

一 唱法華題目抄

文応元年五月 三十九歳御作

於鎌倉名越

ある人予に問うて云く世間の道俗させる法華經の文義を弁ずとも一部一卷四要品自我偈一句等を受持し或は自らもよみかき若しは人をしてもよみかかせ或は我とよみかざれども經に向い奉り合掌礼拝をなし香華を供養し、或は上の如く行ずる事なき人も他の行ずるを見てわづかに隨喜の心ををこし國中に此の經の弘まれる事を悦ばん、是体の僅かの事によりて世間の罪にも引かれず彼の功德に引かれて小乗の初果の聖人の度度人天に生れて而も惡道に墮ちざるがごとく常に人天の生をうけ終に法華經を心得るものと成つて十方淨土にも往生し又此の土に於ても即身成仏する事有るべきや委細に之を聞かん、答えて云くさせる文義を弁えたる身にはあらざれども法華經 涅槃經並に天台・妙樂の釈の心をもて推し量るにかりそめにも法華經を信じて聊も謗を生ぜざらん人は余の惡にひかれて惡道に墮つべしとはおぼえず、但し惡知識と申してわづかに權教を知れる人 智者の由をして法華經を我等が機に叶い難き由を和げ申さんを誠と思ひて法華經を隨喜せし心を打ち捨て余教へうつりはてて一生さて法華經へ歸り入らざらん人は惡道に墮つべき事も有りなん、仰せに付いて疑はしき事侍り実にてや侍るらん法華經に説かれて候とて智者の語らせ給いしは昔三千塵点劫の当初・大通智勝仏と申す仏います其の仏の凡夫にていましける時十六人の王子をはします、彼の父の王仏にならせ給ひて一代聖教を説き給いき十六人の王子も亦出家して其の仏の御弟子とならせ給いけり、大通智勝仏法華經を説き畢らせ給いて定に入らせ給いしかば十六人の王子の沙弥其の前にしてかはるがはる法華經を講じ給いけり、其の所説を聴聞せし人幾千万といふ事をしらず当座に悟をえし人は不退の位に入りనికి、又法華經をおろかに心得る結縁の衆もあり其の人人当座中間に不退の

位に入らずして三千塵点劫をたり、其の間又つぶさに六道・四生に輪廻し今日・釈迦如来の法華經を説き給うに不退の位に入る所謂・舍利弗・目連・迦葉・阿難等是なり猶猶信心薄き者は當時も覺らずして未來無數劫を経べきか知らず我等も大通智勝仏の十六人の結縁の衆にもあるらん此の結縁の衆をば天台・妙樂は名字觀行の位にかなひたる人なりと定め給へ名字觀行の位は一念三千の義理を弁へ法成乘の觀を擬し能義理を弁えたる人なり一念隨喜・五十展轉と申すも天台・妙樂の釈のごときは皆觀行五品の初隨喜の位と定め給へ博地の凡夫の事にはあらず然るに我等は末代の一字・一句等の結縁の衆一分の義理をも知らざらんは豈無量の世界の塵点劫を経ざらんや是れ偏えに理深解微の故に教は至つて深く機は實に浅きがいたす処なり只弥陀の名号を唱えて順次生に西方極樂世界に往生し西方極樂世界に永く不退の無生忍を得て阿弥陀如来・觀音・勢至等の法華經を説き給はん時間いて悟を得んには如かじ然るに弥陀の本願は有智・無智・善人・惡人・持戒・破戒等をも摂ばず只一念唱うれば臨終に必ず弥陀如来・本願の故に來迎し給ふ是を以て思ふに此の土にして法華經の結縁を捨て淨土に往生せんとをもふは億千世界の慶点を經ずして疾法華經を悟るがためなり法華經の根機にあはざる人の此の穢土にて法華經にいとまをいれて一向に念仏を申さざるは法華經の証は取り難く極樂の業は定まらず中間になりて中法華經をおろそかにする人にてやおはしますらんと申し侍るは如何に、其の上只今承り候へ僅に法華經の結縁計ならば三惡道に墮ちざる計にてこそ候へ六道の生死を出るにはあらず、念仏の法門はなにと義理を知らざれども弥陀の名号を唱え奉れば淨土に往生する由を申すは遙かに法華經よりも弥陀の名号はいみじくこそ聞え侍れ、答えて云く誠に仰せめでたき上智者のおんものがたり御物語にも侍るなればこそと存じ候へども但し若し御物語のごとく侍らばすこし不審なる事侍り、大通結縁の者をあらあつちあてがい申すには名字觀行の者とは釈せられて侍れども正しく名字即の位の者と定められ侍る上退大取小の者として法華經をすてて權教につり後には惡道に墮ちたりと見えたる上正しく

法華經を誹謗して之を捨てし者なり、設え義理を知るようなる者なりとも謗法の人にあらん上は三千塵点無量塵点も經べく侍るか、五十展転一念隨喜の人人を觀行初隨喜の位の者と釈せられたるは末代の我等が隨喜等は彼の隨喜の中に入る可からずと仰せ候か、是を天台・妙樂・初隨喜の位と釈せられたりと申さるるほどにては又名字即と釈せられて侍る釈はすてらるべきか、所詮仰せの御義を委く案ずればをそれにては候へとも謗法の一分にやあらん

すらん其の故は法華經を我等末代の機に叶い難き由を仰せ候は末代の一切衆生は穢土にして法華經を行じて詮無き事なりと仰せらるるにや、若しさやうに侍らば末代の一切衆生の中に此の御詞を聞きて既に法華經を信ずる者も打ち捨て未だ行ぜざる者も行ぜんと思つべからず隨喜の心も留め侍らば謗法の分にやあるべがるらん、若し

謗法の者に一切衆生なるならばいかに念仏を申させ給つとも御往生は不定にこそ侍らんすらめ又弥陀の名号を唱へ極樂世界に往生をとぐべきよしを仰せられ侍るは何なる經論を証拠として此の心はつき給いけるやらん正くつき証文候か若しなくば其の義たのもしからず、前に申し候いつるがごとく法華經を信じ侍るはさせる解なければども三惡道には墮すべからず候六道を出る事は一分のさとりなからん人は有り難く侍るか、但し惡知識に値つて

法華經隨喜の心を云いやぶられて候はんは力及ばざるか又仰せに付いて驚き覺え侍り其の故は法華經は末代の凡夫の機に叶い難き由を智者申されしかばさかと思ひ侍る處に只今の仰せの如くならば弥陀の名号を唱つとも法華經をいぬつとむるとがによりて往生をも遂げざる上惡道に墮つべきよし承るはゆゆしき大事にこそ侍れ、抑大通結縁の者は謗法の故に六道に回るも又名字即の浅位の者なり又一念隨喜五十展転の者も又名字觀行即の位と申す

釈は何の處に候やらん委く承り候はばや、又義理をも知らざる者僅かに法華經を信じ侍るが惡智識の教によて法華經を捨て權教に移るより外の世間の惡業に引かれては惡道に墮つべからざる由申さるるは証拠あるか、又無智の者の念仏申して往生すると何に見えてあるやらんと申し給つこそよに事あたらしく侍れ、雙觀經等の淨土の

三部經 善導和尚等の經釈に明かに見えて侍らん上はなにとか疑い給うべき、答えて曰く大通結縁

の者を退大取小の謗法、名字即の者と申すは私の義にあらず天台大師の文句第三の卷に云く「法を聞いて未だ度せず而して世世に相い値うて今に声聞地に住する者有り即ち彼の時の結縁の衆なり」と釈し給いて侍るを、妙樂大師の疏記第三に重ねて此の釈の心を述べ給いて云く「但全く未だ品に入らず、俱に結縁と名づくるが故に」文の心は大通結縁の者は名字即の者となり、又天台大師の玄義の第六に大通結縁の者を釈して云く「若しは信若しは謗因つて倒れ因つて起く喜根を謗ずと雖も後要らず度を得るが如し」文の心は大通結縁の者の三千塵点を経るは謗法の者なり例せば勝意比丘が喜根菩薩を謗ぜしが如しと釈す五十展転の人は五品の初めの初隨喜の位と申す釈もあり、

又初隨喜の位の先の名字即と申す釈もあり疏記第十に云く「初めに法会にして聞く是れ初品なるべし第五十人は必ず隨喜の位の初めに在る人なり」文の心は初會聞法の人は必ず初隨喜の位の内第五十人は初隨喜の位の先の名字即と申す釈なり。

其の上五種法師にも受持・読誦・書写の四人は自行の人・大經の九人の先の四人は解無き者なり解説は化他後の五人は解有る人と証し給へ、疏記第十に五種法師を釈するには「或は全く未だ品に入らず又云く一向未だ凡位に入らず」文の心は五種法師は觀行五品と釈すれども又五品已前の名字即の位とも釈するなり、此等の釈のこと

如くんば義理を知らざる名字即の凡夫が隨喜等の功德も經文の一偈一句・一念隨喜の者五十展転等の内に入るかと覚え候、何に況や此の經を信ぜざる謗法の者の罪業は譬喩品に委くとかれたり持經者を謗する罪は法師品にとかれた

り、此の經を信する者の功德は分別功德品隨喜功德品に説けり謗法と申すは違背の義なり隨喜と申すは隨順の義なりさせる義理を知らざれども一念も貴き由申すは違背隨順の中には何れにか取られ候べき、又末代無智の者のわづかの供養隨喜の功德は經文には載せられざるか如何、其の上天台・妙樂の釈の心は他の人師ありて

法華經の乃至童子戲・偈・一句五十展轉の者を爾前の諸經のごとく上聖の行儀と釈せられたるをば謗法の者と定め給へり、然るに我が釈を作る時機を高く取りて末代造惡の凡夫を迷はし給わんは自語相違にあらざや故に妙樂大師五十展轉の人を釈して云く「恐らくは人謬りて解せる者初心の功德の大なる事を測らず而して功を上位に推り此の初心を蔑る故に今彼の行浅く功深き事を示して以て経力を顕わす」文・文の心は謬つて法華經を説かん人の

此の經は利智精進・上根・上智の人のためといはん事を仏をそれて下根・下智・末代の無智の者のわづかに浅き隨喜の功德を四十余年の諸經の大人上聖の功德に勝れたる事を顕わさんとして五十展轉の隨喜は説かれたり、故に天台の釈には外道・小乗・權大乘までたくらへ來て法華經の最下の功德が勝れたる由を釈せり、所以に阿闍多仙人は十二年が閻恒河の水を耳に留め耆鬼仙人は一日の中に大海の水をすいほす此くの如き得通の仙人は小乗・阿含經の三賢の浅位の一通もなき凡夫には百万倍劣れり、三明六通を得たりし小乗の舍利弗・目連等は華嚴・方等・般若等の諸大乘經の未斷三惑の一通もなき一偈・一句の凡夫には百万倍劣れり華嚴・方等・般若經を習ひ極めたる等覺の

大菩薩は法華經を僅かに結縁をなせる未斷三惑・無惡不造の末代の凡夫には百万倍劣れる由釈の文顯然也、而るを當世の念仏宗等の我が身の權教の機にて実經を信ぜざる者は方等・般若の時の二乗のごとく自身をばちしめてあるべき処に敢えて其の義なし、あまつさへ世間の道俗の中に僅かに觀音品自我偈などを讀み適父母孝養な

んどのために一日經等を書く事あればいぬさまたげて云く善導和尚は念仏に法華經をまじつるを雜行と申し百の時は希に一二を得千の時は希に三五を得ん乃至千中無一と仰せられたり、何に況や智慧第一の法然上人は法華經等を行ずる者をば祖父の履・或は群賊等にたとへられたりなどいふつとめ侍るは是くの如く申す師も弟子も阿鼻の焰をや招かんずらんと申す。

問うて云く何なるすがた並に語を以てか法華經を世間にいふつとむる者には侍るやよにおそろしくこそおぼ

え候へ答えて云く始めに智者の申され候と御物語候いつるこそ法華經をいゝとむる悪知識の語にて侍れ、末代に法華經を失うべき者は心には一代聖教を知りたりと思ひて而も心には権實二經を弁ず身には三衣一鉢を帶し或は阿練若に身をかくし或は世間の人にいみじき智者と思はれて而も法華經をよくよく知る由を人に知られなんと世間の道俗には三明六通の阿羅漢の如く責ばれて法華經を失うべしと見えて候。

問うて云く其の証拠如何、答えて云く法華經勸持品に云く諸の無智の人悪口罵詈等し及び刀杖を加ふる者有らん我等皆當に忍ぶべし文妙樂大師此の文の心を釈して云く初めの一行は通じて邪人を明す、即ち俗衆なり文の心は此の一行は在家の俗男俗女が權教の比丘等にかたはられて敵をすべしとなり、經に云く惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを得たりと謂い我慢の心充滿せん文妙樂大師此の文の心を釈して云く次の一行は道門増上慢の者を明す文の心は惡世末法の權教の諸の比丘我れ法を得たりと慢じて法華經を

行ずるもの敵となるべしといふ事なり、經に云く或は阿練若に納衣にして空閑に在つて自ら眞の道を行ずと謂いて人間を輕賤する者有らん利養に貪著するが故に白衣の与に法を説き世に恭敬せらるる事六通の羅漢の如くならん是の悪心を懷き常に世俗の事を念ひ名を阿練若に仮りて好んで我等が過を出さん而も是くの如き言を作さん此の諸の比丘等利養を貪るを為つての故に外道の論義を説き自ら此の經典を作りて世間の人を誑惑す名聞を

求むるを為つての故に分別して是の經を説くと、常に大衆の中に在りて我等を毀らんと欲するが故に國王大臣婆羅門居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説いて是れ邪見の内外道の論議を説くと謂わん已上妙樂大師此の文を釈して云く三に七行は僭聖増上慢の者を明す文經並に釈の心は惡世の中に多くの比丘有つて身には三衣一鉢を帶し阿練若に居して行儀は大迦葉等の三明六通の羅漢のごとく在家の諸人にあふがれて一言を吐けば如來の金言のごとくをもはれて法華經を行ずる人をいゝやぶらんがために國王大臣等に向ひ奉つて此の人は

邪見じやけんの者なり法門ほうもんは邪法じやほうなりなんどいふつとむるなり。

上の三人の中に第一だいいちの俗衆ぞくしゅうの毀そしよりも第二じふにの邪智じやちの比丘びくの毀そしは猶なほしのびがたし又第二じふにの比丘びくよりも第三さんの大衣だいの阿練若あれんにやの僧そうは甚はなはだし、此この三人は当世とうせの權教こんきょうを手本てほんとする文字もんじの法師ほうし並しききょうに諸經論しよこんどつだんの言語道斷ごんごどつだんの文を信ずる暗禪あんぜんの法師ほうし並しききょうに彼等かれらを信ずる在俗等ざいぞく四十余年よんじゅうよねんの諸經しよきょうと法華經ほけきょうとの權實ごんじつの文義もんぎを弁わきまへざる故に、華嚴けこん・方等ほうとう・般若等はんになの心仏衆生しんぶじやうじやう・即心是仏そくしんぜふつ・即往十方西方等そくおうじふつほうの文と法華經ほけきょうの諸法実相しよほうじつじやう即往十方西方の文と語ごの同じきを以て義理ぎりのかはれるを知らず、或は諸經しよききょうの言語道斷ごんごどつだん・心行所滅しんぎやうじやくめつの文を見て一代いちだい聖教しやうきやうには如來にやうらいの實事じつじをば宣べられざりけりなんどの邪念じやねんをおこす、故に惡鬼ゆゑ あつき此この三人に入まつて末代まつだいの諸人しよじんを損しんじ国土こくどをも破るなり故に經文きやうもんに云く「濁劫惡世じやくあくせの中には多く諸しよの恐怖こふ有らん惡鬼あつき其の身に入まつて我を罵罵めりし毀辱きにくせん乃至ないし仏ぼつの方便隨宜ほうべんずいき所說しよせつの法を知らず」文の心は濁惡世じやくあくせの時比丘びく我が信ずる所の教は仏ぼつの方便隨宜ほうべんずいきの法門ほうもんともしらずして權實ごんじつを弁わきまへたる人出來ですれば罵のり破はし

なんどすべし、是偏ひとえ あつきに惡鬼あつきの身に入りたるをしらずと云うなり、されば末代まつだいの愚人ぐにんの恐るべき事は刀杖とうじやう・虎狼ころう・十惡じしやうあく・五逆ごぎやく等よりも三衣さんね いぼつ一鉢いちぼつを帶おせる暗禪あんぜんの比丘びくと並ごんきやうに權經ごんきやうの比丘びくを賣としと見て実經じきやうの人をにくまん俗侶等ぞくりよなり。

故に涅槃經ねはんきやう二十二いふに云く「惡象等あくそうに於おては心に恐怖こふする事無ことなかれ惡知識あくちしきに於おては怖畏ふいの心を生ぜよ何を以ての故に是ゆゑ惡象等あくそうは唯能ただよく身を壞やぶりて心を破るやぶこと能あたわず惡知識あくちしきは二俱ふたつともに壞やぶるが故に乃至ないし惡象あくそうの為ために殺されては三趣さんしゆに至いたらずあくそう惡友あくゆうの為ために殺されては必ず三趣さんしゆに至いたらん」文 此文このもんの心を章安大師しやうあんだいし宣いべて云く「諸しよの惡象等あくそうは但是ただれ惡緣あくえんにして人に惡心あくしんを生ぜしむる事能あたわず惡知識あくちしきは甘談詐媚かんさんざめい巧言令色ぎやうげんれいしきもて人を牽ひいて惡を作なさしむ惡を作なすを以て

の故ゆゑに人の善心ぜんしんを破るやぶ之を名づけて殺と為なす即ち地獄じごくに墮だす」文、文の心は惡知識あくちしきと申すは甘くかたらひ詐いつわり媚こび言ごを巧たくみにして愚癡いみじの人の心を取とつて善心ぜんしんを破るやぶといふ事なり、總じて涅槃經ねはんきやうの心は十惡じしやう・五逆ごぎやくの者よりも謗法闡提ぼうほうせんたいのものをこそるべしと誡いみじめたり闡提せんたいの人と申すは法華經ほけきやう・涅槃經ねはんきやうを云いつとむる者と見えたり、当世とうせの念仏者ねんぶつ

等・法華經を知り極めたる由をいふに因縁譬喩をもて釈しよくよく知る由を人にしられて然して後には此の經のいみじき故に末代の機のおろかなる者及ばざる由をのべ強き弓重き鎧かひなき人の用にたたざる由を申せば無智の道俗さもと思いて実には叶うまじき權教に心を移して僅かに法華經に結縁しぬるをも翻えし又人の法華經を行ずるをも隨喜せざる故に師弟俱に謗法の者となる。

これに依つて謗法の衆生・國中に充滿して適仏事をいとなみ法華經を供養し追善を修するにも念仏等を行ずる謗法の邪師の僧來て法華經は末代の機に叶い難き由を示す、故に施主も其の説を實と信じてある間訪るる過去の父母夫婦兄弟等は弥地獄の苦を増し孝子は不孝謗法の者となり聽聞の諸人は邪法を隨喜し惡魔の眷屬となる、

日本國中の諸人は佛法を行ずるに似て佛法を行ぜず適佛法を知る智者は國の人に捨てられ守護の善神は法味をなめざる故に威光を失ひ利生を止此の國をすて他方に去り給い惡鬼は便りを得て國中に入り替り大地を動かし惡風を興し一天を悩し五穀を損ず故に飢渴出來し人の五根には鬼神入つて精氣を奪ふ是を疫病と名く一切の諸人

善心無く多分は惡道に墮つることひとへに惡知識の教を信ずる故なり、仁王經に云く諸の惡比丘多く名利を求め國王・太子・王子の前に於て自ら破佛法の因縁破國の因縁を説かん其の王別えずして此の語を信聽し横に法制を作りて仏戒に依らず是れを破仏破國の因縁と為す文、文の心は末法の諸の惡比丘國王・大臣の御前にして國を

安穩ならしむる様にして終に國を損じ佛法を弘むる様にして還つて佛法を失うべし、國王・大臣此の由を深く知し食さずして此の言を信受する故に國を破り佛法を失うと云う文なり。此時日月度を失ひ時節もたがひて夏はさむく冬はあたたかに秋は惡風吹き赤き日月出で望朔にあらずして日月蝕し或は二二三等の日出來せん大火・大風・彗星等をこり飢饉疫病等あらんと見えたり、國を損じ人を惡道にをとす者は惡知識に過ぎたる事なきか。

問うて云く始めに智者の御物語とて申しつるは所詮後世の事の疑わしき故に善惡を申して承らんとためなり、

彼の義等は恐ろしき事にあるにこそ侍るなれ一文不通の我等が如くなる者はいかにしてか法華經に信をとり候べき又心ねをば何様に思い定め侍らん、答えて云く此の身の申す事をも一定とおぼしめざるまじきにや其の故はかやうに申すも天魔波旬・惡鬼等の身に入つて人の善き法門を破りやすらんとおぼしめされ候はん一切は賢きが智者にて侍るにや。

問うて云く若しかやうに疑い候はば我身は愚者にて侍り万の智者の御語をば疑いさて信ずる方も無くして空く一期過し侍るべきにや、答えて云く仏の遺言に依法不依人と説かせ給いて候は經の如くに説かざるをば何にいみじき人なりとも御信用あるべからず候か、又依了義經不依不了義經と説かれて候は愚癡の身にして一代聖教

の前後浅深を弁えざらん程は了義經に付かせ給い候へ了義經不了義經も多く候阿含・小乘經は不了義經華嚴方等・般若・淨土の觀經等は了義經、又四十年の諸經を法華經に對すれば不了義經法華經は了義經、涅槃經を法華經に對すれば法華經は了義經、涅槃經は不了義經、大日經を法華經に對すれば大日經は不了義經法華經は了義經なり、故に四十年の諸經並に涅槃經を打ち捨てさせ給いて法華經を師匠と御憑み候法華經をば國王・父母・日月・大海・須弥山・天地の如くおぼしめせ、諸經をば閑白・大臣・公卿乃至万民・衆星・江河・諸山・草木等の如くおぼしめすべし、我等が身は末代造惡の愚者・鈍者・非法器の者、國王は臣下よりも人をたすくる人父母は他人よりも子をあはれむ者日月は衆星より暗を照らす者、法華經は機に叶わずんば況や余經は助け難しとおぼしめせ、又

釈迦如来と阿弥陀如来・藥師如来・多宝仏・觀音・勢至・普賢・文殊等の一切の諸仏・菩薩は我等が慈悲の父母、此の仏菩薩の衆生を教化する慈悲の極理は唯法華經にのみとまれりとおぼしめせ、諸經は愚人・愚者・鈍者・女人・根欠等の者を救ふ秘術をば未だ説き顯わさずとおぼしめせ法華經の一切經に勝れ候故は但此の事に侍り、而るを当世の學者・法華經をば一切經に勝れたりと讃めて、而も末代の機に叶わずと申すを皆信ずる事豈謗法の人に侍らずや、

只一口におぼしめし切らせ給い候たまひ所詮しせん法華經の文字を破りさきなんどせんには法華經の心やぶるべからず、又世間の悪業あくごうに対して云いいつとむるとも人人用ゆべからず只相似たるただあに権經の義理を以て云いいつとむるにこそ人はたばらかさるれとおぼしめすべし。

問うて云く或智者の申され候しは四十余年の諸經と八箇年の法華經とは成仏の方こそ爾前は難行道・法華經は易行道にて候へ往生の方にては同事にして易行道に侍り法華經を書き讀みても十方の淨土阿彌陀仏の国へも生るべし觀經等の諸經の付いて彌陀の名号を唱えん人も往生を遂ぐべし只機縁の有無に随つて何をあらそも争ふべからず、但し

彌陀の名号は人ごとに行じ易しと思ひて日本国中に行じつけたる事なれば法華經等の余行よりも易きにこそと申されしは如何、答えて云く仰せの法門はさも侍るらん又世間の人も多くは道理と思ひたりげに侍り但し身には此の義に不審あり、其の故は前に申せしが如く末代の凡夫は智者と云うともたのみなし世こそりて上代の智者には及ぶべからざるが故に愚者と申すともいやしむべからず經論の証文顯然ならんには抑無量義經は法華經を説くが為の序分なり、然るに始め寂滅道場より今の常在靈山の無量義經に至るまで其の年月日数を委く計あなげれば四十余年なり、其の間の所説の經を挙るに華嚴阿含方等般若なり所談の法門は三乘・五乘所習の法門なり

修行の時節を定むるには宣説菩薩歷劫修行と云ひ隨自意隨他意を分つには是を隨他意と宣べ四十余年の諸經とは八箇年の所説との語同じく義替れる事を定めるには文辭一と雖ど義各異るととけり成仏の方は別にして往生の方は一

つなるべしとおぼえず華嚴方等般若究竟最上の大乘經頓悟・漸悟の法門皆未顕眞実と説かれたり此の大部の諸經すら未顕眞実なり何に況や淨土の三部經等の往生極樂ばかり未顕眞実の内にもれんや其の上・經經

ばかりを出すのみにあらず既に年月日数を出すをや、然れば華嚴方等般若等の彌陀往生已に未顕眞実なる事疑い無し、觀經の彌陀往生に限つて豈多留難故の内に入らざらんや、若し隨自意の法華經の往生極樂を隨他意の

観經の往生極樂に同じて易行道と定めて而も易行の中に取つても猶觀經の念仏往生は易行なりと之を立てられれば權實
雜亂の失大謗法たる上一滴水漸漸に流れて大海となり一塵積つて須弥山となるが如く漸く權經の人も實經にすま
ず實經の人も權經におち權經の人次第に國中に充滿せば法華經隨喜の心も留り國中に王なきが如く人の神を失え
るが如く法華眞言の諸の山寺荒れて諸天善神・竜神等一切の聖人國を捨てて去らば惡鬼便りを得て
みだれ入り惡風吹いて五穀も成らしめず疫病流行して人民をや亡さんずらん、此の七八年が前までは諸行は永く往生す
べからず善導和尚の千中無一と定めさせ給いたる上選択には諸行を抛てよ行ずる者は群賊と見えたりなんと放語を申し
立てしが、又此の四五年の後は選択集の如く人を勧めん者は謗法の罪によつて師檀共に無間地獄に
墮つべしと經に見えたりと申す法門出来したりげに有りしを、始めは念仏者こそりて不思議の思いをなす上念仏を申す者
無間地獄に墮つべしと申す惡人外道ありなんどののしり候しが念仏者無間地獄に墮つべしと申す語に智慧つきて各
選択集を委く披見する程にげにも謗法の書とや見なしけん千中無一の惡義を留めて諸行往生の由を念仏者毎に之を
立つ然りと雖も唯口にのみゆるして心の中は猶本の千中無一の思ひなり在家の愚人は内心の謗法
なるをばしらずして諸行往生の口にはかされて念仏者は法華經をば謗ぜざりけるを法華經を謗ずる由を聖道門の人の
申されしは僻事なりと思へるにや、一向諸行は千中無一と申す人よりも謗法の心はまさりて候なり失なき由を人に知ら
せ而も念仏計りを亦弘めんとたばかるなり偏に天魔の計りごとなり。

問うて云く天台宗の中の人立つる事あり天台大師爾前と法華と相對して爾前を嫌うに二義あり、一には約部
四十余年の部と法華經の部と相對して爾前はなり法華は妙なりと之を立つ二には約教・教に妙を立て華嚴・方等・
般若等の円頓速疾の法門をば妙と歎じ華嚴・方等・般若等の三乘歷別の修行の法門をば前三教と名づけてなりと嫌へり
円頓速疾の方をば嫌わず法華經に同じて一味の法門とせりと申すは如何、答えて云く此の事は不審に

もする事侍るらん然る可しとをばゆ天台・妙樂より已来今に論有る事に侍り天台の三大部六十卷総じて五大部の章疏
 の中にも約教の時は爾前の円を嫌ふ文無し、只約部の時ばかり爾前の円を押ふさねて嫌へ、日本に二義あり園城寺には
 智証大師の釈より起つて爾前の円を嫌ふと云い山門には嫌はずと云う互に文釈あり俱に料簡あり然れども今に事ゆか
 ず、但し予が流の義には不審晴れておぼえ候、其の故は天台大師四教を立て給うに四の筋目あり、
 一には爾前の經に四教を立つ二には法華經と爾前と相對して爾前の円を法華の円に同じて前三教を嫌う事あり、三には
 爾前の円をば別教に摂して前三教と嫌ひ法華の円をば純円と立つ四には爾前の円をば
 法華に同ずれども但法華經の二妙の中の相待妙に同じて絶待妙には同ぜず、此の四の道理を相對して六十卷をかんがう
 れば狐疑の氷解けたり一一の証文は且つは秘し且つは繁き故に之を載せず、又法華經の本門にしては爾前の円と迹門の
 円とを嫌う事不審なき者なり、爾前の円をば別教に摂して約教の時は前三為 後一為妙と云うなり此の時は爾前の円
 は無量義經の歷劫修行の内に入りぬ、又伝教大師の註釈の中に爾前の八教を挙げて四十余年・未顕真実の内に入れ、或
 は前三教をば迂回と立て爾前の円をば直道と云い無量義經をば大直道と云う委細に見る可し。
 問うて云く法華經を信ぜん人は本尊並に行儀並に常の所行は何にてか候べき、答えて云く第一に本尊は法華經八卷・
 一卷・一品或は題目を書いて本尊と定む可しと法師品並に神力品に見えたり、又たたらん人は釈迦如来・多宝仏を書い
 ても造つても法華經の左右に之を立て奉るべし、又たたらんは十方の諸仏普賢菩薩等をもつくり
 かきたてまつるべし、行儀は本尊の御前にして必ず坐立行なるべし道場を出でては行住坐臥をえらぶべからず、常の所行
 は題目を南無妙法蓮華經と唱うべし、たたらん人は一偈・一句をも読み奉る可し助縁には南無釈迦牟尼仏・多宝仏・
 十方諸仏・一切の諸菩薩・二乘・天人・竜神・八部等心に随うべし愚者多き世となれば一念三千の觀を先とせず其の志
 あらん人は必ず習學して之を觀ずべし。

問うて云く只題目計を唱うる功德如何、答えて云く釈迦如来、法華經をとかとおぼしめて世に出でましまししかども四十余年の程は法華經の御名を秘しおぼしめて御年三十の比より七十余に至るまで法華經の方便をまうけ七十二にして始めて題目を呼び出させ給は諸經の題目に是を比ぶべからず、其の上法華經の肝心たる方便・壽量の一念三千・久遠実成の法門は妙法の二字におさまれり、天台大師・玄義十卷を造り給う第一の卷には略して妙法蓮華經の五字の意を宣べ給う、第二の卷より七の卷に至るまでは又広く妙の一字を宣べ八の卷より九の卷に至るまでは法蓮華の三字を釈し第十の卷には經の一字を宣べ給へり、經の一字に華嚴・阿含・方等・般若・涅槃經を収めたり妙法の二字は玄義の心は百界千如・心仏衆生の法門なり止觀十卷の心は一念三千・百界千如・三千世間・心仏衆生・三無差別と立て給う、一切の諸仏菩薩・十界の因果十方の草木・瓦礫等・妙法の二字にあらずと云う事なし、華嚴・阿含等の四十余年の經經・小乘經の題目には大乘經の功德を収めず又大乘經にも往生を説く經の題目には成仏の功德をおさめず又王にては有れども王中の王にて無き經も有り仏も又經に随つて他仏の功德をおさめず平等・意趣をもつて他仏・自仏とをなじといひ或は法身平等をもて自仏他仏同じといひ、実には一仏に一切仏の功德をおさめず今法華經は四十余年の諸經を一經に収めて十方世界の三身円満の諸仏をあつめて釈迦一仏の分身の諸仏と談ずる故に一仏・一切仏にして妙法の二字に諸仏皆収まれり、故に妙法蓮華經の五字を唱うる功德莫大なり諸經の題目は法華經の所開なり妙法は能開なりとしりて法華經の題目を唱うべし。

問うて云く此の法門を承つて又智者に尋ね申し候えば法華經のいみじき事は左右に及ばず候但し器量ならん人は唯我が身計りは然る可し、末代の凡夫に向つてただちに機をも知らず爾前の教を云いつとめ法華經を行ぜよと申すはとしごろの念仏などをば打ち捨て又法華經には未だ功も入れず有にも無にもつかぬよつにてあらんずらん、又機も知らず法華經を説かせ給はば信ずる者は左右に及ばず若し謗する者あらば定めて地獄に墮ち候はんとす

らん、其の上仏も四十余年の間、法華經を説き給はざる事は、若但讚仏乘・衆生没在苦の故なりと在世の機すら猶然なり。何に況や末代の凡夫をや、されば譬喩品には「仏・舍利弗に告げて言わく、無智の人の中に此の經を説くことなかれ」と云云。此等の道理を申すは如何が候べき、答えて云く、智者の御物語と仰せ承り候は所詮末代の凡夫には機をかがみて説け左右なく説いて人に謗ぜさする事なかれとこそ候なれ、彼人さやうに申され候はば御返事候べきやうは、そもそにもやくたさんぶつじやないしむ、ちにんぢやう。抑、若但讚仏乘、乃至無智人中等の文を出し給はば又一經の内に凡有所見、我深敬汝等等と説いて不輕菩薩の杖、木瓦石をもつてうちはられさせ給いしをば顧みさせ給はざりしは如何と申させ給へ。

問うて云く、一經の内に相違の候なる事こそよに得心がたく侍ればくわしく承り候はん、答えて云く、方便品等には機をかがみて此の經を説くべしと見え不輕品には謗ずとも唯強いて之を説くべしと見え侍り、一經の前後水火の如し、然るを天台大師会して云く、「本已に善有るは釈迦小を以て之を將護し、本末だ善有らざるは不輕大を以て之を強毒す」と文の心は本と善根ありて今生の内に得解すべき者の為には直に法華經を説くべし、然るに其の中に猶聞いて謗すべき機あらば、暫く權經をもてこしらえて後に法華經を説くべし、本と大の善根もなく今も法華經を信ずべからずなにとなくとも惡道に墮ちぬべき故に但押して法華經を説いて之を謗ぜしめて逆縁ともなせと會する文なり、此の釈の如きは末代には善無き者は多く善有る者は少し故に惡道に墮ちんこと疑い無し、同くは法華經を強いて説き聞かせて毒鼓の縁と成す可きか然らば法華經を説いて謗縁を結ぶべき時節なる事、諍い無き者をや、法華經の方便品に五千の上慢あり、略開三顯一を聞いて、廣開三顯一の時、仏の御力をもて座をたたしめ給ふ後に涅槃經並に四依の辺にして今生に悟を得せしめ給うと、諸法無行經に喜根菩薩・勝意比丘に向つて大乘の法門を強いて説ききかせて謗ぜさせしと、此の二の相違をば天台大師会して云く、「如来は悲を以ての故に發遣し、喜根は慈を以ての故に強説す」と文の心は仏は悲の故に後のたのしみをば闇いて當時、法華經を謗じて地獄にをちて苦にあつ

べきを悲み給いて座をたたしめ給いき、譬えば母の子に病あると知れども当時の苦を悲んで左右なく灸を加ざるが如し、喜根菩薩は慈の故に当時の苦をばかへりみず後の樂を思いて強いて之を説き聞かしむ、譬えば父は慈の故に子に病あるを見て当時の苦をばかへりみず後を思ふ故に灸を加うるが如し、又仏在世には仏法華經を秘し給いしかば四十余年の間等覺不退の菩薩名をしらず、其の上寿量品は法華經八箇年の内にも名を秘し給いて最後にきかしめ給いき末代の凡夫には左右なく如何がきかしむべきとおぼゆる處を妙樂大師釈して云く「仏世は當機の故に簡ぶ末代は結縁の故に聞かしむこと釈し給へ」文の心は仏在世には仏一期の間多くの人不退の位にのほりぬべき故に法華經の名義を出して謗せしめず機をこしらへて之を説く仏滅後には當機の衆は少く結縁の衆多きが故に多分に就いて左右なく法華經を説くべしと云う釈なり是体の多くの品あり又末代の師は多くは機を知らず機を知らざらんには強いて但実經を説くべきかされば天台大師の釈に云く「等しく是れ見ざれば但大を説くに咎無し」文の心は機をも知らざれば大を説くに失なしと云う文なり又時の機を見て説法する方もあり皆國中の諸人・權經を信じて実經を謗し強に用いざれば彈呵の心をもて説くべきか時に依つて用否あるべし。

問うて云く唐土の大師の中に二分一向に權大乘に留つて実經に入らざる者はいかなる故か候、答えて云く仏世に出でましまして先ず四十余年の權大乘・小乗の經を説き後には法華經を説いて言わく「若以小乗化乃至於一人我則墮慳貪此事為不可」文の心は仏但爾前の經許りを説いて法華經を説き給はずば仏慳貪の失ありと説かれたり、後に屬累品にいたりて仏右の御手をのべて三たび諫めをなして三千大千世界の外八方四百万億那由他の國土の諸菩薩の頂をなでて未來には必ず法華經を説くべし、若し機たずば余の深法の四十余年の經を説いて機をこしらへ法華經を説くべしと見えたり、後に涅槃經に重ねて此の事を説いて仏滅後に四依の菩薩ありて法を説くに又法の四依あり実經をついに弘めずんば天魔としるべきよしを説かれたり故に如來の滅後、後の五百年九百年

の間に^{いで}給^{たま}いし竜樹菩薩^{りゆうじゆぼさつ}・天親菩薩^{てんじんぼさつ}等^ら・如来^{にがひ}の聖教^{しやうきやう}を弘^{ひろ}め給^{たま}うに天親菩薩^{てんじんぼさつ}は先に^{しうじゆに}小乗^{しやうじゆ}の説^{いっさい}一切有部^{いっさいうぶ}の人^{ひと}・俱舍論^{くしやろん}を造^{つく}つて阿含^{あこん}十二年^{じふにねん}の経^{きやう}の心を宣^{のたま}へて一向^{いひかう}に大乘^{だいじやう}の義理^{ぎり}を明^{あか}さず次に^{じゆうちろん}十地論^{じゆだいじゆろん}・撰^{せん}大乘論^{だいじやうろん}・釈論^{しやくろん}等を造^{つく}つて四十余年^{よんじゆふねん}の権大乘^{こんだいじやう}の心を宣^{のたま}へ後に^{のち}仏性論^{ぶつしやうろん}・法華論^{ほふけふろん}等を造^{つく}りて粗実大乘^{そじつだいじやう}の義^ぎを宣^{のたま}へたり竜樹菩薩^{りゆうじゆぼさつ}亦然^{また}なり天台大師^{てんだいだいし}・唐土^{もろこし}の人師^{にんし}として一代^{いちだい}を分^{わか}つに大小^{だいしやう}・権実^{こんじつ}顯然^{けんねん}なり余^{にんし}の人師^{にんし}は僅^{わず}かに義理^{ぎり}を説^{せつ}けども分明^{ぶんめい}ならず又証文^{しやうもん}たしかならず但^{ただ}し末^{また}の論師^{ろんし}並^{なら}に訳者^{やくしや}・唐土^{もろこし}の人師^{にんし}の中に大小^{だいしやう}をば分^{わか}つて大^{おほい}にをいて権実^{こんじつ}を分^{わか}たず或^{ある}は語^{ことば}には分^{わか}つといへとも心^{しん}は権大乘^{こんだいじやう}のをもむきを出^いでず此等^{これら}は不退諸菩薩^{ふたいしよぼさつ}・其数如恒沙^{こすうのうじや}・亦復不能知^{またまたふのうち}とおぼえて候^{まち}なり。

疑^いつて云^いく唐土^{もろこし}の人師^{にんし}の中に慈恩大師^{じおんだいし}は十一面觀音^{じふいちめんくわんおん}の化身^{けしん}牙^がより光^{ひかり}を放^{はな}つ、善導^{ぜんだう}和尚^{わうじやう}は弥陀^{みだ}の化身^{けしん}口^{くち}より仏^{ぶつ}をいだすこの外^{ほか}の人師^{にんし}通^{とほ}を現^{げん}じ徳^{とく}をほとこし三昧^{さんまい}を發^{はつ}得^{とく}する人世^{じんせい}に多^{おほ}しなんぞ権実^{こんじつ}二經^{にきやう}を并^{なら}べ今^{いま}法華經^{ほふけきやう}を詮^{せん}とせざるや、答^{こた}えて云^いく阿竭多仙人^{あがたせん}外道^{げだう}は十二年^{じふにねん}の間^ま・耳^{みみ}の中に恒河^{こつが}の水^{みづ}をとどむ婆藪仙^{ばそせん}人は自在^{じざい}在天^{てん}となりて二目^{にめ}を現^{げん}ず、唐土^{もろこし}の道士^{どうし}の中^{うち}にも張階^{ちやうかい}は霧^きをいだし鸞^{らん}巴^はは雲^{うん}をはく第六天^{だいごくてん}の魔王^{まおう}は仏滅^{ぶつめつ}後に^{のち}比丘^{びく}・比丘尼^{びくに}・優婆塞^{うぱそく}・優婆夷^{うぱい}阿羅漢^{あらかん}・辟支仏^{ひやくしふつ}の形^{かたち}を現^{げん}じて四十余年^{よんじゆふねん}の経^{きやう}を説^{せつ}くべしと見えたり通力^{つうりき}をもて智者^{ちしや}愚者^{ぐしや}をばしるべからざるか、唯^{ただ}仏^{ぶつ}の遺言^{ゆいごん}の如^{ごと}く一向^{いひかう}に権教^{こんきやう}を弘^{ひろ}めて実經^{じつきやう}をつゐに弘^{ひろ}めざる人師^{にんし}は権教^{こんきやう}に宿習^{しゆくじゆ}ありて実經^{じつきやう}に入^いらざらん者は或^{ある}は魔^まにたばらかされて通^{とほ}を現^{げん}ずるか、但^{ただ}し法門^{ほふもん}をもて邪正^{じやせい}をただすべし利根^{りこん}と通力^{つうりき}とはよるべからず。

文応元年^{ぶんおうげんねん}太歳庚申^{たいさいかうしん}五月二十八日^{ごがつにじはちにち}

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

鎌倉名越^{かまくらなこえ}に於^{おい}て書き畢^{おわ}んぬ

二 立正安国論

文応元年七月

三十九歳御作

与北条時頼書

於鎌倉

17P

旅客来りて嘆いて曰く近年より近日に至るまで天変地夭飢饉疫癘遍く天下に満ち広く地上に迸る牛馬巷に斃れ骸骨路に充てり死を招くの輩既に大半に超え悲まざるの族敢て一人も無し、然る間或は利剣即是の文を専にしてさいとききしや、或は衆病悉除の願を持ちて東方如来の経を誦し、或は病即消滅不老不死の詞を仰いで法華西土教主の名を唱え、或は衆病悉除の願を持ちて東方如来の経を誦し、或は病即消滅不老不死の詞を仰いで法華真実の妙文を崇め或は七難即滅七福即生の句を信じて百座百講の儀を調え有るは秘密真言の経に因て五瓶の水を灑ぎ有るは坐禅入定の儀を全して空觀の月を澄し、若くは七鬼神の号を書して千門に押し若くは五大力の形を圖して万戸に懸け若くは天神地祇を拜して四角四堺の祭祀を企て若くは万民百姓を哀んで国主国宰の徳政を行う、然りと雖も唯肝胆を推くのみにして弥飢疫に逼られ乞客目に溢れ死人眼に満てり、臥せる屍を觀と為し並べる戸を橋と作す、觀れば夫れ二離壁を合せ五緯珠を連ぬ三宝も世に在し百王未だ窮まらざるに此の世早く衰え其の法何ぞ廢れたる是れ何なる禍に依り是れ何なる誤りに由るや。

主人の曰く独り此の事を愁いて胸臆に憤す客来つて共に嘆く屢談話を致さん、夫れ出家して道に入る者は法に依つて仏を期するなり而るに今神術も協わす仏威も驗しなし、具に当世の体を觀るに愚にして後生の疑を發す、然れば則ち円覆を仰いで恨を呑み方載に俯して慮を深くす、倩ら微管を傾け聊か経文を披きたるに世皆正に背き人悉く惡に歸す、故に善神は国を捨てて相去り聖人は所を辞して還りたまわず、是れを以て魔来り鬼来り災起り難起る言わずんばある可からず恐れずんばある可からず。

客の曰く天下の災・国中の難・余独り嘆くのみに非ず衆皆悲む、今蘭室に入つて初めて芳詞を承るに神聖去り

辭し災難並び起るとは何れの経に出でたるや其の証拠を聞かん。

主人の曰く其の文繁多にして其の証弘博なり。

金光明経に云く「其の国土に於て此の経有り」と雖も未だ嘗て流布せしめず捨離の心を生じて聴聞せん事を樂わず亦供養し尊重し讃歎せず四部の衆持経の人を見て亦復た尊重し乃至供養すること能わず、遂に我れ等及び余の眷属無量の諸天をして此の甚深の妙法を聞くことを得ざらしめ甘露の味に背き正法の流を失い威光及び勢力有ること無からしむ、悪趣を増長し人天を損滅し生死の河に墜ちて涅槃の路に乖かん、世尊我等四王並びに諸の眷属及び藥叉等斯くの如き事を見て其の国土を捨てて擁護の心無けん、但だ我等のみ是の王を捨棄

するに非ず必ず無量の国土を守護する諸天善神有らんも皆悉く捨去せん、既に捨離し已りなば其の国当に種種の災禍有つて国位を喪失すべし、一切の人衆皆善心無く唯繫縛殺害瞋諍のみ有つて互に相讒諂し枉げて辜無きに及ばん、疫病流行し彗星数ば出で兩日並び現じ薄蝕恒無く黒白の二虹不祥の相を表わし星流れ地動き井の内に声を發し暴雨惡風時節に依らず常に飢饉に遭つて苗実成らず、多く他方の怨賊有つて国内を侵掠し人民諸の苦惱を受け土地所樂の処有ること無けん已上。

大集経に云く「仏法実隱没せば鬚髮爪皆長く諸法も亦忘失せん、当の時虚空の中に大なる声有つて地を震い一切皆遍く動かんこと猶水上輪の如くならん城壁破れ落ち下り屋宇悉く圯け樹林の根・枝・葉・華・葉・菓・葉・盡きん唯淨居天を除いて欲界の一切処の七味・三精氣損滅して余り有ること無けん、解脱の諸の善論當の時一切盡きん、所生の華菓の味い希少にして亦美からず、諸有の井泉池一切尽く枯涸し土地悉く鹹鹵し裂して丘澗と成らん、諸山皆燃して天竜雨を降さず苗稼も皆枯死し生ずる者皆死し尽き余草更に生ぜず、土を雨らし皆昏闇に日月も明を現ぜず四方皆亢旱して数ば諸惡瑞を現じ、十不善業の道・貪・瞋・癡倍増して衆生父母に於け

る之を觀ること・鹿の如くならん、衆生及び壽命・色力・威樂減じ人天の樂を遠離し皆悉く惡道に墮せん、是くの如き不善業の惡王・惡比丘我が正法を毀壞し天人の道を損滅し、諸天善神王の衆生を悲愍する者、此の濁惡の國を棄てて皆悉く余方に向わん」已上。

仁王經に云く「國土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るが故に万民乱る賊來つて國を却かし百姓亡喪し臣君太子・王子・百官共に是非を生ぜん、天地怪異し二十八宿・星道・日月時を失い度々失い多く賊起ること有らんと、亦云く「我今五眼をもつて明に三世を見るに一切の國王は皆過去の世に五百の仏に侍えるに由つて帝王主と為ることを得たり、是を爲つて一切の聖人羅漢而も爲に彼の國土の中に來生して大利益を作さん、若し王の福盡きん時は一切の聖人皆爲に捨て去らん、若し一切の聖人去らん時は七難必ず起らんと已上。

藥師經に云く「若し刹帝利・灌頂王等の災難起らん時所謂人衆疾疫の難・他國侵逼の難・自界叛逆の難・星宿變怪の難・日月薄蝕の難・非時風雨の難・過時不雨の難あらん」已上。

仁王經に云く「大王吾が今化する所の百億の須弥・百億の日月・一の須弥に四天下有り、其の南閻浮提に十六の大唐五百の中國十千の小國有り其の國土の中に七つの畏る可き難有り一切の國王是を難と爲すが故に、云何なるを難と爲すにちがつた日月度を失い時節返逆し・或は赤日出で黒日出で・三三四五の日出で・或は日蝕して光無く・或は日輪一重・三三四五重輪現するを一の難と爲すなり、二十八宿度を失い金星・彗星・輪星・鬼星・火星・水星・風星・星・南斗・北斗・五鎮の大星・一切の國主星・三公星・百官星是くの如き諸星・各各變現するを二の難と爲すなり、大火國を燒き万姓燒せん或は鬼火・竜火・天火・山神火・人火・樹木火・賊火あらん是くの如く變怪するを三の難と爲すなり、大水百姓を没し時節返逆して冬雨ふり夏雪ふり冬時に雷電霹し・六月に氷霜雹を雨らし赤水・黒水・青水を雨らし・土山・石山を雨らし沙磧石を雨らす江河逆に流れ山を浮べ石を流す是くの如く變ずる時を四の

難と為すなり、大風・万姓を吹殺し国土・山河樹木・時に滅没し、非時の大風・黒風・赤風・青風・天風・地風・火風・水風あらん是くの如く変ずるを五の難と為すなり、天地・国土・亢陽・炎火・洞燃として百草亢旱し・五穀登らず・土地赫燃と万姓滅尽せん是くの如く変ずる時を六の難と為すなり、四方の賊来つて国を侵し内外の賊起り、火賊・水賊・風賊・鬼賊ありて百姓荒乱し刀兵劫起らん是くの如く怪する時を七の難と為すなり「大集経に云く「若し国王有つて無量世に於て施戒慧を修すとも我が法の滅せんを見て捨てて擁護せずんば是くの如く種ゆる所の無量の善根悉く皆滅失して其の国当に三の不祥の事有るべし、一には穀貴・二には兵革・三には疫病なり、一切の善神悉く之を捨離せば其の王教令すとも人随従せず常に隣国の侵する所と為らん、暴火横に起り悪風雨多く暴水増長して人民を吹し内外の親戚其れ共に謀叛せん、其の王久しからずして当に重病に遇い寿終の後・大地獄の中に生ずべし、乃至王の如く夫人・太子・大臣・城主・柱師・郡守・宰官も亦復た是くの如くならん」已上。

夫れ四経の文朗かなり万人誰か疑わん、而るに盲瞽の輩迷惑の人妄に邪説を信じて正教を弁えず、故に天下世上・諸仏・衆経に於て捨離の心を生じて擁護の志無し、仍て善神聖人国を捨て所を去る、是を以て惡鬼外道災を成し難を致す。

客色を作して曰く後漢の明帝は金人の夢を悟つて白馬の教を得、上宮太子は守屋の逆を誅して寺塔の構を成す、爾しより来た上一人より下万民に至るまで仏像を崇め経巻を專にす、然れば則ち叡山・南都・園城・東寺・四海・一州・五畿・七道・仏経は星の如く羅なり堂宇雲の如く布けり、子の族は則ち驚頭の月を觀じ鶴勒の流は亦鷄足の風を伝う、誰か一代の教を編し三宝の跡を廃すと謂んや若し其の証有らば委しく其の故を聞かん。

主人喩して曰く仏閣薨を連ね経藏軒を並べ僧は竹葦の如く侶は稻麻に似たり崇重年旧り尊貴・日に新たなり、

但し法師は諂曲にして人倫を迷惑し王臣は不覺にして邪正を弁ずること無し、仁王經に云く「諸の惡比丘多く名利を求め國王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破國の因縁を説かん、其の王別えずして此の語を信聽し横に法制を作つて仏戒に依らず是を破仏・破國の因縁と為す」已上。

涅槃經に云く「菩薩惡象等に於ては心に恐怖すること無かれ惡知識に於ては怖畏の心を生ぜよ、惡象の爲に殺されては三趣に至らず惡友の爲に殺されては必ず三趣に至る」已上。

法華經に云く「惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを爲れ得たりと謂い我慢の心充滿せん、或は阿練若に納衣にして空閑に在り自ら眞の道を行ずと謂いて人間を輕賤する者有らん、利養に貪著するが故に白衣の与めに法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん、乃至常に大衆の中に在つて我等を毀らんと欲するが故に國王・大臣・婆羅門・居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説いて是れ邪見の人外道の論議を説くと謂わん、濁劫惡世の中には多く諸の恐怖有らん惡鬼其の身に入つて我を罵詈訕毀辱せん、濁世の惡比丘は仏の方便隨宜所説の法を知らず惡口して輦蹙し数数擯出せられん」已上。

涅槃經に云く「我れ涅槃の後・無量百歲四道の聖人悉く復た涅槃せん、正法滅して後・像法の中に於て当に比丘有るべし、持律に似像して少く經を誦誦し飲食を貪嗜して其の身を長養し袈裟を著すと雖も猶獵師の細めに視て徐に行くが如く猫の鼠を伺うが如し、常には是の言を唱えん我羅漢を得たりと外には賢善を現し内には貪嫉を懷く唾法を受けたる婆羅門等の如し、實には沙門に非ずして沙門の像を現じ邪見熾盛にして正法を誹謗せん」已上。

文に就いて世を見るに誠に以て然なり惡侶を誡めずんば豈善事を成さんや。

客猶憤りて曰く、明王は天地に因つて化を成し聖人は理非を察して世を治む、世上の僧侶は天下の歸する所なり、惡侶に於ては明王信ず可からず聖人に非ずんば賢哲仰ぐ可からず、今賢聖の尊重せるを以て則ち竜象の輕

からざるを知らぬ、何ぞ妄言を吐いて強ちに誹謗を成し誰人を以て惡比丘と謂うや委細に聞かんと欲す。

主人の曰く、後鳥羽院の御宇に法然と云うもの有り、選択集を作る即ち一代の聖教を破しく十方の衆生を迷わす、其の選択に云く道綽・禪師・聖道・浄土の二門を立て聖道を捨てて正しく浄土に帰するの文、初に聖道門とは之に就いて二有り乃至之に準じ之を思つに心に密大及び実大をも存すべし、然れば則ち今の眞言・信心・天台・華嚴・三論・法相・地論・撰論、此等の八家の意正しく此に在るなり、曇鸞法師往生論の注に云く謹んで竜樹菩薩の十住毘婆沙を案ずるに云く菩薩阿毘跋致を求むるに二種の道有り一には難行道二には易行道なり、此の中難行道とは即ち是れ聖道門なり易行道とは即ち是れ浄土門なり、浄土宗の學者先ず須らく此の旨を知るべし、設け先より聖道門を学ぶ人なりと雖も若し浄土門に於て其の志有らん者は須らく聖道を棄てて浄土に歸すべし又云く善導和尚正雜の二行を立て雜行を捨てて正行に歸するの文、第一に誦誦雜行とは上の觀經等の往生浄土の經を除いて已外・犬・小乗・顯密の諸經に於て受持・誦誦するを悉く誦誦雜行と名く、第三に礼拝雜行とは上の弥陀を礼拝するを除いて已外一切の諸佛・菩薩等及び諸の世天等に於て礼拝し恭敬するを悉く礼拝雜行と名く、私に云く此の文を見るに須く雜を捨てて専を修すべし、豈百即百生の専修・正行を捨てて堅く千中無一の雜修雜行を執せんや行者能く之を思量せよ、又云く貞元入藏錄の中に始め大般若經六百卷より

法常住經に終るまで顯密の大乗經總じて六百三十七部二千八百八十三卷なり、皆須く誦誦大乘の一句に撰すべし、

当に知るべし隨他の前には暫く定散の門を開くと雖も隨自の後には還て定散の門を閉ず、一たび開いて以後永く閉じざるは唯是れ念仏の一門なりと、又云く念仏の行者必ず三心を具足す可きの文、觀無量壽經に云く

同經の疏に云く問うて曰く若し解行の不同、邪雜の人等有つて外邪異見の難を防がん、或は行くこと一分二分にして群賊等喚廻すとは即ち別解・別行・惡見の人等に喩う、私に云く又此の中に一切の別解・別行・異學・異見等と

言つは是れ聖道門を指す已上、又最後結句の文に云く、夫れ速かに生死を離れんと欲せば二種の勝法の中に且く聖道門を闇きて選んで浄土門に入れ、浄土門に入らんと欲せば正雜二行の中に且く諸の雜行を抛ちて選んで心に正行に歸すべし已上。

之に就いて之を見るに曇鸞道綽善導の謬釈を引いて聖道・浄土・難行・易行の旨を建て法華・真言惣じて一代の大乗六百三十七部二千八百八十三卷一切の諸仏菩薩及び諸の世天等を以て皆聖道・難行・雜行等に摂して、或は捨て或は閉じ或は闇き或は抛つ此の四字を以て多く一切を迷わし、剩え三國の聖僧十方の仏弟を以て皆群賊と号し併せて罵詈せしむ、近くは所依の浄土の三部經の唯除五逆誹謗正法の誓文に背き、遠くは一代五時の肝心

たる法華經の第二の「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば乃至其の人命終つて阿鼻獄に入らんと」の誠文に迷う者なり、是に於て代末代に及び人聖人に非ず各冥衢に容つて並びに直道を忘る悲いかな瞳瞭をたず痛い

かな徒に邪信を催す、故に上國王より下土民に至るまで皆經は浄土三部の外に經無く仏は弥陀の三尊の外に仏無しと謂えり。

仍つて伝教・義真・慈覺・智証等或は万里の波濤を涉つて渡せし所の聖教或は一朝の山川を廻りて崇むる所の仏像若しくは高山の巔に華界を建てて以て安置し若しくは深谷の底に蓮宮を起てて以て崇重す、釈迦・藥師の光を並ぶるや威を現當に施し虚空地蔵の化を成すや益を生後に被らしむ、故に國王は郡郷を寄せて以て灯燭を明にし地頭は田園を充てて以て供養に備う。

而るを法然の選択に依つて則ち教主を忘れて西土の仏馱を貴び付属を抛つて東方の如来を闇き唯四卷・三部の教典を專にして空しく一代五時の妙典を抛つ是を以て弥陀の堂に非ざれば皆供仏の志を止め念仏の者に非ざれば早く施僧の懷いを忘る、故に仏閣零落して瓦松の煙老い僧房荒廢して庭草の露深し、然りと雖も各護惜の心を

捨てて並びに建立の思を廃す、是を以て住持の聖僧行いて帰らず守護の善神去つて来ること無し、是れ偏に法然の選択に依るなり、悲しいかな数十年の間、百千万の人、魔縁に蕩かされて多く仏教に迷えり、傍を好んで正を忘る善神怒を為さざらんや、円を捨てて偏を好む悪鬼便りを得ざらんや、如かず彼の方祈を修せんよりは此の一凶を禁ぜんには。

客殊に色を作して曰く、我が本師釈迦文浄土の三部経を説きたまいて以来、曇鸞法師は四論の講説を捨てて一向に浄土に帰し、道綽禅师は涅槃の広業を闡きて偏に西方の行を弘め、善導和尚は雑行を抛つて専修を立て、慧心僧都は諸経の要文を集めて念仏の一行を宗とす、弥陀を貴重すること誠に以て然なり又往生の人其れ幾ばくぞや、就中法然聖人は幼少にして天台山に昇り十七にして六十巻に涉り並びに八宗を究め具に大意を得たり、其の外一切の経論・七遍反覆し章疏伝記究め看ざることなく智は日月に齊しく徳は先師に越えたり、然りと

雖も猶出離の趣に迷いて涅槃の旨を弁えず、故にく觀悉く鑑み深く思い遠く慮り遂に諸経を抛ちて専ら念仏を修す、其の上一夢の靈応を蒙り四裔の親疎に弘む、故に或は勢至の化身と号し或は善導の再誕と仰ぐ、然れば

則ち十方の貴賤頭を低れ一朝の男女歩を運ぶ、爾しより来た春秋推移り星霜相積れり、而るに忝くも釈尊の教を疎にして恣に弥陀の文を譏る何ぞ近年の災を以て聖代の時に課せ強ちに先師を毀り更に聖人を罵るや、毛を吹いて疵を求め皮を剪つて血を出す昔より今に至るまで此くの如き悪言未だ見ず惶る可く慎む可し、罪業至つて重し科条争か遁れん対座猶以て恐れ有り杖に携われて則ち帰らんと欲す。

主人咲み止めて曰く辛きことを夢の葉に習い臭きことを溷廁に忘る善言を聞いて悪言と思ひ謗者を指して聖人と謂い正師を疑つて悪侶に擬す、其の迷誠に深く其の罪浅からず、事の起りを聞け委しく其の趣を談ぜん、釈尊説法の内一代五時の間に先後を立てて権実を弁ず、而るに曇鸞道綽善導既に権に就いて実を忘れ先に依つ

て後を捨つ未だ仏教の淵底を探らざる者なり、就中法然はその流を酌むと雖も其の源を知らず、所以は何ん大乘經の六百三十七部二千八百八十三卷並びに一切の諸仏菩薩及び諸の世天等を以て捨閉閣抛の字を置いて一切衆生の心を薄んず、是れ偏に私曲の詞を展べて全く仏經の説を見ず、妄語の至り惡口の科言つても比無し責めても余り有り人皆其の妄語を信じ悉く彼の選択を貴ぶ、故に淨土の三經を崇めて衆經を抛ち極樂の一仏を仰いで諸仏を忘る、誠に是れ諸仏・諸經の怨敵聖僧衆人の讎敵なり、此の邪教広く八荒に弘まり周く十方に遍す、抑近年の災難を以て往代を難するの由強ちに之を恐る、聊か先例を引いて汝が迷を悟す可し、止觀第二に史記を引いて云く「周の末に被髮袒身・禮度に依らざる者有り」弘決の第二に此の文を釈するに左伝を引いて曰く「初め平王の東に遷りしに伊川に髪を被にする者の野に於て祭るを見る、識者の曰く、百年に及ばじ其の礼先ず亡びぬと、爰に知んぬ徵前に顛れ災以後に致ることを、又阮藉が逸才なりしに蓬頭散帶す後に公卿の子孫皆之に教いて奴苟相辱しむる者を方に自然に達すと云い、節兢持する者を呼んで田舎と為す是を司馬氏の滅する相と為す已上。

又慈覺大師の入唐巡禮記を案するに云く、唐の武宗皇帝・會昌元年勅して章敬寺の鏡霜法師をして諸寺に於て弥陀念仏の教を伝え令む寺毎に三日巡輪すること絶えず、同二年回鶻国の軍兵等唐の堺を侵す、同三年河北の節度使忽ち亂を起す、其の後大蕃国更た命を拒み回鶻国重ねて地を奪う、凡そ兵乱秦項の代に同じく災火邑里の際に起る、何に況んや武宗大に仏法を破し多く寺塔を滅す亂を撥ること能わずして遂に以て事有り」取意

此れを以て之を惟うに法然は後鳥羽院の御宇・建仁年中の者なり、彼の院の御事既に眼前に在り、然れば則ち大唐に例を残し吾が朝に証を顯す、汝疑うこと莫かれ汝怪むこと莫かれ唯須く凶を捨てて善に歸し源を塞ぎ根を截べし。

客聊きやくりやうが和いわぎて日ひく未いまだ淵底えんていを究きうめざるに数しばしば其そのの趣そを知る但ただし華洛からくより柳営りゅうえいに至いたるまで釈門しゃくもんに枢すつけん在あり、然しかるに未いまだ勅状かんじやうを進まいらせず上奏じやうそうに及およばず汝なんじ賤身じやしんを以もて輒たやすく莠言ゆうげんを吐そく其そのの義余より有そり其そのの理謂いれ無なし。

主人しゆじんの曰いく、予な少量な為なりと雖いえども忝かたじけなくも大乘だいじやうを学まなぶ蒼蠅驥尾そうようきびに附ふして万里ばんりを渡わたり碧蘿松頭きらしやうとうに懸かりて千尋せんじんを延のぶ、弟子でし

一い仏ぶつの子こと生なれて諸經しよきやうの王わうに事ことつ、何なんぞ仏法ぶつぽうの衰微すいびを見て心情しんじやうの哀惜あいせきを起おこさざらんや。

其そのの上涅槃經ねはんぎやうに云いく、若もし善比丘ぜんびくあつて法やを壊やぶる者ものを見て置おいて呵責かしやくし驅遣くけんし挙処じよこせずんば当まさに知るべし是この人は

仏法ぶつぽうの中の怨あだなり、若もし能よく驅遣くけんし呵責かしやくし挙処じよこせば是これ我が弟子でし真しんの声聞しやうもんなり」と、余ぜん善比丘ぜんびくの身な為ならずと雖いえども

「仏法ぶつぽう中ちゆう怨おんの責せきを遁のがれんが為ために唯大綱ただたいかうを撮とつて粗一端はろはたんを示しす。

其そのの上うへ去いぬる元仁げんにん年中えんりやくに延曆えんりやく、興福きふくの両寺りやうじより度たひ度たひ奏聞そうもんを經へ、勅宣御教書ちやくせんみきしよを申もう下くだして、法然ほつねんの選せん択たくの印板いんばんを大講堂だいかうどうに

取とり上うげ三世さんぜの仏恩ぶつおんを報ほうぜんが為ために之これを焼失やうしつせしむ、法然ほつねんの墓所ぼしよに於おいては感神院かんじんいんの犬神人つめそに仰おほせ付はけて破却はきやくせしむ其そのの

門弟もんてい隆觀りゆうかん、聖光せいこう、成覺じやうかく、薩生さくしやう等は遠国えんこくに配流はいりうせらる、其そのの後い未いまだ御勅氣かんきを許ゆるされず豈未あにいだ勅状かんじやうを進まいらせずと云いわんや。

客則すなわち和いわぎて日ひく、經きやうを下くだし僧そうを謗ぼうすること一人ひとりには論ろんじ難がたし、然しかれども大乘だいじやう經きやう六百三十七部二千八百八十三卷

並ならびに一切いっさいの諸しよ仏ぶつ菩薩ぼさつ及おび諸しよの世天等せてんとうを以もつて捨閉閣しゃへい拋かくの四字しに載そす其そのの詞ことば勿論もちろんなり、其そのの文けん顯然けんねんなり、此この瑕瑾かきんを守まもつ

て其そのの誹謗ひぼうを成せいせども迷まよつて言ことうか覺さとりて語かたるか、賢愚けんぐ弁べんぜず是非ぜひ定がため難がたし、但ただし災難さいなんの起おこりは

選せん択たくに因よるの由よし、其そのの詞ことばを盛さかんに弥いよ其そのの旨しよを談だんず、所詮しよせん天下泰平てんがたいへい、国土安穩こくどあんのんは君臣くんしんの樂ねがつ所ど土民どみんの思おもつ所ところなり、夫それ国

は法ふに依よつて昌さかえ法はふは人ひとに因よつて貴とし国亡こくおび人滅あせば仏ぶつを誰たれか崇あがむ可べき法はふを誰たれか信しんず可べきや、先さきず国家こっかを祈いのりて須すく

仏法ぶつぽうを立たつべし若もし災なんを消なし難なんを止とどむるの術ぎやく有あらば聞きこかんと欲ほす。

主人しゆじんの曰いく、余こは是これ頑愚がんぐにして敢あて賢けんを存ぞんぜず唯ただ經文きやうもんに就しよいて聊いか所存しよぞんを述しよべん、抑おも治術ちじゆつの旨な内外ないげの間ま其そのの文

幾多いくばくぞや具ぐに拳けんぐ可べきこと難がたし、但ただし仏道ぶつどうに入はいつて数しばしば愚案ぐあんを廻めぐすに謗法ぼうぽうの人ひとを禁いめて正道せいたうの侶りを重おもんぜば國中安穩くちゆうあんのんに

して天下泰平ならん。

即ち涅槃經に云く「仏の言く唯だ一人を除いて余の一切に施さば皆讚歎す可し、純陀問うて言く云何なるをか名けて唯除一人と為す、仏の言く此の經の中に説く所の如きは破戒なり、純陀復た言く、我今未だ解せず唯願くば之を説きたまえ、仏純陀に語つて言く、破戒とは謂く一闍提なり其の余の在所一切に布施すれば皆讚歎すべく大果法を獲ん、純陀復た問いたてまつる、一闍提とは其の義何ん、仏言わく、純陀若し比丘及び比丘尼 優婆塞・

優婆夷有つてそ惡の言を發し正法を誹謗し是の重業を造つて永く改悔せず心に懺悔無らん、是くの如き等の人を名けて一闍提の道に趣向すと為す、若し四重を犯し五逆罪を作り自ら定めて是くの如き重事を犯すと知れども而も心に初めより怖畏懺悔無く肯て発露せず彼の正法に於て永く護惜建立の心無く毀訾輕賤して言に過咎多からん、是くの如き等の人を亦た一闍提の道に趣向すと名く、唯此くの如き一闍提の輩を除いて其の余に施さば一切讚歎せん」と。

又云く「我れ往昔を念うに閻浮提に於て大国の王と作れり名を仙予と曰いき、大乘經典を愛念し敬重し其の心純善に・惡嫉・有ること無し、善男子我爾の時に於て心に大乘を重んず婆羅門の方等を誹謗するを聞き聞き已つて即時に其の命根を断ず、善男子是の因縁を以て是より已來地獄に墮せず」と、又云く「如來昔國王と為りて菩薩の道を行ぜし時爾所の婆羅門の命を断絶すと、又云く「殺に三有り謂く下中上なり、下とは蟻子乃至一切の

畜生なり唯だ菩薩の示現生の者を除く、下殺の因縁を以て地獄・畜生 餓鬼に墮して具に下の苦を受く、何を以ての故に是の諸の畜生に微善根有り是の故に殺す者は具に罪報を受く、中殺とは凡夫の人より阿那含に至るまで

是を名けて中と為す、是の業因を以て地獄・畜生・餓鬼に墮して具に中の苦を受く上、殺とは父母乃至阿羅漢・辟支仏・畢定の菩薩なり阿鼻大地獄の中に墮す、善男子若し能く一闍提を殺すこと有らん者は則ち此の三種の殺の中に墮せず、善男子彼の諸の婆羅門等は一切皆は一闍提なり」已上。

仁王經に云く「仏波斯匿王に告げたまわく是の故に諸の国王に付屬して比丘比丘尼に付屬せず何を以ての故に王のとき威力無ければなり」已上。

涅槃經に云く「今無上の正法を以て諸王大臣宰相及び四部の衆に付屬す、正法を毀る者をば大臣四部の衆当に苦治すべし」と。

又云く「仏の言く、迦葉能く正法を護持する因縁を以ての故に是の金剛身を成就することを得たり善男子正法を護持せん者は五戒を受けず威儀を修せず心に刀劍・弓箭・鉾槊を持すべし」と、又云く「若し五戒を受持せん者有らば名けて大乘の人と為す事を得ず、五戒を受けざれども正法を護るを為て乃ち大乘と名く、正法を護る者は当に刀劍器仗を執持すべし刀杖を持すと雖も我是等を説きて名けて持戒と曰わん」と。

又云く「善男子過去の世に此の拘尸那城に於て仏の世に出でたまつこと有りき歡喜増益如来と号したてまつる、仏涅槃の後正法世に住すること無量億歳なり余の四十年、仏法の末、爾の時に一の持戒の比丘有り名を覺徳と曰う、爾の時に多く破戒の比丘有り是の説を作すを聞きて皆惡心を生じ刀杖を執持し是の法師を逼む、是の時の国王名けて有徳と曰う是の事を聞き已つて護法の為の故に即便ち説法者の所に往至して是の破戒の諸の惡比丘

と極めて共に戰鬪す、爾の時に説法者厄害を免ることを得たり王爾の時に於て身に刀劍鉾槊の瘡を被り体に完き処は芥子の如き許りも無し、爾の時に覺徳尋いで王を讃めて言く、善きかな善きかな王今眞に是れ正法を護る者なり当來の世に此の身當に無量の法器と為るべし、王是の時に於て法を聞くことを得已つて心大に歡喜し尋いで

すなわ 命終して阿 仏の国に生ずるも彼の仏の為に第一の弟子と作る、其の王の將 從人民 眷屬 戰鬪有りし者 歡喜有
即ち 命終して阿 仏の国に生ずるも彼の仏の為に第一の弟子と作る、其の王の將 從人民 眷屬 戰鬪有りし者 歡喜有
りし者一切菩提の心を退せず 命終して悉く阿 仏の国に生ずる、覺徳比丘却つて後壽終つて亦阿 仏の国に往生するこ
とを得て彼の仏の為に声聞 衆中の第二の弟子と作る、若し正法尽きんと欲すること有らん時当に是くの如く受持し
擁護すべし、迦葉爾の時の王とは即ち我が身是なり、説法の比丘は迦葉仏是なり、
迦葉正法を護る者は是くの如き等の無量の果報を得ん、是の因縁を以て我今日に於て種種の相を得て以て自ら莊嚴し
法身不可壞の身を成す、仏迦葉菩薩に告げたまわく、是の故に法を護らん優婆塞等は心に刀杖を執持して擁護すること
是くの如くなるべし、善男子我涅槃の後濁惡の世に国土荒亂し互に相抄掠し人民飢餓せん、爾の時に
多く飢餓の爲の故に発心出家するもの有らん是くの如きの人を名けて禿人と爲す、是の禿人の輩正法を護持するを見て
驅逐して出さしめ若くは殺し若くは害せん、是の故に我今持戒の人諸の白衣の刀杖を持つ者に依つて以て伴侶と爲すこと
を聽す、刀杖を持すと雖も我是等を説いて名けて持戒と曰わん、刀杖を持すと雖も命を斷ずべからず」と。
法華經に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば即ち一切世間の仏種を斷ぜん、乃至其の人命終して阿鼻獄に入ら
ん」と已上。

夫れ經文顯然なり私の詞何ぞ加えん、凡そ法華經の如くんば大乘經典を謗する者は無量の五逆に勝れたり、故に
阿鼻大城に墮して永く出る期無けん、涅槃經の如くんば設い五逆の供を許すとも謗法の施を許さず、蟻子を殺す者は必
ず三惡道に落つ、謗法を禁ずる者は不退の位に登る、所謂覺徳とは是れ迦葉仏なり、有徳とは則ち釈迦文なり。

法華 涅槃の經教は一代五時の肝心なり其の禁・實に重し誰か帰仰せざらんや、而るに謗法の族・正道を忘るの

人・剩あまつさええ法然ほうねんの選択せんたくに依よつて弥いよ愚癡ぐちの盲瞽もくを増ぞうす、是これを以もつて或あるは彼の遺体いたいを忍しのびて木画もくえの像あわわに露あるし或そのは其もつの妄説まつせつを信ゆうげんじて莠言やうげんを模かたきに彫これり之これを海内かいないに弘ひろめ之これを外かくがいに翫もてあそぶ、仰あおぐ所すなわは則そち其かふうの家風ふう施ほこす所すなわは則そち其もんでいの門弟もんていなり、然しかる間あるやあるは釈迦しやくしやの手指しゆしを切みだつて弥陀いんそうの印相いんそうに結あるび或あるは東方とうほう如来にやうらいの鴈宇がんうを改あらためて西土さいど教主きしゆの鵝王がおうを居すえ、或あるは四百余回よひやくごの如法にやうほふ経きやうを止とどめて西方さいほう淨土じやうどの三部さんぶ經きやうと成なるし或あるは天台てんだい大師だいしの講こうを停とどめて善導ぜんどう講こうと為なす、此このくの如ごとき群類ぐんるい其それ誠まことに尽つくし難がたし是は破は仏ぶつに非あらずや是は破は法ほうに非あらずや是は破は僧そうに非あらずや、此この邪義じゃぎ則すなわち選せん択たくに依よるなり。
嗟あ呼あ悲ひしいかな、如に来らい誠諦じやうたいの禁言きんげんに背そむくこと、哀あわれなるかな愚侶ぐりよめい迷惑いわくの語ごに随したがつこと、早はやく天下てんがの靜謐せいひつを思おもわば須すく

國中こくにの謗法ぼうほうを断つべし。

客いの曰いわく、若もし謗法ぼうほうの輩やからを断もじ若もし仏禁ぶつきのの違いを絶ぜつせんには彼の經文きやうもんの如ごとく斬罪ざんざいに行いう可べきか、若もし然しからば殺害さつがい相あ加くわつて罪業ざいごふ何なんが為なんや。

則すなわち大集經だいしききやうに云いく「頭づうを剃そり袈裟けさを著ちやくせば持戒じかい及および毀戒きかいをも、天人てんにん彼を供養くやうす可べし、則すなわち我われを供養くやうするに為なりぬ、是これ我われが子こなり若もし彼を打かする事こと有あれれば則すなわち我われが子こを打なつに為なりぬ、若もし彼を罵辱めにくせば則すなわち我われを毀辱きにくするに為なりぬ、料はかり知しんぬ善惡ぜんあくを論ろんぜず是ぜ非ひを扱えらぶこと無なく僧侶そうりよ為ならんに於おては供養くやうを展のべ可べし、何なんぞ其その子こを

打辱だにくして忝かたじけなくも其その父ちちを悲哀ひあいせしめん、彼の竹杖ちくじやうの目連尊者もくれんそんじやを害むげんせしや永むげんく無間むげんの底そこに沈しづみ、提婆達多だいばだつたの蓮華れんげ比丘尼びくに殺ころせしや久くしく阿鼻あびの焰ほのおに咽むせぶ、先証せんしやう斯いれ明あきかなり後昆ごこん最さいも恐おそあり、謗法ぼうほうを誠まことむるには似にたれども既すでに禁言きんげんを破やぶる此このの事こと信がたじ難がたし如何いかんが意い得うんや。

主人しゅじんの云いく、客明きやくめいに經文きやうもんを見て猶斯なほこの言ことを成おす心こころの及およばざるか理ことの通とおぜざるか、全おく仏子ぶつしを禁いむるには非あらず唯偏ただひとえに謗法ぼうほうを惡にくむなり、夫それ釈迦しやくしやの以もつ前ぜん仏教ぶつぎやうは其その罪つみを斬いんと雖いまだも能忍のうにんの以い後ご經說きやうせつは則すなわち其その施しを止とどむ、然しかれば則すなわち四海しかい万邦ばん一切いっさいの四衆ししゆ其その惡あくに施ほさず皆みな此このの善ぜんに歸かへせば何いかなる難なんか並ならび起おこり何いかなる災きそか競きそい來きらん。

客則ち席を避け襟を刷いて曰く、仏教斯く区にして旨趣窮め難く不審多端にして理非明ならず、但し法然聖人の選択
現在なり諸仏・諸経・諸菩薩・諸天等を以て捨閑閑抛と載す、其の文顯然なり、茲れに因つて聖人国を去り善神所を捨て
て天下飢渴し世上疫病すと、今主人広く経文を引いて明かに理非を示す、故に妄執既に翻えり
耳目数朗かなり、所詮国土泰平・天下安穩は一人より万民に至るまで好む所なり樂う所なり、早く一闡提の施を止め
永く衆僧尼の供を致し仏海の白浪を収め法山の緑林を截らば世は義農の世と成り国は唐虞の国と為らん、然して後法水
の浅深を斟酌し仏家の棟梁を崇重せん。

主人悦んで曰く、鳩化して鷹と為り雀変じて蛤と為る、悦しきかな汝蘭室の友に交りて麻畝の性と成る、誠に其の
難を顧みて専ら此の言を信ぜば風和らぎ浪静かにして不日に豊年ならん、但し人の心は時に随つて移り物の性は境に依つ
て改まる、譬えば猶水中の月の波に動き陳前の軍の剣に靡くがごとし、汝当座に信ずと雖も後定めて永く忘れん、若し先
ず国土を安んじて現当を祈らんと欲せば速に情慮を回らしで対治を加えよ、

所以は何ん、薬師経の七難の内五難忽に起り二難猶残れり、所以他国侵逼の難・自界叛逆の難なり、大集経の三災の内二
災早く顕れ一災未だ起らず所以兵革の災なり、金光明経の内の種種の災禍一一起ると雖も他方の怨賊国内を侵掠する
此の災未だ露れず此の難未だ来らず、仁王経の七難の内六難今盛にして一難未だ現ぜず所以

四方の賊来つて国を侵すの難なり加之国土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るが故に万民乱ると、今此の文に就いて
具さに事の情を案ずるに百鬼早く乱れ万民多く亡ぶ先難是れ明かなり後災何ぞ疑わん若し残る所の難惡法の科に依つて
並び起り競い来らば其の時何んが為んや、帝王は国家を基として天下を治め人臣は田園を領して世上を保つ、而るに他方
の賊来つて其の国を侵逼し自界叛逆して其の地を掠領せば豈驚かざらんや豈騒がざらんや、国を失い家を滅せば何れの
所にか世を遁れん汝須く一身の安堵を思わば先ず四表の静謐をらん者か、

就中人の世に在るや各後生を恐る、是を以て或は邪教を信じ或は謗法を貴ぶ各是非に迷うことを惡むと雖も而も猶
佛法に歸することを哀しむ、何ぞ同じく信心の力を以て妄りに邪義の詞を崇めんや、若し執心翻らず亦曲意猶存せば早
く有為の郷を辞して必ず無間の獄に墮ちなん、所以は何ん、大集經に云く「若し国王有つて
無量世に於て施戒慧を修すとも我が法の滅せんを見て捨てて擁護せずんば是くの如く種ゆる所の無量の善根悉く皆滅失
し、乃至其の王久しからずして当に重病に遇い、終の後大地獄に生ずべし王の如く夫人太子大臣城主柱師郡主・
宰官も亦復是くの如くならん」と。

仁王經に云く「人、仏教を壞らば復た孝子無く六親不和にして天竜も祐けず疾疫惡鬼日に來つて侵害し災怪首尾し
連禍縦横し死して地獄餓鬼・畜生に入らん、若し出て人と為らば兵奴の果報ならん、響の如く影の如く人の夜書くに
火は滅すれども字は存するが如く、三界の果報も亦復是くの如し」と。

法華經の第二に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば乃至其の人命終して阿鼻獄に入らんと、同第七の卷不輕
品に云く「千劫阿鼻地獄に於て大苦惱を受く」と、涅槃經に云く「善友を遠離し正法を聞かず惡法に住せば是の因縁の
故に沈没して阿鼻地獄に在つて、受くる所の身形・縦横八万四千由延ならん」と。

広く衆經を披きたるに専ら謗法を重んず、悲いかな皆正法の門を出でて深く邪法の獄に入る、愚なるかな各惡教の
綱に懸つて鎖に謗教の網に纏る、此の朦朧の迷彼の盛焰の底に沈む豈愁えざらんや、豈苦まざらんや、汝早く信仰の寸
心を改めて速に実乗の一善に歸せよ、然れば則ち三界は皆仏国なり、仏国其れ衰んや、十方は悉く

宝土なり、宝土何ぞ壞れんや、国に衰微無く土に破壊無んば身は是れ安全、心は是れ禪定ならん、此の詞此の言信ず可く
崇む可し。

客の曰く、今生後生誰か慎まざらん誰か和わざらん、此の經文を披いて具に仏語を承るに誹法の科至つて

重く毀法の罪、誠に深し、我一仏を信じて諸仏を抛ち三部経を仰いで諸経を聞きしは、是れ私曲の思に非ず、則ち先達の詞に随いしなり、十方の諸人も亦復是くの如くなるべし、今の世には性心を勞し来生には阿鼻に墮せんこと文明かに理詳かなり疑う可からず、弥よ貴公の慈誨を仰ぎ益愚客の癡心を開けり、速に對治を回して早く泰平を致し先ず生前を安じて更に没後を扶けん、唯我が信ずるのみに非ず又他の誤りをも誠めんのみ。

三 立正安国論奥書 文応元年太歳庚申之を勸う正嘉より之を始め文応元年に勸え畢る。

去ぬる正嘉元年太歳丁巳八月二十三日戌亥の尅の大地震を見て之を勸う、其の後文応元年太歳庚申七月十六日を以て宿屋・禅門に付して故最明寺入道殿に奉れり、其の後文永元年太歳甲子七月五日大明星の時、此の災の根源を知る、文応元年太歳庚申より文永五年太歳戊辰後の正月十八日に至るまで九ヶ年を経て西方大蒙古国自り我が朝を襲う可きの由牒状之を渡す、又同六年重ねて牒状之を渡す、既に勸文之に叶う、之に準じて之を思うに未来亦然る可きか、此の書は徴有る文なり是れ偏に日蓮が力に非ず法華經の眞文の感応の至す所か。

文永六年太歳己巳十二月八日之を写す。

四 安国論御勘由來

正嘉元年丁巳八月廿三日戌亥の時、前代に超え大に地振す、同二年戊午八月一日大風、同三年己未大飢饉、正元元年己未大疫病、同二年庚申四季に亘つて大疫已まず万民既に大半に超えて死を招き了んぬ、而る間国主之に驚き内外典に仰せ付け種種の御祈有り、爾りと雖も一分の験も無く還つて飢疫等を増長す。

日蓮世間の体を見て粗一切経を勸うるに御祈請験無く還つて凶惡を増長するの由道理・文証之を得了んぬ、終に止むこと無く勸文一通を造り作して其の名を立正安国論と号す、文応元年申七月十六日屋戸野入道に付けて

古最明寺入道殿に奏進申し了んぬ此れ偏に国土の恩を報ぜんが為なり、其勸文の意は日本国・天神七代・地神五代・百王百代人王第卅代欽明天皇の御宇に始めて百済国より仏法此の国に渡り桓武天皇の御宇に至つて其の中間五十余代・二百六十余年なり、其の間一切経並びに六宗之れ有りと雖も天台・眞言の二宗未だ之れ有らず、桓武の御宇に山階寺の行表・僧正の御弟子に最澄と云う小僧有り師と号す、已前に渡る所の六宗並に禅宗之を極むと雖も未だ我が意に叶わず、聖武天皇の御宇に大唐の鑒真和尚渡す所の天台の章疏四十余年を経て已後始めて最澄之を披見し粗仏法の玄旨を覚り了んぬ、最澄・天長地久の為に延暦四年叡山を建立す桓武皇帝之を崇め天子本命の道場と号し六宗の御帰依を捨て一向に天台円宗に帰伏し給う。

同延暦十三年に長岡の京を遷して平安城を建つ、同延暦廿一年正月十九日高雄寺に於て南都・七大寺の六宗の碩学・勤操・長耀等の十四人を召し合せ勝負を決談す、六宗の明匠・一問答にも及ばず口を閉ずること鼻の如し華嚴宗の五教・法相宗の三時・三論宗の二藏・三時の所立を破し了んぬ但自宗を破らるるのみに非ず皆謗法の者為ることを知る、同じき廿九日皇帝勅宣を下して之を詰る、十四人謝表を作つて皇帝に捧げ奉る、其の後代代の皇帝叡山の御帰依は孝子の父母に仕うるに超え黎民の王威を恐るるに勝れり、或御時は宣明を捧げ、或御時は非を以て理に処す等云云、殊に清和天皇は叡山の惠亮和尚の法威に依つて位に即き帝王の外祖父・九条右丞相は誓状を叡山に捧げ、源の右將軍は清和の末葉なり鎌倉の御成敗是非を論ぜず叡山に違背す天命恐れ有る者か。

然るに後鳥羽院の御宇・建仁年中に法然・大日とて二人の増上慢の者有り悪鬼其の身に入つて国中の上下を誑惑し代を挙げて念仏者と成り人毎に禅宗に趣く、存の外に山門の御帰依浅薄なり国中の法華・眞言の学者棄て置かれ了んぬ、故に叡山守護の天照太神・正八幡宮・山王七社・国中守護の諸大善神法味を、わすして威光を失い国土を捨て去り了んぬ、悪鬼便りを得て災難を致し結句他国より此の国を破る可き先相勘うる所なり、又其の後文永

元年がんねん甲子きのえね七月五日彗星東方に出で余光大体一国土に及ぶ、此れ又世始まりてより已来無き所の凶瑞なり内外典の学者も其の凶瑞の根源を知らず、予弥よ悲歎を増長す、而るに勅文を捧げて已後九ヶ年を経て今年後の正月大蒙古国の国書を見るに日蓮が勅文に相叶うこと宛かも符契の如し、仏記して云く「我が滅度の後・一百余年を経て阿育大王出世し我が舍利を弘めんと、周の第四昭王の御宇・大史蘇由が記に云く、「千年の外声教此の土に被らしめんと、聖徳太子の記に云く「我が滅度の後二百余年を経て山城の国に平安城を立つ可し」と、天台大師の記に云く「我が滅後二百余年の已後東国に生れて我が正法を弘めんと等云云、皆果して記文の如し。

日蓮正嘉の大地震同じく大風同じく飢饉・正元元年の大疫等を見て記して云く他国より此の国を破る可き先相なりと、自讃に似たりと雖も若し此の国土を毀壊せば復た仏法の破滅疑い無き者なり。

而るに当世の高僧等謗法の者と同意の者なり復た自宗の玄底を知らざる者なり、定めて勅宣御教書を給いて此の凶惡を祈請するか、仏神弥よ瞋恚を作し国土を破壊せん事疑い無き者なり。

日蓮復之を対治するの方之を知る叡山を除いて日本国には但一人なり、臂えば日月の二つ無きが如く聖人肩を並べざるが故なり、若し此の事妄言ならば日蓮が持つ所の法華經守護の十羅刹の治罰之を蒙らん、但偏に国の為法の為人の為にして身の為に之を申さず、復禪門に對面を遂ぐ故に之を告ぐ之を用いざれば定めて後悔有る可し、恐恐謹言。

文永五年太歳戊辰四月五日

法鑒御房 日蓮花押

安国論別状

立正安国論の正本、富木殿に候、かきて給ひ候はん、ときどのか、又。五月廿六日

日蓮花押

六 守護国家論 正元元年 三十八歳御作 36P

夫れ以んみれば偶 十方微塵の三悪の身を脱れて希に閻浮日本の爪上の生を受け亦閻浮日域 爪上の生を捨てて
十方微塵・三悪の身を受けんこと疑い無き者なり、然るに生を捨てて悪趣に墮つる縁・一に非ず 或妻子 眷属の哀憐に
依り或は殺生惡逆の重業に依り或は国主と成つて民衆の歎きを知らざるに依り或は法の邪正を知らざるに依り或
は悪師を信ずるに依る、此の中に於ても世間の善悪は眼前に在り愚人も之を弁うべし仏法の邪正 師の善悪に於ては証果
の聖人 尚之を知らず況や末代の凡夫に於ておや。

しかのみならず仏 日 西山に隠れ余光・東域を照してより已来 四依の慧灯は日に滅じ三蔵の法流は月に濁る実教に
迷える論師は真理の月に雲を副え権経に執する訳者は実経の珠を砕きて権教の石と成す、何に況や震旦の人師の宗義
其の誤り無からんや何に況や日本辺土の末学誤りは多く実は少き者か、随つて其の教を学する人数は
竜鱗よりも多く得道の者は鱗角よりも希なり、或は権教に依るが故に或は時機不相応の教に依るが故に或は凡聖の
教を弁えざるが故に或は権実二教を弁えざるが故に或は権経を実教と謂うに依るが故に或は位の高下を知らざるが
故に、凡夫の習い仏法に就て生死の業を増すこと其の縁・一に非ず。

中 昔 邪智の上人有つて末代の愚人の為に一切の宗義を破して選択集 一卷を造る、名を鸞 緯 導の三師に倣つて
一代を二門に分ち実教を録して権経に入れ法華・真言の直道を閉じて浄土三部の隘路を開く、亦浄土三部の義にも順ぜ
ずして権実の謗法を成し永く四聖の種を断じて阿鼻の底に沈む可き僻見なり、而るに世人之に順うこと譬えば大風の
小樹の枝を吹くが如く門弟此の人を重んずること天衆の帝釈を敬うに似たり。

此の悪義を破らんが為に亦多くの書有り所謂・浄土決義鈔・彈選・推邪輪等なり、此の書を造る人・皆碩徳の名一天に弥ると雖も恐くは未だ選・集・謗法の根源を顕わさず故に還つて悪法の流布を増す、譬えば盛なる旱ばつの時に小雨を降せば草木弥枯れ兵者を打つ刻に弱兵を先んずれば強敵倍力を得るが如し。

予此の事を歎く間・一卷の書を造つて選・集・謗法の縁起を顕わし名づけて守護国家論と号す、願わくば一切の道俗一時の世事を止めて永劫の善苗を種えよ、今経論を以て邪正を直す信・謗は仏説に任せ敢て自義を存する事無かれ。

分ちて七門と為す、一には如来の経教に於て権・實・二教を定むることを明し、二には正像末の興廢を明し、三には選・集・謗法の縁起を明し、四には謗法の者を対治すべき証文を出すことを明し、五には善知識並に眞實の法には値い難きことを明し、六には法華・涅槃に依る行者の用心を明し、七には問に随つて答ふることを明す。

大文の第一に如来の経教に於て権・實・二教を定むることを明すとは此れに於て四有り、一には大部の經の次第を出して流類を撰することを明し、二には諸經の浅深を明し、三には大小乗を定むることを明し、四には且らく權を捨てて實に就くべきことを明す。

第一に大部の經の次第を出して流類を撰することを明さば、問うて云く仏・最初に何なる經を説きたまうや、答えて云く華嚴經なり、問うて云く其の証如何、答えて云く六十華嚴經の離世間淨眼品に云く「是の如く我聞く一時・仏・摩竭提國・寂滅道場に在つて始めて正覺を成ず」と、法華經の序品に放光瑞の時・彌勒菩薩・十方世界の諸仏の五時の次第を見る時・文殊師利菩薩に問うて云く、「又諸仏聖主師子の經典の微妙第一なることを演説し給うに其の聲・清淨に柔軟の首を出して諸の菩薩を教え給ふこと無数億万なることを觀る」亦方便品に仏、自ら初成道の時を説いて云く「我始め道場に坐し樹を觀じ亦經行す、乃至爾の時に諸の梵王及び諸天帝釋・護世四天王及び

自在天並に余の諸の天衆 眷屬百千万 恭敬合掌し礼して我に転法輪を請ずと此等の説は法華經に華嚴經の時を指す文なり、故に華嚴經の第一に云く毘沙門天王略月天子略日天子略釈提桓因略大梵略摩醯首羅等略已上。

涅槃經に華嚴經の時を説いて云く「既に成道し已つて梵天勸請すらく唯願わくば如來當に衆生の爲に広く甘露の門を開き給うべし、乃至梵王復言く世尊一切衆生に凡そ三種有り所謂利根中根鈍根なり利根は能く受く唯願わくば爲に説き給え、仏言く梵王諦に聴け我今當に一切衆生の爲に甘露の門を開くべし」亦三十三に華嚴經の時を説いて云く「十二部經修多羅の中の微細の義を我先に已に諸の菩薩の爲に説くが如し」。

此くの如き等の文は皆諸仏世に出で給いて一切經の初めには必ず華嚴經を説き給ひし証文なり。

問うて云く無量義經に云く「初めに四諦を説き、乃至次に方等十二部經摩訶般若華嚴海空を説く」此くの如き文は般若經の後に華嚴經を説くと相違如何、答えて云く淺深の次第なるか、或は後分の華嚴經なるか、法華經の方便品に一代の次第淺深を列ねて云く「余乗有ること無し若は二若は三」と此の意なり。

問うて云く華嚴經の次に何の經を説き給うや、答えて云く阿含經を説き給うなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く法華經の序品に華嚴經の次の經を説いて云く「若し人苦に遭つて老病死を厭うには爲に涅槃を説く」方便品に云く「即波羅奈に趣き、乃至五比丘の爲に説く」涅槃經に華嚴經の次の經を定めて云く「即波羅奈國に於て正法輪を轉じて中道を宣説す」此等の經文は華嚴經より後に阿含經を説くなり。

問うて云く阿含經の後に何の經を説き給うや、答えて云く方等經なり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く無量義經に云く「初に四諦を説き乃至次に方等十二部經を説く」涅槃經に云く「修多羅より方等を出す」

問うて云く方等とは天竺の語、此には大乘と云う華嚴般若法華涅槃等は皆方等なり何ぞ独り方等部に限り方等の名を立つるや、答えて云く實には華嚴般若法華等皆方等なり然りと雖も今方等部に於て別して方等の名を

立つることは私の義に非ず無量義經 涅槃經の文に顯然たり、阿含の証果は一向小乘なり次に大乘を説く方等より已後みなだいじょう皆大乘と云うと雖も大乘の始なるが故に初に従つて方等部を方等と云うなり、例せば十八界の十半は色なりと雖も初に従つて色境の名を立つるが如し。

問うて云く方等部の諸經の後に何の經を説き給うや、答えて云く般若經なり、問うて云く何を以て之を知るや答えて云く涅槃經に云く「方等より般若を出す」

問うて云く般若經の後に何の經を説き給うや、答えて云く無量義經なり、問うて云く何を以て之を知るや答えて云く仁王經に云く「二十九年中無量義經に云く四十余年」問うて云く無量義經には般若經の後に華嚴經を列ね涅槃經には般若經の後に涅槃經を列ぬ、今の所立の次第は般若經の後に無量義經を列ぬる相違如何、答えて云く涅槃經第十四の文を見るに涅槃經已前の諸經を列ねて涅槃經に対して勝劣を論じ而も法華經を挙げず、第九の卷に於て法華經は涅槃經より已前なりと之を定め給う、法華經の序品を見るに無量義經は法華經の序文なり、無量義經には般若の次に華嚴經を列ぬれども華嚴經を初時に遣れば般若經の後は無量義經なり。

問うて云く無量義經の後に何の經を説き給うや、答えて云く法華經を説き給うなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く法華經の序文に云く「諸の菩薩の為に大乘經の無量義經 菩薩法 仏所護念と名ずくるを説き給う、仏、此の經を説き已つて結跏趺坐し無量義處三昧に入る」

問うて云く法華經の後に何の經を説き給うや、答えて云く普賢經を説き給うなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く普賢經に云く「卻て後三月 我当に般涅槃すべし、乃至 如来昔 耆闍崛山及び余の住处に於て已に広く一実の道を分別し今も此の処に於てす」

問うて云く普賢經の後に何の經を説き給うや、答えて云く涅槃經を説き給うなり、問うて云く何を以て之を

知るや、答えて云く普賢經に云く「卻て後・三月 我当に般涅槃すべし」涅槃經三十に云く「如来何が故ぞ二月に涅槃したまへ、亦如来は初生 出家・成道・轉法輪皆八日を以てす何ぞ仏の涅槃独り十五日なるやと云う」と大部の經・大概かくの如し此より已外諸の大小乗經は次第不定なり、或は阿含經より已後に華嚴經を説き法華經より已後に方等・般若を説く皆義類を以て之を収めて一処に置くべし。

第二に諸經の浅深を明さば、無量義經に云く「初に四諦を説き次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説き菩薩の歴劫修行を宣説す」亦云く「四十余年には未だ眞實を踰わさず」又云く「無量義經は尊く過上無し」此等の文の如くんば四十余年の諸經は無量義經に劣ること疑い無き者なり。

問うて云く密嚴經に云く「一切經の中に勝れたり」大雲經に云く「諸經の轉輪聖王なり」金光明經に云く「諸經の中の王なり」と此等の文を見るに諸大乘經の常の習なり何ぞ一文を瞻て無量義經は四十余年の諸經に勝ると云うや、答えて云く教主釈尊若し諸經に於て互に勝劣を説かずんば大小乗の差別・權實の不同有るべからず、若し實に差別無きに互に差別浅深等を説かば諍論の根源・惡業・起罪の因縁なり、爾前の諸經の第一は縁に随つて不定なり、或は小乗の諸經に對して第一と、或は報身の寿を説くに諸經の第一なり、或は俗諦・眞諦・中諦等を説くに第一なりと一切の第一に非ず、今の無量義經の如きは四十余年の諸經に對して第一なり。

問うて云く法華經と無量義經と何れが勝れたるや、答えて云く法華經勝れたり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌われて今説の中に入るなり。

問うて云く法華經と涅槃經と何れが勝れたるや、答えて云く法華經勝るなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く涅槃經に自ら如法華中等と説き更無所作と云う、法華經に当説を指して難信難解と云わざるが故なり。

問うて云く涅槃經の文を見るに涅槃經已前をば皆邪見なりと云う如何、答えて云く法華經は如来出世の本懷なる故に

「こんにやいまんぞく こんしようぜこじ 然善男子 我実成仏已来」等と説く、但し諸經の勝劣に於ては仏、自ら「我所説經典無量
今者已満足 今正是其時 然善男子 我実成仏已来」等と説く、但し諸經の勝劣に於ては仏、自ら「我所説經典無量
千万億」なりと挙げ了つて「已説 今説 當説」等と説く時、多宝仏 地より涌現して皆是真実と定め分身の諸仏は舌相を
梵天に付け給うつくの如く諸經と法華經との勝劣を定め了んぬ、此の外 釈迦一仏の所説なれば先後の諸經に對して
法華經の勝劣を論ずべきに非ざるなり、故に涅槃經に諸經を嫌う中に法華經を入れず法華經は諸經に勝る由之を
顯わす故なり、但し邪見の文に至つては法華經を覺知せざる一類の人 涅槃經を聞いて悟を得る故に迦葉童子 自身並に
所引を指して涅槃經より已前を邪見等と云うなり經の勝劣を論ずるには非ず。

第三に大小乗を定むることを明さば、問うて云く大小乗の差別如何、答えて云く常途の説の如くんば阿含部の諸經
は小乗なり華嚴方等般若法華涅槃等は大乗なり、或は六界を明すは小乗 十界を明すは大乗なり、其の外
法華經に對して實義を論ずる時 法華經より外の四十余年の諸大乘經は皆小乗にして法華經は大乗なり。

問うて云く諸宗に亘て我所拠の經を実大乘と謂い余宗所拠の經を權大乘と云うこと常の習いなり末學に於ては是非定
め難し、未だ聞知せず法華經に對して諸大乘經を小乗と稱する証文如何、答えて云く宗宗の立義互に是非を論ず
就中末法に於て世間出世に就て非を先とし是を後とす自らは非を知らず愚者の歎くべき所なり、但し且く我等が智を
以て四十余年の現文を觀るに此の言を破する文無ければ人の是非を信用すべからざるなり、其の上 法華經に對して諸
大乘經を小乗と稱することは自答を存すべきに非ず、法華經の方便品に云く「仏は自ら大乘に住し給えり、乃至自ら
無上道大乘平等の法を証しき若し小乗を以て化すること乃至一人に於てせば我即ち慳貪に墮せん、此の事は為て不可
なり」此の文の意は法華經より外の諸經を皆小乗と説けるなり、亦壽量品に云く「小法を樂う」と此等の文は法華經よ
り外の四十余年の諸經を皆小乗と説けるなり、天台・妙樂の釈に於て四十余年の諸經を小乗なりと釈すとも他師
之を許すべからず故に但經文を出すなり。

第四に且らく権教を闇いて実經に就くことを明さば、問うて云く証文如何、答えて云く十の証文有り法華經に云く「但大乘經典を受持することを樂て乃至余經の一偈をも受けざれ」涅槃經に云く「了義經に依つて不了義經に依らざれ」、是二法華經に云く「此の經は持ち難し若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦然なり是の如き人は諸仏の歎めたもつ所なり、是れ則ち勇猛なり是れ則ち精進なり是を戒を持ち頭陀を行ずる者と名く」末代に於て四十余年の持戒無し、三涅槃經に云く「乘に緩なる者に於ては乃ち名けて緩と為す戒緩の者に於ては名けて緩と為さず菩薩摩訶薩此の大乗に於て心懈慢せずんば是を奉戒と名づく正法を護らんが為に大乘の水を以て而も自ら澡浴す是の故に菩薩破戒を現ず」と雖も名づけて緩と為さず戒を流通する文なり是四法華經第四に云く「妙法華經乃至皆是真實」の証明なり法華經第八普賢菩薩の誓に云く「如来の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめて断絶せざらしめん」法華經第七に云く「我が滅度の後後の五百歳の中に閻浮提に於て断絶せしむること無けん」釈迦如来の誓なり法華經第四に多宝並に十方諸仏來集の意趣を説いて云く「法をして久しく住せしめんが故に此に來至し給えり」是八法華經第七に法華經を行ずる者の住处を説いて云く「如来の滅後に於て心に一心に受持読誦解説書寫して説の如く修行すべし所在の国土に乃至若は經卷所住の処若は園の中に於ても若は林の中に於ても若は樹の下に於ても若は僧坊に於ても若は白衣の舎にても若は殿堂に在つても若は山谷曠野にても是の中に皆塔を起て供養すべし所以は何ん当に知るべし是の処は即ち是れ道場なり諸仏此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得給う」是九法華經の流通たる涅槃經の第九に云く「我涅槃の後正法未だ滅せず余の八十年爾時に是の經閻浮提に於て當に広く流布すべし是の時當に諸の惡比丘有るべし是の經を抄掠して分つて多分と作し能く正法の色香美味を滅す是の諸の惡人復是の如き經典を読誦すと雖も如来深密の要義を滅除して世間莊嚴の文を安置し無義の語を飾り前を抄て後に著け後を抄て前に著け前後を中に著け中を前後に著けん當に知るべし是くの

如き諸の悪比丘は是魔の伴侶なり、乃至譬えば牧牛女の多く水を乳に加うるが如く諸の悪比丘も亦復是の如し雜るに世語を以てし錯りて是の經を定む多くの衆生をして正説・正写・正取・尊重・讚歎・供養・恭敬することを得ざらしむ是の悪比丘は利養の爲の故に是の經を広宣布すること能わず分流すべき所少く言うに足らず彼の牧牛の貧窮の女人展転して乳を売るに乃至糜と成して乳味無きが如し、是の大乗經典・大涅槃經も亦復是の如く展転薄淡にして氣味有ること無し氣味無しと雖も猶余經に勝る是れ一千倍なること彼の乳味の諸の苦味に於て千倍勝る

と爲すが如し何を以ての故に是の大乗經典・大涅槃經は声聞の經に於て最上首爲り是十。

問うて云く不了義經を捨てて了義經に就くとは、大円覚修多羅了義經・大仏頂如来密因修証了義經是の如き諸大乘經は皆了義經なり依用と爲す可きや、答えて云く了義不了義は所対に随つて不同なり二乗・菩薩等の所説の不了義に對すれば一代の仏説皆了義なり仏説に就て小乗經は不了義・大乘經は了義なり大乘に就て又四十余年の諸經は不了義經・法華・涅槃・大日經等は了義經なり而るに円覚・大仏頂等の諸經は小乗及び歷劫修行の不了義經に對すれば了義經なり法華經の如き了義には非ざるなり。

問うて云く華嚴・法華・三論等の天台・真言より已外の諸宗の高祖・各其の依憑の經に依つて其の經の深義を極めたりと欲えり是れ爾る可しや如何、答えて云く華嚴宗の如きは華嚴經に依つて諸經を判じて華嚴經の方便と爲すなり、法相宗の如きは阿含・般若等を卑しめ華嚴・法華・涅槃を以て深密經に同じく中道教と立つると雖も亦法華・涅槃は一類の一乘を説くが故に不了義經なり深密經には五性各別を論ずるが故に了義經と立つるなり、三論宗の如きは二蔵を立てて一代を損し大乘に於て浅深を論ぜず而も般若經を以て依憑と爲す、此等の諸宗の高祖・多分は四依の菩薩なるか定めて所存有らん是非に及ばず。

然りと雖も自身の疑を晴らさんが爲に且らく人師の異解を闔いて諸宗の依憑の經を開き見るに華嚴經は旧訳は

五十・六十・新訳は八十・四十・其の中に法華・涅槃の如く一代・聖教を集めて方便と為すの文無し、四乗を説くと雖も其の中の仏乘に於て十界互具・久遠実成を説かず但し人師に至つては五教を立てて先の四教に諸経を収めて華嚴經の方便と為す、法相宗の如きは三時教を立てる時法華等を以て深密經に同ずと雖も深密經五卷を開き見るに全く法華等を以て中道の内に入れず。

三論宗の如きは二藏を立てる時菩薩藏に於て華嚴法華等を収め般若經に同ずと雖も新古の般若經を開き見るに全く般若を以て法華・涅槃に同ずるの文無し華嚴は頓教法華は漸教等とは人師の意樂にして仏説に非ざるなり。

法華經の如きは序分・無量義經に慥に四十余年の年限を挙げ華嚴方等般若等の大部の諸經の題名を呼んで末頭眞実と定め正宗の法華經に至つて一代の勝劣を定むる時我が所説の經典・無量千萬億已説今説當説の金言を吐いて而も其の中に於て此の法華經は最も難信難解なりと説き給う時多宝仏地より湧出し妙法蓮華經皆是眞実と証誠し分身の諸仏・十方より悉く一処に集つて舌を梵天に付け給う。

今此の義を以て余推察を加うるに唐土・日本に渡れる所の五千・七千余卷の諸經以外の天竺・竜宮・四王天・過去の七仏等の諸經並に阿難の末結集の經・十方世界の塵に同ずる諸經の勝劣・淺深・難易・掌中に在り無量千萬億の中に豈釈迦如来の所説の諸經を漏らす可けんや已説今説當説の年限に入らざる諸經之れ有るべきや願わくば末代の諸人且らく諸宗の高祖の弱文無義を閣きて釈迦多宝・十方諸仏の強文有義を信ず可し、何に況や諸宗の末学・偏執を先と爲し末代の愚者人師を本と爲して經論を抛つ者に依憑すべきや、故に法華の流通たる雙林最後の涅槃經に仏・迦葉童子菩薩に遺言して言く「法に依つて人に依らざれ義に依つて語に依らざれ智に依つて識に依らざれ了義經に依つて不了義經に依らざれ」と云ふ。

予世間を見聞するに自宗の人師を以て三昧発得智慧第一と称すれども無徳の凡夫として実經に依つて法門を信ぜしめ

ず不了義の觀經等を以て時機相応の教と稱し了義の法華・涅槃を闔いて譏つて理深解微の失を付け如來の遺言に背いて
「人に依つて法に依らざれ・語に依つて義に依らざれ・識に依つて智に依らざれ・不了義經に依つて了義經に依らざれ」と
談ずるに非ずや、請い願わくば心有らん人は思惟を加えよ如來の入滅は既に二千二百余の星霜を送れり文殊・迦葉・阿難
・經を結集して已後・四依の菩薩重ねて出世し論を造り經の意を申ぶ末の論師に至つて漸く誤り出来ず亦訳者に於ても
梵漢未達の者・權教・宿習の人有つて實の經論の義を曲げて權の經論の義を存せり、之に就て亦唐土の大師・過去の權教
の宿習の故に權の經論心に叶う間・實經の義を用いず或は少し白義に違う文有れば理を曲げて会通を構え以て自身の
義に叶わしむ、設い後に道理と念うと雖も或は名利に依り或は檀那の帰依に依つて權宗を捨てて実宗に入らず、世間
の道俗亦無智の故に理非を弁えず但・人に依つて法に依らず設い惡法たりと雖も多人の邪義に隨つて一人の實說に依ら
ず、而るに衆生の機多くは流轉に隨つて設い出離を求むとも亦多分
は權教に依る、但恨むらくは惡業の身・善に付け惡に付け生死を離れ難きのみ、然りと雖も今の世の一切の凡夫設い今生
を損すと雖も上に出す所の涅槃經第九の文に依つて且らく法華・涅槃を信ぜよ其の故は世間の淺事すら展轉多き時は虚
は多く實は少し況や仏法の深義に於てをや、如來の滅後二千余年の間・佛法に邪義を副え來り万に一にも正義無きか
一代の聖教多分は誤り有るか、所以に心地觀經の法爾無漏の種子・正法華經の屬累の經末・婆沙論の二十六字・撰論の
識の八九・法華論と妙法華經との相違・涅槃論の法華煩惱所汚の文法・相宗の定性・無性の不成・仏・撰論宗の法華經の一
称南無の別時意趣・此等は皆訳者大師の誤りなり、此の外に亦四十余年の經經に於て多くの誤り有るか設い法華・涅槃
に於て誤有るも誤無きも四十余年の諸經を捨てて法華・涅槃に隨う可し其の証・上に出し了んぬ況や誤り有る諸經
に於て信心を致す者・生死を離るべきや。

大文の第二に正像末に就て佛法の興廢有ることを明すとは、之に就て二有り、一には爾前四十余年の内の諸經と淨土

三部經と末法に於て久住 不久住を明す、一には法華 涅槃と浄土の三部經並に諸經との久住 不久住を明す。

第一に爾前四十余年の内の諸經と浄土の三部經と末法に於て久住 不久住を明すとは、問うて云く如来の教法は大小 浅深 勝劣を論ぜず但時機に依つて之を行ぜば定めて利益有るべきなり、然るに賢劫・大術・大集等の諸經を見るに仏滅 後二千余年已後は仏法皆滅して但 教のみ有つて行証 有るべからず、随つて伝教大師の末法灯明記を開くに我延暦二 十年辛巳一千七百五十歳「説なり」延暦二十年より已後亦四百五十余歳なり既に末法に入れり、設い教法有りと雖も 行証 無けん、然るに於ては仏法を行ずる者 方が一も得道有り難きか、然るに雙觀經の「当來の世・經道滅尽せんに我 慈悲哀愍を以て特り此の經を留め止住せん」と百歳ならん其れ衆生の斯の經に値つこと有らん者は意の所願に随つて皆 得道す可し」等の文を見るに釈迦如来一代の聖教皆滅尽の後 唯特り雙觀教の念仏のみを留めて衆生を利益す可しと 見え了んぬ。

此の意趣に依つて粗浄土家の諸師の釈を勘づるに其の意無きに非ず、道綽禪師は「当今末法は是れ五濁惡世なり唯 浄土の一門のみ通入すべき路なり」と書し、善導和尚は「万年に三宝滅して此の經のみ住すること百年なり」と宣べ慈恩 大師は「末法万年に余經悉く滅し弥陀の一教利物偏に増さん」と定め、日本國の叡山の先德慧心僧都は「一代聖教の要文 を集めて末代の指南を教ゆる往生要集の序に云く「夫れ往生極樂の教行は濁世末代の自足なり道俗貴賤誰か歸せざ る者あらん但し顯密の教法は其の文一に非ず事理の業因其の行惟れ多し利智精進の人は末だ難しと為す予が如き頑魯 の者豈敢てせんや」乃至「次下に云く就中念仏の数は多く末代經道滅尽の後の濁惡の衆生を利する計りなり」と、總じ て諸宗の學者も此の旨を存す可し殊に天台一宗の學者誰か此の義に背く可けんや如何、答えて云く爾前四十余年の 經經 は各時機に随つて而も興廢有るが故に多分は浄土の三部經より已前に滅尽有る可きか、諸經に於ては多く三乘 現身の得道を説く故に末代に於ては現身得道の者之少きなり十方の往生浄土は多くは末代の機に蒙らしむ、之に就て

西方極樂は娑婆隣近なるが故に最下の淨土なるが故に日輪東に出て西に没するが故に諸經に多く之を勸む、随つて淨土の祖師のみ独り此の義を勸むるのみに非ず天台・妙樂等も亦爾前の經に依るの日は且らく此の筋あり、亦独り人師のみに非ず竜樹・天親も此の意有り、是れ一義なり、亦仁王經等の如きは淨土の三部經より尙久く末法万年の後・八千年住す可しとなり、故に爾前の諸經に於ては一定すべからず。

第二に法華・涅槃と淨土の三部經との久住・不久住とを明さば、問うて云く法華・涅槃と淨土の三部經と何れが先に滅すべきや、答えて云く法華・涅槃より已前に淨土の三部經は滅す可きなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く無量義經に四十余年の大部の諸經を挙げ了つて未顕眞実と云う故に雙觀經等の「特り此の經を留む」の言は皆方便なり虚妄なり、華嚴・方等・般若・觀經等の速疾歴劫の往生・成仏は無量義經の実義を以て之を検するに無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐれども終に無上菩提を成ずることを得ず、乃至險き逕を行くに留難多きが故にと云う經なり、往生・成仏俱に別時意趣なり、大集・雙觀經等の住滅の先後は皆隨宜の一説なり、法華經に來らざる已前は彼の外道の説に同じ、譬えば江河の大海に趣かず民臣の大王に隨わざるが如し、身を苦しめ行を作すとも法華・涅槃に至らずんば一分の利益無く有因無果の外道なり、在世滅後俱に教有つて人無く行有つて証無きなり諸木は枯ると雖も松柏は萎まず衆草は散ると雖も鞠竹は変ぜず法華經も亦復是くの如し釈尊の三説・多宝の証明・諸仏の舌相偏に令法久住に在るが故なり。

問うて云く諸經滅尽の後特り法華經のみ留る可き証文如何、答えて云く法華經の法師品に釈尊自ら流通せしめて云く「我が所説の經典無量千萬億已に説き今説き當に説かん而も其の中に於て此の法華經最も為難信難解なり」と云云、文の意は一代五十年の已今當の三説に於て最第一の經なり、八万聖教の中に殊に未來に留めんと欲して説き給へるなり、故に次の品に多宝如來は地より涌出し分身の諸仏は十方より一処に來集し釈迦如來は諸仏を御使として八方四

百万億那由他の世界に充滿せる菩薩・二乘・人天・八部等を責めて多宝如来並に十方の諸仏涌出来集の意趣は偏に
令法久住の爲なり、各三説の諸経滅尽の後、慥に未來五濁難信の世界に於て此の経を弘めんとの誓言を立てよと云える
時に二万の菩薩・八十万億那由他の菩薩、各誓状を立てて云く、「我身命を愛せず但無上道を惜む」と、千世界の微塵の
菩薩・文殊等皆誓つて云く、「我等、仏の滅後に於て乃至當に広く此の経を説くべし」と云云、其の後、仏十喻を挙げ給う、
其の第一の喩は川流江河を以て四十余年の諸経に譬え法華経を以て大海に誓う、末代濁惡の無慚無愧の大早の時、
四味の川流江河は渴ると雖も法華経の大海は減少せず等と説き了つて、次下に正しく説いて云く、「我滅度の後、
後の五百歳の中に広宣流布し閻浮提に於て断絶せしむること無けん」と定め了んぬ。

倩文の次第を案ずるに我滅度の次の後の字は四十余年の諸経滅尽の後の後の字なり、故に法華経の流通たる涅槃経
に云く「心に無上の仏法を以て諸の菩薩に付すべし諸の菩薩は善能く問答するを以てなり是くの如き法宝は則ち久住する
ことを得・無量千世にも増益熾盛にして衆生を利安すべし」已上此の如き等の文は法華・涅槃は無量百歳にも絶ゆる可からざ
る経なり、此の義を知らざる世間の学者・大集権門の五五百歳の文を以て此の経に同じ浄土の三部経より已前に滅尽す
可しと存ずる立義は一經の先後起尽を忘れたるなり。

問つて云く上に挙ぐる所の曇鸞・道綽・善導・慧心等の諸師は皆法華・眞言等の諸経に於て末代不相応の釈を作る之に
依つて源空並に所化の弟子・法華・眞言等を以て雜行と立て難行道と疎み、行者をば群賊・惡衆・惡見の人等と罵り、
或は祖父が履に類しの語、或は絃歌等にも劣ると云うの語其の意趣を尋ねれば偏に時機不相応の義を存するが故なり、
此等の大師の釈をば如何に之を会すべきや、答えて云く釈迦如来一代五十年の説教・一仏の金言に於て権実二教を分ち
権経を捨てて実経に入らしむる仏語顯然たり、此に於て若但讚仏乘・衆生没在苦の道理を恐れ且らく四十二年の権経
を説くと雖も若以小乗化乃至於一人我則墮慳貪の失を脱れんが爲に入大乘爲本の義を存し本意を遂げ法華経を

と
説き給う。

然るに涅槃經に至つて我滅度せば必ず四依を出して權実二教を弘通せしめんと約束しあぬ故に竜樹菩薩は如來の滅後八百年に出世して十住毘婆沙等の權論を造りて華嚴・方等・般若等の意を宣べ大論を造りて二若法華の差別を分ち、天親菩薩は如來の滅後九百年に出世して俱舍論を造りて小乘の意を宣べ唯識論を造りて方等部の意を宣べ最後に仏性論を造りて法華・涅槃の意を宣べ了教不了教を分ちて取て仏の遺言に違わず、末の論師並に訳者の時に至つては一向に權經に執するが故に実經を會して權經に入れ權実雜亂の失出来せり、亦人師の時に至つては各依憑の經を以て本と為すが故に余經を以て權經と為す是より彌仏意に背く。

而るに淨土の三師に於ては鸞・綽の二師は十住毘婆沙論に依つて難易・聖淨の二道を立つ若し本論に違して法華眞言等を以て難易の内に入れば信用に及ばじ、随つて淨土論註並に安樂集を見るに多分は本論の意に違わず、善導和尚は亦淨土の三部經に依つて弥陀・称名等の一行一願の往生を立つる時、梁・陳・隋・唐の四代の撰論師総じて一代聖教を以て別時意趣と定む、善導和尚の存念に違するが故に撰論師を破する時、彼の人を群賊等に誓つ順次生の功德を賊するが故に其の所行を難行と称することは必ず万行を以て往生の素懷を遂ぐる故に此の人を責むる時に千中無一と嫌えり、是の故に善導和尚も雜行の言の中に敢えて法華・眞言等を入れず。

日本国の源信僧都は亦叡山第十八代の座主・慈慧大師の御弟子なり多くの書を造れることは皆法華を弘めんが為なり、而るに往生要集を造る意は爾前四十余年の諸經に於て往生・成仏の二義有り成仏の難行に対して往生易行の義を存し往生の業の中に於て菩提心・觀念の念仏を以て最上と為す、故に大文第十の問答料簡の中第七の

諸行勝劣門に於ては念仏を以て最勝と爲し次下に爾前最勝の念仏を以て法華經の一念信解の功德に對して勝劣を判ずる時・一念信解の功德は念仏三昧より勝る百千万倍なりと定め給えり、當に知るべし往生要集の意は爾前最上の念仏を以て法華最下の功德に對して人をして法華經に入らしめんが爲に造る所の書なり、故に往生要集の後に一乘要決を造つて自身の内証を述ぶる時 法華經を以て本意と爲すなり。

而るに源空並に所化の衆 此の義を知らざるが故に法華 眞言を以て三師並に源信所破の難聖難並に往生要集の序の顯密の中に入れて三師並に源信を法華 眞言の謗法のひと爲す、其の上 日本國の一切の道俗を化して法華 眞言に於て時機不相心の旨を習わしめ在家 出家の諸人に於て法華 眞言の結縁を留む豈仏の記し給う所の 惡世中比丘邪智心諂曲の人に非ずや、亦則ち一切世間の仏種を斷ずの失を免る可けんや。

其の上 山門 寺門 東寺 天台並に日本國中に法華 眞言を習う諸人を群賊・惡衆 惡見の人等に誓つる源空が重罪何れの劫にか其の苦果を経尽す可きや、法華經の法師品に持經者を罵る罪を説いて云く「若し惡人有つて不善の心を以て一劫の中に於て現に仏前に於て常に仏を毀罵せん其の罪尚輕し若し人・一つの惡言を以て在家 出家の法華經を讀誦する者を毀 せん其の罪 甚だ重し」經文一人の持者を罵る罪すら尚是くの如し況や書を造り日本國の諸人に罵らしむる罪をや、何に況や此の經を千中無一と定めて法華經を行ずる人に疑を生ぜしむる罪をや、何に況や此の經を捨てて觀經等の權經に遷らしむる謗法の罪をや、願わくば一切の源空が所化の四衆頓に選択集の邪法を捨てて忽に法華經に遷り今度阿鼻の災を脱れよ。

問うて云く正しく源空が法華經を誹謗する証文如何、答えて云く法華經の第二に云く「若し人信ぜずして斯の經を毀謗せば則一切世間の仏種を斷ぜん」經文不信の相貌は人をして法華經を捨てしむればなり、故に天親菩薩の仏性論の第一に此の文を釈して云く「若し大乘に憎背する者 此は是れ一闡提の因なり衆生をして此の法を捨てし

むるを為の故に「論文謗法の相貌は此の法を捨てしむるが故なり、選択集は人をして法華經を捨てしむる書に非ずや閣拋の二字は仏性論の憎背の二字に非ずや、亦法華經誹謗の相貌は四十余年の諸經の如く小善成仏を以て別時意趣と定むる等なり。」

故に天台の釈に云く「若し小善成仏を信ぜずんば則世間の仏種を断するなり」妙樂重ねて此の義を宣べて云く「此の經は遍く六道の仏種を開す若し此の經を謗せば義断に當るなり」釈迦・多宝・十方の諸仏・天親・天台・妙樂の意の如くんば源空は謗法の者なり所詮選択集の意は人をして法華・眞言を捨てしめんと定めて書き了んぬ謗法の義疑い無き者なり。

大文の第三に選択集謗法の緣起を出さば、問うて云く何れの証拠を以て源空を謗法の者と称するや、答えて云く「選択集の現文を見るに一代聖教を以て二に分つには聖道・難行・雜行・二には淨土・易行・正行なり、其の中に聖難・雜と云うは華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃・大日經等なり淨・易・正とは淨土の三部經の称名念仏等なり取意聖・難・雜の失を判ずるには末代の凡夫之行ぜば百の時に希に一二を得・千の時に希に三五を得ん、或は千の中に一も無し、或は群賊・惡衆・邪見・惡見・邪雜の人等と定むるなり、淨・易・正の得を判ずるには末代の凡夫之行ぜば十は即十生し百は即百生せん等なり謗法の邪義是なり。」

問うて云く一代聖教を聖道・淨土・難行・易行・正行・雜行と分ち其の中に難・聖・雜を以て時機不相応と称することと源空一人の新義に非ず曇鸞・道綽・善導の三師の義なり、此亦此等の大師の私の案に非ず其の源は竜樹菩薩の十住毘婆沙論より出でたり、若し源空を謗法の者と称せば竜樹菩薩並に三師を謗法の者と称するに非ずや、答えて云く竜樹菩薩並に三師の意は法華已前の四十余年の經經に於て難・易等の義を存す、而るに源空より已來竜樹並に三師の難行等の語を借りて法華・眞言等を以て難・雜等の内に入れぬ、所化の弟子・師の失を知らずして此の邪義を以て正義と存じ此の

る。ふ。に。流。布。せ。し。む。る。が。故。に。国。中。の。万。民。悉。く。法。華。眞。言。に。於。て。時。機。不。相。応。の。想。を。作。す。其。の。上。世。間。を。貧。る。天。台。眞。言。の。学。者。世。の。情。に。随。わ。ん。が。為。に。法。華。眞。言。に。於。て。時。機。不。相。応。の。惡。言。を。吐。い。て。選。択。集。の。邪。義。を。扶。け。一。旦。の。欲。心。に。依。つ。て。釈。迦。多。宝。並。に。十。方。諸。仏。の。御。評。定。の。令。法。久。住。於。閻。浮。提。広。宣。流。布。の。誠。言。を。壊。り。一。切。衆。生。を。し。て。三。世。十。方。の。諸。仏。の。舌。を。切。る。罪。を。得。せ。し。む。偏。に。是。れ。惡。世。中。の。比。丘。は。邪。智。に。し。て。心。諂。曲。に。未。だ。得。ざる。を。為。得。たり。と。謂。い。乃。至。惡。鬼。其。の。身。に。入。り。仏。の。方。便。隨。宜。所。説。の。法。を。知。ら。ざる。故。なり。

問。う。て。云。く。竜。樹。菩。薩。並。に。三。師。は。法。華。眞。言。等。を。以。て。難。聖。雜。中。に。入。れ。ざ。り。し。を。源。空。私。に。之。を。入。る。と。は。何。を。以。て。之。を。知。る。や。答。え。て。云。く。遠。く。余。処。に。証。拠。を。尋。ぬ。可。き。に。非。ず。即。選。択。集。に。之。を。見。たり。問。う。て。云。く。其。の。証。文。如。何。答。え。て。云。く。選。択。集。の。第。一。篇。に。云。く。道。綽。禪。師。聖。道。淨。土。の。二。門。を。立。て。而。し。て。聖。道。を。捨。て。て。正。しく。淨。土。に。歸。す。る。の。文。と。約。束。し。了。つ。て。次。下。に。安。樂。集。を。引。い。て。私。の。料。簡。の。段。に。云。く。初。に。聖。道。門。と。は。之。に。就。て。二。有。り。一。に。は。大。乘。二。に。は。小。乘。な。り。大。乘。中。に。就。て。顯。密。權。実。等。の。不。同。有。り。と。雖。も。今。此。の。集。の。意。は。唯。顯。大。及。び。權。大。を。存。す。故。に。歷。劫。迂。回。の。行。に。當。る。之。に。準。じ。て。之。を。思。う。に。心。に。密。大。及。び。實。大。を。も。存。す。べし。已。上。選。択。集。の。文。な。り。此。の。文。の。意。は。道。綽。禪。師。の。安。樂。集。の。意。は。法。華。已。前。の。大。小。乘。經。に。於。て。聖。道。淨。土。の。二。門。を。分。つ。と。雖。も。我。私。に。法。華。眞。言。等。の。實。大。密。大。を。以。て。四。十。余。年。の。權。大。乘。に。同。じ。て。聖。道。門。と。稱。す。準。之。思。之。の。四。字。是。な。り。此。の。意。に。依。る。が。故。に。亦。曇。鸞。の。難。易。の。二。道。を。引。く。時。亦。私。に。法。華。眞。言。を。以。て。難。行。道。中。に。入。れ。善。導。和。尚。の。正。雜。二。行。を。分。つ。時。も。亦。私。に。法。華。眞。言。を。以。て。雜。行。の。内。に。入。る。總。じ。て。選。択。集。の。十。六。段。に。亘。つ。て。無。量。の。謗。法。を。作。す。根。源。は。偏。に。此。の。四。字。よ。り。起。る。誤。れ。る。か。な。畏。し。き。か。な。

爰。に。源。空。の。門。弟。師。の。邪。義。を。救。つ。て。云。く。諸。宗。の。常。の。習。い。設。い。經。論。の。証。文。無。し。と。雖。も。義。類。の。同。じ。き。を。聚。め。て。一。処。に。置。く。而。も。選。択。集。の。意。は。法。華。眞。言。等。を。集。め。て。雜。行。の。内。に。入。れ。正。行。に。對。し。て。之。を。捨。つ。偏。に。經。の。法。体。を。嫌。う。に。非。ず。但。風。勢。無。き。末。代。の。衆。生。を。常。没。の。凡。夫。と。定。め。此。の。機。に。易。行。の。法。を。撰。ぶ。時。稱。名。の。念。仏。を。以。て。其。の。機。に。當。て。易。行。の。法。を。以。て。諸。教。に。勝。る。

と立つ權実淺深の勝劣を詮ずるに非ず、雜行と云うも嫌つて雜と云うに非ず、雜と云うは不純を雜と云う其の上諸の經論並に諸師も此の意無きに非ず故に觀山の先徳の往生要集の意偏に是の義なり。

所以に往生要集の序に云く「顯密の教法は其の文一に非ず事理の業因其の行惟れ多し利智精進の人は未だ難しと

為ず予が如き頑魯の者豈敢てせんや是の故に念仏の一門に依る」と云云、此の序の意は慧心先徳も法華・真言等を破する

に非ず但偏に我等頑魯の者の機に當つて法華・真言は聞き難く行じ難きが故に我身鈍根なるが故なり敢て法体を嫌うに

非ず、其の上序より已外正宗に至るまで十門有り大文第八の門に述べて云く「今念仏を勧むることは余の種種の妙行

を遮するに非ず只是れ男女・貴賤・行住坐臥を簡はず時処諸縁を論ぜず之を修するに難からず乃至・臨終には往生を

願求するに其の便宜を得ること念仏には如かず」已上此等の文を見るに源空の選択集と源信の往生要集と一卷・三卷の

不同有りと雖も一代聖教の中には易行を撰んで末代の愚人を救わんと欲する意趣は但同じ事なり、源空上人・法華・

真言を難行と立てて惡道に墮せば慧心先徳も亦此の失を免るべからず如何、答えて云く汝・師の謗法の失を救わんが

為に事を源信の往生要集に寄せて謗法の上に弥・重罪を招く者なり其の故は釈迦如来五十年の説教に総じて先き四十

二年の意を無量義經に定めて云く「險逕を行くに留難多き故に」と無量義經の已後を定めて云く「大直道を行くに留難無

きが故に」と仏、自ら難易・勝劣の二道を分ちたまえり、仏より外等覺已下末代の凡師に至るまで自義を以て難易の二道

を分ち此の義に背く者は外道魔王の説に同じきか、随つて四依の居士・竜樹菩薩の十住毘婆沙論には法華已前に於て

難易の二道を分ち敢て四十余年已後の經に於て難行の義を存せず、其の上若し修し易きを以て易行と定めば法華經の

五十展轉の行は称名・念仏より行じ易きこと百千万億倍なり、若し亦勝を以て易行と定めば分別功德品に爾前四十余年

の八十万億劫の間の檀・戒・忍・進・念・定・慧・三昧等先きの五波羅蜜の功德を以て法華經の一念信解の功德に比するに一念

信解の功德は念・定・三昧等の先きの五波羅蜜に勝る事百千万億倍なり、難易・勝劣と云い行淺功深と云い觀經等の念・定・

さんまい ほけきよう
三昧を法華經に比するに難行の中の極難行 劣が中の極劣なり。

其の上悪人 愚人を扶くこと 亦教の浅深に依る阿含十二年の戒門には現身に四重五逆の者に得道を許さず、華嚴・方等 般若雙觀經等の諸經は阿含經より教深き故に勸門の時は重罪の者を摂すと雖も猶戒門の日は七逆の者に現身の受戒を許さず、然りと雖も決定性の二乗 無性の闡提に於て誠勸共に之を許さず、法華 涅槃等には唯五逆・七逆謗法の者を摂するのみに非ず亦定性 無性をも摂す、就中末法に於ては常没の闡提之多し豈觀經等の四十余年の諸經に於て之を扶く可けんや無性の常没・決定性の二乗は但法華 涅槃等に限り、四十余年の經に依る人師は彼の經の機と取る此の人は未だ教相を知らざる故なり。

但し往生要集は一往序分を見る時は法華 眞言等を以て顯密の内にに入れて殆ど末代の機に叶わずと書すと雖も文に入つて委細に一部三卷の始末を見るに、第十の問答料簡の下に正しく諸行の勝劣を定むる時 觀仏三昧・般舟三昧・十住 毘婆沙論 寶積・大集等の爾前の經論を引いて一切の万行に對して念仏三昧を以て王三昧と立て了んぬ、最後に一つの問答有り爾前の禪定 念仏三昧を以て法華經の一念信解に對するに百千万億倍劣ると定む、復問を通ずる時念仏三昧を万行に勝ると云うは爾前の当分なりと云云、当に知るべし慧心の意は往生要集を造つて末代の愚機を調べて法華經に入れんが為なり、例せば仏の四十余年の經を以て權機を調べ法華經に入れ給うが如し。

故に最後に一乗要決を造る其の序に云く「諸宗の權實は古來の諍いなり俱に經論に拠て互に是非を執す、余皆方便の歲冬十月病中に歎いて云く仏法に遇うと雖も仏意を了せず若し終に手を空うせば後悔何ぞ追わん、爰に經論の文義 賢哲の章疏、或は人をして尋ねしめ、或は自ら思忖し全く自宗 他宗の偏党を捨つる時、専ら權智実智の深奥を深くるに終に一乘は眞実の理、五乘は方便の説を得る者なり、既に今生の蒙を開く何ぞ夕死の恨を残さんや」已上此の序の意は偏に慧心の本意を顯すなり、自宗他宗の偏党を捨つるの時浄土の法門を捨てざらんや一乘は眞実の理と得る時専ら

法華經に依るに非ずや、源信僧都は永觀二年甲申の冬十一月往生要集を造り寛弘二年丙午の冬十月の比・一乗要決を作る其の中間二十余年なり權を先にし実を後にする宛も仏の如く亦竜樹・天親・天台等の如し、汝往生要集を便りとして師の謗法の失を救わんと欲すれども敢えて其の義類に似ず義類の同じきを以て一処に聚むとならば何等の義類同なるや、華嚴經の如きは二乗界を隔つるが故に十界互具無し方等・般若の諸經は亦十界互具を許さず觀經等の往生極樂も亦方便の往生なり成仏往生俱に法華經の如き往生に非ず皆別時意趣の往生成仏なり。

其の上源信僧都の意は四威儀に行じ易き故に念仏を以て易行と云い四威儀に行じ難きが故に法華を以て難行と称せば天台・妙樂の釈を破する人なり所以に妙樂大師の末代の鈍者無智の者等の法華經を行ずるに普賢菩薩並に多宝・十方の諸仏を見奉るを易行と定めて云く「散心に法華を誦し禪三昧に入らず坐立行・一心に法華の文字を念ぜよ」已上此の釈の意趣は末代の愚者を損せんが為なり散心とは定心に対する語なり誦法華とは八卷・一卷・一字・一句・一偈・題目・一心・一念隨喜の者五十展轉等なり坐立行とは四威儀を嫌わざるなり一心とは定の一心に非ず理の一心に非ず散心の中心・一心なり念法華文字とは此の經は諸經の文字に似ず一字を誦すと雖も八万宝蔵の文字を含み一切諸仏の功德を納むるなり天台大師玄義の八に云く「手に巻を執らざれども常に是の經を読み口に言声・無けれども衆典を誦し仏・說法せざれども恒に梵音を聞き心に思惟せざれども普く法界を照す」已上此の文の意は手に法華經一部八巻を執らざれども是の經を信ずる人は昼夜十二時の持經者なり口に読經の声を出さざれども法華經を信ずる者は日日・時時・念念に一切經を読む者なり。

仏の入滅は既に二十余年を経たり然りと雖も法華經を信ずる者の許に仏の音声を留めて時時刻刻・念念に我死せざる由を聞かしむ心に一念三千を觀ぜざれどもく十方法界を照す者なり此等の徳は偏に法華經を行ずる者に備わるなり、是の故に法華經を信ずる者は設い臨終の時・心に仏を念ぜず口に經を誦せず道場に入らざれども心無くして法界を

照し音無くして一切経を誦し巻軸を取らずして法華經八卷を拳る徳之有り是れ豈權教の念仏者の臨終正念を期して、
十念の念仏を唱えんと欲する者に百千万倍勝るる易行に非ずや、故に天台大師文句の十に云く「都て諸教に勝るるが
故に隨喜功德品と云う」妙樂大師の法華經は諸經より淺機を取る而るを人師此の義を弁えざる故に法華經の機を深く
取る事を破して云く「恐らくは人謬つて解する者初心の功德の大なることを測らずして

功を上位に推り此の初心を蔑る故に今彼の行は淺く功は深きことを示して以て經力を顯す」已上以顯經力の積の意趣は
法華經は觀經等の權經に勝れたるが故に行は淺く功は深し淺機を損むる故なり、若し慧心の先徳法華經を以て念仏よ
り難行と定め愚者頑魯の者を損せずと云わば恐らくは逆路伽耶陀の罪を招かざらんや、恐人謬解の内に入らざらんや。

總じて天台・妙樂の二大部の本末の意には華經は諸經に漏れたる愚者惡人女人常没闡提等を損し給う他師仏意
を覺らざる故に法華經を諸經に同じ或は地住の機を取り或は凡夫に於ても別時意趣の義を存す、此等の邪義を破して
人天四惡を以て法華經の機と定む、種類相對を以て過去の善惡を收む人天に生ずる人豈過去の五戒・十善無からんや等
と定め了んぬ、若し慧心此の義に背かば豈天台宗を知れる人ならんや、而るを源空深く此の義に迷うが故に往生要集
に於て僻見を起し自ら失ち他をも誤る者なり、適宿善有つて實教に入りながら一切衆生を化して權教に還らしめ
剩え實教を破せしむ豈惡師に非ずや、彼の久遠下種・大通結縁の者の如き五百・三千の塵劫を経るが如きは法華の大
教を捨てて爾前の權小に還るが故に後に權經を捨てて六道を回りぬ不輕輕毀の衆は千劫阿鼻地獄に墮つ、權師を信じ
實經を弘むる者に誹謗を作したるが故なり。

而るに源空我が身唯實經を捨てて權經に入るのみに非ず人を勧めて實經を捨てて權經に入らしめ亦權人をして實經
に入らしめず、剩え實經の行者を罵るの罪永劫にも浮び難からんか。

問うて云く十住毘婆沙論は一代の通論なり難易の二道の内に何ぞ法華・眞言・涅槃を入れざるや、答えて云く一代の

諸大乘經に於て華嚴經の如きは初頓後分有り初頓の華嚴は二乗の成不成を論ぜず方等部の諸經には一向に二乗・無性・闡提の成仏を斥う般若部の諸經も之に同じ総じて四十余年の諸大乘經の意は法華・涅槃・大日經等の如くには二乗・無性の成仏を許さず、此等を以て之をうるに爾前・法華の相違は水火の如し滅後の論師・竜樹・天親も亦俱に千部の論師なり所造の論に通別の二論有り通論に於ても亦二有り四十余年の通論と一代五十年の通論となり、其の差別を分つに決定性の二乗・無性・闡提の成・不成を以て論の權實を定むるなり、而るに大論は竜樹菩薩の造・羅什三蔵の訳なり此の論にも亦二乗作仏を許さず之を以て知んぬ法華已前の諸大乘經の意を申へたる論なることを。

問うて云く十住毘婆沙論の何処に二乗作仏を許さざるの文出でたるや、答えて云く十住毘婆沙論の第五に云く「若し声聞地及び辟支仏地に墮する是を菩薩の死と名く則ち一切の利を失す若し地獄に墮すとも是の如き畏れを生ぜじ若し二乗地に墮すれば則ち大怖畏と為す地獄の中に墮すとも畢竟して仏に至ることを得若し二乗地に墮すれば畢竟して仏道を遮す」已上此の文二乗作仏を許さず宛も淨名等の「於仏法中以如敗種」の文の如し。

問うて云く大論は般若經に依つて二乗作仏を許さず法華經に依つて二乗作仏を許すの文如何、答えて云く大論の二百に云く「問うて云く更に何の法が甚深にして般若に勝れたる者あれば而も般若を以て阿難に屬累し余經を以て菩薩に屬累するや、答えて云く般若波羅蜜は秘密の法に非ず而るに法華等の諸經は阿羅漢の受決作仏を説く所以に大菩薩能く受けて持用す譬えば大藥師の能く毒を以て藥と為すが如し」と、亦九十三に云く「阿羅漢の成仏は論義者の知る所に非ず唯仏のみ能く了し給う」已上此等の文を以て之を思うに論師の權實は宛も仏の權實の如し而るを權經に依る人師猥りに法華等を以て觀經等の權説に同じ法華・涅槃等の義を仮りて淨土三部經の徳と作し決定性の二乗・無性の闡提・常没の往生を許す權實雜亂の失脱れ難し、例せば外典の儒者・内典を賊みて外典を莊るが如し謗法の失免れ難きか仏、自ら權實を分ち給う其の詮を探るに決定性の二乗・無性有情の成・不成是なり、而るに此の義を弁えざる訳者・爾前の

経経を訳する時・二乗の作仏・無性の成仏を許す此の義を知る訳者は爾前の経を訳する時・二乗の作仏無性の成仏を許さず、之に依つて仏意を覺らざる人師も亦爾前の経に於て決定性・無性の成仏を明すと見て法華と爾前と同じき思いを作し、或は爾前の経に於て決定無性を嫌う文を見、此の義を以て了義経と爲し法華・涅槃を以て不了義経と爲す共に仏意を覺らず権実二經に迷えり、此等の誤りを出さば但源空一人に限るのみに非ず天竺の論師並に訳者より唐土の人師に至るまで其の義有り、所謂地論師・撰論師の一代の別時意趣・善導・懷感の法華經の二称南無仏の別時意趣、此等は皆権実を弁えざるが故に出来る所の誤りなり、論を造る菩薩・經を訳する三蔵・三昧發得の人師猶以て是くの如し況や末代の凡師に於てをや。

問うて云く汝末学の身として何ぞ論師並に訳者人師を破するや、答えて云く敢えて此の難を致すこと勿れ撰論師並に善導等の釈は権実二教を弁えずして猥りに法華經を以て別時意趣と立つ故に天台・妙樂の釈と水火を作す間、且らく人師の相違を聞いて經論に付て是非を、うる時、権実の二教は仏説より出でたり天親・竜樹重ねて之を定む、此の義に順ずる人師をば且らく之を仰ぎ此の義に順ぜざる人師をば且らく之を用いず敢て自義を以て是非を定むるに非ず但相違を出す計りなり。

大文の第四に謗法の者を対治すべき証文を出さば、此れに二有り、一には仏法を以て国王・大臣並に四衆に付属することを明し、二には正しく謗法の人・王地に處るをば対治す可き証文を明す、第一に仏法を以て国王・大臣並に四衆に付属することを明さば、仁王經に云く「仏・波斯匿王に告わく、乃至、是の故に諸の国王に付属して比丘・比丘尼・清信男・清信女に付属せず何を以ての故に王の威力無きが故に、乃至、此の經の三宝をば諸の国王・四部の弟子に付属す」已上大集經二十八に云く「若し国王有つて我が法の滅せんことを見て捨てて擁護せずんば無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失し其の国に三種の不祥の事を出さん、乃至・命終して大地獄に生ぜん」已上

仁王經の文の如くならば仏法を以て先ず國王に付屬し次に四衆に及ぼす王位に居る君國を治むる臣は仏法を以て先
と爲し國を治む可きなり、大集經の文の如くならば王臣等 仏道の爲に無量劫の間 頭目等の施を施し八万の戒行を持ち
無量の仏法を學ぶと雖も國に流布する所の法の邪正を直さざれば國中に大風 旱 大雨の三災起りて万民を逃脱せし
め王臣定めて三惡に墮せん、又雙林最後の涅槃經の第三に云く「今正法を以て諸王・大臣・宰相・比丘・比丘尼・優婆塞・
優婆夷に付屬す、乃至 法を護らざる者をば禿居士と名く」又云く「善男子・正法を護持せん者は五戒を受けず威儀を
修せずして心に刀劍 弓箭 鉾槊を持つべし」又云く「五戒を受けざれども正法を護るを爲て乃ち大乘と名く正法を護る
者は心に刀劍 器械を執持すべし」云云四十余年の内にも 梵網 等の戒の如くならば國王・大臣の諸人等も一切刀杖・
弓箭 矛斧鬪戰の具を畜つることを得ず、若し此を畜つる者は定めて現身に國王の位・比丘・比丘尼の位を失い後生は
三惡道の中に墮つ可しと定め了んぬ。

而るに今の世は道俗を別はず弓箭 刀杖を帶せり梵網經の文の如くならば必ず三惡道に墮せんこと疑無き者なり、
涅槃經の文無くんば如何にしてか之を救わん亦涅槃經の先後の文の如くならば弓箭 刀杖を帶して惡法の比丘を治し
正法の比丘を守護せん者は先世の四重五逆を滅して必ず無上道を証せんと定め給つ。

亦金光明經の第六に云く「若し人有つて其の國土に於て此の經有り」と雖も未だ嘗て流布せず捨離の心を生じ聽聞せん
ことを樂わず亦供養し尊重し讚歎せず四部の衆の持經の人を見て亦復尊重し乃至供養すること能わず、遂に我等及び
余の眷屬・無量の諸天をして此の甚深の妙法を聞くことを得ざらしめん甘露の味に背き正法の流れを失い威光及び
勢力有ること無く惡趣を増長し人天を損減し生死の河に墜ちて涅槃の路に乖かん世尊 我等四王並に諸の眷屬及び藥叉
等斯くの如き事を見て其の國土を捨てて擁護の心無からん但我等のみ是の王を捨棄するに非ず亦無量の國土を守護する
諸大善神有らんも皆悉く捨去せん既に捨離し已じなば其の國當に種種の災禍有つて國位を喪失すべし一切の人衆皆善心

無けん唯繫縛殺害瞋諍のみ有つて互に相讒諂し枉げて辜無きに及ばん、疫病流行し彗星数数出で両日並び現じ薄蝕恒無く黒白の二虹不祥の相を表わし星流れ地動き井の内に声を発し暴雨惡風時節に依らず常に飢饉に遭いて苗実も成らず多く他方の怨賊有つて国内を侵掠し人民諸の苦悩を受け土地所樂の処有る事無けん已上。

此の經文を見るに世間の安穩を祈るとも而も国に三災起らば惡法流布する故なりと知る可し而るに当世は随分国土の安穩を祈ると雖も去る正嘉元年には大地大に動じ同一年に大雨大風苗実を失えり定めて国を喪うの惡法此の国に有るかと勘うるなり、選択集の或る段に云く「第一に読誦雜行とは上の觀經等の往生淨土の經を除いて已外大小顯密の諸經に於て受持読誦する悉く読誦雜行と名く」と書き了つて次に書いて云く「次に二行の得失を判ぜば法華・真言等の雜行は失淨土の三部經は得なり」次に善導和尚の往生禮讚の十即十生・百即百生・千中無一の文を書き載せて云く「私に云く此の文を見るに弥よ雜を捨てて專を修すべし豈百即百生の專修正行を捨てて堅く千中無一の雜修雜行を執せんや行者能く之を思量せよ」已上、此等の文を見るに世間の道俗豈諸經を信ず可けんや、次下に亦書して法華經等の雜行と念仏の正行と勝劣難易を定めて云く「一には勝劣の義・二には難易の義なり初に勝劣の義とは念仏は是れ勝・余行は是れ劣なり次に難易の義とは念仏は修し易く諸行は修し難し」と、亦次下に法華・真言等の失を定めて云く「故に知んぬ諸行は機に非ず時を失う念仏往生のみ機に當り時を得たり」亦次下に法華・真言等の雜行の門を閉じて云く「隨他の前には暫らく定散の門を開くと雖も隨自の後には還つて定散の門を閉ず一度開て以後永く閉じざるは唯是れ念仏の一門なり」已上最後の述懷に云く「夫れ速に生死を離れんと欲せば二種の勝法の中に且らく聖道門を闔いて撰んで淨土門に入れ淨土門に入らんと欲せば正雜二行の中に且らく諸の雜行を抛つて撰んで心に正行に歸すべし」已上門弟此の書を伝えて日本六十余州に充滿するが故に門人世間無智の者に語つて云く「上人は智慧第一の身と爲て此の書を造り眞実の義と定め法華・眞言の門を閉じて後に開くの文無く抛つて後に還て取るの文無し」と立つる間

世間の道俗一同に頭を傾け其の義を訪う者には仮字を以て選択の意を宣べ或は法然上人の物語を書す間法華眞言に於て難を付けて或は去年の曆祖父の履に譬え或は法華經を読むは管絃より劣ると是くの如き惡書・国中に充滿するが故に法華眞言等国に在りと雖も聴聞せんことを樂わず偶行ずる人有りと雖も尊重を生ぜず一向念佛者法華經の結縁を作すをば往生の障と成ると云う故に捨離の意を生ず、此の故に諸天・妙法を聞くことを得ず法味を嘗めざれば威光勢力有ること無し四天王並に眷屬此の国を捨て日本国守護の善神捨離し已るが故に、正嘉元年に大地大に震い同二年に春の大雨苗を失い夏の旱に草木を枯し秋の大風に菓実を失い飢渴忽に起りて万民を逃脱せしむること金光明經の文の如し豈選択集の失に非ずや、仏語虚しからざる故に惡法の流布有り既に国に三災起れり而も此の惡義を対治せずんば仏の所説の三惡を脱がる可けんや、而るに近年より予「我身命を愛せず但無上道を惜む」の文を瞻る間雪山常啼の心を起し命を大乘の流布に替え強言を吐いて云く選択集を信じて後世を願わん人は無間地獄に墮つ可しと、爾時に法然上人の門弟選択集に於て上に出す所の惡義を隠し或は諸行往生を立て或は選択集に於て法華眞言を破らざる由を称し或は在俗に於て選択集の邪義を知らしめざる為に妄語を構えて云く日蓮は念佛を称する人は三惡道に墮せんと云つと。

問うて云く法然上人の門弟諸行往生を立てるに失有りや否や、答えて云く法然上人の門弟と称し諸行往生を立てるは逆路伽耶陀の者なり当世も亦諸行往生の義を立て而も内心には一向に念佛往生の義を存し外には諸行不謗の由を聞かしむるなり、抑此の義を立てる者は選択集の法華眞言等に於て失を付け捨閉閣拋群賊邪見惡見邪雜人千中無一等の語を見ざるや否や。

第二に正しく謗法人の王地に処るを対治す可き証文を出さば、涅槃經第三に云く「懈怠にして戒を破し正法を毀る者をば王者・大臣・四部の衆に苦治すべし善男子是の諸の國王及び四部の衆は當に罪有るべきや不や不なり世尊・

善男子是の諸の国王及び四部の衆は尚、罪有ること無しと、又第十二に云く「我往昔を念うに閻浮提に於て大国の王と作り名を仙予と日いき大乘經典を愛念し敬重し其の心純善にして麤惡嫉妬慳・有ること無かりき、乃至善男子我爾の時に於て心に大乘を重んず婆羅門の方等を誹謗するを聞き聞き已つて即時に其の命根を断ちき善男子是の因縁を以て是より已来地獄に墮せず」已上。

問うて云く梵網經の文を見るに比丘等の四衆を誹謗するは波羅夷罪なり而るに源空が謗法の失を顕わすは豈阿鼻の業に非ずや、答えて曰く涅槃經の文に云く迦葉菩薩世尊に言さく如来何が故ぞ彼当に阿鼻地獄に墮すべしと記するや、善男子善星比丘は多く眷属有り皆善星は是れ阿羅漢なり是れ道果を得つと謂えり我彼が悪邪の心を壊らんと欲するが故に彼の善星は放逸を以ての故に地獄に墮せりと記す「已上此の文に放逸とは謗法の名なり源空も亦彼の善星の如く謗法を以ての故に無間に墮すべし所化の衆此の邪義を知らざるが故に源空を以て一切智人と号し或は勢至菩薩或は善導の化身なりと云う彼が悪邪の心を壊らんが故に謗法の根源を顕わす梵網經の説は謗法の者の外の四衆なり仏誡めて云く謗法の人を見て其の失を顕わさざれば仏弟子に非ず」と、故に涅槃經に云く「我涅槃の後其の方面に随持戒の比丘有つて威儀具足し正法を護持せば法を壊ぶる者を見て即ち能く驅遣し呵責し徴治せよ当に知るべし是人は福を得んこと無量にして称計す可からず」亦云く「若し善比丘あつて法を壊る者を見て呵責し驅遣し拳処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり若し能く驅遣し呵責し拳処せば是我弟子眞の声聞なり」已上。

予仏弟子の二分に入らんが為に此の書を造り謗法の失を顕わし世間に流布す願わくば十方の仏陀此の書に於て力を副え大惡法の流布を止め一切衆生の謗法を救わしめたまへ。

大文の第五に善知識並に眞実の法に値い難きことを明さば之に付いて三有り、一には受け難き人身値い難き仏法なることを明し、二には受け難き人身を受け値い難き仏法に値うと雖も惡知識に値うが故に三惡道に墮する

を明し、三には正く末代凡夫の爲の善知識を明す。

第一に受け難き人身値い難き仏法なることを明さば、涅槃經三十三に云く「爾の時に世尊地の少土を取つて之を爪上に置き迦葉に告げて言く、是の土多きや十方世界の地土多きや、迦葉菩薩・仏に白して言く、世尊・爪上の土は十方所有の土に比ぶ善男子・人有り身を捨てて還つて人身を得・三悪の身を捨てて人身を受くることを得、諸根完く具して中国に生れ正信を具足して能く道を修習し道を修習し已つて能く正道を修し正道を修し已つて能く解脱を得。解脱を得已つて能く涅槃に入るは爪上の土の如く、人身を捨て已つて三悪の身を得・三悪の身を捨てて三悪の身を得。諸根具せずして辺地に生じ邪倒の信を信じ邪道を修習し解脱常樂の涅槃を得ざるは十方界の所有の地土の如し」經文此の文は多く法門を集めて一具と為せり人身を捨てて還つて人身を受くるは爪上の土の如し人身を捨てて三悪道に墮るは十方の土の如し三悪の身を捨てて人身を受くるは爪上の土の如く三悪の身を捨てて三悪の身を得るは十方の土の如し人身を受くるは十方の土の如く人身を受けて六根欠けざるは爪上の土の如し人身を受けて六根を欠けざれども辺地に生ずるは十方の土の如く中国に生ずるは爪上の土の如く中国に生ずるは十方の土の如く仏法に値うは爪上の土の如し、又云く「闍提と作らず善根を断ぜず是の如き等の涅槃の經典を信ずるは爪上の土の如し乃至・闍提と作りて諸の善根を断じ是の經を信ぜざる者は十方界所有の地土の如し」經文此の文の如くんば法華・涅槃を信ぜずして一闍提と作るは十方の土の如く法華・涅槃を

信ずるは爪上の土の如し此の経文を見て弥感涙押え難し今日本国の諸人を見聞するに多分は権教を行す設い身口は実教を行すと雖も心には亦権教を存す。

故に天台大師摩訶止観の五に云く其の癡鈍なる者は毒氣深く入つて本心を失う故に既に其れ信ぜざれば則ち手に入らず、乃至大罪聚の人なり、乃至設い世を厭う者も下劣の乗を翫び枝葉に攀付し狗作務に狎れ猴を敬つて帝釈と爲し瓦礫を崇んで是れ明珠なりとす此黒闇の人豈道を論ず可けんや、已上、源空並に所化の衆深く三毒の酒に酔つて大通結縁の本心を失う法華涅槃に於て不信の思を作し一闡提と作り觀經等の下劣の乗に依て方便称名の瓦礫を翫び法然房の猴を敬つて智慧第一の帝釈と思ひ法華涅槃の如意珠を捨てて如来の聖教を徧するは権実二教を弁えざるが故なり。

故に弘決の第一に云く此の円頓を聞いて崇重せざる者は良に近代大乘を習う者の雜濫に由るが故なり、大乘に於て権実二經を弁えざるを雜濫と云ふなり、故に末代に於て法華經を信ずる者は爪上の土の如く法華經を信ぜずして權教に墮落する者は十方の微塵の如し、故に妙樂歎いて云く像末は情澆く信心寡薄にして円頓の教法藏に溢れ函に満れども暫くも思惟せず便ち瞑目に至る徒に生じ徒に死す一に何ぞ痛しきや、已上此の釈は偏に妙樂大師權者たるの間遠く日本国の当代を鑒みて記し置く所の未來記なり。

問うて云く法然上人の門弟の内にも一切經藏を安置し法華經を行ずる者有り何ぞ皆謗法の者と称せんや、答えて云く一切經を開き見て法華經を読み難行道の由を称し選択集の惡義を扶けんが爲なり經論を開くに付て彌謗法を増すこと例せば善星の十二部經提婆達多が六万蔵の如し智者の由を称するは自身を重くし惡法を扶けんが爲なり。

第二に受け難き人身を受け値い難き仏法に値うと雖も悪知識に値うが故に三惡道に墮することを明さば、
大莊嚴の滅後に五比丘あり一人は正道を知つて多億の人を度し四人は邪見に住す此四人命終の後阿鼻地獄に墮つ仰ぎ伏し伏に臥し左脇に臥し右脇に臥すこと各九百万億歳なり、乃至若し在家出家の此の人に親近せしもの並に諸の檀越凡そ六百四万億の人あり此の四師と俱に生じ俱に死して大地獄に在つて諸の燒煮を受く大劫若し尽くれば是の四惡人及び六百四万億の人此の阿鼻地獄より他方の大地獄の中に転生す已上涅槃經三十三に云く爾時に城中に一の尼乾有り名を苦得と曰う、乃至善星苦得に問う答えて曰く我食吐鬼の身を得善星諦に聴け、乃至爾の時に善星即ち我所に還つて是の如き言を作す世尊苦得尼乾は命終の後に三十三天に生ぜんと、乃至爾時に如来即ち迦葉と善星の所に往き給う善星比丘遙に我来るを見見已つて即ち惡邪の心を生ず惡心を以ての故に生身に陥ち入つて阿鼻地獄に墮す已上善星比丘は仏の菩薩たりし時の子なり仏に隨い奉り出家して十二部經を受け欲界の煩惱を壊り四禪定を獲得せり然りと雖も悪知識たる苦得外道に値い仏法の正義を信ぜざるに依つて出家の受戒・十二部經の功德を失い生身に阿鼻地獄に墮す苦岸等の四比丘に親近せし六百四万億の人は四師と俱に十方の大阿鼻地獄を経るなり、今の世の道俗は選択集を賣ぶが故に源空の影像を拝して一切經難行の邪義を読む例せば尼乾の所化の弟子が尼乾の遺骨を礼して三惡道に墮せしが如く願わくば今の世の道俗選択集の邪正を知つて後に供養恭敬を致せ爾らずんば定めて後悔有らん。

故に涅槃經に云く「菩薩摩訶薩惡象等に於て心に怖畏すること無く悪知識に於ては怖畏の心を生ぜよ何を以ての故に是の惡象等は唯能く身を壊りて心を壊る能わず悪知識は二俱に壊る故に、是の惡象等は唯一身を壊り悪知識は無量の善身無量の善心を壊る是の惡象等は唯能く不淨の臭き身を破壊す悪知識は能く淨身及び淨心を壊る是の惡象等は能く肉身を壊り悪知識は法身を壊る惡象の為に殺されては三趣に至らず惡友の為に殺されては必ず

三趣に至る是の悪象等は但身の怨と為り悪知識は善法の怨と為らん是の故に菩薩常に當に諸の悪知識を遠離すべし已上。

請い願わくば今の世の道俗設い此の書を邪義と思つと雖も且らく此の念を抛つて十住毘婆沙論を開き其の難行の内法華經の入不入を gae 選択集の準之思之の四字を案じて後には非を致せ謬つて悪知識を信じ邪法を習い此の生を空うすること莫れ。

第三に正しく末代の凡夫の爲の善知識を明さば、問うて云く善財童子は五十余の善知識に値いき其の中に普賢・文殊・觀音・弥勒等有り常啼・班足・妙莊嚴・阿闍世等は曇無竭・普明・耆婆・二子夫人に値い奉りて生死を離れたり此等は皆大聖なり仏世を去つて後是の如きの師を得ること難しとなす滅後に於て亦竜樹・天親も去りぬ南岳・天台にも値わず如何が生死を離る可きや、答えて云く末代に於て眞實の善知識有り所謂法華・涅槃是なり、問うて云く人を以て善知識と爲すは常の習いなり法を以て知識と爲すに証有りや、答えて云く人を以て知識と爲すは常の習いなり然りと雖も末代に於て眞の知識無ければ法を以て知識と爲すに多くの証有り、摩訶止觀に云く、「或は知識に従い或は經卷に従い上に説く所の一実の菩提を聞く」已上此の文の意は經卷を以て善知識と爲す、法華經に云く「若し法華經を閻浮提に行じ受持すること有らん者は應に此の念を作すべし皆是れ普賢威神の力なり」已上此の文の意は末代の凡夫法華經を信ずるは普賢の善知識の力なり、又云く「若し是の法華經を受持し誦誦し正憶念し修習し書写すること有らん者は當に知るべし是の人は即ち釈迦牟尼仏を見るなり仏、口より此の經典を聞くが如し當に知るべし是の人は釈迦牟尼仏を供養するなり」已上此の文を見るに法華經は即ち釈迦牟尼仏なり法華經を信ぜざる人の前には釈迦牟尼仏入滅を取り此の經を信ずる者の前には滅後為りと雖も仏の在世なり。

又云く「若し我成仏して滅度の後十方の国土に於て法華經を説く処有らば我が塔・廟是の經を聴かんが爲の故に其の

前に涌現し為に証 明を為さん」已上此の文の意は我等 法華の名号を唱えて多宝如来本願の故に必ず来りたまう、又云く「諸仏の十方世界に在つて法を説くを尽く還し一処に集めたまう」已上釈迦 多宝・十方の諸仏・普賢菩薩等是我等が善知識なり若し此の義に依らば我等は亦宿善 善財・常啼・班足等にも勝れたり彼は権經の知識に値い我等は実經の知識に値えばなり彼は権經の菩薩に値い我等は実經の仏 菩薩に値い奉ればなり。

涅槃經に云く「法に依つて人に依らざれ智に依つて識に依らざれ」已上依法と云うは法華 涅槃の常住の法なり不依人とは法華 涅槃に依らざる人なり設い仏 菩薩為りと雖も法華 涅槃に依らざる仏 菩薩は善知識に非ず況や法華 涅槃に依らざる論師 詠者 人師に於てをや、依智とは仏に依る不依識とは等覺已下なり、今の世の世間の道俗 源空の謗法の失を隠さんが為に徳を天下に挙げて権化なりと称す依用すべからず、外道は五通を得て能く山を傾け海を竭すとも神通無き阿含經の凡夫に及ばず羅漢を得 六通を現する二乗は華嚴 方等 般若の凡夫に及ばず華嚴 方等 般若の等覺の菩薩も法華經の名字・觀行の凡夫に及ばず設い神通智慧有りと雖も權教の善知識をば用つべからず、我等常没の一闡提の凡夫法華經を信ぜんと欲するは仏性を顕わさんが為の先表なり。

故に妙樂大師の云く「内薫に非ざるよりは何ぞ能く悟を生ぜん故に知んぬ悟を生ずる力は眞如に在り故に冥薫を以て外護と為すなり」已上法華經より外の四十余年の諸經には十界互具無し十界互具を説かざれば内心の仏界を知らず内心の仏界を知らざれば外の諸仏も顕われず故に四十余年の權行の者は仏を見ず設い仏を見ると雖も他仏を見るなり、二乗は自仏を見ざるが故に成仏無し爾前の菩薩も亦自身の十界互具を見ざれば二乗界の成仏を見ず故に衆生無辺誓願度の願も満足せず故に菩薩も仏を見ず凡夫も亦十界互具を知らざるが故に自身の仏界も顕われず、故に阿彌陀如来の来迎も無く諸仏如来の加護も無し譬えば盲人の自身の影を見ざるが如し。

今法華經に至つて九界の仏界を開くが故に四十余年の菩薩・二乗・六凡始めて自身の仏界を見る此の時 此の人の前に

始めて仏菩薩二乗立ち給う此の時に二乗菩薩始めて成仏し凡夫も始めて往生す、此の故に在世滅後の一切衆生の誠の善知識は法華經是なり、常途の天台宗の学者は爾前に於て当分の得道を許せども自義に於ては猶当分の得道を許さず然りと雖も此の書に於ては其の義を尽くさず略して之を記すれば追つて之を記すべし。

大文の第六に法華涅槃に依る行者の用心を明さば、一代教門の勝劣浅深難易等に於ては先の段に既に之を出す、此の一段に於ては一向に後世を念う末代常没の五逆謗法一闡提等の愚人の爲に之を注す、略して三有り、一には在家の諸人正法を護持するを以て生死を離れ惡法を持つに依つて三惡道に墮す可きことを明し、二には但法華經の名字計りを唱えて三惡道を離る可きことを明し、三には涅槃經は法華經の爲の流通と成ることを明す。

第一に在家の諸人正法を護持するを以て生死を離れ惡法を持つに依つて三惡道に墮す可きことを明さば、涅槃經第三に云く「仏迦葉に告わく能く正法を護持するの因縁を以ての故に是の金剛身を成就することを得たり」と亦云く「時に國王有り名を有徳と曰う、乃至法を護らんが爲の故に、乃至是の破戒の諸の惡比丘と極めて共に戰鬪す、乃至王是の時に於て法を聞くことを得已つて心大に歡喜し尋で即ち命終して阿仏の國に生ず」已上此の文の如くならば在家の諸人の智行無しと雖も謗法の者を対治する功德に依つて生死を離る可きなり。

問うて云く在家の諸人、佛法を護持す可き様如何、答えて云く涅槃經に云く「若し衆生有つて財物に貪著せば我当に財を施し然して後に是の大涅槃經を以て之を勧め讀ましむべし、乃至先に愛語を以て其の意に隨い然る後に漸く当に是の大乗大涅槃經を以て之を勧め讀ましむべし若し凡庶の者には當に威勢を以て之に逼りて讀ましむべし若し慢の者には我當に其れが爲に僕使と作り其の意に隨順し其れをして歡喜せしめ然して後に復當に大涅槃經を以て之を教導すべし、若し大乘經を誹謗する者有らば當に勢力を以て之を推きて伏せしめ既に摧伏し已つて然して後に勧め大涅槃經を讀ましむべし、若し大乘經を愛樂する者有らば我、躬ら當に往いて恭敬し供養し尊重

讃歎すべし」已上。

問うて云く今の世の道俗偏に選択集に執して法華涅槃に於ては自身不相応の念を作すの間、護惜建立の心無く偶
邪義の由を称する人有れば念仏誹謗の者と称して悪名を天下に雨らす斯れ等は何、答えて云く自答を存す可きに
非ず仏、自ら此の事を記して云く、仁王經に云く「大王我が滅度の後、未來世の中の四部の弟子諸の小国の王・太子・王子
乃ち是れ三宝を住持して護る者、転更に三宝を滅破せんこと師子の身中の虫の自ら師子を食うが如くならん外道には
非ざるなり多く我仏法を壊り大罪過を得ん正法衰薄し民に正行無く漸く惡を爲すを以て其の寿日に減じて百歳に
至らん人、仏法を壊りて復孝子無く六親不和にして天神も祐けず疾疫惡鬼日に來りて侵襲し災怪首尾し連禍縦横して
地獄・餓鬼・畜生に入らん亦次下に云く「大王未來世の中の諸の小国の王・四部の弟子自ら此の罪を作らん破国の因縁、
乃至諸の惡比丘多く名利を求め國王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁、破国の因縁を説かん其の王別えずして
此の語を信聽し、乃至其の時に當つて正法將に滅せんこと久しからず」已上。

余選択集を見るに敢て此の文の未來記に違わず、選択集は法華・眞言等の正法を定めて雜行・難行と云い末代の
我等に於ては時機相應せず之を行ずる者は千が中に一も無く仏、還つて法華等を説くと雖も法華・眞言の諸行の門を閉
じて念仏の一門を開く末代に於て之を行ずる者を群賊等と定め當世の一切の道俗に此の書を信ぜしめ此の義を以て如來
の金言と思えり、此の故に世間の道俗に仏法建立の意無く法華・眞言の正法の法水忽ちに竭き天人減少して三惡日に
増長する偏に選択集の惡法に催されて起る所の邪見なり、此の經文を伝記して「我滅度後」と云えるは正法の末八十年
像法の末八百年末法の末八千年なり、選択集の出る時は像法の末・末法の始なれば八百年の内なり仁王經の記する所の
時節に當れり、諸の小國王の王とは日本國の王なり中下品の善は粟散王是なり「如師子身中虫」とは仏弟子の源空是なり
諸惡比丘とは所化の衆是なり「説破仏法因縁・破國因縁」とは上に挙る所の選択集の

語是なり「其王不別信聽此語」とは今の世の道俗邪義を弁えずして猥りに之を信ずるなり。

請い願わくば道俗法の邪正を分別して其の後正法に就て後生を願え今度人身を失ひ三惡道に墮して後に後悔すとも何ぞ及ばん。

第二に但法華經の題目計りを唱えて三惡道を離る可きことを明さば、法華經の第五に云く「文殊師利是の法華經は無量の國中に於て乃至名字をも聞くことを得べからず」第八に云く「汝等但能く法華名を受持する者を擁護する福量るべからず」提婆品に云く「妙法華經の提婆品を聞いて淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に墮ちず」大方廣涅槃經名字功德品に云く「若し善男子 善女人有て是の經の名を聞いて惡趣に生ずと云わば是の處有ること無けん」涅槃經は法華經の流通たるが故に引けるなり。

問うて云く但法華の題目を聞くと雖も解心無くば如何にして三惡趣を脱れんや、答えて云く法華經流布の國に生れて此の經の題名を聞き信を生ずるは宿善の深厚なるに依れり設い今生は惡人無智なりと雖も必ず過去の宿善有るが故に此の經の名を聞いて信を致す者なるが故に惡道に墮せず。

問うて云く過去の宿善とは如何、答えて云く法華經の第二に云く「若し此の經法を信受すること有らん者は是の人は已に曾て過去の仏を見たてまつり恭敬し供養し亦此の法を聞けるなり」法師品に云く「又如來滅度の後若し人有て妙法華經の乃至一偈一句を聞いて一念も隨喜せん者は乃至當に知るべし是の諸人等已に曾て十萬億の仏を供養せしなり」流通たる涅槃經に云く「若し衆生有て毘連河沙等の諸仏に於て菩提心を發し乃ち能く是の惡世に於て是の如き經典を受持して誹謗を生ぜず善男子若し能く一恒沙等の諸仏世尊に於て菩提心を發すること有て然る後に乃ち能く惡世の中に於て是の法を謗せず是の典を愛敬せん」經文。

此等の文の如くんば設い先に解心無くとも此の法華經を聞いて謗せざるは大善の所生なり、夫れ三惡の生を

受くること大地微塵より多く人間の生を受くるは爪上の土より少し、乃至四十余年の諸經に値うことは大地微塵よりも多く法華涅槃に値うことは爪上の土より少し上に挙ぐる所の涅槃經の三十三の文を見るに設け一字一句なりと雖も此の經を信ずる者は宿縁多幸なり。

問うて云く設け法華經を信ずると雖も惡縁に随わば何ぞ三惡道に墮せざらんや、答えて云く解心無き者權教の惡知識に遇つて實教を退せば惡師を信ずる失に依つて必ず三惡道に墮す可きなり、彼の不輕輕毀の衆は權人なり大通結縁の者の三千塵点を経しは法華經を退して權教に遷りしが故なり、法華經を信ずる輩は法華經の信を捨てて權人に随わんよりは世間の惡業に於ては法華の功德に及ばざる故に三惡道に墮つ可からざるなり。

問うて云く日本国は法華涅槃有縁の地なりや否や、答えて云く法華經第八に云く「如来の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめ斷絶せざらしむ」七の卷に云く「廣宣流布して閻浮提に於て斷絶せしむること無けん」涅槃經第九に云く「此の大乗經典大涅槃經も亦復是の如し南方の諸の菩薩の爲の故に當に広く流布すべし」經文三千世界広しと雖も仏、自ら法華涅槃を以て南方流布の處と定む、南方の諸国の中に於ては日本国は殊に法華經の流布す可き處なり。

問うて云く其の証如何、答えて云く肇公の法華翻經の後記に云く羅什三藏須利耶蘇摩三藏に値ひ奉りて法華經を授かる時の語に云く「仏日西山に隠れ遺耀東北を照す茲の典東北の諸国に有縁なり汝慎んで伝弘せよ」上東北とは日本なり西南の天竺より東北の日本を指すなり、故に慧心の一乗要決に云く「日本一州円機純一なり朝野遠近同じく一乘に歸し緇素貴賤悉く成仏を期す」已上願わくば日本国の道俗選択集の久習を捨てて法華涅槃の現文に依り肇公慧心の日本記を待みて法華修行の安心を企てよ。

問うて云く法華經修行の者何の淨土を期す可きや、答えて云く法華經二十八品の肝心たる寿量品に云く「我常に此の娑婆世界に在り」亦云く「我常に此處に住し」亦云く「我が此土は安穩」文此の文の如くんば本地久成の円仏は此の世界

に在り此の土を捨てて何の土を願う可きや、故に法華經修行の者の所住の処を淨土と思う可し何ぞ煩しく他処を求めんや、故に神力品に云く「若は經卷所住の処 若は園中に於ても若は林中に於ても若は樹下に於ても若は僧坊に於ても若は白衣舍にても若は殿堂に在つても若は山谷曠野にても、乃至當に知るべし是の処は即ち是道場なり」涅槃經に云く「善男子是の大涅槃微妙の經典流布せらるる処は當に知るべし其の地は即ち是れ金剛なり此の中の諸人も亦金剛の如し」已上法華涅槃を信ずる行者は余処に求む可きに非ず此の經を信ずる人の所在の処は即ち淨土なり。

問うて云く華嚴方等般若阿含觀經等の諸經を見るに兜率西方十方の淨土を勧む其の上法華經の文を見るに亦兜率西方十方の淨土を勧む何ぞ此等の文に違して但此の瓦礫荆棘の穢土を勧むるや、答えて云く爾前の淨土は久遠実成の釈迦如來の所現の淨土にして實には皆穢土なり、法華經は亦方便壽量の二品なり壽量品に至つて實の淨土を定むる時此の土は即ち淨土と定め了んぬ、但し兜率安養十方の難に至つては爾前の名目を改めずして此の土に於て兜率安養等の名を付く、例せば此の經に三乗の名有りと雖も三乗有らざるが如し「不須更指觀經等也」の釈の意是なり、法華經に結縁無き衆生の當世西方淨土を願うは瓦礫の土を樂う者なり、法華經を信ぜざる衆生は誠に分添の淨土無き者なり。

第三に涅槃經は法華經流通の為に之を説き給うことを明さば、問うて云く光宅の法雲法師並に道場の慧觀等の碩徳は法華經を以て第四時の經と定め無常の熟蘇味と立つ、天台智者大師は法華涅槃同味と立つと雖も亦拾の義を存す二師共に権化なり互に德行を具せり何を正として我等の迷心を晴らす可きや、答えて曰く設い論師訳者為りと雖も仏教に違して權実二教を判ぜずんば且らく疑を加う可し何に況や唐土の人師たる天台南岳光宅

慧観・智儼・嘉祥・善導等の釈に於てをや、設い末代の學者爲りと雖も依法不依人の義を存し本經・本論に違わずんば信用を加う可し。

問うて云く涅槃經の第十四卷を開きたるに五十年の諸大乘經を挙て前四味に譬え涅槃經を以て醍醐味に譬う諸大乘經は涅槃經より劣ること百万倍なりと定め了んぬ、其の上迦葉童子の領解に云く「我今日より始て正見を得たり此よりの前は我等悉く邪見の人と名く」と此の文の意は涅槃經已前の法華等の一切の衆典を皆邪見と云うなり、当に知るべし法華經は邪見の經にして未だ正見の仏性を明らめず、故に天親菩薩の涅槃論に諸經と涅槃と勝劣を定むる時、法華經を以て般若經に同じて同じく第四時に撰したり豈正見の涅槃經を以て邪見の法華經の流通と爲んや如何、答て云く法華經の現文を見るに仏の本懷残すこと無し、方便品に云く「今正しく是れ其時なり」壽量品に云く「毎に自らはの念を作す何を以てか衆生をして無上道に入ることを得速かに仏身を成就することを得せしめん」と神力品に云く「要を以て之を言えば如来の一切の所有の法、乃至皆此の經に於て宣示顯説す」已上此等の現文は釈迦如来の内証は皆此の經に尽くし給う其の上、多宝並に十方の諸仏來集の庭に於て釈迦如来の已今當の語を証し法華經に如く經無しと定め了んぬ、而るに多宝諸仏・本土に還るの後に但釈迦一仏のみ異変を存じて還つて涅槃經を説いて法華經を卑まば誰人か之を信ぜん、深く此の義を存ぜよ、随つて涅槃經の第九を見るに法華經を流通して説いて云く「是の經世に出ること彼の菓實の一切を利益し安樂する所多きが如く能く衆生をして仏性を見わさしむ法華の中の八千の声聞の記を授かるを得て大果實を成ずるが如く秋収冬蔵して更に所作無きが如し」と。

此の文の如くんば法華經邪見ならば涅槃經も豈に邪見に非ずや、法華經は大収・涅槃經は拾なりと見え了んぬ、涅槃經は自ら法華經より劣るの由を称す法華經の當説の文敢て相違無し、但し迦葉の領解並に第十四の文は

法華經を下す文に非ず迦葉の自身並に所化の衆今始めて法華經の所説の常住仏性・久遠実成を覚る故に我が身を指して此より已前は邪見なりと云つ、法華經已前の無量義經に嫌わるる諸經を涅槃經に重ねて之を挙げて嫌うなり法華經を嫌うには非ざるなり、亦涅槃論に至つては此等の論は書付くるが如く天親菩薩の造菩提流支の訳なり經文に違するこ
と之多し涅槃論も亦本經に違す当に知るべし訳者の誤りなり信用に及ばず。

問うて云く先の教に漏れたる者を後の教に之を承け取つて得道せしむるを流通と称せば阿含經は華嚴經の流通と成る可きや、乃至法華經は前四味の流通と成る可きや如何、答えて曰く前四味の諸經は菩薩・人天等の得道を許すと雖も決定性の二乗・無性闡提の成仏を許さず、其の上仏意を探りて実を以て之をうるに亦菩薩・人天等の得道も無し十界互具を説かざるが故に久遠実成無きが故に、問うて云く証文如何、答えて云く法華經方便品に云く「若し小乗を以て化すること乃至一人に於てせば我則ち慳貪に墮せん此の事は爲て不可なり」已上此の文の意は今選択集の邪義を破せんが爲に余事を以て詮と爲す故に爾前得道の有無の実義は之を出さず追つて之をうべし、但し四十余年の諸經は実に凡夫の得道無きが故に法華經は爾前の流通と爲らず法華經に於て十界互具・久遠実成を顕わし了んぬ故に涅槃經は法華經の爲に流通と成るなり。

大文の第七に問に随つて答うとは、若し末代の愚人上の六門に依つて万が一も法華經を信ぜば權宗の諸人、或は自惑に依り、或は偏執に依つて法華經の行者を破せんが爲に多く四十余年並に涅槃等の諸經を引いて之を難ぜん、而るに權教を信ずる人は之多く、或は威勢に依り、或は世間の資縁に依り人の意に随つて世路を亘らんが爲に、或は權教には學者多く、實教には智者少し是非に就て万が一も實教を信ずる者有るべからず、是の故に此の一段を撰んで權人の邪難を防がん。問うて云く諸宗の學者難じて云く「華嚴經は報身如來の所説・七處・八會皆、頓極頓證の法門なり、法華經は応身如來の所説・教主既に優劣有り、所説の法門に於て何ぞ浅深無からん随つて対告衆も法慧・功德林・金剛幢等なり永く

二乗を雜えず、法華經は舍利弗等を以て対告衆と爲す、宗難、法相宗の如きは解深密經を以て依憑と爲し難を加えて云く「解深密經は文殊・觀音等を以て対告衆と爲す勝義生菩薩の領解には一代を有空・中と詮す其の中とは華嚴・法華・涅槃・深密等なり法華經の信解品の五時の領解は四大声聞なり菩薩と声聞と勝劣天地なり、淨土宗の如きは道理を立てて云く「我等は法華等の諸經を誹謗するに非ず彼等の諸經は正には大人の爲傍には凡夫の爲にす断惑証理・理深の教にして末代の我等之を行ずるに千人の中に一人も彼の機に當らず在家の諸人多分は文字を見ず亦華嚴・法相等の名を聞かず況や其の義を知らんや、淨土宗の意は我等凡夫は但口に任せて六字の名号を称すれば現在に阿弥陀如来二十五の菩薩等を遣わし身に影の随う如く百重千重に行者を圍繞して之を守り給う、故に現世には七難即滅・七福即生し乃至臨終の時は必ず来迎有つて觀音の蓮台に乘じ須臾の間に淨土に至り業に随つて蓮華開け法華經を聞いて実相を覺る何ぞ煩しく穢土に於て余行を行じて何の詮か有る但万事を抛つて一向に名号を称せよ」と云云、禅宗等の人云く「一代聖教は月を指す指・天地日月等も汝等が妄心より出でたり十方の淨土も執心の影像なり釈迦・十方の仏陀は汝が覺心の所変・文字に執する者は株を守る愚人なり我が達磨大師は文字を立てず方便を仮らず一代聖教の外に仏迦葉に印して此の法を伝う法華經等は未だ眞実を宣ぶす已上。

此等の諸宗の難一に非ず如何ぞ法華經の信心を壞らざる可しや、答て云く法華經の行者は心中に四十余年已今当皆是眞実・依法不依人等の文を存し而も外に語に之を出さず難に随て之を問うべし抑所立の宗義は何の經に依るや、彼、經を引かば引くに随つて亦之を尋ねよ、一代五十年の間の說の中に法華經より先か後か同時なるか亦先後不定なるかと、若し先と答えば未顕眞実の文を以て之を責めよ敢えて彼の經の說相を尋ぬること勿れ、後と答えば当說の文を以て之を責めよ、同時と答えば今說の文を以て之を責めよ、不定と答えば不定の經は大部の經に非ず一時一会の說にして亦物の数に非ず其の上、不定の教と雖も三說を出でず、設い百千万の義を立つと雖も四十余年の文を載せて虚妄と称せざるよ

り外は用うべからず、仏の遺言に不依不了義經と云うが故なり。

亦智嚴・嘉祥・慈恩・善導等を引いて徳を立て難ずと雖も法華・涅槃に違する人師に於ては用うべからず依法不依人の金言を抑ぐが故なり。

亦法華經を信ぜん愚者の爲に二種の信心を立つ、一には仏に就て信を立て二には經に就て信を立て、仏に就て信を立てとは權宗の學者來り難じて云わん善導和尚は三昧發得の人師、本地・妙法蓮華經の化身なり、慈恩大師は十一面觀音の化身、亦筆端より舍利を雨らす此等の諸人は皆彼の經に依つて皆証有り何ぞ汝彼の經に依らず亦彼の師の義を用いざるや、答えて云く汝聞け一切の權宗の大師先德並に舍利弗・目連・普賢・文殊・觀音乃至阿彌陀・藥師・釈迦・如來・我等並に十方の諸人の前に集まりて説いて法華經は汝等が機に叶わず念仏等の權經の行を修して往生を遂げ後に法華經を覺ると云わん是の如き説を聞くと雖も敢えて用う可からず、其の故は四十余年の諸の經には法華經の名字を呼ばず何れの処にか機の堪不堪を論ぜん、法華經に於ては釈迦・多寶・十方諸仏一処に集りて撰定して云く法をして久住せしむ如來の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめ斷絶せざらしむ、此の外に今 仏出來して法華經を末代不相応と定めば既に法華經に違す知んぬ此の仏は涅槃經に出す所の滅後の魔・仏なり之を信用す可からず、其の已下の菩薩・聲聞・比丘等は亦言論するに及ばず此等は不審無し涅槃經に記する所の滅後の魔の所變の菩薩等なり、其の故は法華經の座は三千大千世界の外四百萬億阿僧祇の世界なり其の中に充滿せる菩薩・二乘・人天・八部等皆如來の告勅を蒙り各各所在の国土に法華經を弘む可きの由之を願いぬ、善導等若し權者ならば何ぞ竜樹・天親等の如く權教を弘めて後に法華經を弘めざるや法華經の告勅の数に入らざるや何ぞ仏の如く權教を弘めて後に法華經を弘めざるや、若し此の義無くんば設い仏為りと雖も之を信ず可からず今は法華經の中の仏を

信ず故に仏に就て信を立つと云うなり。

問うて云く釈迦如来の所説を他仏之を証するを實説と称せば何ぞ阿弥陀經を信ぜざるや、答えて云く阿弥陀經に於ては法華經の如き証明無きが故に之を信ぜず、問うて云く阿弥陀經を見るに釈迦如来の所説の一日七日の念仏を六方の諸仏舌を出し三千を覆つて之を証明せり何ぞ証明無しと云うや、答えて云く阿弥陀經に於ては全く法華經の如き証明無く但釈迦一仏、舍利弗に向つて説いて言く我、一人阿弥陀經を説くのみに非ず六方の諸仏舌を出し三千を覆つて阿弥陀經を説くと云う此等は釈迦一仏の説なり敢えて諸仏来りたまわず、此等の權文は四十余年の間は教主も權仏の始覺の仏なり、仏、權なるが故に所説も亦權なり故に四十余年の權仏の説は之を信ず可からず、今の法華涅槃は久遠實成の円仏の實説なり十界互具の實言なり亦多宝・十方の諸仏来りて之を証明し給う故に之を信ずべし阿弥陀經の説は無量義經の末顯真實の語に壞れ了ぬ全く釈迦一仏の語にして諸仏の証明には非ざるなり。

二に經に就て信を立つとは、無量義經に四十余年の諸經を挙げて末顯真實と云う、涅槃經に云く如来は虚妄の言無しと雖も若し衆生・虚妄の説に因つて法利を得と知れば宜しきに随つて方便して則ち為に之を説き給う又云く了義經に依つて不了義經に依らざれ已上是の如きの文一に非ず皆四十余年の自説の諸經を虚妄・方便不了義・魔説と称す是れ皆人をして其の經を捨てて法華涅槃に入らしめんが為なり、而るに何の恃み有つて妄語の經を留めて行儀を企て得道を期するや、今權教の情執を捨て偏に實經を信ず故に經に就て信を立つと云うなり。

問うて云く善導和尚も人に就て信を立て行に就て信を立て何の差別有らんや、答えて云く彼は阿弥陀經等の三部に依つて之を立て一代の經に於て了義不了義經を分たずして之を立て、故に法華涅槃の義に對して之を難する時は其の義壞れ了んぬ。守護國家論

七 災難対治抄

正元二年 三十九歳御作

78P

国土に大地震 非時の大風・大飢饉・大疫病・大兵乱等の種種の災難の起る根源を知りて対治を加う可きの勸文。

金光明經に云く「若し人王有りて其の国土に於て此の經有りて雖も未だ嘗て流布せず捨離の心を生じて聴聞せんこと

を樂わず亦供養し尊重し讚歎せず四部の衆の持經の人を見て亦復尊重し乃至供養すること能わず遂に我等及び余の

眷屬無量の諸天をして此の甚深の妙法を聞くことを得ず甘露の味に背き正法の流を失い威光及び勢力有ること無ら

しむ惡趣を増長し人天を損滅し生死の河に墜ちて涅槃の路に背かん、世尊、我等四王並に諸の眷屬及び藥叉等斯くの

如き事を見て其の国土を捨てて擁護の心無けん但我等是の王を捨棄するのみに非ず亦無量の国土を守護する諸天善神有

らんも皆悉く捨てせん既に捨離し已れば其の國に當に種種の災禍有つて國位を喪失すべし、一切の人衆皆善心無けん唯

繫縛・殺害・瞋諍のみ有つて互に相讒諂し枉げて辜無きに及ばん、疫病流行し彗星數ば出で兩日並び現し薄蝕恒無く

黑白の二虹不祥の相を表わし星流れ地動き井の内に声を發し暴雨・惡風・時節に依らず常に飢饉に遭ひ苗實も成らず多

く他方の怨賊有つて国内を侵掠し人民諸の苦惱を受け土地に所樂の処有ること無けん」と。

大集經に云く「若し國王有つて我が法の滅せんを見て擁護せずんば無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失して其の

國の中に三種の不祥の事を出さん、乃至命終して大地獄に生ぜん」と。

仁王經に云く「大王、国土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るが故に万民乱ると、亦云く大王、我今五眼をもつて明に

三世を見るに一切の國王は皆過去世に五百の仏に侍るに由つて帝王主と為ることを得たり、是をもつて

一切の聖人羅漢而も為に彼の国土の中に來生して大利益を作さん若し王の福尽きん時は一切の聖人皆捨て去ることを為さん若し一切の聖人去らん時は七難必ず起る」と。

仁王經に云く「大王吾今化する所の百億の須弥・百億の日月・一の須弥に四天下有り其の南閻浮提に十六の大国五百の中国十千の小国有り其の国土の中に七つの畏る可き難有り一切の国王是の難の爲の故に、云何なるを難と為す日月度を失ひ時節返逆し或は赤日出で黒日出で三四五の日出づ或は日蝕して光無く或は日輪一重二三四五重輪現するを一の難と為すなり、二十八宿度を失ひ金星・彗星・輪星・鬼星・火星・水星・風星・星・南斗・北斗・五鎮の大星・一切の国主星・三公星・百宿星是くの如き諸星各各變現するを一の難と為すなり、大火・国を焼き万姓焼尽し或は鬼火・竜火・天火・山神火・人火・樹木火・賊火是くの如く變怪するを二の難と為すなり、大水・百姓を漂没して時節返逆し冬・雨ふり夏・雪ふり冬・時に雷電霹靂し六月に冰霜雹を雨らし赤水・黒水・青水を雨らし土山・石山を雨らし沙磧石を雨らし江河逆まに流れ山を浮かべ石を流す是くの如く變ずる時を四の難と為すなり、大風・万姓を吹殺し国土の山河・樹木・時に滅没して非時の大風・黒風・赤風・青風・天風・地風・火風・水風是くの如く變ずる時を五の難と為すなり、天地・国土亢陽し炎火洞然として百草亢旱し五穀登らず土地赫然として万姓滅尽せん是くの如く變ずる時を六の難と為すなり、四方の賊來りて国を侵し内外の賊起り火賊・水賊・風賊・鬼賊あつて百姓荒乱し刀兵劫起せん是くの如く怪する時を七の難と為すなり」と。

法華經に云く「百由旬の内をして諸の衰患無からしめん」と。

涅槃經に云く「是の大涅槃微妙の經典・流布せらるる処は當に知るべし其の地は即ち是れ金剛なり是の中の諸人亦金剛の如し」と。

仁王經に云く「是の經は常に千の光明を放ちて千里の内をして七難起らざらしむと、又云く諸の惡比丘多く

名利を求め國王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説く其の王別えずして此の語を信聴し横に法制を作り仏戒に依らず是を破仏・破国の因縁と為すこと。

今之を勸づるに法華經に云く「百由旬の内諸衰患なからしむ」と仁王經に云く「千里の内に七難不起らしむ」と、涅槃經に云く「當に知るべし其の地は即ち是れ金剛、是の中の諸人亦金剛の如し」と文。

疑つて云く今此の国土に種種の災難起ることを見聞するに所謂建長八年八月自り正元二年二月に至るまで大地震・非時の大風・大飢饉・大疫病等種種の災難連連として今に絶えず大体国土の人数尽く可きに似たり、之に依つて種種の祈請を致す人之多しと雖も其の驗無きか、正直捨方便・多宝の証明・諸仏出舌の法華經の文の令百由旬内・雙林最後の遺言の涅槃經の其地金剛の文、仁王經の千里の内に七難・不起の文皆虚妄に似たり如何。

答えて云く今愚案を以て之を勸づるに上に挙ぐる所の諸大乘經・国土に在り而も祈請と成らずして災難起ることは少し其の故有るか、所謂金光明經に云く其の国土に於て此の經有りと雖も未だ嘗つて流布せず捨離の心を生じて聴聞せんことを樂わず我等四王皆悉く捨て去り其の國當に種種の災禍有るべし、大集經に云く「若し國王有つて我が法の滅せんを見て捨てて擁護せざれば其の國內三種の不祥を出さんと、仁王經に云く「仏戒に依らざる是を破仏・破国の因縁と為す若し一切の聖人去る時は七難必ず起らん」已上、此等の文を以て之を勸づるに法華經等の諸大乘經・國中に在りと雖も一切の四衆捨離の心を生じて聴聞し供養するの志を起さざる故に國中の守護の善神・一切の聖人此の國を捨て去り守護の善神聖人等・無きが故に出来る所の災難なり。

問つて曰く國中の諸人・諸大乘經に於て捨離の心を生じて供養する志を生ぜざる事は何の故より之起るや。

答えて曰く仁王經に曰く「諸の惡比丘多く名利を求め國王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説かん其の王別えずして此の語を信聴し横に法制を作りて仏戒に依らず」と、法華經に云く「惡世の中の比丘は邪智にして

心諂曲に未だ得ざるをこれ得たりと謂い我慢の心充滿せん是の人悪心を懷き国王・大臣・婆羅門・居士及び余の諸の比丘に向つて誹謗して我が悪を説いて是れ邪見の人・外道の論議を説くと謂わん惡鬼其の身に入る」と云。

此等の文を以て之を思うに諸の惡比丘國中に充滿して破国・破仏法の因縁を説く国王並に國中の四衆弁えずして信聴を加うるが故に諸大乘經に於て捨離の心を生ずるなり。

問うて曰く諸の惡比丘等・國中に充滿して破国・破仏戒等の因縁を説くことは仏弟子の中に出來す可きか外道の中に出來す可きか。

答えて曰く仁王經に云く「三宝を護る者にして轉た更に三宝を滅し破らん」と師子の身中の虫の自ら師子を食うが如し外道には非ず」と云。

此の文の如くんば仏弟子の中に於て破国・破仏法の者出來す可きか、問うて曰く諸の惡比丘・正法を壞るに相似の法を以て之を破らんか當に亦惡法を以て之を破るべしとせんか、答えて曰く小乘を以て權大乘を破し權大乘を以て実大乘を破し師弟共に謗法破国の因縁を知らざるが故に破仏戒・破国の因縁を成して三惡道に墮するなり。

問うて曰く其の証拠如何、答えて曰く法華經に云く仏の方便・隨宜所説の法を知らずして惡口して顰蹙し数数擯出せられんと。

涅槃經に云く我涅槃の後當に百千無量の衆生有つて誹謗して是の大涅槃を信ぜざるべし三乘の人も亦復是くの如く無上の大涅槃經を憎惡せん已上。

勝意比丘の喜根菩薩を謗して三惡道に墮ちし尼思仏等の不輕菩薩を打つて阿鼻の災を招くも皆大小權実を弁え

ざるより之起れり十悪五逆は愚者皆罪為ることを知る故に輒く破国破仏法の因縁を成ぜず、故に仁王經に云く「其の王別えずして此の語を信聴す」と、涅槃經に云く「若し四重を犯し五逆罪を作り自ら定めて是くの如き重事を犯すと知り而も心に初より怖畏懺悔無くして肯て発露せず」已上。

此くの如き等の文は謗法の者は自他共に子細を知らざる故に重罪を成して国を破し佛法を破するなり。

問うて曰く若爾らば此の国土に於て權教を以て人の意を取り実教を失う者之有るか如何、答えて曰く爾なり、問うて曰く其の証拠如何、答えて曰く法然上人所造等の選択集是れなり今其の文を出して上の經文に合せ其の失を露顯せしめん若し対治を加えれば国土を安穩ならしむ可きか、選択集に云く道綽禪師・聖道・淨土の二門を立て聖道を捨てて正しく淨土に歸するの文初に聖道門とは之に就て二有り一には大乘二には小乗なり大乘の中に就いて顯密・權實等の不同有りと雖も今此の集の意は唯顯大及び權大を存す故に歷劫迂回の行に當る之に準じて之を思ふに密大及び實大を存すべし、然れば則ち今真言・信心・天台・華嚴・三論・法相・地論・撰論此等の八家の意正しく此れに在るなり、曇鸞法師の往生論の注に云く「謹んで竜樹菩薩の十住毘婆沙を案ずるに云く菩薩・阿毘跋致を求むるに二種の道有り一には難行道二には易行道なり、此の中に難行道とは即ち是れ聖道門なり易行道とは即ち是れ淨土門なり、淨土宗の學者先ず須く此の旨を知るべし設い先ず聖道門を學する人と雖も若し淨土門に於て其の志有らん者は須く聖道を棄てて淨土に歸すべし」文、又云く「善導和尚正維二行を立て雜行を捨てて正行に歸するの文、第一に読誦雜行とは上の觀經等の往生淨土の經を除いて已外・大小乘・顯密の諸經に於て受持・讀誦するを悉く讀誦雜行と名く、第三に禮拜雜行とは上の弥陀を禮拜するを除いて已外一切諸余の仏・菩薩等及び諸の世天等に於て禮拜恭敬するを悉く禮拜雜行と名く」

私に云く此の文を見るに須く雜を捨てて專を修すべし豈百即百生の專修正行を捨てて堅く千中無一の雜修雜行

を執せんや行者能く之を思量せよと。

又云く貞元入藏録の中、始め大般若經六百卷より法常住經に終るまで顯密の大乗經總じて六百三十七部二千八百八十三卷なり皆須く誦誦大乘の一句に撰すべし当に知るべし隨他の前には暫く定散の門を開くと雖も隨自の後には還つて定散の門を閉づ一たび開きて以後永く閉じざるは唯是れ念仏の一門なり文、又最後結句の文に云く「夫れ速に生死を離れんと欲せば二種の勝法の中に且く聖道門を闔て選んで浄土門に入れ浄土門に入らんと欲せば正雜二行の中に且く諸の雜行を抛て選んで正行に歸すべし」已上 選択集 の文なり。

今之をるに日本國中の上下万人深く法然上人を信じて此の書を、ぶ故に無智の道俗此の書の中の捨閉闔抛等の字を見て浄土の三部經阿彌陀仏より外は諸經諸仏菩薩諸天善神等に於て捨閉闔抛等の思を作し彼の仏經等に於て供養受持等の志を起さず還つて捨離の心を生ず故に古の諸大師等の建立せし所の鎮護國家の道場零落せしむと雖も護惜建立の心無し護惜建立の心無きが故に亦誦誦供養の音絶え守護の善神も法味を嘗めざるが故に國を捨てて去り四依の聖人も来らざるなり、偏に金光明・仁王等の一切の聖人去る時は七難必ず起らん我等四王皆悉く捨去せん既に捨離し已れば其の國當に種種の災禍有るべしの文に当れり豈諸惡比丘多く名利を求め、惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲の人に非ずや。

疑つて云く國土に於て選択集を流布せしむるに依つて災難起ると云わば此の書無き已前は國中に於て災難無かりしか、答えて曰く彼の時も亦災難有り云く五常を破り佛法を失いし者之有りしが故なり所謂周の宇文・元嵩等是なり、難じて曰く今の世の災難五常を破りしが故に之起ると云わば何ぞ必ずしも選択集流布の失に依らんや、答えて曰く仁王經に云く「大王 未來の世の中に諸の小國王、四部の弟子諸の惡比丘横に法制を作りて仏戒に依らず亦復仏像の形、仏塔の形を造作することを聴さず七難必ず起らんと、金光明經に云く「供養し尊重し讚歎

せず其の国に当に種種の災禍有るべし」涅槃經に云く「無上の大涅槃經を憎惡す」と云云、豈弥陀より外の諸仏・諸經等を供養し礼拝し讚歎するを悉く雜行と名くると云うに當らざらんや、難じて云く仏法已前国に於て災難有るは何ぞ謗法の者の故ならんや、答えて云く仏法已前に五常を以て国を治むるは遠く仏誓を以て国を治むるなり礼義を破るは仏の出したまえる五戒を破るなり、問うて云く其の証拠如何、答えて曰く金光明經に云く「一切世間の所有る善論は皆此の經に因る」と、法華經に云く「若し俗間の經書治世の語言資生の業等を説かんと皆正法に順ず」と普賢經に云く「正法をもつて国を治め人民を邪枉せず是れを第三懺悔を修すと名く」と、涅槃經に云く「一切世間の外道の經書は皆是れ仏説なり外道の説に非ず」と、止觀に云く「若し深く世法を識れば即ち是れ仏法なり」と弘決に云く「礼樂前に驅せて真道後に啓く」と、広釈に云く「仏三人を遣して且く震旦を化す五常以て五戒の方を開く昔は大宰・孔子に問うて云く三皇・五帝は是れ聖人なるか孔子答えて云く聖人に非ず又問う夫子是れ聖人なるか亦答う非なり又問う若し爾らば誰か聖人なる、答えて云く吾聞く西方に聖有り釈迦と号く」と文。

此等の文を以て之を勸するに仏法已前の三皇・五帝は五常を以て国を治む夏の桀・殷の紂・周の幽等の礼義を破りて国を喪すは遠く仏誓の持破に當れり。

疑つて云く若し爾らば法華・真言等の諸大乘經を信ずる者は何ぞ此の難に値えるや、答えて曰く金光明經に云く「枉げて辜無きに及ばん」と、法華經に云く「横に其の殃に羅る」と云云、此等の文を以て之を推するに法華・真言等を行ずる者も未だ位深からず信心薄く口に誦すれども其の義を知らず一向名利の爲に之を誦す先生の謗法の失未だ尽きず外に法華等を行じて内に選択の心を存す此の災難の根源等を知らざる者は此の難を免れ難きか。

疑つて云く若し爾らば何ぞ選択集を信ずる謗法者の中に此の難に値わざる者之有りや、答えて曰く業力不定なり順現業は法華經に云く此の人現世に白癩の病乃至諸の惡重病を得んと、仁王經に云く「人・仏教を壞らば復孝子

無く六親不和にして天神祐けず疾疫惡鬼日に来りて侵害し災怪首尾し連禍せんと、涅槃經に云く「若し是の經典を信ぜざる者有らば若し臨終の時或は荒乱に値り刀兵競起り帝王の暴虐怨家の讎隙に侵逼せられん」已上、順次生業は法華經に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば其の人命終して阿鼻獄に入らんと、仁王經に云く「人、仏教を壞らば死して地獄餓鬼畜生に入らん」已上、順後業等は之を略す。

問うて曰く如何にして速かに此の災難を留む可きや、答えて曰く速に謗法の者を治す可し若し爾らずんば無尽の祈請有り且雖も災難を留む可からざるなり、問うて曰く如何が対治す可き、答えて曰く治方亦經に之有り涅槃經に曰く「唯一人を除いて余の一切に施せ正法を誹謗して是の重業を造る唯此くの如き一闍提の輩を除いて其の余の者に施さば一切讚嘆すべし」已上、此の文の如んば施を留めて対治す可しと見えたり此の外にも亦治方はれ多く具に出ず暇あらず、問うて曰く謗法の者に於て供養を留め苦治を加うるは罪有りや不や、答えて曰く涅槃經に云く、今無上の正法を以て諸王大臣宰相比丘比丘尼に付屬す正法を毀る者は王者大臣四部の衆當に苦治すべし尚罪有ること無けん已上。

問うて曰く汝僧形を以て比丘の失を顯すは罪業に非ずや、答えて曰く涅槃經に云く「若し善比丘あつて法を壞る者を見て置いて呵責し驅遣し挙処せざれば當に知るべし是の人は佛法の中の怨なり若し能く驅遣し呵責し挙処せば是れ我が弟子真の聲聞なり」已上、予此の文を見るが故に佛法中怨の責を免れんが為に見聞を憚からずして法然上人並に所化の衆等の阿鼻大城に墮つ可き由を称す、此の道理を聞き解く道俗の中に少少は廻心の者有り若し一度高覽を経ん人は上に挙ぐる所の如く之を行ぜずんば大集經の文の若し国王有つて我が法の滅せんを見て捨てて擁護せざれば無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失して其の国の内に三種の不祥を出さん乃至命終して大地獄に生ぜんととの記文を免かれ難きか、仁王經に云く「若し王の福尽きん時は七難必ず起らんと、此の文に

云く「無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失す」と等と云云、此の文を見るに且く万事を闇いて先ず此の災難の起る由を勘う可きか若し爾からざれば弥亦重ねて災難起る可きか、愚勘是くの如し取捨は人の意に任す。

八 念仏者追放せしむる宣旨御教書五篇に集列する勅文状 正元元年 三十八歳御作 八六 P

夫れ以みれば仏法流布の砌には天下静謐なり神明仰崇の界には国土豊饒なり、之に依つて月氏より日域に覃んで君王より人民に至るまで此の義改むること無き職として然り。

爰に後鳥羽院の御宇に源空法師と云う者あり道俗を欺くが故に専修を興して顕密の教理を破し男女を誑かすが故に邪義を構えて仏神の威光を滅し常に四衆を誘つて云く、浄土三部の外は衆経を棄置すべし唱名一行の外は余行を廃退すべし矧んや神祇冥道の恭敬に於ておや況や孝養報恩の事善に於ておや之を信ぜざる者は本願を疑うなりと、爰に頑愚の類は甚深の妙典を輕慢し無智の族は神明の威徳を蔑如す、就中止觀遮那の学窓に臨む者は出離を抑ゆる癡人なり三論法相の稽古を励む者は菩提を塞ぐ証人なりと云云。

之に依つて仏法日に衰え迷執月に増す然る間南都北嶺の明德奏聞を経て天聴に達するの刻源空が過咎遁れ難きの間遠流の宣を蒙り配所の境に赴き畢んぬ其の後門徒猶勅命を憚からずして弥専修を興すること殆ど先代に超えたり違勅の至り責めても余り有り故に重ねて専修を停廢し源空の門徒を流罪すべきの由綸言頻に下る又關東の御下知勅宣に相添う。

門葉等は遁るべきの術を失い或は山林に流浪し或は遠國に逃隱す、爾してより華夷・称名を抛ちて男女正説に歸する者なり然るに又近來先規を弁えざるの輩仏神を崇めざるの類再び専修の行を企て猶邪惡を増すこと甚し。

日蓮不肖なりと雖も且は天下の安寧を思ふが爲且は仏法の繁昌を致さんが爲に強ちに先賢の語を宣説し称名の行を停廃せんと欲し又愚懷の勸文を添え頗る邪人の慢幢を倒さんとす、勸注の文繁くして見難し知り易からしめんが爲に要を取り諸を省き略して五篇を列ぬ、委細の旨は仏本に在くのみ。

奏状篇 詮を取りて之を注す委くは仏本に在り

南都の奏状に云く。

一、謗人謗法之事

右源空・顕密の諸宗を輕んずること土の如く沙の如く智行の高位を蔑ろにすること蟻の如く蠅の如し、常に自讃して曰く広く一代聖教を見て知れるは我なり能く八宗の精微を解する者は我なり我諸行を捨つ況や余人に於ておやと、愚癡の道俗之を仰ぐこと仏の如く弟子の偏執遙に其の師に超え檀那の邪見彌本説に倍し一天四海漸く以てし事の奇特を聞くに驚かずんば有る可からず其の中殊に法華の修行を以て専修の讐敵となす、或は此の經を読む者は皆地獄に墮すと云い或は其の行を修せん者は永く生死に留まると云い或は僅に仏道の結縁を許し或は都て淨土の正因を嫌う、然る間本八軸十軸の文を誦し千部万部の功を積める者も永く以て廃退し剩え前非を悔ゆ、捨つる所の本行の宿習は實に深く企つる所の念仏の薰習は未だ積まず中途に天を仰いで歎息する者多し、此の外般若華嚴の歸依真言止觀の結縁十の八九皆棄置す之を略す。

一、靈神を蔑如する事

右我が朝は本是れ神國なり百王彼の苗裔を承けて四海其の加護を仰ぐ、而るに専修の輩永く神明を別えず権化実類を論ぜず宗廟祖社を恐れず若し神明を憑まば魔界に墮すと云云。

実類の鬼神に於ては置いて論ぜざるか権化の垂迹に至つては既に是れ大聖なり、上代の高僧皆以て歸伏す行教和尚。

宇佐の宮に参るに釈迦三尊の影月の如くに顕れ仲算大徳熊野山に詣ぬるに飛滝千仞の水・簾の如くに巻く、凡そ行基・護命・増利・聖宝・空海・最澄・円珍等は皆神社に於て新に靈異を感ず是くの若きは源空に及ばざるの人か又魔界に墮つべきの類か之を略す。

山門の奏状に云く。

一、一向専修の党類神明に向背する不当の事。

右我が朝は神国なり神道を敬うを以て国の勤めと為す謹んで百神の本を討ぬるに諸仏の迹に非ること無し、所謂伊勢大神宮・八幡・加茂・日吉・春日等は皆是れ釈迦・薬師・弥陀・観音等の示現なり各宿習の地をトめ専ら有縁の儀を調う乃至其の内証に隨いて彼の法施を資け念誦読経神に依つて事異なり世を挙げて信を取り人毎に益を被る、而るに今専修の徒事を念仏に寄せて永く神明を敬うこと無し、既に国の礼を失い仍神を無するの咎あり、当に知るべし有勢の神祇定めて降伏の眸を回らして睨みたまわん之を略す。

一、一向専修和漢の例・快からざる事

右慈覚大師の入唐巡礼記を按ずるに云く唐の武宗皇帝・会昌元年章敬寺の鏡・霜法師に勅令して諸寺に於て弥陀念仏の教を伝え寺毎に三日巡輪して絶えず同じく二年迴鶻国の軍兵等・唐の界を侵す同じく三年河北の節度使・忽ち乱を起す其の後大蕃国更に命を拒む迴鶻国重ねて地を奪いぬ、凡そ兵乱秦項の代に同じく炎火昆里の際に起る何に況や武宗大に仏法を破し多く寺塔を滅す撥乱すること能わずして遂に以て事有り已上取意、是れ則ち恣に浄土の一門を信じて護国の諸教を仰がざるに依つてなり而るに吾朝一向専修を弘通してより以来、国衰微に属し俗多く艱難す已上之を略す、又云く音の哀樂を以て国の盛衰を知る詩の序に云く治世の音は安んじて以て樂しむ其の政和げばなり乱世の音は怨んで以て怒る其の政乖げばなり亡国の音は哀んで以て思ふ其の民困めばなりと云云、近代念仏

の曲を聞くに理世撫民の音に背き已に哀慟の響を成す是れ亡国の音なる可し 是四、已上奏状。

山門の奏状詮を取る此の如し。

又大和の莊の法印俊範 宝地房の法印宗源 同坊の永尊賢者 並に僧都と云う等源空が門徒を対治せんが為に各各子細を述べ其の文広本に在り、又諸宗の明德面面に書を作りて選択集を破し専修を対治する書籍世に伝つ。

宣旨篇

南都北嶺の訴状に依つて専修を対治し行者を流罪す可きの由度度の宣旨の内 今は少を載せ多を省く委くは広本に在り。

永尊賢者の状に云く彈選択等上送せられて後・山上に披露す彈選択に於ては人毎に之を翫び顯選擇は諸人之を謗す法然上人の墓所は感神院の犬神人に仰付て之を破卻せしめ畢んぬ其の後奏聞に及んで裁許を蒙り畢んぬ 七月の上旬に法勝寺の御八講の次山門より南都に触れて云く清水寺祇園の辺南都山門の末寺たるの処に専修の輩身を容れし草菴に於ては悉く破卻せしめ畢んぬ其の身に於ては使庁に仰せて之を搦め取らるるの間 礼讃の声 黒衣の色・京洛の中に都て以て止め畢んぬ 張本三人流罪に定めらると雖も逐電の間 未だ配所に向わず山門今に訴え申し候なり。

此の十一日の僉議に云く法然房所造の選択は謗法の書なり天下に之を止め置く可からず仍つて在在所所の所持並に其の印板を大講堂に取り上げ三世の仏恩を報ぜんが為に焼失すべきの由 奏聞仕り候い畢んぬ重ねて仰せ下され候か、

嘉祿三年十月十五日

専修念仏の張本成覚法師讃岐の大手嶋に経回すと云云実否分明ならず慥に 知を加えらる可きの由・山門の

ひとびともう
人人申す相尋ね申さしめ給う可きの由殿下の御気色候う所なり仍つて執達件の如し。

嘉禄三年十月二十日

参議範輔在り判

修理権亮殿

関東より宣旨の御返事

隆寛律師の事、右大弁宰相家の御奉書披露候い畢んぬ、件の律師去る七月の比下向せしむ鎌倉近辺に経回すると雖も京都の制符に任せ念仏者を追放せらるるの間奥州の方へ流浪せしめ畢んぬ云云、早く在所を尋ね搜して仰せ下さるる旨に任せ対馬の嶋に追遣可きなり、此の旨を以て言上せしむ可きの状鎌倉殿の仰せに依つて執達件の如し。

嘉禄三年十月十五日

武蔵守在り判

相模守在り判

掃部助殿

修理亮殿

専修念仏の事、停廢の宣下重疊の上偷かに尚興行するの条更に公家の知しめす所にあらず偏に有司の怠慢たり早く先符に任せて禁遏せらる可し、其の上衆徒の蜂起に於ては宜く制止を加えしめ給うべし天氣に依つて言上件の如し、

信盛頓首恐惶謹言

嘉禄三年六月二十九日

左衛門権佐信盛奉

進上天台座主大僧正御房政所

右弁官下す

延暦寺

早く僧の隆寛・幸西・空阿弥陀仏の度縁を取り進すべき事の書・権大納言源朝臣雅親・勅を宣奉するに件の隆寛等の坐せらるること配流宜く彼の寺に仰せて度縁を取り進せしむ可し、者れば宜く承知して宣に依つて之を行ふべし違失ある可からず。

嘉禄三年七月六日

左太史小槻宿禰在り判

左少弁藤原朝臣在り判

大政官の符・五畿内の諸国司まさに宜く専修念仏の興行を停廢し早く隆寛・幸西・空阿弥陀仏等の遺弟の留まる処に禁法を犯す所の輩を捉え搦むべきの事。

弘仁聖代の格条・眼に在り左大臣・勅を宣奉し宜く五畿・七道に課せて興行の道を停廢し違犯の身を捉え搦むべし、者れば諸国司宜く承知して宣に依つて之を行え符到らば奉行を致せ。

嘉禄三年七月十七日

修理右宮城使正四位下行右中弁藤原朝臣

修理東大寺大仏長官正五位下左大史兼備前権介小槻宿禰

専修念仏興行の輩停止す可きの由五畿・七道に宣下せられ候い畢んぬ、且つは御存知有る可く候、者れば綸言此の如し之を悉にせよ、頼隆・誠恐頓首謹言。

嘉禄三年七月十三日

右中弁頼隆在り判

進上 天台座主大僧正御房政所

隆寛・対馬の国に改めらる可きの由宣下せられ畢んぬ、其の由御下知有る可きの旨仰せ下さる所に候なり此の趣を以て申し入れしめ給ふ可きの状件の如し。

右中弁頼隆在り判

中納言律師御房

隆寛律師專修の張本たるに依つて山門より訴え申すの間、陸奥に配流せられ畢んぬ而るに衆徒尚申す旨有り仍つて配所を改めて對馬の嶋に追い遣らる可きなり、当時東国の辺に経回すと云云不日に彼の島に追い遣らる可きの由関東に申さる可し、者れば殿下の御氣色に依つて執達件の如し。

嘉禄三年九月二十六日

参議在り判

修理権亮殿

專修念仏の事、京畿七道に仰せて永く停止せらる可きの由先日宣下せられ候い畢んぬ而るに諸国に尚其の聞え有りと云云、宣旨の状を守りて沙汰致す可きの由地頭守護所等に仰付けらる可きの由山門訴え申し候御下知有る可く候、此の旨を以て沙汰申さしめ給う可きの由殿下の御氣色候所なり、仍つて執達件の如し。

嘉禄三年十月十日

参議在り判

武蔵守殿

嵯峨に下されし院宣

近頃破戒不善の輩嚴禁に拘わらず猶專修念仏を企つるの由其の聞え有り、而るに先師法眼存日の時清涼寺の辺に多く以て止住すと云云、遺跡を相繼ぎて若し同意有らば彼の寺の執務縦い相承の理を帶すとも免許の義有る可からざるなり、早く此の旨を存して禁止せしめ給う可し院宣此くの如し仍つて執達件の如し。

建保七年二月四日

按察使在り判

治部卿律師御房

謹んで請う 院宣一紙

右当寺四至の内に破戒不善の専修念仏の輩法に任せて制止ある可く候更に以て芳心有る可からず候、若し猶寺家の力に拘わらずんば事の由を申し上ぐ可く候、謹んで請くる所件の如し。

建保七年閏二月四日

権律師良暁

左弁官下す 綱所

まさに諸寺の執務人に下知して専修念仏の輩を糾断せしむべき事。

右左大臣勅を宣奉す、専修念仏の行は諸宗衰微の基なり、仍つて去る建永二年の春、嚴制五箇条の裁許を以てせる官符の施行先に畢んぬ、傾く者は進んでは憲章を恐れず退いては仏勅を憚らず、或は梵宇を占め、或は聚洛に交わる破戒の沙門党を道場に結んで偏に今按の佯を以てす仏号を唱えんが為に妄りに邪音を作し將に蕩して人心を放逸にせんとす、見聞満座の処には賢善の形を現ずと雖も寂寞破の夕には流俗の睡りに異ならず是れ則ち発心の修善に非ず濫行の奸謀を企つるなり、豈仏陀の元意僧徒の所行と謂わんや。

宜しく有司に仰せて慥に糾断せしむべし若し猶違犯の者は罪科の趣き一に先符に同じ但し道心修行の人をして以て仏法違越の者に濫せしむること莫れ更に弥陀の教説を忽せにするに非ず只釈氏の法文を全からしめんとなり、兼ては又諸寺執務の人五保監行の輩聞知して言わずんば与同罪會つて寛宥せざれ、者れば宜しく承知して宣旨に依つて之を行ふべし。

建保七年閏二月八日

太史小槻宿禰在り判

謹んで請く 綱所

宣旨一通載せらるるはまさに諸寺の執務人に下知して専修念仏の輩を糾断せしむべき事。右宣旨の状に任せ諸寺に告げ触る可きの状謹んで請くる所件の如し。

けんぼ 建保七年閏二月二十二日之を行ふ。

けいねんらいむざん 頃年以來無慚の徒 不法の侶 如如の戒行を守らず 処処の嚴制を恐れず 恣に念仏の別宗を建て 猥りに衆僧の勤學を
ほう 謗す、しかのみならず 内には妄執を凝らして 仏意に乖き 外には哀音を引いて 人心を蕩かす 遠近併ら 專修の一行に歸し
しそ 緇素殆んど 顯密の両教を 徧す 仏法の衰滅而も 斯に由る 自由の奸惡 誠に禁しても 余り有り。

これ も っきやうがほし おい ほんげん たす おんる たいいつい よとう たしか そ ていど ていはい いたんそ
是を以て 教雅法師に 於ては 本源を 温ねて 遠流し 此の外 同行の 余党等 慥かに 其の行を 帝土の中に 停廢し 悉く 其の身を
らくよう 洛陽の外に 追卻せよ 但し 或は 自行の爲 或は 化他の爲に 至心 專念 如法 修行の 輩に 於ては 制の 限りに 在らず。

てんぶく 天福二年六月晦日

ふじわらちゅうなごんべんたてまつ 藤原中納言權弁奉る

てんぶく 天福二年文曆と改む 四條院の御宇 後堀河院の太子なり、武蔵前司 入道 殿の御時。

ぎあん しつう おお 山門の下知状。

たいしゅう せんぎ いわ せんしゅうねんぶつ てんが はんじょう こ すなわ ぎんねんさんもんぶさた いた くだん やから はつしゅうぶつほう おんてき
大衆の僉議に云く 專修念仏者 天下に 繁昌す 是れ 則ち 近年 山門 無沙汰の 致す 所なり、 件の 族は 八 宗 仏法の 怨敵なり
えんどんぎようじや じゅんま きようとおうへん たぐい ざいけしやうみよう おい まか つのめそう おお よう ていし
円頓行者の 順魔なり、 先ず 京都 往返の 類 在家 称名 の所に 於ては 例に 任せ 犬神人 に 仰せて 宜しく 停止せしむべし云云、
ていれ たいしゅうせんぎ むねか せんれい まか つのめそう おお せんしゅうねんぶつ ていし たま べ 恐
者れば 大衆 僉議の 旨 斯くの 如し 早く 先例に 任せ 犬神人 等に 仰せ 含めて 專修念仏者 を 停止せしめ 給う 可し云云、 恐
きんげん 謹言。

えんおう 延応二年五月十四日 公文勾当審賢

きようむさし 四條院の御宇 武蔵前司 殿の御時。 謹上 祇園の執行法眼御房

お もう いぬ たいしゅうせんぎ 逐つて申す、 去る夜 大衆 僉議して 先ず 此の 異名に 於て 殊に 犬神人 に 付けて 之を 責む 可きの 由 仰せ 含め ぬ 仍つて

実名之を獻ず、専修念仏の張本の事 唯仏・鏡仏・智願・定真・円真・正阿弥陀仏・名阿弥陀仏・善慧・道弁・真如堂狼藉の張本なり已上、唐橋油小路並に八条大御堂六波羅の総門の向いの堂 已上 当時興行の所なり。

延暦寺 別院 雲居寺 早く一向専修の悪行を禁断す可き事

右頃年以來、愚蒙の結党・の会衆を名けて専修と曰い 間に旁ねし心に一分の慧解無く口に衆罪の悪言を吐き言を一念十声の悲願に寄せて敢て三毒五蓋の重悪を憚からず盲瞋の輩是非を弁えず唯情に順ずるを以て多く愚誨に信伏す、持戒修善の人を笑うて之を雜行と号し鎮國護王の教を謗りて之を魔業と称す諸善を擯棄し衆悪を選択し罪を山岳に積み報を泥梨に招く毒氣深く入つて禁じても改むること無く偏に欲樂を嗜んで自ら止むこと能わず、猶蒼蠅の唾の為に黏さるるが如く、何ぞ狂狗の雷を逐つて走るに異ならん、恣ままに三寸の舌を振いて衆生の眼目を抜き五尺の身を養わんが為に諸仏の肝心を滅す、併ら只仏法の怨魔と為り専ら緇門の妖怪と謂う可し。

是を以て邪師存生の昔は永く罪条に沈み、滅後の今は亦屍骨を剝らる其の徒・住蓮と安樂とは死を原野に賜い成覺と薩生とは刑を遠流に蒙りぬ此の現罰を以て其の後報を察す可し、方に今且は釈尊の遺法を護らんが為且は衆生の塗炭を救わんが為に宜く諸国の末寺・莊園・神人・寄人等に仰せて重ねて彼の邪法を禁断すべし縦い片時と雖も彼の凶類を寄宿せしむ可からず縦一言と雖も其の邪説を聴受す可からず、若し又山門所部の内に専修興行の輩有らば永く重科に処して寛宥有ること勿れ、者れば三千衆徒の僉議に依つて仰す所件の如し。

延応二年

山門申状

近來二つの妖怪有り人の耳目を驚かす所謂達磨の邪法と念仏の哀音となり。

顯密の法門に属せず王臣の祈請を致さず誠に端拱にして世を蔑り暗証にして人を軽んず小生の浅識を崇めて見性成仏の仁と爲し耆年の宿老を笑つて螻蟻の類に擬す論談を致さざれば才の長短を表さず決択に交らざれば智の賢愚を測らず、唯牆壁に向つて独り道を得たりと謂い三依纔に紆い七慢専ら盛なり長く舒卷を抛つ附仏法の外道吾が朝に既に出現す、妖怪の至り慎まずんばあるべからず何ぞ強ちに亡国流浪の僧を撰んで伽藍伝持の主と爲さんや。

御式目に云く右大將家以後代代の將軍並に二位殿の御時に於ての事一向に御沙汰を改ること無きが、追加の状に云く嘉禄元年より仁治に至るまで御成敗の事正嘉二年二月十日評定、右自今以後に於ては三代の將軍並に二位家の御成敗に準じて御沙汰を改むるに及ばずと云云。

念仏停廢の事、宣旨御教書の趣き南都北嶺の状粗此くの如し、日蓮弱爲りと雖も勅宣並に御下知の旨を守りて偏に南北明哲の賢懷を述べ猶此の義を棄置せらるるに非ずんば綸言徳政を故らる可きか將た御下知を仰せらる可きか、称名念仏の行者又賞翫せらると雖も既に違勅の者なり関東の御勘氣未だ御免許をも蒙らず何ぞ恣に関東の近住を企てんや、就中武蔵前司殿の御下知に至りては三代の將軍並に二位家の御沙汰に準じて御沙汰を改むること有る可からずと云云。

然るに今、念仏者何の威勢に依つてか宣旨に背くのみに非ず御下知を輕蔑して重ねて称名念仏の専修を結構せん人に依つて事異なりと云う此の謂在るか、何ぞ恣に華夷縦横の経回を致さんや。

勘文篇 念仏者追放宣旨御教書の事

九 念仏無間地獄抄

建長七年

三十四歳御作

97P

念仏は無間地獄の業因なり法華経は成仏得道の直路なり早く浄土宗を捨て法華経を持ち生死を離れ菩提を得可き事
法華経第二譬喻品に云く「若人信ぜずして此の経を毀謗せば、即ち一切世間の仏種を断ぜん、其の人命終して阿鼻獄
に入らん、一劫を具足して劫尽きなば更生れん、是くの如く展転して無數劫に至らん」云云此の文の如くんば方便の念仏
を信じて真実の法華を信ぜざらん者は無間地獄に墮つ可きなり念仏者云く我等が機は法華経に及ばざる間、信ぜざる
計りなり毀謗する事はなし何の科に地獄に墮つ可きか、法華宗云く信ぜざる条は承伏なるか、次に毀謗と云うは即不信
なり信は道の源、功德の母と云へり菩薩の五十二位には十信を本と為し十信の位には信心を始と為し諸の悪業煩惱は
不信を本と為す云云、然ば譬喻品の十四誹謗も不信を以て体と為せり今の念仏門は不信と云い誹謗と云い争か入阿鼻獄
の句を遁れんや、其の上浄土宗には現在の父たる教主釈尊を捨て他人たる阿弥陀仏を信ずる故に五逆罪の咎に依つて必
ず無間・大城に墮つ可きなり、経に今此の三界は皆是我有なりと説き給うは主君の義なり其の中の衆生悉く是れ吾子と
云うは父子の義なり而るに今此の処は諸の患難多し、唯我一人能く救護を為すと説き給うは師匠の義なり而して釈尊
付属の文に此法華経をば付属有在と云云何れの機か漏る可き誰人か信ぜざらんや、而るに浄土宗は主師親たる教主
釈尊の付属に背き他人たる西方極樂世界の阿弥陀如来を憑む故に主に背けり八逆罪の凶徒なり違勅の咎遁れ難し即ち
朝敵なり争か咎無けんや、次に父の釈尊を捨つる故に五逆罪の者なり豈無間地獄に墮ちざる可けんや、次に師匠の釈尊
に背く故に七逆罪の人なり争か惡道に墮ちざらんや此の如く教主釈尊は娑婆世界の衆生には主師親の三徳を備て大恩
の仏にて御坐す此の仏を捨て他方の仏を信じ弥陀

- 98 -

仏の出給つと云つて称名念仏一遍を作すに三体づつ口より出給けりと伝たり、毎日の所作には阿弥陀經六十卷念仏、
十萬遍是を欠く事なし、諸の戒品を持つて一戒も破らず三依は身の皮の如く脱ぐ事なく鉢、は両眼の如く身を離さず
精進潔斎す女人を見ずして一期生不眠三十年なりと自歎す、凡そ善導の行儀法則を云ふは酒肉五辛を制止して口に
齧まず手に取らず未来の諸の比丘も是くの如く行ずべしと定めたり、一度酒を飲み肉を食ひ五辛等を食ひ念仏申さん者
は三百萬劫が間地獄に墮す可しと禁めたり、善導が行儀法則は本律の制に過ぎたり、法然房が起請文にも書載たり、
一天四海善導和尚を以て善知識と仰ぎ貴賤上下皆悉く念仏者と成れり但し一代聖教の大王三世諸仏の本懷たる
法華の文には若し法を聞くこと有らん者は無一不成仏と説き給へり、善導は法華經を行ぜん者は千人に一人も得道の者
有る可からずと定む何れの説に付く可きか、無量義經には念仏をば末頭眞実とて実に非ずと言ふ法華經には
正直捨方便但説無上道とて正直に念仏の觀經を捨て無上道の法華經を持つ可しと言ふ此の兩説水火なり何れの辺に
付く可きや善導が言を信じて法華經を捨つ可きか法華經を信じて善導の義を捨つ可きか如何、夫れ一切衆生皆成仏道
の法華經、一たび法華經を聞かば決定して菩提を成ぜんの妙典善導が一言に破れて千中無一虚妄の法と成り、無得道教
と云はれ平等大慧の巨益は虚妄と成り多宝如来の皆是眞実の証明の御言妄語と成るか十方諸仏の上至梵天の
広長舌も破られ給ぬ、三世諸仏の大怨敵と為り十方如来成仏の種子を失う大謗法の科甚重し大罪報の至り無間、
大城の業因なり、之に依つて忽に物狂ひにや成けん所居の寺の前の柳の木に登りて自ら頸をくくりて身を投げ死し畢んぬ
邪法のたたり踵を回さず冥罰愛に見たり、最後臨終の言に云く此の身厭う可し諸苦に責められ暫くも休息無しと
即ち所居の寺の前の柳の木に登り西に向ひ願つて曰く仏の威神以て我を取り觀音勢至來つて又我を扶けたまへと唱え
畢つて青柳の上より身を投げて自絶す云云、三月十七日くびをくくりて飛たりける程にくくり縄や切れけん柳の枝や折
れけん大旱魃の堅土

の上に落て腰骨を打折て二十四日に至るまで七日七夜の間悶絶地しておめきさげびて死し畢んぬ、さればにや是程の高祖をば往生の人の内には入れざるらんと覺ゆ此事全く余宗の誹謗に非ず法華宗の妄語にも非ず善導和尚自筆の類聚伝の文なり云云、而も流を酌む者は其の源を忘れず法を行ずる者は其の師の跡を踏む可し云云浄土門に入つて師の跡を踏む可くば臨終の時善導が如く自害有る可きか、念仏者として頸をくくらずんば師に背く咎有る可きか如何。

日本国には法然上人浄土宗の高祖なり十七歳にして一切経を習極め天台六十巻に渡り、八宗を兼学して一代聖教の大意を得たりとのしり、天下無雙の智者山門第一の学匠なり云云、然るに天魔や其の身に入にけん仏学多聞の智慧も空く諸宗の頂上たる天台宗を打捨て八宗の外なる念仏者の法師と成りにけり大臣公卿の身を捨て民百姓と成るが如し、選択集と申す文を作つて一代五時の聖教を難破し念仏往生の二門を立てたり、仏説法滅尽經に云く五濁惡世には魔道興盛し魔沙門と作つて我が道を壊乱し惡人轉た海中の沙の如く善人甚だ少くして若し一人若は二人ならん云云即ち法然房是なりと山門の状に書かれたり、我が浄土宗の專修の一行をば五種の正行と定め権実・顯密の諸大乘をば五種の雜行と簡て浄土門の正行をば善導の如く決定往生と勧めたり、觀經等の浄土の三部經の外一代顯密の諸大乘經・大般若經を始と為して終り法常住經に至るまで貞元錄に載する所の六百三十七部二千八百八十三巻は皆是千中無一の徒物なり永く得道有る可からず、難行・聖道門をば門を閉じ之を抛ち之を閣き之を捨て浄土門に入る可しと勧めたり、一天の貴賤首を傾け四海の道俗掌を合せ或は勢至の化身と号し或は善導の再誕と仰ぎ一天四海になびかぬ木草なし、智慧は日月の如く世間を照して肩を並ぶる人なし名徳は一天に充ちて善導に超え曇鸞・道綽にも勝れたり貴賤上下皆選択集を以て仏法の明鏡なりと思ひ道俗男女悉く法然房を以て生身の弥陀と仰ぐ、然りと雖も恭敬供養する者は愚癡迷惑の在俗の人帰依渴仰する人は無智

放逸ほういつの邪見じゃけんの輩やからなり、権者ごんしゃに於おいては之これを用もちいず賢哲けんてつ又之またに随したがつこと無し。

然しかる間ま、斗賀尾とがのをの明慧房みょうえぼうは天下てんが無雙むそうの智人ちじん、広学多聞こうがくたもんの明匠めいしやうなり、摧邪輪さいじゃりん三卷さんを造つくつて選せん択たくの邪義じゃぎを破はし、三井寺みいでらの長吏ちやうり・実胤大僧正じつゐんは希代きだいの学者がくしや、名譽めいよの才人さいじんなり、浄土決疑じやうど集しゆ三卷さんを作つくつて専修せんしゆの悪行あくぎやうを難なんじ、比叡山ひえいざんの住侶じゆうろ・仏頂房ぶつちやうぼう・隆真法橋りゆうしんほうきやうは天下てんが無雙むそうの学匠がくしやう、山門探題さんもんたんたいの棟梁とうりやうなり、彈選だんせん択たく上下じやうげを造つくつて法然房ほつねんぼうが邪義じゃぎを責せむ、しかのみならず南都なんと・山門さんもん三井みいより度たび度たび奏聞そうもんを経て法然ほつねんが選せん択たくの邪義じゃぎ亡国ぼつぎの基もと為なるの旨むね訴もつえ申まうすに依よつて人王ちうみかど八十三代はちじゅうさんだい・土御門院ちみかどいんの御宇ぎやう・承元元年じやうげんねん二月にふがつ上旬じやうじゆんに専修念仏せんしゆねんぶつの張本ちやうほんたる安樂あんらく・住蓮等じゆんねんを捕縛めしたえ忽たちまちに頭いづへを刎はねられ畢おわんぬ、法然房ほつねんぼう源空げんくうは遠流えんるの重科じゆうかに沈おちみ畢おわんぬ、其そのの時とき・摂政せつしやう左大臣家実さだいじんいさねと申もつすは近衛殿このえどのの御事おんごなり此このの事ことは皇代記こうだいぎに見みえたり誰たれか之これを疑うたがわん。

しかのみならず法然房ほつねんぼう死去しきよの後かきも又重かさねて山門さんもんより訴もつえ申まうすに依よつて人皇ごほりかわいん八十五代はちじゅうごだい・後堀河院ごほりかわいんの御宇ぎやう嘉禄三年きやうろく京都六箇所きやうとの本所ほんしよより法然房ほつねんぼうが選せん択たく集しゆ、並なに印版いんぱんを賣うめ出だして大講堂だいこうだうの庭にに取り上あげて三千さんぜんの大衆たいしゆ会かい合ごうし三世さんぜの仏恩ぶつおんを報ほうじ奉ほうるなりとて之これを焼失しやうしつせしめ法然房ほつねんぼうが墓所ぼしよをば大神人つのみそに仰おほせ付つけて之これを掘かり出だして鴨河かもがわに流ながされ畢おわんぬ。

宣旨せんじ院宣いんせん・関白殿下かんぱくでんかの御教書みきやうしよを五畿ごき・七道しちだうに成なし下くだされて、六十六箇国ねんぶつに念仏ぎやうじやの行者かたとき・日片時かたときも之これを置おく可べからず对馬つしまの島しまに追やい遣はる可べきの旨むね諸国しよこくの国司こくしに仰おほせ付つけられ畢おわんぬ、此等これらの次第しだい・両六波羅ろくはらの注進状ちゆうしんじやう・關東相模守かんとさきがみの請文うけぶみ等明鏡めいけいなる者ものなり。

嘉禄三年七月五日きやろくに山門さんもんに下くださるる宣旨せんじに云いく。

専修念仏せんしゆねんぶつの行ぎやうは諸宗衰微しよしゆいの基もとなり、茲こゝに因よつて代代みかどの御門しきり・頻げんに嚴旨げんしを降くだされ殊ことに禁遏きんあつを加くうる所しこなり、而しかるを頃年けいねん又興行きやうぎやうを構かまへ山門さんもん訴もつえ申まうさしむるの間まが・先符せんぶに任まかせて仰おほせ下くださること先あに畢おわんぬ、其の上その且かつは仏法ぶつぽうの陵夷りやうい

を禁ぜんが為、且は衆徒の鬱訴を優に依つて其の根本と謂うを以て隆寛・成寛・空阿弥陀仏等其の身を遠流に処せしむ可きの由、不日に宣下せらるる所なり、余党に於ては其の在所を尋ね搜して帝土を追却す可きなり、此の上は早く愁訴を慰して蜂起を停止す可きの旨、時刻を回さず御下知有る可く候、者、綸言此の如し、賴隆・誠恐・頓首謹言。

七月五日酉刻

右中弁賴隆奉わる

進上天台座主大僧正御房政所同七月十三日山門に下さるる宣旨に云く。

專修念仏興行の輩を停止す可きの由、五畿・七道に宣下せられ畢んぬ、且御存知有る可く候、綸言此の如く之を悉にす、賴隆・誠恐・頓首謹言。

七月十三日

右中弁賴隆奉わる

進上天台座主大僧正御房政所殿下御教書

專修念仏の事、五畿・七道に仰せて永く停止せらる可きの由、先日宣下せられ候い畢んぬ、而るを諸国に尚其の聞え有り云云、宣旨の状を守つて沙汰致す可きの由、地頭守護所等に仰せ付けらる可きの旨、山門訴え申し候、御存知有る可く候、此の旨を以て沙汰申さしめ給う可き由、殿下の御気色、候所、なり、仍て執達件の如し。

嘉禄三年十月十日

参議範輔在り判

武蔵守殿

永尊賢者の状に云く、此の十一日に大衆僉議して云く、法然房所造の選択は謗法の書なり、天下之を止め置く可からず、仍て在所の所持並に其の印板を大講堂に取り上げて三世の仏恩を報ぜんが為に之を焼失せしめ畢んぬ、又云く、法然上人の墓所をば感神院の大神人に仰せ付けて破却せしめ畢んぬ。

嘉禄三年十月十五日・隆真法橋 申して云く、專修念仏は亡国の本為る可き旨、文理之有りと。

山門より雲居寺に送る状に云く、邪師源空・存生の間には永く罪条に沈み滅後の今は且死骨を刎ねられ、其の邪類・住蓮・安樂・死を原野に賜い成覚・薩生は刑を遠流に蒙る殆ど此の現罰を以て其の後報を察す可し云云。
嗚呼世法の方を云えば違勅の者と成り帝王の勅勘を蒙り今に御赦免の天氣之れ無し心有る臣下万民誰人か彼の宗に於て布施供養を展ぶ可きや、仏法の方を云えば正法誹謗の罪人爲り無間地獄の業類なり何れの輩か念仏門に於て恭敬礼拝を致す可きや、庶幾くば末代今の浄土宗 仏在世の祖師・舍利弗・阿難等の如く浄土宗を抛つて法華經を持ち菩提の素懷を遂ぐ可き者か。

日蓮 花押

一〇 当世念仏者無間地獄事

104P

安房の国・長狭郡・東条花房の郷・蓮華寺に於て浄円房に對して日蓮阿闍梨之を註るす、文永元年

甲子九月二十二日。

問うて曰く当世の念仏者無間地獄と云ふ事其の故如何、答えて云く法然の選択に就いて云うなり、問うて云く其の
選択の意如何、答えて曰く後鳥羽院の治天下建仁年中に日本国に一の慧星出でたり名けて源空・法然と曰う選択一卷
を記して六十余紙に及び、科段を十六に分つ第一段の意は道綽・禪師の安樂集に依つて聖道・浄土の名目を立つ、其の
聖道門とは浄土の三部經等を除いて自余の大小乗の一切經殊には朝家・歸依の大日經・法華經・
仁王經・金光明經等の顯密の諸大乘經の名目阿彌陀仏より已外の諸仏・菩薩・朝家・歸依の眞言等の八宗の名目
之を挙げて聖道門と名く、此の諸經諸仏諸宗は正像の機に値つと雖も末法に入つて之を行ぜん者は一人も生死を離る
べからずと云云、又曇鸞法師の往生論註に依つて難易の二行を立つ第二段の意は善導和尚の五部九卷の書に依つて正雜
二行を立つ、其の雜行とは道綽の聖道門の料簡の如し、又此の雜行は末法に入つては往生を得る者の千中
に一も無きなり、下の十四段には、或は聖道・難行・雜行をば小善根隨他意有上功德等と名け念仏等を以ては大善根
隨自意無上功德等と名けて、念仏に對して末代の凡夫此れを捨てよ此の門を閉じよ之を閣けよ之を抛てよ等の四字を
以て之を制止す、而て日本国中の無智の道俗を始めて大風に草木の従うが如く皆此の義に隨つて忽に法華・眞言等に隨喜
の意を止め建立の思を廃す、而る間人毎に平形の念珠を以て弥陀の名号を唱え、或は毎日三万遍・六万遍・十万遍四十
八万遍・百万遍等・唱る間、又他の善根も無く念仏堂を造ること稻麻竹葦の如く、結句は法華眞言

等の智者とおぼしき人人も皆、或は帰依を受けんが為に、或は往生極樂の為に皆本宗を捨てて念仏者と成り、或は本宗にして念仏の法門を仰げるなり。

今云く日本国中の四衆の人人は形は異り替ると雖も意根は皆一法を行じて悉く西方の往生を期す、仏法繁昌の国と見えたる処に一の大きな疑を發する事は念仏宗の龜鏡と仰ぐ可き智者達念仏宗の大檀那と為る大名・小名並びに有徳の者多分は臨終思つ如くならざるの由之を聞き之を見る、而るに善導和尚十即十生と定め十遍乃至一生の間念仏者は一人も漏れず往生を遂ぐ可しと見えたり人の臨終と善導の釈とは水火なり。

爰に念仏者会して云く往生に四つ有り、一には意念往生、般舟三昧經に出でたり、二には正念往生、阿彌陀經に出でたり、三には無記往生群疑論に出でたり、四には狂乱往生觀經の下品下生に出でたり、詰つて曰く此の中の意正の二は且く之を置く無記往生は何れの經論に依つて懷感禪師之を書けるや、經論に之無くば信用取り難し、第四の狂乱往生とは引証は觀經の下品下生の文なり、第一に惡人臨終の時妙法を覺れる善知識に値つて覺る所の諸法実相を説かしめて之を聞く者正念存し難く十惡・五逆具諸不善の苦に逼め被れて覺ることを得ざれば善知識実相の初門と為る故に稱名して阿彌陀仏を念ぜよと云うに音を揚げて唱え了んぬ、此れは苦痛に堪え難くし

て正念を失う狂乱の者に非るか狂乱の者争か十念を唱う可き、例せば正念往生の所撰なり全く狂乱の往生には例す可からず、而るに汝等が本師と仰ぐ所の善導和尚は此の文を受けて轉教口稱とは云えども狂乱往生とは云わず、其の上汝等が晝夜十二時に祈る所の願文に云く願くは弟子等命終の時に臨んで心顛倒せず心錯乱せず心失念

せず身心諸の苦痛無く身心・快樂・禪定に入るが如し等云云、此の中に錯乱とは狂乱か而るに十惡・五逆を作らざる当世の念仏の上人達並に大檀那等の臨終の惡瘡等の諸の惡重病並に臨終の狂乱は意を得ざる事なり、而るに善導和尚の十即十生と定め又・定得往生等の釈の如きは疑無きの処に十人に九人往生すと雖も一人往生せざれば猶

不審發る可し、何に況や念仏宗の長者為る善慧・隆觀・聖光・薩生南無・眞光等皆惡瘡等の重病を受けて臨終に狂亂
 して死するの由之を聞き又之を知る、其の已下の念仏者の臨終の狂亂其の数を知らず、善導和尚の定むる所の十即
 十生は闕けて嫌える所の千中無一と成んぬ、千中無一と定められし法華・眞言の行者は粗ぼ臨終の正念なる由之を聞
 けり、念仏の法門に於ては正像末の中には末法に殊に流布す可し、利根・鈍根・善人・惡人・持戒・破戒等の中には鈍根
 惡人破戒等殊に往生す可しと見えたり、故に道綽・綽・禪師は唯有淨土一門と書かれ、善導和尚は十即十生と定め往生
 要集には濁世末代の目足と云えり、念仏は時機已に叶えり行ぜん者空しかる可からざるの処に是くの如きの相違は大
 なる疑なり、若し之に依つて本願を疑わば仏説を疑うに成んぬ進退惟谷れり此の疑を以て念仏宗の先達並びに
 聖道の先達に之を尋るに一人として答うる人之れ無し、念仏者救うて云く、汝は法然上人の捨閑閣抛の四字を謗法と
 過むるか汝が小智の及ばざる所なり、故に上人此の四字を私に之を書くと思えるか、源曇鸞・道綽・善導の三師の釈よ
 り之を出したり、三師の釈又私に非ず、源淨土の三部經・竜樹菩薩の十住毘婆沙論より出ず、
 雙觀經の上卷に云く設い我仏を得乃至十念等と云云、第十九の願に云く設い我仏を得て諸の功德を修め菩提心を
 發す等と云云、下卷に云く乃至一念等と云云、第十八の願成就の文なり、又下卷に云く其の上輩者。一向專念輩者
 。一向專念其下輩者。一向專念と云云、此れは十九願成就の文なり、觀無量壽經に云く「仏阿難に告ぐ汝好く是の語
 を持て是の語を持つ者は即ち是れ無量壽佛の名を持つ等と云云、阿彌陀經に云く小善根を以て
 す可からず乃至一日七日等と云云、先ず雙觀經の意は念仏往生諸行往生と説けども一向專念と云つて諸行往生を捨
 て了んぬ、故に彌勒の付屬には一向に念仏を付屬し了んぬ、觀無量壽經の十六觀も上の十五の觀は諸行往生、下輩一觀
 の三品は念仏往生なり、仏阿難尊者に念仏を付屬するは諸行を捨つる意なり、阿彌陀經には雙觀經の諸行觀無量壽經
 の前十五觀を束ねて小善根と名け往生を得ざるの法と定め畢んぬ、雙觀經の念仏をば無上

功德と名けて弥勒に付属し、觀經・念仏をば芬陀利華と名けて阿難に付属し、阿弥陀經の念仏をば大善根と名けて舍利弗に付属す、終の付属は一經の肝心を付属するなり又一經の名を付属するなり、三部經には諸の善根多しと雖も其の中に念仏最なり、故に題目には無量壽經・觀無量壽經・阿弥陀經等と云えり、釈摩訶衍論・法華論等の論を以て之れを勧づるに一切經の初には必ず南無の二字有り、梵本を以て之を言わば三部經の題目には南無之れ有り、雙觀經の修諸の二字に念仏より外の八万聖教残る可からず、觀無量壽經の三福九品等の誦誦大乘の一句に一切經残る可からず、阿弥陀經の念仏の大善根に対する小善根の語に法華經等漏る可きや、総じて淨土の三部經の意は行者の意樂に随わんが爲に暫く諸行を擧ぐと雖も、再び念仏に対する時は諸行の門を閉じて捨閉閣抛する事顯然なり、例せば法華經を説かんが爲に無量義經を説くの時に四十余年の經を捨てて法華の門を開くが如し、竜樹菩薩十住毘婆沙論を造つて一代聖教を難易の二道に分てり、難行道とは三部經の外の諸行なり易行道とは念仏なり、經論此くの如く分明なりと雖も震旦の人師此の義を知らず唯善導一師のみ此の義を發得せり、所以に雙觀經の三輩を觀念法門に書いて云く「一切衆生根性不同にして上中下有り其の根性に随つて仏皆無量壽仏の名を專念する」とを勧む等云云、此の文の意は發菩提心修諸功德等の諸行は他力本願の念仏に値わざりし以前に修する事よと有りけるを忽に之を捨てよと云つとも行者用ゆ可からず故に暫く諸行を許すなり、實には念仏を離れて諸行を以て往生を遂ぐる者之無しと書きしなり、觀無量壽經の仏告阿難等の文を善導の疏の四に之れを受けて曰く「上来に定散兩門を説くと雖も仏の本願に望めば意・衆生の一向に専ら阿弥陀の名を稱するに在り」云云、定散とは八万の權實顯密の諸經を尽して之を撰して念仏に対して之れを捨つるなり、善導の法事讚に阿弥陀經の大小善根の故を釈して云く「極樂は無爲涅槃界なり隨縁の雜善恐らくは生じ難し故に如來要法を選んで教えて弥陀專修を念ぜしむ」等と云云、諸師の中に三部經の意を得たる人は但導一人のみ、如來の三部經に於ては是くの如く有れども正法・像法の時根機猶

利根の故に諸行往生の機も之有りけるか。

然るに機根衰えて末法と成る間、諸行の機漸く失い念仏の機と成れり、更に阿弥陀如来、善導和尚と生れて震旦に此の義を顕し、和尚日本に生れて初は叡山に入つて修行し後には叡山を出でて一向に専修念仏して三部經の意を顕し給ひたり、汝捨閉閣抛の四字を謗法と咎むる事未だ導和尚の釈並びに三部經の文を窺わざるか、狗の雷を齧むが如く地獄の業を増す汝知らずんば浄土家の智者に問え。

不審して云く上の所立の義を以て法然の捨閉閣抛の謗言を救うか、実に浄土の三師並に竜樹菩薩・仏説により此の三部經の文を開くに念仏に対して諸行を傍と為す事粗經文に之見えたり、經文に嫌われし程の諸行念仏に対して之を嫌わんこと過む可きに非ず、但不審なる處は雙觀經の念仏已外の諸行觀無量壽經の念仏以外の定散・阿弥陀經の念仏の外の小善根の中に法華・涅槃・大日經等の極大乘經を入れ念仏に対して不往生の善根ぞと仏の嫌わせ給ひけるを竜樹菩薩三師並に法然之を嫌わば何の失有らん、但三部經の小善根等の句に法華・涅槃・大日經等は入る可しとも覺えざれば三師並に法然の釈を用いざるなり、無量義經の如きは四十余年・末顯真実と説いて法華八箇年

を除きて以前四十二年に説く所の大小權實の諸經は一字一点も末顯真実の語に漏る可しとも覺えず、しかのみならず四十二年の間に説く所の阿含・方等・般若・華嚴の名目之を出だせり、既に大小の諸經を出して生滅無常を説ける諸の小乘經を阿含の句に摂し、三にして無差別の法門を説ける諸大乘經を華嚴海空の句に摂し、十八空等を説ける諸大乘經を般若の句に摂し、彈呵の意を説ける諸大乘經を方等の句に摂す、是くの如く年限を指し經の題目を挙げ無量義經に依つて法華經に対して諸經を嫌い嫌える所の諸經に依れる諸宗を下すこと天台大師の私に非ず、汝等が浄土の三部經の中には念仏に対して諸行を嫌う文は之有りと嫌わゆる諸行は浄土の三部經よりの外の五十年の諸經なりと云う現文は之無し、又無量義經の如く阿含・方等・般若・華嚴等をも挙げず誰か知る三部經には諸の小乘經並に

歴劫修行の諸経等の諸行を仏・小善根と名け給うと云ふ事を、左右無く念仏よりの外の諸行を小善等と云えるを法華
涅槃等の一代の教なりと打ち定めて捨閉閑抛の四字を置きては仏意にや乖くらんと不審する計りなり、例せば王の
所従には諸人の中諸国の中の凡下等一人も残る可からず民が所従には諸人諸国の主は入る可からざるが如し、誠に
浄土の三部経等が一代超過の経ならば五十年の諸経を嫌うも其の謂れ之有り
なん三部経の文より事起つて一代を撰す可しとは見え、但一機・縁の小事なり何ぞ一代を撰して之を嫌わん、三師並
に法然此の義を弁えずして諸行の中に法華・涅槃並に一代を撰して末代に於て之を行ぜん者は千中無一と定むるは近く
は依經に背き遠くは仏意に違ふ者なり、但し竜樹の十住毘婆沙論の難行の中に法華・真言等を入ると云うは論文に
分明に之有りや、設い論文に之有りと慥なる經文之無くば不審の内なり、竜樹菩薩は権大乘
の論師爲りし時の論なるか、又訳者の入れたるかと思得可し、其の故は仏は無量義經に四十余年は難行道・無量義經は
易行道と定め給う事・金口の明鏡なり、竜樹菩薩・仏の記文に當つて出世して諸経の意を演ぶ豈仏説なる難易の二道を
破つて私に難易の二道を立てんや、随つて十住毘婆沙論の一部始中終を開くに全く法華經を難行の中に入れたる文
これなくただこれに難易の二道を積するに第二地に至り畢つて宣べず、又此の論に諸経の歴劫修行の旨を挙ぐるに菩薩難行道に
墮し二乘地に墮して永不成仏の思を成す由見えたり法華已前の論なる事・疑無し、竜樹菩薩の意を知らずして此の論の
難行の中に法華・真言を入れたりと料簡するか、浄土の三師に於ては書釈を見るに難行・雜行
・聖道の中に法華經を入れたる意・粗之有り、然りと雖も法然が如き放言の事之無し、しかのみならず仏法を弘めん輩は
教機時国教法流布の前後を・む可きか。

如来在世に前の四十余年には大小を説くと雖も説時至らざるの故に本懷を演べ給わず、機有りとし雖も時無ければ大法
を説き給わず、靈山八年の間・誰か円機ならざる時も来る故に本懷を演べたもつに権機移つて実機と成る、法華經の流通

並に涅槃經には実教を前とし権教を後とす可きの由見えたり、在世には実を隠して権を前にす滅後には実を前として権を後と為す可き道理顯然なり、然りと雖も天竺国には正法一千年の間は外道有り、一向小乗の国有り、又一向大乘の国有り、又大小兼学の国有り、漢土に仏法渡つても又天竺の如し、日本国に於ては外道も無く小乗の機も無く唯大乘の機のみ有り、大乘に於ても法華よりの外の機無し、但し仏法日本に渡り始めし時暫く小乗の三宗権大乘の三宗を弘むと雖も桓武の御宇に伝教大師の御時六宗情を破つて天台宗と成りぬ、俱舍・

成実・律の三宗の学者も彼の教の如く七賢三道を經て見思を断じ二乗と成らんとは思はず、只彼の宗を習つて大乘の初門と為し彼の極を得んとは思わず、権大乘の三宗を習える者も五性各別等の宗義を捨てて一念三千・五輪等の妙觀を窺う、大小権実を知らざる在家の檀那等も一向に法華・真言の学者の教に随つて之を供養する間日本一洲は印度震旦には似ず一向純円の機なり、恐くは靈山八年の機の如し、之を以て之を思つに浄土の三師は震旦・権大乘の機に超えじ、法然に於ては純円の機純円の教・純円の国を知らず、権大乘の一分為る觀經等の念仏、権実をも弁えざる震旦の三師の釈之を以て此の国に流布せしめ実機に権法を授け、純円の国を権教の国と成し醍醐を嘗むる者に蘇味を与つるの失誠に甚だ多し。

南無妙法蓮華經と申す事は唱えがたく南無阿弥陀仏南無薬師如来などと申す事は唱えやすく又文字の数の程も大旨は同けれども功德の勝劣は遙に替りて候なり、天竺の習ひ仏出世の前には二天三仙の名号を唱えて天を願ひけるに仏世に出させ給いては仏の御名を唱ふ、然るに仏の名号を二天三仙の名号に対すれば天の名は瓦礫のごとし仏の名号は金銀如意宝珠等のごとし、又諸仏の名号は題目の妙法蓮華經に対すれば瓦礫と如意宝珠の如くに侍るなり、然るを仏教の中の大小・権実をも弁ざる人師などが仏教を知りがほにして仏の名号を外道等

に対して如意宝珠に譬たる經文を見又法華經の題目を如意宝珠に譬たる經文と喩の同きをもつて念仏と法華經とは同じ事と思へるなり、同じ事と思ふ故に又世間に賣と思ふ人の只弥陀の名号計を唱うるに随つて皆人一期の間に六万遍・十万遍など申せども法華經の題目をば一期に一遍も唱ふ、或は世間に智者と思はれたる人人外には智者氣にて内には仏教を弁ざるが故に念仏と法華經とは只一なり南無阿弥陀仏と唱うれば

法華經を一部よむにて侍るなどと申しあへるは一代の諸經の中に一句一字もなき事なり、設ひ大師先徳の釈の中より出たりとも且は觀心の釈か且はあて事かなんぞ心得べし、法華經の題目は過去に十萬億の生身の仏に値ひ奉つて功德を成就する人初めて妙法蓮華經の五字の名を聞き始めて信を致すなり、諸仏の名号は外道諸天・二乗・

菩薩の名号にあはすれば瓦礫と如意宝珠の如くなれども法華經の題目に対すれば又瓦礫と如意宝珠との如し、当世の学者は法華經の題目と諸仏の名号とを功德ひとしと思ひ又同じ事と思へるは瓦礫と如意宝珠とを同じと思ひ一と思つが如し、止觀の五に云く「設い世を厭う者も下劣の乘を翫び枝葉に攀付し狗作務に狎れ猴を敬いて

帝釈たいしやくと為なし瓦礫がりやくを崇あがめめて是みよ明珠みしゆなりとす此この黒闇くろやみの人豈あに道を論べず可いけんやと等と云いふ、文ふみの心こころは設たてひ世よをいとひて出家しゅつけ遁とん世せいして山林さんりんに身をかくし名利みんぎ名聞みもんをたちて一向いひう後世ごせを祈ひとびとる人ひとも法華ほけ經きやうの大乗だいじやうをば修行しぎやうせずして權教ごんきやう下劣げれつの乘のりにつきたる名号みぎう等を唱となづるを瓦礫がりやくを明珠みしゆなどと思おもいたる僻人びやくにんに譬たとへくらき惡道あくどうに行くべき者と書はれて侍はべるなり、弘決くけつの一いつには妙樂みよしやく大師だいし善住ぜんじゆ天子てんし經きやうをかたらせ給たまひて法華ほけ經きやうの心こころを顯いはして云いふ、「法ほを聞きこひて謗ぼうを生おこじ地獄じごくに墮だするは恒沙じやうしやの仏ぶつを供養くひやうする者に勝まさる等と云いふ、法華ほけ經きやうの名なを聞きこひてそしる罪つみは阿彌陀あみた佛ぶつ釈迦しやくか佛ぶつ藥師やくし佛ぶつ等の恒河沙ごうがしやの佛ぶつを供養くひやうし名号みぎうを唱となづるにも過すぎたりされば當世とうせの念仏ねんぶつ者の念仏ねんぶつを六万遍ろくまんへん乃至ないし十萬遍じゆばん申もうすなど云いふと彼かにこては終ついに生死しじをはなるべからず、法華ほけ經きやうを聞きこくをば千中せんちゆう無む一いつ・雜行ざぎやう未有一みういち人得者にんとくしやなど名なけて或あるは抛なげつて或あるは門かどを閉ふじよなんど申もうす謗法ぼうほうこそ設たてひ無間むげん・大城だいじやうに墮おちるとも後に必生死しじは離はれ侍はべらんずれ、同どうくは今生こんじやうに信しんをなしたらばいかによく候なん。

問とう世間せけんの念仏ねんぶつ者ものなんどの申もうす様ようは此身こしにて法華ほけ經きやうなんどを破はする事ことは争いかでか候なべき念仏ねんぶつを申もうすもとくとく極樂世界ごくらくせかいに参まゐりて法華ほけ經きやうをさとらんが為ためなり、又あるは云いふ法華ほけ經きやうは不淨ふじやうの身みにては叶かなひがたし恐れもあり念仏ねんぶつは不淨ふじやうをも嫌きらはねばこそ申もうし候ななんど申もうすはいかん、答こたえて云いふ此この四五年しごねんの程ほどは世間せけんの有智うち・無智むちを嫌きらはず此この義ぎをばさなんめりと思おもひて過する程ほどに日蓮にちれん一代いちだい聖教しやうきやうをあらあら引き見るにいまだ此この二義にぎの文ぶんを勘かん合がひださず詮せんずるところ近來きんらいの念仏ねんぶつ者もの並ならに有智うちの明匠めいしやうとおぼしき人ひとの臨終りんしゆうの思おもひやうにならざるは是こゝ大謗法だいぼうほうの故ゆゑなり、人ひとごとに念仏ねんぶつ申もうして淨土じやうどに生なれて法華ほけ經きやうをさとらんと思おもふ故ゆゑに穢土えどにして法華ほけ經きやうを行おこなずる者をあざむき又また行おこなずる者もすて念仏ねんぶつを申もうす心こころは出來きたるなりと覺おぼゆ、謗法ぼうほうの根本こんぽん此この義ぎより出でたり、法華ほけ經きやうこそ此この穢土えどより淨土じやうどに生なずる正ただ因いんにては侍はべれ念仏ねんぶつ等は末顯みけん眞實しんじつの故ゆゑに淨土じやうどの直因しちいんにはあらず、然しかるに淨土じやうどの正ただ因いんをば極樂ごくらくにして後に修行しぎやうすべき物ものと思おもひ極樂ごくらくの直因しちいんにあらざる念仏ねんぶつをば淨土じやうどの正ただ因いんと思おもふ事こと僻案びくあんなり、淨土じやうど門もんは春沙しゆんさを田でに蒔まいて秋米あきこめを求め天月てんげつをすてて

水に月を求るに似たり人の心に叶いて法華經を失ふ大術此の義にはすぎず、次に不淨念仏の事一切念仏者の師とする善導和尚法然上人は他事にはいわれなき事多けれども此の事に在てはよくよく禁められたり、善導の觀念法門經に云く酒肉五辛を手に取らざれ口にかまざれ手にとり口にもかみて念仏を申さば手と口に惡瘡付くべしと禁め法然上人は起請を書いて云く、酒肉五辛を服して念仏申さば予が門弟にあらずと云云、不淨にして念仏を申すべしとは当世の念仏者の大妄語なり。

問うて云く善導和尚法然上人の釈を引くは彼の釈を用るや否や、答えて云く、しからず念仏者の師たる故に彼がことば己が祖師に相違するが故に彼の祖師の禁めをもて彼を禁るなり、例せば世間の沙汰の彼が語の彼の文書に相違するを責るが如し、問うて云く善導和尚法然上人には何事の失あれば用いざるや、答えて云く仏の御遺言には我が滅度の後には四依の論師たりといへども法華經にたがはば用うべからずと涅槃經に返す返す禁め置かせ給いて侍るに法華經には我が滅度の後・末法に諸經失せて後殊に法華經流布すべき由・所二所ならずあまたの

所に説かれて侍り、随つて天台・妙樂・伝教・安然等の義に此事分明なり、然るに善導法然法華經の方便の一分たる四十余年の内の末顯真実の觀經等に依つて仏も説かせ給はぬ我が依經の読誦大乘の内に法華經をまげ入れて還つて我が經の名号に対して読誦大乘の一句をすつ時法華經を抛てよ門を閉じよ千中無一など書いて侍る僻人をば眼あらん人は是をば用うべしやいなや。

疑つて云く善導和尚は三昧發得の大師本地阿弥陀仏の化身口より化仏を出せり、法然上人は本地・大勢至菩薩の化身既に日本国に生れては念仏を弘めて頭より光を現ぜり争か此等を僻人と申さんや、又善導和尚法然上人は汝が見る程の法華經並に一切經をば見給はざらんや定めて其の故是あらんか、答えて云く汝が難ずる処をば世間の人人定めて道理と思はんか、是偏に法華經並に天台・妙樂等の実經・実義を述べ給へる文義を捨て善導法然

等の謗法の者にたばらかされて年久くなりぬるが故に思はする処なり、先ず通力ある者を信ぜば外道天魔を信ずべきか
ある外道は大海を吸干し、或る外道は恒河を十二年まで耳に湛えたり第六天の魔王は三十二相を具足して仏身を現ず、
阿難尊者、猶魔と仏とを弁す善導法然が通力いみじしといつとも天魔外道には勝れず、其の上仏の最後の禁しめに
通を本とすべからずと見えたり、次に善導法然は一切経並に法華經をばおのれよりも見たり
なんどの疑ひ是れ又謗法の人のためにはさもとと思ひぬべし、然りといへども如来の滅後には先の人は多分賢きに似て後の
人は大旨ははかなきに似たれども又先の世の人の世に賢き名を取りてはかなきもあり、外典にも三皇五帝老子・
孔子の五經等を学びて賢き名を取れる人も後の人にくつがなれたる例是れ多きか、内典にも又かくの如し、仏法漢土
に渡りて五百年の間は明匠國に充滿せしかども光宅の法雲道場の慧觀等には過ぎざりき、
此等の人人は名を天下に流し智水を國中にそそぎしかども天台智者大師と申せし末の人、彼の義どもの僻事なる由を立
て申せしかば初には用ひず、後には信用を加えし時、始めて五百年の間の人師の義どもは僻事と見えしなり、日本國に
も仏法渡りて二百余年の間は異義まちまちにして何れを正義とも知らざりし程に伝教大師と申す人に破られて前二百
年の間の私義は破られしなり、其の時の人人も当時の人の申す様に争か前前の人は一切経並に法華經
をば見ざるべき、定めて様こそあるらめなんと申しあひたりしかども叶はず經文に違ひたりし義どもなれば終に破れて止
みにき、當時も又かくの如し此の五十余年が間は善導の千中無一法然が捨閑閣抛の四字等は権者の釈なればゆへこそあ
らんと思ひてひら信じに信じたりし程に日蓮が法華經の或は惡世末法時或は於後末世或は令法久住等の文を引きむ
かへ相違をせむる時我が師の私義破れて疑いあるなり、詮ずるところ後五百歳の經文の誠なるべきかの故に念仏者
の念仏をもて法華經を失ひつるが還つて法華經の弘まらせ給うべきかと覺ゆ、但し御用心の御為に申す世間の惡人は
魚鳥鹿等を殺して世路を渡る、此等は罪なれども仏法を失ふ縁とはならず懺悔

をなさざれば三惡道にいたる、又魚鳥鹿等を殺して売買をなして善根を修する事もあり、此等は世間には惡と思はれて遠く善となる事もあり、仏教をもつて仏教を失ふこそ失ふ人も失ふとも思はず只善を修すると打ち思つて又そばの人も善と打ち思つてある程に思はざる外に惡道に墮つる事の出来候なり、当世には念仏者などの日蓮に責め落されて我が身は謗法の者なりけりと思つる者も是あり、聖道の人人の御中にこそ実の謗法の人人は侍れ彼の人人の仰せらるる事は法華經を毀る念仏者も不思議なり念仏者を毀る日蓮も奇怪なり、念仏と法華とは一体の物なり、されば法華經を読むこそ念仏を申すよ念仏申すこそ法華經を読むにては侍れと思つ事に候なりと、かくの如く仰せらるる人人・聖道の中にあまたをはしますと聞ゆ、随つて檀那も此の義を存じて日蓮並に念仏者をおこがましげに思へるなり、先日蓮が是れ程の事をしらぬと思へるはかなし。

仏法漢土に渡り初めし事は後漢の永平なり渡りとどまる事は唐の玄宗皇帝開元十八年なり、渡れるところの經・律・論・五千四十八卷・訳者一百七十六人其の經經の中に南無阿彌陀仏は即南無妙法蓮華經なりと申す經は一卷・一品もおはしまさざる事なり、其の上阿彌陀仏の名を仏説き出し給う事は始め華嚴より終り般若經に至るまで四十二年が間に所所に説かれたり、但し阿含經をば除く一代聽聞の者是を知れり、妙法蓮華經と申す事は仏の御年七十二成道より已來四十二年と申せしに靈山にましまして無量義處三昧に入り給ひし時、文殊・弥勒の問答に過去の日月燈明仏の例を引いて我・燈明仏を見る乃至法華經を説かんと欲すと先例を引きたりし時こそ南閻浮提の衆生は法華經の御名をば聞き初めたりしか、三の卷の心ならば阿彌陀仏等の十六の仏は普大通智勝仏の御時・十六の王子として法華經を習つて後に正覺をならせ給へりと思へたり、彌陀仏等も凡夫にてをはしませし時は妙法蓮華經の五字を習つてこそ仏にはならせ給ひて侍れ、全く南無阿彌陀仏と申して正覺をならせ給ひたりとは見え、妙法蓮華經は能開なり南無阿彌陀仏は所開なり、能開所開を弁ずして南無阿彌陀仏こそ南無妙法蓮華經よ

と物知りものしりがほに申し侍もつるなり、日蓮にちれん幼少ようしょうの時とき習ならいそこなひの天台宗てんだいしゅう・真言宗しんごんしゅうに教はへられて此の義を存じて数十年の間ありしなり、是れ存外そんがいの僻案びやくあんなり但し人師にんしの釈しゃくの中に一体と見えたる釈どもあまた侍る、彼は觀心かんじんの釈か或あるは仏の所証しよしょうの法門ほうもんにつけて述たるを今の人ひと弁わきまえすして全体ぜんたい・なりと思いて人を僻人びやくにんに思ふなり、御迹けいせきあるべきなり、念仏ねんぶつと法華經ほけきょうと一つならば仏の念仏ねんぶつ説かせ給たまいし觀經等かんきようこそ如来出世にょらいしゅつせの本懷ほんかいにては侍らめ、彼をば本懷ほんかいともをばしめさずして法華經ほけきょうを出世しゅつせの本懷ほんかいと説かせ給たまふは念仏ねんぶつと一体ならざる事明白しんごんしゅうなり、其の上多くの真言宗しんごんしゅう・天台宗てんだいしゅうの人人ひとびとに値あひ奉りて候たてまつし時、此の事を申しければ、されば僻案びやくあんにて侍りけりと申す人は是れ多し、敢て証文あえてしやうもんに經文きやうもんを書いて進ぜず候はん限りは御用ごうひ有るべからず、是こそ謗法ぼうほうとなる根本こんぽんにて侍れ、あなかしこあなかしこ。

日蓮
花押

一一 法華淨土問答抄

117P

理即

名字即

觀行即

穢土

相似即

法華宗立六即

分真即

報土

究竟即

理即

穢土

名字即

淨土宗の所立

觀行即

相似即

分真即

究竟即

報土

三諦の名を聞く

五品を明す

八十八使の見惑を断ず

八十一品の思惑を断ず

九品の塵沙を断ず

四十一品の無明を断ず

一品の無明を断ず

中品戒行世善等

淨土下品

弁成の立、我が身叶い難きが故に且く聖道の行を捨閉し閣抛し浄土に歸し浄土に往生して法華を聞いて無生を悟ることを得べきなり。

日蓮難じて云く、我が身叶い難ければ穢土に於て法華経等・教主釈尊等を捨閉し閣抛し浄土に至つて之を悟る可し等云云、何れの経文に依つて此くの如き義を立つるや、又天台宗の報土は分真即・究竟即・浄土宗の報土は名字即乃至究竟即等とは何れの経・論釈に出でたるや、又穢土に於ては法華経等・教主釈尊等を捨閉し閣抛し浄土に至つて法華経を悟る可しとは何れの経文に出でたるや。

弁成の立に、余の法華等の諸行等を捨閉し閣抛して念仏を用ゆる文は觀經に云く「仏・阿難に告ぐ汝好く是の語を持て是の語を持つ者は即ち是れ無量寿仏の名を持つて文、浄土に往生して法華を聞くと云う事は文に云く「觀世音・大勢至・大悲の音声を以て其れが為に広く諸法実相・除滅罪法を説く、聞き已つて歡喜し時に応じて即・菩提の心を発す」文、余は繁き故に且く之を置く。

又日蓮難じて云く、觀無量寿経は如来成道四十余年の内なり法華経は後八箇年の説なり如何んが已説の觀經に兼ねて未説の法華経の名を載せて捨閉閣抛の可説と為す可きや、随つて「仏告阿難」等の文に至つては只弥陀念仏を勧進する文なり未だ法華経を捨閉し閣抛することを聞かず、何に況や無量義經に法華経を説かんが為に先ず

四十余年の已説の經經を挙げて未顕眞実と定め畢んぬ、豈未顕眞実の觀經の内に已顕眞実の法華経を挙げて捨て乃至之を抛てと為す可きや、又云く「久しく此の要を黙して務めて速かに説かず」等云云、既に教主釈尊・四十余年の間法華の名字を説かず何ぞ已説觀經の念仏に対して此の法華経を抛たんや、次ぎに「下品下生・諸法実相・除滅罪法等」云云、夫れ法華経已前の実相其の数・一に非ず先ず外道の内の長爪の実相・内道の内の小乘乃至爾前の四教皆所詮の理は実相なり、何ぞ必ずしも已説の觀經に載する所の実相のみ法華経に同じと意得べきや、

このたびはたしか
今度慥なる証文を出して法然上人の無間の苦を救わるべきか。

又弁成の立に、觀經は已説の經なりと雖も未來を面とする故に未來の衆生は未來に有る所の經卷之を讀誦して淨土に往生すべし、既に法華等の諸經・未來流布の故に之れを讀誦して往生すべきか、其の法華を捨閉閣抛し觀經の持無量壽仏の文に依つて法然是くの如く行じ給うか、觀經の持無量壽仏の文の上に諸善を説き一向に無量壽仏を勸持せる故に申せしめ候、実相に於いても多く有りと云う難、彼は淨土の故に此の難來るべからず、法然上人聖道の行機堪え難き故に未來流布の法華を捨閉閣抛す、故に是れ慈悲の至進なれば此の慈悲を以て淨土に往生し全く地獄に墮すべからざるか。

日蓮難じて云く、觀經を已説の經なりと云云、已説に於ては承伏か、觀經の時未だ法華經を説かずと雖も未來を鑒みて捨閉閣抛すべしと法然上人は意得給うか云云、仏・未來を鑒みて已説の經に未來の經を載せて之を制止すと云わば已説の小乗經に未説の大乗經を載せて之を制止すべきか、又已説の權大乘經に未説の実大乘經を載せて未來流布の法華經を制止せば、何が故に仏・爾前經に於て法華の名を載せざる由、之を説きたまうや。

法然上人慈悲の事、慈悲の故に法華經と教主釈尊とを抛つなりと云わば所詮上に出す所の証文は未だ分明ならず慥なる証文を出して法然上人の極苦を救わる可きか、上の六品の諸行往生を下の三品の念仏に對して諸行を捨つ豈法華を捨つるに非ずや等云云、觀無量壽經の上六品の諸行は法華已前の諸行なり、設い下の三品の念仏に對して上六品の諸行之を抛つとも但法華經は諸行に入らず何ぞ之を闇かんや、又法華の意は爾前の諸行と觀經の念仏と共に之を捨て畢りて如來出世の本懷を遂げ給うなり、日蓮管見を以て一代聖教並びに法華經の文を勸うるに未だ之を見ず、法華經の名を挙げて或は之を抛ち或は其の門を閉する等と云う事を、若し爾らば法然上人の憑む所の弥陀本願の誓文並びに法華經の人阿鼻獄の釈尊の誠文如何ぞ之を免る可けんや、法然上人・無間獄に墮せば

所化の弟子並びに諸檀那等共に阿鼻大城に墮ちんか、今度分明なる証文を出して法然上人の阿鼻の炎を消さる可し云云。
文永九年太歳壬申正月十七日

日蓮 花押
弁成 花押

一三 法華真言勝劣事

120P

東寺の弘法大師空海の所立に云く法華經は猶華嚴經に劣れり何に況や大日經等に於いてをやと云云、慈覺大師円仁智証大師円珍・安然和尚等の云く法華經の理は大日經に同じ印と真言との事に於ては是れ猶劣れるなりと云云其の所釈は余處に之を出す。空海は大日經・菩提心論等に依つて十住心を立てて顯密の勝劣を判ず、其の中に第六に他縁大乘・心は法相宗第七に覺心不生心は三論宗・第八に如実一道心は天台宗・第九に極無自性心は華嚴宗・第十に秘密莊嚴心は真言宗なり、此の所立の次第は浅き従り深きに至る、其の証文は大日經の住心品と菩提心論とに出づと云えり、然るに出す所の大日經の住心品を見て他縁大乘・覺心不生・極無自性を尋ぬるに名目は經文に之有り、然りと雖も他縁・覺心・極無自性の三句を法相・三論・華嚴に配する名目は之無し、其の上覺心不生と極無自性との中間に如実一道の文義共に之無し、但し此の品の初に「云何なるか菩提謂く如実に自心を知る」等の文之有り、此の文

を取つて此の二句の中間に置いて天台宗と名づけ華嚴宗に劣るの由、之を存す、住心品に於ては全く文義共に無し、
有文有義・無文有義の二句を虧く信用に及ばず、菩提心論の文に於ても法華・華嚴の勝劣都て之を見ざる上、此の論は
竜猛菩薩の論と云う事上古より諍論之れ有り、此の諍論絶えざる已前に龜鏡に立つる事は堅義の法に背く、其の上
善無畏・金剛智等評定有つて大日經の疏義釈を作れり一行阿闍梨の執筆なり、此の疏義釈の中に諸宗の
勝劣を判ずるに法華經と大日經とは広略の異なりと定め畢んぬ、空海の德貴しと雖も争か先師の義に背く可きやと云
う、難此れ強し此れ安然の難なり、之に依つて空海の門人之を陳ずるに旁陳答之有り或は守護經或は六波羅蜜經或は
楞伽經或は金剛頂經等に見ゆと多く會通すれども總じて難勢を免れず、然りと雖も東寺の末学等大師の高徳を恐
るるの間強ちに會通を加えんとすれども結句會通の術計之無く問答の法に背いて伝教大師最澄は弘法大師の弟子な
りと云云、又宗論の甲乙等旁論ずる事之有りと云云。
日蓮案じて云く、華嚴宗の杜順・智嚴・法蔵等法華經の始見今見の文に就いて法華・華嚴・齊等の義之を存す、其の後
澄觀始今の文に依つて齊等の義を存すること祖師に違せず、其の上二往の弁を加えて法華と華嚴と齊等なりと云えり、
但し華嚴は法華經より先なり、華嚴經の時仏最初に法慧功德林等の大菩薩に對して出世の本懷之を遂ぐ、然れども二乗
並に下賤の凡夫等根機未熟の故に之を用いず、阿含・方等・般若等の調熟に依つて還つて華嚴經に入らしむ、此れを今見
の法華經と名づく、大陣を破るに余殘堅からざる等の如し、然れば実に華嚴經法華經に勝れ
たり等と云云、本朝に於て勤操等に値いて此の義を習學す後に天台・真言を學すと雖も旧執改まらざるが故に此の義を
存するか、何に況や華嚴經法華經に勝るの由は陳隋より已前・南三・北七・皆此の義を存す、天台已後も又諸宗此の義
を存せり但だ弘法一人に非ざるか、但し澄觀・始見今見の文に依つて華嚴經は法華經より勝ると料簡する才覺に於ては
天台智者大師・涅槃經の「是經出世乃至如法華中」等の文に依つて法華・涅槃齊等の義を存するのみに

非ず、又勝劣の義を存するは此の才覚を學びて此の義を存するか此の義若し僻案ならば空海の義も又僻見なる可きなり、天台・眞言の書に云く法華經と大日經とは広略の異なり、略とは法華經なり、大日經と齊等の理なりと雖も印・眞言之を略する故なり、広とは大日經なり、極理を説くのみに非ず印・眞言をも説く故なり、又法華經と大日經とに同劣の二義有り、謂く理同事劣なり、又二義有り一には大日經は五時の撰なり是れ与の義なり、二には大日經は五時の撰に非ず是れ奪の義なり、又云く法華經は譬えば裸形の猛者の如し大日經は甲冑を帶せる猛者なり等と云云、又云く印・眞言無きは其の仏を知る可からず等と云云。

日蓮不審して云く、何を以て之を知る、理は法華經と大日經と齊等なりと云う事を、答えて云く疏と義釈並に慈覺・智証等の所釈に依るなり。

求めて云く此等の三藏大師等は又何を以て之を知るや、理は齊等の義なりと、答えて云く三藏大師等をば疑う可からず等と云云、難じて云く、此の義・論義の法に非ざる上、仏の遺言に違背す慥に經文を出す可し、若し經文無くんば義分無かる可し如何、答う威儀形色經・瑜祇經・觀智儀軌等なり、文は口伝す可し、問うて云く法華經に印・眞言を略すとは仏よりか經家よりか訳者よりか、答えて云く或は仏と云い或は經家と云い或は訳者と云うなり、不審して云く仏より眞言・印を略して法華經と大日經と理同事勝の義之有りといわば此の事何れの經文ぞや、文証の所出を知らず我意の浮言ならば之を用ゆ可からず、若し經家・訳者より之を略すといわば仏説に於ては何ぞ理同事勝の釈を作る可きや、法華經と大日經とは全躰齊なり能く能く子細を尋ぬ可きなり。

私に日蓮云く、威儀形色經・瑜祇經等の文の如くは仏説に於ては法華經に印・眞言有るか、若し爾らば經家・訳者之を略せるが、六波羅蜜經の如きは經家之を略す、旧訳の仁王經の如きは訳者之を略せるか、若し爾らば天台・眞言の理同事異の釈は經家並に訳者の時より法華經・大日經の勝劣なり、全く仏説の勝劣に非ず此れ天台・眞言の極なり、天台宗の

義勢才覚の爲に此の義を難ず、天台・真言の僻見此くの如し、東寺所立の義勢は且く之を置く僻見眼前の故なり、抑
てんたい しんごんしゅう しりょうり どうじしゅう なん には法華經と大日經と理同の義其の文全く之無し、法華經と大日經と
天台・真言宗の所立 理同事勝に二難有り、一には法華經と大日經と理同の義其の文全く之無し、法華經と大日經と
せんごん いかん すで ぎしやく ぜんこれ おわ ほけきょう だいにちきょう ほうけきょう だいにちきょう
先後如何、既に義釈に二經の前後之を定め畢つて法華經は先き大日經は後なりと云々、若し爾らば大日經は法華經の
じつじつ ふうつ 一法を両度之を説くが故なり若し所立の如くば法華經の理を重ねて之を説くを大日經と云つ、
重説なる流通なり、一法を両度之を説くが故なり若し所立の如くば法華經の理を重ねて之を説くを大日經と云つ、
然れば則ち法華經と大日經と敵論の時は大日經の理之を奪つて法華經に付く可し、
ただ だいにちきょう 但し大日經の得分は但 印真言計りなり、印契は身業・真言は口業なり身口のみにして意無くば印・真言有る可からず、手
口等を奪つて法華經に付けなば手無くして印を結び口無くして真言を誦せば虚空に印・真言を誦結す可きか如何、裸形の
もさ かいつ 猛者と甲冑を帶せる猛者との譬の事、裸形の猛者の進んで大陣を破ると甲冑を帶せる猛者の退いて一陣をも破らざると
いすれ まさ は何れが勝るや、又猛者は法華經なり甲冑は大日經なり、猛者無くば甲冑何の詮か之有らん此れは理同の義を難ず
るなり、次に事勝の義を難ぜば法華經には印・真言無く大日經には印・真言之有りと
云云、印契真言の有無に付て二經の勝劣を定むるに大日經に印・真言有つて法華經に之無き故に劣ると云わば、阿含經に
せかいこんりゅうけんせい だいにかきょう 是世界建立賢聖の地位是れ分明なり、大日經には之無し、彼の經に有る事が此の經に無きを以て勝劣を判ぜば大日經
は阿含經より劣るか、雙觀經等には四十八願是れ分明なり大日經に之無し、般若經には十八空是れ分明なり大日經に
は之無し、此等の諸經に劣ると云う可きか、又印・真言無くば仏を知る可からず等と云云、今反詰して云く理無くば
あ 仏有る可からず、仏無くば印契真言一切徒然と成るべし。

彼難じて云く、賢聖並に四十八願等をば印・真言に對す可からず等と云云、今反詰して云く最上の印真言之無くば
ほけきょう 法華經は大日經等よりも劣るか、若し爾らば法華經には二乗作仏・久遠実成・之有り大日經には之無し印真言と二乗
さぶつくあんじつじつ たいろん てんちつんてい 諸經に印真言を簡わざるに大日經に之を説いて何の詮か有る可き
作仏久遠実成とを對論せば天地雲泥なり、諸經に印真言を簡わざるに大日經に之を説いて何の詮か有る可き

や、二乗若し灰断の執を改めずんば印・真言も無用なり、一代の聖教に皆二乗を永不成仏と簡い随つて大日経にも之を隔つ、皆成仏までこそ無からめ三分が二之を捨て百分が六十余分得道せずんば仏の大悲何かせん、凡そ理の三千之有つて成仏すと云う上には何の不足か有る可き成仏に於てはなる仏・中風の覺者は之有る可からず、之を以て案ずるに印・真言は規模無きか、又諸経には始成正覺の旨を談じて三身相即の無始の古仏を顕さず、本無今有の失有れば大日如来は有名無実なり、寿量品に此の旨を顕す釈尊は天の一月諸仏・菩薩は万水に浮べる影なりと見えたり、委細の旨は且く之を置く。

又印・真言無くんば祈・有る可からずと云云、是れ又以ての外の僻見なり、過去現在の諸仏・法華経を離れて成仏す可からず法華経を以て正覺を成じ給う、法華経の行者を捨て給わば諸仏還つて凡夫と成り給うべし恩を知らざる故なり、又未來の諸仏の中の二乗も法華経を離れては永く枯木敗種なり、今は再生の華果なり、他經の行者と相論を為す時は華光如来・光明如来等は何れの方に付く可きや、華嚴經等の諸經の仏・菩薩・人乃至四惡趣等の衆は皆法華経に於て一念三千・久遠実成の説を聞いて正覺を成ず可し何れの方に付く可きや、真言宗等と外道

並に小乗・權大乘の行者等と敵対相論を為すの時は甲乙知り難し、法華経の行者に對する時は竜と虎と師子と兎との鬪いの如く諍論分絶えたる者なり、慧亮腦を破りし時・次第位に即き相応加持する時・眞濟の惡靈伏せらるる等是なり、一向・真言の行者は法華経の行者に劣れる証拠是なり、問つて云く義釈の意は法華経・大日経共に二乗作仏・久遠実成を明かすや如何、答えて云く共に之を明かす、義釈に云く「此の經の心の実相は彼の經の諸法実相なり」と云云、又云く「本初は是れ寿量の義なり」と云云。

問つて云く華嚴宗の義に云く華嚴経には二乗作仏・久遠実成之を明かす、天台宗は之を許さず、宗論は且く之を置く人師を捨てて本經を存せば華嚴経に於ては二乗作仏・久遠実成の相似の文之有りと雖も實には之無し、之を以て

之を思うに義釈には大日經に於て二乗作仏久遠実成を存すと雖も實には之無きか如何、答えて云く華嚴經の如く相似の文之有りと雖も実義之無きか、私に云く二乗作仏無くば四弘誓願満足す可からず、四弘誓願満たずんば又別願も満足す可からず、總別の二願満足せんば衆生の成仏も有り難きか能く能く意得可し云云。問うて云く大日經の疏に云く大日如来は無始無終なり遙に五百塵点に勝れたりと如何、答う毘盧遮那の無始無終なる事華嚴・淨名・般若等の諸大乘經に之を説く独り大日經のみに非ず、問うて云く若し爾らば五百塵点は際限有れば有始有終なり無始無終は際限無し、然れば則ち法華經は諸經に破せらるるか如何、答えて云く他宗の人は此の義を存す天台一家に於て此の難を会通する者有り難きか、今大日經並に諸大乘經の無始無終は法身の無始無終なり三身の無始無終に非ず、法華經の五百塵点は諸大乘經の破せざる伽耶の始成之を破りたる五百塵点なり、大日經等の諸大乘經には全く此の義無し、宝塔の涌現・地涌の涌出・弥勒の疑・寿量品の初の三誠四請・弥勒菩薩領解の文に「仏希有の法を説きたもう昔より未だ曾て聞かざる所なり」等の文是なり、大日經六卷並に供養法の卷金剛頂經・蘇悉地經等の諸の眞言部の經の中に未だ三止四請・三誠四請・二乗の劫国名号・難信難解等の文を見ず。

問うて云く五乗の眞言如何、答う未だ二乗の眞言を知らず四諦・十二因縁の梵語のみ有るなり、又法身平等に会すること有らんや。

問うて云く慈覺・智証等理同事勝の義を存す争か此等の大師等に過ぎんや、答えて云く人を以て人を難ずるは仏の誠なり何ぞ汝仏の制誡に違背するや但經文を以て勝劣の義を存す可し、難じて云く末学の身として祖師の言に背かば之を難ぜざらんや、答う末学の祖師に違する之を難ぜば何ぞ智証・慈覺の天台・妙樂に違するを何ぞ之を難ぜざるや、問うて云く相違如何、答えて云く天台妙樂の意は已今当の三説の中に法華經に勝れたる經之れ有る

可からず、若し法華經に勝れたる經之有りと**いわば一宗の宗義之を壞る可きの由之を存す、若し大日經法華經に勝ると**
いわば天台・妙樂の宗義忽に破る可きをや。

問うて云く天台・妙樂の已今當の宗義証擲經文に有りや、**答えて云くこれ有り法華經法師品に云く「我が所説の**
經典は無量千萬億已に説き今説き當に説かん而も其の中に於て此の法華經最も為れ難信難解なり」と等と云云、此の經文
の如くんば五十余年の釈迦所説の一切經の内には法華經は最第一なり、難じて云く真言師の云く法華經は釈迦所説の
一切經の中に第一なり、大日經は大日如來所説の經なりと、答えて云く釈迦如來より外に大日如來

闍浮提に於て八相成道して大日經を説けるは一、六波羅蜜經に云く過去現在並に釈迦牟尼佛の所説の諸經を分ちて
五藏と爲し其の中の第五の陀羅尼藏は真言なりと真言の經釈迦如來の所説に非ずといわば經文に違す是二、我所説
經典に等の文は釈迦如來の正直捨方便の説なり大日如來の証明分身の諸佛広長舌相の經文なり是三、五佛の章尽く
諸佛皆法華經を第一なりと説き給う是四、「要を以て之を言わば如來の一切の所有の法乃至皆此の經に於て宣示顯説す」
等と云云、此の經文の如くならば法華經は釈迦所説の諸經の第一なるのみに非ず、大日如來・

十方無量諸佛の諸經の中に法華經第一なり、此の外一佛二佛の所説の諸經の中に法華經に勝れたるの經之有りと云わ
ば信用す可からず是五、大日經等の諸の真言經の中に法華經に勝れたる由の經文之れ無し是六、仏より外の天竺・震旦
日本國の論師・人師の中に天台大師より外の人師の所釈の中に一念三千の名目之無し、若し一念三千を立てざれば性惡
の義之無し性惡の義之無くんば仏菩薩の普現色身不動愛染等の降伏の形十界の曼荼羅・三十七尊等・本無今有の
外道の法に同じきかは七。

問うて云く七義の中に一一の難勢之有り然りと雖も六義は且く之を置く第七の義如何、**華嚴の澄觀・真言の一行等皆**
性惡の義を存す何ぞ諸宗に此の義無しと云うや、答えて云く華嚴の澄觀・真言の一行は天台所立の義を盗ん

で自宗の義と成すか、此の事余処に勘えたるが如し、問うて云く天台大師の玄義の三に云く「法華は衆經を總括す乃至舌口中に爛る人情を以て彼の大虚を局ること莫れ」と云云、釈籤の三に云く「法華宗極の旨を了せずして声聞に記する事相のみ華嚴般若の融通無礙なるに如かずと謂う諫曉すれども止まず舌の爛れんこと何ぞ疑わん、乃至已今当の妙茲に於て固く迷えり舌爛れて止まざるは猶為れ華報なり謗法の罪苦長劫に流る」と云云、若し天台・妙樂の釈実ならば南三・北七並に華嚴法相・三論・東寺の弘法等、舌爛れんこと何の疑有らんや、乃至苦流長劫の者なるか、是は且く之を置く慈覺智証等の親り此の宗義を承けたる者、法華經は大日經より劣の義存す可し、若し其の義ならば此の人人の「舌爛口中苦流長劫」は如何、答えて云く此の義は最上の難の義なり口伝に存り云云。

文永元年甲子七月二十九日之を記す。

日蓮 花押

一四 真言七重勝劣事

ぶんえい 文永七年 四十九歳御作 ときじょうにん 与富木常忍

128P

ほっけ 法華 大日二經の七重勝劣の事。

しな 戸那 扶桑の人師二代聖教を判ずるの事。

ちんこ 鎮護国家の三部の事。

だいり 内裏に三宝有り内典の三部に当るの事。

てんたい 天台宗に帰伏する人人の四句の事。

こんき 今經の位を人に配するの事。

三塔の事。

にほん 日本国仏神の座席の事。

ほっけ 法華 大日二經の七重勝劣の事。

いこん 已今当第一

ほんもん 本門第一

ほけき 法華經第一

「やくおう 薬王今汝に告ぐ・諸經の中に於いて最も其の上に在り」 迹門第二

ねはん 涅槃經第二 「是經出世」

むりょう 無量義經第三 「次に方等十二部經 摩訶般若 華嚴海空を説く 眞実甚深 眞実甚深」

けこん 華嚴經第四

はんじや 般若經第五

蘇悉地經第六

上に云く「三部の中に於て此の經を王と爲す、中に云く「猶成就せずんば當に此の法を作す

べし決定として成就せん、所謂乞食 精勤 念誦 大恭敬 巡八聖跡 禮拜行道なり、或は復大

般若經七遍 或は一百遍を轉讀す、下に云く「三時に常に大乘般若等の經を讀め」

大日經第七 三國に未だ弘通せざる法門なり。

尸那 扶桑の法師一代 聖教を判ずるの事

華嚴經第一

涅槃經第二

法華經第三

般若經第一

法華經第一

涅槃經第二

華嚴經第三

深密經第一

法華經第二

般若經第三

華嚴經第一

法華經第二

涅槃經第三

南北の義 晉 齊等五百余年 三百六十余人 光宅を以て長と爲す。

吉蔵の義 梁代の人なり。

南岳の御弟子なり。

天台智者大師の御義 陳隋二代の人なり。

妙樂等之を用う。

玄奘の義 唐の始め太宗の御宇の人なり。

法蔵 澄觀等の義 唐の半ば則天皇后の御宇の人なり。

大日經第一

法華經第二

諸經第三

法華經第一

涅槃經第二

諸經第三

大日經第一

華嚴經第二

法華經第三

大日經第一

法華經第二

諸經第三

鎮護国家の三部の事

法華經

密嚴經

仁王經

法華經・淨名經

善無畏 不空等の義 唐の末 玄宗の御宇の人なり。

伝教の御義人王五十代桓武の御宇及び平城 嵯峨の御代の人、比叡山延暦寺なり。

弘法の義 人王五十二代嵯峨 淳和二代の人、東寺 高野等なり。

感覺の義 善無畏を以て師と為す、仁明・文徳・清和の三代、叡山講堂総持院なり。
智証之に同ず、園城寺なり。

不空三蔵 大曆に法華寺に之を置く、大曆二年護摩寺を改めて法華寺を立つ、中央に法華經・
脇土に両部の大日なり。

聖徳太子 人王三十四代推古天皇の御宇、四天王寺に之を置く摂津の国 難波郡 仏法最初

勝鬘經 しょうむぎょう

法華經 ほけきょう

金光明經 こんくわうみょうきょう

仁王經 にんのうきょう

大日經 だいにとくぎょう

金剛頂經 こんぐうじょう

蘇悉地經 そしつぢきょう

内裏に三宝有り内典の三部に当るの事。

神靈 しんじ

宝剣 ほうけん

内侍所 ないじどころ

天台宗に帰伏する人人の四句の事

一に身心俱に移る しんしんとも

二に心移りて身移らず

三に身移りて心移らず

の寺なり。

伝教大師 人王五十代桓武天皇の御宇、比叡山延暦寺止観院に之を置く、年分得度者一人は遮那業一人は止観業なり。

慈覚大師 人王五十四代仁明天皇の御宇、比叡山東塔の西総持院に之を置かる、御本尊は大日如来、金蘇の二疏十四卷安置せらる。

国の手騷なり。

宝剣 国敵を禦ぐ財なり、平家の乱の時に海に入りて見えす。

内侍所 天照太神影を浮かべ給う神鏡と云う、左馬頭頼茂に打たれて焼失す。

天台宗に帰伏する人人の四句の事

一に身心俱に移る さんろん かじょうだいし

二に心移りて身移らず けこん ちようかんほつし

三に身移りて心移らず しんこん ぜんむい ふくう

華嚴の澄観法師 けこん ちようかんほつし

華嚴の法蔵 けこん ほうぞう

法相の慈恩 ほうじょう じあん

四に身心俱に移らず

智証大師
弘法大師

今經の位を人に配するの事

征夷將軍 鎌倉殿

無量義經

摂政

涅槃經

院

迹門十四品

天子

本門十四品

三塔の事

中堂 伝教大師の御建立

止觀・遮那の二業を置く、御本尊は薬師如来なり、延暦年中の御建立・王城の

止觀院 本院

丑寅に當る、桓武天皇の御崇重、天子本命の道場と云う。
天竺には靈鷲山と云い震旦には天台山と云い扶桑には比叡山と云う、三国伝灯
の仏法此に極まれり。

講堂 慈覺大師の建立

總持院 鎮護国家の道場と云う、御本尊は大日如来なり、承和年中の建立、止觀院の西

西塔

釈迦堂 宝幢院

円澄の建立

観音堂

横川

慈覺の建立

楞嚴院

伝教の御弟子なり。

に眞言の三部を置き是を東塔と云うなり、伝教の御弟子第三の座主なり。

日本国仏神の座席の事

問う 吾が朝には何れの仏を以て一の座と為し何れの法を以て一の座と為し何れの僧を以て一の座と為すや、答う
観世音菩薩を以て一の座と為し真言の法を以て一の座と為し東寺の僧を以て一の座と為すなり。

問う 日本には人王三十代に仏法渡り始めて後は山寺種種なりと雖も延暦寺を以て天子本命の道場と定め鎮護国家の
道場と定む、然して日本最初の本尊釈迦を一の座と為す然らずんば延暦寺の薬師を以て一の座と為すか、又代代の帝王
起請を書いて山の弟子とならんと定め給ふ故に法華經を以て法の一の座と為し延暦寺の僧を以て一の座と為す可し、何ぞ
仏を本尊とせず菩薩を以て諸仏の一の座と為すや、答う 尤も然る可しと雖も慈覺の御時・

叡山は真言になる東寺は弘法の真言を建立す故に共に真言師なり、共に真言師なるが故に東寺を本として真言を崇む
真言を崇むる故に觀音を以て本尊とす真言には菩薩をば仏にまされりと談ずるなり、故に内裏に毎年正月八日の内
道場の法行わる東寺の一の長者を召して行わる若し一の長者暇有らざれば二の長者行つべし三までは及ばず可から
ず云云、故に仏には觀音法には真言、僧には東寺法師なり、比叡山をば鬼門の方とて之を下す譬えば武士の如しと云う
て崇めざるなり故に日本国は亡国とならんとするなり。

問う 神の次第如何、答う 天照太神を一の座と為し八幡大菩薩を第二の座と為す是より已下の神は三千二百三十二社
なり。

一五 真言天台勝劣事

文永七年四十九歳御作

134P

問う何なる経論に依つて真言宗を立つるや、答う大日経・金剛頂経・蘇悉地経並びに菩提心論此の三經一論に依つて真言宗を立つるなり、問う大日経と法華経と何れが勝れたるや、答う法華経は或は七重或いは八重の勝なり大日経は七八重の劣なり、難じて云く驚いて云く古より今に至るまで法華より真言劣ると云う義都て之無しに依つて弘法大師は十住心を立てて法華は真言より三重の劣と釈し給へり覺鑠は法華は真言の履取に及ばずと釈せり打ち任せては密教勝れ顯教劣るなりと世挙つて此を許す七重の劣と云う義は甚珍しき者をや、答う真言は七重の劣と云う事珍しき義なりと驚かるるは理なり、所以に法師品に云く「已に説き今説き當に説かん而も其の中に於て此の法華経は最も為れ難信難解なり」云云、又云く「諸経の中に於て最も其の上に在り」云云、此の文の心は法華は一切経の中に勝れたり此其の一、次に無量義経に云く「次に方等十二部経摩訶般若・華嚴海空を説く」云云、又云く「眞実甚深甚深甚深なり」云云、此の文の心は無量義経は諸経の中に勝れて甚深の中にも猶甚深なり然れども法華の序分にして機もいまだなましき故に正説の法華には劣るなり此其二、次に涅槃の九に云く「是の經の世に出ずるは彼の果實の利益する所多く一切を安樂ならしむるが如く能く衆生をして仏性を見せしむ、法華の中の八千の声聞記を得授するが如く大果實を成じ秋收冬蔵して更に所作無きが如し」云云、簸の二に云く「一家の義意謂く二部同味なれども然も涅槃尚劣る」云云、此の文の心は涅槃経も醍醐味・法華経も醍醐味同じ醍醐味なれども涅槃経は尚劣るなり法華経は勝れたりと云へり、涅槃経は既に法華の序分の無量義経よりも劣り醍醐味なるが故に華嚴経には勝たり此其三、次に華嚴経は最初頓説なるが故に般若には勝れ涅槃経の醍醐味には劣れ

り此其四、次に蘇悉地經に云く「猶成ぜざらん者は、或は復大般若經を転読すること七遍云云、此の文の心は大般若經は華嚴經には劣り蘇悉地經には勝ると見えたり此其五、次に蘇悉地經に云く「三部の中に於て此の經を王と爲す云云、此の文の心は蘇悉地經は大般若經には劣り大日經金剛頂經には勝ると見えたり此其六、此の義を以て大日經は法華經より七重の劣とは申すなり法華の本門に望むれば八重の劣とも申すなり。

次に弘法大師の十住心を立てて法華は三重劣ると云う事は安然の教時義と云う文に十住心の立様を破して云く五つの失有り謂く一には大日經の義釈に違する失二には金剛頂經に違する失三には守護經に違する失四には菩提心論に違する失五には衆師に違する失なり、此の五つの失を陳ずる事無くしてつまり給へり、然る間法華は眞言より三重の劣と釈し給へるが大なる僻事なり謗法に成りぬと覺ゆ、次に覺鑊の法華は眞言の履取に及ばずと舍利講の式に書かれたるは舌に任せたる言なり証拠無き故に専ら謗法なる可し、次に世を挙げて密教勝れ顯教劣ると此を許すと云う事は是れ偏に弘法を信じて法を信ぜざるなり、所以に弘法をば安然和尚五失有りと云うて用いざる時は世間の人は何様に密教勝ると思ふ可き抑密教勝れ顯教劣るとは何れの經に説きたるや是又証拠無き事を世を挙げて申すなり、猶難じて云く大日經等は是中央大日法身無始無終の如来法界宮、或は色究竟天他化自在天にして菩薩の爲に眞言を説き給へり法華は釈迦応身靈山にして二乗の爲に説き給へり、或は釈迦は大日の化身なりとも云へり、成道の時は大日の印可を蒙て字の觀を教えられ後夜に仏になるなり大日如来だにもましまさずば争か釈迦仏も仏に成り給うべき此等の道理を以て案ずるに法華より眞言勝れたる事は云うに及ばざるなり、答て云く依法不依人の故にい恥やうにも經説のやうに依る可きなり、大日經は釈迦の大日となつて説き給へる經なり故に金光明と最勝王經との第一には中央釈迦牟尼と云へり又金剛頂經の第一にも中央釈迦牟尼と云へり大日と釈迦とは一つ中央の仏なるが故に大日經をば釈迦の説とも云うべし大日の説とも云うべし、又毘盧遮那と云う

は天竺の語大日と云うは此の土の語なり釈迦牟尼を毘盧遮那と名づくと云う時は大日は釈迦の異名なり加之旧訳の經に廬舍那と云うをば新訳の經には毘盧遮那と云う然る間新訳の經の毘盧遮那法身と云うは旧訳の經の廬舍那他受用身なり、故に大日法身と云うは法華經の自受用報身にも及ばず況や法華經の法身如来にはまして及ぶ可からず法華經の自受用身と法身とは真言には分絶えて知らざるなり法報不分二三莫弁と天台宗にもきはるるなり、随つて華嚴經の新訳には或は釈迦と稱づけ或は毘盧遮那と稱くと説けり故に大日は只是釈迦の異名なりなに別に別の仏とは意得可きや、次に法身の説法と云う事何れの經の説ぞや弘法大師の二教論には楞伽經に依つて法身の説法を立て給へり、其の楞伽經と云うは釈迦の説にして末顕真実の權教なり法華經の自受用身に及ばざれば法身の説法とはいふともいみじくもなし此の上に法は定んで説かず報は二義に通ずるの一身の有るをば一向知らざるなり、故に大日法身の説法と云うは定んで法華の他受用身に當るなり、次に大日無始無終と云う事既に「我昔道場に坐して四魔を降伏す」とも宣ふ「四魔を降伏し六趣を解脱し一切智智の明を満足す」等云云、此等の文は大日は始めて四魔を降伏して始めて仏に成るとこそ見えたれ全く無始の仏とは見えず、又仏に成りて何程を経る

と説かざる事は權經の故なり実經にこそ五百塵点等をも説きたれ、次に法界宮とは色究竟天か又何れの処ぞや色究竟天、或は他化自在天は法華宗には別教の仏の説処と云うていみじからぬ事に申すなり又菩薩の為に説くとも高名もなし例せば華嚴經は一向菩薩の爲なれども尚法華の方便とこそ云はるれ、只仏出世の本意は仏に成り難き二乗の仏に成るを一大事とし給へりされば大論には二乗の仏に成るを密教と云ひ二乗作仏を説かざるを顕教と云へり、此の趣ならば真言の三部經は二乗作仏の旨無きが故に還つて顕教と云ひ法華は二乗作仏を旨とする故に密教と云う可きなり、随つて諸仏秘密の蔵と説けば子細なし世間の人密教勝ると云うはいかやうに意得たるや但し若し顕教に於て修行する者は久く三大無數劫を経る等と云えるは既に三大無數劫と云う故に是三蔵四阿含經を

指して顕教と云いて権大乘までは云わず況や法華実大乘までは都て云わざるなり。

次に釈迦は大日の化身 字を教えられてこそ仏には成りたれと云う事此は偏に六波羅蜜經の説なり、彼の經一部十卷は是れ釈迦の説なり大日の説には非ず是れ末顕眞実の權教なり随つて成道の相も三藏教の教主の相なり六年苦行の後の儀式なるをや、彼の經説の五味を天台は盗み取つて己が宗に立つると云う無実を云い付けらるるは

弘法大師の大なる僻事なり、所以に天台は涅槃經に依つて立て給へる全く六波羅蜜經には依らず況んや天台死去の後百九十年あつて貞元四年に渡る經なり何として天台は見給つべき不実の過弘法大師にあり、凡そ彼の經説は皆末顕眞実なり之を以て法華經を下さん事甚だ荒量なり、猶難じて云く如何に云うとも印眞言三摩耶尊形を説く

事は大日經程法華經には之無く事理俱密の談は眞言ひとりすべかり、其の上眞言の三部經は釈迦一代五時の撰屬に非ずされば弘法大師の宝鑰には釈摩訶衍論を証拠として法華は無明の辺域 戲論の法と釈し給へる 爰を以て法華劣り眞言勝ると申すなり、答つ凡そ印相尊形は是れ權經の説にして実教の談に非ず設い之を説くとも權実大小の差別淺深有るべし、所以に阿含經等にも印相有るが故に必ず法華に印相尊形を説くことを得ずして之を説かざるに非ず説くまじければ是を説かぬにこそ有れ法華は只三世十方の仏の本意を説いて其形がとあるかつある

とは云う可からず、例せば世界建立の相を説かねばとて法華は俱舍より劣るとは云う可からざるが如し、次に事理俱密の事法華は理秘密眞言は事理俱密なれば勝るとは何れの經に説けるや抑法華の理秘密とは何様の事ぞや、法華の理とは迹門 開權顯実の理か其の理は眞言には分絶えて知らざる理なり、法華の事とは又久遠実成の事なり此の事又眞言

になし眞言に云う所の事理は未開会の權教の事理なり何ぞ法華に勝る可きや、次に一代五時の撰屬に非ずと云う事は往古より 諍なり唐決には四教有るが故に方等部に撰すと云へり、教時義には一切智智一味の開会を説くが故に法華の撰と云へり、二義の中に方等の撰と云うは吉き義なり、所以に一切智智一味の

文を以て法華の損と云う事甚だいはれなし彼は法開会の文にして全く人開会なし争か法華の損と云わるべき、法開会の文は方等般若にも盛んに談ずれども法華に等き事なし彼の大日經の始終を見るに四教の旨具にあり尤も方等の損と云う可し、所以に開權顯実の旨有らざれば法華と云うまじ一向小乘三藏の義無ければ阿含の部とも云うべからず、般若畢竟空を説かねば般若部とも云う可からず、大小四教の旨を説くが故に方等部と云わずんば何れの部とか云わん、又一代五時を離れて外に仏法有りと云う可からず若し有らば二仏並出の失あらん、又其の法を釈迦統領の国土にきたして弘む可からず、次に弘法大師釈摩訶衍論を証拠と爲て法華を無明の辺域戲論の法と云う事は是れ以ての外の事なり、釈摩訶衍論は竜樹菩薩の造なり、是は釈迦如来の御弟子なり争か弟子の論を以て師の一代第一と仰せられし法華經を押下して戲論の法等と云う可きや、而も論に其の明文無く随つて彼の論の法門は別教の法門なり權經の法門なり是円教に及ばず又実教に非ず何にしてか法華を下す可き、其の上彼の論に幾の經をか引くらんされども法華經を引く事は都て之無し權論の故なり、地体弘法大師の華嚴より法華を下されたるは遙に仏意にはくひ違いたる心地なり、用ゆべからず用ゆべからず。

日蓮

花押

一六 真言諸宗違目

文永九年五月五十一歳御作

139P

与富木常忍

土木殿等の人人御中

日蓮

空に読み覚えよ老人等は具に聞き奉れ早々に御免を蒙らざる事は之を欺く可からず定めて天之を抑うるか、藤河入道を以て之を知れ去年流罪有らば今年横死に値う可からざるか彼を以て之を惟うに愚者は用いざる事なり、日蓮が御免を蒙らんと欲するの事を色に出す弟子は不孝の者なり、敢て後生を扶く可からず、各各此の旨を知れ。真言宗は天竺より之無し開元の始に善無畏三蔵金剛智三蔵不空三蔵等天台大師已証の一念三千の法門を盗んで大日経に入れて之を立て真言宗と号す、華嚴宗は則天皇后の御宇に之を始む、澄観等天台の十乗の観法を盗んで華嚴経に入れて之を立て華嚴宗と号す、法相三論は言うに足らず、禅宗は梁の世に達磨大師楞伽経等を以てす大乘の空の二分なり、其の学者等大慢を成して教外別伝等と称し一切経を蔑如す天魔の所為なり、浄土宗は善導等観経等を見て一分の慈悲を起し撰地二論の人師に向つて一向専修の義を立て畢んぬ、日本の法然之をあやまり天台真言等を以て雑行に入れ末代不相応の思いを為して国中を誑惑して長夜に迷わしむ、之を明めし導師は但日蓮一人なるのみ。

涅槃経に云く「若し善比丘法を壊る者を見て置いて呵嘖し駟遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり」等云云、漢頂章安大師云く「仏法を壊乱するは仏法の中の怨なり慈無くして詐り親しむは即ち是れ彼が怨なり彼が為に悪を除くは即ち是れ彼が親なり」等云云、法然が捨閑閣抛禅家等が教外別伝若し仏意に叶わ

ずんば日蓮は日本国の人の為には賢父なり聖親なり導師なり、之を言わざれば一切衆生の為に「無慈詐親即是彼怨」の重禍脱れ難し、日蓮既に日本国の王臣等の為には「為彼除惡即是彼親」に当れり此の国既に三逆罪を犯す天豈之を罰せざらんや、涅槃經に云く「爾の時に世尊地少しの土を取つて之を抓の上に置いて迦葉に告げて言わく是の土多きや十方世界の地土多きや、迦葉菩薩、仏に白して言さく世尊抓の上の土は十方所有の土の比ならざるなり○四重禁を犯し五逆罪を作つて○一闡提と作つて諸の善根を断じ是の經を信ぜざるものは十方界所有の地土の如し○五逆罪を作らず○一闡提と作らず善根を断ぜず是くの如き等の涅槃經典を信ずるは抓の上の土の如し」等云云、經文の如くんば当世、日本国は十方の地土の如く日蓮は抓の上の土の如し。

法華經に云く「諸の無智の人有つて惡口罵詈訕等云云、法滅尽經に云く「吾般泥の後五逆濁世に魔道興盛なり魔沙門と作つて吾が道を壞乱す。惡人転た多くして海中の沙の如し劫尽きんとする時日月転た短く善者甚だ少くして若しは一若しは二人」等云云、又云く「衆魔の比丘・命終の後精神当に無択地獄に墮つべし」等云云、今道隆が一党良觀が一党聖一が一党日本国の一切の四衆等は是の經文に当るなり、法華經に云く「仮使劫焼に乾れたる草を担い負いて中に入つて焼けざらんも亦未だ難しとせず我が滅度の後に若し此の經を持つて一人の爲にも説かん是れ則ち爲れ難し」等云云、日蓮は此の經文に当れり、諸の無智の人有つて惡口罵詈訕等し及び刀杖を加うる者あらんと等云云、仏陀記して云く後の五百歳に法華經の行者有つて諸の無智の者の爲に必ず惡口罵詈訕刀杖瓦礫流罪死罪せられん等云云、日蓮無くば釈迦多宝十方の諸仏の未來記は当に大妄語なるべきなり。

疑つて云く汝当世の諸人に勝ることは一分爾る可し眞言華嚴三論法相等の元祖に勝るとは豈に慢過慢の者に非ずや過人法とは是なり汝必ず無間・大城に墮つ可し、故に首楞嚴經に説いて云く「譬えば窮人妄りに帝王と号して自ら誅滅を取るが如し況んや復法王如何ぞ妄りに竊まん因地直からざれば果紆曲を招かん」等云云、

ねはんぎよう
涅槃經云く「云何なる比丘か過人法に墮する。未だ四沙門果を得ず云何んぞ當に諸の世間の人をして我は已に得たりと謂わしむべき」等云云、答えて云く法華經に云く「又大梵天王の一切衆生の父の如く」又云く「此の經は。諸經の中の主なり最も為れ第一なり能く是の經典を受持すること有らん者は亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦為れ第一なり」等云云、伝教大師の秀句に云く「天台法華宗の諸宗に勝れたるは所宗の經に拠るが故なり自讃毀他ならず庶くは有智の君子經を尋ねて宗を定めよ」等云云、星の中に勝れたる月、星月の中に勝れたるは日輪なり、小国の大臣は大国の無官より下る傍例なり、外道の五通を得るより仏弟子の小乗の三賢の者の未だ一通を得ざるは天地猶勝る、法華經の外の諸經の大菩薩は法華の名字即の凡夫より下れり何ぞ汝始めて之を驚かんや教に依つて人の勝劣を定む先ず經の勝劣を知らずんば何ぞ人の高下を論ぜんや。

問うて云く汝法華經の行者為らば何ぞ天汝を守護せざるや、答えて云く法華經に云く「惡鬼其の身に入る」等云云、首楞嚴經に云く「修羅王有り世界を執持して能く梵王及び天の帝釈四天と權を請う此の阿修羅は變化に因つて有り天趣の所持なり」等云云。

能く大梵天王・帝釈・四天と戦う大阿修羅王有りて禅宗・念仏宗・律宗等の棟梁の心中に付け入つて次第に国主国中に遷り入つて賢人を失う、是くの如き大惡は梵釈も猶防ぎ難きか何に況んや日本守護の小神をや但地涌千界の大菩薩・釈迦・多宝・諸仏の御加護に非ざれば叶い難きか、日月は四天の明鏡なり諸天定めて日蓮を知りたまうか日月は十方世界の明鏡なり諸仏も定めて日蓮を知りたまうか、一分も之を疑う可からず、但し先業未だ尽きざるなり日蓮流罪に当れば教主釈尊衣を以て之を覆いたまわんか、去年九月十二日の夜中には虎口を脱れたるか「必ず心の固きに依りて神の守り即ち強し」等とは是なり、汝等努勞疑うこと勿れ決定して疑い有る可からざる者なり、恐恐謹言。

五月五日

日蓮 花押

此の書を以て諸人に触れ示して恨を残すこと勿れ。

土木殿

一七 真言見聞

文永九年七月五十一歳御作 与三位房日行

142P

問う真言亡国とは証文何なる経論に出ずるや、答う法華誹謗正法向背の故なり、問う亡国の証文之無くば云何に信ず可きや、答う謗法の段は勿論なるか若し謗法ならば亡国墮獄疑い無し、凡そ謗法とは謗仏謗僧なり三宝一体なる故なり是れ涅槃經の文なり、爰を以て法華經には即ち一切世間の仏種を斷ずと説く是を即ち一闡提と名づく涅槃經の一と十と十一とを委細に見る可きなり、罪に輕重有れば獄に浅深を構えたり、殺生偷盜等乃至一大三千世界の衆生を殺害すれども等活黑繩等の上七大地獄の因として無間に墮つことは都て無し、阿鼻の業因は経論の掟は五逆・七逆・因果撥無・正法誹謗の者なり、但し五逆の中に一逆を犯す者は無間に墮つと雖も一中劫を経て罪を尽して浮ぶ、一戒をも犯さず道心堅固にして後世を願うと雖も法華に背きぬれば無間に墮ちて展転無數劫と見えたり、然れば即ち謗法は無量の五逆に過ぎたり、是を以て国家を祈らんに天下將に泰平なるべしや、諸法は現量に如かず承久の兵乱の時關東には其の用意もなし国主として調伏を企て四十一人の貴僧に仰せて十五壇の秘法を行はる、其の中に守護經の法を紫宸殿にして御室始めて行わる七日に滿ぜし日・京方負け畢んぬ亡国の現証に非ずや、是は僅に今生の小事なり權教・邪法に依つて惡道に墮ちん事浅・かるべし。

問う權教邪宗の証文は如何既に真言教の大日覺王の秘法は即身成仏の奥蔵なり、故に上下一同に是の法に歸してんがことにて天下悉く大法を仰ぐ海内を静め天下を治むる事偏に真言の力なり、權教邪法と云う事如何、答う權教と云う事四教含藏帶方便の説なる經文顯然なり、然れば四味の諸教に同じて久遠を隠し二乗を隔つ況んや尽形壽の戒等を述べれば小乗權教なる事疑無し、爰を以て遣唐の疑問に禪林寺の広修國清寺の維の決判分明に方等部の撰と云うなり、疑つて云く經文の權教は且く之を置く唐決の事は天台の先德円珍大師之を破す、大日經の指歸に法華すら尚及ばず況や自余の教をやと云云、既に祖師の所判なり誰か之に背く可きや、決に云く「道理前の如し」依法不依人の意なり但し此の釈を智証の釈と云う事不審なり、其の故は授決集の下に云く「若し法華華嚴涅槃等の經に望めば是れ撰引門」と云へり、広修維を破する時は法華尚及ばずと書き授決集には是れ撰引門と云つて二義相違せり指歸が円珍の作ならば授決集は智証の釈に非ず、授決集が実ならば指歸は智証の釈に非じ、今此の事を案ずるに授決集が智証の釈と云う事天下の人皆之を知る上、公家の日記にも之を載せたり指歸は人多く之を知らず公家の日記にも之無し、此を以て彼を思つに後の人作つて智証の釈と号するが能く能く尋ぬ可き事なり、授決集は止しき智証の自筆なり、密家に四句の五蔵を設けて十住心を立て論を引き伝を三國に寄せ家家の日記と号し我が宗を嚴るとも皆是れ妄語胸臆の浮言にして莊嚴己義の法門なり、所詮法華經は大日經より三重の劣戲論の法にして釈尊は無明纏縛の仏と云う事慥なる如来の金言經文を尋ぬ可し、証文無くんば何と云うとも法華誹謗の罪過を免れず此の事当家の肝心なり返す返す忘失する事勿れ、何れの宗にも正法誹謗の失之有り對論の時は但此の一段に在り仏法は自他宗異ると雖も翫ぶ本意は道俗貴賤共に離苦得樂現當二世の爲なり、誹法に成り伏して惡道に墮つ可くば文殊の智慧富樓那の弁説一分も無益なり無間に墮つ程の邪法の行人にて國家を祈せんに將た善事を成す可きや、顯密對判の釈は且らく之を置く華嚴に法華劣ると云う事能く能く思惟す

可きなり、華嚴經の十二に云く四十華嚴なり。又彼の所修の一切功德六分の一常に王に属す。是くの如く修及び造を障るふぜんし。不善所有の罪業六分の一還つて王に属す。文、六波羅蜜經の六に云く。若し王の境内に殺を犯す者有れば其の王便ち第六分の罪を獲ん。偷盜・邪行及び妄語も亦復是くの如し。何を以ての故に若しは法も非法も王為れ根本なれ。

ば罪に於いても福に於いても第六の一分は皆王に属するなり。云云、最勝王經に云く。悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に他方の怨賊来り國人喪乱に遭わんと等云云、大集經に云く。若し復諸の刹利国王諸の非法を作し世尊の声聞の弟子を悩亂し若しは以て毀罵し刀杖もて打斫し及び衣鉢種種の資具を奪い若しは他の給施に留難を作す者有らば、我等彼をして自然に卒に他方の怨敵を起さしめ及び自の国土にも亦兵起・疫病・饑饉・非時風雨・鬭諍言訟せしめ又其の王久しからずして復当に己が国を亡失すべからしむ。云云、大三界義に云く。爾の時

に諸人共に聚りて衆の内に一の有徳の人を立て名けて田主と為して各所収の物六分の一を以て以て田主に貢輸す一人を以て主と為し政法を以て之を治む、茲に因つて以後刹利種を立て大衆欽仰して恩率土に流る復大三末多王と名づく。已上俱舍に依り之を出すなり。

顯密の事、無量義經十功德品に云く「第四功德の」深く諸仏秘密の法に入り演説す可き所違無く失為し」と、抑大日の三部を密説と云ひ法華經を顯教と云ふ事金言の所出を知らず、所詮眞言を密と云うは是の密は隱密の密なるか微密の密なるか、物を秘するに二種有り一には金銀等を蔵に籠むるは微密なり、二には疵片輪等を隠すは隱密なり、然れば即ち眞言を密と云うは隱密なり其の故は始成と説く故に長寿を隠し二乗を隔つる故に記小無し、

此の二は教法の心髓・文義の綱骨なり、微密の密は法華なり、然れば即ち文に云く四の卷法師品に云く「藥王此の經は是れ諸仏秘要の蔵なり」云云、五の卷安樂行品に云く「文殊師利此の法華經は諸仏如来秘密の蔵なり諸經の中に於て最も其の上に在り」云云、寿量品に云く「如来秘密神通之力」云云、如来神力品に云く「如来一切

ひよつものぞう
秘要之蔵に云云、しかのみならず真言の高祖竜樹菩薩法華經を秘密と名づく二乗作仏有るが故にと釈せり、次に二乗
さぶつ 作仏無きを秘密とせずば真言は即ち秘密の法に非ず、所以は何ん大日經に云く「仏不思議真言相道の法を説いて一切の
しよもん 聲聞縁覺を共にせず亦世尊普く一切衆生の爲にするに非ず」云云、二乗を隔つる事前四味の諸教に同じ、随つて唐決に
ほうとうぶ は方等部の損と判ず經文には四教含蔵と見えたり、大論第百卷に云く第九十品を釈す「問うて曰く更に何れの法か甚深にし
はんや して般若に勝れたる者有つて般若を以て阿難に囑累し而も余の經をば菩薩に囑累するや、答えて曰く般若波羅蜜は秘密の
法に非ず而も法華等の諸經に阿羅漢の受決作仏を説いて大菩薩能く受用す譬えば大藥師の能く毒を以て藥と為すが
如し」等云云、玄義の六に云く「譬えば良医の能く毒を変じて藥と為すが如く二乗の根敗反た復すること能わず之を名づ
けて毒と為す今經に記を得るは即ち是れ毒を変じて藥と為す、故に論に云く余經は秘密に非ずとは法華を秘密と為せば
なり、復本地の所説有り諸經に無き所後に在つて當に広く明すべし」云云、籤の六に云く「第四に引証の中論に云く等と
言うは大論の文証なり秘密と言うは八經の中の秘密には非ず但是れ前に未だ説かざる所を秘と為し開し已れば外無き
を密と為す」文、文句の八に云く「方等般若に実相の蔵を説くと雖も亦未だ五乗の作仏を説かず亦未だ発迹顯本せず
頓漸の諸經は皆未だ融會せず故に名づけて秘と為す」文、記の八に云く「大論に云く法華は是れ秘密諸の菩薩に付すと、
今の下の文の如きは下方を召すに尚本眷屬を待つ驗けし余は未だ堪えざることを」云云、秀句の下に竜女の成仏を釈して
身口密なり」と云えり云云、此等の經論釈は分明に法華經を諸仏は最第一と説き秘密教と定め給へるを經論に文証も
無き妄語を吐き法華を顯教と名づけて之を下し之を謗す豈大謗法に非ずや。

抑も唐朝の善無畏・金剛智等法華經と大日經の両經に理同事勝の釈を作るは梵華兩國共に勝劣か、法華經も
天竺には十六里の宝蔵に有れば無量の事有れども流沙葱嶺等の險難五万八千里・十万里の路次容易ならざる間枝葉
をば之を略せり、此等は併ながら訳者の意樂に随つて広を好み略を惡む人も有り略を好み広を惡む人も有り、然れば

すなわ げんじょう
即ち玄奘は広を好んで四十卷の般若經を六百卷と成し、羅什三藏は略を好んで千卷の大論を百卷に縮めたり、印契・
真言の勝ると云う事はを以て弁え難し、羅什所訳の法華經には是を宗とせず不空三藏の法華の儀軌には印・真言之有
り、仁王經も羅什の所訳には印・真言之無し不空所訳の經には之を副えたり知んぬ是れ訳者の意樂なりと、其の上法華經
には為説実相印」と説いて合掌の印之有り、譬喩品には「我が此の法印世間を利益せんと欲するが爲の故に説く云云、
此等の文如何只広略の異なるか、又舌相の言語皆是れ真言なり、法華經には治生の産業は皆実相と相違背せず」と
宣べ亦是れ前仏經中に説く所なり」と説く此等は如何、真言こそ有名無実の真言末顕真実の權教なれば成仏得道跡形
も無く始成を談じて久遠無ければ性徳本有の仏性も無し、三乗が仏の出世を感ずるに三人に一人を捨て三十人に二十
人を除く、皆令入仏道」の仏の本願満足す可からず十界互具は思いもよらずまして非情の上の色心の因果争か説く可き
や。

然らば陳隋二代の天台大師が法華經の文を解りて印契の上に立て給へる十界互具・百界千如・一念三千を善無畏は盜
み取つて我が宗の骨目とせり、彼の三藏は唐の第七玄宗皇帝の開元四年に来る如来入滅より一千六百六十四年か、開皇
十七年より百二十余年なり何ぞ百二十余年已前に天台の立て給へる一念三千の法門を盜み取つて我が物とするや、而
に己が依經たる大日經には衆生の中に機を簡ひ前四味の諸經に同じて二乗を簡へり、まして草木成仏は思いもよらずさ
れば理を云う時は盜人なり、又印契真言何れの經にか之を簡える若し爾れば大日經にを説くとも規模ならず、一代に
簡われ諸經に捨てられたる二乗作仏は法華に限れり、二乗は無量無辺劫の間千二百余尊の印契真言を行はずとも法華經
に値わらずんば成仏す可からず、印は手の用・真言は口の用なり其の主が成仏せざれば口と手と別に成仏す可きや、一代
に超過し三説に秀でたる二乗の事をば物とせず事に依る時は印真言

を尊む者 劣謂勝見の外道なり。

無量義經說法品に云く「四十余年 未顕眞実」文、一の巻に云く「世尊は法久くして後要ず当に眞実を説きたもつべし」文、又云く「大事の因縁の故に世に出現したもつ」文、四の巻に云く「藥王今汝に告ぐ我が所説の諸經あり而も此の經の中に於て法華最も第一なり」文、又云く「已に説き今説き當に説かん」文、宝塔品に云く「我仏道を爲つて無量の土に於て始より今に至るまで廣く諸經を説く而も其の中に於て此の經第一なり」文、安樂行品に云く「此の法華經は是れ諸の如來第一の説なり諸經の中に於て最も爲甚深なり」文、又云く「此の法華經は諸仏如來秘密の藏なり諸經の中に於て最も其の上在り」文、藥王品に云く「此の法華經も亦復是くの如し諸經の中に於て最も爲其の上なり」文、又云く「此の經も亦復是くの如し諸經の中に於て最も爲其の尊なり」文、又云く「此の經も亦復是の如し諸經の中の王なり」文、又云く「此の經も亦復是の如し一切の如來の所説若しは菩薩の所説若しは声聞の所説諸の經法の中に最爲第一なり」等云云、玄の十に云く「又已今當の説に最も爲難信難解前經は是れ已説なり」文、秀句の下に云く「謹んで案ずるに法華經法師品の偈に云く藥王今汝に告ぐ我が所説の諸經あり而も此の經の中に於て法華最も第一なり」文、又云く「當に知るべし已説は四時の經なり」文、文句の八に云く「今法華は法を論ずれば云云、記の八に云く「鋒に當る」云云、秀句の下に云く「明かに知んぬ他宗所依の經は是れ王中の王ならず」云云、釈迦・多宝・十方の諸仏・天台・妙樂・伝教等は法華經は眞実・華嚴經は方便なり、未だ眞実を顕さず正直に方便を捨てて余經の一偈をも受けざれ」若し人信ぜずして乃至其の人・命終して阿鼻獄に入らんと云云。

弘法大師は「法華は戲論 華嚴は眞実なり」と云云、何れを用う可きや、宝鑰に云く「此くの如き乗乗は自乗に名を得れども後に望めば戲論と作る」文、又云く「謗人謗法は定めて阿鼻獄に墮せん」文、記の五に云く「故に

真相の外は皆戲論と名づく文、梵網經の疏に云く「第十に謗三宝戒亦是謗菩薩戒と云い或は邪見と云う謗は是れ乖背の名なり」て是れ解理に称わず言は實に當らずして異解して説く者を皆名づけて謗と為すなり文、玄の三に云く「文証無き者は悉く是れ邪偽彼の外道に同じ文、弘の十に云く「今の人他の所引の經論を信じて謂いて憑み有り」と爲して宗の源を尋ねず謬誤何ぞ甚しき文、守護章上の中に云く「若し所説の經論明文有らば樞実・大小・偏円・半満を簡択す可し」文、玄の三に云く「広く經論を引いて己義を莊嚴す」文。

抑弘法の法華經は眞言より三重の劣戲論の法にして尚華嚴にも劣ると云う事大日經六卷に供養法の卷を加えて七卷三十一品或は三十六品には何れの品何れの卷に見えたるや、しかのみならず蘇悉地經三十四品金剛頂經三卷三品或は一巻に全く見えざる所なり、又大日經並びに三部の秘經には何れの卷何れの品にか十界互具之有りや都て無きなり、法華經には事理共に有るなり、所謂久遠実成は事なり二乗作仏は理なり、善無畏等の理同事勝は臆説なり信用す可からざる者なり。

凡そ眞言の誤り多き中

一、十住心に第八法華第九華嚴第十眞言云云何れの經論に出でたるや。

一、善無畏の四句と弘法の十住心と眼前違目なり何ぞ師弟敵対するや。

一、五藏を立つる時六波羅蜜經の陀羅尼藏を何ぞ必ず我が家の眞言と云うや。

一、震旦の人師争つて醍醐を盗むと云う年紀何ぞ相違するや、其の故は開皇十七年より唐の徳宗の貞元四年戊辰の歲に至るまで百九十二年なり何ぞ天台入滅百九十二年の後に渡れる六波羅蜜經の醍醐を盗み給う可きや顯然の違目なり、若し爾れば謗人謗法定墮阿鼻獄といふは自責なるや。

一、弘法の心經の秘鍵の五分に何ぞ法華を損するや能く能く尋め可き事なり。

眞言七重難。

一、眞言は法華經より外に大日如來の所説なり云云、若し爾れば大日の出世成道説法利生は釈尊より前か後か如何、對機説法の仏は八相作仏す父母は誰れぞ名字は如何に娑婆世界の仏と云はば世に二仏無く國に二主無きは聖教の通判なり、涅槃經の三十五の卷を見る可きなり、若し他土の仏なりと云はば何ぞ我が主師親の釈尊を蔑にして他方疎縁の仏を崇むるや不忠なり不孝なり逆路伽耶陀なり、若し一体と云はば何ぞ別仏と云うや若し別仏ならば何ぞ我が重恩の仏を捨つるや、唐堯は老い衰へたる母を敬ひ虞舜は頑なる父を崇む是二、六波羅蜜經に云く所謂過去無量伽沙の諸仏、世尊の所説の正法、我今亦當に是の如き説を作すべし所謂八万四千の諸の妙法蘊なり。而も阿難陀等の諸大弟子をして一たび耳に聞いて皆悉く憶持せしむ云云、此の中の陀羅尼藏を弘法我が眞言と云える若し爾れば此の陀羅尼藏は釈迦の説に非ざるか此の説に違す二、凡そ法華經は無量千萬億の已説今説當説に最も第一なり、諸仏の所説菩薩の所説聲聞の所説に此の經第一なり諸仏の中に大日漏る可きや、法華經は正直無上道の説大日等の諸仏長舌を梵天に付けて眞實と示し給う是三、威儀形色經に身相黄金色にして常に満月輪に遊び定慧智拳の印法華經を証誠すこと、又五仏章の仏も法華經第一と見えたり是四、要を以て之を云わば如來の一切所有の法乃至皆此の經に於て宣示顯説す云云、此等の經文は釈迦所説の諸經の中に第一なるのみに非ず三世の諸仏の所説の中に第一なり此の外一仏二仏の所説の經の中に法華經に勝れたる經有りと云はば用ゆ可からず法華經は三世不壞の經なる故なり是五、又大日經等の諸經の中に法華經に勝る經文之無し是六、釈尊御入滅より已後天竺の論師二十四人の付法藏其の外大権の垂迹震旦の大師南三・北七の十師三論・法相の先師の中に天台宗より外に十界互具・百界千如・一念三千と談ずる人之無し、若し一念三千を立てざれば性惡の義之無し性惡の義無くば仏菩薩の普現色身眞言兩界の漫荼羅五百七百の諸尊は本無今有の外道の法に同ぜんか、若し

十界互具・百界・千如を立てば本経何れの経にか十界皆成の旨之を説けるや、天台円宗見聞の後、邪智莊嚴の為に盗み取れる法門なり、才芸を誦し浮言を吐くには依る可からず正しき経文金言を尋ぬ可きなり是七。

涅槃經の三十五に云く「我処の經の中に於て説いて言く一人出世すれば多人利益す一国土の中に一の轉輪王あり一世界の中に一仏出世すといわば是の処有ること無し文、大論の九に云く十方恒河沙の三千大千世界を名づけて一仏せかいなこ世界と為す是の中に更に余仏無し実には一りの釈迦牟尼仏なり文、記の二に云く「世には一仏無く国には一主無し一仏の境界には一の尊号無し文、持地論に云く「世に一仏無く国に二主無く一仏の境界に一の尊号無し文。

七月日

日蓮 花押

一八 蓮盛抄

建長七年 三十四歳御作

150P

禅宗云く涅槃の時、世尊座に登り拈華して衆に示す迦葉、破顔微笑せり、仏の言く吾に正法眼蔵、涅槃の妙心、実相、微妙の法門有り文字を立てず教外に別伝し摩訶迦葉に付属するのみと、問うて云く何なる経文ぞや、禅宗答えて云く大梵天王問仏決疑經の文なり、問うて云く件の經何れの三蔵の訳ぞや、貞元、開元の録の中に曾つて此の經無し如何、禅宗答えて云く此の經は秘經なり故に文計り天竺より之を渡す云云、問うて云く何れの聖人何れの人師の代に渡りしぞや、跡形無きなり此の文は上古の録に載せず中頃より之を載す此の事、禅宗の根源なり尤も古録に載すべし知んぬ偽文なり、禅宗云く涅槃經の二に云く「我今所有の無上の正法悉く以て摩訶迦葉に付属す云云此の文如何、答えて云く無上の言は大乘に似たりと雖も是れ小乗を指すなり外道の邪法に対すれば小乗をも

正法といはん、例せば大法東漸と云えるを妙樂大師解釈の中に「通じて仏教を指す」と云いて大小権実をふさねて大法と云うなり云云、外道に対すれば小乗も大乘と云われ下臆なれども分には殿と云はれ上臆と云はるるがごとし、涅槃經の三に云く「若し法宝を以て阿難及び諸の比丘に付属せば久住を得じ何を以ての故に一切の声聞及び大迦葉は悉く當に無常なるべし彼の老人の他の寄物を受くるが如し、是の故に應に無上の佛法を以て諸の菩薩に付属すべし諸の菩薩は善能問答するを以て是くの如きの法宝則ち久住することを得、無量千世増益熾盛にして衆生を利安せん彼の壮なる人の他の寄物を受くるが如し是の義を以ての故に諸大菩薩乃ち能く問うのみ」云云、大小の付属其れ別なること分明なり、同經の十に云く「汝等文殊當に四衆の爲に広く大法を説くべし今此の經法を以て汝に付属す乃至迦葉阿難等も来らば復當に是くの如き正法を付属すべし」云云故に知んぬ文殊迦葉に大法を付属すべしと云云、仏より付属する処の法は小乗なり悟性論に云く「人心をさとする事あれば菩提の道を得る故に仏と名づく」菩提に五あり何れの菩提ぞや得道又種種なり何れの道ぞや余經に明す所は大菩提にあらず又無上道にあらず經に云く「四十余年耒顯真実」云云。問うて云く法華は貴賤男女何れの菩提の道を得べきや、答えて云く「乃至一偈に於ても皆成仏疑い無し」云云、又云く正直に方便を捨て但無上道を説く」云云、是に知んぬ無上菩提なり「須臾も之を聞いて即ち阿耨菩提を究竟することを得るなり」此の菩提を得ん事須臾も此の法門を聞く功德なり、問うて云く須臾とは三十須臾を一日一夜と云う「須臾聞之」の須臾は之を指すか如何、答う件の如し天台止觀の二に云く「須臾も廃すること無かれ」云云、弘決に云く「暫くも廃すること許さざる故に須臾と云う」故に須臾は刹那なり。

問うて云く本分の田地にもとづくを禪の規模とす、答う本分の田地とは何者ぞや又何れの經に出でたるぞや法華經こそ人天の福田なればむねと人天を教化し給ふ故に仏を天人師と号す此の經を信する者は己身の仏を見るのみならず過現・末の三世の仏を見る事、淨頗梨に向ふに色像を見るが如し、經に云く「又淨明鏡に悉く諸の色像を見るが如し」云

云。

禅宗云く是心即仏。即身是仏と、答えて云く経に云く「心は是れ第一の怨なり此の怨最も悪と為す此の怨能く人を縛り送つて閻羅の処に到る汝独り地獄に焼かれて悪業の為に養う所の妻子兄弟等親属も救うこと能わじ」云云、涅槃經に云く「願つて心の師と作つて心を師とせざれ」云云、愚癡無懺の心を以て即心即仏と立つ豈未得謂得未証謂証の人に非ずや。

問う法華宗の意如何、答う經文に「具三十二相乃是真実滅」云云、或は速成就仏身云云、禅宗は理性の仏を尊んで己れ仏に均しと思ひ増上慢に墮つ定めて是れ阿鼻の罪人なり、故に法華經に云く「増上慢の比丘は將に大坑に墜ちんとす」禅宗云く毘盧の頂上をむと、云く毘盧とは何者ぞや若し周遍法界の法身ならば山川大地も皆是れ毘盧の身土なり是れ理性の毘盧なり、此の身土に於ては狗野干の類も之をむ禅宗の規模に非ず若し實に仏の頂をまんか梵天も其の頂を見ずと云えり薄地争でか之をむ可きや、夫れ仏は一切衆生に於いて主師親の徳有り若し恩徳広き慈父をまんは不孝逆罪の大愚人悪人なり、孔子の典籍尚以て此の輩を捨つ況んや如来の正法をや豈此の邪類邪法を讃めて無量の重罪を獲んや云云、在世の迦葉は頭頂礼敬と云う滅後の閻禅は頂上をむと云う恐る可し。

禅宗云く教外別伝不立文字、答えて云く凡そ世に流布の教に三種を立つ、一には儒教此れに二十七種あり、二には道教此れに二十五家あり、三には十二分教天台宗には四教八教を立つるなり此等を教外と立つるか、医師の法には本道の外を外経師と云う人間の言には姓のつづかざるをば外戚と云う仏教には経論にはなれたるをば外道と云う、涅槃經に云く「若し仏の所説に順わざる者有らば当に知るべし是の人は是れ魔の眷属なり」云云、弘決

九に云く「法華已前は猶是れ外道の弟子なり」云云、禅宗云く仏祖不伝云云、答えて云く然らば何ぞ西天の二十八祖
東土の六祖を立つるや、付属摩訶迦葉の立義已に破るるか自語相違は如何、禅宗云く向上の一路は先聖不伝云云、答
爾らば今の禅宗も向上に於ては解了すべからず若し解らずんば禅に非ざるか凡そ向上を歌つて以て 慢に住し未だ
妄心を治せずして見性に奢り機と法と相乖くこと此の責尤も親し 旁がた化儀を妨ぐ其の失転多し謂く教外と号し
剩さえ教外を字び文筆を嗜みながら文字を立てず言と心と相応せず豈天魔の部類外道の弟子に非ずや、仏は文字に依つ
て衆生を度し給つなり、問う其の証拠如何、答えて云く涅槃經の十五に云く「願わくは諸の衆生悉く皆出世の文字を
受持せよ」文、像法決疑經に云く「文字に依るが故に衆生を度し菩提を得」云云、若し文字を離れば何を以てか仏事とせ
ん禅宗は言語を以て人に示さざらんや若し示さずといはば南天竺の達磨は四巻の楞伽經に依つて五巻の疏を作り慧可
に伝うる時 我漢地を見るに但此の經のみあつて人を度す可し汝此れに依つて世を度す可し云云、若し爾れば猥に教外
別伝と号せんや、次に不伝の言に至つては冷煖二途 唯自覺了と云つて文字に依るか其れも相伝の後の冷煖自知なり是を
以て法華に云く「悪知識を捨て善友に親近せよ」文、止觀に云く「師に値わざれば邪慧日に増し生死月に甚し稠林に
曲木を曳くが如く出づる期有ること無けん」云云、凡そ世間の沙汰尚以て他人に談合す況んや出世の深理寧ろ輒く自己を
本分とせんや、故に經に云く「近きを見る可からざる」と人の睫の如く遠きを見る可からざること空中の鳥の跡の如し
云云、上根・上機の坐禅は且く之を置く当世の禅宗は瓮を蒙つて壁に向つが如し、經に云く「盲冥にして見る所無し
大勢の仏及び断苦の法を求めず深く諸の邪見に入つて苦を以て苦を捨てんと欲す」云云、弘決に云く「世間の頭語尚識ら
ず況んや中道の遠理をや 円常の密教寧ろ当に識る可けんや」云云、当世の禅者皆是れ大邪見の輩なり、就中三惑
未断の凡夫の語録を用いて四智円明の如来の言教を軽んずる返す返す過てる者か、疾の前に葉なし機の前に教なし等覺
の菩薩すら尚教を用い

き底下の愚人何ぞ経を信ぜざる云云、是を以て漢土に禅宗興ぜしかば其の国忽ちに亡びき本朝の滅す可き瑞相に闇証の禅師充滿す、止観に云く「此れ則ち法滅の妖怪なり亦是れ時代の妖怪なり」云云。

禅宗云く法華宗は不立文字の義を破す何故ぞ仏は一字不説と説き給うや、答う汝楞伽經の文を引くか本法自法の二義を知らざるか字ばずんば習うべし其の上彼の經に於いては未顕真実と破られ畢んぬ何ぞ指南と為ん。

問うて云く像法決疑經に云く如来の一句の法を説きたもつを見ず云云如何、答う是は常施菩薩の言なり法華經には菩薩是の法を聞いて疑網皆已に除く千二百の羅漢悉く亦当に作仏すべしと云つて八万の菩薩も千二百の羅漢も悉く皆列座し聴聞隨喜す、常施一人は見えず何れの説に依る可き法華の座に挙ぐる菩薩の之首の中に常施の名之無し見えずと申すも道理なり、何に況や次下に然るに諸の衆生出没有るを見て法を説いて人を度す云云、何ぞ不説の一句を留めて可説の妙理を失う可き、汝が立義一大僻見なり執情を改めて法華に歸伏す可し、然らずんば豈無道心に非ずや。

十九 八宗違目抄

文永九年二月五十一歳御作 与富木常忍

154 P

記の九に云く「若し其れ未だ開せざれば法報は迹に非ず若し顯本し已れば本迹各三なり」文句の九に云く「仏三世に於て等しく三身有り諸教の中に於て之を秘して伝えず」

仏

法身如来
報身如来
応身如来

衆生

正因仏性
了因仏性
縁因仏性

衆生の仏性

小乗經には仏性の有無を論ぜず。

華嚴方等般若大日經等には衆生本より正因仏性有つて了因縁因無し。

法華經には本より三因仏性有り。

文句の十に云く「正因仏性」法身の性なりは本當に通互す、縁了仏性は種子本有なり今に適むるに非ざるなり」

法華經第二に云く

今此の三界は皆是れ我が有なり
其の中の衆生は悉く是れ我が子なり
而も今此の処は諸の患難多し
唯我一人のみ能く救護をなす

壽量品に云く我も亦為世の父文
主 國王 報身如來
師 心身如來
親 法身如來

五百問論に云く「若し父の寿の遠を知らずして復父統の邦に迷わば徒らに才能と謂うとも全く人の子に非ず」又云く「但恐らくは才一國に當るとも父母の年を識らざらんや」

古今 仏道論衡道宣の作に云く「三皇已前は未だ文字有らず但其の母を識つて其の父を識らず禽獸に同じなり」等云云、

惠遠法師周の武帝を詰る語なり

俱舍宗

成実宗

律宗

華嚴宗

三論宗

法相宗

真言宗

一向に釈尊を以て本尊と為す爾りと雖も但心身に限る。

釈尊を以て本尊と為すと雖も法身は無始無終報身は有始無終心身は有始有終なり。

一向に大日如來を以て本尊と為す二義有り 一義に云く大日如來は釈迦の法身なり。 一義に云く大日如來は釈迦の法身には非ず。

但し大日經には大日如来は釈迦牟尼仏なりと見えたり人師よりの僻見なり。

浄土宗一向に阿弥陀如来を以て本尊と為す。

法華宗より外の眞言等の七宗並に浄土宗等は釈迦如来を以て父と為すことを知らず、例せば三皇已前の人禽獸に同ずるが如し鳥の中に鷦鷯鳥も鳳凰鳥も父を知らず獸の中には兎も師子も父を知らず、三皇以前は大王も小民も共に其の父を知らず天台宗よりの外眞言等の諸宗の大乗宗は師子と鳳凰の如く小乗宗は鷦鷯と兎等の如く共に父を知らざるなり。

華嚴宗に十界互具・一念三千を立つること澄觀の疏に之有り。

眞言宗に十界互具・一念三千を立つること大日經の疏に之を出す。

天台宗と同異如何、天台宗已前にも十界互具・一念三千を立つるや、記の三に云く「然るに衆衆を攢むるに既に三乗及び一乘三俱に性相等の十有りと許す何すれぞ六道の十を語らざるや」三藏等の法華經に依る者一念三千の名目を立てざるか。

問うて云く華嚴宗は一念三千の義を用いるや后御宇に之を立つ、答えて云く澄觀の疏三十三國師に云く止觀の第五に十法成乗を明す中の第二に眞正發菩提心。釈して云く然も此の經の上下の發心の義は文理淵博にして其の撮略を見る故に取つて之を用い引いて之を証とすと、二十九に云く法華經に云く唯仏与仏等と天台云く。便ち三千世間を成すと彼の宗には此れを以つて実と為す。一家の意理として通ぜざる無し文。

華嚴經に云く「覺林菩薩之説く弘決には如来林菩薩と引く」心は工なる画師の種種の

五陰を画くが如く一切世間の中に法として造らざることを無し心の如く仏も亦爾なり仏の如く衆生も然なり心と仏と及び衆生と是の三差別無し若し人三世一切の仏を了知せんと欲せば當に是くの如く觀ずべし心は諸の如来を造ると」

法華經に云く「此れは略開三の文所謂諸法とは如是相 如是性 如是体 如是力 如是作 如因 如是縁 如是果 如是報 如是本末究竟等」又云く「唯一大事の因縁を以ての故に世に出現したもう諸仏 世尊は衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」蓮華三昧經に云く「本覺心法身常に妙法の心蓮台に住して本より来た三身の徳を具足し三十七尊金剛界の三十七尊なり」心城に住したまえるを歸命したてまつる心王大日遍照尊 心数恒沙 諸の如来も普門塵数諸の三昧因果を遠離して法然として具す無辺の徳海 本より円満還つて我心の諸仏を頂礼す、仏藏經に云く「仏一切衆生心中に皆如来有して結跏趺坐すと見そなわす」文。

問つて云く真言宗は一念三千を用いるや、答えて云く大日經の義釈智不空一行に云くは「傳弘法之を見ず智証之を渡す」此の經は是れ法王の秘宝なり妄りに卑賤の人に示さざれ釈迦出世して四十余年に舍利弗の慇懃なる三請に因りて方に為に略して妙法蓮華の義を説きたまいしが如し、今此の本地の身又是れ妙法蓮華最深の秘処なるが故に、寿命品に云く常在 靈鷲山 及余諸住处乃至我淨土不毀而衆見燒尽と即ち此の宗の瑜伽の意ならくのみ又補処の菩薩の慇懃の三請に因つて方に為に之を説けりと、又云く「又此の經の宗は横に一切の仏教を統ぶ唯蘊無我にして世間の心を出で蘊の中に住すと説くが如きは即ち諸部の小乘三藏を撰す、蘊の阿頼耶を觀じて自心の本不生を覺ると説くが如きは即ち諸經の八識・三性・無性の義を撰す、極無自性心と十縁生の句を説くが如きは即ち華嚴般若の種種の不思議の境界を撰して皆其の中に入る、如実知自心を一切種智と名づくと説くが如きは則ち仏性涅槃經に「一切の佛性」なり「一乘法華經に「一乘」なり」如来秘藏大日經に「如来秘藏」なり」皆其の中に入る種種の聖言に於て其の精要を統べること無し、毘盧遮那經の疏「傳弘法之を見る」第七の下に云く天台の誦經は是れ円頓の數息なりと謂つ是れ此の意なり」と。

大宋の高僧傳卷の第二十七の含光の伝に云く「代宗光を重んずること含光は不空三藏の弟子なり不空を見るが

如し勅委して五台山に往いて功德を修せしむ、時に天台の宗学湛然「第六の師なり」禅觀を解了して深く智者「天台なり」の膏腴を得たりと、嘗つて江淮の僧四十余人と清涼の境界に入る、湛然光と相見て西域伝法の事を問う、光の云く「一国の僧空宗を体得する有りと問うて智者の教法に及ぶ梵僧云く曾て聞く此の教邪正を定め偏円を曉り止觀を明して功第一と推す再三光に囑す 或は因縁あつて重ねて至らば為に唐を 翻して梵と為して附し来れ 某願くは受持せんと屢屢手を握つて叮囑す、詳かにするに其の南印土には多く竜樹の宗見を行ず故に此の流布を願うこと有るなりと、菩提心義の三に云く一行和上は元是れ天台一行三昧の禪師なり能く天台円満の宗趣を得たり故に凡そ説く所の文言義理動もすれば天台に合す、不空三蔵の門人含光天竺に帰るの日天竺の僧問わく伝え聞く彼の国に天台の教有りと理致須ゆ可くば翻譯して此の方に将来せんや云云、此の三蔵の旨も亦天台に合す、今 或る阿闍梨の云く真言を学せんと欲せば先ず共に天台を学せよと而して門人皆瞋る云云。

問うて云く華嚴經に一念三千を明すや、答えて云く「心仏及衆生」等云云、止觀の一に云く「此の一念の心は縦ならず横ならず不可思議なり但己のみ爾るに非ず仏及び衆生も亦復是くの如し、華嚴に云く心と仏と及び衆生とは是の三差別無しと当に知るべし己心に一切の法を具すること文、弘の一に云く「華嚴の下は引いて理の齊きことを証す、故に華嚴に初住の心を歎じて云く心の如く仏も亦爾なり仏の如く衆生も然り心と仏と及び衆生とは是の三差別無し諸仏は悉く一切は心に從つて転ずと了知したまえり、若し能く是くの如く解すれば彼の人真に仏を見たてまつる、身亦是れ心に非ず心も亦是れ身に非ず一切の仏事を作すこと自在にして未曾有なり、人若し三世一切の仏を知らんと欲求せば心は是くの如き觀を作すべし心諸の如来を造すと、若し今家の諸の円文の意無くんば彼の經の偈の旨理として実に消し難からん」と。

三蔵教 小乗の四阿含經

心生の六界

心具の六界を明さず。

大乘

心生の六界

亦心具を明さず。

通教 別教

心生の十界

心具の十界を明さず。

思議の十界

爾前華嚴等の円

円教

不思議の十界互具

法華の円

止の五に云く「華嚴に云く心は上なる画師の種種の五陰を造るが如く一切世間の中に心より造らざる」と莫しと種種の

五陰とは前の十法界の五陰の如きなり又云く「又十種の五陰一一に各十法を具す謂く如是相性体力作因縁果・

報・本末究竟等なり」文、又云く「夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の

世間を具すれば百法界には即ち三千種の世間を具す此の三千一念の心に在り」文、弘の五に云く「故に大師覺意三昧觀心

食法及び誦經法小止觀等の諸の心觀の文に但自他等の觀を以て三仮を推せり並びに未だ一念三千具足を云わず、乃至

觀心論の中に亦只三十六の問を以て四心を責むれども亦一念三千に涉らず、唯四念処の中に略して觀心の十界を云うの

み、故に止觀に正しく觀法を明すに至つて並びに三千を以て指南と為せり、乃ち是れ終窮究竟の極説なり、故に序の中に

説己心中所行法門と云う良に以有るなり請う尋ね読まん者心に異縁無かれ、止の五に云く「此の十重の觀法は横豎に

収束し微妙精巧なり初は則ち境の眞偽を簡び中は則ち正助相添い後は則ち安忍無著なり、意円かに法巧みに該括周備し

て初心に規矩し將に行者を送つて彼の薩雲に到らんとすなり闍証の禪師誦文の法師の能く知る所に非ざるなり、蓋し如来

積劫の懇求したまえる所・道場の妙悟し

たまえる所身子の三請する所法譬の三たび説く所正しく茲に在るに由るか、弘の五に云く四教の二十六門乃至八教の一期の始終に遍せり今皆開顯して束ねて一乘に入れ遍く諸經を括りて一実に備う、若し当分を者尚偏教の教主の知る所に非ず況んや復た世間闇証の者をや、蓋し如來の下は称歎なり十法は既に是れ法華の所乘なり是の故に還つて法華の文を用いて歎ず迹の説に約せば即ち大通智勝仏の時を指して以て積劫と為し寂滅道場を以て妙悟と為す若し本門に約せば我本行菩薩道の時を指して以て積劫と為し本成仏の時を以て妙悟と為す、本迹二門只是れ此の十法を求悟せるなり、身子等とは寂場にして説かんと欲するに物の機未だ宜からず其の苦に墮せん事を恐れて更に方便を施す四十余年種種に調熟し法華の会に至つて初めて略して權を開するに動執生疑して慇懃に三請す五千起ち去つて方に枝葉無し四一を点示して五仏の章を演べ上根の人に被るを名づけて法説と為し、中根は未だ解せざれば猶譬喩をう下根は器劣にして復た因縁を待つ、仏意聯綿として茲の十法に在り、故に十法の文の末に皆大車に譬えたり今の文の憑る所意此に在り、惑者は未だ見ず尚華嚴を指す唯華嚴円頓の名を知つて而して彼の部の兼帶の説に味し、全く法華絶待の意を失つて妙教独顯の能を貶挫す、迹本の二文を驗して五時の説をうれば円極謬らず何ぞ須らく疑を致すけん是の故に結して正しく茲に在るかと言つ、又云く「初に華嚴を引くことを者重ねて初に引いて境相を示す文を牒す前に心造と云うは即ち是れ心具なり故に造の文を引いて以て心具を証す、彼の經第十八の中に功德林菩薩の偈を説いて云うが如く心は工なる画師の種種の五陰を造るが如く一切世界の中に法として造らざること無し心の如く仏も亦爾なり仏の如く衆生も然なり心と仏と及び衆生と是の三差別無し、若し人三世の一切の仏を知らんと欲求せば心は是くの如く觀ずべし心は諸の如來を造ると今の文を解せずんば如何ぞ偈の心造一切三無差別を消せん、文、諸宗の是非之を以て之を糾明す可きなり、恐恐謹言。

二月十八日

日蓮 在御判

五十歳御作浄土宗問答。

問う六字の名号は善悪の中には何ぞや、答う一義に云く今問う所の善悪は世出の中には何ぞや、一義に云く云う所の善悪を治定せば墮獄治定なるか、一義に云く名号悪と治定せば墮獄治定なるか、一義に云く念仏無間治定して其の上善悪を尋ぬるか、一義に云く汝が依経は権実の中には何れぞや。

問う念仏無間と云わば法華も無間なり、答う一義に云く法華無間とは自義なるか经文なるか、一義に云く念仏無間をば治定して法華無間と云うか、一義に云く祖師の謗法を治定して法華も無間と云うか、一義に云く汝が云う所の法華は超過の法華か又弥陀成仏の法華か。

問うて云く念仏無間の証拠二十八品の中には何れぞや、答う一義に云く二十八品の中に証拠有らば墮獄治定なるか、一義に云く法華を誹謗するを証拠とするなり、一義に云く法華の文を尋ぬるは信じて問うか信ぜずして問うか、一義に云く直に入阿鼻獄の文を出すなり、一義に云く妙法蓮華經其の証拠なり、一義に云く弥陀の本誓に背く故なり、一義に云く弥陀の命を断つ故なり、一義に云く有縁の釈尊に背く故なり念仏無間は三世諸仏の配立なり。

問う止観の念仏の事、答う一義に云く法然所立の念仏は墮獄治定して止観を問うか、一義に云く西方の念仏と一なるか異なるか、一義に云く止観の念仏は法華を誹謗するか、一義に云く彼に文段を問う可し、一義に云く止観に依つて浄土宗を建立するか。

問う観經は法華已後の事、答う一義に云く此の故に法華を謗するか、一義に云く已前ならば無間は治定なるか、一義に云く汝が謗法は無間をば治定して問うか。

問う觀經と法華と同時に、答う一義に云く同時なる故に法華を謗するか、さては返つて觀經をも謗するなり。

問う先師の謗法は一往なり且くの字を置く故なり、答う一義に云く且く謗ぜよとは自義か經文か、一義に云く始終共に謗せば墮獄は治定なるか。

問う末顕眞實は往生に非ず成仏の方なり、答う一義に云く此の故に法華を謗するか、一義に云く余經は無得道と云う人は僻事か。

問う法華本・迹の阿彌陀をば如何、答う一義に云く法華の彌陀は法華經を謗ぜんと誓ひ給ひしか、一義に云く法華の彌陀と三部經と同じきか異なるか、異ならば無間治定なるか。

問う一称南無仏と何んぞ称名を無益と云わんや、答う一義に云く此の故に法華を謗するか、一義に云く法華を信じて問うか信ぜずして問うか。

問う法華に「諸の如來に於て」「諸仏を恭敬す」と何ぞ彌陀を捨つるや、答う一義に云く此の故に法華を謗するか「大旨上の如し。」

問う「余の深法中に示教利喜す」と何ぞ余經を謗するや、答う一義に云く此の故に法華を謗するや、一義に云く汝が誹謗は治定して問うか又自義か經文か「大旨上の如し。」

問う普門品に觀世音の称名功德を挙ぐと見えたり何ぞ余の仏・菩薩を捨てんや、答う一義に云く此の故に法華を謗するか、一義に云く此の觀音は法華を謗するか、一義に云く此の品に依つて念仏を立てるか、私に云く彼が經文釈義を引かん時は先ず文段を一一問う可し、大段万事の問には誹謗の言を先とす可きなり、前の当家の義云

云。

禅宗問答。

問う 禅天魔の故如何、答う 一義に云く 仏經に依らざる故なり、一義に云く 一代聖教を誹謗する故なり。

問う 禅とは三世諸仏成道の始は坐禅し給へ如何、答う 一義に云く 汝が坐禅は仏の出世に背かば天魔治定なるか、又坐禅は大小の中には何れぞや、一義に云く 仏の端座六年は法華に無益と云うか。

問う 禅法には仏説無益なり、答う 一義に云く 是自義なるか 經文なるか、一義に云く やがて是が天魔の所為なり。

問う 經文には「是法不可示」と如何、答う 一義に云く 此の文は法華無益と云う文なるか、一義に云く 爾らば法華に依るか、一義に云く 文段を以て責む可きなり。

問う 竜女は坐禅の成仏なり其の故は經文に「深く禅定に入つて諸法に了達す」と説き給へり、知んぬ法華無益と云うことを、答う 一義に云く 此の義は自義なるか 經文なるか、一義に云く 若し法華の成仏ならば天魔治定なるか、一義に云く 文殊海中の教化は論説妙法と宣べたり如何。

問う 常に坐禅を好み深く禅定に入つて常に坐禅を責ぶとも説けり如何、答う 一義に云く 文段を以て責む可し、一義に云く 此の文は法華無益と云う文なるか、一義に云く 此の文を以て禅宗を建立するか。

問う 唯独り自のみ明了にして余人の見ざる所と云う故に禅宗ひとり真性を見て余人は見ずと云うなり、答う 一義に云く 文段を以て責む可し 經文を見る可し、問う 像法決疑經に云く「一字不説」と爾らば一代は未顕真実と聞きたり真実は只迦葉一人教の外に別伝し給へり如何、答う 此の文は仏説か若し仏説ならば汝此の文に依る故に自語相違なり、一義に云く 言う所の迦葉は何なる經にて成仏するや、一義に云く 言う所の經文は三説の中には何れぞや、一義に云く 楞伽經は仏説なるか。

問う三大部に観心之有り何ぞ禅天魔と云うや、答う一義に云く汝は三大部にて宗を立つるか、一義に云く三大部の観心は汝が禅と同じきか、一義に云く汝は天台を師とするか、一義に云く三大部の観心は諸経を捨つるか。

問う雙非の禅の事如何、答う一義に云く一度は法華に依り一度は法華無益なり、一義に云く二義共に天魔なり一義に云く此の義に背かん者は僻事なるか。

問う法華宗は妙法の道理を知るや、答う一義に云く汝は天魔を治定して問うか、一義に云く汝は法華を信じて問うか、一義に云く妙法を知つて問うか知らずして問うか、一義に云く汝が問う所の妙法は今經に付いて百二十の妙有り其の品品を問うか、一義に云く汝は此の妙法に依つて禅を建立するか。天台宗問答。

問う天台宗を無間といつ証拠如何、答う一義に云く法華を誹謗する故なり、一義に云く經文に背く故なり。

問う余經無益と云う事はを判ずる一往の意なり再往の日は諸乗一仏乗と開會す何ぞ一往を執して再往の義を捨つる

や、答う一義に云く今言つ所の開會とは何れの教の開會ぞや、一義に云く今經に於て本迹の十妙の下に各二十の開會あり亦教行人理の四一開會の中には何れぞや、一義に云く能開所開の中には何れぞや、一義に云く開會の後善惡無しと云うか、一義に云く天台宗は法華を信ずるか、一義に云く開會の後諸宗を簡ばずと云わば天台大師僻事なるか其の故はなんざん北七云云 伝教大師は六宗と云云、一義に云く天台宗は惡行をも致す可きか性惡不斷と云うが故に自語相違なりと責む可きなり、一義に云く開會の後に權實を立つる人は僻事なるか爾らば藥王の十喻法師の三説超過云云、一義に云く此の故に開會の心を以て慈覺は法華を謗するか、一義に云く汝は慈覺の弟子なるか爾らば謗法治定なるか。問う善惡不二邪正一如の故に強ちに善惡を云う可からず元意の重是なり、答えて云く天台の出世は惡を息め

んが為か又悪を増さんが為か、一義に云く悪事を致せとは法華經二十八品の中には何れの処に見えたるや。

問う絶待妙の事、答う一義に云く先ず文段を問う可し、一義に云く何れの教の絶待ぞや、一義に云く此の故に慈覚は法華を謗するか。

問う相待は一往絶待は再往と見えたり如何、答う自義なるか經文なるか、一義に云く相待妙一往と云うは二十八品の中には何れに見えたるや、一義に云く相待妙は法華に明すか余經に明すか若し法華に明さば法華は一往なるか。

問う約教・約部の故に約部の日は一往爾前の円を嫌うなり、答う一義に云く言う所の約教は天台の判釈の四種の約教の中には何れぞや、一義に云く約部は落居の釈なるか、一義に云く約部を捨つ可きか、一義に云く約教の時爾前の円を嫌わば墮獄は治定なるか、一義に云く約教の辺にて今昔円同じとは法華經二十八品の中何れぞや、一義に云く玄文の第一の施開廢の二重の故に開會の後も余經を捨つと云う文をば知るか知らざるか。

山門流の真言宗問答

問う法華第一と云うは顯教の門なり真言に対すれば第一とは云う可からず、答う自義なるか經文なるか爰を以て慈覚大師を無間と申すなり、一義に云く真言に対して法華第一ならば亡國治定なるか、一義に云く真言は已今当の中に何れぞや、若し外と云わば一機・一縁の一往にして秘密とは云わる可からざるなり。

問う法華と真言とは理同事勝の故に真言に対すれば戲論の法と云うか、答う一義に云くさてこそ汝は無間治定なれ、一義に云くさては慈覚は真言をも謗するなり其の故は理同の法華を謗する故なり。

問う伝教の本理大綱集の文を以て顯密同と云う事、答う一義に云く此の書は伝教の御作に非ざるなり、一義に云く此の書に依つて法華を慈覚は謗するか。

東寺流の問答。

問う真言は釈尊の説と云う事其の証拠如何、答う若し真言釈尊の説ならば亡国は治定なるか、若し然なりと云わば弘法大師五蔵を立つる時、法華を六波羅蜜經の五蔵の第四般若波羅蜜藏第五の陀羅尼藏をば真言と建立し給へ如何。問う真言宗を末顯真実とは言つべからず其の故は釈迦の説の外に建立する故なり如何、答えて云く若し釈尊の説教ならば亡国は治定なるか、一義に云く六波羅蜜經は釈迦の説なるか大日の説なるか、若し釈迦の説ならば末顯真実は治定なるか、他云く釈迦所説の顯教無益なりと。

尋ねて云く六波羅蜜經は顯教・密教の中には何れぞや、他云く六波羅蜜經は雜部の真言なり我が家の三部は純説の真言なり、答う助証正証と云う事全く弘法の所判に見えず若し弘法の義ならば墮獄は治定なるか、他云く真言は速疾の教顯教は迂回歴劫の教なり云云、自ら云く自義なるか經文なるか、他云く五秘密教に云く「若し顯教に於て修行する者は久しく三大無數劫を経」と説け是れ其の証拠なり如何、答う、さて此の經は釈迦の説なるか大日の説なるか若し釈迦の説ならば末顯真実は治定なるか。

問う法華宗は何れの經に依つて仏の印契相好を造るや顯教には無し但真言の印を盗むと覺えたり如何、答う之に依つて法華を謗ずるか、一義に云く汝盜むの義相違せば亡国は治定なるか、一義に云く汝法華宗の建立する所の大段の妙法蓮華經をば本尊と落居して問うか、一義に云く釈尊を三部に依つて建立する故に驢牛の三身と下すか若し爾なりと云わば返つて汝は真言を誹謗する者なりと責む可し、一義に云く三世の諸仏の印契相好實に妙法蓮華經に依つて具足するの義落居せば亡国は治定なるか、又盜人は治定なるか、一義に云く竜女靈山に即身に印契相好具足し南方に成道を唱えしは真言に依つて建立するか若し爾なりと云わば直に經文を出せと責む可き

なり。

問う亡国の証拠如何、答う法華を誹謗する故なり云云、一義に云く三徳の釈尊に背く故なり云云、一義に云く現世安穩後生善処の妙法蓮華經に背き奉る故に今生には亡國後生には無間と云うなり、一義に云く法華經第三の劣とは經文なるか自義なるか若し爾らば亡國治定なるか。

他云く密教に対すれば第三の劣なり、答う一義に云く此の義經文なるか自義なるか、一義に云く顯教の内に法華第一なる事落居するか、若し爾なりと云はばさては弘法は僻事なり顯教の内にして法華を華嚴に対して第二眞言に対して第三と云う故なり、一義に云く眞言に対して第一ならば亡國は治定なるか。

他云く印眞言を説かざるが故に第三の劣と云うなり、答う此の故に劣とは經文なるか自義なるか、一義に云く若し法華に説かば亡國は治定なるか。

他云く大日釈迦各別なり、答う一義に云く此の故に法華を謗するか、一義に云く若し一仏ならば亡國は治定なるか、一義に云く各別なれば劣とは經文なるか自義なるか。

他云く顯教は応身密教は法身の説なり此の故に法華は第三の劣なり、自ら云く応身の説の故に法華劣とは經文なるか自義なるか、一義に云く法華法身の説ならば亡國治定なるか、一義に云く眞言は応身の説ならば亡國は治定なるか。

他云く五智五仏の時は北方は釈迦中央は大日と見えたり如何、答う一義に云く中央釈迦ならば亡國治定なるか、一義に云く北方釈迦と云う事は三部の内に無し不空の義なり仏説に非ず。

他云く法華は穢土の説なり眞言は三界の外の法界宮の説なり、答う一義に云く眞言は三界の内の説ならば亡國治定なるか義釈の文。

他云く顕教の内にて大日 釈迦 一体と説くとも密教の内にては二仏各別なり名は同じけれども義異なるなり如何、

答う此の故に亡国と云うなり、一義に云く此の如く云う事直に經文を出す可きなり。

他云く竜女は眞言の成仏 法華には三密闕くる故なり、答う自義なるか經文なるか。

他云く經文なり「陀羅尼を得 不退転を得たり」と云云、陀羅尼は三密の加持なり、答う、此の陀羅尼を眞言と云うは自義なるか經文なるか、一義に云くさては弘法の僻事なり其の故は此の陀羅尼を戲論第三の劣と下すなり、一義に云く自語相違なり法華に印有る故なり。

他云く守護經の文に依れば釈迦は大日より三密の法門を習いて成仏するなり、答う此の故に法華を謗するが、一義に云く此の文は三説の内なるか外なるか、一義に云く此れに相違せば亡国は治定なるか。

他云く法華經には「合掌を以て敬心し具足の道は聞かんと欲す」と云へり何ぞ印 眞言を捨つるや、答う此の故に法華を謗するが、一義に云く自義なるか經文なるか、一義に云く此の故に眞言を捨てずとは經文なるか、一義に云く此の文は眞言を持つと云う文なるか、一義に文段を以て責む可し。

他云く弘法大師を無間と云うは經文なるか自義なるか、答う經文なり。

他云く二十八品の中には何れぞや、答う二十八品の中に有らば墮獄治定なるか、他云く爾なり、答う法華を誹謗すること治定なるか若し爾らば經文を出して責む可きなり

二二 宿屋入道への御状

文永五年八月 四十七歳御作

与宿屋光則

於鎌倉 169P

其の後は書 絶えて申さず不審極り無く候、抑 去る正嘉元年丁巳八月二十三日戌亥の刻の大地震、日蓮諸経を引いて之を勘えたるに念仏宗と禅宗等とを御帰依有るが故に日本守護の諸大善神瞋恚を作して起す所の災なり、若し此れを対治無くんば他国の為に此の国を破らる可きの由勘文一通之を撰し正元二年庚申七月十六日御辺に付け奉つて故最明寺入道殿之を進覧す、其の後九箇年を経て今年大蒙古国より牒状之有る由風聞す等云云、经文の如くんば彼の国より此の国を責めん事必定なり、而るに日本国の中には日蓮一人当に彼の西戎を調伏するの人たる可しと兼て之を知り論文に之を勘う、君の為 国の為 神の為 仏の為 内奏を経らる可きか、委細の旨は見参を遂げて申す可く候、恐恐謹言。

文永五年八月二十一日

日蓮 花押

宿屋左衛門入道殿

二二 北条時宗への御状

169P

謹んで言上せしめ候、抑 も正月十八日 西戎大蒙古国の牒状到来すと、日蓮先年諸経の要文を集め之を勘えたること立正安国論の如く少しも違わず普合しめ、日蓮は聖人の一分に当れり未萌を知るが故なり、然る間重ねて此の由を驚かし奉る急ぎ建長寺・寿福寺・極楽寺・多宝寺・淨光明寺・大仏殿等の御帰依を止めたまえ、然らずんば重ねて又四方より責め来る可きなり、速かに蒙古国の人を調伏して我が国を安泰ならしめ給え、彼を調伏せられん事日蓮に非ざれば

叶う可からざるなり、諫臣国に在れば則ち其の国正しく争子家に在れば則ち其の家直し、国家の安危は政道の直否に在り仏法の邪正は経文の明鏡に依る。

夫れ此の国は神国なり神は非礼を稟けたまわず天神七代地神五代の神神其の外諸天神等は乗擁護の神明なり、然も法華経を以て食と為し正直を以て力と為す、法華経に云く諸仏救世者大神通に住して衆生を悦ばしめんが為の故に無量の神力を現すと、一乗棄捨の国に於ては豈善神怒を成さざらんや、仁王経に云く一切の聖人去る時七難必ず起る」と、彼の呉王は伍子胥が詞を捨て吾が身を亡し桀紂は竜比を失つて国位を喪ぼす、今日本国既に蒙古国に奪われんとす豈歎かざらんや豈驚かざらんや、日蓮が申す事御用い無くんば定めて後悔之有る可し、日蓮は法華経の御使なり経に云く則ち如来の使如来の所遣として如来の事を行ず」と、三世諸仏の事とは法華経なり、此の由方方之を驚かし奉る一所に集めて御評議有つて御報に予かる可く候、所詮は万祈を抛つて諸宗を御前に召し合せ仏法の邪正を決し給え、涸底の長松未だ知らざるは良匠の誤り闇中の錦衣を未だ見ざるは愚人の失なり。

三国仏法の分別に於ては殿前に在り所謂阿闍世陳隋檀武是なり、敢て日蓮が私曲に非ず只偏に大忠を懷く故に身の為に之を申さず神の為君の為国の為一切衆生の為に言上せしむる所なり、恐恐謹言。

文永五年辰十月十一日

日蓮花押

謹上 宿屋入道殿

宿屋左衛門光則への御状

170P

先年勘えたるの書安国論に普合せるに就て言上せしめ候い畢んぬ、抑正月十八日西戎大蒙古国より牒状到来す

と、之を以て之を按ずるに日蓮は聖人の一分に当り候か、然りと雖も未だ御尋に予らず候の間重ねて諫状を捧ぐ、
ねがわぬが、希くば御帰依の寺僧を停止せられ宜しく法華經に歸せしむべし、若し然らずんば後悔何ぞ追わん、此の趣を以て十一所に
申せしめ候なり定めて御評議有る可く候か、偏に貴殿を仰ぎ奉る早く日蓮が本望を遂げしめ給え、十一箇所と申すは平
さえもののしょうの左衛門尉殿に申せしむる所なり委悉申し度く候と雖も上書分明なる間省略せしめ候、御氣色を以て御披露庶幾せしむ
る所に候、恐恐謹言。

ぶんえい 文永五年辰十月十一日

にぢれん 日蓮 花押 かあう

謹上 宿屋入道殿

二四 平左衛門尉頼綱への御状

171P

蒙古国の牒状到来に就いて言上せしめ候い畢んぬ、抑先年日蓮立正安国論に之を勸えたるが如く少しも違わず
普合せしむ、然る間重ねて訴状を以て愁鬱を發かんと欲す爰を以て諫旗を公前に飛ばし争戦を私後に立つ、併ながら貴
殿は一天の屋梁為り万民の手足為り争でか此の国滅亡の事を歎かざらんや慎まざらんや、早く須く退治を加えて謗法の
咎を制すべし。

夫れ以れば一乗妙法蓮華經は諸仏正覺の極理、諸天善神の威食なり之を信受するに於ては何ぞ七難来り三災興らん
や、剩え此の事を申す日蓮をば流罪せらる争でか日月・星宿罰を加えざらんや、聖徳太子は守屋の悪を倒して仏法を
興し秀郷は將門を挫いて名を後代に留む、然らば法華經の強敵為る御帰依の寺僧を退治して宜く善神の擁護を蒙るべき
者なり、御式目を見るに非拠を制止すること分明なり、争でか日蓮が愁訴に於ては御叙い無らん豈御起請の文を破るに
非ずや、此の趣を以て方々へ愚狀を進らす、所謂鎌倉殿・宿屋入道殿・建長寺・寿福寺・極樂寺・大仏殿・長樂寺・多宝寺

浄光明寺 弥源太殿並びに此の状合せ十一箇所なり、各各御評議有つて速かに御報に預るべく候、若し爾らば卞和が璞磨いて玉と成り法王髻中の明珠此の時に顕れんのみ、全く身の爲に之を申さず、神の爲君の爲国の爲一切衆生の爲に言上せしむるの処なり件の如し、恐恐謹言。

文永五年戊辰十月十一日 日蓮 花押

平左衛門尉殿

二五 北条弥源太への御状 172P

去ぬる月、御来臨急ぎ急ぎ御帰宅本意無く存ぜしめ候い畢んぬ、抑蒙古国の牒状到来の事上一人より下万民に至るまで驚動極り無し然りと雖も何の故なること人未だ之れを知らず、日蓮兼ねて存知せしむるの間既に一論を造つて之を進覽せり徴先達つて顕れ則ち災必ず後に来る、去ぬる正嘉元年丁巳八月廿三日戌亥の刻の大地震是併ながら此の瑞に非ずや、法華經に云く如是相と天台大師云く「蜘蛛下りて喜事来り・鵲鳴いて行人来ること、易に云く吉凶動に於て生ず」と此等の本文豈替るべけんや、所詮諸宗の帰依を止めて一乗妙經を信受せしむべきの由勘文を捧げ候、日本亡国の根源は浄土・真言・禅宗・律宗の邪法惡法より起れり諸宗を召し合せ諸經勝劣を分別せしめ給え、殊に貴殿は相模の守殿の同姓なり根本滅するに於ては枝葉豈栄えんや、早く蒙古国を調伏し国土を安穩ならしめ給え、法華を謗ずる者は三世諸仏の大怨敵なり、天照太神・八幡大菩薩等此の国を放ち給う故・大蒙古国より牒状来るか、自今已後各各生取と成り他国の奴と成る可し、此の趣き方方之れを驚かし愚状を進ぜしめ候なり、恐恐謹言。

文永五年戊辰十月十一日

日蓮 花押

謹上 弥源太入道殿

二六 建長寺道隆の御状

173P

夫れ仏閣軒を並べ法門屋に拒る仏法の繁栄は身毒支那に超過し僧宝の形儀は六通の羅漢の如し、然りと雖も一代諸經に於て未だ勝劣浅深を知らず併がら禽獸に同じ忽ち三徳の釈迦如来を抛つて他方の仏菩薩を信ず是豈逆路伽耶陀の者に非ずや、念仏は無間地獄の業・禅宗は天魔の所為・眞言は亡国の惡法・律宗は国賊の妄説と云云、爰に日蓮去ぬる文応元年の比勘えたるの書を立正安国論と名け宿屋入道を以て故最明寺殿に奉りぬ、此の書の所詮は念仏・眞言・禅・律等の惡法を信ずる故に天下に災難頻りに起り、剩え他国より此の国責めらる可きの由之を勘えたり、然るに去ぬる正月十八日牒状到来すと日蓮が勘えたる所に少しも違わず普合せしむ、諸寺・諸山の祈・威力滅する故か將又惡法の故なるか鎌倉中の上下万人道隆・聖人をば仏の如く之を仰ぎ・良觀・聖人をば羅漢の如く之れを尊む、其の外寿福寺・多宝寺・浄光明寺・長樂寺・大仏殿の長老等は「我慢の心充滿し、未だ得ざるを得たりと謂う」の増上慢の大惡人なり、何ぞ蒙古国の大兵を調伏せしむ可けんや、剩え日本国中の上下万人悉く生取と成る可く今世には国を亡し後世には必ず無間に墮せん、日蓮が申す事を御用い無くんば後悔之れ有る可し此の趣鎌倉殿・宿屋入道殿・平の左衛門の尉殿等今之を進状せしめ候、一処に寄り集りて御評議有る可く候、敢て日蓮が私曲の義に非ず只經論の文に任す処なり、具には紙面に載せ難し併ながら対決の時を期す、書は言を尽さず言は心を尽さず、恐恐謹言。

文永五年 辰戌 十月十一日 日蓮 花押

進上 建長寺道隆証人侍者御中

二七 極樂寺良觀への御状

174

西戎大蒙古国簡牒の事に就て鎌倉殿其の外書状を進ぜしめ候、日蓮去る文応元年の比勸え申せし立正安国論の如く
毫末計りも之に相違せず候、此の事如何、長老忍性速かに嘲哂の心を翻えし早く日蓮房に帰せしめ給え、若し然ら
ずんば人間を輕賤する者、白衣の与に法を説くのと失脱れ難きか、依法不依人とは如来の金言なり、良觀聖人の住処を
法華經に説て云く、「或は阿練若に有り納衣にして空閑に在り」と、阿練若は無事と翻ず争か日蓮を譏奏するの条住処と
相違せり併ながら三学に似たる矯賊の聖人なり、僭聖増上慢にして今生は国賊、来世は那落に墮在せんこと必定なり、
聊かも先非を悔いなば日蓮に歸す可し、此の趣き鎌倉殿を始め奉り建長寺等其の外披露せしめ候、所詮本意を遂げんと
欲せば対決に如かず、即ち三藏浅近の法を以て諸經中王の法華に向うは江河と大海と華山と妙高との勝劣の如くなら
ん、蒙古国調伏の秘法定めて御存知有る可く候か、日蓮は日本第一の法華經の行者蒙古国退治の大將為り「於一切衆生
中亦為第一」とは是なり、文言多端理を尽す能わず併ながら省略せしめ候、恐恐謹言。

文永五年辰十月十一日

日蓮花押 謹上

極樂寺長老良觀聖人御所

二八 大仏殿別当への御状

174P

去る正月十八日西戎大蒙古国より牒状到来し候い畢んぬ、其の状に云く大蒙古国皇帝日本国王に書を上る大道の行
わるる其の義たり信を構え睦を修す其の理何ぞ異ならん乃至至元三年丙寅正月日と、右此の状の如くんば返牒に依つ
て日本国を襲う可きの由分明なり、日蓮兼ねて勸え申せし立正安国論に少しも相違せず急かに退治を加え給え、然れば
日蓮を放て之を叶う可からず、早く我慢を倒して日蓮に歸すべし、今生空しく過ぎなば後悔何ぞ追わん委しく之を記す

こと能わす、此の趣方方申せしめ候、一処に聚集して御調伏有る可く候か。

文永五年十月十一日

日蓮花押 謹上 大仏殿別当御房

二九 寿福寺への御状

175P

風聞の如くんば蒙古国の簡牒去る正月十八日慥に到来候い畢んぬ、然れば先年日蓮が勘えし書の立正安国論の如く普合せしむ、恐くは日蓮は未萌を知る者なるか、之を以て之を按ずるに念仏・真言・禅・律等の惡法・二天に充滿して上下の師と為るの故に此の如き他国侵逼の難起れるなり、法華不信の失に依つて皆一同に後生は無間地獄に墮す可し早く邪見を翻し達磨の法を捨てて一乗正法に歸せしむ可し、然る間方方披露せしめ候の処なり、早早一処に集りて御評議有る可く候、委くは対決の時を期す、恐恐謹言。

文永五年十月十一日

日蓮花押 謹上 寿福寺侍司 御中

三〇 浄光明寺への御状

175P

大蒙古国の皇帝日本国を奪う可きの由牒状を渡す、此の事先年立正安国論に勘え申せし如く少しも相違せしめず内日本第一の勸賞に行わる可きかと存せしめ候の処、剩え御称歎に預らず候、是れ併ながら鎌倉中著の類律宗・禅宗等が「向国王・大臣誹謗説我惡」の故なり、早く二百五十戒を抛つて日蓮に歸して成仏を期す可し、若し然らずんば墮在無間の根源ならん、此の趣き方方披露せしめ候い畢んぬ、早く一処に集りて対決を遂げしめ給え日蓮庶幾せしむる

処なり、敢て諸宗を蔑如するに非ざるのみ、法華の大王戒に対して小乗 戒・豈相對に及ばんや、笑う可し。

ぶんえい 文永五年十月十一日 日蓮花押

きんじょう 謹上 浄光明寺侍者 御中

三二 多宝寺への御状 176P

日蓮 故最明寺殿に奉りたる書・立正安国論御披見候か末萌を知つて之を勘え申す処なり、既に去る正月蒙古の簡牒到来す何ぞ驚かざらんや、此の事不審千万なり縦い日蓮は悪しと雖も勘うる所の相当るに於ては何ぞ用いざらんや、早く一所に集りて御評議有る可し、若し日蓮が申す事を御用い無くんば今世には国を亡し後世は必ず無間・大城に墮す可し、此の旨方々之を申せしめしなり敢て日蓮が私曲に非ず委しく御報に預る可く候、言は心を尽さず書は言を尽さず併ながら省略せしめ候、恐恐謹言。 〓

ぶんえい 文永五年十月十一日 日蓮 花押 謹上 多宝寺侍司 御中

三三 長楽寺への御状 176P

蒙古国調伏の事に就いて方々へ披露せしめ候い畢んぬ、既に日蓮立正安国論に勘えたるが如く普合せしむ、早く邪法邪教を捨て実法実教に帰す可し、若し御用い無くんば今生には国を亡し身を失い後生には必ず那落に墮す可し、速かに一処に集りて談合を遂げ評議せしめ給え日蓮庶幾せしむる所なり、御報に依つて其の旨を存ず可く候の処なり敢て諸宗

を蔑如するに非ず但此の国の安泰を存する計りなり、恐恐謹言。

ぶんえい 文永五年十月十一日 日蓮花押

きんじょう 謹上 長樂寺侍司御中

三三 弟子檀那中への御状 177P

大蒙古国の簡牒到来に就いて十一通の書状を以て方々申せしめ候、定めて日蓮が弟子檀那流罪・死罪一定ならん少しも之を驚くこと莫れ方々への強言申すに及ばず是併ながら而強毒之の故なり、日蓮庶幾せしむる所に候、各各用心有る可し少しも妻子眷属を憶つこと莫れ権威を恐るること莫れ、今度生死の縛を切つて仏果を遂げしめ給え、鎌倉殿・宿屋入道・平の左衛門尉・弥源太・建長寺・寿福寺・極楽寺・多宝寺・浄光明寺・大仏殿・長樂寺十二箇所仍つて十一通の状を書して諫訴せしめ候い畢んぬ、定めて子細有る可し、日蓮が所に来りて書状等披見せしめ給え、恐恐謹言。

ぶんえい 文永五年辰十月十一日 日蓮花押

にちれん 日蓮弟子 檀那中

三四 問注得意抄

文永六年五月 四十八歳御作

178P

与富木入道外二人

土木入道殿

日蓮

今日召し合せ御問注の由承り候、各各御所念の如くならば三千年に一度花さき菓なる優曇華に値えるの身か、西王母の園の桃・九千年に三度之を得たる東方朔が心か一期の幸何事か之に如かん、御成敗の甲乙は且らく之を置く前立つて鬱念を開発せんか、但し兼日御存知有りと雖も駿馬にも鞭うつ理之有り、今日の御出仕・公庭に望んでの後は設い知音為りと雖も傍輩に向つて雑言を止めらる可し両方召し合せの時御奉行人・訴陳の状之を読むの尅何事に付けても御奉行人の御尋ね無からんの外一言を出す可からざるか、設い敵人等悪口を吐くと雖も各各当身の事一二度までは聞かざるが如くすべし、三度に及ぶの時顔貌を変ぜず言を出さず語を以て申す可し各各は一处の同輩なり私に於ては全く遺恨無きの由之を申さる可きか、又御供雑人等に能く能く禁止を加え喧嘩を出す可からざるか、是くの如き事書札に尽し難し心を以て御斟酌有る可きか、此等の矯言を出す事恐を存すと雖も仏經と行者と檀那と三事相応して一事を成さんが為に愚言を出す処なり、恐恐謹言。

五月九日 日蓮花押

三人 御中

三五 行敏御返事 ごへんじ 文永八年七月 ぶんえい 五十歳御作 与浄土僧行敏 じゆど 179 P

三六 行敏初度の難状 なん 179 P

未だ見参に入らずと雖も事の次を以て申し承るは常の習に候か、抑風聞の如くんば所立の義尤も以て不審なり、法華の前に説ける一切の諸経は皆是妄語にして出離の法に非ずと是一、大小の戒律は世間を誑惑して惡道に墮せしむるの法と是一、念仏は無間地獄の業為と是三、禅宗は天魔の説若し依つて行ずる者は惡見を増長すと四、事若し実ならば仏法の怨敵なり、仍て対面を遂げて惡見を破らんと欲す、将又其の義無くんば争でか惡名を痛ませられざらんや、是非に付き委く示し賜わる可きなり、恐恐謹言。

七月八日 僧行敏花押 かおう

日蓮阿闍梨御房 にぢれんあじやりごぼう

三七 聖人御返事 しやうにんごへんじ 179 P

条条御不審の事私の問答は事行き難く候か、然れば上奏を經られ仰せ下さるるの趣に随つて是非を糾明せらる可く候か、此の如く仰せを蒙り候条尤も庶幾する所に候、恐恐謹言。

七月十三日 日蓮花押 にぢれんかおう

行敏御房御返事 いへんじ

三八 行敏訴狀御会通

文永八年

五十歳御作

180P

當世日本第一の持戒の僧・良觀聖人並びに法然上人の孫弟子念阿弥陀仏・道阿弥陀仏等の諸聖人等日蓮を訴訟する状に云く早く日蓮を召し決せられて邪見を摧破し正義を興隆せんと欲する事云云、日蓮云く邪見を摧破し正義を興隆せば一眼の龜の浮木の穴に入るならん、幸甚幸甚。

彼の状に云く右八万四千の教乃至一を是として諸を非とする理豈に然る可けんや云云、道綽禪師云く当今末法は是五濁惡世なり唯淨土の一門のみ有つて路に導入す可し云云、善導和尚云く千中無二云云、法然上人云く捨閑閣抛云云、念阿上人等の云く一を是とし諸を非とす謗法なり云云、本師三人の聖人の御義に相違す豈に逆路伽耶陀の者に非ずや、將又忍性良觀聖人彼等の立義に与力して此を正義と存せらるるか、又云く而るに日蓮偏えに法華一部に執して諸余の大乗を誹謗す云云、無量義經に云く四十余年・末顯眞實・法華經に云く要當說眞實と、又云く宣示顯說と、多宝仏証明を加えて云く皆是眞實と十方の諸仏は舌相至梵天と云う云云、已今當の三説を非毀して法華經一部を讚歎するは釈尊の金言なり諸仏の傍例なり敢て日蓮が自義に非ず、其の上此の難は去る延曆・大同・弘仁の比・南都の徳一大師が伝教大師を難破せし言なり、其の難已に破れて法華宗を建立し畢んぬ。

又云く所謂法華前説の諸經は皆是れ妄語なりと云云此又日蓮が私の言に非ず、無量義經に云く未だ眞實を顯さず未顯眞實とは妄語の異名なり法華經第二に云く寧ろ虚妄有りや不なり云云、第六に云く此の良医虚妄の罪を説くや不や云云、涅槃經に云く如来虚妄の言無しと雖も若し衆生虚妄の説に因ると知れば云云、天台云く則ち為如来綺語の語云云、四十余年の經經を妄語と称すること又日蓮が私の言に非ず、又云く念仏は無間の業と云云法華經第一に云く我れ則ち慳貪に墮せん此の事為不可なり云云、第二に云く其の人命終して阿鼻獄に入らん云云、大覺世尊但觀經・念仏等の四十余年の

経経を説て法華経を演説したまわずんば三悪道を脱れ難し云云、何に況や末代の凡夫・一生の間、但自らも念仏の一行に留り他人をも進めずんば豈無間に墮せざらんや、例せば民と子との王と親とに随わざるが如し、何に況や道綽・善導・法然上人等念仏等を修行する輩法華経の名字を挙げて念仏に對当して勝劣難易等を論じ未有一人得者・十即十生・百即百生・千中無一等と謂うは無間の大火を招かざらんや、又云く禅宗は天魔波旬の説と云云、此又日蓮が私の言に非ず彼の宗の人人の云く教外別伝と云云、仏の遺言に云く我が経の外に正法有りといわば天魔の説なり云云、教外別伝の言豈此の科を脱れんや、又云く大小の戒律は世間誑惑の法と云云、日蓮が云く小乗戒は仏世すら猶之を破す其の上月氏国に三寺有り、所謂一向小乗の寺と一向大乘の寺と大小兼行の寺となり云云、一向小と一向大とは水火の如し將又道路をも分隔せり、日本国に去る聖武皇帝と孝謙天皇との御宇に小乗の戒壇を三所に建立せり、其の後桓武の御宇に伝教大師之を責め破りたまひぬ、其の詮は小乗戒は末代の機に當らずと云云、護命景深の本師等其の諍論に負くるのみに非ず六宗の碩徳各退位を捧げ伝教大師に歸依し円頓の戒体を伝受す云云、其の状今に朽ちず汝自ら開き見よ、而るを良觀上人当世日本国の小乗は昔の科を存せずといつ、又云く年来の本尊弥陀・觀音等の像を火に入れ水に流す等云云、此の事慥なる証人を指し出し申す可し若し証拠無くんば良觀上人等自ら本尊を取り出して火に入れ水に流し科を日蓮に負せんと欲するか委細は之を糾明せん時其の隠れ無らんか、但し御尋ね無き間は其の重罪は良觀上人等に譲り渡す、二百五十戒を破失せる因縁此の大妄語に如かず無間・大城の人他処に求ること勿れ、又云く凶徒を室中に集むと云云、法華経に云く或は阿練若に有り等云云、妙樂云く東春云く輔正記云く此等の経釈等を以て当世日本国に引き向うるに汝等が擧る所の建長寺・寿福寺・極樂寺・多宝寺・大仏殿・長樂寺・淨光明寺等の寺寺は妙樂大師の指す所の第二最甚の惡所なり、東春に云く即ち是れ出家処に一切の惡人を撰す云云、又云く兩行は公処に向う等云云、又云く兵杖等云云、涅槃經に云く天台云く章安云く妙樂云く法華經守護の爲の弓箭兵杖は佛法の定れる法な

り例せば國王守護の為に刀杖を集むるが如し、但し良觀上人等弘通する所の法、日蓮が難脱れ難きの間既に露顯せしむ可きか、故に彼の邪義を隠さんが為に諸国の守護地頭雜人等を相語らいて言く日蓮並びに弟子等は阿弥陀仏を火に入れ水に流す汝等が大怨敵なりと云云、頸を切れ所領を追い出せ等と勸進するが故に日蓮の身に疵を被り弟子等を殺害に及ぶこと数百人なり、此れ偏に良觀、念阿、道阿等の上人の妄語より出たり心有らん人人は驚く可し怖る可し云云、毘瑠璃王は七万七千の諸の得道の人を殺す、月氏国の大族王は卒都婆を滅毀し僧伽藍を廃すること凡そ一千六百余処乃至大地震動して無間地獄に墮ちにき、毘盧釈迦王は釈種九千九百九十万人を生け取りて並べ従えて殺戮す積屍莽の如く流血池を成す、弗沙弥多羅王は四兵を興して五天を回らし僧侶を殺し寺塔を焼く、說賞迦王は佛法を毀壞す、訖利多王は僧徒を斥逐し佛法を毀壞す、欽明、敏達、用明の三王の詔に曰く炳然として宜く佛法を斷ずべし云云、二臣自ら寺に詣で堂塔を斫倒し仏像を毀破し火を縱つて之を焼き所焼の仏像を取つて難波の堀江に棄て三尼を喚び出して其の法服を奪い並びに笞を加う云云、大唐の武宗は四千六百余処を滅失して僧尼還俗する者計するに二十六万五百人なり、去る永保年中には山僧、園城寺を焼き払う云云、御願は十五所、堂院は九十所、塔婆は四基、鐘樓は六宇、經藏は二十所、神社は十三所、僧坊は八百余宇、舍宅は三千余等云云、去る治承四年十二月二十二日、太政入道淨海、東大、興福の兩寺を焼失して僧尼等を殺す、此等は仏記に云く此等の惡人は佛法の怨敵には非ず、三明六通の羅漢の如き僧侶等が我が正法を滅失せん、所謂守護經に云く涅槃經に云く、日蓮花押

三八 一昨日御書

文永八年九月 五十歳御作 与平左衛門尉頼綱

183P

一昨日見参に罷入候の条悦び入り候、抑人の世に在る誰か後世を思わざらん仏の出世は専ら衆生を救わんが為なり、爰に日蓮比丘と成りしより旁法門を開き已に諸仏の本意を覚り早く出離の大事を得たり、其の要は妙法蓮華經是なり、一乗の崇重・三國の繁昌の儀眼前に流る誰か疑網を貽さんや、而るに専ら正路に背いて偏に邪途を行ず然る間聖人國を捨て善神瞋を成し七難並びに起つて四海閑かならず、方今世は悉く閑東に歸し人は皆土風を貴ぶ、就中日蓮生を此の土に得て豈吾が國を思わざらんや、仍つて立正安國論を造つて故最明寺入道殿の御時宿屋の入道を以て見参に入れ畢んぬ、而るに近年の間、多日の程犬戎浪を乱し夷敵國を伺う、先年勘え申す所近日符合せしむる者なり、彼の太公が殷の國に入りしは西伯の礼に依り張良が秦朝を量りしは漢王の誠を感じればなり、是れ皆時に當つて賞を得謀を帷帳の中に回らし勝つことを千里の外に決せし者なり、夫れ末萌を知る者は六正の聖臣なり法華を弘むる者は諸仏の使者なり、而るに日蓮忝くも鷲嶺鶴林の文を開いて鵝王烏瑟の志を覚り、剩え将来を勘えたるに粗符合することを得たり先哲に及ばずと雖も定んで後人には希なる可き者なり、法を知り國を思ふの志尤も賞せらる可きの処、邪法邪教の輩、讒奏讒言するの間久しく大忠を懷いて而も未だ微望を達せず、剩え不快の見参に罷り入ること偏に難治の次第を愁うる者なり、伏して惟みれば泰山に昇らずんば天の高きを知らず深谷に入らずんば地の厚きを知らず、仍て御存知の為に立正安國論一卷之を進覽す、勘え載する所の文は九牛の一毛なり未だ微志を尽さざるのみ、抑貴辺は当時天下の棟梁なり何ぞ國中の良材を損せんや、早く賢慮を回らして須く異敵を退くべし世を安し國を安ずるを忠と為し孝と為す、是れ偏に身の為に之を

述べず君の爲仏の爲神の爲一切衆生の爲に言上せしむる所なり、恐恐謹言。

文永八年九月十二日 日蓮花押 謹上 平左衛門殿

三九 強仁狀御返事 建治元年十二月 五十四歳御作 与真言僧強仁

184P

強仁上人十月二十五日の御勘狀同十二月二十六日に到来す、此の事余も年来鬱訴する所なり忽に返狀を書いて自他の疑氷を釈かんと欲す、但し歎ずるは田舎に於て邪正を決せば暗中に錦を服して遊行し澗底の長松匠を知らざるか、兼ねて又定めて喧嘩出来の基なり、貴坊本意を遂げんと欲せば公家と関東とに奏聞を経て露点を申し下し是非を糾明せば上一人咲を含み下万民疑を散ぜんか、其の上大覺世尊は仏法を以て王臣に付属せり世・出世の邪正を決断せんこと必ず公場なる可きなり、就中当時我が朝の体爲る二難を盛んにす所謂自界叛逆難と他国侵逼難となり、此の大難を以て大藏經に引き向えて之を見るに定めて国家と仏法との中に大禍有るか、仍つて予正嘉文永二箇年の大地震と大長星とに驚いて一切經を聞き見るに此の国の中に前代未起の二難有る可し所謂自他叛逼の両難なり、是れ併ながら真言・禅門・念仏・持齋等・権小の邪法を以て法華真実の正法を滅失する故に招き出す所の大災なり、只今他国より我が国を逼む可き由・兼ねて之を知る故に身命を仏神の宝前に捨棄して刀劍・武家の責を恐れず昼は国主に奏し夜は弟子等に語る、然りと雖も真言・禅門・念仏者・律僧等・種種の誑言を構え重重

の讒訴を企つるが故に叙用せられざるの間処処に於て刀杖を加えられ兩度まで御勘氣を蒙る剩え頭を刎ねんと擬する
是の事なり、夫れ以れば月支漢土の仏法の邪正は且らく之を置く大日本国亡国と為る可き由来之を勘するに真言宗の
元祖たる東寺の弘法天台第三の座主慈覚此の両大師法華經と大日經との勝劣に迷惑し日本第一の聖人なる伝教
大師の正義を隠没してより已來叡山の諸寺は慈覚の邪義に付き神護七大寺は弘法の僻見に隨う其れより已來王臣邪師
を仰ぎ万民僻見に歸す、是くの如き詭曲既に久しく四百余年を経歴し国漸く衰え王法も
亦尽きんとす彼の月支の弗沙弥多羅王の八万四千の等塔を焚焼し無量仏子の頸を刎ねし此の漢土の会昌天子の寺院四
千六百余所を滅失し九国の僧尼還俗せしめたる此等大惡人爲りと雖も我が朝の大謗法には過ぎず、故に青天は眼を
瞋らして我が国を睨み黄地は憤を含んで動もすれば天を發す、国主聖主に非れば謂れ之を知らず諸臣儒家に非れ
ば事之を勘えず、剩え此の災天を消さんが為に真言師を渴仰し大難を卻けんが為に持斎等を供養す、譬えば火に薪を
加え冰に水を増すが如く惡法は弥貴まれ大難は益々来る只今此の国滅亡せんとす。

予粗先ず此の子細を勘するの間・身命を捨棄し国恩を報ぜんとす、而るに愚人の習い遠きを尊び近きを蔑るか将又多
人を信じて一人を捨つるかの故に終に空しく年月を送る、今幸に強仁上人御勘狀を以て日蓮を曉諭す然る可くは此の
次でに天聴を驚かし奉つて決せん、誠に又御勘文の体為非を以て先と為し若し上人黙止して空しく一生を過せば定め
て師檀共に泥梨の大苦を招かん、一期の大慢を以て永劫の迷因を殖ること勿れ速速天奏を経て疾疾対面を遂げ邪見を
翻えし給え、書は言を尽さず言は心を尽さず悉悉公場を期す、恐恐謹言。

十二月廿六日

日蓮 花押

強仁上人座下

四〇 開目抄上

文永九年(1172年)二月五十一歳御作 与門下一同 於佐渡塚原 186P

夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり、所謂主師親これなり、又習学すべき物三あり、所謂儒外内これなり。

儒家には三皇・五帝・三王、此等を天尊と号す諸臣の頭目、万民の橋梁なり、三皇已前は父をしらず人皆禽獸に同ず五

帝已後は父母を弁て孝をいたす、所謂重華はかたくなはしき父をうやまひ沛公は帝となつて大公を拝す、武王は西伯を

木像に造り丁蘭は母の形をきざめり、此等は孝の手本なり、比干は殷の世のほろぶぎを見てしめて帝をいさめ頭をはね

らる、公胤といぬし者は懿公の肝をとつて我が腹をさき肝を入て死しぬ此等は忠の手本なり、尹寿は堯王の師・務成は

舜王の師・大公望は文王の師・老子は孔子の師なり此等を四聖とがつす、天尊・頭をかたづけ万民・掌をあわす、此等

の聖人に三墳・五典・三史等の三千余巻の書あり、其の所詮は三玄をいはず三玄とは一には有の玄・周公等此れを立つ二

には無の玄・老子等・三には亦有亦無等・莊子が玄これなり、玄とは黒なり父母・未生・已前をたづねれば、或は元氣より

して生じ、或は貴賤・苦樂・是非・得失等は皆自然等云云。

かくのごとく巧に立つといえども、いまだ過去・未来を一分もしらず玄とは黒なり幽なりかるがゆへに玄といつ但現在計り

しれるにいたり、現在にをひて仁義を制して身をまほり国を安んず此に相違すれば族をほろぼし家を亡ぼす等いつ、此等

の賢聖の人人は聖人なりといえども過去を・しらざる・こと凡夫の背を見ず・未来を・かがみざること盲人の前をみざるがこ

とし、但現在に家を治め孝をいたし堅く五常を行ずれば傍輩も・うやまい名も国にきこえ賢王もこれを召して或は臣とな

し或は師とたのみ、或は位をゆづり天も来て守りつかう、所謂周の武王には五老きたりつかえ後漢の光武には二十八宿来

つで二十八将となりし此なり、而りといえども過去・未来を・しらざれ

ば父母・主君・師匠の後世をもたすけず不知恩の者なりまことの賢聖にあらず。孔子が此の土に賢聖なし西方に仏図とい
う者あり此聖人なりといぬて外典を仏法の初門となせしこれなり、礼樂等を教て内典わたらば戒定慧をしりやすからせ
んがため王臣を教て尊卑をさだめ、父母を教て孝の高きをしらしめ師匠を教て帰依をしらしむ、妙樂大師云く「仏教の
流化実には茲に頼る礼樂前に馳せて真道後に啓く」等云云、天台云く「金光明經に云く一切世間所有の善論皆此の經に
因る、若し深く世法を識れば即ち是れ仏法なり」等云云、止觀に云く「我れ三聖を遣わして彼の真丹を化す」等云云、
弘決に云く「清淨法行經に云く月光菩薩彼に顔回と稱し光淨菩薩彼に仲尼と稱し迦葉菩薩彼に老子と稱す天竺より此
の震旦を指して彼と為す」等云云。

二には月氏の外道・三目八臂の摩醯首羅天・毘紐天此の二天をば一切衆生の尊父・悲母・又天尊・主君と号す、迦毘羅
樓僧ぎや・勒姿婆此の三人をば三仙となづく、此等は仏前八百年・已前已後の仙人なり、此の三仙の所説を四韋陀と号
す六万蔵あり、乃至仏・出世に當つて六師外道・此の外經を習伝して五天竺の王の師となる支流・九十五六等にもなれ
り、一一に流流多くして我慢の瞳・高きこと・非想天にもすぎ執心の心の堅きこと金石にも超えたり、其の見の深きこと
巧なるさま儒家にはにるべくもなし、或は過去・一生・三生・乃至七生・八万劫を照見し又兼て未来・八万劫をしる、其の
所説の法門の極理・或は因中有果・或は因中無果・或は因中亦有果・亦無果等云云、此れ外道の極理なり所謂善き
外道は五戒・十善戒等を持つて有漏の禪定を修し上色・無色をきわめ上界を涅槃と立て屈歩虫のごとく・せめのぼれど
も非想天より返つて三惡道に墮つ一人として天に留るものなし而れども天を極むる者は永くかへらずとをもえり、各各・
自師の義をつけて堅く執するゆへに或は冬寒に一日に三度・恒河に浴し

或は髪をぬき或は嚴に身をなげ或は身を火にあぶり或は五処をやく或は裸形或は馬を多く殺せば福をう或は
草木をやき或は一切の木を礼す、此等の邪義其の数をしらず師を恭敬する事諸天の帝釈をつやまい諸臣の皇帝

を拝するがごとし、しかれども外道の法九十五種善惡につけて一人も生死をはなれず善師につかへは一生・三生等に
悪道に墮ち惡師につかへは順次生に惡道に墮つ、外道の所詮は内道に入る即最要なり或外道云く「千年已後・仏出世
す」等云云、或外道云く「百年已後・仏出世す」等云云、大涅槃經に云く「一切世間の外道の經書は皆是れ仏説にして
外道の説に非ず」等云云、法華經に云く「衆に三毒有りと示し又邪見の相を現ず我が弟子是くの如く方便して衆生を度
す」等云云。

三には大覺世尊は、此一切衆生の大導師・大眼目・大橋梁・大船師・大福田等なり、外典外道の四聖・三仙其の名は聖
なりといえども實には三惑未断の凡夫、其の名は賢なりといえども實に因果を弁えざる事嬰兒のごとし、彼を船として
生死の大海をわたるべしや。彼を橋として六道の巷こえがたし。我が大師は變易猶をわたり給へり。況や分段の生死を
や元品の無明の根本猶をかたづけ給へり。況や見思枝葉の魔惑をや、此の仏陀は三十成道より八十御入滅にいたるまで五
十年が間・一代の聖教を説き給へり、一字・一句皆真言なり一文・一偈妄語にあらず外典外道の中の聖賢の言すらいつ
ことあやまりなし事と心と相符へり況や仏陀は無量曠劫よりの不妄語の人されば一代・五十余年の説教は外典外道に
対すれば大乘なり大人の實語なるべし、初成道の始より泥の夕にいたるまで説くところの所説皆眞実なり。

但し仏教に入て五十余年の経経・八万法蔵を勘えたるに小乗あり大乘あり權經あり実經あり顯教・密教・語・
魔語・実語・妄語・正見・邪見等の種種の差別あり、但し法華經計り教主釈尊の正言なり三世・十方の諸仏の眞言なり、
大覺世尊は四十余年の年限を指して其の内の恒河の諸經を末顯眞実・八年の法華は要當說眞実と定め給しかば多寶仏大
地より出現して皆是眞実と証明す、分身の諸仏來集して長舌を梵天に付く此の赫赫たり明明たり。晴天の日よりも、
あきらかに夜中の満月のごとし仰いで信ぜよ伏して懷つべし。

但し此の經に二箇の大事あり俱舍宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗等は名をもしろず華嚴宗と真言宗との二宗は偷に盗んで自宗の骨目とせり、一念三千の法門は但法華經の本門・壽量品の文の底にしづめたり、竜樹・天親知つてしかもいまだひろいださず但我が天台智者のみこれをいだけり。

一念三千は十界互具よりことはじまれり、法相と三論とは八界を立てて十界をしらさず況や互具をしるべしや、俱舍・成実・律宗等は阿含經によれり六界を明らかに四界をしらさず、十方唯一仏と云つて一方有仏だにもあかさず、一切有情悉有仏性とこそどかさらめ。一人の仏性猶ゆるさず、而るを律宗・成実宗等の十方有仏有仏性などと申すは仏滅後の人師等の大乘の義を自宗に盗み入れたるなるべし、例せば外典・外道等は仏前の外道は執見あさし仏後の外道は仏教をききみて自宗の非をしり巧の心出現して仏教を盗み取り自宗に入れて邪見もつともぶかし、附仏教學仏法成等これなり、外典も又かくのごとし漢土に仏法いまだわたらざりし時の儒家道家は・

いついつとして嬰兒のごとくはかなかりしが後漢已後に釈教わたりて對論の後・釈教やうやく流布する程に釈教の僧侶・破戒のゆゑに或は還俗して家にかへり或は俗に心をあはせ儒道の内に釈教を盗み入れたり。止觀の第五に云く「今世多く惡魔の比丘有つて、戒を退き家に還り駈策を懼畏して更に道士に越濟す、復た名利を邀めて莊老を誇談し、仏法の義を以て偷んで邪典に安き、高を押して下きに就け、尊を推いて卑しきに入れ概して平等ならしむし云云。弘に云く「比丘の身と作つて仏法を破滅す。若しは戒を退き家に還るは、衛の元嵩等が如し、即ち在家の身を以て仏法を破壊す、此の人正教を偷して邪典に助添す、高きを押して等とは道士の心を以て二教の概と為し邪正をして等しからしむ。義是の理無し、曾つて仏法に入つて正を偷んで邪を助け八万・十二の高きを押して五千二篇の下きに就け用つて彼の典の邪鄙の教を釈するを推尊入卑と名く」等云云、此の釈を見るべし次上の心なり。

仏教又かくのごとし、後漢の永平に漢土に仏法わたたりて、邪典やぶれて内典立つ。内典に南三・北七の異執を

こりて蘭菊なりしかども、陳隋の智者大師につちやぶられて仏法二び群類をすくう。其の後法相宗・真言宗・天竺よりわたり華嚴宗又出来せり、此等の宗宗の中に法相宗は一向・天台宗に敵を成す宗・法門水火なり、しかれども玄奘三蔵・慈恩大師・委細に天台の御釈を見ける程に自宗の邪見ひるがゝるかのゆへに自宗をばすてねども其の心天台に帰伏すと見たり、華嚴宗と真言宗とは本は権經・權宗なり善無畏三蔵・金剛智三蔵・天台の一念三千の義を盗みとつて自宗の肝心とし其の上に印と真言とを加て超過の心ををこす、其の子細をしらぬ學者等は天竺より大日經に一念三千の法門ありけりとうちをもつ、華嚴宗は澄觀が時・華嚴經の心如工画師の文に天台の一念三千の法門を偷み入れたり、人これをしらす。

日本 我朝には華嚴等の六宗・天台・真言已前にわたりけり、華嚴三論・法相・諍論水火なりけり、伝教大師此の国にいでて六宗の邪見をやぶるのみならず真言宗が天台の法華經の理を盗み取て自宗の極とする事あらはれをはんぬ、伝教大師・宗宗の人師の異執をすてて専ら經文を前として責めさせ給しかば六宗の高徳・八人・十二人・十四人・三百余人、並に弘法大師等せめをとされて日本国・一人もなく天台宗に帰伏し南都・東寺・日本一州の山寺・皆叡山の末寺となりぬ、又漢土の諸宗の元祖の天台に帰伏して謗法の失をまぬかれたる事もあらはれぬ、又其の後やつやく世をとるへ人の智あさく、なるほどに天台の深義は習うしないぬ、他宗の執心は強盛になるほどにやつやく六宗・七宗に天台宗をとされてよわりゆくかのゆへに結局は六宗・七宗等にもをよばず、いつにかいなき禪宗・淨土宗にをとされて始めは檀那やつやくかの邪宗にうつる、結局は天台宗の碩徳と仰がる人人みなをちゆきて彼の邪宗をたすく、さるほどに六宗・八宗の田畠・所領みなたをされ正法失せはてぬ天照太神・正八幡・山王等・諸の守護の諸大善神も法味をなめざるか国中を去り給つかの故に悪鬼・使を得て国すでに破れなんとす。

此に予愚見をもつて前四十余年と後八年との相違をかんがへみるに、其の相違多しといえども先ず世間の學者もゆる

し、我が身にもさもやとうちをぼつる事は二乗作仏・久遠実成なるべし。法華經の現文を拝見するに、舍利弗は華光
如來、迦葉は光明如來、須菩提は名相如來、迦施延は閻浮那提金光如來、目連は多摩羅跋栴檀香仏、富樓那は法明如來
阿難は山海慧自在通王仏、羅喉羅は蹈七宝華如來、五百・七百は普明如來、学・無学二千人は宝相如來、摩訶波闍波提
比丘尼、耶輸多羅比丘尼等は、一切衆生喜見如來、具足千万光相如來等なり、此等の人人は法華經を拝見したてまつる
には尊きやうなれども、爾前の經經を披見の時はけをさむる事どもをほし。其の故は仏・世尊は実語の人なり故に聖人・
大人と号す。外典・外道の中の賢人・聖人・天仙などと申すは実語につけたる名なるべし此等の人人に勝れて第一なる故に
世尊をば大人とは申すぞかし、此の大人唯一大事因縁故・出現於世とならせ給いて「未だ眞實を顕さず・世尊は
法久しうして後・要す当に眞實を説くべし・正直に方便を捨て」等云云、多宝仏・証明を加え分身・舌を出す等は舍利弗
が未来の華光如來、迦葉が光明如來等の説をば誰の人が疑網をなすべき。
而れども爾前の諸經も又仏陀の実語なり・大方広仏華嚴經に云く「如來の知慧・大藥王樹は、唯二処に於て生長して
利益を為作すこと能わず、所謂二乗の無為広大の深坑に墮つると、及び善根を壞る非器の衆生は大邪見・貧愛の水に溺る
るとなり」等云云、此の經文の心は雪山に大樹あり無尽根となづく。此を大藥王樹と号す、閻浮提の諸木の中の大王なり
此の木の高さは十六万八千由旬なり、一閻浮提の一切の草木は此の木の根ざし枝葉・華菓の次第に随つて華菓なるべ
し、此の木をば仏の仏性に譬たり一切衆生をば一切の草木にたとつ、但し此の大樹は火坑と
水輪の中に生長せず、二乗の心中をば火坑にたとえ一闍提人の心中をば水輪にたとえたり、此の二類は永く仏になるべ
からずと申す經文なり、大集經に云く「二種の人有り、必ず死して活きず、畢竟して恩を知り恩を報ずること能わず。一
には声聞、二には縁覺なり、譬えば人有りて深坑に墜墮し、是の人自ら利し他を利すること能わざるが如く、声聞・縁覺
も亦復是くの如し、解脱の坑に墮して自ら利し及び他を利すること能わずし等云云、外典・

三千余卷の所詮に二つあり所謂孝と忠となり忠も又孝の家よりいでたり、孝と申すは高なり天高けれども孝よりも高からず又孝とは厚なり地あつけれども孝よりは厚からず、聖賢の二類は孝の家よりいでたり何に況や仏法を学せん人知恩報恩なかるべしや、仏弟子は必ず四恩をして知恩報恩をいたすべし、其の上舍利弗迦葉等の二乗は二百五十戒三千の威儀持整して味淨無漏の三静慮阿含經をきわめ三界の見思を尽せり。知恩報恩の人の手本なるべし、然るを不知恩の人なりと世尊定め給ぬ、其の故は父母の家を出でて出家の身となるは必ず父母をすくはんがためなり、二乗は自身は解脱とをもえども利他の行かけぬ。設い分分の利他ありといえども父母等を永不成仏の道に入るれば、かへりて不知恩の者となる。

維摩經に云く「維摩詰、又文殊師利に問う、何等をか如来の種と為す、答えて曰く一切塵勞の疇は如来の種と為る、五無間を以て具すと雖も、猶能く此の大道意を発す」等云云又云く「譬えば族姓の子高原陸土には青蓮芙蓉の衡華を生ぜず卑湿汚田に乃ち此の華を生ずるが如し」等云云、又云く「已に阿羅漢を得て心真と為る者は終に復道意を起して仏法を具すること能わざるなり、根敗の土其の五樂に於て複利すること能わざるが如し」等云云、文の心は貪瞋癡等の三毒は仏の種となるべし殺父等の五逆罪は仏種となるべし高原の陸土には青蓮華生ずべし、二乗は仏になるべからず、いつ心は二乗の諸善と凡夫の惡と相對するに凡夫の惡は仏になるとも、二乗の善は仏にならじとなり、諸の小乘經には惡をいましめ善をほむ、此の經には二乗の善をそしり凡夫の惡をほめたり、

かへりて仏經ともをば今外道の法門のやうなれども詮するところは二乗の永不成仏をつよく定めさせ給うにや、方等陀羅尼經に云く「文殊・舍利弗に語らく猶枯樹の如く更に華を生ずるや不や。亦山水の如く本処に還るや不や。折石還つて合つや不や。焦種芽を生ずるや不や。舍利弗の言く不なり、文殊の言く若し得べからずんば云何ぞ我に菩提の記を得るを問うて心に歡喜を生ずるや」等云云、文の心は枯れたる木華さかず山水・山にかへらず

劫国・名号と申して二乗成仏の国をさだめ、劫をしるし、所化の弟子などを定めさせ給は、教主釈尊の御誨すに二言になりぬ。自語相違と申すはこれなり。外道が仏陀を大妄語の者と咲いしことこれなり。人天大会けをさめてありし程に、爾の時に東方・宝淨世界の多宝如来・高さ五百由旬・広さ二百五十由旬の大七宝塔に乘じて教主釈尊の人天・大会に自語相違をせめられてどのべがうのべさまさまに宣させ給いしかども、不審猶をはるべしともみずもてあつかいてをさせし時、仏前に大地より涌現して虚空にのぼり給う、例せば暗夜に満月の東山より出づるがごとし七宝の塔・大虚にかからせ給いて大地にもつかず大虚にも付かせ給はず・天中に懸りて宝塔の中より梵音声を出して証明して云く「爾の時に宝塔の中より大音声を出して歎めて云く、善哉善哉・釈迦牟尼世尊・能く平等大慧・教菩薩法・仏所護念の妙法華經を以て大衆の為に説きたもう、是くの如し是くの如し、釈迦牟尼世尊の所説の如きは皆是れ眞実なり」等云云、又云く「爾の時に世尊・文殊師利等の無量百千万億・旧住娑婆世界の菩薩・乃至人非人等・一切の衆の前に於て大神力を現じたまう、広長舌を出して上み梵世に至らしめ一切の毛孔より乃至十方世界・衆の宝樹の下の師子の座の上の諸仏も亦復是くの如く、広長舌を出し無量の光を放ちたまう」等云云、又云く「十方より来りたまえる諸の分身の仏をして各本土に還らしめ、乃至多宝仏の塔も、還つて故の如くし給うべし」等云云、大覺世尊・初成道の時・諸仏・十方に現じて釈尊を慰諭し給う上・諸の大菩薩を遣しき、般若經の御時は釈尊・長舌を三千にをほひ千仏・十方に現じ給い、金光明經には四方の四仏現せり、阿弥陀經には六方の諸仏・舌を三千にををう、大集經には十方の諸仏・菩薩・大宝坊にあつまれり、此等を法華經に引合せて・かんがうるに黄石と黄金と白雲と白山と白氷と銀鏡と黒色と青色とをば翳眼の者・眇目の者・一眼の者・邪眼の者は・みたがへつべし、華嚴經には先後の經なければ仏語相違なしなにつけてか大疑いで来べき、大集經・大品經・金光明經・阿弥陀經は諸小乗經の二乗を彈呵せんがために十方に淨土をとき凡夫菩薩を欣慕せしめ二乗をわづらは

す、小乗經と諸大乘經と一分の相違あるゆえに、或いは或は十方に仏現じ給ひ、或は十方より大菩薩をつかはし
あるじゅうほうせかい
或は十方世界にも此の經をとくよしをしめし、或は十方より諸仏あつまり給う、或は釈尊、舌を三千にをほひ、或は
しよぶつ
諸仏の舌をいたすよしをとかせ給う、此ひとえに諸小乗經の十方世界唯一仏とどかせ給ひしをもひをやぶるな
ほけきよう
るべし、法華經のごとくに先後の諸大乘經と相違出来して舍利弗等の諸の聲聞・大菩薩・人天等に將非魔作仏とをも
はれさせ給う大事にはあらず、而るを華嚴・法相・三論・眞言・念仏等の翳眼の輩・彼彼の經經と法華經とは同じと
ちをもへるはつたなき眼なるべし。

但在世は四十余年をすて法華經につき候ものもやありけん、仏滅後に此の經文を開見して信受せんことかたかるべ
し、先ず一つには爾前の經經は多言なり法華經は一言なり爾前の經經は多經なり此の經は一經なり彼彼の經經は多
年なり此の經は八年なり、仏は大妄語の人、永く信ぜばからず不信の上に信を立てば爾前の經經は信ずる事もありなん
ほけきよう
法華經は永く信ぜばからず、当世も法華經をば皆信じたるやうなれども法華經にてはなきなり、其の故は法華經と
だいじきよう
大日經と法華經と華嚴經と法華經と阿彌陀經と一なるやうをとく人をば悦んで歸依し別別なるなんと申す人をば用い
ずたとい用ゆれども本意なき事とをもへ。

日蓮云く日本に仏法わたりてすでに七百余年、但伝教大師一人計り、法華經をよめりと申すをば諸人これを用い
ず、但し法華經に云く若し須弥を接つて他方の無數の仏土に擲置かんも亦未だ為難しとせず、乃至若し仏滅後に惡世中
に於て能く此の經を説かん是れ則ち為難しし等云云、日蓮が強義・經文に普合せり法華經の流通たる涅槃經に末代濁世
に謗法の者は十方の地のとし正法の者は爪上の土のごとことどかれて候はいかんがし候べき、日本の諸人は爪上の土
か日蓮は十方の土がよくよく思惟あるべし、賢王の世には道理かつべしの世に非道先をすべし、聖人の世に法華經の実義
顯るべし等と心うべし、此の法門は迹門と爾前と相對して爾前の強き

やうにをばゆもし爾前つよるならば舍利弗等の諸の二乗は永不成仏の者なるべし。いかながなげかせ給うらん。

二には教主釈尊は住劫第九の減・人寿百歳の時・師子頹王には孫・淨飯王には嫡子・童子悉達太子・一切義成就菩薩これなり、御年十九の御出家・三十成道の世尊・始め寂滅道場にして実報華王の儀式を示現して十玄・六相・法界・

円融・頓極微妙の大法を説き給ひ十方の諸仏も顕現し一切の菩薩も雲集せり、土といひ機といひ諸仏といひ始めといひ何事につけてか大法を秘し給うべき、されば経文には顕現自在力・演説円満経等云云、一部六十巻は一字一点もなく

円満経なり、譬は如意宝珠は一粒も無量珠も共に同じ。一粒も万宝を尽して雨し万珠も万宝を尽すがごとし、華嚴経は一字も万事も但同事なるべし、心仏及衆生の文は華嚴宗の肝心なるのみならず法相・三論・真言

天台の肝要とこそ申し候へ此等程いみじき御経に何事をか隠すべき、なれども二乗闡提不成仏ととかれしは珠のきずと・みゆる上三処まで始成正覺とならせ給ひて久遠実成の寿量品を説きかくさせ給ひき、珠の破れたると月に雲のか

かれると日の蝕したるがごとし不思議なりしことなり、阿含・方等・般若・大日経等は仏説なれば・いみじき事なれども華嚴経にたいすれば・いづにかいなし、彼の経に秘せんこと此等の経経にとかるべからず、されば雜阿含経に云く「初め

成道」等云云、大集経に云く「如来成道始め十六年」等云云、淨名経に云く「始め仏樹に坐して力めて魔を降す」等云云、大日経に云く「我昔道湯に坐して」等云云、仁王般若経に云く「二十九年」等云云。

此等は言うにたらず只耳目ををどろかす事は無量義経・華嚴経の唯心法界・方等・般若経の海印三昧・混同無二等の大法をかきあげて・或は末顕眞実・或は歴劫修行等・下す程の御経に我先きに道場菩提樹の下に端坐すること六年、

あのかたさんみやくなをほだい阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり」と初成道の華嚴経の始成の文に同せられし不思議と打ち思うところに此は

法華経の序分なれば正宗の事をいはずもあるべし、法華経の正宗・略開二・広開三の御時・唯仏与仏乃能究尽・

諸法実相等・世尊法久後等・正直捨方便・多宝仏・迹門八品を指して皆是其实と証明せられしに何事をか隠すべきなれども久遠寿命をば秘せさせ給いて我始め道場に坐し樹を觀じて亦経行す等云云、最第一の大不思議なり、されば弥勒菩薩・涌出品に四十余年の未見今見の大菩薩を仏・爾して乃ち之を教化して初めて道心を發さしむ等と・とかせ給いしを疑つて云く「如来太子為りし時・釈の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまえり、是より已来始めて四十余年を過ぎたり世尊・云何ぞ此の少時に於て大いに仏事を作したまえる」と等云、教主釈尊此等の疑を晴さんがために寿命品を・とかんとして爾前・迹門のききを挙げて云く「一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏・釈氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たまえり」と謂えり」と等云云、正しく此の疑を答えて云く「然るに善男子・我実に成仏してより已来無量無辺・百千万億・那由他劫なり」と等云云。

華嚴・乃至般若・大日経等は二乗作仏を隠すのみならず、久遠実成を説きかくさせ給へり、此等の経經に二つの失あり、一には「行布を存するが故に、仍おもた権を開せず」とて迹門の一念三千をかくせり、二には始成を言うが故に尚未だ迹を發せず」とて本門の久遠をかくせり、此等の二つの大法は一代の綱骨・一切經の心髓なり、迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前二種の失・二つを脱れたり、しかりといえども・いまだ發迹顯本せざればまことの一念三千もあらはれず二乗作仏も定まらず、水中の月を見るがごとし根なし草の波の上に浮べるにいたり、本門にいたりて始成正覺をやぶれば四教の果をやぶる、四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ、爾前・迹門の十界の因果を打ちやぶつて、本門の十界の因果をとき顯す、此即ち本因・本果の法門なり、九界も無始の仏界に具し

仏界も無始の九界に備りて・眞の十界互具・百界千如・一念三千なるべし、かつてかへり・みれば華嚴經の台上十方・阿含經の小釈迦・方等・般若の金光明經の阿弥陀經の大日経等の權仏等は此の寿命の仏の天月しばらく影を

大小の器にして浮べ給うを・諸宗の学者等 近くは自宗に迷い遠くは法華經の寿量品をしらず水中の月に実の月の想いをなし或は入つて取らんとをもひ或は縄をつけてつなぎとどめんとす、天台云く「天月を識らず但池月を觀ず」等云云。

日蓮案じて云く二乗作仏すら猶爾前づよにをばゆ。久遠実成は又になるべくもなき爾前づりなり、其の故は爾前法華相對するに猶爾前こわき上・爾前のみならず迹門十四品も一向に爾前に同ず、本門十四品も涌出・寿量の二品を除いては皆始成を存せり、雙林最後の大般涅槃經四十卷 其の外の法華前後の諸大經に一字一句もなく法身の無始・無終はとけども心身・報身の顯本はとかれず、いかんが広博の爾前・本・迹・涅槃等の諸大乘經をばすて但涌出・寿量の二品には付くべき。

されば法相宗と申す宗は、西天の仏滅後九百年に無著菩薩と申す大論師有しき、夜は都率の内院にのぼり、弥勒菩薩に對面して一代聖教の不審をひらき 昼は阿輸舍國にして法相の法門を弘め給う。彼の御弟子は世親・護法・難陀・戒賢等の大論師なり。戒日大王・頭をかたづけ五天幢を倒して此れに歸依す、尸那國の玄奘三藏・月氏にいたりて十七年、印度百三十余の國國を見きて、諸宗をばふりすて、此の宗を漢土にわたして 太宗皇帝と申す賢王にさづけ給い 肪・尚・光・基を弟子として大慈恩寺並に三百六十余箇國に弘め給う。日本國には人王三十七代・孝徳天皇の御宇に道慈・道昭等ならいわたして山階寺にあがめ給へ、三國第一の宗なるべし、此の宗の云く始め華嚴經より終り法華・涅槃經にいたるまで無性有情と決定性の二乗は永く仏になるべからず、仏語に一言なし一度・永不成仏と定め給いぬる上は日月は地に落ち給うとも、大地は反覆すとも、永く変改有るべからず。されば法華經・涅槃經の中にも爾前の經經に嫌いし無性有情・決定性を正しくついでして成仏すとはとかれず。まづ眼を閉じて案ぜよ。

法華經・涅槃經に決定性・無性有情・正く仏になるならば無著・世親ほどの大論師・玄奘・慈恩ほどの三藏・人師これを

みざるべしや、此をのせざるべしや、これを信じて伝えざるべしや、弥勒菩薩に聞いてたてまつるべしや、汝は法華經の文に依るやうなれども、天台・妙樂・伝教の僻見を信受して其の見をもつて經文をみるゆえに爾前に法華經は水火なりと見るなり。華嚴宗と真言宗は法相・三論にはいるべくもなき超過の宗なり、二乗作仏・久遠実成は法華經に限らず華嚴經・大日經に分明なり、華嚴宗の杜順・智儼・法蔵・澄觀・真言宗の善無畏・金剛智・不空等は天台・伝教にはいるべくもなき高位の人なり、其の上善無畏等は日如来より系みだれざる相承あり、此等の権化の人いかでかあやまりあるべき、随つて華嚴經には「或は釈迦・仏道を成じ已つて不可思議劫を経るを見る」と等云云、大日經には「我れは一切の本初なり」と等云云、何ぞ但久遠実成・寿命品に限らん、譬は井底の蝦が大海を見ず山左が洛中を・しらざるがごとし、汝但寿命の一品を見て華嚴・大日經等の諸經をしらざるか、其の上月氏・戸那・新羅・百濟等にも一向に二乗作仏・久遠実成は法華經に限るといつか。

されば八箇年の經は四十余年の經には相違せりといつとも先判・後判の中には後判につくべしといつとも、猶爾前づりにこそをばうれ。又、但在世計りならばさもあるべきに滅後に居せる論師・人師・多是爾前づりにこそ候へかう法華經は信じがたき上、世もやうやく末になれば聖賢はやうやくかくれ迷者はやうやく多し。世間の浅き事すら猶あやまりやすし。何に況や出世の深法・なかるべしや、犢子・方広が聡敏なりし猶を大小乘經にあやまてり、無垢が利根なりし、權実・二教を弁えず、正法一千年の内、在世も近く月氏の内なりしすでにかくのごとし、況や戸那・日本等は国もへたて音もかはれり。人の根も鈍なり寿命も日あさし貪・瞋・癡も倍增せり、仏世を去つてとし久し、仏經みなあやまれり、誰の智解か直かるべき、仏涅槃經に記して云く「末法には正法の者は爪上の土・謗法の者は十方の土」とみぬ、法滅尽經に云く「謗法の者は恒河沙・正法の者は一二の小石」と記しをき給う、千年五百年に一人なんども正法の者ありがたからん、世間の罪に依つて惡道に墮る者は爪上の土・仏法によつて惡道に墮る者は十方の土・俗よりも僧・女より尼

多く惡道に墮つべし。

此に日蓮案じて云く、世すでに末代に入つて二百余年、辺土に生をうけ、其の上下賤、其の上貧道の身なり。輪廻六趣の間、人天の大王と生れて、万民をなびかす事、大風の小木の枝を吹くがごとくせし時も、仏にならず、大小乗經の外凡、内凡の大菩薩と修しあがり、一劫・二劫・無量劫を経て菩薩の行を立て、すでに不退に入りぬべかりし時も、強盛の惡縁におとされて、仏にもならず、しらず大通結縁の第三類の在世をもれたるか久遠五百の退轉して今に来れるか、法華經を行ぜし程に世間の惡縁・主難・外道の難・小乗經の難などは忍びし程に權大乘・實大乘經を極めたるやうなる道・綽・善導・法然等がごとくなる惡魔の身に入りたる者、法華經をつよくほめあげ、機をあながちに下し、「理深解微」と立て、未有一人得者、「千中無一等」とすかしものに、無量生が間、恒河沙の度すかされて權經に墮ちぬ權教より小乗經に墮ちぬ外道・外典に墮ちぬ結句は惡道に墮ちけりと深く此れをしれり、日本国に此れをしれる者は、但日蓮一人なり。

これを一言も申出すならば父母・兄弟・師匠に国主の王難必ず来るべし、いはずば慈悲なきににたりと思惟するに法華經・涅槃經等に此の二辺を合せ見るに、いはずば今生は事なくとも後生は必ず無間地獄に墮べし、いつならば三障四魔必ず競起るべしとしりぬ、二辺の中にはいつべし、王難等・出来の時は退轉すべしは一度に思ひ止るべしと、且くやすらいし程に宝塔品の六難九易これなり、我等程の小力の者、須弥山はなぐとも、我等程の無通の者、乾草を負つて劫火にはやけずとも我等程の無智の者、恒沙の經經をばよみをばつとも、法華經は一句一偈も末代に持ちがたと、とかるるはこれなるべし、今度強盛の菩提心ををこして退轉せじと願しぬ。

既に二十余年が間、此の法門を申すに日日月月・年年に難かさなる、少少の難はがずしらず大事の難、四度なり二度はしばらくをく王難すでに二度にをよぶ、今度はずでに我が身命に及ぶ其の上弟子といひ檀耶といひわづかの聴聞の俗人など来つて重科に行わる謀反などの者のいとし。

法華經の第四に云く「而も此經は如来の現在にすら猶怨嫉多し、況や滅度の後をや」等云云、第二に云く「經を讀誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん」等云云、第五に云く「一切世間、怨多くして信じ難し」等云云、又云く「諸の無智の人の惡口罵詈する有らん」等、又云く「國王・大臣・婆羅門・居士に向つて誹謗し我が惡を説いて、是れ邪見の人なりと謂わん」と、又云く「数数擯出見れん」等云云、又云く「杖木瓦石もて之を打擲せん」等云云、涅槃經に云く「爾の時に多く無量の外道有つて、和合して共に摩訶陀の王・阿闍世の所に往き、今は唯一の大惡人有り瞿曇沙門なり、一切世間の惡人利養の爲の故に其の所に往集して眷屬と爲つて、能く善を修せず、呪術の力の故に迦葉及び舍利弗・目連を調伏す」等云云、天台云く「何に況や未來をや。理化し難きに在るなり」等云云、妙樂云く「障り未だ除かざる者を怨と爲し、聞くことを喜ばざる者を嫉と名く」等云云。南三・北七の十師・漢土無量の學者・天台を怨敵とす、得一云く「咄いかな智公・汝は是れ誰が弟子ぞ。三寸に足らざる舌根を以て、覆面舌の所説を謗する」等云云、東春に云く「問う在世の時許多の怨嫉あり仏滅度の後此經を説く時、何が故ぞ亦留難多きや、答えて云く俗に良藥口に苦しと云うが如く、此經は五乘の異執を廢して一極の玄宗を立つ、故に凡を斥け聖を呵し、大を排い小を破り天魔を銘づけて毒虫と爲し、外道を説いて惡鬼と爲し、執小を貶して貧賤と爲し、菩薩を挫きて新學と爲す、故に天魔は聞くを惡み、外道は耳に逆い一乘は驚怪し、菩薩は怯行す、此くの如きの徒、悉く留難を爲す多怨嫉の言、豈唐しからんや」等云云、顯・或論に云く「僧統奏して曰く、西夏に鬼弁・婆羅門有り。東土に巧言を吐く禿頭沙門あり、此れ乃ち物類冥・召して世間を誑惑す」等云云、論じて曰く「昔齊朝の光統に聞き今は本朝の六統に見る、実なるかな法華に何況すつをや」等云云、秀句に云く「代を語れば則ち像の終り未の始め、地を尋ねれば則ち唐の東、羯の西・人を原ねれば則ち五濁の生・鬪諍の時なり、經に云く猶多怨嫉・況滅度後と。此の言、良に以有るなり」等云云。夫れ小兒に灸治を加れば必ず母をあだむ。重病の者に良藥をあたつれば定んで口に苦

しとうれう、在世猶をしかり、乃至像末辺土をや、山に山をかさね波に波をたたみ難に難を加牟に非をますべし、像法の中には天台一人法華經一切経をよめり。南北これをあだみしかども、陳隋二代の聖主眼前に是非を明めしかば敵ついに尽きぬ、像の末に伝教一人法華經一切経を仏説のごとく読み給へ、南都七大寺蜂起せしかども桓武乃至嵯峨等の賢主我と明らめ給ひしかば又事なし、今末法の始め二百余年なり況滅度後のしるしに鬭諍の序となるべきゆへに非理を前として濁世のしるしに召合せられずして流罪乃至寿にもをよばんとするなり、

されば日蓮が法華經の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども難を忍び慈悲のすぐれたる事はをそれをもいだしぬべし、定んで天の御計いにもあづかるべしと存ずれども、一分のしるしもなし。いよいよ重科に沈む、還つて此の事を計りみれば我が身の法華經の行者にあらざるか、又諸天・善神等の此の国をすてて去り給えるかがたがた疑はし、しかば法華經の第五の巻勸持品の二十行の偈は日蓮だにも此の国に生れずばほとをど世尊は大妄語の人八十億那由他の菩薩は提婆が虚誑罪にも墮ちぬべし、經に云く諸の無智の人あつて惡口罵詈訾し刀杖瓦石を加う等云云、今の世を見るに日蓮より外の諸僧たれの人か法華經につけて諸人に惡口罵詈訾られ刀杖等を加えらるる者ある、日蓮なくば此の一偈の未來記は妄語となりぬ、惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲又云く白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること、六通の羅漢の如し此等の經文は今の世の念佛者・禪宗・律宗等の法師なくば世尊は又大妄語の人、常在大衆中乃至向國王・大臣・婆羅門・居士等、今の世の僧等日蓮を讒奏して流罪せずば此の經文むなし、又云く数数見擯出等云云、日蓮法華經のゆへに度々ながされずば数数の二字いかにがせん、此の二字は天台・伝教もいまだよみ給はず況や余人をや、末法の始のしるし恐怖惡世中の金言のあふゆへに但日蓮一人これをよめり、例せば世尊が付法藏經に記して云く「我が滅後・一百年に阿育大王といつ王あるべし」摩耶經に云く「我が滅後・六百年に竜樹菩薩といつ人南天竺に出ずべし」大悲經に云く「我が滅後・六十年に末田地といつ者地を竜宮につくべし」此れ等皆仏記のごとくなりき、しからず

ば誰か仏教を信受すべき、而るに仏恐怖惡世、然後末世・末法滅時、後五百歲など正妙の二本に正しく時を定め給う、当世法華の三類の強敵なくば誰か仏説を信受せん日蓮なくば誰をか法華經の行者として仏語をたすけん、南三北七・七大寺等、猶像法の法華經の敵の内、何に況や当世の禅律、念仏者等は脱るべしや、經文に我が身普合せり御勘氣をかほれば、いよいよ悦びをますべし、例せば小乗の菩薩の未断惑なるが「願兼於業」と申して、つくりたくなき罪なれども父母等の地獄に墮ちて大苦をうくるを見てかたのごとく其の業を造つて願つて地獄に墮ちて苦が同じ苦に代れるを悦びとするがごとし、此れも又かくのごとし、當時の責はたつぐもなければ、なけれども未來の惡道を脱すらんとをえれば悦びなり。

但し世間の疑といふ、自心の疑と申し、いかでか天扶け給わざるらん、諸天等の守護神は仏前の御誓言あり法華經の行者には、さるになりとも法華經の行者とがうして早急に仏前の御誓言をとげんとこそをばすべきに其の義なきは我が身・法華經の行者にあらざるか、此の疑は此の書の肝心・一期の大事なれば、処処にこれをかく上疑を強くして答をかまうべし。

季札といひし者は心のやくそくを、たがへしと、王の重宝たる劍を徐君が塚にかく、王尹と云いし人は河の水を飲んで金の驚目を水に入れ、公胤といひし人は腹をさいて主君の肝を入れる、此等は賢人なり恩をほつずるなるべし、況や舍利弗迦葉等の大聖は二百五十戒三千の威儀、一もかけず見思を断じ三界を離れたる聖人なり、梵帝・諸天の導師・一切衆生の眼目なり、而るに四十余年が間、永不成仏と嫌いすてはてられてありしが法華經の不死の良薬をなめて、種の生い、破石の合、枯木の華菓などならんとせるがごとく仏になるべしと許されて、いまだ八相をとえず、いかでか此の經の重恩をば、ほつぜざらん、若しほつぜずば、彼の賢人にも、をとりて不知恩の畜生なるべし、毛宝が龜はあをの恩をわすれず、昆明池の大魚は命の恩をほつぜんと明珠を夜中にささげたり、畜生すら猶思をほつず、何に況や大聖をや、阿難尊者は斛飯王の

次男 羅喉羅尊者は淨飯王の孫なり、人中に家高き上証果の身となつて成仏ををさへられたりしに八年の靈山の席にて山海慧 蹈七宝華なんと如来の号をさづけられ給う、若し法華經ましますばいかにいえたかく大聖なりとも誰か恭敬したてまつるべき、夏の桀 殷の紂と申すは万乗の主 土民の帰依なり、しかれども政あしくして世をほろぼせしかば今にわするきもの手本には桀 紂 桀 紂とこそ申せ、下賤の者 癩病の者も桀 紂のごとしといはれぬればのられたりと腹たつなり、千二百 無量の声聞は法華經ましますば誰か名をもきくべき其の音をも習うべき、一千の声聞 一切經を結集せりとも見る人よもあらじ、まして此等の人人を繪像 木像にあらはして本尊と仰ぐべしや、此れ偏に法華經の御力によつて一切の羅漢歸依せられさせ給うなるべし、諸の声聞 法華を はなれさせ給ひなば魚の水をはなれ猿の木をはなれ小兒の乳をはなれ民の王をはなれたるがごとし、いかでか法華經の行者をすて給うべき、諸の声聞は爾前の經經にては肉眼の上に天眼・慧眼をう。法華經にして法眼・仏眼備われり。十方世界すら猶照見し給うらん、何に況や此の娑婆世界の中心法華經の行者を知見せられざるべしや、設い日蓮 惡人にて一言・二言・一年・二年・一劫・二劫 乃至百千万億劫 此等の声聞を惡口 罵詈し奉り刀杖を加えまいらす色なりとも法華經をだにも信仰したる行者ならばすて給うべからず、たと 譬は幼 稚の父母をのる父学これをすつるや、梟 鳥が母を食う、母これをすてず、破鏡父をがいす父これにしたがふ、畜生すら猶かくのごとし大聖 法華經の行者を捨つべしや、されば四大声聞の領解の文に云く我等今は真に是れ声聞なり仏道の声を以て一切をして聞かしむ我等今は真に阿羅漢なり諸の世間天人 魔 梵に於て普く其の中に於て心に供養を受くべし、世尊は大恩まいます希有の事を以て憐愍教化して我等を利益し給う、無量億劫にも、誰か能く報ずる者あらん。手足をもつて供給し頭頂をもつて礼敬し一切をもつて供養すとも伴報ずること能わじ、若しは以て頂戴し両肩に荷負して恒沙劫に於て心を尽して恭敬し又美膳 無量の宝衣、及び諸の臥具 種種の湯藥を以てし、牛頭栴檀、及び諸の珍宝を以て塔廟を起て宝衣を地に布き斯くの如き等の事を以て供養すること恒沙劫に於てすとも亦報ずること能わ

じ」等二云。

諸の声聞等は前四味の経にいはくその呵嘖を蒙り人天大会の中に於て恥辱がましき事其の数をしらず、しかれば迦葉尊者の淳泣の音は三千をひびかし、須菩提尊者は亡然として手の一鉢をすつ。舍利弗は餌食をはき富楼那は画瓶に糞を入ると嫌わる。世尊、鹿野苑にしては阿含経を讚歎し二百五十戒を師とせよなどと慇懃にほめさせ給いて、今又いつのまに我が所説をばかうはそしらせ給うと一言相違の失とも申しぬべし、例せば世尊提婆達多を汝愚人人の唾を食うと罵詈せさせ給しかば毒箭の胸に入るがごとくをもひてうらみて云く瞿曇

は仏陀にはあらず我は斛飯王の嫡子阿難尊者が兄瞿曇が一類なり、いかにあしき事ありとも内内・教訓すべし、此等程の人天大会に此程の大禍を現に向つて申すもの大人、仏陀の中にあるべしや、されば先々は妻のかたき、今は一座のかたき、今日よりは生生世世に大怨敵となるべし」と誓いしぞかし、此れをもつて思うに今諸の大声聞は本と外道婆羅門の家より出でたり、又諸の外道の長者なりしかば諸王に帰依せられ諸檀那にたつとまる、或は

種姓・高貴の人もあり、或は富福・充滿のやからもあり、而るに彼彼の栄官等をうちすて慢心の瞳を倒して俗服を脱ぎ壊色の糞衣を身にまとひ白脇弓箭等をうちすて一鉢を手ににぎり貧人乞丐などのごとくして世尊につき奉り風雨を防ぐ宅もなく、身命をつぐ衣食乏少なりしありさまなるに五天四海皆外道の弟子檀那なれば仏すら九横の大難にあひ給ふ、所謂提婆が大石をとばせし阿闍世王の醉象を放ちし、阿耆多王の馬麦婆羅門

城のこんづせんしや婆羅門女が鉢を腹にふせし、何に況や所化の弟子の数難申す計りなし、無量の釈子は波瑠璃王に殺され千万の眷属は醉象にふまれ、華色比丘尼は提婆にがせられ迦盧提尊者は馬糞につつまれ、目尊者は竹杖にがせらる、其の上六師同心して阿闍世、婆斯匿王等に譏奏して云く、瞿曇は閻浮第一の大悪人なり、彼がいたる処は三災・七難を前とす。大海の衆流をあつめ、大山の衆木をあつめたるがごとし、瞿曇がところには衆悪をあつめたり、所謂迦葉・舍利弗・目連・須菩提等なり、人身を受けたる者は忠孝を先とすべし、彼等は瞿曇にすかされて父母の教訓をも用いず、家をいで王法の宣旨をも、そむいて山林にいたる、一國に跡をとどむべき者にはあらず、されば天には日月・衆星・変をなす地には衆天さかんなりなどうつつたう、堪へしもおぼえざりしに又うちそうわざわいと仏陀にもうちそいがたくてありしなり、人天大会の衆会の砌にて時時呵嘖の音をききしかば、いかにあるべしともおぼす只あわつる心のみなり、其の上大の大難の第一なりしは浄名經の「其れ汝に施す者は福田と名けず汝を供養する者は三惡道に墮す」等云、文の心は仏・庵羅苑申すところにをせしに梵天・帝釈・日月・四天・三界諸天・地神・竜神等・無數恒沙の大会の中に云く須菩提等の比丘等を供養せん天人は三惡道に墮つべし、此等をつちきく天人此等の声聞を供養すべしや、詮ずるところは仏の御言を用つて諸の二乗を殺害せさせ給うかと思ゆ、心あらん人人は仏をもうとみぬべし、されば此等の人人は仏を供養したてまつりしついでにこそわづかの身命をも扶けさせ給いしか、されば事の心を案ずるに四十余年の経經のみとかれて法華八箇年の所説なくて、御入滅ならせ給いたらましかば、誰の人か此等の尊者をば供養し奉るべき現身に餓鬼道にこそをばすべけれ。

而るに四十余年の経經をば東春の大日輪・寒氷を消滅するがごとく無量の草露を大風の零落するがごとく一言一時に未顕真実と打ちけし、大風の黒雲をまき大虚に満月の処するがごとく青天に日輪の懸り給うがごとく世尊は法久後に

要當説眞実と照させ給いて、華光如来・光明如来等と舍利弗・迦葉等を赫赫たる日輪・明明たる月輪のごとく鳳文にしるし、龜鏡に浮べられて候はこそ如来滅後の人天の諸檀那等には仏陀のごとくは仰がれ給しか。水すまば月影ををしむべからず風ふかば草木なびかざるべしや、法華經の行者あるならば此等の聖者は大火の中をすぎても大石の中を・とをりてもとぶらはせ給うべし、迦葉の人定もここにこそよれ、いかにとなりぬるぞ。

いぶかしとも申すばかりなし、後・五百歳・のあたらざるか「広宣流布」の妄語となるべきか是が法華經の行者ならざるか、法華經を教内と下して別伝と称する大妄語の者をまほり給うべきか、捨閉閣抛と定めて法華經の門をとぢよ巻をなげすてよと・ゑりて法華堂を失える者を守護し給うべきか、仏前の誓いはありしかども濁世の大難のはげしさをみて諸天下り給わざるか、日月・天にまします須弥山いまでもくづれず海潮も増減す四季もがたのごとく・たがはず・いかになりぬるやらんと大疑いよいよつもり候。

又諸大菩薩・天人等のときは爾前の經經にして記別をうるやうなれども水中の月を取らんと、するのごとく影を体とおもつのごとく・いろいろかたち・のみあつて実義もなし、又仏の御恩も深くて深からず、世尊初成道の時はいまだ説教もなかりしに法慧菩薩・功德林菩薩・金剛幢菩薩・金剛藏菩薩等など申せし六十余の大菩薩・十方の諸仏の国土より教主釈尊の御前に来り給いて賢首菩薩・解脱月等の菩薩の請にをもむいて十住・十行・十回向・十地等の

法門を説き給い、此等の大菩薩の所説の法門は釈尊に習いたてまつるにあらず、十方世界の諸の梵天等も来つて法をとく又釈尊にならいたてまつらず、総じて華嚴会座の大菩薩・天竜等は釈尊以前に不思議解脱に任せる大菩薩なり、釈尊の過去・因位の御弟子にや有るらん・十方世界の先仏の御弟子にや有るらん、一代教主・始成の正覺の仏の弟子にはあらず、阿含・方等・般若の時・四教を仏の説き給いし時こそやうやく御弟子は出来して候へ、此も又仏の自説なれども正説にはあらず、ゆへいかなとなれば方等・般若の別・円三教は華嚴經の別・円二教

の義趣をいえず、彼の別円・二教は教主釈尊の別円・二教にはあらず、法慧等の別円・二教なり、此等の大菩薩は人目には仏の御弟子かとは見ゆれども仏の御師ともいぬべし、世尊・彼の菩薩の所説を聴聞して智発して後重ねて方等般若の別円をとけり、色もかわらぬ華嚴經の別円・二教なり、されば此等の大菩薩は釈尊の師なり、華嚴經に此等の菩薩をかず今善知識ととかれしはこれなり、善知識と申すは一向師にもあらず一向弟子にもあらずある事なり、藏通・二教は又別円の枝流なり別円・二教をしる人必ず藏通・二教をしるべし、人の

師と申すは弟子のしらぬ事を教えたるが師にては候なり、例せば仏より前の一切の人天外道は二天・三仙の弟子なり、九十五種まで流派したりしかども三仙の見を出でず、教主釈尊もかれに習ひ伝えて外道の弟子にてましませしが苦行・樂行・十二年の時苦空・無常・無我の理をさとり出してこそ外道の弟子の名をば離れさせ給いて無師智とはならせ給ひしか、又人天も大師とは仰ぎまいらせしか、されば前四味の間は教主釈尊・法慧菩薩等の御弟子なり、例せば文殊は釈尊九代の御師と申すがごとし、つねは諸經に不説一字ととかせ給うもこれなり。

仏御年・七十二の年・摩竭提國・靈鷲山と申す山にして無量義經をとかせ給ひしに、四十余年の經經をあげて杖葉をば其の中におさめて四十余年・耒闢真実と打消し給うは此なり、此の時こそ諸大菩薩・諸天人等はあはてて実義を請せんとは申せしか、無量義經にて実義とをばしき事一言ありしかどもいまだまことなし、譬は月の出でんとして其の体東山にかくれて光り西山に及べども諸人月体を見ざるがごとし、法華經・方便品の略開三顯一

の時・仏略して二念三千・心中の本懷を宣へ給う、始の事なればほととぎすの初音をねをびれたる者の一音ききたるがやうに月の山の半を出でたれども薄雲のをほるがごとく、かそかなりしを舍利弗等・驚いて諸天・竜神・大菩薩等をもよをして諸天・竜神等・其の数恒沙の如し仏を求むる諸の菩薩大数八万有り又諸の万億國の轉輪聖王の至れる合掌して敬心を以て具足の道を聞かんと欲す等とは請ぜしなり、文の心は四味・三教・四十余年の間

いまだきかざる法門つけ給はらんと請ぜしなり、この文に具足の道を聞かんと欲すと申すは、大教に云く「薩とは具足の義に名く」等云云、無依無得大乘四論玄義記に云く「沙とは訳して六と云う胡法に六を以て具足の義と為すなり」等云云。吉蔵の疏に云く「沙とは翻じて具足と為す」等云云、天台の玄義の八に云く「薩とは梵語、此に妙と翻ずるなり」等云云、付法蔵の第十三真言華嚴諸宗の元祖本地は法雲自在王如来迹に竜猛菩薩初他の大聖の大智度論千卷の肝心に云く「薩とは六なり」等云云、妙法蓮華經と申すは漢語なり、月支には薩達磨分陀利伽蘇多覽と申す、善無畏三蔵の法華經の肝心真言に云く「囊謨三曼陀沒駄南阿暗惡薩縛勃陀枳攬知娑乞菟毘耶見」囊三娑縛空性羅乞叉相也薩哩達磨浮陀哩迦蘇駄覽經惹咩發喜縛日羅固羅乞叉護咩無願娑婆詞成就」此の真言は南天竺の鉄塔の中の法華經の肝心の真言なり、此の真言の中に薩哩達磨と申すは正法なり薩と申すは正なり正は妙なり妙は正なり正法華妙法華是なり、又妙法蓮華經の上に南無の二字ををけり南無妙法蓮華經これなり、妙と具足六とは六度万行、諸の菩薩の六度万行を具足するやうをきかんとをもつ、具とは十界互具足と申すは一界に十界あれば当位に余界あり満足の義なり、此の經一部八卷

二十八品六万九千三百八十四字一に皆妙の一字を備えて三十二相八十種好の仏陀なり、十界に皆己界の仏界を顯す妙樂云く「尚仏果を具す、余果も亦然り」等云云、仏此れを答えて云く「衆生をして仏知見を開か令めんと欲す」等云云、衆生と申すは舍利弗衆生と申すは一闡提衆生と申すは九法界衆生無辺誓願度此に満足す、我本誓願を立つ一切の衆をして我が如く等しくして異なること無からしめんと欲す我が昔の願せし所の如き今は已に満足しぬ」等云云。

諸大菩薩諸天等此の法門をきひて領解して云く「我等昔より來數世尊の説を聞きたてまつれども未だ曾て是の如き深妙の上法を開かず」等云云、伝教大師云く「我等昔より來數世尊の説を聞くと謂うは昔法華經

の前けこん華嚴等の大法を説くを聞けどもとなり、未だ曾て是くの如き深妙の上法を開かずと謂うは未だ法華經の唯一いちだい仏乗の教を聞かざるなり」等云云、華嚴・方等・般若・深密・大日等の恒河沙の諸大乘經はいまだ一代の肝心たる一念三千の大綱・骨髓たる二乗作仏・久遠実成等をいまだきかずと領解せり。

四一 開目抄下

210P

又、今よりこそ諸大菩薩も梵帝・日月・四天等も教主・釈尊の御弟子にては候へされば宝塔品には、此等の大菩薩を仏・我が御弟子等とをぼすゆゑに諫曉して云く「諸の所大衆に告ぐ我が滅度の後、誰か能く此の經を護持し誦する今・仏前に於て自ら誓言を説け」とはしたたかに仰せ下せしか、又諸大菩薩も譬えば大風のたいふう小樹の枝を吹くが如し等と吉祥草の大風にたいふう隨したがい河水の大海たいかい引くがごとく仏にはしたが隨したがいまいらせしか。

而れども靈山日浅くして夢のごとくうつならずありしに証前の宝塔の上に起後の宝塔あつて十方の諸仏・來集せる皆我が分身なりとならせ給い宝塔は虚空に釈迦・多宝坐を並べ日月の青天に並出せるが如し、人天大会は星をつらね分身の諸仏は大地の上宝樹の下の師子のゆかにまします、華嚴經の蓮華藏世界は十方・此土の報仏・各各に国國にして彼の界の仏・此の土に來つて分身とならず此の界の仏・彼の界へかず但法慧等の大菩薩のみ互に來会せり、大日經・金剛頂經等の八葉九學三十七尊等・大日如來の化身とはみゆれども其の化身・三身円滿の古仏にあらず、大品經の千仏・阿彌陀經の六方の諸仏いまだ來集の仏にあらず大集經の來集の仏・又分身ならず、金光明經の四方の四仏は化身なり、總じて一切經の中に各修・各行の三身円滿の諸仏を集めて我が分身と

はとかれず、これ寿命品の遠序なり、始成四十余年の釈尊が一劫・十劫等、已前の諸仏を集めて分身ととかる。さすが平等意趣にもにず、をびただしくをどろかし、又始成の仏ならば所化・十方に充滿すべからざれば分身の徳は備わりたりとも示現して益なし、天台云く、分身既に多し当に知るべし成仏の久しきことを、等云云、大会のをどろきし意をかかれたり。

其の上に地涌千界の大菩薩・大地より出来せり釈尊に第一の御弟子とをばしき普賢・文殊等にもにるべくもなし、華嚴・方等・般若・法華經の宝塔品に來集する大菩薩・大日經等の金剛薩等、の十六の大菩薩なんども此の菩薩に對当すれば、群る中に帝釈の來り給うが如し、山人に月郷等のまじはるにことならず、補処の弥勒すら猶迷惑せり何に況や其の已下をや、此の千世界の大菩薩の中に四人の大聖まします所謂・上行・無逆行・淨行・安立行なり、此の四人は虛空・靈山の諸菩薩等・眼もあはせ心もをよばず、華嚴經の四菩薩・大日經の四菩薩・金剛頂經の十六大菩薩等も此の菩薩に對すれば翳眼のものの日輪を見るが如く、海人が皇帝に向い奉るが如し、大公等の四聖の衆中にありしにたり、商山の四皓が忠節に仕えしにことならず、巍巍堂堂として尊高なり、釈迦・多宝・十方の分身を除いては一切衆生の善知識ともたのみ奉りぬべし、弥勒菩薩・心に念言すらく、我は仏の太子の御時より三十成道、今の靈山まで四十二年が間、此の界の菩薩・十方世界より來集せし諸大菩薩皆しりたり、又十方の淨穢土に、或は御使い、或は我と遊戲して其の國に大菩薩を見聞せり、此の大菩薩の御師などはいかなる仏にてや、あるらん、よも此の釈迦・多宝・十方の分身の仏陀にはにるべくもなき仏にてこそ、をはすらめ、雨の猛を見て竜の大なる事をしり、華の大なるを見て池のふかきことはじんぬべし、此等の大菩薩の來る國、又誰と申す仏にあいたてまつり、いかなる大法をか習修し給うらんと疑いし、あまりの不審さに音をも、いだすべくもなければ、仏力にやありけん、弥勒菩薩疑つて云く、無量千萬億の大衆の諸の菩薩は昔より未だ曾て見ざる所なり、是の諸の大威徳

の精進に菩薩衆は誰か其の爲に法を説いて教化して成就せる、誰に従つてか初めて発心し何れの仏法をか称揚せる、世尊我昔より来未だ曾つて是の事を見ず、願くは其の所従の国土の名号を説きたまえ、我常に諸国に遊べども未だ曾つて是の事を見ず、我れ此の衆の中に於て乃し一人をも識らず忽然に地より出でたり願くは其の因縁を説きたまえ」等云云、天台云く「寂場より已降今座已往十方の大士来会絶えず限る可からずと雖も我補処の智力を以て悉く見悉く知る、而れども此の衆に於て一人をも識らず然るに我れ十方に遊戲して諸仏に奉し大衆に快く識知せらる」等云云、妙楽云く「智人は起を知る蛇は自ら蛇を織る等云云、経釈の心分明なり詮ずるところは初成道よりこのかた此の土十方にて此等の菩薩を見たてまつらずきかずと申すなり。

仏此の疑を答えて云く「阿逸多・汝等昔より未だ見ざる所の者は我是の娑婆世界に於て阿耨多羅三藐三菩提を得已つて是の諸の菩薩を教化し示導して其の心を調伏して道の意を發こさしめたり」等、又云く「我伽耶城菩提樹下に於て坐して最正覺を成ずることを得て無上の法輪を轉じ爾して乃ち之を教化して初めて道心を發さしむ今皆不退に任せり、乃至我久遠より来是等の衆を教化せり」等云云、此に弥勒等の大菩薩大に疑いをもつ、華嚴經の時法慧等の無量の菩薩あつまるいかなる人人なるらんとをもは我が善知識なりとをほせられしかば、さもやとうちをもひき、其後の大宝坊・白鷺池等の来会の大菩薩もしかのごとし、此の大菩薩は彼等にはにるべくもなきふりたりげにまします定めて釈尊の御師匠かなんごおぼしきを令初發道心とて幼稚のものどもなりしを教化して弟子となせりななどをほせあれば、大なる疑なるべし、日本の聖德太子は人王第三十二代・用明

天皇の御子なり、御年六歳の時百濟・高麗・唐土より老人どものわたりたりしを六歳の太子我が弟子なりとをほせありしかば彼の老人ども又合掌して我が師なり等云云、不思議なりし事なり、外典に申す或者道をゆけば路のほとりに年三十計りなる・わかものが八十計りなる老人をとらへて打ちけり、いかなる事ぞとえば此の

老翁は我が子なりなんと申すとがたるにもたり、されば弥勒菩薩等疑つて云く「世尊、如来太子為りし時、釈の宮を出で伽耶城を去ること遠からずして道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得給えり、是より已来始めて四十余年を過ぎたり、世尊、云何ぞ此の少時に於て大いに仏事を作し給える」等云云、一切の菩薩始め華嚴經より四十余年、會に疑をまつて一切衆生の疑網をはらす中に此の疑、第一の疑なるべし、無量義經の大莊嚴等の八万の大士、四十余年と今との歴劫、疾成の疑にも超過せり、觀無量壽經に韋提希夫人の阿闍世王が提婆にすかされて父の王をいましめ母を殺さんとせしが耆婆月光にをどされて母をはなれたりし時、仏を請じたてまつて

まづ第一の間に云く「我れ宿し何の罪あつて此の惡子を生む世尊、復た何等の因縁有つて提婆達多と共に眷屬となり給う」等云云、此の疑の中に「世尊復た何等の因縁有つて」等の疑は大なる大事なり、輪王は敵と共に生れず帝釈は鬼とともならず仏は無量劫の慈悲者なりいかに大怨と共にまします還つて仏にはまします

ざるかと疑うなるべし、而れども仏答え給はず、されば觀經を讀誦せん人、法華經の提婆品へ入らずばいたづらことなるべし、大涅槃經に迦葉菩薩の三十六の問もこれには及ばず、されば仏此の疑を晴させ給はずば一代の聖教は泡沫にどうじ一切衆生は疑網にかかるべし、壽量の一品の大切なるこれなり。

其の後、仏・壽量品を説いて云く「一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出で伽耶城を去ること遠からず道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得給えりと謂えり」等云云、此の經文は始め寂滅道場より終り法華經の安樂行品にいたるまでの一切の大菩薩等の所知をあげたるなり、然るに善男子、我れ實に成仏してより

已来、無量無辺百千万億那由他劫なり」等云云、此の文は華嚴經の「三処の始成正覺」阿含經に云く「初成」淨名經の「始坐仏樹」大集經に云く「始十六年」大日經の「我昔坐道場」等、仁王經の「二十九年」無量義經の「我先道場」法華經の方位品に云く「我始坐道場」等を一言に大虚妄なりとやぶるもんなり。

此の過去常顯る時 諸仏皆釈尊の分身なり爾前・迹門の時は諸仏・釈尊に肩を並べて各修 各行の仏なり、かるがゆへに諸仏を本尊とする者・釈尊等を下す、今華嚴の台上 方等 般若 大日經等の諸仏は皆釈尊の眷屬なり、仏三十成道の御時は大梵天王 第六天等の知行の娑婆世界を奪い取り給いき、今爾前・迹門にして十方を淨土とがうして此の土を穢土ととかれしを打ちかへして此の土は本土なり十方の淨土は垂迹の穢土となる、仏は久遠の仏なれば迹化 他方の大菩薩も教主釈尊の御弟子なり、一切經の中に此の壽量品ましまさずば天に日月の 国に大王の 山河に珠の 人に神の なからんがごとくしてあるべきを華嚴 真言等の權宗の智者とをぼしき澄觀 嘉祥 慈恩・弘法等の 一往・權宗の 人人 且は自の依經を讚歎せんために 或は云く「華嚴經の教主は報身 法華經は応身」と・或は云く「法華 壽量品の 仏は無明の辺域 大日經の 仏は明の分位」と等云、雲は月をかくし・臣は賢人をかくす人讚すれば黄石も玉とみ 諛臣も賢人かとをぼゆ、今濁世の學者等 彼等の語義に隠されて壽量品の玉を翫ばず、又天台宗の 人人もたばらかされて金石・同のををひをなせる 人人もあり、仏久成にましまさずば所化の少かるべき事を弁すべきなり、月は影を慳ざれども水なくばうつるべからず、仏衆生を化せんとをばせども結縁うすければ八相を現ぜず、例せば諸の聲聞が初地・初住にはのぼれども爾前にして自調自度なりしかば未來の八相をこするなるべし、しかれば教主釈尊始成ならば今 此の世外の梵帝 日月 四天等は劫初より此の土を領すれども四十余年の 仏弟子なり、靈山 八年の法華結縁の衆今まいの主君にををひつかず久住の者にたてらるるがごとし、今久遠実成あらはれぬれば東方の藥師如來の日光 月光 西方阿彌陀如來の觀音 勢至 乃至十方世界の諸仏の 御弟子大日・金剛頂等の両部の 大日如來の 御弟子の諸大菩薩 猶教主釈尊の 御弟子なり、諸仏・釈迦如來の分身たる上は諸仏の所化申すにをよばず何に況や此の土の劫初よりこのかたの日月・衆星等・教主釈尊の 御弟子にあらずや。

而るも天台宗より外の諸宗は本尊にまどえり、俱舎・成実・律宗は三十四心・断結・成道の釈尊を本尊とせり、天尊の太子が迷惑して我が身は民の子とをもうがごとし、華嚴宗・真言宗・三論宗・法相宗等の四宗は大乘の宗なり、法相・三論は勝応身にいたる仏を本尊とす天王の太子・我が父は侍とをもうがごとし、華嚴宗・真言宗は釈尊を下げて慮舎那の大口等を本尊と定む天子たる父を下げて種姓もなき者の法王のごとくなるにつけり、浄土宗は釈迦の分身の阿弥陀仏を有縁の仏とをもつて教主をすてたり、禅宗は下賤の者・一分の徳あつて父母をさぐるがごとし、仏をさげ経を下す此皆本尊に迷えり、例せば三皇已前に父をしらず人皆禽獸に同ぜしが如し、寿命品をしらざる諸宗の者は畜に同じ不知恩の者なり、故に妙樂云く「一代教の中未だ曾て遠を顯さず、父母の寿知らずんばある可からず若し父の寿の遠きを知らずんば復父統の邦に迷う、徒に才能と謂つとも全く人の子に非ず」等云云、妙樂大師は唐の末・天宝年中の者なり三論・華嚴・法相・真言等の諸宗・並に依経を深くみ広く勘えて寿命品の仏をしらざる者は父統の邦に迷える才能ある畜生とかけるなり、徒謂才能とは華嚴宗の法蔵・澄觀・乃至・真言宗の善無畏・三蔵等は才能の大師なれども子の父を知らざるがごとし、伝教大師は日本顯密の元祖・秀句に云く「他宗所依の経は一分仏母の義有りと雖も然も但愛のみ有つて嚴の義を闕く、天台法華宗は嚴愛の義を具す一切の賢聖・學・無學及び菩薩心を發せる者の父なり」等云云、真言・華嚴等の経・には種熱脱の三義・名字すら猶なし何に況や其の義をや、華嚴・真言経等の一生初地の即身成仏等は経は権經にして過去をかくせり、種をしらざる脱なれば超高が位にのぼり道鏡が王位に居せんとせしがごとし。

宗宗・互に程を諍う予此をあらそはず但經に任すべし、法華經の種に依つて天親菩薩は種子無上を立てたり天台の一念三千これなり、華嚴經・乃至諸大乘經・大日經等の諸尊の種子皆一念三千なり天台智者大師・一人此の法門を得給えり、華嚴宗の澄觀・此の義を盗んで華嚴經の心如工画師の文のた神とす、真言・大日經等には二乘

さぶつ くあんじつしゅう いちねんさんぜん 作仏・久遠実成・一念三千の法門これなし、善無畏三蔵・震旦に来て後・天台の止観を見て智発し大日經の心実相我一切本初の文の神に天台の一念三千を盗み入れて真言宗の肝心として其の上に印と真言とをかざり法華經と大日經との勝劣を判ずる時・理同事勝の釈をつくれり、両界の漫荼羅の二乗作仏・十界互具は一定・大日經にありや第一の誑惑なり、故に伝教大師云く「新来の真言家は則ち筆受の相承を泯じ、旧到の華嚴家は則ち影響の規模を隠す」等云云、浮囚の嶋なんどにわたてほのぼのといつたはわれよみたりなんど申すはえぞていの者は・

さこそをもつべし、漢土・日本の學者又かくのごとし、良和尚云く「真言・禪門・華嚴・三論乃至若し法華等に望めば是接引門」等云云、善無畏三蔵の閻魔の責にあづからせ給しは此の邪見による後に心をひるがへし法華經に帰伏してこそ、このせめをば脱させ給いしか、其の後善無畏・不空等・法華經を両界の中央にきて大王のごとし胎藏の大日經・金剛の金剛頂經をば左右の臣下のごとくせしこれなり、日本の弘法も教相の時は華嚴宗に心をよせて法華經をば第八にをきしかども事相の時には実慧・真雅・円澄・光定等の人人に伝え給いし時・両界の中央

に上のごとくをかれたり、例せば三論の嘉祥は法華玄十卷に法華經を第四時・会二破二と定めども天台に帰伏して七年つか廃講散衆して身を肉橋となせり、法相の慈恩は法苑珠林・七卷・十二卷に一乘方便・三乘真実等の妄言多し、しかれども玄賛の第四には故亦両存等と我が宗を不定になせり、言は両方なれども心は天台に帰伏せり、

華嚴の澄觀は華嚴の疏を造て華嚴・法華・相對して法華を方便とかけるに似れども彼の宗之を以て実と為す此の宗の立義・理通ぜざるごとく無し等とかけるは悔い還すにあらずや、弘法も又かくのごとし、龜鏡なければ我が面をみず敵なければ我が非をしらず、真言等の諸宗の學者等・我が非をしらざりし程に伝教大師にあひたてまつて自宗の失をしるなるべし。

されば諸經の諸仏・菩薩・人天等は彼彼の經經にして仏にならせ給うやうなれども実には法華經にして正覺なり給へり・釈迦諸佛の衆生無辺の総願は皆此の經にをいて満足する今者已満足の文これなり、予事の由ををし計るに華嚴・觀經

大日經等をよみ修行する人をばその經經の仏菩薩・天等守護し給らん疑あるべからず、但し大日經・觀經等をよむ行者等・法華經の行者に敵対をなさば彼の行者をすて法華經の行者を守護すべし、例せば孝子・慈父の王敵となれば父をすてて王にまいる孝の至りなり、仏法も又かくのごとし、法華經の諸仏・菩薩・十羅刹・日蓮を守護し給う上・淨土宗の六方の諸仏・二十五の菩薩・眞言宗の千二百等・七宗の諸尊・守護の善神・日蓮を守護し給うべし、例せば七宗の守護神・伝教大師をまほり給いが如しとをもつ、日蓮案じて云く法華經の二処・

三会の座にましましし、日月等の諸天は法華經の行者出来せば磁石の鉄を吸うがごとく月の水に遷るがごとく須臾に來つて行者に代り仏前の御誓をはたさせ給べしとこそをば候にいままで日蓮をとぶらひ給はぬは日蓮・法華經の行者にあらざるか、されば重ねて經文を勸えて我が身にあてて、身の失をしるべし。

疑て云く当世の念仏宗・禪宗等をば何なる智眼をもつて法華經の敵人・一切衆生の惡知識とはしるべきや、答えて云く私の言を出すべからず・經釈の明鏡を出して謗法の醜面をつかべ其の失をみせしめん生盲は力をよばず、法華經の第四宝塔品に云く「爾の時に多宝仏・宝塔の中に於て半座を分ち釈迦牟尼仏に与う、爾の時に大衆二如来の七宝の塔の中の師子の座の上に在して結跏趺坐し給うを見たてまつる、大音声を以て普く四衆に告げ給わく、

誰か能く此の娑婆国土に於て広く妙法華經を説かん、今正しく是れ時なり、如来久しからずして当に涅槃に入るべし、仏・此の妙法華經を以て付属して在ること有らしめんと欲す」等云云、第一の勅宣なり。

又云く「爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して偈を説いて云く、聖主世尊・久しく滅度し給うと雖も宝塔の中に在して尚法の爲に來り給えり、諸人如何ぞ勤めて法に為わざらん、又我が分身の無量の諸仏・恒沙等の如く來れる法を聴かんと欲す・各妙なる土及び弟子衆・天人・竜神・諸の供養の事を捨てて法をして久しく住せしめ

んが故に此に來至し給えり、譬えば大風のたいふう小樹の枝を吹くが如し、是の方便を以て法をして久しく住せしむ、諸の大衆に告ぐ我が滅度の後誰か能く此の經を護持し誦誦せん今 仏前に於て自ら誓言を説け、第二の鳳詔なり。

「多宝如來および我が身集むる所の化仏當に此の意を知るべし、諸の善男子、各諦かに思惟せよ此れは為れ難き事なり、宜しく大願を發すべし、諸余の經典數 恒沙の如し此等を説くと雖も未だ為れ難しとするに足らず、若し須弥を接つて他方無數の仏土に擲げ置かんも亦未だ為れ難しとせず、若し仏滅後 惡世の中に於て能く此の經を説かん是則ち為れ難し、仮使劫焼に乾れたる草を担い負うて中に入つて焼けざらんも亦未だ為れ難しとせず、我が滅度の後に若し此の經を持ちて一人の爲にも説かん是則ち為れ難し、諸の善男子、我が滅後に於て誰か能く此の經を護持し誦誦せん、今 仏前に於て自ら誓言を説けと等云云、第三の諫勅なり、第四 第五の二箇の諫曉 提婆品にあり下にかくべし。

此の經文の心は眼前なり青天に大日輪の懸がごとし白面に鷹のあるにいたり、而れども生盲の者と邪眼の者と一眼のもの各謂自師の者 迦執家の者はみがたし万難をすてて道心あらん者にしるしとどめてみせん、西王母がそのものも・輪王出世の優曇華よりもあいがたく沛公が項羽と八年 漢土をあらそいし頼朝と宗盛が七年 秋津嶋にたたかひし修羅と帝釈と金翅鳥と竜王と阿耨池に諍えるも此にはすぐべからずとするべし、日本国に此の法顯ること二度なり伝教大師と日蓮となりとしれ、無眼のものは疑うべし力及ぶべからず此の經文は日本 漢土月氏・竜宮・天上・十方世界の一切經の勝劣を釈迦 多宝・十方の仏 來集して定め給うなるべし。

問うて云く華嚴經・方等經 般若經・深密經・楞伽經・大日經・涅槃經等は九易の内か六難の内か、答えて云く華嚴宗の杜順 智儼 法蔵 澄觀等の三蔵大師。讀んで云く「華嚴經と法華經と六難の内 名は二經なれども所説 乃至理これ同じ四門觀別 見真諦同の」とし、法相の玄奘三蔵 慈恩大師等 讀んで云く「深密經と法華經とは同く唯識の法門にして第三時の教・六難の内なりし三論の吉蔵等讀んで云く「般若經と法華經とは名異体同・二經一法なり」善無畏三蔵・

金剛智三藏 不空三藏等 読んで云く「大日経と法華経とは理同じ、をなじく六難の内の経なり」、日本の弘法 読んで云く「大日経は六難 九易の内にあらず大日経は釈迦所説の一切経の外 法身 大日如來の所説なり」、又 或る人云く「華嚴経は報身如來の所説 六難 九易の内にはあらず」、此の四宗の元祖等かやうに読みければ其の流れをくむ数千の学徒等も又此の見をいず、日蓮なげいて云く上の諸人の義を左右なく非なりといはば当地の諸人面を向くべからず非に非をかさね結句は國王に譏奏して命に及ぶべし、但し我等が慈父 雙林最後の御遺言に云く「法に依つて人に依らざれ」等云云、不依人等とは初依 二依 三依 第四依 普賢・文殊等の等覺の菩薩が法門を説き給つとも経を手くにぎらざらんをば用ゆべからず、「了義経に依つて不了義経に依らざれ」と定めて経の中にも了義 不了義経を糾明して信受すべきこそ候いぬれ、竜樹菩薩の十住毘婆沙論に云く「修多羅黒論に依らずして修多羅白論に依れ」等云云、天台大師云く「修多羅と合う者は録して之を用いよ文無く義無きは信受すべからず」等云云、伝教大師云く「仏説に依憑して口伝を信ずること其れ」等云云、円珍智証大師云く「文に依つて伝うべし」等云云、上にあぐるところの諸師の釈 皆一分・経論に依つて勝劣を并つやうなれども皆自宗を堅く信受し先師の謬義をたださざるゆゑに曲会私情の勝劣なり莊嚴已義の法門なり 仏滅後の犢子・方広・後漢已後の外典は仏法外の外道の見よりも三皇・五帝の儒書よりも邪見・強盛なり邪法・巧なり、華嚴・法相・真言等の入師・天台宗の正義を嫉ゆゑに実経の文を会して権義に順ぜしむること強盛なり、しかれども道心あらん人 偏党をすて自他宗をあらそはず人をあなづる事なかれ。

法華経に云く「已今当」等云云、妙樂云く「縦い経有つて諸経の主と云うとも已今当説最為第一と云わず」等云云、又云く「已今当の妙茲に於て固く迷う謗法の罪苦長劫に流る」等云云、此の経釈にをどろいて一切経 並に

人師にんしの疏しよ積じきを見るに狐疑こぎの氷こおりとけぬ今真言しんごんの愚者等ぐしや 印真言しんごんのあるをたのみて真言宗しんごんしゅうは法華經ほけきやうにすぐれたりとをもひ
慈覺大師等じかくだいしの真言勝しんごんさくれたりとをせられぬれば などもえるはいつにかいなき事なり。

密嚴經みつごんきやうに云く「十地華嚴等じゅうちけこんと大樹たいじゆと神通勝鬘じんつうしやうまん及び余經よきやうと皆此みなの經きやう從よりり出いでたり、是かくの如ごときの密嚴經みつごんきやうは一切經いっさいきやうの中に
勝すぐれたり等云云、大雲經だいふんきやうに云く「是の經は即是諸經そくぜしよきやうの轉輪聖王てんりんじやうおうなり何を以ての故に是の經典きやうてんの中に衆生しゆじやうの実性ぶじやう、
常住じやうぢやうの法藏ほふぞうを宣説せんぜつする故なり」等云云、六波羅蜜經ろくはらみつぎやうに云く「所謂過去無量そくわこくむりやうの諸仏しよぶつ所説しよせつの正法しやうほふ及び我今説われいまく所の所謂
八万四千はちまんの諸の妙法みほふ蘊うんなり、撰せんして五分と為す一には索咀纒そくそらん二には毘奈耶びなや三には阿毘達磨あびだるま・

四には般若波羅蜜・五には陀羅尼門だらにとなり此の五種の蔵をもつて有情を教化す、若し彼の有情契經調伏しやうぎきやうてうふく対法般若たいほふはなを受持じゆぢ
すること能あたわず 或は復有情諸の惡業あるまたうじやうもがく四重八重しづはつづみ五無間罪むげんつみ方等經ほうとうきやうを謗ぼうする一闡提等いつせんたいの種種しゆしゆの重罪じゆうざいを造るに銷滅しやうめつして
速疾そくしつに解脫げだつし頓とんに涅槃ねはんを悟ることを得せしむ、而も彼が為に諸の陀羅尼蔵だらにぞうを説く、此の五の法藏ほふぞう譬たとへば乳酪にゅうがく生蘇しやうそ熟蘇じゆそ
及び妙みほなる醍醐だいごの如ごとし、總持門そうぢもんとは譬たとへば醍醐だいごの如ごとし醍醐だいごの味は乳酪にゅうがく蘇その中に微妙みほ妙第一みほみほにして能く諸の病を除き諸の
有情うじやうをして身心安樂しんしんあんらくならしむ、總持門そうぢもんとは契經等けいきやうの中に最も第一だいいちと為す能く重罪じゆうざいを除く

等云云、解深密經げじんみつに云く「爾その時に勝義生菩薩復しやうぎしやうぼさた白もつして云く世尊せそん初いちめ一時いちじに於おいて波羅はら 仙人墮せん處にん施だ鹿林しよせろくりんの中に
在ただ唯しやうもん聲聞乘ほつしゆを發趣はつしゆする者の為ために四諦しだいの相さうを以もつて正法輪しやうふりんを轉たまじ給たまい、是はなはだ甚こだ奇けにして甚はなはだだ此これ希有けうなり一切世間いっさいせけん
の諸もろもろの天人等てんにん 先まづより能く法の如ごとく轉たまずる者有ること無しと雖も、而も彼の時に於おいて轉たまじ給たまつ所の

法輪ほふりんは有上うじやうなり有容うじやうなり是れ未了義みりやうぎなり是れ諸の諍論しやうろん安足あんじやくの処所しよじよなり、世尊せそん在昔第二時せそんむかしの中に唯發趣ただはつしゆして大乘だいじやうを修しゆす
る者の為ためにして一切いっさいの法みなむじせは皆無自性みなむじせなり無性無滅むじやうむめつなり本来寂靜ほんらいじやくじやうなり自性涅槃じしやうなはんなるに依よる隱密おんみつの相さうを以もつて正法輪しやうふりんを轉たまじ
給たまい、更に甚はなはだだ奇けにして甚はなはだだ為けれ希有けうなりと雖も、彼の時に於おいて轉たまじ給たまつ所の法輪ほふりん亦是またれ有上うじやうなり容受うじやうする所有しやうり
猶未なほだ了義りやくぎならず、是れ諸の評論もろもろ安足あんじやくの処所しよじよなり、世尊せそん今第三時けふさんじの中に於おいて普あまねく一切乘いっさいしゆを發趣はつしゆする

者の為に一切の法は皆無自性・無生無滅・本来寂靜・自性涅槃にして無自性の性なるに依り顯了の相を以て正法輪を轉じ給う、第一甚だ奇にして最も為れ希有なり、今に世尊轉じ給う所の法輪・無上無容にして是れ眞の了義なり諸の評論安息の処所に非ず等云云、大般若經に云く「聽聞する所の世・出世の法に隨つて皆能く方便して般若甚深の理趣に會入し諸の造作する所の世間の事業も亦般若を以て法性に會入し一事として法性を出ずる者を見ず等云云、大日經第一に云く「秘密主大乘行あり無縁乗の心を発す法に我性無し何を以ての故に彼往昔是くの如く修行せし者の如く蘊の阿頼耶を観察して自性幻の如しと知る等云云、又云く「秘密主彼是くの如く無我を捨て心主自在にして自心の本不生を覺す等云云、又云く「所謂空性は根境を離れ無相にして境界無く諸の戲論

に越えて虚空に等同なり乃至極無自性等云云、又云く「大日尊秘密主に告げて言く秘密主云何なるか菩提・請く実の如く自心を知る等云云、華嚴經に云く「一切世界の諸の群生声同乗を求めんと欲すること有ること・し縁覺を求むる者・轉・復少し、大乘を求むる者甚だ希有なり大乘を求むる者猶為れ易く能く是の法を信ずる為れ甚だ難し、況や能く受持し・正憶念し・説の如く修行し・眞実に解せんをや、若し三千大千界を以て頂戴すること・一劫身動ぜざらんも彼の所作未だ為れ難からず是の法を信ずるは為れ甚だ難し、大千塵数の衆生の類に一劫諸の樂典を供養するも彼の功德未だ為れ勝れず是の法を信ずるは為れ殊勝なり、若し掌を以て十仏刹を持し虚空の中に於て住すること・一劫なるも彼の所作未だ為れ難からず是の法を信ずるは為れ甚だ難し、十仏刹塵の衆生の類に一劫諸の樂典を供養せんも彼の功德未だ勝れりと為さず是の法を信ずるは為れ殊勝なり、十仏刹塵の諸の如来を一劫恭敬して供養せん若し能く此の品を受持せん者の功德彼よりも最勝と為す等云云、涅槃經に云く「是の諸の大乗方等經典復無量の功德を成就すと雖も是の經に比せんと欲するに喩を為すを得ざること百倍千倍百千万倍、乃至算數譬喩も及ぶこと能わざる所なり、善男子譬えば牛従り乳を出し乳従り酪を出し酪従り生蘇を出し

生蘇しよそ従じゆり熟蘇じゆそを出しし熟蘇じゆそ従じゆり醍醐だいごを出しす醍醐だいごは最上さいじやうなり、若もし服ふくすること有ある者は衆病しゆびやう皆除しよき所有しよじゆの諸藥しよやくも悉しつく其その中ちゆうに入るが如ごとし、善男子ぜんなんし仏ぶつも亦是またくの如ごとし仏ぶつ従じゆり十二部經じふにぶきやうを出しし十二部經じふにぶきやう従じゆり修多羅しゆたらを出しし修多羅しゆたら従じゆり方等經ほうとうきやうを出しし方等經ほうとうきやう従じゆり般若波羅蜜はんにやばらみつを出しし般若波羅蜜はんにやばらみつ従じゆり大涅槃だいねはんを出しす猶なほ醍醐だいごの如ごとし醍醐だいごと言いふは仏性ぶつじやうに喩たとふ等云云。

此等これらの經文きやうもんを法華經ほけきやうの已今當いこんとう・六難九易なんくゐに相對そつたいすれば月に星をならべ九山しゆみに須弥しゆみを合せたるにいたり、しかれども華嚴宗けこんしゆつの澄觀ちやうかん・法相ほふさう・三論さんろん・真言等しんこんの慈恩じあん・嘉祥かじやう・弘法等こうぼうの仏眼ぶつげんのごとくなる人なほ猶なほ此の文にまどへり、何に況や盲眼いゐんやめくらめのごとくなる當世たうせの學者等がくしや・勝劣しやうりふを弁わきまつべしや、黑白くわくのごとくあきらかに須弥しゆみ・芥子けしのごとくなる勝劣しやうりふなをまどへりいはんや虚空こくうのごとくなる理に迷まよひざるべしや、教の淺深せんじんをしらざれば理の淺深せんじんを弁わきまつものなし巻をたて文前後ぶんぜんごすれば教門きやうもんの色わきま弁わきまえがたければ文を出しして愚者ぐしやを扶たすけんとをもつ、王に小王だいう・大王だいおう・一切に少分いっさい・全分ぜんぶん・五乳ごにちゆに全喻ぜんゆ・分喻ぶんゆを弁わきまつべし、六波羅蜜ろくぱらみつ經は有情うじやうの成仏じやうぶつあつて無性むじやうの成仏じやうぶつなし何に況や久遠実成きうゑんじつじやうをあかさず、

猶なほ涅槃經ねはんきやうの五味ごみにをよばず何に況や法華經ほふきやうの迹門しやくもん・本門ほんもんにたいすべしや、而しかに日本にほんの弘法大師こうぼうだいし・此の經文きやうもんにまどひ給たまいて法華經ほふきやうを第四だいごの熟蘇じゆそ味みに入れ給たまへり、第五だいごの總持門そうじもんの醍醐だいご味みすら涅槃經ねはんきやうに及およばずいかにし給たまいけるやらん、而しかを震旦しんたんの人師にんし争だうごつて醍醐だいごを盗ぬすむと天台等てんだいを盗人ぬすびととかき給たまへ惜おし哉かな古賢こけん醍醐だいごを嘗なめず等と自歎じたんせられたり、此等これらはさてをく我が一門いちもんの者のためにしるす他人たにんは信しんぜざれば逆縁ぎやくえんなるべし、一いっをなめて大海たいかいのしををしり

一華いちけを見て春はるを推すいせよ、万里ばんりをわたて宋そうに入らずとも三箇年さんげんを経て靈山りやうざんにいたらずとも竜樹りゆうじゆのごとく竜宮りゆうきゆうに入らずとも無著菩薩むぢやくぼさつのごとく弥勒菩薩みろくぼさつにあはずとも二所三會にしょさんゑに値あわらずとも一代いちだいの勝劣しやうりふはこれをしるるなるべし、蛇じやは七日が内の洪水しんすいをしる竜りゆうの眷属けんぞくなるゆゑ鳥とりは年中なちゆうの吉凶きうきゆうをしり過去かこに陰陽師おんやうしなりしゆ鳥とりはとゞ徳人とくじんにすぐれたり。

日蓮は諸経の勝劣をすること華嚴の澄觀・三論の嘉祥・法相の慈恩・真言の弘法にすぐれたり、天台・伝教の跡をしるべしなり、彼の人人は天台・伝教に帰せさせ給はずば謗法の失脱れさせ給うべしや、当世・日本国に第一に富める者は日蓮なるべし命は法華經にたてまつり名をば後代に留べし、大海の主となれば諸の河神・皆したがう須弥山の王に諸の山神したがはざるべしや、法華經の六難九易を弁うれば一切經よまざるにしたがつべし。

宝塔品の三箇の勅宣の上に提婆品に二箇の諷曉あり、提婆達多は一闡提なり天王如来と記せらる、涅槃經四十卷の現証は此の品にあり、善星・阿闍世等の無量の五逆・謗法の者の一をあげ頭をあげ万ををさめ枝をしたがふ、

一切の五逆・七逆・謗法・闡提・天王如来にあらはれ了んぬ毒藥變じて甘露となる衆味にすぐれたり、竜女が成仏此れ一人にはあらず一切の女人の成仏をあらはす、法華已前の諸の小乗教には女人の成仏をゆるさず、諸の大乗經には成仏

・往生をゆるすやうなれども、或は改轉の成仏にして一念三千の成仏にあらざれば有名無実の成仏往生なり、拳一例諸と申して竜女が成仏は末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし、儒家の孝養は今生にかる未来の父母を扶けざれば外家の聖賢は有名無実なり、外道は過未をしれども父母を扶くる道なし仏道こそ

父母の後世を扶くれば聖賢の名はあるべけれ、しかれども法華經已前等の大小乗の經宗は自身の得道猶かなひがたし何に況や父母をや但文のみあつて義なし、今法華經の時こそ女人成仏の時・悲母の成仏も顕われ・達多の悪人成仏の時・慈父の成仏も顕われる、此の經は内典の孝經なり、二箇のいさめ了んぬ。

已上五箇の鳳詔にをどろきて勸持品の弘經あり、明鏡の經文を出して当世の禅・律・念・仏者・並びに諸檀那の謗法をしらしめん、日蓮といぬし者は去年九月十二日子丑の時に頸はならぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて返年の二月雪中にしるして有縁の弟子をくればをそろしくてをそろしからず・みんないかにをぢぬらむ、此れは釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国・当世をうつし給う明鏡なりかたみともみるべし。

勸持品に云く「唯願くは慮したもつべからず仏滅度の後恐怖惡世の中に於て我等當に広く説くべし、諸の無智の人の惡口罵詈訾等し及び刀杖を加うる者有らん我等皆當に忍ぶべし、惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心充滿せん、或阿練若に納衣にして空閑に在つて自ら眞の道を行ずと謂つて人間を輕賤する者有らん利養に貪著するが故に白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるることを爲ること六通の羅漢の如くならん、是の人惡心を懷き常に世俗の事を念い名を阿練若に仮て好んで我等が過を出さん、常に大衆の中に在つて我等を毀らんと欲するが故に國王・大臣・婆羅門・居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説いて是れ邪見の外人道の論議を説くと謂わん、濁劫惡世の中には多く諸の恐怖有らん惡鬼其身に入つて我を罵詈訾毀辱せん、濁世の惡比丘は仏の方便隨宜の所説の法を知らず惡口し顰蹙し数数擯出せられん」等云云、記の八に云く「文に三初に一行は通じて邪人を明す即ち俗衆なり、次に一行は道門増上慢の者を明す、三に七行は僭聖増上慢の者を明す、此の三の中に初は忍ぶ可し次の者は前に過ぎたり第三最も甚だし後後の者は轉識り難きを以ての故に」等云云、東春に智度法師云く「初に有諸より下の五行は第一に一偈は三業の惡を忍ぶ是れ外惡の人なり次に惡世の下一偈は是上慢出家の人なり第三に、或有阿練若より下の三偈は即是出家の処に一切の惡人を撰す」等云云、又云く「常在大衆より下の兩行は公処に向つて法を毀り人を謗す」等云云、涅槃經の九に云く「善男子・闍提有り羅漢の像を作して空処に住し方等大乘經典を誹謗せん諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢是大菩薩なりと謂わん」等云云、又云く「爾の時に是の經闍浮提に於て當に広く流布すべし、是の時に當に諸の惡比丘有つて是の經を抄略し分ちて多分と作し能く正法の色香美味を滅すべし、是の諸の惡人復是くの如き經典を誦誦すと雖も如來の深密の要義を滅除して世間の莊嚴の文飾無義の語を安置す前を抄して後に著け後を抄して前に著け前後を中に著け前後を中に著け中を前後に著く當に知るべし是くの如きの諸の惡比丘は是れ魔の伴侶なり」等云云、六卷の般泥經

に云く「阿羅漢に似たる一闍提有つて惡業を行ず、一闍提に似たる阿羅漢あつて慈心を作さん羅漢に似たる一闍提有りと
は是の諸の衆生方等を誹謗するなり、一闍提に似たる阿羅漢とは声聞を毀咎し廣く方等を説くなり衆生に語つて言く
我れ汝等と俱に是れ菩薩なり所以は何ん一切皆如来の性有る故に然も彼の衆生一闍提なりと謂わん」等云云、涅槃經
に云く「我涅槃の後乃至正法滅して後像法の中に於て當に比丘有るべし持律に似像して少か
に經を誦誦し飲食を貪嗜し其の身を長養す、袈裟を服ると雖も猶獵師の細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如し、常
に是の言を唱えん我羅漢を得たりと外には賢善を現わし内には貪嫉を懷かん唾法を受けたる婆羅門等の如し、実に沙門
に非ずして沙門の像を現じ邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等云云。

夫れ鷲峯雙林の日月毘湛・東春の明鏡に當世の諸宗並に國中の禅・律・念・仏者が醜面を浮べたるに一分もくもりな
し、妙法華經に云く「於仏滅度後恐怖惡世中・安樂行品に云く「於後惡世」又云く「於末世中」又云く「於後末世
法欲滅時」分別功德品に云く「惡世末法時・藥王品に云く「後・五百歲」等云云、正法華經の勸説品に云く「然後末世」又
云く「然後來末世」等云云、添品法華經に云く等、天台の云く「像法の中の南三北七は法華經の怨敵なり」、傳教の云く
「像法の末・南都・六宗の學者は法華の怨敵なり」等云云、彼等の時はいまだ分明ならず、

此は教主釈尊・多寶・宝塔の中に日月の並ぶがごとく十方分身の諸仏・樹下に星を列ねたりし中にして正法一千年・
像法一千年・二千年すぎて末法の始に法華經の怨敵三類あるべしと八十万億那由他の諸菩薩の定め給ひし虚妄となるべし
や、当世は如来滅後二千二百余年なり大地は指ばはづるとも春は花はさかずとも三類の敵人・必ず日本国にあるべ
し、さるにてはたれたれの人人が三類の内なるらん又誰人か法華經の行者なりとさされた

るらんをばつかなし、彼の三類の怨敵に我等入りてやあるらん又法華經の行者の内にてやあるらんをばつかなし、周の第四
昭王の御宇二十四年甲寅・四月八日の夜中に天に五色の光氣・南北に亘りて昼のごとし、大地・六種

に震動し雨ふらずして江河井池の水まさり一切の草木に花さき菓なりたりけり不思議なりし事なり、昭王・犬に驚き
大史・蘇由・占つて云く「西方に聖人生れたり」昭王問て云く「此の国いかん」答えて云く「事なし一千年の後に彼の聖言此
の国にわたつて衆生を利すべし」彼のわづかの外典の一毫未断見思の者しかれども一千年のことをしる、はたして仏教・一
千一十五年と申せし後漢の第二明帝の永平十年丁卯の年仏法漢土にわたる、此は似るべくもなき釈迦多宝十方分身
の仏の御前の諸菩薩の未来記なり、当世日本国に三類の法華經の敵人なかるべしや、されば仏付法藏經等に記して云く
「我が滅後に正法一千年が間我が正法を弘むべき人二十四人・

次第に相續すべし」迦葉・阿難等はさてをきぬ一百年の脇比丘・六百年の馬鳴・七百年の竜樹菩薩等一分もたがはずで
に出で給いぬ、此の事いかにがむなしかるべき此の事相違せば一經皆相違すべし、所謂舍利弗が未来の華光如来迦葉の
光明如来も皆妄語となるべし、爾前返つて一定となつて永不成仏の諸声聞なり、犬野干をば供養すとも阿難等をば供養
すべからずとなん、いかにがせん、いかにがせん。

第一の有諸無智人と云うは經文の第二の惡世中比丘と第三の納衣の比丘の大檀那と見たり、随つて妙樂大師は
「俗衆」等云云、東春に云く「公処に向う」等云云、第二の法華經の怨敵は經に云く「惡世中の比丘は邪智にして心諂曲に
未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心充滿せん」等云云、涅槃經に云く「是の時に當に諸の惡比丘有るべし乃至是の諸
の惡人復是くの如き經典を讀誦すと雖も如来深密の要義を滅除せん」等云云、止觀に

云く「若し信無きは高く聖境に推して己が智分に非ずとす、若し智無きは増上慢を起し己れ仏に均しと謂う」等云云、
道綽禪師が云く「二に理深解微なるに由る」等云云、法然云く「諸行は機に非ず時を失う」等云云、記の十に云く「恐くは
人謬り解せん者初心の功德の大なることを識らずして功を上位に推り此の初心を蔑にせん故に今彼の行浅く功深きこと
を示して以て經力を顯す」等云云、伝教大師云く「正像稍過ぎ已て末法太はだ近きに有り

法華一乗の機今正しく是其の時なり何を以て知ることを得る安樂行品に云く末世法滅の時なり」等云云、慧心の云く「日本一州円機純一なり」等云云、道綽と伝教と法然と慧心といつれ此を信ずべしや、彼の一切経に証文なし此れは正しく法華経により、其の上日本国一同に觀山の大師は受戒の師なり何ぞ天魔のつける法然に心をよせ我が剃頭の師をなげすつるや、法然智者ならば何ぞ此の釈を選択に載せて和合せざる人の理をかくせる者なり、第二の惡世中比丘と指さるるは法然等の無戒邪見の者なり、涅槃經に云く「我れ等悉く邪見の人と名く」等云云、妙樂云く「自ら三教を指して皆邪見と名く」等云云、止觀に云く「大經に云く此よりの前は我等皆邪見の人と名くるなり、邪豈惡に非ずや」等云云、弘決に云く「邪は即ち是れ惡なり是の故に當に知るべし唯円を善と為す、復二意有り、一には順を以つて善と為し背を以つて惡と為す相待の意なり、著を以つて惡と為し達を以つて善と為す相待絶待俱に須く惡を離るべし円に著する尚惡なり況や復余をや」等云云、外道の善惡は小乘經に対すれば皆惡道小乘の善道乃至四味三教は法華經に対すれば皆邪惡但法華のみ正善なり、爾前の円は相待妙なり、絶待妙に対すれば猶惡なり前三教に損すれば猶惡道なり、爾前のごとく彼の經の極理を行ずる猶惡道なり、況や觀經等の猶華嚴般若經等に及ばざる小法を本として法華經を觀經に取り入れて還つて念仏に対して閤拋閉捨せるは法然並びに所化の弟子等檀那等は誹謗正法の者にあらずや、釈迦多宝・十方の諸仏は法をして久しく住せしめんが故に此に來至し給えり、法然並に日本国の念仏者等は法華經は末法に念仏より前に滅尽すべしと豈三聖の怨敵にあらずや。

第三は、法華經に云く「或は阿練若に有り納衣にして空閑に在つて乃至白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるることを為ること六通の羅漢の如くならん」等云云、六卷の般泥經に云く「羅漢に似たる一闍提有つて惡業を行じ一闍提に似たる阿羅漢あつて慈心を作さん、羅漢に似たる一闍提有りとは是諸の衆生の方等を誹謗するなり

一闡提に似たる阿羅漢とは声聞を毀訾して広く方等を説き衆生に語つて言く我汝等と俱に是れ菩薩なり所以は何ん一切皆如来の性有るが故に然かも彼の衆生は一闡提と謂わん等云云、涅槃經に云く「我れ涅槃の後、像法の中に當に比丘有るべし持律に似像して少かに經典を誦誦し飲食を貪嗜して其の身を長養せん袈裟を服ると雖も猶獵師の細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如し、常に是の言を唱えん我羅漢を得たりと外には賢善を現し内には貪嫉を懷く誣法を受けたる婆羅門等の如く実には沙門に非ずして沙門の像を現し邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等云云、妙樂云く「第三最も甚し後後の者轉識り難きを以つての故に」等云云、東春云く「第三に或有阿練若より下の三偈は即是出家の処に一切の惡人を撰す」等云云、東春に「即是出家の処に一切の惡人を撰す」等とは當世日本国には何れの処ぞや、叡山か園城か東寺か南都か建仁寺か寿福寺か建長寺かよくよくたづぬべし、延曆寺の出家の頭に甲冑をよろづをさすべきか、園城寺の五分法身の膚に鎧杖を帶せるか、彼等は經文に納衣在空閑と指すには必ず為世所恭敬如六通羅漢と人をもはず又轉難識故といつべしや華洛には聖一等鎌倉には良觀等にいたり、人をあだむことなかれ眼あらば經文に我が身をあわせよ、止觀の第一に云く止觀の明靜なることは前代未だ聞かず」等云云、弘の一に云く「漢の明帝夜夢みし自り陳朝にぶまで禪門に予り廁て衣鉢伝授する者」等云云、補注に云く「衣鉢伝授とは達磨を指す」等云云、止の五に云く「又一種の禪人乃至盲跛の師徒二俱に墮落す」等云云、止の七に云く「九の意世間の文字の法師と共ならず、事相の禪師と共ならず、一種の禪師は唯觀心の一意のみ有り、或は浅く、或は偽る余の九は全く此無し虚言に非ず後賢眼有らん者は當に証知すべきなり、弘の七に云く「文字法師とは内に觀解無くして唯法相を構う事相の禪師とは境智を閑わす鼻膈に心を止む乃至根本有漏定等なり、一師唯有觀心一意等とは此は且く与えて論を為す奪えば則ち觀解俱に闕く、世間の禪人偏えに理觀を尚ぶ既に教を誦んぜず觀を以つて經を消し八邪八風を数えて丈六の仏と為し五陰二毒を合して名け

て八邪と爲し六入を用いて六通と爲し四大を以つて四諦と爲す、此くの如く經を解するは偽の中の偽なり何ぞ浅くして論ず可けんや」等云云、止觀の七に云く「昔、洛の禪師名河海に播き住するときは四方雲の如くに仰ぎ去るときは阡陌群を成し隱隱轟轟亦何の利益か有る、臨終に皆悔ゆ」等云云、弘の七に云く「洛の禪師とは、相州に在り即ち齊魏の都する所なり、大に仏法を興す禪祖の一、其の地を王化す、時人の意を譲りて其の名を出さず洛は即ち洛陽なり」等云云、六卷の般泥、經に云く「究竟の処を見ずとは彼の一闡提の輩の究竟の惡業を見ざるなり」等云云、妙樂云く「第三最も甚だし転識り難きが故に」等、無眼の者・一眼の者、邪見の者は末法の始の三類を見るべからず一分の仏眼を得るもの此れをしるべし、向國王・大臣・婆羅門・居士等云云、東春に云く「公処に向い法を毀り人を謗ず」等云云、夫れ昔像法の末には護命・修円等奏狀をささげて伝教大師を讒奏す、今末法の始には良觀・念阿等偽書を注して將軍家にささぐ・あに三類の怨敵にあらずや。

当世の念仏者等・天台法華宗の檀那の國王・大臣・婆羅門・居士等に向つて云く「法華經は理深我等は解微法は至つて深く機は至つて浅し」等と申しつとむるは高推聖境・非己智分の者にあらずや、禪宗の云く「法華經は月をさす指・禪宗は月なり月をえて指なにかせん、禪は仏の心、法華經は仏の言なり仏、法華經等の一切經をとかせ給いて後、最後に一ふさの華をもつて迦葉一人にさづく、其のしるしに仏の御袈裟を迦葉に付屬し乃至付法蔵の二十八・六祖までに伝つ」等云云、此等の大妄語國中を誑醉せしめてとしひさし、又天台・真言の高僧等名は其の家にえたれども我が宗にくらし、貪欲は深く公家・武家ををそれて此の義を証伏し讚歎す、昔の多宝・分身の諸仏は法華經の令法久住を証明す、今天台宗の碩徳は理深解微を証伏せり、かるがゆへに日本國に但法華經の名のみあつて得道の人・一人もなし、誰をか法華經の行者とせん、寺塔を焼いて流罪せらるる僧侶は、がずをしらず、公家・武家に諛つてにくまるる高僧これ多し、此等を法華經の行者といつべきか。

仏語むなしからざれば三類の怨敵すに國中に充滿せり、金言のやぶるべきかのゆゑに法華經の行者なし、いかがせん、
抑たれやの人か衆俗に惡口罵詈せらるる誰の僧か刀杖を加へらるる、誰の僧をか法華經のゆゑに公家武家に
奏する誰の僧か数数見擯出と度度ながさるる、日蓮より外に日本國に取り出さんとするに人なし、日蓮は法華經の行者
にあらず天これをすて給うゆゑに、誰をか當世の法華經の行者として仏語を冥語
とせん、仏と提婆とは身と影とのごとし生生にはなれず聖德太子と守屋とは蓮華の花華同時なるがごとし、法華經の
行者あらば必ず三類の怨敵あるべし、三類はずにあり法華經の行者は誰なるらむ、求めて師とすべし一眼の龜の浮木に
値うなるべし。

有る人云く當世の三類はほぼ有るにいたり、但し法華經の行者なし汝を法華經の行者といはんとすれば大なる相違あり、
此の經に云く「天の諸の童子以て給使を為さん、刀杖も加えず、毒も害すること能わざらん」と云く「若し人惡罵すれば
口則閉塞す」等、又云く「現世には安穩にして後善処に生れん」等云云、又「頭破れて七分と作ること阿梨樹の杖の
如くならん」と云く「亦現世に於て其の福報を得ん」等又云く「若し復是の經典を受持する者を見て其の過惡を出せば
若しは實にもあれ若しは不實にもあれ此の人現世に白癩の病を得ん」等云云、答え
て云く汝が疑い大に吉しついでに不審を晴さん、不輕品に云く「惡口罵詈」等、又云く「或は杖木瓦石を以て之を
打擲す」等云云、涅槃經に云く「若しは殺若しは害」等云云、法華經に云く「而かも此の經は如來の現在すら猶怨嫉多し」
等云云、仏は小指を提婆にやぶられ九横の大難に値い給う此は法華經の行者にあらずや、不輕菩薩は一乘の行者といは
れまじきか、目連は竹杖に殺さる法華經記の後なり、付法藏の第十四の提婆菩薩第二十五の師子尊者の二人は人に
殺されぬ、此等は法華經の行者にはあらざるか、竺の道生は蘇山に流されぬ法道は火印を面にやいて江南につゞき、
此等は一乘の持者にあらざるか、外典の者なりしかども白居易北野の天神は

おんる 遠流せらる賢人にあらざるか、事の心を案ずるに前生に法華経 誹謗の罪なきもの今生に法華経を行すこれを世間の実に
よせ 或は罪なきをあだすれば忽に現罰あるか 修羅が帝釈を射る金翅鳥の阿耨池に入る等必ず返つて一時に損するがこ
とし、天台云く「今、我が疾苦は皆過去に由る今生の修福は報 将来に在り」等云云、心地観経に曰く「過去の因を知らん
と欲せば其の現在の果を見よ未来の果を知らんと欲せば其の現在の因を見よ」等云云、不輕品に云く「其の罪畢已」等云
云、不輕菩薩は過去に法華経を謗じ給う罪 身に有るゆゑに瓦石をかほるとみたり、又順次生に必ず地獄に墮つべき者は
重罪を造るとも現罰なし一闍提人これなり、涅槃経に云く「迦葉菩薩
仏に白して言く世尊、仏の所説の如く大涅槃の光一切衆生の毛孔に入る」等云云、又云く「迦葉菩薩、仏に曰して言く
世尊云何んぞ未だ菩提の心を発さざる者 菩提の因を得ん」等云云、仏此の問を答えて云く「仏迦葉に告わく若し
是の大涅槃経を聞くこと有つて我菩提心を発すことを用いずと言つて正法を誹謗せん、是の人即時に夜夢の中に羅刹の
像を見て心中怖畏す羅刹語つて言く咄し善男子汝今若し菩提心を発さずんば当に汝が命を断つべし是の人惶怖し寤め
已つて即ち菩提の心を発す当に是の人は大菩薩なりと知るべし」等云云、いたつの大悪人ならざる者
が正法を誹謗すれば即時に夢みてひるがる心生ず、又云く「枯木・石山」等、又云く「憔悴甘雨に遇つと雖も」等、又
明珠淤泥」等、又云く「人の手に創あるに毒藥を捉るが如し」等、又云く「大雨空に住せず」等云云、此等多くの譬あり、
詮ずるところ上品の一闍提人になりぬれば順次生に必ず無間獄に墮つべきゆゑに現罰なし例せば夏の桀・殷の紂の世には
天変なし重科有て必ず世ほろぶべきゆゑか、又守護神此国をすつるゆゑに現罰なきか
謗法の世をば守護神すて去り諸天まほるべからずかるがゆゑに正法を行ずるものにしるしなし還つて大難に値うべし
金光明経に云く「善業を修する者は日日に衰減す」等云云、悪国 惡時これなり具さには立正安国論にかんがへたるがこ
と。

詮ずるところは天もすて給え諸難にもあえ身命を期とせん、身子が六十劫の菩薩の行を退せし乞眼の婆羅門の責を堪えざるゆへく遠大通の者の三五の塵をふる悪知識に値つゆなり、善に付け悪につけ法華經をすつるは地獄の業なるべし、大願を立てん日本国の位をゆづらむ、法華經をすて觀經等について後生をこそせよ、父母の頸を刎ん念仏申さずば、なんどの種種の大難出来すとも智者に我義やぶられずば用いじとなり、其の外の大難・風の前の塵なるべし、我日本の柱とならむ我日本の眼目とならむ我日本の大船とならむ等とちかいし願やぶるべからず。

疑つて云くいかにとして汝が流罪・死罪等を過去の宿習としらむ、答えて云く銅鏡は色形を顕わす秦王・駿偽の鏡は現在の罪を顕わす仏法の鏡は過去の業因を現す、般泥・經に云く「善男子過去に曾て無量の諸罪種種の惡業を作るに是の諸の罪報は或は輕易せられ・或は形状醜陋衣服足らず飲食ソソ財を求むるに利あらず貧賤の家邪見の家に生れ・或は王難に遭い及び余の種種の人間の苦報あらん現世に軽く受るは斯れ護法の功德力に由るが故なり」云云、此の經文日蓮が身に宛も符契のごとし狐疑の氷とけぬ千万の難も由なし一の句を我が身にあわせん、或被輕易等云云、法華經に云く「輕賤憎嫉」等云云二十余年が間の輕慢せらる、或は形状醜陋又云く

衣服不足は予が身なり飲食ソソは予が身なり求財不利は予が身なり生貧賤家は予が身なり、或遭王難等此の經文疑うべしや、法華經に云く「數數擯出せられん」此の經文に云く「種種」等云云、斯由護法功德力故等とは摩訶止觀の第五に云く「散善微弱なるは動せしむること能わず今止觀を修して健病」ぎれば生死の輪を動ず」等云云、

又云く「三障四魔紛然として競い起る」等云云我れ無始よりこのかた惡王と生れて法華經の行者の衣食・田畠等を奪いとせしことかざしらず、当世日本国の諸人の法華經の山寺をたうすがごとし、又法華經の行者の頸を刎こと其の数をしらず此等の重罪はたせるもありいまだはたさざるもあるらん、果すも余残いまだつきず

生死を離るる時は必ず此の重罪をけしはてて出離すべし、功德は浅軽なり此等の罪は深重なり、権經を行ぜしには此の重罪いまだをこらず鉄を熱にいたつきたわざればきず隠れてみえず、度度せむればきずあらはる、麻子をじぼるにつよくせめざれば油少きがごとし、今ま日蓮・強盛に国土の謗法を責むれば此の大難の来るは過去の重罪の今生の護法に招き出だせるなるべし、鉄は火に値わざれば黒し火と合いぬれば赤し木をもつて急流をかけば波山のごとし睡れる師子に手をつくれれば大に吼ゆ。

涅槃經に曰く「譬えば貧女の如し居家救護の者有ること無く加うるに復病苦飢渴に逼められて遊行乞丐す、他の客舎に止り一子を寄生す是の客舎の主駈逐して去らしむ、其の産して未だ久しからず是の児をして他國に至らんと欲し、其の中路に於て惡風雨に遇て寒苦並び至り多く蚊虻蜂毒虫の食う所となる、恒河に由し児を抱いて渡る其の水漂疾なれども而も放ち捨てず是に於て母子遂に俱に没しぬ、是くの如き女人慈念の功德
命終の後梵天に生ず、文殊師利若し善男子有つて正法を護らんと欲せば彼の貧女の恒河に在つて子を愛念するが為に身命を捨つるが如くせよ、善男子護法の菩薩も亦是くの如くなるべし、寧ろ身命を捨てよ是くの如き人解脱を求めずといふと解脱自ら至ること彼の貧女の梵天を求めざれども梵天自ら至るが如し等云云、此の經文は章安大師三障をもつて釈し給へ、それをみるべし、貧人とは法財のなきなり女人とは一分の慈ある者なり、
客舎とは穢土なり一子とは法華經の信心了因の子なり舍主駈逐とは流罪せらる其の産して未だ久しからずとはいまだ信じてひさしからず、惡風とは流罪の勅宣なり蚊虻等とは諸の無智の人有り惡口罵詈等なり母子共に没すとは終に法華經の信心をやぶらずして頸を刎らるるなり、梵天とは仏界に生るるをいつなり引業と申すは仏界までかはらず、日本漢土の万国の諸人を殺すとも五逆謗法なければ無間地獄には墮ちず、余の惡道にして多歳をふべし、色天に生るること万戒を持てども万善を修すれども散善にては生れず、又梵天王となる事有漏の

引業の上に慈悲を加えて生ずべし、今此の貧女が子を念うゆへに梵天に生る常の性相には相違せり、章安の二はあれども詮ずるところは子を念う慈念より外の事なし、念を一境にする、定に似たり、專子を思う又慈悲にもにたり、かるがゆへに他事なけれども天に生るるか、又仏になる道は華嚴の唯心法界・三論の八不・法相の唯識・真言の五輪親等も実には叶うべしともみず、但天台の一念三千こそ仏になるべき道とみゆれ、此の一念三千も我等一分の慧解もなし、而ども一代経経の中には此の経計り一念三千の玉をいだけり、余経の理は玉ににたる黄石なり沙をしぼるに油なし石女に子なきがごとし、諸経は智者猶仏にならず此の経は愚人も仏因を種べし

不求解脱・解脱自至等と云云、我並びに我が弟子・諸難ありとも疑う心なくば自然に仏界にいたるべし、天の加護なき事を疑はざれ現世の安穩ならざる事をなげかざれ、我が弟子に朝夕教えしかども・疑いををこして皆すてけんつたなき者のならひは約束せし事をまことの時はわするるなるべし、妻子を不便とをもつゆ・現身にわかれん事をなげくらん、多生曠劫にしたしみ妻子には心とはなれしか仏道のためにはなれしか、いつも同じわかれなるべし、我法華経の信心をやぶらずして靈山にまいりて返てみちびけかし。

疑つて云く念仏者と・禅宗等を無間と申すは・諍う心あり修羅道にや墮つべかるらむ、又法華経の安樂行品に云く・樂て人及び經典の過を説かざれ亦諸余の法師を輕慢せざれ等云云、汝此の経文に相違するゆへに天にすてられたるか、答て云く止觀に云く・夫れ仏に両説あり一には撰・二には折・安樂行に不称長短という如きは是れ撰の義なり、大經に刀杖を執持し乃至首を斬れといふ是れ折の義なり与奪途を殊にすと雖も俱に利益せしむと等云云、弘決に云く・夫れ仏に両説あり等とは大經に刀杖を執持すとは第三に云く正法を護る者は五戒を受けず威儀を修せず、乃至下の文・仙・予・國王等の文、又新・醫・禁じて云く若し更に為すこと有れば當に其の首を斷つべし是くの如き等の文並びに是れ破法の人を折伏するなり一切の經論此の二を出でずと等云云、文句に云く・問う大經には

國王に親付し弓を持ち箭を帶し惡人を摧伏せよと明す、此の經は豪勢を遠離し謙下慈善せよと剛柔頌いに乖く云何ぞ異ならざらん、答う大經には偏に折伏を論ずれども一子地に住す何ぞ曾て摂受無からん、此の經には偏に摂受を明せども頭破七分と云う折伏無きに非ず各一端を挙げて時に適う而已等云云、涅槃經の疏に云く出家在家法を護らんに其の元心の所為を取り事を棄て理を存して匡に大經を弘む故に護持正法と言うは小節に拘わらず故に不修威儀と言ふなり、昔の時は平にして法弘まる心に戒を持つべし杖を持つと勿れ今の時は嶮にし

て法翳る心に杖を持つべし戒を持つと勿れ、今昔俱に嶮ならば俱に杖を持つべし今昔俱に平ならば俱に戒を持つべし、取捨宜きを得て一向にす可からず等云云、汝が不審をば世間の學者多分道理とをもつ、いかに諫曉すれども日蓮が弟子等も此のをもひをすて一闡提人のごとくなるゆへに先づ天台・妙樂等の釈をいだしてかれ

が邪難をふせぐ、夫れ摂受・折伏と申す法門は水火のごとし火は水をいとう水は火をにくむ、摂受の者は折伏をわらう折伏の者は摂受をかなしむ、無智・惡人の国土に充滿の時は摂受を前とす安樂行品のごとし、邪智・謗法の者の多き時は折伏を前とす常不輕品のごとし、譬は熱き時に寒水を用い寒き時に火をこのむのごとし、草木は日輪の眷屬・寒月に苦をう諸水は月輪の所従、熱時に本性を失う、末法に摂受・折伏あるべし所謂惡國・破法の兩國あるべきゆへなり、日本國の當世は惡國か破法の國かとしるべし。

問うて云く摂受の時・折伏を行ずると利益あるべしや、答えて云く涅槃經に云く迦葉菩薩・仏に白して言く如來の法身は金剛不壞なり未だ所因を知ること能わず云何、仏の言く迦葉能く正法を護持する因縁を以ての故に是の金剛身を成就することを得たり、迦葉我護持正法の國縁にて今是の金剛身常住不壞を成就することを得たり、善男子正法を護持する者は五戒を受けず威儀を修せず心に刀劍弓箭を持つべし、是くの如く種種に法を説くも然も故師子吼を作すこと能わず非法の惡人を降伏すること能わず、是くの如き比丘自利

し及び衆生を利すること能わず、当に知るべし是の輩は懈怠懶惰なり能く戒を持ち淨行を守護すと雖も当に知るべし是の人は能く為す所無からん、乃至時に破戒の者有つて是の語を聞き已つて咸共に瞋恚して是の法師を害せん是の説法の者設い復命終すとも故持戒自利利他と名く等云云、章安の云く「取捨宜きを得て一向にす可からず」等、天台云く「時に適う而已」等云云、譬は秋の終りに種子を下し田畠をかえさんに稻米をつることかたし、建仁年中に法然・大日の二人出来して念仏宗・禅宗を興行す、法然云く「法華経は末法に入つては未有一人得者千中無一」等云云、大日云く「教外別伝」等云云、此の両義国土に充滿せり、天台・真言の学者等念仏・禅

の檀那を・へつらいをづる事犬の主にををふり、ねづみの猫ををそるがごとし、国王・將軍にみやつかひ破仏法の因縁・破国の因縁を能く説き能くかたるなり、天台・真言の学者等今生には餓鬼道に墮ち後生には阿鼻を招くべし、設い山林にまじわつて一念三千の觀をこらすとも空閑にして二密の油をこぼさずとも時機をしらず、撰折の二門を弁ずばいかでか生死を離るべき。

問うて云く念仏者・禅宗等を責めて彼等に・あだまれたる・いかなる利益があるや、答えて云く涅槃經に云く「若し善比丘法を壊る者を見て置いて呵責し駈遣し拳処せずんば当に知るべし是の人は仏法中の怨なり、若し能く駈遣し呵責し拳処せば是れ我が弟子真の聲聞なり」等云云、「仏法を壊乱するは仏法中の怨なり慈無くして詐り親しむは是れ彼が怨なり能く糾治せんは是れ護法の聲聞真の我が弟子なり彼が為に惡を除くは即ち是れ彼が親なり能く呵責する者は是れ我が弟子駈遣せざらん者は仏法中の怨なり」等云云。

夫れ法華經の宝塔品を拜見するに釈迦・多宝・十方分身の諸仏の來集はなに心ぞ、令法久住・故來至此」等云云、三仏の未來に法華經を弘めて未來の一切の仏子にあたえんとおぼしめす御心の中をすいするに父母の二子の大苦に値うを見るよりも強盛にこそみたるを法然いたはしと・もおもはで末法には法華經の門を堅く閉じて人を

入れじとせき狂児をたばらかして宝をすてさするやうに法華經を抛させける心こそ無慚に見候へ我が父母を人の殺さんに父母につげざるべしや、悪子の醉狂して父母を殺すをせいせざるべしや、悪人寺塔に火を放たんにせいせざるべしや、一子の重病を灸せざるべしや、日本の禅と念佛者とをみて制せざる者はかくのごとし「慈無くして詐り親しむは即ち是れ彼が怨なり」等云云。

日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり一切天台宗の人は彼等が大怨敵なり「彼が為に悪を除くは即ち是れ彼が親」等云云、無道心の者生死をはなる事はなきなり、教主釈尊の一切の外道に大悪人と罵詈せられさせ給ひ天台大師の南北並びに得一に三寸の舌もつて五尺の身をたつと伝教大師の南京の諸人に「最澄未だ唐都を見ず」等といはれさせ給ひし皆法華經のゆゑなればはぢならず愚人にほめられたるは第一のはぢなり、日蓮が御勘気を・

かほれば天台眞言の法師等悦ばしくやをもつらんかつはむざんなりかつはきくわいなり、夫れ釈尊は娑婆に入り羅什は秦に入り伝教は戸那に入り提婆師子は身をすつ薬王は臂をやく上宮は手の皮をはく釈迦菩薩は肉をうる樂法は骨を筆とす、天台の云く「適時而已」等云云、仏法は時によるべし日蓮が流罪は今生の小苦なればなげかしからず、後生には大樂をつくべければ大に悦ばし。

四一 如来滅後五百歲始觀心本尊抄

本朝沙門 日蓮撰

238P

摩訶止觀第五に云く「世間と如是と」なり

文永十年 五二歳御作

「そ夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の世間を具すれば百法界に即三千種の世間を具す、比の三千一念の心に在り若し心無んば而巳介爾も心有れば即ち三千を具す乃至所以に称して不可思議と為す意此に在り」

問うて云く玄義に一念三千の名目を明かすや、答えて曰く妙樂云く明かさず、問うて曰く文句に一念三千の名目を明かすや、答えて曰く妙樂云く明かさず、問うて曰く其の妙樂の釈如何、答えて曰く未だ一念三千と云わず等云云、問うて曰く止觀の二三四等に一念三千の名目を明かすや、答えて曰く之れ無し、問うて曰く其の証如何、答えて曰く妙樂云く「故に止觀に至つて正しく觀法を明かす並び三千を以て指南と為す」等云云、疑つて曰く玄義第二に云く「又一法界に九法界を具すれば百法界千如是」等云云、文句第一に云く「一入に十法界を具すれば一界又十界なり十界各十如是あれば即ち是れ一千」等云云、觀音玄に云く「十法界交互なれば即ち百法界有り千種の性相冥伏して心に在り現前せずと雖も宛然として具足す」等云云、問うて曰く止觀の前の四に一念三千の名目を明かすや、答えて曰く妙樂云く明かさず、問うて曰く其の釈如何、答う弘決第五に云く「若し正觀に望めば全く未だ行を論ぜず亦二十五法に歴て事に約して解を生ず方に能く正修の方便と為すに堪えたり是の故に前の六をば皆解に属す」等云云、又云く「故に止觀の正しく觀法を明かすに至つて並びに三千を以て指南と

な すなわこ 為す乃ち是れ終窮究竟の極説なり故に序の中に「説己心中所行法門」と云う良に以所有るなり請う尋ね読まん者心に果縁無れと等云云、

夫れ智者の弘法三十年二十九年の間は玄文等の諸義を説いて五時・八教・百界・千如を明かし前き五百余年の間の諸非を責め並びに天竺の論師未だ述べざるを顕す、章安大師云く「天竺の大論尚其の類に非ず震旦の人師何ぞ勞わしく語るに汲ばん此れ誇耀に非ず法相の然らしむるのみ」等云云、墓ないかな天台の末学等華嚴眞言の元祖の盗人に一念三千の重宝を盗み取られて還つて彼等が門家と成りぬ章安大師兼ねて此の事を知つて歎いて言く「斯の言若し墜ちなば将来悲む可し」云云。

問うて曰く百界千如と一念三千と差別如何、答えて曰く百界千如は有情界に限り一念三千は情非情に亘る、不審して云く非情に十如是亘るならば草木に心有つて有情の如く成仏を為す可きや如何、答えて曰く此の事難信難解なり天台の難信難解に二有り一には教門の難信難解二には觀門の難信難解なり、其の教門の難信難解とは一仏の所説に於て爾前の諸經には二乘闡提未來に永く成仏せず教主釈尊始めて正覺を成じ法華經迹本二門に來至し給ひ彼の二説を壊る一仏二言水火なり誰人か之を信ぜん此れは教門の難信難解なり、觀門の難信難解は百界千如・一念三千・非情の上の色心の二法十如是是なり、爾りといえども木画の二像に於ては外典内典共に之を許して本尊と為す其の義に於ては天台一家より出でたり、草木の上に色心の因果を置かずんば木画の像を本尊に恃み奉ること無益なり、疑つて云く草木国土の上の十如是の因果の二法は何れの文に出でたるや、答えて曰く止觀第五に云く「国土世間亦十種の法を具す所以に悪国土・相性・体力」と等と云云、釈詮第六に云く「相は唯色に有り性は唯心に在り体力作縁は義色心を兼ね因果は唯心・報は唯色にあり」と等云云、金・論に云く「乃ち是れ一草・一木・一礫・一塵・各一仏性・各一因果あり縁了を具足す」と等云云。

問うて曰く出処既に之を聞く觀心の心如何、答えて曰く觀心とは我が己心を觀じて十法界を見る是を觀心と云うなり、譬えば他人の六根を見ると雖も未だ自面の六根を見ざれば自具の六根を知らず明鏡に向うの時始めて自具の六根を見るが如し、設い諸經の中に処処に六道並びに四聖を載すと雖も法華經並びに天台大師所述の摩訶止觀等の明鏡を見ざれば自具の十界・百界千如・一念三千を知らざるなり。

問うて云く法華經は何れの文ぞ天台の釈は如何、答えて曰く法華經第一方便品に云く衆生をして仏知見を開かしめんと欲す等云云是は九界所具の仏界なり、寿命品に云く是くの如く我成仏してより已來甚大に久遠なり寿命無量阿僧祇劫・常住にして滅せず諸の善男子我本菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命今猶未だ尽きず復上の數に倍せり等云云此の經文は仏界所具の九界なり、經に云く提婆達多乃至天王如來等云云地獄所具

の仏界なり、經に云く一を藍婆と名け乃至汝等但能く法華の名を護持する者は福量るべからず等云云、是れ餓鬼界所具の十界なり、經に云く竜女乃至成等正覺等云云此れ畜生界所具の十界なり、經に云く婆稚阿修羅王乃至一偈一句を聞いて阿耨多羅三藐三菩提を得べし等云云修羅界所具の十界なり、經に云く若し人・仏の爲の故に乃至皆已に仏道を成ず等云云此れ人界所具の十界なり、經に云く大梵天王乃至我等も亦是くの

如く必ず當に作仏することを得べし等云云此れ天界所具の十界なり、經に云く舍利弗乃至華光如來等云云此れ聲聞界所具の十界なり、經に云く其の緣覺を求むる者比丘比丘尼乃至合掌を以て敬心し具足の道を聞かんと欲す等云云、此れ即ち緣覺界所具の十界なり、經に云く地湧千界乃至眞淨大法等云云此れ即ち菩薩所具の十界なり、經に云く或説己身或説他身等云云即ち仏界所具の十界なり。

問うて曰く自他面の六根共に之を見る彼此の十界に於ては未だ之を見ず如何が之を信ぜん、答えて曰く法華經・法師品に云く難信難解・宝塔品に云く六難九易等云云、天台大師云く「門悉く昔と反すれば難信難解

なり「章安大師云く」仏此れを將て大事と為す何ぞ解し易きことを得可けんや」等云云、伝教大師云く「此の法華經は最も為れ難信難解なり隨自意の故に」等云云、夫れ在世の正機は過去の宿習厚き上、教主釈尊・多宝仏・十方分身の諸仏・地涌千界・文殊・弥勒等之を扶けて諫曉せしむるに猶信ぜざる者之れ有り五千・席を去り人天移さる況や正像をや何に況や末法の初をや汝之を信ぜば正法に非じ。

問うて曰く經文並に天台章安等の解釈は疑網無し但し火を以て水と云い墨を以て白しと云う設い仏説為りと雖も信を取り難し、今數ば他面を見るに但人界に限つて余界を見ず自面も亦復是くの如し如何が信心を立てんや、答う數ば他面を見るに或時は喜び或時は瞋り或時は平に或時は貪り現じ或時は癡現じ或時は諂曲なり、瞋るは地獄・貪るは餓鬼・癡は畜生・諂曲なるは修羅・喜ぶは天・平かなるは人なり他面の色法に於ては六道共に之れ有り四聖は冥伏して現れざれども委細に之を尋ねば之れ有る可し。

問うて曰く六遣に於て分明ならずと雖も粗之を聞くに之を備うるに以たり、四聖は全く見えざるは如何、答えて曰く前には人界の六道之を疑う、然りと雖も強いて之を言つて相似の言を出だせしなり四聖も又爾るに可きか試みに道理を添加して万か一之をの宣べん所以に世間の無常は眼前に有り豈人界に二乗界無からんや、無顧の惡人も猶妻子を慈愛す菩薩界の一分なり、但仏界計り現じ難し九界を具するを以て強いて之を信じ疑惑せしむること勿れ、法華經の文に人界を説いて云く「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」涅槃經に云く「大乘を学する者は肉眼有りと雖も名けて仏眼と為す」等云云、末代の凡夫出生して法華經を信ずるは人界に仏界を具足する故なり。

問うて曰く十界互具の仏語分明なり然りと雖も我等が劣心に仏法界を具すること信を取り難き者なり今時之を信ぜずば必ず一闡提と成らん願くば大慈悲を起して之を信ぜしめ阿鼻の苦を救護したまえ。

答えて曰く汝既に唯一大事因縁の經文を見開して之を信ぜざれば釈尊より已下四依の菩薩並びに末代理即の我等
如何が汝が不信を救護せんや、然りと雖も試みに之を云わん仏に値いたてまつて覺らざる者阿難等の辺にして得道す
る者之れ有ればなり、其れ機に二有り一には仏を見たてまつり法華にして得道す二には仏を見たてまつらざれども法華に
て得道するなり、其の上仏教已前は漢土の道士月支の外道・儒教・四韋陀等を以て經と爲して正見に入る者之れ有り、
又利根の菩薩凡夫等の華嚴・方等・般若等の諸大乘經聞きし縁を以て大通久遠の下種
をする者多々なり例せば独覺の飛花落葉の如し教外の得道是なり、過去の下種結縁無き者の權小に執着する者は設い
法華經に値い奉れども小權のを見を出でず、自見を以て正義と爲るが故に通つて法華經を以て或小乘經に同じ或は
華嚴・大日經等に同じ或は之を下す、此等の諸師は儒家外道の賢聖より劣れる者なり、此等は且らく之を置く、
十界互具之を立つるは石中の花・木中の花信じ難けれども縁に値うて出生すれば之を信ず人界所具の仏界
は水中の火・火中の水最も甚だ信じ難し、然りと雖も竜火は水より出で竜水は火より生ず心得られざれども現証有れ
ば之を用ゆ、既に人界の八界之を信ず、仏界何ぞ之を用いざらん堯舜等の聖人の如きは万民に於て偏頗無し人界の
仏界の一分なり、不輕菩薩は所見の人に於て仏身を見る悉達太子は人界より仏身を成ず此等の現証を以て之を信ず
可きなり。

問うて曰く教主釈尊は此れより三惑已断の仏なり又十方世界の国主一切の菩薩・二乘・人天等の主君なり行の時梵天左に在
り帝釈右に侍り四衆・八部後に従い金剛前に導びき八万法蔵を演説して一切衆生を得脱せしむ是くの如き仏陀何を
もつわれらばんがこしん
以て我等凡夫の己心に住せしめんや、又迹門爾前の意を以て之を論ずれば教主釈尊は始成正覺の仏なり、過去の因行
を尋ね求れば或能施太子或は儒童菩薩或は尸毘王或は薩た王子或は三祇百劫、或は
動塵劫或は無量阿僧祇劫或は初発心時或は三千塵点等の間七万五千・六千・七千等の仏を供養し劫を積み

行満じて今の教主釈尊と成り給う、是くの如き因位の諸行は皆我等が己身所見の菩薩界の功德か、果位を以て之を論ずれば教主釈尊は始成正覺の仏四十年の間四教の色身を示現し爾前・迹門・涅槃等を演説して一切衆生を利益し給う、所謂華藏の時・十万台上の虞舍那・阿含經の三十四心・断結成道の仏、方等・般若の千仏等、大日・金剛頂の千二百余尊、並びに迹門・宝塔品の四士色身、涅槃經の或は丈六と見る或は小身大身と現じ或いは虞舍那と見る或いは身虚空に同じと見る四種の身乃至八十御入滅舍利を留めて正像末を利益し給う、本門を以て之を疑わば教主釈尊は五百塵点已前の仏なり因位も又是くの如し、其れより已来十方世界に分身し一代聖教を演説して塵数の衆生を教化し給う、本門の所化を以て迹門の所化に比較すれば一たいと大海と一塵と大山とな、本門の一菩薩を迹門・十万世界の文殊・觀音等に対向すれば猴猿を以て帝釈に比するに尚及ばず、其の外十方世界の断惑証果の二乗並びに梵天帝釈・日月・四天・四輪王乃至無間・大城の大火等比等は皆我が一念の十界か己身の三千か、仏説為りといえども之を信ず可からず。

此れを以て之を思うに爾前の諸經は実事なり実語なり、華嚴經に云く「究竟して虚妄を離れ染無きこと虚空の如し」と仁王經に云く「源を窮め性を尽して妙智存せり」と金剛般若經に云く「清淨の善のみ有り」と馬鳴菩薩の起信論に云く「如来藏の中に清淨の功德のみ有り」と天親菩薩の唯識論に云く「請く余の有漏と劣の無漏と種は金剛喻定が現在前する時極円明純淨の本識を引く彼の依に非ざるが故に皆永く喜捨す」と等云、爾前の諸經と法華經と之を校量するに彼の諸經は無数なり時説既に長し一仏二言彼に付く可し、馬鳴菩薩は律法藏第十一にして仏記に之れ有り天親は千部の論師、四依の大師なり、天台大師は辺鄙の小僧にして一論をも宣べず誰か之を信ぜん、其の上多を捨て小に付くとも法華經の文分明ならば少し恃怙有らんも法華經文に何れの所にか十界互具・百界千如・一念三千の分明なる証文之れ有りや、随つて經文を開拓するに「断諸法中惡」と等云、天親菩薩の

法華論 堅慧菩薩の宝性論に十界互具之れ無く漢土南化の諸大人師 日本七寺の末師の中にも此の義無し但天台一人の
僻見なり伝教一人の謬伝なり、故に清涼国師の云く「天台の謬りなり」憲苑法師の云く「然るに天台は小乗を呼んで
三藏教と為し其の名謬濫するを以て」等云云、了洪が云く「天台独り未だ華嚴の意を尽さず」等云云、得一が云く「咄い
かな智公汝は是れ誰が弟子ぞ、三寸に足らざる舌根を以て覆面説の所説の教時を謗す」等云云、弘法大師の云く「震旦の
人師等諍つて醍醐を盗んで各自宗に名く」等云云、夫れ一念三千の法門は一代の権実の名目を削り四依の諸論師其の義
を載せず漢土日域の人師も之を用いず、如何が之を信ぜん。

答えて曰く此の難最も甚し最も甚し但し諸經と法華との相違は經文より事起つて分明なり末頭と已頭と証明と
舌相と二乗の成不と始成と久成と等之を頭わす、諸論師の事、天台大師云く「天親・竜樹・内鑑冷然たり外には時の宜き
に適い各権に拠る所あり、而るに人師偏に解し學者苛も執し遂に矢石を興し各一辺を保ちて大に聖道に乖けり」等云
云、章安大師云く「天竺の大論尚其の類に非ず真旦の人師何ぞ勞わしく語るに及ばん此れ誇耀に非ず法相の然らしむる
のみ」等云云、天親・竜樹・馬鳴・堅慧等は内鑑冷然なり然りと雖も時未だ至らざるが故に之を宣べざるか、人師に於ては
天台已前は或は珠を含み、或は一向に之を知らず已後の人師、或は初に之を破して後に
帰伏する人有り、或は一向用いざる者も之れ有り但し断諸法中惡の經文を會す可きなり、彼は法華經に爾前の經文を
載するなり往いて之を見るに經文分明に十界互具之を説く所謂「欲令衆生開仏知見」等云云、天台此の經文を承けて
云く「若し衆生に仏の知見無んば何ぞ開を論ずる所あらん当に知るべし仏の知見衆生に蘊在すること」云
云、章安大師の云く「衆生に若し仏の知見無くんば何ぞ開悟する所あらん若し貧女に蔵無んば何ぞ示す所あらんや」等
云云。

但し会し難き所は上の教主釈尊等の大難なり、此の事を仏遮会して云く「已今当説最為難信難解」と次下の六難九易

是なり、天台大師云く「二門・悉く昔と反すれば、信じ難く解し難し。鉾に当るの難事なり」章安大師の云く「仏此れを將つて大事と為す。何ぞ解し易きことを得可けんや」伝教大師云く「此の法華經は最も為れ難信難解なり。隋自意の故に」等云云。夫れ仏より滅後に至る一千八百余年。三國に經歷して但三人のみ有つて始めて此の正法を覺知せり。所謂月支の釈尊・真旦の智者大師・日域の伝教此の三人は内典の聖人なり、問うて曰く竜樹・天親等は如何、答えて曰く此等の聖人は知つて之を言わざる仁なり、或は迹門の一分之を宣べて、本門と觀心とを云わず。或は機有つて時無きか、或は機と時と共に之れ無きか、天台・伝教已後は之を知る者多きなり。一聖の智を用ゆるが故なり所謂三論の嘉祥・南三・北七の百余人・華嚴宗の宝蔵・清涼等・法相宗の玄奘・三蔵・慈恩大師等・真言宗の善無畏・三蔵・金剛智・三蔵・不空・三蔵等、律宗の道宣等、初には反逆を存し、後には一向に歸伏せしなり。

但し初の大難を遮せば無量義經に云く「譬えば國王と夫人と新たに王子を生ぜん若し一日若し二日若し七日に至り若し一月若し二月若し七月に至り若し一歳若し二歳若し七歳に至り復國事を領理すること能わずと雖も已に臣民に宗敬せられ諸の大王の子以て伴侶と為らん、王及び夫人の愛心偏に重くして常にと共に語らん所以は何ん稚小なるを以ての故にと云うが如く、善男子是の持經者も亦復是くの如し、諸仏の國王と是の經の夫人と和合し

て共に是の菩薩の子を生ず若し菩薩是の經を聞くことを得て若しは一句若しは一偈若しは一転若しは二転若しは十若しは百若しは千若しは万若しは億万恒河沙・無量無數転せば復真理の極を体すること能わずと雖も、乃至已に一切の四衆・八部に宗仰せられ諸の大菩薩を以て眷屬と為し乃至常に諸仏に護念せられ慈愛偏に覆われん新学なるを所ての故なり」等云云、普賢經に云く「此の大乗經典は諸仏の宝蔵十万三世の諸仏の眼目なり乃至三世の諸の如来を出生する種なり乃至汝大乘を行じて仏種を断ぜざれ」等云云、又云く「此の方等經は是れ諸仏の眼なり諸仏是に因つて五眼を具することを得、仏の三種の身は方等従り生ず是れ大法印にして涅槃海に印す此くの如き

かいちゅうよ

海中能く三者の仏の清淨身を生ず此の三種の身は人天の福田なり」等云云。

夫れ以れば・釈迦如来の一代・顯密・大小の二教・華嚴・眞言等の諸宗の依経往いて之を勧づるに・或は十方台葉・

毘盧遮那仏・大集雲集の諸仏如来・般若・染淨の千仏・示現・大日・金剛・頂等の千二百尊・但其の近因・近果を演説して其の遠

因果を顯さず、速疾頓成之を説けども三五の速化を亡失し化導の始終跡を削りて見えず、華嚴經・大日經等は・一往之を

見るに別円四藏等に似たれども再往之を勧づれば・藏通二教に同じて未だ別円にも及ばず・本有の三因之れ無し何を以てか

仏の種子を定めん、而るに新訳の訳者等・漢土に來入するの日・天台の一念三千の法門を見聞し

て・或は自ら所持の経經に添加し・或は天竺より受持するの由之を稱す、天台の學者等・或は自宗に同ずるを悦び・或は

遠きを費んで近きを蔑みし・或は旧を捨てて新を取り・魔心・愚心出來す、然りと雖も詮ずる所は・一念三千の仏種に非ずん

ば有情の成仏・木画二像の本尊は有名無実なり。

問うて曰く上の大難未だ其の会通を開かず如何。

答えて曰く無量義經に云く「未だ六波羅蜜を修行する事を得ずと雖も六波羅蜜自然に在前す」等云云、法華經に云く

「具足の道を聞かんと欲す」等云云、涅槃經に云く「薩とは具足に名く」云云、竜樹菩薩云く「薩とは六なり」等云云、

無依無得大乘四論・玄義記に云く「沙とは訳して六と云う胡法には六を以て具足の義と為すなり」吉藏疏に云く「沙とは

翻じて具足と為す」天台大師云く「薩とは梵語なり此には妙と翻ず」等云云、私に会通を

加えは本文を讀が如し爾りと雖も文の心は釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等・此の五字を受持

すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う、四大聲聞の領解に云く「無上宝聚・不求自得」云云、我等が己心の声聞界

なり、「我が如く等くして異なる事無し我が昔の所願の如き今は已に満足しぬ一切衆生を化して皆仏道に入らしむ」・

妙覺の釈尊は我等が血肉なり因果の功徳は骨髓に非ずや、宝塔品に云く「其れ能く此の經法を

護る事有らん者は則ち為れ我及び多宝を供養するなり、乃至亦復諸の来り給える化仏の諸の世界を莊嚴し光飾し給う

者を供養するなり」等云云、釈迦・多宝・十方の諸仏は我が仏界なり其の跡を紹繼して其の功德を受得す「須臾も之を聞

く即ち阿耨多羅三藐三菩提を究竟するを得んとは是なり、寿量品に云く「然るに我実に成仏してより已来、無量無辺

百千万那由佗劫なり」等云云、我等が己心の釈尊は五百塵点劫乃至所顯の三身にして無始の古仏なり、經に云く「我本

菩薩の道を行じて、成ぜし所の寿命、今猶未だ尽きず復上の数に倍せり」等云云、我等が己心の菩薩等なり、地涌千界の

菩薩は己心の釈尊の眷属なり、例せば大公・周公旦等は周武の臣下、成王幼稚の眷属、武内の大匠は神功皇后の棟梁、仁

徳王子の臣下なるが如し、上行・無辺行・淨行・安立行等は我等が己心の菩薩なり、妙薬大師云く「当に知るべし身土

一念の三千なり故に成道の時此の本理に稱うて一身一念法界に遍し」等云云。

夫れ始め寂滅道場・華藏世界より沙羅林に終るまで五十余年の間・華藏・密嚴・三变・四見等の三十四土は皆成劫の上

の無常の土に変化する所の方便・実報・寂光・安養・淨瑠璃・密嚴等なり能變の教主涅槃に入りぬれば所變の諸仏随つて

滅尽す土も又以て是くの如し。

今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の淨土なり仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜず所化以て同体

なり此れ即ち己心の三千具足・三種の世間なり迹門十四品には未だ之を説かず法華經の内に於ても時機未熟の故なる

か。

此の本門の肝心南無妙法蓮華經の五字に於ては仏・猶・文・殊・薬王等にも之を付属し給わず何に況や其の已外をや但地涌

千界を召して八品を説いて之を付属し給う、其の本尊の爲体本師の娑婆の上に宝塔空に居し塔中の妙法蓮華經の左右に

釈迦牟尼仏・多宝仏・釈尊の脇土上行等の四菩薩・文殊・弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し迹化他方の大小の諸

菩薩は万民の大地に処して雲閣月卿を見るが如く十方の諸仏は大地の上に処し給う迹仏迹土を表する故なり、是くの

如き本尊は在世五十年に之れ無し八年の間にも但八品に限る、正像二千年の間は小乗の釈尊は迦葉阿難を脇士となし権大乘並に涅槃法華經の迹門等の釈尊は文殊普賢等を以て脇士と為す此等の仏をば正像に造り画けども未だ寿量の仏有さず、末法に來入して始めて此の仏像出現せしむ可き。

問う正像二千余年の間は四依の菩薩並びに人師等余仏・小乗・權大乘・爾前・迹門の釈尊等の寺塔を建立すれども本門・壽量品の本尊並びに四大菩薩をば三国の王臣俱に未だ之を崇重せざる由之を申す、比の事粗之を聞くと雖も前代未聞の故に耳目を驚動し心意を迷惑す請う重ねて之を説け委細に之を聞かん。

答えて白く法華經一部八卷二十八品進んでは前四味退いては涅槃經等の二代の諸經惣じて之を括るに但一經なり始め寂滅道場より終り般若經に至るまでは序分なり無量義經法華經普賢經の十卷は正宗なり涅槃經等は流通分なり、正宗十卷の中において亦序正流通有り無量義經並に序品は序文なり、方便品より分別功德品の十九行の偈に至るまで十五品半は正宗分なり、分別功德品の現在の四信より普賢經に至るまでの十一品半と一卷は流通分なり。

又法華經等の十卷に於ても二經有り各序正流通を具するなり、無量義經と序品は序分なり方便品より人記品に至るまでの八品は正宗分なり、法師品より安樂行品に至るまでの五品は流通分なり、其の教主を論ずれば始成正覺の仏、本無今有の百界千如を説いて已今當に超過せる隨自意難信難解の正法なり、過去の結縁を尋れば大通十六の時、仏果の下種を下し進んでは華嚴經等の前四味を以て助經と為して大通の種子を覺知せしむ、此れは仏の本意に非ず但毒發等の二分なり、二乘凡夫等は前四味を縁と為し漸漸に法華に來至して種子を顕わし開顯を遂ぐるの機是なり、又在世に於て始めて八品を聞く人天等、或は一句一偈等を聞て下種とし、或は熟し、或は脱し、或は普賢・涅槃等に至り、或は正像未等に小權等を以て顔と為して法華に入る例せば在世の前四味の者の如し。

又本門十四品の一經に序正流通有り涌出品の半品を序分と為し壽量品と前後の二半と此れを正宗と為す其の余は流通分なり、其の教主を論ずれば始成正覺の釈尊に非ず所説の法門も亦天地の如し十界久遠の上に国土世間既に顕われ一念三千殆んど竹膜を隔つ又迹門並びに前四味・無量義經・涅槃經等の三説は悉く隨他意の易信易解・本門は三説の外の難信難解・隨自意なり。

又本門に於て序正流通有り過去大通仏の法華經より乃至現在の華嚴經乃至迹門十四品涅槃經等の一代五十余年の諸經・十方三世諸仏の微塵の經經は皆壽量の序分なり一品二半よりの外は小乗教・邪教・未得道教・覆相教と名く、其の機を論ずれば德薄垢重・幼稚・貧窮・孤露にして禽獸に同ずるなり、爾前・迹門の円教尚仏因に非ず何に況や大日經等の諸小乗經をや何に況や華嚴・眞言等の七宗等の論師・人師の宗をや、与えて之を論ずれば前三教を出でず奪つて之を云えば藏通に同ず、設い法は甚深と称すとも未だ種熟脱を論ぜず還つて灰断に同じ化の始終無しとは是なり、皆えは王女たりと雖も畜種を懷妊すれば其の子旃陀羅に劣れるが如し、此等は且く之を闔く迹門十四品の正宗の八品は二往之を見るに二乗を以て正と為し菩薩・凡夫を以て傍と為す、再往之を勸うれば凡夫・正像末を以て正と為す正像末の三時の中にも末法の始を以て正が中の正と為す、問うて曰く其の証如何ん、答えて

曰く法師品に云く「而も此の經は如来の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」宝塔品に云く「法をして久住せしむ乃至來れる所の化仏当に此の意を知るべし」等、勸持安樂等之を見る可し迹門是くの如し、本門を以て之を論ずれば一向に末法の初を以て正機と為す所謂一往之を見る時は久種を以て下種と為し大通前四味迹門を熟と為して本門に至つて等妙に登らしむ、再往之を見れば迹門には似ず本門は序正流通俱に末法の始を以て終と為す、

在世の本門と末法の始は一同に純円なり但し彼は脱此れは種なり彼は一品二半此れは但題目の五字なり。

問うて曰く其の証文如何、答えて云く涌出品に云く「爾の時に他方の国土の諸の來れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の數に

過ぎたる大衆の中に於て起立し合掌し礼を作して仏に白して言さく、世尊若し我等に仏の滅後に於て娑婆世界に在つて勤加精進して是の經典を護持し誦誦し書寫し供養せんことを聴し給わば當に此の土に於て広く之を説きたてまつるべし、爾の時に仏、諸の菩薩摩訶薩衆に告げ給わく止ね善男子・汝等が此の經を護持せんことを須いしし等云云、法師より已下五品の經文前後水火なり、宝塔品の末に云く「大音声を以て普く四衆に告ぐ誰か能く此の娑婆国土に於て広く妙法華經を説かんものなる」等云云、設い教主一仏為りと雖も之を奨勸し給わば藥王等の大菩薩、梵帝、日月、四天等は之を重んず可き処に多宝仏・十方の諸仏客仏と為て之を諫曉し給う、諸の菩薩等

は此の慇懃の付属を聞いて「我不愛身命」の誓言を立つ、此等は偏に仏意に叶わんが為なり、而るに須臾の間に仏語相違して過八恒沙の此の土の弘經を制止し給う進退惟れ谷まり凡智に及ばず、天台智者大師前三後三の六釈を作つて之を會し給えり、所詮迹化他方の大菩薩等に我が内証の壽量品を以て授与すべからず末法の初は謗法の国にして惡機なる故に之を止めて地湧千界の大菩薩を召して壽量品の肝心たる妙法蓮華經の五字を以て閻浮の

衆生に授与せしめ給う、又迹化の大衆は釈尊初發心の弟子等に非ざる故なり、天台大師云く「是れ我が弟子なり応に我が故を弘むべし」妙樂云く「子父の法を弘む世界の益有り」、輔正記に云く「法是れ久成の法なるを以ての故に久成の人に付す」等云云。

又弥勒菩薩疑請して云く經に云く「我等は復仏の髓宜の所説、仏所出の言未だ曾て虚妄ならず、仏の所知は皆悉く通達し給えりと信ず」と雖も、然も諸の新發意の菩薩、仏の滅後に於て若し是の語を聞かば、或は信受せずして法を破する罪業の因縁を起さん。唯然り世尊、願わくは為に解説して我等が疑を除き給え及び未來世の諸の善男子此の事を聞き已りならば、亦疑を生ぜじ」云云。文の意は壽量の法門は滅後の為に之を請ずるなり、壽量品に云く「或は本心を失える或は失わざる者あり。乃至、心を失わざる者は比の良藥の色香、俱に好きを見て即便之を服するに病尽く、

除癒ぬ^{のぞりいぬ}等云云、久遠下種大通結縁乃至前四味迹門等^{くおんげしゅだいつけちえんないしぜんしみやくもん}の一切の菩薩・二乘人天等の本門に於て得道する是なり、經に云く「余の心を失える者は其の父の來れるを見て亦歡喜し、問訊して病を治せんことを求むと雖も、然も其の藥を与つるに而も肯えて服せず、所以は何ん。毒氣深く入つて本心を失えるが故に此の好き色香ある藥に於て美からずと謂えり。乃至、我今当に方便を設け此の藥を服せしむべし、乃至是の好き良藥を今留めて此に在く汝取つて服す可し、差じと憂うること勿れ、是の教を作し已つて復他國に至つて使を遣わして還つて告ぐ」等云云、分別功德品に云く「惡世末法の時」等云云。

問つて曰く此の經文の遣使還告は如何、答えて曰く四依なり四依に四類有り、小乘の四依は多分は正法の前の五百年に出現す、大乘の四依は多分は正法の後の五百年に出現す、三に迹門の四依は多分は像法一千年少分は末法の初なり、四に本門の四依は地涌千界末法の始に必ず出現す可し今の遣使還告は地湧なり是好良藥とは寿量品の肝要たる名体宗用教の南無妙法蓮華經是なり、此の良藥をば仏猶迹化に授与し給わず何に況や他方をや。

神力品に云く「爾の時に千世界微塵等の菩薩摩訶薩の地より涌出せる者皆仏前に於て一心に合掌し尊顔を胆仰して仏に白して言さく世尊我等 仏の滅後 世尊分身の所在の国土 滅度の処に於て當に広く此の經を説くべし」等云云、天台の云く「但下方の発誓のみを見たり」等云云、道暹云く「付屬とは此の經をば唯下方涌出の菩薩に付す何が故に爾る法是れ久成の法なるに由るが故に久成の人に付す」等云云、夫れ文殊師利菩薩は東方金色世界の不動仏の弟子觀音は西方無量寿仏の弟子・藥王菩薩は日月淨明德仏の弟子・普賢菩薩は宝威仏の弟子なり一往釈尊の行化を扶けん為に娑婆世界に來入す又爾前・迹門の菩薩なり本法所持の人に非れば末法の弘法に足らざる者か、經に云く「爾の時に世尊乃至一切の衆の前に大神力を現じ給う広長舌を出して上梵世に至らしめ乃至十方世界衆の宝樹の下師子の座の上の諸仏も亦復是くの如く広長舌を出し給う」等云云、夫れ顯密二道・一切の大小乗經

の中に釈迦諸仏並び坐し舌相梵天に至る文之無し、阿弥陀經の広長舌相三千を覆うは有名無実なり、般若經の舌相三千光を放つて般若を説きしも全く証明に非ず、此は皆兼常の故に久遠を覆相する故なり、是くの如く十神力を現じて地涌の菩薩に妙法の五字を囑累して云く、經に曰く「爾の時に仏・上行等の菩薩大衆に告げ給わく諸仏の神力は是くの如く無量無辺不可思議なり若し我れ是の神力を以て無量無辺百千万億阿僧祇劫に於て囑累の爲

の故に此の經の功德を説くとも猶尽すこと能わじ要を以て之を言わば如來の一切の所有の法如來の一切の自在の神力・如來の一切の秘要の蔵如來の一切の甚深の事皆此の經に於て宣示顯説す等云云、天台云く「爾時仏告上行より下は第三結要付屬なり」云云、傳教云く「又神力品に云く以要言之如來一切所有之法乃至宣示顯説經文明かに知んぬ果分の一切の所有の法果分の一切の自在の神力果分の一切の秘要の蔵果分の一切の甚深の事皆法華に於て宣示顯説するなり」等云云、此の十神力は妙法蓮華經の五字を以て上行・安立行・淨行・無辺行等の

四大菩薩に授与し給うなり前の五神力は在世の爲後の五神力は滅後の爲なり、爾りと雖も再往之を論ずれば一向に滅後の爲なり、故に次下の文に云く「仏滅度の後に能く此の經を持たんを以ての故に諸仏皆歡喜して無量の神力を現じ給う」等云云。

次下の囑累品に云く「爾の時に釈迦牟尼仏法座より起つて大神力を現じ給う右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩で乃至今以て汝等に付屬す」等云云、地涌の菩薩を以て頭と爲して迹化他力乃至・梵釈・四天等に此の經を囑累し給う・十方より来る諸の分身の仏各本土に還り給う乃至多宝仏の塔還つて故の如くし給う可し等云云、藥王品已下乃至涅槃經等は地涌の菩薩去り了つて迹化の衆他方の菩薩等の爲に重ねて之を付屬し給う拾遺囑是なり。

疑つて云く正像二千年の間に地涌千界閻浮提に出現して此の經を流通するや、答えて曰く爾らず、驚いて云く法華經並びに本門は仏の滅後を以て本と爲して先ず地涌に之を授与す何ぞ正像に出現して此の經を弘通せざるや、答

えて云く宜^いふず、重^{かさ}ねて問^いうて云く如何^{いかん}、答^{こた}う之^{これ}を宣^{のたま}ふず、又重^{かさ}ねて問^いう如何^{いかん}、答^{こた}えて曰^{いは}く之^{これ}を宣^{のたま}ふれば一切世間の諸人^{しよじん}、威音王^{いおんおう}の末法^{まっぽう}の如^{ごと}く又我が弟子^{でし}の中にも粗^ほ之^{これ}を説^みかば皆誹謗^{ひいぼう}を為^なす可^べし默止^{もくし}せんのみ、求め

て云く説^{いわ}かずんば汝慳貪^{なんじんけんどん}に墮^だせん、答^{こた}えて曰^{いは}く進退^{しんたい}惟^きれ谷^{きや}れり試^まみに粗^ほ之^{これ}を説^みかん、法師品^{ほうしほん}に云く況^{いは}んや滅度^{めつど}の後^ごをや、寿量品^{じゆりやうばん}に云く今留^{いまど}めて此^{こゝ}に在^あく、分別功德品^{ぶんべつくどく}に云く惡世末法^{あくせまっぽう}の時^{とき}、藥王品^{やくおうほん}に云く後^ごの五百歲闍浮提^{えんぶだい}に於^{おい}て広宣^{くわうせん}流布^{りふ}せん、涅槃經^{ねはんぎやう}に云く譬^{たと}えば七子^{しちこ}あり父母^{ふぼ}平等^{びやうどう}ならざるに非^あざれども然^{しか}れども病者^{びやうしや}に於^{おい}て心^{こゝろ}

則^{すなわ}ち偏^{ひとえ}に重^{おも}きが如^{ごと}し、等^{ひとし}云云、已^い前の明鏡^{めいけい}を以^{もつ}て仏意^{ぶつゐ}を推^す知^ちするに仏^{ぶつ}の出世^{しゅつじ}は靈山^{りやうざん}八年^{はつねん}の諸人^{しよじん}の爲^{ため}に非^{あら}ず正像末^{しやうざうまつ}の人の爲^{ため}なり、又正像^{しやうざう}二千年^{にせんねん}の人の爲^{ため}に非^{あら}ず末法^{まっぽう}の始め予^よが如^{ごと}き者の爲^{ため}なり、然^{しか}れども病者^{びやうしや}に於^{おい}いてと云^{いは}ふは滅後^{めつご}法華經誹謗^{ほけきやうひぼう}の者を指^さすなり、今留^{いまど}在此^{こゝ}とは、於此好色香藥^{おこじしきかうやく}而謂^{いつ}不美^{ふみ}の者を指^さすなり。

地涌千界^{じゆせんがい}正像^{しやうざう}に出^いでざることは正法^{しやうぽう}一千年^{いつせんねん}の間は小乘^{じやうじやう}・權大乘^{ごんじやうじやう}なり機時^{きとき}共に之^{これ}無く四依^{しえ}の大士^{だいし}小權^{じやうごん}を以^{もつ}て縁^{えん}と爲^なして在世^{ざいせ}の下種^{げしゆ}之^{これ}を脱^{だつ}せしむ謗^{ぼう}多くして熟益^{じゆくやく}を破^{やぶ}る可^べき故^{ゆゑ}に之^{これ}を説^みかず例^{れい}せば在世^{ざいせ}の前四味^{ぜんしゐ}の機根^{きこん}の如^{ごと}し、像法^{ざうぽう}の中^{ちゆう}末^{まつ}に觀音^{くわんおん}・藥王^{やくおう}・南岳^{なんがく}・天台^{てんだい}等^{どう}と示現^{じげん}し出現^{しゆげん}して迹門^{しやくもん}を以^{もつ}て面^{めん}と爲^なして本門^{ほんもん}を以^{もつ}て裏^{うら}と爲^なして百界千如^{ひやくかいせんじよ}・一念三千^{いちねんさんぜん}其^その義^ぎを尽^きせり、但理具^{だんりぐ}を論^{ろん}じて事行^{じぎやう}の南無妙法蓮華經^{なむみやうほうれんげきやう}の五字^{ごじ}並びに本門^{ほんもん}の本尊^{ほんそん}未^{いま}だ広^{ひろ}く之^{これ}を行^なぜず所詮^{しよせん}円機^{えんき}有^あつて円時^{えんじ}無^なき故^{ゆゑ}なり。

今末法^{いままっぽう}の初小^{はつしやう}を以^{もつ}て大^{だい}を打^{うち}ち權^{ごん}を以^{もつ}て実^{じつ}を破^はし東西^{とうし}共に之^{これ}を失^{うしな}いて天地顛倒^{てんちてんどう}せり迹化^{しやくけ}の四依^{しえ}は乱^{みだ}れて現前^{げんぜん}せず諸天^{しよてん}其^その國^{こく}を棄^すて之^{これ}を守護^{しご}せず、此^{こゝ}の時地湧^ほの菩薩^{ぼさつ}始めて世^よに出現^{しゆげん}し但妙法蓮華經^{みやうほうれんげきやう}の五字^{ごじ}を以^{もつ}て幼稚^{ちやうし}に服^{ふく}せしむ、因謗^{だあく}墮^だ惡^{あく}必^{かならず}因^よ得益^{とくやく}とは是^{こゝ}なり、我が弟子^{でし}之^{これ}を推^おえ地涌千界^{じゆせんがい}は教主^{きやうしゆ}釈尊^{しやくそん}の初發心^{しよはつしん}の弟子^{でし}なり寂滅^{じやくめつ}道場^{だうぢやう}に來^きらず林^{そうつしん}最後^{さいご}にも訪^{まじ}わ

ず不孝^{ふきやう}の矢^や之^{これ}れ有^あり迹門^{しやくもん}の十四品^{じしゆひん}にも來^きらず本門^{ほんもん}の六品^{りくひん}には座^ざを立^たつ但人品^{だんにん}の問^{もん}に來^き還^{えん}せり、

かく是くの如き高貴の大菩薩・三仏に約束して之を受持す末法の初に出で給わざる可きか、当に知るべし此の四菩薩折伏を現する時は賢王と成つて愚王を誠責し摂受を行ずる時は僧と成つて正法を弘持す。

問うて曰く仏の記文は云何答えて曰く「後の五百歳閻浮提に於て広宣流布せん」と、天台大師記して云く「後の五百歳遠く妙道に沾おわん」妙薬記して云く「末法の初冥利無きにあらず」伝教大師云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」等云云、末法太有近の釈は我が時は正時に非ずと云う意なり、伝教大師「日本にして末法の始を記して云く」代を語れば像の終り末の初地を尋れば唐の東・羯の西・人を原れば則ち五濁の生・鬪諍の時なり經に云く猶多怨嫉・況滅度後」と此の言良とに以有るなり」

此の釈に鬪諍の時と云云、今の自界叛逆・西海侵逼の一難を指すなり、此の時地涌千界出現して本門の釈尊を脇士と爲す一閻浮提第一の本尊此の国に立つ可し月支震旦に未だ此の本尊有さず、日本国の上宮・四天王寺を建立して未だ時来らざれば阿弥陀・他方を以て本尊と爲す、聖武天皇・東大寺を建立す、華嚴經の教主なり、未だ法華經の実義を顯さず、伝教大師粗法華經の実義を顯示す然りと雖も時未だ来らざるの故に東方の鵝王を建立して本門の四菩薩を顯わさず、所詮地涌千界の爲に此れを譲り与え給う故なり、此の菩薩・仏勅を蒙りて近く大地の下に在り正像に未だ出現せず末法にも又出で来り給わずば大妄語の大士なり、三仏の未來記も亦泡沫に同じ。

此れを以て之を惟うに正像に無き大地震・大彗星等出来す、此等は金翅鳥・修羅・竜神等の動変に非ず偏に四大菩薩を出現せしむ可き先兆なるか、天台云く「雨の猛きを見て竜の大なるを知り花の盛なるを見て池の深きことを知る」等云云、妙樂云く「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云、天晴れぬれば地明かなり法華を識る者は世法を得可きか。

一念三千を識らざる者には仏・大慈悲を起し五字の内に此の珠を裏み末代幼稚の首に懸けさしめ給う、四大菩薩の此の人を守護し給わんとこと大公・周公の文王を摂扶し四皓が惠帝に侍奉せしに異ならざる者なり。

ぶんえい
文永十年卯月二十五日

にちれんこれ しる
日蓮之を註す

四三 観心本尊抄送状
かんしんのほんぞんしやう

帷かたびら 一つ墨三長筆五官給び候うい了んぬ、観心かんじんの法門ほつもん少少これ之を注して大田殿・教信御房等ごぼう たてまつに奉る、此の事日蓮身にちれんに当た
る大事だいじなり之を秘これす、無二にふたへの志こころを見みば之これを開かいたく せらる可べきか、此の書なは難多なんく答少こたなし未聞の事なれば人耳目じんもくを驚動きやうどう
す可べきか、設たといい他見たに及ぶとも三人四人座さんにんしにんざを並ならべて之これを讀むこと勿なかれ、仏滅後ぶつめつ・二千二百二十余年未だ此の書この心有こころら
ず、国難なんを顧かえりみず五五百歳ごひゃくさいを期きして之これを演説えんぜつす乞こい願ねがくば一見いけんを歴来れきらいの輩やからは師弟してい共に靈山淨土りやうぜんじやうどに詣もつでて三仏さんぶつの顔貌げんみやうを
拝見はいけんしたてまつらん、恐恐きようきよう謹言きんげん。

ぶんえい
文永十年太齋卯月二十六日

日蓮 花押
かおう

とぎとのこへんじ
富木殿御返事

四四

撰時抄 せんじしやう

建治元年 がんねん

五十四歳御作

256P

釈子 にちれん 日蓮述ぶ

夫れ仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし、過去の大通智勝仏は出世し給いて十小劫が間・一経も説き給はず經に云く一坐十小劫又云く「仏時の未だ至らざるを知り請を受けて默然として坐す」等云云、今の教主釈尊は四十余年の程法華經を説き給はず經に云く「説く時未だ至らざるが故」と云云、老子は母の胎に処して八十年、弥勒菩薩は兜率の内院に籠らせ給いて五十六億七千万歳をまち給うべし、彼の時鳥は春ををくり鶏鳥は曉をまつ畜生すらなをかくのごとし何に況や仏法を修行せんに時を糾ざるべしや、寂滅道場の砌には十方の諸仏示現し一切の大菩薩集會し給い梵帝・四天は衣をひるがへ竜神・八部は掌を合せ凡夫大根性の者は耳をそばだて生身得忍の諸菩薩・解脱月等請をなし給いしかども世尊は二乗作仏・久遠実成をば名字をかくし即身成仏・一念三千の肝心、其義を宣べ給はず、此等は偏にこれ機は有りしかども時の来らざればのべさせ給はず經に云く「説く時未だ至らざる故」等云云、靈山會上の砌には閻浮第一の不孝の人たりし阿闍世大王座につらなり、一代謗法の提婆達多には天王如来と名をさづけ五障の竜女は蛇身をあらためずして仏になる、決定性の成仏は憍種の花さき果なり久遠実成は百歳の叟・二十五の子となれるかとうたがふ、一念三千は九界即仏界・仏界即九界と談ず、されば此の經の一字は如意宝珠なり一句は諸仏の種子となる此等は機の熟不熟はさてをきぬ時の至れるゆへなり、經に云く「今正しく是れ其の時なり決定して大乘を説かん」等云云。

問うて云く機にあらざるに大法を授けられば愚人は定めて誹謗をなして惡道に墮るならば豈説く者の罪にあらずや、

答えて云く人路をつくる路に迷う者あり作る者の罪となるべしや良医・薬を病人にあたう病人嫌いて服せずして死せば良医の失となるか、尋ねて云く法華經の第二に云く「無智の人の中に此の經を説くこと莫れ」同第四に云く「分布して妄りに人に授与すべからず」同第五に云く「此の法華經は諸仏如来の秘密の蔵なり、諸經の中

に於て最も其の上に在り長夜に守護して妄りに宣説せざれ」等云云、此等の經文は機にあらずば説かざれといつか、今は反詰して云く不輕品に云く「而も是の言を作さく我深く汝等を敬う等云云四衆の中に瞋恚を生じ心不淨なる者有り、惡口罵詈訾して言く是の無智の比丘。又云く衆人或は杖木瓦石を以て之を打擲す」等云云、勸持品に云く「諸の無智の人の惡口罵詈訾等し及び刀杖を加うる者有らん」等云云、此等の經文は惡口罵詈訾乃至打擲すれ

どもととかれて候は説く人の失となりけるか、求めて云く此の両説は水火なり、いかに心づべき答えて云く天台云く「時に適うのみ」章安云く「取捨宜きを得て一向にすべからず」等云云、釈の心は或る時は謗じぬべきにはしばらくとかず或る時は謗ずとも強て説くべし、或る時は一機は信ずべくとも万機謗くべくとくべからず、或る時は万機一同に謗ずとも強て説くべし、初成道の時は法慧・功德林・金剛幢・金剛藏・文殊・普賢・弥勒・解脱月等の大菩薩、梵帝・四天王等の凡夫・大根性の者かずをしらず、鹿野苑の苑には俱鄰等の五人・迦葉等の二百五十人・八万の諸天、方等大会の儀式には世尊の慈父の淨飯大王ねんごろに恋せさせ給いしかば仏宮に入らせ給いて觀仏三昧經をとかせ給い、悲母の御ために、利天に九十日が間籠らせ給いしには摩耶經をとかせ給う、慈父悲母などにはいかなる秘法か惜ませ給うべきなれども法華經をば説かせ給はずせんずるところ機にはよらず時いたらざればいかにもとかせ給はぬにや。

問うて云くいかなる時にか小乗・權經をときいかなる時にか法華經を説くべきや、答えて云く十信の菩薩より等覺の大士にいたるまで時と機とをば相知りがたき事なり何に況や我等は凡夫なり、いかに時機をしるべき、求め

て云くすこしも知る事あるべからざるか、答えて云く仏眼をかつて時機をかんがふ仏日を用て国土をてらせ、問うて云く其の心如何、答えて云く大集經に大覺世尊、月藏菩薩に對して未來の時を定め給えり所謂我が滅度の後の五百歳の中には解脱堅固、次の五百年には禪定堅固、一千年、次の五百年には誦誦多聞堅固、次の五百年には多造塔寺堅固、二千年、次の五百年には我法の中に於て鬭諍言訟して白法隱沒せん等云云、此の五の五百歳・二千五百余年に人人の料簡さまざまなり、漢土の道綽禪師が云く正像二千・四箇の五百歳には小乗と大乘との白法盛なるべし末法に入つては彼等の白法皆消滅して淨土の法門、念仏の白法を修行せん人計り生死をはなるべし、日本国の法然が料簡して云く今、日本国に流布する法華經、華嚴經並びに大日經諸の小乗經、天台、真言、律等の諸宗は大集經の記文の正像二千年の白法なり末法に入つては彼等の白法は皆滅尽すべし設け行ずる人ありとも一人も生死をはなるべからず、十住毘婆沙論と曇鸞法師の難行道道綽の末有一人得者、善導の千中無一これなり、彼等の白法隱沒の次には淨土三部經、弥陀・称名の一行ばかり大白法として出現すべし、此を行ぜん人人はいかなる惡人、惡人なりとも十即十生・百即百生、唯淨土の一門のみ有つて路に通入すべしとはこれなり、されば後世を願はん人人は觀山・東寺・園城・七大寺等の日本一州の諸寺、諸山の御歸依をとどめて彼の寺山によせをける田畠郡郷をつばいとつて念仏堂につけば決定往生南無阿弥陀仏とすめければ我が朝一同に其の義になりて今に五十余年なり、日蓮此等の惡義を難じやぶる事はことふり候いぬ、彼の大集經の白法隱沒の時は第五の五百歳当世なる事は疑ひなし、但し彼の白法隱沒の次には法華經の肝心たる南無妙法蓮華經の大白法の一閻浮提の内八万の国あり其の国に八万の王あり王王ごとに臣下並びに万民までも今、日本国に弥陀、称名を四衆の口口に唱うるがごとく広宣流布せさせ給うべきなり。

問うて云く其の証文如何、答えて云く法華經の第七に云く「我が滅度の後、後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に

於て断絶せしむること無けん」等云云、經文は大集經の白法隱没の次の時をとかせ給うに広宣流布と云云、同第六の巻に云く「惡世末法の時能く是の經を持つ者」等云云又第五の巻に云く「後の末世の法滅せんとする時」等又第四の巻に云く「而も此經は如来現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」又第五の巻に云く「一切世間怨多くして信じ難し」又第七の巻に第五の五百歳・鬪諍堅固の時を説いて云く「惡魔・魔民諸の天竜・夜叉・鳩槃荼等其の便を得ん」大集經に云く「我が法の中に於て鬪諍言訟せん」等云云、法華經の第五に云く「惡世の中の比丘」

又云く「或は阿蘭若に有り」等云云又云く「惡鬼其身に入る」等云云、文の心は第五の五百歳の時惡鬼の身に入る大僧等・國中に充滿せん其時に智人・一人出現せん彼の惡鬼の入る大僧等時の王臣万民等を語て惡口罵詈・杖木瓦礫・流罪・死罪に行はん時釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌の大菩薩らに仰せつけ大菩薩は梵帝・日月・四天等に申しくだされ其の時・天変地天盛なるべし、国主等其のいさめを用いずば鄰国にをほせつけて彼彼の国国の惡王

惡比丘等をせめらるるならば前代未聞の大鬪諍・一閻浮提に起るべし其の時・日月所照の四天下の一切衆生、或は国ををしみ、或は身ををしむゆへ一切の仏・菩薩にいのりをかくともしるしなくば彼のにくみする一の小僧を信じて無量の大家僧等八万の大王等、一切の万民皆頭を地につけ・掌を合せて一同に南無妙法蓮華經となうべし、

例せば神力品の十神力の時・十方世界の一切衆生一人もなく娑婆世界に向つて大音声をはなちて南無釈迦牟尼仏・南無釈迦牟尼仏・南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と一同にさけびしがごとし。

問うて曰く經文は分明に候・天台・妙樂・伝教等の未来記の言はありや、答えて曰く汝が不審・逆なり釈を引かん時こそ經論はいかにとは不審せられたれ經文に分明ならば釈を尋ねべからず、さて釈の文が經に相違せば經をすてて釈につくべきか如何、彼云く道理至極せり、しかれども凡夫の習・經は遠し釈は近し近き釈・分明ならばいますこし信心をますべし、今云く汝が不審なんごるなれば少少釈をいだすべし天台大師云く「後の五百歳遠く妙道に

沾わん「妙樂大師云く」末法の初め冥利無きにあらず「伝教大師云く」正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乗の機今正しく是れ其の時なり、何を以て知ることを得る、安樂行品に云く末世法滅の時なり「又云く」代を語れば則ち像の終り末の初め地を尋ねば唐の東・羯の西・人を原めれば五濁の生・鬭諍の時なり、經に云く猶多怨嫉・況滅度後と此の言良に以有るなり「云云、夫れ釈尊の出世は住劫第九の滅・人寿百歳の時なり百歳と十歳との中間在世五十年滅後二千年と一万年となり、其の中間に法華經の流布の時・二度あるべし所謂在世の八年・滅後には末法の始の五百年なり、而に天台・妙樂・伝教等は進んでは在世法華經の時にももれさせ給いぬ、退いては滅後末法の時にも生れさせ給はず中間なる事をなげかせ給いて末法の始をこひさせ給う御筆なり、例せば阿私陀仙人が悉達太子の生れさせ給いしを見て悲んで云く現生には九十にあまれり太子の成道を見るべからず後生には無色界に生れて五十年の説法の坐にもつらなるべからず正像末にも生るべからずとなげきしがごとし、道心あらん人人は此を見きて悦ばせ給え正像二千年の大王よりも後世ををもはん人人は末法の今の民にてこそあるべけれ此を信ぜざらんや、彼の天台の座主よりも南無妙法蓮華經と唱うる癡人とはなるべし、梁の武帝の願に云く「寧ろ提婆達多となて無間地獄には沈むとも鬱頭羅弗とはならじ」と云云。

問うて云く竜樹・天親等の論師の中に此の義ありや、答えて云く竜樹・天親等は内心には存ぜさせ給うといえども言には此の義を宣べ給はず、求めて云くいかなる故にか宣給ざるや、答えて云く多くの故あり一には彼の時にも機なし二には時なし三には迹化なれば付嘱せられ給はず、求めて云く願くは此の事よくよくきかんとをもつ、答えて云く夫仏の滅後二月十六日より正法の始なり迦葉尊者・仏の付嘱をつけて二十年、次に阿難尊者二十年

次に商那和修二十年・次に優婆崛多二十年・次に提多迦二十年、已上一百年が間は但小乘經の法門をのみ弘通して諸大乘經は名字もなし何に況や法華經をひろむべしや、次には弥遮迦・仏陀難提・仏駄密多・脇比丘・富那奢

等の四五人、前の五百余年が間は大乘經の法門少少出来せしかどもとりたてて弘通し給はず、但小乗經を面としてや
 みぬ、已上大乘經の先五百年解脫堅固の時なり、正法の後六百年已後一千年が前其の中間に馬鳴菩薩 毘羅尊者・竜樹
 菩薩 提婆菩薩 羅尊者 僧 難提 僧伽耶奢 鳩摩羅駄 闍夜那 盤陀 摩奴羅 鶴勒夜那 師子等の十余人の人人始には
 外道の家に入り次には小乗經をきわめ後には諸大乘經をもて諸小乗經をさんさんに破し失ひ給いき此等の大士等は
 諸大乘經をもて諸小乗經をば破せさせ給いしかども諸大乘經と法華經の勝劣をば分明にかかせ給はず、設い勝劣
 をすこしかかせ給いたるやうなれども本迹の十妙・二乗作仏・久遠実成・已今当の妙・百界千如
 ・一念三千の肝要の法門は分明ならず、但或は指をもつて月をさすがごとくし、或は文にあたりてひとはし計りかかせ
 給いて化導の始終 師弟の遠近 得道の有無はすべて一分もみず、此等は正法の後五百年 大集經の禪定堅固の時にあ
 たり、正法一千年の後月氏に仏法充滿せしかども或は小をもて大を破し、或は權經をもつて実經を隱没し仏法さ
 まざまに乱れしかば得道の人やふやくすくなく仏法につけて惡道に墮る者かずをしらず、正法一千
 年の後、像法に入つて一十五年と申せしに仏法東に流れて漢土に入り、像法の前五百年の内、始の一百余年が間は
 漢土の道士と月氏の仏法と諍論していまだ事さだまらず設い定まりたりしかども仏法を信ずる人の心いまだふからず、
 而るに仏法の中に大小 權実 蹟密をわかたらず聖教一同ならざる故・疑をこりてかゝりて外典
 とともなう者もありぬべし、これらのをそれあるかのゆゑに摩騰竺蘭は自は知つて而も大小を分けず權実をいはずしてや
 みぬ、其の後魏 晉 齊 宋 梁の五代が間 仏法の内に大小 權実 蹟密をあらそひし程にいづれこそ道理ともきこえずし
 て上み一人より下も万民にいたるまで不審すくならず南三北七と申して仏法十流にわかれぬ所謂南には三時・四時・
 五時・北には五時・半滿・四宗・五宗・六宗、二宗の大乘一音等 各各義を立て辺執水火なり、しかれども大綱は一同なり
 所謂一代聖教の中には華嚴經第一 涅槃經第二 法華經第三なり法華經は阿含 般若・

浄名・思益等の経に對すれば眞実なり了義経・正見なりしかりといへども涅槃經に對すれば無常教・不了義経・邪見の経等云云、漢より四百余年の末五百年に入つて陳隋二代に智と申す小僧一人あり後には天台智者大師と号したてまつる、南北の邪義をやぶりて一代聖教の中には法華経第一・涅槃經第二・華嚴經第三なり等云云、此れ像法の前・五百歳・大集経の読誦多聞堅固の時にあひあたり、像法の後・五百歳は唐の始・太宗皇帝の御宇に玄奘三蔵・月支に入つて十九年が間、百三十箇国の等塔を見聞して多くの論師に値いたてまつりて八万聖教・十二部経の淵底を習いきわめしに其の中に二宗あり所謂法相宗・三論宗なり、此の二宗の中に法相・大乘は遠くは弥勒・無著近くは戒賢論師に伝えて漢土にかゝりて太宗皇帝にさづけさせ給う、此の宗の心は仏教は機に随つべし一乗の機のために三乗方便・一乗眞実なり所謂法華経等なり、三乗の機のためには三乗眞実・一乗方便所謂深密経・勝鬘経等此れなり、天台智者等は此の旨を弁えず等云云、而も太宗は賢王なり當時名を一天にひびかすのみならず三皇にもこえ五帝にも勝れたるよし四海にひびき漢土を手になぎるのみならず高昌・高麗等の一千八百余国をなびかし内外を極めたる王ときこへ賢王の第一の御帰依の僧なり、天台宗の学者の中にも頭をさしだす人・一人もなし、而れば法華経の実義すでに一国に隠没しぬ、同じき太宗の太子・高宗・高麗の継母・則天皇后の御宇に法蔵法師といふ者あり法相宗に天台宗のをそわるところを見て前に天台の御時せめられし華嚴経を取出して一代の中には華嚴第一・法華第二・涅槃第三と立てけり、太宗・第四代玄宗皇帝の御宇開元四年同八年に西天・印度より善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・大日経・金剛頂経・蘇悉地経を持て渡り眞言宗を立つ、此の宗の立義に云く教に二種あり一には釈迦の顕教所謂華嚴・法華等、二には大日の密教所謂大日経等なり、法華経は顕教の第一なり此の経は大日の密教に對すれば極理は少し同じけれども事相の印契と眞言とはたえてみず二密相応せざれば不了義経等云云、已上法相・華嚴・眞言の二宗一同に天台法華宗をやぶれども天台大師程の智人・法華宗の中になかりけ

るかの間、内内はゆはれなき由は存じけれども天台のごとく公場にして論ぜられざりければ上国王・大臣・下一切の人民にいたるまで皆仏法に迷いて衆生の得道みなとどまりけり、此等は像法の後の五百年の前二百余年が内なり、像法に入つて四百余年と申しけるに百済国より一切経並びに教主釈尊の木像・僧尼等日本国にわたる、漢土の梁の末陳の始にあひあたる、日本には神武天王よりは第三十代欽明天王の御宇なり、欽明の御子・用明の太子に上宮王子・仏法を弘通し給うのみならず並びに法華経・浄名経・勝鬘経を鎮護国家の法と定めさせ給ひぬ、其の後・人王第三十七代に孝徳天皇の御宇に三論宗・成実宗を觀勒僧正・百済国よりわたす、同御代に道昭法師・漢土より法相宗・俱舎宗をわたす、人王第四十四代元正天皇の御宇に天竺より大日経をわたして有りしかども而も弘通せずして漢土へかへる此の僧をば善無畏三蔵といひ、人王第四十五代に聖武天皇の御宇に審祥大徳・新羅国より華嚴宗をわたして良弁僧正・聖武天王にさづけたてまつりて東大寺の大仏を立てさせ給へり同御代に大唐の鑒真和尚・天台宗と律宗をわたす、其の中に律宗をば弘通し小乗の戒場を東大寺に建立せしかども法華宗の事をば名字をも申し出させ給はずして入滅し了んぬ、其後人王第五十代像法八百年に相当つて桓武天皇の御宇に最澄と申す小僧出来せり後には伝教大師と号したてまつる、始には三論・法相・華嚴・俱舎・成実・律の六宗並びに禪宗等を行表・僧正等に習学せさせ給ひし程に我と立て給へる国昌寺・後には比叡山と号す、此にして六宗の本経・本論と宗宗の人の釈とを引き合せて御らむありしかば彼の宗宗の人の釈・所依の經論に相違せる事多き上僻見多にして信受せん人皆惡道に墮ちぬべしとかんがへさせ給う其の上法華經の実義は宗宗の人人・我も得たり我も得たりと自讃ありしかども其の義なし、此れを申すならば喧嘩出来すべしもだして申さずば仏誓にそむきなんとをもひわづらはせ給ひしかども終に仏の誠ををそれて桓武皇帝に奏し給ひしかば帝・此の事ををどろかせ給いて六宗の碩学に召し合させ給う、彼の学者等始めは慢幢山のごとし惡心・毒蛇のやうなりしかども終に王の前にしてせめ

をとされて六宗・七寺一同に御弟子となりぬ、例せば漢土の南北の諸師陳殿にして天台大師にせめおとされて御弟子となりしがごとし、此れはこれ円定・円慧計りなり其の上天台大師のいまだせめ給はざりし小乗の別受戒をせめをとし六宗の八大徳に梵網經の大乗別受戒をさづけ給うのみならず法華經の円頓の別受戒を觀山に建立せしかば延暦円頓の別受戒は日本第一たるのみならず仏の滅後一千八百余年が間身毒戸那一閻浮提にいまだなかりし靈山の大戒にほんこく日本国に始まる、されば伝教大師は其の功を論ずれば竜樹天親にもこえ天台・妙楽にも勝れてをはします聖人なり、されば日本国の当世の東寺・園城・七大寺諸国の八宗・淨土・禪宗・律宗等の諸僧等誰人か伝教大師の円戒をそむくべき、かの漢土九国の諸僧等は円定・円慧は天台の弟子にたれども円頓一同の戒場は漢土になければ戒にをいては弟子とならぬ者もありけん、この日本国は伝教大師の御弟子にあらざる者は外道なり悪人なり、而れども漢土・日本の天台宗と真言の勝劣は大師心中には存知せさせ給いけれども六宗と天台宗とのごとく公場に於て勝負なかりけるゆへにや、伝教大師已後には東寺・七寺・園城の諸寺日本一州一同に真言宗は天台宗に勝れたりと上一人より下万人にいたるまでをばしめしをもえり、しかれば天台法華宗は伝教大師の御時計りにぞありける此の伝教の御時は像法の末・大集經の多造塔寺堅固の時なり、いまだ於我法中・闍諍言訟・白法隱没の時にはあたらす。今末法に入つて二百余歳・大集經の於我法中・闍諍言訟・白法隱没の時にあたれり仏語まことならば定んで一閻浮提に闍諍起るべき時節なり、伝え聞く漢土は三百六十箇国・二百六十余州はずでに蒙古国に打ちやぶられぬ華洛すでにやぶられて徽宗・欽宗の両帝・北蕃にいけどりにせられて鞭撻にして終にかくれさせ給いぬ、徽宗の孫・高宗皇帝は長安をせめをとされて田舎の臨安行在府に落ちさせ給いて今に数年が間京を見ず、高麗六百余国も新羅百濟等の諸国等も皆だいまちにく大蒙古国の皇帝にせめられぬ、今の日本国の壹岐對馬並びに九国のごとし闍諍堅固の仏語

地に墮ちず、あたかもこれ大海のしをの時をたがへざるがごとし、是をもつて案ずるに大集經の白法隱没の時に次いで法華經の大白法の日本国並びに一閻浮提に広宣流布せん事も疑うべからざるか、彼の大集經は仏說の中の權大乘ぞかし、生死をはなるる道には法華經の結縁なき者のためには未顕真実なれども六道・四生・三世の事を記し給ひけるは寸分もたがはざりけるにや、何に況や法華經は釈尊・要當說真実となのらせ給ひ多宝仏は真実なりと御判をそへ十方の諸仏は広長舌を梵天につけて誠諦と指し示し、釈尊は重ねて無虚妄の舌を色究竟に付けさせ給いて後・五百歳に一切の佛法の滅せん時・上行菩薩に妙法蓮華經の五字をもたしめて謗法一闡提の白癩病の輩の良薬とせん

と梵帝・日月・四天・竜神等に仰せつけられし金言虚妄なるべしや、大地は反覆すとも高山は頽落すとも春の後に夏は来らずとも日は東かゝるとも月は地に落つるとも此の事は一定なるべし、此の事一定ならば鬪諍堅固の時・日本国の王臣と並びに万民等が仏の御使として南無妙法蓮華經を流布せんとするを或は罵詈訾し或は惡口し或は流罪し或は打擲し弟子眷属等を種種の難にあわする人人いかでか安穩にては候べき、これをば愚癡の者は咒詛す

とをもひぬべし、法華經をひろむる者は日本国の一切衆生の父母なり章安大師云く「彼が為に惡を除くは即ち是れ彼が親なり」等云云、されば日蓮は当帝の父母・念佛者・禅衆・真言師等が師範なり又主君なり、而るを上一人より下万民にいたるまであだをなすをば日月いかでか彼等が頂を照し給うべき地神いかでか彼等の足を戴き給うべき、提婆達多は仏を打ちたてまつりしかば大地揺動して火災いでにき、檀弥羅王は師子尊者の頸を切りしかば右の手刀とともに落ちぬ、徽宗皇帝は法道が面になやきをやきて江南にながせしかば半年が内にゑびすの手にかかり給ひき、蒙古のせめも又かくのごとくなるべし、設い五天のつわものをあつめて鉄圀山を城とせりともかなふべからず必ず日本国の一切衆生・兵難に値うべし、されば日蓮が法華經の行者にてあるなきかはこれにても見るべし、教主釈尊記して云く末代惡世に法華經を弘通するものを惡口罵詈訾等せん人は我を一劫が間

あだせん者の罪にも百万億倍すぎたるべしととかせ給へり、而るを今の日本国の国主・万民等・雅意にまかせて父母・宿世の敵よりもいたくにくみ謀反・殺害の者よりもつよくせめぬるは現身にも大地われて入り天雷も身をさかざるは不審なり、日蓮が法華經の行者にてあらざるか。もししからばををきになげかし、今生には万人にせめられて片時もやすからず後生には惡道に墮ん事あさましとも申すばかりなし、又日蓮法華經の行者ならずばいかなる者の一乗の持者にてはあるべきぞ、法然が法華經をなげすてよ善導が千中無一道・綽が未有一人得者と申すが法華經の行者にて候か、又弘法大師の云く法華經を行ずるは戲論なりとかかれたるが法華經の行者なるべきか、經文には能持是經・能説此經などこそとかれて候へよくとと申すはいかなるぞと申すに於諸經中最在其上と申して大日經・華嚴經・涅槃經・般若經等に法華經はすぐれて候なりと申す者をこそ經文には法華經の行者とはとかれて候へもし經文のごとくならば日本国に仏法わたて七百余年、伝教大師と日蓮とが外は一人も法華經の行者はなきぞかし、いかにいかにとをもつところに頭破作七分口則閉塞のなかりけるは道理にて候いけるなり、此等は浅き罰なり但一人・二人等のことなり、日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり此れをそしり此れをあだむ人を結構せん人は閻浮第一の大難にあうべし、これは日本国をふりゆるがす正嘉の大地震・一天を罰する文永の大彗星等なり、此等をみよ仏滅後の後・仏法を行ずる者にあだをなすといへとも今のごとくの大難は一度もなきなり、南無妙法蓮華經と一切衆生にすすめたる人・一人もなし、此の徳はたれか一天に眼を合せ四海に肩をならぶべきや。

疑つて云く設い正法の時は仏の在世に対すれば根機劣なりとも像末に対すれば最上の上機なり、いかでか正法の始に法華經をば用いざるべき。随つて馬鳴・竜樹・提婆・無著等も正法一千年の内にこそ出現せさせ給へ天親菩薩は千部の論師・法華論を造りて諸經の中第一の義を存す真諦三蔵の相伝に云く月支に法華經を弘通せる家・五十余家・天親は其の一也と已上・正法なり、像法に入つては天台大師・像法の半に漢土に出現して玄と文と止との二十

巻を造りて法華經の淵底を極めたり、像法の末に伝教大師日本に出現して天台大師の円慧・円定の二法を我が朝に弘通せしむるのみならず円頓の大戒場を叡山に建立して日本一州皆同じく円戒の地になして上一人より下万民まで延暦寺を師範と仰がせ給う豈に像法の時法華經の広宣流布にあらずや、答えて云く如来の教法は必ず機に随うという事は世間の学者の存知なり、しかれども仏教はしからず・上根・上智の人のために必ず大法を説くならば初成道の時なんぞ法華經をとき給はざる正法の先五百年に大乘經を弘通すべし、有縁の人に大法を説かせ給うならば淨飯大王・摩耶夫人に觀仏三昧經・摩耶經をとくべからず、無縁の惡人・謗法の者に秘法をあたえずは覺徳比丘は無量の破戒の者に涅槃經をさづくべからず、不輕菩薩は誹謗の四衆に向つていかに法華經をば弘通せさせ給ひしぞ、されば機に随つて法を説くと申すは大なる僻見なり。

問うて云く竜樹・世親等は法華經の実義をば宣べ給わずや、答えて云く宣べ給はず、問うて云く何なる教をか宣べ給ひし、答えて云く華嚴・方等・般若・大日經等の権大乘・蹟密の諸經をのべさせ給いて法華經の法門をば宣べさせ給はず、問うて云く何をもつてこれをするや答えて云く竜樹菩薩の所造の論・三十万偈而れども尽して漢土・

日本にわたらざれば其の心しりがたしといえども漢土にわたれる十住毘婆娑論・中論・大論等をもつて天竺の論をも比知して此れを知るなり。

疑つて云く天竺に残る論の中にわたれる論よりも勝れたる論やあるらん、答えて云く竜樹菩薩の事は私に申すべからず仏記し給う我が滅後に竜樹菩薩と申す人・南天竺に出ずべし彼の人の所詮は中論といふ論に有るべしと仏記し給う、随つて竜樹菩薩の流天竺に七十家あり七十人ともに大論師なり、彼の七十家の人人は皆中論を本

とす中論四卷・二十七品の肝心は因縁所生法の四句の偈なり、此の四句の偈は華嚴・般若等の四教三諦の法門なりいまだほつかけいへさんたい法華開会の三諦をば宣べ給はず。

疑つて云く汝がごとくに料簡せる人ありや、答えて云く天台云く「中論を以て相比すること莫れ」又云く「天親・竜樹内鑒冷然して外は時の宜きに適う」等云云、妙樂云く「破会を論ぜば未だ法華に若かざる故に」云云、從義の云く「天親・天親未だ天台に若かず」云云、問うて云く唐の末に不空三蔵一卷の論をわたす其の名を菩提心論となづく竜猛菩薩の造なり云云、弘法大師云く「此の論は竜猛千部の中の第一肝心の論」と云云、答えて云く「此の論一部七丁あり竜猛の言ならぬ事処に多し故に目錄にも或は竜猛或は不空と両方にいまだ事定まらず、其上此の論文は一代を括れる論にもあらず荒量なる事此れ多し、先ず唯真言法中の肝心の文あやまりなり其の故は文証・現証ある法華經の即身成仏をばなきになして文証も現証もあとかたもなき真言經に即身成仏を立て候又唯という唯の一字は第一のあやまりなり、事のていを見るに不空三蔵の私につくりて候を時の人にをもくせさせんがために事を竜猛によせたるか其の上不空三蔵は誤る事かずをほし所謂法華經の觀智の儀軌に寿量品を阿弥陀仏とかける眼の前の大僻見陀羅尼品を神力品の次にをける屬累品を經末に下せる此等はいつかひなし、さるかともれば天台の大乗戒を盗んで代宗皇帝に宣旨を申し五台山の五寺に立てたり、而も又真言の教相には天台宗をすべしといえりかたがた誑惑の事どもなり、他人の訳ならば用ゆる事もありなん此の人の訳せる經論は信ぜられず、総じて月支より漢土に經論をわたす人・旧訳・新訳に一百八十六人なり羅什三蔵一人を除いてはいつれの人人もらざるはなし、其の中に不空三蔵は殊に誤多き上誑惑の心顯なり、疑つて云く何をもつて知るぞや羅什三蔵より外の人人はあやまりなりとは汝が禅宗・念仏・真言等の七宗を破るのみならず漢土・日本にわたる一切の訳者を用いざるかいかん、答えて云く此の事は余が第一の秘事なり委細には向つて問うべし、但しすこし申すべし羅什三蔵の云く我漢土の一切經を見るに皆梵語のごとくならずいかでか此の事を顯すべき、但し一の大願あり身を不淨になして妻を帶すべし舌計り清淨になして仏法に妄語せし我死なば必やくべし焼かん時舌焼けるなら

ば我が経をすてよと常に高座にしてとかせ給しなり、上一人より下万民にいたるまで願じて云く願くは羅什三蔵より後に死せんと、終に死し給つ後焼きたてまつりしかば不浄の身は皆灰となりぬ御舌計り火中に青蓮華生て其の上にあり五色の光明を放ちて夜は昼のごとく昼は日輪の御光をうばい給いき、さてこそ一切の訳人の経経は軽くなりて羅什三蔵の訳し給える経経殊に法華経は漢土にやすやすとひろまり給いしか。

疑つて云く羅什已前はしかるべし已後の善無畏不空等は如何、答えて云く已後なりとも訳者の舌の焼けるをばありけりとするべしされば日本国に法相宗のはやりたりしを伝教大師責めさせ給いしには羅什三蔵は舌焼けず玄奘慈恩は舌焼けぬとせめさせ給いしかば桓武天王は道理とをばして天台法華宗はうつらせ給いしなり、涅槃経の第三第九等をみまいらすれば我が仏法は月支より他国へわたらん時、多くの謬誤出来して衆生の得道

うすかるべしととかれて候、されば妙楽大師は並びに進退は人に在り何ぞ聖旨に關らんとこそあそばされて候へ今の人人にかに経のままに後世をねがうともあやまれる経経のままにねがはば得道もあるべからず、しかればとて仏の御とがにはあらじとかかれて候、仏教を習ふ法には大小権実顕密はさてをくこれこそ第一の大事にては候らめ。

疑つて云く正法一千年の論師の内心には法華経の実義の顕密の諸経に超過してあるよしはしろしめしながら外には宣説せずして但権大乘計りを宣べさせ給うことはしかるべしとはをばねども其の義はすこしきこえ候いぬ、像法一千年の半に天台智者大師出現して題目の妙法蓮華経の五字を玄義十卷・一千枚にかきつくし、文句

十卷には始め如是我聞より終り作礼而去にいたるまで一字一句に因縁・約教・本迹・觀心の四の釈をならべて又一千枚に尽し給う已上玄義・文句の二十卷には一切経の心を江河として法華経を大海にたとえ十方界の仏法の露一も漏さず妙法蓮華経の大海に入れさせ給いぬ、其の上天堂の大論の諸義・一点ももらさず漢土・南北の十師の義

破すべきをばこれをはし取るべきをば此れを用う、其の上止観十巻を注して一代の觀門を一念にすべ十界の依正を三千に
つづめたり、此の書の文体は遠くは月支・千年の間の論師にも超え近くは戸那・五百年の大師の釈にも勝れたり、故に
三論宗の吉藏大師・南北一百余人の先達と長者らをもて天台大師の講經を聞けと勸むる状に云く「千年の興五百の
実復今日に在り乃至南岳の叡聖・天台の明哲・昔は三業住持し今は二尊に紹係す豈止甘呂を震旦に灑ぐのみならん亦
當に法鼓を天竺に震うべし、生知の妙悟魏晉以来典籍風謡実に関連無し乃至禪衆一百余の僧と共に智者大師を奉請す」
等云云、修南山の道宣律師・天台大師を讃歎して云く「法華を照了すること高輝の
幽谷に臨むが若く摩訶衍を説くこと長風の太虚に遊ぶに似たり仮令文字の師千羣万衆ありて彼の妙弁を数め尋ぬとも
能く窮むる者無し、乃至義月を指すに同じ乃至宗一極に歸す」云云、華嚴宗の法藏大師・天台を讃して云く「思禪師智者
等の如き神異に感通して迹登位に参わる靈山の聴法憶い今に在り」等云云、真言宗の不空三藏・含光法師等師弟共に
真言宗をすて天台大師に帰伏する物語に云く高僧伝に云く「不空三藏と親たり天竺に遊びたる
に彼に僧有り問うて曰く大唐に天台の迹教有り最も邪正を簡び偏円を曉むるに堪えたり能く之を訳して將に此土に至ら
しむ可きや」等云云、此の物語は含光が妙樂大師にかたり給しなり、妙樂大師・此の物語を聞いて云く「豈中国に法を
失いて之を四維に求むるに非ずや而も此方識ること有る者少し魯人の如きのみ」等云云、身毒国の中
に天台三十巻のごとくなる大論あるならば南天の僧いかでか漢土の天台の釈をねがつべき、これあに像法の中に法華經の
実義顯れて南閩浮提に広宣流布するにあらずや、答えて云く「正法一千年・像法の前四百年・已上弘滅後・
一千四百余年にいまだ論師の弘通し給はざる一代超過の円定・円慧を漢土に弘通し給うのみならず其の声月氏までもきこ
えぬ、法華經の広宣流布にはにたれどもいまだ円頓の戒壇を立てられず小乗の威儀をもつて円の慧定に切りつけるはすこ
し便なきにたり、例せば日輪の蝕するがごとし月輪のかけたるに似たり、何にいわずや天台

だいし おんとき だいしきまつ
大師の御時は大集經の読誦多聞堅固の時にあひあたていまだ広宣流布の時にあらず。

問うて云く伝教大師は日本国の土なり桓武の御宇に出世して欽明より二百余年が間の邪義をなんじやぶり天台大師の

円慧・円定をせんじ給うのみならず、鑒真和尚の弘通せし日本小乗の三処の戒壇をなんじやぶり叡山に円頓の大乗

別受戒を建立せり、此の大事は仏滅後・一千八百年が間の身毒戸那・扶桑乃至一閭浮提第一の奇事なり、内証は竜樹・

天台等には或は劣るにもや或は同じくもやあるらん、仏法の人をすべて一法となせる事は竜樹・天親

にもこえ南岳・天台にもすぐれて見えさせ給うなり、総じては如来御入滅の後・一千八百年が間此の二人こそ法華經の

行者にてはをはすれ、故に秀句に云く「經に云く若し須弥を接つて他方無數の仏土に擲け置かんも亦未だこれ難しとせず

乃至若し仏の滅度惡世の中に於て能く此の經を説かん是則ちこれ難し云云、此經を釈して云く浅は易く深は難しとは

釈迦の所判なり浅を去て深に就くは丈夫の心なり天台大師は釈に信順し法華宗を助けて震旦

に敷揚し叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す云云、釈の心は賢劫第九の滅・人寿百歳の時より

如来在世五十年滅後・一千八百余年が中間に高さ十六万八千由旬・六百六十二万里の金山を有人五尺の小身の手をも

つて方一寸・二寸等の瓦礫をにぎりて二丁二丁までなぐるがごとく雀鳥のとぶよりもはやく鉄圍山の外なぐる者もあり

とも法華經を仏のとかせ給いしやうに説かん人は末法にはまれなるべし、天台大師・伝教

大師こそ仏説に相似してとかせ給いたる人にてをはすれとなり、天竺の論師はいまだ法華經ゆきつき給はず漢土の天台

已前の人師は或はすぎ或はたらず、慈恩・法蔵・善無畏等は東を西といふ天を地と申せる人人なり、此等は伝教大師の

自讃にはあらず、去る延暦二十一年正月十九日高雄山に桓武皇帝行幸なりて六宗七大寺の碩徳た

る善議・勝猷・奉基・龍忍・賢玉・安福・勤操・修円・慈誥・玄耀・歳光・道証・光証・觀敏等の十有余人、最澄法師と召し合せ

られて宗論ありしに或は一言に舌を巻いて二言三言に及ばず皆一同に頭をかたづけ手をあざう、三論

の二蔵・三時・三転法輪・法相の三時・五性・華嚴宗の四教・五教・根本枝末・六相・十玄・皆大綱をやぶらる、例せば大屋の棟梁のをれたるがごとし十大徳の幔幢も倒れにき、爾の時天子大に驚かせ給いて同二十九日に弘世・国道の両吏を勅使として重ねて七寺・六宗に仰せ下れしかば各各帰伏の状を載せて云く「竊に天台の玄疏を見れば総じて釈迦一代の教を括つて悉く其の趣を顯すに通ぜざる所無く独り諸宗に逾え殊に一道を示す其の中の所説甚深の妙理なり七箇の大寺・六宗の学生昔より未だ聞かざる所曾て未だ見ざる所なり三論・法相久年の諍い渙焉として

氷の如く釈け照然として既に明かに猶雲霧を披いて三光を見るがごとし聖徳の弘化より以降今に二百余年の間講ずる所の經論其の数多く彼此理を争えども其の疑未だ解けず、而るに此の最妙の円宗未だ闡揚せず蓋し以て此の間の羣生未だ円味に心わざるか、伏して惟れば聖朝久しく如来の付を受け深く純円の機を結び一妙の義理始めて乃ち興顯し六宗の學者初めて至極を悟る此の界の含靈今より後悉く妙円の船に載り早く彼岸に済る事を得ると謂いつべし、乃至善議等牽れて休運に逢い乃ち奇詞を閱す深期に非ざるよりは何ぞ聖世に託せんや」等云、彼の

漢土の嘉祥等は百余人をあつめて天台大師を聖人と定めたり、今日本の七寺二百余人は伝教大師を聖人とがつしたてまつる、仏の滅後二千余年に及んで両国に聖人二人出現せり其の上天台大師の末弘の円頓大戒を叡山に建立し給う此れ豈像法の末に法華經広宣流布するにあらずや、答えて云く迦葉・阿難等の弘通せざる大法を馬鳴・竜樹・提婆天親等の弘通せる事前の難に顯れたり、又竜樹・天親等の流布し残し給える大法天台大師の弘通し給う

事又難にあらはれぬ、又天台智者大師の弘通し給はざる円頓の大戒を伝教大師の建立せさせ給う事又顯然なり、但し詮と不審なる事は仏は説き尽し給えども仏滅後に迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親乃至天台・伝教のいまだ弘通しましませぬ最大の深密の正法經文の面に現前なり、此の深法今末法の始五五百歳に一閻浮提に広宣流布すべきやの事不審極り無きなり。

問ういかなる秘法ぞ先ず名をきき次に義をきかんとをもう此の事もし実事ならば釈尊の二度世に出現し給うか
上行菩薩の重ねて涌出せるかいそぎいそぎ慈悲をたれられよ彼の玄奘三蔵は六生を経て月氏に入りて十九年法華
一乗は方便教・小乗阿含經は眞実教、不空三蔵は身毒に返りて寿量品を阿弥陀仏とかかれたり、此等は東を西といつ
日を月とあやまてり身を苦めてなにかせん心に染てようなし、幸い我等末法に生れて一步をあゆまず
して三祇をこゑ頭を虎にかわずして無見頂相をえん、答えて云く此の法門を申さん事は經文に候はやすかるべし但し此
の法門には先ず三の大事あり大海は広けれども死骸をとどめず大地は厚けれども不孝の者をば載せず、仏法には五逆を
たすけ不孝をばすくう但し誹謗一闡提の者持戒にして第一なるをばゆるさず、此の三のわざは
ひととは所謂念仏宗と禅宗と眞言宗となり、一には念仏宗は日本国に充満して四衆の口あそびとす、二に禅宗は三衣
一鉢の大慢の比丘の四海に充満して一天の明導とをもへ、三に眞言宗は又彼等の二宗にはにるべくもなし叡山・東寺・
七寺・園城或官主或は御室或は長吏或は検校なりかの内侍所の神鏡燼灰となりしかども大日如来の宝印を仏
鏡とたのみ宝剣・西海に入りしかども五大尊をもつて国敵を切らんと思へ、此等の堅固の信心は設け劫石
はひすらぐともがたぶくべしとはみず大地は反覆すとも疑心をこりがたし、彼の天台大師の南北をせめ給ひし時も此の
宗はいまだわたらず此の伝教大師の六宗をしゑたげ給ひし時ももれぬ、かたがたの強敵をまぬがれてかゝつて大法をかすめ
失う、其の上伝教大師の御弟子慈覚大師此の宗をとりたてて叡山の天台宗をかすめとして一向・眞言宗になししかば
此の人には誰の人が敵をなすべき、かかる僻見のたよりをえて弘法大師の邪義を
もとがむる人もなし、安然和尚すこし弘法を難ぜんとせしかども只華嚴宗のころ計りとがむるににてかへて法華經をば
大日經に對して沈めはてぬ、ただ世間のたて人の者のごとし。

問うて云く此の三宗の謬如何答えて云く淨土宗は齊の世に曇鸞法師と申す者あり本は三論宗の人竜樹菩薩の

十住毘婆娑論を見て難行道 易行道を立てたり、道綽禪師といつ者あり唐の世の者本は涅槃經をかうじけるが曇鸞法師が浄土につつま筆を見て涅槃經をすてて浄土につつま聖道 浄土二門を立てたり、又道綽が弟子に善導といつ者あり雑行・正行を立つ、日本国に末法に入つて二百余年、後鳥羽院の御宇に法然といつものあり一切の道俗をすすめて云くぶつほう 正行 日本国に末法に入つて二百余年、後鳥羽院の御宇に法然といつものあり一切の道俗をすすめて云く 仏法は時機を本とす法華經・大日經 天台 真言等の八宗 九宗 一代の大小 顕密 権実等の諸宗等は上根 上智の正像二千年の機のためなり、末法に入りてはいかに功をなして行ずるとも其の益あるべからず、其の上 弥陀 念仏にまじへて行ずるならば念仏も往生すべからず此れわたくしに申すにはあらず 竜樹菩薩 曇鸞法師は難行道となづけ、道綽は末有 一人得者ときらひ善導は千中無一とさだめたり、此等是他宗なれば御不審も あるべし、慧心 先徳にすぎさせ給へる天台 真言の智者は末代にをはすべきか彼の往生要集には顕密の教法は予が死生をはなるべき法にはあらず、又三論の永觀が十因等をみよされば法華 真言等をすてて一向に念仏せば十即 十生 百即 百生とすすめければ、叡山 東寺 園城 七寺等始めは諍論するやうなれども、往生要集の序の詞 道理かとみ付けば顕真座主落ちさせ給いて法然が弟子となる、其の上設い法然が弟子とならぬ人々も弥陀念仏は他仏ににるべくもなく口ずさみとし心よせにをもひければ日本国 皆一同に法然房の弟子と見分けり、此の五十年が間 一天四海 一人もなく法然が弟子となる法然が弟子となりぬれば日本国 一人もなく謗法の者となりぬ、譬へ千人の子が一同に一人の親を殺害せば千人共に五逆の者なり 一人阿鼻に墮ちなば余人墮ちざるべしや、結句は法然 流罪をあだみて惡靈となつて我並びに弟子等をとがせし国主山寺の僧等が身に入つて 或は謀反ををこし 或は惡事をなして皆関東にほろぼされぬ、わづかにのこれる叡山 東寺等の諸僧は俗男 俗女にあなづらるること猿猴の人にわらはれ 俘囚が童子に蔑如せらるるがごとし、禅宗は又此の便を得て持斎等となつて人の眼を迷かし だつとげなる氣色なればいかにびがほつもんを いぬくるべも失ともをばす、禅宗と申す宗は教外別伝と申して釈尊の一切經

の外に迦葉尊者にひそかにささやかせ給へり、されば禪宗をしらずして一切経を習うものは、犬の雷をかむがごとし、猿の月の影をとるにたり云云、此の故に日本国の中に不孝にして父母にすてられ無礼なる故に、主君にcanどうせられあるいは若なる法師等の学文にもものつき遊女のものぐるわしき本性に叶る邪法なるゆへに皆一同に持斎になりて国の百姓をくらう蝗虫となれり、しかれば天は天眼をいからかし地神は身をふるつ、真言宗と申す

は上の二のわざはひにはにるべくもなき大僻見なりあら此れを申すべし、所謂大唐の玄宗皇帝の御宇に善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・大日経・金剛頂経・蘇悉地経を月支よりわたす、此の三経の説相分明なり其の極理を尋ねれば会二破二の一乗其の相を論ずれば印と真言と計りなり、尚華嚴般若の二一相對の一乗にも及ばず天台宗の爾前の別円程もなし但蔵通二教を面とするを善無畏三蔵をもはく此の経文をあらわにいぬ出す程ならば

華嚴法相にもをこつかれ天台宗にもわらはれなん大事として月支よりは持ち来りぬさてもだせば本意にあらずとやをもひけん、天台宗の中に一行禪師といつ僻人一人ありこれをかたらひて漢土の法門をかたらせけり、一行阿闍梨うちぬかれて三論・法相・華嚴等をあらあらかたるのみならず天台宗の立てられけるやうを申しければ善無畏をもはく天台宗は天然にして聞きしにもなをうちすぐれてかさむべきやうもなかりければ善無畏一行をうち

ぬひて云く和僧は漢土にはさかしき者にてありけり、天台宗は神妙の宗なり今真言宗の天台宗にかさむところは印と真言と計りなりといふければ一行さもやとをもひければ善無畏三蔵一行にかたて云く、天台大師の法華経に疏をつくらせ給へるごとく大日経の疏を造りて真言を弘通せんとをもつ汝かきなんやといふければ一行が云く

やすう候、但しいかやうにかき候べきぞ天台宗はにくき宗なり諸宗は我も我烽にあらそいをなせども一切に叶わざる事一あり、所謂法華経の序分に無量義経と申す経をもつて前四十余年の経経をば其の門を打ちふさぎ候いぬ、法華経の法師品神力品をもつて後の経経をば又ふさがせぬ肩をならぶ経経をば今説の文をもつてせめ候

大日経をば三説の中にはいつくにかをき候べきと問ひければ爾の時に善無畏三蔵大に巧んで云く大日経に住心品という品あり無量義経の四十余年の経経を打ちはらうがごとし、大日経の入漫陀羅已下の諸品は漢土にては法華経・大日経とて二本なれども天竺にては一経のごとし、釈迦仏は舍利弗弥勒に向つて大日経を法華経となづけて印と真言とをすて但理計りをとけるを羅什三蔵此れをわたす天台大師此れをみる、大日如来は法華経を大日経となづけて金剛薩に向つてとかせ給う此れを大日経となづく我まのあたり天竺にしてこれを見る、されば汝がかくべきやうは大日経と法華経とをば水と乳とのやうに一味となすべし、もししからば大日経は已今当の三説を

皆法華経のごとくうちをとすべし、さて印と真言とは心法の一念三千に莊嚴するならば三密相応の秘法なるべし、三密相応する程ならば天台宗は意密なり真言は甲なる將軍の甲鎧を帶して弓箭を横た太刀を腰にはけるがごとし、天台宗は意密計りなれば甲なる將軍の赤裸なるがごとくならんといふければ、一行阿闍梨は此のやうにかきけり、漢土三百六十箇国には此の事を知る人なかりけるかのあひだ始めには勝劣を諍論しけれども善無畏等

は人がらは重し天台宗の人人は軽かりけり、又天台大師ほどの智ある者もなかりければ但日日に真言宗になりてさてやみにけり、年ひさしくなればいよいよ真言の誑惑の根ふかくかくれて候いけり、日本国の伝教大師漢土にわたりて天台宗をわたり給うついでに真言宗をならべわたす、天台宗を日本の皇帝にさづけ真言宗を六宗の大徳にならばせ給う、但し六宗と天台宗の勝劣は入唐已前に定めさせ給う、入唐已後には円頓の戒場を立てつ立て

じの論の計りなかりけるかのあひだ敵多くしては戒場の一事成りがたしとやをばしめしけん、又末法にせめさせんとやをばしけん皇帝の御前にしても論ぜさせ給はず弟子等にもはかばかしくかたらせ給はず、但し依憑集と申す一卷の秘書あり七宗の人人の天台に落ちたるやうをかくれて候文なり、かの文の序に真言宗の誑惑一筆み候弘法大師は同じき延暦年中に御入唐青竜寺の慧果に値ひ給いて真言宗をならはせ給へり、御帰朝の後一代

の勝劣を判じ給ひけるに第一真言、第二華嚴、第三法華とかかれて候、此の大師は世間の人人もつてのほかに重ずる人なり、但し仏法の事は申すにをそれあれどももつてのほかにあらしき事どもはんべり、此の事をあらあらがながたるに漢土にわたらせ給ひては但真言の事相の印、真言計り習いつたえて其の義理をばくはしくもさはぐらせ給はざりけるほどに日本にわたりて後大に世間を見れば天台宗もつてのほかにかきみたりければ、我が重ず

る真言宗ひろめがたかりけるかのゆへに日本国にして習いたりし華嚴宗をとりだして法華經にまされるよしを申しけり、それも常の華嚴宗に申すやうに申すならば人信ずまじとやをばしめしけんすこしいろをかえて此れは大日經、竜猛菩薩の菩提心論、善無畏等の実義なりと大妄語をひきそへたりけれども天台宗の人人いたうとがめ申す事なし。

問うて云く弘法大師の十住心論、秘藏宝鑰二教論に云く、此くの如き乗乗、自乗に名を得れども後に望めば戲論と作す、又云く「無明の辺域にして明の分位に非ず」と云く、第四熟蘇味なり」と云く、震旦の大師等諍つて醍醐を盗んで各自宗に名く、等云云、此等の釈の心如何、答えて云く予此の釈にをどろいて一切經並びに大日の

三部經等をひらきみるに華嚴經と大日經とに對すれば法華經戲論、六波羅蜜經に對すれば盜人守護經に對すれば無明の辺域と申す經文は一字一句も候はず此の事はいとかなき事なれども此の三四百余年に日本国のそこばくの智者ども

の用いさせ給ひは定めてゆへあるかともひぬべし、しばらくいとやすきひが事をあげて余事のはかなき事をしらすべし、

法華經を醍醐味と称することは陳隋の代なり六波羅蜜經は唐の半に般若三藏此れをわたす、

六波羅蜜經の醍醐は陳隋の世にはわたりてあらばこそ天台大師は真言の醍醐をば盜ませ給はめ、傍例あり日本の得一が云く天台大師は深密經の三時教をやぶる三寸の舌をもつて五尺の身をたつべしとのしりしを傳教大師此れをただして云く深密經は唐の始玄奘これをわたす天台は陳隋に人智者御入滅の後、數箇年あつて深密經わたれ

り、死して已後にわたれる経をばいかでか破り給うべきとせめさせ給いて候いしかば得一はつまるのみならず舌八にさけて死し候いぬ、これは彼にはにるべくもなき悪口なり、華嚴の法蔵三論の嘉祥法相の玄奘・天台等、乃至南北の諸師、後漢より已下の三蔵・人師を皆をさえて盗人とかかれて候なり、其の上又法華経を醍醐と称することは天台等の私の言にはあらず、仏涅槃経に法華経を醍醐とどかせ給い、天親菩薩は法華経・涅槃経を醍醐とかかれて候、竜樹菩薩は法華経を妙薬となづけさせ給う、されば法華経等を醍醐と申す人、盗人ならば釈迦・多宝・十方の諸仏・竜樹・天親等は盗人にてをはずべきか、弘法の門人等乃至日本の東寺の眞言師如何に自眼の黒白はつたなくして弁ずとも他の鏡をもつて自禍をしれ、此の外法華経を戯論の法とかかること大日経・金剛頂経等にたしかなる経文をいだされよ、設い彼彼の経に法華経を戯論ととかれたりとも訳者の事もあるぞかしよく思慮のあるべかりけるか、孔子は九思一言、周公旦は沐には三にぎり食には三はかれけり、外書のはかなき世間の浅き事を習う人すら智人はかう候ぞかし、いかにかかるあさましき事はありけるやらん、かかる僻見の末なれば彼の伝法院の本願とがつする聖覚房が舍利講の式に云く、「尊高なる者は不二摩訶衍の仏なり、驢牛の三身は車を扶くること能はず、秘奥なる者は両部漫陀羅の教なり、頭乗の四法は履を採るに堪ふ」と云云、頭乗の四法と申すは法相・三論・華嚴・法華の四人、驢牛の三身と申すは法華・華嚴・般若・深密経の教主の四仏、此等の仏僧は眞言師に対すれば、聖覚弘法の牛飼、履物取者にもたらぬ程の事なりとかいて候、彼の月氏の大慢婆羅門は生知の博學・頭密・二道胸につかべ内外の典籍・掌ににぎる、されば王臣頭をかたづけ万人師範と仰ぐあまりの慢心に世間に尊崇する者は大自在天・婆薮天・那羅延天・大覺世尊此の四聖なり、我が座の四足にせんと座の足につくりて坐して法門を申しけり、当時の眞言師が釈迦・仏等の一切の仏をかきあつめて灌頂する時敷まんだらとするがごとし、禅宗の法師等が云く此の宗は仏の頂をふむ大法なりといつがごとし、而るを賢愛論師と申せし

こぞつ
小僧あり彼をただすべきよし申せしかども王臣万民これをもちあず、結句は大慢が弟子等・檀那等に申しつけて無量の
妄語をかまへ悪口・打擲せしかどもすこしも命をしまずのしりしかば帝王・賢愛をにくみてつめせんとし給いしほ
どにかへて大慢がせめられたりしかば、大王・天に仰ぎ地に伏してなげひての給はく朕はまのあたり此の事をきひて邪見
をはらしめ先王はいかに此の者にたばらされて阿鼻地獄にをはすらんと賢愛論師の御足にとりつきて悲泣せさせ給いしか
ば、賢愛の御計いとして大慢を驢にのせて五竺に面をさらし給いければいよいよ

悪心盛になりて現身に無間地獄に墮ちぬ、今の世の眞言と禪宗等とは此れにかわれりや、漢土の三階禪師の云く教主
釈尊の法華経は第一第二階の正像の法門なり末代のためには我がつくれる普経なり法華経を今の世に行ぜん者は十方
の大阿鼻獄に墮つべし、末代の根機にあたらずるゆなりと申して六時の礼懺・四時の坐禅・生身仏

のごとくなりしかば、人多く尊みて弟子万余人ありしかどもわづかの小女の法華経をよみしにせめられて当坐には音を
失い後には大蛇になりてそごの檀那弟子並びに小女処女等をのみ食いしなり、今の善導・法然等が千中無一の悪義も
これにて候なり、此等の三大事はずでに久くなり候はいやしむべきにはあらねども申さば信ずる人もやありなん、これよ
りも百千万億倍・信じがたき最大の悪事はんべり、慈覚大師は伝教大師の第三の御弟子

なりしかれども上一人より下万民にいたるまで伝教大師には勝れてをはします人なりとをもひり、此の人眞言宗と
法華宗の実義を極めさせ給いて候が眞言は法華経には勝れたりとかかせ給へり、而るを叡山三千人の大衆・日本一州の
学者等・一同の帰伏の義なり、弘法の門人等は大師の法華経を華嚴経に劣るとかかせ給えるは、我がかたながらも少し強
きやうなれども、慈覚大師の釈をもつてをもつに眞言宗の法華経に勝れたることは一定な

り、日本国にして眞言宗を法華経に勝ると立つるをば叡山こそ強きかたきなりぬべかりつるに慈覚をもつて三千人の口
をふさぎなば眞言宗はをもつごとし、されば東寺第一のかたつと慈覚大師にはすぐべからず、例せば

浄土宗・禅宗は余国にてはひろまるとも日本国にしては延暦寺のゆるされなからんには無辺劫はふとも叶うまじかりしを安然和尚と申す叡山第一の古徳・教時・諍論と申す文に九宗の勝劣を立てられたるに第一真言宗・第二禅宗・第三天台法華宗・第四華嚴宗等云云、此の大謬・釈につひて禅宗は日本国に充滿してすでに亡国とならんとはするなり法然が念仏宗のはやりて一國を失わんとする因縁は慧心の往生要集の序よりはじまれり、師子の身の中の虫の師子を食うと仏の記し給うはまことなるかなや。

伝教大師は日本国にして十五年が間天台・真言等を自見せさせ給う生知の妙悟にて師なくしてさとらせ給いしかども、世間の不審をはらさんがために漢土に亘りて天台・真言の二宗を伝へ給いし時漢土の人人はやうやうの義ありしかども我が心には法華は真言にすぐれたりとをばしめししゆへに真言宗の宗の名字をば削らせ給いて天台宗の止観・真言等がかせ給う、十二年の年分得度の者二人ををかせ給い重ねて止観院に法華經・金光明經・仁王經の三部を鎮護國家の三部と定めて宣旨を申し下し永代日本國の第一の重宝・神璽・宝剣・内侍所とあがめさせ給いき、叡山第一の座主・義真和尚・第二の座主・円澄大師までは此の義相違なし、第三の慈覺大師・御入唐漢土にわたりて十年が間・蹟密二道の勝劣を八箇の大徳にならひつたう、又天台宗の人人・広修・惟・等にならひせ給いしかども心の内にをばしけるは真言宗は天台宗には勝れたりけり、我が師・伝教大師はいまだ此の事をばくはし

く習せ給わざりけり漢土に久しくもわたらせ給わざりける故に此の法門はあらうちにをはしけるやとをばして日本國に帰朝し叡山東塔止観院の西に総持院と申す大講堂を立て御本尊は金剛界の大日如来、此の御前にして大日經の善無畏の疏を本として金剛頂經の疏七卷・蘇悉地經の疏七卷、已上十四卷をつくる、此の疏の肝心の釈に云く「教に二種有り一は顯示教謂く三乗教なり世俗と勝義と未だ円融せざる故に、二は秘密教謂く一乗教なり世俗と勝義と一体にして融する故に、秘密教の中に亦二種有り一には理秘密の教諸の華嚴・般若・維摩・法華・涅槃等なり但

だ世俗と勝義との不二を説いて未だ真言密印の事を説かざる故に、二には事理俱密教謂く大日教 金剛頂經 蘇悉地經等なり亦世俗と勝義との不二を説き亦真言密印の事を説く故に等云云、釈の心は法華經と真言の三部との勝劣を定めさせ給うに真言の三部經と法華とは所詮の理は同じく一念三千の法門なり、しかれども密印と真言等の事法は法華經かけてをはず法華經は理秘密 真言の三部經は事理俱密なれば天地雲泥なりとかかれたり、しかも此の筆は私の釈にはあらず善無畏三藏の大日經の疏の心なりとをばせどもなをなを二宗の勝劣不審にやありけん、はた又他人の疑いをさんぜんとやをばしけん、大師覺の伝に云く「大師二經の疏を造り功を成し已畢つて心中独り謂らく此の疏仏意に通ずるや否や若し仏意に通ぜざれば世に流伝せじ仍つて仏像の前に安置し七日七夜深誠を翹企し祈請を勤修す五日の五更に至つて夢らく正午に當つて日輪を仰ぎ見弓を以て之を射る其の箭日輪に當つて日輪即転動す夢覺めての後深く仏意に通達せりと悟り後世に伝うべし」等云云、慈覺大師は本朝にしては伝教弘法の両家を習いきわめ異朝にしては八大德並に南天の宝月三藏等に十年が間最大事の秘法をきわめさせ給える上二經の疏をつくりり重ねて本尊に祈請をなすに智慧の矢すでに中道の日輪にあたりてつちをどろかせ給い 歡喜のあまりに仁明天王に宣旨を申しそさせ給い大台の座主を真言の官主となし真言の鎮護國家の三部とて今に四百余年が間 碩学稻麻のごとし湯仰竹葦に同じ、されば桓武 伝教等の日本国建立の寺塔は一字もなく真言の寺となりぬ公家も武家も一同に真言師を召して師匠とあをぎ官をなし寺をあづけ給ふ、仏事の木画の開眼供養は八宗一同に大日仏眼の印 真言なり。

疑つて云く法華經を真言に勝ると申す人は此の釈をばいかげせん用うべきか又すつべきか、答う仏の未來を定めて云く「法に依つて人に依らざれ」竜樹菩薩の云く「修多羅に依れるは白論なり修多羅に依らざれば黒論なり」天台の云く「復修多羅と合せば録して之を用ゆ文無く義無きは信受すべからず」伝教大師云く「仏説に依憑して

口伝を信ずること莫れ等云云、此等の経論釈のときんば夢を本にはすべからずただいさして法華經と大日經との
勝劣を分明に説きたらん経論の文こそたいせちに候はめ、但印・真言なくば木画の像の開眼の事、此れ又をこの事なり
真言のなかりし已前には木画の開眼はなかりしか、天竺・漢土・日本には真言宗・已前の木画の像は、或は行き或は説法し
ある、或は御物語あり、印・真言をもて仏を供養せしより、このかた利生もかたがた失たるなり、此れは常の論談の義なり、此の
一事にをひては但し日蓮は分明の証拠を余所に引くべからず慈覚大師の御釈を仰いで信じて候なり。
問うて云く何にと信ぜらるるや、答えて云く此の夢の根源は真言は法華經に勝ると造定めての御ゆめなり、此の夢吉夢
ならば慈覚大師の合せさせ給うがごとく真言勝るべし、但日輪を射るとゆめにみたるは吉夢なりといつべきか、内典五千・
七千余卷外典三千余卷の中に日を射るとゆめにみて吉夢なる証拠をつけ給わるべし、少少此れ
より出し申さん阿闍世王は天より月落るとゆめにみて耆婆大臣に合せさせ給しかば大臣合せて云く仏の御入滅なり
須拔多羅天より日落るとゆめにみる我とあわせて云く仏の御入滅なり、修羅は帝釈と合戦の時まづ日月をいたてまつる、
かのけつ・いのちのちゅう
夏の桀・殷の紂と申せし悪王は常に日をいて身をほろぼし国をやぶる、摩耶夫人は日をはらむとゆめ
にみて悉達太子をつませ給う、かるがゆへに仏のわらわなをば日種といふ、日本国と申すは天照太神の日天にてまします
ゆへなり、されば此のゆめは天照太神・伝教大師・釈迦仏・法華經をいたてまつれる矢にてこそ二部の疏は候なれ、日蓮は
愚癡の者なれば経論もしらず但此の夢をもつて法華經に真言すべきたりと申す人は今生には
国をほろぼし家を失ひ後生にはあび地獄に入るべしとはしりて候、今現証あるべし日本国と蒙古との合戦に一切の眞言師
の調伏を行ひ候へば日本かちて候ならば真言はいみじかりけりとおもひ候なん、但し承久の合戦にそまはく眞言師の
いのり候しが調伏せられ給し権の大夫殿はかたせ給い、後鳥羽院は隠岐の国・御子の天子は佐渡

の嶋嶋調伏しやりまいらせ候いぬ、結句は野干のなきの身をつなるやうに還著於本人の經文にすこしもたがはず叡山の三千人かまくらにせめられて一同にしたがいてぬしかるに今はかまくらの世さかんなるゆゑに東寺・天台・園城・七寺の眞言師等と並びに自立をわすれたる法華宗の謗法の人人・関東にをちくだりて頭をかたづけひざをかがめやうやうに武士の心をととりて諸寺・諸山の別当となり長吏となりて王位を失いし悪法をとりだして国土安穩といのれば、將軍家並びに所従の侍已下は国土の安穩なるべき事なんめりとうちをもひて有るほどに法華經を失う大禍の僧どもを用いらるれば国定めてほろびなん、亡国のかなしさ亡身のなげかしさに身命をすて

て此の事をあらわすべし、国主世を持つべきならばあやしとおもひてたづぬべきところにただざんげんのことばのみ用いてやうやうのあだをなす、而るに法華經守護の梵天帝釈日月・四天地神等は古の謗法をば不思議とはをばせども此れをしる人なければ一子の悪事のごとくうちゆるして、いつわりをろかなる時もあり又すこしつみしらする時もあり、今は謗法を用いたるだに不思議なるにまれまれ諫曉する人をかへりてあだをなす、一日

・二日・一月・二月・一年・二年ならず数年に及ぶ、彼の不輕菩薩の杖木の難に値いしにもすぐれ覺徳比丘の殺害に及びしにもこえたり、而る間・梵釈の二王・日月・四天・衆星・地神等やうやうにいかり度度いさめらるれどもいよいよあだをなすゆゑに天の御計いとして隣国の聖人にをほせつけられて此れをいましめ大鬼神を国に入れて人の心をたばらかし自界反逆せしむ、吉凶につけて瑞大なれば難多かるべきことわりにて仏滅後・二千二百三十余年

が間いまだいでざる大長星いまだふらざる大地しん出来せり、漢土・日本に智慧すぐれ才能いみじき聖人は度度ありしかどもいまだ日蓮ほど法華經のかたうとして国土に強敵多くまつけたる者なきなり、まづ眼前の事をもつて日蓮は閻浮提第一の者とするべし、仏法・日本にわたて七百余年一切経は五千・七千宗は八宗・十宗・智人は稻麻のごとし弘通は竹葦にたり、しかれども仏には阿弥陀仏諸仏の名号には弥陀の名号ほどひろまりてをはする

は候はず、此の名号を弘通する人は慧心は往生要集をつくる日本国三分が一同の弥陀念仏者、永観は十因と往生講の式をつくる扶桑三分が二分は一同の念仏者法然せんちやくをつくる本朝一同の念仏者、而れば今の弥陀の名号を唱うる人人は一人が弟子にはあらず、此の念仏と申すは雙観經・觀經・阿彌陀經の題名なり、權大乘經の題目の広宣流布するは実大乘經の題目の流布せんずる序にあらずや、心あらん人は此れをすひしめべし、權經流布せば実經流布すべし、權經の題目流布せば実經の題目も又流布すべし、欽明より当帝にいたるまで七百余年いまだきかずいまだ見えず南無妙法蓮華經と唱えよと他人をすすめ我と唱えたる智人なし、日出でぬれば星かくる賢王来れば愚王ほろぶ、実經流布せば權經のとどまり智人南無妙法蓮華經と唱えば愚人の此れに隨はんこと影と身と声と響とのごとくならん、日蓮は日本第一の法華經の行者なる事あえて疑ひなし、これをもつてすいせよ漢土月支にも一閻浮提の内にも肩をならぶる者は有るべからず。

問うて云く正嘉の大地しん文永の大慧星はいかなる事によつて出来せるや答えて云く天台云く「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云、問て云く心いかな、答えて云く上行菩薩の大地より出現し給いたりしをば弥勒菩薩・文殊師利菩薩・觀世音菩薩・藥王菩薩等の四十一品の無明を断ぜし人人も元品の無明を断ぜざれば愚人といはれて寿命品の南無妙法蓮華經の末法に流布せんずるゆへに、此の菩薩を召し出されたるとはしらざりしといふ事

なり、問うて云く日本漢土月支の中に此の事を知る人あるべしや、答えて云く見思を断尽し四十一品の無明を尽せる大菩薩だにも此の事をしらせ給はずいかにいわうや一毫の惑をも断ぜぬ者ども此の事を知るべきか、問うて云く智人なくばいかでか此れを対治すべき例せば病の所起を知らぬ人の病人を治すれば人必ず死す、此の災の

根源を知らぬ人人がいのりをなさば国まさに亡びん事疑いなきか、あらあさましやあらあさましや、答えて云く蛇は七日が内の大雨をしり鳥は年中の吉凶をしる此れ則ち大竜の所従又久学のゆへか、日蓮は凡夫なり、此の事

をしるべからずといえども汝等にはばこれをさとさん、彼の周の平王の時、禿にして裸なる者出現せしを辛有といぬし者うらなつて云く百年が内に世ほろびん同じき幽王の時山川くづれ大地ふるひき白陽と云う者勸えていはく十二年の内に大王事に値せ給うべし、今の大地震大長星等は国王、日蓮をにくみて亡国の法たる禅宗と念仏者と真言師をかたぶどせらるれば天いからせ給いていださせ給うところの災難なり。

問うて云くなにをもつてか此れを信ぜん、答えて云く最勝王経に云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に星宿及び風雨皆時を以て行われず」等云云、此の経文のときんば此国に悪人のあるを王臣此れを帰依すといふ事疑いなし、又此の国に智人あり国主此れをにくみてあだすといふ事も又疑いなし、又云く「三十三天の衆咸忿怒の心を生じ変怪流星墮ち二の日俱時に出で他方の怨賊来りて国人喪乱に遭わん」等云云、すでに此の国に

天変あり地天あり他国より此れをせむ三十三天の御いかり有こと又疑いなきか、仁王経に云く「諸の惡比丘多く名利を求め国王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説く其王別ずして信じて此語を聴く」等云云、又云く「日月度を失い時節反逆し、或は赤日出で、或は黒日出で、三四五の日出で、或は日蝕して光無く、或は日輪一重二重四重五重輪現ず」等云云、文の心は惡比丘等、国に充滿して国王・太子・王子等をたばらかして破仏法・破国の因縁をとかば其の国の王等、此の人いたばらかされてをばすやう、此の法こそ持仏法の因縁持国の因縁とをもひ此の言ををさめてをこなうならば日月に変あり大風と大雨と大火等出来し次には内賊と申して親類より犬兵乱お

こり我がかたつとしめべき者をば皆打ち失いて後には他国にせめられて、或は自殺し、或はいけどりにせられて、或は降人となるべし是れ偏に仏法をほろぼし国をほろぼす故なり、守護経に云く「彼の釈迦牟尼如来所有の教法は一切の天魔・外道惡人五通の神仙皆乃至少分をも破壊せず而るに此の名相の諸の惡沙門皆悉く毀滅して余り有ること無からしむしめせん、たといさんぜんかい、そつもく、たき、な、ほん、う、ひ、き、め、つ、あ、も、こ、う、か、須弥山を仮使三千界の中の草木を尽して薪と為し長時に焚焼すとも一毫も損すること無し若し劫火

起りて火内從り生じ須臾も焼滅せんには灰燼をも余す無きが如し等云云、蓮華面經に云く「仏阿難に告わく譬えば師子の命終せん若しは空若しは地若しは水若しは陸所有の衆生敢て師子の身の穴を食わず唯師子自ら諸の虫を生じて自ら師子の穴を食うが如し阿難我が之の佛法は余の能く壞るに非ず是れ我法の中の諸の惡比丘我が三大阿僧祇劫積行勤苦し集むる所の佛法を破らんと等云云、經文の心は過去の迦葉仏釈迦如來の末法の事を訖哩枳

王にかたらせ給い釈迦如來の佛法をばいかなるものがうしなうべき、大族王の五天の堂舎を焼き払い十六大國の僧尼を殺せし漢土の武帝皇帝の九國の等塔四千六百余所を消滅せしめ僧尼二十六萬五百人を還俗せし等のごとくなる惡人等は釈迦の佛法をば失うべからず、三衣を身にまとひ一鉢を頸にかけ八萬法藏を胸にうかべ十二部經を口にずせん僧侶が彼の佛法を失うべし、譬へ須彌山は金の山なり三千大千世界の草木をもつて四天六欲に充滿してつみこめて一年二年百千萬億年が間やくとも一分も損ずべからず、而るを劫火をこらん時須彌の根より豆

計りの火いでて須彌山をやくのみならず三千大千世界をやき失うべし、若し仏記のごとくならば十宗・八宗・内典の僧等が佛教の須彌山をば焼き払うべきにや、小乗の俱舍・成實・律僧等が大乘をそねむ胸の瞋恚は炎なり真言の善無畏・禪宗の三階等・淨土宗の善導等は佛教の師子の肉より出來せる蝗虫の比丘なり、傳教大師は三論・法相・

華嚴等の日本の碩徳等を六虫とかかせ給へ、日蓮は眞言・禪宗・淨土等の元祖を三虫となづく、又天台宗の慈覺・安然・慧心等は法華經・傳教大師の師子の身の中の三虫なり。

此等の大謗法の根源をただす日蓮にあだをなせば天神もをしみ地祇もいからせ給いて災天も大に起るなり、されば心うべし一閻浮提第一の大事を申すゆへに最第一の瑞相此れをこれり、あわれなるかなや・なげかしきかなや・日本國の人皆無間・大城に墮ちむ事よ、悦しきかなや・樂かなや不肖の身として今度心田に仏種をつえたる、いまにしもみよ大蒙古國・數万艘の兵船をつかべて日本をせめば上一人より下萬民にいたるまで一切の仏寺一切

の神寺をばなげすてて各各声をつる連合べて南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱えとな掌たなこみを合せてたすけ給え、日蓮の御房にちれんごぼう日蓮の御房とさけび候はんずるにや、例せば月支のだいそくおう大族王は幻日王にたなこみ掌たなこみをあはせ日本にほんの宗盛はかぢわらをつやまう、大慢だいまんのものは敵に随うしたがといつこのことわりなり、彼の輕毀大慢きやうきだいまんの比丘等は始めには杖木をとじちうもくのふぎようばさつふぎようばさつ今不輕菩薩を打ちしかども後には掌たなこみをあはせて失とがをくゆ提婆達多は釈尊しやくそんの御身に血をいだししかども臨終りんじゆうの時には南無と唱えたりき、仏とだに申したりしかば地獄じじくには墮おつべからざりしを業ふかくして但南無とのみとななむ今なむ日本国にほんこくの高僧等も南無日蓮聖人なむにちれんしやうにんとなえんとすとも南無計りにてやあらんずらんふびんふびん。

外典げてんに曰く未萌みぼうをしるを聖人しやうにんといつ内典ないてんに云く三世さんぜを知るを聖人しやうにんといつ余に三度のかうみようあり一には去しいた文応元年ぶんおうれん庚申七月十六日に立正安國論を最明寺殿に奏したてまつりし時宿谷の入道にようどうに向つて云く禅宗ぜんしゆうと念仏宗ねんぶつしゆうとを失うしない給うべしと申させ給たま此の事を御用もつちいなきならば此の一門いちもんより事をこりて他国たこくにせめられさせ給うべし、一には去しいた文永八年ぶんえいはちねん

九月十二日申さるの時に平左衛門尉さへもんじゆうに向つて云く日蓮は日本国にほんこくの棟梁とうりやうなり予を失うしななつは日本国にほんこくの

柱はしら撞つを倒すなり、只今ただに自界じかい反逆はんぎやく難なんとてどしうちして他国たこく侵逼しんぷつ難なんとて此の国の人人他国ひとびとたこくに打ち殺さるのみならず多くいけどりにせらるべし、建長寺けんちやうじ・寿福寺じゆふくじ・極樂寺ごくらくじ・大仏だいぶつ・長樂寺ちやうらくじ等の一切いっさいの念仏者ねんぶつ・禅僧等ぜんそうが寺塔じとうをばやきはらいて彼等かれらが頸けいを

ゆひのはまにて切らずば日本国にほんこく必ずほろぶべしと申し候了ぬ、第三には去年こぞ文永ぶんえい十一年四月八日

左衛門尉さへもんじゆうに語つて云く、王地おうちに生れたれば身をば随つがえられたてまつるやうなりとも心をば随つがえられたてまつるべからず念仏ねんぶつの無間獄むげんごく・天魔てんまの所為しよゐなる事は疑うたがひなし、殊ことに真言宗しんごんしゆうが此の国土ここくの大なるわざはひにては候なり大蒙古だいもうこを調伏てうふくせん事真言師しんごんしには仰おほせ付けらるべからず若し大事だいじを真言師しんごんし・調伏てうふくするならばいよいよいそいで此の国ほろぶべしと申せしかば頼綱らいあみ問いつて云くいづろよせ候べき、予い言わく經文きやうもんにはいつとはみ候はねども天みけしきの御氣色

いかりすくなからずきつに見令候よも今生はずこし候はじと語りたりき、此の二つの大事は日蓮が申したるにはあらず
ただひとえしかによらい 我身に入りかわせ給いけるにや我が身ながらも悦び身にあまる法華經の一念三千と申す大事の
只偏に釈迦如来の御神 我身に入りかわせ給いけるにや我が身ながらも悦び身にあまる法華經の一念三千と申す大事の
ほうもん 法門はこれなり、經に云く所謂諸法如是相と申すは何事ぞ十如是の始の相如是が第一の大事にて候は仏は世にいでさせ
たま 給う、智人は起をしる蛇みづから蛇をしるとはこれなり、衆流あつまりて大海と
なる微塵つもりて須弥山となれり、日蓮が法華經を信じ始めしは日本国には一・微塵のごとし、法華經を二人三人十
人・百千万億人・唱え伝ふるほどならば妙覺の須弥山ともなり大涅槃の大海ともなるべし仏になる道は此れよりほかに又
もとむる事なかれ。

問うて云く第二の文永八年九月十二日の御勘氣の時はいかにとして我をそんなせば自他のいくさをこるべしとはしり給う
や、答う大集經十に云く「若し復諸の刹利国王諸の非法を作し世尊の聲聞の弟子を悩亂し若しは以て毀罵し刀杖をもて
打斫し及び衣鉢種種の資具を奪い若しは他の給施に留難を作す者有らば我等彼をして自然に卒に他方の怨敵を起さし
め及び自界の国土にも亦兵起り飢疫飢饉非時の風雨・鬭諍言訟譏謗せしめ、又其の王をして久しからずして復当に己れ
が国を亡失せしむべし」等云云、夫れ諸經に諸文多しといえども此の經文は身にあたり時にぞんで殊に尊くをばつるゆへ
にこれをせんしだす、此の經文に我等とは梵王と帝釈と第六天の魔王と日月と四天等の三界の一切の天竜等なり、
此等の上主・仏前に詣して誓つて云く仏の滅後・正法・像法・末代の中に正法
を行ぜん者を邪法の比丘等が国主につたは王に近きもの王に心よせなる者、我がたつとしとをもつ者のいつことなれば
理不尽に是非を糾さず、彼の智人をさんざんとはぢにをよばせなんとせば、其の故ともなく其の国ににわかに大兵乱・
出現し後には他国にせめらるべし其の国主もつせ其の国もほろびなんずととかれて候、いたひとかゆきとはこれなり、予が
身には今生にはさせる失なし但国をたすけんがため生国の恩をほつせんと申せし

を御用いながらんこそ本意にあらざるに、あまき合し出して法華經の第五の巻を懷中せるをとりだしてさんざんといなみ、結句は「つぎをわたしなんどせし」ば申したりしなり、日月天に処し給いながら日蓮が大難にあつを今度かわらせ給はずば一つには日蓮が法華經の行者ならざるか忽に邪見をあらたむべし、若し日蓮法華經の行者ならば忽に国にしろしを見せ給へしからずば今の日月等は釈迦・多宝・十方の仏をたぶらかし奉る大妄語の人なり、提婆が虚誑罪・俱伽利が大妄語にも百万億倍すぎさせ給へる大妄語の天なりと声をあげて申せしかば忽に出来る自界・反逆難なり、されば国土いたくみだれば我身はいつにかひなき凡夫なれども御經を持ちまいらせ候分齊は当世には日本第一の大人なりと申すなり。

問うて云く慢煩悩は七慢・九慢・八慢あり汝が大慢は仏教に明すところの大慢にも百万億倍すぐれたり、彼の徳光論師は弥勒菩薩を礼せず・大慢婆羅門は四聖を座とせり、大天は凡夫にして阿羅漢となる無垢論師が五天第一といひ、此等は皆阿鼻に墮ちぬ無間の罪人なり汝いかでか一閻浮提第一の智人となれる地獄に墮ちざるべしやおそろしおそろし、答えて云く汝は七慢・九慢・八慢等をばしれりや大覺世尊は三界第一とならせ給う一切の外道が云く只今天に罰せらるべし大地われて入りなんと、日本国の七寺・三百余人が云く最澄法師は大天が蘇生か鉄腹が再誕か等云云、而りといえども天も罰せずか今左右を守護し地もわれず金剛のごとし、伝教大師は叡山を立て一切衆生の眼目となる結句・七大寺は落ちて弟子となり諸国は檀那となる、されば現に勝れたるを勝れたりといふ事は慢にて大功徳なりけるか、伝教大師云く「天台法華宗の諸宗に勝れたるは所依の經に拠るが

故に自讃毀他ならず」等云云法華經第七に云く「衆山の中に須弥山これ第一なり此の法華經も亦復かくの如し諸經の中に於て最もこれ其の上なり」等云云、此の經文は已説の華嚴・般若・大日經等、今説の無量義經、當説の涅槃經等の五千・七千月支竜宮・四王・天・利天日月の中の一經經尽十方界の諸經は土山・黒山・小鉄团山・大鉄团山

のごとし日本国にわたらせ給える法華経は須弥山のごとし。

又云く「能く是の經典を受持すること有らん者も、亦復是くの如し、一切衆生の中に於て亦これ第一なり」等云云、此の經文をもつて案ずるに華嚴經を持てる普賢菩薩、解脫月菩薩等、竜樹菩薩、馬鳴菩薩、法蔵大師、清涼国師、則天皇后、審祥大徳、良弁僧正、聖武天皇、深密、般若經を持てる勝義生菩薩、須菩提尊者、嘉祥大師、玄奘三蔵、太宗、高宗、観勒、道昭、孝徳天皇、真言宗の大日經を持てる金剛薩、竜猛菩薩、竜智菩薩、印生王、善無畏三蔵、金剛智三蔵、不空三蔵、玄宗、代宗、慧果、弘法大師、慈覚大師、涅槃經を持てる迦葉童子菩薩、五十二類、曇無讖三蔵、光宅寺の法雲、南三、北七の十師等よりも末代悪世の凡夫の一戒も持たず一闡提のごとくに人には思はれたれども、經文のごとく已今当にすぐれて法華経より外は仏になる道なしと強盛に信じて而も一分の解なからん人人は、彼等の大聖には百万億倍のまさりなりと申す經文なり、彼の人人は或は彼の經經に且く人を入れて法華経へうつさんがためなる人もあり、或は彼の經に著をなして法華経へ入らぬ人もあり、或は彼の經經に留逗のみならず彼の經經を深く執するゆゑに法華経を彼の經に劣るといつ人もあり、されば今法華経の行者は心づべし、譬えば一切の川流江河の諸水の中に海これ第一なるが如く法華経を持つ者も亦復是くの如し、又衆星の中に月天子最もこれ第一なるが如く法華経を持つ者も亦復是くの如し、等と御心えあるべし、当世、日本国の智人等は衆星のごとし日蓮は満月のごとし。

問うて云く古へかくのごとくいえる人ありや、答えて云く伝教大師の云く「当に知るべし他宗所依の經は未だ最為第一ならず其の能く經を持つ者も亦未だ第一ならず天台法華宗は所持の經最為第一なるが故に能く法華を持つ者も亦衆生の中に第一なり、已に仏説に拠る豈自歎ならんや」等云云、夫れ麒麟の尾につけるだにの一日に千里を飛ぶといふ、転王に隨える劣夫の須臾に四天下をめぐるといつをば難ずべしや、疑うべしや、豈自歎哉の釈

は肝にめいずるか若し爾らば法華經を經のごとくに持つ人は梵王にもすぐれ帝釈にもこえたり、修羅を随へは須弥山をもになひぬべし竜をせめつかはば大海をもくみほしぬべし、伝教大師云く「讚むる者は福を安明に積み誇る者は罪を無間に聞く」等云云、法華經に云く「經を誦誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷か
ん乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」等云云、教主釈尊の金言まことならば多宝仏の証明たがずば十方の諸仏の舌相一定ならば今日本国の一切の衆生無間地獄に墮ちん事疑うべしや、法華經の八の巻に云く「若し後の世に於て是の經典を受持し誦誦せん者は乃至諸願虚しからず、亦現世に於て其の福報を得ん」又云く「若し之を供養し讚歎する」と有らん者は当に今世に於て現の果報を得べし」等云云、此の二つの文の中に亦於現世・得其福報の八字・
當於今世・得現果報の八字・已上一六字の文むなくして日蓮今生に大果報なくば如来の金言は提婆が虚言に同じく
多宝の証明は俱伽利が妄語に異ならじ、謗法の一切衆生も阿鼻地獄に墮つべからず、三世
の諸仏もましまさざるか、されば我が弟子等心みに法華經のごとく身命もおします修行して此の度仏法を心みよ、南無
妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

抑此の法華經の文に「我身命を愛せず但無上道を惜しむ」涅槃經に云く「譬えば王使の善能談論して方便に巧なる命
を他國に奉るに寧ろ身命を喪つとも終に王所説の言教を匿さざるが如し智者も亦爾なり凡夫中に於て身命を惜まず
かならず大乘方等如来の秘藏一切衆生に皆仏性有りと宣説すべし」等云云、いかやうな事のあるゆゑに身命をすつるまで
にてあるやらん委細につけ給わり候はん、答えて云く予が初心の時の存念は伝教弘法慈覚・
智証等の勅宣を給いて漢土にわたりし事の我不愛身命にあたるか、玄奘三蔵の漢土より月氏に入りしに六生が間・
身命をほろぼしこれ等か、雪山童子の半偈のために身をなげ、藥王菩薩の七万二千歳が間臂をやきし事かなんどもも
ひしほに經文のごときんば此等にはあらず、經文に我不愛身命と申すは上に三類の敵人をあけて彼

等がのりせめ刀杖に及んで身命をつばうともみたり、又涅槃經の文に寧喪身命等とかれて候は次下の經文に云く「一闡提有り羅漢の像を作し空処に住し方等經典を誹謗す、諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢是れ大菩薩なりと謂わんと等云云、彼の法華經の文に第三の敵人を説いて云く、或は阿蘭若に納衣にして空閑に在つて乃至世に恭敬せらるること六通の羅漢の如き有らん」等云云、般泥經に云く「羅漢に似たる一闡提有つて惡業を行ず」等云云、此等の經文は正法の強敵と申すは惡王惡臣よりも外道魔王よりも破戒の僧侶よりも、持戒有智の大僧の中に大謗法の人あるべし、されば妙樂大師かいて云く「第三最も甚し後後の者は轉識り難きを以ての故なり」等云云、法華經の第五の卷に云く「此の法華經は諸仏如来の秘密の藏なり、諸經の中に於て最も其の上に在り」等云云、此の經文に最在其上の四文あり、されば此の經文のときんば法華經を一切經の頂にありと申すが法華經の行者にてはあるべきか、而るを又國王に尊重せらるる人人あまたありて、法華經にまさりてをはする經經ましますと申す人にせめあひ候はん時、かの人は王臣に御帰依あり法華經の行者は貧道なるゆゑに、國こそつてこれをいやしみ候はん時、不輕菩薩のごとく賢愛論師のごとく申しつをらば身命に及ぶべし、此れが第一の大事なるべしとみて候此の事は今の日蓮が身にあたれり、予が分齊として弘法大師・慈覺大師・善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵などを法華經の強敵なり經文まことならば無間地獄は疑なしなど申すは裸形にて大火に入るはやすし須弥を手にとてなげんはやすし大石を負つて大海をわたらんはやすし日本國にして此の法門を立てんは大事なるべし云云。

靈山淨土の教主釈尊寶淨世界の多寶仏・十方分身の諸仏・地涌千界の菩薩等梵釈日月・四天等・冥に加し顯に助け給はずば一時一日も安穩なるべしや。

夫れ老狐は塚をあとにせず白亀は毛宝が恩をほつず畜生すらかくのごとしわつや人倫をや、されば古の賢者予譲といぬし者は剣をのみて智伯が恩にあてこう演と申せし臣下は腹をさひて衛の懿公が肝を入れたり、いかにわつや仏教をならはん者父母・師匠・国恩をわするべしや、此の大恩をほつぜんには必ず仏法をならひきはめ智者とならで叶うべきか、譬は衆盲をみちびかんには生盲の身にては橋河をわたしがたし方風を弁えざらん

大舟は諸商を導きて宝山にいたるべしや、仏法を習い極めんとをもはばいとまあらずば叶うべからずいとまあらんとをもはば父母・師匠・国主等に随いては叶うべからず是非につけて出離の道をわきまあらんほどは父母・師匠等の心に随うべからず、この義は諸人をもはく顯にもはつれ冥にも叶うまじとをもつ、しかれども外典の孝経にも父母・主君に随はずして忠臣孝人なるやうもみえたり、内典の仏經に云く「恩を棄て無為に入るは眞実報恩の者なり」等云云、比干が王に随わずして賢人のなをとり悉達太子の浄飯大王に背きて三界第一の孝となりしこれなり。

かくのごとく存して父母・師等に随わずして仏法をうかがひし程に一代聖教をさとるべき明鏡十あり、所謂る俱舍・成実・律宗・法相・三論・真言・華嚴・浄土・禅宗・天台法華宗なり此の十宗を明師として一切經の心をしるべし世間の学者等おもえり此の十の鏡はみな正直に仏道の道を照せりと小乗の三宗はしばらくこれををく民の消息の是非につけて他国へわたるに用なきがごとし、大乘の七鏡こそ生死の大海をわたりて浄土の岸につく大船なれ

ば此を習いほどひて我がみも助け人をもみちびかんとおもひて習ひみるほどに大乘の七宗いつれもいつれも自讃あり我が宗こそ一代の心はえたれえたれ等云云、所謂華嚴宗の杜順・智儼・法蔵・澄觀等、法相宗の玄奘・

慈恩・智周・智昭等、二論宗の興皇・嘉祥等、真言宗の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覺・智証等、禪宗の達磨・慧可・慧能等、淨土宗の道綽・善導・懷感・源空等、此等の宗宗みな本經・本論によりて我も我も一切經をさとれり仏意をきはめたりと云云、彼の人人云く一切經の中には華嚴經第一なり法華經・大日經等は臣下のごとし、真言宗の云く一切經の中には大日經第一なり余經は衆星のごとし、禪宗が云く一切經の中には楞伽經第一なり乃至余宗かくのごとし、而も上に挙ぐる諸師は世間の人人、各各おもえり諸天の帝釈をつやまひ衆星の日月に随うがごとし我等凡夫はいづれの師師なりとも信ずるならば不足あるべからず仰いでこそ信ずべけれども日蓮が愚案はれがたし、

世間をみるに各各 我も我もといへども国主は但一人なり二人となれば国土おだやかならず家に二の主あれば其の家必ずやぶる一切經も又かくのごとくや有るらん何の經にてもをはせ一經こそ一切經の大王にてはをはずらめ、而るに十宗・七宗まで各各 諍論して随はず国に七人・十人の大王ありて万民をだやかならじ、いかにがせんと疑うところに一の願を立つ我れ八宗・十宗に随はじ天台大師の専ら經文を師として一代の勝劣をかんがへしがごとく

一切經を開きみるに涅槃經と申す經に云く「法に依つて人に依らざれ」等云云依法と申すは一切經・不依人と申すは仏を除き奉りて外の普賢菩薩・文殊師利菩薩乃至上にあぐるところの諸の人師なり、此の經に又云く「了義經に依つて不了義經に依らざれ」等云云、此の經に指すところ了義經と申すは法華經・不了義經と申すは華嚴經・大日經・涅槃經等の已今当の一切經なり、されば仏の遺言を信ずるならば専ら法華經を明鏡として一切經の心をばしるべきか。

随つて法華經の文を開き奉れば「此の法華經は諸經の中に於て最も其の上に在り」等云云此の經文のごとくば須弥山の頂に帝釈の居がごとく輪王の頂に如意宝珠のあるがごとく衆木の頂に月のやどるがごとく諸仏の頂に肉髻の住せるがごとく此の法華經は華嚴經・大日經・涅槃經等の一切經の頂上の如意宝珠なり。

されば専ら論師・人師をすてて經文に依るならば大日經・華嚴經等に法華經の勝れ給えることは日輪の青天に出現せる時眼あきらかなる者の天地を見るがごとく高下宛然なり、又大日經・華嚴經等の一切經をみるに此の經文に相似の經文・一字・一点もなし、或は小乘經に對して勝劣をとかれ、或は俗諦に對して真諦をとき、或は諸の空仮に對して中道をほめたり、譬は小國の王が我が國の臣下に對して大王といつがごとし、法華經は諸王に對して大王等と云云、但涅槃經計りこそ法華經に相似の經文は候へされば天台已前の南北の諸師は迷惑して法華經は涅槃經に劣と云云、されども専ら經文を開き見るには無量義經のごとく華嚴・阿含・方等・般若等の四十余年の經經をあげて涅槃經に對して我がみ勝るとひとひて又法華經に對する時は是の經の出世は乃至法華の中の八千の聲聞に記を授くることを得て大菓實を成ずるが如き秋收冬藏して更に所作無きが如し等と云云、我れと涅槃經は法華經には劣るととける經文なり、かう經文は分明なれども南北の大智の諸人の迷うて有りし經文なれば末代の學者能く能く眼をとどむべし、此の經文は但法華經・涅槃經の勝劣のみならず十方世界の一切經の勝劣をもしりぬべし、而るを經文にこそ迷うとも天台・妙樂・伝教大師の御れつけんの後は眼あらん人人はしりぬべき事ぞかし、然れども天台宗の人たる慈覺・智証すら猶此の經文にくらしいわうや余宗の人人をや。

或る人疑つて云く漢土・日本にわたりたる經經にこそ法華經に勝たる經はをはずとも月氏・竜宮・四王・日月・利天・都率天などには恒河沙の經經ましますなれば其中に法華經に勝れさせ給う御經やましますらん、答て云く一をもつて万を察せよ庭戸を出でずして天下をしようとこれなり、癡人が疑つて云く我等は南天を見て東西北の三空を見ず彼の三方の空に此の日輪より別の日やましますらん、山を隔て煙の立つを見て火を見ざれば煙は一定なれども火にてやなかるらん、かくのごとくいはん者は一闡提の人とするべし生盲にことならず、法華經の法師品に釈迦如来金口の誠言をもつて五十余年の一切經の勝劣を定めて云く「我所説の經典は無量千万億にして

仏敵たらざるべき、若し又恐をなして指し申さずは一切経の勝劣むなしかるべし、又此人人を恐れて末の人人を仏敵といはんとすれば彼の宗宗の末の人人の云く法華經に大日經をまさりたりと申すは我れ私の計にはあらず祖師の御義なり戒行の持破・智慧の勝劣、身の上下はありとも所学の法門はたがふ事なしと申せば彼人人にとがなし、

又日蓮此れを知らながら人人を恐れて申さずは寧喪身命、不匿教者の仏陀の諫曉を用いぬ者となりぬ、いかんがせんいはんとすれば世間をそろし止とすれば仏の諫曉のがれがたし進退此に谷り、むべなるかなや、法華經の文に云く、而かも此経は如來の現在にすら猶怨嫉多し況んや滅度の後をや、又云く一切世間怨多くして信じ難し等云云、釈迦仏を摩耶夫人はらませ給いたりければ第六天の魔王・摩耶夫人の御腹をとをし見て我等が大怨敵・

法華經と申す利剣をはらみたり事の成ぜぬ先にいかにしてか失うべき、第六天の魔王・大医と変じて浄飯王宮に入り御座安穩の良薬を持候、大医ありとのしりて毒を后にまいらせつ、初生の時は石をふらし乳に毒をまじ、城を出でさせ給いしには黒き毒蛇と変じて道にふさがり乃至提婆瞿伽利波瑠璃王阿闍世王等の悪人の身に入りて或は大石をなげて仏の御身より血をいたし、或は釈子をころし、或は御弟子等を殺す、此等の大難は皆遠くは法華經を仏・世尊に説かせまいらせじとたばかりし如來現在猶多怨嫉の大難ぞかし、此等は遠き難なり近き難には

舍利弗・目連・諸大菩薩等も四十余年が間は法華經の大怨敵の内ぞかし、況滅度後と申して未来の世には又此の大難よりもすぐれてをそろしき大難あるべしとかれて候、仏だにも忍びがたかりける大難をば凡夫はいかでか忍ぶべきいわうや在世より大なる大難にてあるべがんなり、いかなる大難か提婆が長三丈広一丈六尺の大石、阿闍世王の醉象にはすぐべきとはおもへども彼にもすぐるべく候なれば小失なくとも大難に度々値う人をこそ滅後の法華經の行者とはしり候はめ、付法蔵の人人は四依の菩薩、仏の御使なり提婆菩薩は外道に殺され師子尊者は檀弥羅王に頭を刎ねられ仏陀密多・竜樹菩薩等は赤幡を七年十二年さしとをす馬鳴菩薩は金錢三億がかわりとな

り如意論師はおもひじに死す。

此れ等は正法一千年の内なり、像法に入つて五百年 仏滅後・一千五百年と申せし時漢土に一人の智人あり始は智：後には智者大師とがうす、法華經の義をありのままに弘通せんと思ひ給しに天台已前の百千万の智者しなじな一代を判ぜしかども詮して十流となりぬ所謂南三北七なり十流ありしかども一流をもて最とせり、所謂

南三の中の第三の光宅寺の法雲法師これなり、此の人は一代の仏教を五にわかす其の五の中に三經をえらびいたす、所謂華嚴經 涅槃經 法華經なり一切經の中には華嚴經第一・大王のごとし涅槃經第二・摂政関白のごとし第三法華經は公卿等のごとし此れより已下は万民のごとし、此の人は本より智慧かしき上 慧觀 慧嚴 僧柔 慧次など申せし大智者より習ひ伝え給るのみならず南北の諸師の義をせめやぶり山林にまじわりて法華經 涅槃經・

華嚴經の功をつもりし上 梁武帝召し出して内裏の内に寺を立て光宅寺となづけて此の法師をあがめ給う、法華經をかうぜしかば天より花ふること世のごとし、天鑒五年に大旱魃ありしかば此の法雲法師を請じ奉りて法華經を講ぜさせまいらせしに藥草喻品の其雨普等 四方俱下と申す二句を講ぜさせ給ひし時 天より甘雨下たりしかば天子御感のあまりに現に僧正になしまいらせて諸天の帝釈につかえ万民の国王ををそるるがごとく我とつかへ

給ひし上・或人夢く此人は過去の灯明仏の時より法華經をかうぜる人なり、法華經の疏四卷あり此の疏に云く「此經未だ碩然ならず」亦云く「異の方便」等云云、正く法華經はいまだ仏理をきわめざる經と書かれて候、此の人の御義仏意に相ひ叶ひ給ひければこそ天より花も下り雨もふり候けらめ、かかるいみじき事にて候しかば漢土の人人

さては法華經は華嚴經 涅槃經には劣にてこそあるなれと思ひし上 新羅・百濟・高麗日本まで此の疏ひろまりて大体一同の義にて候しに法雲法師御死去ありていくばくならざるに梁の末 陳の始に智 法師と申す小僧出来せり、南岳大師と申せし人の御弟子なりしかども師の義も不審にありけるかのゆゑに一切經蔵に入つて度御らん

ありしに華嚴經 涅槃經 法華經の三經に詮じだし此の三經の中に殊に華嚴經を講じ給いき、別して礼文を造りて日に功をなし給いしかば世間の人もわく此人も華嚴經を第一とおぼすかと思えしほどに法雲法師が一切經の中に華嚴第一涅槃第二法華第三と立てたるがあまりに不審なりける故にことに華嚴經を御らんありけるなり、かくて一切經の中に法華第一 涅槃第二 華嚴第三と見定めさせ給いてなげき給うやうは如来の聖教は漢土にわたれども人を利益することなしかりて一切衆生を惡道に導びくこと人師の によれり、例せば国の長とある人東を西といふ天を地といふいたしめれば万民はかくのごとくに心うつべし、後にいやしき者出来して汝等が西は東汝等が天は地なりといはばもちつることなき上 我が長の心に叶わんがために今の人をのりうちなんどすべしかんがせんとはおぼせしかどもさてもだすべきにあらねば光宅寺の法雲法師は謗法によつて地獄に墮ちぬとのしられ給う、其の時南北の諸師はちのごとく蜂起しからすのごとく烏合せり、智 法師をば頭をわるべきか国を

をつぎかなんぞ申せし程に陳主此れをきこしめて南北の数人に召し合せて我と列座してきかせ給いき、法雲法師が弟子等の慧栄 法歳 慧曠 慧 なんと申せし僧正 僧都 已上の人人百余人なり各各惡口を先とし眉をあげ眼をいからし手をあげ柏子をたたき、而れども智 法師は末座に坐して色を変ぜず言を らず威儀

しづかにして諸僧の言を一一に牒をとり言ごとにせめかえす、をしかへて難じて云く抑も法雲法師の御義に第一華嚴第二涅槃第三法華と立させ給いける証文は何れの經ぞ慥かに明かなる証文を出ださせ給えとせめしかば各各頭をつぶせ色を失いて一言の返事なし。

重ねてせめて云く無量義經に正しく次説方等十二部經 摩訶般若 華嚴海空等云云、仏 我と華嚴經の名をよびあげて無量義經に対して末頭眞実と打ち消し給う法華經に劣りて候、無量義經に華嚴經はせめられて候ぬかに心えさせ給いて華嚴經をば一代第一とは候けるぞ各各 御師の御かたつとせんとをばさば此の經文をやぶりて此れ

に勝れたる経文を取り出だして御師の御義を助け給えとせめたり。

又涅槃經を法華經に勝ると候けるはいかなる経文ぞ涅槃經の第十四には華嚴阿含方等般若をあげて涅槃經に對して勝劣は説れて候へどもまづ法華經と涅槃經との勝劣はみず、次上の第九の卷に法華經と涅槃經との勝劣分明なり、所謂経文に云く「是の經の出世は乃至法華の中の八千の声聞記を受くることを得て大菓実を成ずるが如き秋收冬藏して更に所作無きが如し」等云云、經文明に諸經をば春夏と説かせ給い涅槃經と法華經とをば菓実の位とは説かれて候へども法華經をば秋收冬藏の大菓実の位涅槃經をば秋の末冬の始拾の位と

定め給いぬ、此の経文正く法華經には我が身劣ると承伏し給いぬ、法華經の文には已説今説当説と申して此の法華經は前と並との経經に勝れたるのみならず後に説かん経經にも勝るべしと仏定め給う、すでに教主釈尊かく定め給いぬれば疑うべきにあらねども我が滅後はいかんと疑いおぼして東方宝浄世界の多宝仏を証人に立て

給いしかば多宝仏大地よりをどり出でて妙法華經皆是真実と証し十方分身の諸仏重ねてあつませ給い広長舌を大梵天に付け又教主釈尊も付け給う、然して後多宝仏は宝浄世界えかり十方の諸仏各各本土にかへらせ給いて後多宝分身の仏もおはせざらん、教主釈尊涅槃經をといて法華經に勝ると仰せあらば御弟子等は信ぜさせ給うべしやとせめしかば日月の大光明の修羅の眼を照らすごとく漢王の劍の諸侯の頸にかかりしがごとく両眼を

とど一頭を低れたり、天台大師の御気色は師子王の狐兔の前に吼えたるがごとし鷹鷲の鳩雉をせめたるにたり、かくのごとくありしかばさては法華經は華嚴經涅槃經にもすぐれてありけりと震旦一國に流布するのみならずがへりて五天竺までも聞合氏大小の諸論も智者大師の御義には勝れず教主釈尊、両度出現しまするか仏教二度あらはれぬとほめられ給いしなり。

其の後天台大師も御入滅なりぬ陳隋の世も代わりて唐の世となりぬ章安大師も御入滅なりぬ、天台の仏法やうやく

なり
習い失せし程に唐の太宗の御宇に玄奘三蔵といふし人貞觀三年に始めて月氏に入りて同十九年にかへりしが月氏の仏法
尋ね尽くして法相宗と申す宗をわたす、此の宗は天台宗と水火なり而るに天台の御覧なかりし深密經・瑜伽論・唯識論
等をわたして法華經は一切經には勝れたれども深密には劣るといつ、而るを天台は御覧なかりしかば天台の末学等は智慧
の薄きかのゆゑにさもやとおもつ、又太宗は賢王なり玄奘の御歸依あさからず、いつ

べき事ありしかどもいつも事なれば時の威をおそれ申す人なし、法華經を打ちかへして三乘眞実・一乘方便・五性各別
と申せし事は心うかりし事なり、天台よりはわたれども月氏の外道が漢土にわたれるか法華經は方便・深密經は眞実とい
ふしかば釈迦・多宝・十方の諸仏の誠言もかへりて虚くなり玄奘・慈恩こそ時の生身の仏にてはありしか。

其後則天皇の御宇に天台大師にせめられし華嚴經に又重ねて新訳の華嚴經わたりしかば、さきのいきどをりをはた
さんがために新訳の華嚴をもつて天台にせめられし旧訳の華嚴經を扶けて華嚴宗と申す宗を法蔵法師と申す人立てぬ
此の宗は華嚴經をば根本法輪法華經をば枝末法輪と申すなり、南北は一華嚴・二涅槃・三法華・天台大師は一法華・二
涅槃・三華嚴・今の華嚴宗は一華嚴・二法華・三涅槃等二云。

其の後玄宗皇帝の御宇に天台より善無畏三蔵は大日經・蘇悉地經をわたす、金剛智三蔵は金剛頂經をわたす、又
金剛智三蔵の弟子あり不空三蔵なり、此の二人は月氏の人種姓も高貴なる上人がら漢土の僧にせず法門もなにとは
しらず後漢より今にいたるまでなかりし印と眞言といふ事をあひそいてゆゆしかりしかば天子かつべをかたづけ万民掌
をあわす、此の人人の義にいわく華嚴・深密・般若・涅槃・法華經等の勝劣は顯教の内・釈迦如来

の説の分なり、今の大日經等は法王の勅言なり彼の經經は民の万言、此經は天子の一言なり、華嚴經・涅槃經等は
大日經には梯を立ても及ばず但法華經計りこそ大日經には相似の經なれ、されども彼の經は釈迦如来の説・

民の正言・此の経は天子の正言なり言は似れども人から雲泥なり、譬は濁水の月と清水の月のごとし月の影は同じけれど
も水に清濁ありなどと申しければ、此の由尋ね頭す人もなし諸宗皆落ち伏して真言宗にかたぶきぬ、善無畏・金剛智・
死去の後・不空三蔵又月氏にかへて菩提心論と申す論をわたしいよいよ真言宗盛りなりけり、
但し妙楽大師といふ人あり天台大師よりは二百余年の後なれども智慧かしこき人にて天台の所釈を見明めてありしかば
てんだい しゃく
天台の釈の心は後にわたれる深密経・法相宗又始めて漢土に立てたる華嚴宗・大日経・真言宗にも法華経は勝れさせ
給いたりけるを、或は智のをよばざるか或は人に畏るるか或は時の王威をおづるかの故にいはざりけるかがくてあるな
らば天台の正義すでに失なん、又陳隋已前の南北が邪義にも勝れたりとおぼして三十巻の末文
を造り給う所謂弘決・釈籤・疏記これなり、此の三十巻の文は本書の重なるをけづり・よわきをたすくのみならず
てんだいだいし
天台大師の御時なかりしかば御責にものがれてあるやうなる法相宗と華嚴宗と真言宗とを一時にとりひしがれたる書
なり。

又日本国には人王第三十代欽明天皇の御宇十三年壬申十月十三日に百済国より一切経・釈迦仏の像をわたす、又
ようめいてんのう ぎょう しょうくたいし ぶつぼう
用明天皇の御宇に聖徳太子佛法をよみはじめ和氣の妹子と申す臣下を漢土につかはして先生所持の一卷の法華経をとり
よせ給いて持経と定め、其の後人王第三十七代孝徳天皇の御宇に三論宗・華嚴宗・法相宗・俱舎宗・
成実宗わたる、人王第四十五代に聖武天皇の御宇に律宗わたる已上六宗なり、孝徳より人王五十代の桓武天皇にいたる
までは十四代一百二十余年が間は天台・真言の二宗なし、桓武の御宇に最澄と申す小僧あり山階寺の行表・僧正の
おんでし ほうしん しょう しょう
御弟子なり、法相宗を始めとして六宗を習いきわめぬれども佛法いまだ極めたりともおぼえざりし
けいしんしょう ほうしん しょう
に華嚴宗の法蔵法師が造りたる起信論の疏を見給うに天台大師の釈を引きのせたり此の疏こそ子細ありげなれ此の国に
渡りたるか又いまだわたらざるかと不審ありしほどに有人にとひしかば其の人の云く大唐の揚州竜興寺

の僧鑒眞和尚は天台の末学道暹律師の弟子天宝の末に日本国にわたり給いて小乗の戒を弘通せさせ給いしかども天台の御釈持来りながらひろめ給はず人王第四十五代聖武天王の御宇なりとかる、其の書を見んと申されしかば取り出だして見せまいらせしかば一返御らんありて生死の醉をさましつ此の書をもつて六宗の心を尋ねあきらめしかば一一に邪見なる事あらはれぬ、忽に願を發て云く日本国の人皆謗法の者の檀越たるが天下一定

みだ 乱れなんずとおぼして六宗を難ぜられしかば七大寺・六宗の碩学蜂起して京中烏合し天下みなさわぐ、七大寺・六宗の諸人等惡心強盛なり、而るを去ぬる延暦二十一年正月十九日に天王高雄寺に行幸あつて七寺の碩德十四人善議・勝猷・奉基・龍忍・賢玉・安福・勤操・修円・慈誥・玄耀・歳光・道証・光証・觀敏等の十有余人を召し合はす、華嚴・三論・法相等の人人各各我宗の元祖が義にたがはず最澄上人は六宗の人人の所立・一一に牒を取りて本經・本論・並に諸經諸論に指し合はせてせめしかば一言も答えず口をして鼻のごとくになりぬ、天皇をどろき給いて委細に御たづねありて重ねて勅宣を下して十四人をせめ給いしかば承伏の謝表を奉りたり、其書に云く「七箇の大寺・六宗の学匠乃至初て至極を悟る」等云云又云く「聖德の弘化より以降今に二百余年の間、講ずる所の經論其数多し、彼此理を争つて其の疑未だ解けず而も此の最妙の円宗猶未だ闡揚せず」等云云、又云く「三論法相・久年の諍渙焉と

して氷の如く解け照然として既に明かに猶雲霧を披いて三光を見るがごとし」云云、最澄和尚十四人が義を判じて云く「各一軸を講ずるに法鼓を深壑に振い寶主三乗の路に徘徊し義旗を高峰に飛す長幼三有の結を摧破して猶未だ歴劫の轡を改めず白牛を門外に混ず、豈善く初発の位に昇り阿茶を宅内に悟らんや」等云云、弘世真綱二人の臣下云く「靈山の妙法を南岳に聞き総持の妙悟を天台に闢く一乗の権滞を慨き三諦の末頭を悲しむ」等云云、又十四人の云く「善議等牽れて休運に逢て乃ち奇詞を閑す深期に非るよりは何ぞ聖世に託せんや」等云云、此の十四人は華嚴宗の法威・審祥・三論宗の嘉祥・觀勒・法相宗の慈恩・道昭・律宗の道宣・鑒眞等の漢土・日本元祖等の法門・

瓶はかはれども水は一なり、而るに十四人彼の邪義をすてて伝教の法華經に帰伏しぬる上は誰の末代の人か華嚴般若・深密經等は法華經に超過せりと申すべきや、小乗の三宗は又彼の人人の所学なり大乘の三宗破れぬる上は沙汰のかぎりにあらず、而るを今に子細を知らざる者六宗はいまだ破られずとをもへり、譬は盲目が天の日月を見ず聾人が雷の音をきかざるゆへに天には日月なし空に声なしとをもつがごとし。

真言宗と申すは日本・人王第四十四代と申せし元正天皇の御宇に善無畏三蔵・大日經をわたりて弘通せずして漢土へかへる、又玄・等大日經の義釈十四卷をわたりて又東大寺の得清大徳わたりて、此等を伝教大師御らんありてありしかども大日經・法華經の勝劣いかながとおぼしけるほどにかたがた不審ありし故に去る延暦二十三年七月御入唐西明寺の道遂和尚・仏滝寺の行滿等に値ひ奉りて止觀円頓の大戒を伝受し靈感寺の順・曉和尚に値ひ奉りて真言を相伝し同延暦二十四年六月に帰朝して桓武天王に御対面・宣旨を下して六宗の學生に止觀・真言を習はしめ同

て真言を相伝し同延暦二十四年六月に帰朝して桓武天王に御対面・宣旨を下して六宗の學生に止觀・真言を習はしめ同七大師にをかれぬ、真言・止觀の二宗の勝劣は漢土に多く子細あれども又大日經の義釈には理同事勝とかきたれども傳教大師は善無畏三蔵のあやまりなり、大日經は法華經には劣りたりと知しめして八宗とはせさせ給はず、真言宗の名をけづりて法華宗の内に入れ七宗となし大日經をば法華天台宗の傍依經となして華嚴・大品・般若・

涅槃等の例とせり、而れども大事の内頓の大乗別受戒の大戒壇を我が国に立つ立じの諍論がわづらはしきに依りてや真言・天台の二宗の勝劣は弟子にも分明にをしえ給わざりけるか、但依憑集と申す文に正しく真言宗は法華天台宗の正義を偷みとりて大日經に入れて理同とせり、されば彼の宗は天台宗に落ちたる宗なり、いわづや不空

三蔵は善無畏・金剛智入滅の後・月氏に入りてありしに竜智菩薩に値ひ奉りし時・月氏には仏意をあきらめたる論釈なし、漢土に天台といふ人の釈こそ邪正をえらび偏円をあきらめたる文にては候なれ、あなかしこ・あなかしこ月氏へ渡し給えとねんごろにあつらへし事を不空の弟子含光といふ者が妙樂大師にかたれるを記の十の末に

引き載せられて候をこの依憑集に取り載せて候、法華經に大日經は劣るとしろしめす事、伝教大師の御心顕然なり、されば釈迦如来・天台大師・妙樂大師・伝教大師の御心は一同に大日經等の一切經の中には法華經はすぐれたりといふ事は分明なり、又真言宗の元祖といふ竜樹菩薩の御心もかくのごとし、大智度論を能く能く尋ぬるならば此の事分明なるべきを不空があやまれる菩提心論に皆人ばかされて此の事に迷惑せるか。

又石淵の勤操僧正の御弟子に空海と云う人あり後には弘法大師とがうす、去める延暦二十三年五月十二日に御入唐、漢土にわたりては金剛智・善無畏の両三蔵の第三の御弟子慧果和尚といぬし人に両界を伝受し大同二年十月二十二日に御帰朝平城天皇の御宇なり、桓武天皇は御ほつぎよ平城天皇に見参し御用いありて御帰依、他にことなりしかども平城ほどもなく嵯峨に世をとられさせ給ひしかば弘法ひき入れてありし程に伝教大師は嵯峨天王

の弘仁十三年六月四日御入滅、同じぎ弘仁十四年より弘法大師・王の御師となり真言宗を立てて東寺を給真言和尚とがうし此より八宗始る、一代の勝劣を判じて云く第一真言・大日經第二・華嚴第三は法華・涅槃等云云、法華經は阿含・方等・般若等に対すれば真実の經なれども華嚴經・大日經に望むれば戲論の法なり教主釈尊は仏なれども大日如来に向れば無明の辺域と申して皇帝と俘囚との如し、天台大師は盗人なり真言の醍醐を盗んで法華經を醍醐といふなどかかれしかば法華經はいみじとをもへとも弘法大師にあひぬれば物のかずにもあらず、天竺

の外道はさて置きめ漢土の南北が法華經は涅槃經に対すれば邪見の經といぬしにもすぐれ華嚴宗が法華經は華嚴經に対すれば枝末教と申せしにもこたたり、例ば彼の月氏の大慢婆羅門が自在天・那羅延天・婆藪天・教主釈尊の四人を高座の足につくりて其の上にのぼつて邪法を弘めしがごとし、伝教大師御存生ならば一言は出されべかりける事なり、又義真・円澄・慈覚・智証等もいかに御不審はなかりけるやらん天下第一の凶なり、慈覚大師は去める承和五年に御入唐、漢土にして十年が間、天台・真言の二宗をならう、法華・大日經の勝劣を習ひしに

法全・元政等の八人の真言師には法華經と大日經は理同事勝等云云、天台宗の志遠・広修・維等には習いしは大日經は方等部の損等云云、同じき承和十三年九月十日に御帰朝、嘉祥元年六月十四日に宣旨下、法華・大日經等の勝劣は漢土にしてしりがたかりけるかのゆゑに金剛・頂經の疏七卷・蘇悉地經の疏七卷已上十四卷此疏の心は大日經・金剛・頂經・蘇悉地經の義と法華經の義は其の所詮の理は一同なれども事相の印と真言とは真言の三部經すぐれたりと云云、此れはひとえに善無畏・金剛智・不空の造りたる大日經の疏の心のごとし、然れども我が心に猶不審やのこりけん又心にはとけてんけれども人の不審をはらさんとやおぼしけん、此の十四卷の疏を御本尊の御前にさしをきて御祈請ありきかくは造りて候へども仏意計りがたし大日の三部やすぐれたる法華經の三部やまさ

れると御祈念有りしかば五日と申す五更に忽に夢想あり、青天に大日輪かかり給へり矢をもてこれを射ければ矢飛んで天にのぼり日輪の中に立ちぬ日輪動転してすでに地に落とすとをもひてうちさめぬ、悦んで云く我吉夢あり法華經に真言勝れたりと造りつるふみは仏意に叶いけりと悦ばせ給いて宣旨を申し下して日本国に弘通あり、而も宣旨の心に云く「遂に知んぬ天台の止觀と真言の法義とは理冥に符えり」等と云云、祈請のごときんば大日經に法華經は劣なるやうなり、宣旨を申し下すには法華經と大日經とは同じ等云云。

智証大師は本朝にしては義真和尚・円澄大師、別當・慈覚等の弟子なり、顕密の二道は大体此の国にして学し給いけり天台・真言の二宗の勝劣の御不審に漢土へは渡り給けるか、去仁寿二年に御入唐漢土にしては真言宗は法全・元政等にならばせ給い大體・大日經と法華經とは理同事勝・慈覚の義のごとし、天台宗は良・和尚にならひ給い真言・天台の勝劣、大日經は華嚴・法華等には及ばず等云云、七年が間漢土に經て去る貞觀元年五月十七日に御帰朝、大日經の旨歸に云く「法華尚及ばず況や自余の教をや」等云云、此釈は法華經は大日經には劣る等云云、又授決集に云く「真言・禪門乃至若し華嚴・法華・涅槃等の經に望むれば是れ損引門」等云云、普賢經の記・論の記

に云く同じ等云云、貞観八年丙戌四月廿九日壬申勅宣を申し下して云く「聞くならく真言・止観・両教の宗同じく醍醐と号し俱に深秘と称す」等云云、又六月三日の勅宣に云く「先師既に両業を開いて以て我が道と為す代代の座主相承して兼ね伝えざることを莫し在後の輩豈旧迹に乖かんや、聞くならく山上の僧等専ら先師の義に違いて偏執の心を成ず殆んど余風を扇揚し旧業を興隆するを顧みざるに似たり、凡そ厥の師資の道一を闕きても不可なり伝弘の勤め寧ろ兼備せざらんや、今より以後宜く両教に通達するの人を以て延暦寺の座主と為し立てて恒例と為すべし」云云。

されば慈覚・智証の二人は伝教・義真の御弟子、漢土にわたりては又天台・真言の明師に値いて有りしかども二宗の勝劣は思い定めざりけるか、或は真言すぐれ、或は法華すぐれ、或は理同事勝等云云、宣旨を申し下すには二宗の勝劣を論ぜん人は違勅の者といましめられたり、此れ等は皆自語相違といぬべし他宗の人はよも用いじとみえて候、但二宗齊等とは先師・伝教大師の御義と宣旨に引き載せられたり、抑も伝教大師いづれの書にかかれて候ぞ

や此の事よくよく尋ぬべし、慈覚・智証と日蓮とが伝教大師の御事を不審申すは親に値うての年あらそひ日天に値ひ奉りての目くらへにては候へども慈覚・智証の御かたぶどをせさせ給はん人人は分明なる証文をかまさせ給うべし、詮ずるところは信をとらんがためなり、玄奘三蔵は月氏の婆沙論を見たりし人ぞかし天竺にわたらざりし宝法師にせめられにき、法護三蔵は印度の法華經をば見たれども囑累の先後をば漢土の人みねども、とい

ひしぞかし、設ひ慈覚・伝教大師に値ひ奉りて習ひ伝えたりとも智証・義真和尚に口決せりといふとも伝教・義真の正文に相違せばあに不審を加えざらん、伝教大師の依憑集と申す文は大師第一の秘書なり、彼の書の序に云く「新來の眞言家は則ち筆授の相承を泯し旧到の華嚴家は則ち影響の軌範を隠し、沈空の三論宗は彈訶の屈恥を忘れて称心の醉を覆う、著有の法相は撲揚の帰依を非し青竜の判經を撥う等、乃至謹んで依憑集の一巻を著わして

どうが
同我の後哲に贈る某の時興ること日本第五十二葉、弘仁の七・丙申の歳なり云云、次ぎ下の正宗に云く「天竺の名僧
だいつてんたい きよしやく
大唐天台の教迹、最も邪正を簡ぶに堪えたりと聞いて渴仰して訪問す云云、次ぎ下に云く「豈中国に法を失つて之を
しい
四維に求むるに非ずや而かも此の方に識ること有る者少し魯人の如きのみ云云、此の書は法相・三論・華嚴・真言の四
宗をせめて候文なり、天台・真言の二宗同一味ならばいかでかせめ候べき、而も不空三蔵
等をば魯人のごとしななどかかれて候、善無畏・金剛智・不空の真言宗いみじくばいかでか魯人と悪口あるべき、又天竺
の真言が天台宗に同じきも又勝れたるならば天竺の名僧いかでか不空にあつらへ中国に正法なしとはいふべき、それはいか
にもあれ慈覚・智証の二人は言は伝教大師の御弟子とはならせ給ども心は御弟子にあらず、其の故は此の書に云く「謹
で依憑集一卷を著わして同我の後哲に贈る」等云云、同我の二字は真言宗は
てんたいもつ
天台宗に劣るとならひてこそ同我にてはあるべけれ我と申し下さる宣旨に云く「専ら先師の義に違ひ偏執の心を成す」等
云云、又云く「凡そ厥師資の道一を闕いても不可なり」等云云、此の宣旨のごとくならば慈覚・智証こそ専ら先師にそむく
人にては候へかつせめ候もをそれにては候ども此れをせめずば大日經・法華經の勝劣
やぶれなんと存じていのちをまとにかくてせめ候なり、此の二人の人人の弘法大師の邪義をせめ候はざりけるは最も道理
にて候いけるなり、されば糧米をつくし人をわづらはして漢土へわたらせ給はんよりは本師・伝教大師の御義をよくよく、
つくさせ給うべかりけるにや、されば叡山の仏法は但だ伝教大師・義真和尚・円澄大師の三代計りにてやありけん、天台
座主すでに真言の座主につりぬ名と所領とは天台・山其の主は真言師なり、されば慈覚
だいし ちしうだいし いこんとう きよもを たま したてんし
大師・智証大師は已今当の經文をやぶらせ給う人なり、已今当の經文をやぶらせ給うはあに釈迦・多宝・十方の諸仏の
おんてき
怨敵にあらずや、弘法大師こそ第一の謗法の人とおもつに、これはそれにはにるべくもなき僻事なり、其の故は水火天地な
る事は僻事なれども人用ゆる事なければ其の僻事成ずる事なし、弘法大師の御義はあまり

僻事なれば弟子等も用ゆる事なし事相計りは其の門家なれども其の教相の法門は弘法の義いぬにきゆへに善無畏・金剛智・不空慈覚 智証の義にてあるなり、慈覚・智証の義こそ真言と天台とは理同なりなどと申せば皆人さもやとをもつ、かつをもつゆへに事勝の印と真言とにつひて天台宗の人人・画像・木像の開眼の仏事を・ならはんがために日本一同に真言宗におちて天台宗は一人もなきなり、例せば法師と尼と黒と青とはまがひぬべけれ

ば眼くらき人はあやまつぞかし、僧と男と白と赤とは目くらき人も迷わず、いわうや眼あきらかなる者をや、慈覚・智証の義は法師と尼と黒と青とがごとくなるゆへに智人も迷ひ愚人もあやまり候て此の四百余年が間は叡山・園城・東寺

奈良・五畿・七道・日本一州 皆謗法の者となりぬ。

抑も法華經の第五に「文殊師利此の法華經は諸仏如来の秘密の蔵なり諸經の中に於て最も其の上に在り」云云、此の經文のごとくならば法華經は大日經等の衆經の頂上に住し給う正法なり、さるにては善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覚 智証等は此の經文をばいかんが会通せさせ給うべき、法華經の第七に云く「能く是の經典を受持する

こと有らん者も亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦為第一なり」等云云、此の經文のごとくならば法華經の行者はせんるごうか 川流江河の中の大海・衆山の中の須弥山・衆星の中の月天・衆明の中の大日天、転輪王・帝釈・諸王の中の大梵王なり、伝教大師の秀句と申す書に云く「此の經も亦復是くの如し乃至諸の經法の中に最も為第一なり能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦為第一なり」已上經文なりと引き入れさせ

給いて次下に云く「天台法華玄に云く」等云云、已上玄文とかかせ給いて上の心を釈して云く「当に知るべし他宗所依の經は未だ最も為れ第一ならず其の能く經を持つ者も亦未だ第一ならず、天台法華宗所持の法華經は最も為れ第一なる故に能く法華を持つ者も亦衆生の中の第一なり已に仏説に拠る豈自歎ならん哉」等云云、次下に譲る釈に云く「委曲の依憑具さに別卷に有るなり」等云云、依憑集に云く「今吾が天台大師・法華經を説き法華經を釈

すること群に特秀し唐に独歩す明に知んぬ如来の使なり讃る者は福を安明に積み誇る者は罪を無間に開く」等云、
法華經・天台・妙樂・伝教の経釈の心の如くならば今日本国には法華經の行者は一人もなきぞかし、月氏には教主
釈尊・宝塔品にして一切の仏をあつめさせ給て大地の上に居せしめ大日如来計り宝塔の中の南の下座にす奉りて教主
釈尊は北の上座につかせ給う、此の大日如来は大日經の胎藏界の大日・金剛・頂經の金剛界の大日の
主君なり、両部の大日如来を即從等と定めたる多宝仏の上座に教主釈尊居せさせ給う此れ即ち法華經の行者なり
天竺かくのごとし、漢土には陳帝の時天台大師・南北にせめかちて現身に大師となる群に特秀し唐に独歩すといつこ
れなり、日本国には伝教大師六宗にせめかちて日本の始第一の根本大師となり給う月氏漢土・日本に但三人計りこそ
於一切衆生中亦為第一にては候へされば秀句に云く「浅きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり
浅きを去つて深きに就くは丈夫の心なり天台大師は釈迦に信順して法華宗を助けて震旦に敷揚し叡山の一家は天台に
相承して法華宗を助けて日本に弘通す」等云、仏滅後・二千八百余年が間に法華經の行者漢土に一人・日本に一人已
上二人釈尊を加奉りて已上三人なり。
外典に云く聖人は一千年に一出で賢人は五百年に一出づ、黄河は渭ながれをわけて五百年には半、河すみ千年
には共に清むと申すは一定にて候けり、然るに日本国は叡山計りに伝教大師の御時・法華經の行者ましましけり、義真・
円澄は第一第二の座主なり第一の義真計り伝教大師にいたり、第二の円澄は半は伝教の御弟子・半は弘法の弟子な
り、第三の慈覚大師は始めは伝教大師の御弟子にいたり、御年四十にて漢土にわたりてより名は伝教の御弟其の跡をばつ
がせ給えども法門は全く御弟子にはあらず、而れども円頓の戒計りは又御弟子にいたり蝙蝠鳥のごとし鳥にもあらずね
ずみにもあらず梟鳥禽破鏡獸のごとし、法華經の父を食らい持者の母をかめるなり日をいとゆめにみしこれなり、さ
れば死去の後は墓なくてやみぬ、智証の門家・園城寺と慈覚の

門家・叡山と修羅と悪竜と合戦ひまなし園城寺をやき叡山をやく、智証大師の本尊の慈氏菩薩もやけぬ慈覚大師の本尊・大講堂もやけぬ現身に無間地獄をかんぜり、但中堂計りのこれり、弘法大師も又跡なし弘法大師の云く東大寺の受戒せざらん者をば東寺の長者とすべからず等御いましめの状あり、しかれども寛平法王は仁和寺を建立して東寺の法師をうつして我寺には叡山の円頓戒を持ざらん者をば住せしむべからずと宣旨分明なり、されば今の東寺の法師は鑒真が弟子にもあらず弘法の弟子にもあらず戒は伝教の御弟子なり又伝教の御弟子にもあらず伝教の法華經を破失す、去る承和二年三月二十一日に死去ありしかば公家より遺体をばほつづらせ給う、其の後誑惑の弟子等集りて御入定と云云、或はかみをそりてまいらするぞといひ或は三鈷をかんどよりなげたりといひ或は日輪夜中に出でたりといひ或は現身に大日如来となりたりといひ或は伝教大師に十八道ををし余らせ給うといひて師の徳をあげて智慧にか我が師の邪義を扶けて王臣を誑惑するなり、又高野山に本寺伝法院といひし二の寺あり本寺は弘法のたてたる大塔・大日如来なり、伝法院と申すは正覚房の立てし金剛界の大日なり、此の本末の二寺昼夜に合戦あり例せば叡山・園城のごとし誑惑のつもりて日本に二の禍の出現せるか、糞を集めて栴檀となせども焼く時は但糞の香なり大妄語を集めて仏とがつすとも但無間・大城なり、尼が塔は数年が間・利生広大なりしかども馬鳴菩薩の礼をつけて忽にくづれぬ、鬼弁婆羅門がとばりは多年・人をたばらかせしかども阿・縛・沙菩薩にせめられてやぶれぬ、留外道は石となつて八百年・陳那菩薩にせめられて水となりぬ、道士は漢土をたばらかすこと数百年・摩騰・竺蘭にせめられて仙經もやけぬ、趙高が国をとりし王莽が位をうばいしがごとく法華經の位をとて大日經の所領とせり、法王すでに国に失せぬ人王あに安穩ならんや、日本国は慈覚・智証・弘法の流なり一人として謗法ならざる人はなし。

但し事の心を案ずるに大莊嚴仏の末・一切明王仏の末法のごとし、威音王仏の末法には改悔ありしすら猶・

千劫・阿鼻地獄に墮つ、いかにいわうや日本国の眞言師・禅宗・念佛者等は一分の廻心なし如是展転至無數劫疑なきものか、かかる謗法の国なれば天もすてぬ天すつればふるき守護の善神もほこらをやひて寂光の都へかへり給いぬ、但日蓮計り留り居て告げ示せば国主これをあだみ数百人の民に、或は罵詈、或は悪口、或は杖木、或は刀剣、或は宅宅ことにせき、或は家家ごとにをう、それになはねば我と手をくだして一度まで流罪あり、去ぬる文永八年

九月の十二日に頸を切らんとす、最勝王経に云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に他方の怨賊来つて国人喪乱に遭う」等云云、大集経に云く「若しは復諸の刹利国王有つて諸の非法を作して世尊の声聞の弟子を悩乱し、若しは以て毀罵し刀杖をもつて打斫し及び衣鉢種種の資具を奪い、若しは他の給施せんに留難を

作さば我等彼れをして自然に他方の怨敵を卒起せしめん及び自らの国土も亦兵起り病疫・飢饉し非時の風雨・鬭諍言訟せしめん、又其の王をして久しからずして復当に己が国を亡失せしめん等云云、此等の経文のごときは日蓮この国になくば仏は大妄語の人、阿鼻地獄はいかで脱給うべき、去ぬる文永八年九月十二日に平の左衛門並び

に数百人に向て云く日蓮は日本国のはしらなり日蓮を失うほどならば日本国のはしらをたをすになりぬ等云云、此の経文に智人を国主等若は悪僧等がざんげんにより若は諸人の悪口によつて失にあつるならば、にはかにいくさをこり又大風吹き他国よりせめらるるべし等云云、去ぬる文永九年二月のどしくさ同じき十一年の四月の大風、同じき十月に大蒙古の来りしは偏に日蓮がゆへにあらずや、いわうや前よりこれをかながたり誰の人が

疑うべき、弘法・慈覚・智証の国に年久し其の上禅宗と念佛宗とのわざわいあいをこりて逆風に大波をこり大地震のかさなれるがごとし、さればやふやく国をとろつ太政入道が国をおさへ承久に王位つきはてて世・東につりしかども但国中のみだれにて他国のせめはなかりき、彼は謗法の者はあれども又天台の正法もすこし有り、其の上ささへ顕わす智人なしがるがゆへになのめなりき、譬へば師子のねぶれるは手をつけざればほす迅

流は櫓をささぎれば波たかからず盗人はとめざればいからず火は薪を加えざればさかんならず、謗法はあれどもあら
わす人なければ王法もしばらくはたえず国もをだやかなるにいたり、例せば日本国に仏法わたりはじめて候いしに始はな
に事もなかりしかども守屋 仏をやき僧をいましめ堂塔をやきしかば天より火の雨ふり国にはつさをこり兵乱つづきし
がごとし、此れはそれにはにるべくもなし、謗法の人人も国に充滿せり、日蓮
が大義も強くせめかかる修羅と帝釈と仏と魔王との合戦にもをとるべからず、金光明經に云く「時に鄰国の怨敵是くの
如き念を興さん当に四兵を具して彼の国土を壊るべし」等云云、又云く「時に王見已つて即四兵を嚴いて彼の国に発向し討
罰を為んと欲す我等爾の時に當に眷属無量無辺の藥叉諸神と各形を隠して為に護助を作し
彼の怨敵をして自然に降伏せしむべし」等云云、最勝王經の文又かくのごとし、大集經云云「仁王經云云、此等の經文の
ごときんば正法を行ずるものを国主あだみ邪法を行ずる者のかたうとせば大梵天王 帝釈 日月 四天等 隣国の賢王の
身に入りかわりて其の国をせむべしとみゆ、例せば訖利多王を雪山下王のせめ大族王を幻日王の失い
しがごとし、訖利多王と大族王とは月氏の仏法を失いし王ぞかし、漢土にも仏法をほろぼしし王みな賢王にせめられぬ
これは彼にはにるべくもなし仏法のかたうとなるようにて仏法を失なう法師を扶くと見えて正法の行者を失うゆゑに愚者
はすべてしらず智者なども常の智人はしりがたし、天も下劣の天人は知らずもやあるらん、されば漢土 月氏のいにしへの
みだれよりも大きなるべし。

法滅尽經に云く「吾般泥 の後 五逆濁世に魔道興盛し魔沙門と作つて吾が道を壊乱せん、乃至惡人転多く海中の
沙の如く善者甚だ少して若しは一若しは二云云、涅槃經に云く「是くの如き等の涅槃經典を信ずるものは爪上の土の
如く乃至是の經を信ぜざるものは十方界の所有の地土の如し」等云云、此の經文は時に當りて貴とく予が肝に染みぬ、
当世 日本国には我も法華經を信じたり信じたり、諸人の語のごときんば一人も謗法の者なし、此

の經文には末法に謗法の者・十方の地土・正法の者爪上の土等云云、經文と世間とは水火なり、世間の人云く日本國には日蓮一人計り謗法の者等云云、又經文には大地より多からんと云云、法滅尽經には善者二人、涅槃經には信者爪上土等云云、經文のごとくならば日本國は但日蓮一人こそ爪上土二人にては候へされば心あらん人人は經文をか用ゆべき世間をか用ゆべき。

問て云く涅槃經の文には涅槃經の行者は爪上の土等云云、汝が義には法華經等云云如何、答えて云く涅槃經に云く「法華の中の如し」等云云、妙樂大師云く「大經自ら法華を指して極と爲す」等云云、大經と申すは涅槃經なり涅槃經には法華經を極と指て候なり、而るを涅槃經の人の涅槃經を法華經に勝ると申せしは主を所従といぬ

下郎を上郎といぬし人なり、涅槃經をよむと申すは法華經をよむを申すなり、譬へ賢人は國主を重んずる者をば我をさぐれども悦ぶなり、涅槃經は法華經を下て我をほむる人をばあながちに敵とにくませ給う、此の例をもつて知るべし華嚴經 觀經 大日經等をよむ人も法華經を劣とよむは彼れ彼れの經經の心にはそむくべし

此れをもつて知るべし法華經をよむ人の此の經をば信するよつなれども諸經にても得道なるとおもつは此の經をよまぬ人なり、例せば嘉祥大師は法華玄と申す文十巻造りて法華經をほめしかども妙樂かれをせめて云く「毀其の中に在り何んぞ弘讚と成さん」等云云、法華經をやぶる人なりされば嘉祥は落ちて天台につかひて法華經

をよまず我れ經をよむならば惡道まぬがたとして七年まで身を橋とし給いき、慈恩大師は玄贊と申して法華經をほむる文十巻あり伝教大師せめて云く「法華經を讚むると雖も還て法華の心を死す」等云云、此等をもつておもつに法華經をよみ讚歎する人人の中に無間地獄は多く有るなり、嘉祥 慈恩すでに一乘誹謗の人ぞかし、

弘法 慈覺 智証あに法華經蔑如の人にあらざや、嘉祥大師のごとく講を廢し衆を散じて身を橋となせしも猶已前の法華經誹謗の罪やきさるらん、例せば不輕輕毀の衆は不輕菩薩に信伏隨從せしかども重罪いまだのこり

て千劫阿鼻に墮ちぬ、されば弘法・慈覺・智証等は設け、ひるがす心ありとも尚法華經をよむならば重罪きゑがたしいわ
うや・ひるがす心なし、又法華經を失ひ眞言教を昼夜に行ひ朝暮に伝法せしをや、世親菩薩・馬鳴菩薩は小をもつて大
を破せる罪をば舌を切らんとこそせさせ給ひしか、世親菩薩は仏説なれども阿含經をば・たわふれにも舌の上ををかしと
ちかひ、馬鳴菩薩は懺悔のために起信論をつくりて小乗をやぶり給き、嘉祥大師は天台大師
を請ひ奉りて百余人の智者の前にして五体を地になげ遍身にあせをながし紅のなんだをながして今よりは弟子を見じ
法華經をかうぜじ弟子の面をまほり法華經をよみたてまつれば我力の此の經を知るにたりとて天台よりも高僧老僧に
ておはせしがわざと人のみるときをひまいらせて河をこかづにちかつきてせなか

にのせまいらせて高座にのぼせたまつり結句御臨終の後には隋の皇帝にまいらせて小兒が母にをくれたるがごとくに足ず
りをしてなき給ひしなり、嘉祥大師の法華玄を見るにいたう法華經を謗じたる疏にはあらず但法華經と諸大乘經とは
門は浅深あれども心は一とがきてこそ候此れが謗法の根本にて候か。

華嚴の澄觀も眞言の善無畏も大日經と法華經とは理は一とこそかかれて候へ嘉祥大師とがあらば善無畏三蔵も脱が
たしされば善無畏三蔵は中天の国主なり位をすて他国にいたり殊勝・招提の二人にあひて法華經をつけ百千の石の塔
を立てしかば法華經の行者とこそみへしか、しかれども大日經を習ひしよりこのかた法華經を

大日經に劣るとやおもひけん、始はいたう其の義もなかりけるが漢土にわたりて玄宗皇帝の師となりぬ、天台宗をそねみ
思ふ心つき給ひけるかのゆへ、忽に頓死して二人の獄卒に鉄の縄・七すぢつけられて閻魔王宮にいたりぬ、命いまだつき
ずといゐてかかれしに法華經を謗ずるとやおもひけん眞言の觀念・印・眞言等をば・なげ

すて法華經の今此三界の文を唱えて縄も切れかかれ給ひぬ、又雨のいのりをおほせつけられたりしに忽に雨は下たりし
かども大風吹きて国をやぶる、結句死し給ひてありしには弟子等集りて臨終いみじきやうを・

ほめしかども無間・大城に墮ちにき、問うて云く何をもつてかこれをする、答えて云く彼の伝を見るに云く「今畏の遺形を
観るに漸く加縮小し黒皮隠隠として骨其露なり」等云云、彼の弟子等は死後に地獄の相の顯われたるをしらずして徳
をあぐなどをも企ともかきあらはせる筆は畏が失をかけり、死してありければ身やぶやく・

つづまりぢひさく皮はくろし骨あらはなり等云云、人死して後・色の黒きは地獄の業と定むる事は仏陀の金言ぞかし、
善無畏三蔵の地獄の業はなに事ぞ幼少にして位をすてめ第一の道心なり、月氏・五十余箇国を修行せり慈悲の余りに
漢土にわたれり、天竺・震旦・日本一閻浮提の内に真言を伝鈴をふる此の人の徳にあらずや、いかにして地獄に墮ちける
と後生をおもはん人人は御尋ねあるべし。

又金剛智三蔵は南天竺の大王の太子なり、金剛頂經を漢土にわたす其の徳善無畏のごとし、又互いに師となれり、
而るに金剛智三蔵勅宣によて雨の祈りありしかば七日が中に雨下る天子大に悦ばせ給うほどに忽に大風吹き来る、王臣
等けうさめ給いき使をつけて追はせ給いしかどもとかうのべて留りしなり、結句は姫宮の御死去

ありしに、いのりをなすべしとて御身の代に殿上の二女七歳になりしを新につみこめて焼き殺せし事こそ無慚にはおぼゆ
れ、而れども姫宮もいきかへ給はず不空三蔵は金剛智と月支より御ともせり、此等の事を不審とやおもひけん畏と智と
入滅の後月氏に還りて竜智に値い奉り真言を習いなをし天台宗に帰伏してありしが心計り

は帰えれども身はかへる事なし、雨の御いのりうけ給わりたりしが三日と申すに雨下る、天子悦ばせ給いて我れと御布施ひ
かせ給う、須臾ありしかば大風落ち下りて内裏をも吹きやぶり雲閣月卿の宿所一所もあるべし

ともみざりしかば天子大に驚きて宣旨なりて風をとどめよと仰せ下さる且らくありては又吹き又吹きせしほどに数日
が間やむことなし、結句は使をつけて追うてこそ風もやみてありしか、此の三人の悪風は漢土・日本の一切の真言師の大風
なり。

さにてあるやらん去ぬる文永十一年四月十二日の大風は阿弥陀堂の加賀法印・東寺第一の智者の雨のいのりに吹きたり
し逆風なり、善無畏・金剛智・不空の恵法をすこしもたがず伝えたりけるか・心にくし・心にくし。

弘法大師は去ぬる天長元年の二月大旱魃のありしに先には守敏・祈雨して七日が内に雨を下す但京中にふりて田舎に
そそがず、次に弘法承取て一七日に雨氣なし二七日に雲なし三七日と申せしに天子より和氣の真綱を使者として御幣を
神泉苑にまいらせたりしかば天雨下事三日、此れをば弘法大師並に弟子等此の雨をつばひとり我が

雨として今に四百余年弘法の雨といつ、慈覚大師の夢に日輪をいしと弘法大師の大妄語に云く弘仁九年の春・大疫をいの
りしかば夜中に大日輪出現せりと云云、成劫より已来・住劫の第九の滅・已上二十九劫が間に日輪夜中に

出でしといつ事なし、慈覚大師は夢に日輪をいしといつ内典五千・七千・外典三千余巻に日輪をいしとゆめにみるは吉夢と
いつ事有りやいなや、修羅は帝釈をあだみて日天をいたてまつる其の矢かへりて我が眼にたつ、殷の紂王は日天を的にいて
身を亡す、日本の神武天皇の御時・度美長と五瀬命と合戦ありしに命の手に矢たつ、命の云く我はこれ日天の子孫なり
日に向い奉りて弓をひくゆへに日天のせめをかをほれりと云云、阿闍世王は邪見を

ひるがえして仏に歸しまいらせて内裏に返りてぎよしんなりしが、おどろいて諸臣に向て云く日輪・天より地に落つとゆめ
にみる諸臣の云く仏の御入滅か云云、須跋陀羅がゆめ又かくのことし、我国は殊にいむべきゆめな

り神をば天照といつ国をば日本といつ、又教主釈尊をば日種と申す摩耶夫人日をはらむとゆめにみてまうけ給える
太子なり、慈覚大師は大日如来を叡山に立て釈迦仏をすて真言の三部経をあがめて法華經の三部の敵となせしゆへに此の
夢出現せり。

例せば漢土の善導が始は密州の明勝といぬし者に値うて法華經をよみたりしが後には道綽に値うて法華經をすて
觀經に依りて疏をつくり法華經をば千中無一・念仏をば十即十生・百即百生と定めて此の義を成せんがために

阿弥陀仏の御前にして祈誓をなす、仏意に叶うやいなや毎夜夢の中に常に一りの僧有りて来て指授すと云云、乃至一經法の如くせよ乃至觀念法門經等云云、法華經には「若し法を聞く者有れば」として成仏せざる無しと善導は「千の中に一も無し」等云云、法華經と善導とは水火なり善導は觀經をば十即十生・百即百生・無量義經に云く觀經は未だ眞實を顯さず」等云云、無量義經と楊柳房とは天地なり此れを阿弥陀仏の僧と成りて來つて汝が疏は眞なりと証し給わんはあに眞事ならんや、抑阿弥陀は法華經の座に來りて舌をば出だし給はざりけるか、觀音勢至は法華經の座にはなかりけるか、此れをもつてをも忿覺大師の御夢はわざわひなり。

問うて云く弘法大師の心經の秘鍵に云く「時に弘仁九年の春天下大疫す、爰に皇帝自ら黄金を筆端に染め紺紙を爪掌に握りて般若心經一卷を書写し奉り給う予、講読の撰に範りて經旨の宗を綴る未だ結願の詞を吐かざるに蘇生の族途にイずむ、夜變じて而も日光赫赫たり是れ愚身の戒徳に非ず金輪御信力の所為なり、但し神舎に詣でん輩は此の秘鍵を誦し奉れ、昔予鷲峰說法の筵に陪して親り其の深文を聞きたてまつる豈其の義に達せざらんや」等云云、又孔雀經の音義に云く「弘法大師歸朝の後眞言宗を立てんと欲し諸宗を朝廷に群集す即身成仏の義を疑う、大師智拳の印を結びて南方に向うに面門俄に開いて金色の毘盧遮那と成り即便本体に還歸す、入我・

我入の事即身頓証の疑い此の日釈然たり、然るに眞言瑜伽の宗・秘密曼荼羅の道彼の時より建立しぬ、又云く「此の時に諸宗の学徒大師に歸して始めて眞言を得て請益し習学す三論の道昌・法相の源仁・華嚴の道雄・天台の円澄等皆其の類なり、弘法大師の伝に云く歸朝泛舟の日、発願して云く我が所學の教法若し感応の地有らば此三鉢其の処に到るべし仍て日本の方に向て三鉢を抛げ上ぐ遙かに飛んで雲に入る十月に歸朝す」云云、又云く「高野山の下に入定の所を占む乃至彼の海上の三鉢今新たに此に在り」等云云、此の大師の徳無量なり其の両三を示すかくのとくの大徳あり、いかに此の人を信ぜずしてかゝつて阿鼻地獄に墮といはんや、答えて云く

予も仰いで信じ奉る事かくのごとし但古の人人も不思議の徳ありしかども仏法の邪正は其にはよらず、外道が或は恒河を耳に十二年留め、或は大海をすひほし、或は日月を手ににぎり、或は釈子を牛羊となしなんどせしかども、いよいよ大慢ををこして生死の業とこそなりしか、此れをば天台云く、名利を邀め見愛を増す、とこそ釈せられて候へ、光宅が忽に雨を下し須臾に花をさかせしをも、妙樂は、感応此の如くなれども猶理に称わず、とこそかかれて候へ、されば天台大師の法華經をよみて、須臾に甘雨を下せ、伝教大師の三日が内に甘露の雨をふらしておはせしも、其をもつて仏意に叶うとはをほせられず、弘法大師いかなる徳ましますとも法華經を戯論の法と定め釈迦仏を無明の辺域とかかせ給へる御ふでは智慧かしこからん人は用ゆべからず、いかにいわうや上にあげられて候徳どもは不審ある事なり、弘仁九年の春天下大疫、等云云、春は九十日、何の月、何の日ぞ是、一、又弘仁九年には大疫ありけるは是、二、又「夜変じて日光赫赫たり」と云云、此の事第一の大事なり弘仁九年は嵯峨天皇の御宇なり左史右史の記に載せたりや是、三、設い載せたりとも信じがたき事なり成劫二十劫・住劫九劫・已上二十九劫が間にいまだ無き天変なり、夜中に日輪の出現せる事如何又如來一代の聖教にもみず未来に夜中に日輪輸出すべしとは三皇・五帝の三墳・五典にも載せず、仏經のときんば壞劫にこそ二の日・三の日乃至七の日は輸出すべしとは見えなれどもかれは昼のひとぞかし夜日出現せば東西北の三方は如何、設い内外の典に記せずとも現に弘仁九年の春何れの月何れの夜何れの時に日出ずるといつ公家・諸家・叡山等の日記あるならばすこし信するへんもや、次ぎ下に「昔予鷲峰説法の筵に陪して親り其の深文を聞く」と等云云、此の筆を人に信ぜさせしめんがためにかまふだす大妄語か、されば靈山にして法華は戯論・大日經は眞実と仏の説き給けるを阿難・文殊が、りて妙法華經をば眞実とかけるかい、いづにかいなき姪女・破戒の法師等が歌をよみて雨す雨を三七日まで下さざりし人はかかる徳あるべしや、是四、孔雀經の音義に云く「大師智拳の印を結ん

で南方なんぽうに向うに面門めんもん俄かに開いて金色きんしきの毘盧遮那びるしゃなと成るなり等云云、此れ又何いづれれの王いづれ何いづれれの年時かんどぞ漢土かんどには建元を初とし日本には大宝を初として緇素しその日記大事には必ず年号のあるが、これほどの大事にいかでか王も臣も年号も日時もなきや、又次ぎに云く「三論の道昌どうしやう、法相ほふしやうの源仁げんじん、華嚴けこんの道雄どうゆう、天台てんだいの円澄えんちやう」等云云、抑も円澄は寂光大師じゃくくわうだいし、天台第二の座主ざすなり、其の時何ぞ第一の座主ざす、義真根本の伝教大師をば召さざりけるや、円澄は天台第二の座主ざす、伝教大師の御弟子なれども又弘法大師の弟子なり、弟子を召さんよりは三論さんろん、法相ほふしやう、華嚴けこんよりは天台の伝教でんぎやう、義真ぎしんの一人を召すべかりけるか、而も此の日記に云く「真言瑜伽の宗、秘密曼荼羅彼の時よりして建立す」等

云云、此の筆は伝教でんぎやう、義真ぎしんの御存生かごんしやうとみゆ、弘法は平城天皇・大同二年より弘仁十三年までは盛に真言をひろめし人なり、其の時は此の二人現におはします又義真は天長十年までおはせしかば其の時まで弘法の真言はひろまらざりけるか、かたがた不審あり、孔雀経の疏は弘法の弟子、真済が自記なり信じがたし、又邪見者が公家、諸家・円澄の記をひかるべきか、又道昌どうしやう、源仁げんじん、道雄どうゆうの記を尋ぬべし、「面門めんもん俄かに開いて金色の毘盧遮那と成る」等云云、面門とは口なり口の開けたりけるか眉間みけん開くとかかんとしけるか、りて面門とかけるか、ぼう書をつく

るゆへにかかるあやまりあるか、「大師智拳の印を結んで南方に向うに面門めんもん俄かに開いて金色の毘盧遮那と成る」等云云、涅槃經ねはんぎやうの五に云く「迦葉かしやう、仏に白して言さく世尊、我今是の四種の人に依らず何を以ての故に瞿師羅經の中の如き仏くしら、瞿師羅が為に説きたまわく若し天魔梵破壊せんと欲するが為に變じて仏の像と為り三十二相・八十種好を具足し莊嚴し、円光一尋面部円満なること猶月の盛明なるが如く眉間の毫相白きこと珂雪に踰え乃至左の脇

より水を出し右の脇より火を出す」等云云、又六の巻に云く「仏迦葉に告げたまわく我般涅槃して乃至後是の魔波旬漸く当に我が正法を沮壞す乃至化して阿羅漢の身及仏の色身と作り魔王此の有漏の形を以て無漏の身と作り我が正法を壞らん」等云云、弘法大師は法華經を華嚴經・大日經に対して戲論等云云、而も仏身を現す此れ涅槃

經には魔有漏の形をもつて仏となつて我が正法をやぶらんと記し給う、涅槃經の正法は法華經なり故に經の次ぎ下の文に云く「久く已に成仏す」、又云く「法華の中の如し」等云云、釈迦多宝・十方の諸仏は一切經に対して「法華經は眞実大日經等の一切經は不眞実」等云云、弘法大師は仏身を現じて華嚴經・大日經に対して「法華經は戲論」等云云、仏説まことならば弘法は天魔にあらずや、又三鈷の事殊に不審なり漢土の人の日本に來りてほりいたすとも信じがたし、已前に人をやつかわしてうずみけん、いわうや弘法は日本人がかかる誑乱其の数多し此等をもつて仏意に叶う人の証拠とはしりがたし。

されば此の眞言・禪宗・念仏等やうやくかさなり来る程に人王八十二代・尊成・隱岐の法皇・權の太夫殿を失わんと年ごろはげませ給いけるゆへに大王たる国主なればなにとなくとも師子王の兔を伏するがごとく、鷹の雉を取るやうにこそあるべかりし上・叡山・東寺・園城・奈良・七大寺・天照太神・加茂・春日等に数年が間、或は調伏、或は神に申させ給いしに二日三日だにもささへかねて佐渡国・阿波国・隱岐国等にながし失て終に

かくれさせ給いぬ、調伏の上首御室は但東寺をかへらるるのみならず眼のごとくあひせさせ給いし第一の天童・勢多伽が頸切られたりしかば調伏のしるし還著於本人のゆへこそ見へ候へ、これはわづかの事なり此の後定んで日本国の諸臣万民一人もなく乾草を積みて火を放つがごとく大山のくづれて谷をつむるがごとく我が国・他國にせめらるる事出来すべし、此の事日本國の中に但日蓮一人計りしれり、いぬいたすならば殷の紂王の

比干が胸をさきしがごとく夏の桀王の竜蓬が頸を切りしがごとく檀弥羅王の師子尊者が頸を刎ねしがごとく竺の道生が流されしがごとく法道三蔵のかなやきをやかれしがごとくならんずらんとはかねて知りしかども法華經には「我身命を愛せず、但無上道を惜しむ」ととかれ涅槃經には「寧身命を喪うとも教を匿さざれ」といさめ給えり、今度命をおしむならばいつの世にか仏になるべき、又何なる世にか父母・師匠をもすくひ奉るべきと。

ひとへをもひ切りて申し始めしかば案にたがはず 或は所をおひ 或はのり 或はつたれ 或は疵をかつふるほどに去ぬる
弘長元年辛酉五月十二日に御勘氣をかつふりて伊豆の国 伊東にながされぬ 又同じき弘長三年癸亥二月二十二日に
ゆりぬ。

其の後 弥菩提心強盛にして申せばいよいよ大難かさなる事大風に大波の起るがごとし、昔の不輕菩薩の杖木のせめも
我身につみしられたり覺徳比丘が歡喜仏の末の大難も此れには及ばじとをばゆ、日本六十六箇国 嶋二の中に一日片時
も何れの所にすむべきやうもなし、古は二百五十戒を持ちて忍辱なる事 羅云のごとくなる持戒の聖人も富樓那のごとく
なる智者も日蓮に値いぬれば悪口をはく正直にして魏徴 忠仁公のごとくなる賢者等も日蓮を見ては理をまげて非とをこ
なう、いわつや世間の常の人人は犬のさるをみたるがごとく獵師が鹿を。

こめたるにいたり、日本国の中に一人として故こそあるらめといつ人なし道理なり、人ごとに念仏を申す人に向うことに
念仏は無間に墮つるといつゆへに、人ごとに真言を尊む真言は国をほろぼす悪法といつ、国主は禅宗を尊む日蓮は天魔の
所為といつゆへに我と招けるわざわひなれば人のるをもとがめず とがむとても一人ならず、打つをもいたまず本より
存ぜしがゆへにがついよいよ身もをしまず力にまかせてせめしかば禅僧数

百人・念仏者 数千人 真言師 百千人 或は奉行につき 或はきり人につき 或はきり女房につき 或は後家尼御前等につい
て無尽のざんげんをなせし程に最後には天下第一の大事 日本国を失わんと咒する法師なり、故最明寺殿 極楽寺殿を
無間地獄に墮ちたりと申す法師なり御尋ねあるまでもなし但須臾に頸をめせ弟子等をば又頸を切り 或は遠国につかは
し 或は籠に入れよと尼ごぜんたちからせ給いしかばそのまま行われけり。

去ぬる文永八年辛 未九月十二日の夜は相模の国たつの口にて切らるべかりしが、いかにしてやありけん其の夜はのびて
依智といつとろろづきぬ 又十三日の夜はゆりたりとどめきしが又いかにやありけんぞとの

国までゆく、今日切るあす切るといひしほどに四箇年といつに結句は去ぬる文永十一年太歳甲戌二月十四日にゆりて同じき三月二十六日に鎌倉へ入り同じき四月八日平の左衛門の尉に見参してやうやうの事申したりし中に今年は蒙古は一定よすべしと申しぬ、同じき五月の十二日にかまくらをいでて此の山に入れり、これはひとへ父母の恩師匠の恩・三宝の恩・国恩をほつぜんがために身をやぶり命をすつれども破れざればさでこそ候へ

又賢人の習い三度国をいさむるに用いずば山林にまじわれといつことは定まるれいなり、此の功德は定めて上三宝・下梵天・帝釈・日月までもしろしめしぬらん、父母も故道善房の聖霊も扶かり給うらん、但疑い念うことあり目連尊者は扶けんとおもいしかども母の青提女は餓鬼道に墜ちぬ、大覺世尊の御子なれども善星比丘は阿鼻地獄墜ちぬ、これは力のまますくはんとをばせども自業自得果のへんはすくひがたし、故道善房はいたう弟子なれば日蓮をばにくしとはをばせざりけるらめどもきわめて臆病なりし上・清澄をはなれじと執せし人

なり、地頭景信がおそろしさといふ提婆・瞿伽利にことならぬ円智・実成が上と下とに居てをどせしをあながちにをそれていとをしをもつとしごろの弟子等をだにもすてられし人なれば後生はいかんかと疑わし、但一の冥加には景信と円智・実成とがさきにゆきしこそ一のたすかりとはをもへども彼等は法華經十羅刹のせめを・

かほりてはやく失ぬ、後にすこし信ぜられてありしはいさかひの後のちぎりきなり、ひるのともしびなにかせん其の上いかなる事あれども子弟子などいづ者は不便なる者ぞかし、力なき人にもあらざりしがさどの国までゆきしに一度もとぶらはれざりし事は法華經を信じたるにはあらぬぞかしそれにつけてもあさましかれば彼の

人の御死去ときくには火にも入り水にも沈みはしりたちてもゆひて御はかをもたたいて經をも一卷読誦せんとこそおもへども賢人のならひ心には遁世とはおもはねども人は遁世とこそおもつらんにゆへもなくはしり出ずるならば末へもとをらずと人おもひぬべし、さればいかにおもひたてまつれどもまいるべきにあらず、但

し各各二人は日蓮が幼少の師匠にておはします、勤操僧正・行表僧正の伝教大師の御師たりしがかへりて御弟子とな
らせ給いしがごとし、日蓮が景信にあだまれて清澄山を出でしにかくしおきてしのび出でられたりしは天下第一の法華經の
奉公なり後生は疑いおぼすべからず。

問うて云く法華經一部八卷二十八品の中に何物か肝心なるや、答えて云く華嚴經の肝心は大方便弘華嚴經阿含經
の肝心は仏説中阿含經・大集經の肝心は大方等・大集經・般若經の肝心は摩訶般若波羅蜜經・雙觀經の肝心は仏説無量
壽經・觀經の肝心は仏説觀無量壽經・阿彌陀經の肝心は仏説阿彌陀經・涅槃經の肝心は大般涅槃經かくのごとくの
一切經は皆如是我聞の上の題目其の經の肝心なり、大は大につけ小は小につけて題目をもつて肝心と

す、大日經・金剛頂經・蘇悉地經等亦復かくのごとし、仏も又かくのごとし大日如來・日月燈明仏・燃燈仏・大通仏・
雲雷音王仏是等の仏も又名の内に其の仏の種種の徳をそなへたり、今の法華經も亦もつてかくのごとし、

如是我聞の上の妙法蓮華經の五字は即一部八卷の肝心、亦復一切經の肝心一切の諸仏・菩薩・二乘・天人・修羅・龍神等の
頂上の正法なり、問うて云く南無妙法蓮華經と心もしらぬ者の唱つると南無大方広弘華嚴經と心もしらぬ者の唱つる
と齊等なりや淺深の功德差別せりや、答えて云く淺深等あり、疑て云く其の心如何、答えて云く小河は露と涓と井
と渠と江とをば収むれども大河ををさめず大河は露乃至小河を撰むれども大海ををさめず、

阿含經は井江等露涓ををさめたる小河のごとし、方等經・阿彌陀經・大日經・華嚴經等は小河ををさむる大河なり、
法華經は露・涓・井・江・小河・大河・天雨等の一切の水を一てももらさぬ大海なり、譬えば身の熱者の大寒水の辺に
いねつればすずしく小水の辺に臥ぬれば苦きがごとし、五逆謗法の大きな一闍提人・阿含・華嚴・觀經・大日經等の小

水の辺にては大罪の大熱さんじがたし、法華經の大雪山の上に臥ぬれば五逆・誹謗・一闍提等の大熱忽に散ずべしされば
愚者は必ず法華經を信ずべし、各各經經の題目は易き事同じといふとも愚者と智者との唱つる功德は天地雲泥なり、譬へ

ば大綱は大力も切りがたし小力なれども小刀をもつてたやすくこれをきる、譬は堅石をば鈍刀をもては大力も破がたし、利剣をもては小力も破りぬべし、譬は薬はしらなども服すれば病やみぬ食は服すれども病やまず、譬は仙薬は命をのべ凡薬は病をいやせども命をのべず。

疑つて云く二十八品の中に何か肝心ぞや、答えて云く、或は云く品品皆事に随いて肝心なり、或は云く方便品・寿量品肝心なり、或は云く方便品肝心なり、或は云く寿量品肝心なり、或は云く開示悟入肝心なり、或は云く実相肝心なり。

問うて云く汝が心如何答う南無妙法蓮華経肝心なり、其の証如何阿難・文殊等如是我聞等云云、問うて云く心如何、答えて云く阿難と文殊とは八年が間此の法華経の無量の義を一句・一偈・一字も残さず聴聞してありしが仏の滅後に結集の時九百九十九人の阿羅漢が筆を染めてありしに先づはじめに妙法蓮華経とかかせ給いて如是我聞と唱えさせ給いしは妙法蓮華経の五字は一部八巻・二十八品の肝心にあらずや、されば過去の燈明仏の時よ

り法華経を講ぜし光宅寺の法雲法師は如是とは將に所聞を伝えんとす前題に一部を挙ぐるなりと等云云、靈山にまのあたりきこしめしてありし天台大師は如是とは所聞の法体なりと等云云章安大師の云く記者釈して曰く蓋し序王とは経の玄意を叙し玄意は文心を述すと等云云、此の釈に文心とは題目は法華経の心なり妙樂大師云く一代の教法を収むること法華の文心より出ずと等云云、天竺は七十箇国なり總名は月氏国日本は六十箇国總名

は日本国月氏の名の内に七十箇国乃至人畜珍宝みなあり、日本と申す名の内に六十六箇国あり、出羽の羽も奥州の金も乃至国の珍宝・人畜乃至寺塔も神社もみな日本と申す二字の名の内に摂れり、天眼をもつては日本と申す二字を見て六十六国乃至人畜等をみるべし法眼をもつては人畜等の此に死し彼に生るをもみるべし譬は人の声をきいて体をしり跡をみて大小をしる蓮をみて池の大小を計り雨をみて竜の分音をかんがう、これはみな一に

一切の有るごとわりなり、阿含經の題目には大旨一切はあるやうなれども但小釈迦・一仏のみありて他仏なし、華嚴經・觀經・大日經等には又一切有るやうなれども二乗を仏になすやうと久遠実成の釈迦仏いまさず、例せば華さいて菓ならず雷なつて雨ふらず鼓あつて音なし眼あつて物をみず女人あつて子をうまず人あつて命なし又神なし、大日の眞言・藥師の眞言・阿弥陀の眞言・觀音の眞言等又かくのごとし、彼の經經にしては大王・須弥山・日月・良藥・如意珠・利劍等のやうなれども法華經の題目に対すれば雲泥の勝劣なるのみならず皆各各当体の自用を失ふ、例せば衆星の光の一の日輪にうばはれ諸の鉄の一の磁石に値うて利性のつき大劍の小火に値て用を失ない牛乳・驢乳等の師子王の乳に値うて水となり衆狐が術・犬に値うて失い・狗犬が小虎に値うて色を變ずるがごとし、南無妙法蓮華經と申せば南無阿弥陀仏の用も南無大日眞言の用も觀世音菩薩の用も一切の諸仏・諸經・諸菩薩の用皆悉く妙法蓮華經の用に失なはる、彼の經經は妙法蓮華經の用を借ずば皆いたづらのものなるべし当時眼前のことはなり、日蓮が南無妙法蓮華經と弘むれば南無阿弥陀仏の用は月のかくるがごとく塩のひるがごとく秋冬の草のかるるがごとく氷の白天にとくるがごとくなりゆくをみよ。

問うて云く此の法実にいみじくばなど迦葉・阿難・竜樹・馬鳴・無著・天親・南岳・天台・妙樂・伝教等は善導が南無阿弥陀仏とすすめて漢土に弘通せしがごとく、慧心・永觀・法然が日本国を皆阿弥陀仏になしたるがごとくすすめ給はざりけるやらん、答えて云く此の難は古の難なり今はじめたるにはあらず、馬鳴・竜樹・菩薩等は仏の滅後・六百年・七百年等の大論師なり、此の人人世にいでて大乘經を弘通せしかば諸諸の小乗の者疑つて云く迦葉・阿難等は仏の滅後・二十年・四十年住寿し給いて正法をひろめ給いしは如来一代の肝心をこそ弘通し給いしか、而るに此の人人は但苦・空・無常・無我の法門をこそ詮とし給いしに今馬鳴・竜樹等かしこといふとも迦葉・阿難等にはすぐべからず是

一、迦葉は仏にあひまいらせて解をえたる人なり、此の人人は仏にあひたてまつらず是二、外道

は常樂我淨と立てしを仏世に出でさせ給いて苦空・無常・無我と説かせ給いき、此のどもは常樂我淨といへり、されば仏も御入滅なり又迦葉等もかくれさせ給いぬれば第六天の魔王が此のどもが身に入りかはりて仏法をやぶり外道の法となさんとするなり、されば仏法のあだをば頭をわれ頸をきれ命をたて食を止めよ国を追へ諸の小乗の人人申せしかども馬鳴・竜樹等は但・二人なり昼夜に悪口の声をきき朝暮に杖木をかつぶりしなり、而れども此の二人は仏の御使ぞかし、正く摩耶經には六百年に馬鳴出で七百年に竜樹出でんと説かれて候、其の上楞伽經等にも記せられたり又付法藏經には申すにをよばず、されども諸の小乗のどもは用いず但めくらぜめにせめしなり、如来現在猶多怨嫉・況滅度後の經文は此の時にあたりて少しつみしられけり、提婆菩薩の外道にころされ師子尊者の頸をきられし此の事をもつておもひやらせ給へ。

又仏滅後・二千五百余年にあたりて月氏よりは東に漢土といふ国あり陳隋の代に天台大師出世す、此の人の云く如来の聖教に大あり小あり顕あり密あり権あり実あり、迦葉・阿難等は一向に小を弘め馬鳴・竜樹・無著・天親等は権大乘を弘めて実大乘の法華經をば或は但指をさして義をかくし或は經の面をのべて始中終をのべず、或は迹門をのべて本門をあらはさず、或は本迹あつて觀心なしといひしかば、南三北七の十流が末数千万人時をつくりどつとわらふ、世の末になるままに不思議の法師も出現せり、時にあたりて我等を偏執する者はありとも後漢の永平十年丁卯の歳より今陳隋にいたるまでの三藏・人師・二百六十余人をもものもしらずと申す上謗法の者なり惡道に墜つるといふ者出来せり、あまりのものをくるはしさに法華經を持て来り給へる羅什三藏をもものしらぬ者と申すなり、漢土はさてもをけ月氏の大論師竜樹・天親等の数百人の四依の菩薩もいまだ実義をのべ給はずといふなり、此をころしたらん人は鷹をころしたるものなり鬼をころすにもすぐべしとのしりき、又妙樂大師の時月氏より法相真言わたり漢土に華嚴宗の始まりたりしをとかくせめしかばこれも又さはぎしなり。

日本国には伝教大師が仏滅後・一千八百年にあたりていでさせ給ひ天台の御釈を見て欽明より已来二百六十余年が間の六宗をせめ給ひしかば在世の外道漢土の道士日本に出現せりと謗ぜし上仏滅後・一千八百年が間月氏漢土日本になかりし円頓の大戒を立てんといふのみならず、西国の観音寺の戒壇・東国下野の小野寺の戒壇・中国大和の国東大寺の戒壇は同く小乗臭糞の戒なり瓦石のごとし、其を持つ法師等は野干猿猴等のこととありしかばあら不思議や法師ににたる大蝗虫国に出現せり仏教の苗一時につせなん、殷の紂夏の桀法師となりて日本に生まれたり、後周の宇文唐の武宗・二たび世に出現せり仏法も但今失せぬべし国もほろびなんと大乘・小乗の二類の法師出現せば修羅と帝釈と頂羽と高祖と一国に並べるるべしと、諸人手をたたき舌をふるふ、在世には仏と提婆が二の戒壇ありてそごくの人人死にき、されば他宗にはそむくべし我が師天台大師の立て給はざる円頓の戒壇を立てしといふ不思議さよあらおそろしおそろしとのしりあえりき、されども經文分明にありしかば叡山の大乘戒壇すでに立てさせ給ひぬ、されば内証は同じけれども法の流布は迦葉阿難よりも馬鳴・竜樹等はすぐれ馬鳴等よりも天台はすぐれ天台よりも伝教は超えさせ給ひたり、世末になれば人の智はあさく仏教はふかくなる事なり、例せば軽病は凡薬・重病には仙薬 病人には強きかたつど有りて扶くるこれなり。問うて云く天台・伝教の弘通し給わざる正法ありや、答えて云く有り 求めて云く何物ぞや、答えて云く三あり、末法のために仏留め置き給う迦葉・阿難等馬鳴・竜樹等天台・伝教等の弘通せさせ給はざる正法なり、求めて云く其の形貌如何、答えて云く一には日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし、所謂宝塔の内の人ごとに有智無智をきらはず一同に他事をすてて南無妙法蓮華經と唱うべし、此の事いまだひろまらず一閻浮提の内に仏滅後・二千二百二十五年が間・一人も唱えず日蓮一人南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經等と声

もをしまなず唱となづるなり、例せば風に随したがつて波の大小あり薪によつて火の高下あり池に随したがつて蓮の大小あり雨の大小は竜
による根ふかければ枝しげし源遠ければ流ながしといつこれなり、周の代の七百年は文王の礼孝による秦の世ほどもなし
始皇の左道によるなり、日蓮にちれんが慈悲曠大ならば南無妙法蓮華經は万年の外未来までもながるべし、日本国の一切衆生の
盲目をひらける功德あり、無間地獄の道をふさぎぬ、此の功德は伝教天台にも超へ
竜樹迦葉にもずぐれたり、極楽百年の修行は穢土の一日の功德に及ばず、正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか、
是れひとへに日蓮にちれんが智のかしこきにはあらず時のかしこむる耳、春は花さき秋は菓くだなる夏はあたたかに冬はつめたし時の
しからしむるに有らずや。

「我滅度の後、後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て断絶して惡魔、魔民、諸の天竜、夜叉、鳩槃荼等に其の使たよりり
を得せしむること無けん」等云云、此の經文若しむなくなるならば舍利弗は華光如来とならじ迦葉尊者は光明如来とな
らじ目もっけんは多摩羅跋耆檀香仏とならじ阿難は山海慧自在通王仏とならじ摩訶波闍波提比丘尼は一切衆生喜見仏とな
らじ耶輸陀羅比丘尼は具足千万光相仏とならじ、三千塵点も戲論となり五百塵点も妄語となりて恐らくは教主釈尊は
無間地獄に墮ち多宝仏は阿鼻の炎にむせび十方の諸仏は八大地獄を栖すまかし一切の菩薩は一百三十六の苦をつくべし
かでかその義候べき、其の義なくば日本国は一同の南無妙法蓮華經なり、されば花は根にかへり真味は土にとどまる、此の
功德は故道善房の聖靈の御身にあつまるべし、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

建治二年太歲丙子七月二十一日

之を記す甲州波木井郷身延山より安房の国・東条の郡・清澄山・淨頭房・義成房の許に奉送す

御状給り候畢ぬ、親疎と無く法門と申すは心に入れぬ人はいはぬ事にて候ぞ御心得候へ御本尊図して進候 此の法華經は仏の在世よりも仏の滅後・正法よりも像法・像法よりも末法の初には次第に怨敵強くなるべき由をだにも御心へあるならば日本国に是より外に法華經の行者なしこれを皆人存じ候ぬべし、道善御房の御死去の由 去る月粗承わり候、自身早と参上し此の御房をもやがてつかはすべきにて候しが自身は内心は存ぜずといへども人目には遁世のやうに見えて候はなにとなく此の山を出でず候、此の御房は又内内・人の申し候しは宗論

やあらんずらんと申せしゆへに十方にわかつて経論等を尋ねしゆへに国国の寺寺へ人をあまたつかはして候に此の御房はするがの国へつかはして当時こそ来て候へ又此の文は随分大事の大事どもをかきて候ぞ詮なからん人人にきかせなばあしかりぬべく候、又設いさなくともあまたになり候はば・ほかさまにもきこえ候なば御ため又このため安穩ならず候はんか、御まへと義成房と二人此の御房をよみてとして嵩がもりの頂にて三三遍又・故道善御房の御はかにて一遍よませさせ給いては此の御房にあづけさせ給いてつねに御聴聞候へたびたびになり候ならば心づかせ給う事候なむ、恐恐謹言。

七月二十六日

日蓮 花押

清澄御房

四七

法華取要抄

文永十一年五月

五十三歳御作

与富木常忍

於身延

331P

扶桑沙門日蓮之を述ぶ

夫れ以れば月支 西天より漢土 日本に渡来する所の經論 五千・七千余卷なり、其中の諸經論の勝劣 浅深 難易、先後、自見に任せて之を弁うことは其の分に及ばず、人に随い宗に依つて之を知る者は其の義紛紜す、所謂華嚴宗の云く「一切經の中に此の經第一」と、法相宗の云く「一切經の中に深密經第一」と、三論宗の云く「一切經の中に般若經第一」と、真言宗の云く「一切經の中に大日の三部經第一」と、禪宗の云く或は云く「教内には楞伽經第一」と、或は云く「首楞嚴經第一」と、或は云く「教外別傳の宗なり」と、浄土宗の云く「一切經の中に浄土の三部經末法に入りては機教相應して第一なり」と、俱舍宗 成実宗 律宗云く「四阿含並に律論は仏説なり華嚴經 法華經等は仏説に非ず外道の經なり」或は云く或は云く、而に彼れ彼れ宗宗の元祖等 杜順 智儼 法蔵 澄観 玄奘 慈恩 嘉祥 道朗 善無畏 金剛智 不空 道宣 鑒真 曇鸞 道綽 善導 達磨 慧可等なり、此等の三藏大師等は皆聖人なり賢人なり智は日月に齊く徳は四海に弥れり、其の上各各に經 律 論に依り更互に証拠有り随つて王臣国を傾け士民之を仰ぐ末世の偏學設い是非を加うとも人信用を致さじ、爾りと雖も宝山に來り登つて瓦石を採取し梅檀に歩み入つて伊蘭を懷き取らば悔恨有らん、故に万人の誘りを捨て猥りに取捨を加う我が門弟委細に之を尋討せよ。

夫れ諸宗の人師等 或は旧訳の經論を見て新訳の聖典を見ず 或は新訳の經論を見て旧訳を捨置き 或は自宗の曲に執著して己義に随い愚見を注し止めて後代に之を加添す、株杭に驚き騒ぎて兎獸を尋ね求め智円扇に發して仰いで天月を見る非を捨て理を取るは智人なり、今末の論師 本の人師の邪義を捨て置いて専ら本經 本論を引き見る

に五十余年の諸經の中に法華經第四法師品の中の已今当の三字最も第一なり、諸の論師諸の人師定めて此經文を見けるか、然りと雖も、或は相似の經文に狂い、或は本師の邪会に執し、或は王臣等の帰依を恐るるか、所謂金光明經の「是諸經之王」密嚴經の「一切經中勝」六波羅蜜經の「總持第一」大日經の「云何菩提」華嚴經の「能信是經 最為難」般若經の「入法性 不見一事」大智度論の「般若波羅蜜最第一」涅槃論の「今者涅槃理」等なり、此等諸文は法華經の已今当の三字に相似せる文なり然りと雖も、或は梵帝、四天王等の諸經に對当すれば是れ諸經の王なり、或は小乘經に相對すれば諸經の中の王なり、或は華嚴勝鬘等の經に相對すれば一切經の中に勝れたり全く五十余年の大小權實蹟密の諸經に相對して是れ諸經の王の大王なるに非ず所詮所對を見て經經の勝劣を弁うべきなり、強敵を臥伏するに始て大力を知見する是なり、其の上諸經の勝劣は釈尊一仏の淺深なり全く多宝分身の助言を加うるに非ず私説を以て公事に混ずる事勿れ、諸經は或は二乘凡夫に對揚して小乘經を演説し、或は文殊解脫月金剛薩等の弘伝の菩薩に對向して全く地涌千界の上行等には非ず、今法華經と諸經とを相對するに一代に超過すること二十種之有り、其の中最要二有り所謂三五の二法なり三とは三千塵点劫なり諸經は或は釈尊の因位を明すこと、或は三祇・或は動逾塵劫、或は無量劫なり、梵王云く此の土には二十九劫より已來知行の主なり第六天帝釈四天王等も以て是くの如し、釈尊と梵王等と始めて知行の先後之を諍論す爾りと雖も一指を挙げて之を降伏してより已來梵天頭を傾け魔王掌を合せ三界の衆生をして釈尊に歸伏せしむる是なり、又諸仏の因位と釈尊の因位と之を糾明するに諸仏の因位は、或は三祇、或は五劫等なり、釈尊の因位は既に三千塵点劫より已來娑婆世界の一切衆生の結縁の大士なり、此の世界の六道の一切衆生は他土の他の菩薩に有縁の者一人も之無し、法華經に云く「爾の時に法を聞く者は各諸仏の所に在り」等云云、天台云く「西方は仏別に縁異り故に子父の義成せず」等云云、妙樂云く「弥陀釈迦二仏既に殊なり況や宿昔の縁別にして化導同じからざるをや結縁は生の如く成熟は

養の如し生養縁異れば父子成ぜず等云、当世日本国の一切衆生弥陀の来迎を待つは譬えば牛の子に馬の乳を含め瓦の鏡に天月を浮ぶるが如し、又果位を以て之を論ずれば諸仏如来、或は十劫百劫千劫已来の過去の仏なり、教主釈尊は既に五百塵点劫より已来妙覺果満の仏なり大日如来、阿彌陀如来、薬師如来等の尽十方の諸仏は我

等が本師教主釈尊の所従等なり、天月の万水に浮ぶ是なり、華嚴經の十方台上の毘盧遮那大日經、金剛頂經、両界の大日如来は宝塔品の多宝如来の左右の脇士なり、例せば世の王の両臣の如し此の多宝仏も、寿量品の教主釈尊の所従なり、此の土の我等衆生は五百塵点劫より已来教主釈尊の愛子なり不孝の矢に依つて今に覺知せずと雖も

他方の衆生には似る可からず、有縁の仏と結縁の衆生とは譬えば天月の清水に浮ぶが如く無縁の仏と衆生とは譬えば聾者の雷の声を聞き盲者の日月に向うが如し、而るに或る人師は釈尊を下して大日如来を仰崇し、或る人師は世尊は無縁なり阿彌陀は有縁なり、或る人師の云く小乗の釈尊と或は華嚴經の釈尊と或は法華經迹門の釈尊と此等の諸師並びに檀那等釈尊を忘れて諸仏を取ることは例せば阿闍世太子の頻婆沙羅王を殺し釈尊に背いて提婆達多に付き

しが如し、二月十五日は釈尊御入滅の日乃至十二月十五日も三界慈父の御遠忌なり、善導、法然、永觀等

の提婆達多に誑されて阿彌陀仏の日と定め畢んぬ、四月八日は世尊御誕生の日なり薬師、仏に取り畢んぬ、我が慈父の忌日を他仏に替るは孝養の者なるか如何、寿量品に云く「我も亦為れ世の父狂子を治する為の故に」等云云、天台大師云く「本此の仏に従つて初めて道心を発す亦此の仏に従つて不退地に住す乃至猶百川の海に潮すべきが如く縁に牽かれて

応生すること亦復是くの如し」等云云。

問つて云く法華經は誰人の為に之を説くや、答えて曰く方便品より人記品に至るまでの八品に一意有り上より下に向て次第に之を読めば第一は菩薩第二は二乗、第三は凡夫なり、安樂行より勸持、提婆、宝塔、法師と逆次に之を読めば滅後の衆生を以て本と為す在世の衆生は傍なり滅後を以て之を論ずれば正法一千年、像法一千年は傍な

り、末法を以て正と為す末法の中には日蓮を以て正と為すなり、問うて曰く其の証拠如何、答えて曰く況滅度後の文是なり、疑つて云く日蓮を正と為す正文如何、答えて云く「諸の無智の人有つて悪口罵詈等し及び刀杖を加うる者」等云云、問うて曰く自讃は如何、答えて曰く喜び身に余るが故に堪え難くして自讃するなり、問うて曰く本門の心如何、答えて曰く本門に於て一の心有り一には涌出品の略開近顕遠は前四味並に迹門の諸衆をし
て脱せしめんが為なり、一には涌出品の動執生疑より一半並びに寿命品 分別功德品の半品已上一品一半を公開近顕遠と名く一向に滅後の為なり、問うて曰く略開近顕遠の心如何、答えて曰く文殊・弥勒等の諸大菩薩・梵天・帝釈・日月・衆星・竜王等初成道の時より般若經に至る已来は一人も釈尊の御弟子に非ず此等の菩薩・天人は初成道の時・仏未だ説法したまわざる已前に不思議解脱に住して我と別円二教を演説す釈尊其の後に阿含・方等・般若を宣説し給う然りと雖も全く此等の諸人の得分に非ず、既に別円二教を知りぬれば感通をも又知れり勝は劣を兼ねる是なり委細に之を論ぜば、或は釈尊の師匠なるか善知識とは是なり釈尊に随うに非ず、法華經の迹門の八品に至り始めて始めて未聞の法を聞いて此等の人人は弟子と成りぬ舍利弗・目連等は鹿苑より已来初発心の弟子なり、然りと雖も権法のみを許せり、今法華經に來至して実法を授与し法華經本門の略開近顕遠に來至して華嚴よりの大菩薩・二乘・大梵天・帝釈・日月・四天・竜王等は位・妙覺に隣り又妙覺の位に入るなり、若し爾れば今我等天に向つて之を見れば生身の妙覺の仏本位に居して衆生を利益する是なり。

問うて曰く誰人の為に公開近顕遠の寿命品を演説するや、答えて曰く寿命品の一品一半は始より終に至るまで正く滅後衆生の為なり滅後の中には末法今時の日蓮等が為なり、疑つて云く此の法門前代に未だ之を聞かず經文に之れ有りや、答えて曰く予が智前賢に超えず設い經文を引くと雖も誰人か之を信ぜん下和が啼泣・伍子胥が悲傷是なり、然りと雖も略開近顕遠・動執生疑の文に云く「然も諸の新發意の菩薩・仏の滅後に於て若し是の語を

聞かば、或は信受せずして法を破する罪業の因縁を起さん等云云、文の心は寿量品を説かずんば末代の凡夫皆惡道に墮せん等なり、寿量品に云く「是の好き良薬を今留めて此に在く」等云云、文の心は上は過去の事を説くに似たる様なれども此の文を以て之を案ずるに滅後を以て本と為す先ず先例を引くなり、分別功德品に云く「惡世末法の時」等云云、神力品に云く「仏滅度の後に能く是の經を持たんを以ての故に諸仏皆歡喜して無量の神力を現じ給う」等云云、藥王品に云く「我が滅度の後、後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て断絶せしむること無けん」等云云、又云く「此の經は則ち為れ閻浮提の人の病の良薬なり」等云云、涅槃經に云く「譬えば七子の如し父母平等ならざるに非ざれども然も病者に於て心則ち偏に重し」等云云、七子の中の第一第二は一闍提、謗法の衆生なり諸病の中には法華經を謗するが第一の重病なり、諸藥の中には南無妙法蓮華經は第一の良薬なり、此の一闍浮提は縦広七千由善那八万の国之れ有り正像二千年の間未だ広宣流布せざるに法華經当世に當つて流布せしめずんば釈尊は大妄語の仏、多宝仏の証明は泡沫に同じく十方分身の仏の助舌も芭蕉の如くならん。

疑つて云く多宝の証明・十方の助舌、地涌の涌出此等は誰人の為ぞや、答えて曰く世間の情に云く在世の為と、日蓮云く舍利弗目等は今現在を以て之を論ずれば智慧第一・神通第一の大聖なり、過去を以て之を論ずれば金竜陀仏・青竜陀仏なり、未來を以て之を論ずれば華光如来、靈山を以て之を論ずれば三惑頓尽の大菩薩、本を以て之を論ずれば内秘外現の古菩薩なり、文殊・弥勒等の大菩薩は過去の古仏、現在の応生なり、梵帝・日月・四天等は初成已前の大聖なり、其の上・前・四味・四教一言に之を覺りぬ仏の在世には一人に於ても無智の者之れ無し誰人の疑を晴さんが為に多宝仏の証明を借り諸仏舌を出し地涌の菩薩を召さんや方方以て謂れ無き事なり、經文に随つて況滅度後・令法久住」等云云、此等の經文を以て之を案ずるに偏に我等が為なり、随つて天台大師当世を指して云く「後の五百歳遠く妙道に沾わん」伝教大師当世を記して云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有

り」等云云、「末法太有近」の五字は我が世は法華經流布の世に非ずと云う釈なり。

問うて云く如来滅後二千年・竜樹・天親・天台・伝教の残したまえる所の秘法は何物ぞや、答えて云く本門の本尊と戒壇と題目の五字となり、問うて曰く正像等に何ぞ弘通せざるや、答えて曰く正像に之を弘通せば小乗・權大乘・迹門の法門一時に滅尽す可きなり、問うて曰く仏法を滅尽するの法何ぞ之を弘通せんや、答えて曰く末法に於ては大小權實・蹟密共に教のみ有つて得道無し一閻浮提皆謗法と為り畢んぬ、逆縁の爲には但妙法蓮華經

の五字に限る、例せば不輕品の如し我が門弟は順縁なり日本国は逆縁なり、疑つて云く何ぞ広略を捨て要を取るや、答えて曰く玄奘三蔵は略を捨てて広を好み四十巻の小品經を六百巻と成す羅什三蔵は広を捨て略を好む千巻の大論を百巻と成せり、日蓮は広略を捨てて肝要を好む所謂上行菩薩所伝の妙法蓮華經の五字なり、九包淵が

馬を相するの法は玄黄を略して駿逸を取る支道林が經を講ずるには細科を捨てて元意を取る等云云、仏既に宝塔に入つて二仏座を並べ分身來集し地涌を召し出し肝要を取つて末代に當てて五字を授与せんこと当世異義有る可からず。

疑つて云く今世に此の法を流布せば先相之れ有りや、答えて曰く法華經に「如是相乃至本末究竟等」云云、天台云く

「蜘蛛掛りて喜び事來たり」鵲鳴いて客人來る小事猶以て是くの如し何に況や大事をやと取意、問うて曰く若し爾れば

其の相之れ有りや、答えて曰く去める正嘉年中の大地震・文永の大彗星其より已後今に種種の大なる天変・地天此等は此

先相なり、仁王經の七難・二十九難・無量の難、金光明經・大集經・守護經・藥師經等の諸經に挙ぐる所の諸難皆之有り

但し無き所は三三四五の日出る大難なり、而るを今年佐渡の国の土民は口口に云う今年正月廿三日の申の時西の方に二

の日出現す、或は云く三の日出現す等云云、二月五日には東方に明星二つ並び出ず其の中間は三寸計り等云云、此の

大難は日本国先代にも未だ之有らざるか、最勝王經の王法正論品に云く「變化の流星

落ち二の日俱時に出で他方の怨賊来つて国人喪乱に遭う等云云、首楞嚴經に云く「或は二の日を見し或は両つの月を見す」等、藥師經に云く「日月薄蝕の難」等云云、金光明經に云く「慧星數ば出で兩つの日並び現じ薄蝕恒無し」大集經に云く「佛法実に隱没せば乃至日月明を現ぜず」仁王經に云く「日月度を失ひ時節返逆し或は赤日出で黒日出で二三四五の日出ず或は日蝕して光無く或は日輪一重二三四五重輪現ぜん」等云云、此の日月等の難は七難二十九難無量の諸難の中に第一の大惡難なり、問うて曰く此等の大中小の諸難は何に因つて之を起すや、答えて曰く「最勝王經に曰く非法を行ずる者を見て當に愛敬を生じ善法を行ずる人に於て苦楚して治罰す」等云云、法華經に云く涅槃經に云く金光明經に云く「惡人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に星宿及び風雨皆時を以て行われず」等云云、大集經に云く「佛法実に隱没し乃至是くの如き不善業の惡王惡比丘我が正法を毀壞す」等、仁王經に云く「聖人去る時七難必ず起る」等、又云く「法に非ず律に非ず比丘を繫縛すること獄囚の法の如くす爾の時に當つて法滅せんこと久しからず」等、又云く「諸の惡比丘多く名利を求め國王太子王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破國の因縁を説かん其の王別まえずして此の語を信聽せん」等云云、此等の明鏡を覆て當時の日本國を引き向うるに天地を浮ぶること宛も符契の如し眼有らん我が門弟は之を見よ、當に知るべし此の國に惡比丘等有つて天子・王子・將軍等に向つて讒訴を企て聖人を失う世なり、問うて曰く弗舍密多羅王・會昌・天子・守屋等は月支・真旦・日本の佛法を滅失し提婆菩薩・師子尊者等を殺害す其の時何ぞ此の大難を出さざるや、答えて曰く災難は人に随つて大小有る可し正像二千年の間惡王惡比丘等は或は外道を用い或は道士を語らい或は邪神を信ず佛法を滅失すること大なるに似たれども其の科尚浅きか、今當世の惡王惡比丘の佛法を滅失するは小を以て大を打ち権を以て実を失う人心を削て身を失わず寺塔を焼き尽さずして自然に之を喪す其の失前代に超過せるなり、我が門弟之を見て法華經を信用せよ目を瞋らして鏡に向え、天瞋るは人に失有ればなり、二の日

並び出るは一国に二の国王並び相なり、王と王との鬭争なり、星の日月を犯すは臣王を犯す相なり、日と日と競い出るは四天下一同の諍論なり、明星並び出るは太子と太子との諍論なり、是くの如く国土乱れて後に上行等の聖人出現し本門の三つの法門之を建立し一四天四海一同に妙法蓮華經の広宣流布疑い無からん者か。

文永十一年五月

在御判

四八 四信五品抄

建治三年四月十日 五十六歳御作 与富木常忍

CCCCP

青鳧一結送り給ひ候い了んぬ。

今来の学者一同の御存知に云く「在世滅後異なりと雖も法華を修行するには必ず三学を具す一を欠いても成ぜず」云云。

余又年来此の義を存する処一代聖教は且らく之を置く法華經に入つて此の義を見聞するに序正の二段は且らく之を置く流通の一段は末法の明鏡尤も依用と為すべし、而して流通に於て二有り一には所謂迹門の中の法師等の五品・二には所謂本門の中の分別功德の半品より經を終るまで十一品半なり、此の十一品半と五品と合せて十六品半此の中に末法に入つて法華を修行する相貌分明なり是に尚事行かずんば普賢經・涅槃經等を引き来りて之を糾明せん其の隠れ無きか、其の中の分別功德品の四信と五品とは法華を修行するの要・在世滅後の龜鏡なり。

荊谿の云く「一念信解とは即ち是れ本門立行の首なり」と云云、其の中に現在の四信の初の一念信解と滅後の五品の

第一の初随喜と此の二処は一同に百界千如・一念三千の宝篋十方三世の諸仏の出る門なり、天台・妙樂の二の聖賢此の二処の位を定むるに三の釈有り所謂或は相似・十信・鉄輪の位或は勸行五品の初品の位・未断見思或は名字即の位なり、止観に其の不定を会して云く「仏意知り難し機に赴きて異説す此を借つて開解せば何ぞ勞しく苦に諍わん」云云等。予が意に云く、三釈の中名字即は經文に叶うか滅後の五品の初の一品を説いて云く「而も毀皆せずして随喜の心を起す」と若し此の文相似の五品に渡らば而不毀皆の言は便ならざるか、就中寿量品の失心不失心等は皆名字即なり、涅槃經に「若信若不信乃至熙連」とあり之を勘えよ、又一念信解の四字の中の信の一字は四信の初めに居し解の一字は後に奪わるる故なり、若し爾らば無解有信は四信の初位に當る經に第二信を説いて云く「略解言趣」と云云、記の九に云く「唯初信を除く初は解無きが故に」随つて次下の随喜品に至つて上の初随喜を重ねて之を分明にす五十人は皆展転劣なり、第五十人に至つて二の釈有り一には謂く第五十人は初随喜の内なり二には謂く第五十人は初随喜の外なりと云うは名字即なり、教弥よ美なれば位弥よ下れりと云う釈は此の意なり、四味三教よりも円教は機を損し爾前の円教よりも法華經は機を損し迹門よりも本門は機を尽すなり教弥実位弥下の六字心を留めて案ず可し。問う末法に入つて初心の行者必ず円の二字を具するや不や、答えて曰く此の義大事たる故に經文を勘え出して貴辺に送付す、所謂五品の初二三品には仏正しく戒定の二法を制止して一向に慧の一分に限る慧又勘されば信を以て慧に代え信の一字を詮と為す、不信は一闡提謗法の因信は慧の因名字即の位なり、天台云く「若し相似の益は隔生すれども忘れず名字勸行の益は隔生すれば即ち忘る或は忘れざるも有り忘るる者も若し知識に値えば宿善かえ還つて生ず若し惡友に値えば則ち本心を失う」云云、恐らくは中古の天台宗の慈覺・智証の両大師も天台・伝教の善知識に違背して心・無畏・不空等の惡友に遷れり、末代の學者慧心の往生要集の序に誑惑せられて法華の本心を失ひ弥陀の權門に入る退大取小の者なり、過去を以て之を推するに未來無量劫を経て三惡道に処せん若し惡友に値えば即ち本心を

失うとは是なり。

問うて曰く其の証如何答えて曰く止観第六に云く「前教に其の位を高うする所以は方便の説なればなり円教の位下きは眞実の説なればなり」弘決に云く「前教と云うより下は正く權實を判ず教弥よ実なれば位弥よ下く教弥よ權なれば位弥よ高き故に」と、又記の九に云く「位を判ずることをいば觀境弥よ深く実位弥よ下きを顯す」と云云、他宗は且らく之を置く天台一門の学者等何ぞ実位弥下の釈を闇いて慧心僧都の筆を用ゆるや、畏智空と覺証との事は追つて之を習え大事なり大事なり一閻浮提第一の大事なり心有らん人は聞いて後に我を外め。

問うて云く末代初心の行者何物をか制止するや、答えて曰く檀戒等の五度を制止して一向に南無妙法蓮華經と称せしむるを一念信解初隨喜の氣分と為すなり是れ則ち此の經の本意なり、疑つて云く此の義未だ見聞せず心を驚かし耳を迷わす明かに証文を引て請う苦に之を示せ、答えて云く經に云く「須く我が爲に復た塔寺を起て及び僧坊を作り四事を以て衆僧を供養することをもちいされ」此の經文明かに初心の行者に檀戒等の五度を制止する文なり、疑つて云く汝が引く所の經文は但寺塔と衆僧と計りを制止して未だ諸の戒等に及ばざるか、答えて曰く初

を挙げて後を略す、問て曰く何を以て之を知らん、答えて曰く次下の第四品の經文に云く「況や復人有つて能く是の經をもちて兼ねて布施持戒等を行ぜんをや」云云、經文明明に初二三品の人には檀戒等の五度を制止し第四品に至つて始めて之を許す後に許すを以て知んぬ初に制する事を、問うて曰く經文一往相似たり將た又疏釈有り

や、答えて曰く汝が尋ぬる所の釈とは月氏四依の論が將た又漢土、日本の人師の書か本を捨て末を尋ね体を離れて影を求め源を忘れて流を責ぶ分明なる經文を闇いて論釈を請い尋ね本經に相違する末釈有らば本經を捨てて

末釈に付く可きか然りと雖も好みに随て之を示さん、文句の九に云く「初心は縁に紛動せられて正業を修するを妨げん」とを畏る直ちに専ら此の經を持つ即ち上供養なり事を廢して理を存するは所益弘多なり」と、此の釈に縁と云うは五度なり初心の者兼ねて五度を行ずれば正業の信を妨ぐるなり、譬えば小船に財を積んで海を渡るに財と俱に没するが如し、直專持此經と云うは一經に亘るに非ず専ら題目を持つて余文を雜えず尚一經の誦誦だも許さず何に況や五度をや、「廢事存理」と云うは戒等の事を捨てて題目の理を専らにす云云、所益弘多とは初心の者諸行と題目と並び行ずれば所益全く失うと云云。

文句に云く「問う若爾らば經を持つは即ち是れ第一義の戒なり何が故ぞ復能く戒を持つ者と云うや、答う此は初品を明かす後を以て難を作すべからず」等云云、当世の學者此の釈を見ずして末代の愚人を以て南岳天台の二聖に同ず誤りの中の誤りなり、妙樂重ねて之を明して云く「問う若し爾らば若し事の塔及び色身の骨を須いず亦須く事の戒を持つべからざるべし乃至事の僧を供養することを須いざるや」等云云、伝教大師の云く「二百五十戒たちまち忽に捨て畢んぬ唯教大師一人に限るに非ず鑒眞の弟子如宝道忠並びに七大寺等一同に捨て了んぬ又教大師未來を誠めて云く「末法の中に持戒の者有らば是れ怪異なり市に虎有るが如し此れ誰か信ず可き」云云。

問う汝何ぞ一念三千の觀門を勸進せず唯題目許りを唱えしむるや、答えて曰く日本の二字に六十六国の人畜財を撰尽して一も残さず月氏の両字に豈七ヶ国無からんや、妙樂の云く「略して經題を挙ぐるに玄に一部を収む」又云く「略して界如を挙ぐるに具さに三千を撰す、文殊師利菩薩・阿難尊者・三會八年の間の仏語之を挙げて妙法蓮華經と題し次下に領解して云く「如是我聞」と云云。

問う其の義を知らざる人唯南無妙法蓮華經と唱つるに解義の功德を具するや否や、答う小兒乳を含むに其の味を知らざれども自然に身を益す耆婆が妙藥誰か弁えて之を服せん水心無けれども火を消し火物を焼く豈覺有らんや竜樹・

てんだいみな
天台皆此の意なり重ねて示す可し。

問う何が故ぞ題目に万法を含むや、答う章安の云く「蓋し序王とは經の玄意を叙す玄意は文の心を述す文の心は迹本に過ぎたるは莫し妙樂の云く「法華の文心を出して諸教の所以を弁ず」云云、濁水心無けれども月を得て自ら清めり草木雨を得豈覺有つて花さくならんや妙法蓮華經の五字は經文に非ず其の義に非ず唯一部の意なるのみ、初心の行者其の心を知らざれども而も之を行ずるに自然に意に當るなり。

問う汝が弟子一分の解無くして但一口に南無妙法蓮華經と称する其の位如何、答う此の人は但四味三教の極位並びに爾前の円人に超過するのみに非ず將た又真言等の諸宗の元祖畏嚴恩藏宣摩導等に勝出すること百千万億倍なり、請う國中の諸人我が末弟等を軽ずる事勿れ進んで過去を尋ねれば八十万億劫に供養せし大菩薩なり宣熙連一恒の者に非ずや退いて未來を論ずれば八十年の布施に超過して五十の功德を備う可し天子の襁褓に纏れ大竜の始めて生ずるが如し蔑如すること勿れ蔑如すること勿れ、妙樂の云く「若し悩乱する者は頭七分に破れ

供養すること有る者は福十号に過ぐと、優陀延王は寶頭盧尊者を蔑如して七年の内に身を喪失し相州は日蓮を流罪して百日の内に兵乱に遇えり、經に云く「若し復是の經典を受持する者を見て其の過惡を出さん若は実にもあれ若は不実にもあれ此の人現世に白癩の病を得ん乃至諸惡重病あるべし」又云く「当に世世に眼無かるべし」等云云、明心と円智とは現に白癩を得、道阿弥は無眼の者と成りぬ、國中の疫病は頭破七分なり罰を以て徳を推するに我が門人等は福過十号疑い無き者なり。

夫れ人王三十代欽明の御宇に始めて仏法渡りし以来桓武の御宇に至るまで二十代二百余年の間六宗有りと雖も仏法未だ定らず、爰に延暦年中に一りの聖人有つて此の国に出現せり所謂伝教大師是なり、此の人先きより弘通する六宗を糾明し七寺を弟子と為して終に叡山を建てて本寺と為し諸寺を取つて末寺と為す、日本の仏法唯一門なり王法も二に

非あらず法定まり国清めり其その功を論ぜば源みなもと已今当の文より出いでたり其その後弘法こうぼう慈覚じかく智証ちしやうの三大師事を漢土に寄せて
大日だいにちの三部は法華經に勝ると謂おもい刺さえ教大師の削ずる所の真言宗の宗の一字之を削そえて八宗と云云、三人一同に
勅宣ちよくせんを申し下して日本に弘通し寺毎に法華經の義を破る是偏に已今当の文を破らんと為して釈迦多宝・十方の諸仏の
大怨敵おんてきと成りぬ然しかして後 仏法漸く廃れ王法次第に衰え天照太神・正八幡等の久住
守護神は力を失ひ梵帝しゅごしん四天は国を去つて已に亡国と成らんとす情有らん人誰か傷み嗟なげかざらんや、所詮しよせん三大師の邪法
の興る所は所謂東寺と叡山えいざんの総持院と園城寺との三所なり禁止せずんば国土の滅亡と衆生の惡道と疑うたがひ無き者か予粗
此の旨むねを勸かんがえ国主に示すと雖も敢て叙用無し悲む可し悲む可し。

四九 下山御消息 建治三年六月 五十六歳御代作 与下山兵庫光基 343P

例時に於おいては尤も阿弥陀經を讀まる可べきか等云云此の事は仰おほせ候はぬ已前より親父の代官といひ私の計と申し此の四
五年が間は退轉たいてん無し、例時には阿弥陀經を讀み奉り候しが去年の春の末夏の始めより阿弥陀經を止めて一向に法華經の
内うち・自我偈讀誦じがげし候又同くば一部を讀み奉らむとはげみ候これ又偏に現当の御祈きとの為なり、但し阿弥陀經・念仏を止め
て候事は此れ日比日本国に聞きこえ給う日蓮聖人去る文永十一年の夏の比同じき甲州飯野御牧・波木井の郷の内身延
の嶺のと申す深山に御隠居みやまさせ給たまい候は、さるべき人人御法門承ほうもんわる可べきの由候ゆへとも御制止ありて入れられずおぼろ
げの強縁そのならではかなひがたく候しに有人見参の候と申し候しかば信じまいらせ候はんれうには参り候はず、もの様をも
見候みはんために閑所より忍しのびて参り御庵室あんしつの後に隠れ人人の御不審ふしんに付きてあらあら御法門ほうもんとかせ給たまい候まい。

法華經と大日經 華嚴 般若 深密 楞伽 阿彌陀經等の経經の勝劣 浅深等を先として説き給いしを承り候は
法華經と阿彌陀經等の勝劣は一重二重のみならず天地雲泥に候けり、譬ば帝釈と猿猴と鳳凰と烏鵲と大山と微塵と
日月と螢炬等の高下勝劣なり、彼彼の経文と法華經とを引き合せてたくらべさせ給いしかば愚人も弁えつ可し白白なり
赤赤なり、されば此の法門は大體人も知れり始めておどろくべきにあらず又仏法を修行する法は必ず 経經の大小 權実
顕密を弁うべき上よくよく時を知り機を鑑みて申すべき事なり、而るに当世 日本国は人毎に阿みだ經並に弥陀の名号
等を本として法華經を忽諸し奉る世間に智者と仰がるる人人 我も我も時機を知れり知れり
と存ぜられに候へども小善を持て大善を打ち奉り權經を以て実經を失ふとがは小善還つて大惡となる藥變じて毒とな
る親族還つて怨敵と成るが如し難治の次第なり、又仏法には賢なる様なる人なれども時に依り機に依り国に依り先後の
弘通に依る事を弁えれば身心を苦めて修行すれども験なき事なり、設い一向に小乗流布の国に
は大乗をば弘通する事はあれども一向大乘の国には小乗經をあながちにいむ事なりしめてこれを弘通すれば国もわづ
らひ人も惡道まぬかれがたり、又初心の人には二法を並べて修行せしむる事をゆるさず月氏の習いには一向小乗の寺の
者は王路を行かず一向大乘の僧は左右の路をふむ事なし井の水河の水 同しく飲む事なし何に況や一
房に栖みなんや、されば法華經に初心の一向大乘の寺を仏説き給うに「但大乘經典を受持せんことを樂つて 乃至余經
の一偈をも受けざれ」と又云く「又声聞を求むる比丘 比丘尼 優婆塞 優婆夷に親近せざれ」と又云く「亦問訊せざれ」等云
云、設い親父たれども一向小乗の寺に住する比丘 比丘尼をば一向大乘の寺の子息これを礼拝せず親近せず何に況や
其法を修行せんや大小兼行の寺は後心の菩薩なり。

今日本国は最初に仏法渡りて候し比・大小雜行にて候しが人王四十五代聖武天皇の御宇に唐の揚州竜興寺の鑑真
和尚と申せし人漢土より我が朝に法華經 天台宗を渡し給いて有りしが円機未熟とやおぼしけんの法門をば

己心に収めて口にも出だし給はず、大唐の終南山の豐徳寺の道宣律師の小乗戒を日本国の三所に建立せり此れ偏に法華宗の流布すべき方便なり、大乘出現の後には肩を並べて行ぜよとはあらず例せば儒家の本師たる孔子・老子等の三聖は仏の御使として漢土に遣されて内典の初門に礼樂の文を諸人に教えたりき、止觀に經を引いて云く「我三聖を遣して彼の震旦を化す」等云云、妙樂大師云く「礼樂前に馳せ真道後に啓く」と云云、仏は大乘の初門に且らく小乗戒を説き給ひしかども時すぎぬれば禁めて云く涅槃經に云く「若し人有つて如来は無常なりと言わん

云何んぞ是の人舌墮落せざらん」と等云云、其の後人王第五十代桓武天皇の御宇に伝教大師と申せし聖人出現せり始めには華嚴・三論・法相・俱舍・成実・律の六宗を習ひ極め給つのみならず、達磨宗の淵底を探り究め給ひ刺へいまだ日本国に弘通せざる天台・真言の二宗をも尋ね顕わして浅深勝劣を心中に究竟し給へり、去延暦二十一年正月十九日

に桓武皇帝・高雄山に行幸なり給ひ南都・七大寺の長者・善議・勤操等の十四人を教大師に召し合せて六宗と法華宗との勝劣を糾明せられしに六宗の碩学宗宗毎に我宗は一代超過の由各各に立て申されしかども教大師

の一言に万事破れ畢んぬ、其の後皇帝重ねて口宣す和氣弘世を御使として諫責せられしかば七大寺・六宗の碩学一同に謝表を奉り畢んぬ、一十四人の表に云く「此界の含靈而今而後悉く妙円の船に載り早く彼岸に濟ることを得」云云、教

大師云く「二百五十戒忽ちに捨て畢んぬ」云云、又云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」又云く「一乗の家には

都て權を用いず」又云く「穢食を以て宝器に置くこと無し」又云く「仏世の大羅漢已に此の呵嘖を被むれり滅後の小蚊虻

何ぞ此れに随わざらん」云云、此れ又私の責めにはあらず法華經には「正直に方便

を捨て但無上道を説く」云云涅槃經には「邪見の人」等云云、邪見方便と申すは華嚴・大日經・般若經・阿弥陀經等の四十余年の経經なり、捨とは天台の云く「廢るなり」又云く「謗とは背くなり」正直の初心の行者の法華經を修行する

法は上に攀ぐるところの経經、宗宗を抛つて一向に法華經を行ずるが眞の正直の行者にては候なり、

而るを初心の行者深位の菩薩の様に彼の経と法華經とを並べ行ずれば不正直の者となる、世間の法にも賢人は二君に仕す貞女は両夫に嫁がずと申す是なり、又私に異議を申すべきにあらず。

如来は未来を鑑みさせ給いて我が滅後・正法一千年・像法一千年・末法一万年が間我が法門を弘通すべき人人並に経經を一一にきりあてられて候、而るに此を背く人世に出来せば設い智者賢王なりとも用うべからず、所謂我が滅後

の次の日より正法五百年の間は一向小乗經を弘通すべし迦葉・阿難乃至・富那奢等の十余人なり、後の五百年には権大乘經の内華嚴・方等深密・般若・大日經・觀經・阿彌陀經等を弥勒菩薩・文殊師利菩薩・馬鳴菩薩・竜樹菩薩・

無著菩薩・天親菩薩等の四依の大菩薩等の大論師弘通すべしと云云、此れ等の大論師は法華經の深義を知し食さざるにあらず然而法華經流布の時も来らざる上釈尊よりも仰せ付けられざる大法なれば心には存じて口に宣へ給はず、或時は

粗口に轉る様なれども実義をば一向に隠して演べ給はず、像法一千年の内に入りぬれば月氏の仏法漸く漢土・日本に渡り来る世尊眼前に藥王菩薩等の迹化他方の大菩薩に法華經の半分・迹門十四品を譲り給う、これは又

地涌の大菩薩末法の初めに出現せさせ給いて本門・寿命品の肝心たる南無妙法蓮華經の五字を一閻浮提の一切衆生に唱えさせ給うべき先序のためなり、所謂迹門弘通の衆は南岳・天台・妙楽・伝教等はなり、今の時は世すでに上行菩薩等

の御出現の時刻に相当れり、而るに余愚眼を以てこれを見るに先相すにあらはれたるか、而るに諸宗所依の華嚴・大日・阿彌陀經等は其の流布の時を論ずれば正法一千年の内、後の五百年乃至像法の始めの諍論の

経經なり、而るに人師等経經の浅深勝劣等に迷惑するのみならず仏の譲り状をもわすれ時機をも勘す猥りに宗宗を構え像末の行となせり、例せば白田に種を下だして玄冬に穀をもとめ下弦に満月を期し夜中に日輪を尋める如し、何に

況や律宗などと申す宗は一向小乗なり月氏には正法一千年の前の五百年の小法又日本国にては像法の中比法華經・天台宗の流布すべき前に且らく機を調養せむがためなり、例せば日出でんとて明星前に立ち雨下ら

むとて雲先おくるが如し、日出雨下て後の星雲はなにかせん而るに今は時過ぬ又末法に入りて之を修行せば重病に輕藥を授け大石を小船に載するが如し修行せば身は苦く暇は入りて験なく華のみ開きて菓なからん、故に教大師像法の末に出現して法華經の迹門の戒定慧の三が内、其中、円頓の戒壇を觀山に建立し給ひし時二百五十戒忽に捨て畢んぬ、随つて又鑑真の末の南都・七大寺の二十四人三百余人も加判して大乘の人となり一國挙つて小律儀を捨て畢んぬ、其の授戒の書を見る可し分明なり。

而るを今邪智の持斎の法師等昔し捨てし小乗經を取り出して一戒もたまため名計りなる二百五十戒の法師原有つて公家・武家を誑惑して國師とのしる、刺我慢を發して大乘戒の人を破戒・無戒とあなづる、例せば狗犬が師子を吠え猿猴が帝釈をあなづるが如し、今の律宗の法師原は世間の人人には持戒実語の者の様には見ゆれども其の実を論ぜば天下第一の大不実の者なり、其の故は彼等が本文とする四分律・十誦律等の文は大小乗の中には一向

小乗・小乗の中にも最下の小律なり、在世には十二年の後方等大乘へつる程の且くのやすめ言滅後には正法の前五百年は一向小乗の寺なり此れ亦一向大乘の寺の毀謗となさんがためなり、されば日本国には像法半に鑑真和尚大乘の手習とし給う教大師彼の宗を破し給いて人をば天台宗へとりとし宗をば失うべしといふも後に事の由を知らしめんがために我が大乘の弟子を遣してたすけをき給う、而るに今の学者等は此の由を知らずし

て六宗は本より破れずして有りとおもへり墓無し墓無し、又一類の者等天台の才学を以て見れば我が律宗は幼弱なる故に漸漸に梵網經へつり結句は法華經の大戒を我が小律に盗み入れて還つて円頓の行者を破戒・無戒と咲へば、国主は當時の形貌の貴げなる気色にたばらかされ給いて天台宗の寺に寄せたる田畠等を奪い取つて彼等にあたふ民は又一向大乘の寺の帰依を抛ちて彼の寺につつま、手づから火をつけざれども日本一國の大乘の寺を焼き失ひ抜目鳥にあらざれども一切衆生の眼を抜きぬ仏の記し給ふ阿羅漢に似たる闡提是なり、涅槃經に云く我

涅槃の後・無量百歳に四道の聖人も悉く復涅槃せん正法滅して後・像法の中に於いて当に比丘有るべし、持律に似像し少く経を誦誦し飲食を貪嗜して其の身を長養せん、乃至袈裟を服すと雖も猶獵師の細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如く外には賢善を現し内には貪嫉を懷き唾法を受けたる婆羅門等の如く実に沙門に非ずして沙門の像を現し邪見熾盛にして正法を誹謗せん等云云、此の經文に世尊未來を記し置き給う。抑・釈尊は我等がためには賢父たる上明師なり聖主なり、一身に三徳を備へ給へる仏の仏眼を以て未來惡世を鑑み給いて記し置き給う記文に云く「我涅槃の後・無量百歳ニ云云仏滅後・二千年已後と見ぬ、又「四道の聖人悉く復涅槃せん」云云、付法藏の二十四人を指すか、正法滅後ニ等云云像末の世と聞えたり、當に比丘有るべし持律に似像し」等云云今末法の代に比丘の似像を撰び出さば日本国には誰の人をか引き出して大覺世尊をば不妄語の人とし奉るべき、俗男・俗女・比丘尼をば此の經文に載たる事なし但比丘計なり比丘は日本国に数を知らず、然るに其の中に三衣一鉢を身に帶せねば似像と定めがたし唯持齋の法師計相似たり一切の持齋の中には次下の文に持律ととり律宗より外は又脱ぬ、次下の文に「少し経を誦誦す」云云相州鎌倉の極樂寺の良觀房にあらざれば誰を指し出だし經文をたすけ奉るべき、次下の文に「猶獵師の細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如く外には賢善を現し内には貪嫉を懷く」等云云両火房にあらざれば誰をか三衣一鉢の獵師伺猫として仏説を信ず可し、哀れなるかな當時の俗男・俗女・比丘尼等檀那等が山の鹿・家の鼠となりて獵師・猫に似たる両火房に伺われ・たばらかされて今生には守護国土の天照太神・正八幡等にすてられ他国の兵軍にやぶられて猫の鼠を捺え取るが如く獵師の鹿を射死が如し、俗男・武士等は射伏・切伏られ俗女は捺え取られて他国・おもむかん王昭君・楊貴妃が如くになりて後生には無間・大城に一人もなく趣くべし。

而るを余・此の事を見る故に彼が檀那等が大惡心をおそれ強盛にせむる故に両火房・内内諸方に讒言を企てて余が

口を塞がんとはげみしなり、又経に云く「汝を供養する者は三惡道に墮つ等云云、在世の阿羅漢を供養せし人尚三惡道まぬかれがたし、何に況や滅後の誑惑の小律師原をや、小戒の大科をばこれを以て知んぬ可し、或は又驢乳にも譬えたり還つて糞となる、或は狗犬にも譬えたり大乘の人の糞を食す、或は猴・或は瓦礫と云云、然れば時を弁ず機をしらずして小乗戒を持たば大乘の障となる、破れば又必ず惡果を招く其の上今の人人小律の者どもは大乗戒を小乗戒に盗み入れ驢乳は牛乳を入れて大乘の人をあざむく、大偷盗の者大謗法の者其のとがを論ずれば提婆達多も肩を並べがたく瞿伽利尊者が足も及ばざる閻浮第一の大惡人なり帰依せん国土安穩なるべしや、余此の事を見るに自身だにも弁へなばさでこそあるべきに日本国に智者とおぼしき人人一人も知らず国すでにやぶれなんとす、其の上仏の諫曉を重んずる上一分の慈悲にもよをされて国に代りて身命を捨て申せども国主等彼にたばらかされて用ゆる人一人もなし譬は熱鉄に冷水を投げ睡眠の師子に手を触るが如し、爰に両火房と申す法師あり身には三衣を皮の如くはなつ事なし、一鉢は両眼をまほるが如し二百五十戒堅く持ち三千の威儀をととのへたり、世間の無智の道俗国主よりはじめて万民にいたるまで地藏尊者の伽羅陀山より出現せるか迦葉尊者の靈山より下来するかと疑ふ、余法華經の第五の巻の勸持品を拝見したてまつれば末代に入りて法華經の大怨敵三類あるべし其の第三の強敵は此の者かと見畢んぬ、便宜あらば國敵をせめて彼れが大慢を倒して佛法の威験をあらはさんと思つ處に両火房常に高座にして歎いて云く「日本國の僧尼には二百五十戒・五百戒・男女には五戒・八齋戒等を一同に持たせんとおもつに、日蓮が此の願の障りとなること云云、余案じて云く「現証に付て事を切らんと思ふ處に、彼常に雨を心に任せて下す由披露あり、古へも又雨を以て得失をあらはす例これ多し、所謂傳教大師と護命と守敏と弘法と等なり、此に両火房上より祈雨の御いのりを仰せ付けられたり」と云云、此に両火房祈雨あり去る文永八年六月十八日より二十四日なり、此に使を極樂寺遣す年来の御歎きこれなり」

七日が間に若一雨も下らば御弟子となりて二百五十戒具さに持たん上に、念仏・無間地獄と申す事ひがよみなりけりと申すべし余だにも帰伏し奉らば我弟子等をはじめて日本国大体かたぶき候なんと云云、七日が間に三度の使をつかはす、然れどもいかんがしたりけむ一雨も下らざるの上、類風・風・旋風・暴風等の八風・十二時にやむ事なし、剋二七日まで一雨も下らず風もやむ事なし、されば此の事は何事ぞ和泉式部と云いし色好み・能因法師と申せし無戒の者、此は彼の両火房がいむところの三十一文字ぞかし、彼の月氏の大盜賊南・無仏と称せしかば天頭を得たり、彼の両火房並に諸僧等の二百五十戒・真言・法華の大法・大法の数百人の仏法の靈驗いかなれば姪女等の誑言・大盗人が称仏には劣らんとあやしき事なり、此れを以て彼等が大科をばしらるべきにさはなくして還つて讒言をもちぬらるるは実とはおぼす所詮日本国亡国となるべき期来るか、又祈雨の事はたとひ雨下らせりとも雨の形貌を以て祈る者の賢不賢を知る事あり雨・種種なり或は大雨・或は竜雨・或は修羅雨・或は雨・或は甘雨・或は雷雨等あり、今の祈雨は都て一雨も下らざる上二七日が間前よりはるかに超過せる大旱魃・大悪風・十二時に止む事なし、両火房真の人ならば忽に邪見をもひるがへし跡をも山林にかくすべきに其の義なくして面を弟子・檀那等にさらす上、剩讒言を企て日蓮が頸をきらせまいらせんと申し上あづかる人の国まで状を申し下して種をたたとする大悪人なり、而るを無智の檀那等は恃怙して現世には国をやぶり後生には無間地獄に墮ちなん事の不便さよ、起世経に云く「諸の衆生有りて放逸を為し清浄の行を汚す故に天雨を下さず」又云く「不如法あり慳貪・嫉妬・邪見・顛倒なる故に天則ち雨を下さず」又経律異相に云く「五事有て雨無し」二三之を略す四には雨師姪乱・五には国王理をもつて治めず雨師瞋る故に雨ふらず」云云、此等の経文の亀鏡をもて両火房が身に指し当て見よ少くもりなからん、一には名は持戒とき・ゆれども実には放逸なるか二には慳貪なるか三には嫉妬なるか四には邪見なるか五には姪乱なるか此の五にはすべからず、又此の経は両火房一人には限るべからず昔をかがみ今を

もし、弘法大師の祈雨の時二七日の間・一雨も下らざりしもあやしき事なり、而るを誑惑の心強盛なりし人なれば天子の御祈雨の雨を盗み取て我が雨と云云、善無畏三蔵金剛智三蔵不空三蔵の祈雨の時も小雨は下たりしかども三師共に大風連連と吹いて勅使をつけてをはれしあさましさと、天台大師・伝教大師の須臾と三日が間に帝釈雨を下らして小風も吹かざりしもたとくぞおぼゆるおぼゆる。

法華經に云く、「或は阿練若に納衣にして空閑に在りて、乃至利養に貪著するが故に白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如きもの有らん」と云く、常に大衆の中に在て我等を毀らんと欲するが故に國王大臣婆羅門居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が悪を説き乃至惡鬼其の身に入つて我を罵詈毀辱せん、又云く、濁世の惡比丘は仏の方便隨宜所説の法を知らずして惡口して鬻聲し數數擯出せられん」と等云云、涅槃經に云く、「闍提有つて羅漢の像を作し空処に住し方等大乘經典を誹謗す諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢是れ大菩薩なり」と謂えり」と等云云、今予法華經と涅槃經との仏鏡をもつて當時の日本國を浮べて其影をみるに誰の僧か國主に六通の羅漢の如くたとまれて而も法華經の行者を譏言して頸をきらせんとせし、又いつれの僧か萬民に大菩薩とあをがれたる、誰の智者か法華經の故に度度處處を追はれ頸をきられ弟子を殺され兩度まで流罪せられて

最後に頸に及ばんとせし、眼無く耳無きの人は除く眼有り耳有らん人は經文を見聞せよ、今の人人は人毎に經文を我もよむ我も信じたりといふ只にくむところは日蓮計なり經文を信するならば慥にのせたる強敵を取出して經文を信じてよむしとせよ、若し爾らずんば經文の如く読誦する日蓮をいかれるは經文をいかれるにあらず

や仏の使をかるしむるなり、今の代の両火房が法華經の第三の強敵とならずば釈尊は大妄語の仏・多宝・十方の諸仏は不実の証明なり、又經文まことならば御歸依の國主は現在には守護の善神にすてられ國は他の有となり後生には阿鼻地獄疑なし、而るに彼等が大惡法を尊まるる故に理不尽の政道出來す彼の國主の僻見の心を推するに日蓮

は阿弥陀仏の怨敵・父母の建立の堂塔の讎敵なれば假令政道をまげたりとも仏意には背かじ天神もゆるし給うべしとをもはるるか、はかなしはかなし委細にかたるべけれども此れは小事なれば申さず心有らん者推して知んぬべし上に書挙るより雲泥大事なる日本第一の大科此の国に出来して年久くなる間、此の国既に梵釈・日月・四天・大王等の諸天にも捨てられ守護の諸大善神も還つて大怨敵となり法華經守護の梵帝等鄰国の聖人に仰せ付けて日本国を治罰し仏前の誓状を遂げんとおぼしめす事あり。

(三五二頁)

夫れ正像の古へは世濁世に入るといへども始めなりしかば国土さしも乱れず聖賢も間間出現し福德の王臣も絶えざりしかば政道も曲る事なし万民も直かりし故に小科を対治せんがために三皇・五帝・三王・三聖等出現して墳典を作りて代を治す、世しばらく治りたりしかども漸漸にすへになるままに聖賢も出現せず福德の人もすくなければ三災は多大にして七難・先代に超過せしかば外典及びがたし、其の時治を代えて内典を用いて世を治す随つ

て世且くはおさまるされども又世末になるままに人の悪は日日に増長し政道は月月に衰減するかの故に又三災・七難先よりいよいよ増長して小乗・戒等の力驗なかりしかば其の時治をかへ小乗の戒等を止めて大乘を用ゆ、大乘又叶わねば法華經の円頓の大戒壇を叡山に建立して代を治めたり、所謂伝教大師・日本三所の小乗・戒並に華嚴・

三論・法相の三大乗戒を破失せし是なり、此の大師は六宗をせめ落させ給うのみならず禪宗をも習い極め剩え日本国に

いまだひろまらざりし法華宗・真言宗をも勘え出して勝劣鏡をかけ顕密の差別黑白なり、然れども世間の疑を散じが

たかりしかば去る延暦年中に御入唐漢土の人人も他事には賢かりしかども法華經・大日經・天台・

真言の二宗の勝劣・浅深は分明に知らせ給はざりしかば、御帰朝の後・本の御存知の如く妙樂大師の記の十の不空三蔵の

改悔の言を含光がかりしを引き載せて天台勝れ真言劣なる明証を依憑集に定め給う剩え真言宗の宗の一字を削り

給う、其の故は善無畏・金剛智・不空の三人・一行阿闍梨をたばらかして本はなき大日經に天台の己証の一念

さんぜん ほうもん
三千の法門を盗み入れて人の珍宝を我が有とせる大誑惑の者なりと心得給へり、例せば澄觀法師が天台大師の十法
成乗の觀法を華嚴に盗み入れて還つて天台宗を末教と下せしが如しと御存知あて宗の一字を削りて叡山は唯七宗たるべ
しと云云、而るを弘法大師と申し天下第一の自讃毀他の大妄語の人、教大師御入滅の後対論なくして公家をかすめたて
まつりて八宗と申し立てぬ、然れども本師の跡を紹繼する人人は叡山は唯七宗にてこそあるべき
に教大師の第三の弟子、慈覺大師と叡山第一の座主、義真和尚の末弟子、智証大師と此の二人は漢土に渡り給ひし時、
日本国にて一國の大事と諍論せし事なれば天台、真言の碩学等に値ひ給う毎に勝劣、浅深を尋ね給う、然るに其の時の
明匠等も或は真言宗勝れ、或は天台宗勝れ、或は二宗齊等し、或は理同事異といども俱に慥の証文をば出さず、
二宗の学者等併しながら胸臆の言なり然るに慈覺大師は学極めずして帰朝して疏十四卷を作れり所謂金剛頂經の疏七
卷、蘇悉地經の疏七卷なり此の疏の体たらくは法華經と大日經の三部經とは理は同く事は異なり等云云、此の疏の心は
大日經の疏と義釈との心を出すがなを不審あきらめがたかりけるかの故に本尊の御前に疏を指し
置て此の疏仏意に叶へりやいなやと祈せしせし処に夢に日輪を射ると云云、うちをどろきて吉夢なり真言勝れたる事疑
なしとおもひて宣旨を申し下す日本国に弘通せんとし給ひしがほどなく疫病やみて四ヶ月と申せしかば跡もなくうせ
給ひぬ、而るに智証大師は慈覺の御為にも御弟子なりしかば、遺言に任せて宣旨を申し下し給う所謂・
真言・法華齊等なり譬ば鳥の二の翼、人の両目の如し又叡山も八宗なるべしと云云、此の兩人は身は叡山の雲の上に臥す
といふも心は東寺里中の塵にまじはる本師の遺跡を紹繼する様にて還つて聖人の正義を忍諸し給へり、法華經の於諸經
中、最在其上の上の字をうちかへて大日經の下に置き先づ大師の怨敵となるのみならず存外に釈迦・多宝・十方分身・
大日如来等の諸仏の讎敵となり給う、されば慈覺大師の夢に日輪を射ると見しは是なり仏法の大科此れよりはじまる
にほんこく ほうし
日本国亡国となるべき先兆なり、棟梁たる法華經既に大日經の椽杓となりぬ、王法も

下剋上して王位も臣下に随うべかりしを其の時又一類の学者有りて堅く此の法門を諍論せし上座主も両方を兼ねて事いまだきれざりしかば世も忽にほろびず有りけるか、例せば外典に云く「大国には諍臣七人・中国には五人・小国には三人諍論すれば仮令政道に謬誤出来すれども国破れず乃至家に諫子あれば不義におちず」と申すが如し仏家も又是くのこと、天台・真言の勝劣・浅深事きれざりしかば少少の災難は出来せしかども青天にも捨てられず黄地にも犯されず一国の内の事にてありし程に人王七十七代後白河の法皇の御宇に当りて天台座主明雲・伝教大師の止観院の法華經の三部を捨てて慈覚大師の總持院の大日經の三部に付き給う、天台山は名計りにて真言の山になり法華經の所領は大日經の地となる天台と真言と座主と大衆と敵対あるべき序なり、国又王と臣と諍論して王は臣に随うべき序なり一國乱れて他國に破らるべき序なり、然れば明雲は義仲に殺されて院も清盛にしたがひられ給う、然れども公家も叡山も共に此の故としらずして世静ならずする程に災難次第に増長して人王八十二代隱岐の法皇の御宇に至つて一災起れば二災起ると申して禅宗・念仏宗起り合いぬ、善導房は法華經は末代には千中無一とかき、法然は捨閑閣抛と云云、禅宗は法華經を失はんがために教外別伝・不立文字とのしる、此の二の大惡法鼻を並べて一國に出現せしが故に此の國すでに梵釈・二天・日月・四王に捨てられ奉り守護の善神も還つて大怨敵とならせ給う然れば相伝の所従に責随えられて主上・上皇共に夷島に放たれ給ひ御返りなくしてむなしき島の塵となり給う詮ずる所は実經の所領を奪い取りて權經たる真言の知行となせし上・日本國の万民等・禅宗・念仏宗の惡法を用いし故に天下第一・先代未聞の下剋上出来せり而るに相州は謗法の人ならぬ上文武きはめ尽せし人なれば天許し國主となす随つて世且く静なりき、然而又先に王法を失し真言漸く関東に落ち下る存外に崇重せらるる故に鎌倉又還つて大謗法一闡提の官僧・禅僧・念仏僧の檀那と成りて新寺を建立して旧寺を捨つる故に天神は眼を瞋らして此の國を睨め地神は憤を含めて身を震ふ長星は一天に覆ひ地震は四海を動かす余此等の災天に

驚いて粗内典五千・七千、外典三千等を引き見るに先代にも希なる天変地天なり、然而儒者の家には記せざれば知る事なし仏法は自迷なればこそ今此の災天は常の政道の相違と世間の謬誤より出来せるにあらず定めて仏法より事起るかと勘へしめ、先ず大地震に付て去る正嘉元年に書を一卷注したりしを故最明寺の入道殿に奉る御尋ねもなく御用いもなかりしかば国主の御用いなき法師なればあやまちたりとも科あらじとやおもひけん念仏者並に檀那等又さるべき人人も同意したるとぞ聞へし夜中に日蓮が小庵に数千人押し寄せて殺害せんとせしかども、いかんがしたりけん其の夜の害もまぬかれぬ、然れども心を合せたる事なれば寄せたる者も科なくて大事の政道を破る日蓮が未だ生きたる不思議なりとて伊豆の国流しぬ、されば人のあまりににくきには我がほろぶべきとがをも、かへりみざるか御式目をも破らるるか御起請文を見るに梵釈四天・天照太神・正八幡等を書きのせたてまつる、余存外の法門を申さば子細を弁えられずば日本国の御帰依の僧等に召し合せられて其れになを事ゆかずば漢土・月氏までも尋ねらるべし、其れに叶わずば子細ありなんとて且くまたるべし、子細も弁えぬ人人が身のほろぶべきを指をきて大事の起請を破らるる事心へられず。 三五五頁

自讃には似たれども本文に任せて申す余は日本国の人人には上は天子より下は万民にいたるまで三の故あり、一には父母なり二には師匠なり三には主君の御使なり、経に云く「即如来の使なり」と又云く「眼目なり」と又云く「日月なり」と章安大師の云く「彼が為に悪を除くは則ち是彼が親なり」と等云云、而るに謗法一闡提・国敵の法師原が讒言を用いて其義を弁えず左右なく大事たる政道を曲げらるるはわざとわざはひをまねかるるか墓無し墓無し、然るに事しづまりぬれば科なき事は恥かしきかの故にほどなく召返されしかども故最明寺の入道殿も又早くかくれさせ給いぬ、当御時に成りて、或は身に疵をかぶり、或は弟子を殺され、或は所所を追れ、或はやどをせめしかば一日片時も地上に栖むべき便りなし、是に付けても仏は一切世間・多怨難信と説き置き給う諸の菩薩は

がふあいしんみょうたんぞくむじにたてり
我不愛身命但惜無上道と誓へ、加刀杖瓦石数数見擯出の文に任せて流罪せられ刀のさきにかかりなば法華經一部よみ
まいらせたるにこそとおもひきりてわざと不輕菩薩の如く覺徳比丘の様に竜樹菩薩 提婆菩薩 仏陀密多 師子尊者の
如く 弥強盛に申しはる、今度 法華經の大怨敵を見て經文の如く父母 師匠 朝敵 宿世の敵の如く散散に責るならば
定めて万人もいかり国主も讒言を収て流罪し頸にも及ばんずらん、其時 仏前にして誓状せし梵釈 日月・
してん
四天の願をもはたさせたまつり法華經の行者をあだまんものを須臾ものがさじと起請せしを身にあてて心みん、釈尊・
たほう じゅうほうぶんじん
多宝・十方分身の諸仏の或は共に宿し 或は衣を覆はれ 或は守護せんとねんごろに説かせ給いしをも 実か虚言かと知つ
しんじん
て信心をも増長せんと退転なくはげみし程に案にたがはず 去る文永八年九月十二日に都て一分の科もなくして佐土の国
るさい
流罪せらる、外には遠流と聞えしかども内には頸を切ると定めぬ余又兼て此の事を推せし
ゆえ でし
故に弟子に向つて云く我が願既に遂ぬ悦び身に余れり人身は受けがたくして破れやすし、過去遠遠劫より由なき事には
うしな
失いかども法華經のために命をすてたる事はなし、我頸を刎られて師子尊者が絶えたる跡を継ぎ天台・伝教の功にも超
ふほうそう
付法蔵の二十五人に一を加えて二十六人となり不輕菩薩の行にも越えて釈迦 多宝・十方の諸仏に
いかげせんとなげかせまいらせんと思ひし故に言をもおしまはず已前にありし事後に有るべき事の様を平の金吾に申し含めぬ
此の語しげければ委細にはかかず。

抑も日本国の主となりて万事を心に任せ給へ何事も両方を召し合せてこそ勝負を決し御成敗をなす人のいかなれば
にちれん
日蓮一人に限つて諸僧等に召合せずして大科に行わるるらん是れ偏にただ事にあらずたとひ日蓮は大科の者なりとも国
は安穩なるべからず、御式目を見るに五十一箇条を立てて終りに起請文を書載せたり、第一 第二
あんのん
は神事 仏事乃至五十一等云云、神事 仏事の肝要たる法華經を手ににぎれる者を讒人等に召合せられずして彼等が
ぶつじないし
申すままに頸に及ぶ然れば他事の中にも此の起請文に相違する政道は有るらめども此れは第一の大事なり、
もつ

日蓮にちれんがにくさに国をか身を失はんとせらるるか魯ろの哀公わいこうが忘事わうじの第一だいいちなる事を記せらるるには移宅わたましに妻をわすると云云、孔子こうしの云く身をわする者あり国主と成りて政道を曲ぐるなり是云云、将又国主は此の事を委細いさいには知らせ給はざるか、いかに知らせ給はずとのべらるるとも法華經ほけきょうの大怨敵おんてきと成給いぬる重科じゅうかは脱るべしや、多宝・十方の諸仏しよぶつの御前にして教主釈尊きょうしゆくそんの申す口として末代当世まつだいとうせの事を説かせ給いしかば諸の菩薩記もろもろぼさつしるして云く「悪鬼其の身に入つて我を罵詈毀辱めりきにくせん、乃至数数擯出ないししばしばひんすいせられん」等云云、又四仏釈尊しやくそんの所説しよせつの最勝王經さいしやうおうきやうに云く「悪人を愛敬あいぎやうし善人を治罰ちばつするに由るが故に、乃至他方の怨賊来つて国人喪乱そうらんに遭わん」等云云、たとい日蓮をば輕賤きやうせんせさせ給うとも教主釈尊きょうしやくそんの金言きんげん多宝・十方の諸仏しよぶつの証明しやうめいは空かるべからず一切の眞言師しんごんし・禅宗ぜんしゆ・念仏者等の謗法ぼうほうの惡比丘あくびくをば前より御帰依ごきえありしかども其の大科だいかを知らせ給はねば少し天も許し善神ぜんじんもすてざりけるにや、而るを日蓮が出現しゆつぜんして一切の人を恐れず身命しんめいを捨てて指し申さば賢なる国主ならば子細しさいを聞き給うべきに聞きもせず用いられざるだにも不思議なるに剩あまた・額おほに及ばむとせし事は存外ぞんがいの次第しだいなり、然れば大悪人を用いる大科正法だいかしやうほうの大善人ぜんじんを耻辱ちしよくする大罪たいざい・二惡鼻にがはなを並べて此の国に出現しゆつぜんせり、譬たとへば修羅しゆらを恭敬きやうけいし日天にってんを射奉るが如し故に前代未聞ぜんだいみもんの大事だいじ此の国に起るなり、是又先例せんれいなきにあらず夏の桀王かのかつは竜蓬りゅうほうが頭を刎ね殷いんの紂王しやくわうは比干ひかんが胸をさき二世王よおうは李斯りしを殺しうだえんあつ・びんずるそんじや・べんじよ・だんみら・ししそんじや・優陀延王うたえんわうは寶頭盧尊者ほうとうろそんじやを蔑如べつじよし檀弥羅王だんみらわうは師子尊者ししそんじやの頸をきる武王ぶわうは慧遠法師ゑいぜんほふしと諍論じやうろんし惠宗王ゑいしゆわうは白居易はつきぎいを遠流おんるし徽宗きそ皇帝こうていは法道三蔵ほふどうさんざうの面に火印かなやきをさす、此等は皆諫曉みなかんきやうを用いざるのみならず還かへつて怨を成せし人人現世ひとびとげんせには国を亡し身を失ひ後生うしろにうまれには惡道あくどうに墮おつ是れ又人をあなづり讒言ざんげんを納れて理を尽さざりし故なり、而るに去る文永十一年二月に佐土の国より召返されて同四月の八日に平金吾たいめんに對面して有りし時理不尽りふじんの御勘氣ごかんきの由委細いさいに申し含めぬ、又恨むらくは此の国すでに他国に破れん事わのあさましさよと歎なげき申せしかば金吾わが云く何の比か大蒙古たいうこは寄せ候べきと問いしかば經文きやうもんには分明ぶんめいに年月ねんげつを指したる事はなけれども天の御氣色みけしきを拝見はいけんし奉るに以ての外もつに此

の国を睨みさせ給うか今年は一定寄せぬと覺ふ若し寄するならば一人も面を向う者あるべからず此れ又天の責なり、
日蓮をばわどのばらが用いぬ者なれば力及ばず、六賢六賢眞言師等に調伏行わせ給うべからず若し行わするほどなら
いよいよ悪かるべき由申付けてさて歸りてありしに上下共に先の如く用いさりげに有る上本より存知
せり国恩を報ぜんがために三度までは諫曉すべし用いずば山林に身を隠さんとおもひしなり、又上古の本文にも三度の
いさめ用いずば去れといふ本文にまかせて且く山中に罷り入りぬ、其の上は国主の用い給はざらんに其れ已下に法門申し
て何かせん申したりとも国もたすかるまじ人も又仏になるべしとおぼす。

又念仏無間地獄阿弥陀經を読むべからずと申す事も私の言にはあらず、夫れ弥陀念仏と申すは源と釈迦如来の五十
余年の説法の内前四十余年の内の阿弥陀經等の三部經より出来せり、然れども如来の金言なれば定めて眞實にてこそあ
るらめと信ずる処に後八年の法華經の序分たる無量義經に仏法華經を説かせ給はんために先づ四十余年の經經並に
年紀等を具に数あげて未顕眞實乃至終不得成無上菩提と若干の經經並に法門を唯一言に

打ち消し給う事譬えば大水の小火をけし大風の衆の草木の露を落すが如し、然後に正宗の法華經の第一卷に至つて
世尊法久後要當説眞實又云く正直捨方便但説無上道と説き給う譬は闇夜に大月輪の出現し大塔立て後足代を切
り捨つるが如し、然實義を定めて云く「今此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ我が子なり而も今、
此の処は諸の患難多し唯我一人のみ能く救護を為す、復教詔すと雖も而も信受せず、乃至經を誦誦

し書き持つと有らん者を見て輕賤憎嫉して而も結恨を懷かん、其の人命終して阿鼻獄に入らんと等云云、經文の次第
普通の性相の法には似ず常には五逆・七逆の罪人こそ阿鼻地獄とは定めて候に此れはさにては候はず在世滅後の一切
衆生阿弥陀經等の四十余年の經經を堅く執して法華經へうつらざらんとたとひ法華經へ入るとも本執を捨てずして
彼彼の經經を法華經に並て修行せん人と又自執の經經を法華經に勝れたりといはん人と法華經を

法の如く修行すとも法華經の行者を恥辱せん者と此れ等の諸人を指しつめて其人命終入阿鼻獄と定めさせ給いしなり、此の事はただ釈迦一仏の仰なりとも、外道にあらずば疑うべきにてはあらねども已今当の諸經の説に色をか今重き事をあらはさんがために宝淨世界の多宝如来は自はるばる來給いて証人とならせ給う、釈迦如来の先判たる大日經・阿弥陀經・念仏等を堅く執して後の法華經へ入らざらむ人人は入阿鼻獄は一定なりと証明し、又阿弥陀等の十方の諸仏は各々の国を捨てて靈山虛空会に詣で給い宝樹下に坐して広長舌を出し大梵天に付け給うこと無量無辺の虹の虚空に立ちたらんが如し、心は四十余年の中の觀經・阿弥陀經・悲華經等に法藏比丘の諸菩薩四十願等を發して凡夫を九品の淨土來迎せんと説く事は且く法華經已前のやすめ言なり、實には彼れ彼れの經經の文の如く十方西方への來迎はあるべからず實とおもふことなかれ釈迦仏の今説き給うが如し實には釈迦・多宝・十方の諸仏壽量品の肝要たる南無妙法蓮華經の五字を信ぜしめんが為なりと出し給う広長舌なり、我等と釈迦仏とは同じ程の仏なり釈迦仏は天月の如し我等は水中の影の月なり釈迦仏の本土は實には娑婆世界なり天月動き給はずば我等もうつるべからず此の土に居住して法華經の行者を守護せん事臣下が主上を仰ぎ奉らんが如く父母の一子を愛するが如くならんと出し給う舌なり、其の時阿弥陀仏の二の弟子・觀音・勢至等は阿弥陀仏の塩梅なり雙翼なり左右の臣なり両目の如し、然而極樂世界よりはるばると御供し奉りたりしが無量義經の時仏の阿弥陀經等の四十八願等は未顕眞實乃至法華經にて一名阿弥陀と名をあげて此等の法門は眞實ならずと説き給いしかば實とも覺えりしに阿弥陀仏正く來りて合点し給いしをうち見てさては我等が念仏者等を九品の淨土來迎の蓮台と合掌の印とは虚しかりけりと聞定めてさては我等も本土に還りて何かせんとて八万二万の菩薩のうちに入り或は觀音品に遊於娑婆世界と申して此の土の法華經の行者を守護せんとねんごろに申せしかば、日本国より近き一閻浮提の内・南方・補陀落山と申す小所を釈迦仏より給いて宿所と定め給ふ、阿弥陀仏は左右の臣下

たる観音勢至に捨てられて西方世界へ還り給はず此の世界に留りて法華經の行者を守護せんとありしかば此の世界の内欲界第四の兜率天 弥勒菩薩の所領の内 四十九院の一院を給いて阿弥陀院と額を打つておはするとこそつけ給はれ、其の上阿弥陀經には仏 舍利弗に対して凡夫の往生すべき様を説き給ふ、舍利弗 舍利弗 又舍利弗 又舍利弗と二十余処までいくばくもなき經によび給いしはかまびすしかりし事ぞかし、然れども四紙の一巻が内すべて舍利弗等の諸声聞の往生成仏を許さず法華經に來りてこそ始て華光如來・光明如來とは記せられ給いしか一閻浮提第一の大智者たる舍利弗すら淨土の三部經にて往生成仏の跡をけづる、まして末代の牛羊の如くなる男女彼彼の經にて生死を離れなんや、此の由を弁へざる末代の學者等並に法華經を修行する初心の人人かたじけなく阿弥陀經を読み念仏を申して或は法華經に鼻を並べ 或は後に此れを読み法華經の肝心とし功德を阿弥陀經等にあつらへ西方へ回向し往生せんと思ふは譬へば飛竜が驢馬を乗物とし師子が野干をたのみたるか將又日輪出現の後の衆星の光大雨の盛 時の小露なり、故に教大師云く「白牛を賜う朝には三車を用いず、家業を得る夕に何ぞ除糞を須いん、故に經に云く「正直に方便を捨て但無上道を説く」又云く「日出でぬれば星隠れ巧を見て拙を知ること云云、法華經出現の後は已今当の諸經の捨てらるる事は勿論なりたとひ修行すとも法華經の所從にてこそあるべきに今の日本国の人人道緯が未有一人得者 善導が千中無一 慧心が往生要集の序 永觀が十因 法然が捨閉閣抛等を堅く信じて或は法華經を抛ちて一向に念仏を申す者もあり、或は念仏を本として助けに法華經を持つ者もあり 或は弥陀念仏と法華經とを鼻を並べて左右に念じて二行と行ずる者もあり 或は念仏と法華經と一法の二名なりと思いて行ずる者もあり、此れ等は皆教主釈尊の御屋敷の内に居して師主をば指し置き奉りて阿弥陀堂を釈迦如來の御所領の内に国毎に郷毎に家家毎に並べ立て或は一萬・二萬 或は七萬返 或は一生の間 一向に修行して主師親をわすれたるだに不思議なるに、剩親父たる教主釈尊の御誕生後入滅の両日を奪い取りて十五日は

阿弥陀仏の日・八日は薬師・仏の日等云云、一仏誕生の両日を東西二仏の死生の日となせり是豈に不孝の者にあらずや
逆路七逆の者にあらずや、人毎に此の重科有りてしかも人毎に我が身は科なしとおもへり無慚無愧の一闍提人なり、
法華經の第二の卷に主と親と師との三大事を説き給へり一經の肝心ぞかし、其の經文に云く「今、此の三界は皆是れ我有
なり其中の衆生は悉く是れ我が子なり、而も今、此の処は諸の患難多し唯我一人のみ能く救護を為す
」等云云、又此の經に背く者を文に説いて云く「復教詔すと雖も而も信受せず、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん
」等云云、されば念仏者が本師の導公は其中衆生の外か唯我一人の經文を破りて千中無一といひし故に現身に狂人と成り
て楊柳に登りて身を投げ堅土に落ちて死にかねて十四日より二十七日まで十四日が間顛倒狂死し畢んぬ、又真言宗の
元祖善無畏三藏・金剛智三藏・不空三藏等は親父を兼ねたる教主・法王を立て大日
他仏をあがめし故に善無畏三藏は閻魔王のせめにあづかるのみならず又無間地獄に墮ちぬ、汝等此の事疑あらば眼前
に閻魔堂の画を見よ、金剛智・不空の事はしげければかず、又禅宗の三階信行・禪師は法華經等の一代聖教をば別教と
下だす我が作れる經をば普經と崇重せし故に四依の大士の如くなりしかども法華經の持者の優婆夷にせめられてこえを
失ひ現身に大蛇となり数十人の弟子を呑み食つ。

今、日本国の人人はたとひ法華經を持ち・釈尊を・釈尊と崇重し奉るとも・真言宗・禅宗・念仏者をあがむるならば無間
地獄はまぬがれがたし、何に況や三宗の者共を日月の如く渴仰し我が身にも念仏を事とせむ者をや心あらん人人は念仏・
阿弥陀經等をば父母・師君・宿世の敵よりもいむべきものなり、例せば逆臣が旗をば官兵は指す事なし寒食の祭には火をい
むぞかし、されば古への論師・天親菩薩は小乗經を舌の上に置かじと誓ひ、賢者たりし吉蔵大師
は法華經をだに読み給はず、此等とはもと小乗經を以て大乘經を破失し法華經を以て天台大師を毀謗し奉りし謗法の
重罪を消滅せんがためなり、今、日本国の人人は一人もなく不輕輕毀の如く苦岸勝意等の如く一國万人皆

無間地獄に墮つべき人人ぞかし、仏の涅槃經に記して末法には法華經誹謗の者は大地微塵よりもおほかるべしと記し給ひ是なり、而に今法華經の行者出現せば一国万人皆法華經の誹誦を止めて吉蔵大師の天台大師に隨うが如く身を肉橋となし不輕輕毀の遺つて不輕菩薩に信伏隨從せしが如く仕つるとも、一日・二日・一月・二年・一年二年・一生二生が間には法華經誹謗の重罪は尚なをし滅しがたかるべきに其の義はなくして当世の人人は四衆俱に一慢

をおこせり、所謂念仏者は法華經を捨てて念仏を申す日蓮は法華經を持といへとも念仏を持たず我等は念仏を持ち法華經をも信ず戒をも持ち一切の善を行ず等云云、此等は野兎が跡を隠し金鳥が頭を穴に入れ、魯人が孔子をあなづり善星が仏ををどせしことならず鹿馬迷いやすく鷹鳩変じがたき者なり、墓無し墓無し、當時は予が古く申せし事の漸く合かの故に心中には如何せんとは思ふらめども年来あまりに法にすぎてそしり悪口せし事が忽に翻がたくて信ずる由をせず、而も蒙古はつよりゆく、如何せん宗盛義朝が様になげくなり、あはれ人は

心はあるべきものかな孔子は九思一言周公旦は浴する時は三度にぎり食する時は三度吐給う賢人は此の如く用意をなすなり世間の法にもはぶにすぎばあやしめといふぞかし、国を治する人などが人の申せばとて委細にも尋ねずして左右なく科に行はれしはあはれくやしかるらん夏桀王が湯王に責められ呉王が越王に生けどり

にせられし時は賢者の諫曉を用いざりし事を悔ひ阿闍世王が惡瘡身に出て他国に襲はれし時は提婆を眼に見じ耳に聞かじと誓い乃至宗盛がいくさにまけ義經に生けどられて鎌倉に下されて面をさらせし時は東大寺を焼き払はせ山王の御輿を射奉りし事を歎きしなり、今の世も又一分もたがふべからず日蓮を賤み諸僧を貴び給う故に自然に法華經の強敵となり給う事を弁へず、政道に背きて行はるる間・梵釈・日月・四天・竜王等の大怨敵となり給う、

法華經守護の釈迦・多宝・十方分身の諸仏・地涌千界・迹化他方・二聖・二天・十羅刹女・鬼子母神・他国の賢王の身に入り代りて国主を罰し国をほろぼさんとするを知らず、真の天のせめにてだにもあるならばたとひ鉄围山を日本

国に引回し須弥山を蓋として十方世界の四天王を集めて波際に立て並べてふせがすると法華經の敵となり教主釈尊より大事なる行者を法華經の第五の巻を以て日蓮が頭を打ち十巻共に引き散して散散にふみたりし大禍は現当二世にのがれがたくこそ候はんずらめ日本守護の天照太神正八幡等もいかでかかかる国をばたすけ給うべきいそぎいそぎ治罰を加えて自科を脱がれんとこそはげみ給うらめをそく科に行う間日本国の諸神ども四天王にいましめられてやあるらん知り難き事なり教大師云く竊に以れば菩薩は国の宝なること法華經に載せ大乘の利他は摩訶衍の説なり弥天の七難は大乗經に非ずんば何を以てか除くことを為ん、未然の大災は菩薩僧に非ずんば豈冥滅することを得んやと等云云、而るを今大蒙古国を調伏する公家武家の日記を見るに或は五大尊或は七

仏薬師或は仏眼或は金輪等云云、此れ等の小法は大災を消すべしや還著於本人と成りて国忽に亡びなんとす、或は日吉の社にして法華の護摩を行うといへども不空三蔵があやまれる法を本として行う間祈の儀にあらず、又今の高僧等あるは或は東寺の真言或は天台の真言なり東寺は弘法大師天台は慈覚智証なり、此の三人は上に申すが如く大謗法のひとびと人人なり、其れより已外の諸僧等は或は東大寺の戒壇の小乗の者なり、叡山の円頓戒は又慈覚の謗法に曲げられぬ彼の円頓戒も迹門の大戒なれば今の時の機にあらず旁叶うべき事にはあらず、只今国土やぶれなん後悔さきにたたじ不便不便と語り給いしを千万が一を書き付けて参らせ候。

但し身も下賤に生れ心も愚に候へば此の事は道理かとは承わり候へとも国主も御用いなきかの故に鎌倉にては如何が候けん不審に覚え候、返す返すも愚意に存じ候はこれ程の国の大事をばいかに御尋ねもなくして両度の御勘気には行はれけるやらんと聞食しほどかせ給はぬ人人の或は道理とも或は僻事とも仰せあるべき事とは覚え候はず、又此の身に阿弥陀經を読み候はぬも併ら御為父母の爲にて候、只理不尽に読むべき由を仰せを蒙り候はば其の時重ねて申すべく候、いかにも聞食さずしてうしろの推義をなさん人人の仰せをばたとひ身は随う様に候え

ども心は一向に用いまいらせ候まじ、又恐れにて候へども兼ねてつみしらせまいらせ候、此の御房は唯一人おはします若し
やの御事の候はん時は御後悔や候はんずらん世間の人人の用いねばとは一旦のをろかの事なり上の御用あらん時は誰人か
用いざるべきや、其の時は又用いたりとも何かせん人を信じて法を信ぜず、又世間の人人の思いて候は親には子は是非に
随うべしと君臣 師弟も此くの如しと此れ等は外典をも弁えず内典をも知らぬ人人の邪推なり外典の孝経には子父 臣君
争うべき段もあり、内典には恩を棄て無為に入るは真実に恩を報ずる者なりと仏定め給いぬ、悉達太子は閻浮第一の孝子
なり父の王の命を背きてこそ父母をば引導し給いしか、比干が親父紂王を諫曉して胸をほられてこそ賢人の名をば流せし
か、賤み給うとも小法師が諫曉を用ひ給はずば現当の御歎きなるべし、此れは親の為に読みまいらせ候はぬ阿弥陀経にて
候はいかにも当時は叶うべしとはおぼ候はず、恐れ申し上げ候。

建治三年六月日 僧 日永

下山兵庫五郎殿御返事

問うて云く末代悪世の凡夫は何物を以て本尊と定むべきや、答えて云く法華經の題目を以て本尊とすべし、問うて云く何れの經文何れの人師の釈にか出でたるや、答う法華經の第四法師品に云く「藥王在在處處に若しは説き若しは讀み若しは誦し若しは書き若しは經卷所住の處には皆心に七宝の塔を起て極めて高広嚴飾なら令むべし復舍利を安んずることを須いじ所以は何ん此の中には已に如来の全身有す」等云云、涅槃經の第四如來性品に云く「復次に迦葉諸仏の師とする所は所謂法なり是の故に如来恭敬供養す法常なるを以ての故に諸仏も亦常なり」云云、天台大師の法華三昧に云く「道場の中に於て好き高座を敷き法華經一部を安置し亦必ずしも形像舍利並びに余の經典を安くべからず唯法華經一部を置け」等云云。

疑つて云く天台大師の摩訶止觀の第二の四種三昧の御本尊は阿彌陀仏なり、不空三蔵の法華經の觀智の儀軌は釈迦多宝を以て法華經の本尊とせり、汝何ぞ此等の義に相違するや、答えて云く是れ私の義にあらず上に出だすところの經文並びに天台大師の御釈なり、但し摩訶止觀の四種三昧の本尊は阿彌陀仏とは彼は常坐・常行・非行・非坐の三種の本尊は阿彌陀仏なり、文殊問經・般舟三昧經・請觀音經等による、是れ爾前の諸經の内、未顕眞実の經なり、半行半坐三昧には二あり、一には方等經の七仏・八菩薩等を本尊とす彼の經による、二には法華經の釈迦多宝等を引き奉れども法華三昧を以て案ずるに法華經を本尊とすべし、不空三蔵の法華儀軌は宝塔品の文によれり、此れは法華經の教主を本尊とす法華經の正意にはあらず、上に挙ぐる所の本尊は釈迦・多宝・十方の諸仏の御本尊法華經の行者の正意なり。

問うて云く日本国に十宗あり所謂俱舍・成実・律・法相・三論・華嚴・真言・淨土・禪・法華宗なり、此の宗は皆本尊まちななり所謂俱舍・成実・律の三宗は劣応身の小釈迦なり、法相・三論の二宗は大釈迦を本尊とす華嚴宗は台上のるさな報身の釈迦如来、真言宗は大日如来、淨土宗は阿弥陀仏、禪宗にも釈迦を用いたり、何ぞ天台宗にひとり法華經を本尊とするや、答う彼等は仏を本尊とするに是は經を本尊とす其の義あるべし、問う其の義如何仏と經といづれか勝れたるや、答えて云く本尊とは勝れたるを用うべし、例せば儒家には三皇・五帝を用いて本尊とするが如く仏家にも又釈迦を以て本尊とすべし。

問うて云く然らば汝云何ぞ釈迦を以て本尊とせずして法華經の題目を本尊とするや、答う上に挙ぐるころの經釈を見給ふ私の義にはあらず釈尊と天台とは法華經を本尊と定め給へ、末代今の日蓮も仏と天台との如く法華經を以て本尊とするなり、其の故は法華經は釈尊の父母・諸仏の眼目なり釈迦大日・総じて十方の諸仏は法華經より出生し給へり故に今能生を以て本尊とするなり、問う其証拠如何、答う普賢經に云く「此の大乗經典は諸仏

の宝藏なり十方三世の諸仏の眼目なり三世の諸の如来を出生する種なり」等云云、又云く「此の方等經は是れ諸仏の眼なり諸仏は是に因つて五眼を具することを得たまえり仏の三種の身は方等より生ず是れ大法印にして涅槃海を印す此の如き海中より能く三種の仏の清淨の身を生ず此の三種の身は人天の福田応供の中の最なり」等

云云、此等の經文仏は所生法華經は能生仏は身なり法華經は神なり、然れば則ち木像・画像の開眼供養は唯法華經にかぎるべし而るに今木画の二像をまつけて大日仏眼の印と真言とを以て開眼供養をなすはもとも逆なり。

問うて云く法華經を本尊とすると大日如来を本尊とするといづれか勝るや、答う弘法大師・慈覺大師・智証大師の御義の如くならば大日如来はすべし法華經は劣るなり、問う其の義如何、答う弘法大師の秘藏宝鑰十住心に云く「第八法華・第九華嚴・第十大日經」等云云是は浅きより深きに入る、慈覺大師の金剛頂經の疏・蘇悉地經の疏

智証大師の大日經の旨歸等に云く「大日經第一 法華經第二」等云云、問う汝が意如何、答う釈迦如来 多宝仏 総じて十方の諸仏の御評定に云く已今当の一切經の中に法華最為第一なり云云、問う今日本国中の天台 眞言等の諸僧並びに王臣万民疑つて云く日蓮法師めは弘法 慈覚 智証大師等に勝るべきか如何、答う日蓮反詰して云く弘法 慈覚 智証大師等は釈迦 多宝 十方の諸仏に勝るべきか是、今日本の国王より民までも教主釈尊の御子なり釈尊の最後の御遺言に云く「法に依つて人に依らざれ」等云云、法華第一と申すは法に依るなり、然るに三大師等に勝るべしやとの給ふ諸僧 王臣 万民乃至所従牛馬等にいたるまで不孝の子にあらずや是、問う弘法大師は法華經を見給はずや、答う弘法大師も一切經を読み給へり、其の中に法華經 華嚴經 大日經の浅深 勝劣を読み給うに法華經を読給う様に云く文殊師利 此の法華經は諸仏如来秘密の蔵なり諸經の中に於て最も其の下に在り、又読み給う様に云く薬王今汝に告ぐ我が所説の諸經あり而も此の經の中に於て法華最第三云云、又慈覚 智証大師の読み給う様に云く諸經の中に於て最も其の中に在り又最為第二等云云、釈迦如来 多宝仏 大日如来 一切の諸仏・法華經を一切經に相對して説いての給はく法華第一、又説いて云く法華最も其の上に在り云云、所詮釈迦十方の諸仏と慈覚 弘法等の三大師といつれを本とすべきや、但し事を日蓮によせて釈迦十方の諸仏には永く背きて三大師を本とすべきか如何。

問う弘法大師は讃岐の国の人勤操僧正の弟子なり、三論・法相の六宗を極む、去る延暦二十三年五月桓武天皇の勅宣を帯びて漢土に入り順宗皇帝の勅に依りて青竜寺に入りて慧果和尚に眞言の大法を相承し給へり慧果和尚は大日如来よりは七代になり給う人はかはれども法門はをなじ譬えば瓶の水を猶瓶にうつすがごとし、大日如来と金剛薩・竜猛 竜智 金剛智 不空 慧果 弘法との瓶は異なれども所伝の智水は同じ眞言なり此の大師 彼の眞言を習いて三千の波濤をわたりて日本国に付き給うに平城 嵯峨 淳和の三帝にさづけ奉る、去る弘仁十四年正月

十九日に東寺を建立すべき勅を給いて真言の秘法を弘通し給う然らば五畿・七道・六十六箇国・二の島にいたるまでも鈴をとり杵をにぎる人たれかこの末流にあらざるや。

又慈覚大師は下野の国の人・広智菩薩の弟子なり、大同三年御歳十五にして伝教大師の御弟子となりて叡山に登りて十五年の間六宗を習い法華・真言の二宗を習い伝え承和五年御入唐漢土の会昌天子の御宇なり、法全・元政・義真・法月・宗叡・志遠等の天台・真言の碩学に値い奉りて顕密の二道を習い極め給う、其の上殊に真言の秘教は十年の間功を尽したまひ給う大日如来よりは九代なり嘉祥元年・仁明天皇の御師なり、仁寿・斉衡に金剛頂經・蘇悉地經の二經の疏を造り叡山に総持院を建立して第三の座主となり給う天台の真言これよりはじまる。

又智証大師は讃岐の国の人天長四年御年十四叡山に登り義真和尚の御弟子となり給う、日本国にては義真・慈覚・円澄・別当等の諸徳に八宗を習い伝え去る仁寿元年に文徳天皇の勅を給いて漢土に入り宣宗皇帝の大中年中に法全良・和尚等の諸大師に七年の間顕密の二教習い極め給いて去る天安二年に御帰朝・文徳・清和等の皇帝の御師なり、何れも現の爲当の爲月の如く日の如く代代の明主・時時の臣民・信仰余り有り帰依怠り無し故に愚癡の一切偏に信ずるばかりなり誠に法に依つて人に依らざれの金言を背かざるの外は争か仏によらずして弘法等の人によるべきや、所詮其の心如何、答う夫れ教主釈尊の御入滅一千年の間月氏に仏法の弘通せし次第は先五百年は小乗後の五百年は大乗・小大・権実の諍はありしかども顕密の定めはかすかなりき、像法に入りて十五年と申せしに漢土に仏法渡る始は儒道と釈教と諍論して定めがたかりきされども仏法やうやく弘通せしかば小大・権実

の諍論いできたる、されどもいたくの相違もなかりしに、漢土に仏法渡りて六百年・玄宗皇帝の御宇・善無畏・金剛智・不空の三蔵・月氏より入り給いて後真言宗を立てしかば、華嚴・法華等の諸宗は以ての外にくだされき上一人自り下万民に至るまで真言には法華經は雲泥なりと思ひしなり、其の後・徳宗皇帝の御宇に妙樂大師と申す人

眞言は法華經にあながちにをとりたりとおぼしめしかども、いたく立てる事もなかりしかば法華・眞言の勝劣を弁える人なし。

日本国は人王三十代欽明の御時・百済国より仏法始めて渡りたりしかども始は神と仏との諍論こわくして三十余年はすぎにき、三十四代推古天皇の御宇に聖徳太子始めて仏法を弘通し給う慧観・観勒の二の上人百済国よりわたりて三論宗を弘め、孝徳の御宇に道昭・禪宗をわたす文武の御宇に新羅国の智鳳・法相宗をわたす第四十四代元正天皇の御宇に善無畏三蔵・大日經をわたす然而弘まらず、聖武の御宇に審祥・大徳・朗弁・僧正等華嚴宗をわたす人王四十六代孝謙天皇の御宇に唐代の鑒真和尚・律宗と法華經をわたす律をばひろめ法華をば弘めず、第五十代桓武天皇の御宇に延暦二十三年七月伝教大師勅宣を給いて漢土に渡り妙樂大師の御弟子・道遂・行滿に値ひ奉りて法華宗の定慧を伝え道宣律師に菩薩戒を伝え順・曉和尚と申せし人に眞言の秘教を習ひ伝えて日本国に帰り給いて眞言・法華の勝劣は漢土の師のおしに依りては定め難しと思食しければここにして大日經と法華經と彼の釈と此の釈とを引き並べて勝劣を判じ給いに大日經は法華經に劣りたるのみならず大日經の疏は天台の心をとりにて我が宗に入れたりけりとかんがたま勘え給へ。

其の後弘法大師・眞言經を下されける事を遺恨とや思食しけむ眞言宗を立てんとたばかりて法華經は大日經に劣るのみならず華嚴經に劣れりと云云、あはれ慈覺・智証・叡山・園城にこの義をゆるさずば弘法大師の僻見は日本国にひろまらざらまし、彼の両大師・華嚴・法華の勝劣をばゆるさねど法華・眞言の勝劣をば永く弘法大師に同心せしかば存外に本の伝教大師の大怨敵となる、其の後日本国の諸碩徳等各智慧高く有るなれども彼の三大師にこえざれば今四百余年の間日本一同に眞言は法華經に勝れけりと定め畢んぬたまたまた天台宗を習へる人人も眞言は法華に及ばざるの由存ぜども天台の座主・御室等の高貴におそれて申す事なしあるは又其の義をもわきまぬ

かのゆへにからくして同の義をいはい一向眞言師はさる事おもひもよらずとわらふなり。

然らば日本国中に数十万の寺社あり皆眞言宗なりたまたま法華宗を並ぶとも眞言は主の如く法華は所従の如くなり
若しくは兼学の人も心中は一同に眞言なり、座主長吏・檢校・別當・一向に眞言たるうへに好むところ下皆したがふ事
なれば一人ももれず眞言師なり、されば日本国或は口には法華經最第一とはよめども心は最第二・最第三なり或は
身口意共に最第二三なり、三業相応して最第一と読める法華經の行者は四百余年が間一人もなしまして能持此經の
行者はあるべしとおぼす、如来現在猶多怨嫉況滅度後の衆生は上一人より下万民にいたるまで法華經の大怨敵なり。

然るに日蓮は東海道十五箇国の内第十二に相當る安房の国長狹の郡・東条の郷・片海の海人が子なり、生年十二同じ
き郷の内・清澄寺と申す山にまかり登り住しき、遠國なるう寺とはなづけて候へども修学の人なし然而随分諸國を修行
して學問し候いしほどに我が身は不肖なり人はおしす十宗の元起勝劣たやすくわきまがたきところに、たまたま仏・
菩薩に祈請して一切の經論を勸て十宗に合せたるに俱舍宗は浅近なれども一分は小乗經に相當するに似たり、成実宗
は大小兼雜して謬あり律宗は本は小乗・中比は權大乘・今は一向に大乘宗とおもへ
り又伝教大師の律宗あり別に習う事なり、法相宗は源・權大乘經の中の浅近の法門にてありけるが次第に增長して
權実と並び結句は彼の宗宗を打ち破らんと存ぜり譬えば日本國の將軍・將門・純友等のごとし下に居て上を破る、
三論宗も又權大乘の空の一分なり此れも我は實大乘とおもへり、華嚴宗は又權大乘と云ひながら余宗にまされり
譬えば摂政・関白のごとし然而法華經を敵となして立てる宗なる故に臣下の身を以て大王に順ぜんとするがごとし、
浄土宗と申すも權大乘の一分なれども善導・法然がたばかりかしくして諸經をば上げ觀經をば下し正像の機をば上
げ末法の機をば下して末法の機に相叶える念仏を取り出して機を以て經を打ち一代の聖教を失いて念仏

のいちもん一門を立てたり譬たとえば心かしくして身は卑いやしき者が身を上げて心はかなきものを敬けんじんいて賢人をつしなふがごとし、
禅宗と申すは一代聖教の外に眞実しんじつの法有りと云云譬たとえばをやを殺して子を用い主を殺せる所従しよじゅうのしかも其の位につけ
るがごとし、眞言宗と申すは一向に大妄語にて候が深く其の根源をかくして候は浅機あさぎの人あらはしがたし一向に誑惑おあわくせ
られて数年を経て候先ず天竺に眞言宗と申す宗なし然れども有り」と云云、其の証拠を尋ぬ可き
なり所詮大日經ここにわたれり法華經に引き向けて其の勝劣を見候処に大日經は法華經より七重下劣の經なり証拠彼
の經此の經に分明ぶんめいなり此に之を引かずしかるを或は云く法華經に三重の主君或は二重の主君なりと云云以ての外の大僻見びやくけんな
り、譬たとえば劉聰が下劣の身として愍帝に馬の口をとらせ超高が民の身として横に帝位につきしがごとし又彼の天竺の大慢
婆羅門が釈尊を床として坐せしがごとし漢土にも知る人なく日本にもあやしめずしてすでに四百余年をおくれり。

是くの如く仏法の邪正乱れしかば王法も漸く尽きぬ結句は此の国他国にやぶられて亡国となるべきなり、此の事日蓮
ひとり勘え知れる故に仏法のため王法のため諸經の要文を集めて一卷の書を造る仍つて故最明寺入道殿に奉る立正安国論
と名けき、其の書にくはしく申したれども愚人は知り難し、所詮現証を引いて申すべし抑人王八十二代隱岐の法王と
申す王有おわしき去ぬる承久三年太歳辛巳五月十五日伊賀太郎判官光末を打捕まします鎌倉の義時をうち給はむとの
門出なり、やがて五畿七道の兵を召して相州鎌倉の権の太夫義時を打ち給はんとし給う

ところへ還りて義時にまけ給いぬ、結句我が身は隱岐の国にながされ太子一人は佐渡の国阿波の国にながされ給う公卿
七人は忽に頸をはねられてき、これはいかんとしてまけ給いけるぞ国王の身として民の如くなる義時を打ち給はんは鷹の
雉をとり猫の鼠を食むにてこそあるべけれこれは猫のねずみにくらはれ鷹の雉にとられたるやうなり、しかのみならず
調伏力を尽せり所謂天台の座主慈円僧正眞言の長者仁和寺の御室園城寺の長吏総じ

ななだいに
て七大寺・十五大寺 智慧戒行は日月の如く 秘法は弘法 慈覚等の三大師の心中の深密の大法・十五壇の秘法なり、五
月十九日より六月の十四日にいたるまであせをながしなづきをくだきて行き最後には御室 紫宸殿にして日本国にわた
りていまだ三度までも行はぬ大法・六月八日始めて之を行う程に同じき十四日に関東の兵軍・宇治勢多をおしわたして
洛陽に打ち入りて三院を生け取り奉りて九重に火を放ちて一時に焼失す、三院をば三国へ
流罪し奉りぬ又公卿七人は忽に頸をきる、しかのみならず御室の御所に押し入りて最愛の弟子の小児勢多伽と申せしをせ
めいだして終に頸をきりにき御室思いに堪えずして死に給い畢んぬ母も死す童も死す、すべて此のいのりをたのみし人いく
千万といふ事をしらず死にきたまたまいきたるもかひなし、御室祈りを始め給いし六月八日

より同じき十四日までなかをかぞふれば七日に満じける日なり、此の十五壇の法と申すは一字金輪 四天王不動大威徳
・転法輪・如意輪・愛染王・仏眼六字・金剛童子・尊星王・太元守護経等の大法なり此の法の詮は国敵王敵となる者を降伏
して命を召し取りて其の魂を密厳浄土へかはすと云う法なり、其の行者の人人も又軽からず天台の座主 慈円東寺御室
三井の常住院の僧正等の四十一人並びに伴僧等三百余人なり云云、法と云ひ行者と云ひ又

代も上代なりいかにとしてまけ給いけるぞたとひかつ事こそなくとも即時にまけおはりてかかるはぢにあひたりける事、い
かなるゆへといふ事を余人いまだしらず、国主として民を討たん事 鷹の鳥をとらんがごとしだとひまけ給うとも一年・二
年十年二十年もささつべきぞかし五月十五日におこりて六月十四日にまけ給いぬわづかに三十余日なり、権の大夫殿は此
の事を兼てしらねば祈 もなしがまへもなし。

然而日蓮小智を以て勘えたるに其の故あり所謂彼の真言の邪法の故なり僻事は一人なれども万国のわづらひなり一人
として行ずとも一国・二国やぶれぬべし況や三百余人をや国主とともに法華経の大怨敵となりぬいかでかほろびざらん、か
かる大悪法としを今やうやく関東におち下りて諸堂の別当供僧となり連連と行えり本より辺域

の武士なれば教法の邪正をば知らずただ三宝をばあがむべき事とばかり思ふゆゑに自然としてこれを用いたりてやうや
く年数を経る程に今他国のせめをかうふりて此の国すでにほろびなんとす、関東八箇国のみならず叡山・東寺・園城・七寺
等の座主・別当・皆関東の御はからひとなりぬるゆゑに隠岐の法皇のごとく大悪法の檀那と成定まり給ひぬるなり、国主と
なる事は大小皆・梵王・帝釈・日月・四天の御計になり、法華經の怨敵となり定まり給は
ば忽に治罰すべきよしを誓ひ給へ、随つて人王八十一代安徳天皇に太政入道の二門与力して兵衛佐頼朝を調伏せんが
ために、叡山を氏寺と定め山王を氏神とたのみしかども安徳は西海に沈み明雲は義仲に殺さる一門・皆一時にほろび畢ん
ぬ、第二度なり今度は第三度にあたるなり。

日蓮がいさめを御用いなくて真言の悪法を以て大蒙古を調伏せられれば日本国還つて調伏せられなむ還著於本人と説けり
と申すなり、然らば則ち罰を以て利生を思うに法華經にすぎたる仏になる大道はなかるべきなり現世の祈は兵衛佐殿・
法華經を讀誦する現証なり。

此の道理を存ぜる事は父母と師匠との御恩なれば父母はずでに過去し給ひ畢んぬ、故道善御房は師匠にておはしまし
しかども法華經の故に地頭におそれ給ひて心中には不便とおぼしつらめども外にはかたきのやうににくみ給ひぬ、後には
すこし信じ給ひたるやうにきこへしかども臨終にはいかにやおはしけむおぼつかなし地獄までは

よもおはせじ又生死をはなる事はあるべしとおぼす中有にやただよひますらむとなげかし、貴辺は地頭のいかり
し時・義城房とともに清澄寺を出でておはせし人なれば何となくともこれを法華經の御奉公とおぼしめして生死をはなれ
させ給ふべし。

此の御本尊は世尊説きおかせ給ひて後二千二百三十九年が閏・閏浮提の内にいまだひろめたる人候はず、漢土の天台
日本の伝教ほほしうしめしていささかひろめさせ給はず當時こそひろまらせ給ふべき時にあたりて候へ

経には上行・無辺行等こそ出でてひろめさせ給うべしと見今候へどもいまだ見させ給はず、日蓮は其の人に候はねどもほ
ぼこころえて候は地涌の菩薩の出でさせ給うまでの口ずさみにあらあら申して況滅度後のほとさきに当り候なり、願わく
は此の功德を以て父母と師匠と一切衆生に回向し奉らんと祈請仕り候、其の旨をしらせまいらせむがために御不審を書
きおくりまいらせ候に他事をすてて此の御本尊の御前にして一向に後世をもいのらせ給い候へ又これより申さんと存じ
候、いかにも御房たちはからい申させ給へ。

日蓮
花押

五一 諸宗問答抄

建長七年 三十四歳御作与三位房日行

375P

問うて云く抑法華宗の法門は天台・妙楽・伝教等の御釈をば御用い候や如何、答て云く最も此の御釈共を明鏡の助証として立て申す法門にて候、問て云く何を明鏡として立てられ候ぞや彼の御釈共には爾前権教を簡び捨てらる事候はず、随つて初後仏慧・円頓・或は義斉とも或は此妙彼妙・妙義殊なること無しとも釈せられて華嚴と法華との仏慧同じ仏慧にて異なること無しと釈せられ候、通教・別教の仏慧も法華と同じと見えて候何を以て偏に法華勝れたりとは仰せられ候や意得ず候如何、答て云く天台の御釈を引かれ候は定て天台宗にて御坐候らん、然る

に天台の御釈には教道・証道とて二筋を以て六十巻を造られて候、教道は即教相の法門にて候証道は即内証の悟の方に候、只今引れ候釈の文共は教証の二道の中には何れの文と御得意候て引かれ候ぞや、若し教門の御釈にて候わば教相には三種の教相を立て爾前・法華を釈して勝劣を判ぜられ候、先づ三種の教相と申すは何にて候ぞやと之を尋ぬ可し、若し三種の教相と申すは一には根性の融不融の相・二には化導の始終不始終の相・三には師弟の

遠近不遠近の相なりと答へさては只今引かれ候、御釈は何れの教相の下にて引かれ候やと尋ぬ可きなり、若し根性の融不融の下にて釈せらるると答へ又押し返して問う可し根性の融不融の下には約教・約部とて二の法門あり何れぞと尋ぬ可し、若し約教の下と答へ又問う可し約教・約部に付いて与奪の二の釈候只今の釈は与の釈なるか奪の釈なるかと之を尋ね可し、若し約教・約部をも与奪をも弁えずと云わばさてはさては天台宗の法門は堅固に無沙汰にて候けり、尤も天台法華の法門は教相を以て諸仏の御本意を宣られたり若し教相に闇くして法華の法門を云ん者は雖讚法華經還死法華心とて法華の心を殺すと云う事にて候、其の上若し余經を弘むるに教相を明ら

めざるも義に於て傷ること無し若し法華を弘むるに教相を明さざれば文義闕くること有り」と釈せられて殊更教相を本として天台の法門は建立せられ候、仰せられ候如く次第も無く偏円をも簡はず邪正も選ばず法門申さん者をば信受せざれと天台堅く誠にめられ候なり、是程に知食さず候けるに中々天台の御釈を引かれ候事浅き御事なりと責む可きなり、但し天台の教相を三種に立てらるる中に根性の融不融の相の下にて相待妙絶待妙とて二妙を立て候、相待妙の下にて又約教約部の法門を釈して仏教の勝劣を判ぜられて候、約教の時は一代の教を蔵通べつえんしきようわか別円の四教に分つて之に付いて勝劣を判ずる時は前三為後一為妙とは判ぜられて蔵通別の三教をば教と嫌ひ後の一教をば妙法と選取せられ候へとも此の時もなほ爾前權教の当分の得道を許し且く華嚴等の仏慧と法華の仏慧とを等から令めて只今の初後仏慧円頓義音等の与の釈を作られ候なり、然りと雖も約部の時は一代の教を五時に分つて五味に配し華嚴部阿含部方等部般若部法華部と立てられ前四味為後二為妙と判じて奪の釈を作られ候なり、然れば奪の釈に云く「細人一人二俱犯過從過辺説俱名人」と、此釈の意は華嚴部にも別円二教を説かれて候へば円の方は仏慧と云わるるなり、方等部にも蔵通別円の四教を説かれたれば円の方は又仏慧なり般若部にも通別円の後三教を説いて候は其れも円の方は仏慧なり、然りと雖も華嚴は別教と申すえせ物をつれて説れたる間わるき物つれたる仏慧なりとて簡わるるなり方等部の円も前三教のえせ物をつれたる仏慧なり般若部の円も前二のえせ物をつれたる仏慧なり、然る間仏慧の名は同と雖も過の辺に従つてと云われてわるき円教の仏慧と下され候なり、之に依て四教にても眞実の勝劣を判ずる時は一往は三蔵を名て小乗と為し再往は三教を名て小乗と為すと釈して一往の時は二百五十戒等の阿含三蔵教の法門を総じて小乗の法と簡い捨てらるれども、再往の釈の時は三蔵教と大乘と云いつる通教と別教との三教皆小乗の法と本朝の智証大師も法華論の記と申す文を作つて判釈せられて候なり。

次に絶待妙と申すは開会の法門にて候なり、此の時は爾前權教とて嫌ひ捨らるる所の教を皆法華の大海におさめ入るなり、随つて法華の大海に入りぬれば爾前の權教とて嫌わるる者無きなり、皆法華の大海の不可思議の徳として南無妙法蓮華經と云う一味にたたきなしつる間 念仏 戒 眞言 禪とて別の名言を呼び出す可き道理會て無きなり、随つて釈に云く「諸水入海 同一 鹹味 諸智入如実智 失本名字」と等と釈して本の名字を一言も呼び顯す可らずと釈せられて候なり、世間の人天台宗は開会の後は相待妙の時斥け捨てられし所の前四味の諸經の名言を唱うるも又諸仏 諸菩薩の名言を唱うるも皆是法華の妙体にて有るなり大海に入らざる程こそ各別の思なりけれ大海に入つて後に見れば日来よしわるしと嫌ひ用ひけるは大僻見にて有りけり、嫌はるる諸流も用ひらるる冷水も 源はただ大海より出でたる一水にて有りけり、然れば何の水と呼びたりとてもただ大海の一水に於て別別の名言をよびたるにてこそあれ、各別各別の物と思つてよぶにこそ科はあれ只大海の一水と思つて何れをも心に任せて有縁に従つて唱え持つに苦しかる可らずとて念仏をも眞言をも何れをも心に任せて持ち唱うるなり。

今云う此の義は与えて云う時はさも有る可きかと覺れども奪つて云う時は随分墮地獄の義にて有るなり、其の故は縦ひ一人此くの如く意得何れをも持ち唱るとても万人 此の心根を得ざる時は只例の偏見 偏情にて持ち唱えれば一人成仏するとも万人は皆地獄に墮す可き邪見の惡義なり、爾前に立てる所の法門の名言と其の法門の内に談ずる所の道理の所詮とは皆是 偏見 偏情によりて入邪見稠林 若有若無等の權教なり、然れば此等の名言を以て持ち唱へ此等の所詮の理を觀ずれば偏に心得たるも心得ざるも皆大地獄に墮つべし、心得たりとて唱へ持たたらん者は牛蹄に大海を納めたる者の如し是僻見の者なり、何ぞ三惡道を免がれん又心得ざる者の唱へ持たは本迷惑の者なれば邪見權教の執心によつて無間・大城に入らん事 疑い無き者なり、開会の後も 教とて嫌ひ捨てし惡法をば名言をも其の所詮の極理をも唱へ持つて交ゆべからずと見えて候弘決に云く「相待 絶待俱に須く惡を離るべ

し円に著する尚悪なり況や復余をやと云云、文の心は相待妙の時も絶待妙の時も俱に須く悪法をば離るべし円に著する尚
悪し況や復余の法をやと云う文なり、円と云うは満足の義なり余と云うは闕減の義なり、円教の十界平等に成仏する
法をすら著したる方を悪ぞと嫌ふ、況や復十界平等に成仏せざるの悪法の闕たるを以て執著をなして朝夕受持読誦
解説書写せんをや、設ひ爾前の円を今の法華に開会し入るとも爾前の円は法華の一味と
なる事無し、法華の体内に開会し入れられても体内の権と云われて実とは云わざるなり、体内の権を体外に取出して且く
於一仏乗分別説三する時権に於て円の名を付て三乗の中の円教と云われたるなり、之に依りて古も金杖の譬を以て
三乗にあてて沙汰する事あり、譬は金の杖を三に打をりて一つ三乗の機根に与へ何れも皆金なり然れば何ぞ同じ金
に於て差別の思をなして勝劣を判ぜんやと談合したり、此はつち聞く所はさもやと覺えたれ
ども悪く学者の得心たるなり、今云う此の義は譬は法華の体内の権の金杖を仏三根にあてて体外に三度つちふり給へる
其の影を機根が見付ずして皆真実の思を成して己が見に任せたるなり、其の真実には金杖を打折て三になしたる事が有ら
ばこそ今の譬は合譬とはならぬ、仏は権の金杖を折らずして三度ふり給へるを機根ありて三に
成りたりと執著し得心たる返す返す不得心の大邪見なり大邪見なり、三度振りたるも法華の体内の権の功德を体外の
三根に配して三度振りたるにてこそ有れ、全く妙体不思議の円実を振りたる事無きなり、然れば体外の影の三乗を体内
の本の権の本体開会し入るれば本の体内の権と云われて全く体内の円とは成らざるなり、此の心を以て体内体外の権実
の法門をば得意弁ふべき者なり。

次に禅宗の法門は或は教外別伝不立文字と云ひ或は仏祖不伝と云ひ修多羅の教は月をさす指の如しとも云ひ或
は即身成仏とも云つて文字をも立てず仏祖にも依らず教法をも修学せず画像・木像をも信用せずと云うなり、反詰して
云く仏祖不伝にて候はば何ぞ月氏の二十八祖東土の六祖とて相伝せられ候や、其の上迦葉尊者は何ぞ一枝の花房を

釈尊より授けられ微笑して心の一法を靈山にして伝えたりとは自称するや、又祖師無用ならば何ぞ達磨大師を本尊とするや、又修多羅の法無用ならば何ぞ朝夕の所作に真言陀羅尼をよみつるぞや、首楞嚴經・金剛經・円覺經等を或は談し或は読誦するや、又仏菩薩を信用せずんば何ぞ南無三寶と行住坐臥に唱つるやと責む可きなり、次に聞き知らざる言を以て種種申し狂はば云う可し、凡そ機には上中下の三根あり随つて法門も三根に与へて説事なり、禪宗の法門にも理致・機関・向上として三根に配て法門を示され候なり、御辺は某が機をば三根の中には何れと得意て聞知せざる法門を仰せられ候ぞや、又理致の分か機関の分か向上の分に候かと責む可きなり、理致と云うは下根に道理を云いきかせて禪の法門を知らする名目なり、機関とは中根には何なるか本来の面目と問は庭前の柏樹子などと答へたる様の言づかひをして禪法を示す様なり、向上と云うは上根の者の事なり此の機は祖師よりも伝えず仏よりも伝えず我として禪の法門を悟る機なり、迦葉靈山微笑の花に依て心の一法を得たりと云う時には是れ尚中根の機なり、所詮禪の法門と云う事は迦葉一枝の花房を得しより已来出来せる法門なり、抑も伝えし時の花房は木の花か草の花か五色の中には何様なる色の花ぞや又花の葉は何重の葉ぞや委細に之を尋ぬ可きなり、此の花をありのままに云い出したる禪宗有らば実に心の一法をも一分得たる者と知る可きなり、設ひ得たりとは存知すとも真実の仏意には叶う可からず如何となれば法華經を信ぜざるが故なり、此の心は法華經の方便品の末長行に委く見えたり委は引て拝見し奉る可きなり、次に禪の法門何としても物に著する所を離れよと教へたる法門にて有るなり、さと云へば其れも情なりかと云うも其れも情なりとあなたこそなたへずべりとどまらぬ法門にて候なり、夫れを責む可き様は他人の情に著したらん計りをば沙汰して己が情量に著し封ぜらる所をば知らざるなり、云うべき様は御辺は人の情計りをば責むれども御辺情を情と執したる情をばなど離れ得ぬぞと反詰すべきなり、凡そ法として三世諸仏の説きのこしたる法は無きなり汝仏祖不伝と云つて仏祖

よりも伝えずとならばさては禅法は天魔の伝うる所の法門なり如何、然る間汝断常の二見を出でず無間地獄に墮せん
事疑無しと云つて何度もかれが云う言にてややもすれば己がつまる語なり、されども非学匠は理につまらずと云つて
他人の道理をも自身の道理をも聞き知らざる間暗証の者とは云うなり、都て理におれざるなり譬えば行く水にかずかく
が如し。

次に即身即仏とは即身即仏なる道理を立てよと責む可し其の道理を立てずして無理に唯即身即仏と云わば例の天魔の
義なりと責む可し但即身即仏と云う名目を聞くに天台法華宗の即身成佛の名目つかひを盗み取て禅宗の家につかふと
覚えたり、然れば法華に立つる様な即身即仏なるか如何とせめよ、若し其の義無く押して名目をつかはばつかはるる語
は無障礙の法なり譬えば民の身として国王と名乗ん者の如くなり如何に国王と云うとも言に

は障り無し己が舌の和かなるままに云うとも其の身は即土民の卑しく嫌われたる身なり、又瓦礫を玉と云う者の如し
石瓦を玉と云いたりとも會て石は玉にならず、汝が云う所の即身即仏の名目も此くの如く有名無実なり不便なり不便
なり。

次に不立文字と云う所詮文字と云う事は何なるものと得心此くの如く立てられ候や、文字は是一切衆生の心法の顯れ
たる質なりされば人のかける物を以て其の人の心根を知つて相する事あり、凡そ心と色法とは不二の法にて有る間かきた
る物を以て其の人の貧福をも相するなり、然れば文字は是一切衆生の色心不二の質なり汝若し

文字を立てざれば汝が色心をも立つ可からず汝六根を離れて禅の法門一句答へよと責む可きなり、さてと云うもかうと
云うも有と無との二見をば離れず無と云わば無の見なりとせめよと有と云わば有の見なりとせめよ、何れも何れも叶わ
ざる事なり。

次に修多羅の教は月をさす指の如しと云うは月を見て後は徒者と云う義なるか若其義にて候わば御辺の親も徒者と

云う義か又師匠は弟子の爲に徒者か又大地は徒者か又天は徒者か、如何となれば父母は御邊を出生するまでの用にてこそあれ御邊を出生して後はなにかせん、人の師は物を習い取るまでこそ用なれ習い取つて後は無用なり、夫れ天は雨露を下すまでこそあれ雨ふりて後は天無用なり大地は草木を出生せんが爲なり草木を出生して後は大地無用なりと云わん者の如し、是を世俗の者の譬に喉過ぬればあつさわすれ病愈えぬれば医師をわすると云うらん譬に少も違わず相似たり、所詮修多羅と云うも文字なり文字は是れ三世諸仏の氣命なりと天台釈し給へ、天台は震旦・禅宗の祖師の中に入れたり、何ぞ祖師の言を嫌はん其の上御邊の色心なり凡そ一切衆生の三世不断の色心なり、何ぞ汝本来の面目を捨て不立文字と云うや、是れ昔し移宅しけるに我が妻を忘れたる者の如し、眞實の禅法をば何としてか知るべき哀なる禅の法門かなと責む可し。

次に華嚴法相・三論・俱舍・成実・律宗等の六宗の法門いかに花をさかせても申しやすく返事すべき方は能いはせて後・南都の歸伏状を唯読みかす可きなり、既に六宗の祖師が歸伏の状をかきて桓武天皇に奏し奉る、仍て彼歸伏状を山門に納められぬ其外内裏にも記せられたり諸道の家家にも記し留めて今にあり、其より已來華嚴宗等の六宗の法門・末法の今に至るまで一度も頭をさし出さず何ぞ唯今事新しく捨られたる所の權教・無得道の法にをいて眞實の思をなし此くの如く仰せられ候ぞや心得られずとせむべし。

次に眞言宗の法門は先ず眞言三部經は大日如來の説か釈迦如來の説かと尋ね定めて釈迦の説と言はば釈尊・五十年の説教にをいて已今當の三説を分別せられたり、其の中に大日經等の三部は何れの分にをさまり候ぞと之を尋め可し、三説の中にはいつくにこそおさまりたりと云はば例の法門にてたやすかるべき問答なり、若法華と同時の説なり義理も法華と同じと云はば法華は是純円一実の教にて會て方便を交へて説く事なし、大日經等は四教を含有したる經なり何ぞ時も同じ義理も同じと云わんや謬なりとせめよ、次に大日如來の説法と云はば

大日如来の父母と生ぜし所と死せし所を委く沙汰し問うべし、一句一偈も大日の父母なし説所なし生死の所なし
有名無実の大日如来なり然る間殊に法門せめやすかるべきなり若法門の所詮の理を云はば教主の有無を定めて説教の得
不得をば極む可き事なり、設ひ至極の理密・事密を沙汰すとも訳者に虚妄有り法華の極理を盗み取て事密真言とか立て
られてあるやらん不審なり、之に依りて法の所談は教主の有無に随て沙汰有る可きなりと責む可きなり、次に大日如来
は法身と云はば法華よりは未顕真実と嫌ひ捨てられたる爾前権教にも法身如来と説たり何ぞ不思議なるべきやと云う
可きなり、若無始無終の由を云ていみじき由を立て申さば必大日如来に限らず我等一切衆生・螻蟻等に至るまで
みな無始無終の色心なり、衆生に於て有始有終と思ふは外道の僻見なり汝外道に同ず如何と云う可きなり。

次に念仏は是浄土宗所用の義なり、此れ又権教の中の権教なり譬えば夢の中の夢の如し有名無実にして其の実無き
なり一切衆生願て所詮なし、然れば云う所の仏も有為無常の阿弥陀仏なり何ぞ常住不滅の道理にしかんや、されば
本朝の根本大師の御釈に云く「有為の報仏は夢中の権果無作の三身は覺前の実仏」と釈して阿弥陀仏等の有為無常の仏を
ば大にいましめ捨てをかれ候なり、既に憑む所の阿弥陀仏有名無実にして名のみ有つて其の体

なからんには往生す可き道理をば委く須弥山の如く高く立て大海の如くに深く云とも何の所詮有るべきや又経論に正
き明文ども有と云はば明文ありとも未顕真実の文なり、浄土の三部經に限らず華嚴經等より初て何の經・教・論・釈にか
成仏の明文無らんや、然れども権教の明文なる時は汝等が所執の拙きにてこそあれ経論に無き僻事なり、何れも法門
の道理を宣べ厳り依經を立てたりとも夢中の権果にて無用の義に成る可きなり返す返す。

五二 一生成仏抄

建長七年 三十四歳御作 与富木常忍

383P

夫れ無始の生死を留めて此の度決定して無上菩提を証せんと思はばすべからく衆生本有の妙理を觀ずべし、衆生本有の妙理とは妙法蓮華經是なり故に妙法蓮華經と唱へてまつれば衆生本有の妙理を觀するにてあるなり、文理真正の經王なれば文字即実相なり実相即妙法なり唯所詮一心法界の旨を説き顯すを妙法と名く故に此の經を諸仏の智慧とは云うなり、一心法界の旨とは十界三千の依正色心非情草木虚空刹土いづれも除かずちりも残らず一念の心に収めて此の一念の心法界に満するを指して方法とは云うなり、此の理を覺知するを一心法界

と云うなるべし、但し妙法蓮華經と唱持つと云うとも若し己心の外に法ありと思はば全く妙法にあらず法なり、法は今經にあらず今經にあらずれば方便なり権門なり、方便権門の教ならば成仏の直道にあらず成仏の直道にあらずれば多生曠劫の修行を経て成仏すべきにあらずる故に一生成仏叶いがたし、故に妙法と唱へ蓮華と読まん時は我が一念を指して妙法蓮華經と名くるぞと深く信心を發すべきなり。

都て一代八万の聖教三世十方の諸仏菩薩も我が心の外に有りとはゆめゆめ思ふべからず、然れば仏教を習ふといへども心性を觀ぜざれば全く生死を離るる事なきなり、若し心外に道を求めて万行万善を修せんは譬えば貧窮の人日夜に隣の財を計たれども半銭の得分もなきが如し、然れば天台の釈の中には若し心を觀ぜざれば重罪滅せずとて若し心を觀ぜざれば無量の苦行となると判ぜり、故にかくの如きの人をば仏法を學して外道となると恥しめ

られたり、爰を以て止觀には雖學仏教還同外見と釈せり、然る間仏の名を唱へ經卷をよみ華をちらし香をひねるまでも皆我が一念に納めたる功德善根なりと信心を取るべきなり、之に依つて淨名經の中には諸仏の解脱

を衆生の心行に求めば衆生即菩提なり生死即涅槃なりと明せり、又衆生の心けがるれば土もけがれ心清ければ土も清しとて浄土と云ひ穢土と云うも土に一の隔なし只我等が心の善悪によると見えたり、衆生と云うも仏と云うも亦此くの如し迷う時は衆生と名け悟る時をば仏と名けたり、譬えば闇鏡も磨きぬれば玉と見ゆるが如し、只今も一念無明の迷心は磨かざる鏡なり是を磨かば必ず法性真如の明鏡と成るべし、深く信心を發して日夜朝暮に又懈らず磨くべし何様にしてか磨くべき只南無妙法蓮華經と唱たてまつるを是をみかくとは云うなり。

抑妙とは何と云う心ぞや只我が一念の心不思議なる處を妙とは云うなり不思議とは心も及ばず語も及ばずと云う事なり、然ればすなはち起るところの一念の心を尋ね見れば有りと云はんとすれば色も質もなし又無しと云はんとすれば様様に心起る有と思ふべきに非ず無と思ふべきにも非ず、有無の二の語も及ばず有無の二の心も

及ばず有無に非ずして而も有無にして中道一実の妙体にして不思議なるを妙とは名くるなり、此の妙なる心を名けて法とも云うなり、此の法門の不思議をあらはすに譬を事法にかたどりて蓮華と名く、一心を妙と知りぬれば亦轉じて余心をも妙法と知る處を妙經とは云うなり、然ればすなはち善惡に付いて起り起る處の念心の当体を

指して是れ妙法の体と説き宣べたる經王なれば成仏の直道とは云うなり、此の旨を深く信じて妙法蓮華經と唱は一生成仏更に疑あるべからず、故に經文には「我が滅度の後に於て応に斯の經を受持すべし是の人、仏道に於て決定して疑有る事無けん」とのべたり、努努不審をなすべからず六賢六賢、一生成仏の信心南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經。

日蓮 花押

釈迦仏は我等が為には主なり師なり親なり一人してすくひ護ると説き給へり、阿弥陀仏は我等が為には主ならず親ならず師ならず、然れば天台大師是を釈して曰く「西方は仏別にして縁異なり仏別なるが故に隠顕の義成ぜず縁異なるが故に子父の義成ぜず、又此の經の首末に全く此の旨無し眼を閉じて穿鑿せよ」と実なるかな釈迦仏は中天竺の淨飯大王の太子として十九の御年家を出で給いて檀特山と申す山に籠らせ給ひ、高峯に登つては妻木をとり深谷に下つては水を選び難行苦行して御年三十と申せしに仏にならせ給いて一代聖教を説き給ひしに、上

には華嚴阿含方等般若等の種種の經經を説かせ給へども内心には法華經を説かばやとおぼしめされしかども衆生の機根まちまちにして一種ならざる間仏の御心をば説き給はで人の心に随ひ万の經を説き給へり、此くの如く四十二年が程は心苦しく思食しかども今法華經に至つて我が願既に満足しぬ我が如くに衆生を仏になさんと説き給へり、久遠より已来或は鹿となり或は熊となり或時は鬼神の為に食われ給へり、此くの如き功德をば法華經を信じたらん衆生は是れ眞仏子とて是実の我が子なり此の功德を此の人に与へんと説き給へり、是れ程に思食したる親の釈迦仏をばないがしろに思ひなして唯以一大事と説き給へる法華經を信ぜざらん人は争か仏になるべきや能く心を留めて案ずべし。

二の巻に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切世間の仏種を断ず乃至余經の一偈をも受けざれ」と文の心は仏にならん為には唯法華經を受持せん事を願つて余經の一偈・一句をも受けざれと、三の巻に云く「飢国より来つて忽ち大王の膳に遇うが如し」と文の心は飢えたる国より来つて忽に大王の膳にあへり心は大野干

の心を致すとも迦葉・目連等の小乗の心をば起さざれば破れたる石は合つとも枯木に花はさくとも二乗は仏になるべからずと仰せられしかば須菩提は茫然として手の一鉢をなげ迦葉は涕泣の声大千界を響すと申して歎き悲みしが今法華經に至つて迦葉尊者は光明如来の記を授かりしかば目連・須菩提・摩訶迦旃延等は是を見て我等も定めて仏になるべし飢えたる国より来つて忽に大王の膳にあへるが如しと喜びし文なり、我等衆生・無始曠劫より

已来妙法蓮華經の如意宝珠を片時も相離れざれども無明の酒にたばらかされて衣の裏にかけたりとしらずして少きを得て足りぬと思ひぬ、南無妙法蓮華經とだに唱え奉りたらましかば速に仏に成るべかりし衆生どもの五戒・十善等のわずかなる戒を以て或は天に生れて大梵天・帝釈の身と成つていみじき事と思ひ或時は人に生れて諸の

国王・大臣・公卿・殿上人等の身と成つて是れ程のたのしみなしと思ひ少きを得て足りぬと思ひ悦びあへり、是を仏は夢の中のさかへまぼろしのたのしみなり唯法華經を持ち奉り速に仏になるべしと説き給へり、又四の巻に云く、而も此の經は如来の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をやと云云。

釈迦仏は師子・頻王の孫・淨飯王には嫡子なり十善の位をすて五天竺第一なりし美女耶輸多羅女をふりすてて十九の御年出家して勤め行ひ給ひしかば三十の御年・成道し御坐して三十二相・八十種好の御形にて御幸なる時は大梵天王・帝釈左右に立ち多聞・持国等の四天王・先後圍繞せり、法を説き給ふ御時は四弁・八音の説法は祇園精舎

に満ち三智五眼の徳は四海にしけり、然れば何れの人か仏を惡むべきなれども尚怨嫉するもの多し、まして滅度の後・一毫の煩惱をも断ぜず少しの罪をも弁へざらん法華經の行者を惡み嫉む者多からん事は雲霞の如くならん見えたり、然れば則ち末代惡世に此の經を有りのままに説く人には敵多からんと説かれて候に世間の人人我も

持ちたり我も読み奉り行じ候に敵なきは仏の虚言か法華經の実ならざるか、又実の御經ならば当世の人人經をよみまいらせ候は虚よみか実の行者にてはなきか如何能く能く心得べき事なり明むべき物なり、四の巻に

たほつによらい しゃかむにぶつ
多宝如来は釈迦牟尼仏御年三十にして仏に成り給ふに、初には華嚴經と申す經を十方華王のみぎりにして別円頓大の
ほうりん ほうえ くだくりん こんごうとう こんごう
法輪・法慧 垢徳林 金剛幢 金剛藏の四菩薩に對して三七日の間説き給ひしにも来り給はず、其の二乗の機根叶はざりし
かば瓔珞細の衣をぬぎすて 弊垢膩の衣を著 波羅奈国 鹿野苑に趣いて十二年の間・生滅四諦の
ほうもん と あにやくりん そべいくに き はらな ろくやあん しうめつしたい
法門を説き給ひしに阿若俱鄰等の五人証果し八万の諸天は無生忍を得たり、次に欲色二界の中間大宝坊の儀式・浄名
の御室には三万二千の牀を立て般若 白鷺池の辺 十六会の儀式 梁浄虚融の旨をのべ給ひしにも来り給はず、法華經にも
一の卷乃至四の卷 人記品までも来り給はず宝塔品に至つて初めて来り給へり。
しゃかぶつ よんじゅうよねん たま ほうとうほん いた
釈迦仏 先四十余年の經を我と虚事と仰せられしかば人用うる事なく法華經を真実なりと説かせ給へども仏と云うは
こまつ そご ため おお
無虚妄の人とて永く虚言し給はずと聞きしに一日ならず二日ならず一月ならず二月ならず一年・二年ならず四十余年の
ねんご せいご ため
程まで虚言したり仰せられしかば又此の經を實と説き給うも虚言にやあらんずらんと不審なししかば此の不審釈迦仏一
しやり ほう たほつぶつ ほうじゅうせかい ふしん
人しては舍利弗を始め事はれがたかりしに此の多宝仏・宝浄世界よりはるばると来らせ給ひ
ほけきよう みなご しんじつ しうみよう たまい
て法華經は皆是れ真実なりと証明し給ひしに先の四十余年の經を虚言と仰せらるる事實の虚言に定まるなり、又法華經
より外の一切經を空に浮べて文・文・句句 阿難尊者の如く覺り富樓那の弁舌の如くに説くとも其れを難事とせず、又
しゆみせん もつ ゆじゆん たほうせかい なる なん
須弥山と申す山は十六万八千由旬の金山にて候を他方世界へつづてになぐる者ありとも難事には候はじ、仏の滅度の後、
とうせ まつだい あくせ ほけきよう よ 説かん是を難しとすと説かせ給へり、五天竺 第一
当世 末代 惡世に法華經を有りのままに能く説かん是を難しとすと説かせ給へり、五天竺 第一
の大力なりし提婆達多も長三丈五尺 広一丈二尺の石をこそ仏になげかけて候いしか又漢土第一の大力 楚の項羽と申せ
し人も九石入の釜に水滴ち候いしをこそひさげ候いしか其れに是は須弥山をばなぐる者は有りともし此の經を説の如く読み
たりまつ 奉らん人は有りがたしと説かれて候に人ごとに此の經をよみ書き説き候、經文を虚言に成して当世の人人を皆法華經の
きんごう せいご とうせ ひとびと みなほけきよう
行者と思ふべきが能く能く御心得有るべき事なり、五の卷提婆品に云く「若し善男子・

善女人有りて妙法華經の提婆達多品を聞いて淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に墮せずして十方
の仏前に生ぜん」と、此の品には二つの大事あり一には提婆達多と申すは阿難尊者には兄・斛飯王には嫡子・師子頰王には
孫・仏にはいとこにて有りしが仏は一閻浮提第一の道心者にてましましに怨をなして我は又閻浮提第一の邪見放逸の者
とならんと誓つて万の悪人を語いて仏に怨をなして三逆罪を作つて現身に大地破れて無間・大城
に墮ちて候いしを天王如来と申す記を授けらるる品にて候、然れば善男子と申すは男此の經を信じまひらせて聴聞す
るならば提婆達多程の悪人だにも仏になる、まして末代の人とはたとひ重罪なりとも多分は十惡をすぎずまして深く持ち
奉る人・仏にならざるべきや、二には娑竭羅竜王のむすめ竜女と申すは八歳のくちなは仏に成りた

る品にて候此の事めづらしく貴き事にて候、其の故は華嚴經には「女人は地獄の使なり能く仏種子を断ず外面は菩薩に
似て内心は夜叉の如し」と、文の心は女人は地獄の使・よく仏の種をたつ外面は菩薩に似たれども内心は夜叉の如しと云へ
り、又云く「一度女人を見る者はよく眼の功德を失ふ設ひ大蛇をば見るとも女人を見るべからず」と云い、又有る經には
「所有の三千界の男子の諸の煩惱を合せ集めて一人の女人の業障と為す」と三千大千

世界にあらゆる男子の諸の煩惱を取り集めて女人一人の罪とすと云へ、或經には「三世の諸仏の眼は脱て大地に墮つ
とも女人は仏に成るべからず」と説き給へ、此の品の意は人畜をいはば畜生たる竜女だにも仏に成れりまして我等は形の
ごとく人間の果報なり、彼の果報にはまされり争か仏にならざるべきやと思食すべきなり。

中にも三惡道におちずと説かれて候其の地獄と申すは八寒八熱乃至八大地獄の中に初め浅き等活地獄を尋ねれば此の
一閻浮提の下一千由旬なり、其の中の罪人は互に常に害心をいだけりもしたまたま相見れば獵師が鹿にあるが如し各各
鉄の爪を以て互につかみさく・血肉皆尽きて唯残つて骨のみあり、或は獄卒棒を以て頭よりあなづらに至るまで皆打ち
くだく身も破れくだけで猶沙の如し、焦熱なんと申すは譬えんがたなき苦なり鉄城四方に回つ

て門を閉じたれば力士も開きがたく猛火高くのぼつて金翅のつばさもかけるべからず、餓鬼道と申すは其の住処に二あり
一には地の下五百由旬の閻魔王宮にあり、二には人天の中にもまじはれり其の相種種なり 或は腹は大海の如くのんどは
鍼の如くなれば明けても暮れても食すともあくべからず、まして五百生・七百生など飲食の名
をだにもきかず 或は己が頭をくだきて腦を食するもあり 或は一夜に五人の子を生んで夜の内に食するもあり、万菓林
に結び取らんとすれば悉く劍の林となり万水・大海に流入りぬ飲んとすれば猛火となる如何にしてか此の苦をまぬがるべ
き、次に畜生道と申すは其の住所に二あり根本は大海に住す枝末は人天に雜れり短き物は長き物に
のまれ小き物は大きなる物に食はれ互に相食んでしばらくもやすむ事なし、或は鳥・獸と生れ 或は牛馬と成つても重き物
をおほせられ西へ行かんと思は東やられ東へ行かんとすれば西やらる山野に多くある水と草をのみ思いて余は知るとこ
ろなし、然るに善男子・善女人此の法華經を持ち南無妙法蓮華經と唱え奉らば此の三罪を脱るべしと説き給へり何事か
是にしかんたのもしきかなだのもしきかな、又五の巻に云く「我れ大乘經を闡いて
苦の衆生を度脱す」と心はわれ大乘の教をひらいてと申すは法華經を申す苦の衆生とは何ぞや地獄の衆生にもあらず
餓鬼道の衆生にもあらず只女人を指して苦の衆生と名けたり、五障三従と申して三つしたがふ事有つて五つの障りあり
童女我女人の身を受けて女人の苦をつみしれり然れば余をば知るべからず女人を導かんと誓へり、南無妙法蓮華經・南無
妙法蓮華經。

日蓮 花押

五四

一代聖教大意

正嘉二年二月 三十七歳御作

390P

四教は一には三藏教・二には通教・三には別教・四には円教なり。

始に三藏とは阿含經の意なり、此の經の意は六道より外を明さず、但し六道修・天人の内の因果の道理を明す、但し正報は十界を明すなり、地・餓・畜・修・人・天・声聞・緣覺・菩薩・仏なり、依報が六にて有れば六界と申すなり、此の教の意は六道より外を明さざれば三界より外に淨土と申す生處ありと言わず、又三世に仏は次第・次第に出せすと

は云へども横に十方に並べて仏有りと云わす、三藏とは一には經藏・二には律藏・三には論藏・四には定戒・慧・戒・定・慧・慧・定・戒と云う事あるなり、戒藏とは五戒・八戒・十善戒・二百五十戒・五百戒なり、定藏とは味・禪・定・名・淨・禪・無漏禪なり、慧藏とは苦・空・無常・無我の智慧なり、戒・定・慧の勝劣と云うは但上の戒・計りを持つ者は三界の内の欲界の天人に生を受くる凡夫なり、但し上の定・計りを修する人は戒を持たざれども定の力に依つ

て上の戒を具するなり、此の定の内に味・禪・淨・禪は三界の内の色・無色・界・全・無漏・禪は聲聞・緣覺と成つて見思を断じ尽し灰身・滅智するなり、慧は又苦・空・無常・無我と我が色・心を觀すれば上の戒・定を自然に具足して聲聞・緣覺とも成るなり、故に戒より定は勝れ、定より慧は勝れたり、而れども此の三藏教の意は戒が本体にてあるなり、されば阿含經を總結する遺教經には戒を説けるなり、此の教の意は依報には六界・正報には十界を明せども而も依報

に随つて六界を明す經と名くるなり、又正報に十界を明せども緣覺・菩薩・仏も聲聞の悟に過ぎざれば但聲聞教とも申す、されば仏も菩薩も緣覺も灰身・滅智する教なり、聲聞に付いて七賢・七聖の位あり、六道は凡夫なり。

三賢 さんけん

一に五停心

二に別想念処 ねんしよ

外凡

三に総想念処 ねんしよ

七賢 智と言ふ事なり

一に法

四善根 ぜんこん

二に頂法

内凡

三に忍法

四に世第一法 だいいち

此の七賢の位は六道の凡夫より賢く生死を厭ひ煩惱を具しながら煩惱を發さざる賢人なり、例せば外典の許由巢父が如し。

五停心

一に数息を数えて散乱を治す すそく

二に不淨身の不淨を觀じて貪欲を治す ふじよう

三に慈悲慈悲を觀じて嫉妬を治す じひじひ

四に因縁十二因縁を觀じて愚癡を治す いんねん

五に界方便 地水火風空識の六界を觀じて障道を治す又は念仏と云う ほつぺん

一に身 外道は身を淨と言ひ仏は不淨と説き給う げどう

二に受 外道は三界を樂と言ひ仏は苦と説き給う げどう

三に心 外道は心を常と言ひ仏は無常と説き給う げどう

四に法 外道は一切衆生に我有りと云ひ仏は無我と説き給う げどう

別想念処 ねんしよ

外道は常心樂受我法淨身仏は苦・不淨・無常・無我と説く總想念処とは先の苦・不淨・無常・無我を調練して觀するなり
 法は智慧の火・煩惱の薪を蒸せば煙の立つなり故に法と云う、頂法は山の頂に登つて四方を見るに雲無きが如し、
 世間出世間の因果の道理を委く知つて闇き事無きに譬えたるなり、始め五停心より此の頂法に至るまで退位と申して惡縁
 に値ひ惡道に墮つ而れども此の頂法の善根は失せずと習うなり、忍法は此の位に入る人は永く惡道に墮ちず、世第一法
 は此の位に至る賢人なり但今聖人と成る可きなり。

一に見道 二 随信行 鈍根

随法行 利根

正と言つ事なり

信解 鈍根

七聖三 三 見得 利根

二に修道 身証 利鈍に亘る

阿羅漢 二 慧解脱鈍根

三に無学道 俱解脱利根

見思の煩惱を断ずる者を聖と云う、此の聖人に三道あり、見道とは見思の内の見惑を断じ尽くす、此の見惑を尽くす人
 をば初果の聖者と申す、此の人は欲界の天人には生るれども永く地・餓・畜・修の四惡趣には墮ちず、天台云く「見惑を
 破るが故に四惡趣を離る」文、此の人は未だ思惑を断ぜず貪・瞋・癡有り、身に貪欲ある故に妻を帶す、而れども他人の妻
 を犯さず、瞋恚あれども物を殺さず、鋤を以て地をすけば虫自然に四寸去る、愚癡なる故に我が身・初果の聖者と知ら
 ず、婆娑論に云く「初果の聖者は妻を八十一度・一夜に犯すと」取意天台の解釈に云く「初果地を耕すに虫四寸を離るるは
 道共の力なり」と、第四果の聖者・阿羅漢を無学と云ひ亦は不生と云う、

永く見思を断じ尽して三界六道に此の生の尽きて後生ずべからず見思の煩惱無きが故なり、又此の教の意は三界六道より外に処を明さざれば生処有りと知らず、身に煩惱有りととも知らず又生因なく但灰身滅智と申して身も心もつせ虚空の如く成るべしと習う、法華經にあらば永く仏になるべからずと云うは二乗是なり、此の教の修行の時節は声聞は三生鈍根六十劫利根又一類の最上利根の声聞一生の内に阿羅漢の位に登る事あり、緣覺は四生鈍根百劫利根菩薩は一向凡夫にて見思を断ぜず而も四弘誓願を發し六度万行を修し三僧祇百大劫を経て三藏教の仏と成る

仏と成る時始めて見思を断尽するなり、見惑とは一には身見と云う二には辺見常見と云う三には邪見と云う四には見取見勝見と云う五には戒禁取見計道見と云うなり見惑は八十八有れども此の五が根本にて有るなり、思惑とは一には貪・二には瞋・三には癡・四には慢なり思惑は八十一有れども此の四が根本にて有るなり、此の法門は阿含經四十卷 婆沙論二百卷 正理論・顯宗論 俱舍論に具に明せり、別して俱舍宗と申す宗有り又諸の大乘に此の法門少少明す事あり 請く方等部の經・涅槃經等なり但し華嚴般若法華には此の法門無し。

次に通教とは大乘の始なり又戒定慧の三字あり、此の教の意のおきて大旨は六道を出です少分利根なる菩薩六道より外に推し出すことあり、声聞緣覺菩薩共に一の法門を習い見思を三人共に断じ而も声聞緣覺灰身滅智の意に入る者もあり入らざる者もあり、此の教に十地あり。

一 乾慧地 三賢

二 性地 四善根 賢人

三 八人地 見道位聖人

四 見地 見惑を断ず

初果の聖人

十地 薄地

六 離欲地 思惑を断ず

七 已弁地 阿羅漢 見思を断じ尽す

八 辟支仏 地習氣を尽す

九 菩薩地 誓つて習を扶けて生ずるなり

十 仏地 見思を断じ尽す

此通教の法門は別して一經に限らず方等經・般若經・心經・觀經・阿彌陀經・雙觀經・金剛般若等の經に散在せり、此通教の修行の時節は動踰塵劫を経て仏に成ると習うなり、又一類の疾く成ると云う辺もあり、已上上の藏通二教には六道の凡夫本より仏性ありとも談ぜず始めて修すれば声聞・緣覺・菩薩・仏とおもひおもひに成ると談ずる教なり。

次に別教又戒定慧の三学を談ず此の教は但菩薩計りにて声聞・緣覺を雜えず、菩薩戒とは三聚淨戒なり五戒・八戒・十善戒・二百五十戒・五百戒・梵網の五十八の戒・瓔珞の十無尽戒・華嚴の十戒・涅槃經の自行の五支戒・護陀の十戒・大論の十戒是等は皆菩薩の三聚淨戒の内・撰律儀戒なり、撰善法戒とは八万四千の法門を撰す、饒益有情戒とは四弘誓願なり定とは觀練熏修の四種の禪定なり慧とは心生十界の法門なり、五十二位を立つ五十二位とは一に十信・二に十住・三に十行・四に十回向・五に十地等覺一位・妙覺二位なり、已上。

十信 退位 凡夫菩薩未だ見思を断ぜず
十住 不退位五十二位
五十二位

十行 十回向見思・塵沙を断ぜる菩薩

十地 無明を断ぜる菩薩

等覺

妙覺 無明を断じ尽せる仏なり

此の教は大乗なり戒定慧を明す 戒は前の威通二教に似ず尽未來際の戒金剛宝戒なり、此の教の菩薩は三惡道を恐しとせず二乗道を恐る地 餓畜等の三惡道は仏の種子を断ぜず二乗の道は仏の種子を断ずればなり、大莊嚴論に云く「恒に地獄に処すと雖も大菩提を障えず若し自利の心を起さば是れ大菩提の障なり」と、此の教の習は眞の惡道とは三無爲の火 なり眞の惡人とは二乗を云ふなり、されば惡を造るとも二乗の戒をば持たじと談ず、故に

大般若經に云く「若し菩薩設い恒河沙劫に妙なる五欲を受くるとも菩薩戒に於ては猶犯と名けずと若し一念二乗の心を起さば即ち名けて犯と爲す」文、此の文に妙なる五欲とは色 声 香味 觸の五欲なり、色欲とは青黛 珂雪 白齒等声欲とは絲竹管絃 香欲とは沈檀芳薰 味欲とは猪鹿等の味 觸欲とは 膚等なり、此に恒河沙劫に著すれども菩薩戒は破れず一念の二乗の心を起すに菩薩戒は破ると云える文なり、太賢の古迹に云く「貪に汚さるる

と雖も大心尽きざるをもつて無余の犯無し起せども無犯と名く」文、二乗戒に趣くを菩薩の破戒とは申すなり華嚴 般若 方等總じて爾前の經にはあながちに二乗をきらつなり定慧此れを略す、梵網經に云く「戒をば謂いて大地と爲し定をば謂いて室宅と爲す智慧は爲灯明なり」文、此の菩薩戒は人畜 黃門 二形の四種を嫌わず但一種の

菩薩戒を授く、此の教の意は五十二位を一一の位に多俱低劫を経て衆生界を尽して仏に成るべし一人として一生に仏に成る者無し、又一行を以て仏に成る事無し一切行を積んで仏と成る微塵を積んで須弥山と成すが如し、華嚴 方等 般若 梵網 瓔珞等の經に此の旨分明なり、但し二乗界の此の戒を受くる事を嫌ふ、妙樂の釈に云く「法華已前の諸經を尋ぬるに實に二乗作仏の文無し」文。

次に円教とは此の円教に二有り・一には爾前の円・二には法華涅槃の円なり、爾前の円に五十二位又戒定慧あり、にぜん爾前の円とは華嚴經の法界唯心の法門文に云く「初發心の時便ち正覺を成ず」と又云く「円満修多羅」文、淨名經に云く「我が無我無造にして受者無けれども善惡の業敗亡せず」文、般若經に云く「初發心より即ち道場に坐す」文、觀經に云く「韋提希時に應じて即ち無生法忍を得」文、梵網經に云く「衆生、仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に是れ諸仏の子なり」文、此は皆爾前の円の証文なり、此の教の意は又五十二位を明す名は別教の五十二位の如し但し義はかはれり、其の故は五十二位が互に具して浅深も無く勝劣も無し、凡夫も位を経ずとも仏にもなり又往生するなり、煩惱も断ぜざれども仏に成る障り無く一善一戒を以ても仏に成る少少開会の法門を説く処もあり、所謂淨名經には凡夫を会し煩惱惡法も皆会す但し二乗を会せず、般若經の中には二乗の所學の法門をば開會して二乗の人と惡人をば開會せず、觀經等の經に凡夫一毫の煩惱をも断ぜず往生すと説くは皆爾前の円教の意なり、法華經の円經は後に至つて書く可し已上四教。

次に五時、五時とは一には華嚴經・結經・梵網經・別円二教を説く、二には阿含・結經・遺教經・但三藏教の小乘の法門を説く、三には方等經・寶積經・觀經等の説時を知らざる権大乘經なり、結經・瓔珞經・但し藏通・別円の四教を皆説く、四には般若經・結經・仁王經・通教・別教・円教の後三教を説く三藏教を説かず、華嚴經は三七日の間の説、阿含經は十二年の説、般若經は三十年の説、已上華嚴より般若に至る四十二年なり、山門の義には方等は説時定まらず説処定まらず般若經三十年と申す、寺門の義には方等十六年・般若十四年と申す、秘藏の大事の義には方等・般若は説時三十年・但し方等は前・般若は後と申すなり、仏は十九出家・三十成道と定むる事は大論に見えたり、一代聖教五十年と申す事は涅槃經に見えたり、法華經已前四十二年と申す事は無量義經に見えたり、法華經八箇年と申す事は涅槃經の五十年の文と無量義經の四十二年の文の間を勘づれば八箇年なり、已上十九出家・三十成道・五十年の転法輪・

八十人滅と定む可し、此等の四十二年の説教は皆法華經の汲引の方便なり、其の故は無量義經に云く「我先に道場菩提樹下に端坐すること六年阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。方便力を以てす、四十余年には未だ眞實を顯さず初に四諦を説き阿含經なり次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説く」と。

私に云く説の次第に順ずれば華嚴阿含・方等般若・法華涅槃なり、法門の浅深の次第を列ぬれば阿含・方等般若・華嚴・涅槃・法華と列ぬべし、されば法華經・涅槃經には爾くの如く見えたり華嚴宗と申す宗は智嚴法師・法藏法師・澄觀法師等の大師・華嚴經に依つて立てたり、俱舍宗・成実宗・律宗は宝法師・光法師・道宣等の大師・阿含經に依つて立てり、法相宗と申す宗は玄奘三藏・慈恩法師等・方等部の内に上生經・下生經・成仏經・解深密經・

瑜伽論・唯識論等の經論に依つて立てたり、三論宗と申す宗は般若經・百論・中論・十二門論・大論等の經論に依つて吉藏大師立て給へり、華嚴宗と申すは華嚴と法華・涅槃は同じく円教と立つ余は皆劣と云うなる可し、法相宗には解深密經と華嚴・般若・法華・涅槃は同じ程の經と云う、三論宗とは般若經と華嚴・法華・涅槃は同じ程の經なり、但し法相の依經諸の小乗經は劣なりと立つ、此等は皆法華已前の諸經に依つて立てたる宗なり、爾前の円を極として立てたる宗どもなり、宗宗の人人の諍は有れども經經に依つて勝劣を判ぜん時はいかにも法華經は勝れたるべきなり、人師の釈を以て勝劣を論ずる事無し。

五には法華經と申すは開經には無量義經一卷・法華經八卷・結經には普賢經一卷上の四教・四時の經論を書き挙ぐる事は此の法華經を知らん為なり、法華經の習としては前の諸經を習わずしては永く心を得ること莫きなり、爾前の諸經は一經一經を習うに又余經を沙汰せざれども苦しからず、故に天台の御釈に云く「若し余經を弘むるには

教相を明さざれども義に於て傷むこと無し若し法華を弘むるには教相を明さずんば文義闕くること有り」と云、法華經に云く「種種の道を示すと雖も其れ實には仏乗の爲なり」と云、種種の道と申すは爾前一切の諸經なり仏乗の

ため ほけきよう ため いっさい
為とは法華經の為に一切の經を説くと申す文なり。

問う諸經の如きは、或は菩薩の為、或は人天の為、或は声聞、緣覺の爲機に随つて法門もかわり益もかわる此の經は何な
る人の爲ぞや、答つ此の經は相伝に有らざれば知り難し所詮惡人は提婆達多、妙莊嚴王、阿闍世王、善人は韋提希等の人天の人、有智は舍利弗、
総じて十界の衆生の爲なり、所謂惡人は提婆達多、妙莊嚴王、阿闍世王、善人は韋提希等の人天の人、有智は舍利弗、
無智は須利槃特、有戒は声聞、菩薩、無戒は竜畜なり女人は竜女なり、総じて十界の衆生、円の一法を覺るなり此の事を
知らざる學者、法華經は我等凡夫の爲には有らずと申す仏意恐れ有り、此の經に云く「一切の菩薩の
あのかたさんみやくさんぼだい
阿耨多羅三藐三菩提は皆此の經に属せり」文、此の文の菩薩とは九界の衆生、善人、惡人、女人、男子、三藏教の声聞、
緣覺、菩薩、通教の三乘、別教の菩薩、爾前の円教の菩薩、皆此の經の力に有らざれば仏に成るまじと申す文なり、
又此の經に云く「藥王、多く人有りて在家、出家の菩薩の道を行ぜんに若し是の法華經を見聞し、誦誦し、書持し、供養すること
を得ること能わずんば、当に知るべし、是の人は未だ善く菩薩の道を行ぜず、若し是の經典を聞くことを得ること有らば、乃ち
よく、
能く菩薩の道を行ずるなり」と文、此の文は顯然に權教の菩薩の三祇、百劫、動踰塵劫、無量阿僧祇劫の間の六度万行、
しくせいがん
四弘誓願は此の經に至らざれば菩薩の行には有らず、善根を修したるにも有らずと云う文なり、又菩薩の行無ければ、
も成らざる事も顯然なり。

天台・妙樂の末代の凡夫を勧進する文、文句に云く「好堅地に処して、牙已に百圍せり、頻伽に在つて、声衆鳥に勝れ
たり」文、此の文は法華經の五十展轉の第五十の功德を釈する文なり、仏苦に校量を説き給うに、權教の多劫の修行又
たいせい
大聖の功德よりも此の經の須臾、結縁の愚人の隨喜の功德、百千万億勝れたる事經に見えつれば、此の意を大師譬を以て
あらしまたま
顯し給えり、好堅樹と申す木は一日に百圍にて高くをう、頻伽と申す鳥は幼だも諸の大小の鳥の聲に勝れたり、權教
の修行の久きに諸の草木の遅く生長するを譬へ、法華の行の速に仏に成る事を一日に百圍なるに

たとへば權教の大小の聖人をば諸鳥に譬法華の凡夫のはかなきを 声の衆鳥に勝るるに譬う、妙樂大師重ねて釈して云く「恐らくば人謬りて解せる者初心の功德の大なることを測らずして功を上位に推り此の初心を蔑る故に今彼の行浅く功深きことを示して以て経力を顯す」文、末代の愚者は法華経は深理にしていみじけれども我等が下機に叶わずと言つて法を挙げ機を下して退する者を釈する文なり。

又妙樂大師末代に此の法の捨てられん事を歎いて云く「此の円頓を聞きて崇重せざる者は良に近代に大乘を習える者の雜濫するに由るが故なり、況や像末に情澆く信心寡薄に円頓の教法蔵に溢れ函に盈れども暫くも思惟せず便ち目を瞑ぐに至る・徒に生じ徒に死す一に何ぞ痛ましきや有る人云く聞いて行ぜずんば汝に於て何ぞ預らん此れは未だ深く久遠の益を知らず、善住天子経の如き文殊・舍利弗に告ぐ法を聞き謗を生じて地獄に墮つるは恒沙

の仏を供養する者に勝れたり地獄に墮つと雖も地獄より出でて還つて法を聞くことを得ると、此れは仏を供し法を聞かざる者を以て校量と為り聞いて謗を生ずる尚遠種と為す況や聞いて思惟し勤めて修習せんをや」と、又云く「一句も神に染ぬれば咸く彼岸を資く思惟修習永く舟航に用いたり随喜見聞恒に主伴と為る、若は取若は捨耳に経て縁と成り或は順・或は違終に斯れに因つて脱すと文、私に云く若取若捨・或順・或違の文は肝に銘ずるなり。

法華翻經の後記に云く「釈僧肇記 什羅 什三藏なり姚興王に対して曰く予昔天竺国に在りし時・く五竺に遊びて大乘を尋討し大師須梨耶蘇摩に従つて理味を餐受するに頂を摩でて此の経を属累して言く、仏日西に隠れ遺光東北を照らす茲の典東北諸国に有縁なり汝慎んで伝弘せよと文、私に云く天竺よりは此の日本は東北の州なり慧心の一乗要決に云く「日本一州円機純熟 朝野遠近同じく一乘に歸し緇素貴賤悉く成仏を期す 唯一師等あつて若し信受せず權とや為ん実とや為ん權為らば責む可し」浄名に云く「衆の魔事を覚知して其行に随わず善力方便を以て意に随つて度すと実為らば憐む可し」此經に云く「当来世の悪人は仏説の一乗を聞いて迷惑して信受せず法を破し

て悪道に墮つ文。

妙法蓮華經 妙は天台玄義に云く「言つ所の妙とは妙は不可思議に名くるなり」と、又云く「秘密の奥蔵を発く之を稱して妙と為す」と、又云く「妙とは最勝 修多羅 甘露の門なり故に妙と言ふなり」と、法は玄義に云く「言つ所の法とは十界十如 權実の法なり」、又云く「權実の正軌を示す故に号して法と為す」と、蓮華は玄義に云く「蓮華とは權実の法に譬するなり」、又云く「久遠の本果を指す之を喩するに蓮を以てし不二の円道に会す之を譬するに華を以てす」文、經は又云く「声仏事を為す之を稱して經と為す」文、私に云く法華以前の諸經に小乗は心生ずれば六界・心滅すれば四界なり、通教以て是くの如し、爾前の別円の二教は心生の十界なり小乗の意は六道 四生の苦樂は衆生の心より生ずと習うなりされば心滅すれば六道の因果は無きなり、大乘の心より十界を生ず、華嚴經に云く「心は工なる画師の如く種種の五陰を造る一切世界の中に法として造らざること無し」文、造種種五陰とは十界の五陰なり仏界をも心法をも造ると習う心が過去 現在 未來の十方の仏と顯ると習うなり、華嚴經に云く「若し人三世一切の仏を了知せんと欲せば当に是くの如く觀すべし心は諸の如来を造ると」法華已前の經のおきては上品の十悪は地獄の引業・中品の十悪は餓鬼の引業・下品の十悪は畜生の引業・五常は修羅の引業・三歸・五戒は人の引業・三歸・十善は六欲天の引業なり、有漏の坐禅は色界・無色界の引業・五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒・五百戒の上に苦空・無常・無我の觀は聲聞・緣覺の引業・五戒・八戒乃至三聚淨戒の上に六度四弘の菩提心を發すは菩薩なり仏界の引業なり、藏通二教には仏性の沙汰なし但菩薩の發心を仏性と云う、別円二教には衆生に仏性を論ず但し別教の意は二乗に仏性を論ぜず、爾前の円教は別教に附して二乗の仏性の沙汰無し此等は皆 法なり、今の妙法とは此等の十界を互に具すと説く時・妙法と申す、十界互具と申す事は十界の内に一界に余の九界を具し十界互に具すれば百法界なり、玄の二に云く「又一法界に九法界を具すれば即ち

百法界有り文、法華經とは別の事無し十界の因果は爾前の經に明す今は十界の因果互具をおきてたる計りなり、爾前の經意は菩薩をば仏に成るべし声聞は仏に成るまじなど説けば菩薩は悦び声聞はなげき人天等はおもひもかけずなるとある經もあり、或は一乗は見思を断じて六道を出でんと念い菩薩はわざと煩惱を断ぜず六道に生れて衆生を利益せんと念ふ、或は菩薩の頓悟成仏を見・或は菩薩の多俱低劫の修行を見、或は凡夫往生の旨を説けば菩薩・声聞の爲には有らずと見て人の不成仏は我が不成仏、人の成仏は我が成仏、凡夫の往生は我が往生・聖人の見思断は我等凡夫の見思断とも知らず四十二年をば過ぎしなり。

然るに今經にして十界互具を談ずる時、声聞の自調自度の身に菩薩界を具すれば六度万行も修せず多俱低劫も経ぬ声聞が諸の菩薩のからくして修したりし無量無辺の難行道が声聞に具する間をもはざる外に声聞が菩薩と云われ人をせむる獄卒・慳貪なる凡夫も亦菩薩と云はる、仏も又因位に居して菩薩界に損せられ妙覺ながら等覺なり、藥草喻品に声聞を説いて云く「汝等が行は是れ菩薩の道なり」と、又我等六度をも行ぜざるが六度満足の菩薩なる文經に云く「未だ六波羅蜜を修行することを得ずと雖も六波羅蜜自然に在前しな」と、我等一戒をも受けざるが持戒の者と云わるる文經に云く「是則ち勇猛なり是則ち精進なり是を戒を持ち頭陀を行ずる者と名く」文。

問うて云く諸經にも悪人が仏に成る華嚴經の調達の授記・普超經の闍王の授記・大集經の婆藪天子の授記・又女人が仏に成る胎經の釈女の成仏・畜生が仏に成る阿含經の鵠雀の授記・二乗が仏に成る方等だらに經・首楞嚴經等なり、菩薩の成仏は華嚴經等・具縛の凡夫の往生は觀經の下品下生等・女人の女身を転ずるは雙觀經の四十八願の中の三十五の願此等は法華經の二乗・竜女・提婆菩薩の授記に何なるかわりめがある、又設いかわりめはありとも諸經にても成仏はうたがひなし如何、答つ予の習い伝つる處の法門、此の答に顯るべし此の答に法華經の諸經

に超過し又諸経の成仏を許し許さぬは聞うべし秘蔵の故に顕露に書さず。

問うて曰く妙法を一念三千と言ふ事如何、答う天台大師此の法門を賞り給うて後玄義十卷文句十卷覺意三昧・小止観・浄名疏・四念処・次第禅門等の多くの法門を説き給いしかども此の一念三千をば談義し給はず、但十界・百界千如の法門ばかりにておはしませしなり、御年五十七の夏四月の比荊州の玉泉寺と申す処にて御弟子章安大師と申す人に説ききかせ給いし止観十卷あり、上の四帖に猶をしみ給いて但六即四種三昧等計の法門にてありしに五の巻より十境十乗を立てて一念三千の法門を書き給へり、此れを妙樂大師末代の人に勧進して言く「並に三千を以て指南と為す。請うらくは尋ね読まん者心に異縁無かれ」文、六十卷三千丁の多くの法門も由無し但

此の初の三行を意得可きなり、止観の五に云く「夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の世間を具すれば百法界には即ち三千種の世間を具す此の三千一念の心に在り」文、妙樂承け釈して云く「当に知るべし身土一念の三千なり故に成道の時此の本理に称て一身一念法界に」ねし文、日本の伝教

大師比叡山建立の時根本中堂の地を引き給いし時地中より舌八つある鑰を引き出したり、此の鑰を以て入唐の時に天台大師より第七代妙樂大師の御弟子道邃和尚に値い奉りて天台の法門を伝給いし時、天機秀発の人たりし間道邃和尚悦んで天台の造り給へる十五の経蔵を開き見せしめ給いしに十四を開いて一の蔵を開かず、其時伝教大師云く師此の一蔵を開き給えと請い給いしに邃和尚云く「此の一蔵は開く可き鑰無し天台大師自ら出世

して開き給う可し」と云云其の時伝教大師日本より隨身の鑰を以て開き給いしに此の経蔵開けたりしかば経蔵の内より光室に満ちたりき、其の光の本を尋ねれば此の一念三千の文より光を放ちたりしなりありがたき事なり、其の時邃和尚は返つて伝教大師を礼拝し給いき、天台大師の後身と云云、依つて天台の経蔵の所釈は遺り無く日本に亘りしなり、天台大師の御自筆の観音経章安大師の自筆の止観今比叡山の根本中堂に収めたり。

四性計 一 自性 自力 迦毘羅外道
二 他性 他力 樓僧伽外道
三 共性 共力 勒娑婆外道

四 無因性 無因力 自然外道

外道に三人あり、一には仏法外の外道九十五種の外道二に附仏法成の外道小乘三には學仏法の外道大乘の外道なり。今の法華經は自力も定めて自力にあらず十界の一切衆生を具する自なる故に我が身に本より自の仏界・一切衆生の他の仏界我が身に具せり、されば今、仏に成るに新仏にあらず又他力も定めて他力に非ず他仏も我等凡夫の自具なるが故に又他仏が我等が如く自に現同するなり、共と無因は略す。

法華經已前の諸經は十界互具を明さざれば仏に成らんと願うには必ず九界を厭う九界を仏界に具せざるが故なり、されば必ず惡を滅し煩惱を断じて仏には成ると談ず凡夫の身を仏に具すと云わざるが故に、されば人天惡人の身を失いて仏に成ると申す、此れをば妙樂大師は厭離断九の仏と名くされば爾前の經の人人は仏の九界の形を

現ずるをば但仏の不思議の神變と思ひ仏の身に九界が本よりありて現ずるとは言わず、されば實を以てさぐり給うに法華經已前には但權者の仏のみ有つて實の凡夫が仏に成りたりける事は無きなり、煩惱を断じ九界を厭うて仏に成らんと願うは實には九界を離れたる仏無き故に往生したる實の凡夫も無し、人界を離れたる菩薩界も無き

故に但法華經の仏の爾前にして十界の形を現して所化とも惡人とも善人とも外道とも言われしなり、實の惡人・善人外道・凡夫は方便の權を行じて真實の教とうち思ひなしてすぎし程に法華經に來つて方便にてありけり、實には見思無明も断ぜざりけり往生もせざりけりなんと覺知するなり、一念三千は別に委く書す可し。

此の經には一妙あり釈に云く「此の經は唯二妙を論ず」と一には相待妙二には絶待妙なり、相待妙の意は前の

四時の一代聖教に法華經を對して爾前と之を嫌ひ、爾前をば當分と言ひ法華を跨節と申す、絶待妙の意は一代聖教は即ち法華經なりと開會す、又法華經に二事あり一には所開二には能開なり開示悟入の文、或は皆已成仏道等の文、一部・八卷二十八品・六万九千三百八十四字・一の字の下に皆妙の文字あるべしこれ能開の妙なり、此の法華經は知らずして習ひ談ずる者は但爾前の經の利益なり、阿含經開會の文は經に云く「我が此の九部の法は衆生に隨順して説く大乘に入るに為本なり」と云云、華嚴經開會の文は一切世間・天人及び阿修羅は皆謂えり今の釈迦牟尼仏等の文、般若經開會の文は安樂行品の十八空の文、觀經等の往生安樂開會の文は此に於て命終して即ち安樂世界に往く等の文、散善開會の文は「たゞ南無仏と稱せし皆已に仏道を成じき」の文、一切衆生開會の文は「今此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ我が子なり」、外典開會の文は「若し俗間經書治世語言資生の業等を説かんと皆正法に順ぜん」文、兜率開會の文・人天所開會の文しげきゆへにいたさず。

此の經を意得ざる人は經の文に此の經を読んで人天に生ずと説く文を見、或は兜率・利などにいたる文を見、或は安養に生ずる文を見て穢土に於て法華經を行ぜば經はいみじけれども行者不退の地に至らざれば穢土にして流轉し久しく五十六億七千万歳の晨を期し、或は人畜等に生れて隔生する間・自の苦しみ限り無しなると云云、或は自力の修行なり難行道なり等云云、此れは恐らくは爾前法華の二途を知らずして自ら癡闇に迷うのみに非ず一切衆生の仏眼を閉ずる人なり、兜率を勧めたる事は小乗經に多し少しは大乗經にも勧めたり西方を勧めたる事は大乘經に多し此等は皆所開の文なり、法華經の意は兜率に即して十方仏土中・西方に即して十方仏土中・人天に即して十方仏土中と云云、法華經は惡人に対しては十界の惡を説くは惡人・五眼を具しなるとすれば惡人のきわまりを救ひ、女人に即して十界を談ずれば十界皆女人なる事を談ず、何にも法華円実の菩提心を發さん人は

迷まよの九界くかい金力きんりきに引ひかるる事こと無なきなり。

此この意いを存ぞんじ給たまいけるやらん法ほう然ねん上じやう人にんも一向いっしやう念ねん仏ぶつの行ぎやう者じやながら選せん択たくと申もうす文ぶんには雜ぞう行ぎやう難なん行ぎやう道どうには法ほ華け經きやう・大だい日にち經きやう等らうをば除ぞかれたる処ところもあり委くわく見みよ又また慧え心しんの往おう生じやう要よう集じふにも法ほ華け經きやうを除ぞくきたり、たとい法ほう然ねん上じやう人にん慧え心しん法ほ華け經きやうを雜ぞう行ぎやう・難なん行ぎやう道どうとして末まつ代だいの機きに叶かなわずと書たまき給たまつとも日にち蓮れんは全ぜんくもちゆべからず、一いち代だい聖せい教きやうのおきてに違たがい三さん世ぜ十じゅう方ぽうの仏ぶつ陀だの誠せい言げんに違いする故ゆゑにいわうやそのぎなし、而しかるに後のちの人ひとの消しょう息しつに法ほ華け經きやうを難なん行ぎやう道どう經きやうはいみじけれども末まつ代だいの機きに叶かなわず謗そしらばこそ罪つみにてもあらめ、淨じやう土どに至いたつて法ほ華け經きやうをば覺さつと云いふ、日にち蓮れんが心こころは何いかにも此この事ことはひが事ことと覺おぼゆるなりかう申もうすもひが事ことにや有あらん、能よく能よく智ち人じんに習ならふ可べし。

正嘉二年二月十四日 日蓮撰

十二因縁圖、問う流転の十二因縁とは何等ぞや答う「一には無明・俱舍に云く、宿惑の位は無明なり」文、無明とは昔愛欲の煩惱起りしを云うなり、男は父に瞋を成して母に愛を起す、女は母に瞋を成して父に愛を起すなり俱舍の第九に見えたり、「二には行・俱舍に云く、宿の諸業を行と名く」と文、昔の造業を行とは云うなり業に「二有り」一には牽引の業なり我等が正く生を受く可き業を云うなり、「二には円満の業なり余の一切の造業なり所謂足を折り

手を切る先業を云うなり是は円満の業なり、三には識・俱舍に云く、識とは正く生を結する蘊なり」文、正く母の腹の中に入る時の五蘊なり、五蘊とは色・受・想・行・識なり亦五陰とも云うなり、四には名色・俱舍に云く、六処の前は名色なり」文、五には六処・俱舍に云く、眼等の根を生ずるより三和の前は六処なり」文、六処とは眼・耳・

鼻・舌・身・意の六根出来するを云うなり、六には触・俱舍に云く「三受の因の異なるに於て未だ了知せざるを触と名く」文、火は熱しとも知らず水は寒しとも知らず刀は人を切る物とも知らざる時なり、七には受・俱舍に云く「婬愛の前に在るは受なり」文、寒熱を知つて未だ婬欲を發さざる時なり、八には愛・俱舍に云く「資具と婬とを貪るは愛なり」文、女人を愛して婬欲等を發すを云うなり、九には取・俱舍に云く「諸の境界を得んが為に」

馳求するを取と名く」文、今世に有る時世間を営みて他人の物を貪り取る時を云うなり、十には有・俱舍に云く「有は謂く正しく能く当有の果を牽く業を造る」文、未来又此くの如く生を受く可き業を造るを有とは云うなり、十一には生・俱舍に云く「当の有を結するを生と名く」文、未来に正く生を受けて母の腹に入る時を云うなり、十二には老死・俱舍に云く「当の受に至るまでは老死なり」文、生老死を受くるを老死憂悲苦惱とは云うなり。

問う十二因縁を三世兩重に分別する方如何、答う無明と行とは過去の二因なり識と名色と六入と触と受とは現在の五果なり愛と取と有とは現在の二因なり生と老死とは未来の兩果なり、私の略頌に云く過去の二因無明行現在の五果識名色六入触受現在の二因愛取有未来の兩果生老死と、問う十二因縁流轉の次第如何、答う無明は行に縁たり行は識に縁たり識は名色に縁たり名色は六入に縁たり六入は触に縁たり触は受に縁たり受は愛に縁たり愛は取に縁たり

取は有に縁たり有は生に縁たり生は老死憂悲苦惱に縁たり是れ其の生死海に流轉する方なり此くの如くして凡夫とは成るなり、問う還滅の十二因縁の様如何答う無明滅すれば則ち行滅す行滅すれば則ち識滅す識滅すれば則ち名色滅す名色滅すれば則ち六入滅す六入滅すれば則ち觸滅す觸滅すれば則ち受滅す受滅すれば則ち愛滅す愛滅すれば則ち取滅す取滅すれば則ち有滅す有滅すれば則ち生滅す生滅すれば則ち老死憂悲苦惱滅す、是れ其の還滅の様なり仏は還つて煩惱を失つて行く方なり私に云く中有の人には十二因縁具に之無し又天上にも具には之無く又無色界にも具には之無し。

一念三千理事 十如是とは如是相は身なり玄二に云く相以て外に據る實を別つ、如是性は心なり玄二に云く性以て内に據る自分、如是体は身と心となり玄二に云く主質を名けて体となす、如是力は身と心となり止に云く力に據る忍を用となす、如是作は身と心となり止に云く建立を作と名く、如是因は心なり止に云く因と爲す亦名けて業となす、如是縁止に云く縁は縁業を助くるに由る、如是果止に云く果は剋獲を果となす、如是報止に云く報は酬因と爲す、如是本末究竟等玄二に云く初めの相を本と爲し後ちの報を末と爲す、三種世間とは五陰世間に五陰世間と名くるなり文、衆生世間衆生世間と名くるなり、国土世間国土世間と稱す、五陰とは新訳には五蘊と云うなり陰とは聚集の義なり一に色陰・五色是なり二に受陰・領納是なり三に相陰・俱舍に云く想は像を取るを体と爲すと文、四に行陰・造作是行なり五に識陰・了別是れ識なり止の五に婆沙を引いて云く識先ず了別し次に受は領納し相は相貌を取り行は違從を起し色は行に由つて感ずと。

百界千如三千世間の事、十界互具即百界と成るなり、地獄十如是五陰世間は国土世間下赤鉄、餓鬼十如是五陰世間十如是
 国土世間地下畜生十如是五陰世間十如是国土世間水陸空修羅十如是五陰世間十如是国土世間海畔底、人間十如是、五陰世間十如是国土
 世間弥四州、天十如是五陰世間十如是国土世間十如是宮殿、声聞十如是五陰世間十如是国土世間同居土、縁覚十如是五陰世間十如是国土
 世間同居士、菩薩十如是五陰世間十如是国土世間方便、実報、仏十如是五陰世間十如是国土世間寂光土。
 止観の五に云く「心縁と合すれば則ち三種世間三千の性相皆心より起る文、弘の五に云く故に止観に正しく観法
 を明すに至つて並びに三千を以て指南と為す、乃ち是れ終窮究竟の極説なり故に序の中に説己心中所行の法門と云う
 良に以有るなり、請う尋ねて読まん者心に異縁無かれ文、又云く「妙境の一念三千を明さずんば如何ぞ一切を撰る
 ことを識る可けん、三千は一念の無明を出でず是の故に唯苦因苦果のみ有り文、又云く「一切の諸業十界百界千如、
 三千世間を出でざるなり文、籤の二に云く「仮は即ち衆生、実は即ち五陰及び国土、即ち三世間
 なり千の法は皆三なり故に三千有り文、弘の五に云く「一念の心に於て十界に約せざれば事を収むること、からず三諦
 に約せざれば理を撰ること周からず十如を語らざれば因果備わらず三世間無んば依正尽きず文、記の一に云く「若三千
 に非ざれば撰ること、からず若し円心に非ざれば三千を撰せず文、玄の二に云く「但衆生法
 は太だ広く仏法は太だ高し初学に於て難と為し心は則ち易しと為す文、弘の五に云く「初に華嚴を引くことは心の工な
 る画師の如く種種の五陰を造る一切世界の中に法として造らざること無し、心の如く仏も亦爾なり仏の如く衆生も然な
 り心仏及び衆生是の三差別無し若し人三世一切の仏を求め知らんと欲せば当に是くの如く観ずべし心は諸の如来を造
 ると、金論に云く「実相は必ず諸法、諸法は必ず十如、十如は必ず十界、十界は必ず身土
 なり」

三身釈の事、先ず法身とは大師大經を引いて「一切の世諦は若し如来に於ては即ち是第一義諦なり衆生顛倒して仏法に非ずと謂えり」と釈せり、然れば則ち自他・依正・魔界・仏界・染淨・因果は異なれども悉く皆諸仏の法身に背く事に非ざれば善星比丘が不信なりしも楞伽王の信心に同じく般若蜜外道が意の邪見なりしも須達長者が正見に異らず、即ち知んぬ此の法身の本は衆生の当体なり、十方諸仏の行願は實に法身を証するなり、次に報身とは大師の云く「法如如の智如如真実の道に乘じ来つて妙覺を成ず智如の理に称う理に従つて如と名け智に従つて来と名く即ち報身如来なり盧舎那と名け此には淨滿と翻ず」と釈せり、此れは如如法性の智・如如真実の道に乘じて妙覺究竟の理智・法界と冥合したる時・理を如と名く智は来なり。

我が身が三身即一の本覺の如來にてありける事を今經に説いて云く如是相 如是性 如是体 如是力 如是作 如是因 如是縁 如是果 如是報 如是本末究竟等文、初めに如是相とは我が身の色彩に顯れたる相を云うなり是を応身如來とも又は解脱とも又は仮諦とも云うなり、次に如是性とは我が心性を云うなり是を報身如來とも又は般若とも又は空諦とも云うなり、三に如是体とは我が此の身体なり是を法身如來とも又は中道とも法性とも寂滅とも云うなり、されば此の三如是を三身如來とは云うなり此の三如是が三身如來にておはしましけるをよそに思ひ
企てつるがはや我が身の上にてありけるなり、かく知りぬるを法華經をさとれる人とは申すなり此の三如是を本としてはよりのこりの七つの如はいでて十如是とは成りたるなり、此の十如是が百界にも千如にも三千世間にも成りたるなり、かくの如く多くの法門と成りて八万法蔵と云はるれどもすべて只一つの三諦の法にて三諦より外には法門なき事なり、其の故は百界と云うは仮諦なり千如と云うは空諦なり三千と云うは中諦なり空と仮と中とを三諦と云う事なれば百界千如三千世間まで多くの法門と成りたりと云へとも唯一つの三諦にてある事なり、されば始の三如是の三諦と終の七如是の三諦とは唯一つの三諦にて始と終と我が一身の中の理にて唯一物にて不可思議なりければ本と末とは究竟して等しとは説き給へるなり、是を如是本末究竟等とは申したるなり、始の三如是を本とし終の七如是を末として十の如是にてあるは我が身の中の三諦にてあるなり、此の三諦を三身如來とも云は我が心身より外には善惡に付けてかみすぢ計りの法もなき物をされば我が身が頼て三身即一の本覺の如來にてはありける事なり、是をよそに思つを衆生とも迷いとも凡夫とも云うなり、是を我が身の上と知りぬ

るを如来とも覺とも聖人とも智者とも云うなり、かう解り明かに觀ずれば此の身頓て今生の中に本覺の如来を顯はして即身成仏とはいはるるなり、譬えば春夏・田を作りうづれば秋冬は蔵に収めて心のままに用うるが如し春より秋をまつ程は久しき様なれども一年の内に待ち得るが如く此の覺に入つて仏を顯はす程は久しき様なれども一生の内に顯はして我が身が三身即一の仏となりぬるなり。

此の道に入ぬる人にも上中下の三根はあれども同じく一生の内に顯はすなり、上根の人は聞く所にて覺を極めて顯はす、中根の人は若は一日若は一月若は一年に顯はすなり、下根の人はのびゆく所なくてつまりぬれば一生の内に限られたる事なれば臨終の時に至りて諸のみえつる夢も覺てうつたになりぬるが如く只今までみつる所の生死妄想の邪思ひがめの理はあと形もなくなりて本覺のつつの覺にかゝりて法界をみれば皆寂光の極樂にて

ひらきぬるなり、
日来賤と思ひし我が此の身が三身即一の本覺の如来にてあるべきなり、秋のいねには早と中と晩との三のいね有れども一年が内に収むるが如く、此れも上中下の差別ある人なれども同じく一生の内に諸仏如来と一体不二に思い合せてあるべき事なり。

妙法蓮華經の体のいみじくおはしますは何様なる体にておはしますぞと尋ね出してみれば我が心性の八葉の白蓮華にてありける事なり、されば我が身の体性を妙法蓮華經とは申しける事なれば經の名にてはあらずしてはや我が身の体にてありけると知りぬれば我が身頓て法華經にて法華經は我が身の体をよび顯し給いける仏の御言にてこそありければやがて我が身三身即一の本覺の如来にてあるものなり、かく覺ぬれば無始より已来今まで思い

ならわしし・ひが思ひの妄想は昨日の夢を思ひやるが如く・あとかたもなく成りぬる事なり、是を信じて一遍も南無妙法蓮華經と申せば法華經を覺て如法に一部をよみ奉るにてあるなり、十遍は十部・百遍は百部・千遍は千部を如法によみ奉るにてあるべきなり、かく信ずるを如説修行の人とは申すなり、南無妙法蓮華經。

法華經の余經に勝れたる事何事ぞ此の經に一心三觀・一念三千と云う事あり、藥王菩薩漢土に出世して天台大師と云われ此の法門を覺り給いしかども先ず玄義十卷・文句十卷・覺意三昧・小止觀・淨名疏・四念處・次第禪門等の多くの法門を説きしかども此の一念三千の法門をば談じ給はず百界・千如の法門計りなり、御年五十七の夏四月の比・荊州玉泉寺と申す処にて御弟子章安大師に教え給ふ止觀と申す文十卷あり、上四帖に猶秘し給いて但六即・四種三昧等計りなり、五の卷に至つて十境・十乘・一念三千の法門を立て夫れ一心に具す等と云云是より二百年後に妙樂大師釈して云く「當に知るべし身土一念の三千なり故に成道の時此の本理に称て一身一念法界に遍し」と云云、此の一念三千・一心三觀の法門は法華經の一の卷の十如是より起れり、文の心は百界・千如・三千世間云云、さて一心三觀と申すは余宗は如是とあそばす是れ僻事にて二義かけたり天台・南岳の御義を知らざる故なり、されば当宗には天台の所釈の如く三遍読に功德まさる、第一に是相如と相性体力以下の十を如と云ふ如と云うは空の義なるが故に十法界皆空諦なり是を読み觀ずる時は我が身即報身如来なり八万四千又は般若とも申す、第二に如是相是れ我が身の色形顯れたる相なり是れ皆仮なり相性体力以下の十なれば十法界皆仮諦と申して仮の義なり是を読み觀ずる時は我が身即心身如来なり又は解脱とも申す、第三に相如是と云うは中道と申して仏の法身の形なり是を読み觀ずる時は我が身即法身如来なり又は中道とも法性とも涅槃とも寂滅とも申す、此の三を法報心の三身とも空仮中の三諦とも法身・般若・解脱の三徳とも申す此の三身如来全く外になし我が身即三徳究竟の体にて三身即一身の本覺の仏なり、是をしるを如来とも聖人とも悟とも云う知らざるを凡夫とも衆生とも迷とも申す。

十界の衆生、各互に十界を具足す合すれば百界なり、百界に各各十如を具すれば千如なり、此の千如是に衆生世間・国土世間・五陰世間を具すれば三千なり、百界と顯れたる色相は皆総て仮の義なれば、千如は總て空の義なれば、空諦の一なり、三千世間は總て法身の義なれば、中道の一なり、法門多しと雖も、但三諦なり、此の三諦を三身如來とも三德究竟とも申すなり、始の三如是は本覺の如來なり、終の七如是と一體にして無二無別なれば、本末究竟等とは申すなり、本と申すは仏性、末と申すは末顯の仏、九界の名なり、究竟等と申すは妙覺究竟の如來と理即の凡夫なる我等と差別無きを究竟等とも平等大慧の法華經とも申すなり、始の三如是は本覺の如來なり、本覺の如來を悟り出し給へる妙覺の仏なれば、我等は妙覺の父母なり、仏は我等が所生の子なり、止の一に云く、「止は則、仏の母・觀は即、仏の父なり」と云云、譬えば人十人あらんずるが、面に蔵に寶をつみ、我が蔵に寶のある事を知らずかつ死して讞す、或は一人、此の中にかしこき人ありて、悟り出すが如し、九人は終に知らず、然るに或は教えられて食し、或はくめられて食するが如し、弘の一の止觀の二字は正しく、聞體を示す聞かざる者は本末究竟等も徒らか、子なれども親にまさる事多し、重華はかたくなはしき父を敬いて、賢人の名を得たり、沛公は帝王と成つて後、も其の父を拝す、其の敬われし父をば全く王といはず、敬いし子をば王と仰ぐが如し、其れ仏は子なれども賢くましまして、悟り出し給へ、凡夫は親なれども愚癡にして、未だ悟らず、委しき義を知らざる人、毘盧の頂上をふむなど、惡口す大なる僻事なり。

一心三觀に付いて、次第の三觀、不次第の三觀と云う事あり、委く申すに及ばず候、此の三觀を心得すまし成就したる處を華嚴經に三昧唯一心と云云、天台は諸水入海とのぶ、仏と我等と總て一切衆生、理性一にて、へたてなきを平等大慧と云うなり、平等と書いてはおしなべてと読む、此の一心三觀・一念三千の法門、諸經にたえて之無し、法華經に遇わざれば、争か成仏す可きや、余經には六界八界より十界を明せども、さらに具を明かさず、法華經は

念念に一心三觀・一念三千の謂を觀ずれば我が身本覺の如來なること悟り出され無明の雲晴れて法性の月明かに妄想の夢醒て本覺の月輪いさぎよく父母所生の肉身煩惱具縛の身即本有常住の如來となるべし、此を即身成仏とも煩惱即菩提とも生死即涅槃とも申す、此の時法界を照し見れば悉く中道の一理にて仏も衆生も一なり、され

ば天台の所釈に「色一香中道に非ざる」と無しと釈し給へ、此の時は十方世界皆寂光淨土にて何れの処をか弥陀薬師等の淨土とは云わん、是を以て法華經に「是の法は法位に住して世間の相常住なり」と説き給ふさては經をよまずとも心地の觀念計りにて成仏す可きかと思いたれば一念三千の觀念も一心三觀の觀法も妙法蓮華經の五字に納れり、妙法蓮華經の五字は又我等が一心に納りて候けり、天台の所釈に「此の妙法蓮華經は本地甚深の奧藏

三世の如來の証得したもう所なり」と釈したり、さて此の妙法蓮華經を唱うる時心中の本覺の仏顯る我等が身と心をば蔵に譬妙の一字を印に譬へたり、天台の御釈に「秘密の奧藏を発く之を稱して妙と為す、權實の正軌を示す故に号して法と為す、久遠の本果を指す之を喻うるに蓮を以てす、不二の円道に会す之を譬うるに華を以てす、声仏事を為す之を稱して經と為す」と釈し給へ、又妙とは不可思議の法を褒美するなり又妙とは十界・十如

權實の法なり」と云云、經の題目を唱うると觀念と一なる事心得がたしと愚癡の人は思い給ふべし、されども天台止の二に而於説默と云へ、説とは經・默とは觀念なり、又四教義の一に云く「但功の唐捐ならざるのみに非ず亦能く理に契つる要なるをや」と云云、天台大師と申すは薬王菩薩なり此の大師の説而觀而と釈し給ふ元より天台の所釈に因縁・約教・本迹・觀心の四種の御釈あり四種の重を知らずして一しなを見たる人・一向本・迹をむね

とし一向觀心を面とす、法華經に法譬因縁と云う事あり法説の段に至つて諸仏出世の本懷・一切衆生・成仏の直道と定む、我のみならず一切衆生・直至道場の因縁なりと定め給ひしは題目なり、されば天台玄の一に「衆善の小行を会して大の一乘に歸す」と廣大と申すは残らず引導し給へを申すなり、仮使釈尊一人本懷と宣へ給う

とも等覺以下は仰いで此の経を信ず可し況や諸仏出世の本懷なり、禪宗は觀心を本懷と仰ぐとあれども其は四種の一面なり、一念三千・一心三觀等の觀心計りが法華經の肝心なるべくば題目に十如是を置くべき處に題目に妙法蓮華經と置かれたる上は子細に及ばず、又当世の禪宗は教外別伝と云い給うかと思ひ又捨られたる円覺經等の文を引かるる上は實經の文に於て御綺に及ぶべからず候、智者は読誦に觀念をも並ぶべし愚者は題目計りを唱ふとも此の理に會う可し、此の妙法蓮華經とは我等が心性・總じては一切衆生の心性八葉の白蓮華の名なり是を教え給ふ仏の御詞なり、無始より以来、我が身中の心性に迷て生死を流轉せし身今此の經に値ひ奉つて三身即一の本覺の如來を唱うるに顯れて現世に其内証成仏するを即身成仏と申す、死すれば光を放つ是れ外用の成仏と申す
 來世得作仏とは是なり、略拳經題・玄収一部とて一遍は一部云云、妙法蓮華經と唱うる時心性の如來顯る耳にふれし類は無量阿僧祇劫の罪を滅す一念も隨喜する時即身成仏す縱ひ信ぜざれども種と成り熟と成り必ず之に依て成仏す、妙樂大師の云く「若は取若は捨耳に經て縁と成る、或いは順或いは違終いに斯れに因つて脱す」と云云、日蓮云く若取若捨・或順・或違の文肝に銘ずる詞なり法華經に若有聞法者等と説れたるは是か、既に聞く者と説れたり觀念計りにて成仏すべくば若有觀法者と説かるべし、只天台の御料簡に十如是と云うは十界なり此の十界は一念より事起り十界の衆生は出來たりけり、此の十如是と云は妙法蓮華經にて有けり此の娑婆世界は耳根得道の國なり以前に申す如く当知身土と云云、一切衆生の身に百界千如三千世間を納むる謂を明が故に是を耳に觸るる一切衆生は功德を得る衆生なり、一切衆生と申すは草木瓦礫も一切衆生の内なるが、有情、抑草木は何ぞ金論に云く「一草木・一礫一塵各一仏性各一因果具足緣了」と等と云云、法師品の始に云く「無量の諸天・竜王・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩羅伽・人と非人と及び比丘比丘尼、妙法蓮華經の一偈一句を聞いて乃至一念も隨喜せん者は我皆あのかたらさんみやくさんぼだい
 阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授く」と云云、非人とは總じて人界の外一切有情界とて心

あるものなり況や人界をや、法華經の行者は如説修行せば必ず一生の中に一人も残らず成仏す可し、譬えば春夏田を作るに早晚あれども一年の中には必ず之を納む、法華の行者も上中下根あれども必ず一生の中に証得す、玄の二に云く「上中下根皆記を与つと云云、觀心計りにて成仏せんと思ふ人は一方かけたる人なり、況や教外別伝の坐禅をや、法師品に云く、藥王多く人有て在家出家の菩薩の道を行ぜんに若し是の法華經を見聞し誦誦し

書持し供養すること得ること能わすんば當に知るべし是の人は未だ善く菩薩の道を行ぜず、若し是の經典を聞くこと得ること有らば乃ち能善菩薩の道を行ずるなり」と云云、觀心計りにて成仏すべんば争か見聞誦誦と云わんや、此の經は専ら聞を以て本と為す凡此の經は惡人・女人・二乘・闡提を簡はず故に皆成仏道とも云ひ又平等大慧とも云う、善惡不二邪正一如と聞く処にやがて内証成仏す故に即身成仏と申し一生に証得するが故に一生妙覺と

云ふ、義を知らざる人なれども唱ふれば唯仏と仏と悦び給ふ我即歡喜、諸仏亦然云云、百千合せたる藥も口にのみざれば病愈えず蔵に宝を持ども開く事をしらずしかつ懷に藥を持ども飲まん事をしらずして死するが如し、如意宝珠と云う玉は五百弟子品の此の經の徳も又此くの如し、觀心を並べて読めば申すに及ばず觀念せずと雖も始に申しつることく所謂諸法如是相如云云と読む時は如は空の義なれば我が身の先業につくる所の相性体力其の

具する所の八十八使の見惑・八十一品の思惑・其の空は報身如来なり、所謂諸法如是相云云とよめば是れ仮の義なれば我が此の身先業に依つて受けたる相性体力云云其の具したる塵沙の惑悉く即身応身如来なり、所謂諸法如是と読む時は是れ中道の義に順じて業に依つて受くる所の相性等云云、其に隨いたる無明皆退いて即身法身の如来と心を開く、此の十如是・三転によまる事・三身即一身・一身即三身の義なり三に分るれども一なり一に定まれども三なり。

二乗三界を出でざれば即ち十法界の數量を失う云云、問う十界互具を知らざらん者六道流轉の分段の生死を出離して變易の土に生ず可きや、答う二乗は既に見思を断じ三界の生因無し底に由つてか界内の土に生る事を得ん是の故に二乗永く六道に生ぜず、故に玄の第二に云く「夫れ變易に生るに則ち三種有り三藏の二乗・通教の三乗・別教の三十心」已上此の如き等の人は皆通惑を断じ變易の土に生ずることを得て界内分段の不淨の国土に生ぜず。

難じて云く小乗の教は但是れ心生の六道を談じて是れ心具の六界を談ずるに非ず、是の故に二乗は六界を顯さず心具を談ぜず云何ぞ但六界の見思を断じて六道を出ず可きや、故に壽量品に云える一切世間天人阿修羅と

は爾前・迹門・兩教の二乗・三教の菩薩並に五時の円人を皆天人・修羅と云う豈に未断見思の人と云うに非ずや、答う十界互具とは法華の淵底此の宗の冲微なり四十余年の諸經の中には之を秘して伝えず、但し四十余年の諸の經教の中に無數の凡夫見思を断じて無漏の果を得能く二種の涅槃の無為を証し塵数の菩薩・通別の惑を断じ頓に二種の生死の縛を超ゆ、無量義經の中に四十余年の諸經を挙げて未顕眞実と説くと雖も而も猶爾前・三乗の益を許す、法華の中に於て正直捨方便と説くと雖も尚見諸菩薩授記作仏と説く此くの如き等の文爾前の説に於て当分の益を

許すに非ずや、但し爾前の諸經に二事を説かず謂く実の円仏無く又久遠実成を説かず故に等覺の菩薩に至るまで近成を執する思い有り此の一边に於て天人と同じく能迷の門を挙げ生死煩惱・一時に断壊することを証せず故に唯未顕眞実と説けり、六界の互具を明さざるが故に出ず可からずとは此の難甚だ不可なり、六界互具せば即ち十界互具す可し何となれば權果の心生とは六凡の差別なり心生を觀するに何ぞ四聖の高下無からんや。

第三重の難に云く所立の義誠に道理有るに似たり委く一代聖教の前後をうるに法華本門並に觀心の智慧を起さざれば円仏と成らず、故に実の凡夫にして權果だも得ず所以に彼の外道五天竺に出でて四顛倒を立つ、如来出世して四顛倒を破せんが為に苦・空等を説く此れ則ち外道の迷情を破せんが為なり、是の故に外道の我見を破して無我に住するは火を捨てて以て水に随うが如し堅く無我を執して見思を断じ六道を出ずると謂えり、此れ迷の根本なり故に色心俱滅の見に住す大集等の経に断常の二見と説くは是れなり、例せば有漏外道の自らは得道すと念えども無漏智に望むれば未だ三界を出でざるが如し、仏教に値わずして三界を出ずるといわば是の処有ること無し小乗の二乗も亦復是くの如し、鹿苑施小の時外道の我を離れて無我の見に住す此の情を改めずして四十余年草庵に止宿するの思ひ暫くも離るる時無し、又大乗の菩薩に於て心生の十界を談ずと雖も而も心具の十界を論ぜず、又或る時は九界の色心を断尽して仏界の一理に進む是の故に自ら念わく三惑を断尽して变易の生を離れ寂光に生るべしと、然るに九界を滅すれば是れ則ち断見なり進んで仏界に昇れば即ち常見と為す九界の色心の常住を滅すと欲うは豈に九法界に迷惑するに非ずや、又妙樂大師の云く「但し心を觀ずと言わば則ち理に称わす文、此の釈の意は小乗の觀心は小乗の理に称わざるのみ、又天台の文句第九に云く「七方便並に究竟の滅に非ず已上、此の釈は是れ爾前の前三教の菩薩も実には不成仏と云えるなり、但し未顕真実と説くと雖も三乗の得道を許し正直捨方便と説くと雖も而も見諸菩薩授記作仏と云うは、天台宗に於て三種の教相有り第二の化導の始終の時過去に於て法華結縁の輩有り爾前の中に於て且らく法華の為に三乗当分の得道を許す所謂種熟脱の中の熟益の位なり是は尚迹門の説なり、本門觀心の時は是れ実義に非ず一往許すのみ、其の実義を論ずれば如来久遠の本に迷い一念三千を知らざれば永く六道の流転を出ず可からず、故に釈に云く「円乗の外を名けて外道と為す文、又諸善男子・樂於小法・德薄垢重者」と説く若し爾れば經釈共に道理必然なり、答う執難有りと雖も其の義

不可なり、所以は如来の説教は機に備りて虚からず是を以て頓等の四教蔵等の四教八機の為に設くる所にして得益無きに非ず、故に無量義經には「是の故に衆生の得道差別あり」と説く、誠に知んぬ終に無上菩提を成ずる

ことを得ず」と説くと雖も而も三法四果の益無きに非ず、但是れ速疾頓成と歷劫迂回との異なるのみ、是れ一向に得道無きに非ざるなり、是の故に或は三明六通も有り或は普現色身の菩薩も有り縦い一心三觀を修して以て同体の三惑を断ぜずとも既に析智を以て見思を断ず何ぞ二十五有を出でざらん、是の故に解釈に云く「若し

衆生に遇うて小乗を修せしめば我則ち慳貪に墮せん此の事不可なりとして祇二十五有を出す」已上、当に知るべし此の事不可と説くと雖も而も出界有り但是れ不思議の空を觀ぜざるが故に不思議の空智を顯さずと雖も何ぞ小分の空解を起さざらん、若し空智を以て見思を断ぜずと云わば開善の無声聞の義に同ずるに非ずや、況や今の

經は正直捨權純円一実の説なり諸の爾前の声聞の得益を挙げて諸漏已に尽きて復煩惱無し」と説き又「実に阿羅漢を得此の法を信ぜず是の処有ること無し」と云い又「三百由旬を過ぎて一城を化作す」と説く、若し諸の声聞全く凡夫に同ぜば五百由旬一步も行く可からず。

又云く「自ら所得の功德に於て滅度の想を生じて当に涅槃に入るべし、我余国に於て作仏して更に異名有らん是の人滅度の想を生じて涅槃に入ると雖も而も彼の土に於て仏の智慧を求めて是の經を聞くことを得ん」已上、此の文既に証果の羅漢法華の座に来らずして無余涅槃に入り方便土に生じて法華を説くを見えたり、若し

爾らば既に方便土に生じて何んぞ見思を断ぜざらん是の故に天台・妙樂も「彼土得聞」と釈す、又爾前の菩薩に於て「始めて我が身を見我が所説を聞いて即ち皆信受し如来慧に入りనికి」と説く、故に知んぬ爾前の諸の菩薩三惑を断除して仏慧に入ること、故に解釈に云く「初後の仏慧円頓の義齊し」已上。

或は云く「故に始終を挙ぐるに意、仏慧に在り」と若し此等の説相經釈共に非義ならば正直捨權の説唯以一

だいじ 大事の文 妙法華經 皆是眞実の証 誠皆以て無益なり 皆是眞実の言は豈一部八巻に亘るに非ずや、釈迦・多宝・十方
ぶんじん 分身の舌相・至梵天の神力・三世諸仏の誠諦・不虛の証 誠・空・泡沫に同ぜん、但し小乗の斷常の一見に至つては且く
だいじょう だいじょう 大乘に對して小乗を以て外道に同ず小益無きに非ざるなり、又七方便並に究竟の滅に非ざるの釈、或は復但し心を觀ず
と言わば則ち理に稱わずとは又是れ円実の大益に對して七方便の益を下して並に非究竟滅 即不称理と釈す
るなり。

第四重の難に云く法華本門の觀心の意を以て一代聖教を按ずるに菴羅果を取つて掌中に捧ぐるが如し、所以は何ん
迹門の大教起れば爾前の大教亡じ 本門の大教起れば迹門 爾前亡じ 觀心の教起れば本 迹爾前共に亡ず此れは是れ
如來所説の聖教、從淺至深して次第に迷を転ずるなり、然れども如來の説は一人の爲にせず此の大道を説きて迷情除か
ざれば生死出で難し、若し爾前の中に八教有りとは頓は則ち華嚴漸は則ち三昧・秘密と不定とは前四昧に亘る、蔵は
すなわ 則ち阿含・方等に亘る、通は是れ方等・般若・円別は是れ則ち前四昧の中に鹿苑の説を除く、此くの如く八機各各不同な
れば教説も亦異なり四教の教主亦是れ不同なれば当教の機根余仏を知らず、故に解釈に云く「各各仏独り其の前に在す
と見る」已上。

人天の五戒・十善・二乗の四諦・十二菩薩の六度・三祇・百劫・或は動逾塵劫・或は無量阿僧祇劫・円教の菩薩の
初發心時・便成正覺 明かに知んぬ機根別なるが故に説教亦別なり、教別なるが故に行も亦別なり行別なるが故に得果
も別なり此れ即ち各別の得益にして不同なり。

然るに今法華方便品に「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」と説き給う爾の時八機並に惡趣の衆生悉く皆同じく
釈迦如來と成り互に五眼を具し一界に十界を具し十界に百界を具せり、是の時 爾前の諸經を思惟するに諸經の諸仏は
自界の二乗を二乗も又菩薩界を具せず三界の人天の如きは成仏の望絶えて二乗 菩薩の斷惑即ち是れ

自身の断惑なりと知らず、三乗四乗の智慧は四惡趣を脱るるに似たりと雖も互に界界を隔つ而も皆是れ一体なり、昔の
 経は二乗は但自界の見思を断除すると思つて六界の見思を断ずることを知らず菩薩も亦是くの如し自界の三惑を断尽せ
 んと欲すと雖も六界二乗の三惑を断ずることを知らず、眞実に証する時は一衆生即十衆生・十衆生即一衆生なり、
 もし六界の見思を断ぜざれば二乗の見思を断ず可からず是くの如く説くと雖も迹門は但九界の情を
 改め十界互具を明す故に即ち円仏と成るなり、爾前当分の益を嫌つこと無きが故に「三界の諸漏已に尽き三百由旬を
 過ぎて始めて我身を見る」と説けり又爾前入滅の二乗は實には見思を断ぜず故に六界を出でずと雖も迹門は二乗作仏が
 本懷なり故に「彼の土に於いて是の經を聞くことを得」と説く、既に「彼の土に聞くことを得」と云う故に知んぬ爾前の諸經
 には方便土無し故に實には実報並に常寂光も無し、菩薩の成仏を明す故に実報・寂光を仮立
 す然れども菩薩に二乗を具す二乗成仏せずんば菩薩も成仏す可からざるなり、衆生無辺誓願度も滿せず二乗の沈空尽
 滅は即ち是れ菩薩の沈空尽滅なり凡夫六道を出でざれば二乗も六道を出ず可からず、尚下劣の方便土を明さず況や
 勝れたる実報・寂光を明さんや、實に見思を断ぜば何ぞ方便を明さざらん菩薩實に実報・寂光に至らば何ぞ方便土に
 至ること無らん、但断無明と云うが故に仮りに実報・寂光を立つと雖も而も上の二土無きが故に同居の中に於て影現の
 実報・寂光を仮立す、然るに此の三百由旬は實には三界を出ずること無し迹門には但是れ始覺の十界互具を説きて未だ
 必ず本覺本有の十界互具を明さず故に所化の大衆能化の円仏皆是れ悉く始覺なり、若し爾らば本無今有の失何ぞ免る
 ることを得んや、当に知るべし四教の四仏則ち円仏と成るは且く迹門の所談なり是の故に無始の本仏を知らず、故に
 無始無終の義欠けて具足せず又無始・色心常住の義無し但し是の法は法位に住すと説くことは未來常住にして是れ
 過去常に非ざるなり、本有の十界互具を顯さざれば本有の大乗菩薩界無きなり、故に知んぬ迹門の二乗は未だ見思を
 断ぜず迹門の菩薩は未だ無明を断ぜず六道の凡夫は本有の六界に住せざれ

ば有名無実なり。

故に涌出品に至つて爾前・迹門の断無明の菩薩を「五十小劫・半日の如しと謂えり」と説く是れ則ち寿量品の久遠円仏の非長非短・不二の義に迷うが故なり、爾前・迹門の断惑とは外道の有漏断の退すれば起るが如し未だ久遠を知らざるを以て惑者の本と為すなり、故に四十一品断の弥勒・本門立行の發起・影響・当機・結縁の地涌千界の衆を知らず、既に一分の無始の無明を断じて十界の一分の無始の法性を得れば何ぞ等覺の菩薩を知らざらん、設いとうかく等覺の菩薩を知らざるも争でか当機・結縁の衆を知らざらん乃ち不識一人の文は最も未断三惑の故か、是を以て本門に至つては則ち爾前・迹門に於て随他意の釈を加え又天人・修羅に摂し「貪著五欲・妄見網中・為凡夫顛倒」と説き、釈の文には「我坐道場不得一法」と云う蔵通両仏の見思断も別円二仏の無明断も並に皆見思無明を断ぜず故に随他意と云う、所化の衆生三惑を断ずと謂えるは是れ実の断に非ず答の文に開善の無声聞の義に同ずとは汝も亦光宅の有声聞の義に同ずるか、天台は有無共に破し給うなり、開善は爾前に於て無声聞を判じ光宅は法華に於て有聲聞を判ず故に有無共に難有り、天台は「爾前には則ち有り今経には則ち無し所化の執情には則ち有り長者の見には則ち無し此くの如きの破文皆是れ爾前・迹門相對の釈にて有無共に今の難には非ざるなり、但し七方便並に究竟の滅に非ず又但し心を觀ずと云わば則ち理に称わすことの釈は円益に對し当分の益を下して並非究竟滅・即不称理」と云うなりと云うは金・論には「偏に清淨の眞如を指す尚小の眞を失えり仏性安んぞ在らん」と云う釈をば云何が会す可き、但し此の尚失小眞の釈は常には出だす可からず最も秘藏す可し、但し「妙法蓮華経皆是眞実」の文を以て迹門に於て爾前の得道を許すが故に爾前得道の義有りと云うは此れは是れ迹門を爾前に對して眞実と説くか、而も未だ久遠実成を顯さず是れ則ち彼の未顯眞実の分域なり所以に無量義經に大莊嚴等の菩薩の四十余年の得益を擧ぐるを仏の答えたもつに未顯眞実の言を以てす、又涌出品の中に弥勒疑つて

云く「如来太子為りし時、釈の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず、乃至四十余年を過ぐ」已上仏答えて云く「一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出で伽耶城を去ること遠からずして三菩提を得たりと謂えり我実に成仏してより以来已上、我実成仏とは寿量品已前を未顕真実と云うに非ずや是の故に記の九に云く「昔七方便より誠諦に至るまでは七方便の權と言ふは且く昔の權に寄す若し果門に對すれば權實俱に是れ隨他意なり」已上、此の釈は明かに知んぬ迹門をも尚隨他意と云うなり、寿量品の皆実不虛を天台釈して云く「円頓の衆生に約すれば迹本二門に於て一実一虚なり」已上、記の九に云く「故に知んぬ迹の実は本に於て猶虚なり」已上、迹門既に虚なること論に及ぶ可からず但し皆是真実とは若し本門に望むれば迹は是れ虚なりと雖も一座の内に於て虚実を論ず故に本迹兩門俱に真実と言ふなり、例せば迹門法説の時の譬説因縁の二周も此の一座に於て聞知せざること無し故に名けて顯と為すが如し、記の九に云く「若し方便教は二門俱に虚なり因門開し竟りて果門に望むれば則ち一実一虚なり本門顯れ竟れば則ち二種俱に実なり」已上、此の釈の意は本門未だ顯れざる以前は本門に對すれば尚迹門を以て名けて虚と為すが若し本門顯れ已りぬれば迹門の仏因は即ち本門の仏果なるが故に天月水月本有の法と成りて本迹俱に三世常住と顯るるなり、一切衆生の始覺を名けて迹門の円因と言ひ一切衆生の本覺を名けて本門の円果と為す修一円因感一円果とは是なり、是くの如く法門を談ずるの時迹門爾前は若し本門顯れずんば六道を出でず何ぞ九界を出でんや。

問うて云く二乗永不成仏の教に菩薩の作仏を許す可きや、答えて云く楞伽經第二に云く「大慧何者か無性乗なる、謂く一闍提なり・大慧・一闍提とは涅槃の性無し何を以ての故に解脱の中に於て信心を生ぜず涅槃に入らず、大慧一闍提とは二種あり何等をか二と為す一には一切の善根を梵焼す、二には一切衆生を憐愍して一切衆生界を尽さんとの願を作す大慧・云何が一切の善根を梵焼する謂く菩薩蔵を謗じて是くの如きの言を作す、彼の修多羅毘尼・解脱の説に随順するに非ず諸の善根を捨つと是の故に涅槃を得ず、大慧・衆生を憐愍して衆生界を尽さんとの願を作す者は菩薩と為す、大慧菩薩は方便して願を作す若し諸の衆生の涅槃に入らざる者あらば我も亦涅槃に入らずとかくのゆえ ばさつまかさつねはん 是の故に菩薩摩訶薩涅槃に入らず、大慧 是を二種の一闍提無涅槃性と名く是の義を以ての故に決定して一闍提の行を取る、大慧菩薩 仏に白して言く世尊此の二種の一闍提何等の一闍提か常に涅槃に入らざる、仏、大慧に告げたまわく菩薩摩訶薩の一闍提は常に涅槃に入らず何を以ての故に能善く一切諸法本来涅槃なりと知るを以てかくのゆえ ねはん 是の故に涅槃に入らず一切の善根を捨つる闍提には非ず、何を以ての故に大慧彼れ一切の善根を捨つる闍提は若し諸仏・善知識等に値いたてまつれば菩提心を發し諸の善根を生じて便ち涅槃を証す」と云云、此の經文に「若し諸の衆生涅槃に入らざれば我も亦涅槃に入らじ」と等云云。

前四味の諸經に二乗作仏を許さず之を以て之を思うに四味諸經の四教の菩薩も作仏有り難きか、華嚴經に云く「衆生界尽きざれば我が願も亦尽きず」と等と云云、一切の菩薩必ず四弘誓願を發す可し其の中の衆生無辺誓願度の願之を滿せざれば無上菩提誓願証の願又成じ難し、之を以て之を案ずるに四十余年の文二乗に限らば菩薩の

願又成じ難きか。

問うて云く二乗成仏之無ければ菩薩の成仏も之無き正証文如何、答えて云く涅槃經三十六に云く「仏性は是れ衆生に有りと信ずと雖も必ず一切に皆悉く之有らず是の故に名けて信不具足と為す」と三十六本三十二、此の文の如くんば先四味の諸菩薩は皆一闡提の人なり二乗作仏を許さず二乗の作仏を成ぜざるのみに非ず、將又菩薩の作仏も之を許さざる者なり、之を以て之を思つに四十余年の文二乗作仏を許さずんば菩薩の成仏も又之無きなり、

一乗要決の中に云く「涅槃經三十六に云く仏性は是れ衆生に有りと信ずと雖も必ず一切皆悉く之有らず是の故に名けて信不具足と為すと三十六本三十二、第三十一に説く一切衆生及び一闡提到悉く仏性有りと信ずるを菩薩の十法の中の第一の信心具足と名くと、三十六本第三十、一切衆生悉く有仏性を明すは是れ少分に非ず、若し猶堅く少分の一切なりと執せば唯經に違するのみに非ず亦信不具なり何に因つてか樂つて一闡提と作るや此れに由つて全分の有性を許すべし理亦一切の成仏を許すべし。」

慈恩の心經玄贊に云く「大悲の辺に約すれば常に闡提と為る大智の辺に約すれば亦當に作仏すべし、宝公の云く大悲闡提は是れ前經の所説なり前説を以て後説を難す可からざるなり諸師の釈意大途之に同じ文、金の註に云く「境は謂く四諦なり百界三千の生死は即ち苦なり此の生死即ち是れ涅槃なりと達するを衆生無邊誓願度と名く百界三千にさんなく三惑を具足す此の煩惱即ち是れ菩提なりと達するを煩惱無邊誓願断と名く生死即涅槃と円の仏性を証するは即ち仏道無上誓願成なり、惑即菩提にして般若に非ざること無ければ即ち法門無尽誓願知なり、惑智無二なれば生仏体同じ苦集ゆいしん唯心なれば四弘融攝す一即一切なりとは斯の言徴有り」文、慈覺大師の速証仏位集に云く「第一に唯今經の力用仏の下化衆生の願を満す故に世に出てて之を説く所謂諸仏の因位、四弘の願、利生断惑、知法作仏なり然るに因円果満なれば後の三の願は満す、利生の一願甚だ満じ難しと為す彼の華嚴の力十界皆仏道

を成ずること能わず阿含・方等・般若も亦爾なり後番の五味・皆成仏道の本懷なる事能わず、今此の妙經は十界皆成
仏道なること分明なり彼の達多・無間に墮するに天王仏の記を授け竜女成仏し十羅刹女も仏道を悟り阿修羅も成仏の
総記を受け人天・二乘・三教の菩薩・円妙の仏道に入る、經に云く我が昔の所願の如きは今者已に満足しぬ一切衆生を化
して皆仏道に入らしむと云云、衆生界尽きざるが故に未だ仏道に入らざる衆生有りと雖も然れども十界皆成仏するこ
と唯今經の力に在り故に利生の本懷なりと云云。

又云く「第一に妙經の大意を明さば諸仏は唯一大事の因縁を以ての故に世に出現し一切衆生悉有仏性と説き闍法・
觀行・皆當に作仏すべし、抑仏何の因縁を以て十界の衆生悉く三因仏性有りと説きたもうや、天親菩薩の仏性論縁起
分の第一に云く如来五種の過失を除き五種の功德を生ずるが爲に故に一切衆生悉有仏性と説きたもう已上謂く五種の
過失とは一には下劣心・二には高慢心・三には虚妄執・四には眞法を謗じ・五には我執を起すなり、
五種の功德とは一には正勤・二には恭敬・三には般若・四には闍那・五には大悲なり、生ずること無しと疑うが故に大
菩提心を發すること能わざるを下劣心と名け、我に性有つて能く菩提心を發すと謂えるを高慢と名け、一切の法無我の中
に於て有我的執を作すを虚妄執と名け一切諸法の清淨の智慧功德を違謗するを謗眞法と名け意唯己を存して一切
衆生を憐むことを欲せざるを起我執と名く此の五に翻對して定めて性有りと知りて菩提心を發すること。

日蓮 花押

六〇 十法界明因果抄

ぶんおうがんねん
文応元年五月三十九歳御作沙門

にちれん
日蓮撰

427P

八十華嚴經六十九に云く「普賢道に入ることを得て十法界を了知す」と、法華經第六に云く「地獄聲・畜生聲 餓鬼聲・

阿修羅聲比丘聲 比丘尼聲 人道天声 天道声 聞声 辟支声 菩薩声 仏声」と已上十法界名 目なり。

第一に地獄界とは觀仏三昧經に云く「五逆罪を造り因果を撥無し大衆を誹謗し四重禁を犯し虚く信施を食するの者

此の中に墮す」と阿鼻地獄なり、正法念經に云く「殺盜婬欲飲酒妄語の者此の中に墮す」と大叫喚地獄なり、正法念經

に云く「昔酒を以て人に与えて酔わしめ已つて調戲して之を翫び彼をして羞恥せしむるの者此の中に墮す」と叫喚地獄なり、正法

念經に云く「殺生偷盜邪婬の者此の中に墮す」と衆合地獄なり、涅槃經に云く「殺に三種有り謂く下中上なり。下とは蟻子

乃至一切の畜生乃至下殺の因縁を以て地獄に墮し乃至具に下の苦を受く」と文。

問うて云く十悪五逆等を造りて地獄に墮するは世間の道俗皆之を知れり謗法に依つて地獄に墮するは未だ其の相貌

を知らざる如何、答えて云く堅慧菩薩の造勒那摩提の訳究竟一乘宝性論に云く「樂て小法を行じて法及び法師を謗じ

。如来の教を識らずして説くこと修多羅に背いて是真實義と言つ文、此の文の如くんば小乗を信じ

て真實義と云い大乘を知らざるは是れ謗法なり、天親菩薩の説真諦三蔵の訳仏性論に云く「若し大乘に憎背するは此

はは一闡提の因なり衆生をして此の法を捨てしむるを為ての故に」文、此の文の如くんば大小流布の世に一向に小乗を

弘め自身も大乘に背き人に於ても大乘を捨てしむる是を謗法と云うなり、天台大師の梵網經の疏に

云く「謗は是れ乖背の名。て是れ解理に称わず言実に当らず異解して説く者を皆名けて謗と為すなり己が宗に背くが

故に罪を得」文、法華經の譬喻品に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切世間の仏種を断ぜん

乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん文、此の文の意は小乗の三賢已前・大乘の十信已前・末代の凡夫の十悪・五逆・不孝父母・女人等を嫌わず此等法華經の名字を聞いて或題名を唱え一字一句四句一品一卷八卷等を受持し読誦し乃至亦上の如く行ぜん人を随喜し讚歎する人は法華經よりの外、一代の聖教を深く習ひ義理に達し堅く大小乗の戒を持てる大菩薩の如き者より勝れて往生成仏を遂ぐ可しと説くを信ぜずして還つて法華經は地住已上の菩薩の爲、或は上根・上智の凡夫の爲にして愚人悪人・女人末代の凡夫等の爲には非ずと言わん者は即ち一切衆生の成仏の種を断じて阿鼻獄に入る可しと説ける文なり、涅槃經に云く「仏の正法に於て永く護惜建立の心無し」文、此の文の意は此の大涅槃經の大法世間に滅尽せんを惜まざる者は即ち是れ誹謗の者なり、天台大師法華經の怨敵を定めて云く「聞く事を喜ばざる者を怨と爲す」文、謗法は多種なり大小流布の国に生れて一向に小乗の法を學して身を治め大乘に遷らざるは是れ謗法なり、亦華嚴・方等・般若等の諸大乘經を習える人も諸經と法華經と等同の思を作し人をして等同の義を學ばしめ法華經に遷らざるは是れ謗法なり、亦偶円機有る人の法華經を學ぶをも我が法に付けて世利を貪るが爲に汝が機は法華經に當らざる由を稱して此の經を捨て権經に遷らしむるは是れ大謗法なり、此くの如き等は皆地獄の業なり人間に生ずること過去の五戒は強く三惡道の業因は弱きが故に人間に生ずるなり、亦当世の人も五逆を作る者は少く十惡は盛に之を犯す亦偶後世を願う人の十惡を犯さずして善人の如くなるも自然に愚癡の失に依つて身口は善く意は悪しき師を信ず、但我のみ此の邪法を信ずるに非ず国を知行する人・人民を聳て我が邪法に同ぜしめ妻子眷屬・所従の人を以て亦聳め従え我が行を行ぜしむ、故に正法を行ぜしむる人に於て結縁を作さず亦民・所従等に於ても隨喜の心を至さしめず、故に自他共に謗法の者と成りて修善止惡の如き人も自然に阿鼻地獄の業を招くこと末法に於て多分之れ有るが。

阿難尊者は淨飯王の甥 斛飯王の太子 提婆達多の舍弟 釈迦如来の從子なり、如来に仕え奉つて二十年覺意

さんまい 三昧を得て一代聖教を覚れり、仏入滅の後阿闍世王阿難を帰依し奉る、仏の滅後四十年の此阿難尊者一の竹林の中に至るに一りの比丘有り一の法句の偈を誦して云く「若し人生じて百歳なりとも水の潦涸を見ずんば生じて一日にして之を覩見することを得るに如かず」已上、阿難此の偈を聞き比丘に語つて云く此れ仏説に非ず汝修行す可らず爾時に比丘阿難に問うて云く仏説は如何、阿難答えて云く若し人生じて百歳なりとも生滅の法を解せずんば生じて一日にして之を解了することを得んには如かず已上此の文仏説なり、汝が唱うる所の偈は此の文を謬りたるなり、爾の時に比丘此の偈を得て本師の比丘に語る、本師の云く我汝に教うる所の偈は眞の仏説なり阿難が唱うる所の偈は仏説に非ず阿難年老衰して言錯謬多し信ず可らず、此の比丘亦阿難の偈を捨てて本の謬りたる偈を唱う阿難又竹林に入りて之を聞くに我が教うる所の偈に非ず重ねて之を語るに比丘信用せざりき等云云、仏の滅後四十年にさえ既に謬り出来せり何に況んや仏の滅後既に二千余年を過ぎたり、仏法天竺より唐土に至り唐土より日本に至る論師さんぞうにんし三蔵・人師等伝来せり定めて謬り無き法は万が一なるか、何に況や当世の学者偏執を先と爲して我慢を挿み火を水と諍い之を糾さず偶仏の教の如く教を宣ぶる学者をも之を信用せず故に謗法ならざる者は万が一なるか。

第二に餓鬼道とは正法念經に云く「昔財を食りて屠殺せるの者此の報を受く」と、亦云く「丈夫自ら美食をい妻子に与えず或は婦人自ら食して夫子に与えざるは此の報を受く」と、亦云く「名利を貪るが爲に不淨説法する者此の報を受く」と、亦云く「昔酒をに水を加うる者此の報を受く」と、亦云く「若し人勞して少物を得たるを誑惑して之を取り用いける者此の報を受く」と、亦云く「昔行路人の病苦ありて疲極せるに其の売を欺き取り直を与つること薄少なりし者此の報を受く」と、又云く「昔刑獄を典主・人の飲食を取りし者此の報を受く」と、亦云く「昔陰涼樹を伐り及び衆僧の園林を伐りし者此の報を受く」と文、法華經に云く「若し人信ぜずして此の

経を毀謗せば。常に地獄に処すること。園觀に遊ぶが如く余の惡道に在ること己が舍宅の如し。文、慳貪・偷盜等の罪に依つて餓鬼道に墮することは世人知り易し、慳貪等無き諸の善人も謗法に依り亦謗法の人に親近し自然に其の義を信ずるに依つて餓鬼道に墮することは智者に非ざれば之を知らず能く能く恐る可きか。

第三に畜生道とは愚癡無慙にして徒に信施の他物を受けて之を償わざる者。此の報を受くるなり、法華經に云く「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば。當に畜生に墮すべし」文已上三惡道なり。

第四に修羅道とは止觀の一に云く「若し其の心念念に常に彼に勝らんことを欲し耐えざれば人を下し他を輕しめ己を珍ぶこと鵠の高く飛びて下視が如し而も外には仁・義・礼・智・信を掲げて下品の善心を起し阿修羅の道を行ずるなり」文。

第五に人道とは報恩經に云く「三歸五戒は人に生る」文。

第六に天道とは二有り、欲天には十善を持ちて生れ色無色天には下地は苦障・上地は静妙離の六行觀を以て生ずるなり。

問うて云く六道の生因は是くの如し抑同時に五戒を持ちて人界の生を受くるに何ぞ生盲・聾・陋・。はいる 貧窮・多病・瞋恚等無量の差別有りや、答えて云く大論に云く「若し衆生の眼を破り若し衆生の眼を屈り若し背偃・貧窮・多病・瞋恚等無量の差別有りや、答えて云く大論に云く「若し衆生の眼を破り若し衆生の眼を屈り若し正見の眼を破り罪福無しと言わん是の人死して地獄に墮し罪畢つて人と為り生れて從り盲なり、若し復仏塔の中の火珠及び諸の灯明を盗む是くの如き等の種種の先世の業・因縁をもて眼を失うなり。聾とは是れ先世の

因縁師父の教訓を受けず行ぜず而も反つて瞋恚す是の罪を以ての故に聾となる、復次に衆生の耳を截り若し衆生の耳を破り若し仏塔僧塔諸の善人・福田の中の 椎・鈴・貝及び鼓を盗む故に此の罪を得るなり、先世に他の舌を截り或は其の口を塞ぎ或は惡藥を与えて語ることを得ざらしめ、或は師の教・父母の教勅を聞き其の語を断つ。

世に生れて人と為り唾にして言つこと能わず。○先世に他の坐禅を破り坐禅の舎を破り諸の咒術を以て人を咒して瞋らし闘諍し姪欲せしむ今世に諸の結使厚重なること婆羅門の其の稻田を失い其の婦復死して即時に狂発し裸形にして走りしが如くならん、先世に仏阿羅漢辟支仏の食及び父母所親の食を奪えば仏世に値うと雖も猶故飢渴す罪の重きを以ての故なり、○先世に好んで鞭杖拷掠閉繫を行じ種種に悩すが故に今世の病を得るなり。○先世に他の身を破り其の頭を截り其の手足を斬り種種の身分を破り或は仏像を壊り仏像の鼻及び諸の賢聖の形像を毀り或は父母の形像を破る是の罪を以ての故に形を受くる多く具足せず、復次に不善法の報身を受くること醜陋なり、文、法華經に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば。○若し人と為ることを得ては諸根闇鈍にして盲・聾・背偃ならん。○口の氣常に臭く鬼魅に著せられん貧窮下賤にして人に使われ多病瘠瘦にして依怙する所無く。○若し他の叛逆し抄劫し竊盜せん是くの如き等の罪横に其の殃に羅らん」文。

又八の卷に云く「若し復是の經典を受持する者を見て其の過惡を出さん若し若は実にもあれ若は不実にもあれ此の人は現世に白癩の病を得ん若し之を輕笑すること有らん者は当に世世に牙齒疎欠・醜き脣・平める鼻・手脚繚戾し眼目かくらいに身体臭穢にして惡瘡膿血・水腹・短氣諸の惡重病あるべし」文、問うて云く何なる業を修する者が六道に生じて其の中の王と成るや、答えて云く大乘の菩薩戒を持して之を破る者は色界の梵王・欲界の魔王・帝釈・四輪王・禽獸王・閻魔王等と成るなり、心地觀經に云く「諸王の受くる所の諸の福樂は往昔會つて三の淨戒を持し戒德薰修して招き感ずる所、人天の妙果王の身を獲。○中品に菩薩戒を受持すれば福德自在の轉輪王として心の所作に随つて尽く皆成じ無量の人天悉く遵奉す、下の上品に持すれば大鬼王として一切の非人咸く率伏す戒品を受持して欠犯すと雖も戒の勝るるに由るが故に王と為ることを得、下の中品に持すれば禽獸の王として一切の飛走皆歸伏す清淨の戒に於て欠犯有るも戒の勝るるに由るが故に王と為ることを得、下の下品に持すれば魔王として地獄

の中に処して常に自在なり禁戒を毀り惡道に生ずと雖も戒の勝るに由るが故に王と爲る事を得。若し如來の戒を受けざる事有れば終に野干の身をも得ること能わず何に況んや能く人天の中の最勝の快樂を感じて王位に居せん文、安然和尚の広釈に云く「菩薩の大戒は持して法王と成り犯して世王と成る而も戒の失せざることを譬え

ば金銀を器と成すに用ゆるに貴く器を破りて用いざるも而も宝は失せざるが如し亦云く「無量壽觀に云く劫初より已來八萬の王有つて其の父を殺害すと此則ち菩薩戒を受けて國王と作ると雖も今殺の戒を犯して皆地獄に墮れども犯戒の力も王と作るなり」大仏頂經に云く「発心の菩薩罪を犯せども暫く天神地祇と作ると、大隨求に

云く「天帝命尽きて忽ち驢の腹に入れども隨求の力に由つて還つて天上に生ず」と、尊勝に云く「善住天子死後七返畜生の身に墮すべきを尊勝の力に由つて還つて天の報を得たり」と、昔國王有り千車をもて水を運び仏塔の焼くるを救うみずか自ら心を起して阿修羅王と作る、昔梁武帝五百の袈裟を須彌山の五百の羅漢に施す、誌公云く「往五百に施すに一りの衆を欠けり罪を犯して暫く人王と作る即ち武帝是なり、昔國王有つて民を治むること

等からず今天王と作れども大鬼王と爲る、即ち東南西の三天王是なり拘留孫の末に菩薩と成りて發誓し現に北方毘沙門と作る是なり云云、此等の文を以て之を思うに小乗戒を持して破る者は六道の民と作り大乘戒を破する者は六道の王と成り持する者は仏と成る是なり。

第七に声聞道とは此の界の因果をば阿含・小乗十二年の經に分明に之を明せり、諸大乘經に於ても大に對せんがために亦之をば明せり、声聞に於て四種有り一には優婆塞・俗男なり五戒を持し苦空・無常・無我の觀を修し自調自度の心強くして敢て化他の意無く見思を断尽して阿羅漢と成る此くの如くする時自然に髪を剃るに自ら落つ

、二には優婆夷・俗女なり五戒を持し髪を剃るに自ら落つると男の如し三には比丘僧なり二百五十戒具足なりを持して苦空・無常・無我の觀を修し見思を断じて阿羅漢と成る此くの如くするの時髪を剃らざれども生ぜず、

四に比丘尼なり五百戒を持す余は比丘の如し、一代諸經に列座せる舍利弗・目連等の如き声聞はなり永く六道に生ぜず亦仏菩薩とも成らず灰身滅智し決定して仏に成らざるなり、小乗戒の根本たる尽形寿の戒は一度依身を壞れば永く戒の功德無し、上品を持すれば二乗と成り中下を持すれば人天に生じて民と爲る之を破れば三惡道に墮して罪人と成るなり、安然和尚の広釈に云く「三善は世戒なり因生して果を感じ業尽きて惡に墮す譬えば楊葉の秋至れば金に似れども秋去れば地に落つるが如し、二乗の小戒は持する時は果拙く破る時は永く捨つ譬えば瓦器の完くして用うるに卑しく若し破れば永く失するが如し」文。

第八に緣覺道とは二有り一には部行獨覺 仏前に在りて声聞の如く小乗の法を習ひ小乗の戒を持し見思を断じて永不成仏の者と成る、二には鱗喩獨覺 無仏の世に在りて飛花落葉を見て苦・空・無常・無我の觀を作し見思を断じて永不成仏の身と成る戒も亦声聞の如し此の声聞 緣覺を二乗とは云ふなり。

第九に菩薩界とは六道の凡夫の中に於て自身を輕んじ他人を重んじ惡を以て己に向け善を以て他に与えんと念う者有り、仏此の人の爲に諸の大乗經に於て菩薩戒を説きたまへり、此の菩薩戒に於て三有り一には損善法戒・所謂八万四千の法門を習ひ尽さんと願す、二には饒益有情戒・一切衆生を度しての後に自ら成仏せんと欲する是なり、三には損律儀戒一切の諸戒を盡く持せんと欲する是なり、華嚴經の心を演ぶる梵網經に云く「仏諸の仏子に告げて言く十重の波羅提木叉有り若し菩薩戒を受けて此の戒を誦せざる者は菩薩に非ず仏の種子に非ず我も亦是くの如く誦す一切の菩薩は已に學し一切の菩薩は當に學し一切の菩薩は今學す」文、菩薩と言ふは二乗を除いて一切の有情なり、小乗の如きは戒に随つて異なるなり、菩薩戒は爾らず一切の有心に必ず十重禁等を受く一戒を持するを一分の菩薩と云ふ具に十分を受くるを具足の菩薩と名く、故に瓔珞經に云く「一分の戒を受くること有れば一分の菩薩と名け乃至三分・三分・四分・十分なるを具足の受戒と云ふ」文。

問うて云く二乗を除くの文如何、答えて云く梵網經に菩薩戒を受くる者を列ねて云く「若し仏戒を受くる者は國王・王子・百官・宰相・比丘・比丘尼・十八梵天・六欲天子・庶民・黃門・婬男・婬女・奴婢・八部・鬼神・金剛神・畜生・乃至變化人にもあれ但法師の語を解するは尽く戒を受得すれば皆第一清淨の者と名く文、此の中に於て二乗無きなり、方等部の結經たる瓔珞經にも亦二乗無し、問うて云く二乗所持の不殺生戒と菩薩所持の不殺生戒と差別如何、答えて云く所持の戒の名は同じと雖も持する様並に心念永く異なるなり、故に戒の功德も亦浅深あり、問うて云く異なる様如何、答えて云く二乗の不殺生戒は永く六道に還らんと思はず故に化導の心無し亦仏菩薩と成らんと思はず但灰身滅智の思を成すなり、譬えば木を焼き灰と為しての後に一塵も無きが如し故に此の戒をば瓦器に譬う破れて後用つること無きが故なり、菩薩は爾らず饒益有情戒を發して此の戒を持するが故に機を見て五逆・十惡を造り同く犯せども此の戒は破れず還つて彌戒体を全くす、故に瓔珞經に云く「犯すこと有れども失せず未來際を尽くす」文、故に此の戒をば金銀の器に譬う完くして持する時も破する時も永く失せざるが故なり、問うて云く此の戒を持する人は幾劫を経てか成仏するや、答えて云く瓔珞經に云く「未だ住前に上らざる。若は一劫二劫三劫乃至十劫を経て初住の位の中に入ることを得」文、文の意は凡夫に於て此の戒を持するを信位の菩薩と云う、然りと雖も一劫二劫乃至十劫の間は六道に沈輪し十劫を経て不退の位に入り永く六道の苦を受けざるを不退の菩薩と云う未だ仏に成らず還つて六道に入れども苦無きなり。

第十に仏界とは菩薩の位に於て四弘誓願を發すを以て戒と為す三僧祇の間・六度万行を修し見思・塵沙・無明の三惑を斷盡して仏と成る、故に心地觀經に云く「三僧企耶大劫の中に具に百千の諸の苦行を修し功德圓滿にして法界に遍く十地究竟して三身を証す」文、因位に於て諸の戒を持ち仏果の位に至つて仏身を莊嚴す三十二相・八十種好は即ち是の戒の功德の感ずる所なり、但し仏果の位に至れば戒体失す譬えば華の果と成つて華の形無きが

如し、故に天台の梵網經の疏に云く「仏果に至つて乃ち廢す」文、問うて云く梵網經等の大乘戒は現身に七逆を造れると並に決定性の二乗とを許すや、答えて云く梵網經に云く「若し戒を受けんと欲する時は師問い言うべし汝現身に七逆の罪を作らざるやと、菩薩の法師は七逆の人の与に現身に戒を受けしむることを得ず」文、此の文の如くんば七逆の人は現身に受戒を許さず、大般若經に云く「若し菩薩設い恒河沙劫に妙の五欲を受くるとも菩薩戒に於ては猶犯と名けず若し一念二乗の心を起さば即ち名けて犯と為す」文、大莊嚴論に云く「恒に地獄に処すと雖も大菩提を障ず若し自利の心を起さば是れ大菩提の障なり」文、此等の文の如くんば六凡に於ては菩薩戒を授け二乗に於ては制止を加うる者なり、二乗戒を嫌うは二乗所持の五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒等を嫌うに非ず彼の戒は菩薩も持す可し但二乗の心を嫌うなり、夫れ以みれば持戒は父母・師僧・國王・主君の一切衆生・三宝の恩を報ぜんが為なり、父母は養育の恩深し一切衆生は互に相助くる恩重し國王は正法を以て世を治むれば自他安穩なり、此に依つて善を修すれば恩重し主君も亦彼の恩を蒙りて父母・妻子・眷屬・所従・牛馬等を養う、設い爾らずと雖も一身を顧る等の恩是重し師は亦邪道を閉じ正道に趣かしむる等の恩是深し仏恩は言うに及ばず是くの如く無量の恩分之有り、而るに二乗は此等の報恩皆欠けたり故に一念も二乗の心を起すは十惡・五逆に過ぎたり一念も菩薩の心を起すは一切諸仏の後心の功德を起せるなり、已上四十余年の間の大小乗の戒なり、法華經の戒と言つは二有り、一には相待妙の戒二には絶待妙の戒なり、先ず相待妙の戒とは四十余年の大小乗の戒と法華經の戒と相對して爾前を戒と云い法華經を妙戒と云うて諸經の戒をば未顕眞實の戒・歷劫修行の戒・決定性の二乗戒と嫌なり、法華經の戒は眞實の戒・速疾頓成の戒・二乗の成仏を嫌わざる戒等を相對して妙を論ずるを相對妙の戒と云なり。

問うて云く梵網經に云く「衆生・仏戒を受くれば即ち諸仏の位に入る位大覺に同じ已に實に是諸仏の子なり」文。

華嚴經に云く「初発心の時便ち正覺を成ず」文、大品經に云く「初発心の時即ち道場に坐す」文、此等の文の如くんば
四十余年の大乗戒に於て法華經の如く速疾頓成の戒有り何ぞ但歷劫修行の戒なりと云うや、答えて云く此れに於て二
義有り一義に云く四十余年の間に於て歷劫修行の戒と速疾頓成の戒と有り法華經に於ては但一つの速疾頓成の戒のみ
有り、其の中に於て四十余年の間の歷劫修行の戒に於ては法華經の戒に劣ると雖も四十余年の
間の速疾頓成の戒に於ては法華經の戒に同じ、故に上に出す所の衆生・仏戒を受けば即ち諸仏の位に入る等の文は
法華經の須臾聞之・即得究竟の文に之同じ、但し無量義經に四十余年の經を挙げて歷劫修行等と云えるは四十余年の内
の歷劫修行の戒計りを嫌うなり速疾頓成の戒をば嫌わざるなり、一義に云く四十余年の間の戒は一向に
歷劫修行の戒・法華經の戒は速疾頓成の戒なり、但し上に出す所の四十余年の諸經の速疾頓成の戒に於ては凡夫地より
速疾頓成するに非ず凡夫地より無量の行を成じて無量劫を経・最後に於て凡夫地より即身成仏す、故に最後に從えて
速疾頓成とは説くなり、委悉に之を論ぜば歷劫修行の所損なり、故に無量義經には總て四十余年の經を
挙げて仏・無量義經の速疾頓成に対して宣說菩薩・歷劫修行と嫌いたまへり、大莊嚴菩薩の此の義を承けて領解して云く
「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過れども終に無上菩提を成ずることを得ず、何を以ての故に菩提の大直道を知らざるが
故に險逕を行くに留難多きが故に、乃至大直道を行くに留難無きが故に」文、若し四十余年の間
に無量義經・法華經の如く速疾頓成の戒之れ有れば仏猥りに四十余年の実義を隠し給うの失之れ有り云云、二義の中に
後の義を作る者は存知の義なり、相待妙の戒是なり、次に絶待妙の戒とは法華經に於ては別の戒無し、爾前の戒即ち
法華經の戒なり其の故は爾前の人天の楊葉戒・小乘・阿含經の二乗の瓦器戒・華嚴・方等・般若・觀經等の
歷劫菩薩の金銀戒の行者・法華經に至つて互に和会して一同と成る、所以に人天の楊葉戒の人は二乗の瓦器・菩薩の
金銀戒を具し菩薩の金銀戒に人天の楊葉二乗の瓦器を具す余は以て知んぬ可し、三惡道の人は現身に於て戒

無し過去に於て人天に生れし時人天の楊葉・二乗の瓦器菩薩の金銀戒を持ち退して三惡道に墮す、然りと雖も其の功德未だ失せず之有り三惡道の人法華經に入る時其の戒之を起す故に三惡道にも亦十界を具す、故に爾前の十界の人法華經に來至すれば皆持戒なり、故に法華經に云く「是を持戒と名く」文、安然和尚の広釈に云く「法華に云く能く法華を説く是を持戒と名く」文、爾前經の如く師に随つて戒を持せず但此の經を信するが即ち持戒なり、爾前の經には十界互具を明さず故に菩薩無量劫を経て修行すれども二乘・人天等の余戒の功德無く但一界の功德を成ず故に一界の功德を以て成仏を遂げず、故に一界の功德も亦成ぜず、爾前の人法華經に至りぬれば余界の功德を一界に具す、故に爾前の經即ち法華經なり法華經即ち爾前の經なり、法華經は爾前の經を離れず爾前の經は法華經を離れず是を妙法と言つ、此の覺り起りて後は行者阿含・小乘經を読むとも即ち一切の大乗經を讀誦し法華經を読む人なり、故に法華經に云く「聲聞の法を決了すれば是諸經の王なり」文、阿含經即ち法華經と云う文なり、「仏乘に於て分別して三と説く」文、華嚴・方等・般若即ち法華經と云う文なり、「若し俗間の經書・治世の語言・資生の業等を説かんと皆正法に順ず」文、一切の外道・老子・孔子等の經は即ち法華經と云ふ文なり、梵網經等の權大乘の戒と法華經の戒とに多くの差別有り、一には彼の戒は二乘七逆の者を許さず二には戒の功德に仏果を具せず三には彼は歴劫修行の戒なり是くの如き等の多くの失有り、法華經に於ては二乘七逆の者を許す上、博地の凡夫・一生の中に仏位に入り妙覺至つて因果の功德を具するなり。

正元二年庚申四月二十一日

日蓮 花押

本朝沙門日蓮之を註す

一に教とは釈迦如来所説の一切の経律論五千四十八卷四百八十帙天竺に流布すること一千年仏の滅後・一十五年に當つて震旦国に仏経渡る、後漢の孝明皇帝永平十年丁卯より唐の玄宗皇帝開元十八年庚午に至る六百六十四歳の間に一切経渡り畢んぬ、此の一切の経律論の中に小乗・大乘・權經・實經・顯經・密經あり此等を弁うべし、此の名目は論師・人師よりも出でず仏説より起る十方世界の一切衆生一人も無く之を用うべし之を用いざる者は外道と知るべきなり、阿含經を小乗と説く事は方等般若法華涅槃等の諸大乘經より出でたり、法華經には一向に小乗を説きて法華經を説かざれば仏慳貪に墮すべしと説きたもつ、涅槃經には一向に小乗經を用いて仏を無常なりと云わん人は舌口中に爛るべしと云云。

二に機とは仏教を弘むる人は必ず機根を知るべし舍利弗尊者は金師に不淨觀を教え浣衣の者には数息觀を教うる間九十日を経て所化の弟子佛法を一分も覺らずして還つて邪見を起し一闡提と成り畢んぬ、仏は金師に数息觀を教え浣衣の者に不淨觀を教えたもつ故に須臾の間に覺ることを得たり、智慧第一の舍利弗すら尚機を知らず何に況や末代の凡師機を知り難し但し機を知らざる凡師は所化の弟子に一向に法華經を教うべし、問うて云く無智の人の中に此の經を説くこと莫れとの文は如何、答えて云く機を知るは智人の説法する事なり又謗法の者に向つては一向に法華經を説くべし毒鼓の縁と成さんが為なり、例せば不輕菩薩の如し亦智者と成る可き機と知らば必ず先ず小乗を教え次に權大乘を教え後に實大乘を教う可し、愚者と知らば必ず先ず實大乘を教う可し信謗共に下種と為ればなり。

三に時とは仏教を弘めん人は必ず時を知るべし、譬えば農人の秋冬・田を作るに種と地と人の功勞とは違わざれども一分も益無く還つて損す一段を作る者は少損なり、一町二町等の者は大損なり、春夏耕作すれば上中下に随つて皆分に益有るが如し、仏法も亦復是くの如し、時を知らずして法を弘めば益無き上還つて惡道に墮するなり

ゆえに、仏出世したもつて必ず法華經を説かんと欲するに縦い機有れども時無きが故に四十余年には此の經を説きたまわず故に經に云く「説時未だ至らざるが故なり」と云云、仏の滅後の次の日より正法一千年は持戒の者は多く破戒の者は少し正法一千年の次の日より像法一千年は破戒の者は多く無戒の者は少し、像法一千年の次の日より末法一万年は破戒の者は少く無戒の者は多し、正法には破戒・無戒を捨てて持戒の者を供養すべし像法には無戒を捨てて破戒の者を供養すべし、末法には無戒の者を供養すること仏の如くすべし但し法華經を謗ぜん者をば正像末の三時に亘りて持戒の者をも無戒の者をも破戒の者をも共に供養すべからず、供養せば必ず國に三災・七難起り供養せし者も必ず無間・大城に墮すべきなり、法華經の行者の權經を謗するは主君・親師の所従・子息・弟子等を罰するが如し、權經の行者の法華經を謗するは所従・子息・弟子等の主君・親師を罰するが如し、又当世は末法に入つて二百一十余年なり、權經・念仏等の時か法華經の時か能く能く時刻を助つべきなり。

四に國とは仏教は必ず國に依つて之を弘むべし國には寒國・熱國・貧國・富國・中國・辺國・大國・小國・一向偷盜國・一向殺生國・一向不孝國等之有り、又一向小乗の國・一向大乘の國・大小兼學の國も之有り、而るに日本國は一向に小乗の國が一向に大乘の國が大小兼學の國なるか能く之を助つべし。

五に教法流布の先後とは未だ仏法渡らざる國には未だ仏法を聴かざる者あり既に仏法渡れる國には仏法を信ずる者あり必ず先に弘まれる法を知つて後の法を弘むべし先に小乗・權大乘弘らば後に必ず實大乘を弘むべし先に實大乘弘らば後に小乗・權大乘を弘むべからず、瓦礫を捨てて金珠を取るべし金珠を捨てて瓦礫を取ること勿れ。

已上の此の五義を知つて仏法を弘めば日本国の国師と成る可きか所以に法華經は一切經の中の第一の經王なりと知るは是れ教を知る者なり、但し光宅の法雲・道場の慧觀等は涅槃經は法華經に勝れたりと、清涼山の澄觀・高野の弘法等は華嚴經・大日經等は法華經に勝れたりと、嘉祥寺の吉藏・慈恩寺の基法師等は般若・深密等の二經は法華經に勝れたりと云う、天台山の智者大師只一人のみ一切經の中に法華經を勝れたりと立つるのみに非ず

法華經に勝れたる經之れ有りと云わん者を諫曉せよ止まずんば現世に舌口中に爛れ後生は阿鼻地獄に墮すべし等と云云、此等の相違を能く能く之を弁えたる者は教を知れる者なり、当世の千万の學者等一一に之に迷えるか、若し爾らば教を知れる者之れ少きか教を知れる者之れ無ければ法華經を読む者之れ無し法華經を読む者之れ無ければ国師となる者無きなり、国師となる者無ければ国中の諸人一切經の大小權實・顯密の差別に迷うて一人に於ても生死を離るる者之れ無く、結句は謗法の者と成り法に依つて阿鼻地獄に墮する者は大地の微塵よりも多く法に依つて生死を離るる者は爪上の土よりも少し、恐る可し恐る可し、日本国の一切衆生は桓武帝より已来

四百余年一向に法華經の機なり、例せば靈山八箇年の純円の機為るが如し大師安然和尚慧心等の記に之有り是れ機を知れるなり、而るに当世の學者の云く日本国は一向に称名念佛の機なり等と云云、例せば舍利弗の機に迷うて所化の衆を一闡提と成せしが如し。

日本国の当世は如来の滅後二千二百一十餘年後五百歳に當つて妙法蓮華經広宣流布の時刻なり是れ時を知れるなり、而るに日本国の当世の學者或は法華經を抛ちて一向に称名念佛を行じ或は小乗の戒律を教えて叡山の大僧を蔑り或は教外を立てて法華の正法を輕しむ此等は時に迷える者か、例せば勝意比丘が喜根菩薩を謗じ徳光論師が弥勒菩薩を蔑りて阿鼻の大苦を招きしが如し、日本国は一向に法華經の国なり例せば舍衛国の一方向大乘なりしが如し、又天竺には一向に小乗の国一向に大乘の国・大小兼学の国も之有り、日本国は一向大乘の国なり大乘

の中にも法華經の國爲る可きなり瑜加論筆公の記聖德太子伝教是れ國を知れる者なり、而るに當世の學者日本國の衆生に向つて一向に小乗の戒律を授け一向に念仏者等と成すはたと譬えば宝器に穢食を入れたるが如ししん等云云の守護章に在り、日本國には欽明天皇の御宇に仏法百濟國より渡り始めしより桓武天皇に至るまで二百四十余年の間此の國に小乗・權大乘のみ弘まり法華經有りと雖も其の義未だ顯れず、例せば震旦國に法華經渡つて三百余年の間法華經有りと雖も其の義未だ顯れざりしが如し、桓武天皇の御宇に伝教大師有して小乗・權大乘の義を破して法華經の実義を顯せしより已来又異義無く純一に法華經を信ず、設け華嚴・般若・深密・阿含・大小の六宗を学する者も法華經を以て所詮と爲す、況や天台・眞言の學者をや何に況や在家の無智の者をや、例せば崑崙山に石無く蓬萊山に毒無きが如し、建仁より已来今に五十余年の間大日・仏陀・禪宗を弘め、法然・隆寛・浄土宗を興し実大乘を破して權宗に付き一切經を捨てて教外を立つ、譬えば珠を捨てて石を取り地を離れて空に登るが如し

此は教法流布の先後を知らざる者なり。

仏誡めて云く、惡象に値つとも惡知識に値わざれと云云、法華經の勸持品に後の五百歳二千余年に當つて法華經の敵人三類有る可しと記し置きたまへりと云云當世は後五百歳に當れり、日蓮・仏語の実否を勘するに三類の敵人之有り之を隱さば法華經の行者に非ず之を顯さば身命定めて喪わんか、法華經第四に云く、而も此の經は如来の現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をやと云云、同じく第五に云く「一切世間怨多くして信じ難し」と、又

云く、「我身命を愛せず但無上道を惜む」と、同第六に云く「自ら身命を惜まず」と云云、涅槃經第九に云く「譬えば王使の善能談論し方便に巧みなる命を他國に奉け寧ろ身命を喪つとも終に王の所説の言教を匿さざるが如し、智者も亦爾なり凡夫の中に於て身命を惜まずして要必大乘方等を宣説すべし」と云云、章安大師釈して云く「寧喪身命不匿教とは身は軽く法は重し身を死して法を弘めよ」と云云、此等の本文を見れば三類の敵人を

顕あらわさずんほけきょうばぎょうじ法華經の行者あらに非これず之あらわを顕あらわすは法華經ほけきょうの行者ぎょうじなり、而しかれども必しんみょうず身命うじなを喪うわんか、例しせば師し子そん尊じゃ者だい提いは婆

菩薩等ぼさつの如ごとくならん云云。

二月十日

日蓮にちれん

花押かおう

第一に八大地獄の因果を明し、第二に無間地獄の因果の輕重を明し、第三に問答料簡を明し、第四に行者弘經の用心を明す。

第一に八大地獄の因果を明さば、

第一に等活地獄とは此の閻浮提の地の下・千由旬にあり此の地獄は縦広齊等にして二万由旬なり、此の中の罪人はたがい害心をいだく若たまた相見れば犬ととのあえるがごとし、各鉄の爪をもて互につかみさく血肉既に尽きぬれば唯骨のみあり、或は獄卒手に鉄杖を取つて頭より足にいたるまで皆打くたく身体くだけで

沙のごとし、或は利刀をもつて分分に肉をさく然れども又よみがへるなり此の地獄の寿命は人間の晝夜五十年をもつて第一四王天の一日一夜として四王天の天人の寿命五百歳なり、四王天の五百歳を此れ等活地獄の一日一夜として其の寿命五百歳なり、此の地獄の業因をいばもの命をたつもの此の地獄に墮つ

螻蟻蚊等の小虫を殺せる者も懺悔なければ必ず此の地獄に墮つべし、譬ははりなれども水の上にをけば沈まざることなきが如し、又懺悔すれども懺悔の後に重ねて此の罪を作れば後の懺悔には此の罪きえがたし、譬はぬすみをして獄に入りぬるものしばらく経て後に御免を蒙りて獄を出ずれども又重ねて盗をして獄に入りぬれば

出ゆるされがたきが如し、されば当世の日本国の人は上一人より下万民に至まで此の地獄をまぬがる人は一人もありがたかるべし、何に持戒のをばをとれる持律の僧たりとも蟻虱などを殺さず蚊をあやまたざる

べきか、況や其外山野の鳥鹿、江海の魚鱗を日日に殺すものをや、何に況や牛馬人等を殺す者をや。

第二に黒繩地獄とは等活地獄の下にあり縦広は等活地獄の如し、獄卒・罪人をとらえて熱鉄の地にふせて熱鉄の繩をもつて身にすみうつて熱鉄の斧をもつて繩に随つてきりざきけづる又鋸を以てひく又左右に大なる鉄の山あり山の上に鉄の幢を立て鉄の繩をはり罪人に鉄の山ををせて繩の上よりわたす繩より落ちてくだけ或鉄のかなえに墮し入れてにらる此の苦は上の等活地獄の苦よりも十倍なり、人間の一百歳は第二の利天の一日一夜なり其の寿一千歳なり此の天の寿一千歳を一日一夜として此の第二の地獄の寿命一千歳なり、殺生の上に偷盜とてぬすみをかさねたるもの此の地獄にをつ、当世の偷盜のものものをぬすむ上物の主を殺すもの此の地獄に墮つべし。

第三に衆合地獄とは黒繩地獄の下にあり縦広は上の如し多くの鉄の山二つづつに相向へり、牛頭・馬頭等の獄卒手に棒を取つて罪人を駈りて山の間に入らしむ、此時両の山迫り来て合せ押す身体くだけて血流れて地にみつ、又種種の苦あり、人間の二百歳を第三の夜・摩天の一日一夜として此の天の寿二千歳なり此の天の寿を一日一夜として此の地獄の寿命二千歳なり、殺生・偷盜の罪の上に邪淫とて他人のつまを犯す者此の地獄の中に墮つ

べし、而るに当世の僧・尼・士・女・多分は此の罪を犯す殊に僧にこの罪多し、士女は各各互にまほり又人目をつつまざる故に此の罪ををかさず僧は一人ある故に淫欲とばしきところに若し有身ば父ただされあらはれぬべきゆゑに独ある女人ををかさず、もしやかくると他人の妻をうかがひぶかくかくれんとをもつなり、当世のほかたうとげなる僧の中にことに此の罪又多くあるらんとをばゆ、されば多分は当世たうとげなる僧此の地獄に墮つべし。

第四に叫喚地獄とは衆合の下にあり縦広前に同じ獄卒惡声出して弓箭をもつて罪人をいり、又鉄の棒を以て

頭を打つて熱鉄の地をはらしむ、或は熱鉄のいりだなにうちかへしうちかへし此の罪人をあぶる、或は口を開てわける銅のゆを入るれば五臓やけて下より直に出ず、寿命をいば人間の四百歳を第四の都率天の一日一夜とす、又都率天の四千歳なり都率天の四千歳の寿を一日一夜として此の地獄の寿命四千歳なり、此の地獄の業因をいば殺生偷盗・邪淫の上に飲酒とて酒のむもの此の地獄に墮つべし、当世の比丘比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆の大酒なる者、此の地獄の苦免れがたきか、大論には酒に三十六の失をいだし梵網經には酒盃をすすめる者五百生に手なき身と生るとどかせ給う人師の釈にはみみずていの者となるとみたり、況や酒をつりて人にあたえたる者をや何に況や酒に水を入れてつるものをや、当世の在家の人人この地獄の苦まぬがたし。

第五に大叫喚地獄とは叫喚の下にあり縦広前に同じ、其の苦の相は上の四の地獄の諸の苦に十倍して重くこれをつく、寿命の長短を云わば人間の八百歳は第五の化乐天の一日一夜なり此の天の寿八千歳なり此の天の八千歳を一日一夜として此の地獄の寿命八千歳なり、殺生偷盗・邪淫・飲酒の重罪の上に妄語とてそらごとせる者此の地獄に墮つべし、当世の諸人は設け賢人・上人などいはるる人人も妄語せざる時はありとも妄語をせざる日はあるべからず、設け日はありとも月はあるべからず設け月はありとも年はあるべからず設け年はありとも一期生・妄語せざる者はあるべからず、若ししからば当世の諸人一人もこの地獄をまぬがたきか。

第六に焦熱地獄とは大叫喚地獄の下にあり縦広前にをなじ、此の地獄に種種の苦あり若し此の地獄の豆計りの火を閻浮提にをけらんに一時にやけ尽きなん況や罪人の身のなることわたのごとくなるをや、此の地獄の人は前の五つの地獄の火を見る事雪の如し、譬は人間の火の薪の火よりも鉄銅の火の熱きが如し、寿命の長短は

人間の千六百歳を第六の他化天の一日一夜として此の天の寿千六百歳なり此の天の千六百歳を一日一夜として此の地獄の寿命一千六百歳なり、業因を云わば殺生偷盗・邪淫・飲酒・妄語の上邪見とて因果なしといふ者此の

中に墮つべし、邪見とは有人の云く人飢えて死ぬれば天に生るべし等と云云、総じて因果をしらぬ者を邪見と申すなり世間の法には慈悲なき者を邪見の者といつ、当世の人人此の地獄を免れがたき。

第七に大焦熱地獄とは焦熱の下にあり縦広前の如し、前の六つの地獄の一切の諸苦に十倍して重く受るなり、其の寿命は半中劫なり、業因を云わば殺生、偷盜、邪淫、飲酒、妄語、邪見の上に淨戒の比丘尼ををさせるもの此の中に墮つべし、又比丘酒をもつて不邪淫戒を持てる婦女をたばらかし、或は財物をあたふ犯せるもの此の中に墮つべし、当世の僧の中に多く此の重罪あるなり、大悲經の文に末代には士女は多くは天に生じ僧尼は多くは地獄に墮つべしとかれたるはこれの事か、心あらん人人ははづべしはづべし。

総じて上の七大地獄の業因は諸經論をもつて勘え当世、日本国の四衆にあて見るに此の七大地獄をはなるべき人を見ず又きかず、涅槃經に云く末代に入りて人間に生ぜん者は爪上の土の如し三惡道に墮つるものは十方世界の微塵の如しと説かれたり、若爾らば我等が父母兄弟等の死ぬる人は皆上の七大地獄にこそ墮ち給いては候らめ。

あさましともいづばかりなし、竜と蛇と鬼神と仏菩薩・聖人をば未だ見ずただをとのみにこれをきく当世に上の七大地獄の業を造らざるものをば未だ見ず又をとにもきかず、而るに我が身よりはじめて一切衆生七大地獄に墮つべしとをもえる者・一人もなし、設い言には墮つべきよしをさえづれども心には墮つべしともをもわず、

又僧尼・士女地獄の業をば犯すとはをもえども、或は地藏菩薩等の菩薩を信じ、或は阿弥陀仏等の仏を恃み、或は種種の善根を修したる者もあり、皆をもはく我はかかる善根をもてれば、ななうちをもひて地獄をもをぢず、或は宗宗を習へる人人は各各の智分をたのみて又地獄の因ををぢず、而るに仏菩薩を信じたるも愛子・夫婦などをあいし父母・主君などをつやまつには雲泥なり、仏菩薩等をばかろくをもえるなり、されば当世の人人の仏菩薩を恃めれば宗宗を学したれば地獄の苦はまぬがれなななどをもえるは僻案にや心あらん人人はよくよく

はかりをもつべきか。

第八に大阿鼻地獄とは又は無間地獄と申すなり欲界の最底・大焦熱地獄の下にあり此の地獄は縦広八万由旬なり、外に七重の鉄の城あり地獄の極苦は且く之を略す前の七大地獄並びに別処の一切の諸苦を以て一分として大阿鼻地獄の苦一千倍勝れたり、此の地獄の罪人は大焦熱地獄の罪人を見る事他化自在天の樂みの如し、此の地獄の香のくさを人かくなれば四天下欲界・六天の天人皆ししなん、されども出山没山と申す山此の地獄の臭き氣ををさへ人間衆らせざるなり、故に此の世界の者死せずと見ぬ、若し仏此の地獄の苦を具に説かせ給はば人聽いて血をはいて死すべき故にくわしく仏説き給はずとみたり、此の無間地獄の寿命の長短は一中劫なり一中劫と申すは此の人寿無量歳なりしが百年に一寿を減じ又百年に一寿を減ずるほどに人寿十歳の時に減ずるを一減と申す、又十歳より百年に一寿を増し又百年に一寿を増する程に八万歳に増するを一増と申す、此の一増一減の程を小劫として二十の増減を一中劫とは申すなり、此の地獄に墮ちたる者これ程久しく無間地獄に住して大苦をつくるなり、業因を云わば五逆罪を造る人此の地獄に墮つべし、五逆罪と申すは一に殺父・二に殺母・三に殺阿羅漢・四に出仏身血・五に破和合僧なり、今の世には仏ましまさずしかれば出仏身血あるべからず、和合僧なければ破和合僧なし、阿羅漢なければ殺阿羅漢これなし、但殺父・殺母の罪のみありぬべし、しかれども王法のいましめきびしくあるゆへに此の罪をかしがたし、若爾らば当世には阿鼻地獄に墮つべき人すくなし但し相似の五逆罪これあり木画の佛像・堂塔等をやきかの佛像等の寄進の所をつばいとり率兜婆等をきりやき智人を殺しなんとするもの多し、此等は大阿鼻地獄の十六の別処に墮つべし、されば当世の衆生十六の別処に墮つるもの多きか又謗法の者この地獄に墮つべし。

第二に無間地獄の因果の輕重を明さば、問うて云く五逆罪より外の罪によりて無間地獄に墮んことあるべし

や、答えて云く誹謗正法の重罪なり、問うて云く証文如何、答えて云く法華經第二に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば乃至其の人命終して阿鼻獄に入らんと等と云云、此の文に謗法は阿鼻地獄の業と見たり、問うて云く五逆と謗法と罪の輕重如何、答て云く大品經に云く舍利弗、仏に白して言く世尊五逆罪と破法罪と相似するや、仏舍利弗に告わく相似と言うべからず所以は何ん若し般若波羅蜜を破れば即ち十方諸仏の一切智一切種智を破るに為んぬ、仏宝を破るが故に法宝を破るが故に僧宝を破るが故に三宝を破るが故に即ち世間の正見を破す世間の正見を破れば、則ち無量無辺阿僧祇の罪を得るなり無量無辺阿僧祇の罪を得已つて則ち無量無辺阿僧祇の憂苦を受るなり」文又云く「破法の業、因縁集るが故に無量百千万億歳大地獄の中に墮つ、此の破法人の輩一大地獄より一大地獄に至る若し劫火起る時は他方の大地獄の中に至る、是くの如く十方に、くして彼の間に劫火起る故に彼より死し破法の業、因縁未だ尽きざるが故に是の間の大地獄の中に還来す」と云云、法華經第七に云く「四衆の中に瞋恚を生じ心不淨なる者有り惡口罵詈して言く是れ無智の比丘と、或は杖木瓦石を以て之れを打擲す乃至千劫阿鼻地獄に於て大苦惱を受く」と等と云云、此の經文の心は法華經の行者を惡口し及び杖を以て打擲せるもの其の後に懺悔せりといへども罪いまだ滅せずして千劫阿鼻地獄に墮ちたりと見えぬ、懺悔せる謗法の罪すら五逆罪に千倍せり況や懺悔せざらん謗法に在いては阿鼻地獄を出ずる期かたかるべし、故に法華經第二に云く「經を誦誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん乃至其の人命終して阿鼻獄に入り一劫を具足して劫尽きなば更生れん、是くの如く展轉して無數劫に至らんと等と云云。

第三に問答料簡を明さば問うて云く五逆罪と謗法罪との輕重はしんめ謗法の相貌如何、答えて云く天台智者大師の梵網經の疏に云く謗とは背なり等と云云、法に背くが謗法にてはあるか天親の仏性論に云く若し憎は背くなり等と云云、「この文の心は正法を人に捨てさせるが謗法にてあるなり、問うて云く委細に相貌をしらんと

をもつあらあらしめすべし、答えて云く涅槃經第五に云く「若し人有りて如来は無常なりと言わん云何ぞ是の人舌墮落せざらん」等云、此の文の心は仏を無常といはん人は舌墮落すべしと云云、問うて云く諸の小乗經に仏を無常と説かるる上又所化の衆皆無常と談じき若爾らば仏並に所化の衆の舌墮落すべしや、答えて云く小乗經の仏を小乗經の人が無常ととき談ずるは舌ただれざるか、大乘經に向つて仏を無常と談じ小乗經に対して大乘經を破するが舌は墮落するか、此れをもつてををもつにをのれが依經には随えども依經よりすぐれたる經を破するは破法となるか、若爾らば設い觀經華嚴經等の權大乘經の人人所依の經の文の如く修行すともかの經にすぐれたる經に隨はず又すぐれざる由を談ぜば謗法となるべきか、されば觀經等の經の如く法をえたりとも觀經等を破せる經の出来したらん時其の經に隨わずば破法となるべきか、小乗經を以てなぞらえて心うべし。

問うて云く雙觀經等に乃至十念即得往生なるとかれて候が彼のけうの教の如く十念申して往生すべきを後の經を以て申しやぶらば謗法にては候まじきか、答えて云く仏觀經等の四十余年の經經を束て未顯真實と説かせ給いぬれば此の經文に隨つて乃至十念即得往生等は實には往生しがたしと申す此の經文なくば謗法となるべし、問うて云く或人云く無量義經の四十余年未顯真實の文はあえて四十余年の一切の經經並に文文句句を皆みけんしんじつと説き給にはあらず、但四十余年の經經に處處に決定性の二乗を永不成仏ときらはせ給い釈迦如来を始成正覺と説き給しを其の言ばかりをさして未顯真實とは申すなりあえて余事にはあらず、而るをみだりに四十余年の文を見て觀經等の凡夫のために九品往生なんぞを説きたるを妄りに往生はなき事なりなど押し申すあに・

をそろしき謗法の者にあらずやなんと申すはいかに、答えて云く此の料簡は東土の得一が料簡に似たり、得一が云く未顯真實とは決定性の二乗を仏爾前の經にして永不成仏ととかれしを未顯真實とは嫌はるるなり前四味の一切にはわたるべからずと申しき、伝教大師は前四味に亘りて文文句句に未顯真實と立て給いき、さればこの料簡

は古の謗法者の料簡に似たり、但し且く汝等が料簡に随て尋ね明らめん、問う法華已前に二乗作仏を嫌いけるを今
未顕真実といつとならば先ず決定性の二乗を仏の永不成仏と説かせ給し処の經文ばかりは未顕真実の仏の妄語なり
と承伏せさせ給うか、さては仏の妄語は勿論なり若し爾らば妄語の人の申すことは有無共に用いぬ事にてあるぞかし、
決定性の二乗・永不成仏の語ばかり妄語となり若し余の菩薩・凡夫の往生・成仏等は実語となるべきならば信用しがたき
事なり、譬へば東方を西方と妄語し申さん人は西方を東方と申すべし二乗を永不成仏と説く仏は余の菩薩の成仏をゆる
すも又妄語にあらずや、五乗は但一仏性なり二乗の仏性をかくし菩薩・凡夫の仏性をあらはすは返つて菩薩・凡夫の仏性
をかくすなり。

有人云く四十余年・未顕真実とは成仏の道ばかり未顕真実なり往生等は未顕真実にはあらず、又難じて云く
四十余年が間の説の成仏を未顕真実と承伏せさせ給はば雙觀經に云う不取正覺成仏已來凡歷十劫等の文は未顕真実
と承伏せさせ給うか、若し爾らば四十余年の經經にして法藏比丘の阿彌陀仏になり給はずば法藏比丘の成仏すでに
妄語なり、若し成仏妄語ならば何の仏か行者を迎え給うべきや、又かれ此の難を通して云ん四十余年が間は
成仏はなし阿彌陀仏は今の成仏にはあらず過去の成仏なり等と云云、今難じて云く今日の四十余年の經經にして実の
凡夫の成仏を許されずば過去遠劫の四十余年の權經にても成仏叶いたきか、三世の諸仏の説法の儀式皆同きが故な
り、或は云く不得疾成・無上菩提ととかるれば四十余年の經經にては疾くこそ仏にはならねども遅く
劫を経てはなるか、難じて云く次下の大莊嚴菩薩等の領解に云く「不可思議無量無辺阿僧祇劫を過るとも終に無上菩提
を成ずることを得ず」と等と云云、此の文の如くならば劫を経ても爾前の經計りにては成仏はかたきか。

有は云う華嚴宗の料簡に云く四十余年の内には華嚴經計りは入るべからず、華嚴經にすでに往生成仏・此ありなんぞ
華嚴經を行じて往生成仏をとげざらん、答えて云く四十余年の内に華嚴經入るべからずとは華嚴宗の人の師の

義なり、無量義經には正く四十余年の内に華嚴海空と名目を呼び出して四十余年の内にかずへ入れられたり、人師を本とせば仏に背くになりぬ。

問うて云く法華經をはなれて往生成仏をとげずば仏世に出させ給ては但法華經計をこそ説き給はめ、なんぞわづらはしく四十余年の經經を説かせ給うや、答えて云く此の難は仏、自ら答え給えり。若し但仏乘を讃せば衆生苦に没在して法を破して信ぜざるが故に三惡道に墜ちなん等の經文これなり、問うて云くいかなれば爾前の經をば衆生謗せざるや、答えて云く爾前の經經は万差なれども東ねて此れを論ずれば隨他意と申して衆生の心をとかれ

てはんべり故に違する事なし、譬へば水に石をなぐるにあらそうことなきがごとし又しなじなの説教はんべれども九界の衆生の心を出でず衆生の心は皆善につけ惡につけて迷を本とするゆへに仏にはならざるか、問うて云く衆生謗すべきゆへに仏最初に法華經をとき給はずして四十余年の後に法華經をとき給はば汝なんぞ当世に權經をばとかずして左右なく法華經をといて人に謗をなさせて惡道に墮すや、答えて云く仏在世には仏菩提樹

の下に坐し給いて機をかがみ給うに当時法華經を説くならば衆生謗して惡道に墮ちぬべし、四十余年すぎて後にとかば謗せずして初住不退、乃至妙覺にのほりぬべしと知見しましましき、末代濁世には當機にして初住の位に入るべき人は万に一人もありがたかるべし、又能化の人も仏にあらざれば機をかがみん事もこれかたし、

されば逆縁、順縁のために先ず法華經を説くべしと仏ゆるし給へ、但し又滅後なりとも當機衆になりぬべきものには先ず權教をとく事もあるべし、又悲を先とする人は先ず權經をとく釈迦仏のごとし慈を先とする人は先ず実經をとくべし、不輕菩薩のごとし、又末代の凡夫はなにとなくとも惡道を免れんことはかたかるべし同じく惡道に

墮るならば法華經を謗せさせて墮すならば世間の罪をもて墮ちたるにはにるべからず、闍法生謗、墮於地獄、勝於供養、恒沙仏者等の文のごとし、此の文の心は法華經をはつじて地獄に墮ちたるは釈迦仏、阿弥陀仏等の恒河沙

の仏を供養し、歸依渴仰する功德には百千万倍すぎたりととかれたり。

問うて云く上の義のごとくならば華嚴・法相・三論・真言・淨土等の祖師はみな謗法に墮すべきか、華嚴宗には華嚴經は法華經には雲泥超過せり法相・三論もてかくのごとし、真言宗には日本国に二の流あり東寺の眞言は法華經は華嚴經にとれり何に況や大日經にをいてをや、天台の眞言には大日經と法華經とは理は齊等なり印眞言等は

超過せりと云云、此等は皆惡道に墮つべしや、答えて云く宗をたて經經の勝劣を判ずるに二の義あり、一は似破・二は能破なり一に似破とは他の義は吉とをもえども此をはすかの正義を分明にあらはさんがためか、二に能破とは實に他人の義の勝れたるをば弁えずして迷うて我が義すぐれたりとをもひて心中よりこれを破するをば能破

というされば彼の宗宗の祖師に似破・能破の二の義あるべし、心中には法華經は諸經に勝れたりと思えども且く違して法華經の義を顯さんとをもひてこれをはする事あり、提婆達多・阿闍世王・諸の外道が仏のかたきとなり

て仏徳を顯し後には仏に歸せしがごとし、又實の凡夫が仏のかたきとなりて惡道に墮つる事これ多し、されば諸宗の祖師の中に回心の筆をかかずば謗法の者惡道に墮ちたりとしるべし、三論の嘉祥・華嚴の澄觀・法相の慈恩・東寺の弘法等は回心の筆これあるか、よくよく尋ねならうべし。

問うて云くまことに今度生死をはなれんとをもはんになにものをかいとひなにものをか願うべきや、答う諸の經文には女人等をいとうべしとみたれども雙林最後の涅槃經に云く菩薩是の身に無量の過患具足充滿すと見ると雖も涅槃經を受持せんと欲するを為ての故に猶好く將護して之少ならしめず、菩薩惡象等に於ては心に

恐怖すること無れ惡知識に於ては怖畏の心を生ぜよ、何を以ての故に是れ惡象等は唯能く身を壞りて心を壞る事能わず、惡知識は二俱に壞るが故に、惡象の若きは唯一身を壞る惡知識は無量の身・無量の善心を壞る、惡象の為に殺されては三趣に至らず惡友の為に殺されては三趣に至る」と等と云云此の經文の心は後世を願はん人は一切

悪縁を恐るべし一切の悪縁よりは悪知識ををそるべしとみえたり。

されば大莊嚴仏の末の四の比丘は自ら悪法を行じて十方の大阿鼻地獄を経るのみならず、六百億人の檀那等を十方の地獄に墮しめ、鴛堀摩羅は摩尼跋陀が教に随つて九百九十九人の指をきり結句母並に仏をがいせんとぎす、善星比丘は仏の御子十二部經を受持し四禪定をえ欲界の結を断じたりしかども苦得外道の法を習つて生身

に阿鼻地獄に墮ちぬ、提婆が六万蔵・八万蔵を暗じたりしかども外道の五法を行じて現に無間に墮ちにき、阿闍世王の父を殺し母を害せんと擬せし大象を放つて仏をうしないたてまつらんとせしも惡師提婆が教なり、俱伽利比丘が舍利弗・目連をそりて生身に阿鼻に墮せし、大族王の五竺の仏法僧をほろぼせし、大族王の舎弟は

加弥羅國の王となりて健駄羅國の率都婆・寺塔・一千六百所をうしなひし、金耳國王の仏法をほろぼせし、波瑠璃王の

九千九十万の人をころして血ながれて池をなせし、設賞迦王の仏法を滅し菩提樹をきり根をほりし、後周の宇文王の四千六百余所の寺院を失ひ二十六万六百余の僧尼を還俗せしめし、此等は皆惡師を信じ惡鬼其の身に入りし故なり。

問うて云く天竺・震旦は外道が仏法をほろぼし小乗が大乘をやぶるとみえたり、此の日本国もしかるべきか、答えて云く月支・戸那には外道あり小乗あり此の日本国には外道なし小乗の者なし、紀典博士等これあれども仏法の敵となるものこれなし、小乗の三宗これあれども彼宗を用て生死をはなれんとをまはず但大乘を心うる才覚

とをまえり、但し此の国には大乘の五宗のみこれあり人人皆をもえらく彼の宗宗にして生死をはなるべしとをもつ故にあらずとも多くいできたり、又檀那の歸依も多かるゆへに利養の心もふかし。

第四に行者・仏法を弘むる用心を明さば、夫れ仏法をひろめんとをまはんものは必ず五義を存して正法をひろむべし、五義とは一には教・二には機・三には時・四には国・五には仏法流布の前後なり、第一に教とは如来一代五十年

の説教は大小 權実 蹟密の差別あり、華嚴宗には五教を立て一代ををさめ其の中には華嚴・法華を最勝とし華嚴・法華の中に華嚴經を以て第一とす、南三・北七並に華嚴宗の祖師日本国の東寺の弘法大師・此の義なり、法相宗は三時に一代ををさめ其の中に深密法華經を一代の聖教にすぐれたりとす、深密法華の中 法華經は了義經の中の不了義經・深密經は了義經の中の了義經なり、三論宗に又二藏・三時を立つ三時の中の第三中道教とは般若・法華なり、般若・法華の中には般若最第一なり、真言宗には日本国に一の流あり東寺流は弘法大師十住心を立て第八法華・第九華嚴・第十真言・法華經は大日經に劣るのみならず猶華嚴經に下るなり、天台の真言は慈覺大師等大日經と法華經とは広略の異法華經は理秘密・大日經は事理俱密なり、淨土宗には聖道・淨土・難行・易行・雜行・正行を立てたり淨土の三部經より外の法華經等の一切經は難行・聖道・雜行なり、禪宗には一の流あり一切經・一切の宗の深義は禪宗なり一流は如來一代の聖教は皆言説 如來の口輪の方便なり禪師は如來の意密言説にをよばず教外の別伝なり、俱舍宗・成実宗・律宗は小乘宗なり天竺・震旦には小乘宗の者大乘を破する事これ多し日本国には其の義なし。

問うて云く諸宗の異義区なり――に其の謂れありて得道をなすべきか又諸宗皆謗法となりて一宗計り正義となるべきか、答えて云く異論相違ありといへども皆得道なるか、仏の滅後四百年にあたりて健駄羅國の迦式色迦王 仏法を貴み一夏・僧を供し仏法をといひに――の僧 異義多し此の王不審して云く仏説は定て一ならんと終に

協尊者に問う、尊者答て云く金杖を折つて種種の物につくるに形は別なれども金杖は一なり形の異なるをば争つといへども金たる事をあらそはず、門門不同なればいりかどをば争えども入理は一なり等と云云、又求那跋摩云く諸論各異端なれども修行の理は一無し偏執に是非有りとも達者は違諍無し等と云云、又五百羅漢の真因各異なれども同く聖理をえたり、大論の四悉檀の中の対治悉檀・揅論の四意趣の中の衆生意樂意趣 此等は此の善を嫌い

此の善をほむ、檀戒進等一一にそしり一一にはむる皆得道となる、此等を以てこれと思うに護法・清弁のあらそい智光・戒賢の空中・南三・北七の頓漸不定・二時・三時・四時・五時・四宗・五宗・六宗・天台の五時・華嚴の五教・真言教の東寺・天台の諍・淨土宗の聖道・淨土・禪宗の教外・教内、入門は差別せりといつとも実理に入る事は但一なるべきか。難じて云く華嚴の五教法相・三論の三時・禪宗の教外・淨土宗の難行・易行・南三・北七の五時等門はことなりといへども入理・一にして皆仏意に叶い謗法とならずといはば謗法といつ事あるべからざるか謗法とは法に背くといつ事なり法に背くと申すは小乗は小乗經に背き大乘は大乘經に背く法に背かばあに謗法とならざらん謗法とならばなんぞ苦果をまねかざらん、此の道理にそむくこれひとつ、大般若經に云く般若を謗する者は十方の大阿鼻地獄に墮つべし法華經に云く若し人信ぜずして乃至其の人命終して阿鼻地獄に入らんと涅槃經に云く世に難治の病三あり一には四重・二には五逆・三には謗大乘なり此等の經文あにむなしかるべき、此等は証文なり、されば無垢論師・大慢婆羅門・毘連禪師・嵩靈法師等は正法を謗して現身に大阿鼻地獄に墮ち舌口中に爛れたりこれは現証なり、天親菩薩は小乗の論を作つて諸大乘經をはしき、後に無著菩薩に対して此の罪を懺悔せんがために舌を切らんとくい給いき、謗法もし罪とならずんばいかなが千部の論師懺悔をいたすべき、闡提とは天竺の語此には不信と翻す不信とは一切衆生悉有仏性を信ぜざるは闡提の人と見たり。

不信とは謗法の者なり恒河の七種の衆生の第一は一闡提・謗法常没の者なり、第二は五逆・謗法常没等の者なりあに謗法ををそれざらん、答えて云く謗法とは只由なく仏法を謗するを謗法といつか我が宗をたてんがために余法を謗するは謗法にあらざるか、撰論の四意趣の中の衆生意樂意趣とは仮令人ありて一生の間・一善をも修せず但悪を作る者あり而るに小縁にあいて何れの善にてもあれ一善を修せんと申すこれは隨喜讚歎すべし、又善人あり

一生の間ただ一善を修す而るを他の善えうつさんがためにそのぜんをそしる、一事の中に於て或は呵し或は讃すといふこれなり、大論の四悉檀の中の対治悉檀又これをなじ、浄名經の彈呵と申すは阿含經の時ほめし法をそしるなり、此等を以てをもふに或は衆生多く小乗の機あれば大乘を謗りて小乗經に信心をまし或は衆生多く大乘の機なれば小乗をそしりて大乘經に信心をあつくす、或は衆生・弥陀仏に縁あれば諸仏をそしりて弥陀に信心をまさしめ、或は衆生多く地藏に縁あれば諸菩薩をそしりて地藏をほむ、或は衆生多く華嚴經に縁あれば諸經をそしりて華嚴經をほむ、或は衆生・大般若經に縁あれば諸經をそしりて大般若經をほむ、或は衆生・法華經・或は衆生・大日經等同く心うつべし、機を見て或は讃め或は毀る共に謗法とならず而るを機をしらざる者みだりに或は讃め或は毀るは謗法となるべきか、例せば華嚴宗・三論・法相・天台・真言・禪・淨土等の諸師の諸經をはして我が宗を立てるは謗法とならざるか。

難じて云く宗を立てんに諸經・諸宗を破し仏菩薩を讃むるに仏菩薩を破し他の善根を修せしめんがためにこの善根をはするくるしからずば阿含等の諸の小乗經に華嚴經等の諸大乘經をはしたる文ありや、華嚴經に法華・大日經等の諸大乘經をはしたる文これありや、答えて云く阿含・小乗經に諸大乘經をはしたる文はなけれども

華嚴經には二乘大乘・一乘をあげて二乘大乘をはし涅槃經には諸大乘經をあげて涅槃經に対してこれをはす、密嚴經には一切經中王ととき無量義經には四十余年・耒顛眞実ととかれ阿弥陀經には念仏に対して諸經を小善根ととかる、これらの例一にあらず故に又彼の經經による人師皆此の義を存せり、此等をもつて思うに宗を立てる

方は我が宗に対して諸經を破るはくるしからざるか、難じて云く華嚴經には小乗・大乘・一乘とあげ密嚴經には一切經中王ととかれ涅槃經には是諸大乘とあげ阿弥陀經には念仏に対して諸經を小善根ととかれたれども無量義經のごとく四十余年と年限を指して其の間の大部の諸經・阿含・方等・般若・華嚴等の名をよびあげて勝劣を

とける事これなし、涅槃經の是諸大乘の文計りこそ雙林最後の經としては是諸大乘ととかれたれば涅槃經には一切經は嫌はるかとをばつれども是諸大乘經と挙げて次ぎ下に諸大乘經を列ねたるに十二部修多羅方等般若等とあげたり無量義經法華經をば載せず、但し無量義經に挙ぐるところは四十余年の阿含方等般若華嚴經をあげたり、いまだ法華經涅槃經の勝劣はみず密嚴に一切經中王とはあげたれども一切經をあぐる中に華嚴勝鬘等の諸經の名をあげて一切經中王とく故に法華經等とはみず、阿彌陀經の小善根は時節もなし善根の相貌もみず、たれかしる小乘經を小善根といつか又人天の善根を小善根といつか又觀經雙觀經の所説の諸善を小善根といつかいまだ一代を念仏に對して小善根といつとはきこえず。

又大日經六波羅蜜經等の諸の秘教の中にも一代の一切經を嫌つてその經をほめたる文はなし、但し無量義經計りこそ前四十余年の諸經を嫌ひ法華經一經に限りて已説の四十余年今説の無量義經當説の未來にくべき涅槃經を嫌つて法華經計りをほめたり、釈迦如来過去現在未來の三世の諸仏世にいで給いて各各一切經を説きたまふ給うにいつれの仏も法華經第一なり、例せば上郎下郎不定なり田舎にしては百姓郎從等は侍を上郎といふ、洛陽にして源平等已下を下郎といふ三家を上郎といふ、又主を王といはば百姓も宅中の王なり地頭領家等も又村郷郡國の王なりしかれども大王にはあらず、小乘經には無為涅槃の理が王なり小乘の戒定等に對して智慧

は王なり、諸大乘經には中道の理が王なり又華嚴經は円融相即の王般若經は空理の王大集經は守護正法の王藥師經は藥師如来の別願を説く經の中の王雙觀經は阿彌陀仏の四十八願を説く經の中の王大日經は印真言を説く經の中の王二代一切經の王にはあらず、法華經は真諦俗諦空仮中印真言無為の理十二大願四十八願一切諸經の所説の所詮の法門の大王なり、これ教をしれる者なり而るを善無畏金剛智不空法藏澄觀慈恩嘉祥南三北七曇鸞道綽善導達磨等の我が所立の依經を一代第一といえるは教をしらざる者なり、但し一切

にんし 人師の中には天台智者大師一人教をしれる人なり、曇鸞道綽等の聖道、淨土・難行・易行・正行・雜行は源と十住
びしゃもんろん 毘婆沙論に依る彼本論に難行の内に法華・真言等を入ると謂は僻案なり、論主の心と論の始中終をしらざる失あり
じんみつ 慈恩が深密經の三時に一代をしる事、又本經の三時に一切經の損らざる事をしらざる失あり、法蔵・澄觀等が五
いちだい 教に一代をしる中法華經・華嚴經を円教と立て又華嚴經は法華經に勝れたりともえるは所依の華嚴經に二乘
さぶつ 作仏・久遠実成をあかさざるに記小久成ありともひ華嚴よりも超過の法華經を我經に劣ると謂うは僻見なり、三論の
かじょう 嘉祥の二藏等又法華經に般若經すべきたりとをもう事は僻案なり、善無畏等が大日經は法華經に勝れたりといふ
ほけきょう 法華經の心をしらざるのみならず大日經をしらざる者なり。

問て云く此等皆謗法ならば惡道に墮ちたるか如何、答て云く謗法に上中下雜の謗法あり慈恩・嘉祥・澄觀等が謗法は
じょう 上中の謗法が其上自身も謗法としれるか問、悔還す筆これあるか、又他師をしるに二あり能破似破これなり教はまさ
りとしれども是非をあらはさんがために法をしる、これは似破なり、能破とは實にまされる經を劣と

をもつてこれをしる、これは惡能破なり、又現にをとれるをしる、これ善能破なり、但し脇尊者の金杖の譬は小乘經は
多しといえども同じ苦・空・無常・無我の理なり、諸人同く此の義を存して十八部・二十部相ひ諍論あれども但門の諍に
て理の諍にはあらず故に共に謗法とならず、外道が小乘經を破するは外道の理は常住なり、小乘經の理は無常なり
空なり故に外道が小乘經をしるは謗法となる、大乘經の理は中道なり、小乘經は空なり、小乘經の者が大乘經
をしるは謗法となる大乘經の者が小乘經をしるは破法とならず、諸大乘經の中の理は未開会の理いまだ記小
久成これなし法華經の理は開会の理、記小久成これあり、諸大乘經の者が法華經をしるは謗法となるべし法華經の者
の諸大乘經を謗するは謗法となるべからず、大日經・真言宗は未開会、記小久成なくば法華經已前なり開会、記小久成
を許さば涅槃經とをなじ、但し善無畏・三藏・金剛智・不空・一行等の性惡の法門・一念三千の法門は天台智者の法門をぬ

すめるか、若し爾らば善無畏等の謗法は似破か又雜謗法か五百羅漢の真因は小乘十二因縁の事なり無明行等を縁として空理に入ると見たり、門は諍えども謗法とならず撰論の四意趣・大論の四悉檀等は無著菩薩・竜樹菩薩滅後の論師として法華經を以て一切經の心をえて四悉四意趣等を用いて爾前の經經の意を判するなり未開会の四意趣・四悉檀と開会の四意趣・四悉檀を同ぜば、あに謗法にあらずや此等をよくよくしるは教をしれる者なり、四句あり一に信而不解・二に解而不信・三に亦信亦解・四に非信・非解、問うて云く信而不解の者は謗法なるか答えて云く法華經に云く「信を以て入ることを得」と等と云云、涅槃經の九に云く難じて云く涅槃經

三十六に云く我契經の中に於て説く二種の人有り仏法僧を謗すと、一には不信にして瞋恚の心あるが故に二には信ずと雖も義を解せざるが故に善男子若し人信心あつて智慧有ること無き是の人は則ち能く無明を増長す若し智慧有つて信心あること無き是の人は則ち能く邪見を増長す善男子・不信の人は瞋恚の心あるが故に説いて仏法僧宝有ること無しと言わん、信者は慧無く顛倒して義を解するが故に法を聞く者をして仏法僧を謗せしむ等と云云、

此の二人の中には信じて解せざる者を謗法と説く如何、答えて云く此の信而不解の者は涅槃經の三十六に恒河の七種の衆生の第二の者を説くなり、此の第二の者は涅槃經の一切衆生悉有仏性の説を聞いて之を信ずと雖も又不信の者なり。問うて云く如何ぞ信ずと雖も不信なるや、答えて云く一切衆生悉有仏性の説を聞きて之を信ずと雖も又心を爾前の經に寄する一類の衆生をば無仏性の者と云ふなり此れ信而不信の者なり問うて云く証文如何、答えて云く恒河第二の衆生を説いて云く經に云く「是くの如き大涅槃經を聞くことを得て信心を生ず是を名けて出と為す」と又云く「仏性は是れ衆生に有りと信ずと雖も必ずしも一切皆悉く之有らず是の故に名けて信不具足と為す」文此の文の如くんば口には涅槃を信ずと雖も心に爾前の義を存する者なり又此の第二の人を説いて云く「信する者に」

して慧なく無く顛倒てんだうして義を解するが故ゆゑに等と云云、顛倒解義とは実經の文を得て樞經の義を覚さとる者なり。

問うて云く信而不解得道の文如何、答えて云く涅槃經の三十二に云く是れ菩提の因は復無量なりと雖も若し信心を説けば已に摂尽す文九に云く此の經を聞き已つて悉く皆菩提の因縁と作る法声光明毛孔に入る者は必定して当に阿耨多羅三藐三菩提を得べし等と云云、法華經に云く信を以て入ることを得等と云云、問うて云く解而不信の者は如何、答う恒河の第一の者なり、問うて云く証文如何、答えて云く涅槃經の三十六に第一を説て

云く「人有りて是の大涅槃經の如来常住無有变易常樂我淨を聞くとともに終に畢竟して於涅槃の一切衆生悉有仏性に入らざるは一闡提の人なり方等經を謗し五逆罪を作り四重禁を犯すとも必ず当に菩提の道を成ずることを得べし須陀の人斯陀含の人阿那含の人阿羅漢の人辟支仏等必ず当に阿○菩提を成ずることを得べし是の語を聞き已つて不信の心を生ず」と等と云云。

問うて云く此の文不信とは見えたり解而不信とは見えす如何、答えて云く第一の結文に云く「若し智慧有つて信心有ること無き是の人は則ち能く邪見を増長す」と文。

抑も希に人身をつけ適ま仏法をきけり、然るに法に浅深あり人に高下ありと云へり何なる法を修行してか速に仏になり候べき願くは其の道を聞かんと思ふ、答えて云く家家に尊勝あり国国に高貴あり皆其の君を貴み其の親を崇むといへども豈國王にまさるべきや、爰に知んぬ大小権実は家家の争ひなれども一代聖教の中には法華独り勝れたり、是れ頓証菩提の指南、直至道場の車輪なり、疑つて云く人師は経論の心を得て釈を作る者なり然らば則ち宗宗の人師、面面、各各に教門をしつらひ釈を作り義を立て証得菩提と志す何ぞ虚しかるべきや、然るに法華独り勝ると候はば心せばこそ覚え候へ答えて云く法華独りいみじと申すが心せば候はば釈尊程心せば人は世に候はじ何ぞ誤りの甚しきや、且く一経・一流の釈を引いて其の迷をさとらせん、無量義経に云く「種種に法を説き種種に法を説くこと方便力を以てす四十余年未だ真実を顕さず」云云、此の文を聞いて大莊嚴等の八万人の菩薩・一同に「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐるとも終に無上菩提を成ずることを得ず」と領解し給へり、此の文の心は華嚴・阿含・方等・般若の四十余年の経に付いていかに念仏を申し禅宗を持ちて仏道を願ひ無量無辺・不可思議阿僧祇劫を過ぐるとも無上菩提を成ずる事を得じと云へり、しかのみならず方便品には「世尊は法久くして後要当に真実を説きたもうべし」ととき、又唯一乘法無二亦無三と説きて此の経ばかりまことなりと云い又二の巻には「唯我一人のみ能く救護を為す」と教へ但樂いて大乘經典を受持して乃至余經の一偈をも受けず」と説き給へり、文の心はただわれ一人してよくすくひ・まもる事をなす、法華經をつけたもたん事をねがひて余經の一偈をもつけざれと見えたり、又云く「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば則ち一切世間の仏種を

断ぜん乃至其の人命終して阿鼻獄に入らんと云云、此の文の心は若し人此の経を信ぜずして此の経にそむかば則ち一切世間の仏のたねをたつものなり。その人は命をはらば無間地獄に入るべしと説き給へり、此等の文をつけて天台は將非魔作仏の詞正く此の文によりりと判じ給へり、唯人師の釈計りを憑みて仏説によらずば何ぞ仏法と云う名を付くべきや言語道断の次第なり、之に依つて智証大師は經に大小なく理に偏円なしと云つて一切人によらば仏説無用なりと釈し給へり、天台は若し深く所以有り復修多羅と合せるをば録して之を用ゆ無文無義は信受す可からずと判じ給へり、又云く文証無きは悉く是れ邪の謂いとも云へり、いかが心得べきや。

問うて云く人師の釈はさも候べし爾前の諸經に此の經第一とも説き諸經の王とも宣べたり若し爾らば仏説なりとも用うべからず候か如何、答えて云く設い此の經第一とも諸經の王とも申し候會是れ權教なり其の語によるべからず、之に依つて仏は了義經によりて不了義經によらざれ」と説き妙樂大師は縦い經有りて諸經の王と云うとも已今當説最為第一と云わざれば兼但对帶其の義知んぬ可しと釈し給へり、此の釈の心は設ひ經ありて諸經の王とは云うとも前に説きつる經にも後に説かんずる經にも此の經はまされりと云はずば方便の經としれと云う釈なり、されば爾前の經の習として今説く經より後に又經を説くべき由を云はざるなり、唯法華經計りこそ最後の極説なるが故に已今當の中に此の經独り勝れたりと説かれて候へされば釈には唯法華に至つて前教の意を説いて今教の意を顯す」と申して法華經にて如来の本意も教化の儀式も定りたりと見えたり、之に依つて天台は如来成道四十余年未だ眞実を顯さず法華始めて眞実を顯す」と云へり、此の文の心は如来世に出でさせ給いて四十余年が間は眞実の法をば顯さず法華經に始めて仏になる実の道を顯し給へりと釈し給へり。

問うて云く已今當の中に法華經勝れたりと云う事はさも候べし、但し有人師の云く四十余年未顯眞実と云うは法華經にて仏になる声聞の爲なり爾前の得益の菩薩の爲には未顯眞実と云うべからずと云う義をばいかが心得

候べきや、答えて云く法華經は二乗の爲なり菩薩の爲にあらず、されば末頭眞実と云う事二乗に限る可しと云うは徳一
大師の義か此れは法相宗の人なり、此の事を伝教大師破し給うに「現在の食者は偽章数巻を作りて、法を謗し人を
謗す何ぞ地獄に墮せざらんや」と破し給ひしかば徳一は其の語に責められて舌八にさけてつせ給い
き、末頭眞実とは二乗の爲なりと云はば最も理を得たり、其の故は如来布教の元旨は元より二乗の爲なり一代の化儀三
周の善巧併ら二乗を正意とし給へり、されば華嚴經には地獄の衆生は仏になるとも二乗は仏になるべからずと嫌い
方等には高峯に蓮の生ざるように二乗は仏の種をいりたりと云はれ、般若には五逆罪の者は
仏になるべし二乗は叶うべからずと捨てらる、かかるあさましき捨者の仏になるを以て如来の本意とし法華經の規模とす、
之に依つて天台の云く「華嚴大品も之を治すること能わず唯法華のみ有りて能く無学をして還つて善根を生じ仏道を成ず
ることを得せしむ所以に妙と称す、又闡提は心有り猶作仏す可し二乗は智を滅す心生ず可か
らず法華能く治す復称して妙と爲す」と云云、此の文の心は委く申すに及ばず誠に知んぬ華嚴・方等・大品等の法薬も
二乗の重病をばいやさず又三惡道の罪人をも菩薩ぞと爾前の經にはゆるせども二乗をばゆるさず、之に依つて妙樂
大師は「余趣を實に会すること諸經に或は有れども二乗は全く無し故に菩薩に合して二乗に對し難き
に従つて説く」と釈し給えり、しかのみならず二乗の作仏は一切衆生の成仏を顯すと天台は判じ給へり、修羅が大海を渡
らんをば是れ難しとやせん、嬰兒の力士を投ん何ぞたやすしとせん、然らば則ち仏性の種あるものは仏になるべしと爾前
にも説けども未だ焦種の著作仏すべしとは説かず、かかる重病をたやすくいやすは独り法華の
良薬なり、只須く汝仏にならんと思はば慢のはたほこをたをし忿りの杖をすて偏に二乗に歸すべし、名聞名利は今生
のかざり我慢偏執は後生のほだしなり、嗚呼恥づべし恥づべし恐るべし恐るべし。

問うて云く一を以て万を察する事なればあらあら法華のいわれを聞くに耳目始めて明かなり、但し法華經を

はいかように心得候てか速に菩提の岸に到るべきや、伝え聞く一念三千の大虚には慧日くもる事なく一心三觀の広池には智水にこる事なき人こそ其の修行に堪えたる機にて候なれ、然るに南都の修学に臂をくだく事なかりしかば瑜伽唯識にもくらし北嶺の学文に眼をさらさざりしかば止觀玄義にも迷へ、天台・法相の両宗はほとぎを蒙りて壁に向へるが如し、されば法華の機には既にもれて候にこそ何んがし候べき、答えて云く利智精進にして観法修行するのみ法華の機ぞと云つて無智の人を妨ぐるは当世の学者の所行なり是れ還つて愚癡邪見の至りなり、一切衆生皆成仏道の教なれば上根・上機は觀念・觀法も然るべし下根・下機は唯信心肝要なり、されば經には「淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして十方の仏前に生ぜん」と説き給へり、いかにも

信じて次の生の仏前を期すべきなり、譬えば高き岸の下に人ありて登ることあたはざらんに又岸の上に人ありて繩をおろして此の繩にとりつかば我れ岸の上に引き登さんと云はんに引く人の力を疑ひ繩の弱からん事をあやぶみて手を納めて是をとらざらんが如し争か岸の上に登る事をつげ、若し其の詞に随ひて手をのべ是をとらへ

ば即ち登る事をつべし、唯我一人能為救護の仏の御力を疑ひ以信得人の法華經の教への繩をあやぶみて決定無有疑の妙法を唱牽らざらんは力及ばず菩提の岸に登る事難かるべし、不信の者は墮在泥梨の根元なり、されば經には「疑を生じて信ぜざらん者は則ち當に惡道に墮つべし」と説かれたり、受けがたき人身をつけ値いがたき佛法にあひて争か虚く候べきぞ、同じく信を取るならば又大小・權実のある中に諸仏出生の本意・衆生成仏の

直道の一乘をこそ信ずべけれ、持つ処の御經の諸經に勝れてましませば能く持つ人も亦諸人にまされり、爰を以て經に云く「能く是の經を持つ者は一切衆生の中に於て亦為第一なり」と説き給へり大聖の金言疑ひなし、然る

に人此の理をしらず見ずして名聞・狐疑・偏執を致せるは墮獄の基なり、只願くは經を持ち名を十方の仏陀の願海に流し譽れを三世の菩薩の慈天に施すべし、然れば法華經を持ち奉る人は天竜・八部・諸大菩薩を以て我が眷屬と

する者なり、しかのみならず因身の肉団に果満の仏眼を備有為の凡膚に無為の聖衣を著ぬれば三途に恐れなく八難に
はばかり、七方便の山の頂に登りて九法界の雲を払ひ無垢地の園に花開け法性の空に月明かならん、是人於仏道決定
無有疑の文憑あり唯我一人能為救護の説疑ひなく、一念信解の功德は五波羅蜜の行に越五十展転
の随喜は八十年の布施に勝れたり、頓証菩提の教は遙に群典に秀で顕本遠寿の説は永く諸乘に絶えたり、爰を以て八歳
の童女は大海より来つて經力を剎那に示し本化の上行は大地より涌出して仏寿を久遠に顕す言語道断の經王心行所滅
の妙法なり、然るに此の理をいるかせにして余經にひとしむるは謗法の至り大罪の至極なり、譬
を取るに物なし、仏の神変にても何ぞ是を説き尽きん菩薩の智力にても争か是を量るべき、されば譬喩品に云く「若し其の
罪を説かば劫を窮むとも尽きず」と云へり文の心は法華經を一度もそむける人の罪をば劫を窮むとも説き尽し難しと見え
たり、然る間三世の諸仏の化導にももれ恒沙の如來の法門にも捨てられ冥きより冥きに入つ
て阿鼻大城の苦患争か免れん誰か心あらん人、長劫の悲みを恐れざらんや、爰を以て經に云く「經を讀誦し書持すること
有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん其の人命終して阿鼻獄に入らんと云云、文の心は法華經をよみたもたん者
を見てかろしめいやしみにくみそねみうらみをむすばん其の人は命をはりて阿鼻大城に入らん
と云へり、大聖の金言誰か是を恐れざらんや、正直捨方便の明文豈是を疑うべきや、然るに人皆經文に背き世悉く法理
に迷へり汝何ぞ惡友の教に隨はんや、されば邪師の法を信じ受くる者を名けて毒を飲む者なりと天台は釈し給へり汝
能く是を慎むべし是を慎むべし。

倩ら世間を見るに法をば貴しと申せども其の人をば万人是を惡む汝能く能く法の源に迷へり何にと云うに一切の
草木は地より出生せり、是を以て思うに一切の佛法も又人によりて弘まるべし之に依つて天台は仏世すら猶人を以て法
を顯はず末代いつくんぞ法は貴けれども人は賤しと云はんやとこそ釈して御坐候へされば持た

る法だに第一ならば持つ人随つて第一なるべし、然らば則ち其の人を毀るは其の法を毀るなり其の子を賤しむるは即ち其の親を賤しむなり、爰に知んぬ当世の人は詞と心と総てあはず孝経を以て其の親を打つが如し豈冥の照覧恥かしからざらんや地獄の苦み恐るべし恐るべし慎むべし慎むべし、上根に望めても卑下すべからず下根を捨てざるは本懷なり、下根に望めても 慢ならざれ上根ももる事あり心をいたさざるが故に凡そ其の里ゆかし

けれども道たえ縁なきには通ふ心もをろそかに其の人恋しけれども憑めず契らぬには待つ思もなをざりなるやうに彼の月卿雲閣に勝れたる靈山浄土の行きやすきにも未だゆかず我即是父の柔の御すがた見奉るべきをも未だ見奉らず、是れ誠に袂をくだし胸をこがす歎ならざらんや、暮行空の雲の色有明方の月の光までも心をもよほす思なり、事にふれをりに付けても後世を心につけ花の春雪の朝も是を思ひ風さはぎ村雲まよふ夕にも忘るる

隙なかれ、出ずる息は入る息をまたず何なる時節ありてか毎自作是念の悲願を忘れ何なる月日ありてか無一不成仏の御経を持たざらん、昨日が今日になり去年の今年となる事も是れ期する処の余命にはあらざるをや、総て

過ぎにし方をかぞへ今年を積るをば知るといへども今行末にをいて一日片時も誰か命の数に入るべき、臨終已に今にありとは知りながら我慢偏執・名聞利養に著して妙法を唱牽らざらん事は志の程無下にかひなし、さこそは皆成仏道の御法とは云いながら此の人争でか仏道にものづからざるべき、色なき人の袖にはそぞろに月のやどる事かは、又命已に一念

にすぎざれば仏は一念随喜の功德と説き給へり、若し是れ一念三念を期すと云はば平等大慧の本誓頓教一乘皆成仏の法とは云はるべからず、流布の時未世法滅に及び機は五逆謗法をも納めたり、

故に頓証菩提の心におきてられて狐疑執著の邪見に身を任する事なかれ、生涯幾くならず思は一夜のかりの宿を忘れて幾くの名利をか得ん、又得たりとも是れ夢の中の栄珍しからぬ楽みなり、只先世の業因に任せて営むべし世間の無常をさとらん事は眼に遮り耳にみてり、雲とやなり雨とやなりけん昔の人は只名をのみ

きく、露とや消え煙とや登りけん今の友も又みえず、我れいつまでか三笠の雲と思ふべき春の花の風に随ひ秋の紅葉の時雨

に染まる、是れ皆ながらへぬ世の中のためしなれば法華経には「世皆牢固ならざること水沫泡焰の如し」とすすめたり」以

何令衆生得入無上道「の御心のそ順縁逆縁の御ことは已に本懐なれば暫くも持つ者も又

本意にかないぬ又本意に叶はば仏の恩を報ずるなり、悲母深重の経文心安ければ唯我一人の御苦みもかつかつやすみ

給うらん、釈迦一仏の悦び給うのみならず諸仏出世の本懐なれば十方三世の諸仏も悦び給うべし「我即歡喜諸仏亦然」

と説かれたれば仏悦び給うのみならず神も即ち隨喜し給うなるべし、伝教大師是を講じ給ひしか

ば八幡大菩薩は紫の袈裟を布施し、空也上人是を読み給ひしかば松尾の大明神は寒風をふせがせ給う、されば「七難

即滅・七福即生」と祈らんにも此の御経第一なり現世安穩と見えたればなり、他国侵逼の難・自界叛逆の難の御祈にも

此の妙典に過ぎたるはなし、令百由旬内無諸衰患と説かれたればなり。

然るに当世の御祈はさかさまなり先代流布の権教なり末代流布の最上真実の秘法にあらざるなり、譬えば去年の曆

を用ゐる鳥を鵲につかはんが如し是れ偏に権教の邪師を賣んで未だ実教の明師に値わせ給はざる故なり、惜いかな文武の

平和があら玉何くにか納めけん、嬉しいかな釈尊出世の譬の中の明珠今度我身に得たる事よ、十方諸仏の証誠として、

いるがせならず、さこそは「一切世間多怨難信」と知りながら争か一分の疑心を残して決定

無有疑の仏にならざらんや、過去遠遠の苦みは徒らにのみこそうけこしか、などが暫く不變常住の妙因をうへざらん

未来永永の樂みはかつかつ心を養ふともしゐてあながちに電光朝露の名利をば貪るべからず、「三界無安猶如火宅」は

如来の教へ所以諸法如幻如化は菩薩の詞なり、寂光の都ならずは何くも皆苦なるべし

本覺の栖を離れて何事か樂みなるべき、願くは「現世安穩・後生善処」の妙法を持つのみこそ只今生の名聞・後世の弄引

なるべけれ須く心を一にして南無妙法蓮華經と我も唱・他をも勸んのみこそ今生人界の思出なるべき、

南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

日蓮 花押

六四 木絵二像開眼之事

文永元年

四十三歳御作

468P

仏に三十二相有す皆色法なり、最下の千輻輪より終り無見頂相に至るまでの三十一相は可見有対色なれば書きつべし作りつべし梵音声の二相は不可見無対色なれば書く可らず作る可らず、仏滅後は木画の二像あり是れ三十一相にして梵音声かけたり故に仏に非ず又心法かけたり、生身の仏と木画の二像を対するに天地雲泥なり、何ぞ涅槃の後分には生身の仏と滅後の木画の二像と功德齊等なりといふや又大瓔珞経には木画の二像は生身の仏に

はをとれりととけり、木画の二像の仏の前に経を置けば三十一相具足するなり、但心なければ三十二相を具すれども必ず仏にあらず人天も三十二相あるがゆへに、木絵の三十一相の前に五戒経を置けば此の仏は輪王とひとし、十善論と云うを置けば帝釈とひとし、出欲論と云うを置けば梵王とひとし全く仏にあらず、又木絵二像の前

に阿含経を置けば声聞とひとし、方等般若の一時一会の共般若を置けば縁覚とひとし、華嚴方等般若の別円を置けば菩薩とひとし全く仏に非らず、大日経・金剛頂経・蘇悉地経等の仏眼・大日の印真言は名は仏眼・大日といども其の義は仏眼・大日に非ず、例せば仏も華嚴経は円仏には非ず名にはよらず三十一相の仏の前に法華経を置き

たてまつれば必ず純円の仏なり云云、故に普賢経に法華経の仏を説て云く「仏の三種の身は方等より生ず」文、是の方等は方等部の方等に非ず法華を方等といふなり、又云く「此の大乗経は是れ諸仏の眼なり諸仏是に因つて五眼を具することを得る」等云云、法華経の文字は仏の梵音声の不可見無対色を可見有対色のかたちとあらはし

ぬれば顯形の二色となれるなり、滅せる梵音声ぼんおんしやうかつて形をあらはして文字もんじと成つて衆生を利益するなり、人の声を出すに二つあり、一には自身は存ぜざれども人をたぶらかさむがために声をいたす是は隨他意ずいたいの聲、自身の思を声にあらはす事ありされば意が声とあらはる意は心法・声は色法・心より色をあらはす、又声を聞いて心を知る色法が心法を顯すなり、色心不二なるがゆへに而二とあらはれて仏の御意みいあらはれて法華の文字もんじとなれり、
もんじ 文字變じて又仏の御意みいとなる、されば法華經をよませ給はむ人は文字もんじと思食事おほしめすことなかれすなわち仏の御意みいなり、故に天台の釈に云く「請を受けて説く時は只是れ教の意を説く教の意は是れ仏意・佛意即是れ仏智なり、仏智至て深し是故に三止四請す、此の如き艱難かんなんあり余經に比するに余經は則易し、此文の釈の中に仏意と申すは色法ををさへ

心法といふ釈なり、法華經を心法とさだめて三十一相の木絵の像に印すれば木絵二像の全体・生身の仏なり、草木成仏といふは是なり、故に天台は「一色一香無非中道」と云云、妙樂是をうけて釈に「然るに亦俱に色香中道を許せども無情・佛性は耳を惑わし心を驚かす云云、華嚴の澄觀が天台の一念三千をぬすみて華嚴にさしいれ法華・華嚴ともに一念三千なり、但し華嚴は頓頓・さきなれば法華は漸頓のちなれば華嚴は根本・さきをしぬれば法華は

枝葉等といふて我理をえたりとおもへる意・山の如し然りと雖も一念三千の肝心・草木成仏を知らざる事を妙樂のわらひ給へる事なり、今の天台の學者等我一念三千を得たりと思ふ、然りと雖も法華をもつて或は華嚴に同じ、或は大日經に

同ず其の義を論ずるに澄觀のを見を出す善無畏不空に同ず、詮を以て之を謂わば今の木絵二像を真言師を以て之を供養すれば実仏に非ずして權仏なり權仏にも非ず形は仏に似たれども意は本の非情の草木なり、又本の非情の草木にも非ず魔なり鬼なり、真言師が邪義・印真言と成つて木絵二像の意と成れるゆへに例せば人の思變じて石と成り俱留と黃夫石が如し、法華を心得たる人・木絵二像を開眼供養せざれば家に主のなきに盜人が入り人の死するに其の身に鬼神入るが如し、今真言を以て日本の仏を供養すれば鬼入つて人の命をつばふ鬼をば

奪命者といふ魔入つて功德をうばふ魔をば奪功德者といふ、鬼をあがむるゆへに今生には国をほろぼす魔をたとむゆへに後生には無間獄に墮す、人死すれば魂去り其の身に鬼神入り替つて子孫を亡ぼす、餓鬼といふは我をくらふといふ是なり、智者あつて法華經を讚歎して骨の魂となせば死人の身は人身心は法身・生身得忍といふ

法門是なり、華嚴・方等・般若の円をさとれる智者は死人の骨を生身得忍と成す、涅槃經に身は人身なりと雖も心は仏心に同ずといへるは是なり、生身得忍の現証は純陀なり、法華を悟れる智者死骨を供養せば生身即法身是を即身といふ、さりぬる魂を取り返して死骨に入れて彼の魂を変えて仏意と成す成仏是なり、即身の二字は色法・成仏

の二字は心法・死人の色心を変えて無始の妙境・妙智と成す是れ則ち即身成仏なり、故に法華經に云く「所謂諸法如是相死人の身如是性同く心如是体同く色心等」云云、又云く「深く罪福の相に達してく十方を照したまう微妙の淨き法身相を具せること三十二等」云云、上の二句は生身得忍・下の二句は即身成仏・即身成仏の手本は竜女是なり生身得忍の手本は純陀是なり。

六五 女人成仏抄

文永二年四十四歳御作

470P

提婆品に云く「仏告諸比丘未來世中乃至蓮華化生」等云云、此の提婆品に二箇の諫曉あり所謂達多の弘經釈尊の成道を明し又文殊の通經・竜女の作仏を説く、されば此の品を長安宮に一品切り留めて二十七品を世に流布する間・秦の代より梁の代に至るまで七代の間の王は二十七品の經を講読す、其の後滿法師と云いし人此の品法華經になき由を讀み出され候いて後・長安城より尋ね出し今は二十八品にて弘まらせ給つ、さて此の品に淨心信敬の人

のことを云うに一には三惡道に墮せず二には十方の仏前に生ぜん三には所生の処には常に此の經を聞かん四には若し人天の中に生ぜば勝妙の樂を受けん五には若し仏前に在らば蓮華より化生せんとなり、然るに一切衆生は法性真如の都を迷い出でて妄想顛倒の里に入りしより已來身口意の三業になすところ善根は少く惡業は多し、されば經文には一人一日の中に八億四千念あり念念の中に作す所皆是れ三途の業なり等云云、我等衆生三界二十五有

のちまたに輪回せし事鳥の林に移るが如く死しては生じ生じては死し車の場に回るが如く始め終りもなく死し生ずる惡業深重の衆生なり、愛を以て心地觀經に云く有情輪回して六道に生ずること猶車輪の始終無きが如く、或は父母と爲り男女と爲り生生世世互に恩有り」等云云、法華經二の卷に云く「三界は安きこと無し猶火宅の如く衆苦充滿せり」云云、涅槃經二十二に云く「菩薩摩訶薩諸の衆生を觀するに色香味触の因縁の爲の故に昔無量無數劫より以來常に苦惱を受く、一の衆生一劫の中に積る所の身の骨は王舍城の毘富羅山の如く飲む所の

乳汁は四海の水の如く身より出す所の血は四海の水より多く父母兄弟妻子眷屬の命終に涕泣して出す所の目淚は四大海の水より多し、地の草木を尽くして四寸の簍と爲して以て父母を数づるに亦尽くすこと能わじ、無量劫より已來或地獄・畜生・餓鬼に在つて受くる所の行苦稱計す可からず亦一切衆生の骸骨をや」云云、是くの如くいたづらに命を捨るところの骸骨は毘富羅山よりも多し恩愛あはれみの淚は四大海の水よりも多けれども佛法の爲には一骨をもなげず、一句一偈を聽聞して一滴の涙をもおとさめゆへに三界の籠樊を出でずして二十五

有のちまたに流轉する衆生にて候なり、然る間如何として三界を離るべきと申すに佛法修行の功力に依つて無明のやみはれて法性真如の覺を開くべく候、さては佛法は何なるをか修行して生死を離るべきぞと申すに但一乘・妙法にて有るべく候、されば慧心僧都・七箇日・加茂に參籠して出離生死は何なる教にてか候べきと祈請申され候いに明神御託宣に云く「釈迦の説教は一乘に留まり諸仏の成道は妙法に在り菩薩の六度は蓮華に在り二乗の得道

は此の経に在り云云、普賢經に云く「此の大乗經典は諸仏の宝蔵なり十方三世の諸仏の眼目なり三世の諸の如来を出生する種なり云云、此の経より外はすべて成仏の期有るべからず候上殊更女人成仏の事は此の経より外は更にゆるさず、結句爾前の経にてはをびたたく嫌はれたり、されば華嚴經に云く女人は地獄の使なり能く仏の種子を断ず外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し云云、銀色女經に云く三世の諸仏の眼は大地に墮落すとも法界の諸の女人は永く成仏の期無し云云、或は又女人には五障三従の罪深しと申す、其れは内典には五障を明し外典には三従を教えたり、其の三従とは少くしては父母に従ひ盛にしては夫に従ひ老いては子に従ふ一期身を心に任せず、されば榮啓期が三樂を歌ひし中にも女人と生れざるを以て一樂とす、天台大師云く他經

には但菩薩に記して二乗に記せず但男に記して女に記せずとて全く余經には女人の授記これなしと釈せり、其上釈迦・多宝の二仏塔中に並坐し給ひし時・文殊・妙法を弘めん為に海中に入り給いて・仏前に歸り参り給ひしかば宝淨世界の多宝仏の御弟子・智積菩薩は竜女成仏を難じて云く「我釈迦如来を見たてまつれば無量劫に於て難行苦行し功を積み・徳を累ね菩薩の道を求むること未だ曾つて止息したまわず、三千大千世界を觀るに乃至芥子の如き許りも是れ菩薩の身命を捨てたもう・処に非ざること有ること無し、衆生の為の故なり」と等云云、所謂智積

・文殊・再三問答いたし給う間は八万の菩薩・万二千の聲聞等何れも耳をすまして御聽聞計りにて一口の御助言に及ばず、然るに智慧第一の舍利弗・文殊の事をば難する事なし多くの故を以て竜女を難ぜらる所以に女人は垢穢にして是れ法器に非ずと小乗・權教の意を以て難ぜられ候いしかば文殊が竜女成仏の有無の現証は今・仏前にして見え候べしと仰せられ候いしに、案にたがはず八歳の竜女蛇身をあらためずして・仏前に参詣し・値直三千大千世界と説かれて候・如意宝珠を仏に奉りしに、仏悦んで是を請取り給ひしかば此の時智積菩薩も舍利弗も不審を開き女人成仏の路をふみわけ候、されば女人成仏の手段はより起つて候・委細は五の卷の經文之を讀む可く候、

伝教大師の秀句に云く「能化の竜女歴劫の行無く所化の衆生も歴劫の行無し能化所化俱に歴劫無し妙法経力・即身成仏す」天台の疏に云く「智積は別教に執して疑いを為し竜女は円を明して疑いを釈く身子は三蔵の権を挾んで難ず竜女は一実を以て疑いを除く」海竜王経に云く「竜女作仏し国土を光明国と号し名をば無垢証如来と号す」云云、法華已前の諸経の如きは縦い人中・天上の女人なりといふとも成仏の思絶たるべし、然るに竜女・畜生道の衆生として戒緩の姿を改めずして即身成仏せし事は不思議なり、是を始として釈尊の姨母・摩訶波闍波提比丘尼

等・勸持品にして一切衆生喜見如来と授記を被り羅羅之母・耶輸陀羅女も眷属の比丘尼と共に具足千万光相如来と成り、鬼道の女人たる十羅刹女も成仏す、然れば尚殊に女性の御信仰あるべき御経にて候、抑此の経の一文一句を読み一字一点を書く尚出離生死・証大菩提の因なり、然れば彼の字に結縁せし者・尚炎魔の庁より歸され六十四字を書し人は其の父を天上へ送る、何に況や阿鼻の依正は極聖の自心に処し地獄・天宮皆是れ果地の如来なり、毘盧の身土は凡下の一念を逾ず遮那の覺体も衆生の迷妄を出でず妙文は靈山浄土に増し六万九千の露点は紫磨金の輝光を副え給うべし、殊に過去・聖靈は御存生の時より御信心他に異なる御事なりしかば今日講經の功力に依つて仏前に生を受け仏果菩提の勝因に登り給うべし云云、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

六六 聖愚問答抄上

上文永二年 四十四歳御作

474P

夫れ生を受けしより死を免れざる理りは賢き御門より卑き民に至るまで人ごとに是を知るといへども実には是を大事とし是を歎く者千万人に一人も有がたし、無常の現起するを見ては疎きをば恐れ親きをば歎くといへども先立つははかなく留るはがしきやうに思いて昨日は彼のわざ今日は此の事とて徒らに世間の五慾にほだされて白駒のかけ過ぎやすく羊の歩み近づく事をしらずして空しく衣食の獄につながれ徒らに名利の穴にをち三途の旧里に帰り六道のちまたに輪回せん事心有らん人誰か歎かざらん誰か悲しまざらん。

嗚呼 老少不定は娑婆の習ひ会者定離は浮世のことわりなれば始めて驚くべきにあらねども正嘉の初め世を早うせし人のありさまを見るに 或は幼き子をふりすて 或は老いたる親を留めをき、いまだ壮年の齡にて黄泉の旅に趣く心の中さこそ悲しかるらめ行くもかなしみ留るもかなしむ、彼楚王が神女に伴いし情を一片の朝の雲に残し劉氏が仙客に値し思いを七世の後胤に慰む予か如き者底に縁つて愁いを休めん、かかる山左のいやしき心なれば身には思のなかれかしと云いけん人の古事さ愈い出でられて末の代のわすれがたみにもとて難波のもしほ草をかきあつめ水くきのあとを形の如くしるしをくなり。

悲しいかな痛しいかな我等無始より已来無明の酒に酔て六道 四生に輪回して 或時は焦熱大焦熱の炎にむせび 或時は紅蓮・大紅蓮の氷にとぢられ 或時は餓鬼飢渴の悲みに値いて五百生の間飲食の名をも聞かず、 或時は畜生 残害の苦みをつけて小さきは大きなるに、のまれ短きは長きにまかる是を残害の苦と云う、 或時は修羅・闘争の苦をつけ 或時は人間に生れて八苦をつく生老病死・愛別離苦 怨憎会苦・求不得苦・五盛陰苦等なり 或時は天上

に生れて五衰をうく、此くの如く三界の間を車輪のごとく回り父子の中にも親の親たる子の子たる事をさとらず夫婦の
会遇るも会遇たる事をしらず、迷々事は羊目に等しく暗き事は狼眼に同し、我を生たる母の由来をも

しらず生を受けたる我が身も死の終りをしらず、嗚呼受け難き人界の生をつけ値い難き如來の聖教に値い奉れり一眼の
龜の浮木の穴にあへるがごとし、今度若し生死のきづなをきらず三界の籠樊を出でざらん事かなしかるべしかなしかるべし。

爰に或る智人來りて示して云く汝が歎く所実に爾なり此くの如く無常のことはりを思い知り善心を發す者は鱗角よ
りも希なり、此のことはりを覺らずして惡心を發す者は牛毛よりも多し、汝早く生死を離れ菩提心を發さんと思はば吾
最第一の法を知れり志あらば汝が為に之を説いて聞かしめん、其の時愚人座より起つて掌を合せて云く我は日來
外典を學し風月に心をよせていまだ仏教と云ふ事を委細にしらず願くば上人我が為に是を説き給へ

其の時上人の云く汝耳を伶倫が耳に寄せ目を離朱が眼にかつて心をしづめて我が教をきけ汝が為に之を説かん夫れ
仏教は八萬の聖教多けれども諸宗の父母たる事戒律にはしかずされば天竺には世親馬鳴等の薩唐土には慧曠道宣
と云い人は是を重んず、我が朝には人皇四十五代聖武天皇の御宇に鑑真和尚此の宗と天台宗と両宗を渡して東大寺の
戒壇之を立つ爾しより已來當世に至るまで崇重年旧り尊貴日に新たなり、就中極樂寺の良觀上人

は上一人より下万民に至るまで生身の如來と是を仰ぎ奉る彼の行儀を見るに実に以て爾なり、飯嶋の津にて六浦の閑米
を取つては諸國の道を作り七道に木戸をかまて人別の錢を取つては諸河に橋を渡す慈悲は如來に齊しく德行は先達に越
えたり、汝早く生死を離れんと思はば五戒・二百五十戒を持ち慈悲をふかくして物の命を殺さずして良觀上人の如く道
を作り橋を渡せ是れ第一の法なり、汝持たんや否や。

愚人彌掌を合せて云く能く能く持ち奉らんとと思ふ具に我が為に是を説き給へ抑五戒・二百五十戒と云ふ事は
我等未だ存知せず委細に是を示し給へ智人云く汝は無下に愚かなり五戒・二百五十戒と云ふ事をば孩兒も是をしる

然れども汝が為に之を説かん、五戒とは一には不殺生戒二には不偷盜戒三には不妄語戒四には不邪淫戒五には不飲酒戒是なり、二百五十戒の事は多き間之を略す、其の時に愚人礼拝恭敬して云く我今日より深く此の法を持ち奉るべし。

爰に予が年来の知音・或所に隱居せる居士一人あり予が愁歎を訪わん為に來れるが始には往事渺茫として夢に似たる事をかたり終には行末の冥冥として弁え難き事を談ず鬱を散し思をのべ後予に問うて云く抑人の世に有る誰か後生を思はざらん、貴辺何なる仏法を持ちて出離をねがひ又亡者の後世をも訪ひ給うや、予答えて云く一日或る上人來つて我が為に五戒・二百五十戒を授け給へり實に以て心肝にそみて貴し、我深く良觀上人の如く及ばぬ身にもわるき道を作り深き河には橋をわたさんと思ふなり、其の時居士示して云く汝が道心貴きに似て愚かなり、今談ずる処の法は浅ましき小乗の法なり、されば仏は則ち八種の喩を設け文殊は又十七種の差別を

宣べたり或は螢火日光の喩を取り或は水精・瑠璃の喩あり爰を以て三国の人師も其の破文一に非ず、次に行者の尊重の事必ず人の敬ふに依つて法の貴きにあらずされば仏は依法不依人と定め給へり、我伝え聞く上古の持律の聖者の振舞は殺を言い収を言うには知浄の語有り行雲迴雪には死屍の想を作す而に今の律僧の振舞を見るに布絹・財宝をたくは兪錢・借請を業とす教行既に相違せり誰か是を信受せん、次に道を作り橋を渡す事還つて人の歎きなり、飯嶋の津にて六浦の関米を取る諸人の歎き是れ多し諸国七道の木戸是も旅人のわづらい只此の事に在り眼前の事なり汝見ざるや否や。

愚人色を作して云く汝が智分をもつて上人を謗し奉り其の法を誹る事謂れ無し知つて云うか愚にして云うかおそろしおそろし、其の時居士笑つて云く嗚呼おろかなりおろかなり彼の宗の僻見をあらあら申すべし、抑教に

大小有り宗に樞実を分かつて鹿苑施小の昔は化城の戸ばそこに導くといども驚峯開顕の筵には其の得益更に之れ無し、
其の時愚人茫然として居士に問うて云く文証・現証実に以て然なりさて何なる法を持つてか生死を離れ速に成仏せん
や、居士示して云く我れ在俗の身なれども深く仏道を修行して幼少より多くの人師の語を聞き粗経教をも聞き見る
に末代我等が如くなる無悪不造のためには念仏往生の教にしくはなし、されば慧心の僧都は夫れ
往生極楽の教行は濁世末代の目足なり」と云ひ法然上人は諸経の要文を集めて一向専修の念仏を弘め給ふ中にも
弥陀の本願は諸仏超過の崇重なり始め無三悪趣の願より終り得三法忍の願に至るまでいづれも悲願目出けれども第十八
の願殊に我等が為に殊勝なり、又十悪・五逆をもきはらず一念・多念をもえらばずされば上一人より下万民に至るまで
此の宗をもてなし給う事他に異なり又往生の人それ幾ぞや。

其の時愚人の云く実に小を恥じて大を慕ひ浅を去て深に就は仏教の理のみに非ず世間にも是れ法なり我早く彼の宗に
うつらんと思ふ委細に彼の旨を語り給へ彼の仏の悲願の中に五逆・十悪をも簡ばずと云へ五逆とは何等ぞや十悪とは
如何、智人の云く五逆とは父を殺し母を殺し阿羅漢を殺し仏身の血を出し和合僧を破す是を五逆と云うなり、十悪とは
身に三口に四意に三なり身に三とは殺盗婬・口に四とは妄語綺語惡口兩舌意に三

とは貪・瞋・癡是を十悪と云うなり、愚人云く我今解しぬ今日よりは他力往生に憑を懸くべきなり、爰に愚人又云く
以ての外盛にいみじき密宗の行人あり是も予が歎きを訪わんが為に來臨して始には狂言綺語のことはりを示し終には
顕密二宗の法門を談じて予に問うて云く抑汝は何なる仏法をか修行し何なる経論をか誦誦し奉るや、

予答えて云く我一日或る居士の教に依つて浄土の三部經を読み奉り西方極楽の教主に憑を深く懸くるなり、行者の
云く仏教に二種有り一には顕教二には密教なり顕教の極理は密教の初門にも及ばずと云云、汝が執心の法を聞けば
釈迦の顕教なり我が所持の法は大日覺王の秘法なり、実に三界の火宅を恐れ寂光の宝台を願はば須く顕教

を捨てて密教につくべし。

愚人驚いて云く我いまだ顕密二道と云う事を聞かず何なるを顕教と云ひ何なるを密教と云々や、行者の云く予は是れ頑愚にして敢て賢を存ぜず然りと雖も今一二の文を挙げて汝が矇昧を挑げん、顕教とは舍利弗等の請に依つて応身如來の説き給う諸教なり密教とは自受法樂の爲に法身大日如來の金剛薩を所化として説き給う処の大日經等の三部なり、愚人の云く実に以て然なり先非をひるがへして賢き教に付き奉らんと思ふなり。

又爰に萍のごとく諸州を回り蓬のごとく県県に転ずる非人のそれとも知らず来り門の柱に寄り立ちて含笑語る事なし、あやしみをなして是を問うに始めには云う事なし後に強て問を立つる時彼が云く月蒼蒼として風忙忙たりとなりかたし形質常に異に言語又通ぜず其の至極を尋れば当世の禅法是なり、予彼の人の有様を見其の言語を聞き

て仏道の良因を問う時、非人の云く修多羅の教は月をさす指教網は是れ言語にとどこほる妄事なり我が心の本分におちつかんと出立法は其の名を禅と云うなり、愚人云く願くは我聞んと思ふ、非人の云く実に其の志深くは壁に向い坐禅して本心の月を澄ましめよ爰を以て西天には二十八祖系乱れず東土には六祖の相伝明白なり、汝是を悟らずして教網にかかる不便不便、是心即仏即心是仏なれば此の身の外に更に何にか仏あらんや。

愚人此の語を聞いてつくづくと諸法を觀じ閑かに義理を案じて云く仏教万差にして理非明らめ難し宜なるかな常啼は東に請い善財は南に求め葉王は臂を焼き樂法は皮を剥ぐ善知識實に値い難し、或は教内と談じ或は教外と云う此のことはりを思ふに未だ淵底を究めず、法水に臨む者は深淵の思いを懷き人師を見る族は薄氷の心を成せ

り、爰を以て金言には依法不依人と定め又爪上土の譬あり若し仏法の眞偽をしる人あらば尋ねて師とすべし求めて崇べし、夫れ人界に生を受くるを天上の系にたとへ仏法の視聽は浮木の穴の類せり、身を軽くして法を重んずべしと思つに依つて衆山に攀歎きに引れて諸寺を回る足に任せて一つの巖窟に至るに後には青山峨峨として松風

・常樂我淨を奏し前には碧水湯湯として岸うつ波 四徳波羅蜜を響かす深谷に開敷せる花も 中道実相の色を顕し広野に綻ぶる梅も界如三千の薫を添ふ言語道断・心行所滅せり謂可し商山の四皓の所居とも又知らず古仏経行の迹なるか、景雲朝に立ち靈光夕々に現ず嗚呼心を以て計るべからず詞を以て宣ふべからず、予此の砌に沈吟と

さまよひ彷徨とたちもとをり徙倚とたたずむ、此処に忽然として一の聖人坐す其の行儀を拝すれば法華読誦の声深く心肝に染みて閑の戸ほそを伺は玄義の牀に臂をくだす、爰に聖人予が求法の志を酌知て詞を和げ予に問うて云く汝なにに依つて此の深山の窟に至れるや、予答えて云く生をかるくして法をおもくする者なり、聖人問て

云く其の行法如何、予答えて云く本より我は俗塵に交りて未だ出離を弁えず、適善知識に値て始には律次には念仏・真言並に禪此等を聞くといへども未だ真偽を弁えず、聖人云く汝が詞を聞くに実に以て然なり身をかるくして法をおもくするは先聖の教予が存ずるところなり、抑上は非想の雲の上下は那落の底までも生を受けて

死をまぬかるる者やはある、然れば外典のいやしきをしえにも朝に紅顔有つて世路に誇るとも夕には白骨と為つて郊原に朽ちぬと云へり、雲上に交つて雲のびんづらあざやかに廻雪たもとをひるがすとも其の樂みをおもは夢の中の夢なり、

山のふもと蓬がもとはつゝの栖なり玉の台・錦の帳も後世の道にはなにかせん、小野の小町

・衣通姫が花の姿も無常の風に散り攀張良が武芸に達せしも獄卒の杖をかなしむ、されば心ありし古人の云くあはれ

なり鳥べの山の夕煙をくる人とてとまるべきかは、末のつゆ本のしづくや世の中のをくれさきたつためしなるらん、先亡後滅の理り始めて驚くべきにあらず願ふても願ふべきは仏道求めても求むべきは經教なり、抑汝が云うところの法門をきけば或は小乗・或は大乗位の高下は且らく之を置く還つて惡道の業たるべし。

爰に愚人驚いて云く如来一代の聖教はいづれも衆生を利せんが為なり、始め七処八会の筵より終り跋提河の儀式まで何れか釈尊の所説ならざる設ひ一分の勝劣をば判ずとも何ぞ惡道の因と云べきや、聖人云く如来一代の

聖教に権有り実有り大有り小有り又顕密二道相分ち其の品一に非ず、須く其の大途を示して汝が迷を悟らしめん、
夫れ三界の教主、釈尊は十九歳にして伽耶城を出て檀特山に籠りて難行苦行し三十成道の刻に三惑頓に破し無明の大
夜爰に明しかば須く本願に任せて一乗妙法蓮華經を宣ぶべしといへども機縁万差にして其の機仏乘に堪えず、然れば
四十余年に所被の機縁を調へ後八箇年に至つて出世の本懷たる妙法蓮華經を説き給へ、然れば仏の御年七十二歳にし
て序分・無量義經に説き定めて云く、「我先きに道場菩提樹の下に端坐すること六年にして阿耨多羅三藐三菩提を成ずる
ことを得たり、仏眼を以て一切の諸法を觀するに宣説す可からず、所以は何ん諸の
衆生の性慾不同なるを知れり性慾不同なれば種種に法を説くこと方便の力を以てす四十余年には未だ
眞實を顯わさず」文、此の文の意は仏の御年三十にして寂滅道場菩提樹の下に坐して仏眼を以て一切衆生の心根を御覽
するに衆生成仏の直道たる法華經をば説くべからず、是を以て空拳を挙げて嬰兒をすかすが如く様様のたばかりを以て
四十余年が間ははまだ眞實を顯わさずと年紀をさして青天に日輪の出で暗夜に満月のかかるが如く説き定めさせ給へ、
此の文を見て何ぞ同じ信心を以て仏の虚事と説かるる法華已前の權教に執著して
めずらしからぬ三界の故宅に帰るべきや、されば法華經の一の卷方便品に云く「正直に方便を捨て但無上道を説く」文、
此の文の意は前四十二年の經經汝が語るところの念仏眞言・禪・律を正直に捨てよとなり、此の文明白なる上重ねてい
まして第二の卷譬喻品に云く「但樂つて大乘經典を受持し乃至余經の一偈をも受けざれ」文、此の文の意は年紀かれこ
れ煩はし所詮法華經より自余の經をば一偈をも受くべからずとなり、然るに八宗の異義蘭菊
に道俗形ちを異にすれども一同に法華經をば崇むる由を云つ、されば此等の文をばいかが弁へたる正直に捨てよと云つ
て余經の一偈をも禁むるに或は念仏或は眞言或は禪或は律是れ余經にあらずや、今此の妙法蓮華經とは諸仏出世
の本意・衆生成仏の直道なり、されば釈尊は付属を宣ふ多宝は証明を遂げ諸仏は舌相を梵天に付けて

皆是眞実と宣へ給へり、此の経は一字も諸仏の本懐・一点も多生の助なり一言一語も虚妄あるべからず此の経の禁を用いざる者は諸仏の舌をきり賢聖をあざむく人に非ずや其の罪実に怖るべし、されば一の巻に云く「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば則ち一切世間の仏種を断ず」と文、此の文の意は若人此経の一偈・一句をも背かん人は過去・現在・未来三世十方の仏を殺さん罪と定む、経教の鏡をもつて当世にあてみるに法華経をそむかぬ人は実に以て有りがたし、事の心を案ずるに不信の人尚無間を免れず況や念仏の祖師法然上人は法華経をもつて念仏に對して抛てよと云云、五千・七千の經教に何れの処にか法華経を抛てよと云う文ありや、三昧発得の行者・

生身の弥陀仏とあがむる善導和尚・五種の雜行を立てて法華経をば千中無一とて千人持つとも一人も仏になるべからずと立てたり、經文には若有聞法者無一不成仏と談じて此の経を聞けば十界の依正・皆仏道を成ずと見えたり、爰を以て五逆の調達は天王如来の記に予り非器五障の竜女も南方に頓覺成道を唱ふ況や復の六即を立てて機を漏らす事なし、善導の言と法華経の文と実に以て天地雲泥せり何れに付くべきや就中其の道理を思うに諸仏衆経の怨敵聖僧衆人の讎敵なり、經文の如くならば争か無間を免るべきや。

爰に愚人色を作して云く汝賤き身を以て恣に莠言を吐く悟つて言うか迷つて言うか理非弁え難し、忝なくも善導和尚は弥陀善逝の応化・或は勢至菩薩の化身と云へり、法然上人も亦然なり善導の後身といへり、上古の先達たる上行徳秀発し解了・底を極めたり何ぞ惡道に墮ち給つと云うや、聖人云く汝が言然なり予も仰いで信を取ること此くの如し但し仏法は強ちに人の貴賤には依るべからず只經文を先きとすべし身の賤をもつて其の法を

輕んずる事なかれ、有人樂生惡死・有人樂死惡生の十二字を唱へし毘摩大國の狐は帝釈の師と崇められ諸行無常等の十六字を談ぜし鬼神は雪山童子に貴まる是れ必ず狐と鬼神との貴きに非ず只法を重んずる故なり、されば我等が慈父・教主釈尊・雙林最後の御遺言・涅槃經の第六には依法不依人として普賢・文殊等の等覺已還の大薩・法門

を説き給ふとも経文を手に把らずば用ゐざれとなり、天台大師の云く「修多羅と合する者は録して之を用いよ文無く義無きは信受す可からず」文、釈の意は経文に明ならんを用いよ文証無からんをば捨てよとなり、伝教大師の云く「ぶつせつ 依憑して口伝を信ずること莫れ」文、前の釈と同意なり、竜樹菩薩の云く「修多羅白論に依つて修多羅黒論に依らざれ」と文、意は経の中にも法華已前の権教をすてて此の経につけよとなり、経文にも論文にも法華に対して諸余の經典を捨てよと云う事分明なり、然るに開元の録に挙る所の五千・七千の経巻に法華経を捨てよ乃至抛てよと嫌ふことも又雑行に摂して之を捨てよと云う経文も全く無しされば慥の経文を勘出して善導・法然の無間の苦を救はるべし、今世の念仏の行者 俗男 俗女・経文に違するのみならず又師の教にも背けり、五種の雑行とて念仏申さん人のすべき日記・善導の釈之れ有り、其の雑行とは選択に云く「第一に読誦雑行とは上の觀經等の往生淨土の経を除いて已外・大小乗 蹟密の諸經に於て受持 読誦するを悉く読誦雑行と名く乃至第三に礼拝雑行とは上の弥陀を礼拝するを除いて已外一切諸余の仏菩薩等及諸の世天に於て礼拝恭敬するを悉く礼拝雑行と名く、第四に称名雑行とは上の弥陀の名を称するを除いて已外自余の一切仏菩薩等及諸の世天等の名を称するを悉く称名雑行と名く、第五に讚歎供養雑行とは上の弥陀を除いて已外一切諸余の仏菩薩等及諸の世天等に於て讚歎し供養するを悉く讚歎供養雑行と名く」文。

此の釈の意は第一の読誦雑行とは念仏申さん道俗男女読むべき經あり読むまじき經ありと定めたり、読むまじき經は法華經・仁王經 藥師經・大集經 般若心經 轉女成仏經 北斗壽命經ことさらうち任せて諸人読まるる八巻の中の觀音經此等の諸經を一句一偈も読むならばたとひ念仏を志す行者なりとも雑行に摂せられて往生す可からず云云、予愚眼を以て世を見るに設ひ念仏申す人なれども此の經經を讀む人は多く師弟敵対して七逆罪となりぬ。

又第三の礼拝雑行とは念仏の行者は弥陀三尊より外は上に挙ぐる所の諸仏菩薩 諸天善神を礼するをば礼拝

雑行と名け又之を禁ず、然るを日本は神国として伊奘諾伊奘册の尊、此の国を作り天照大神垂迹御坐して御裳濯河の流れ久しくして今にたえず豈此の国に生を受けて此の邪義を用ゆべきや、又普天の下に生れて三光の恩を蒙りながら誠に日月、星宿を破する事尤も恐れ有り。

又第四の称名、雑行とは念仏申さん人は唱うべき仏菩薩の名あり、唱えまじき仏菩薩の名あり、唱うべき仏菩薩の名とは弥陀三尊の号、唱うまじき仏菩薩の号とは釈迦、薬師、大日等の諸仏、地藏、普賢、文殊、日月星、一所と三嶋と熊野と羽黒と天照大神と八幡大菩薩と此等の名を一遍も唱えん人は念仏を十萬遍、百萬遍申したりとも此の仏菩薩、日月神等の名を唱うる過に依つて無間にはおつとも往生すべからずと云云、我世間を見るに念仏を申す人も此等の諸仏菩薩、諸天善神の名を唱うる故に是れ又師の教に背けり。

第五の讚歎供養、雑行とは念仏申さん人は供養すべき仏は弥陀三尊を供養せん外は上に挙ぐる所の仏菩薩、諸天善神に香華のすこしをも供養せん人は念仏の功は貴とけれども此の過に依つて雑行に損すと是をきらふ、然るに世を見るに社壇に詣では幣帛を捧げ堂舎に臨みては礼拝を致す是れ又師の教に背けり、汝若し不審ならば選択を見よ其の文明白なり、又善導和尚の觀念法門經に云く、酒肉五辛誓つて發願して手に捉らざれ口に喫まざれ

若し此の語に違せば即ち身口俱に惡瘡を著けんと願ぜよ、文、此の文の意は念仏申さん男女、尼法師は酒を飲まざれ、魚鳥をも食わざれ、其の外にらひる等の五つのからくくさき物を食わざれ、是を持たざる念仏者は今生には惡瘡身に出て後生には無間に墮すべしと云云、然るに念仏申す男女、尼法師此の誠をかへりみず、恣に酒をのみ、魚鳥を食ふ事、劍を飲む、譬にあらざるや。

爰に愚人の云く、誠に是れ此の法門を聞くに念仏の法門、實に往生すと雖も其の行儀修行し難し、況や彼の憑む所の經論は皆以て權説なり、往生す可からざるの条分明なり、但眞言を破する事は其の謂れ無し、夫れ大日經とは大日覺王の秘法

なり大日如来より系も乱れず善無畏・不空之を伝え弘法大師は日本に両界の曼陀羅を弘め、尊高三十七尊・秘奥なるものなり然るに顯教の極理は尚密教の初門にも及ばず爰を以て後唐院は法華尚及ばず況や自余の教をやと釈し給へ此の事如何が心うべきや。

聖人示して云く予も始は大日に憑を懸けて密宗に志を寄す然れども彼の宗の最底を見るに其の立義も亦謗法なり汝が云う所の高野の大師は嵯峨天皇の御宇の人師なり、然るに皇帝より仏法の浅深を判釈すべき由の宣旨を給いて十住心論十卷之を造る、此の書広博なる間要を取つて三卷に之を縮め其の名を秘藏宝鑰と号す始異生羝羊心

より終秘密莊嚴心に至るまでに十に分別し、第八法華・第九華嚴・第十真言と立てて法華は華嚴にも劣れば大日經には三重の劣と判じて此くの如きの乗乗は自乗に仏の名を得れども後に望めば戲論と作ると書いて法華經を狂言綺語と云い釈尊をば無明に迷へる仏と下せり、仍て伝法院建立せし弘法の弟子正覺房は法華經は大日經のはきものとり及ばず・釈迦仏は大日如来の牛飼にも足らずと書けり、汝心を静めて聞け一代五千・七千の經教・外典三千余卷にも法華經は戲論三重の劣・華嚴經にも劣り釈尊は無明に迷へる仏にて大日如来の牛飼にも足らずと云う慥なる文ありや、設ひさる文有りと云うとも能く能く思案あるべきか。

經教は西天より東土にばす時・訳者の意樂に随つて經論の文不定なり、さて後秦の羅什三蔵は我漢土の仏法を見るに多く梵本に違せり我が訳する所の經若し誤りなくば我死して後身は不淨なれば焼くると云えども舌計り焼けざらんと常に説法し給ひしに焼き奉る時・御身は皆骨となるといへども御舌計りは青蓮華の上に光明を放つて日輪を映奪し給ひき有り難き事なり、さてこそ殊更・彼の三蔵所訳の法華經は唐土にやすやすと弘まらせ給ひしか、然れば延暦寺の根本大師・諸宗を責め給ひしには法華を訳する三蔵は舌の焼けざる験あり汝等が依經は皆誤れりと破し給ふは是なり、涅槃經にも我が仏法は他国移らん時誤り多かるべしと説き給へは經文に設ひ法華經

はいたずら事・釈尊をば無明に迷る仏なりとありとも権教・実教・大乘・小乗・説時の前後・訳者能く能く尋ねべし、所謂老子・孔子は九思一言・三思一言・周公旦は食するに二度吐き沐するに二度にぎる外典のあさき猶是くの如し況や内典の深義を習はん人をや、其の上此の義・経論に迹形もなし人を毀り法を謗しては悪道に墮つべしとは弘法大師の釈なり必ず地獄に墮んこと疑い無き者なり。

愛に愚人・茫然とほれ忽然となげひて良久しうして云く此の大師は内外の明鏡・衆人の導師たり徳行世に勝れ名譽普く聞えて或は唐土より三鉢を八万余里の海上をなぐるに即日本に至り或は心経の旨をつづるに蘇生の族・途にイむ、然れば此の人ただ人にあらず大聖権化の垂迹なり仰いで信を取らんにはしかじ、聖人云く予も始めは然なり但し仏道に入つて理非を勘見るに仏法の邪正は必ず得通自在にはよらず是を以て仏は依法不依人と定め給へり前に示すが如し、彼の阿伽陀仙は恒河を片耳にただ今十二年・耆鬼仙は一日の中に大海をすひほす張階は

霧を吐き欒巴は雲を吐く然れども未だ仏法の是非を知らず因果の道理をも弁す、異朝の法雲法師は講経勤修の砌に須臾に天華をふらせしかども妙楽大師は感応斯くの如きも猶理に称わずとていまだ仏法をばしらずと破し給う、夫れ此の法華経と申すは已今当の三説を嫌つて已前の経をば末顕真実と打破り肩を並ぶる経をば今説の文を以てせめ已後の経をば当説の文を以て破る実に三説第一の経なり、第四の巻に云く「薬王今汝に告ぐ我所説の經典而かも此の経の中に於て法華最第一なり」と文、此の文の意は靈山会上に薬王菩薩と申せし菩薩に仏告げて云く

始・華嚴より終・涅槃經に至るまで無量無辺の経・恒河沙等の数多し其の中には今の法華経最第一と説かれたり、然るを弘法大師は一の字を三と読まれたり、同巻に云く「我仏道の為に無量の土に於て始より今に至るまで広く諸経を説く而も其の中に於て此の経第一なり」と、此の文の意は又釈尊無量の国土にして或は名字を替え或は年紀を不同になし種種の形を現して説く所の諸経の中には此の法華経を第一と定められたり、同き第五巻には最在其上

と宣べて大日經・金剛頂等の無量の經の頂に此の經は有るべしと説かれたるを弘法大師は最在其下と謂へり、釈尊と弘法と法華經と宝鑰とは実に以て相違せり、釈尊を捨て奉つて弘法に付くべきか、又弘法を捨てて釈尊に付奉るべきか、又經文に背いて人師の言に随ふべきか、人師の言を捨てて金言を仰ぐべきか、用捨心に有るべし、又第七の卷藥王品に十喩を挙げて教を歎ずるに第一は水の譬なり、江河を諸經に譬へ大海を法華に譬へたり、然るを大日經は勝れたり、法華は劣れりと云う人は、即大海は小河よりもすくなしと云わん人なり、然るに今の世の人は、海の諸河に勝る事をば知るといへども、法華經の第一なる事をば弁へず、第二は山の譬なり、衆山を諸經に譬へ、須弥山を法華に譬へたり、須弥山は上下十六万八千由旬の山なり、何れの山か肩を並ぶべき法華經を大日經に劣ると云う人は、富士山は須弥山より大なりと云わん人なり、第三は星月の譬なり、諸經を星に譬へ、法華經を月に譬へ、月と星とは何れ勝りたりと思へるや、乃至次下には此の經も亦復是くの如し、一切の如来の所説若しは菩薩の所説若しは声聞の所説諸の經法の中に最も為れ第一とて此の法華經は只釈尊一代の第一と説き給うのみにあらず、大日及び藥師・阿彌陀等の諸仏・普賢・文殊等の菩薩の一切の所説・諸經の中に此の法華經第一と説けり、されば若し此の經に勝りたりと云う經有らば、外道天魔の説と知るべきなり、其の上・大日如来と云うは久遠実成の教主、釈尊四十二年、和光同塵して其の機に應ずる時、三身即一の如来、暫く毘盧遮那と示せり、是の故に開顕実相の前には、釈迦の応化と見えたり、爰を以て普賢經には、釈迦牟尼仏を毘盧遮那遍一切處と名け、其の仏の住處を常寂光と名くと説けり、今法華經は十界互具・一念三千・三諦即是・四土不二と談ず、其の上に二代聖教の骨髓たる二乗作仏・久遠実成は今經に限れり、汝語る所の大日經・金剛頂等の三部の秘經に此等の大事ありや、善無畏不空等此等の大事の法門を盗み取つて己が經の眼目とせり、本經・本論には迹形もなき誑惑なり、急ぎ急ぎ是を改むべし。

抑大日經とは四教含藏して、尽形寿戒等を明せり、唐土の人師は天台所立の第三時方等部の經なりと定め

たる権教なりあさましあさまし、汝実に道心あらば急いで先非を悔ゆべし夫れいれば此の妙法蓮華經は一代の觀門を一念にすべし十界の依正を三千につづめたり。

六六一

聖愚問答抄下

487P

爰に愚人聊か和いで云く經文は明鏡なり疑慮をいたすに及ばず但し法華經は三説に秀で一代に超ゆるといふも言説に拘はらず經文に留まらざる我等が心の本分の禪の二法にはしくべからず凡そ万法を払遣して言語の及ばざる處を禪法とは名けたり、されば跋提河の辺り沙羅林の下にして釈尊・金棺より御足を出し拈華微笑して此の法門を迦葉に付屬ありしより已來・天竺二十八祖・系乱れず唐土には六祖次第に弘通せり、達磨は西天にしては二十八祖の終・東土にしては六祖の始なり相伝をうしなはず教網に滞るべからず、爰を以て大梵天王問仏決疑經に云く「吾に正法眼蔵の涅槃妙心・実相無相微妙の法門有り教外に別に云う文字を立てず摩訶迦葉に付屬す」とて迦葉に此の禪の二法をば教外に伝ふと見えたり、都て修多羅の經教は月をさす指・月を見て後は指何かはせん心の本分禪の一理を知つて後は仏教に心を留むべしや、されば古人の云く十二部經は総て是れ閑文字と云云、仍つて此の宗の六祖慧能の壇經を披見するに実に以て然なり、言下に契会して後は教は何かせん此の理如何が弁えんや、聖人示して云く汝先ず法門を置いて道理を案ぜよ、抑我一代の大途を伺わず十宗の淵底を究めずして国を諫め人を教ふべきか、汝が談ずる所の禪は我最前に習ひ極めて其の至極を見るに甚だ以て僻事なり、禪に三種あり所謂如来禪と教禪と祖师禪となり、汝が言う所の祖师禪等の一端之を示さん聞いて其の旨を知れ若し教を

離れて之を伝うといわば教を離れて理なく理を離れて教無し理全く教・教全く理と云う道理汝之を知らざるや拈華微笑して迦葉に付屬し給うと云うも是れ教なり不立文字と云う四字も即教なり文字なり此の事・和漢兩國に事旧りぬ今いば事新きに似たれども一兩の文を勘えて汝が迷を払はしめん、補註十一に云く又復若し言説に滞ると

謂わば且く娑婆世界には何を將つて仏事と為るや、禅徒豈言説をもつて人に示さざらんや、文字を離れて解脱の義を談ずること無し豈に聞かざらんや乃至次ぎ下に云く豈に達磨西来して直指人心・見性成佛すと而るに華嚴等の諸大乘經に此の事無からんや、嗚呼世人何ぞ其れ愚かなるや汝等当に仏の所説を信ずべし諸仏如来は言虚妄無し、此の文の意は若し教文にとどこほり言説にかかはるとて教の外に修行すといはば此の娑婆國にはさて如何がして仏事善根を作すべき、さよつに云うところの禅人も人に教ゆる時は言を以て云はざるべしや其の上仏道の

解了を云う時文字を離れて義なし、又達磨西より来つて直に人心を指して仏なりと云う是程の理は華嚴・大集・大般若等の法華已前の権大乘經にも在在處處に之を談ぜり是をいみじき事とせんは無下に云いがひなき事なり嗚呼今世の何ぞ甚ひがめるや只中道実相の理に契当せる妙覺果満の如来誠諦の言を信すべきなり又妙樂大師の弘決の一に此の理を釈して云く「世人教を蔑にして理觀を尚ぶは誤れるかな誤れるかな」と、此の文の意は今の世の人人は觀心觀法を先として經教を尋ね學ばず還つて教をあなづり經をかるしむる是れ誤れりと云う文なり、

其の上当世の禅人・自宗に迷へり、続高僧伝を披見するに習禅の初祖達磨大師の伝に云く教に藉つて宗を悟ると、如来一代の聖教の道理を習學し法門の旨・宗宗の沙汰を知るべきなり、又達磨の弟子・六祖の第二祖慧可の伝に云く達磨禅師四卷の楞伽を以て可に授けて云く「我漢の地を觀るに唯此の經のみ有り仁者依行せば自ら世を度する事を得ん」と、此の文の意は達磨大師天竺より唐土に來つて四卷の楞伽經をもつて慧可に授けて云く我此の國を見るに是の經殊に勝れたり汝持ち修行して仏に成れとなり、此等の祖師既に經文を前とす若し之に依つて經に

依ると云はば大乘か小乗か權教か実教か能く能く弁ふべし、或は經を用いるには禪宗も楞伽經・首楞嚴經・金剛般若經等による是れ皆法華已前の權教・覆藏の説なり、只諸經に是心即仏・即心是仏等の理の方を説ける一両の文と句とに迷いて大小・權實・顕露・覆藏をも尋ねず、只不二を立てて而二を知らず謂己均仏の大慢を成せり、彼の月氏の大慢が迹をつぎ此の戸那の三階禪師が古風を追う然りと雖も大慢は生ながら無間に入り三階は死して大蛇と成りぬをそろしをそろし、釈尊は三世了達の解了・朗かに妙覺果滿の智月潔くして未來を鑒きたまい像法決疑經に記して云く「諸の惡比丘・或は禪を修する有つて經論に依らず自ら己見を逐つて非を以て是と爲し是邪是正と分別すること能わすく道俗に向つて是くの如き言を作さく我能く是を知り我能く是を見ると當に知るべし此の人は速かに我法を滅す」と、此の文の意は諸惡比丘あつて禪を信仰して經論をも尋ねず邪見を本として法門の是非をば弁えずして而も男女・尼法師等に向つて我よく法門を知れり人はしらずと云つて此の禪を弘むべし、當に知るべし此の人は我が正法を滅すべしとなり、此の文をもつて當世を見るに宛も符契の如し汝慎むべし汝畏るべし、先に談ずる所の天竺に二十八祖有つて此の法門を口伝すと云う事其の証拠何に出でたるや仏法を相伝する人・二十四人・或は二十三人と見えたり、然るを二十八祖と立つる事・所出の翻譯何にかある全く見えざるところなり、此の付法藏の人の事・私に書くべきにあらず如来の記文分明なり、其の付法藏伝に云く「復比丘有り名けて師子と曰う寶國に於て大に仏事を作す、時に彼の國王をば彌羅掘と名け邪見熾盛にして心に敬信無く・寶國に於て塔寺を毀壞し衆僧を殺害す、即ち利剣を以て用いて師子を斬る頸の中血無く唯乳のみ流出す法を相付する人は是に於て便ち絶えん此の文の意は仏我が入涅槃の後に我が法を相伝する人・二十四人あるべし其の中に最後・弘通の人に當るをば師子比丘と云わん、寶國と云う國にて我が法を弘むべし彼の國の王をば檀彌羅王と云うべし邪見放逸にして仏法を信ぜず衆僧を敬はず堂塔を破り失ひ剣をもつて諸僧の頸を切るべし即師子比丘の頸をきらん時

に頸の中に血無く只乳のみ出ずべし、是の時に仏法を相伝せん人絶ゆべしと定められたり、案の如く仏の御言違わず師子尊者、頸をきられ給う事実に以て爾なり、王のかいな共につれて落ち畢んぬ、二十八祖を立つる事甚以て僻見なり禅の僻事はより興るなるべし、今慧能が壇經に二十八祖を立つる事は達磨を高祖と定むる時師子と達磨との年紀遙かなる間、三人の禪師を私に作り入れて天竺より来れる付法蔵系乱れずと云うて人に重んぜさせん

為の僻事なり此の事異朝にして事旧りぬ、補註の十一に云く「今家は二十三祖を承用す豈有らんや、若し二十八祖を立つるは未だ所出の翻訳を見ざるなり、近來更に石に刻み版に鏤め七仏二十八祖を図状し各一偈を以て伝授相付すること有り嗚呼仮託何ぞ其れ甚だしきや識者力有らば宜しく斯の弊を革むべし是も二十八祖を立て石にぎざみ版にちりばめて伝うる事甚だ以て誤れり此の事を知る人あらば此の誤をあらためなをせとなり、祖師禪甚だ僻事なる事是にあり先に引く所の大梵天王問仏決疑經の文を教外別伝の証拠に汝之を引く既に自語相違せり、其の上此の經は説相權教なり又開元貞元の再度の目録にも全く載せず是録外の經なる上・權教と見えたり、然れば世間の學者用ゐざるところなり証拠とするにたらず。

抑今の法華經を説かるる時益をつる輩・迹門界如三千の時敗種の二乗・仏種を萌す四十二年の間は永不成仏と嫌はれて在在處處の集會にして罵詈誹謗の音をのみ聞き人天大会に思いつとまれて既に飢え死ぬべかりし人人も今の經に來つて舍利弗は華光如來・目連は多摩羅跋旃檀香如來・阿難は山海慧自在通王・羅羅は七宝華如來・

五百の羅漢は普明如來・二千の聲聞は宝相如來の記に予る蹟本遠寿の日は微塵数の菩薩増道損生して位大覺に鄰る、されば天台大師の釈を披見するに他經には菩薩は仏になると云つて二乗の得道は永く之れ無し、善人は仏になると云つて悪人の成仏を明さず男子は仏になると説いて女人は地獄の使と定む人天は仏になると云つて畜類は仏になるといはず、然るを今の經は是等が皆仏になると説くたのもしきかな末代濁世に生を受くといへども提婆

が如くに五逆をも造らず三逆をも犯さず、而るに提婆猶天王如来の記を得たり況や犯さざる我等が身をや、八歳の竜女既に蛇身を改めずして南方に妙果を証す況や人界に生を受けたる女人をや、只得難きは人身値い難きは正法なり汝早く邪を翻えし正に付き凡を転じて聖を証せんと思はば念仏・真言・禅・律を捨てて此の一乗妙典を受持すべし、若し爾らば妄染の塵穢を払つて清浄の覺体を証せん事疑なかるべし。

愛に愚人云く今聖人の教誡を聴聞するに日來の矇昧忽に開けぬ天真發明とも云つべし理非顯然なれば誰か信仰せざらんや、但し世上を見るに上一人より下万民に至るまで念仏・真言・禅・律を深く信受し御座する前には国土に生を受けながら争か王命を背かんや、其の上我が親と云い祖と云い旁念仏等の法理を信じて他界の雲に交り畢んぬ、又日本には上下の人数・幾か有る、然りと雖も權教・權宗の者は多く此の法門を信ずる人は未だ其の名を

も聞かず、仍て善処・惡処をいはず邪法・正法を簡ばず内典五千・七千の多きも外典三千余卷の広きも只主君の命に随ひ父母の義に叶うが肝心なり、されば教主釈尊は天竺にして孝養報恩の理を説き孔子は大唐にして忠功孝高の道を示す師の恩を報ずる人は肉をさき身をなぐ主の恩をしる人は弘演は腹をさき予讓は劍をのむ親の恩を思いし

人は丁蘭は木をきざみ伯瑜は杖になく、儒外・内・道は異なりといへども報恩謝徳の教は替る事なし然れば主師親のいまだ信ぜざる法理を我始めて信ぜん事既に違背の過に沈みなん法門の道理は經文明白なれば疑網都て尽きぬ後生を願はずば来世・苦に沈むべし進退惟谷れり我如何がせんや、聖人云く汝此の理を知りながら猶是の語をなす理の通ぜざるか意の及ばざるか我釈尊の遺法をまなび仏法に肩を入れしより已來知恩をもて最とし報恩

をもて前とす世に四恩あり之を知るを人倫となづけ知らざるを畜生とす、予父母の後世を助け国家の恩徳を報ぜんと思ふが故に身命を捨つる事敢て他事にあらず唯知恩を旨とする計りなり、先ず汝目をふさぎ心を静めて道理を思ふ我は善道を知りながら親と主との惡道にかからんを諫めざらんや、又愚心の狂ひ酔つて毒を服せんを我

知りながら是をいましめざらんや、其の如く法門の道理を存じて火・血・力・の苦を知らながら争か恩を蒙る人の悪道におちん事を歎かざらんや、身をもなげ命をも捨つべし諫めてもあきたらず歎きても限りなし、今世に眼を合する苦み猶是を悲む況や悠悠たる冥途の悲み豈に痛まざらんや恐れても恐るべきは後世慎みても慎むべきは来世なり、而るを是非を論ぜず親の命に随ひ邪正を簡ばず主の仰せに順はんと云う事愚癡の前には忠孝に似たれども賢人の意には不忠不孝是に過ぐべからず。

されば教主釈尊は転輪聖王の末師子・頼王の孫・浄飯王の嫡子として五天竺の大王たるべしといへども生死無常の理をさとり出離解脱の道を願つて世を厭ひ給しかば浄飯大王是を歎き四方に四季の色を顕して太子の御意を留め奉らんと巧み給ふ、先づ東には霞たなびくたえまよりかりがねこじちに帰り、梅の香・玉簾の中にかよひでうでつたる花の色・ももさへりの鶯・春の気色を顕はせり、南には泉の色白たへにしてかの玉川の卯の華・

信太の森のほととぎす夏のすがたを顕はせり、西には紅葉・常葉に交ればさながら錦をおり交え荻ふく風・閑かにして松の嵐ものすこし過ぎにし夏のなごりには沢辺にみゆる螢の光・あまつ空なる星かと誤り、松虫・鈴虫の声声・涙を催せり、北には枯野の色いつしかものつく池の汀につららめて谷の小川もをとさびぬ、かかるありさまを造つて御意をなぐさめ給うのみならず四門に五百人づつの兵を置いて守護し給いしかども終に太子の御年十九

と申せし二月八日の夜半の比・車匿を召して金泥駒に鞍置かせ伽耶城を出て檀特山に入り十二年高山に薪をとり深谷に水を結んで難行苦行し給ひ二十成道の妙果を得得して三界の独尊・一代の教主と成つて父母を救ひ群生を導き給いしをばさて不孝の人と申すべきか、仏を不孝の人と云いしは九十五種の外道なり父母の命に背いて無為に入り還つて父母を導くは孝の手本なる事、仏其の証拠なるべし、彼の浄蔵・浄眼は父の妙莊嚴王・外道の法に著して仏法に背き給いしかども二人の太子は父の命に背いて雲雷音王・仏の御弟子となり終に父を導いて沙羅樹王

仏と申す仏になし申されけるは不孝の人と云うべきか、経文には棄恩入無為・眞実報恩者と説いて今生の恩愛をば皆す
てて仏法の実の道に入る是れ実に恩をしれる人なりと見えたり、又主君の恩の深き事汝よりも能くしれり汝若し知恩の
望あらば深く諫め強いて奏せよ非道にも主命に随はんと云う事、佞臣の至り不忠の極りなり、殷の紂王は悪王・比干は忠
臣なり政事に違いしを見て強て諫めしかば即比干は胸を割かる紂王は比干死して後、周の王
に打たれぬ、今の世までも比干は忠臣といはれ紂王は悪王といはる、夏の桀王を諫めし竜蓬は頭をきられぬされども桀
王は悪王・竜蓬は忠臣とぞ云う主君を三度諫むるに用ゐずば山林に交れとこそ教たれ何ぞ其の非を見ながら黙せんと
云うや、古の賢人・世を遁れて山林に交りし先蹤を集めて聊か汝が愚耳に聞かしめん、殷の代の太公望は、溪と云う谷
に隠る、周の代の伯夷・叔齊は首陽山と云う山に籠る、秦の綺里季は商洛山に入り漢の嚴光は孤亭に居し、晋の介子綏は
縣上山に隠れぬ、此等をば不忠と云うべきか愚かなり汝忠を存ぜば諫むべし孝を思はば言うべきなり。

先ず汝権教・権宗の人は多く此の宗の人は少し何ぞ多を捨て少に付くと云う事必ず多きが尊くして少きが卑きにあ
らず、賢善の人は希に愚悪の者は多し麒麟鸞鳳は禽獸の奇秀なり然れども是は甚だ少し牛羊・烏鴿は畜鳥の拙卑なり
されども是は転多し、必ず多きがたつとくして少きがいやしくば麒麟をすてて牛羊をとり鸞鳳を閣いて烏鴿をとるべき
か、摩尼・金剛は金石の靈異なり、此の宝は乏しく瓦礫・土石は徒物の至り是は又巨多なり、汝が
言の如くならば玉などをば捨てて瓦礫を用ゆべきかはかなしはかなし、聖君は希にして千年に一たび出で賢佐は五百
年に一たび顕る摩尼は空しく名のみ聞く麒麟誰か実を見たるや世間出世・善き者は乏しく悪き者は多き事、眼前なり、
然れば何ぞ強ちに少きをおろかにして多きを詮とするや土沙は多けれども米穀は希なり木皮は充滿すれども布絹は
些少なり、汝只正理を以て前とすべし別して人の多きを以て本とすることなかれ。

愛に愚人席をさり袂をかいつくりて云く誠に聖教の理をきくに人身は得難く天上の絲筋の海底の針に貫けるより
も希に仏法は聞き難くして一眼の龜の浮木に遇うよりも難し、今既に得難き人界に生をうけ値い難き仏教を見聞しつ
今生を・もだしては又何れの世にか生死を離れ菩提を証すべき、夫れ一劫受生の骨は山よりも高けれども仏法の為にはい
まだ一骨をもすすす多生恩愛の涙は海よりも深けれども尚後世の為には一滴をも落さず、拙きが中に拙く愚かなるが中
に愚かなり設ひ命をすて身をやぶるとも生を軽くして仏道に入り父母の菩提を資け愚身が獄縛をも免るべし能く能く教
を示し給へ。

抑法華經を信ずる其の行相如何・五種の行の中には先ず何れの行をか修すべき丁寧に尊教を聞かん事を願う、聖人
示して云く汝蘭室の友に交つて麻畝の性と成る誠に禿樹禿に非ず春に遇つて榮え華さく枯草枯るに非ず夏に入つて鮮か
に注ぶ、若し先非を悔いて正理に入らば湛寂の潭に遊泳して無為の宮に優遊せん事疑なかるべし、抑仏法を弘通し群
生を利益せんには先ず教機時国教法流布の前後を弁ふべきものなり、所以は時に正像末あり
法に大小乗あり修行に摂折あり摂受の時・折伏を行ずるも非なり折伏の時・摂受を行ずるも失なり、然るに今世は
摂受の時か折伏の時か先づ是を知るべし摂受の行は此の国に法華一純に弘まりて邪法・邪師一人もなしといはん、此の時
は山林に交つて觀法を修し五種・六種乃至十種等を行すべきなり、折伏の時はかくの如くならず經教のおきて蘭菊に
諸宗のおぎる譽れを擅にし邪正・肩を並べ大小先を争はん時は万事を闇いて謗法を責むべし是れ折伏の修行なり、此の
旨を知らずして摂折途に違はば得道は思もよらず惡道に墮つべしと云う事・法華・涅槃に定め置き天台・妙樂の解釈に
も分明なり是れ仏法修行の大事なるべし、譬ば文武兩道を以て天下を治るに武を先とすべき時もあり文を旨とすべき時
もあり、天下無為にして国土静かならん時は文を先とすべし東夷・南蛮・西戎・北狄・蜂起して野心をさしはさまんには武
を先とすべきなり、文武のよき事計りを心えて時をもしらず万邦安堵の思をなし

て世間無為ならん時甲冑をよるひ兵杖をもたん事も非なり、又王敵起らん時戦場にて武具をば閣いて筆硯を提ん事も亦時に相応せず撰受・折伏の法門も亦是くの如し正法のみ弘まつて邪法・邪師無からん時は深谷にも入り閑静にも居して読誦・書写をもし觀念工夫をも凝すべし、是れ天下の静なる時筆硯を用ゆるが如し權宗・謗法
国にあらん時は諸事を閣いて謗法を責むべし是れ合戦の場に兵杖を用ゆるが如し、然れば章安大師・涅槃の疏に釈して云く「昔は時平かにして法弘まる心に戒を持すべし杖を持すること勿れ今は時嶮しくして法翳る心に杖を持すべし戒を持すること勿れ今昔俱に嶮しくば俱に杖を持すべし今昔俱に平かならば心に俱に戒を持すべし、取捨宜きを得て一向にす可からず」と此の釈の意分明なり、昔は世もすなをに人もただしくして邪法邪義無かり

き、されば威儀をただし穩便に行業を積んで杖をもつて人を責めず邪法をとがむる事無かりき、今の世は濁世なり人の情もひがみゆがんで權教謗法のみ多ければ正法弘まりがたし此の時は読誦・書写の修行も觀念・工夫・修練も無用なり、只折伏を行じて力あらば威勢を以て謗法をくだき又法門を以ても邪義を責めよとなり、取捨其旨を得て一向に執する事なかれと書けり、今の世を見るに正法一純に弘まる国が邪法の興盛する国が勸ふべし、然るを

淨土宗の法然は念仏に対して法華經を捨閉閣抛とよみ善導は法華經を雜行と名け剩今中無一とて千人信ずとも一人得道の者あるべからずと書けり、真言宗の弘法は法華經を華嚴にも劣り大日經には三重の劣と書き戲論の法と定めたり、正覺房は法華經は大日經のはきものとりにも及ばずと云ひ釈尊をば大日如来の牛飼にもたらずと判せり、禪宗は法華經を吐たるづばき月をさす指教網なんど下す、小乗律等は法華經は邪教・天魔の所説と名けたり、此等豈謗法にあらずや責めても猶あまりあり禁めても亦たらず。

愚人云く日本六十余州・人替り法異りといへども或は念仏者・或は真言師・或は禪・或は律・誠に一人として謗法ならざる人はなし、然りと雖も人の上沙汰してなにかせん只我が心中に深く信受して人の誤りをば余所の事に

せんと思ふ、聖人示して云く汝言つ所実にしかなり我も其の義を存ぜし処に經文には或は不惜身命とも或は寧喪身命とも説く、何故にかやうには説かるやと存するに只人をはばからず經文のままに法理を弘通せば謗法の者多からん世には必ず三類の敵人有つて命にも及ぶべしと見えたり、其の仏法の違目を見ながら我もせめず国主にも訴すば教へ背いて仏弟子にはあらずと説かれたり、涅槃經第三に云く「若し善比丘あつて法を壞らん者を
見て置いて呵責し驅遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり、若し能く驅遣し呵責し挙処せば是れ我が弟子真の声聞なり」と、此の文の意は仏の正法を弘めん者・經教の義を悪く説かんを聞き見ながら我もせめず我が身及ばずば国主に申し上げても是を対治せずば仏法の中の敵なり、若し經文の如くに人をもはばからず我もせめ国主にも申さん人は仏弟子にして真の僧なりと説かれて候、されば仏法中怨の責を免れんとて・
かやうに諸人に悪まれるれども命を釈尊と法華經に奉り慈悲を一切衆生に与へて謗法を責むるを心えぬ人は口をすくめ眼を瞋らす、汝實に後世を恐れば身を輕しめ法を重んぜよ是を以て章安大師云く「寧ろ身命を喪ふとも教を匿さざれとは身は輕く法は重し身を死して法を弘めよ」と、此の文の意は身命をばほろぼすとも正法をかくさざれ、其の故は身はかるく法はおもし身をばころすとも法をば弘めよとなり、悲いかな生者必滅の習なれば設ひ長寿を得たりとも終には無常をのがるべからず、今世は百年の内外の程を思へば夢の中の夢なり、非想の八万歳未だ無常を免れず利の一千年も猶退没の風に破らる、況や人間閻浮の習は露よりもあやうく芭蕉よりも・
もろく泡沫よりもあだなり、水中に宿る月のあるかなきかの如く草葉にをく露のをくれさきだつ身なり、若し此の道理を得ば後世を一大事とせよ歡喜仏の末の世の覺徳比丘・正法を弘めしに無量の破戒此の行者を怨みて責めしかば有徳国王・正法を守る故に謗法を責めて終に命終して阿・仏の国に生れて彼の仏の第一の弟子となる、大乘を重んじて五百人の婆羅門の謗法を誡めし仙予国王は不退の位に登る、憑しいかな正法の僧を重んじて邪惡

の侶を誡むる人かくの如くの徳あり、されば今の世に摂受を行ぜん人は謗人と俱に惡道に墮ちん事疑い無し、南岳大師の四安樂行に云く「若し菩薩有つて惡人を將護し治罰すること能わず乃至其の人命終して諸惡人と俱に地獄に墮せん」と、此の文の意は若し仏法を行ずる人有つて謗法の惡人を治罰せずして觀念思惟を専らにして邪正權實をも簡ばず詐つて慈悲の姿を現ぜん人は諸の惡人と俱に惡道に墮つべしと云う文なり、今真言念仏・禪・律の謗人をたださずいつはつて慈悲を現ずる人此の文の如くなるべし。

爰に惡人意を竊にし言を顯にして云く誠に君を諫めて家を正しくする事先賢の教本文に明白なり外典此くの如し内典是に違つべからず、惡を見ていましめず謗を知つてせめずば經文に背き祖師に違せん其の禁め殊に重し今より信心に至すべし、但し此經を修行し奉らん事叶いがたし若し其の最要あらば証拠を聞かんと思ふ、聖人示して云く今汝の道意を見るに鄭重・慇懃なり、所謂諸仏の誠諦得道の最要は只是れ妙法蓮華經の五字なり、檀王の宝位を退き竜女が蛇身を改めしも只此の五字の致す所なり、夫れ以れば今の經は受持の多少をば一偈・一句と宣べ修行の時刻をば一念・隨喜と定めたり、凡そ八万法藏の広きも一部八卷の多きも只是の五字を説かためなり、靈山の雲の上・鷲峯の霞の中に釈尊要を結び地涌付屬を得ることありしも法体は何事ぞ只此の要法に在り、

天台・妙樂の六千張の疏・玉を連ぬるも道・遂行滿の数軸の釈・金を並ぶるも併しながら此の義趣を出でず、誠に生死を恐れ涅槃を欣い信心を運び渴仰を至さば遷滅無常は昨日の夢・菩提の覺悟は今日のうつつたるべし、只南無妙法蓮華經とだにも唱・牽らば滅せぬ罪やあるべき来らぬ福や有るべき、真実なり甚深なり是を信受すべし。

愚人・掌を合せ膝を折つて云く貴命肝に染み教訓意を動ぜり然りと雖も上能兼下の理なれば広きは狭きを括り多は少を兼ね、然る処に五字は少く文言は多し首題は狭く八軸は広し如何ぞ功德齊等ならんや、聖人云く汝愚かなり捨少取多の執・須弥よりも高く輕狭重広の情・溟海よりも深し、今の文の初後は必ず多きが尊く少きが卑しき

にあらざる事前に示すが如し、爰に又小が大を兼ね、一が多に勝ると云う事之を談ぜん彼の尼拘類樹の実は芥子三分が一のせいなりされども五百輛の車を隠す徳あり是小が大を含めるにあらずや、又如意宝珠は一あれども万宝を雨して欠処之れ無し是れ又少が多を兼ねたるにあらずや、世間のことわざにも一は万が母といへ此等の道理を知らずや、所詮実相の理の背契を論ぜよ強ちに多少を執する事なかれ、汝至つて愚かなり今一の譬を仮らん、夫れ妙法蓮華經とは一切衆生の仏性なり仏性とは法性なり法性とは菩提なり、所謂釈迦多宝十方の諸仏。

・上行・無辺行等・普賢・文殊・舍利弗・目連等、大梵天王・釈提桓因・日月・明星・北斗・七星・二十八宿・無量の諸星・天衆・地類・竜神・八部・人天・大会・閻魔法王・上は非想の雲の上下は那落の炎の底まで所有一切衆生の備うる所の仏性を妙法蓮華經とは名くるなり、されば一遍此の首題を唱奉れば一切衆生の仏性が皆よばれて爰に集まる時我が身の法性の法報応の三身ともにひかれて頭れ出ずる是を成仏とは申すなり、例せば籠の内にある鳥の鳴く時空を飛ぶ衆鳥の同時に集まる是を見て籠の内の鳥も出でんとするが如し。

爰に愚人云く首題の功德・妙法の義趣今聞く所詳かなり但し此の旨趣正しく經文に是をのせたりや如何、聖人云く其の理詳かならん上は文を尋ぬるに及ばざるか然れども請に随つて之れを示さん法華經第八陀羅尼品に云く「汝等但能く法華の名を受持せん者を擁護せん福量るべからず此の文の意は仏・鬼子母神・十羅刹女の法華經の行者を守らんと誓い給つを讃むるとして汝等法華の首題を持つ人を守るべしと誓ふ、其の功德は三世了達

の仏の智慧も尚及びがたとしと説かれたり、仏智の及ばぬ事何かあるべきなれども法華の題名受持の功德ばかりは是を知らずと宣べたり、法華一部の功德は只妙法等の五字の内に籠れり、一部八巻・文・文・ことに二十八品・生起かはれども首題の五字は同等なり、譬ば日本の二字の中に六十余州・島二つ入らぬ国やあるべき籠らぬ郡やあるべき、飛鳥とよば空をかける者と知り走獸といへば地をはしる者と心づる一切名の大切なる事蓋し以て是くの

如し、天台は名詮自性・句詮差別とも名者大綱とも判ずる此の謂れなり、又名は物をめす徳あり物は名に応ずる用あり
法華題名の功德も亦以て此くの如し。

愚人云く聖人の言の如くば実に首題の功莫大なり但し知ると知らざるとの不同あり、我は弓箭に携り、兵杖をむねとして未だ仏法の真味を知らず若し然れば得る所の功德何ぞ其れ深からんや、聖人云く円頓の教理は初後全く不二にして初位に後位の徳あり一行・一切行にして功德備わらざるは之れ無し若し汝が言の如くば功德を知つて植えずんば上は等覚より下は名字に至るまで得益更にあるべからず、今の経は唯仏与仏と談ずるが故なり、

譬喩品に云く「汝舍利弗尚此の経に於ては信を以て入ることを得たり況や余の声聞をや」文の心は大智・舍利弗も法華経には信を以て入る其の智分の力にはあらず況や自余の声聞をやとなり、されば法華経に来つて信ぜしかば永不成仏の名を削りて華光如来となり嬰兒に乳をふくむるに其の味をしらずといへども自然に其の身を生長す、

医師が病者に薬を与うるに病者薬の根源をしらずといへども服すれば任運と病愈ゆ若し薬の源をしらずと云つて医師の与ふる薬を服せずば其の病愈ゆべしや薬を知るも知らざるも服すれば病の愈ゆる事以て是れ同じ、既に仏を良医と号し法を良薬に譬へ衆生を病人に譬ふされば如来一代の教法を擣り和合して妙法一粒の良薬に丸ぜり豈知るも知らざるも服せん者、煩惱の病愈えざるべしや病者は薬をしらず病をも弁ずといへども服すれば必ず愈ゆ、行者も亦然なり法理をもしらず煩惱をしらずといへども只信すれば見思・塵沙・無明の三惑の病を同時に

断じて実報・寂光の台にのぼり本有三身の膚を磨かん事疑いあるべからず、されば伝教大師云く「能化所化俱に歴劫無く妙法経の力即身成仏」と法華経の法理を教へん師匠も又習はん弟子も久しからずして法華経の力をもつて俱に仏になるべしと云う文なり、天台大師も法華経に付いて玄義・文句・止観の三十巻の釈を造り給う、妙楽大師は又釈籤・疏記・輔行の三十巻の末文を重ねて判釈す、天台六十巻とは是なり、玄義には名体宗用教の五重玄

を建立して妙法蓮華經の五字の機能を判釈す、五重玄を釈する中の宗の釈に云く「綱維を提ぐるに目として動かざる」と無く衣の一角を牽くに縷として来らざる無きが如しと、意は此の妙法蓮華經を信仰し奉る一行に功德として来らざる事なく善根として動かざる事なし、譬は網の目無量なれども一つの大綱を引くに動かざる目もなく衣の系筋巨多なれども一角を取るに系筋として来らざることなきが如しと云う義なり、さて文句には如是我聞より作礼而去まで文文句句に因縁・約教・本・迹・觀心の四種の釈を設けたり、次に止觀には妙解の上に立てる所

の觀不思議境の一念三千是れ本覺の立行・本具の理心なり、今爰に委しくせず、悦ばしいかな生を五濁惡世に受くといへども一乘の眞文を見聞する事を得たり、熙連恒沙の善根を致せる者・此の經にあい奉つて信を取ると見えたり、汝今一念隨喜の信を致す函蓋相感應道交疑い無し。

愚人頭を低れ手を挙げて云く我れ今よりは一実の經王を受持し三界の獨尊を本師として今身自り仏身に至るまで此の信心敢て退轉無けん、設ひ五逆の雲厚くとも乞ふ提婆達多が成仏を續ぎ十惡の波あらくとも願くは王子覆講の結縁に同じからん、聖人云く人の心は水の器にしたがふが如く物の性は月の波に動くに似たり、故に汝当座は信ずといふとも後日は必ず翻へさん魔来り鬼来るとも騷乱する事なかれ、夫れ天魔は佛法をにくむ外道は内道をきらふ、されば猪の金山を摺り衆流の海に入り薪の火を盛んになし風の求羅をますが如くせば豈好き事にあらずや。

夫れ以んみれば末法流布の時、生を此の土に受け此の経を信ぜん人は如来の在世より猶多怨嫉の難甚しかるべしと見えて候なり、其の故は在世は能化の主は仏なり弟子又大菩薩阿羅漢なり、人天四衆八部人非人等なりといへども調機調養して法華経を聞かしめ給ふ猶怨嫉多し、何に況んや末法今の時は教機時刻当来すといへども其の師を尋ねれば凡師なり、弟子又鬪諍堅固・白法隱没・三毒強盛の惡人等なり、故に善師をば遠離し惡師には親近す、其の上眞実の法華経の如説修行の行者の師弟檀那とならんには三類の敵人決定せり、されば此の経を聴聞し

始めん日より思い定むべし況滅度後の大難の三類甚しかるべしと、然るに我が弟子等の中にも兼て聴聞せしかども大小の難來る時は今始めて驚き肝をけして信心を破りぬ、兼て申さざりけるか経文を先として猶多怨嫉・況滅度後・況滅度後と朝夕教へし事は是なり予が或は所ををわれ或は疵を蒙り・或は高度の御勸氣を蒙りて遠國に流罪せらるるを見聞くとも今始めて驚くべきにあらざる物をや。

問うて云く如説修行の行者は現世安穩なるべし何が故ぞ三類の強敵盛んならんや、答えて云く釈尊は法華経の御為に今度九横の大難に値ひ給ふ、過去の不輕菩薩は法華経の故に杖木瓦石を蒙り竺の道生は蘇山に流され法道三蔵は面火印をあてられ師子尊者は頭をはねられ天台大師は南三北七にあだまれ伝教大師は六宗にくまれ給へ、此等の仏菩薩・大聖等は法華経の行者として而も大難にあひ給へ、此れ等の人人を如説修行の人と云わ

ずんばいづくにか如説修行の人を尋ねん、然るに今の世は鬪諍堅固・白法隱没なる上、惡国・惡王・惡臣・惡民のみ有りて正法を背きて邪法・邪師を崇重すれば国土に惡鬼乱れ入りて三災・七難盛に起れり、かかる時刻に日蓮仏勅

を蒙りて此の土に生れけるこそ時の不祥なれ、法王の宣旨背きがたければ経文に任せて権実二教のいくさを起し忍辱の鎧を着て妙教の剣を提げ一部八巻の肝心・妙法五字の旗を指上て末顕真実の弓をはり正直捨権の箭をばげて大白牛車に打乗つて権門をかつばと破りがしこおしかけこおしよせ念仏・眞言・禪・律等の八宗・十宗の敵人をせむるに或はにげ或はひきしりぞき或は生取られし者は我が弟子となる、或はせめ返しせめをとしすれどもかたきは多勢なり法王の一人は無勢なり今に至るまで軍やむ事なし、法華折伏・破権門理の金言なれば終に権教権門の輩を一人もなくせめをとして法王の家人となし天下万民諸乗一仏乗と成つて妙法独り繁昌せん時、万民一同に南無妙法蓮華經と唱え奉らば吹く風枝をならさず雨壤を砕かず、代は義農の世となりて今生には不祥の災難を払ひ長生の術を得、人法共に不老不死の理・顕れん時を各各御覽ぜよ現世安穩の証文・疑い有る可からざる者なり。

問うて云く如説修行の行者と申さんは何様に信ずるを申し候べきや、答えて云く当世・日本国中の諸人・一同に如説修行の人と申し候は諸乗一仏乗と開会しぬれば何れの法も皆法華經にして勝劣・浅深ある事なし、念仏を申すも眞言を持つも禪を修行するも総じて一切の諸經並びに仏・菩薩の御名を持ちて唱るも皆法華經なりと信ずるが如説修行の人とは云われ候なり等云云、予が云く然らず所詮佛法を修行せんには人の言を用う可らず只仰いで仏の金言をまほるべきなり我等が本師・釈迦如来は初成道の始より法華を説かんと思食しかども衆生の機根未熟なりしかば先ず權教たる方便を四十余年が間説きて後に真実たる法華經を説かせ給ひしなり、此の經の序分・無量義經にして權実のはつじを指て方便真実を分け給へり、所謂以方便力・四十余年・末顕真実はなり、大莊嚴等の八万の大土・施權・開權・廢權等のいはれを心得分け給いて領解して言く法華經已前の歴劫修行等の諸經は終不得成・無上菩提と申しきり給ひぬ、然して後・正宗の法華に至つて世尊・法久後・要當説真実と説き給ひしを始めとして

無二亦無三除仏方便説正直捨方便乃至不受余經一偈と禁め給へり、是より已後は唯一仏乗の妙法のみ一切衆生を
仏になす大法にて法華經より外の諸經は一分の得益もあるまじきに末法の今の學者何れも如来の説教なれば皆得道あ
るべしと思ひて或は眞言或は念仏或は禪宗三論法相俱舍成実律等の諸宗諸經を取取に信ずるなり、是くの如
き人をば若人不信毀謗此經即斷一切世間仏種乃至其人命終入阿鼻獄と定め給へり、此等のをきての明鏡を本と
して一分もたがえず唯一乘法と信ずるを如説修行の人とは仏は定めさせ給へり。

難じて云く左様に方便權教たる諸經諸仏を信ずるを法華經と云はばこそ、只一經に限りて經文の如く五種の修行
をこらし安樂行品の如く修行せんは如説修行の者とは云われ候まじきか如何、答えて云く凡仏法を修行せん者は損折
二門を知る可きなり一切の經論此の一を出でざるなり、されば國中の諸學者等、仏法をあらあら學すと云へども時刻
相應の道をしらず四節四季取取に替れり、夏は熱く冬はつめたく春は花さき秋は菓なる春種子を下して秋菓を取るべ
し秋種子を下して春菓を取らんに豈取らる可けんや、極寒の時は厚き衣は用なり極熱の夏はな

にかせん、涼風は夏の用なり冬はなにかせん、仏法も亦復是くの如し小乗の流布して得益あるべき時もあり、權大乘の
流布して得益あるべき時もあり、實教の流布して仏果を得べき時もあり、然るに正像二千年は小乗・權大乘の流布の時
なり、末法の始めの五百年には純円一実の法華經のみ広宣流布の時なり、此の時は鬪諍堅固・白法隱没の時と定めて權實
雜亂の砌なり、敵有る時は刀杖弓箭を持つ可し敵無き時は弓箭兵杖何にかせん、今の時は

權教即實教の敵と成るなり、一乘流布の時は權教有つて敵と成りてまぎらはしくは實教より之を責む可し、是を損折
二門の中には法華經の折伏とは申すなり、天台云く「法華折伏・破權門理」とまことに故あるかな、然るに損受たる四
安樂の修行を今の時行するならば冬種子を下して春菓を求る者にあらずや、鶏の曉に鳴くは用なり宵に鳴くは物怪な
り、權實雜亂の時・法華經の御敵を責めずして山林に閉じ籠り損受を修行せんは豈法華經修行の時を

失う物怪にあらずや、されば末法今の時法華經の折伏の修行をば誰か經文の如く行じ給へしぞ、誰人にも坐せ諸經は無得道墮地獄の根源法華經独り成仏の法なりと音も惜まずよばはり給いて諸宗の人法共に折伏して御覽ぜよ三類の強敵来らん事疑い無し。

我等が本師釈迦如来は在世八年の間折伏し給ひ天台大師は三十余年伝教大師は二十余年今日蓮は二十余年の間、権理を破す其間の大難数を知らず、仏の九横の難に及ぶか及ばざるは知らず、恐らくは天台・伝教も法華經の故に日蓮が如く大難に値い給いし事なし、彼は只悪口怨嫉計りなり、是は両度の御勘氣遠くに流罪せられ竜口の頭の座頭の疵等其の外悪口せられ弟子等を流罪せられ籠に入れられ檀那の所領を取られ御内を出だされし、是等の大難には竜樹・天台・伝教も争か及び給うべき、されば如説修行の法華經の行者には三類の強敵打ち定んで有る可しと知り給へされば釈尊御入滅の後二千余年が間に如説修行の行者は釈尊・天台・伝教の三人は・

さてをき候ぬ、末法に入つては日蓮並びに弟子・檀那等はなり、我等を如説修行の者といはずば釈尊・天台・伝教等の三人も如説修行の人なるべからず、提婆・瞿伽利・善星・弘法・慈覺・智証・善導・法然・良觀房等は即ち法華經の行者と云はれ、釈尊・天台・伝教・日蓮並びに弟子・檀那は念仏・眞言・禅・律等の行者なるべし、法華經は方便權教と云はれ念仏等の諸經は還つて法華經となるべきか、東は西となり西は東となると大地は持つ所の草木共に飛び上りて天となり天の日月・星宿は共に落ち下りて地となるためしはありともいかでか此の理あるべき。

哀なるかな今日日本国の万民日蓮並びに弟子・檀那等が三類の強敵に責められ大苦に値うを見て悦んで笑ふとも昨日は人の上・今日は身の上なれば日蓮並びに弟子・檀那共に霜露の命の日影を待つ計りぞかし、只今仏果に叶いて寂光の本土に居住して自受法樂せん時、汝等が阿鼻大城の底に沈みて大苦に値わん時我等何計無慚と思はんずらん、汝等何計うらやましく思はんずらん、一期を過ぐる事程も無ければいかに強敵重なるともゆめゆめ退する

心なかれ恐るる心なかれ、縦ひ頸をば鋸にて引き切り、どうをばひしほを以てつき足にはほだしを打ってきりを以てもむとも、命のかよはんほどは南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱えて唱死に死するならば釈迦・多宝・十方の諸仏靈山会上にして御契約なれば須臾の程に飛び来りて手をとリ肩に引懸けて靈山へはしり給はば二聖・二十羅刹女は受持の者を擁護し諸天善神は天蓋を指し幡を上げて我等を守護して慥かに寂光の宝刹送り給うべきなり、あらうれしや・あらうれしや。

文永十年癸酉五月日 日蓮在御判

人々御中へ此の書御身を離さず常に御覽有る可く候

六八 顯仏未来記 沙門 日蓮 之を勸う 505P

法華經の第七に云く「我が滅度の後、後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん」と等云云、予一たびは歎いて云く仏滅後既に二千二百二十余年を隔つ何なる罪業に依つて仏の在世に生れず正法の四依像法の中の天台・伝教等にも値わざるやと、亦一たびは喜んで云く何なる幸あつて後五百歳に生れて此の眞文を拝見することぞや、在世も無益なり前四味の人は未だ法華經を聞かず正像も又由し無し南三・北七並びに華嚴・眞言等の学者は法華經を信ぜず、天台大師云く「後の五百歳遠く妙道に沾おわん」と等云云広宣流布の時を指すか、伝教大師云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」と等云云末法の始を願樂するの言なり、時代を以て果報を論ずれば

竜樹・天親に超過し天台・伝教にも勝るなり。

問うて云く後・五百歳は汝一人に限らず何ぞ殊に之を喜悅せしむるや、答えて云く法華經の第四に云く「如来の現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」文、天台大師云く「何に況や未來をや理化し難きに在り」文、妙樂大師云く「理在難化とは此の理を明すことは意・衆生の化し難きを知らしむるに在り」文、智度法師云く「俗に良藥口に苦しと言うが如く此の經は五乘の異執を廢して一極の玄宗を立つ故に凡を斥ぞけ聖を呵し大を排し小を破る乃至此くの如きの徒悉く留難を為す」等云云、伝教大師云く「代を語れば則ち像の終り末の始地を尋れば唐の東・羯の西・人を原れば則ち五濁の生・鬭諍の時なり、經に云く猶多怨嫉・況滅度後と此の言良に以有るなり」等云云、

此の伝教大師の筆跡は其の時に當るに似たれども意は當時を指すなり正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有りの釈は心有るかな、經に云く「惡魔・魔民・諸天・夜叉・鳩槃荼等其の便りを得ん」云云、言う所の等とは此の經に又云わく「若し夜叉・若し羅刹・若し餓鬼・若し富單那・若し吉遮・若し毘陀羅・若し馱・若し烏摩勒伽・若し阿跋摩羅・若し夜叉吉遮・若し人吉遮」等云云、此の文の如きは先生に四味三教乃至外道人天等の法を持得して今生に惡魔・諸天・諸人等の身を受けたる者が円実の行者を見聞して留難を至すべき由を説くなり。

疑つて云く正像の二時を末法に相對するに時と機と共に正像は殊に勝るなり何ぞ其の時機を捨てて偏に當時を指すや、答えて云く仏意測り難し予未だ之を得ず試みに一義を案じ小乘經を以て之を勘するに正法千年は教行証の

三つ具さに之を備う像法千年には教行のみ有つて証無し末法には教のみ有つて行証無し等云云、法華經

を以て之を採るに正法千年に三事を具するは在世に於て法華經に結縁する者か、其の後正法に生れて小乗の教行を以て縁と爲し小乗の証を得るなり、像法に於ては在世の結縁微薄の故に小乗に於て証すること無く此の人權大乘を以て縁と爲して十方の淨土に生ず、末法に於ては大小の益共に之無し、小乗には教のみ有つて行証無し

大乘には教行のみ有つて冥顯の証之無し、其の上正像の時の所立の権小の二宗漸漸末法に入て執心弥強盛にして小を以て大を打ち権を以て実を破り国土に大体謗法の者充滿するなり、仏教に依つて惡道に墮する者は大地微塵よりも多く正法を行して仏道を得る者は爪上の土よりも少きなり、此の時に當つて諸天善神其の国を捨離し

但邪天邪鬼等有つて王臣比丘比丘尼等の身心に入住し法華經の行者を罵詈毀辱せしむべき時なり、爾りと雖も仏の滅後に於て四味三教等の邪執を捨て実大乘の法華經に歸せば諸天善神並びに地涌千界等の菩薩法華の行者を守護せん此の人は守護の力を得て本門の本尊妙法蓮華經の五字を以て閻浮堤に広宣流布せしめんか、

例せば威音王仏の像法の時不輕菩薩我深敬等の二十四字を以て彼の土に広宣流布し一國の杖木等の大難を招きしが如し、彼の二十四字と此の五字と其の語殊なりと雖も其の意是れ同じ彼の像法の末と是の末法の初と全く同じ彼の不輕菩薩は初隨喜の人日蓮は名字の凡夫なり。

疑つて云く何を以て之を知る汝を末法の初の法華經の行者なりと為すと云うことを、答えて云く法華經に云く況んや滅度の後をやと云く諸の無智の人有つて惡口罵詈等し及び刀杖を加うる者あらんと云く数數擯出せられんと云く一切世間怨多くして信じ難しと云く杖木瓦石をもつて之を打擲すと云く惡魔・魔民・諸天・夜叉・鳩槃荼等其の便りを得んと等云云、此の明鏡に付いて仏語を信ぜしめんが為に、日本國中の王臣・

四衆の面目に引き向えたるに予よりの外には一人も之無し、時を論ずれば末法の初め一定なり、然る間若し日蓮無くんば仏語は虚妄と成らん、難じて云く汝は大慢の法師にして大天に過ぎ四禅比丘にも超えたり如何、答えて云く汝日蓮を蔑如するの重罪、又提婆達多に過ぎ無垢論師にも超えたり、我が言は大慢に似たれども仏記を扶け如来の実語を顯さんが為なり、然りと雖も日本國中に日蓮を除いては誰人を取り出して法華經の行者と為さん汝日蓮を謗らんとして仏記を虚妄にす豈大惡人に非ずや。

疑つて云く如来の未来記汝に相当れり、但し五天竺並びに漢土等にも法華經の行者之有るか如何、答えて云く
四天下の中に全く二日無し四海の内豈両主有らんや、疑つて云く何を以て汝之を知る、答えて云く月は西より出でて
東を照し日は東より出でて西を照す仏法も又以て是くの如し正像には西より東に向い宋法には東より西に往く、妙樂
大師の云く「豈中国に法を失いて之を四維に求むるに非ずや」と等云云、天竺に仏法無き証文なり漢土
に於て高宗皇帝の時北狄東京を領して今に一百五十余年、仏法王法共に尽き了んぬ、漢土の大蔵の中に小乗經は一向
之れ無く大乘經は多分之を失す、日本より寂照等少少之を渡す然りと雖も伝持の人無れば猶木石の衣鉢を帯持せる
が如し、故に遵式の云く「始西より伝う猶月の生ずるが如し今復東より返る猶日の昇るが如し」と等云云、此等の釈の如くん
ば天竺漢土に於て仏法を失せること勿論なり、問うて云く月氏漢土に於て仏法無きこと
は之を知れり、東西北の三洲に仏法無き事は何を以て之を知る、答えて云く法華經の第八に云く「如来の滅後に於て
閻浮提の内に広く流布せしめて断絶せざらしめん」と等云云、内の字は三洲を嫌う文なり、問うて曰く仏記
既に此くの如し汝が未来記如何、答えて曰く仏記に順じて之を勧づるに既に後五百歳の始に相当れり仏法必ず東土の
日本より出づべきなり、其の前相必ず正像に超過せる天変地天之れ有るか、所謂仏生の時・轉法輪の時・入涅槃の時・吉瑞
凶瑞共に前後に絶えたる大瑞なり、仏は此れ聖人の本なり、經經の文を見るに仏の御誕生の時は五色の光氣四方に遍く
して夜も昼の如し仏御入滅の時には十二の白虹・南北に亘り大日輪光り無くして闇夜の如くなりし、其の後正像二千年の
間・内外の聖人・生滅有れども此の大瑞には如かず、而るに去める正嘉年中
より今年に至るまで・或は大地震・或は大天変・宛かも仏陀の生滅の時の如し、当に知るべし仏の如き聖人生れたまわん
か、大虚に亘つて大慧星出づ誰の王臣を以て之に對せん、当瑞大地を傾動して二たび振裂す何れの聖賢を以て之に課せ
ん、当に知るべし通途世間の吉凶の大瑞には非ざるべし惟れ偏に此の大法興廢の大瑞なり、天台云く

「あめ たけ 雨の猛きを見て竜の大なるを知り華の盛なるを見て池の深きを知る」等云云、妙樂の云く「ちじん 智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云、日蓮此の道理を存して既に二十一年なり、日來の災 月來の難 此の両三年の間の事既に死罪に及ばんとす今年 今月万が一も脱がれ難き身命なり、世の人 疑い有らば委細の事は弟子に之を問え、幸なるかな一生の内に無始の謗法を消滅せんことを悦ばしいかな未だ見聞せざる教主釈尊に侍え奉らんことよ、願くは我を損ずる国主等をば最初に之を導かん、我を扶くる弟子等をば釈尊に之を申さん、我を生める父母等には未だ死せざる已前に此の大善を進めん、但し今 夢の如く宝塔品の心を得たり、此の経に云く「もし須弥を接つて他方の無数の仏土に擲げ置かんも亦未だ為難しとせず乃至若し仏の滅後に悪世の中に於て能く此の経を説かん是れ則ち為難し」等云云、伝教大師云く「浅きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり浅きを去つて深きに就くは丈夫の心なり、天台大師は釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す」等云云、安州の日蓮は恐くは三師に相承し法華宗を助けて末法に流通す三に一を加えて三国四師と号く、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

ぶんえい 文永十年太歳癸酉後 五月十一日 桑門日蓮之を記す

問う妙法蓮華經とは其の体何物ぞや、答う十界の依正即ち妙法蓮華經の当体なり、問う若爾れば我等が如き一切衆生も妙法の全体なりと云わる可きか、答う勿論なり經に云く「所謂諸法乃至本末究竟等」云云、妙樂大師釈して云く「実相は必ず諸法、諸法は必ず十如・十如は必ず十界・十界は必ず身土」と云云、天台云く「十如十界三千の諸法は今經の正体なるのみ」云云、南岳大師云く「云何なるを名けて妙法蓮華經と為すや答う妙とは衆生妙なるが故に法とは即ち是れ衆生法なるが故に」云云、又天台釈して云く「衆生法妙」と云云。

問う一切衆生の当体即妙法の全体ならば地獄乃至九界の業因・業果も皆是れ妙法の体なるや、答う法性の妙理に染淨の二法有り染法は熏じて迷と成り淨法は熏じて悟と成る悟は即ち仏界なり迷は即ち衆生なり、此の迷悟の二法二なりと雖も然も法性真如の一理なり、譬えば水精の玉の日輪に向えば火を取り月輪に向えば水を取る玉の体

一なれども縁に随て其の功同じからざるが如し、真如の妙理も亦復是くの如し一妙真如の理なりと雖も惡縁に遇えば迷と成り善縁に遇えば悟と成る悟は即ち法性なり迷は即ち無明なり、譬えば人夢に種種の善惡の業を見夢覺めて後に之を思えば我が一心に見る所の夢なるが如し、一心は法性真如の一理なり夢の善惡は迷悟の無明法性なり、是くの如く意得れば惡迷の無明を捨て善悟の法性を本と為す可きなり、大円覺・修多羅・了義經に云く「一切」

諸の衆生の無始の幻無明は皆諸の如来の円覺の心従り建立す」云云、天台大師の止觀に云く「無明癡惑本是れ法性なり癡迷を以ての故に法性變じて無明と作る」云云、妙樂大師の釈に云く「理性体無し全く無明に依る無明体無し全く法性に依る」云云、無明は所斷の迷・法性は所証の理なり何ぞ体一なりと云うやと云える不審をば此等

の文義を以て意得可きなり、大論九十五の夢の譬、天台一家の玉の譬、誠に面白く思うなり、正く無明法性其の体一なりと云う証拠は法華經に云く「是の法は法位に住して世間の相常住なり」云云、大論に云く「明と無明と異無く別無しかくのごとく」は是を中道と名く云云、但真如の妙理に染淨の二法有りと云う事証文之れ多し
と雖も華嚴經に云く「心仏及衆生是三無差別」の文と法華經の諸法實相の文とは過ぐ可からざるなり南岳大師の云く「心体に染淨の二法を具足して而も異相無く一味平等なり」云云、又明鏡の譬、真実に「二」なり委くは大乗止觀の釈の如し又能き釈には籤の六に云く「三千理に在れば同じく無明と名け三千果成すれば咸く常樂と稱す三千改むること無ければ無明即明三千並に常なれば俱体俱用なり」文、此の釈分明なり。

問う一切衆生、皆悉く妙法蓮華經の当体ならば我等が如き愚癡闇鈍の凡夫も即ち妙法の当体なりや、答う当世の諸人之れ多しと雖も一人を出でず謂ゆる權教の人實教の人なり而も權教方便の念仏等を信ずる人は妙法蓮華の当体と云わる可からず實教の法華經を信ずる人は即ち当体の蓮華、真如の妙体、是なり涅槃經に云く「一切衆生大乘を信ずる故に大乘の衆生と名く」文、南岳大師の四安樂行に云く「大強精進經に云く衆生と如来と同共一法身にして清淨妙無比なるを妙法華經と稱す」文、又云く「法華經を修行するは此の一心一學に衆果普く備わる一時に具足して次第入に非ず亦蓮華の一華に衆果を一時に具足するが如し是を一乘の衆生の義と名く」文、又云く「二乘・声聞及び鈍根の菩薩は方便道の中の次第修學なり利根の菩薩は正直に方便を捨てて次第行を修せず若し法華三昧を証すれば衆果悉く具足す是を一乘の衆生と名く」文、南岳の釈の意は次第行の三字をば当世の學者は別教なりと料簡す、然るに此の釈の意は法華の因果具足の道に対して方便道を次第行と云う故に爾前の円、爾前の諸大乘經並びに頓漸大小の諸經なり証拠は無量義經に云く「次に方等十二部經、摩訶般若、華嚴海空を説いて菩薩の歷劫修行を宣説す」文、利根の菩薩は正直に方便を捨てて次第行を修せず若し法華經を証する時は衆果悉く

具足す是を一乗の衆生と名くるなり此等の文の意を案するに三乗・五乘・七方便・九法界・四味三教・一切の凡聖等をば
 大乘の衆生妙法蓮華の当体とは名く可からざるなり、設い仏なりと雖も權教の仏をば仏界の名言を付く可からず權教
 の三身は未だ無常を免れざる故に何に況や其の余の界の名言をや、故に正像二千年の國王・大臣より
 も末法の非人は尊貴なりと釈するも此の意なり、南岳釈して云く「一切衆生法身の蔵を具足して仏と一にして異り有るこ
 と無し」、是の故に法華經に云く「父母・所生・清淨・常眼・耳鼻・舌・身・意亦復如是」文、又云く問うて云く仏何れの經
 の中に眼等の諸根を説いて名けて如來と為や、答えて云く大強精進經の中に衆生と如來と同じ
 く共に一法身にして清淨妙無比なるを妙法蓮華經と稱す文、他經に有りと雖も下文顯れ已れば通じて引用すること
 を得るなり、大強精進經の同共の二字に習い相伝するなり法華經に同共して信ずる者は妙經の体なり不同共の念仏者
 等は既に仏性法身如來に背くが故に妙經の体に非ざるなり、所詮妙法蓮華の当体とは法華經を信ずる
 日蓮が弟子・檀那等の父母所生の肉身是なり、正直に方便を捨て但法華經を信じ南無妙法蓮華經と唱うる人は煩惱・業
 苦の三道・法身・般若・解脱の三徳と轉じて三觀・三諦即一心に顯われ其の人の所住の處は常寂光土なり、能居・所居・
 身土・色心・俱体俱用・無作三身の本門・壽量の当体蓮華の仏とは日蓮が弟子・檀那等の中の事なり是れ即ち法華の当体
 自在神力の顯わす所の功能なり敢て之を疑う可からず之を疑う可からず、問う天台大師妙法蓮華の
 当体・譬喩の二義を釈し給えり爾れば其の当体・譬喩の蓮華の様は如何、答う譬喩の蓮華とは施開廢の三釈委く之を見る
 べし、当体蓮華の釈は玄義第七に云く「蓮華は譬えに非ず当体に名を得類せば劫初に万物名無し聖人・理を觀じて準則し
 て名を作るが如し」文、又云く「今蓮華の稱は是れ喩を仮るに非ず乃ち是れ法華の法門なり法華の法門は清淨にして
 因果微妙なれば此の法門を名けて蓮華と為す即ち是れ法華三昧の當体の名にして譬喩に非ざるなり」又云く「問う蓮華
 定めて是れ法華三昧の蓮華なりや定めて是れ華草の蓮華なりや、答う定めて是れ法蓮華

なり法蓮華解し難し故に草花を喩と為す利根は名に即して理を解し譬喩を仮らず但法華の解を作す中下は未だ悟らず
たええ たち すなわ いげ れんげ もつ なん れんげ たと ゆえ 故に三周の説法有つて上中下根に逗う上根に約すれば是れ法
譬を須いて乃ち知る易解の蓮華を以て難解の蓮華に喩う、故に三周の説法有つて上中下根に逗う上根に約すれば是れ法
の名中下に約すれば是れ譬の名なり三根合論し雙て法譬を標す是くの如く解する者は誰とか

あらそ 諍うことを為さんや云云、此の釈の意は至理は名無し聖人理を觀じて万物に名を付くる時因果俱時不思議の法
これ 之れ有り之を名けて妙法蓮華と為す此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を具足して闕減無し之を修行する者は仏因
ぶつかどうじ 仏果同時に之を得るなり、聖人此の法を師と為して修行覺道し給えば妙因妙果俱時に感得し給うが故に妙覺果滿
の如來と成り給いしなり、故に伝教大師云く「一心の妙法蓮華とは因華果台俱時に增長す三周各各
とつたい ひゆ 当体譬喩有り、総じて一經に皆当体譬喩あり別して七譬三平等十無上の法門有りて皆当体蓮華有るなり、此の理
を詮ずる教を名けて妙法蓮華經と為す云云、妙樂大師の云く「須く七譬を以て各蓮華樞実の義に対すべし。何者蓮華
は只是れ為実施權開權顯実七譬皆然なり文、又劫初に華草有り聖人理を見て号して蓮華と名く
此の華草因果俱時なること妙法蓮華に似たり故に此の華草同じく蓮華と名くるなり水中に生ずる赤蓮華・白蓮華等の
れんげこれ 蓮華是なり、譬喩の蓮華とは此の華草の蓮華なり此の華草を以て難解の妙法蓮華を顯す天台大師の妙法は解し難し譬
を仮りて顯れ易しと釈するは是の意なり。

問う劫初より已來何人か当体の蓮華を証得せしや、答う釈尊五百塵点劫の当初此の妙法の当体蓮華を証得して世
世番番に成道を唱え能証・所証の本理を顯し給えり、今日又中天竺摩訶陀国に出世して此の蓮華を顯わさんと欲す
に機無く時無し故に一法の蓮華に於て三の華草を分別し三乗の權法を施し擬宣誘引せしこと四十余年な

り、此の間は衆生の根性万差なれば種種の華草を施し設けて終に妙法蓮華を施したまわざる故に、無量義經に云く「我
先に道場菩提樹下乃至四十余年未だ眞実を顯さず文、法華經に至つて四味三教の方便の權教・小乘種種

そのけ
の草華を捨てて唯一の妙法蓮華を説き三の華草を開して一の妙法蓮華を顕す時、四味三教の権人に初住の蓮華を授けしより始めて開近顯遠の蓮華に至つて二住・三住・乃至・十住・等覺・妙覺の極果の蓮華を得るなり。

問う法華經は何れの品何れの文にか正しく当体譬喩の蓮華を説き分けたるや、答う若し三周の聲聞に約して之を論ぜば方便の一品は皆是当体蓮華を説けるなり、譬喩品・化城喩品には譬喩蓮華を説きしなり、但方便品にも譬喩蓮華無きに非ず余品にも当体蓮華無きに非ざるなり、問う若し爾らば正しく当体蓮華を説きし文は何れぞや答う方便品の諸法実相の文是なり、問う何を以て此の文が当体蓮華なりと云う事を知ることを得るや、答う天台・妙楽今の文を引て今經の体を釈せし故なり、又伝教大師釈して云く「問う法華經は何を以て体と為すや、答う諸法実相を以て体と為す」文、此の釈分明なり此の文の名を妙法蓮華と曰う義なり、又現証は宝塔品の二身是れ現証なり、或は涌出の菩薩竜女の即身成仏是なり、地涌の菩薩を現証と為す事は經文に如蓮華在水と云う故なり、菩薩の当体と聞たり竜女を証拠と為す事は靈鷲山に詣で千葉の蓮華の大いさ車輪の如くなるに坐しと説きたまう故なり、又妙音・觀音の三十三・四身なり是をば解釋には法華三昧の不思議・自在の業を証得するに非ざるよりは安ぞ能く此の三十三身を現せんと云云、或は世間相常住の文、此等は皆当世の學者の勸文なり、然りと雖も日蓮は方便品の文と神力品の如来・一切所有之法等の文となり、此の文をば天台大師も之を引いて今經の五重玄を釈せしなり、殊更此の一文正しき証文なり。

問う次上に引く所の文証・現証・殊勝なり何ぞ神力の一文に執するや、答う此の一文は深意有る故に殊更に吉なり、問う其の深意如何、答う此の文は釈尊・本眷属地涌の菩薩に結要の五字の当体を付属すと説きたまえる文なる故なり、久遠実成の釈迦如来は我が昔の所願の如き今は已に満足す、一切衆生を化して皆仏道に入ら令むとて御願已に満足し、如来の滅後・後五百歲中・広宣流布の付属を説かんが為地涌の菩薩を召し出し本門の当体蓮華を要を以て付属し給える

とつたいひゆ
当体譬喩合説する様を委細に釈し給う時大集經の我今 仏の蓮華を敬礼すと云う文と法華論の今の文とを引証して
釈して云く「若し大集に依れば行法の因果を蓮華と為す菩薩上に処すれば即ち是れ因の華なり仏の蓮華を礼すれば即ち
是れ果の華なり、若し法華論に依れば依報

の国土を以て蓮華と為す復菩薩蓮華の行を修するに由つて報蓮華の国土を得 当に知るべし依正因果悉く是れ蓮華の法
なり、何ぞ譬をもつて顯すことをもちいん鈍人の法性の蓮華を解せざる為の故に世の華を挙げて譬と為す亦何の妨げか
あるべき文、又云く若し蓮華に非んば何に由つて遍く上来の諸法を喩えん法譬雙弁ずる故に

妙法蓮華と稱するなり、次に竜樹菩薩の大論に云く蓮華とは法譬並びに挙ぐるなり」文、伝教大師が天親・竜樹の二論
の文を釈して云く「論の文但妙法蓮華經と名くるに二種の義あり唯蓮華に一種の義有り」と謂うには非ず、凡そ法喩とは相

似たるを好しと為す若し相似ずんば何を以てか他を解せしめん、是の故に釈論に法喩並び

挙ぐ一心の妙法蓮華は因華・果台・俱時に増長す此の義解し難し喩を仮れば解し易し此の理教を詮するを名けて
妙法蓮華經と為す」文、此等の論文釈義分明なり文に在つて見る可し包蔵せざるが故に合説の義・極成せり、凡そ法華經
の意は譬喩即法体法体即譬喩なり、故に伝教大師釈して云く「今經は譬喩多しと雖も大喩は是れ七喩なり

此の七喩は即ち法体法体は即ち譬喩なり、故に譬喩の外に法体無く法体の外に譬喩無し、但し法体とは法性の理体なり
譬喩とは即ち妙法の事相の体なり事相即理体なり理体即事相なり故に法譬一体とは云うなり、是を以て論文山家の釈
に皆蓮華を釈するには法譬並べ挙ぐ」等云云、釈の意分明なる故重ねて云わす。

門う如来の在世に誰か当体の蓮華を証得せるや、答う四味三教の時は三乘・五乘・七方便・九法界・帶權の円の菩薩
並びに教主乃至法華迹門の教主総じて本門寿量の教主を除くの外は本門の当体蓮華の名をも聞かず何に況んや証得

せんをや、開三顯一の無上菩提の蓮華尚四十余年には之を顯さず、故に無量義經に終不得成・無上菩提とて迹門

開三頭一の蓮華は爾前に之を説かずと云うなり、何に況んや開近顕遠。本地難思。境智冥合。本有無作の当体蓮華をば
迹化弥勒等之を知る可きや、問う何を以て爾前の円の菩薩・迹門の円の菩薩は本門の当体蓮華を証得せずと云う事を
知ることを得ん、答う爾前の円の菩薩は迹門の蓮華を知らず迹門の円の菩薩は本門の蓮華を知ら
ざるなり、天台云く、權教の補処は迹化の衆を知らず迹化の衆は本化の衆を知らず文、伝教大師云く「是直道なりと
雖も大直道ならず」云云、或は云く「未だ菩提の大直道を知らざるが故に」云云此の意なり、爾前・迹門
の菩薩は一分断惑証理の義分有りと雖も本門に對するの時は当分の断惑にして跨節の断惑に非ず未断惑と云わるるな
り、然れば菩薩処得入と釈すれども二乗を嫌うの時一往得入の名を与うるなり、故に爾前・迹門の大菩薩が仏の
蓮華を証得する事は本門の時なり眞実の断惑は寿量の一品を聞きし時なり、天台大師涌出品の五十小劫仏
の神力の故に諸の大衆をして半日の如しと謂わしむの文を釈して云く「解者は短に即して長・五十小劫と見る惑者は長に
即して短・半日の如しと謂えり」文、妙樂之を受けて釈して云く「菩薩已に無明を破す之を稱して解と為す大衆仍お賢位
に居す之を名けて惑と為す」文、釈の意分明なり爾前・迹門の菩薩は惑者なり地涌の菩薩のみ独り
解者なりと云う事なり、然るに当世天台宗の人の中に本・迹の同異を論ずる時異り無しと云つて此の文を料簡するに
解者の中に迹化の衆入りたりと云うは大なる僻見なり經の文釈の義分明なり何ぞ横計を為す可けんや、文の如きは地涌
の菩薩・五十小劫の間如来を称揚するを靈山迹化の衆は半日の如く謂えりと説き給えるを天台は
解者惑者を出して迹化の衆は惑者の故に半日と思えり是れ即ち僻見なり、地涌の菩薩は解者の故に五十小劫と見る是れ
即ち正見なりと釈し給えるなり、妙樂之を受けて無明を破する菩薩は解者なり未だ無明を破せざる菩薩は惑者なりと
釈し給いし事文に在つて分明なり、迹化の菩薩なりとも住上の菩薩は已に無明を破する菩薩なりと云わん学者は無得道
の諸經を有得道と習いし故なり、爾前・迹門の当分に妙覺の位有りと雖も本門寿量の眞仏に望むる時は惑者仍お賢位に

居ると云わるる者なりこんきやう 権教の三身未だ無常を免れざる故は夢中の虚仏なるが故なり、爾前と迹化の衆とは未だ本門に至らざる時は未断惑の者と云われ彼に至る時正しく初住に叶うなり、妙樂の釈に云く「開迹顯本皆初住に入る」文、仍賢位に居すの釈之を思い合すべし、爾前迹化の衆は惑者未だ無明を破せ

ざる仏 菩薩なりと云う事真実なり真実なり、故に知ぬ本門 寿量の説顯れての後は靈山一會の衆皆悉く当体蓮華を証得せしなり、二乗 闡提・定性 女人 惡人等も本仏の蓮華を証得するなり、伝教大師一大事の蓮華を釈して云く「法華の肝心一大事の因縁は蓮華の所顯なり、一とは一実相なり大とは性広博なり事とは法性の事なり一究竟事は

円の理教 智行、円の身 若達なり一乗・三乗・定性 不定性 内道 外道 阿闍 阿顛 皆悉く一切智地に到る是の一大事仏の知見を開示し悟入して一切成仏す」女人 闡提・定性 二乗等の極惡人靈山に於て当体蓮華を証得するを云うなり。

問う 末法今時誰れ人が当体蓮華を証得せるや、答う 当世の体を見るに大阿鼻地獄の当体を証得する人之れ多しと雖も仏の蓮華を証得せる人之れ無し其の故は無得道の権教方便を信仰して法華の当体真実の蓮華を毀謗する故なり、仏説いて云く「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば則ち一切世間の仏種を断ぜん乃至其の人命終して

阿鼻獄に入らん」文、天台云く「此の経は 六道の仏種を開く若此の経を謗せば義断ずるに当るなり」文、日蓮云く「此の経は是れ十界の仏種に通ず若し此の経を謗せば義是れ十界の仏種を断ずるに当る是の人無間に於て決定して墮在す何ぞ出ずる期を得んや、然るに日蓮が一門は正直に権教の邪法 邪師の邪義を捨てて正直に正法 正師

の正義を信ずる故に当体蓮華を証得して常寂光の当体の妙理を顯す事は本門 寿量の教主の金言を信じて南無妙法蓮華經と唱うるが故なり、問う 南岳 天台 伝教等の大師 法華經に依つて一乘 円宗の教法を弘通し給うと雖も未だ南無妙法蓮華經と唱えたまわざるは如何、若し爾らば此の大師等は未だ当体蓮華を知らず又証得したまわずと云

うべきや、答う南岳大師は觀音の化身・天台大師は藥王の化身なり等云云、若し爾らば靈山に於て本門壽量の説を聞きし時は之を証得すと雖も在生の時は妙法流布の時に非ず、故に妙法の名字を替えて止觀と号し一念三千一心三觀を修し給いしなり、但し此等の大師等も南無妙法蓮華經と唱うる事を自行眞実の内証と思食されしなり、南岳大師の法華懺法に云く「南無妙法蓮華經」文、天台大師の云く「南無平等大慧一乘妙法蓮華經」文、又云く「稽首妙法蓮華經」云云、又「歸命妙法蓮華經」云云、伝教大師の最後臨終の十生願の記に云く「南無妙法蓮華經」云云、問う文証分明なり何ぞ是くの如く弘通したまわざるや、答う此れに於て二意有り一には時の至らざるが故に二には付屬に非ざるが故なり、凡そ妙法の五字は末法流布の大白法なり地涌千界の居士の付屬なり是の故に南岳・天台・伝教等は内に鑑みて末法の導師に之を譲りて弘通し給わざりしなり。

七〇 当体義抄送状

519P

問う当体の蓮華解し難し故に譬喩を仮りて之を顯すとは經文に証拠有るか、答う經に云く「世間の法に染まらざる」と蓮華の水に在るが如し地より而も涌出す」云云、地涌の菩薩の当体蓮華なり、譬喩は知るべし以上後日に之を改め書すべし、此の法門は妙經所詮の理にして釈迦如来の御本懷地涌の居士に付屬せる末法に弘通せん經の肝心なり、国主信心あらん後始めて之を申す可き秘藏の法門なり、日蓮最蓮房に伝え畢んぬ。

日蓮 花押

七一 小乗大乘分別抄 文永十年 五十二歳御作 与富木常忍

520P

夫れ小大定めなし一寸の物を一尺の物に対しては小と云い五尺の男に対しては六尺七尺の男を大の男と云う、外道の法
に対しては一切の大小の仏教を皆大乘と云う大法東漸通指仏教以為大法等と釈する是なり、仏教に入つても鹿苑十二
年の説・四阿含經等の一切の小乗經をば諸大乘經に対して小乗經と名けたり、又諸大乘經には大乘
の中にとりて劣る教を小乗と云う華嚴の大乘經に其餘樂小法と申す文あり、天台大師はこの小法というは常の
小乗經にはあらず十地の大法に対して十住・十行・十回向の大法を下して小法と名くと釈し給へり、又法華經第一の卷
方便品に若以小乗化乃至於一人と申す文あり天台・妙樂は阿含經を小乗と云うのみにあらず華嚴經の別教・方便品
般若の通別の大乗をも小乗と定め給う、又玄義の第一に會小歸大是漸頓混合と申す釈をば智証大師は
初め華嚴經より終り般若經にいたるまで四教八教の權教諸大乘經を漸頓と釈す混合とは八教を會して一大円教に
合すとこそことばはられて候へ、又法華經の壽量品に樂於小法 德薄垢重者と申す文あり、天台大師は此經文に小法と云
うは小乗經にもあらず又諸大乘經にもあらず久遠実成を説かざる華嚴經の円乃至方等般若法華經の迹門十四
品の円頓の大法まで小乗の法なり、又華嚴經等の諸大乘經の教主の法身報身毘盧遮那盧舍那大日如来等をも小
仏なりと釈し給ふ、此の心ならば涅槃經・大日經等の一切の大小權實顯密の諸經は皆小乗經八宗の中には俱舍宗・
成実宗・律宗を小乗と云うのみならず華嚴宗・法相宗・三論宗・真言宗等の諸大乘宗を小乗宗として唯天台の一宗
計り実大乘宗なるべし、彼彼の大乗宗の所依の經經には絶えて二乗作仏久遠実成の最大の法をとかせ給はず、譬えは
一尺二尺の石を持つ者をば大力といはず一丈二丈の石を持つを大力と云うが如し、華嚴經の法界円融

四十一位・般若經の混同無二・十八空・乾慧地等の十地・瓔珞經の五十二位・仁王經の五十一位・藥師經の十二の大願・
雙觀經の四十八願・大日經の眞言・印契等此等は小乘經に對すれば大法秘法なり、法華經の二乗作仏・久遠実成に對
すれば小乘の法なり、一尺二尺を一丈二丈に對するが如し、又二乗作仏・久遠実成は法華經の肝用にして諸經に
對すれば奇なりと云へども法華經の中にてはまた奇妙ならず一念三千と申す法門こそ奇が中の奇妙が中の妙にて華嚴・
大日經等に分絶たるのみならず、八宗の祖師の中にも眞言等の七宗の大師名をだにもしらず天竺の大論師・竜樹菩薩・
天親菩薩は内には珠を含み外には書きあらはし給はざりし法門なり、雨衆が三德・米育が六句の先仏の
教を盗みとれる様に華嚴宗の澄觀・眞言宗の善無畏等は天台大師の一念三千の法門を盗み取つて我が所依の經の心仏及
衆生の文の心とし心実相と申す文の神とせるなり、かくのごとく盗み取つて我が宗の規模となせるが又還つて天台宗を
下し華嚴宗・眞言宗には劣れる法なりと申す、此等の大師は世間の盗人にはあらねども仏法の盗人なるべし、此等をよく
よく尋ね明むべし。

又世間の天台宗の學者並びに諸宗の人人の云く法華經は但二乗作仏・久遠実成計りなり等云云、今反詰して云く汝
等が承伏に付いて但二乗作仏と久遠実成計り法華經にかぎつて諸經になくば此れなりとも豈奇が中の奇にあらずや、
二乗作仏・諸經になくば仏の御弟子・頭陀第一の迦葉・智慧第一の舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子・
千二百の羅漢・万二千の声聞・無數億の二乗界・過去遠遠劫より未來無數劫にいたるまで法華經に値いたてまつらずば永
く色心俱に滅して永不成仏の者となるべし豈大なる失にあらずや、又二乗界・仏にならずば迦葉等を供養せし梵天帝釈
四衆・八部・比丘・比丘尼等の二界・八番の衆はいかんがあるべき、又久遠実成が此の經に限ら

ずんば三世の諸仏・無常遷滅の法に墮しなん、譬えば天に諸星ありとも日月ましまさずんばいかんがせん地に草木ありと
も大地なくばいかんがせん、是は汝が承伏に付いての義なり実をもつて勘へ申さば二乗作仏なきなら

ば九界の衆生 仏になるべからず、法華經の心は法爾のことほりとして一切衆生に十界を具足せり、譬えば人・一人は必ず四大を以てつくれり一大かけなば人にあらじ、一切衆生のみならず十界の依正の二法非情の草木一微塵にいたるまで皆十界を具足せり、二乗界 仏にならずば余界の中の二乗界も仏になるべからず又余界の中の二乗界 仏にならずば余界の八界 仏になるべからず、譬えば父母ともに持ちたる者兄弟九人あらんか二人は凡下の者と定められば余の七人も必ず凡下の者となるべし、仏と經とは父母の如し九界の衆生は実子なり声聞 緣覺の二人 永不成仏の者となるならば菩薩 六凡の七人あに得道をゆるさるべきや、今此の三界は皆是我が有なり其の中の衆生は悉く是吾子なり乃至唯我一人のみ能く救護を為すの文をもつて知るべし、又菩薩と申すは必ず四弘誓願をおこす第一衆生無辺誓願度の願 成就せずば第四の無上菩提誓願証の願も成就すべからず、前四味の諸經にては菩薩 凡夫は仏になるべし二乗は永く仏になるべからず等云云、而るをかしげなる菩薩もはかなげなる六凡も共に思へ我等 仏になるべし二乗は仏にならざればがしくして彼の道には入ざりけると思ふ、二乗はなげきをいたき此の道には入るまじかりし者をと恐れかなしみしが今法華經にして二乗を仏になし給へる時二乗 仏になるのみならずかの九界の成仏をもときあらはし給へ、諸の菩薩 此の法門を聞いて思はく我等が思ひははかなかりけり爾前の經經にして二乗 仏にならずば我等もなるまじかりける者なり、二乗を永不成仏と説き給ふは二乗一人計りなげくべきにあらざりけり我等も同じなげきにてありけりと心づるなり。

又壽量品の久遠実成が爾前の經經になき事を以て思ふに爾前には久遠実成なきのみならず仏は天下第一の大妄語の人なるべし、爾前の大乗第一たる華嚴經・大日經等に始めて正覺を成じ我昔道場に坐す等云云、眞実甚深正直捨方便の無量義經と法華經の迹門には我先に道場にして我始め道場に坐すと説れたり、此等の經文は壽量品の然るに我実に成仏してより已來無量無辺なりの文より思ひ見ればあに大妄語にあらずや、仏の一身すで

に大妄語の身なり一身に備えたる六根の諸法あに実なるべきや、大氷の上に造れる諸舎は春をむかへては破れざるべしや水中の満月は実に体ありや、爾前の成仏往生等は水中の星月の如し爾前の成仏往生等は体に随ふ影の如し、本門寿量品をもつて見れば寿量品の智慧をはなれては諸経は跨節当分の得道共に有名無実なり、
天台大師 此の法門を道場にして独り覚知し玄義十卷・文句十卷・止観十卷等かきつけ給うに諸経に二乗作仏・久遠実成絶えてなき由を書きき給ふ、是は南北の十師が教相に迷つて三時・四時・五時・四宗・五宗・六宗・一音・半滿・三教・四教等を立てて教の浅深勝劣に迷ひし此等の非義を破らんが為にまず眼前たる二乗作仏・久遠実成をもつて諸経の勝劣を定め給ひしなり、然りと云つて余界の得道をゆるすにはあらず、其の後華嚴宗の五教・法相宗の三時・真言宗の顯密五藏・十住心義釈の四句等は南三・北七の十師の義よりも尚る教相なり。

此等は他師の事なればさてをきぬ又自宗の学者が天台・妙楽・伝教大師の御釈に迷つて爾前の経経には二乗作仏・久遠実成計りこそ無けれども余界の得道は有りなんと申す人人・二人・一人ならず日本国に弘まれり、他宗の人人是に便を得て弥・天台宗を失ふ此等の学者は譬えば野馬の蜘蛛の網にかかり渴る鹿の陽炎をおふよりもはかなし例せば頼朝の右大將家は泰衡を討たんが為に泰衡を誑して義経を討たせ、太政入道清盛は源氏を喪して世をとらんが為に我が伯父平馬介忠正を切る義朝はたばらかされて慈父為義を切るが如し、此等は墓なき人人のためしなり、

天台大師 法華經より外の経経には二乗作仏・久遠実成は絶えてなしなんと釈し給ひ菩薩の作仏・凡夫の往生はあるなんめりとうち思ひて我等は二乗にもあらざれば爾前の経経にても得道なるべし此の念い心中にさし

はさめり、其の中にも觀經の九品往生はながひやすき事なれば法華經をばなげすて念仏申して淨土に生れて觀音・勢至・阿彌陀仏に値いたてまつて成仏を遂ぐべし云云、当世の天台宗の人人を始として諸宗の学者皆此くの如し実義をもつて申さば一切衆生の成仏のみならず六道を出で十方の淨土に往生する事はかならず法華經の

力なり、例せば日本国の人・唐土の内裏に入らん事は必ず日本の国王の勅定によるべきが如し穢土を離れて浄土に入る事は必ず法華經の力なるべし、例せば民の女・乃至閼白・大臣の女に至るまで大王の種を下せば其の産る子王となりぬ、大王の女なれども臣下の種を懷妊せば其の子王とならざるが如し、十方の浄土に生るる者は三乗・人天・畜生等までも皆王の種姓と成つて生るべし皆仏となるべきが故なり、阿含經は民の女の民を夫とし華嚴・方等・般若等は臣の女の臣を夫とせるが如し、又華嚴經・方等・般若・大日經等の円教の菩薩等は大王の女の臣下を夫とせるが如し、皆浄土に生るべき法にはあらず、又華嚴・阿含・方等・般若等の經經の間に六道を出づる人あり

是は彼の經經の力には非ず過去に法華經の種を殖えたりし人現在に法華經を待たずして機すすむ故に爾前の經經を縁として過去の法華經の種を發得して成仏往生をとぐるなり、例せば縁覺の無仏世にして飛花落葉を觀じて獨覺の菩提を証し孝養父母の者の梵天に生るるが如し飛花落葉孝養父母等は獨覺と梵天との修因にはあらねどもかれを縁として過去の修因を引きおこし彼の天に生じ獨覺の菩提を証す、而るに尚過去に小乗の三賢四善根にも入らず有漏の禪定をも修せざる者は月を觀じ花を詠し孝養父母の善を修すれども獨覺ともならず色天にも生ぜず、過去に法華經の種を殖ざる人は華嚴經の席に侍りしかども初地・初住にものぼらず、鹿苑說教みきりの砌にても見思をも断ぜず觀經等にても九品の往生をもとげず、但大小の賢位のみに入つて聖位にはのぼらずして法華經に来て始めて仏種を心田に下して一生に初地・初住等に登る者もあり、又涅槃の座へさがり乃至滅後未來までゆく人もあり、過去に法華經の種を殖たる人人は結縁の厚薄に随つて華嚴經を縁として初地・初住に登る人もあり、阿含經を縁として見思を断じて二乗と成る者もあり、觀經等の九品の行業を縁として往生する者もあり、方等・般若も此れをもつて知んぬべし、此等は彼の經經の力にはあらず偏に法華經の力なり譬えば民の女に王の種を下せるを人しらずして民の子と思ひ大臣等の女に王の種を下せるを人しらずして臣下の子と思へ

ども大王より是を尋ねれば皆王種となるべし、爾前にして界外全る人を法華經より之を尋ねれば皆法華經の得道なるべし、又過去に法華經の種を殖えたる人の根鈍にして爾前の經に發得せざる人人は法華經にいたりて得道なる、是は爾前の經をばめのととしてきさき腹の太子・王子と云うが如くなるべし、又仏の滅後にも正法一千年が間は在世の如くこそなければ過去に法華經の種を殖えて法華涅槃經にて覺りをとぐる者もありぬ現在・在世にて種を下せる人人も是多し。

又滅後なれども現に法華經ましませば外道の法より小乗經にうつり小乗經より權大乘にうつり權大乘より法華經にうつる人人数をしらず、竜樹菩薩・無著菩薩・世親論師等是なり、像法一千年には正法のほどこそ無けれども又過去・現在に法華經の種を殖えたる人人も少少之有り、而るを漸漸に仏法澆薄になる程に宗宗も偏執・石の如くかたく我慢山の如く高し、像法の末に成りぬれば仏法によつて諍論・興盛して仏法の合戦ひまなし、世間の罪よりも仏法の失に依つて無間地獄に墮つる者数をしらず。

今は又末法に入つて二百余歳過去・現在に法華經の種を殖えたりし人人もやうやくつきはてぬ、又種をつゑたる人人は少少あるらめども世間の悪人・出生の謗法の者数をしらず国に充滿せり、譬えば大火の中の小水・大水の中の小火・大海の中の水・大地の中の金などの如く悪業とのみなりぬ、又過去の善業もなきが如く現在の善業

もしるしなし、或は弥陀の名号をもつて人を狂はし法華經をすてしむれば背上向下のとがあり、或は禪宗を立てて教外と称し仏教をば眞の法にあらずと蔑如して増上慢を起し、或は法相・三論・華嚴宗を立てて法華經を下し、或は眞言宗・大日宗と称して法華經は釈迦如来の顯教にして眞言宗に及ばず等云云、而るに自然に法門に迷う者もあり、或は師師に依つて迷う者もあり、或は元祖・論師・人師の迷法を年久しく眞実の法ぞと伝來る者もあり、或は惡鬼天魔の身に入りかはりて惡法を弘めて正法ぞと思ふ者もあり、或ははづかの小乗一途の小法をしりて

大法を行ずる人はしからずと我慢して我が小法を行ぜんが為に大法秘法の山寺をおさへる者もあり、或は慈悲魔と申す魔身に入つて三衣一鉢を身に帶し小乗の一法を行ずるやからはづかの小法を持ちて国中の棟梁たる比叡山竜象の如くなる智者どもを一分我が教にたぐるを見て邪見の者悪人なんどうち思へ、此の悪見をもつて国主をたばらかし誑惑して正法の御帰依をうすうなしかつて破国破仏の因縁となせるなり、彼の妹己姉己褒〇と申し后は心もおだやかにみめかたちも人にすぐれたりき、愚王これを愛して国をほろぼす因縁となす、当世の禪師・律師・念仏者なんと申す聖一・道隆・良観・道阿弥・念阿弥なんと申す法師どもは鳩鴿が糞土を食するが如し西施が呉王をたばらかしに似たり、或は我が小乗の臭糞・驢乳の戒を持て

七二 立正観抄

文永十一年 五十三歳御作

法華止観同異決

日蓮撰 527P

とうせでんだい きやうほう
当世天台の教法を習学するの輩多く観心修行を貴んで法華本迹二門を捨て見えたり、今問う抑観心修行と
てんだいだいし まかしかん せつじんちゆうしききやうほうもん いっしんさんかん いちねんさんぜん
言うは天台大師の摩訶止観の説己心中所行法門の一心三観・一念三千の観に依るか、将又世流布の達磨の禅観に依る
も だるま
か、若し達磨の禅観に依るといわば教禅は未顕真実妄語方便の禅観なり法華經妙禅の時には正直捨方便
と捨てらるる禅なり、祖師達磨禅は教外別伝の天魔禅なり、共に是れ無得道妄語の禅なり仍て之を用ゆ可からず、若し
てんだい しかん いっしんさんかん
天台の止観一心三観に依るとならば止観一部の廃立天台の本意に背く可からざるなり、若し止観修行の観心に依ると
ほけきやう そむ べ
ならば法華經に背く可からず止観一部は法華經に依つて建立す一心三観の修行は妙法の不可得な
かんとく
るを得得せんが為なり、故に知んぬ法華經を捨てて但だ観を正とするの輩は大謗法大邪見天魔の所為なることを、
そのゆえ てんだい いっしんさんかん
其の故は天台の一心三観とは法華經に依つて三昧開發するを己心証得の止観とは云う故なり。
てんだいだいししかん
問う天台大師止観一部並びに一念三千・一心三観己心証得の妙観は併しながら法華經に依ると云う証拠如何、答
はんきつ いわ ほうきやう よ
う予反詰して云く法華經に依らずと見えたる証文如何、人之を出して云く此の止観は天台智者己心中所行の法門を説
ある ゆえ しかん いた まさし かんほう あきら
く或は又故に止観に至つて正く観法を明かす並に三千を以て指南と為す乃ち是れ終窮究竟の極説なり
ゆえ
故に序の中に説己心中所行法門と云えり良に以有るなり「文、難じて云く此の文は全く法華經に依らずと云う文に非ず
すで せつじんちゆうしききやうほうもん ほうもん
既に説己心中所行の法門と云うが故なり天台の所行の法門は法華經なるが故に此の意は法華經に依ると見えたる証文
ただ たしゆう
なり但し他宗に対するの時は問答大綱を存す可きなり、所謂云う可し若し天台の止観 法華經に

依らずといわば速かに捨つ可きなりと、其の故は天台大師兼ねて約束して云く「修多羅と合せば録して之を用いよ文無く義無きは信受す可からず」云云、伝教大師の云く「仏説に依憑して口伝を信ずること莫れ」文、竜樹の大論に云く「修多羅に依るは白論なり修多羅に依らざるは黒論なり」文、教主釈尊云く「依法不依人」文、天台は法華經に依り竜樹を高祖にしながら經文に違し我が言を翻じて外道邪見の法に依つて止觀一部を釈する事全く有る可からざるなり、問う正しく止觀は法華經に依ると見えたる文之有りや、答う余りに多きが故に少少之を出さん止觀に云く漸と不定とは置いて論ぜず今經に依つて更に円頓を明かさん文、弘決に云く「法華經の旨を擯て不思議・十乘・十境・待絶・滅絶・寂照の行を成ず」文、止觀大意に云く「今家の教門は竜樹を以て始祖と為す慧文は但内觀を列ねて視聽するのみ南岳・天台に及んで復法華三昧陀羅尼を發するに因つて義門を開拓して觀法周備す、若し法華を釈するには弥弥須く權実本・迹を曉了すべし方に行を立つ可し此の經独り妙と稱することを得方に此に依つて以て觀意を立つ可し、五方便及び十乘軌行と言つは即ち円頓止觀全く法華に依る円頓止觀は即ち法華三昧の異名なるのみ文、文句の記に云く「觀と經と合すれば他の宝を数うるに非ず方に知んぬ止觀一部は是れ法華三昧の筌なり若し斯の意を得れば方に經旨に會う」云云、唐土の大師・行滿の釈せる学天台宗法門大意に云く「摩訶止觀一部の大意は法華三昧の異名を出でず經に依つて觀を修す」文、此等の文証分明なり、誰か之を論ぜん問う天台四種の釈を作るの時觀心の釈に至つて本・迹の釈を捨て見えたり、又法華經は漸機の爲に之を説き止觀は直達機の爲に之を説くと如何、答う漸機の爲に説けば劣り頓機の爲に説けば勝るとならば今の天台宗の意は華嚴・真言等の經は法華經に勝れたりと云う可きや、今の天台宗の浅さは真言は事理俱密の教なる故に法華經に勝れたりと謂えり、故に止觀は法華に勝ると云えるも道理なり道理なり。

次に觀心の釈の時本・迹を捨てと云う難は法華經何れの文人師の釈を本と爲して仏教を捨てよと見えたるや設い

てんだい 天台の釈なりとも釈尊の金言に背き法華經に背かば全く之を用ゆ可からざるなり、依法不依人の故に竜樹 天台 伝教元よりの御約束なるが故なり、其上天台の釈の意は迹の大教起れば爾前の大教亡じ本の大教興れば迹の大教亡じ觀心の大教興れば本の大教亡じと釈するは本体の本法をば妙法不思議の一法に取り定めての上に修行を

立つるの時、今像法の修行は觀心修行を詮と為るに迹を尋ねれば迹 広し本を尋ねれば本 高うして極む可からず、故にまつがくき かな 難し但己心の妙法を觀ぜよと云う釈なり、然りと雖も妙法を捨てよとは釈せざるなり若し妙法を捨てば末学機に叶い難し但己心の妙法を觀ぜよと云う釈なり、然りと雖も妙法を捨てよとは釈せざるなり若し妙法を捨てば何物を己心と為して觀ず可きや、如意宝珠を捨て瓦石を取つて宝と為す可きか、悲しいかな当世天台宗

の学者は念仏 眞言・禅宗等に同意するが故に天台の教釈を習い失つて法華經に背き大謗法の罪を得るなり、若し止觀を法華經に勝ると云わば種種の過之有り止觀は天台の道場所得の己証なり、法華經は釈尊の道場所得の大法なりは一

釈尊は妙覺果滿の仏なり天台は住前未証なれば名字・觀行 相似には過ぐ可からず四十二重の劣なり是二

法華は釈尊乃至諸仏出世の本懷なり止觀は天台出世の己証なり是三法華經は多宝の証明あり来集の分身は広長舌を大梵天に付く皆是眞実の大白法なり是四止觀は天台の説法なり是くの如き等の種種の相違之有れども仍お之を略するな

り、又一つの問答に云く所被の機 上機なる故に勝ると云わば実を捨てて權を取れ天台云く「教弥弥權なれば位弥弥高し」と釈し給う故なり所被の機下劣なる故に劣ると云わば權を捨てて実を取れ、天台の釈には教弥弥實なれば位弥弥下しと

云う故なり、然而して止觀は上機の為に之を説き法華は下機の為に之を説くと云わば止觀は法華に劣れる故に機を高く説くと聞えたり実にさもや有るらん、天台大師は靈山の聴衆として如来出世

の本懷を宣べたもつと雖も時至らざるが故に妙法の名字を替えて止觀と号す迹化の衆なるが故に本化の付属を弘め給わす正直の妙法を止觀と説きまぎらかす故に有のままの妙法ならざれば帶權の法に似たり、故に知んぬ天台弘通の所化の機は在世帶權の円機の如し、本化弘通の所化の機は法華本門の直機なり、止觀法華は全く体同

と云わん尚人師の釈を以て仏説に同ずる失甚重なり、何に況や止観は法華經に勝ると云う邪義を申し出すは但是れ
ほんげ べきよう しゃつけ べつう そうほう まほう しやくもん ふぞく ほんもん ふぞく
本化の弘經と迹化の弘通と像法と末法と迹門の付属と本門の付属とを末法の行者に云い顯わさせん為の仏天の御計いな
り、爰に知んぬ当世天台宗の中に此の義を云う人は祖師天台の為には不知恩の人なり豈其の過を免れ
んや、夫れ天台大師は昔靈山に在ては薬王と名け今漢土に在ては天台と名け日本国の中にては伝教と名く三世の弘通
とも みようほう なす かくのごと ほけきよう ぐつう たま ざいせ しゃくそん てんだい にほんこく でんきよう なす さんぜ ぐつう
俱に妙法と名く、是くの如く法華經を弘通し給う人は在世の釈尊より外は三国に其の名を聞かず有り難く御坐します
だいし そ まつぐそ なら とが てんだい とが か あにたいざい あら
大師を其の末学其の教釈を悪く習つて失無き天台に失を懸けたてまつる豈大罪に非ずや。

今問う天台の本意は何法ぞや碩学等の云く「一心三觀是なり」今云く「一実円滿の一心三觀とは誠に甚深なるに似たれ
ども尚以て行者修行の方法なり三觀とは因の義なるが故なり慈覺大師の釈に云く「三觀とは法體を得せしめんが為の
修觀なり」云云、伝教大師云く「今止觀修行とは法華の妙果を成ぜんが為なり」云云、故に知んぬ
いっしんさんかん かく かく ほうもん じよう ほうけ しかんしききよう ほつけ じかくだいし いっしんさんかん ほうたい
一心三觀とは果地 果徳の法門を成ぜんが為の能觀の心なることを何に況や三觀とは言説に出でたる法なる故に如来の
かじ かく みようほう しぎ さんかん いわんやさんかん
果地 果徳の妙法に對すれば可思議の三觀なり。

問う「一心三觀に勝れたる法とは何なる法ぞや、答う此の事誠に一大事の法門なり唯仏与仏の境界なるが故に我等が言
説に出す可からざるが故に是を申す可らざるなり、是を以て經文には「我が法は妙にして思い難し言を以て宣ぶ可から
ず」云云妙覺果滿の仏すら尚不可説不思議の法と説き給う何に況や等覺の菩薩已下乃至凡夫をや、

問う名字を聞かずんば何を以て勝法有りと知んことを得んや、答う天台已証の法とは是なり、当世の学者は血脈相承
を習い失う故に之を知らざるなり故に相構え相構えて秘す可く秘す可き法門なり、然りと雖も汝が志 神妙
なれば其の名を出すなり一言の法是なり伝教大師の「一心三觀一言に伝つと書き給う是なり、問う未だ其の法體を聞か
ず如何、答う所詮一言とは妙法是なり、問う何を以て妙法は「一心三觀に勝れたり」と云う事を知んことを

得るや、答う妙法は所詮の功德なり三観は行者の觀門なる故なり此の妙法を仏説いて言く「道場所得法我法妙難思
法非思量不可以言宣」云云、天台の云く「妙は不思議言語道斷・心行所滅なり法は十界十如因果不二の法なり」と、
三諦と云うも三観と云うも三千と云うも共に不思議法とは云えども天台の已証天台の御思慮の及ぶ所の法門なり、此の
妙法は諸仏の師なり今の經文の如くならば久遠実成の妙覺極果の仏の境界にして爾前・迹門の教主
諸仏・菩薩の境界に非ず經に唯仏与仏乃能究竟とは迹門の界如三千の法門をば迹門の仏が当分究竟の辺を説けるなり、
本地難思の境智の妙法は迹仏等の思慮に及ばず何に況や菩薩・凡夫をや、止観の二字をば觀名仏知・止名仏見と釈すれ
ども迹門の仏智・仏見にして妙覺極果の知見には非ざるなり、其の故は止観は天台已証の界如三千・
三諦三観を正と為す迹門の正意是なり、故に知んぬ迹仏の知見なりと云う事を但止観に絶待不思議の妙觀を明かすと
云えども只一念三千の妙觀に且らく与えて絶待不思議と名けるなり。

問う天台大師真実に此の一言の妙法を証得したまわざるや、答う内証爾らざるなり、外用に於ては之を弘通したま
わざるなり、所謂内証の辺をば祕して外用には三観と号して一念三千の法門を示現し給うなり、問う何が故ぞ知り乍ら
弘通し給わざるや、答う時至らざるが故に付属に非ざるが故に迹化なるが故なり、問う天台此の一言

の妙法を証得し給える証拠之有りや、答う此の事天台一家の祕事なり世に流布せる學者之を知らず灌頂玄旨の血脈
とて天台大師自筆の血脈一紙之有り、天台御入滅の後は石塔の中に之有り伝教大師御入唐の時八舌の鑰を以て之を開
き道邃和尚より伝受し給う血脈とは是なり、此の書に云く「一言の妙旨一教の玄義」文、伝教大師の
血脈に云く「夫れ一言の妙法とは兩眼を開いて五塵の境を見る時は隨緣真如なるべし兩眼を閉じて無念に住する時は

不變真如なるべし、故に此の一言を聞くに方法茲に達し一代の修多羅一言に含す」文、此の兩大師の血脈の如くならば
天台大師の血脈相承の最要の法は妙法の一言なり、一心三觀とは所詮妙法を成就せん為の修行の方法

なり、三觀は因の義妙法は果の義なり但因の処に果有り果の処に因有り因果俱時の妙法を觀するが故に是くの如き功能を得るなり、爰に知んぬ天台至極の法門は法華本迹未分の処に無念の止觀を立てて最祕の大法とすと云える邪義大なる僻見なりと云う事を四依弘經の大薩は既に仏經に依つて諸論を造る天台何ぞ仏説に背いて無念の止觀を立てたまわんや、若し此の止觀法華經に依らずといわば天台の止觀教外別伝の達磨の天魔の邪法に同ぜん都て然る可からず哀れなり哀れなり。

伝教大師の云く「國主の制に非ざれば以て遵行する無く法王の教に非ざれば以て信受すること無けん」と文、又云く「四依論を造るに権有り実有り三乘旨を述ぶるに三有り一有り、所以に天台智者は三乘の旨に順じて四教の階を定め一実の教に依つて一仏乗を建つ、六度に別有り、戒度何ぞ同じからん受法同じからず威儀豈同じからんや、是の故に天台の伝法は深く四依に依り亦一佛經に順う文、本朝の天台宗の法門は傳教大師より之を始む

若し天台の止觀法華經に依らずと云わば日本に於ては傳教の高祖に背き漢土に於ては天台に背く両大師の伝法既に法華經に依る豈其の末学之に違せんや、違するを以て知んぬ当世の天台家の人人其の名を天台山に借ると雖も所学の法門は達磨の僻見と善無畏の妄語とに依ると云う事、天台傳教の解釈の如くんば己心中の秘法は但

妙法の一言に限るなり、然而当世の天台宗の学者は天台の石塔の血脈を秘し失う故に天台の血脈相承の秘法を習い失いて我と一心三觀の血脈とて我意に任せて書を造り錦の袋に入れて頸に懸け箱の底に埋めて高直に売る故に邪義國中に流布して天台の仏法破失するなり、天台の本意を失い釈尊の妙法を下す是れ偏えに達磨の教訓善無畏の勸なり、故に止觀をも知らず一心三觀・一心三諦をも知らず一念三千の觀をも知らず本迹二門をも知らず相待

絶待の二妙をも知らず法華の妙觀をも知らず教相をも知らず權実をも知らず四教・八教をも知らず五時・五味の施化をも知らず、教機時國・相心の義は申すに及ばず実教にも似ず權教にも似ざるなり道理なり道理なり。

てんだい でんぎよう 天台 伝教の所伝は法華経は禪 眞言より劣れりと習う故に達磨の邪義 眞言の妄語と打ち成つて権教にも似ず実教にも似ず二途に摂せざるなり、故に大謗法罪顕れて止観は法華経に勝ると云う邪義を申し出して過無き天台に失を懸けたてまつる故に高祖に背く不孝の者 法華経に背く大謗法罪の者と成るなり。

そ てんだい 夫れ天台の観法を尋ねれば大蘇道場に於て三昧開發せしより已来目を開いて妙法を思えば随縁眞如なり目を閉じて妙法を思えば不变眞如なり此の兩種の眞如は只一言の妙法に有り我妙法を唱つる時 万法茲に達し一代の修多羅一言に含す、所詮迹門を尋ねれば迹広く本門を尋ねぬれば本高し如かじ己心の妙法を觀ぜんにはと思食されしなり、当世の学者此の意を得ざるが故に天台已証の妙法を習い失いて止観は法華経に勝り禪宗は止観に勝れたりと思いて法華経を捨てて止観に付き止観を捨てて禪宗に付くなり、禪宗の一門云く松に藤懸る松枯れ藤枯れて後如何上らずして一枝なんど云える天魔の語を深く信ずる故なり、修多羅の教主は松の如く其の教法は藤の如し

各各に諍論すと雖も仏も入滅して教法の威徳も無し爰に知んぬ修多羅の仏教は月を指す指なり禪の二法のみ独妙なり之を觀ずれば見性得達するなりと云う大謗法の大魔の所為を信ずる故なり、然而法華経の仏は寿命無量・

常住不滅の仏なり、禪宗は滅度の仏と見るが故に外道の無の見なり、是法住法位世間相常住の金言に背く僻見なり、禪は法華経の方便無得道の禪なるを眞実常住法と云うが故に外道の常見なり、若し与えて之を言わば仏の方便三蔵の分齊なり若し奪つて之を言わば但外道の邪法なり与は当分の義 尊は法華の義なり法華の尊の義を以ての故に禪は天魔・外道の法と云うなり、問う禪を天魔の法と云う証拠如何、答う前前に申すが如し。

今度の御使おんつかいに誠まことに御志おんしの程ほど顯あらわれ候まうい畢おわんぬ又種しゅじゆ種の御志おんし慥たしかに給たまは候まうい畢おわんぬ。

抑おさへ承うけたまはり候まう、

当世とうせの天台宗てんだいしゆう等止觀しかんは法華經ほけきやうに勝すぐれ禪宗ぜんしゆうは止觀しかんに勝まさる、又觀心かんじんの大教おほ興おこる時は本迹ほんしの大教おほを捨すつと

云いふ事こと先まづず天台一宗てんだいに於おて流りゆう流りゆう各別かくべつなりと雖いへども慧心えしん檀那だんなの両流りやうりゆうを出いでず候まうなり、慧心流えしんりゆうの義ぎに云いふ止觀しかんの一部いは本迹ほんし

二門にもんに亘わたるなり謂おもへ止觀しかんの六むに云いふ「觀くわんは仏知ぶつちと名なく止とは仏見ぶつけんと名なく念念ねんねんの中に於おて止觀しかん現前げんぜんす乃至ないしさんじやう三乘さんじやうの近執こんじやくを除のぞ

く文ぶん、弘決くけつの五ごに云いふ「十法じふぽう既すでに是これ法華ほつげの所乘しじやうなり是かくのゆえの故ゆゑに還かえつて法華ほつげの文もんを用もちいて歎たんず、若もし

迹説しやくせつに約すなわせば即すなわち大通智勝だいつちしやうぶつ仏ぶつの時ときを指しして以もつて積劫しやくけつと為なし寂滅じやくめつ道場どうじやうを以もつて妙悟みやうごと為なす、若もし本門ほんもんに約すなわせば

我本行菩薩道がほんぎやうぼさつだうの時ときを指しして以もつて積劫しやくけつと為なし本成ほんじやう仏ぶつの時ときを以もつて妙悟みやうごと為なす本迹ほんし二門に只是ただ此この十法じふぽうを求悟もとごす文ぶん、始はの一

文ぶんは本門ほんもんに限かぎると見みえたり次つぎの文ぶんは正ただしく本迹ほんしに亘わたると見みえたり、止觀しかんは本迹ほんしに亘わたると云いふ事こと文証もんしやう此こに依よるな

りと云いふ、次に檀那だんな流りゆうには止觀しかんは迹門しやくもんに限かぎると云いふ証拠しやうこは弘決くけつの三さんに云いふ「還かえつて教味きやうみを借かつて以もつて妙円みやうえんを顯あらわす。

故ゆゑに知しんぬ一部の文ぶん共に円成えんじやうの開權かいけん妙觀みやうくわんを成じやうずるを文ぶん、此この文ぶんに依よらば止觀しかんは法華ほつげの迹門しやくもんに限かぎると云いふ事こと文ぶんに在ありて

分明ぶんめいなり兩流りやうりゆうの異義いぎ替かれども共に本迹ほんしを出いでず当世とうせの天台宗てんだいしゆう何なんくより相承そうじやうして止觀しかんは法華經ほけきやうに勝まさると云いふや、但ただし予

が所存しよぞんは止觀法華しかんほつげの勝劣しやうれつは天地雲泥てんちうんぬいなり。

若もし与もて此こを論ろんぜば止觀しかんは法華迹門ほつげしやくもんの分齊ぶんさいに似にたり、其そのの故ゆゑは天台大師てんだいだいしの已証こしやうとは十德じふとくの中なかの第一だいいちは自解じげ仏乘ぶつじやう第九

は玄悟げんご法華円意ほつげえんいなり、靈応れいおう伝でんの第四だいよに云いふ「法華ほつげの行ぎやうを受けて二七日にじふしちにち境界きやうがいす文ぶん、止觀しかんの一いに云いふ「此この止觀しかんは天台智者てんだいちしや

己心中こしんちゆうに行いずる所ところの法門ほふもんを説くく文ぶん、弘決くけつの五ごに云いふ「故ゆゑに止觀しかんに正ただしく觀法くわんぽうを明みすに至いたつて並ならびに三千さんぜんを以もつて指南しなんと

な 為す。故に序の中に云く己心中に行ずる所の法門を説く文、己心所行の法とは一念三千・一心三觀なり三諦三觀の名義は瓔珞・仁王の二經に有りと雖も一心三觀・一念三千等の己心所行の法門をば迹門十如実相の文を依文として釈成し給い畢んぬ。

愛に知んぬ止觀一部は迹門の分齊に似たりと云う事を若し奪つて之を論ぜば爾前権大乘・即別教の分齊なり其の故は天台已証の止觀とは道場所得の妙悟なり所謂天台大師・大蘇の普賢道場に於て三昧開發し証を以て師に白す師の曰く法華の前方便陀羅尼なりと靈心伝の第四に云く「智・師に代つて金字經を講ず一心具足万行の処に至つて・疑有り思為に釈して曰く汝が疑う所は此乃ち大品次第の意なるのみ未だ是法華円頓の旨にあらざるなり」文、講ずる所の經既に権大乘經なり又次第と云えり故に別教なり、開發せし陀羅尼又法華前方便と云えり故に知んぬ爾前帶權の經・別教の分齊なりと云う事を已証既に前方便の陀羅尼なり止觀とは己心中所行の法門を説くと云うが故に、明かに知んぬ法華の迹門に及ばずと云う事を何に況や本門をや、若し此の意を得ば檀那流の義尤も吉なり此等の趣を以て止觀は法華に勝ると申す邪義をば問答有る可く候か、委細の旨は別に一卷書き進らせ候なり、又日蓮相承の法門血脉慥に之を註し奉る、恐恐謹言

文永十二乙亥二月二十八日

日蓮 花押

最蓮房御返事

日蓮去る正嘉元年太歳丁巳八月二十三日大地震を見て之を勘え定めて書ける立正安国論に云く「やくし
 難忽ちに起つて二難猶残れり所以他国侵逼の難、自界叛逆の難なり、大集經の三災の内二災早く顕れ一災未だ起らず、
 所以兵革の災なり、金光明經の内の種種の災過一一起ると雖も他方の怨賊国内を侵掠する此の災未だ露われず此の難
 未だ来らず、仁王經の七難の内六難今盛にして一難未だ現ぜず所以四方より賊来つて国を侵す
 の難なり、しかのみならず国土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱る故に万民乱ると、今此の文に就て具さに事の情を案
 ずるに百鬼早く乱れ万民多く亡びぬ先難是れ明なり後災何ぞ疑わん若し残る所の難、惡法の科に依つて並び起り競い来ら
 ば其の時何為や、帝王は国家を基として天下を治む、人臣は田園を領して世上を保つ、而るに他方より賊来つて此の国を
 侵逼し自界叛逆して此の地を掠、領せば豈驚かざらんや豈騒がざらんや、国を失い家を滅せば何れの所にか世を遁れん
 等云云已上 立正安国論の言なり。

今日蓮重ねて記して云く大覺世尊記して云く「苦得外道七日有つて死す可し死して後食吐鬼に生れん苦得外道の言く
 七日の内には死す可からず我羅漢を得て餓鬼道に生れじと」等云云、瞻婆城の長者の婦懷妊す六師外道の云く「女子を
 生まん」仏記して云く「男子を生まん」等云云、仏記して云く「卻て後三月あつて我当に般涅槃す
 べし」等云云、一切の外道云く「是れ妄語なり」等云云、仏の記の如く二月十五日に般涅槃し給う、法華經の第二に云く
 「舍利弗汝未来世に於て無量無辺不可思議劫を過て乃至当に作仏するを得べし号をば華光如来と曰わん」等云云、又第
 三の卷に云く「我が此の弟子摩訶迦葉未来世に於て当に三百万億に奉觀することを得べし乃至最後

身に於て仏と成ることを得ん名をば光明如来と曰わん等云云、又第四の巻に云く、「又如來滅度の後に若し人有つて妙法華經の乃至一偈一句を聞いて一念も隨喜せん者には我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授く」等云云、此等の經文は仏・未來世の事を記し給う、上に挙ぐる所の苦得外道等の三事・符合せずんば誰か仏語を信ぜん・設け多宝仏証明を加え分身の諸仏長舌を梵天に付くとも信用し難きか、今亦以て是くの如し・設け日蓮富樓那の弁を得て目連の通を現ずとも勘する所・當らずんば誰か之を信ぜん、去める文永五年に蒙古国の牒狀渡來する所をば朝に賢人有らば之を怪む可し、設け其れを信ぜずとも去る文永八年九月十二日御勘氣を蒙りしの時・吐く所の強言次の年二月十一日に符合せしむ、情有らざる者は之を信ず可し何に況や今年既に彼の國災兵の上二箇國を奪い取る設け木石為りと雖も設け禽獸為りと雖も感ず可く驚く可きに偏えに只事に非ず天魔の國に入つて醉えるが如く狂えるが如く歎く可し哀む可し恐る可し厭う可し、又立正安國論に云く「若し執心翻えらずして亦曲意猶存せば早く有為の郷を辭して必ず無間の獄に墮せん」等云云、今符合するを以て未來を案ずるに日本國の上下・万人阿鼻大城に墮ちんこと大地を的と為すが如し、此等は且らく之を置く日蓮が弟子等又此の大難脱れ難きか彼の不輕輕毀の衆は現身に信伏隨從の四字を加れども猶先謗の強きに依つて先ず阿鼻大城に墮して干劫を経歴して大苦惱を受く、今日蓮が弟子等も亦是くの如し或は信じ或は伏し或は隨い或は從う但だ名のみ之を仮りて心中に染まざる信心薄き者は設け干劫をば經ずとも或は一無間或は二無間乃至十百無間・疑無からん者か是を免れんと欲せば各・藥王・樂法の如く臂を焼き皮を剥ぎ雪山國王等の如く身を投げ心を仕えよ、若し爾らずんば五体を地に投げ・身に汗を流せ、若し爾らずんば珍寶を以て仏前に積め若し爾らずんば奴婢と為つて持者に奉えよ若し爾らずんば等云云、四悉檀を以て時に適うのみ、我弟子等の中にも信心薄淡き者は臨終の時阿鼻獄の相を現ず可し其の時・我を恨む可からず等云云。

文永十一年太歲甲戌十二月十五日 日蓮之を記す

七五 上行菩薩結要付屬口伝

建治元年

五十四歳御作

於身延

538P

妙法蓮華經見宝塔品第十一「爾の時に仏前に七宝の塔有り」と云云、又云く「即時に釈迦牟尼仏神通力を以て諸の大衆を接して皆虚空に在たもう、大音声を以て普く四衆に告げたまわく誰か能く此の娑婆国土に於て広く妙法華經を説かん今正く是れ時なり如来久しからずして当に涅槃に入るべし仏此の妙法華經を以て付屬して在ること有らしめんと欲す」云云、又云く「諸余の教典数恒沙の如し」と云云、又云く「諸の大衆に告ぐ我滅度の後に誰か能く斯の經を護持し誦誦せん今、仏前に於て自ら誓言を説け」と又云く「此の經は持ち難し若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦然なり是の如きの人は諸仏の歎め給つ所なり」と云云、妙法蓮華經勸持品第十三「爾時藥王菩薩摩訶薩及び大樂說菩薩摩訶薩二万の菩薩眷屬と俱に皆仏前に於て是の誓言を作さく唯願くば世尊以て慮したもうべからず我等、仏の滅後に於て当に此の經典を奉持し誦誦し説きたてまつるべし、後の惡世の衆生は善根轉た少くして増上慢多く利供養を貪り不善根を増し解脱を遠離せん教化すべきこと難しと雖も我等当に大忍力を起して此の經を誦誦し持説し書写し種種に供養して身命を惜まざるべし、爾の時に衆中の五百の阿羅漢の授記を得たる者、仏に白して言さく世尊我れ等亦自ら誓願すらく異の国土に於て広く此の經を説かんと、復學無學の八千人の授記を得たる者有り座從り起て合掌し仏に向いたてまつりて是誓言を作さく世尊我等亦當に他の国土に於て広く此の經を説きたてまつるべし、所以は何ん是の娑婆国の中は人、弊惡多く増上慢を懷き功德淺薄に瞋濁諂曲にして心不実なるが故に」と云云、又云く「爾の時に世尊、八十万億那由他の諸の菩薩摩訶薩を視す

是の諸の菩薩は皆是阿惟越致なり、即時に諸の菩薩俱に同く声を発して偈を説いて言さく、唯願くは慮したもつべからず仏の滅度の後、恐怖惡世の中に於て我等当に広く説くべし諸の無智の人の惡口罵詈等し及び刀杖を加うる者有らん我等皆當に忍ぶべし、惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるをこれ得たりと謂い我慢の心充滿せん、或は阿練若に納衣にして空閑に在り自ら眞の道を行ずと謂いて人間を輕賤する者有らん、利養に貪著するが故に白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん是の人惡心を懷き常に世俗の事を念ひ名を阿練若に仮りて好んで我等の過を出ださん、濁世の惡比丘は仏の方便、隨宜所説の法を知らずして惡口して顰蹙し数数擯出せられんと云云。

文句の八に云く「初めに一行は通じて邪人を明す即ち俗衆なり、次に一行は道門増上慢の者を明す、三に七行は僭聖増上慢の者を明す、故に此の三の中初めは忍ぶ可し次は前に過ぐ第三は最も甚し」と云云。

涌出品に云く「爾の時に他方の国土の諸の來れる菩薩摩訶薩八恒河沙の數に過ぎたり、大衆の中に於て起立し合掌し礼を作して仏に白して言く、世尊若し我等に仏の滅後に於て此の娑婆世界に在つて勤加精進し是の經典を護持し誦誦し書寫し供養せんことを聴いたまわば當に此の土に於て広く之を説きたてまつるべし、爾の時に仏

諸の菩薩摩訶薩衆に告く止みな善男子汝等が此の經を護持せんことを須いし所以は何ん我が娑婆世界に自ら六万恒河沙等の菩薩摩訶薩有り、一一の菩薩各六万恒河沙の眷屬有り是の諸人等能く我が滅後に於て護持し誦誦し廣く此の

經を説かん」と云云五卷畢。

属累品に云く「爾の時に釈迦牟尼仏法座從り起つて大神力を現じたもつ右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩でて是の言を作したまわく我無量百千万億阿僧祇劫に於て是の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり今以て汝等に付屬す汝等當に一心に此の法を流布して広く増益せしむべし、是くの如く三たび諸の菩薩摩訶薩の

頂^{いただき}を摩^なでて是^この言^{こと}を作^なしたまわく我^わ無量^{むりよう}百千万億^{せんまん}阿僧祇劫^{あそぎこう}に於^おて是^この得難^{がた}き阿耨多羅三藐三菩提^{あぬたらさんみやくさんぼだい}の法^{しゆつ}を修習^{しゆしゆ}せり今^{もつ}以^{もつ}て汝等^{なんじ}に付属^{ふぞく}す、汝等^{なんじ}当^{まさ}に受持^{じゆじ}読誦^{とくじゆ}し広^{ひろ}く此^{この}の法^{のへ}を宣^{のたま}べて一切衆生^{いっさいしゆじやう}をして普^{あまね}く聞知^{もんち}するこゝを得^えせしむべし所以^{ゆえん}は何^{いか}ん如來^{にやうらい}は大慈悲^{じひ}有^ひつて諸^{もろ}の慳^{けん}無^なく亦^{また}畏^{おそ}る所^{なく}無^なく能^{しゆじやう}く衆生^{しゆじやう}に仏^{ぶつ}の智慧^{ちえ}・如來^{にやうらい}の智慧^{ちえ}・自然^{じねん}の智慧^{ちえ}を与^{たま}ふ如來^{にやうらい}は是^こ一切衆生^{いっさいしゆじやう}の大施主^{だいせしゆ}なり汝等^{なんじ}亦^{また}随^{したが}つて如來^{にやうらい}の法^{のへ}を学^{まな}ぶべし慳^{けん}を生^なずること勿^なかれと云云^{と云ふ}。

文句^{もんく}の九^くに云^いく品下^{ひんげ}、如來^{にやうらい}之^{これ}を止^{とど}めたもつに凡^{およ}そ三義^{さんぎ}有^あり、汝等^{なんじ}各各^{みづか}に自^{おの}ら己^もが任^{まか}り有^あり若^もし此^{この}の土^どに住^{すま}せば彼^かの利益^{りやく}を廢^やせん、又^{また}他方^{たほう}は此^し土^ど結縁^{けつえん}の事^{こと}浅^{せん}し宣授^{せんじゆ}せんと欲^ほすと雖^{いふ}も必^きず巨益^{きよやく}無^なからん又^{また}若^もし之^{これ}を許^{ゆる}さば則^{すな}ち下^げを召^めすことを得^えず下^げ若^もし来^きらずんば迹^{あと}を破^やすることを得^えず遠^{とほ}を顯^{あらわ}すことを得^えず是^こを三義^{さんぎ}もつて如來^{にやうらい}之^{これ}を止^{とど}めたもつと為^なす、下方^{かた}を召^めして来^きらしむるに亦^{また}三義^{さんぎ}有^あり是^これ我^わが弟子^{でし}なり我^わが法^{はう}を弘^{ひろ}むべし縁深^{えんしん}広^{ひろ}なるを以^{もつ}て能^よく此^{この}の土^どに遍^{へん}じて益^{やく}し分身^{ふんじん}の土^どに遍^{へん}して益^{やく}し他方^{たほう}の土^どに遍^{へん}して益^{やく}す、又^{また}開^{かい}近顯^{こんけん}遠^{とほ}することを得^え是^この故^{ゆゑ}に彼^かを止^{とど}めて下^げを召^めすなりと云云^{と云ふ}。

記^いに云^いく問^{もん}う諸^{もろ}の仏^{ぶつ}菩薩^{ぼさつ}は共^{とも}に未熟^{みじく}を熟^{じよく}す何^{なん}の彼^か此^し有^あらん分身^{ふんじん}散影^{さんえい}して普^{あまね}く十方^{じふぽう}に遍^{へん}す而^{しか}を己^{おの}任^{まか}及び廢^{はい}彼^かと言^いうや、答^{こた}う諸^{もろ}の仏^{ぶつ}菩薩^{ぼさつ}は実^{じつ}に彼^か此^し無^なし但^{ただ}機^きに在^あり無^な始^し法爾^{はうに}なり故^{ゆゑ}に第二^{だいに}の義^ぎを以^{もつ}て初^{はつ}の義^ぎを顯^{あら}わして結縁^{けつえん}事^{こと}浅^{せん}と云^いう、初^{はつ}め此^{この}の仏^{ぶつ}菩薩^{ぼさつ}に從^{したが}つて結縁^{けつえん}し還^{かえ}つて此^{この}の仏^{ぶつ}菩薩^{ぼさつ}に於^おて成就^{じゆじゆ}すこと云云^{と云ふ}、又^{また}云^いく子父^{しふ}の法^{はう}を弘^{ひろ}むるに世界^{せかい}の益^{やく}有^あり」と云云^{と云ふ}、記^いの八^{はち}に云^いく因^{いん}藥王^{やくおう}とは本^{ほん}藥王^{やくおう}に託^{たく}し茲^{こゝ}に因^{いん}せて余^あに告^こぐ此^{この}れ流通^{りつづう}の初^{はつ}なり

先^{まづ}に八万^{はちまん}の大士^{だいし}に告^こぐとは、大論^{だいろん}に云^いく法華^{はうけ}は是^こ秘密^{ひみつ}なれば諸^{もろ}の菩薩^{ぼさつ}に付^つすと、下^{した}の文^{ぶん}に下^{した}方^{かた}を召^めすが如^{ごと}きは尚^{なお}本^{ほん}眷属^{けんぞく}を待^{まち}つ驗^{あけりけ}し余^あは未^{いま}だ堪^たえずと云云^{と云ふ}、問^{もん}う何^{なん}が故^{ゆゑ}ぞ他方^{たほう}を止^{とど}めて本^{ほん}眷属^{けんぞく}を召^めすや、答^{こた}う私^{わが}の義^ぎ有^ある可^べからず靈山^{りやうざん}の聴衆^{しやうしゆ}天台^{てんたい}の所判^{しよはん}に任^{まか}す可^べし、疏^{しよ}に云^いく涌出^{ゆじゆつ}に三^{さん}と為^なす一^{いつ}には他方^{たほう}の菩薩^{ぼさつ}弘經^{くわうきやう}を請^{しん}す二^にには如來^{にやうらい}許^{ゆる}したまわす三^{さん}には下^{した}方^{かた}の涌出^{ゆじゆつ}なり、他方^{たほう}の菩薩^{ぼさつ}は通經^{とうきやう}の福^{ふく}の大^{だい}なることを聞^きいて咸^{いっせい}く願^{がん}を發^{はつ}し此^{この}の土^どに住^{すま}して弘宣^{くわせん}

んと欲するが故に請ず、之が為に如来之を止めたもうと等と云云。

結要付属の事

初に称歎付属 爾時仏告 猶不能尽

結要勸持四 二に結要付属以要言之 宣示顯説

三に正勸付属是故汝等起塔供養

四に釈勸付属所以者何而般涅槃

疏の十に云く「爾時仏告 上行の下は是れ第三に結要付属なり」と云云、又云く「結要に四句有り、一切法とは一切皆是れ仏法なり此は一切皆妙名を結するなり一切力とは通達無礙にして八自在を具す此れは妙用を結するなり一切秘藏とは一切処に遍して皆是れ実相なり此れは妙体を結するなり一切深事とは因果は是れ深事なり此は妙宗を結するなり、皆於此經宣示顯説とは総じて一經を結する唯四ならくのみ其枢柄を撮つて之を授与す」と云云、記に云く「結要有四句とは本迹二門に各宗用有り二門の体は両処殊ならず」と云云輔正記に云く付属とは此の經は唯下方涌出の菩薩に付す何を以ての故に爾る法是れ久成の法なるに由るが故に久成の人に付す云云。

- 一 正く付属
 - 二 正く付属を釈す
 - 三 付属を誠む余の深法の中の下なり
- 初に付属に三 一 如来の付属 二 付属を釈す

属累品の文段に二有り

二 菩薩の領受

三 事畢て唱散す

次に時衆の歡喜 説是語時の下三行余

第一の五百歳 解脱堅固

第二の五百歳 禅定堅固

第三の五百歳 読誦多聞堅固

第四の五百歳 多造塔寺堅固

第五の五百歳 闘諍堅固

大集經の五箇五百歳とは

夫れ仏滅度の後二月十六日より正法なり、迦葉仏の付属を請け次に阿難尊者・次に商那和修・次に優婆・多次に提多迦此の五人各各二十年にして一百年なり、其の間は但小乗經の法門のみ弘通して諸大乘經は名字もなし何に況や法華經をや、次に弥遮迦・仏陀難陀・仏駄密多・脇比丘・富那奢等の五人は五百年の間・大乘の法門少少出来すと雖も取立てて弘通せず但小乗經を正と為す已上大集經の前の五百年解脱堅固に当れり、正法の後の五百

年には馬鳴・竜樹乃至師子等の十余人の人人始には外道の家に入り次には小乗經を極め後には諸大乘經を以て散散に小乗經等を破失しき、然りと雖も樞大乘と法華經との勝劣未だ分明ならず浅深を書かせ給いかども本迹の十妙・二乗作仏・久遠実成・已今当等・百界千如・一念三千の法門をば名をも書き給わず此大集經の禅定堅固に当れり、次に像法に入つては天竺は皆樞実雜乱して地獄に墮する者数百人ありき、像法に入つて一百余年の間は漢土の道士と月氏の佛法と諍論未だ事定らざる故に佛法を信ずる心未だ深からずまして樞実を分くる事なし、摩騰竺法蘭は自は知りて而も大小を分たず樞実までは思いもよらず、其の後魏・晋・宋・齊・梁の五代の間漸く佛法の

中に大小樞実・蹟密を諍いし程に何れをも道理とも聞えず南三・北七の十流・我意に佛法を弘む、爾れども大に分つて一切經の中には一には華嚴・二には涅槃・三には法華と云云、爾れども像法の始の四百年に當つて天台大師震旦に出現して南北の邪義・一に之を破し畢んぬ、此大集經の多聞堅固の時に当れり、像法の後の五百年には

三論法相乃至眞言等を各三藏將來す、像法に入つて四百余年あつて日本国合済国より一切経並に釈尊の木像僧尼等を渡す梁の末陳の始めに相當る日本国には神武天皇より第三十代欽明天皇の御宇なり、像法の後の五百年に三論・法相等の六宗面々の異義あり爾れども各邪義なり、像法八百年に相當つて伝教大師日本に出でて彼の六宗の義を皆責め伏せ給えりと云云、伝教已後には東寺・園城寺等の諸寺日本一同に云く「眞言宗は天台宗に勝れ

たり」と云云、此大集經の多造塔寺堅固の時なり今末法に入つて仏滅後二千二百二十余年に當りて聖人出世す是は
大集經の鬪諍言訟白法隱没の時なり云云、夫れ釈迦の御出世は住劫第九の減・人寿百歳の時なり百歳と十歳との中間
は在世は五十年滅後は正像二千年と末法一万年となり、其の中間に法華經流布の時二度之れ有る可し、所謂在世の八
年滅後には末法の始の五百年なり。

夫れ仏法を学する法には必ず時を知る可きなり過去の大通智勝仏は出世し給いて十小劫が間一偈も之を説かず經に
云く「一坐十小劫」と云云、又云く「仏時末だ至らずと知しめて請を受け默然として坐したまえり」と、今の教主釈尊
も四十余年の間は法華經を説きたまわず經に云く「説時末だ至らざるが故なり」と等云云、老子は母の胎に処して八十年・
弥勒菩薩は兜率の内院にして五十六億七千万歳を待ちたまふ仏法を修行する人人時を知らざ
らんや、爾らば末法の始には純円一実の流布とは知らざれども經文に任するに「我が滅度の後、後の五百歳の中に閻浮提
に広宣流布して断絶せしむること無けん」と云云、誠に以て分明なり。

問うて云く八宗・九宗・十宗の中に何か釈迦仏の立て給へる宗なるや、答えて云く法華宗は釈迦所立の宗なり其の故は已説今説・当説の中には法華經第一なりと説き給う是れ釈迦仏の立て給う處の御語なり、故に法華經をば仏立宗と云い又は法華宗と云う又天台宗とも云うなり、故に伝教大師の釈に云く天台所釈の法華の宗は釈迦世尊所立の宗と云へり、法華より外の經には全く已今当の文なきなり已説とは法華より已前の四十余年の諸經を云う

今説とは無量義經を云う当説とは涅槃經を云う此の三説の外に法華經計り成仏する宗なりと仏定め給へり、余宗は仏涅槃し給いて後 或は菩薩 或は人師達の建立する宗なり仏の御定を背きて菩薩・人師の立てたる宗を用ゆべきか菩薩・人師の語を背きて仏の立て給へる宗を用ゆべきか又何れをも思い思いに我が心に任せて 志あらん經法を持すべきかと思う處に仏是を兼て知し召して末法濁惡の世に眞實の道心あらん人人の持つべき經を定め給へり、經に云く「法に依つて人に依らざれ 義に依つて語に依らざれ知に依つて識に依らざれ」義經に依つて不了義經に依らざれ文、此の文の心は菩薩・人師の言には依るべからず仏の御定を用いよ華嚴 阿含 方等 般若經等の眞言・禅宗 念仏等の法には依らざれ了義經を持つべし了義經と云うは法華經を持つべしと云う文なり。

問うて云く今 日本国を見るに当時五濁の障重く鬭諍堅固にして瞋恚の心猛く嫉妬の思い甚しかかる国かかる時には何れの經をか弘むべきや、答えて云く法華經を弘むべき国なり、其の故は法華經に云く「閻浮提の内に広く流布せしめて断絶せざらしめん」等云云、瑜伽論には丑寅の隅に大乘 妙法蓮華經の流布すべき小国ありと見えた

り、安然和尚云く「我が日本国と等云云、天竺よりは丑寅の角に此の日本国は当るなり、又慧心僧都の一乘

要決に云く「日本一州円機純一にして朝野遠近同一乗に帰し緇素貴賤悉く成仏を期せん」と云、此の文の心は日本国は京鎌倉・筑紫・鎮西みちをく遠きも近きも法華一乗の機のみ有りて上も下も貴も賤も持戒も破戒も男も女も皆おしなべて法華經にて成仏すべき国なりと云う文なり、譬えば崑崙山に石なく蓬萊山に毒なきが如く日本国は純に法華經の国なり、而るに法華經は元よりめでたき御經なれば誰か信ぜざると語には云つて而も昼夜朝暮に弥陀念仏を申す人は藥はめでたしとほめて朝夕毒を服する者の如し、或は念仏も法華經も一なりと云はん人は石も玉も上臈も下臈も毒も藥も一なりと云わん者の如し、其の上法華經を怨み嫉み惡み毀り輕しめ賤む族のみ多し、經に云く「一切世間多怨難信」又云く「如来現在猶多怨嫉況滅度後」の經文少しも違はず當れり、されば伝教大師の釈に云く「代を語れば則ち像の終り末の初め地を尋ぬれば唐の東羯の西人を原ぬれば則ち五濁の生鬭諍の時なり經に云く猶多怨嫉況滅度後」と此の言良に以有るなり」と、此等の文釈をもつて知るべし、日本国に法華經より外の眞言・禪・律・宗・念・信・等々の經教山山寺寺朝野遠近に弘まるといふとも正しく國に相應して仏の御本意に相叶ひ生死を離るべき法にはあらざるなり。

問つて云く華嚴宗には五教を立て余の一切の經は劣れり華嚴經は勝ると云ひ、眞言宗には十住心を立て余の一切經は顯經なれば劣るなり眞言宗は密教なれば勝れたりと云う、禪宗には余の一切經をば教内と簡いて教外別伝・不立文字と立て壁に向いて悟れば禪宗独り勝れたりと云う、淨土宗には正雜二行を立て法華經等の一切經をば捨閉閣抛し雜行と簡ひ淨土の三部經を機に叶ひめでたき正行なりと云う、各各我慢を立て互に偏執を作す何れか釈迦仏の御本意なるや、答えて云く宗宗各別に我が經こそすべれたれ余經は劣れりと云いて我が宗・吉と云う事は唯是れ人師の言にて仏説にあらず、但し法華經計りこそ仏五味の譬を説きて五時の教に當て此の經の勝れたる由を説き、或は又已今當の三説の中に仏になる道は法華經に及ぶ經なしと云う事は止しき仏の金言なり、然るに

我が経は法華經に勝れたり我が宗は法華宗に勝れたりと云はん人は下臈が上臈を凡下と下し相伝の従者が主に敵対して我が下人なりと云わんが如し何ぞ大罪に行なはれざらんや、法華經より余經を下す事は人師の言にあらざる經文分明なり、譬えば國王の万人に勝れたりと名乗り侍の凡下を下臈と云わんに何の禍があるべきや、此の經は是れ仏の御本意なり天台・妙樂の正意なり。

問うて云く釈迦一期の説法は皆衆生のためなり衆生の根性万差なれば説法も種種なり何れも皆得道なるを本意とす、然れば我が有縁の經は人の為には無縁なり人の有縁の經は我が為には無縁なり故に余經の念仏によりて得道なるべき者の為には觀經等はめでたし法華經等は無用なり、法華によりて成仏得道なるべき者の為には余經は無用なり法華經はめでたし、四十余年未顕眞実と説くも雖示種種道其実為仏乗と云うも正直捨方便但説無上道

と云うも法華得道の機の前の事なりと云う事世こそつてあはれ然るべき道理かなんと思へり如何心うべきや、若し爾らば大乘・小乗の差別もなく權教・実教の不同もなきなり何れをか仏の本意と説き何れをか成仏の法と説き給えるやはなほ甚だいぶかし、いぶかし、答えて云く凡そ仏の出世は始めより妙法を説かんと申し食ししかども

衆生の機縁万差にしてととのをらざりしかば三七日の間思惟し四十余年の程こそしうおおせて最後に此の妙法を説き給う、故に若し但仏乗を讃せば衆生苦に没在し是の法を信ずること能わず、法を破して信ぜざるが故に三惡道に墜ちんと説き世尊の法は久くして後要らず当に眞実を説きたまふべしとも云へり、此の文の意

は始めより此の仏乗を説かんと申し食ししかども仏法の気分もなき衆生は信ぜずして定めて謗りを至さん、故に機をひとしなに誘給うほどに初めに華嚴・阿含・方等・般若等の經を四十余年の間とき最後に法華經をと給う時、四十余年の座席にありし身子・目連等の万二千の声聞・文殊・弥勒等の八万の菩薩・万億の輪王等・梵王・帝釈等の無量の天人各爾前に聞きし処の法をば如來の無量の知見を失えりと云云、法華經を聞いては無上の宝聚求め

ざるに自ら得たりと悦び給ふ、されば「我等昔より来 数世尊の説を聞きたてまつるに未だ曾て是くの如き深妙の上法を聞かず」とも、「仏希有の法を説き給う昔より未だ曾て聞かざる所なり」とも説き給う、此等の文の心は四十余年の程若干の説法を聴聞せしかども法華經の様なる法をば総てきかず又仏も終に説かせ給はずと法華經を讃たる文なり四十二年の聴と今經の聴とをばわけたくらぶべからず、然るに今經をそれ法華經得道の

人の為にして爾前得道の者の為には無用なりと云う事大なる誤りなり、をのづから四十二年の經の内には一機・一縁の爲にしつらう処の方便なれば設有縁無縁の沙汰はありとも法華經は爾前の經經の座にして得益しつる機どもを押ふさねて一純に調えて説き給ひし間 有縁無縁の沙汰あるべからざるなり、悲しいかな大小 權実みだりがわしく仏の本懷を失いて爾前得道の者のためには法華經無用なりと云へる事を能能憤むべし 恐るべし、古の徳一大師と云いし人此の義を人にも教我が心にも存してさて法華經を読み給ひしを伝教大師 此の人を破し給ふ言に「法華經を讃すと雖も還つて法華の心を死す」と責め給ひしかば徳一大師は舌八にさけて失せ給ひき。

問うて云く天台の釈の中に菩薩処得入と云う文は法華經は但二乗の爲にして菩薩の爲ならず菩薩は爾前の經の中にしても得道なると見えたり若し爾らば末頭真実も正直捨方便等も総じて法華經八卷の内皆以て二乗の爲にして菩薩は一人も有るまじきと意うべきか如何、答えて云く法華經は但二乗の爲にして菩薩の爲ならずと云う事は天台より已前、唐土に南三北七と申して十人の学匠の義なり、天台は其の義を破し失て今は弘まらず若し

菩薩なしと云はば菩薩是の法を聞いて疑網皆已に除くと云える豈是れ菩薩の得益なしと云わんや、それに尚鈍根の菩薩は二乗とつれて得益あれども利根の菩薩は爾前の經にて得益すと云はば「利根 鈍根等しく法雨を雨す」と説き「一切の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提は皆此經に属せり」と説くは何に、此等の文の心は利根にてもあれ鈍根

にてもあれ持戒にてもあれ破戒にてもあれ貴もあれ賤もあれ一切の菩薩凡夫・二乗は法華經にて成仏得道なるべしと云う文なるをや、又法華得益の菩薩は皆鈍根なりと云はば普賢・文殊・弥勒・藥王等の八万の菩薩をば鈍根なりと云うべきか、其の外に爾前の經にて得道する利根の菩薩と云うは何様なる菩薩ぞや、抑爾前に菩薩の得道と云うは法華經の如き得道にて候か、其ならば法華經の得道にて爾前の得分にあらず、又法華經より外の得道ならば已今当の中には何れぞや、いかさまにも法華經ならぬ得道は当分の得道にて眞実の得道にあらず、故に無量義經には「是の故に衆生の得道差別せり」と云い又終に無上菩提を成ずることを得じ」と云へり、文の心は爾前の經經には得道の差別を説くと云ふとも終に無上菩提の法華經の得道はなしとこそ仏は説き給いて候へ。

問うて云く當時は釈尊入滅の後今に二千二百三十余年なり、一切經の中に何の經が時に相應して弘まり利生も有るべきや大集經の五箇の五百歳の中の第五の五百歳に當時はあたれり、其の第五の五百歳をば鬪諍堅固・白法隱没と云つて人の心たけく腹あしく貪欲・瞋恚・強盛なれば軍・合戦のみ盛にして仏法の中に先き先き弘りし所の眞言・禪宗・念仏持戒等の白法は隱没すべしと仏説き給へり、第一の五百歳第二の五百歳第三の五百歳第四の五百歳を見るに成仏の道こそ未顕眞実なれ世間の事法は仏の御言一分も違はず是を以て之を思つに當時の鬪諍堅固・白法隱没の金言も違つ事あらじ、若爾らば末法には何の法も得益あるべからず何れの仏菩薩も利生あるべからずと見えたり如何、さてもだして何の仏菩薩にもつか牽らず何の法をも行ぜず憑む方なくして候べきか、後世をば如何が思い定め候べきや、答えて云く末法當時は久遠実成の釈迦仏・上行菩薩・無辺行菩薩等の弘めさせ給うべき法華經二十八品の肝心たる南無妙法蓮華經の七字計り此の國に弘まりて利生得益もあり上行菩薩の御利生盛んなるべき時なり、其の故は經文明白なり道心堅固にして志あらん人は委く是を尋ね聞くべきなり。

浄土宗の人人末法万年には余経悉く滅し弥陀一教のみと云ひ又当今末法は是れ五濁の悪世唯浄土の一門のみ有て通入す可き路なりと云つて虚言して大集經に云くと引ども彼の經に都て此文なし、其の上あるべき様もなし仏の在世の御言に当今末法五濁の悪世には但浄土の一門のみ入るべき道なりとは説き給つべからざる道理顯然なり本經には「当來の世經道滅尽し特り此の經を留めて止住する事百歳ならん」と説けり、末法一万年の百歳

とは全く見えず、然るに平等覺經・大阿弥陀經を見るに仏滅後・千年の後の百歳とこそ意えられたれ、然るに善導が惑へる釈をば尤も道理と人皆思へり是は諸僻案の者なり、但し心あらん人は世間のことはりをもつて推察せよ、大旱魃のあらん時は大海が先にひるべきか小河が先にひるべきか仏是を説き給うには法華經は大海なり

觀經・阿弥陀經等は小河なり、されば念仏等の小河の白法こそ先にひるべしと經文にも説き給いて候ひぬれ、大集經の五箇の五百歳の中の第五の五百歳・白法隱没と云と雙觀經に經道滅尽と云とは但一つ心なり、されば末法には始めより雙觀經等の經道滅尽すと聞えたり經道滅尽と云は經の利生の滅すと云う事なり、色の經卷有るにはよるべからず、されば當時は經道滅尽の時に至つて二百歳に余れり、此の時は但法華經のみ利生得益あるべし。

されば此經を受持して南無妙法蓮華經と唱え奉るべしと見えたり藥王品には「後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむることなけん」と説き給ひ、天台大師は「後の五百歳遠く妙道に沾ん」と釈し、妙樂大師は「且らく大經の流行す可き時に拠ると釈して後の五百歳の間法華經弘まりて其の後は閻浮提の内に絶え

失せる事有るべからずと見えたり、安樂行品に云く「後の末世の法滅せんと欲せん時に於て斯の經典を受持し誦誦せん者」文神力品に云く「爾の時に仏・上行等の菩薩大衆に告げたまわく属累の爲の故に此の經の功德を説くと
も猶尽すこと能わじ、要を以て之を云わば如來の一切の所有の法・如來の一切の自在の神力・如來の一切の秘要の

蔵・如来の一切の甚深の事、皆此經に於て宣示顯説す」と云云、此等の文の心は、積尊入滅の後第五の五百歳と説くも、来世と云うも濁悪世と説くも正像二千年過ぎて末法の始二百余歳の今時は、唯法華經計り弘まるべしと云う文なり、其の故は人既にひがみ法も実にしるしく、仏神の威験もましまさず、今生後生の祈りも叶はず、かからん時はたよりを得て天魔波旬乱れ入り、国土常に飢渴して天下も疫癘し、他国侵逼難、自界叛逆難とて、我が国に軍合戦常にありて、後には他国より兵どもをそひ来りて此の国を責むべしと見えたり、此くの如き鬭諍堅固の時は、余經の白法は、驗し失せて法華經の大良藥を以て此の大難をば治すべしと見えたり。

法華經を以て国土を祈らば上一人より下万民に至るまで悉く悦び榮給うべき鎮護国家の大白法なり、但し阿闍世王・阿育大王は始めは悪王なりしかども、耆婆大臣の語を用ひ夜叉尊者を信じ給いて後にこそ賢王の名をば留め給いしか、南三北七を捨てて知、法師を用ひ給いし陳主・六宗の碩徳を捨てて最澄法師を用ひ給いし桓武天皇は、今に賢王の名を留め給へ、知、法師と云うは後には天台大師と号し奉る最澄法師は、後には伝教大師と云う

是なり、今の国主も又是くの如し現世安穩、後生善処なるべき此の大白法を信じて、国土に弘め給はば万国に其の身を仰がれ、後代に賢人の名を留め給うべし、知らず又無辺行菩薩の化身にてやましますらん、又妙法の五字を弘め給はん智者をば、いかに賤くとも上行菩薩の化身か又釈迦如来の御使かと思つべし、又藥王菩薩・藥上菩薩・觀音・

勢至の菩薩は正像二千年の御使なり、此等の菩薩達の御番は早過たれば上古の様に利生有るまじきなり、されば当世の祈を御覽ぜよ一切叶はざる者なり、末法今の世の番衆は上行・無辺行等にててをはしますなり、此等を能能明らめ信じてこそ法の驗も仏菩薩の利生も有るべしとは見えなれ、譬えばよき火打とよき石のかごとよきほくちと

此の三寄り合いて火を用ゆるなり、祈も又是くの如しよき師とよき檀那とよき法と此の三寄り合いて祈を成就し、国土の大難をも払ふべき者なり、よき師とは指したる世間の失無くして聊のひらうことなく小欲知足にし

て慈悲有らん僧の經文に任せて法華經を読み持ちて人をも勧めて持たせん僧をば仏は一切の僧の中に吉第一の法師なりと讃められたり、吉檀那とは貴人にもよらず賤人をもにくまず上にもよらず下をもいやします一切人をば用いずして一切經の中に法華經を持たん人をば一切の人の中に吉人なりと仏は説給へ吉法とは此の法華經を最爲第一の法と説かれたり、已説の經の中にも今説の經の中にも当説の經の中にも此の經第一と見えて候は吉法なり、禅宗・真言宗等の經法は第二第三なり殊に取り分けて申せば眞言の法は第七重の劣なり、然るに日本国には第二第三乃至第七重の劣の法をもつて御祈あれども未だ其の証拠をみず、最上第一の妙法をもつて御祈あるべきか、是を正直捨方便但説無上道唯此一事實と云へり誰か疑をなすべきや。

問つて云く無智の人來りて生死を離るべき道を問はん時は何れの經の意をか説くべき仏如何が教給へや、答えて云く法華經を説くべきなり所以に法師品に云く「若し人有つて何等の衆生か未來世に於て當に作仏することを得べきと問わば応に示すべし、是の諸人等未來世に於て必ず作仏することを得ん」と云云、安樂行品に云く「難問する所有らば小乗の法を以て答えず但大乘を以て而も為に解説せよ」云云、此等の文の心は何なる衆生か仏になるべきと問わば法華經を受持し奉らん人必ず仏になるべしと答うべきなり是れ仏の御本意なり、之に付て不審あり衆生の根性区にして念仏を聞かんと願ふ人もあり法華經を聞かんと願ふ人もあり、念仏を聞かんと願ふ人に法華經を説いて聞かせんは何の得益があるべき、又念仏を聞かんと願ふ人に請じたらん時にも強て法華經を説くべきか、仏の説法も機に隨いて得益有るをこそ本意とし給うらんと不審する人あらば云うべし、元より末法の世には無智の人に機に叶ひ叶はざるを顧みず但強いて法華經の五字の名号を説いて持たすべきなり、其の故は釈迦仏昔不輕菩薩と云はれて法華經を弘め給ひしには男女尼法師がおしなべて用ひざりき、或は罵られ毀られ或は打れ追はれ一しなならず、或は怨まれ嫉まれ給ひしかども少しも二りもなくして強いて法華經を説き給ひし故に

今の釈迦仏となり給いしなり、不輕菩薩を罵りまいらせし人は口もゆがまず打ち奉りしかいなもすくまず、付法蔵の師子尊者も外道に殺されぬ、又法道三蔵も火印を面にあてられて江南に流され給いしぞかし、まして末法にかひなき僧の法華經を弘めんにはかかる難あるべしと經文に正しく見えたり、されば人は是を用ひず機に叶はずと云ふも強いて法華經の五字の題名を聞かすべきなり、是ならでは仏になる道はなきが故なり、又或人不審して

云く、機に叶はざる法華經を強いて説いて謗せさせて惡道に人を墮さんよりは、機に叶へる念仏を説いて發心せしむべし、利益もなく謗せさせて返つて地獄に墮さんは法華經の行者にもあらず邪見の人にてこそ有るらめと不審せば、云うべし經文には何体にもあれ末法には強いて法華經を説くべしと仏の説き給ふをばさていか心がうべく候や、釈迦仏・不輕菩薩・天台・妙樂・伝教等はさて邪見の人外道にておはしまし候べきか、又惡道にも墮ち

ず三界の生を離れたる二乗と云う者をば仏の給はく設ひ犬野干の心をば發すとも二乗の心をもつべからず五逆・十惡を作りて地獄には墮つとも二乗の心をばもつべからずなどと禁められしぞかし、惡道におちざる程の利益は争でか有るべきなれども其れをば仏の御本意とも思し食さず地獄には墮つるとも仏になる法華經を耳にふれぬれば是を種として必ず仏になるなり、されば天台・妙樂も此の心を以て強いて法華經を説くべしとは釈し給へ

譬えば、人の地に依りて倒れたる者の返つて地をおさへて起が如し、地獄には墮つれども疾く浮んで仏になるなり、当世の人・何となくとも法華經に背く失に依りて地獄に墮ちん事疑いなき故に、とてもかくても法華經を強いて説き聞かすべし、信ぜん人は仏になるべし謗ぜん者は毒鼓の縁となつて仏になるべきなり、何にとしても仏の

種は法華經より外になきなり、權教をもつて仏になる由だにあらば、なにしか仏は強いて法華經を説いて謗するも信ずるも利益あるべしと説き我不愛身命とは仰せらるべきや、よくよく此等を道心ましますん人は御心得あるべきなり。

問うて云く無智の人も法華經を信じたらば即身成仏すべきか、又何れの淨土に往生すべきぞや、答えて云く法華經を持つにおいては深く法華經の心を知り止觀の坐禅をし一念三千・十境・十乘の觀法をこらさん人は實に即身成仏し解を開く事もあるべし、其の外に法華經の心をもしらず無智にしてひら信心の人は淨土に必ず生べしと見えたり、されば生十方仏前と説き或は即往安樂世界と説き、是の法華經を信ずる者の往生すと云う明文なり、之に付いて不審あり其の故は我が身は一にして十方の仏前に生るべしと云う事心得られず、何れにてもあれ一方に限るべし正に何れの方をか信じて往生すべきや、答えて云く一方にさだめずして十方と説くは最もいはれあるなり、所以に法華經を信ずる人の一期終る時には十方世界の中に法華經を説かん仏のみもとに生るべきなり、余の華嚴・阿含・方等・般若經を説く淨土は生るべからず、淨土十方に多くして声聞の法を説く淨土もあり辟支仏の法を説く淨土もあり或は菩薩の法を説く淨土もあり、法華經を信ずる者は此等の淨土には一向生れずして法華經を説き給う淨土直ちに往生して座席に列りて法華經を聴聞してやがてに仏になるべきなり、然るに今世にして法華經は機に叶はずと云いつとめて西方淨土にて法華經をさとるべしと云はん者は阿彌陀の淨土にても法華經をさとるべからず十方の淨土にも生るべからず、法華經に背く咎重きが故に永く地獄に墮つべしと見えたり、其人命終入阿鼻獄と云ふ是なり。

問うて云く即往安樂世界・阿彌陀仏と云云、此の文の心は法華經を受持し奉らん女人は阿彌陀仏の淨土に生るべしと説き給えり念仏を申しても阿彌陀の淨土に生るべしと云ふ、淨土既に同じ念仏も法華經も等と心え候べきか如何、答えて云く觀經は權教なり法華經は實教なり全く等しかるべからず其の故は仏世に出でさせ給いて四十余年の間多くの法を説き給いしかども二乗と惡人と女人とをば簡ひはてられて成仏すべしとは一言も仰せられざりしに此の經にこそ敗種の二乗も三逆の調達も五障の女人も仏になるとは説き給い候つれ、其の旨經文に見えた

り、華嚴經には「女人は地獄の使なり仏の種子を断ず外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し」と云へり、銀色女經には三世の諸仏の眼は抜けて大地に落つるとも法界の女人は永く仏になるべからずと見えたり、又經に云く「女人は大鬼神なり能く一切の人を喰ふ」と、竜樹菩薩の大論には一度女人を見れば永く地獄の業を結ぶと見えたり。されば實にてやありけん善導和尚は謗法なれども女人をみずして一期生と云はれたり、又業平が歌にも律をいてあれたるやどのつれたきはがりにも鬼のずだくなりけりと云うも女人をば鬼とよめるにこそ侍れ、又女人には五障三従と云う事有るが故に罪深しと見えたり、五障とは一には梵天王・二には帝釈・三には魔王・四には轉輪聖王・五には仏にならずと見えたり、又三従とは女人は幼き時は親に従いて心に任せず、人となりては男に従いて

心にまかせず、年よりぬれば子に従いて心にまかせず加様に幼き時より老耄に至るまで二人に従て心にまかせず思ふ事もいはず見たき事をもみず聴問したき事をもきかず是を三従とは説くなり、されば榮啓期が三樂を立てたるにも女人の身と生れざるを一の樂みといへり、加様に内典・外典にも嫌はれたる女人の身なれども此の經を

読まねどもかかねども身と口と意とにつけ持ちて殊に口に南無妙法蓮華經と唱へ奉る女人は在世の竜女・曇弥・耶輸陀羅女の如くにやすやすと仏になるべしと云う經文なり、又安樂世界と云うは一切の淨土をば皆安樂と説くなり、又阿彌陀と云うも觀經の阿彌陀にはあらず、所以に觀經の阿彌陀仏は法藏比丘の阿彌陀、四十八願の主十劫成道の仏なり、法華經にも迹門の阿彌陀は大通智勝仏の十六王子の中の第九の阿彌陀にて法華經大願の主の仏なり、本門の阿彌陀は釈迦分身の阿彌陀なり随つて釈にも「須く更に觀經等を指すべからざるなり」と釈し給えり。

問つて云く經に難解難入と云へり世間の人此の文を引いて法華經は機に叶はずと申し候は道理と覚え候は如何、答えて云く謂れなき事なり其の故は此の經を能も心えぬ人の云う事なり、法華より已前の經は解り難く

入り難し法華の座に來りては解り易く入り易しと云う事なり、されば妙樂大師の御釈に云く「法華已前は不了義なるが故に故に難解と云う即ち今の教には咸く皆実に入るを指す故に易知と云う」文、此の文の心は法華より已前經にては機つたなくして解り難く入り難し、今の經に來りては機賢く成りて解り易く入り易しと釈し給へり、其の上難解難入と説かれたる經が機に叶はずば先念仏を捨てさせ給うべきなり、其の故は雙觀經に「難きが中の難き此の難に過ぎたるは無し」と説き阿彌陀經には難信の法と云へり、文の心は此の經を受け持たん事は難きが中の難きなり此れに過ぎたる難きはなし難信の法なりと見えたり。

問うて云く經文に「四十余年未だ真実を顕さず」と云い又「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過るとも終に無上菩提を成ずることを得じ」と云へり、此の文は何体の事にて候や、答えて云く此の文の心は釈迦仏二期五十年の説法の中に始めの華嚴經にも真実をとかず中の方等般若にも真実をとかず、此の故に禪宗念仏戒等を行ずる人は無量無辺劫をば過ぐとも仏にならじと云う文なり、仏四十二年の歲月を経て後法華經を説き給ふ文には「世尊の法は久くして後に要らず當に真実を説き給うべし」と仰せられしかば、舍利弗等の千二百の羅漢万二千の声聞彌勒等の八万人の菩薩梵王帝釈等の万億の天人阿闍世王等の無量無辺の國王仏の御言を領解する文に

は我等昔より來數世尊の説を聞きたてまつるに未だ曾て是くの如き深妙の上法を聞かずと云つて我等仏に離れ奉らずして四十二年若干の説法を聴聞しつれどもいまだ是くの如き貴き法華經をばきかずと云へる、此等の明文をばい

かが心えて世間の人は法華經と余經と等しく思ひ剰機に叶はねば闇の夜の錦とぞ

の曆なんど云ひて、適持つ人を見ては賤み輕しめ惡み嫉み口をすくめなんどする是れ併ら謗法なり争か往生成仏もあるべきや、必ず無間地獄に墮つべき者と見えたり。

問うて云く凡そ仏法を能く心得て仏意に叶へる人をば世間には是を重んじ一切是を貴む、然るに當世法華經を持つ

人人をば世にぞつて悪み嫉み輕しめ賤み、或は所を追ひ出し、或は流罪し供養をなすまでは思いもよらず怨敵の様ににくまるは、いかさまにも心わろくして仏意にもかなはず、ひがさまに法を心得たるなるべし、經文には如何が説きたるや、答えて云く經文の如くならば末法の法華經の行者は人に悪まる程に持つを實の大乗の僧とす、又經を弘めて人を利益する法師なり、人に吉と思はれ人の心に隨いて貴しと思はれん僧をば法華經のかたき世間の悪知識なりと思つべし、此の人を經文には獵師の目を細めにして鹿をねらひ猫の爪を隠して鼠をねらふが如くにして在家の俗男、俗女の檀那をうつらいつわりたばらかすべしと説き給へり、其の上勸持品には法華經の敵人三類を挙げられたるに、一には在家の俗男、俗女なり此の俗男、俗女は法華經の行者を憎み罵り打ちはりきり殺し所を追ひだし、或は上讒奏して遠流しなさけなくあだむ者なり、二には出家の人なり此の人は慢心高くして内心には物も知らざれども智者げにもてなして世間の人に学匠と思はれて法華經の行者を見ては怨み嫉み輕しめ、賤み犬野干よりもわるきよつを人に云いつとめ法華經をば我、一人心得たりと思つ者なり、三には阿練若の僧なり此の僧は極めて貴き相を形に顯し三衣一鉢を帶して山林の閑かなる所に籠り居て在世の羅漢の如く諸人に賣まれ仏の如く万人に仰がれて法華經を説の如くに読み持ち奉らん僧を見ては憎み嫉んで云く大愚癡の者大邪見の者なり総て慈悲なき者、外道の法を説くなど云わん、上一人より仰いで信を取らせ給はば其の已下万人も仏の如くに供養をなすべし、法華經を説の如くよみ持たん人は必ず此の三類の敵人に怨まるべきなりと仏説き給へり。

問うて云く仏の名号を持つ様に法華經の名号を取り分けて持つべき証拠ありや如何、答えて云く經に云く「仏諸の羅刹女に告げたまわく善き哉善き哉汝等但能く法華の名を受持する者を擁護せん福量る可からず」と云云此の文の意は十羅刹の法華の名を持つ人を護らんと誓言を立て給つを大覺世尊讃めて言く善き哉善き哉汝等

南無妙法蓮華經と受け持たん人を守らん功德いくら程とも計りがたくめでたき功德なり神妙なりと仰せられたる文なり、是れ我等衆生の行住坐臥に南無妙法蓮華經と唱ふべしと云う文なり。

凡そ妙法蓮華經とは我等衆生の仏性と梵王・帝釈等の仏性と舍利弗・目連等の仏性と文殊・弥勒等の仏性と三世の諸仏の解の妙法と一体不二なる理を妙法蓮華經と名けたるなり、故に一度妙法蓮華經と唱うれば一切の仏・一切の法・一切の菩薩・一切の声聞・一切の梵王・帝釈・閻魔法王・日月・衆星・天神・地神・乃至地獄・餓鬼・畜生・修羅・人天一切衆生の心中の仏性を唯一音に喚び顯し奉る功德・無量無辺なり、我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉りて我が己心中の仏性・南無妙法蓮華經とよびよばれて顯れ給う処を仏とは云うなり、譬えば籠の中の鳥なけば空とぶ鳥のよばれて集まるが如し、空とぶ鳥の集まれば籠の中の鳥も出でんとするが如し口に妙法をよび奉れば我が身の仏性もよばれて必ず顯れ給ふ、梵王・帝釈の仏性はよばれて我等を守り給ふ、仏・菩薩の仏性はよばれて悦び給ふ、されば「もし暫くも持つ者は我れ則ち歡喜す諸仏も亦然なり」と説き給うは此の心なり、されば三世の諸仏も妙法蓮華經の五字を以て仏に成り給いしなり三世の諸仏の出世の本懷・一切衆生・皆成仏道の妙法と云うは是なり。是等の趣きを能く能く心得て仏になる道には我慢偏執の心なく南無妙法蓮華經と唱へ奉るべき者なり。日蓮在御判

夫れ一代聖教とは総べて五十年の説教なり是を一切経とは言ふなり、此れを分ちて二と為す一には化他・二には自行なり、一には化他の経とは法華経より前の四十二年の間説き給える諸の経教なり此れをば權教と云い亦是は方便と名く、此れは四教の中には三藏教・通教・別教の三教なり五時の中には華嚴・阿含・方等・般若なり法華より前の四時の経教なり、又十界の中には前の九法界なり又夢と寤との中には夢中の善悪なり又夢をば權と云い寤を

ば実と云ふなり、是の故に夢は仮に有つて体性無し故に名けて權と云ふなり、寤は常住にして不變の心の体なるが故に此れを名けて実と為す、故に四十二年の諸の経教は生死の夢の中の善悪の事を説く故に權教と言ふ夢中の衆生を誘引し驚覺して法華経の寤と成さんと思食しての支度方便の経教なり故に權教と言ふ、斯れに由つて文字の読みを糾して心得可きなり、故に權をば權と読む權なる事の手本には夢を以て本と為す又実をば実と読む実事

の手本は寤なり、故に生死の夢は權にして性体無ければ權なる事の手本なり故に妄想と云ふ、本覺の寤は実にして生滅を離れたる心なれば眞実の手本なり故に実相と云ふ、是を以て權実の二字を糾して一代聖教の化他の權と自行の実との差別を知る可きなり、故に四教の中には前の三教と五時の中には前の四時と十法界の中には前の九

法界は同じく皆夢中の善悪の事を説くなり故に權教と云ふ、此の教相をば無量義經に四十余年未顕眞実と説き給う已上、未顕眞実の諸経は夢中の權教なり故に釈籤に云く「性殊なること無しと雖も必ず幻に藉りて幻の機と幻の感と幻の心と幻の赴とを發す能心と所化と並びに權實に非ず」已上、此れ皆夢幻の中の方便の教なり性雖無殊

等とは夢見る心性しんしやうと寤うの時の心性しんしやうとは只ただ一の心性しんしやうにして総て異ること無しと雖も夢の中の虚事そらごとと寤うの時の実事じつじと二事一の心法しんぽうなるを以て見ると思ふも我が心なりと云う釈しやくなり、故に止観しかんに云く「前の三教の四弘しやく能も所も泯みんす已上しやく、四弘しやくとは衆生の無辺なるを度せんと誓願せいがんし煩惱ぼんのうの無辺なるを断だんぜんと誓願せいがんし法門ほつもんの無尽なるを知らんと誓願せいがんし無上菩提むじやうぼだいを証せんと誓願せいがんす此を四弘しやくと云う、能とは如来にょらいなり所とは衆生しゆじやうなり此の四弘しやくは能の仏も所

の衆生も前三教は皆夢中の是非なりと釈しやくし給えるなり、然れば法華以前の四十二年の間の説教せしきやうたる諸経は未顕真実の権教ごんきやうなり方便ほうべんなり、法華に取寄る可き方便なるが故に真実には非ず、此れは仏、自ら四十二年の間説き集め給いて後に、今法華經を説かんと欲して先ず序分の開經の無量義經の時、仏、自ら勘文かんぶんし給える教相きやうさうなれば人の語も

入る可からず不審ふしんをも生ず可からず、故に玄義げんぎに云く「九界を権と為し仏界を實と為す」已上しやくかい、九法界の権は四十二年の説教せしきやうなり仏法界の實は八箇年の説法華經是なり、故に法華經をば仏乗と云う九界の生死は夢の理なれば權教ごんきやうと云いい仏界の常住は寤の理なれば實教と云う、故に五十年の説教せしきやう・一代の聖教しやうきやう・一切の諸經は化他けたの四十二年の權教ごんきやうと自行じきやうの八箇年の實教と合して五十年なれば權と實との二の文字を以て鏡に懸けて陰無し。

故に三藏經を修行しゆきやうすること三僧祇さんぞう・百大劫を歴て終りに仏に成らんとせば我が身より火を出して灰身入滅はいしゆにふつとて灰と成つて失せるなり、通教を修行しゆきやうすること七阿僧祇あそんぞう・百大劫を満てて仏に成らんとせば前の如く同様に灰身入滅はいしゆにふつして跡形あとがたも無く失せぬるなり、別教を修行しゆきやうすること二十二大阿僧祇あそんぞう・百千万劫を尽くして終りに仏に成りぬと思へば生死しじふの夢の中の權教の成仏なれば本覺の寤うの法華經の時には別教には實仏無し夢中の果なり故に別教

の教道には實の仏無しと云うなり、別教の証道には初地に始めて一分の無明を断じて一分の中道の理を顯し始めて之を見れば別教は隔歴不融の教と知つて円教に移り入つて円人と成り已つて別教には留まらざるなり上中下三根の不同ふたつ有るが故に初地・二地・三地乃至等覺までも円人と成る故に別教の面に仏無きなり、故に有教無人

と云うなり、故に守護国界章に云く「有為の報仏は夢中の権果（前二教の）無作の三身は覺前の実仏なり（後の四教の）又云く「權教の三身は未だ無常を免れず（前二教の）實教の三身は俱体俱用なり（後の四教の）此の釈を能く能く意得可きなり、權教は難行苦行してまたま

適 仏に成りぬと思えば夢中の權の仏なれば本覺の寤の時には実仏無きなり、極果

の仏無ければ有教無人なり況や教法実ならんや之を取つて修行せんは聖教に迷えるなり、此の前二教には仏に成らざる証拠を説き置き給いて末代の衆生に慧解を開かしむるなり九界の衆生は一念の無明の眠の中に於て生死の夢に溺れて本覺の寤を忘れ夢の是非に執して冥きより冥きに入る、是の故に如來は我等が生死の夢の中に入つて

顛倒の衆生に同じて夢中の語を以て夢中の衆生を誘ひ夢中の善惡の差別の事を説いて漸漸に誘引し給うに、夢中の善惡の事重 疊して様様に無量無辺なれば先ず善事に付いて上中下を立つ三乗の法是なり、三三九品なり、此くの如く説き已つて後に又上・上品の根本善を立て上中下・三三九品の善と云う、皆悉く九界生死の夢の中の

善惡の是非なり今是をば総じて邪見外道と為す（搜要の意）、此の上に又上・上品の善心は本覺の寤の理なれば此れを善の本と云うと説き聞かせ給し時に夢中の善惡の悟の力を以ての故に寤の本心の実相の理を始めて聞知せられし事なり、是の時に仏説いて言く夢と寤との二は虚事と実事との二の事なれども心法は只一なり、眠の縁に値いぬれ

ば夢なり眠去りぬれば寤の心なり心法は只一なりと開会せらるべき下地を造り置かれし方便なり（此れは別教の中道の理是の故に未だ十界互具・円融相即を顕さざれば成仏の人無し故に三藏教より別教に至るまで四十二年の間の八教は皆悉く方便・夢中の善惡なり、只暫く之を用いて衆生を誘引し給う支度方便なり此の權教の中にも分分に皆悉く）

方便と真実と有りて權実の法闕けざるなり、四教一一に各四門有つて差別有ること無し語も只同じ語なり文字も異ること無し斯れに由つて語に迷いて權実の差別を分別せざる時を仏法滅すと云う是の方便の教は唯穢土に有つて総じて淨土には無きなり法華經に云く「十方の仏土の中には唯一乗の法のみ有つて二無く亦三も無し仏の方便

の説をば除く已上、故に知んぬ十方の仏土に無き方便の教を取つて往生の行と為し十方の淨土に有る一乗の法をば之を嫌いて取らずして成仏す可き道理有る可しや否や一代の教主釈迦如来一切経を説き勸文し給いて言く三世の諸仏同様に一つ語一つ心に勸文し給える説法の儀式なれば我も是くの如く一言も違わざる説教の次第なり云云、方便品に云く三世の諸仏の説法の儀式の如く我も今亦是くの如く無分別の法を説く已上、無分別の法

とは一乗の妙法なり善悪を簡ぶこと無く草木樹林山河大地にも一微塵の中にも互に各十法界の法を具足す我が心の妙法蓮華經の一乗は十方の淨土に周して闕くること無し十方の淨土の依報・正報の功德莊嚴は我が心の中に有つて片時も離るること無き三身即一の本覺の如来にて是の外には法無し此の一法計り十方の淨土に有りて

余法有ること無し故に無分別法と云う是なり、此の一乗妙法の行をば取らずして全く淨土には無き方便の教を取つて成仏の行と為さんは迷いの中の迷いなり、我仏に成りて後に穢土に立ち還りて穢土の衆生を仏法界に入らしめんが為に次第に誘引して方便の教を説くを化他の教とは云うなり、故に權教と言ひ又方便とも云う化他の法門の有様大體略を存して斯くの如し。

二に自行の法とは是れ法華經八箇年の説なり、是の經は寤の本心を説き給う唯衆生の思ひ習わせる夢中の心地なるが故に夢中の言語を借りて寤の本心を訓る故に語は夢中の言語なれども意は寤の本心を訓ゆ法華經の文と釈との意此くの如し、之を明め知らずんば經の文と釈の文とに必ず迷う可きなり、但し此の化他の夢中の法門も寤の本心に備われる徳用の法門なれば夢中の教を取つて寤の心に摂むるが故に四十二年の夢中の化他方便の法門も

妙法蓮華經の寤の心に摂まりて心の外には法無きなり此れを法華經の開會とは云うなり、譬えば衆流を大海に納むるが如きなり仏の心法妙衆生の心法妙と此の二妙を取つて已心に摂むるが故に心の外に法無きなり已心と心性と心体との三は己身の本覺の三身如来なり是を經に説いて云く如是相如是性如是体如来此れを三如是

と云う、此の三如是の本覺の如來は十方法界を身体と為し十方法界を心性と為し十方法界を相好と為す是の故に我が身は本覺三身如來の身体なり、法界に周して一仏の徳用なれば一切の法は皆是仏法なりと説き給ひし時其の座席に列りし諸の四衆八部・畜生・外道等一人も漏れず皆悉く妄想の僻目・僻思・立所に散止して本覺の寤にかへみなぶつたう還つて皆仏道を成ず、仏は寤の人の如く衆生は夢見る人の如し故に生死の虚夢を醒して本覺の寤に還るを即身成仏とも平等大慧とも無分別法とも皆成仏道とも云う只一つの法門なり、十方の仏土は区に分れたりと雖も通じて法は一乘なり方便無きが故に無分別法なり、十界の衆生は品品に異りと雖も実相の理は一なるが故に無分別なり百界千如・三千世間の法門殊なりと雖も十界互具するが故に無分別なり、夢と寤と虚と実と各別異なりと雖も一心の中の法なるが故に無分別なり、過去と未来と現在とは三なりと雖も一念の心中の理なれば無分別なり、一切経の語は夢中の語とは譬えば扇と樹との如し法華經の寤の心を顯す言とは譬えば月と風との如し、故に本覺の寤の心の月輪の光は無明の闇を照し実相般若の智慧の風は妄想の塵を払う故に夢の語の扇と樹とを以て寤の心の月と風とを知らしむ是の故に夢の余波を散じて寤の本心に歸せしむるなり、故に止觀に云く「月・重山に隱るれば扇を挙げて之に類し風大虚に息みぬれば樹を動かして之を訓ゆるが如し文、弘決に云く「真常性の月・煩惱の山に隱る煩惱」に非ず故に名けて重と為す円音教の風は化を息めて寂に歸す寂理無礙なること猶大虚の如し四依の弘教は扇と樹との如し乃至月と風とを知らしむるなり已上、夢中の煩惱の雲・重疊せること山の如く其の数八万四千の塵勞にて心性本覺の月輪を隱す扇と樹との如くなる経論の文字言語の教を以て月と風との如くなる本覺の理を覺知せしむる聖教なり故に文と語とは扇と樹との如し文、上釈は一往の釈とて実義に非ざるなり月の如くなる妙法の心性の月輪と風の如くなる我が心の般若の慧解とを訓え知らしむるを妙法蓮華經と名く、故に釈籤に云く「声色の近名を尋ねて無相の極理に至る」と已上、声色の近名とは扇と樹との如くなる夢中の一切経論の言説なり

無相の極理とは月と風との如くなる寤の我が身の心性の寂光の極樂なり、此の極樂とは十方法界の正報の有情と十方法界の依報の国土と和合して一体三身即一なり、四土不二にして法身の二仏なり十界を身と為すは法身なり十界を心と為すは報身なり十界を形と為すは応身なり十界の外に仏無し仏の外に十界無くして依正

不二なり身土不二なり一仏の身体なるを以て寂光土と云う是の故に無相の極理とは云うなり、生滅無常の相を離れたるが故に無相と云うなり法性の淵底玄宗の極地なり故に極理と云う、此の無相の極理なる寂光の極樂は一切有情の心性の中に有つて清淨無漏なり之を名けて妙法の心蓮台とは云うなり是の故に心外無別法と云う此れを一切法は皆是仏法なりと通達解了すとは云うなり、生と死と二つの理は生死の夢の理なり妄想なり顛倒なり本覺の寤を以て我が心性を糾せば生ず可き始めも無きが故に死す可き終りも無し既に生死を離れたる心法に非ずや、

劫火にも焼けず水災にも朽ちず剣刀にも切られず弓箭にも射られず芥子の中に入るれども芥子も広からず心法も縮まらず虚空の中に満つれども虚空も広からず心法も狭からず善に背くを惡と云い惡に背くを善と云う、故に心の外に善無く惡無し此の善と惡とを離るるを無記と云うなり、善惡無記 此の外には心無く心の外には法無きなり

故に善惡も淨穢も凡夫聖人も天地も大小も東西も南北も四維も上下も言語道斷し心行所滅す心に分別して思ひ言に顯す言語なれば心の外には分別も無分別も無し、言と云うは心の思ひを響かして声を顯すを云うなり凡夫は我が心に迷つて知らず覺らざるなり、仏は之を悟り顯わして神通と名くるなり神通とは神の一切の法に通じて

礙無きなり、此の自在の神通は一切の有情の心にて有るなり故に狐狸も分分に通を現すること皆心の神の分分の悟なり此の心の一法より国土世間も出来る事なり、一代聖教とは此の事を説きたるなり此れを八万四千の法藏とは云うなり是れ皆悉く一人の身中の法門にて有るなり、然れば八万四千の法藏は我身一人の日記文書なり、此の八万法藏を我が心中に孕み持ち懷き持ちたり我が身中の心を以て仏と法と淨土とを我が身より外に思ひ願ひ

求むるを迷いとは云うなり此の心が善惡の縁に値つて善惡の法をば造り出せるなり、華嚴經に云く「心は工なる画師の種種の五陰を造るが如く一切世間の中に法として造らざること無し心の如く仏も亦爾なり仏の如く衆生も然なり三界唯一心なり心の外に別の法無し心仏及び衆生是の三差別無し已上、無量義經に云く「無相・不相の法より無量義を出生す已上、無相・不相の法とは一切衆生の一念の心是なり、文句に釈して云く「生滅無常の相無きが故に無相と云うなり二乗の有余・無余の二つの涅槃の相を離るが故に不相と云うなり」云云、心の不思議を以て經論の詮要と爲すなり、此の心を悟り知るを名けて如来と云う之を悟り知つて後は十界は我が身なり我が心なり我が形なり本覺の如来は我が身心なるが故なり之を知らざる時を名けて無明と爲す無明は明かなること無しと読むなり、我が心の有様を明かに覺らざるなり、之を悟り知る時を名けて法性と云う、故に無明と法性とは一心の異名なり、名と言とは一なりと雖も心は只一つ心なり斯れに由つて無明をば斷ず可からざるなり夢の心の無明なるを斷ぜば寤の心を失う可きが故に總じて円教の意は一毫の惑をも斷ぜず故に一切の法は皆是れ佛法なりと云うなり、法華經に云く「如是相・本覺の心・身・如来・如是性・本覺の報・身・如来・如是体・本覺の法・身・如来」此の三如是より後の七如是出生して合して十如是と成れるなり、此の十如是は十法界なり、此の十法界は一人の心より出で八万四千の法門と成るなり、一人を手本として一切衆生平等なることは是くの如し、三世の諸仏の總勸文にして御判慥かに印たる正本の文書なり仏の御判とは実相の一印なり印とは判の異名なり、余の一切の經には実相の印無ければ正本の文書に非ず全く実の仏無し実の仏無きが故に夢中の文書なり淨土に無きが故なり、十法界は十なれども十如是は一なり譬えば水中の月は無量なりと雖も虚空の月は一なるが如し、九法界の十如是は夢中の十如是なるが故に水中の月の如し佛法界の十如是は本覺の寤の十如是なれば虚空の月の如し、是の故に仏界の一つの十如是顯れぬれば九法界の十如是は水中の月の如きも一も闕減無く同時に皆顯れて体と用と一具にして一体の仏と

成る、十法界を互に具足し平等なる十界の衆生なれば虚空の本月も水中の末月も一人の身中に具足して闕くること無し
故に十如是は本末究竟して等しく差別無し、本とは衆生の十如是なり末とは諸仏の十如是なり諸仏は衆生の一念の心よ
り顕れ給えば衆生は是れ本なり諸仏は是れ末なり、然るを經に云く「今此の三界は皆是我が有なり其の中の衆生は悉く
是吾が子なり」と已上、仏成道の後に化他の為の故に迹の成道を唱えて生死の夢中にして本覺
の寤を説き給うなり、智慧を父に譬え愚癡を子に譬えて是くの如く説き給えるなり、衆生は本覺の十如是なりと雖も
一念の無明眠りの如く心を覆つて生死の夢に入つて本覺の理を忘れ髮筋を切る程に過去現在未來の三世の虚夢を見る
なり、仏は寤の人の如くなれば生死の夢に入つて衆生を驚かし給える智慧は夢の中にて父母の如く
夢の中なる我等は子息の如くなり、此の道理を以て悉是吾子と言ひ給うなり、此の理を思い解けば諸仏と我等とは本の
故にも父子なり末の故にも父子なり父子の天性は本末是れ同じ、斯れに由つて己心と仏心とは異ならずと觀するが故に
生死の夢を覺まして本覺の寤に還えるを即身成仏と云うなり、即身成仏は今我が身の上の天性・
地体なり煩も無く障りも無き衆生の運命なり果報なり冥加なり、夫れ以れば夢の時の心を迷いに譬え寤の時の心を悟
りに譬う之を以て一代聖教を覺悟するに跡形も無き虚夢を見て心を苦しめ汗水と成つて驚きぬれば我身も家も臥所
も一所にて異らず夢の虚と寤の実との二事を目にも見・心にも思へども所は只一所なり身も只一身にて一の虚と実との
事有り之を以て知んぬ可し、九界の生死の夢見る我が心も仏界常住の寤の心も異ならず九界生死
の夢見る所が仏界常住の寤の所にて変らず心法も替らず在所も差わされども夢は皆虚事なり寤は皆実事なり止觀に
云く「昔莊周と云うもの有り夢に胡蝶と成つて一百年を経たり苦は多く樂は少く汗水と成つて驚きぬれば胡蝶にも成ら
ず百年をも経ず苦も無く樂も無く皆虚事なり皆妄想なり」已上、弘決に云く「無明は夢の蝶の如く三千は百年の如し一念
実無きは猶蝶に非ざるが如く三千も亦無きこと年を積むに非るが如し」已上、此の釈は即身

成仏の証拠なり夢に蝶と成る時も莊周は異ならず寤に蝶と成らずと思つ時も別の莊周無し、我が身を生死の凡夫なりと思つ時は夢に蝶と成るが如く、倅目倅思なり、我が身は本覺の如來なりと思つ時は本の莊周なるが如し、即身成仏なり、蝶の身を以て成仏すと云うに非ざるなり、蝶と思つは虚事なれば成仏の言は無し、沙汰の外事なり、無明は夢の蝶の如しと判ずれば我等が倅思は猶昨日の夢の如く、性体無き妄想なり、誰の人か虚夢の生死を信受して疑を常住涅槃の仏性に生ぜんや、止觀に云く、無明の癡惑本より是れ法性なり、癡迷を以ての故に法性變じて無明と作り諸の顛倒の善不善等を起す寒來りて水を結ばば變じて堅氷と作るが如く、又眠來りて心を変ずれば種種の夢有るが如し、今當に諸の顛倒は即ち是法性なり、一ならず異ならずと体すべし、顛倒起滅すること旋火輪の如し、雖も顛倒の起滅を信ぜずして唯此の心、但是れ法性なりと信ず、起は是れ法性の起、滅は是れ法性の滅なり、其れを体するに、實には起滅せざるを妄りに起滅すと謂えり、只妄想を指すに悉く是れ法性なり、法性を以て法性に繋げ法性を以て法性を念ず、常には是れ法性なり、法性ならざる時無し、已上、是くの如く法性ならざる時の際も無き理の法性に夢の蝶の如く無明に於て実有の思を生じて之に迷うなり、止觀の九に云く、譬えば眠の法、心を覆つて一念の中に無量世の事を夢みるが如し、乃至寂滅真如に何の次位か有らん、乃至一切衆生即大涅槃なり、復滅す可からず何の次位、高下、大小有らんや、不生不生にして不可説なれども因縁有るが故に亦説くことを得可し、十因縁の法生の爲に因と作る虚空に画き方便して樹を種るが如し、一切の位を説くのみ、已上、十法界の依報、正報は法身の仏、一体、三身の徳なりと知つて一切の法は皆是れ仏法なりと通達し解了する是を名字即と爲す、名字即の位より即身成仏す故に円頓の教には次位の次第無し、故に玄義に云く、末代の学者多く經論の方便の断伏を執して、

争鬪す水の性の冷かなるが如きも飲まずんば安んぞ知らん、已上、天台の判に云く、次位の綱目は、仁王、瓔珞に依り断伏の高下は大品智論に依る、已上、仁王、瓔珞、大品、大智度論、是の經論は皆法華已前の八教の經論なり、

權教の行は無量劫を経て昇進する次位なれば位の次第を説けり今法華は八教に超えたる円なれば速疾頓成にして心と
仏と衆生と此の三は我が一念の心中に摂めて心の外に無しと觀ずれば下根の行者すら尚一生の中に妙覺の位に入る・一
と多と相即すれば一位に一切の位皆是れ具足せり故に一生に入るなり、下根すら是くの如し況や中根の者をや何に況や
上根をや実相の外に更に別の法無し実相には次第無きが故に位無し、総じて一代の聖教は一人の

法なれば我が身の本体を能く能く知る可し之を悟るを仏と云い之に迷うは衆生なり此れは華嚴經の文の意なり、弘決の
六に云く「此の身の中に具さに天地に倣うことを知る頭の円かなるは天に象り足の方なるは地に象ると知り身の内の空種
なるは即ち是れ虚空なり腹の温かなるは春夏に法とり背の剛きは秋冬に法とり四体は四時に法とり大節の十二は十二月
に法とり小節の三百六十は三百六十日に法とり、鼻の息の出入は山沢溪谷の中の風に法

とり口の息の出入は虚空の中の風に法とり眼は日月に法とり開閉は昼夜に法とり髪は星辰に法とり眉は北斗に法とり脈
は江河に法とり骨は玉石に法とり皮肉は地土に法とり毛は叢林に法とり、五臓は天に在つては五星に法とり地に在つては
五岳に法とり陰陽に在つては五行に法とり世に在つては五常に法とり内に在つては五神に法とり行を修するには五徳に
法とり罪を治むるには五刑に法とる謂く墨・・宮・大辟此の五刑は人を様様に之を備ましむ
其の数三千の罰有り此を五刑と云う

首領には五官と為す五官は下の第八の卷に博物誌を引くが如し謂く苟萌等なり、天に昇つては五雲と曰い化して五竜と
為る、心を朱雀と為し腎を玄武と為し肝を青竜と為し肺を白虎と為し脾を勾陳と為す又云く「五音・五明・六藝・皆
此れより起る亦復当に内治の法を識るべし覺心内に大王と為つては百重の内に居り出でては則ち五官に侍衛せ為る、肺を
ば司馬と為し肝をば司徒と為し脾をば司空と為し四支をば民子と為し、左をば司命と

為し右をば司録と為し人命を主司す、乃至臍をば太一君等と為すと禪門の中に広く其の相を明す已上、人身の本体委く
検すれば是くの如し、然るに此の金剛不壞の身を以て生滅無常の身なりと思ふ僻思は譬えば莊周が夢の

蝶の如しと釈し給えるなり、五行とは地水火風空なり五大種とも五蘊とも五戒とも五常とも五方とも五智とも五時とも云う、只一物・経経の異説なり内典・外典名目の異名なり、今經に之を開して一切衆生の心中の五仏性五智の如來の種子と説けり是則ち妙法蓮華經の五字なり、此の五字を以て人身の体を造るなり本有常住なり本覺の如來なり是を十如是と云う此を唯仏与仏乃能究尽と云う、不退の菩薩と極果の二乗と少分も知らざる法門なり然るを円頓の凡夫は初心より之を知る故に即身成仏するなり金剛不壞の体なり、是を以て明かに知んぬ可し天崩れば我が身も崩る可し地裂けば我が身も裂く可し地水火風滅亡せば我が身も亦滅亡すべし、然るに此の五大種は過去・現在・未來の三世は替ると雖も五大種は替ること無し、正法と像法と末法との三時殊なりと雖も五大種は是れ一にして盛衰轉變無し、藥草喻品の疏には円教の理は大地なり円頓の教は空の雨なり亦三藏教・通教・別教

の三教は三草と二木となり、其の故は此の草木は円理の大地より生じて円教の空の雨に養われて五乗の草木は栄うれども天地に依つて我栄えたりと思知らざるに由るが故に三教の人天・二乗・菩薩をば草木に譬えて不知恩と説かれたり、故に草木の名を得今法華に始めて五乗の草木は円理の母と円教の父とを知るなり、一地の所生なれば母の恩を知るが如く一雨の所潤なれば父の恩を知るが如し、藥草喻品の意是くの如くなり。

釈迦如來・五百塵点劫の当初凡夫にて御坐せし時我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき、後に化他の為に世世番番に出世成道し在在處處に八相作仏し王宮に誕生し樹下に成道して始めて仏に成る様を衆生に見知らしめ四十余年に方便教を儲け衆生を誘引す、其の後方便の諸の經教を捨てて正直の妙法蓮華經の五智の如來の種子の理を説き顯して其の中に四十二年の方便の諸經を丸かし納れて一仏乗と丸し人・一の法と

名く一人が上の法なり、多人の綺えざる正しき文書を造つて慥かな御判の印あり三世諸仏の手継ぎの文書を釈迦仏より相伝せられし時に三千三百万億那由他の国土の上の虚空の中に満ち塞がれる若干の菩薩達の頂を摩で

尽して時を指して末法近來の我等衆生の為に慥かに此の由を説き聞かせて仏の讓 狀を以て末代の衆生に慥かに授与す可しと懇懇に三度まで同じ御語に説き給いしかば若干の菩薩達 各数を尽して を曲げ頭を低れ三度まで同じ言に各、我も劣らじと事請を申し給いしかば仏 心安く思食して本覺の都に還えり給う、三世の諸仏の説法の儀式作法には只同じ御言に時を指したる末代の讓 狀なれば只一向に後 五百歳を指して此の妙法蓮華經を以て成仏す可き時なりと讓 狀の面に載せられたる手継ぎ証文なり。

安樂行品には末法に入つて近來 初心の凡夫 法華經を修行して成仏す可き様を説き置かれしなり、身も安樂行なり口も安樂行なり意も安樂行なり自行の三業も誓願安樂の化他の行も同じく後の末世に於て法の滅せんと欲する時と云云、此は近來の時なり已上四所に有り藥王品には二所に説かれ勸發品には三所に説かれたり、皆近來を指して讓り置かれたる正しき文書を用いずして凡夫の言に付き愚癡の心に任せて三世諸仏の讓り狀に背き奉り永く仏法に背かば三世の諸仏 何に本意無く口惜しく心憂く歎き悲しみ思食すらん 涅槃經に云く「法に依つて人に依らざれ」と云云、痛ましいかな悲しいかな末代の學者 仏法を習學して還つて仏法を滅す、弘決に之を悲しんで曰く「此の円頓を聞いて崇重せざることは良に近代大乘を習う者の雜濫に由るが故なり況や像末情澆く信心寡薄 円頓の教法蔵に溢れ函に盈つれども暫くも思惟せず便ち目を瞑ぐに至る徒らに生し徒らに死す一に何ぞ痛ましき哉」已上、同四に云く 然も円頓の教は本と凡夫に被むらしむ若し凡を益するに擬せずんば仏 何ぞ自ら法性の土に住して法性の身を以て諸の菩薩の為に此の円頓を説かずして何ぞ諸の法身の菩薩の与に凡身を示し此の三界に現じ給うことを須いんや、乃至一心凡に在れば即ち修習す可し「已上、所詮已心と仏身と一なりと觀ずれば速かに仏に成るなり、故に弘決に又云く「一切の諸仏已心は仏心と異ならずと觀し給うに由るが故に仏に成ることを得る」と已上、此れを觀心と云う実に已心と仏心と一心なりと悟れば臨終を礙わる可き惡業も有らず

生死に留まる可き妄念も有らず、一切の法は皆是れ仏法なりと知りぬれば教訓す可き善知識も入る可らず思うと思ひ
言つと言ひ為すと為し儀いと儀う行住坐臥の四威儀の所作は皆仏の御心と和合して一体なれば過も無く障りも無き
自在の身と成る此れを自行と云う、此くの如く自在なる自行の行を捨て跡形も有らざる無明妄想なる僻思の心に住して
三世の諸仏の教訓に背き奉れば冥きより冥きに入り永く仏法に背くこと悲しむ可く悲しむ可し、

只今打ち返えし思ひ直し悟り返さば即身成仏は我が身の外には無しと知りぬ、我が心の鏡と仏の心の鏡とは只一鏡なりと
雖も我等は裏に向つて我が性の理を見ず故に無明と云う、如來は面に向つて我が性の理を見たまへり故に明と無明とは
其の体只一なり鏡は一の鏡なりと雖も向い様に依つて明昧の差別有り鏡に裏有りと雖も面の障りと

成らず只向い様に依つて得失の二有り相即融通して一法の二義なり、化他の法門は鏡の裏に向うが如く自行の觀心は鏡
の面に向うが如し化他の時の鏡も自行の時の鏡も我が心性の鏡は只一にして替ること無し鏡を即身に譬え面に向うをば
成仏に譬え裏に向うをば衆生に譬う鏡に裏有るをば性惡を斷ぜざるに譬え裏に向う時・面の徳無きをば化他の功德に
譬うるなり衆生の仏性の顯れざるに譬うるなり、自行と化他とは得失の力用なり玄義の一に

云く「薩婆悉達・祖王の弓を彎て満るを名けて力と為す七つの鉄鼓を中り一つの鉄囲山を貫ぬき地を洞し水輪に徹る如き
を名けて用と為す用なり諸の方便教は力用の微弱なること凡夫の弓箭の如し何となれば昔の縁は化他の二智を稟けて理を
照すこと遍からず信を生ずること深からず疑を除くこと尽さず化他、今の縁は自行の二智を稟けて仏の境界を極め法界

の信を起し円妙の道を増し根本の惑を斷じ變易の生を損す、但だ生身及び生身得忍の兩種の

菩薩俱に益するのみに非ず法身と法身の後心との兩種の菩薩も亦以て俱に益す化の功広大に利潤弘深なる蓋し茲の經の
力用なり自行・自行と化他との力用勝劣分明なること勿論なり能く能く之を見よ一代聖教を鏡に懸たる教相なり、極
仏境界とは十如是の法門なり十界に互に具足して十界・十如の因果權実の二智・二境は我が

身の中に有つて一人も漏ること無しと通達し解了し仏語を悟り極むるなり起法界信とは十法界を体と為し十法界を心と為し十法界を形と為したまえりと本覺の如來は我が身の中に有りけりと信ず増円妙道とは自行と化他との二は相即円融の法なれば珠と光と宝との三徳は只一の珠の徳なるが如し片時も相離れず仏法に不足無し一生の中に仏に成るべしと慶喜の念を増すなり、断根本惑とは一念無明の眠を覺まして本覺の寤に還れば生死も涅槃も俱に昨日の夢の如く跡形も無きなり、損變易生とは同居土の極樂と方便土の極樂と実報土の極樂との三土に往生せる人彼の土にて菩薩の道を修行して仏に成らんと欲するの間、因は移り果は易りて次第に進み昇り劫數を経て成仏の遠きを待つを變易の生死と云ふなり、下位を捨つるを死と云い上位に進むを生と云ふ是くの如く變易する生死は淨土の苦惱にて有るなり、爰に凡夫の我等が此の穢土に於て法華を修行すれば十界互具法界一如なれば淨土の菩薩の變易の生は損し仏道の行は増して變易の生死を一生の中に促めて仏道を成ず故に生身及び生身得忍の兩種の菩薩増道損生するなり、法身の菩薩とは生身を捨てて実報土に居するなり、後心の菩薩とは等覺の菩薩なり但し迹門には生身及び生身得忍の菩薩を利益するなり本門には法身と後身との菩薩を利益す但し今は迹門を開して本門に擣めて一の妙法と成す故に凡夫の我等穢土の修行の行の力を以て淨土の十地等覺の菩薩を利益する行なるが故に化の功広大なり化他や徳用利潤弘深とは自行のえんどん徳用円頓の行者は自行と化他と一法をも漏さず一念に具足して横に十方法界に遍するが故に弘きなり豎には三世に亘つて法性の淵底を極むるが故に深きなり、此の經の自行の力用此くの如し化他の諸經は自行を具せざれば鳥の片翼を以て空を飛ばざるが如し故に成仏の人も無し今法華經は自行化他の二行を開會して不足無きが故に鳥の二翼を以て飛ぶに障り無きが如く成仏滞り無し、

藥王品には十喻を以て自行と化他との力用の勝劣を判ぜり第一の譬に云く諸經は諸水の如く法華は大海の如し云云取意、実に自行の法華經の大海には化他の諸經の衆水を入ること昼夜に絶えず入ると雖も増せず減ぜず

ふかしき 不可思議の徳用を顕す、諸經の衆水は片時の程も法華經の大海を納ること無し自行と化他との勝劣是くのこと
て諸を例せよ、上来の譬喩は皆仏の所説なり人の語を入れず此の旨を意得れば一代聖教鏡に懸けて陰り無し此の文釈
を見て誰の人か迷惑せんや、三世の諸仏の總勘文なり敢て人の会釈を引き入る可からず三世諸仏の
出世の本懷なり一切衆生成仏の直道なり、四十二年の化他の経を以て立る所の宗宗は華嚴・真言・達磨・淨土・法相・三論
・律宗・俱舍・成実等の諸宗なり此等は皆悉く法華より已前の八教の中の教なり皆是方便なり兼但・対帶の方便誘引な
り、三世諸仏の説教の次第なり此の次第を糾して法門を談ず若し次第に違わば仏法に非ざるなり、一代教主の釈迦如来
も三世諸仏の説教の次第を糾して一字も違わず我も亦是くの如しとて経に云く「三世諸仏の説法の儀式の如く我も今亦
かくのこと
是くの如く無分別の法を説く已上、若し之に違えば永く三世の諸仏の本意に背く他宗の祖師各 我が宗を立て法華宗と
あらそ 諍つと」の中の 迷いの中の迷いなり。

徵佗学の決に之を破して云く「山王院 凡そ八万法藏其の行相を統ぶるに四教を出です頭辺に示すが如し藏通 別円は
すなわ 即ち声聞・縁覺・菩薩・仏乘なり真言・禅門・華嚴・三論・唯識・律業・成俱の二論等の能所の教理争でか此の四を過ぎん
も 若し過ぐると言わば豈外邪に非ずや若し出ですと言わば便ち他の所期を問い得よ」然して後に答に
したが 随つて極理を推ね徵めよ我が四教の行相を以て並べ検えて決定せよ彼の所期の果に於て若し我と違わば随つて即ち之を詰
めよ、且く華嚴の如きは五教に各各に修因・向果有り初中・後の行一ならず一教一果是れ所期なるべし

若し藏通・別円の因と果とに非ざれば是れ仏教ならざるのみ、三種の法輪・三時の教等・中に就て定む可し汝何者を以て
か所期の乗と為るや若し仏乘なりと言わば未だ成仏の觀行を見ず若し菩薩と言わば此れ亦即離の中道の異なるなり、
汝正しく何れを取るや設し離の辺を取らば果として成ず可き無し如し即是を要せば仏に例して之を難ぜよ謬つて真言を
誦すとも三觀一心の妙趣を会せずんば恐くは別人に同じて妙理を証せし所以に他の所期の極を

逐うて理に準じて我が宗の世む理なり徴べし、因明の道理は外道と対す多くは小乗及び別教に在り若し法華華嚴涅槃等の經に望むれば接引門なり権りに機に對して設けたり終に以て引進するなり邪小の徒をして会して真理に至らしむるなり所以に論ずる時は四依撃目の志を存して之を執着すること莫れ又須らく他の義を將つて自義に對檢し

したがて随つて是非を決すべし執して之を怨むこと莫れ大底他は多く三教に在り先徳大師の所判是の如し、諸宗の所立鏡に懸けて陰り無し末代の學者何ぞ之を見ずして妄りに教門を判ぜんや大綱の三教を能く能く學す可し、頓と漸と円とは三教なり是れ一代聖教の總の三諦なり頓漸の二は四十二年の説なり円教の一は八箇年の説なり合し

て五十年なり此の外に法無し何に由つてか之に迷わん、衆生に有る時には此れを三諦と云い仏果を成ずる時には此れを三身と云う一物の異名なり之を説き顯すを一代聖教と云い之を開會して只一の總の三諦と成ずる時に成仏す此を開會と云い此を自行と云う、又他宗所立の宗宗は此の總の三諦を分別して八と為す各各に宗を立つるに依つて円満の理を闕いて成仏の理無し是の故に余宗には実の仏無きなり故に之を嫌う意は不足なりと嫌うなり、

円教を取つて一切諸法を觀ずること円融・円満して十五夜の月の如く不足無く満足し究竟すれば善惡をも嫌わず折節をも撰ばず静処をも求めず人品をも択ばず一切諸法は皆是れ仏法なりと知りぬれば諸法を通過す即ち非道を行うとも仏道を成ずるが故なり、天地水火風は是れ五智の如来なり一切衆生の身心の中に住在して片時も離ること無きが故に世間と出世と和合して心中に有つて心外には全く別の法無きなり故に之を聞く時立所に速かに仏果を成ずること滞り無き道理至極なり、總の三諦とは譬えば珠と光と宝との如し此の三徳有るに由つて如意宝珠と云う故に總の三諦に譬うも若し亦珠の三徳を別別に取り放さば何の用にも叶う可からず隔別の方便教の宗宗も亦是くの如し珠をば法身に譬え光をば報身に譬え宝をば心身に譬う此の總の三徳を分別して宗を立つるを不足と嫌うなり之を丸じて一と為すを總の三諦と云う、此の總の三諦は三身即一の本覺の如来なり又寂光をば鏡に譬え同居

と方便と実報の三土をば鏡に遷る像に譬う四土も一土なり三身も一仏なり今は此の三身と四土と和合して仏の一体の徳なるを寂光の仏と云う寂光の仏を以て円教の仏と為し円教の仏を以て寤の実仏と為す余の三土の仏は夢中の權仏なり、此れは三世の諸仏の只同じ語に勘文し給える總の教相なれば人の語も入らず会釈も有らず若し之に違わば三世の諸仏に背き奉る大罪の人なり天魔・外道なり永く仏法に背くが故に之を秘藏して他人には見せざれ若し秘藏せずして妄りに之を披露せば仏法に証理無く二世に冥加無からん謗ずる人出来せば三世の諸仏に背くが故に一人乍ら俱に惡道に墮んと識るが故に之を誡むるなり、能く能く秘藏して深く此の理を証し三世の諸仏の

御本意に相叶い一聖・二天・十羅刹の擁護を蒙むり滞り無く上上品の寂光の往生を遂げ須臾の間に九界生死の夢の中に還り来つて身を十方法界の国土に遍じ心を一切有情の身中に入れて内よりは勧發し外よりは引導し内外相應し因縁和合して自在神通の慈悲の力を施し広く衆生を利益すること滞り有る可からず。

三世の諸仏は此れを一大事の因縁と思食して世間に出現し給えり一とは中道なり大とは華嚴なり事とは方便等般若なり已上一代の總の三諦なり、之を悟り知る時、仏果を成ずるが故に出世の本懷成仏の直道なり因とは一切衆生の身中に總の三諦有つて常住不變なり此れを總じて因と云うなり縁とは三因仏性は有りと雖も善知識の縁に値わざれば悟らず知らず顯れず善知識の縁に値えば必ず顯るるが故に縁と云うなり、然るに今此の一と大と事と因と

縁との五事と和合して値い難き善知識の縁に値いて五仏性を顯さんこと何の滞りか有らんや春の時来りて風雨の縁に値いぬれば無心の草木も皆悉く萌え出生して華敷き榮えて世に値う気色なり秋の時に至りて月光の縁に値いぬれば草木皆悉く実成熟して一切の有情を養育し寿命を續き長養し終に成仏の徳用を顯す之を疑い之を信ぜざ

る人有る可しや無心の草木すら猶以て是くの如し何に況や人倫に於てをや、我等は迷の凡夫なりと雖も一分の心も有り解も有り善惡も分別し折節を思知る然るに宿縁に催されて生を仏法流布の国土に受けたり善知識の縁に

値いなば因果を分別して成仏す可き身を以て善知識に値うと雖も猶草木にも劣つて身中の三因仏性を顕さずして黙止せ
る謂れ有る可きや、此の度必ず必ず生死の夢を覚まし本覺の寤に還つて生死の繼を切る可し今より已後は夢中の法門を
心に懸く可からざるなり、三世の諸仏と一心と和合して妙法蓮華經を修行し障り無く開悟す可し自行と化他との二教の
差別は鏡に懸けて陰り無し、三世の諸仏の勸文是くの如し秘す可し秘す可し。

弘安二年己卯十月 日

日蓮 花押

夫れ馬は一歳二歳の時は設たいつがいのびまろすねにすねほそくうでのびて候もとも病あるべしとも見えず、而れども七八歳なんどになりて身もこ血ふとく上かち下をくれ候はは小船に大石をつめるがごとく小き木に大なる菓こののなれるがごとく多くのやまい出来して人の用にもあわず力もよわく寿いのちもみじかし、天神等も又かくのごとし成劫じやうの始には先生せんしやうの果報かほういみじき衆生しゆじやう生れ来る上、人の悪も候はねば身の光もあざやかに心もいさぎよく日月にちがつのごとくあざやかに師子象しししやうのいさみをなして候いし程に成劫じやうやうやくすぎて住劫じゆけつになるままに前の天神等てんじんは年かさなりて下旬の月のごとし今生こんじやうれ来れる天神は果報衰減さゐげんし下劣げれつの衆生しゆじやう多分たぶんは出来す、然る間しか・一天いつてんに三災さんさいやうやくをこり四海しかいに七難粗出現しちなんそしゆげんせしかば一切衆生いっさいしゆじやう始めて苦と樂とををもち知る。

此の時、仏出現ぶつしゆげんし給たまいて仏教ぶつぎやうと申す薬を天と人と神とにあた給たまいしかば燈ともに油をそ老人らうじんに杖をあたたるがごとく天神等てんじん還かへつて威光いこうをまし勢力せきりきを増長じやうぢやうせし事・成劫じやうのごとし仏教ぶつぎやうに又五味ごみのあぢわひ分れたり、在世ざいせの衆生しゆじやうは成劫じやうほとこそなかりしかども果報かほういたつをとるゝぬ衆生しゆじやうなれば五味ごみの中に何なんの味をもなめて威光いこう勢力せきりきをままし候き

、仏滅度ぶつめつどの後正像しやうざう二千年過すて末法まふぽうになりぬれば本の天も神も阿修羅大竜等あしゆらだいりやうも年もかさなりて身もつかれ心もよくなり又今生こんじやうれ来る天人てんじん・修羅等しゆらは或あるは小果報せうかほう或あるは悪天人等あくてんじんなり、小乗じやうじやう・権大乘等こんだいじやうの乳酪にゅうがく・生蘇しやうそ・熟蘇じやくそ・味を服すれども老人らうじんに食しきをあた高人かうじんに麦飯等ばくはんを奉るがごとし、而るを当世たうせい此を弁わえざる学人等がくじん等古いにしへにならいて日本国にほんこくの一切いっさいの諸神等しよじんの御前おんまへにして阿含經あがんぎやう・方等ほうとう・般若はんや・華嚴けえん・大日經等だいじつぎやうを法樂ほふがくし俱舍くしや・成実じやうじつ・律りつ・法相ほふさう・三論さんろん・華嚴けえん・淨土じやうど・禅等ぜんの僧そうを護持ごぢの僧そうとし給たまえる唯老人ただらうじんに食しきを与しよ介兒けいにに強飯きやうはんをくくめるがごとし、何いかに況や今のいまの小乗經じやうじやうと小乗宗じやうじやう

と大乘經と大乘宗とは古の小大乘の經宗にはあらず、天竺より仏法漢土へわたりし時小大の經經は金言に私言まじはれり、宗宗は又天竺漢土の論師・人師、或は小を大とあらそい或は大を小といふ、或は小に大をかきまじへ或は大に小を入れ、或は先きの經を後とあらそい或は後を先とし、或は先を後につけ、或は顯經を密經といひ密經を顯經といふ譬へば乳に水を入れ藥に毒を加うるがごとし、涅槃經に仏・未來を記して云く「爾の時に諸の賊・醍醐を以ての故に之に加うるに水を以てす、水を以てする事多きが故に乳・酪・醍醐一切俱に失す」等云云、阿含・小乘經は乳味のごとし方等・大集經・阿彌陀經・深密經・楞伽經・大日經等は酪味のごとし、般若經等は生蘇味の如く華嚴經等は熟蘇味の如く法華・涅槃經等は醍醐味の如し、設い小乘經の乳味なりとも仏説の如くならば争でか一分の藥とならざるべき、況や諸の大乘經をや何に況や法華經をや。

然るに月氏より漢土に經を渡せる訳人は一百八十七人なり其の中に羅什三藏一人を除きて前後の二百八十六人は純乳に水を加藥に毒を入たる人人なり、此の理を弁さる一切の人師・末學等設い一切經を讀誦し十二分經を胸に浮べたる様なりとも生死を離る事かたし又現在に一分のしるしある様なりとも天地の知る程の祈とは成る可からず魔王・魔民等守護を加えて法に驗の有様なりとも終には其の身も檀那も安穩なる可からず譬ば旧医の藥に毒を雜てさしをけるを旧医の弟子等・或は盜み取り、或は自然に取りて人の病を治せんが如し、いかでか安穩なるべき、当世・日本国の眞言等の七宗並に淨土・禪宗等の諸學者等、弘法・慈覺・智証等の法華經最第一の醍醐に法華第二・第三等の私の水を入れたるを知らず仏説の如くならば、いかでか一切俱失の大料を脱れん、大日經は法華經より劣る事七重なり而るを弘法等・顛倒して大日經最第一と定めて日本国に弘通せるは法華經一分の乳に大日經七分の水を入れたるなり水にも非ず乳にも非ず大日經にも非ず法華經にも非ず而も法華經に似て大日經に似たり大覺世尊此の事を涅槃經に記して云く「我が滅後に於て正法將に滅尽せんと欲す爾の時に多く惡を行ずる比丘有

らん、乃至ないし牧牛女の如く乳を売るに多利を貪らんと欲するを為ためての故に二分の水を加う、乃至此の乳水多し、爾の時に是の経閻浮提に於て当に広く流布すべし、是の時に当に諸の惡比丘有て是の經を鈔略たぶんし分て多分と作し能く正法の色香美味を滅すべし、是の諸の惡人復是くの如き經典を誦誦すと雖も如來の深密の要義を滅除せん、乃至前を鈔て後に著け後を鈔て前に著け前後を中に著け中を前後に著けん当に知るべし是くの如きの諸の惡比丘は是れ魔の伴侶なりと等云。

今、日本国を案ずるに代始まりて已に久しく成りぬ旧き守護の善神は定めて福も尽き寿も減じ威光勢力も衰えぬらん、仏法の味をなめてこそ威光勢力も増長すべきに仏法の味は皆たがひぬ齡はたけぬ争でか国の災を払い氏子をも守護すべき、其の上謗法の国にて候を氏神なればとて大科をいましめずして守護し候は仏前の起請を毀る神なり、しかれども氏子なれば愛子の失のやうにすてずして守護し給いぬる程に法華經の行者をあだむ国主。

国人等を対治を加えずして守護する失に依りて梵釈等のためには八幡等は罰せられ給いぬるか此事は一大事なり秘すべし秘すべし、有る經の中に仏此の世界と他方の世界との梵釈日月四天・竜神等を集めて我が正像末の持戒・破戒・無戒等の弟子等を第六天の魔王・惡鬼神等が人王・人民等の身に入りて悩亂せんを見乍ら聞き乍ら治罰せずして須臾もすこすならば必ず梵釈等の使をして四天王に仰せつけて治罰を加うべし、若し氏神・治罰を加えずば梵釈・

四天等も守護神に治罰を加うべし梵釈又かくのごとし、梵釈等は必ず此の世界の梵釈日月四天等を治罰すべし、若し然らずんば三世の諸仏の出世に漏れ永く梵釈等の位を失いて無間・大城に沈むべしと釈迦・多宝・十方の諸仏の御前にして起請を書き置れたり。

今之を案ずるに日本小国の王となり神となり給うは小乗には三賢の菩薩・大乘には十信法華には名字五品の菩薩なり、何なる氏神有りて無尽の功德を修すとも法華經の名字を聞かず一念三千の觀法を守護せずんば退位の

菩薩と成りて永く無間・大城に沈み候べし、故に扶桑記に云く「又伝教大師・八幡大菩薩の奉為に神宮寺に於て、自ら法華經を講ず、乃ち聞き竟て大神託宣すらく我法音を聞かずして久しく歳年を歴る幸い和尚に値遇して正教を聞くことを得たり兼て我がために種種の功德を修す至誠隨喜す何ぞ徳を謝するに足らん、兼て我が所持の法衣有りと即ち託宣の主・自ら宝殿を開いて手ら紫の袈裟一つ紫の衣一を捧げ和尚に奉上す大悲力の故に幸に納受を垂れ給えと、是の時に禰宜・祝等各歎異して云く元來是の如きの奇事を見ず聞かざるかな、此の大神施し給う所の法衣今山王院に在るなり」云云、今謂く八幡は人王第十六代・応神天皇なり其の時は仏經無かりしかば此に袈裟衣有るべからず、人王第三十代・欽明天皇の治三十二年に神と顕れ給い其れより已來弘仁五年までは禰宜・祝等次第に宝殿を守護す、何の王の時此の袈裟を納めけると意へし而して禰宜等云く元來見ず聞かず等云云、此の大菩薩いかにしてか此の袈裟衣は持ち給いけるぞ不思議なり不思議なり。

又欽明より已來弘仁五年に至るまでは王は二十二代・仏法は二百六十余年なり、其の間に三論・成実・法相・俱舍・華嚴・律宗・禅宗等の六宗・七宗・日本国に渡りて八幡大菩薩の御前にして經を講ずる人人其の数を知らず、又法華經を讀誦する人も争でか無からん、又八幡大菩薩の御宝殿の傍には神宮寺と号して法華經等の一切經を講ずる堂・大師より已前に是あり、其の時定めて仏法を聴聞し給いぬらん何ぞ今始めて我法音を聞かずして久しく年歳を歴る等と託宣し給ふべきや、幾くの人人か法華經・一切經を講じ給いけるに何ぞ此の御袈裟衣をば進らせ給はざりけるやらん、当に知るべし伝教大師已前は法華經の文字のみ読みけれども其の義はいまだ顯れざりけるか、去める延暦二十年十一月中旬の比・伝教大師比叡山にして南都・七大寺の六宗の碩徳十余人を奉請して法華經を講じ給いしに、弘世・真綱等の二人の臣下此の法門を聴聞してなげいて云く「一乗の権滯を慨き三諦の末頭を悲しむ」又云く「長幼三有の結を摧破し猶未だ歷劫の轍を改めず」等云云、其の後延暦二十一年正月十九日

たかあでり
に高雄寺に主上行幸ならせ給いて六宗の碩徳と伝教大師とを召し合はせられて宗の勝劣を聞し食ししに南都の十四人
みな
皆口を閉ぢて鼻のごとくす、後に重ねて怠状を捧げたり、其の状に云く「聖徳の弘化より以降た今に二百余年の間講ずる
所の経論其の数多し、彼れ此れ理を争い其の疑未だ解けず而も比の最妙の円宗猶未だ闡揚せず」等云云、比れをもつて
思うに伝教大師已前には法華經の御心いまだ顯れざりけるか、八幡大菩薩の見ず聞かずと御託宣有りけるは指なり指な
り白なり白なり。
あきらか
あきらか

法華經第四に云く「我が滅度の後に能く竊に一人の爲にも法華經を説かん、当に知るべし是の人は則ち如来の使なり
ないしにやういすなわ
乃至如来則ち衣を以て之れを覆い給うべし」等云云、当来の弥勒仏は法華經を説き給うべきゆへに釈迦仏は大迦葉尊者を
おんかい
御使として衣を送り給ふ、又伝教大師は仏の御使として法華經を説き給うゆへに八幡大菩薩を使として衣を送り給う
か、又此の大菩薩は伝教大師已前には加水の法華經を服してをはしましけれども先生の
ぜんこん
善根に依つて大王と生れ給いぬ、其の善根の余慶神と顯れて此の国を守護し給いけるほどに今は先生の福の余慶も尽き
ぬ、正法の味も失せぬ謗法の者等、国中に充滿して年久しけれども日本国の衆生に久く仰がれてなじみせし大科あれど
も捨てがたくをばしめし老人の不幸の子を捨てざるが如くして天のせめに合ひ給いぬるか、又

此の袈裟は法華經第一と説かん人こそがけまいらせ給うべきに伝教大師の後は第一の座主、義真和尚、法華經第一の
人なればかけさせ給う事其の謂あり、第二の座主、円澄大師は伝教大師の御弟子なれども又弘法大師の弟子なりすこ
し謗法にいたり、此の袈裟の人には有らず、第三の座主、円仁慈覚大師は名は伝教大師の御弟子なれども

心は弘法大師の弟子、大日經第一、法華經第二の人なり、此の袈裟は一向にかけがたし、設いかけたりとも法華經の行者
にはあらず、其の上又当世の天台座主は一向、真言の座主なり、又当世の八幡の別当は或は園城寺の長吏、或は東寺の
末流なり、此れ等は遠くは釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵、近くは伝教大師の讐敵なり、譬は

提婆達多が大覺世尊の御袈裟をかけたがごとし、又獵師が仏衣を被て師子の皮をはぎしがごとし、当世叡山の座主は傳教大師の八幡大菩薩より給て候し御袈裟をかけて法華經の所領を奪ひ取りて眞言の領となせり、譬は阿闍世王の提婆達多を師とせしがごとし。

而るを大菩薩の此の袈裟をはぎかへし給わざるは第一の大科なり、此の大菩薩は法華經の御座にして行者を守護すべき由の起請をかきながら数年が間、法華經の大怨敵を治罰せざる事不思議なる上、たまたま法華經の行者の出現せるを來りて守護こそなさざらめ、我が前にして、国主等の怨する事、犬の猿をかみ蛇の蝦をのみ鷹の雉

を師子王の兎を殺すがごとくするを一度もいましめず、設いしましむるやうなれどもいつわりをろかなるゆゑに梵釈、日月、四天等のせめを八幡大菩薩かほり給いぬるにや、例せば欽明天皇、敏達天皇、用明天皇已上三代の大王、物部大連、守屋等がすめに依りて宣旨を下して金銅の釈尊を焼き奉り堂に火を放ち僧尼をせめしかば天よ

り火下て内裏をやく、其の上、日本国の万民とがなくては悪瘡をやみ死ぬること大半に過ぎぬ、結句三代の大王、二人の大臣、其の外多くの王子、公卿等、或は悪瘡、或は合戦にほろび給いしがごとし、其の時、日本国の百八十の神の栖給いし宝殿皆焼け失せぬ釈迦仏に敵する者を守護し給いし大科なり、又園城寺は叡山已前の寺なれども智証大師

の眞言を伝えて今に長吏とがうす叡山の末寺たる事疑いなし、而るに山門の得分たる大乘の戒壇を奪ひ取りて園城寺に立てて叡山に随わじと云云、譬は小臣が大王に敵し子が親に不幸なるがごとし、かかる惡逆の寺を新羅大明神みだれがわしく守護するゆゑに度度、山門に宝殿を焼く、此のごとし、今八幡大菩薩は法華經の大怨敵

を守護して天火に焼かれ給いぬるか、例せば秦の始皇の先祖、襄王と申せし王、神となりて始皇等を守護し給いし程に秦の始皇大慢をなして三皇、五帝の墳典をやき三聖の孝經等を失いしかば沛公と申す人剣をもつて大蛇を切り死ぬ秦皇の氏神是なり、其の後秦の代ほどなくほろび候いぬ此れも又かくのごとし、安芸の国いつく島の大明神

は平家の氏神なり平家ををこらせし失に伊勢太神宮・八幡等に神うち打ち失われて其の後平家ほどなくほろび候いぬ此れも又かくのごとし。

法華經の第四に云く「仏滅度の後能く其の義を解せんは是れ諸の天人世間の眼なり」等云云、日蓮が法華經の肝心たる題目を日本国に弘通し候は諸天世間の眼にあらずや、眼には五あり所謂肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼なり、此の五眼は法華經より出生せさせ給う故に普賢經に云く「此の方等經は是れ諸仏の眼なり諸仏是れに因て五眼を具する事を得給う」等云云、此の方等經と申すは法華經を申すなり、又此の經に云く「天人の福田・応供の中の最なり」等云云、此等の經文のごとくば妙法蓮華經は天人の眼・二乗菩薩の眼諸仏の御眼なり、而るに法華經の行者を怨む人は天人の眼をくじめる者なり、其の人を罰せざる守護神は一切の天人の眼をくじめる者を結構し給う神なり、而るに弘法・慈覚・智証等は正しく書を作りて法華經を無明の辺域にして明の分位に非ず後に望れば戲論

と作る力者に及ばず履者とりにとらずとかきつけて四百余年、日本国の上一人より下万民にいたるまで法華經をあなづらせ一切衆生の眼をくじめる者を守護し給うはあに八幡大菩薩の結構にあらずや、去ぬる弘長と又去ぬる文永八年九月の十二日に日蓮一分の失なくして南無妙法蓮華經と申す大科に国主のはからいとして八幡大菩薩

の御前にひきはらせて一國の謗法の者どもにわらわせ給いしはあに八幡大菩薩の大科にあらずや、其のいましめとをばしきはただどうしうちばかりなり、日本国の賢王たりし上第一第二の御神なれば八幡に勝れたる神は

よもをはせじ、又偏頗はよも有らじとはをもへども一切經並に法華經のをきてのごときんばこの神は大科の神なり、日本六十六箇國二つの島一万一千三十七の寺の仏は皆或は画像或は木像或は真言已前の寺もあり或は已後の寺もあり、此等の仏は皆法華經より出生せり、法華經をもつて眼とすべし、所謂「此の方等經は是れ諸仏の眼なり」等云云、妙樂云く「然も此の經は常住仏性を以て咽喉と爲し一乗の妙行を以て眼目と爲し再生敗種を以て

わするゆへに天のせめを被り給いぬるなり、我が弟子等の内、謗法の余慶有る者の思いて、わく此の御房は八幡をかたきとすと云云、これいまだ道理有りて法の成就せぬには本尊をせむるといつ事を存知せざる者の思なり、付法蔵經と申す經に大迦葉尊者の因縁を説いて云く、時に摩竭國に婆羅門有り、尼俱律陀と名づく過去かこの世あひに於て久しく勝業を修し、多く財宝に饒かにして巨富無量なり、摩竭王に比するに千倍勝れりと為す、財宝饒かなりと雖も、子息有る事無し、自ら念わく老朽して死の時將に至らんとす、庫藏の諸物委付する所無し、其の舎の側に於て樹林神有り、彼の婆羅門子を求むるが為の故に即ち往て祈請す、年歳を経歴すれども微心無し、時に尼俱律陀大に瞋忿を生じて、樹神に語て曰く、我汝に事てより来已に年歳を経れども都て一の福応を垂るを見ず、今当に七日至心に汝に事つべし、若し復驗無ければ必ず相焼剪せん、樹神聞き已て甚だ恐怖を懷き、四天王に向つて具さに斯の事を陳ぶ、是に於て四王往て帝釈に白す、帝釈閻浮提の内を觀察するに、福德の人の彼の子と為るに堪ゆる無し、即ち梵王に詣て、広く上の事を宣ぶ、爾の時に梵王、天眼を以て觀見するに、梵天の當に命終に臨む有り、而て之に告げて曰く、汝若し神を降さば宜しく、當に彼の閻浮提界の婆羅門の家に生ずべし、梵天對て曰く、婆羅門の法惡邪見多し、我今其子と為る事能ざるなり、梵王復言く彼の婆羅門大威徳有り、閻浮提の人往て生ずるに堪ゆる莫し、汝必ず彼に生ぜば吾れ相護りて終に汝をして邪見に入らしめざらん、梵天曰く、諾、敬て聖教を承けん、是に於て帝釈、即樹神に向つて斯の如き事を説く、樹神歡喜して、尋て其の家に詣て、婆羅門に語らく、汝今復恨を我れに起す事なかれ、卻て後七日當に卿が願を満すべし、七日に至て已に婦身む事有るを覺え、十月を満足して一男児を生めり、乃至今の迦葉是なり、云云、時に應じて、尼俱律陀大に瞋忿を生ず、等云云、常のときんば、氏神に向いて大瞋恚を生ぜん者は、今生には身をほろぼし、後世には惡道に墮つべし、然りと雖も、尼俱律陀長者、氏神に向て大惡口大瞋恚を生じて、大願を成就し、賢子をまうけ給いぬ、當に知るべし、瞋恚は善惡に通ずる者なり。

いまだにちれん　いまだにちれん　けんちう　今日蓮は去ぬる建長五年癸丑四月二十八日より今年弘安三年太歳庚辰十二月にいたるまで二十八年が間又他事なし、只
みよしつれんげきよう　こじ　にほんこく　いつさいしゆじよう　妙法蓮華經の七字五字を日本国の一切衆生の口に入れんとはげむ計りなり、此れ即母の赤子の口に乳を入れんとはげむ
じひぶん　こ　慈悲なり此れ又時の当らざるにあらず已に仏記の五五百歳に当れり、天台・伝教の御時は時いまだ来らざりしかども
いちぶん　き　一分の機ある故に少分流布せり、何に況や今は已に時いたりめ設とひ機なくして水火をなすともいかでか弘通せざらむ、
ただふぎよう　ただふぎよう　だいにん　大難には値うとも流布せん事疑なかるべきに眞言・禅・念仏等の譏奏に依り
むち　こく　留難をなす此を対治すべき氏神八幡大菩薩・彼等の大科を治せざるゆへに日蓮の氏神を諫曉するは道理
そむ　にくり　だちようじや　に背くべしや、尼俱律陀長者が樹神をいさむるに異ならず、蘇悉地經に云く「本尊を治罰する事鬼魅を治するが如し」
等云、文の心は經文のごとく所願を成ぜんがために数年が間法を修行するに成就せざれば本尊
を　或はし　或は打ちなんどせよとかれて候、相応和尚の不動明王をしりけるは此の經文を見たりけるか、此は
他事にはにるべからず日本国の一切善人は或は戒を持ち或は布施を行じ或は父母等の孝養のために寺塔を建立し
或は成仏得道の爲に妻子をやしなすべき財を止めて諸僧に供養をなし候に、諸僧謗法の者たるゆへに謀反の者を知ずして
やどしたるがごとく不孝の者に契をなせるがごとく今生には災難を招き後生も惡道に墮ち
候べきを扶けんとする身なり而るを日本国の守護の善神等・彼等にくみして正法の敵となるゆへに此をせむるは經文のこ
とし道理に任せたり、我が弟子等が愚案にをもわく我が師は法華經を弘通し給うとてひろまらざる上・大難の来れるは
眞言は國をほろぼす念仏は無間地獄・禅は天魔の所爲・律僧は國賊との給うゆへなり、例せば道理有る
問注に惡口のまじわれるがごとしと云云、日蓮我が弟子に反詰して云く汝若し爾らば我が問を答えよ一切の眞言師・
一切の念仏者・一切の禅宗等に向て南無妙法蓮華經と唱え給えと勸進せば彼等の云く我が弘法大師は法華經と釈迦仏
とを戲論無明の辺域・力者はき物とり不及ばずとがかせ給いて候、物の用にあわぬ法華經を誦誦せ

んよりも其の口に我が小呪を一反も見つべし一切の在家の者の云く善導和尚は法華經をば千中無一法然上人は捨閉
闍拋道綽禪師は未有一人得者と定めさせ給へり汝がすすむる南無妙法蓮華經は我が念仏の障りなり我等設い惡をつく
るともよも唱えじ一切の禪宗の云く我が宗は教外別伝と申して一切經の外に伝たる最上の法門なり一切經は指のこと
し禪は月のごとし天台等の愚人は指をまほつて月を亡いたり法華經は指なり禪は月なり月を見
て後は指は何のせんか有るべきなどと申す、かくのごとく申さん時はいかにとしてか南無妙法蓮華經の良藥をば彼れ等が
口には入るべき仏は且らく阿含經を説き給いて後彼の行者を法華經へ入れんと・たばかり給いしに一切の聲聞等只
阿含經に著して法華經へ入らざりしをばいかやうにかたばからせ給いし、此をば仏説いて云く
「設ひ五逆罪は造るとも五逆の者をば供養すとも罪は仏の種とはなるとも彼れ等が善根は仏種とならじ」とこそ説かせ給
しか、小乗・大乘はかわれども同じく仏説なり大が小を破して小を大となすと大を破して法華經に入ると大小は異なれ
ども法華經へ入れんと思ふ志は一つなり、されば無量義經に大を破して云く未顯眞実と法華經に云く「此の事は爲て
不可なり」等云云、仏、自ら云く「我世に出て華嚴般若等を説きて法華經をとかずして入涅槃せば愛子に財ををしみ
病者に良藥をあたずして死にたるがごとし仏、自ら地獄に墮つべし」と云云、
ふか不可と申すは地獄の名なり況や法華經の後爾前の經に著して法華經へうつらざる者は大王に民の従がはざるがごとし親
に子の見ざるがごとし、設い法華經を破せざれども爾前の經經をほむるは法華經をそしるに当たれり妙樂云く「若し昔
を称歎せば豈に今を毀るに非ずや」文、又云く「発心せんと欲すと雖も偏円を簡ばず誓の境を解らざれば未來法を聞く
とも何ぞ能く謗を免れん」と等云云、眞言の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覺・智証等は
た設といふ法華經を大日經に相對して勝劣を論ぜずして大日經を弘通すとも滅後に生まれたる三藏・人師なれば謗法はよも
免れ候はじ、何に況や善無畏等の三藏は法華經は略説・大日經は広説と同じて而かも法華經の行者を

大日経えすかし入れ、弘法等の三大師は法華經の名をかきあげて戲論などかかれて候大科を明らめずして此の四百余年一切衆生を皆謗法の者となせり、例せば大莊嚴仏の末の四比丘が六百万億那由他の人を皆無間地獄に墮せると、師子音王仏の末の勝意比丘が無量無辺の持戒の比丘比丘尼うばそくうばいを皆阿鼻大城に導きしと、今の三大師の教化に隨いて日本国四十九億九万四千八百二十八人、或は云く日本紀に行基の人数に云く男女四十五億八万九千六百五十九人云云の一切衆生又四十九億等の人人四百余年に死して無間地獄に墮ちぬれば其の後他方世界よりは生れて又死して無間地獄に墮ちぬ、かくのごとく墮つる者は大地微塵よりも多し此れ皆三大師の科ぞかし、此れを日蓮此に大に見ながらいつわりをろかにして申さずば俱に墮地獄の者となつて一分の科なき身が十方の大阿鼻獄を経めぐるべしかでが身命をすてよばわらざるべき涅槃經に云く「一切衆生異の苦を受くるは悉く是如来一人の苦なり」等云云、日蓮云く一切衆生の同一苦は悉く是日蓮一人の苦と申すべし。

平城天皇の御字に八幡の御託宣に云く「我は是れ日本の鎮守八幡大菩薩なり百王を守護せん誓願あり」等云云、今云く人王八十一・二代隱岐の法皇・三四五の諸王已に破られ畢んぬ残の二十余代今捨て畢んぬ、已に此の願破るるがごとし、日蓮料簡して云く百王を守護せんといふは正直の王百人を守護せんと誓ひ給つ、八幡の御誓願に云く「正直の人の頂を以て栖と爲し、諂曲の人の心を以て亭す」等云云、夫れ月は清水に影をやとす濁水にすむ事なし、王と申すは不妄語の人、右大將家権の大夫殿は不妄語の人正直の頂八幡大菩薩の栖む百皇の内なり、正直に二あり一には世間の正直王と申すは天心地の三を串くを王と名づく、天・地・地の三は横なりたつてんは縦なり、王と申すは黄帝・中央の名なり、天主・人の主・地の主を王と申す、隱岐の法皇は名は国王・身は妄語のなり横人なり、権の大夫殿は名は臣下・身は大王・不妄語の人・八幡大菩薩の願ひ給う頂きなり、二には出世の正直と申すは爾前・七宗等の經論釈は妄語・法華經・天台宗は正直の經釈なり、本地は不妄語の經の釈迦仏・

迹には不妄語の八幡大菩薩なり、八葉は八幡・中台は教主釈尊なり、四月八日・寅の日に生まれ八十年を経て二月十五日申の日に隠れさせ給う、豈に教主の日本国に生まれ給うに有らずや、大隅の正八幡宮の石の文に云く「昔し靈鷲山に在つて妙法華經を説き今正宮の中に在て大菩薩と示現す」等云云、法華經に云く「今此三界」等云云、又「常に靈鷲山に在り」等云云、遠くは三千大千世界の一切衆生は釈迦如来の子なり、近くは日本国・四十九億九万四千八百二十八人は八幡大菩薩の子なり、今日本国の一切衆生は八幡をたのみ奉るやうにもてなし釈迦仏をすて奉るは影をつやまつて体をあなづり子に向いて親をのるがごとし、本地は釈迦如来にして月氏国に出でて正直捨方便の法華經を説き給ひ、垂迹は日本国に生れては正直の頂きにすみ給う、諸の権化の人人の本地は法華經の一実相なれども垂迹の門は無量なり、所謂跋俱羅尊者は三世に不殺生戒を示し鸞崛摩羅は生生に殺生を示す、舍利弗は外道となり是くの如く門門不同なる事は本凡夫にて有りし時の初發得道の始を成仏の後化他門に出で給う時我が得道の門を示すなり、妙樂大師云く「若し本に従て説かば亦是れ昔殺等の惡の中に於て能く出離するが故なり是の故に迹中に亦殺を以て利他の法門と為す」等云云、今八幡大菩薩は本地は月支の妄語の法華經を迹に日本国にして正直の二字となして賢人の頂きにやどらんと云云、若し爾らば此の大菩薩は宝殿をやきて天にのぼり給うとも法華經の行者日本国に有るならば其の所に栖み給うべし。

法華經の第五に云く諸天昼夜に常に法の為の故に而も之を衛護す、經文の如くんば南無妙法蓮華經と申す人をば大梵天・帝釈・日月・四天等昼夜に守護すべしと見えたり、又第六の卷に云く「或は己身を説き或は他身を説き或は己身を示し或は他身を示し或は己事を示し或は他事を示す」文觀音尚三十三身を現じ妙音又三十四身を現じ給ふ教主釈尊何ぞ八幡大菩薩と現じ給はざらんや天台云く「即是れ形を十界に垂れて種種の像を作す」等云云。天竺国をば月氏国と申すは仏の出現し給うべき名なり、扶桑国をば日本国と申すに聖人出で給わざらむ、月

は西より東に向へり月氏の仏法の東流るべき相なり、日は東より出づ日本の仏法の月氏へかへるべき瑞相なり、月は光あきらかならず在世は但八年なり、日は光明月に勝れり五五百歳の長き闇を照すべき瑞相なり、仏は法華經謗法の者を治し給はず在世には無きゆへに、末法には一乗の強敵充滿すべし不輕菩薩の利益此れなり、
各各 我が弟子等へばませ給へばませ給へ

弘安三年太歳庚辰十二月日

日蓮 花押

七九 二乗作仏事 589P

爾前得道の旨たる文、經に云く見諸菩薩等云云、又云く始見我身等、此等の文の如きは菩薩初地・初住に叶う事有ると見えたるなり、故に見諸菩薩の文の下には而我等不預斯事と、又始見の文の下には除先修習等云云、此れは爾前に二乗作仏無しと見たる文なり。

問う 顕露定教には二乗作仏を許すや 顕露不定教には之を許すか 秘密には之を許すか 爾前の円には二乗作仏を許すや 別教には之を許すか、答う 所詮は重重の問答有りと雖も皆之を許さざるなり、所詮は二乗界の作仏を許さずんば菩薩界の作仏も許さざるか 衆生無辺誓願度の願の闕くるが故なり、釈は菩薩の得道と見たる經文を消する許りなり、所詮華・方・般若の円の菩薩も初住に登らず又凡夫二乗は勿論なり化一切衆生・皆令入仏道の文の下にて此の事は意得可きなり。

問う 円の菩薩に向つては二乗作仏を説くか、答う 説かざるなり 未會向人説如此事の釈に明かなり。

問う 華嚴經の三無差別の文は十界互具の正証なりや、答う 次下の經に云く如來智慧の大藥王樹は唯二所を除きて生長

することを得ず所謂声聞と縁覺となり等云云二乗作仏を許さずと云う事分明なり、若し爾らば本文は十界互具と見え
たれども実には二乗作仏無ければ十界互具を許さざるか、其の上爾前の経は法華経を以て定む可し既に除先修習等云
云と云う華嚴は二乗作仏無しと云う事分明なり方等般若も又以て此くの如し。

惣じて爾前の円に意得可き様二有り、一には阿難結集の已前に仏は一音に必ず別円二教の義を含ませ一一の音に必
ず四教三教を含ませ給えるなり、故に純円の円は爾前経には無きなり故に円と云えども今の法華に対すれば別に撰すと
云うなり、籤の十に又一一の位に皆普賢行布の二門有り故に知んぬ兼ねて円門を用いて別に撰すと

釈するなり此の意にて爾前に得道無しと云うなり、一には阿難結集の時多羅葉に注す一段は純別一段は純円に書け
るなり方等般若も此くの如し、此の時は爾前の純円に書ける処は粗法華に似たり、住中多明円融之相等と釈するは此
の意なり。

天台智者大師は此の道理を得給いし故に他師の華嚴など惣じて爾前の経を心得しにはたがい給えるなり、此の二の
法門をば如何として天台大師は心得給いしとさぐれば法華経の信解品等を以て一一の文字別円の菩薩及び四教三教
なりけりとは心得給いしなり、又此の智慧を得るの後にて彼等の経に向つて見る時は一向に別一向

に円等と見えたる処あり、阿難結集の後のしはさなりけりと見給えるなり、天台一宗の学者の中に此の道理を得ざるは
爾前の円と法華の円と始終同の義を思ふ故に一処のみの円教の経を見て一卷二卷等に純円の義を存ずる故に彼の経等
に於て往生成仏の義理を許す人人是れ多きなり、華嚴方等般若觀經等の本文に於て阿難・円教の

巻を書くの日に即身成仏云云即得往生等とあるを見て一生乃至順次生に往生成仏を遂げんと思いたり、阿難結集
已前の仏口より出す所の説教にて意を案ずれば即身成仏即得往生の裏に歷劫修行・永不往生の心含めり、句の二に
云く撰論を引いて云く了義経 依文判義等と云う意なり、爾前の経を文の如く判ぜば仏意に乖く可しと云う

事は是なり、記の三に云く法華已前は不了義なる故と云えり此の心を釈せるなり、籤の十に云く「唯此の法華のみ前教の意を説き今經の意を顯す」と釈の意は是なり。

抑他師と天台との意の殊なる様は如何と云うに他師は一の經經に向つて彼の經經の意を得たりと謂へ、天台大師は法華經に仏四十年の經經を説き給へる意をもつて諸經を釈する故に阿難尊者の書きし所の諸經の本文にたがひたる様なれども仏意に相叶いたるなり、且らく觀經の疏の如き經説には見えざれども一字に於て四教

を釈す、本文は一處は別教・一處は円教・一處は通教に似たり、釈の四教に亘るは法華の意を以て仏意を知りたもう故なり、阿難尊者の結集する經にては一處は純別・一處は純円に書き別円を一字に含する義をば法華にて書きけり、法華にして爾前の經の意を知らしむるなり、若し爾らば一代聖教は反覆すと雖も法華經無くんば一字も諸

經の意を知るべからざるなり、又法華經を讀誦する行者も此の意を知らずんば法華經を讀むにては有る可からず、爾前の經は深經なればと云つて淺經の意をば顯さず淺經なればと云つて又深義を含まざるにも非ず、法華經の意は一の文字は皆爾前の意を顯し法華經の意をも顯す故に一字を讀めば一切經を讀むなり一字を讀まざるは

一切經を讀まざるなり、若し爾らば法華經無き国には諸經有りと雖も得道は難かる可し、滅後に一切經を讀む可き様は華嚴經にも必ず法華經を列ねて彼の經の意を顯し觀經にも必ず法華經を列ねて其の意を顯すべし諸經も又以て此の如し、而るに月支の末の論師及び震旦の大師此の意を弁えず一經を講して各我得たりと謂い又超過諸經の謂いを成せるは會て一經の意を得ざるのみに非ず謗法の罪に墮するが。

問う天台の論師震旦の大師の中に天台の如く阿難結集已前の仏口の諸經を此くの如く意得たる論師・大師之有るか、答う無著菩薩の撰論には四意趣を以て諸經を釈し、竜樹菩薩の大論には四悉檀を以て一代を得たり、此れ等は粗此の意を釈すとは見えたれども天台の如く分明には見えす、天親菩薩の法華論も又以て此くの如し、震旦国に於ては天台以前

の五百年の間には一向に此の義無し、玄の三に云く「天竺の大論尚其の類に非ず」云云、籤の三に云く「一家の章疏は理に
附し教に憑り凡そ立つる所の義他人の其所弘に随い偏に己が典を讃するに同じからず、若し法華を弘むるに偏に讃せば
尚失なり況や復余をや」文、何となれば既に開權顯実と云う何ぞ一向

に權を毀る可きや、華嚴經の心仏及衆生是三無差別の文は華嚴の大師此の文に於て一心覺不覺の三義を立つるは、
源と起信論の名目を借りて此の文を釈するなり、南岳大師は妙法の二字を釈するに此の文を借りて三法妙の義を存せ
り、天台智者大師は之を依用す此に於て天台宗の人は華嚴法華同等の義を存するか、又澄觀心仏及
衆生の文に於て一心覺不覺の義を存するのみに非ず性惡の義を存して云く、澄觀の釈に「彼の宗には此れを謂つて実と
為す此の宗の立義理通ぜざる無し」等云云、此等の法門許す可きや否や、答えて云く弘の一に云く「若し今家の諸の円文
の意無くんば彼の經の偈の旨理実に消し難し」同じく五に云く「今文を解せずんば如何ぞ心造

一切三無差別を消解せん」文、記の七に云く忽ち都て未だ性惡の名を聞かずと云えり、此等の文の如くんば天台の意を得
ずんば彼の經の偈の意知り難きか、又震旦の大師の中には天台の外には性惡の名目あらざりけるか、
又法華經に非ずんば一念三千の法門談ずべからざるか、天台已後の華嚴の末師並びに真言宗の人・性惡を以て自宗の
依經の詮と為すは天竺より伝わりたりけるか祖師より伝わるか、又天台の名目を偷んで自宗の内証と為すと云ふか、
能く能く之を驗す可し。

問う性惡の名目は天台一家に限る可し諸宗には之無し、若し性惡を立てずんば九界の因果を如何が仏界の上に現ぜ
ん、答う義例に云く性惡若断等云云、問う円頓止觀の証拠と一念三千の証拠に華嚴經の心仏及衆生是三無差別の文を
引くは彼の經に円頓止觀及び一念三千を説くといつか、答えて云く天台宗の人の中には爾前の円と法華の円と同一の義を
存す、問う六十巻の中に前三教の文を引いて円の義を釈せるは文を借ると心得、爾前の円の

文を引いて法華の円の義を釈するをば借らずと存ぜんや、若し爾らば三種の止觀の証文に爾前の諸經を引く中に円頓止觀の証拠に華嚴の菩薩於生死等の文を引けるをば、妙樂釈して云く「還つて教味を借て以て妙円を顯す」とは此の文は諸經の円の文を借ると釈するに非ずや、若し爾らば心仏及衆生の文を「一念三千の証拠に引く事は之を借れるにて有るべし、答う」当世の天台宗は華嚴宗の見を出でざる事を云うか、華嚴宗の意は法華と華嚴とに於て

同勝の二義を存ず、同は法華・華嚴の所詮の法門之同じとす、勝には二義あり、古の華嚴宗は教主と對菩薩衆等の勝の義を談ず、近代の華嚴宗は華嚴と法華とに於て同勝の二義有りと云云、其の勝に於て又二義あり、迹門は華嚴と同勝の二義あり華嚴の円と法華迹門の相待妙の円とは同なり彼の円も判、此の円も判、の故なり、籤の二に云く「故に須らく

二妙を以て三法を妙ならしむべし故に諸味の中に円融有りと雖も全く二妙無し」私志記に

云く「昔の八の中の円は今の相待の円と同じと云へるは同なり記の四に云く「法界を以て之を論ずれば華嚴に非ざる無し」仏慧を以て之を論ずれば法華に非ざる無し云云、又云く「心に知るべし華嚴の尽未來際在即ち此

の經の常在靈山なり」云云、此等の釈は爾前の円と法華の相待妙とを同ずる釈なり、迹門の絶待開會は永く爾前の円と異なり、籤の十に云く「此の法華經は開權顯實、開迹顯本の此の両意は永く余經に異なり」と云えり、記の四に云く「若し仏慧を以て法華と為さば即ち等と云云、此の釈は仏慧を明すは爾前・法華に亘り開會は唯法華に限る

と見えたり是は勝なり、爾前の無得道なる事は分明なり其の故は二妙を以て一法に妙ならしむるなり、既に爾前の円には絶待の一妙を闕く衆生も妙の仏と成る可からざる故に籤の三に云く妙變為、の釈是なり、華嚴の円變じて別と成ると云う意なり。

本門は相待・絶待の一妙俱に爾前に分無し又迹門にも之無し、爾前・迹門は異なれども二乘は見思を断じ菩薩は無明を断ずと申すことは一往之を許して再往は之を許さず、本門・寿量品の意は爾前・迹門に於て一向に三乘俱に三惑を

断ぜずと意得可きなり、此の道理を弁えざるの間、天台の学者は爾前法華の一往同の釈を見て永異の釈を忘れ結句名は
天台宗にて其の義分は華嚴宗に墮ちたり、華嚴宗に墮ちるが故に方等般若の円に墮ちぬ、結句は善導等の釈のを見を出で
ず、結句後には謗法の法然に同じて師子身中の虫の自ら師子を食うが如し文、仁王經「大王我が
滅度の後、未來世の中に四部の弟子諸の小国の王太子王子乃ち是れ三宝を住持し護れる者、転た更に三宝を滅破する
こと師子身中の虫の自ら師子を食うが如し、外道には非ず多く我が仏法を壊りて大罪過を得ん」云云、籤の十に云く「始
め住前より登住に至るこのかた全く是れ円の義第二住より次の第七住に至る文相次第して又別の義に似たり、七住の中
に於て又一多相即自在を弁ず、次の行向地又是れ次第差別の義なり、又一一の位に皆普賢行布の二門有り故に知んぬ
兼て円門を用いて別に撰すること」を

華嚴

阿含

大日經

真言宗

觀經等

淨土宗

方等

深密經等

法相宗

般若

楞伽經

禪宗

三論宗

無量義經

法華經迹門十四品

本門藥王品已下の六品並びに普賢涅槃經等

応身

劣応身

勝応身

報身

華嚴經るさな仏

大日經等びるさな仏

並びに迹門涅槃經等の仏

阿逸・汝当に知るべし是の諸の大菩薩

小仏

小乗

序出二三云。

無數劫より、このかた仏の智慧を修習す、悉く是れ我が所化なり大道心を發さしむ此等は是れ我が子なり是の世界に依止せり、玄の七に云く「六に本説法妙とは經に言く此等我所化、令發大道心、今皆住不退と我所化とは止く是れ説法して大道心を發さしむるは小説に簡非するなり、此れ本時の説を指して迹説を簡非するなり迹説、多種なれども若し涅槃に依れば」等云云、華嚴經の寂滅是なり始成正覺。

迹仏。増一阿含經の十に云く「仏摩竭國に在し道樹の下にして爾時に世尊得道未だ久からず」淨名經に云く「始め仏樹に坐して力て魔を降す」大集經に云く「如來成道始めて十六年なり」大日經に云く「我昔道場に坐し四魔を降伏す」仁王般若經に云く「大覺世尊先ず我が爲に二十九年、無量義經に云く「我先に道場菩提樹下に端坐する事六年乃至四十余年、法華經の方便品に云く「我始め道場に坐し樹を觀じ亦經行し三七日

の中に於て是くの如き事を思惟す」籤の七に云く「大乘の融通過ぎたること無し」華嚴經の初に云く「菩提道場にして始めて正覺を成ず、故に知んぬ大小識成皆近なり」壽量品に云く「爾時に世尊、諸の菩薩の三たび請じて止まざるを知ろしめして之に告げて言たまわく汝等諦かに聴け如來の秘密神通の力を一切世間の天人

及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂えり、然るに善男子、我實に成仏してより已來無量無辺百千萬億那由他劫なり」等云云、文句の九に云く

「仏三世に於いて等く三身有り諸教の中に於いて之を秘して伝えず、故に一切世間の天人、修羅は今の仏は是に始まると謂えるなり、此の三身を得る故に近に執して遠を疑う」壽量品に云く「諸の善男子、如來

は諸の衆生の小法を樂える徳薄垢重の者を見ては是の人の爲に我少くして出家し阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く、然るに我實に成仏してより已來久遠なること斯くの若し」文句の九に云く「一日。○二現在。○三約修行。○四果門に約

せば近成（いんじやう）の小を聞かんと樂（ねが）う者は釈氏（しやくし）の宮を出で始めて菩提（ぼだい）を得たりとし長大久遠（くおん）の道を聞かん事を樂欲（ゆえ）せず故に樂小と云う此等（これら）の小心（きやうしん）は今日（きやうじつ）に始まるに非ず若し先に大を樂（ねが）わば仏即ち始成（しじやう）を説かず始成（しじやう）を説くことは皆小法（みな）を樂（ねが）う者の為のみ、又云く諸の衆生（しよもんじやうじやう）小法（せうぽう）を樂（ねが）う者とは所見（しよけん）の機（き）なり「華嚴（けこん）に云く

大衆清淨（たいしやうじやうじやう）なりと雖も其の余の樂（きやうじやう）小法の者は或は疑悔（ぎけ）を生じ長夜（じやうや）に衰惱（すいのう）せん此（こ）れを慙（あわれ）むが故に黙（もく）す「偈（げ）に云く其の余の久く行ぜざるは智慧（ちえ）未だ明了（みやうりやう）ならず識に依つて智に依らず聞き已つて憂悔（うげ）を生じ彼將に惡道（まゐ）に墮（お）ちんとす此（こ）れを念（おも）うが故に説かず」と、彼の經を案ずるに声聞（しやうもん）二乘（じふじやう）無し但不久行の者を指して樂（きやうじやう）小法の

人と為すのみ、師の云く「樂小は小乗（じやうじやう）の人に非ざるなり乃ち是れ近説（きんせつ）を樂（ねが）う者を小と為すのみ「文句の九に云く「徳薄（とくはく）とは縁了（えんりやう）の二善功用（ぜんくう）微劣（みりやく）なれば下の文に諸子幼稚（しよじ）と云うなり垢重（くじやう）とは見思（けんじ）未だ除かざるなり「記の九に云く「徳薄垢重（とくはくこうじやう）とは其の人未だ実教（じつきやう）の二因有らざる故なり下の文に諸子幼稚（しよじ）と云うは下の医子の譬（たとへ）の文

を指す尚未（なほ）だ円（えん）を聞くに堪（た）えず況んや遠を聞かんをや、見思（けんじ）未除（みじゆ）とは且（しかば）く譬（たとへ）の中の幼稚（やうじ）の言を消す定めて未だ遠を知らず「玄の二に云く「厚（こう）善根（ぜんこん）を殖（しょく）えて此の頓説（とんせつ）を感じず「文、籤（せん）の二に云く「一往は総じて別円（べつえん）を以て厚と為す「五百問論（いふもんろん）に云く「一經（いつきやう）の中に本門（ほんもん）を以て主と為す「云云、又云く「代教（いちだい）の中に未だ曾て遠（えん）を顯（あらわ）さず父母（ふぼ）の寿は知らずんばあるべからず始めて此の中に於いて方に遠本（えんぽん）を顯（あらわ）す、乃至但恐る才（さい）一國に當るも父母

の年を知らざれば失（うしな）う所小と謂（おも）うも辱むる所至（いた）つて大なり、若し父の寿の遠きを知らざれば復父統（またふとう）の邦（くに）に迷（まよ）う徒（いた）に才能（さいのう）と謂（おも）うも全く人の子に非ず「文句の九に云く「菩薩（ぼさつ）に三種有り下方（たはう）と他方（たはう）と旧住（きうじゆ）となり「玄義（げんぎ）の七に云く「若し迹因（しやくいん）を執（しゆ）して本因（ほんいん）と為（な）さば斯（こ）れ迹（しやく）を知らず亦本（また）を識（し）らざるなり天月（てんげつ）を識（し）らずして但池月（ちげつ）を觀（み）る

が如し。、弘迹（こうしやく）顯本（けんぽん）せば即ち本地（ほんち）の因妙（いんめう）を知る影（えい）を撥（はら）つて天を指すが如し云何（いかな）ぞ益（えき）に臨（りん）んで漢（かん）を仰（あお）がざる嗚呼（あうふ）聾駭（そうがい）なんすれぞ道を論（ろん）ぜんや「又云く「若し迹果（しやくくわ）を執（しゆ）して本果（ほんくわ）と為（な）す者は斯（こ）れ迹（しやく）を知らず亦本（また）を識（し）らざるな

り、本より迹を垂るるは月の水に現ずるが如く迹を払うて本を顕すは影を撥うて天を指すが如し、当に始成の果を撥けば皆是れ迹果なるべく久成の果を指すは是れ本果なりと云く「諸土は悉く迹土なり」には今 仏の所栖の故に二には前後修立の故に三には中間所払の故に若し是れ本土は今 仏の所栖に非ず、今 仏の所栖は即ち迹土なり、若し是れ本土は一土一切土にして前後修立なるべからず浅深不同なり。迹を執して本と為す者は此れ迹を知らず亦本を識らざるなり、今迹を払うて本を指すときは本時所栖の四土は是れ本国土妙なり」

迹仏しやくぶつ

別因

無量劫菩薩

十一品断無明

円因

四十一品断無明

劣因

蔵「草座」三十四心断結成道

勝心

通「天衣」三十四心見思塵沙断の仏

迹仏果ぶつが

果

報身ほうしん

別「蓮華座」十一品断無明の仏

法身ほふしん

円「虚空座」四十二品断無明の仏

八一 日月の事

599P

誓耶后

麻利支天女

大日天

乗輅車

九曜

毘誓耶后

七曜

二十八宿

大月天

乗鷲

十二宮

金光明經に云く「日の天子乃以び月天是の經典を聞き精氣充実す」最勝王經に云く「日出でて光を放ち無垢炎
清淨なり此の經王の力に由て流暉四天を遶る」仁王經に云く「日月度を失い等、大集經に云く「日月明を現ぜず四方皆
亢旱す是の如き不善業惡王、惡比丘我が正法を毀壞す」仁王經に云く「非法非律にして比丘を繫縛すること獄囚の法の
如くす」法華經に云く「色力乃び智惠此等皆減少す」華嚴經に云く大集經に云く。

段食・法食・喜食・禪悦食。

三力、一切衆生力・法力・自身功德力。

戒光 清淨也

日光 定光 定也

惠光 也

人天 にんてん 三学

小乘 しょうじょう 三学

大乘 だいじょう 三学

権大乘 こんだいじょう 三学

実大乘 じつだいじょう 三学

純円 じゆんえん 三学

法身光 ほつしん 般若光

解脱光 げだつ

此天は初地 しよじ 或は十廻向なり ある えこう

十信 じゆじん 十住 じゆじゆう 十行 じゆぎやう 十廻向 えこう 十地 じゆち 等妙

初地三惑断 しよじさんなぐ

初住三惑断 しよじゆつさんなぐ

北辰

梵帝釈 たいしゃく 日月四天等 にちがつ してん

衆星 しゆせい

衣食 いしよく

寿命 じゆみやう

肉眼 にくげん

天眼 てんげん

一切の四天下の衆生の眼目 いっさい してんげ しゆじやう がんもく

恵眼

法眼 ほうげん
仏眼 ぶつげん

有に非ず地を離るが故に、空に非ず有を照すが故に有、辺に非ずして中に処するが故に、而も空空に処するが故に、
而も有有を養うが故に、来らずして北に至るが故に、而も来りて南に来るが故に、一ならず四州を照すが故に、異なら
ず一日なるが故に、断ならず常なるが故に、常ならず一処に住せざるが故に。

記の三に云く部方等と雖も義は円極なる故に故に今之を引く、

伏羲

小昊

三皇

神農

三墳・五典

黃帝

五帝

帝

堯王

男九人女一人

舜王

殷 夏

第一文王

第二武王

周公旦

第三成王

第四昭王の御宇二十四年甲寅に當る

五色の光氣南北に亘る大史 蘇由之を占う四月八日は仏の御誕生なり

中間七十九年なり

第五穆王の五十二年壬申に當る二月十五日御入滅

十二の虹南北に亘る大史 扈多之を占う

三十七有り或は八

一儒教 五常

文武等なり

三教

二道教 仙教「孔丘」「顔回」

三釈教 一代五十余年「老子」

周

始皇

儒教 じゆきやう

次生皇

三教

道教

釈教 しゃくきやう

前漢 十四代

又周の第四の昭王二十四年より後漢の第二光武に至る一千一十五年に当るなり

後漢光武皇帝永平十年丁卯

一千一十五年に当て摩騰迦竺法蘭の一人の聖人四十二生経 十住断結経 大乘経を

以て白馬に負せて漢土に渡す

魏 雙觀経渡る

西晋 正法華経十卷渡る 法護三蔵巨す

妙法華経渡る 七卷 或は八卷 羅什三蔵巨す

三論宗渡る

阿弥陀経巨る

華嚴経巨る

観経巨る

大涅槃経巨る

三時 四時 五時 五時 一音 半満 三教 四宗 五宗 六宗

末

始

南三なんさん北七ほくしち「江南なり」の十師「江北なり」

曇鸞法師淨土宗を立つ

禪宗ぜんしゅう渡るわた達摩大師なり

撰論せんろん亘るわた南北

地論ちろん亘るわた南北

別時意趣べつじいしゆの法門出来す

南岳大師亦惠思なんがくだいしまた禪師ぜんしと云う「觀音かんのんの化身けしんなり道宣だうせんの感通伝に出ず」

六根淨ろくこんの人日本にほんの淨宮太子たいし是なり

天台大師てんだいだいしの御師おんしなり

日本にほんに伝教でんきやう大師だいしと生る

亦智者またちしやと云い

亦智またと云い

天台大師てんだいだいし

亦德安またと云い

此おんときの御時おんとき南三なんさん北七ほくしち並びに前まへ五百余年ごひやくねんの人師にんし三藏さんぞう・所立しりゅうの十師じしの義ぎを破はし始めて五時ごとき・八教はつきやう三觀さんかん・六即りくそく・

十境じゅうけい・十乘じしゆを立て小釈迦しやかと号す、進すすでは天竺てんじくの論師ろんしにも超こえ退たいては震旦しんたんの人師にんしに勝まさるなり、玄義げんぎの三さんに云く

故ゆえに章安大師しやうあんだいしの云く「天竺てんじくの大論だいろん尚なほ其そのの類るいに非あらず震旦しんたんの人師にんし何なんぞ劣わすしく語かたるに及およばん

此れ誇耀に非ず法相の然るのみ又智証大師 授決集 也云く「天台世に出で仏意快く暢ぶ豈万教再び世間に演るに非ずや」

笈多と崛多の両三藏添品法華經を渡す

道綽善導此の世に在り

華嚴宗

後漢の世自り唐の神武皇帝の開元十八年庚申に至る六百六十四載に渡す所の經律論五千四十八卷

訳者百七十六人なり妙樂は是の世の人なり

法相宗は玄奘三藏西天自り之を渡す

真言宗は善無畏三藏金剛智三藏之を渡す

法相宗 真言宗の二宗は天台之を見ず妙樂大師之を見て天台宗に対当して勝劣を論ず又日本国の佛教

慈覚 智証之を諍つ

宋

唐

天台の玄義の十に南北の十師を破して云く「但聖意幽隱にして教法弥難し、前代の諸師、或は粗名匠に承け、或は思い袖衿より出ず阡陌縦横なりと雖も孰か是なるを知ることを莫し、然るに義雙立せず理兩存すること無し若し深く所以有り復修多羅と合する者は録して而て之を用ゆ文無く義無きは信受すべからず」籤の十に云く「一として全く是なること無きを以ての故に一一に難破す」玄の三に云く「輕慢止まざれば舌口中に爛る」と又云く「法華は衆經を總括す」籤の三に云く「已法華已前華阿方般等の一切經今無量義經なり当涅槃經等の法華已後の一切經なりの妙茲に於て固く迷えば舌爛れて止まざるも猶華報と為す謗法の罪苦長劫に流る」南三北七並び

けごんしゅう けごんしゅう けごんしゅう けごんしゅう けごんしゅう
に華嚴宗の法蔵・澄観・真言宗の弘法等は法華經よりも華嚴經を勝るとするなり、又三論の嘉祥は法華經よりも
般若經を勝るとす、又法相の慈恩等は法華經よりも深密經を勝るとす、又真言宗の善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空
三蔵等は法華經よりも大日經を勝るとするなり、此等の宗宗の相違如何相違如何。

授決集に云く 円 珍智 証大師

文は大經に出でたり人の之を会する無し、光・盲の前に在れども他に於ては無用なり、仏分明に五味の喩を説き五時
の教に喩えたもう云云、訳ありてより來講者 路に溢るれども未だ會て五味を談ずるの義を解せず己が胸臆に任せて
趣爾嚙語す何ぞ象に触る衆盲の者に異らんや、天台世に出で仏意快く暢ぶ豈に万教再び世間に演るに非ず
や、南北の講匠經論を釈する者 各教時を立つれども百にして一も是なること無し只教部の前後頓漸權実大小の妙寬
狭進否に迷うに縁りてなり 大教の網を張りて法界の海を亘し人天の魚を済て涅槃の岸に置く斯くの如く
するすら其の遺漏を恐る況や諸師の輩羅の一目なり何れの時か其の鳥を得ん 若し万蔵を暗ずと雖も此の理趣を会せざ
れば年を終るまで他の宝を計りて自ら半錢の分無く虚しく諍論を益し長水に水を添うのみ。

授決集に法相宗の慈恩大師を破して云く、五性宗に云く未熟法華論の前にと云うは、応に不熟と云うべし。○今謂く汎く
法華を講ずるには須く此の義を以て正と為すべし若し爾らずんば經を破し論を破し罪五逆に過ぎたり基公を除きて外は
人の彼の不熟の義を伝つる無し。○若し強て之を執せば公私十方の信施消し難し消し難し若し

消せずんば何ぞ三途を免れん爾を供養せん者は三惡道に墮せん謗法の罪報は法華般若の諸大乘經に一切明かに説けり
智者披く可し。○爾これを信受す可し無間を招く莫れ。

授決集 円 珍真 言の諸宗を徴して云う

真言 禅門 華嚴・三論 唯識 律業 成俱の二論等、○若し法華・涅槃等の經に望むれば是れ摂引門なり文、又云く大底

他は多く三教在り円むねいたつの旨うづ至いたて少さきのみ弘法大師こうぼうだいしの二教論にきょうろんに喩いわして日こく今斯きんしの經文きやうもんに依よるに仏五味を以て五蔵に配当す、
總持だいいを醍醐しやうと稱たし四味しんたんを四蔵にんしに譬あらそう震旦だいいの人師等じんし爭なすつて醍醐だいいを盗ぬすみ各自宗じきしゆに名なく。

一 姐多覽「乳」 「アナン」 經

二 毘那耶「酪」 「ウハ」 律 小乘じやうじやう

六波羅經五蔵ろくはら 三阿毘達磨「生」 「カセンナ」 論

四 般若「熟」 はら蜜蔵 「文珠」 大乘だいじやう

五 惣持「醍醐」 だらに蔵 「金剛蔵」

一 姐多覽「乳」

二 毘那耶「酪」

三 阿毘達磨「生」

弘法大師 此の經に

依よつて五蔵ごそうを立つ

華

方

四 般若はんにはぎはら蜜「熟」

般

法華ほつけ

涅槃ねはん

五 だら尼蔵「醍醐」 大日だいにちの三部經さんぶきやう

二 教論きやうろんに云いく加しか以のみず 釈教しやくきやう東夏とうかに漸ぜんし微よ自より著しやくに至いたり漢明かんめいを始はめと為なし周文しうもんを後なと為なす、其その中ちゆう間げん翻傳ふんする所みな皆

是れ顯教なり玄宗代宗の時・金智広智の日・密教として起り盛に秘趣を談ず、新薬日に浅くして旧痾未だ除かず楞伽の如きに至つては法弘説法の文智度性身妙色なり句・憶に馳せ而も文を会して自宗を馭り而も義を取る惜いかな古賢醍醐を嘗めず

日本

神代十二代

天神 七代

地神 五代

人代百王

第一神武天皇

之を略す

第十四仲哀

八幡大神の父なり

第十五神功皇后

八幡大菩薩の母なり

第十六応神天皇

今の八幡大菩薩なり 略

第三十欽明天皇

歴記に云く欽明天皇の治天下十三年己申歳冬十月一日百済国聖明王自り仏像經等始めて

日本国に送る

第三十一敏達天皇

厩戸王子 四天王寺を造る

第三十二用明

聖徳太子は用明の御子也

上宮太子守屋を切り四十九院を立つ南岳大師の後身なり救世観音の垂迹なり

第三十三崇峻

第三十四推胡

女帝

第三十五舒明

第三十六皇極

第三十七孝德

第三十八斉明

第三十九天智

第四十天武

第四十一持統

第四十二文武

第四十三元明

第四十四元正

女帝

女帝

六宗

俱舍宗

律宗

成実宗

法相宗

三論宗

華嚴宗

亦禅宗有り並びに一切経有り

第四十五聖武

聖武天皇東大寺の大仏を造る

欽明自り聖武に至るまで二百四十余年なり、震旦国自り鑒真和尚渡り律宗を亘す、次に天台宗の玄文止等を渡す、又東大寺の小乗戒壇を立つ

第四十六孝謙

聖武の女

第四十七淡路

廃帝

第四十八称徳

孝謙又即位也

第四十九光仁

桓武の父なり

欽明自り二百六十余年に及ぶ

第五十

桓武延暦三年に奈良の都自り長岡の京に遷り、延暦十三年長岡の京自り平の京に遷る、延暦二十五年御崩

去延暦四年叡山を立つ最澄なり延暦二十年叡山八講を始め南京の十人を請ず、延暦二十一年の正月十九日高雄に於て南京の十四人と最澄と宗論あり、同二十九日六宗の十四人謝表を桓武聖王に奉る、延暦二十二年入宋同二十四年御帰朝、此の時始めて伝教大師・天台宗を立て四十余年の文を以て六宗を破り始めて法華の実義之を顕し、欽明自り二百余年の邪義之を改む、又六宗の碩徳たる勤操・徳円・長耀等の十四人・桓武皇帝に謝表を奉りて邪見を翻す。弘法大師空海は延暦二十三年御入宋・大同元年御帰朝、伝教大師は山階寺の行表・僧正の御弟子・弘法大師は石淵の勤操・僧正の御弟子なり。

第五十一平城

第五十二嵯峨弘仁十三年六月四日伝教大師御入滅同十一日「慈覚大師」戒壇を立つ。

第五十三淳和

秀句しゅうくに云いく「法華經ほっけきやうを賛さんすと雖いふども還かえつて法華ほっけの心こころを死しす」文。

選せん集しやくに云いく法ほつ然ぜん造ぞう捨しや閉ひ閣かく拋ほう、善ぜん導どう礼れい讃さんに云いく「十じゆ即そく十じゆ生しやう・百ひやく即そく百ひやく生しやう」又い云いく「百ひやくの時ときに希まれに一二いつふたを得とく千せんの時ときに

希まれに三五さんごを得とく」又い云いく「千せん中ちゆう無む一いつ」道どう綽しやくの安あん樂らく集しやくに云いく大集目「我われが末まつ法ほつの時ときの中なかの億いふ億いふの衆しゆ生じやう行ぎやうを起おこし道どうに臨りんむも

未いまだ一人ひとりの得とくる者もの有あらず、当とつ今こん末まつ法ほつは是こゝ五ご濁だくの惡あく世せなり唯ただ淨じやう土どの二に門もんのみ有ありて通とほ入いす可べきの路ろなり」惠え心しんの往おつ生じやう要よう集しやく

に云いく「利り智ち精しやう進じんの人ひとは未いまだ難がたしと為なさず予こゝが如ごとき頑がん魯ろの者もの豈あに敢あえててせんや」

根本大師

伝教大師

山家

天台の後身なり

守護章しゆごしやうに「正しやう像ざう稍しやう過かぎ已おつて末まつ法ほつ太はなだ近ききに有あり法華ほつ一いつ乘じやうの機き今いま正まさに是こゝれ其その時ときなり」又い云いく「一いつ乘じやうの家けには都すて用もちいざ

れ小乘權大乘四十年しよしやうねんなり但ただし開あし已おつて助道しよだうに用もちいたるを除のぞく」

八三 一代五時図

文応元年三十九歳御作 612P

於総州

大論に云く十九出家三十成道と

権大乘

華嚴経「三七日」

華嚴宗

戒 定 智儼 杜順 法蔵

「二七日」

慧 澄観

小乗

俱舍宗

戒定慧

阿含「十二年」

成実宗

戒定慧

律宗

戒定慧

鑒真和尚

大集経

玄奘

深密経

法相宗

玄奘

戒定慧

楞伽経

禅宗

慈恩

権大乘

観経

方等

雙観経

浄土宗

阿弥陀経

善導

三十年

金剛頂經

大日經

真言宗

戒定慧

蘇悉地經

百論「提婆菩薩造」

權大乘

中論「竜樹菩薩造」

般若

十二門論

同

三論宗

戒定慧

大論

同

嘉祥寺

吉蔵大師

無量義經に云く

「方便力を以て四十余年には未だ真実を顕さず、又云く無量無辺不可思議阿僧祇劫を過れども終に

無上菩提を成ずることを得ず所以は何ん菩提の大直道を知らざるが故に險逕を行くに留難多きが故に」と、又云く「大

直道を行くに留難無きが故に」と。

法華經「八箇年」

法華宗

天台宗

戒定慧

世尊は法久しくして後かならず当に真実を説き給うべし、種種の道を示すと雖も其れ実には仏乗の為なり、正直に方便

を捨てて但無上道を説く、今此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ我が子なり而も今此の処は諸の

患難多し唯我一人のみ能く救護を為す復教詔すと雖も而も信受せず、若し人信ぜずして此の経を毀謗

せば則ち一切世間の仏種を断ぜん。其の人命終して阿鼻獄に入らん。○將に魔の仏と作りて我が心を悩乱するに非ず

や疑二の巻、妙法華經。○皆是れ真実明の文証」

涅槃經六に出ず

法四依

法に依つて人に依らざれ

義に依つて語に依らざれ

智に依つて識に依らざれ

了義經に依つて不了義經に依らざれ

一日一夜

涅槃經

八十入滅

人四依

初依

六根

五品

天台等

第二依

初地已上

竜樹菩薩等

第三依

第四依

等覺菩薩

天竺 十四五六卷

十住毘婆沙論に云く

竜樹 菩薩造羅 什三 藏訳

難行道

譬えば陸路を歩行せば苦なれども

不退地

易行道

水道を船に乗れば則ち楽なるが如し

十仏 百三十余菩薩並に阿弥陀仏等

曇鸞法師「齊世」本三論宗の人なり浄土論註二卷を作る

道綽禪師「唐世」善導の師なり安樂集二卷を作る

安樂集に云く「大集月藏經に云く我が末法の時の中の億億の衆生起行修道すとも未だ一人も得る者有らじ

当今末法は是れ五濁の惡世なり唯浄土の一門のみ有つて通入すべき路なり」と

唐世

善導 玄義 一卷 序分義 一卷 定善義 一卷 散善義 一卷 觀念法門 一卷 往生礼讃 一卷 般舟讃 一卷 法事讃 上下已上

九卷 隱岐院の御宇建仁年中今に五十余年なり

法然 源空

選択集 一卷

未だ一人も得る者有らず千の中に一も無し

浄土三部經を除くの外法華經等の一切阿弥陀仏を除く一切の仏菩薩一切の神祇等

難行 聖道 雜行

天台法華宗等八宗を捨閉し閣拋す

易行 浄土 正行

阿弥陀仏は十即十生・百即百生

六百三十七部二千八百八十二卷

捨閉閣拋

雙觀經に云く「設い我仏を得んに十方の衆生至心に信樂し我が国に生れんと欲し乃至十念して若し生ぜずんば

正覺を取らじ唯五逆と誹謗正法とを除く」と、道綽の未有一人得者、善導の千中無一、法然の捨閉閣拋、此等は豈謗法

に非ずや、法華經第二譬喻品に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切世間の仏種を断ぜん、或は復顰蹙して

而も疑惑を懷かん汝当に此の人の罪報を説くを聴くべし若しは仏の在世若しは滅度の後に其れ斯の如き

經典を誹謗すること有らん經を讀誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して而も結恨を懷かん此の人の罪報汝今復聴け其の人命終して阿鼻獄に入らん一劫を具足して劫尽きなば更生れん是くの如く展転して無數劫に至らん地獄從り出ては當に畜生に墮つべし涅槃經第十に云く問う一闍提とは其の義云何、仏云く純陀若し比丘

及び比丘尼・優婆塞・優婆夷有つて惡の言を發し正法を誹謗し是の重業を造りて永く改悔せず心に慚愧無からん是くの如き等の人を名けて一闍提の道に趣向すと為す、若し四重を犯して五逆罪を作り自ら定めて是くの如き重事を犯すと知つて而も心に初より怖畏慚愧無く肯て發露せず彼の正法に於て永く護惜建立の心無く毀皆輕賤して言過咎多からん、是くの如き等の人も亦一闍提の道に趣向すと名く、若し復説いて佛法衆無しと云わん是くの如き等の人も亦一闍提の道に趣向すと名く、唯此くの如き一闍提の輩を除きて其の余に施さば一切讚歎すべしと。

- 一 殺生 下殺は螻蟻蚊
 - 二 偷盜 中殺は凡夫人及び前三果の聖人
 - 三 邪淫 上殺は阿羅漢・辟支仏・菩薩父母等
 - 四 妄語
 - 五 綺語
 - 六 惡言
 - 七 兩舌
 - 八 貪
 - 九 瞋
 - 十 癡
- 上品は地獄に墮つ
中品は餓鬼に墮つ
下品は畜生に墮つ
- 十惡

- 一 殺父
- 二 殺母
- 一 殺生
- 二 偷盜
- 一 殺父
- 二 殺母
- 一 殺生
- 二 偷盜
- 一 殺父
- 二 殺母

四重

五逆

凡夫上人

邪じゃ嫗いん

三 殺阿羅漢あらかん

木画像等もくえ

妄語もうご

四 出仏身血すいぶつしんけつ

五 破和合僧はわごうそう

四人已上凡夫僧ぼんぶ

此等これらは皆みな一業引いちごういん一生いっしやうなり故ゆゑに一度惡道ひとたびあくどうに墮だすれば還かえつて二度惡道あくどうに墮だせず、謗法ほうぼうは一業引多生いちごういんなれば一度三寶ひとたびさんぼうを破はすれば度た度た惡道あくどうに墮だする是これなり、伝教大師でんきやうだいしの守護章しゆごに云いく「不正義せいぎの一切いっさい学人しんじゆは信受しんじゆすべからず所以ゆゑんは何ん其いの師その墮だする所で弟子またあも亦またあ墮だち檀那だんなも亦またあ墮だつ金口きんくの明説めいせつ何ぞ慎つしまざるべけんや慎つしまざるべけんや」と。

第一弟子だいいち「長樂寺多念ちやうらくじ」隆觀りやうくわん「南無房一切鎌倉なむぼういっさいかまくらの人人ひとひと」

第一だいいち「うさか」善慧房ぜんねぼう「当院洛中一切諸人いっさいしよにん」

法然ほうねん 第一聖光だいいちせいこう「筑紫九国一切諸人つくし」

一条覺明いちやうかくめい 今いまの道阿弥等どうあみ

成覺じやうかく 一念いちねん

法本ほふほん 一念いちねん

已上弟子八十余人でし

乃な至日本国いにしにほんこくの一切いっさい念佛者いんぶつ並ならに檀那等だんな、又一切いっさいの天台てんだい・真言等しんごんの諸宗しよしゆの人人ひとひと又法然ほうねんが智分ちぶんを出いでず各各其その宗しゆを習しえども心こころは皆みな一同いっどうに念佛者いんぶつなり、法華經ほけきやうを読よめども真言しんごんを行しずれども皆助業みなとなし念佛いんぶつを以もつて正業しやうごふと為なす謗法ほうぼうの失脱しやうだつるべからず。

八四 一代五時図

618P

竜樹菩薩造いわ

大論に云く十九出家浄飯王の太子 三十成道悉達太子

権大乘

六十卷

華嚴経

華嚴宗

八十卷

三七日

増一阿含経

俱舍宗

世親菩薩
玄奘三蔵

小乗経

中阿含経

阿含経

長阿含経

成実宗

迦梨跋摩

十二年

雑阿含経

律宗

道宣律師

二百五十戒

僧

小乗戒

五百戒

尼

五戒

男女

八斎戒

男女

深密經 五卷

瑜伽論 ゆいが百卷
唯識論 ゆいしきろん

弥勒菩薩造 みろくぼさつ
世親菩薩造 せじんぼさつ

法相宗 ほつそうしゅう

玄奘三蔵 げんじょうさんそう
慈恩大師 じおんだいし

大集經 だいしききょう

雙卷經

曇鸞法師 どんらんほつし

淨土三部經 じやうたふさなぶききょう

觀經 かんききょう

道綽禪師 どうしやくぜん

阿弥陀經 あみだ

淨土宗 じやうたいていしゅう

善導和尚 ぜんだうわじきょう

法然房 ほつねんぼう

大日經 だいにちききょう
七卷

善無畏三蔵 ぜんむいさんそう

權大乘 こんだいしきょう

金剛頂經 こんごうちきうききょう
三卷

金剛智三蔵 こんごうちきさんそう

方等部 ほうとうぶ

蘇悉地經 そしつちききょう
三卷

真言宗 しんこんしゅう

不空三蔵 ふくうさんそう

慧果和尚 けいかわじきょう

弘法大師 こうぼうだいし

慈覺大師 じかくだいし

智証大師 ちしやうだいし

達摩大師 だいまし

三十年

禪宗 ぜんしゅう

慧可 えか

楞伽經 四卷

僧

道信

十卷

求忍

百論

提婆菩薩造

中論

龍樹菩薩造

權大乘

慧能

般若

十二門論

同

三論宗

興皇

四十卷

大智度論

同

嘉祥大師

無量義經

七十二歲

吉蔵

四十余年には未だ真実を顕さず、方便の力を以て四十余年には未だ真実を顕さず、無量無辺不可思議阿僧祇劫を過れども終に無上菩提を成ずることを得ず、所以は何ん菩提の大直道を知らざるが故に險逕を行くは留難多きが故に、大直道を行くは留難無きが故に。

実大乘

顕露宗

法華經

最秘密宗

八箇年

仏立宗

法華宗

天台宗

世尊は法久しくして後に要当に真実を説き給うべし正直に方便を捨てて但無上道を説く種種の道を示すと雖も其れ

實には仏乗の爲なり、今此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり而も今此の処は諸の患難多し唯我れ一人のみ能く救護を爲す復教詔すと雖も而も信受せず、若し人信ぜずして此の経を毀謗せば則一切世間の仏種を断ぜん、或は復蹙して疑惑を懷かん汝当に此の人の罪報を説くことを聴くべし若しは仏の在世若しは滅度の後其れ斯の如き經典を誹謗すること有らん経を誦誦し書持する有らん者を見て輕賤憎嫉し而も結恨を懷かん此の人の罪報を汝今復聴け其の人命終して阿鼻獄に入らん一劫を具足して劫尽きなば更生じ是の如く展転して無數劫に至らん此に於て死し已つて更に隣身を受けん其の形長大にして五百由旬ならん、若し是の善男子善女人我が滅度の後に能く竊に一人の爲にも法華經の乃至一句を説かん当に知るべし是の人は則如来の使なり如来の所遣として如来の事を行ずるなり、藥王若し惡人有つて不善の心を以て一劫の中に於て現に仏前に於て常に仏を毀罵せん其の罪尚輕し若人一の惡言を以て在家出家の法華經を誦誦する者を毀訾せば其の罪甚だ重し藥王今汝に告ぐ我が所説の諸經而も此の經の中に於て法華最も第一なり我が所説の經典無量千萬億にして已に説き今説き當に説かん而も其の中に於て此の法華經最も爲難信難解なり若し法師に親近せば速かに菩薩の道を得ん是の師に隨順して学せば恒沙の仏を見上ることを得ん、爾の時に宝塔の中より大音声を出して歎めて言わく善哉善哉釈迦牟尼世尊能く平等大慧教菩薩法仏所護念の妙法華經を以て大衆の爲に説き給う是の如し是の如し釈迦牟尼世尊の所説の如きは皆是れ眞実なり諸余の經典數恒沙の如し此等を説くと雖も未だ難しと爲す

に足らず若し須弥を接つて他方無數の仏土に擲け置かんも亦未だ難しと為さず若し仏の滅度に惡世の中に於て能く此の經を説かん是れ則ち難しと為す、諸の無智の人の惡口罵詈訾等し及び刀杖を加うる者有らん我等皆當に忍ぶべし惡世の中の比丘は邪智にして心詭曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心充滿せん或は阿練若に納衣にして空閑に在つて自ら眞の道を行ずと謂いて人間を輕賤する者有らん利養に貪著するが故に白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん常に大衆の中に在つて我等を毀らんと欲する故に國王・大臣・婆羅門・居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説いて是れ邪見の人外道の論議を説くと謂わん濁劫惡世の中には多く諸の恐怖有らん惡鬼其身に入つて我を罵詈訾し毀辱せん濁世の惡比丘は仏の方便隨宜所説の法を知らず惡口して蹙し数数擯出せられん、大神力を現し広長舌を出して上梵世に至らしむ諸仏も亦復是の如く広長舌を出し給ふ。

依報不依人

文殊・普賢・觀音・地藏等竜樹菩薩・善無畏・弘法・慈覺・法藏・嘉祥・善導等なり

一日一夜
涅槃經

八十入滅

依義不依語
依智不依識
依了義經
不依不了義經

法華經
觀經等

大日經等
深密經等
華嚴經等
般若經等

八五 一代五時鷄図

623P

壽命三百年

羅什訳

百論

法雲自在王如來

觀自在王如來

千卷

仏滅後六七八

大論に云く十九出家三十成道

三十万卷

竜樹菩薩

第十一馬鳴菩薩の御弟子付法蔵の第十三

大悲方便論

十万卷

猛

大心論

十万卷

大無畏論

十万卷

実大乘

権大乘

華嚴經

三七日

華嚴宗

立五教撰尽一代

杜順和尚

智儼法師

法蔵大師

香象大師

賢首法師

結経梵網経

大乘戒之を出す

華嚴和尚

小乘 しやうじやう

十二年

阿含經 あこんきやう

結經遺教經 けつぎやういぎやう

大乘 だいじやう

或說時不定 あるはつじふじやう

或十六年 あるはちかねん

或八箇年 あるはちかねん

方等部 ほうとうぶ

權大乘 こんだいじやう

定

經 ぎやう

俱舍宗 くしゃしゆう

論 ろん

成実宗 じやうじつしゆ

律宗 りつしゆう

小乘戒之を出す しやうじやうけいのいだし

或云法華已前 あるはつけいぜん

或云法華已後 あるはつけいご

深密經 じんみつぎやう

五卷

弥勒菩薩說 みろくぼさつ

無著菩薩筆 むしやくぼさつ

瑜伽論 ゆいがろん

世親菩薩造 せじんぼさつ

唯識論 ゆいしきろん

三十頌 しじゆうじん

三時を立て一代を撰す いちだいいしじゆじん

玄奘三蔵 げんじやうさんそう

慈恩大師 じおんだいし

法相宗 ほうしやうしゆう

六經十一論

瓔珞經 ようらくぎやう

結經 けつぎやう

楞伽經

禪宗

達磨大師

或は諸法無行經

或は金剛般若經

或は大円覺經

或は首楞嚴經

或は云く一切經

或は云く教外別伝

一卷七枚

菩提心論

或云竜樹造

或云不空造

大日經

「七卷」

善無畏三藏

金剛頂經

「三卷」

真言宗

顯密二道を分ち五藏を立て

或は十住心を立つ

蘇悉地經

「三卷」

金剛智三藏 不空三藏 一行阿闍梨

或は云く方等部

或は云く華嚴部

或は云く般若部

或は云く法華部

或は云く涅槃部

或は一代諸經の外

雙觀經

曇鸞法師

觀經

淨土宗

道綽禪師

善導和尚

阿弥陀經
あみだ

惠感禪師
ぜん

難行
なんぎょう

小乘法師
ほっし

易行
いぎょう

法照

聖道
しやうだう

淨土
じやうど

雜行
ざぎやう

正行
しやうぎやう

諸行
しよぎやう

念佛
ねんぶつ

三十年

或は云く二十二年
ある いわ

或は云く十四年
ある いわ

大品般若
だいほんはんによ

光讚般若
くわうさんはんによ

金剛般若
こんごうはんによ

天王問般若
てんわうもんはんによ

摩訶般若
まかはんによ

般若經
はんによぎやう

仁王般若
にんのうはんによ

「結經」
けつぎやう

百論

竜樹菩薩造
りゅうじゅぼさつ

中論

同

十二門論

同

大論

同

三論宗

或は四論宗といふ

淨影

興皇

嘉祥寺の吉蔵大師

或は法性宗と云う
或は無相宗と云う

道朗

三時を立て一代を撰尽す、或は二蔵を立て或は三転法輪を立つ
華嚴三七日阿含十二年方等般若三十年已上四十二年なり

法界性論に四十二年

無量義經に云く方便力を以ての故に四十余年には未だ眞實を顯さず、又云く無量無辺不可思議阿僧祇劫を過るも終に無上菩提を成ずるを得ず、所以は何ん菩提の大直道を知らず險逕を行くに留難多きが故に、又云く大直道を行けば留難無きが故に。

諸宗依憑宗

世尊法久後要當說眞實

仏立宗

廢也 或は前三教と云い或は前四教前四味と云うなり、或は先の三教の円教

天台宗

に撰尽するを云う。

法華宗

正直捨方便但說無上道

法華經 秘密宗

四時・七教・五時・八教

顯露彰灼宗

雖示種種道其実為仏乘

唯一仏乘

普賢經

結經

將非魔作仏悩乱我心耶

叡山戒壇

久默此要。不務速說

華嚴經・大日經・深密經・楞伽經・大品經・般若經等

無量義經

涅槃經等

「我が所説の經典は無量千萬億にして已に説き今説き當に説かん而も其の中に於て此の法華經最も為難信難解なり、記の六に云く縦い經有つて諸經の主と云うとも已今當説最為第一と云わず、兼但对帶其の義知んぬべし、玄の三に云く舌口中に爛る、籤の三に云く已今當の妙此に於て固く迷えば舌爛れて止まざるは猶華報と為す謗法の罪苦長劫に流る、又云く諫曉止まず」

結經

像法決疑經

「二日一夜」

涅槃經

法四依第六卷

人四依

依法不依人

依義不依語

仏智

菩薩等識

八十御入滅

七十九・八十・八十一

八十二・百五・百二十

主上

天尊

主

法王

國王

依了義經不依不了義經

二天

魔修羅天

毘紐天

大梵天

第六天

帝釈天

釈尊
しゃくそん

師

師匠
ししやう

七逆に違す
ななさかじやう

涅槃疏云 章安釈
ねはんしゆ しょうあん

一体の仏主師親と作る
いつたいのぶつしゅししん

五逆に違す
ごぎやく

親

八親
はくしん

人王 天王

八虐に違す

三仙

外道師
げどう

六師
りくし

四聖

周公旦
しゆうこうたん
孔子
こうし
顔回
がんかい

天竺
てんじく

師子類王
ししやうおう

淨飯王
じやうはん

震旦
しんたん

三皇
さんかう

五帝

三王等

日本国
にほんこく

神武天皇
てんのう

迦毘羅
かびら

樓僧伽

勒沙婆

尹喜

務成

老

呂望

世尊 三界特尊

二十五有

理性の子 結縁の子

今此三界 皆是我有

其中衆生 悉是吾子

文句の五に云く一切衆生等しく仏性有り仏性同じきが故に等しく是れ子なり

而今此処 多諸患難 唯我一人能為救護

玄の六に云く本此の仏に従つて初めて道心を発し亦此の仏に従つて不退の地に住す

文句の六に云く「旧は西方の無量寿仏を以て長者に合す今は之を用いず、西方は仏別に縁異り仏別なる故に隠顕の義成ぜず縁異る故に子父の義成ぜず又此の經の首末全く此の旨無し眼を閉し穿鑿せよ、舍那の著脱近く尚知らず弥陀は遠きに在り何ぞ嘗て交換せん」と云云、記の六に云く「西方等とは弥陀 釈迦の二仏既に殊なり豈弥陀をし珍玩の服を隠さしめ乃ち釈迦をして弊垢の衣を著せ使めん状、釈迦珍服の隠す可き無く弥陀唯勝妙の形なるに當る、況や宿昔の縁別に化導同じからざるをや、結縁は生の如く成就は養の如し生養の縁異れば父子成ぜず、珍弊途を分ち著脱殊に隔る消経 事闕けて調 熟の義乖く当部の文永く斯の旨無し、舍那著脱等とは舍那の動ぜずして而も往くに迷う、弥陀の著弊は諸経に文無し、若し平等意趣を論ぜば彼此奚ぞ嘗て自ら矜らん、縦い他を我が身とするも還つて我が化を成す、我他の像を立つれば乃ち他の縁を助く人之を見ざれば化縁便ち乱る、故に知んぬ夫の結縁とは並に応身に約することをお昔曾て二万億等と云うが如し、況や十六王子始縦り今に至つて機感相成し任運に分解す、是の故に彼の弥陀を以て此の交換と為す可からず」

種熟 東方有縁

主

第一阿仏

師

大通の太子
十六王子

脱
種熟西方有縁
第九阿弥陀仏

親主師

沙弥

脱

種熟娑婆世界

親主師

第十六釈迦牟尼仏

脱

親主師

記の九に云く「初此の仏菩薩に従つて結縁し還た此の仏菩薩に於て成熟す、玄の六に云く「仏尚自ら分段に入つて仏事を施作す有縁の者何ぞ来らざるを得ん譬えば百川の海に潮す応須が如し縁に牽れて応生すること亦復是くの如し」、又云く「本此の仏に従つて初めて道心を発し亦此の仏に従つて不退地に住す」

劣応身釈迦如来
本尊

俱舍宗
成実宗
律宗

盧舍那報身

華嚴宗の本尊

勝應身に当る
釈迦如来

法相宗の本尊

勝應身に当る
釈迦如来

三論宗の本尊

法身
胎蔵界
大日如来

真言宗の本尊

報身
金剛界

八六 釈迦一代五時繼図

633P

大論に云く十九出家三十成道八十入滅文、此の論は竜樹菩薩の造・寿命三百年・三十万偈の論師なり、付法蔵の第十三仏滅後七百年の人なり。

説処は中天竺摩竭提国の寂滅道場菩提樹下・七処八会
飯立実報土、別円の二教を説く

三七日の説なり「三七日は法華の説二七日は華嚴の説」

華嚴經

兼と名く

権大乘なり乳味と名く頓大の機^きの爲に説く

頓教と名く「亦秘密教有り亦不定教有り」擬宜と名く

結経は梵網經なり

馬鳴菩薩

起信論を造る

天竺

天親菩薩

十地論を造る

竜樹菩薩

十住毘婆沙論を造る

華嚴宗祖師

杜順和尚

法蔵大師

漢土

智蔵法師

澄観法師

此の華嚴教といつは所謂仏摩訶陀国寂滅道場菩提樹下にして始めて正覺を成じたまいし時・七処八会に於て法惠・功德・林・金剛幢・金剛藏の四菩薩に加して頓大の根性の為に因陀羅網・無障礙土の相を現じ別円の兩教・住行向地の功德・法界唯心の理を説き給う所謂華嚴經なり、此の經には四十一位を明す謂く十住・十行・十迴向・十地・仏果なり、此の經には新古の二訳有り六十華嚴は旧訳なり八十華嚴は新訳なり、梵網經を以て華嚴の結經と爲す、此の華嚴は化儀は頓部化法は別円なり、成道の最初に此の教を説き給う譬えば日出でて先づ高山を照すが如し厚殖善根は斯の頓説を感ず、頓説本と小の為にせず彼の初分に於ては永く声聞無し後分には即ち有り復た坐に在りと雖も聾の如くの如し、經文に云く「即ち傍人を遣わして急に追うて將に還さんとす乃至悶絶して地に」る云云。

説処は波羅奈国鹿野苑・同居土の説

但三藏教を説く但と名く

十二年小乗を説く・酪味と名く

阿含經

三乗の根性の為に説く・漸教と名く

誘引と名く

結經は遣教經なり

俱舍宗・成実宗・律宗

此の阿含は是小乗教なり、仏・成道五十七日を経て梵王の請に赴き波羅奈国の鹿野苑に於て陳如等の五人の為に三藏教の四諦の法論を説き給う、謂く四阿含等の小乗經を説くなり、増一阿含には人天の因果を明し、長阿含には邪見を破し、中阿含には眞寂の深義を明し、雜阿含には禪定を明す、遣教經を以て結經と爲す、化儀は漸の部

の初め化法は三蔵教なり、三乗の根性の為に此の阿含教を説く經の次第に依れば日の次に幽谷を照すが如し、浅行を偏に明せば当分に漸を解る三蔵本大の爲ならず座に在りと雖も多 婆和す、經に云く「將に其の子を誘引せんと欲して方便を説く密かに一人の形色憔悴せる威徳無き者を遣わす」云云。

説処は欲色二界の中間 大宝坊同居土の説なり

蔵通 別円の四教を説く

十六年の説なり 三井寺の義説時不定なり 山門の義権大乘生蘇味

対と名く

四教の機の為に説く漸教と名く 亦秘密教有り 亦不定教有り

彈訶と名く

結經は瓔珞經なり

深密經 法相宗 玄奘三蔵慈恩大師

楞伽經 禅宗 達磨 曇鸞法師

觀經 道綽禅师

雙觀經 浄土宗 祖师 善導和尚

阿弥陀經 法然上人

大日經 善無畏三蔵

金剛頂經 真言宗 祖师 金剛智三蔵

蘇悉地經 不空三蔵

方等部

此の方等教は謂く鹿苑の後般若の前四教の機に對し処処に四教の法を説いて唯だ二乗を彈呵し菩薩を稱揚す、所謂密嚴經・厚嚴經・思益經・方等經・楞伽經・淨名經等なり、瓔珞經を以て結經と為す、化儀は漸部の中、化法は四教なり、説教の次第に依れば日の次ぎに平地を照すが如し影万水に臨み器の方円を逐い波の動靜に随つて一仏土を示すに淨穢不同ならしめ一身を示現するに巨細各異なり、一音の説法・類に随つて各解なり、恐畏し歡喜し厭離し斷疑す神力不共の故に見に淨穢有り聞に褒貶有り嗅に胆蘊と不胆蘊と有り華に著身と不著身と有り淨名方等の如し、經文に云く「是を過ぎて已後、心相体信じて入出難り無し」文。

説処は鷲峯山・白鷺池等の四处十六会、同居土の説なり

權大乘なり

帶と名く

熟蘇味と名く

十四年の説なり「三井寺の義」三十年の説「山門の義」

漸と名く「亦秘密教有り亦不定教有り」

淘汰と名く

結經は仁王經なり 已上四十二年なり

百論

中論 三論宗

祖師

嘉祥大師

十二門論

吉藏大師

此の大般若經は唐の玄奘三蔵の所訳是れ新訳なり、此の經は一部六百卷・二百六十五品・六十億四十万字・二万

六百三十八紙なり、此の般若経は方等の後、法華の前四処十六会の中に於て後三教の機のために広く諸部の般若を説く、
いわゆる「三さんはんぎょう」もんじゅう「はんぎょう」こんごうはんぎょう「のつだんこんごうはんぎょう」だいほんはんぎょう「はんぎょう」ほこうはんぎょう
所謂光讚般若経・文殊問般若経・金剛般若経・能断金剛般若経・小品般若経・放光般若経・天王問般若経・
大般若経等なり、仁王般若経を以て結経と爲す、唯だ化儀は漸教の後、化法は通別円なり、此の般若経の時も二乗の
念処道品は皆是れ摩訶衍と説いて亦身子・須菩提をして菩薩の爲に般若を轉教せしむ。

玄義に云く「大人は其の光用を蒙り嬰兒は其の精明を喪つ夜遊の者は伏匿し作務の者は興盛す故に文に云く「但菩薩
の爲に其の實事を説いて我が爲に此の眞要を説かず、三人俱に學すと雖も二乗は証を取る具に小品等の如し」經文に云く
爾の時に窮子即ち教勅を受けて衆物を領知し乃至而も一を取するの意無し云云。

仏自ら四十余年の諸経を破し給う事、無量義經説法品に云く「我先に道場菩提樹下に端座すること六年にして
阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり仏眼を以て一切の諸法を觀るに宣説すべからず所以は如何諸の衆生の性欲
不同なることを知れり性欲不同なれば種種に法を説き種種に法を説くことは方便力を以てす四十余年には未だ眞實を
顯わさず云云、又云く「文辞は一なりと雖も義は各異なり云云、伝教大師の無量義經の注釈に云く

「性欲不同なれば種種に法を説くとは是れ能彼の教を挙ぐるなり釈迦一代四十余年の所説の教略して四教及び八教あり
所謂樹王の華嚴・鹿苑の阿含・坊中方等・鷲峯等の般若・演説一乘・大小の菩薩の歷劫修行・小乗の三蔵教・
大乘の通教・大乘の別教・大乘の円教・頓教・漸教・不定教・秘密教是くの如き等の前四味各各不同なり是の故に名け
て種種の説法と爲す云云、又云く「但隨他の五種性等門外の方便・差別の權教・帶權の一乘を説いて未だ隨自一仏乘等・
露地の眞實・平等の直道・捨權の一乘を顯わさず是の故に説いて方便力を以て四十余年未だ眞實を顯さ

ずと言つ」と云云、無量義經に云く「若し衆生有つて是の經を聞くことを得ば則ち爲れ大利なり所以は如何若し能く
修行すれば必ず疾く無上菩提を成ずることを得ればなり、其れ衆生有つて聞くことを得ざる者は當に知るべ

し是等は為れ大利を失えるなり、無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐれども終に無上菩提を成ずることを得ず所以は如何菩提の大直道を知らざる故に險逕を行くに留難多きが故に云云、注釈に云く「疾く無上菩提を成ずることを得ずとは未だ直道一乗の海路を解せず未だ純円六度の固船に乗らず未だ実相方便の順風を得ず是の故に横道の三乗嶮路の歩行留難多き処」勲苦妄想夢裏の大河なり是の故に説いて疾く無上菩提を成ずることを得ずと云云、秀句の下に云く「法華經を讃むと雖も還つて法華の心を死す」云云、無量義經に云く「次に方等十二部經摩訶般若華嚴海空を説いて菩薩の歷劫修行を宣説せしかども」云云、伝教大師秀句の下巻に云く「謹しみて無量義經を案ずるに云く方等十二部經とは法相宗所依の經なり摩訶般若とは三論宗の所依の經なり華嚴海空とは即ち華嚴宗の所依の經なり但歷劫修行を説いて未だ大直道を知らず」云云、天台大師玄義の五に云く「成道より以來四十余年未だ真実を顯わさず法華に始めて真実を顯わす」相伝に云く「仏の年七十二歳にして法華經を説くと云云、慧心僧都の一乗要決の下に云く「仏既に説いて言く法華真実なり前は未だ真実を顯わさず何ぞ強ちに仏教に背いて法華の怨嫉と為るや」云云、記の八に云く「略して經題を挙げて玄に一部を収む故に仏欲以此妙法等と云うなり」釈籤一に云く「次に經題を釈す初めには妙法の兩字は通じて本迹を詮す蓮華の兩字は通じて本迹を譬つ」

説処は靈山虚空の二処三會実報土の説

実大乘

八箇年の説

又開会の妙典とも純円一実の説とも一円機の説とも云う

法華經

醍醐味

円教

頓不定と秘密無し

結経は普賢經

仏立宗

法華宗

天台宗

一に靈山會

序品より法師品に至る十品

二処三會の儀式

二に虚空會

宝塔品より神力品に至る十一品

三に靈山會

嘱累品より勧發品に至る七品

本迹の両門

序品より十四品は迹門なり

開權顯実と名く

此の法華經は第五時の教なり、

無量義經を開經と為し觀普賢經を結經と為す、化儀は會漸歸頓・會三歸一・化法は純円

なり、般若の後 雙林の前 純ら一の円機に對して眞実を説くなり、日光普なく照すに土圭の測影縮ならず盈ならざるが

如し低頭挙手 皆仏道を成ず汝は実に我が子 我は実に汝が父 唯だ如来の滅後を以て之を滅度す、此の第

五時の教は是れ日中にして四時に非ず是醍醐にして四味に非ず是れ定にして不定に非ず是れ顯露にして秘密に非ず三乘

五乘・七方便・九法界を會して一仏乘に入らしむ所以に迹門には二乗初住の位に叶て無生忍を得・成仏の記を受く八歳

の童女は男子に變成して即身に無垢の成道を唱う、本門には二世の弟子増道損生の益を得 凡そ三周

四説不可思議なり方便品に云く世尊の法久くして後要す当に眞実を説くべし又云く未だ曾て説ざる所以は説時未だ

至らざるが故なり今正しく是れ其の時なり決定して大乘を説かんと云云、又云く乃至一偈に於ても皆成仏すること疑

無し十方仏土の中 唯一乗の法のみ有つて二も無く亦三も無し仏の方便の説を除く又云く諸仏世

に出る唯此の一事のみ実なり余の二は則ち真に非ず、普賢經の記に云く「故に正説に云く唯此の一事のみ実にして余の二は則ち真に非ず」と斯れに多義有り、一には非頓非漸の妙法を指して一事実と爲し而頓而漸を余二の權

と爲す、二には三教の仮名を呼びて非真と爲し一円の実理を指して一実と爲す、三には四味を以て非真と爲し

醍醐を以て一実と爲すこと、方便品に云く「終に小乗を以て衆生を濟度せず」云云、又云く「若小乗を以て化すること乃至一人に於てもせば我則ち慳貪に墮せん此の事不可と爲す」又云く「正直に方便を捨てて但だ無上道を説く」と、玄の

九に云く「廢三顯一とは此れ正しく教を廢す其の情を破すと雖も若し教を廢せざれば樹想還つて生ず教を執して惑を生ず是の故に教を廢す正直に方便を捨てて但だ無上道を説く十方仏土の中唯だ一乗の法の有り

二も無く亦三も無し」云云、玄義の一に云く「華落は權を廢するを譬え蓮成は実を立するを譬う」文に云く「正直に方便を捨てて但だ無上道を説く」云云、伝教大師の顯戒論に云く「白牛を賜う朝には三車を用いず家業を得る夕べには何ぞ除糞を用いん」故に經に云く「正直に方便を捨てて但だ無上道を説く」と、方便品に云く「我が昔の所願の如く今已に満足す」云云。

玄義の十に云く「即ち方便の一乗を廢して唯だ円実の一乗なり故に云く我本と誓願するが如き今已に満足す」方便品に云く「当來世の惡人仏一乗を説き給うを聞いて迷惑して信受せず法を破して惡道に墮せん」と云云、又云く「法を聞き歡喜し讚めて乃至一言を發す則ち為れ已に一切三世の仏を供養するなり」譬喩品に云く「今此の三界

は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ我が子なり而も今此の處は諸の患難多し唯我一人のみ能く救護を爲す」

云云、文句の六に云く「旧は西方の無量壽仏を以て以て長者に合す今之を用いず西方の仏別に縁異なり仏別なり故に隱顯の義成ぜず縁異なるが故に子父の義成ぜず又此の經の首末全く此の旨無し閉眼穿鑿せよ、疏記の六に云く

「弥陀・釈迦二仏既に殊なり況や宿昔の縁別に化導同じからざるをや結縁は生の如く成熟は養の如し

生養の縁異なれば父子成ぜず珍幣途を分ち著脱殊に隔たる消経事闕け調熟義乖く当部の文永く斯の旨無し云云、
 又云く「往昔は大小の両縁俱に釈迦に在りとし今は尊特垢衣俱に弥陀に在りとせば更に笑う可きことを成ず云云、
 涅槃經の疏の一に云く「無救無護無所宗仰とは此れは無主の苦を釈す貧窮孤露・一旦遠離・無上世尊とは此れは無親の
 苦を釈す設有疑惑・當復問誰とは此は無師の苦を釈す云云、涅槃經の四に云く「我又聞浮提の中
 に示現し疫病劫起多く衆生有つて病に悩む所と爲んに去つて医薬を施し然して後に爲に微妙の法を説いて其をして無上
 菩提に安住せしむ云云、涅槃經の一に云く「我等今より救護有ること無く宗仰する所無く貧窮孤露なり、一旦無上
 世尊に遠離したてまつらば設い疑惑有りといえども當に復た誰にか問うべし同一に云く「主無く親無ければ家を亡し國
 を亡す又云く「一体の仏を主師親と作す譬喩品に云く「一切衆生皆是吾が子なり云云、
 壽量品に云く「我常に此の娑婆世界に在つて説法教化す亦余処の百千万億那由佗阿僧祇の國に於ても衆生を導利す云
 云、大論に云く「十万恒河沙等の三千の國土を名けて一仏國土と爲す是の中に更に余仏無し實に一りの釈迦仏のみなり」
 云云、壽量品に云く「我亦爲れ世の父諸の苦患を救う者なり云云、宝塔品に云く「能く來世
 に於て此の經を読み持たんは是れ眞の仏子なり云云、譬喩品に云く「若し人あつて信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切
 世間の仏種を断ず其の人命終して阿鼻獄に入り一劫を具足して劫尽きて更に生じ是くの如く展轉して無數劫に至らん
 又云く「但大乘經典を受持することを樂つて乃至余經の一偈をも受けざれ妙樂大師の五百
 問論に云く「況や彼の華嚴は但福を以て比す此の經の法を以て之を比するに同じからず、故に云く乃至不受余經一偈と
 人之を思はず徒らに引く何んの益あらん玄義の五に云く「究竟の大乗は華嚴・大集・大品・法華・涅槃に過ぐる無し」
 妙樂の釈籤の十に云く「請う有眼の者委悉に之を尋ねて法華は漸円華嚴の頓極に及ばずと云うこと勿れ當に知るべし
 法華は部に約するときは則ち尚華嚴般若を破し教に約するときは則ち尚別教の後心を破す」

譬喩品に云く「初め仏の所説を聞いて心中大に驚疑す將に魔・仏と作つて我が心を悩乱するに非ずや」宝塔品に云く「爾の時に宝塔の中より大音声を出して歎めて言く善哉善哉釈迦牟尼世尊能く平等大慧教菩薩法仏所護念の妙法蓮華經を以て大衆の爲に説き給ふことは是くの如し是くの如し釈迦牟尼世尊所説の如きは皆是れ眞実なり」又云く「釈迦牟尼・快く是の法華經を説き給へ我是の經を聴かんが爲の故に而かも此に來至せり」と云云、又云く「大音声を以て普く四衆に告ぐ誰か能く此の娑婆国土に於て廣く妙法華經を説かん今正しく是れ時なり如來久しからずして當に涅槃に入り給ふべし」此の妙法華經を以て付屬して在ること有らしめんと欲す「法師品に云く藥王若し人有て何等の衆生か未來世に於て當に作仏することを得べしと問わば心に示すべし、是の諸人等・未來世に於て必ず作仏することを得んと何を以ての故に善男子・善女人・法華經の乃至一句に於て受持し誦誦せん」と云云、宝塔品に云く「諸余の經典數恒沙の如くならん、此等を説くと雖も未だ難しと爲るに足らず若し仏の滅後惡世の中に於て能く此の經を説く是則ち難しと爲すと」提婆品に云く「仏諸の比丘に告げ給わく未來世の中に若し善男子・善女人有て妙法華經の提婆達多品を聞いて淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして十方の仏前に生ぜん、所生の處には常に此の經を聞き若し人天の中に生れば勝妙の樂を受け若し仏前に在らば蓮華より化生せん」又云く「當時の衆會皆童女の忽然の間に變じて男子と成つて菩薩の行を具して即ち南方無垢世界に往き寶蓮華に坐して等正覺を成じ三十二相・八十種好あつて普く十方一切衆生の爲に妙法を演説するを見る」又云く「爾の時に娑婆世界の菩薩・聲聞・天竜・八部・人と非人と皆遙かに彼の童女の成仏して普く時の會の人天の爲に法を説くを見て心大に歡喜し悉く遙かに敬礼す」分別功德品に云く「阿逸多是の善男子・善女人は我が爲に復た塔寺を起て及び僧坊を作り四事を以て衆僧に供養することを須いず、所以は如何是の善男子・善女人是の經典を受持し誦誦する者は已に塔を起て僧坊を造立し衆僧を供養すと爲す、則ち爲れ仏舍利を以て七寶の塔を起て

高広漸小にして梵天に至る」と云云、神力品に云く「仏滅度の後に能く是の經を持たんを以ての故に諸仏皆歡喜す」云云、又云く「我が滅度の後に於て応に斯の經を受持すべし是の人 仏道に於て決定して疑有ること無けん」云云、藥王品に云く「能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦第一と為す」云云、普賢經に云く「煩惱を断ぜず五欲を離れず三昧に入らざれども但誦持するが故に」云云、又云く「其れ大乘方等經典を誦誦する有らば當に知るべし此の人は仏の功徳を具して諸惡永く滅して仏慧より生ずるなり」云云、一經の始めの如是我聞を釈する文句の一に云く「如是とは所聞の法体を拳ぐ」と則ち妙法蓮華經是なり。

一日一夜の説

權大乘

涅槃經

説処は跋提河の辺

常住四教を説く

同醍醐味

結經は像法決疑經

此の涅槃經は一日一夜の説三藏教・通教・別教・円教を明す、亦是醍醐味とも名く、釈尊拘尸那城力士生地・阿利羅跋提河・沙羅雙樹の間に於て二月十五日の晨朝・面門より種種の光を放ち給う十二由旬の内十方の大衆を集めて涅槃經を説き給う即ち三十六の涅槃經旧訳の四十の涅槃經なり、像法決疑經を以て結經と為す、亦拾教と名け亦扶律顕常と云う、化儀は漸部・化法は四教なり法華の時猶未解の輩有り更に後番五味を以て余殘の機を調熟し給う、涅槃の時四教の機同く、仏性を見る秋收冬蔵の如し、唯四機有り俱に常住を知る故に法華と合して同醍醐味と為すなり、凡そ一往此くの如く配立すと雖も万差の機縁に随つて時節の長短不同なり、或は華嚴の時長は涅槃の時に

いた 至る阿含・方等 般若も亦爾なり云云、涅槃經の六に「法に依て人に依らざれ義に依つて語に依らざれ智に依つて識に依らざれ義經に依つて不了義經に依らざれ」と云云、又「亦如来隨宜の方便所説の法の中に執着を生ぜざる是を了義と名く不了義とは經の中に一切焼然なり一切無常なり一切皆苦なり一切皆空なり一切無我なり」と説くが如し是を不了義と名く何を以ての故に是くの如きの義を了すること能わざるを以ての故に諸の衆生をして阿鼻獄に墮せしむ」云云、十七の卷に云く「如来は虚妄の言無しと雖も若し衆生の虚妄の説に因つて。」「文、又云く「虚妄の法則ち是れ罪と為す是の罪を以ての故に地獄に墮す」云云。

一、小乗の戒を破する事

涅槃經の三の卷に云く「仏迦葉に告げ給わく能く正法を護持する因縁を以ての故に是の金剛身を成就することを得。迦葉我往昔に於て護法の因縁を以て今是の金剛身を成就することを得て常住にして壊せず、善男子正法を護持する者は五戒を受けず威儀を修せず心に刀剣弓箭鋒鋦を持して持戒清淨の比丘を守護すべし」云云、同十七に云く「仏性を見るが故に大涅槃を得 是を菩薩の清淨の持戒にして世間の戒には非ずと名く」と云云、又云く

「是の經を受持して戒を毀る者は則ち是れ衆生の大悪知識なり我が弟子に非ず是れ魔の眷屬なり」云云、法師品に云く「若し是の深經声聞の法を決了する是れ諸經の王なることを聞いて」云云、安樂行品に云く「又声聞を求むる比丘比丘尼優婆塞優婆夷に親近せざれ亦問訊せざれ若しは坊中に於ても若しは經行の処若しは講堂の中に在ても共に住止せざれ」云云、伝教大師の顯戒論の中に云く「貧人の食は是れ輪王の毒なるが如し、故に二乗の者

の持戒精進は即ち菩薩の破戒懶惰なり故に心に親近すべからず、来らば為に法を説け親使利養恭敬を わざれ」と云云、秀句の下に云く「小乗の持戒は則ち菩薩の煩惱なり」云云、宝塔品に云く「此の經は持ち難し若し暫くも持つ者は我則ち歡喜す諸仏も亦然なり、是の如きの人は諸仏の歎め給う所なり是則ち勇猛なり是則ち精進な

り是を戒を持ち頭陀を行ずる者と名く、則ち疾く無上の仏道を得と為す能く来世に於て此の経を読み持たんは是眞の
仏子なり云云、竜樹菩薩の大論に云く、「自法愛染の故に他人の法を毀ぜず持戒の行人と雖も地獄の苦を脱れず云云、
涅槃經の十二に云く「仏迦葉に告げ給わく若し菩薩有つて破戒の因縁を以て則ち能く人をして大乘經典
を受持し愛樂せしむることを知つて又能く其れをして經卷を誦誦し通利し書寫し広く人の爲に説いて
あのかたさんみやくさんぼだい、阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざらしめんと、是くの如き爲の故に故さらに戒を破ることを得云云、安然の広釈に云く
能く法華經を説く是を持戒と名く律儀を持すと雖も善法を損せざれば猶木石の衣鉢を帶持せるが如し云云、弘決の
四に大論の十九を引いて云く「諸の比丘、仏に問いたてまつる阿蘭若の比丘死しぬ今何の処にか生ずる仏の言く阿鼻獄に
生ず諸の比丘大いに驚く、坐禪持戒するに便ち爾るに至すや仏答えて言く多聞持戒、禪未だ漏尽の法を得ず云云、
伝教大師云く「今より已後声聞の利益を受けず菩薩は二百五十戒を捨て畢んぬ云云、涅槃經の四に云く「我涅槃の後、
無量百歳に四道の聖人も悉く復涅槃せん正法滅して後、像法の中に於て当に比丘有べし貌持律に像て少しく経を誦誦し
飲食を貪嗜し其の身を長養し袈裟を服すと雖も猶獵師の如く細めに視て徐かに行くこと猫の鼠を伺うが如く、常に是の
言を唱う我羅漢を得たりと、諸の病苦多く糞穢に眠臥す、外には賢善を現し内には貪嫉
を懷く唾法を受けたる婆羅門等の如し、実に沙門に非ずして沙門の像を現し邪見熾盛にして正法を誹謗し及び甚深
秘密の教を壞り各自意に随つて反つて経律を説く云云、同九に云く「善男子、闍提有り羅漢の像を作し空処に住して
方等大乘經典を誹謗す諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢なり是れ大菩薩摩訶薩なりと謂えり」

一、善導和尚自害の事

類聚伝に云く「導、此の身諸苦に逼迫せられて情偽反易し暫くも休息すること無し、乃ち所居の寺の前の柳樹に登つて
西に向て願つて云く仏の威神驟以て我を摂し觀音勢至も亦来て我を助け給え、此の心をして正念を失わ

ざらしめ驚怖を起さず弥陀の法の中に於て以て退墮を生ぜざらんと願し畢つて其の樹の上に極り身を投じて自ら絶えぬ
一、仏自害断食身根不具を禁ずる事

涅槃の七に云く「若し説いて言えること有らん常に一の脚を翹げて寂として言わず淵に投じて火に赴き自ら高巖より墜ち嶮難を避けず毒を服し食を断じ灰土の上に臥し自ら手足を縛つて衆生を殺害せん、方道咒術旃陀羅の子無根・二根及び不定根身根不具ならん、是くの如き等の事如来悉く出家して道を為すことを聴し給うといわば是を魔説と名くニ云云、涅槃經の六に云く「大乘を学する者は肉眼有りと雖も名けて仏眼と為す耳鼻五根も例して亦是くの如し」云云、像法決疑經に云く「諸の悪比丘我が意を解せず己が所見を執して十二部經を宣説し文に随つて義を取り決定の説と作さん、当に知るべし此の人は三世の諸仏の怨なり速かに我が法を滅せん」

云云、涅槃經の十四に云く「如来世尊は方便有り無常を常と説き常を無常と説き樂を説いて苦と為し苦を説いて樂と為し不浄を浄と説き浄を不浄と説き我を無我と説き無我を我と説き非衆生に於て説いて衆生と為し実の衆生に於て非衆生と説き非物を物と説き物を非物と説き非実を実と説き実を非実と説き非境を境と説き境を非境と説き非生を生と説き生を非生と説き乃至無明を明と説き明を無明と説き非色を色と説き色を非色と説き非道を道と説き道を非道と説く」云云。

父は月淨轉輪王鼓音声陀羅尼經の説なり

淨土宗の阿弥陀

誓願は執持名号往生極樂

正覺は十劫已来なり

父は大通智勝仏なり

法華宗の阿弥陀

誓願は常樂の説は妙法蓮華經なり

正覺は三千塵点劫なり

薬王品に云く「若し女人有つて是の經典を聞いて説の如く修行せば此に於て命終して即ち安樂世界阿弥陀仏大菩薩衆の圍繞せる住処に往き蓮華の中宝坐の上に生ず」云云、疏記の十に云く「若し女人有つて等とは此の中只是の經を聞くことを得、説の如く修行すと云う即ち浄土の因更に觀經等を指すことを須いざるなり、問う如何が修行する答う既に如説修行と云う即ち經に依て行を立つ具さに分別功德品の中直ちに此の土を觀ずるに四土具足するが如し故に此の仏身即三身なり」云云、自在所欲生に云云、方便品に云く「舍利弗、如来但一仏乘を以ての故に衆生のために法を説く余乗の若しは二若しは三有ること無し」云云、安樂行品に云く「無量の國中に於て乃至名字を聞くことを得可からず」陀羅尼品に云く「汝等但能く法華の名を受持せし者を擁護せんすら福量る可からず」釈籤の一に云く「名は即ち是体文字解脱なり」又云く「次に經題を釈す初めには妙法の兩字は通じて本迹を詮す蓮華の兩字は通じて本迹を誓う」疏記の一に云く「妙法の唱は唯だ正宗のみに非ず二十八品俱に妙法と名くが故に、故に品品の内に咸く体等を具し句句の下に通じて妙名を結す」云云、薬王品に云く「若し復人有つて七宝を以て三千大千世界に満てて仏及び大菩薩、辟支仏、阿羅漢に供養せん是の人の得る所の功德此の法華經の乃至一四句偈を受持する其の福最も多きに如かず」又云く「能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦為れ第一なり」又云く「此の經は能く一切衆生を救う者なり此の經は能く一切衆生をして諸の苦惱を離れしむ此の經は能く大に一切衆生を饒益して其の願を充滿す」と勸発品に云く「若し復是の經典を受持する者を見て其の過惡を出さば若しは実若しは不実にもあれ此の人は現世に白癩の病を得ん、若し之を

輕笑すること有らん者は当に世世に牙齒疎き欠け醜脣平鼻・手脚繚戾し眼目角・身体臭穢にして惡瘡・血・水・腹・短氣・諸の惡重病あるべし、是の故に普賢若し是の經典を受持する者を見ては當に起つて遠く迎えて當に仏を敬うが如くすべし、涅槃經の十三に云く「我爾の時に於て思惟し坐禅し無量歳を経れども亦如来出世の大乗經の名有ることを聞かず、文句の五に云く「所以は經に出でたり人の語を信ずること勿れ」と同三に云く「たとい百千種の師あつて一一の師・百千種の説を作すとも是れ權ならざるは無し、如来の所説有る尚復是れ權なり況や復人師をや、寧ろ權に非ざることを得んや前に出す所の如きは悉く皆權なり」

一、念仏者謗法罪を作る事 法然の選択に云く「道綽・禪師・聖道・淨土の二門を立て聖道を捨てて正しく淨土に歸するの文、初めに聖道門と云うは之に就いて一有り、乃至之に准じて之を思うに応に密大及実大を存すべし、然れば則ち今真言・信心・天台・華嚴・三論・法相・地論・撰論此等の家の意正しく此に在り、淨土宗の學者先ず須らく此の旨を知るべし、設い先ず聖道門を學するの人なりと雖も若し淨土門に於て其の志有らん者は須らく聖道を棄てて淨土に皈すべし、善導和尚・正維二行を立て雜行を捨てて正行に皈するの文、第一に誦誦雜行と云うは上の觀經等の往生淨土の經を除いて已外・大小乘・顯密の諸經に於て受持し誦誦するを悉く誦誦雜行と名く、乃至第三に禮拜雜行と云うは上の弥陀を禮拜するを除いて已外・自余一切諸余の仏菩薩等及び諸の世天等に於て禮拜し恭敬するを悉く禮拜雜行と名け、第四に稱名雜行とは上の弥陀の名号を稱するを除いて已外・自余一切の仏菩薩等及び諸の世天等の名号を稱するを悉く稱名雜行と名け、第五に讚歎供養雜行と云うは上の弥陀・自余一切諸余の仏菩薩及び諸の世天等に於て讚歎し供養するを悉く讚歎供養雜行と名く、乃至、此の文を見るに彌須らく雜を捨てて專を修すべし、豈百即百生の專修の正行を捨てて堅く千中無一の雜修雜行を執せんや、又云く貞元入藏錄の中に始め大般若經

六百卷より終り法常住經に至るまで顯密の大乗經惣べて六百三十七部・二千八百八十三卷なり皆須らく誦誦大乘の句に撰すべし夫れ速かに生死を離れんと欲せば二種の勝法の中且らく聖道門を闇いて選んで浄土門に入れ浄土門に入らんと欲せば正雜二行の中に且らく諸の雜行を抛つて選んで正行に皈すべし云云、大論に云く「自法愛染の故に他人の法を毀皆す持戒の行人と雖も地獄の苦を脱れず云云、法華經に云く「当來世の惡人は仏の一乘を説き給つを聞いて迷惑して信受せず法を破して惡道に墮せん」又云く「法を破して信ぜざるが故に三惡道に墮ちなん」雙觀經に云く「設い我仏を得るも十方衆生の至心に信樂して我が國に生ぜんと欲して乃至十念せんに若し生ぜずんば正覺を取らじ唯五逆と誹謗正法を除く」譬喻品に云く「若し人あつて信ぜずして此の經を毀謗するときは則ち一切世間の仏種を斷ず其人命終して阿鼻獄に入り一劫を具足して劫盡きて更に生ぜん是くの如く展轉して無數劫に至らんと文句に云く「今經に小善成仏を明かす此の緣因を取つて仏種と為す、若し小善成仏を信ぜずんば則ち一切世間の仏種を斷ずるなり」云云。

一、眞言師謗法罪を作る事

秘藏宝鑰の上に云く十住心とは、

- | | | | |
|---------|------|---------|------|
| 一 異生羝羊心 | 凡夫惡人 | 二 愚童持齋心 | 凡夫善人 |
| 三 嬰童無畏心 | 外道 | 四 唯蕘無我心 | 声聞 |
| 五 拔業因種心 | 緣覺 | 六 他緣大乘心 | 法相宗 |
| 七 覺心不生心 | 三論宗 | 八 如實一道心 | 法華宗 |
| 九 極無自性心 | 華嚴宗 | 十 秘密莊嚴心 | 眞言宗 |

又云く「他緣以後は大乗の心なり大乘において前の二は菩薩乘、後の二は仏乘なり此くの如きの乘乘は自乘には

仏の名を得れども後に望むれば戲論と作る云云、又云く「人を謗し法を謗すれば定めて阿鼻獄に墮ちて更に出ずる期無し、世人斯の義を知らずして舌に任せて輒すく談じて深害を顧みず寧ろ日夜に十惡・五逆を作るべしとも一言一語も人法を謗す可からず」云云、大日經に云く「仏不思議の眞言相道の法を説くに一切の声聞・縁覺を共にせず亦普く一切衆生の爲にするに非ず」法華經の二に云く「汝等若し能く此の語を信受せば一切皆當に仏道を成ずることを得べし是の乘微妙にして清淨第一なり」云云、又云く「此の法華經は是れ諸の如来第一の説・諸説の中に於て最も甚深なり」又云く「此の法華經は諸仏如来の秘密の蔵・諸經の中に於て最も其の上に在り」六波羅蜜經に五蔵五味を説く、私に云く此の經は天台御入滅已後百余年に天竺より漢土に來れり爾れば見ざる經の醍醐を盗むと書くは謬失なり弘法の二教論の下に云く「喻して曰く今斯の經文に依らば仏五味を以て五蔵に配當し惣持を醍醐と稱し四味を四蔵に譬え給えり、振旦の大師等醍醐を争ひ盗んで各自宗に名く若し斯の經を鑒みば則ち掩耳の智割割を待たじ」云云、又云く「毘盧遮那經の疏に順ぜば阿字を釈す」云云、私に云く「毘盧遮那經疏供養法の卷は竜樹入滅已後八百年の造疏なり、而るに菩提心論に此の事を引き載せたり故に知んぬ菩提心論は竜樹の釈に非るなり又云く「唯眞言法の中にのみ即身成仏するが故に是三摩地の法を説く諸教の中に於て闕いて書せず」云云。

一、眞言は別仏の説に非る事

大日經の一の卷の五仏は中央は大日如来と説く同五卷の五仏は中央は毘盧遮那と説く第一の卷の五仏は中央は釈迦牟尼仏と説く、文句の九に云く普賢觀は法華を結成す文に云く「釈迦牟尼仏を毘盧遮那と名くと、乃ち是れ異名なり別体なるに非ざるなり、安然の教時義に云く「眞言宗の本地毘盧遮那は即ち天台宗の妙法蓮華經・最深密処同仏なり、智証大師の授決集に云く「眞言・禪門・華嚴・三論・唯識・律宗・成俱の二論等は若し法華・涅槃經等

の經に望むれば是れ摂引の門なり云云、金剛頂經に云く「婆伽梵釈迦牟尼如来一切平等に善く通達するが故に一切方を平等に觀察して四方に坐し給う不動如来・宝生如来・觀自在王如来・不空成就如来云云、大日經普通真言藏品の四に云く「時に釈迦牟尼世尊宝处三昧に入つて自心及び眷屬の眞言を説き給う」文、大日經の第二に云く

「我昔道場に坐して四魔を降伏し大勤勇の声を以て衆生の怖畏を除く、是の時梵天等心喜共に称説す此れに由つて諸の世間号して大勤勇と名く我本不生を覺る云云、前唐院金剛頂經の疏に云く「成仏已来甚大久遠なり未だ所經の劫数を説かざる所以は經に於て各傍正の義有り故に彼の法華の久遠の成仏も亦是れ此の經の毘盧遮那仏

と異解す可からず」云云、仏法伝来の次第に云く「大師智拳印を結びて南方に向かう面門俄かに開けて金色の毘盧遮那と成り即便ち本体に還歸す」云云、涅槃經の七の卷に仏迦葉に告げ給わく「我般涅槃して七百歳の後はの摩波旬漸く當に我が正法を壊乱すべし、乃至化して阿羅漢の身及び仏の色身と作らん魔王此の有漏の形を以て無漏の身と作りて我が正法を壊らん」云云。

一、禪宗謗罪を作す事

円覺經に云く「修多羅の教は月を標す指の如し」文方便品に云く「或は修多羅を説く衆生に隨順して説く大乘に入るに為れ本なり」梵天王問仏決疑經に云く「梵天・靈山会上に至つて金色の沙羅華を以て仏に獻り仏群生の為に法を説き給えと請す世尊坐に登り華を拈して衆に示して青蓮の目を瞬す天人百万悉く皆措くこと罔し独り

金色の頭陀破顔微笑す、世尊の言く吾に正法眼蔵・涅槃妙心・実相微妙の法門有り文字を立てず教外別伝・摩訶迦葉に付属す」云云、是は中天竺なり仏の御入滅は北天竺拘尸那城なり、涅槃經の一に云く「爾の時に閻浮提の中の比丘・比丘尼一切皆集る唯尊者摩訶迦葉・阿難の二衆を除く」同經の三に云く「若し法宝を以て阿難及び諸の比丘に付属し給う久住することを得ず何を以ての故に一切声聞及大迦葉は悉く當に無常なるべし彼の老人の他の

寄物を受くるが如し、是の故に無上の仏法を以て諸の菩薩に付属すべし云云、像法決疑經に云く「諸の惡比丘、或は禪を修修すること有るも經論に依らず、自ら己見を逐つて非を以て是と爲し是れ邪是れ正を分別すること能わず、遍く道俗に向つて是くの如き言を作さん我能く是を知り我能く是を見ると、當に知るべし此の人は速かに我が法を滅せん乃至地獄に入ること猶箭を射るが如し云云、弘決一の下に云く「世人多く坐禪安心を以て名けて発心となす、此の人都て未だ所縁の境を識らず所期の果無ければ全く上求無し大悲を識らざれば全く下化無し、是の故に発心は大悲より起るなり云云、天台の止觀の五に云く「又一種の禪人他の根性に達せずして純ら乳藥を教ゆ体心踏心、和融覺覓若しは泯若しは了斯れ一轍の意なり障難万途紛然として識らず纔かに異相を見て即ち是れ道と判ずみずかほうきあらまたしゅうたるを闕く盲跛の師徒二り俱に墮落す瞽瞍の夜遊甚だ憐愍す可し云云、自ら法器に非ず復他に匠たるを闕く盲跛の師徒二り俱に墮落す瞽瞍の夜遊甚だ憐愍す可し云云、弘決の一に云く「世人、教を蔑にし理觀を尙ぶ者、れるかな、れるかな、方便品に云く「諸法実相、所謂諸法、如是相、如是性、如是体、如是力、乃至如是本末究竟等云云、妙樂大師の金論に云く「実相は必ず諸法、諸法は必ず十如、十如は必ず十界、十界は必ず身土なり云云、疏記の十に云く「直ちに此の土を觀するに四土具足す故に此の仏身即ち三身なり云云。

一、権実証拠の事

玄義の二に云く「則ち百法界、千如是有り束ねて五差と爲す一に惡、二に善、三に二乘、四に菩薩、五に仏なり、判じて二法と爲す前の四は是れ権法、後の一は是れ実法云云、釈籤の二に云く「九界を權と爲し仏界を實と爲す云云、秀句の下に云く「定性と不定性は位の高下に依り成仏と不成仏は經の權實に依る文句の九に云く漸頓の益は虚なり云云、記の九に云く「權を擧げて界を出るを名けて虚出と爲す云云、玄義の九に云く「化他の因果は仏菩提を致すこと能わず是の故に取て並べ用いず化他の權實も亦他をして極に至らしむること能わず亦取る

応らず「云云、止観の二に云く」権の権は実の権に非ず実の権と成ることを得可し権の実は実の実に非ず実の実と成ることを得べからず「云云。

一、権実分別の事

一に玄義の一に云く「蓮の爲の故に華・実の爲に権を施すを譬う、権は即ち是れ苗文に云く種種の道を示すと雖も其れ
實には仏乗の爲なり「云云、二に又云く「華敷は権を開するを譬う蓮現は実を顕すを譬う権実共に稲なり文に云く方便
の門を開いて真実の相を示す「云云、三に又云く「華落は権を廃するを譬う蓮成は実を立つるを
譬う実独り真米なり文に云く正直に方便を捨てて但無上の道を説く「云云、釈籤の一に云く「開廢俱時なり開の時已に
廃するが故なり「云云、又云く「開の時即ち廃す「又云く「既に実を識り已れば永く権を用いず「云云。

一、破三顯一の事

方便品に云く「仏乗に於て分別して三と説く「云云、玄義の九に云く「廢三顯実「又云く「施権「方便品に云く「二も
無く亦三も無し仏の方便説を除く「云云涅槃經の二十三に云く「實には三乗無し顛倒心の故に三乗有りと云う、一実の
道は眞實にして虚ならず顛倒心の故に一実無しと云う「云云、方便品に云く「尚二乗無し何に況や三有らんや「云云。

一、入如来慧の事

法華經に云く「是の諸の衆生世世より已來常に我が化を受く此の諸の衆生始めて我が身を見て我が所説を聞いて即ち
皆信受して如来の慧に入る先より修習して小乗を学する者を除く「云云、文句の九に云く「根利にして徳厚く世世已來
常に大化を受け始めて我が身を見て即ち華嚴を稟けて如来慧に入る菓熟して零ち易し「云云、釈籤の十に云く「当に知る
べし法華は部に約するときは則ち華嚴般若を破す「云云。

一、余深法中の事

嘱累品に云く「若し衆生有て信受せざらん者には当に如來の余の深法の中に於て示教利喜すべし」文句の七に云く「示教利喜・示は即ち示轉・教は即ち勸轉・利喜は即ち証轉なり」、玄義の六に云く「余とは方便を帶するなり深とは中道を明すなり方便を帶して中道を明すは即ち別教なり」云云、又云く「但為に實を弘むるに而も衆生信ぜず須らく實の為に權を施すべし」釈籤の六に云く「有深復余とは即ち別教の法なり入地を深と名け地前を余と名く」云云、文句の十に云く「汝能く余深の法を以て仏慧を助申せば即ち善巧に仏の恩を報ず」云云、疏記の十に云く「以偏助円は則ち此の意なり此の經の上下一切皆然なり人之を見ずして三乘有りと謂うは謬れり」云云。

一、三種教相の事

玄義に「教相を三と為す一に根性の融不融の相・二に化導の始終不始終の相・三に師弟の遠近不遠近の相」云云、釈籤の一に云く「前の兩意は迹門に約し後の一意は本門に約す」云云、寂滅道場を以て元始と為す方便以下の五品の意なり。

第一、根性融「法華」不融「爾前」の相

華嚴・阿含・方等・般若・法華・各得道有り種熟脱を論ぜず、釈籤の一に云く「又今文の諸義は凡そ一の科皆先ず四教に約して以て麁妙を判ずるときは則ち前三を麁と為し後一を妙と為す次に五味に約して以て麁妙を判ずるときは則ち前四味を麁と為し醍醐を妙と為す、全く上下の文意を推求せずして直ちに一語を指して法華は華嚴より劣れりと謂えるは幾許のりぞや」云云。

華嚴は一麁一妙

相待妙

麁妙を判ず

阿含は單麁

無妙

方等は二麁一妙 相待妙 麁妙を判ず
般若は一麁一妙 相待妙 麁妙を判ず
法華は一妙有り 相待妙は 麁妙を判ず
絶待妙は 麁を開して妙を顕わす

釈籤の十に云く「唯法華に至つて前教の意を説いて今教の意を顕わす」、玄義の二に云く「此の妙彼の妙の義殊なること無し、約教相待前三を麁と為し後二を妙と為す、但方便を帶すると方便を帶せざるを以て異と為すのみ」云云、約部相前四味を麁と為し醍醐を妙と為す、同十に云く「初後の仏慧円頓の義齋し一往の釈、文句の五に云く「今の如く始の如く今の如く二無く異無し」云云、弘決の五に云く「惑者未だ見ず尚華嚴を指す唯華嚴円頓の名を知つて彼の部の兼帶の説に味し全く法華絶待の意を失う」云云、釈籤の二に云く「故に諸味の中円融有りと雖も全く二妙無し」と同三に云く「若し

但四教の中の円を判じて之を名けて妙と為す諸経に皆是くの如きの円の義有り何ぞ妙と称せざる故に復更に部に約し味に約して方に今經の教も円部も円なることを顯わすべし、若し教に約せざれば則ち教の妙を知らず若し味に約せざれば則ち部の妙を知らず、爾前の相待妙とは前三を威通別麁と為し後一円を妙と為す」云云、法華の相待妙とは前四味華嚴阿含方等般若を麁と為し醍醐を妙と為す三千塵点大通を以て元始と為す。

第二、化導始・中間終・靈山の初住・不始終の相 化城喻品の意なり

種熟脱を論ず種は大通なり熟は中間乃至今日の四味なり脱は今法華なり玄の二に云く「異とは余教は当機益物にして如来施化の意を説かず此の經は仏の教を設け給う元始巧みに衆生の為に頓漸不定顯密の種子を作す

を明す」云云、釈籤の二に云く「漸及び不定に寄すと雖も余教を以て種と為さず故に巧為と云う」止觀の二に云く「若し初業に常を知るを作さずんば三蔵の帰戒羯磨悉く成就せず」と、弘決の二に云く「今日の声聞禁戒を

具ぐすることは良よに久遠くおんの初業しよくに常じょうを聞くに由よる若もし昔聞しよききこかずんば小尚具せうなぐせず況いはんやまたや復大ふくたをやを云いふ弘決くけつの二にに云いふ若もし全ぜんく未いまだ曾かつて大乘だいじやうの常じょうを聞きかずんば既すでに小果無せうくわなし誰たれか禁戒きんかいの具ぐ不具ふぐを論ろんぜんやを云いふ又また云いふ羯磨かつまつ不成ふせうと言いふは所謂しよゐる久遠くおん必ず大無だいなしんば則すなわち小乘しよじやうの乗のりる法はふを成なりぜざらしめん本無ほんなしきを以もつての故ゆゑに諸行成しよぎやうぜざること樹じゆの根無こんなしければ華果けかを成なりぜざるが如ごとし、時機未じきいまだ熟じやくせずんば權けんに小せうの名なを立つ汝等なんじの行ぎやうずる所こ是これ菩薩ぼさつの道だう、始めて記きを得えて方まさに大人だいにんと名なくるに非あらずしやくせん「釈籤しやくせんの二にに云いふ法譬はふび二周得益とくやくの徒やからは往日結縁けちえんの輩やからに非あらること莫なし二云いふ。

五百塵点久遠じんでんくおんを以もつて元始げんしと為なす寿量品じゆりやうひんの意いなり

五百塵点靈山じんでんりやうしやんの中間ちゆうかん

第三だいしに師弟しだいの遠近おんこんふおんこん不遠近ふおんこんの相さう

種熟脱しゆじやくだつを論ろんず

種しゆは久遠くおん熟じやくは過去かこ脱だつは近きんく世世番番しよしよばんばんの成道じやうだう今日けふの法華はふけなり

玄義げんぎの二にに云いふ「又衆經しゆじやうきやうに咸いっとう云いふ道樹だうじゆに師しの実智じつち始めて満みじ道樹だうじゆを起たてて始めて權智けんちを施ほどこす今の經きんじゆは師しの權實けんじつ道樹だうじゆの前ぜんに在ありて久くに已すでに満みすと明あきらかす、諸經しよきやうに明あきらかす二乘にじやうの弟子でしは實智じつちに入いることを得えず亦權智またけんちを施ほどこすこと能あたわらず、今の經きんじゆに明あきらかす弟子でしの入実はなはだは甚まただ久くし、亦先またより解げして權けんを行おこなふ、又衆經しよきやうは尚道樹なほだうじゆの前ぜんの師しと弟子でしとの近きんこん

の權實けんじつを論ろんぜず況いはんやまたや復た遠遠おんおんをや、今の經きんじゆは道樹だうじゆの前ぜんの權實けんじつ長遠ちやうおんなることを明あきらかす補処ふしよせかい世界せかいを数かずつるに知らず況いはんやまたや其その塵数じんじゆをやを經きんじゆに云いふ昔未しよきだ曾かつて説しやくざる所ところ今皆當けふみなまに聞きこくことを得えべし慇懃おんこんに稱讚しやうさんすること良よに所以ゆゑん有あるなり、當まに知るべし此この經きんじゆは諸經しよきやうに異なることを「釈籤しやくせんの二にに云いふ二乘猶小果にじやうしよくに住す故ゆゑに不入ふにと云いふ豈あにに能よく他た

を化くわせんや、故ゆゑに權けんを施ほどこさず、次に今經けふきんじゆを明あきらかす満願等まんがんの如ごとき先すに已すでに実じつに入る説法せふはふ第一だいじなり、故ゆゑに先すより解げして權けんを行おこなふことを「弘くわの七しちに云いふ過去かこに種しゆを下くだすは現在げんざいに重かさねて聞きこいて成熟じやくじゆの益えきを得え、未だ曾かつて種しゆを

下さざるは現在に種を成じ未来に方に益す故に三世の益皆法輪に因る」と藥草喻品に云く「汝等が所行は是れ菩薩の道なり漸漸に修學して悉く當に成仏すべし」云云、記の一に云く「一時・説・一念の中・三世・九世・種熟脱の三あり」弟子品に云く「諸の比丘諦かに聴け仏子所行の道善く方便を學ぶが故に思議することを得可からず衆の小法を樂つて而して大智を畏るることを知る、是の故に諸の菩薩・聲聞・緣覺と作る無数の方便を以て諸の衆生の類を化す」云云、又云く「内に菩薩の行を秘し外に是れ聲聞なることを現す小欲にして生死を厭えども実には自ら仏土を淨む、衆に三毒有ることを示し又邪見の相を現す我が弟子是くの如く方便して衆生を度す」云云、方便品に云く「大乘に入る為れ本なり」云云、分別功德品に云く「願わくば我未來に於て長寿を以て衆生を度せん」云云、玄義の七に云く「但本極の法身微妙深遠なり仏若し説かずんば弥勒尚暗し何に況や下地をや何に況や凡夫をや」云云、伝教大師の秀句の下に云く「浅は易し深は難し釈迦の所判なり浅を去つて深に就くは丈夫の心なり天台大師は釈迦に信順して法華宗を助けて震旦に敷揚し觀山の一家は天台に相承して法華宗を助けて日本に弘通す」云云、又云く「謹みて法華經・法師品の偈を案ずるに云く藥王今汝に告ぐ我が所説の諸經而も此の經の中に於て法華最も第一なり」已上當に知るべし斯の法華經は諸經の中の最為第一なり」と、釈迦世尊宗を立つるの言は法華を極と為す金口の校量なり深く信受す可きか。

八七

一代五時繼図

658p

大論に云く

百卷華嚴菩薩の追如来滅後七百年出世の人なり

十九出家

三十成道

八十涅槃

涅槃經に云く

八十入滅

阿含經亦此の説有り云云、

兼説処は中天竺寂滅道場菩提樹下

權大乘

別教

六十卷

旧訳仏陀跋多羅三蔵の訳

三七日

八十卷

新訳実叉難陀三蔵の訳

華嚴經

円教

四十卷

乳味

結經は梵網經

他受用報身如来

旧訳の説

教主

毘盧遮那如来

新訳の説

所居の土は仮立実報土又は蓮華蔵世界と云う

愚法二乗經

一に小乗教

一切の小乗經を撰す

空

華嚴宗五教を立つ

二に大乘始教

方等部の經を撰す

不空

三に大乘終教

般若涅槃經を撰す

三乗の中の絶言の理を説く

四に頓教

一切經中の頓悟成仏の旨を撰す

別教一乗

五に円教

華嚴法華を撰す

馬鳴菩薩

起信論を造る

竜樹菩薩

十住毘婆沙論を造る

天親菩薩

十地論を造る

杜順和尚

終南山の住文殊の化身云云

智儼法師

至相寺の住

法蔵大師

京兆涼山大華寺の住「又賢首大師と云い又康蔵大師と云う」

澄観法師

「清涼山大華寺の住又清涼国師と云う」

審祥大和尚

「大安寺の住新羅国の人」日本最初伝

慈訓小僧都

明哲律師

良弁僧正

東大寺の本願

祖師

唐土

天竺

日本

等定大僧都そうず

道雄僧都どうゆうそうず

海印寺の住

一向小乘いっこうししょう

波羅奈国はらな

鹿野園ろくやおん

十二年説

酪味らくみ

四阿含經あこんきょう

但三藏教さんぞう

一に増一阿含あこん

人天の因果を明す
真寂の深義を明す
諸の禪定を明す
諸の外道を破す

結經は遺教經けつぎょういぎょう

有部顯宗六百頌うぶ

天竺の人なりてんじく

俱舍宗くしやしゅう

俱舍論三十卷三乘法を明かすくしや

世親菩薩の造如来滅後九百年の人なりせじんぼさつ

新訳しんやく

經部密宗十万頌・天親菩薩の造天竺には婆藪畔豆と云うなりてんじんぼさつ

玄奘三藏げんじょうさんぞう

旧訳くやく

光法師ほつし

宝法師ほうし

唐土もろこし

神泰

円暉

祖師そし

恵暉

道麟

善報

日本にほん

伝灯満位の勝貴えんりやく「延暦廿五年ほつそうしゅう法相宗に付す私ひそかに云く余抄いわに云う延暦十三年官付云云」

訶梨跋摩三蔵さんぞう天竺てんじくの人此こゝに師子鎧ししやういと云う

成実宗じやうじつしゅう

成実論十六卷「二十七賢聖けんせいの位を明す二百二品」

如来滅後九百年

羅什三蔵らじつさんぞう

唐土もろこし

僧叡

祖師そし

智蔵ちぞう開善寺の僧

日本にほん

伝灯満位の賢融えんりやく延暦二十五年さんろんしゅうとつだいじ三論宗東大寺僧に付す余抄いわに云く延暦十三年云云

律宗りつしゅう

如来成道五年にやらいじやうていごの後律を説く、僧祇律しきりつ之を説く、或は十二年あるの後須提こゝによつて戒律を制す四分律しふぶんりつ之を説く

一 曇無徳部

二 薩婆多部あるば

三 弥沙塞部

四 婆麗富羅部

五 迦葉遺部かしょう

五部を明あきらかす

五篇七聚を立つ

一には波羅夷

二には僧残

三には偷蘭遮

四には波逸提

五には波羅提提舍尼

六には突吉羅

七には惡說

一には波羅夷篇

二には僧伽婆尸沙篇

三には波逸提篇

四には波羅提提舍尼篇

五には突吉羅篇

多三藏

仏滅後三百年

道宣律師

弟子鑒真和尚

鑒真和尚は唐土の人なり、東大寺戒壇院を立てし人なり。

十六年説時不定

祖師

天竺

唐土

日本

蔵通別円

対

方等部

権大乘

生蘇味

結経は瓔珞経

又有相宗と云う

法相宗

解深密經

瑜伽論百卷 弥勒說無著筆

唯識論

「惣じては一切經に依り別し

ては六經十一部に依る」

三時教を立つ

有初 又有相教とも云う
空昔 又無相教とも云う

中今 又中道教とも云う

如来滅後九百年に出づ

天竺

弥勒菩薩

無著菩薩

世親菩薩

護法菩薩

戒賢論師

摩訶陀国の大那爛陀寺の人

祖師

法師

尚法師

弟子四人

光法師

唐土

玄奘三蔵

慈恩大師

智周法師

智鳳

義淵

基法師

日本

空晴

真喜

善議

勤操

觀經一卷

良耶舍の訳

宋の代

雙觀經二卷

康僧鎧の訳

魏の代

阿弥陀經一卷

鳩摩羅什の訳

後秦代

浄土宗

浄土論一卷

天親菩薩の造 菩提流支三藏の訳 天竺の人なり

天竺

菩提流支三藏

曇鸞法師

難行 易行を立てて一切の經論を撰するなり

道綽禪師

聖道 浄土の二門を立てて一切の經論を撰するなり

唐土

善導和尚

正雜の二行を立てて一切の經論を撰するなり

懷感禪師

群疑論を造つて一代の聖教を判ずるなり

小乘法師

已上、五人唐土の人なり

日本

法然上人

選択集「一卷」

「捨閉閣抛入開入販」

如来禪

楞伽經

金剛般若經等に依る、又は教禪とも云う

禪宗

祖師禪

教外別伝

不立文字云云

西天せいてんの二十八祖 別紙これあに之有り

祖そ師し

菩提ぼだい達磨だるま禅師ぜんぜん 天竺てんじくの人なり

惠可け禅師ぜんぜん

僧

東土とうど六祖

道信

弘忍

惠能

真言宗しんごんしゅう

胎藏界たいざうかい

七百余尊よそん

金剛界こんごうかい

五百余尊よそん

大日經だいにちきやう「六卷卅一品」善無畏三藏ぜんむいさんぞうの訳「開元かいげん四年中天竺てんじくの人なり」

供養法くやうぽうの巻を加えて七卷なり、一卷五品ごぼん

金剛頂經こんごうぢやうきやう「三卷・一品」金剛智三藏こんごうちさんぞうの訳「開元かいげん八年南天竺てんじくの人なり」

蘇悉地經そしつちきやう「三卷卅四品」善無畏三藏ぜんむいさんぞうの訳

菩提心論ぼだいしんろん「一卷七丁」竜猛菩薩りゆうもうぼさつの造不空ふくうの訳 或あるは不空ふくうの造

大日如来だいにちにょらい

金剛薩捶こんごうさつち

天竺てんじく

竜猛菩薩りゆうもうぼさつ

竜智 已上天竺てんじくの人なり

祖そ師し

唐もろこし土じ

日にほん本ん

善ぜん無む畏い三さん蔵ぞう

金こん剛ごう智ち

不ふ空くう

惠ゑ果くわ

弘こう法ぽう

真しん雅が

源げん仁じん

聖せい宝ぼう

淳じゅん祐ゆう

元げん果くわ

仁に海かい

成せい尊そん

義ぎ範はん

範はん俊しゅん

又くわい空かい海かいと云うう

五ご蔵ざう

一いちに組くみ多た覽らん蔵ざう「乳にゅう味み經きやう蔵ざう」阿あ難なんの結けつ集しゆ

二にに毘び奈な耶や蔵ざう「酪らく味み律りつ蔵ざう」優う婆ぱ利り

三さんに阿あ毘び達だつ磨ま蔵ざう「生しやう蘇そ味み論ろん蔵ざう」迦か旃せん延ねん

四しに般はん若にゃ波は羅ら蜜みつ多た蔵ざう「熟じゆく蘇そ味み文もん殊じゆ」華け嚴こん方ほう等とう般はん若にゃ法ほつ華け涅槃ねはん經きやうを撰せんするなり

弘法大師 義立

五に陀羅尼藏「醍醐味 金剛藏」大日經 金剛頂經 蘇悉地經を撰す

十住心

一 異生羝羊住心「凡夫惡人」

二 愚童持齋住心「凡夫善人」

三 嬰童無畏住心「外道」

四 唯蘊無我住心「聲聞」

五 拔業因種住心「緣覺」

六 他緣大乘住心「法相宗」

七 覺心不生住心「三論宗」

八 如實一道住心「法華宗」

九 極無自性住心「華嚴宗」

十 秘密莊嚴住心「真言宗」

般若部

通別円

帶

權大乘

十四年の説 或は三十年の説

熟蘇味

結經は仁王經

百論「二卷」提婆菩薩の造

中論「四卷」竜樹菩薩の造

十二門論「一卷」竜樹菩薩の造

三論宗

二蔵

大論だいろんを加えて四論宗とも云う。

一に声聞蔵しやもんぞう

一に根本法論こんぽんぽうろん

二に菩薩蔵ぼさつぞう

三転法論

二に枝末法論しまつぽうろん

文殊もんじゆ

三に撰末歸本法論せんぽんきほんぽうぽんぽうろん

馬鳴めみやう

竜樹りゆうじゆ

天竺てんじく

提婆だいば

竜智

清弁しやうべん

智光ちこう

羅什らじゆ

唐土もろこし

道朗

法朗

吉蔵きちぞう

「亦嘉祥大師またかじやうだいしと云う嘉祥寺かじやうじの僧なり」

観勒僧正かんろくそうじやう

百濟国くだらの人なり

恵灌

高麗国こまの人なり

日本にほん

善議ぜんぎ

勤操こんそう

法華經

妙法蓮華經
羅什三蔵の訳
正法華經
法護三蔵の訳
添品法華經
闍那笈多の訳
薩吽分陀梨法華
新訳

八箇年の説

実大乘

醍醐味

純円の説

結経は普賢經

法華宗

仏立宗

天台宗

依憑宗

曇無蜜多の訳 「宋代」

四教五時を立てて一代教を撰す

一に三蔵教 諸部小乗の実有の所説を撰す

華嚴 寅時
阿含 卯時
方等 辰時
般若 巳時
法華 午時

二に通教 つうきょう 諸部の如幻即空の旨を撰す しよ そく だいしやうなり りやうこく むね せつ
三に別教 べつきやう 諸部の大乘並びに歴劫行の所説を撰す しよ だいしやうなり しよせつ せつ
四に円教 えんきやう 諸部の大乘經の速疾頓成の所説を撰す しよ だいしやうきやう そくしつとんじやう しよせつ せつ

祖師 そし

天竺 てんしゆく 大覺世尊 だいかくせそん
竜樹菩薩 りゆうじゆぼさつ

唐土 もろこし 天台大師 てんだいだいし
章安大師 しやうあんたいし

日本 にほん 妙樂大師 みやうらくたいし
伝教大師 でんきやうたいし

涅槃經 ねはんぎやう

醍醐味 だいごみ

一日一夜の説

結經は像法決疑經 けつきやう ぞうぽうけつぎきやう

涅槃宗の祖師 ねはん そし

一虎丘の叟法師 ほつし

二愛法師 ほつし

三法雲法師 ほつしんほつし

「光宅寺の僧なり」 くわうたく

北七

一北地師

二菩提流支師 ぼだいりし

三光統法師 こうずほつし

四護身の法師 まも ほつし

五耆闍の法師 ほつし

六北地の禪師 ぜん

七北地の禪師 ぜん

法華の外は小乗の事

寿命品に云く小法を樂う徳薄垢重の者は人の為に我少きより出家して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く云云。
もんく 文句九に云く始成を説きたもつことは皆小法を樂える者と為すのみ云云。

疏記に云く但し近成を樂う者樂小の者と為すは華嚴の頓部諸味の中の内なり文。

天親菩薩の法華論に云く一往三蔵を名けて小乗と為し再往は三教を名けて小乗と為す文。

もんく 文句の九に云く小を樂う者は小乗の人に非ざるなり、乃ち是近説を樂う者を小と為すのみ文。

疏記の九に云く樂小法とは久近を以て相望して小と為す文。

秀句の下に云く仏滅度の後の六七百年の經宗論宗九百年の中の法相の二宗は歷劫修行を説いて衆生を引擧す是の故に未顕真実なり云云。

伝教大師の依憑集に云く新來の眞言家は則ち筆受の相承を泯し旧到の華嚴家は則ち影響の規模を隠し空の二論宗は彈呵の屈耻を忘れて称心の心酔を覆し、著有の法相宗は僕陽の帰依を非して青竜の判經を撥す云云。

秀句の下に云く誠に願くは一乗の君子仏説に依憑して口伝を信ずること莫れ、仰いで誠文を信じて偽会を信ずること莫れ、天台所釈の法華宗は諸宗に勝る寧ろ所伝を空うせんや、又云く謹みて無量義經を案ずるに云く次に方等十二部

經摩訶般若華嚴海空を説いて菩薩の歷劫修行を宣説す已上大唐の伝に云く方等十二部經とは法相宗

の所依の經なり、摩訶般若とは二論宗の所依の經なり、華嚴海空とは華嚴宗の所依の經なり俱に歷劫修行を説いて未だ大直道を知らず文。

妙樂大師の弘決の九に云く法華以前は猶是れ外道の弟子なり文。

伝教大師の守護章の上に云く妙法の外更に一句の経無し文。

智証大師授決集の上に云く経に大小無く理に偏円無からん一切人に依らば仏説無用ならん、若し然らずんば文に擲て伝つ可し己が父は国王に勝ると執すること莫れ、又他に劣ると謂うこと莫れ、然も家家の尊勝、国国の高貴大小各分齊有り、土を以て金と為せば家家に之有り金を以て金と為せば有無処を異にす、久成の本開権の妙法華独り妙に独り勝る、強いて抑えて之を喪し仏説を哽塞す如来を咎む合し伝者を非すること莫れ、又云く国国とは五味、家家とは四教八教なり文。

天台の玄義の十に云く若し余教を弘むるには教相を明さざれども義に於て傷むこと無し、法華を弘むるには教相を明さざれば文義闕くること有り、但聖意幽隱にして教法弥難し前代の諸師或は名匠に祖承し或は思い袖衿より出ず阡陌縦横なりと雖も孰れか是なることを知ること莫し、然るに義雙び立たず理兩つながら存する無し、若し深く所以有りて復修多羅と合する者は録して之を用ゆ文無く義無きは信受す可からずと。

一、開会の事

寿量品に云く諸の経方に依つて好き薬草の色香美味皆悉く具足するを求めて擣和合す文。

文句の九に云く経方とは即ち十二部経なり薬草は即ち教の所詮の八万の法門なり、香美味とは戒定慧なり、空観は擣くが如く仮観はうが如く中観は合するが如し文。

大經に云く衆流海に入りて同一鹹味故に海味と云う文。玄の三に云く諸水海に入れば同一鹹味なり、諸智如実智に入れば本の名字を失すと文。

一、是諸經之王と云う事

信解品に云く並びに親族、国王、大臣を会す。

もんく 文句の六に云く国王とは一切漸頓の諸経なり。

じよき 疏記の六に云く諸の小王を廢して唯一の王を立つ是の故に法華を王中の王と名く文。

ほっけ いぜん 一、法華已前の説を權と云う事

げんぎ 玄義の三に云く涅槃の聖行品に云く追つて衆經を分別す故に具に四種の四諦を説くなり、徳王品に追つて衆經を
みん 泯す文。

じゃくせん 釈籤の三に云く涅槃に追と言うは退なり劫つて更に前の諸味を分別す、泯とは合会なり法華より已前の諸経皆泯す此
すなわ 意は則ち法華の部に順ずるなり文。

ぐ いわ 弘の三に云く彼の經の四教皆常住を知る故に本意は円に在りと文。 げんぎ 玄義の四に云く法華の意を得る者は涅槃に於て
しだい 次第の五行を用いざるなり文。

ざぜん 一、常好坐禅と云う事

あんらくぎようほん 安樂行品に云く亦師と同ずることを樂わず常に坐禅を好む文。 ふげん 普賢經に云く専ら大乘を誦し三昧に入らず文、又
いわ そ 云く其の大乘經典を誦誦するもの有らば諸惡永く滅して仏恵より生ずるなり文。

てんだいしゅう あみだ 一、天台宗阿弥陀の事

ぐけつ 弘決の二に云く諸經の讚する所多く弥陀に在り故に西方を以て一准と為す文、私に云く此の釈・文殊説・文殊問の
りようきよう 兩經に依るなり、常坐三昧の下。

しかん 止觀の二に云く弥陀を唱つるは即ち是れ十方の仏を唱つる功德と等し但専ら弥陀を以て法門の主と為す、要を挙げ
これ のたま 之を言わば歩歩 声声 念念 唯阿弥陀仏に在り文、私に云く此の釈般舟三昧經に依るなり 常行三昧の下。

くせつもく
口説 の下。

又云く意に止観を論ぜば西方阿弥陀仏を念ず此れを去ること十萬億仏刹と文、此の釈般舟三昧の經の文に依るなり
常行三昧の下。

又云く陀羅尼咒を誦し三寶十仏を請じ摩訶袒持陀羅尼を思惟せよ文、此の釈は方等陀羅尼經に依る半行半坐の三昧の下。

又云く三寶・七仏・釈尊・弥陀・三陀羅尼・菩薩・聖衆を礼せよ、此の釈は諸經に依る非行・非坐三昧の下。
玄義の九に云く諸行は傍の実相を以て躰と爲し体行俱に麁なり文、又云く諸經の方法に依る常行等の行は傍を以て
體と爲す体行俱に麁なり文。

已上四十余年の經釈

止観の二に云く別に一卷有り法華三昧と名く是れ天台大師の著す所なり、世に流伝して行者之を宗ぶ、此れ則ち説
を兼ね復別に論ぜざるなり文。

法華三昧に云く道場の中に於て好き高座を敷き法華經一部を安置し亦未だ必ず形像・舍利並に余の經典を安ずるこ
とを須いす唯法華經を置け文。

止観の二に云く意の止観とは普賢觀に云く専ら大乘を誦して三昧に入らず日夜六時に六根の罪を懺す、安樂行品に
云く諸法に於て行ずる所無く亦不分別を行ぜざれ文。

法華經に云く乃至余經の一偈をも受けざれ文。

又云く復舍利を安ずることを須いす文。

一、天台念仏の事

止観の六に云く見思の惑即ち是れ仏法界なりと覺して法身を破せざるを念仏と名くと文。

止観二に云く意止観とは普賢觀に云く専ら大乘を誦し三昧に入らず日夜六時に六根の罪を懺す安樂行品に云く諸法に於て行ずる所無く亦不分別を行ぜざれ。

秀句の下に云く能化の竜女歷劫の行無し所化の衆生も亦歷劫無し文。

一、法華成仏の人数の事

二の卷舍利弗は華光如來三の卷迦葉は光明如來須菩提は名相如來迦旃延は閻浮那提金光如來目連は多摩羅跋旃檀香如來四の卷富樓那は法明如來陳如等の千二百は普明如來阿難は山海慧自在通王弘羅羅は蹈七宝華如來五の卷提婆達多は大天如來摩訶波闍波堤比丘尼は一切衆生喜見仏耶輸陀羅女は具足千万光相如來娑竭羅竜王の女の人歳の竜女は無照光如來の説なり提婆品に云く當時の衆会皆竜女を見る忽然の間に變じて男子と成て菩薩の行を具しすなわ南方無垢世界に往き宝蓮華に坐して等正覺を成じ三十二相八十種好普ねく十方一切衆生の為に妙法を演説て即ち南方無垢世界に往き宝蓮華に坐して等正覺を成じ三十二相八十種好普ねく十方一切衆生の為に妙法を演説す文。

又云く爾の時に娑婆世界の菩薩・声聞・天竜・八部・人と非人と皆遙かに彼の竜女の成仏して普ねく時の会の人天の為に法を説くを見て心大いに歡喜して遙かに敬礼す文。

一、四十余年の諸の經論に女人を嫌う事

華嚴經に云く女人は地獄の使なり能く仏の種子を斷つ外面は菩薩に以て内心は夜叉の如しと文。

又云く一び女人を見れば能く眼の功德を失う縦い大蛇を見ると雖も女人を見る可からずと文。

銀色女經に云く三世の諸仏の眼は大地に墮落すとも法界の諸の女人は永く成仏の期無らんと文。

華嚴經に云く女人を見れば眼大地に墮落す何に況や犯すこと一度せば三惡道に墮つ文。

十二仏名經に云く仮使法界に遍する大悲の諸菩薩も彼の女人の極業の障を降伏すること能わず文。

大論に云く女人を見ること一度なるすら永く輪廻の業を結ぶ、何に況や犯すこと一度せば定んで無間獄に墮すと文。

往生礼讃に云く女人と及び根欠と二乗種とは生ぜず文。

大論に云く女人は惡の根本なり一たび犯せば五百生彼の所生の処六趣の中に輪廻すと文。

華嚴經に云く女人は大魔王能く一切の人を食す現在には纏縛と作り後生は怨敵と為る文。

一、眞言を用いる事

伝教大師の依憑集の序に云く新來の眞言家は則ち筆受の相承を泯す文。

安然の教時義の第二に云く問う天台宗の遺唐の決義に云く此の大盧遮那經は天台五時の中に於て第三時方等部の撰なり彼の經の中に四乗を説くを以ての故に云云、此の義云何ん答う彼の決義に云く伝え聞く疏二十卷有り但未だ披見せず

云云、此は是れ未だ經意を知らざる誤判なり、何なれば天台第三時の方等教は四教相對して大を以て小を斥け円を以て

偏を弾ず、今日日經は応供正遍知衆生の樂に隨つて四乗の法及び八部法を説きたも是は一切智智一味云云、若し

爾らば法華と同じと謂う可し何に方等弾斥の教に撰するや文。

広修維の唐決に云く問う大毘盧遮那一部七卷薄伽梵如來加持広大金剛法界宮に住して一切の持金剛者の為に

之を演説す、大唐の中天竺國の三藏輪婆迦羅唐には言う善無畏と訳す、今疑う如來の所説始め華嚴より終り涅槃に

至るまで五時四教の為に統撰せざる所無し、今此の毘盧遮那經を以て何の部何の時何の教にか之を撰せん又法華の前

説とや為さん当に法華の後説とや為さん此の義云何、答う謹みて經文を尋ぬるに方等部に属す声聞緣覺に被らしむる

が故に不空縑索犬宝積犬集犬方等金光明維摩楞伽思益等の經と同味なり、四教四仏

四土を具す今毘盧遮那經法界宮に於て説くことを顯す、乃ち是れ法身寂光土なり勝に従つて名を受くるなり前後詳明す可し云云。

一、法華と諸經との勝劣の事

ほけきょう だいいち
法華經第一

ほんもん だいいち
本門第一

已今当第一なり、藥王今汝に告ぐ諸經の中に於て最も其の上に在り又云く我が所説の諸經此の經の中に於て法華最第一なり云云

しやくもん
迹門第二

ねはんきょう
涅槃經第二

しせ
是經出世

むりょうきょう
無量義經第三「次に方等十二部經を説く」

けこんきょう
華嚴經第四

はんぎきょう
般若經第五

そしちきょう
蘇悉地經第六されば、或は復大般若經を転読すること七遍、或は一百遍せよ

だいいちきょう
大日經第七 三國に未だ弘通せざる法門なり

一、鎮護國家の三部の事

ほけきょう
法華經

ふくうさんぞう だいれき
不空三藏大曆に法華寺に之を置く

みつてんきょう
密嚴經

とう だいれき
唐の大曆二年に護摩寺を改めて法華寺を立て中央に法華經

にんのきょう
仁王經

きょうじ
脇士に両部の大日なり

ほけきょう
法華經

すいこ
人王三十四代推古天王の御宇聖德太子

じょうみんきょう
浄名經

してんのう
四天王寺に之を置く摂津国難波郡

しやくまん
勝鬘經

ぶほつまいしき
仏法最初の寺なり

法華經

人王五十代桓武天皇の御宇伝教大師

金光明經

比叡山延暦寺止観院に之を置かる

仁王經

年分得度者二人 一人は遮那業

大日經

五十四代仁明天王の御宇

金剛頂經

慈覚大師比叡山東塔の西惣持院に之を置かる

蘇悉地經

御本尊は大日如来金蘇二疏十四卷之を安置せらる

一、悲華經の五百の大願等の事並びに示現等

第一百十三願に云く我来世穢惡土の中に於て當に作仏することを得べし則ち十方淨土の擯出の衆生を集めて我當に之を度すべしと文。

第一百十四願に云く我無始より來かた積集せる諸の大善根一分我が身に留めず悉く衆生に施さんと文。

第一百十五願に云く十法界の諸の衆生無始より來かた造作する所の極重五無間等の諸罪合して我が一人の罪と為す大地獄等に入つて大悲代つて苦を受けんと文。

悲華經に云く我が滅度の後末法の中に於て大明神と現じて広く衆生を度せんと文。

涅槃經の二に云く爾の時に如来 棺の中より手を出して阿難を招き密かに言く汝悲泣すること勿れ我還つて復閻浮に生じて大明神と現じて広く衆生を度せんと文。

又云く汝等悲泣すること莫れ遂に瞻部州に到つて衆生を度せんが為の故に大明神と示現せんと文。

悲華經に云く第五百願に我来世穢惡土の中に於て大明神と現じて當に衆生を度すべしと文。

大隅正八幡の石の銘に云く昔靈鷲山に在つて妙法華經を説く衆生を度せんが爲の故に大菩薩と示現すと文。

行教和尚の夢の記に云く阿弥陀三尊

延暦二十二年甲申春、

伝教大師渡海の願を遂げんが爲に筑前宇佐の神宮寺に向つて自ら法華經を講ず、即ち託宣して云く我此の法音を聞かずして久しく歳年を歴たり幸に和尚に値遇して正教を聞くことを得て至誠に隨喜す何ぞ徳を謝するに足らん苟くも我が所持の法衣有り即ち託宣の主、齋殿を開いて手に紫の袈裟一を捧げて和尚に上る、大悲力の故に幸に納受を垂れたまへ、是の時禰宜、祝等各各之を隨喜す元來此くの如きの奇事見ず聞かざるかなと、彼の施す所の法衣は山王院に在り文。

元慶元年丁酉十一月十三日權大宮司藤原実元女七歳にして託宣して云く我日本国を持ちて大明神と示現す本跡は

是れ釈迦如来なり。

延喜二年四月二日二歳計りの小兒に託宣して云く我無量劫自り以來度し難き衆生を教化す末度の衆生の爲に此の中に在つて大菩薩と示現すと文。

一、北野の天神法華經に歸して真言等を用いざる事

天神の託宣に云く吾円宗の法門に於て未だ心に飽かず仍つて遠忌追善に當て須く密壇を改めて法華八講を修すべきなり、所以に曼陀羅供を改めて法華八講を始め吉祥院の八講と号す是なり、彼の院は北野天神の御旧跡なり。

一、賀茂大明神法華を信ずる事

一条院の御時代記に之有り

恵心の僧都加茂社に七箇日參籠して出離生死の道は何れの經にか付く可きと祈誠有れば、示現して云く釈迦の説教は一乘に留り諸仏の成道は妙法に在り菩薩の六度は蓮華に在り二乗の作仏は此の經に在り文。

傳教大師加茂大明神に参詣して法華經を講ず甲冑をぬいで自ら布施給ひ畢んぬ。

文句の十に云く得聞是經不老不死とは此れ須らく觀解すべし不老は是れ樂不死は是れ常此の經を聞いて常樂の解を得文。

涅槃經の十三に云く是の諸の大乗方等經典は復無量の功德を成就すと雖も是の經に比せんと欲す喩と爲ることを得ず百倍千倍百千万億倍乃至算數譬喩も及ぶこと能わざる所なり、善男子譬えば牛より乳を出し乳より酪を出し酪より生蘇を出し生蘇より熟蘇を出し熟蘇より醍醐を出し醍醐最上なり、若し服すること有る者は衆病皆除く所有の諸藥悉く其の中に入るが如し、善男子、仏も亦是くの如し仏より十二部經を出生し十二部經より修多羅を出し修多羅より方等經を出し方等より般若波羅蜜を出し般若波羅蜜より大涅槃を出す猶醍醐の如し、醍醐と言ふは仏性を喩う仏性とは即ち是れ如来なり文。

一、金剛峯寺建立修業緣記に云く、吾人定の間知足天に往いて慈尊御前に参仕すること五十六億七千余歳の後慈尊下生の時必ず随從して吾が旧跡を見る可し此の峯等閑にすること勿れと文。

一、弘決に云く若し衆生生死を出でず仏乘を慕わずと知らば魔是の人に於て猶親想を生ずと文。

五百問論に云く大千界塵数の仏を殺すは其の罪尚輕し、此の經を毀謗すれば罪彼より多し永く地獄に入つて出期有ること無からん、誦誦の者を毀訾する亦復是くの如し文。

一、広宣流布す可き法華の事

傳教大師の守護章に云く正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乘の機今正しく是れ其の時なり何を以て知ることを得ん安樂行品に云く末世法滅時と文。

秀句の下に云く代を語れば則ち像の終り末の初め地を尋ねれば唐の東羯の西人を原ねれば則ち五濁の生・

鬪争の時なり、経に云く如来の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや、此の言良に所以有るなり文。

道暹和尚の輔正記に云く法華の教興れば権教即ち廃す日出れば星隠れ功なるを見て拙を知る文。

法華經の安樂行品に云く一切世間怨多くして信じ難し文。

藥王品に云く我滅度の後、後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん文。

勧発品に云く我今神通力を以ての故に是の經を守護して如来滅後閻浮提の内に於て広く流布せしめて断絶せざらしめ

んと文。

文句の一に云く但當時大利益を獲るのみに非ず後五百歳遠く妙道に沾わんと文。

一乗要決に云く日本一州、円機純一朝野遠近、同く一乗に歸し緇素貴賤悉く成仏を期す、安樂の広釈に云く彼の

天竺国には外道有つて仏道を信ぜず亦小乗有つて大乘を許さず、其の大唐国には道法有つて仏法を許さず亦小乗有つ

て大乘を許さず、我が日本国には皆大乘を信じて一人として成仏を願わざること有ること無し、瑜伽論に云く東方に

小国有つて唯大乘の機のみ有り豈我が国に非ずや文。

一、不謗人法の事

安樂行品に云く人及び經典の過を説くことを樂わざれ亦諸余の法師を輕慢せざれ文。

止觀の十に云く夫れ仏説に両説あり一に擯二に折、安樂行の長短を称ぜざるが如き是れ擯の義なり、大經の刀杖

を執持し乃至首を斬る是れ折の義なり、与奪途を殊にすと雖も俱に利益せしむ文。

弘決の十に云く夫れ仏法兩説等は、大經の執持刀杖等は第三に云く善男子正法を護持する者五戒を受けず威儀を

修せず乃至下の文は仙預国王等の文なり文。

文句の八に云く大經には偏に折伏を論じ一子地に住す何ぞ曾て損受無からん、此の經には偏に損受を明せど

も頭七分に破る折伏無きに非ず、各各一端を挙げて時に適うのみ文。

顕戒論の中に云く論じて曰く持品の上位は四行を用いず安樂の下位は必ず四行を修す摩訶薩の言定んで上下に通ずと文。

文句の八に云く持品は八万の大力忍力成ずる者此の土に弘經す新得記の者は他土に弘經す安樂行の一品文。

疏記の八に云く持品は即ち是れ惡世の方軌安樂行は即ち是れ始行の方軌なり故に住忍辱地等と云う、安樂行品に云く他人及び經典の過を説かざれ、他人の好惡長短を説かざれと文。

一、念仏の一切衆生の往生せざる事六、道輪廻の事

善導和尚の玄義分に云く問うて曰く未審定散の一善出でて何れの文にか在る今既に教備つて虚しからず何れの機か受くることを得る、答えて曰く解するに二義有り一には謗法と無信八難及び非人と此等は受けざるなり斯れ乃ち朽林頑石生潤の期有る可からず此等の衆生は必ず受化の義無し、斯れを除いて已外は一心に信樂して求めて往生を願ずれば上み一形を尽し下も十念を収む仏の願力に乗じて皆往かざると云うこと莫し文。

一、八難処の事

弘決の四に云く北州及び三惡に長寿天と並びに世智弁聰と仏前仏後と諸根不具を加う、是を八難と為すと文。善導の遺言に云く我毎日阿彌陀經六十卷念仏六万返懈怠無く三衣は身の皮の如く瓶鉢は両眼の如く諸の禁戒を保持一戒をも犯さず未来の弟子も亦然り、設し念仏すと雖も戒を持たざる者は往生即ち得難し、譬えば小舟に大石を載せ大惡風に向つて去るが如し、設し本願の船有りと雖も破戒の大石重きが故に岸に就くこと万が一な

り文。

観念法門經に云く酒肉五辛誓つて発願して手に捉らざれ口に喫らわざれ若し此の語に違せば即ち身口俱に惡瘡著かんと願せよ文。

法然上人の起請文に云く酒肉五辛を服して念仏を申さば予が門弟に非ずと文。

観念法門經に云く戒を持ちて西方弥陀を思念せよと文。

無量寿經に云く三心を具する者は必ず彼の国に生ずと文。

善導の釈に云く若し一心も少ければ即ち生ずることを得ずと明らかに知んぬ一少は是れ更に不可なることを、茲に因つて極樂に生ぜんと欲するの人は全く三心を具足す可きなり。

月藏經に云く我が末法の時の中の億億の衆生行を起し行を修すとも未だ一人も得る者有らず、当今は末法なり現に是れ五濁惡世なり唯淨土の一門のみ有つて通入す可きの路なり文。

遺教經に云く淨戒を持つ者は販賣貿易し田宅を安置し人民奴婢畜生を畜養することを得ざれ一切の種植及び諸の財宝 皆當に遠離すること火坑を避るが如くすべし草木を斬伐し墾土掘地することを得ざれ文。

善導和尚の所釈の観念法門經の酒肉五辛を禁ずる事の依經をいわば、無量寿經一に依り二卷十六觀經二に依り一卷、四紙の阿弥陀經三に依り一卷般舟三昧四に依り十往生經五に依り一卷淨土三昧經六に依る一卷

雙觀經の下に云く無智の人の中にして此の經を説かざれ文。

一、觀經と法華經との説時各別の事

善導和尚の疏の四に云く仏彼の經を説きたまいし時、処別時別、教別対機別、利益別なり又彼の經を説きたもう時は即ち觀經・弥陀經等を説き給う時に非ず文。

阿弥陀經に云く況や三惡道無し文、無三惡と説くと雖も修羅・人天之れ有り。

四十八願の第一に云く三惡趣も設し我れ仏を得んに国に地獄・餓鬼・畜生有らば正覺を取らじ。

第二の願に云く三惡道に更えらす極樂に於て又死す可しと云う設し我れ仏を得るも十方の無量不可思議の諸三惡道には正覺を取らじ文。

第三十五の願に云く聞名転女人往生せざる事設し我れ仏を得んに十方の無量不可思議の諸仏の世界に其れ女人有て我が名号を聞いて

歡喜信樂して菩提心を發して女身を厭惡せん寿終の後復女像と為らば正覺を取らじ文。

一、黒衣並びに平念珠地獄に墮つ可き事

法鼓經に云く黒衣の謗法なる必ず地獄に墮す文。

勢至經に云く平形の念珠を以ゆる者は此れは是れ外道の弟子なり我が弟子に非ず仏子我が遺弟必ず円形の念珠を

用ゆ可し次第を超越する者は妄語の罪に因つて必ず地獄に墮せん文。

一、天台の念仏の事

一 大意

二 釈名

三 鉢相

止観十章者

四 撰法

五 偏円

六 方便

七 正観

一 常坐三昧一文 殊説經文 殊問經に依る

二 本尊は阿弥陀はんじゆさんまい 常行三昧一般 舟三昧經に依る

三 本尊は別有 半行半坐三昧一方等 經法華經に依る

四 本尊は觀音 非行非坐三昧一説經説善説惡説無記

右四種三昧の次では先段に之を注す

八 果報 かほう

九 起教 ききょう

十 指帰 じき

止観の七に云く若し四種三昧修習の方便は通じて上に説くが如し、唯法華懺法のみ別して六時五悔に約して重ねて方便を作す今五悔に就いて其の位相を明す文。

弘決の七に云く四種三昧は通じて二十五法を用いて通の方便と為す、若し法華を行ずるには別して五悔を加う余行に通ぜず文。

第七の正修止観とは止の五に云く前の六重は修多羅に依つて以て妙解を開き今は妙解に依つて以て正行を立つ文。
十疑の第四に云く釈迦大師一代の説法処処の聖教に唯衆生心を專にして偏に阿弥陀仏を念じて西方極樂世界に生ぜんことを求めよと勧めたまえり文。

七疑に云く又聞く西国の伝に云く三りの菩薩有り一を無著と名け二を世親と名け三を獅子覺と名く文。
八疑に云く雜集論に云く若し安樂国土に生ぜんと願わば即ち往生を得る等文。

一、天台御臨終の事

止観の一に云く安禅として化す位五品に居す文。

弘決の一に云く安禅として化す位五品に居す等とは此れ臨終の行位を出すなり、禅定を出でずして端坐して滅を取る故に安禅として化すと云う文、又云く法華と觀無量寿の二部の經題を唱えしむ文、又云く香湯を索めて口を漱ぎ竟つて十如四不生・十法界・四教・三觀・四悉・四諦・十二縁を説くに一一の法門・一切の法を損す、吾今最後

に觀を策まし玄を談ず最後善寂なり。○跏趺して三宝の名を唱えて三昧に入るが如し即ち其の年十一月二十四日未の時、端坐して滅に入りたもつ文。

又云く大師生存に常に兜率に生ぜん事を願う臨終に乃ち觀音來迎すと云う、當に知るべし物に軌とり機に随い縁に順じて化を設く一准なる可からざることを文、又云く汝善根を種うるに嬾くして他の功德を問う盲の乳を問ひ蹴きたる者の路を訪うが如し実を告げて何の益かあらん文。

選択集の上に云く願くは西方の行者各其の意樂に随ひ或は法華を讀誦して以て往生の業と爲し、或は華嚴を讀誦して以て往生の業と爲し、或は遮那教主及び諸尊の法等を受持し讀誦して往生の業と爲し、或は般若・方等及び涅槃經等を解説し書寫して以て往生の業と爲す是れ則ち淨土宗觀無量壽經の意なり文。

又云く問うて曰く爾前經の中何ぞ法華を損するや、答えて曰く今言う所の損とは權實偏円等の義を論ずるに非ず、讀誦大乘の言は普く前後の大乘諸經に通ず文。

觀無量壽經に云く爾の時に王舎大城に一りの太子有す阿闍世と名く、調達惡友の教に隨順して父の王の頻婆沙羅を収執して幽閉して七重の室内に置く文。

法華經の序品に云く韋提希の子阿闍世王若干百千の眷屬と俱なり文。

惠心の往生要集の上に云く夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足なり道俗貴賤誰か歸せざらん、但顯密の教法其の文一に非ず事理の業因其の行惟れ多し利智精進の人は未だ難と爲さず、予が如き頑魯の者豈敢てせんや、是の故に念仏の一門に依つて聊か經論の要文を集め之を披らき之を修するに覺り易く行じ易し文。

惠心往生要集を破し二十二年已後に一乘要決を作る、一乘要決の上に云く諸乘の權實は古來の諍なり俱に經論に拠つて互に是非を執す、余寛弘丙午の歲冬十月病中に歎じて曰く仏法に遇うと雖も未だ仏意を了せず若し

終に手を空うせば後悔何ぞ追はん、爰に經論の文義賢哲の章疏、或は人をして尋ねしめ、或は自ら思忖す、全く自宗他宗の偏党を捨てて専ら権智実智の深奥を採るに遂に一乘は眞実の理、五乘は方便の説なることを得る者なり、既に今生の蒙を開く何ぞ夕死の恨を遺さん文。

一、念仏は末代に流布す可き事

雙觀經の下に云く、当來の世に經道滅尽せんに我慈悲を以て哀愍して特に此の經を留めて止住すること百歲ならん、其れ衆生有つて斯の經に値う者は意の所願に隨つて皆得度す可し文。

往生禮讚に云く、万年に三宝滅して此の經住すること百年、爾の時に聞いて一念もせば皆當に往生を得べし文。

慈恩大師の西方要決に云く、末法万年に余經悉く滅して弥陀の一經のみと文。

方便品に云く、深く虚妄の法に著して堅く受けて捨つ可からず、是くの如き人度し難しと文。

堅惠菩薩の宝性論に云く、過去謗法の障り不了義に執著すと文。

方便品に云く、若し余仏に遇わば此の法中に於て便ち決了することを得んと文。

玄の七に云く、南岳師の云く、初依を余仏と名く、無明未だ破せず之を名けて余と為す、能く如来秘密の藏を知つて深く円理を覺す之を名けて仏と為す文。

涅槃經疏十一に云く、人正法を得るが故に聖人と云うと文。

像法決疑經に云く、常施菩薩、初成道より乃至涅槃其の中間に於て如来の一句の法を説くを見ず、然るに諸の衆生は出沒、説法度人有りと見ると文。

二十五三昧・二十五有の略頌に曰く、四州・四惡趣・六欲並びに梵世・四禪・四無色・無想・五那含文。

一、漢土南北の十師 天台大師に帰伏する事

國清百録の第四に云く千年と復五百と復実^{また}に今日^{きょう}に在^あり南岳^{なんがく}の叡^{えい}聖天台^{しやうてんたい}の明哲昔^{めいしやく}は三業^{さんごう}を住持^{じゆぢ}し今は一尊^{しやうけい}に紹繼^{しやうけい}す豈止^{あに}だ甘露^{かんろ}を振旦^{しんたん}に灑^{そそ}ぐのみならん亦^{また}當^{たま}に法鼓^{はふこ}を天竺^{てんしゆく}に振^{みよ}つべし生知^{みよ}妙悟^{みよ}なり魏晉^{みよ}より以來^{このかた}典籍^{てんしやく}風謡^{ふうやう}實^{じつ}に連類^{れんるい}無し云云^{このかた}

乃^{ない}至^し禅衆^{ぜんしゆ}一百余僧^{いちやくしやう}と共に智者大師^{ちしやだいし}を請^{しやう}し奉^{たてまつ}る。

顓^こ川^{せんがわ}の人なり、後^ご則^{すなは}ち南荊^{なんしやう}州華容^{しやうじやう}県^{けん}に遷居^{せんきよ}す。

一、伝教大師^{でんきやうだいし}の一期略記^{いちきりやくき}に云く 桓武天皇^{くわんぶてんかう}の御宇^{ごう}、延暦^{えんりやく}廿一年^{にじふいちねん}壬午正月^{みづのえしんげつ}十九日^{じゅうくじゅうくにち}伝教大師^{でんきやうだいし}最澄^{さいしやう}高尾寺^{かうぶじ}に於^おて六宗^{りくしゆ}と諍^{しやう}し買^かめ破^やり畢^ひぬ。漢明^{かんめい}の年^{ねん}

教震旦^{きやうしんたん}に被^{おほ}り磯島^{いそじま}の代^{しろ}に訓本朝^{くんほんてう}に及^{およ}ぼす、聖德^{しやうとく}の皇子^{みこ}は靈山^{りやうざん}の聖衆^{しやうしゆ}にして衡岳^{けいがく}の後身^{ごしん}なり經^{きやう}を西隣^{しりん}に

請^こい道を東域^{とういき}に弘^{ひろ}む、智者^{ちしや} 禅師^{ぜんし}は亦^{また}共に靈山^{りやうざん}に侍^わし迹^{しやく}を台岳^{たいがく}に降^{くだ}り同^{どう}く法華^{ほふけ}三昧^{さんまい}を悟^しり以^{もつ}て諸仏^{しよぶつ}の妙旨^{めうし}を演^{えん}ぶる者^{もの}なり、竊^{ひそ}に天台^{たいたい}の玄疏^{げんしゆ}を見^みれば釈迦^{しやくかい}一代^{いちだい}の教^{きやう}を惣括^{そうかつ}して悉^{しつ}く其^{その}の趣^{しゆ}を顯^{あら}わし処^{ところ}として通^とぜざることを無^なし独^{ひとり}り諸宗^{しよしゆ}に逾^こえ

殊^{こと}に一道^{いちだう}を示^しす、其^{その}の中^{なかつ}の所説^{しよせつ}の甚深^{じんじん}の妙理^{めうり}・七箇^{しちかん}の大寺^{だいじ}・六宗^{りくしゆ}の学^{がく}匠^{しやう}昔^い未^{いま}だ聞^きかざる所^{ところ}曾^{かつ}て未^{いま}だ見^みざる所^{ところ}三論^{さんろん}法相^{ほふしやう}

の久年^{きうねん}の諍^{しやう}い渙^{くわん}焉^んとして氷^この如^{ごと}く釈^{しやく}け昭然^{しやうぜん}として既^{すで}に明^{あき}かなり雲霧^{うんむ}を披^{ひら}いて三光^{さんかう}を見る^みが猶^{なほ}し、

聖德^{しやうとく}の弘化^{くわくわ}より以降^{このかた}今^{いま}に二百余年^{にひやくにふしねん}の間^{かん}講^{きやう}ずる所^{ところ}の經論^{きやうろん}其^{その}の数^{かず}惟^{ただ}れ多^{おほ}し彼此^{かれこれ}理^りを争^{あら}つて其^{その}の疑^{うたが}未^{いま}だ解^{かい}けず、此^{この}の最妙^{さいめう}の

円宗^{えんしゆ}猶^{なほ}未^{いま}だ闡揚^{せんやう}せず、蓋^{けだ}し以^{もつ}れば此^{この}の間^{かん}の群生^{ぐんしやう}未^{いま}だ円味^{えんみ}に應^{おほ}ぜざるか、伏^{おも}して惟^{ただ}れば聖朝^{せいてう}久^{ひさ}しく如来^{にやらい}の付嘱^{ふしよく}を受け深^{ふそく}く

純^{じゆん}円^{えん}の機^きを結^{むす}ぶ一妙^{いちめう}の義理^{ぎり}始^はめて乃^{すなわ}ち興顯^{きやうけん}す、六宗^{りくしゆ}の学衆^{がくしゆ}初^はめて至極^{ししよく}を悟^しる、謂^いつべし此^{この}の

界^{がい}の含靈^{がんりやう}而^{しか}今^{いま}而^{しか}後^ご悉^{しつ}く妙^{めう}円^{えん}の船^{せん}に載^のつて早^{はや}く彼岸^{ひがん}に濟^{わた}ることを得^えと、如来^{にやらい}の成道^{じやうだう}四十余年^{しじふにふしねん}の後^ご乃^{すなわ}ち法華^{ほふけ}を説^いいて悉^{しつ}く

三乘^{さんじやう}の侶^りをして共に一乘^{いつじやう}の車^{くるま}に駕^かせしむるが猶^{なほ}し、善議^{ぜんぎ}等慶躍^{けいやく}の至^{いた}りに堪^たえず敢^{あへ}て表^へを奉^{たてまつ}つて陳謝^{ちんせ}以^{もつ}て聞^きす云云^{このかた}

秀句^{しゆく}の下^{した}に云^いく當^{あた}に知^しるべし已說^{いせつ}の四時^{しじ}の終^{しゆう}今說^{こんせつ}の無量義經^{むりやうぎきやう}當^{あた}說^{せつ}の涅槃經^{ねはんぎやう}は易信易解^{いしんいげ}なることを隨他意^{ずいたい}の故^{ゆゑ}に、此^{この}の

法華經^{ほふけきやう}は最^もも為^なれ難信難解^{なんしんなんげ}なり隨自意^{ずいじい}の故^{ゆゑ}に、隨自意^{ずいじい}の説^{せつ}は隨他意^{ずいたい}に勝^{まさ}る、但^{ただ}し無量義^{むりやうぎ}を隨他意^{ずいたい}と云^いふ

は未合の一边を指す余部の随他意に同じからざるなり文。

文句の八に云く已とは大品以上の漸頓の諸説なり今とは同一の座席謂く無量義経なり当とは謂く涅槃なり、大品等の漸頓は皆方便を帯すれば信を取ること易しと為す今無量義は一より無量を生ずれども無量未だ一に還らず是亦信じ易し、今の法華は法を論ずれば一切の差別融通して一法に帰す人を論ずれば則ち師弟の本迹俱に皆久遠なり、二門悉く昔と反すれば信じ難く解し難し、鋒に当る難事をば法華已に説く涅槃は後に在れば則ち信ず可きこと易し、秘要の蔵とは隠して説かざるを秘と為し一切を惣括するを要と為す真如実相の包蘊せるを蔵と為す、

不可分布とは法妙にして信じ難し深智には授く可し無智は罪を益す故に妄りに説く可らず、昔より已来未だ曾て顕説せずとは三蔵の中に於ては二乗の作仏を説かず、亦師弟の本迹を明かさず、方等般若には実相の蔵を説くと雖も亦未だ五乗の作仏を説かず、亦未だ発迹顕本せず頓漸の諸経皆未だ融会せず故に名けて秘と為す、此の経には具に昔秘する所の法を説く即ち是れ秘密蔵を開するに亦即ち是れ秘密蔵なり、此くの如きの秘蔵は未だ曾て顕説せず、如来在世猶多怨嫉といわば四十余年には即ち説くことを得ず今説かんと欲すと雖も而も五千尋いで即ち座を退く仏世すら尚爾り、何に況や未来をや理化し難きに在り。

楞伽經に云く我得道の夜より涅槃の夜に至るまで一字をも説かず文。

止觀の五に云く是の故に二夜一字を説かずと文、又云く仏二法に因つて此くの如きの説を作したもう縁自法と及び本住の法を謂う、自法とは彼の如来の得る所我亦之を得文、又云く文字を離るるとは仮名を離るるなり文。

法華に云く但仮の名字を以て衆生を引導したもう文。

玄義の五に云く惠能く惑を破し理を顯す理は惑を破すこと能わず、理若し惑を破せば一切衆生悉く理性を

具す何が故ぞ破せざる、若し此の恵を得れば則ち能く惑を破す故に智を用つて乗体と為す文。

弘の五に云く何の密語に依つて此くの如き説を作したもつ、仏の言く二の密語に依る請く自証法及び本住法なり、然るに一代の施化豈権智被物の教無からんや、但此の二に約して未だ曾て説有らざる故に不説と云うのみ文。籤の二に云く三に廃迹とは後の如く前の如し文を引く中初に諸仏の下同を引く為度の下正しく廃迹を明す、廃し已れば迹無し故に皆実と云う、実は只是れ本権は只是れ迹若し同異を弁ぜば広く第七の巻の如し文、籤の二に云く捨は只だ是れ廃故に知んぬ開と廃は名異躰同なることを文。

止の六に云く和光同塵は結縁の始め八相成道は以て其の終りを論ずと文。

弘の六に云く和光の下身を現ずるを釈するなり四住の塵に同じ処処に縁を結び浄土の因を作し利物の始めと為す、衆生機熟して八相成道す身を見法を聞き終に実益に至る文。

天照大神の託宣に云く

往昔勤修して仏道を成じ求願円満遍照尊閻浮に在つては王位を護り衆生を度せんが為に天照神。

八九 三論宗御書

691P

三論宗の始めて日本に渡りしは三十四代推古の御宇治す十年壬戌の十月百済の僧観勒之を渡す、日本記の太子の伝を見るに異義無し、但し三十七代との事は流布の始めなり、天台宗・律宗の渡れる事は天平勝宝六年甲午二月十六日丁未乃至四月に京に入り東大寺に入る天台止観等云云、諸伝之に同じ、人王第四十六代孝謙天皇の御宇なり聖武は義謬りなり書き直す可きか、戒壇は以て前に同じ、大日経の日本に渡れる事は弘法の遺告に云く「件の経王は大日本国高市郡久米道場の東塔の下に在り」云云、此れ又元政天皇の御宇なり、法華経の渡り始めし事は人王第三十四代推古の四年なり、太子惠慈法師に謂つて曰く「法華経の中に此の句落字」と云云、太子使を漢土に遣わし已前の法華経此の国に有るか、惟れ知んぬ欽明の御宇に渡る所の経の中に法華経有るなり、但し自ら御不審有る大事は所謂日本記に云く「欽明天皇十三年壬申冬十月十三日辛酉百济国聖明王始めて金銅釈迦像一軀を献ず」等云云、善光寺流記に云く「阿弥陀並びに観音勢至・欽明天皇の御宇治天下十三年壬申十月十三日辛酉百济国の明王伴の仏菩薩頂戴」と云云、相違欲「已下欠」

八九

十宗判名の事

692P

俱舎宗
くしゃしゅう

拙度宗

華嚴宗
けこんしゅう

迷経宗
まいきやうしゅう

半字宗

真言宗
しんごんしゅう

范宗

下劣宗
げれつ

法華宗
ほっけしゅう

仏立宗
ぶつりゅうしゅう

成実宗
じやうじつしゅう

驢牛和合乳宗
ろごわごう

法華宗

殺二世王
ころせにせおう

律宗
りつしゅう

驢乳宗
ろにゅうしゅう

禅宗
ぜんしゅう

趙高宗
てうかうしゅう

禽

法相宗
ほうそうしゅう

逆路宗
ぎやくろ

浄土宗
じやうどしゅう

梟鳥宗
きやうぢやうしゅう

獸

不孝宗
ふこうしゅう

背上向下宗
そむ

浄土宗

破鏡宗
はけい

三論宗
さんろんしゅう

捨本附末宗

九〇 五行御書ごしよ

不殺生戒ふさつしょうかい

肝臟

不飲酒戒おんじゆ

不妄語戒もうご

脾臟ひ

眼根がんこん

舌根ぜつこん

身根

酢味

苦味

甘味

東方とうほう

南方なんほう

中央

木

青色

火

赤色

土

黄色

春

夏

土用

青雲

赤雲

黄雲

魂

神

意

歳星

惑星

鎮星

金

不偷盜戒ちゅうとう

肺臟

不邪淫戒ふじゃいんかい

鼻根

耳根

辛味

味

西方さいほう

北方

白色

水

黑色

秋

冬

白雲

黒雲

魄

志

大白星

辰星

九一 浄土九品の事

695p

難行易行・聖道浄土・雜行 正行 諸行念仏、

法然房の料簡は諸行と念仏と相對なり、

二義、一には勝劣・一には難易 廃立

一に諸行を廢して念仏に歸せんが為に而も諸行を説くなり

助正

二に念仏を助成せんが為に而も諸行を説くなり

傍正

三に念仏諸行の二門に約して各三品を立てんが為に而も諸行を説くなり
若善導に依らば初を以て正と為すのみ

讀誦大乘

至誠心深心廻向發願心なり

上品上生

三種の心を發して即ち往生す
復三種の衆生有り當に往生を得べし

六念

天 施 戒 僧 法 仏

上品

一には慈心にして殺さず諸の戒行を具す

二には大乘方等經典を讀誦す

三には六念を修行す

法然の料簡に云く

華嚴經・方等經 般若經 法華經 涅槃經 大日經 深密經・楞嚴經 等の一切の大乗經は読誦
大乘の一句に摂尽す

解第一義

上品中生

善く義趣を解し第一義に於て一法然の料簡に云く一華嚴の唯心 法界法相の唯識三論の八
不真言の五相成身天台の一念三千 皆解第一義の一句に摂尽す

上品下生

法然の料簡一深信の因果に十界の因果を摂尽す

中品上生

五戒・八戒乃至諸戒を摂尽す

四阿含經・俱舍・成実・律宗は此の二品に摂尽す

中品

中品中生

八斎戒

儒教道教は此の二品に摂尽す

中品下生

孝養父母の行なり仁慈

外典三千余卷

下品上生

老子經

孝經

觀經

此くの如きの愚人多く衆惡を造るも十念せば往生す

下品中生 或は衆生有て五戒・八戒及び具足戒を毀犯す、此くの如きの愚人は僧祇物を偷み現前僧

物を盗む不淨に法を説いて懺愧有ること無し

下品下生は五逆重罪の者なり而かも能く逆罪を除滅するは余行に堪えざる所なり、唯念仏の力のみ能く重罪を滅するに堪る有り、故に極惡最下の人の為に而かも極善最上の説を説く等云云

下品下生 五逆罪の人・十念往生

撰択に云く「念仏三昧は重罪すら消滅す何に況や輕罪をや余行は然らず 或は輕を滅して重を滅せざる有り、或は一を消して二を消せざる有り」等云云

捨閉閣拋

法華經等の一切經

釈迦仏等の一切諸仏

天台宗等の八宗・九宗の世天等

淨土三部經 阿彌陀仏よりの外なり

安樂集に

未だ一人も得る者有らず唯淨土の二門のみ有て通入の路なるべし

往生禮讚に云く

千中無一十即十生・百即百生

一弟子 いちでし
隆寛 りゅうかん 多念 たねん
長樂寺南無 ちやうらくじなむ

故嵯峨法皇の御師 さかほろほうこうのおんし

一弟子 いちでし
善恵 ぜんゑ 小坂 こさか 道観 だうくわん

聖光 せいこう 故打宮入道修観 きうちみやうだうしゆくわん

極樂寺殿の御師 ごくらくじだんののおんし

法蓮 はふれん

法本 はふほん

念阿弥陀仏 ねんあみたぶつ
諸行往生 しよぎやうおうじやう

覚明 かくみやう

一条 いちじょう
道阿弥 だうあみ

嵯峨 さが

聖心 しやうしん
成覚 じやうかく
一念 いちねん

去本 そふほん

頼顯僧上の御師 らいけんそうじょうのおんし

蘭城寺の長吏 らんじやうじのぢやうし

公胤大式僧上 こういんたしきそうじやう 淨土決疑集三巻を造て法然房の撰択集を破す、隨機の諸行皆往生を為すべし等云云

故宝地房法印証眞の弟子 こほうちほうはふいんしやうしんぢ

上野清井者 じやうのきやうせい

源空 げんくう

法然房 はうねんぼう

顯眞座主 けんしんざす

八人の碩徳 はつにんのせきとく

建仁年中 けんじにんぢやう
後鳥羽院御宇 ごとばいんぎやう

定真ていしん堅者けんじゃ

彈撰だんせん扱あつ二卷にまゐを造つくる隨機き諸行しよぎやう往生おうじやう

下輩げはい下三品

証真しやうしんの嫡弟てつてい 竹中たけなかつ法師ほふし

値惡人あくにん

宗源そうげん法印ほふいん

隆真りゆうしん法印ほふいん

証義者

大和やまとの莊

俊鏤しゆんろう法印ほふいん

相生

善人ぜんにん

三塔さんたつの總學頭

小乘しよじゆ凡夫ぼんぷ

三千人さんぜんの大衆たいしゆ

中輩

五人ごにん探題たんだい

聖覺しやうかく

中三品

貞雲

竜証

値小

華嚴けこん宗しゆ

とがのを

値大

明惠めいゑ房ぼう

摧邪さいしや輪りん三卷さんまゐを造つくる隨機き諸行しよぎやう往生おうじやう

大乘だいしやう凡夫ぼんぷ

深密じんみつ經きやうに依よる

上輩

法相ほふさう宗しゆ

三時さんじ教きやうをもて一代いちだいを損しん尽じんし返かへて深密じんみつ經きやうを以もつて法華ほふけ經きやうを下くだす

三論さんろん宗しゆ

二藏にざう三時さんじをもて一代いちだいを損しん尽じんし返かへて妙智みやうち經きやうを以もつて法華ほふけ經きやうを下くだす

上三

華嚴けこん宗しゆ

五教ごきやうをもて一代いちだいを損しん尽じんし返かへて華嚴けこん經きやうを以もつて法華ほふけ經きやうを下くだす

大乘五宗 真言宗

五蔵をもて一代を撰尽し返て大日経等を以て法華経を下す

天台宗

四教五時をもて一代を撰尽す

県の額を州に打ち牛跡を大海に入る

伝教大師 此の義を許すや不や

夫れ三時の教は勝義の領解一部の聞は義生の機宜猶三部を闕く何ぞ一代を撰せん、華嚴
云く三論云く真言等云云

九二 御義口伝目錄

701P

南無妙法蓮華經

七〇八

卷上

序品七箇の大事

七〇九

第一 如是我聞の事

七〇九

第二 阿若陳如の事

七一〇

第三 阿闍世王の事

七一〇

第四 仏所護念の事

七一一

第五 下至阿鼻地獄の事

七一二

第六 導師何故の事

七一二

第七 天鼓自然鳴の事

七二三

方便品八箇の大事

七二三

第一 方便品の事

七二三

第二 諸仏智慧甚深無量其智慧門の事

七二四

第三 唯以一大事因縁の事

七二六

第四 五濁の事

七二七

第五 比丘・比丘尼有懷増上慢優婆塞我慢

七二八

第六 優婆夷不信の事

七二八

第七 如我等無異如我昔所願の事

七二〇

第八 於諸菩薩中正捨方便の事

七二〇

第九 當來世惡人聞仏説一乘迷惑不信受破法

七二一

墮惡道の事

七二一

譬喻品九箇の大事

七二二

第一 譬喻品の事

七二二

第二 即起合掌の事

七二三

第三 身意泰然快得安穩の事

七二三

第四 得仏法分の事

七二三

第五 而自廻転の事

七二三

第六 一時俱作の事

七二三

第七 以譬喻得解の事

七二四

第八 唯有一門の事

七二四

第九 今此三界等の事

七二四

信解品六箇の大事

七二五

第一 信解品の事

七二五

第二 捨父逃逝の事

七二六

第三 加復窮困の事

七二六

第四 心懷悔恨の事

七二六

第五 無上宝聚不求自得の事

七二七

第六 世尊大恩の事

七二七

藥草喻品五箇の大事

七二八

第一 藥草喻品の事

七二八

第二 此の品述成段の事

七二九

第三 雖一地所生一雨所潤等の事

七二九

第四 破有法王出現世間の事

七二九

第五 我觀一切普皆平等無有彼此愛憎之心我

無貪著亦無限礙の事

七三

授記品四箇の大事

七三〇

第一 授記の事

七三〇

第二 迦葉光明の事

七三一

第三 捨是身已の事

七三一

第四 宿世因縁吾今当説の事

七三一

化城喩品七箇の大事

七三二

第一 化城の事

七三二

第二 大通智勝仏の事

七三二

第三 諸母弟立の事

七三三

第四 其祖輪聖王の事

七三三

第五 十六王子の事

七三三

第六 即滅化城の事

七三四

第七 皆共至宝処の事

七三四

五百弟子品三箇の大事

七三四

第一 衣裏の事

七三四

第二 醉酒而臥の事

七三四

第三 身心遍歡喜の事

七三五

人記品二箇の大事

七三五

第一 学無学の事

七三五

第二 山海慧自在通王仏の事

七三五

法師品十六箇の大事

七三六

第一 法師の事

七三六

第二 成就大願愍衆生故生於惡世広演此經の

事

七三六

第三 如來所遣行如來事の事

七三六

第四 与如來共宿の事

七三六

第五 是法華經藏深固幽遠無人能到の事

七三七

第六 聞法信受随順不逆の事

七三七

第七 衣座室の事

七三七

第八 欲捨諸懈怠应当聽此經の事

七三七

第九 不聞法華經去仏智甚遠の事

七三八

第十 若説此經時有人惡口罵加刀杖瓦石

七三八

念仏故忍の事

七三八

第十一 及清信士女供養於法師の事

七三八

第十二 若人欲加惡刀杖及瓦石則遣變化人為

七三八

之作衛護の事

七三八

第十三 若親近法師速得菩薩道の事

七三八

第十四 随順是師学の事

七三八

第十五 師と学との事

七三九

第十六 得見恒沙仏の事

七三九

宝塔品廿箇の大事

七三九

第一 宝塔の事

七三九

第二 有七宝の事

七三九

第三 四面皆出の事

七四〇

第四 出大音声の事

七四〇

第五 見大宝塔住在空中の事

七四〇

第六 国名宝淨彼中有仏号曰多宝の事

七四〇

第七 於十方国土有説法華經処我之塔廟為
聽是經故涌現其前為作証明讃言
善哉の事

七四〇

第八 南西北方四惟上下の事

第九 各寶宝華滿掬の事

第十 如却闕鑰開大城門の事

第十一 撰諸大衆皆在虚空の事

第十二 譬如大風吹小樹枝の事

第十三 若有能持則持仏身の事

第十四 此經難持の事

第十五 我則歡喜諸仏亦然の事

第十六 讀持此經の事

第十七 是真仏子の事

第十八 是諸天人世間之眼の事

第十九 能須臾説の事

第二十 此經難持の事

提婆達多品八箇の大事 七四四

第一 提婆達多の事

第二 若不違我當為宣説の事

第三 採菓汲水拾薪設食の事

第四 情存妙法故身心無懈倦の事七四五

第五 我於海中唯常宣説の事 七四五

第六 年始八歳の事 七四五

第七 言論未訖の事 七四六

第八 有一宝珠の事 七四七

勸持品十三箇の大事 七四七

第一 勸持の事 七四七

第二 不惜身命の事 七四七

第三 心不実故の事 七四八

第四 敬順仏意の事 七四八

第五 作師子吼の事 七四八

第六 如法修行之事 七四八

第七 有諸無智人の事 七四八

第八 惡世中比丘の事 七四九

第九 或有阿練若の事 七四九

第十 自作此經典の事 七四九

第十一 為斯所輕言汝等皆是仏の事七四九

第十二 惡鬼入其身の事 七四九

第十三 但惜無上道の事 七四九

安樂行品五箇の大事 七五〇

第一 安樂行品の事 七五〇

第二 一切法空の事 七五〇

第三 有所難問不以小乘法答等の事 七五〇

七五〇

第四 無有怖畏加刀杖等の事 七五〇

第五 有人来欲難問者諸天昼夜等的事

七五〇

涌出品一箇の大事

七五〇

第一 唱導之師の事

七五一

卷下

寿量品廿七箇の大事

七五二

第一 南無妙法蓮華經如来寿量品第十六の事

七五二

第二 如来秘密神通之力の事

七五二

第三 我実成仏已来無量无边等の事七五三

第四 如来如実知見三界之相無有生死の事

七五三

第五 若仏久住於世薄徳之人不種善根貧窮

下賤貪著五欲入於憶想妄見網中の事

七五四

第六 飲他毒藥藥發悶乱宛転于地の事七五四

第七 或失本心或不失者の事 七五五

第八 擣和合与子令服の事 七五五

第九 毒氣深入失本心故の事 七五五

第十 是好良藥今留在此汝可取服勿憂不差

の事

七五六

第十一 自我得仏来の事

七五六

第十二 為度衆生故方便現涅槃の事七五六

第十三 常住此説法の事 七五六

第十四 時我及衆僧俱出靈鷲山の事七五六

七五七

第十六 我亦為世父の事

七五七

第十七 放逸著五欲墮於惡道中の事七五八

第十八 行道不行道の事 七五八

第十九 每自作是念の事 七五八

第二十 得入無上道等の事 七五九

第二十一 自我偈の事 七五九

第二十二 自我偈始終の事 七五九

第二十三 久遠の事 七五九

第二十四 此の寿量品の所化の国土と修行との事

七五九

第二十五 建立御本尊等の事 七六〇

第二十六 寿量品の対告衆の事 七六〇

第二十七 無作三身の事 七六〇

分別功德品三箇の大事

第一 其有衆生聞仏寿命長遠如是乃至

能生一念信解所得功德無有限量の事

七六〇

第二 是則能信受如是諸人等頂受此經典の事

七六一

第三 仏子住此地則是仏受用の事七六一

隨喜品二箇の大事 七六一

第一 妙法蓮華經隨喜功德の事 七六一
第二 口氣無穢優鉢華之香常從其口出の事 七六一

法師功德品四箇の大事 七六一

第一 法師功德の事 七六一

第二 六根清淨の事 七六一

第三 又如淨明鏡の事 七六三

第四 是人持此經安住希有地の事 七六三
常不輕品三十箇の大事 七六三

第一 常不輕の事 七六三

第二 得大勢菩薩の事 七六四

第三 威音王の事 七六四

第四 凡有所見の事 七六四

第五 我深敬汝等不敢輕慢所以者何汝等
皆行菩薩道當得作仏の事 七六四

第六 但行禮拜の事 七六四

第七 乃至遠見の事 七六四

第八 心不淨者の事 七六五

第九 言は無智比丘の事 七六五

第十 聞其所說皆信伏隨從の事 七六五

第十一 於四衆中說法心無所畏の事 七六五

第十二 常不輕菩薩豈異人乎則我身是の事 七六六

第十三 常不值仏不聞法不見僧の事 七六六

第十四 畢是罪已復遇常不輕菩薩の事 七六六

第十五 於如來滅後等の事 七六六

第十六 此品の時の不輕菩薩の体の事 七六七

第十七 不輕菩薩の禮拜住処の事 六七七

第十八 開示悟入禮拜住処の事 六七七

第十九 每自作是念の文禮拜住処の事 六七七

第二十 我本行菩薩道の文禮拜住処の事 六七七

第二十一 生老病死禮拜住処の事 七六八

第二十二 法姓禮拜住処の事 七六八

第二十三 無明禮拜住処の事 七六八

第二十四 蓮華の二字禮拜住処の事 七六八

第二十五 實報土禮拜住処の事 七六九

第二十六 慈悲の二字禮拜住処の事 七六九

第二十七 禮拜住処分眞即の事 七六九

第二十八 究竟即禮拜住処の事 七六九

第二十九 法界禮拜住処の事 七六九

第三十 禮拜住処忍辱地の事 七七〇

神力品八箇の大事 七七〇

第一 妙法蓮華經如來神力の事 七七〇

第二 出広長舌の事 七七〇

第三 十方世界衆宝樹下師子座上の事七七一

第四 滿百千歳の事 七七二

第五 地皆六種震動其中衆生。衆宝樹下の

事 七七二

第六 娑婆是中有仏名釈迦牟尼仏の事七七二

第七 斯人行世間能滅衆生闇の事 七七二

第八 畢竟住一乘。是人於仏道決定無有疑

囑累品三箇の大事 七七二

第一 從法座起の事 七七二

第二 如來是一切衆生之大施主の事七七二

第三 如世尊勅当具奉行之事 七七二

藥王品六箇の大事 七七三

第一 不如受持此法華經乃至一四句偈の事 七七三

第二 十喻の事 七七三

第三 離一切苦一切病痛能解一切生死之縛

の事 七七三

第四 火不能燒水不能漂の事 七七三

第五 諸余怨敵皆悉摧滅の事 七七四

第六 若人有病得聞是經病即消滅不老不死

の事 七七四

妙音品三箇の大事 七七四

第一 妙音菩薩の事 七七四

第二 肉髻白毫の事 七七四

第三 八万四千七宝鉢の事 七七五

普門品五箇の大事 七七五

第一 無尽意菩薩の事 七七五

第二 觀音妙の事 七七六

第三 念念勿生疑の事 七七六

第四 二求兩願の事 七七六

第五 三十三身利益の事 七七七

陀羅尼品六箇の大事 七七七

第一 陀羅尼の事 七七七

第二 安爾曼爾の事 七七七

第三 鬼子母神の事 七七八

第四 受持法華名者福不可量の事 七七八

第五 皐諦女の事 七七八

第六 五番神呪の事 七七八

嚴王品三箇の大事 七七九

第一 妙莊嚴王の事 七七九

第二 浮木孔の事 七七九

第三 当品邪見即正の事 七七九

普賢品六箇の大事 七八〇

第一 普賢菩薩の事 七八〇

第二 若法華經行闍浮提の事 七八〇

第三 八万四千天女の事 七八〇

第四 是人命終為千仏授手の事 七八〇

第五	閻浮提内広令流布の事	七八一
第六	此人不久当詣道場の事	七八一
無量義經六箇の大事	七八三	
第一無量義經德行品第一の事	七八三	
第二量の字の事	七八四	
第三義の字の事	七八四	
第四処の一字の事	七八四	

第五	無量義処の事	七八四
第六	無量義処の事	七八五
普賢經五箇の大事	七八五	
第一普賢經の事	七八五	
第二不断煩惱不離五欲の事	七八五	
第三六念の事	七八五	

九三 御義口伝

708P

南無妙法蓮華經

御義口伝に云く南無とは梵語なり此には歸命と云う、人法之れ有り人とは釈尊に歸命し奉るなり法とは法華經に歸命し奉るなり又歸と云うは迹門不變真如の理に歸するなり命とは本門隨緣真如の智に命くなり歸命とは南無妙法蓮華經是なり、釈に云く隨緣不變・一念寂照と、又歸とは我等が色法なり命とは我等が心法なり色心不二なるを一極と云うなり、釈に云く一極に歸せしむ故に仏乗と云うと、又云く南無妙法蓮華經の南無とは梵語、妙法蓮華經は漢語なり梵漢共時に南無妙法蓮華經と云うなり、又云く梵語には薩達磨 芬陀梨伽 蘇多覽と云う此には妙法蓮華經と云うなり、薩は妙なり、達磨は法なり、芬陀梨伽は蓮華なり蘇多覽は經なり、九字は九尊の仏体なり九界即仏界の表示なり、妙とは法性なり法とは無明なり無明法性一体なるを妙法と云うなり蓮華とは因果の二法なり是又因果一体なり經とは一切衆生の言語音声を経と云うなり、釈に云く声仏事を為す之を名けて經と為すと、或は三世常恒なるを経と云うなり、法界は妙法なり法界は蓮華なり法界は經なり蓮華とは八葉九尊の仏体なり能く能く之を思う可し已上。

伝云序品七箇の大事

方便品八箇の大事

譬喻品九箇の大事

信解品六箇の大事

藥草喻品五箇の大事授記品四箇の大事

化城喻品七箇の大事

五百品三箇の大事

人記品二箇の大事

法師品十六箇の大事

宝塔品二十箇の大事

提婆品八箇の大事

勸持品十三箇の大事 安樂行品五箇の大事涌出品一箇の大事
壽量品二十七箇の大事分別功德品三箇の大事隨喜品二箇の大事
法師功德品四箇の大事不輕品三十箇の大事神力品八箇の大事
囑累品三箇の大事藥王品六箇の大事妙音品三箇の大事
普門品五箇の大事陀羅尼品六箇の大事嚴王品三箇の大事
普賢品六箇の大事無量義經六箇の大事普賢經五箇の大事
已上二百三十一箇条也此の外に別伝之有り具さに之を記し訖ぬ。

御義口伝卷上

序品七箇の大事

第一如是我聞の事 文句の一に云く如是とは所聞の法体を挙ぐ我聞とは能持の人なり記の一に云く故に始と末と一經を所聞の体と為す。

御義口伝に云く所聞の同は名字即なり法体とは南無妙法蓮華經なり能持とは能の字之を思ふ可し、次に記の一の故始末一經の釈は始とは序品なり末とは普賢品なり法体とは心と云う事なり法とは諸法の心とは妙法蓮華經なり、傳教云く法華經を讚むると雖も還つて法華の心を死すと、死の字に心を留めて之を案ず可し不信の人は如是我聞の聞には非ず法華經の行者は如是の体を聞く人と云う可きなり、爰を以て文句の一に云く「如是とは信順の辞なり信は則ち所聞の理會し順は則ち師資の道成ず」と、所詮日蓮等の

類を以て如是我聞と云うべきなり云云。

第二阿若 陳如の事 疏の二に云く、陳如は姓なり此には火器と翻す婆羅門種なり其の先火に事こつ此れに従て族に命く、火に二義有り照なり暎なり照は則ち聞生ぜず焼は則ち物生ぜず此には不生を以て姓と為す。

御義口伝に云く火とは法性の智火なり、火の二義とは一の照は随縁真如の智なり一の焼は不變真如の理なり照焼の二字は本迹二門なり、さて火の能作としては照焼の二徳を具する南無妙法蓮華經なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは生死の闇を照し晴して涅槃の智火明了なり生死即涅槃と開覺するを照則闇不生とは云うなり、煩惱の薪を焼いて菩提の慧火現前するなり煩惱即菩提と開發するを焼別物不生とは云うなり、爰を以て之を案ずるに陳如是我等法華經の行者の煩惱即菩提生死即涅槃を顯したり云云。

第三阿闍世王の事 文句の二に云く阿闍世王とは未生怨と名く、又云く大經に云く阿闍世世とは未生怨と名く又云く大經に云く阿闍を不生と名く世とは怨と名く。

御義口伝に云く日本国の一切衆生は阿闍世王なり既に諸仏の父を殺し法華經の母を害するなり、無量義經に云く諸仏の國王と是の經の夫人と和合して共に是の菩薩の子を生む、謗法の人今は母の胎内に処しながら法華の怨敵たり豈未生怨に非ずや、其の上日本国当世は三類の強敵なり世者名怨の四字に心を留めて之を案ず可し。

日蓮等の類い此の重罪を脱れたり謗法の人人法華經を信じ釈尊に歸し奉らば何ぞ已前の殺父殺母の重罪滅せざらんや、但し父母なりとも法華經不信の者ならば殺害す可きか、其の故は權教の愛を成す母方便真實を明めざる父をば殺害す可しと見えたり、仍て文句の二に云く「觀解は食愛の母無明の父此れを害する故に逆と稱す逆即順なり非道を行じて仏道に通達す」と、觀解とは末法当今は題目の觀解なる可し子として父母を殺害するは逆なり、然りと雖も法華經不信の父母を殺しては順となるなり爰を以て逆即是順と釈せり、今日蓮等の

類たぐいは阿闍世王あじやせなり其そのの故ゆえは南無妙法蓮華經なむみょうほつれんげきやうの剣を取とつて食愛とんあい・無明むみやうの父位を害きやうして教主きやうしゆ・釈尊しやくそんの如ごとく仏身ぶつじんを感得かんとくするなり、貧愛とんないの母とは勸持品かんじほん三類さんるいの中な第一だいいちの俗衆ぞくしやうなり無明むみやうの父とは第二だいに・第三だいにの僧そうなり云云。

第四よ仏所護念ぶつじよごねんの事 文句もんくの三さんに云いく仏所護念ぶつじよごねんとは無量義むりやうぎ處こは是これ仏の証得しやうとくし給たまふ所かくのゆえの故ゆえに如來にやうらいの護念ごねんし給たまふ所かくのゆえなり、

下の文ぶんに仏自住大乘ぶつじぢゆうだいじやうと云いへり開示かいじせんと欲ほすと雖いふも衆生の根鈍しゆじやうなれば久こしく斯この要もくを默もくして務すて速すみかに説とき給たまわす故ゆえに護念ごねんと云いふ記きの三さんに云いく昔未いまいだ説いまいかず故ゆえに之これを名なけて護ごと為なす法はふに約きし機きに約きして皆護念みなごねん

する故ゆえに乃至機い仍ないしきな未いまだ發あこせず隱かくして説いかず故ゆえに護念ごねんと云いふ、乃至末説ないしを以もつての故ゆえに護ごし未暢みちやうを以もつての故ゆえに念ごず、久默くもくと云いふは昔いより今いまに至いたるなり斯要等しやうやうの意い之これを思おもつて知しる可べし。

御義口伝おんぎくでんに云いく此この護念ごねんの体たいに於おては本迹ほんし二門首題にもんしゆだいの五字ごじなり、此この護念ごねんに於おて七種しちしゆの護念ごねん之これ有あり一ひとには時に約きし

二ふたには機きに約きし三さんには人に約きし四しには本迹ほんしに約きし五ごには色心しきしんに約きし六ろくには法体はふたいに約きし七しちには信心しんじんに約きするなり云云、

今日蓮等こんにちれんたうの類たぐいは護念ごねんの体たいを弘ひろむるなり、一ひとに時に約きするとは仏法華經はふけきやうを四十余年よんじゅうよねんの間いま未いまだ時とき

至いたらざるが故ゆえに護念ごねんし給たまふなり、二ふたに機きに約きするとは破法不信はほうふしん故墜こつ於お二惡道にあくだうの故ゆえに前ぜん四十余年よんじゅうよねんの間いま未いまだ之これを説とかざ

るなり、三さんに人に約きするとは舍利弗しゃりほつに対して説とかかんが為ななり、四しに本迹ほんしに約きするとは護ごを以もつて本ほんと為なし念ごを以もつて迹しと

為なす、五ごに色心しきしんに約きするとは護ごを以もつて色しきと為なし念ごを以もつて心しんと為なす、六ろくに法体はふたいに約きするとは法体はふたいとは

本有常住ほんゆぢやうなり一切衆生いっけしゆじやうの慈悲心じひしん是こなり、七しちに信心しんじんに約きするとは信心しんじんを以もつて護念ごねんの本ほんと為なすなり、所詮しよせん日蓮等にちれんたうの類たぐい

南無妙法蓮華經なむみょうほつれんげきやうと唱となえ奉たまつるは併しから護念ごねんの体たいを開ひらくなり、護ごとは仏見ぶつけんなり、念ごとは仏知ぶつちなり此この知見ちけんの二字ふたご本迹ほんし兩

門もんなり仏知ぶつちを妙めうと云いふなり仏見ぶつけんを法はふと云いふなり此この知見ちけんの体たいを修行しやうぎやうするを蓮華れんげと云いふなり、因果いんがの体たい

なり因果いんがの言語ごんごは經きやうなり 加之た法華經はふけきやうの行者ぎやうをば三世さんぜの諸仏護念しよぶつごねんし給たまふなり、普賢品ふけんひんに云いく一ひと者もの為な諸しよ仏護念ぶつごねんと護念ごねん

とは妙法蓮華經めうほつれんげきやうなり諸しよ仏ぶつの法華經はふけきやうの行者ぎやうを護念ごねんしたもつは妙法蓮華經めうほつれんげきやうを護念ごねんしたもつなり機法きはふ一同護いご

念一体なり、記の三の釈に約法約機 皆護念故と云うは此の意なり、又文句の三に云く「仏所護念とは前の地動瑞を決定するなり地動は六番破惑を表するなり、妙法蓮華經を受持する者は六番破惑疑い無きなり」神力品に云く「於我滅度後 心受持斯經 是人於仏道 決定無有疑」仏自住大乘とは是なり、又た一義に仏の衆生を護念したもう事は護とは唯我一人能為救護 念とは毎自作是念是なり、普賢品に至つて一者為諸仏護念と説くなり、日蓮は生年三十二より南無妙法蓮華經を護念するなり。

第五下至阿鼻地獄の事

御義口伝に云く十界皆成の文なり提婆が成仏 此の文にて分明なり、宝塔品の次に提婆が成仏を説く事は一箇の諫曉の分なり、提婆は此の文の時成仏せり此の至の字は白毫の行く事なり白毫の光明は南無妙法蓮華經なり、上至阿迦尼咤天は空諦・下至阿鼻地獄は仮諦・白毫の光は中道なり、之に依つて十界同時の成仏なり天王仏とは宝号を送るまでなり、去て依正二報の成仏の時此の品の下至阿鼻地獄の文は依報の成仏を説き提婆達多の大王如来は正報の成仏を説く依報・正報共に妙法の成仏なり、今日蓮等の類い聖靈を訪う時・法華經を誦誦し南無妙法蓮華經と唱え奉る時 題目の光無間に至りて即身成仏せしむ、廻向の文此れより事起るなり、法華不信の人は墮在無間なれども、題目の光を以て孝子法華の行者として訪わんに豈此の義に替わる可しや、されば下至阿鼻地獄の文は仏光を放ちて提婆を成仏せしめんが為なりと日蓮推知し奉るなり。

第六導師何故の事 疏に云く良に以みれば説法入定して能く人を導く既に導師と称す。

御義口伝に云く此の導師は釈尊の御事なり、説法とは無量義經・入定とは無量義經三昧に入りたもう事なり、所詮導師に於て一あり惡の導師善の導師之れ有るなり、惡の導師とは法然・弘法・慈覺・智証等なり善の導師とは天台・伝教等是なり、末法に入つては今日蓮等の類いは善の導師なり、説法とは南無妙法蓮華經・入定とは

法華受持の決定心に入る事なり能導於人の能の字に心を留めて之を案ず可し涌出品の唱導之師と同じ事なり、所詮日本国の一切衆生を導かんが為に説法する人はなり云云。

第七天鼓自然鳴の事 疏に云く天鼓自然鳴は無間・自説を表するなり。

御義口伝に云く此の文は此土・他土の瑞同じきことを頌して長出せり、無間・自説とは釈迦如来・妙法蓮華經を無間・自説し給うなり、今日蓮等の類は無間・自説なり念仏・無間・禪天魔・真言亡国・律国賊と喚ぶ事は無間・自説なり三類の強敵来る事は此の故なり、天鼓とは南無妙法蓮華經なり自然とは無障礙なり鳴とは唱うる所の音声なり、一義に一切衆生の語言・音声を自在に出すは無間・自説なり自説とは獄卒の罪人を呵責する音・餓鬼飢饉の音声等一切衆生の貪・瞋・癡の三毒の念念等を自説とは云うなり此の音声の体とは南無妙法蓮華經なり、本・迹両門妙法蓮華經の五字は天鼓なり天とは第一義天なり自説とは自受用の説法なり、記の三に云く無間・自説を表するとは方便の初に三昧より起つて舍利弗に告げ広く歎じ略して歎ず、此土他土言に寄せ言を絶す若は境若は智此乃ち一經の根本五時の要津なり此の事輕からずと、此釈に一經の根源五字の要津とは南無妙法蓮華經是なり云云。

方便品八箇の大事

713P

第一方便品の事 文句の三に云く方とは秘なり便とは妙なり妙に方に達するに即ち是真の秘なり、內衣裏の無価の珠を点ずるに王の頂上の唯一珠有ると二無く別無し、客作の人を指すに是長者の子にして亦二無く別無し、此の如きの言は是秘是妙なり、經の唯我知是相・十方仏亦然・止止不須説我法妙難思の如し故に秘を以て方を釈し妙を以て便を釈す正しく是れ今の品の意なり故に方便品と言うなり記の三に云く第三に秘妙に約して

釈するとは妙を以ての故に即なり円を以て即と為し三を不即と為す故に更に不即に對して以て即を釈す。

御義口伝に云く此の釈の中に一珠とは衣裏珠・即頂上珠なり、客作の人と長者の子と全く不同之無し、所詮謗法

不信の人は体外の權にして法用能通の二種の方便なり爰を以て無二無別に非るなり、今日蓮等の類南無妙法蓮華經と

唱え奉るは是秘妙方便にして体内なり故に妙法蓮華經と題して次に方便品と云えり、妙樂の記の三の釈に本疏の即是

真秘の即を以円為即と消釈せり、即は円なれば法華經の別名なり即とは凡夫即極・諸法実相の仏なり、円とは

一念三千なり即と円と言は替れども妙の別名なり、一切衆生実相の仏なれば妙なり不思議なり謗法の人今之を知ら

ざる故に之を秘と云う、又云く法界三千を秘妙とは云うなり秘とはきびしきなり三千羅列なり是より外に不思議

之無し、大謗法の人たりと云うとも妙法蓮華經を受持し奉る所を妙法蓮華經方便品とは

云うなり今末法に入つて正しく日蓮等の類の事なり、妙法蓮華經の体内に爾前の入法を入るを妙法蓮華經方便品とは

云うなり、是を即身成仏とも如是本末究竟等とも説く、又方便とは十界の事なり又は無明なり妙法蓮華經は十界の

頂上なり又は法性なり煩惱即菩提・生死即涅槃是なり、以円為即とは一念三千なり妙と即とは同じ物なり一字の

一念三千と云う事は円と妙とを云うなり円とは諸法実相なり、円とは釈に云く円を円融・円満に名く

と円融は迹門・円満は本門なり又は止觀の二法なり又は我等が色心の二法なり一字の一念三千とは慧心流の秘藏な

り、口は一念なり員は三千なり一念三千とは不思議と云う事なり、此の妙は前三教に未だ之を説かず故に秘と云うな

り、故に知ぬ南無妙法蓮華經は一心の方便なり妙法蓮華經は九識なり十界は八識已下なり心を留めて之を案ず可し、

方とは即十方・十方は即十界なり便とは不思議と云う事なり云云。

第二諸仏智慧甚深無量其智慧門の事 文句の三に云く先ず実を歎じ次に權を歎ず、実とは諸仏の智慧なり三種の化他の
權實に非ず故に諸仏と云う自行の実を顯す故に智慧と言つ、此の智慧の体即ち一心の三智なり、甚深

無量とは即ち称歎の辞なり仏の実智の豎に如理の底に徹することを明す故に甚深と言う、横に法界の辺を窮む故に無量と言う無量甚深にして豎に高く横に広し、譬えば根深ければ則ち条茂く源遠ければ則ち流長きが如し実智既に然り権智例して爾り云云、其智慧門は即ち是れ権智を歎ずるなり蓋し是れ自行の道前の方便進趣の力有り故に名けて門と為す、門より入つて道中に到る道中を実と称し道前を権と謂うなり、難解難入とは権を歎ずるの辞なり不謀にしてしし無方の大用あり、七種の方便測度すること能わず十住に始めて解す十地を入と為す初と後とを擧ぐ中間の難示難悟は知る可し、而るに別して声聞縁覚の所不能知を擧ぐることは執重きが故に別して之を破するのみ、記の三に云く豎高横広とは中に於て法警合あり此れを以て後を例す、今実を釈するに
既に周く横豎を窮めたり下に権を釈するに理深極なるべし、下に当に権を釈すべし予め其の相を述す故に云云と註す、其智慧門とは其とは乃ち前の実果の因智を指す若し智慧即門ならば門は是れ権なり若し智慧の門ならば智即ち果なり、蓋し是等とは此の中に須く十地を以て道前と為し妙覺を道中と為し証後を道後と為すべし、故に知んぬ文の意は因の位に在りと。
御義口伝に云く此の本末の意分明なり、中に豎に高く横に広しとは豎は本門なり横は迹門なり、根とは草木なり草木は上登る此れは迹門の意なり、源とは本門なり源は水なり水は下へたる此れは本門の意なり、条茂とは迹門十四品なり流長とは本門十四品なり智慧とは一心の三智なり門とは此の智慧に入る処の能入の門なり
三智の体とは南無妙法蓮華經なり門とは信心の事なり、爰を以て第二の巻に以信得入と云う入と門とは之れ同じきなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るを智慧とは云うなり、譬喩品に云く「唯有一門」と門に於て有門空門・亦有亦空門・非有非空門あるなり、有門は生なり空門は死なり亦有亦空門は生死一念なり非有非空門は生に非ず死に非ず有門は題目の文字なり空門は此の五字に方法を具足して一方にとゞまらざる義なり

り、亦有亦空門は五字に具足する本迹なり非有非空門は一部の意なり、此の内証は法華已前の二乗の智慧の及ばざる所なり、文句の三に云く「七種の方便測度すること能わず」と、今日蓮等の類は此の智慧に得入するなり、仍て偈頌に除諸菩薩衆信力堅固者と云うは我等行者の事を説くなり云云。

第三唯以一大事因縁の事 文句の四に云く一は即ち一実相なり五に非ず三に非ず七に非ず九に非ず故に一と言うなり、其の性広博にして五三七九より博し故に名けて大と為す、諸仏出世の儀式なり故に名けて事と為す、衆生に此の機有つて仏を感じ故に名けて因と為す、仏機を承けて而も応ず故に名けて縁となす、是を出世の本意と為す。

御義口伝に云く一とは法華經なり大とは華嚴なり事とは中間の三昧なり、法華已前にも三諦あれども碎けたる珠は宝に非ざるが如し云云、又云く一とは妙なり大とは法なり事とは蓮なり因とは華なり縁とは経なり云云、又云く我等が頭は妙なり喉は法なり胸は蓮なり胎は華なり足は経なり此の五尺の身妙法蓮華經の五字なり、此

の大事を釈迦如来四十余年の間隱密したもうなり今經の時説き出したもう此の大事を説かんが為に仏は出世したもうわれら我等が一身の妙法五字なりと開仏知見する時即身成仏するなり、開とは信心の異名なり信心を以て妙法を唱え奉らば聽て開仏知見するなり、然る間信心を開く時南無妙法蓮華經と示すを示仏知見と云うなり、示す時に靈山淨土の住处と悟り即身成仏と悟るを悟仏知見と云うなり、悟る当体直至道場なるを入仏知見と

云うなり、然る間信心の開仏知見を以て正意とせり、入仏知見の入の字は迹門の意は実相の理内に歸入するを入と云うなり本門の意は理即本覺と入るなり、今日蓮等の類は南無妙法蓮華經と唱え奉る程の者は宝塔に入るなり云云、又云く開仏知見の仏とは九界所具の仏界なり知見とは妙法の二字止觀の二字寂照の二德生死の二法なり色心因果なり、所詮知見とは妙法なり九界所具の仏心を法華經の知見にて開く事なり、爰を以て之を思ふ

に仏とは九界の衆生の事なり、此の開覺顕れて今身より仏身に至るまで持つや否やと示す処が妙法を示す示仏知見と云うなり、師弟感応して受け取る時如我等無異と悟るを悟仏知見と云うなり、悟つて見れば法界三千の己己の当体法華経なり此の内証に入るを入仏知見と云うなり秘す可し云云、又云く四仏知見とは八相なり開とは生の相なり入とは死の相なり中間の示悟は六相なり下天託胎等は示仏知見なり出家降魔成道転法輪等は悟仏知見なり、權教の意は生死を遠離する教なるが故に四仏知見に非ざるなり、今経の時生死の二法は一心の妙用有無の二道は本覺の眞徳と開覺するを四仏知見と云うなり、四仏知見を以て三世の諸仏は一大事と思召し世に出現したもつなり、此の開仏知見の法華経を法然捨閉閣抛と云い弘法大師は第三の劣戲論の法とのしれり、五仏道同の舌をきる者に非ずや、慈覺大師智証等は惡子に劍を与えて我が親の頭をきらす者に非ずや

云云、又云く一とは中諦・大とは空諦・事とは仮諦なり此の円融の三諦は何物ぞ所謂南無妙法蓮華経是なり、此の五字日蓮出世の本懷なり之を名けて事と為す、日本国は一切衆生の中に日蓮が弟子・檀那と成る人は衆生有此機感仏故名爲因の人なり、夫れが爲に法華経の極理を弘めたるは承機而応故名爲縁に非ずや、因は下種なり縁は三五の宿縁に歸するなり、事の一念三千は、日蓮が身に當りての大事なり、一とは一念・大とは三千なり此の三千ときたるは事の因縁なり事とは衆生世間・因とは五陰世間・縁とは国土世間なり、国土世間の縁とは南閻浮提は妙法蓮華経を弘むべき本縁の国なり、経に云く閻浮提内広令流布使不斷絶是なり云云。

第四五濁の事 文句の四に云く劫濁は別の体無し劫は是長時・刹那是是短時なり、衆生濁は別の体無し見慢果報を攬る煩惱濁は五鈍使を指て体と爲し見濁は五利使を指て体と爲し命濁は連持色心を指して体と爲す。

御義口伝に云く日蓮等の類いは此の五濁を離るるなり、我此土安穩なれば劫濁に非ず実相無作の仏身なれば衆生濁に非ず煩惱即菩提・生死即涅槃の妙旨なれば煩惱濁に非ず・五百塵点劫より無始本有の身なれば命濁に

非ざるなり、正直捨方便、但説無上道の行者なれば見濁に非るなり、所詮南無妙法蓮華經を境として起る所の五濁なれば、日本国の一切衆生五濁の正意なり、されば文句四に云く「相とは四濁増劇にして此の時に聚在せり瞋恚増劇にして刀兵起り貪欲増劇にして飢餓起り愚癡増劇にして疾疫起り三災起るが故に煩惱倍隆んに諸見転た熾なり」經に如來現在猶多怨嫉、況滅度後と云う是なり、法華經不信の者を以て五濁障重の者とす經に云く「以五濁惡世但樂著諸欲如是等衆生終不求仏道」云云、仏道とは法華經の別名なり天台云く「仏道とは別して今經を指す」と。

第五比丘比丘尼有懷増上慢優婆塞我慢婆夷不信の事、文句の四に云く上慢と我慢と不信と四衆通じて有り、但し出家の二衆は多く道を修し禪を得て謬て聖果と謂い偏に上慢を起す、在俗は矜高にして多く我慢を起す女人は智淺くして多く邪僻を生ず自ら其の過を見ずとは三失心を覆う、疵を蔵くし徳を揚げて自ら省ること能わざるは是れ無慙の人なり、若し自ら過を見れば是れ有羞の僧なり記の四に云く疵を蔵くす等とは三失を釈するなり疵を蔵くし徳を揚ぐは上慢を釈す、自ら省ること能わざるは我慢を釈す、無慙の人とは不信を釈す、若し自ら過を見るは此の三失無し未だ果を証せずと雖も且らく有羞と名く。

御義口伝に云く此本末の釈の意は五千の上慢を釈するなり委くは本末を見る可きなり、比丘比丘尼の二人は出家なり共に増上慢と名く疵を蔵くし徳を揚ぐるを以て本とせり、優婆塞は男なり我慢を以て本とせり優婆夷は女人なり無慙を以て本とせり、此の四衆は今日本国に盛んなり經には其数有五千と有れども日本国に四十九億九万四千八百廿八人と見えたり、在世には五千人仏の座を立てり今末法にては日本国の一切衆生悉く日蓮が所座を立てり、比丘比丘尼増上慢とは道隆・良觀等に非ずや又鎌倉中の比丘尼等に非ずや、優婆塞とは最明寺優婆夷とは上下の女人に非ずや敢て我が過を知る可からざるなり、今日蓮等の類いを誹謗して惡名を立つ豈

不自見其過の者に非ずや大謗法の罪人なり法華の御座を立つ事疑無き者なり、然りと雖も日蓮に値う事は併ら
れいぶつにたい 礼仏而退の義なり此の礼仏而退は輕賤の義なり全く信解の礼退に非ざるなり此等の衆は於戒有欠漏の者なり、文句の
四に云く「於戒有欠漏とは律義失有るをば欠と名け定共道共失有るをば漏と名く」と此の五千の上慢とは我等所具の
五住の煩惱なり、今法華經に値い奉る時慢即法界と開きて礼仏而退するを仏威徳故去と云うな
り、仏とは我等所具の仏界なり威徳とは南無妙法蓮華經なり、故去とは而去不去の意なり普賢品の作礼而去之を思
可きなり、又云く五千の退座と云う事法華の意は不退座なり其の故は諸法実相略開三顯一の開悟なり、さて其の時は
我慢増上慢とは慢即法界と開きて本有の慢機なり、其数有五千とは我等が五住の煩惱なり若し又
五住の煩惱無しと云うは法華の意を失いたり、五住の煩惱有り乍ら本有常住ぞと云う時其数有五千と説くなり、斷惑
に取り合わず其の儘本有妙法の五住と見れば不自見其過と云うなり、さて於戒有欠漏とは小乗權教の対治衆病の
戒法にては無きなり是名持戒の妙法なり故に欠漏の当体其の儘是名持戒の体なり、然るに欠漏を其の儘本有と談ずる
故に護惜其瑕疵とは説くなり、元より一乗の妙戒なれば一塵含法界一念遍十方する故に是小智已出と云うなり、
糟糠とは塵塵法法本覺の三身なり故にすくなき福德の当体も本覺無作の覺体なり、不堪受是法とは略開の諸法実相
の法体を聞きて其の儘開悟するなりさて身子尊者鈍根のために分別解説したまえと請う広開三の法門をば不堪受是法
と説く、さて法華の実義に歸りて見れば妙法の法体は更に能受所受を忘るるなり不思議の妙法なり、本法の重を悟り
て見る故に此衆無枝葉と云うなり、かかる内証は純一実相実相外更無別法なれば唯有諸貞実なり所詮貞実とは色心
を妙法と開く事なり、今日蓮等の類に南無妙法蓮華經と唱え奉る處を唯有諸貞実と説くなり、諸とは諸法実相の仏
なり諸は十界なり貞実は十界の色心を妙法と云うなり今經に限る故に唯と云うなり、五千の上慢の外全く法華經
之れ無し五千の慢人とは我等が五大なり五大即妙法蓮華經な

り、五千の上慢は元品の無明なり故に礼仏而退なり此れは九識八識六識と下る分なり流転門の談道なり、仏威徳故去とは還滅門なり然らば威徳とは南無妙法蓮華経なり本迷本悟の全体なり能く能く之を案ず可し云云。

第六如我等無異如我昔所願の事 疏に云く因を挙げて信を勧むと。

御義口伝に云く我とは釈尊 我実成仏久遠の仏なり此の本門の釈尊は我等衆生の事なり、如我の我は十如是の末の七如是なり九界の衆生は始の三如是なり我等衆生は親なり仏は子なり父子一体にして本末究竟等なり、此の我等を寿量品に無作の三身と説きたるなり、今日蓮等の類に南無妙法蓮華経と唱うる者はなり、愛を以て之を思うに釈尊の惣別の二願とは我等衆生の為に立てたもつ処の願なり、此の故に南無妙法蓮華経と唱え奉りて

日本国の一切衆生を我が成仏せしめんと云う所の願併ら如我昔所願なり、終に引導して己身と和合するを今者已満足と意得可きなり、此の今者已満足の已の字すでにと読むなり何の処を指して已にとは説けるや、凡そ所釈の心は諸法実相の文を指して已にとは云えり、爾りと雖も当家の立義としては南無妙法蓮華経を指して今者已満足と説かれたりと意得可きなり、されば此の如我等無異の文肝要なり、如我昔所願は本因妙如我等無異は本果妙なり妙覺の釈尊は我等が血肉なり因果の功德骨髓に非ずや、釈には孝因勸信と孝因は即ち本果なり、今日蓮が唱うる所の南無妙法蓮華経は末法一万年の衆生まで成仏せしむるなり、豈今者已満足に非ずや、已とは建長五年四月廿八日に初めて唱え出す処の題目を指して已と意得可きなり、妙法の大良薬を以て一切衆生の無明の大病を治せん事疑い無きなり此れを思い遣る時んば満足なり満足とは成仏と云う事なり、釈に云く「円は円融、円満に名け頓は頓極頓足に名く」と之を思う可し云云。

第七於諸菩薩中正直捨方便の事 文句の四に云く於諸菩薩中の下の三句は正しく実を顯すなり、五乗は是れ曲にして直に非ず通別は偏傍にして正に非ず今皆彼の偏曲を捨てて但正直の一道を説くなり」と。

御義口伝に云く此の菩薩とは九界の第九に居したる菩薩なり又一切衆生を菩薩と云うなり今日蓮等の類いなり、又諸天善神等迄も是れ菩薩なり正直とは煩惱即菩提・生死即涅槃なり、さて一道とは南無妙法蓮華経なり今末法にして正直の一道を弘むる者は日蓮等の類いに非ずや。

第八当来世悪人聞仏説一乘迷惑不信受破法墮惡道の事

御義口伝に云く当来世とは末法なり悪人とは法然・弘法・慈覚・智証等なり、仏とは日蓮等の類いなり一乗とは妙法蓮華経なり不信の故に三惡道に墮す可きなり。

譬喩品九箇の大事

第一譬喩品の事 文句の五に云く譬とは比況なり喩とは曉訓なり大悲息まず巧智無辺なれば更に樹を動かして風を訓

え扇を挙げて月を喩すと。

御義口伝に云く大悲とは母の子を思う慈悲の如し今日蓮等の慈悲なり、章安云く「彼の為に惡を除くは即是れ彼の親」と、巧智とは南無妙法蓮華経なり諸宗無得道の立義なり巧於難問答の意なり更とは在世に次で滅後の事と意得可きなり、樹を動すとは煩惱なり風を訓るとは即菩提なり扇を挙ぐとは生死なり月を喩すとは即涅槃なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る時大白牛車に乗じて直至道場するなり、記の五に云く「樹と

扇と風と月とは唯円教の理なり」と又云く「法説の実相は何ぞ隠れ何ぞ顯れんや長風息むこと靡く空月常に懸れり」と此釈之を思う可し、隠とは死なり顯とは生なり長風とは我等が息なり空月とは心月なり法華の生死とは三世常恒にして隱顯之無し我等が息風とは吐く処の言語なり是南無妙法蓮華経なり、一心法界の覺月常住にして懸れり是を指して唯円教の理と釈せり円とは法界なり教とは三千羅列なり理とは実相の一理なり云云。

第二即起合掌の事 文句の五に云く外義を敍するとは即起合掌は身の領解と名く昔は権実二と為す 掌の合わざるが

如し、今は権即実と解る二の掌の合するが如し、向仏とは昔は権 仏因に非ず実 仏果に非ず今権即実と解して大円
因を成ず因は必ず果に趣く故に合掌向仏と言つと。

御義口伝に云く合掌とは法華經の異名なり向仏とは法華經に値い奉ると云うなり合掌は色法なり向仏は心法なり、
色心の二法を妙法と開悟するを歡喜踊躍と説くなり、合掌に於て又二の意之れ有り合とは妙なり 掌とは法なり、

又云く合とは妙法蓮華經なり 掌とは廿八品なり、又云く合とは仏界なり 掌とは九界なり九界は権 仏界は実な
り、妙樂大師の云く「九界を権と為し仏界を實と為す」と十界悉く合掌の二字に納まって森羅三千の諸法は合掌に

非ざることを莫きなり、惣じて三種の法華の合掌之れ有り今の妙法蓮華經は三種の法華未分なり、爾りと雖も先ず顯説
法華を正意と為すなり、之に依つて傳教大師は於二仏乗とは根本法華の教なり。妙法の外更に一句の余經無しと、向

仏とは二文文皆金色の仏体と向い奉る事なり合掌の二字に法界を尽したるなり、地獄 餓鬼の己己の当体其の外三千
の諸法其の儘合掌向仏なり而る間法界悉く舍利弗なり舍利弗とは法華經なり、

舎とは空諦利とは仮諦弗とは中道なり円融三諦の妙法なり舍利弗とは梵語此には身子と云う身子とは十界の色心な
り身とは十界の色法子とは十界の心法なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は悉く舍利弗なり、舍利弗

は即釈迦如来 釈迦如来は即法華經 法華經は即我等が色心の二法なり、仍て身子此の品の時間此法音と領解せり、聞
とは名字即法音とは諸法の音なり諸法の音とは妙法なり、爰を以て文句に釈する時長風息むこと靡しと長風とは法界

の音声なり、此の音声を信解品に以て仏道声令一切聞と云えり一切とは法界の衆生の事なり此の音声とは南無
妙法蓮華經なり。

第三云く身意泰然快得安穩の事 文句の五に云く從仏は是れ身の喜を結するなり聞法は此れ口の喜を結するなり

断諸疑悔とは是れ意の喜を結すと。

御義口伝に云く身意泰然とは煩惱即菩提・生死即涅槃なり、身とは生死即涅槃なり意とは煩惱即菩提なり従仏とは日蓮に従う類い等の事なり口の富とは南無妙法蓮華経なり意の喜とは無明の惑障無き故なり、愛を以て之を思うに此の文は一心三觀・一念三千我等が即身成仏なり方便の教は泰然に非ず安穩に非ざるなり行於險逕多留難故の教なり。

第四得仏法分の事

御義口伝に云く仏法の分とは初住一分の中道を云うなり、迹門初住本門二住已上と云う事は此の分の字より起るなり、所詮此の分の一字は一念三千の法門なり其の故は地獄は地相の分で仏実を証し乃至三千の諸法己己の当体の分で仏果を証したるなり真実の我等が即身成仏なり、今日蓮等の類南無妙法蓮華経と叫うる分で仏果を証したるなり、分とは権教は無得道・法華経は成仏と分つと意御可きなり、又云く分とは本門・寿命品の意なり己己本分の分なり、惣じて迹門初住分証と云うは教相なり真実は初住分証の処にて一経は極りたるなり。

第五而自廻轉の事 記の五に云く或は大論の如し経に而自廻轉と云うは身子の得記を聞きて法性自然にして轉じ因果依正自他悉く轉ずるを表すと。

御義口伝に云く草木成仏の証文に而自廻轉の文を出すなり是れ一念三千の依正体一の成仏を説き極めたるなり、草木成仏の証人とは日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るを指すなり、廻轉とは題目の五字なり自とは我等行者の事なり記の五の釈能く能く之を思うべし云云。

第六一時俱作の事

御義口伝に云く一時とは末法の一時なり俱作とは南無妙法蓮華経なり俱とは畢竟住一乘なり、今日蓮等の類い所作には題目の五字なり余行を交えざるなり、又云く十界の語言は一返の題目を俱作したり、是れ豈感応に非ずや。

第七以譬喻得解の事 止觀の五に云く智とは譬に因るに斯の意徴し有り。

御義口伝に云く此の文を以て鏡像円融の三諦の事を伝ふるなり、惣じて鏡像の譬とは自浮自影の鏡の事なり此の鏡と
は一心の鏡なり、惣じて鏡に付て重重の相伝之有り所詮鏡の能徳とは万像を浮ぶるを本とせり妙法華華經の五字は万
像を浮べて一法も残る物之れ無し、又云く鏡に於て五鏡之れ有り妙の鏡には法界の不思議を浮べ。

法の鏡には法界の体を浮べ蓮の鏡には法界の果を浮べ華の鏡には法界の因を浮べ經の鏡には方法の言語を浮べたり、又
云く妙の鏡には華嚴を浮べ法の鏡には阿含を浮べ蓮の鏡には方等を浮べ華の鏡には般若を浮べ經の鏡には法華を浮べ
るなり、順逆次第して意得可きなり、我等衆生の五体五輪妙法蓮華經と浮び出でたる間宝塔品を以て鏡と習ふなり、
信謗の浮び様能く能く之を案ず可し自浮自影の鏡とは南無妙法蓮華經是なり云云。

第八唯一門の事 文句の五に云く唯一門とは上の以種種法門宣示於仏道に譬つ、門に又二あり宅門と車門となり
宅とは生死なり門とは出づる要路なり、此は方便教の詮なり車とは大乘の法なり門とは円教の詮たりと。

御義口伝に云く一門とは法華經の信心なり車とは法華經なり牛とは南無妙法蓮華經なり宅とは煩惱なり自身法性の
大地を生死 生死と転ぐり行くなり云云。

第九今此三界等の事 文句の五に云く次に今此三界より下 第二に一行半は上の所見諸衆生為生老病死之所燒煮を
頌して第二の所見 火の譬を合す、唯我一人より下 第三に半偈は上の仏見此已便作是念と頌し、驚入

火宅を合するなりと。

御義口伝に云く此の文は一念三千の文なり一念三千の法門は迹門には生陰二千の世間を明し本門には国土世間を明すなり、又云く今此三界の文は国土世間なり其中衆生の文は五陰世間なり而今此処多諸患難唯我一人の文は衆生世間なり、又云く今此三界は法身如来なり其中衆生悉是吾子は報身如来なり而今此処等は応身如来なり。

信解品六箇の大事

第一信解品の事 記の六に云く正法華には信樂品と名く其の義通ずと雖も樂は解に及ばず今は領解を明かす何を以て

か樂と云わんや。

御義口伝に云く法華一部廿八品の題号の中に信解の題号此の品に之れ有り、一念三千も信の一字より起り三世の諸仏の成道も信の一字より起るなり、此の信の字元品の無明を切る利剣なり其の故は信は無疑曰信とて疑惑を断破する利剣なり解とは智慧の異名なり信は価の如く解は宝の如し三世の諸仏の智慧をかうは信の一字なり

智慧とは南無妙法蓮華経なり、信は智慧の因にして名字即なり信の外に解無く解の外に信無し信の一字を以て妙覺の種子と定めたり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と信受領納する故に無上宝聚不求自得の大宝珠を得るなり信は智慧の種なり不信は墮獄の因なり、又云く信は不變真如の理なり其の故は信は知一切法皆是佛法と体達して実相の理と信ずるなり解は隨緣真如なり自受用智を云うなり、文句の九に云く疑い無きを信と曰い明了なるを解と曰うと、文句の六に云く中根の人譬喩を説くを聞きて初めて疑惑を破して大乘の見道に入る故に名けて信と為す進んで大乘の修道に入る故に名けて解と為す、記の六に云く大を以て之に望むるに乃ち両手を分ちて以て二道に属す疑を破するが故に信なり進んで入るを解と名く、信は二道に通じ解は唯修に在り故に

修道を解と名くと云うと。

第二捨父逃逝の事 文句の六に云く、捨父逃逝とは大を退するを捨と為し無明自ら覆つを逃と曰い生死に趣向するを逝と為すと。

御義口伝に云く父に於て三之れ有り法華經・釈尊・日蓮是なり、法華經は一切衆生の父なり此の父に背く故に流転の凡夫となる、釈尊は一切衆生の父なり此の父に背く故に備さに諸道を輪ぐるなり、今日蓮は日本国の一切衆生の父なり、章安大師の云く「彼が為に惡を除く即ち是れ彼が親なり」と、退大の大は南無妙法蓮華經なり無明とは疑惑謗法なり、自ら覆つとは法然・弘法・慈覺・智証・道隆・良觀等の惡比丘・謗法の失を恣まに覆いかくすなり。

第三加復窮困の事 文句の六に云く、出要の術を得ざるを又窮と為し、八苦の火に焼かるるが故に困と為すと。

御義口伝に云く出要とは南無妙法蓮華經なり術とは信心なり、今日蓮等の類い窮困を免離する事は法華經を受持し奉るが故なり、又云く妙法に値い奉る時は八苦の煩惱の火自受用報身の智火と開覺するなり云云。

第四心懷悔恨の事 文句の六に云く悔を父に約し恨を子に約すと、記の六に云く父にも悔恨あり、子にも悔恨ありと。

御義口伝に云く日本国の一切衆生は子の如く日蓮は父の如し、法華不信の失に依つて無間・大城に墮ちて返つて日蓮を恨みん、又日蓮も声も惜まず法華を捨つ可からずと云うべきものを靈山にて悔ること之れ有る可きか、文句の六に云く

「心懷悔恨とは昔・勤に教詔せず訓うること無くして逃逝せしむることを致すことを悔い子の恩義を惟わずして我を疎んじ他に親しむるを恨む」と。

第五無上宝聚不求自得の事

御義口伝に云く無上に重重の子細あり、外道の法に対すれば三蔵教は無上外道の法は有上なり又三蔵教は有上・通教は無上・通教は有上・別教は無上・別教は有上・円教は無上、又爾前の円は有上・法華の円は無上・又迹門の円は有上・本門の円は無上、又迹門十三品は有上・方便品は無上又本門十三品は有上・一品二半は無上、又天台大師所弘の止観は無上・玄文二部は有上なり、今日蓮等の類いの心は無上とは南無妙法蓮華經・無上の中の極無上なり、此の妙法を指して無上・宝聚と説き給うなり、宝聚とは三世の諸仏の万行万善の諸波羅蜜の宝を聚めたる南無妙法蓮華經なり、此の無上宝聚を辛勞も無く行功も無く一言に受取る信心なり不求自得とは是れなり、自の字は十界なり十界各各得るなり諸法実相是なり、然る間此の文・妙覺の釈尊我等衆生の骨肉なり能く能く之を案ず可し云云。

第六世尊大恩の事

御義口伝に云く世尊とは釈尊・大恩とは南無妙法蓮華經なり、釈尊の大恩を報ぜんと思わば法華經を受持す可き者なり是れ即ち釈尊の御恩を奉じ奉るなり、大恩を題目と云う事は次下に以稀有事と説く、希有の事とは題目なり、此の大恩の妙法蓮華經を四十余年の間秘し給いて後八箇年に大恩を開き給うなり、文句の一に云く「法王運を啓く」と運とは大恩の妙法蓮華經なり云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉りて日本国の一切衆生を助けんと思つは豈世尊の大恩に非ずや、章安大師十種の恩を挙げたりしなり第一には慈悲逗物の恩・第二には最初下種の恩・第三には中間隨逐の恩・第四には隱德示拙の恩・第五には鹿苑施小の恩・第六には耻小慕大の恩・第七には領地家業の恩・第八には父子決定の恩・第九には快得安穩の恩・第十には還用利多の恩なり此の十恩即ち衣座室の三軌なりと云云、記の六に云く「宿萌稍割けて尚未だ敷采せず長遠の恩何に由りてか報ず可き

「と、又云く」注家は但物として施を天地に答えず子として生を父母に謝せず感報斯に亡するを以てなり、と云えり、輔正記の六に云く「物は施を天地に答えずとは謂く物は天地に由て生ずと雖も而も天地の沢を報ずと云わず子も亦之の如し」と、記の六に云く「況や復只だ我をして報亡せしむるに縁る斯の恩報じ きをや」と、輔正記に云く「只縁令我報亡とは意に云く只如來の聲聞をして等しく亡報の理を得せしむるに縁るなり理は謂く一大涅槃なり」と。おんぎくでん いわ か じこ じよやくこ いえど しゃせん な む びやうほつれげきやう げしゆ げしゆ ゆえ にやうつ 御義口伝に云く此くの如く重重の所釈之れ有りと雖も所詮南無妙法蓮華經の下種なり下種の故に如影隨形し給うなり、今日蓮も此くの如きなり妙法蓮華經を日本国の一切衆生等に与え授くる豈釈尊の十恩に非ずや、十恩は即ち衣座室の三軌なりとは第一 第二 第三は大慈為室の御恩なり第四 第五第六第七は柔和忍辱衣の恩なり第八第九第十は諸法空為座の恩なり、第六の耻小慕大の恩を記の六に云く「故に頓の後に於て便ち小化を垂れ彈斥淘汰し槌砧鍛鍊す」と。

薬草喻品五箇の大事

第一薬草喻品の事 記の七に云く無始の性徳は地の如く大乘の心を発するは種の如し二乗の心を発するは草木の芽茎の如し今初住に入るは同じく仏乗の芽茎等を成ずるが如しと。

おんぎくでん ほつけ あ ぶつ か じゆ じゆ 御義口伝に云く法華の心を信ずるは種なり諸法実相の内証に入れば仏果を成ずるなり、薬とは九界の衆生の心法なり其の故は権教の心は毒草なり法華に値いぬれば三毒の煩惱の心地を三身果満の種なりと開覚するを薬とは云うなり、今日蓮等の類い妙法の薬を煩惱の草に受くるなり煩惱即菩提・生死即涅槃と覺らしむるを喩とは云うなり、釈に云く「喩とは曉訓なり」と薬草喩とは我等行者の事なり。

第二此の品述 成段の事

御義口伝に云く述とは迦葉なり成とは釈尊なり、述成の二字は迦葉・釈尊一致する義なり、所詮述は所化の領解、成は仏の印加なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と領するは述なり日蓮が贊嘆するは成なり我等が即身成仏を説き極めたる品なり、述成一致符契するは述成不二の即身成仏なり此の述成は法界三千の皆成仏道の述成なり。

第三雖一地所生一雨所潤等の事

御義口伝に云く隨縁不變の起る所の文なり、妙樂大師云く「隨縁不變の説は大教より出で木石無心の言は小宗より生ず」と、此の大教とは一經の惣体に非ず此の雖一地所生等の十七字を指すなり、一地所生一雨所潤は無差別譬而諸草木各有差別は有差別譬なり無差別譬の故に妙なり有差別譬の故に法なり云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは有差を置くなり廿八品は有差別なり、妙法の五字は無差別なり、一地とは迹門の大地一雨とは本門の義天・一地とは從因至果・二雨とは從果向因、末法に至つて從果向因の一雨を弘通するなり

一雨とは題目に余行を交えざるなり、序品の時は雨大法雨と説き此の品の時は一雨所潤と説けり一雨所潤は序品の雨大法雨を重ねて仏説き給うなり、一地とは五字の中の經の一字なり一雨とは五字の中の妙の一字なり法蓮華の二字は三千万法中にも草木なり三乘・五乘・七方便・九法界なり云云。

第四破有法王出現世間の事

御義口伝に云く有とは謗法の者なり破とは折伏なり法王とは法華經の行者なり世間とは日本国なり、又云く破は空・有は假・法王は中道なり、されば此の文をば釈迦如来の種子と伝うるなり惣じて三世の諸仏の出世は此の文に依るなり、有とは三界廿五有なり破とは有執を破するなり法王とは十界の衆生の心法なり王とは心法を

云うなり諸法実相と開くを破有法王とは云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは謗法の有執を断じて釈迦法王と成ると云う事なり、破有の二字を以て釈迦如來の種子とは云うなり、又云く有と云うは我等が煩惱生死なり此の煩惱生死を捨てて別に菩提涅槃有りと云うは權教權門の心なり、今經の心は煩惱生死を其の儘置いて菩提涅槃と開く所を破と云うなり、有とは煩惱・破とは南無妙法蓮華經なり有は所破なり破は能破なり能破所破共に実相の一理なり、序品の時は尽諸有結と説き此の品には破有法王と説き譬喩品の時は皆是我有と宣べたり云云。

第五我觀一切 普皆平等 無有彼此 愛憎之心 我無貪著 亦無限礙の事

御義口伝に云く此の六句の文は五識なり我觀一切 普皆平等とは九識なり無有彼此とは八識なり愛憎之心とは七識なり我無貪著とは六識なり亦無限礙とは五識なり我等衆生の觀法の大体なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は豈我觀一切 普皆平等の九識の修行に非ずや爾らば無有彼此に非ずや愛憎之心に非ずや我無貪著に非ずや亦無限礙に非ずや。

授記品四箇の大事

第一授記の事 文句の七に云く授とは是れ与の義なりと。

御義口伝に云く記とは南無妙法蓮華經なり授とは日本國の一切衆生なり不信の者には授けざるなり又之を受けざるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經の記を受くるなり、又云く授記とは法界の授記なり地獄の授記は惡因なれば惡業の授記を罪人に授くるなり余は之に准じて知る可きなり、生の記有れば必ず死す死の記あれば又生ず三世常恒の授記なり、所詮中根の四大声聞とは我等が生老病死の四相なり、迦葉は生の相 迦旃延は老の

相・日連は病の相・須菩提は死の相なり、法華に来て生老病死の四相を四大声聞と顕したり是れ即ち八相作仏なり、諸法実相の振舞なりと記を授くるなり妙法の授記なるが故に法界の授記なり、蓮華の授記なるが故に法界・清浄なり經の授記なるが故に衆生の語言音声は三世常恒の授記なり、唯一言に授記すべき南無妙法蓮華經なり云云。

第二迦葉光明の事

御義口伝に云く光明とは一切衆生の相好なり光とは地獄の灯燃猛火此れ即ち本覺自受用の智火なり乃至仏果之れ同じ、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經の光明を謗法の闇冥の中に指し出だす此れ即ち迦葉の光明如来なり、迦葉は頭陀を本とす頭陀は爰に抖と云うなり、今末法に入つて余行を抖して専ら南無妙法蓮華經と修するは此經難持行頭陀者是なり云云。

第三捨是身已の事

御義口伝に云く此の文段より捨不捨の起りなり転捨にして永捨に非ず転捨は本門なり永捨は迹門なり此の身を捨るは煩惱即菩提・生死即涅槃の旨に背くなり云云、所詮日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは捨是身已なり不惜身命の故なり云云、又云く此の身を捨すと読む時は法界に五大を捨すなり捨つる處の義に非ず、是の身を捨てて仏に成ると云うは権門の意なりかかる執情を捨つるを捨是身已と説くなり、此の文は一念三千の法門なり捨是身已とは還歸本理・一念三千の意なり、妙樂大師の当知身土・一念三千・故成道時・称此本理・一心一念・遍於法界と釈するは此の意なり云云。

第四宿世因縁吾今当說の事

御義口伝に云く宿世の因縁とは三千塵点の昔の事なり下根の為に宿世の因縁を説かんと云う事なり、因縁と

是因は種なり縁は昔に帰る義なりもとづくこと訓ぜり、大通結縁の下種にもとづくこと云う事を因縁と云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは過去の因にもとづきたり、爰を以て妙樂大師の云く「故に知んぬ

末代一時聞くことを待て聞き已て信を生ず・事須く宿種なるべし」と、宿とは大通の往時なり絶とは下種の南無妙法蓮華經なり此の下種にもとづくを因縁と云うなり、本門の意は五百塵点の下種にもとづくべきなり眞実妙法の因縁を成仏と云うなり。

化城喻品七箇の大事

732P

第一化城の事

御義口伝に云く化とは色法なり城とは心法なり、此の色心の二法を無常と説くは權教の心なり法華經の意は無常を常住と説くなり化城即宝処なり、所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は色心妙法と開くを化城即宝処と云うなり、十界皆化城・十界各各宝処なり化城は九界なり宝処は仏界なり、化城を去つて宝処に至ると云うは五百由旬の間なり此の五百由旬とは見思・塵沙・無明なり、此の煩惱の五百由旬を妙法の五字と開くを化城即宝処と云うなり、化城即宝処とは即の一字は南無妙法蓮華經なり念念の化城念念の宝処なり、我等が色心の二法を無常と説くは權教なり常住と説くは法華經なり無常と執する執情を滅するを即滅化城と云うなり、化城は皮肉・宝処は骨なり色心の二法を妙法と開闡するを化城即宝処の実体と云うなり、実体とは無常常住・俱時相即・隨縁不變・一念寂照なり一念とは南無妙法蓮華經・無疑曰信の一念なり即の一字心を留めて之を思ふ可し云云。

第二大通智勝仏の事

御義口伝に云く大通は心王なり智勝は心数なり大通は迹門智勝は本門なり大通智勝は我等が一身なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は大通なり題目を唱うるは智勝なり、法華經の行者の智は権宗の大智よりも百千万倍勝れたる所を智勝と心得可きなり、大は色法通は心法なり我等が生死を大通と云うなり、此の生死の身心に振舞う起念を智勝とは云うなり、愛を以て之を思うに南無妙法蓮華經と唱え奉る行者は大通智勝仏なり十六王子と是我等が心数なり云云。

第三諸母涕泣の事

御義口伝に云く諸母とは諸は十六人の母と云う事なり、実義には母とは元品の無明なり此の無明より起る惑障を諸母とも云うなり、流転の時は無明の母とつれて出で還滅の時は無明の母を殺すなり、無明の母とは念仏・禪・真言等の人人なり而随送之とは謗人を指すなり、然りと雖も終に法華經の広宣流布顕れて天下一同に法華經の行者と成る可きなり随至道場還欲親近是なり。

第四其祖転輪聖王の事

御義口伝に云く本地身の仏とは此文を習うなり、祖とは法界の異名なり此れは方便品の相性体の三如是を祖と云うなり、此の三如是より外に転輪聖王之れ無きなり転輪とは生住異滅なり聖王とは心法なり、此の三如是は三世の諸仏の父母なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は三世の諸仏の父母にして其祖転輪聖王なり、金銀銅鉄とは金は生・銀は白骨にして死なり銅は老の相・鉄は病なり此れ即ち開示悟入の四仏知見なり、三世常恒に生死・生死とめぐるを転輪聖王と云うなり、此の転輪聖王出現の時の輪宝とは我等が吐く所の言語音声なり此の音声の輪宝とは南無妙法蓮華經なり愛を以て平等大慧とは云うなり。

第五十六王子の事

御義口伝に云く十とは十界なり六とは六根なり王とは心王なり子とは心数なり此れ即ち実相の一理の大通の子なり、
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は十六王子なり八方作仏とは我等が八苦の煩惱即菩提と開くなり云云。

第六即滅化城の事

御義口伝に云く我等が滅する当体は化城なり、此の滅を滅と見れば化城なり不滅の滅と知見するを宝処とは云うなり、是を寿命品にしては而実不滅度とは説くなり、滅と云う見を滅するを滅と云うなり三権即一実の法門之を思ふべし、或は即滅化城とは謗法の寺塔を滅する事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は化城即宝処なり我等が居住の山谷曠野 皆皆常寂光の宝処なり云云。

第七皆共至宝処の事

御義口伝に云く皆とは十界なり共とは如我等無異なり至とは極果の住処なり宝処とは靈山なり、日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は一同に皆共至宝処なり、共の一字は日蓮に共する時は宝処に至る可し不共ならば阿鼻大城に墮つ可し云云。

五百弟子品三箇の大事

第一衣裏の事

御義口伝に云く此の品には無価の宝珠を衣裏に繋ぐる事を説くなり、所詮日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は一乘妙法の智宝を信受するなり信心を以て衣裏にかくと云うなり。

第二醉酒而臥の事

御義口伝に云く酒とは無明なり無明は謗法なり臥とは謗法の家に生る事なり、三千塵点の当初に悪縁の酒を吞みて

五道六道に酔い廻りて今謗法の家に臥したり、酔とは不信なり、覺とは信なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る時無明の酒醒めたり、又云く酒に重重之れ有り權教は酒法華經は醒めたり、本迹相對する時迹門は酒なり始覺の故なり本門は醒めたり本覺の故なり、又本迹二門は酒なり南無妙法蓮華經は醒めたり酒と醒むるとは相離れざるなり、酒は無明なり醒むるは法性なり法は酒なり妙は醒めたり妙法と唱うれば無明法性体一なり、止の二に云く無明塵勞即是菩提と。

第三身心遍歡喜の事

御義口伝に云く身とは生死即涅槃なり心とは煩惱即菩提なり、遍とは十界同時なり歡喜とは法界同時の歡喜なり、此の歡喜の内には三世諸仏の歡喜納まるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉れば我則歡喜とて釈尊歡喜し給うなり、歡喜とは善惡共に歡喜なり十界同時なり深く之を思う可し云云。

人記品二箇の大事

第一學無學の事

御義口伝に云く學とは無智なり無學とは有智なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは學無學の人に如我等無異の記を授くるに非ずや、色法は無學なり心法は學なり又心法は無學なり色法は學なり學無學の人とは日本国の一切衆生なり、智者愚者をしなべて南無妙法蓮華經の記を説きて而強毒之するなり。

第二山海慧自在通王仏の事

御義口伝に云く山とは煩惱即菩提なり海とは生死即涅槃なり慧とは我等が吐く所の言語なり自在とは無障礙なり通王とは十界互具・百界千如・一念三千なり、又云く山とは迹門の意なり海とは本門の意なり慧とは妙法の五字なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は山海慧自在通王仏なり全く外に非ざるなり我等行者の外に阿難之れ無きなり、阿難とは歡喜なり一念三千の開覺なり云云。

法師品十六箇の大事

第一法師の事

御義口伝に云く法とは諸法なり師とは諸法が直ちに師と成るなり森羅三千の諸法が直ちに師と成り弟子となるべきなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は法師の中の大法師なり、諸法実相の開覺顯れて見れば地獄の灯燃猛火乃至仏果に至る迄悉く具足して一念三千の法師なり、又云く法とは題目師とは日蓮等の類いなり。

第二成就大願愍衆生故生於惡世広演此經の事

御義口伝に云く大願とは法華弘通なり愍衆生故とは日本国の一切衆生なり生於惡世の人とは日蓮等の類いなり広とは南閻浮提なり此經とは題目なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者なり。

第三如来所遣行如来事の事

御義口伝に云く法華の行者は如来の使に來れり、如来とは釈迦如来事とは南無妙法蓮華經なり如来とは十界三千の衆生の事なり今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは眞実の御使なり云云。

第四与如来共宿の事

おんぎくでん いわ ほつけ ぎふじや なんよ にやい ほんのつくくほだい しちうじきくねはん
御義口伝に云く法華の行者は男女共に如来なり煩惱即菩提・生死即涅槃なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え
奉る者は与如来共宿の者なり、傳大士の釈に云く「朝朝仏と共に起き夕夕仏と共に臥し時時に成道し時時に顕本す」と云云。

第五是法華經藏深固幽遠無人能到の事

おんぎくでん いわ ぜほけきようぞう おん むにんのついで
御義口伝に云く是法華經藏とは題目なり深固とは本門なり幽遠とは迹門なり無人能到とは謗法なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は無人能到の者に非ざるなり云云。

第六聞法信受隨順不逆の事

おんぎくでん いわ みよじやく だいもく しんじゆ つまじ ずいじゆん
御義口伝に云く聞とは名字即なり法とは題目なり信受とは受持なり隨順不逆とは本迹二門に隨順するなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者の事なり。

第七衣座室の事

おんぎくでん いわ えざしつ ほつほうおう さんじん くつちゆう さんたいしんくい
御義口伝に云く衣座室とは法報応の三身なり空仮中の三諦身口意の三業なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は此の三軌を一念に成就するなり、衣とは柔和忍辱の衣当著忍辱鎧是なり座とは不惜身命の修行なれば空座に居するなり室とは慈悲に住して弘むる故なり母の子を思うが如くなり、豈一念に三軌を具足するに非ずや。

第八欲捨諸懈怠応当聽此經の事

おんぎくでん いわ もむちけたい ынじゆうねん ほうべん けく じんぎふ けなけたい
御義口伝に云く諸の懈怠とは四十余年の方便の經教なり悉く皆懈怠の經なり此經とは題目なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは是れ即ち精進なり応当聽此經は是なり、応に日蓮に此の經を聞くべしと云えり云云。

第九不聞法華經去仏智甚遠の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く不聞とは謗法なり成仏の智を遠ざかるべきなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は仏智開悟の者にして成仏の近き故なり。

第十若説此經時有人惡口罵加刀杖瓦石念仏故忍の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く此經とは題目なり惡口とは口業なり加刀杖は身業なり此の身口の二業は意業より起るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は仏勅を念ずるが故に忍とは云うなり。

第十一及清信士女供養於法師の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く士女とは男女なり法師とは日蓮等の類いなり清信とは法華經に信心の者なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はなり云云、此れ諸天善神等男女と顯れて法華經の行者を供養す可しと云う經文なり。

第十二若人欲加惡刀杖及瓦石則遣變化人為之作衛護の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く變化人とは竜口守護の八幡大菩薩なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者を守護す可しと云う經文なり。

第十三若親近法師速得菩薩道の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く親近とは信受の異名なり法師とは日蓮等の類いなり菩薩とは仏果を得る下地なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者の事なり。

第十四隨順是師學の事

御義口伝に云く是師とは日蓮等の類いなり学とは南無妙法蓮華経なり随順とは信受なり云云。

第十五師と学との事

御義口伝に云く日蓮等の類いの南無妙法蓮華経は学者の一念三千なり師も学も共に法界三千の師学なり。

第十六得見恒沙仏の事

御義口伝に云く見恒沙仏とは見宝塔と云う事なり、恒沙仏とは多宝の事なり多宝の多とは法界なり宝とは一念三千の開悟なり法界を多宝仏と見るを見恒沙仏と云うなり、故に法師品の次に宝塔品は来るなり解行証の法師の乗物は宝塔なり云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは妙解妙行妙証の不思議の解不思議の行不思議の証得なり真実一念三千の開悟なり云云、此の恒沙と云うは悪を滅し善を生ずる河なり、恒沙仏とは一文文皆金色の仏体なり見の字之を思ふ可し仏見と云う事なり、随順とは仏知見なり得見の見の字と見宝塔の見とは依正の二報なり得見恒沙の見は正報なり見宝塔の見は依報なり云云。

宝塔品廿箇の大事

739P

第一宝塔の事

文句の八に云く前仏已に居し今仏並に座す当仏も亦然なりと。御義口伝に云く宝とは五陰なり塔とは和合なり五陰和合を以て宝塔と云うなり、此の五陰和合とは妙法の五字なりと見る是を見とは云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は見宝塔なり。

第二有七宝の事

御義口伝に云く七宝とは聞・信・戒・定・進・捨・慙なり、又云く頭上の七穴なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え

奉るは有七宝の行者なり云云。

第三四面皆出の事

もんく 文句の八に云く四面出香とは四諦の道風四徳の香を吹くなり。御義口伝に云く四面とは生老病死なり四相を以てわれら我等が一身の塔を莊嚴するなり、我等が生老病死に南無妙法蓮華經と唱え奉るは併ら四徳の香を吹くなり、南無とは楽波羅蜜・妙法とは我波羅蜜 蓮華とは浄波羅蜜 經とは常波羅蜜なり。

第四出大音声の事

おんぎくでん 御義口伝に云く我等衆生の朝夕吐く所の言語なり、大音声とは権教は小音声 法華經は大音声なり廿八品は小音声題目は大音声なり、惣じて大音声とは大は法界なり法界の衆生の言語を妙法の音声と沙汰するを大音声とは云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは大音声なり、又云く大とは空諦・音声とは仮諦なり出とは中道なり云云。

第五見大宝塔住在空中の事

おんぎくでん 御義口伝に云く見大宝塔とは我等が一身なり住在空中とは我等衆生終に滅に歸する事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉りて信心に住する処が住在空中なり虚空会に住するなり。

第六国名宝浄彼中有仏号曰多宝の事

おんぎくでん 御義口伝に云く宝浄世界とは我等が母の胎内なり、有仏とは諸法実相の仏なり愛を以て多宝仏と云うなり、胎内とは煩惱を云うなり煩惱の淤泥の中に真如の仏あり我等衆生の事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るを当体蓮華の仏と云うなり云云。

第七於十方国土有說法華經処我之塔廟為聽是經故涌現其前為作証明讚言善哉の事

御義口伝に云く十方とは十界なり法華經とは我等衆生流轉の十二因縁なり仍て言語の音声を指すなり善哉とは善惡不二邪正一如なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る處を多宝涌現と云うなり。

第八南西北方四惟上下の事

御義口伝に云く四方四惟上下合して十方なり即ち十界なり、十界の衆生共に三毒の光之れ有り是を白毫と云うなり一心中道の智慧なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは十界同時の光指なり諸法実相の光明なるが故なり。

第九各齋宝華滿掬の事

御義口伝に云く宝華とは合掌一念三千の所表なり各とは十界なり滿の一字を一念三千と心得可し、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは仏に宝華を奉るなり宝華即宝珠なり宝珠即一念三千なり合掌以敬心欲聞具足道是なり云云。

第十如却閑鑰開大城門の事 補註の四に云く此の開塔見仏は蓋し所表有るなり、何となれば即ち開塔は即開権なり見仏は即顕実なり是れ亦前を証し復將さに後を起さんとするのみ、如却閑鑰とは却是除なり障除こり機動くことを表す謂く法身の大士惑を破し理を顕し道を増し生を損するなりと。

御義口伝に云く閑鑰とは謗法なり無明なり開とは我等が成仏なり大城門とは我等が色心の二法なり大城とは色法なり門とは口なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る時無明の惑障却けて己心の釈迦多宝住するなり、閑鑰とは無明なり開とは法性なり鑰とは妙の一字なり天台の云く「秘密の奥蔵を發らく之を称して妙と為す」と、妙の一字を以て鑰と心得可きなり、此の經文は謗法不信の閑鑰を却けて己心の仏を開くと云う事なり開仏知見之を思う可し云云。

第十一 撰諸大衆皆在虛空の事

おんぎくでん いわ たいしやう ちやうじやう みな ことく 御義口伝に云く大衆とは聴衆なり皆在虛空とは我等が死の相なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは生死即涅槃と開闢するを皆在虛空と説くなり生死即涅槃と被撰するなり、大地は色法なり虛空は心法なり色心不二と心得可きなり虛空とは寂光土なり、又云く虛空とは蓮華なり經とは大地なり妙法は天なり虛空とは中なり一切衆生の内菩薩蓮華に座するなり、此れを妙法蓮華經と説かれたり、經に云く「若在仏前蓮華化生」と。

第十二 譬如大風吹小樹枝の事

おんぎくでん いわ げじや しやうりやう ひにょたいしやう 御義口伝に云く此の偈頌の如清凉池と譬如大風と燃大炬火とは三身なり、其の中に譬如大風とは題目の五字なり吹小樹枝とは折伏門なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは大風の吹くが如くなり。

第十三 若有能持則持仏身の事

おんぎくでん いわ ほけきやう たまつ ぶつしん 御義口伝に云く法華經を持ち奉るとは我が身仏身と持つなり、則の一字は生仏不二なり上の能持の持は凡夫なり持つ体は妙法の五字なり仏身を持つと云うは「一文文皆金色仏体の故なり、さて仏身を持つとは我が身の外に仏無しと持つを云うなり、理即の凡夫と究竟即の仏と二無きなり即の字は即故初後不二の故なり云云。

第十四 此經難持の事

おんぎくでん いわ ほけきやう 御義口伝に云く此の法華經を持つ者は難に遇わんと心得て持つなり、されば即為疾得無上仏道の成仏は今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る是なり云云。

第十五 我則歡喜諸仏亦然の事

御義口伝に云く我とは心王なり諸仏とは心数なり法華經を持ち奉る時は心王心数同時に歡喜するなり、又云く我とは凡夫なり諸仏とは三世諸仏なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱えて歡喜する是なり云云。

第十六誦持此經の事

御義口伝に云く五種の修行の誦誦と受持との二行なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは誦なり此の經を持つは持なり此經とは題目の五字なり云云。

第十七是真仏子の事

御義口伝に云く法華經の行者は真に釈迦法王の御子なり、然る間王位を継ぐ可きなり悉是吾子の子と是真仏子の子と能く能く心得合す可きなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は釈迦法王の御子なり。

第十八是諸天人世間の眼の事

御義口伝に云く世間とは日本国なり眼とは仏知見なり法華經は諸天・世間の眼目なり、眼とは南無妙法蓮華經なり是諸天人世間の眼又云く是諸仏眼目云云、此の眼をくじる者は禅・念仏・真言宗等なり眼等とは目を閉づるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは諸天・世間の眼に非ずや云云。

第十九能須臾説の事

御義口伝に云く能の一字之を思ふ可し説とは南無妙法蓮華經なり、今日蓮等の類いは能須臾説の行者なり云云。

第二十此經難持の事

御義口伝に云く此の經文にて三学俱伝するなり、虚空不動戒・虚空不動定・虚空不動慧・三学俱に伝うるを名け

て妙法と曰うと、戒とは色法なり定とは心法なり慧とは色心二法の振舞なり、俱の字は南無妙法蓮華經の一念三千なり伝とは末法万年を指すなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉り權教は無得道・法華經は眞実と修行する是は戒なり防非止惡の義なり、持つ所の行者・決定無有疑の仏体と定む是は定なり、三世の諸仏の智慧を一返の題目に受持する是は慧なり、此の三学は皮肉骨・三身・三諦・三軌・三智等なり。

提婆達多品八箇の大事

第一 提婆達多だいばだつたの事 文句の八に云く本地は清涼にして迹に天熱を示すと。

御義口伝に云く提婆とは本地は文殊なり、本地清涼と云うなり迹には提婆と云うなり天熱を示す是なり、清涼は水なり此れは生死即涅槃なり天熱は火なり是は煩惱即菩提なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るに煩惱即菩提・生死即涅槃なり、提婆は妙法蓮華經の別名なり過去かこの時に阿私仙人なり阿私仙人とは妙法の異名なり阿とは無の義なり私無きの法とは妙法なり、文句の八に云く無私法を以て衆生に灑ぐと云えり阿私仙人とは法界三千の別名なり故に私無きなり一念三千之を思ふ可し云云。

第二 若不違我当為宣説の事

御義口伝に云く妙法蓮華經を宣説する事を汝は我に違わずして宣説すべしと云う事なり、若の字は汝なり、天台の云く「法を受けて奉行す」と、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は日蓮に違わずして宣説す可きなり阿私仙人とは南無妙法蓮華經なり云云。

第三採菓汲水拾薪設食の事

御義口伝に云く採菓とは癡煩惱なり汲水とは貪煩惱なり拾薪とは瞋煩惱なり設食とは慢煩惱なり、此の下に八種の給仕之れ有り此の外に妙法蓮華經の伝受之れ無きなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは即ち千歳給仕なり是れ即ち一念三千なり貪瞋癡慢を対治するなり。

第四 情存妙法故身心無懈倦の事

御義口伝に云く身心の二字色心妙法と伝受するなり、日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉りて即身成仏す身心無倦とは一念三千なり云云。

第五 我於海中唯常宣説の事

御義口伝に云く我とは文殊なり海とは生死の海なり唯とは唯一乘法なり常とは常住此説法なり妙法蓮華經とは法界の言語音声なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る是なり、生死の海即真如の大海なり我とは法界の智慧なり文殊なり云云。

第六 年始八歳の事

御義口伝に云く八歳とは八巻なり提婆は地獄界なり竜女は仏界なり然る間十界互具・百界千如・一念三千なり、又云く八歳とは法華經八巻なり我等八苦の煩惱なり、惣じて法華經の成仏は八歳なりと心得可し八苦即八巻なり八苦八巻即八歳の竜女と踊るるなり一義に云く、八歳の事はたまをひらくと読むなり、歳とは竜女の一心なり八とは三千なり三千とは法華の八巻なり、仍つて八歳とは開仏知見の所表なり智慧利根より能至菩提まで法華に歸入するなり、此の中に心念口演とは口業なり志意和雅とは意業なり悉能受持深入禪定とは身業なり三業即三徳なれば三諦法性なり、又云く心念とは一念なり口演とは三千なり悉能受持とは竜女法華經受持の文なり、歳とは如意宝珠なり妙法なり八とは色心を妙法と開くなり。

第七 言論未訖の事

御義口伝に云く此の文は無明即法性の明文なり、其の故は智積難問の言未だ訖らざるに竜女三行半の偈を以て答うるなり、難問の意は別教の意なり無明なり竜女の答は円教の意なり法性なり、智積は元品の無明なり竜女は法性の女人なり仍て無明に即する法性法性に即する無明なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは言論未訖なり、時とは上の事の末末の事の始なり時とは無明法性同時の時なり南無妙法蓮華經と唱え奉る時なり、智積菩薩を元品の無明と云う事は不信此女不信の二字なり不信とは疑惑なり疑惑を根本無明と云うなり、竜女を法性と云う事は我闡大乘教の文なり竜女とは竜は父なり女は八歳の娘なり竜女の二字は父子同時の成仏なり、其の故は時竜王女の文是なり既に竜王の女と云う間竜王は父なり女とは八歳の子なり、されば女の成仏は此の品にあり父の竜の成仏は序品に之れ在り、有八竜王の文是なり、然りと雖も父子同時の成仏なり序品は一經の序なる故なり、又聞成菩提とは竜女が智積を責めたる言なりされば唯我が成仏をば仏御存知あるべしとて又聞成菩提唯仏当証知と云えり苦の衆生とは別して女人の事なり、此の三行半の偈は一念三千の法門なり遍照於十方とは十界なり、殊には此の八歳の竜女の成仏は帝王持經の先祖たり、人王の始は神武天皇なり神武天皇は地神五代の第五の鵜萱葺不合尊の御子なり此の葺不合尊は豐玉姫の子なり此の豐玉姫は沙竭羅竜王の女なり八歳の竜女の姉なり、然る間先祖法華經の行者なり甚深甚深云云、されば此の提婆の一品は一天の腰刀なり無明煩惱の敵を切り生死愛着の繩を切る秘法なり、漢高三尺の劍も一字の智劍に及ばざるなり妙の一字の智劍を以て生死煩惱の繩を切るなり、提婆は火災を顕し竜女は大蛇を示し文殊は智劍を顕すなり仍つて不動明王の尊形と口伝せり、提婆は我等が煩惱即菩提を顕すなり、竜女は生死即涅槃を顕すなり、文殊をば

此には妙徳と翻ずるなり煩惱生死具足して当品の能化なり。

第八 有一宝珠の事 文句の八に云く一とは珠を献して円解を得ることを表すと。

御義口伝に云く一とは妙法蓮華經なり宝とは妙法の用なり珠とは妙法の体なり、妙の故に心法なり法の故に色法なり色法は珠なり心法は宝なり妙法とは色心不二なり、一念三千を所表して竜女宝珠を奉るなり、釈に表得円解と云うは一念三千なり、竜女が手に持てる時は性得の宝珠なり仏受け取り給う時は修得の宝珠なり、中に有るは修性不二なり、甚疾とは頓極・頓速・頓証の法門なり即為疾得無上仏道なり、神力とは神は心法なり力とは色法なり觀我成仏とは舍利弗竜女が成仏と思うが儼事なり、我が成仏ぞと觀ぜよと責めたるなり、觀に六則觀之れ有り爰元の觀は名字即の觀と心得可きなり、其の故は南無妙法蓮華經と聞ける處を一念坐道場成仏不虛也と云えり、變成男子とは竜女も本地南無妙法蓮華經なり其の意經文に分明なり。

勸持品十三箇の大事

747P

第一 勸持の事

御義口伝に云く勸とは化他持とは自行なり南無妙法蓮華經は自行化他に亘るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經を勧めて持たしむるなり。

第二 不惜身命の事

御義口伝に云く身とは色法命とは心法なり事理の不惜身命之れ有り、法華の行者田畠等を奪わるは理の不惜身命なり命根を断たるを事の不惜身命と云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は事理共に

値^あうなり。

第三 心不実故^{ふじつ}の事

御義口伝に云く心不実故とは法華最第一の經文を第三と読み最為其上の經文を最為其下と讀みて法華經のいちねんさんぜんけこんだいにち一念三千を華嚴・大日等に之れ有りと法華の即身成仏を大日經に取り入るは此等は皆心不実故なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は心実なるべし云云。

第四 敬順^{ぶつじ}仏意の事

御義口伝に云く法華經に順ずるは敬順^{ぶつじ}仏意なり意とは南無妙法蓮華經是なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは敬順^{ぶつじ}仏意の意なり。

第五 作師子吼^{ししく}の事

御義口伝に云く師子吼とは仏の説なり説法とは法華別しては南無妙法蓮華經なり、師とは師匠授くる所の妙法子とは弟子受くる所の妙法吼とは師弟共に唱うる所の音声なり作とはおこすと読むなり、末法にして南無妙法蓮華經を作すなり。

第六 如法修行^{じゆけうしゆぎやう}の事

御義口伝に云く如法修行の人とは天台・妙樂・伝教等なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは如法修行なり云云。

第七 有諸無智^{しよむち}人の事

御義口伝に云く一文不通の大俗なり惡口罵詈等分明なり日本国の俗を諸と云うなり。

第八惡世中比丘の事

御義口伝に云く惡世中比丘の惡世とは末法なり比丘とは謗法たる弘法等是なり、法華の正智を捨て權教の邪智を本とせり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は正智の中の大正智なり。

第九或有阿練若の事

御義口伝に云く第三の比丘なり良觀等なり如上六通羅漢の人と思うなり。

第十自作此經典の事

御義口伝に云く法華經を所作して讀むと謗す可しと云う經文なり。

第十一為斯所輕言汝等皆是仏の事

御義口伝に云く法華雜の行者を蔑づり生仏と云うべしと云う經文なり、是は輕心を以て誇るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者を云う可きなり。

第十二惡鬼入其身の事

御義口伝に云く惡鬼とは法然弘法等是なり入其身とは國王・大臣・方民等の事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るを怨むべしと云う事なり、鬼とは命を奪う者にして奪功德者と云うなり、法華經は三世諸仏の命根なり此の經は一切菩薩の功德を納めたる御經なり。

第十三但信無上道の事

御義口伝云く無上道とは南無妙法蓮華經是れなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經を惜しむ事は命根よりも惜しき事なり、之に依つて結ぶ処に仏自知我心と説かれたり法華經の行者の心中をば教主釈尊の御存知有る可きなり、仏とは釈尊我心とは今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者なり。

安樂行品五箇の大事 あんらくぎょうひんごのだいじ

第一 安樂行品の事 だいいち あんらくぎょうひんごのじ

御義口伝に云く妙法蓮華經を安樂に行ぜむ事末法に於て今日蓮等の類いの修行は妙法蓮華經を修行するに難来るを以て安樂と意得可きなり。

第二 一切法空の事 いっさい げんご

御義口伝に云く此下に於て十八空之有り十八空の体とは南無妙法蓮華經是なり十八空は何れも妙法の事なり。

第三 有所難問不以小乘法答等の事 なん じゆごにひていせうぼうぽうたふたうのじ

御義口伝に云く対治の時は權教を以て会通す可からず。

一切種智とは南無妙法蓮華經なり一切は万物なり種智は万物の種なり妙法蓮華經是なり、又云く一切種智とは我等が一心なり一心とは万法の惣体なり之を思ふ可し。

第四 無有怖畏加刀杖等の事 ぶい とうじやう

御義口伝に云く迹化の菩薩に刀杖の難之れ有る可からずと云う經文なり、勸持品は末法法華の行者に及加刀杖者数数見擯出と此の品には之無し、彼は末法の折伏の修行此の品は像法撰受の修行なるが故なり云云。

第五 有人来欲難問者諸天昼夜等の事 あるひと なん じよてん

御義口伝に云く末法に於て法華を行ずる者をば諸天守護之有る可し常為法故の法とは南無妙法蓮華經是なり。

涌出品一箇の大事 ゆづしゅひんごのだいじ

第一 唱導之師の事

御義口伝に云く涌出の二品は悉く本化の菩薩の事なり、本化の菩薩の所作としては南無妙法蓮華經なり此れを唱と云うなり導とは日本国の一切衆生を靈山淨土引導する事なり、末法の導師とは本化に限ると云うを師と云うなり、此の四大菩薩の事を釈する時、疏の九を受けて輔正記の九に云く「經に四導師有りとは今四徳を表す

上行は我を表し無辺行は常を表し淨行は淨を表し安立行は樂を表す、有る時には一人に此の四義を具す二死の表に出づるを上行と名け断常の際を踰ゆるを無辺行と称し五住の垢累を超ゆる故に淨行と名け道樹にして徳円かなり故に安立行と曰うなり」と今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱え奉る者は皆地涌の流類なり、又云く火

は物を焼くを以て行とし水は物を淨むるを以て行とし風は塵垢を払うを以て行とし大地は草木を長ずるを以て行とするなり四菩薩の利益是なり、四菩薩の行は不同なりと雖も、俱に妙法蓮華經の修行なり、此の四菩薩は下方に住する故に釈に「法性之淵底玄宗之極地」と云えり、下方を以て住处とす下方とは眞理なり、輔正記に云く「下方とは生公の云く住して理に在るなり」と云云、此の理の住处より顕れ出づるを事と云うなり、又云く千草万木地涌の菩薩に非ずと云う事なし、されば地涌の菩薩を本化と云えり本とは過去久遠五百塵点よりの利益として無始無終の利益なり、此の菩薩は本法所持の人なり本法とは南無妙法蓮華經なり、此の題目は必ず

地涌の所持の物にして迹化の菩薩の所持に非ず、此の本法の体より用を出して止觀と弘め一念三千と云う、惣じて大師入師の所釈も此の妙法の用を弘め給うなり、此の本法を受持するは信の一字なり、元品の無明を対治する利剣は信の一字なり無疑曰信の釈之を思ふ可し云云。

御義口伝卷上

弘安元年 戊寅 正月 一日

執筆 日興

九五 御義口伝 卷下

日蓮所立自寿量品至開結二經

752P

寿量品廿七箇の大事

第一 南無妙法蓮華經如來寿量品第十六の事 文句の九に云く如來とは十方三世の諸仏二仏三仏本仏迹仏の通号なり別しては本地三仏の別号なり、寿量とは詮量なり、十方三世二仏三仏の諸仏の功德を詮量す故に寿量品と云うと。

御義口伝に云く此の品の題目は日蓮が身に当る大事なり神力品の付属是なり、如來とは釈尊惣じては十方三世の諸仏なり別しては本地無作の三身なり、今日蓮等の類の意は惣じては如來とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子・檀那なり、されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云う

なり、寿量品の事の三大事とは是なり、六即の配立の時は此の品の如來は理即の凡夫なり頭に南無妙法蓮華經を頂戴し奉る時名字即なり、其の故は始めて聞く所の題目なるが故なり聞き奉りて修行するは觀行即なり此の觀行即とは事の一念三千の本尊を觀ずるなり、さて惑障を伏するを相似即と云うなり化他に出づるを分真即と

云うなり無作の三身の仏なりと究竟したるを究竟即の仏とは云うなり、惣じて迷惑を以て寿量品の極とせず唯凡夫の当体・本有の儘を此の品の極理と心得可きなり、無作の三身の所作は何物ぞと云う時南無妙法蓮華經なり云云。

第二如來秘密神通之力の事

御義口伝に云く無作三身の依文なり、此の文に於て重重の相伝之有り、神通之力とは我等衆生の所作發発と振る舞う處を神通と云うなり獄卒の罪人を苛責する音も皆神通乃力生住異滅の森羅三千の当体悉く神通之力の体なり、今日蓮等の類の意は即身成仏と開覺するを如來秘密神通之力とは云うなり、成仏するより外の神通と秘密とは之れ

無きなり、此の無作の三身をば一字を以て得たり所謂信の一字なり、仍つて経に云く「我等当信受仏語」と信受の二字に意を留む可きなり。

第三我実成仏已来無量无边等の事会

御義口伝に云く我実とは釈尊の久遠実成道なりと云う事を説かれたり、然りと雖も当品の意は我とは法界の衆生なり十界已を指して我と云うなり、実とは無作三身の仏なりと定めたり此れを實と云うなり成とは能成所成なり成は開く義なり法界無作の三身の仏なりと開きたり、仏とは此れを覚知するを云うなり已とは過去なり来とは未来なり已来の言の中に現在是有るなり、我実と成けたる仏にして已も来も無道なり无边なり、百界千如・一念三千と説かれたり、百千の二字は百は百界千は千如なり此れ即ち事の一念三千なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は寿量品の本主なり、惣じては迹化の菩薩此の品に手をつけいろべきに非ざる者なり、彼は迹表本裏此れは本面迹裏然りと雖も而も当品は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す云云。

第四如来如実知見三界之相無有生死の事

御義口伝に云く如来とは三界の衆生なり此の衆生を寿量品の眼開けてみれば十界本有と実の如く知見せり三界之相とは生老病死なり本有の生死とみれば無有生死なり生死無ければ退出も無し唯生死無きに非ざるなり、

生死しよじを見て厭離おんりするを迷まよいと云いい始しか覺かくと云うなりさて本有ほんぬの生死しよじと知見ちけんするを悟いと云いい本覺ほんかくと云うなり、今日蓮等の類いまたちれんい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる時本有ほんぬの生死しよじ本有ほんぬの退出しゅつじと開覺かいかくするなり、又云いわく無も有も生も死も若退も若出も在世も滅後も悉く皆本有常住みなほんぬじやうじやうの振舞ふるまいなり無とは法界同時ほつかいどうじに妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの振舞ふるまいより外は無きなり有とは地獄じごくは地獄じごくの有まじの儘まじ十界本有じふかいどうじの妙法みょうほつの全体ぜんたいなり、生とは妙法みょうほつの生なれば隨緣ずいゑんなり死とは壽量じゆりやうの死なれば法界同時ほつかいどうじに責如なり若退ゆゑの故に滅後めつごなり若出ゆゑの故に在ざい世なり、されば無死退滅むしとくめつは空なり有生出在にやういによじつは無作むさの法身ほつしんなり、此の三身さんじんは我が一身いつしんなり、一身即三身そくさんじんみよつ名為秘ひとは是これなり、三身即一身さんじんたう名為密みつも此の意なり、然らば無作むさの三身さんじんの当体とうたいの蓮華れんげの仏にちれんとは日蓮にちれんが弟子でし檀那等だんなななり南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの宝号たもを持ち奉たてまつる故なり云云。

第五 若く仏ぶつ久住くじゆ於世薄徳はくとく之人不種善根ぜんこんびんぐげせん貧窮下賤せんてん貪著こんちやく五欲入於憶想妄見網中ごうしやうの事御義口伝おんぎくでんに云いく此の經文きやうもんは仏世ぶつぜに久住くじゆしたまわば薄徳はくとくの人は善根ぜんこんを殖うゆ可べからず然しかる間妄見網中ごうしやうと説しやかれたり、所詮しよせん此の薄徳はくとくとは在世ざいぜに漏もれたる衆生しゆじやう今滅後めつご日本国にほんこくに生なれたり、所謂い念仏ねんぶつ・禪ぜん・真言しんごん等の謗法ほうほつなり、不種善根ぜんこんとは善根ぜんこんは題目だいもくなり不種ふしゆとは未いまだ持もたざる者なり、憶想いよくしやうとは捨閉閣しやへい拋ほう第三だいさんの劣等りやくとう此こくの如ごときの憶想いよくしやうなり、妄とは權教けんぎやう妄語まうごの經教きやうぎやうなり見けんは邪見じやけんなり法華ほうげ最第一さいだいの一いつを第三だいさんと見るが邪見じやけんなり、網中ごうしやうとは謗法ほうほつ不信ふしんの家なり、今日蓮等の類こんにちれんい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者はかかる妄見まうけんの經網中きやうごうしやうの家を離はなれたる者なり云云。

第六 飲他毒藥藥發悶乱宛轉于地もんらんの事

御義口伝おんぎくでんに云いく他たとは念仏ねんぶつ・禪ぜん・真言しんごんの謗法ほうほつの比丘びくなり、毒藥どくやくとは權教方便けんぎやうなり法華ほうけの良藥りやうやくに非あらず故ゆゑに悶乱もんらんするなり悶もんとはいきたゆるなり、壽量品じゆりやうひんの命いのちなきが故ゆゑに悶乱もんらんするなり宛轉えんてん于地ちとは阿鼻あび地獄じごく入いるなり云云。諸子しよ

飲毒の事は釈に云く「邪師の法を信受するを名けて飲毒と為す」と、諸子とは謗法なり飲毒とは弥陀大日等の権法なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは毒を飲まざるなり。

第七 或矢本心 或不失者の事

御義口伝に云く本心を失うとは謗法なり本心とは下種なり不失とは法華經の行者なり失とは本有る物を失う事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは本心を失わざるなり云云

第八 符和合与子令服の事

御義口伝に云く此の經文は空仮中の三諦戒定慧の三字なり、色香美味の良藥なり擣は空諦なりは仮諦なり和合は中道なり与は投与なり子は法華の行者なり服すると云うは受持の義なり、是を此大良藥色香美味皆悉具足と説かれたり、皆悉の一字万行方善・諸波羅蜜を具足したる大良藥たる南無妙法蓮華經なり、色香等とは一色一香・無非中道にして草木成仏なり、されば題目の五字に一法として具足せずと云う事なし若し服する者は速除苦惱なり、されば妙法の大良藥を服するは貪・瞋・癡の三毒の煩惱の病患を除くなり、法華の行者南無妙法蓮華經と唱え奉る者は謗法の供養を受けざるは貪欲の病を除くなり、法華の行者は罵詈せらるれども忍辱を行ずるは脹意の病を除くなり、法華經の行者は是人於仏道決定無有疑と成仏を知るは愚痴の煩惱を治するなり、されば大良藥は末法の成仏の甘露なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは大良藥の本主なり。

第九 毒氣深入 矢本心故の事

御義口伝に云く毒氣深入とは權教謗法の執情深く入りたる者なり、之に依つて法華の大良藥を信受せざるなり服せしむると雖も吐き出だすは而謂不美とてむまからずと云う者なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは而謂

不美の者に非ざるなり。

第十 是好良薬今留在此汝可取服勿憂不差の事

おんぎくでん いわ ぜこうりやくやくこんるざいしなんじ もつうぶさい
御義口伝に云く是好良薬とは或は経教 或は舍利なりさて末法にては南無妙法蓮華経なり、好とは三世諸仏の好み物は題目の五字なり、今留とは末法なり此とは一閻浮提の中には日本国なり、汝とは末法の一切衆生なり取は法華経を受持する時の儀式なり、服するとは唱え奉る事なり服するより無作の三身なり始成正覚の病患差るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る是なり。

第十一 自我得仏来の事

おんぎくでん いわ いっくさんじん なり
御義口伝に云く一句三身の習いの文と云うなり、自とは九界なり我とは仏界なり此の十界は本有無作の三身にして来る仏なりと云えり、自も我も得たる仏来れり十界本有の明文なり、我は法身・仏は報身・来は応身なり此の三身・無始無終の古仏にして自得なり、無上宝聚不求自得之を思う可し、然らば即ち顯本遠寿の説は永く諸教に絶えたり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは自我得仏来の行者なり云云。

第十二 為度衆生故方便現涅槃の事

おんぎくでん いわ ねはんぎょう ほけきょう
御義口伝に云く涅槃経は法華経より出でたりと云う経文なり、既に方便と説かれたり云云。

第十三 常住此説法の事

おんぎくでん いわ ねはんぎょう ほけきょう
御義口伝に云く常住とは法華経の行者の住处なり、此とは娑婆世界なり山谷曠野を指して此とは説き給う、説法とは一切衆生の語言の音声が本有の自受用智の説法なり、末法に入つて説法とは南無妙法蓮華経なり今日蓮等の類い説法はなり。

第十四 時我及衆僧俱出靈鷲山の事

御義口伝に云く靈山一会儼然未散の文なり、時とは感応末法の時なり我とは釈尊及とは菩薩聖衆を衆僧と説かれ
たり俱とは十界なり靈鷲山とは寂光土なり、時に我も及も衆僧も俱に靈鷲山に出ずるなり秘す可し秘す可し、
本門事の一念三千の明文なり御本尊は此の文を顕し出だし給うなり、されば俱とは不變真如の理なり出とは隨緣真如
の智なり俱とは一念なり出とは三千なり云云。

又云く時とは本時娑婆世界の時なり下は十界宛然の曼陀羅を顕す文なり、其の故は時とは末法第五時の時なり、我と
は釈尊及は菩薩衆僧は二乗俱とは六道なり・出とは靈山淨土に列出するなり靈山とは御本尊並びに日蓮等の類
南無妙法蓮華經と唱え奉る者の住所を説くなり云云。

第十五 衆生見劫尽。而衆見焼尽の事

御義口伝に云く本門寿量の一念三千を領する文なり、大火所焼時とは実義には煩惱の大火なり、我此土安穩とは国土
世間なり、衆生所遊樂とは衆生世間なり、宝樹多華菓とは五陰世間なり是れ即ち一念三千を分明に説かれたり、又
云く上の件の文は十界なり大火とは地獄界なり天鼓とは畜生なり人と天とは人天の二界なり、天と

人と常に充滿するなり、雨曼陀羅華とは声聞界なり園林とは緣覺界なり菩薩界とは及の一字なり仏界とは散仏なり
修羅と餓鬼界とは憂怖諸苦惱如是悉充滿の句に撰するなり、此等を是諸罪衆生と説かれたり、然りと雖も此の
寿量品の説顯われては、則皆見我身とて一念三千なり、今日蓮等の類に南無妙法蓮華經と唱え奉る者はなり云云。

第十六 我亦為世父の事

御義口伝に云く我とは釈尊一切衆生の父なり主師親に於て仏に約し經に約す、仏に約すとは迹門の仏の三徳は
今此三界の文是なり、本門の仏の主師親の三徳は主の徳は我此土安穩の文なり師の徳は常説法教化の文なり

親の徳は此の我亦為世父の文是なり、妙樂大師は寿量品の文を知らざる者は不知恩の畜生と釈し給えり經に約すれば、諸經中王は主の徳なり能救一切衆生は師の徳なり又如大梵天王一切衆生之父の文は父の徳なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は一切衆生の父なり無間地獄の苦を救う故なり云云、涅槃經に云く「一切衆生の異の苦を受くるは悉く是れ如來一人の苦」と云云、日蓮が云く一切衆生の異の苦を受くるは悉く是れ日蓮一人の苦なるべし。

第十七 放逸著五欲墮於惡道中の事

御義口伝に云く放逸とは謗法の名なり入阿鼻獄疑無き者なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は此の經文を免離せり云云。

第十八 行道不行道的事

御義口伝に云く十界の衆生の事を説くなり行道は四聖不行道は六道なり、又云く行道は修羅・人天不行道は三惡道なり、所詮末法に入つては法華の行者は行道なり謗法の者は不行道なり、道とは法華經なり、天台云く「仏道とは別して今の經を指すこと、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは行道なり唱えざるは不行道なり云云。

第十九 每自作是念の事

御義口伝に云く毎とは三世なり自とは別しては釈尊惣じては十界なり、是念とは無作本有の南無妙法蓮華經の一念なり、作とは此の作は有作の作に非ず無作本有の作なり云云、広く十界本有に約して云わば自とは万法己己の当体なり、是念とは地獄の呵責の音其の外一切衆生の念念皆是れ自受用報身の智なり是を念とは云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る念は大慈悲の念なり云云。

第二十 得入無上道等の事

御義口伝に云く無上道とは寿量品の無作の三身なり此の外に成就仏身之れ無し、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は成就仏身疑無きなり云云。

第廿一 自我偈の事

御義口伝に云く自とは九界なり我とは仏身なり偈とはことわるなり本有とことわりたる偈頌なり深く之を案ずべし、偈様とは南無妙法蓮華經なり云云。

第廿二 自我偈始終の事

御義口伝に云く自とは始なり速成就仏身の身は終りなり始終自身なり中の文字は受用なり、仍つて自我偈は自受用身なり法界を自身と開き法界自受用身なれば自我偈に非ずと云う事なし、自受用身とは一念三千なり、伝教云く「一念三千即自受用身自受用身とは尊形を出でたる仏と出尊形仏とは無作の三身と云う事なり」云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はなり云云。

第廿三 久遠の事

御義口伝に云く此の品の所詮は久遠実成なり久遠とははたらかさずつくるわずもとの儘と云う義なり、無作の三身なれば初めて成ぜず是れ働かざるなり、卅二相八十種好を具足せず是れ繕わざるなり本有常住の仏なれば本の儘なり是を久遠と云うなり、久遠とは南無妙法蓮華經なり実成無作と開けたるなり云云。

第廿四 此の寿量品の所化の国土と修行との事

御義口伝に云く当品流布の国土とは日本国なり惣じては南閻浮提なり、所化とは日本国の一切衆生なり修行

とは無疑うたがひなし曰信の信心しんじんの事なり、授与じゅよの人とは本化地涌ほんげじゆの菩薩ぼさつなり云云。

第廿五建立御本尊等の事こんりゅうごほんそん

御義口伝おんぎくでんに云く此の本尊ほんそんの依文よぶんとは如来秘密神通にょらいひみつじんつう之力ちからの文なり、戒定慧かいじやうえの三学さんがくは寿量品じゆりやうぼんの事の三大秘法ひほつこ是れなり、日蓮にちれん慥たしかに靈山りやうぜんに於て面受口決めんぐけつせしなり、本尊ほんそんとは法華經ほけきやうの行者ぎやうじやの一身いつたいの当体とうたいなり云云

第廿六寿量品の対告衆の事じゆりやうぼんたいこしゆ

御義口伝おんぎくでんに云く經文きやうもんは弥勒菩薩みろくぼさつなり、然りと雖も滅後めつごを本とする故に日本国にほんこくの一切衆生いつさいしゆじやうなり、中にも日蓮等にちれんたうの類たぐひい南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうと唱え奉る者たてまつ是なり、弥勒みろくとは末法華まっぽうほけの行者ぎやうじやの事なり、弥勒みろくをば慈氏じしと云う法華ほつけの行者ぎやうじやを指すなり、章安大師じやうあんだいし云く「為彼除惡即是彼親そくぜ」と是れ豈弥勒菩薩あにみろくぼさつに非ずや云云

第廿七無作三身の事 種子尊形三摩耶むささんじん しゆしそんぎやう まや

御義口伝おんぎくでんに云く尊形そんぎやうとは十界本有じゆかいほんゆの形像ぎやうざうなり三摩耶まやとは十界所持じゆかいしよじの物なり種子しゆしとは信の一字いちじなり、所謂南無いわゆるなむ妙法蓮華經みよほうれんげきやう改めざるを云うなり三摩耶まやとは合掌がっしやうなり秘す可し秘す可し云云。

分別功德品三箇の大事ぶんべつくどく だいじ

第一其有衆生聞仏寿命長遠如是乃至能生一念信解所得功德無有限量の事だいいち しゆしゆじんもんぶつじゆめいぢやうゑんによぜないしつじゆいぢなんしんげ

御義口伝おんぎくでんに云く一念信解いちなんしんげの信の一字いちじは一切智慧いちじちを受得じゆとくする所の因種いんしゆなり、信の一字いちじは名字即みなづいそくの位ゐなり仍なほつて信の一字いちじは最後品さいごの無明むみやうを切る利剣りけんなり、信の一字いちじは寿量品じゆりやうぼんの理頭本りぢうほんを信ずるなり解とは事頭本じぢうほんを解するなり

此の事理の顯本を一念に信解するなり、一念とは無作本有の一念なり、此くの如く信解する人の功德は限量有る事有る可からざるなり、信の処に解あり解の処に信あり然りと雖も信を以て成仏を決定するなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はなり云云。

第二是則能信受如是諸人等頂受此經典の事

御義口伝に云く法華經を頭に頂くと云う明文なり、如是諸人等の文は広く一切衆生に亘るなり、然らば三世十方の諸仏は妙法蓮華經を頂き受けて成仏し給う、仍つて上の寿量品の題目を妙法蓮華經と題して次に如來と題したり秘す可し云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは此の故なり云云。

第三仏子住此地則是仏受用の事

御義口伝に云く此の文を自受用の明文と云えり、此地とは無作の三身の依地なり仏子とは法華の行者なり仏子は菩薩なり法華の行者は菩薩なり住とは信解の義なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は妙法の地に住するなり仏の受用の身なり深く之を案ず可し云云。

随喜品二箇の大事

第一妙法蓮華經隨喜功德の事

御義口伝に云く随とは事理に隨順するを云うなり喜とは自他共に喜ぶ事なり、事とは五百塵点の事顯本に隨順するなり理とは理顯本に隨うなり所詮寿量品の内証に隨順するを随とは云うなり、然るに自他共に智慧と慈悲と有るを喜とは云うなり所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る時必ず無作三身の仏に成るを喜とは云うなり、然る間随とは法に約し喜とは人に約するなり、人とは五百塵点の古仏たる釈尊法とは寿量品の南無

妙法蓮華經なり、是に随い喜ぶを随喜とは云うなり惣じて随とは信の異名なり云云、唯信心の事を隋と云うなりされば二巻には随順此經非己智分と説かれたり云云。

第二口氣無 優鉢華之香常徒其口出の事

御義口伝に云く口氣とは題目なり、無 稼とは弥陀等の権教方便無得道の教を交えざるなり、優鉢華之香とは法華經なり、末法の今は題目なり、方便品に如優量鉏華の事を一念三千と云えり之を案ず可し、常とは三世常住なり其口とは法華の行者の口なり出とは南無妙法蓮華經なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは 常從其口出なり云云。

法師功德品四箇の大事

第一法師功德の事

御義口伝に云く法師とは五種法師なり功德とは六根清淨の果報なり、所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は六根清淨なり、されば妙法蓮華經の法の師と成つて大なる徳有るなり、功は幸と云う事なり又は惡を滅するを功と云い善を生ずるを徳と云うなり、功德とは即身成仏なり又六根清淨なり、法華經の説文の如く修行するを六根清淨と得意可きなり云云。

第二六根清淨の事

御義口伝に云く眼の功德とは法華不信の者は無間に墮在し信する者は成仏なりと見るを以て眼の功德とするなり、法華經を持ち奉る処に眼の八百の功德を得るなり、眼とは法華經なり此の大乗經典は諸仏の眼目と、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は眼の功德を得るなり云云、耳鼻舌身意又又此くの如きなり云云。

第三又如淨明鏡の事

御義口伝に云く法華經に鏡の譬を説く事此の明文なり、六根清淨の人は瑠璃明鏡の如く三千世界を見ると云う
經文なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は明鏡に万像を浮ぶるが如く知見するなり、此の明鏡とは
法華經なり別しては宝塔品なり、又は我が一心の明鏡なり、所詮瑠璃と明鏡との二の譬を説かれたり身根清淨の下
なり、色心不二なれば何れも清淨の徳分なり淨とは不淨に對して淨と云うなり明とは無明に對して明と説くなり、鏡
とは一心なり淨は仮諦・明は空諦・鏡は中道なり悉見諸色像の悉は十界なり、所詮沖明鏡とは色心の二法、
妙法蓮華經の体なり淨明鏡とは信心なり云云、又三千大千世界を知見するとは三世間の事なり。

第四是人持此經安住希有地の事

御義口伝に云く是人とは日本国の一切衆生の中には法華の行者なり希有地とは寿量品の事理の顯本を指すなり、
是を又分別品には「仏説希有法」と説かれたり別しては南無妙法蓮華經なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え
奉る者の希有の地とは末法弘通の明鏡たる本尊なり、惣じては此の品の六根清淨の功德は十信相似即なり対告衆の常
精進菩薩は十信の第三信と云えり、然りと雖も末法に於ては法華經の行者を指して常精進菩薩と心得可きなり此の
經の持者は是則精進の故なり。

常不輕品三十箇の大事

第一常不輕の事

763P

御義口伝に云く常の字は三世の不軽の事なり、不軽とは一切衆生の内証所具の三因仏性を指すなり、仏性とは法性なり、法性とは妙法蓮華経なり云云。

第二得大勢菩薩の事

御義口伝に云く得とは応身なり大とは法身なり勢とは報身なり、又得とは仮諦なり大とは中道なり勢とは空諦なり、円融の三諦三身なり。

第三威音王の事

御義口伝に云く威とは色法なり音とは心法なり王とは色心不二を王と云うなり、末法に入つて南無妙法蓮華経と唱え奉る是れ併ら威音王なり云云、其の故は音とは一切権教の題目等なり威とは首題の五字なり王とは法華の行者なり云云、法華の題目は獅子の吼ゆるが如く余経は余獣の音の如くなり諸経中王の故に王と云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る威音王仏なり云云。

第四凡有所見の事

御義口伝に云く今日日本の一切衆生を法華経の題目の機なりと知見するなり云云。

第五我深敬汝等不敢輕慢所以者何汝等皆行菩薩道当得作仏の事

御義口伝に云く此の廿四字と妙法の五字は替われども其の意は之れ同じ廿四字は略法華経なり。

第六但行礼拝の事

御義口伝に云く礼拝とは合掌なり合掌とは法華経なり此れ即ち一念三千なり、故に不専読誦經典但行礼拝と云うなり。

第七乃至遠見の事

御義口伝に云く上の凡有所見の見は内証所具の仏性を見るなり、此れは理なり遠見の見は四衆と云う間事なり仍つて上は心法を見る今は色法を見る色法は本門の開悟四一開会なり、心法を見るは迹門の意又四一開会なり、遠の一字は寿量品の久遠なり故に故往礼拝といえり云云。

第八心不浄者の事

御義口伝に云く謗法の者は色心二法共に不浄なり、先ず心法不浄の文は今此の心不浄者なり、又身不浄の文は譬喩品に「身常臭处垢穢不浄」と云えり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は色心共に清浄なり、身浄は法師功德品に云く「若持法華經其身甚清浄」の文なり、心浄とは提婆品に云く「淨心信敬」と云云、浄とは法華經の信心なり不浄とは謗法なり云云。

第九言は無智比丘の事

御義口伝に云く此の文は法華經の明文なり、上慢の四衆不輕菩薩を無智の比丘と罵詈せり、凡有所見の菩薩を無智と云う事は第六天の魔王の所為なり、末法に入つて日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は無智の比丘と謗ぜられん事經文の明鏡なり、無智を以て法華經の機と定めたり。

第十聞其所説皆信伏随従の事

御義口伝に云く聞とは名字即なり所詮は而強毒之の題目なり、皆とは上慢の四衆等なり信とは無疑曰信なり伏とは法華に帰伏するなり随とは心を法華經に移すなり従とは身を此の經に移すなり、所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る行者は末法の不輕菩薩なり。

第十一於四衆中説法心無所畏の事

御義口伝に云く四衆とは日本国の中の一切衆生なり説法とは南無妙法蓮華經なり、心無所畏とは今日蓮等の

類い南無妙法蓮華經と呼ばる所の折伏なり云云。

第十二常不輕菩薩豈異人乎則我身是の事

御義口伝に云く過去の不輕菩薩は今日の釈尊なり、釈尊は寿命品の教主なり、寿命品の教主とは我等法華經の行者なり、さては我等が事なり今日蓮等の類いは不輕なり云云。

第十三常不值仏不聞法不見僧の事

御義口伝に云く此の文は不輕菩薩を輕賤するが故に三宝を拜見せざる事二百億劫地獄に墮ちて大苦惱を受くと云えり、今末法に入つて日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者を輕賤せん事は彼に過ぎたり、彼は千劫此れは至無數劫なり末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり、法とは題目なり僧とは我等行者なり、仏とも云われ又凡夫僧とも云わるなり、深覺円理名之為仏の故なり円理とは法華經なり云云。

第十四畢是罪已復遇常不輕菩薩の事

御義口伝に云く若し法華誹謗の失を改めて信伏随從する共浅く有りては無間に墮つ可きなり、先謗強きが故に依るなり千劫無間地獄に墮ちて後に出づる期有つて又日蓮に値つ可きなり復遇日蓮なるべし。

第十五於如来滅後等の事

御義口伝に云く不輕菩薩の修行は此の如くなり仏の滅後に五種に妙法蓮華經を修行すべしと見えたり、正しく是故より下廿五字は末法日蓮等の類いの事なるべし、既に是の故にとおさえて於如来滅後と説かれたり流通の品なる故なり、惣じては流通とは未來当今の為なり、法華經一部は一往は在世の為なり再往は末法当今の為なり、其の故は妙法蓮華經の五字は三世の諸仏共に許して未來滅後の者の為なり、品品の法門は題目の用なり体の妙法末法の用たらば何ぞ用の品品別ならむや、此の法門秘す可し秘す可し、天台の綱維を提ぐるに目と

して動かざることを無きが如し」と等と釈する此の意なり、妙樂大師は「略して経題を挙ぐるに玄に一部を収む」と、此等を心得ざる者は末法の弘通に足らざる者なり。

第十六此品の時の不輕菩薩の体の事

おんぎくでん 御義口伝に云く不輕菩薩とは十界の衆生なり、三世常住の礼拝の行を立つるなり吐く所の語言は妙法の音声なり、獄卒が杖を取つて罪人を呵責するが体の礼拝なり敢えて輕慢せざるなり、罪人我を責め成すと思えば不輕菩薩を呵責するなり折伏の行是なり。

第十七不輕菩薩の礼拝住処の事之に付て十四箇所の礼拝住処の事之有り

おんぎくでん 御義口伝に云く礼拝の住処とは多宝塔中の礼拝なり、其の故は塔婆とは五大の所成なり五大とは地水火風空なり此れを多宝の塔とも云ふなり、法界広しと雖も此の五大には過ぎざるなり故に塔中の礼拝と相伝するなり秘す可し秘す可し云ふ。

第十八開示悟入礼拝住処の事

おんぎくでん 御義口伝に云く開示悟入の四仏知見を住処とするなり、然る間方便品の此の文を礼拝の住処と云ふなり此れは内に不輕の解を懷くと釈せり、解とは正因仏性を具足すと釈するなり開仏知見とは此の仏性を開かしめんとて仏は出現し給ふなり。

第十九每自作是念の文礼拝住処の事

おんぎくでん 御義口伝に云く毎の字は三世なり念とは一切衆生の仏性を念じ給ひしなり、仍つて速成就仏身と皆当作仏とは同じき事なり仍つて此の一文を相伝せり、天台大師は「開三顯一」○開近顯遠」と釈せり秘す可し秘す可し云ふ。

第二十我本行菩薩道の文礼拝住処の事

おんぎくでん 御義口伝に云く我とは本因妙の時を指すなり、本行菩薩道の文は不輕菩薩なり此れを礼拝の住処と指すなり。

第廿一生老病死礼拝住処の事

おんぎくでん 御義口伝に云く一切衆生老病死を厭離せず無常遷滅の当体に迷うに依つて後世菩提を覚知せざるなり、此を示す時煩惱即菩提生死即涅槃と教うる当体を礼拝と云うなり、左右の両の手を開く時は煩惱生死上慢不輕各別なり、礼拝する時両の手を合するは煩惱即菩提生死即涅槃なり、上慢の四衆の所具の仏性も不輕所具の仏性も一種の妙法なりと礼拝するなり云云。

第廿二法性礼拝住処の事

おんぎくでん 御義口伝に云く不輕菩薩法性真如の三因仏性南無妙法蓮華經の廿四字に足立て無明の上慢の四衆を拝するは蓋在衆生の仏性を礼拝するなり云云。

第廿三無明礼拝住処の事

おんぎくでん 御義口伝に云く自他の隔意を立て彼は上慢の四衆我は不輕と云う、不輕は善人上慢は悪人と善惡を立つるは無明なり、此に立つて礼拝の行を成す時善惡不二邪正一如の南無妙法蓮華經と礼拝するなり云云。

第廿四蓮華の二字礼拝住処の事

おんぎくでん 御義口伝に云く蓮華とは因果の二法なり、悪因あれば悪果を感じ善因あれば善果を感じず内証には汝等三因仏性の善因あり、事に顯す時は善果と成つて皆当作仏す可しと礼拝し給うなり云云。

第廿五実報土礼拝住処の事

おんぎくでん 御義口伝に云く実報土は豎の時は菩薩の住処なり、仍つて不輕菩薩の住処を實報土と定めて此にて礼拝行を立て給う間実報土は礼拝の住処なり云云。

第廿六慈悲の二字礼拝住処の事

おんぎくでん 御義口伝に云く不輕礼拝の行は皆当作仏と教うる故に慈悲なり、既に杖木瓦石を以て打擲すれども而強毒之するは慈悲より起れり、仏心とは大慈悲心是なりと説かれたれば礼拝の住処は慈悲なり云云。

第廿七礼拝住処分真即の事

おんぎくでん 御義口伝に云く菩薩は分真即の位と定むるなり、此の位に立つて理即の凡夫を礼拝するなり之に依つて理即の凡夫なる間此の授記を受けずして無智の比丘と謗じたり云云。

第廿八究竟即礼拝住処の事

おんぎくでん 御義口伝に云く凡有所見の見は仏知見なり、仏知見を以て上慢の四衆を礼拝する間究竟即を礼拝の住処と定むるなり云云。

第廿九法界礼拝住処の事

おんぎくでん 御義口伝に云く法界に立て礼拝するなり法界とは広きに非ず狭きに非ず惣じて法とは諸法なり界とは境界なり、地獄界乃至仏界各各界を法る間不輕菩薩は不輕菩薩の界に法り上慢の四衆は四衆の界に法るなり、仍て法界が法界を礼拝するなり自他不二の礼拝なり、其の故は不輕菩薩の四衆を礼拝すれば上慢の四衆所具の仏性又不輕菩薩を礼拝するなり、鏡に向つて礼拝を成す時浮べる影又我を礼拝するなり云云。

第卅礼拝住処忍辱地の事

御義口伝に云く既に上慢の四衆罵詈瞋恚を成して虚妄の授記と謗ずと云えども不生瞋恚と説く間忍辱地に住して礼拝の行を立つるなり云云、初の一の住処は世流布の学者知れり後の十三箇所は当世の学者知らざる事なり云云。已上十四箇条の礼拝の住処なり云云。

神力品八箇の大事

第一妙法蓮華經如来神力の事

文句の十に云く神は不測に名け力は幹用に名く不測は即ち天然の体深く幹用は則ち転変の力大なり、此の中深法を付属せんが為に十種の大力を現す故に神力品と名くと。

御義口伝に云く 此の妙法蓮華經は釈尊の妙法には非ざるなり既に此の品の時上行菩薩に付属し給う故なり、惣じて妙法蓮華經を上行菩薩に付属し給う事は宝塔品の時事起り・寿量品の時事顕れ、神力属累の時事竟るなり、如来とは上の寿量品の如来なり神力とは十種の神力なり所謂妙法蓮華經の五字は神と力となり、神力とは上

の寿量品の時の如来秘密神通之力の文と同じきなり、今日蓮等の類に南無妙法蓮華經と唱え奉る所の題目なり此の十種の神力は在世滅後に亘るなり然りと雖も十種共に滅後に限ると心得可きなり、又云く妙法蓮華經如来と神との力の品と心得可きなり云云、如来とは一切衆生なり寿量品の如し、仍つて釈にも如来とは上に釈し畢ぬと云えり此の神とは山王七社等なり此の旨之を案ず可きなり云云。

第二出広長舌の事

御義口伝に云く広とは迹門・長とは本門・舌とは中道法性なり十法界妙法の功德なれば広と云うなり豎に高ければ

長と云うなり。広とは三千重点より已来の妙法。長とは五百塵点已来の妙法。同じく広長舌なり云云。

第三十方世界衆宝樹下師子座上の事

御義口伝に云く十方とは十界なり此の下に於て草木成仏分明なり、師子とは師匠匠子は弟子なり座上とは寂光土なり十界即本有の寂光たる国土なり云云。

第四満百千歳の事

御義口伝に云く満とは法界なり百は百界なり千は千如なり一念三千を満百千歳と説くなり云云、一時も一念も満百千歳にして十種の神力を現するなり十種の神力とは十界の神力なり、十界の各各の神力は一種の南無妙法蓮華經なり云云。

第五地皆六種震動其中衆生。衆宝樹下の事

御義口伝に云く地とは国土世間なり其中衆生とは衆生世間なり衆宝樹下とは五陰世間なり一念三千分明なり云云。

第六娑婆是有名釈迦牟尼仏の事

御義口伝に云く本化弘通の妙法蓮華經の大忍辱の力を以て弘通するを娑婆と云うなり、忍辱は寂光土なり此の忍辱の心を釈迦牟尼仏と云えり娑婆とは堪忍世界と云うなり云云。

第七新人行世間能滅衆生闇の事

御義口伝に云く斯人とは上行菩薩なり世間とは大日本国なり衆生闇とは謗法の大重病なり、能滅の件は南無妙法蓮華經なり今日蓮等の類は是なり云云。

第八畢竟住一乘。○是人於仏道決定無有疑の事

御義口伝に云く畢竟とは広宣流布なり住一乗とは南無妙法蓮華經の一法に住す可きなり是人とは名字即の凡夫なり
仏道とは究竟即なり疑とは根本疑惑の無明を指すなり、末法当今は此の經を受持する一行計りにして成仏す可しと
定むるなり云云。

嘱累品三箇の大事

第一從法座起の事

御義口伝に云く起とは塔中の座を起ちて塔外の儀式なり三摩の付嘱有るなり、三摩の付嘱とは身口意三業三諦三觀と
付嘱し給う事なり云云。

第二如來是一切衆生之大施主の事

御義口伝に云く如來とは本法不思議の如來なれば此の法華經の行者を指す可きなり、大施主の施とは末法当今流布の
南無妙法蓮華經主とは上行菩薩の事と心得可きなり、然りと雖も当品は迹門付嘱の品なり上行菩薩を首として付属
し給う間上行菩薩の御本意と見たるなり云云。

第三如世尊勅当具奉行の事

御義口伝に云く諸の菩薩等の誓言の文なり、諸天善神菩薩等を日蓮等の類い諫曉するは此の文に依るなり云云。

第一不如受持此法華經乃至一四句偈の事

御義口伝に云く法華經とは一經廿八品なり一四句偈とは題目の五字と心得可きなり云云。

第二十喻の事

御義口伝に云く十喻とは十界なり、此の山の下に地獄界を含めり、川流江河餓鬼・畜生を撰せり、日月の下に修羅を収めたり帝釈梵天は天界なり凡夫人とは人間なり、声聞とは四向四果の阿羅漢なり縁覚とは辟支仏中と説かれたり、菩薩は菩薩為第一と云えり仏界は如仏為諸法王と見えたり、此の十界を十喻と挙げて教相を分別してさて妙法蓮華經の於一仏乘より分別説三する時此くの如く挙げたり、仍つて一念三千の法門なり一念三千は拔苦与樂なり。

第三離一切苦一切病痛能解一切生死之縛の事

御義口伝に云く法華の心は煩惱即菩提・生死即涅槃なり離解の二字は此の説相に背くなり然るに離の字をば明とよむなり、本門寿量の慧眼開けて見れば本来本有の病痛苦惱なりと明らめたり仍つて自受用報身の智慧なり、解とは我等が生死は今始めたる生死に非ず本来本有の生死なり、始覺の思縛解くるなり云云、離解の二字は南無妙法蓮華經なり云云。

第四火不能烧水不能漂の事

御義口伝に云く火とは阿鼻の炎なり水とは紅蓮の氷なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は此くの如くなるべし云云。

第五諸余怨敵皆悉摧滅の事

御義口伝に云く怨敵とは念仏・禪・真言等の謗法の人なり摧滅とは法華折伏・破権門理なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る是なり云云。

第六若人有病得聞是經病即消滅不老不死の事

文句の十に云く此に觀解を須ゆべしと。

御義口伝に云く若人とは上仏果より下地獄の罪人まで之を損す可きなり、病とは三毒の煩惱・菩薩に於ても亦之れ有るなり、不老は釈尊不死は地涌の類たり、是は滅後當今の衆生の爲に説かれたり、然らば病とは謗法なり、此の經を受持し奉る者は病即消滅・疑無きなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は是なり云云。

妙音品三箇の大事

第一妙音菩薩の事

御義口伝に云く妙音菩薩とは十界の衆生なり、妙とは不思議なり音とは一切衆生の吐く所の語言・音声・妙法の音声なり三世常住の妙音なり、所用に随つて諸事を弁ずるは慈悲なり是を菩薩と云ふなり、又云く妙音とは今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る事は末法當今の不思議の音声なり、其の故は煩惱即菩提・生死即涅槃の妙音なり云云。

第二肉髻白毫の事

御義口伝に云く此の二の相好は孝順師長より起れり法華經を持ち奉るを以て一切の孝養の最頂とせり、又

云く此の白毫とは父の姪なり肉髻とは母の姪なり赤白二・今經に來つて肉髻白毫の二相と顕れたり、又云く肉髻は隨緣真如の智なり白毫は不變真如の理なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは此等の相好を具足するなり、我等が生のは始は赤色肉髻なり死後の白骨は白毫相なり、生の始の赤色は隨緣真如の智死後の白骨は不變真如の理なり秘す可し秘す可し云云。

第三八万四千七宝鉢の事

御義口伝に云く此の文は妙音菩薩雲雷音王仏に奉る所の供養の鉢なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は八万四千の鉢を三世の諸仏に供養し奉るなり、八万四千とは我等が八万四千の塵勞なり南無妙法蓮華經と唱え奉る處にて八万四千の法門と顕るるなり、法華經の文字は開結二經を合しては八万四千なり、又云く八とは八苦なり四とは生老病死なり七宝とは頭上の七穴なり鉢とは智者なり妙法の智水を受持するを以て鉢とは心得可きなり云云。

普門品五箇の大事

775P

第一無尽意菩薩の事

御義口伝に云く無尽意とは円融の三諦なり、無とは空諦尽とは仮諦意とは中道なり、觀世音とは觀は空諦世は仮諦音は中道なり、妙法蓮華經とは妙とは空諦法蓮華は仮諦經とは中道なり、三諦法性の妙理を三諦の觀世音と三諦の無尽意に対して説き給うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は末法の無尽意なり、所詮無とは我等が死の相なり尽とは我等が生の相なり意とは我等が命根なり、然る間一切の法門・境智

冥合等の法門意の一字に之を摂入す此の意とは中道法性なり法性とは南無妙法蓮華經なり、仍つて意の五字なり我等が胎内の五位の中には第五番の形なり、其の故は第五番の姿は五輪なり五輪即ち妙法等の五字なり、此の五字又意の字なり仏意とは妙法の五字なり此の事別に之無し、仏の意とは法華經なり是を壽量品にして是好良藥とて三世の諸仏の好もの良藥と説かれたり森羅三千の諸法は意の一字には過ぎざるなり、此の仏の意を信ずるを信心とは申すなりされば心は有分別なり俱に妙法の全体なり云云。

第二觀音妙の事

御義口伝に云く妙法の梵語は薩達摩と云うなり、薩とは妙と翻ず此の薩の字は觀音の種子なり仍て觀音・法華眼目異名と釈せり、今末法に入つて日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る事は觀音の利益より天地雲泥せり、所詮觀とは円觀なり世とは不思議なり音とは仏機なり觀とは法界の異名なり既に円觀なるが故なり、諸法実相の觀世音なれば地獄・餓鬼・畜生等の界界を不思議世界と知見するなり、音とは諸法実相なれば衆生として実相の仏に非ずと云う事なし、壽量品の時は十界本有と説いて無作の三身なり、觀音既に法華經を頂受せり然らば此の經受持の行者は觀世音の利益より勝れたり云云。

第三念念勿生疑の事

御義口伝に云く念念とは一の念は六凡なり一の念は四聖なり六凡四聖の利益を施すなり疑心を生ずること勿れ云云、又云く念念とは前念後念なり、又云く妙法を念ずるに疑を生ず可からず云云、又三世常住の念念なり之に依つて上の文に是故衆生念と、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉りて念念勿生疑の信心に住す可きなり煩惱即菩提・生死即涅槃疑有る可からざるなり云云。

第四二求兩願の事

御義口伝に云く二求とは求男求女なり、求女とは世間の果報求男とは出世の果報仍つて現世安穩は求女の徳なり後生善処は求男の徳なり、求女は竜女が成仏生死即涅槃を顯すなり求男は提婆が成仏煩惱即菩提を顯すなり我等が即身成仏を顯すなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る行者は求男求女を満足して父母の成仏決定するなり云云。

第五十三身利益の事

御義口伝に云く三十とは三千の法門なり、三身とは三諦の法門なり云云、又云く卅三身とは十界に三身づつ具すれば十界には三十本の三身を加うれば卅三身なり、所詮三とは三業なり十とは十界なり三とは三毒なり身とは一切衆生の身なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は卅三身の利益なり云云。

陀羅尼品六箇の大事

777P

第一陀羅尼の事

御義口伝に云く陀羅尼とは南無妙法蓮華經なり、其の故は陀羅尼は諸仏の密語なり題目の五字三世の諸仏の秘密の密語なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは陀羅尼を弘通するなり捨惡持善の故なり云云。

第二安爾曼爾の事

御義口伝に云く安爾とは止なり曼爾とは觀なり、此の安爾曼爾より止觀の二法を釈し出せり、仍つて此の咒は藥王菩薩の咒なり藥王菩薩は天台の本地なり、安爾は我等が心法なり妙なり曼爾は我等が色法なり法なり

色心妙法と呪する時は即身成仏なり云云。

第三鬼子母神の事

御義口伝に云く鬼とは父なり子とは十羅刹女なり母とは伽利帝母なり、逆次に次第する時は神とは九識なり母とは八識へ出づる無明なり子とは七識六識なり鬼とは五識なり、流転門の時は悪鬼なり還滅門の時は善鬼なり、仍つて十界互具百界千如の一念三千を鬼子母神十羅刹女と云うなり、三宝荒神とは十羅刹女の事なり所謂飢渴神貪欲神障碍神なり、今法華經の行者は三毒即三徳と転ずる故に三宝荒神に非ざるなり荒神とは法華不信の人なり法華經の行者の前にては守護神なり云云。

第四受持法華名者福不可量の事

御義口伝に云く法華の名と云うは題目なり、者と云うは日本国の一切衆生の中には法華經の行者なり、又云く者の字は男女の中には別して女人を讃めたり女人を指して者と云うなり、十羅刹女は別して女人を本とせり例せば竜女が度脱苦衆生とて女人を苦の衆生と云うが如し藥王品の是經典者の者と同じ事なり云云。

第五皐諦女の事

御義口伝に云く皐諦女は本地は文殊菩薩なり、山海何かなる処にても法華經の行者を守護す可しと云う經文なり、九惡一善とて皐諦女をば一善と定めたり、十惡の煩惱の時は偷盜に皐諦女は当れり逆次に次第するなり云云。

第六五番神呪の事

御義口伝に云く五番神呪とは我等が一身なり、妙とは十羅刹女なり法とは持国天王なり蓮とは增長天王なり

り華とは広目天王なり経とは毘沙門天王なり、此の妙法の五字は五番神呪なり、五番神呪は我等が一身なり、十羅刹女の呪は妙の一字を十九句に並べたり経文には寧上我頭上の文是れなり、持国天は法の一字を九句に並べたり経文には四十二億と云えり、四とは生老病死・十とは十界・二とは迷悟なり、持国は依報の名なり法は十界なり、増長天は蓮の一字を十三句に並べたり経文には亦皆随喜と云えり随喜の言は仏界に約せり、広目天は華の一字を四十三句に並べたり経文には於諸衆生多所饒益と云えり、毘沙門天は経の一字を六句に並べたり経文には「持是経者」等の文是なり云云。

嚴王品三箇の大事

第一妙莊嚴王の事 文句の十に云く妙莊嚴とは妙法功德をもつて諸根を莊嚴するなりと。

御義口伝に云く妙とは妙法の功德なり、諸根とは六根なり此の妙法の功德を以て六根を莊嚴す可き名なり、所詮妙とは空諦なり莊嚴とは仮諦なり王とは中道なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は悉く妙莊嚴王なり云云。

第二浮木孔の事

御義口伝に云く孔とは小孔大孔の二之れ有り、小孔とは四十余年の經教なり大孔とは法華經の題目なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは大孔なり、一切衆生は一眼の龜なり梅檀の浮木とは法華經なり、生死の大海に南無妙法蓮華經の大孔ある浮木は法華經に之在り云云。

第三当品邪見即正の事

御義口伝に云く嚴王の邪見二人の教化に依り功德を得て邪を改めて正とせり、止の二に辺邪皆中正と云う

是なり、今日本国の一切衆生は邪見にして蔽王なり、日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は二人の如し終に畢竟住一乘して邪見即正なる可し云云。

普賢品六箇の大事

第一 普賢菩薩の事 文句の十に云く勧発とは恋法の辞なりと。

御義口伝に云く勧発とは勧は化他・発は自行なり、普とは諸法実相迹門の不变真如の理なり、賢とは智慧の義なり本門の随縁真如の智なり、然る間經末に来つて本迹二門を恋法し給えり、所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は普賢菩薩の守護なり云云。

第二 若法華經行閻浮提の事

御義口伝に云く此の法華經を閻浮提に行ずることは普賢菩薩の威神の力に依るなり、此の經の広宣流布することは普賢菩薩の守護なるべきなり云云。

第三 八万四千天女の事

御義口伝に云く八万四千の塵勞門なり、是れ即ち煩惱即菩提・生死即涅槃なり七宝の冠とは頭上の七穴なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は是なり云云。

第四 是人命終為千仏授手の事

御義口伝に云く法華不信の人は命終の時地獄に墮在す可し、經に云く「若人不信毀謗此經即斷一切世間・仏種其人命終入阿鼻獄」と、法華經の行者は命終して成仏す可し是人命終為千仏授手の文是なり、千仏とは千如の法門なり謗法の人は獄卒來迎し法華經の行者は千仏來迎し給うべし、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は

千仏の来迎疑無き者なり云云。

第五閻浮提内広令流布の事

御義口伝に云く此の内の字は東西北の三方を嫌える文なり、広令流布とは法華経は南閻浮提計りに流布す可しと云う
経文なり、此の内の字之を案ず可し、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は深く之を思う可きなり云云。

第六此人不久当詣道場の事

御義口伝に云く此人とは法華経の行者なり、法華経を持ち奉る処を当詣道場と云うなり此を去つて彼に行くには
非ざるなり、道場とは十界の衆生の住处を云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者の住处は山谷
曠野皆寂光土なり此れを道場と云うなり、此因無易故云直至の釈之を思う可し、此の品の時最上第一の相伝あり、
釈尊八箇年の法華経を八字に留めて末代の衆生に譲り給うなり八字とは当起遠迎当如敬仏の文なり、

此の文までにて経は終るなり当の字は未来なり当起遠迎とは必ず仏の如くに法華経の行者を敬う可しと云う経文な
り、法師品には於此経巻敬視如仏と云えり、八年の御説法の口開きは南無妙法蓮華経方便品の諸仏智慧終りは当起
遠迎当如敬仏の八字なり、但此の八字を以て法華一部の要路とせりされば文句の十に云く「当起遠迎当如敬仏よりは
其の信者の功德を結することを述す」と、法華一部は信の一字を以て本とせり云云。

尋ねて云く今の法華経に於て序品には首めに如の字を置き終りの普賢品には去の字を置く羅什三蔵の心地何なる表事
の法門ぞや、答て云く今の経の法体は実相と久遠との二義を以て正体と為すなり始の如の字は実相を表し終りの去の字
は久遠を表するなり、其の故は実相は理なり久遠は事なり理は空の義なり空は如の義なり之に

依て如をば理空に相配するなり、釈に云く「如は不具に名く即ち空の義なり」と久遠は事なり其の故は本門寿量の心は
事円の三千を以て正意と為すなり、去は久遠に当るなり去は開の義如は合の義なり開は分別の心なり合は無分別の意な
り、此の開合を生仏に配当する時は合は仏界開は衆生なり、序品の始に如の字を顕したるは生仏不二の義なり、迹門は
不二の分なり不變真如なる故なり、此の如是我聞の如をば不變真如の如と習うなり、空仮中の三諦には如は空 是は中
我聞は仮諦・迹門は空を面と為す故に不二の上の而こなり、然る間而二の義を顕す時 同聞衆を別に列ぬるなり、さて
本門の終りの去は隨緣真如にして而二の分なり仇つて去の字を置くなり、作礼而去の去は隨緣真如と約束するなり、
本門は而二の上の不二なり而二不二常同常別 古今法爾の釈之を思う可し、此の去の字は彼の五千起去の去と習うな
り、其の故は五千とは五住の煩惱と相伝する間五住の煩惱が己心の仏を礼して去ると云う義なり、如去の二字は生死の
二法なり、伝教云く「去は無来之如来無去之円去と等と云云。
如の字は一切法是心の義・去の字は心は一切法の義なり、一切法是心は迹門の不變真如なり心は一切法は本門の
隨緣真如なり、然る間 法界を一心に縮むるは如の義なり法界に開くは去の義なり三諦三觀の口決相承と意同じ云
云。

一義に云く如は実なり去は相なり実とは心王相は心数なり、又諸法は去なり実相は如なり今經一部の始終諸法実相の四
字に習うとは是なり、釈に云く「今經は何を以て体と為るや諸法実相を以て体と為すこと、今一重立ち入つて日蓮が
修行に配当せば如とは如說修行の如なり、其の故は結要五字の付属を宣べ給う時 宝塔品に事起り声徹下方し近令有
在・遠令有在と云うて有在の二字を以て本化・迹化の付属を宣ぶるなり仍つて本門の密序と習うなり、さて二仏並座・
分身の諸仏集まつて是好良藥の妙法蓮華經を説き顯し釈尊十種の神力を現じて四句に

結び上行菩薩に付属し給う英の付属とは妙法の首題なり惣別の付属塔中塔外之を思う可し、之に依つて涌出寿量に事顯れ神力屬累に事竟るなり、此の妙法等の五字を末法・白法隱没の時上行菩薩・御出世有つて五種の修行の中には四種を略して但受持の一行にして成仏す可しと經文に親り之れ有り、夫れば神力品に云く「於我滅度後・応受持斯經・是人於仏道・決定無有疑」云云此の文明白なり、仍つて此の文をば仏の廻向の文と習うなり、然る問此の經を受持し奉る心地は如説修行の如なり此の如の心地に妙法等の五字を受持し奉り南無妙法蓮華經と唱え奉れば忽ち無明煩惱の病を悉く去つて妙覺極果の膚を瑩く事を顯す故にさて去の字を終りに結ぶなり、仍つて上に受持仏語と説けり煩惱惡覺の魔王も諸法実相の光に照されて一心一念・遍於法界と觀達せらる、然る間還つて己心の仏を礼す故に作礼而去とは説き給うなり、彼彼三千互遍亦爾の釈之を思う可し秘す可し秘す可し唯受一人の相承なり、口外す可からず然らば此の去の字は不去而去の去と相伝するを以て至極と為すなり云云。

無量義經六箇の大事

第一 無量義經德行品第一の事

御義口伝に云く無量義の三字を本迹・觀心に配する事、初の無の字は迹門なり其の故は理円を面とし不變真如の旨を談ず、迹門は無常の損屬なり常住を談ぜず但し「是法住法位世間相常住」と明かせども是れは理常住にして事常住に非ず理常住の相を談ずるなり、空は無の義なり但し此の無は斷無の無に非ず相即の上の空なる處を無と云い空と云うなり、円の上にて是を沙汰するなり、本門の事常住無作の三身に對して迹門を無常と云うなり、守護章には有為の報仏は夢中の權果無作の三身は覺前の実仏と云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經

とな
と唱え奉る者は無作の三身覚前の実仏なり云云。

第二量の字の事

御義口伝に云く量の字を本門に配当する事は量とは権摂の義なり、本門の心は無作三身を談ず此の無作三身とは仏の上ばかりにて之を云わず、森羅万法を自受用身の自体顕照と談ずる故に迹門にして不變真如の理円を明かす処を改めずして己が当体無作三身と沙汰するが本門事円三千の意なり、是れ即ち桜梅桃李の己己の当体を改めずして無作三身と開見すれば是れ即ち量の義なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は無作三身の本主なり云云。

第三義の字の事

御義口伝に云く義とは觀心なり、其の故は文は教相義は觀心なり所説の文字を心地に沙汰するを義と云うなり、就中無量義は一法より無量の義を出生すと談ず、能生は義所生は無量なり是は無量義經の能生所生なり、法華經と無量義經とを相對する能所に非ざるなり無相不相名為実相の理より万法を開出すと云う、源が実相なる故に觀心と云うなり、此くの如く無量義の三字を迹門・本門觀心に配当する事は法華の妙法等の題と今の無量義の題と一体不二の序正なりと相承の心を相伝せむが為なり。

第四処の一字の事

御義口伝に云く処の一字は法華經なり、三藏教と通教とは無の字に摂し別教は量の字に摂し円教は義の字に摂するなり、此の爾前の四教を所生と定めさて序分の此の經を能生と定めたり、能生を且く処と云い所生を無量義と定めたり、仍つて権教に相對して無量義処を沙汰するなり云云。

第五無量義処の事

御義口伝に云く法華經八卷は処なり無量義經は無量義なり、無量義は三諦三觀三身三乘三業なり法華經に於一仏乘分別說三と説いて法華の爲の序分と成るなり、爰を以て隔別の三諦は無得道円融の三諦は得道と定むる故に四十余年未顕眞実と破し給えり云云。

第六無量義処の事

御義口伝に云く無量義処とは一念三千なり、十界各各無量に義処たり、此の当体其の儘実相の一理より外は之れ無きを諸法実相と説かれたり、其の爲の序なる故に一念三千の序として無量義処と云うなり、処は一念無量義は三千なり、我等衆生朝夕吐く所の言語も依正二法共に無量に義処りたり、此れを妙法蓮華經とは云うなり然る間法華の爲の序分開経なり云云。

普賢經五箇の大事

第一普賢經の事 題号に云く仏説觀普賢菩薩行法經と云云。

御義口伝に云く此の法華經は十界互具三千具足の法体なれば三千十界悉く普賢なり、法界一法として漏るる義之れ無し故に普賢なり、妙法の十界蓮華の十界なれば依正の二法悉く法華經なりと結し納めたる経なれば此の普賢經を結経とは云うなり、然らば十界を妙法蓮華經と結し合せたり云云。

第二不断煩惱不離五欲の事

御義口伝に云く此の文は煩惱即菩提・生死即涅槃を説かれたり、法華の行者は貪欲は貪欲のまま瞋恚は瞋恚のまま愚癡は愚癡のまま普賢菩薩の行法なりと心得可きなり云云。

第三六念の事 念仏 念法 念僧 念戒 念施 念天

御義口伝に云く念仏とは唯我一人の導師なり、念法とは滅後は題目の五字なり念僧とは末法にては凡夫僧なり、念戒とは是名持戒なり、念施とは一切衆生に題目を授与するなり、念天とは諸天昼夜常為法故而衛護之の意なり、末法当今の行者の上なり之を思ふ可きなり云云。

第四一切業障海皆從妄想生若欲懺悔者端坐思実相衆罪如霜露慧日能消除の事

御義口伝に云く衆罪とは六根に於て業障降り下る事は霜露の如し、然りと雖も慧日を以て能く消除すと云えり、慧日とは末法当今日蓮所弘の南無妙法蓮華經なり、慧日とは仏に約し法に約するなり、釈尊をば慧日大聖尊と申すなり法華經を又如日天子能除諸闇と説かれたり、末法の導師を如日月光明等と説かれたり。

第五正法治国不邪枉人民の事

御義口伝に云く末法の正法とは南無妙法蓮華經なり、此の五字は一切衆生をたばらかさめ秘法なり、正法を天下一同に信仰せば此の国安穩ならむ、されば玄義に云く「若し此の法に依れば即ち天下泰平」と、此の法とは法華經なり法華經を信仰せば天下安全たらむ事疑有る可からざるなり。

已上二百三十一箇条の大事

廿八品に一文充の大事 合せて廿八箇条の大事秘す可し云云

序品

十界也 始覺

於無漏実相 心已得通達

妙法 不變 隨縁

此の文我が心本より覺なりと始めて覺るを成仏と云うなり所謂南無妙法蓮華經と始めて覺る題目なり。

真諦 しんたい

方便品 ほうべん

俗諦 ぞくたい

是法住法位 ぜほうしほうほうい

世間相常住 せけんさうじやうちゆう

迹門 じやくもん

本門 ほんもん

此の文衆生の心は本来仏なりと説くを常住と云うなり万法元より覺の体なり。

譬喩品 ひゆほん

受持人 大白牛車 だいびやくしや

乘此宝乘 だいもく

題目

凡夫即極 ほんぶ
直至道場 じきしどうじやう

此の文は自身の仏乗を悟つて自身の宮殿に入るなり所謂南無妙法蓮華經と唱え奉るは自身の宮殿に入るなり。

信解品

一念三千 いちねんさんぜん
無上宝珠 むじやうほうしゆ

題目

不求自得 ふぐじとく

此の文は無始色心本是理性妙境 妙智なれば己心より外に実相を求む可からず所謂南無妙法蓮華經は不求自得なり。

藥草喩品

三世 題目 一切衆生 さんぜ だいもく いっさいしゆじゆう

又諸仏子 專心仏道 常行慈悲自知作仏 しよぶつ せんしんぶつだう じやうぎん じひじちさぶつ
此の文は当來の成仏顯然なり所謂南無妙法蓮華經なり。

授記品

十界実相仏 三世常住 煩惱即菩提 生死即涅槃

於諸仏所常修梵行於無量劫奉持佛法

一切業障

此の文に常と云い無量劫と云う即ち本有所具の妙法なり所謂南無妙法蓮華經なり。

化城喻品

三千塵点

觀彼久遠 猶如今日

在世

此の文は元初の一念一法界より外に更に六道四聖とて有る可からざるなり所謂南無妙法蓮華經は三世一念なり今日とは末法を指して今日と云うなり。

五百品

日本国一切衆生

貧人

題目御本尊

見此珠

心法色法

其心大歡喜

煩惱即菩提 生死即涅槃

此の文は始めて我心本来の仏なりと知るを即ち大歡喜と名く所謂南無妙法蓮華經は歡喜の中の大歡喜なり。

人記品

一部

安住於仏道

広略

題目

以求無上道

要

此の文は本来相即の三身の妙理を初めて覚知するを求無上道とは云うなり所謂南無妙法蓮華経なり。

法師品

寂光

当知如是人

自在所

此の文は我等が一念の妄心の外に仏心無し九界の生死が真如なれば即ち自在なり所謂南無妙法蓮華経と唱え奉る即ち自在なり。

宝塔品

受持也

則為疾得

無上仏道

凡夫即極也

此の文は持者即ち円頓の妙戒なれば等妙二覚一念開悟なれば疾得と云うなり所謂南無妙法蓮華経と唱え奉るは疾得なり。

提婆品

忽然之間 變成男子

此の文の心は二惑の全体三諦と悟るを變と説くなり所謂南無妙法蓮華経と唱え奉るは二惑即三徳なり。

勸持品

色去心法

我不愛身命但惜無上道

此の文は色心幻化四大五陰元より惡習なり然るに本覺真如は常住なり所謂南無妙法蓮華経なり。

安樂行品 あんらくぎょうひん

一切諸法空無所有無有常住亦無起滅 いっさいしよほう じゆうしゆ じやうぢゆう ちやくむ

此の文は元より常住の妙法なる故に六道の生滅本来不生と談ず故に起滅無し所謂南無妙法蓮華經本来無起滅なり云云。

涌出品 ゆづりぶつ

昼夜常精進 為求仏道故 じゆちやうしやうじん ぶつどうがため

此の文は一念に億劫の辛勞を尽せば本来無作の三身念念に起るなり所謂南無妙法蓮華經は精進行なり。

寿量品 じゆりやうりやう

如來如實知見三界之相無有生起 にょらいにじゆじちけんさんがかい しやうじ

此の文は万法を無作の三身と見るを如實知見と云う無作の覺体なれば何に依つて生死有りと云わんか。

分別功德品 ぶんべつくどく

持此一心福 願求無上道 ちしししん がんくむじやうたう

此の文は一切の万行万善但一心本覺の三身を顕さんが為なり、善惡一如なれば一心福とは云うなり所謂南無妙法蓮華經は一心福なり。

隨喜功德品 ずいきくどく

言此經深妙 千万劫難遇

此の文は一切即妙法なれば一心の源底を顕す事甚妙無外なり所謂南無妙法蓮華經不思議なり。

法師功德品

靜散

入禪出禪者 聞香悉能知

不變死 隨緣生 十界

此の文は一心靜なる時は入禪、一心散亂する時は出禪、靜散即本覺と知るを悉く知るとは云うなり所謂南無妙法蓮華經は入禪出禪なり云云。

不輕品

应当一心広說此經世世值仏疾成仏道

此の文は法界皆本来三諦一心に具わる事を顯せば己心の念念・仏に値う事を即ち世世值仏と云うなり所謂南無妙法蓮華經是なり。

神力品

是人於仏道 決定無有疑

十如是

此の文は十界各各本有本覺の十如是なれば地獄も仏界も一如なれば成仏決定するなり所謂南無妙法蓮華經の受持なり云云。

囑累品

信にやうい如來知慧者當演說此法華經えんぜつ ほけきやう

此の文は釈迦如來の悟の如く一切衆生の悟と不同有ること無し故に如來の智慧を信ずるは即ち妙法なり所謂南無妙法蓮華經の智慧なり云云。

藥王品やくおうほん

是真精進是名眞法供養如來しんしんしん じまうほふく くにやうく

此の文は色香中道の觀念懈ること無し是を即ち眞法供養如來と名くるなり所謂南無妙法蓮華經唯一乘の故に眞法なり世間も出世も純一実相なり云云。

妙音品みよおん

久遠くおん 寂光土じやくくわうど

身不動搖而入三昧さんまい

此の文は即ち久遠を悟るを身不動搖と云うなり惑障を尽くさずして寂光に入るを三昧とは云うなり所謂南無妙法蓮華經の三昧なり云云。

普門品ふもんほん

福智

慈眼視衆生福聚海無量むじやくう

此の文は法界の依正妙法なる故に平等一子の慈悲なり依正福智共に無量なり所謂南無妙法蓮華經福智の二法なり云云。

陀羅尼品だらにぼん

未來顯 みらい けん

修行是經者 しゆぎやうしぜきやうししや

令得安穩 あんのん げんざい

現在顯 げんざい けん

此の文は五種妙行を修すれば悟の道に入つて嶮路に入らざるなり此れは安穩と云う事なり、所謂南無妙法蓮華經即安穩なり云云。

嚴王品

宿福深厚生値仏法 しゆくふくしんぷくしやうしやうしちふつぽう

此の文は一句妙法に結縁すれば億劫にも失せずして大乘無価の宝珠を研き顯すを生値仏法と云うなり所謂南無妙法蓮華經の仏法なり。

勸發品 かんぱつぽん

是人命終為千仏授手令不恐怖不墮惡趣 みようじゆめい せんぶつじゆてい くらふ だあくしゆ

此の文は妙法を悟れば分段の身即常寂光と顯るるを命終と云うなり千仏とは千如御手とは千如具足なり故に不墮惡趣なり所謂南無妙法蓮華經の御手なり。

已上品品別伝畢 しやうぽんぽんべつでんひ

一廿八品悉南無妙法蓮華經の事 にやふはつぽんしつなんむめうほうれんげきやう

疏の十に云く惣じて一經を結するに唯四のみ其の枢柄を撮つて之を授与すと。

御義口伝に云く一經とは本迹二十八品なり唯四とは名用体宗の四なり枢柄とは唯題目の五字なり授与とは上行菩薩に授与するなり之とは妙法蓮華經なり云云、此の積分分明なり今日蓮等の弘通の南無妙法蓮華經は体なり心なり廿八品は用なり廿八品は助行なり題目は正行なり正行に助行を摂す可きなり云云。

無量義經の事

御義口伝に云く妙法の序分無量義經なれば十界悉く妙法蓮華經の序分なり。

序品

御義口伝に云く如是我聞の四字を能く能く心得れば一經無量の義は知られ易きなり十界互具三千具足の妙と聞くなり此の所聞は妙法蓮華と聞く故に妙法の法界互具にして三千清淨なり此の四字を以て一經の始終に亘るなり廿八品の文文句句の義理我が身の上の法門と聞くを如是我聞とは云うなり、其の聞物は南無妙法蓮華經なりされば皆成仏道と云うなり此の皆成の二字は十界三千に亘る可きなり妙法の皆成なるが故なり又仏とは我が一心なり是れ又十界三千の心心なり、道とは能通に名くる故に十界の心心に通ずるなり此の時皆成仏道と顯るるなり皆成仏道の法は南無妙法蓮華經なり。

方便品

御義口伝に云く此の品には十如是を説く此の十如是とは十界なり此の方便とは十界三千なり。既に妙法蓮華經を頂く故に十方仏土中唯一乘法なり妙法の方便蓮華の方便なれば秘妙なり清淨なり妙法の五字は九識方便は八識已下なり九識は悟なり八識已下は迷なり、妙法蓮華經方便品と題したれば迷悟不二なり森羅三千の諸法此の妙法蓮華經方便に非ずと云う事無きなり品は義類同なり、義とは三千なり類とは互具なり同とは一念なり此の一念三千を指して品と云うなり此の一念三千を三仏合点し給えり仍つて品品に題せり南無妙法蓮華經の信

一念より三千具足と聞えたり云云。

譬喩品

御義口伝に云く此の品の大白牛車とは「無明癡惑本是法性」の明闇一体の義なり、即ち三千具足の一乗をかがげたる車なれば明闇一体にして三千具足の義を顯すなり、法界に満したれども一法なるを一乗と云うなり、此の一乗とは諸乗具足の一乗なり諸法具足の一法なり故に一の白牛なり又白牛は一なりといえども無量の白牛なり一切衆生の体だいびやくこしゃ
大白牛車なるが故なり、然らば妙法の大白牛車に妙法の十界三千の衆生乗じたり蓮華の大白牛車なれば十界三千の衆生も蓮華にして清浄なり南無妙法蓮華經の法体此くの如し。

信解品

御義口伝に云く此の信解は中根の四大声聞の領解に限るに非ず妙法の信解なるが故に十界三千の信解なり、蓮華の信解なるが故に十界三千の清浄の信解なり此の信解の体とは南無妙法蓮華經是なり云云。

藥草喩品

御義口伝に云く妙法の藥草なれば十界三千の毒草蓮華の藥草なれば本来清浄なり、清浄なれば仏なり此の仏の説法とは南無妙法蓮華經なり云云、されば此の品には種相体性の種の字に種類種・相体種の二の開会之れ有り、相對種とは三毒即三徳なり種類種とは始の種の字は十界三千なり、類とは互具なり下の種の字は南無妙法蓮華經なり種類種なり、十界三千の草木各各なれども只南無妙法蓮華經の一種なり、毒草の毒もなきなり清浄の草木にして藥草なり云云。

授記品

御義口伝に云く十界已已の当体の言語は妙法蓮華の授記なれば清浄の授記なり、清浄の授記なれば十界三千の仏なり、爰を以て仏南無妙法蓮華經と授記するなり云云。

化城喩品

御義口伝に云く妙法の化城なれば十界同時の無常なり、蓮華の化城なれば十界三千の開落なり、常住無常俱に妙法蓮華經の全体なり、化城宝処は生死本有なり生死本有の体とは南無妙法蓮華經なり、釈に云く「起は是れ法性の起滅は是れ法性の滅」と。

五百品

御義口伝に云く此の品には五百弟子授記作仏すと現文に見えたり、然りと雖も妙法の五百なれば十界三千皆五百の弟子なり、蓮華の弟子なれば又清浄なり、所詮十界三千南無妙法蓮華經の弟子に非ずと云う事なし此の經の授記是なり云云。

人記品

御義口伝に云く此の品には学無学の聖者来つて成仏するなり、既に妙法頂戴の学無学なれば十界互具三千具足の学無学なり妙法の学無学なるが故に不思議の十界に煩惱未だ尽くさざるなり蓮華の学無学なれば十界三千清浄の開落なり、此の学無学何物ぞや学とは法なり無学とは妙なり所謂南無妙法蓮華經なり云云。

法師品

御義口伝に云く妙法の法師なれば十界皆妙法受持の一句一偈の法師なり、蓮華の法師なれば十界三千清浄の法師なり、十界衆生の色法は能持の人なり十界の心性は所持の法なり、仍つて色心共に法師にして自行化他を

あらわ
顯すなり所謂南無妙法蓮華經の法師なるが故なり云云。

宝塔品

おんぎくでん
御義口伝に云く此の宝塔は宝浄世界より涌现するなり、其の宝浄世界の仏とは事相の義をば且らく之を置く、証道
かんじん
観心の時は母の胎内是なり故に父母は宝塔造作の番匠なり、宝塔とは我等が五輪・五大なり然るに託胎の胎を
ほうじょうせかい
宝浄世界と云う故に出生する處を涌現と云うなり、凡そ衆生の涌现は地輪より出現するなり故に従地湧出と云うな
り、妙法の宝浄世界なれば十界の衆生の胎内は皆是れ宝浄世界なり、蓮華の宝浄なれば十界の胎内
悉く無垢清浄の世界なり、妙法の地輪なれば十界に亘るなり蓮華の地なれば清浄地なり、妙法の宝浄なれば我等が
身体は清浄の宝塔なり妙法蓮華の涌出なれば十界の出生の産門本来清浄の宝塔なり、法界の搭婆にして十法界即
塔婆なり妙法の二仏なれば十界三千・皆境智の二仏なり、妙法の一座には三千の心性皆以て二尊の所座
なり妙法蓮華二仏一座なれば不思議なり清浄なり、妙法蓮華の見なれば十界の衆生・三千の群類・皆自身の搭婆を見
るなり、十界の不同なれども己が身を見るは三千具足の塔を見るなり己の心を見るは三千具足の仏を見るなり、分身と
は父母より相続する分身の意なり、迷う時は流転の分身なり悟る時は果中の分身なり、さて分身
の起る處を習うには地獄を習うなり、かかる宝塔も妙法蓮華經の五字より外は之れ無きなり妙法蓮華經を見れば
宝塔即一切衆生一切衆生即南無妙法蓮華經の全体なり云云。

提婆品

おんぎくでん
御義口伝に云く此の品には釈尊の本師・提婆達多の成仏と文殊師利・教化の竜女成仏とを説くなり、是れ又
みほうふし
妙法蓮華經の提婆竜女なれば十界三千皆調達竜女なり、法界の衆生の逆の辺は調達なり法界の貪欲・瞋恚・愚癡の方

は悉く竜女なり、調達は修徳の逆罪・一切衆生は性徳の逆罪なり一切衆生は性徳の天王如来調達は修徳の天王如来なり、竜女は修徳の竜女・一切衆生は性徳の竜女なり、所詮釈尊も文殊も提婆も竜女も一つ種の妙法蓮華經の功能なれば本来成仏なり、仍つて南無妙法蓮華經と唱え奉る時は十界同時に成仏するなり、是を妙法蓮華經の提婆達多と云うなり、十界三千竜女なれば無垢世界に非ずと云う事なし、竜女が一身も本来成仏にして南無妙法蓮華經の当体なり云云。

勸持品

御義口伝に云く此の品の姨母・耶輸の記は十界同時の授記なり妙法の姨母・妙法の耶輸なる故なり、十界の衆生の心性は所持の經の体なり是れ即ち勸持の流通なり、心性所持の經を勸持して自行化他に趣くなり、姨母耶輸は女人の成仏なり二万の大士は男子の流通なり此の文陰陽一体にして南無妙法蓮華經の当体なり云云。

安樂行品

御義口伝に云く妙法の安樂行なれば十界三千悉く安樂行なり、自受用の当体なり身口意誓願悉く安樂行なり、蓮華の安樂行なれば三千十界清淨の修行なり、諸法実相なれば安樂行に非ざること莫し、本門の意は十界の色心本来有として眞実の安樂行なり、安樂行の体とは所謂上行所伝の南無妙法蓮華經是なり云云、靈山淨土に安樂に行詣す可きなり云云。

涌出品

御義口伝に云く此の品は迹門流通の後本門開顯の序分なり、故に先ず本地無作の三身を顯さんが為に釈尊所具の菩薩なるが故本地本化の弟子を召すなり、是れ又妙法の從地なれば十界の大地なり、妙法の涌出なれば十界

みなゆじゅう 皆涌出なり、十界妙法の菩薩なれば皆饒益有情界の慈悲深重の大地なり、蓮華の大地なれば十界の大地も十界涌出の菩薩も本来清浄なり、所詮悟道に約する時は從地とは十界の衆生の大種の所生なり、涌出とは十界の衆生の出胎の相なり菩薩とは十界の衆生の本有の慈悲なり、此の菩薩に本法の妙法蓮華經を付屬せんが為に從地涌出するなり、日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は從地涌出の菩薩なり外に求むること莫かれ云云。

— 壽量品 —

おんぎくでん 御義口伝に云く壽量品とは十界の衆生の本命なり、此の品を本門と云う事は本に入る門と云う事なり、凡夫の血肉の色心を本有と談ずるが故に本門とは云うなり、此の重に至らざるを始覺と云い迹門と云うなり、是を悟るを本覺といひ本門と云うなり、所謂南無妙法蓮華經は一切衆生の本有の在処なり爰を以て經に我実成仏已来とは云うなり云云。

— 分別品 —

おんぎくでん 御義口伝に云く此の品は上の品の時本地無作の三身如来の寿を聞く故に今品にして上の無作の三身を信解するなり、其の功德を分別するなり功德とは十界己己の当体の三毒の煩惱を此の品の時其の儘妙法の功德なりと分別するなり、其の功德とは本有の南無妙法蓮華經是なり云云。

— 隨喜品 —

おんぎくでん 御義口伝に云く妙法の功德を隨喜する事を説くなり、五十展転とは五とは妙法の五字なり十とは十界の衆生なり展転とは一念三千なり、教相の時は第五十人の隨喜の功德を校量せり五十人とは一切衆生の事なり、妙法の五十人妙法蓮華經を展転するが故なり、所謂南無妙法蓮華經を展転するなり云云。

一 法師功德品

御義口伝に云く無作の三身も如来の寿も分別功德も随喜も我が身の上の事なり、然らば父母所生の六根は清淨にして自在無碍なり妙法の六根なれば十界三千の六根皆清淨なり、蓮華所具の六根なれば全く不淨に非ざるなり、此の六根にて南無妙法蓮華經と見開覺知する時は本来本有の六根清淨なり云云。

一 不輕品

御義口伝に云く此の菩薩の禮拜の行とは一切衆生の事なり、自他一念の禮拜なり父母果縛の肉身を妙法蓮華經と禮拜するなり、仏性も仏身も衆生の当体の色心なれば直ちに禮拜を行ずるなり、仍つて皆当作仏の四字は南無妙法蓮華經の種子に依るなり。

一 神力品

御義口伝に云く十種の神力を現じて上行菩薩に妙法蓮華經の五字を付属し給う此の神力とは十界三千の衆生の神力なり、凡夫は体の神力三世の諸仏は用の神力なり神とは心法力とは色法なり力は法神は妙なり妙法の神力なれば十界悉く神力なり、蓮華の神力なれば十界清淨の神力なり、惣じて三世の諸仏の神力は此の品に尽くせり釈尊出世の神力の本意も此の品の神力なり、所謂妙法蓮華經の神力なり十界皆成と談ずるより外の諸仏の神力は之れ有る可からず、一切の法門神力に非ずと云う事なし云云。

一 嘱累品

御義口伝に云く此の品には摩頂付属を説きて此の妙法を滅後に留め給うなり、是れ又妙法の付属なれば十界三千皆付属の菩薩なり、又三摩する事は能化所具の三觀三身の御手を以て所化の頭上に明珠を譲り与えたる心なり、凡そ頂上の明珠は覺悟知見なり頂上の明珠とは南無妙法蓮華經是なり云云。

藥王品

御義口伝に云く此の品は藥王菩薩の仏の滅後に於て法華を弘通するなり、所詮焼身焼臂とは焼は照の義なり照は智慧の義なり智能く煩惱の身生死の臂を焼くなり、天台大師も本地藥王菩薩なり、能説に約する時は釈迦なり衆生の重病を消除する方は藥王、藥師如来なり又利物の方にて藥王と云う自悟の方にては藥師と云う、此の藥王、藥師出世の時は天台大師なり藥王も滅後に弘通し藥師如来も像法暫時の利益有情なり、時を以て身体を顯し名を以て義を顯す事を仏顯し給うなり、藥王菩薩は止觀の一念三千の法門を弘め給う、其の一念三千とは所謂南無妙法蓮華經是なり云云。

妙音品

御義口伝に云く此の菩薩は法華弘通の菩薩なり故に卅四身を現じて十界互具を顯し給ひ利益説法するなり、是れ又妙法の妙音なれば十界の音声は皆妙音なり、又十界悉く卅四身の所現の妙音なり、又蓮華の妙音なれば十界三千の音声皆無染清淨なり、されば慈覺大師をば妙音の出世と習うなり之に依つて唐決の時、引声妙音をば伝え給えり何故有りてか法華を誹謗して大日經等に劣りたりと云うや云云、所謂法界の音声、南無妙法蓮華經の音声に非ずと云う事なし云云。

觀音品

御義口伝に云く此の品は甚深の秘品なり息災延命の品なり当途王經と名く、されば此の品に就て職位法門を継ぐぞと習うなり、天台も三大部の外に觀音玄といつ疏を作り章安大師は兩卷の疏を作り給えり能く能くの秘品なり、觀音、法華眼目異名と云いて觀音即ち法華の体なり所謂南無妙法蓮華經の体なり云云。

陀羅尼品

御義口伝に云く此の品は二聖・二天王・十羅刹女・陀羅尼を説きて持経者を擁護し給うなり、所詮妙法・陀羅尼の眞言なれば十界の語言音声皆陀羅尼なり、されば伝教大師の云く「妙法の眞言は他經に説かず、普賢常護は他經に説かず」陀羅尼とは南無妙法蓮華經の用なり、此の五字の中には妙の一字より陀羅尼を説き出すなり云云。

嚴王品

御義口伝に云く此の品は二子の教化に依つて父の妙莊嚴王邪見を翻し正見に住して沙羅樹王仏と成るなり、沙羅樹王とは梵語なり此には熾盛光と云う、一切衆生は皆是れ熾盛光より出生したる一切衆生なり、此の故に十界衆生の父なり、法華の心にては自受用智なり忽然火起焚燒舍宅とは是なり、煩惱の一念の火起りて迷悟不二の舍宅を燒くなり邪見とは是なり、此の邪見を邪見即正と照したる南無妙法蓮華經の智慧なり所謂六凡は父なり四聖は子なり四聖は正見六凡は邪見故に六道の衆生は皆是れ我が父母とは是なり云云。

勸發品

御義口伝に云く此の品は再演法華なり本迹二門の極理此の品に至極するなり、慈覺大師云く十界の衆生は發心修行と釈し給うは此の品の事なり、所詮此の品と序品とは生死の二法なり序品は我等衆生の生なり此の品は一切衆生の死なり生死一念なるを妙法蓮華經と云うなり品品に於て初の題号は生の方終の方は死の方なり、此の法華經は生死・生死と轉りたり、生の故に始に如是我聞と置く如は生の義なり死の故に終りに作礼而去と結したり、去は死の義なり作礼の言は生死の間に成しと成す処の我等衆生の所作なり、此の所作とは妙法蓮華經なり

り、礼とは不乱ふらんの義ぎなり法界ほっかい妙法みょうぼうなれば不乱ふらんなり、天台大師てんだいだいしの云いく「体の字は礼に訓くんず礼は法なり各々其の親を親とし各々其の子を子とす出世しゅっせの法ほつぽう体たいも亦復是の如ごとしと、体とは妙法蓮華經みょうぼうれんげきやうの事なり先づ体玄義げんぎを釈しゃくするなり、体とは十界の異体なり是を法華經ほけきやうの体とせり此等これらを作礼而去さいらいにことは説はかれたり、法界ほっかいの千草万木地獄じごく餓鬼がき等何の界がいも諸法実相しよほつじゆつの作礼あらに非あらずといふ事なし是れ即ち普賢菩薩すなわ ぶげんぼさつなり、普すなわとは法界ほっかい賢けんとは作礼而去さいらいにこなり此れ即ち妙法蓮華經みょうぼうれんげきやうなり、爰こゝをを以て品品の初めにも五字ごじを題し終りにも五字を以て結し前後中間南無妙法蓮華經ぜんごちゆうげん なむ みょうぼうれんげきやうの七字なり、末法弘通まっぽうくつうの要法唯此ようほうただの一段に之れ有るなり、此等これらの心を失うしなつて要法ようほうに結むすばずんば末法弘通まっぽうくつうの法はふには不足ふそくの者なり剩あまつさえ日蓮にちれんが本意ほんいを失うしなふ可べし、日蓮にちれんが弟子でし檀那だんな別の才覚さいかく無益むやくなり、妙樂みょうらくの釈いに云いく「子父しふの法はふを弘ひろむ世界せかいの益有えきり」と、子とは地涌じゆの菩薩ぼさつなり父とは釈尊しやくそんなり世界せかいとは日本国にほんこくなり益えきとは成仏じやうぶつなり法はふとは南無妙法蓮華經なむ みょうぼうれんげきやうなり、今又以て此この如ごとし父ふとは日蓮にちれんなり子とは日蓮にちれんが弟子でし檀那だんななり世界せかいとは日本国にほんこくなり益えきとは受持じゆじ成仏じやうぶつなり法はふとは上行じやうぎやう所伝しよでんの題目だいめくなり

御義口伝卷下おんぎくでん

弘安元年戊寅正月一日こうあんげんねんごのすえとい

執筆しつぴつ 日興にちきう

御講聞書

九六 御講聞書目錄

804 p

已上九十ヶ条

- 一、妙法蓮華經序品第一の事 八〇七
みょうほうれんげきょうじよぼんだいいち
- 一、妙法 八〇八
みょうほう
- 一、蓮華 八〇八
れんげ
- 一、本因・本果の事 八〇九
ほんいん・ほんが
- 一、爾前無得道の事 八〇九
にぜん とくどう
- 一、序品の事 八〇九
じよぼん
- 一、品と云う事 八〇九
によぜがもん
- 一、如是我聞の事 八一〇
- 一、如是の二字 八一〇
こ
- 一、耆闍崛山の事 八一一
ぎしゃくつせん
- 一、与大比丘衆の事 八一二
びく
- 一、爾時・世尊の事 八二三
にぎじよ せそん
- 一、浄飯王摩耶夫人成仏証文の事 八二三
じやうはんおうまゐやふじんじやうぶつしやうもん
- 一、方便品の事 八二三
はんべん
- 一、仏所成就第一希有難解之法唯仏与仏の事 八二四
ぶつじよじやうじゆだいじちけうなん ぶつ ぶつしやうじゆ

- 一、十如是の事 八二五
じゆ
- 一、自証無上道大乘平等法の事 八二五
むじやうどうだいじやうびやうどう
- 一、我始坐道場 觀樹亦經行の事 八二六
わしじやうだうじやう かんじゆ また
- 一、今 我喜無畏の事 八二六
- 一、我聞是法音疑網皆已除の事 八二六
わうん ほうせいぎもうちがい
- 一、以本願故說三乘法の事 八二七
ほんがん さんじやう
- 一、有大長者の事 八二八
ちやうじや
- 一、多有田宅の事 八二九
- 一、等一大車の事 八二〇
- 一、其車高広の事 八二〇
- 一、是朽故宅属于一人の事 八二〇
そくう
- 一、諸鬼神等揚声大叫の事 八二二
しよきじん じやうしやうだいきやう
- 一、乘此宝乘直至道場の事 八二二
じき じやうだうじやう
- 一、若人不信毀謗此經則断一切世間 仏種の事 八二三
にやにふしん ぐわう じき けう じやう ぶつしゆ
- 一、捨惡知識親近善友の事 八二三
あくちしきしんじんぜんぜん
- 一、無上宝聚不求自得の事 八二四
むじやうじゆ ぶくじとく

- 一、藥草喻品の事 八二四
- 一、現世安穩、後生善処の事 八二五
- 一、皆悉到於一切智地の事 八二五
- 一、此の一切智地の四字八二六
- 一、根茎枝葉の事 八二七
- 一、枯槁衆生の事 八二七
- 一、等雨法雨の事 八二七
- 一、如從飢国来忽遇大王の事八二八
- 一、大通智勝仏。不得成仏道の事八二九
- 一、貧人見此珠其心大歡喜の事八三〇
- 一、如甘露見灌の事 八三一
- 一、若有惡人以不善心等の事 八三一
- 一、如是如是の事 八三一
- 一、是真仏子住淳善地の事 八三一
- 一、非口所宣非心所測の事 八三三
- 一、不染世間法如蓮華在水從地而涌出の事八三三
- 一、願仏為未來演說令開解の事八三四
- 一、譬如良医智慧聰達の事 八三四
- 一、一念信解の事 八三五
- 一、見仏聞法信受教誨の事 八三五
- 一、若復有人以七宝滿是人所得其福最多の事八三五
- 一、妙音菩薩の事 八三六
- 一、爾時無尽意菩薩の事八三六
- 一、觀音妙智力の事 八三六
- 一、自在之業の事 八三六
- 一、妙法蓮華經陀羅尼の事 八三六
- 一、六万八千人の事 八三七
- 一、妙莊嚴王の事 八三七
- 一、華嚴・大日觀經等の凡夫の得道の事八三七
- 一、題目の五字を以て下種の証文と為す可き事八三七
- 一、題目の五字末法に限りて持つ可きの事八三八
- 一、天台云く是我弟子応弘我法の事八三八
- 一、色心を心法と云う事八三八
- 一、無作の心身我等凡夫也と云う事八三八
- 一、諸河無鹹の事 八三八
- 一、妙樂大師の釈に末法之初冥利不無の釈の事八三九

- 一、爾前經瓦礫国の事 八三九
- 一、無明惡酒の事 八三九
- 一、日蓮己証の事 八四〇
- 一、釈尊の持言秘法の事 八四〇
- 一、日蓮門家大事の事 八四〇
- 一、日蓮が弟子臆病にては叶う可からざる事 八四〇
- 一、妙法蓮華經の五字を眼と云う事 八四〇
- 一、法華經の行者に水火の行者の事 八四一
- 一、女人と妙と釈尊と一体の事 八四一
- 一、置不呵責の文の事 八四二
- 一、異念無く靈山淨土參る可き事 八四二
- 一、不可失本心の事 八四二

- 一、天台大師を魔王障礙せし事 八四三
- 一、法華經極理の事 八四四
- 一、妙法蓮華經五字の威の事 八四四
- 一、我等衆生の成仏は打かためたる成仏と云う証文の事 八四五
- 一、爾前法華の能くらべの事 八四五
- 一、授職の法体の事 八四五
- 一、末代讓狀の事 八四五
- 一、本有止觀と云う事 八四五
- 一、入末法四弘誓願の事 八四五
- 一、四弘誓願応報如理と云う事 八四六
- 一、本来の四弘の事 八四六

右日向記の目録は、現行板本の目録に脱せる「にやげがもん 如是我聞の事」及び「ほけきよう 法華經の行者に水火の行者の事」の二条を加え、新曾本に明かに「已上九十ヶ条」とあるに合せて、新たに作製せり。現行板本に八十八箇条とあるは誤なり、但し巻頭の「あやまり 総」は新曾本にも数えず、故に本目録にも記載せず。なお同一箇条にして、別条に御講示ある場合、即ち「すなわ 等雨法雨の事」「しやう 根茎枝葉の事」等は、新曾本も現行板本も、共に一条に数うるを以て、本目録も亦た其れに従えり。

已上四行の附記は全く日宗社本に依る、編者。

九七 御講聞書

807P

自二弘安元年三月十九日一連連御講至一同三年五月二十八日一也仍テ記シ之畢

日向 記之

凡そ法華經と申すは一切衆生皆成仏道の要法なり、されば大覺世尊は説時未至故と説かせ給いて説く可き時節を待たせ給いき、例せば郭公の春をおくり鶏鳥の曉を待ちて鳴くが如くなり、此れ即ち時を待つ故なり、されば涅槃經に云く以知時故名大法師と説かれたり、今末法は南無妙法蓮華經の七字を弘めて利生得益あるべき時なり、されば此の題目には余事を交えれば僻事なるべし、此の妙法の大曼荼羅を身に持ち心に念じ口に唱え奉るべき時なり、之に依つて一部二十八品の頂上に南無妙法蓮華經序品第一と題したり。

一妙法蓮華經序品第一の事玄旨伝に云く、一切經の惣要とは謂く妙法蓮華經の五字なり、又云く、一行一切行恒修二此三昧一文、云う所の三昧とは即ち法華の有相無相の二行なり、此の道理を以て法華經を讀誦せん行者は即ち法具の一心三觀なり云云、此の釈に一切經と云うは近くは華嚴阿含方等般若等なり、遠くは大通仏より已來の諸經なり、本門の意は寿量品を除いて其の外の一切經なり、惣要とは天には日月地には大王・人には神・眼目の如くなりと云う意を以て釈せり、此れ即ち妙法蓮華經の枝葉なり、一行とは妙法の一行に一切行を納めたり、法具とは題目の五字に万法を具足すと云う事なり、然る間三世十方の諸仏も上行菩薩等も大梵天王

帝釈四王・十羅刹女・天照太神・八幡大菩薩・山王二十一社其の外日本国中の小神・大神等此の經の行者を守護すべしと法華經の第五卷に分明に説かれたり、影と身と音と響との如し、法華經二十八品は影の如く

響ひびきの如ごとし、題目だいもくの五字ごじは体ていの如ごとく音おんの如ごとくなり、題目だいもくを唱となえ奉たてまつる音おんは十方じゅうほう世界せかいにとずかずと云いう所ところなし、我等われらが小音せうおんなれども、題目だいもくの大音だいおんに入れて唱となえ奉たてまつる間かん、一大いさん三千せん界かいにいたらざる所ところなし、譬たとえば小音せうおんなれども貝かいに入れて吹ふく時とき遠とほく響ひびきくが如ごとく、手ての音おんはわすかなれども鼓こを打うつに遠とほく響ひびきくが如ごとく、一念いちねん三千せんの大事だいじの法門ほうもん是これなり、かかる目出度めだき御經ぎぎょうにて渡わたらせ給たまえるを、謗そしる人なん何なんぞ無間むげんに墮ださいせざらんや、法然ほうねん、弘法こうぼう等らの大悪知識あくちしき是これなり。

一妙法みほう 二字にじは一切衆生いっさいしゅじやうの色心しきしんの二法にぽうなり、一代説教いちだいせつぎやうの中に法の字じの上に妙めうの字じを置おきたる經ぎょうは一經いっきやうもなし、

涅槃經ねはんぎやうの題目だいもくにも大涅槃經だいねはんぎやうと云いいて大だいの字じあれども妙めうの字じなし、但ただし大だいは只是ただこれ妙めうと云いえり然しかれども大だいと妙めうとは不同ふどうなり、同じ大だいなれども華嚴經けこんぎやうの大方廣ほうぼう華嚴經けこんぎやうと云いえる題号だいごうの大だいと、涅槃經ねはんぎやうの大だいと天地雲泥てんちうんぬいなり、華嚴けこん

經ぎやうの大だいは無得道むとくだうの大だいなり。涅槃經ねはんぎやうの大だいは法華同醍醐味ほっけどうだいごみの大だいなり、然しかれども然しか涅槃尚ねはんしやう劣あつと云いう時は法華經ほっけぎやうには劣あつれり、此この

事ことは涅槃經ねはんぎやうに分明ぶんめいに法華經ほっけぎやうに劣あつると説いかれたり、涅槃經ねはんぎやうに云いく如下法華中八千声聞得受二記ごうにげべつ一成中いちやうちゆう大果舞上だいこぶじやう如ごとく

三秋收しやうしゅう冬藏とうざう更無二所作しやうしやニ云い此このの文ぶん分明ぶんめいに我われと法華經ほっけぎやうに劣あつれりと説いかせ給たまえり。

一蓮華れんげ とは本因ほんいん・本果ほんがなり、此このの本因ほんいん・本果ほんがと云いうは一念三千いちねんさんぜんなり、本有ほんゆの因いん・本有ほんゆの果くわなり、今始いまめたる因果いんがに

非あらざるなり、五百塵点じふごじんてんの法門ほうもんとは此このの事ことを説いかれたり、本因ほんいんの因いんと云いうは下種げしゆの題目だいもくなり、本果ほんがの果くわとは成仏じやうぶつなり、因いんと

云いうは信心領納しんじんりやうのうの事ことなり、此このの經ぎやうを持ち奉たてまつる時ときを本因ほんいんとす其そのの本因ほんいんのまま成仏じやうぶつなりと云いうを本果ほんがと

は云いうなり、日蓮にちれんが弟子でし・檀那だんなの肝要かんようは本果ほんがより本因ほんいんを宗しゆとするなり、本因ほんいんなくしては本果ほんが有ある可べからず、仍いふて本因ほんいんとは

慧みの因いんにして名字即みふじしやくの位ゐなり、本果ほんがは果くわにして究竟即くきやうしやくの位ゐなり、究竟即くきやうしやくとは九識本覺くわんしきほんかくの異名いみやうなり、九識本法くわんしきほんぽうの都ととは法華ほっけ

の行者ぎやうぎやの住所じよじゆなり、神力品じんりきほんに云いく若もしは山谷曠野やまやうくわうぎや等らと説いけり即すなわち是これ道場だうじやうと見えたり豈あに法華ほっけの行者ぎやうぎやの住所じよじゆは生処しやうじよ得道とくだう

・転法輪てんぽうりん・入涅槃にるねはんの諸仏しよぶつの四処しじよの道場だうじやうに非あらずや。

一本因・本果の事

法界悉く常住不滅の爲体を云うなり、されば妙樂大師此の事を釈する時弘決に云く当七

知身土一念三千故成道時称二此本理一身一念遍二於法界一云云、此の釈分明に本因・本果を釈したり、身と云うは

一切衆生なり、土と云うは此の一切衆生の住処なり一念とは此の衆生の念念の作業なり、故成道時称二此本理一とは

本因・本果の成道なり、本理と本因・本果とは同じ事なり法界とは五大なり、所詮法華經を持ち奉る行者は若在仏前

蓮華化生なれば称此本理の成道なり、本理に称うとは妙法蓮華經の本理に称うと云う事なり、法華經の本理に叶うとは

此の經を持ち奉るを云うなり、若有能持則持仏身とは是なり。

一爾前無得道の事

此の法門は蓮華の二字より起れり、其の故は蓮華の二字を以て云うなり、三世の諸仏の成道を

唱うるは蓮華の二字より出でたり、權教に於て蓮華の沙汰無し若しありと云うとも有名無実の蓮華なるべし、三世の諸仏

の本時の下種を指して華と名け、此の下種の華によつて成仏の蓮を取る、妙法蓮華即ち下種な

り、下種即ち南無妙法蓮華經なり、華は本因・蓮は本果なれば華の本國を不信謗法の人豈具足せんや、經に云く

若人不信毀謗此經則斷一切世間仏種云云、此の蓮華に迷う故に十界具足無し、十界具足せざれば一念三千跡形無き

なり、一切の法門は蓮華の二字より起れり、一代説教に於て無得道と云うも蓮華の二字より起れり深く之を案ず可し。

一序品の事

此の事は、教主釈尊・法華經を説き給わんとて先ず瑞相の顯れたる事を云うなり、今末法に入つて

南無妙法蓮華經の顯われ給うべき瑞相は彼には百千万倍勝るべきなり、其の故は雨は竜の大小により蓮華は池の浅深に

随つて其の色不同なるが如くなるべし。

一品と云う事

品とは、釈に云く義類同と云えり、此の法華經は三仏寄合ひ給いて定判し給えり、三仏とは釈迦・多宝

分身是なり、此の三仏・評定してのたまわく一切衆生皆成仏道は法華經に限りて有りと、皆是真實

の証明・吉相梵天の誠証・要當說眞実の金言・此等を義類同して題したる品の字なり、天竺には跋渠と云う此には品と云えり、釈迦・多宝・分身の三仏の御口を以て指し合せ同音に定判し給える我等衆生の成仏なり、譬えば鳥の卵の内より卵をつつく時・母又同じくつきあくるに同じき所をつつきあくるが如し、是れ即ち念慮の感応する故なり、今法華經の成仏も此くの如くなり、三世諸仏の同音に同時に定め給える成仏なり、故に經に云く從仏口生如從仏等云云。

一如是我聞の事

仰に云く如と云うは衆生の如と仏の如と一如にして無二如なり、然りと雖も九界と仏界と分れたるを是と云うなり、如は如を不具に名く即ち空の義なりと釈して少しもことならざるを云うなり、所詮法華經の意は煩惱即菩提・生死即涅槃・生仏不二・迷悟一体といえり、是を如とは云うなり、されば如は実相・是は諸法なり、又如は心法・是は色法・如は寂・是は照なり、如は一念・是は三千なり、今經の心は文・文・句句・一念三千の法門なり、惣じて如是我聞の四字より外は今經の体全く無きなり、如と妙とは同じ事・是とは法と又同じ事なり、法華經と釈尊と我等との三・全く不同無く・如我等無異なるを如と云うなり、仏は悟り・凡夫は迷なりと云う

を是とは云うなり、我聞と云うは、我は阿難なり、聞とは耳の主と釈せり、聞とは名字即なり、如是の一字は妙法なり、阿難を始めて靈山一會の聴衆・同時に妙法蓮華經の五字を聴聞せり仍つて我も聞くと云えり、されば相伝の点には如は是なりきと我れ聞くといえり、所詮末法当今には南無妙法蓮華經を我も聞くと心得べきなり、我は眞如法性の我なり、天台大師は同聞衆と判ぜり同じ事を聞く衆と云うなり、同とは妙法蓮華經なり、聞は即身成仏・法華經に限ると聞くなり云云。

一如是の二字

を約教の下に釈する時・文句の一に又一時に四箭を接して地に墮せしめざるも未だ敢て捷しと称せず、鈍驢に策つて跋・を駟る尚し一をも得ず何に況や四をや云云、記の一に云く、大經に云く迦葉菩薩

問うて云く云何が智者 念念の滅を觀ずと、仏の言く譬えば四人皆射術を善し満つて一処に在りて各一方を射るに念言
すらく我等は四の箭俱に射て俱に墮せんと、復人有りて念すらく其の未だ墮せざるに及んで我れ能く一時に手を以て
接取せんといつが如く、仏の言く捷疾鬼は復是の人よりも速なり是くの如く、飛行鬼 四天王・
日月神 堅疾天は展転して箭よりも疾し、無常は此れに過ぎたりと、此の本末の意は他師 此の經の如是に付て釈を設くと
云えども更に法蓮華の理に深く叶わざるなり、一二だも義理を尽さざるなり況や因縁をや、何に況や約教 觀心の四を
やと破し給えり、所詮法華經は速疾頓成を以て本とす、我等衆生の無常のはやき事は捷疾鬼よ
りもはやし、爰を以て出ずる息は入る息を待たず、此の經の如是は爾前の諸經の如是に勝れて超八の如是なり、超八醍醐
の如是とは速疾頓成の故なり、妙樂大師云く若し超八の如是に非ずんば、安ぞ此の經の所聞と為さんと云云。

一耆闍崛山の事

仰に云く耆闍崛山とは靈鷲山なり、

靈とは三世の諸仏の心法なり必ず此の山に仏法を留め給う、

驚

とは鳥なり此の山の南に當つて詩だ戸陀林あり死人を捨つる所なり、驚此の屍を取り食うて、此の山に住むなり、さて
靈鷲山とは云うなり、所詮今の經の心は迷悟 一体と談ず、靈と云うは法華經なり、三世の諸仏の心法

にして悟なり、驚と云う卯は畜生にして迷なり、迷悟不二と開く中道即法性の山なり、耆闍崛山中と云うは迷悟不二、

三諦一諦・中道第一義空の内証なり、されば法華經を行ずる日蓮等が弟子・檀那の住所はいかなる山野なりとも

靈鷲山なり行者遠釈迦如来に非ずや、日本国は耆闍崛山・日蓮等の類は釈迦如来なるべし、惣じて一乘南無

妙法蓮華經を修行せん所はいかなる所なりとも常寂光の都・靈鷲山なるべし、此の耆闍崛山中とは煩惱の山なり、仏

菩薩等は菩提の果なり、煩惱の山の中にして法華經を三世の諸仏説き給えり、諸仏は法性の依地・衆生は無明の依地な

り、此の山を寿量品にしては本有の靈山と説かれたり、本有の靈山とは此の娑婆世界なり、中にも日本国な

り、法華經の本国土妙・娑婆世界なり、本門・壽量品の未曾有の大曼荼羅建立の在所なり云云、瑜伽論に云く東方に小国有り、其中唯大乘の種姓のみ有り、大乘の種姓とは法華經なり法華經を下種として成仏すべしと云う事なり、所謂南無妙法蓮華經なり小国とは日本国なり云云。

一与大比丘衆の事

仰に云く文句の一に云く釈論に明す、大とは亦是多と言ひ亦是勝と言ふ、遍く内外の經書を知る故に多と言ふ、又数一万二千に至る故に多と言ふ、今明さく大道有るが故に大用有るが故に大知有るが故に故に大と言ふ、勝とは道勝れ風勝れ知勝る、故に勝と言ふ、多とは道多く用多く知多し故に多と言ふ、又云く含容一心一切心なり、故に多と名くるなり、記の一に云く一心一切心と言ふは心境俱に心にして各一切を撰す、一切三千を出でざるが故なり、具に止觀の第五の文の如し、若し円心に非ざれば三千を撰せず、故に

三千惣別威く空仮中なり、一文既に爾なり他は皆此れに准せよ、此の本末の心は心境義の一念三千を釈するなり、止觀の第五の文とは夫一心具十法界乃至不可思議境の文を指すなり、心境義の一念三千とは此の与大比丘和が大字より釈し出だせり、大多勝の三字・三諦・三觀なり、円頓行者起念の当体・三諦三觀にして大多勝なり、

此の釈に惣と云ふは一心の事なり、別とは三千なり、一文とは大の一字なり、今末法に入つては法華經の行者・日蓮等の類、正しく大多勝の修行なり、法華經の行者は釈迦如来を始め奉りて悉く大人の爲に敬い奉るなり誠に以て大曼荼羅の同共の比丘衆なり、本門の事の一念三千・南無妙法蓮華經・大多勝の比丘衆なり、文文句句六万

九千三百八十四字の字ごとに大多勝なり、人法一体にして即身成仏なり、されば釈に云く大は是れ空の義・多は是れ仮の

義・勝は是れ中の義と、一人の上にも大多勝の三義・分明に具足す、大とは迹門・多とは本門・勝とは題目なり、

法華經の本尊を大多勝の大曼荼羅と云うなり、是れ豈与大比丘衆に非ずや、二界・八番の雜衆悉く法華の会座の大曼荼羅なり、法華經の行者は二法の情を捨てて唯妙法と信ずるを大といふなり、此の題目の一心に一切

心こころをあは含ふ容ようするを多おほくと云いうなり、諸經しよきやう 諸人しよじんに勝すぐれたるが故ゆゑに勝かちと云いうなり、一切心いっさいに法界ほふかいを尽つくす一心いっしんとは法華經ほふけきやうの信心しんじんなり、信心しんじん即すなはち一念いちねん三千さんぜんなり云云。

一爾時せそん 世尊せそんの事 仰いはに云いく世尊せそんとは釈迦しやくかに如来にやうらい 所詮しよせん世尊せそんとは孝養かうようの人を云いうなり、其そのの故ゆゑは不孝ふかうの人をば世尊せそんとは

云いわず教主きやうしやく釈尊しやくそんこそ世尊せそんの本もとにては御座おわし候しやうえ、父淨飯王じやうはん 母摩耶夫人まやふじんを成道じやうどうせしめ給たまうなり、されど今經こんきやうの座ざには父ふ母ぼ御座おわしさざれば方便ほふべん土ど法華經ほふけきやうをば送たまらせ給たまうなり、彼土たつ得聞とくもんとは是これなり、但ただし法華經ほふけきやうの心こころは十方じふほう

仏土中ぶつちゆう 唯ただ有一いっ乘法じふぎふなり切利夫せつりふに母摩耶夫人まやふじん人生たまたじ給たまえり、仰利天よくてんに即すなはちたる寂光土じやくかうどなり、方便土ほふべんに即すなはちたる寂光土じやくかうどなり、四土しど一念いちねん 皆常寂光みなじやうじやくかうなれば、何いれも法華經ほふけきやうの説せつ処ところなり、虚空会こくうかいの時の説ほつ法華ほつに岩切利天いやくせつりてんもるべきや寂光土じやくかうどの説せつ法華ほつに遠方便土えんほふべんもるべきや、何いれも法華經ほふけきやうの説せつ所ところなれば同聞衆どうもんしゆうの人数にんずうなり云云。

一淨飯王座耶夫人成仏証文の事 仰いはに云いく方便品ほふべんに云いく我始坐道場わしざだうぢやう 觀樹また亦經行またきやうぎやうの文ぶん是これなり、又壽量品じゆうりやうひんに

云いく、然我実成仏がじつじやうぶつじやうらい已來いらいの文ぶん是これなり、教主きやうしやく釈尊しやくそんの成道じやうどうの時とき淨飯王じやうはんも摩耶まやも得道とくどうするなり、本迹二門ほんせきにんの得道とくどうの文ぶん是これなり云云、此の文日蓮にちれんが己心こしんの大事だいじなり、我始わしと我実がじつとの文ぶん能よく能よく之これを案あず可べし、其そのの故ゆゑは爾前經にぜんきやうの心こころは父ふ子し

各別かくべつの談道だんどうなり、然しか開成仏かいじやうぶつ之これ無なし、今の經の時いまのきやうのとき父ふ子しの天性てんぎやうを定め父ふ子し一いつ体たいと談だんぜり、父ふ母ぼの成仏じやうぶつ即すなはち子この成仏じやうぶつなり、子この成仏じやうぶつ即すなはち父ふ母ぼの成仏じやうぶつなり、釈尊しやくそんの我実成仏がじつじやうぶつの

時とき淨飯王じやうはん 摩耶夫人まやふじん同時どうじなり始本共しはほんくわいに同時どうじの成道じやうどうなり、此このの法門ほふもんは天台てんだい 伝教等でんきやうとうを除のぞいて知しる人ひと一ひと人も

之これ有ある可べからず、末法まふぽうに入いつて日蓮等にちれんとうの類たぐひ 堅かたく秘ひす可べき法門ほふもんなり、譬たとえば蓮華れんげの華果けかの相離あひはなせざるが如ごとくなり、然しかれば法華經ほふけきやうの行者ぎやうぎは男女なんによめ悉しつく世尊せそんに非あらずや、藥王品やくわうひんに云いく於一切衆生いっさいしゆうじやう中亦また為なす第一だいいち文ぶん、此このれ即すなはち世尊せそんの經文きやうもんに非あらずや、

是真しぜ仏子ぶつしなれば法王ほふわうの子こにして世尊せそん第一だいいちに非あらずや。

一方便品ほふべんの事 妙法蓮華經みよふれんげきやうの五字ごじとは名体宗用教なうたいしゆうきやうの五重玄義ごじゆうげんぎなり、されば止觀しかんに十章じしやうを釈しやくせり此このの十章じしやう即すなはち

妙法蓮華經の能積なり、夫れとは積名は名玄義なり、体相摂法の二は体玄義なり、偏円の二は教玄義なり、方便・正觀・果報の二は宗玄義なり、起教の一は用玄義なり、始の大意の章と終の旨歸との二をば之を除く、此の意は止觀一部の所詮は大意と旨歸とに納れり無明即明の大意なる故なり、無明とも即明とも分別せざるが旨歸なり、今妙法蓮華經の五重玄義を修行し奉れば煩悩即菩提・生死即涅槃の開悟を得るなり、大意と旨歸とは法華の信心の事なるべし、以信得入・非己智分とは是なり、我等衆生の色心の二法は妙法の二字なり無始色心・本是理性・妙境・妙智と開闡するを大意と云うなり、大は色法の徳意は心法の徳なり大の字は形に訓ぜり、今日蓮等の類・南無妙法蓮華經と唱え奉る男女・貴賤等の色心本有の妙境・妙智なり、父母果縛の肉身の外に別に三十二相・八十種好の相好之れ無し即身成仏是なり、然る間大の一字に法界を悉く収むるが故に法華經を大乘と云うなり、一切の仏・菩薩・聖衆・人畜・地獄等の衆生・の智慧を具足し給うが故に・仏意と云うなり、大乘と云うも同じ事なり是れ即ち妙法蓮華經の具徳なり、されば九界の衆生の意を以て仏の意とす、一切經の心を以て法華經の意とす、於一仏乗分別説三とは是なり、かかる目出度き法華經を謗し奉る事・三世の諸仏の御舌を切るに非ずや、然るに此の妙法蓮華經の具徳をば仏の智慧にてもはかりがたく何に況や菩薩の智力に及ぶ可けんや、之に依つて大聖塔中・偶の相伝に云く、一家の本意は只一言を以て本と為す云云、此の一言とは寂・照不二の一言なり、或は本末究竟等の一言とも云うなり、眞実の義には南無妙法蓮華經の一言なり、本とは凡夫なり、末とは仏なり、究竟とは生仏一如なり、生仏一如の如の体は所謂南無妙法蓮華經是なり云云。

一仏所成就第一・希有難解之法唯仏与仏の事　仰に云く仏とは釈尊の御事なり、成就とは法華經なり、第一は爾前の不第一に對し・希有は爾前の不希有に對し・難解之法は爾前の不難解に對したり、此の仏と申すは諸法実相なれば十界の衆生を仏とは云うなり、十界の衆生の語言音声成就にして法華經なり、三世の諸仏の出世の本懷の

妙法にして優曇華の妙文なれば第一希有なり、九界の智慧は及ばざれば難解の法なり、成就とは我等衆生の煩惱即菩提生死即涅槃の事なり、權教の意は終に不成仏なれば成就には非ず、迹門には二乗成仏顕れたり、是れ即ち成就なり、是を仏所成就とは説かれたり、されば唯仏とは釈迦・与仏とは多宝なり、多宝涌現なければ与仏とは云いがたし、然りと雖も終には出現あるべき故に与仏を多宝といつなり、所詮日蓮等の類いの心は唯仏は釈尊・与仏は日蓮等の類いの事なるべし、其の故は唯仏の唯を重ねて譬喩品には唯我一人と説けり、与仏の二字を重ねて方便品の末に至つて若遇余仏と説けり、釈には深く円理を覚るは、之れを名けて仏と為すと釈せり、是れ即ち与仏と云うは法華經の行者男女の事なり、唯我一人の釈尊に与し上る仏なり、此の二仏寄り合いて乃能究尽する所の諸法実相の法体なり、されば十如是と云うは十界なり、十界即十如是なり、十如是は即ち法華經の異名なり云云。

一十如是の事 仰に云く此の十如是は法華經の眼目・一切經の惣要たり、されば此の十如是を開覺しぬれば語法に於て迷悟無く、実相に於て染淨無し、之れに依つて天台大師は止觀の十章も此の十如是より釈出せり、然る間十如是に過たる法門更に以て之れ無し、爰を以て和尚授けて云く十大章は是れ全く十如是 若し大意を覚る

時性如是の意を以て下の玄如の図を分別す可し、十如是を十大章に習う事は性如是は大意・和如是は釈名・体如是は体相・力如是は摂法・作如是は偏円・縁如是は方使・因如是は正觀・果報如是は果報・本末究竟如是は旨歸なり、此の中に起教の章は化他利物果上化用と云うなり云云。

一自証無上道大乘平等法の事 仰に云く末法当今に於て大乘平等の法を証せる事・日蓮等の類いに限れりされば此の經文は教主大覺世尊・法華經の極理を証して番番に出世し給いて説き給うなり、所詮此の自証と云うは三十成道の時を指すなり、其の故は教主釈尊は十九出家・三十成道なり、然る間・自証無上道等文、所詮此の品の

心は十界皆成の旨を明せり、然れば自証と云うは十界を諸法実相の一仏ぞと説かれたり、地獄も餓鬼も悉く無上大乗の妙法を証得したるなり、自は十界を指したり、恣まに証すと云う事なり、権教は不平等の経なり、法華経は平等法の経なり、今日蓮等の類は眞実自証無上道・大乘平等法の行者なり、所謂南無妙法蓮華経の大乗平等の広宣流布の時なり云云。

一我始坐道場觀樹亦經行の事

仰に云く、此の文は教主釈尊・三十成道の時を説き給へり、觀樹の樹と云うは十

二因縁の事なり、所詮十二因縁を觀じて經行すと説き給へり、十二因縁は法界の異名なり又法華経の異名なり、其の故は樹木は枝葉華菓あり是れ即ち生住異滅の四相なり、大覺世尊・十二因縁の流轉を觀じ、經行し給へ

り、所詮末法当今も一切衆生・法華経を謗じて流轉す可きを觀じて日本国を日蓮經行して南無妙法蓮華経と弘通する。又又此の如くなり、法華の行者は悉く道場に坐したる人なり云云。

一今我喜無畏の事

仰に云く此の文は權教を説き畢らせ給いて法華経を説かせ給う時なれば喜びておそれなしと

觀じ給へり、其の故は爾前の間は一切衆生を畏れ給へり、若し法華経を説かずして空しくやあらんずらんと思召して畏れ深くありと云う文なり、さて今は恐るべき事なく時節來つて説く間、畏れなしと喜び給へり、今日蓮

等の類も是くの如く日蓮も三十二までは畏れありき、若しや此の南無妙法蓮華経を弘めずしてあらんずらんと畏れありき、今は即ち此の恐れ無く既に末法当時・南無妙法蓮華経の七字を日本国に弘むる間恐れなし、終には一閻浮提に

広宣流布せん事一定なるべし云云。

一我聞是法音疑網皆已除の事

仰に云く法音とは南無妙法蓮華経なり、疑網とは最後品の無明を云うなり、此の經

を持ち奉れば悉く除くと説かれたり、此の文は舍利弗が三重の無明・一時俱尽する事を領解せり、今日日本国の一切衆生、法華経の法音を聞くと云えども未だ能く信ぜず豈疑網皆已に除かんや、除かざれば入阿鼻獄は疑

無きなり、疑うたがひの字は元品がんぽんの無明むみょうの事なり此の疑うたがひを断つを信とは云うなり、釈いわに云く無疑うたがひなし曰信うたがひいしんと云えり身子しんしは此の疑うたがひ無き故に華光けこう仏と成れり、今日蓮等の類は題目だいもくの法音を信受しんじゆする故に疑網ぎもう更に無し、如我等無異にやがとうむいとて釈迦しやか同等の仏にやすやすとならん事疑うたがひ無きなり、疑網ぎもうと云うは色心の二法に有る惑障わくしょうなり、疑うたがは心法にあり、網うたがは色法にあり、此の經を持ち奉り信ぜれば色心の二法共に悉く除くと云う事なり、此の皆已の已の字は身子しんしそんじや尊者・広開三頭一くわいかいさんけんいつを指して已とは云うなり、今は領解の文段なり、身子しんし・妙法実相の理を聴聞ちやうもんして心懷大歡喜しんかい かんきせしなり、所詮舍利弗尊者程しよせんしゃりふつそんじやの智者・法華經ほけきやう衆しゆつて華光けこう仏となり、疑網ぎもうを断除だんじよせり、何に況んや末法當時の權人謗法の人人ひとびと此の經に値あわずんば成仏じやうぶつあらんや云云。

一以本願故說三乘法の事

仰に云く此の經文は身子尊者・成道の国じやうだうのくに離垢世界りこせかいにて三乗さんじやうの法は惡世あくせには非ず、

然りと雖も身子本願しんしほんがんの故に説くと云えり、其の本願と云うは身子菩薩しんしぼさつの行を立てしに乞眼びやくがんの婆羅門ばらもんに眼を抉えじられて其の時そのとき菩薩ぼさつの行を退轉たいてんしたり、此の菩薩ぼさつの行を百劫ひやくけつ立てけるに、六十劫ろくじやくなして今四十劫しじやくたらざりき、此

の時そのとき乞眼まなこに眼を抉えじられて其の時そのとき菩薩ぼさつの行を退して願成がんじやう仏ぶつ・日かいたん開三乘法さんじやうほふの願を立てたるなり、上品淨土じやうほんじやうど・不須開漸ふしよかんぜんなれば三乗さんじやうの法を説く事は更に以てあるまじけれども以本願故ほんがんゆえの故にて三乗さんじやうの法を説くなり、此の行は禪多羅ぜんたら仏の所にして立つるなり、此の事は身子しんしが六住退りくじゆたいとて大なる沙汰さたなり、重重じやうじやうの義勢ぎせい之れ在り輒たやすく心得こころえ難がたきの事なり、或は欲怖よくふ地前の意い、或は權者退けんじやたい云云、所詮しよせんは六住退りくじゆたいとは六根ろくこん・六道りくだうに菩薩ぼさつの行を取られたりと云う事なり、之を以て之を思おもつに末法まふぽう当今たうじん・法華經ほけきやうを修行しやうぎやうせんには、必ず身子しんしが退轉たいてんの如くなるべし、所詮しよせん身子しんしが眼を取らるるは菩薩ぼさつの智慧ちえの行を取らるるなり、今日蓮等の類けふのれんどのるい・南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうの眼を持ち奉るに謗法ぼうぽうの諸人しよじんに障觀しやうくわんせらるる・宝眼ほうがんを抉り取らるるに非ずや、所詮しよせん彼の乞眼びやくがんの婆羅門ばらもん・眼を乞もといしは身子しんしが菩薩ぼさつの行を退轉たいてんせしめんが為ために乞もといて踏ふみつづして捨てたり、全く菩薩ぼさつの供養くやうの方を本として眼をば乞もとわざりしなり、只だ退轉たいてんせしめん為ためなり

り、身子は一念菩薩の行を立ててがかる事に値えり、向後は菩薩の行をば立つ可からず二乗の行を立つ可しと云つて後悔せし故に成仏の日説三乘法するなり、所詮乞眼婆羅門の責を堪えざるが故なり、法華經の行者三類の強敵を堪忍して妙法の信心を捨つ可からざる見り信心を以て眼とせり云云。

一有大長者の事

仰に云く此の長者に於いて天台大師三の長者を釈し給えり、一には世間の長者・二には出世の長者・三には觀心の長者是なり、此の中に出世觀心の長者を以て此の品の長者とせり、長者とは釈迦如來の事なり、觀心の長者の時は一切衆生なり、所詮法華經の行者は男女共に長者なり、文句の五に委しく釈せり、末法当今の長者と申すは日蓮等の類・南無妙法蓮華經と唱え奉る者なり、されば三の長者を釈する時、文句五に云く、二に位号を探するに三と為す、一は世間の長者・二は出世の長者・三は觀心の長者なり、世に十徳を備う、一には姓貴・二には位高・三には大富・四には威猛・五には智深・六には年耆・七には行淨・八には礼備・九には上歎・十には下歸なり云云、又云く、出世の長者は、仏は三世の眞如實際の中より生ず、功成り、道著われて十号極り無し、法財万徳、悉く皆具に満せり、十力雄猛にして魔を降し外を制す、一心の三智通達せずと云うこと無し、早く正覺を成じて久遠なること斯くの如し、三業智に随つて運動して矢無し、仏の威儀を具して心大なること海の如し、十方の種覺共に称譽する所なり、七種の方便而も来つて依止す、是を出世の仏大長者と名く、三に觀心とは、觀心の智実相より出で生じて仏家にあり、種性眞正なり、三惑起らず、未だ眞を發さずと縮も是れ如來の衣を着れば、寂滅忍と称す、三諦に一切の功徳を含蔵す、正觀の慧・愛見を降伏す、中道双べ照して權実並に明なり、久く善根を積みて能く此の觀を修す、此の觀七方便の上に出でたり、此の觀・心性を觀ずるを上定と名くれば、即ち三業過無し、歷縁对境するに成儀失無し、能く此くの如く觀ず、是れ深信解の相諸仏皆歡喜して持法の者を歎美したもつ、天竜・四部・恭敬供養す、下の文に云く、仏子是の地に住すれば、即ち

是れ仏受用し給ひ、経行し及び坐臥し給わんと、既に此の人を称して仏と為す、出田觀心の長者と名けざらんやと此の
積分明に觀心の長者に十徳を具足すと釈せり、所謂引証の文に、分別功德品の則是仏受用の文を引けり、經文には
仏子住此地とあり、此の字を是の字につせり、経行若坐臥の若を及の字にかえたり、又法師品の文を引け

り、所詮仏子とは法華經の行者なり、此地とは真相の大地なり、経行若坐臥とは法華經の行者の四威儀の所作の振舞、
悉く仏の振舞なり、我等衆生の振舞の当体、仏の振舞なり、此の当体のふるまいこそ長者なれ、仍つて

觀心の長者は我等凡夫なり、然るに末法当今の法華經の行者より外に、觀心の長者無きなり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る者、無上宝緊不求自得の長者に非ずや、既称此人為仏の六字に心を留めて案ずべきなり云云。

一多有田宅の事 仰に云く田宅とは、長者の財宝なり、所詮田と云うは命なり、宅とは身なり、文句の五に田宅を

ば身命と釈せり、田は米なり、米は命をつぐ、宅は身をやどす是は家なり、身命の二を安穩にするより外に財宝は無きな
り、法門に約すれば田は定宅は慧なり、仍つて定は田地の如し、慧は万法の如し、我等一心の田地

より諸法の方法は起れり、法華一部分寸知るべしと釈して八年の法華も一心が三千と開きたるなり、所詮田は定なれば妙
の徳、宅は慧の徳なれば法の徳、又は本迹同門なり、止觀の二法なり、教主釈尊本迹兩門の田宅を以つて一切衆生を

助け給えり、田宅は我等衆生の色心の二法なり、法華經に低い奉りて南無妙法蓮華經と唱え
奉る時、煩惱即菩提、生死即涅槃と体達するなり、山扁多有田宅の長者に非ずや、多有と云う心は心法に具足する心数

なり、色法に具足する所作なり、然らば多有田宅の文は一念三千の法門なり、其の故は一念は定なり、三千
は慧なり、既に釈に云く、田宅は別譬なり、田は能く命を養う、禪定の般若を資するに譬う、宅は身を栖ます可し、実境

の智の所託と為るに誓う云云、此の積分明なり、田宅は身命なり、身命は即ち南無妙法蓮華經なり、此

だれもく
題目を持ち奉る者は宝多有田宅の長者に非ずや、今末法に入つて日蓮等の類、多有田宅の本主として如説修行の行者なり云云。

一 等一大車の事
仰に云く此の大車とは直至道場の大白牛車にして其の疾きこと風の如し、所詮南無妙法蓮華經を

等一大車と云うなり、等と云うは諸法実相なり、一とは唯一乘法なり、大とは大乘なり、車とは一念三千なり、仍つて釈には等の字を子等車等と釈せり、子等の等と如我等無異の等とは同なり、車等の等は平等大慧の等なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は男女貴賤共に無上宝聚、不求自得の金言を持つ者なり、智者愚者をきらわず共に即身成仏なり云云、疏の五に云く一に等子二に等車、子等しきを以ての故に則ち心等し、一切衆生等しく仏性有るに譬う、仏性同じきが故に等しく是れ子なり、第二に車等とは法等しきを以ての故に仏法に非ざること無し、一切法皆摩訶えんなるに誓う、摩訶えん同じきが故に等しく是れ大車なり、而して各賜と言うは各々本習に随う、四諦六度無量の諸法、各各旧習に於て眞実を開示す、旧習同じからず故に各と言う、皆摩訶えんなり故に大車と言う云云。

一 其車高広の事
仰に云く此の車は南無妙法蓮華經なり、即ち我等衆生の体なり、法華一部の總体なり、高広とは仏知見なり、されば此の車を方便品の時は諸仏智慧と説き其の智慧を甚深無量と称歎せり、歎の言には甚深無量とほめたり、爰には其車と説いて高広とほめたり、されば文句の五に云く其車高広の下は如来の知見深遠なるに譬う、横に法界の辺際に周く、堅に三諦の源底に徹す故に高広と言うなりと、所詮此の如来とは一切衆生の事なり既に諸法実相の仏なるが故なり、知見とは色心の二法なり知は心法見は色法なり、色心二法を高広と云えり、高広即本迹二門なり此れ即ち南無妙法蓮華經なり云云。

一 是朽故宅属干一人の事
仰に云く此の文をば文句の五に云く出火の由を明す文、此の宅とは三界の火宅な

り、火と云うは煩惱の火なり、此の火と宅とをば属于一人とて釈迦一仏の御利益なり、弥陀・薬師・大日等の諸仏の救護に非ず、教主釈尊一仏の御化導なり、唯我一人能為救護とは是なり、此の属于一人の文を重ねて、五卷提婆品に説いて云く観三千大千世界一乃至無有下如芥子許非是菩薩捨二身命一処上為二衆生一故文、妙樂大師此の属于一人の經文を釈する時、記の五に云く、咸く長者に歸す。一番一切皆然なりと判ぜり、既に咸歸長者と釈して、法界に有りである一切衆生の受くる苦悩をば、釈尊一人の長者に歸すと釈せり、一色一番一切皆然なりとは、法界の千草万木・飛華落葉の為体、是れ皆無常遷滅の質と見て仏道に歸するも、属于一人の利益なり、此の利益の本源は南無妙法蓮華經の内証に引入れしめんが為なり、所詮末法に入つて属于一人の利益は日蓮が身に當りたり、日本国の一切衆生の受くる苦悩は、悉く日蓮一人が属于一人なり、教主釈尊は唯我一人能為救護、日蓮は一人能為救護に云云、文句の五に云く、是朽故宅属于一人の下、第二に一偈有り、失火の由を明す、三界は是れ仏の化応の処発心已來誓つて度脱せんと願う、故に属于一人と云うと、此の釈に発心已來誓願度脱の文、豈日蓮の身に非ずや云云。

一諸鬼神等揚声大叫の事

仰に云く諸鬼神等と云うは親類部類等を鬼神と云うなり、我等衆生死したる時、妻子

眷属あつまりて悲歎するを揚声大叫とは云うなり、文句の五に云く諸鬼神等の下、第四に一行半は被焼の相を明す、或云く親属を鬼神と為し、哭泣を揚声と為すと。

一乘此宝棄直至道場の事

仰に云く此の經文は我等衆生の煩惱即菩提・生死即涅槃を明せり、其の故は文句の五

に云く、此の因易ること無きが故に直至と云う、此の釈の心は爾前の心は煩惱を捨てて生死を厭つて別に菩提涅槃を求めたり、法華經の意は煩惱即菩提・生死即涅槃と云えり、直と即とは同じ事なり、所詮日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者の、住处即寂光土と心得可きなり、然れば此の実乗に乗じて、忽ちに妙覺極果

の位に至るを直至道場とは云うなり、直至と云う文の意は、四十二位を爰にて極めたり、此の直の一字は、地獄即寂光がきそくじつにひてい、法華經の行者の住処、山谷曠野なりとも、直至道場なり、道場とは究竟の寂光なり、仍つて乗此宝乘の上の乗は法華の行者、此の品の意にては中根の四大声聞なり、惣じて一切衆生の事なり、今末法に入つては日蓮等の類になり、宝乘の乗の字は太白牛車の妙法蓮華經なり、然れば上の乗は能乗下の乗は所乗なり、宝乘は蓮華なり、釈迦・多宝等の諸仏も、此の宝乘に乘じ給えり、此れを提婆品に重ねて説く時、若在仏前蓮華化生と云ふ、釈迦・多宝の二仏は我等が己心なり、此の己心の法華經に値ひ奉つて成仏するを顕わさんと
して釈迦・多宝・二仏並座して乗此宝乘、直至道場を顕わし給えり、此の乗とは車なり、車は蓮華なり、此の蓮華の上の妙法は、我等が生死の二法・二仏なり、直至の至は此れより彼へいたるに至るには非ず住処即寂光と云うを至とは云うなり、此の宝乘の宝は七宝の大車なり、七宝即ち頭上の七宝・七宝即ち末法の要法、南無妙法蓮華經
是なり、此の題目の五字、我等衆生の爲には、三途の河にては船となり、紅蓮地獄にては寒さをのぞき、焦熱地獄にては涼風となり、死出の山にては達華となり、渴せる時は水となり、飢えたる時は食となり、裸かなる時は衣となり、妻となり、子となり、眷屬となり、家となり、無窮の応用を施して一切衆生を利益し給うなり、直至道場
とは是なり、仍つて此の身を取りも直さず寂光土に居るを直至道場とは云うなり、直の字心を留めて之を案ず可し云云。
一若人不信毀謗此經則新一切世間仏種の事 仰に云く此の經文の意は小善成仏を信ぜずんば一切世間の仏種を断ずと云う事なり、文句の五に云く、今經に小善成仏を明す、此れは縁因を取つて仏種と爲す、若し小善の成仏を信ぜずんば、即と一切世間の仏種を断ずるなり文、爾前經の心は小善成仏を明さざるなり、法華經の意は一華・二香の小善も法華經に歸すれば大善となる、縦い法界に充滿せる大善なりとも此の經に値わずんば善根とは

ならず、譬^{たと}えば諸河の水・大海に入りぬれば鹹^{かん}の味となる、入らざれば本の水なり、法界の善根も、法華經・歸入せざれば善根とはならざるなり、されば釈に云く、断一切^{いっさい}仏種とは淨名^{じやうみやう}には煩惱を以て如來の種と爲す、此れ境界性を取るなり、此の釈の心は淨名經の心ならば我等衆生^{われらうしやうじやう}の一日一夜に作す所の罪業・八億四千の念慮を起す、余經の意は皆三途の業因と説くなり、法華經の意は、此の業因・即ち仏ぞと明せり、されば煩惱を以て如來の種子とすと云うは此の義なり、此の淨名經の文は、正しく文在爾前・義在法華の意なり、此の境界性と云うは、末師釈する時、能生煩惱・名境界性と判ぜり、我等衆生の眼耳等の六根に妄執^{まうしゆ}を起すなり、是を境界性と云うなり、權教の意は此の念慮を捨てよと説けり、法華經の心は、此の境界性の外に、三因^{さんいん}仏性の種子なし、是れ則ち三身円滿の仏果となるべき種性なりと説けり、此の種性を、權教を信ずる人は之を知らず此の經を謗るが故に、凡夫即極の義をも知らず、故に一切世間の仏種を断ずるなり、されば六道の衆生も三因^{さんいん}仏性を具足して終に三身円滿の尊容を顯す可き所に、此の經を謗するが故に、六道の仏種をも断ずるなり、されば妙樂大師云く、此の經は遍く六道の仏種を開す、若し此の經を謗するは、義断に当るなりと、所詮日蓮が意は一切の言は十界をさす、此の經を謗するは十界の仏種を断ずるなり、されば、誹謗の二字を大論に云く、口に謗るを誹と云い心に背くを謗と云うと、仍つて色心三業に經て、法華經を謗じ奉る人は入阿鼻獄疑い無きなり、所謂弘法・慈覺・智証・善導・法然・達磨等の大謗法の者なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る、豈二世の諸仏の仏種を繼ぐ者に非ずや云云。

一捨惡知識親近善友の事
阿難・目連等^{あなん もくれん}是なり、末法^{まふはう}当今に於て惡智識と云うは法然・弘法・慈覺・智証等の權人謗法の人人なり、善智識と申すは日蓮等の類の事なり、惣じて知識に於て重重之れ有り、外護の知識・同行の知識・實相の知識是なり、

所詮実相の知識とは所謂南無妙法蓮華經是なり、知識とは形をしり、心をしるを云うなり、是れ即ち色心の二法なり、
謗法の色心を捨てて法華經の妙境 妙智の色心を顯すべきなり、悪友は謗法の人人なり、善友は日蓮等の類いなり。

一無上宝聚不求自得の事

仰に云く、此の無上宝聚に於て一には釈尊の因行 果徳の万行 万善の骨髓を宝聚と云

うなり、二には妙法蓮華經の事なり、不求とは中根の四大声聞は此くの如き宝聚を任運自在と得たり此実我子我実其父
の故なり、総じては一切衆生の事なり、自得と云うは自は十界の事なり、此れは自我得仏来の自と

同じ事なり、得も又同じ事なり末法に入つては自得とは日蓮等の類いなり、自とは法華經の行者、得とは題目なり、得の
一字には師弟を含みたり、与うると得るとの義を含めり、不求とは仏法に入るには修行 覺道の辛勞あり、釈迦如来は往
来娑婆八千反の御辛勞にして求め給う功德なり、さて今の釈迦牟尼仏と成り給えり、法華經の

行者は求めずして此の功德を受得せり仍て自得とは説かれたり、此の自の字は一念なり得は三千なり、又自は三千 得は
一念なり、又た自は自なり得は他なり、総じて自得の二字に法界を尽くせり、所詮此の妙法蓮華經を自よ
り得たり、自とは釈尊なり、釈尊は即ち我が一心なり、一心の釈迦より受得し奉る南無妙法蓮華經なり、日蓮も生年三
十二にして自得し奉る題目なり云云。

一薬草喻品の事

仰に云く薬とは是好良薬の南無妙法蓮華經なり、妙法を頂上にいただきたる草なれば、薬に非ず

と云う事なし、草は中根の声聞なれども、惣じては一切衆生なり、譬えば土器に薬をかけたるが如し、我等衆生 父母
果縛の肉身に南無妙法蓮華經の薬をかけたり、煩惱即菩提 生死即涅槃は是なり云云、此の分を教う
るを喻とは申すなり、釈に云く、喻とは曉訓なりと、提婆・竜女の畜生 人間も、天帝 羅漢 菩薩等も、悉く薬草の仏
に非ずと云う事なし、末法当今の法華の行者の日蓮等の類い薬草にして日本国は一切衆生の薬王なり

云云。

一 現世安穩 後生善処の事

仰に云く所詮此の妙法蓮華經を聴聞し奉るを現世安穩とも後生善処とも云えり、

既に上に聞是法已と説けり聞は名字即の凡夫なり妙法を聞き奉る所にて即身成仏と聞くなり、若有能持即持仏身とは

是なり、聞く故に持ち奉るの故に三類の強敵来る来るを以て現世安穩の記文顯れたり、法華の行者なる事疑無きなり、

法華の行者はかかる大難に値うべしと見えたり、大難に値うを以て後生善処の成仏は決定せり是れ豈

現世にして安穩なるに非ずや、後生善処は提婆品に分明に説けり、所詮現世安穩とは法華經を信じ奉れば三途八難の苦

をはなれ善惡上下の人までも皆教主釈尊、同等の仏果を得て自身本覺の如来なりと顯す、自身の当体妙法蓮華經の藥

草なれば現世安穩なり、愛を開くを後生善処と云うなり、妙法蓮華經と云うは妙法の藥草なり、所詮現世安穩は色法・

後生善処は心法なり、十界の色心・妙法と開覺するを現世安穩・後生善処とは云うなり、所詮法華經を弘むるを以て

現世安穩・後生善処と申すなり云云。

一 皆悉到於一切智地の事

仰に云く一切智地と云うは法華經なり、譬えば三千大千世界の土地草木・人畜等皆

大地に備りたるが如くなり、八万法蔵・十二部經・悉く法華に歸入せしむるなり、皆悉の二字をば善人も惡人も迷も悟も

一切衆生の惡業も善業も其の外藥師・大日・弥陀並びに地藏・觀音・横に十方・豎に三世有りとする諸仏

の具徳・諸菩薩の行徳・惣じて十界の衆生の善惡・業作等を皆悉と説けり、是を法華經に歸入せしむるを一切智地の

法華經と申すなり、されば文句の七に云く皆悉到於一切智地とは、地とは真相なり、究竟して二に非ず故に

一と名くるなり、其の性広博なり、故に名けて切と為す、寂にして常照なり、故に名けて智と為す、無住の本より一切の

法を立す、故に名けて地と為す、此れ円教の実説なり、凡そ所説有るは皆衆生をして此の智地に到らしむ云云、此の釈

は一切智地の四字を委しく判ぜり、一をば究竟と云い切をば広博と釈し智をば寂而常照と云い

地をば無住之本と判ぜり、然るに凡有所説は約教を指し、皆令衆生は機縁を納るるなり、十界の衆生を指して切と云い
凡有所説を指して、究竟非二故名一也と云えり、一とは三千大千世界・十方世界を云うなり、其の上に入畜等あるは地
なり、記の七に云く、切を衆に訓ずと文、仍て一切の二字に法界を尽せりなり、諸法は切なり実相は
一なり、所詮・法界実相の妙体・照而常寂の一理にして十界三千・法性に非ずと云う事なし是を一と説くなり、さて
三千の諸法の自己に本分なれば切の義なり、然らば一は妙・切は法なり、妙法の二字・一切の二字なり、無住之本は妙の
徳・立一切法は法の徳なり、一切智地とは南無妙法蓮華經是なり一切智地・即一念三千なり、今末法に入て一切智地を
弘通するは日蓮等の類是なり、然るに一とは一念なり切とは三千なり、一心より松よ桜よと起る
は切なり、是は心法に約する義なり、色法にては手足等は切なり、一身なるは一切なり、所詮色心の二法・一切智地にして
南無妙法蓮華經なり二云。

一此の一切智地の四字

に法華經一部八卷文・句句を収めたり、此の一切智地とは三諦・一諦・非三非一なり、三

智に約すれば空智なり、さては三諦とは云い難し、然りと雖も三諦・一諦の中の空智なり、されば三諦に於て三三九箇の

三諦あり、先ず空諦にて三諦を云う時は空諦と呼出だすが仮諦・空諦なるは空諦なり不二するは

中道なり、三諦同じく此くの如く心得可きなり、所詮此の一切智地をば九識法性と心得可きなり、九識法性をば、迷悟

不二・凡聖一如なれば空と云うなり、無分別智光を空と云うなり、此の九識法性とは、いかなる所の法界を指すや、法界

とは十界なり、十界即諸法なり、此の語法の当体・本有の妙法蓮華經なり、此の重に迷う衆生の

ために、一仏現じて分別説三するは、九識本法の都を立出するなり、さて終に本の九識に引入する、夫れを法華經とは云う

なり、一切智地とは是れなり、一切智地は我等衆生の心法なり心法即ち妙法なり一切智地とは是なり

云云。

一 根茎枝葉の事

仰に云く此の文をば釈には信戒定慧と云云、此の釈の心は草木は此の根茎枝葉を以て増長と云

うなり、仏法修行するも又斯くの如し、所詮我等衆生、法華經を信じ奉るは根をつけたるが如し、法華經の文の如く是名

持戒の戒体を本として、正直捨方便、但説無上道の如くなるは戒なり、法華經の文相にまかせて

法華三昧を修するは定なり、題目を唱え奉るは慧なり、所謂法界悉く生住異滅するは信、己己本分は戒、三世不改なるは

定なり、各各の徳義を顕したるは慧なり、是れ即ち法界平等の根茎枝葉なり、是れ即ち真如実相の振舞なり、所謂

戒定慧の三学、妙法蓮華經なり、此れを信ずるを根と云うなり、釈に云く三学俱に伝うるを名けて妙法と曰うと云云。

一 根茎枝葉の事

仰に云く此れは我等が一身なり、根とは心法なり茎とは我等が頭より足に至るまでなり、枝とは手

足なり、葉とは毛なり、此の四を根茎枝葉と説けり、法界三千此の四を具足せずと云う事なし、是れ即ち信戒定慧の体

にして実相一理の南無妙法蓮華經の体なり、法華不信の人は根茎枝葉ありて増長あるべからず枯塙の衆生なるべし云

云。

一 枯塙衆生の事

仰に云く、法華經を持ち奉る者は、枯塙の衆生に非ざるなり、既に法華經の種子を受持し奉るが故

なり、謗法不信の人は下種無き故に枯塙の衆生なり、されば、妙樂大師の云く、余教を以て種と為さず文。

一 等雨法雨の事

仰に云く等とは平等の事なり、善人、惡人、二乘、闍提、正早、邪見等の者にも、妙法の雨を惜ま

ず平等にふらすと云う事なり、されば法の雨を雨すと云う時は、大覺世尊ふらしてに成り給えり、さて、の雨ふりてとよ

む時は、本より実相平等の法雨は、常住、本有の雨なれば、今始めてふるべきに非ず、されば、諸法実相を、譬喩品の時は

風月に譬えたり、妙樂大師は何ぞ隠れ何ぞ顕れんと釈せり、実相の法雨は三世常恒に

して、おんげん 隠顕更に無きなり、しよせん 所詮、等の字はひとしくとよむ時は、しよせん 釈迦如来の平等の慈悲なり、さて、ひとしきとよむ時は、びやうだい 平等大慧の妙法蓮華経なり、ひとしく法の雨をふらすとは、のう 能弘につけたり、ひとしき法の雨ふり、にりと読む時は、しよせん 所弘の法なり、しよせん 所詮法と云うは、じゆかい 十界の語法なり、雨とはじゆかい 十界の言語・音声の振舞なり、ふるると

は自在にして地獄は洞燃猛火、乃至仏界の上の所作音声を、等雨法雨とは説けり、此の等雨法雨は法体の南無妙法蓮華経なり、今末法に入つて、日蓮等の類いの弘通する題目は、等雨法雨の法体なり、此の法雨・地獄の衆生・餓鬼・畜生等に至るまで同時にふりたる法雨なり、日本国の一切衆生の爲に付属し給う法雨は題目の五字なり、

所謂日蓮建立の御本尊・南無妙法蓮華経是なり云云、方便品には本末究竟等と云えり、譬喩品には等一大事と云えり、

此の等の字を重ねて説かれたり、或は如我等無異と云えり、此の等の字は宝塔品の如是如是と同じなり、

所詮等とは南無妙法蓮華経なり、法雨をふらすとは今身より仏身に至るまで打つや否やと云う受持の言語なり云云。

一等雨法雨の事

仰に云く此の時は妙法実相の法雨は十界三千・下は地獄・上は非想非非想まで横に十方・豎に

三世に亘つて妙法の功德をふるを等とは云うなり、さてふるとは一切衆生の色心・妙法蓮華経と三世常住ふるなり云

云、一義に云く、此の妙法の雨は九識本法の法体なり、然るに一仏現前して説き出す所の妙法なれば、法

の雨をふらすと云うなり、其の故は、ふらすと云うは上より下へふるを云うなり、このつて従果向因の義なり、仏に約すれ

ば、第十の仏見より九界へふらす、法体にてはふる処もふらす処も、真如の理なり識分にては八識

へふり下りたるなり、然らば今日蓮等の類い南無妙法蓮華経を日本国の一切衆生の頂上にふらすを法の雨をふらすと

云うなり云云。

一如從飢国来忽遇大王膳の事 仰に云く此の文は中根の四大声聞・法華に来れる事、譬えばつえたる国より

来りて大王のそなえに値うが如くの歡喜なりと云えり、然らば此の文の如くならば法華已前の人は餓鬼界の衆生なり、既に飢国来と説けり、大王膳とは醍醐味なり、中根の声聞法華に来て一乗醍醐の法味を得て忽に法王の位に備りたり、忽の字は爾前の迂廻道の機に對して忽と云うなり、速疾頓成の義を忽と云うなり、仮令外用の八相を唱うる事は所化をして仏道に進めんが爲なり、所詮末法に入つては謗法の人人は餓鬼界の衆生なり、此の經に値い奉り南無妙法蓮華經に値い奉る事は併ら大王膳たり、忽遇の遇の字肝要たり、釈に云く、成仏の難きには非ず、此の經に値うをかたしとすと云えり、不輕品に云く復遇常不輕と云云、嚴王品に云く生値仏法云云、大王の膳に値いたり、最も以て南無妙法蓮華經を信受し奉る可きなり、此の經文の如くならば法華より外の一切衆生はいかに高貴の人なりとも餓鬼道の衆生なり、十羅刹女は餓鬼界の羅刹なれども法華經を受持し奉る故に餓鬼に即する一念三千なり、法華余らずんば何れも餓鬼飢餓の苦みなるべし、所詮必ず中根の声聞領解の言に我身を餓鬼に類する事は餓鬼は法界に食ありと云えども食する事を得ざるなり、諸法実相の一味の醍醐の妙法あれども終に開覺に能えざる間四十余年食にうえたり云云、一義に云く序品方便より諸法実相の甘露顯れて南無妙法蓮華經あれども広略二重の警説段まで悟らざるは餓鬼の満満とある食事をくらわざるが如し、所詮日本国の一切衆生は餓鬼界の衆生なり、大王膳とは所謂南無妙法蓮華經是なり、遇の字には人法を納めたり、のつて末に如飢須教食と云えり、うえたるも大王のをしえを待ちて醍醐を食するが如しと云えり、今南無妙法蓮華經有れども今身より仏身に至るまでの受持をつけずんば成仏は之れ有るべからず、教とは爾前無得道法華成仏の事なり、此の教をつけずんば法華經を讀誦すとも大王の位に登る事之れ有る可からず醍醐は題目の五字なり云云。

一大通智勝仏十劫坐道場佛法不現前不得成仏道の事 仰に云く此經文は一切衆生の本法流轉を説かれたり、されば釈にも出世以前と判ぜり、此は大通仏出世し給えども十小劫の間一經も説給わずと云う經文なり、

仍て仏法も現前せざる故に不得成仏と云えり、されども釈を見るに出世以前と云う時は、此の經文は何なる事ぞ此は本法の重を説かれたり、一仏出世すれば流転門となる、一仏も出世無き時は、本法不思議の体なり、迷悟もなく、生仏もなく、成仏もなく、不成仏もなきなり、仍つて不得成仏道と云えり、抑も本法と申すは水があつくなり、火がつめたくならば流転門なるべし、水はいつもつめたく、火はいつもあつく、地獄は何も火焰、餓鬼はいつも飢渴、其の外方法已の当位、当位の儘なるを本法の体と云うなり、此の重を説き顯したる經文なり、此の本法の重は法華經なり、權教は流転なり、此の流転の衆生を本法の重に引入せられんとての仏の出世なり、其の

本法と云うは此の經なり、所詮此の經文本法とは大通智勝仏と云うは我等衆生の色心なり、十劫と云うは十界なり、坐道場と云うは十界の住所其の儘道場なり、道場なれば寂光土なり、法界寂光土にして、十界の衆生悉く諸法実相の仏なれば一仏現すべきに非ず、迷の衆生無ければ説く可き法も無し、仍つて仏法不現前と云えり、不得成仏道とは始覺本覺の成仏と云う事も無し、本法不思議の体にして万法本有なり、之れに依つて釈には出世以前

と判ぜり、然らば、其の本法の体とは、所詮南無妙法蓮華經なり、此の本法の内証に引入せんが為に、住は四十余年誘引し、終に第五時の本法を説き給えり、今末法に入つて上行、所伝の本法の南無妙法蓮華經を弘め奉る、

日蓮世間に出世すと云えども、三十二歳までは、此の題目を唱え出さざるは、仏法不現前なり、此の妙法蓮華經を弘めて終には本法の内証に引入するなり日蓮、豈大通智勝仏に非ずや、日本国の一切衆生こそ十劫坐道場とて十界其の儘本法の南無妙法蓮華經へ引入するなり、所詮信心を出だして南無妙法蓮華經と唱え奉る可き者なり云云。

一貧人見此珠其心大歡喜の事

仰に云く此珠とは一乘無価の宝珠なり、貧人とは下根の聲聞なり、惣じて

一切衆生なり、所詮末法に入つて此珠とは南無妙法蓮華經なり、貧人とは日本国の一切衆生なり、此の題目を唱え奉る者は心大歡喜せり、されば見宝塔と云う見と此珠とは同じ事なり所詮此珠とは我等衆生の一心なり、一念三千なり此の經に値い奉る時、一念三千と開くを珠を見るとは云うなり、此の珠は広く一切衆生の心法なり此の珠は体中にある財用なり、一心に三千具足の財を具足せり、此の珠を方便品にして諸法実相と説き、譬喩品にては大白牛車・三草二木・五百由旬の宝塔、共に皆一珠の妙法蓮華經の宝珠なり、此の經文色心の実相歡喜を説けり、見此珠の見は色法なり、其心大と云うは心法なり、色心共に歡喜なれば大歡喜と云うなり、所詮此珠と云うは我等衆生の心法なり、仍つて一念三千の宝珠なり、所謂妙法蓮華經なり、今末代に入つて此の珠を顯す事は日蓮等の類なり所謂未曾有の大曼荼羅こそ正しく一念三千の宝珠なれ、見の字は日本国の一切衆生、広くは一閻浮提の衆生なり、然りと雖も其心大歡喜と云う時は、日蓮が弟子・檀那等の信者をさすなり、所詮煩惱即菩提・生死即涅槃と体達する、其心大歡喜なり、されば、我等衆生・五百塵点の下種の珠を失いて、五道・六道に輪廻し、貧人となる、近くは三千塵点の下種を捨てて備輪諸道せり、之れに依つて貧人と成る、今此の珠を釈尊に値い奉りて見付け得て本の如く取り得たり、此の故に心大歡喜せり、末法当今に於いて妙法蓮華經の宝珠を受持し奉りて、己心を見るに、十界互具・百界千如・一念三千の宝珠を分明に具足せり、是れ併ら末法の要法たる題目なり云云。

一如甘露見灌の事 仰に云く甘露とは天上の甘露なり、されば妙樂大師云く実相常住は甘露の如し是れ不死の藥云云、此の釈の心は諸法実相の法体をば甘露に譬えたり、甘露は不死の藥と云えり、所詮妙とは不死の藥なり、此の心は不死とは法界を指すなり、其の故は森羅三千の万法を不思議と歎じたり、生住異滅の当位当位・三世常恒なるを不死と云う、本法の徳として水はくだりつめたく火はのぼりあつ、此れを妙と云う、此れ即ち

不思議なり、此の重を不死とは云うなり、甘露と妙とは同じ事なり、然らば法界の儘に闇いて妙法なりと説くを本法とも甘露とも云えり、火は水にきゆる本法にして不死なり、十界己己の当位当位の振舞・常住本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮末法に入つて甘露とは南無妙法蓮華経なり、見灌とは受持の一行なり云云。

一若有惡人以不善心等の事

仰に云く惡人とは在世にては提婆瞿伽利等なり、不善心とは惡心を以て仏を罵詈

奉る事を説くなり、滅後には惡人とは弘法慈覺智証善導法然等是なり、不善心とは謗言なり此の謗言を書寫したる十住心等選択集等の謗法の書どもなり、さて末法に入て善人とは日蓮等の類なり善心とは法華弘通の信心なり所謂南無妙法蓮華経是なり云云。

一如是如是の事

仰に云く釈に云く法相の是に如し根性の是に如するなり文、法相の是に如すとは諸法実相を

重ねて如是と説かれたり、根性の是に如すとは、九法界を説かれたり、然れば機法共に釈迦如来の所説の如く眞実なりと証明し給えり、始の如是は教一開会なり次の如是は人・一開会なり、權教の意は諸法を妄法ときらいし

隔別不融の教なり、根性に於ては性欲不同なれば種種に説法し給えり、仍つて人も成仏せず、今の經の心は諸法実相の御經なれば十界平等に授くる所の妙法なり、根性は不同なれども同じく如是性の一性なり、所詮今末法に

入つての如法相是は塔中相承の本尊なり如根性は也と云うは十界宛然の尊像なり法相は南無妙法蓮華経なり、根性は日本国の一切衆生広くは一閻浮提の衆生なり云云。

一是真仏子住淳善地の事

仰に云く末法当今に於て釈迦如来の眞実の御子と云うは法華經の行者なり、其の故は

上の文に能於来世読持此經と説けり来世とは末法なり、読むと云うは法華經の如説修行の行者なり、弘法慈覺智証・善導法然等讀みて云く第三の劣戲論の法捨閑閑拋理同事勝等と読むは謗法にして三仏の御舌

を切るに非ずや何に況や持たんをや、伝教大師云く法華經を讃むると雖も還つて法華の心を死すとは是なり、今日蓮等の類に南無妙法蓮華經と唱え奉る人は、読持此經の人なり、豈是真仏子に非ずや淳善地は寂光土に非ずや、是真仏子の字は十界の衆生なり、所詮此の子の字は法華經の行者に限る、悉是吾子の字は孝不孝を分別せざる子なり、我等皆似仏子の字は中根の声聞仏子に似たりと説かれたり、為治狂子故の子は、久遠の下種を忘れたれば物にくるつ子なり、仍つて釈尊の御子にも物にくるつ子もあり、不孝の子もあり、孝養の子もあり、所謂法華經の行者眞実の釈尊の御子なりと、釈迦多宝分身三千三百萬億那由他の世界に充滿せる諸仏の御前にして孝不孝の子を定めをき給えり、父の業をつぐを以て子とせり、三世の諸仏の業とは南無妙法蓮華經是なり、法師品に行如來事と説けり云云、法華經は母なり釈尊は父なり我等衆生は子なり、無量義經に云く諸仏の國王と是の經の夫人と和合して共に是の菩薩の子を生み給う文、菩薩とは法華經の行者なり、法師品に云く在家出家行菩薩道云云。

一非口所宣非心所測の事 仰に云く非口所宣は色法・非心所測は心法なり、色心の二法を以て大海にして教化したる衆生を宣測するに非ずと云えり、末に至つては広導諸群生と説かれたり云云。

一不染世間法如蓮華在水從地而涌出の事 仰に云く、世間法とは全く貪欲等に染せられず、譬えば蓮華の水の中より生ずれども淤泥にそまざるが如し、此の蓮華と云うは地涌の菩薩に譬えたり、地とは法性の大地なり所詮法華經の行者は蓮華の泥水に染まざるが如し、但だ唯一大事の南無妙法蓮華經を弘通するを本とせり、世間の

法とは國王・大臣より所領を給わり官位を給うとも夫には染せられず、謗法の供養を受けざるを以て不染世間法とは云うなり、所詮蓮華は水をはなれて生長せず水とは南無妙法蓮華經是なり、本化の菩薩は蓮華の如く過去久遠より已來本法所持の菩薩なり蓮華在水とは是なり、所詮此の水とは我等行者の信心なり、蓮華は本因・本果の

妙法なり信心の水に妙法蓮華は生長せり、地とは我等衆生の心地なり涌出とは広宣流布の時一閻浮提の一切衆生法華經の行者となるべきを涌出とは云うなり云云。

一願仏為未來演說令開解の事

仰に云く此の文は弥勒菩薩等末法當今の為に我從久遠來教化是等衆の言を演說令

開解せしめ給えと請じ奉る經文なり、此の請文に於て壽量品は顯れたり五百塵点の久遠の法門是なり、開解とは教主釈尊の御内証に此の分ををさえ給うを願くは開かしめ給え同じく一会の衆の疑をも解かしめ給え

と請するなり、此の開解の語を壽量品にして汝等當信解と誠め給えり、若し開解し給わずんば大衆皆法華經に於て疑惑を生ず可しと見給えり、疑を生ぜば三惡道に墮つべしと既に弥勒菩薩申されたり、此時壽量品顯れずんば即當

墮惡道すべきなり壽量品の法門大切なるは是なり、さて此の開解の開に於て二あり、迹門の意は諸法を

実相の二理と会したり、さては諸法を実相と開きて見れば十界悉く妙法実相の二理なりと開くを開仏智見と説けり、さ

て本門の意は十界本有と開いて始覺のきづなを解きたり、此の重を開解と申されたり仍つて演說の二字は

釈尊開解の両字は大衆なり、此の演說とは壽量品の久遠の事なり、終に釈尊壽量品を説かせ給いて一切大衆の疑惑を

破り給えり云云。

一譬如良医智慧聰達の事

仰に云く良医とは教主釈尊智慧とは八万法藏十二部經なり聰達とは三世了達なり藥

とは妙法の良藥なり、さて壽量品の意は十界本有と談ぜりされば此の藥師とは一切衆生の事なり、智慧とは方法己の自受用報身の振舞なり聰達とは自在自在に振舞うを聰達とは云うなり、所詮末法當今の為の壽量品

なれば法華經の行者の上の事なり、此の智慧とは南無妙法蓮華經なり、聰達とは本有無作三身なりと云う事なり、元品の無明の大良藥は南無妙法蓮華經なり、智とは一切衆生の力なり、慧とは一切衆生の言語音声なり、故に偈頌に云く

我智力如是慧光照無量と云えり云云。

一 一念信解の事

仰に云く此の經文は一念三千の宝珠を納めたる函なり此れは現在の四信の初の一念信解なり、さて滅後の五品の初の十心具足初隨喜品も一念三千の宝を積みたる函なり、法華經の骨髓・末法に於て法華經の行者の修行の相貌分明なり、所詮信と隨喜とは心同じなり隨喜するは信心なり信心するは隨喜なり一念三千の法門は信心隨喜の函に納りたり、又此の函とは所謂南無妙法蓮華經是なり又此の函は我等が一心なり此の一心は万法の總体なり總体は題目の五字なり、一念三千と云うが如く一心三千もあり釈に云く介爾も心有れば即ち三千を具すと、又宝函とは我等が色心の二法なり。本・迹兩門・生死の二法・止觀の二法なり所詮信心の函に入れたる南無妙法蓮華經の函なり云云。

一 見仏聞法信受教誨の事

仰に云く此の經文は一念隨喜の人は五十の功德を備うべし、然る間見仏聞法の功德を具足せり、此の五十展轉の五十人の功德を隨喜功德品には説かれたり、仍つて世世・生生の間見仏聞法の功德を備えたり、所詮末法に入つては仏を見るとは壽量品の積尊・法を聞くとは南無妙法蓮華經なり、教誨とは日蓮等の類に教化する所の諸宗無得道の教誡なり、信受するは法華經の行者なり、所詮・壽量開頭の眼の顯れては、此の見仏は無作の三身なり、開法は方法己己の音声なり、信受教範は本有隨緣真如の振舞なり、是れ即ち色心の二法なり、見聞とは色法なり、信受は信心領納なれば心法なり、所謂色心の二法に備えたる南無妙法蓮華經是なり云云。

一 若復有人以七宝滿是人所得其福最多の事

仰に云く此の經文は七宝を以て三千大千世界に満てて四聖を供養せんよりは法華經の一偈を受持し奉らんにはをとれりと説かれたり、天台大師は生養成榮の四の義を以て、法華經の功德を釈し給えり、所詮末法に入つては題目の五字即ち是なり、此の妙法蓮華經の五字は万法能生の父母なり、生養成榮も亦復是くの如きなり、仍て釈には法を以て本と為すと釈せり、三世十方の諸仏は、妙法

蓮華經を以て父母とし給えり、此の故に四聖を供養するよりも法華經を持つは勝れたり、七宝は世間の財宝なり、四聖は滅に歸する仏菩薩羅漢なり、さて妙法の功德は一得永不失なれば朽失せざる功德なり、此の故に勝れたり云云。

一 妙音菩薩の事 仰に云く妙音菩薩とは、十界の語言音声なり、此の音声悉く慈悲なり、菩薩とは是れなり。

一 爾時無尽意菩薩の事 仰に云く此の菩薩は空仮中の三諦なり、意の一字には一切の法門を摂得するなり意と云う

は中道の事なり無は空諦なり尽とは仮諦なり、所謂意と云うは南無妙法蓮華經なり、一切諸經の意三世の諸仏の題目の五字なり所詮法華の行者は信心を以て意とせり云云。

一 觀音妙智力の事 仰に云く妙とは不思議なり、智とは隨緣真如の智力なり、森羅三千の自受用智なり、觀音は

円觀なり、円觀とは一念三千なり、觀音とは法華の異名なり、觀音と法華とは眼目の異名と釈する間、法華經の異名なり、觀とは円觀音は仏機なり、仍つて觀音の二字は人法一体なり、所謂一心三觀・念三千是なり云云。

一 自在之業の事 仰に云く此の自在之業とは自受用報身の智力なり、森羅三千の諸法作業をさして云うなり、其の

所作のまま法華經の意は不思議の自在之業なりと説けり、此の自在之業の本は南無妙法蓮華經是なり云云。

一 妙法蓮華經陀羅尼の事 仰に云く妙法蓮華經陀羅尼とは正直捨方便、但説無上道なり、五字は体なり陀羅尼は

用なり妙法の五字は我等が色心なり、陀羅尼は色心の作用なり、所詮陀羅尼とは呪なり、妙法蓮華經を以て煩惱即菩提生死即涅槃と呪いたるなり、日蓮等の類い南無妙法蓮華經を受持するを以て呪とは云うなり、若有

能持即持仏身とまじないたるなり、釈に云く陀羅尼とは諸仏の密号と判ぜり、所詮法華折伏、破権門理の義遮惡持善の義なり云云。

一 六万八千人の事

仰に云く六とは六根なり、万とは六根に具わる處の煩惱なり八とは八苦の煩惱なり千とは八苦に具足する煩惱なり、是れ即ち法華經に値い奉りて六万八千の功德の法門と顯るるなり、所詮日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る外に六万八千の功德の法門之れ無きなり云云。

一 妙莊嚴王の事

仰に云く邪見即正の手本なり、所詮森羅三千の万法、妙を以て莊嚴したる王なり妙とは称歎の語なり莊嚴とは色法なり王とは心法なり諸法の色心を不思議とほめたり、然れば、妙莊嚴王の言、三千の諸法、三諦法性の当位なり、所詮日蓮等の類、南無妙法蓮華經を以て色心を莊嚴したり、此の莊嚴とは別してかぎり立てたるには非ず、当位即妙の莊嚴なり、煩惱即菩提、生死即涅槃是なり云云。

一 華嚴・大日觀・經等の凡夫の得道の事

仰に云く彼等の衆皆各各其の經經の得道に似たれども、眞実には法華の得道なり、所謂三五下種の輩なり經に云く始見我身聞我所説文、妙樂大師云く脱は現に在りと雖も具に本種を騰ぐと云えり本種と云うは南無妙法蓮華經是なり云云。

一 題目の五字を以て下種の証文と為すべき事

仰に云く經に云く教無量菩薩畢、責住一乘文、妙樂大師の云く余教を以て程と為さず文、無量の菩薩とは日本国の一切衆生を菩薩と開會して題目を教えたり、畢竟とは題目の五字に畢竟するなり住一乗とは乘此宝乘直至道場是なり文、下種とはたねを下すなり種子とは成仏の種の事なり

り、上の經文に教無量菩薩の教の一字は下種の証文なり教とは題目を授くる時の事なり、權教無得道・法華得道と教う

るを下種とは云うなり、末法に入つて此の經文を出ださん人は有る可からざるなり慥に塔中相承の秘文なり下種の

証文秘す可し云云。

一題目の五字末法に限つて持つ可きの事

仰に云く經に云く、惡世末法時能持是經者文、此の經とは題目の五字な

り、能の一字に心を留めて之れを案ずべし云云、末代惡世、日本國の一切衆生に持てと云う經文なり云云。

一天台云く是我弟子応弘我法

仰に云く我が弟子とは上行菩薩なり我が法とは南無妙法蓮華經なり、權教

乃至始覺等は隨他意なれば他の法なり、さて此の題目の五字は五百塵点より已來、証得し給える法體なり故に我が法と

釈せり、天台云く此の妙法蓮華經は本地甚深の奧藏なり、三世の如來の証得し給える所とは是れなり。

一色心を心法と云う事

仰に云く玄の十に云く請を受けて説く時只だ是れ教の意を説く教意は是れ仏意なり仏意

は即ち是れ仏智なり仏智至つて深し是の故に三止四請す此くの如きの艱難・余經に比するに余經は則ち易し云云、此の

釈の意分明なり教意と仏意と仏智とは何れも同じ事なり、教は二十八品なり意は題目の五字なり惣じて仏意とは法華經

の異名なり、法華經を以て一切經の心法とせり又題目の五字を以て一代説教・本・迹二門の神とせり、經に云く

妙法蓮華經如來壽量品是なり、此の題目の五字を以て三世の諸仏の命根とせりさて諸經の神

法華經なりと云う証文は妙法蓮華經方便品と題したる是なり云云。

一無作の心身我等凡夫也と云う事

仰に云く釈に云く凡夫も亦三身の本を得たりと云云、此の本の字は心身の事なり

されば本地無作本覺の體は無作の心身を以て本とせり仍つて我等凡夫なり、心身は物に應つ身なり其の上壽量品の題目

を唱え出し奉るは眞實に心身如來の慈悲なり云云。

一諸河無鹹の事

仰に云く此無鹹の事をば諸教無得道に譬えたり大海のしをはゆきをば法華經の成仏得道に譬え

たり、又諸經に一念三千の法門無きは、諸河につしをの味無きが如く死人の如し、法華經に一念三千の法門

有るはつしをの大海にあるが如く生きたる人の如し、法華經を浅く信ずるはあわのつしをの如し、深く信ずるは、海水の如し、あわはきえやすし、海水は消えざるなり、如説修行最も以て大切なり、然りと雖も、諸經の大河の極深なるも、大海のあわのしをの味をば具足せず、權教の仏は法華經の理即の凡夫には百万倍劣るなり云云。

一 妙樂大師の釈に末法之初冥利不無の釈の事

仰に云く此の釈の心は末法に於て冥の利益迹化の衆あるべしと云う

事なり、此の釈は藥王品の此經即為閻浮提人病之良藥若人有病得聞是經病即消滅不老不死云云、此の經文の意を底に含めて釈せり、妙樂云く然るに後五百は、且らく一往に従う、末法の初冥利無きにあらす、

且く大教の流行す可き時に拠る、故に五百と云う文、仍て本化の菩薩は顯の利益迹化は冥の利益なるべし云云。

一 爾前經瓦礫国の事

仰に云く法華經の第三に云く、如從飢国来忽遇大王と云云、六の卷に云く我此土安穩天人

常充滿我淨土不毀云云、此の両品の文の意は權教は悉く瓦礫の旅の国なり、あやまりて本国と思ひて都と思わん事迷の故なり、一往四十二年住したる国なれば衆生皆本国と思ひ、本国は此の法華經なり、

信解品に云く遇向本国と、三五の下種の所を指して本国とも淨土とも大王とも云うなり、下種の心地即ち受持信解の

国なり云云。

一 無明惡酒の事

仰に云く無明の惡酒に酔うと云う事は弘法慈覺智証法然等の人人なり、無明の惡酒と云う

証文は勸持品に云く、惡鬼入其身是なり、惡鬼と惡酒とは同じ事なり惡鬼の鬼は第六天の魔王の事なり惡酒とは無明な

り無明即魔王魔王即無明なり、其身の身とは日本国の謗法の一切衆生なり、入ると呑むとは同じ事なり、此の惡鬼入る

人は阿鼻に入る、さて法華經の行者は入仏知見道故と見えて仏道に入る得入無上道とも説け

り、相構え相構えて無明の悪酒を恐るべきなり云云。

一日蓮已証の事 仰に云く寿量品の南無妙法蓮華經是れなり、地涌千界の出現末代の当世の別付属の妙法蓮華經

の五字を一閻浮提の一切衆生に取次ぎ給うべき仏勅使の上行菩薩なり云云、取次とは取るとは釈尊より上行菩薩の手へ取り給うさて上行菩薩又末法当今の衆生に取次ぎ給えり是を取次ぐとは云うなり、広くは末法万年

までの取次なり、是を無令断絶とは説かれたり、又結要の五字とも申すなり云云、上行菩薩取次の秘法は所謂南無妙法蓮華經なり云云。

一釈尊の持言秘法の事 仰に云く持言の秘法の經文とは寿量品に云く、每自作是念の文是なり、毎の字は三世

常住なり、是念の念とは、わすれ給わずして内証に具足し給えり故に持言なり、秘法とは南無妙法蓮華經是なり秘す可し秘す可し云云。

一日蓮門家の大事の事 仰に云く此の門家の大事は涌出品の前三後三の釈なり、此の釈無くんば本化迹化の不同

像法付属末法付属迹門本門等の起尽之れ有る可からず、既に止善男子の止の一字は日蓮門家の大事なり秘す可し秘す可し、総じて止の一字は正しく日蓮門家の明鏡の中の明鏡なり口外も詮無し、上行菩薩等を除いては総じて余の菩薩を

ば悉く止の一字を以て成敗せり云云。

一日蓮が弟子臆病にては叶う可からざる事 仰に云く此の意は問答対論の時は爾前迹門の釈尊をも用う可から

ざるなり、此れは臆病にては釈尊を用いまじきかなんと思ふべき故なり、釈尊をさえ用う可からず何に況や其の以下の等覺の菩薩をやまして謗法の人人に於ておや、所謂南無妙法蓮華經の大音声を出だして諸經諸宗を対治すべし、巧於難問答其心無所畏とは是なり云云。

一妙法蓮華經の五字を眼と云う事 仰に云く法華第四に云く、仏滅度後能解其義是諸天人世間之眼と云云、

此の経文の意は、法華経は人天二乘菩薩の眼目なり、此の眼目を弘むるは日蓮一人なり、此の眼には五眼あり、
いわゆるくげん・てんげん・えげん・ほうげん・ぶつげん
所謂肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼なり、此の眼をくじりて別に眼を入れたる人あり、所謂弘法大師是なり、法華経の
いちねんさんぜんそくしんじょうぶつしよぶつ
一念三千即身成仏諸仏の開眼を止めて、真言経にありと云えり、是れ豈法華経の眼を抽れる人に非ず
や、又此の眼をとじぶさぐ人あり所謂法然上人是れなり、捨閉の閉の文字は、閉眼の義に非ずや、所詮能弘の人に約し
ては、日蓮等の類い世間之眼なり、所弘の法に随えば、此の大乗經典は、是れ諸仏の眼なり、所詮眼の一
字は一念三千の法門なり、六万九千三百八十四字を此の眼の一字に納めたり、此の眼の字顕われて見れば煩惱即菩提・
生死即涅槃なり、今末法に入つて、眼とは所謂未曾有の大曼荼羅なり、此の御本尊より外には眼目無きなり云云。
一法華経の行者に水火の行者の事 仰に云く総じて此の経を信じ奉る人に水火の不同あり、其の故は火の如きの行者は
多く水の如き行者はまれなり、火の如しとは此の経のいわれをききて火災のもえ立つが如く貴く殊勝に思いて信ずれども
やがて消失す、此れは当座は大信心と見えたれども其の信心の灯きゆる事やすしさて水の如きの行者と申すは水は昼夜
不退に流るるなり少しもやむ事なし、其の如く法華経を信ずるを水の行者とは云うなり云云。
一女人と妙と釈尊と一体の事 仰に云く女人は子を出生す、此の出生の子又子を出生す此くの如く展転して無數の
子を出生せり、此の出生の子に善子もあり惡子もあり端嚴美麗の子もあり醜陋の子もあり長のひくき子もあり大なる
子もあり男子もあり女子もあり云云、所詮妙の一字より万法は出生せり地獄もあり餓鬼
もあり乃至仏界もあり・權教もあり・實教もあり・善もあり惡もあり・諸法を出生せり云云、又釈迦一仏の御身より
一切の仏・菩薩等悉く出生せり、阿弥陀・藥師・大日等は悉く釈尊の一月より万水に浮ぶ所の万影なり、然らば

女人にょにんと妙しやうと祇尊ぎそんとの三さん全く不同ふどう無きなり、妙樂大師みやうらくだいしの云いわく妙即三千そくさんぜん三千即法さんぜんそく云云、提婆品だいばに云いわく有二に宝殊ほうしゆ一価直いかに

一置不呵責かしかくの文の事

仰いに云いく此の經文きやうもんに於あては日蓮等の類にちれんのおそるべき文字もんじ一字之れ有り、若し此の文字もんじを恐れ

ざれば縦たとい当座とうざは事なしとも未来無間の業みらいむげんたるべし、然しからば無間地獄むげんじごく引ひき入いる獄卒ごくそつなるべし夫それは置の一字いれ是なり云云、此の置の一字ごくそつは獄卒ごくそつなるべし謗法不信ほうほうふしんの失とがを見ながら聞ききながら云いわすして置おかんは必ず無間むげん

地獄じごく墮だ在ざ在ざす可べし、仍いつて置の一字ごくそつ獄卒ごくそつ阿防羅刹あほうらせつなるべし尤もつとも以もて恐る可べきは置の一字ごくそつなり云云、所詮しよせん此の經文きやうもんの内に獄卒の一字ごくそつを恐るべきなり云云、此の獄卒の一字ごくそつを深く之を思おもう可べし、日蓮にちれんは此の字あを恐る故ゆゑに建長五年けんちやうごより今弘安年かうあん

中なまで在ざ在所ざい所しよにて申もうしはりしなり只偏ただひとえに此の獄卒ごくそつを脱まぬれんが為ためなり、法華經ほけきやうには若人にやくにん不信ふしんとも

生疑うたがひ不信者ふしんしやとも説とき給たまえり、法華經ほけきやうの文句ぶんくうをひらき涅槃經ねはんきやうの文句ぶんくうをひらきたりとも置おいていわずんば叶かなう可べからざるは此の置の一字ごくそつより外ぐわいに獄卒ごくそつは無きなり云云。

一異念い無なくく靈山淨土りやうぜんじやうど參まゐる可べき事

仰いに云いく異念いとは不信ふしんの事なり若もし我が心こころなりとも不信ふしんの意い出来しゆ来たいせば忽たちまちに

信心しんじんに住すべし、所詮しよせん不信ふしんの心をば師しとなすべからず信心しんじんの心を師匠ししやうとすべし淨心信敬じやうしんしんけうに法華經ほけきやうを修行しゆぎやうし奉たてまつるべきなり、されば能持のうじ二是經にぜきやう一能説と二此經にぜきやう一と説ときて能たの字まを説たまかせ給たまえり靈山りやうぜんここにあり四十一しよじち念ねん皆常寂光みなじやうじやくかうとは是これなり云云。

一不可失本心ふかしつほんしんの事

仰いに云いく此の本心ほんしんと云いうは法華經ほけきやうの信心しんじんの事なり、失とがと申もうすは謗法ほうほうの人ひとにすかされて法華經ほけきやうを捨はなつる心の出来しゆするを云いうなり、されば天台大師てんだいだいし云いく若もし悪友あくゆうに値あへば則すなわち本心ほんしんを失うしな

人の事ひとなり、本心ほんしんとは法華經ほけきやうなり、法華經ほけきやうを本心ほんしんと云いう意いは諸法実相しよほふじつしやうの御經ごきやうなれば十界じゆかいの衆生しゆじやうの心法しんぽうを法華經ほけきやうとは申まうすなり、而しかに此の本心ほんしんを引きかえて迷妄めいむの法ほふに着ちやくするが故ゆゑに本心ほんしんを失うしなり、此の本心ほんしんに

於ては三五の下種の法門なり、若し善友に値う時んば失う所の本心を忽に見得するなり、所謂迦葉・舍利弗等是なり、善友とは釈迦如来・悪友とは第六天の魔王・外道・婆羅門是なり、所詮末法に入つて本心とは日蓮弘通の南無妙法蓮華經是なり、悪友とは法然・弘法・慈覚・智証等是なり、若し此の題目の本心を失せんに於ては又三五塵点を経べきなり、但、如是展転至無數劫なるべし、失とは無明の酒に酔いたる事なり仍て本心を失うと云うなり、此の酔をさますとは権教を捨てしむるを云うなり云云。

一天台大師を魔王障礙せし事

仰に云く此の事は随分の秘藏なり、其の故は天台大師・一心三觀・一念三千の觀法

を説き顯さんとし給いしかば父母左右の膝に住して悩まし奉り障礙し給いしなり、是れ即ち第六天の魔王が父母の形を現

じて障礙せしなり、終に魔王に障礙せられ給わずして摩訶止觀の法門起れり、何に況や今日蓮が弘むる南無妙法蓮華經

は三世の諸仏の成道の師・十方薩の得道の師匠たり、其の上正像二千年の仏法は爾前・迹門

なれば、魔王自身・障礙をなさずともなるべし、今末法の時は、所弘の法は法華經本門の事の一念三千の南無妙法蓮華經

なり、能弘の導師は本化地涌の大菩薩にてましますべし、然る間魔王自身下りて障礙せずんば叶う可からざるなり、仍つ

て自身下りたる事分明なり、所謂道隆・良觀・最明寺等是なり、然りと雖も諸天善神等は日蓮に力を合せ給う故に竜口

までもかちぬ、其の外の大難をも脱れたり、今は魔王もこりてや候うらん、日蓮死去

の後に残党ども軍を起すべきが、故に夫れも落居は叶う可からざるなり、其の故は第六天の魔王の眷属日本国に四十九億

九万四千八百二十八人なりしが今は日蓮に降参したる事多分なり、經に云く悪鬼入其身とは是なり、此の合戦の起り

も、所詮南無妙法蓮華經是なり、魔王に於て体の魔王・用の魔王あり、体の魔王とは法性同共の

魔王なり妙法の法是なり、用の魔王とは此れより出生する第六天の魔王なり、用の魔王は障礙をなす、然れども体用同

共の諸法実相の理なり、唯一門の智慧の門に入り、無明法性一体なるべきなり云云、所謂摩訶止觀の

だいじ ほうもんこれ
大事の法門是なり、
ほけきよう いちだいせききう
法華經の一代説教に勝れたるは此の故なり、
いちねんさんぜん
一念三千とは是なり、
ほけきよう
法華經第三に云く魔及魔民皆護
仏法云云。

一 法華經極理の事
仰に云く迹門には二乗作仏本門には久遠実成此をさして極理と云うなり、但し是も未だ極理

にたらず、迹門にして極理の文は諸仏智慧甚深無量の文是れなり、其の故は此の文を受けて文句の三に云く豎に如理の底に徹し横に法界の辺を窮むと釈せり、さて本門の極理と云うは如来秘密神通之力の文是なり、

所詮日蓮が意に云く法華經の極理とは南無妙法蓮華經是なり、一切の功德法門・釈尊の因行果徳の二法三世十方の諸仏の修因感果 法華經の文・句句の功德を取り聚めて此の南無妙法蓮華經と成し給えり、爰を以て釈に云く惣じて

一經を結するに唯だ四のみ、其の枢柄を撮つて之を授与す云云、上行菩薩に授与し給う題目の外に法華經の極理は無きなり云云。

一 妙法蓮華經五字の蔵の事
仰に云く此の意は妙法の五字の中には一念三千の宝珠あり五字を蔵と定む、天台大師

玄義の一に判ぜり、所謂此の妙法蓮華經は本地甚深の奥蔵なり云云、法華經の第四に云く是れ法華經蔵と云云、妙華嚴法阿含蓮 方等 華嚴 若 經涅槃 又云く妙涅槃法 般 若 蓮 方等 華阿含 經 華嚴、已上妙法蓮華經の五字には十界三千の宝珠あり、

三世の諸仏は此の五字の蔵の中より、或は華嚴の宝を取り出だし、或は阿含 方等 般若の宝を取り出だし種種説法し給えり、加之 論師・人師等の疏釈も悉く此の五字の中より取り出だして一切衆生に与え給えり、此等は皆五字の中より取

り出だし給えども妙法蓮華經の袋をば持ち給わず、所詮五字は上行菩薩の付属にして更に迹化の菩薩・諸論師いろはざる題目なり、仍つて上行 所伝の南無妙法蓮華經は蔵なり、金剛不壊の袋なり此の袋をそのまま日本國の一切衆生には与え

給えり、信心を以て此の財宝を受取るべきなり、今末法に入つては日蓮等の類に受取る所の如意宝珠なり云云。

一我等衆生の成仏は打かためたる成仏と云う証文の事 仰に云く經に云く無上宝聚不求自得の文是なり、我等凡夫

即極とはたと打かためたる成仏なり所謂不求自得する所の南無妙法蓮華經なればなり云云。

一爾前法華の能くらべの事 仰に云く爾前の經にして十惡・五逆等の成仏の能なし、今法華經に十界皆成分明なり、

爾前の經の無能と云う証文とは方便品に云く但似仮名字引導於衆生の文是なり、さて法華經は能と云う証文は

諸法実相の文是なり、今末法に入つて第一の能たる南無妙法蓮華經是なり云云。

一授職の法体の事 仰に云く此の文は唯仏与仏の秘文なり輒く云う可からざる法門なり、十界三千の諸法を一言を以て

授職する所の秘文なり、其の文とは神力品に云く皆於此經宣示顯説の文是なり、此の五字即十界同時に授職する所の秘

文なり十界己の当体・本有妙法蓮華經なりと授職したる秘文なり云云。

一末代讓状の事 仰に云く末代とは末法五百年なり、讓状とは手継の証文たる南無妙法蓮華經是なり此れを讓るに

二義之れ有り、一には跡をゆずり二には宝をゆずるなり、一に跡を讓ると云うは釈迦如来の跡を法華經の行者にゆずり

給えり、其の証文に云く如我等無異の文是なり、次に財宝をゆずると云うは釈尊の智慧戒徳を

法華經の行者にゆずり給えり、其の証文に云く無上宝聚不求自得の文是なりと云云、さて此の題目の五字は讓状なり

云云。

一本有止觀と云う事 仰に云く本有の止觀と云うは大通を以て習うなり、久遠実成道の仏と大通智勝仏と釈尊との三

仏を次の如く仏法僧の三宝と習うなり、此の故に大通は本有の止觀なれば即ち三世の諸仏の師範と定めたり、仍つて大通

仏を法と習う、此の法は妙法蓮華經是なり、仍つて証文に云く大通智勝仏十劫坐道場の文是なり十劫は即ち十界なり

云云。

一入末法四弘誓願の事 仰に云く四弘誓願をば一文に口伝せり、其の一文とは所謂神力品に云く於我滅度

後おのづか受持じ斯經きやうぎやう是人にん於おのづか仏道ぶつどう決定けつぎ無有むう疑ぎと云い云ふ、此きやうもんの經文けきぶんは法華經ほけきやうの序品じよばんより始して四弘誓願しぐせいがんの法門ほふもんを説とき終はりてさて上行じやうぎやう菩薩ぼさつに妙法蓮華經みよほうれんげきやうを付屬ふぞくし給たまう時とき・妙法みよほうの五字ごじに四弘誓願しぐせいがんを結びて結句けつこに説とかせ給たまえり滅後めつごとは末法まほふの始はつの五百年ごひゃくねんなり、衆生しゆじやう無辺むへん誓願せいがん度どと云いうは是人にんの人の字しなり、誓願せいがんは地涌じゆの本化ほんげの上行じやうぎやう菩薩ぼさつの誓願せいがんに入いらん

と此これ即すなわち仏道ぶつどうの二字ふたご度脫どだつなり、煩惱ぼんのう無辺むへんなれども煩惱ぼんのう即すなわち菩提ぼだい・生死しじう即すなわち涅槃ねはんと体達たいだつす、仏道ぶつどうに入いつては煩惱ぼんのう更さらになし受持じ斯經きやうぎやうの所しよには法門ほふもん無尽むじん誓願せいがん知分ちぶん明みやうなり無上むじやう菩提ぼだい誓願せいがん証しやうと云いうは是人にん於おのづか仏道ぶつどう決定けつぎ無有むう疑ぎと定さだめたる四弘誓願しぐせいがん分明ぶんめいなり、教主きやうしゆ釈尊じやくそん・末法まほふに入いつて四弘誓願しぐせいがんも此この文ぶんなり、上行じやうぎやう菩薩ぼさつの四弘誓願しぐせいがんも此この文ぶんなり深ふかく之これを思案しあんす可べし云云。

一し四弘誓願しぐせいがん應報おうほう如理にょりと云いう事こと 仰いに云いく衆生しゆじやう無辺むへん誓願せいがん度どは心身しんしんなり、煩惱ぼんのう無辺むへん誓願せいがん斷たんは報身ほうしんなり、法門ほふもん無尽むじん誓願せいがん知ちは智法身ちほふしんなり、無上むじやう菩提ぼだい誓願せいがん証しやうは理法身りほふしんなり、所詮しよせん誓願せいがんと云いうは題目だいもく弘通くわうつうの誓願せいがんなり、釈いに云いく彼たが為ために惡あくを除すなわくは即すなわち是これ彼たが親おやなりと是こなり云云。

一し本来しやうらいの四弘しぐの事こと 仰いに云いく諸法しよほふの当体とうたい本来しやうらい四弘しぐなり、其その故ゆゑは衆生しゆじやうと云いうは法界ほふかいなり、所詮しよせん法界ほふかいに理智じち慈悲じひの三さんを具足くそくせり、應報おうほう法ほふの三身さんしん諸法しよほふの自体じたいなり、無作むさの心身しんしんを以もつて衆生しゆじやう無辺むへん誓願せいがん度どと云いうなり、無作むさの報身ほうしんには智德ちとく斷德たんとくの二德にとくを備そなへたり、煩惱ぼんのう無辺むへん誓願せいがん斷たんを以もつて本有ほんゆの斷德たんとくとは定さだめたり、法門ほふもん無尽むじん誓願せいがん知ちを以もつて本有ほんゆの智德ちとくとす、無上むじやう菩提ぼだい誓願せいがん証しやうを以もつて無作むさの法身ほふしんと云いうなり、所詮しよせん四弘誓願しぐせいがんの中なかつには衆生しゆじやう無辺むへん誓願せいがん度どを以もつて肝要かんやうとするなり、今日蓮等けふれんたうの類るいは南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうを以もつて衆生しゆじやうを度あする此こより外そとは所詮しよせんなきなり、速成就そくけうじゆ仏身ぶつしん是こなり云云、所詮しよせん四弘誓願しぐせいがんは一念三千いちねんさんぜんなり、さて四弘しぐの弘くとは何物なにものぞ、所謂いふゆる上行じやうぎやう所傳しよでんの南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうなり、釈いに云いく四弘能所混しぐのつじよみんすと云い云、此この釈しやうは止觀しかんに前三教ぜんさんきやうを釈しやうせり、能よと云いうは如來にょらいなり所しよとは衆生しゆじやうなり能所各別のつじよみんするは權教けんきやうの故ゆゑなり、法華經ほけきやうの心しんは能所のつじよみん一いつ体たいなり混みすと云いうは權教けんきやうの心しんは機法きほふ共に一いつ同どうなれば能所混のつじよみんすと云いうなりあえて能所一のつじよみん同どうして成仏じやうぶつする所しよを混みすと云いうには非あらざるなり、今末法いまほふに入いつて法華經ほけきやうの行者ぎやうぎやは四弘能所感しぐのつじよみん應おうの即身成仏そくしんじやうぶつの四弘しぐなり云云。

御講聞書
終

九八 四九院申状

848P

駿河の国蒲原の庄・四十九院の供僧等謹んで申す。

寺務・二位律師嚴譽の為に日興並に日持・承賢・賢秀等・所学の法華宗を以て外道大邪教と称し往古の住坊並に田畠を奪い取り寺内を追ひ出さしむる謂れ無き子細の事。

右釈迦一代教の中には天台を以て宗匠と為す、如来五十年の間は法華を以て眞実と為す、是れ則ち諸仏の本懷なり抑亦多宝の証誠なり、上一人より下万民に至るまで帰敬年旧り渴仰日に新なり。

而るに嚴譽の状に云く「四十九院の内日蓮が弟子等居住せしむるの由、其の聞え有り、彼の党類仏法を学し乍ら外道の教に同じ正見を改めて邪義の旨に住せしむ以ての外次第なり、大衆等評定せしめ寺内に住せしむべからざるの由の所に候なり」云々。

茲に因つて日興等忽に年来の住坊を追ひ出され已に御祈・便宜の学道を失つ、法華の正義を以て外道の邪教と称するは何の経・何れの論文ぞや、諸経多しと雖も未だ両眼に触れず法華の中に諸経を破るの文之有りと雖も諸経の裏に法華を破るの文全く之無し、所詮已今当の三説を以て教法の方便を破推するは更に日蓮聖人の莠言に非ず皆是れ釈尊出世の金口なり。

爰に眞言及び諸宗の大師等大小乗の浅深を弁えず権実教の雜乱を知らず、或は勝を以て劣と称し或は權を以て実と号し意樹に任せて砂草を造る、仍て愚癡の輩・短才の族・経経・顯然の正説を伺わず徒に師資相伝の口決を信じ秘密の法力を行ずと雖も眞実の驗證無し、天地之が為に妖孽を示し国土之が為に災難多し、是れ併ら仏法

の邪正を糾さず僧侶の賢愚を撰ばざる故なり、夫れ仏法は王法の崇尊に依つて威を増し王法は仏法の擁護に依つて長久す、正法を学ぶの僧を以て外道と称せらるるの条理豈然る可けんや外道か外道に非ざるか早く嚴訃律師と召し合わせられ真偽を糾されんと欲す。

且去る文応年中・師匠日蓮聖人・仏法の廢れたるを見・未來の災を鑒み諸經の文を勘え一卷の書を造ると号す・異国の來難果して以て符合し畢んぬ未萌を知るを聖と謂つ可きか、大覺世尊・靈山・虚空・二処・三会・二門・八年の間・三重の秘法を説き窮むと雖も仏滅後二千二百二十余年の間・月氏の迦葉・阿難・竜樹・天親等の大論師・漢土の天台・妙樂・日本の伝教大師等内には之を知ると雖も外に之を伝えず第三の秘法今に残す所なり、是偏に末法鬪諍の始・他國來難の刻・一閻浮提の中の大合戦起らんの時・国主此の法を用いて兵乱に勝つ可きの秘術なり、經文赫赫たり所説明明たり、彼れと云い此れと云い國の爲世の爲・尤も尋ね聞し食さるべき者なり、仍て款狀を勒して各言上件の如し。

承賢

賢秀

日持

日興

弘安元年三月 日

九九 竜泉寺申狀

弘安二年十月 五十八歳御代作

849P

駿河の國・富士下方滝泉寺の大衆・越後房日弁・下野房日秀等謹んで弁言す。

当寺院主代 平左近入道行智 条条の自科を塞ぎ遮らんが為に不実の濫訴を致す謂れ無き事。

訴状に云く日秀 日弁 日蓮房の弟子と号し法華經より外の余經 或は眞言の行人は皆以て今世後世叶う可からざるの由之を申す云云取意。

此の条は日弁等の本師日蓮聖人 去る正嘉以来の大彗星大地動等を觀見し一切經を勘えて云く当時 日本国の体たら
く權小に執著し実經を失没せるの故に当に前代未有の二難を起すべし所謂自界叛逆難 他国侵逼難なり、仍て治国の故
を思い兼日彼の大災難を対治せらる可きの由、去る文応年中一巻の書を上表す立正安國論と号す勘え申す所皆以て符
合す既に金口の未來記に同じ宛も声と響との如し、外書に云く「未萌を知るは聖人なり」内典に

云く「智人は起を知り蛇は自ら蛇を知る」云云、之を以て之を思つに本師は豈聖人なるかな巧匠内に在り国宝外に求む
可からず、外書に云く「隣国に聖人有るは敵国の憂なり」云云、内經に云く「国に聖人有れば天必ず守護す」云云、外書
に云く「世必ず聖智の君有り而して復賢明の臣有り」云云、此の本文を見るに聖人 国に在るは

日本国の大喜にして蒙古国の大憂なり諸竜を驅り催して敵舟を海に沈め梵釈に仰せ付けて蒙王を召し取るべし、君既に
賢人に在さば豈聖人を用いずして徒に他国の逼を憂えん。

抑大覺世尊 遙に末法鬪諍堅固の時を鑒み此くの如きの大難を対治す可きの秘術を説き置かせらるるの經文明明た

り、然りと雖も如来の滅後二千二百二十余年の間 身毒 戸那 扶桑等一閻浮提の内に未だ流布せず、随つて四依の居士
内に鑒みて説かず天台伝教而も演べず時未だ至らざるの故なり、法華經に云く「後の五百歳の中に

閻浮提に広宣流布す」云云、天台大師云く「後五百歳」妙樂云く「五五百歳」伝教大師云く「代を語れば則ち像の終り末
の初め地を尋ねれば唐の東 羯の西 人を原めれば則五濁の生 鬪諍の時」云云、東勝西負の明文なり。

法主聖人 時を知り国を知り法を知り機を知り君の爲臣の爲神の爲仏の爲災難を対治せらる可きの由 勘え

申すと雖も御信用無きの上、剩さえ謗法人等の讒言に依つて聖人・頭に疵を負い左手を打ち折らるる上、兩度まで遠流の責を蒙り門弟等・所所に射殺され切り殺され毒害・刃傷・禁獄・流罪・打擲・擯出・罵詈等の大難勝けて計つ可からず、茲に因つて大日本国・皆法華經の大怨敵と成り万民・悉く一闡提の人と爲るの故に天神・国を捨て地神・所を辞し天下静ならざるの由・粗伝承するの間其の仁に非ずと雖も愚案を顧みず言上せしむる所なり、外經に云く「奸人朝に在れば賢者進まず」云云、内經に云く「法を壊る者を見て責めざる者は仏法の中の怨なり」云云。

又風聞の如くんば高僧等を囑請して蒙古国を調伏す云云、其の状を見聞するに去る元曆・承久の兩帝・叡山の座主・東寺・御室・七大寺・園城寺等・検校・長吏等の諸の眞言師を請い回け内裏の紫宸殿にして咒咀し奉る故源・右將軍並に故平右虎牙の日記なり、此の法を修するの仁は敬つて之を行えば必ず身を滅し強いて之を持てば定めて主

を失ふなり、然れば則ち安德天皇は西海に沈没し叡山の明雲は流矢に当り後鳥羽法皇は夷島に放ち捨てられ東寺・御室は自ら高山に死し北嶺の座主は改易の恥辱に値う、現罰・眼に遮り後賢之を畏る聖人山中の御悲みは是なり。

次に阿弥陀經を以て例時の勤と爲す可きの由の事、夫れ以みれば花と月と水と火と時に依つて之を用ゆ必ずしも先例を追う可からず、仏法又是くの如し時に随つて用捨す、其の上・汝等の執する所の四枚の阿弥陀經は四十余年未顕・眞実の小經なり、一闡浮提第一の智者たる舍利弗尊者は多年の間・此の經を誦誦するも終に成仏を遂げ

ず然る後・彼の經を抛ち末に法華經に至つて華光如来と爲る、況や末代惡世の愚人・南無阿弥陀仏の題目計りを唱えて順次往生を遂ぐ可しや、故に仏之を誡めて言く法華經に云く「正直に方便を捨て但無上道を説く」と云云・教主釈尊・正しく阿弥陀經を抛ちたまう云云又涅槃經に云く「如来は虚妄の言無しと雖も若し衆生の虚妄の説に因るを知れば」と云云、正しく弥陀念仏を以て虚妄と称する文なり、法華經に云く「但樂て大乘經典を受持し乃至余經

の一偈をも受けざれ」云云、妙樂大師云く「況や彼の華嚴但以て称比せん此の經の法を以て之を化するに同じからず故に
ないしふじゆきよう 乃至不受余經一偈と云う」云云、彼の華嚴經は寂滅道場の説法界唯心の法門なり、上本は十三世界微塵品中品は四十
九万八千偈下本は十万偈四十八品今現に一切經藏を觀るに唯八十六十四十等の經なり、其の
外の方等般若・大日經・金剛頂經等の諸顯密・大乘經等を尚法華經に對当し奉りて仏自ら或は末顯真実と云い
あるとどなん 或は留難多きが故に或は門を閉じよ或は抛て等云云、何に況や阿弥陀經をや、唯大山と蟻岳との高下・師子王と
こと 狐兔との力なり。

今日秀等専ら彼等小經を抛ち専ら法華經を讀誦し法界に勸進して南無妙法蓮華經と唱え奉る豈殊忠に非ずや、此
等の子細御不審を相貽さば高僧等を召され是非を決せらる可きか、仏法の優劣を糺明致す事は月氏・漢土日本の先例な
り、今明時に當つて何ぞ三國の旧規に背かんや。

訴狀に云く今月二十一日数多の人勢を催し弓箭を帶し院主分の御坊内に打ち入り下野坊は乘馬相具し熱原の百姓・紀
次郎男・点札を立て作毛を苅り取り日秀の住房に取り入れ畢んぬ云云「取意」。

此の条・跡形も無き虚誕なり日秀等は損亡せられし行者なり不安堵の上は誰の人か日秀等の点札を叙用せしむ可き將
た又 弱なる土民の族・日秀等に雇い越されんや、然らば弓箭を帶し悪行を企つるに於ては行智云く近隣の人人争つて
弓箭を奪い取り其の身に召し取ると云うが如き子細を申さざるや、矯飾の至り宜しく賢察に足るべし。

日秀・日弁等は当寺代代の住侶として行法の薰修を積み天長地久の御祈を致すの処に行智は乍に当寺靈地の院
主代に補し寺家・三河房・頼円並に少輔房・日禅・日秀・日弁等に行智より仰せて法華經に於ては不信用の法なり速に
ほけきよう 法華經の讀誦を停止し一向に阿弥陀經を讀み念仏を申す可きの由の起請文を書けば安堵す可きの旨下知せし

むるの間、頼円は下知に随つて起請を書いて安堵せしむと雖も日禅等は起請を書かざるに依つて所職の住坊を奪い取るの時、日禅は即ち離散せしめ畢んぬ、日秀、日弁は無頼の身たるに依つて所縁を相憑み猶寺中に寄宿せしむるの間、此の四箇年の程、日秀等の所職の住坊を奪い取り嚴重の御祈を打ち止むるの余り悪行猶以て飽き足らず為に法華經行者の跡を削り謀案を構えて種種の不実を申し付くるの条、豈在世の調達に非ずや。

凡そ行智の所行は法華三昧の供僧和泉房蓮海を以て法華經を柿紙に作り紺形を彫り堂舎の修治を為す、日弁に御書下を給い構え置く所の上簀摺一万二千寸の内八千寸を之を私用せしむ、下方の政所代に勧め去る四月御神事の最中に法華經信心の行人四郎男を刃傷せしめ去る八月弥四郎坊男の頸を切らしむ、日秀等に頸を刎ぬる事を擬して此の中に書き入れ無智無才の盗人兵部房静印より過料を取り器量の仁と称して当寺の供僧に補せしめ、或は

寺内の百姓等を催し、鶉狩、狸殺、狼落の鹿を取りて別当の坊に於て之を食らい、或は毒物を仏前の池に入れ若干の魚類を殺し村里に出して之を売る、見聞の人耳目を驚かさざるは莫し仏法破滅の基悲んで余り有り。

此くの如き不善の悪行、日相積るの間、日秀等愁歎の余り依つて上聞を驚かさんと欲す、行智条条の自科を塞がんが為に種種の秘計を廻らし近隣の輩を相語らい遮つて跡形も無き不実を申し付け日秀等を損亡せしめんと擬するの条言語道断の次第なり、冥に付け頭に付け戒めの御沙汰無からんや、所詮仏法の権実沙汰の真偽淵底

を究めて御尋ね有り且は誠諦の金言に任せ且は式条の明文に准し禁遏を加えられれば守護の善神は変を消し擁護の諸天は咲を含まん、然れば則ち不善悪行の院主代行智を改易せられ將た又本主此の重科を脱れ難からん何ぞ実相寺に例如せん、誤まらざるの道理に任せて日秀、日弁等は安堵の御成敗を蒙り堂舎を修理せしめ天長地久御祈の忠勤を抽んでんと欲す、仍て状を勅し披陳言上件の如し。

弘安二年十月

日

沙門

日秀日弁等上

与日興

五十九歳

具勝本種・正法の実義・本・迹勝劣正伝、本因妙の教手本門の大師・日蓮謹んで之を結要す・万年救護写瓶の弟子日

異に之を授与す云云、脱種合して一百六箇之れ在り、

靈山浄土・多宝塔中・久遠実成・無上覚王・直授相承本・迹勝劣の口決相伝譜、久遠名字より已来た本因・本果の主・

本地自受用報身の垂迹上行菩薩の再誕・本門の大師日蓮詮要す。

理の一念三千・一心三觀本迹

三世諸仏の出世・成道の脱益寿量の義理の三千は釈迦諸仏の仏

心と妙法蓮華經の理觀の一心とに蘊在せる理なり。

大通今日・法華本迹

久遠名字本因妙を本として中間・今日・下種する故に久成を本と為し中

応仏一代の本迹

間・今日の本迹を俱に迹と為る者なり。

久遠下種・靈山得脱・妙法値遇の衆生を利せん為に無作三身・寂光浄土従り三

眼三智をもつて九界を知見し迹を垂れ權を施す後に説く妙經の故に今日の本

迹門為理円の一致の本迹

迹共に迹と之を得る者なり。

松柏風波万声一如・諸法実相の理上の觀心は応仏の域を引かえた

る故に本迹とは別れども唯理の上の法相なれば本迹理觀の妙法と

顕す、迹化は付屬無きが故に之を弘めず。

心法即身成仏の本迹

心法妙法蓮華經の本迹

從因至果・中間今日の本迹

本果の妙法蓮華經の本迹

中間・今日も迹門は心法の成仏なれば華嚴・阿含・方等・般若・法華の安樂行品に至るまで円理に同ずるが故に迹は劣り本は勝る者なり。

山家云く一切諸法・從本已来・不生不滅・性相凝然・釈迦口を閉ぢて身子言を絶す云云、方便品には理具の十界互具を説く本門に至つて顕本理上の法相なれば久遠に對して之を見るに実相は久遠垂迹の本門なる故に色法に非なるなり。

像法の修行は天台・伝教弘通の本迹は中間・今日の迹門を因と爲し本門修行を果と爲るなり。

今日の本果は從因至果なれば本の本果には劣るなり、寿量の脱益・在世一段の一品二半は舍利弗等の声聞の爲の觀心なり、我等が爲には教相なり、情は迹劣本勝なり、又滅後・像法相似・觀行解了の行益も以て是くの如し、南岳・天台・伝教の修行の如く末法に入つて修行せば帶權・隔歴の行と成つて我等が爲には虚戲の行と成る可きなり、日蓮は一向本・天台は一向迹・能く能く之を問う可し。

疏の九に云わく爾前皆虚にして実ならず迹門は一虚一実・本門は皆実不虛云云、爾前二種の失の事・一には存行布故仍未聞權として迹門の理の一念三千を隱せり、二には言始成故尚未發迹として本門の久遠を隱せり迹門方便品一念三千・二乗作仏を説いて爾膳・二種の失一つ脱がれたり、本門に至りて迹門の十界因果を打破

是即ち本因・本果の法門なり、実の一念三千も顕れず二乗作仏も定らず云云、世間の罪に依つて惡道に墮ん者は爪上の土・仏法に依つて惡道に墮ちん者は十方の土の如し、故は信心の根本は本勝迹劣余の信心は枝葉なり。余行に渡る法華經の本迹

在世觀心法華經の本迹

脱益の妙法の教主の本迹

脱益の今此三界の教主本迹

脱益像法時剋弘經の本迹

脱益迹門修行の本迹

脱益迹門自解仏乗修行の本迹

脱の五大尊の本迹

一念三千も顕れず二乗作仏も定らず云云、世間の罪に依つて惡道に墮ん者は十方の土の如し、故は信心の根本は本勝迹劣余の信心は枝葉なり。一代八万の諸法は本因妙の下種を受けて説く所の教なるが故に一部八卷乃至一代五時次第梯は名字の妙法を下種して熱脱せし本迹なり。

一品二半は在世一段の觀心なり天台の本門なり、日蓮が為には教相の迹門なり云云。

所説の正法は本門なり能説の教主釈尊は迹門なり、法自ら弘まらず人法を弘むる故に人法ともに尊し。

天上天下唯我独尊は迹身門・密表寿量品の今此三界は即本身門なり。

天台の本迹は俱に日蓮が迹門なり時剋亦天地の不同之在り。正法一千年の修行の徳より像法一日の徳は勝れたるなるべし。

熱益は迹、脱益は本なり之に就いて之を思惟す可し。

他受用応仏は本・普賢・文殊・弥勒・藥王は迹なり。

脱の眞俗二諦の本迹

前十四品悉く流通分の本迹

脱益理觀一致の本迹

脱益戒體の本迹

脱の迹化七面の本迹

脱の迹化本尊の本迹

脱益守護神の本迹

脱益山王の本迹

天台大師弘通の本迹前十四品は迹門に約し後十四品は本門に約す云云、
是法住法位世間相常住文。

如来の内証は序品より滅後正像末の爲なり、藥王菩薩は像法

の主天台是なり、密表の法師品に云く今此三界文。脱益理觀一致の本迹
本迹殊なりと雖も不思議一と云うは今日乃至中間の本迹は本迹と分別す

れども本因妙を下種として説く所の本迹なれば迹の本は本に非ず云云。

爾前迹門、熱益の戒躰を迹とし脱益の戒躰を本と爲るなり、迹門の或は爾前
大小の戒に勝れ本門の或は爾前迹門の戒に勝るなり。

像法には理觀を本と用うるなり故に天台は迹を本と爲し本を迹と行ず
るなり。

一部を本尊と定むるに前十四品は迹、後十四品は本と云云、是は一部八
卷なり云云。

守護する所の法華は本、守番し奉る所の神等は迹なり、本因妙の影を万水
に浮べたる事は治定と云云。

久遠・中間に受くる所の法華は本、夫れより守り来る所は垂迹なり、下種は本
因妙なり云云。

脱迹だつしゆ十羅刹女じゆしやくにょの本迹

脱迹だつしゆ付属ふぞくの本迹

脱迹だつしゆ開会かいえの本迹

脱益だつえき成仏じやうぶつの本迹

脱迹だつしゆ三種さんしゆ教相きやうしやうの本迹

脱の五味ごみ所従しよじやうの本迹

脱迹だつしゆ父子ふしの本迹

脱迹だつしゆ師弟していの本迹

脱益だつえき感応かんのうの本迹

久遠・中間 今日の理事は本・中間・大通 今日出世冥守する処は垂迹なり、下種は前の如し云云。

脱益の迹化付属は中間・大通を本とし今日初任の終を迹とするなり、受くる正法は本・持つ方は迹なり。

大通の初を開と云い今日初任の終りを会と云うなり、本は大通・迹は初任なり、初頭を開と云い終合を会と云う云云、案位も理上の案位なり。

寿量品は本・応仏は迹なり、無作三身寂光土に任して三眼・三智をもつて九界を見見す云云。

一種は迹・無開会・一種は本有の開会なり、一種は開頭・二種は不開会・所従者属の教相なり云云。

天台・伝教の五味は横豎ともに所従なり、五味は本・修行の人は迹たり、在世以て此くの如し云云。

応仏は本・迹仏は迹なり、子父の法を弘むるに世界の益ありと云云。

義理共に上に同じ是れ我が弟子・我が法を弘む可し弘む可し云云。

久遠の天月の影を中間・今日の脱益の水に移すなり、衆生久遠に仏の善巧を蒙るとは是なり。

脱益寂照の本迹だつえきしやくしやう

脱益随縁不変の本迹だつえきずいえんふへん

脱益九法妙の本迹

脱益八相・八苦習合の本迹

脱益灌頂等の本迹

脱益説所戒壇本迹だつえきせうそかいだん

脱益三世三仏利の本迹だつえきさんぜさんぶつり

脱益証明・多宝仏塔の本迹だつえきしやうめいたはうぶつたう

脱益序正流通現文の本迹だつえきしよせうりゆうつうげんぶん

理りの上のうへの寂照しやくしやうは妙覺めうかく乃な至いた觀行等くわんぎやうの解了げりやうなり、理り即すなはち凡夫ぼんぷは無駄むだ有用ゆうようの本迹

在ざい世せいと像法ざうほうと之これ同おなじ真如しんによの義理ぎりなり、随縁ずいえんも不変ふへんも共に理りの一段いつだんの本迹なり。

三法妙さんぽうめうに各かく三法妙さんぽうめうを具くすれば九法妙くうぽうめうなり、法中ほふちゆうの心法妙しんぽうめうより起おこる所の生仏しやうぶつ二妙にめうなり本迹ほんだく知るべし。

八相はちさうは本ほん・八苦はちくは迹しやく同躰どうたいの權實ごんじつ是これなり。

灌頂くわんていとは至極しごくなり後世ごせい・仏ぶつ菩薩ぼさつの灌頂くわんていは法華經ほふけきやうなり、迹門しやくもんの灌頂くわんていは方便ほうべん誦じゆ・欲令よくめい衆生しゆじやう開仏知見かいぶつちけんなり、本門ほんもんの灌頂くわんていは壽量品じゆうりやうほんどくじゆ誦誦じゆじゆ然我実成がじつじやう・仏ぶつ已来いらいなり。

靈山りやうぜんは本ほん・天台山てんだいは迹しやく・久遠くおんと末法まふぽうとは事行じぎやうの戒事かいじ・戒かい・理戎りじゆ・今日けふと像法ざうほうとは理りの戒躰かいだいなり。

世世しぜ番番ばんばんの教主きやうしゆは本ほん・所化しゆけの衆生しゆじやうは迹しやくなり、世世しぜ已来いらい常に我われが化けを受け番番ばんばんに出世しゆせし師しと俱ともに生なず。

妙法蓮華經めうぽうれんげきやう皆是かゝ眞實しんじつは本ほん・多宝たはう・佛ぶつは迹しやく・迹門しやくもん・八品はちひん乃至ないし本門ほんもん之これを指さすなり云云。

經文きやうもん釈義しやくぎの如ごとく理りの上のうへの正宗しやうしゆう・流通序文りゆうつうしよぶんなれども本ほんは勝すぐれ迹しやくは劣

るなり、然るに迹は本無今有なれば久遠の迹を脱として今日の本を説くなり云云。

脱益損受折伏の本迹

天台は損受を本とし折伏を迹とす、其の故は像法は在世の熟益冥利の故なり福智具足の故と云えり。

脱益二妙の本迹

相待妙は迹 絶待妙は本・妙法の外に更に一句の余経無し云云、独一法界の故に絶待と名くるの釈之を思う可し。

脱益十妙の本迹

本果妙は本・九妙は迹なり在世と天台とは機上の理なり、仏は本因妙を本と為し所化は本果妙を本と思えり。

脱益六重所説の本迹

已今を本と為し余は迹なり本迹殊なりと雖も不思議一と云云、理具の本迹なれば一部俱に迹の上の本迹なり。

脱益六即所判の本迹

妙覺は本・余は迹なり。

玄九に云く初の十住を因と為し十行を果と為す十行を因とし十廻向を果とし十廻向を因とし十地を果とし十地を因と為し等覺を果とし等覺を因とし妙覺を果と為す云云。

脱益十不二門の本迹

理の上の不變の不二にして事行の不二門には非なるなり。

脱益十界互具の本迹

理具の十界互具にして事行の互具には非ざるなり、九界の理を仏界の理に押し入るる方ならでは脱せざるなり。

脱益十二因縁四諦の本迹

經に云く無明乃至老死云云、苦集滅は迹なり道諦は本なり。脱益

三土の本迹 報土は本同居方便は迹なり。

妙樂云く雖脱在現 本迹理上の一致なり心は寿量品も文は現量なれども上行所伝の本因妙を唱え顯して後は只久遠の教相にて成仏肝要の觀心には非ずと云云。籤一に云く本中体等迹と殊ならず脱益の妙覺乃至觀行相似等の妙法蓮華經は理に即して事を含む、然も本迹一致に非ず破廢立本云云。玄七に云く權實は智に約し教に約す 化他不定の時施す所の權實八教なり両所殊ならず久遠の本今日の脱益と両所なり。

籤七に云く理淺深無し故に不殊と曰う本因本果の理を今日中間にも寿量顯本の理に推し入れて顯すと釈するなり。籤七に云く經に約すれば是れ本門と雖も既に是れ今世迹中の本名本門と為す故に知んぬ 今日正く迹中利益に當る、乃至本成已後俱に中間と名く中間本を顯すに利益を得る者尚迹益を成ず況や復今日をや文。

意は久遠本巢の迹を中間 今日の本と為す、又久遠名字の妙法の影を中間今日に垂迹する故に下種に對して脱益寿量を迹と得たる証拠に釈する是なり。

疏の一に云く衆生久遠に仏の善巧を蒙る久遠下種靈山得脱。

籤十に云く故に知んぬ今日の返會は昔の成熟の機に赴くことを靈山下種久遠得脱の益。記二に云く本時の自行は唯円と合す本時とは本周

妙の時なり。化他は不定亦八教有り中間今日化導の儀式なり。

玄七に云く迹の本は本に非ず 今日の本果妙の事なり。

本の迹は迹に非ず本因妙の事なり。本迹殊なりと雖も不思議一なり本因妙の外全く迹無きなり迹門は即ち顯本の後には本無今有の方便無得道なりと中鳥の証俊何にと問われし時、俊範法印答えて云く不思議一と、求めて云く其の義如何、答えて云く文在迹門義在本門云云と、会して云く迹門既に益無し本門益有り本迹勝劣不思議一と云云。

妙樂云く權實は理なり本迹は事なり天台云く本迹を二經と為すと云えり如来の本迹は理上の法相なり日蓮の本迹は事行の法相なり

以上、脱の上の本迹勝劣口決畢んぬ

事の一念三千・一心三觀の本迹いちねんさんぜん いっしんさんかん ほんしやく

久遠元初直行の本迹くおん ほんしやく

久遠実成直体の本迹くおんじつじょう ほんしやく

久遠本果成道の本迹くおん ほんしやく

久遠自受用報身の本迹くおんじじゅうほうしん ほんしやく

久成本門為事円の本迹くじょうほんもん ほんしやく

色法即身成仏の本迹そくしんじしゅうぶつ ほんしやく

色法妙法蓮華經の本迹みょうほうれんげきょう ほんしやく

釈迦三世の諸仏・声聞・緣覺・人天の唱る方は迹なり、南無しやかさんぜ しよぶつ しよもん えんかく にんてん なむ

妙法蓮華經は本なり。みょうほうれんげきょう

名字本因妙は本種なれば本門なり、本果妙は余行に渡る故に本の上の迹なり、久遠釈尊の口唱を今日蓮直に唱うるなり。みょうじほんにんみょう ほんもん ほんしやく ほんもん ほんしやく ほんもん ほんしやく

久遠名字の正法は本種子なり、名字童形の位、釈迦は迹なり
我本行菩薩道是なり、日蓮が修行は久遠を移せり。がほんぎみょうぼさつだうこれ にちれん しぎょう ほんもん ほんしやく ほんもん ほんしやく

名字の妙法を持つ処は直躰の本門なり直に唱え奉る我等は迹なり。みょうじ みょうほう じきたい ほんもん ほんしやく ほんもん ほんしやく

男は本女は迹・知り難き勝劣なり。能く能く伝流口決す可き者なり
上行・所伝の妙法は名字本有の妙法蓮華經なれば事理俱勝の本なり
日蓮並に弟子檀袖郡等は迹なり。おとこ ほんめい ほんしやく ほんもん ほんしやく ほんもん ほんしやく

親の義なり父の義なり、涌出品より已後・我等は色法の成仏なり不渡
余行の妙法は本・我等は迹なり。おや ほんしやく ほんしやく ほんしやく ほんしやく ほんしやく

男子と成つて名字の大法を聞き己己・物物・事事・本・迹を顕す者なり、
又今日の二十八品・品品の内の勝劣は通号は本なり勝なり、別号は

迹なり劣なり三云。あと ほんしやく ほんしやく ほんしやく

妙楽・疏記九に云く故に知んぬ迹の実は本に於て猶虚なり、籤十に云く、今日は初成を以て元始と為し
爾前・迹門は大通を以て元始と為し
迹門 本門は本因を以て元始と為す本門にぜん しかもん だいとう ほんもん ほんもん ほんもん

此の釈は元始本迹おんこんしやうれつ遠近勝劣を判ずるなり、本果妙は然我実成仏已来猶迹門なり、迹の本は本に非ざるなり、本因妙は我本行菩薩道がほんぎやうぼさつどう眞実の本門なり、本の迹は迹に非ず云云、我が内証の寿量品は迹化も知らず云云、重位秘蔵の義なり本迹と分別する上は勝劣は治定しやうれつなれども末代には知り難き故云云。

くおんじゅうかごういん ほんしやく
久遠従果向因の本迹

みよふほつれんげきやう ほんしやく
本因妙法蓮華経の本迹

ふどよきやうほけきやう ほんしやく
不渡余行法華経の本迹

げしゆ ほけきやうきやうしゆ ほんしやく
下種の法華経教主の本迹

げしゆ こんしさんがい ほんしやく
下種の今此三界の主の本迹

げしゆ かんじん ほんしやく
下種得法観心の本迹

がじつしやうぶつにあらざるもん
本果妙は釈迦仏・本因妙は上行菩薩・久遠の妙法は果・今日の寿量品は
花なるが故に従果向因の本迹と云うなり。

みよふほつ わか みよふほつ とな うちれん
全く余行に分たざりし妙法は本唱うる日蓮は迹なり、手本には不
輕菩薩の二十四字是なり、又其の行儀是なり云云。

ぎり じきたう ほつ ほんもん とな しゃか いまにちれん しゆつ
義理上に同じ直達の法華は本門唱うる釈迦は迹なり、今日蓮が修
行は久遠名字の振舞に芥爾計も違わざるなり。

じじゆゆうしん じようきやうにちれん われら ないしやう じゆりやうほん
自受用身は本・上行日蓮は迹なり、我等が内証の寿量品とは脱益
寿量の文底の本因妙の事なり、其の教主は某なり。

くおん てんじやう てんが ゆいがどくそん にちれんこれ くおん
久遠元始の天上天下唯我独尊は日蓮是なり、久遠は本・今日
は迹なり、三世常住の日蓮は名字の利生なり。

くおんげしゆ ちやうげん かんじん ぶんへつくとく
久遠下種の得法は本なり、今日中間等の得法観心は迹なり、分別功德
品の名字初随喜の文の如し云云。

下種自解仏乗の本迹 げしゅじげぶつじょう ほんしやく

末法時刻の弘通の本迹 まっぽうじこく ぐつう ほんしやく

本門修行の本迹 ほんもんしゆぎょう ほんしやく

本門五大尊の本迹 ほんもん ほんしやく

日蓮本門弘通の本迹 にちれんほんもんぐつう ほんしやく

本化事行一致の本迹 ほんげ いっち ほんしやく

後十四品皆流通の本迹 みなるつう ほんしやく

下種戒体の本迹 げしゆ ほんしやく

本化七面の本迹 ほんげ ほんしやく

名字の妙法を上行所伝と聞き得る方は自解仏乗の本なり、聞き得て後受持する我等は迹なり、故に伝教より日蓮は勝るなり云云。

本因妙を本とし今日寿量の脱益を迹とするなり、久遠の釈尊の修行と今日蓮の修行とは芥子計も違わざる勝劣なり云云。

正像二千年の修行は迹門なり、末法の修行は本門なり、又中間今日の仏の修行より日蓮の修行は勝る者なり。

久遠本果の自受用報身如来は本なり、上行等の四菩薩は迹なり。

本因妙は本なり我本行菩薩道は迹なり云云。

本迹殊なりと雖も不思議二云云、本因妙の外に並に迹とて別して之無し故に一と釈する者なり、真実の勝劣の手本の義なり云云。

本果妙の釈尊・本因妙の上行菩薩を召し出す事は一向に滅後末法利益の爲なり、然る間日蓮修行の時は後の十四品皆滅後の流通分なり

爾前・迹門の戒躰は権実雜乱、本門の戒躰は純一無雜の大戒なり。

勝劣天地水火尚及ばず具に戒躰抄の如し云云。

末法には事行を本とし在世と像法とには理觀を本とするなり、天台の本

書は理の上の事なれば一向迹門の七決、我家の本書は事の上の本なり。

げしゅ ほっけ ほんしゃく
下種三種法華の本迹

ほんげほんぞん ほんしゃく
本化本尊の本迹

げしゅしゅごしん ほんしゃく
下種守護神の本迹

げしゅさんのつ ほんしゃく
下種山王神の本迹

げしゅごめいひん ほんしゃく
下種十羅刹女の本迹

ほんもんふぞく ほんしゃく
本門付属の本迹

ほんもんかいえ ほんしゃく
本門開会の本迹

げしゅじにじ ほんしゃく
下種成仏の本迹

二種は迹なり一種は本なり、迹門は隱密法華・本門は根本法華・迹本文
底の南無妙法蓮華經は顯說法華なり。

七字は本なり余の十界は迹なり、諸經・諸宗中王の本尊万物下種の種子無上
の大曼陀羅なり。

守護し奉る所の題目は本・護る所の神明は迹なり、諸仏救世者現無量神
力云云。

久遠に受くる所の妙法は本・中間今日未來までも守り来る所の山王明
神は即迹なり。

此の義理上に同じ唯神明と十女を本迹に対する時・十羅刹女は本・神明
は迹なり。

久遠名字の時受る所の妙法は本・上行等は迹なり、久遠元初の結要付属は
日蓮今日寿量の付属と同意なり云云。

久遠の本会を本と為す、今日寿量の脱を迹と為るなり。
妙楽云く始頭を開と云い終合を会と云う文。

本因妙は本・自受用身は迹・成仏は難きに非ず此の經を持つこと難けれ
ばなり云云。

下種三種教相の本迹げしゆ きやうそう ほんしやく

五味主の中の主の本迹ほんしやく

本種師弟不變の本迹ほんしやく

本種父子常住の本迹ほんしやく

四土具足の本迹ぐそく ほんしやく

下種感応日月の本迹げしゆ かんのおにちがつ ほんしやく

下種隨緣不變の本迹げしゆ ずいゑんふへん ほんしやく

下種九法妙の本迹げしゆ くにふたう ほんしやく

下種人天の本迹げしゆ にんてん ほんしやく

下種八相・八苦習合実勝の本迹げしゆ ほんしやく

二種は迹門・一種は本門なり、本門の教相は教相の主君なり、二種は二十八品・一種は題目なり、題目は觀心の上の教相なり。

日蓮が五味は横豎共に五味の修行なり、五味は即本門・修行は即迹門なり。

久遠実成の自受用身は本・上行菩薩は迹なり、三世常恒不變の約束なり

義理上に同じ、久遠の名字即の俗諦常住の父子は今日蓮が修行に殊ならず、世間相常住是なり。

三土は迹・常寂光土は本なり、四土即常寂光・寂光即四土の淨土は唯本門弘經の道場なり。

下種の仏は天月・脱仏は池月なり。天台云く不識天月但觀池月云云。体用同時の眞実・眞如・一口の首題なり、本有の迹・本有の一念三千是なり、隨緣不變一念寂・照の本迹なり。

久遠下種の妙法は本・已來の九法は迹なり。

久遠下種の妙法は本なり、已來の人天は迹なり。

脱の八相は迹・種の八相は本・脱の八苦は迹・種の八苦は本

なり煩惱即菩提・生死即涅槃・常在此不滅と云えり。

下種最後直授摩頂の本迹げしゅさいご ほんしやく

下種弘通戒壇実勝の本迹げしゅくわうかいだん ほんしやく

下種寂照実事体用無上の本迹げしゅじやくしよく じつじ たいゆうむじよう ほんしやく

下種三世三仏実益の本迹げしゅさんぜ さんぶつ ほんしやく

下種証明多宝仏塔の本迹げしゅしょうみょう たびふつ ほんしやく

下種序正流通文底の本迹げしゅしよ せいりゆう ぶんてい ほんしやく

下種折撰二門の本迹げしゅせつせん にもん ほんしやく

下種二妙実行の本迹げしゅにめう ぎこう ほんしやく

下種十妙実体的本迹げしゅしゆ じゆめう ほんしやく

久遠一念元初の妙法を受け頂く事は最極無上の灌頂なり法は本人は迹なり。くおんいちねん ぎやうほつ かんちよう

三箇の秘法建立の勝地は富士山本門寺本堂なり。ひがうこんりゆう ほんもん

(上行 院は祖師堂云云弘通所は総じて院号なるべし云云)じやう げん ぞし ぐん ぐん ぐん ぐん

生仏一如の事の上の本覚の寂照なり人は迹 仏は本なり

云云。

日蓮は下種の利益三世九世種熟脱本有一念の利益なり、天にちれん げしゅ りやく さんぜ ぐせ しゆじやくだう ほんぬいちねん りやく

台云く若しは破若しは立皆是法華の意の修行の利益なり。い ぐ も 破 も 立 みな ほう け しぎやう りやく

久遠実成 無始無終 本法の妙法蓮華經皆是眞実は本なり、久遠くおん じゆえん じゆめい ぶし むしゆ ほんぽう ほんれんげきやう かいぜしんじつ

の本師は妙法なり、本有実成釈迦多宝は迹なり。ほんし ぎやうほう ほんぬじつじやう たびは じやく

応仏と天台とは正宗 一品二半を本門と定め現文の勝劣、報仏とてんたい しょうぶつ ほんもん げんぶん しょうれつ

日蓮とは流通を本と定む文底の勝劣なり。にちれん りゆう ぶんてい しょうれつ

日蓮は折伏を本とし撰受を迹と定む法華折伏 破権門理とは是なり。にちれん せつぷく しょうじゆ ほんぽう ほんもん り ぜつ ほんもん り ぜつ

日蓮は脱の二妙を迹と為し種の二妙を本と定む、然るに相待は迹 絶待にちれん だつ にめう じゆ ほんにめう ぜつ ぜつ

は本云云。

日蓮は本因妙を本と為し、余を迹と為すなり、是れ眞実の本因・本果のにちれん ほんにんめう な 余を迹と為すなり、 是れ ほんじつ ほんいん・ほんが

法門なり。

下種六重具膳の本迹

日蓮は脱の六重を迹と為し、種の六重を本と為るなり云云。

下種六即実去の本迹

日蓮は脱の六即を迹と為し種の三世一即の六即案位の理即は開会の妙覚開会の理即は本覺の極果を本と為るなり。

下種十二因縁の本迹

日蓮は応仏所説の十二因縁を迹と為し、久遠報仏所説の十二因縁を本と定むるなり。

下種十不二門の本迹

日蓮が十不二門は事上極極の事理一牀用の不二門なり。

下種十界互具の本迹

唱え奉る妙法 仏界は本 唱うる我等九界は迹なり、妙覚より理即の凡夫までなり、実の十界互具の勝劣とは是なり。

下種境智俱実の本迹

脱の境智は迹 種の境智は本なり、名字即の境智は境智俱に本・觀行即の境智は境智俱に迹なり云云。

意は十界の仏性只一口に呼び顯すなり、本因口唱の勝る南無妙法蓮華經なり、初心成仏抄の如きなり、弘一に云く理造作に非ざる故に天真と曰い証智 円明の故に独朗と云う云云、久遠の理と今日の理と理に浩作無し、然れも久遠は事上の理なり今日は理上の理なり故に知んぬ本因妙の理は勝れ今日日本果妙の理は劣るなり是理の本迹なり是の故に独朗と云うなり、又云く独一法界の故に絶待と名く云云。

天台は唯大綱を存して綱目を事とせず此の釈の意は大綱は本綱目は迹なり、天台・伝教の修行は綱目・日蓮・日興等の修行は大綱なり云云、如來秘密神通之力意得可し是事理の如來の本迹なり、秘密の如來は理性の如來なり、我等なり、神通の如來は世尊なり秘密は本地神通は垂迹なり、世世以来常受我化 我本行菩薩道所成壽命今猶未盡復倍上數云云。

本迹勝劣其理甚遠なり、仏若し説かずんば弥勒尚暗し何に況や下地をや何に況や凡夫をや、本仏本化乃能究尽云云、妙樂云く具騰本種 本勝迹劣 故に但名に於て以て本迹を分つ三種名字 妙法事行の勝劣なる所を判ずるなり本迹は身に約し位に約す久遠名字即の身と位との判なり本従り迹を垂れ迹は本に依る迹は究竟に非ず、玄の一に開示悟入是れ迹の要なりと雖も若し顕本し已れば即ち本要と成るなり、籤の一に若し迹中の事理乃至權實無くんば何ぞ能く長寿の本を顕さん云云。

已上程の本迹勝劣畢んぬ

右此の血脈は本迹勝劣其の数一百六箇之を注す數量に就て表事有り之を覚知すべし 釈迦諸仏出世の本懷 眞実 眞実 唯為一大事の秘密なり、然る間 万年救護の為に之を記し留む。

就中六人の清弟を定むる表事は先先に沙汰するが如し云云、但し直授結要付属は一人なり、白蓮阿闍梨日興を以て惣貫首と為して日蓮が正義悉く以て毛頭程も之を残さず悉く付属せしめ畢んぬ、上首 己下並に末弟等異論無く尽未来際に至るまで予が存日の如く日興嫡嫡 付法の上人を以て惣貫首と仰ぐ可き者なり。

又五人並に己下の諸僧等日本乃至一閻閻浮捏の外 万国に之を流布せしむと雖も日興 嫡嫡 相承の臯茶羅を以て本堂の正本尊と為す可きなり所以は何ん在世滅後殊なりと雖も付属の儀式之同じ曹えば四大六万の直弟の大昔属有りと雖も上行儀棒を以て結要の大導師と定むるが如し、今以て是くの如し六人以下数輩の弟子有りと雖も日興を以て結要付属の大将と定むる者なり。

又弘長配流の日も文永流罪の時も其の外語処の大難の折節も先陣をかけ日蓮に影の形に随うが如くせしなり誰か之を疑わんや、又延山地頭発心の根元は日興教化の力用なり、遁世の事甲斐の国三牧は日興衆志の故なり。

又御本尊書写の事 予が顕し奉るが如くなるべし、若し日蓮御判と書かずんば天稗地蝼もよも用い給わじ 上行 無辺行と持国と淨行・安立行 と毘沙門との間には若悩乱者 頭破七分 有供養者・福過十号と之を害す可きなり、經中の明文等意に任す可き可き。

又立つ浪吹く風万物に洗いて本迹を分け勝劣を弁す可きなり。

法華本門宗血脈相承事

本因妙の行者日蓮之を記す。

予が外用の師・伝教大師生歳四十二歳の御時・仏立寺天台山 仏立寺の大和尚に値い奉り義道を落居し生死一大事の秘法を決したもうの日、大唐の貞元二十一年太歳乙酉五月三日・三大章疏を伝え各七面七重の口決を以て治定し給えり、所謂玄義七面の決とは正釈五重列名に約して決したもう。

一に依名判義の一面・名とは法の分位に於いて施設す・体とは宰主を義と為す・宗とは所作の究竟なり、受持本因の所作に由つて口唱本果の究竟を得、用とは証体本因・本果の上の功能德行なり、教とは誠を義と為す・誠とは本の為の迹為れば迹は即ち有名無実無得道なるを実相の名題は本・迹同じければ本・迹一致と思惟す可き事を大に誠んが為に三種の教相を起て種熟脱の論不論を立つる者なり、經文・解・釈・明・白なり、此くの如く文・文・句句の名・妙・正の深義・本・迹・勝・劣の本意を顕し給う者なり、然りと雖も天台・傳・教の御弘通は偏に理の上の法相・迹・化・付・属・像・法の理位・觀・行・五品の教主なれば迹を表と為して衆を救い、本を隠して裏に用る者なり甚深甚深秘す可し秘す可し。

二に仏意・機情・二意の一面、仏意は觀行・相似を本と為し機情は理即・名字を本と為す、何れも体用を離れず体用は法華の心智に依つて一代五時の次第・淺・深を開拓す、次に機情とは大通・結・縁の衆の為に四味の調養を設け法華に來入す、本・迹・二門乃至文・文・句句此の二意を以て分別す可き者なり。

三に四重・淺・深の一面、名の四重有り・一には名・体・無・常の義・爾・前・の・諸・經・諸・宗・なり、二には体・実・名・假・迹・門・始・覺・無・常・なり、三には名・体・俱・實・本・門・本・覺・常・住・なり、四には名・体・不・思・議・是・れ・觀・心・直・達・の・南・無・妙・法・蓮・華・經・なり、湛・然・の・云・く

「雖脱在現・具騰本種」云云次に体の四重とは一に三諦隔歴の体・爾前權教なり、二に理性円融の体・迹門十四品なり、三に三千本有の体・本門十四品なり、四に自性不思議の体・我が内証の寿量品・事行の一念三千なり、次に宗の四重とは一に因果異性の宗・方便權教なり、二に因果同性の宗・是れ迹門なり、三に因果並常の宗・即ち本門なり、四に因果一念の宗・文に云く「芥爾も心有れば即ち三千を具す」と、是れ即ち末法純円・結要付屬の妙法なり云云、次に用の四重とは一に神通幻化の用・今經已前に明かす所の仏菩薩・出仮利生の事、二に普賢色身の用・即ち一身の中に於て十界を具する事なり本・迹一代五時に亘る、三に無作常住の用・証道八相有り無作自在の事なり、四に一心の化用・或説己身等なり、次に教の四重とは一に但頭隔理の教・權小なり、二には教即實理の教・迹門なり、三には自性会中の教・応仏の本門なり、四には一心法界の教・寿量品の文の底の法門・自受用報身如來の眞實の本門・久遠一念の南無妙法蓮華經・雖脱在現具騰本種の勝劣是なり。

第四に八重淺深の一面なり、名の八重とは一に名体永別の名・二に名体不離の名・三に従体流出の名・四に名体具足の名・五に本分常住の名・六に果海妙性の名・七に無相不思議の名・八に自性己己の名・乃至教知る可し云云、文に任せて思惟す可きなり。

第五に還住当文の一面、四八の淺深を以て本・迹勝劣を知る可し。

第六に但入己心の一面、始め大法東漸より第十の判教に至るまで文の生起を闇おき一向に心理の勝劣に入れて正意を成す可し、謂く大法とは即ち行者の己心の異名なり云云、釈の意は文義の広博を離れて首題の理を專にすと釈し給うなり。

第七に出離生死の一面、心は一代応仏の寿量品を迹と爲し内証の寿量品を本と爲し釈尊久遠名字即の身と位とに約して南無妙法蓮華經と唱え奉る是を出離生死の一面と名く、本・迹約身約位の釈之を思つ可き者なり已上。

玄文畢る。

文句の七面の決とは、一に依名の一面、其の義上の如し、二に感應の二面、三時弘經に亘る可し、爾前・迹門の正像二千年弘經の感應より本門末法弘通の感應は眞實眞勝なり、三に四教の一面、四に五時の一面、五に本迹の一面、六に体用の一面、七に入己心の一面、悉く皆其の心前に同じ、智威大師の伝には玄義・文句の両部には爾前・迹門に各三十重の浅深を以て口決し給えり、具には伝教大師七面決の如し。

又摩訶止觀一部には十重顯觀を立てて是を通じ給えり、一は待教立觀、爾前・本迹の三教を破して不思議実理の妙法蓮華經の觀を立つ、文に云く円頓者初緣実相と云云、迹門を理具の一念三千と云う脱益の法華は本迹共に迹なり、本門を事行の一念三千と云う下種の法華は独一の本門なり、是を不思議実理の妙觀と申すなり、二に廢教立觀、心は權教並に迹執を捨て本門首題の理を取つて事行に用いよとなり、三に開教顯觀、文に云く一切諸法・

本是仏法三諦の理を具するを名けて仏法と爲す云何んぞ教を除かん云云文意は觀行理觀の一念三千を開して名字事行の一念三千を顯す、大師の深意・釈尊の慈悲・上行所伝の秘曲是なり、四に会教顯觀・教相の法華を捨てて觀心の法華を信ぜよと、五に住不思議顯觀・文に云く理は造作に非ず故に天真と曰う、証智円明なるが故に独朗と云う云云、釈の意は口唱首題の理に造作無し、今日熟脱の本迹二門を迹と爲し久遠名字の本門を本と爲す、信心強盛にして唯余念無く南無妙法蓮華經と唱え奉れば凡身即仏身なり、是を天真独朗の即身成仏と名く。

問うて曰く前代に此の法門を知れる人之有りや、答えて曰く之有り、求めて云く誰人ぞや、示して云く釈尊是なり、尋ねて云く仏を除き奉つて余に之を知れる人師論師有りや、答えて曰く天台の云く「天親・竜樹・内鑒冷然・外適時宜」と、今日南無妙法蓮華經は南岳・天台・妙樂・伝教の内鑒冷然・外適時宜なり、内鑒冷然・外適時宜の修行の日は本迹一致なり、有智無智を嫌わず円頓者初緣実相の理は造作に非ざる故に天真と曰う、証智円明の故に

独朗と曰うと云つて理位觀行に趣かしめ利益を為し末法の時を待つ者なり、故に天台云く「但當時大利益を獲るのみに非ず後五百歳遠く妙道に達」と云云、天台章安・妙樂・伝教等の大聖は内証は本迹勝劣、外用は本迹一致なり、其の故は教相も觀心も相似觀行解了の大師時機亦像法なり、付属は即妄授余人御身も亦迹化の衆觀音・妙音・文殊・藥王等の化身なり、今末法は本化の薩上行等の出世の境・本門流宣の時尅なり、何ぞ理觀を用いて事行を修せざらんや、予が所存は内証・外用共に本迹勝劣なり、若し本迹一致と修行せば本門の付属を失う物怪なり。

本迹の不同は処・処に之を書す、然りと雖も宿習拙き者本迹に迷倒せんか若し本迹勝劣を知らずんば未來の惡道最も不便なり宿業を恥じず還つて予を恨む可きか、我が弟子等の中にも天台・傳教の解了の理觀を出でず、本迹に就て一往勝劣再往一致の謬義を存して自他を迷惑せしめんの条・宿習の然らしむる所か、閻浮提第一の秘事為りと雖も万年救護の爲に之を記し留る者なり、我が未來に於て予が佛法を破らん爲に一切衆生の元品の大石・大六天の魔王・師子身中の蝗蟲と成つて名を日蓮に仮りて本迹一致と云ふ邪義を申し出して多の衆生を當に惡道に引くべし、若し道心有らん者は彼等の邪師を捨てて宜く予が正義に隨うべし、正義とは本迹勝劣の深秘具騰本種の實理なり、日蓮一期の大事なれば弟子等にも朝な夕なに教え亦一期の所造等悉く此の義なり、然りと雖も迹執を出でず・或は輕見惑或は蔑惡惑或は癡塵沙惑或は迷無明惑、故に日蓮が立義を用いざるが予が教相・觀心は理即・名字・愚惡愚見の爲なり。

日蓮は名字即の位・弟子檀那是理即の位なり、上行・所伝・結要・付属の行儀は教觀判乘・皆名字即・五味の主の修行なり、故に教相の次第要用に依る可し唯大綱を存する時は余は綱目を事とせず彼は綱目を教相の主此れは大綱首題の主恐くは日蓮の行儀には天台・傳教も及ばず、何に況や他師の行儀に於てをや、

唯在世八箇年の儀式を移して滅後末法の行儀と為す、然りと雖も仏は熟脱の教主某は下種の法主なり、彼の一品二半は舍利弗等の為には観心たり、我等凡夫の為には教相たり、理即短妄の凡夫の為の観心は余行に渡らざる南無妙法蓮華經是なり、是くの如く深義を知らざる僻人出来して予が立義は教相辺外と思う可き者なり、此等は皆宿業の拙き修因感果の至極せるなるべし、彼の天台大師には三千人の弟子ありて章安一人朗然なり、伝教大師は三千人の衆徒を置く義真已後は其れ無きが如し、今以て此くの如し数輩の弟子有りと雖も疑心無く正義を伝ふる者は希にして二の小石の如し秘す可きの法門なり。

第六に住教顕観七に住教非観八に覆教顕観九に住教用観十に住観用教此の五重は上の五重の如し思惟す可し。

問うて云く本迹雖殊不思議一本迹の教に於て別して不思議の観理を顕わす故にと云云、機情に約すれば本迹に於て久近の異有る可し、是れ一往の浅義なり、内証に約して之を論ずれば勝劣有る可からず再往の深義は不思議一なり云云如何が意を得可けんや、答えて云く住教顕観は煩惱即菩提住教非観は法性寂然覆教顕観は名字判教住教用観は不思議一住観用教は以顯妙円と申す大事是なり、教観不思議天然本性の処に独一法界の妙観を立つ是を不思議の本迹勝劣と云う亦絶對不思議の内証不可得言語道断の勝劣は天台・妙樂・伝教の残す所我が家の秘密観心直達の勝劣なり、迹と云う名ありといえども有名無実本無今有の迹門なり、実に不思議の妙法は唯寿量品に限る故に不思議一と釈するなり、迹門の妙法蓮華經の題号は本門に似ると雖も義理天地を隔つ成仏亦水火の不同なり、久遠名字の妙法蓮華經の朽木書なる故を顕さんが為に一と釈するなり末学疑網を残すこと勿れ、日蓮靈山會上、多宝塔中に於て親たり釈尊より直授し奉る秘法なり、甚深甚深秘す可し秘す可し伝う可し伝う可し。

摩訶止觀七面口決とは依名判義 附文元意 寂照一相・教行証 六九二識 絶諸思慮 出離生死の一面已上、一切諸法・

從本已來 不生不滅・性相凝然 釈迦閉口 身子絶言云云、是は迹門天台 止觀の内証なり、本門日蓮の止觀は釈迦は

口を開き文殊は言語す 迹門不思議 不可説 本門不思議可説の証拠の釈是なり、亦三大部に於て一同十異・

四同六異之有り、伝教仏立寺より之を口決す、一同とは名同なり、十異とは名同義異 所依異 觀心異 傍正異 用教異

・對機異 蹟本理異・修行異 相承異・元旨異、四同とは名同 義同 所依 同所 蹟同なり、六異とは釈異 大綱綱目異・

本末異 觀心異 教内外觀異 自行化他異 是なり、今要を以て之を言わば迹本觀心同名異義なり始終 本末共に修行も

覺道も時機も感応も皆勝劣なり。

此の下・二十四番勝劣なり、彼の本門は我が迹門 彼の勝は此の劣彼の深義は予が浅義 彼の深理は此の浅理 彼が極位は

此の浅位 彼の極果は此の初心 彼の觀心は此の教相 彼の台星の国に出生す 此れは日天の国に出世す 彼は藥王 此れ

は上行 彼は解了の機を利す 此れは愚惡の機を益す 彼の弘通は台星所居の高嶺なり 此の弘經は日王 能住の高峰な

り 彼は上機に教え 此れは下機を訓ず 彼は一部を以て本尊と為し 此れは七字を本尊と為す 彼は相對開會を表と為し

此れは絶對開會を表と為す 彼は熟脱此れは下種 彼は衆機の為に円頓者初縁実相と示し 此れは万機の為に南無

妙法蓮華經と勸む 彼は惡口怨嫉 此れは遠島流罪 彼は一部を誦誦すと雖も二字を読まざること之在り 此れは文文句

句 悉く之を読む 彼は正直の妙法の名を替えて一心三觀と名く 有の儘の大法に非ざれば帶權の法に似たり 此れは信謗

彼此 決定成菩提 南無妙法蓮華經と唱えかく、彼は諸宗の謬義を粗書き顯すと雖も未だ言說せず 此れは身命を惜ま

ず 他師の邪義を糾し三類の強敵を招く 彼は安樂普賢の説相に依り 此れは勸持不輕の行相を用ゆ 彼は一部に勝劣を立

て 此れは一部を迹と伝う 彼は応仏のいきをひかう 此れは寿量品の文底を用ゆ 彼は應仏昇進の自受用報身の

一念三千一心三觀 此れは久遠元初の自受用報身無作本有の妙法を

直に唱つ。

此れ等の深意は迹化の衆 普賢 文殊 觀音 藥王等の大菩薩にも付屬せざる所の大事なれば知らざる所の秘法なり況や凡師に於てをや。

若し末法に於て本迹一致と修行し所化等に教ゆる者ならば我が身も五逆罪を造らずして無間に墮ち其れに随從せんともがらも阿鼻に沈まん事 疑 無き者なり、此の書一見の人人は理 普賢智文殊 一言の薩 生死絶断の際 定光覺悟の大菩薩なり、伝教云く文殊の利剣は六輪に通じ十二の生類を切断す、一刀を下して 妙法 万方に勅するに自然に由お三諦を出だす見聞覺知に明なり此の一言の三際を示すに一言に如かず、若し未達の者も一頌を開くに題目三般三諦同じく通知せざること無し、生仏自ら一現なる是を一言の妙旨一教の玄義と謂う云云、天台の云く「一言三諦刹那成道 半偈成道」と云云、伝教の云く「仏界の智は九界を境と為し九界の智は仏界を境と為す境智互に冥薰して凡聖常恒なる是を刹那成道と謂う、三道即三徳と解れば諸悪に真善なる是を半偈成道と名く、今会釈して云く諸仏菩薩の定光三昧も凡聖一如の証道刹那半偈の成道も我が家の勝劣 修行の南無妙法蓮華經の一言に摂し尽す者なり、此の血脉を列ぬる事は末代浅学の者の予が仮字の消息を蔑如し天台の漢字の止觀を見て眼目を迷わし心意を驚動し或は仮字を漢字と成し、或は止觀明靜 前代未聞の見到耽り本迹一致の思を成す、我が内証の寿量品を知らずして止觀に同じ但自見の僻見を本として予が立義を破失して惡道に墮つ可き故に天台三大章疏の奥伝に屬す、天台伝教等の秘し給える正義 生死一大事の秘伝を書き顯し奉る事は且は恐れ有り且は憚り有り、広宣流布の日公亭に於て心に之を披覽し奉るべし、会通を加える事は且は広宣流布の爲且は末代浅学の爲なり又天台伝教の釈等も予が眞実の本懷に非ざるか、未來嬰兒の弟子等彼を本懷かと思つべきものか。

去る文永の免許の日 爾前・迹門の謗法を対治し本門の正義を立て被れば不日に豐歳ならむと申せしかは聞く人毎

に舌を振り耳を塞ぐ、其の時方一人も無く唯我と日蓮与我日興計りなり。

問うて云く、寿命品文底の大事と云う秘法如何、答えて云く、唯密の正法なり、秘す可し秘す可し、一代応仏のいきをひかえたる方は理の上の法相なれば、一部共に理の一念三千迹の上の本門、寿命ぞと得意せしむる事を脱益の文の上と申すなり、文の底とは久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず、直達の正觀事行の一念三千の南無妙法蓮華經是なり、權実は理今日本迹理なり、本迹は事久遠本迹事なり、亦權實は約智約教、一代応仏本迹、本迹は約身約位、名字久遠本迹、亦云く、雖脱在現具騰本種といへり、釈尊久遠名字即の位の御身の修行を末法今時、日蓮が名字即の身に移せり、理は造作に非ず、故に天真と曰い証智円明の故に独朗と云うの行儀本門立行の血脈之を注す秘す可し秘す可し。

又日文字の口伝、産湯の口決、二箇は両大師の玄旨にあつ、本尊七箇の口伝は七面の決に之を表す、教化弘經の七箇の伝は弘通者の主要なり、又此の血脈並に本尊の大事は日蓮嫡嫡座主伝法の書・塔中相承の稟承、唯授一人の血脈なり、相構え相構え秘す可し秘す可し、伝う可し、法華本門宗血脈相承畢んぬ。

弘安五太歳壬午十月十一日

日蓮 在御判

御名乗りの事、始めは是生・実名は蓮長と申し奉る後には日蓮と御名乗り有る御事は悲母梅菊女の重女の御名なり平の畠山殿の類にて御座す云云法号妙蓮禅尼の御物語り御座す事には、我に不思議の御夢想あり、清澄寺に通夜申したりし時汝が志真に神妙なり一閻浮提第一の宝を与えんと思ふなり、東条片海に三国の太夫と云う者あり是を夫と定めよと云云、其の歳の春三月廿四日の夜なり正に今も覚え侍るなり。

我父母に後れ奉りて已後詮方なく遊女の如くなりし時御身の父に嫁げり、或夜の靈夢に曰く叡山の頂に腰をかけて近江の湖水を以て手を洗つて富士の山より日輪の出でたもつを懷き奉ると思つて打ち驚いて後月水留ると夢物語りを申し侍れば、父の太夫我も不思議なる御夢想を蒙むるなり、虚空蔵菩薩貌吉き児を御肩に立て給う

、此の少人は我が為には上行菩提薩なり日の下の人のは生財摩訶薩なり、亦一切有情の為には行く末三世常恒の大導師なり、是を汝に与えんとしたもつと見て後御事懷妊の由を聞くと語り相いたりき、さてこそ御事は聖人なれ。

又産生まるべき夜の夢に富士山の頂に登つて十方を見るに明なる事掌の内を見るが如し三世明白なり、梵天・帝釈・四天王等の諸天悉く来下して本地自受用報身如来の垂迹・上行菩薩の御身を凡夫地に謙下し給う御誕生は唯今なり、無熱池の主阿那婆達多竜王八・功德水を応に汲み来るべきなり、当に産湯に浴し奉るべしと

諸天に告げ給えり、仍て竜神王即時に青蓮華を一本荷い来れり、其の蓮より清水を出して御身を浴し進らせ侍りけり、其の余れる水をば四天下に灑ぐに其の潤いを受くる人畜草木国土世間悉く金色の光明を放ち四方

草木花発らき菓成る。

男女座を並べて有れども煩惱無く淤泥の中より出れども塵泥に染まず、譬えば蓮華の泥より出でて泥に染まざるが如し、人天竜畜共に白き蓮を各手に捧げて日に向つて今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子、唯我一人能為救護と唱え奉ると見て驚けば則聖人出生し給えり、每自作是念、以何令衆生得入無上道速成就仏身と苦我き給う。我少し寐みし様なりし時梵帝等の諸天一同音に唱えて言く善哉善哉善日童子、末法教主釈迦仏と二度唱えて作礼して去し給うと寤に見聞きしなりと慥に語り給いしを聞し食しさては某は日蓮なりとの給いしなり。

聖人重ねて曰う様は日蓮が弟子檀那等、悲母の物語りと思うべからず即ち金言なり其の故は予が修行は兼ねて母の靈夢にありけり、日蓮は富士山自然の名号なり、富士は郡名なり実名をば大日蓮華山と云うなり、我中道を修行する故に是くの如く国をば日本と云い神をば日神と申し仏の童名をば日種太子と申し予が童名をば善日、仮名は是生、実名は即ち日蓮なり。

久遠下種の南無妙法蓮華經の守護神は我國に天下り始めし国は出雲なり、出雲に日の御崎と云う所あり、天照太神始めて天下り給う故に日の御崎と申すなり。

我が釈尊法華經を説き顯し給いしより已来十羅刹女と号す、十羅刹と天照太神と釈尊と日蓮とは一体の異名本地垂迹の利益広大なり、日神と月神とを合して文字を訓ずれば十なり、十羅刹と申すは諸神を一体に束ね合せたる深義なり、日蓮の日は即日神、昼なり蓮は即月神、夜なり、月は水を縁とす蓮は水より生ずる故なり、又是生とは日の下の人を生むと書けり。

日蓮は天上天下の一切衆生の主君なり父母なり師匠なり、今久遠下種の寿命品に云く「今此三界皆是我有、主君の義なり其中衆生悉是吾子、父母の義なり而今此処多諸患難、国土草木唯我一人能為救護、師匠の義なり」と云えり、三世常恒に日蓮は

今此三界の主なり、日蓮は大恩以事希有、憐愍教化利益我等無量億劫誰能報者なるべし。

若し日蓮が現在の弟子並びに未来の弟子等の中に日文字を名乗の上の字に置かずんば自然の法罰を蒙ると知るべし、予が一期の功德は日文字に留め置くと御説法ありし儘日興謹んで之を記し奉る。

聖人の言く此の相承は日蓮嫡嫡一人の口決唯授一人の秘伝なり神妙神妙とのたまいて留め畢んぬ。

与義浄房浄顕房

於鎌倉

法華經は一代聖教の肝心八万法蔵の依りどころなり、大日經華嚴經般若經深密經等の諸の顯密の諸經は震旦・月氏・竜宮天上十方世界の国土の諸仏の説教恒沙塵数なり、大海を硯の水とし三千大千世界の草木を筆としても書き尽しがたき經經の中をも或は此れを見或は計り推するに法華經は最第一におはします、而るを印度等の

宗日域の間に仏意を窺はざる論師・人師多くして或は大日經は法華經に勝れたり、或る人人は法華經は大日經に劣れるのみならず華嚴經にも及ばず、或る人人は法華經は涅槃經般若經深密經等には劣る、或る人人は辺辺あり互に勝劣ある故に、或る人の云く機に随つて勝劣あり時機に叶は勝れ叶はざれば劣る、或る人の云く有門よ

り得道すべき機あれば空門をそしり有門をほむ余も是を以て知るべしなど申す、其の時の人人の中に此の法門を申しやぶる人なければおろかなる国王等深く是を信ぜさせ給ひ田畠等を寄進して徒党あまたになりぬ、其の義久く旧ぬれば只正法なんめりと打ち思つて疑ふ事もなく過ぎ行く程に末世に彼等が論師・人師より智慧賢き人

出来して、彼等が持つところの論師・人師の立義一一に或は所依の經經に相違するやう或は一代聖教の始末浅深等を弁へざる故に専ら經文を以て責め申す時、各各宗宗の元祖の邪義扶け難き故に陳し方を失ひ、或は疑つ

て云く論師・人師定めて經論に証文ありぬらん我が智及ばざれば扶けがたし、或は疑つて云く我が師は上古の賢哲なり今我等は末代の愚人なりなど思ふ故に有徳高人をかたらひえて怨のみなすなり。

しかりといへども予自他の偏党をなげすて論師・人師の料簡を闇いて専ら經文によるに法華經は勝れて第一におはすと思得て侍るなり、法華經に勝れておはする御經ありと申す人出来候はば思食べし、此れは相似の經文を

見たがえて申すか又人の私に我と経文をつくりて事を仏説によせて候か、智慧あるかなる者并わきまえずして仏説と号するなんどと思食すべし、慧能が壇經善導が觀念法門經天竺震旦日本国に私に經を説きをける邪師其の数多し、其の外私に経文を作り経文に私の言を加えんとせる人人是れ多し、然りと雖も愚者は是を真と思ふなり、譬えば天に日月にすぎたる星有りなど申せば眼無き者はさもやなど思はんが如し、我が師は上古の賢哲

汝は末代の愚人など申す事をば愚なる者はさもやと思ふなり、此の不審は今に始りたるにあらず陳隋の代に智法師と申せし小僧一人侍りき後には二代の天子の御師天台智者大師と号し奉る、此の人始いやりし時但漢土五百余年の三藏・人師を破るのみならず月氏・一千年の論師をも破せしかば南北の智人等雲の如く起り

東西の賢哲等星の如く列りて雨の如く難を下し風の如く此の義を破りしかども終に論師・人師の偏邪の義を破して天台一宗の正義を立てにき、日域の桓武の御宇に最澄と申す小僧侍りき後には佛教大師と号し奉る、欽明已来の二百余年の諸の人師の諸宗を破りしかは始は諸人いかりをなせしかども後には一同に御弟子となり

にき、此等の人人の難に我等が元祖は四依の論師上古の賢哲なり汝は像末の凡夫愚人なりとこそ難じ侍りしか、正像末には依るべからず実經の文に依るべきぞ人には依るべからず専ら道理に依るべきか、外道仏を難じて云く、汝は成劫の末住劫の始の愚人なり我等が本師は先代の智者二天三仙是なりと申せしかども終に九十五種の外道とこそ捨てられしか。

日蓮八宗を勘へたるに法相宗・華嚴宗・三論宗等は權經に依つて或は実經に同じ或は実經を下せり、是れ論師・人師より誤りぬと見えぬ、俱舎・成実の子細ある上律宗などは小乗最下の宗なり、人師より論師權大乘より実大乘經なれば真言宗・大日經等は未だ華嚴經等に及ばず何に況や涅槃・法華經等に及ぶべしや、而るに善無畏・三藏は華嚴・法華・大日經等の勝劣を判ずる時・理同事勝の謬・釈を作りしより已來或はおこりをなして法華經は

華嚴經にも劣りなん何に況や真言經に及ぶべしや、或は云く印・真言のなき事は法華經に諍ふべからず、或は云く天台宗の祖師多く真言宗を勝ると云い世間の思いも真言宗勝れたるなんめりと思へ、日蓮此の事を計るに人多く迷ふ事なれば委細にかんがへたるなり、粗余処に注せり見るべし又志あらん人人は存生の時習に伝ふべし人の多くおもふにはおそるべからず、又時節の久近にも依るべからず専ら經文と道理とに依るべし、淨土宗は曇鸞道綽善導より誤り多くして多くの人人を邪見に入れけるを日本の法然是をうけ取つて人ごとに念仏を信ぜしむるのみならず天下の諸宗を皆失はんとするを叡山三千の大衆南都興福寺東大寺の八宗よりは是をせく故に代代の國王勅宣を下し將軍家より御教書をなしてせけどもとどまらず、彌彌繁昌して返つて主上・上皇・万民等にいたるまで皆信状せり。

而るに日蓮は安房の国・東条片海の石中の賤民が子なり威徳なく有徳のものにあらず、なににつけてか南都北嶺のとどめがたき天子の虎牙の制止に叶はざる念仏をふせぐべきとは思へども經文を龜鏡と定め天台・伝教の指南を手ににぎりて建長五年より今年文永七年に至るまで十七年が間は賣めたるに日本国の念仏大体留り了ぬ

眼前に是れ見えたり、又口にすてぬ人人はあれども心計りは念仏は生死をはなるる道にはあらざりけると思ふ、禅宗以て是くの如し一を以て万を知れ真言等の諸宗の誤りをだに留めん事手ににぎりておぼゆるなり、況や当世

の高僧真言師等は其の智牛馬にもおとり螢火の光にもしかず只死せるもの手に弓箭をゆひつけねごとするものに物をとぶが如し、手に印を結び口に真言は誦すれども其の心中には義理を弁つる事なし、結句慢心は山の

如く高く欲心は海よりも深し、是は皆自ら經論の勝劣に迷ふより事起り祖師の誤りをたださざるによるなり、所詮智者は八万法蔵をも習ふべし十二部經をも学すべし、末代濁惡世の愚人は念仏等の難行・易行等をば抛つて一向に法華經の題目を南無妙法蓮華經と唱え給うべし、日輪東方の空に出でさせ給へ南浮の空皆明かなり

大光を備給へる故なり、螢火は未だ国土を照さず宝珠は懷中に持ぬれば万物皆ふらさずと云う事なし、瓦石は財をふらさず念仏等は法華經の題目に対すれば瓦石と宝珠と螢火と日光との如し。

我等が昧き眼を以て螢火の光を得て物の色を弁ふべしや、旁凡夫の叶いがたき法は念仏眞言等の小乗權教なり、又我が師釈迦如来は一代聖教乃至八万法蔵の説者なり、此の娑婆無仏の世の最先に出でさせ給いて一切衆生の眼目を開き給ふ御仏なり、東西十方の諸仏菩薩も皆此の仏の教なるべし、譬えば皇帝已前は人父をしらずして畜生の如し、堯王已前は四季を弁す牛馬の癡なるに同じかりき、仏世に出でさせ給はざりしには比丘。

比丘尼の二衆もなく只男女二人にて候いき、今比丘比丘尼の眞言師等大日如来を御本尊と定めて釈迦如来を下し念仏者等が阿弥陀仏を一向に持つて釈迦如来を抛てたるも教主釈尊の比丘比丘尼なり元祖が誤を伝え来るなるべし。

此の釈迦如来は三の故ましまして他仏にかはらせ給ひて娑婆世界の一切衆生の有縁の仏となり給ふ、一には此の娑婆世界の一切衆生の世尊にておはします、阿弥陀仏は此の国の大王にはあらず釈迦仏は譬えば我が国の主上のごとし先ず此の国の大王を敬つて後に他国の王をば敬ふべし、天照太神・正八幡宮等は我が国の本主なり迹化

の後神と顕れさせ給ふ、此の神にそむく人此の国の主となるべからず、されば天照太神をば鏡につつし奉りて内侍所と号す、八幡大菩薩に勅使有つて物申しあはさせ給いき、大覺世尊は我等が尊主なり先づ御本尊と定むべし、

二には釈迦如来は娑婆世界の一切衆生の父母なり、先づ我が父母を孝し後に他人の父母には及ぼすべし、例せば周の武王は父の形を木像に造つて車にのせて戦の大将と定めて天感を蒙り殷の紂王をうつ、舜王は父の眼の盲たるをなげきて涙をながし手をもつてのひしかば本のごとく眼あきにけり、此の仏も又是くの如く我等衆生の眼をば開仏知見とは開き給いしか、いまだ他仏は開き給はず、三には此の仏は娑婆世界の一切衆生の本師な

り、此の仏は賢劫第九人壽百歳の時中天竺淨飯大王の御子十九にして出家し三十にして成道し五十余年が間・一代
聖教を説き八十にして御入滅舍利を留めて一切衆生を正像末に救ひ給ふ、阿弥陀如来薬師 仏大日等は他土の仏にし
て此の世界の世尊にてはまします、此の娑婆世界は十方世界の中の最下の処譬えば此の国土の中
の獄門の如し、十方世界の中の十悪・五逆・誹謗・正法の重罪・逆罪の者を諸仏如来擯出し給ひしを釈迦如来此の土にあつめ
給ふ、三悪並びに無間・大城に墮ちて其の苦をつぐのひて人中天上には生れたれども其の罪の余残ありてややもすれば
正法を謗し智者を罵り罪つくりやすし、例せば身子は阿羅漢なれども瞋恚のけしきあり、畢陵は
見思を断ぜしかども慢心の形みゆ、難陀は婬欲を断じても女人に交る心あり、煩惱を断じたれども余残あり何に況や
凡夫にをいてをや、されば釈迦如来の御名をば能忍と名けて此の土に入り給うに一切衆生の誹謗をとがめずよく忍び
給ふ故なり、此等の秘術は他仏のかけ給へところなり、阿弥陀仏等の諸仏・世尊・悲願をおこさせ給ひ
て心にははちをおぼしめして還つて此の界にかよひ四十八願十二大願などは起させ給ふなるべし、觀世音等の他土の菩薩
も亦復是くの如し、仏には常平等の時は一切諸仏は差別なけれども常差別の時は各各に十方世界に土をしめて有縁
無縁を分ち給ふ、大通智勝仏の十六王子十方に土をしめて一に我が弟子を救ひ給ふ、其の中
に釈迦如来は此土に当り給ふ我等衆生も又生を娑婆世界に受けぬ、いかにも釈迦如来の教化をばはなるべからず而りと
いへども人皆是を知らず委く尋ねあきらめば唯我一人能為救護と申して釈迦如来の御手を離るべからず、而れば此の土の
一切衆生・生死を厭ひ御本尊を崇めんとおぼしめさば必ず先ず釈尊を木画の像に顕わして御本尊と定めさせ給いて其の
後力おはしまさば弥陀等の他仏にも及ぶべし。

然るを当世聖行なき此の土の人人の仏をつくりかかせ給うに先ず他仏をさきとするは其の仏の御本意にも釈迦如来の
御本意にも叶ふべからざる上世間の礼儀にもはづれて候、されば優填大王の赤梅檀いまだ他仏をばきざ

ませ給はず、千塔王の画像も釈迦如来なり、而るを諸大乘經による人人、我が所依の經經を諸經に勝れたりと思ふ故に教主釈尊をば次さまにし給ふ、一切の眞言師は大日經は諸經に勝れたりと思ふ故に此の經に詮とする大日如来を我等が有縁の仏と思ひ念仏者等は觀經等を信ずる故に阿彌陀仏を娑婆有縁の仏と思ふ、当世はことに善導・法然等が邪義を正義と思ひて淨土の三部經を指南とする故に十造る寺は八九は阿彌陀仏を本尊とす、在家・

出家一家十家百家千家にいたるまで持仏堂の仏は阿彌陀なり、其の外木画の像一家に千仏万仏まします大旨は阿彌陀仏なり、而るに当世の智者とおぼしき人人是を見てわざはひとは思はずして我が意に相叶ふ故に只称美讚歎の心のみあり、ただ一向惡人にして因果の道理をも弁す一仏をも持たざる者は還つて失なきへんもあり

ぬべし、我等が父母世尊は主師親の三徳を備えて一切の仏に擯出せられたる我等を唯我一人能為救護とはげませ給ふ、其の恩大海よりも深し其の恩大地よりも厚し其の恩虚空よりも広し、二つの眼をぬいて仏前に空の星の数備ふとも身の皮を剥いで百千万天井にはるとも涙を闕伽の水として千万億劫仏前に花を備ふとも身の肉血を無量劫仏前に山の如く積み大海の如く湛ふとも此の仏の一分の御恩を報じ尽しがたし。

而るを当世の僻見の學者等設ひ八万法藏を極め十二部經を諳んじ大小の戒品を堅く持ち給ふ智者なりとも此の道理に背かば惡道を免るべからずと思食すべし、例せば善無畏三藏は眞言宗の元祖烏菴奈国の大王・仏種王の太子なり、教主釈尊は十九にして出家し給ひき此の三藏は十三にして位を捨て月氏七十箇国九万里を歩き回り

て諸經諸論諸宗を習ひ伝北天竺金粟王の塔の下にして天に仰ぎ祈請を致し給へるに虚空の中に大日如来を中央として胎藏界の曼荼羅顯れさせ給ふ、慈悲の余り此の正法を辺土に弘めんと思食して漢土に入り給ひ玄宗

皇帝に秘法を授け奉り早魃の時雨の祈をし給ひしかば三日が内に天より雨ふりしなり、此の三藏は千二百余尊の種子尊形三摩耶一事もくもりなし、当世の東寺等の一切の眞言宗一人も此の御弟子に非るはなし、而るに

此の三蔵一時に頓死ありき数多の獄卒来つて鉄繩七すぢ懸けたてまつり閻魔王宮に至る此の事第一の不審なり、いかなる罪あつて此の責に値ひ給ひけるやらん、今生は十悪は有りもやすらん五逆罪は造らず過去を尋ねれば大國の王となり給ふ事を勸つるに十善戒を堅く持ち五百の仏陀に仕給ふなり何の罪あらん、其の上十二にして位を捨て出家し給ひき閻浮第一の菩提心なるべし、過去現在の輕重の罪も滅すらん其の上月氏に流布する所の經論諸宗を習ひ極め給ひしなり何の罪か消えざらん、又真言密教は他に異なる法なるべし一印一真言なれども手に結び口に誦すれば三世の重罪も滅せずと云ふことなし、無量俱低劫の間作る所の衆の罪障も此の曼荼羅を見れば一時に皆消滅すところ申し候へ況や此の三蔵は千二百余尊の印真言を諳に浮べ即身成仏の觀道鏡に懸り兩部灌頂の御時大日覺王となり給ひき、如何にして閻魔の責に豫り給ひけるやらん、日蓮は顯密二道の中に勝れ

させ給ひて我等易易と生死を離るべき教に入らんと思ひ候ひて真言の秘教をあらあらず習ひ此の事を尋ね勸つるに一人として答をする人なし、此の人惡道を免れずば當世の一切の真言並びに一印一真言の道俗三惡道の罪を免るべきや。

日蓮此の事を委く勸つるに二つの失有つて閻魔王の責に予り給へ、一つには大日經は法華經に劣るのみに非ず涅槃經・華嚴經・般若經等にも及ばざる經にて候を法華經に勝れたりとする謗法の失なり、二つには大日如來は釈尊の分身なり而るを大日如來は教主・釈尊に勝れたりと思ひし僻見なり、此の謗法の罪は無量劫の間千二百余尊の法を行ずとも惡道を免るべからず、此の三蔵此の失免れ難き故に諸尊の印・真言を作せども叶はざりしかば

法華經第二譬喻品の今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子而今此處多諸患難唯我一人能為救護の文を唱へて鉄の繩を免れさせ給ひき、而るに善無畏已後の真言師等は日蓮經は一切經に勝るのみに非ず法華經に超過せり、或は法華經は華嚴經にも劣るなどと申す人もあり此等は人は異なれども其の謗法の罪は同じきか、又善無畏三蔵法華經と大日經と大事とすべしと深理をば同ぜさせ給ひしかども印と真言とは法華經は大日經に劣りけるとおぼせし僻見計りなり、其の

已後の眞言師等は大事の理をも法華經は劣れりと思へり、印眞言は又申すに及ばず謗法の罪遥にかさみたり、閻魔の責にて墮獄の苦を延ぶべしとも見えず直に阿鼻の炎をや招くらん、大日經

には本一念三千の深理なし此の理は法華經に限るべし、善無畏三藏天台大師の法華經の深理を読み出でさせ給ひしを盗み取つて大日經に入れ法華經の莊嚴として説かれて候大日經の印眞言を彼の經の得分と思へり、理も

同じと申すは僻見なり眞言印契を得分と思ふも邪見なり、譬えば人の下人の六根は主の物なるべし而るを我が財と思ふ故に多くの失出で来る、此の譬を似て諸經を解るべし劣る經に説く法門は勝れたる經の得分と成るべきなり。

而るを日蓮は安房の国・東条の郷清澄山の住人なり、幼少の時より虚空蔵菩薩に願を立てて云く日本第一の智者となし給へと云云、虚空蔵菩薩眼前に高僧とならせ給いて明星の如くなる智慧の宝珠を授けさせ給ひき、其のしるしにや日本国の八宗並びに禅宗念仏宗等の大綱粗同ひ侍りぬ、殊には建長五年の比より今文永七年に至る

まで此の十六七年の間禅宗と念仏宗とを難ずる故に禅宗念仏宗の学者蜂の如く起り雲の如く集る、是をつむる事一言二言には過ぎず結句は天台眞言等の学者自宗の廢立を習ひ失いて我が心と他宗に同じ在家の信をなせる事なれば彼の邪見の宗を扶けんが為に天台眞言は念仏宗・禅宗に等しと料簡しなして日蓮を破するなり、此れは日蓮を破する様なれども我と天台眞言等を失ふ者なるべし能く能く恥ずべき事なり。

此の諸經諸論諸宗の失を弁つる事は虚空蔵菩薩の御利生本師道善御房の御恩なるべし。龜魚すら恩を報ずる事あり何に況や人倫をや、此の恩を報ぜんが為に清澄山に於て仏法を弘め道善御房を導き奉らんと欲す、而るに此の人愚癡におはする上念仏者なり三惡道を免るべしとも見えず、而も又日蓮が教訓を用ふべき人にあらず、

然れども文永元年十一月十四日西条華房の僧坊にして見参に入りし時、彼の人の云く我智慧なければ請用の望もなし、
年老いていられなければ念仏の名僧をも立てず世間に弘まる事なれば唯南無阿弥陀仏と申す計りなり、又我が心より起こ
らざれども事の縁有つて阿弥陀仏を五体まで作り奉る是れ又過去の宿習なるべし、此の科に依つ
て地獄に墮つべきや等云云、爾時に日蓮意に念はく別して中違ひまいらす事無けれども東条左衛門入道蓮智が事に
依つて此の十余年の間は見奉らず但し中不和なるが如し、穩便の義を存じおだやかに申す事こそ礼儀なれとは思ひしかど
も生死界の習ひ老少不定なり又二度見参の事難かるべし、此の人の兄道義房義尚此の人に向つて
無間地獄に墮つべき人と申して有りしが臨終思ふ様にもましまさざりけるやらん、此の人も又しかるべしと哀れに思ひし
故に思い切つて強強に申したりき、阿弥陀仏を五体作り給へるは五度無間地獄に墮ち給ふべし其の故は正直捨方便の
法華經に釈迦如来は我等が親父阿弥陀仏は伯父と説かせ給ふ、我が伯父をば五体まで作り
供養せさせ給いて親父をば一体も造り給はざりけるは豈不孝の人に非ずや、中山人海人などが東西をしらず一善を
も修せざる者は還つて罪浅き者なるべし、当世の道心者が後世を願ふとも法華經 釈迦仏をば打ち捨て阿弥陀仏念仏なん
どを念念に捨て申さざるはいかがあるべからん、打ち見る处は善人とは見えなれども親を捨てて他人につく失免るべしと
は見えず、一向悪人はいまだ仏法に帰せず釈迦仏を捨て奉る失も見えず縁有つて信ず
る辺もや有らんずらん、善導法然並びに当世の学者等が邪義に就いて阿弥陀仏を本尊として一向に念仏を申す人人は
多生曠劫をふるとも此の邪見を翻へして釈迦仏法華經に歸すべしとは見えず、されば雙林最後の涅槃經に十惡五逆
よりも過ぎておそろしき者を出ださせ給ふに謗法闡提と申して二百五十戒を持ち三衣一鉢を身に纏る智者共の中にこ
そ有るべしと見え侍れとこまごまと申して候いしかば此の人もこころえづけに思いておはしき、傍座の人人もこころえづけ
にをもはれしかども其の後承りしに法華經を持たるるの由承りしかば此の人

邪見を 翻し給ふか善人に成り給いぬと悦び思ひ候処に又此の釈迦仏を造らせ給う事申す計りなし、当座には強なる様に有りしかども法華經の文のままに説き候いしかばかつおれさせ給へ、忠言耳に逆らい良薬口に苦しと申す事は是なり。

今既に日蓮師の恩を報ず定めて仏神納受し給はんか、各各此の由を道善房に申し聞かせ給ふべし、仮令強言なれども人をたすくれば実語・語なるべし、設ひ・語なれども人を損ずるは妄語・強言なり、当世・学匠等の法門は語・実語と人人は思食したれども皆強言妄語なり、仏の本意たる法華經に背く故なるべし、日蓮が念仏申す者は無間地獄に墮つべし・禅宗・真言宗も又謬の宗なりなんと申し候は強言とは思食すとも実語・語なるべし、例せば此の道善御房の法華經を迎釈迦仏を造らせ給う事は日蓮が強言より起る、日本国の一切衆生も亦復是くの如し、当世此の十余年已前は一向念仏者にて候いしが十人が二人は一向に南無妙法蓮華經と唱へ三人は両方になり、又一向念仏申す人も疑をなす故に心中に法華經を信じ又釈迦仏を書き造り奉る、是れ亦日蓮が強言より起る、譬えば栴檀は伊蘭より生じ蓮華は泥より出でたり而るに念仏は無間地獄に墮つと申せば当世牛馬の如くなる智者どもが日蓮が法門を仮染にも毀るは冀犬が師子王をほゝ癡猿が帝釈を笑ふに似たり。

文永七年

日蓮 花押

義浄房浄顕房

与円浄房 於佐渡

九月十二日に御勘気を蒙て今年十月十日佐渡の国へまかり候なり、本より学文し候し事は仏教をきはめて仏になり恩ある人をもたすけんと思ふ、仏になる道は必ず身命をすつるほどの事ありてこそ仏にはなり候らめとをしはからる、既に経文のごとく悪口・罵詈・刀杖・瓦礫・数数見擯出と説かれてかかるめに値い候こそ法華経をよむにて候らめと、いよいよ信心もおこり後生もたのもしく候、死して候はば必ず各各をもたすけたてまつるべし、天竺に師子尊者と申せし人は檀弥羅王に頸をはねられ提婆菩薩は外道につきころさる、漢土に竺の道生と申せし人は蘇山と申す所ながさる、法道三蔵は面になをやかれて江南と申す所ながされき、是れ皆法華経のとおく仏法のゆへなり、日蓮は日本国・東夷・東条・安房の国・海辺の旃陀羅が子なり、いたづらにくちん身を法華経の御故に捨てまいらせん事あに石に金をかふるにあらずや、各各なげかせ給うべからず、道善の御房にもかう申しきかせまいらせ給うべし、領家の尼御前へも御ふみと存じ候へとも先かかる身のふみなればなつかしやとおぼさざるらんと申しぬると便宜あらば各各御物語り申させ給い候へ

十月 日

日蓮花押

御法門の事委しく承はり候い畢んぬ、法華經の功德と申すは唯仏与仏の境界・十方分身の智恵も及ぶか及ばざるかの内証なり、されば天台大師も妙の一字をば妙とは妙は不可思議と名くと釈し給いて候なるぞ前御存知の如し、然れども此の經に於て重重の修行分れたり天台・妙楽・伝教等計りしらせ給う法門なり、就中く伝教大師天台の後身にて渡らせ給へとも人の不審を晴さんとや思し食しけん大唐決をつかはし給ふ事多し、されば今經の所詮は十界互具・百界千如・一念三千と云ふ事こそゆゆしき大事にては候なれ、此の法門は摩訶止觀と申す文にしろされて候、次に壽量品の法門は日蓮が身に取つたのみあることぞかし、天台・伝教等も粗しらせ給へとも言に出して宣べ給はず竜樹・天親等も亦是くの如し、壽量品の自我偈に云く「一心に仏を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜しまず」云云、日蓮が己心の仏界を此の文に依つて顯はすなり、其の故は壽量品の事の一念三千の三大秘法を成就せる事此の經文なり秘す可し秘す可し、觀山の大師渡唐して此の文の点を相伝し給う處なり、一とは一道清淨の義心とは諸法なり、されば天台大師心の字を釈して云く「一月三星・心果清淨」云云、日蓮云く「一とは妙なり心とは法なり欲とは蓮なり見とは華なり仏とは經なり、此の五字を弘通せんには不自信身命是なり、一心に仏を見る心を一にして仏を見る一心を見れば仏なり、無作の三身の仏果を成就せん事は恐くは天台・伝教にも越へ竜樹・迦葉にも勝れたり、相構・相構へて心の師とはなるとも心を師とすべからずと仏は記し給ひしなり、法華經の御為に身をも捨て命をも惜しまざれと強情に申せしは是なり、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

ぶんえい
文永十年五月二十八日

にちれんかおう
日蓮花押

ぎよんじ
義浄房御返事

一〇六 清澄寺大衆中

建治二年正月 五十五歳御作

893d

きよすみであたいしゅう
新春の慶賀自他幸甚幸甚、去年来らず如何定めて子細有らんか、抑参詣を企て候わば伊勢公の御房に十住心論・
ひそつほうやく
秘蔵宝鑰二教論等の真言の疏を借用候へ是くの如きは真言師蜂起の故に之を申す、又止観の第一第二御隨身候兼春
ふじりや
輔正記などや候らん、円智房の御弟子に観智房の持ちて候なる宗要集かしたび候へそれのみ

ひとびともう
ならずふみの候由も人人申し候いしなり早早に返すべきのよし申させ給へ今年は殊に仏法の邪正たださるべき年か浄願の
ごほう
御房義城房等には申し給うべし、日蓮が度度殺害せられんとし並びに二度まで流罪せられ頸を刎られんとせし事は別に
せけん
世間の失に候はず、生身の虚空蔵菩薩より大智慧を給わりし事ありき、日本第一の智者と

たまた
なし給へと申せし事を不便とや思し食しけん明星の如くなる大宝珠を給いて右の袖につけとり候いし故に一切経を見候い
しかば八宗並びに一切経の勝劣粗是を知りぬ、其の上真言宗は法華経を失う宗なり、是は大事なり先ず序分に禅宗と
なをうしやう
念仏宗の僻見を責めて見んと思ふ、其の故は月氏漢土の仏法の邪正は且らく之を置く日本国の法華経

せいぎ
の正義を失うて一人もなく人の悪道に墮つる事は真言宗が影の身に随うがごとく山山寺寺ごとに法華宗に真言宗を
あひそひて如法の法華経に十八道をそ懺法に阿弥陀経を加天台宗の学者の灌頂をして真言宗を正とし法華経を傍と
せし程に、真言経と申すは爾前権教の内の華嚴般若にも劣れるを慈覚弘法これに迷惑して或は法華経に同じ或は
勝れたりなど申して、仏を開眼するにも仏眼大日の印真言をもつて開眼供養するゆゑに日本国

木画の諸像皆無魂無眼の者となりぬ、結句は天魔入り替つて檀那をほろぼす仏像となりぬ王法の尽きんとするこれなり、此の悪真言かまくらに來りて又日本国をほろぼさんとす。

其の上禅宗・浄土宗などと申すは又いつばかりなき僻見の者なり、此れを申さば必ず日蓮が命と成るべしと存知せしかども虚空蔵菩薩の御恩をほつぜんがために建長五年四月二十八日安房の国・東条の郷清澄寺道善の房持仏堂の南面にして淨円房と申す者並びに少少の大衆にこれを申しはじめて其の後二十余年が間退轉なく申す、或は所を追ひ出され或は流罪等、昔は聞く不輕菩薩の杖木等を今は見る日蓮が刀劍に當る事を、日本国の有智・無智上下万人の云く日蓮法師は古の論師・人師大師先德にすぐるべからずと、日蓮この不審をはらさんがために

正嘉文永の大地震大長星を見て勘えて云く我が朝に二つの大難あるべし所謂自界叛逆難・他国侵逼難なり、自界は鎌倉に權の大夫殿御子孫どしうち出來すべし、他国侵逼難は四方よりあるべし、其の中に西よりつくせむべし、是れ偏に仏法が一国挙りて邪なるゆへに梵天帝釈の他國に仰せつけてせめらるるなるべし。

日蓮をだに用いぬ程ならば將門・純友・貞任・利仁・田村のやうなる將軍百千人ありとも叶ふべからず、これまことならずば真言と念佛等の僻見をば信ずべしと申しひろめ候いき、就中清澄山の大衆は日蓮を父母にも三宝にもをもひをとさせ給はば今生には貧窮の乞者とならせ給ひ後生には無間地獄に墮ちさせ給うべし故いかんと

なれば東条左衛門景信が悪人として清澄のかいしし等をかりとり房房の法師等を念佛者の所從にしなんとせしに日蓮敵をなして領家のかたつどとなり清澄・二間の二箇の寺東条が方につくならば日蓮・法華經をすてんと、せいじやうの起請をかにて日蓮が御本尊の手にゆいつけていのりて一年が内に両寺は東条が手をはなれ候いしな

り、此の事は虚空蔵菩薩もいかでかすてさせ給うべき、大衆も日蓮を心ずになもはれん人人は天にすてられたてまつらざるべしや、かつ申せば愚癡の者は我をのろつと申すべし後生に無間地獄に墮ちんが不便なれば申す

なり。

領家の尼ごぜんは女人なり愚癡なれば人人のいひをどせばさこそとましまし候らめ、されども恩をしらぬ人となりて後生に惡道に墮ちさせ給はん事こそ不便に候へども又一つには日蓮が父母等に恩をかほらせたる人なればいかにしても後生をたすけたてまつらんとこそいのり候へ法華經と申す御經は別の事も候はず我は過去五百塵点劫より先の仏なり、又舍利弗等は未來に仏になるべしと、これを信ぜざらん者は無間地獄に墮つべし、我のみかつ申すにはあらず多宝仏も証明し十方の諸仏も舌をいだしてかう候、地涌千界・文殊・觀音・梵天・帝釈・日月・四天・十羅刹・法華經の行者を守護し給はんと言ふれたり、されば仏になる道は別のやうなし過去の事未來の事を申しあてて候がまことの法華經にては候なり。

日蓮はいまだつくしを見ずえそしらず、一切經をもつて勘合候はずに値いぬ、もししからは各各不知恩の人なれば無間地獄に墮ち給うべしと申し候はたがひ候べきか、今はよし後をこらんぜよ日本国は當時のゆき對馬のやうになり候はんずるなり、其の時安房の国にむこが寄せて責め候はん時、日蓮房の申せし事の合うたりと申すは偏執の法師等が口すくめて無間地獄に墮ちん事不便なり不便なり。

正月十一日

日蓮花押

安房の国清澄寺大衆中

このふみはさと殿とすけあさり御房と虚空蔵の御前にして大衆ごとによみきかせ給へ

大日経をば善無畏・不空・金剛智等の義に云く「大日経の理と法華経の理とは同じ事なり但印と真言とが法華経は劣なり」と立てたり、良・和尚・広修・維・など申す人は大日経は華嚴経・法華経・涅槃経等には及ばず但方等部の経なるべし、日本の弘法大師云く「法華経は猶華嚴経等に劣れりまして大日経には及ぶべからず」等云、又云く「法華経は釈迦の説・大日経は大日如来の説・教主既にことなり又釈迦如来は大日如来の御使として顕教をとき給うこれは密教の初門なるべし」或は云く「法華経の肝心たる寿量品の仏は顕教の中にしては仏なれども密教に対すれば具縛の凡夫なり」と云云。

日蓮勸えて云く「大日経は新訳の経唐の玄宗皇帝の御時開元四年に天竺の善無畏三蔵もて来る、法華経は旧訳の経・後秦の御宇に羅什三蔵もて来る其の中間三百余年なり、法華経亘て後百余年を経て天台智者大師・教門には五時四教を立てて上五百余年の学者の教相をやぶり觀門には一念三千の法門をさとりて始めて法華経の理を得たり、天台大師已前の三論宗・已後の法相宗には八界を立て十界を論ぜず一念三千の法門をば立つべきやうなし、華嚴宗は天台・已前には南北の諸師華嚴経は法華経に勝れたりとは申しけれども華嚴宗の名は候はず、唐の代に高宗の後、則天皇后と申す人の御時・法蔵法師・澄觀なども申す人・華嚴宗の名を立てたり、此の宗は教相に五教を立て觀門には十玄・六相なども申す法門なり、をびただしきやうにのみたりしかども澄觀は天台をはするやうにてなを天台の一念三千の法門をかりとりて我が経の心如工画師の文の心とす、これは華嚴宗は天台に落ちたりといふべきか又一念三千の法門を盗みとりたりといふべきか、澄觀は持戒の人・大小の戒を一塵をもやぶらざれ

ども一念三千の法門をばぬすみとれりよくよく口伝あるべし、真言宗の名は天竺にありやいなや大なる不審なるべし、但真言經にてありけるを善無畏等の宗の名を漢土にして付けたりけるかよくよくしるべし、就中善無畏等法華經と大日經との勝劣をはんずるに理同事勝の釈をばつくりて一念三千の理は法華經・大日經これ同じ、なんどいへども印と真言とが法華經には無ければ事法は大日經に劣れり、事相かけぬれば事理俱密もなしと存ぜり、今日本国及び諸宗の学者等並びにことに用ゆべからざる天台宗共にこの義をゆるせり例せば諸宗の人人をばそねめども一同に弥陀の名をとなへて自宗の本尊をすてたるがごとし天台宗の人人は一同に真言宗に落ちたる者なり。

日蓮理のゆくところを不審して云く善無畏三蔵の法華經と大日經とを理は同じく事は勝れたりと立つるは天台大師の始めて立て給へる一念三千の理を今大日經にとり入れて同じと自由に判ずる条ゆるさるべしや、例せば先に人丸がほのぼのとあかしのつらのあさぎりにしまかくれゆくふねをしぞをもつとよめるを、紀のしく

ばう源のしたがつななどが判じて云く「此の歌はうたの父うたの母」等云云、今の人我うたよめりと申してほのぼのとなし乃至船をしぞをもつと一字をもたがずよみて我が才は人丸にとらずと申すをば人これを用ゆべしや、やまかつ海人などば用ゆる事もありなん、天台大師の始めて立て給へる一念三千の法門は仏の父・仏の

母なるべし、百年已後の善無畏三蔵がこの法門をぬすみとりて大日經と法華經とは理同なるべし、理同と申すは一念三千なりとかけるをば智慧かしこき人は用ゆべしや、事勝と申すは印・真言なしなんど申すは天竺の大日經・法華經の勝劣か漢土の法華經・大日經の勝劣か、不空三蔵の法華經の儀軌には法華經に印・真言をそへて訳

せり、仁王經にも羅什の訳には印・真言なし不空の訳の仁王經には印・真言これあり、此等の天竺の經經には無量の事あれども月氏漢土・国をへたててとをくことごとくもちて來がたければ經を略するなるべし、法華經

には印・眞言なければども二乗作仏・劫国名号・久遠実成と申すべきの事あり、大日経等には印・眞言はあれども二乗作仏・久遠実成これなし、二乗作仏と印・眞言とを並ぶるに天地の勝劣なり、四十余年の経経には一乗は敗種の人と一字・二字ならず無量無辺の経経に嫌はれ、法華経にはこれを破して二乗作仏を宣べたり、いつれの経経にか印・眞言を嫌うことばあるや、その言なければ又大日経にも其の名を嫌はず但印・眞言とけり、印と申すは手の用なり手仏にならずは手の印・仏になるべしや、眞言と申すは口の用なり口仏にならずは口の眞言・仏になるべしや、二乗の三業は法華経に値いたてまつらずは無量劫・千二百余尊の印・眞言を行ずとも仏になるべからず、勝れたる二乗作仏の事法をばとかずと申して劣れる印・眞言をとける事法をば勝れたりと申すは理によれば盗人なり事によれば劣謂勝見の外道なり、此の失によりて閻魔の責めをばかほりし人なり、後にいかへして天台大師を仰いで法華にうつりて悪道をば脱れしなり。

久遠実成なんどは大日経にはをもひもよらず、久遠実成は一切の仏の本地・譬・大海は久遠実成・魚鳥は千二百余尊なり、久遠実成なくば千二百余尊はつきくさの根なきがごとし夜の露の日輪の出でざる程なるべし、天台宗の人人この事を并・ずして眞言師にたばらかされたり、眞言師は又自宗の誤をしらず、いたづらに悪道の邪念

をつみをく、空海和尚は此の理を并・さる上華嚴宗のすでにやぶられし邪義を借りとりて法華経は猶華嚴経にをとれりと僻見せり、龜毛の長短・兎角の有無・龜の甲には毛なしなんぞ長短をあらそい兎の頭には角なし・なんの有無を論ぜん、理同と申す人いまだ閻魔のせめを脱れず、大日経に劣る華嚴経に猶劣ると申す人・謗法を脱るべしや、人は・かはれども其の謗法の義同じかるべし、弘法の第一の御弟子かきのもときの僧正・紺青鬼となりし・これをもつてしるべし、空海悔改なくば悪道疑うべしともをばず其の流をつけたる人人又いかん。

問うて云わく法師一人此の悪言をはく如何、答えて云く日蓮は此の人人を難するにはあらず但不審する計りなり、い

かりをばせば、さでをはしませ、外道の法門は一千年・八百年・五天にはびこりて輪王より万民かつべをかたぶけたりしかども九十五種共に仏にやぶられたりき、撰論師が邪義・百余年なりしもやぶれき、南北の三百余年の邪見もやぶれき、日本・二百六十余年の六宗の義もやぶれき、其の上此の事は伝教大師の或書の中にやぶられて候を申すなり、日本国は大乘に五宗あり法相・三論・華嚴・真言・天台、小乗に三宗あり俱舍・成実・律宗なり、真言・華嚴・三論・法相は大乘よりいでたりといへどもくわしく論ずれば皆小乗なり、宗と申すは戒・定・慧の三学を備へたる物なり、其の中に定・慧をさてをきぬ、戒をもて大小のばうじをうちわかつものなり、東寺の真言
 法相・三論・華嚴等は戒壇なきゆへに東大寺に入りて小乗・律宗の乳驢・臭糞の戒を持つ、戒を用つて論ぜば此等の宗は小乗の宗なるべし、比叡山には天台宗・真言宗の二宗・伝教大師習いつた給いたりしかども天台・円頓の円定・円慧・円戒の戒壇立つべきよし申させ給いしゆへに天台宗に対しては真言宗の名あるべからずとをばして天台法華宗の止観・真言とあそばして公家まいらせ給いき、伝教より慈覚たまはらせ給いし誓戒の文には天台
 法華宗の止観・真言と正くのせられて真言宗の名をけづられたり、天台法華宗は仏立宗と申して仏より立てられて候、真言宗の真言は当分の宗・論師・人師始めて宗の名をたてたり、而るを事を大日如来・弥勒菩薩等によせたるなり、仏御存知の御意は但法華經一宗なるべし小乗には二宗十八宗二十宗候へども但所詮の理は無常の一理なり、法相宗は唯心有境・大乘宗・無量の宗ありとも所詮は唯心有境とだにいはば但一宗なり三論宗は唯心無境・無量の宗ありとも所詮、唯心無境ならば但一宗なり、此れは大乘の空・有の二分が、華嚴宗・真言宗あがらば但中・くだらば大乘の空・有なるべし、經文の説相は猶華嚴・般若にも及ばず但しよき人とおぼしき人人の多く信じたるあいだ、下女を王のあいするにいたり、大日經等は下女のごとし理は但中にすぎず、論師・人師は王のごとし人のあいするによていはうがあるなるべし、上の問答等は當時は世すえになりて人の智浅く慢心高きゆへに用ゆ

る事はなくとも、聖人賢人なんども出でたらん時は子細もやあらんずらん、不便にをもひまいらすれば目安に注せり、御ひまにはならはせ給うべし。

これは大事の法門なり、こくつぎつ菩薩にまいりてつねにのみ奉らせ給うべし。

聖密房に之を遣わす

日蓮花押

一〇八

華果成就御書

弘安元年四月 五十七歳御作

900P

与浄顕房・義浄房 於身延

其の後なに事もうちた申し承わらず候、さては建治の比故道善房聖人のために一札かきつかはし奉り候を嵩が森にてよませ給いて候よし悦び入つて候、たとへ根ふかきときんば枝葉かれず、源に水あれば流かはかず、火はたきぎかくればたぬ、草木は大地なくして生長する事あるべからず、日蓮法華經の行者となつて善惡

につけて日蓮房・日蓮房とつたはる此の御恩さながら故師匠道善房の故にあらずや、日蓮は草木の如く師匠は大地の如し、彼の地涌の菩薩の上首四人にてまします、一名上行乃至四名安立行菩薩云云、末法には上行出世し給はば安立行菩薩も出現せさせ給うべきか、さればいねは華果成就すれども必ず米の精大地にをさまる、

故にひつちおひいでて二度華果成就するなり、日蓮が法華經を弘むる功德は必ず道善房の身に歸すべしあらたつたとつと、よき弟子をもつときんば師弟仏果にいたりあしき弟子をたくはひぬれば師弟地獄にをといへり、師弟相違せばなに事も成べからず委くは又又申すべく候、常にかたりあわせて出離生死して同心に靈山浄土にてつなづきかたり給へ經に云く「衆に二毒有ることを示し又邪見の相を現ず我が弟子是くの如く方便して衆生

度すニ云 前前申す如く御心得あるべく候、穴賢 穴賢

弘安元年戌寅卯月 日

日蓮花押

浄顯房

義浄房

一〇九 別当御房御返事

901P

聖密房のふみにくはしくかきて候よりあいてきかせ給い候へなに事も二間清澄の事をば聖密房に申しあわせさせ給うべく候か、世間のりをしりたる物に候はかう申すに候、これの所当などの事はゆめゆめをもはず候、いくらほどの事に候べき、但なばかりにてこそ候はめ、又わせいづをの事をそれ入つて候、いくほど

なき事に御心ぐるしく候らんとがへてなげき入つて候へども我が恩をばしりたりけりとしらせまつらなために候、大なるを計るものは小耻にはちらずと申して、南無妙法蓮華經の七字を日本国にひろめ震旦高麗までも及ぶべきよしの大願をはらみて其の願の満すべきしにや、大蒙古国の牒状しきりにありて此の国の人ごとの大なる

歎きとみ候、日蓮又先きよりこの事をかんがたり閻浮第一の高名なり、先きよりにくみぬるゆゑにままたこのかうみやうのやうに専心とは用い候はねども終に身のなげき極まり候時は辺執のものどもも一定とかへぬとみ候、これほどの大事をはらみて候ものの少事をあながちに申し候べきか、但し当時日蓮心ざす事は生処なり日本国よりも大切にをもひ候、例せば漢王の沛郡ををもくをばしめししがごとしかれ生処なるゆゑなり、

聖智が跡の主となるをもつてしろしめせ、日本国の山寺の主ともなるべし、日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり。天のあたへ給うべきことわりなるべし。

米一斗六升あはの米二升やき米はぶくろへそれのみならず人人の御心ざし申しつくしがたく候、これはいたみをもひ候、これより後は心ぐるしくをばしめすべからず候、よく人人にしめすべからず候、よく人人にもつたさせ給ひ候へ。

乃時

別当御房御返事

一一〇 寂日房御書

弘安二年九月 五十八歳御作

902P

与寂日房日家 於身延

是まで御をとかたじけなく候、夫れ人身をつくる事はまれなるなり、已にまれなる人身をつけたり又あひがたきは仏法是も又あへり、同じ仏法の中にも法華經の題目にあひたてまつる結句題目の行者となれり、まことにまことに過去十萬億(じゅうまんおく)の諸仏を供養する者なり。

日蓮は日本第一の法華經の行者なり、すでに勸持品の二十行の偈の文は日本国の中には日蓮一人よめり、八十萬億那由他の菩薩は口には宣たれども修行したる人一人もなし、かかる不思議の日蓮をうみ出だせし父母は日本国の一切衆生の中には大果報の人なり、父母となり其の子となるも必ず宿習なり、若し日蓮が法華經 釈迦如来の御使ならば父母あに其の故なからんや、例せば妙莊嚴王 淨徳夫人 淨蔵 淨眼の如し、釈迦 多宝の一仏 日蓮が父母と變じ給うか、然らずんば八十萬億の菩薩の生れかわり給うか、又上行菩薩等の四菩薩の中の垂迹か不思議に覚え候、一切の物にわたりて名の大切なるなり、さてこそ天台大師 五重玄義の初めに名玄義と釈し給へ。

日蓮にちれんとなる事自解じげ仏乗ぶつじょうとも云いいつべし、かやうに申せば利口りくげに聞えたれども道理だうりのさすところさもやあらん、經に云く「日月にちがつの光明くわうみょうの能く諸しよの幽冥おんめいを除くが如く斯この人世間せけんに行じて能く衆生の闇を滅す」と此の文の心よくよく案じさせ給へ斯人行世間の五の文字は上行菩薩じやうぎふさ・末法の始の五百年に出現して南無妙法蓮華經なむみょうほつれんげきやうの五字の光明をさして無明煩惱むみょうぼんのうの闇をてらすべしと云う事なり、日蓮は此の上行菩薩の御使として日本国の一切衆生に法華經をつけたもてと勧めしは是なり、此の山にしてもをこたらず候なり、今の經文の次下に説いて云く「我が滅度の後に於て應に此の經を受持すべし是の人・仏道に於て決定して疑い有ること無けん」と云云、かかる者の弟子・檀那だんなとならん人人は宿縁しゆくえんふかしと思つて日蓮と同じく法華經を弘むべきなり、法華經の行者といはれぬる事はや不祥ふしやうなりまぬかれがたき身なり、彼のはんいちやうりやうまさすみといはれたる者は名ををしむ故にはちを思ふ故に・ついに臆したることとはなし、同じはずなれども今生のはちは・ものかずならず・ただ後生のはちこそ大切なれ、獄卒ごくそくだつえば懸衣翁が三途河のはたにていしうをはがん時を思食して法華經の道場どうじやうまいり給うべし、法華經は後生のはちをかくす衣なり、經に云く「裸者の衣を得たるが如し」云云。

此の御本尊こそ冥途めいどのいしやうなれよくよく信じ給うべし、をとこのはだをかくさざる女あるべしや・子のさむさをあわれまざるをやるべしや、釈迦しやくか・法華經はめやとの如くましまし候ぞ、日蓮をたすけ給う事・今生の恥をかくし給う人なり後生は又日蓮御身のはちをかくし申すべし、昨日は人の上・今日は我が身の上なり、

花さけばこのみなり・よめのしうとめになる事候ぞ、信心をこたらずして南無妙法蓮華經と唱え給うべし、度度の御音信申しつくしがたく候ぞ、此の事寂日房ぼつくわしくかたり給へ。

九月十六日

日蓮花押

あまのり一ふくる送り給ひ畢あわんぬ、又大尼御前あまごぜんよりあまのり畏かしこまり入つて候、此の所をば身延たけの嶽もつと申するがす駿河の国は南にあたりたり彼の国の浮島うきしまがはらの海ぎはより此の甲斐かいの国・波木井はきいの郷・身延みねの嶺みねは百余里に及ぶ、余の道せんり千里よりもわづらはし、富士河と申まをす日本第一にほんだいいちのはやき河・北より南へ流れたり、此の河は東西は高山こうざんなり谷深く左右は大石にして高き屏風を立て並べたるがごとくなり、河の水は筒の中に強兵がうへいが矢を射出したるがごとし、此の河の左右の岸をつたい或は河を渡り、或時は河はやく石多ければ舟破れて微塵みじんとなる、かかる所をすぎゆきて身延の嶺と申まをす大山あり、東は天子てんしの嶺・南は鷹取りの嶺・西は七面の嶺・北は身延の嶺なり、高き屏風を四ついたてたるがごとし、峯に上つてみれば草木森森たり谷に下つてたづねれば大石連連たり、大狼おおろうの音・山に充満じゅうまんしましらら猴まけのなき谷にひびき鹿のつまをこぐる音あはれしく蝉のひびきかまびすし、春の花は夏にさき秋の葉はは冬になる、たまたま見るものはやまかつがたき木をひろうつすがた時時とぶらう人は昔なれし同朋どうぽんなり、彼の商山しょうざんの四皓しごが世を脱まぬかれし心ち竹林の七賢しちけんが跡を隠せし山もかくやありけむ、峯に上つてわかめやをいたると見候は、さにてはなくしてわらびのみ並び立ちたり、谷に下つてあまのりやをいたると尋たずねれば、あやまりてや・みるらんせりのみしげりふしたり、古郷の事はるかに思ひわすれて候いつるに今此のあまのりを見候いてよしなき心をもひいでてうくつらし、かたうみいちはこみなとの磯のほとりにて昔見しあまのりなり、色形あぢわひもかはらず、など我が父母ふぼかはらせ給たまいけんとかたがちなるうづめしさなみだをさへがたし。

此れはさてどめ候いぬ、但大尼御前の御本尊の御事おほせつかはされておもひわづらひて候、其の故は

此の御本尊は天竺より漢土へ渡り候いしあまたの三蔵漢土より月氏へ入り候いし人人の中にもしるしをかせ給はず、西域慈恩伝燈録等の書どもを開き見候へば五天竺の諸国の寺寺の本尊皆しるし尽して渡す、又漢土より日本に渡る聖人にちいき漢土へ入る賢者等のしるされて候、寺寺の御本尊皆かんが食し日本国最初の寺・

元興寺・四天王寺等の無量の寺寺の日記、日本紀と申すふみより始めて多くの日記にのこりなく註して候へば其の寺寺の御本尊又かくれなし、其の中に此の本尊はあてましますぞ。

人疑つて云く経論になきかなければこそそこの賢者等は画像にかき奉り木像にもつくりたてまつらざるらめと云、而れども経文は眼前なり御不審の人人は経文の有無をこそ尋ぬべけれ、前代につくりかかぬを難ぜんとをもうは僻案なり、例せば釈迦仏は悲母孝養のために、利天に隠れさせ給いたりしをば一閻浮提の一切

の諸人しる事なし、但目蓮尊者一人此れをしり此れ又仏の御力なりと云云、仏法は眼前なれども機なければ顯れず時いたらざればひろまらざる事法爾の道理なり、例せば大海の潮の時に随つて増減し上天の月の上下にみちかくるがごとし。

今此の御本尊は教主釈尊・五百塵点劫より心中にをさめさせ給いて世に出現せさせ給いても四十余年其の後又法華経の中にも迹門はせず宝塔品より事をこりて寿量品に説き顯し神力品・属累に事極りて候いしが、金色世界の文殊師利兜史多天宮の弥勒菩薩・補陀落山の觀世音・日月・淨明・徳仏の御弟子の薬王菩薩等の諸大士我も我もと望み給いしかども叶はず、是等は智慧いみじく才学ある人人とはひびけどもいまだ法華経を学する日あ

さし学も始なり、末代の大難忍びがたかるべし、我五百塵点劫より大地の底にかくしをきたる真の弟子あり此れにゆづるべしとて上行菩薩等を涌出品に召し出させ給いて法華経の本門の肝心たる妙法蓮華経の五字をゆづらせ給いてあなかしこあなかしこ我が滅度の後・正法一千年・像法一千年に弘通すべからず、末法の始に

ほうほう 法師 一閻浮提に充滿して諸天いかりをなし彗星は一天にわたらせ大地は大波のごとくをどらむ、大旱魃・大火・大水・大風・大疫病・大飢饉・大兵乱等の無量の大災難並びをこり、一閻浮提の人人各各甲冑をきて弓杖を手ににぎらむ時、諸仏・諸菩薩・諸大善神等の御力の及ばせ給わざらん時、諸人皆死して無間地獄に墮ること雨のごとくしげからん時、此の五字の大曼荼羅を身に帶し心に存せば諸王は国を扶け万民は難をのがれん、乃至後生の大火災を脱るべしと仏記しをかせ給いぬ、而るに日蓮上行菩薩にはあらねどもは兼てこれをしれるは彼の菩薩

の御計らいかと存じて此の二十余年が間此れを申す、此の法門弘通せんには如来現在猶多怨嫉・況滅度後一切世間・多怨難信と申して第一のかたきは国主並びに郡郷等の地頭・領家・万民等なり、此れ又第二・第三の僧侶がうったへについて行者を或は悪口し或は罵詈訛し或は刀杖等云云。

而るを安房の国・東条の郷は辺国なれども日本国の中心のごとし、其の故は天照太神・跡を垂れ給へり、昔は伊勢の国に跡を垂れさせ給いてこそありしかども、国王は八幡・加茂等を御帰依深くありて天照太神の御帰依浅かりしかば、太神・伊勢の外宮にしのびをさめしかば太神の御心に叶はせ給いけるかの故に日本を手ににぎる將軍となり給いぬ、此の人東条

の郡を天照太神の御栖と定めさせ給う、されば此の太神は伊勢の国にはをはしまさず安房の国・東条の郡にすませ給うか、例えば八幡大菩薩は昔は西府にをはせしかども、中比は山城の国男山に移り給い、今は相州鎌倉鶴が岡に栖み給うこれもかくのごとし。

日蓮は一閻浮提の内日本国安房の国・東条の郡に始めて此の正法を弘通し始めたり、随つて地頭敵となる彼の者すでに半分ほろびて今半分あり、領家はいつわりをろかにて或時は信じ、或時はやぶる不定なりしが日蓮御勘気を蒙りし時すでに法華経をすて給いき、日蓮先よりけさんのついでにと難信難解と申せしはこれなり、

にちれん じゅうあん
日蓮が重恩の人なれば扶けたてまつらなために此の御本尊をわたし奉るならば十羅刹定めて偏頗の法師とをばしめされ
なん、又経文のごとく不信の人にわたしまいらせずば日蓮偏頗はなけれども尼御前我が身のとがをばしらせ給はずして
うらみさせ給はんずらん、此の由をば委細に助阿闍梨の文にかきて候ぞ召して尼御前の見参に入れさせ給うべく候。
おんこ
御事にをいては御一味なるやうなれども御信心は色あらわれて候、さどの国と申し此の国と申し度度の御志ありて
たゆむけしきはみさせ給はねば御本尊はわたしまいらせて候なり、それも終にはいかんがとをそれ思ふ事 薄氷をふみ太
刀に向うがごとし、くはしくは又又申すべく候、そのみならずかまくらにも御勘気の時・
千が九百九十九人は墮ちて候人人もいまは世間やわらぎ候かのゆへにくゆる人人も候と申すげに候へとも此れはそれには
似るべくもなくいかにもふびんには思いまいらせ候へとも骨に肉をばかぬ事にて候は法華經に相違せさせ給ひ候はん事を
かな
叶うまじき由いつまでも申し候べく候、恐恐謹言。

二月十六日

にちれん かおう
日蓮花押

あまこぜんごへんじ
新尼御前御返事

ごくそつえんま王の長は十丁ばかり面はすをさし眼まなこは日月にちがつのごとく齒はまんぐわのねのやうにくぶしは大石のごとく
大地だいちは舟を海につかべたるやうにごとき声はういのごとくはたはたとなりわたらむにはよも南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきうとはを
ほせ候はじ、日蓮にぢれんが弟子でしにもをほせずよくよく内をしたためてをほせをかほり候はん、なづきをわりみをせめていのり
てみ候はん、たださきのいのりとをぼしめせ、これより後はのちの事をよくよく御かため候へ。恐おそ恐おそ。

九月二十日

日蓮にぢれん在御判大尼御前御返事あまごぜんごへんじ

いぬるぶんえい 去ぬる文永五年後の正月十八日 西戎・大蒙古国より日本国ををそつべきよし牒状をわたす、日蓮が去ぬる文応
 がんねん 元年太歳申に勘えたりし立正安国論今すこしもたがわず符合しぬ、此の書は白樂天が樂府にも越公の未來記にもをとらず
 まっだい 末代の不思議なに事かこれにすぎん、賢王・聖主の御世ならば日本第一の権状にもをこなわれ現身に大師号もあるべし定
 めて御たづねありていくさの僉義をいぬあわせ調伏なんども申しつけられぬらんとををひしに其の義なかりしかば其の
 年の末十月に十一通の状をかきてがたがたををどろかし申す、国に賢人なんどもあるならば不思議なる事かなこれはひ
 とへにただ事にはあらず、天照太神・正八幡宮の此の僧について日本国の

たすかるべき事を御計らいのあるかとををわるべきにさはなくて或は使を悪口し或はあざむき或はとりも入れず或
 は返事もなし或は返事をなせども上も申さずこれひとへにただ事にはあらず、設い白蓮が身の事なりとも国主となりま
 つり事をなさん人々は取りづき申したらんには政道の法ぞかし、いわつやこの事は上の御大事いで

きらむのみならず各各の身にあたりてをほいなるなげき出来すべき事ぞかし、而るを用うる事こそなくとも悪口まではあ
 まりなり、此れひとへに日本国の上下万人・一人もなく法華經の強敵となりてとしひさしくなりぬれば大禍のつもり大鬼神
 の各各の身に入る上・蒙古国の牒状に正念をぬかれてくるつなり、例せば段の紂王・比干と

いぬし者いさめをなせしかば用いずして胸をほり周の文武王にほるばされぬ、呉王は伍子しよがいさめを用いず自害をせさ
 せしかば越王勾踐の手にかかる、これもかれがごとくなるべきかといよいよぶびんにをばへて名ををしまず命をもすて
 て強盛に申しはりしかば風・大なれば波・大なり竜・大なれば雨たけきやつに、いよいよあだを

なし。ますますにくみて御評定に僉議あり、頸をはぬべきか鎌倉ををわるべきか弟子檀那等をば所領あらん者は所領を召して頸を切れ或はろうにてせめあるいは遠流すべし等云云。

日蓮悦んで云く本より存知の旨なり、雪山童子は半偈のために身をなげ常啼菩薩は身をとり善財童子は火に入り樂法梵士は皮をはぐ薬王菩薩は皆をやく不輕菩薩は杖木をかうむり師子尊者は頭をはねられ提婆菩薩は外道にころさる、此等はいかなりける時ぞやと勘うれば天台大師は時に適うのみとかかれ章安大師は「取捨宜きを

得て一向にすべからず」とするされ、法華經は一法なれども機にしたがひ時によりて其の行万差なるべし、仏記して云く「我が滅後・正像二千年すぎて末法の始に此の法華經の肝心題目の五字計りを弘めんもの出来すべし、其の時惡王・惡比丘等大地微塵より多くして或大乘或は小乗等をもてきそはんほどに、此の題目の行者に

せめられて在家の檀那等をかたらひて或はのり或はうち或はろうに入れ或は所領を召し或は流罪或は頸をはぬべし、などいふとも退轉なくひろむるほどならばあだをなすものは国主はどし打ちをはじめ餓鬼のごとく身をくらひ後には他国よりせめらるべし、これひとに梵天帝釈日月四天等の法華經の敵なる国を他国より責め

させ給うなるべし」とかれて候ぞ、各各我が弟子とならん人人は一人もをくしをもはるべからず、をやををもひめこををもひ所領をかへみることなかれ、無量劫よりこのかたをやこのため所領のために命すてたる事は大地微塵よりもをほし、法華經のゆへにはいまだ一度もすてず、法華經をばそこばく行ぜしかどもかかる事出来せしかば退轉してやみにき、譬えばゆをわかつて水に入れ火を切るにとげざるがごとし、各各思い切り給へ此の身を法華經にかうるは石に金をか金に米をかつるなり。

仏滅後・二千二百二十余年が間・迦葉・阿難等・馬鳴・竜樹等・南岳・天台等・妙楽・伝教等だにもいまだひろめ給わぬ法華經の肝心・諸仏の眼目たる妙法蓮華經の五字・末法の始に一閻浮提にひろまらせ給うべき瑞相に日蓮さがけた

り、わたつども二陣三陣つづきて迦葉・阿難にも勝ぐれ天台・伝教にもこよかし、わづかの小島のぬしらがをどさんを
ぢては閻魔王のせめをばいかんがすべき、仏の御使となりのながらをくせんは無下の人人なりと申しふくめぬ、さりし程
に念仏者・持斎・真言師等・自身の智は及ばず訴状も叶わざれば上郎・尼ごぜんたちに・

とりつきて種種にかま申す、故最明寺入道殿・極樂寺入道殿を無間地獄に墮ちたりと申し建長寺・寿福寺・極樂寺・
長樂寺・大仏寺等をやきはらへと申し道隆上人・良觀上人等を頸をはねよと申す、御評定になにとなくとも日蓮が罪禍
まぬかれがたし、但し上件の事・一定申すかと召し出たつねらるべしとて召し出だされぬ、奉行人の

云く上のをほせ、かくのごとしと申せしかば・上件の事・一言もたがはず申す、但し最明寺殿・極樂寺殿を地獄といふ事は・
そらごとなり、此の法門は最明寺殿・極樂寺殿・御存生の時より申せし事なり。

詮ずるところ、上件の事どもは此の国ををもひて申す事なれば世を安穩にたまたんと・をばさは彼の法師ばらを召し合
せてきこしめせ、さなくして彼等にかわりて理不尽に失に行わるるはどならば国に後悔あるべし、日蓮・御勘氣をかほらば
仏の御使を用いぬになるべし、梵天・帝釈・日月・四天の御とがめありて遠流・死罪の後・百日・

一年・三年・七年が内に自界叛逆難とて此の御一門どしうちはじめるべし、其の後は他国侵逼難とて四方より・ことには
西方よりせめられさせ給うべし、其の時後悔あるべしと平左衛門尉に申し付けしかども太攻入道のくるひしやうにすこ
しもはばかり事なく物にくるつ。

去文永八年太歳庚申辛・末九月十二日・御勘氣をかほる、其の時の御勘氣のやうも常ならず法にすぎてみゆ、了行が謀
反を・をこし大夫の律師が世をみださんとせしをめしとられしにもこえたり、平左衛門尉・大將として数百人の兵者にど
うまるきせてゑばうしかけて眼をいからし声をあらうす、大体・事の心を案ずるに太政入道の世をとりながら国をや
ぶらんとせしにいたり、ただ事ともみず、日蓮これを見てをもつやう日ごろ月ごろをもひまう

けたりつる事はこれなり、さいわひなるかな法華經のために身をすてん事よ、くさきかうべをはなたれば沙に金をか合に
珠をあきなふるがごとし、さて平左衛門尉が一の郎従・少輔房と申す者はしりよりて日蓮が懷中せる法華經の第五の巻
を取り出しておもてを三度さいなみてさんざんとうちちらす、又九巻の法華經を兵者ども

打ちちらしてあるいは足にふみあるいは身にまとひあるいはいたじき・たたみ等家の二三間にちらさめ所もなし、日蓮・
大高声を放ちて申すあらをもしろや平左衛門尉がものにくるつを見よ、とのばら但今日本国の柱をたをすとよばはり
しかば上下万人あわてて見えし、日蓮こそ御勘氣をかほればをくして見ゆべかりしにさはな

くしてこれはひがことなりとやをもひけん、兵者どもものいろこそへんじて見へしか、十日並びに十二日の間・真言宗の失・
禅宗・念仏等・良觀が雨ふらさめ事具さに平左衛門尉にいぬきかせてありしに或はどつとわらひ或はいかりなんどせ
し事どもはしげければ・しるさず、せんずるところは六月十八日より七月四日まで良觀が雨の

いのりして日蓮に支ふられてふらしかね汗をながしなんだのみ下して雨ふらざりし上・逆風ひまなくてありし事・三度まで
つかひをつかわして一丈のほりをこぬもの十丈・二十丈のほりをこつべきか、いづみきぶいろこのみの身にして八斎戒に
せいせるつたをよみて雨をふらし、能因法師が破戒の身としてつたをよみて天雨

を下らせしに、いかに二百五十戒の人人・百千人あつまりて七日・十七日せめさせ給うに雨の下らざる上に大風は吹き候
ぞ、これをもつて存ぜさせ給各各の往生は叶うまじきぞとせめられて良觀がなきし事・人人につきて通せし事・二に申せ
しかば、平左衛門尉等かたつとしかなずして・しまりふしし事どもはしげればかかず。

さては十二日の夜・武蔵守殿のあづかりにて夜半に及び頸を切らんがために鎌倉をいでしに・わかみやこつちにつちいで
て四方に兵のつちつみてありしかども、日蓮云く各各さわがせ給うなべちの事はなし、八幡大菩薩に最後に申すべき事
ありとて馬よりさしをりて高声に申すやう、いかに八幡大菩薩はまことの神か和氣清丸が

頸を刎られんとせし時は長一丈の月と顕われさせ給い、伝教大師の法華經をかうぜさせ給いし時はむらさきの袈裟を御
布施にさづけさせ給い、今日蓮は日本第一の法華經の行者なり其の上身に一分のあやまちなし、日本国の一切衆生の
法華經を誦して無間・大城におつきをたすけんがために申す法門なり、又大蒙古国よりこの国をせむるならば天照
太神・正八幡とても安穩におはすべきか、其の上・釈迦仏・法華經を説き給いしかば多宝仏・十方
の諸仏・菩薩あつまりて日と月と星と鏡とをならべたるがごとくなりし時、無量の諸天並びに天竺・漢土
にほんこく・日本等の善神・聖人あつまりたりし時、各各法華經の行者にをろかなるまじき由の誓状まいらせよとせめられしか
ば一一に御誓状を立てられしぞかし、さるにては日蓮が申すまでもなしいそぎいそぎこそ誓状
の宿願をとげさせ給うべきにいか此の処にはをちあわせ給はめぞとたかだかと申す、さて最後には日蓮今夜頸切
られて靈山浄土へまいりてあらん時はまづ天照太神・正八幡こそ起請を用いぬかみにて候いけれとさしきりて教主釈尊
に申し上げ候はざるぞいたしとおぼさばいそぎいそぎ御計らいあるべしとて又馬にのりぬ。

ゆいのはまにうちいでて御りやうのまへにいたりて又云くしばしとのばらこれにつぐべき人ありとて、中務三郎
左衛門尉と申す者のもと・熊王と申す童子をつかわしたりしかばいそぎいでぬ、今夜頸切られへまかるなり、この数年が
間願いつる事これなり、此の娑婆世界にしてきじとなりし時はたかにつかまれぬずみと

なりし時はねこにくらわれき、或はめこのかたきに身を失いし事・大地微塵より多し、法華經の御ためには一度だも失う
ことなし、されば日蓮貧道の身と生れて父母の孝養・心にたらず国の恩を報すべき力なし、今度頸を法華經に奉りて其の
功德を父母に回向せん其のあまりは弟子・檀那等にはぶくべしと申せし事これなりと申せしか

ば、左衛門尉・兄弟四人馬の口にとりつきてこゝへたつの口にゆきぬ、此にてぞ有らんずらんとをもつところ案にた
がはず兵士どもうちまはりさわぎしかば、左衛門尉申すやう只今なりとなく、日蓮申すやう不かく

のどのばらかなに、これほどの悦びをば、わらふかし、いかにやくそくをば、たがへらるぞと申せし時、江のしまのかたより月のごとく、ひかりたる物まりのやうにて辰巳のかたより戌亥のかたへひかりわたる、十二日の夜のあけぐれ人の面も、みえざりしが物のひかり月よのやうにて人人の面もみなみゆ、太刀取目くらみ、たふれ臥し
兵共おぢ怖れ、けうさめて一町計りはせのき、或は馬よりをりて、かしこまり、或は馬の上にてうずくまれるもあり、日蓮申すやう、いかにとのばら、がかる大根ある召人にはとをのくぞ近く打ちよれや打ちよれやと、たかだかとよばわれども、いそぎよる人もなし、さてよあけば、いかにいかに頸切べくはいそぎ切るべし夜明けなばみぐるしかりなんとすすめしかども、とかくのへんじもなし。

はるか計りありて云くさがみのえちと申すところへらせ給へと申す、此れは道知る者なしさきうちすべしと申せども、うつ人もなかりしかば、さてやすらうほどに、或如来の云く、それこそその道にて候へと申せしかば、道にまかせてゆく、午の時計りにえちと申すところへゆきつきたりしかば、本間六郎左衛門がいに入りぬ、さけとりよせて、もののぶどもにのませ、てありしかば、各かゝるとて、かうへをつなたれ手をあさへ申すやう、このほどはいかなる人にてや、をはすらん、我等がたのみて候、阿弥陀仏をそしらせ給うと、うけ給われば、にくみまいらせて候いつるに、まのあたりをがみまいらせ候いつる事どもを見て候は、たうとさにどしころ申しつる念仏は、すて候いぬとて、ひうちぶくろよりすずとりいだして、すつる者あり、今は念仏申さじと、せいじやうをたつる者もあり、六郎左衛門が郎從等、番をばつけとりぬ、さえもん、のじようも、がへりぬ。

其の日の戌の時計りに、かまくらより上の御使とて、たてぶみをもちて来ぬ、頸切れといつ、がさねたる御使か、ともものぶどもは、をもひてありし程に、六郎左衛門が代官右馬のじようと申す者、立ぶみもちてはしり来りひざまづひて申す、今夜にて候べし、あらあさましやと存じて候いつるに、かかる御悦びの御ふみ来りて候、武蔵守殿は

今日卯の時にあたみの御ゆ御出で候はいそぎあやなき事もやとまづこれはいりまいりて候と申す、かまくらより御つかいは一時にはしりて候、今夜の内にあたみの御ゆへはしりまいるべしとてまかりいでぬ、追状に云く此の人はとがなき人なり今しばらくありてゆるさせ給うべしあやまちしては後悔あるべしと云云。

其の夜は十三日兵士ども数十人坊の辺り並びに大庭になみゐて候いき、九月十二夜の夜なれば月大にはれてありしに夜中に大庭に立ち出でて月に向ひ奉りてこ自我偈少少よみ奉り諸宗の勝劣法華經の文あらあ申して抑今の月天は法華經の御座に列りまします名月天子ぞかし、宝塔品にして仏勅をつけ給ひ囑累品にして仏に頂をなでられまいらせ世尊の勅の如く当に具に奉行すべしと誓状をたてし天ぞかし、仏前の譬は日蓮

なくば虚くてこそをはすべけれ、今かかる事出来せばいそぎ悦びをなして法華經の行者にもかはり仏勅をもはたして誓言のしるしをばとげさせ給うべし、いかに今しるしのなきは不思議に候ものかな、何なる事も国になくしては鎌倉へもかへらんとお思はず、しるしこそなくともうれしがをにて澄渡らせ給うはいかに、大集經には「日月明を現ぜず」とかれ、仁王經には「日月度を失う」とかれ、最勝王經には「三十三天各隕恨を生ず」

とこそ見え侍るにいかに月天いかに月天とせめしかば、其のしるしにや天より明星の如くなる大星下りて前の梅の木のかかりてありしかばものふども皆えんよりどびをり、或は大庭にひれふし、或は家のうしろへにげぬ、やがて即ち天かきくもりて大風吹き来りて江の島となると空のひびく芋大なるづつみを打つがごとし。

夜明れば十四日卯の時に十郎入道と申すもの来りて云く、昨日の夜の戌の時計りにかつどのに大なるさわぎあり、陰陽師を召して御うらなひ候は申せしは大に国みだれ候べし此の御房御勘氣のゆなり、いそぎいそぎ召しかえさずんば世の中いかが候べかるらんと申せば、ゆりさせ給へ候と申す人もあり、又百日の把に軍あるべしと申しつればそれを待つべしとも申す、依智にして二十余日其の間鎌倉に或は火をつくる事七八度・或は人

をころす事ひまなし、讒言の者共の云く日蓮が弟子共の火をつくるなりと、さもあるらんとて日蓮が弟子等を鎌倉に置くべからずとて二百六十余人しるさる、皆遠島遣すべしろうにある弟子共をば頸をはねらるべしと聞ふ、さる程に火をつくる等は持斎念仏者が計事なり其の余はしげければかず。

同十月十日に依智を立てて同十月二十八日に佐渡の国箸ぬ、十一月一日に六郎左衛門が家のつしる塚原と申す山野の中に洛陽の蓮台野のやうに死人を捨つる所に一間四面なる堂の仏もなし、上はいたまあはず四壁はあばらに雪ふりりて消ゆる事なし、かかる所にしきがは打ちしき衰うちきて夜をあかし日をくらす、夜は雪雷雷電

ひまなし昼は日の光もささせ給はず心細かるべきすまゐなり、彼の季陵が胡国に入りて巖窟にせめられし法道三蔵の徽宗皇帝にせめられて面にかなやきをさされて江南にはなたれしも只今とおぼゆ、あらうれしや檀王は阿私仙人にせめられて法華經の功德を得給いき、不輕菩薩は上慢の比丘等の杖にあたりにて一乗の行者といはれ給ふ、今日蓮は末法に生れて妙法蓮華經の五字を弘めてかかるせめにあり、仏滅度後二千二百余年が間恐らくは

天台智者大師も一切世間多怨難信の經文をば行し給はず数数見擯出の明文は但日蓮一人なり、一句一偈我皆与授記は我なり阿耨多羅三藐三菩提は疑いなし、相模守殿こそ善知識よ平左衛門こそ提婆達多よ念仏者は瞿伽利尊者持斎等は善星比丘なり、在世は今にあり今は在世なり、法華經の肝心は諸法実相とてかかれて本末究竟等とのべられて候は是なり、摩訶止觀第五に云く「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る」文、又云く「猪の金山を摺り衆流の海に入り薪の火を熾にし風の求羅を益すが如きのみ」等云云、釈の心は法華經を教のごとく機に叶ひ時に叶うて解行すれば七つの大事出来す、其の中に天子魔とて第六天の魔王、或は国主、或は父母、或は妻子、或は檀那、或は悪人等について、或は随つて法華經の行をさえ、或は達してさうべき事なり、何れの經をも行ぜよ仏法を行ずるには分分に随つて留難あるべし、其の中に法華經を行ずるには強盛にさうべし、法華經ををしへ

の如く時機に當つて行ずるには殊に難あるべし、故に弘決の八に云く「若し衆生・生死を出でず仏乘を慕わずと知れば魔・是の人に於て猶親の想を生ず」等云云、釈の心は人・善根を修すれども念仏・眞言・禪・律等の行をなして法華經を行ぜざれば魔王親のおもひをなして人間につきて其の人をもてなし供養す世間の人に実の僧と思はせんが爲なり、例せば国主のたとむ僧をば諸人供養するが如し、されば国主等のかたきにするは既に正法を行ずるに
あるなり、釈迦如来の御ためには提婆達多こそ第一の善知識なれ、今の世間を見るに人をよくなすものはかたうどよりも強敵が人をばよくなしけるなり、眼前に見えたり此の鎌倉の御一門の御繁昌は義盛と隠岐法皇まし
まさずんば争か日本の主となり給うべき、されば此の人人は此の御一門の御ためには第一のかたうどなり、日蓮が仏にならん第一のかたうどは景信・法師には良觀・道隆・道阿弥陀仏と平左衛門尉・守殿ましまさずんば争か法華經の行者とはなるべきと悦ぶ。

かくてずこす程に庭には雪つもりて・人もかよはず堂にはあらし風より外はをとづるものなし、眼には止觀・法華をさらし口には南無妙法蓮華經と唱・夜は月星に向ひ奉りて諸宗の違目と法華經の深義を談ずる程に年もかへりぬ、いつくも人の心のはかなさは佐渡の国の持齋・念仏者の唯阿弥陀仏・生喻房・印性房・慈道房等の数百人より合いて僉議すと承る、聞ふる阿弥陀仏の大怨敵・一切衆生の悪知識の日蓮房・此の国にながされたり・なにと

なくとも此の国へ流されたる人の始終いけらるる事なし、設ひいけらるるてもがへる事なし、又打ちころしたりとも御とがめなし、塚原と云う所に只一人ありいかにがうなりとも力つよくとも人なき処なれば集りていころせかしと云うものもありけり、又なにとなくとも頸を切らるべかりけるが守殿の御台所の御懷妊なれば・しばらく

きられず終には一定ときく、又云く六郎左衛門尉殿に申してきらずんばはからうべしと云う、多くの義の中に・これについて守護所に数百人集りぬ、六郎左衛門尉云く上より殺しまうすまじき副状下りてあなづるべき流人

にはあらず、あやまちあるならば重連が大なる失なるべし、それよりは只法門にてせめよかしと云いければ念仏者等・或は浄土の三部經・或は止観・或は真言等を小法師等が頸にかけさせ、或はわきにはさませて正月十六日にあつまる、佐渡の国のみならず越後・越中・出羽・奥州・信濃等の国国より集れる法師等なれば塚原の堂の大殿・山野に数百人・六郎左衛門尉・兄弟一家さならぬもの百姓の入道等かずをしらず集りたり、念仏者は口口に悪口をなし真言師は面面に色を失ひ天台宗ぞ勝つべきよしをのしる、在家の者どもは聞ふる阿弥陀仏のかたきよとのしりさわぎ・びびく事・震動雷電の如し、日蓮は暫らくさはがせて後、各各しまらせ給へ法門の御為にこそ御渡りあるらめ悪口等よしなしと申せしかば、六郎左衛門を始めて諸人然るべしとて悪口せし念仏者をば、そくびをつきだしぬ、さて止観・真言・念仏の法門一一にかれが申す様をでつしあげて承伏せさせては、ちやうとはつめつめ・一言二言にはすぎず、鎌倉の真言師・禅宗・念仏者・天台の者よりもはかなきものどもなれば只思ひやらせ給へ利剣をもて、うりをきり大風の草をなびかすが如し、仏法のおろかなるのみならず、或は自語相違し、或は経をわすれて論と云ひ釈をわすれて論と云ふ、善導が柳より落ち弘法大師の三鈷を投たる大日如来と現したる等をば、或は妄語、或は物にくるゝる處を一一にせめたるに、或は悪口し、或は口を閉ぢ、或は色を失ひ、或は念仏ひが事なりけりと云うものもあり、或は当座に袈裟・平念珠をすてて念仏申すまじきよし誓状を立つる者もあり。

皆人立ち帰る程に六郎左衛門尉も立ち帰る一家の者も返る、日蓮不思議二云はんと置いて六郎左衛門尉を大庭よりよび返して云くいつか鎌倉へばり給うべき、かれ答えて云く下人共に農せさせて七月の比と云云、日蓮云く弓箭とる者は、ををやけの御大事にあひて所領をも給わり供をこそ田畠つくるとは申せ、只今いくさのあらんずるに急ぎうちのばり高名して所知を給らぬが、さすがに和殿原はさがみの国には名ある侍ぞかし、田舎にて田つくりいくさにはづれたらんは恥なるべしと申せしかば、いかにや思いけめあはててもものいはず、念仏者・

持齋在家の者どももなにと云う事ぞやと恠しむ。

さて皆歸りしかば去年の十一月より勘えたる開目抄と申す文二巻造りたり、頸切るるならば日蓮が不思議とどめんと
思いて勘えたり、此の文の心は日蓮によりて日本国の有無はあるべし、譬は宅に柱なければたまたず人に魂なければ死人
なり、日蓮は日本の人の魂なり平左衛門既に日本の柱をたをしぬ、只今世乱れてそれと

もなくゆめの如くに妄語出来して此の御一門どうして後には他国よりせめらるべし、例せば立正安国論に委しきが
如し、かやうに書き付けて中務三郎左衛門尉が使にとらせぬ、つきたる弟子等もあらぎかなと思へとも力及ばざりげにて
ある程に、二月の十八日に島に船つく、鎌倉に軍あり京にもありそのやう申す計りなし、六郎左衛門尉其の夜にはやふ
ねをもつて一門相具してわたる日蓮にたな心を合せてたすけさせ給へ去る正月十六日の御言いかによと此程疑い申し
つるにいくほどなく三十日が内にあひ候いぬ、又蒙古国も一定渡り候いな

ん、念仏・無間地獄も一定にてぞ候はんずらん永く念仏申し候まじと申せしかば、いかに云うとも相模守殿等の用ひ給は
ざらんには日本国の人用うまじ用ゐずば国必ず亡ぶべし、日蓮は幼若の者なれども法華経を弘むれば釈迦仏の御使ぞか
し、わづかの天照太神・正八幡などと申すは此の国には重けれども梵釈・日月・四天に対すれば小神ぞかし、されども此
の神人などをあやまちぬれば只の人を殺せるには七人半などと申すぞかし、太政入道・

隠岐法皇等のほろび給いしは是なり、此れはそれにはにるべくもなし教主釈尊の御使なれば天照太神・正八幡宮も頭を
かたづけ手を合せて地に伏し給うべき事なり、法華経の行者をば梵釈・左右に侍り月月・前後を照し給ふ、

かかる日蓮を用いぬるともあしくうやまはば国亡ぶべし、何に況や数百人にくませ二度まで流しぬ、此の国の亡びん事
疑いなるべけれども且く禁をなして国をたすけ給へと日蓮がひかうればこそ今までは安穩にありつれどもはつに過ぐ
れば罰あたりぬるなり、又此の度も用ひずば大蒙古国より打手を向けて日本国ほろぼさるべし、

ただ平左衛門尉が好むわざわひなり、和殿原とても此の島とても安穩なるまじきなりと申せしかば、あさましげにて立歸りぬ、さて在家の者ども申しけるは、此の御房は神通の人にてましますか。あらおそろし。おそろし。今は念仏者をもやしなひ持齋をも供養すまじ、念仏者・良觀が弟子の持齋等が云く、此の御房は謀叛の内に入りたりけるか、さて且くありて世間しつまる。

又念仏者集りて僉議す、かうてあらんには我等かつえしぬべし。いかにもして此の法師を失はばや、既に国の者も大体つきぬ。いかんがせん、念仏者の長者の唯阿弥陀仏持齋の長者の性論房・良觀が弟子の道觀等・鎌倉に走り登りて武蔵守殿に申す、此の御房・島に侯ものならば堂塔一宇も侯べからず。僧一人も侯まじ、阿弥陀仏をば、或は火に入れ、或は河にながす、夜もひるも高き山に登りて日月に向つて大音声を放つて上を呪咀し奉る、其の首声・

一國に聞ふと申す、武蔵前司殿是をきき上申すまでもあるまじ、先ず國中のもの日蓮房につくならば、或は國をおひ、或はろつに入れよと私の下知を下す、又下文下るかくの如く三度其の間の事申さざるに心をもて計りぬべし、或は其の前をとをれりと云つてろつに入れ、或は其の御房に物をまいらせけりと云つて國をおひ、或は妻子をとる、かくの如くして上此の由を申されければ案に相違して去る文永十一年二月十四日の御赦免の状、同三月

八日に島につきぬ、念仏者等・僉議して云く、此れ程の阿弥陀仏の御敵・善導和尚・法然上人をのるほどの者が、たまたま御勘氣を蒙りて此の島に放されたるを御赦免あるとていけて帰さんは心つき事なりと云つて、やうやうの支度ありしかども何なる事にや有りけん、思はざるに順風吹き来りて島をば、たちしかばあはいあしければ百日・五

十日にもわたらず、順風には三日なる所を須臾の間に渡りぬ、越後のこつ・信濃の善光寺の念仏者・持齋・真言等は雲集して僉議す、島の法師原は今までいけてかすは人かつたいなり、一我等はいかにも生身の阿弥陀仏の御前をばとをすまじと僉議せしかども、又越後のこつより兵者ども・あまた日蓮にそひて善光寺をとをりしかば力

および、三月十三日に島を立ちて同三月二十六日に鎌倉弁ち入りぬ。

同四月八日平左衛門尉に見参しぬ、さきにはにるべくもなく威儀を和らげてただしくする上・或る入道は念仏をとふ・或る俗は真言をとふ・或る人は禅をとふ平左衛門尉は爾前得道の有無をとふ一一に経文を引いて申しぬ平の左衛門尉は上の御使の様に大蒙古国はいつか渡り候べきと申す、日蓮答えて云く今年は一定なりそれにとつては日蓮已前より勘申すをば御用ひなし、譬えば病の起りを知らざる人の病を治せば弥よ病は倍増す

べし、真言師だにも調伏するならば弥よ此の国軍にまくべし・六賢六賢、真言師総じて当世の法師等をもつて御祈り有るべからず各各は仏法をしらせ給うておわさばこそ申すともしらせ給はめ、又何なる不思議にやあるらん他事にはことにして日蓮が申す事は御用いなし、後に思い合せさせ奉らんが為に申す隠岐法皇は天子なり

権大夫殿は民ぞかし、子の親をあだまんをば天照太神うけ給いなんや、所従が主君を敵とせんをば正八幡は御用いあるべしや、いかなりければ公家はまけ給いけるぞ、此れは偏に只事にはあらず弘法大師の邪義慈覚大師智証大師の僻見をまことと思ひて叡山・東寺・園城寺の人人の鎌倉をあだみ給いしかば還著於本人とて其の失還つて

公家はまけ給いぬ、武家は其の事知らずして調伏も行はざればかちぬ今又かくの如くなるべし、ゑぞは死生不知のもの安藤五郎は因果の道理を弁えて堂塔多く造りし善人なり、いかにとして頸をばゑぞにとられぬるぞ、是をもつて思うに此の御房たちだに御祈あらば入道穀事にあひ給いぬと覚え候、あなかしこあなかしこさ・いはざりけるとおほせ候など、したたかに申し付け候いぬ。

さてかへりききしかば同四月十日より阿弥陀堂法印に仰付られて雨の御いのりあり、此の法印は東寺第一の智人をむる等の御師弘法大師慈覚大師智証大師の真言の秘法を鏡にかけ天台華嚴等の諸宗をみな胸につかべたり、それに随いて十日よりの祈雨に十一日に大雨下りて風ふかず雨しつかにて一日一夜ふりしかば守殿御感

のあまりに金三十両むまやうやうの御ひきで物ありとぎこぶ、鎌倉中の上下万人手をたたき口をすくめてわらうやうは日蓮にちれんひが法門ほふもん申してすでに頸をきられんとせしがとかうしてゆりたらばさではなくして念仏ねんぶつ・禅をそしるのみならず、真言しんこんの密教みつぎょうなんどももそしるゆへにかかる法のしるしめでたしとのしりしかば、日蓮にちれんが弟子等けうさめてこれは御あら義と申せし程に日蓮にちれんが申すやうはしばしまて弘法大師こうぼうだいしの惠義あきぎまことにて国の御いのりとなるべくば隠岐おき法皇ほうわうこそいくさにかち給はめ、をむる最愛の児こせいたかも頸をきられざるらん、弘法の法華經ほけきやうを華嚴經けこんきやうにとれりとかける状は十住心論じゅうじゆしんろんと申す文にあり、寿量品じゆりやうほんの釈迦仏しやくかがぶつをば凡夫ぼんぶなりとするされたしる文は秘藏宝鑰ひぞうほうやくに候、天台大師てんだいだいしをぬす人とかける状は二教論にぎょうろんにあり、一乘法華經いちじつほけきやうをとける仏をば真言師しんごんしのはきものとりにも及ばずとかける状は正覚房しやうかくぼうが舍利講しやろりかうの式にあり、かかる僻事を申す人の弟子阿弥陀堂あみだだうの法印ほふいんが日蓮にちれんにかつならば竜王りゆうおうは法華經ほけきやうのかたきなり、梵釈ぼんしやく四王しおうにせめられなん子細しさいぞあらんずらんと申せば、弟子どものいはくいかなる子細しさいのあるべきぞとをこつきし程に、日蓮にちれん古く善無畏ぜんむゐも不空ふくうも雨のいのりに雨はふりたりしかども大風吹きてありけるとみゆ、弘法こうぼうは三七日しちにちすぎて雨をふらしたり、此等これらは雨ふらさぬがごとし、三七・二十一日にふらぬ雨やあるべき設たていふりたりともなんの不思議ふしぎがあるべき、天台てんだいのごとく千觀せんくわんなんのごとく一座いざなんのごとくたうとけれ、此れは一定やうあるべしといふもあはせず大風吹来る、大小の舍宅しゃたく・堂塔どうたう・古木こもく・御所等をある或は天に吹きのぼせ、或は地あるに吹き入れ、そらには大なる光り物とび地には棟梁むねりやうみだれたり、人人をもぶきころし牛馬うまををくたふれぬ、悪風あくふうなれども秋は時なればなをゆるすかたもあり此れは夏四月こなり、其の上そ日本国にほんこくにはふかず但かた關東かんとう・八箇国はつかんこくなり八箇国はつかんこくにも武威むかし・相模さかきの両国りやうこくなり両国りやうこくの中には相州さうしゆにつよくぶく、相州さうしゆにもがまくらがまくらにも御所みよ・若宮わくみや・建長寺けんぢやうじ・極樂寺等ごくらくじとうにつよくふけり、ただ事ともみずひとへこのいのりのゆへにやとおぼへてわらひ口すくめせし人人もけうさめてありし上、我が弟子どももあら不思議ふしぎやと舌をふるつ。

本よりいせし事なれば三度、国をいさめんにもちゐずば国をさるべしと、されば同五月十二日にかまくらをいでて此の山に入る、同十月に大蒙古国よせて吉岐、対馬の二箇国を打ち取るのみならず、太宰府もやぶられて少弐入道・大友等ききにげにげ其の外の兵者ども其の事ともなく大體打たれぬ、又今度よせくるならばいかにも此の国よはよはと見ゆるなり、仁王経には「聖人去る時は七難必ず起る」等云云、最勝王経に云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に乃至他方の怨賊来りて国人喪乱に遇わん」等云云、仏説まことならば此の国に一定悪人のあるを国主たつとませ給いて善人をあだませ給うにや、大集経に云く「日月明を現ぜず四方皆亢旱す是くの如く不善業の悪王、悪比丘我が正法を毀壞せん」云云、仁王経に云く「諸の悪比丘多く名利を求め國王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁、破国の因縁を説く、其の王別えずして此の語を信聴せん是を破仏法・破国の因縁と爲す等云云、法華経に云く「濁世の悪比丘」等云云、経文まことならば此の国に一軍悪比丘のあるなり、夫れ宝山には曲林をきる大海には死骸をとどめず、仏法の大海二乗の宝山には五逆の瓦礫、四重の濁水を

ば入るれども誹謗の死骸と一闡提の曲林をばをさめざるなり、されば仏法を習わん人、後世をねがはん人は法華誹謗をおそるべし。

皆人をばするやうはいかでか弘法、慈覚等をそしる人を用うべきと、他人はさてをきぬ、安房の国の東西の人人は此の事を信すべき事なり、眼前の現証ありいもの円頓房・清澄の西堯房・道義房かたつみの実智房等は年とかりし僧ぞかし、此等の臨終はいかんがありけんと尋めべし、これらはさてをきぬ、円智房は清澄の大堂

にして三箇年が間・一字三礼の法華経を我とかきたてまつりて十巻を誦にをばへ五十年が間・二日一夜に二部づつよまれしぞかし、かれをば哲人は仏になるべしと云云、日蓮こそ念仏者よりも道義房と円智房とは無間地獄の底にをつべしと申したりしが此の人人の御臨終はよく候いけるか、いかに、日蓮なくば此の人人をば仏になりぬ

らんとこそおぼすべけれ、これをもつてしろしめせ弘法・慈覚等はあさましき事どもはあれども弟子ども隠せしかば公家にもしらせ給はず未の代はいよいよあをぐなり、あらはす人なくば未来永劫までもさであるべし、拘留外道は八百年ありて水となり、迦毘羅外道は一千年すぎてこそ其の失はあらわれしか。

そ夫人身をつくる事は五戒の力による、五戒を持てる者をば二十五の善神これをまほる上同生同名と申して二つの天生れしよりこのかた左右のかたに守護するゆゑに失なくて鬼神あだむことなし、しかるに此の国の無量の諸人なげきをなすのみならず、ゆきつしまの両国の人皆事にあひぬ太宰府又申すばかりなし、此の国はいかな

るとがのあるやらん・しらまほしき事なり、一人二人こそ矢もあるらめこそばくの人人いかん、これひとへに法華經をさぐる弘法・慈覚・智証等の末の台空白師・善導・法然が末の弟子等・達磨等の人人の末の者ども国中に充満せり、故に梵釈・四天等の法華經の座の誓状のごとく頭破作七分の失にあてらるるなり。

疑つて云く法華經の行者をあだむ者は頭破作七分ととかれて候に日蓮房をそしれども頭もわれぬは日蓮房は法華經の行者にはあらざるかと申すは道理なりとをば候はいかん、答えて云く日蓮を法華經の行者にてなしと申さば法華經をなげすてよとかける法然等・無明の辺域としるせる弘法大師・理同事勝と宣たる善無畏・意覚等が

法華經の行者にてあるべきか、又頭破作七分と申す事はいかなる事ぞ刀をもてきるやうにわるとしれるか、經文には如阿梨樹枝とこそとかれたれ、人の頭に七滴あり七鬼神ありて一滴食は頭をいたむ三滴を食は寿絶えんとす七滴皆食えば死するなり、今の世の人人は皆頭阿梨樹の枝のごとくにわれたれども悪業ふかくしてしら

ざるなり、例せばてをおいたる人の或は酒にゑい或はねいりぬればをばえざるが如し、又頭破作七分と申すは或は心破作七分とも申して頂の皮の底にある骨のひびたふるなり、死ぬる時はわるる事もあり、今の世の人人は去ぬる正嘉の大地震・文永の大慧星に皆頭われて候なり、其の頭のわれし時ぜひせひやみ・五臓の損ぜし時あかき

腹をやみしなり、これは法華經の行者をそしりしゆゑにあたりし罰とはしらずや。

されば鹿は味ある故に人に殺され、龜は油ある故に命を害せらる。女人はみめ形よければ嫉む者多し、国を治る者は他國の恐れあり、財有る者は命危し。法華經を持つ者は必ず成仏し候、故に第六天の魔王と申す三界の主、此の經を持つ人をばあながちねた強に嫉み候なり、此の魔王疫病の神の目にも見え、ずして人に付き候やうに古酒に人の酔い候如く、國主

父母、妻子に付きて法華經の行者を嫉むべしと見えて候、少しも違わざるは當時の世にて候、日蓮は南無妙法蓮華經と唱うる故に二十余年所を追はれ二度まで御勘氣を蒙り、最後には此の山にこもる、此の山の体たらくは西は七面の山、東は

天子のたけ北は身延の山、南は鷹取の山、四つの山高きこと天に付き、さがしきこと飛鳥もとびがたし、中に四つの河あり所謂富士河、早河、大白河、身延河なり、其の中に一町ばかり間の侯に庵室を結びて候、昼は日を

みず、夜は月を拝せず、冬は雪深く、夏は草茂り、問う人希なれば道をふみわくることがたし、殊に今年に雪深くして人問うことなし、命を期として法華經計りをたのみ奉り候に御音信ありがたく候、しらず釈迦仏の御使が過去の父母の御使かと

申すばかりなく候、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

いぬ ぶんえい
去る文永八年太歳辛 未九月のころより御勘氣をかほりて北国の海中佐渡の嶋にはなたれたりしかば、なにとなく
そつてまづかまくら
相州鎌倉に住しには生国なれば安房の国はこひしかりしかども我が国ながらも人の心もいかにとやむつびにくくありしか
ば、常にはかよつ事もなくしてすぎしに御勘氣の身となりて死罪となるべかりしが、しばらく

く国の外にはなたれし上はをぼるげならではかまくらへはかゝるべからず、かゝらずば又父母のはかをみる身となりがたしと
をもひつづけしかば、いまさらとびたつばかりくやくしてなどかかふる身とならざりし時 日にも月にも海もわたり山をも
こえて父母のはかをみ師匠のありやうをもとひをとづれざりけんとなげかしくて、彼の蘇武が胡国に入りて十九年かり
の南へびけるをうらやみ、仲丸が日本国の朝使としてもちこつ

にわたりてありしがかゝれずしてとしを経しかば月の東に出でたるをみて 我が国みかさの山にも此の月は出でさせ給いて
故里の人も只今月に向いてながむらんと心をすましてけり、此れもかくをもひやりし時 我が国より 或人のびんにつけて
衣をたびたりし時 彼の蘇武がかりのあし此れは現に衣ありにるべくもなく心な

ぐさみて候しに、日蓮はさせる失あるべしとはをもはねども此の国のならひ念仏者と禅宗と律宗と真言宗にすかされぬ
るゆへに法華経をば上にはたうとむよしをふるまい心には入らざるゆへに、日蓮が法華経をいみじ

きよし申せば威音王仏の末の末法に不輕菩薩をにくみしごとく上一人より下万人にいたるまで名をもきかじまして形を
みる事はをもひよらず、さればたとひ失なくともかくなさるる上はゆるしがたし、ましていわう

や日本国にほんこくの人の父母ふぼよりもをもく日月にちがつよりもたかくたのみたまへる念仏ねんぶつを無間の業むげんと申し禅宗ぜんじゆうは天魔てんまの所為しよゐ、眞言しんごんは亡国ぼうこくの邪法じゃほう念仏者ねんぶつ・禅宗ぜんじゆう・律僧等りつしゆうが寺をばやきはらひ念仏者ねんぶつどもが頸をはねらるべしと申す上、故最明寺極樂寺の両入道殿にゅうだうてんを阿鼻地獄あびじこくに墮ち給いたりと申すほどの大禍ある身なり、此れ程の大事だいじを上下万人じやうげばんにんに申し

つけられぬる上は設たとひそらごととなりとも此の世にはつかびがたし、いかにいわつやこれはみな朝夕ちやうせきに申し昼夜に談ぜしうへ平左衛門尉等の数百人の奉行人ぶぎやうに申しきかせいかにとがに行わるとも申しやむまじきよししたたかにいぬきかせぬ、されば大海たいかいのそこのちびきの石はつかぶとも天よりふる雨は地にをちずとも日蓮にちれんはかまくら

へ還かえるべからず、但し法華經ほけきやうのまことにおはしまし日月にちげつ我をすて給はずばかり入りて又父母ふぼのはかをもみるへんもありなんと心づよくをもひて梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天してんはいかになり給いぬるやらん、天照太神てんしやうたいじん・正八幡宮しやうはちまんぐうは此の国にをはせぬか、仏前ぶつぜんの御起請ぎしやうはむなしくて法華經ほけきやうの行者ぎやうにやをばすて給うか、もし此の事叶かなわずば日蓮にちれん

が身のなにともならん事はをしからず、各各現げんに教主きやうしゆ釈尊しやくそんと多宝如来たぼうにょらいと十方じふじやうの諸仏しよぶつの御宝前ごぼうぜんにして誓状せいじやうを立て給いしが今日蓮けふれんを守護しゆごせずして捨て給うならば正直捨方便しやうじきしやほうべんの法華經ほけきやうに大妄語だうまうごを加給たまへるか、十方三世じふじやうさんぜの諸仏しよぶつをたばらかし奉たてまれる御失ごたふは提婆達多だいばだつたが大妄語だうまうごにもこ瞿伽利尊者くぎやりそんじやが虚誑罪こかうざいにもまされたり設たとひ大梵天ぼんてんとして色界しやくがいの

頂こに居ゐし千眼天せんがんてんといはれて須弥しゆみの頂いただきにおはすとも日蓮にちれんをすて給うならば阿鼻あびの災にはたきぎとなり無間むげん・大城だいじやうにはいづるにおはせじ、此の罪つみをそろしとおぼさばいそぎいそぎ国土こくどにするしをいたし給え、本国こくかへし給たまへと高き山にのぼりて大音声おんしやうをはなちてさけびしかば、九月の十二日に御勘氣ごかんき十一月に謀反ぼはんのものゝできた

り、かゝる年の二月十一日に日本国にほんこくのかためたるべき大将どもよしく打ちころされぬ、天のせめといつ事あらはなり、此れにやをどろかれけん弟子でしどもゆるされぬ。

而れどもいまだゆりざりしかば、いよいよ強盛じやうせいに天に申せしかば頭の白き鳥かしらすとび来りぬ、彼の燕たいしのたむ太子たいし

馬鳥うまどりのれい日蔵上人にっそうしやうじんの山がらすがしらもしくくなりけり、我がかゝるべき時やきぬらんながめし此れなりと申し
もあす、文永ぶんえい十一年二月十四日の御赦免状ごしゃめんじやう同三月八日に佐渡さどの国につきぬ同十三日に国を立ちて

まつらといつにをりて十四日はかのつにとどまり、同じき十五日に越後の寺どまりのつにつくべきが大風たいふうにはなたれさいわ
ひにぶつかぢをすぎてかしはさきにつきて、次の日はうつにつき中十二をて二月二十六日

鎌倉かまくらへ入りぬ、同じき四月八日に平左衛門尉さへもんのかみに見参す、本よりこせし事なれば日本国のほろびんを助けんがために三度
いさめに御用ごもちいなくば山林さんりんにまじわるべきよし存ぜしゆへに同五月十二日に鎌倉をいでぬ。

但しただ本国にいたりて今一度父母ふたひはふのはかをもみんとをもへどもにしきをきて故郷へはかへれといふ事は内外ないげのをきてなり、
させる面目めんもくもなくして本国へいたりなば不孝ふこうの者にてやあらんずらん、これほどのかたかり事だにもやぶれてかまくらへか
へり入る身なれば又にしきをきるへんもやあらんずらん、其の時父母そのときふはのはか

をもみよかすとぶかくおもつゆへにいまに生国なまくにはいたらねどもさすがこひしくて吹く風立つくもまでも東のかたと申せば庵
をいでて身にふれ庭に立ちてみるなり、かかる事なれば故郷の人は設たといい心よせにおもはぬ物なれども我が国の人といはなつ
かしくてはんぐるところに此の御ふみを給びて心もあらずしていそぎい

そぎひらきてみ候みまうへをとし六月の八日にいや四郎にをくれてとかかれたり、御ふみもひらかざりつるまではうれしく
てありつるが、今此のことばをよみてこそなにかくいそぎひらきけんうらしまが子のはこなれやあけてくやしきものか
な、我が国の事はつくつらくあたりし人のすへまでもをろかならずをもつ

にことさら此の人は形も常の人にはすぎてみへつちをもひたるけしきもかたくなにもなしと見えしかども、さすが法華經ほけきやうの
みざなればしらぬ人ひとあまたありしかば言もかけずありしに、経はてさせ給たまいて皆人みなも立ちかゝる、此の人も立ちかへりし
が使を入れて申せしは安房あわの国のあまつと申すとこの者にて候が、をさなくより

御心ざしをもひまいらせて候上母にて候人もをろかならず申しなれなれしき申し事にて候へども、ひそかに申すべき事の候、さきざきまひりて次第になれまいらせてこそ申し入るべきに候へどもゆみやとる人にみやづ

かひてひま候はぬ上事きつになり候いぬる上はをそれをかへみず申すとこまごまときこえしかば、なにとなく生国の人なる上そのあたりの事ははばかるべきにあらずとて入れたてまつりてこまごまとこしかたゆく

すかたりてのちには世間無常なりいつと申す事をしらず、其の上武士に身をまかせたる身なり又ちかく申しかけられて候事のがれがたし、さるにては後生こそをそろしく候へたすけさせ給へときこへしかば経文をひいて

申しきかす、彼のなげき申せしは父はさてをき候いぬ、やもめにて候はわをさしおきて前に立ち候はん事こそ不孝にをば候へもしやの事候ならば御弟子に申したてたび候へんごろにあつら候いしが、そのた

びは事ゆなく候へれども後にむなくなる事のいできたりて候いけるにや、人間に生をつけたる人上下につけてうれなき人はなけれども時にあたり人人にしたがひてなげきしなじななり、譬は病のならひは何の病

も重くなりぬれば是にすぎたる病なしとをもつがごとし、主のわかれをやのわかれ夫妻のわかれいつれか。

おろかなるべきなれども主は又他の主もありぬべし、夫妻は又かはりぬれば心をやすむる事もありなん、をやこのわかれこそ月日のたつるままにいよいよなげきふかりぬぐみ候へをやこのわかれにもをやはゆきて子はとどまるは同じ無常なれどもことわりにもや、をひたるはわはとどまりてわきき子のさきにたつ

なさけなき事なれば神も仏もつらめしや、いかなればをやに子をかせ給いてさきにはたてさせ給はず、とどめをかせ給いてなげかせ給うらんと心つつし、心なき畜生すら子のわかれしのびがたし、竹林精舎の金鳥

はかひこのために身をやし鹿野苑の鹿は胎内の子をしみて王の前にまいれり、いかにいわつや心あらん人にをいてをや、されば王陵が母は子のためになつきをくだき、神堯皇帝の後は胎内の太子の御ために腹をやぶらせ給いき、此等ををもひ

つづけさせ給はんに火にも入り頭をもわりて我が子の形をみるべきならばをしからずとこそおぼすらめとおもひやられてなみだもとどまらず。

又御消息に云く人をもころしたりし者なればいかやうなところにか生れて候らんをほせをかほり候はんと云云、夫れ針は水にせずむ雨は空にとどまらず、蟻子を殺せる者は地獄に入り死にかばねを切れる者は悪道をまぬかれず、何に況や人身をつけたる者をころせる人をや、但し大石も海にかぶ船の力なり大火もきゆる事

水の用にあらずや、小罪なれども懺悔せざれば悪道をまぬかれず、大逆なれども懺悔すれば罪きぬ、所謂る粟をつみたりし比丘は五百生が間牛となる、をつみし者は三悪道に墮ちにき、羅摩王・拔提王・毘楼真王・那沙王・迦帝王・毘舍王・月光王・光明王・日光王・愛王持多人王等の八万余人の諸王は皆父を殺して位につく、善知識にあはざれば罪きずして阿鼻地獄に入りき、波羅奈城に悪人あり其の名をば阿逸多といふ母をあひせしゆに父を殺し妻とせり、父が師の阿羅漢ありて教訓せしかば阿らかむを殺す、母又他の夫にとづきしかば又母をも殺しつ、具に三逆罪をつくりしかば隣里の人うとみしかば、一身たもちがたくして祇精舎にゆいて出家をもとめしに諸僧許さざりしかば悪心強盛にして多くの僧坊をやきぬ、然れども釈尊に値ひ奉りて出家をゆるし給にき、北天竺に城あり細石となづく彼の城に王あり竜印といつ、父を殺してありしかども後に此れをおそれて彼の国をすて仏にまいりたりしかば仏懺悔を許し給いき、阿闍世王はひととなり三毒熾盛なり十悪ひまなし、其の上父をころし母を害せんとし提婆達多を師として無量の仏弟子を殺しぬ、悪逆のつもりに二月十五日仏の御入滅の日にあたりて無間地獄の先相に七処に悪瘡出生して玉体しづかならず、大火の身をやくがごとく熱湯をくみかくるがごとくなりしに六大臣まいりて六師外道を召されて悪瘡を治すべきやう申しき、今の日本国の人人の禅師・律師・念仏者・真言師等を善知識とたのみて蒙古国を調伏し後生をたすからんとをもつがごとし、其の

上提婆達多だいたばだつたは阿闍世王あじゃせの本師ほんしなり、外道げどうの六万蔵ぶつぼう仏法はちまんの八万蔵はちまんをそらにして世間出世せけんしゅせのあきらかなる事日月にちがつと明鏡めいきやうとに向うがごとし、今の世の天台宗てんだいしゆうの碩学せきがくの顯密二道けんみつにとうを胸むねにつかべ一切経いっさいきやうをそらんぜしがごとし、此れ等の人人諸の大臣ひとびともろもろだいじん阿闍世王あじゃせを教訓きやうくんせしかば仏に帰依きえし奉る事たてまつなかりし程に摩竭堤たこくに天変度てんぺんたひたび度かさなり地天ちようしきりなる上大風たいふう・大旱ききんば飢饉疫癘えきれいひまなき上他国たこくよりせめられてすでにかつとみえしに惡瘡あくそうすら身に出しかば国土こくど一時にほろびぬとみえし程に俄に仏前にまいり懺悔ざんげして罪つみきえしなり。

これらはさてをき候いぬ人のをやは悪人あくにんなれども子善人ぜんにんなればをやの罪つみゆるす事あり、又子悪人あくにんなれども親善人ぜんにんなれば子の罪つみゆるさるる事あり、されば故弥いよいよ四郎殿しやうらふだは設たい悪人あくにんなりともうめる母釈迦しやかぶつ仏の御宝前ぼつぜんにして昼夜しやなげきとぶらば争いか彼人いかつかばざるべき、いかにいわつや彼の人は法華經ほけきやうを信じたりしかばをやをみち

びく身とぞなられて候らん、法華經ほけきやうを信ずる人はかまへかまへ法華經ほけきやうのかたきををそれさせ給へ念仏者ねんぶつと持齋じさいと真言師しんごんしと一切南無妙法蓮華經いっさいなむみょうほうれんげきやうと申さざらん者をばいかに法華經ほけきやうをよむとも法華經ほけきやうのかたきとしろしめすべし、かたきをしらねばかたきにたばらかされ候ぞ、あはれあはれけさんに入りてくわしく申し候はばや、又

これよりそれへわたり候三位房佐度公等ぼうにたびごとにこのふみをよませてきこしめすべし、又この御文おんぶんをば明慧房みやうえぼうにあづけさせ給たまうべし、なにとなく我が智慧ちえはたらぬ者が或はをこづき或は此文このもんをさいかくとしてそしり候なり、或はよも此の御房ごぼうは弘法大師こうぼうだいしにはまさらじよも慈覚大師じかくだいしにはこへしな人とくくらべをし候ぞかし、かく申もうす人をばものしらぬ者とをばすべし。

建治二年太歳丙子三月

日

日蓮花押

甲州南部波木井の郷山中

一一五 光日上人御返事

弘安四年八月 六十歳御作

932P

法華經二の卷に云く、其の人命終して阿鼻獄に入らんと云云、阿鼻地獄と申すは天竺の言唐土日本には無間と申す

無間はひまなしとかけり、一百三十六の地獄の中に一百三十五はひま候、十二時の中にあつけれども又すすしき事もあり

たがたけれども又ゆるくなる時もあり、此の無間地獄と申すは十二時に一時かた時も大苦なら

ざる事はなし故に無間地獄と申す、此の地獄は此の我等が居て候大地の底二万由旬をすぎて最下の処なり、此れ世間の

法にもかるき物は上に重き物は下にあり、大地の上には水あり地よりも水かるし、水の上には火あり水よりも火かるし、火

の上に風あり火よりも風かるし、風の上に空あり風よりも空かるし、人をも此の四大を以て

造れり悪人は風と火と先ず去り地と水と留まる故に人死して後重きは地獄墮つる相なり、善人は地と水と先ず去り風

火留る重き物は去りぬ軽き物は留まる故に輕し人天全まるる相なり、地獄の相重きが中の重きは無間地獄の相なり、彼

の無間地獄は縦横二万由旬なり八方は八万由旬なり、彼の地獄に墮つる人人は一人の身大に

して八万由旬なり多人も又此くの如し、身のやはらかなる事綿の如し火のこわき事は大風の焼亡の如し鉄の火の如し、詮

を取つて申さば我が身より火の出ずる事十三あり、二の火あり足より出でて頂をとる、又二の火あり頂より出でて足

をとる、又二の火あり背より入りて胸より出ず、又二の火あり胸より入りて背へ出ず、又二の火あり左の脇より入りて右の

脇へ出ず、又二の火あり右の脇より入りて左の脇へ出ず、亦一の火あり首より下に向いて雲の山を巻くが如くして下る、此の

地獄の罪人の身は枯れたる草を焼くが如し、東西南北に走れども逃去所なし、他の苦は且らく之を置く大火の一苦なり、此

の大地獄の大苦を仏委しく説き給うならば我等衆生聞いて皆死す

べし故に仏委しくは説き給う事なしと見えて候。

今日本国の四十五億八万九千六百五十八人の人人は皆此の地獄墮ちさせ給うべし、されども一人として墮つべしとはおぼさず、例せば此の弘安四年五月以前には日本の上下万人・一人も蒙古の責めにあふべしともおぼさざりしを日本国にただにちれん只日蓮一人計りかかる事此の国に出来すべしとしる、其の時日本国の四十五億八万九千六百五

十八人の一切衆生一人もなく他国に責められさせ給いて、其の大苦は譬へはほつろくと申す釜に水を入れてざつこと申す小魚をあまた入れて枯れたるしば木をたかむが如くなるべしと申せば、あらおそろしいまいまし打ち

はれ所を追ひ流せ殺せ信ぜん人人をば田はたをとれ財を奪へ所領をめせと申せしかども、此の五月よりは大蒙古の責めに値いてあきれ迷ふ程にさもやと思う人人もあるやらん、にがにがしうしてせめたくはなけれども有る事なればあたりたりあたりたり、日蓮が申せし事はあたりたりばけ物のもの申す様にこそ候めれ。

去る承久の合戦に隠岐の法皇の御前にして京の二位殿などと申せし何もしらぬ女房等の集りて王を勧め奉り戦を起して義時に責められあはて給いしが如し、今今御覽ぜよ法華経誹謗の科と云ひ日蓮をいやしみし罰と申し経と仏と僧との三宝誹謗の大科によつて現生には此の国に修羅道を移し後生には無間地獄行き給うべし、此れ

又偏に弘法・慈覚・智証等の三大師の法華経誹謗の科と達磨善導律僧等の一乗誹謗の科と此れ等の人人を結構せさせ給う国主の科と、国を思ひ生处を忍びて兼て勘合啓示を用いずして還つて怨をなす大科、先例を思へば呉王夫差の伍子胥が諫を用いずして越王勾踐にほろぼされ、殷の紂王が比干が言をあなづりて周の武王に責められしが如し。

而るに光日尼御前はいかなる宿習にて法華経をば御信用ありけるぞ、又故弥四郎殿が信じて候しかば子の勧めか此の功德空しからざれば子と俱に靈山浄土参り合せ給わん事疑いなるべし、烏竜と云いし者は法華経を

謗はつじて地獄じごくに墮おちたりしかども其その子に遺いり竜りゆうと云いいし者ほけき法華經ようを書かきて供養くやうせしかば親おや仏ぶつに成なりぬ、又また妙莊嚴王めうしやういんおうは惡王あくおうなりしかども御子の淨藏・淨眼みちびに導みちびかれて娑羅樹王しやらじゆおう仏ぶつと成ならせ給たまう、其そのの故ゆゑは子の肉は母の肉母の骨は子の骨なり、松榮しょうえいれば柏悦はくえつぶ芝しかるれば蘭らんなく情無じやうむき草木そうもくすら友の喜よろこび友の歎なげき一つなり、何いかに況いはや親と子との

契ちぎり胎内たいたいに宿むかして九月くわつを經へて生なみ落おし數年すうねんまで養やしなひき、彼かになはれ彼かにとぶらはれんと思おもひしに彼をかとぶらふうらめしさ、彼いかん如何いかんがあらんと思おもつこころぐるしさ、いかにせん、いかにせん、子こを思おもう金鳥こんちやうは火の中に入りひにき、子こを思おもひし貧女ひんによは恒河こんがに沈しづみき、彼の金鳥きんちやうは今いまの弥勒菩薩みろくぼさつなり彼の河に沈しづみし女人にょにんは大梵天王だいぼんてんのうと生なまれ給たまえり、何いかに況いはや今の光日上人くわうじやうじんとは子こを思おもうあまりに法華經ほけききやうの行者ぎやうぎやと成なり給たまふ、母と子と俱ともに靈山淨土りやうせんじやうど參まゐり給たまうべし、其そのの時御對面ごたいめんいかにうれしかるべき、いかにうれしかるべき、恐おそ恐おそ。

八月八日

日蓮花押
にぢれんかおう

光日上人御返事
くわうじやうじんごへんじ

一一六 光日尼御返事 くわうにんごへんじ

934P

なきなをながさせ給たまうにや、三つのつなは今生こんじやうに切きれぬ五つのさわりはずではれぬらむ、心の月くもりなく身のあかきあかはてぬ、即身そくしんの仏ぶつなりたうとしたうとし、くはしく申もうすべく候もちへどもあまりふみををくかき候もちときにかきたりて候もちぞ恐おそ恐おそ謹言きんげん。

九月十九日

日蓮在御判
にぢれん

光日尼くわうにんごぜん御返事
ごへんじ

与工藤左近尉吉隆

於伊豆伊東

抑此の流罪の身になりて候につけて二つの大事あり、一には大なる悦びあり其の故は此の世界をば娑婆と名く娑婆と申すは忍と申す事なり故に仏をば能忍と名けたてまつる、此の娑婆世界の内に百億の須弥山百億の日月百億の四州あり、其の中の中央の須弥山日月四州に仏は世に出でまします、此の日本国は其の仏の世に出で

まします国よりは丑寅の角にあたりたる小島なり、此の娑婆世界より外の十方の国土は皆浄土にて候は人の心もやはらかに賢聖をのり悪む事も候はず、此の国土は十方の浄土にすてはてられて候・十悪・五逆・誹謗賢聖・不孝父母・不敬沙門等の科の衆生が三惡道に墮ちて無量劫を経て還つて此の世界に生れて候が、先生の惡業の習氣失せ

ずしてややもすれば十悪・五逆を作り賢聖をのり父母に孝せず沙門をも敬はず候なり、故に釈迦如来世に出でましますしかば或は毒藥を食に雜て奉り或は刀杖・惡象・師子・惡牛・惡狗等の方便を以て害し奉らんとし或は女人

を犯すと云い或は卑賤の者或は殺生の者と云い或は行き合ひ奉る時は面を覆つて眼に見奉らじとし或は戸を閉じ窓を塞ぎ、或は国王・大臣の諸人に向つては邪見の者なり高き人を罵者など申せしなり、大集經涅槃經等に見えたり、

させる失も仏にはおはしまさざりしかども只此の国のくせかたわとして惡業の衆生が生れ集りて

候上、第六天の魔王が此の国の衆生を他の浄土企さじとばかりを成してかく事にふれてひがめる事をなすなり、此のたばかりも詮する所は仏に法華經を説かせまいらせじ料と見えて候、其の故は魔王の習として三惡道

の業を作る者をば悦び三善道の業を作る者をばなげく、又三善道の業を作る者をばいたつなげかず三乘とならんとする者をばいたつなげく、又三乘となる者をばいたつなげかず仏となる業をなす者をば強になげき事

にふれて障をなす、法華経は一文一句なれども耳にふる者は既に仏になるべきと思ひていたう第六天の魔王もなげき
思う故に方便をまはして留難をなし経を信ずる心をすてしめんとたばかり、而るに仏の在世の時は濁世なりといへども
五濁と始たりし上仏の御力をも恐れ人の貪瞋癡邪見も強盛ならざりし時だにも竹杖外道は神通第一の目連尊者を
殺し、阿闍世王は悪象を放て三界の独尊ををどし奉り、提婆達多は証果の阿羅漢蓮華
比丘尼を害し、瞿伽利尊者は智慧第一の舍利弗に悪名を立てき、何に況や世漸く五濁の盛になりて候をや、況や世末代
に入りて法華経をかりそめにも信ぜん者の人にそねみねたまれん事はおびただしかるべきか、故に法華経に云く「如来の
現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」と云云、始に此の文を見候いし時はさしもやと思ひ候いしに今こそ仏の御言は
違はざりけるものかなと殊に身に當つて思ひ知れて候へ

日蓮は身に戒行なく心に三毒を離れざれども此の御経を若しや我も信を取り人にも縁を結ばしむるかと思つて随分
世間の事おだやかならんと思ひき、世末になりて候へば妻子を帯して候比丘も人の帰依をつけ魚鳥を服する僧もさてこそ
候か、日蓮はさせる妻子をも帯せず魚鳥をも服せず只法華経を弘めんとする失によりて妻子を帯せずして犯僧の名四海
に満ち螻蟻をも殺さざれども悪名一天に弥れり、恐くは在世に釈尊を諸の外道が毀り奉り
しに似たり、是れ偏に法華経を信ずることの余人よりも少し経文の如く信をもむけたる故に悪鬼其の身に入つてそねみを
なすかとをばえ候は是れ程の卑賤無智無戒の者の二千余年已前に説かれて候法華経の文にの
せられて留難に値つべしと伝記しをかれまいらせて候事のつれしき申し尽くし難く候、此の身に学文つかまつりし事やうや
く二十四五年にまかりなるなり、法華経を殊に信じまいらせ候いし事はわづかに此の六七年よりこ

のかたなり、又信じて候いしかども懈怠の身たる上或は学文と云ひ或は世間の事にさえられて一日にわづかに一卷・一品
題目計なり、去年の五月十二日より今年正月十六日に至るまで二百四十余日の程は昼夜十二時に法華経を修行し奉る

と存じ候、其の故は法華經の故にかかる身となりて候は行住坐臥に法華經を読み行するにてこそ候へ人間に生を受けて
是れ程の悦びは何事か候べき。

凡夫の習い我とはげみて菩提心を發して後生を願うといふも自ら思ひ出し十二時の間に一時・二時こそはげみ候へ

是は思ひ出さぬにも御經をよみ読まざるにも法華經を行するにて候か、無量劫の間六道四生を輪回し候けるには或
は謀叛をおこし強盜夜打等の罪にてこそ国主より禁をも蒙り流罪死罪にも行はれ候らめ、是

は法華經を弘むるかと思ふ心の強盛なりしに依つて惡業の衆生に讒言せられてかかる身になりて候は定て後生の勤に
はなりなんと覚え候、是れ程の心ならぬ昼夜十二時の法華經の持經者は末代には有がたくこそ候らめ、又止事なくめでた

き事侍り無量劫の間六道に回り候けるには多くの国主に生れ値ひ奉りて或は寵愛の大臣閑白

等ともなり候けん、若し爾らば国を給り財宝官祿の恩を蒙けるか法華經流布の国主に値ひ奉り其の国にて法華經の御名
を聞いて修行し是を行じて讒言を蒙り流罪に行われまいらせて候国主には未だ値いまいらせ候はぬか、

法華經に云く「是の法華經は無量の國中に於て乃至名字をも聞くことを得べからず何に況んや見ることを得て受持し誦
せんをや」と云云、されば此の讒言の人国主こそ我が身には恩深き人にはをわしまし候らめ。

仏法を習ふ身には必ず四恩を報すべきに候か、四恩とは心地觀經に云く「一切衆生の恩、一切衆生なくば衆生
無辺誓願度の願を發し難し、又惡人無くして菩薩に留難をなさずばいかでか功德をば増長せしめ候べき、二には父母の

恩、六道に生を受けるに必ず父母あり、其の中に或は殺盜惡律儀謗法の家に生れぬれば我と其の科を
犯さざれども其の業を成就す、然るに今生の父母は我を生みて法華經を信ずる身となせり、梵天帝釈四大天王・

轉輪聖王の家に生まれて三界四天をゆづられて人天四衆に恭敬せられんよりも恩重きは今の某が父母なるか、三に
は国王の恩、天の二光に身をあたため地の五穀に神を養ふこと皆是れ国王の恩なり、其の上今度法華經

を信じ今度生死を離るべき国主に値い奉れり、争か少分の怨に依つておるかに思ひ奉るべきや、四には三宝の恩、釈迦如来無量劫の間菩薩の行を立て給いし時一切の福德を集めて六十四分と成して功德を身に得給へり、其の一分をば我が身に用ひ給ふ、今六十三分をば此の世界に留め置きて五濁雜亂の時非法の盛ならん時 謗法の者、国に充滿せん時、無量の守護の善神も法味をなめずして威光勢力減ぜん時、日月光りを失ひ天竜雨をくださず地神地味を減ぜん時、草木根茎枝葉華菓等々の七味も失せん時、十善の国王も貪瞋癡をまし父母六親に考せずしたしからざらん時、我が弟子無智無戒にして髪ばかりを剃りて守護神にも捨てられて活命のはかりごとながらん比丘比丘尼の命のささへせんと誓ひ給へり、又果地の三分の功德二分をば我が身に用ひ給ひ、仏の寿命百二十まで世にましますべかりしが八十にして入滅し、残る所の四十年の寿命を留め置きて我等に与給ふ恩をば四大海の水を硯の水とし一切の草木を焼て墨となして一切のけだもの毛を筆とし十方世界の大地を紙と定めて注し置くとも争か仏の恩を報じ奉るべき、法の恩を申さば法は諸仏の師なり諸仏の貴き事は法に依る、されば仏恩を報ぜんと思はん人は法の恩を報ずべし、次に僧の恩をいば仏宝法宝は必ず僧によりて住す、譬えば薪なければ火無く大地無ければ草木生ずべからず、仏法有りといへども僧有りて習伝ずんば正法像法・二千年過ぎて末法へも伝はるべからず、故に大集經に云く五箇の五百歳の後に無智無戒なる沙門を失ありと云つて是を悩すは此の人、仏法の大燈明を滅せんと思えと説かれたり、然れば僧の恩を報じ難し、されば三宝の恩を報じ給うべし、古の聖人は雪山童子常啼菩薩藥王太子普明王等此等は皆我が身を鬼のつちかひとなし身の血髓をうり臂をたき頭を捨て給いき、然るに末代の凡夫三宝の恩を蒙りて三宝の恩を報ぜず、いかにしてか仏道を成ぜん、然るに心地觀經梵網經等には仏法を學し円頓の戒を受けん人は必ず四恩を報ずべしと見えたり、某は愚癡の凡夫血肉の身なり三惑一分も断ぜず只法華經の故に罵詈毀謗せられて刀杖を加えられ流罪せられたる

を以て大聖の臂を焼き髓をくだき頭をはねられたるになぞらへんと思ふ、是れ一つの悦びなり。

第二に大なる歎きと申すは、法華經第四に云く「若し悪人有つて不善の心を以て一劫の中に於て現に仏前に於て常に仏を毀罵せん其の罪尚輕し、若し人一つの惡言を以て在家出家の法華經を誦誦する者を毀皆せん其の罪甚だ重し」と云云、此等の經文を見るに信心を起し身より汗を流し両眼より涙を流すこと雨の如し我一人此の

国に生れて多くの人をして一生の業を造らしむることを歎く、彼の不輕菩薩を打擲せし人現身に改悔の心を起せしだにも猶罪消え難くして千劫阿鼻地獄に墮ちぬ、今我に怨を結べる輩は未だ一分も悔る心もおこさず、是体の人の受くる業報を大集經に説いて云く「若し人あつて千万億の仏の所にして仏身より血を出さん意に於て如何此

の人の罪をうつ事寧ろ多しとせんや否や、大梵王言さく若し人只一仏の身より血を出さん無間の罪尚多し、無量にして算をおきても数をしらず阿鼻大地獄の中に墮ちん、何に況や万億の仏身より血を出さん者を見んをや、終によく広く彼の人の罪業果報を説く事ある事ながらん但し如来をば除き奉る、仏の言はく大梵王若し我が為に

髪をそり袈裟をかけ片時も禁戒をうけず欠犯をうけん者をなやましの杖をもつて打ちなんとする事有らば罪をうつ事彼よりは多しと。

弘長二年壬戌正月十六日

日蓮 花押

工藤左近尉殿

南無妙法蓮華經

問うて云く法華經の意もしらず只南無妙法蓮華經と計り五字七字に限りて一日一遍一月乃至一年十年一期生の間に
 只一遍など唱えても輕重の惡に引かれずして四惡趣におもむかずついに不退の位にいたるべしや、答えて云くしかるべき
 なり、問うて云く火火といえども手にとらざればやけず水水といえども口にのまざれば水の

ほしさもやまず、只南無妙法蓮華經と題目計りを唱うとも義趣をまぬかれん事いがあるべかるらん、答えて云く獅子の
 筋を琴の絃として一度奏すれば余の絃悉くきれ梅子のすき声をきけば口につたまりう

るをう世間の不思議すらは是の如し況や法華經の不思議をや小乗の四諦の名計りをさやづる鸚鵡なを天に生ず三歸計り
 を持つ人犬魚の難をまぬかる何に況や法華經の題目は八万聖教の肝心一切諸仏の眼目なり汝等此れを唱えて四惡趣
 をはなるべからずと疑うか、正直捨方便の法華經には「信を以て入ることを得」と云い雙林最後の涅槃經には「是の

菩提の因は復無量なりと雖も若し信心を説けば即ち已に摂尽すと等云云

夫れ仏道に入る根本は信をもて本となす五十二位の中には十信の位には信心初めなりたとひさとりなければも信心あ
 らん者は鈍根も正見の者なりたとひさとりあるとも信心なき者は誹謗闡提の者なり善星比丘は二百五十戒を持ち四
 禅定を得十二部經を諳にせし者提婆達多是六万八万の宝蔵をおぼへ十八變を現ぜしかども此等是有解無信の者今に
 阿鼻大城にありと聞く、迦葉舍利弗等は無解有信の者なり仏に授記を蒙りて華光如來

・光明如来といはれき、仏説いて云く「疑いを生じて信ぜざらん者は即ち当に惡道に墮つべし」等云云、此等是有解無信の者を説き給う、而るに今の代に世間の學者の云く只信心計りにて解する心なく南無妙法蓮華經と唱つる計りにて争か悪信をまぬかるべき等云云、此の人人は經文の如くならば阿鼻大城まぬかれがたし、さればさせる解りなくとも南無妙法蓮華經と唱つるならば惡道まぬかるべし譬えば蓮華は日に随つて回る蓮に心なし芭蕉は雷によりて増長す此の草に耳なし、我等は蓮華と芭蕉の如く法華經の題目は日輪と雷との如し、犀の生角を身に帶して水に入りぬれば水五尺身に近ずかず梅檀の一葉開きぬれば四十由旬の伊蘭を變ず我等が悪業は伊蘭と水との如く法華經の題目は犀の生角と梅檀の一葉の如し、金剛は堅固にして一切の物に破られずされども羊の角と龜の甲に破らる尼俱類樹は大鳥にも枝おれざれどもかのまづげに巢くうせつれう鳥にやぶらる、我等が悪業は金剛の如く尼俱類樹の如し法華經の題目は羊の角のごとくせつれう鳥の如し琥珀は塵をとり磁石は鉄をすう我等が悪業は塵と鉄の如く法華經の題目は琥珀と磁石の如し。

かくをもひて常に南無妙法蓮華經と唱うべし、法華經の第一の卷に云く「無量無數劫にも是の法を聞かんこと亦難し」第五の卷に云く「是の法華經は無量の國中に於て乃至名字を聞くことも得可からず」等云云法華經の御名を聞く事はをばるげにもありがたき事なり、されば須仙多仏多宝仏は世にいでさせ給いたりしかども法華經の御名をだびも説き給わず釈迦如来は法華經のために世にいでさせ給いたりしかども四十二年が間は名をひしてかたりいださせ給わず仏の御年七十二と申せし時はじめて妙法蓮華經となえいでさせ給いたりき、しかりといえども摩訶尸那日本の辺國の者は御名をもきかざりき一千余年すぎて二百五十余年に及びてこそに御名計りをば聞きたりしか、さればこの經に値いたてまつる事をば三千年に一度華さく優曇華、無量無辺劫に一度値うなる一眼の龜にもたとへたり、大地の上に針を立てて大梵天王宮より芥子をなぐるに針のさきに芥子のつらぬかれ

たるよりも法華經の題目に値う事はかたし、この須弥山に針を立ててが須弥山より大風のつよく吹く日いとをわたさん
にいたりてはりの穴にいとさきのいりたらんよりも法華經の題目に値い奉る事かたし、さればこの經の題目をと
なえさせ給はんにはをばしめすべし、生盲の始めて眼をあきて父母等をみんよりもうれしく強きがたきにとられたる者
のゆるされて妻子を見るよりもめずらしとをばすべし。

問うて云く題目計りを唱うる証文これありや、答えて云く妙法蓮華經の第八に云く「法華の名を受持せん者 福量る
べからず」正法華經に云く「若し以の經を聞いて名号を宣持せば特量可からず」添品法華經に云く「法華の名を受持せん
者 福量る可からず」等云云、此等の文は題目計りを唱うる福齒計るべからずとみへぬ 一部

八卷二十八品を受持読誦し隨喜護持等するは広なり、方便品・寿量品を受持し乃至護持するは略なり、但一四句偈
乃至題目計りを唱えとなづる者を護持するは要なり、広略要の中には題目は要の内なり。問うて云く妙法蓮華經の五字
にはいくばくかの功德をおさめたるや、答えて云く大海は衆流を納めたり大地は有情非情を持てり如意宝珠は万財を
雨ふらし梵王は山界を領す妙法蓮華經の五字または是の如し一切の九界の衆生並に仏界を納む、十界を納むれば亦十界の
依報の国土を収む、先ず妙法蓮華經の五字に一切の法を納むる事をいは

ば經の一字は諸經の中の王なり一切の諸經を納む、仏世に出でさせ給いて五十余年の間八万聖教を説きをかせ給いき、
仏は人壽百歳の時王申の歳二月十五日の夜半に御入滅あり、其の後四月八日より七月十五日に至るまで一夏九旬
の間二千人の阿羅漢結集堂にあつまりて一切經をかきをかせ給いき、其の後正法一千年の間は五天竺に一切經ひろま
らせ給いかども震旦国には渡らず、像法に入つて二十五年と申せしに後漢の孝明皇帝永平

十年丁卯歳・仏教始めて渡つて唐の玄宗皇帝開元十八年庚午の歳に至るまで渡れる訳者・一百七十六人持ち来る經・律
論一千七十六部・五千四十八卷・四百八十帙・是れ皆法華經の經の一字の眷属の修多羅なり。

先ず妙法蓮華經の以前四十余年の間の經の中に大方弘華嚴經と申す經まします。竜宮城には二本あり上本は十三
世界微塵数の品・中本は四十九万八千八百偈・下本は十万偈四十八品・此の三本の外に震旦・日本には僅に八十卷・六十
卷等あり、阿含・小乘經・方等・般若の諸大乘經等、大日經は梵本には阿婆ら詞きやの五字計りを三千五
百の偈をもつてむすべし、況や余の諸尊の種子・尊形・三摩耶・其の数をしらず、而るに漢土には但わずかに六卷七卷なり、
涅槃經には雙林最後の説・漢土には但四十卷是も梵本之れ多し、此等の諸經は皆釈迦如来の所説の法華經の眷屬の
修多羅なり、この外過去の七仏・千仏・遠遠劫の諸仏の所説・現在十万の諸仏の説經皆法華經の經の一字の眷屬なり、され
ば藥王品に仏・宿王華菩薩に対して云く「譬えば一切の川流江河の諸水の中に海為れ第一なるが如く衆山の中に須弥山
為れ第一・衆星の中に月天子最も為れ第一」等云云、妙樂大師の釈に云く「已今當説最為第一」等云云、以の經の一字の
中に十方法界の一切經納めたり、譬えば如意宝珠の一切の財を納め虚空の万象を
含めるが如し、經の一字は一代に勝る故に妙法蓮華の四字も又八万宝蔵に超過するなり、妙とは法華經に云く「方便の門
を開いて眞実の相を示す」、章安大師の釈に云く「秘密の奥蔵を發く之を稱して妙と為す」、妙樂大師・此の文を受けて
云く「發とは開なり」等云云、妙と申す事は開と云う事なり世間に財を積める蔵に鑰なければ開くことかたし開かざれ
ば蔵の内の財を見ず、華嚴經は仏説き給いたりしかども經を開く鑰をば仏・彼の經に説き給わず、
阿含・方等・般若・觀經等の四十余年も仏説き給いたりしかども彼の經經の意をば開き給わず、門を閉じてをかせ給い
たりしかば人・彼の經經をさとする者一人もなかりき、たとひさとれりともひしも僻見にてありしなり、而るに仏・
法華經を説かせ給いて諸經の蔵を開かせ給いき、此の時に四十余年の九界の衆生始めて諸經の蔵
の内の財を見しりたりなり譬えば大地の上に人畜・草木等あれども日月の光なければ眼ある人も人畜・草木の色彩をし
らず、日月出で給いてこそ始めてこれをば知る事なれ、爾前の諸經は長夜の闇の如く法華經の本・迹

二門は日月の如し、諸の菩薩の二目ある二乗の眇目なる凡夫の盲目なる闍提の生盲なる共に爾前の経経にてはいろかたちをばわきまえずありし程に、法華經の時・迹門の月輪始めて出で給いし時、菩薩の両眼先にさとり二乗の眇目次にさと凡夫の盲目次に開き生盲の一闍提未來に眼の開くべき縁を結ぶ是れ偏に妙の一字の得なり。

迹門十四品の一妙・本門十四品の一妙合わせて二妙、迹門の十妙合わせて二十妙、迹門の三十妙・本門の三十妙合わせて六十妙、迹門の四十妙・本門の四十妙・觀心の四十妙合せて百二十重の妙なり六万九千三百八十四字一の字の下に一の妙あり総じて六万九千三百八十四の妙あり、妙とは天竺には薩と云い漢土には妙と云う妙

とは具の義なり具とは円満の義なり、法華經の一一の文字・一字一字に余の六万九千三百八十四字を納めたり、譬えば大海の一タイの水に一切の河の水を納め一の如意宝珠の芥子計りなるが一切の如意宝珠の財を雨らすが如し、譬えば秋冬枯れたる草木の春夏の日に値うて枝葉・華菓・出来するが如し、爾前の秋冬の草木の如くなる九界

の衆生 法華經の妙の一字の春夏の日輪にあひたてまつりて菩提心の華さき成仏往生の菓なる、竜樹菩薩の大論に云く「譬えば大藥師の能く毒を以て藥と為すが如し」云云、此の文は大論に法華經の妙の徳を釈する文なり、

妙樂大師の釈に云く「治し難きを能く治す所以に妙と称す」等云云、総じて、成仏往生のなりがたき者 四人あり第一に決定性の二乗 第二には一闍提人 第三には空心の者 第四には謗法の者なり、此等を法華經にをいて仏になさせ給う故に法華經は妙と云うなり。

提婆達多是斛飯王の第一の太子・淨飯王にはをひ・阿難尊者がこのかみ・教主釈尊にはいとこに当る・南閻浮提にかるかざる人なり須陀比丘を師として出家し阿難尊者に十八変をならひ外道の六万蔵 仏の八万蔵を胸につかべ五法を行じて殆ど仏よりも尊きけしきなり、両頭をたてて破僧罪を犯さんために象頭山に戒壇を築き仏弟子を招き取り、阿闍世太子をかたらいて云く我は仏を殺して新仏となるべし太子は父の王を殺して新王となり給へ

阿闍世太子あせん たいしすでに父の王を殺せしかば提婆達多だいばだつたは又仏をつかがい大石をもちて仏の御身おんみより血をいだし阿羅漢あらかんたる華色あらかん比丘尼びく にを打ちころし五逆ごぎやくの内三逆をつぶさにつくる、其の上その伽梨尊者かきりそんじやを弟子でしとし阿闍世王あじやせを檀那だんなとたのみ五天竺てんてん・十六たいくの大国たいこく・五百の中国等ちゆうごくの二逆・三逆等をつくれる者は皆提婆みなだいばが一類いちるいにあらざる事これなし、譬たとえば大海の諸河しよをあつめ大山の草木そくもくをあつめたるがごとし、智慧ちえの者は舍利弗しゃりほつにあつまり神通じんつうの者は目連もくれんにしたがひ悪人あくにんは提婆だいばにがたらしいなり、されば厚さ十六万八千由旬ゆじゆん其の下に金剛こんかうの風輪ある大地だいちすでにわれて生身しやうしんに無間むげん・大城だいじやうに墮おちにき、第一だいいちの弟子でしく伽梨かきりも又生身に地獄ぢじくに入る施遮婆羅門せしやばらもん女もおちにき波瑠璃王はるりもをちぬ善星ぜんじやう比丘びくもおちぬ、又此等の人人の生身に墮おちしをば五天竺てんてん・十六の大国たいこく・五百の中国ちゆうごく・十千の小国の人人も皆これをみる、六欲りく・四戦中丁無爭梵字音釈だいろくてん まおう えんまほうおつ第六天の魔王むげん だいいじやうも閻魔法王等も皆御覽みなありき、三千大千他界さんぜん じゆつぽうほつかい・十方法界の衆生も皆開みなきしなり、されば大地微塵劫だいちみじんはすぐとも無間むげん・大城を出づがらず、劫石はひすらぐとも阿鼻大城あびだいじやうの苦はつきじとこそ思い合あひいたりしに、法華經ほけきやうの提婆品だいばにして教主きやうしゆ・釈尊しやくそんの昔むかしの師し天王如来てんのうにょらいと記しるし給たまう事こそ不思議ふしぎにをばゆれ、爾前にぜんの経きやう・實じつならば法華經ほけきやうは大妄語もうご・法華經実ほけきやうならば爾前にぜんの諸經しよきやうは大虚誑罪こおやさいなり、提婆だいばが三逆さんぎやくを具おかに犯そして其の外無量の重罪むりやう じゆうひんを作りし天王如来てんのうにょらいとなる、況や二逆・三逆等の諸の悪人の得道とくだう疑ぎいなき事譬たとえば大地をか今いまに草木等そくもくのかへるがごとく堅石かたきしをわる者もの・草くさをわるが如ごとし、故ゆゑに此の経をば妙と云ふ。

女人にょにんをば内外典ないげてんに是これをそしり三皇さんかう・五帝ごていの三墳さんぶん・五典ごてんに諂曲てんてくの者と定む、されば災は二女より起ると云へる国の亡び人の損みなもとずる源みなもとは女人を本とす、内典ないてんの中には初成道しゆじやうだうの大法だいほうたる華嚴經けぎやんきやうには女人は地獄ぢじくの使しなり能く仏の種子しゆしを断しつ外面は菩薩ぼさつに似て内心は夜叉やしゃの如ごとしと云い、雙林最後そうりんさいごの大涅槃經だいねはんきやうには一切いっさいの江河かうが必ず回曲えいこく有あり一切の女人にょにん必ず諂曲てんてく有ありと、又云く「所有三千界しゆゆさんぜんかいの男子なんしの諸の煩惱ぼんなん合集ごくしふして一人の女人の業障ごうしやうと為なる」と等云云、大華嚴經けぎやんきやうの文に能く仏の種子しゆしを断しつと説かれて候は女人は仏になるべき種子しゆしをいれり、譬たとえば大旱魃かんぱつの時・虚空こくうの

中に大雲をこり大雨を大地に下すにがれたるが如くなる無量無辺の草木花さき菓なる、然りと雖もいれる種はをひずして結句雨しげればくちうするが如し、仏は大雲の如く、説教は大雨の如くがれたるが如くなる草木を一切衆生に譬えたり、仏教の雨に潤い五戒・十善・禪定等の功德を修するは花さき菓なるが如し、一雨ふれどもいりたる種のをひずかへりてくちうするは女人の仏教にあひて生死をはなれずしてかへりて仏法を失ひ惡道に墮つるに譬ふべし、是を「よ能く仏の種子を断つとは申すなり、涅槃經の文に一切の江河のまがれるが如く女人

も又まがれりと説かれたるは、水はやわらかなる物なれば石山などのこわき物にさへちれて水のさきひるむゆへにあれへこれ行くなり、女人も亦是くの如く女人の心をば水に譬えたり、心よくして水の如くなり、

道理と思ふ事も男のこわき心に値いぬればせかれてよしなき方をもむく、又水に氣がくにとどまらざるが如し、女人は不信を体とするゆへに只今さあるべしと見る事も又しばらくあればあらぬさまになるなり、仏と申すは正直を本とす故にまがれる女人は仏になるべからず五障三従と申して五つのさはり三つしたがふ事あり、されば銀色女經には「三世の諸仏の眼は大地に落つとも女人は仏になるべからず」と説かれ大論には「清風はとると云えども女人の心はとりがたし」と云へ。

此くの如く諸經に嫌はれたりし女人を文殊師利菩薩の妙の一字を説き給いしかば忽に仏にりき、あまりに不審なりし故に宝淨世界の多宝仏の第一の弟子智積菩薩、釈迦如来の御弟子の智慧第一舍利弗尊者、四十余年の大小乗經の經文をもつて竜女の仏になるまじき由を難ぜしかども終に叶はず仏にたりにき、初成道の能く仏の

種子を断つ雙林最後の「一切の江河必ず回曲有り」の文も破れぬ、銀色女經並に大論の龜鏡も空しくなりぬ智積・舍利弗は舌を巻きて口を閉ぢ人天大会は歡喜せしあまりに掌を合せたりき、是れ偏に妙の一字の徳たり、此の南閻浮提の内に二千五百の河あり一一に皆まがれり、南閻浮提の女人の心のまがれるが如し、但し娑婆耶と

申す河あり繩を引きはえたるが如くして直に西海に入る、法華經を信ずる女人亦復是の如く直に西方淨土へ入るべし此れ
妙の一字の徳なり、妙とは蘇生の義なり蘇生と申すは蘇る義なり、譬えば黄鵠の子死せるに鶴の母子案となけば死せる
子還つて活り、鳩鳥水に入れば魚蚌悉く死す犀の角これにふるれば死せる者皆
よみがえる如く爾前の經經にて仏種をいりて死せる二乘闡提女人等妙の一字を持ちぬればいれる仏種も還つて生ず
るが如し、天台云く闡提は心有り猶作仏すべし二乗は智を威す心生ず可からず法華能く治す復稱して妙と為すと、
妙樂云く「但大と云いて妙と名づけざるは一には有心は治し易く無心は治し治し難きを能く

治す所以に妙と稱す」等云云、此等の文の心は大方広仏華嚴經・大集經・大品經・大涅槃等は題目に大の字のみありて妙の
字なし、但生る者を治して死せる者をば治せず、法華經は死せる者をも治するが故に妙と云ふ釈なり、されば諸經にして
は仏になる者も仏になるべからず其の故は法華は仏になりがたき著すら尚仏になりぬなりやすき者は云ふにや及ぶと云
う道理立ちぬれば法華經をとかれて後は諸經にをもむく一人もあるべからず。

而るに正像二千年過ぎて末法に入つて当世の衆生の成仏往生のとげがたき事は在世の二乘闡提等にも百千万億倍
すぎたる衆生の觀經等の四十余年の經經によりて生死をはなれんと思つははかなしはかなし女人は在世正像末
総じて一切の諸仏の一切經の中に法華經をはなれて仏になるべからず、靈山の聴衆道場開悟たる天台智者大師定め
て云く「諸經は但男に記して女に記せず今經は皆記す」等云云。釈迦如来多宝仏十方諸仏の御前に

して摩訶提国王舎城の良・鷲の山と申す所にて八箇年の間説き給ひし法華經を智者大師まのあたり聞こしめしりるに我
五十余年の一代聖教を説きをく事は皆衆生利益のためなり、但し其の中に四十二年の經經には女人・仏に
なるべからずと説きたまひしなり、今法華經にして女人・仏に成るととくとのならせ給ひしを仏滅後・二千五百年に當
つて鷲の山より東北・十方八千里の山海をたてて摩訶訶那と申す国あり震旦国是なり、此の国に仏の

御使に出でさせ給ひ天台智者大師となりて女人は法華經をはなれて仏になるべからずと定めさせ給いぬ。

戸那国より三千里をへたてて東方に国あり日本国となづけたり、天台大師・御入滅・二百余年と申せしに此の国に生れて伝教大師とならせ給いて秀句と申す書を作り給いに「能化・所化俱に歴劫無し妙法經の力にて即身に成仏す」と童女が成仏を定め置き給いたり、而るに当世の女人は即身成仏こそがたからめ往生極樂は法華を憑ま

ば疑いなし、譬えば江河の大海に入るよりもたやすく雨の空より落つるよりもはやくあるべき事なり、而るに日本国の一切の女人は南無妙法蓮華經とは唱ずして女人の往生成仏をとげざる雙觀・觀經等によりて弥陀の名号を一日に六万遍・十万遍などとなつるは、仏の名号なれば巧なるには似たれども女人不成仏・不往生の經

によれるが故にいたずらに他の財を数えたる女人なり、これひとえに悪知識にたばらかされたるなり、されば日本国の一切の女人の御かたきは虎狼よりも山賊・海賊よりも父母の敵とわり等よりも法華經をばをしえずして念仏をしゆるこそ一切の女人のかたきなれ。

南無妙法蓮華經と一日に六万・十万・千万等も唱えて後に暇あらば時時阿弥陀等の諸仏の名号をも口ずさみなるやうに申し給はんこそ法華經を信ずる女人にてはあるべきに当世の女人は一期の間・弥陀の名号をばしきりにどな念仏の仏事をばひまなくをこなひ法華經をばつやつや唱ず供養せず或はわづかに法華經を持經者

によますれども念仏者をば父母・兄弟などのやうにをもひなし持經者をば所從眷屬よりもかろくをもへ、かくしてしかも法華經を信ずる由をなるなり、抑も淨徳夫人は一人の太子の出家を許して法華經をひろめさせ童女は「我闍大乗教・度脱苦衆生」とこそ誓ひしが全く他經計りを行じて比の經を行ぜじとは誓はず、今の女人は偏に他經を行じて法華經を行ずる方をしらず、とくとく心をひるがすべし心をひるがすべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經

ぶんえい 文永三年五月六日 清澄寺に於て末の時書し畢んぬ。

一一九 富木殿御消息 文永六年六月 四十八歳御作

949P

だいし 大師講の事 今月 明性房にて候が 此月はさしあい候 又余人の申せんと候 人候はば 申させ給えと候、貴辺より仰を蒙り
そつち 侯へ 御指合にて候はば 他処申すべく候、恐々。

六月七日

にちれんかあつ 日蓮花押

土木殿

一二〇 富木殿御返事

949P

しらよね 白米一ほか 本斗六升たしかに給候、ときれうも候はざりつるに悦び入り候、何事も見参にて申すべく候。

乃時

かあう 花押

とぎどの 富木殿

一一一 真間 釈迦仏御供養逐状

文永七年九月 四十九歳御作

950P

釈迦仏御造立の御事、無始曠劫よりいまだ顕れましまさぬ己心の一念三千の仏造り顕しますか、はせまいりてをが
みまいらせ候わばや、「欲令衆生開仏知見乃至然我実成仏已来」は是なり、但し仏の御開眼の御事はいそぎいそぎ伊よ房
をもてはたしまいらせさせ給ひ候へ法華經一部御仏の御六根によりみ入れまいらせて生身の教主
釈尊になしまいらせてかへりて迎入れまいらせさせ給へ自身並に子にあらずばいかながと存じ候、御所領の堂の事等は
大進の阿闍梨がききて候、かすがすをがみ結縁しまいらせ候べし、いづぞや大黒を供養して候いし其後より世間なげかず
しておはするか、此度は大海のしほの満つるがごとく月の満ずるが如く福きたり命ながく後生は靈山とおぼしめせ。

九月二十六日

日蓮花押

進上 富木殿御返事

一二二 土木殿御返事

文永八年九月

五十歳御作

於相模依智

950P

上のせめさせ給うにこそ法華經を信じたる色もあらわれ候へ月はかけてみちしをはひてみつる事疑なし

此れも罰あり必ず徳あるべしなにしにかなげかん。

此の十二日酉の時御勘気武蔵守殿御あづかりにて十三日丑の時にかよくらをいでて佐土の国ながされ侯が、たつじはほん雀のえちと申すところにてえちの六郎左衛門尉殿の代官右馬太郎と申す者あづかりて侯が、いま四五日はあるべに侯、御嘆きはさる事に候へともこれには一定と本よりごして侯はなげかず侯、いままで

頸の切れぬこそ本意なく侯へ法華経の御ゆへに過去に頸をうしないたらばかかる少身のみにて候べきか、又数数見擯出ととかれて度度失にあたりて重罪をけしてこそ仏にもなり候はんずれば我と苦行をいたす事は心ゆへなり。

九月十四日

日蓮花押

土木殿御返事

一一三三 寺泊御書

文永八年十月 五十歳御作

951P

与富木常忍 於越後寺泊

驚目一結給び了ぬ、心ざしあらん諸人は一処にあつまりて御聴聞あるべし。

今月十月なり十日相州愛京郡依智の郷を起つて武蔵の国久目河の宿に付き十二日を経て越後の国寺泊の津に付きぬ、此れより大海を亘つて佐渡の国に至らんと欲するに順風定まらず其の期を知らず、道の間の事心も及ぶこと莫く又筆にも及ばず但暗に推し度る可し、又本より存知の上なれば始めて嘆く可きに非ざれば之を止む。

法華経の第四に云く「而も此の経は如来の現在すら猶怨嫉多し況んや滅度の後をや」第五の巻に云く「一切

世間怨多くして信じ難し、涅槃經の三十八に云く「爾の時に一切の外道の衆咸く是の言を作さく。大王今は唯一の大悪人有り瞿曇沙門なり。一切の世間の悪人利養の爲の故に其の所に往き集り而も眷属と爲つて善を修すること能わず呪術力の故に迦葉及び舍利弗目蓮等を調伏す云云、此の涅槃經の文は一切の外道我が本師たる二天三仙の所説の經典を仏陀に毀られて出す所の惡言なり、法華經の文は仏を怨と爲す經文には非ず、天台の意に云く「一切の聲聞緣覺並に近成を樂み菩薩等云云、聞かんと欲せず信ぜんと欲せず其の機に當らざるは言を出して謗る」と莫きも皆怨嫉の者と定め了んぬ、在世を以て滅後を推すに一切諸宗の学者等は皆外道の如し、彼等が云う一大悪人とは日蓮に當れり、一切の悪人之人に集まるとは日蓮が弟子等是なり、彼の外道は先仏の説教流伝の後之を謬つて後仏を怨と爲せり、今諸宗の学者等も亦復是くの如し、所詮仏教に依つて邪見を起す目の転ずる者大山転ずと欲う、今八宗・十宗等多門の故に諍論を至す、涅槃經の第十八に贖命重宝と申す法門あり、天台大師の料簡に云く命とは法華經なり重宝とは涅槃經に説く所の前三教なり、但し涅槃經に説く所の円教は如何、此の法華經に説く所の仏性常住を重ねて之を説いて歸本せしめ涅槃經の円常を以て法華經に摂す、涅槃經の得分は但前三教に限る、天台の玄義の三に云く「涅槃は贖命の重宝なり重ねて掌を抵つのみと文、籤の三に云く「今家の引意は大經の部を指して以て重宝と爲す」等云云、天台大師の四念処と申す文に法華經の雖示種種道」の文を引いて先ず四味を又重宝と定め了んぬ、若し爾らば法華經の先後の諸經は法華經の爲の重宝なり、世間の学者の想到に云く此れは天台一宗の義なり諸宗は之を用いず等云云、日蓮之を案じて云く八宗・十宗等は皆仏滅後より之を起し論師・人師之を立つ滅後の宗を以て現在の經を計る可からず天台の所判は一切經に叶うに依つて一宗に属して之を弃つ可からず、諸宗の学者等自師の誤りを執する故に或は事を機に寄せ或は前師に譲り或は賢王を語らい結句最後には悪心強盛にして鬭諍を起し失無き者を之を損つて樂と爲す、諸宗の中に真言宗殊に僻案を至す

善無畏・金剛智等の想に云く一念三千は天台の極理一代の肝心なり顕密二道の詮たる可きの心地の三千は且く之を置く、此の外印と真言とは仏教の最要等云云、其の後真言師等事を此の義に寄せて印・真言無き経経をば之を下すこと外道の法の如し、或る義に云く大日経は釈迦如来の外の説なりと、或る義に云く教主釈尊第一の説なりと、或る義には釈尊と現じて顕経を説き大日と現じて密経を説くと、道理を得ずして无尽の僻見之を起す、譬えば乳の色を弁えざる者種種の邪推を作せども本色に当らざるが如く又象の譬の如し、今汝等知る可し大日経等は法華経已前ならば華嚴経等の如く已後ならば涅槃等の如し。

又天竺の法華経には印・真言有れども訳者之を略して羅什は妙法経と名づけ、印・真言を加えて善無畏は大日経と名づくるか、譬えば正法華添品法華・法華三昧・薩云分陀利等の如し、仏の滅後天竺に於いて此の詮を得たるは竜樹菩薩・漢土に於いて始めて之を得たるは天台智者大師なり、真言宗の善無畏等・華嚴宗の澄観等・三論宗の嘉祥等・法相宗の慈恩等・名は自宗に依れども其の心は天台宗に落ちたり其の門弟等此の事を知らず如何ぞ謗法の失を免れんや、或る人日蓮を難じて云く機を知らずして議を立て難に値うと、或る人云く勸持品の如きは深位の菩薩の義なり安樂行品に違すと、或る人云く我も此の義を存すれども言わずと云云、或る人云く唯教門計りなりと、具に我之を存すと雖も卞和は足を切られ清丸は穢丸と云う名を給うて死罪に及ばんと欲す時の人之を咲う、然りと雖も其の人未だ善き名を流さず汝等が邪難も亦爾る可し。

勸持品に云く「諸の無智の人有つて悪口罵詈訾し」等云云日蓮此の経文に当れり汝等何ぞ此の経文に入らざる、及び刀杖を加うる者」等云云、日蓮は此の経文を読めり汝等何ぞ此の経文を読まざる「常に大衆の中に在つて我等が過を毀らんと欲す」等云云、「国王・大臣婆羅門・居士に向つて」等云云、「悪口して鬻聲し数数擯出せられん」数数とは度度なり日蓮擯出衆度流罪は一度なり、法華経は二世の説法の儀式なり、過去の不輕品は今の勸持品

今の勸持品は過去の不輕品なり、今の勸持品は未来は不輕品為る可し、其の時は日蓮は即ち不輕菩薩為る可し、一部八卷・二十八品天竺の御經は一由旬に布くと承わる定めて數品有る可し、いま漢土・日本の二十八品は略の中の要なり、正宗は之を置く流通に至つて宝塔品の三箇の勅宣は靈山虛空の大衆に被らしむ、勸持品の二万・八万・八十万億等の大菩薩の御誓言は日蓮が浅智には及ばず但し「恐怖惡世中」の經文は末法の始を指すなり、此の「恐怖惡世中」の次下の安樂行品等に云く「於末世」等云云、同本異訳の正法華經に云く「然後末世」又云く「然後來末世」、添品法華經に云く「恐怖惡世中」等云云、時に當り當世三類の敵人は之れ有るに但八十万億・

那由他の諸菩薩は一人も見えたまわず乾たる湖の満たず月の虧けて満ちざるが如し水清めば月を浮かべ木を植うれば鳥棲む、日蓮は八十万億那由他の諸菩薩の代官として之を申す彼の諸の菩薩の加被を請う者なり。

此の入道佐渡の国御共為す可きの由之を申す然る可き用途と云いかたがた煩有るの故に之を還す、御志し始めて申すに及ばず候人人に是くの如く申させ給え、但し僧等のみに懸り候便宜の時早早之を聴かす可し、六賢六賢。

十月二十二日 酉の時

日蓮花押

一二四 富木入道殿御返事

文永八年十一月五十歳御作

於佐渡塚原

955P

此比は十一月の下旬なれば相州鎌倉に候し時の思には四節の転変は万国皆同じかるべしと存候し処に此北国佐渡の国に下著侯て後二月は寒風頻に吹て霜雪更に降ざる時はあれども日の光をば見る事となし、八寒を現身に感ず、人の心は禽獸に同じく主師親を知らず何に況や仏法の邪正師の善悪は思もよらざるをや、此等は且く之を置く。去十月十日に付られ候し入道寺泊より還し候し時法門を書き遣わし候き推量侯らむ、已に眼前なり仏滅後二千二百余年に月氏漢土日本一閻浮提の内に天親・竜樹・内鑑冷然外適時宜云云、天台・伝教は粗釈し給へども之を弘め残せる一大事の秘法を此国に初めて之を弘む日蓮豈其の人に非ずや。

前相已に顕れぬ去正嘉の大地震前代未聞の大瑞なり神世十二人王九十代と仏滅後二千二百余年未曾有の大瑞なり神力品に云く正滅度の後に於て能く是の経を持つが故に諸仏皆歡喜して無量の神力を現ず等云云、如来一切所有之法云云、但此の大法弘まり給ならば爾前迹門の経教は一分も益なかるべし、伝教大師云く「日出て

星隠る」云云、遵式の記に云く「末法の初西を照す」等云云、法已に顕れぬ、前和先代に超過せり日蓮粗之を勧づるに是時の然らしむる故なり経に云く「四導師有り一を上行と名く」云云又云く「悪世末法時能持是經者」又云く「若接須弥擲置他方」云云。

又貴辺に申付し高経の要文智論の要文五帖一処に取り集め被る可く候、其外論釈の要文散在あるべからず侯、又小僧達談義あるべしと仰らるべく候流罪の事痛く歎せ給ふべからず、勸持品に云く不輕品に云く、命限り有り

惜む可からず遂に願う可きは仏国也云々。

日蓮 花押

文永八年十一月二十三日

富木入道殿返事

小僧達少還えし候此国為体在所の有様御問い有る可く候筆端に載せ難く候。

一一五 佐渡御書

文永九年三月五十一歳御作 与弟子檀那

956P

此文は富木殿のかた三郎左衛門殿大蔵たうのつじ十郎入道殿等さじきの尼御前一一に見させ給べき人人の御中へなり、京鎌倉に軍に死る人人を書付けたび候へ外典抄文句のこ玄の四の本末勸文宣旨等これの人人もちてわたらせ給へ。

世間に人の恐るる者は火炎の中と刀劍の影と此身の死するとなるべし牛馬猶身を惜む況や人身をや瀬人猶命を惜む何に況や杜人をや、仏説て云く七宝を以て三千大千世界に布き満るとも手の小指を以て仏経に供養せんには如かず取意、雪山童子の身をなげし樂法梵志が身の皮をはぎし身命に過たる惜き者のなければ是を布施として仏法を習ふは必仏となる身命を捨る人他の宝を仏法に惜べしや、又財宝を仏法におしまん物まさる身命を拾べきや、世間の法にも重恩をば命を捨て報ずるなるべし又主君の為に命を捨る人はすくなきやうなれども其数多し男子ははちに命をすて女人は男の為に命をすつ、魚は命を惜む故に池にすむに池の浅き事を嘆きて池の底に穴をほりてすむしかれどもゑにばかされて釣をのむ鳥は木にすむ木のひきき事をおじて木の上枝にすむしかれどもゑにばかされて網にかかる、人も又是くの如し世間の浅き事には身命を失ふとも大事の仏法などには捨る事

難し故に仏になる人もなかるべし。

仏法は損受・折伏時によるべし。譬ば世間の文武二道の如しされば昔の大聖は時によりて法を行ず。雪山童子・薩王子は身を布施とせば法を教へん菩薩の行となるべしと責しかば身をすつ、肉をほしがらざる時身を捨つ可きや紙なからん世に身は身の皮を紙とし筆なからん時は骨を筆とすべし、破戒・無戒を毀り持戒・正法を用ん用には諸戒を堅く持べし。儒教・道教を以て釈教を制止せん日には道安法師・慧遠法師・法道三蔵等の如く王と論じて命を輕つ

すべし、釈教の中に小乗・大乘・權經・實經・雜亂して明珠と瓦礫と牛驢の二乳を弁へざる時は天台大師・伝教大師等の如く大小・確實・蹟密を強盛に分別すべし、畜生の心は弱きをおどし強きをおそる。当世の学者等は畜生の如し智者の弱きをあなづり王法の邪をおそる諛臣と申すは是なり。強敵を伏して始て力士をしる、惡王の正法を破るに

邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし。例せば日蓮が如し、これおこれるにはあらず。正法を惜む心の強盛なるべし。おこれる者は必ず強敵に値ておそる心出来するなり。

例せば、修羅のおごり帝釈にせめられて無熱池の蓮の中に小身と成て隠れしが如し。正法は一字・一句なれども時機に叶いぬれば必ず得道なるべし。千經・万論を習学すれども時機に相違すれば叶う可らず。

宝治の合戦すでに二十六年今年二月十一日十七日又合戦あり。外道・惡人は如来の正法を破りがたし。仏弟子等必ず仏法を破るべし。師子身中の虫の獅子を食等云云、大果報の人をば他の敵やぶりがたし。親しみより破るべし、薬師經に云く「自界叛逆難」と是なり、仁王經に云く「聖人去る時七難必ず起らん」云云、金光明經に云く「三十

三天各瞋恨を生ずるは其の国王惡を縦にし治せざるに由る」等云云、日蓮は聖人にあらざれども法華經を説の如く受持すれば聖人の如し。又世間の作法兼て知るに由て注し置くことは違つ可らず。現世に云をく言の違はざらんをもて後生の疑をなすべからず、日蓮は此関東の御一門の棟梁なり。日月なり・龜鏡なり。眼目なり。日蓮捨て去る

時・七難必ず起るべしと去年九月十二日御勘氣を蒙りし時大音声を放てよばはりし事これなるべしに六十日乃至百五十日に此事起るかは華報なるべし実果の成せん時いかがなげかはしからんずらん、世間の愚者の思に云く日蓮智者ならば何ぞ王難に値哉なんと申す日蓮来ての存知なり父母を打子あり阿闍世王なり仏阿羅漢を殺し血を出す者あり提婆達多是なり六臣これをほめく伽利等これを悦ぶ、日蓮当世には此御一門の父位なり仏阿羅漢の如し然を流罪し主従共に悦びぬるあはれに無慙なる者なり誘法の法師等が自ら禍の既に頼るるを欺きしがかくなるを一旦は悦ぶなるべし後には彼等が欺き目迎が一門に劣るべからず、例せば泰衡がせうとを討九郎判官を討て悦しが如し既に一門を亡す大鬼の此国に入なるべし法華經に云く「惡鬼入其身」と是なり。

日蓮も又かくせめらるるも先業なきにあらず不輕品に云く「其罪畢已」等云云、不輕菩薩の無量の謗法の者に罵詈打ちやくせられしも先業の所感なるべし何に況や日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ施陀羅が家より出たり心こそすこし法華經を信じたる様なれども身は人身に似て畜身なり魚鳥を混丸して赤白二滯とせり其中に識神をやどす濁水に月のうつれるが如し糞囊に金をつつめるなるべし、心は法華經を信ずる故に梵天帝釈をも猶恐しと思はず身は畜生の身なり色心不相応の故に愚者のあなづる道理なり心も又身に對すればこそ月金にもたとふれ、又過去の謗法を案ずるに誰かしの勝意比丘が魂にもや大天が神にもや不輕輕毀の流類なるか失心の余残なるか五千上慢

の眷属なるか大通第三の余流にもやあるらん宿業はかりがたし鉄は炎打てば剣となる賢聖は罵詈して試みるなるべし、我今度の御勘氣は世間の失一分もなし偏に先業の重罪を今生に消して後生の三惡を脱れんずるなるべし、般泥垣經に云く「当來の世仮りに袈裟を被て我が法の中に於て出家学道し懶惰懈怠にして此等の方等契經を誹謗すること有らん当に知るべし此等は皆是今日の諸の異道の輩なり」等云云、此經文を見ん者自身をはづべし今我等が出家して袈裟をかけ懶惰懈怠なるは是仏在世の六師外道が弟子なりと仏記し給へ、法然が一類大日

が一類念仏宗・禅宗と号して法華經に捨閉閣抛の四字を副令制止を加て權教の弥陀称名計りを取立教外別伝して法華經を月をさす指只文字をかぞふるなどと笑ふ者は六師が末流の仏教の中に出来せるなるべし、うれなるかなや涅槃經に仏光明を放て地の下一百三十六地獄を照し給うに罪人一人もなかるべし法華經の寿量品にして皆成仏せる故なり但し一闍提人と申て謗法の者計り地獄守に留られたりき彼等がうみげて今の世の日本国の一切衆生となれるなり。

日蓮も過去の種子已に謗法の者なれば今生に念仏者にて数年の間法華經の行者を見ては未有一人得者千中無一等と笑しなり今謗法の醉さめて見れば酒に酔る者父位を打て悦しが醉さめて後歎しが如し欺けども甲斐なし此罪消がたし、何に況や過去の謗法の心中にそみけんをや經文を見候は烏の黒きも鷺の白きも先業のつよくそみけるなるべし外道は知らずして自然と云い今の人は謗法を顕し扶けんとすれば我身に謗法なき由をもながちに陳答して法華經の門を閉よと法然が書けるをとかくあらかひなれど念仏者はさてをきめ天台・真言等の人人彼が方人をあながちにするなり、今年正月十六日十七日に佐渡の国の念仏者等数百人印性房と申すは念仏者の棟梁なり

日蓮が許に来て云く法然上人は法華經を抛よとかかせ給には非ず一切衆生に念仏を申させ給いて候此の大功德に御往生疑なしと書付て候を山僧等の流されたる並に寺法師等善哉善哉とほめ候をいかがこれを破し給と申しき鎌倉の念仏者よりもはるかにはかなく候ぞ無慙とも申す計りなし。

いよいよ日蓮が先生今生先日の謗法おそろしかかりける者の弟子と成けんかかる国に生れけんいかなるべしとも覚え、般泥垣經に云く「善男子過去に無量の諸罪種種の惡業を作らんは是の諸の罪報・或は輕易せられ或は形狀醜陋衣服足らず飲食疎財を求めて利あらず貧賤の家及び邪見の家に生れ或は王難に遇う」等云云、又云く「及び余の種種の人間の苦報現世に軽く受くるは斯れ護法の功德力に由る故なり」等云云、此經文は日蓮が身

なくば殆ど仏の妄語となりぬべし、一には或被輕易二には或形状醜陋三には衣服不足四には飲食疎五には求財不利六には生貧賤家七には及邪見家八には或遭王難等云云、此八句は只日蓮が身に感ぜり、高山に登る者は必ず下り我人を輕しめば還て我身人に輕易せられん形状端嚴をすれば醜陋の報いを得人の衣服飲食をうばは必ず餓鬼となる持戒尊貴を笑は貧賤の家に生ず正法の家をすれば邪見の家に生ず善戒を笑は国土の民となり王難に遇ふ是は常の因果の定れる法なり、日蓮は此因果にはあらず法華經の行者を過去に輕易せし故に

法華經は月と月とを並べ星と星とをつらね華山に華山をかさね玉と玉とをつらねたるが如くなる御經を或は上げ或は下て嘲弄せし故に此八種の大難に値るなり、此八種は尽未來際が間一づつこそ現ずべかりしを日蓮つよく法華經の敵を責るによて一時に聚り起せるなり譬は民の郷郡などにあるにはいかなる利錢を地頭等におほせたれど

もいたくせめず年年にのべゆく其所を出る時に競起が如し斯れ護法の功德力に由る故なり等は是なり、法華經には諸の無智の人有り惡口罵詈等し刀杖瓦石を加うる乃至國王大臣婆羅門居士に向つて乃至数数摸出せられん等云云、獄卒が罪人を責ずば地獄を出る者かたかりなん当世の王臣なくば日蓮が過去謗法の重罪消し難し日蓮は過去の不輕の如く当世の人人は彼の輕毀の四衆の如し人は替れども因は是一なり、父母を殺せる人異なれど

も同じ無間地獄におつかねば不輕の因を行じて日蓮一人釈迦仏とならざるべき又彼諸人は跋陀婆羅門等と云はれざらんや但干劫阿鼻地獄にて責られん事こそ不快にはおぼゆれ是をいかんとすべき、彼輕毀の衆は始は謗ぜしかども後には信伏随從せりき罪多分は滅して少分有しが父母千人殺したる程の大苦をつく当世の諸人は翻す心なし譬喩品の如く無數劫をや経んずらん三五の塵点をやおくらんずらん。

これはさてをきぬ日蓮を信するやうなりし者どもが日蓮がかくなれば疑ををこして法華經をすつるのみならずかへりて日蓮を教訓して我賢しと思はん僻人等が念仏者よりも久く阿鼻地獄にあらん事不便とも申す計りなし、

しゅら 修羅が仏は十八界我は十九界と云ひ外道が云く仏は一究竟道我は九十五究竟道と云いしが如く日蓮御房は師匠にておはせども余にこはし我等はやはらかに法華經を弘むべしと云んは螢火が日月をわらひ蟻塚が華山を下し井江が河海をあなづり烏鵲が鸞鳳をわらふなるべしわらふなるべし。

なむ みょうほうれんげきよう
南無妙法蓮華經

ぶんえい 文永九年太歳 壬申 三月二十日

日蓮 花押

にちれんでし 檀那等御中

さど 佐渡の国は紙侯はぬ上面面に申せば煩あり一人ももるれば恨ありぬべし此文を心ざしあらん人人は寄合て御覽じ料簡侯て心なぐさませ給へ世間にまさる欺きだにも出来すれば劣る欺きは物ならず当時の軍に死する人人実不實は置く幾か悲しかるらん、いざはの入道さかべの入道いかなりぬらんかはのべ山城得行寺殿等の事いかにと書付て給べし、外典書の貞觀政要すべて外典の物語八宗の相伝等此等がなくしては消息もかかれ侯はぬにかまへかまへ給侯べし。

一一一六

ときどのごへんじ
富木殿御返事

ぶんえい
文永6年4月51歳御作

さど
於佐渡一の谷

962P

ごへんじ
御返事

日蓮が臨終一分も疑無く頭を刎ねらるる時は殊に喜悦有るべし、大賊に値つて大毒を宝珠に易ゆと思う可きか。
驚目員数の如く給ひ候い畢んぬ御志申し送り難く候、法門の事先度四条三郎左衛門尉殿に書持せしむ其の書能く
能く御覧有る可し、粗経文を勘え見るに日蓮法華經の行者為る事疑無きか但し今に天の加護を蒙らざるは一には
諸天善神此の悪国を去る故か、二には善神法味を味わざる故に威光勢力無きか、三には大悪鬼三類の心中に入り梵天・
帝釈も力及ばざるか等、二の証文道理追て進せしむ可く候、但生涯本より思い切て候今に翻返ること無く共の上又遺憾
無し諸の悪人は又善知識なり、撰受・折伏の二義仏説に依る、敢て私曲に非ず万事靈山浄土を期す、恐恐謹言。

卯月十日

日蓮
花押

土木殿

驚目二貫給侯い畢んぬ、太田殿と其れと二人の御心喜び侯、伊与房は機量物にて侯ぞ今年留め候い畢んぬ、御勘気ゆりぬ事、御欺き侯べからず侯、当世日本国子細之れ有る可き由之を存ず定めて勘文の如く侯べきか、設い日蓮死生不定なりと雖も妙法蓮華經の五字の流布は疑い無き者か伝教大師は御本意の円宗を日本に弘めんとす、

但し定慧は存生に之を弘め円或は死後に之を顕す事法為る故に一重大難之れ有るか、仏滅後二千二百二十余年今に壽量品の仏と肝要の五字とは流布せず、当時果報を論ずれば恐らくは伝教天台にも超え竜樹天親にも勝れたるか、文理無くんば大慢豈之に過んや、章安大師天台を褒めて云く「天竺の大論尚其の類に非ず震旦の大師何ぞ劣しく語るに及ばん此れ誇耀に非ず法相の然らしむるのみ」等云云、日蓮又復是くの如し竜樹天親等尚其の類に非ず等云云、此れ誇耀に非ず法相の然らしむるのみ、故に天台大師日蓮を指して云く「後の五百歳遠く妙道に結わんと」等云云、伝教大師当世を恋いて云く「末法太はだ近きに有り」等云云、幸いなるかな我が身数数見擯出の文に当ること悦ばしいかな悦ばしいかな、諸人の御返事に之を申す故に委細、恐恐。

七月六日

日蓮花押

土木殿御返事

一一八 富木殿御書

文永十一年五十三歳御作

964 P

けかち申すばかりなし米一合もつらずがししぬべし、此の御房たちもみなかへして但一人候べし、このよしを御房たちにもかたりさせ給へ

十二日さかわ十三日たけのした十四日くるまがへし十五日ををみや十六日なんぶ、十七日このところいまださだまらずといえども、たいしはこの山中・心中に叶いて候はしばらくは候はんずらむ、結句は一人になりて日本国に流浪すべきみにて候、又たちとどまるみならばけさんに入り候べし、恐恐謹言。

十七日 日蓮 在御判

ときどの

一二九 土木殿御返事

964 P

仕候なり。

褒美に非ず、実に器量者なり。来年正月大進阿闍梨と越中に之を遣し去るべく候、白小袖一つ給ひ候ひ畢んぬ、今年日本国一同に飢渴の上、佐渡の国には七月七日已下天より忽ちに石灰虫と申す虫と雨等にて一時に稲穀損し。其の上疫病処に遍満し、方方死難脱れ難きか、事事紙上に尽し難く候、恐恐謹言。

十一月三日 日蓮在御判

一三〇 法華行者逢難事 文永十一年正月 五十三歳御作与富木常忍

965P

河野辺殿等中

やまとあじやりごほうおんちゆう
大和阿闍梨御房御中

いっさいでし
一切我弟子等中

さえもんのじよう
三郎左衛門尉殿

きんじちう
謹上

ときどの
富木殿

にちれん
日蓮

追て申す、竜樹・天親は共に千部の論師なり、但権大乘を申べて法華經をば心に存して口に吐きたまわず此に口、伝有り、天台・

でんぎようこれのべほんもんほんぞんぼさつかいだんなむみようほうれんげきようこじこれ
伝教は之を宣べて本門の本尊と四菩薩と戒壇と南無妙法蓮華經の五字と之を残したもう、所詮一には仏授与したまわ

ざるが故に、二には時機未熟の故なり、今既に時来れり四菩薩出現したまわんか日蓮此の事先ず

これ之を知りぬ、西王母の先相には青鳥・客人の来相にはかんじやくこれ鵲是なり、各各我が弟子たらん者は深く此の由を存ぜよ設い

しんみちう
身命に及ぶとも退転すること莫れ。

さえもん
富木三郎左衛門の尉河野辺・大和阿闍梨等殿原・御房達各各互に読聞けまいらせさせ給え、かかる濁世には互につ

ねにいゝあわせてひまもなく後世ねがわせ給い候へ。

ほけきよう
法華經の第四に云く「如来の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」等云云、同第五に云く「一切世間怨多くして信じ

がた
難し」等云云、涅槃經の三十八に云く「爾の時に外道に無量の人有り。心瞋恚を生ず」等云云、又云く

爾その時に多く無量むりやうの外道げどう有り和合わがっして共に摩伽陀あじやせの王わう・阿闍世あけせの前に往ゆきぬ。今は唯一ただ大惡人あくにん有り瞿曇沙門くどんしゃもんなり王未いまだけんぎよう檢校けんぎようせず我等われらは甚おそだ畏おそる、一切世間いっさいせけんの惡人利養あくにんりやうの爲ゆえの故そに其の所に往集けんそくして眷屬けんそくと爲なる乃至迦葉ないしかしやう・舍利弗しゃりほつ・目連もくぜん等ら云云云云に由よりいげんざいゆたあんしつこれ如來現在猶多怨嫉だいくてんだいちしやだいしの心のし是なり、得い一大德天台智者大師だいくてんだいちしやだいしを罵ののしりして曰いわく「智公汝ちこうなんじは是れ誰が弟子でしぞ三寸に足らざる舌根ぜつこんを以て覆面舌ふめんぜつの所説しよせつの教時けうじを謗ぼうす」、又云いわく「豈あに是れ狂てんきやうの人に不あらずや」等云云、南都なんと七

大寺かうたくの高徳等こうたくとく・護命僧都ごみやうそうず・景信律師等かげのぶりつし三百余人さんひやくにん・伝教大師でんきやうだいしを罵ののしりして曰いわく「西夏に鬼弁婆羅門ばらもん有り東土とうどに巧言ぎやうげんを吐はくとくずしやもん禿頭沙門とくずしやもんあり此れ乃ち物類冥すなわちものるいみやうしやう召めして世間せけんを誑惑あわく等云云、秀句しやうくに云く「浅あきは易やすく深がたきは難がたしとは釈迦しやかの所判しよはんなり浅あきを去はつて深ふかきに就つくは丈夫じやうぶの心なり、天台大師てんだいだいしは釈迦しやかに信順しんじゆんし法華宗ほふしやうを助たすけて震旦しんたんに敷揚ふやうし、叡山えいざんの一家てんだいは天台てんだいに相承さうじやうし法華宗ほふしやうを助たすけて日本にほんに弘通くわうつうす」云云。

夫それ在世ざいせいと滅後めつごと正像しやうざう二千年にせんねんの間に法華經ほふけきやうの行者ぎやうじや唯ただ三人さんにん有り所謂いわゆる仏ぶつと天台てんだい・伝教でんきやうとなり、真言宗しんこんしやうの善無畏ぜんむい・不空ふくくう等ら・華嚴宗けこんしやうの杜順とじゆん・智儼等ちぎん・三論さんろん・法相等ほふしやうの人師等にんしは実經じつきやうの文ぶんを会あして権けんの義ぎに順じゆんぜしむる人人ひとびとなり、竜樹りゆうじゆ・天親等てんじんの論師ろんしは内に鑒かんがみて外がいに発はつせざる論師ろんしなり、經きやうの如ごとく宣せん伝でんすること正法しやうほふの四依しえも天台てんだい・伝教でんきやうには如ごとく、而しかに仏記ぶつぎの如ごとくまふほう末法まふほうに入はいつて法華經ほふけきやうの行者ぎやうじや有ある可べし其の時そのときの大難だいにん・在世ざいせいに超過ちやうかせんと云云、仏ぶつに九横くおうの大難だいにん有り所謂いわゆる孫陀利そんたの謗ぼうと金鏑こんすと馬麦めみやくと琉璃るりの積つみを殺ころすと乞食こつじき鉢はつと旃遮女せんぢやによの誘さうと調達ちやうだつが山さんを謗ぼうすと寒風かんぷうに衣もを索もとむるとなり、其その上一いっさい切外道いっさいげどうの讒奏ざんそう上に引ひくが如ごとく記文きぶんの如ごとくてんだい天台てんだい・伝教でんきやうも仏記ぶつぎに及およばず。

之これを以て之これを案あんするに末法まふほうの始はつに仏説ぶつせつの如ごとく行者世ぎやうじやに出現しゆげんせんか、而しかに文永十年十二月七日ぶんえいじゆんねんじふにがつしちにち武蔵むさしの前司殿ぜんしでんより佐土さどの国くに今います状じやうに云いく自判じはん之の在あり。

佐渡さどの国の流人りゅうにんの僧日蓮にちれん弟子等でしを引率いんそつし惡行あくぎやうを巧たくらむの由ゆ其の聞きこえ有り所行しやうぎやうの企くわだて甚はなはだだ以て奇怪きかいなり今いまより以後いご・彼僧そに相あい随したがわん輩やからに於おいては炳誠へうじやうを加くえしむ可べし、猶なほ以て違犯いはんせしめば交名ちやうめいを注進ちゆしんせらる可べきの由ゆの所に候こうな

り、何て執達件の如し。

ぶんえい 文永十年十二月七日

しゃもんかんえたまつ 沙門觀惠上る

えち 依智六郎左衛門尉等云云。

此の状に云く悪行を巧む等云云、外道が云く瞿曇は悪人なり等云云、又九横の難一に之在り、所謂琉璃殺釈と乞食空鉢と寒風索衣とは仏世に超過せる大難なり、恐くは天台・伝教も未だ此の難に値いたまわず当に知るべし三人に日蓮を入れ四人と為して法華經の行者・末法に有るが、喜哉・況滅度後の記文に当れり悲哉・戦国中の諸人阿鼻獄に入らんこと茂きを厭うて之を子細に記さず心を以て之を推せよ。

ぶんえい 文永十一年甲戌正月十四日日蓮花押

いっさい 一切の諸人之を見聞し志有らん人人は互に之を語れ。

一三三 富木殿御返事

文永十二年五十四歳御作

968P

富木殿御返事

日蓮

帷かたびら 一領給ひ候あわい畢そんぬ、夫それ仏ぶつ弟子でしの中ちゆう比丘びく一人ひとりはんべり、飢饉ききんの世よに仏おんときの御時ごとき事ことかけて候そうじければ比丘びく袈裟けさをつて其そのあたあいを仏たてまつに奉たてまつる、仏そ其ゆらいの由ゆらい来きを問たまいい給たまいければ、しかじかとありのままに申もうしけり、仏い云わく「袈裟けさはこれ三世さんぜの諸しよ仏ぶつ、解げ脱だつの法ほう衣えなり、このあたあひをば我われ報はうじがたし」と辞退ししまししかば此この比丘びく申もうすは「この袈裟けさあたあひをばいかんがせん」と申もうしければ、仏いの云わく「汝なんじ悲母ひも有ありや不ふや」答こたえて云いく「有あり」仏い云わく「此この袈裟けさをば汝母なんじに供養くようすべし」此この比丘びく 仏いに云わく「仏こは此これ三界さんがいの中ちゆう第一だいいちの特尊とくそんなり一切衆生いっさいしゆじやうの眼目がんもくにてをはす、設たとい十方世界じふぱうせかいを覆おほつ衣えなりとも大地だいちにしく袈裟けさなりとも能よく報はうじ給たまうべし、我が位ゐは無智むちなる事牛ことし羊やうよりもはかなしいかでか袈裟けさの信施しんせをほつぜん」と云いふ、仏い返へんして告いげて云いく「汝なんじが身みをば誰たれか生なみしぞや」汝なんじが母ははこれを生なむ此この袈裟けさの恩報おんほうじぬべし」等と云いふ、此これは又また齡九旬やうじゆうにいたれる悲母ひもの愛子あいしにこれをまいらせさ給たまえる我われと両眼りやうげんを誕うり身命しんみづを尽つくくせり、我が子この身みとして此このか帷かたびらの恩おんかたしとをばしてつかわせるか日蓮にちれん又またはつじがたし、しかれども又返またすべきにあらず此この帷かたびらをきて日天にってんの御前ごんまへにして此この子細しさいを申もうし上げば定さだめて釈梵しやくはん諸天しよてんしろしめすべし、帷かたびらは一ひとなれども十方じふぱうの諸天しよてん此これをしり給たまうべし、露つゆを大海たいかいによせ土どを大地だいちに加くるがごとし生なに失なせし世世しよしよにくちざらむかし、恐恐ききょう謹言きんげん。

二月五日

日蓮 花押

与富木常忍

妙法蓮華經の第二に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗し經を誦誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん其人命終して阿鼻獄に入らん乃至是の如く展転して無數劫に至らん」第七に云く「千劫阿鼻獄に於てす」第三に云く「三千塵点第六に云く五百塵点劫」等云云、涅槃經に云く「惡象の爲に殺されては三惡に至らず惡友の爲に殺されては必ず三惡に至る」等云云、賢慧菩薩の法性論に云く「愚にして正法を信ぜず邪見及び慢なるは過去の謗法の障りなり不了義に勒着して供養恭敬に著し唯邪法を見て善知識に遠離して謗法者の小乗の法に樂著する是の如き等の衆生に親近して大乘を信ぜず故に諸仏の法を謗す、智者は怨家蛇火毒・因陀羅霹靂・刀杖諸の惡獸虎狼師子等を畏るべからず、彼は但能く命を断じて人をして畏るべき阿鼻獄に入らしむること能わず、畏るべきは深法を謗すると及び謗法の知識となり決定して人をして畏るべき阿鼻獄に入らしむ、惡知識に近づきて惡心にして仏の血を出だし及び父母を殺害し諸の聖人の命を断じ和合僧を破壊し及び諸の善根を断ずると雖も念を正法に繋ぐるを以て能く彼の處を解脱せん、若し復余人有つて甚深の法を誹謗せば彼の人無量劫にも解脱を得べからず、若し人衆生をして是の如きの法を覺信せしめば彼は是我が父母亦是れ善知識なり、彼人は是智者なり如来の滅後に邪見顛倒を廻して正道に入らしむるを以ての故に三宝清淨の信菩提功德の業なり」等云云、竜樹菩薩の菩提資糧論に云く「五無間の業を説きたもう乃至許し未解の深法に於て執着を起せるは○彼の前の五無間等の罪緊に之を比するに百分にしても及ばず」云云。

未れ賢人は安きに居て危きを欺き佞人は危きに居て安きを欺く大火は小水を畏怖し大樹は小鳥に値いて枝を折らる

智人は恐怖すべし大乘を謗する故に、天親菩薩は舌を切らんと云い馬鳴菩薩は頭を刎ねんと願ひ吉蔵大師は身を肉橋となし玄奥三蔵は此れを靈地に占ひ不空三蔵は疑いを天竺に決し伝教大師は此れを異域に求む皆上に挙ぐる所は経論を守護する故か。

今日日本国の八宗並びに浄土・禅宗等の四衆上主上・上皇より下臣下万民に至るまで皆一人も無く弘法・慈覚・智証の三大師の末孫・檀越なり、円仁・慈覚大師云く「故に彼と異り」と円珍・智証大師云く「華嚴・法華を大日経に望むれば戯論と為す」と空海・弘法大師云く「後に望むれば戯論と為す」と等と云云、此の三大師の意は法華経は已今、当の譜経の中の第一なり然りと雖も大日経に相對すれば戯論の法なり等云云、此の義心有らん人信を取る可きや不や。

今日日本国の諸人・惡象・惡馬・惡牛・惡狗・毒蛇・惡刺・懸岸・險崖・暴水・惡人・惡国・惡城・惡舍・惡妻・惡子・惡所從等よりも此に超過し以て恐怖すべきこと百千万億倍なれば持戒・邪見の高僧等なり、問うて云く上に挙ぐる所の三大師を謗法と疑うか叡山第二の円澄・寂光大師・別当・光定大師・安慧・大樂大師・慧亮和尚・安然和尚・淨觀僧都・檀那僧・正・慧心・先德・此等の数百人、弘法の御弟子・実慧・真濟・真雅等の数百人並びに八宗・十宗等の大師・先德・日と日と月と月と星と星と並びに出でたるが如し、既に四百余年を経歴するに此等の人人一人として此の義を疑わず汝何なる智を以て之を難するや云云。

此等の意を以て之を案するに我が門家は夜は眠りを断ち昼は暇を止めて之を案ぜよ一生空しく過して万歳悔ゆること勿れ、恐恐謹言。

八月二十三日

富木殿

日蓮花押

鷲目一結給ひ候畢んぬ、志有らん諸人は一処に踏集して御聴聞有るべきか。

一三三三 御衣並単衣御書

建治元年 五十四歳御作

971P

御衣の布並びに御単衣給ひ候い畢んぬ鮮白比丘尼と申せし人は生れさせ給いて御衣をたてまつりたりけり、生長するほどに次第にこの衣大になりけり、後に尼とならせ給いければ法衣となりけり、ついに法華經の座にして記をさづかる一切衆生喜見如来これなり、又法華經を説く人は柔和忍辱衣と申して必ず衣あるべし、物たね

と申すもの一なれども植えぬれば多くなり竜は小水を多雨となし人は小火を大火となす、衣かたびらは一なれども法華經にまいらせ給いぬれば法華經の文字は六万九千三百八十四字・一字は一仏なり、此の仏は再生敗種を心符とし顕本遠寿を其の寿とし常住仏性を咽喉とし一乗妙行を眼目とせる仏なり、応化非真仏と申して三十二相

八十種好の仏よりも法華經の文字こそ真の仏にてはわたらせ給いて仏在世に仏を信ぜし人は仏にならざる人もあり、仏の滅後に法華經を信ずる人は無二不成仏如来の金言なり、この衣をつくりてかたびらをきそえて法華經を

よみて候わば日蓮は無戒の比丘なり法華經は正直の金言なり、毒蛇の珠をはき伊蘭の栴檀をいだすがごとし、恐
謹言。

九月二十八日御返事日蓮 花押

一三四 観心本尊得意抄

建治元年十一月 五十四歳御作

972P

驚目一貫文厚綿の白小袖一つ筆十管墨五丁給ひ畢んぬ。

身延山は知食如く冬は嵐はげしくふり積む雪は消えず極寒の処にて候間昼夜の行法もはだつすにては堪え難く辛苦にて候に此の小袖を着ては思ひ有る可からず候なり、商那和修は付法蔵の第三の聖人なり、此の因位を仏説いて云く「乃往過去に病の比丘に衣を与ふる故に生生世世に不思議自在の衣を得たり」、今の御小袖は彼に似たり此の功德は日蓮は之を知る可からず併ながら釈迦仏に任せ奉り畢んぬ。

抑も今の御状に云く教信の御房観心本尊抄の未得等の文字に付て迹門をよまじと疑心の候なる事不相伝の僻見にて候か、去る文永年中に此の書の相伝は整足して貴辺に奉り候しが其の通りを以て御教訓有る可く候、所詮・

在在処処に迹門を捨てよと書きて候事は今我等が読む所の迹門にては候はず、叡山天台宗の過時の迹を破し候なり、たといてんだい「でんきよう」にて設いた台「伝教の如く法のままありとも今末法に至ては去年の曆の如し何に況や慈覚自り已来大小権実に迷いて大謗法に同じきをや、然る間像法の時の利益も之無し増して末法に於けるをや。

一北方の能化難じて云く爾前の経をば末顕真実と捨て乍ら安国論には爾前の経を引き文証とする事自語相違と不審の事前前申せし如し、総じて一代聖教を大に分つて一と為す一には大綱二には綱目なり、初の大綱とは成仏得道の教なり、成仏の教とは法華経なり、次に綱目とは法華已前の諸経なり、彼の諸経等是不成仏の教なり、

成仏得道の文言之を説くと雖も但名字のみ有て其の実義は法華に之有り、伝教大師の決権実論に云く「権智の所作は唯名のみ有て実義有ること無し」云云、但し権教に於ても成仏得道の外は説相空しかる可からず法華の為の

網目なるが故に、所詮成仏の大綱を法華に之を説き其の余の網目は衆典に之を明す、法華の爲の網目なるが故に法華の証文に之を引き用ゆ可きなり、其の上法華經にて実義有る可きを爾前の經にして名字計りのしる事全く法華の爲なり、然る間尤も法華の証文となるべし。

問う法華を大綱とする証如何、答う天台は当に知るべし此の經は唯如來說教の大綱を論じて綱目を委細にせざるなりと、問う爾前を綱目とする証如何、答う妙樂の云く「皮膚毛綵衆典に存在せり」云云、問う成仏は法華に限ると云う証如何、答う經に云く「唯一乗の法のみ有て二も無く亦三も無し」文問う爾前は法華の爲との証如何答う經に云く「種種の道を示すと雖も仏乗の爲なり」委細申し度く候と雖も心地違例して候程に省略せしめ候、恐恐謹言。

十一月二十三日

日蓮花押

富木殿御返事

帥殿の物語りしは下総に目連樹と云う木の候よし申し候し、其の木の根をほりて十兩ばかり兩方の切目には焼金を宛てて紙にあつくつみて風ひかぬ様にこしらへ大夫次郎が便宜に給ひ候べきよし御伝えあるべく候。

一三五 聖人知三世事

建治元年

五十四歳御作

与富木常忍

974P

聖人と申すは委細に三世を知るを聖人と云う、儒家の三皇・五帝並びに三聖は仏説在を知つて過未を知らず外道は過去八万・未来八万を知る一分の聖人なり、小乗の二乗は過去・未来の因果を知る外道に勝れたる聖人なり、小乗の菩薩は過去三僧祇菩薩、通教の菩薩は過去に動踰塵劫を経歴せり、別教の菩薩は一の位の中に多俱低劫の過去を知る、法華經の迹門は過去の三千塵点劫を演説す一代超過是なり、本門は五百塵点劫過去遠遠劫をも之を演説し又未来無數劫の事をも宣伝し、之に依つて之を案するに委く過未を知るは聖人の本なり、教主釈尊既に近くは去つて後三月の涅槃之を知り遠くは後・五百歳・広宣流布疑い無き者か、若し爾れば近きを以て遠きを推し現を以て当を知る如是相乃至本末究竟等是なり。

後・五百歳には誰人を以て法華經の行者と之を知る可きや予は未だ我が智慧を信ぜず然りと雖も自他の返逆・伝道之を以て我が智を信ず敢て他人の為に非ず又我が弟子等之を存知せよ日蓮は是れ法華經の行者なり不輕の跡を紹繼するの故に輕毀する人は頭七分に破信ずる者は福を安明に積まん、問うて云く何ぞ汝を毀る人頭破七分無きや、答えて云く古昔の聖人は仏を除いて已外之を毀る人頭破但一人・二人なり今日蓮を毀皆する事は非一人・二人に限る可らず日本一國・一同に同じく破るるなり、所謂正嘉の大地震・文永の長星は誰か故ぞ日蓮は一閻浮提第一の聖人なり、上一人より下万民に至るまで之を輕毀して刀杖を加え流罪に処するが故に梵と釈と日月・四天と隣國に仰せ付けて之を逼責するなり、大集經に云く・仁王經に云く・涅槃經に云く・法華經に云く・設い万祈を作すとも日蓮を用いずんば必ず此の国今の嵯岐・對馬の如くならん、我が弟子仰いで之を見よ此れ偏に日蓮が貴尊な

るに非ず法華經の御力の殊勝なるに依るなり、身を擧ぐれば慢ずと想い身を下せば經を頗る松高ければ藤長く源深ければ流れ遠し、幸なるかな楽しいかな穢土に於て喜樂を受くるは但日蓮一人なる而已。

一三六 富木尼御前御返事

建治二年 五十五歳御作

975p

驚目一貫並びにつつひとつ給い候いゝんぬやのはしる事は言のちからくものゆくことはりうのちから、をとこのしわざはめのちからなり、いまときどののこれ御わたりある事尼ごぜんの御力なり、けぶりをみれば火をみるあめをみればりうをみる、をとこをみればめをみる、今ときどのにけさんつかまつれば尼ごぜんをみたてまつるとをぼつ、ときどのの御物がたり候はこのはわのなげきのなかにりんずうのよくをせしと尼がよくあたりかんびやうせし事のつれしさ、いつのよにわするべしともをぼえずとよろこばれ候なり、なによりもをぼつなき事は御所勞なり、かまえてさもと三年はじめのごとくにきつじせさせ給へ病なき人も無常まぬがたし但しとしのはてにはあらず、法華經の行者なり非業の死にはあるべからずよも業病にては候はじ、設い業病なりとも法華經の御力たのもし、阿闍世王は法華經を持ちて四十年の命をのべ陳臣は十五年の命をのべたり、尼ごぜん又法華經の行者なり御信心月のまさるがごとくしをのみつがごとし、いかでか病も失せ寿ものびざるべきと強

盛にをばしめし身を持し心に物をなげかざれ、なげき出来る時はゆきつしまの事だざひふの事がまくらの人人の天の樂のごとにありしが、当時つくしむかへとどまるめゆくをこゝはなるるときはかわをはぐがごとくかをとかをとをとりあわせ目と目とをあわせてなげきしが、次第にはなれてゆいのはまいなぐらうこゝえさかわはこねさか一日・二日するほどに、あゆみあゆみとをさかるあゆみをかわも山もかたて雲もかたつればうちこつ

ものはなみだなりともなうものはなげきなり、いかにかなしかるらむかくなげかんほどに。もうこのつわものせめきたらば山か海もいけとりかぶねの内かかうらいかにてうきめにあはん、これひとに失もなく日本国

の一切衆生の父母となる法華經の行者日蓮をゆゑなく、或はのり、或は打ち、或はうじをわたり、ものにくるい

しが十羅刹のせめをかほりてなれる事なり、又又これより百千万億倍たがたき事どもいで来るべし、不思議を

目の前に御らんあるぞかし、我れ等は仏に疑いなしとをばせば、なにのなげきか有るべき、きさきになりても・

なにかせん天に生れても・ようしなし、竜女があとをつぎ摩訶波舍波提比丘尼のれちにつらなるべし、あらうれしあらう

れし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱えさせ給へ、恐恐謹言。

三月二十七日日蓮 花押尼ごぜんへ

一三七 忘持經事

建治二年 五十五歳御作

与富木常忍

976p

忘れ給う所の御持經追て修行者に持たせ之を遣わす。

魯の哀公云く人好く忘る者有り移宅に乃ち其の妻を忘れたり云云、孔子云く又好く忘るること此れより甚しき者有

り桀紂の君は乃ち其の身を忘れたり等云云、夫れ桀特尊者は名を忘る此れ閻浮第一の好く忘る者なり今常忍上人は

持經を忘る日本第一の好く忘るるの仁か、大通結縁の輩は衣珠を忘れ三千塵劫を経て貧路に跣し久遠下種の人は

良薬を忘れ五百塵点を送りて三途の嶮地に顛倒せり、今真言宗・念仏宗・禅宗・律宗等の学者等は仏陀の本意を忘失

し未来無數劫を経歴して阿鼻の火坑に沈淪せん、此れより第一の好く忘るる者あり所謂今の世の

てんだいもう がくしゃ とじきよう
天台宗の学者等と持経者等との日蓮を誹謗し念仏者等を扶助する是れなり、親に背いて敵に付き刀を持ちて自を
破る此等は且く之を置く。

そ じようたいばさつ
夫れ常啼菩薩は東に向つて般若を求め善財童子は南に向いて華嚴を得る雪山の小児は半偈に身を投げ樂法梵志は一偈
に皮を剥ぐ、此等は皆上聖大人なり其の迹を うるに地 住に居し其の本を尋ねれば等妙なるのみ。身は八熱に入つて
かきようさんまい
火坑三昧を得。心は八寒に入つて清涼三昧を証し身心共に苦無し、譬えば矢を放つて虚空を射。石を握つて水に投ずるが
こと
如し。

今 じょうい 貴辺は末代の愚者にして見思未断の凡夫なり、身は俗に非ず道に非ず禿居士心は善に非ず惡に非ず羝羊のみ、
然りと雖も 一人の悲母 堂に有り朝に出で主君に詣で夕に入て私宅に返り営む所は悲母の爲め存する所は孝心のみ、
しか 而るに去月下旬の比 生死の理 を示さんが爲に黄泉の道に趣く此に貴辺と歎いて言く齡既に九旬に及び子を留めて親の
去ること次第たりと雖も情事の心を案ずるに去つて後來る可からず何れの月日をか期せん二母

国に無し今より後誰をか拝す可き、離別忍び難きの間 舍利を頸に懸け足に任せて大道に出で下州より甲州に至る其の
ちやうげん 中間往復千里に及ぶ国 皆飢饉し山野に盜賊充滿し宿宿糧米乏少なり我身羸弱・所従亡きが若く牛馬合期せず
が 峨峨たる大山重重として漫漫たる大河多多なり高山に登れば頭を天に ち幽谷今れば足雲を踏む鳥に非れば渡り難く
鹿に非れば越え難し眼眩き足冷ゆ、羅什三蔵の葱嶺 役の優婆塞の大峰も只今なりと云云、然る後深洞に尋ね入りて一
菴室を見る法華読誦の音 青天に響き一乗談義の言山中に聞ゆ、案内を触れて室に入り教主釈尊の御宝前に母の骨を
あんち 安置し五臓を地に投げ合掌して両眼を開き尊容を拝し歡喜身に余り心の苦み忽ち息む、我が頭は父母の頭 我が足は
ふ 父母の足 我が十指は父母の十指 我が口は父母の口なり、譬えば種子と菓子と身と影との如し教主釈尊の成道は淨飯
摩耶の得道 吉占師子 青提女 目 尊者は同時の成仏なり、是の如く觀する時・

むし いづにたちま 無始の業障忽ちに消え心性の妙蓮忽ちに開き給うか然して後に随分仏事を為し事故無く還り給う云云、恐恐謹言。

富木入道殿

一三八 富木殿御返事 建治二年十萬五十五歳御作

978p

がもくひとゆいてんだいだいし 驚目一結天台大師の御宝前を莊嚴し候い了んぬ、經に云く「法華最第一なり」と、又云く「能く是の經典を受持する」と有らん者も亦復是の如し一切衆生の中に於て亦これ第一なり」と、又云く「其の福復彼れに過ぐ」妙樂

いも のうん 云く「若し悩乱する者は頭七分に破れ供養すること有らん者は福十号に過ぐ」伝教大師も「讚者は福を安明に積み謗者は罪を無間に開く」等云云、記の十に云く「方便の極位に居る菩薩猶尚第五十人に及ばず」等云云、華嚴經の法慧功德林大日經の金剛薩捶等尚法華經の博地に及ばず何に況や其の宗の元祖等法藏善無畏等に於てをや、

こ 是れは且く之を置く、尼ごぜんの御所勞の御事我身一身の上とをもひ候は昼夜に天に申し候なり、此の尼ごぜんは法華經の行者をやしなう事灯に油をそ余の根に土をかさめるがごとし、願くは日月天共の命にかわり給へと申し候なり、又をもいわする事もやといよ房に申しつけて供そ、たのもしとをばしめせ、恐恐。

十一月二十九日

日蓮花押

富木殿御返事

驚目五貫文慥に送り給ひ候い了ぬ、且つ知食すが如く此の所は里中を離れたる深山なり衣食乏少の間読経の声続き難く談義の勤め廃しつ可し、此の託宣は十羅刹の御計にて檀那の功を致さしむるか、止觀の第八に云く「帝釈堂の小鬼敬い避くるが如し道場の神大なれば妄りに侵する可く無し、又城の主剛ければ守る者も強し城の主剛ければ守る者忙る、心は是れ身の主なり同名同生の天是れ能く人を守護す心固ければ則ち強し身の神尚爾なり況や

道場の神をや弘決の第八に云く「常に人を護ると雖も必ず心の固きに依りて神の守り則ち強し」又云く「身の両肩の神尚常に人を護る況や道場の神をや」云云、人所生の時より一神守護す所謂同生天同名天是を俱生神と

云う華嚴經の文なり、文句の四に云く「賊南無仏と称して尚天頭を得たり況や賢者称せば十方の尊神敢て当らざらんや但精進せよ懈怠すること勿れ」等云云、釈の意は月氏天を崇めて仏を用いざる国あり而るに寺を造り第六天の魔王を主

とす頭は金を以てす大賊年来之を盗まんとして得ず有時仏前に詣で物を盗んで法を聴く、仏説いて

云く南無とは驚覺の義也盗人之を聞いて南無仏と称して天頭を得たり、之を糾明する処盗人上の如く之を申す一国、

皆天を捨てて仏に帰せり云云、彼を以て之を推するに設け料有る者も三宝を信ぜば大難を脱れんか、而るに今示し給える

託宣の状は兼て之を知る之を案ずるに難を卻て福の来る先兆ならんのみ、妙法蓮華經の妙の一字は竜樹菩薩の大論に

釈して云く「能く毒を変じて藥と為す」と云云、天台大師の云く「今經に記を得る即ち毒を変じて藥と為すなり」と云云、

災来るとも變じて幸と為らん何に況や十羅刹之を兼るをや、薪火を熾にし風求羅を益すとは是なり、言は紙上に尽し

難し心を以て之を量れ、恐恐謹言。

十二月十三日

日蓮 花押

御返事

一四〇 常忍抄

建治三年十月 五十六歳御作

980p

御文粗拝見仕り候了んぬ。

御状に云く常忍の云く記の九に云く「権を稟けて界を出づるを名れて虚出と為す」云云、了性房云く全く以て其の釈無し云云、記の九に云く「壽量品の疏」無有虚出より昔虚為実故に至るまでは為の字権を稟けて界を出づるを名けて

虚出と為す三乗は皆三界を出でずと云うこと無し人天は三途を出でんが為ならずと云うこと無し並に名けて虚と為す云云、文句の九に云く「虚より出でて而も実に入らざる者有ること無し、故に知んぬ昔の虚は去声実の為の故なり」と云云、壽量品に云く「諸の善男子如来諸の衆生小法を樂ねがう徳薄垢重の者を見て乃至以諸衆生乃至未會暫廢」云云、此の經の文を承けて天台・妙樂は釈せしなり、此の經文は初成道の華嚴の別円より乃至法華經

の迹門十四品を、或は小法と云い・或は徳薄垢重・或は虚出等と説ける經文なり、若し然らば華嚴經の華嚴宗・深密經の法相宗・般若經の三論宗・大日經の真言宗・觀經の淨土宗・楞伽經の禪宗等の諸經の諸宗は依經の如く其の經を讀誦すとも三界を出でず三途を出でざる者なり何に況や或は彼を實と稱し或は勝ぐる等云云、此の人人天に向つて唾を吐き地をつかんで忿いかりを為す者か。

此の法門に於て如来滅後月氏・一千五百年付法藏の二十四人・竜樹・天親等知つて未だ此れを顯さず、漢土一千余年の余人も未だ之を知らず但天台・妙樂等粗之を演ぶ、然りと雖も未だ其の実義を顯さざるか、伝教大師以て

かくのごとく、今日蓮粗之を勘するに法華經の此の文を重ねて涅槃經に演べて云く「若し三法に於て異の想を修する者は是くの如し、今日蓮粗之を勘するに法華經の此の文を重ねて涅槃經に演べて云く」若し三法に於て異の想を修する者は當に知るべし是の輩は清淨の三歸則ち依処無く所有の禁戒皆具足せず終に声聞縁覺菩薩の果を証することを得ず」等云云、此の經文は正しく法華經の壽量品を顯說せるなり、壽量品は木に譬え爾前・迹門をば影に譬うる文なり、經文に又之有り、五時・八教・當分・跨節・大小の益は影の如し本門の法門は木の如し云云、又壽量品已前の在世の益は闇中の木の影なり過去に壽量品を聞きし者の事なり等云云、又不信は謗法に非ずと申す事、又云く不信の者地獄に墮ちずとの事、五の卷に云く「疑を生じて信ぜざらん者は則ち當に惡道に墮つべし」云云。

總じて御心候へ法華經と爾前と引き向えて勝劣・淺深を伴するに當分跨節の事に三つの様有り日蓮が法門は第三の法門なり、世間に粗夢の如く一二をば申せども第三をば申さず候、第三の法門は天台・妙樂・伝教も粗之を示せども未だ事了えず所詮末法の今に譲り与えしなり、五五百歳は是なり、但し此の法門の御論談は余は承らず候彼は広学多聞の者なりはばかりはばかりみたまたと候いしかば此の方のまけなんども申しつけられなば。

いかんがし候べき、但し彼の法師等が彼の釈を知り候はぬはさてをき候いぬ、六十卷になしなんど申すは天のせめなり謗法の科の法華經の御使に値うて顯れ候なり、又此の沙汰の事を定めてゆゑありて出来せり、がしまの大田次郎兵衛大進房又本院主もいかにとや申すぞよくきかせ給い候へ此れ等は經文に子細ある事なり、

法華經の行者をば第六天の魔王の必ず障うべきにて候、十境の中の魔境此れなり魔の習いは善を障えて惡を造らしむるをば悦ぶ事に候、強いて惡を造らざる者をば力及ばずして善を造らしむ又二乗の行をなす物をばあながちに怨をなして善をすすむるなり、又菩薩の行をなす物をば遮つて二乗の行をすすむ是後に純円の行を一向になす者をば兼別等に墮する止觀の八等を御らむあるべし。

又彼が云く止観の行者は持戒等云云、文句の九には初二三の行者の持戒をば此れをせしす經文又分明なり、止観に
そうい 相違の事は妙樂の問答之有り記の九を見る可し、初隨記に二有り利根の行者は持戒を兼ねたり鈍根は持戒之を制止す、
又正像末の不同もあり損受折伏の異あり伝教大師の市の虎の事思ひ合わすべし。

此れより後は下総にては御法門候べからず了性思念をつめつる上は他人と御論候わばかゝてあさくなりなん、彼の了性
と思念とは年来日蓮をそしるとつけ給わる、彼等程の蚊虻の者が日蓮程の師子王を聞かず見ずしてつはのそらにそしる
程のをこじんなり、天台法華宗の者ならば我は南無妙法蓮華經と唱えて念仏なんと申す者をばあればさる事なんと申す
だにもきくわいなるべきに其の義なき上・偶申す人をそしるでう・あらふしぎ

ふしぎ、大進房が事さきさきさきかつかわして候やうにつよづよとかき上申させ給ひ候へ大進房には十羅刹
のつかせ給ひて引きかへせさせ給うとをば候ぞ、又魔王の使者ななどがつきて候いけるがはなれて候とをば候ぞ、
悪鬼入其身はよもそら事にては候はじ、事事重く候へども、此の使いそぎ候はよるかきて候ぞ、恐恐謹言。

十月一日

日蓮花押

一四一 始聞仏乘義

建治四年二月 五十七歳御作

与富木常忍

982p

青島七結下州より甲州に送らる其の御志悲母の第三年に相当る御孝養なり、問う止観明静前代未聞の心如何、答う
円頓止観なり、問う円頓止観の意何ん、答う法華三昧の異名なり、問う法華三昧の心如何、答う夫れ末代の凡夫法華經
を修行する意に二有り一には就類種の開会二には相對種の開会なり、問う此の名は何より出る

や、答う法華經第三藥草喻品に云く「種相体性の四字なり其の四字の中に第一の種の一字に二あり、一には就類種二には相對種なり」其の就類種とは釈に云く「凡そ心有る者は是れ正因の種なり随つて一句を聞くは是れ了因の種なり低頭挙手は是れ縁因の種なり」等云云、其の相對種とは煩惱と業と苦との三道其の当体を押えて法身と般若と解脱と称する是なり、其の中に就類種の一法は宗は法華經に有りと雖も少分又爾前の經經にも通ず、妙樂云く「別經は唯就類の種有つて而も相對無し」と云云、此の釈の別教と云うは本の別教には非ず爾前の円或は他師の円なり、又法華經の迹門の中供養舍利已下二十余行の法門も大体就類種の開会なり、問う其の相對種の心如何、答う止觀に云く「云何なるか聞円法なる生死即法身煩惱即般若結業即解脱なりと聞くなり三の名有り」と雖も而も三の体無し是れ一体なりと雖も而も三の名を立つ是の三即ち一相にして其れ實に異有ること無し、法身究竟すれば般若も解脱も亦究竟な般若清淨なれば余亦清淨なり解脱自在なれば余亦自在なり一切の法を聞くこと亦是の如し皆仏法を具して減少する所無し是を聞円と名く等云云、此の釈は即ち相對種の手法なり其の意如何、答う生死とは我等が苦果の依身なり所謂五陰・十二入・十八界なり煩惱とは見思・塵沙・無明の三惑なり結業とは五逆・十惡・四重等なり、法身とは法身如來般若とは報身如來解脱とは応身如來なり我等衆生無始曠劫より已來此の三道を具足し今法華經に値つて三道即三徳となるなり。

難じて云く火より水出でず石より草生ぜず惡因・惡果を感じ善因善報を生ずるは仏教の定れる習なり而るに我等其の根本を尋ね究むれば父母の精血・赤白二一和合して一身と爲る惡の根本不淨の源なり、設い大海を傾けて之を洗うとも清淨なる可らず又此れ苦果の依身は其の根本を探り見れば貧・瞋・癡の三毒より出づるなり、此の煩惱苦果の二道に依つて業を構う此の業道即ち是れ結縛の法なり、譬えば籠に入れる鳥の如し如何ぞ此の三道を以て三仏因と稱するや、譬えば糞を集めて栴檀を造れども終に香しからざるが如し、答う汝が難大いに道理なり

我此の事を弁えず但し付法蔵の第十二天台大師の高祖・竜樹菩薩・妙法の妙の一字を釈して譬えば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し等云云、毒と云うは何物ぞ我等が煩惱・業・苦の三道なり薬とは何物ぞ法身・般若・解脱なり、能く毒を以て薬と為すとは何物ぞ三道を変じて三徳と為すのみ、天台云く妙は不可思議と名づく等云云、又云く一心乃至不可思議境界此に在り等云云、即身成仏と申すは此れ是なり、近代の華嚴・真言等此の義を盗み取りて我が物と為す大偷盗天下の盗人はなり。

問うて云く凡夫の位も此の秘法の心を知るべきや、答う私の答は詮無し竜樹菩薩の大論に云く九十三なり「今漏尽の阿羅漢還つて作仏すと云うは唯仏のみ能く知ろしめす、論議とは正しく其の事を論ず可し測り知ること能わす是の故に戲論すべからず若し仏を求め得る時乃ち能く了知す余人は信ずべく而も未だ知るべからず」等云云、此の釈は爾前の別教の十一品の断・無明・円教の四十一品の断・無明の大菩薩普賢・文殊等も未だ法華經の意を知らず

何に況や蔵通二教の三乗をや何に況や末代の凡夫をやと云う論文なり、之を以て案ずるに法華經の唯仏与仏乃能究竟とは爾前の灰身滅智の二乗の煩惱・業・苦の三道を押えて法身・般若・解脱と説くに二乗還つて作仏す菩薩・凡夫も亦かくの如しと釈するなり、故に天台の云く二乗根敗す之を名けて毒と為す今經に記を得る即ち是れ毒を變じて薬と為す、論に云く余經は秘密に非ず法華は是れ秘密なり等云云、妙樂云く論に云くとは大論なりと云云、問うかくのごとく是くの如し之を聞いて何の益有るや、答えて云く始めて法華經を聞くなり、妙樂云く若し三道即是れ三徳と信ぜば尚能く二死の河を渡る況や三界をやと云云、末代の凡夫此の法門を聞かば唯我一人のみ成仏するに非ず父母も又即身成仏せん此れ第一の孝養なり病身為るの故に委細ならず又又申す可し。

建治四年太歲 戊寅 二月二十八日

日蓮花押

富木殿

夫れ病に二あり一には輕病二には重病・重病すら善医に値う急に対治すれば命猶存す何に況や輕病をや、業にこあり一には定業二には不定業、定業すら能く能く懺悔すれば必ず消滅す何に況や不定業をや、法華經第七に云く「此の經は則為閻浮提の人の病の良藥なり」等云云、此の經文は法華經の文なり、一代の聖教は皆如來

の金言・無量劫より已來不妄語の言なり、就中此の法華經は仏の正直捨方便と申して眞実が中の眞実なり、多宝証明を加え諸仏・舌相を添え給ういかでかむなしかるべき、其の上最第一の秘事はんべり此の經文は後・五百歳・二千五百余年の時女人の病あらんとどかれて候文なり、阿闍世王は御年五十の二月十五日に大惡瘡・身に出来せり、大医耆婆が力も及ばず三月七日必ず死して無間・大城に墮つべかりき、五十余年が間の大樂一時に滅して一生の大苦・三七日にあつまれり、定業限りありしかども仏・法華經をかさねて演説して涅槃經となづけて大王にあら

たい給いしかば身の病・忽に平愈し心の重罪も一時に露と消えにき、仏滅後・二千五百余年・陳臣と申す人ありき命知命にありと申して五十年に定まりて候いしが天台大師に伴いて十五年の命を宣べて六十五までをはしき、其の上不輕菩薩は更増壽命ととかれて法華經を行じて定業をのべ給いき、彼等は皆男子なり女人にはあらざれども

法華經を行じて寿をのぶ、又陳臣は後・五百歳にもあたらす冬の稻米・夏の菊花のごとし、当時の女人の法華經を行じて定業を転ずることは秋の稻米冬の菊花誰かをどろくべし。

されば日蓮悲母をいのりて候しかば現身に病をいやすのみならず四箇年の壽命をのべたり、今女人の御身として病を身につけさせ給う・心みに法華經の信心を立てて御らむあるべし、しかも善医あり中務三郎左衛門尉殿は

法華經の行者なり、命と申す物は一身第一の珍宝なり一日なりともこれを延るならば千万両の金にもすぎたり、
法華經の一代の聖教に超過していみじきと申すは寿量品のゆゑかし、鬪浮第一の太子なれども短命なれば草よりもか
ろし、日輪のごとくなる智者なれども夭死にあれば生犬に劣る、早く心ざしの財をかさねていそぎいそぎ

御対治あるべし、此れよりも申すべけれども人は申すによて吉事もあり又我が志のつすきかとをもつ者もあり人の心
しりがたき上先に少少かかる事候、此の人は人の申せばこそ心すげに思つ人なり、なかなか申す

はあしかりぬべし、但なかつともなく、ひらなさけに又心もなくうちたのませ給え、去年の十月これに來りて候いしが御所
労の事をよくよくなげき申せしなり、當事大事のなければをどろかせ給わぬにや、明年正月二月のころをひは必ずをこる
べしと申せしかばこれにもなげきは入つて候。

富木殿も此の厄ごぜんをこそ杖柱とも恃たるになんと申して候いしなり随分にわび候いしぞきわめてまけじたましの
人にて我がかたの事をば大事と申す人なり、かすが今身の財をだにをしませ給わば此の病治がたかるべし、一日の命は
三千界の財にもすぎて候なり先ず御志をみみさせ給うべし、法華經の第七の巻に三千

大千世界の財を供養するよりも手の一指を焼きて仏法華經に供養せよとかれて候はこれなり、命は三千にもすぎて
候而も齡もいまだたけさせ給はず、而して法華經にあわせ給いぬ一日もいきてをせば功德つもるべし、あらをしの命や
をしの命や、御姓名並びに御年を我とかかせ給いてわざとつかわせ大日月天に申しあぐべし、いよどのもあながちにな
げき候は日月天に自我偈をあて候はんずるなり、
恐恐。

日蓮花押
厄ごぜん御返事

一四三 富城殿御返事

987p

あまこぜん じゆみちうあん
尼御前御寿命長遠の由 天に申し候ぞ其の故御物語り候へ

ふだんほけきよう
不断法華経来年三月の料の分錢三貫文米二斗送り給ひ畢んぬ

十一月二十五日

にちれん
日蓮 在御判

富城殿御返事

一四四 四菩薩造立抄

こうあん
弘安二年五月

五十八歳御作

987p

白小袖一薄墨染衣一同色の袈裟一帖 鷲目一貫文給ひ候、今に始めざる御志言を以て宣^{のべ}がたし何れの日を期してか
たいめん と しんちゆう もつろつ もつ ひろかん
対面を遂げ心中の朦朧を申し披や。

一御状に云く本門久成の教主釈尊を造り奉り脇士には久成地涌の四菩薩を造立し奉るべしと兼て聴聞仕り候いき、
いづれ ほんもんくじよう きようしやくそん つく たまつきようじ くらじようじ ゆ ぼさつ たてまつ かね ちようもん
然れば聴聞の如くんば何の時かと云、夫れ仏世を去らせ給いて二千余年に成りぬ、其の間 月氏 漢土 日本国一
ちゆうもん ごとく けいすれ こそ がつし かんど にほんこく
閻浮提の内に仏法の流布する事 僧は稲麻のごとく法は竹葦の如し、然るにいまだ本門の教主釈尊、並に本化の菩薩を
えんぶだい ぶつぽう るふ とうま とくふ ちけい ごとく しか ほんもん きようしやくそん ほんもん ほんもん ほんもん ほんもん ほんもん ほんもん
造り奉りたる寺は一処も無し三朝の間に未だ聞かず、日本国に数万の寺を建立せし人も本門の教主脇士を造るべき
たてまつ いっしょ しま してんのう にほんこく ます こんりゆう ひとびと ほんもん きようしやくそん ほんもん ほんもん ほんもん ほんもん ほんもん ほんもん
事を知らず上宮太子仏法最初の寺と号して四天王寺を造立せしかども阿弥陀仏を本尊として脇士には観音等 四天王
じきうくつたいしぶつぽうさいしよ してんのう 日本国に数万の寺を建立せし人も本門の教主脇士を造るべき かんなん してんのう
を造り副えたり、伝教大師 延暦寺を立て給うに中堂には東方の鷲王の相貌を造りて本尊として
つく そ でんぎやうだいし えんりやくじ たま ちゆうだう とうほう がおう そうみよう つく ほんぞん ほんぞん

久成の教主・脇士をば建立し給はず、南京七大寺の中にも此の事を未だ聞かず田舎の寺寺以て爾なり、かたがた不審なりし間・法華經の文を拝見し奉りしかば其の旨顯然なり、末法・鬪諍堅固の時にいたらずんば造るべからざる旨分明なり、正像に出せし論師・人師の造らざりしは仏の禁を重んずる故なり、若し正法・像法の中に久成の教主・釈尊並びに脇士を造るならば夜中に日輪出で日中に月輪の出でたるが如くなるべし、末法に入つて始めの五百年に上行菩薩の出でさせ給いて造り給うべき故に正法・像法の四依の論師・人師は言にも出させ給はず、竜樹・天親こそ知らせ給いたりしかども口より外出させ給はず、天台智者大師も知らせ給いたりしかども迹化の菩薩の一分なれば一端は仰せ出させ給いたりしかども其の実義をば宣へ出させ給はず、但ねぎめの枕に

時鳥の二音を聞きしが如くにして夢のさめて止めるやうに弘め給ひ候ぬ、夫れより已外の人師はまして一言をも仰せ出し給う事なし、此等の論師・人師は靈山にして迹化の衆は末法に入らざらん正像二千年の論師・人師は本門久成の教主・釈尊並に久成の脇士・地涌上行等の四菩薩を影ほども申出すべからずと御禁ありし故ぞかし。

今末法に入れば尤も仏の金言の如くんば造るべき時なれば本仏・本脇士造り奉るべき時なり、當時は其の時に相当れば地涌の菩薩やがて出でさせ給はんずらん、先ず其れ程に四菩薩を建立し奉るべし尤も今は然るべき時なりと云云、されば天台大師は後の五百歳遠く妙道に沾わんとしたひ、伝教大師は正像稍過ぎ已て末法太だ近きに有り法華一乗の機今正に是れ其の時なりと恋いさせ給う、日蓮は世間には日本第一の貧しき者なれども仏法を以て論

ずれば一閻浮提第一の富る者なり、是れ時の然らしむる故なりと思へ喜び身にあまり感涙押難く教主・釈尊の御恩報じ奉り難し、恐らくは付法蔵の人人も日蓮には果報は劣らせ給いたり天台智者大師・伝教大師等も及び

給うべからず最も四菩薩を建立すべき時なり云云、問うて云く四菩薩を造立すべき証文之れ有りや、答えて云く涌出品に云く「四の導師有り一をば上行と名け二をば無辺行と名け三をば淨行と名け四をば安立行と名く」

等云云、問うて云く後・五百歳に限るといへる経文之れ有りや、答えて云く薬王品に云く「我が滅度の後、後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん」等云云。

一御状に云く大田方の人人・一向に迹門に得道あるべからずと申され候由、其の聞え候とは是以ての外、謬なり、御得意候本・迹二門の浅深・勝劣・与奪・傍正は時と機とに依るべし、一代聖教を弘むべき時に三あり機もつて爾なり、仏滅後・正法の始の五百年は一向・小乗後の五百年は権大乘像法一千年は法華經の迹門等なり、末法の始には一向に本門なり一向に本門の時なればとて迹門を捨つべきにあらず、法華經一部に於て前の十四品を捨つべ

き経文之れ無し本・迹の所判は一代聖教を三重に配当する時、爾前・迹門は正法、像法、或は末法は本門の弘まらせ給うべき時なり、今の時は正には本門、傍には迹門なり、迹門無得道と云つて迹門を捨てて一向本門に心を入れさせ給うひとびと人人はいまだ日蓮が本意の法門を習はせ給はざるにこそ以ての外、の僻見なり、私ならざる法門を僻案せん人は偏に天魔波旬の其の身に入り替りて人をして自身ともに無間・大城に墮つべきにて候つたなしつたなり、此の

法門は年来貴辺に申し含めたる様に人人にも披露あるべき者なり総じて日蓮が弟子と云つて法華經を修行せん人人は日蓮が如くにし候へさだにも候はば釈迦・多宝・十方の分身・十羅刹も御守り候べし、其れさ尚人人の御心中は量りがたし。

一日行房死去の事不便に候、是にて法華經の文読み進らせて南無妙法蓮華經と唱へ進らせ願くは日行を釈迦・多宝・十方の諸仏靈山へ迎取らせ給へと申し上げ候いぬ、身の所労いまだきらきらず候間省略せしめ候、又又申す可く候、恐恐謹言。

弘安二年五月十七日

日蓮花押

一四五 富木殿女房尼御前御書 弘安二年十一月 五十八歳御作

990p

いよ房は学生になりて候ぞつねに法門きかせ給へ

はるかに見まいらせ候はねばをばつかなく候、たつじとてまたのしき事は候はねどもむかしはことわびしく候いし時よりやしなはれまいらせて候はことにをんをもいまいらせ候、それについてはいのちはつるかめのごとくさいはいは月のまさりしをのみづがごとくこそ法華經にはいのりまいらせ候へさてはえち後房しもつけ房と申す僧をいよどのにつけて候ぞ、しばらくくふびんにあたらせ給へとき殿には申させ給へ

十一月二十五日

日蓮花押 富城殿女房尼御前

問うて云く法華經の第四法師品に云く難信難解と云云いかなる事ぞや、答えて云く此の經は仏説き給いて後二千余年

にまかりなり候、月氏に一千二百余年漢土に二百余年を経て後に日本国に渡りてすでに七百余年なり、仏滅後に此の

法華經の此の句を読みたる人但三人なり、所謂月氏には竜樹菩薩の大論に云く譬えば大藥師の能く

毒を以て藥と為すが如し等云云、此れは竜樹菩薩の難信難解の四字を読み給いしなり、漢土には天台智者大師と申せし

人読んで云く「已今當説最も為れ難信難解」と云云、日本国には伝教大師読んで云く「已説の四時の經今説の無量義經

當説の涅槃經は易信易解なり隨他意の故に此の法華經は最も為れ難信難解なり隨自意の故に

と等云云、問うて云く其の意如何、答て云く易信易解は隨他意の故に難信難解は隨自意の故なり云云、弘法大師並びに

日本国東寺の門人をもわく法華經は顯教の内の難信難解にて密教に相對すれば易信易解なり云云、慈覺智証並びに

門家思うよう法華經と大日經は俱に難信難解なり但し大日經と法華經と相對せば法華經は難信難解・

大日經は最も為れ難信難解なり云云、此の二義は日本一同なり、日蓮讀んで云く外道の經は易信易解・小乗經は

難信難解・小乗經は易信易解大日經等は難信難解大日經等は易信易解般若經は難信難解なり般若と華嚴と華嚴

と涅槃と涅槃と法華と・迹門と本門と・重重の難易あり。

問うて云く此の義を知つて何の詮か有る答えて云く生死の長夜を照す大燈・元品の無明を切る利剣は此の法門に過ぎざ

るか隨他意とは真言宗・華嚴宗等は隨他意の易信易解なり仏九界の衆生の意樂に隨つて説く所の經經を隨他意とい

つた譬えば賢父が愚子に隨うが如し、仏・仏界に隨つて説く所の經を隨自意といつ、譬は聖父が愚子

を随えたるが如きなり、日蓮此の義に付て大日經・華嚴經・涅槃經等を勘え見候に皆随他意の經なり、問うて云く其の随他意の証拠如何、答えて云く勝鬘經に云く「非法を聞くこと無き衆生には人天の善根を以て之を成熟す声聞を求むる者には声聞乗を授け縁覺を求むる者には、縁覺乗を授け大乘を求むる者には授くるに大乘を以てす」と云云、易信易解の心是なり、華嚴・大日・般若・涅槃等又是くの如し「爾の時に世尊・藥王菩薩に因せて八万の居士に告げたまわく藥王汝是の大衆の中の無量の諸天・竜王・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩羅伽・人と非人と及び比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の聲聞を求むる者・辟支仏を求むる者・仏道を求むる者を見るや、是くの如き等類咸く仏前に於て妙法華經の一偈・一句を聞いて一念も隨喜する者には我皆記を与え授く当に阿・菩提を得べし」文、諸經の如くんば人は五戒・天は十善・梵は慈悲喜捨・魔王には一無遮・比丘の二百五十・比丘尼の五百戒・聲聞の四諦・縁覺の十二因縁・菩薩の六度・譬は水の器の方円に随い象の敵に随つて力を出すごとし、法華經は爾らず八部・四衆皆一同に法華經を演説す、譬は定木の曲りを削り師子王の剛弱を嫌わずして大力を出すごとし。

此の明鏡を以て一切經を見聞するに大日の三部・淨土の三部等隠れ無し、而るをいかにやしけん弘法・慈覺・智証の御義を本としける程に此の義すでに隱没して日本國四百余年なり、珠をもつて石にか拵檀を凡木につれり、仏法やうやく顛倒しければ世間も又濁乱せり、仏法は体のごとし世間はかげのごとし体曲れば影ななめなり、幸なるは我が一門仏意に随つて自然に薩般若海に流入す、世間の學者の若きは随他意を信じて苦海に沈まんことなり、委細に旨又又申す可く候、恐恐。

五月廿六日

日蓮花押

一四七 富城入道殿御返事

弘安四年十月 六十歳御作

993p

与富木胤継 於身延

今月十四日の御札同じき十七日到来、又去ぬる後の七月十五日の御消息同じて二十比到来せり、其の外度度の貴札を賜うと雖も老病為るの上又不食氣に候間未だ返報を奉らず候条其の恐れ少からず候、何よりも去ぬる後の七月御状の内云く鎮西には大風吹き候て浦浦 島島に破損の船充滿の間乃至京都には思円上人、又云く理豈然らんや等云、此の事別して此の一門の大事なり総じて日本国の凶事なり仍つて病を忍んで一端是れを申し候はん

是偏に日蓮を失わんと為て無かるゝ事を造り出さん事兼て知る、其の故は日本国の真言宗等の七宗・八宗の人人の、大科今に始めざる事なり然りと雖も且く一を挙げて万を知らしめ奉らん、去ぬる承久年中に隱岐の法皇義時を失わしめんが為に調伏を山の座主・東寺・御室・七寺・園城に仰せ付けられ、仍つて同じき三年の五月十五日

鎌倉殿の御代官・伊賀太郎判官光末を六波羅に於て失わしめ畢んぬ、然る間同じき十九日二十日鎌倉中に騒ぎて同じき二十一日・山道・海道・北陸道の三道より十九万騎の兵者を指し登す、同じき六月十三日其の夜の戌亥の時より青天俄に陰りて震動雷電して武士共首の上に鳴り懸り懸りし上車軸の如き雨は篠を立てるが如し、爰に

十九万騎の兵者等・遠き道は登りたり兵乱に米は尽きぬ馬は疲れたり在家の人は皆隠れ失せぬ青は雨に打たれて縣の如し、武士共・宇治勢多に打ち寄せて見ければ常には三丁四丁の河なれども既に六丁・七丁・十丁に及ぶ、然る間・一丈・

二丈の大石は枯葉の如く浮び五丈・六丈の大木流れ塞がること間無し、昔利綱・高綱等が渡せし時には似る可くも無し武士之を見て皆隠してこそ見えたりしが、然りと雖も今日を過さば皆心を翻し墮ちぬ可し去る故に

馬筏を作りて之を渡す処、或は百騎・或は千騎・此くの如く皆我も我もと度ると雖も・或は一丁・或は二丁・或は三丁

渡る様なりと雖も彼の岸に付く者は一人も無し、然る間、緋綴・赤綴等の甲其の外弓箭・杖・白星の胄等の河中に流れ浮ぶ事は猶長月神無月の紅葉の吉野・立田の河に浮ぶが如くなり、爰に叡山・東寺・七寺・園城寺等の高僧等之を聞くことを得て真言の秘法・大法の験とこそ悦び給いける、内裏の紫宸殿には山の座主・東寺・御室・五壇・十五壇の法を弥盛んに行われければ法皇の御叡感極り無く玉の敵を地に付け大法師等の御足を御手にて摩給いしかば大臣・公卿等は庭の上へ走り落ち五体を地に付け高僧等を敬い奉る。

又宇治勢田にむかへたる公卿・殿上人は胄を震い挙げて大音声を放つて云く義時・所従の毛人等慥に承われ昔より今に至るまで王法に敵を作し奉る者は何者か安穩なるや、狗犬が師子を吼えて其の腹破れざること無く修羅が日月を射るに其の箭還つて其の眼に中らざること無し遠き例は且く之を置く、近くは我が朝に代始まつて人王八十余代の間・大山の皇子・大石の小丸を始と為て二十余人王法に敵を為し奉れども一人として素懷を遂げたる者なし皆頸を獄門に懸けられ骸を山野に曝す関東の武士等・或は源平・或は高家等先祖相伝の君を捨て奉り伊豆の国の民為る義時が下知に随う故にかかる災難は出来するなり、王法に背き奉り民の下知に随う者は師子王が野狐に乗せられて東西南北に馳走するが如し今生の恥之れを何如、急ぎ急ぎ胄を脱ぎ弓弦をはつして参参と招きける程に、何に有りけん申酉の時にも成りしかば関東の武士等・河を馳せ渡り勝ちかかりて責めし間京方の武者共一人も無く山林に逃げ隠るるの間、四つの王をば四つの島放ちまいらせ又高僧・御師・御房達は或は住房を追われ或は恥辱に値い給いて今に六十年の間いまだそのはぢをすすがとこそ見え候に、今亦彼の僧侶の御弟子達御祈・承はられて候げに候あひだいつも事なれば秋風に纔の水に敵船・賊船などの破損仕りて候を大將軍生取たりなど申し祈り成就の由を申し候げに候なり、又蒙古の大王の頸の参りて候かと問い給うべし、其の外はいかに申し候とも御返事あるべからず御存知のためにあらあら申し候なり。

乃至此の二門の人人にも相触れ給ふべし又必ずしちの四郎が事は承り候い畢んぬ、予既に六十に及び候へば天台大師の御恩報じ奉らんと仕り候あひだみぐるしげに候房をひきつくり候ときにさくれうにおろして候なり、銭四貫をもちて一閻浮提第一の法華堂造りたりと靈山浄土に御参り候はん時は申しあげさせ給うべし、恐恐。
十月二十二日
日蓮花押

一四八 治病大小権実違目 富木入道殿御返事 日蓮

995p

さもん殿の便宜の御かたびら給い了んぬ。

今度の人人のかたがたの御さいとも佐衛門尉殿の御日記のごとく給い了んぬと申させ給い候へ。

太田入道殿のかたがたのものときどの日記のごとく給い候了んぬ此の法門のかたづらは佐衛門尉殿にかきて候、こ
わせ給いて御らむ有るべく候。

御消息に云く凡そ疫病 弥興盛等と云云、夫れ人に二の病あり一には身の病 所謂地大百一・水大百一・火大百一・風大百一・已上四百四病なり、此の病は設い仏に有らざれども之を治す所謂 治水 流水 耆婆 扁鵲等が方薬此れを治するにゆいて愈えずといふ事なし、二には心の病所謂三毒乃至八万四千の病なり、此の病は二天・三仙・六師等も治し難し何に況や神農 黄帝等の方薬及ぶべしや、又心の病重重に浅深勝劣分れたり、六道の凡夫の三毒八万四千の心病は小仏・小乘 阿含経 俱舍・成実・律宗の論師・人師此れを治するにゆいて愈えぬべし、但し此

の小乗の者等・小乗を本として或は大乗を背き或は心には背かざれども大乘の国に肩を並べんとする其の国其の人に諸病起る、小乗等をもつて此れを治すれば諸病は増すとも治せらるる事なし、諸大乘經の行者をもつて此れを治すれば則ち平愈す、又華嚴經・深密經・般若經・大日經等の權大乘の人人各各劣謂勝見を起して我が宗は或は法華經と齊等・或は勝れたりなどと申す人多く出来し或は國主等此れを用いぬれば此れによつて三毒八万四千の病起る、返つて自の依經をもつて治すれどもいよいよ倍增す、設け法華經をもつて行つとも驗なし經は勝れたれども行者・僻見の者なる故なり。

法華經に又二經あり所謂迹門と本門となり本迹の相違は水火天地の違目なり、例せば爾前と法華經との違目よりも猶相違あり爾前と迹門とは相違ありといふとも相似の辺も有りぬべし、所説に八教あり爾前の円と迹門の円は相似せり爾前の仏と迹門の仏は劣心勝心報身法身異れども始成の辺は同じきぞかし、今本門と迹門とは教主已に久始のかわりめ百歳のをきなと一歳の幼子のごとし、弟子又水火なり土の先後いつばかりなし、而るを本迹を混合すれば水火を弁えざる者なり、而るを仏は分明に説き分け給いたれども仏の御入滅より今に二千年が間三國並びに一閻浮提の内に分明に分けたる人なし、但漢土の天台日本の伝教此の二人計りこそ粗分け給いて候へども本門と迹門との大事に円戒いまだ分明ならず、詮ずる處は天台と伝教とは内には鑒み給うといふとも一には時来らず二には機なし三には譲られ給はざる故なり、今末法に入りぬ地涌出現して弘通有るべき事なり、

今末法に入つて本門のひろまらせ給うべきには小乗・權大乘迹門の人人設け料なくとも彼れ彼れの法にては驗有るべからず、譬へば春の薬は秋の薬とならず設けいねれども春夏のごとくならず何に況や彼の小乗・權大乘・法華經の迹門の人人或は大小・權實に迷える上・上代の國主彼れ彼れの經經に付きて寺を立て田畠を寄進せる故に彼の法を下せば申し延べがたき上・依怙すでに失るかの故に大瞋恚を起して或は實經を謗し或は行者をあだむ國主も

又一には多人につき、或は上代の国主の崇重の法をあらため難き故、或は自身の愚癡の故、或は実教の行者を賤しむゆ等の故彼の訴人等の語ををさめて実教の行者をあだめば実教の守護神の梵釈日月四天等其の国を罰する故に先代未聞の三災・七難起るべし、所謂去年去ぬる正嘉等の疫病等なり。

疑つて云く汝が申すがごとくならば此の国法華經の行者をあだむ故に善神此の国を治罰する等ならば諸人の疫病なるべし何ぞ汝が弟子等又やみ死ぬるや、答えて云く汝が不審最も其の謂有るか但し一方を知りて一方を知らざるか、善と惡とは無始よりの左右の法なり權教並びに諸宗の心は善惡は等覺に限る若し爾ば等覺までは互に失有るべし、法華宗の心は一念三千・性惡性善・妙覺の位に猶備われり元品の法性は梵天帝釋等と顯われ元品の無明は第六天の魔王と顯われたり、善神は惡人をあだむ惡鬼は善人をあだむ、末法に入りぬれば自然に惡鬼は國中に充滿せり瓦石草木の並び滋がごとし善鬼は天下に少し聖賢まれなる故なり、此の疫病は念仏者・眞言師・禪宗・律僧等よりも日蓮が方にこそ多くやみ死ぬべきにて候か、いかにとして候やらん彼等よりもすくなくやみすくなく死に候は不思議にをば候、人のすくなき故か又御信心の強盛なるか。

問つて云く日本国に此の疫病先代に有りや、答えて云く日本国は神武天皇よりは十代にあたらせ給いし崇神天皇の御代に疫病起りて日本国やみ死ぬる事半にすぐ、王始めて天照太神等の神を国に崇しかば疫病やみぬ故に崇神天皇と申す、此れは仏法のいまだわたらざりし時の事なり、人王第三十代並びに一二の三代の国主並びに臣下等痲瘡と疫病に御崩去等なりき、其の時は神にいのれども叶わざりき、去ぬる人王三十代・欽明天皇の御宇に百濟国より經論僧等をわたすのみならず金銅の教主釈尊を渡し奉る、蘇我の宿禰等崇むべしと申す物部の大連等の諸臣並びに万民等は一同に此の仏は崇むべからず若し崇むるならば必ず我が国の神・禰りをなして国やぶれなんと申す、王は両方弁まえがたくをせしに三災・七難先代に超えて起り万民皆疫死す、大連等便りを得て

奏問せしかば僧尼等をはじに及ぼすのみならず金銅の釈迦仏をすみををこして焼き奉る寺又同じ、爾の時に大連やみ死ぬ王も隠れさせ給ひ仏をあがめし蘇我の宿禰もやみぬ、大連が子守屋の大臣云く此の仏をあがむる故に三代の国主すでにやみかくれさせ給ひ我が父もやみ死ぬ、まさに知るべし仏をあがむる聖徳太子馬子等はをやのかたき公の御かたきなりと申せしかば六部の王子宅部の王子等並びに諸臣已下数千人一同によりきて仏と堂等をやきはらうのみならず、合戦すでに起りぬ結句は守屋討たれ了んぬ、仏法渡りて三十五年が間年年に三災
七難疫病起りしが守屋馬子に討たるのみならず神もすでに仏にまけしかば災難忽に止み了んぬ、其の後の代代の三災七難等は大体は仏法の内の乱れより起るなり、而れども或は一人二人或は一國二國或は一類二類或は二處二處の事なれば神のたたりも有り謗法の故もあり民のなげきよりも起る。

而るに此の三十余年の三災七難等是一向に他事を雑えず日本一同に日蓮をあだみて國郡郷村人ごとに上一人より下万民にいたるまで前代未聞の大瞋恚を起せり、見思未斷の凡夫の元品の無明を起す事此れ始めなり、神と仏と法華經にいのり奉らばいよいよ増長すべし、但し法華經の本門をば法華經の行者につけて除き

奉る結句は勝負を決せざらん外は此の災難止み難かるべし、止觀の十境十乘の觀法は天台大師説き給いて後行ずる人無し、妙樂・伝教の御時少し行ずといへども敵人ゆわきゆへにさてすぎぬ、止觀に三障四魔と申すは權經

を行ずる行人の障りにはあらず今日蓮が時具さに起れり、又天台・伝教等の時の三障四魔よりもいまひとしをまさりたり、一念三千の觀法に二つあり一には理二には事なり天台・伝教等の御時には理なり今は事なり觀念すでに勝る故に大難又色まさる、彼は迹門の一念三千此れは本門の一念三千なり天地はるかに殊なりことなりと御臨終の御時は御心
有るべく候、恐恐謹言。

六月二十六日

日蓮花押

一四九 金吾殿御返事

文永七年十一月 四十九歳御作 与大田金吾

999p

止観しかんの五正月一日よりよみ候ういて現世安穩げんせあんのん、後生善処ごじょうぜんしよと祈請きしやう仕り候、便宜びんぎに給たまわり候本末ほんまつは失うせて候いしかどもこれに
すりさせて候多く本入るもつべきに申し候。

大師講だいしに鵜目五連給候がもく たびそつら あわい了あぬ、此の大師講だいし・三四年に始めて候が今年ことしは第一だいいちにて候いつるに候。

抑そもそも此の法門ほつもんの事 勘文かんもんの有無うむに依よつて弘ひろまるべきか弘ひろまらざるか 去年こぞ方方に申もつして候いしかども いなせの返事候はず
候、今年十一月の比方方かたがた申もつして候は少少返事あるかたも候、をほかた人の心もやわらぎてさもやとをぼしたりげに
候、又上のけさんにも入りて候やらむ、これほどの儼事ひがごと申もつして候は流死りうしの二罪ふたつみの内は一定

と存ぞんぜしがいままでなにと申もつす事も候はぬは不思議ふしぎとをば候、いたれる道理どうりにて候やらむ、又自界叛逆難じかいほんぎやくなん きやうもんの经文きんもんも値ちべ
きにて候やらむ、山門さんもんなんども いにしへにも百千万億倍せんまん ちくまん ちくまんすぎて動揺どうごとつけ給たまわり候、それならず子細しさいども候やらん震旦しんたん・
高麗こますでに禅門ぜんもん 念仏ねんぶつになりて守護しゆごの善神ぜんじんの去るかの間彼の蒙古もうこに聳もつい候いぬ、我が朝も又

此の邪法じゃほう弘まりて天台法華宗てんだいほつげしやうを忽諸ゆるがせのゆへに山門安穩さんもんあんのんならず師檀違叛したん たいはんの国と成り候いぬれば十が八・九はいかんがとみへ
候、人身じんしんすでにつけぬ邪師じゃし又まぬがれぬ、法華經ほけきやうのゆへに流罪るさいに及びぬ、今死罪しさいに行われぬこそ本意ほんいならず候へあわれさ
る事の出来しゆらいし候かしとこそはげみ候いて方方に強言かたがた けうげんをかきて拏あげをき候なり、すでに年五十に及びぬ余命あまのいのちいくばくなら
ず、いたづらに曠野くわうやにすてん身を同じくは一乘法華いちじやうほつけのかたにながて雪山童子せつせんどうじ・

やくおうぼさつ あと 薬王菩薩の跡をおひ仙予・有徳の名を後代に留めて法華 涅槃經に説き入れられまいらせんと願うところなり、南無
みょうぼつれんげきょう 妙法蓮華經。

十一月二十八日 日蓮花押
にちれんかおう

御返事

一五〇 転重輕受法門 文永八年十月 五十歳御作 与大田左衛門曾谷入道金原法橋 1000p

しゅうりはんぐく 修利槃特と申すは兄弟二人なり、一人もありしかばすりはんどくと申すなり、各各三人は又かくのごとし一人も来ら
せ給は三人と存じ候なり。

ねはんぎょう 涅槃經に転重輕受と申す法門あり、先業の重き今生につきずして未来に地獄の苦を受くべきが今生にかかる重苦に
あ 値い候は地獄の苦みぱつとき今死に候は人天・三乗・一乗の益をうる事の候、不輕菩薩の惡口罵詈せられ杖木瓦礫を
かほるもゆへなきにはあらず過去の誹謗正法のゆへかとみ今其罪畢已と説れて候は不輕菩薩の難に

あ 値うゆへに過去の罪の滅するかとみはんべり是、又付法蔵の二十五人は仏をのぞきたてまつりては皆仏のかねて記しをき
たま 給える権者なり、其の中に第十四の提婆菩薩は外道にころされ第二十五師子尊者は檀弥栗王に頸を刎られ其の外仏陀
密多・竜樹菩薩なんとも多くの難にあへり、又難なくして王法に御帰依いみじくて法をひろめ

たる人も候、これは世に悪国善国有り法に損受折伏あるゆへかとみはんべり、正像猶かくのごとし中国又しかなり、これ
は辺土なり末法の始なり、かかる事あるべしとは先にもひさだめぬ期をこそまち候いつれ是、この上の法門はいにしえ申し
をき候いきめづらしからず円教の六即の位に觀行即と申すは所行如所言所言如所行と

云云、理即名字の人は円人なれども言のみありて真なる事かたし、例せば外典の三墳・五典には読む人かずをしらず、かれがごとくに世ををさめふれまう事千万が一つもかたしされば世のをさまる事も又かたし、法華経は紙付に音をあげてよめども彼の経文のごとくふれまう事かたく候か、譬喩品に云く「経を読誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん」法師品に云く「如来現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」勸持品に云く「刀杖を加え乃至数数擯出せられん」安樂行品に云く「一切世間怨多くして信じ難し」と、此等は経文には候へども何世にかかるべしともしられず、過去の不輕菩薩、覺德比丘などこそ身にあたりてよみまいらせて

候いけるとみはんべれ、現在には正像二千年はさてをきぬ、末法に入つては此の日本国には當時は日蓮一人み候か、昔の悪王の御時多くの聖僧の難に値い候には又所従、耆屬等、弟子檀那等いくぞばかなげき候いけんと今をもちてをしはかり候、今日蓮・法華經一部よみて候一句一偈に猶受記をかほれり何に況や一部をやと、いよいよたのもし、但おほけなく国土までとこそをもひて候へども我と用いられぬ世なれば力及ばず、しげきゆへにとどめ候い」んぬ。

文永八年辛未十月五日

日蓮花押

大田左衛門尉殿

蘇谷入道殿

金原法橋御房

新春の御慶賀自他幸甚幸甚。

抑俗諦・真諦の中には勝負を以て詮と為し世間出世とも甲乙を以て先と為すか、而るに諸経・諸宗の勝劣は三国の聖人共に之を存し両朝の群賢同じく之を知るか、法華經と大日經と天台宗と真言宗との勝劣は月支日本未だ之を弁ぜず西天東土にも明らめざる物か、所詮天台・伝教の如き聖人・公場に於て是非を決せず明帝桓武の如き国主之を聞かざる故か、所謂善無畏三蔵等は法華經と大日經とは理同事勝等と慈覚・智証等も此の義を存するか、弘法大師は法華經を華嚴經より下す等此等の二義共に經文に非ず同じく自義を存するか將た又慈覚・智証等表を作つて之を奏す申すに随つて勅宣有り、聞くが如くんば真言・止觀兩教の宗をば同じく醍醐と号し俱に深秘と称す乃至譬えば猶人の両目・鳥の雙翼の如き者なり等云云、又重誠の勅宣有り聞くが如くんば山上の僧等専ら先師の義に違して偏執の心を成ず殆んど以つて余風を扇揚し旧業を興隆することを顧みず等云云、余生れて末の初に居し學諸賢の終りを稟く慈覚・智証の正義の上に勅宣方方之れ有り疑い有るべからず一言をも出さず然りと雖も円仁・円珍の両大師・先師・伝教大師の正義を劫略して勅宣を申し下すの疑い之れ有る上、仏誠遁れ難し、随つて又亡国の因縁・謗法の源初之れに始まるか、故に世の謗を憚からず用不用を知らず身命を捨てて之を申すなり。

疑つて云く善無畏・金剛智・不空の三三蔵・弘法・慈覚・智証の三大師・二經に相對して勝劣を判ずるの時、或は

理同事勝 或は華嚴經より下る等云云、随つて又聖賢の鳳文之れ有り、諸徳之を用いて年久し此の外に汝一義を存して諸人を迷惑し剰さえ天下の耳目を驚かす豈増上慢の者に非ずや如何、答えて曰く汝等が不審尤最もなり如意論師の世親菩薩を炳誠せる言は是なり、彼の状に云く、党援の衆と大義を競つこと無く群迷の中に正論を弁ずること無かれと言ひ畢つて死す云云、御不審之れに当るか、然りと雖も仏世尊は法華經を演説するに一經の内に二度の流通之れ有り重ねて一經を説いて法華經を流通す、涅槃經に云く「若し善比丘あつて法を壊る者を見て置いて呵責し驅遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり」等云云、善無畏・金剛智の両三蔵・慈覺・智証の二大師・大日

の権經を以つて法華の実經を破壊せり。

而るに日蓮世を恐て之を言わずんば仏敵と為らんか、随つて章安大師末代の學者を諫曉して云く「仏法を懷乱するは仏法の中の怨なり慈無くして詐わり親しむは是れ彼の人の怨なり能く糾治する者は即ち是れ彼が親なり」等云云、余は此の釈を見て肝に染むるが故に身命を捨てて之を糾明するなり、提婆菩薩は付法藏の第十四師子尊者は二十五に當る或は命を失ひ或は頭を刎らる等是なり、疑つて云く經經の自讃は諸經常の習いなり、

所謂金光明經に云く「諸經之王・密嚴經の一切經中の勝・蘇悉地經に云く「三部の中に於て此の經を王と為す」法華經に云く「是れ諸經之王」等云云、随つて四依の菩薩・両国の三蔵も是くの如し如何、答えて曰く大国・小国・大王・小王・大家・小家・尊主・高貴・各各分齊有り然りと雖も国国の万民皆大王と号し同じく天子と称す詮を

以つて之を論ぜば梵王を大王と為し法華經を以て天子と称するなり、求めて云く其の証如何、答えて曰く金光明經の是諸經之王の文は梵釈の諸經に相對し密嚴經の一切經中勝の文は次上に十地經・華嚴經・勝鬘經等を挙げて彼の經に相對して一切經の中に勝ると云云、蘇悉地經の文は現文之れを見るに三部の中に於て王と為す等云云、蘇悉地經は大日經・金剛頂經に相對して王と云云、而るに善無畏等或は理同事勝或は華嚴經より下ると

等云云、此れ等の僻文は螢火を日月に同じ大海を江河に入るか。

疑つて云く経経の勝劣之れを論じて何か為ん、答えて曰く法華經の第七に云く「能く是の經典を受持する者有れば亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦為第一なり」等云云、此の經の藥王品に十喩を挙げて已今当の一切經に超過すと云云、第八の譬兼ねて上の文に有り所詮仏の意の如くならば經の勝劣を詮するのみに非ず法華經の行者は一切の諸人に勝れたるの由之れを説く、大日經等の行者は諸山・衆星・江河・諸民なり、法華經の行者は須弥

山・日月・大海等なり、而るに今の世は法華經を輕蔑すること土の如し民の如し真言の僻人等を尊崇して國師と為ること金の如し王の如し之に依つて増上慢の者國中に充滿す青天瞋を為し黃地天を致す涓聚りて塹を破るが如く民の愁い積りて國を亡す等是なり、問つて曰く内外の諸釈の中に是くの如きの例之れ有りや、答え

て曰く史臣吳兢が太宗に上つる表に云く「竊かに惟れば太宗文武皇帝の政化曠古より之れ求むるに未だ是くの如くの盛なる者有らず唐堯・虞舜・夏禹・殷湯・周の文武漢の文景と雖も皆未だ逮ばざる処なり」云云、今此の表を見れば太宗を慢ぜる王と云う可きか政道の至妙先聖に超えて讚ずる所なり、章安大師天台を讚めて云く「天竺の大論尚其の類に非ず真丹の人師何ぞ劣く語るに及ばん此れ誇耀に非ず法相の然らしむるのみ」等云云、從義

法師重ねて讚めて云く「竜樹・天親未だ天台には若かず」伝教大師自讚して云く「天台法華宗の諸宗に勝ることは所依の經に拠るが故に自讚毀他ならず庶くば有智の君子經を尋ねて宗を定めよ」云云、又云く「能く法華を持つ者は亦衆生の中の第一なり已に仏説に拠る豈自讚ならんや」云云、今愚見を以つて之を勘うるに善無畏

弘法・慈覚・智証等は皆仏意に違つのみに非ず或は法の盗人、或は伝教大師に逆える僻人なり、故に或は閻魔王の責を蒙り或は墓墳無く或は事を入定に寄せ或は度度・大火・大兵に値えり權者は辱を死骸に与えざる処の本文に違するか、疑つて云く六宗の如く真言の二宗も天台に落たる状之れ有りや、答つ記の十の末に之を載せたり、

随したがつて伝でん教ぎょう大師だいし依い憑ひょう集じつを造これつて之これを集まなむ眼がん有こらん者は開これいて之これを見みよ、冀ねが哉わ末ま代だいの学がく者しや妙み楽らく・伝でん教ぎょうの聖せい言ごんに随したがつて
善ぜん無む畏い・慈じ覺かくの凡も言ちを用もちゆること勿なれ、予なが門もん家か等な深しんく此この由よしを存ぞんぜよ、今こん生じやうに人じんを恐おそれて後ご生じやうに惡あく果くわを招まねくこと勿なれ、
恐きよう恐きよう謹きん言げん。

正月廿四日

日蓮花押
にちれんかおう

大田金吾入道うでにぎむ

一五二 太田殿女房御返事おくだにむすめばうごへんじ

建治元年けんちげんねん 五十四歳御作於身延ごさくおん

八や月ぎ分ぶんの八た木び一そ石う給た候ひいらんぬ、即そ身く成しん仏ぶつと申もうす法ほう門もんは諸しよ大だい乘じやうもん・經きやうもん並ふんびに大だい日に經きやうもん等とうの經きやうもん文ぶんに分ぶん明めいに候しぞ、爾しかればとて
彼かの經き經きやうもんの人人ひとひとの即そ身く成しん仏ぶつと申もうすは二その増ぞう上じやう慢まんに墮おちて必むず無む間げん地じ獄じくへ入いり候しなり、記きの九くに云いく、然しかして二じの上じやう慢まん
深しん浅せん無むきにあらず如おと謂いふは乃すち大だい無む慙ぜんの人ひとと成なる云いふ、諸しよ大だい乘じやうもん・經きやうもんの煩はん惱のう即そ菩ぼ提だい・生しやう死じ即そ涅ね槃はんの即そ身く成しん仏ぶつの法ほう門もんは
いみじくをそたかきやうなれども此これはあえて即そ身く成しん仏ぶつの法ほう門もんにはあらず、其その心しんは二に乘じやうと申もうす

者ろくおんは鹿ろく苑おんにけんじして見けん思しを断だんじていまだ塵じん沙しや・無む明みやうをば断だんぜざる者そが我われは已すでに煩はん惱のうを尽じんしたり無む余よに入いりて灰けしん身めつち滅めつ智ちの者しやと
なれり、灰けしん身めつちなれば即そ身くにそくしんあらず滅めつ智ちなれば成じやう仏ぶつの義ぎなし、されば凡ぼん夫ぶは煩はん惱のう業ごうもあり苦く果くわの依い身しんも失うつ事じなければ
煩はん惱のう業ごうを種ほとして報ほう身しん・心しん身みともなりなん、苦く果くわあれば生し死じ即そ涅ね槃はんとて法ほう身しん如に来らいともなりなんと二に乘じやう
をこそ弾だん呵かせさせ給たまいしか、さればとて煩はん惱のう業ごう・苦くが三さん身しんの種しゆとはなり候しはず、今いま法ほ華け經きやうにして有あ余よ・無む余よの二に乘じやうが無なき
煩はん惱のう業ごう・苦くをとり出して即そ身く成しん仏ぶつと説たまき給たまつ時とき二に乘じやうの即そ身く成しん仏ぶつするのみならず凡ぼん夫ぶも即そ身く成しん仏ぶつするなり

此の法門をだにもくはしく案じほどかせ給わば華嚴・真言等の人人の即身成仏と申し候は依經に文は候へども其の義はあえてなき事なり僻事の起り此れなり。

弘法・慈覚・智証等は此の法門に迷惑せる人なりとみ候、何に況や其の已下の古徳・先徳等は言うに足らず、但天台の第四十六の座主東陽の忠尋と申す人こそ此の法門はすこしあやぶまれて候事は候へ然れども天台の座主慈覚の末をつくる人なればいつわりをろかにてさてはてめるか、其の上・日本国に生を受ける人はいかでか心にはをもつとも言に出し候べき、しかれども釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌・竜樹菩薩・天台・妙樂・伝教大師は即身成仏は法華經に限るとをばしめされて候ぞ、我が弟子等は此の事ををもひ出にせさせ給え。

妙法蓮華經の五字の中に諸論師・諸人師の釈まちまちに候へども皆諸經の見を出です、但竜樹菩薩の大論と申す論に譬えば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如しと申す釈こそ此の一字を心合せ給いたりけるかと見へ候へ毒と申すは苦集の二諦・生死の因果は毒の中の毒にて候ぞかし、此の毒を生死即涅槃・煩惱即菩提となし候を妙の極とは申しけるなり、良薬と申すは毒の変じて薬となりけるを良薬とは申し候いけり、此の竜樹菩薩は大論と申す文の一百の卷に華嚴・般若等は妙にあらず法華經こそ妙にて候へと申す釈なり、此の大論は竜樹菩薩の論羅什三蔵と申す人の漢土へわたして候なり、天台大師は此の法門を御らむあつて南北をばせめさせ給いて候ぞ、而るを漢土唐の中に日本弘仁已後の人人の出来し候いける事は唐の第九代・宗皇帝の御宇・不空三蔵と申す

人の天竺より渡して候論あり菩提心論と申す、此の論は竜樹の論となづけて候、此の論に云く「唯真言法の中にのみ即身成仏する故に是れ三摩地の法を説く諸教の中に於て闕て書せず」と申す文あり、此の釈にはかされて

弘法慈覚智証等の法門はさんざんの事にては候なり、但し大論は竜樹の論たる事は自他あらそう事なし、菩提心論は竜樹の論、不空の論と申すあらそい有り、此れはいかにも候きてをき候ぬ、但不審なる事は、大論の心ならば即身成仏は法華經に限るべし文と申し道理きわまれり、菩提心論が竜樹の論とは申すとも大論にそむいて眞言の即身成仏を立つる上唯の一字は強と見令候、何の經文に依りて唯の一字をば置いて法華經をば破し候いけるぞ証文尋ぬべし、竜樹菩薩の十住毘婆娑論に云く、「經に依らざる法門をば黒論」と云云自語相違あるべからず、大論の一百に云く「而も法華等の阿羅漢の授決作仏乃至譬えば大藥師の能く毒を以て藥と為すが如し」等云云、此の釈こそ即身成仏の道理はかかれて候へ、但菩提心論と大論とは同じ竜樹大聖の論にて候が水火の異をばいかんせんと見候に此れは竜樹の異説にはあらず訳者の所為なり、羅什は舌やけず不空は舌やけぬ、妄語はやけ実語はやけぬ事顯然なり、月支より漢土へ經論わたす人・二百七十六人なり其の中に羅什一人計りこそ教主釈尊の經文に私の言入れぬ人にては候へ、一百七十五人の中、羅什より先後・二百六十四人は羅什の智をもつて知り候べし、羅什来らせ給いて前後・二百六十四人が、も顯れ新訳の十一人が、も顯れ又こざかしくなりて候も羅什の故なり、此れ私の義にはあらず感通伝に云く「絶後光前」と云云、前を光らすと申すは後漢より後秦までの訳者、後を絶すと申すは羅什已後、善無畏・金剛智・不空等も羅什の智をつけてすこしこざかしく候なり、感通伝に云く「已下の諸人並びに皆俟つ事」されば此の菩提心論の唯の文字は設い竜樹の論なりとも不空の私の言なり、何に況や次下に諸教の中に於て闕いて書せず」とかかれて候、存外のおやまりなり。

即身成仏の手本たる法華經をば指をいてあとかたもなき眞言に即身成仏を立て剩え唯の一字ををかるる条、天下第一の僻見なり此れ偏に修羅根性の法門なり、天台智者大師の文句の九に寿量品の心を釈して云く「仏三世に於て等しく三身有り諸教の中に於て之を秘して伝えず」とかかれて候、此れこそ即身成仏の明文にては候へ

不空三蔵此の釈を消さんが為に事を竜樹に依せて唯真言の法の中にのみ即身成仏するが故に是の三摩地の法を説く諸教の中に於て闕いて書せずとかかれて候なり、されば此の論の次下に即身成仏をかれて候が、あて即身成仏にはあらず生身得忍に似て候、此の人は即身成仏はめづらしき法門とはきかれて候へとも即身成仏の義はあへつかがわぬ人なり、いかにも候は二乗成仏久遠実成を説き給う経にあるべき事なり、天台大師の「於諸教中秘之不伝」の釈は千且千且恐。且恐。

外典三千余巻は政当の相違せるに依つて代は濁ると明す、内典五千・七千余巻は仏法の僻見に依つて代濁るべしとあかされて候、今の代は外典にも相違し内典にも違背せるかのゆへにこの大科一國に起りて已に亡國とならむとし候が、不便。不便。

七月二日

日蓮花押

太田殿女房御返事

貴札之を開いて拝見す、御痛みの事一たびは歎き二たびは悦びぬ、維摩詰經に云く「爾の時に長者維摩詰自ら念ずらく寝て牀に疾む云云、爾の時に仏文殊師利に告げたまわく、汝維摩詰に行詣して疾を問え」云云、大涅槃經に云く「爾の時に如来乃至身に疾有るを現じ、右脇にして臥したもう彼の病人の如くす」云云、法華經に云く「少病少惱」云云、止觀の第八に云く「若し毘耶に偃臥し疾に託いて教を興す、乃至如来滅に寄せて常を談じ病に因つて力を説く」云云、又云く「病の起る因縁を明すに六有り、一には四大順ならざる故に病む・二には飲食節ならざる故に病む・三には坐禪調わざる故に病む・四には鬼便りを得る・五には魔の所為・六には業の起るが故に病む」云云、大涅槃經に云く「世に三人の其の病治し難き有り・一には大乘を誇ず・二には五逆罪・三には一闡提是くの如き三病は世の中の極重なり」云云、又云く「今世に惡業成就し乃至必ず地獄なるべし乃至三宝を供養するが故に地獄に墮せずして現世に報を受く所謂頭と目と背との痛み等云云、止觀に云く「若し重罪有つて乃至人中に軽く償つと此れは是れ業が謝せんと欲する故に病むなり」云云、竜樹菩薩の大論に云く「問うて云く若し爾れば華嚴經・乃至般若波羅蜜は秘密の法に非ず而も法華は秘密なり等、乃至譬えば大藥師の能く毒を変じて藥と為すが如し」云云、天台此の論を承けて云く「譬えば良医の能く毒を変じて藥と為すが如く乃至今經の得記は即ち是れ毒を変じて藥と為すなり」云云、故に論に云く「余經は秘密に非ず法華を秘密と為すなり」云云、止觀に云く「法華能く治す復稱して妙と為す」云云、妙樂云く「治し難きを能く治す所以に妙と稱す」云云、大經に云く「爾の時に王舍大城の阿闍世王其の性弊惡にして乃至父を害し已つて心に悔熱を生ず乃至心悔熱するが故に

偏体瘡を生ず其の瘡臭穢にして附近すべからず、爾の時に其の母韋提希と字く種種の藥を以て而も為に之を傳く其の瘡遂に増して降損有ること無し、王即ち母に白す是くの如きの瘡は心よりして生ず四大より起るに非ず若し衆生能く治する者有りと云わば是の処有ること無けん云云、爾の時に世尊・大悲導師・阿闍世王のために月愛三昧に入りたもつ三昧に入り已つて大光明を放つ其の光り清涼にして往いて王の身を照すに身の瘡即ち愈えぬ云云、平等大慧・妙法蓮華經の第七に云く「此の經は則ち為れ閻浮提の人の病の良藥なり若し人病有らんは是の經を聞くことを得ば病即ち消滅して不老不死ならん云云。

已上上の諸文を引いて惟に御病を勘づるに六病を出でず其の中の五病は且らく之を置く第六の業病最も治し難し、將た又業病に輕き有り重き有りて多少定まらず就中法華誹謗の業病最第一なり、神農・黃帝・華佗・扁鵲も手を拱き持水・流水・耆婆・維摩も口を閉ず、但し釈尊一仏の妙經の良藥に限つて之を治す、法華經に云く上の如し、大涅槃經に法華經を指して云く「若し是の正法を毀謗するも能く自ら改悔し還りて正法に歸すること有れば乃至此の正法を除いて更に救護すること無し是の故に正法に還歸すべし云云、荊溪大師の云く「大經に自ら法華を指して極と為す云云、又云く「人の地に倒れて還つて地に從りて起つが如し故に正の謗を以て邪の墮を接す云云、世親菩薩は本小乗の論師なり五竺の大乗を止めんが為に五百部の小乗論を造る後に無著菩薩に値ひ奉りて忽ち邪見を翻えし一時此の罪を滅せんが為に著に向つて舌を切らんと欲す、著止めて云く汝其の舌を以て大乘を讚歎せよと、親忽に五百部の大乘論を造つて小乗を破失す、又一の願を制立せり我一生の間小乗を舌の上に置かじと、然して後罪滅して弥勒の天に生ず、馬鳴菩薩は東印度の人、付法藏の第十三に列れり本外道の長たりし時勒比丘と内外の邪正を論ずるに其の心言下に解けて重科を遮せんが為に自ら頭を刎ねんと探す所謂我に敵して墮獄せしむ、勒比丘諫め止めて云く汝頭を切ること勿れ其の頭と口とを以て大乘を讚歎せよと、鳴急に

起信論を造つて外小を破失せり月氏の大乗の初なり、嘉祥寺の吉藏大師は漢土第一の名匠・三論宗の元祖なり呉会に独歩し慢幢最も高し天台大師に対して已今当の文を諍い立処に邪執を翻破し謗人・謗法の重罪を滅せんが為に百余人の高徳を相語らい智者大師を屈請して身を肉橋と為し頭に両足を承く、七年の間・薪を採り水を汲み講を廢し衆を散じ慢幢を倒さんが為法華經を誦せず、大師の滅後隨帝に往詣し 足を 搥し涙を流して別れを告げ古鏡を觀見して自影を侮辱す業病を滅せんと欲して上の如く懺悔す、夫れ以みれば一乗の妙經は三聖の金言・已今当の明珠諸經の項に居す、經に云く「諸經の中に於て最も其の上に在り」又云く「法華最第一なり」伝教大師の云く「仏立宗ニ云云。

予随分・大金・地等の詣の真言の經を勸えたるに敢えて此の文の会通の明文無し但畏智空・法・覺・証等の曲会に見えたり是に知んぬ釈尊・大日の本意は限つて法華の最上に在るなり、而るに本朝真言の元祖たる法・覺・証等の三大師入唐の時・畏・智・空等の三藏の誑惑を果・全等に相承して歸朝し了んぬ、法華・真言弘通の時三説超過の一乗の明月を隠して真言両界の螢火を顯し刺さえ法華經を罵詈して曰く戲論なり無明の辺域なり、自害の謬に曰く大日經は戲論なり無明の辺域なり本師既に曲れり末葉豈直ならんや 源・濁れば流清からず等是れ之を謂うか、之に依つて日本久しく闇夜と為り扶桑終に他国の霜に枯れんと欲す。

抑貴辺は嫡嫡の末流の一分に非ずと雖も將た又檀那の所従なり身は邪家に処して年久しく心は邪師に染みて月重なる設い大山は頽れ設い大海は乾くとも此の罪は消え難きか、然りと雖も宿縁の催す所又今生に慈悲の薰ずる所存の外に貧道に値遇して改悔を發起する故に未來の苦を償つても現在に輕瘡出現せるか、彼の闇王の身瘡は五逆誹法の二罪の招く所なり、仏・月・愛・三妹に入つて其の身を照したまえば惡瘡忽に消え三七日の短寿を延べて四十年の宝算を保ち發ては又千人の羅漢を屈請して一代の金言を書き顯し、正像未に流布せり、此の禪門の惡瘡

は但謗法の一科なり、所持の妙法は月愛に超過す、宝輕瘡を愈して長寿を招かざらんや、此の語徴無くんば声を發して一切世間眼は大妄語の人・一乗妙経は綺語の典なり、名を惜しみ給わば世尊驗を顯し、誓を恐れ給わば諸の賢聖来り護り給えと叫喚したまえと爾か云う書は言を尽さず言は心を尽さず事事見參の時を期せん、恐恐。

十一月三日

日蓮花押

太田入道殿御返事

一五四 乗明聖人御返事

建治三年四月五十六歳御作

与大田乗明

1012p

相州の鎌倉より青鳧二結甲州身延の嶺に送り遣わされ候い了んぬ、昔金珠女は金錢一文を木像の薄と為し九十一劫金色の身と為りき其の夫の金師は今の迦葉・未来の光明如来是なり、今の乗明法師、妙日並びに妻女は銅錢二千枚を法華經に供養す彼は仏なり此れは經なり經は師なり仏は弟子なり、涅槃經に云く諸仏の師とする所は所謂法なり乃至是の故に諸仏恭敬供養すこと、法華經の第七に云く若し復人有つて七宝を以て三千大千世界に満てて仏及び大菩薩、辟支仏、阿羅漢を供養せし、是の人の得る所の功德は此の法華經の乃至一四句偈を受持する其の福の最も多きに如かず、夫れ劣る仏を供養する尚九十一劫に金色の身と為りぬ勝れたる經を供養する施主・一生に仏位に入らざらんや、但真言・禅宗・念佛者等の謗法の供養を除き去るべし、譬えば修羅を崇重しながら帝釈を帰敬するが如きのみ、恐恐謹言。

卯月十二日

日蓮花押

乗明聖人御返事

柿のあをうらの小袖わた十両に及んで候か、此の大地の下は二の地獄あり一には熱地獄すみををこし野に火をつけせ
うまつの火鉄のゆのごとし、罪人のやくる事は大火に紙をなげ大火になくづをなぐるがごとし、この地獄はやきとり
と火をかけてかたきをせめ物をねたみて胸をこがす女人の墮つる地獄なり、二には寒地獄・

此の地獄に八あり、涅槃經に云く「八種の寒冰地獄あり所謂阿波波地獄阿 地獄阿羅羅地獄阿婆婆地獄優鉢羅
地獄波頭摩地獄拘物頭地獄芬陀利地獄ニ云、此の八大かん地獄は或はかんにせめられたるこえ或は身のいる等に
て候、此の国のすわの御いけ 或は越中のたて山のかへ加賀の白山のれいのとりのはねをとぢられ、

やもめをつなのすそのひゆる、ほうろの雪にせめられたるをもてしろしめすべし、かんにせめられてをとがいのわなめく等
を阿波波阿 阿羅羅等と申すかんにせめられて身のくれないにたるを紅蓮・大紅蓮等と申す

なり、いかなる人の此の地獄をつるぞと申せば此の世にて人の衣服をぬすみとり父母 師匠等のさむげなるをみまいらせ
て我はあつくあたたかにして昼夜をすごす人人の墮つる地獄なり。

六道の中に天道と申すは其の所に生ずるより衣服ととのをりて生るところなり、人道の中にも商那和修鮮白比丘尼
等は悲母の胎内より衣服ととのをりて生れ給へり、是れはたうとき人人に衣服をあたたるのみならず父母・主君・三宝に
きよくあつき衣をまいらせたる人なり、商那和修と申せし人は裸形なりし辟支仏に衣をまいら

せて世世・生生に衣服身に随ふ、曇弥と申せし女人は仏にきんばら衣をまいらせて一切衆生喜見仏となり給う、今
法華經に衣をまいらせ給う女人あり後生にはちかん地獄の苦をまぬかれさせ給うのみならず、今生には大難

をばらひ其の功德のあまりを男女のきんだち きぬにきぬをかさねいろにいろをかさね給うべし、六賢六賢。

建治三年丁丑十一月十八日 日蓮在御判

一五六 大田左衛門尉御返事

弘安元年四月 五十七歳御作

1014p

当月十八日の御状、同じき二十二日の午の剋計りに到来、聽拜見仕り候ひ畢ぬ、御状の如く御布施鳥目十貫文・太刀・五明一本・焼香二十両給ひ候、抑専ら御状に云く某今年は五十七に罷り成り候は大厄の年かと覚え候、なにやらんして正月の下旬の比より卯月の此の比に至り候まで身心に苦勞多く出来候、本より人身を受くる者は必ず身心に諸病相續して五体に苦勞あるべしと申しながら更に云云。

此の事最第一の歎きの事なり、十二因縁と申す法門あり、意は我等が身は諸苦を以て体と為す、されば先世に業を造る故に諸苦を受け、先世の集煩惱が諸苦を招き集め候、過去の二因・現在の五果・現在の三因・未来の両果とて三世次第して一切の苦果を感じるなり、在世の二乗が此等の諸苦を失はんとて、空理に沈み灰身滅智して、菩薩の勤行精進の志を忘れ、空理を証得せん事を真極と思ふなり、仏方等の時此等の心地を彈呵し給ひしなり、然るに生を此の三界に受けたる者苦を離るる者あらんや、羅漢の応供すら猶此くの如し、況や底下の凡夫をや、さてこそいそぎ生死を離るべしと勧め申し候へ。

此等体の法門はさて置きぬ、御辺は今年は大厄と云云、昔伏羲の御宇に、黄河と申す河より亀と申す魚八卦と申す文を甲に負て浮出たり、時の人此の文を取り挙げて見れば、人の生年より老年の終りまで厄の様を明したり、厄年の人の

あやう 危き事は、少水に住む魚を鴨鵲とひからずなどが伺うかがひ、灯の辺に住める夏の虫の火中に入らんとするが如くあやうし、鬼神きじんややもすれば此の人の神たましいを伺うかがひなやまさんとす、神内と申す時は諸の神たましい・身に在り万事心に叶ふ、神外と申す時は諸の神たましい・識の家を出でて万事を見聞するなり、当年は御辺は神外と申して諸神他国たこく遊行すれば愼つしんで除災得樂を祈り給ふべし、又木性の人にて渡わたらせ給ふは、今年は大厄なりとも春夏の程は何事か渡わたらせ給ふべき、至門性経に云く「木は金に遇て抑揚し、火は水を得て光滅し、土は木に値て時に瘦せ、金は火に入て消え失せ、水は土に遇て行かず」等云云。

指して引き申すべき経文にはあらざれども、予が法門は四悉檀を心に懸けて申すならば、強ちに成仏の理に違はざれば、且らく世間普通の義を用ゆべきか、然るに法華経と申す御経は身心の諸病の良薬なり、されば経に云く「此の経は則ち為閻浮提の人の病の良薬なり、若し人病有らんは是の経を聞くことを得ば、病即消滅して不老不死ならん」等云云、又云く「現世は安穩にして、後生には善処ならん」等云云、又云く「諸余の怨敵、皆悉く摧滅せん」等云云、取分奉る御守り方便品・寿量品、同じくは一部書て進らせ度候へども、当時は去り難き隙ども入る事候は略して二品奉り候、相構あひかみ合あひあ構あひかみ今御身を離さず重ねつつみて御所持有るべき者なり、此の方便品と申すは迹門の肝心なり、此の品には仏十如実相の法門を説て十界の衆生の成仏を明し給ふは、舍利弗等は此れを聞て無明の惑を

断じ真因の位に叶ふのみならず、未来華光如来と成て、成仏の覺月を離垢世界の曉の空に詠ぜり、十界の衆生の成仏の始めは是なり、当時の念仏者・真言師の人人・成仏は我が依經に限れりと深く執するは、此等の法門を習学せずして、未顕真実の經に説く所の名字計りなる授記を執する故なり。

貴辺は日来は此等の法門に迷ひ給ひしかども、日蓮が法門を聞て、賢者なれば本執を忽に翻し給て、法華経を持ち給ふのみならず、結句は身命よりも此の経を大事と思食す事不思議が中の不思議なり、是れは偏に今の

事に非ず、過去の宿縁開發せるにこそ、かくは思食すらめ、有り難し有り難し、次に寿命品と申すは本門の肝心なり、又此の品は一部の肝心、一代聖教の肝心のみならず、三世の諸仏の説法の儀式の主要なり、教主釈尊、寿命品の一念三千の法門を証得し給ふ事は、三世の諸仏と内証等しきが故なり、但し此の法門は釈尊一仏の已証のみに非ず諸仏も亦然なり、我等衆生の無始已来六道生死の浪に沈没せしが、今教主釈尊の所説の法華經に値ひ奉る事は、乃往過去に此の寿命品の久遠実成の一念三千を聴聞せし故なり、有り難き法門なり。

華嚴・真言の元祖、法蔵・澄觀・善無畏・金剛智・不空等が、釈尊・一代聖教の肝心なる寿命品の一念三千の法門を盗み取て、本より自の依經に説かざる華嚴經・大日經に一念三千有りと云て取り入るる程の盗人にばかされて、末学深く此の見を執す、墓無し墓無し、結句は真言の人師の云く「争て醍醐を盗て、各自宗に名く」云云、又

云く「法華經の二乗作仏・久遠実成は無明の辺域、大日經に説く所の法門を明の分位」等云云、華嚴の人師云く「法華經に説く所の一念三千の法門は枝葉、華嚴經の法門は根本の一念三千なり」云云、是跡形も無き僻見なり、真言・華嚴經に一念三千を説きたらばこそ、一念三千と云ふ名目をばつかはめ、おかしおかし、龜毛兎角の法門なり。

正しく久遠実成の一念三千の法門は前四味並に法華經の迹門十四品まで秘させ給て有りしが、本門正宗に至て寿命品に説き顯し給へ、此の一念三千の宝珠をば妙法五字の金剛不壞の袋に入れて、末代貧窮の我等衆生の為に残し置かせ給ひしなり、正法・像法に出でさせ給ひし論師・人師の中に此の大事を知らず、唯竜樹・天親こそ心の底に知らせ給ひしかども色にも出ださせ給はず、天台大師は玄・文・止觀に秘せんと思召ししかども、末代の為にや止觀十章第七正觀の章に至て粗書かせ給ひたりしかども、薄葉に釈を設けてさて止み給ひぬ、但理觀の一分を示して事の三千をば斟酌し給ふ。

彼の天台大師は迹化の衆なり、此の日蓮は本化の一分なれば盛に本門の事の分を弘むべし、然に是くの如き

だいじ 大事の義理の籠らせ給ふ御經を書て進らせ候は 彌信を取らせ給ふべし、勸発品に云く「当に起て遠く迎へ、当に仏を敬ふが如くすべし」等云云、安樂行品に云く「諸天昼夜に、常に法の為の故に、而も之を衛護す、乃至天の諸の童子、以て給使を為さん」等云云、譬喩品に云く「其の中の衆生は、悉く是れ吾が子なり」等云云、法華經の持者は教主釈尊の御子なれば、争か梵天・帝釈・日月・衆星も昼夜朝暮に守らせ給はざるべきや、厄の年災難を払はん秘法に法華經に過ぎず、たのもしきかな、たのもしきかな。

かまくら さては鎌倉に候ひし時は細細申し承はり候ひしかども、今は遠国に居住候に依て面謁を期する事更になし、されば心中に含みたる事も使者玉章にあらざれば申すに及ばず、歎かし歎かし、当年の大厄をば日蓮に任せ給へ 釈迦・多宝・十方分身の諸仏の法華經の御約束の実不実は是れにて量るべきなり、又又申すべく候、

弘安元年 戊寅 四月二十二日

日蓮花押

太田左衛門尉殿御返事

八木一石付十合者大旱魃かんばつの代に、かはける物に水をほどこしては、大竜王りゅうおうと生れて雨をふらして人天にんてんをやしなう、うえたる代に、食をほどこせる人は国王こくおうと生れて其の国ゆたかなり、過去かこの世に金色きんしきと申す大王たいおうましましき其の国をば波羅奈はらな国と申す、十二年が間、旱魃かんばつゆきて人民じんみんうえ死ぬ事おびただし。宅中たくちゆうには死人しにん充滿じゅうまんし、道路だうろには骸骨がいこつ充滿じゅうまんせり、其の時、大王たいおう一切衆生いっさいしゆじゆうをあはれみて、おおくの蔵くらをひらきて施しをほどこし給ひき、蔵の中の財さいつきて唯一日の御供ごこうのみのこりて候ひし、衆僧しゆそうをあつめて供養くうやうをなし、王と后しうごと衆僧しゆそうと万民ばんみんと皆みなうえ死しなんとせし程に、天より雨のごとくふりて大國たいこく一時に富貴ふきせりと、金色王経きんしきおうきやうにとかれて候、此れも又かくのごとし此の供養くうやうによりて現世げんせには福人ふくじんとなり、後生ごしやうには靈山淨土りやうざんじやうどまいらせ給ふべし。恐恐きんきん謹言きんげん。

九月二十四日

日蓮にちれん 花押かおう

大田入道殿女房御返事

一五八 慈覚大師事

弘安三年正月 五十九歳御作与太田入道

於身延

1014p

驚眼三貫 絹の袈裟一帖給い候い了ぬ、法門の事は秋元太郎兵衛尉殿の御返事に少注して候御覧有るべく候、なによりも受け難き人身値い難き仏法に値いて候に五尺の身に一尺の面あり其の面の中三寸の眼二つあり、一歳より六十に及んで多くの物を見る中に悦ばしき事は法華最第一の経文なり、あさましき事は慈覚大師の金剛頂経の頂の字を釈して云く「言う所の頂とは諸の大乗の法の中に於て最勝にして無過上なる故に頂を以て之れに名づく乃至人の身の頂最も為勝るるが如し、乃至法華に云く是法住法位と今正しく此の秘密の理を顕説す、故に金剛頂と云うなり」云云、又云く金剛は宝の中の宝なるが如く此の経も亦爾なり諸の経法の中に最為第一にして三世の如来の髻の中の宝なる故に等云云、此の釈の心は法華最第一の経文を奪い取りて金剛頂経に付くるのみならず、如人之身頂最為勝の釈の心は法華経の頭を切りて真言経の頂とせり、此れ即ち鶴の頸を切つて蝦の頸に付けけるが真言の蟻も死にぬ法華経の鶴の御頸も切れぬと見え候、此れこそ人身つけたる眼の不思議にては候へ三千年に一度花開くなる優曇花は転輪聖王此れを見る。

究竟円満の仏にならざらんより外は法華経の御敵は見しらさんなり、一乗のかたき夢のごとく勘合して候、慈覚大師の御はかはいづれのところ有りと申す事きこす候、世間に云う御頭は出羽の国立石寺に有り云云、いかにも此の事は頭と身とは別の所に有るか、明雲座主は義仲に頸を切られたり、天台座主を見候は伝教大師はさてをきまいらせ候いぬ、第一義真第二円澄、此の兩人は法華経を正とし真言を傍とせり、第三の座主慈覚大師は真言を正とし法華経を傍とせり、其の已後代代の座主は相論にて思い定むる事無し、第五十五並びに

五十七の二代は明雲大僧正座主なり、此の座主は安元三年五月日院勘を蒙りて伊豆の国配流、山僧・大津にて奪い取りて後治承三年十一月に座主となりて源の右將軍頼朝を調伏せし程に寿永二年十一月十九日義仲に打たれさせ給う、此の人生けると死ぬと二度大難に値えり、生の難は仏法の定例、聖賢の御繁盛の花なり死の後の恥辱は悪人・愚人・誹謗正法の人招くわざわいなり、所謂大慢ばら門・須利等なり。

粗此れを勘えたるに明雲より一向に真言の座主となりて後、今三十余代一百余年が間、一向、真言の座主にて法華經の所領を奪えるなり、しかれば此等の人人は釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵・梵釈・日月・四天・天照太神・正八幡大菩薩の御讎敵なりと見えて候ぞ、我が弟子等、此の旨を存じて法門を案じ給うべし、恐恐。

正月二十七日 日蓮花押

太田入道殿御返事

夫れ法華經の第七神力品に云く「要を以て之を言はば如来の一切の所有の法・如来の一切の自在の神力・如来の一切の秘要の蔵・如来の一切の甚深の事 皆此經に於て宣示顯説す」等云云、釈に云く「經中の要説の要 四事に在り」等云云、問う所説の要言の法とは何物ぞや、答て云く夫れ釈尊初成道より四味三教乃至法華經の広開三顯一の席を立ちて略開近顯遠を説かせ給ひし涌出品まで秘せさせ給ひし実相証得の当初修行し給ひし処の寿命品の本尊と戒壇と題目の五字なり、教主釈尊此の秘法をば三世に隠れ無き普賢・文殊等にも譲り給はず況や其の以下をや、されば此の秘法を説かせ給ひし儀式は四味三教並に法華經の迹門十四品に異なりき、所居の土は寂光本有の国土なり能居の教主は本有無作の三身なり所化以て同体なり、かかる砌なれば久遠称揚の本眷属上行等の四菩薩を寂光の大地の底よりはるばると召し出して付属し給う、道暹律師云く「法是れ久成の法なるに由る故に久成の人に付す」等云云、問て云く其の所属の法門仏の滅後に於ては何れの時に弘通し給う可きか、答て云く經の第七藥王品に云く「後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん」等云云、謹んで經文を拝見し奉るに仏の滅後正像二千年過ぎて第五の五百歳・閻浮堅固・白法隱没の時云云、問て云く夫れ諸仏の慈悲は天月の如し機縁の水澄めば利生の影を普く万機の水に移し給べき処に正像末の三時の中に末法に限ると説き給わば教主釈尊の慈悲に於て偏頗あるに似たり如何、答う諸仏の和光利物の月影は九法界の闇を照すと雖も謗法一闡提の濁水には影を移さず正法一千年の機の前には唯小乘・權大乘相叶へ、像法一千年には法華經の迹門・機感相应せり、末法の始の五百年には法華經の本門前後十三品を置きて只寿命品の一品を弘通すべき時なり機法相应せり。

今此の本門・寿量の一品は像法の後の五百歳・機尚堪えず況や始めの五百年をや、何に況や正法の機は迹門尚日浅し増して本門をや、末法に入て爾前・迹門は全く出離生死の法にあらず、但専ら本門・寿量の一品に限りて出離生死の要法なり、是を以て思うに諸仏の化導に於て全く偏頗無し等云云、問う仏の滅後正像末の三時に於て本化・迹化の各各の付屬分明なり但・寿量の一品に限りて末法濁悪の衆生の為なりといへる經文未だ分明ならず慥に經の現文を聞かんと欲す如何、答う汝強ちに之を問う聞て後堅く信を取る可きなり、所謂・寿量品に云く「是の好き良薬を今留めて此に在く汝取て服す可し差じと憂うる勿れ」等云云。

問て云く・寿量品専ら末法惡世に限る經文顯然なる上は私に難勢を加う可らず然りと雖も三大秘法其の体如何、答て云く予が己心の大事之に如かず汝が志・無二なれば少し之を云わん・寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主・釈尊是れなり、・寿量品に云く「如来秘密神通之力」等云云、疏の九に云く「一身即三身なるを名けて秘と為し三身即一身なるを名けて密と為す又昔より説かざる所を名けて秘と為し唯仏のみ自ら知るを名けて密と為す仏・三世に於て等しく三身有り諸經の中に於て之を秘して伝えず」等云云、題目とは二の意有り所謂正像と末法となり、正法には天親菩薩・竜樹菩薩・題目を唱えさせ給いしかども自行ばかりにしてさて止め、像法には南岳・天台等亦南無妙法蓮華經と唱え給いて自行の爲にして広く他の爲に説かず是れ理行の題目なり、末法に入て今日連が唱る所の題目は前代に異り自行化他に亘りて南無妙法蓮華經なり名体宗用教の五重玄の五字なり、戒壇とは王法・佛法に冥じ佛法・王法に合して王臣一同に本門の三秘密の法を持ちて有徳王・覺徳比丘の其の乃往を末法濁悪の未来に移さん時勅宣並に御教書を申し下して靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立す可き者か時を待つ可きのみ事の戒法と申すは是なり、三國並に一閭浮提の人・懺悔滅罪の戒法のみならず大梵天王・帝釈等も来下して・給うべき戒壇なり、此の戒法立ちて後・延曆寺の戒壇は迹門の理戒なれ

ば益あるまじき処に、叡山に座主始まつて第三・第四の慈覚・智証存の外に本師・伝教・義真に背きて理同事勝の狂言を
本として我が山の戒法をあなづり戯論とわらいし故に、存の外に延暦寺の戒・清浄・無染の中道の妙戒なりしが徒に土泥
となりぬる事云つても余りあり歎きても何かはせん、彼の摩黎山の瓦礫の土となり梅檀林の荆棘となるにも過ぎたるなる
べし、夫れ一代・聖教の邪正偏円を弁えたらん学者の人をして今の延暦寺の戒壇を、ましむべきや、此の法門は義理を案じ
て義をつまびらかにせよ、此の三大秘法は二千余年の当初・地涌千界の元首として日蓮慥かに教主大覚世尊より口決
相承せしなり、今日蓮が所行は靈鷲山の稟承に芥爾計りの相違なき色も替らぬ寿量品の事の三大事なり。

問う一念三千の正しき証文如何、答う次に申し申す可し此に於て一種有り、方便品に云く「諸法実相・所謂諸法・
如是相・乃至・欲令衆生開仏知見と等云云、底下の凡夫・理性所具の一念三千か、寿量品に云く「然我実成仏已来・無量
無辺と等云云、大覚世尊・久遠実成の当初証得の一念三千なり、今日蓮が時に感じて此の法門広宣流布するなり予年来
己心に秘すと雖も此の法門を書き付て留め置ずんば門家の遺弟等定めて無慈悲の讒言を加う可し、其の後は何と悔ゆと
も叶うまじきと存ずる間、貴辺に對し書き送り候、一見の後、秘して他見有る可からず口外も詮無し、法華經を諸仏出世
の一大事と説かせ給いて候は此の三大秘法を含めたる經にて渡らせ給えばなり、秘す可し秘す可し。

弘安四年卯月八日 日蓮花押

自界叛逆難^{じかいはんぎやくなん} 他方侵逼の難既^{たほうしんびつ なんすで}に合^あ候^あい畢^{おわ}んぬ^{これ} 之^{これ}を以て思^{おも}うに「多く他方^{たほう}の怨賊^{おんぞく}有^あつて国内^{こくない}を侵掠^{しんりやく}し人民^{じんみん}諸^{もろ}の苦惱^{くのう}を受け土地^{とち}に所樂^{しよらく}の処^{ところ}有^あること無^なけん」と申^{まう}す經文^{きやうもん}合^あ候^あいぬと覺^{おほ}え候^あ、当時^{とうじ}吉岐^{きちき} 對馬^{つしま}の土民^{どみん}の如^{ごと}くになり候^あはんずるなり、是^これ偏^{ひとへ}に仏法^{ぶつぽう}の邪見^{じゃけん}なるによる^よる仏法^{ぶつぽう}の邪見^{じゃけん}と申^{まう}すは真言宗^{しんごんしゆう}と法華宗^{ほふけしゆう}との違^い目^{めく}なり、禪宗^{ぜんしゆう}と念仏宗^{ねんぶつしゆう}とを責^せめ候^あしは此^{この}事を申^{まう}し顯^{あらわ}さん料^{りやう}なり漢土^{かんど}には善無畏^{ぜんむい} 金剛智^{こんごうち} 不空三藏^{ふくうさんざう}の誑惑^{あおわく}の心^{こころ} 天台法華宗^{てんだいほふけしゆう}を真言^{しんごん}の大日經^{だいにちぎきやう}に盗^{ぬす}み入^いれて還^{かえ}つて法華經^{ほふけきやう}の肝心^{かんじん}と天台大師^{てんだいだいし}の徳^{とく}とを隠^{かく}せし故^{ゆゑ}に漢土^{かんど}滅^{めつ}するなり、日本^{にほん}國^{こく}は慈覺大師^{じかくだいいし}が大日經^{だいにちぎきやう} 金剛頂經^{こんごうぢやうきやう} 蘇悉地經^{そしつぢぎきやう}を鎮護^{ちんご}國家^{こくが}の三部^{さんぶ}と取^とつて伝教大師^{でんきやうだいいし}の鎮護^{ちんご}國家^{こくが}を破^{やぶ}せしより叡山^{えいざん}に惡義^{あくぎ} 出来^{しゆたい}して終^{つい}に王法^{わうぽう}尽^つきにき、此^{この}惡義^{あくぎ} 鎌倉^{かまくら}に下^{くだ}つて又^{また}日本^{にほん}國^{こく}を亡^{もう}すべし弘法大師^{こうぼうだいいし}の邪義^{じゃぎ}は中^{なか}中^{なか}顯^{あらわ}然^{ぜん}なれば人^{ひと}もたばらかされぬ者^{もの}もあり、慈覺大師^{じかくだいいし}の法華經^{ほふけきやう} 大日經^{だいにちぎきやう}の理^り同事^{どうじ}勝^{しょう}の釈^{しやく}は智人^{ちじん}既^{すで}に許^{ゆる}しぬ愚者^{ぐしや}争^あでか信^{しん}ぜざるべき慈覺大師^{じかくだいいし}は法華經^{ほふけきやう}と大日經^{だいにちぎきやう}との勝劣^{しょうりやく}を祈^き請^{しやう}せしに箭^やを以^{もつ}て日^{にち}を射^やると見^みしは此^{この}事^{こと}なるべし、是^これは慈覺大師^{じかくだいいし}の心中^{しんちゆう}に修羅^{しゆら}の入^いつて法華經^{ほふけきやう}の大日輪^{だいにちりん}を射^やるにあらずや、此^{この}の法門^{ほふもん}は当世^{とうせ}叡山^{えいざん}其^{その}の外^の日本^{にほん}國^{こく}の人^{ひと}用^{もち}ゆべきや、若^もし此^{この}の事^{こと} 実事^{じつじ}ならば日蓮^{にぢれん}豈^{あに}須^{しゆ}弥山^{みせん}を投^なる者^{もの}にあらずや、我^{われ}が弟子^{でし}は用^{もち}ゆべきや如何^{いかん}最後^{さいご}なれば申^{まう}すなり恨^きみ給^{たま}へからず、恐^{おそ}恐^{おそ} 謹言^{きんげん}。

十一月二十日

日蓮花押

曾谷入道殿

方便品の長行書進せ候先に進せ候し自我偈に相副て読みたまうべし、此の經の文字は皆悉く生身妙覺の御仏なり然れども我等は肉眼なれば文字と見るなり、例せば餓鬼は恒河を火と見る人は水と見る天人は甘露と見る水は一なれども果報に随つて別別なり、此の經の文字は盲眼の者は之を見ず、肉眼の者は文字と見る二乗は虚空と見る菩薩は無量の法門と見る、仏は一一の文字を金色の釈尊と御覽あるべきなり即持仏身とは是なり、されども僻見の行者は加様に目出度く渡らせ給うを破し奉るなり、唯相構えて相構えて異念無く一心に靈山淨土を期せらるべし、心の師とはなるとも心を師とせざれとは六波羅蜜經の文ぞかし、委細は見參の時を期し候、恐恐謹言。

文永十二年三月 日 日蓮花押

曾谷入道殿

夫れ以れば重病を療治するには良薬を構索し逆謗を救助するには要法には如かず、所謂時を論ずれば正像末教を論ずれば小大偏円権実蹟密国を論ずれば中辺の両国機を論ずれば已逆と未逆と已謗と未謗と師を論ずれば凡師と聖師と二乗と菩薩と他方と此土と迹化と本化となり、故に四依の菩薩等滅後に出現し仏の付属に随つて妄りに経法を演説したまわず、所詮無智の者未だ大法を謗ぜざるには忽ちに大法を与えず悪人爲る上已に実大を謗する者には強て之を説く可し、法華經第二の卷に仏・舍利弗に対して云く「無智の人の中に於て此の經を説くこと莫れ」又第四の卷に藥王菩薩等の八万の居士に告げたまわく「此の經は是れ諸仏秘要の藏なり分布して妄りに人に授与す可からず」云云、文の心は無智の者の而も未だ正法を謗ぜざるには左右無く此の經を説くこと莫れ、法華經第七の卷不輕品に云く「乃至遠く四衆を見ても亦復故に往いて」等云云、又云く「四衆の中に瞋恚を生じ心不淨なる者有り惡口罵詈して言く是は無智の比丘何れの所従り來りてか」等云云、又云く「或は杖木瓦石を以て之を打擲す」等云云、第二第四の卷の經文と第七の卷の經文と天地水火せり。

問うて曰く「一經二説何れの義に就いて此の經を弘通すべき、答えて云く私に會通すべからず靈山の聴衆爲る天台大師並びに妙樂大師等処処に多くの釈有り先ず一函の文を出さん、文句の十に云く「問うて曰く釈迦は出世して跏趺して説かず今は此れ何の意ぞ造次にして説くは何ぞや答えて曰く本已に善有るには釈迦小を以て之を將護

し本末だ善有らざるには不輕・大を以て之を強毒す」等云云、釈の心は寂滅・鹿野・大宝・白鷺等の前四味の小大・権実の諸經四教八教の所被の機縁・彼等が過去を尋ね見れば久遠大通の時に於て純円の種を下せしかども諸衆

一乗經を謗ぜしかば三五の塵点を經歷す然りと雖も下せし所の下種・純熟の故に時至つて自ら繫珠を顕す但四十余年の間過去に已に結縁の者も猶謗の義有る可きの故に且らく権小の諸經を演説して根機を練らしむ。

問うて曰く華嚴の時別円の大菩薩乃至觀經等の諸の凡夫の得道は如何、答えて曰く彼等の衆は時を以て之を論ずれば其の經の得道に似たれども実を以て之を勸するに三五下種の輩なり、問うて曰く其の証拠如何、答えて曰く法華經第五の卷涌出品に云く「是の諸の衆生は世世より已來常に我が化を受く乃至此の諸の衆生は始め我が身を見我が所説を聞いて即ち皆信受して如來の慧に入りనికి等云云、天台釈して云く衆生久遠々等云云、妙樂大師の云く「脱は現に在りと雖も具に本種を騰ぐ又云く故に知んぬ今日の逗会は昔成熟するの機に赴く」等云云、

經釈顯然の上は私の料簡を待たず例せば王女と下女と天子の種子を下さざれば国主と為らざるが如し。

問うて曰く大日經等の得道の者は如何、答えて曰く種種の異義有りと雖も繁きが故に之を載せず但し所詮彼れ彼の經經に種熟脱を説かざれば還つて灰断に同じ化に始終無きの經なり、而るに真言師等の所談の即身成仏は譬えば窮人の妄りに帝王と号して自ら誅滅を取るが如し王莽趙高の輩外に求む可からず今の真言家なり、此等

に因つて論ぜば仏の滅後に於て三時有り、正像二千年年には猶下種の者有り例せば在世四十余年の如し根機を知らずんば左右無く実經を与つ可からず、今は既に末法に入つて在世の結縁の者は漸漸に衰微して権実の二機皆悉く尽きぬ彼の不輕菩薩末世に出現して毒鼓を撃たしむるの時なり、而るに今時の學者時機に迷惑して或は小乗を

弘通し或は權大乘を授与し或は一乗を演説すれども題目の五字を以て下種と為す可きの由來を知らざるか、殊に真言宗の學者迷惑を懷いて三部經に依憑し単に会二破二の義を宣ぶ猶三三相對を説かず即身頓悟の遺跡を削り草木成仏は名をも聞かざるのみ、而るに善無畏金剛智不空等の僧侶月氏より漢土に來臨せし時本国に於て未だ存せざる天台の大法盛に此の國に流布せしむるの間自愛所持の經弘め難きに依り一行阿闍梨を語い得て天台

の智慧を盗み取り大日経等に摂入して天竺より有るの由之を偽る、然るに震旦一国の王臣等並びに日本国の弘法慈覺の両大師之を弁えずして信を加う已下の諸学は言つに足らず、但漢土日本の中に伝教大師一人之を推したまえり、然れども未だ分明ならず所詮善無畏三蔵閻魔王の責を蒙りて此の過罪を悔い不空三蔵の還つて天竺に渡つて真言を捨てて漢土に來臨し天台の戒壇を建立して両界の中央の本尊に法華經を置きし是なり。

問うて曰く今時の真言宗の学者等何ぞ此の義を存せざるや、答えて曰く眉は近けれども見えず自の禍を知らずとは是の謂か、嘉祥大師は三論宗を捨てて天台の弟子と為る今の末学等之を知らず、法蔵澄觀華嚴宗を置いて智者に歸す彼の宗の学者之を存せず、玄奘三蔵慈恩大師は五性の邪義を廢して一乗の法に移る法相の学者堅く之を諍う。

問うて曰く其の証如何、答えて曰く或は心を移して身を移さず或は身を移して心を移さず或は身心共に移し或は身心共に移さず其の証文は別紙に之を出す可し此の消息の詮に非ざれば之を出すや、仏滅後に三時有り、所謂正法一千年前の五百年には迦葉阿難商那和修末田地脇比丘等一向に小乗の薬を以て衆生の輕病を対治す

四阿含經・十誦・八十誦等の諸律と相續解脱經等の三蔵を弘通して後には律宗・俱舍宗・成実宗と号する是なり、後の五百年には馬鳴菩薩・竜樹菩薩・提婆菩薩・無著菩薩・天親菩薩等の諸の大論師初には諸の小聖の弘めし所の小乗經之を通達し後には一一に彼の義を破失し了つて諸の大乗經を弘通す是れ又中薬を以て衆生の中病を対治す所謂華嚴經・般若經・大日經・深密經等・三輪宗・法相宗・真言陀羅尼・禪法等なり。

問うて曰く迦葉・阿難等の諸の小聖何ぞ大乗經を弘めざるや、答えて曰く一には自身堪えざるが故に二には所被の機無きが故に三には仏より譲り与えられざるが故に四には時來らざるが故なり、問うて曰く竜樹・天親等何ぞ一乗經を弘めざるや、答えて曰く四つの義有り先の如し、問うて曰く諸の真言師の云く「仏の滅後八百年に相

當つて 竜猛菩薩 月氏に出現して釈尊の顯經たる華嚴法華等を馬鳴菩薩等に相伝し大日の密經をば自ら南天の鉄塔を開拓し面り大日如来と金剛薩とに對して之を口決す、竜猛菩薩に二人の弟子有り提婆菩薩には釈迦の顯教を伝え竜智菩薩には大日の密教を授く竜智菩薩は阿羅苑に隱居して人に伝えず其の間に提婆菩薩の傳つる所の顯教は先づ漢土に渡る其の後數年を経歴して竜智菩薩の傳つる所の秘密の教を善無畏・金剛智・不空漢土に渡す等云云此の義如何、答えて曰く一切の眞言師是くの如し又天台華嚴等の諸家も一同に之を信ず、抑 竜猛已前には月氏国の中には大日の三部經無しと云うか釈迦よりの外に大日如来世に出現して三部の經を説くと云うか、顯を提婆に伝え密を竜智に授くる証文何れの經論に出でたるぞ、此の大妄語は提婆の欺誑罪にも過ぎ瞿伽利の誑言にも超ゆ漢土日本の王位の尽き兩朝の僧侶の謗法と爲るの由来専ら斯れに在らずや、然れば則ち彼の震旦既に北蕃の為に破られ此の日域も亦西戎の為に侵されんと欲す此等は且らく之を置く。

像法に入つて一千年 月氏の仏法漢土に渡來するの間 前四百年には南北の諸師 異義蘭菊にして東西の仏法未だ定まらず、四百年の後 五百年の前其の中間 一百年の間に南岳・天台等漢土に出現して粗法華の実義を弘宣したまふ然而円慧円定に於ては国師たりと雖も円頓の戒場未だ之を建立せず故に國を挙つて戒師と仰がず、六百年の已後法相宗西天より來れり太宗皇帝之を用ゆる故に天台法華宗に歸依するの人漸く薄し、茲に就いて隙を得て則天皇后的御宇に先に破られし華嚴亦起つて天台宗に勝れたるの由之を称す、太宗より第八代玄宗皇帝の御宇に眞言始めて月氏より來れり所謂開元四年には善無畏三蔵の大日經・蘇悉地經・開元八年には金剛智・不空の兩三蔵の金剛頂經 此くの如く三經を天竺より漢土に持ち來り、天台の釈を見聞して智發して釈を作つて大日經と法華經とを一經と爲し其の上印・眞言を加えて密教と号し之に勝るの由、結句權教を以て実教を下す漢土の學者 此の事を知らず。

像法の末・八百年に相当つて伝教大師・和国に託生して華嚴宗等の六宗の邪義を糾明するのみに非ずしかのみならずなんかく・てんだい・いまま・ひろ・なんかく・てんだい・いまま・ひろ・南岳・天台も未だ弘めたまわざる円頓戒壇を叡山に建立す、日本一州の学者一人も残らず大師の門弟と為る、但天台と真言との勝劣に於ては誑惑と知つて而も分明ならず、所詮末法に贈りたもつか此等は傍論為るの故に且らく之を置く、吾が師・伝教大師三国に未だ弘まらざるの円頓の大戒壇を叡山に建立したもつ此れ偏に上藥を持ち用いて衆生の重病を治せんと為る是なり。

今末法に入つて二百二十余年五濁強盛にして三災頻りに起り衆見の二濁国中に充滿し逆謗の二輩四海に散在す、専ら一闡提の輩を仰いで棟梁と恃怙謗法の者を尊重して国師と為す、孔丘の孝經之を提げて父母の頭を打ち釈尊の法華經を口に誦しながら教主に違背す不孝国は此の国なり勝母の間他境に求めじ、故に青天・眼を瞋らして此の国を睨み黄地は憤りを含んで大地を震つ、去る正嘉元年の大地動文永元年の大彗星此等の天災は仏滅後

・二千二百二十余年の間月氏漢土日本の内に未だ出現せざる所の大難なり、彼の弗舍密多羅王の五天の寺塔を焼失し漢土の会昌天子の九国の僧尼を還俗せしめしに超過すると百千倍なり大謗法の輩国中に充滿し一天に弥るに依つて起る所の天災なり、大般涅槃經に云く「末法に入つて不孝謗法の者大地微塵の如し」意取、法滅尽經に

「法滅尽の時は狗犬の僧尼・恒河沙の如し」等云云意取、今親り此の国を見聞するに人毎に此の二の惡有り此等の大惡の輩は何なる秘術を以て之を扶救せん、大覺世尊仏眼を以つて末法を鑒知し此の逆謗の二罪を対治せしめんが為に一大秘法を留め置きたもつ、所謂法華經本門久成の釈尊・宝淨世界の多宝仏・高さ五百由旬広さ二百五十由旬の大宝塔の中に於て二仏座を並べしこと宛も日月の如く十方分身の諸仏は高さ五百由旬の宝樹の下に五由旬の師子の座を並べ敷き衆星の如く列座したもつ、四百万億那由他の大地に三仏二会に充滿したもつの儀式は華嚴寂場の華嚴世界にも勝れ真言両界の千二百余尊にも超えたり一切世間の眼なり、此の大会に於て六難九易を挙げ

て法華經を流通せんと諸の大菩薩に諫曉せしむ、金色世界の文殊師利・兜史多宮の弥勒菩薩・宝淨世界の智積菩薩・
 補陀落山の觀世音菩薩等・頭陀第一の大迦葉・智慧第一の舍利弗等・三千世界を統領する無量の梵天・須弥の頂に居
 住する無辺の帝釈・一四天下を照耀せる阿僧祇の日月・十方の仏法を護持する恒沙の四天王・大地微塵の諸の竜王等
 我にも我にも此の經を付嘱せられよと競望みしかども世尊都て之を許したまわず、爾の時に下方の大地
 より未見今見の四大菩薩を召し出したもう、所謂上行菩薩・無辺行菩薩・淨行菩薩・安立行菩薩なり、此の大菩薩各
 各六万恒河沙の眷属を具足す形・貌威儀言を以て宣べ難く心を以て量るべからず、初成道の法慧・功德林・金剛幢・金剛
 藏等の四菩薩各各十恒河沙の眷属を具足し仏会を莊嚴せしも大集經の欲色二界の中間・大宝坊に於て來臨せし十方の
 諸大菩薩乃至大日經の八葉の中の四大菩薩も金剛・頂經の三十七尊の中の十六大菩薩等も此の四大菩薩に比すれば
 猶帝釈と猿猴と華山と妙高との如し、弥勒菩薩・衆の疑を挙げて云く「乃一人をも識らず」等云云、
 天台大師云く「寂場より已降今座より已往十方の大土來会絶えず限る可からずと雖も我れ補処の智力を以て悉く見
 悉く知る而も此の衆に於ては一人をも識らず」等云云、妙樂云く「今見るに皆識らざる所以は乃至智人は起を知り蛇は
 自ら蛇を識る」等云云、天台又云く「雨の猛きを見て竜の大なるを知り華の盛なるを見て池の深きを
 知る」云云、例せば漢王の四將の張良・樊・陳平・周勃の四人を商山の四皓・綺里柢・角里先生・東園公・夏黄公等の四
 賢に比するが如し天地雲泥なり、四皓が為体頭には白雪を頂き額には四海の波を畳み肩には半月を移し腰には多羅枝
 を張り惠帝の左右に侍して世を治められたる事・堯・舜の古を移し一天安穩なりし事・神農の昔にも異ならず、此の四大
 菩薩も亦復是くの如し法華の会に出現し三仏を莊嚴し謗人の慢幢を倒すこと大風の吹くが如く衆会の敬心
 を致すこと諸天の帝釈に従うが如く提婆が仏を打ちしも舌を出して掌を合せ瞿伽梨が無実を構えしも地に臥して失
 を悔ゆ、文殊等の大聖は身を慙ぢて言を出さず舍利弗等の小聖は智を失して頭を低る、

爾その時に大覺世尊・壽量品を演說えんぜつし然しかして後に十神力じゅうりきを示現しげんして四大菩薩はさつに付屬ふぞくしたもつ、其その所屬しよぞくの法は何物なにものぞや、法華經ほけきやうの中にも広を捨て略を取り略を捨てて要を取る所謂妙法蓮華經いわゆるみょうほうれんげきやうの五字名体宗用教ごじなみたいうけうの五重玄ごじゅうげんなり、例せば九苞淵ほうえんが相馬そうばの法には玄黄げんかうを略して駿逸しゅんいつを取り史陶林しとうりんが講經かうけいの法には細科さいかを捨て元意げんいを取るが如ごとし等、此この四大菩薩はさつは祇尊成道ぎそんじやうだうの始はじめ、寂滅道場じやくめつだうじやうの砌みきりにも来らず如来入滅にやうらいにぎふめつの終りに拔提河はつたいての辺にも至らずしかのみならず靈山八年りやうぜんはちねんの間に進んでは迹門序正しやくもんじよしやうの儀式ぎしきに文殊もんじゆ・弥勒みろく等の發起影向ぎつしやうえいけうの諸聖衆しよしやうしゆにも列いならず、退しんぞういては本門流通ほんもんりゆうたうの座席ざせきに觀音かんのん・妙音みやうおん等の發誓弘經はくせきかうけいの諸大士しよだいたいにも交まわらず、但此ひはうの一大秘法ひとひみつを持もつて本處ほんちよに隱居いんきよするの後、仏の滅後正像二千年めつごしやうじやうにふたごの間に於おいて未いまだ一度も出現しゆげんせず、所詮しよせん仏専ぶつせんら末法まつぽうの時ときに限こつて此等これらの大士だうしに付屬ふぞくせし故ゆゑなり、法華經ほけきやうの分別功德品ぶんべつくんとくに云いく「惡世末法の時あくせまつぽうのとき能よく是この經きやうを持もつ者ものニ云いふ、涅槃經ねはんぎやうに云いく「譬たとえば七子の父母ふぼふち平等びやうどうならざるに非あらず然しかも病者びやうしやに於おいて心則すなわち偏ひとえに重おもきが如ごとし」云いふ、法華經ほけきやうの藥王品やくおうほんに云いく「此この經きやうは則すなわち為なれ閻浮提えんぶだいの人の病りやうの良藥りやうやくなり」云いふ、七子しちしの中に上の六子ろくしは且しからく之これを置おく第七だいななの病子びやうしは一闡提いつせんだいの人、五逆ごぎやく謗法ぼうぽうの者もの・末代惡世まつだいあくせの日本にほん國くにの一切衆生いっさいしゆじやうなり、正法しやうぽう一千年いつさいしやうもんねはんの前五百年おほには一切いっさいの聲聞しやうもん涅槃ねはん了おんぬ、後の五百年たはうには他方たはう來きやうの菩薩はさつ・大體本土だいたいほんどに還かえり向むかひ了おんぬ、像法ざうぽうに入いつての一千年もんじゆには文殊かんのん・觀音やくおう・藥王みろく・弥勒なんがく等てんだい・南岳なんがく・天台てんたいと誕生ふだいしし傳大士でんきやう・行基ぎやうき・伝教等でんけうと示現しげんして衆生しゆじやうを利益りやくす。

今末法いままつぽうに入いつて此等これらの諸大士しよだたいも皆本處みなほんちよに隱居いんきよしぬ、其その外えんぶしゆこ閻浮守護てんじんの天神ちんぎ・地祇あも或あるは他方たはうに去あり、或あるは此この土ちに住すすれども惡國しきこくを守護しゆごせず、或あるは法味ほつみを嘗なめざれば守護しゆごの力ちから無なし、例たとせば法身ほつしんの大士だうしに非あらざれば三惡道さんあくだうに入いられざるが如ごとし大苦忍だいくにんび難がたきが故ゆゑなり、而しかに地涌千界ぢゆせんがいの大菩薩はさつ・一ひとには娑婆世界しやばせかいに住すること多塵劫たじんこくなり二ふたには祇尊ぎそんに隨したがつて久遠くおんより已來このかた初發心しよはつしんの弟子でしなり三さんには娑婆世界しやばせかいの衆生しゆじやうの最初下種さいしよげしゆの菩薩はさつなり、是かくの如ごとき等の宿緣しゆくえんの方便ほうべん・諸大菩薩しよだいはさつに超過ちやうこせり。

問うて曰く其の証拠如何、法華第五涌出品に云く「爾の時に他方の国土より諸の来れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の數に過ぎたる乃至爾の時に仏諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまわく止みね善男子汝等が此の經を護持せんことを須いし」等云云、天台云く「他方は此の土結縁の事浅し宣授せんと欲すと雖も必ず巨益無し」云云、妙樂云く尚偏に他方の菩薩に付せず豈独り身子のみならんや」云云、又云く「告八万大士とは乃至今の下の文に下方を召すが如く尚本眷屬を待つ驗し余は未だ堪えざることを」云云、經釈の心は迦葉舍利弗等の一切の聲聞文殊藥王觀音彌勒等の迹化、他方の諸大士は末世の弘經に堪えずと云うなり、經に云く「我が娑婆世界に自ら六万恒河沙等の菩薩摩訶薩有り一一の菩薩に各六万恒河沙の眷屬有り是の諸人等能く我が滅後に於て護持し誦誦し廣く

此の經を説かん、仏是を説きたもつ時娑婆世界の三千大千の国土地皆震裂して其中より無量千万億の菩薩摩訶薩有り同時に涌出せり、乃至是の菩薩衆の中に四たり導師有り一をば上行と名け二をば無辺行と名け三をば淨行と名け四をば安立行と名く其の衆の中に於て最も為上首唱導の師なり」等云云、天台云く「是れ我が弟子心に我が法を弘むべし」云云、妙樂云く「子父の法を弘む」云云道暹云く「付屬とは此の經は唯下方涌出の菩薩

に付す何が故に爾る法是れ久成の法なるに由るが故に久成の人に付す」等云云、此等の大菩薩末法の衆生を利益したもつこと猶魚の水に練れ鳥の天に自在なるが如し、濁惡の衆生此の大士に遇つて仏種を殖つること例せば水精の月に向つて水を生じ孔雀の雷の声を聞いて懷妊するが如し、天台云く「猶百川の海に潮すべきが如し縁に牽れて応生するも亦復かくのごとく是くの如し」云云。

慧日大聖尊仏眼を以て兼ねて之を鑒みたもつ故に諸の大聖を捨棄し此の四聖を召し出して要法を伝え末法の弘通を定むるなり、問うて曰く要法の經文如何、答えて曰く口伝を以て之を伝えん釈尊然後正像二千年の衆生の為に宝塔より出でて虚空に住立し右の手を以て文殊觀音梵帝日月四天等の頂を摩でて是くの如く三反して

法華經の要よりの外の広略二門並びに前後の一代の一切經を此等の大土に付屬す正像二千年の機の為なり、其の後
涅槃經の會に至つて重ねて法華經並びに前四味の諸經を説いて文殊等の諸大菩薩に授与したもう、此等は拾の遺屬な
り。

爰を以て滅後の弘經に於ても仏の所屬に随つて弘法の限り有り然れば則ち迦葉・阿難等は一向に小乘經を弘通して
大乘經を申へず、竜樹・無著等は權大乘經を申へて一乘經を弘通せず、設い之を申へしかども纔かに以て之を指示し
或は迹門の二分のみ之を宣べて全く化道の始終を談ぜず、南岳・天台等は觀音・藥王等の化身と為て小大・

權實・迹本二門・化道の始終・師弟の遠近等悉く之を宣へ其の上に已今當の二説を立てて一代超過の由を判ぜること天竺の
諸論にも勝れ真丹の衆釈にも過ぎたり旧訳・新訳の三藏も宛かも此の師には及ばず、顯密二道の元祖も敵対に非ず、
然りと雖も広略を以て本と為して未だ肝要に能わず、自身之を存すと雖も敢て他伝に及ばず、此れ偏に付屬を重んぜし
が故なり、伝教大師は仏の滅後・一千八百年・像法の末に相當つて日本國に生れて小乘・大乘・一乘の諸戒一一に之を
分別し・梵網・瓔珞の別受戒を以て小乘の二百五十戒を破失し又法華・普賢の円頓の大王の戒を以て諸大乘經の臣民
の戒を責め下す、此の大戒は靈山八年を除いて一閻浮提の内に未だ有らざる所の大戒場を叡山に建立す、然る間八宗
共に偏執を倒し一國を挙げて弟子と為る、觀勒の流の三論・成実道昭の渡せる法相・俱舍・
良弁の伝うる所の華嚴宗・鑒真和尚の渡す所の律宗・弘法大師の門弟等誰か円頓の大戒を持たざらん此の義に違背する
は逆路の人なり、此の戒を信仰するは伝教大師の門徒なり日本一州・円機純一・朝野遠近・同帰一乘とは是の謂か、此の
外は漢土の三論宗の吉藏大師並びに一百余人・法相宗の慈恩大師・華嚴宗の法藏・澄觀・真言宗の善無畏・金剛智・
不空・慧果日本の弘法・慈覺等の三藏の諸師は四依の大土に非ざる暗師なり愚人なり、經に於ては大小・權實の旨を弁え
ず顯・密両道の趣を知らず論に於ては通申と別申とを糾さず申と不申とを曉めず、然りと雖も彼の

宗宗の末学等 此の諸師を崇敬して之を聖人と号し之を国師と尊ぶ今先ず一を挙げんに万を察せよ。

弘法大師の十住心論 秘藏宝鑰・二教論等に云く「此くの如き乗乗自乗に名を得れども後に望めば戲論と作る」又云く「無明の辺域」又云く「震旦の大師等諍て醍醐を盗み各自宗に名く」等云云、釈の心は法華の大法を華嚴と大日經とに對して戲論の法と蔑り無明の辺域と下し、剩え震旦一国の諸師を盗人と罵る、此れ等の謗法

謗人は慈恩得一の三乘真実・一乘方便の誑言にも超過し善導法然が千中無一捨閉閣抛の過言にも雲泥せるなり、六波羅蜜經をば唐の末に不空三藏月氏より之を渡す後漢より唐の始めに至るまで未だ此の經有らず南三北七の碩徳未だ此の經を見ず三論天台法相華嚴の大師誰人か彼の經の醍醐を盗まんや、又彼の經の中に法華經は醍醐に非ずといふの文之有りや不や、而るに日本国の東寺の門人等堅く之を信じて種種に僻見を起し非より非を増し暗より暗に入る不便の次第なり。

彼の門家の伝法院の本願たる正覺の舍利講式に云く「尊高なる者は不二摩訶衍の仏驢牛の二身は車を扶くること能ず秘奥なる者は両部曼陀羅の教蹟乗の四法の人は履をも取るに能えず」云云、三論天台法相華嚴等の元祖等を真言の師に相對するに牛飼にも及ばず力者にも足らずと書ける筆なり、乞ひ願わくは彼の門徒等心在らん人は之を案ぜよ大惡口に非ずや大謗法に非ずや、所詮此等の誑言は弘法大師の望後作戲論の惡口より起るか、教主釈尊多宝十方の諸仏は法華經を以て已今當の諸説に相對して皆是真実と定め然る後世尊は靈山に隱居し多宝諸仏は各本土に還りたまいぬ、三仏を除くの外誰か之を破失せん。

就中弘法所覽の真言經の中に三説を悔い還すの文之有りや不や、弘法既に之を出さず末学の智如何せん而るに弘法大師一人のみ法華經を華嚴大日の二經に相對して戲論盗人と為す所詮釈尊多宝十方の諸仏を以て盗人と稱するか末学等眼を閉じて之を案ぜよ。

問うて曰く昔より已来未だ曾て此くの如きの謗言を聞かず何ぞ上古清代の貴僧に違背して寧ろ当今濁世の愚侶を帰仰せんや、答えて曰く汝が言う所の如くば愚人は定んで理運なりと思わんか然れども此等は皆人の偽言に因つて如来の金言を知らざるなり、大覺世尊涅槃經に滅後を警めて言く「善男子我が所説に於て若し疑を生ずる者は尚受くべからず」云云、然るに仏尚我が所説なりと雖も不審有らば之を叙用せざれとなり、今予を諸師に比べ謗難を加う、然りと雖も敢て私曲を構えず専ら釈尊の遺誡に順つて諸人の謬釈を糾すものなり。

夫れ齊の始めより梁の末に至るまで二百余年の間南北の碩徳・光宅・智誕等の二百余人涅槃經の「我等悉名邪見之人」の文を引いて法華經を以て邪見之經と定め一國の僧尼並びに王臣等を迷惑せしむ、陳隋の比智者大師之を糾明せし時始めて南北の僻見を破り了んぬ、唐の始めに太宗の御宇に基法師勝鬘經の「若如来随彼所欲而方便説・即是大乘無有二乘」の文を引いて一乘方便・三乘真實の義を立つ此の邪義震旦に流布するのみに非ず、日本の得一が称徳天皇の御時盛んに非義を談ず、爰に伝教大師悉く彼の邪見を破り了んぬ、後鳥羽院の御代に源空・法然・観無量壽經の誦誦大乘の一句を以て法華經を摂入し還つて称名念佛に対すれば雜行方便なれば捨閑闍抛せよ等云云。

然りと雖も五十余年の間南都・北京・五畿・七道の諸寺・諸山の衆僧等此の惡義を破ること能はざりき予が難破分明なるの間一國の諸人忽ち彼の選択集を捨て了んぬ根露るれば枝枯れ源乾けば流竭くとは蓋し此の謂なるか、加之ならず唐の半玄宗皇帝の御代に善無畏・不空等大日經の住心品の如実一道心の一句に於て法華經を摂入し返つて權經と下す、日本の弘法大師は六波羅蜜經の五藏の中に第四の熟酥味の般若波羅蜜藏に於て法華經・涅槃經等を摂入し第五の陀羅尼藏に相對して争つて醍醐を盗む等云云、此等の禍咎は日本一州の内四百余年今に未だ之を糾明せし人あらず予が所存の難勢く一國に満つ必ず彼の邪義を破られんか此等は且らく之を止む。

迦葉・阿難等・竜樹・天親等・天台・伝教等の諸大聖人知つて而も未だ弘宣せざる所の肝要の秘法は法華經の文赫赫たり論釈等に載せざると明明なり生知は自ら知るべし賢人は明師に値遇して之を信ぜよ罪根深重の輩は邪推を以て人を輕しめ之を信ぜず且く耳に停め本意に付かば之を喩さん大集經の五十一に大覺世尊月蔵菩薩に語つて云く「我が滅後に於て五百年の中は解脱堅固次五百年は禪定堅固、已上一千次五百年は読誦多聞堅固次五百年は多造塔寺堅固、已上二百二十余年我法中鬪諍言訟・白法隱没の時に相当れり、法華經の第七藥王品に教主釈尊多宝仏と共に宿王華菩薩に語つて云く「我が滅度の後、後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て断絶して惡魔・魔民諸の天竜・夜叉・鳩槃荼等に其の便を得せしむこと無けん」と大集經の文を以て之を案ずるに前四箇度の五百年は仏の記文の如く既に符合せしめ了んぬ第五の五百歳の一事豈唐捐ならん随つて当世の体為る大日本国と大蒙古国と鬪諍合戦す第五の五百に相当れるか、彼の大集經の文を以て此の法華經の文を惟うに後五百歳中広宣流布於閻浮提の鳳詔豈扶桑国に非ずや、弥勒菩薩の瑜伽論に云く「東方に小国有り其の中に唯大乘の種姓のみ有り」と云、慈氏菩薩仏の滅後九百年に相当つて無著菩薩の請に赴いて中印度に来下して瑜伽論を演説す、是れ或は権機に随ひ或は付属に順ひ或は時に依つて権經を弘通す、然りと雖も法華經の涌出品の時地涌の菩薩を見て近成を疑うの間仏、請に赴いて寿命品を演説し分別功德品に至つて地涌の菩薩を勧奨して云く「惡世末法の時能く是の經を持たん者」と、みるくばさつじしん、ふぞく、あら、これ、ひろ、い、まのあたりうげん、おい、あくせま、きんげん、ちゅうもん、ゆえ、ゆいが、彌勒菩薩自身の付属に非ざれば之を弘めずと雖も親子靈山会上に於て惡世末法の金言を聴聞せし故に瑜伽論を説くの時末法に日本国に於て地涌の菩薩法華經の肝心を流布せしむ可きの由兼ねて之を示すなり、肇公の翻經の記に云く「だいししゅりやそま、ほけきよう、く、まうじゅう、いた、な、な、じゅよ、いわ、ひいけん、じゅうげん、ご、しん、くす、」此

んとす此の經典東北に縁有り汝慎んで伝弘せよ」と云、予此の記の文を拝見して両眼滝の如く一身悦びを、くす、」此

天台大師は毛喜等を相語らい、伝教大師は国道弘世等を恃怙む云云。

仁王經に云く「千里の内をして七難起らざらしむ」云云、法華經に云く「百由旬の内に諸の衰患無からしむ」云云、国主正法を弘通すれば必ず此の徳を備う臣民等、此の法を守護せんに豈家内の大難を払わざらんや、又法華經の第八に云く「所願虚しからず亦現世に於て其の福報を得ん」と云く、当に今世に於て現の果報を得べし云云、又云く「此の人は現世に白癩の病いを得ん」と云く、頭破れて七分と作らん」と又第二卷に云く「經を誦誦

し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」云云、第五の卷に云く「若し人惡み罵らば口則ち閉塞せん」云云、伝教大師の云く「讚する者は福を安明に積み謗する者は罪を無間に開く」等云云、安明とは須弥山の名なり、無間とは阿鼻の別名なり、国主持者を誹謗せば位を失ひ臣民

行者を毀咎すれば身を喪す一國を挙りて用いざれば定めて自反他逼出来せしむべきなり、又上品の行者は大の七難中品の行者は二十九難の内下品の行者は無量の難の随一なり、又大の七難に於て七人有り第一は日月の難なり第一の内に又五の大難有り所謂日月度を失ひ時節反逆し或は赤日出で或は黒日出で三四五の日出ず或は日蝕して光無く或は日輪一重二三四五重輪現ぜん、又經に云く「一月並び出でんと、今此の国土に有らざるは一日二月等の大難なり余の難は大體之有り、今此の龜鏡を以て日本國を浮べ見るに必ず法華經の大行者有るか、既に之を謗る者に大罰有り之を信ずる者何ぞ大福無からん。

今兩人微力を勵まし予が願に力を副え仏の金言を試みよ經文の如く之を行ぜんに徴無くんば釈尊正直の經文多宝証明の誠言・十方分身の諸仏の舌相有言無実と為らんか、提婆の大妄語に過ぎ瞿伽利の大誑言に超えたらん日月地に落ち大地反覆し天を仰いで声を發し地に臥して胸を押う殷の湯王の玉体を薪に積み戒日大王の竜顔を火に入れしも今、此の時に當るか、若し此の書を見聞して宿習有らば其の心を發得すべし、使者に此の書を持た

しめ早早北国に差し遣し金吾殿の返報を取りて速速是非を聞かしめよ、此の願若し成ぜば崑崙山の玉鮮かに求めずして蔵
に収まり大海の宝珠招かざるに掌に在らん、恐惶謹言。

下春十日

日蓮花押

曾谷入道殿

大田金吾殿

一六三 法蓮抄

建治元年

五十四歳御作

与曾谷法蓮日礼

1040p

夫れ以れば法華經第四の法師品に云く、若し悪人有つて不善の心を以て一劫の中に於て現に仏前に於て常に仏を毀罵せ
ん其の罪尚輕し若し人二つの悪言を以て在家出家の法華經を讀誦する者を毀せん其の罪甚だ重し等云云、此の經文の心は一劫
大師云く、然も此の經の功高く理絶えたるに約して此の説を作すことを得る余經は然らず等云云、此の經文の心は一劫
とは人壽八万歳ありしより百年に一歳をすて千年に十歳をすつ此くの如く次第に減ずる程に

人壽十歳になりぬ、此の十歳の時は當時の八十の翁のごとし、又人壽十歳より百年ありて十一歳となり又百年ありて十
二歳となり乃至一千年あらば二十歳となるべし乃至八万歳となる、此の一減一増を一劫とは申すなり、又種種の劫あり
といふも且く此の劫を以て申すべし、此の二劫が間、身口意の三業より事おこりて仏をにくみた

てまつる者あるべし例せば提婆達多のごとし、仏は淨飯王の太子、提婆達多は斛飯王の子なり、兄弟の子息なる間、仏の御
いとこにてをさせしかども今も昔も聖人も凡夫も人の中をたがへること女人よりして起りたる第一のあだにてはんべるな
り、釈迦如来は悉達太子としてをばしし時提婆達多も同じ太子なり、耶輸大臣に女あり耶輸多羅女

となづく五天竺第一の美女、四海名譽の天女なり、悉達と提婆と共に后にせん事をあらそひ給ひし故に中あしくならせ給ひぬ、後に悉達は出家して仏とならせ給ひ提婆達多、又須陀比丘を師として出家し給ひぬ、仏は二百五十戒を持ち三千の威儀をととの給ひしかば諸の天人これを渴仰し四衆これを恭敬す、提婆達多を人たとまざりしかばいかにしてか世間の名譽、仏にすぎんとはげみしほどにとかつ案じだして仏にすぎて世間にたと

まれぬべき事五つあり、四分律に云く一には糞掃衣、二には常乞食、三には一座食、四には常露座、五には塩及び五味を受けず等云云、仏は人の施す衣をうけさせ給う提婆達多は糞掃衣、仏は人の施す食をうけ給う提婆は只常乞食、仏は一日に二三反も食させ給ひ提婆は只一座食、仏は塚間、樹下にも処し給ひ提婆は日中常露座なり、

仏は便宜にはしを復は五味を服し給ひ提婆はしを等を服せず、かうありしかば世間、提婆の仏にすぐれたる事、雲泥なり、かくのごとくして仏を失いたてまつらんとつかがひし程に頻婆舍羅王は仏の檀那なり、日に五百輛の車を数年が間、一度もかかさずおくりて仏並びに御弟子等を供養し奉る、これをそねみどらんがために末生怨太子

をかたらいて父、頻婆舍羅王を殺させ我は仏を殺さんとして、或は石をもつて仏を打ちたてまつるは身業なり、仏は誑惑の者と罵詈せしは口業なり、内心より宿世の怨とをもひしは意業なり、三業相応の大悪、此れにはすぐべからず、此の提婆達多ほどの大悪人、三業相応して一中劫が間、釈迦仏を罵詈・打杖し嫉妬し候はん大罪はいくらほど

か重く候べきや、此の大地は厚さは十六万八千由旬なりされば四大海の水をも九山の土石をも三千の草木をも一切衆生をも頂戴して候へども落ちもせず、かたぶかず破れずして候ぞかし、しかれども提婆達多が身は既に五尺の人身なりわづかに三逆罪に及びしかば大地破れて地獄に入りぬ、此の穴、天竺にまだ候、玄奘三蔵、漢土より

月支に修行して此れをみる西域と申す文に載せられたり、而るに法華經の末代の行者を心にも、をもはず色にもそねまず、只たわふれてのりて候が上の提婆達多のごとく三業相応して一中劫仏を罵詈し奉るにすぎて候と

とかれて候、何に況や当世の人の提婆達多がごとく三業相応しての大悪心をもつて多年が間、法華經の行者を罵詈毀辱・嫉妬・打擲、讒死、歿死に当てんをや。

問うて云く末代の法華經の行者を怨める者は何なる地獄に墮つるや、答えて云く法華經の第二に云く「經を誦誦し

書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん一劫を具足して劫尽きなば復死し展転して無數劫に至らん」等云云、此の大地の下、五百由旬を過ぎて炎魔王宮あり、その炎魔

王宮より下、一千五百由旬が間に八大地獄並びに一百三十六の地獄あり、其の中に一百二十八の地獄は輕罪の者の住処

・八大地獄は重罪の者の住処なり、八大地獄の中に七大地獄は十惡の者の住処なり、第八の無間地獄は五逆と不孝と

誹謗との三人の住処なり、今法華經の末代の行者を戲論にも罵詈誹謗せん人人はおつべしと説き給へる文なり、法華經の

第四法師品に云く「人有つて仏道を求めて一劫の中に於て乃至持經者を歎美せんは其の福復彼に過ぎん」等云云、妙樂

大師云く「若し悩亂する者は頭七分に破れ供養する有らん者は福十号に過ぐ」等云云、夫れ人中には轉輪聖王第一な

り此の輪王出現し給つべき前相として大海の中に優曇華と申す大木生いて華さき実なる、金輪王出現して四天の山海を

平になす大地は縣の如くやはらかに大海は甘露の如くあまく大山は金山草木は

七宝なり、此の輪王須臾の間に四天下をめぐる、されば天も守護し鬼神も来つてつか龜王も時に随つて雨をふらす、

劣夫なんどもこれに従ひ奉れば須臾に四天下をめぐる、是れ偏に轉輪王の十善の感得せる大果報なり、毘沙門等の四大

天王は又これには似るべくもなき四天下の自在の大王なり、帝釈は利天の主、第六天の魔王は欲界

の頂に居して三界を領す、此れは上品の十善戒・無遮の大善の所感なり、大梵天王は三界の天尊・色界の頂に居して

魔王・帝釈をしたがへ三千大千界を手になぎる、有漏の禪定を修行せる上に慈悲・喜・捨の四無量心を修行せる人なり、

声聞と申して舍利弗・迦葉等は二百五十戒・無漏の禪定の上に苦・空・無常・無我の觀をこらし三界の

けんじ 見思を断尽し水火に自在なり故に梵王と帝釈とを眷属とせり、縁覚は声聞に似るべくもなき人なり仏と出世をあらそふ人なり、昔獵師ありき飢えたる世に利と申す辟支仏にひえの飯を一盃供養し奉りて彼の獵師九十一劫が閻人中天上の長者と生る、今生には阿那律と申す天眼第一の御弟子なり、此れを妙樂大師釈して云く「穉飯輕し」と雖も所有を尽し及び田勝るるを以ての故に勝るる報を得る」等云云、釈の心はひえの飯は輕しといへども貴き辟支仏を供養する故にかかる大果報に度度生るとこそ書かれて候へ又菩薩と申すは文殊・弥勒等なり、此の大菩薩等は彼の辟支仏に似るべからざる大人なり、仏は四十二品の無明と申す闇を破る妙覺の仏なり、八月十五夜の満月のごとし、此の菩薩等は四十一品の無明をつくして等覺の山の頂にのぼり十四夜の月のごとし、仏と申すは上の諸人には百千万億倍すくれさせ給へる大人なり、仏には必ず三十二相あり其の相と申すは梵音声・無見頂相・肉相・白毫相・乃至千輻輪相等なり、此の三十二相の中の一相をば百福を以て成じ給へり、百福と申すは假令大医ありて日本国・漢土・五天竺・十六の大国・五百の中国・十千の小国・乃至閻浮提・四天下・六欲天・乃至三千大千世界の一切衆生の眼の盲たるを本の如く一時に開けたらんほどの大功徳を一つの福として此の福・百をかさねて候はんを以て三十二相の中の一相を成ぜり、されば此の一相の功徳は三千大千世界の草木の数よりも多く四天下の雨の足よりもすぎたり、設い壞劫の時・僧・陀と申す大風ありて須弥山を吹き抜いて色究竟天にあげてがうて微塵となす大風なり、然れども仏の御身の一毛をば動かさず仏の御胸に大火あり平等大慧・大智・光明・火坑三昧と云う、涅槃の時は此の大火を胸より出して一身を焼き給いしかば六欲・四海の天神・竜衆等・仏を惜み奉る故にあつまりて大雨を下し三千の大地を水となし須弥は流るといへども此の大火はきず、仏にはかかる大徳ましますゆへに阿闍世王は十六大国の悪人を集め一四天下の外道をかたらひ提婆を師として無量の悪人を放ちて仏弟子をのりうち殺害せしのみならず、賢王にてとがもなかりし父の大王を一尺の釘をもつて七処までうちつけ、はつけ

にし生母をば王のかんざしをきり刀を頭にあてし重罪のつもりに悪瘡七処に出でき、三七日を経て三月の七日に大地破れて無間地獄に墮ちて一劫を経べかりしかども仏の所に詣で悪瘡ゆるのみならず無間地獄の大苦をまぬかれ四十年の寿命延びたりき、又耆婆大臣も御つかひなりしかば炎の中に入つて瞻婆長者が子を取り出したりき、之を以て之を思つに一度も仏を供養し奉る人はいかなる悪人・女人なりとも成仏得道疑無し、提婆には三十相あり二相かけたり所謂白毫と千輻輪となり、仏に二相劣りたりしかば弟子等軽く思いぬべしとて螢火をあつめて眉間につけて白毫と云ひ千輻輪には鍛冶に菊形をつくらせて足に付けて行くほどに足焼て大事になり結句死せんとせしかば仏に申す、仏御手を以てなで給いしかば苦痛さりき、ここに改悔あるべきかと思ひしにさはなくしも信じ奉る者をば争でか捨て給うべきや。

かかる仏なれば木像・画像につつし奉るに優填大王の木像は歩をなし摩騰の画像は一切経を説き給ふ、是れ程に貴き教主釈尊を一時・二時ならず一日・二日ならず一劫が間、掌を合せ両眼を仏の御顔にあて頭を低て他事を捨て頭の火を消さんと欲するが如く渴して水ををもひ飢えて食を思つがごとく間無く供養し奉る功德よりも戯論に一言継母の継子をほむるが如く心ざしなくとも末代の法華經の行者を讃め供養せん功德は彼の三業相應の信心にて一劫が間・生身の仏を供養し奉るには百千万億倍すべしと説き給いて候、これを妙樂大師は福過十号とは書れて候なり、十号と申すは仏の十の御名なり十号を供養せんよりも末代の法華經の行者を供養せん功德は勝るとかかれたり、妙樂大師は法華經の一切経に勝れたる事を二十あつむる其の一なり、已上・上の二つの法門は仏説にては候へども心えられぬ事なり争か仏を供養し奉るよりも凡夫を供養するがまさるべきや、而れども是を妄語と云はんとすれば釈迦如来の金言を疑い多宝仏の証明を輕しめ十方諸仏の舌相をやぶるになりぬべし、若し爾らば

現身に阿鼻地獄に墮つべし、巖石にのぼりてあら馬を走らするが如し心肝しづかならず、又信ぜば妙覺の仏にもなりぬべし如何してか今度法華經に信心をとるべき信なくして此の經を行ぜんは手なくして宝山に入り足なくして千里の道を企つるが如し、但し近き現証を引いて遠き信を取るべし仏の御歳八十の正月一日法華經を説きおはらせ給て御物語あり、
「阿難・弥勒・迦葉 我世に出でし事は法華經を説かんがためなり我既に本懷をとげぬ今は
世にありて詮なし今三月ありて二月十五日に涅槃すべし」云云、一切内外の人人疑をなせしかども仏語むなしからざればついに二月十五日に御涅槃ありき、されば仏の金言は実なりけるかと少し信心はとられて候、又仏記し給ふ「我滅度の後・二百年と申さんに阿育大王と申す王出現して一閻浮提三分の一が主となりて八万四千の塔を立て我が舍利を供養すべし」云云、人疑い申さんほどに案の如く出現して候いき是よりしてこそ信心をばとりて候いつれ、又云く「我滅後に四百年と申さんに迦叶色迦王と申す大王あるべし五百の阿羅漢を集めて婆沙論を造るべし」と是又仏記のごとなりき、是等をもつてこそ仏の記文は信ぜられて候へ若し上に挙ぐる所の二の法門・妄語ならば此の一經は皆妄語なるべし、寿命品に我は過去五百塵点劫のそのかみの仏なりと説き給う我等は凡夫なり過ぎにし方は生れてより已来すらなをおぼす況や一生二生をや況や五百塵点劫の事をば争か信ずべきや、又舍利弗等に記して云く「汝未來世に於て無量無辺不可思議劫を過ぎ及至当に作仏することを得べし号を華光如来と曰わん」云云、又又摩訶迦葉に記して云く「未來世に於て乃至最後の身に於て仏と成爲ことを得ん名けて光明如来と曰わん」云云、此等の經文は又未來の事なれば我等凡夫は信ずべしとおぼえず、されば過去未來を知らざらん凡夫は此の經は信じがたし又修行しても何の詮があるべき是を以て之を思うに現在に眼前の証拠あらんずる人此の經を説かん時は信ずる人もありやせん。

今法蓮上人の送り給える調誦の状に云く「慈父幽靈第十三年の忌辰に相当り一乗妙法蓮華經五部を転読し奉る」等

云云、夫れ教主釈尊をば大覺世尊と号したてまつる、世尊と申す尊の一字を高と申す高と申す一字は又孝と訓ずるなり、一切の孝養の人の中に第一の孝養の人なれば世尊と号し奉る、釈迦如来の御身は金色にして三十二相を備給ふ、彼の三十二相の中に無見頂相と申すは仏は丈六の御身なれども竹杖外道も其の御長をはからず梵天も其の頂を見ず故に無見頂相と申す是れ孝養第一の大人なればかかる相を備へします、孝経と申すに二あり一には外典の孔子と申せし聖人の書に孝経あり、二には内典今の法華経是なり、内外異なれども其意は是れ同じ、釈尊塵点劫の間修行して仏にならんとはげみし何事ぞ孝養の事なり、然るに六道四生の一切衆生は皆父母なり、孝養おさりしかば仏にならせ給はず、今法華経と申すは一切衆生を仏になす秘術まします御経なり、所謂地獄の一人、餓鬼の一人乃至九界の一人を仏になせば一切衆生皆仏になるべきことより顕る、譬えば竹の節を一つ破ぬれば余の節亦破るるが如し、困碁と申すあそびにしちよと云う事あり一の石死しぬれば多の石死ぬ、法華経も又一切衆生を仏になす用おはも又此くの如し金と申すものは本草を失う用を備へは一切の火をけす徳あり、法華経も又一切衆生を仏になす用おはします、六道四生の衆生に男女あり此の男女は皆我等が先生の父母なり、一人ももれば仏になるべからず故に二乗をば不知恩の者と定めて永不成仏と説かせ給う孝養の心あまねからざる故なり、仏は法華経をさとらせ給いて六道四生の父母孝養の功德を身に備給へり、此の仏の御功德をば法華経を信ずる人にゆづり給う、例せば

悲母の食う物の乳となりて赤子を養うが如し、今此の三界は皆是れ我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり」等云云、教主釈尊は此の功德を法華経の文字となして一切衆生の口になめさせ給う、赤子の水火をわきまみず毒藥を知らざれども乳を含めば身命をつぐが如し、阿含経を習う事は舍利弗等の如くならざれども華嚴経をさとる事解脱月等の如くならざれども乃至一代聖教を胸に浮べたる事文殊の如くならざれども一字一句をも之を聞きし人、仏にならざるはなし、彼の五千の上慢は聞きてさとらず不信の人なり、然れども謗ぜざりしかば三月

を経て仏になりなき」若しは信じ若しは信ぜざれば即ち不動国に生ぜん」と涅槃經に説かるるは此の人の事なり、法華經は不信の者すら謗ぜざれば聞きつるが不思議にて仏になるなり、所謂七步蛇に食れたる人一步乃至七歩をすぎず毒の用の不思議にて八歩をすぎさぬなり、又胎内の子の七日の如し必ず七日の内に転じて余の形となる八日をすぎさず、今の法蓮上人も又此くの如し教主釈尊の御功德御身に入りかはらせ給いぬ、法蓮上人の御身は過去聖靈の御容貌を残しおかれたるなり、たとひ種の苗となり華の菓となるが如し其華は落ちて菓はあり種はかくれて苗は現に見ゆ、法蓮上人の御功德は過去聖靈の御財なり、松さかふれば柏よろこぶ芝かるれば蘭なく情なき草木すら此くの如し何に況や情あらんをや又父子の契をや。

彼の諷誦に云く「慈父閉眼の朝より第十三年の忌辰に至るまで釈迦如来の御前に於て自ら自我偈一卷を讀誦し奉りて聖靈に回向す」等云云、当時日本国の人、仏法を信じたるやうには見令候へども古いまだ仏法のわたらざりし時は仏と申す事も法と申す事も知らず候しを守屋と上宮太子と合戦の後信ずる人もあり又信ぜざるもあり、漢土も此くの如し摩騰漢土に入つて後道士と諍論あり道士まけしかば始めて信ずる人もありしかども不信の人多し、されば烏竜と申せし能書は手跡の上手なりしかば人々を用ゆ、然れども仏經に於てはいかなる依怙ありしかども書かず最後臨終の時子息遺童を召して云く汝我が家に生れて芸能をつぐ我が孝養には仏經を書くべからず殊に法華經を

書く事なかれ、我が本師の老子は天尊なり天に二つの日なし而に彼の經に唯我一人と説くきくわい第一なり、若し遺言を違へ書く程ならば忽に惡靈となりて命を断つべしと云つて舌八つにさけて頭七分に破れ

五根より血を吐いて死し畢んぬ、されども其の子善惡を弁ぜれば我が父の謗法のゆゑに惡相現じて阿鼻地獄に墮ちたりともしらず遺言にまかせて仏經を書く事なし況や口に誦する事あらんをや、かく過ぎ行く程に時の王を司馬氏と号し奉る御仏事のありしに書写の經あるべしとて漢土第一の能書を尋ねらるるに遺童に定まりぬ、召し

て仰せ付けらるるに再三辞退申せしかば力及ばずして他筆にて一部の経を書かせられけるが、帝王心よからず尚遺竜を召して仰せに云く汝親の遺言とて朕が経を書かざる事其の謂無しと雖も且く之を免ず但題目計りは書くべしと三度勅定あり、遺竜猶辞退申す大王竜顔心よからずして云く天地尚王の進退なり、然らば汝が親は即ち我が家人にあらずや、私をもつて公事を軽んずる事あるべからず、題目計りは書くべし若し然らずんば、仏事の庭

なりといへども速に汝が頭を刎めべしとありければ題目計り書けり、所謂妙法蓮華経巻第一乃至巻第八等云云、其の暮に私宅に歸りて歎いて云く我親の遺言を背き王勅術なき故に仏経を書きて不孝の者となりぬ天神も地祇も定んで瞋り不孝の者とおぼすらんとて寝る、夜の夢の中に大光明出現せり朝日の照すかと思は天人一人庭上に立ち給へり又無量の眷属あり、此の天人の頂上の虚空に仏六十四仏まします、遺竜合掌して問うて云く如何

なる天人ぞや、答えて云く我は是れ汝が父の烏竜なり仏法を謗ぜし故に舌八つにさけ五根より血を出し頭七分に破れてむげんじこくおの彼の臨終の大苦をこそ堪忍すべしともおぼざりしに無間の苦は尚百千億倍なり、人間にして鈍刀をもて爪をはなち鋸をもて頸をきられ炭火の上を歩ばせ棘にこめられなんどせし人の苦を此の苦にたとはかずならず、如何してか我が子に告げんと思ひしかどもかなはず、臨終の時・汝を誡て仏経を書くこと

なかれと遺言せし事のくやしき申すばかりなし、後悔先にたたず我が身を恨み舌をせめしかどもかひなかりしに昨日の朝より法華経の始の妙の一字・無間地獄のかなへの上に飛び来つて變じて金色の釈迦仏となる、此の仏三十二相を具し面貌満月の如し、大音声を出して説て云く「假令法界に遍く善を断ちたる諸の衆生も一たび法華経を聞かば決定して菩提を成ぜん」云云、此の文字の中より大雨降りて無間地獄の炎をけす閻魔王は冠をかたづけ

て敬ひ獄卒は杖をすてて立てり、一切の罪人はいかなる事ぞとあはてたり、又法の一字来れり前の如し又蓮又華又経・此くの如し六十四字来つて六十四仏となりぬ、無間地獄に仏六十四体ましますば日月の六十四が天に出

たるごとし、天より甘露をくだして罪人に与ふ、抑此等の大善は何なる事ぞと罪人等 仏に問い奉りしかば六十四の仏の
答に云く我等が金色の身は栴檀・宝山よりも出現せず是は無間地獄にある烏竜が子の遺竜が書ける法華経八巻の題目の
八八・六十四の文字なり、彼の遺竜が手は烏竜が生める処の身分なり、書ける文字は烏竜が書くにてあるなりと説き給い
しかば無間地獄の罪人等は我等も娑婆にありし時は子もあり婦もあり眷属もありき、いかにど
ぶらはぬやらん又訪へとも善根の用の弱くして来らぬやらんと歎けども甲斐なし、或は一日・二日・一年・二年・
半劫・一劫になりぬるにかかる善知識にあひ奉つて助けられぬるとて我等も眷属となりて 利天にのぼるか、先ず汝をお
がまんとして来るなりとかたりしかば、夢の中につれしさ身にあまりぬ、別れて後又いつの世にか見んと思ひし親のすがたを
も見奉り仏をも拝し奉りぬ、六十四仏の物語に云く我等は別の主なし汝は我等が
檀那なり、今日よりは汝を親と守護すべし汝をこたる事なかれ、一期の後は必ず来つて都率の内院尊くべしと御約束あ
りしかば遺竜ことに畏みて誓いて云く今日以後外典の文字を書く可からず等云云、彼の世親菩薩が小乗経を誦せじと
誓い日蓮が弥陀念仏を申さじと願せしがごとし、さて夢さめて此の由を王に申す、大王の勅宣に云く此の仏事已に成じぬ
此の由を願文に書き奉れとありしかば勅宣の如くにし、さてこそ漢土・日本国は法華経にはならせ給いけれ、此の状は
漢土の法華伝記に候。

是は書写の功德なり、五種法師の中には書写は最下の功德なり、何に況や読誦など申すは無量無辺の功德なり、今の
施主十三年の間・毎朝読誦せらるる自我偈の功德は唯仏与仏・乃能究尽なるべし、夫れ法華経は一代聖教の骨髓なり
自我偈は二十八品のたましひなり、三世の諸仏は寿量品を命とし十方の菩薩も自我偈を眼目とす、自我偈の功德をば
私に申すべからず次下に分別功德品に載せられたり、此の自我偈を聴聞して仏になりたる人人の数をあげて候には小千・
大千・三千世界の微塵の数をこそあげて候へ、其の上薬王品已下の六品得道のもの自我偈

は我が子息しそく法蓮は子にはあらず善知識ぜんちしきなりとて娑婆世界しやばせかいに向つておがませ給たまうらん、是こそ実の孝養じうようにては候なれ。

抑そも法華經ほけきようを持つと申もうすは經は一なれども持つ事は時に随したがつて色色なるべし、或は身肉をさひて師に供養くようして仏になる

時もあり、又身を牀ゆかとして師に供養し又身を薪たきぎとなし、又此の經のために杖木じようもくをかほり又精進しじゆんし又持戒じかい上の如くすれども仏にならぬ時もあり時に依よつて不定なるべし、されば天台大師は適時而已てんだいだいし ちやくじにいと書かれ、章安大師は取捨得宜だいいし しゆしゃとくぎふ不可一向かいつう等云云。

問いつて云く何なる時か身肉を供養し何なる時か持戒じかいなるべき、答えて云く智者と申もうすは此くの如き時を知りて法華經ほけきようを弘通くつうするが第一の秘事だいいち ひじなり、たとへば渴者は水こそ用もちつる事なれ弓箭きうせん杖はよしなし、裸なる者は衣を求む水は用なしをもつて万を察すべし、大鬼神ありて法華經を弘通せば身を布施ふせすべし余の衣食は詮なし、惡王あつて法華經を失うしなは身命しんみづをほろぼすとも随したがうべからず、持戒精進の大僧等じかいしじゆんのだいそうとう法華經を弘通するやうにて而も失うしなうならば是を知しつて責せむべし、法華經に云く「我身命しんみづを愛せず但た無上道むじやうだうを惜おしむ」云云、涅槃經に云く「寧ろ身命しんみづを喪うしなうとも終に王の所説しよせつの言教げんきやうを匿かくさざれ」等云云、章安大師の云く「寧喪身命じやうさうしんみづ不匿教ふのくきやうとは身は輕く法は重し身を死ころして法を弘ひろむ」等云云。

然しかるに今日蓮いまにちれんは外見ごとの如くば日本第一の僻人びやくにんなり我が朝六十六箇国せんまんの百千万億ししゆうの四衆じやうげばんにん上下万人あだに怨あたまる、仏法ぶつぽう日本国にほんこくに渡わたつて七百余年これほどいまだ是程に法華經ほけきようの故ゆゑに諸人しよにんに惡にくまれたる者なし、月氏がつし漢土かんどにもありともきこえず又あるべしとおおばず、されば一閻浮提第一えんぶだい だいいちの僻人びやくにんぞかし、かかるものなれば上かみには一朝いちやうの威を恐れ下には万民ばんみんの嘲あざけりを顧かんみて親類しんるいもとぶらはず外人は申もうすに及およばず出世せしゆの恩のみならず世間の恩を蒙かかりし人も諸人しよにんの眼を恐おそれて口をふさがんためにや心に思はねども、そしるよしをなす、数度事にあひ両度御勘氣ごかんきを蒙かかりし

かば我が身の失に当るのみならず、行通人人の中にも、或は御勘気、或は所領をめされ、或は御内を出され、或は父母、兄弟に捨てらる、されば付きし人も捨てはてぬ今又付く人もなし、殊に今度の御勘気には死罪に及ぶべきがいが思はれけん佐渡の国につかはされしかば彼の国趣く者は死は多く生は稀なり、からくして行きつきたりしかば殺害謀叛の者よりも猶重く思はれたり、鎌倉を出でしより日に強敵かさなるが如し、ありとある人は念仏の持者なり、野を行き山を行くにもそばひらの草木の風に随つてそよめく声も、かたきの我を責むるかとおぼゆ、やうやく国にも付きめ北国の習なれば冬は殊に風はげしく雪ふかし衣薄く食ともし、根を移されし橘の自然にからたちとなりけるも身の上につみしられたり、栖にはおばな、がるかや、おひしげれる野中の三昧ばらにおちやぶれたる草堂の上は雨もり壁は風もたまらぬ傍に昼夜耳に聞く者はまくらにさゆる風の音、朝に眼に遮る者は遠近の路を埋む雪なり、現身に餓鬼道を経、寒地獄に墮ちぬ、彼の蘇武が十九年の間、胡国に留められて雪を食し李陵が巖窟に入つて六年衰をきてすこしけるも我が身の上なりき。

今適御勘気ゆりたれども鎌倉中にも且くも身をやどし迹を、とどむべき処なければ、かかる山中の石のはさま松の下に身を隠し心を静むれども大地を食とし草木を著ざらんより外は食もなく衣も絶えぬる処にいかなる御心ねにてかく、きわけて御訪のあるやらん、知らず過去の我が父母の御神の御身に入りかはらせ給うか、又知らず大覺世尊の御めぐみやあるらん涙こそ、おさがたく候へ。

問うて云く抑正嘉の大地震、文永の大彗星を見て自他の叛逆、我が朝に法華經を失う故としらせ給うゆ、如何、答えて云く此の二の天災、地天は外典三千余巻にも載せられず三墳・五典・史記等に記する処の大長星、大地震は、或は一尺二尺・一丈二丈・五丈六丈なり、まだ一天には見えず地震も、又是くの如し、内典を以て之を勘うるに、仏御入滅已後は、かかる大瑞出来せず、月支には弗沙密多羅王の五天の仏法を亡し十六大国の寺塔を焼き払い僧尼の頭

をはねし時もがかる瑞はなし、漢土には会昌天子の寺院、四千六百余所をとどめ僧尼、二十六万五百人を還俗せさせし時も出現せず、我が朝には欽明の御宇に仏法渡りて守屋、仏法に敵せしにも清盛法師、七大寺を焼き失ひ山僧等、園城寺を焼亡せしにも出現せざる大慧星なり。

当に知るべし是よりも大事なる事の一閻浮提の内に出現すべきなりと勘えて立正安国論を造りて最明寺入道殿に奉る、彼の状に云く詮取此の大瑞は他国より此の国をほろぼすべき先兆なり、禅宗、念仏宗等が法華經を失う故なり、彼の法師原が頸をきりて鎌倉ゆめの浜にすてずば国正に亡ぶべし等云云、其の後文永の大慧星の時は又手ににぎりて之を知る、去文永八年九月十二日の御勘氣の時重ねて申して云く予は日本国の棟梁なり我を失うは

国を失うなるべしと今は用いまじけれども後のためにとて申しにき、又去年の四月八日に平左衛門尉に對面の時蒙古国は無比かよせ候べきと問うに、答えて云く經文は月日をささず但し天眼のいかり頻りなり今年をばすべ

からずと申したりき、是等は如何にして知るべしと人疑うべし予不肖の身なれども法華經を弘通する行者を王臣人民之を怨む間、法華經の座にて守護せんと誓をなせる地神いかりをなして身をふるひ天神身より光を出して此の国をおどす、いかに諫むれども用いざれば結局は人の身に入つて自界叛逆せしめ他国より責むべし。

問うて云く此の事何たる証拠あるや、答う經に云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に星宿及び風雨皆時を以て行わずと等云云、夫れ天地は国の明鏡なり今、此の国に天災地天あり知るべし国主に失ありと云う事を鏡につかべたれば之を諍うべからず国主、小禍のある時は天鏡に小災見ゆ今の天災は当に知るべし大禍ありと云

う事を、仁王經には小難は無量なり中難は二十九、大難は七とあり此の經をば一には仁王と名づけ二には天地鏡と名づく、此の国主を天地鏡に移して見るに明白なり、又此の經文に云く「聖人去らん時は七難必ず起る」等云云、当に知るべし此の国に大聖人有りと、又知るべし彼の聖人を国主信ぜずと云う事を。

問うて云く先代に仏寺を失ひし時何ぞ此の瑞なきや、答えて云く瑞は失の輕重によりて大小あり此の度の瑞は怪むべし、一度二度にあらず一返二返にあらず年月をふるままに弥盛なり、之を以て之を察すべし先代の失よりも過ぎたる國主に失あり、國主の身にて万民を殺し又万臣を殺し又父母を殺す失よりも聖人を怨む事彼に過ぐる事を、今日本國の王臣並びに万民には月氏漢土総じて一閻浮提に仏滅後二千二百二十余年の間いまだなき大科人ごとにあるなり、譬えば十方世界の五逆の者を一処に集めたるが如し、此の國の一切の僧は皆提婆瞿伽利が魂を移し國主は阿闍世王波瑠璃王の化身なり、一切の臣民は兩行大臣月称大臣刹陀耆利等の惡人をあつめて日本國の民となせり、古は二人三人逆罪不孝の者ありしかばこそ其の人の在所は大地も破れて入りぬれ、今は此の國に充滿せる故に日本國の大地一時にわれ無間に墮ち入らざらん外は一人二人の住所の墮つべきやうなし、例せば老人の二の白毛をば抜けども老耄の時は皆白毛なれば何を分けて抜き捨つべき只一度に剃捨る如くなり、問うて云く汝が義の如きは我が法華經の行者なるを用いざるが故に天変地天等ありと、法華經第八に云く「頭破れて七分と作らんと、第五に云く若し人惡み罵れば口則ち閉塞す」等云云、如何ぞ数年が間罵とも怨とも其の義なきや、答う反詰して云く不輕菩薩を毀し罵詈し打擲せし人は口閉頭破ありけるか如何、問う然れば經文に相違する事如何、答う法華經を怨む人に二人あり、一人は先生に善根ありて今生に縁を求めて菩提心を発して仏になるべき者は或は口閉ぢ或は頭破る、一人は先生に謗人なり今生にも謗し生生に無間地獄の業を成就せる者あり是はのれども口則ち閉塞せず、譬えば獄に入つて死罪に定まる者は獄の中にて何なる僞事あれども死罪を行ううまでにて別の失なし、ゆりぬべき者は獄中にて僞事あればこれをいましむるが如し、問うて云く此の事第一の大事なり委細に承わるべし、答えて云く涅槃經に云く法華經に云く云云。

夫れ法華經第一方便品に云く諸仏の智慧は甚深無量なり云云、釈に云く境淵無辺なる故に甚深と云い智水測り難き故に無量と云つと、抑此の経釈の心は仏になる道は豈境智の二法にあらずや、されば境と云うは万法の体を云い智と云うは自体顯照の姿を云うなり、而るに境の淵ほとりなく、ふかき時は智慧の水ながる事つがなし、此の境智合しぬれば即身成仏するなり、法華以前の経は境智各別にして而も権教方便なるが故に成仏せず、今法華經にして境智一如なる間開示悟入の四仏知見をさとりて成仏するなり、此の内証に声聞辟支仏更に及ばざるところを次下に一切声聞辟支仏所不能知と説かるるなり、此の境智の二法は何物ぞ但南無妙法蓮華經の五字なり、此の五字を地涌の大地を召し出して結要付属せしめ給う是を本化付属の法門とは云うなり。然るに上行菩薩等末法の始の五百年に出生して此の境智の二法たる五字を弘めさせ給うべしと見えたり經文赫赫たり明明たり誰か是を論ぜん、日蓮は其の人にも非ず又御使にもあらざれども先序分にあらあら弘め候なり、既に上行菩薩釈迦如来より妙法の智水を受けて末代惡世の枯槁の衆生に流れかよはし給う是れ智慧の義なり、釈尊より上行菩薩譲り与へ給う然るに日蓮又日本国にして此の法門を弘む、又是には總別の二義あり總別の二義少しも相そむけば成仏思もよらず輪廻生死のもといたらん、例せば大通仏の第十六の釈迦如来に下種せし今日の声聞は全く弥陀・薬師に遇て成仏せず譬えば大海の水を家内々々み来らんには家内の者皆縁をふるべきなり、然れども汲み来るところの大海の一滴を闇きて又他方の大海の水を求めん事は大僻案なり大愚癡なり、法華經の大海の智慧の水を受けたる根源の師を忘れて余心をうつさば必ず輪廻生死のわざはいなるべし、但し師なりと

も誤あやまり ある者をば捨つべし又捨てざる義も有るべし世間せけん 仏法の道理ぶつぽう とうり によるべきなり、末世の僧等は仏法の道理をばしらずして我慢がまん に著つま して師をいやしみ檀那だんな をつらふなり、但正直しんじき にして少欲知足たらん僧こそ眞実しんじつ の僧なるべけれ、文句の二に云く「既に未だ眞を發さざれば第一義天に慙は じ諸の聖人に愧は ず即是れ有羞の僧なり觀慧若かんねも 發するは即眞実の僧なり」云云、涅槃經に云く「若し善比丘あつて法を壞る者を見て置いて呵責かしゃく し驅遣くけん し挙処こしよ せずんば當に知るべし是の人は佛法の中の怨なり、若し能く驅遣くけん し呵責かしゃく し挙処こしよ せんは是れ我が弟子其の声聞しょうもん なり」云云、此の文の中に見壞法者の見と置不呵責ちふかしやく の置とを能く能く心腑しんぶ に染む可きなり、法華經の敵を見ながら置いてせめずんば師檀したん ともに無間地獄むげんじごく は疑うたがひ になかるべし、南岳大師なんがくだいし の云く「諸の惡人と俱とも に地獄に墮お ちん」云云、謗法ぼうほう を責めずして成仏じやうぶつ を願はば火の中に水を求め水の中に火を尋たず ぬるが如くなるべしはかなし、何に法華經を信じ給うとも謗法ぼうほう あらば必ず地獄じごく にをつべし、うるし千ばいに蟹の足一つ入れたらんが如し、毒氣深入どくけ ほんしん 矢本心故これ は是なり、經に云く「在い 在諸の仏土に常に師とも と俱とも に生ぜん」又云く「若し法師ほふし に親近しんこん せば速すみや かに菩薩ぼさつ の道をを 得ん是の師こ に隨順ずいじゆん して学まな せば恒沙じやうしゃ の仏を見たてまつることを得ん」又云く「本此の仏に従つて初めて道心どうしん を發おこ し亦此の仏に従つて不退地ふたい に住す」又云く「初め此の仏菩薩ぼさつ に従つて結縁けちえん し還また 此の仏菩薩ぼさつ に於て成就じやうじゆ す」云云、返す返すも本從たがずして成仏じやうぶつ せしめ給うべし、釈尊しやくそん は一切衆生いっさいじゆしやう の本從の師し にて而も主親の徳を備た へ給う、此法門ほふもん を日蓮申にちれんもう 故に忠言耳ちゆうごんみみ に逆さか り道理どうり なるが故に流罪るい せられ命にも及びしなり、然どもいまだこりず侯ほけきやう 法華經は種たね の如く仏はつ今の如く衆生は田の如くなり、若し此等の義をたがへさせ給はば日蓮も後生は助け申すまじく候、恐恐謹言。

建治二年丙子八月三日

曾谷殿

日蓮花押

妙法蓮華經一部一卷小字經、御供養のために御布施に小袖二重・鷲目十貫・並に扇百本、文句の一に云く「如とは所聞の法体を掌ぐ」と、記の一に云く「若し超八の如是に非ずんば安ぞ此の經の所聞と為さん」云云、華嚴經の題に云く「大方広仏華嚴經、如是我聞」云云、「摩訶般若波羅蜜經、如是我聞」云云、大日經の題に云く「大毘盧遮那神變加持經、如是我聞」云云、一切經の如是は何なる如是ぞやと尋ねば、上の題目を指して如是とは申すなり、仏、何の經にてもとかせ給ひし其の所詮の理をさして題目とはせさせ給ひしを、阿難・文殊・金剛手等滅後に結集し給ひし時、題目をうちをいて「如是我聞」と申せしなり、一經の内の肝心な題目におさまれり、例せば天竺と申す国あり、九万里・七十箇国なり、然れども其中の人畜草木・山河・大地・皆月氏と申す二字の内にれきれたり、譬は一四天下の内に四洲あり、其の一切の万物は月に移てすこしもかくる事なし、經も又是くの如く、其の經の中の法門は其の經の題目の中にあり、阿含經の題目は一經の所詮・無常の理をおさめたり、外道の經の題目のあつて二字にすぐれたる事百千万倍なり、九十五種の外道・阿含經の題目を聞いてみな邪執を倒し、無常の正路におもむきぬ、般若經の題目を聞ては体空・但中・不但中の法門をさと、華嚴經の題目を聞く人は但中・不但中のさとあり、大日經・方等・般若經の題目を聞く人は或は析空、或は体空・或は但空・或は不但空・或は但中・不但中の理をばさとれども、いまだ十界互具・百界千如・三千世間の妙覺の功德をばきかず、その詮を説かざれば、法華經より外は理即の凡夫なり、彼の經經の仏菩薩はいまだ法華經の名字即に及ばず、何に況や題目をも唱えざれば觀行即にいたるべしや、故に妙樂大師の記に云く「若し超八の如是に非ずんば、安ぞ此の經の所聞と為さん」云云、

かれがれ 彼の諸経の題目は八教の内なり、網目の如し、此の経の題目は八教の網目に超えて大綱と申す物なり、今妙法蓮華經と申す人人はその心をしられども、法華經の心をつるのみならず、一代の大綱を覺り給へ、例せば一、二、三歳の太子位につき給ひぬれば、国は我が所領なり、摂政関白已下は我が所従なりとは、しらせ給はねども、なにも此の太子の物なり、譬は小児は分別の心なけれども、悲母の乳を口にのみぬれば自然に生長するを、趙高が様に心おこれる臣下ありて、太子をあなづれば身をほろぼす、諸経・諸宗の学者等、法華經の題目ばかりを唱ふる太子をあなづりて、趙高が如くして無間地獄に墮つるなり、又法華經の行者の、心もしらず題目計りを唱ふるが、諸宗の智者におどされて退心をおこすは、こがいと申せし太子が趙高におどされころされしが如し。

南無妙法蓮華經と申すは一代の肝心たるのみならず、法華經の心なり、体なり、所詮なり、かかるいみじき法門なれども仏滅後二千二百二十余年の間、月氏に付法蔵の二十四人弘通し給はず、漢土の天台・妙樂も流布し給はず、日本国には聖徳太子・伝教大師も宣説し給はず、されば和法師が申すは僻事にてこそ有るらめと諸人疑て信ぜず、是れ又第一の道理なり、譬は昭君などを、あやしの兵などがおかしたてまつるを、みな人よもさはあらじと思へり、大臣公卿などのご様な天台・伝教の弘通なからん法華經の肝心・南無妙法蓮華經を、和法師程のものがいかで唱ふべしと云云、汝等是を知るや・鳥と申す鳥は無下のげす鳥なれども、驚の知らざる年中の吉凶を知れり、蛇と申す虫は竜象に及ばずとも、七日の間の洪水を知るぞかし、設い竜樹天台の知り給はざる法門なりとも

經文顯然ならばなにをか疑はせ給ふべき、日蓮をいやしみて南無妙法蓮華經と唱させ給はぬは、小児が乳をつたがふてなめず病人が医師を疑て藥を服せざるが如し、竜樹・天親等は是を知り給へども、時なく機なければ弘通し給はざるか、余人は又しらずして宣伝せざるか、仏法は時により機によりて弘まる事なれば、云ふにかひなき日蓮が時にこそあたりて候らめ。

所詮妙法蓮華經の五字をば當時の人人は名と計りと思へり、さにては候はず、体なり、体とは心にて候、章安云く「蓋し
序王は經の玄意を叙し、玄意は文の心を述す」云云、此の釈の心は妙法蓮華經と申すは文にあらず、義にあらず、一經の
心なりと釈せられて候、されば題目をはなれて法華經の心を尋める者は、をはなれて肝をたづねしはかなき龜なり、
山林をすてて菓を大海の辺にもとめし、猴なり、はかなし、はかなし。

建治三年丁丑霜月二十八日 日蓮花押

曾谷次郎入道殿

一六六 曾谷殿御返事 弘安二年八月 五十八歳御作

1059p

焼米二俵給畢ぬ、米は少と思食し候へとも人の寿命を継ぐ者にて候、命をば三千大千世界にても買はぬ物にて候と仏は
説かせ給へり、米は命を継ぐ物なり譬えば米は油の如く命は燈の如し、法華經は燈の如く行者は油の如し檀那是油の
如く行者は燈の如し、一切の百味の中には乳味と申して牛の乳第一なり、涅槃經の七に云く「猶諸味の中に乳最も為れ
第一なるが如し」云云、乳味をせんずれば酪味となる酪味をせんずれば乃至醍醐味となる

醍醐味は五味の中の第一なり、法門を以て五味にたとへば儒家の三千外道の十八大經は衆味の如し、阿含經は醍醐味な
り、阿含經は乳味の如く觀經等の一切の方等部の經は酪味の如し、一切の般若經は生蘇味、華嚴經は熟蘇味、無量義經と
法華經と涅槃經とは醍醐のごとし又涅槃經は醍醐のごとし法華經は五味の主の如し、妙樂大師

云く「若し教旨を論ずれば法華は唯開權顯遠を以てて教の正主と為す独り妙の名を得る意此に在り」云云、又云く「故に
知んぬ法華は為れ醍醐の正主」等云云、此の釈は正しく法華經は五味の中にはあらず此の釈の心は五味は

壽命をやしなふ壽命は五味の主なり、天台宗には二の意あり一には華嚴・方等・般若・涅槃・法華は同じく醍醐味なり、此の釈の心は爾前と法華とを相似せるにたり世間の學者等此の筋のみを知りて法華經は五味の主と申す法門に迷惑せるゆへに諸宗にたばらかさるるなり、開末開異なれども同じく円なりと云云是は迹門の心なり、諸經は五味法華經は五味の主と申す法門は本門の法門なり、此の法門は天台・妙樂粗書かせ給い候へとも分明ならざる間學者の存知すくなし、此の釈に若論教旨とかかれて候は法華經の題目を教旨とはかかれて候、開權と申すは五字の中の華の一字なり顯遠とかかれて候は五字の中の蓮の一字なり獨得妙名とかかれて候は妙の一字なり、意在於此とかかれて候は法華經を一代の意と申すは題目なりとかかれて候ぞ、此れを以て知んぬべし法華經の題目は一切經の神・一切經の眼目なり、大日經等の一切經をば法華經にてこそ開眼供養すべき処に大日經等を以て一切の木画の仏を開眼し候は日本國の一切の寺塔の佛像等形は仏に似れども心は仏にあらず九界の衆生の心なり、愚癡の者を智者とすることはより始まり、國のついでのみ入て祈とならず還て仏變じて魔となり鬼となり國主乃至萬民をわづらはす是なり、今法華經の行者と檀那との出來する故に百獸の師子王をいとひ草木の寒風をおそるるが如し、是は且くをく法華經は何故ぞ諸經に勝れて一切衆生の爲に用いる事なるぞと申すに譬えば草木は大地を母とし虚空を父とし甘雨を食とし風を魂とし日月をめのととして生長し華さき菓なるが如く、一切衆生は實相を大地とし無相を虚空とし一乘を甘雨とし已今當第一の言を大風とし定慧力莊嚴を日月として妙覺の功德を生長し大慈大悲の華さかせ安樂仏果の菓なつて一切衆生を養ひ給ふ、一切衆生又食するによりて壽命を持つ、食に多數あり土を食し水を食し火を食し風を食する衆生もあり、求羅と申す虫は風を食す・うつろもちと申す虫は土を食す、人の皮肉・骨髓等を食する鬼神もあり、尿糞等を食する鬼神もあり、壽命を食する鬼神もあり、声を食する鬼神もあり、石を食するいをくろがねを食するばくもあり、地神・天神・竜神・日月・帝釈・犬

梵王・二乗 菩薩 仏は仏法をなめて身とし魂とし給ふ、例せば乃往過去に輪陀王と申す大王ましましき一閻浮提の主なり賢王なり、此の王はなに物をか供御とし給うと申せば白馬の鳴声をきこしめて身も生長し身心も安穩にしてよをたち給う、れいせば蝦蟇と申す虫の母のなく声を聞いて生長するがごとし、秋のはぎのしかの鳴くに華のさくがごとし、象牙草のいかづちの声にはらみ柘榴の右にあふてさかつるがごとし、されば此の王 白馬ををほくあつめてかはせ給ふ、又此の白馬は白鳥をみてなく馬なれば、をほくの白鳥をあつめ給いしかば我が身の安穩なるのみならず百官 万乗もさか天下も風雨 時にしたかひ他国もかうべをかたづけてすねんすこし給うにまつり事のさるにやはむべりけん又宿業によつて果報や尽きけん 千万の白鳥一時につせしかば又無量の白馬もなく事やみぬ、大王は白馬の声をきかざりしゆへに華のしほめるがごとく月のしよくするがごとく、御身の色かはり力よはく六根もうつもつとしてほれたるがごとくありしかば、きさきももつもつしくならせ給ひ百官万乗もいかにがせんとなげき、天もくもり地もふるひ大風かんぱちしかやくびよに人の死する事肉はつか骨はかはらとみへしかば他国よりもをそひ来れり、此時大王いかにがせんとなげき給いしほどにせんする所は仏神にいのるにはしくべからず、此の国にもとより外道をほく国をふさげり、又仏法といつ物ををほくあがめをきて国の大事とす、いづれにてもあれ白鳥をいだして白馬をなかせん法をあがむべし、まづ外道の法にをほせつけて数日をこなはせけれども白鳥一足もいでず白馬もなく事なし、此の時外道のいのりをとどめて仏教にをほせつけられけり、其の時馬鳴菩薩と申す小僧一人ありめしだされければ此の僧の給はく國中に外道の邪法をとどめて仏法を弘通し給うべば馬をなかせん事やすしといふ、勅宣に云くをほせのごとくなるべしと、其の時に馬鳴菩薩 三世十方の仏にきしやうし申せしかばたちまちに白鳥出来せり、白馬は白鳥を見てここなきけり、大王 馬の声をここへきこしめて眼を開き給ひ白鳥二ひき乃至百千にきたりければ百千の

はくばいちじ 白馬一時に悦びなきけり、大王の御いろなをると日しよくのほんにふくするがごとし、身の力心のはかり事、先先には
せんまん 百千万ばいこたり、きさきもよろこび大臣・公卿いさみて万民もたな心をあはせ他国もかうべをかたぶけたりとみ
候。

今のも又是にたがうべからず、天神七代・地神五代・已上十二代は成劫のごとし、先世のかいりきと福力とによつて
今生のはげみなければも国もおさまり人の寿命も長し、人王のよとなりて二十九代があひだは先世のかいりきもすこし
よはく今生のまつり事もはかなかりしかば国にやつやく三災・七難をこりはじめたり、なをがんど

より三皇・五帝の世ををさむべきふみわたりしかば其をもつて神をあがめて国の災難をしづむ、人王第三十代欽明天王の
世となりて国には先世のかいふくすく悪心がうじやうの物をほく出来て善心をろかに悪心はかしこし、外典のをしは
あさしつみをもきゆへに外典すてられ内典になりしなり、れいせばもりやは日本の天神七代

地神五代が間の百八十神をあがめたてまつりて仏教をひろめずしてもとの外典となさんといのりき、聖徳太子は教主
釈尊を御本尊として法華経・一切経をもんしよとして両方のせうぶありしに、ついに神はまけ仏はかたせ給いて神国はじ
めて仏国となりぬ、天竺・漢土の例のごとし、今此三界皆是我有の経文あらはれさせ給うべき

序なり、欽明より桓武にいたるまで二十よ代・二百六十余年が間、仏を大王とし神を臣として世ををさめ給いしに仏教は
すぐれ神はをとりたりしかども未だよをさまる事なし。

いかなる事にやとつたがはりし程に桓武の御宇に伝教大師と申す聖人出来して勸えて云く神はまけ仏はかたせ給いぬ、
仏は大王・神は臣かなれば上下あひついでれいぎただしければ國中をさまるべしとをもふに国のしづかならざる事ふしん
なるゆへに一切経をかんがへ候へば道理にて候けるぞ、仏教にをほきなるとがありけり、一切経の中に法華経と申す大王
をはします、ついで華嚴経・大品経・深密経・阿含経等はあるいは臣の位あるいは

さふらいのくらいあるいはたみの位なりけるを、或は般若経は法華經にはすぐれたり三論宗、或は深密經は法華經にすぐれたり法相宗、或は華嚴經は法華經にすぐれたり華嚴宗、或は律宗は諸宗の母なりなど申して一人として法華經の行者なし、世間に法華經を誦誦するは還つてをこつきうしなうなり、之に依つて天もいかり守護の善神も力よはし云云、所謂「法華經をほむといえども返つて法華の心をこらす」等云云、南都・七大寺・

十五大寺、日本国中の諸寺、諸山の諸僧等、此のことばをききてをほきにいかり天竺の大神、漢土の道士、我が国に出来せり所謂最澄と申す小法師是なり、せんする所は行きあはむする処にてかしらをわれがたをきれをとせ・

うてのれと申せしかども桓武天皇と申す賢王たづね、おきらめて六宗はひが事なりけりとて初めてひい山をこりうしててんだい、法華宗とさだめをかせ円頓の戒を建立し給うのみならず、七大寺・十五大寺の六宗の上に法華宗をそをかる、せんする所六宗を法華經の方便となされしなり、れいせば神の仏にまけて門まほりとなりしが

ごとし、日本国も又かくのごとし法華最第一の經文初めて此の国に顯れ給ひ能竊為一人、説法華經の如來の使初めて此の国に入り給ひぬ、桓武・平城・嵯峨の三代二十余年が間は日本一州、皆法華經の行者なり、しかれば梅檀には伊蘭、釈尊には提婆のごとく、伝教大師と同時に弘法大師と申す聖人出現せり、漢土にわたりて大日經・真言宗をならい日本国にわたりてありしかども、伝教大師の御存生の御時はいたう法華經に大日經すぐれたりといふ

事はいはざりけるが、伝教大師去ぬる弘仁十三年六月四日にかくれさせ給いてのちひまをえたりとや、をもひけん、弘法大師去ぬる弘仁十四年正月十九日に真言第一・華嚴第二・法華第三・法華經は戲論の法、無明の辺域、天台宗等は盗人なりなど申す書どもをつくりて、嵯峨の皇帝を申しかすめたてまつりて七宗に真言宗を申しくはえて七宗を方便とし、真言宗は真実なりと申し立て畢んぬ。

其の後、日本一州の人ごとに真言宗になりし上、其の後又伝教大師の御弟子慈覺と申す人、漢土にわたりて天台

眞言の二宗の奥義をきはめて帰朝す、此の人金剛頂經、蘇悉地經の一部の疏をつくりて前唐院と申す寺を叡山に申し立て畢んぬ、此れには大日經第一法華經第二其の中に弘法のごとなる過言かずうべからず、せむぜむにせうせう申し畢んぬ、智証大師又此の大師のあとをついでをんじやう寺に弘通せり、たうじ寺とて国のわざはいとみゆる寺是なり、叡山さんぜんは慈覚智証をはずすは眞言すぐれたりと申すをばもちいぬ人もありな

の三千人は慈覚智証をはずすは眞言すぐれたりと申すをばもちいぬ人もありな
ん、円仁大師に一切の諸人くちをふさがれ心をたばらかされてことばをいたす人なし、王臣の御きえも又伝教弘法にも超過してみ候へい山七寺日本一州一同に法華經は大日經にをとりと云云、法華經の弘通の寺寺ごとに眞言ひろまりて法華經のかしらとなれり、かくのごとくしてすでに四百余年になり候いぬ、やうやく此の邪見ぞうじやうして八十一乃至五の五王すでにつせめ仏法うせしかば王法すでにつき畢んぬ。

あまつさへ禪宗と申す大邪法念仏宗と申す小邪法眞言と申す大惡法此の惡宗はなをならべて一国にさかんなり、天照太神はたましいをうしなつてうだごをまほらず八幡大菩薩は威力よはくして国を守護せずけつくは他国の物とならむとす、日蓮此のよしを見るゆへに仏法中怨、俱墮地獄等のせめをおそれて粗国主にしめせども、かれらが邪義にたばらかされて信じ給う事なし還つて大怨敵となり給いぬ法華經をうしなふ人国中に充滿せり

と申せども人しる事なければただぐちのとがばかりにてある事今は又法華經の行者出来せり日本国の人人癡の上にかりををす邪法をあやし正法をにくむ、三毒がうじやうなる一国いかでか安穩なるべき、壞劫の時は大の三災をくる、いはゆる火災水災風災なり、又滅劫の時は小の三災をくる、ゆはゆる飢渴疫病合戦なり、飢渴

は大貪よりをこりやくびやうはぐちよりをこり合戦は瞋恚よりをくる、今日本国の人人四十九億九万四千八百二十八人の男女人人ことなれども同じく一の三毒なり、所謂南無妙法蓮華經を境としてをこれる三毒なれば人ごとに釈迦多宝・十方の諸仏を一時にのりせめ流しうしなうなり、是れ即ち小の三災の序なり。

しかるに日蓮にちれんが一いるいかなる過去かこの宿しゆくしうにや法華經ほけきよつの題目だいもくのだんとなり給たまうらん、是これをもつてをばしめせ今梵天ほんてん・
帝釈たいしゃく・日月にちがつ・四天してん・天照太神てんしやうだいじん・八幡大菩薩はちまんたいぼさつ日本国にほんこくの三千一百三十二社さんぜんの大小だいしやうのじんぎは過去かこの輪陀王りんだおうのごとし、白馬はくばは
日蓮にちれんなり白鳥いちもんは我われらが一門いもんなり白馬はくばのなくは我等われらが南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきよつのこえなり、此この声をきかせ給たまう梵天ほんてん・帝釈たいしゃく・日月にちがつ・
四天等してんいかでか色をましひかりをさかんになし給たまはざるべき、いかでか我等われらを守護しゆごし給たまはざるべきとつよつよとをばしめす
べし。

抑そもそ貴辺きへんの去いめる三月ぶつじの御仏事がもくそに驚目おどろ其この数有ありしかば今年ことし一百よ人ひゃくにんの人を山中やまなかにやしなひて十二時じふにじの法華經ほけきよつをよま
しめ談義だんぎして候こぞ、此これらは末代惡世まつだいあくせには一いえんぶだい第一だいいちの仏事ぶつじにてこそ候こへいくそばくか過去かこの聖靈しやうりやうもうれしくを
ばすらん、釈尊しやくそんは孝養こやうの人を世尊せそんとなづけ給たまへり貴辺きへんあに世尊せそんにあらずや、故大進阿闍梨あじやりの事ことなげかしく候こへども此これ又
法華經ほけきよつの流布りふの出来しゆたいすべきいんえんにてや候こらんとをばしめすべし、事事命じじめいながらは其そのの時申ときもうすべし。

弘安二年己卯八月十七日 日蓮花押にちれんかおう

曾谷そや道宗御返事ごへんじ

一六七 曾谷二郎入道殿御返事そや じろうにんどうのうゑごへんじ

1065p

去いる七月十九日しちがつじゅうきゅうにちの消息しそく、同三十日どうさんじつ到来らいす、世間せけんの事は且しからく之を置く、専ら仏法ぶつぽうに逆さかふこと法華經ほけきよつの第二だいにに云く
「其人命終入阿鼻獄にじにんみよしうにやうあびじく」等云云、問て云く、其の人とは、何等なんらの人を指すや、答て云く、次上に云く「唯我一人能為救護のうい まも雖
復教詔きふしうしやく 而不信受しんじゆ」と、又云く「若人不信にやくにんふしん」と、又云く「或復顰蹙ある」と、又云く「見有誹誦書持經者どくしゆ じきやう 輕賤憎嫉 而懷結恨のうい まも」
復教詔きふしうしやく 而不信受しんじゆ」と、又云く「若人不信にやくにんふしん」と、又云く「或復顰蹙ある」と、又云く「見有誹誦書持經者どくしゆ じきやう 輕賤憎嫉 而懷結恨のうい まも」

と、又第五に云く「生疑不信者・即当墮惡道」と、第八に云く「若有人輕毀之言・汝狂人耳・空作是行終無所獲」等云云、
「其人」とは、此れ等の人人を指すなり、彼の震旦国の天台大師は、南北十師等を指すなり、此の日本国の伝教大師は、
六宗の人人と定めたるなり、今日蓮は弘法・慈覺・智証等の三大師、並に三階・道綽・善導等
を指して其のひと云ふなり、入阿鼻獄とは、涅槃經第十九に云く「仮使ひとり人独り是の獄に墮ち、其の身長大にして八万
由延なり、其の中間に満して空しき処無し、其の身周圍して種種の苦を受く設ひ多人有て、身亦満すとも相ひ妨碍
せず」、同三十六に云く「沈没して阿鼻地獄に在て、受くる所の身形・縱広八万四千由旬ならん」等云云、普賢經に云く
「方等經を謗する是の大惡報惡道に墮つべきこと暴雨にも過ぎ必定して當に阿鼻地獄に墮つべし」等とは、阿鼻獄に入る文
なり。

日蓮云く、夫れ日本国は、道は七、国は六十八箇国、郡は六百四、郷は一万余、長さは三千五百八十七里、人数は四十
五億八万九千六百五十九人、或は云く四十九億九万四千八百二十八人なり、寺は一万一千三十七所、社は三千一百三
十二社なり、今法華經の入阿鼻獄とは、此れ等の人人を指すなり、問て云く、衆生に於て惡人善人の二類有り、生処も
又善惡の二道有るべし、何ぞ日本国の一切衆生、一同に入阿鼻獄の者と定むるや、答て云く、人数多しと雖も業を造るこ
と是れ一なり、故に同じく阿鼻獄と定むるなり。

疑て云く日本国の一切衆生の中に、或は善人、或は惡人あり善人とは五戒・十戒、乃至二百五十戒等なり、惡人とは、
殺生・偷盜、乃至五逆・十惡等はなり、何ぞ一業と云ふや、答て云く、夫れ小善・小惡は異なりと雖も、法華經の誹謗に
於ては、善人惡人・智者愚者、俱に妨げ之れ無し、是の故に同じく入阿鼻獄と云ふなり、問て云く、何を以てか日本国の
一切衆生を、一同に法華誹謗の者と言ふや、答て云く、日本国の一切衆生衆多なりと雖も四十五億八万九千六百五十
九人に過ぎず、此等の人人貴賤上下の勝劣有りと雖も是くの如きの人人の憑む所は唯三大師に在り

師とする所三大師を離る事無し余残の者有りと雖も信行・善導等の家を出ずべからざるなり、問て云く三大師とは誰人ぞや、答て曰く、弘法・慈覚・智証の三大師なり、疑て云く此の三大師は何なる重科有るに依て、日本国の一切衆生於経文の其の人の内に入るや、答て云く、此の三大師は大小乗持戒の人、面には八万の威儀を備へ、或は三千等之を具す、顕密兼学の智者なり、然れば則ち、日本国四百余年の間、上一人より下万民に至るまで、之を仰ぐこと日月の如く、之を尊むこと世尊の如し、猶徳の高きこと須弥にも超え、智恵の深きことは蒼海にも過ぎたるが如し但恨むらくは法華經を大日真言經に相對して勝劣を判ずる時は、或は戲論の法と云ひ、或は第二第三と云ひ、或は教主を無明の辺域と名け、或は行者をば盗人と名く彼の大莊嚴仏の末の六百四万億那由佗の四衆の如き、各各

の業因異りと雖も、師の苦岸等の四人と俱に同じく無間地獄に入りぬ、又師子音王仏の末法の無量無辺の弟子等の中にも貴賤の異有りと雖も同じく勝意が弟子と為るが故に一同に阿鼻大城に墮ちぬ今日日本国亦復是くの如し。

去る延暦弘仁年中、伝教大師六宗の弟子檀那等を呵責する語に云く「其の師の墮つる所弟子亦墮つ、弟子の墮つる所檀越亦墮つ、金口の明説慎まざるべけんや、慎まざるべけんや」等云云、疑て云く、汝が分齊何を以て三大師を破するや、答て云く、予は敢て彼の三大師を破せざるなり、問て云く、汝が上の義は如何、答て云く、月氏

より漢土本朝に渡る所の経論は五千七十余卷なり、予粗之を見るに、弘法・慈覚・智証に於ては、世間の科は且く之を置く、仏法に入ては、謗法第一の人人と申すなり、大乘を誹謗する者は、箭を射るより早く地獄に墮すとは如来の金言なり、将又謗法罪の深重は弘法・慈覚等一同定め給ひ畢ぬ、人の語は且く之を置く、釈迦・多宝の二仏の金言虚妄ならずんば、弘法・慈覚・智証に於ては定めて無間・大城に入らん、十方分身の諸仏の舌墮落せずんば、日本国中の四十五億八万九千六百五十九人の一切衆生は、彼の苦岸等の弟子檀那等の如く阿鼻地獄に墮て熱鉄の上に於て仰ぎ臥して九百万億歳伏臥して九百万億歳・左脇に臥して九百万億歳・右脇に臥して九百万億歳、是くの如く熱鉄

の上に在て三千六百万億歳なり、然して後、此の阿鼻より転じて他方に生れて大地獄に在て、無数百千万億那由佗歳大苦惱を受けん、彼は小乗經を以て樞大乘を破せしも、罪を受くることは是くの如し、況や今三大師は末頭真実の經を以て三世の仏陀の本懷の説を破するのみに非ず、剩さえ一切衆生成仏の道を失ふ、深重の罪は、過現未來の諸仏も、争か之を窮むべけんや、争か之を救ふべけんや。

法華經の第四に云く「已説今説当説而於其中此法華經最為難信難解」、又云く「最在其上」、並に「藥王十喻」等云云、他經に於ては、華嚴・方等・般若・深密・大雲・密嚴・金光明經等の諸教の中に、經經の勝劣之を説くと雖も、或は小乗經に對して此の經を第一と曰ひ、或は眞俗二諦に對して中道を第一と曰ひ、或は印真言等を説くを以て第一と爲す、此等の説有りと雖も、全く已今當の第一に非ざるなり、然而るに末の論師人師等、謬執の年積り、門徒又繁多なり。

爰に日蓮彼の依經に無きの由を責むる間・弥よ瞋恚を懷て是非を糾明せず唯大妄語を構て国主・国人等を誑惑し、日蓮を損ぜんと欲す、衆千の難を蒙らしむるのみに非ず兩度の流罪・剩・額の座に及ぶ是なり、此等の大難忍び難き事不輕の杖木にも過ぎ、將又勸持の刀杖にも越えたり、又法師品の如きは、末代に法華經を弘通せん者は、如来の使なり此の人を輕賤するの輩の罪は、教主・釈尊を一中劫蔑如するに過ぎたり等云云、今日日本国には提婆達多・大慢婆羅門等が如く無間地獄に墮つべき罪人、國中三千五百八十七里の間に、満つる所の四十五億八万九千六百五十九人の衆生之れ有り彼の提婆・大慢等の無極の重罪を、此の日本国四十五億八万九千六百五十九人に對せば、輕罪中の輕罪なり問ふ其の理如何答ふ彼等は、惡人爲りと雖も全く法華を誹謗する者には非ざるなり又提婆達多是恒河第二の人にして第二に一闡提なり今日日本国四十五億八万九千六百五十九人は皆恒河第一の罪人なり、然れば則ち提婆が三逆罪は輕毛の如し日本国の上に挙ぐる所の人人の重罪は猶大石の如し定めて梵釈も日本国を捨て

同生同名も国中の人を離れ、天照太神・八幡大菩薩も争か此の国を守護せん。

去る治承等の八十一・二三四五代の五人の大王と頼朝・義時と此の国を御諍ひ有て天子と民との合戦なり猶鷹駿と金鳥との勝負の如くなれば、天子頼朝等に勝たんこと必定なり、決定なり、然りと雖も五人の大王は負け畢ぬ、兎、師子王に勝ちしなり、負くるのみに非ず、剩へ或は蒼海に沈み、或は島島に放たれ、誹謗法華未だ年歳を

積まざる時、猶以て是くの如し、今度は彼に似るべからず、彼は但国中の災い許りなり、其の故は粗之を見るに、蒙古の牒状已前に、去る正嘉・文永等の大地震・大彗星の告げに依て、再三之を奏すと雖も、国主敢て信用無し、然るに日蓮が勸文粗仏意に叶ふかの故に、此の合戦既に興盛なり、此の国の人人今生には一同に修羅道に墮し、後生には皆阿鼻大城に入らん事、疑ひ無き者なり。

爰に貴辺と日蓮とは師檀の一分なり、然りと雖も、有漏の依身は国主に随ふが故に、此の難に値はんと欲するか、感涙押難し、何れの代にか対面を遂げんや、唯一心に靈山淨土を期せらるべきか、設ひ身は此の難に値ふとも、心は仏心に同じ、今生は修羅道に交はるとも、後生は必ず仏国に居せん、恐恐謹言。

弘安四年閏七月一日

日蓮 花押

曾谷二郎入道殿御返事

於安房保田

御文委く承り候い畢んぬ、御文に云く末法の始・五百年にはいかなる法を弘むべしと思ひまいらせ候しに聖人の仰を承り候に法華經の題目に限つて弘むべき山・聴聞申して御弟子の一分に定まり候、殊に五節供はいかなる由来・何なる所表・何を以て正意としてまつり候べく候や云云、夫れ此の事は日蓮委しく知る事なし、然りと雖も粗意得て候、根本大師の御相承ありげに候、総じて真言・天台兩宗の習なり、委くは曾谷殿申候次での御時は御談合あるべきか、先ず五節供の次第を案ずるに妙法蓮華經の五字の次第の祭なり、正月は妙の一字のまつり天照太神を歳の神とす、三月三日は法の一字のまつりなり辰を以て神とす、五月五日は蓮の一字のまつりなり午を以て神とす、七月七日は華の一字の祭なり申を以て神とす、九月九日は經の一字のまつり戌を以て神とす、此くの如く心得て南無妙法蓮華經と唱へさせ給へ現世安穩・後生善処・疑なかるべし、法華經の行者をば一切の諸天不退に守護すべき經文分明なり、經の第五に云く「諸天昼夜に常に法の為の故に而も之を衛護す」云云、又云く「天の諸の童子以て給使を為し刀杖も加えず毒も害する能わず」云云、諸天とは梵天帝釋・日月・四大天王等なり、法とは法華經なり、童子とは七曜・二十八宿・摩利支天等なり、「臨兵闘者皆陳列在前」是又「刀杖不加」の四字なり、此等は隨分の相伝なり能く能く案じ給うべし、第六に云く「一切世間の治生産業は皆実相と相違背せず」云云、五節供の時も唯南無妙法蓮華經と唱へて悉地成就せしめ給へ、委細は又又申す可く候。

次に法華經は末法の始め五百年に弘まり給ふべきと聴聞仕り御弟子となると仰せ候事、師檀となる事は三世の契り

種熟脱の三益別に人を求めんや、^{しゅじゅくだつ}「在在諸の仏土常に師と俱に生れん若し法師に親近せば速かに菩提の道を得ん、是の師に随順して学ばば恒沙の仏を見奉る事を得ん」との金言違ふべきや、^{ずいじゆん}「提婆品に云ふ、所生の処常に此の経を聞くし人は^{たいてば}あに貴辺にあらざや、其の故は次上に^{きへん}「未来世中若有善男子善女人」と見えたり、善男子とは法華経を持つ俗の事なり^{いよいよしんじん}弥信心をいたし給うべし、信心をいたし給うべし、^{たまたま}恐恐謹言。

正月十一日

日蓮花押

秋元殿御返事

保国 安房のほた保田 より出す

一六九 秋元御書

弘安三年一月 五十九歳御作 於身延

1071p

筒御器一具付三十並に蓋付六十送り給ひ候い畢んぬ、御器と申すはうつはものと読み候、大地くぼければ水たまる青天淨ければ月澄めり、月出でぬれば水淨し雨降れば草木昌へたり、器は大地のくぼきが如し水たまるは池に水の入るが如し、月の影を浮ぶるは法華経の我等が身に入らせ給うが如し、器に四の矢あり一には覆と申してうつづけるなり又はくつがす又は蓋をおほふなり、一には漏と申して水もるなり、三にはと申してけがれたるなり水淨けれども糞の入りたる器の水をば用ゆる事なし、四には雑なり飯に或は糞或は石或は沙或は土などを雑へぬれば人食ふ事なし、器は我等が身心を表す、我等が心は器の如し口も器耳も器なり、法華経と申すは仏の智慧の法水を我等が心に入れぬれば或は打ち返し或は耳に聞かじと左右の手を二つの耳に覆ひ或は口に唱へしと吐き出しぬ、譬えば器を覆するが如し、或は少し信ずる様なれども又悪縁に値うて信心うすくなり或は打ち捨て或は信ずる日はあれども捨つる月もあり是は水の漏が如し、或は法華経を行ずる人の一口は

南無妙法蓮華經一口は南無阿彌陀仏なんど申すは飯に糞を雜沙石を入れたるが如し、法華經の文に「但大乘經典を受持することを樂つて乃至余經の一偈をも受けざれ」等と説くは是なり、世間の学匠は法華經に余行を雜えても苦しからずと思へり、日蓮もさこそ思ひ候へども經文は爾らず、譬えば后の大王の種子を妊めるが又民と・

とつげば王種と民種と雜りて天の加護と氏神の守護とに捨てられ其の国破るる縁となる、父二人出来れば王にもあらず民にもあらず人非人なり、法華經の大事と申すは是なり、種熟脱の法門法華經の肝心なり、三世十方の仏は必ず妙法蓮華經の五字を種として仏になり給へり、南無阿彌陀仏は仏種にはあらず真言五戒等も種ならず、

能く能く此の事を習ひ給へし是は雜なり、此の覆漏・雜の四の矢を離れて候器をば完器と申してまたき器なり、塹つ

つみ漏らざれば水失る事なし、信心のころ全ければ平等大慧の智水乾く事なし、今此の筒の御器は固く

厚く候上・漆淨く候は法華經の御信力の堅固なる事を顕し給うか、毘沙門天は仏に四つの鉢を進らせて四天下第一の福

天と云はれ給ふ、淨徳夫人は雲雷音王仏に八万四千の鉢を供養し進らせて妙音菩薩と成り給ふ、今法華經に筒御器三

十蓋六十進らせて争か仏に成らせ給はざるべき。

抑日本国と申すは十の名あり扶桑野馬台・水穗秋津洲等なり、別しては六十六箇国島二つ長さ三千余里広さは

不定なり、或は百里或は五百里等、五畿七道郡は五百八十六郷は三千七百二十九田の代は上田一万一千一百二

十町乃至八十八万五千五百六十七町・人数は四十九億八万九千六百五十八人なり、神社は三千一百三

十二社寺は一万一千三十七所、男は十九億九万四千八百二十八人・女は二十九億九万四千八百三十人なり、其の男の

中に只日蓮第一の者なり、何事の第一とならば男女に悪まれたる第一の者なり、其の故は日本国に国多く人多しと云ふ

も其の心一同に南無阿彌陀仏を口ずさみとす、阿彌陀仏を本尊とし九方を嫌いて西方を願う、設い法華經を行ずる人も

真言を行ふ人も、戒を持つ者も智者も愚人も余行を傍として念仏を正とし罪を消さん謀は

名号なり、故に或は六万八万四十八万返、或は十返百返千返なり、而るを日蓮一人阿弥陀仏は無間の業・禅宗は天魔の所為・真言は亡国の悪法・律宗・持斎等は国賊なりと申す故に上一人より下万民に至るまで父母の敵宿世の敵謀叛夜討強盗よりも或畏れ、或は瞋り、或は罵り、或は打つ是を、る者には所領を与、是を讃むる

者をば其の内を出だし、或は過料を引かせ殺害したる者をば褒美などせらるる上両度まで御勘気を蒙れり、当世第一の不思議の者たるのみならず人王九十代仏法渡りては七百余年なれども、かかる不思議の者なし、日蓮は文永の大彗星の如し日本国に昔より無き天変なり、日蓮は正嘉の大地震の如し秋津洲に始めての地天なり、日本国に代始まりてより已に謀叛の者二十六人第一は大山の王子、第二は大石の山丸、乃至第二十五人は

頼朝第二十六人は義時なり、二十四人は朝は責められ奉り獄門に首を懸けられ山野に骸を曝す、二人は王位を傾むけ奉り国中を手を拳る王法既に尽きぬ、此等の人人も日蓮が万人に悪まるるに過ぎず、其の由を尋ねれば法華経には最第一の文あり、然るを弘法大師は法華最第三・慈覚大師は法華最第二・智証大師は慈覚の如し、今叡山・東寺・園城寺の諸僧法華経に向いては法華最第一と読めども其の義をば第二・第三と読むなり、公家と武家と

は子細は知ろしめさねども御帰依の高僧等皆此の義なれば師檀一同の義なり、其の外禅宗は教外別伝と云云法華経を蔑如する言なり、念仏宗は千中無一、未有一人得者と申す心は法華経を念仏に對して挙げて失ふ義なり、律宗は小乘なり正法の時すら仏免し給う事なし況や末法に是を行じて国主を誑惑し奉るをや、妲己・妹喜・褒似の三女が三王を誑らかして代を失いが如し、かかる悪法に流布して法華経を失う故に安德・尊成等の大王・天照

太神・正八幡に捨てられ給いて、或は海に沈み、或は島に放たれ給ひ相伝の所従等に傾けられ給ひしは天に捨てられさせ給う故ぞかし、法華経の御敵を御帰依有りしかども是を知る人なければ其の失を知る事もなし、「知人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」とは是なり。

日蓮は智人に非ざれども蛇は竜の心を知り鳥の世の吉凶を計るが如し、此の事計りを勘得て候なり、此の事を申すならば須臾に失に当るべし申さずば又大阿鼻地獄に墮つべし。

法華經を習うには三の義あり一には謗人、勝意比丘、苦岸比丘、無垢論師、大慢婆羅門等が如し、彼等は三衣を身に纏い一鉢を眼に当てて二百五十戒を堅く持ちて而も大乘の讎敵と成りて無間・大城に墮ちにき、今日本国の弘法・慈覚・智証等は持戒は彼等が如く智慧は又彼比丘に異ならず、但大日經・真言第一・法華經第二・第三と申す

事百千に一つも日蓮が申す様ならば無間・大城にやおはすらん、此の事は申すも恐れあり増して書き付くるまでは如何と思ひ候へども法華經最第一と説かれて候に是を二三等と読まん人を聞いて人を恐れ国を恐れて申さずば即是彼怨と申して一切衆生の大怨敵なるべき由經と釈とにのせられて候は申し候なり、人を恐れず世を憚か

らず云う事我不愛身命但惜無上道と申すは是なり、不輕菩薩の惡口杖石も他事に非ず世間を恐れざるに非ず唯法華經の責めの苦なればなり、例せば祐成・時宗が大将殿の陣の内を簡ばざりしは敵の恋しく恥の悲かりし故ぞかし、此れは謗人なり。

謗家と申すは都て一期の間法華經を謗せず昼夜十二時に行ずれども謗家に生れぬれば必ず無間地獄に墮つ例せば勝意比丘・苦岸比丘の家に生まれて或は弟子となり或は檀那と成りし者共が心ならず無間地獄に墮ちたる是なり、譬えば義盛が方の者軍をせし者はさて置きめ腹の内に有りし子も産を待たれず母の腹を裂かれしが如し

今日蓮が申す弘法・慈覚・智証の三大師の法華經を正しく無明の辺域・虚妄の法と書かれて候は若し法華經の文実ならば叡山・東寺・園城寺七大寺日本一万一千三十七所の寺の僧は如何が候はんずらん、先例の如くならば無間・大城・疑無し、是れは謗家なり。

謗国と申すは謗法の者其の国に住すれば其の一国皆無間・大城になるなり、大海は一切の水集り其の国は

一切の禍集まる、譬えば山に草木の滋きが如し、三災月月に重なり七難日日に来る、飢渴發れば其の国餓鬼道と變じ疫病重なれば其の国地獄道となる軍起れば其の国修羅道と變ず、父母兄弟姉妹をば簡ず妻とし夫と憑めば其の国畜生道となる、死して三惡道に墮つるにはあらず現身に其の国四惡道と變ずるなり、此れを謗国と申す。

例せば大莊嚴仏の末法師子音王仏の濁世の人人の如し、又報恩經に説かれて候が如くんば過去せる父母兄弟姉妹一切の人死せるを食し又生たるを食す、今日本国亦復是くの如し眞言師・禪宗持齋等人を食する者國中に充滿せり、是偏に眞言の邪法より事起れり、竜象房が人を食しは万が一顛れたるなり、彼に習いて人の肉を

或は猪鹿に交へ或は魚鳥に切り雜へ或はたたき加へ或はすしとして売る、食する者数を知らず皆天に捨てられ守護の善神に放されたるが故なり、結句は此の国他国より責められ自国どし打ちして此の国變じて無間地獄と成るべし、日蓮此の大なる失を兼て見し故に与同罪の失を脱れんが為め仏の呵責を思ふ故に知恩報恩の爲め国の恩を報ぜんと置いて国主並に一切衆生に告げ知らしめしなり。

不殺生戒と申すは一切の諸戒の中の第一なり、五戒の初めにも不殺生戒八戒・十戒・二百五十戒・五百戒・梵網の十重禁戒・華嚴の十無尽戒・瓔珞經の十戒等の初めには皆不殺生戒なり、儒家の三千の禁の中にも大辟こそ第一にて候へ其の故は「へんまんさんぜんがい」満三千界・無有直身命と申して三千世界に満つる珍宝なれども命に替る事はなし、

蟻子を殺す者尚地獄に墮つ況や魚鳥等をや青草を切る者猶地獄に墮つ況や死骸を切る者をや、是くの如き重戒なれども法華經の敵に成れば此れを害するは第一の功德と説き給うなり、況や供養を展ぶ可けんや、故に仙予国王は五百人の法師を殺し覺徳比丘は無量の謗法の者を殺し阿育大王は十万八千の外道を殺し給いき、此等の

国王比丘等は閻浮第一の賢王持戒第一の智者なり、仙予国王は釈迦仏覺徳比丘は迦葉仏阿育大王は得道の仁なり、今日本国も又是くの如し持戒・破戒・無戒王臣万民を論ぜず一同に法華經誹謗の国なり、設い身の皮

をはぎて法華經を書き奉り肉を積んで供養し給つとも必ず国も滅び身も地獄に墮ち給つべき大なる科あり、唯眞言宗・念仏宗・禅宗持斎等を禁めて身を法華經によせよ、天台の六十巻を空に浮べて国主等には智人と思われたる人人の或は智の及ばざるか、或は知れども世を恐るるかの故に、或は眞言宗をほめ、或は念仏・禅・律等に同ずれば彼等が大科には百千超えて候、例せば成良義村等が如し、慈恩大師は玄賛十巻を造りて法華經を讃めて地獄に墮つ、此の人は太宗皇帝の御師玄奘三蔵の上足十一面觀音の後身と申すぞかし、音は法華經に似たれども心は爾前の經に同ずる故なり、嘉祥大師は法華玄十巻を造りて既に無間地獄に墮つべかりしが法華經を読む事を打ち捨てて天台大師に仕えしかば地獄の苦を脱れ給いき、今法華宗の人人も又是くの如し、比叡山は法華經の御住所・

日本国は一乗の御所領なり、而るを慈覺大師は法華經の座主を奪い取りて眞言の座主となし三千の大衆も又其の所従と成りぬ、弘法大師は法華宗の檀那にて御坐ます嵯峨の天皇を奪い取りて内裏を眞言宗の寺と成せり、安德天皇は明雲座主を師として頼朝の朝臣を調伏せさせ給いし程に、右大將殿に罰せらるるのみならず安德は西海

に沈み明雲は義仲に殺され給いき、尊成王は天台座主、慈円僧正東寺御室並に四十一人の高僧等を請下し奉り内裏に大壇を立てて義時右京の権の大夫殿を調伏せし程に、七日と申せし六月十四日に洛陽破れて王は隱岐の国、或は佐渡の島に遷され座主御室は、或は責められ、或は思い死に死に給いき、世間の人人、此の根源を知る事なし

此れ偏に法華經・大日經の勝劣に迷える故なり、今も又日本国大蒙古国の責を得て彼の不吉の法を以て御調伏を行わると承わる又日記分明なり、此の事を知らん人争か歎かざるべき。

悲いかな我等誹謗正法の国に生れて大苦に値はん事よ、設い謗身は脱ると云つとも謗家謗国の失如何せん、謗家の失を脱れんと思はば父母・兄弟等に此の事を語り申せ、或は悪まるるか、或は信ぜさせまいらするか、謗国の失を脱れんと思はば国主を諫曉し奉りて死罪か流罪かに行わるべきなり、我不愛身命但惜無上道と説かれ

身輕法重・死身弘法と釈せられし是なり、過去遠遠劫より今に仏に成らざりける事は加様の事に恐れて云い出さざりける故なり、未來も亦復是くの如くなるべし今日蓮が身に當りてつみ知られて候、設い此の事を知る弟子等の中にも当世の責のおそろしさと申し露の身の消え難きに依りて或は落ち或は心計りは信じ或はとかつす、御經の文に難信難解と説かれて候が身に當つて賣く覺え候ぞ、謗ずる人は大地微塵の如し信ずる人は爪上の土の如し、謗ずる人は大海進む人は一
天台山に竜門と申す所あり其の滝百丈なり、春の始めに魚集りて此の滝登るに百千に一つも登る魚は竜と成る、此の滝の早き事矢にも過ぎ電光にも過ぎたり、登りがたき上に春の始めに此の滝に漁父集りて魚を取る網を懸くる事百千重
或は射て取り或は酌んで取る、驚鳴梟虎狼犬狐集りて昼夜に取りふなり

十年・二十年に一つも竜となる魚なし、例せば凡下の者の昇殿を望み下女が后と成らんとするが如し、法華經を信ずる事此にも過ぎて候と思食せ、常に仏禁しめて言く何なる持戒智慧高く御坐して一切経並に法華經を進退せる人なりとも法華經の敵を見て責め罵り国主にも申さず人を恐れて黙止するならば必ず無間・大城に墮つべし、
譬えば我は謀叛を發さねども謀叛の者を知りて国主にも申さねば与同罪は彼の謀叛の者の如し、南岳大師の云く「法華經の讎を見て呵責せざる者は謗法の者なり無間地獄の上に墮ちん」と、見て申さぬ大智者は無間の底に墮ちて彼の地獄の有らん限りは出ずべからず、日蓮此の禁めを恐るる故に国中を賣めて候程に一度ならず流罪・死罪に及びぬ、今は罪も消え過も脱れなれと思いて鎌倉を去りて此の山に入つて七年なり。

此の山の為体日本国の中には七道あり七道の内に東海道十五箇国、其の内に甲州・飯野・御牧・波木井の三箇郷の内波木井と申す、此の郷の内戌亥の方に入りて二十余里の深山あり、北は身延山・南は鷹取山・西は七面山・東は天子山なり、板を四枚つい立てたるが如し、此の外を回りに四つの河あり北より南富士河・西より東牟河

此れは後なり、前に西より東へ波木井河の内に一つの滝あり身延河と名けたり、中天竺の鷲峰山を此の処へ移せるか將又漢土の天台山の来れるかと覺ゆ、此の四山四河の中に手の広さ程の平かなる処あり、爰に庵室を結んで大雨を脱れ木の皮をはぎて四壁とし、自死の鹿の皮を衣とし、春は蕨を折りて身を養ひ秋は果を拾いて命

を支候つる程に、去年十一月より雪降り積て改年の正月今に絶る事なし、庵室は七尺雪は一丈四壁は氷を壁とし軒のつらは道場莊嚴の瓔珞の玉に似たり、内には雪を米と積む、本より人も来らぬ上雪深くして道塞がり問う人もなき処なれば現在に八寒地獄の業を身につくのへり、生きながら仏には成らずして又寒苦鳥と申す

鳥にも相似たり、頭は剃る事なければうつらの如し、衣は氷にとぢられて鷲鷲の羽を氷の結べるが如し、かかる処は古へ睨びし人も問わず弟子等にも捨てられて候いつるに此の御器を給いて雪を盛りて飯と觀じ水を飲んでこんずと思つ、志のゆく所思い遣らせ給ふ又申すべく候、恐恐謹言。

弘安三年正月二十七日

日蓮花押

秋元太郎兵衛殿御返事

与池上兄弟 於身延

夫れ法華經と申すは八万法蔵の肝心十二部經の骨髓なり、三世の諸仏は此の經を師として正覺を成じ十方の仏陀は一乘を眼目として衆生を引導し給ふ、今現に經蔵に入つて此れを見るに後漢の永平より唐の末に至るまで渡れる所の一切經論に二本あり、所謂旧訳の經は五千四十八卷なり、新訳の經は七千三百九十九卷なり、彼の一切經は皆各各分分に随つて我第一なりとなれり、然而法華經と彼の經經とを引き合せて之を見るに勝劣天地なり高下雲泥なり、彼の經經は衆星の如く法華經は月の如し彼の經經は燈炬、星月の如く法華經は大日輪の如し此れは総なり。

別して經文に入つて此れを見奉れば二十の大事あり、第一第二の大事は三千塵点劫五百塵点劫と申す二つの法門なり、其三千塵点と申すは第三の卷化城喻品と申す處に出でて候、此の三千大千世界を抹して塵となし東方に向つて千の三千大千世界を過ぎて一塵を下し又千の三千大千世界を過ぎて一塵を下し此くの如く三千大千世界の塵を下はてぬ、さてかえつて下せる三千大千世界と下さざる三千大千世界をともしおしふさねて又塵となし、此

の諸の塵をもてならべをきて一塵を一劫として經尽しては、又始め又始めかくのごとく上の諸塵の尽し經たるを三千塵点とは申すなり、今三周の声聞と申して舍利弗、迦葉、阿難、羅云など申す人人は過去遠遠劫三千塵点劫のそのかみ大通智勝仏と申せし仏の第十六の王子にてをせし菩薩ましましき、かの菩薩より法華經を習いけるが悪縁にすかされて法華經を捨つる心つきにけり、かくして或は華嚴經をち、或は般若經をち、或は大集經をち、或は涅槃經へをち、或は大日經、或は深密經、或は觀經等をち、或は阿含・小乘經、をちなんどしけるほどに次第に

お 堕ちゆきて後には人天の善根、後に惡にをちぬ、かくのごとく墮ちゆく程に三千塵点劫が間、多分は無間地獄少分は七大地獄たまたまには一百余の地獄まれには餓鬼・畜生・修羅などに生れ大塵点劫などを経て人天には生れ候けり。

されば法華經の第二の卷に云く「常に地獄に処すること園觀に遊ぶが如く余の惡道に在ること己が舍宅の如し」等云云、十惡をつくる人は等活黑繩などと申す地獄に墮ちて五百生、或は一十歳を経、五逆をつくれる人は無間地獄に墮ちて一中劫を経て後は又かへて生ず、いかなる事にや候らん法華經をすつる人はすつる時はさしも父母を殺すなどのやうにをびただしくはみ候はねども無間地獄に墮ちては多劫を経候、設父母を一人二人・

十人百人千人万人・十万人・百万人・億万人などと殺して候ともいかんが三千塵点劫をば經候べき、一仏・二仏・十仏・百仏・千仏・万仏乃至億万仏を殺したりともいかんが五百塵点劫をば經候べき、しかるに法華經をすて候いけるつみによ

りて三周の聲聞が三千塵点劫を経諸大菩薩の五百塵点劫を経候けることをびただしくをばへ

候、せんするところはをもつて虚空を打てばくぶしいたからず石を打てばくぶしいたし、惡人を殺すは罪あさし善人を殺すは罪ふかし、或は他人を殺すはをもつて泥を打つがごとし父母を殺すはをもつて石を打つがごとし、鹿をほつる犬は頭われず師子を吠る犬は腸くさる日月をのむ修羅は頭七分にわれ仏を打ちし提婆は大地われて入りにき、所対によりて罪の輕重はありけるなり。

さればこの法華經は一切の諸仏の眼目教主釈尊の本師なり、一字一点もすつる人あれば千万の父母を殺せる罪にもすぎ十方の仏の身より血を出す罪にもこゝて候けるゆゑに三五の塵点をば經候けるなり此の法華經はさてをきたてまつりぬ又此の經を經のごとくにとく人に値うことは難にて候、設い一眼の龜の浮木には値うともはちすのいをもつて須弥山をば虚空にかくとも法華經を經のごとく説く人にあひがたし。

されば慈恩大師と申せし人は玄奘三蔵の御弟子太宗皇帝の御師なり、梵漢を空につかべ一切経を胸にたたか舎利を筆のさきより雨らし牙より光を放ち給いし聖人なり、時の人も日月のごとく恭敬し後の人も眼目とこそ渴仰せしかども伝教大師これをせめ給うには雖讚法華経遺死法華心等云云、言は彼の人の心には法華経をほむとをもへも理のさすところは法華経をこそす人になりぬ、善無畏三蔵は月支国うぢやうな国の国王なり、位をすて出家して天竺五十余の国を修行して顕密二道をきわめ、後には漢土にわたりて玄宗皇帝の御師となる、戸那日本の真言師誰か此人のながれにあらざる、かかるたうとき人なれども一時に頓死して閻魔のせめにあはせ給う、いかなりけるゆへとも人しらず。

日蓮此れをかんがへたるに本は法華経の行者なりしが大日経を見て法華経にまされりといふしゆなり、されば舍利弗・目連等が三五の塵点を経しことは十悪・五逆の罪にもあらず謀反・八虐の失にてもあらず、但悪知識に値うて法華経の信心をやぶりて権経につりしゆなり、天台大師釈して云く「若し悪友に値えば則ち本心を失う」云云、本心と申すは法華経を信ずる心なり、失うと申すは法華経の信心を引きかへ余経へうつる心なり、されば経文に云く「然与良薬而不肯服」等云云、天台の云く「其の心を失う者は良薬を与うと雖も而かも肯て服せず生死に流浪し他国に逃逝す」云云。

されば法華経を信ずる人のをそるべきものは賊人・強盗・夜打ち虎狼師子等よりも当時の蒙古のせめよりも法華経の行者をなやます人人なり、此の世界は第六天の魔王の所領なり一切衆生は無始已来彼の魔王の眷属なり、六道の中に二十五有と申するうをかまへ一切衆生を入るのみならず妻子と申すほだしをうち父母・主君と申すあみをそらにはり貪・瞋・癡の酒をのませて仏性の本心をたばらかす、但あくのさかなのみをすすめて三惡道の大地に伏臥せしむ、たまたま善の心あれば障碍をなす、法華経を信ずる人をばいかにもして惡墮さんとをもつ

に叶かなわざればやうやくすかさんがために相似そつじせる華嚴けこん經きやうをとしつ杜順とじゆん 智儼ちいん 法蔵ほふぞう 澄觀ちやうかん等ら是これなり、又般若はんぎやう經きやうすかしをとす惡友あくゆうは嘉祥かじやう僧詮そうぜん等ら是これなり、又深密じんみつ經きやうすかしをとす惡友あくゆうは玄奘げんじやう 慈恩じおん是これなり、又大日だいにく經きやうへずかしをとす惡友あくゆうは善無畏ぜんむい 金剛こんかう智ち 不空ふくう 弘法こうぼう 慈覺じかく 智証ちしやう是これなり、又禪宗ぜんしゆすかしをとす惡友あくゆうは達磨だるま 慧可えか等ら是これなり、又觀經かんきやうすかしをとす惡友あくゆうは善導ぜんどう 法然ほつねん是これなり、此だいらくてんは第六まおう天ちしやの魔王まおうが智者ちしやの身みに入いつて善人ぜんにんをたばらかすなり、法華ほけきやう經きやう第五ごの卷まきに「惡鬼あくき其そのの身みに入いる」と説とかれて候は是これなり。

設たとひ等覺とうかくの菩薩ぼさつなれども元品がんぽんの無明むみやうと申まうす大惡鬼あつき身みに入いつて法華ほけきやう經きやうと申まうす妙覺みやうかくの功徳くどくを障さや候はなり、何いかに況いわんや其その已下いかの人人ひとごとにをいてをや、又第六だいらくてん天まおうの魔王まおう 或あるは妻子さいしの身みに入いつて親おやや夫うそをたばらかし 或あるは國王こくおうの身みに入いつて法華ほけきやう經きやうの行者ぎやうををどし 或あるは父母ふぼの身みに入いつて孝養かうやうの子こをせむる事ことあり、悉達しつたたい太子たいしは位ゐを捨てんとし給たまいしかば

羅 羅らはらまれてをはしませしを淨飯じやうはん王わう此このの子こ生うれて後出家しゆけし給たまえといさめられしかば魔まが子こををさへ六年ろくにんなり、舍利弗しゃりふは昔むかし多羅羅たらかと申まうせし仏ぶつの末世ぼそに菩薩ぼさつの行ぎやうを立てて六十むそ劫じやくを経へたりき、既すでに四十しじふ劫じやくちかづきしかば百劫ひやくじやくにてあるべかりしを第六だいらくてん天まおうの魔王まおう 菩薩ぼさつの行ぎやうの成じやうぜん事をあぶなしと思おもいけん、婆羅門ばらもんとなりて眼まなこを乞こい

しかば相違さういなくとらせたりしかども其そのより退しりぞする心こころ出来いて舍利弗しゃりふは無量むりやう劫じやくが間かん 無間むげん地獄じごくに墮おちたりしぞかし、大莊嚴だいそうごん仏ぶつの末すえの六百八十億むぱくしじふひやくの檀那だんな等らは苦岸くがん等らの四比丘しびくにたばらかされて普事ふじ比丘びくを怨あだみてこそ大地だいち微塵みじん劫じやくが間かん 無間むげん地獄じごくを経へしぞかし、師子しし音王おんわうの末すえの男女なんによ等らは勝意しやうい比丘びくと申まうせし持戒じかいの僧そうをたのみて喜根きこん比丘びくを笑わらつてこそ無量むりやう劫じやくが間かん地獄じごくに墮おちつれ。

今いま又また日蓮にちれんが弟子でし 檀那だんな等らは此このにあたり、法華ほけきやう經きやうには「如来にろふの現在げんざいにすら猶なほ怨嫉おんしつ多おほし況めつや滅度めつどの後のちをや」又また云いく「一切いっさい世間せけん怨多あだおほくして信がじ難がたし」涅槃ねはん經きやうに云いく「横よこに死し殃わざに羅わり呵嘖かやく 罵辱めにく 鞭杖べんじやう 閉繫へけい 飢餓きが 困苦くふ 是かくの如ごとき等の現世げんせの輕報けいほうを受けて地獄じごくに墮おちず」等ら云いふ、般泥はんない經きやうに云いく「衣服いふく不足ふそくにして飲食おんじき 疎そなり財さいを求もとめるに利りあらず貧賤おひせんの家や及び邪見じゃけんの

家に生れ或いは王難及び余の種種の人間の苦報に遭う現世に軽く受くるは斯れ護法の功德力に由る故なり等云云、文の心は我等過去に正法を行じける者にあだをなしてありけるが今かへりて信受すれば過去に人を障る罪にて未来に大地獄に墮つべきが、今生に正法を行ずる功德強盛なれば未来の大苦をまね

ぎこして少苦に値うなり、この經文に過去の誹謗によりてやつやつの果報をつくるなかに或は貧家に生れ或は邪見の家に生れ或は王難に値う等云云、この中に邪見の家と申すは誹謗正法の家なり王難等と申すは惡王に生れあうなり、此二つの大難は各各の身に當つてをばへつべし、過去の謗法の罪を滅せんとして邪見の父母にせめられ

させ給う、又法華經の行者をあだむ国主にあへり經文明明たり經文赫赫たり、我身は過去に謗法の者なりける事疑い給うことなかれ、此れを疑つて現世の輕苦忍びがたくて慈父のせめに隨いて存外に法華經をすつるよしあるならば我身地獄に墮つるのみならず悲母も慈父も大阿鼻地獄に墮ちてともになしまん事疑いなるべし、

大道心と申すはこれなり。

各各隨分に法華經を信ぜられつるゆへに過去の重罪をせめいだし給いて候、たとへばくろがねをよくよくきたはきずのあらわるるがごとし、石はやけばはいとなる金はやけば真金となる、此の度こそまことの御信用はあらわれて法華經の十羅刹も守護せさせ給うべきにて候らめ、雪山童子の前に現ぜし羅刹は帝釈なり尸毘王

のはとは毘沙門天ぞかし、十羅刹心み給わんがために父母の身に入らせ給いてせめ給うこともやあるらん、それにつけても、心あさからん事は後悔あるべし、又前車のくつがすは後車のいましめぞかし、今の世にはなにとなくとも道心をこりぬべし、此の世のありさま厭うともよも厭われじ日本の人人定んで大苦に値いぬと見今候

眼前の事ぞかし、文永九年二月の十一日にさかなりし華の大風にをるるがごとく清絹の大火にやかるるがごとくなりしに世をいとう人のいかでかなかるらん文永十一年の十月ゆきつしまのものども一時に死人

となりし事はいかに人の上とををばすか當時もがのつてに向かいたる人人のなげき老たるをやをさなき子わかき妻めづらしかりしすみかつちすててよしなき海をまほり雲のみつればはたかと疑いつりぶねのみゆれば兵船かと肝心をけす、日に二度山えのぼり夜に三四度馬にくらををく、現身に修羅道をかんぜり、各各のせめられさせ給う事も詮するところは国主の法華経のかたきとなれるゆへなり、国主のかたきとなる事は持斎等念仏真言師等が謗法よりをこれり、
このたび
今度ねつしくらして法華経の御利生心みさせ給へ日蓮も又強盛に天に申し上げ

候なり、いよいよをづる心ねすがたをはずべからず、定んで女人は心よはくをはずればこぜたちは心ひるがへてやをはずらん、がうじやうにはがみをしてたゆむ心なけれ、例せば日蓮が平左衛門の尉がもとにてうちふるまいぬしがことくすこしもをづる心なけれ、わだが子となりしものわかさのかみが子となりし将門・

貞当が郎従等となりし者、仏になる道にはあらねどもはぢををもへ命をしまめ習いなり、なにとなくとも一度の死は一定なり、いろばしあしくて人にわらはれさせ給うなよ。

あまりにをばつかなく候は大事のものがたり一つ申す、白ひ叔せいと申せし者は胡竹国の王の一人の太子なり、父の王弟の叔せいに位をゆづり給いき、父して後叔せい位につかざりき、白ひが云く位につき給え叔せいが云く兄位を継ぎ給え白ひが云くいかに親の遺言をばたが給うぞと申せしかば親の遺言はさる事なれども

いかに兄ををきては位には即くべきと辞退せしかば、二人共に父母の国をすてて他国へわたりぬ、周の文王につかへしほどに文王殷の紂王に打たれしかば武王百箇日が内にいくさををこしき、白ひ叔せいは武王の馬の口にとりつきていさめて云くをやのして後三箇年が内にいくさををすはあに不孝にあらずや、武王いかり

て白ひ叔せいを打たんとせしかば大公望せいで打たせざりき、二人は此の王をうとみてすやと申す山にかくれゐてわらびををりて命をつぎしかば、麻子と申す者ゆきあひて云くいかにこれにはをばするぞ二人

かみくだん
上件の事をかたりしかば麻子が云くさるにてはわらびは王の物にあらずや、二人せめられて爾の時よりわらびをくわず、
天は賢人をすて給わぬならひなれば天白鹿と現じて乳をもつて一人をやしなひき、白鹿去つて後に

叔せいが云く此の白鹿の乳をのむだにもつましまして肉をくわんといぬしかば白ひせいしかども天これを・

ききて来らず、二人うて死ににき、一生が間賢なりし人も一言に身をほろぼすにや、各各も御心の内はしらず候はを
ぼつかなしをぼつかなし。

釈迦如来は太子にてをせし時父の浄飯王太子ををしみたてまつりて出家をゆるし給はず、四門に千人のつわもの
をすゝてまほらせ給ひしかども、終にをやの御心をたがへ家をいでさせ給いき、一切はをやに随うべきにてこそ候へとも仏
になる道は随わぬが孝養の本にて候か、されば心地観經には孝養の本をとかせ

給うには棄恩入無為真実報恩者等云云、言はまことの道に入るには父母の心に随わずして家を出て仏になるがまことの恩
をほつずるにてはあるなり、世間の法にも父母の謀反などををすすには随わぬが孝養とみへ

候ぞかし、孝経と申す経に見へ候、天台大師も法華經の三昧に入らせ給いてをせし時は父母左右のひざに住して仏道
をさえんとし給いしなり、此れは天魔の父母のかたちをげんじてさつるなり。

白ひすくせいが因縁はさきにかき候ぬ、又第一の因縁あり、日本国の人王第十六代に王をはしき応神天王と申す今の
八幡大菩薩これなりこの王の御子二人まします嫡子をば仁徳・次男は宇治王子天王・次男の宇治の王子に位をゆづり
給いき、王はつぎよならせ給いて後・宇治の王子の云く兄位につき給うべし、兄の云く、いかにをやの

御ゆづりをばもちゐさせ給わぬぞ、かくのごとくたがいにるむじて、三箇年が間位に王をはせざりき、万民のなげきいつば
かりなし天下のさいにてありしほどに、宇治の王子云く我いきてあるゆゑにあに位に即き給わずといつて死させ給いにき、仁
徳これをなげかせ給いて又ふしつませ給いしかば、宇治の王子い

きかへりてやうやうにをほせをかせ給いて又ひきいらせ給いぬ、さて仁徳位につかせ給いたりしかば国を
だやかなる上しんらはくさひがつらいも日本国にしたがひてねんぐを八十そつそな付るとこそみへ候
へ

賢王のなかにも兄弟をだやかならぬれいもあるぞかし、いかなるちぎりにて兄弟かくはをはするぞ浄蔵・浄眼の二人の
太子の生れかはりてをはするか薬王・薬上の二人か、大夫志殿の御をやの御勳気はつけ給わりしか
どもひやうへ志殿の事は今度はよもあにはづかせ給はじさるにてはいよいよ大夫志殿のをやの御不審はをばるげにては
ゆりじなんどももつて候は、このわらわの申し候はまことにてや候らん、御同心と申し候はあまりのふしぎさに別の御文
をまいらせ候、未来までのものがたりなに事かこれにすぎ候べき。

西域と申す文にかきて候は月氏に婆羅 斯国・施鹿林と申すところに一の隠士あり仙の法を成ぜんともう、すでに
瓦礫を變じて宝となし人畜の形をかえけれどもいまだ風雲にのつて仙宮にはあそばざりけり、此の事を成ぜんがために一の
烈士をかたらひ長刀をもたせて壇の隅に立てて息をかくし言をたつ、よひよりあしたにいたる

までものいはずば仙の法成ずべし、仙を求る隠士は壇の中に坐して手に長刀をとつて口に神呪をずつす約束して云く
設ひ死なんとする事ありとも物言う事なかれ烈士云く死するとも物いはず、此の如くして既に夜中を過ぎて

夜まさにあけんとする時、如何が思いけん烈士大に声をあげて呼はる、既に仙の法成ぜず、隠士烈士に言つて云く何に
約束をばたがふるぞ口惜しき事なりと云う、烈士歎いて云く少し眠つてありつれば昔し仕へし主人自ら来りて責めつれども
師の恩厚ければ忍で物いはず、彼の主人怒つて頸をはねんと云う、然而又ものいはず、遂に頸を

切りつ中陰に趣く我が屍を見れば惜く歎かし然而物いはず、遂に南印度の婆羅門の家に生れぬ入胎出胎するに大苦
忍びがたし然而息を出さず、又物いはず已に冠者となりて妻をとつぎぬ、又親死ぬ又子をまうけたり、か

なくもありよろばしくもあれども物いはず此くの如くして年六十有五になりぬ、我が妻かたりて云く汝若し物いはずば汝がいとをしみの子を殺さんと云う、時に我思はく我已に年衰、ぬ此の子を若し殺されなば又子をまつげがたしと思いつる程に声をおこすとをもはをどろきめと云いければ、師が云く力及ばず我も汝も魔にたばらかされぬ終に此の事成ぜずと云いければ、烈士大に歎きけり我心よはくして師の仙法を成ぜずと云いければ、隱士が云く我が失なり兼て誠めざりける事をと悔ゆ、然れども烈士師の恩を報ぜざりける事を歎きて遂に思ひ死にししめとかれて候、仙の法と申すは漢土には儒家より出で月氏には外道の法の一分なり、云うにかひ無き仏教の小乗、阿含經にも及ばず況や通別円をや況や法華經に及ぶべしや、かかる浅き事だにも成ぜんとすれば四魔競て成じかたし、何に況や法華經の極理南無妙法蓮華經の七字を始めて持たん日本國の弘通の始ならん人の弟子檀那とらん人人の大難の来らん事をば言をもつて尽し難し心をもつてをしはかるべしや。

されば天台大師の摩訶止觀と申す文は天台一期の大事一代聖教の肝心ぞかし、仏法漢土に渡つて五百余年、南北の十師・智は日月に齊く徳は四海に響きしかどもいまだ一代聖教の浅深・勝劣前後次第には迷惑してこそ候いしが、智者大師再び仏教をあきらめさせ給うのみならず、妙法蓮華經の五字の蔵の中より一念三千の如意宝珠を

取り出して三国の一切衆生に普く与給ひ、此の法門は漢土に始るのみならず月氏の論師までも明し給はぬ事なり、然れば章安大師の釈に云く止觀の明静なる前代に未だ聞かずニ云云、又云く天竺の大論尚其の類に非ずニ等云云、其の上摩訶止觀の第五の卷の一念三千は今一重立ち入たる法門ぞかし、此の法門を申すには必ず魔出来

すべし魔競はずは正法と知るべからず、第五の卷に云く「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至隨う可らず畏る可らず之に隨えば將に人をして惡道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ」等云云、此の釈は日蓮が身に當るのみならず門家の明鏡なり謹んで習ひ伝えて未來の資糧とせよ。

此の釈に三障と申すは煩惱障・業障・報障なり、煩惱障と申すは貪・瞋・癡等によりて障礙出来すべし、業障と申すは妻子等によりて障礙出来すべし、報障と申すは国主父母等によりて障礙出来すべし、又四魔の中に天子魔と申すもかくのごとし、日本国に我も止観を得たりと云う人誰か三障四魔競る人あるや、之に随えば將に人をして惡道に向わしむと申すは只三惡道のみならず人天九界を皆惡道とかけり、されば法華經を除きて華嚴・阿含・方等・般若・涅槃・大日經等なり、天台宗を除きて余の七宗の人人は人を惡道に向わしむる獄卒なり、天台宗の人人の中にも法華經を信ずるやうにて人を爾前やるは惡道に人をつかはす獄卒なり。

今二人の人人は隱士と烈士とのごとし一もかけなば成ずべからず、譬えば鳥の二つの羽人の兩眼の如し、又二人の御前達は此の人人の檀那ぞかし女人となる事は物に随つて物を随える身なり夫たのしくば妻もさかふべし夫盜人ならば妻も盜人なるべし、是れ偏に今生計りの事にはあらず世世生生に影と身と華と果と根と葉との如く

にておはするぞかし、木にすむ虫は木をはむ水にある魚は水をくらふ芝かるれば蘭なく松さかうれば柏よろこぶ、草木すら是くの如し、比翼と申す鳥は身は一つにて頭二つあり二つの口より入る物一身を養ふ、ひほくと申す魚は一目づつある故に一生が間はなる事なし、夫と妻とは是くの如し此の法門のゆへには設ひ夫に害せらる

るとも悔ゆる事なかれ、一同して夫の心をいさめば童女が跡をつぎ末代惡世の女人の成仏の手本と成り給うべし、此くの如くおはさば設ひいかなる事ありとも日蓮が二聖・二天・十羅刹釈迦・多宝に申して順次生に仏になしたてまつるべし、心の師とはなるとも心を師とせざれとは六波羅蜜經の文なり。

設ひいかなる・わづらはしき事ありとも夢になして只法華經の事のみさはぐらせ給うべし、中にも日蓮が法門は古へこそ信じかたかりしが今は前前いひをきし事既にあひぬればよしなく謗ぜし人人も悔る心あるべし、設ひこれより後に信ずる男女ありとも各各にはか愈ふべからず、始は信じてありしかども世間のをそろしさにすつ

人人かずをしらず、其の中に返つて本より謗ずる人人よりも強盛にそしる人人又あまたあり、在世にも善星比丘等は始は信じてありしかども後にすつるのみならず返つて仏をはうじ奉りしゆへに仏も叶い給はず無間地獄にをちにき、此の御文は別してひやうの志殿へまいらせ候、又太夫志殿の女房兵衛志殿の女房によくよく申しきかせ給うべしきかせさせ給うべし南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經。

文永十二年四月十六日

日蓮 花押

一七一 兵衛志殿御返事

建治元年八月五十四歳御作

於身延

1089d

鷲目二貫文 武蔵房円日を使にて給ひ候い畢んぬ、人王三十六代・皇極天皇と申せし王は女人にてをはしき、其の時入鹿の臣と申す者あり、あまりおごりのものぐるわしさに王位をうばはんとぶるまいしを、天皇王子等不思議とはをばせしかどもいかに力及ばざりしほどに、大兄の王子・輕の王子等なげかせ給いて中臣の鎌子と申せし臣に申しあわせさせ給いしかば、臣申さく、いかにも人力はかなうべしとはみ候はず、馬子が例をひきて教主・釈尊の御力ならずば叶たしと申せしかば、さらばとて釈尊を造り奉りていのりしかば入鹿ほとなく打れにき、此の中臣の鎌子と申す人は後には姓をかへ藤原の鎌足と申し内大臣になり大職冠と申す人、今の一の人の

御先祖なり、此の釈迦仏は今の興福寺の本尊なり、されば王の王たるも釈迦仏、臣の臣たるも釈迦仏、神国の仏国となりし事もえものたいう殿の御文と引き合せて心させ給へ、今代の他国にうばわれんとする事・釈尊をいるがせにする故なり、神の力も及ぶべからずと申すはこれなり、各各は二人はずでにとこそ人はみしかどもかくいみじくみさせ給うはひとえに釈迦仏、法華經の御力なりとをぼすらむ、又此れにもをもひ候、後生のた

のもしさ申すばかりなし、此れより後もいかなる事ありともすこしもたゆむ事なかれ、いよいよはりあげてせむべし、
設ひ命に及ぶともすこしもひるむ事なかれ、あなかしこあなかしこ、恐恐謹言。

八月二十一日

日蓮花押

兵衛志殿御返事

一七二 兵衛志殿御返事

建治元年十一月 五十四歳御作

於身延

1090P

かたがたのものふ二人をもつてをくりたびて侯、その心ざし弁殿の御ふみに申すげに侯、さてはなによりも御ために
第一の大事を申し候なり、正法像法の時は世もいまだをとるす聖人賢人もづき生れ侯き天も人をまほり給いき、
末法になり候は人のとんよく貪欲やうやくすぎ侯て主と臣と親と子と兄と弟と諍論ひまなし、まして他人は申すに
及ばず、これによりて天もその国をすつれば三災七難乃至一三三四五六七の日にて草木かれうせ小大河もつき大地
はすみのごとくをこり大海はあぶらのごとくになりけつくは無間地獄より炎いでて上梵天まで火炎・充滿すべし、これ
いの事いんとてやうやく世間はをと候なり、皆人のをもひて侯は父には

子したがひ臣は君にかなひ弟子は師にあすべからずと云云、かしき人もいやしき者もしれる事なり、しかれども貪欲・
瞋恚・愚癡と申すさけにえて主に敵し親をかるしめ師をあなづるつねにみ候、但師と主と親とに払いてあしき事をば
諫ば孝養となる事はさきの御ふみにかきつけて候いしかばつねに御らむあるべし。

ただこのたびももの志どのかさねて親のかんだうありとの御前にこれにて申せしがごとく一定かんだうあるべし。
ひやうの志殿をばつかなしとせんかま御心あるべしと申して供しなり今度はその一定をち

給いぬとをぼつるなりをち給はんをいかにと申す事はゆめゆめ候はず但地獄にて日蓮をうらみ給う事なかれしり候まじきなり千年のかるかやも一時にはひとなる百年の功も一言にやぶれ候は法のことわりなり、さえもんの大夫殿は今度、法華經のかたきになりさだまり給うとみて候、えもんのたいつの志殿は今度、法華經の行者になり候はんずらん、とは現前の計なれば親につき給はんずらむ、ものぐるわしき人人はこれをほめ候べし、宗盛が親父

入道の悪事に随いてしのわらにて頸を切られし重盛が随わずして先に死せしづれか親の孝人なる、法華經のかたきになる親に随いて一乗の行者なる兄をすてば親の孝養となりなんや、せんするところひとすぢにをもひ切つて兄と同じく仏道をなり給へ親父は妙莊嚴王のごとし兄弟は淨蔵、淨眼なるべし、昔と今はかわるとも法華經のこ

とわりはたがつからず、當時も武蔵の入道そこばくの所領所従等をすてて遁世あり、ましてわどのばらがわづかの事をうらひて心うすくて悪道に堕ちて日蓮をうらみさせ給うな、かすが今度とは墮べしとをぼつるなり。

此の程心ざしありつるがひきか今悪道に墮ち給はん事がぶびんなれば申すなり、百に一千に一つも日蓮が義につかんとをばさば親に向つてい切り給親なればいかにも順いまいらせ候べきが法華經の御かたきになり給はつきまいらせては不孝の身となりぬぐ候はずてまいらせて兄につき候なり、兄をすてられ候わば

兄と一同とをぼすべしと申し切り給へすこしもをそるる心なかれ過去遠遠劫より法華經を信ぜしかども仏にならぬ事これなり、しをのひるとみつと月の出づるといふと夏と秋と冬と春とのさかひには必ず相違する事あり凡夫の仏になる又かくのごとし、必ず三障四魔と申す障いできたれば賢者はよろこび愚者は退くこれなり、

此の事はわざとも申し又びんぎにとをもちつるに御使ありがたし、墮ち給うならばよもこの御使はあらじとをもち候は、もしやと申すなり。

仏になり候事は此の須弥山にはりをたてて彼の須弥山より熊をはなちて、そのいとのおずぐにわたりてはりのあなに入る

よりもかたし、いわつや、さかさまに大風のふきむかたらんはいよいよかたき事ぞかし、経に云く「億億万劫より不可議に至る時に乃ち是の法華経を聞くことを得、億億万劫より不可議に至る諸仏、世尊時に是の

経を説きたもう、是の故に行者、仏滅後に於て是くの如きの経を開いて疑惑を生ずること勿れ」等云云、此の経文は法華経二十八品の中に、ここにめづらし、序じ仰より法師品にいたるまで等覺已下の入天、四衆八部、其のかずありしかど

も仏は但釈迦如来一仏なり重くてかるきへんもあり、宝塔品より囑累品にいたるまでの十二品は殊に重

きが中の重きなり、其の故は釈迦仏の御前に多宝の宝郡部現せり月の前に日の出でたるがごとし、又十方の諸仏は樹下に御はします十方世界の草木の上に火をともせるがごとし、此の御前にてせんせられたる文なり。

涅槃経に云く「昔無數無量劫より来た常に苦悩を受く、一一の衆生一劫の中に積む所の骨は王舎城の毘富羅山の如く

飲む所の乳汁は四海の水の如く身より出す所の血は四海の水より多く父母兄弟妻子眷属の命終に哭泣して出す所の目涙は四大海より多く、地の草木を尽くして四寸の籌と為し以て父母を数うも亦尽くすこと能わじ云云、此の経文

は仏最後に雙林の本に臥てかたり給いし御言なりもつとも心をとどむべし、無量劫より已来生ところの父母は十方世界の大地の草木を四寸に切りてあてかそうとも、たるべからずと申す経文なり、此等の父母にはあひしかども法華経にはいま

だあわず、されば父母はまうけやすし法華経はあひがたし、今度あひやすき父母のことばを、そむきてあひがたき法華経のともにはなれずば我が身仏になるのみならず、そむきしをやをもみちびき

なん、例せば悉達太子は浄飯王の嫡子なり国をもゆづり位にもつけんとをばしてすでに御位につけまいらせたりしを御心をやぶりて夜中城をにげ出でさせ給いしかば不孝の者なりと、うらみさせ給いしかども仏にならせ給うてはまづ浄飯

王麻耶夫人をこそみちびかせ給いしが。

を^親やといつ。を^{じさい}やの世をすてて仏になれと申^{もう}す。を^{ねんぶつ}やは一人もなきなり、これはとによせ。かくによせて。わ^和どのばらを
持^{ねんぶつ}斎。念^{ねんぶつ}仏者等がつくり。をとさんために。を^{ねんぶつ}やをすすめをとすなり、両^{ひとびと}火房は百万反の念^{ねんぶつ}仏をすすめて人^{ひと}人の内をせき
て法^{ほけき}華^き經のたねを。たたんと。はかるときくなり、極^{ごく}樂^{らく}寺^じ殿^{でん}はいみじかりし人ぞかし、念^{ねんぶつ}仏者等に

たばらかされて日^に蓮^ちを怨^{あだ}ませ給^{たま}いしかば我^{われ}が身^みとい其^その一^{いち}門^{もん}皆^{みな}ほろびさせ給^{たま}う。ただいまは。今^{いま}この守^{しゆ}殿^{でん}一人計^{ばか}りなり、
両^{りやう}火^{くわ}房^{ぼう}を御^ご信^{しん}用^{よう}ある人はいみじきと御^ごらむあるか、な。今^{いま}この一^{いち}門^{もん}の善^{ぜん}光^{くわう}寺^じ・長^{ちやう}樂^{らく}寺^じ・犬^{たい}仏^{ぶつ}殿^{でん}立てさせ給^{たま}い

て其^その一^{いち}門^{もん}のならせ給^{たま}う事^{こと}をみよ、又^{また}守^{しゆ}殿^{でん}は日^に本^{ほん}国^{こく}の主^{しゆ}にてを^をはするが、一^{いん}閻^{えん}浮^ふ提^{だい}のこ^ことくなる。か^かたきをさせ給^{たま}へ。

わ^わどの見^みをすてて。あにがあとを。ゆづられたりとも千^{せん}万^{まん}年^{ねん}のさかへがたかるべし、しらず又^{また}わづかの程^{ほど}にや。い^いかんがこ
のよならんずらん、よくよくをもひ切^きつて二^に向^{かう}に後^ご世^{せい}をたのま^まるべし、かう申^{もう}すとも。いたづらのふみなるべしと。をもば、か
くも。ものつけれども。のちのをもひでに。し^しるし申^{もう}すなり、恐^き恐^き謹^{きん}言^{げん}

十一月二十日

日^に蓮^ち花^か押^{おし}

兵^{さかん}衛^ご志^の殿^{へん}御^じ返^じ事^じ

先度仏器まいらせさせ給ひ候しが、此度此の尼御前大事の御馬にのせさせ給て候由承はり候、法にすぎて候御志かな。
 これは殿はさる事にて、女房のはからひか、昔儒童菩薩と申せし菩薩は、五茎の蓮華を五百の金銭を以てかいとり、定光
 菩薩を七日七夜供養し給ひき、女人あり、瞿夷となづく、二茎の蓮華を以て自ら供養して云く、凡夫にてあらん時は世世
 生生夫婦とならん、仏にならん時は同時に仏になるべし此のちかひくちずして九十一劫の間夫婦となる、結句、儒童
 菩薩は今の釈迦仏昔の瞿夷は今の耶輸多羅女今法華經の勸持品にして具足千万光相如来是なり、悉達太子檀特山に
 入り給しには、金泥駒帝釈の化身、摩騰迦竺法蘭の經を漢土に渡せしには十羅刹化して白馬となり給ふ、此馬も
 法華經の道なれば百二十年御さかの後靈山淨土乗り給ふべき御馬なり、恐恐謹言。

建治三年丁丑三月二日 日蓮花押

兵衛志殿女房

久しくつけ給わり候はねばよくおぼつかなく候、何よりもあはれにふしぎなる事は大夫志殿と殿との御事不思議に候、常さまには世末になり候は聖人賢人も皆かくれたださんじむねいじんわざんきよくりの者のみこそ国には充満すべきと見へ候は、喩えば水すくなくなれば池さはがしく風ふけば大海しづかならず、代

の末になり候はかんばちえきれい大雨大風ふきかさなり候は広き心もせばくなり道心ある人も邪見になるとこそ見へて候へされば他人はさてをきぬ父母と夫妻と兄弟と諍う事れつとしかとねことねずみとたかときじとの如しと見へ候、良観等の天魔の法師らが親父左衛門の大夫殿をすかし、わどのばら二人を失はんとせし

に、殿の御心賢くして日蓮がいさめを御もちありしゆへに二のわの車をたすけ二の足の人になるが如く二の羽のとぶが如く日月の一切衆生を助くるが如く、兄弟の御力にて親父を法華經に入れまいらせさせ給いぬる御計らい偏に貴辺の御身にあり、又真実の經の御ことはりを代末になりて仏法あながちにみだれば大聖人世に

出ずべしと見へ候、喩は松のしもの後に木の王と見菊は草の後に仙草と見へ候、代のおさまれるには賢人見えず代の乱れたるにこそ聖人愚人は顕れ候へあはれ平の左衛門殿さがみ殿の日蓮をだに用いられて候いしかば、すぎにし蒙古国の朝使のくびはよも切せまいらせ候はじくやくしくおはすらなん。

人王八十一代安徳天皇と申す大王は天台の座主明雲等の真言師等数百人かたらひて源の右將軍頼朝を調伏せしかば還著於本人とて明雲は義仲に切られぬ安徳天皇は西海に沈み給う、人王八十二三四隠岐の法皇阿波の院佐渡の院、当今、已上四人・座主・慈円僧正・御室・三井等の四十余人の高僧等をもて平の將軍義時を調伏し給う程に又

げんちゃくおほんにん
還著於本人とて上の四王島島に放たれ給いき、此の大悪法は弘法 慈覚 智証の三大師 法華經最第一の釈尊の金言を破
りて法華最第二・最第三・大日經最第一と読み給いし僻見を御信用有りて今生には国と身とをほろぼし後生には無間
地獄に墮ち給いぬ、今度は又此の調伏三度なり、今 我が弟子等死したらん人人は仏眼をもて是を見給うらん、命つれな
くて生たらん眼に見よ、国主等は他国へ責めわたされ調伏の人人は 或は狂死 或は他国 或は山林にかくるべし、教主
釈尊の御使を二度までごつちをわたし弟子等をろうつに入れ 或は殺し 或は害し 或は所国をおひし故に其の科必ず其の
国国民の身に一一にかかるべし、或は又白癩 黒癩 諸悪重病の人人おほかるべし、我が弟子等 此の由を存ぜさせ
給へ 恐恐 謹言。

九月九日

日蓮花押

此の文は別しては兵衛の志殿へ総じては我が一門の人人御覧有るべし、他人に聞かせ給うな。

一七五 兵衛志殿女房御返事

1097P

銅の御器二給ひ畢おわぬ、釈迦しゃかぶつ仏三十の御年 仏になり始てをはし候時 牧牛女もくしと申せし女人にょにん 乳のかいをにて仏にまいらせんとし候し程にいれてまいらすべき器なし、毘沙門天王等の四天王してんのう 四鉢を仏にまいらせたりし、其その鉢をつちかさねてかいをまいらせしに仏にはならせ給たまう、其その鉢後には人も もらざりしかども常に飯いのみちしなり後に馬鳴菩薩めみょうぼさつと申せし菩薩ぼさつ 伝たへ金錢三貫にほつじたりしなり、今御器二を千里せんりにをくり釈迦しゃかぶつ仏にまいらせ給たまへは、かの福のごとくなるべし、委しくは申さず候。

建治三年丁丑十一月七日

日蓮花押

兵衛志殿女房御返事

一七六 兵衛志殿御返事 弘安元年

1097P

みそをけ一給ひ畢ぬ。はらのけ(下痢)は左衛門さえもんどのの御薬になをりて候。又このみそ味噌をなめて、いよいよこちなをり候ぬ。あわれあわれ今年御つづがなき事をこそ、法華経に申し上げまいらせ候へ。恐恐謹言。

弘安元年六月二十六日

日蓮 花押

兵衛志殿御返事

錢六貫文の内一貫次郎白厚綿小袖一領四季にわたりて財を三宝さんぼうに供養くやうし給たまつづれもいづれも功德くどくにならざるはなし、
但ただし時に随したがいて勝劣しょうりつ浅深せんじんわかれて候、うへたる人には衣をあたるよりも食をあたる候はいますこし功德くどくまさるこゝへ
たる人には食をあたる候よりも衣は又まさる春夏しゅうかに小袖をあたる候よりも秋冬しゅうふに

あたへぬれば又功德一倍なり、これをもつて一切いっさいはしりぬべし、ただし此の事に在あては四季を論ぜず日月にちげつをたださずせに。
こめかたびらぎぬこそで、日日月月にひまなし、例せばびん頻婆沙羅王ばしやらわつの教主きやうしゆ釈尊しやくそんに日日に五百輛の車ををくり
阿育大王あそかだいおうの十億の沙金を鵝頭魔寺にせせしがごとし、大小だいしやうことなれども志しよんは彼かにもすぐれたり。

其その上今年しやうねんは子細しさい候、ふゆと申まうすふゆいづれのふゆかさむからざる、なつと申まうすなついづれのなつかあつからざる、ただし
今年しやうねんは余国よこくにはいかんが候らんこのはきぬは法にすぎてかんじ候、ふるきをきなどもとどひ候は八十九一百になる者の
物語ものがたりり候はすべていにしへこれほどさむき事候はず、此のあんじちより四方しほうの

山の外十町二十町人かよう事候はねばしり候はず、きんぺん一町のほどはゆき一丈二丈五尺等なり、このつるつ十月卅日
ゆきすこしふりて候しがやがてき候ぬ、この月の十一日たつの時より十四日まで大雪ふりて候しに兩三日たててすこし雨
ふりてゆきかたくなる事金剛きんかうのうとしいまにきゆる事なし、ひるもよるもさ

むくつめたく候事法にすぎて候、さけはをりて石のごとく、あぶらは金ににたり、なべがまは少し水あればこおりてわれか
んいよいよかきなり候は、きものすすく食ともしくしてさしづるものもなし。

坊ははんさくにてかぜゆきたまらず、しきものはなし、木はさしいづるものもなければ火もたかず、ふるき

あかづきなんどして候こそで、なんどきたるものは其身のいろ紅蓮大紅蓮のごとし、こへはは地獄にことならず、手足かんじてきれさけ人死ぬことがぎりなし、俗のひげをみればやうらくをかけたなり、僧のはなをみればすつらぬきかけて候、かかるふしぎ候はず候に去年の十二月の卅日より、はらのけの候しが春夏やむ

ことなし、あきすぎて十月のころ大事になりて候しが、すこして平愈つかまつりて候へとも、ややもすればをこり候に、兄弟二人のふたつの小袖わた四十両をきて候が、なつのかたびらのやうにかろく候ぞ、ましてわたうすく、ただぬのものばかりのものを、もひやらせ給へ、此の二のこそでなくば、今年はこのへしに候なん。

其上兄弟と申し右近の尉の事と申し、食もあいついて候、人はなき時は四十人ある時は六十人、いかにせき候へとも、これにある人々のあにとて出来し舎弟とてさしいでしきゐ候ぬれば、かかはやさにかにとも申し、心

にはしずかに、あじちむすびて小法師と我が身計り御経よみまいらせんとこそ存じて候に、かかるわづらはしき事候はず、又としあけ候わば、いづくもにげんと存じ候ぞ、かかるわづらわしき事候はず、又又申すべく候。

なによりも、えもんの大夫志ととの御事、ちちの御中と申し、上のをばへ申し、面にあらずば申しつくしが、たし、恐

謹言。

十一月廿九日

兵衛志殿御返事

日蓮 花押

御親父御逝去の由、風聞真にてや候らん、貴辺と大夫志の御事は代末法に入つて生を辺土につけ法華の大法を御信用候は悪鬼定めて国主と父母等の御身に入りかわり怨をなさん事疑なかるべきところに、案にたがふ事なく親父より度度の御かんだつをかつほらせ給ひしかども兄弟ともに浄蔵浄眼の後身か將た又薬王薬上の御計ら

いかのゆゑに事に事ゆなく親父に御かんきをゆりさせ給いて前にたてまいらせし御孝養心に任せさせ給いぬるはあに孝子にあらずや、定めて天よりも悦びをあたふ法華經十羅刹も御納受あるべし。

其の上貴辺の御事は心の内に感じをもつ事候、此の法門經のごとくひろまり候わば御悦び申すべし、六賢六賢兄弟のおんちゅうふわ御中不和にわたらせ給ふべからず不和にわたらせ給ふべからず、大夫志殿の御文にくわしくかきて候きこしめすべし、恐恐謹言。

弘安二年二月二十一日

日蓮 花押

一七九

兩人御中御書

弘安二年

五十八歳御作

於身延

1101p

たいこくあじやり
大國阿闍梨えもんのたいつ志殿等に申す、故大進阿闍梨の坊は各各の御計らいに有るべきかと存じ候に今に人も住せず
ななど候なるはいかなる事ぞ、ゆづり状のなくばこそ人人も計らい候はめ、くはしくつけ給わり候はべんの阿闍梨にゆづられて候よしつけ給わり候き、又いぎあるべしともをばす候、それに御用いなきは別の子細の候か其の子細なくば大國
あじやりたゆうどの
阿闍梨大夫殿の御計らいとして弁の阿闍梨の坊へはちわたさせ給い候へ心けんなる人に候はいかんがとこそをもち候らめ、弁の阿闍梨の坊をすりしてひろくもらずば諸人の御ために御たからにてこそ候はんずらむめ、ふゆはせつまつしげし、
もしやけなばそむと申し人もわらいなん、このふみついて西三日が内に事切て各各御返事給ひ候はん、恐恐謹言。

十月廿日

にちれん
日蓮
かおう
花押

おんちゆう
兩人御中

ゆづり状をたがうべからず

一八〇 右衛門太夫殿御返事

1102P

抑久しく申し承らず候の処に御文到来候い畢んぬ、殊にあをきうらの小袖一ぼつし一をび一すぢ鷺目一貫文くり
一籠たしかにうけとりまいらせ候、当今は末法の始の五百年に当りて候、かかる時刻に上行菩薩御出現あつて南無
妙法蓮華經の五字を日本国の一切衆生にさづけ給うべきよし經文分明なり、又流罪・死罪に行わるべきよし明かなり、
日蓮は上行菩薩の御使にも似たり此の法門を弘むる故に、神力品に云く「日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く斯の
人世間に行じて能く衆生の闇を滅す」等云云、此の經文に斯人行世間の五の文字の中の人の文字をば誰とか思し食す、
上行菩薩の再誕の人なるべしと覺えたり、經に云く「我が滅度の後に於て心に斯の經を受持すべし是の人、仏道に於て決定
して疑有ること無けん」云云、貴辺も上行菩薩の化儀をたずくる人なるべし。

弘安二年己卯十二月三日

日蓮花押

右衛門太夫殿御返事

一八一 大夫志殿御返事

弘安三年

五十九歳御作

1103p

小袖一つ直垂三具同じく腰三具等云云、小袖は七貫直垂並びに腰は十貫已上十七貫文に当れり、夫れ以れば天台大師の御位を章安大師顕して云く「止觀の第一に序文を引いて云く安禪として化す、位五品に居したまえ

り、故に經に云く四百万億那由他の国の人に施すに一一に皆七宝を与え又化して六通を得しむるすら初隨喜の人に如ざること百万倍せり況や五品をや、文に云く即如来の使なり如来の所遣として如来の事を行ず」等云云、

伝教大師天台大師を釈して云く「今吾が天台大師は法華經を説き法華經を釈し群に特秀し唐に独歩す」云云、又云く

明かに知んぬ如来の使なり讃むる者は福を安明に積み誇る者は罪を無間に開く」と云云、是の如きは且らく之を置く、

滅後・一日より正像二千余年の間、仏の御使二十四人なり、所謂第一は大迦葉 第二は阿難 第三は

末田地 第四は商那和修 第五は 多 第六は提多迦 第七は弥遮迦 第八は仏駄難提 第九は仏駄密多 第十は脇比丘

第十一は富那奢 第十二は馬鳴 第十三は毘羅 第十四は竜樹 第十五は提婆 第十六は羅 第十七は僧 難提 第十八

は僧 耶奢 第十九は鳩摩羅駄 第二十は闍夜那 第二十一は盤駄 第二十二は摩奴羅 第二十三は鶴勒夜奢 第二十四

は師子尊者、此の二十四人は金口の記する所の付法藏經に載す、但し小乗・権大乘經の御使なりいまだ法華經の御使

にはあらず、三論宗の云く「道朗吉藏は仏の使なり」法相宗の云く「玄奘慈恩は仏の使なり」華嚴宗の云く「法藏澄觀は

仏の使なり」真言宗の云く「善無畏・金剛智・不空慧果弘法等は仏の使なり」

日蓮之を勧えて云く全く仏の使に非ず全く大小乗の使にも非ず、之を供養せば災を招き之を謗せば福を至さん、問

う汝の自義が答えて云く設い自義為りと雖も有文有義ならば何の科あらん、然りと雖も釈有り伝教大師云く「誰か福を

捨て罪を慕う者あらんやと云、福を捨てるとは天台大師を捨てる人なり、罪を慕うとは上に攀ぐる所の法相三論華嚴
・真言の元祖等なり、彼の諸師を捨て一向に天台大師を供養する人の其の福を今申すべし、三千大千世界と申すは
東西南北一須弥山六欲梵天を一四天下となづく、百億の須弥山四州等を小千と云う、小千の千を中千と云う、中千の千
を大千と申す、此の三千大千世界を一にして四百万億那由佗国の六道の衆生を八十年やしなひ法華経より外の已今当の
一切経を一一の衆生に読誦せさせて三明六通の阿羅漢辟支仏等覺の菩薩となせる一人の檀那と、世間出世の財を一分
も施さぬ人の法華経計りを一字一句一偈持つ人と相對して功德を論ずるに、法華経の行者の功德勝れたる事百千万億
倍なり、天台大師此れに勝れたる事五倍なり、かかる人を供養すれば福を須弥山につみ給うなりと伝教大師ことはらせ
給ひて候、此の由を女房には申させ給へ、恐恐謹言。

大夫志殿御返事 花押

一八二 兵衛志殿御返事

1104p

青鳧五貫文送り給び了んぬ、唱え奉る南無妙法蓮華経一返の事、恐恐。

六月十八日

日蓮 花押

兵衛志殿御返事

一八三

大夫志殿御返事

弘安四年十二月六十歳御作

1105p

聖人一つ味文字一をけ生和布一こ聖人と味文字はさてをき候いぬ生和布は始めてにて候、将又病の由聞かせ給いて
不日に此の物して御使をもつて脚力につかわされて候事心ざし大海よりふかく善根は大地よりも厚し、かうじんかうじん、
恐恐。

十二月十一日日蓮花押

大夫志殿御返事

一八四

八幡宮造営事

弘安四年五月六十歳御作

1105p

此の法門申し候事すでに廿九年なり、日日の論義月月の難両度の流罪に身つかれ心いたみ候いし故にや此の
七八年間に間年々に衰病をこり候いれどもなほのめにて候いつるが、今年は正月より其の気分出来して既に一期
をわりになりぬべし、其の上齢既に六十にみちぬ、たとひ十に一年はすぎ候とも一二をばいかでかすぎ候べ
き、忠言は耳に逆い良薬は口に苦しとは先賢の言なりや世病の者は命をきらう、佞人は諫を用いずと申すなり、此
の程は上下の人人の御返事申す事なし心もものつく手もたゆき故なり、しかりと申せども此の事大事なれば苦
を忍んで申すものつしとおぼすらん一篇きこしめすべし、村上天皇の前中書王の書を投げ給いがごとくなる
ことなかれ。

さては八幡宮の御造営につきて一定さむそうや有らんずらむと疑いまいらせ候なり、をやと云ひ我が身と申し二代が聞きみにめしつかはれ奉りてあくまで御恩のみなり、設一事相違すともなむのあらみかあるべき、わがみ賢人ならば設上よりつかまつるべきよし仰せ下さるるとも一往はなに事につけても辞退すべき事ぞかし、

幸に讒臣等がことを左右によせば悦んでこそあるべきに望まるる事一の失なり、此れはさてをきぬ五戒を先生に持ちて今生に人身を得たり、されば云うに甲斐なき者なれども国主等謂なく失にあつれば守護の天いかりをなし給う況や命をうばわるる事は天の放ち給うなり、いもうや日本国四十五億八万九千六百五十九人の男女をば四

十五億八万九千六百五十九のたまほり給うらん、然るに他国よりせめ来る大難は脱るべしとも見え候はぬは、四十五億

八万九千六百五十九人の人人の天にも捨てられ給う上六欲四禅梵釈日月四天等にも放たれまいらせ給うにこそ候い

ぬれ、然るに日本国の国主等八幡大菩薩をあがめ奉りなばなに事のあるべきと思はるるが、八幡

は又自力叶いがなければ宝殿を焼きてかくれさせ給うか、然るに自の大科をばかへりみず宝殿を造りてまほらせまいらせ

むとおもへう。

日本国の四十五億八万九千六百五十九人の一切衆生が釈迦多宝・十方分身の諸仏地涌と娑婆と他方との諸大士

十方世界の梵釈日月四天に捨てられまひらせん分齊の事ならばはづかなる日本国の小神天照太神・八幡大菩薩の力

及び給うべしや、其の時八幡宮はつくりたりとも此の国他国にやぶらればくぼきところにちりたまりひきき

ところに水あつまると、日本国の上一人より下万民にいたるまでたせむ事は兼て又知れり、八幡大菩薩は本地は阿弥陀

ほとけにまします、衛門の大夫は念仏・無間地獄と申す阿弥陀仏をば火に入れ水に入れ其の堂をやきはら

ひ念仏者のくびを切れと申す者なり、かかる者の弟子・檀那と成りて候が八幡宮を造りて候へども八幡大菩薩用いさせ

給はぬゆへに此の国はせめらるるなりと申さむ時はいかがすべき、然るに天かねて此の事をしろしめすゆへ

に御造営の大ばんしやうをはづされたるにやあるらむ 神宮寺じんくうじの事のはづるも天の御計おんはからいか。

其そのゆえの故は去ぬる文永十一年四月十二日に大風たいふうふきて其の年そのの他国たこくよりおそひ来るべき前相なり風は是れ天地てんちの使なりまつり事あらければ風あらしと申もうすは是なり、又今年四月廿八日を迎むかえて此の風ふき来る、而るに四月廿六日は八幡はちまんのむね上と承はる、三日の内の大風たいふうは疑うたがいなるべし、蒙古もうこの使者の貴辺きへんが八幡宮はちまんを造りて此の風ふきたらむに人わらひさたせざるべしや。

返す返す穩便おんびんにして・あだみうらむる気色なくて身をやつし下人をもぐせずよき馬にもならず、のこぎりかなづち手にもちこしにつけてつねにえめるすがたにておわすべし、此の事一事もたがさせ給うならば今生けいせいには身をほろぼし後生ごせいには悪道あくどうに堕ち給うべし、返す返す法華經ほけきやううらみさせ給う事なかれ、恐恐きょうきょう。

五月廿六日

在御判

大夫志殿たゆうのしかんの

兵衛志殿さかんの

一八五

兵衛志殿女房御返事

1108p

兵衛志殿女房絹片裏給い候、此の御心は法華經の御宝前に申し上げて候、まこととはをば候はねども此の御房たちの申し候は御子どもはなしよにせけんふつふつとをはすると申され候こそなげかしく候へともさりともとをばしめし候へ恐恐。

十一月廿五日

日蓮 在御判

兵衛志殿女房御返事

一八六

兵衛志殿御返事

1108p

我が法華經も本迹和合して利益を無量にあらはす、各各二人又かくのごとし二人同心して大御所・守殿・法華堂・八幡等つくりまいらせ給うならば此れは法華經の御利生とをもわせ給わざるべき、二人一同の儀は車の二つのわの如し鳥の二つの羽のごとし、設に妻子等の中のたがわせ給うとも二人の御中不和なるべからず、恐れ候へとも日蓮をたいとしとをもひあわせ給へもし中不和にならせ給うならば二人の冥加いかながあるべかるらめと思しめせ、あなかしこあなかしこ、各各みわきかたきもたせ給いたる人人なり、内より論出来れば鵜蚌の相扼も漁夫のをそれ有るべし、南無妙法蓮華經と御唱えつしむべしつしむべし、恐恐。

十一月十二日

日蓮在御判

ひやうえの志殿御返事

懐胎のよし承り候い畢んぬ、それについては符の事仰せ候、日蓮相承の中より撰み出して候能く能く信心あるべく候、たとひ秘薬なりとも毒を入れぬれば薬の用すくなし、つるぎなれどもわるびれ「臆病」たる人のためには何かせん、就中夫婦共に法華の持者なり法華經流布あるべきたねをつぐ所の玉の子出で生れん目出度覚え候ぞ、色心二法をつぐ人なり争かをそなはり候べき、とくとくこそうまれ候はむずれ、此の薬をのませ給はば疑いなるべきなり、闇なれども灯入りぬれば明かなり濁水にも月入りぬればすみ、明かなる事日月にすぎんや淨き事・蓮華にまさるべきや、法華經は日月と蓮華となり故に妙法蓮華經と名く、日蓮又日月と蓮華との如くなり、信心の水すまば利生の月必ず応を垂れ守護し給うべし、とくとくうまれ候べし法華經に云く「如是妙法」又云く「安樂産福子」云云、口伝相承の事は此の弁公にくはしく申しふくめて候則如来の使なるべし返す返すも信心候べし。天照大神は玉をそさのをのみことにさづけて玉の如くの子をまふけたり、然る間日の神我が子となづけたり、さてこそ正哉吾勝とは名けたれ、日蓮うまるべき種をさづけて候は争か我が子にとるべき、「有一宝珠」値直三千」等、「無上宝聚不求自得 釈迦如来皆是吾子」等云云、日蓮あに此の義にかはるべきや、幸なり幸なりめでたしめでたし、又又申すべく候、あなかしこあなかしこ。

ぶんえい
文永八年五月七日

しじょうきんご にちろうひつ にへんじ
四条金吾殿女房御返事

にちれんかおう
日蓮花押

わがしらへ
 若童生れさせ給いし由承り候目出たく覚候、殊に今日は八日にて候、彼れと云い此れと云い所願しをの指す
 が如く春の野に華の開けるが如し、然ればいそぎいそぎ名をつけ奉る月満御前と申すべし、其の上此の国の主
 八幡大菩薩は卯月八日につまれさせ給ふ娑婆世界の教主釈尊も又卯月八日に御誕生なりき、今の童女又月は替れども
 八日につまれ給ふ釈尊八幡のつまれ替りとや申さん、日蓮は凡夫なれば能くは知らず是れ併しながら日蓮が符を進らせ
 し故なり、さこそ父母も悦び給うらん、殊に御祝として餅酒鳥目一貫文送り給ひ候い畢んぬ是ま
 た御本尊十羅刹に申し上げて候、今日の仏生れさせまします時に三十二の不思議あり此の事周書の異記と云う
 文にしるし置けり。

釈迦仏は誕生し給いて七歩し口を自ら開いて天上天下唯我独尊三界皆苦我当度之の十六字を唱給ふ、今の月満
 御前はつまれ給いてつづぐ系に南無妙法蓮華經と唱給ふか、法華經に云く諸法実相と天台の云く声為
 仏事と等云云、日蓮又かくの如く推し奉る、譬えば雷の音耳しいの為に聞く事なく日月の光り目くらの為に見
 る事なし、定めて十羅刹女は寄り合つてつづぐ水をなで養ひ給うらんあらめでたやあらめでたや御悦び推量申し
 候、念頃に十羅刹女天照太神等にも申して候、あまりの事に候間委くは申さず、是より重ねて申すべく候、
 あなかしあなかし
 六賢六賢。

雪のごとく白く候白米一斗古酒のごとく候油一筒御布施一貫文、態使者を以て盆料送り給い候、殊に御文の趣有難くあはれに覚え候。

抑孟蘭盆と申すは源目連尊者の母青提女と申す人慳貪の業によりて五百生 餓鬼道にをち給いて候を目連救ひしより事起りて候、然りと雖も仏にはなさず其の故は我が身いまだ法華經の行者ならざる故に母をも仏になす事なし、靈山八箇年の座席にして法華經を持ち南無妙法蓮華經と唱えて多摩羅跋栴檀香仏となり給い此の時母も仏になり給う、又施餓鬼の事仰せ候、法華經第三に云く「如從飢國來忽遇大王膳ニ云、此の文は中根の四大声聞 醍醐の珍膳をおとにもきかざりしが今經に來つて始めて醍醐の味をあくまでになめて昔しうへたる心を忽にやめし事を説き給う文なり、若し爾らば餓鬼供養の時は此の文を誦して南無妙法蓮華經と唱えてとぶらひ給うべく候。

総じて餓鬼にをいて三十六種類相わかれて候、其の中に身餓鬼と申すは目と口となき餓鬼にて候、是は何なる修因ぞと申すに此の世にて夜討強盜などをなして候によりて候、食吐餓鬼と申すは人の口よりはき出す物を食し候是も修因上の如し、又人の食をうばふに依り候、食水餓鬼と云うは父母孝養のために手向る水などを呑む餓鬼なり、有財餓鬼と申すは馬のひずめの水をのむがきなり是は今生にて財ををしみ食をかくす故なり、無財がきと申すは生れてより以来飲食の名をもきかざるがきなり、食法がきと申すは出家となりて仏法を弘むる人、我は法を説けば人尊敬するなご思ひて名聞名利の心を以て人にすぐれんと思つて今生をわたり衆生をたすけず父母をすくふべき心もなき人を食法がきとて法をくらふがきと申すなり、当世の僧を見るに人にかくし

て我、一人ばかり供養をつくる人もあり是は狗犬の僧と涅槃經に見えたり、是は未来には牛頭と云う鬼となるべし、又人にしらせて供養をつくるとも欲心に住して人に施す事なき人もあり是は未来には馬頭と云う鬼となり

候、又在家の人人も我が父母地獄・餓鬼・畜生におちて苦患をつくるをばとぶらはずして我は衣服飲食にあきみ牛馬眷属充満して我が心に任せてたのしむ人をばいかに父母のつらやましく恨み給うらん、僧の中にも父

母師匠の命日をとぶらふ人はまれなり、定めて天の日月地の地神いかりいきどをり給いて不孝の者とおもは

せ給うらん形は人にして畜生のごとし人頭鹿とも申すべきなり、日蓮此の業障をけしはてて未来は靈山淨土に

まいるべしとおもは種種の大難雨のごとくふり雲のごとくにわき候へとも法華經の御故なれば苦をも苦と

もおもはず、かかる日蓮が弟子・檀那となり給う人人殊に今月十二日の妙法・聖靈は法華經の行者なり日蓮が檀那なり

いかでか餓鬼道におち給うべきや、定めて釈迦・多宝・十方の諸仏の御宝前にまします、是こそ四条金吾殿

の母よ母よ同心に頭をなで悦びほめ給うらめ、あはれいみじき子を我はもちたりと釈迦仏とかたらせ給うら

ん、法華經に云く「若し善男子・善女人有て妙法華經の提婆達多品を聞いて淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄

餓鬼・畜生に墮ちずして十方の仏前に生ぜん、所生の処には常に此の經を聞かん、若し人天の中に生れば勝妙の樂を

受け、若し仏前に在らば蓮華より化生せんと云云、此の經文に善女人と見たり妙法・聖靈の事にあらず

んば誰が事にやらん、又云く「此の經は持つこと難し若し暫も持つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦然なり是の如き

の人は諸仏の歎めたもう所」と云云、日蓮讚歎したてまつる事はものかすならず、諸仏所歎と見えたり、あら

たのもしやあらたのもしやと信心をふかくとり給うべし信心をふかくとり給うべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、

恐恐謹言。

七月十二日

日蓮 花押

四条金吾殿御返事

度度たびたびの御音信おとずれもつ申しつくしがたく候、さてもさても去るいぬ十二日の難なんのとき貴辺きへんたつのくちまでつれさせ給たまいしかのみならず腹を切らんと仰おほせられし事こそ不思議ふしぎとも申もうすばかりなけれ、日蓮過去にちれんかこに妻子所領さいししよりうけんとく眷属等ゆゑの故ゆゑに身命しんみちうを捨てし所いくそばくありけむ、或あるは山にすて海にすて或あるは河或あるはいそ等路どうろのほとりか、然れども法華經ほけきやうのゆ題目だいもくの難なんにあらざれば捨てし身も蒙いおむる難等なんも成仏じやうぶつのためならず、成仏じやうぶつのためならざれば捨てし海河も仏土にもあらざるが。

今度このたび法華經ほけきやうの行者ぎやうじやうとして流罪るざい・死罪しざいに及ぶ、流罪るざいは伊東死罪しざいはたつのくち相州さうしゆうのたつのくちこそ日蓮にちれんが命を捨てたる処ところなれ仏土におとるべしや、其そのの故ゆゑはずで法華經ほけきやうの故なるがゆなり、經に云く十方じふしやう仏土中ちゆう唯有一乘法ゆいいうと此の意なるべきか、此の經文きやうもんに一乘法いちじやうほうと説き給たまふは法華經ほけきやうの事なり、十方じふしやう仏土の中には法華經ほけきやうより外は全くなきなり除仏方便説ほつぷんほうべんと見えたり、若し然らば日蓮にちれんが難にあう所ごとに仏土なるべきか、娑婆世界しやばせかいの中には日本国にほんこく・日本国にほんこくの中には相模さがみの国相模さがみの国の中には片瀨片瀨の中には竜口に日蓮にちれんが命をとどめをく事は法華經ほけきやうの御故なれば寂光土ともいふべきか、神力品じちりきひんに云く「若於林中若於園中若山谷曠野是中乃至而般涅槃はんねはん」とは是か。

かかる日蓮にちれんにともなひて法華經ほけきやうの行者ぎやうじやうとして腹を切らんと給たまふ事かの弘演かうえんが腹をさいて主の認公いんこうがきもを入れたるよりも百千万倍ひやくせんまんばいすぐれたる事なり、日蓮靈山にちれんりやうぜんにまいりてまづ四條金吾しじやうきんごこそ法華經ほけきやうの御故ゆゑに日蓮にちれんとをなじく腹切らんと申し候なりと申し上げ候べきぞ、又かまくらどのの仰おほせとて内内佐渡さどの国くにはすべき由

承り候、三光天子の中に月天子は光物とあらはれ竜口の頸をたすけ、明星天子は四五日已前に下りて日蓮に見参し給ふ、いま日天子ばかりのこり給ふ定めて守護あるべきかと。たのもしたのもし、法師品に云く「則遣变化人為之作衛護」疑あるべからず、安樂行品に云く「刀杖不加」普門品に云く「刀尋段段壞」此等の經文よも虚事にては候はじ、強盛の信力こそありがたく候へ 恐恐謹言。

文永八年九月二十一日

四条金吾殿

日蓮 花押

一九一 同生同名御書

文永九年四月 五十一歳御作

此の御文は藤四郎殿の女房と常によりあひて御覽あるべく候。

大閻をば日輪やぶる女人の心は大閻のごとし法華經は日輪のごとし、幼子は母をしろす母は幼子をわすれず、釈迦仏は母のごとし女人は幼子のごとし、二人たがひに思はずべではなれず一人は思へとも一人思はざれば・あるときはあひあるときはあわず、仏はをもふもののごとし女人はをもはざるもののごとし、我等仏をもはばいかでか釈迦仏見え給はざるべき、石を珠といへども珠とならず珠を石といへども石とならず、権經の当世の念仏等は石のごとし、念仏は法華經ぞと申すとも法華經等にあらず、又法華經をそしるとも珠の石とならざるがごとし。

昔唐国に徽宗皇帝と申せし悪王あり、道士と申すものにすかされて仏像・經卷をつしなひ僧尼を皆還俗せしめしに一人として還俗せざるものなかりき、其の中に法道三蔵と申せし人こそ勅宣をおそれずして面になを。

やかれて江南と申せし処、こゝろ流されて候いしが、今の世の禪宗と申す道士の法門のやうなる惡法を御信用ある世に生れて
日蓮が大難に値うことは法道に似たり、おのおのわずかの御身と生れて鎌倉にゐながら人目をもはばかりず命をもお
しまず法華經を御信用ある事だ事もおぼえず、但おしはかるに濁水に玉を入れぬれば水のすむがごとし、しらざる
事をよき人におしえられて其のままに信用せば道理にきこゆるがごとし、釈迦仏・普賢菩薩・藥王菩薩やくおうぼさ
つ・宿王華菩薩等の各各の御心中に入り給へるか、法華經の文に閻浮提に此の經を信ぜん人は普賢菩薩の御力なりと
申す是なるべし、女人はたとへば藤のごとしをとこは松のごとし須臾もはなれぬれば立ちあがる事なし。

はかばかしき下人もなきに、かかる乱れたる世に此のものをつかはされたる心ざし大地よりもおつし地神定めてしりぬ
らん、虚空よりもたかし梵天帝釈もしらせ給いぬらん、人の身には同生同名と申す二のつかひを天生るる時よりつけさせ
給いて影の身にしたがつがごとく須臾もはなれず、大罪・小罪・大功徳・小功徳すこしもおとさずかはる、かはる天にのぼ
て申し候と仏説き給う、此の事ははや天も・しろしめしぬらん、たのもししたのもし。

四月 日

日蓮花押

四條金吾殿女房御返事

日蓮が諸難について御とぶらひ今にはじめざる志 ありがたく候、法華經の行者として がかかる大難にあひ候はくやしくおもひ候はず、いかほど生をつけ死にあひ候とも是ほどの果報の生死は候はじ、又三悪 四趣にこそ候いつらめ、今は生死切断し仏果をうべき身となれば よろこばしく候。

天台・伝教等は迹門の理の一念三千の法門を弘め給うすらなを怨嫉の難にあひ給いぬ、日本にしては伝教より義真・円澄・慈覚等 相伝して弘め給ふ、第十八代の座主 慈慧大師なり御弟子あまたあり、其の中に檀那 慧心・

僧賀・禅喻等と申して四人まします、法門又二つに分れたり、檀那僧正は教を伝ふ、慧心僧都は觀をまなぶ、されば教と觀とは日月のごとし教はあさく觀はふかし、されば檀那の法門はひろくしてあさく、悪心の法門はせばくしてふかし。

今日蓮が弘通する法門は せばきやうなれども はなはだふかし、其の故は彼の天台・伝教等の所弘の法よりは

一重立入りたる故なり、本門・寿命品の三大事とは是なり、南無妙法蓮華經の七字ばかりを修行すればせばきが如し、されども三世の諸仏の師範・十方薩埵の導師・一切衆生 皆成仏道の指南にてましますなれば、ふかきなり、經に云く「諸仏智慧 甚深無量」云云、此の經文に諸仏とは十方三世の一切の諸仏・真言宗の大日如来・淨土宗の阿弥陀 乃至諸宗・諸經の仏 菩薩 過去・未來・現在の總諸仏 現在の釈迦如来等を諸仏と説き挙げて次に智慧といへ

り、此の智慧とはなにもので諸法実相・十如果成の法体なり、其の法体とは又なにもぞ南無妙法蓮華經なり、釈に云く「実相の深理・本有の妙法蓮華經」といへり、其の諸法実相と云うも釈迦・多宝の二仏とならうなり、

諸法をば多宝に約し実相をば釈迦に約す、是れ又境智の二法なり多宝は境なり釈迦は智なり、境智而二にしてしかも境智不二の内証なり、此等はゆゆしき大事の法門なり煩惱即菩提生死即涅槃と云うもこれなり、まさし

く男女交会のとき南無妙法蓮華經ととなふるところを煩惱即菩提生死即涅槃と云うなり、生死の当体不生不滅とさ
とるより外に生死即涅槃はなきなり、普賢經に云く煩惱を断ぜず五欲を離れず諸根を淨むることを得て諸罪を滅除す

止觀に云く無明度勞は即是菩薩生死は即涅槃なり「壽量品に云く毎に自らは是の念を作す、何を

以てか衆生をして無上道に入り、速に仏身を成就することを得せしめん」と方便品に云く世間の相常住なり」等は此の
意なるべし、此くの如く法体と云うも全く余には非ずただ南無妙法蓮華經の事なり、かかるいみじく・

たうとき法華經を過去にて勤このしたにをきたてまつり或はあなづりくちひそみ、或は信じ奉らず、或は法華經の

法門をならうて一人をも教化し法命をつぐ人を悪心をもつてとによせかくによせおこきわらひ、或は

後生のつとめなれども郎今生かなひがたければしばらくさしをけななどと無量にいひうとめ謗ぜしによつて今生に日蓮

種種の大難にあつなり。

諸經の頂上たる御經を鵬きくをき奉る故によりて現社に又人に紆げられ用いられざるなり、譬喩品に「人にしたしみつく

とも人山がいて不便とおもふべからず」と説きたり、然るに血月辺法華經の行者となり結句大難にも

あひ日蓮をもたすけ給う事、法師品の文に「造化四衆比丘比丘陀優婆塞優婆襲」と説き給ふ此の中の優婆塞とは貴辺の

事にあらずんば、たれをかささむ、すでに法を聞いて信受して逆はさればなり不思議や不思議や、若し然ら

ば日蓮法華經の法師なる事疑なきか、則ち如来にもにたるらん行如来事をも行ずるになりなん。

多宝塔中にして二仏並坐の時上行菩薩に譲り給ひし題目の五字を日蓮粗ひろめ申すなり、此れ即ち上行菩薩の御使

いが、貴辺又日蓮にしたがひて法華經の行者として諸人にかたり給ふ是れ豈流通にあらずや、法華經の信心をとをし給へ

火をきるにやすみぬれば火をえず、強盛の大信力をいだして法華宗の四条金吾、四条金吾と鎌倉中の上下万人乃至日本国の一切衆生の口につたはれ給へあしき名さ流す況やよき名をや何に況や法華経ゆへ
の名をや、女房にも此の由を云ひふくめて日月・両眼さうのつばさと調ひ給へ日月あらば冥途あるべきや両眼あらば三仏の顔貌拝見疑なし、さうのつばさあらば寂光の宝刹・飛ばん事・須臾刹那なるべし、委しくは又又申べく候、恐惶謹言。

五月二日

日蓮花押

四条金吾殿御返事

一九三 四条金吾殿御返事 文永九年九月 五十一歳御作

1118p

夫れ齊の桓公と申せし王 紫をこのみて服給いき、楚の莊王と言いし王は女の腰のふとき事をにくみしかば一切の遊女腰をほそからせんがために餓死しけるものおほし、しかれば一人の好む事をば我が心にあはざれども万民随いしなり、たとへば大風の草木をなびかし大海の衆流をひくが如し、風にしたがはざる草木はをれうせざるべしや、小河大海におさまらずばいづれのところにおさまるべきや、国王と申す事は先生に万人にすぐれて大戒を持ち天地及び諸神ゆるし給いぬ、其の大戒の功德をもちて其の住むべき国土を定む、二人・三人等を王とせず地王 天王 海王 山王 等悉く来臨してこの人をまほる、いかにいはんや其の国中の諸民其の大王を背くべしや、此の王はたとひ悪逆を犯すとも一二三度等には左右なく此の大王を罰せず、但諸天等の御心に叶わざるは一往は天変地天等をもちてこれをいさむ、事過分すれば諸天善神等其の国土を捨離し給う、若しは此

大王の戒力つき期来つて国土のほろぶる事もあり、又逆罪多くにかさまれば隣国に破らるる事もあり、善惡に付て国は必ず王に随うものなるべし。

世間此くの如し仏法も又然なり、仏陀すでに仏法を王法に付し給うしかればたとひ聖人賢人なる智者なれど

も王にしたがはざれば仏法流布せず、或は後には流布すれども始めには必ず大難来る、迦式志加王は仏の滅後四百年の王なり健陀羅國を掌のうちににぎれり、五百の阿羅漢を帰依して婆沙論二百巻をつくらしむ、國中総て小乗なり其の國に大乘弘めがたかりき、發舍密多羅王は五天竺を随へて仏法を失ひ衆僧の頸をきる、誰の智者も叶わず。

太宗は賢王なり玄奘三蔵を師として法相宗を持ち給いき誰の臣下かそむきし、此の法相宗は大乘なれども五性各別と申して仏教中のおほきなるわざはひと見えたり、なを外道の邪法にもすぎ惡法なり、月支震旦日本・

三国共にゆるさず、終に日本國にして佛教大師の御手にかかりて此の邪法止め畢んぬ、大なるわざはひなれども太宗これを信仰し給いしかば誰の人かこれをそむきし。

真言宗と申すは大日經・金剛頂教・蘇悉地經によるこれを大日の三部と号す、玄宗皇帝の御時善無畏三蔵・金剛智三蔵天竺より將ち来れり、玄宗これを尊重し給う事天台・華嚴宗等にもこたり、法相三論にも勝れて思し食すが故に漢土は総て大日經は法華經に勝るとおもひ日本國當世にいたるまで天台宗は真言宗に劣るなりと

おもふ、彼の宗を学する東寺・天台の高僧等慢過慢をおこす、但し大日經と法華經とこれをならべて偏党を捨て是を見れば大日經は螢火の如く法華經は明月の如く真言宗は衆星の如く天台宗は日輪の如し、偏執の者の云く汝未だ真言宗の深義を習いきはめずして彼の無尽の科を申す、但し真言宗漢土に渡つて六百余年日本に弘まりて四百年此の間の人の難答あらあらこれをしれり、佛教大師一人此の法門の根源をわきま給うし

かるに当世とうせ、日本国第一にほんこくだいいちの科とが是なり、勝を以て劣と思ひ劣を以て勝と思ふの故に大蒙古国を調伏する時、還つて襲われんと欲ほす是なり。

華嚴宗と申すは法蔵法師が所立の宗なり、則天皇皇后の御帰依ありしによりて諸宗肩をならべがたかりき、しかれば王の威勢によりて宗の勝劣はありけり法に依つて勝劣なきやうなり。

たとひ深義を得たる論師・人師なりといふとも王法には勝がたきゆへにたまたま勝んとせし仁は大難にあへり、所謂師子尊者は檀弥羅王のために頸を刎ねらる、提婆菩薩は外道のために殺害せらる、竺の道生は蘇山に流され法道三蔵は面火印をされて江南に放たれたり、而るに日蓮は法華經の行者にもあらず又僧侶の数にもいらず。

然り而して世の人に随て阿弥陀仏の名号を持ちしほどに阿弥陀仏の化身とひびかせ給う善道和尚の云く「十即十生・ひやくそくひやくじうないせんちゆうむい」百即百生乃至千中無一と、勢至菩薩の化身とあをがれ給う法然上人、此の釈を料簡して云く「末代に念仏の外ほかの法華經等を雑ふる念仏においては千中無一一向に念仏せば十即十生」と云、日本国の有智・無智仰いで

此の義を信じて今に五十余年一人も疑を加ず、唯日蓮の諸人にかはる所は阿弥陀仏の本願には唯五逆と誹謗正法とを除くことかひ、法華經には「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切世間の仏種を断ず、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らんと説かれたり、此れ善導・法然謗法の者なればたのむところの阿弥陀仏にすてられをはんぬ、余仏余經においては我と抛ちぬる上は救い給うべきに及ばず、法華經の文の如きは無間地獄・疑なしと云云、而るを日本国はをしなべて彼等が弟子たるあひだ此の大難まぬかれがたし。

無尽の秘計をめぐらして日蓮をあだむ是なり先先の諸難はさておき候いぬ、去年九月十二日御勘氣をかほりて其の夜のうちに頭をはねらるべきにてありしがいかなる事にやよりけん彼の夜は延びて此の国に來りていままで候に世間にもすてられ仏法にもすてられ天もとぶらはれず一途にかけたるすてもなり、而るを何なる

御志にてこれまで御使をつかはし御身には一期の大事たる悲母の御追善第三年の御供養を送りつかはされたる兩三日はうつともおぼす、彼の法勝寺の修行がいをはが嶋にてとしごろつかひける童にあひたりし心地なり、胡国の夷陽公といひしもの漢土にいけどられて北より南出けるに飛びまひける雁を見てなげきけんも、これにはしかじとおぼたり。

但し法華經に云く「若し善男子・善女人・我が滅度の後に能く竊かに一人の爲にも法華經の乃至一句を説かん、当に知るべし是の人は則ち如来の使如来の所遣として如来の事を行ずるなり」と等云、法華經を一字・一句も唱え又人にも語り申さんものは教主釈尊の御使なり、然れば日蓮賤身なれども教主釈尊の勅宣を頂戴して此の国に来れり、此れを一言もそしらん人人は罪を無間に開き一字・一句も供養せん人は無数の仏を供養するにもすぎたりと見えたり。

教主釈尊は一代の教主一切衆生の導師なり、八万法蔵は皆金言十二部經は皆眞実なり、無量億劫より以来持ち給ひし不妄語戒の所詮は一切經是なり、いづれも疑うべきにあらず、但是は総相なり別してたづぬれば如来の金口より出来して小乗・大乘・顯密權經・実經是あり、今この法華經は「正直捨方便等乃至世尊法久後・要當説眞実」と説き給う事なれば誰の人が疑うべきなれども多宝如来証明を加諸仏舌を梵天に付け給う、されば此の御經は一部なれども三部なり一句なれども三句なり一字なれども三字なり、此の法華經の一字の功德は釈迦・多宝・十方の諸仏の御功德を一字におさめ給う、たとへ如意宝珠の如し一珠も百珠も同じき事なり一珠も無量の宝を雨す百珠も又无尽の宝あり、たとへ百草を抹りて一丸乃至百丸となせり一丸も百丸も共に病を治する事これなじ、譬へ大海の一も衆流を備へ海も万流の味をもてるが如し。

妙法蓮華經と申すは総名なり二十八品と申すは別名なり、月支と申すは天竺の総名なり別しては五天竺是なり、日本と申すは総名なり別しては六十六州これあり、如意宝珠と申すは釈迦仏の御舍利なり竜王にこれを給いて頂上に

頂戴して帝釈是を持ちて宝をふらす、仏の身骨の如意宝珠となれるは無量劫来持つ所の大戒身に薰じて骨にそみ一切衆生をたすける珠となるなり、たとへば犬の牙の虎の骨にとく魚の骨の・氣に消ゆるが如し、乃至・師子の筋を琴の絃にかけてこれを弾けば余の一切の獸の筋の絃皆きらざるにやぶる、仏の説法をば師子吼と申す乃至法華経は師子吼の第一なり。

仏には三十二相そなはり給う――の相皆百福莊嚴なり、肉髻白毫など申すは菓の如し因位の華の功德等と成つて三十二相を備え給う、乃至無見頂相と申すは釈迦仏の御身は丈六なり竹杖外道は釈尊の御長をはからず御頂を見奉らんとせしに御頂を見たてまつらず、応持菩薩も御頂を見たてまつらず、大梵天王も御頂をば見たてまつらず、これはいかなるゆゑとたづねれば父母・師匠主君を頂を地につけて恭敬し奉りしゆへに此の相を感じ得せり。

乃至梵音声と申すは仏の第一の相なり、小王大王・轉輪王等此の相を一分備へたるゆへに此の王の一言に国も破れ国も治まるなり、宣旨と申すは梵音声の一分なり、万民の万言一王の一言に及ばず、則ち三墳・五典など申すは小王の御言なり、此の小国を治め乃至大梵天王三界の衆生を随ふる事仏の大梵天王・帝釈等をしたがへ給う事もこの梵音声なり、此等の梵音声一切経と成つて一切衆生を利益す、其の中に法華経は釈迦如来の書き顯して此の御音を文字と成し給う仏の御心はこの文字に備れり、たとへば種子と苗と草と稻とはかはれども心はたがはず。

釈迦仏と法華経の文字とはかはれども心は一つなり、然れば法華経の文字を拝見せさせ給うは生身の釈迦如来にあひ進らせたりとおぼしめすべし、此の志・佐渡の国までおくりつかはされたる事すでに釈迦仏知し食し畢ん

ぬ、実に孝養の詮なり、恐恐謹言。

文永九年 月 日

日蓮在御判

四条三郎殿御返事

一九四

經王御前御書

文永九年五十一歳 御作

1123p

種種御送り物給ひ候い畢んぬ、法華經第八妙莊嚴王品と申すには妙莊嚴王、淨徳夫人と申す后は淨藏、淨眼と申す太子に導かれ給うと説かれて候、經王御前を儲させ給いて候は現世には跡をつぐべき孝子なり、後生には又導かれて仏にならせ給うべし、今の代は濁世と申して乱れて候なり、其の上、眼前に世の中乱れて見え候は皆人今生には弓、箭の難に値いて修羅道におち後生には惡道疑いなし。

而るに法華經を信ずる人人こそ仏には成るべしと見え候へ、御覽ある様にかかる事出来すべしと見へ候、故に昼夜に人に申し聞かせ候いしを用いらる事こそなくとも科に行はる事は謂れなき事なれども、古も今も人の損ぜんとては善言を用いぬ習いなければ終には用いられず世の中亡びんとするなり、是れ偏に法華經、釈迦仏の御使いを責むる故に梵天、帝釈、日月、四天等の責めを蒙つて候なり、又世は亡び候とも日本国は南無妙法蓮華經とは人ごとに唱え候はんずるにて候ぞ、如何に申さじと思つとも毀らん人には弥よ申し聞かすべし、命生きて

御坐ば御覽有るべし、又いかに唱うとも日蓮に怨をなせし人人は必ず無間地獄に墮ちて無量劫の後に日蓮の弟子と成つて成仏す可し、恐恐謹言。

四条金吾殿御返事

日蓮 花押

其の後御おとづれきかまほしく候いとるところに・わざと人ををくり給候、又なによりも重宝たるあし山海を尋ねるとも日蓮が身には時に当たりて大切に候。

夫について經王御前のこと・二六時中に日月天に祈り申し候、先日そのままり暫時も身をはなさずたまち給へ其の本尊は正法・像法・二時には習ふ人だにもなしましてかき願し奉る事たえたり、獅子王は前三後・一と申して・

ありの子を取らんとするにも又たけきものを取らんとする時もいきをひを出す事はただをなじき事なり、日蓮守護たる処の御本尊を・したため参らせ候事も獅子王にとるべからず、經に云く「獅子奮迅之力」とは是なり、

此の曼荼羅能く能く信ぜさせ給ふべし、南無妙法蓮華經は獅子吼の如し、いかなる病さわりをなすべきや、鬼子母神・十羅刹如法華經の題目を持つものを守護すべしと見えたり、幸いは愛染の如く福は毘沙門の如くなる

べし、いかなる処にて遊びたはふるとも・づつがあるべからず遊行して畏れ無きこと獅子王の如くなるべし、十羅刹如の中にも皇諦女の守護ふかかるべきなり、但し御信心によるべし、つるぎなんどもすすまざる人のためには

用る事なし、法華經の劍は信心のけなげなる人こそ用る事なれ鬼にかなばうたるべし、日蓮がたましひをすみにそめながしてがきて候ぞ信じさせ給へ仏の御意は法華經なり日蓮がたましひは南無妙法蓮華經にすぎた

るはなし、妙樂云く「願本遠寿を以て其の命と為す」と釈し給う。

經王御前には、わざはひも転じて幸いとなるべし、あひかまて御信心出し此の御本尊に祈念せしめ給へ何事が成就せざるべき、「充滿其願・如清涼池・現世安穩・後生善処」疑なからん、又申し候当国の大難ゆり候はば・

いそぎ いそぎ鎌倉へ上り見参いたすべし、法華經の功力を思ひやり候へば不老不死、目前にあり、ただ歎く所は露命計りな
天たすけ給へと強盛に申し候、淨徳夫人・竜女の跡をつがせ給へ南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、あなかしこ、あなか
しこ

八月十五日

日蓮花押

經王殿御返事

一九六

呵責謗法滅罪抄

文永十年 五十二歳御作

1125p

御文委く承り候、法華經の御ゆへに已前に伊豆の国に流され候いしもかう申せば謙ぬ口と人はおぼすけれども心ばかりは悦ば入つて候いき、無始より已來法華經の御ゆへに實にても虚事にても科に当るならば争かか
るつたなき凡夫とは生れ候べき、一端はわびしき様なれども法華經の御為なればうれしと思ひ候いに少し
先生の罪は消えぬらんとthinkかども無始より已來の十惡 四重六重八重十重五無間誹謗正法一闡提の種種
の重罪大山より高く大海より深くこそ候らめ、五逆罪と申すは一逆を造る猶一劫無間の果を感ず。

一劫と申すは人寿八万歳より百年に一を減し是くの如く乃至十歳に成りぬ、又十歳より百年に一を加うれば次第に
増して八万歳になるを一劫と申す、親を殺す者此程の無間地獄に墮ちて隙もなく大苦を受くるなり、法華經誹謗の者は
心には思はざれども色にも嫉み戯れにも程ならば經にて無けれども法華經に名を寄たる人を輕し
めぬれば上の一劫を重ねて無數劫無間地獄に墮ち候と見えて候、不輕菩薩を罵打し人は始こそさありしかども
後には信伏随從して不輕菩薩を仰ぎ尊ぶ事諸天の帝釈を敬ひ我等が日月を畏るるが如くせしかども始め

し大重罪消えかねて千劫大阿鼻地獄に入つて二百億劫三宝に捨てられ奉りたりき。

五逆と謗法とを病に對すれば五逆は霍乱の如くして急に事を切る、謗法は白癩病の如し始は緩に後漸漸に大事なり、

謗法の者は多くは無間地獄に生じ少しは六道に生を受く、人間に生ずる時は貧窮・下賤等・白癩病等と見えたり、日蓮は

法華經の明鏡をもつて自身に引き向かへるに都てくもりなし、過去の謗法の我が身にある事疑い

なし此の罪を今生に消さずば未来争か地獄の苦をば免るべき、過去遠遠の重罪をば何にしてか皆集めて今生に消滅して

未来の大苦を免れんと勘えしに当世時に當つて謗法の人人國國に充滿せり、其の上國主既に第一の誹謗

の人たり、此時此の重罪を消さずば何の時を可期すべき、日蓮が小身を日本國に打ち覆つてのしらは無量無辺の

邪法の四衆等無量無辺の口を以て一時にるべし、爾の時に國主は謗法の僧等が方人として日蓮を怨み

或は頸を刎ね或は流罪に行ふべし、度度かかる事、出来せば無量劫の重罪一生の内に消なんと謀てたる大術少も違つ

事なくかかる身となれば所願も満足なるべし。

然れども凡夫なれば動すれば悔ゆる心有りぬべし、日蓮だにも是くの如く侍るに前後も弁へざる女人などの各佛法を

見ほどかせ給わぬが何程か日蓮に付いてくやしとおぼすらんと心苦かりしに、案に相違して日蓮

よりも強盛の御志どもありと聞候は偏に只事にあらず、教主釈尊の各の御心に入り替らせ給うかと思へは感涙押え

難し、妙樂大師の釈に云く記七故に知んぬ末代一時も聞くことを得聞き已つて信を生ずる事宿種なるべし等云云、又

云く弘一運像末に在つて此の眞文を囑る宿に妙因を殖つるに非ざれば實に値難しと為す等云云。

妙法蓮華經の五字をば四十余年此を秘し給ふのみにあらず迹門十四品に猶是を抑させ給ひ寿量品にし

て本果本因の蓮華の二字を説き顯し給ふ、此の五字をば仏・文殊・普賢・弥勒・藥王等にも付属せさせ給はず、地涌の

上行菩薩・無辺行菩薩・淨行菩薩・安立行菩薩等を寂光の大地より召し出して此れを付属し給ふ、儀式ただ事

ならず宝浄世界の多宝如来大地より七宝の塔に乗じて涌現せさせ給ふ、三千大千世界の外に四百萬億那由他の国土を淨め高さ五百由旬の宝樹を尽一箭道に殖え並べて宝樹一本の下に五由旬の師子の座を敷き並べ十方分身の仏尽く来り坐し給ふ、又釈迦如来は垢衣を脱て宝塔を開き多宝如来に並び給ふ、譬えば青天に日月の並べるが如し帝釈と頂生王との善法堂に在すが如し、此の界の文殊等他方の觀音等十方の虚空に雲集せる事星の虚空に充滿するが如し、此時此の土には華嚴經の七処八会十方世界の台上の盧舍那仏の弟子法慧・功德林・金剛幢・金剛藏等の十方刹土塵点数の大菩薩雲集せり、方等の大宝坊雲集の仏菩薩般若經の千仏須菩提・帝釈等・大日經の八葉九尊の四仏四菩薩金剛頂經の三十七尊等涅槃經の俱尸那城集會せさせ給ひし十方法界の仏菩薩をば文殊・弥勒等互に見知りて御物語り是ありしかば此等の大菩薩は出仕に物狎れたりと見え候、今此の四菩薩出でさせ給うて後釈迦如来には九代の本師三世の仏の御母にておはする文殊師利菩薩も一生補処とののしらせ給うふ弥勒等も此の菩薩に値いぬれば物とも見えさせ給はず、譬えば山かつが月卿に交り、猴が師子の座に列るが如し、此の人人を召して妙法蓮華經の五字を付属せさせ給ひき、付属も只ならず十神力を現じ給ふ、釈迦は広長舌を色界の頂に付け給ひ諸仏も亦復是くの如く四百萬億那由他の国土の虚空に諸仏の御舌赤虹を百千萬億・並べたるが如く充滿せしかばおびただしかりし事なり、是くの如く不思議の十神力を現じて結要付属と申して法華經の肝心を抜き出して四菩薩に譲り、我が滅後に十方の衆生に与へよと慇懃に付属して其の後又一つの神力を現じて文殊等の自界他方の菩薩・二乘・天人・竜神等には一經乃至一代聖教をば付属せられしなり、本より影の身に随つて候様につかせ給ひたりし迦葉舍利弗等にも此の五字を譲り給はず此れはさてをきぬ、文殊・弥勒等には争か惜み給うべき器量なくとも嫌い給うべからず、方方不審なるを、或は他方の菩薩は此の土に縁少しと嫌ひ、或は此の土の菩薩なれども娑婆世界に結縁の日浅し、或は我が弟子なれども初発心の弟子にあらずと嫌はれさせ

たまたま 給う程に、四十余年並びに迹門十四品の間は一人も初発心の御弟子なし、此の四菩薩こそ五百塵点劫より已来教主釈尊の御弟子として初発心より又他仏につかずして一門をもふまざる人人なりと見えて候、天台の云く「但下方の発誓を見る」等云云、又云く「是れ我が弟子なり応に我が法を弘むべし」等云云、妙楽の云く「子父の法を弘む」等云云、道暹云く「法是れ久成の法なるに由るが故に久成の人に付す」等云云、此の妙法蓮華經の五字をば此の四人に譲られ候。

而るに仏の滅後・正法一千年・像法一千年・末法に入つて二百二十余年が間、月氏・漢土・日本一閻浮提の内に未だ一度も出でさせ給はざるは何なる事にて有るらん、正くも譲らせ給はざりし文殊師利菩薩は仏の滅後四百五十年まで此の土におはして大乘經を弘めさせ給ひ、其の後も香山・清涼山より度度來つて大僧等と成つて法を弘め、

やくおうぼさつ てんだいだいし かんぜおん なんぐくだいし せりやう たびたび ひろくぼさつ ふだいし かしやう あなん めつご 藥王菩薩は天台大師となり觀世音は南岳大師と成り、弥勒菩薩は傳大士となれり、迦葉・阿難等は仏の滅後二十年四十年法を弘め給ふ、嫡子として譲られさせ給へる人の未だ見えさせ給はず、二千二百余年が間・教主釈尊の

繪像・木像を賢王・聖主は本尊とす、然れども但小乗・大乘・華嚴・涅槃・觀經・法華經の迹門・普賢經等の仏・眞言・大日經等の仏・宝塔品の釈迦・多宝等をば書けどもいまだ寿命品の釈尊は山寺精舎にましまさず何なる事とも量りがた

し、釈迦如来は後五百歳と記し給ひ正像二千年をば法華經流布の時とは仰せられず、天台大師は後の五百歳遠く妙道に沾わんと未來に譲り、伝教大師は「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」と等と書き給いて、像法

の末は未だ法華經流布の時ならずと我と時を嫌ひ給ふ、さればをしはかるに地涌千界の大菩薩は釈迦・多宝・十方の諸仏の御譲り御約束を空く黙止してはさせ給つべきが。

外典の賢人すら時を待つ郭公と申す畜鳥は卯月五月に限る、此の大菩薩も末法に出ずべしと見えて候、いかんと候べきぞ瑞相と申す事は内典・外典に付いて必ず有るべき事の先に現するを云うなり、蜘蛛がかつて喜事來り

かささぎ

鵲鳴いて客人来ると申して小事すら験先に現ず何に況や大事をや、されば法華經序品の六瑞は一代超過の大瑞なり、

涌出品は又此れには似るべくもなき大瑞なり、故に天台の云く「雨の猛きを見ては竜の大きな事を知り

華の盛なるを見ては池の深き事を知ること書かれて候、妙楽云く「智人は起を知り蛇は自ら蛇を知ること云云、

今日蓮も之を推して智人の一分とならん、去る正嘉元年「太歳丁巳」八月二十三日戌亥の刻の大地震と、文永元年甲子七

月四日の大彗星、此等は仏滅後二千二百余年の間未だ出現せざる大瑞なり、此の大菩薩の此の大法をもちて出現し

給うべき先瑞なるか、尺の池には丈の浪たらず驢吟するに風鳴らず、日本国の政事乱れ万民歎くに依つ

ては此の大瑞現じがたし、誰か知らん法華經の滅不滅の大瑞なりと。

二千余年の間 悪王の万人にらるる謀叛の者の誰人にあだまるる等日蓮が失もなきに高きにも下きにも罵詈毀辱刀杖

瓦礫等ひまなき事二十余年なり、唯事にはあらず過去の不輕菩薩の威音王仏の末に多年の間 罵詈

せられしに相似たり、而も仏彼の例を引いて云く我が滅後の末法にも然るべし等と記せられて候に近くは日本

遠くは漢土等にも法華經の故にかかる事有りとは未だ聞かず人は悪んで是を云はず、我と是を云はば自讃に似たり、云わ

ずば仏語を空くならず過あり、身を輕んじて法を重んずるは賢人にて候なれば申す、日蓮は彼の不輕菩薩

に似たり、国王の父母を殺すも民が考妣を害するも上下異なれども一因なれば無間におつ、日蓮と不輕菩薩とは位の

上下はあれども同業なれば彼の不輕菩薩成仏し給はば日蓮が仏果疑うべきや、彼は二百五十戒の上慢の比丘に罵られ

たり、日蓮は持戒第一の良觀に讒訴せられたり、彼は帰依せしかども千劫阿鼻獄におつ、此れは未だ渴仰せず知らず

無數劫をや経んずらん不便なり不便なり。

疑つて云く正嘉の大地震等の事は去る文応元年「太歳庚申」七月十六日宿屋の入道に付けて故最明寺入道殿奉る所の勸文

立正安国論には法然が選択に付いて日本国の仏法を失ふ故に天地瞋をなし自界叛逆難と他国侵遍難起る

べしと勘へたり、此には法華經の流布すべき瑞なりと申す先後の相違之有るか如何、答えて云く汝能く之を問えり、法華經の第四に云く「而も此の經は如來現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」等云云、同第七に況滅度後を重ねて説いて云く「我が滅度の後、後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布せん」等云云、仏滅後の多怨は後、五百歳に妙法蓮華經の流布せん時と見えて候、次ぎ下に又云く「惡魔・魔民・諸天・夜叉・鳩槃荼」等云云、行滿座主・傳教大師を見て云く「聖語朽ちず今、此の人に遇えり我れ披閱する所の法門、日本国の阿闍梨に授与す」等云云、今も又かくのごとし末法の始に妙法蓮華經の五字を流布して日本国の一切衆生が仏の下種を懷妊すべき時なり、例せば下女が王種を懷妊すれば諸女瞋りをなすが如し、下賤の者に王頂の珠を授与せんに大難來らざるべしや、一切世間多怨難信の經文是なり、涅槃經に云く「聖人に難を致せば他国より其の国を襲つ」と云云、仁王經も亦復是くの如し、日蓮をせめて弥よ天地四方より大災雨の如くふり泉の如くわき浪の如く寄せ來るべし、国の大蝗虫たる諸僧等近臣等が日蓮を讒訴する弥よ盛ならば大難倍來るべし、帝釈を射る修羅は箭還つて己が眼にたち阿那婆達多竜を犯さんとする金翅鳥は自ら火を出して自身をやく、法華經を持つ行者は帝釈・阿那婆達多竜に劣るべきや、章安大師の云く「仏法を壊乱するは仏法の中の怨なり慈無くして詐わり親むは則ち是れ彼が怨なり」等云云、又云く「彼が為に惡を除くは則ち是れ彼が親なり」等云云。

日本国の一切衆生は法然が捨閉閣抛と禪宗が教外別伝との誑言に誑かされて一人もなく無間・大城に墮つべしと勘へて国主・万民を憚からず大音声を出して二十余年が間よばはりつるは竜逢と比干との直臣にも劣るべきや、大悲千手觀音の一時に無間地獄の衆生を取り出すに似たるか、火の中の数子を父母が一時に取り出さんと思ふに手少なければ慈悲前後有るに似たり、故に千手万手億手ある父母にて在すなり、爾前の經經は一手・二手等に似たり法華經は一切衆生を化して皆仏道に入らしむ」と無数手の菩提是なり、日蓮は法華經並びに章安の釈の

如くならば日本国の一切衆生の慈悲の父母なり、天高けれども耳とければ聞かせ給うらん地厚けれども眼早ければ御覧あるらん天地既に知し食しぬ、又一切衆生の父母を罵詈するなり父母を流罪するなり、此の国此の西三年が間の乱政は先代にもきかず法に過ぎてこそ候へ。

抑 悲母の孝養の事仰せ遣され候感涙押 難し、昔元重等の五童は五郡の異性の他人なり兄弟の契りをなして

互に相背かざりしかば財三千を重ねたり、我等親と云う者なしと歎きて途中に老女を儲けて母と崇めて一分も心に違はずして二十四年なり、母忽に病に沈んで物いはず、五子天に仰いで云く我等孝養の感無くして母もの云わ

ざる病あり、願くは天孝の心を受け給はば此の母に物いせ給へと申す、其の時に母五子に語つて云く我は本是れ大原の陽猛と云うものの女なり、同郡の張文堅に嫁す文堅死にき、我に一人の児あり名をば烏遺と云いき彼が

七歳の時乱に値うて行く処をしらず、汝等五子に養はれて二十四年此の事を語らず、我が子は胸に七星の文あり右の足の下に黒子ありと語り畢つて死す、五子葬をなす途中にして国令の行くにあひぬ、彼の人物記する囊を

落せり此の五童が取れるになして禁め置かれたり、令来つて問うて云く汝等は何くの者ぞ、五童答えて云く上に言えるが如し、爾の時に令上よりまろび下て天に仰ぎ地に泣く、五人の縄をゆるして我が座に引き上せて物語り

して云く我は是れ烏遺なり、汝等は我が親を養いけるなり此の二十四年の間多くの楽みに値へとも非母の事を

の所思い出でて楽みも楽しみならず、乃至大王の見参に入れて五県の主と成せりき、他人集つて他の親を養ふに是くの如し、何に況や同父同母の舎弟妹女等がいついつたるを顧みば天も争か御納受なからんや。

淨蔵・淨眼は法華經をもつて邪見の慈父を導びき、提婆達多是仏の御敵四十余年の経經にて捨てられ臨終悪くして大地破れて無間地獄に行きしかども法華經にて召し還して天王如来と記せらる、阿闍世王は父を殺せども仏涅槃の時、法華經を聞いて阿鼻の大苦を免れき。

例せば此の佐渡の国は畜生の如くなり又法然が弟子充滿せり、鎌倉に日蓮を惡みしより百千万億倍にて候、一日も寿あるべしとも見えねども各御志ある故に今まで寿を支たり、是を以て計るに法華經をば釈迦多宝・十方の諸仏大菩薩供養恭敬せさせ給は此の仏菩薩は各各の慈父慈母に日日夜夜十二時にこそ告げさせ給はめ、當時主の御おぼえのいみじくおはするも慈父悲母の加護にや有るらん、兄弟も兄弟とおぼすべからず只子とおぼせ、子なりとも梟鳥と申す鳥は母を食ふ破鏡と申す獸の父を食わんとうかがふ、わが子四郎は父母を養ふ人目申す計りなし、妹等を女と念はばなどか孝養せられざるべき、是は流されしには一人も訪う人もあらじとこそおぼせしかども同行七八人よりは少からず、上下のくわても各の御計ひなくばいかがせん、是れ偏に法華經の文字の各の御身に入り替らせ給いて御助けあるとこそ覺ゆれ。

何なる世の乱れにも各各をば法華經十羅刹助け給へと湿れる木より火を出し乾ける土より水を儲けんが如く強盛に申すなり、事繁ければとどめ候。

四条金吾殿御返事

日蓮花押

一九七 主君耳入此法門免与同罪事

文永十一年九月

五十三歳御作

与四条金吾

1132p

錢二貫文給ひ畢んぬ。

有情の第一の財は命にすぎず此れを奪う者は必ず三途に墮つ、然れば輪王は十善の始には不殺生仏の小乗經の始には五戒其の始には不殺生、大乘梵網經の十重禁の始には不殺生、法華經の寿命品は釈迦如来の不殺生戒

の功德に當つて候品ぞかし、されば殺生をなす者は三世の諸仏にすてられ六欲天も是を守る事なし、此の由は世間の学者も知れり日蓮もあらあら意得て候、但し殺生に子細あり彼の殺さるる者の失に輕重あり、我が父母・主君・我が師匠を殺せる者をかゝつて害せば同じつみなれども重罪かゝつて輕罪となるべし、此れ世間の学者知れる処なり、但し法華經の御かたきをば大慈大悲の菩薩も供養すれば必ず無間地獄に墮つ、五逆の罪人も彼を怨とすれば必ず人天に生を受く、仙予国王有徳国王は五百無量の法華經のかたきを打ちて今は釈迦仏となり給う、其の御弟子迦葉・阿難・舍利弗・目連等の無量の眷属は彼の時に先を懸け陣をやぶり或は殺し或は害し或は隨喜せし人となり、覺徳比丘は迦葉仏なり、彼の時に此の王王を勧めて法華經のかたきをば父母宿世叛逆の者の如くせし大悲の法華經の行者なり。

今の世は彼の世に當れり、国主日蓮が申す事を用ゆるならば彼がごとくなるべきに用いざる上かゝつて彼がかたうどとなり一國こぞりて日蓮をかゝつてせむ、上一人より下万民にいたるまで皆五逆に過ぎたる謗法の人となりぬ、されば各各も彼が方ぞかし、心は日蓮に同意なれども身は別なれば与同罪のがれがたきの御事に候に主君に此の法門を耳にふれさせ進せけるこそありがたく候へ今は御用いなくもあれ殿の御失は脱れ給ひぬ、此れより後には口をつつみておはすべし、又天も一定殿をば守らせ給うらん、此れよりも申すなり。

かまへかまへ御用心候べし、いよいよにくむ人人ねらひ候らん、御さかもり夜は一向に止め給へ只女房と酒うち飲んでなにの御不足あるべき、他人のひるの御さかもりおこたるべからず、酒を離れてねらうひま有るべからず、返す返す、恐恐謹言。

九月二十六日

左衛門尉殿御返事

日蓮 花押

所詮しよせん日本にほん国こくの一切衆生いっしよじゆせうの目をぬき神をまどはかす邪法真言師じやほうしんごんしにはすぎず是は且しからく之を置く、十喻じゆいゆは一切経いっしよきやうと
 法華經ほけきやうとの勝劣しやうりやくを説かせ給たまつと見えたれども仏の御心ごしんはさには候はず、一切経いっしよきやうの行者ぎやうと法華經ほけきやうの行者ぎやうとをな
 らべて法華經ほけきやうの行者ぎやうは日月等にちげつたうのごとし諸經しよきやうの行者ぎやうは衆星燈炬しゆせうていこのごとしと申す事を詮せんと思し食され候、なにをもつてこれ
 をしるとならば第八だいての譬たとへの下に最大だいて事じの文あり、所謂此の經文きやうもんに云く「有能受持是經典者亦復如是於一切
 衆生中亦為第一等云云、此の二十二字は一經第一の肝心なり一切衆生の眼目なり、文の心は法華經ほけきやうの行者ぎやうは日月大
 梵王ぼんのう仏のごとし、大日經だいにちぎやうの行者ぎやうは衆星しゆせう、江河凡夫かうがふのごとしとかれて候經文きやうもんなり、されば此の世の中の
 男女僧尼なんによそには嫌きらつべからず法華經ほけきやうを持たせ給たまう人は一切衆生のしつとこそ仏は御らん候らめ、梵王ぼんのう帝釈たいしやくはあをがせ給たまつ
 らめとうれしさ申すばかりなし、又この經文きやうもんを昼夜に案じ朝夕によみ候は常の法華經ほけきやうの行者ぎやうにては候
 はぬにはんべり、是經典者ききやうてとて者の文字はひととよみ候は此の世の中の比丘比丘尼びくびくにつば塞ふさつばいの中に法華經ほけきやうを信じま
 いらせ候人人ひとびとかと思えまいらせ候はさにては候はず、次下つぎの經文きやうもんに此の者の文字を伝でんかさね
 てとかせ給たまつて候には若有女人じやうあにんととかれて候、日蓮にちれん法華經ほけきやうより外の一切経いっしよきやうをみ候には女人にょにんとはなりたくも候はず、或經ある
 には女人にょにんをば地獄じごくの使と定められ或經あるには大蛇だいじゃととかれ或經あるにはまがれ木のごとし或經あるには仏種ぶつしゆをい
 れる者とこそとかれて候へ仏法ぶつぽうならず外典げてんにも栄啓期えいけいきと申せし者の三樂さんらくをつたひし中に無女樂むじやうらくと申して天地てんちの中にょにん女にょにん人にんと
 生れざる事を一の樂とこそたてられて候へわざわひは二女にによりをこれりと定められて候に、此の法華經ほけきやう計はかりに此の經を持
 つ女人にょにんは一切いっしよの女人にょにんにすぎたるのみならず一切いっしよの男子なんしにこそたりとみえて候、所詮しよせん・

一切いっさいの人にそしられて候にやにんよりも女人にょにんの御ごためにはいとをしとをもはしき男おとこにふびんとをもはれたらんにはずぎじ、一切いっさいの人はにくまばにくめ、釈迦しやくわ仏ぶつ多宝たほう仏ぶつ十方じふぱうの諸しよ仏ぶつ乃至ないし梵王ぼんのう帝釈たいしやく日月にちがつ等にだにもふびんとをもはれまいらせなばなにかくるしかるべき、法華ほけきやう經きやうにだにもほめられたてまつりなばなにかくるしかるべき。

今三十三の御ごやくとて御布施ふせ送りたびて候しやくわぶつは釈迦しやくわ仏ぶつ法華ほけきやう經きやう日天にってんの御ごまへ申し上あがて候もつ、又人の身みには左右さうのかたあり、このかたに二つの神かみをはします一ひとをば同名どうみ二ふたをば同生どうしやうと申まをす、此この二つの神かみは梵天ぼんてん帝釈たいしやく日月にちがつの人ひとをまほらせんがために母の腹はらの内に入りしよりこのかた一生いしやうをわるまで影かげのごとく眼まなこのごとくつき随したがいて候まをが、人の惡わるをつくり善よきをなしなむとし候しをばつゆちりばかりものこそさず天あまにつたまいらせ候まをなるぞ。

華嚴けこんきやう經きやうの文ぶんにて候しを止觀しかんの第八てんだいだいしに天台大師たんだいだいしよませ給たまへり、但ただし信心しんじんのよはきものをば法華ほけきやう經きやうを持もつ女人にょにんなれどもすつるとみえて候し、例たとせば大將軍だいしやうじんよはければしたがうものもかひなし、弓ゆみよはければ絃いゆるし風かぜゆるけ

れば波なみちるさきは自然じねんの道理どうりなり、而しかるにさえもん殿だんは俗しやくの中ちゆう日本にほんにはかたをならぶべき者ものもなき法華ほけきやう經きやうの信しん者しやなり、是こゝにあひつれさせ給たまいぬるは日本にほん第一だいいちの女人にょにんなり、法華ほけきやう經きやうの御ごためには竜女りゆうにょとこそ仏ぶつはをほしめされ候もつらめ、女むすめと申まをす文字もんじをばかかるとよみ候し、藤ふじの松まつにかかり女の男おとこにかかるも今は左衛門さゑもん殿だんを師しとせさせ給たまいて法華ほけきやう經きやうみちびかれさせ給たまい候しへ。

又三十三のやくは転てんじて三十三のさいはひとならせ給たまうべし、七難しちなん即滅そくめつ七福しちふく即生そくしやうとは是こゝなり、年としはわかうなり福ふくはかさなり候もつべし、あなかしこあなかしこ。

五月二十七日

日蓮花押にぢれんかおう

四条金吾殿女房御返事しじやうきんごだんなぼうごへんじ

此經難持の事、抑弁阿闍梨が申し候は、貴辺のかたらせ給ふ様に持つらん者は現世安穩・後生善処と承つてすでに去年より今日までがたの如く信心をいたし申し候処に、さにては無くして大難雨の如く来り候と云云、真にてや候らん、又弁公がいつはりにて候やらん、いかさまよきついでに不審をはらし奉らん、法華經の文に難信難解と説き給ふは是なり、此の經をききうつくる人は多し、まことに聞き受くる如くに大難来れども憶持不忘の人は希なり、受くるはやすく持つはかたしざる間、成仏は持つにあり、此の經を持たん人は難に値うべしと心得て持つなり、即為疾得・無上仏道は疑なし、三世の諸仏の大事たる南無妙法蓮華經を念ずるを持とは云うなり、經に云く「護持仏所屬」といへり、天台大師の云く「信力の故に受け念力の故に持つ」云云、又云く「此の經は持ち難し若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦然なり」云云、火にたきぎを加える時はさかんなり、大風吹けば求羅は倍增するなり、松は万年のよはひを持つ故に枝をまげらる、法華經の行者は火と求羅との如し薪と風とは大難の如し、法華經の行者は久遠長寿の如来なり、修行の枝をきられまげられん事疑なかるべし、此れより後は此經難持の四字を暫時もわすれず案じ給うべし。○ 恐恐。

文永十二年乙亥三月六日

日蓮花押

四条金吾殿

銭一貫五百文給ひ候い畢んぬ、焼亡の事委く承つて候事悦び入つて候、大火の事は仁王經の七難の中の第三の火難・法華經の七難の中には第一の二の火難なり、夫れ虚空をば剣にてきることなし水をば火焼くことなし、聖人・賢人・福人・智者をば火やくことなし、例せば月氏に王舎城と申す大城は在家・九億万家なり、七度まで大火をこりてやけほろびき、万比なげきて逃亡せんとせしに大王なげかせ給う事がぎりなし、其の時賢人ありて云く七難の大火と申す事は聖人のさり王の福の付くる時をこり候なり、然るに此の大火・万民をばやくといえとも内裏には火ちかづくことなし、知んぬ王のところがにはあらず万民の失なりされば万民の家を王舎と号せば火神・名にをそれてやくべからずと申せしかば、さるへんもとて王舎城とそなづけられしかばそれより火災とどまりぬ、されば大果報の人をば大火はやかざるなり。

これは国王已にやけぬ知んぬ日本国の果報のつくるしるしなり、然りに此の国は大謗法の僧等が強盛にいのりをなして日蓮を降伏せんとする故に弥弥わざはひ来るにや、其の上名と申す事は体を顕し候に両火房と申す謗法の聖人・鎌倉中の上下の師なり、一火は身に留まりて極楽寺焼て地獄寺となりぬ、又一火は鎌倉にじやなちて御所やけ候ぬ、又一火は現世の国をやきぬる上に日本国の師弟ともに無間地獄にはちて阿鼻の炎にもえ候べき先表なり、愚癡の法師等が智慧ある者の申す事を用い候はぬは是体に候なり、不便不便、先先御文まいらせ候しなり。

御馬のがいて候は又ともびきしてくり毛なる馬をこそまつけて候へあはれあはれ見せまいらせ候はばや、名越の事はにこそ多くの子細どもをば甲えて候へある人のゆきあひて理具の法門自讃しけるをさむざむに

せめて侯けると承り侯。

又女房の御いのりの事・法華經をば疑ひまいらせ侯はねども御信心やよはくわたらせ給はんずらん、如法に信じたる様なる人々も実にはさもなき事とも是にて見て侯、それにも知しめされて侯、まして女人の御心風をばつ

なぐともとりがたし、御いのりの叶い侯はざらんは言のつよくしてつるよはく、太刀つるぎにてつかう人の臆病なるやうにて侯べし、あへて法華經の御とがにては侯べからず、よくよく念仏と持齋とを我もすて人をも力の

あらん程はせかせ給へ、譬へは左衛門殿の人にくまるるがごとくまこととまことと御物語り侯へいかに法華經を御信用ありとも法華經のかたきをとりほどにはよもおぼさじとなり、一切の事は父母にそむき國王にしたが

はざれば不孝の者にして天のせめをかうふる、ただし法華經のかたきになりぬれば父母、國主の事をも用ひざるが孝養ともなり國の恩を報ずるにて侯。

されば日蓮は此の經文を見侯しかば父母手をすりてせせしかども師にて侯し人かんだうせしかども、鎌倉殿の御勘氣を二度までがほり、すでに頸となりしかども、ついにをそれずして侯は、今は日本國の人々も道理か

と申すへんもあるやらん、日本國に國主・父母・師匠の申す事を用いずしてついに天のたすけをかほる人は日蓮より外は出しがたくや侯はんずらん、是より後も御覽あれ日蓮をそしる法師原が日本國を祈らば、彌彌國亡ぶべし、結句せめ

の重からん時、上一人より下万民までもとどりをわかつやことなりはぞをくうためしあるべし、後生

はさてをきぬ今生に法華經の敵となりし人をば梵天・帝釈・日月・四天、罰し給いて皆人にみこりさせ給へと申しつけて侯、日蓮・法華經の行者にてあるなしは是れにて御覽あるべし、かう申せば國主等は此の法師のをどすと思ふか、あへてに

くみては申さず大慈大悲の力、無間地獄の大苦を今生にけさしめんとなり、章安大師云く「彼が

ために惡を除くは即ち是れ彼が親なり」等云云、かう申すは國主の父母、一切衆生の師匠なり、事事多く侯へども

留侯ぬ、又麦の白米一だはしかみ送り給ひ候い畢んぬ。

建治元年乙亥卯月十二日

四条金吾殿御返事

二〇一 四条金吾殿御返事

1139d

態と御使喜び入つて候、又柑子五十、鷲目五貫文給ひ候い畢んぬ、各各御供養と云云、又御文の中に云く去る十六日に有る僧と寄合つて候時、諸法実相の法門を申し合いたりと云云、今経は出世の本懐・一切衆生、皆成仏道の根元と申すも、只此の諸法実相の四字より外は全くなきなり、されば伝教大師は万里の波濤をしのぎ給いて相伝し

まします此の文なり、一句万了の一言とは是なり、当世天台宗の開会の法門を申すも此の経文を悪く意得て邪義を云い出し候ぞ、只此の経を持ちて南無妙法蓮華経と唱えて正直捨方便、但説無上道と信ずるを諸法実相の開会の法門とは申すなり、其の故は釈迦仏・多宝如来・十方三世の諸仏を証人とし奉り候なり、相構えてかくの如く

心得させ給いて諸法実相の四の文字を時時あぢわ給うべし・良薬に毒をまじつる事有るべきや、うしほの中より河の水を取り出す事ありや、月は夜に出、日は昼出で給う此の事争ふべきや、此れより後には加様に意得給いて御問答あるべし、但し細細は論難し給うべからず、猶も申さばそれがしの師にて候日蓮房に御法門候へうち咲つて打ち返し打ち返し仰せ給うべく候。

法門を書きつる間、御供養の志は申さず供、有り難し有り難し委くは是よりねんごろに申すべく候。

建治元年乙亥七月二十二日 日蓮花押

四条中務三郎左衛門尉殿御返事

与四条金吾

夫れ天変は衆人をおどろかし地天は諸人をうごかす、仏法華経をとかんとし給う時五瑞六瑞をげんじ給う、其の中に地動瑞と申すは大地六種に震動す六種と申すは天台大師文句の三に釈して云く「東涌西没とは東方は青肝を主どる肝は眼を主どる西方は白肺を主どる肺は鼻を主どる此れ眼根の功德生じて鼻根の煩惱互に滅するを表するなり鼻根の功德生じて眼の中の煩惱互に滅す余方の涌没して余根の生滅を表するも亦復云云、妙楽大師之を承けて云く「表根と言うは眼鼻已に東西を表す耳舌理として南北に対す中央は心なり四方は身なり身四根を具す心く四を縁す故に心をして身に対して涌没を為す云云、夫十方は依報なり衆生は正報なり譬は依報は影のごとし正報は体のごとし身なくば影なし正報なくば依報なし又正報をば依報をもつて此れをつくる、眼根をば東方をもつてこれをつくる、舌は南方鼻は西方耳は北方身は四方心は中央等これをもつてしんぬべし、かるがゆへに衆生の五根やぶれんとせば四方中央をどうつべしされば国土やぶれんとするしにはまづ山くづれ草木かれ江河つくるしあり人の眼耳等驚そうすれば天変あり人の心をつごかせば地動す・抑何の経に六種動これなき一切経を仏とかせ給いしみなこれあり、しかれども仏法華経をとかせ給はんとて六種震動ありしかば衆も・とにおどろき弥勒菩薩も疑い文殊師利菩薩もこたへは諸経よりも瑞も大に久しくありしかば疑も大に決しがたかりしなり、故に妙楽の云く「何れの大乗経に集衆放光雨花動地あらざらん但大疑を生ずること無し」等云云、此の釈の心はいかなる経経にも序は候へも此れほど大なるはなしとなりされば天台大師の云く「世人以蜘蛛掛れば喜び来り鵲鳴けば行人至ると小すら尚徴有り大焉ぞ瑞無からん近きを以て

遠きを表す」等云云。

夫一代四十余年が間なかりし大瑞を現じて法華經の迹門をとかせ給いぬ、其の上本門と申すは又爾前の経經の瑞に迹門を対するよりも大なる大瑞なり、大宝塔の地よりをどりいでし地涌千界大地よりならび出でし大震動は大風

の大海を吹けば大山のごとくなる大波のあしのはのごとくなる小船のをひほにつくがごとくなりしなり、されば序品の瑞をば弥勒は文殊に問い涌出品の大瑞をば慈氏は仏に問いたてまつるこれを妙樂釈して云く「迹事は浅近文殊に寄すべし久本は裁り難し故に唯仏に託す」云云迹門のことは仏説き給はざりしかども文殊は「これをしれり、本門の事は妙徳すこしもはからず、此の大瑞は在世の事にて候、仏神力品にいたつて十神力を現す此れは又さきの二瑞にはなるべくもなき神力なり、序品の放光は東方万八千土、神力品の大放光は十方世界、序品の地動は但三千界神力品の大地動は諸仏の世界地皆六種に震動す、此の瑞も又かくのごとし、此の神力品の大瑞は仏の滅後正像二千年すぎて末法に入つて法華經の肝要のひろまらせ給うべき大瑞なり、經文に云く「仏の滅度の後に能く是の經を持つを以ての故に諸仏皆歡喜して無量の神力を現す」等云云、又云く「惡世末法の時」等云云。

疑つて云く夫れ瑞は吉凶につけて或は一時・二時或は一日・二日或は一年・二年或は七年十二年か如何ぞ二千年已後の瑞あるべきや、答えて云く周の昭王の瑞は一千十五年に始めてあえり、訖利季王の夢は二万二千年に始めてあいぬ、豈二千年の事の前にはあらざるを疑うべきや、問うて云く在世よりも滅後の瑞大なる如何、答えて云く大地の動ずる事は人の六根の動くによる、人の六根の動きの大小によつて大地の六種も高下あり、爾前の経經には一切衆生煩惱をやぶるやうなれども実にはやぶらず、今法華經は元品の無明をやぶるゆへに大動あり、末代は又在世よりも惡人多多なり、かるがゆへに在世の瑞にもずぐれてあるべきよしを示現し給う。

疑うたがつて云いわく証文しやうもん如何いかん、答こたえて云いわく而しかも此この経きやうは如來にやらいの現在げんざいすら猶なほ怨嫉おんしつ多おほし況めつや滅度めつどの後のちをや等いぬ云いぬ、去しやうる正嘉しやうか文永ぶんえいの大地震だいじしん大天変てんべんは天神てんじん七代しちだい地神ちじん五代ごだいはさてをきぬ、人王じんおう九十代くじゅうだい二千余年にほんこくが間ま日本にほん国こくにいまだなき天変地天てんべんちちやうなり、人ひとの悦よろこび多おほ多おほなれば天てんに吉瑞きくわいをあらはし地に帝釈ていしゃくの動うごきあり、人ひとの惡心あくしん盛さかなれば天てんに凶变きやうへん地に凶天きやうてん

出來しゅつ来たいす、瞋しん恚にの大小だいしやうに随したがいて天變てんべんの大小だいしやうあり地天ちちやうも又またかくのごとし、今いま日本にほん国こく上一じやういつ人ひとより下げ万民ばんみんにいたるまで大惡心あくしんの衆生しゆじやう充滿じゆふまんせり、此この惡心あくしんの根本こんぽんは日蓮にっれんによりて起おこれるところなり、守護しゆご国界こくがい經きやうと申もうす經きやうあり法華經ほふけきやう以後いごの經きやうなり阿闍世あじやせ王おうにまいりて云いわく我國わがくにに大早魃たいさう大風たいふう大水飢饉たいすいききん疫病えきびやう年年ねんねんに起おこる上他国たこくより我が國くにをせむ、

而しかに仏ぶつの出現しゆげんし給たまへる國くになりいかにと問といまらせ候さうしかば仏ぶつ答こたえて云いわく善よき哉かな善よき哉かな大王だいおう能あたく此この問とをなせり、汝なんじには多おほくの逆罪ぎやくざいあり其その中に父ちちを殺ころし提婆だいばを師しとして我われを害がいせしむ、この二罪ふたつみ大おほなる故ゆゑかかる大難だいにん來きる

ことかくのごとく無量むりやうなり、其その中に我われが滅後めつごに末法まふぽうに入いつて提婆だいばがやうなる僧國そうこく中に充滿じゆふまんせば正法しやうぽうの僧そう一人ひとりあるべし、彼の惡僧あくそう等ら正法しやうぽうの人ひとを流罪るざい死罪しざいに行いいて王后わうごう乃至ないし万民ばんみんの女おんなを犯おかして謗法ぼうぽう者しやの種子しゆしの國くにに充滿じゆふまん

せば國中しゆじゆに種種だいにんの大難だいにんをこり後ごには他國たこくにせめらるべしとかれて候さう、今いまの世よの念仏ねんぶつ者しやかくのごとく候上さう・真言しんごん

師等だいまんだいが提婆だいば達多だつたに百千万億倍せんまんすぎて候さう、真言宗しんごんしゆうの不思議ふしぎあら申もうすべし、胎藏界たいざうがいの八葉はちようの九尊くしゆを画えにかきて其その上うへにのぼりて諸佛しよぶつの御面ごめんをふみて灌頂かんぢやうと申もうす事ことを行いうなり、父母ふぼの面おもてをふみ天子てんしの頂いただきをふむがごとくなる者もの・國中こくにに充滿じゆふまんして上下じやうげの師しとなれり、いかでか國くにほろびざるべき。

此この事こと余いが一大事いちだいじの法門ほふもんなり又又またまた申もうすべし、さきにすこしかきて候さう、いたう人ひとにおほせあるべからず、びんごとの心こころざし一度二度いちどにどならねばいかにとも。

一切衆生いっさいしゅじょう・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となづるより外の遊樂ほがなきなり經きやうに云く、衆生所遊樂しゅじょうニ云云、この文ぶんあに自受法樂じじゆほうらくにあらずや、衆生のうちしゅじょうに貴殿きでんもれ給たまうべきや、所ところとは一閻浮提えんぶだいなり日本国にほんこくは閻浮提えんぶだいの内うちなり、遊樂ゆうらくとは我等われらが色心しきしん依正えしやうともに一念三千いちねんさんぜん・自受用身の仏じじゆゆうしんにあらずや、法華經ほけきやうを持ち奉たてまつるより外ほかに遊樂ゆうらくはなし現世安穩げんせあんのおん・後生善処ごしやうぜんじよとは是これなり、ただ世間の留難るなん来るともとりあ給たまうべからず、賢人けんじん・聖人せいじんも此の事はもがれず、ただ女房にようぼうと酒うちのみて南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうととなへぬさせ給たまへこれあに給たまへ苦をば苦とさとり樂をば樂とひらき苦樂ともに思い合あわせて南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうとうちとなへぬさせ給たまへこれあに自受法樂じじゆほうらくにあらずや、いよいよ強盛かうじやうの信力しんりきをいたし給たまへ 恐恐きようきよう謹言きんげん

建治二年丙子ひのえね 六月二十七日

日蓮にちれん 花押かおう

四条金吾殿御返事しじょうきんごごへんじ

御日記の中に釈迦仏の木像一体等云云、開眼の事普賢經に云く「此の大乗經典は諸仏の宝蔵なり十方三世の諸仏の眼目なり」等云云、又云く「此の方等經は是れ諸仏の眼なり諸仏是に因つて五眼を具することを得たもつ」云云、此の經の中に得具五眼とは一には肉眼二には天眼三には慧眼四には法眼五には仏眼なり、此の五眼をば法華經を持つ者は自然に相具し候、譬へは王位につく人は自然に國のしたがつごとし、大海の主となる者の自然に魚を得るに似たり、華嚴阿含方等般若・大日經等には五眼の名はありといども其の義なし、今の法華經には名もあり義も備わりて候、設ひ名はなけれども必ず其の義あり。

三身の事、普賢經に云く「仏三種の身は方等より生ず是の大法印は涅槃海を印す此くの如き海中より能く三種の仏の清淨の身を生ず此の三種の身は人天の福田にして応供の中の最なり」云云、三身とは一には法身如来二には報身如来三には応身如来なり、此の三身如来をば一切の諸仏必ずあひぐす譬へは月の体は法身月の光は報身月の影は応身にたとふ、一の月に三のことであり一仏に三身の徳まします、この五眼三身の法門は法華經より外には全く候はず、故に天台大師の云く「仏三世に於て等しく三身有り諸教の中に於て之を秘して伝えず」云云、此の釈の中に於諸教中とかかれて候は華嚴方等般若のみならず法華經より外の一切經なり、秘之不伝とかかれて候は法華經の寿命品より外の一切經には教主釈尊秘めて説き給はずとなり。

されば画像・木像の仏の開眼供養は法華經・天台宗にかぎるべし、其の上一念三千の法門と申すは三種の世間よりをこれり、三種の世間と申すは一には衆生世間二には五陰世間三には国土世間なり、前の二は且らく之を置

く、第三の国土世間と申すは草木世間なり、草木世間と申すは五色のゑのくは草木なり画像これより起る、木と申すは木像はより出来ず、此の画木に魂魄と申す神を入れる事は法華經の力なり天台大師のさとりなり、此の法門は衆生にて申せば即身成仏といはれ画木にて申せば草木成仏と申すなり、止觀の明靜なる前代にまだきかずとかかれて候と無情仏性・惑耳驚心等とのべられて候は是なり、此の法門は前代になき上、後代にも又あるべからず、設ひ出来せば此の法門を偷盜せるなるべし、然るに天台以後二百余年の後、善無畏・金剛智・不空等・大日經に真言宗と申す宗をかまへて仏説の大日經等にはなかりしを法華經・天台の釈を盗み入れて真言宗の肝心とし、しかも事を天竺によせて漢土・日本の末字を誑惑せしかば皆人此の事を知らず一同に信伏して今に五百余年なり、然る間、真言宗已前の木画の像は靈驗・殊勝なり真言已後の寺塔は利生うすし、事多き故に委く注さず。

此の仏こそ生身の仏にておはしまし候へ、優填大王の木像と影顯王の木像と一分もたがうべからず、梵帝・日月・四天等必定して影の身に随うが如く貴辺をばまほらせ給うべし是。

御日記に云く毎年四月八日より七月十五日まで九旬が間、大日天子に仕えさせ給ふ事、大日天子と申すは宮殿七宝なり其の大きさは八百十六里五十一由旬なり、其の中に大日天子居し給ふ、勝無勝と申して二人の后あり左右には七曜九曜つらなり前には摩利支天女まします七宝の車を八匹の駿馬にかけて四天下を一日一夜にめぐり

四州の衆生の眼目と成り給う、他の仏・菩薩天子等は利生のいみじくまします事耳にこれをきくとも愚眼に未だ見えず、是は疑うべきにあらず眼前の利生なり教主釈尊にましますば争か是くの如くあらたなる事候べき、一乗の妙經の力にあらずんば争か眼前の奇異をば現す可き不思議に思ひ候、争か此の天の御恩をば報すべきと・もとめ候に仏法以前の人人も心ある人は皆、或は礼拝をまいらせ、或は供養を申し皆しるしあり、又逆をなす人は皆ばつあり、今内典を以てかんがへて候に金光明經に云く「日天子及以月天子是の經を聞くが故に精氣充實す」等云

云、最勝王經に云く、「此の経王の力に由つて流暉四天下を遠る」等云云、当に知るべし日月天の四天下をめぐり給うは仏法の力なり彼の金光明經 最勝王經は法華經の方便なり勝劣を論ずれば乳と醍醐と金と宝珠との如し、劣なる経を食しまして尚四天下をめぐり給う、何に況や法華經の醍醐の甘味を嘗させ給はんをや、故に法華經の序品には普香天子とつらなります、法師品には阿耨多羅三藐三菩提と記せられさせ給う火持如来是なり、其の上慈父よりあひつたはりて二代我が身となりてとしひさし争かすてさせたまひ候べき、其の上日蓮も又此の天を待みてたてまつり日本国にたてあひて数年なり、既に日蓮かちぬべき心地す利生のあらたなる事外にもとむべきにあらず、是より外に御日記たうとさ申す計りなければども紙上に尽し難し。

なによりも日蓮が心にたつとき事候、父母御孝養の事度度の御文に候上に今日の御文なんだ更にとどまらず、我が父母地獄にやおはすらんとなげかせ給う事のあわれさよ、仏の弟子の御中に目尊者と申しけるは父をばきつせん師子と申し母をば青提女と申しけるが餓鬼道におちさせ給いけるを凡夫にてをはしける時は、しらせ給わざりければなげきもなかりける程に、仏の御弟子とならせ給いて後阿羅漢となりて天眼をもつて御らんありければ餓鬼道におはしけり、是を御らんありて飲食をまいらせしかば炎となりていよいよ苦をましさせまいらせ給いしかば、いそぎはしりかへり仏に此の由を申させ給いしぞかし、爾の時の御心をおもひやらせ給へ今貴辺は凡夫なり肉眼なれば御らんなければどももしもさもあらばとなげかせ給うこは孝養の一分なり梵天帝釈日月・四天も定めてあはれとおぼさんが、華嚴經に云く「恩を知らざる者は多く横死に遭う」等云云、觀仏相海經に云く「是れ阿鼻の因なり」等云云、今既に孝養の志 あつし定めて天も納受あらんか是二。

御消息の中に申しあはさせ給う事はしく事の心を案ずるにあるべからぬ事なり、日蓮をば日本国の人あだむ是はひとへにさがみどののあだませ給うにて候ゆなき御政りことなれどもいまだ此の事にあはざりし時よ

りかかる事あるべしと知りしかば今更いかなる事ありとも人をあだむ心あるべからずとをもし候は、此の心のいりとなりて候やらんそばくのなんをのがれて候、いまは事なきやうになりて候、日蓮がさどの国にてもかつしなず又これまで山中にして法華經をよみまいらせ候はたれかたすけんひとへとの御たすけなり又殿の御たすけはなにゆゑとたづねれば入道殿の御故ぞかし、あらわにはしろしめさねども定めて御いのりともなるらんかうあるならばかへりて又との御いのりとなるべし父母の孝養も又彼の人の御恩ぞかし、かかる人の御内を如何なる事有ればとてさせ給うべきやかれより度度すてられんずらんはいかがすべき・又いかなる命になる事なりともすてまいらせ給うべからず、上にひきぬる經文に不知恩の者は横死有と見えぬ・孝養の者は又横死有る可からず、鵜と申す鳥の食する鉄はとくれども腹の中の子はとけず、石を食する魚あり又腹の中の子はしなず、梅檀の木は火に焼けず浄居の火は水に消す仏の御身をば三十二人の力士火をつけしかどもやけず、仏の御身よりいでし火は三界の竜神雨をふらして消しかどもきえず、殿は日蓮が功德をたすけたる人なり悪人にやぶらるる事かたし、もしやの事あらば先生に法華經の行者をあだみたりけるが今生にむくふなるべし、此の事は如何なる山の中海の上にてものがたし、不輕菩薩の杖木の賣も目尊者の竹杖に殺されしも是なり、なにしか歎かせ給うべき。

但し横難をば忍にはしかじと見今候此の文御覽ありて後はけつして百日が間をぼろげならではどうれい並に他人と我が宅ならで夜中の御さかもりあるべからず主の召さん時は昼ならばいそぎ参らせ給うべし、夜ならば三度までは頓病の由を申させ給いて二度にすぎば下人又他人をかたらひてつじを見せななどして御出仕あるべし、かうつしませ給はんほどにむこの人もよせななどし候はば人の心又さきにひきか候べし、かたきをうつ心とどまるべしと申させ給う事は御あやまちありとも左右なく御内を出でさせ給うべからず、ましてなから

んにはなにと人申せくるしかるべからず、おもひのままに入道にもなりておはせばさきさきならばくるし
からず、又身にも心にもあはぬ事あまた出来せばなかなか悪縁度度来るべし、このころは女は尼になりて人を
はかり男は入道になりて大悪をつくるなり、ゆめゆめあるべからぬ事なり、身に病なくともやいとを一二箇所
やいて病の由あるべし、さわぐ事ありともしばらく人をもつて見せをほせさせ給へ
事くはしくはかきつくしがたし、此の故に法門もかき候はず、御經の事はすしくなり候いてかいてまいらせ候はん、
恐恐謹言。

建治二年丙子七月十五日

日蓮 花押

四条金吾殿御返事

二〇五 四条金吾殿御返事

1148p

正法をひろむる事は必ず智人によるべし、故に釈尊は一切經をとかせ給いて小乗經をば阿難大乘經をば文殊
師利法華經の肝要をば一切の声聞・文殊等の一切の菩薩をきらひて上行菩薩をめて授けさせ給いき、設い正法を持て
る智者ありとも檀那なくんば争か弘まるべき然れば釈迦仏の檀那は梵王帝釈の二人なりこれは二人なが
ら天の檀那なり、仏は六道の中には人天人天の中には人に出でさせ給う人には三千世界の中央・五天竺・五天竺の中には
摩竭堤国に出でさせ給いて候しに、彼の国の王を檀那とさだむべき処に彼の国の阿闍世王は悪人なり、
聖人は悪王に生れあふ事第一の怨にて候しぞかし、阿闍世王は賢王なりし父をころす、又うちそふわざはひと堤婆達多
を師とせり、達多は三逆罪をつくる上仏の御身より血を出だしたりし者ぞかし、不孝の悪王と謗法の師とよりあひて候し
かば人間に二のわざはひにて候しなり、一年・二年ならず数十年が間 仏にあだを なしまいらせ

仏の御弟子を殺せし事数をしらず、かかりしかば天いかりをなして天変しきりなり、地神いかりをなして地天申すに及ばず、月月に悪風年年に飢饉疫癘来りて万民ほとんどつきなんとせし上、四方の国より阿闍世王を賣む、既に危く成りて候し程に阿闍世王或は夢のつげにより或は耆婆がすすめにより或は心にあやしむ事ありて提婆達多をばうち捨て仏の御前にまいりてやうやうにたいほう申せしかば身の病忽にいゑ他方のいくさも留まり国土安穩になるのみならず三月の七日に御崩御なるべかりしが命をのべて四十年なり、千人の阿羅漢をあつめて一切經ことには法華經をかきをかせ給いき、今我等がたのむところの法華經は阿闍世王のあたへさせ給う御恩なり。

是はさてをきめ仏の阿闍世王にかたらせ給いし事を日蓮申すならば日本国の人は今つくれる事どもと申さんずらんなれども我が弟子檀那なればかたりたてまつる、仏言わく我が滅後末法に入つて又調達がやうなるだうとく五法を行ずる者国土に充滿して悪王をかたらせて但一人あらん智者を或はのり或はつち或は流罪或は死に及ぼさん時昔にもすぐれてあらん天変地天大風飢饉疫癘年年にありて他国より責べしと説かれて候、守護經と申す經の第十の巻の心なり。

当時の世にすこしもたがはず、然るに日蓮は此の一分にあたれり日蓮をたすけんと志す人少少ありといへども或は心ざしつすし或は心ざしはあつけれども身がついせずやうやうにをはするに御辺は其の一分なり心ざし人にすぐれてをはする上わづかの身命をささるるも又御故なり、天もさだめてしろしめし地もしらせ給いぬらん殿いかなる事にもあはせ給うならばひとへに日蓮がいのちを天のたたせ給うなるべし、人の命は山海空市まぬかれがたき事と定めて候へども又定業亦能転の經文もあり又天台の御釈にも定業をのぶる釈もあり、前に申せしやうに蒙古国のよするまでつしませ給うなるべし、主の御返事をば申させ給うべし身に病ありては

叶^{かな}いがたき上^せ世^{けん}間^{かん}すでにかつと見え候^うそれがしが身^みは時^{とき}によりて憶^{おぼ}病^{びょう}はいかんが候^うはんずらん、只^{ただ}今の心^{こころ}はいかなる事も^{こと}出来^{でき}候^うはば入^い道^{どう}殿^{でん}の御^ご前^{ぜん}にして命^{いのち}をすてんと存^{ぞん}じ候^う、若^もしやの事^{こと}候^うならば越^こ後^ごよりはせ上^あらんは・

はるかなる上^{ふじょう}不定^{ふじょう}なるべし、たとひ所^{しやう}領^{りやう}をめさるるなりとも今年^{ことし}はきみをはなれまいらせ候^うべからず。

是^{こゝ}より外^{ほか}はいかに仰^{おほ}せ蒙^{ごう}るともをそれまいらせ候^うべからず、是^{こゝ}よりも大^{だい}事^じなる事^{こと}は日^に蓮^{ちん}の御^ご房^{ぼう}の御^ご事^じと過^か去^こに候^う父^ふ母^ぼの事^{こと}なりとのしらせ給^{たま}へすてられまいらせ候^うとも命^{いのち}はまいらせ候^うべし後^ご世^{せい}は日^に蓮^{ちん}の御^ご房^{ぼう}にまかせまいらせ候^うと高^{たか}声^{こゑ}にうちな^なのり居^{たま}させ給^{たま}へ。

建^{ひのえ}治^ね二年^に丙^{ひのえ}子^ね九月^く六^{ろく}日^{にち}

四^し条^{じょう}金^{きん}吾^ご殿^{でん}

日^に蓮^{ちん}花^か押^お

二〇六 四^し条^{じょう}金^{きん}吾^ご殿^{でん}御^ご返^{へん}事^じ

1150p

はるかに申^{まう}し承^{たも}り候^うはざりつればいぶせく候^ういつるにかたがたの物^{もの}と申^{まう}し御^ごつかいと申^{まう}しよろこび入^いつて

候^う又^{また}まほりまいらせ候^う、所^し領^{りやう}の御^ご事^じは上^{かみ}よりの御^ご文^{ぶん}ならびに御^ご消^{しょう}息^{そく}引^ひき合^あせて見^み候^うに畢^おんぬ、此^{こゝ}の事^{こと}は御^ご文^{ぶん}なきさきにすいて候^う、上^{かみ}には大^{だい}事^じとおぼしめされて候^うへとも御^ごきんずの人人^{ひとひと}のざんそうにてあまりに所^し領^{りやう}

をきらい上^{かみ}をかるしめたてまつり候^う、ちうあつの人^{ひと}こそををく候^うにかくまで候^うは且^{かつ}らく御^ご恩^{おん}をばおささせ

給^{たま}つべくや候^うらんと申^{まう}しぬらんとすいて候^うなりそれにつけては御^ご心^{こころ}えあるべし御^ご用^{よう}意^いあるべし、我^{われ}が身^みと申^{まう}しをやるいしん

と申^{まう}しかたがた御^ご内^{ない}に不^ふ便^{べん}といはれまいらせて候^う大^{だい}恩^{おん}の主^{しゅ}なる上^{かみ}すぎにし日^に蓮^{ちん}が御^ごかんきの時^{とき}、日^に本^{ほん}一同^{いっどう}にくむ事^{こと}なれ

ば弟^{でい}子^し等^らも或^{ある}は所^{しやう}領^{りやう}をををかたよりめされしかば又^{また}方^{かた}方^{かた}の人人^{ひとひと}も或^{ある}は御^ご内^{ない}をいだし

或は所領をおいなんどせしに其の御内になに事もなかりしは御身にはゆゆしき大恩と見候。

このつひたとひ一分の御恩なくともつらみまいらせ給うべき主にはあらず、それにかさねたる御恩を申し所領をきらせ給う事御とがにあらずや、賢人は八風と申して八のかぜにをかされぬを賢人と申すなり、利・

衰 毀 譽 称 譏 苦 樂 な り、をを心は利あるによろばずをとろつるになげかず等の事なり、此の

八風にをかされぬ人をば必ず天はまほらせ給うなりしかるをひりに主をうらみなんどし候はいかに申せども天まほり給う事なし、訴訟を申せど叶いぬべき事もあり、申さぬに叶うべきを申せば叶わぬ事も候、夜めぐりの

殿原の訴訟は申すは叶いぬべきよしをかんがへ候しにあながちになげかれし上日蓮がゆゑにめされて候へ

ばいかでか不便に候はざるべき、ただし訴訟だにも申し給はずばいのりてみ候はんと申せしかば、さうけ給わ

り候いぬと約束ありて又をりかみをしきりにかき人々訴訟ろんなんどありと申せし時に此の訴訟よも叶わじとをもひ候いしがいままでのびて候。

だいがくどのゑもんのたいつどの事どもは申すままにて候あいだいのり叶いたるやうにみえて候、はきりどの事は法門の御信用あるやうに候へども此の訴訟は申すままには御用いなかりしかばいかんかと存じて候

いしほごにさりとはと申して候いしゆゑにや候けんすこしするし候か、これにをもつほどなかりしゆゑに又をもつほどなし、だんなと師とをもひあわぬいのりは水の上に火をたくがごとし、又だんなと師とをもひあひ

て候へども大法を小法をもつてをかしてとしひさしき人々の御いのりは叶い候はぬ上、我が身もだんなもほろび候なり。

天台の座主明雲と申せし人は第五十代の座主なり、去ぬる安元二年五月に院勘をかほりて伊豆国配流・山僧大津よりうばいかず、しかれども又かへりて座主となりぬ又すぎにし壽永二年十一月に義仲にがらめとられ

し上頤うちきられぬ是はながされ頤きらるるをとかとは申さず賢人・聖人もかかる事候、但し源氏の頼朝と平家の清盛との合戦の起りし時清盛が一类二十余人起請をかき連判をして願を立てて平家の氏寺と叡山をたのむべし三千人は父母のごとし山のなげきは我等がなげき山の悦びは我等がよろこびと申して、近江の国・二十四郡を一向によせて候しかば、大衆と座主と一同に内には真言の大法をつくし外には悪僧どもをもつて源氏をいさせしかども義仲が郎等ひぐちと申せしをのこ義仲とただ五六人計り叡山中堂にはせのほり調伏の壇の上にありしを引き出してなわをつけ西ぎかを大石をまろばすやうに引き下して頤をうち切りたりき、かかる事あれども

日本の人人真言をうとむ事なし又たづめる事もなし去ぬる承久三年辛巳五六七の三箇月が間京・夷の合戦ありき、時に日本国第一の秘法どもをつくして叡山東寺・七大寺・園城寺等・天照太神・正八幡・山王等に一一に御いのりありき、其の中に日本第一の僧四十一人なり所謂前の座主・慈円大僧正・東寺・御室・三井寺の常住院の僧正等は度々・義時を調伏ありし上、御室は紫宸殿にして六月八日より御調伏ありしに、七日と申せしに同じく十四日にいくさにまけ勢多迦が頤きられ御室をもひ死に死しぬ、かかる事候へども真言はいかなるとがともあやしむる人候はず、をよそ真言の大法をつくす事明雲第一度・慈円第二度に日本国の王法ほろび候い畢んぬ、今度第三度になり候、当時の蒙古調伏此れなり、かかる事も候ぞ此れは秘事なり人にいはずして心に存知せさせ給へ

されば此の事御訴訟なくて又うらむる事なく御内をばいでず我かまくらにうちいてさきざきよりも出仕とをきやうにてときどきさしいでておはするならば叶う事も候なん、あながちにわるびれてみさせ給うべからず、よくと名聞瞋との。

去ぬる六月二十三日の御下文、島田の左衛門入道殿・山城の民部入道殿 両人の御承りとして同二十五日謹んで拝見
仕り候い畢んぬ、右仰せ下しの状に云く、竜象御房の御説法の所に参られ候いける次第をほかた穩便ならざる由、見聞の人
あまねくしほつ
遍く一方ならず同口に申し合ひ候事驚き入つて候、徒党の仁其の数兵 杖を帯して出入すと云云。

此の条跡形も無き虚言なり、所詮誰人の申し入れ候けるやらん御哀憐を蒙りて召し合せられ実否を糾明され候はば
しか
然るべき事にて候、凡そ此の事の根源は去る六月九日日蓮聖人の御弟子三位公頼基が宿所に来り申し云く、近日竜象房
と申す僧京都より下りて大仏の門の西桑か谷に止住して日夜に説法仕るが申して云く、現当の為

仏法に御不審存ぜむ人は来りて問答申す可き旨説法せしむる間、鎌倉中の上下釈尊の如く貴び奉るしかれども問答に及
ぶ人なしと風聞し候、彼行き向いて問答を遂げ一切衆生の後生の不審をはらし候はむと思ひ候、聞き給はぬかと申され
しかども折節官仕に隙無く候いし程に思い立たず候いしかども、法門の事と承りてたびたび罷り向いて候えども頼基は俗
家の分にて候い一言も出さず候し上は悪口に及ばざる事厳察足る可く候。

ここに竜象房説法の中に申して云く此の見聞満座の御中に御不審の法門あらば仰せらる可くと申されし処に、日蓮
房の弟子三位公問うて云く生を受けしより死をまぬかるまじきことはり始めてをどろくべきに候はねども、一事さら當時・
日本国の災に死亡する者数を知らず眼前の無常人毎に思ひしらずと云ふ事なし、然る所に

京都より上人、御下りあつて人人の不審をはらし給うよし承りて参りて候つれども御説法の最中骨無くも候なばと存じ候
し処に問うべき事有らむ人は各各憚らず問ひ給へ候し間悦び入り候、先づ不審に候事は末法に生を

受けて辺土のいやしき身に候へども中国の仏法幸に此の国にわたれり是非信受す可き処に経は五千・七千数多なり、
然而一仏の説なれば所詮は一經にてこそ候らむに華嚴・眞言乃至八宗・淨土・禪とて十宗まで分れてをはします、此れ等
の宗宗も門はことなりとも所詮は一かと推する処に、弘法大師は我が朝の眞言の元祖・法華經は華嚴
經・大日經に相對すれば門の異なるのみならず其の理は戲論の法無明の辺域なり、又法華宗の天台大師等は諍盜醍醐等
云云、法相宗の元祖慈恩大師云く「法華經は方便深密經は眞實無性有情永不成立」云云、華嚴宗の澄觀
云く「華嚴經は本教法華經は末教、或は華嚴は頓頓法華は漸頓」等云云、三論宗の嘉祥大師の云く「諸大乘經の中には
般若教第一」云云、淨土宗の善導和尚云く「念仏は十即十生・百即百生、法華經等は千中無一」云云、法然上人
云く「法華經を念仏に對して捨閉閣拋、或は行者は群賊」等云云、禪宗の云く「教外別伝、不立文字」云云、教主釈尊は
法華經をば世尊の法は久しくして後に要當に眞實を説きたもつべし、多宝仏は妙法華經は眞實なり十方分身の諸仏
は舌相梵天に至るとこそ見えて候に弘法大師は法華經をば戲論の法と書かれたり、釈尊・多宝・十方の諸
仏は眞實と説かれて候、いつれをか信じ候べき、善導和尚・法然上人は法華經をば千中無一・捨閉閣拋・釈尊・多宝・
十方分身の諸仏は一として成仏せずと云ふ事無し皆仏道を成ずと云云、三仏と導和尚然上人とは水火なり雲泥なり
何れをか信じ候べき何れをか捨て候べき就中彼の導然兩人の仰ぐ所の雙觀經の法蔵比丘の四十八願の
中に第十八願に云く「設い我れ仏を得るとも唯五逆と誹謗正法とを除く」と云云、たとひ弥陀の本願實にして往生すべ
くとも、正法を誹謗せむ人人は弥陀の往生には除かれ奉るべきか又法華經の二の巻には「若し人信ぜざれば其の人命終
して阿鼻獄に入らんと云云、念仏宗に詮とする導然の兩人は經文實ならば阿鼻大城をまぬかれ給ふべしや、彼の上人の
地獄に墮ち給わせば末學弟子・檀那等自然に惡道に墮ちん事疑いなるべし、此等こそ不審に候へ上人は如何と問
給はれしかば、

竜上人答て云く上古の賢哲達をばいかでか疑い奉るべき、竜象等が如くなる凡僧等は仰いで信じ奉り候と答え給しを、をり返して此の仰せこそ智者の仰せとも覚え候へ誰人か時の代にあをがる人師等をば疑い候べき、但し涅槃經に仏最後の御遺言として「法に依つて人に依らざれ」と見えて候、人師にあやまりあらば經に依れと仏は説かれて候、御辺はよもあやまりまされと申され候、御房の私の語と仏の金言と比には三位は如来の金言に付きまいらせむと思ひ候なりと申されしを。

象上人は人師にあやまり多しと候は、いづれの人師に候ぞと問はれしかば、上に申しつる所の弘法大師法然上人等の義に候はずやと答え給ひ候しかば象上人は嗚呼叶ひ候まじ我が朝の人師の事は忝くも問答仕るまじく候、満座の聴衆皆皆其の流にて御座す鬱憤も出来せば定めてみだりがはしき事候なむ恐れあり恐れありと申されし処に、三位房の云く人師のあやまり誰ぞと候は經論に背く人師達をいだし候し憚ありかなふまじと仰せ候にこそ進退きはまりて覚え候へ法門と申すは人を憚り世を恐れて仏の説き給うが如く經文の実義を申さざらんは愚者の至極なり、智者上人とは覚え給はず惡法世に弘まりて人惡道に墮ち国土滅すべしと見候はむに法師の身として争かいさめず候べき、然れば則ち法華經には「我身命を愛まず涅槃經には寧ろ身命を喪つとも」等云云、實の聖人にてをせば何が身命を惜みて世にも人にも恐れ給うべき、外典の中にも竜蓬と云いし者、比干と申せし賢人は頸をはねられ胸をさかれしかども夏の桀殷の紂をばいさめてこそ賢人の名をば流し候しか、内典には不輕菩薩は杖木をかり師子尊者は頭をはねられ竺の道生は蘇山にながされ法道三蔵は面に火印をさされて江南にはなたれしかども正法を弘めてこそ聖人の名をば得候しかと難ぜられ候しかば。

竜上人の云くさる人は末代にはありがたし我我は世をはばかり人を恐るる者にて候、さやうに仰せらるる人とてもことばの如くにはよもをはしまし候はじと候しかば。

此の御房は争か人の心をば知り給うべき某こそ當時日本国に聞え給う日蓮聖人の弟子として候へ某が師匠の聖人は末代の僧にて御坐候へども当世の大名僧の如く望んで請用もせず人をもはず聊か異なる悪名もたらず只此の国に真言・禅宗・浄土宗等の悪法並に謗法の諸僧満ち満ちて上一人をはじめ奉りて下万民に至るまで御歸依ある故に法華經教主釈尊の大怨敵と成りて現世には天神地祇にすてられ他国のせめにあひ、後生には阿鼻大城に墮ち給うべき由・經文にまかせて立て給いし程に此事申さば大なるあだあるべし申さずんば仏のせめのがれがたし、いはゆる涅槃經に「若し善比丘あつて法を壞る者を見て置いて呵責し驅遣し拳処せずんば當に知るべし是の人は仏法の中の怨なり」と云、世に恐れて申さずんば我が身惡道に墮つべきと御覽じて身命をすて

て去る建長年中より今年建治三年に至るまで二十余年が間あえてをこたる事なし、然れば私の難は数を知らず国王の勘氣は兩度に及びき、三位も文永八年九月十二日の勘氣の時は供奉の一人にて有りしかば同罪に行はれて頸をはねらるべきにてありしは身命を惜むものにて候かと申されしかば。

竜象房口を閉て色を変え候しかば此の御房申されしは是程の御智慧にては人の不審をはらすべき由の仰せ無用に候けり苦岸比丘勝意比丘等は我れ正法を知りて人をたすくべき由存ぜられて候しかども我が身も弟子・檀那等も無間地獄に墮ち候き、御法門の分齊にてそごぼくの人を救はむと説き給うが如くならば師檀共に無間地獄に

や墮ち給はんずらむ今日より後は此くの如き御説法は御はからひあるべし、加様には申すまじく候へども惡法を以て人を地獄にをとさん邪師をみながら責め顯はさずば返つて仏法の中の怨なるべしと仏の御いましめのがれがたき上聴聞の上下みなあかく皆惡道にをち給はん事不便に覚え候は此くの如く申し候なり、智者と申すは国のあやうき

をいさめ人の邪見を申しとどむるこそ智者にては候なれ、是はいかなるひが事ありとも世の恐しければいさめじと申されむ上は力及ばず、某は文殊の智慧も富樓那の弁説も詮候はずとて立たれ候しかば、諸人歡喜をなし

掌を合せ今暫く御法門候かしと留め申されしかどもやがて帰り給い了ぬ此の外は別の子細候はず且つは御推察あるべし法華經を信じ参らせて仏道を願ひ候はむ者の争か法門の時悪行を企て悪口を宗とし候べき、しかしながら御ぎやうさく有る可く候其上日蓮聖人の弟子となりのぬる上罷り歸りても御前に参りて法門問答の様かたり申し候き、又た其の辺に頼基しらぬもの候はず只頼基をそねみ候人のつくり事にて候にや早早召し合せられん時其の隠れ有る可らず候。

又仰せ下さるる状に云く極楽寺の長老は世尊の出世と仰ぎ奉ると此の条難かむの次第に覚え候、其の故は日蓮聖人は御經にとかれてましますが如くば久成如来の御使上行菩薩の垂迹法華本門の行者五百歳の大導師にて御座候聖人を頸をはねらるべき由の申し状を書きて殺罪に申し行はれ候しが、いかが候けむ死罪を止て佐渡の

島まで遠流せられ候しは良觀上人の所行に候はずや其の訴状は別紙に之れ有り、抑生草をだに伐るべからずと六斎日夜説法に給われながら法華正法を弘むる僧を断罪に行わる可き旨申し立てらるるは自語相違に候はずや如何此僧豈天魔の入る僧に候はずや、但し此の事の起は良觀房常の説法に云く日本国の一切衆生を皆持斎にな

して八斎戒を持たせて国中の殺生天下の酒を止めむとする処に日蓮房が謗法に障えられて此の願叶い難き由歎き給い候間、日蓮聖人此の由を聞き給いていかがして彼が誑惑の大慢心をたをして無間地獄の大苦をたすけむ

と仰せありしかば、頼基等は此の仰せ法華經の御方人大慈悲の仰せにては候へとも当時、日本国別して武家領食の世きらざる人にてをはしますをたやすく仰せある事いかがと弟子共同口に恐れ申し候し程に、去る文永八年

太歳辛未六月十八日大旱魃の時彼の御房祈雨の法を行いて万民をたすけんと申し付け候由日蓮聖人聞き給いて此体は小事なれども此の次でに日蓮が法験を万人に知らせばやと仰せありて、良觀房の所へつかはすに云く七日の内にふらし給はば日蓮が念仏無間と申す法門すてて良觀上人の弟子と成りて二百五十戒持つべし、雨ふらぬほどな

らば彼の御房の持戒げなるが大誑惑なるは顯然なるべし、上代も祈雨に付て勝負を決したる例これ多し、所謂護命と伝教
だいし 守敏と弘法なり、仍て良觀房の所、周防房・入沢の入道と申す念仏者を遣わす御房と入道は良觀が弟子又
ねんぶつ 念仏者なりいまに日蓮が法門を用うる事なし是を以て勝負とせむ、七日の内に雨降るならば本の八斎戒・念仏を以て
おつじつ 往生すべしと思つべし、又雨らずば一向に法華經になるべしといはれしかば是等悦びて極樂寺

の良觀房に此の由を申し候けり、良觀房悦びないて七日の内に雨ふらすべき由にて弟子百二十余人頭より煙を出し声を
りょうかん 天にひびかし、或は念仏、或は請雨經、或は法華經、或は八斎戒を説きて種種に祈請す、四五日まで雨の氣無ければたまし
つしな ゐを失いて多宝寺の弟子等数百人呼び集めて力を尽し祈りたるに七日の内に露ばかりも雨降ら

ず其の時、日蓮聖人使を遣す事三度に及ぶ、いかに泉式部と云い姪女・能因法師と申せし破戒の僧・狂言綺語の三十一
そのとき 字を以て忽にふらせし雨を持戒持律の良觀房は法華・真言の義理を極め慈悲第一と聞給う上人の数百人の衆徒を率い
たちまち て七日の間にいかにふらし給はぬやらむ、是を以て思ひ給へ丈の堀を越えざる者二丈三丈の堀を

越えてんややすき雨をだにふらし給はず況やかたき往生成仏をや、然れば今よりは日蓮怨み給う邪見をば是を以て
ひるがえり 翻えし給へ後生をそろしくをばし給はば約束のままにいそぎ来り給へ雨ふらす法と仏になる道をし牽らむ七日の内に

雨こそふらし給はざらめ、早魃・弥興盛に八風ますます吹き重りて民のなげき弥弥深し、すみや

かに其のいのりやめ給へと第七日の申の時使者ありのままに申す処に良觀房は涙を流す弟子・檀那同じく声をおしまず
そ 口惜しがる日蓮御勘氣を蒙る時、此の事御尋ね有りしかば有りのままに申し給いき、然れば良觀房・身の上の恥を思はば
くちおし 跡をくらまして山林にもまじはり約束のままに日蓮が弟子ともなりたれば道心の少にてもある
あと

べきにさはなくして無尽の讒言を構えて殺罪に申し行はむとせしは責き僧かと日蓮聖人かたり給いき又頼基も見聞き候
むじん べき、他事に於てはかけはくも主君の御事畏れ入り候へども此の事はいかに思い候とも、いかでかと思は

れ候べき。

仰せ下しの状に云く竜象房・極楽寺の長老・見参の後は釈迦・弥陀とあをぎ奉ると云云、此の条又恐れ入り候、彼の竜象房は洛中にして人の骨肉を朝夕の食物とする由露顕せしむるの間、山門の衆徒蜂起して世末代に及びて悪鬼国中に出現せり、山王の御力を以て対治を加えむとて住所を焼失し其の身を誅罰せむとする処に自然に逃失し行方を知らざる処にたまたま鎌倉の中に又人の肉を食の間情ある人恐怖せしめて候に仏菩薩と仰せ給う事所従の身として争か主君の御あやまりをいさめ申さず候べき、御内のをとなしき人一人にこそ存じ候へ

同じき下し状に云く是非につけて主親の所存には相随わんこそ仏神の冥にも世間の礼にも手本と云云、此の事最第一の大事にて候は私私の申し状恐れ入り候間本文を引くべく候、孝経に云く「子以て父に争わずんばあるべからず臣以て君に争わずんばあるべからず」、鄭玄曰く「君父不義有らんに臣子諫めざるは則ち亡国破家の道な

り」新序に曰く「主の暴を諫めざれば忠臣に非ざるなり、死を畏れて言わざるは勇士に非ざるなり」、伝教大師云く「凡そ不誼に当つては則ち子以て父に争わずんばあるべからず臣以て君に争わずんばあるべからず当に知るべし君臣父子師弟以て師に争わずんばあるべからず」文、法華経に云く「我れ身命を愛まず但無上道を惜む」文、

涅槃経に云く「譬えば王の使の善能談論し方便に巧にして命を他国に奉ずるに寧ろ身命を喪つとも終に王の所説の言教を匿さざるが如し智者も亦爾り」文、章安大師云く「寧ろ身命を喪つとも教を匿さざれとは身は軽く法は重し身を死して法を弘む」文、又云く「佛法を壊乱するは佛法の中の怨なり慈無くして詐り親むは則ち是れ彼が怨なり能く糾治する者は彼の爲めに悪を除く則ち是れ彼が親なり」文、頼基をば傍輩こそ無礼なりと思はれ候らめども世の事にをき候ては是非父母・主君の仰せに随ひ参らせ候べし。

其にとて重恩の主の悪法の者にたばらかされましまして悪道に墮ち給はむをなげくばかりなり、阿闍世王は

提婆六師を師として教主釈尊を敵とせしかば摩竭提国 皆仏教の敵となりて閻王の眷属 五十八万人 仏弟子を敵とする中に耆婆大臣計り仏の弟子なり、大王は上の頼基を思し食すが如く仏弟子たる事を御心よからず思し食ししかども最後には六大臣の邪義をすて耆婆が正法にこそつかせ給い候しが其の如く御最後をば頼基や救い参ら

せ候はんずらむ此の如く申さしめ候は阿闍世は五逆罪の者なり彼に對するかと思し食しぬべし、恐れにては候へども彼には百千万倍の重罪にて御座すべしと御經の文には顯然に見えさせ給いて候、所謂「今此の三界は皆是れ我有なり其中の衆生は悉く是れ吾子なり」文の如くば教主釈尊は日本国の一切衆生の父母なり師匠なり主君

なり阿弥陀仏は此の三の義まします、而るに三徳の仏を闇いて他仏を昼夜朝夕に称名し六万八万の名号を唱えましますあに不孝の御所作にわたらせ給はずや、弥陀の願も釈迦如来の説かせ給いしかども終にくひ返し給いて唯我一人と定め給いぬ、其の後は全く二人三人と見え候はず、随つて人にも父母二人なし何の經に弥陀は此の国の父何れの論に母たる旨 見今候觀經等の念仏の法門は法華經を説かせ給はむ為の・しばらくの・じつらひな

り、塔くまむ為の足代の如し、而るを仏法なれば始終あるべしと思う人 大僻案なり、塔立てて後 足代を責ぶほどのはかなき者なり、又日よりも星は明と申す者なるべし、此の人を經に説いて云く「復教詔すと雖も而も信受せず其の人命終して阿鼻獄に入らん」、当世 日本国の一切衆生の釈迦仏を抛つて阿弥陀仏を念じ法華經を抛つ

て觀經等を信ずる人、或は此くの如き謗法の者を供養せむ俗男 俗女等 存外に五逆七逆 八虐の罪ををかせる者を智者と謁仰する諸の大名僧並びに国主等なり、如是展転至無數劫とは是なり、此の如き僻事をなまじみに承りて候間次を以て申せしめ候、宮仕をつかまつる者上下ありと申せども分分に随つて主君を重んぜざるは候は

ず、上の御ため現世後生あしくわたらせ給うべき事を秘かにも承りて候はむに傍輩 世に憚りて申し上ざらむは与同罪にこそ候まじきか。

随つて頼基は父子二代命を君にまいらせたる事顕然なり。故親父中務故君の御勘氣かふらせ給いける時、数百人の御内の臣等心かはりし候けるに中務一人最後の御供奉して伊豆の国まで参りて候き、頼基は去る文永十一年二月十二日の鎌倉の合戦の時、折節伊豆の国に候しかば十日の申の時に承りて唯一人菅根山を一時に馳せ越えて御前に自害すべき八人の内に候き、自然に世しづまり候しかば今に君も安穩にこそわたらせ給い候へ爾来・大事小事に付けて御心やすき者にこそ思い含まれて候頼基が今更何につけて疎縁に思いまいらせ候べき、後生までも随従しまいらせて頼基成仏し候はば君をもすくひまいらせ君成仏しまさば頼基もたすけられまいらせむとこそ存じ候へ。

其れに付ひて諸僧の説法を聴聞仕りて何れか成仏の法とつかがひ候処に日蓮聖人の御房は三界の主一切衆生の父母釈迦如来の御使上行菩薩にて御坐候ける事の法華經に説かれてましましけるを信じまいらせたるに候、今こそ真言宗と申す悪法・日本国に渡りて四百余年去る延暦二十四年に伝教大師日本国にわたし給いたりしかども此の国にあしかりなむと思し食し候間宗の字をゆるさず天台法華宗の方便となし給い畢んぬ、其の後・伝教大師御入滅の次をつかがひて弘法大師・伝教に偏執して宗の字を加えしかども叡山は用うる事なかりしほどに慈覚・智証短才にして二人の身は当山に居ながら心は東寺の弘法に同意するかの故に我が大師には背いて始めて叡山に真言宗を立てぬ日本亡国の起り是なり、爾来三百余年或は真言勝れ法華勝れ一同なむと諍論事きれざりしかば王法も左右なく尽きざりき、人王七十七代後白河法皇の御宇に天台の座主明雲一向に真言の座主になりしかば明雲は義仲にころされぬ頭破作七分是なり、第八十二代隠岐の法皇の御時・禅宗・念仏宗出来つて真言の大悪法に加えて国土に流布せしかば、天照太神・正八幡の百王百代の御誓やぶれて王法すでに尽きぬ、関東の権の大夫義時に天照太神・正八幡の御計いとして国務をつけ給い畢んぬ、爰に彼の三の悪法・関東に落ち下りて

ぞんがい ぐきえ ゆえ ぼんしゃく
存外に御帰依あり、故に梵釈・二天・日月・四天いかりを成し先代末有の天変地天を以ていさむれども用い給はざれば
りんく おお ほけきようひぼう ちばつ たま てんしやうだいじん しやうはちまん
鄰國に仰せ付けて法華経誹謗の人を治罰し給う間、天照太神・正八幡も力及び給はず、日蓮聖人・一人此の事を知し食
せり、此くの如き嚴重の法華経にてをはして候間、主君をも導きまいらせむと存じ候故に無量の
し せう じ けい けきよう けん じゆくん せむと 存じ 候故に 無量の
小事をわすれて今に仕われまいらせ候、頼基を讒言申す仁は君の御為不忠の者に候はずや、御内を罷り出て候はば君た
ちまちに無間地獄に墮ちさせ給うべし、さては頼基 仏に成り候ても甲斐なしとなげき存じ候。

抑 彼の小乗 戒は富樓那と申せし大阿羅漢諸天の為に二百五十戒を説き候しを・浄名居士たんにて云く「穢食を以
て宝器に置くこと無れと等云云、鶯嶺摩羅は文殊を呵責し・嗚呼蚊蚋の行は大乗空の理を知らずと、又小乗 戒をば文殊
は十七の失を出だし如来は八種の譬喩を以て是をそしり給うに驢乳と説き蝦蟆に譬えられたり、此れ
等をば鑒眞の末弟子は伝教大師をば悪口の人とこそ嵯峨天皇には奏し申し候しかども経文なれば力及び候はず、南都の
奏状やぶれて叡山の大戒壇立ち候し上は、すでに捨てられ候し小乗に候はずや、頼基が良観房を蚊蚋蝦蟆の法師なり
と申すとも経文分明に候はば御とがめあるべからず。

剩 起請に及ぶべき由仰せを蒙むるの条存外に歎き入て候、頼基不法時病にて起請を書き候程ならば君忽に法華経の
御罰を蒙らせ給うべし、良観房が讒訴に依りて釈迦如来の御使日蓮聖人を流罪し奉りしかば聖人の申し給いしが如く百
日が内に合戦出来して若干の武者滅亡せし中に、名越の公達横死にあはせ給いぬ、是れ偏に良観
房が失ひ奉りたるに候はずや、今又竜象良観が心に用意せさせ給いて頼基に起請を書かしめ御座さは君又其の罪に当ら
せ給はざるべしや、此くの如き道理を知らざる故か、又君をあだし奉らむと思ふ故か、頼基に事を寄せて大事を出さむと
たばかり候人等御尋ねあつて召し合わせらるべく候、恐惶謹言。

建治三年丁丑六月二十五日

四条中務尉頼基 請文

去月二十五日の御文 同月の二十七日の酉の時に来りて候、仰せ下さるる状と又起請かくまじきよしの御せいじやうとを見候へば優曇華のさきたるをみるか赤梅檀のふたばになるをえたるか、めづらしかつばし、三明六通を得給う上法華經にて初地・初住にのぼらせ給へる証果の大阿羅漢得無生忍の菩薩なりし舍利弗 目連 迦葉等だにも娑婆世界の末法に法華經を弘通せん事の大難こらへかねければかなふまじき由辞退候いき、まして三惑未断の末代の凡夫が争か此經の行者となるべき、設し日蓮一人は杖木瓦石惡口王難をも忍ぶとも妻子を帶せる無智の俗なんどは争か叶うべき、中自信ぜざらんはよかりなんすゝとをらずしばしならば人に・わらはれなんと不便にをもひ候いしに、度度の難二箇度の御勘氣に心ざしをあらはし給うだにも不思議なるに、かくおどさるに二所の所領をすてて法華經を信じとをすべしと御起請候事いかにも申す計りなし、普賢・文殊等を末代はいかんがと仏思し食して妙法蓮華經の五字をば地涌千界の上首 上行等の四人にこそ仰せつけられて候合事の心を案ずるに日蓮が道をたすけんと上行菩薩貴辺の御身に入りかはらせ給へるか又教主釈尊の御計いか、彼の御内の人々うちにはびこつて良觀 竜象が計ひにてやぢやうあるらん、起請をかかせ給いなば、いよいよかつばらをこりてかたがたにふれ申さば鎌倉の内に日蓮が弟子等一人もなくせめつしなひなん、凡夫のならひ身の上ははからひがたし、これをよくよくしるを賢人・聖人とは申すなり、遠きをばしばらくをかせ給へ近きは武蔵のかう殿所をすてて入道になり結局は多くの所領男女のきつだち御ぜん等をすてて御遁世と承わる、とは子なしたのもしき兄弟なしわづかの二所の所領なり、一生はゆめの上明日をこせずいかなる乞食にはなるとも法華經にきずをつけ給うべからず、されば同くはなげきたるけしきなくて此の状にかきたるが。

ごとくすこしもへつらはず振舞仰せあるべし、中中へつらふならばあしかりなん、設ひ所領をめされ追出し給うとも
十羅刹女の御計いにてぞあるらむとふかくたのませ給うべし。

日蓮はながされずしてかまくらにだにもありしかば有りしいくさに一定打ち殺されなん、此れも又御内にてはあし
かりぬげれば釈迦仏の御計いにてやあるらむ、陳状は申して候へとも又それに僧は候へともあまりのおぼつかなさに三位
房をつかはすべく候にまだ所労きらきらしく候はず候は同事に此の御房をまい

らせ候、だいがくの三郎殿かたきの太郎殿かとき殿かにいとまに随いてかかせてあげさせ給うべし、これはあげなば事きれ
なむいたういそがずとも内内うちをしたため又ほかのかつばらにもあまなくさはがせてさしいだしたらば若や此の文
かまくら内にもひろうし上へまいる事もやあるらん、わざはひの幸はこれなり。

法華經の御事は已前に申しふりぬ、しかれども小事こそ善よりはをこて候へ、大事になりぬれば必ず大なるさはぎが大
なる幸となるなり、此の陳状人ごとにみるならば彼等がはぢあらわるべし、只一口に申し給我とは御内を出て所領をあ
ぐべからず、上よりめされいださむは法華經の御布施幸と思つべしとののしらせ給へ

かすが今奉行人にへつらうけしきなかれ、此の所領は上より給たるにはあらず、大事の御所労を法華經の薬をもつてたす
けまいらせて給て候所領なれば召すならば御所労こそ又かへり候はむずれ、爾時は頼基に御たいしやう候とも用ひまいら
せ候まじく候とうちあてにくさつげにてかゝるべし。

あなかしこあなかしこ御よりあひあるべからず、よるは用心きびしく夜廻の殿原かたらいて用ひ常にはよりあはるべし
今度御内をだにもいだされずば十に九は内のものねらひなむかまへきたなきしにすべからず。

建治三年丁丑七月 日蓮花押 四条金吾殿御返事

御文あらあらうけ給わりて長き夜のあけとをき道をかへたるがごとし、夫れ仏法と申すは勝負をさきとし、王法と申すは賞罰を本とせり、故に仏をば世雄と号し王をば自在となづけたり、中にも天竺をば月氏という我国をば日本と申す一閭浮提八万の国の中に大なる国は天竺小なる国は日本なり、名のめでたきは印度第二扶桑第一なり、仏法は月の国より始めて日の国にとどまるべし、月は西より出で東に向ひ日は東より西へ行く事天然のことはり、磁石と鉄と雷と象華とのごとし、誰か此のことはりをやぶらん。

此の国に仏法わたりし由来をたづねれば天神七代地神五代すぎて人王の代となりて第一神武天皇乃至第三十代欽明天皇と申せし王をはしき、位につかせ給いて三十二年治世し給いに第十三年壬申十月十三日辛酉に此の国より西に百済国と申す州あり日本国の大王の御知行の国なり、其の国の大王聖明王と申せし国王あり、年貢を日本国にまいらせしついでに金銅の釈迦仏並に一切経法師尼等をわたしたりしかば天皇大に喜びて群臣に仰せて西蕃の仏をあがめ奉るべしやいなや、蘇我の大臣いなめの宿禰と申せし人の云く西蕃の諸国みな此れを礼すとよあきやまとあに独り背やと申す、物部の大むらじをこし中臣のかまこ等奏して曰く我が国家天下

に君たる人はつねに天地しやそく百八十神を春夏秋冬にさいはいするを事とす、しかるを今更あらためて西蕃の神を拝せばおそらくは我が国の神いかりをなさんと云云、爾の時に天皇わかちがたくして勅宣す、此の事を

只心に蘇我の大臣につけて一人にあがめさすべし、他人用いる事なかれ、蘇我の大臣つけ取りて大に悦び給いて此の釈迦仏を我が居住のおはたと申すところに入まいらせて安置せり、物部の大連不思議なりとていきどを

りし程に日本国に大疫病おこりて死せる者大半に及ぶすに国民尽きぬべかりしかば、物部の大連 隙を得て此の仏を失うべきよし申せしかば勅宣なる、早く他国の仏法を棄つべし云云、物部の大連 御使として仏をば取りて炭をもつてをしつちをもつて打ちくだき仏殿をば火をかけてやきはらひ僧尼をばむちをくわう、其の時
天に雲なくして大風ふき雨ふり、内裏天火にやけあがつて大王並に物部の大連 蘇我の臣三人共に疫病ありきるがごとくやくがごとし、大連は終に寿絶えぬ蘇我と王とはからくして蘇生す、而れども仏法を用ゆることなくして十九年すぎぬ。

第三十一代の敏達天皇は欽明第二の太子治十四年なり左右の両臣は一は物部の大連が子にて弓削の守屋父のあとをついで大連に任ず蘇我の宿禰の子は蘇我の馬子と云云、此の王の御代に聖德太子生給へり用明の御子 敏達のをいなり御年二歳の二月東に向つて無名の指を開いて南無仏と唱 給は御舍利 掌 にあり、是れ日本国の

釈迦念仏の始めなり、太子八歳なりしに八歳の太子云く「西国の聖人釈迦牟尼仏の遺像末世に之を尊めば則ち禍を銷し福を蒙る之を蔑れば則ち災を招き寿を縮む」等云云、大連物部の弓削宿禰の守屋等いかりて云く「蘇我は勅宣を背きて他国の神を礼す」等云云、又疫病未だ息まず人民すでにたえぬべし、弓削守屋又此れを間奏す云云、勅宣に云く「蘇我の馬子仏法を興行す宜く仏法を卻ぞくべし」等云云、此に守屋中臣の臣勝海大連等両臣

と、寺に向つて堂塔を切たつし仏像をやきやぶり、寺には火をはなち僧尼の袈裟をはぎ笞をもつてせむ 又天皇並に守屋馬子等疫病す、其の言に云く「焼くがごとしきるがごとし」又瘡をこるはうそつといふ、馬子歎いて云く「尚三宝を仰がんと勅宣に云く」汝独り行え但し余人を断てよ」等云云、馬子欣悦し精舎を造りて

三宝を崇めぬ。

天皇は終八月十五日崩御云云、此の年は太子は十四なり第三十二代用明天皇の治二年欽明の太子 聖德

太子たいしの父ちちなり、治二年ちのふたね丁未ていみ四月しがつに天皇てんのう疫病えきびあり、皇勅みかどして云く「三宝さんぼうに帰せんと欲す」云云、蘇我そがの大臣だいじん詔したがへに随したがつ可べし
とて遂はつしに法師ほふしを引ひいて内裏だいりに入る豊国ほうしこれの法師ほふし是なり、物部もろやの守屋もりや大連おおい等いかにに瞋よしまり横よしまに睨いんで云く天皇てんのうを厭魅つゐすと終ついに
皇隠みかどれさせ給たまつ五月ごがつに物部もろやの守屋もりやが一族いそ河の家かにひきこもり多勢たせいをあつめぬ、太子たいしと馬子うまこと押おし
し寄せてたかたか、五月・六月・七月の間に四箇度しよかんど合戦がせんす、三度は太子たいしまけ給たまつ第四度だいよどめに太子たいし願ねがを立てて云く「釈迦しやくか
如来にらいの御舎利しかりの塔たつを立て四天王してんのう寺てらを建立こんりゅうせんと」馬子うまこ願ねがて云く「百濟くだらより渡わたす所の釈迦しやくか仏ぶつを寺てらを立てて崇重すうちゆうすべし」と
云云、弓削いなのつて云く「此これは我が放はなつ矢やにはあらず我が先祖すうぢゆう崇重ふとの府都だいまつじんの大明神だいめいじんの放はなち給たまふ矢やな
り」と、此の矢やはるかに飛たんで太子たいしの鎧よろいに中なる、太子たいしなる「此は我が放はなつ矢やにはあらず四天王してんのうの放はなち給たまつ矢やなり」とて迹
見みの赤棒せくぼうと申もつす舎人しやにんにいさせ給たまふ矢やはるかに飛たんで守屋もりやが胸むねに中なりぬ、はだのかはかつをちあひて頸けいをとる、此の合戦がせんは
用明崩御ようめいほうぎ崇峻すしゆん未だ位ゐに即すなはち給たまわざる其その中間ちゆうかんなり。

第三十三・崇峻すしゆん天皇てんのう位ゐにつき給たまつ、太子たいしは四天王してんのう寺てらを建立こんりゅうす此これ釈迦しやくか如来にらいの御舎利しかりなり、馬子うまこは元興寺がんこじと申もつす寺てらを
建立こんりゅうして百濟国くだらよりわたりて候きこいし教主きやうしゆ釈尊しやくそんを崇重すうちゆうす、今の代よに世間せけん第一だいいちの不思議ふしぎは善光寺ぜんくわうてらの阿弥陀如来あみたにらいといおつ誑惑おあわく
これなり、又釈迦しやくか仏ぶつにあだをなせしゆへに三代さんだいの天皇てんのう並ならに物部もろやの一族いそむなしくなりしなり又太子たいし・教主きやうしゆ釈尊しやくそんの像ざう一体いつたいつく
らせ給たまいて元興寺がんこじに居ゐせしむ今の橘寺たちばなてらの御本尊ごほんそんこれなり、此これこそ日本国にほんこくに釈迦しやくか仏ぶつつく
りしはじめなれ。

漢土かんどには後漢ごかんの第二ふたひの明帝みんてい永平七年えいへいしちねんに金神きんしんの夢ゆめに見みて博士おひし蔡さい・王遵等おうじゆんとうの十八人じふはちにんを月氏がつしにつかはして仏法ぶつぽうを尋たずねさせ
給たまいしかば中天竺てんてんしゆくの聖人せいじん摩騰迦またうか・竺法蘭しやくぽらんと申もつせし二人ふたにんの聖人せいじんを同永平十年どうえいへいじゆねん丁卯ていぼうの歳とし迎むかひ取りて崇重すうちゆうありしかば、漢土かんどに
て本より皇の御いのりせし儒家道家の人数千人にんすう此の事をそねみてうつたへしかば、同永平十四年正月十五日どうえいしよしよねんしやうがつにじふごにちに召よし合
せられしかば漢土かんどの道士だうし悦よろこびをなして唐土たうどの神百靈しんひやくれいを本尊ほんそんとしてありき、二人の聖人せいじん

は仏の御舍利と釈迦仏の画像と五部の経を本尊と恃怙み給う、道士は本より王の前にして習いたりし仙經・三墳・五典・二聖・三王の書を新につみこめてやきしかば古はやけざりしがはいとなりぬ、先には水につかびしが水に沈みぬ、鬼神を呼しも来らず、あまりのはづかしさに、善信・費叔才など申せし道士等はおもひ死にししぬ、

二人の聖人の説法ありしかば舍利は天に登りて光を放ちて日輪みゆる事なし、画像の釈迦仏は眉間より光を放ち給う、呂慧通等の六百余人の道士は帰伏して出家す、三十日が間に十寺立ちぬ、されば釈迦仏は賞罰ただしき仏なり、上に挙ぐる三代の帝、並に一人の臣下、釈迦如来の敵とならせ給いて今生は空く後生は悪道に墮ちぬ、

今の代も又これにがはるべからず、漢土の道士信費等日本の守屋等は漢土日本の大小の神祇を信用して教主釈尊の御敵となりしかば神は仏に随い奉り行者は皆ほろびぬ、今の代も此くの如く上に挙ぐる所の百済国の仏は教主釈尊なり、名を阿弥陀仏と云つて日本国をたばらかして釈尊を他仏にかたり、神と仏と仏との差別

こそあれども釈尊をすつる心はただ一なり、されば今の代の滅せん事又疑いなるべし、是は未だ申さざる法門なり秘す可し秘す可し、又吾一門の人人の中にも信心もつく日蓮が申す事を背き給はば蘇我が如くなるべし、其の故は仏法・日本に立ちし事は蘇我の宿禰と馬子との父子二人の故ぞかし、釈迦如来の出世の時の梵王・帝釈の

如くにてこそあらまじなれども、物部と守屋とを失ひし故に只一門になりて位もあがり国をも知行し一門も繁昌せし故に高挙をなして崇峻天皇を失いたてまつり王子を多く殺し結句は太子の御子二十三人を馬子がまご入鹿の臣下失ひまいらせし故に、皇極天皇は中臣の鎌子が計いとして教主釈尊を造り奉りてあながちに申せしかば入鹿の臣並に父等の一族一時に滅びぬ、

此れをもつて御推察あるべし、又我が此の一門の中にも申しとをらせ給はざらん人人はがへりて失あるべし、日蓮をうらみさせ給うな少輔房能登房等を御覧あるべし、かまてかまて此の間はよの事なりとも御起請か

かせ給^{たま}うべからず火はをびただしき様なれども暫^{しばし}くあればしめる水はのろき様なれども左右^{さう}なく失^{うしな}いがたし、御^ご辺は腹あしき人なれば火の燃^もるがごとし一定人にすかされなん、又主^{しゅ}のつらつらと言^{いわ}和^わかにすかせ給^{たま}うならば火に水をかけたる様に御^ごわたりありぬと覺^{おぼ}ゆ、きたはぬかねはさかななる火に入るればとくとけ候^{まち}、氷^こを

ゆに入るがごとし、劍^{けん}なんどは火^{たい}火^かに入るれども暫^{しばし}くはとけず是きたる故なり、まへにかう申^{もう}すはきたつなるべし仏^{ぶつ}法^{ぽう}と申^{もう}すは道理なり道理と申^{もう}すは主に勝^{かち}つ物なりいかにいとをしはなれじと思^{おも}うめなれども死^ししぬればかひなしに所^{しよ}領^{りやう}ををししとをばすとも死^ししては他人^{たにん}の物、すでにさか今年^{ことし}久^{ひさ}しすこしも惜^{おし}む事なかれ、又さきさき申^{もう}すがごとくさきさきよりも百^{ひゃく}千^{せん}万^{まん}億^{いふ}倍^{ばい}御^ご用^{よう}心^{しん}あるべし。

日^に蓮^{れん}は少^{せう}より今^{いま}生^{せい}のいのりなし只^{ただ}仏^{ぶつ}にならんとをもふ計^{はかり}りなり、されども殿^{おん}の御^ご事^じをばひまなく法^{ほけ}華^け經^{きやう}・釈^{しやく}迦^か仏^{ぶつ}・日^に天^{てん}に申^{もう}すなり其^{その}の故^{ゆゑ}は法^{ほけ}華^け經^{きやう}の命^{めい}を継^{つぎ}ぐ人なればと思^{おも}うなり。六^{ろく}賢^{けん}六^{ろく}賢^{けん}あらかるべからず吾^わが家^けに・あらずんば人に寄^よ合^{ごう}事なかれ、又夜^よ廻^{まわ}の殿^{おん}原^{げん}はひとりもたのもしき事^{こと}はなれども法^{ほけ}華^け經^{きやう}の故^{ゆゑ}に屋^{おく}敷^{しき}を取^とられた

人^{ひと}人^{ひと}なり、常^{じやう}はむつばせ給^{たま}うべし、又夜^よの用心^{ようしん}の爲^{ため}と申^{もう}しかたがた殿^{おん}の守^{まも}りとなるべし、吾^わ方^{かた}の人^{ひと}人^{ひと}をば少^{せう}少^{せう}の事^{こと}をばみずきかずあるべしさて又法^{ほふ}門^{もん}などを聞^{きこ}ばやと仰^{おほ}せ候^{まち}はんに悦^{よろこ}んで見^みえ給^{たま}うべからず、いかんが候^{まち}はんずらん、御^{おん}弟^{でい}子^し共に申^{もう}してこそ見^み候^{まち}はめとやわやわとあるべしいかにもうれしさにいろに顯^{あらわ}れなんと

覺^{おぼ}え聞^{きこ}かんと思^{おも}う心^{こころ}だにも付^つかせ給^{たま}うならば火^ひをつけてもすがごとく天^{てん}より雨^{あめ}の下^{した}るがごとく万^{ばん}事^じをすてられんずるなり。

又今^{いま}度^{たび}いかなる便^{べん}も出^で来^きせばしたため候^{まち}し陳^{ちん}状^{じやう}を上^あげらるべし、大^{だい}事^じの文^{ぶん}なればひとさはきはかならずあるべし、
六^{ろく}賢^{けん}六^{ろく}賢^{けん}。

四^し条^{じょう}金^{きん}吾^ご殿^{でん} 日^に蓮^{れん}花^か押^{おし}

二二〇 四条金吾殿御返事

1170p

法華經本迹相對して論ずるに迹門は尚始成正覺の旨を明す故に^{ゆえ}いまだ留難^{るなん}かかれり、本門^{ほんもん}はかかる留難^{るなん}を去りたり
然りと雖も題目の五字に相對する時は末法の機^きにかなはざる法なり、真実一切衆生色心の留難^{るなん}を止むる秘術は唯南無
妙法蓮華經なり。

四条金吾殿御返事

日蓮

二二一 崇峻天皇御書 建治三年九月 五十六歳御作 与四条金吾

1170p

白小袖一領錢一ゆひ又富木殿の御文のみなによりもかきなしまひじきひるひじきやうやうの物うけ取りしなじな
御使にたび候いぬ、さてはなによりも上の御いたはりなげき入つて候、たとひ上は御信用なき様に
候へともとの其の内にをはして其の御恩のかけにて法華經をやしなひまいらせ給い候は偏に上の御祈とぞな
り候らん、大木の下の小木大河の辺の草は正しく其の雨にあたらず其の水をえずといふとも露をつたへいきを
えてさかつる事に候。

此れもかくのごとし、阿闍世王は仏の御かたきなれども其の内にありし耆婆大臣仏に志ありて常に供養ありしかば
其の功大王に帰すとこそ見え候へ仏法の中に内薫外護と申す大なる大事ありて宗論にて候、法華經には我深く汝等
を敬う、涅槃經には一切衆生悉く仏性有り、馬鳴菩薩の起信論には真如の法常に薰習するを

以ての故に妄心即滅して法身顯現す。弥勒菩薩の瑜伽論には見えたり、かくれたる事のあらはれたる徳となり候なり、されば御内の人人には天魔ついて前より此の事を知りて殿の此の法門を供養するをささえんがために今度の大妄語をば造り出だしたりしを御信心深ければ十羅刹たすけ奉らんがために此の病はをこれるか、上は我がかたきとはをばさねども一たんかれらが申す事を用い給いぬるによりて御しよらうの大事になりてながしらせ給うか、彼等が柱とたのむ竜象すでにたつれぬ、和譏せし人も又其の病にをかされぬ、良観は又一重の大科の者なれば大事に値うて大事をひきをこしていかにもなり候はんずらん、よもただは候はじ。

此れにつけても殿の御身もあぶなく思いまいらせ候ぞ、一定かたきにねらはれさせ給いなんすぐろくの石は二つ並びぬればかけられず車の輪は二あれば道にかたぶかず、敵も二人ある者をばいふせがり候ぞ、いかにとがあらとも弟ども且くも身をはなち給うな、殿は一定腹あしき相かをに顯れたり、いかに大事と思へども腹あ

しき者をば天は守らせ給はめと知らせ給へ殿の人にあだまれてをはさば設い仏にはなり給うとも彼等が悦びと云う、此れよりの歎きと申し口惜しかるべし、彼等がいかにもせんとはげみつるに、古よりも上に引き付けられまいらせてをはすれば外のすがたはしづまりたる様にあれども内の胸はもふる計りにや有らん、常には

彼等に見へぬ様にて古よりも家のことを敬ひきうだちまいらせ給いてをはさんには上の召しありとも且くうつしむべし、入道殿いかにもならせ給はば彼の人人はまどひ者になるべきをばかへみず、物をばへぬ心にとのいよいよ来るを見ては一定ほのをを胸にたきいきをさかさまにつくらん、若しきうだちきり者の女房たちい

かに上の御そろつはと問い申されば、いかなる人にても候へ膝をかがめて手を合せ某が力の及ぶべき御所旁には候はず候をいかに辞退申せどもただと仰せ候へは御内の者にて候間かくて候とてびむをもかかずひたたれこはからず、さはやかなる小袖色ある物なんどもきずして且くねうじて御覧あれ。

返す返す御心への上なれども末代まつだいのありさまを仏の説かせ給たまいて候こには濁世じよくせには聖人しやうじんも居こしがたし大火の中の石の如ごとし、且しかくはこらふるやうなれども終ついにはやけくだけで灰となる、賢人けんじんも五常ごじやうは口に説きて身には振舞ふるまいいがたしと見みて候こぞ、かつの座をば去れと申もうすぞかし、そこばくの人の殿を造り落さんとしつるにをとされず

してはやかちぬる身が穩便おんびんならずして造り落されなば世間に申もうすこぎこひでの船こぼれ又食の後に湯の無きが如ごとし、上よりやを給たまいて居こしてをせば其処にては何事無ことなくとも日ぐれ曉など入り返りなどに定めてね

らうらん、又我が家の妻戸の脇持仏堂家の内の板敷いたじきの下か天井などをば、あながちに心えて振舞ふるまいい給たまへ今度はさきよりも彼等かれらはたばかり賢かるらん、いかに申もうすとも鎌倉かまくらのえがら夜廻りの殿原にはすぎじ、いかに心にあはぬ事有りとまがたらひ給たまへ

義経よしつねはいかにも平家をばせめおとしがたかりしかども、成良しげよしをかたらひて平家をほろぼし、大将殿はおさだを親のかたきとをばせしかども平家を落さざりしには頸を切り給たまはず、況や此の四人は遠くは法華經のゆ近くは日蓮にぢれんがゆへに命を懸けたるやしきを上台うへだいされたり、日蓮にぢれんと法華經とを信ずる人人ひとびとをば前前彼の人人ひとびといかなる事ありともかへみ給たまつべし、其の上殿の家此の人人ひとびと常にかよつならばかたきはよる行きあはじとをぢ

るべし、させる親のかたきならねば顛あやわれてとはよも思はじ、かくれん者は是れ程の兵士はなきなり、常にむづせ給たまへ殿は腹悪き人にてよも用ひさせ給たまはじ、若もしさるならば日蓮にぢれんが祈りの力及びがたし、竜象と殿の兄とは殿の御ためにはあしかりつる人ぞかし天の御計おんはからいに殿の御心の如くなるぞかしに天の御心に背かんとは

をばするぞ設たといい千万の財をみちたりとも上にすてられまいらせ給たまいては何の詮かあるべき已すでに上にはをやの様に思はれまいらせ水の器に随したがつが如くつしの母を思ひ老者の杖をたのむが如く主のものを思食されたるは法華經の御たすけにあらずや、あらうらやましやとこそ御内の人人ひとびとは思はるるらめとくく此の四人かたらひて

日蓮にきかせ給へるならば強盛に天に申すべし、又殿の故御父母御母の御事も左衛門の尉があまりに歎き候ぞと天にも申し入れて候なり、定めて釈迦仏の御前に子細候らん。

返す返す今に忘れぬ事は頸切れんとせし時殿はともして馬の口に付きてなきかなしみ給いしをばいかなる世にか忘れな、設い殿の罪ふかくして地獄に入り給はば日蓮をいかに仏になれと釈迦仏こしらへさせ給うとも用ひまいらせ候べからず同じく地獄なるべし、日蓮と殿と共に地獄に入るならば釈迦仏法華経も地獄にこそを

はしまさずらめ、暗に月の入るがごとく湯に水を入れるがごとく氷に火をたくがごとく日輪にやみをなぐるが如くこそ候はんずれ、若しすこしも此の事をたがさせ給うならば日蓮うらみさせ給うな。

此の世間の疫病はこのまうすがごとく年帰りなば上へあがりぬとをばえ候ぞ、十羅刹の御計いか今且く世にをはして物を御覧あれかし、又世間のすぎえぬやうばし歎いて人に聞かせ給うな、若しさるならば賢人にははづれたる事なり、若しさるならば妻子があとにとどまりてはちを云うとは思はねども、男のわかれのおしさに他人に向いて我が夫のはちをみなかたるなり、此れ偏にかれが失にはあらず我がふるまひのあしかりつる故なり。

人身は受けがたし爪の上の土人身は持ちがたし草の上の露、百二十まで持ちて名をくたして死せんよりは生きて一日なりとも名をあげん事こそ大切なれ、中務三郎左衛門尉は主の御ためにも仏法の御ためにも世間の心ねもよかりけりよかりけりと鎌倉の人人の口につたはれ給へ、穴賢穴賢、蔵の財よりも身の財すぐれたり身の財より心の財第一なり、此の御文を御覧あらんよりは心の財つませ給うべし。

第一秘蔵の物語あり書きてまいらせん、日本始りて国王二人人に殺され給う、其の一人は崇峻天皇なり、此の王は欽明天皇の御太子聖徳太子の伯父なり、人王第三十三代の皇にてをはせしが聖徳太子を召して勅宣下さ

る、汝は聖智の者と聞く朕を相してまいらせよと云云、太子三度まで辞退申させ給いしかども頻の勅宣なれば止みがたくして敬いて相しまいらせ給う、君は人に殺され給うべき相ましますと、王の御気色かはらせ給いてなにと云う証拠を以て此の事を信ずべき、太子申させ給はく御眼に赤き筋とをりて候人にあだまる相なり、皇帝勅宣を重ねて下しいかにしてか此の難を脱れん、太子の云く免脱がたし但し五常と申すつはものあり此れを身に離し給わずば害を脱れ給はん、此のつはものをば内典には忍波羅蜜と申して六波羅蜜の其の一なりと云云、且くは此れを持ち給いてをばせしがややもすれば腹あしき王にて是を破らせ給いき、或時人猪の子をまいらせたり

しかばこつがいをぬきて猪の子の眼をづぶづぶとささせ給いていつかにくしと思うやつをかくせんと仰せありしかば、太子其の座にをはせしが、あらあさましやあさましや君は一定人にあだまれ給いなん、此の御言は身を害する剣なりとて太子多くの財を取り寄せて御前に此の言を聞きし者に御ひきで物ありしかども、有人蘇我

の大臣馬子と申せし人に語りしかば馬子我が事なりとて東漢直駒直磐井と申す者の子をかたらひて王を害しまいらせつ、されば王位の身なれども思ふ事をばたやすく申さぬぞ、孔子と申せし賢人は九思一言とてこのたびおもひて一度申す、周公旦と申せし人は沐する時は三度握り食する時は三度はき給いき、たしかにきこしめせ我ばし恨みさせ給うな仏法と申すは是にて候ぞ。

一代の肝心は法華經法華經の修行の肝心は不輕品にて候なり、不輕菩薩の人を敬いしはいかなる事ぞ教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ、六賢六賢、賢きを人と云いはかなきを畜といふ。

建治三年丁丑九月十一日

日蓮 花押

四條左衛門尉殿御返事

鷹取^{たかとり}のたけ身延のたけなないたがれのたけいだにと申し、木のもとかやのねいわの上土の上いかにたづね候へどもをひて候ところなし、されば海にあらざればわかめなし山にあらざればくさびらなし、法華經^{ほけきょう}にあらざれば仏になる道なかりけるかこれはさてをき候いぬ、なによりも承り^{たまわ}てすずしく候事はいくばくの

御にくまれの人の御出仕に人かず^{なま}にめしぐせられさせ給いて^{たま}一日・二日ならず御ひまもなきよしうれしさ申すばかりなし、えもんのたいつのをやに立ちあひて上の御一言にてかへりてゆりたると殿のすねんが間のにくまれ去年^{こぞ}のふゆはかうとききしにかへりて日日の御出仕の御ともいかなる事ぞ、ひとへに天の御計^{おんはから}い法華經^{ほけきょう}の

御力^{おんちから}にあらずや、其^その上円教房^{えんきやう}の采りて候いしが申し候は、えまの四郎殿の御出仕に御ともさふらい二十四・五其^その中にしうはさてをきたてまつりぬ、ぬしのせいといひかをたましひむま下人までも中務のさえもんのじやう第一^{だいいち}なり、あはれをとこやをとこやとかまくらわらはへはつじちにて申しあひて候しとかたり候。

これにつけてもあまりにあやしき候、孔子^{こうし}は九思一言周公旦^{しゅうこうたん}は浴^{あゆみ}する時は三度にぎり食する時は三度はかせ給う^{たま}、古の賢人^{いにしえけんじん}なり今の人のかがみなり、されば今度はこと^{このたび}に身をつつしませ給うべし、よるはいかなる事ありとも一人そと出^いでさせ給うべからず、たとひ上の御めし有りとままづ下人をこそつかわして、なひなひ一定

をききさだめてはらまきをきてはちまきし、先後^{せんごさう}左右に人をたてて出仕し御所のかたわらに心よせのやかたか又我がやかたかにぬぎをきてまいらせ給うべし^{たま}、家かへらんにはさきに人を入れてとのわきはしのしたむまやのしりたかどの一切^{いっさい}くらきところをみせて入るべし。せうまつには我が家よりも人の家よりもあれだ

からををしみてあわてて火をけすとろづつとよるべからず、まして走り出る事なけれ、出仕より主の御ともして御かへ
の時はみかどより馬よりをりていとまのさしあうよしはつくわんに申していそぎかゝるべ

し、上のををせなりともよに入りて御ともして御所にひさしかるべからず、かへらむには第一心にふかきえうじんあるべし、
こをばかならずかたきのつかがうところなり。

人のさけたばんと申すともあやしみてあるひは言をいだしあるひは用いることなけれ、又御をとともには常はふびんの
よしあるべし、つねにゆせにせうりのあたいなんと心あるべし、もしやの事のあらむにはかたきはゆるさじ、我がためにい
ちをうしなはんずる者ぞかしとをばしてとがありともせうせうの矢をばしじ

ぬやうにてあるべし、又女るひはいかなる矢ありとも一向に御けつくくまでもあるべからず、ましていさかうことなけれ、
涅槃經に云く罪極て重しと雖も女人に及ぼさずと等云々、文の心はいかなる矢ありとも女のとがををこなはざれ、此れ
賢人なり此れ仏弟子なりと申す文なり、此の文は阿闍世王父を殺すのみならず母をあやま

たむとせし時耆婆月光の両臣がいさめたる經文なり、我が母心ぐるしくをもひて臨終までも心にかけしいもつともな
ければ矢をめんじて不便といつならば母の心やすみて孝養となるべしとふかくおぼすべし、他人をも不便といつぞかしわ
うやをとをとをもをや、もしやの事の有るには一所にていかにもなるべし、此等こそ

とどまりゐてなげかんずればをもひでにとふかくをばすべし、かやう申すは他事はさてをきぬ、雙六は一ある石はかけら
ず、鳥の一の羽にてとぶことなし、将門さだたふがやうなりしいふしやうも一人は叶わず、されば舍弟等を子とも郎等と
もうちたのみてをせば、もしや法華經もひろまらせ給いて世にもあらせ給わば

一方のかたうとたるべし。

すでにきやうのだいり院のこそかまぐらの御所並に御うしろみの御所一年が内に二度正月と十二月とに

やけ候いぬ、これ只事にはあらず、謗法の真言師等を御師とたのませ給う上かれら法華經をあだみ候ゆへに天のせめ法華經十羅刹の御いさめあるなり、かへりて大ざんげあるならばたすかるへんもあらんずらん、いたう天

の此の国ををしませ給うゆへに大なる御いさめあるか、すでに他国が此の国をうちまきて国主国民を失はん上仏神の寺社百千万がほろびんずるを天眼をもつて見下してなげかせ給うなり、又法華經の御名をいついつたるものどもの唱うるを誹謗正法の者どもがをどし候を天のにくませ給う故なり。

あなかしこあなかしこ、今年かしくして物を御らんぜよ、山海空市まぬかるところあらばゆきて今年はずぎぬべし、阿私陀仙人が仏の生れ給いしを見ていのちををしみがごとしをしみがごとし、恐恐謹言。

正月二十五日

日蓮花押

中務左衛門尉殿

一一三 陰徳陽報御書

1178p

いよいよかない候べし、いかにわなくともきかぬやうにてをはすべし、此の事をみ候に申すやうにだにふれまわせ給うならばなをも所領もかさなり人のをばもいできたり候べしとをば候、さきざき申し候いし

やうに陰徳あれば陽報ありと申して、皆人は主にうた全もいかんぞをばせしかどもわどの正直の心に主の後生をたすけたてまつらむともう心がうじやうにしてすれんをすればかかるりしやうにもあづからせ給うぞ

かし此は物のはしなり大果報は又来るべしとおぼしめせ、又此の法門の一行いかなる本意なき事ありともみずきかずいわずしてむつばせ給へ大人にはいのりなしまいらせ候べし、上に申す事私の事にはあらず外典三千・内典五千の肝心の心をぬきてがきて候、あなかしこあなかしこ恐恐謹言。

卯月二十三日

日蓮在御判

御返事

一二四 中務左衛門尉殿御返事

弘安元年六月 五十七歳御作 1178p

夫れ人に二病あり、一には身の病所謂地大百一水・大百一火・大百一風・大百一已上四百四病、此の病は治水・流水・蒼婆・偏鵲等の方薬をもつて此れを治す、二には心の病所謂三毒、乃至八万四千の病なり、仏に有らざれば二天三仙も治しがたし何に況や神農・黄帝の力及ぶべしや、又心の病に重重的の浅深分れたり、六道の凡夫の三毒・八万

四千の心の病をば小乗の三蔵俱舎・成実・律宗の仏此れを治す大乘の華嚴・般若・大日經等の經經をそしりて起る
三毒八萬の病をば小乗をもつて此れを治すればかゝつては增長すれども平愈全くなし、大乘をもつて此れを治すべし、
又諸大乘經の行者の法華經を背きて起る三毒八萬の病をば華嚴・般若・大日經・真言三論等をもつて此れを
治すればいよいよ增長す、譬は木石等より出でたる火は水をもつて消しやすし水より起る火は水をかくればいよいよ
熾盛に炎上りて高くあがる、今の日本国去今年の疫病は四百四病にあらざれば華陀・扁鵲が治も及ばず小乗・權大乘の
八萬四千の病にもあらざれば諸宗の人人のいのりも叶はずかゝつて增長するか、設い今年はとどま
るとも年年に止がたからむか、いかにも最後に大事出来して後定まる事も候はんずらむ、法華經に云く「若し医道を修
して方に順つて病を治せば更に他の疾を増し、或は復死を至さん而も復増劇せん」涅槃經に云く「爾の時に王舎大城の
阿闍世王。偏体に瘡を生じ乃至是くの如き創は心に從て生ず、四大より起るに非ず、若し衆生能く
治する者有りと言はば是の処有ること無けん」云云、妙樂の云く「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」云云、此の疫病
は阿闍世王の瘡の如し彼の仏に非ずんば治し難し此の法華に非ずんば除き難し、將又日蓮下痢去年十二月卅日事起り
今年六月三日四日日日に度をまし月月に倍增す定業かと存する処に賣辺の良藥を服してより已來
日日月月に減じて今百分の一となれり、しらず教主・釈尊の入りかわりまいらせて日蓮をたすけ給うか、地涌の菩薩の
妙法蓮華經の良藥をさづけ給えるかと疑い候なり、くはしくは筑後房申すべく候。又追つて申すきくせんは今月二
十五日戌の時来りて候種種の物かずへつくしがたし、ときどのかたびらの申し給わるべし、又女房の御ををちの御事な
げき入つて候よし申し給ふべし、恐恐。

六月廿六日

日蓮花押

中務佐衛門尉殿御返事

錢一貫文給いて頼基がまいらせ候とて法華經の御宝前に申し上げて候、定めて遠くは教主釈尊、並に多宝・十方の諸仏、近くは日月の宮殿にわたらせ給うも御照覽候ぬらん、さては人のよにすぐれんとするをば賢人・聖人とをばしき人人も皆そねみ・ねたむ事に候、いわうや常の人をや、漢皇の王昭君をば三千のきさき是をそねみ帝釈の九十九億那由他のきさきは尸迦をねたむ、前の中書王をばをの宮の大臣是をねたむ、北野の天神をば時平の大臣是をさんそうして流し奉る、此等をもてをばしめせ、入道殿の御内は広かりし内なれども、せばくならせ給いきつだちは多くわたらせ給う、内としごろの人人あまたわたらせ給ひ池の水すくなくなれば魚さわがしく秋風立てば鳥こずえをあらそう様に候事に候は、いくそばくそ御内の人人そねみ候らん、に年度の仰せをかへしより、御心にたがはせ給ひいくそばくのざんげんこそ候らん、に年度の御所領をかへして今又所領給はらせ給うと云云、此れ程の不思議は候はず、此れ偏に陰徳あれば陽報ありとは此れなり。

我が主に法華經を信じさせまいらせんとをばしめす御心のふかき故か、阿闍世王は仏の御怨なりしが耆婆大臣の御すめによつて法華經を御信じありて代を持ち給う、妙莊嚴王は三子の御すめによつて邪見をひるがへし給う、此れ又しかるべし貴辺の御すめによつて今は御心もやわらがせ給いてや候らん、此れ偏に貴辺の法華經の御信心のふかき故なり、根ふかければ枝さか、源遠ければ流長しと申して一切の經は根あさく流ちかく法華經は根ふかく頂とをし、末代・悪世までもつきずさかうべしと天台大師あそばし給ひ、此の法門につきし人あまた候いしかどもをほやけかたくしの大難・年度重なり候いしかば一年・二年こそつき候いしが後後には皆

或はをち 或はかへり矢をいゝ、或は身はをちねども心をち 或は心はをちねども身はをちぬ。

釈迦仏は浄飯王の嫡子・閻浮提を知行する事・八万四千二百一十の大王なり・閻浮提の諸王・頭をかたづけん上・

御内に召しつかいし人十萬億人なりしかども十九の御年・浄飯王宮を出でさせ給いて檀特山に入りて十二年、此の間御と

もの人五人なり、所謂拘鄰と と跌提と十力迦葉と拘利太子となり、此の五人も六年と申せしに二人は去りぬ残りの

三人も後の六年にすて奉りて去んぬ、但一人残り給つてこそ仏にはならせ給いしか、法華経は

又此れにもすぎて人はじがたかるべし難信難解此れなり、又仏の在位よりも末法は大難かさなるべし、此れをこらへん行者

は我が功德にはすぐれたる事・劫とこそ説かれて候へ、仏滅度後・二千二百三十余年になり候に月氏・一千余年が間・

仏法を弘通せる人・伝記にのせてかくれなし、漢土一千年・日本七百年・又目錄にのせて候いし

かども仏のごとく大難に値える人少し、我も聖人・我も門人とは申せども況滅度後の記文に値える人・一人も候はず、

竜樹菩薩・天台・伝教こそ仏法の大難に値える人にては候ども此等も仏説には及ぶ事なし、此れ即代のあがり法華経

の時に生れ候はせ給はざる故なり。

今は時すでに後・五百歳・末法の始なり、日には五月十五日・月には八月十五夜に似たり、天台・伝教は先に生れ給へ

今より後は又のちぐへなり、大陣すでに破れぬ余党は物のかずならず、今こそ仏の記しをき給いし後・五百歳・末法の初・

況滅度後の時に当りて候は仏語むなからずば一閻浮提の内に定めて聖人出現して候らん、聖人の出するしには一

閻浮提第一の合戦をこるべしと説かれて候にすでに合戦も起りて候にすでに聖人や一閻浮提の内に出でさせ給いて候ら

ん、きりんと出でしかば孔子を聖人とする鯉社なつて聖人出で給う事疑なし、仏には

梅檀の木をひて聖人とする、老子は二五の文を結んで聖人とする、末代の法華経の聖人をは何を用つてかするべき、經に

云く「能説此經・能持此經の人則如来の使なり」八卷・一卷・二品・一偈の人乃至題目を唱うる人如来の

使なり、始中終すずして大難をとをす人如來の使なり。

日蓮が心は全く如來の使にはあらず凡夫なる故なり、但し三類の大怨敵にあだまれて二度の流難に値へは如來の御使に似たり、心は三毒ふかく一身凡夫にて候へども口に南無妙法蓮華經と申せば如來の使に似たり、過去を

尋ぬれば不輕菩薩に似たり、現在をどぶらうに加刀杖瓦にたがう事なし、未來は當詣道場疑いながらんか、これをやしなはせ給う人人は豈淨土に同居するの人にあらずや、事多しと申せどもとどめ候心をもて計らせ給うべし。

ちこのそらうよくなりたり悦び候ぞ、又大進阿闍梨の死去の事未代のぎばいかでか此れにすぐべきと皆人舌をふり候なり、さにて候いけるやらん、三位房が事さう四郎が事此の事は宛も符契符契と申しあひて候、日蓮が死生をばまかせまいらせて候、全く他のくすしをば用いまじく候なり。

弘安元年戌寅九月十五日

日蓮花押

四条金吾殿

驚目一貫文給い候い畢んぬ、御所領上より給わらせ給いて候なる事まことと覺今候夢かとあまりに不思議に覺候、御返事なんともいがやうに申すべしと覺今候、其の故はこの御身は日蓮が法門の御ゆゑに日本国並にかまくら中御内の人人きうだちまでつけずふしぎにをまはれて候は其の御内にをせむだにも不思

議に候に御恩をかうほらせ給はうちかへし又うちかへせさせ給はばかり同れいどももふしぎとをもひ上もあまりなりとをぼすらむ、さればこのたびはいかんが有るべかるらんとつたがひ思い候つる上、御内の数十人の人人うった今候はさればこそいかにもかなひがたかるべし、あまりなる事なりと疑候いつる上。

兄弟にもすてられてををはするにかかる御をん面目申すばかりなし、かの処はとのをかの三倍とあそばして候上さどの国のもののこれに候がよくよく其の処をしりて候が申し候は三箇郷の内にいかだと申すは第一の処なり、田畠はすくなく候へどもとくははかりなしと申し候ぞ、二所はみねんぐ千貫一所は三百貫と云云、かかる

処なりと承はる、なにとなくともどうれいといひしたしき人人と申しすてはてられてわらひよろこびつるにとのをかにをとりて候処なりとも御下し文は給たく候つるぞかしまして三倍の処なりと候、いかにわろくともわろきよし人にも又上も申させ給うべからず候、よきところよきところと申し給はは又かさねて給はらせ給う

べし、わろき処、徳分なしなむど候はは天にも人にもすてられ給い候はむするに候ぞ、御心あるべし。

阿闍世王は賢人なりしが父をころせしかば即時に天にもすてられ大地もやぶれて入りぬべかりしかども、殺されし父の王一日に五百りやう五百りやう数年が間、仏を供養しまいらせたりし功德と後に法華經の檀那となる

べき功德くどくによりて天もすてがたし地もわれずついに地獄じごくにをちずして仏になり給たまいぎ、とのも又かくのごとし・兄弟きみうだいにもすてられ同れいにもあだまれきうだちにもそばめられ日本国にほんこくの人にもにくまれ給たまいけれども、去いぬる文永八年ぶんえいはちねんの九月十二日くわにふにじふにちの子丑うしの時 日蓮にちれんが御勘氣ごかんきをかほりし時馬ときうまの口にとりつきて鎌倉かまくらを出いでてさがみのえちに御ごともありしが、一閻浮提えんぶだい第一だいいちの法華經ほけきようの御かたうどにて有りしかば梵天ぼんてん・帝釈たいしゃくもすてかねさせ給たまへるか、仏たまにならせ給はん事もかくのごとし、いかなる大科だいかありとも法華經ほけきようをそむかせ給はたまず候たまいし、御ごともの御ほつごににて仏たまにならせ給たまつべし、例せば有徳国王うとくこくおうの覺徳比丘かくとくびくの命にかはりて釈迦しやくか・仏ぶつとならせ給たまいしがごとし、法華經ほけきようはいのりとはなり候たまいけるぞ。

あなかしこあなかしこいよいよ道心堅固だうしんけんこにして今度このたび仏たまになり給へ御一門いちもんの御房ごぼうたち又俗人等しやくじんらうにもかかるとれしき事候はたまず、かう申せば今生こんじやうのよくとをばすか、それも凡夫ぼんぶにて候たまはさも候たまべき上慾うえをもはなれずして仏たまになり候ける道の候けるぞ、普賢經ふげんに法華經ほけきようの肝心かんじんを説きて候 煩惱ぼんのうを断たんぜず五欲ごよくを離はなれず等云云、天台てんだい大師だいしの摩訶止觀まかしがんに云く 煩惱ぼんのう即菩提そくぼだい・生死しやうじ即涅槃そくねはん等云云、竜樹菩薩りゆうじゆぼさつの大論だいろんに法華經ほけきようの一代いちだいにすぐれていみじきやうを釈しやくして云く 譬たとえば大藥師たいうやくしの能く毒どくを変じて藥なと為なすが如ごとし等云云、小藥師せうやくしは藥を以て病を治す大医だいういは大毒だどくをもつて大重病だうじゆうめくを治す等云云。

弘安元 戊寅年十月 日

日蓮花押

四糸金吾殿御返事

今月二十二日信濃より贈られ候いし物の日記

銭三貫文・白米能米俵一・餅五十枚・酒大筒一・小筒一・串柿五把・

柘榴十、夫れ王は民を食とし民は王を食とす衣は寒温をふせぎ食は身命をたすく、譬ば油の火を継ぎ水の魚を助くるが

如し、鳥は人の害せん事を恐れて木末に巢くふ、然れども食のために地にをりてわなにかかる、魚は淵の

底に住みて浅き事を悲しみて穴を水の底に掘りてすめども餌にばかされて鉤をのむ、飲食と衣薬とに過ぎたる人の宝や候

べき。

而るに日蓮は他人にことなる上山林の栖就中今年は疫癘飢渴に春夏は過越し秋冬は又前にも過ぎたり、又身に当り

て所労大事になりて候つるをかたがの御薬と申し小袖彼のしなじなの御治法にやうやう験し候て今所労平愈し本よりも

いさぎよくなりて候、弥勒菩薩の瑜伽論竜樹菩薩の大論を見候へは定業の者は薬変じて毒と

なる法華経は毒変じて薬となると見えて候、日蓮不肖の身に法華経を弘めんとし候へは天魔競ひて食をうばはんとするか

と思ひて歎かず候いつるに今度の命たすかり候は偏に釈迦仏の貴辺の身に入り替らせ給いて御たすけ候が。

是はさてをきぬ、今度の御返りは神を失いて歎き候いつるに事故なく鎌倉に御帰り候事悦びいくそばくぞ、余りの覺束

なさに鎌倉より来る者ごとに問い候いづれば或人は湯本にて行き合せ給うと云い或人は二つづにと或

人は鎌倉にと申し候いしにこそ心落居て候へ是より後はおぼるげならず御渡りあるべからず大事の御事候はば御使にて

承わり候べし、返す返す今度の道はあまりにおぼつかなく候いつるなり、敵と申す者はおすれさせ

てねらふものなり、是より後に若やの御旅には御馬をおしましませ給ふべからず、よき馬にのらせ給へ又供の者どもせんにあひぬべからんもの又どうまるもちあげぬべからん御馬にのり給うべし、摩訶止観第八に云く弘決第八に云く「必ず心の固きに仮つて神の守り則ち強し」云云、神の護ると申すも人の心つよきによるとみえて候、法華経はよきつるぎなれどもつかう人によりて物をきり候か。

されば末法に此の経をひろめん人人舍利弗と迦葉と観音と妙音と文殊と薬王と此等程の人やは候べき、二乗は見思を断じて六道を出でて候菩薩は四十一品の無明を断じて十四夜の月の如し、然れども此等の人人にはゆづり給はずして地涌の菩薩に譲り給へり、されば能く能く心をきたはせ給うにや、李広將軍と申せしうはもの

は虎に母を食れて虎に似たる石を射しかば其の矢羽ぶくらまでせめぬ、後に石と見ては立つ事なし、後には石虎將軍と申しき、貴辺も又かくのごとく敵はねらふらめども法華経の御信心強盛なれば大難もかねて消え候か、是につけても能く能く御信心あるべし、委く紙には尽しがたし、恐恐謹言。

弘安元年 戊寅 後十月二十二日

四条左衛門殿御返事

日蓮花押

二二八 日眼女造立釈迦仏供養事

弘安二年二月 五十八歳御作

1187p

御守書てまいらせ候三界の主教主釈尊一体三寸の木像造立の檀那日眼女御供養の御布施前に二貫今一貫云。

法華經の寿命品に云く「或は己身を説き或は他身を説く」等云云、東方の善徳仏中央の大日如来十方の諸仏

過去の七仏三世の諸仏上行菩薩等文殊師利舍利弗等大梵天王第六天の魔王釈提桓因王日天天月天

明星天北斗七星二十八宿五星七星八万四千の無量の諸星阿修羅王天神地神山神海神宅神里神一切世間

の国の主とある人何れか教主釈尊ならざる天照太神八幡大菩薩も其の本地は教主釈尊なり、例せば釈尊は天の一

月諸仏菩薩等は万水に浮べる影なり、釈尊一体を造立する人は十方世界の諸仏を作り奉る人なり、譬えば頭をふれば

かみゆるぐ心はたらけば身つく、大風吹けば草木しづかならず大地うごけば大海さはがし、教主釈尊をつごかし奉れば

ゆるがぬ草木やあるべきさわがぬ水やあるべき。

今日眼女は三十七のやくと云云、やくと申すは譬えばさいにはかどますにはすみ人にはつきふし方には四維の如し、

風は方よりふけばよはく角より吹けばつよし病は肉より起れば治しやすし節より起れば治しがたし、家にはかきなれば

盗人いる人にはとがあれば敵便をつく、やくと申すはふしづしの如し、家にかきなく人に

料あるがごとし、よきひやうしを以てまほらすれば盗人をからめとる、ふしの病をかめて治すれば命ながし、今教主釈尊

を造立し奉れば下女が太子をつめるが如し国王尚此の女を敬ひ給ふ何に況や大臣已下をや、大梵天王釈提桓因王

日月等此の女人を守り給ふ況や大小の神祇をや、昔優填大王釈迦仏を造立し奉りしかば大梵天王日月等木像を礼

しに参り給ひしかば木像説いて云く「我を供養せんよりは優填大王を供養すべし」等云云、影堅王の画像の釈尊を書き

奉りしも又是くの如し、法華經に云く「若し人仏の爲の故に諸の形像を建立す是くの

如き諸人等皆已に仏道を成じき云云、文の心は一切の女人釈迦仏を造り奉れば現在には日月の月の大小の難を払ひ後生には必ず仏になるべしと申す文なり。

抑 女人は一代五千・七千余巻の経に仏にならずときらはれます、但法華経ばかりに女人・仏になると説かれて候、天台智者大師の釈に云く「女に記せず」等云云、釈の心は一切経には女人・仏にならずと云云、次下に云く「今経は皆記す」と云云、今の法華経にこそ竜女・仏になれりと云云、天台智者大師と申せし人は仏滅度の後・二千五百年に漢土と申す国に出でさせ給いて一切経を十五返まで御覽あそばして候いしが法華経より外の経には

女人・仏にならずと云云、妙楽大師と申せし人の釈に云く「一代に絶えたる所なり」等云云、釈の心は一切経にたえたる法門なり、法華経と申すは星の中の月ぞかし人の中の王ぞかし山の中の須弥山水の中の大海の如し、是れ程いみじき御経に女人・仏になると説かれぬれば一切経に嫌はれたるになにかくるしかるべき、譬えば盗人・

夜打・強盗・乞食・湯体にきらはれたらんと国の大王に讃られたらんと何れかつれしかるべき、日本国と申すは女人の国と申す国なり、天照太神と申せし女神のつきいだし給える島なり、此の日本には男十九億九万四千八百二十八人女は二十九億九万四千八百三十人なり、此の男女は皆・念仏者にて候ぞ皆・念仏なるが故に阿弥陀仏を本尊とす現世の祈りも又是くの如し、設い釈迦仏をつくりかけども阿弥陀仏の浄土・ゆかんと申して本意の様には思ひ候はぬぞ、中中つくりかかぬにはをとり候なり。

今日眼女は今生の祈りのやうなれども教主釈尊をつくりまいらせ給ひ候は後生も疑なし、二十九億九万四千八百三十人の女人の中の第一なりとおぼしめすべし、委くは又又申すべく候、恐恐謹言。

弘安二年己卯二月二日

日蓮 花押

日眼女御返事

二二九

聖人御難事

弘安二年十月五十八歳御作

与門人等

1189p

去ぬる建長五年太歳癸丑四月二十八日に安房の国長狭郡の内東条の郷今は郡なり、天照太神の御くりや右大將家の立て始め給ひし日本第二のみくりや今は日本第一なり、此の郡の内清澄寺と申す寺の諸仏坊の持仏堂の南面にして午の時に此の法門申しはじめて今に二十七年弘安二年「太歳己卯」なり、仏は四十余年天台大師は三十余年・
伝教大師は二十余年に出世の本懷を遂げ給う、其中の大難申す計りなし先先に申すがごとし、余は二十七年なり其の間の大難は各各かつしろしめせり。

法華經に云く「而も此の經は如来の現在にすら猶怨嫉多し、況や滅度の後をや」云云、釈迦如来の大難はかずをしらず、其の中に馬の麦をもつて九十日・小指の出仏身血・大石の頂にかかりし、善生比丘等の八人が身は仏の御弟子・心は外道にともないて昼夜十二時に仏の短をねらいし、無量の釈子の波瑠璃王に殺されし・無量の弟子等が悪象にふまれし阿闍世王の大難をなせし等、此等は如来現在の小難なり、況滅度後の大難は竜樹・天親・天台・伝教いまだ値い給はず法華經の行者ならずといわばいかでか行者にてをせざるべき、又行者といはんとすれば仏のごとく身より血をあやされず、何に況や仏に過ぎたる大難なし經文むなしきがごとし、仏説すでに大虚妄となりぬ。

而るに日蓮二十七年が間弘長元年辛酉五月十二日には伊豆の国流罪、文永元年子甲十一月十一日頭にきずをかほり左の手を打ちをらる、同文永八年辛未九月十二日佐渡の国配流又頭の座に望む其の外に弟子を殺され切れ追出くわれう等かずをしらず仏の大難には及ぶか勝れたるか其は知らず、竜樹・天親・天台・伝教は余に肩を

並べがたし、日蓮末法に出でずば仏は大妄語の人多宝・十方の諸仏は大虚妄の証明なり、仏滅後二千二百三十九年が
間・一閻浮提の内に仏の御言を助けたる人但日蓮一人なり、過去現在の末法の法華經の行者を輕賤する王臣万民始め
は事なきやうにて終にほろびざるは候はず、日蓮又かくのごとし、始めはしるしなきやうなれども今二十七年が間、
法華經守護の梵釈日月・四天等さのみ守護せずば仏前の御誓むなしくて無間・大城に墮つべしとお
そろしく想う間今は各各はげむらむ、大田の親昌・長崎次郎兵衛の尉時綱・犬進房が落馬等は法華經の罰のあらわる
か、罰は總罰別罰・蹟罰・冥罰・四候、日本国の大疫病と大けかちとどしうちと他国よりせめらるるは総ばちなり、やく
びやうは冥罰なり、大田等は現罰なり別ばちなり、各各師子王の心を取り出していかに人をどすと
もをづる事なかれ、師子王は百獸にをぢず師子の子又かくのごとし、彼等は野干のほつるなり日蓮が一門は師子の吼るな
り、故最明寺殿の日蓮をゆるししと此の殿の許ししは禍なかりけるを人のざんげんと知りて許ししなり、今はいかに人申す
とも聞きほどかずしては人のざんげんは用い給うべからず、設い大鬼神のつける人なりと
も日蓮をば梵釈日月・四天等・天照太神・八幡の守護し給うゆへにばしがたかるべしと存じ給うべし、月月・日日につより
給すこしもたゆむ心あらば魔たよりをうつべし。

我等凡夫のつたなさは経論に有る事と遠き事はおそる心なし、一定として平等も城等もいかりて此の一門をさんざ
んとなす事も出来せば眼をひさいで觀念せよ、当時の人人のつくしゝかさされんずらむ、又ゆく人又か
しこに向える人人を我が身にひきあてよ、当時までは此の一門に此のなげきなし、彼等はげんはかくのごとし殺されば又
地獄へゆくべし、我等現には此の大難に値うとも後生は仏になりなん、設えは灸治のごとし当時はいたけれども後の薬なれ
ばいたくていたからず。

彼のあつわらの愚癡の者どもいぬはげましてをどす事なかれ、彼等にはただ一えんにおも切れよからん

は不思議ふしぎわるからんは一定とをもへひだるしとをもわば餓鬼道がきだうをしよ、さむしといわば八かん地獄じじくをしよ、をそろししといわばたかにあへるきねこにあえるねずみを他人たにんとをもつ事なかれ、此これはこまごまと

かき候事はかくとしどし月月・日もつ日に申して候へともなごの尼せう房のと房三位房などのやうに候、をくびやう物をばずよくふかくうたがい多き者どもはぬれるうるしに水をかけそらをきりたるやうに候ぞ。

三位房が事は大不思議ふしぎの事ども候いしかどもとのばらのをいには智慧ちえある者をそねませ給たまうかとぐちの人をいなんともいいて物も申もつさで候いしが、はらぐろとなりて大難たいなんにもあたりて候ぞ、なかなかさんざんと・

だにも申せしかばたすかるへんもや候いなん、あまりにふしぎさに申さざりしなり、又かく申せばおこ人どもは死もつ事を仰おほせ候と申すべし、鏡のために申す又此の事は彼等かれらの人人ひとひとも内内はおぢおそれ候らむとおぼへ候ぞ。

人のさわげばとてひやうじなんと此の二門いちもんにせられば此これかきつけてたび候へ、恐恐ききょう謹言きんげん。

十月一日

日蓮花押にちれんかおう

人人御中ひとひとおんちゆう

なぶらうじぎもん殿のもとにとどめらるべし。

先度強敵（こゝろ）ととりあひについて御文給いき委（くわ）く見まいらせ候、さてもさても 敵人（てきじん）にねらはれさ給（たま）いしが、前前の用心（ようじん）といひ又けなげといひ又法華經の信心（しんじん）つよき故に難なく存命（ぞんめい）させ給（たま）い自出たし目出たし、夫れ運（そ）きはまりぬれば兵法もいらず 果報（かほう）つきぬれば所従（しよじゆう）もしたがはず、所詮運（しよせん）ものこり果報もひかゆる故なり、ことに法華經の行者（ぎぎやう）をば諸天（しよてん）善神（ぜんじん）守護（しゆご）すべきよし属累品（ぞくるゐほん）にして誓状（せいじゆう）をたて給（たま）い一切の守護神（しゆごじん） 諸天の中にも我等（われら）が眼（まなこ）に

見（み）て守護（しゆご）し給（たま）うは日月天なり争か言をとらざるべき、ことに・ことに日天の前に摩利支天まします。日天（にってん）法華經の行者（ぎぎやう）を守護（しゆご）し給（たま）はんは所に所従（しよじゆう）の摩利支天尊（たもしてん）すで給（たま）うべしや、序品（じよほん）の時 名月天子（ながつてんし） 普光天子（ふくわうてんし） 宝光天子（ほうくわうてんし） 四天王（しよてん）与其眷属（けんそく） 万天子（てんし）俱（れつ）と列座（れつざ）し給（たま）ふ、まりし天は三万天子の内なるべし、もし内になくば地獄（じごく）にこそおはしまさんずれ、今度の大事（このたびだいじ）は此の天のまほりに非（あ）ずや、彼の天は劍形（けんぎやう）を賣（き）込（へん）にあた此（こ）今（け）りぬ、此の白蓮（にぢれん）は首題（しよだい）の五字（ごじ）を汝（なんじ）こそづく、法華經受持（ほけきやうじゆじ）のものを守護（しゆご）せん事疑（うたが）あるべからず、まりし天も法華經（ほけきやう）を持ちて一切衆生（いっしよじゆうじやう）をたすけ給（たま）う、臨兵闘者皆陣列在前（りんぺいとうしやがいはじんれつぜん）の文も法華經より出（い）でたり、若説俗間經書治世語言資生業等皆順正法（そつかんきやうしよちせいいげんしせい）とは是（これ）なり、これにつけてもいよいよ強盛（きやうせい）に大信力（だいしんりき）をいだし給（たま）へ我が運命（しよてんしゆい）つきて諸天守護（しよてんしゆご）なしとつらむる事あるべからず。

將門はつわもの名どとり兵法（だいいち）の大事（だいじ）をきはめたり、されども王命（わうめい）にはまけぬ、はんくわひぢやうりやうもよしなし。ただ心こそ大切（たいせつ）なれ、いかに日蓮（にちれん）いのり申（もう）すとも不信（ふしん）ならばぬれたるほくちに火をうちかくるがごとくなるべし、はげみをなして強盛（きやうせい）に信力（しんりき）をいだし給（たま）うべし、すぎし存命（ぞんめい）不思議（ふしぎ）とおもわせ給（たま）ふなひの兵法よ

りも法事經の兵法をもちひ給うべし、^{しよよおんでき}「諸余怨敵、皆悉摧滅」の金言むなしかるべからず、兵法劍形の大事も此の妙法より出でたり、ふかく信心をとり給へあて臆病にては叶うべからず候、^{きふうきふうきんげん}恐恐謹言。

十月二十三日 日蓮花押^{にちれんかおう}

四条金吾殿御返事^{しじょうきんごごへんじ}

二二二 四条金吾殿御返事^{しじょうきんごごへんじ}

弘安三年十月五十九歳御作^{こうあん}

1193p

殿岡より米送り給ひ候、今年七月、孟蘭盆供の僧膳にして候、自恣の僧・靈山の聴衆、仏陀・神明も納受随喜し給うらん、^{しんねつ}尽きせぬ志、^{とむら}連連の御訪い言を以て尽くしがたし。

何となくとも殿の事は後生菩提疑なし、何事よりも文永八年の御勘氣の時既に相模の国竜の口にて頸切られんとせし時にも殿は馬の口に付いて足歩赤足にて泣き悲み給いし事実にならば腹きらんとの氣色なりしをば、いつの世にか思い忘るべき、そのみならず佐渡の島に放たれ北海の雪の下に埋もれ北山の嶺の山下風に命助かるべしともをばす、^{とともて}年来の同朋にも捨てられ故郷へ歸らん事は大海の底のちびきの石の思ひしてさすがに凡夫なれば古郷の

人人も恋しきに在俗の官仕隙なき身に此の經を信ずる事こそ稀有なるに山河を凌ぎ蒼海を経て遙に尋ね来り給いし^{しんねつ}志、^{くた}香城に骨を砕き雪嶺に身を投げし人人にも争でか劣り給うべき、又我が身はこれ程に浮び難か

りしがいかなりける事にてや同十一年の春の比救免せられて鎌倉に歸り上りけむ、情事の情を案ずるに今は我身に過あらじ、或は命に及ばんとし弘長には伊豆の国文永には佐渡の島諫曉再三に及べば留難重疊せり、^{ふほうちゅうあん}仏法中怨の誠責をも身にははや免れぬらん。

然るに今山林に世を遁れ道を進まんと思ひしに人人の語様なりしかども 旁存する旨ありしに依りて当国 当山に
入りにて已に七年の春秋を送る、又身の智分をば且らく置きぬ法華經の方人として難を忍び疵を蒙る事は漢土の天台大師
にも越え日域の伝教大師にも勝れたり、是は時の然らしむる故なり、我が身法華經の行者ならば靈山の教主釈迦
ほうじょうせかい たほうによらい じゅうほうふんじん しょうつほんげ しゃつけ ぼさつほんしやくりゅうじん じゅうせつにょ
宝浄世界の多宝如来・十方分身の諸仏本化の大士迹化の大菩薩梵釈 竜神十羅刹女も定めて
此の砌におはしますらん、水あれば魚すむ林あれば鳥来る蓬萊山には玉多く摩黎山には梅檀生ず麗水の山には金あり、
今此の所も此くの如し仏菩薩の住み給う功德聚の砌なり、多くの月日を送り読誦し奉る所の法華經の功德は虚空にも
余りぬべし、然るを毎年度度の御参詣には無始の罪障も定めて今生一生に消滅すべきか、弥はげむべしはげむべし。

十月八日

日蓮 花押

四条中務三郎左衛門殿御返事

白小袖一つ、縣十兩慥に給候い畢んぬ、歳もかたぶき候又処は山の中風はげしく庵室はかこの目の如し、うちしく物は草の葉きたる物ばかりみぎぬ身のひゆる事は石の如し、食物は氷の如くに候は此の御小袖給候て頓て身をあたたまらんとをもとも明年の一日とかかれて候は迦葉尊者の足山にこもりて慈尊の出世、五十六億七千万歳をまたるもかくやひさしかるらん。

これはさてをき候ぬ、しぬちの四郎がかたり申し候、御前の御法門の事つけ給わり候こそよに、すすしく覚え候へ此の御引出物に大事の法門一つかき付けてまいらせ候、八幡大菩薩をば世間の智者愚者大体は阿弥陀仏の化身と申し候ぞ、其れもゆへなきにあらず中古の義に、或は八幡の御託宣とて阿弥陀仏と申しける事少少候、

此れはをの心の念仏者にて候故にあかき石を金と思いくひせをうさぎと見るが如し、其れ実には釈迦仏にておはしまし候ぞ、其の故は大隅の国に石体の銘と申す事あり、一つの石われて二つになる、一つの石には八幡と申す二字あり、一つの

石の銘には「昔、靈鷲山に於て妙法蓮華經を説き今正宮の中に在りて大菩薩と示現す」と云云、

是れ釈迦仏と申す第一の証文なり、此れよりもことにまさしき事候、此の八幡大菩薩は日本国入王第十四代仲哀天皇

は父なり、第十五代神功皇后は母なり、第十六代応神天皇は今の八幡大菩薩是なり、父の仲哀天皇は天照太神の仰せにて新羅国を責めんが為に渡り給いしが新羅の大王に調伏せられ給いて仲哀天皇ははかたにて

崩御ありしかば、きさきの神功皇后は此の太子を御懷妊ありながらわたらせ給いしが、王の敵をつたんとて数万騎のせいをあい具して新羅国へ渡り給いしに、浪の上船の内にて王子御誕生の氣いでき見え給つ、其の時

神功皇后ははらの内の王子にかたり給ふ、汝は王子か女子か王子ならばたしかに聞き給へ我は君の父仲哀天皇の敵を打たなが為に新羅国へ渡るなり、我が身は女の身なれば汝を大将とたのむべし、君日本国の主となり給うべきならば今度生れ給はずして軍の間腹の内にて数万騎の大将となりて父の敵を打たせ給へ是を用ひ給はずして只今生れ給うほどならば海へ入れ奉らんするなり、我を恨みに思い給うなと有りければ、王子本の如く胎内にをさまり給いけり、其の時石のをびを以て胎をひやし新羅国へ渡り給いて新羅国を打ちしたが今還つて豊前の国うさの宮につき給いここに王子誕生あり、懐胎の後三年六月三日と申す甲寅の年四月八日に生れさせ給う是を応神天皇と号し奉る、御年八十と申す壬申の年二月十五日にかくれさせ給ふ、男山の主我が朝の守護神正体めづらしからずして靈験新たにおはします今の八幡大菩薩是なり。

又釈迦如来は住劫第九の減・人寿百歳の時浄飯王を父とし摩耶夫人を母として中天竺伽毘羅衛国らんびに蘭と申す処にて甲寅の年四月八日に生れさせ給いぬ、八十年を経て東天竺俱尸那城跋提河の辺にて二月十五日壬申にかくれさせ給いぬ、今の八幡大菩薩も又是くの如し、月氏と日本と父母はかわれども四月八日と甲寅と二月十五日と壬申とはかわる事なし、仏滅度の後・二千二百二十余年が間、月氏漢土・日本・閻浮提の内に聖人・賢人と生るる人をば皆釈迦如来の化身とこそ申せども、かかる不思議は未だ見聞せず。

かかる不思議の候上八幡大菩薩の御誓いは月氏にては法華經を説いて正直捨方便とならせ給い、日本国にしては正直の頂にやどらんと誓い給ふ、而るに去ぬる十一月十四日の子に御宝殿をやいて天にのぼらせ給いぬる故をかんが候に此の神は正直の人の頂にやどらんと誓ふに正直の人の頂の候はねば居処なき故に

栖なくして天にのぼり給いけるなり、日本国の第一の不思議には釈迦如来の国に生れて此の仏をすて一切衆生皆一同に阿弥陀仏につけり、有縁の釈迦をばすて奉り無縁の阿弥陀仏をあをぎたてまつりぬ、其の上親父

釈迦仏の入滅の日をば阿弥陀仏につけ又誕生の日をば薬師になしぬ、八幡大菩薩をば崇るやうなれども又本地を
阿弥陀仏になしぬ、本地垂迹を捨つる上に此の事を申す人をばかたきとする故に力及ばせ給はずして此の神は天にのぼり
給ひぬるか、但し月は影を水につかぶる濁れる水には栖ことなし、木の上草の葉なれども澄める露には移る事なればかな
らず国主ならずとも正直の人のかつべにはやどり給うなるべし。

然れば百王の頂にやどらんと誓い給ひしかども人王八十一代、安徳天皇・二代隠岐の法皇・三代阿波・四代佐渡・五
代東一条等の五人の国王の頂にはすみ給はず、詔曲の人の頂なる故なり、頼朝と義時とは臣下なれども其の頂には
やどり給ふ正直なる故か、此れを以て思うに法華経の人人は正直の法につき給ふ故に釈迦仏猶是をまほり給ふ、況や
垂迹の八幡大菩薩争か是をまほり給はざるべき、淨き水なれども濁りぬれば月やどる事なし、糞水なれどもすめば影を
惜み給はず、濁水は清けれども月やどらず糞水はきたなければどもすめば影ををしまず、

濁水は智者学匠の持戒なるが法華経に背くが如し、糞水は愚人の無戒なるが貪欲ふかく瞋恚強盛なれども法華経計り
を無二無三に信じまいらせて有るが如し、涅槃経と申す経には法華経の得道の者を列ねて候に、螻蛄と申して糞虫を
挙げさせ給ふ、竜樹菩薩は法華経の不思議を書き給うに、虫と申して糞虫を仏になす等云云、又

涅槃経に法華経にして仏になるまじき人をあげられて候には「闍提の人の阿羅漢の如く、大菩薩の如き等云云、此等は
濁水は淨けれども月の影を移す事なしと見えて候、されば八幡大菩薩は不正直をにくみて天にのぼり給うとも、法華経
の行者を見ては争か其の影をばをしみ給うべき、我が一門は深く此の心を信ぜさせ給うべし、八幡大菩薩は此にわたらせ
給うなり、疑い給う事なかれ、疑い給う事なかれ、恐恐謹言。

十二月十六日

日蓮 花押

四条金吾殿 女房御返事

満月まんげつのごとくなるもちゑ二十かんろのごとくなるせいす一つ給候たひやうちあわい畢おわんぬ春のはじめの御悦ごえつびは月のみてるがごとくしをのさすがごとく草のかこむが如ごとくく雨のふるが如ごとくしと思し食すべし。

そもそも

抑八日は各各の御父釈迦しやくかぶつ仏の生れさせ給たまい候し日なり、彼の日に三十二のふしぎあり・一には一切いっさいの草木そうもくに花さき・みなる・二には大地だいちより一切いっさいの宝わきいづ・三には一切いっさいのでんばたに雨ふらずして水わきいづ・四には夜変

じてひるの如ごとくし・五には三千世界さんぜんせかいに欺かきのこゑなし、是かくの如く吉瑞きちずいの相のみにて候し、是より已来このかた今にいたるまで二千二百三十余年が間吉事には八日をつかひ給たまい候なり。

然しかるに日本国にほんこく皆釈迦みなしやくかぶつ仏を捨てさせ給たまい候にいかなる過去かこの善根ぜんこんにてや法華經ほけきやうと釈迦しやくかぶつ仏とを御信心ごしんじんありて各各あ

つまらせ給たまい候て八日をくやう申もうさせ給たまうのみならず・山中やまのちうの日蓮にぢれんに華かうををくらせ候やらん、たうとし・たうとし、
 恐おそ恐おそ。

正月七日

日蓮花押

人人御返事

伝え承はる御消息の状に云く法華經を日ごとに一品づつ二十八日が間に一部をよみまいらせ候しが當時は藥王品の
 品を毎日の所作にし候、ただもとの様に一品づつをよみまいらせ候べきやらんと云云、法華經は一日の所作に一部八卷・
 二十八品・或は一巻・或は一品・偈・句・二字・或は題目ばかりを南無妙法蓮華經と只一遍となへ・或は又一期の間
 に只一度となへ・或は又一期の間にただ一遍唱うるを聞いて隨喜し・或は又隨喜する声を聞いて
 隨喜し是体に五十展轉して末になりなば志もつくなり隨喜の心の弱き事・三歳の幼穉の者のはかなきが如く・
 牛馬などの前後を弁ざるが如くなりとも、他經を学する人の利根にして智恵かしこく舍利弗・目連・文殊・弥勒の如く
 なる人の諸經を胸の内につかべて御坐まさん人人の御功德よりも勝れたる事・百千万億倍なるべきよ
 し・經文並に天台・妙樂の六十巻の中に見え侍り、されば經文には「仏の智慧を以て多少を籌量すとも其の辺を得ず」と
 説かれて仏の御智慧すら此の人の功德をばしるしめさず、仏の智慧のありがたさは此の三千大千世界に七日若しは二
 七日など・ふる雨の数をだにもしるしめして御坐候なるが只法華經の一字を唱えたる人の功德
 をのみ知しめさずと見えたり、何に況や我等逆罪の凡夫の此の功德をしり候いなんや、然りと云えども如来滅後二千二
 百余年に及んで五濁さかりになりて年久し事にふれて善なる事ありがたし、設ひ善を作人も一の善に十の惡を造り重ねて
 結句は小善につけて大惡を造り心には大善を修したりと云ふ慢心を起す世となれり、然るに如来
 の世に出でさせ給いて候し国よりしては二十万里の山海をたてて東によれる日域・辺土の小嶋につまれ・五障の雲厚うして
 三從のきづなにつながれ給へる女人などの御身として法華經を御信用候は・ありがたしなんど・

とも申すに限りなく侯、凡そ一代聖教を扱き見て顕密二道を究め給へる様なる智者学匠だにも近來は法華經を捨てねんばつ、念仏を申し侯に何なる御宿善ありてか此の法華經を一偈一句もあそばす御身と生れさせ給いけん。

されば此の御消息を拝し侯は優曇華を見たる眼よりもめづらしく一眼の龜の浮木の穴に値へるよりも乏き事かなと心ばかりは有がたき御事に思いまいらせ侯間、一言・一点も隨喜の言を加えて善根の余慶にもやとはげみ侯へども只恐らくは雲の月をかくし塵の鏡をくもらすが如く短く拙き言にて殊勝にめでたき御功德を申し隠しくもらす事にや侯らんといたみ思ひ侯ばかりなり、然りと云えども貴命もたす黙止べきにあらず一滴を江海に加へ

火を日月にそへて水をまし光を添ふると思し食すべし、先法華經と申すは八卷・一卷・一品・一偈一句乃至題目を唱ふるも功德は同じ事と思し食すべし、譬えば大海の水は一滴なれども無量の江河の水を納めたり、如意宝珠は一珠なれども万宝をふらす、百千万億の滴珠も又これ同じ法華經は一字も一の滴珠の如し、乃至万億の字も又万億の滴珠の如し、諸經諸仏の一字一名号は江河の一滴の永山海の一石の如し、一滴に無量の水を備えず一石に無數の石の徳をそなへたず、若し然らば此の法華經は何れの品にても御坐しませ只御信用の御坐さん品こそめづらしくは侯へ

総じて如来の聖教は何れも妄語の御坐すとは承り侯はねども再び仏教を勧えたるに如来の金言の中にも大小權実顯密などと申す事・經文より事起りて侯、随つて論師・人師の釈義にあらあら見えたり、詮を放つて申さば釈尊の五十年の諸教の中に先四十余年の説教は猶うたがはしく侯ぞかし、仏、自ら無量義經に四十余年未だ眞実

を顯さずと申す經文まのあたり説かせ給へる故なり、法華經に於ては仏、自ら一句の文字を「正直に方便を捨てて但だ無上道を説く」と定めさせ給いぬ、其の上多宝仏・大地より涌出でさせ給いて「妙法華經皆是眞実」と証明を加へ十方の諸仏、皆法華經の座にあつまりて舌を出して法華經の文字は一字なりとも妄語なるまじきよし

助成をそ給へり、譬えば大王と后と長者等の一味同心に約束をなせるが如し、若し法華經の一字をも唱えん男女等・十悪・五逆・四重等の無量の重業に引かれて惡道におつるならば日月は東より出でさせ給はぬ事はありとも・大地は反覆する事はありとも・大海の潮はみちひめ事はありとも、破たる石は合つとも江河の水は大海に入らずとも・法華經を信じたる女人の世間の罪に引かれて惡道に墮つる事はあるべからず、若し法華經を信じたる女人物をねたむ故腹のあしきゆへ食欲の深きゆへなどに引れて惡道に墮つるならば・釈迦如来・多宝仏・十方の諸仏・無量曠劫よりこのかた持ち来り給へる不妄語戒忽に破れて調達が虚誑罪にも勝れ瞿伽利が大妄語にも超えたらん争かしかるべきや。

法華經を持つ人・惡しく有りがたし、但し一生が間・二惡をも犯さず・五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒・五百戒・無量の戒を持ち・一切經をそらに浮べ・一切の諸仏・菩薩を供養し無量の善根をつませ給うとも、法華經計りを御信用なく又御信用はありとも諸經・諸仏にも並べて思し食し又並べて思し食さずとも他の善根をば隙なく行じ

て時時・法華經を行じ・法華經を用ひざる謗法の念仏者などにも語らひをなし、法華經を末代の機に叶はずと申す者を科とも思し食さずば・一期の間・行じさせ給う處の無量の善根も忽につせ・並に法華經の御功德も且く隠れ

させ給いて・阿鼻大城に墮ちさせ給はん事・雨の空にとどまらざるが如く・峰の石の谷へころぶが如しと思し食すべし、十悪・五逆を造れる者なれども法華經に背く事なければ往生成仏は疑なき事に侍り、一切經をたもち諸仏・菩薩を信じる持戒の人なれども法華經を用る事無ければ惡道に墮つる事疑なしと見えたり。

予が愚見をもつて近來の世間を見るに多くは在家・出家・誹謗の者のみあり、但し御不審の事・法華經は何れの品も先に申しつる様に愚かならねども殊に二十八品の中に勝れてめでたきは方便品と寿量品にて侍り、余品は皆枝葉にて候なり、されば常の御所作には方便品の長行と寿量品の長行とを習い読ませ給い候へ又別に書き出

してもあそばし候べく候、余の二十六品は身に影の随ひ玉に財の備わるが如し、寿量品・方便品をよみ候へば自然に余品はよみ候はねども備はり候なり、薬王品・提婆品は女人の成仏往生を説かれて候品にては候へども提婆品は方便品の枝葉やくあつぱん ほうべん じやうりやうぱん しやう 薬王品は方便品と寿量品の枝葉にて候、されば常には此の方便品・寿量品の二品をあそばし候て余の品をば時時御いとまのひまにあそばすべく候。

又御消息の状に云く曰ごとくに三度づつ七つの文字を拝しまいらせ候事と、南無一乗妙具と一万遍申し候事とをば曰ごとにし候が、例の事に成つて候程は御経をばよみまいらせ候はず、拝しまいらせ候事も一乗妙典と申し候事もそらにし候は苦しかるまじくや候らん、それも例の事の日数の程は叶うまじくや候らん、いく日ばかりに

てよみまいらせ候はんずる等と云云、此の段は一切の女人ごとの御不審に常に問せ給ひ候御事にて侍り、又古今も女人の御不審に付いて申したる人も多く候へども一代聖教にさして説かれたる処のなきかの故に証文分明に出したる人もおはせず、日蓮粗聖教を見候にも酒肉・五辛・婬事などの様に不浄を分明に月日をさして禁めたる

様に月水をいみたる経論を未だ勘す候なり、在世の時多く盛んの女人尼になり仏法を行ぜしかども月水の時と申して嫌はれたる事なし、是をもつて推し量り侍るに月水と申す物は外より来れる不浄にもあらず、只女人のくせ癖かたわ生死の種を継ぐべき理にや、又長病の様なる物なり例せば尿尿などは人の身より出れども能く浄くなしぬれば別にいみもなし是体に侍る事か。

されば印度戸那なんどもいたくむよしも聞えず、但し日本国は神国なり此の国の習として仏菩薩の垂迹不思議に経論にあひにぬ事も多く侍るに是をそむけば現に当罰あり、委細に経論を勘見るに仏法の中に随方毘尼と申す戒の法門は是に当れり、此の戒の心はいたう事かけざる事をば少少仏教にたがふとも其の国の風俗に違つべからざるよし仏一の戒を説き給へり、此の由を知らざる智者共神は鬼神なれば敬ふべからずなどと申す

強義を申して多くの檀那を損ずる事ありと見えて候なり、若し然らば此の国の明神 多分は此の月水をいませ給へ、生を此の国につけん人人は大に忌み給うべきか、但し女人の日の所作は苦しかるべからずと覚え候か、元より法華経を信ぜざる様なる人人が経をいかにしても云いつとめんと思うがさすがに。ただちに経を捨てよとは

云いえずして 身の不浄なんどにつけて法華経を遠ざからしめんと思つ程に、又不浄の時 此れを行ずれば経を愚かにしまいらするなんど。おどして罪を得させ候なり、此の事をば一切御心得候て月水の御時は七日までも其の氣の有らん程は御経をばよませ給はずして暗に南無妙法蓮華経と唱えさせ給い候へ 礼拝をも経にむかはせ

給はずして拝させ給うべし、又不慮に臨終なんどの近づき候はんには魚鳥なんどを服させ給うても候へよみぬべし経をもよみ及び南無妙法蓮華経とも唱えさせ給い候べし、又月水なんどは申すに及び候はず又南無一乗妙具と唱えさせ給う事 是れ同じ事には侍れども天親菩薩・天台大師等の唱えさせ給い候しが如く 只南無妙法蓮華経と唱えさせ給うべきか、是れ子細ありてかくの如くは申し候なり、六賢六賢。

文永元年甲子四月十七日

日蓮 花押

大学三郎殿御内御報

一一二五 大学三郎殿御書

建治元年七月 五十四歳御作

1203p

外道には天人畜の三善道を明し鬼道の有無之を論じて地獄道は其の沙汰無し、小乗経には六道の因果を明して四聖の因果以て分明ならず、俱舎・成実・律の三宗は小乗経に依憑して但六道を明す是なり、三論宗は天台宗已前に天竺より之を渡す八界を立てて十界を明さず、法相宗は又天竺の宗なり天台已後に唐の太宗の世に之を渡

す、又八界を立つ大乘だいじゆふ為りと雖もいそ五性各別を立て無性有情は永く成仏せずと之を立つ殆んど外道の法に似たりじ自他宗じたの歎きなり、華嚴宗・真言宗の両宗は天台已後に之有り、華嚴宗は唐の則天皇后の御宇に之を立つ、真言宗は玄宗の時善無畏三藏ぜんむいさんそう之を渡す但し天竺に真言宗の名之無し無畏三藏・大日經を以て宗と為すの故に猥りに天竺の宗と称するか、此の二宗共に十界を立つ但し天台宗已後なり智者大師の巧智を偷盜して自身の才能と号するが。

仏説の如く之を勘うれば法華經の外華嚴經・大集經・般若經・大日經・深密經等の諸經は但小衍相對なり但法華經計りに限つて已今当を以て眷属の修多羅と為す、然りと雖も天台已前の諸師法華經等の一切の大乗經を小衍相對を以て之を釈す、王臣の差別無く上下之を混すぶつぽう仏法未だ顯れず愚癡の失之有り、天台已後に諸宗小衍相對の經經を以て權實相對之を定む、天台の智之を盜めり、日月に背いて灯に向い丘塚を華恒に比する是なり、仏は十八界修羅は十九界天台は四智真言は五智天台は九識十識真言は十識十一識而るを天台の學者之に誑惑

せられ悉く実義なりと思ひ、法華經は釈尊の所説にて民の方言の如く大日經は天子の鳳文にて王の一言の如し等云云、善無畏三藏事を天竺に寄せ法華經と大日經と理同事勝と立つ是れ一の謬言なり、日蓮は論師・人師の添言を捨てて専ら經文を勘するに大日經一部六卷並びに供養法の卷・一卷三十一品之を見聞するに声聞乘と緣覺乘と大乘の菩薩ときよつもん仏乘の四乗之を説く、其の中の大乗の菩薩乘とは三藏教の三祇の菩薩乘なりぶつじゆもん仏乘は実大乘なり法華經に及ばざるの上華嚴般若にも劣り但だ阿含と方等との一經なり、大日經の極理は未だ天台の別教・通教の極理

にも及ばざるなり。

弘法大師延暦二十三年に入唐し大同二年に帰朝す、三箇年の間慧果和尚に値いて真言の秘教を学習し帰朝の後十住心二教論之を注して世間に流布す、釈迦牟尼仏並びに大日經二仏の所説の勝劣之を定む、第一大日經・

第二華嚴經 第三法華經 浅きより深きに至る義なり華嚴經 法華經に勝るとは南北の二義を取るなり又華嚴宗の義なり、南北並びに弘法大師は無量義經 法華經 涅槃經の三經を見ざる愚人なり、仏既に分明に華嚴經と無量義經との勝劣之を説く、何ぞ聖言を捨てて南北の凡謬に付かんや、近きを以て遠きを察するに將た又大日經と法華經との勝劣之を論ぜば民と王と石と珠との勝劣高下是なり、而るに安然和尚粗之を顯す然りと雖も但だ華嚴經と法華經との勝劣は之を明むるに似たれども法華 大日經の勝劣之に闇つして闇と漆との如くなり、慈覚大師は本伝教大師に稟くと雖も本を捨てて末に付き入唐の間 真言家の人人に誑惑せらるるの間又大日經と法華と理同事勝と云云、賢きに似たれども但だ善無畏の僻見を出でざるのみ。

而るに日蓮末代に居し粗此の義を疑う遠きを尊み近きを賤み死せるを上げ生けるを下す、故に当世の学者等之を用いず、設け堅く三歸五戒・十善戒・二百五十戒・五百戒十無尽戒等の諸戒を持てる比丘・比丘尼等も愚癡の失に依つて小乗經を大乘經と謂い權大乘經を實大乘經なりと執する等の謬義出来す、大妄語大殺生大偷盜等の大逆罪の者なり、愚人は之を知らずして智者と尊む、設け世間の諸戒之を破る者なりとも堅く大小 權實等の經を弁えれば世間の破戒は仏法の持戒なり、涅槃經に云く「戒に於て緩なる者を名けて緩と為さず乘に於て緩なる者を乃ち名けて緩と為す」等云云、法華經に云く「是を持戒と名く」等云云、重き故に之を留む、事事靈山を期す、恐恐謹言。

七月二日

日蓮 花押

大学三郎殿

漢の明夜夢みしより迦竺二人の聖人初めて長安のとぼそに臨みしより以来唐の神武皇帝に至るまで天竺の仏法震旦に
流布し、梁の代に百済国の聖明王より我が朝の人王三十代欽明の御宇に仏法初めて伝ふ、其れより已来一切の経論諸宗
みなにちいき
皆日域にみたり、幸なるかな生を末法に受くるといへども靈山のきき耳に入り身は辺土に居せりといへども大河の流れ
たぬじよ
掌に汲めり、但し委く尋ね見れば仏法に於て大小権実前後のおもむきあり、若し
此の義に迷いぬれば邪見に住して仏法を習ふといへども還つて十悪を犯し五逆を作る罪よりも甚しきなり、爰を以て世
を厭ひ道を願はん人先ず此の義を存ずべし、例せば彼の苦岸比丘等の如し、故に大經に云く「若し邪見なる事有らんに
命終の時正に阿鼻獄に墮つべし」と云へり。

問う何を以てか邪見の失を知らん予不肖の身たりといへども随分後世を畏れ仏法を求めんと思ふ、願くは此の義を知ら
ん、若し邪見に住せばひるがへして正見におもむかん、答う凡眼を以て定むべきにあらず浅智を以て明むべきにあらず、
経文を以て眼とし仏智を以て先とせん、但恐くは若し此の義を明さは定めていかりをなし

憤りを含まん事を、さもあらばあれ仏勅を重んぜんにはしかず、其れ世人は皆遠きを貴み近きをいやしむ但愚者の行
ひなり、其れ若し非ならば遠とも破すべし其れ若し理ならば近とも捨つべからず、人貴むとも非ならば何ぞ今用いん、伝え
聞く彼の南三北七の十流の学者威徳ことに勝れて天下に尊重せられし事既に五百余年まで有り
しかども陳隋二代の比天台大師是を見て邪義なりと破す、天下に此の事を聞いて大きに是をにくむ、然りといへども陳王
隋帝の賢王たるに依て彼の諸宗に天台を召し決せられ、邪正をあきらめて前五百年の邪義を改め

みなことごとく
皆悉く大師に帰す。

又我が朝の叡山の根本大師は南都北京の碩学と論じて仏法の邪正をただす事 皆経文をさきとせり、今当世の道俗
きせんみな 貴賤皆人をあがめて法を用いず心を師として経によらず、之に依て或は念仏權教を以て大乘妙典をなげすて或は眞言
の邪義を以て一実の正法を謗ず、是等の類豈大乘誹謗のやからに非ずや、若し経文の如くならば争か那落の苦みを受
けざらんや、之に依て其の流をくむ人もかくの如くなるべし、疑つて云く念仏眞言は是れ

或は權 或は邪義又行者 或は邪見 或は謗法なりと此の事 甚だ以て不審なり、其の故は弘法大師は是れ金剛薩の化
現第三地の菩薩なり、眞言は是れ最極甚深の秘密なり、又善導和尚は西土の教主弥陀如来の化身なり、法然上人は大
勢至菩薩の化身なりかくの如きの上人を豈に邪見の人と云ふべきや、答えて云く此の事本より私の語を以

て是を難ずべからず経文を先としては是をただすべきなり、眞言の教は最極の秘密なりと云うは三部経の中に於て蘇悉地經
を以て王とすと見えたり、全く諸の如来の法の中に於て第一なりと云う事を見ず、凡そ仏法と云うは善悪の人をえらば
ず皆仏になすを以て最第一に定むべし、是れ程の理をば何なる人なりとも知るべきことなり、若し

此の義に依らば経と経とを合せて是を×すべし、今法華經には二乗成仏あり眞言經には之無しあまつさへあながちに
是をきらへり、法華經には女人成仏之有り眞言經にはすべて是なし、法華經には悪人の成仏之有り眞言經には全くなし、
何を以てか法華經に勝れたりと云ふべき、又若し其の瑞相を論ぜば法華には六瑞あり、所謂

雨華地動し白毫相の光り上は有頂を極め下は阿鼻獄を照せる是なり、又多宝の塔大地より出て分身の諸仏・十方より
来る、しかのみならず上行等の菩薩の六万恒沙五万四万三万乃至一恒沙半恒沙等大地よりわきいでし事此の威儀
不思議を論ぜば何を以て眞言 法華にまされりと云わん、此等の事委くのぶるにいとまあらずはづかに大海の一滴を
出す。

愛に菩提心論と云う一卷の文あり、竜猛菩薩の造と号す、此の書に云く「唯真言法の中に即身成仏す故に是れ三摩地の法を説く諸教の中に於て闕いて書るさず」と云えり、此の語は大に不審なるに依て経文に就てこれを見るに即身成仏の語は有れども即身成仏の人全くなり、たとひありとも法華經の中に即身成仏あらば諸教の中にをいてかいて而もかかずと云うべからず此の事甚だ以て不可なり、但し此の書は全く竜猛の作にあらず委き旨は別に有るべし、設ひ竜猛菩薩の造なりともあやまりなり、故に大論に一代をのぶる肝要として般若は秘密にあらず二乗作仏なし法華は是秘密なり二乗作仏ありと云えり、又云く「二乗作仏あるは是秘密二乗作仏なきは是顯教」と云えり、若し菩提心論の語の如くならば別しては竜樹の大論にそむき総じては諸仏出世の本意・一大事の因縁をやぶるにあらずや、今竜樹天親等は皆釈尊の説教を弘めんが爲に世に出ず、付法藏二十四人の其の一なり何ぞ此くの如き妄説をなさんや、彼の真言は是れ般若經にも劣れり何に況や法華に並べんや、爾るに弘法の秘藏宝鑰に真言に一代を損ずるとして法華を第三番に下し、あまつさ戲論なりと云えり、謹んで法華經を披きたるに諸の如来の所説の中に第一なりと云えり、又已今当の三説に勝れたりと見えたり、又藥王の十喻の中に法華を大海にたとひ輪にたとひ須弥山にたとひたり、若し此の義に依らば深き事何ぞ海にすぎん明かなる事何ぞ日輪に勝れん高き事何ぞ須弥山に越ゆる事有らん、喩を以て知んぬべし何を以てか法華に勝れたりと云はんや、大日經等に全く此の義なし但己が見に任せて永く仏意に背く、妙樂大師曰く「請う眼有らん者は委悉に之を尋ねよ」と云へり、法華經を指て華嚴に劣れりと云うは豈眼ぬけたるものにあらずや、又大經に云く「若し仏の正法を誹謗する者あらん正に其の舌を断べし」と、嗚呼誹謗の舌は世世に於て物云うことなく邪見の眼は生生にぬけて見ること無らん加之らず若し人信ぜずして此の經を毀謗せば乃至其の人命終えて阿鼻獄に入らん」の文の如くならば定めて無間・大城に墮ちて無量億劫のくるしみを受けん、善導・法然も是に例して知んぬべし、

誰か智慧有らん人此の謗法の流を汲んで共に阿鼻の焰にやかれん、行者能く畏るべし此れは是れ大邪見の輩なり、所以に如來誠諦の金言を按ずるに云く「我が正法をやぶらん事は譬えば獵師の身に袈裟をかけたるが如し、或は須陀斯那含阿那含阿羅漢辟支仏及び仏の色身を現じて我が正法を壊らん」といふ。

今此の善導法然等は種種の威を現じて愚癡の道俗をたぶらかし如來の正法を滅す、就中彼の眞言等の流れ偏に現在を以て旨とす、所謂畜類を本尊として男女の愛法を祈り莊園等の望をいのる、是くの如き少分のしるしを以て奇特とす、若し是を以て勝れたりといはば彼の月氏の外道等にはすぎじ、彼の阿闍多仙人は十二年の間恒河の水を耳にただへたりき、又耆菟仙人の四大海を一日の中にすひほし、留外道は八百年の間石となる豈是

にすぎたらんや、又瞿曇仙人が十二年の程釈身と成り説法せし、弘法が刹那の程にびるさな身と成りし、其の威徳を論ぜば如何、若し彼の變化のしるしを信ぜば即ち外道を信ずべし当に知るべし彼れ威徳ありといふも猶阿鼻の炎をまぬがれず、況やはづかの變化にをいてをや況や大乘誹謗にをいてをや、是一切衆生の愚知識

なり近付くべからず畏る可し畏る可し、仏の曰く「愚象等に於ては畏るる心なかれ愚知識に於ては畏るる心をなせ、何を以ての故に愚象は但身をやぶり意をやぶらず愚知識は二共にやぶる故に、此の愚象等は但一身をやぶる愚知識は無量の身むりようは無量の意をやぶる、愚象等は但不淨の臭き身をやぶる愚知識は淨身及び淨心をやぶる、愚象は但肉身をやぶる愚知識は法身をやぶる、愚象の爲にころされては三惡に至らず愚知識の爲に殺されたるは

必ず三惡に至る、此の愚象は但身の爲のあだなり、愚知識は善法の爲にあだなり」と、故に畏る可きは大毒蛇惡鬼神よりも弘法善導法然等の流の愚知識を畏るべし、略して邪見の矢を明すこと畢んぬ。

此の使あまりに急ぎ候ほどにとりあへぬさまにかたはしばかりを申し候、此の後又便宜に委く経釈を見調べてかくべく候、六賢六賢、外見あるべからず候若命つれなく候はば仰せの如く明年の秋下り候て且つ申すべ

く候、きこう 恐恐。きこう

十二月五日

日蓮花押
にちれんかおう

星名五郎太郎殿御返事
ごへんじ

二二七 大豆御書 文永七年十月 四十九歳御作

1210p

大豆一石かしこまつて拝領し畢おわんぬ法華經の御宝前に申し上候、一の水を大海になげぬれば三災にも失せず一華を五
淨によせぬれば劫火ごうかにもしばまず、一豆を法華經になげぬれば法界ほうかいみな蓮なり、恐惶謹言。きこうきんげん

十月二十三日

日蓮花押
にちれんかおう

御所御返事
ごへんじ

二二八 寿量品得意抄

文永八年四月 五十歳御作

1210p

教主釈尊 寿量品を説き給うに爾前・迹門しやくもんのききをあげて云く「一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は
釈氏の宮を出でて伽耶城がやを去ること遠からず道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂えり云云、此の文の意は
初め華嚴經より終り法華經安樂行品に至るまで一切の仏の御弟子大菩薩等の知る処の思いの心中をあげ
たり、爾前の經に二つの失あり、一には「行布ぎふを存する故に仍未だ權を開せず」と申して迹門方便品の十如是の一念三千
開權顯実二乗作仏の法門を説かざる過なり、二には始成を言う故に尚未だ迹を発わず」と申して

くあんにじつじつ じゅうりょうほん
久遠実成の寿量品を説かざる過なり、此の二つの大法は一代聖教の綱骨一切経の心髓なり、迹門には二乗作仏を説いて四十余年の二つの失一つを脱したり、然りと雖も未だ寿量品を説かざれば実の一念三千もあらはれず二乗作仏も定まらず、水にやどる月の如く根無し草の浪の上に浮べるに異ならず、又云く然るに善男子我実に成仏してより已来無量無辺百千万億那由佗劫等云云、此の文の心は華嚴經の始成正覺と申して始めて仏になると説き
たま せんまん なゆた
給ふ阿含經の初成道 淨名經の始坐仏樹大集經の始十六年大日經の我昔坐道場仁王經の二十九年、無量義經の我先道場法華經方便品の我始坐道場等を一言に大虚妄なりと打破る文なり、本門寿量品に至つて始成正覺やぶるれば四教の果やぶれ四教の果やぶれぬれば四教の因やぶれぬ、因とは修行弟子の位なり、爾前・迹門の因果を打破つて本門の十界因果をときあらはす是れ則ち本因・本果の法門なり、九界も無始の仏界に具し仏界も無始の九界にそなへて実の十界互具・百界千如・一念三千なるべし、かうしてか今みるときは華嚴經の台上盧舍那阿含經の文六の小釈迦方等般若金光明經阿弥陀經・大日經等の權仏等は此の寿量品の仏の天月のしばらくかげを大小のつはものに浮べ給つを、諸宗の智者学匠等は近くは自宗にまどひ遠くは法華經の寿量品を知らず水中の月に実月のおもひをなして或は入つて取らんとおもひ或は繩をつけてつなぎとどめんとす、此れを天台大師釈して云く「天月を識らずして但池月を觀ず」と、心は爾前・迹門に執着する者はそらの月をしらずして但池の月をのぞみ見るが如くなりと釈せられたり、又僧祇律の文に五百の×山より出でて水にやどれる月をみて入つてとらんとしけるが實には無き水月なれば月とられずして水に落ち入つて×は死にけり、×とは今の提婆達多・六群比丘等なりとかし給へ。

一切経の中に此の寿量品ましまさずは天に日月無く国に大王なく山海に玉なく人にたまし無からんがごとし、されば寿量品なくしては一切経いたづらことなるべし、根無き草はひさしからずみなもとなき河は遠から

ず親無き子は人にいやしまる、所詮^{しせん}寿量品の肝心^{かんじん}南無妙法蓮華經こそ十方三世の諸仏^{しよぶつ}の母にて御坐し候へ、^{きんげん}恐^{おそ}謹言^{きんげん}。

四月十七日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

二二九 五人土籠御書^{ごしよ}

文永八年十月 五十歳御作 於相模依智作^{さがみえち}

与日朗日心坂部入道伊沢入道得業寺^{にちろうにちしんさかべにちしんいざわにちしんとくごう}

五人御中参^{おんちゆう}

日蓮^{にちれん}

せんあくてご房をばつけさせ給へ又しらづめが一人あらんするがふびんに候は申す。

今月七日さどの国へまかるなり、各各は法華經一部づつあそばして候は我が身並びに父母兄弟存亡等に回向しましまし候らん、今夜のかんずるにつけていよいよ我が身より心くるしと申すばかりなく、ろつをいでさせ給いなば明年のはるかならずきたり給えみみまいらすべし、せうどのの但一人あるやつをつけよかしとをもつ心になしとをもつ人一人もなければしぬまで各各御はぢなり。

又大進阿闍梨はこれにきたすべき事かたがたあり、又をのの御身の上をもみはてせんがれうにとどめをくなり、くはしくは申し候わんずらん、^{おしやう}恐^{おそ}恐^{おそ}謹言^{きんげん}。

十月三日

日蓮花押^{にちれんかおう}

五人御中^{おんちゆう}

一一三〇

土籠御書

文永八年十月

与日郎

1213p

日蓮は明日・佐渡の国へまかるなり、今夜のさむきに付けても、ろづのうちのありさま思いやられていたはしくこそ候へ
あはれ殿は法華經一部を色心二法共にあそばしたる御身なれば、父母・六親・切衆生をもたすけ
給うべき御身なり、法華經を余人のよみ候は口ばかりことばばかりはよめども心はよまず、心はよめども身によまず、
色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ、天諸童子、以為給使、刀杖不加毒不能害と説かれて候は別的事はあるべから
ず、籠をばし出でさせ給ひ候はば、とくとくきたり給へ、見たてまつり見えたてまつらん、恐恐謹言。

文永八年辛未十月九日 日蓮花押

筑後殿

一一三一

日妙聖人御書

文永九年五月 五十一歳

1213p

御作過去に樂法梵志と申す者ありき、十二年の間、多くの国をめぐりて如来の教法を求む、時に総て仏法僧の三宝一つ
もなし、此の梵志の意は濁して水をもとめ飢えて食をもとむるがごとく、仏法を尋ね給ひき、時に婆羅門あり求めて云く我
れ聖教を一偈持てり、若し実に仏法を願はば、当にあたふべし、梵志答えて云く、しかなり、婆羅門の云く、実に志あらば皮
をはいで紙とし、骨をくだいて筆とし、髓をくだいて墨とし、血をいたして水として書かんと云

はば仏の偈を説かん、時に此の梵志悦びをなして彼が申すごとくして皮をはいでほして紙とし乃至一言をもたがず、時に婆羅門・忽然として失ぬ、此の梵志・天にあふぎ・地にふす、仏陀此れを感じて下へ万より涌出て説て云く「如法は応に修行すべし非法は行ずべからず今世若しは後世・法を行ずる者は安穩なり」等云云、此の梵志・須臾に仏になる此れは十字なり、昔釈迦菩薩・転輪王たりしとき「夫生輒死此滅為樂」の八字を尊び給う故に身をかへて千燈にともすして此の八字を供養し給ひ人をすすめて石壁・要路にがきつけて見る人をして菩提心をおこさしむ、此の光明・とう利天に至る天の帝釈並びに諸天の燈となり給ひき。

昔釈迦菩薩・仏法を求め給ひき、癡人あり此の人にむかつて我れ正法を持てり其の字・二十なり我が癡病をさすりいたきなぶり日に両三斤の肉をあたは説くべしと云う、彼が申すごとくして二十字を得て仏になり給う、所謂「如来は涅槃をを証し永く生死を断じ給う、若し至心に聴くこと有らば当に無量の樂を得べし」等云云。

昔雪山童子と申す人ありき、雪山と申す山にして外道の法を通達せしかども、いまだ仏法をきかず、時に大鬼神ありき説いて云く「諸行無常是生滅法」等云云、只八字計りを説いて後をとかず時に雪山童子・此の八字を得て悦きはまなければども半なる如意珠を得たるがごとく華さき菓ならざるにいたり、残の八字を。きかんと申す、

時に大鬼神の云、我れ数日が間・飢えて正念乱るゆへに後の八字をときがたし食をあたふと云う、童子問うて云く何をか食与る、鬼答えて云く我は人のあたたかなる血肉なり、我れ飛行自在にして須臾の間に四天下を回つて尋ねれどもあたたかなる血肉得がし、人をば天守り給う故に失なければ殺害する事かたし等云云、童子

の云く我が身を布施として彼の八字を習ひ伝えんと云云、鬼神の云く智慧甚だ賢し我をやずかさんずらん、童子答えて云く瓦礫に金銀をかへんは是をかえざるべしや我れ徒に此の山にして死しなば鴟梟虎狼に食はれて一分の功德なかるべし、後の八字にかえなば糞を飯にかふるがごとくし、鬼の云く我いまだ信ぜず、童子の云く証人

あり過去の仏もだて給いし大梵天王・釈提桓因・日月・四天も証人にたち給うべし、此の鬼神後の偈をとかんと申す、童子身にきたる鹿の皮をぬいで座にしき踞跪合掌して此の座につき給へと請す、大鬼神・此の座について説て云く「生滅滅已・寂滅為樂」等云云、此の偈を習ひ學して若しは木・若しは石等に書き付けて身を大鬼神の□になげいれ給う、彼の童子は今の釈尊・彼の鬼神は今の帝釈なり。

藥王菩薩は法華經の御前に臂を七万二千歳が間ともし給い、不輕菩薩は多年が間・二十四字の故に無量無辺の四衆に罵詈・毀辱・杖・木・瓦石・而打擲之せられ給いき、所謂二十四字と申すは「我深く汝等を敬う敢て輕慢せず所以は好ん汝等皆菩薩の道を行じて当に作仏することを得べし」等云云、かの不輕菩薩は今の教主釈尊なり、昔の須頭檀王は妙法蓮華經の五字の為に千歳が間・阿私仙人にせめつかはれ身を床となさせて給いて今の釈尊となり給う。

然るに妙法蓮華經は八卷なり・八巻を読めば十六巻を読むべし、釈迦・多宝の二仏の經なる故へ十六巻は無量無辺の卷軸なり、十方の諸仏の證明ある故に一字は二字なり・釈迦・多宝の二仏の字なる故へ一字は無量の字なり・十方の諸仏の証明の御經なる故に、譬えば如意宝珠の玉は一粒なれども二珠乃至無量珠の財をふらすこと・

これをなじ・法華經の文字は一字は一の宝・無量の字は無量の宝珠なり、妙の一字は二つの舌まします・釈迦・多宝の御舌なり、この二仏の御舌は八葉の蓮華なり、この重なる蓮華の上に宝珠あり妙の一字なり。

此妙の珠は昔釈迦如来の檀波羅密と申して身をうえたる虎にかひし功德・鳩にかひし功德・戸羅波羅密と申して須陀摩王としてそらごとせざりし功德等、忍辱仙人として歌梨王に身をまかせし功德・能施太子・尚闍梨仙人等の六度の功德を妙の一字にをさめ給いて末代惡世の我等衆生に一善も修せざれども六度万行を満足する功德をあたえ給う、今此三界皆是我有・其中衆生・悉是吾子・これなり、我等具縛の凡夫忽に教主釈尊と功德ひとし彼

の功德を全体受け取る故なり、経に云く「如我等無為」等云々、法華経を心得るものは釈尊と齊等なりと申す文なり、
譬えは父母和合して子をつむ子の身は全体父母の身なり誰か是を争そつべき、牛王の子は牛王なりいま獅子王とならず、
獅子王の子は獅子王となる。いまだ人王・天王よならず、今法華経の行者は其中衆生悉是吾子と申して教主釈尊の御子
なり教主釈尊のごとく法王とならん事難かるべからず、但し不孝の者は父母の跡をつがず

堯王には丹朱と云う太子あり舜王には商均と申す王子あり、二人共に不孝の者なれば父の王にすてられて現身に民と
なる、重華と禹とは共に民の子なり、孝養の心ふかりしかば堯舜の二王召して位をゆづり給いき、民の身忽ち玉体に
ならせ給いき、民の現身に王となると凡夫の忽に仏となると同じ事なるべし、一念三千の肝心と申すはこれなり、なをいか
にとしてか此功德をばつべきぞ、樂法梵志・雪山童子等のごとく皮をはぐべきか身をなく

べきか臂をやくべきか等云云、章安大師云く「取捨宜しきを得て一向にすべからず」等これなり、正法を修して仏になる行
は時によるべし、日本国に紙なくば皮をはぐべし、日本国に法華経なくて知れる鬼神一人出来せば身をなぐべし、日本国に
油なくば臂をもとすべし、あつき紙・国に充滿せり皮をはいでなにかせん、然るに玄奘は西天に法を求めて十七年・
十万里にいたれり、伝教御人唐但二年なり波濤三千里をたてたり。

此等は男子なり・上古なり・賢人なり・聖人なり、いまだきかず女人の仏法をもとめて千里の路をわけし事を竜女が
即身成仏も摩訶波闍波提比丘尼の記べつにあづかりしも、しらず権化にやありけん、又在世の事なり、男子・女人其の性
本より別れたり、火はあたたかに水はつめたし海人は魚をとるにたくみなり、山人は鹿をとるにがしこし、女人は物をそ
ねむにがしこしとこそ経文にはあかされて候へいまだきかず仏法にがしこしとは、女人

の心を清風に譬えたり風はつなぐともとりがたきは女人の心なり、女人の心をば水にゑがくに譬えたり、水面には文字と
どまらざるゆへなり、女人をばおつ人にたとへたり、或時は実なり、或時は虚なり、女人をば河に譬え

たり・一切まがられるゆなり、而るに法華経は・正直捨方便等 皆是真実等 質直意柔軟等 柔和質直者等と申して
正直なる事 弓の弦のはれるがごとく 墨のなはを うつがごとくなる者の信じまいらする御経なり、糞を梅檀と申すとも
梅檀の香なし、妄語の者を不妄語と申すとも不妄語にはあらず、一切経は皆仏の金口の説 不妄語
の御言なり、然れども法華経に對しまいらすれば妄語のごとし 椅語のごとし 惡口のごとし 兩舌のごとし、此の御経こ
そ実語の中の実語にて候へ 実語の御経をば 正直の者心得、候なり、今実語の女人にておはすか当に知るべし須弥山を
戴きて大海をわたる人を見るときも此の女人をば見るべからず、砂をむして飯となす人を
見るとも此の女人をば見るべからず、当に知るべし釈迦仏・多宝仏・十方分身の諸仏・上行・無辺行等の大菩薩・
大梵天王 帝釈 四王等 此女人をば影の身にそつがごとく まほり給うらん、日本第一の法華経の行者の女人なり、
故に名を一つけたてまつりて不輕菩薩の義になぞらん 日妙聖人等云云。

相州鎌倉より北国佐渡の国 其の中間二千余里に及べり、山海はるかに・たて山は蛾蛾 海は濤濤 風雨 時にしたがつ
事なし、山賊・海賊克満せり、宿宿とまりとまり 民の心 虎のごとし 犬のごとし 現身に三惡道の苦をふるか、其の上
当世は世乱れ去年より謀叛の者 国に充満し今年二月十一日合戦、其れより今五月のすゑ いまだ世間安穩ならず、而れ
ども一の幼子あり あづくべき父も たのもしからず 離別すでに久し。

かたがた筆も及ばず心弁がたければとどめ畢んぬ。

文永九年太歳壬 申五月二十五日

日妙聖人

日蓮 花押

漢土に^{かんど}いまだ^ぶ仏法の^{ぶつぽう}の^{わたり}候は^{せう}ざりし^し時は^な三皇^{さんこう}・五帝^{ごてい}・三王^{さんおう}乃^{ない}至^{いた}大^{だい}公^{こう}望^{ぼう}周^{しゅう}公^{こう}旦^{たん}老^{ろう}子^し孔^{こう}子^しつ^くら^らせ^{たま}給^いいて^そ候^あいし^し文^{ぶん}を
或^{ある}は^は経^{きやう}とな^なづ^け或^{ある}は^は典^{てん}等^{とう}とな^なづ^く此^この^の文^{ぶん}を^ひ披^ひいて^て人^にに^れ礼^{れい}儀^ぎを^おし^へ父^ふ母^ぼを^しら^しめ^ま主^{しゅ}臣^{しん}を^定めて^て世^せを^おさ^めしか^ば
人^もした^がひ^も天^{てん}も^の納^{のう}受^{じゆ}を^たれ^{たま}給^ふ此^これに^にた^がい^し子^しを^ば不^ふ孝^{こう}の^の者^{もの}と^申し^あ臣^{しん}を^ば逆^{ぎやく}臣^{しん}の^の者^{もの}と^て失^{とが}にあ^てられ^し程^{ほど}に^に月^{がつ}氏^し
より^{より}仏^{ぶつ}経^{きやう}わ^{たり}し^し時^{とき}・或^{ある}一^{いち}類^{るい}は^は用^{よう}ふ^べから^ずと^申し^あ或^{ある}一^{いち}類^{るい}は^は用^{よう}ふ^べしと^申せ^し程^{ほど}に^にあ^ら
そ^ひ出^{しゅ}来^{らい}て^て召^{めい}し^し合^あせ^たり^{しか}ば^ば外^げ典^{てん}の^の者^{もの}・負^おけ^てて^て仏^{ぶつ}弟^{てい}子^し勝^{かつ}ち^にき^き其^その^の後^ごは^は外^げ典^{てん}の^の者^{もの}と^て仏^{ぶつ}弟^{てい}子^しを^合せ^しか^ば・氷^{こおり}の^の口^{くち}にと
く^るが^如く^く火^{くわ}の^の水^{すい}に^滅する^が如^くく^く・ま^くる^のの^のみ^みな^らず^ず・な^ににと^もな^き者^{もの}と^なり^しなり^{なり}・又^{また}仏^{ぶつ}経^{きやう}漸^{せん}く^わたり^来り^し程^{ほど}に^に仏^{ぶつ}経^{きやう}
の^の中^{ちゆう}に^に又^{また}勝^{しょう}劣^{りやく}・浅^{せん}深^{しん}侯^{こう}い^{けり}・所^い謂^{いは}ふ^る・小^{しょう}乘^{じやう}経^{きやう}・大^{だい}乘^{じやう}経^{きやう}・蹟^{けん}経^{きやう}・密^み経^{きやう}・権^{こん}経^{きやう}・実^{じつ}経^{きやう}なり^{なり}・譬^{たと}え^ば一^{いち}切^きの^の石^{いし}
は^は金^{きん}に^に対^{たい}す^べれば^ば一^{いち}切^きの^の金^{きん}に^に劣^{おと}れ^{ども}・又^{また}金^{きん}の^の中^{ちゆう}に^にも^も重^{じゆう}重^{じゆう}あり^{あり}・一^{いち}切^きの^の人^{にん}間^{げん}の^の金^{きん}は^は閻^{えん}浮^ぶ檀^{だん}金^{きん}に^には^は及^{およ}び^し侯^{こう}は^はず^ず・閻^{えん}浮^ぶ檀^{だん}金^{きん}は^は
梵^{ぼん}天^{てん}の^の金^{きん}に^には^は及^{およ}ば^{ざる}が^{ごと}く^く・一^{いち}切^きの^の経^{きやう}は^は金^{きん}の^の如^{ごと}く^くな^れども^も又^{また}勝^{しょう}劣^{りやく}・浅^{せん}深^{しん}ある^{なり}・小^{しょう}乘^{じやう}経^{きやう}と^と申^しす^は経^{きやう}は^は世^せ間^{げん}の^の小^{しょう}船^{せん}の^のこ
と^く・わ^づか^にに^に人^{にん}の^の一^{いち}人^{にん}・三^{さん}人^{にん}等^{とう}は^は来^きす^れども^も百^{ひやく}千^{せん}人^{にん}は^は乗^{じやう}せ^ず・設^{たと}ひ^ひ一^{いち}人^{にん}・三^{さん}人^{にん}等^{とう}は^は来^きす^れども^も此^し岸^{がん}に^につ^つけて^て彼^ひ岸^{がん}へ^へ行^いき
が^たし^し・又^{また}す^こし^のの^の物^{ぶつ}を^をば^は入^いる^れども^も大^{だい}なる^{なる}物^{ぶつ}を^をば^は入^いれ^がた^し・大^{だい}乗^{じやう}と^と申^しす^は大^{だい}船^{せん}なり^{なり}人^{にん}も^も十^{じゅう}・二^に十^{じゅう}人^{にん}も^も来^きる^上・大^{だい}なる^{なる}
物^{ぶつ}を^をも^もつ^つみ^み鎌^{かま}倉^{くら}より^{より}・つ^つく^くし^しみ^みち^ちの^の国^{こく}へ^へも^もい^いた^る。

実^{じつ}経^{きやう}と^と申^しす^は又^{また}彼^かの^の大^{だい}船^{せん}の^の大^{だい}乗^{じやう}経^{きやう}に^には^はに^にる^るべ^くも^もな^し・大^{だい}なる^{なる}珍^{ちん}宝^{ぼう}を^をも^もつ^つみ^み百^{ひやく}千^{せん}人^{にん}の^のり^りて^てが^がう^うら^らい^いな^なん^ども^も・わ^わた
り^りぬ^ぬべ^し・一^{いち}乗^{じやう}法^{ぽう}華^け経^{きやう}と^と申^しす^は経^{きやう}も^も又^{また}是^この^の如^{ごと}く^く・提^{だい}婆^ぱ達^{だつ}多^たと^と申^しす^は閻^{えん}浮^ぶ第^{だい}一^{いち}の^の大^{だい}悪^{あく}人^{にん}な^なれ^{ども}も^も法^{ぽう}華^け経^{きやう}に^にして^{して}天^{てん}王^{わう}如^{にょ}来^{らい}と
なり^{なり}ぬ^ぬ・又^{また}阿^あ闍^{じゃ}世^せ王^{わう}と^と申^しせ^しは^は父^ふを^をこ^ろせ^し惡^{あく}王^{わう}な^なれ^{ども}も^も法^{ぽう}華^け経^{きやう}の^の座^ざに^に列^りり^て一^{いち}偈^げ・一^{いち}句^くの^の結^{けつ}縁^{えん}

衆となりぬ、竜女と申せし蛇体の女人は法華經を文殊師利菩薩説き給ひしかば仏になりぬ、其の上仏説には惡世末法と

時をささせ給いて末代の男女にをくらせ給いぬ、此れこそ唐船の如くにて候・一乗經にてはおはしませ、されば一切經は
外典に対すれば石と金との如し、又一切の大乗經・所謂華嚴經・大日經・觀經・阿弥陀經・般若經等の諸の經經を
法華經に対すれば螢火と日月と華山と蟻塚との如し、經に勝劣あるのみならず大日經の一切の眞言

師と法華經の行者とを合すれば水に火をあはせ露と風とを合するが如し、犬は師子をほつれば腸くさる、修羅は日輪を
射奉れば頭七分に破る、一切の眞言師は犬と修羅との如く、法華經の行者は日輪と師子との如し、泳は日輪の出でざる時
は堅き事金の如し、火は水のなき時はあつき事・鉄をやけるが如し、然れども夏の日にあひぬれ

ば堅泳のとけやすさあつき火の水にあひてきやすさ、一切の眞言師は氣色のたうとげさ、智慧のかしげさ、日輪をみ
ざる者の堅き泳をたのみ、水をみざる者の火をたのめるが如し。

当世の人人の蒙古国をみざりし時のおごりは御覽ありしやうに、がぎりもなかりしぞかし、去年の十月よりは一人も・
おごる者なし、きこしめししやうに日蓮一人計りこそ申せしが、よせてだにきたる程ならば面をあはする人もあるべか
らず、但さるの犬ををそれがゑるの蛇ををそるるが如くなるべし、是れ偏に釈伽仏の御使い

たる法華經の行者を一切の眞言師・念佛者・律僧等ににくませて我と損じ、ことさらに天のにくまれを、がほれる国なる
故に皆人・臆病になれるなり、譬えば火が水をおそれ、木が金をおぢ、雉が鷹をみて魂を失ひ、ねずみが猫にせめらるるが
如し、一人も・たすかる者あるべからず、其の時は、いかがせさせ給つべき、軍には大將軍を魂とす、大將軍をくしぬれば
歩兵臆病なり。

女人は夫を魂とす、夫なければ女人魂なし、此の世に夫ある女人すら世の中渡りがたふみえて候に、魂もなくして世を
渡らせ給つが魂ある女人にも、すぐれて心中かひがひしくおはする上、神にも心を入れ仏をもあがめさせ

給は人に勝れておはする女人なり、鎌倉に候いし時は念仏者等はさてをき候いぬ、法華經を信ずる人人は志あるもなきも知られ候はざりしかども、御勘氣をがほりて佐渡の鳥まで流されしかば問ひ訪う人もなかりしに、女人の御身として、かたがた御志ありし上、我と来り給ひし事うつつならざる不思議なり、其の上いまの事つで又申すばかりなし、定めて神もまほらせ給ひ十羅刹も御あはれみしますらん、法華經は女人の御ためには暗きにと
もしび・海に船・おそろしき所にはまほりと・なるべきよし・ちかはせ給へり、羅什三蔵は法華經を渡し給ひしかば毘沙門天王は無量の兵士をして葱嶺を送りしなり、道昭法師・野中にして法華經をよみしかば無量の虎来りて守護しき、此れも又彼にはがはるべからず、地には三十六祇天には二十八宿まほらせ給う上・人には必ず二つの天影の如くにそひて候、所謂一をば同生天と云い一をば同名天と申す左右の肩にそひて人を守護すれば、失なき者をば天もあやまつ事なし、況や善人におひてをや、されば妙樂大師のたまはく「必ず心の固きに依りて神の守り則ち強し」等云、人の心かたければ神のまほり必ずつよしとこそ候へ、是は御ために申すぞ古の御心ざし申す計りなし、其より今一重強盛に御志あるべし、其の時は弥弥十羅刹女の御まほりもつよかるべしとおぼすべし、例には他を引くべからず、日蓮をば日本国の上一人より下万民に至るまで一人もなくあやまたんとせしかども、今までかうのて候事は一人なれども心のつよき故なるべしとおぼすべし、一つ船に乗りぬれば船頭のはかり事わるければ一同に船中の諸人損じ、又身つよき人も心かひなければ多くの能も無用なり、日本国にはがしとき人人はあるらめども大将のはかり事つたなければかひなし、壹岐・對馬・九ヶ国のつはもの並に男女多く、或はころされ、或はとらはれ、或は海に入り、或はがけよりおちしものいくせんまんと云う事なし、又今度よせなば先にはにるべくもあるべからず、京と鎌倉とは但壹岐・對馬の如くなるべし、前にしたくして、いづくへもにげさせ給へ、其の時は苦し日蓮を見し聞かじと申せし人人も、掌をあはせ法華經を信ずべし、念仏者・禪宗までも

南無妙法蓮華經と申すべし、抑法華經をよくよく信したらん男女をば肩になひ背におつべきよし經文に見えて候上くまらゑん三蔵と申せし人をば木像の釈迦をせ給いて候いしぞかし、日蓮が頭には大覺世尊かはらせ給いぬ昔と今と一同なり、各各は日蓮が檀那なり争か仏にならせ給はざるべき。

いかなる男をせさせ給うとも法華經のかたきならば随ひ給うべからず、いよいよ強盛の御志あるべし、氷は水より出でたれども水よりもすすまじ、青き事は藍より出でたれどもがさぬれば藍よりも色まさる、同じ法華經にてはをはすれども志をかさぬれば他人よりも色まさり利生もあるべきなり、木は火にやかるれども梅檀の木

は、やけず、火は水にけさるれども仏の涅槃の火はきえず、華は風にちれども淨居の華はしほまず、水は大旱魃に失れども黄河に入りぬれば失せず、檀弥羅王と申せし惡王は月氏の僧の類を切りしにとがなかりしかども、師子尊者の頸を切りし時刀と手と共に一時に落ちにき、弗沙密多羅王は鷄頭摩寺を焼し時十二神の棒にかふべわれにき、今日本国の人人は法華經のかたきとなりて身を亡ぼし国を亡ぼしぬるなり、かう申せば日蓮が自訟なりと

心えぬ人は申すなり、さにはあらず是を云わずば法華經の行者にはあらず、又云う事の後にあはこそ人も信ずれ、かうただがきをきなばこそ未来の人は智ありけりとはじり候はんずれ、又身輕法重、死身弘法と

のべて候ば身は輕ければ人は打ちはり惡むとも法は重ければ必ず弘まるべし、法華經弘まるならば死かばね還つて重くなるべし、かばね重くなるならば此のかばねは利生あるべし、利生あるならば今の八幡大菩薩といははるやうにいはつべし、

其の時は日蓮を供養せる男女は武内、若宮なんどのやうにあがめらるべしとおぼしめ

せ、抑一人の盲目をあけて候はん功德すら申すばかりなし、況や日本国の一切衆生の眼をあけて候はん功德をや、

何に況や一閻浮提、四天下の人の眼のしめたるをあけて候はんをや、法華經の第四に云く「仏滅度の後に能く其の義を解せんは是諸の天人、世間之眼なり」等云云、法華經を持つ人は一切世間の天人の眼なりと説かれて

侯、日本国にほんこくの人の日蓮にちれんをあだみ侯そうは一切世間いっさいせけんの天人てんじんの眼まなこをくじる人なり、されば天もいかり日日てんべんに天変あり地もいかり月に地天かさなる、天たいやくの帝釈たいしゃくは野干やかんを敬やかしいて法はふを習ならいしかば今の教主きやうしゆしやくそん釈尊せつせんとうじとなり給たまい雪山童子せつせんとうじは鬼きを師しとせしかば今の三界さんがいの主しゅとなる、大聖だいせい・上人しやうじんは形かたちを摘とみて法はふを捨てざりけり、今日蓮けふにちれんおろかなりとも野干やかんと鬼きとに劣おとるべからず、当世とうせの人ひといみじくとも帝釈たいしゃく・雪山童子せつせんとうじに勝まさるべからず、日蓮にちれんが身の賤しせんきについて巧言ぎやうげんを捨てて侯故ゆえに国くに既に亡なびんとするがなしさよ、又日蓮にちれんを不便ふびんと申しぬる弟子でしどもをもたすけがたからん事こそなげかしくは寛おほえ侯そうへいかなる事も出来侯いひだせは是御おんわたりあるべし見奉みまうらん・山中やまなかにて共にうえ死しにし侯そうはん、又乙御前おとこぜんこそおとなしくなりて侯そうらめ、いかにさかしく侯そうらん、又又申まうすべし。

八月四日

日蓮にちれん 花押かあう

乙御前おとこぜんへ

一一三三 乙御前母御書おとこぜんごしよ

1222p

をとこぜんのは

いまは法華經ほふけきやうをしらせ給たまいて仏ぶつにならせ給たまうべき女人にょにんなり、かすが今いまふみものぐさき者ものなれどもたびたび申まうす、又御房ごぼうたちをもぶびんにあたらせ給たまうとつけ給たまわる申まうすばかりなし。

なによりも女房にようぼうのみとしてこれまで来きりて候そういし事ことこれまでながされ候そういける事はさる事ことにて御心おんこころざしのあらわるべきにや・ありけんと・ありがたくのみをば侯そう、釈迦しやくかに如来にがひにの御弟子おんでしあまたをわしし・なかに十大弟子でし

とて十人ましまししがなかに目・連尊者そんじやと申せし人は神通第一じんつうだいいちにてをはしき、四天下してんげと申して日月にちがつのめぐり給たまうところをかみずぢ一すぢきらざるにめぐり給たまいき、これはいかなるゆゑと。たづねればせんしやうに千里ありしところをかよいてぶつぽう 仏法を聴聞ちやうもんせしゆなり、又天台大師てんだいだいしの御弟子おんでしに章安と申せし人は万里をわけて法華經ほけきやうをきかせ給たまへ、伝教大師でんきやうだいしは二千里をすぎて止觀しかんをならい玄奘三藏げんじやうさんぞうは二十万里をゆきて般若經はんにやきやうを得給たまへ、道のとをきに心ざしのあらわるるにやかれは皆男子みななり権化ごんげの人のしわざなり、今御身おんみは女人にょにんなり。こんじちはしりがたし。いかなる宿善しゆくぜんにてやをはすらん、昔女人にょにんすいをとをしをびてこそ、或あるは千里をもたづね石となり。木となり。鳥となり。蛇じやとなれる事もあり。

十一月三日

日蓮在御判にちれんざいごはん

をとごぜんのはは

をとごぜんがいに尼となり候いつらん、法華經ほけきやうにみやづかわせ候ほつこつをばをとごぜんの尼はのちさいわいなり候に○○○○。

一二三四

辨殿御消息べんどのしやうそく

文永九年七月五十一歳御作ぶんえいぶんえい

1223p

不審有らば諍論ふしんじやうろん無く書き付けて一日進まいらしむべし。

此の書は随分ずいぶんの秘書なり、已前いぜんの字文の時もいまだ存ぜられざる事粗ほ之これを載のす、他人たにんの御聴聞ちやうもんなからん已前いぜん

に御存知有るべし、総じてはこれよりぐしてたらん人にはよいて法門御聴聞有るべし互に師弟と為らんか、恐恐謹言。

七月二十六日

日蓮花押

辦殿・犬進阿闍梨御房 三位殿

二三五 辦殿尼御前御書 文永十年九月 五十二歳御作 与日昭母妙一 1224p

しげければとどむ、辦殿に申す大師講ををこなうべし・大師とてまいらせて候、三郎左衛門尉殿に候、御文のなかに涅槃經の後分二卷・文句五の本末・授決集の抄の上卷等 御隨身あるべし。

貞当は十二年にやぶれぬ將門は八年にかたふきぬ、第六天の魔王・十軍のいくさををこして法華經の行者と生死海の海中にして同居穢土ををどられじうばはんとあらそう、日蓮其の身にあひあたりて大兵ををこして二十余年なり、日蓮一度もしりぞく心なし、しかりといえども弟子等 檀那等の中に臆病のもの大体或はをち或は退轉の心あり、尼ごぜんの一文不通の小心にいままでしりぞかせ給わぬ事申すばかりなし、其の上自身のつかうべきところ以下人を一人つけられて候事定めて釈迦・多宝・十方分身の諸仏も御知見あるか、恐恐謹言

九月十九日

日蓮 花押

辦殿尼御前に申させ給へ

たきわつをばいゑふくべきよし候けるとてまかるべきよし申し候はつかわし候、ゑもんのたいつどののか合せに事は大進の阿闍梨のふみに候らん。

一 十郎入道殿の御けさ悦び入つて候よしかたらせ給え。

一 さぶらつゝゑもんどのこのほど人をつかわして候しが、をほせ給いし事あまりにがすがすをばつがなく候よし、わざと御わたりありてきこしめしてがきつかはし候べし、又さゑもんどのにもかくと候へかわのべとの等の四人の事はるかにつけ給はり候はずおぼつかなし、かの辺になに事か候らん――にかきつか

はせ、度度この人人の事はことに一大事と天をせめまいらせ候なり、さだめて後生はさてをきぬ今生にしるしあるべく候と存すべきよししたたかにかたらせ給へ伊東の八郎ゑもん今はしなののかみはげんに、しに

たりしをいのりいけて念仏者等になるまじきよし明性房にをくりたりしがかへて念仏者、真言師になりて無間地獄に堕ぬ、のと房はげんに身かたで候しが世間のをそろしさと申しよくと申し日蓮をすつるのみならず・

かたきとなり候ぬ、せう房もかくの如し。

おのおのは随分の日蓮がかたつとなり、しかるをなづきをくだきているにいままでしるしのなきはこ

の中に心のひるがる人の有るとをば候ぞ、をもちあわぬ人をいるは水の上に火をたき空にいゑをつく

るなり、此の由を四人にかたらせ給ふべし、むこり国の事のあつをもつておぼしめせ、日蓮が失にはあらず、ちくご房三位そつ等をばいとまあらばいそぎ来るべし大事の法門申すべしかたらせ給え、十住毘婆沙等の

要文を大帖にて候と真言の表のせうそくの裏にさど房のかきて候とそつじてせせとがきつけて候もののがるきとりて
たび候へ紙なくして一紙に多く要事を申すなり。

七月二十一日 日蓮花押

辨殿

一三七 弥源太殿御返事

1226p

抑日蓮は日本第一の僻人なり、其の故は皆人の父母よりもたかく主君よりも大事におもはれ候ところの
阿弥陀仏大日如来薬師等を御信用ある故に、三災七難先代にこえ天変地天等昔にもすぎたりと申す故に結句は
今生には身をほろぼし国をそこない後生には大阿鼻地獄に墮ち給うべしと、一日片時もたゆむ事なくよ

ばわりし故にかかる大難にあへり、譬えば夏の虫の火にとびくばりねずみがねこのまへに出でたるが如し、是あに我が身を知
つて用心せざる畜生の如くにあらずや、身命を事失ふ併ら心より出ずれば僻人なり、但し石

は玉をふくむ故にくだかれ鹿は皮肉の故に殺され魚はあぢはひある故にとらるすいは羽ある故にやぶらる女人はみめか
たちよければ必ずねたまる此の意なるべきか、日蓮は法華經の行者なる故に三種の強敵あつて種種の大難にあへり然るにか
かる者の弟子檀那とならせ給う事不思議なり定めて子細候らん相構えて能能御信心候
て靈山浄土へまいり給へ

又御祈のために御太刀同く刀あはせて二つ送り給はて候、此の太刀はしかるべきかぢ作り候かと覺候、あまくに或
は鬼きり或はやつるぎ異朝にはかむしやつばくやが剣に争でかことなるべきや此れを法華經にま

いらせ給^{たま}う、殿の御もちの時は悪の刀今 仏前^{ぶつぜん}まいりぬれば善の刀なるべし、譬^{たと}えば鬼の道心^{どうしん}をおこしたらんが如^{ごと}し、あら不思議^{ふしぎ}や不思議^{ふしぎ}や、後生^{ごせい}には此の刀をつえとたのみ給^{たま}うべし、法華經^{ほけきょう}は三世の諸仏^{しよぶつ}発心^{はつしん}のつえにて候ぞかし、但し日蓮^{にちれん}をつえはしらともたのみ給^{たま}うべし、けはしき山あしき道つえをつきぬればたをれず、

殊^{こと}に手をひかれぬればまろぶ事なし、南無妙法蓮華經^{なむみょうほつれんげきょう}は死出の山にてはつえはしらとなり給^{たま}へ釈迦^{しゃか}・仏^{ぶつ}・多宝^{たぼう}・仏^{ぶつ}・上行^{じやうぎやう}等の四菩薩^{ぼさつ}は手を取り給^{たま}うべし日蓮^{にちれん}さきに立ち候はば御迎にまいり候事もやあらんずらん、又さきに行かせ給^{たま}はば日蓮^{にちれん}必ず閻魔^{えんま}法王^{ほうおう}にも委^{くわ}く申^{もう}すべく候、此の事少しもそら事あるべからず、日蓮^{にちれん}法華經^{ほけきょう}の文の如^{ごと}くな

らば通塞^{つうそく}の案内者^{なんないしや}なり、只一心^{ただいっしん}に信心^{しんじん}おはして靈山^{りやうざん}を期^きし給^{たま}へげにと云^いうものは用にしたがつて変ずるなり、法華經^{ほけきょう}も亦復^{またかく}是^{この}の如^{ごと}し、やみには燈となり渡^{わた}りには舟となり、或^{ある}は水ともなり、或^{ある}は火ともなり給^{たま}うなり、若^もし然^{しか}らば法華經^{ほけきょう}は現世^{げんせい}安穩^{あんゑん}後生^{ごせい}善処^{ぜんじょ}の御經^{ごきやう}なり。

其上^{にちれん}日蓮^{にほんこく}は日本国^{にほんこく}の中には安州^{あんしゅう}のものなり総じて彼国^{てんしやうだいしん}は天照太神^{てんしやうだいしん}のすみそめ給^{たま}いし国なりといへかしこにして日本国^{にほんこく}をさぐり出^だし給^{たま}ふあはの国御くりやなりしかも此国^{いっさいしめじやう}の一切衆生^{じふひも}の慈父^{じふ}悲母^{ひも}なりかかるいみじき国な

れば定んで故ぞ候らんいかなる宿習^{しゆくじゆ}にてや候らん日蓮^{にちれん}又彼国^{たいてい}に生れたり第一^{かほう}の果報^{かほう}なるなり此消息^{ししやうそく}の詮^{しん}にあらざれば委^{くわ}しくはかかず但おしはかり給^{たま}うべし。

能^おく能^おく諸天^{しよてん}にいのり申^のべし、信心^{しんじん}にあかなくして所願^{しよがん}を成就^{じやうじゆ}し給^{たま}へ女房^{にようばう}にもよくよくがたらせ給^{たま}へ恐^{おそ}恐^{おそ}謹言^{きんげん}。

二月二十一日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

弥源太殿御返事^{やげんたごへんじ}

別の事候まじ憑み奉り候上は最後はかうと思し食し候へ河野辺の入道殿のこひしく候に漸く後れ進らせて其のかたみと見まいらせ候はん、さるにても候は如何が空しかるべきやさこそ覚え候へ。

但し当世は我も法華經をしりたりと人毎に申し候、時に法華經の行者はあまた候、但し法華經と申す經は転子病と申す病の様に候、転子と申すは親の様な子は少く候へも此の病は必ず伝わり候なり、例せば犬の子は母の吠を伝への子は母の用を伝えて鼠を取る、日本国は六十六箇国嶋二つ、其の中に仏の御寺は一万一千二十

七所其の内に僧尼或は三千或は一萬或は一千一百或は十人或は一人候へも其の源は弘法大師慈覺大師智証大師此の三大師の御弟子にて候、山の座主東寺御室七大寺の檢校、園城寺の長吏伊豆箱根日光慈光等の寺寺の別当等も皆此の三大師の嫡嫡なり、此の人人は三大師の如く読むべし、其れ此の三大師法華經と

一切經との勝劣を読み候しには弘法大師は法華經最第三と慈覺智証は法華經最第二或は戲論なんどこそ読み候いかん又是くのごとし。

但し日蓮が眼には僻目にてや候らん、法華經最第一皆是真実と釈迦仏多宝仏十方の諸仏は説いて証明せさせ給へり此の三大師には水火の相違にて候、其の末を受くる人人彼の跡を繼で彼の所領の田畠を我が物とせさせ給いぬれば何に争はせ給うとも三大師の僻事ならば此の科遁れがたくやおはすらんと見え候へども日蓮は怯弱

の者にて候はかく申す事をも人御用いなし、されば今日本国の人人の我も我も經を読むといへども申す事用ゆべしとも覚え候。

是はさて置き候め御音信も候はねば何にと思いて候つるに御使うれしく候、御所勞の御平愈の由うれしく候うれしく候、尚仰せを蒙る可く候 恐恐 謹言。

九月十七日

日蓮 花押

弥源太入道殿御返事

二三九 弥源太入道殿御消息

12226d

一日の御歸路をぼつがなく候つる処に御使悦び入つて候、御用事の御事共は伯耆殿の御文に書かせて候、然るに道隆の死して身の舍利となる由の事、是は何とも人知らず用いまじく候は兎角申して詮は候はず、但し仏の以前に九十五種の外道ありき各各是を信じて仏に成ると申す、又皆人も一同に思いて候し程に仏世に出でさせ給い

て九十五種は皆地獄に墮ちたりと説かせ給いしかば五天竺の国王・大臣等は仏は所詮なき人なりと申す、又外道の弟子どもも我が師の上を云れて悪心をかき候、竹杖外道と申す外道の目連尊者を殺せし事はなり、苦得外道と申せし者を仏記して云く七日の内に死して食吐鬼と成るべしと説かせ給いしかば外道瞋りをなす、七日の内に食吐鬼と成りたりしかば其を押し隠して得道の人の御舍利買つべしと云いき、其より外に不思議なる事数を知らず。

但し道隆が事は見ぬ事にて候は如何様に候やらん、但し弘通するところの説法は共に本権教より起りて候しを今は教外別伝と申して物にくるひて我と外道の法と云うか、其の上建長寺は現に眼前に見え候、日本国の山寺の敵とも謂いづべき様なれども事を御威によせぬれば皆人恐れて云わず、是は今生を重くして後生は軽くす

る故なりされば現身に彼の寺の故に亡国すべき事当りぬ、日蓮は度度知つて日本国の道俗の科を申せば是は今生の禍後生の福なり、但し道隆の振舞は日本国の道俗知りて候へとも上を畏れてこそ尊み申せ又内心は皆うとみて候らん、仏法の邪正こそ愚人なれば知らずとも世間の事は眼前なれば知りぬらん、又一は用いずとも人の骨

の舍利と成る事は易く知れ候事にて候、仏の舍利は火にやけず水にぬれず金剛のかなづちにてうても摧けず、一くだきして見よかしあらやすしあらやすし、建長寺は所領を取られてまどひたる男どもの入道に成りて四十五十六なんどの時走り入りて候が用は之れ無く道隆がかげにしてすぎぬるなり、云うに甲斐なく死ぬれば不思議にて候をかくして暫くもすぎき。

又は日蓮房が存知の法門を人に疎ませんとこそたばかりて候らめ、あまりの事どもなれば誑惑顯われなんとす、但しはらくねうじて御覽ぜよ、根露れぬれば枝かれ源、渴けば流尽くると申す事あり、恐恐謹言。

弘安元年 戊寅 八月十一日

日蓮 花押

弥源太入道殿

二四〇 さじき女房御返事

建治元年五十四歳御作

1231p

女人は水のごとしうつは物にしたがつ 女人は矢のごとし弓につがはさる 衆人はふねのごとしがぢのまかするによるべし、しかるに女人はをそこぬす人なれば女人ぬす人となるをそこ主なれば女人きさきとなるをそこ善人なれば女人・仏になる、今生のみならず後生もをそこによるなり、しかるに兵衛のさゑもんどの法華經の行者なり、たとひいかなる事ありともをそこめなれば法華經の女人とこそ仏は・しろしめされて供らんに・又我とこころををこして法華經の御ために御かたびらをくりたびて候。

法華經の行者に二人あり・聖人は皮をはいで文字をつつす 凡夫はただひとつきて焼かたびらなどを法華經の行者に供養すれば皮をはぐうちに仏をさめさせ給うなり、此の人のかたびらは法華經の六万九千三百八十四の文字の仏にまいらせさせ給いぬれば六万九千三百八十四のかたびらなり、又六万九千三百八十四の仏・一六万九千三百八十四の文字なれば此のかたびらも又かくのごとし、たとひはるの野の千里ばかりにくさのみちて候はんにすこしの豆ばかりの火をくさひとつにはなちたれば一時に無量無辺の火となる、此のかたびらも又かくのごとし、ひとつのかたびらなれども法華經の一切の文字の仏にたてまつるべし。

この功德は父母 祖父母 乃至無辺の衆生にもをよぼしてん、ましてわがいとをしとをもふをとこは申すに及ばずと、おぼしめすべし、おぼしめすべし。

五月二十五日

日蓮 花押

さじき女房御返事

二四一

棧敷女房御返事

建治四年二月五十七歳御作

1232p

白かたびら布一給い畢んぬ、法華經を供養申しまいらせ候に十種くやうと申す十のやう候、其のなかに衣服と申し候は
なににても候へ僧のき候物をくやうし候、其の因縁をとかれて候には過去に十萬億の仏をくやうせる人、法華經に近づき
まいらせ候とこそとかれて候へあらあら申すべく候ども、身にいたはる事候間こまやかならず候、恐恐謹言。

二月十七日

日蓮 花押

さじきの女房御返事

二四二

善無畏抄

建治元年五十四歳御作

1232p

善無畏三歳は月氏烏菟奈国の仏種王の太子なり、七歳にして位に即き給う十三にして国を兄に譲り出家遁世し五
天竺を修行して五乗の道を極め三学を兼ね給いき、達磨掬多と申す聖人に値い奉りて真言の諸印契一時に頓受し即日
御灌頂なし人天の師と定まり給いき、足山に入りては迦葉尊者の髪を剃り王城に於て雨を祈り給い
しかば觀音日輪の中より出て水瓶を以て水を灌ぎ、北天竺の金粟王の塔の下にして仏法を祈請せしかば文殊師利菩薩
大日經の胎藏の曼荼羅を現して授け給う、其の後開元四年丙辰に漢土に渡る玄宗皇帝之を尊むこと日月の如し、又大
旱魃あり皇帝勅宣を下す、三蔵一鉢に水を入れ暫く加持し給いに水の中に指許りの物有り變じて竜

と成る其の色赤色なり、白氣立ち昇り鉢より竜出でて虚空に昇り忽に雨を降す、此の如くいみじき人なれども一時に頓死して有りき、蘇生りて語つて云く我死する時獄卒来りて鉄の繩七筋付け鉄の杖を以て散散にさいなみ閻魔宮に到りにき、八万聖教一字一句も覚えず唯法華經の題名許り忘れざりき題名を思いしに鉄の繩少し許ぬ息続いて高声に唱えて云く今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子而今此処多諸患難唯我一人能為救護等云云、七つの鉄の繩切れ砕け十方に散す閻魔冠を傾けて南庭に下り向い給いき、今度は命尽きずとて歸されたるなりと語り給いき、今日蓮不審して云く善無畏三蔵は先生に十善の戒力あり五百の仏陀に仕えたり、今生には捨て難き王位をつばきを捨てるが如く之を捨て幼少十三にして出家し給い月支国を廻りて諸宗を習い極め天の感を蒙り化道の心深くして震旦国に渡りて真言の大法を弘めたり、一印一真言を結び誦すれば過去現在の無量の罪滅しぬらん何の科に依りて閻魔の責をば蒙り給いけるやらん不審極り無し、善無畏三蔵真言の力を以て閻魔の責を脱れずば天竺震旦日本等の諸国の真言師地獄の苦を脱る可きや、委細に此の事を勸えたるに此の三蔵は世間の輕罪は身に御せず諸宗並びに真言の力にて滅しぬらん、此の責は別の故無し法華經誹謗の罪なり、大日經の義釈を見るに此の經は是れ法王の秘宝妄りに卑賤の人に示さず、釈迦出世の四十余年に舍利弗慇懃の三請に因つて方に為に略して妙法蓮華の義を説くが如し、今此の本地の身又是れ妙法蓮華最深秘處なり、故に寿命品に云く「常に靈鷲山及び余の諸の住処に在り、乃至我が浄土は毀れざるに而も衆は燒き尽くと見る」と、即ち此の宗瑜伽の意なるのみ、又補處の菩薩の慇懃三請に因つて方に為に之を説く」等云云、此の釈の心は大日經に本迹二門開三顯一開近顯遠の法門有り、法華經の本迹二門の如し、此の法門は法華經に同じけれども此の大日經に印と真言と相加わりて三密相応せり、法華經は但意密許りにて身口の二密闕けたれば法華經をば略説と云い大日經をば広説と申す可きなりと書かれたり、此の法門第一の謗法の根本なり、此の文に二つのり有り、又義釈に云く

「此の経横に一切の仏教を統ぶ」等云云、大日経は当分随他意の経なるを、りて随自意跨節の経と思えり、かたがたりたるを実義と思し食す故に閻魔の責をば蒙りたりしか智者にて御座せし故に此の謗法を悔い還えして法華経に翻りし故に此の責を免がるるか、天台大師釈して云く「法華は衆経を総括す乃至輕慢止まざれば舌口中に爛る」等云云、妙樂大師云く「已今当の妙此に於て固く迷えり舌爛止まざるは猶華報と為す、謗法の罪苦長劫に流る」等云云、天台・妙樂の心は法華経に勝れたる経有りと云はむ人は無間地獄に墮つ可しと書かれたり善無畏三蔵は法華経と大日経とは理は同じけれども事の印・真言は勝れたりと書かれたり、然るに二人の中に一人は必悪道に墮つ可しとをばふる処に天台の釈は経文に分明なり、善無畏の釈は経文に其証拠見え、其の上閻魔王の責の時我が内証の肝心と思食す大日経等の三部経の内文を誦せず、法華経の文を誦して此の責を免れぬ、疑無く法華経に真言勝ると思うを翻したるなり其の上善無畏三蔵の御弟子不空三蔵の法華経の儀軌には大日経・金剛頂経の両部の大日をば左右に立て法華経多宝仏をば不二の大日と定めて両部の大日をば左右の巨下の如くせり。伝教大師は延暦二十三年の御入唐靈感寺の順・曉和尚に真言三部の秘法を伝う、仏滝寺の行滿座主に天台止観宝珠を請け取り顕密二道の奥旨を極め給いたる人、華嚴三論・法相律宗の人人の自宗我慢の辺執を倒して天台大師に帰入せる由を書かせ給いて候、依憑・集守護章・秀句なむと申す書の中に善無畏・金剛智・不空等は天台宗に帰入して智者大師を本師と仰ぐ由のせられたり、各各思えらく宗を立てる法は自宗をほめて他宗を嫌うは常の習なりと思えり、法然なむとは又此例を引きて曇鸞の難易道・綽の聖道・浄土善導が正・維・二行の名目を引きて天台・真言等の大法を念仏の方便と成せり、此等は牛跡に大海を入れ果の額を州に打つ者なり、世間の法には下剋上・背上向下は国土亡乱の因縁なり、仏法には権小の経経を本として実経をあなづる、大謗法の因縁なり恐る可し恐る

可し。

嘉祥寺の吉蔵大師は三論宗の元祖、或時は一代聖教を五時に分け、或時は二蔵と判ぜり、然りと雖も竜樹菩薩の造の百論・中論十二門論大論を尊んで般若經を依憑と定め給ひ、天台大師を迈執して過ぎ給ひし程に智者大師の梵網等の疏を見て少し心とけやうやう近づきて法門を聴聞せし程に結句は一百余人の弟子を捨て般若經並びに法華經をも講ぜず七年に至つて天台大師に仕えさせ給いき、高僧伝には「衆を散じ身を肉橋と成す」と書かれたり、天台大師高坐に登り給えば寄りて肩を足に備え路を行き給えば負奉り給うて堀を越え給いき、吉蔵大師程の人だにも謗法を恐れてかくこそ仕え給ひしか、然るを真言三論・法相等の宗宗の人人今末末に成りて迈執せさせ給うは自業自得果なるべし。

今の世に浄土宗・禅宗など申す宗宗は天台宗にをとされし真言・華嚴等に及ぶ可からず、依經既に楞伽經・觀經等なり此等の經經は仏の出世の本意にも非ず一時一会の小經なり一代聖教を判ずるに及ばず、而も彼の經經を依經として一代の聖教を聖道・淨土・難行・易行・雜行・正行に分ち教外別伝なむどののしる、譬えば民が王をしえたげ小河の大海を納むるが如し、かかる謗法の大師どもを信じて後生を願う人人は無間地獄脱る可きや、然れば当世の愚者は仏には釈迦牟尼仏を本尊と定めぬれば自然に不孝の罪脱がれ法華經を信じぬれば不慮に謗法の科を脱れたり。

其の上女人は五障三従と申して世間出世に嫌われ一代の聖教に捨てられ畢んぬ、唯法華經計りにこそ竜女が仏に成り諸の尼の記はさづけられて候ぬれば一切の女人は此の經を捨てさせ給ひては何の經をか持たせ給うべき、天台大師は震旦国の人・仏滅後・一千五百年に仏の御使として世に出でさせ給いき、法華經に三十卷の文を注し給ひ文句と申す文の第七の卷には「他經には但男に記して女に記せず」と等云、男子も余經にては仏に成らざれども且らく与えて其をば許してむ、女人に於ては一向諸經に於ては叶う可からずと書かれて候、縦令千万の經經に女人成る可しと許され為りと雖も法華經に嫌われなば何の憑か有る可きや。

教主釈尊我が諸經四十余年の経經を末頭真実と悔い返し涅槃經等をば当説と嫌ひ給ひ無量義經をば今説と定め置
 き、三説に秀でたる法華經に「正直に方便を捨て但無上道を説く世尊の法は久しくして後要当に真実を説くべし」と
 釈尊宣へ給ひしかば、宝淨世界の多宝仏は大地より出でさせ給ひて真実なる由の証明を加え、十方分身
 の諸仏広長舌を梵天に付け給う、十方世界微塵数の諸仏の舌相は不妄語戒の力に酬いて八葉の赤蓮華に生出させ給ひ
 き、一仏・二仏三仏乃至十仏百仏千万億仏の四百万億那由他の世界に充滿せる仏の御舌を以て定め置き給える女人
 成仏の義なり、謗法無くして此の経を持つ女人は十方虚空に充滿せる慳貪嫉妬瞋恚・十惡五逆なりとも草木の露の
 大風にあえるなる可し三冬の氷の夏の日に滅するが如し、但滅し難き者は法華經謗法の罪なり、譬えば三千大千世界の
 草木を薪と為すとも須弥山は一分も損じ難し、縱令七つの日出でて百千日照すとも大海の中をばかわかしがたし、設い
 八万聖教を読み大地微塵の塔婆を立て大小乗の戒行を尽し十方世界の衆生を一子の如くに為すとも法華經謗法の
 罪はきゆべからず、我等過去現在・未來の三世の間に仏に成らずして六道の苦を受くるは偏に法華經誹謗の罪なるべし、
 女人と生れて百惡身に備ふるも根本此の経誹謗の罪より起れり。
 然者此の経に値ひ奉らむ女人は皮をはいで紙と為し血を切りて墨と為し骨を折りて筆と為し血の涙を硯の水と為して書
 き奉ると雖も飽く期あるべからず、何に況や衣服・金銀・牛馬・田畠等の布施を以て供養せむはものの
 かずにてかずなりす。

青鼻五貫文給い候い畢んぬ、夫れ五戒の始は不殺生戒六波羅蜜の始は檀波羅蜜なり、十善戒二百五十戒十重禁戒等の一切の諸戒の始めは皆不殺生戒なり、上大聖より下蚊虻に至るまで命を財とせざるはなし、これを奪は又第一の重罪なり、如来世に出で給いては生をあわれむを本とす、生をあわれむしには命を奪はず施食を修するが第一の戒にて候なり、人に食を施すに三の功德あり・一には命をつぎ・二には色をまし・三には力を授く、命をつぐは人中天上に生れては長命の果報を得仏に成りては法身如来と顕れ其の身虚空と等し、力を授くる故に人中天上に生れては威徳の人と成りて眷属多し、仏に成りては報身如来と顕れて蓮華の台に居し八月十五夜の月の晴天に出でたるが如し、色をます故に人中天上に生れては三十二相を具足して端正なる事華の如く、仏に成りては応身如来と顕れて釈迦仏の如くなるべし、夫れ須弥山の始を尋ねれば一塵なり大海の初は一露なり一を重ぬれば二となり二を重ぬれば三乃至十百千万億阿僧祇の母は唯一なるべし。

されば日本国には仏法の始まりし事は天神七代・地神五代の後人王百代其の初めの王をば神武天皇と申す、神武より第三十代に当りて欽明天皇の御宇に百濟国より経並びに教主釈尊の御影僧尼等を渡す、用明天皇の太子の上宮と申せし人、仏法を読み初め法華経を漢土よりとりよせさせ給いて疏を作りて弘めさせ給いき、それより後人王三十七代孝徳天皇の御宇に觀勒僧正と申す人新羅国より三論宗・成実宗を渡す、同じき御代に道昭と申す

僧漢土より法相宗・俱舍宗を渡す、同じき御代に審祥大徳・華嚴宗を渡す、第四十四代・元正天皇の御宇に天竺の上人・大日経を渡す、第四十五代・聖武天皇の御宇に鑑真和尚と申せし人漢土より日本国に律宗を渡せし。

次で天台宗の玄義・文句・円頓止觀・淨名疏等を渡す、然れども真言宗と法華宗との二宗をばいまだ弘め給はず、人王第五十代桓武天皇の御代に最澄と申す小僧あり後には伝教大師と号す、此の人入唐已前に真言宗と天台宗の二宗の章疏を十五年が間、但一人見置き給いき、後に延暦二十三年七月に漢土に渡り、が今年の六月に本朝に著かせ給いて、天台・真言の二宗を七大寺の碩学数十人に授けさせ給いき、其の後于今四百年なり、総じて日本国に仏法渡りて于今七百余年なり、或は弥陀の名号、或は大日の名号、或は釈迦の名号等をば一切衆生に勧め給へる人、はおはすれども、いまだ法華經の題目・南無妙法蓮華經と唱へよと勧めたる人なし、日本国に限らず月氏等にも仏滅後・一千年の間、迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親等の大論師、佛法を五天竺に弘通せしかども、漢土に仏法渡りて数百年の間、摩騰・迦竺・法蘭・羅什・三蔵・南岳・天台・妙楽等、或は疏を作り、或は經を釈せしかども、いまだ法華經の題目をば弥陀の名号の如く勧められず、唯自身一人計り唱へ、或は經を講ずる時、講師計り唱る事あり、然るに八宗・九宗等其の義まちまちなれども、多分は弥陀の名号次には觀音の名号次には釈迦仏の名号次には大日・薬師等の名号をば唱給へる高祖先德等はおはすれども何なる故有りてか、一代諸教の肝心たる法華經の題目をば唱えりけん、其の故を能く能く尋ね習い給ふべし、譬えば大医の一切の病の根源薬の浅深は弁へたれども故なく大事の薬をつかふ事なく病に随ふが如し。

されば仏の滅後正像二千年の間は煩惱の病、輕かりければ一代第一の良薬の妙法蓮華經の五字をば勧めざりけるか、今末法に入りぬ人毎に重病有り、阿弥陀・大日・釈迦等の輕薬にては治し難し、又月はいみじけれども秋にあらざれば光を惜む、花は目出けれども春にあらざればさかず、一切時による事なり、されば正像二千年の間は題目の流布の時に当らざるか、又仏教を弘るは仏の御使なり、随つて仏の弟子の譲りを得る事各別なり、正法千年に出でし論師像法千年に出づる人師等は多くは小乗・權大乘・法華經の、或は迹門、或は枝葉を譲られし人人なり、

いまだ本門の肝心たる題目を譲られし上行菩薩世に出現し給はず、此の人末法に出現して妙法蓮華經の五字を一閻浮提の中國ごと人ごとに弘むべし、例せば當時日本國に弥陀の名号の流布しつるが如くなるべきか。

然るに日蓮は何の宗の元祖にもあらず又末葉にもあらず持戒破戒にも闕て無戒の僧有智無智にもはづれたる牛羊の如くなる者なり、何にしてか申し初めけん上行菩薩の出現して弘めさせ給うべき妙法蓮華經の五字を先立てねこの様に心にもあらず南無妙法蓮華經と申し初て候し程に唱うる者なり、所詮よき事にや候らん。

又悪き事にや侍るらん我もしらず人もわきまへかたきか、但し法華經を開いて拝し奉るに此の經をば等覺の菩薩文殊・弥勒觀音普賢までも輒く一句一偈をも持つ人なし、「唯仏与仏」と説き給へり、されば華嚴經は最初の頓説円満の經なれども法慧等の四菩薩に説かせ給ふ、般若經は又華嚴經程こそなけれども当分は最上の經ぞ

かし、然れども須菩提これを説く、但法華經計りこそ三身円満の釈迦の金口の妙説にては候なれ、されば普賢・文殊なりとも輒く一句一偈をも説かせ給うべからず、何に況や末代の凡夫我等衆生は一字・二字なりとも自身には持ちがたし、諸宗の元祖等法華經を読み奉れば各各其の弟子等は我が師は法華經の心を得給へりと思へ、然れ

ども詮を論ずれば慈恩大師は深密經唯識論を師として法華經をよみ、嘉祥大師は般若經中論を師として法華經をよむ、杜順法藏等は華嚴經十住毘婆沙論を師として法華經をよみ、善無畏・金剛智・不空等は大日經を師として法華經をよむ、此等の人人は各法華經をよめりと思へども未だ一句一偈もよめる人にはあらず、詮を論ずれ

ば伝教大師ことわりて云く「法華經を讀すと雖も還つて法華の心を死す」云云、例せば外道は仏經をよめども外道と同じ蝙蝠が昼を夜と見るが如し、又赤き面の者は白き鏡も赤しと思ひ太刀に顔をうつせるもの円かなる面をほそながしと思ふに似たり。

今日蓮は然らず已今当の經文を深くまほり一經の肝心たる題目を我も唱へ人にも勧む、麻の中の蓬墨つてゐる

木の自体は正直ならざれども自然に直ぐなるが如し、経のまゝに唱つればまがれる心なし、当に知るべし仏の御心の我等が身に入らせ給はずば唱へたきか、又それ他人の弘めさせ給ふ仏法は皆師より習ひ伝へ給へり、例せば鎌倉の御家人等の御知行所領の地頭、或は一町二町なれども皆故大將家の御恩なり、何に況や百町・千町・

一国・二国を知行する人人をや、賢人と申すはよき師より伝へたる人聖人と申すは師無くして我と覚れる人なり、仏滅後がっし、漢土、日本国に二人の聖人あり所謂天台・伝教の二人なり、此の二人をば聖人とも云うべし又賢人とも云うべし、天台大師は南岳に伝えたり是は賢人なり、道場にして自解仏乗し給ひぬ又聖人なり、伝教

大師は道邃・行滿に止観と円頓の大戒を伝へたりこれは賢人なり、入唐已前に日本国にして真言・止観の二宗を師なくしてざとり極め、天台宗の智慧を以て六宗・七宗に勝れたりと心得給ひしは是れ聖人なり、然れば外典に云く「生れながらにして之を知る者は上なり」とは聖人、学んで之を知る者は次なり」とは賢人、「内典に云く

「我が行師の保無し」等云云、夫れ教主釈尊は娑婆世界第一の聖人なり、天台・伝教の二人は聖賢に通ずべし、馬鳴・龍樹・無著・天親等老子・孔子等は或は小乘、或は権大乘、或は外典の聖賢なり、法華經の聖賢には非ず。

今日蓮は聖にも賢にも非ず持戒にも無戒にも有智にも無智も当らず、然れども法華經の題目の流布すべき後、五百歳二千二百二十余年の時に生れて近くは日本国遠くは月氏、漢土の諸宗の人人唱始めざる先に南無妙法蓮華經と高声によばはりて二十余年をふる間、或は罵られ打たれ、或は疵をかつほり、或は流罪に二度死罪に一度

定められぬ、其の外の大難数をしらず、譬は火湯に大豆を漬し小水に大魚の有るが如し、経に云く「而も此の経は如来の現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」と云く「一切世間怨多くして信じ難し」と云く「諸の無智

の人有りて悪口罵詈す」或は云く「刀杖瓦石を加え、或は数数擯出せらる」等云云、此等の経文は日蓮、日本国に生ぜずんば但仏の御言のみ有りて其の義空しかるべし、譬は花さき菓みならず、雷なりて雨ふらざらんが如し

仏の金言空くして正直の御経に大妄語を雑へたるなるべし、此等を以て思ふに恐くは天台・伝教の聖人にも及ぶべし又老子・孔子をも下しぬべし、日本国の中に但一人南無妙法蓮華經と唱えたり、これは須弥山の始の一塵大海の始の一露なり、二人・三人・十人・百人・二国・三國・六十六箇国・已に島二にも及びぬらん、今は謗ぜし人人も唱へ給うらん、又上一人より下万民に至るまで法華經の神力品の如く一同に南無妙法蓮華經と唱へ給ふ事もやあらんずらん、木はしづかならんと思へとも風やまず春を留んと思へとも夏となる、日本国の人人は法華經は尊とけれども日蓮房が悪ければ南無妙法蓮華經とは唱えまじとことわり給ふとも今一度も二度も大蒙古国より押し寄せて壹岐對馬の様に男をば打ち死し女をば押し取り京鎌倉に打ち入りて国主並びに大臣百官等を搦め取り牛馬の前にけたてつよく責めん時は争か南無妙法蓮華經と唱へざるべき、法華經の第五の巻をもつて日蓮が面を数箇度打ちたりしは日蓮は何とも思はずうれしくぞ侍りし、不輕品の如く身を責め勸持品の如く身に當つて責し。

但し法華經の行者を惡人に打たせしと仏前にして起請をかきたりし梵王・帝釈・日月・四天等いかに口惜かるらん、現身にも天罰をあたらざる事は小事ならざれば始中終をくくりて其の身を亡すのみならず議せらるるか、あ今日蓮が失にあらす謗法の法師等をたすけんが為に彼等が大禍を自身に招きよせさせ給うか。

此等を以て思ふに便宜ごとの青鳧五連の御志は日本国の法華經の題目を弘めさせ給ふ人に当れり、国中の諸人・一人・二人乃至千万億の人題目を唱うるならば存外に功德身にあつまらせ給うべし、其の功德は大海の露をあつめ須弥山の微塵をつむが如し、殊に十羅刹女は法華經の題目を守護せんと誓わせ給う、此を推するに妙密上人並びに女房をば母の一子を思ふが如く、牛の尾を愛するが如く昼夜にまほらせ給うらん、たのもしたのもし、事多しといふとも委く申すにいとまあらず、女房にも委く申し給へ此は諂言にはあらず、金はやけば弥

色まさり剣はとげば弥利くなる法華經の功德はほむれば弥功德まさる、二十八品は正き事はわづかなり讃むる言こそ多く候へと思食すべし。

閏三月五日

日蓮 花押

谷妙密上人御返事

二四四 道妙禅門御書「四種祈 御書」

1242p

御親父祈 事承り候間、仏前にて祈念申すべく候、祈 に於ては、顕祈・顯心・顯祈・冥心・冥祈・冥心・冥祈・顯心の祈 有りと雖も、只肝要は、此の經の信心を致し給ひ候はば、現当の所願満足有るべく候、法華第三に云く「魔及び魔民有りと雖、皆佛法を護る」、第七に云く「病即消滅して不老不死ならん」との金言之を疑ふべからず、妙一尼御前当山參詣有難く候、巻物一巻之を進らせ候、披見有るべく候、南無妙法蓮華經。

建治二年丙子八月十日 日蓮 花押

道妙禅門

御本尊供養の御為に驚目五貫・白米一駄・菓子其の数送り給ひ候い畢んぬ、抑此の御本尊は在位五十年の中には八年の間に涌出品より属累品までに八品に顕れ給うなり、さて滅後には正法・像法・末法の中には正像二千年にはいまだ本門の本尊と申す名だにもなし、何に況や顕れ給はんをや又顕すべき人なし、天台・妙楽・伝教等は内にはかんがみ給へども故こそあるらめ言には出だし給はず、彼の顔淵が聞きし事意にはさるといふとも、言に出していはざるが如し、然るに仏滅後二千年過ぎて末法の始の五百年に出現せさせ給ふべき山經文赫赫たり明明たり、天台・妙楽等の解釈分明なり。

ここに日蓮いかなる不思議にてや候らん竜樹・天親等・天台・妙楽等だにも顕し給はざる大曼荼羅を・末法二百余年の比はじめて法華弘通のはたじるとして顕し奉るなり、是全く日蓮が自作にあらず多宝塔中の大牟尼世尊分身の諸仏すしかたぎたる本尊なり、されば首題の五字は中央にかかり四天王は宝塔の四方に坐し釈迦多宝・本化の四菩薩肩を並べ普賢・文殊等・舍利弗・日蓮等坐を屈し、日天・月天・第六天の魔王・竜王・阿修羅・其の外不動・愛染は南北の二方に陣を取り・惡逆の達多・愚癡の竜女一座をはり・三千世界の人の寿命を奪ふ惡鬼たる鬼子母神・十羅刹女等・加之・日本国の守護神たる天照太神・八幡大菩薩・天神七代・地神五代の神神、総じて大小の神祇等・体の神つらなる其の余の用の神豈もるべきや、宝塔品に云く「諸の大衆を接して皆虚空に在り」と云、此等の仏・菩薩・大聖等・総じて序品列坐の二界八番の雜衆等一人ももれず、此の御本尊の中に住し給ひ妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる是をを本尊とは申すなり。

經に云く「諸法実相」是なり、妙樂云く「実相は必ず諸法、諸法は必ず十如乃至十界は必ず身土」云云、又云く「実相のじんりほんぬ、妙法蓮華經」等と云云、伝教大師云く「一念三千即自受用身、自受用身とは出尊形の仏、文、此の故に未曾有の大曼荼羅とは名付け奉るなり、仏滅後二千二百二十余年には此の御本尊、まだ出現し給はずと云う事なり。

かかる御本尊を供養し奉り給ふ女人、現在には幸をまねぎ後生には此の御本尊、左右前後に立ちそひて闇に燈の如く、險難の処に強力を得たるが如く、彼こまはり此へより、日女御前をかこみまほり給うべきなり、相構え相構えてとわりを我が家へせたくもなき様に誘法の者をせかせ給うべし、悪知識を捨てて善友に親近せよとは是なり。

此の御本尊全く余所に求る事なかれ、只我れ等衆生の法華經を打ちて南無妙法蓮華經と唱うる胸中の肉団におはしますなり、是を九識心王責如の都とは申すなり、十界具足とは十界一界もかけず一界にあるなり、之に依つて曼荼羅とは申すなり、曼荼羅と云うは天竺の名なり、此には輪円具足とも功德聚とも名くるなり、此の御本尊も只信心の二字にをさまり、以信得入とは是なり。

日蓮が弟子、檀那等・正直捨方便、不受余經一偈と無二に信ずる故によつて、此の御本尊の宝塔の中へ入るべきなり。たのもしたのもし、如何にも後生をたしなみ給ふべし、たしなみ給ふべし、穴賢・南無妙法蓮華經とげかり叫々仏になるべき事尤も大切ななり、信心の厚薄によるべきなり、仏法の根本は信を以て源とす、されば止觀の四に云く「仏法は海の如し、唯信のみ能く入る」と、弘決の四に云く「仏法は海の如し、唯信のみ能く入る」と、弘決の四に云く「仏法は海の如し、唯信のみ能く入るとは孔丘の言

尚信を首と為す況や仏法の深理をや信無くして寧ろ入らんや、故に華嚴に信を道の元、功德の母と為す」等、又止の二に云く「何が円の法を開き、日の信を起し、円の行を立て、円の位に住せん、弘の一に云く「円信」とうは理

に放つて信を起す信を行の本と為す云云、外典に云く「漢王位の説を信ぜしかば河上の波忽ちに冰り李広父
のを思いしかば草中の石羽を飲む」と云えり、所詮天台・妙楽の釈分明に信を以て本とせり、彼の漢王も疑はずして
大臣のことはを信ぜしかば立波こほり行くぞかし、石に矢のたつ是れ又父のかたきと思ひし至信の故なり、
何に況や仏法においてをや、法華經を受け持ちて南無妙法蓮華經と唱うる即五種の修行を具足するなり、比の事伝教
大師入朽して道邃和尚に値い奉りて五種頓修の妙行と云う事を相伝し給ふなり、日蓮が弟子檀那の肝要是より外に求
る事なかれ、神力品に云く、委くは又又申す可く俟、穴賢穴賢。

建治三年八月二十三日

日蓮 花押

日女御前御返事

二四六 日女御前御返事 弘安元年六月 五十七歳御作

1245p

御布施七貫文送り給ひ畢んぬ、属累品の御心は仏虚空に立ち給いて四百万億那由他の世界にむさしのすすきのこと
く富士山の木のごとくぞくぞくとひぎをつめよせて頭を地につけ身をまげ掌をあはせあせを流し、つゆしげくおはせし
上行菩薩等・文殊等・大梵天王・帝釈・日月・四天王・竜王・十羅刹女等に法華經をゆづらん
がために、三度まで頂をなでさせ給ふ、譬えば悲母の一子が頂のかみをなづるがごとし、爾の時に上行乃至日月等
忝き仰せを蒙りて法華經を末代に弘通せんとちかひ給いしなり、薬王品と申すは昔喜見菩薩と申せし菩薩・日月
浄明德仏に法華經を習わせ給いて其の師の恩と申し法華經のたうとさと申しかんにたかねて万の重宝を尽くさせ給いし
かどもなを心ゆかずして身に油をぬりて千二百歳の間、當時の油にとつしみを入れてたく

がごとく身をたいて仏を供養し後に七万二千歳が間ひぢをともしびとしてたきつくし法華經を御供養候き。

されば今法華經を後五百歳の女人供養せば其の功德を一分ものこそずゆづるべし、譬えば長者の一子に一切の財宝をゆづるがごとし、妙音品と申すは東方の淨華宿王智仏の国に妙音菩薩と申せし菩薩あり、昔の雲雷音王仏の御代に妙莊嚴王の後淨徳夫人なり、昔法華經を供養して今妙音菩薩となれり、釈迦如来の娑婆世界にして法華經を説き給ふにまいりて約束申して末代の女人の法華經を持ち給うをまもるべしと云云。觀音品と申すは又普門品と名く、始は觀世音菩薩を持ち奉る人の功德を説きて候、此を觀音品と名づく後には觀音の持ち給へる法華經を持つ人の功德をとけり此を普門品と名く、陀羅尼品と申すは二聖・二天・十羅刹女の法華經の行者を守護す

べき様を説きけり、一聖と申すは藥王と勇施となり、二天と申すは毘沙門と持国天となり十羅刹女と申すは十人の大鬼神女四天下の一切の鬼神の母なり又十羅刹女の母あり鬼子母神是なり、鬼のならひとして人を食す、

人に三十六物あり所謂糞と尿と唾と肉と血と皮と骨と五蔵と六腑と髪と毛と氣と命等なり、而るに下品の鬼神は糞等を食し中品の鬼神は骨等を食す上品の鬼神は精氣を食す、此の十羅刹女は上品の鬼神として精氣を食す疫病の大鬼神なり、鬼神に二あり一には善鬼二には惡鬼なり、善鬼は法華經の怨を食す惡鬼は法華經の行者を

食す、今日本国の去年今年の大疫病は何とか心うべき此を答ふべき様は一には善鬼なり梵王・帝釈・日月・四天の許されありて法華經の怨を食す、二には惡鬼が第六天の魔王のすすめによりて法華經を修行する人を食す、善鬼が法華經の怨を食ふことは官兵の朝敵を罰するがごとし、惡鬼が法華經の行者を食ふは強盜夜討等が官兵を殺

すがごとし、例せば日本国に仏法の渡りてありし時、仏法の敵たりし物部の大連守屋等も疫病をやみき蘇我・宿禰の馬子等もやみき、欽明・敏達用明の三代の国王は心には仏法釈迦如来を信じまいらせ給いてありしかども外には国の礼にまかせて天照太神熊野山等を仰ぎまいらせさせ給ひしかども仏と法との信はつすく神の信はあ

つかりしかば強きにひかれて三代の国王・疫病疱瘡にして崩御ならせ給いき、此をもて上の二鬼をも今の代の世間の人人の疫病をも日蓮が方のやみしぬをも心うつべし、されば身をすて信ぜん人人はやまぬへんもあるべし・

又やむともたすかるへんもあるべし、又大悪鬼に値いなば命を奪はるる人もあるべし、例せば畠山重忠は日本第一の大力の大将なりしかども多勢には終にほろびぬ。

又日本国の一切の真言師の悪霊となれりと並に禅宗・念仏者等が日蓮をあだまんがために国中に入り乱れたり、又梵釈・日月十羅刹の眷属日本国に乱入せり、両方互に責めとらんとはげむなり、而るに十羅刹女は総じて法華經の行者を守護すべしと誓はせ給いて候はば一切の法華經を持つ入人をば守護せさせ給うらんと思ひ候

に法華經を持つ入人も或は大日經はまされりなど申して真言師が法華經を誦誦し候はがへりてそしるにて候なり、又余の宗宗も此を以て押し計るべし、又法華經をば經のごとく持つ入人も法華經の行者を或は貪・瞋・癡により或は世間の事により或はしなじなのふるまひによつて憎む人あり、此は法華經を信ずれども信ずる功德な

しかへりて罰をかほるなり、例せば父母などには謀反等より外は子息等の身として此に背けば不孝なり、父が我がいとをしめをとり母が我がいとをしきおとを奪ふとも子の身として一分も違はば現世には天に捨てられ

後生には必ず阿鼻地獄に墮つる業なり、何に況や父母にまされる賢王に背かをや、何に況や父母国王に百千万億倍まされる世間の師をや、何に況や出世間の師をや、何に況や法華經の御師をや。

黄河は千年に一度すむといへり聖人は千年に一度出ずるなり、仏は無量劫に一度出世し給ふ、彼には値うといへども法華經には値いがたし、設ひ法華經に値い奉るとも末代の凡夫法華經の行者には値いがたし、何ぞなれば末代の法華經の行者は法華經を説ざる華嚴・阿含・方等・般若・大日經等の千二百余尊よりも末代に法華經を説く行者は勝れて候なるを、妙樂大師釈して云く「供養すること有る者は福十号に過ぎ若し悩乱する者は頭七分に破れ

んに云、今日本国の者去年今年の疫病と去正嘉の疫病とは人王始まりて九十余代に並なき疫病なり、聖人の国にあるをあだむゆへと見えたり、師子を吼る大は腸切れ日月をのみ修羅は頭の破れ候なるはこれなり、日本国の一切衆生すでに三分が二はやみぬ又半分は死しぬ今一分は身はやまされども心はやみぬ、又頭も頸にも冥にも破ぬらん、罰に四あり総罰別罰冥罰蹟罰なり、聖人をあだめは総罰一國にわたる又四天下又六欲四禪にわたる、賢人をあだめは但敵人等なり、今日本国の疫病は総罰なり定めて聖人の國にあるをあだむか、山は玉をいだけば草木かれず國に聖人あれば其の國やぶれず、山の草木のかれぬは玉のある故とも愚者はしらず、國のやぶるは聖人をあだむ故とも愚人は弁ざるか。

設ひ日月の光ありとも盲目のために用ゆる事なし、設ひ声ありとも耳しひのためににの用があるべき、日本国の一切衆生は盲目と耳しひのごとし、此の一切の眼と耳とをくじりて一切の眼をあけ一切の耳に物をきかせんはいか程の功德があるべき、誰の人も此の功德をば計るべき、設ひ父母子をつみて眼耳有りと物を教ゆる師

なくば畜生の眼耳にてこそあらましか、日本国の一切衆生は十方の中には西方の一方一切の仏の中には阿弥陀仏一切の行の中には弥陀の名号此の三を本として余行をば兼ねたる人もあり一向なる人もありしに、某去ぬる

建長五年より今に至るまで二十余年の間、遠くは一代聖教の勝劣先後浅深を立て近くは弥陀念仏と法華經の題目との高下を立て申す程に上一人より下万民に至るまで此の事を用ひず、或は師師に問い或は主主に訴へ或は傍輩にかたり

或は我が身の妻子眷属に申す程に、國・郡・郷・村・寺・社に沙汰ある程に、人ごとに日蓮が名を知り法華經を念仏に対して念仏のいみじき様法華經の叶ひがたき事諸人のいみじき様日蓮わろき様を

申す程に上もあだみ下も悪む日本一同に法華經と行者との大怨敵となりぬ、かう申せば日本国の人人並に日蓮が方の中にも物におばえぬ者は人に信ぜられんとあらめ事を云うと思へり、此は仏法の道理を信じたる男女

に知らせんれうに申す、各各の心にまかせ給うべし。

妙莊嚴王品と申すは殊に女人の御ために用る事なり、妻が夫をすすめたる品なり、末代に及びても女房の男をすすめんは名こそかわりたりとも功德は但淨徳夫人のごとし、いはうや此は女房も男も共に御信用あり鳥の二の羽そなはり車の二つの輪かかれり何事か成ぜざるべき、天あり地あり日あり月あり日てり雨ふる功德の草木花さき菓なるべし。

次に勧発品と申すは釈迦仏の御弟子の中に僧はあまたありしかども迦葉阿難左右におはしき王の左右の臣の如し、此は小乗經の仏なり、又普賢文殊と申すは一切の菩薩多しといへども教主釈尊の左右の臣なり、而るに一代超過の法華經八箇年が間十方の諸仏菩薩等大地微塵よりも多く集まり候しに左右の臣たる普賢菩薩のお

はせざりしは不思議なりし事なり、而れども妙莊嚴王品をとかれてきておはりぬべかりしに東方宝威徳淨王仏の国より万億の伎樂を奏し無數の八部衆を引率しておくればせして参らせ給いしかば、仏の御きそくやあし

からんずらんと思ひし故にや色か今て末代に法華經の行者を守護すべきやうをねんごろに申し上られしかば、仏も法華經を閻浮に流布せんこととにねんごろなるべきと申すにやめでさせ給いけん、返つて上の上位よりもことにねんごろに仏ほめさせ給へう。

かかる法華經を末代の女人二十八品を品品ごとに供養せばやとおぼしめす但事にはあらず、宝塔品の御時は多宝如来釈迦如来十方の諸仏一切の菩薩あつまらせ給いぬ、此の宝塔品はいづれのところにしか只今ましますらんとかがへ候は、日女御前の御胸の間八葉の心蓮華の内におはしますと日蓮は見まいらせて候、例せば

蓮のみに蓮華の有るがごとく後の御腹に太子を懷妊せるがごとし、十善を持てる人太子と生んとして後の御腹にましませば諸天此を守護す故に太子をば天子と号す、法華經二十八品の文字六万九千三百八十四字二一の

もんじ
文字は字ごとに太子のごとし字母に仏の御種子なり、闇の中に影あり人・此をみず虚空に鳥の飛跡あり人・此をみず、
たいかい
大海に魚の道あり人これをみず月の中に四天下の人物一もかけず人・此をみず、而りといふとも天眼は此をみる。

にちによごぜん おんみ ないしん ほうとうぼん ほんぶ しゃか たほう じゅつぼう しょうぶつ
日女御前の御身の内心に宝塔品まします凡夫は見ずといふとも釈迦多宝十方の諸仏は御らんあり、日蓮又此をすい
すあらたうとしたうとし、周の文王は老たる者をやしなひていくさに勝ち、其の末三十七代八百年の

間すゑずゑはひが事ありしかども根本の功によりてさかさせ給ふ、阿闍世王は大悪人たりしかども父びんばさら王の仏
を数年やしなひまいらせし故に九十年の間位を持ち給いき、当世も又かくの如く法華経の御かたきに成りて候代なれば
しゅゆ 須臾も持つべしとはみえねども 故権の大夫殿武蔵の前司入道殿の御まつりごと いみじくて暫く安穩なるか、其も始終は
ほけきよう 法華経の敵と成りなば叶うまじきにや。

ひとびと びやくあん ねんぶつ ほけきよう うちわん ねんぶつ われら いずれ
此の人人の御僻案には念仏者等は法華経にちいなり日蓮は念仏の敵なり、我等は何れをも信じたりと云云、日蓮つめ
いわ て云く代に大禍なくば古にすぎたる疫病 飢饉 犬兵乱はいかに、召も決せずして法華経の行者を二度まで大科に行ひし
ふびん 不便・不便、而るに女人の御身として法華経の御命をつがせ給うは釈迦多宝十方の諸仏の御父母の御命をつ
たま がせ給うなり此の功德をもてる人・一閻浮提に有るべしや、恐恐謹言。

にちれんかおう
六月二十五日日蓮花押

にちによごぜんごへんじ
日女御前御返事

近日誰やらん承りて申し候は内内還俗の心中出来候由風聞候ひけるは実事にてや候らん虚事にてや候らん心元なく候間・一筆啓せしめ候、凡父母の家を出でて僧となる事は必ず父母を助くる道にて候なり、出家功德經に云く「高き三十三天に百千の塔婆を立つるよりも一日出家の功德は勝れたり」と、されば其の身は無智無行にも

あれかみをそり袈裟をかくる形には天魔も恐をなすと見えたり、大集經に云く「頭を剃り袈裟を着くれば持戒及び毀戒も天人供養す可し則ち仏を供養するに為りぬ」云云、又一經の文に有人海辺をとをる一人の餓鬼あつて喜び踊れり、其の謂れを尋ねれば我が七世の孫今日出家になれり其の功德にひかれて出離生死せん事喜ばしきなり

と答へたり、されば出家と成る事は我が身助かるのみならず親をも助け上無量の父母まで助かる功德あり、されば人身をつくること難く人身をつけても出家と成ること尤も難し、然るに悪縁にあふて還俗の念起る事浅ましき

次第なり金を捨てて石をとり薬を捨てて毒をとるが如し、我が身悪道に墮つるのみならず六親眷属をも悪道に引かん事不便の至極なり。

其の上在家の世を渡る辛勞一方ならずやがて必ず後悔あるべし、只親のなされたる如く道をちがず出家にてあるべし、道を違へずば十羅刹女の御守り堅かるべし、道をちがへたる者をば神も捨てさせ給ふ理りにて候なり、大勢至經に云く「衆生五の失有り必ず悪道に墮ちん」には出家還俗の失なり、又云く「出家の還俗は其の失

五逆に過ぎたり、五逆罪と申すは父を殺し母を殺し仏を打ち奉りなどする大なる失を五聚めて五逆罪と云ふなり、されば此の五逆罪の人は一中劫の間無間地獄に墮ちて浮ぶ事なしと見えたり。

然るに今宿善薰発して出家せる人の還俗の心付きて落つるならば彼の五逆罪の人よりも罪深くして大地獄に墮つべしと申す經文なり、能く能く此の文を御覽じて思案あるべし、我が身は天よりもふらず地よりも出でず父母の肉身を分たる身なり、我が身を損ずるは父母の身を損ずるなり、此の道理を弁て親の命に随ふを孝行と云う

親の命に背くを不孝と申すなり、所詮心は兎も角も起れ身をば教の如く一期出家にてあらば自ら冥加も有るべし、此の理に背きて還俗せば仏天の御罰を蒙り現世には浅ましくなりはて後生には三惡道に墮ちぬべし、能く能く思案あるべし、身は無智無行にもあれ形出家にてあらば里にも喜び某も祝著たるべし、況や能き僧にて候はんをや、委細の趣後音を期し候。

弘安二年五月日

日蓮 花押

二四八 妙一尼御前御消息

1252p

妙一尼御前

夫れ天に月なく日なくば草木いかで生ずべき、人に父母あり一人もかけば子息等そだちがたし、其の上過去
の聖靈は或は病子あり、或は女子あり、とどめをく母もかいがいしからず、たれにいゝあつてか冥途にをもむき給いけ
ん。

大覺世尊 御捏盤の時なげいてのたまはく、我涅槃すべし但心にかかる事は阿闍世王のみ、迦葉童子菩薩 仏に申さく仏
は平等の慈悲なり一切衆生のためにいのちを惜み給うべし、いかにかきわけて阿笹吾人とをほせあるやらんと問いまいら
せしかば、其の御返事に云く「譬えば一人にして七子有り是の七子の中に一子病に遇え

り、父母の心平等ならざるには非ず、然れども病子に於ては心則ち偏に重きが如し等云云、天台摩訶止観に此の經文を釈して云く「譬えば七子の父母平等ならざるには非ず然れども病者に於ては心則ち偏に重きが如し等云云」とこそ仏は答えさせ給いしか、文の心は人にはあまたの子あれども父母の心は病する子にありとなり、仏

の御ためには一切衆生は皆子なり其の中罪ふかくして世間の父母をころし仏經のかたきとなる者は病子のごとし、しかるに阿闍世王は摩竭提国の主なり我が大檀那たりし頻婆舍羅王をころし我がてきとなりしかば天もすてて日月に變いで地も頂かじとふるひ万民みな佛法にそむき他国より摩竭国をせむ、此等は偏に惡人提婆達多

を師とせるゆへなり、結句は今日より惡瘡身に出て三月の七日無間地獄に墮つべし、これがかなしければ我涅槃せんこと心にかかるというなり、我阿闍世王をすくひなば一切の罪人阿闍世王のごとしとなげかせ給いき。

しかるに聖靈は或は病子あり或は女子ありわれすてて冥途にゆきなばかれたる朽木のやうなるとしより尼が一人とどまり此の子どもをいかに心ぐるしかるらんなげかれぬらんとおぼゆ、かの心のがたがたには又は日蓮が事心にかからせ給いけん、仏語むなしからざれば法華經ひろまらせ給つべし、それについては此の御房は

いかなる事もありていみじくならせ給つべしとおぼしつらん、いつかなくなりながし失しかばいかにやいかにや法華經十羅刹はとこそをもはれけんに、いままでだにもながらえ給いたりしかば日蓮がゆりて候いし時に悦ばせ給はん。

又いぬし事むなしからずして大蒙古国もよせて国土もあやをしげになりて候は、いかに悦び給はん、これは凡夫の心なり、法華經を信ずる人は冬のごとし冬は必ず春となる、いまだ昔よりきかずみず冬の秋とかれる事を、いまだきかず法華經を信ずる人の凡夫となる事を、經文には「若有開法者無二小成仏」とかかれて候。

故聖靈は法華經に命をすててをはしき、わづかの身命をささえしところを法華經のゆへにめされしは命をす

つるにあらずや、彼の雪山童子の半偈のために身をすて薬王菩薩の臂をやき給いしは彼は聖人なり火に水を入れるがごとし、此れは凡夫なり紙を火に入れるがごとし、此れをもつて案ずるに聖靈は此の功德あり、大月輪の中が大日輪の中か天鏡をもつて妻子の身を浮べて十二時に御らんあるらん、設い妻子は凡夫なれば此れをみずきかず、譬は耳しめる者の雷の声をきかず目つぶれたる者の日輪を見ざるがごとし、御疑あるべからず定めて御まほりとならせ給うらん其の上さこそ御わたりあるらめ。

力あらばとひまひらせんとをもつところに衣を一つ給ぶでう存外の次第なり、法華経はいみじき御経にてをはすれば、もし今生にいきある身ともなり候いなば尼ごぜんの生きてをわしませ、んあれ、をさなききんだち等をばかり見たてまつるべし。

さどの国と申しこれと申し下人・一人つけられて候は、いつの世にかわすれ候べき、たてまつり候べし、南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経・恐恐謹言。

五月 日

妙一尼御前

日蓮 花押

二四九

妙一尼御前御返事

弘安三年五月

五十九歳御作

1255p

夫信心と申すは別にこれなく候、妻のをとこをおしむが如くをとこの妻に命をすつるが如く、親の子をすてざるが如く、子の母にはなれざるが如くに、法華経・釈迦・多宝・十方の諸仏・菩薩・諸天善神等に信を入れ奉りて南無妙法蓮華経と唱へたてまつるを信心とは申し候なり、しかのみならず正直捨方便・不受余経一偈の经文を女のかがみをすてざるが如く、男の刀をさすが如く、すこしもすつる心なく案じ給うべく候、あながしこあながし。

五月十八日 日蓮花押 妙一尼御前御返事

一二五〇

妙一女御返事

弘安三年七月

五十九歳御作

1255p

問うて云く、日本国に六宗・七宗八宗有り何れの宗に即身成仏を立つるや、答えて云く、伝教大師の意は唯法華経に限り弘法大師の意は唯真言に限れり、問うて云く、其の証拠如何、答えて云く、伝教大師の秀句に云く、当に知るべし他宗所依の経には都て即身入無し一分即入すと雖も八地已上に推して凡夫身を許さず天台法華宗のみ具に即入の義有り云云、又云く、能化所化俱に歴劫無し妙法経力即身成仏す云云、又云く、当に知るべし此の文に成仏する所の人を問うて此の経の威勢を顕すなりと等云云、此の釈の心は即身成仏は唯法華経に限るなり。

問うて云く弘法大師の証拠如何、答えて云く弘法大師の二教論に云く、菩提心論に云く、唯真言法の中に即身成仏する故は是れ三摩地の法を説くなり諸教の中に於て闕いて書さず、諭して曰く此の論は竜樹大聖の所造千部の

論の中に秘藏肝心の論なり此の中に諸教と謂うは他受用身及び变化身等の所説の法諸の顕教なり、是れ三摩地の法を説くとは自性法身の所説秘密真言の三摩地の行是なり金剛頂十万頌の經等と謂う是なり」

問うて云く此の兩大師所立の義水火なり何れを信ぜんや、答えて云く此の二大師は俱に大聖なり同年に入唐して兩人同じく真言の密教を伝受す、伝教大師の兩界の師は順曉和尚、弘法大師の兩界の師は慧果和尚、順曉慧果の二人俱に不空の御弟子なり、不空三蔵の大日如来六代の御弟子なり、相伝と申し本身といひ世間の重んずる

事日月のごとし、左右の臣にことならず末学の膚につけて是非がたし、定めて悪名天下に充滿し大難を其の身に招くか然りと雖も試に難じて兩義の是非を糾明せん、問うて云く弘法大師の即身成仏は真言に限ること何れの經文何れの論文ぞや、答えて云く弘法大師は竜樹菩薩の菩提心論に依るなり、問うて云く其の証拠如何、答えて

云く弘法大師の二教論に菩提心論を引いて云く「唯真言法の中のみ乃至諸教の中に於て闕いて書さず」云云、問うて云く經文有りや、答えて云く弘法大師の即身成仏義に云く「六大無礙にして常に瑜伽なり四種の曼荼各離れず三密加持すれば速疾に顯る重重にして帝網の如くなるを即身と名く、法然として薩般若を具足す心王心数刹塵

に過たり各五智無際智を具す円鏡力の故に実の覺智なり」等云云、疑つて云く此の釈は何れの經文に依るや、答えて云く金剛頂經大日經等に依る、求めて云く其の經文如何、答えて云く弘法大師其の証文を出して云く「此の三昧を修する者は現に仏菩提を証す」文、又云く「此の身を捨てずして神境通を逮得し大空位に遊歩して身秘密を成す」文、又云く「我本より不生なるを覺る」文、又云く「諸法は本より不生なり」云云。

難じて云く此等の經文は大日經金剛頂經の文なり、然りと雖も經文は或は大日如来の成正覺の文、或は真言の行者の現身に五通を得るの文、或は十回向の菩薩の現身に歡喜地を証得する文にして猶生身得忍に非ず何に況や即身成仏をや、但し菩提心論は一には經に非ず論を本とせば背上向下の科、依法不依人の仏説に相違す。

東寺の眞言師日蓮を悪口して云く汝は凡夫なり弘法大師は三地の菩薩なり、汝未だ生身得忍に非ず弘法大師は帝の眼前に即身成仏を現ず、汝未だ勅宣を承けざれば大師にあらず日本国の師にあらず等云云は一、慈覚大師は伝教・義眞の御弟子智証大師は義眞・慈覚の御弟子安然和尚は安慧和尚の御弟子なり、此の三人の云く法華天台宗は理秘密の即身成仏眞言宗は事理俱密の即身成仏と云云、伝教・弘法の両大師何れもをろかならねども聖人は偏頗なきゆへに慈覚・智証安然の三師は伝教の山に栖むといへども其の義は弘法東寺の心なり、随つて日本国・

四百余年は異義なし汝不肖の身としていかんが此の悪義を存ずるや是一、答えて云く悪口をはき悪心ををこそば汝にをいては此の義申すまじ、正義を聞かんと申さば申すべし、但し汝等がやうなる者は物をいはずばつまりぬとをもつべし、いつべし悪心ををこそさんよりも悪口をなさんよりもきらきらとして候経文を出して・汝が

信じまいらせたる弘法大師の義をたすけよ、悪口悪心ををもてをもうに経文には即身成仏無きか、但し慈覚・智証安然等の事は此れ又覚証の両大師・日本にして教大師を信ずといへども、漢土にわたりて有りし時・元政・法全等の義を信じて心には教大師の義をすて、身は其の山に住すれどもいつわりてありしなり。

問うて云く汝が此の義はいかにしてをもひいたしけるぞや、答えて云く伝教大師の釈に云く「当に知るべし此の文は成仏する所の人を問うて此の経の威勢を顯すなり」とかかれて候は、上の提婆品の我於海中の経文をかきのせてあそばして候、釈の心はいかに人申すとも即身成仏の人なくば用ゆべからずと・がかせ給へ、いかにも純円一実の経にあらずば即身成仏はあるまじき道理あり、大日經・金剛頂經等の眞言經には其の人なし又・経文

を見るに兼・但对帶の旨分明なり、二乗成仏なし久遠実成あとをけづる、慈覚・智証は善無畏・金剛智・不空三蔵の釈にたばらかされてをはするか、此の人人は賢人・聖人とはをもへども遠きを貴んで近きをあなづる人なり、彼の三部經に印と眞言とあるにばかされて大事の即身成仏の道をわすれたる人人なり、然るを當時・叡山の

ひとひと ほけきよう
人人・法華經の即身成仏のやうを申すやうなれども慈覺大師安然等の即身成仏の義なり、彼の人人の即身成仏は
ゆうめいむじつ そくしんじょうぶつ そ
有名無実の即身成仏なり其の義専ら伝教大師の義に相違せり、教大師は分段の身を捨てても捨てずしても法華經の心に
そくしんじょうぶつ かくだいし
ては即身成仏なり、覺大師の義は分段の身をすつれば即身成仏にあらずとをもはれたるがあて即身成仏の義をしらざる
ひとなり。

求めて云く慈覺大師は伝教大師に値い奉りて習い相伝せり汝は四百余年の年紀をたてたり如何、答えて云く師の口
より伝つる人必ずあやまりなく後にたづねあきらめたる人をろそかならば經文をすてて四依の菩薩につくべきか、父母の
譲り状をすてて口伝を用ゆべきか、伝教大師の御釈無用なり慈覺大師の口伝真実なるべき

か、伝教大師の秀句と申す御文に一切經になき事を十いだされて候に第八に即身成仏化導勝とかかれて次下に「まに知
るべし此の文成仏する所の人を問うて此の經の威勢を顯すなり、乃至当に知るべし他宗所依の經には都て即身入無し」等
云云、此の釈を背きて覺大師の事理俱密の大日經の即身成仏を用ゆべきか。

求めて云く教大師の釈の中に菩提心論の唯の字を用いざる釈有りや不や、答えて云く秀句に云く「能化所化俱に歴劫
無く妙法經力即身成仏す」等云云、此の釈は菩提心論の唯の字を用いずと見へ候、問うて云く菩提心論を用いざるは
竜樹を用いざるか答えて云く但恐くは訳者の曲会私情の心なり、疑つて云く訳者を用いざれば法華

經の羅什をも用ゆ可からざるか、答えて云く羅什には現証あり不空には現証なし、問うて云く其の証如何、答えて云く
舌の焼けざる証なり具には聞くべし、求めて云く覺証等は此の事を知らざるか、答えて云く此の兩人は無畏等の三蔵を信
ずる故に伝教大師の正義を用いざるか、此れ則ち人を信じて法をすてたる人人なり。

問うて云く日本国にいまだ覺証然等を破したる人をきかず如何、答えて云く弘法大師の門家は覺証を用ゆべしや
覺証の門家は弘法大師を用ゆべしや。

問うて云く両方の義相違すといへども汝が義のごとく水火ならず誹謗正法とはいわず如何、答えて云く誹謗正法とは其の相貌如何外道が仏教をそしり小乗が大乘をそしり權大乘が実大乘を下し実大乘が權大乘に力をあわせ詮ずるところは勝を劣といふ法にそむくがゆゑに謗法とは申すか、弘法大師の大日經を法華經華嚴經に勝れたりと申す証文ありや、法華經には華嚴經・大日經等を下す文分明なり、所謂已今当等なり、弘法尊しと雖も釈迦・多宝・十方分身の諸仏に背く大科免れ難し事を權門に寄せて日蓮ををどさんより但正しき文を出だせ、汝等は人をかたうとせり日蓮は日月・帝釈・梵王をかたうとせん、日月・天眼を開いて御覽あるべし、将又日月の宮殿には法華經と大日經と華嚴經とをはずとけうしあわせて御覽候へ弘法・慈覺・智証・安然の義と日蓮が義とは何れがすぐれて候、日蓮が義もし百千に一つも道理に叶いて候はばいかにたすけさせ給はぬぞ彼の人人の御義もし邪義ならばいかに日本国の一切衆生の無眼の報を候はんをば不便とはをばせ候はぬぞ。

日蓮が二度の流罪結句は頸に及びしは釈迦・多宝・十方の諸仏の御頸を切らんとする人ぞかし日月は一人にてをばせども四天下の一切衆生の眼なり命なり、日月は仏法をなめて威光勢力を増し給つと見今候、仏法のあぢわいをたがうる人は日月の御力をうばつ人一切衆生の敵なり、いかに日月は光を放ちて彼等が頂をてらし寿命と衣食とをあたへやしなひ給つぞ、彼の三大師の御弟子等が法華經を誹謗するは偏に日月の御心を入れさせ給いて謗ぜさせ給つか、其の義なくして日蓮がひが事ならば日天もしめし彼等にもめしあはせ其の理にまけてありとも其の心ひるがへらずば天寿をもめしとれかし。

其の義はなくしてただ理不尽に彼等にさるの子を犬にあづけねづみの子をにたぶやうにうちあづけてさんざんにせめさせ給いて彼等を罰し給はぬ事心へられず、日蓮は日月の御ためにはをそらくは大事の御かたきなり、教主釈尊の御前にてかならずうた申すべし、其の時うらみさせ給つなよ、日月にあらずとも地神も海神

だにも云いよせざる法門なり。

されば世間の人人は菩提心論の唯真言法中の文に落されて即身成仏は真言宗に限ると思へり、之に依つて正しく即身成仏を説き給いたる法華經をば戲論等云云、止觀五に云く「設し世を厭う者も下劣の乗を翫んで枝葉に攀附す狗作務に狎れ、猴を敬いて帝釈と爲し瓦礫を崇めて是れ明珠とす此の黒闇の人豈道を論ず可けんや」と等云云、此の意なるべし、歎かわしきかな華嚴・真言法相の學者徒にいとまをついやし即身成仏の法門をたつる事よ、

夫れ先ず法華經の即身成仏の法門は竜女を証拠とすべし、提婆品に云く「須臾の頃に於て便ち正覺を成ず」と等云云乃至「變じて男子と成ると、又云く「即ち南方無垢世界に往く」と云云、伝教大師云く「能化の竜女も歴劫の

行無く所化の衆生も亦歴劫無し能化所化俱に歴劫無し妙法經力即身成仏す」と等云云、又法華經の即身成仏に二種あり迹門は理具の即身成仏本門は事の即身成仏なり、今本門の即身成仏は当位即妙本有不改と斷ずるなれば肉身を其のま

ま本有無作の三身如來と云える是なり、此の法門は一代諸教の中に之無し文句に云く「諸教の中に於て之を秘して伝えず」と等云云。

又法華經の弘まらせ給うべき時に二度有り所謂在世と末法となり、修行に又二意有り仏世は純円一実滅後末法の今の時は一向本門の弘まらせ給うべき時なり、迹門の弘まらせ給うべき時は已に過ぎて二百余年になり、天台・伝教こそ其の能弘の人にてましまし候いしかどもそれもはや入滅し給いぬ、日蓮は今時を得たり豈此の所囑の本門を弘めざらんや、本迹二門は機も法も時も遙に各別なり。

問つて云く日蓮計り此の事を知るや、答えて云く「天親・竜樹内鑑冷然」と等云云、天台大師云く「後の五百歳遠く妙道に沾わん」伝教大師云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乘の機今正しく是れ其の時なり、何を以て知ることを得んや、安樂行品に云く末世法滅の時」と云云、此等の論師・人師末法鬭諍堅固の時地涌出現

し給いて本門の肝心たる南無妙法蓮華經の弘まらせ給うべき時を知りて恋させ給いて是くの如き釈を設けさせ給いぬ、尚
尚即身成仏とは迹門は能入の門本門は即身成仏の所詮の実義なり、迹門にして得道せる人人種類種・相對種の成仏
いれも其の実義は本門・寿量品に限れば常にかく觀念し給企觀なるべし。

然るにさばかりの上代の人人だにも即身成仏には取り煩はせ給いしに、女人の身として度度此くの如く法門を尋ねさせ
給う事は偏に只事にあらず、教主釈尊御身に入り替らせ給うにや童女が跡を継ぎ給うか又・曇弥女の二度来れるか、
知らず御身は忽に五障の雲晴れて寂光の覺月を詠め給うべし、委細は又又申す可く候。

弘安三年十月五日

日蓮 花押

妙一女御返事

二五二 日嚴尼御前御返事

弘安三年十一月 五十九歳御作

1262p

弘安三年十一月八日、尼日嚴の立て申す立願の願書並びに御布施の錢一貫文又たふかたびら一つ法華經の御宝前並び
に日月天に申し上げ候い畢んぬ、其の上は私に計り申すに及ばず候叶ひ叶はぬは御信心により候べし全く日蓮がとがにあ
らず、水すめば月うつる風ふけば木ゆるぐとくみな御心は水のとし信のよは

きはにけるがとし、信心のいさぎよきはすめるがとし、木は道理のとし風のゆるがすは經文をよむがとしとを
ぼしめせ、恐恐。

十一月二十九日

日蓮 花押

日嚴尼御前御返事

弁房べんぼうの便宜べんぎに三百文今度二百文給ひ畢おわんぬ、仏は眞に尊くして物によらず、昔の得勝童子とうじは沙の餅を仏に供養し奉りたてまつて阿育大王あそくだいおうと生れて一閻浮提えんぶだいの主たりき、貧女の我がかしらをおろして油と成せしが須弥山しゅみせんを吹きぬきし風も此の火をけさず、されば此の二三の驚目は日本国がもく にほんこくを知る人の国を寄せ七宝しちほうの塔を 利天とつてんにくみあげたらん

にもすぐるべし、法華經ほけきようの一字は大地だいちの如し万物を出生しゅつじうす、一字は大海たいかいの如し衆流を納む一字は日月にちがつの如し四天下を照す、此の一字變じて仏となる、稻變じて苗なえとなる 苗變じて草となる草變じて米となる 米變じて人となる 人變じて仏となる 女人變じて妙の一字となる妙の一字變じて台上の釈迦仏しゃかぶつとなるべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、恐恐謹言。

王日殿
おおにちどの

日蓮
にちれん
花押
かおう

御文並びに御輿振の日記給ひ候いぬ悦び入つて候、中堂炎上の事其の義に候か山門破滅の期其の節に候か、此等も其の故無きに非ず天竺には祇園精舎頭摩寺漢土には天台山正像二千年の内に以て滅尽せり、今末法に当つて日本国計りに叡山有り三千界の中の但此の処のみ有るか、定めて悪魔一跡に嫉を留むるか、小乗権教の輩も之を妬むか、随つて禅僧律僧念仏者主臣に之を訴へ三千人の大衆は我が山破滅の根源とも知らず師檀共に

破国破仏の因縁に迷えり、但恃む所は妙法蓮華經第七の巻の後五百歳於閻浮提広宣流布の文か、又伝教大師の正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乗の機今正しく是れ其の時なりこの釈なり、滅するは生ぜんが為下るは登らんが為なり、山門繁昌の為に是くの如き留難を起すか、事事紙面に尽し難し早早見参を期す、謹言。

三月一日

日蓮 花押にちれん かおう御返事ごへんじ

法門申さるべきやう、選択をばうちをきて先ず法華經の第二の卷の今此三界の文を開いて釈尊は我等が親父なり等定め了るべし、何の仏か我等が父母にてはをします、外典三千余卷にも忠孝の二字こそせんにて候なれ忠は又孝の家より出ずとこそ申し候なれ、されば外典は内典の初門此の心は内典にたがわず候か、人に尊卑・上下はありといえども親を孝するにはすぎずと定められたるか、釈尊は我等が父母なり一代の聖教は父母の子を教えたる教經なるべし、其の中に天上竜宮天竺などには無量無辺の御經ましますなれども、漢土・日本にはわづかに五千・七千余卷なり、此等の經經の次第勝劣等は私には弁えがたう候、而るに論師大師先德には末代の人智慧こかたければ彼の人人の料簡を用ゆべきかところに、華嚴宗の五教四教法相・三論の三時二藏、或は三轉法輪世尊法久後・要當說眞実の文は又法華經より出て候金口の明說なり、仏說すでに大に分れて二途なり、譬へは世間の父母の讓の前判後判のごとし、はた又世間の前判後判は如来の金言をまなびたるか、孝不孝の根本は前判後判の用不用より事をこれり、かう立て申すならば人人さもやとをばしめしたらん時申すべし。

抑淨土の三部經等の諸宗の依經は當分四十余年の内なり、世尊は我等が慈父として未顕眞実ぞと定めさせ給ふ御心はかの四十余年の經經に付けとをばしめし候か、又說眞実の言につれとをばしめし候か、心あらん人人、御賢察候べきかとしばらくあぢわひてよも仏程の親父の一切衆生を一子とをばしめすが眞実なる事をすてて未顕眞実の不実なる事に付けとはをばしめさじ、さて法華經につり候はんは四十余年の經經をすてて遷り候べきか、はた又かの經經並びに南無阿彌陀仏等をばすてずして遷り候べきかとおぼしきところに凡夫の私の。

はからいぜひにつけてをそれあるべし、仏と申す親父の仰を仰ぐべしとまところに仏定めて云く「正直捨方便」等云云、方便と申すは無量義經に未顕真実と申す上に以方便力と申す方便なり、以方便力の方便の内に浄土三部經等の四十余年の一切經は一字一点も漏るべからざるか、されば四十余年の經經をすてて法華經に入らざらん人人は世間の孝不孝はしらず仏法の中には第一の不孝の者なるべし、故に第二譬喻品に云く「今此三界乃至雖復教詔而不信受」等云云、四十余年の經經をすてずして法華經に並べ行ぜん人人は主師親の三人のをほせを用いざる人人なり。

教と申すは師親のをし詔と申すは主上の詔勅なるべし、仏は閻浮第一の賢王・聖師・賢父なり、されば四十余年の經經につきて法華經へつらず、又うつれる人人も彼の經經をすててうつらざるは三徳備えたる親父の仰を用いざる人天地の中に住むべき者にはあらず、この不孝の人の住処を經の次下に定めて云く「若人不信乃至其人命終入阿鼻獄」等云云、設い法華經をそしらずともうつり付ざらん人人不孝の失疑なかるべし、不孝の者は又惡道疑なし故に仏は入阿鼻獄と定め給いぬ、何に況や爾前の經經に執心を固なして法華經へ遷らざるのみならず、善導が千中無一法然が捨閉閣抛とかけるはあに阿鼻地獄を脱るべしや、其の所化並びに檀那は又申すに及ばず、雖復教詔而不信受と申すは孝に二つあり世間の孝の不孝は外典の人人これをしりぬべし、内典の孝不孝は設い論師等なりとも実教を弁えざる權教の論師の流を受けたる末の論師なんどは後生しりがたき事なるべし、何に況や末末の人人をや。

涅槃經の三十四に云く「人身を受けん事は爪上の土・三惡道に墮ちん事は十方世界の土・四重・五逆乃至涅槃經を謗する事は十方世界の土・四重・五逆乃至涅槃經を信ずる事は爪の上の土」などとかれて候、末代には五逆の者と謗法の者は十方世界の土のごとしとみぬ、されども当時五逆罪つくる者は爪の上の土につくらざる者は

十方世界の土と説かれ候は経文そらことなるやうにみ候をくはしくかんがみ候は不孝の者を五逆罪の者とは申し候か、又相似の五逆と申す事も候、さるならば前王の正法、実法を弘めさせ給えと候を今の王の権法、相似の法を尊んで天子本命の道場たる正法の御寺の御帰依うすくして、権法、邪法の寺の国に多くいできたれ
るは、愚者の眼には仏法繁盛とみて仏天智者の御眼には古き正法の寺やうやくうせ候は一には不孝なるべし
賢なる父母の氏寺をすつるゆへには謗法なるべし、若ししからは日本国当世は国一同に不孝謗法の国なるべし、此の国は釈迦如来の御所領仏の左右臣下たる大梵天王、第六天の魔王にたはせ給いて大海の死骸をとどめざるがごとく宝山の曲林をいとうがごとく此の国の謗法をかへとおぼすかと勘え申すなりと申せ。

この上捨てられて候四十余年の経経の今に候はいかになんと俗の難せば返詰して申すべし、塔をくむあししろは塔くみあげては切りするなりなど申すべし、此の譬は玄義の第二の文に「今の外教若し起れば方便の教絶す」と申す釈の心なり、妙と申すは絶といふ事絶と申す事は此の経起れば已前の経経を断止ると申す事なる

べし、正直捨方便の捨の文字の心、又嘉祥の日出ぬるに星かくるの心なるべし、但し爾前の経経は塔のあししろなれば切りするとも、又塔をすりせん時は用ゆべし又切りすべし、三世の諸仏の説法の儀式かくのごとし。

又俗の難に云く慈覚大師の常行、堂等の難これをば答うべし、内典の人、外典をよむ得道のためにはあらず才学のためか、山寺の小児の俱舎の頌をよむ得道のためか、伝教慈覚は八宗を極め給へ一切経をよみ給う、これみな法華経を詮と心給はん梯磴なるべし。

又俗の難に云く何にさらば御房は念仏をば申し給はぬ、答えて云く伝教大師は二百五十戒をすて給いぬ時にあたりて法華円頓の戒にまぎれしゆなり、当世は諸宗の行多けれども時にあたりて念仏をもてなして法華経を謗するゆえに金石迷いやすければ唱え候はず、例せば仏十二年が間、常樂我淨の名をいみ給いき、外典にも寒食

のまつりに火をいみあかき物をいむ、不孝の国と申す国をば孝養の人とはをらず、此等の義なるべし、いくたびも選択をば
いらずして先ずかうたつべし。

又御持仏堂にて法門申したりしが面目などかかれて候事かすがす不思議にをば候、そのゆへは僧となりぬ其の上
一閻浮提にありがたき法門なるべし、設け等覺の菩薩なりともなにとかをもうべき、まして梵天帝釈等は我等が親父釈迦
如来の御所領をあづかりて正法の僧をやしなうべき者につけられて候、毘沙門等は四天

下の主此等が門まほり又四州の王等は毘沙門天が所従なるべし、其の上日本秋津嶋は四州の輪王の所従にも及ばず、
但嶋の長なるべし、長なんどにつかへん者どもに召されたり上なんどかく上面目なんと申すは、旁

せんずるところ日蓮をいやしみてかけるか、総じて日蓮が弟子は京にのぼりぬれば始はわすれぬやうにて後には天魔つき
て物にくるうせう房がごとし、わ御房もそれていになりて天のにくまれかほるな。

のぼりていくばくもなきに実名をかうるでう物くるわし、定めてことばつき音なんども京なめりになりたるらん、ねずみ
がかわほりになりたるやうに鳥にもあらずねずみにもあらず、田舎法師にもあらず京法師にもにず、せう房がやうになり
ぬとをばゆ、言をば但いなかことばにてあるべしなかなかあしきやうにて有るなり、尊成とかけるは隠岐の法皇の御実名
かかたがた不思議なるべし。

かつしられて候やうに当世の高僧真言・天台等の人人の御いのりは叶うまじきよし、前前に申し候上、今年鎌倉の
真言師等は去年より変成男子の法をこなはる、隆弁などとは自歎する事がぎりなし、七八百余人の真言師・東寺・天台の
大法秘法尽して行ぜしがついにむなしくなりぬ、禅宗・律僧等又一同行いしかどもかなはず、日蓮

が叶うまじと申すとして不思議なりなんどをとし候いしかども皆むなしくなりぬ、小事たる今生の御いのりの叶はぬを用つて
しるべし大事たる後生叶うべしや。

真言宗の漢土に弘まる始は天台の一念三千を盗み取つて真言の教相と定めて理の本とし枝葉たる印・真言を宗と立て宗として天台宗を立て下す条・謗法の根源たるか、又華嚴・法相・三論も天台宗・日本になかりし時は謗法ともしられざりしが・伝教大師円宗を勸えいだし給いて後謗法の宗ともしられたりしなり、当世真言等の七宗の者しかしながら謗法なれば大事のいのり叶うべしともをばす、天台宗の人人は我が宗は正なれども邪なる他宗と同ずれば我が宗の正をもしらぬ者なるべし、譬へ東に迷う者は対当の西に迷い東西に迷うゆへに十方に迷うなるべし。

外道の法と申すは本内道より出でて候、而れども外道の法をもつて内道の敵となるなり、諸宗は法華經よりいで天台宗を才学として而も天台宗を失うなるべし、天台宗の人人は我が宗は実義とも知らざるゆへに我が宗のほろび我が身のかるくなるをばしらずして他宗を助けて我が宗を失うなるべし、法華宗の人が法華經の題目南無妙法蓮華經とはとなえずして南無阿弥陀仏と常に唱えは法華經を失う者なるべし、例せば外道は三宝を立つ眞の中に仏宝と申すは南無摩醯修羅天と唱えしかば仏弟子は翻邪の三歸と申して南無釈迦牟尼仏と申せしなり、此れをもつて内外のしるしとす、南無阿弥陀仏とは浄土宗の依經の題目なり、心には法華經の行者と存すとも南無阿弥陀仏と申さば傍輩は念佛者としりぬ、法華經をすてたる人とも申すべし、叡山の三千人は此の旨を弁えずして王法にもすてられ叡山をもほろぼさんとするゆへに自然に三宝に申す事叶わず等と申し給うべし。

人不審して云く天台・妙楽・伝教等の御釈に我がやうに法華經並びに一切經を心えざらん者は惡道に墮つべしと申す釈やあると申さば、玄の三籤の三及び已今当等をいだし給うべし、伝教大師六宗の学者・日本国の十四人を呵して云く「顯戒論の下に云く昔齊朝の光統を聞き今は本朝の六統を見る、実なるかな法華の何況や」等云云、華嚴・真言・法相・三論の四宗を呵して云く「依憑集に云く新來の真言家は即ち筆受の相承を泯ぼし、旧到の華嚴家

すなわち影響の軌模を隠す。沈空の三論宗は彈訶の屈恥を忘れ称心の醉を覆う、著有の法相宗は僕陽の帰依を非し青竜の判経を撥つに等云云、天台・妙楽・伝教等は眞言等の七宗の人人は設け戒定はまつたくとも謗法のゆゑに惡道脱るべからずと定められたり、何に況や禅宗・浄土宗等は勿論なるべし、されば止観は偏に達磨をこそはして

候めれ、而るに当世の天台宗の人人は諸宗に得道をゆるすのみならず諸宗の行をつばい取つて我が行とする事いかん、当世の人人ことに眞言宗を不審せんか立て申すべきやう、日本国は八宗あり眞言宗大に分れて二流あり所謂東寺・天台なるべし、法相・三論・華嚴・東寺の眞言等は大乘宗設け定慧は大乘なれども東大寺の小乗戒を持つ

ゆゑに戒は小乗なるべし、退大取小の者小乗宗なるべし、叡山の眞言宗は天台円頓の戒をつく全眞言宗の戒なし、されば天台宗の円頓戒にをちたる眞言宗なり等申すべし、而るに座主等の高僧名を天台宗にかりて一向・眞言宗によて法華経をさぐるゆゑに叡山皆謗法になりて御いのりにしるしなきが。

問うて云く天台法華宗にたいして眞言宗の名をけつらるる証文如何、傳教大師 作なり 答えて云く学生式に云く天台法華宗年分

学生式「首年分度者の人柏原先帝天台法華宗 傳法者に加へらる凡そ法華宗天台の年分は弘仁九年より叡山に住せしめて二十二年山門を出さず兩業を修学せしめん、凡そ止観業の者おほしかな凡そ遮那業の者おほしかな等云云、顯戒論縁起の上に云く「新法華宗を加えんことを請う表一

首、沙門最澄。華嚴宗に二人天台法華宗に一人等云云、又云く天台の業に二人一人摩訶止観を讀ましむ、此等は天台宗の内に眞言宗をば入れて候こそ候めれ、嘉祥元年六月十五日の格に云く「右入唐廻て請益す伝灯法師位円仁の表に、伏

して天台宗の本朝に伝わるることを尋めれば。延暦廿四

年。廿五年特天台の年分度者二人を賜う一人は眞言の業を習わし一人は止観の業を学す。然れば則ち天台宗の止観と

眞言との兩業は是れ桓武天皇の崇建する所等云云、叡山にをいては天台宗にたいしては眞言宗の名をけつり天台宗を骨

とし眞言をば肉となせるが。

而るに末代に及びて天台・真言・両宗中あしうなりて骨と肉と分け座主は一向に真言となる骨なき者のごとし・大衆はたぶんてんだいしゅう
多分天台宗なり肉なきものごとし、仏法に諍いあるゆゑに世間の相論も出来して叡山静ならず朝下にわづらい多し、此等の大事を内内は存すべし、此の法門はいまだをしえざりきよくよく存知すべし。

又念仏宗は法華經を背いて浄土の三部經につくゆゑに阿弥陀仏を正として釈迦仏をあなづる、真言師・大日をせんとをもつゆゑに釈迦如来をあなづる、戒をいいては大小殊なれども釈尊を本とす余仏は証明なるべし、諸宗殊なりとも釈迦を仰ぐべきが、師子の中の虫師子をくらう、仏教をば外道はやぶりがたし内道の内に事いできた

りて仏道を失うべし仏の遺言なり、仏道の内には小乗をもつて大乘を失い権大乘をもつて実大乘を失うべし、此等は又外道のごとし、又小乗・権大乘よりは実大乘法華經の人人がかゝりて法華經をば失はんが大事にて候べし、

仏法の滅不滅は叡山にあるべし、叡山の仏法滅せるかのゆゑに異国我が朝をほろぼさんとす、叡山の正法の失するゆゑに大天魔日本国に出来して法然・大日等が身に入り、此等が身を橋として王臣等の御身につつり住み

かゝりて叡山三千人に入るゆゑに師檀中不和にして御祈しるしなし、御祈請しるしなければ三千の大衆等檀那にすてはてられぬ。

又王臣等・天台・真言の学者に問うて云く念仏・禅宗等の極理は天台・真言とは一つかとはせ給は、名は天台・真言にかりて其の心も弁えぬ高僧天魔にぬかれて答えて云く、禅宗の極理は天台・真言の極理なり、弥陀念仏は法華經の肝心なりなど答え申すなり、而るを念仏者・禅宗等のやつばらには天魔乗りうつりて当世の天台・真言の

僧よりも智慧かしこきゆゑに全くしからず、禅ははるかに天台・真言に超えたる極理なり、或は云く諸教は理深我等衆生は解微なり、機教相違せり得道あるべからず、なんと申すゆゑに、天台・真言等の学者・王臣等・檀那皆奪いとられて御帰依なければ現身に餓鬼道に墮ちて友の肉をはみ仏神にいかりをなし檀那をすそし年年に災

を起し、或は我が生身の本尊たる大講堂の教主釈尊をやきはらい、或は生身の弥勒菩薩をほろぼす、進んでは教主釈尊の怨敵となり退いては当来弥勒の出世を過たんとくる候か、この大罪は経論にまだとかれず、又此の大罪は觀山三千人の失にあらざ公家、武家の失となるべし。

日本一州上下万人・一人もなく謗法なれば大梵天王帝桓並びに天照大神等隣国の聖人に仰せつけられて謗法をためさんとせらるるか、例せば国民たりし清盛入道王法をかたぶけたてまつり結句は山王・大仏殿をやきはらいしかば天照大神正八幡山王等よりきさせ給いて源の頼義が末の頼朝に仰せ下して平家をほろぼされて

国土安穩なりき、今一國挙りて仏神の敵となれり、我が国に此の國を領すべき人なきかのゆへに大蒙古國は起るとみへたり、例せば震旦高麗等は天竺については仏國なるべし、彼の國國禪宗・念仏宗になりて蒙古にほろぼされぬ、日本國は彼の二國の弟子なり二國のほろぼされんにあに此の國安穩なるべしや、國をたすけ家ををもは

ん人人はいそぎ禪念がともがらを經文のごとくいましめらるべきか、經文のごとくならば仏神・日本國にまします、かれを請しまいらせんと術はおぼろげならでは叶いかたし、先ず世間の上下万人云く八幡大菩薩は正直の頂にやどり給い別のすみかなし等云云、世間に正直の人なければ大菩薩のすみかまします、又仏法の中に法華經計りこそ正直の御經にてはおはしませ、法華經の行者なければ大菩薩の御すみかおはせざるか。

但し日本國には日蓮一人計りこそ世間出世正直の者にては候へ、其の故は故最明寺入道に向つて禪宗は天魔のそいなるべしに勘文もつてこれをつげしらしむ、日本國の皆人無間地獄に墮つべし、これほど有る事を正直に申すものは先代にもありがたくこそ、これをもつて推察あるべしそれより外の小事曲ぐべしや、又聖人は言

をかざらずと申す、又いまだ頭れざる後をしるを聖人と申すか、日蓮は聖人の二分にあたり、此の法門のゆへに二十余所をわれ結句流罪に及び身に多くのきずをかをほり弟子をあまた殺せたり、比干にもこえ伍しそ

にもをとらず、提婆菩薩の外道に殺され師子尊者の檀弥利王に頸をはねられしにもをとるべきか、もししからば八幡大菩薩は日蓮が頂をはなれさせ給いてはいつれの人の頂にかすみ給はん、日蓮を此の国に用いすばいかんがすべきとなげかれ候なりと申せ、又日蓮房の申し候 仏菩薩並びに諸大善神をかへしまいらせん事は別の術なし、禅宗 念仏宗の寺寺を一つもなく失い其の僧らをいましめ叡山の講堂を造り靈山の釈迦牟尼仏の御魂を請し入れたてまつらざらん外は諸神もかへり給うべからず、諸仏も此の国を扶け給はん事はかたしと申せ。

二五六

十章抄

ぶんえい

文永八年五月

五十歳御作

与三位公日行

1273p

華嚴宗と申す宗は華嚴經の円と法華經の円とは一なり而れども法華經の円は華嚴の円の枝末と云云、法相・三論も又又かくのごとし、天台宗彼の義に同ぜば別宗と立てなにかせん、例せば法華 涅槃は一つ円なり先後に依つて涅槃尚をとるとさだむ、爾前の円 法華の円を一とならば先後によりて法華豈劣らざらんや、詮ずるところ。

この邪義のをこり此妙彼妙 円実不異 円頓義 前・三為 等の釈にばかされて起る義なり、止観と申すも円頓止観の証文には華嚴經の文をひきて候ぞ、又二の卷の四修三昧は多分は念仏と見へ候なり、源濁れば流清からずと申して爾前の円と法華經の円と一つと申す者が止観を人によませ候えは但念仏者のごとくにて候なり、但止観は迹門より出たり本門より出たり本迹に亘ると申す三つの義にしえよりこれあり、これは且くこれををく、故に知る一部の文共に円乗開権の妙觀を成すと申して止観一部は法華經の開会の上に建立せる文なり、爾前の經經をひき乃至外典を用いて候も爾前・外典の心にはあらず、文をばかれども義をばけつりすてたるなり、「境は昔に寄ると雖も智は必ず円に依る」と申して文殊問方等請觀音等の諸經を引いて四種を立つれども心は必ず

ほけきよう
法華経なり」諸文を散引して二代の文体を該れども正意は唯二經に歸すと申すこれなり。

止観に十章あり大意釈名・体相・撰法・偏円・方便・正観・果報・起教・旨歸なり、前六重は修多羅に依ると申して大意より方便までの六重は先四巻に限る、これは妙解迹門の心をのべたり、今妙解に依つて以て正行を立つと申すは第七の正観・十境・十乗の觀法本門の心なり、一念三千此れよりはじまる、一念三千と申す事は迹門にすらな

を許されず何に況や爾前に分たたる事なり、一念三千の出处は略開三の十如实相なれども義分は本門に限る爾前は迹門の依義判文迹門は本門の依義判文なり、但真實の依文判義は本門に限るべし、されば円の行まちまちなり沙をかすへ大海をみるなを円の行なり、何に況や爾前の經をよみ弥陀等の諸仏の名号を唱つるをや。

但これらは時時の行なるべし、眞実に円の行に順じて常に口ずさみにすべき事は南無妙法蓮華経なり、心に存すべき事は一念三千の觀法なり、これは智者の行解なり日本国の在家の者には但一向に南無妙法蓮華経ととな

へさすべし、名は必ず体にいたる徳あり、法華経に十七種の名ありこれ通名なり別名は三世の諸仏皆南無妙法蓮華経とつけさせ給いしなり、阿弥陀・釈迦等の諸仏も因位の時は必ず止観なりき口ずさみは必ず南無妙法蓮華経なり、此等をしらざる天台・眞言等の念仏者口ずさみには一向に南無阿弥陀仏と申すあひだ在家の者は一向に

念うやう天台・眞言等は念仏にてありけり、又善導・法然が一門はすなわち天台・眞言の人人も実には自宗が叶いがたれば念仏を申すなり、わづらわしくかれを学せんよりは法華経をよまんよりは一向に念仏を申して浄土にし

て法華経をもささるべしと申す、此の義日本国に充滿せし故に天台・眞言の学者在家の人人にすてられて六十余州の山寺はつせはてぬるなり。

九十六種の外道は仏慧比丘の威儀よりをこり、日本国の謗法は爾前の円と法華の円と一つといつ義の盛なりしよりこれはじめれり、あわれなるかなや、外道は常樂我淨と立てしかば仏世にいでませ給いては苦空・無常・

無我ととかせ給いき、二乗は空觀に著して大乘にすすまざりしかば仏誡めて云く五逆は仏のたね塵勞の疇は如来の種
二乗の善法は永不成と嫌わせ給いき、常樂我淨の義こそ外道はあしかりしかども名はよかりしぞかし、
而れども仏名をいみ給いき、惡だに仏の種となるましてせんはとこそをばつれども仏二乗に向いては惡をば許して善をばい
ましめ給いき。

當世の念仏は法華經を國に失う念仏なり、設いぜんたりとも義分あたれりといつとも先ず名をいむべし、其の故は佛法
は國に随うべし、天竺には一向小乘一向大乘大小兼學の國ありわかれたり、震旦亦復是くの如し、
日本國は一向大乘の國大乘の中の一乗の國なり、華嚴法相三論等の諸大乘すら猶相応せず何に況や小乘の三宗を
や、而るに當世にはやる念仏宗と禪宗とは源方等部より事をこれり法相三論華嚴のを見を出さず、南無阿彌陀仏
は爾前にかぎる、法華經に在いては往生の行にあらず開會の後仏因となるべし、南無妙法蓮華經
は四十余年にわたらず但法華八箇年にかぎる、南無阿彌陀仏に開會せられず法華經は能開念仏は所開なり、法華經の
行者は一期南無阿彌陀仏と申さずとも南無阿彌陀仏並びに十方の諸仏の功徳を備えたり、譬えば如意宝珠の如し
金銀等の財を備えたり、念仏は一期申すとも法華經の功徳をぐすべからず、譬は金銀等の如意宝珠をかねざるがごと
し、譬は三千大世界に積みたる金銀等の財も一つの如意宝珠をばかうべからず、設い開會をさ
とれる念仏なりとも猶体内の権なり体内の實に及ばず、何に況や當世に開會を心得たる智者も少なくこそをはすらめ、
設いさる人ありとも弟子眷屬・所從などはいかんがあるべかるらん、愚者は智者の念仏を申し給うをみては念仏者とぞ
見候らん、法華經の行者とはよも候はじ、又南無妙法蓮華經と申す人をばいかなる愚者も法華經の行者とぞ申し候はん
ずらん、當世に父母を殺す人よりも謀反ををこす人よりも天台眞言の學者と云はれ
て善公が礼讃をつたひ然公が念仏をさえつる人人はをそろしく候なり。

この文を止観よみあげさせ給いて後ふみのさの人ひひろめてわたらせ給うべし、止観よみあげさせ給はばすみやかに御わたり候へ。

沙汰の事は本より日蓮が道理だにもつよくば事切れん事かたしと存じて候いしが人ごとに問注は法門にはにずいみじうしたりと申し候なるときに事切るべしとをば候はず、少弼殿より平三郎左衛門のもとにわたりて

候とぞつけ給わり候、この事のび候わば問注はよきと御心得候へ又いつにてもよも切れぬ事は候はじ、又切れずば日蓮が道理とこそ人人はをもい候はんずらめ、くるしく候はず候、當時はことに天台・真言等の人人の多く来て候なり、事多き故に留め候い了んぬ。

二五七

教行証御書

文永十二年三月五十四歳御作

与三位房日進於身延

1276p

夫れ正像二千年に小乗・権大乘を持依して其の功を入れて修行せしかば大体其の益有り、然りと雖も彼れ彼れの経經を修行せし人人は自依の経經にして益を得ると思へとも法華經を以て其の意を探れば一分の益なし、所以は何ん仏の在世にして法華經に結縁せしが其の機の熟否に依り円機・純熟の者は在世にして仏に成れり、根機微劣の者は正法に退轉して権大乘經の淨名・思益・觀經・仁王般若經等にして其の証果を取れること在世の如し、されば正法には教行証の三俱に兼備せり、像法には教行のみ有つて証無し、今末法に入りては教のみ有つて行証無く在世結縁の者一人も無し権実の二機悉く失せり、此の時は濁惡たる当世の逆謗の一人に初めて本門の肝心・寿量品の南無妙法蓮華經を以て下種と為す、是の好き良薬を今留めて此に在く汝取つて服す可し差えじと憂る勿れとは是なり、乃往過去の威音王仏の像法に三宝を知る者一人も無かりしに不輕菩薩出現して教主説き置き給い

し二十四字を一切衆生に向つて唱えしめしがごとし、彼の二十四字を聞きし者は一人も無く亦不輕大士に値つて益を得たり、是れ則ち前の聞法を下種とせし故なり、今も亦是くの如し、彼は像法此れは濁惡の末法、彼は初隨喜の行者此れは名字の凡夫彼は二十四字の下種此れは唯五字なり、得道の時節異なりと雖も成仏の所詮は全体是れ同じかるべし。

問うて云く上に挙ぐる所の正像末法の教行証各別なり何ぞ妙樂大師は末法の初冥利無きにあらざり且く大教の流行すべき時に拠ると釈し給うや如何、答えて云く得意に云く正像に益を得し人人は顯益なるべし在世結縁の熟せる故に、今末法には初めて下種す冥益なるべし已に小乘・權大乘爾前・迹門の教行証に似るべくもなし現に証果の者之無し、妙樂の釈の如くんば、冥益なれば人は是を知らず見ざるなり。

問うて云く末法に限りて冥益と知る經文之有りや、答えて云く法華經第七藥王品に云く「此の經は則ち為閻浮提の人の病の良藥なり若し人病有らんは是の經を聞くことを得ば病即ち消滅して不老不死ならん」等云云、妙樂大師云く「然も後の五百は且く一往に従う末法の初冥利無きにあらざり且く大教の流行す可き時に拠るが故に五百と云う」等云云。

問うて云く汝が引く所の經文釈は末法の初五百に限ると聞きたり、權大乘經等の修行の時節は尚末法万年と云へ如何、答えて曰く前釈已に且従一往と云へ再往は末法万年の流行なるべし、天台大師上の經文を釈して云く「但當時大利益を獲るのみに非ず後の五百歳遠く妙道に沾わん」等云云、是れ末法万年を指せる經釈に非ずや、

法華經第六分別功德品に云く「惡世末法の時能く是の經を持てる者」と安樂行品に云く末法の中に於て是の經を説かんと欲す等云云此等は皆末法万年と云う經文なり、彼れ彼れの經經の説は四十余年末顯真實なり或は結集者の意に拠るか依用し難し、拙いかな諸宗の學者法華經の下種を忘れ三五塵点の昔を知らず純円の妙經を捨てて亦生死の苦海に沈まん事よ、円機純熟の國に生を受けて徒に無間・大城に還らんこと不便とも申す許り無し、崑崙山に入りし者の

一の玉をも取らずして貧国に歸り栴檀林に入つて瞻蔔を踏まずして瓦礫の本国に歸る者に異なら

ず、第三の巻に云く「飢国より来りて忽ち大王の膳に遇うが如し」第六に云く「我が此の土は安穩。我が浄土は毀れず」等云云。

状に云く難問に云く爾前当分の得道等云云、涅槃經第三に「善男子、应当修習」の文を立つ可し之を受けて弘決第三に「所謂久遠必無大者」と会して「爾前の諸經にして得道せし者は久遠の初業に依るなるべし」と云つて一分の益之無き事を治定して、其の後滅後の弘經に於ても亦復是くの如く正像の得益証果の人は在世の結縁に依るなる

べし等云云、又彼が何度も爾前の得道を云はば無量義經に四十余年の經經を仏我れと未顕真実と説き給は我等が如き名字の凡夫は仏説に依りてこそ成仏を期すべく候へ師の言語は無用なり、涅槃經には依法不依人と説かれて大に制せられて候へばなんと立てて未顕真実と打ち捨て打ち捨て正直捨方便世尊法久後なんどの經經をば秘して左右無く出すべからず。

又難問に云く得道の所詮は爾前も法華經もこれ同じ、其の故は觀經の往生或は其の外例の如し等云云と立つ可し、又未顕真実其の外但似仮名字等云云と、又同時の經ありと云はば法師品の已今当の説をもつて会す可きなり、玄義の三籤の三の文を出す可し、經經能く能く料簡して秘す可し。

一 状に云く真言宗云云等、答う彼が立つる所の如き弘法大師の戲論無明の辺域何れの經文に依るやと云つて彼の依經を引かば云うべし大日如来は三世の諸仏の中には何れぞやと云つて善無畏三藏金剛智等の偽りをば汝は知れるやと云つて其の後一行筆受の相承を立つ可し、大日經には一念三千跡を削れり漢土にして偽りしなり、就中僻見有り毘盧の頂上を踏む証文は三世の諸仏の所説に之有りや、其の後彼云く等云云、立つ可し

大慢婆羅門が高座の足等云云、彼れ此れ是くの如き次第何なる經文論文に之を出すやと等云云、其の外常に教へし如く問答對論あるべし、設ひ何なる宗なりとも真言宗の法門を云はば真言の僻見を責む可く候。

次に念仏の曇鸞法師の難行、易行道綽が聖道、淨土善導が雜行・正行、法然が捨閉閣拋の文、此等の本經・本論を

尋ぬべし、經に於て權實の二經有ること例の如し、論に於ても又通別の二論有り、黑白の二論有ること深く習ふべし、彼の依經の淨土三部經の中にはくのと如き等の所説ありや、又人毎に念仏阿彌陀等之を讚す又前の如し、

所詮和漢両國の念仏宗法華經を雜行なんと捨閉閣拋する本經・本論を尋ぬべし、若し慥なる經文なくんば是くの如く權經より實經を謗するの過罪、法華經の譬喩品の如くば阿鼻大城に墮落して展轉無數劫を経歴し給はんずらん、彼の宗の僻謬を本として此の三世諸仏の皆是真實の証文を捨つる其の罪實と諸人に評判せさすべし、心有

らん人誰か実否を決せざらんや、而して後に彼の宗の大師を強に破すべし、一經の株を見て万經の勝劣を知らざる事未練なる者かな、其の上・我と見明らめずとも・積尊並びに多宝分身の諸仏の定判し給へる經文法華經許り皆是真實なるを不真實・未顯真實を已顯真實と僻める眼は牛羊の所見にも劣れる者なるべし、法師品の已今當・無量義經の歷劫修行みけんしんじつが未顯真實何なる事ぞや五十余年の諸經の勝劣ぞかし、諸經の勝劣は成仏の有無なり、慈覺・智証

の理同事勝の眼・善導・法然の余行非機の目・禪宗が教外別伝の所見は東西動轉の眼目・南北不弁の妄見なり、牛羊よりも劣り蝙蝠鳥にも異ならず、依法不依人の經文毀謗此經の文をば如何に恐れさせ給はざるや、惡鬼入其身して無明の惡

酒に酔ひ沈み給うらん。

一切は現証には如かず善無畏・一行が横難横死弘法・慈覺が死去の有様・實に正法の行者是くの如くに有るべく候や、觀仏相海經等の諸經並びに竜樹菩薩の論文如何が候や、一行禪師の筆受の妄語・善無畏のたばかり弘法の戲論慈覺の理同事勝・曇鸞道綽が余行非機・是くの如き人人の所見は權經權宗の虛妄の弘法の習にてや候らん

それほどに浦山敷もなき死去にて候ぞやと和らかに又強く両眼を細めに見 顔貌に色を調て閑に言上すべし。

状に云く彼此の経経得益の数を挙ぐ等云云、是れ不足に候と先ず陳ぶべし、其の後汝等が宗宗の依経に三仏の証誠

之有りや未だ聞かず、よも多宝分身は御来り候はじ、此の仏は法華経に來り給いし間、一仏二言はやはか御坐候べきと次

に六難九易何なる経の文に之有りや、若し仏滅後の人人の偽経は知らず、釈尊の実説五十年の説法の内には一字一句も

有るべからず候なんと立つ可し、五百塵点の頭本之有りや二千塵点の結縁説法ありや、一念

信解、五十展転の功德何なる経文に説き給へや、彼の余経には一二三乃至十功德すら之無し五十展転まではよも説き

給い候はじ、余経には一二の塵数を挙げず何に況や五百三千をや、二乗の成不成竜畜下賤の即身成仏今

の経に限り、華嚴般若等の諸大乘経に之有りや、二乗作仏は始めて今経に在り、よも天台大師程の明哲の弘法慈覺

の如き無文無義の偽りはおはし給はじと我等は覺え候、又悪人の提婆天道国の成道法華経に並びて何なる経にか之有り

や、然りと雖も万の難を聞いて何なる経にか十法界の開会等草木成仏之有りや、天台・妙樂の無非

中道惑耳驚心の釈は慈覺・智証の理同事勝の異見に之を類す可く候や、已に天台等は三国伝灯の大師・普賢開發の聖師

天真・發明の権者なり、豈経論になき事を偽り釈し給はんや、彼れ彼れの経経に何なる一大事か之有るや、此の経には

二十の大事あり就中五百塵点頭本の寿量に何なる事を説き給へとか人人は思召し候、我等が如き凡夫無始已來生死

の苦底に沈輪して仏道の彼岸を夢にも知らざりし衆生界を無作本覺の三身と成し實に一念三千

の極理を説くなんと浅深を立つべし、但し公場ならば然るべし私に問註すべからず、慥に此の法門は汝等が如き者は人毎

に座毎に日毎に談ずべんば三世諸仏の御罰を蒙るべきなり、日蓮已証なりと常に申せし是なり、大日

経に之有りや、浄土三部経の成仏已來凡歷十劫之に類す可きや、なんと前後の文乱れず一一に會す可し、其の後又云

うべし、諸人は推量も候急ぐの如くいみじき御経にて候はこそ多宝遠來して証・誠を加え分身來集し

て三仏の御舌を梵天に付け不慮妄とは、しらせ給いしか、地涌千界出現して濁惡末代の当世に別付属の妙法蓮華經を一閻浮提の一切衆生に取り次ぎ給うべき仏の勅使なれば、八十万億の諸大菩薩をば止善男子と嫌はせ給しか等云云、又彼の邪宗の者どもの習いとして強に証文を尋ぬる事之有り、涌出品並びに文句の九記の九の前三後三の釈を出すべし、但日蓮が門家の大事之に如かず。

又諸宗の人、大論の自法愛染の文を問難とせば、大論の立所を尋ねて後執權謗実の過罪をば竜樹は存知無く候いけるか、余經は秘密に非ず法華是れ秘密」と仰せられ、譬如大藥師と此の經計り成仏の種子と定めて又悔い返して「自法愛染不免墮惡道」と仰せられ候べきか、さで有らば仏語には「正直捨方便、不受余經一偈」などと法華經の実語には大に違背せり、よもさにては候はじ、若し末法の当世時剋相應せる法華經を謗じたる弘法曇鸞などを付法藏の論師釈尊の御記文にわたらせ給う菩薩なれば鑒知してや記せられたる論文なるらん、覺束無しなどあざむくべし、御辺や不免墮惡道の末學なるらん痛敷候、未來無數劫の人数にてや有るらんと立つ可し。

又律宗の良觀が云く法光寺殿訴狀を奉る其の狀に云く、忍性年来歎いて云く当世、日蓮法師と云える者世に在り齋戒は墮獄す云云、所詮何なる經論に之有りや、又云く当世、日本国上下誰か念仏せざらん念仏は無間の業と云云、是れ何なる經文ぞや慥なる証文を日蓮房に對して之を聞かん、是二、総じて是体の爾前得道の有無の法門六箇条云云、然るに推知するに極樂寺良觀が已前の如く日蓮に相値つて宗論有る可きの由、事有らば目安を上げて極樂寺に對して申すべし、某の師にて候者は去る文永八年に御勘氣を蒙り佐州へ遷され給つて後、同じき文永

十一年正月の比御免許を蒙り鎌倉に歸る、其の後平金吾に對して様様の次第申し含ませ給いて甲斐の国の深山に閉籠らせ給いて後は、何なる主上女院の御意たりと云えども山の内を出で諸宗の學者に法門あるべからざる由仰せ候、随つて其の弟子に若輩のものにて候ども師の日蓮の法門九牛が一毛をも学び及ばず候といへども

法華經に付いて不審有りと仰せらるる人わたらせ給はば存じ候なんど云つて、其の後は隨問而答の法門申す可し、又前六箇条一一の難門兼兼申せしが如く日蓮が弟子等は臆病にては叶うべからず、彼れ彼れの經經と法華經と勝劣淺深成仏不成仏を判せん時、爾前・迹門の釈尊なりとも物の数ならず何に況や其の以下の等覺の菩薩をや、まして權宗の者どもをや、法華經と申す大梵王の位にて民とも下し鬼畜なんどと下しても其の過有らんやと意を得て宗論すべし。

又彼の律宗の者どもが破戒なる事山川の類るるよりも尚無戒なり、成仏までは思もよらず人天の生を受くべしや、妙樂大師云く「若し一戒を持てば人中に生ずることを得若し一戒を破れば還て三途に墮す」と、其の外齋法經正法念經等の制法阿含經等の大小乘經の齋法齋戒今程の律宗忍性が一党誰か一戒を持てる還墮三途は疑無し、若しは無間地獄にや落ちんずらん不便なんど立てて宝塔品の持戒行者と是をしるべし、其の後良有

つて此の法華經の本門の肝心妙法蓮華經は三世の諸仏の万行万善の功德を集めて五字と為せり、此の五字の内に豈万戒の功德を納めざらんや、但し此の具足の妙戒は一度持つて後行者破らんとすれど破れず是を金剛宝器戒とや申しけんなど立つ可し、三世の諸仏は此の戒を持つて法身報身心身など何れも無始無終の仏に成ら

せ給う、此れを「諸教の中に於て之を秘して伝ふ」とは天台大師は書き給へ、今末法当世の有智無智在家出家上下万人此の妙法蓮華經を持つて説の如く修行せんに豈仏果を得ざらんや、さてこそ決定無有疑とは

滅後濁惡の法華經の行者を定判せさせ給へ、三仏の定判に漏れたる權宗の人人は決定して無間なるべし、是くの如くいみじき戒なれば爾前・迹門の諸戒は今一分の功德なし、功德無からんに一日の齋戒も無用なり。

但此の本門の戒を弘まらせ給はんには必ず前代末聞の大瑞あるべし、所謂正嘉の地動文永の長星是なるべし、抑当世の人人何の宗宗にか本門の本尊戒壇等を弘通せる、仏滅後二千二百二十余年に一人も候はず、日本人王三十代欽明

てんのつ ぎょう ぶつぼうわた
天皇の御宇に仏法渡つて今に七百余年前代末聞の大法此の国に流布して月氏漢土・閻浮提の内の一切衆生 仏に成る
べき事こそ有り難けれ有り難けれ、又已前の重末法には 教行証 の三つ俱に備われり例せば正法
の如し等云云、に地涌の大菩薩 上行 出でさせ給いぬ結要の大法亦弘まらせ給うべし、日本漢土・万国の一切衆生は金
輪聖王の出現の先兆の優曇華に値えるなるべし、在世四十二年並びに法華經の迹門十四品に之を秘して説かせ給はざり
し大法本門 正宗 に至つて説き顕し給ふのみ。

良觀房が義に云く彼の良觀が日蓮遠国今向と聞く時は諸人に向つて急ぎ急ぎ鎌倉へ上れかし為に宗論を遂げて
諸人の不審を晴さんなんと自讃毀他する由其の聞え候、此等も戒法にてや有らん強ち尋ぬ可し、又日蓮鎌倉に罷上る時
は門戸を閉じて内へ入るべからずと之を制法し或は風氣などと虚病して罷り過ぎぬ、某は日蓮に非ず

其の弟子にて候ままし言のなまり法門の才覚は乱れがはしくとも・律宗国賊替るべからずと云うべし、公場にして理運の
法門申し候ばとて雑言 強言・自讃氣なる体・人目に見すべからず浅しき事なるべし、弥身口意を調え謹んで主人に向
うべし主人に向うべし。

三月二十一日

三位阿闍梨御房今之を遣はす

日蓮 花押

二五八

諸人御返事

1284 p

三月十九日の和風並びに飛鳥同じく二十一日戌の時到来す、日蓮一生の間の祈請並びに所願忽ちに成就せしむるが、
はたまた
将又五百歳の仏記宛かも符契の如し、所詮真言・禅宗等の謗法の諸人等を召し合せ是非を決せしめば日本国一同に
にちれん
日蓮が弟子檀那と為り、我が弟子等の出家は主上・上皇の師と為らん在家は左右の臣下に列ならん、将又一閻浮提皆此
の法門を仰がん、幸甚幸甚。

弘安元年三月二十一日

日蓮 花押

諸人御返事

二五九

小蒙古御書

1284 p

小蒙古の人・大日本国に寄せ来るの事、我が門弟並びに檀那等の中に若し他人に向い将又自ら言語に及ぶ可からず、
も
若し此の旨に違背せば門弟を離すべき等の由存知せる所なり、此の旨を以て人人に示す可く候なり。

弘安四年太歳辛巳 六月十六日

花押

人人御中

二六〇

さだしげ殿御返事

1285p

さきざきに申しつるがごとし、世間の学者、仏法を学問して智恵を明めて我も我もとおもひぬ、一生のうちにむなしくなりてゆめのごとくに申しつれども唯一大事を知らずよくよく心得させ給うべし、あなかしこあなかしこ。

十二月二十日

日蓮 在御判

さだしげ殿御返事

二六一

霖雨御書

1285p

山中のながきあめつれづれ申すばかり候はず、えんどつかしこまりて給い候いし、ことによるぶよし玄性房申しあげさせ給い候へ。恐恐。

五月廿二日

日蓮 在御判

御返事

二六二 玄性房御返事

1286p

いやげんだ入道のなげき候いしかばむかはきと玄性御房このよしをかみ申させ給い候へ 恐恐。

七月十八日

日蓮 花押

玄性御房

二六三 智妙房御返事

弘安三年十二月 五十九歳御作

1286p

驚目一貫送り給いて法華經の御宝前に申し上げ了んぬ。

なによりも故右大将家の御廟と故権太夫殿の御墓とのやけて候由承わりてなげき候は又八幡大菩薩並びに若宮のや

けさせ給う事いかんが人のなげき候らむ。

世間の人人は八幡大菩薩をば阿弥陀仏の化身と申ぞ、それも中古の人人の御言なればさもや、但し大隅の正八幡の石の銘には一方には八幡と申す二字一方には昔靈鷲山に在つて妙法蓮華經を説き今正宮の中に在つて大菩薩と示現す等云云、月氏にては釈尊と顕れて法華經を説き給い日本国にしては八幡大菩薩と示現して正直の二

字を誓いに立て給う、教主釈尊は住劫第九の滅・人寿百歳の時四月八日甲寅の日中天竺に生れ給い・八十年を経て二月十五日壬申の日御入滅なり給う、八幡大菩薩は日本国第十六代応神天皇四月八日甲寅の日生れさせ給いて御年八十の二月の十五日壬申に隠れさせ給う、釈迦仏の化身と申す事はたれの人かあらそいをなすべき、

しかるに今、日本国の四十五億八万九千六百五十九人の一切衆生、善導、慧心、永觀、法然等の大天魔にたばらかされて、
釈尊をなげすめて阿弥陀仏を本尊とす、あまりの物のくるわしさに十五日を奪い取つて阿弥陀仏の日となす八日をまぎ
らかして薬師、仏の日と云云、あまりにをやをにくまんとて八幡大菩薩をば阿弥陀仏の化身と云

云、大菩薩をもてなすやうなれども八幡の御かたきなり、知らずわざでもあるべきに日蓮此の二十八年が間、今此三界の
文を引いて此の迷をしめせば信ぜずはさてこそ有るべきに、いきこころし、つながしつ、おうゆへに八幡大菩薩、宅をやいて
こそ天へのほり給いぬらめ日蓮がかんがへ候し立正安国論此れなり、あわれ他国よりせめ来りてたかのきじをとるやう
に、ねこのねずみをかむやうに、せめられん時、あまや女房どものあわて

候はんずらむ、日蓮が一を二十八が間せめ候いしむくに、或はいこころし、切りこころし、或はいけどり、或は他方へわた
され、宗盛がなわつきてさらされしやうに、ずせんまんの人人のなわつきてせめられんぶびんさよ、しかれども日本国の一切
衆生は皆五逆罪の者なれば、かくせめられんをば天も悦び仏もゆるし給はし、あわれあわれはぢみぬさきに阿闍世王の
提婆を、いましめしやうに、真言師、念仏者、禅宗の者どもをいましめて、すこし、つみをゆるくせさせ給えかし、あらをかし
あらぶびん、ぶびん、わわくのやつばらの智者げなれば、まこととて、もてなして事にあはんぶびんさよ、
恐、恐、謹言。

十二月十八日

日蓮 花押

ちめつ房御返事

二六四

十住毘婆娑論尋出御書

1288p

昨日武蔵前司殿の使として念仏者等召相せられて候いしなり、又十郎の使にて候はんずるが、十住毘婆娑論を内内見る可き事候、万事を抛ちて尋ね出だし給い候え。

十月十四日

日蓮在御判

武蔵公御房

十住毘婆娑論十四卷拝上せしむ、今一卷は求め失せ候なり、御要以後は早早返し給わる可く候、愚身も必ず必ず参り候いて承わる可く候、昨日の論談五十展転の随喜誠に以て有難く候、又袴品賜わる可く候、六賢六賢、恐恐。

十月十一日

判

日蓮阿闍梨御房

二六五

武蔵殿御消息

1288p

撰論三卷は給候へども釈論等の各疏候はざるあひだ事ゆかず候、をなしくは給い候いてみあわすべく候、見参の事いつてか候べき、仰をかほり候はん。

八講はいつにて候やらん。

七月十七日

武蔵殿御房

日蓮在御判

二六六 破良觀等御書

1289d

良觀・道隆 悲願聖人等が極樂寺 建長寺 寿福寺 普門寺等を立てて叡山の円頓大戒を蔑如するが如し、此れは第一には破僧罪なり二には仏の御身より血を出だす、今の念仏者等が教主釈尊の御入滅の二月十五日ををさへとり、阿弥陀仏の日とさだめ仏生日の八日をば薬師仏の日といふ、一切の眞言師が大日如来をたのみて教主釈尊は無明に迷える仏我等が履とりにも及ばず結句は灌頂して釈迦仏の頭をふむ、禅宗の法師等は教外別伝とのしりて一切経をばほんぐにはをとり我等は仏に超過せりと云云、此は南印度の大慢ばら門がながれ出仏身血の一分なり、第三に蓮花比丘尼を打ちころすこれ仏の養母にして阿羅漢なり、此れは阿闍世王の提婆達多をすてて仏につき給いし時いかりをなして大火・をやきしかばはらをすかねて此の尼のゆきあひ候たりしを打ち殺せしなり、今の念仏者等が念仏と禅と律と眞言とをせめられてのぶるかたわなし、結句は檀那等をあひかたらひて日蓮が弟子を殺させ予が頭等にきずをつけさんそうをなして二度まで流罪・あわせて頸をきらせんとくわだて弟子等數十人をろうに申し入るるのみならず、かまくら内に火をつけて日蓮が弟子の所為なりとふれまわして一人もなく失わんとせしが如し。

而るに提婆達多が三逆罪は仏の御身より血をいだせども爾禅の仏久遠実成の釈迦にはあらず、殺羅漢も爾前の羅漢

法華經の行者にはあらず、破和合僧も爾前小乗の戒なり法華円頓の大戒の僧にもあらず、大地われて無間地獄に入りしかども法華經の三逆ならざればいたつも深くあらざりけるかのゆゑに提婆は法華經にして天王如来とならせ給う、今の眞言師・念仏者・禅・律等の人人並に此れを御歸依ある天子並びに將軍家・日本国の上・下万人は法華經の強敵となる上一乗の行者の大怨敵となりぬ、されば設い一切經を覽り十方の仏に歸依し一國の堂塔を建立し一切衆生に慈悲ををこすとも衆流大海に入りかんみとなり衆鳥・須弥山に近ずきて同色となるがごとく、一切の大善變じて大惡となり七福かゝりて七難をこり現在眼前には他國のせめきびしく自身は兵にやぶられ妻子は敵にとられて後生には無間・大城に墮つべし。

此れをもんてをもうに故弥四郎殿は設い大罪なりとも提婆が逆にはすぐべからず、何に況や小罪なり法華經を信ぜし人なれば無一不成仏疑なきものなり。

疑て云く今の眞言師等を無間地獄と候は心あらめ事なり、今の眞言は源弘法大師・伝教大師・慈覺大師・智証大師・此の四大師のながれなり、此の人人地獄に墮ち給はずば今の眞言師いかで墮ち候べき、答えて云く地獄は一百三十六あり一百三十五の地獄は墮つる人雨のごとし其の因やすきゆなり、一の無間・大城は墮つる人

かたし五逆罪を造る人まれなるゆなり、又仏前には五逆なし但殺父殺母の二逆計りあり、又二逆の中にも仏前の殺父殺母は決定として無間地獄は墮ちがたし畜生の二逆のごとし、而るに今日本國の人人は又一百三十五の地獄はゆきがたし、日本國の人人形はことなれども同じく法華經誹謗の輩なり、日本國異なれども同じく法華誹謗の者となる事は源伝教より外の三大師の義より事をこれり。

問うて云く三大師の義如何、答えて云く弘法等の三大師は其の義ことなれども同じく法華經誹謗は一同なり、所謂善無畏三藏・金剛智三藏・不空三藏の法華經誹謗の邪義なり。

問うて云く三大師の地獄墮つる証拠如何、答えて云く善無畏三蔵は漢土日本国の真言宗の元祖なり彼の人すでに頓死して閻魔のせめにあり、其のせめに値う事は他の失ならず法華經は大日經に劣ると立てしゆなり、而るを此の失を知らずして其の義をひろめたる慈覺・智証地獄を脱るべしや、但し善無畏三蔵の閻魔のせめにあづかりし故をだにもたづねあきらめば此の事自然に顕れぬべし善無畏三蔵の鉄の縄七すぢつきたる事は大日經の疏に我とかかれて候上日本醍醐の閻魔堂・相州鎌倉の閻魔堂にあらわせり、此れをもつて慈覺・智証等の失をば知るべし。

問うて云く法華經と大日の三部經の勝劣は經文如何、答えて曰く法華經には諸經の中に於て最も其の上に在りと説かれて此の法華經は一切經の頂上の法なりと云云、大日經七卷・金剛頂經三卷・蘇悉地經三卷・已上十三卷の内法華經に勝ると申す經文は一句一偈もこれなし、但蘇悉地經計りにぞ三部の中に於て此の經を王と爲すと申す文候、此れは大日の三部經の中の王なり全く一代の諸經の中の大王にはあらず、例せば本朝の王を大王といふ此れは日本国の内の大王なり、全く漢土月支の諸王に勝れたる大王にはあらず、法華經は一代の一切經の中の王たるのみならず三世十方の一切の諸仏の所說の中の大王なり、例せば大梵天王のごときんば諸の小王・轉輪王・四天王・釈王・魔王等の一切の王に勝れたる大王なり、金剛頂經と申すは眞言教の頂王・最勝王經と申すは外道・天仙等の經の中の大王・全く一切經の中の頂王にはあらず、法華經は一切經の頂上の宝珠なり、論師・人師をすてて専ら經文をくらばはかくのごとし、而るを天台宗・出来の後・月氏よりわたれる經論並に天竺・漢土にして立てたる宗宗の元祖等・修羅心をさしはさめるかのゆへに或は經論にわたくしの言をまじへて事を仏説によせ或は事を月氏の經によせなどして私の筆をそへ仏説のよしを称す、善無畏三蔵等は法華經と大日經との勝劣を定むるに理同事勝と云云、此れは仏意にはあらず、仏説のごとくならば大日經等は四十余年の内・四十余年の内

にも華嚴 般若等には及ぶぐもなし、但阿含・小乘經にすこしいさてたる經なり、而るを慈覺大師等は此の義を弁えずして善無畏三藏を重くをもつゆゑに理同事勝の義を実義とをもえり、弘法大師は又此等にはにるぐもなき僻人なり、所謂法華經は大日經に劣るのみならず華嚴經等にもをとれり等云云、而を此の邪義を人に信ぜさせんために、或は大日如來より写瓶せりといふ、或は我まのあたり靈山にできけりといふ、或は師の慧果和尚の我をほめし、或は三鈷をなげたりなどと申し種種の誑言をかまたり、愚な者は今信をとる、又天台の眞言師は慈覺大師を本とせり、叡山の三千人もこれを信ずる上墮つて代代の賢王の御世に勅宣を下す、其の勅宣のせんは法華經と大日經とは同醍醐、譬は鳥の兩翼・人の左右の眼等云云、今の世の一切の眞言師は此の義をすぎず、此等は螢火を日月に越ゆともひ蚯蚓を花山より高しといふ義なり、其の上一切の眞言師は灌頂となづけて釈迦仏を直ちにかきてしきまんだらとなづけて弟子の足にふませ、或は法華經の仏は無明に迷える仏・人の中のいそのことし眞言師が履とりにも及ばずなどぶみにつくれり、今の眞言師は此の文を本疏となづけて日日・夜夜に談義して公家・武家のいのりとがうしてををくの所領を知行し檀那をたばらかす、事の心を案ずるに彼の大慢ばら門がごとく無垢論師にことならず、此等は現身に阿鼻の大火を招くべき人人なれども強敵のなければさてすぐるか、而りといへとも其のしるし眼前にみたり、慈覺と智証との門家等・鬭諍ひまなく、弘法と聖覺が末孫が本寺と伝法院・叡山と園城との相論は修羅と修羅と猿と犬のごとし、此等は慈覺の夢想に日をいとみ弘法の現身妄語のすへか、仏末代を記して云く謗法の者は大地微塵よりも多く正法の者は爪上の土よりすくなかるべし、仏語まことなるかなや今、日本国かの記にあたり。

予はかつしろしめされて候がごとく幼少の時より学文に心をかけし上・大虚空藏菩薩の御宝前に願を立て日本第一の智者となし給へ十二のとしより此の願を立つ其の所願に子細あり今くはしくのせがたし、其の後先ず

浄土宗・禅宗をきく其の後叡山・蘭城・高野・京中・田舎等処処に修行して自他宗の法門をならひしかども我が身の
不審はれがたき上本よりの願に諸宗何れの宗なりとも偏党執心あるべからずいつも仏説に証拠分明に道理現前なら
んを用ゆべし論師・訳者・人師等にはよるべからず専ら經文を詮とせん又法門によりては設け王のせめ

なりともはばかるべからず何に況や其の已下の人をや父母・師兄等の教訓なりとも用ゆべからず人の信不信はしらずあ
りのままに申すべしと誓状を立てしゆへに三論宗の嘉祥・華嚴宗の澄觀・法相宗の慈恩等をば天台

妙楽・伝教等は無間地獄とせめたれども真言宗の善無畏・三蔵弘法大師・慈覺・智証等の僻見はいまだせむる人なし、
善無畏・不空等の真言宗をすてて天台による事は妙楽大師の記の十の後序並に伝教大師の依憑集にのせられたれどもい
まだくはしからざればにや慈覺・智証の謬は出来せるかと強盛にせむるなり。

かく申す程に年卅二・建長五年の春の比より念仏宗と禅宗と等をせめはじめて後に真言宗等をせむるほどに念仏者
等始にはあなづる日蓮いかにがしこくとも明円房・公胤・僧上・顕真・座主等にはずべからず彼の人人だにもはじめは
法然上人をなんぜしが後にみな堕ちて或は上人の弟子となり或は門家となる日蓮はかれがこ

とし我つめん我つめんとはやりし程にいにしへの人人は但法然をなんじて善導・道綽等をせめず又經の權實をいわざりし
かばこそ念仏者はをこりけれ今日蓮は善導・法然等をば無間地獄につきをとして専ら浄土の三部

經を法華經にをしあはせてせむるゆへに螢火に日月・江河に大海のやうなる上念仏は仏のしばらくの戲論の法実にこ
れをもつて生死をはなれんとをわば大石を船に造り大海をわたり大山をになて嶮難を越ゆるがごとしと難ぜしかば
面をむかふる念仏者なし。

後には天台宗の人人をがたらひてどううちにせんとせしかどもそれもかなはず天台宗の人人もせめられしかば
在家・出家の心ある人人少少念仏と禅宗とをすつ念仏者・禅宗・律僧等我が智力叶わざるゆへに諸宗に

入りあるきて種種しゅしゆの讒奏ざんそうをなす、在家ざいけの人人ひとびとは不審ふしんあるゆゑに各各おのづからの持僧等あつ、或は眞言師しんごんし、或は念仏者ねんぶつ、或はふるき天台宗てんだいしゆ、或は禅宗ぜんしゆ、或は律僧等りつしゆをわきにはさみて、或は日蓮にちれんが住処じゆしよに向い、或はかしこよぶ、而れども一言二言にはすぎず、迦旃延かぜんねんが外道をげどうをせめしがごとく、徳慧菩薩とくえはさつが摩沓婆まかつぱをつめしがごとく、せめしゆゑに其その力ちから及およばず、人は智ちかしこき者ものすくなきかのゆゑに結句けっくは念仏者等ねんぶつをばつめさせてかなはぬところには大名だいめいしてものをばへ侍さむらいども、たのしくて先後せんごも弁わきまぬ在家ざいけの徳人等あつ、挙あげて日蓮にちれんをあだするほどに、或は私ひそかに狼藉ろうじやくをいたして日蓮にちれんが、かたの者を打ち、或は所あつを、ひある或は地あつをたて、或はかんたつをなす事あつかずをしらず、上に奏そうすれども人の主しやうとなる人はさす、
が戒力けいりきといふ福田ふくでんと申し子細しさいあるべきかとをもひて左右さうなく失とがもなされざりしかば、ぎりものどもよりあひてまちつと等らをかたらひて数万人しうばんにんの者をもつて夜中やちゆうにをしよせ失しわんとせしほどに、十羅刹じゆしやくの御計ごけいらいにてやありけん、日蓮にちれん其そのの難なんを脱だつれしかば、両国りやうこくの吏し、心をあわせたる事なれば殺ころされぬを、とがにして伊豆いづの国くにながされぬ、
最明寺さいめいじ殿計でんけいりこそ子細しさいあるかともわれていそぎゆるされぬ、
さりし程ほどに最明寺さいめいじ入道にゅうだう殿隠でんいんれさせ給たまひしかば、いかにも此このの事ことあしくなりなんす、いそぎかくるべき世なりとはをもひしかども、これにつけても法華經ほふけきやうのかたつとよくせば、一定事いぢやうじいで来るならば、身命しんめいをずつるにてこそあらめと思おもひ切りしかば、讒奏ざんそうの人人ひとびといよいよがずをしらず、上下万人じやうげばんにん、皆父母みなふぼのかたきとわりをみるがごとし、不輕菩薩ふぎやうはさつの威音王いおんおう仏ぶつのすゑにすこしもたがう事なし。

二六七

檀越某御返事

弘安元年四月五十七歳御作

1294p

御文おんぶんうけ給たまわ良あい、了おんぬ、日蓮にちれん流罪りゆうざいして先先かきなりにわざわいども重おもて候もちに又またなにと申まうす事ことが候もちべきとはをも

企も人のそんぜんとし候には不可思議の事の候はさが候はんずらむ、もしその義候わば用いて候はんには百千万億倍のさいわいなり、今度ぞ三度になり候、法華経もよも日蓮をばゆるき行者とはをばせじ、釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌千界の御利生今度みはて候はん、あわれあわれさる事の候へかし、雪山童子の跡ををひ

不輕菩薩の身になり候はん、いたづらにやくびやうにやをかされ候はんずらむ、をいじににや死に候はんずらむあらあさましあさまし、願くは法華経のゆへに国主にあだまれて今度生死をはなれ候わばや、天照太神・正八幡・日月・帝釈・梵天等の仏前の御ちかい今度心み候わばや、事事さてをき候いぬ、各各の御身の事は此れより申し

はからうべし、さでをはするこそ法華経を十二時に行ぜさせ給うにては候らめ、あなかしこあなかしく御みやづかいを法華経とをばしめせ、一切世間の治生産業は皆実相と相違背せずとは此れなり、かすが今御文の心こそをもいやられ候へ、恐恐謹厳。

四月十一日
日蓮花押

御衣布並に單衣布給候たひそつらいあわんぬ、抑そもそ食は命をつぎ衣は身をかくす、食を有情に施すものは長寿の報をまねぎ人の食を奪うものは短命の報をつく、衣を人にばどこさぬ者は世世存生に裸形の報をかんず、六道の中に人道已下は皆形裸にして生る天は隨生衣なり、其の中の鹿等は無衣にして生るのみならず、人の衣をぬすみしゆ

へに身の皮を人にはがれて盗し衣をつぐのつほつをえたり、人の中にも鮮白比丘には生ぜし時衣を被て生れぬ、仏法の中にも裸形にして法を行ずる道なし、故に釈尊は摩訶大母比丘尼の衣を得て正覺をなり給いき、諸の比丘には三衣をゆるされき、鈍根の比丘は衣食ととのわざれば阿羅漢果を証せずとみ今候、殊に法華經には

柔和忍辱衣と申して衣をこそ本として候へ又法華經の行者をば衣をもつて覆せ給つと申すもねんごろなるぎなり。

日蓮は無戒の比丘邪見の者なり故に天これをにくませ給いて食衣ともしき身にて候、しかりといえども法華經を口に誦しときどきこれをとく、譬は大の珠を含みいらんよりせんだんを生ずるがごとし、いらんをすててせんだんまいらせ候・形をかくして珠を授けたてまつる、天台大師云く「他經は但男に記して女に記せず」等云云、法華經にあらざれば女人成仏は許されざるか、具足千万光相如来と申すは摩訶大比丘尼のことなり、此れ等もつてをしはかり候に女人の成仏は法華經により候べきか、要當說眞實は教主釈尊の金言、皆是眞實は多宝仏の証明、舌相至梵天は諸仏の誓狀なり、日月は地に落つべしや須弥山はくづるべしや・大海の潮は増減せざるべしや大地は翻覆すべしや、此の御衣の功德は法華經にとかれて候、但心をもつてをもひやらせ給い候へ言にはのべがたし。

もつて一閻浮提えんぶだいの者の眼まなこを抉えくるべきか、釈迦しやか仏ぶつの御名みなをば幼稚ようちにては日種ひしゆといつ、長大ちやうだいの後の異名いみょうをば慧日えにちといつ、此の国くにを日本にほんといつ主しゅをば天照てんしやうと申もうす。

「是れ我が有うなり其その中の衆生しゆじやうは悉しつく是れ吾子わがこなり」等云云、この文の「ごとく」ならばこの三界さんがいは皆みな釈迦しやか如来にょらいの御所領しやうりやうなり、寿量品じゆりやうほんに云く「我常いわに此の娑婆世界しやばせかいに在り」等云云、この文の「ごとく」ならば乃至過去五百塵点劫ないしかここひやくじんでんこつよりこのかた此の娑婆世界しやばせかいは釈迦菩薩しやかぼさつの御進退しんたいの国土こくどなり、其の上仏そのの滅後めつご・一百年あそかだいおつに阿育大王あそくだいおうと申もうす王わうをはしき此の南閻浮提えんぶだいを三度さんどまで僧ふぞくに付属たまいし給たまひき、又此の南閻浮提えんぶだいの内の大日本国にほんこくをば戸那国しなの南岳大師なんがくだいし此の国の上宮太子じやうくつたいしと生れてこの国の王わうとなり給たまひき、しかれば聖徳太子しやうとくたいし已後の諸王しよわうは皆南岳大師みななんがくだいしの末葉まつようなり、桓武天皇かんむ已下の諸王しよわうは又山王さんわう。

者どもをば少しはをひだし或はきしやうかかせてはつにすぎて候いつるが七月末八月の始に所領かわり一万余東の作毛をさへがられて山やにまとひ候ゆへ日蓮なをばうじつるゆへかとののしり候上御かへり

の後七月十五日より上下いはいと申す虫ふりて国大体三分のうきんじ候いぬをほかた人のいくべしともみず候、これまで候をもいたせ給う上なにも事をもひ候どもかかねての御心ざしはつにもすぎ候か。

なによりもおぼつかなく候いつる事はとのかみの御気色いかながとをぼつかなく候いつるになに事もなき事申すばかりなし。

かつらむこの事つけ給わり候ぬ、なにとなくとも釈迦如来法華経を失い候いつる上は大果報ならば三年はよもとをもひ候いつるにいくさけかちづき候いぬ、国はいかに候法華経のひろまらん事疑なかるべし。

御母への御事経をよみ候事に申し候なり、此の御使いそき候はくはしく申さず候、恐恐。

二七二 除病御書 じよごしよ

1298p

其の上日蓮の身並びに弟子又過去謗法の重罪未だ尽きざるの上現在多年の間謗法の者と為り亦謗法の国に生る、当時信心深からざらんか豈之を脱れんや、但し貴辺此の病を受くるの理或人之を告ぐ予日夜朝暮に法華経に申し上げ朝暮に青天に訴う除病の由今日之を聞く喜悦何事か之に過ぎん、事事見参を期せん、恐恐。

三論宗も分別ならざる証文をもつて立てたりしかば、盲目の衆生に値うて誑惑せしかども、明眼の智者に値うて邪義顯れぬ、此れ即根露るれば枝枯れ源乾けば流竭く自然の道理なり、念仏宗・禅宗と真言とは其の根本謬を本とし誑惑を源とせり、其の根源顯れなば設い日蓮はいやしくと天のはからひ大法流布の時来るならば、彼の惡法やぶれて此の眞実の法立つ事疑なかるべし。

すでに此の惡法消えんとするは汝知るやいなや、日蓮をいやしみてさんざんとするほじにするほじ。

堂塔つくらず布施まいらせずらん、をしき物は命ばかりなり、これを法華經にまいらせんとをもし、三世の仏は皆凡夫にてをせし時命を法華經にまいらせて仏になり給う、此の故に一切の仏の始には南無と申す南無と申すは月氏の語、此の土にては歸命と申すなり、歸命と申すは天台の釈に云く「命を以て自ら歸す」等云云、命を法華經にまいらせて仏にはならせ給う、日蓮今度命を法華經にまいらせて

二七五

題目功德御書

1300p

功德は先の功德にたくらぶれば、前の功德は爪上の土のごとし、法華經の題目の功德十方の土のごとし、先の功德は一の水のごとし、題目の功德は大海のごとし、先の功德は瓦礫のごとし、過日の功德は金銀のごとし、先の功德は螢火のごとし、題目の功德は日月のごとしと申す經文なり。

二七六

大悪大善御書

1300p

大事には小瑞なし、大悪をきれば大善きたる、すでに大謗法、国にあり大正法必ずひろまるべし、各各なにをかなげかせ給うべき、迦葉尊者にあらずとも、まいをも、まいぬべし、舍利弗にあらねども、立つてをどりぬべし、上行菩薩の大地よりいで給いしには、をどりてこそいで給いしか、普賢菩薩の来るには、大地を六種につこかせり、事多しといども、しげきゆへにとどむ、又文申すすべし。

二七七

来臨曇華御書

1300p

追つて申す、御器の事は越後□□房申し候べし、御心ざしふかき由、内房へ申させ給い候へ。

春の始の御悦び自他申し籠め候い畢んぬ、抑去年の来臨は曇華の如し、将又夢か幻か疑いまだ晴れず候処に。

二七八

常樂我淨御書

1301p

出でさせ給いて諸大乘經をかんがへ出し十方の淨土を立て一切の諸法は常樂我淨と云云、其の時・五天竺の十六の
大国・五百の中国・十千の小国・無量の藥散国の諸の小乗經の無量無辺の寺寺の衆僧一同に蜂のごとく蜂起
し、蟻のごとく緊集し・雷のごとくなりわたり、一時に緊集して頭をあわせてなげいて云く仏在世にこそ五大の外道は
我等が本師・教主・釈尊とわあらそいしが仏は一人なり、外道は多勢なりしかども、外道はありのごとし・
仏は竜のごとく・師子王のごとくましませしかばこそせめかたせ給いぬ、此れはそれにはにるべくもなし、馬鳴は一人なれ
ども、我等は多人なれども、代すになれば悪はつよく善はゆわし、仏の在世の外道と仏法とは水火なり。

二七九

歸伏正法御書

1301p

上一人下万民一同に歸伏する正法なり始めて勝劣を立てて慈覺・智証・弘法そむかんとをほせある。べかりしとをば
すか強敵を仏法の中にあらそい出来すべきたね国のみだるべきせんてつなりいかなる聖人の御ことばなりとも用ゆべからず
各各日遮をいやしみて。真言宗と法華經宗と叡山末寺園城なら。

二八〇

現世無間御書

1302p

或^{ある}はくびをきり或^{ある}はながさればととかれて此^{この}の法門^{ほうもん}を涅槃^{ねはん}經^{ぎやう}守護^{しゆご}經^{ぎやう}等の法華^{ほけ}經^{ぎやう}の流通^{りつう}の御經^{ごぎやう}にときをかせ給^{たま}いて候^{まち}は此^{この}の国^{くに}をば梵王^{ぼんのう}帝釈^{たいしゃく}に仏^{ぶつ}をほせつけてよりせめさせ給^{たま}うべしととかれて候^{まち}されば此^{この}の国^{くに}は法華^{ほけ}經^{ぎやう}の大怨敵^{おんてき}なれば現世^{げんせ}に無間地獄^{むげんじごく}の大苦^{たいく}すこし心みさせ給^{たま}うか教主^{きやうしゆ}釈尊^{しやくそん}の日蓮^{にちれん}がかたつどをしてつみらせ給^{たま}うにやよもさるならば天照太神^{てんしやうたいじん}正八幡等^{せいはつぱんとう}は此^{この}の国^{くに}のかたつどにはなり給^{たま}はじ日蓮房^{にちれんぼう}のかたきなりすずにてなをわかし候^{まち}はんとぞはやり候^{まち}らむいのらばい
よいよあしかりなんあしかりなん、恐^{おそ}恐^{おそ}謹言^{きんげん}。

二月十三日

日蓮在御判^{にちれん}

御返事^{ごへんじ}

二八一

衣食御書^{いしょくごしょ}

1302p

尼御前^{あまごぜん}参^{まゐ}る

驚目^{がもく}一貫^{いちくわん}給^{たま}い畢^{おわ}んぬ、それじきはいろをましちからをつけいのちをのぶ、ころもはさむさをふせぎあつそ

をさえはちをかくす、人にものをせする人は人のいろをましちからをそえいのちをつぐなり。

釈迦如来は正しく法華經に「惡世末法の時能く是の經を持つ者」等云、善導云く千中無一等云、いづれを信ずべしや、又云く日蓮がみる程の經論を善導・法然上人は御覽なかりけるかと申すか、若しこの難のごとくならば昔の人の謬をば後の人のいかにあらわすべからざるか。

かたきはををくがたきはつよく、かたうどはこわくしてしまけ候は惡心ををこしてがへて法華經の信心をもやぶり惡道にをち候なり、あしきところをばついしきりてあるべし、釈迦仏は三十二相そなわつて身は金色面は満月のことし、しかれども或は惡人はすみとみる或は惡人はいとみる或は惡人はかたきとみる。

御文委く披見いたし候了んぬ、抑宝塔の御供養の物銭一貫文白米しななじなをくり物たしかにつけとり候了んぬ、

此の趣御本尊法華経にもねんごろに申し上げ候御心やすくおぼしめし候へ。

一御文に云く多宝如来・涌現の宝塔・何事を表し給うやと云云、此の法門ゆゆしき大事なり宝塔をことわるに天台大師文句の八に釈し給いし時証前起後の二重の宝塔あり、証前は迹門・起後は本門なり、或は又閉塔は迹門・

開塔は本門是れ即ち境智の二法なりしげきゆへにこれををく、所詮三周の声聞法華経に来て己心の宝塔を見ると云う事なり、今日蓮が弟子檀那又又かくのごとし、末法に入つて法華経を持つ男女のすがたより外には宝塔

なきなり、若し然れば貴賤上下をえらばず南無妙法蓮華経ととなづるものは我が身宝塔にして我が身又多宝如来なり、妙法蓮華経より外に宝塔なきなり、法華経の題目宝塔なり宝塔又南無妙法蓮華経なり。

今阿仏上人の一身は地水火風空の五大なり、此の五大は題目の五字なり、然れば阿仏房さながら宝塔・宝塔さながら阿仏房此れより外の才覚無益なり、聞信戒定進捨慚の七宝を以てかざりたる宝塔なり、多宝如来の宝塔を供養し給うかとおもへばさにては候はず我が身を供養し給う我が身又三身即一の本覚の如来なり、かく

信じ給いて南無妙法蓮華経と唱え給へことさながら宝塔の住処なり、経に云く「法華経を説くこと有らん処は我が此の宝塔其の前に涌現す」とはこれなり、あまりにありがたく候は宝塔をかきあらはしまいらせ候

ぞ、子にあらずんばゆづる事なかれ信心強盛の者に非ずんば見る事なかれ、出世の本懐とはこれなり。

阿仏房しかしながら北国の導師とも申しつべし、淨行菩薩うまれかわり給いてや日蓮を御とふらい給うか

不思議なり不思議なり、此の御志をば日蓮はしらず上行菩薩の御出現の力にまかせたてまつり候ぞ、別の故はあるべからずあるべからず、宝塔をば夫婦ひそかにをがませ給へ、委くは又又申すべく候、恐恐謹言。

文永九年壬申 三月十三日

日蓮 花押

阿仏房上人所へ

二八五 妙法曼陀羅供養事

文永十年 五十二歳御作 与千日尼

1305p

妙法蓮華經の御本尊供養候いぬ、此の曼陀羅は文字は五字七字にて候と、も三世の諸仏の御師一切の女人の成仏の印文なり、冥途にはともしびとなり死出の山にては良馬となり、天には日月の如し地には須弥山の如し、生死海の船なり成仏得道の導師なり。

此の大曼陀羅は仏滅後二千二百二十余年の間、閻浮提の内には未だひろまらせ給はず、病によりて薬あり軽病には凡薬をほどこし重病には仙薬をあたつべし、仏滅後より今までは二千二百二十余年の間は人の煩惱と罪業の病軽かりしかば智者と申す医師たちつぎ出でさせ給いて病に随つて薬をあたえ給いき、所謂俱舍宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗・真言宗・華嚴宗・天台宗・浄土宗・禅宗等なり、彼の宗宗に一一に薬あり、所謂華嚴の六相十玄・三論の八不中道、法相の唯識觀、律宗の二百五十戒・浄土宗の弥陀の名号、禅宗の見性成仏・真言宗の五輪觀、天台宗の一念三千等なり。

今の世は既に末法にのぞみて諸宗の機にあらざる上、日本国一同に一闡提大謗法の者となる、又物に譬うれば父母を殺す罪謀叛ををこせる科、出仏身血等の重罪等にも過ぎたり、三千大千世界の一切衆生の人の眼をぬける罪よりも深く

十方世界の堂塔を焼きはらふよりも超えたる大罪を一人して作れる程の衆生日本国に充滿せり、されば天は日日に眼をいからして日本国をにらめ、地神は怒りを作して時時に身をふるつなり、然るに我が朝の一切衆生は皆我が身に科なしと思ひ必ず往生すべし成仏をとげんと思へ、赫赫たる日輪をも目無き者は

見ず知らず、譬えばたいこの如くなる地震をもねぶれる者の心にはおぼえず、日本国の一切衆生も是くの如し女人よりも男子の科はををく男子よりも尼のところが重し尼よりも僧の科はををく破戒の僧よりも持戒の法師のところが重し、持戒の僧よりも智者の科はををかるべし、此等は癩病の中の白癩病白癩病の中の大白癩病なり。

末代の一切衆生はいかなる大医いかなる良薬を以てか治す可きとかが候は大日如来の智拳の印並びに大日の眞言阿弥陀如来の四十八願 薬師如来の十二大願・衆病悉除の誓も此の薬には及ぶがらず、つやつや病消滅せざる上いよ倍増すべし、此等の末法の時のために教主釈尊 多宝如来・十方分身の諸仏を集めさせ

給うて一の仙薬をとどめ給へ所謂妙法蓮華經の五の文字なり、此の文字をば法慧・功德林・金剛薩・普賢・文殊・薬王・観音等にもあつらへさせ給はず、何に況や迦葉舍利弗等をや、上行菩薩等と申して四人の大菩薩まします、此の菩薩は釈迦如来・五百塵点劫よりこのかた御弟子とならせ給いて一念も仏をわすれず、まします大菩薩

を召し出して授けさせ給へ、されば此の良薬を持たん女人等をば此の四人の大菩薩 前後左右に立そひて此の女人たせ給へ此の大菩薩も立たせ給ふ乃至此の女人道を行く時は此の菩薩も道を行き給ふ、譬はがげ

と身と水と魚と声とひびきと月と光との如し、此の四大菩薩南無妙法蓮華經と唱えたてまつる女人をはなるるならば釈迦・多宝・十方分身の諸仏の御勘気を此の菩薩の身に蒙らせ給うべし、提婆よりも罪深く瞿迦利よりも大妄語のものたるべしとをばしめすべし、あら悦ばしやあら悦ばしや、南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經。

日蓮花押

御文に云く謗法の浅深輕重に於ては罪報如何なりや云云、夫れ法華經の意は一切衆生皆成仏道の御經なり、然りと
いへども信ずる者は成仏をとく謗ずる者は無間・大城に墮つ、若し人信ぜずして斯の經を毀謗せば即ち一切世間の仏種
を断ぜん、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らんとは是なり、謗法の者にも浅深輕重の異あり、法華經を持ち信ずれど
も誠に色心相應の信者能持此經の行者はまれなり、此等の人は介爾ばかりの謗法はあれど
も深重の罪を受くる事はなし、信心はつよく謗法はよはき故なり、大水を以て小火をけすが如し、涅槃經に云く「若し
善比丘法を壊る者を見て置いて呵責し驅遣し拳処せずんば当に知るべし、是の人は仏法中の怨なり、若し能く驅遣し呵責
し拳処せば是れ我が弟子眞の聲聞なり」と云云、此の經文にせめられ奉りて日蓮は種種の大難に値うといへども仏法中怨
のいましめを免れんために申すなり。

但し謗法に至つて浅深あるべし、偽り愚かにしてせめざる時もあるべし、眞言・天台宗等は法華誹謗の者いたう呵責すべ
し、然れども大智慧の者ならでは日蓮が弘通の法門分別しがたし、然る間まづまづさしをく事あるなり立正安國論の
如し、いふといはざるこの重罪免れ難し、云つて罪のまぬがるべきを見ながら聞きながら置い

ていましめざる事眼耳の二徳忽に破れて大無慈悲なり、章安の云く「慈無くして詐り親むは即ち是れ彼が怨なり」等云々、
重罪消滅しがたし弥利益の心尤も然る可きなり、輕罪の者をばせむる時もあるべし又せめずしてをくも候べし、自然
になるる辺あるべしせめて自他の罪を脱れてさてゆるすべし、其の故は一向謗法になればまされる大重罪を受くるなり、彼
が為に惡を除けば即ち是れ彼が親なりとは是なり。

日蓮が弟子・檀那の中にも多く此くの如き事共候、さだめて尼御前もきこしめして候らん、一谷の入道の事日蓮が檀那と内には候へども外は念仏者にて候ぞ後生はいかんとすべき、然れども法華經十卷渡して候いしなり。

弥信心をはげみ給うべし、仏法の道理を人に語らむ者をば男女僧尼必ずにくむべし、よしにくまばにくめ法華經・釈迦仏天台・妙樂・伝教章安等の金言に身をまかすべし、如説修行の人とは是れなり、法華經に云く「恐れ

の世に於て能く須臾も説く」云云、惡世末法の時三毒強盛の惡人等集りて候時正法を暫時も信じ持ちたらん者をば天人供養あるべしと云う經文なり。

此の度大願を立て後生を願はせ給ふ少しも謗法不信のところが候はば無間・大城・疑いなるべし、譬ば海上を船にのるに船おろそかにあらざれどもあかりぬれば必ず船中の人人一時に死するなり、なはて堅固なれども蟻の穴あれば必ず終に湛たる水のたまらざるが如し、謗法不信のあかをとり信心のなはてををかたむべきなり、浅き

罪ならば我よりゆるして功德を得さすべし、重きあやまちならば信心をばげまして消滅さすべし、尼御前の御身として謗法の罪の浅深輕重の義をとせ給ふ事まことにありがたき女人にておはすなり、童女にあにをとるべ

きや、「我大乘の教を聞いて苦の衆生を度脱せん」とは是なり、「其の義趣を問うは是れ則ち難しと為す」と云つて法華經の義理を問う人はがたとしと説かれて候、相構えて相構えて力あらん程は謗法をばせめさせ給うべし、日蓮が義を助け給う事不思議に覚え候ぞ不思議に覚え候ぞ、六賢六賢。

九月三日

阿仏房尼御前御返事

日蓮 花押

二八七 千日尼御前御返事

弘安元年七月二十八日 五十七歳御作 与阿仏房尼

1309p

弘安元年太歳戊寅七月六日佐渡の国より千日尼と申す人、同じく日本国甲州波木井郷の身延山と申す深山同じき夫の阿仏房を使として送り給う御文に云く、女人の罪障はいかがと存じ候へども御法門に法華経は女人の成仏をさきとするぞと候いしを万事はたのみまいらせ候いて等云云。

夫れ法華経と申し候御経は誰れ仏の説き給いて候ぞとをもひ候へば此の日本国より西漢土より又西・流沙・葱嶺と申すよりは又はるか西月氏と申す国に浄飯王と申しける大王の太子十九の年位をすてさせ給いて檀どく山と申す山に入り御出家三十にして仏とならせ給い身は金色と変じ神は三世をかがみさせ給う、すぎにし

事来るべき事ががみにかけさせ給いておはせし仏の五十余年が間一代一切の経経を説きおかせ給う、此の一切の経経仏の滅後一千年が間月氏国にやうやくひろまり候いしかどもいまだ漢土日本国等は来り候はず、仏滅度後一千五年と申せしに漢土仏法渡りはじめて候いしかども又いまだ法華経はわたり給はず。

仏法漢土にわたりて二百余年に及んで月氏と漢土との中間に龜茲国と申す国あり、彼の国の内に鳩摩羅えん三蔵と申せし人の御弟子に鳩摩羅什と申せし人彼の国より月氏に入り須利耶蘇磨三蔵と申せし人に此の法華経をさづかり給いき、其の経を授けし時の御語に云く此の法華経は東北の国に縁ふかしと云云、此の御語を持ちて月氏より東方漢土へはわたし給いしなり。

漢土には仏法わたりて二百余年後秦王の御宇に渡りて候いき、日本国には人王第三十代欽明天皇の御宇治十三年、壬申十月十三日辛酉の日此れより西百済国と申す国より聖明皇日本国に仏法をわたす、此れは漢土に仏法わたり

て四百年 仏滅後・一千四百余年なり、其の中にも法華經はまししかども人王第三十二代 用明天皇の太子聖徳太子
と申せし人 漢土使をつかわして法華經をとりよせまいらせて日本国に弘通し給いき、それよりこのかた七百余年な
り、仏滅度後すでに二千二百三十余年になり候上 月氏 漢土 日本 山河 海海 里
里 遠くあたり人々 心心 国 国 各 各 別別にして語かわりしなごとなれば、いかでか仏法の御心をば我等凡夫は弁え候
べき、ただ経經の文字を引き合せてこそ知るべきに一切經はやうやうに候へども法華經と申す御經は八巻まします流通
に普賢經序文の無量義經各一卷已上此の御經を開き見まいらせ候へば明かなる鏡をもつて
我が面を見るがごとし、日出でて草木の色を弁えるにいたり、序品の無量義經を見まいらせ候へば「四十余年未だ眞實を
顯わさず」と申す經文あり、法華經の第一の巻方便品の始めに「世尊の法は久しき後に要らず當に眞實を説きたもうべ
し」と申す經文あり、第四の巻の宝塔品には「妙法華經 皆是眞實」と申す明文あり、第七
の巻には「舌相梵天に至ると申す經文赫赫たり、其の外は此の經より外のさきのちならざる經經をば星に譬へ江河に譬へ
小玉に譬へ小山に譬へたり、法華經をば月に譬へ日に譬へ大海・大山・大王等に譬へ給へり、
此の語は私の言には有らず皆如来の金言なり十方の諸仏の御評定の御言なり、一切の菩薩・二乗梵天・帝釈今の天に
懸りて明鏡のごとくにまします、日月も見給いき聞き給いき其の日月の御語も此の經にのせられて候、月氏 漢土 日本 国
のふるき神たちも皆其の座につらなり給いし神神なり、天照太神・八幡大菩薩・熊野・すずか等の
日本国に神神もあらそひ給うべからず、此の經文は一切經に勝れたり地走る者の王たり師子王のごとし 空飛ぶ者の王た
り驚のごとし、南無阿弥陀仏經等はきじのごとし兎のごとし驚につかまれては涙をながし師子にせめられては腸わたをた
つ、念仏者 律僧 禅僧 眞言師等又かくのごとし、法華經の行者に値いぬればいろを失い魂をけすなり。

かかるいみじき法華經と申す御經はいかなる法門ぞと申せば、一の卷方便品よりうちはじめて菩薩・二乘凡夫皆仏に
り給うやうをとかれて候へどもいまだ其のしるしなし、設えば始めたる客人が相貌うるわしくして心もいさぎよくよく口
もきいて候はいつ事疑なけれどもさきも見ぬ人なればいまだあらわれたる事なけ

れば語のみにては信じがたきぞかし、其の時語にまかせて大なる事度度あひ候はさては後の事もたのもしなどと申すぞ
かし、一切信じて信ぜられざりしを第五の卷に即身成仏と申す一經第一の肝心あり、譬はくろき物を白くす事漆を
雪となし不浄を清浄になす事濁水に如意珠を入れたるがごとし、竜女と申せし小蛇を現身

に仏になしてましましき、此の時こそ一切の男子の仏になる事をば疑う者は候はざりしか、されば此の經は女人成仏を
手本としてとかれたりと申す、されば日本国に法華經の正義を弘通し始めましませし叡山の根本伝教大師の此の事を
釈し給うには「能化所化俱に歴劫無し妙法経力即身成仏す」等、漢土の天台智者大師法華經の正義

をよみはじめ給いしには「他經は但男に記して女に記せず乃至今經は皆記す」等云、此れは一代聖教の中には法華經
第一法華經の中には女人成仏第一なりとことわらせ給うにや、されば日本の一切の女人は法華經より外の一切經には
女人成仏せずと嫌うとも法華經にだにも女人成仏ゆるされなばなにかくるしかるべき。

しかるに日蓮はつけがたくして人身をつけ値いがたくして仏法に値い奉る、一切の仏法の中に法華經に値いまいらせて
候、其の恩徳をももは父母の恩国主の恩一切衆生の恩なり、父母の恩の中に慈父をば天に譬悲母をば大地に譬へたり
いづれもわけがたし、其の中にも悲母の大恩ことにほつじがたし、此れを報ぜんとをもつ

に外典の三墳・五典孝經等によて報ぜんとをももは現在をやしないて後世をたすけがたし、身をやしなひ魂をたすけず
内典の仏法に入りて五千・七千余卷の小乗・大乘は女人成仏かたければ悲母の恩報じがたし・小乗は女人成仏一向に
許されず、大乘經は或は成仏、或は往生を許たるやうなれども仏の仮言にて実事なし、但法華經

計りこそ女人成仏悲母の恩を報ずる実の報恩經にて候へと見候いしかば悲母の恩を報ぜんために此の經の題目を一切の
女人に唱えさせんと願す、其れに日本国の一切の女人は漢土の善導日本の慧心永觀・法然等にすかされて詮とすべきに
南無妙法蓮華經をば一国の一切の女人一人も唱うる事となし、但南無阿彌陀仏と一日に一返
十返・百千万億反・乃至三万・十万反・一生が間・昼夜十二時に又他事なし、道心堅固なる女人も又悪人なる女人も彌陀
念仏を本とせり、わづかに法華經をこととするやうなる女人も月まつまでのてずさびをもわしき男のひまに心ならず心ざ
しなき男にあつがごとし。

されば日本国の一切の女人・法華經の御心に叶うは一人もなし、我が悲母に詮とすべき法華經をば唱えずして彌陀に心
をかけば法華經は本ならねばたすけ給うべからず、彌陀念仏は女人たすけるの法にあらず必ず地獄に墮ち給うべし、いか
んがせんとなげきし程に我が悲母をたすけんがために彌陀念仏は無間地獄の業なり・五逆
にはあらざれども五逆にすぎたり、父母を殺す人は其の肉身をばやぶれども父母を後生に無間地獄には入れず、今・
日本国の女人は必ず法華經にて仏になるべきを・たばらかして一向に南無阿彌陀仏になしぬ、悪ならざればすかさねぬ・仏
になる種ならざれば仏にはならず彌陀念仏の小善をもつて法華經の大善を失う小善の念仏は大惡の五逆にすぎたり、
譬へば承平の將門は關東八箇國をつた天喜の貞任は奥州をうちとめし民を王・通せざりしかば朝敵となりてついにほ
ろぼされぬ、此等は五逆にすぎたる謀反なり。

今・日本国の仏法も又かくのごとし色かわれる謀反なり、法華經は天王大日經觀無量壽經・眞言宗・淨土宗・禪宗・
律僧等は彼れ彼れの小經によつて法華經の大怨敵となりぬるを日本の一切の女人等は我が心のをろかなるをば知らずして我
をたすくる日蓮をかたきとをもひて大怨敵たる念仏者・禪・律・眞言師等を善知識とあやまてり、たすけんとする日蓮かへ
りて大怨敵とをもわるるゆへに女人こそりて國主に讒言して伊豆の國ながせし上・

又佐渡の国さどながされぬ。

ここに日蓮にちれん願いわつて云く日蓮は全くあやまなし設たといひごとい僻事いっさいなりとも日本国にほんこくの一切いっさいの女人にょにんを扶たすけんと願ねがせる志こころはすてがたかるべし、何いかに況ほけきようや法華經ほけきようのまゝに申もうす、而しかを一切いっさいの女人にょにん等ら信しんぜずばさでこそ有あるべきに、かへりて日蓮にちれんをつたする、日蓮にちれんが僻事ひがごとか釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゅうほうの諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつ・二乘にじよう・梵釈ぼんしやく・四天してん等らいかに計たまらい給たまつぞ、日蓮にちれん僻事ひがごとなれば其その義ぎを示たまし給たまへことには日月天にちがつは眼前がんぜんの境界きようかいなり、又仏前ぶつぜんにしてきかせ給たまえる上法華經ほけきようの行者ぎやうじやをあだまんものをば頭破づつへれて七分しちぶんと作つくらんと等らと誓ちかいひ給たまひ候まちべきと日蓮にちれん強盛きやうじやうにせめまいらせ候まちゆへに天てん此この国こくを罰ばつすゆへに此この疫病えきびやう出現しゆげんせり、他国たこくより此この国こくを天てんをほせつけて責せめらるべきに、両方りやうほうの人ひとあ

また死ぬべきに天てんの御計ごけいらいとしてまづ民たみを滅めつぼして人ひとの手足てしよくを切るがごとくして大事だいじの合戦がくせんなくして此この国こくの王臣おうしん等をせめかたづけて法華經ほけきようの御敵ごてきを滅めつぼして正法しやうほうを弘通くわうつうせんとなり。

而しかに日蓮にちれん・佐渡さどの国こく・流しゆされたりしかば彼かの国こくの守護しゆご等は国主こくしゆの御計ごけいらいに随したがいて日蓮にちれんをあだむ・万民ばんみんは其その命いのちに随したがう、念仏者ねんぶつ・禅ぜん・律りつ・真言師しんごんし等は鎌倉かまくらよりもいかにもして此これをわたらぬやう計もうると申しつかわし、極樂寺ごくらくじの良觀房りやうくわん等は武蔵むさしの前司殿みきようしやうの私みの御教書ごきやうしよを申もうして弟子でしに持もちたせて日蓮にちれんをあだみなんとせしかばいかにも命いのちた

すかるべきやうはなかりしに天てんの御計ごけいらいはさてをきぬ、地頭じとう・地頭じとう・念仏者ねんぶつ・念仏者ねんぶつ等ら・日蓮にちれんが庵室あんしつに昼夜じつやに立ちそいてかよつ人もあるをまどわさんとせめしに阿仏房あぶつぼうにひつを・しおわせ夜中たひちゆうに度度たびたび・御ごわたりありし事こといつの世よにか・わすらむ、只悲母ただひもの佐渡さどの国こくに生あれかわりて有あるが。

漢土かんどに沛公はいこうと申まうせし人王じんわうの相有ちやうりとして秦ちんの始皇しやうくわんの勅宣くたを下くだして云く沛公はいこう打ちてまいらせん者ものには不次ふじの賞しょうを行おこなうべし、沛公はいこうは里りの中には隠かくれがたくして山やまに入りて七日しちにち・二七日ふたしちにちなど有あるなり、其そのの時命ときすでにをわりぬべかりしに沛公はいこうの妻女さいにょ呂公りこうと申まうせし人ひとこそ山中やまのちゆうを尋たずねて時時よより命いのちをたすけしが彼は妻さいなればなさけすてがたし、此これ

は後世ををばせずばなにしかかくはおはすべき、又其の故に或は所ををい或はくわれうをひき或は毛をとられなんどせしにいにとをらせ給いぬ、法華經には過去に十萬億の仏を供養せる人こそ今生には退せぬとわみ候へされば十萬億供養の女人なり、其の上人は見る眼の前には心ざし有りと、もさしはなれぬれば心

はわすれずともさでこそ候に去ぬる文永十一年より今年弘安元年まではすでに五箇年が間、此の山中に候に佐渡の国より三度まで夫をつかはす、いくらほどの御心ざしぞ大地よりもあつく大海よりもふかき御心ざしぞかし、

釈迦如来は我が薩王太子たりし時うへたる虎に身をかいし功德戸毘王とありし時鳩のために身をかへし功德をば我が末の代かくのごとく法華經を信ぜん人にゆづらむとこそ多宝十方の仏の御前にては申させ給いしか。

其の上御消息に云く尼が父の十三年は来る八月十一日又云くぜに一貫もん等云云、あまりの御心ざしの切に候はありえて御はしますに隨いて法華經十巻をくりまいらせ候、日蓮がこいしくをせん時は学乗房によませて御ちやうもんあるべし、此の御經をしるしとして後生には御たづねあるべし、抑去年今年のありさまはいか

にかならせ給いぬらむとをばつかなさに法華經にねんごろに申し候いづれどもまだいがかしく候いつるに七月二十七日の申の時に阿仏房を見つけて尼ごせんはいかにこつ入道殿はいかにとまづとて候いづればまだやまず、こつ入道殿は同道にて候いつるがわけはすでにちかづきぬこわなしいかんがせんとしてがへ

られ候いつるとかたり候いし時こそ盲目の者の眼のあきたる死し給える父母の閻魔宮より御をとづれの夢の内に有るをゆめにて悦ぶがごとし、あわれあわれふしぎなる事かな、此れもかまくらも此の方の者は此の病にて死ぬる人はすくなく候、同じ船にて候はいづれもたすかるべしともをばず候いつるにふねやぶれて・

たすけぶねに値えるか、又竜神のたすけにて事なく岸へつけるかとこそ不思議がり候へ

さわの入道の事なげくよし尼ごせん申したさえ給え、ただし入道の事は申し切り候いしかばをもち合

せ給^{たま}うらむ、いかに念^{ねん}仏^{ぶつ}堂^{どう}ありとも阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}は法^ほ華^け經^{きやう}のかたきをばたすけ給^{たま}うべからず、かえりて阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}の御^ごかたきなり後^ご生^{しやう}惡^{あく}道^{どう}に墮^おちてくいられ候^{こう}らむ事^{こと}あさまし。

ただし入^い道^{だう}の堂^{どう}のらうにていのちをたびたびたすけられたりし事^{こと}そいかにすべしともをば候^{こう}はね、学^{がく}乘^{じやう}房^{ぼう}をもつてはかにつねづね法^ほ華^け經^{きやう}をよませ給^{たま}えとかたらせ給^{たま}え、それも叶^{かな}うべしとはをばえず、さても尼^にのいかにたよりなかるらむとなげくと申^{もう}した^{たま}いさせ給^{たま}い候^{こう}へ又^{また}申^{もう}すべし。

七月二十八日

日蓮^{にぢれん} 花押^{かおう}

佐渡^{さど}国^{くに}府^ふ阿^あ仏^{ぶつ}房^{ぼう}尼^に御^ご前^{ぜん}

二八八 千日^{あまごぜんごへんじ}尼^に御^ご前^{ぜん}御^ご返^{へん}事^じ

弘安^{こうあん}元^{げん}年^{ねん}十^{じゅう}月^{げつ}十^{じゅう}九^{きゅう}日^{にち}

五十七^{ごじち}歳^{さい}御^ご作^{さく}

与^{あぶつぼう}阿^あ仏^{ぶつ}房^{ぼう}尼^に

1315

青^{せい}鳧^ふ一^{いつ}貫^{くわん}文^{ぶん}干^{かん}飯^{はん}一^{いつ}斗^と種^{しゆ}種^{しゆ}の物^{もの}給^{たま}い候^{こう}い^いんぬ、仏^{ぶつ}に土^どの餅^{もち}を供^く養^{やう}せし德^{とく}勝^{しやう}童^{どう}子^しは阿^あ育^{いく}大^{だい}王^{わう}と生^なれたり、仏^{ぶつ}に漿^{じやう}をまひらせし老^{らう}女^{にょ}は辟^{ひやく}支^し仏^{ぶつ}と生^なれたり、法^ほ華^け經^{きやう}は十^{じゅう}方^{ぽう}三^{さん}世^{せい}の諸^{しよ}仏^{ぶつ}の御^ご帥^{すい}なり、十^{じゅう}方^{ぽう}の仏^{ぶつ}と申^{もう}すは東^{とう}方^{ぽう}善^{ぜん}德^{とく}仏^{ぶつ}・東^{なん}南^{ぽう}方^{ぽう}無^む憂^{いう}德^{とく}仏^{ぶつ}・南^{なん}方^{ぽう}栴^{せん}檀^{だん}德^{とく}仏^{ぶつ}・西^{なん}南^{ぽう}方^{ぽう}宝^{ほう}施^し仏^{ぶつ}・西^{さい}方^{ぽう}無^む量^{りやう}明^{めい}仏^{ぶつ}・西^{さい}北^{ほく}方^{ぽう}華^わ德^{とく}仏^{ぶつ}・北^{ほく}方^{ぽう}相^{さう}德^{とく}仏^{ぶつ}・東^{とう}北^{ほく}方^{ぽう}三^{さん}乘^{じやう}行^{ぎやう}仏^{ぶつ}・上^{じやう}方^{ぽう}広^{くわう}衆^{しゆ}德^{とく}仏^{ぶつ}・

下^{めい}方^{とく}明^{めい}德^{とく}仏^{ぶつ}なり、三^{さん}世^{せい}の仏^{ぶつ}と申^{もう}すは過^か去^こ・莊^{じやう}嚴^{げん}劫^{きやく}の千^{せん}仏^{ぶつ}・現^{げん}在^{ざい}・賢^{けん}劫^{きやく}の千^{せん}仏^{ぶつ}・未^み来^{らい}・星^{せい}宿^{しやく}劫^{きやく}の千^{せん}仏^{ぶつ}・乃^な至^し華^わ嚴^{げん}經^{きやう}・法^ほ華^け經^{きやう}・涅槃^{ねはん}經^{きやう}等^{とう}の大小^{だいしやう}・權^{けん}實^{じつ}・蹟^{じやく}密^{みつ}の諸^{しよ}經^{きやう}に列^{れつ}り給^{たま}へる一^{いつ}切^{しやく}の諸^{しよ}仏^{ぶつ}・尽^{じん}十^{じゅう}方^{ぽう}世^{せい}界^{かい}の微^み塵^{ちん}数^{すう}の菩^ぼ薩^{さつ}等^{とう}も皆^{みな}悉^{しつ}く法^ほ華^け經^{きやう}の妙^{めう}の一^{いつ}字^じより出^{しゅつ}生^{しやう}し給^{たま}へ、故^{ゆえ}に法^ほ華^け經^{きやう}の結^{けつ}經^{きやう}たる普^ふ賢^{けん}經^{きやう}に云^いく「仏^{ぶつ}三^{さん}種^{しゆ}の身^みは方^{ぽう}等^{とう}より生^なず」等^{とう}云^いく、方^{ぽう}等^{とう}とは月^{がつ}氏^しの語^ご・漢^{かん}土^どには大^{だい}乘^{じやう}と翻^{はん}ず・大^{だい}乘^{じやう}と申^{もう}すは法^ほ華^け經^{きやう}の名^ななり、阿^あ含^{こん}經^{きやう}は外^げ道^{だう}の經^{きやう}に對^{たい}すれば大^{だい}乘^{じやう}經^{きやう}・華^け嚴^{げん}・般^{はん}若^{にゃく}・大^{だい}日^{にち}經^{きやう}等^{とう}は阿^あ含^{こん}經^{きやう}に對^{たい}すれば大^{だい}乘^{じやう}經^{きやう}・法^ほ華^け經^{きやう}に對^{たい}すれば小^{しやう}乘^{じやう}經^{きやう}なり、法^ほ華^け經^{きやう}に勝^{すく}れたる經^{きやう}なき故^{ゆえ}に一^{いつ}

大乘経なり、例せば南閻浮提、八万四千の国、国の王王は其の国にては大王と云う、
大乗経なり、例せば南閻浮提、八万四千の国、国の王王は其の国にては大王と云う、
乃至六欲・四神の王王は大小に破る、色界の頂の大梵天王独り大王にして小の文字をつくる事なきが如し、
法華経は父性なり、譬えば一人の父母に千子有りて一人の父母を讃歎すれば千子悦びをなす、
一人の父母を供養すれば千子を供養するになりぬ。

又法華経を供養する人は十方の仏・菩薩を供養する功德と同じきなり、
十方の諸仏は妙の一字より生じ給へる故なり、
譬えば一の師子に百子あり、彼の百子諸の禽獸に犯さるるに、一の師子王吼れば百子力を得て諸の禽獸皆頭七分に
わる、法華経は師子王の如し一切の獸の頂きとす、法華経の師子王を持つ女人は一切の地獄・餓鬼・畜生

等の百獸に恐るる事なし、譬えば女人の一生の間の御罪は諸の乾草の如し法華経の妙の一字は小火の如し、
小火を衆草につきぬれば衆草焼け亡ぶるのみならず大木大石照焼け失せぬ、
妙の一字の智火以て此くの如し諸罪消ゆ

るのみならず衆罪かへりて功德となる毒藥変じて甘露となる是なり、
譬えば黒漆に白物を入れぬれば白色となる、
女人の御罪は漆の如し南無妙法蓮華経の文字は白物の如し人は臨終の時地獄に墮つる者は黒色となる上其の身重き事、
千引の石の如し善人は設ひ七尺八尺の女人なれども色黒き者なれども臨終に色変じて白色となる又輕き事、
鷲毛の如し軟なる事、
兜羅縣の如し。

佐渡の国より此の国までは山海を隔てて千里に及び侯に女人の御身として法華経を志し、
ましますによりて年年に夫を御使として御訪いあり定めて法華経・釈迦・多宝・十方の諸仏、
其の御心をしろしめすらん、
譬えば天月は四万由旬なれども大地の池には須臾に影浮び雷門の鼓は千万里遠けれども打ちては須臾に聞ゆ、
御身は佐渡の国にをせども心は此の国に来れり、
仏に成る道も此くの如し、我等は穢土に候へども心は靈山に住べし、
御面を見てはなにかせん心こそ大切に候へいづかがいつか釈迦仏のをはします靈山会上にまひりあひ候はん、
南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華經、恐恐謹言。

弘安元年後十月十九日

千日尼御前御返事

日蓮 花押

二八九 阿仏房御返事

1317p

御状の旨、委細承り候了んぬ、大覺世尊説いて曰く、生老病死・生住異滅・等云云、既に生を受けて、齡六旬に及ぶ老又疑い無し只残る所は病死の二句なるのみ、然るに正月より今月六月一日に至り連連此の病息むこと無し死ぬる事疑い無き者か、経に云く、生滅滅已・寂滅為樂云云、今は毒身を棄てて後に金身を受ければ豈欺くべけんや。

建治三年丁丑六月三日

阿仏房

日蓮 花押

追伸、絹の染袈裟一つまいらせ候、豊後房に申し候べし既に法門・日本国にひろまりて候、北陸道をば豊後房なびくべきに学生ならでは叶うべからず。九月十五日已前にいそぎいそぎまいるべし、こつ入道殿の尼ごぜんの事なげき入つて候、又こいしこいと申しつたさせ給へかすの聖教をば日記のごとくたんば房にいそぎいそぎつかわすべし、山伏房をばこれより申すにしたがいてこれ合はわたすべし、山伏の現にあだまれ候事悦び入つて候。

驚目一貫五百文のりわかめほしいしな物の給ひ候いんぬ、法華經の御宝前に申し上げて候、法華經に云く「若し法を聞く者有らば一として成仏せざること無し」云、文字は十字にて候ども法華經を一句よみまいらせ候は釈迦如来の一代聖教をのりなく読むにて候なるぞ、故に妙樂大師の云く「若し法華を弘むるは凡そ

一義を消するも皆一代を混じて其の始末を窮めよ」等云、始と申すは華嚴經・末と申すは涅槃經・華嚴經と申すは仏最初成道の時法慧・功德林等の大菩薩・解脫月菩薩と申す菩薩の請に趣いて仏前にてとかれて候、其の經

は天竺・竜宮城・兜率天等は知らず日本国にわたりて候は六十卷・八十卷・四十卷候、末と申すは大涅槃經・此れも月氏

・竜宮等は知らず我が朝には四十卷・三十六卷・六卷・二卷等なり、此れより外の阿含經・方等經・般若經等は五千・七千余卷なり、此れ等の經經は見ずきかず候ども但法華經の一字・一句よみ候は彼れ彼れの經經を一字

もをとさずよむにて候なるぞ、譬は月氏日本と申すは二字・二字に五天竺十六の大国・五百の中国・十千の小国・無量の粟散国の大地・大山・草木・人畜等をさまれるがごとし、譬は鏡はわづかに一寸・二寸・三寸・四寸・五寸と候ども一尺・五

尺の人をもつかべ二丈・二丈・十丈・百丈の大山をもつつすがごとし。

されば此の経文をよみて見候は此の経をきく人は一人もかけず仏になると申す文なり、九界六道の一切衆生各
心心かわれり、譬は二人三人乃至百千人候ども一尺の面の内しちにたる人一人もなし、心のにざるゆへに面もに
ず、まして二十人六十人九界の衆生の心いかながかわりて候らむ、されば花をあいにし月

をあいにしきをこのみにがきをこのみちいさきをあいにし大なるをあいにしいろいろなり、善をこのみ悪をこのみしななり、か
くのごとくいろいろに候ども法華經に入りぬれば唯一人の身一人の心なり、譬は衆河の大海に入りて同一の鹹味なるが
ごとく衆鳥の須弥山に近ずきて一色なるがごとく、提婆が三逆も羅羅が

二百五十戒も同じく仏になりぬ、妙莊嚴王の邪見も舍利弗が正見も同じく授記をかをほれり、此れ即ち無一不成仏のゆ
ゑかし、四十余年の内の阿弥陀経等には舍利弗が七日の百万反大善根をとかれしかども未顕眞実ときらわれしかば七日
ゆをわかつて大海になげたるがごとく、ゐ提希が觀經をよみて無生忍を得しかども正直捨方便

とすてられしかば法華經を信ぜずば返つて本の女人なり、大善を用うる事なし法華經に値わざればなにかせん、大悪をも
歎く事無かれ一乗を修行せば提婆が跡をもつぎなん、此等は皆無一不成仏の経文のむなしからざるゆゑかし。

されば故阿仏房の聖靈は今いつくにかをはすらんと人は疑うとも法華經の明鏡をもつて其の影をつかて候は
靈鷲山の山の中に多宝仏の宝塔の内に東むきにをはずと日蓮は見まいらせて候、若し此の事そらごとにて候わば日蓮が
ひがめにては候はず、釈迦如来の世尊法久後、要当説眞実の御舌も多宝仏の妙法華經、皆是眞実の舌相

も四百万億那由他の国土にあさのごとくいねのごとく星のごとく竹のごとくぞくぞくとすきまもなく列なつてをはしまし
し諸仏如来の一仏もかけ給はず、広長舌を大梵王宮に指し付けてをせし御舌どものくちらの死にてくされたるがごと
く、いわしのようにあつまりてくされたるがごとく、皆一時にくちくされて十方世界の

諸仏如来大妄語の罪にをとされて寂光の浄土の金るり大地はたとわれて提婆がごとく無間・大城にかつぱと入り法蓮香比丘尼がごとく身より大妄語の猛火ばといでて実報華王の花のその一時に灰燼の地となるべし、いかでかさる事は候べき、故阿仏房一人を寂光の浄土に入れ給はずば諸仏は大苦に墮ち給うべし、ただをいて

物を見よただをいて物を見よ、仏のまことそら事は此れにて見奉るべし、さてはをとこはしらのごとし女はなかわのごとし、をとこは足のごとし女人は身のごとし、をとこは羽のごとし女はみのごとし、羽とみとべちべちになりなばなをもつてかとぶべき、はしらたうれなばなは地に墮ちなん、いかにをとこなければ

人のたましひなきがごとし、くうじをたれにかいぬあわせん、よき物をばたれにかやしなうべき、一月二日たがいしをだにもをばつかなくをもいしに、ごぞの三月の二十一日にわかれにしがごぞもまちくらせどまみゆる事なし、今年もすでに七つきになりぬ、たといわれこそ来らずともいかにをとづればなかるらん、ちり

し花も又さきぬおちし菓も又なりぬ、春の風もかわらず秋のけしきもごぞのごとし、いかにこの一事のみがわりゆきて本のごとくなかるらむ、月は入りて又いでぬ雲はきこ又来る、この人人の出でてかへらぬ事こ

そ天もつらめしく地もなげかしく候へさこそをばすらめいそぎいそぎ法華経をらうれつとたのみまいらせ給いて、りやうぜん浄土まいらせ給いてみまいらせさせ給うべし。

抑子はかたきと申す経文もあり、世人子の為に衆の罪を造るの文なり、鷲と申すとりはをやは慈悲をもつて養ひ子はかゝりて食とす梟鳥と申すとりは生まれては必ず母をくらう、畜生かくのごとし、人の中に

もはるり王は心もゆかぬ父の位を奪い取る、阿闍世王は父を殺せり、安祿山は養母をころし安慶緒と申す人は父の安祿山を殺す安慶緒は又史師明に殺されぬ史師明は史朝義と申す子に又ころされぬ、此れは敵と申すもことわりなり、善星比丘と申すは教主釈尊の御子なり、苦得外道をかたらいて度度父の仏を殺し奉らんとす、又

子は財と申す経文もはんべり所以に経文に云く「其の男女追つて福を修すれば大光明有つて地獄を照し其の父母に信心を顕さしむ」等と申す、設い仏説ならずとも眼の前に見えて候。

天竺に安足国王と申せし大王はあまりに馬をこのみてがいしほどに、後にはがいなれて鈍馬を竜馬となすのみならず牛を馬ともなす、結句は人を馬となしてのり給いき、其の国の人あまりになげきしかば知らぬ国の人を馬となす、他国の商人のゆきたりしかば薬をかいて馬となして御まやうにつなぎつけぬ、なにとなければども

我が国はこいしき上妻子ことにこいしくしのびがたかりしかどもゆるす事なかりしかばかへる事なし、又かへりたりともこのすがたにては由なかるべし、ただ朝夕にはなげきのみにしてありし程に一人ありし

子父のまちどきすぎしかば人にや殺されたるらむ又病にや沈むらむ子の身としていかでか父をたづねざるべきといたちければ母なげくらく男も他国よりかへらず一人の子もすてゆきなば我いかんがせんとな

げきしかども子ちちのあまりにこいしかりしかば安足国尋ねゆきぬ、ある小屋にやどりて候しかば家の主申すやうあらふびんやわどのはをさなき物なり而もみめかたち人にすぐれたり、我に一人の子ありしが他国に

ゆきてしにやしけん又いかにてやあるらむ、我が子の事ををもはわどのをみてめもあてられず、いかにと申せば此の国は大なるなげき有り、此の国の大王あまり馬をこのませ給いて不思議の草を用い給へ、一葉せば

き草をくわすれば人馬となる、葉の広き草をくわすれば馬人となる、近くも他国の商人の有りしをこの草をくわせて馬となして第一の御まやに秘蔵してつなぐれたりと申す、此の男これをきいてさては我が父は馬と成りてけりとをもいて返つて問う其の馬は毛はいかにとといければ家の主答えて云く栗毛なる馬の肩白く・

ぶちたりと申す、此の物此の事をききてとかつはからいて王宮に近づき葉の広き草をぬすみとりて我が父の馬になりたりしに食せしかば本のごとく人となりぬ、其の国の大王不思議なるおもひをなして孝養の者なりと

て父を子にあづけ給へり、其れよりついに人を馬となす事はとどめられぬ。

子ならずば、いかでか尋ねゆくべき、目連尊者は母の餓鬼の苦をすくひ淨蔵淨眼は父の邪見をひるが、此れよき子の親の財となるゆぞかし、而るに故阿仏聖靈は日本国・北海の島のいひすのみなりしかども後生ををそれて出家して後生を願ひしが此の人、日蓮に値いて法華經を持ち去年の春仏になりぬ、戸陀山の野干は仏法に値いて生をいとひ死を願いて帝釈と生れたり、阿仏上人は濁世の身を厭いて仏になり給ひぬ、其の子藤九郎守綱は此の跡をつぎて一向法華經の行者となりて去年は七月二日父の舍利を頸に懸け、一千里の山海を経て甲州・波木井身延山に登りて法華經の道場に此れをおさめ、今年は又七月一日身延山に登りて慈父のはかを拝見す、子にすぎたる財なし子にすぎたる財なし南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

七月二日

日蓮花押

故阿仏房尼御返事

あまのりのかみぶくろ二つわかめ十でつものかみぶくろ一つたひとかしら。

人の御心は定めなきものなればうつる心さだめなし、さどの国に候いし時御信用ありしだにもふしぎにをば候いしに、
これまで入道殿をつかわされし御心ざし又国もたたり年月もかさなり候はたむ御心もやとうたがい候にいよいよ
をあらわし二つをつませ給う事但一生二生の事にはあらざるか、此の法華経は

信じがたければ仏人の子となり父母となり女となりなどしてこそ信ぜさせ給うなれ、しかるに御子もをはず但をやば
かりなり、其中衆生悉是吾子の经文のごとくならば教主釈尊は入道殿尼御前の慈父ぞかし、日蓮は又御子にてあるべ
かりけるが、しばらく日本国の人をたすけんと中国に候か、宿善たつとく候、又蒙古国の日本にみ
だれ入る時はこれ御わたりあるべし、又子息なき人なれば御としのすへにはこれへをぼしめすべし、いづくも定めなし、仏
になる事こそそのすみかにては候いしとをもひ切らせ給うべし、
恐恐。

卯月十二日

日蓮 花押

二つ入道殿御返事

阿仏御房の尼にげんよりげに三百文、同心なれば此の文を一人して人によませてきこしめせ。

単衣一領佐渡の国より甲斐の国波木井の郷の内の深山まで送り給候たびそつら了あぬ、法華經第四法師品に云く「人有あつて仏道を求めて一劫の中に於て合掌して我が前に在あつて無数の偈を以て讃めん、是の讃仏に由るが故に無量の功德を得ん、持經者を歎美せんは其の福復た彼に過ぎんと等云云、文の心は釈尊ほどの仏を三業相応して

一中劫が間ねんごろに供養し奉るよりも末代悪世の世に法華經の行者を供養せん功德はすぐれたりととかれて候、まことしからぬ事にては候へも仏の金言にて候うたがひ疑うたがひうべきにあらず、其の上妙樂大師と申す人此の

經文を重ねてやわらげて云く「若し毀謗せん者は頭七分に破れ若し供養せん者は福十号に過ぎんと等云云、釈の心は末代の法華經の行者を供養するは十号を具足します如來を供養したてまつるにも其の功德すぎたり、又濁世に法華經の行者あらんを留難をなさん人は頭七分にわるべしと云云。

夫れ日蓮は日本第一の系せものなり、其の故は天神七代はさておきぬ、地神五代も又はかりがたし、人王始まりて神武より今に至るまで九十代欽明天王より七百余年が間世間につけ仏法によりても日蓮ほどあまなく人にあだまれたるものは候はじ、守屋が寺塔をやき清盛入道が東大寺興福寺を失せし彼等が一類は彼がにくま
ず、将門貞たつが朝敵と成りし伝教大師の七寺にあだまれし彼等もいまだ日本一州の比丘比丘尼優婆塞優婆夷の四衆にはにくまれず、日蓮は父母兄弟師匠同法上一人下万民一人ももれず父母のかたきのこと

く謀反強盗にもすぐれて人ごとにあだをなすなり、されば或時は数百人にのられ或時は数千人に取りこめられて刀杖の大難にあつ、所ををはれ国を出さる結句は国主より御勘気二度一度は伊豆の国今度は佐渡の嶋

なり、されば身命みことみことをつぐべきかつてもなし形体を隠すべき藤の衣ももたず、北海の嶋にはなたれしかば彼の国の道俗みちよくは相州さそうの男女なんによよりもあだをなしき、野中に捨てられて雪にはだをまじえくさをつみて命をさえたりき、彼の蘇夫そふが胡国ここくに十九年雪を食くつて世をわたりし、李呂りりが北海に六ヶ年がんくつにせめられし我は身にてしられぬ、これはひとえに我が身にはとがとがにほなく失ななし日本国をたすけんとをもひしゆなり。

しかるに尼にごぜん並びに入道にちどう殿は彼の国に有る時は人めををそれて夜中に食ををくり、或る時は国のせめをまはばからず身にもかわらんとせし人ひとなり、さればつらかりし国なれどもそりたるかみをうしろひかれずすむあしもかへりしぞかし、いかなる過去かこのえんにてやありけんとおぼつかなかりしに又いつしかこれま

でさしも大事だいじなるわが夫を御つかいにてつかはされて候、ゆめかまぼろしか尼にごぜんの御すがたをばみまいらせ候はねども心をばこれにとどめをば候へ日蓮にちれんをこいしくをはしせば常に出いずる日ゆづべにいつる月ををがませ給たまえ、いつとなく日月にちがつにかけをつかぶる身なり、又後生うしろなまには靈山浄土りやうぜんじゆどにまいりあひまひらせん、南無妙法蓮華經。

六月十六日

日蓮にちれん
花押かおう

さどの国のいつの尼御前あまごぜん

二九三 一谷入道御書

建治元年五月八日 五十四歳御作 与一谷入道日学女房

1326p

去る弘長元年いぬ じうちょうがんねん太歳辛酉五月十二日に御勘氣を蒙ごかんきをまうつて伊豆の国伊東の郷と云う処に流罪せられたりき、兵衛の介頼朝のながされてありし処なり、さありしかども程無く同三年なぐ太歳癸亥二月二十二日に召し返されぬ、又文永八年ぶんえい太歳辛未九月十二日重ねて御勘氣を蒙りしが忽に頸を刎らるべきにてありけるが子細ありけるかの故に・しばらく

のびて北国佐渡の嶋を知行する武蔵の前司預りて其の内の者どもの沙汰として彼の嶋に行き付いてありしが彼の島の者ども因果の理をも弁へぬあらゑびすなればあらくあたりし事は申す計りなし、然れども一分も恨むる

心なし、其の故は日本国の主として少しも道理を知りぬべき相模殿だにも国をたすけんと云う者を子細も聞ほどかず理不尽に死罪にあてがう事なれば・況や其の末の者どもの事はよきもたのまねずあしきもにくからず。

此の法門を申し始めしより命をば法華經に奉り名をば十方世界の諸仏の淨土にながすべしと思ひ儲けしなり、弘演と云いし者は主衛の懿公の肝を取りて我が腹を割いて納めて死にき、予譲と云いし者は主の知伯が恥をすすがんがために劔を呑んで死せしぞかし、是は但わづかの世間の恩を報ぜんがためぞかし。

況や無量劫より已来六道に流転して仏にならざりし事は法華經の御ために身を惜み命を捨てざる故ぞかし、されば喜見菩薩と申せし菩薩は千二百歳の間身を焼いて日月淨明德仏を供養し、七万二千歳の間臂を焼いて法華經を供養し奉る其の人は藥王菩薩ぞかし、不輕菩薩は法華經の御ために多劫の間罵詈毀辱、杖木瓦石にせめられき、今の釈迦仏にあらずや、されば仏になる道は時により品品に替つて行すべきにや、今の世には法華經はざる事にておはすれども時によりにて事ことなるなれば山林に交わりて誦誦すとも将又里に住して演説すとも持戒にして行ずとも臂を焼いて供養すとも仏にはなるべからず、日本国は仏法盛なるやうなれども仏法について

不思議あり人は是を知らず、譬えば虫の火に入り鳥の蛇の口に入るが如し眞言師華嚴宗法相・三論禪宗・淨土宗・律宗等の人人は我も法を得たり我も生死を離れたる人とは思へども立始めし本師等依經の心をも弁えず、但我が心の思い付いて有りしままに其の經を取り立てんと思へる莫無き心計りにて法華經に背けば又仏意にも叶わざる事をば知らずして弘め行く程に國主・万民是を信じぬ又他國渡り又年久しく成りぬ、末学の者共本師の誤をば知らずして弘め習ひし人人をも智者とは思へり、源濁りぬれば流淨からず身曲りぬれば影直からず、眞言の元祖善無畏等は既に地獄に墮ちぬべかりしが或は改悔して地獄を免れたる者もあり、或は唯依經を弘めて法華經の讚歎をもせざれば生死は離れねども惡道に墮ちざる人もあり、而るを末末の者此の事を知らずして諸人一同に信をなしぬ、譬えば破たる船に乗つて大海に浮び酒に酔る者の火の中に臥せるが如し。

日蓮是を見し故に忽に菩提心を發して此の事を申し始めしなり、世間の人人何に申すとも信ずる事はあるべからず、還つて流罪・死罪せらるべしとは兼て知つてありしかども今の日本國は法華經に背き釈迦仏を捨つる故に後生は必ず無間・大城に墮ちん事はさておきぬ今生にも必ず大難に値うべし、所謂他國より責め來つて上一人より

下万民に至るまで一同の歎きあるべし、譬えば千人の兄弟が一人の親を殺したらんに此の罪を千に分ては受くべからず、一に皆無間・大城に墮ちて同じく一劫を経べし、此の國も又是くの如し、娑婆世界は五百塵点劫より已來教主釈尊の御所領なり、大地虚空山海草木一分も他仏の有ならず、又一切衆生は釈尊の御子なり、

譬えば成劫の始め一人の梵王下つて六道の衆生をば生て候ぞかし、梵王の一切衆生の親たるが如く、釈迦仏も又一切衆生の親なり、又此の國の一切衆生のためには教主釈尊は明師にておはするぞかし、父母を知るも師の恩なり黒白を弁うも釈尊の恩なり、而るを天魔の身に入つて候善導・法然などが申すに付いて、國土に阿彌陀堂を造り或は一郡・一郷・一村等に阿彌陀堂を造り或は百姓万民の宅のことに阿彌陀堂を造り或は宅宅・人人ごと

に阿弥陀仏を書造り、或は人ごとに口口に、或は高声に唱へ、或は一万遍、或は六万遍など唱うるに、少しも智慧ある者は、いよいよこれをすすむ、譬は火にかれたる草をくわ、氷に風を合せたるに似たり、此の国の人人は一人もなく、教主釈尊の御弟子御民ぞかし、而るに阿弥陀等の他仏を、一仏もつくらず、かかず念仏も申さずある。

者は悪人なれども、釈迦仏を捨て奉る色は未だ顕れず、一向に阿弥陀仏を念ずる人人は既に釈尊仏を捨て奉る色顕然なり、彼の人人の墓無き念仏を申す者は悪人にてあるぞかし、父母にもあらず主君・師匠にてもおはせぬ仏をばいとをしき妻の様にてもなし、現に国主父母明師たる釈迦仏を捨て乳母の如くなる法華経をば口にも誦し奉らず、是れ豈不孝の者にあらざるや、此の不孝の人人一人二人百人千人ならず、一国二国ならず、上一人より

下万民に至るまで日本国、皆こぞりて一人もなく三逆罪の者なり、されば日月は色を変じて此れをにらめ、大地も瞋りてをどりあがり、大慧星天にはびこり、大火国に充滿すれども、僻事ありともおもはず、我等は念仏にひまなし、其の上念仏堂を造り阿弥陀仏を持ち奉るなど自讃するなり、是は賢き様に墓無し、譬えば若き夫妻等が夫は女を愛し、女は夫をいと、おしむ程に父母のゆくを知らず、父母は衣薄けれども我はねや熱し、父母は食せ

ざれども我は腹に飽きぬ、是は第一の不孝なれども彼等は失ともしらず、況や母に背く妻父にさかる夫、逆重罪にあらずや、阿弥陀仏は十萬億のあなたに有つて此の娑婆世界には一分も縁なし、なにと云つとも故もなきなり、馬に牛を合せ犬に、をかつたらひたるが如し。

但日蓮一人計り此の事を知りぬ、命を惜みて云はずば、国恩を報ぜぬ上、教主釈尊の御敵となるべし、是を恐れずして有のままに申すならば死罪となるべし、設ひ死罪は免るとも流罪は疑なかるべしとは兼て知つてありし

かども仏の恩重きが故に人をはばからず申しぬ、案にたがはず、両度まで流されて候いし中に、文永九年の夏の比佐渡の国石田の郷一谷と云いし処に有りしに、預りたる名主等は公と云ひ私と云ひ父母の敵よりも宿世

の敵よりも悪げにありしに宿の入道と云ひ妻と云ひつかう者と云ひ始はおぢをそれしかども先世の事にやありけん、内内不便と思ふ心付きぬ、預りよりあづかる食は少し付ける弟子は多くありしに僅の飯の二口三口ありしを、或はおしきに分け、或は手に入て食しに宅主内内心あつて外にはをそる様なれども内には不便げにありし事何の世にかわすれん、我を生みておはせし父母よりも当時は大事とこそ思いしか、何なる恩おもはげむべしまして約束せし事たがうべしや。

然れども入道の心は後世を深く思いてある者なれば久しく念仏を申しつもりぬ、其の上阿弥陀堂を造り田畠も其の仏の物なり、地頭も又をそろしななど思いて直ちに法華經にはならず、是は彼の身には第一の道理ぞかし、然れども又無間大城は疑無し、設ひ是より法華經を遣したりとも世間をもそろしければ念仏すつべからずな

んと思はば、火に水を合せたるが如し、謗法の大水、法華經を信ずる小火をけさん事疑なかるべし、入道・地獄に墮つるならば還つて日蓮が失になるべし、如何んがせん如何んがせんと思ひわづらひて今まで法華經を渡し奉らず、渡し進せんがためにまづけまいらせて有りつる法華經をば鎌倉の焼亡に取り失ひ参せて候由申す、旁入道

の法華經の縁はなかりけり、約束申しける我が心も不思議なり、又我とはすすまざりしを鎌倉の尼の還りの用途に歎きし故に口入有りし事なげかし、本錢に利分を添えて返さんとすれば又弟子が云く御約束違ひななど

申す、旁進退極りて候へとも人の思わん様は狂惑の様なるべし、力及ばずして法華經を一部十巻渡し奉る、入道よりもうばにてありし者は内内心よせなりしかば是を持ち給へ

日蓮が申す事は愚なる者の申す事なれば用ひず、されども去る文永十一年太歳甲戌十月に蒙古国より筑紫によせて有りしに對馬の者かためて有りしに・宗総馬尉逃ければ百姓等は男をば、或は殺し、或は生取にし、女をば、或は取り集めて手をとをして船に結い付け、或は生け取にす・一人も助かる者なし、壹岐によせても又是くの如し、船おしよ

せて有りけるには奉行入道 豊前前司は逃げて落ちぬ、松浦党は数百人打たれ、或は生け取にせられしかば寄せたりける
浦浦の百姓ども壹岐対馬の如し、又今度は如何が有るらん彼の国の百千万億の兵 日本国を引回らして寄せて有るなら
ば如何に成るべきぞ、北の手は先ず佐渡の島に付いて地頭守護をば須臾に打ち殺し百姓等は北山
へにげん程に、或は殺され、或は生け取られ、或は山にして死ぬべし、抑、是れ程の事は如何として起るべきぞと推すべし、前
に申しつるが如く此の国の者は一人もなく三逆罪の者なり、是は梵王 帝釈 日月 四天の彼の蒙古国の大王の身に入らせ
給いて責め給うなり。

日蓮は愚なれども釈迦仏の御使法華経の行者なりとなりの候を用いざらんだにも不思議なるべし、其の失に依つて国
破れなんとす、況や、或は国を追ひ、或は引はり、或は打擲し、或は流罪し、或は弟子を殺し、或は所領を取る、現の
父母の使をかくせん人人よかるべしや、日蓮は日本国の人人の父母ぞかし、主君ぞかし、明師ぞかし、是を背ん事よ、念仏を
申さん人人は無間地獄に堕ちん事決定なるべし、たのもしたのもし。

抑、蒙古国より責めん時は如何がせさせ給うべき、此の法華経をいただき頸にかけさせ給いて北山登らせ給うとも年
比念仏者を養ひ念仏を申して、釈迦仏 法華経の御敵とならせ給いて有りし事は久しし、又若し命ともなるならば法華経
ばし恨みさせ給うなよ、又閻魔王宮にしては何とか仰せあるべき、おこがましき事とはおぼすと

も其の時は日蓮が檀那なりとこそ仰せあらんずらめ、又是はさてをきぬ、此の法華経をば学乗房に常に開かせ給うべ
し、人如何に云うとも念仏者、真言師持斎なんどにばし開かせ給うべからず、又日蓮が弟子となるとも日蓮が判を持
ざらん者をば御用いあるべからず、恐恐謹言。

五月八日日蓮花押

一谷入道女房

二九四

中興入道消息

弘安二年十一月三十日

五十八歳御作

与中興入道女房

1331p

驚目一貫文送り給い候い、んぬ妙法蓮華經の御宝前に申し上げ候い、んぬ、抑日本国と申す国は須弥山よりは南一閻浮提の内縦広七千由旬なり、其の内に八万四千の国あり、所謂五天竺十六の大国五百の中国・十千の小国無量の菓散国微塵の島あり、此等の国国は皆大海の中にありたとは池にこのはちれるが如し、

此の日本国は大海の中の小島なりしほみては見えずしみゆるかの程にて候いしを神のつき出させ給いて後人王のはじめ神武天皇と申せし大王をはしましき、それよりこのかた三十余代は仏と経と僧とはましまさずただ人と神とばかりなり、仏法をはしまさねば地獄もしらず、浄土もねがはず、父母・兄弟のわかれありしかどもいかなるらん、ただ露のきゆるやうに日月のかくれさせ給うやうにうちをもちてありけるが然る

に人王第三十代欽明天皇と申す大王の御宇に此の国より戌亥の角に当りて百済国と申す国あり、彼の国よりせいめい王と申せし王金銅の釈迦仏と此の仏の説かせ給へる一切経と申すふみと此をよむ僧をわたしてありしかば仏と申す物もいきたる物にもあらず、経と申す物も外典の文にもにず、僧と申す物も物はいへとも道理もきこず形も男女にもにざりしかばかたがたあやしみをどろきて左右の大臣大王の御前にしてとかう僉議

ありしかども多分はもちうまじきにてありしかば、仏はすてられ僧はいましめられて候いしほどに用明天皇の御子聖徳太子と申せし人びだつの二年二月十五日東に向いて南無釈迦牟尼仏と唱えて御舍利を御手より出し給いて同六年に法華経を誦誦し給ふ、それよりこのかた七百余年王は六十余代に及ぶまでやうやく仏法ひろま

り候いて日本六十六箇国・二つの島にいたらぬ国もなし、国郡郷里村に堂塔と申し寺と申し仏法の住所すでに十七万一千三十七所なり、日月の如くあきらかなる智者代代に仏法をひろめ衆星のごとくが

やくけんじん国に充滿せり、かの人人は自行には、或は真言を行じ、或は般若、或は仁王、或は阿弥陀仏の番号、或は觀音、或は地藏、或は三千仏、或は法華經誦誦しをるとは申せども、無智の道俗をすすむるには、ただ南無阿弥陀仏と申すべし、譬えば女人の幼子をまつけたるに、或はほり、或はかわ、或はひとりなるには、母よ母よと申せば、

ききつけぬれば、かならず他事をすてたすく習なり、阿弥陀仏も又是くの如し、我等は幼子なり、阿弥陀仏は母なり、地獄のあな餓鬼のほりなどに、をち入りぬれば、南無阿弥陀仏と申せば、音と響きとの如く、必ず来りてすくひ給うなりと、一切の智人ども、教へ給ひしかば、我が日本国かく申しならはして年ひさしくなり候。

然るに日蓮は、中国都の者にもあらず、辺国の將軍等の子息にもあらず、遠国の者民が子にて候ひしかば、日本国七百余年に一人も、いまだ唱へまいらせ候はぬ、南無妙法蓮華經と唱え候のみならず、皆人の父母のごとく、日月の如く、主君の如く、わたりに船の如く、渴して水のごとく、うえて飯の如く、思ひ候、南無阿弥陀仏を無間地獄の業なりと申し候ゆへ、食に石をたひたる様に、がんせきに馬のはねたるやうに、渡りに大風の吹き来たるやうに、いじめ

らくに大火のつきたるやうに、俄にかたきのよせたるやうにとわりのきさきになるやうに、をどろきそねみねたみ候ゆへ、いける建長五年四月二十八日より、今弘安二年十一月まで、二十七年が間、退転なく申しつより、候事月のみづるのごとく、いほのさすがごとく、はじめは日蓮只一人、唱候いしほどに、見る人、値う人、聞く人、耳を

ふさぎ眼をいからかし、口をひそめ、手をにぎり、はをかみ、父母、兄弟、師匠、ぜんつも、がたきとなる、後には所の地頭、領家かたきとなる、後には一國さはぎ、後には万民をどろくほどに、或は人の口まねをして、南無妙法蓮華經となへ、或は悪口のためにとなへ、或は信ずるに似て唱へ、或はそしるに似て唱へ、なんとする程に、すでに日本国

十分が一分は一向南無妙法蓮華經のこりの九分は、或は両方、或はつたがひ、或は一向念佛者なる者は、父母のかたき、主君のかたき、宿世のかたき、やうにのしる、村主、郷主、国主等は、謀叛の者のごとく、あだまれたり、かく

の如く申す程に大海の浮木の風に随いて定めなきが如く輕毛の虚空にのぼりて上下するが如く日本国ををはれある程に、或時はつたれ或時はいましめられ或時は疵をかほり或時は遠流或時は弟子をころされ或時はつちをはなれんとする程に、去ぬる文永八年九月十二日には御かんきをかほりて北国佐渡の島につつされて候いしなり、世間には一分のことがもなかりし身なれども故最明寺入道殿極樂寺入道殿を地獄に墮ちたりと申す法師なれば謀叛の者にもすぎたりとて相州鎌倉・竜口と申す処にて頸を切らんとし候いしが科は大科なれども法華經の行者なれば左右なくうしなひなばいかながとやをもはれけん、又遠国の島にすてをきたるならば、いかにもなれかし。

上ににくまれたる上万民も父母のかたきのやうにおもひたれば道にても又国にても若しはころすか若しはかつしぬるかならんずらんとあてがはれて有りしに、法華經・十羅刹の御めぐみにやありけん、或は天とがなきよしを御らんずらんにやありけん、島にてあだむ者は多かりしかども中興の次郎入道と申せし老人ありき、彼の人は年ふりたる上心かしこ身もたのしくて国の人にも人とをもはれたりし人の此の御房はゆゑある人にやと申しけるかのゆゑに子息等もいたつにもくまず、其の已下の者どもたいし彼等の人人の下人にてありしかば内内あやまつ事もなく唯上の御計いのままにてありし程に、水は濁れども又すみ月は雲かくせども。

又はることはりなれば、科なき事すであらわれていぬし事もむなしからざりけるかのゆゑに、御一門諸大名はゆるすべからざるよし申されけれども相模守殿の御計らひばかりにてついにゆりて候いてのぼりぬ、ただし日蓮は日本国には第一の忠の者なり肩をならぶる人は先代にもあるべからず後代にもあるべしとも覚えす。

其の故は去ぬる正嘉年中の大地震文永元年の大長星の時内外の智人其の故をうらなひしかどもなにのゆ

へいかなる事の出来すべしと申す事をしらせりしに、日蓮一切経蔵に入りて勘合たるに真言・禅宗・念仏律等の権小の人人をもつて法華経をかるしめたてまつる故に梵天・帝釈の御とがめに西なる国に仰せ付けて日本国をせむべしとかんがへ、故最明寺入道殿にまいらせ候いき、此の事を諸道の者、をこきわらひし程に九箇

年すぎて去ぬる文永五年に大蒙古国より日本国ををそつべきよし牒状わたりぬ、此の事のおふ故に念仏者・真言師等あだみて失はんとせしなり、例せば漢土に玄宗皇帝と申せし御門の御后に上陽人と申せし美人あり、天下第一の美人にてありしかば楊貴妃と申すきさきの御らんじて此の人王まいるならば我がをばをとりなんとて

宣旨なりと申しかすめて、父母・兄弟をば或はながし或は殺し上陽人をばろうに入れて四十年までせめたりしなり、此れもそれににて候、日蓮が勘文あらわれて大蒙古国を調伏し日本国かつならば此の法師は日本第一の僧となりなん、我等が威徳をとろうべしと思つかのゆへに讒言をなすをばしるしめさずして、彼等がことばを用い

て国を亡さんとせらるるなり、例せば二世王は趙高が讒言によりて李斯を失ひかへて趙高が為に身をほろぼされ、延喜の御門はしへいのをとどの讒言によりて菅丞相を失いて地獄におち給いぬ、此れも又かくの如し、法華経のかたきたる真言師・禅宗・律僧・持斎・念仏者等が申す事を御用いありて日蓮をあだみ給つゆへに、日蓮

はいやしけれども所持の法華経を釈迦・多宝・十方の諸仏・梵天・帝釈・日月・四天・竜神・天照太神・八幡大菩薩・人の眼をおしむがごとく諸天の帝釈をつやまがつがごとく母の子を愛するがごとくまほりおもんじ給つゆへに、法華経の行者をあだむ人を罰し給う事父母のかたきよりも朝敵よりも重く大科に行ひ給うなり。

然るに貴辺は故次郎入道殿の御子にてををはするなり御前は又よめなりいみじく心かしこがりし人の子とよめとにをはすればや、故入道殿のあとをつぎ国主も御用いなき法華経を御用いあるのみならず法華経の行者をやしなはせ給いてとしに千里の道をおくりむかふぬる幼子のむすめ御前の十三年に丈六のそとばを

たてて其の面に南無妙法蓮華經の七字を顕してをはしませば、北風吹けば南海のいろくづ其の風にあたりて大海の苦をはなれ東風きたれば西山の鳥鹿其の風を身にふれて畜生道をまぬかれて都率の内院に生れん、況やかのそばに隨喜をなし手をふれ眼に見まいらせ候人類をや、過去の父母も彼のそばの功德によりて天の日月の如く浄土をてらし孝養の人並びに妻子は現世には寿を百二十年持ちて後生には父母とともに靈山浄土にまいり給はん事水すめば月うつりつみをつてはひびきのあるがごとしとをばしめし候等云云、此れより後後の御そばにも法華經の題目を顕し給へ。

弘安二年己卯十一月卅日

中興入道殿女房

身延山

日蓮 花押

二九五 是日尼御書

1335p

さどの国より此の甲州まで入道の来りたりしかばあらふしぎとをもひしに又今年来りなつみ水くみたきぎこりだん王の阿志仙人につかへしがごとくして一月に及びぬる不思議さよ、ふでをもちてつくしがたし、これひ

とへに又尼ぎみの御功德なるべし、又御本尊一ふくかきてまいらせ候、靈山浄土にてはがならずゆきあひたてまつるべし、
恐恐謹言。

卯月十二日

日蓮

尼是日

二九六

遠藤左衛門尉御書

1336p

日蓮此の度赦免を被むり鎌倉登るにて候、如我昔所願今者已満足此の年に当るか、遠藤殿御育み無くんば命永らう可しや亦赦免にも預かる可しや、日蓮一代の行功は偏に左衛門殿等遊し候処なり、御經に「天諸童子以て給使を為し刀杖も加えず毒も害すること能はず」と候得ば有難き御經なるかな、然ば左衛門殿は梵天釈天の御使にてましますか、靈山えの契約に此の判を参せ候、一流は未来え持せ給え靈山に於て日蓮日蓮と呼び給え、其の時御迎えに罷り出ず可く候、猶又鎌倉より申し進す可く候なり。

文永十一年甲戌三月十二日

日蓮

遠藤左衛門尉殿

二九七

生死一大事血脈抄

文永九年二月十一日五十一歳御作

与最蓮房日淨

1336p

日蓮記之

御状委細披見せしめ候い畢んぬ、夫れ生死一大事血脈とは所謂妙法蓮華經是なり、其の故は釈迦多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて此の妙法蓮華經の五字過去遠劫より已来寸時も離れざる血脈なり、妙は死法は生なり此の生死の二法が十界の当体なり又此れを当体蓮華とも云うなり、天台云く「當に知るべし依正の因果は悉く是れ蓮華の法なり」と云云此の釈に依正と云うは生死なり生死之有れば因果又蓮華の法なる事明けし、伝教大師云く「生死の二法は一心の妙用有無の二道は本覺の真徳」と文、天地陰陽日月五星地獄乃至仏果・

生死の二法に非ずと云うことなし、是くの如く生死も唯妙法蓮華經の生死なり、天台の止觀に云く「起は是れ法性の起、滅は是れ法性の滅」云云、釈迦・多宝の二仏も生死の二法なり、然れば久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華經と我等衆生との三つ全く差別無しと解りて妙法蓮華經と唱え奉る處を生死一大事の血脈とは云うなり、此の事但日蓮が弟子・檀那等の肝要なり法華經を持つとは是なり、所詮臨終只今にありと解りて信心を致して南無妙法蓮華經と唱うる人を「是人命終・為千仏授手令不恐怖不墮惡趣」と説かれて候、悦ばしい哉一仏・二仏に非ず百仏・二百仏に非ず千仏まで來迎し手を取り給はん事歡喜の感涙押え難し、法華不信の者は「其人命終入阿鼻獄」と説かれたれば定めて獄卒迎えに來つて手を取り候はんずらん浅・浅、十王は裁断し俱生神は呵責せんか。

今日蓮が弟子・檀那等・南無妙法蓮華經と唱えん程の者は千仏の手を授け給はん事譬えば・夕顔の手を出すが如くと思し食せ、過去に法華經の結縁強盛なる故に現在に此の經を受持す、未來に仏果を成就せん事疑有るべからず、過去の生死現在の生死未來の生死三世の生死に法華經を離れ切れざるを法華の血脈相承とは云うなり、謗法

不信の者は「即断一切世間・仏種」とて仏に成るべき種子を断絶するが故に生死一大事の血脈之無きなり。

總じて日蓮が弟子・檀那等自他彼此の心なく水魚の思を成して異体同心にして南無妙法蓮華經と唱え奉る處を生死一大事の血脈とは云うなり、然も今日蓮が弘通する處の所詮是なり、若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者か、剩れ日蓮が弟子の中に異体異心の者之有れば例せば城者として城を破るが如し、日本国の一切衆生に法華經を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめんとするに還つて日蓮を種種の難に合せ結句此の島まで流罪す、而るに貴辺日蓮に隨順し又難に値い給う事心中思い遣られて痛しく候ぞ、金は大火にも焼けず大水にも漂わず朽ちず・鉄は水火共に堪えず賢人は金の如く愚人は鉄の如し貴辺豈眞金に非ずや法華經の金を持つ故か、經に云く「衆山の中に須弥山為第一此の法華經も亦復是くの如し」又云く「火も焼くこと能わず水も漂わすこと能わ

ずニ云、過去の宿縁追ひ来つて今度日蓮が弟子と成り給うが釈迦・多宝こそ御存知候らめ、「在在諸仏土常与師俱生」も虚事候はし。

殊に生死一大事の血脈相承の御尋ね先代末聞の事なり貴貴、此の文に委悉なり能く能く心得させ給へ只南無妙法蓮華經・釈迦・多宝上行菩薩血脈相承と修行し給へ火は焼照を以て行と為し水は垢穢を淨るを以て行と為し風は塵埃を払ふを以て行と為し又人畜草木の爲に魂となるを以て行と為し大地は草木を生ずるを以て行と為し天は潤すを以て行と為す妙法蓮華經の五字も又是くの如し本化地涌の利益是なり、上行菩薩末法今の時此の法門を弘めんが爲に御出現之れ有るべき由・經文には見え候へども如何が候やらん、上行菩薩出現すとやせん出現せずとやせん、日蓮先ず粗弘め候なり、相構え相構えて強盛の大信力を致して南無妙法蓮華經臨終・正念と祈念し給へ生死一大事の血脈此れより外に全く求むることなかれ、煩惱即菩提・生死即涅槃とは是なり、信心の血脈無くんば法華經を持つとも無益なり、委細の旨又又申す可く候、恐恐謹言。

文永九年壬申二月十一日桑門

最蓮房上人御返事

日蓮 花押

二九八 草木成仏口決

文永九年二月二十日 五十一歳御作 与最蓮房日淨

223338p

問うて云く草木成仏とは有情非情の中何れぞや、答えて云く草木成仏とは非情の成仏なり、問うて云く情非情共に今經に於て成仏するや、答えて云く爾なり、問うて云く証文如何、答えて云く妙法蓮華經是なり・妙法とは有情の成仏なり蓮華とは非情の成仏なり、有情は生の成仏非情は死の成仏生死の成仏と云うが有情非情の成仏

の事なり、其の故は我等衆生死する時塔婆を立て開眼供養するは死の成仏にして草木成仏なり、止観の一に云く「一色一香中道に非ざる」と無し妙楽云く「然かも亦共に色香中道を許す無情仏性・惑耳驚心す此の一色とは五色の中には何れの色ぞや、青黄赤白黒の五色を一色と釈せり」とは法性なり、愛を以て妙楽は色香中道と釈せり、天台大師も無非中道といひ、一色一香の一は三相對の一には非ざるなり、中道法性をさして」と云うなり、所詮十界三千依正等をそなふと云う事なし、此の色香は草木成仏なり是れ即ち蓮華の成仏なり、色香と蓮華とは言はかはれども草木成仏の事なり、口決に云く「草にも木にも成る仏なり」と云、此の意は草木にも成り給ふ寿命品の釈尊なり、經に云く「如来秘密神通之力」と云、法界は釈迦如来の御身に非ずと云う事なし、理の顯本は死を表す妙法と顯る事の顯本は生を表す蓮華と顯る、理の顯本は死にて有情をつかさどる事の顯本は生にして非情をつかさどる、我等衆生のために依怙・依託なるは非情の蓮華がなりたるなり我等衆生の言語・音声・生の位には妙法が有情となりぬるなり、我等一身の上には有情非情具足せり、爪と髪とは非情なりきるにもいたまず其の外は有情なれば切るにもいたみるしむなり、一身所具の有情非情なり此の有情非情十如是の因果の二法を具足せり、衆生世間・五陰世間・国土世間・此の三世間・有情非情なり。

一念三千の法門をふりすぎたてたるは大曼荼羅なり、当世の習いそこないの學者ゆめにもしらざる法門なり、天台・妙楽・伝教内にはかがみさせ給へともひろめ給はず、一色一香とのしり惑耳驚心とささやき給いて・妙法蓮華と云うべきを円頓止観とかきせ給いき、されば草木成仏は死人の成仏なり、此等の法門は知る人すくなきなり、所詮妙法蓮華をしらざる故に迷うところの法門なり、敢て忘失する事なかれ、恐恐謹言。

二月二十日

日蓮 花押

最蓮房御返事

夕ざりは相構え相構えて御入り候へ得受職人功德法門委細申し候はん。

御礼の旨委細承り候い畢んぬ、都よりの種種の物慥かに給ひ候い畢んぬ、鎌倉に候いし時こそ常にかかる物は見候いつれ此の島に流罪せられし後は未だ見ず候、是れ体の物は辺土の小島にてはよによに目出度き事に思ひ候。

御状に云く去る二月の始より御弟子となり帰伏仕り候上は自今以後は人数ならず候とも御弟子の一分と思し食され候はば恐悦に相存ず可く候云云、経の文には「在在諸仏の土に常に師と俱に生れん」とも或は「若し法師に親近せば速かに菩薩の道を得ん是の師に随順して学せば恒沙の仏を見たてまつることを得ん」とも云へり、釈

には「本此の仏に従つて初めて道心を発し亦此の仏に従つて不退地に住せん」とも、或は云く「初此の仏菩薩に従つて結縁し還つて此の仏菩薩に於て成就す」とも云えり、此の経釈を案ずるに過去無量劫より已来師弟の契約有りしか、我等末法濁世に於て生を南閻浮提大日本国につけ忝くも諸仏出世の本懐たる南無妙法蓮華経を口に唱へ心に信じ身に持ち手に翫ぶ事、是れ偏に過去の宿習なるか。

予日本の体を見るに第六天の魔王智者の身に入りて正師を邪師となし善師を悪師となす、経に「悪鬼入其身」とは是なり、日蓮智者に非ずと雖も第六天の魔王我が身に入らんとするに兼ての用心深ければ身によせつけず、故に天魔力及ばずして主臣を始として良観等の愚癡の法師原に取り付いて日蓮をあだむなり、然るに今時は師に於て正師邪師善師・悪師の不同ある事を知つて邪惡の師を遠離し正善の師に親近すべきなり、設い徳

は四海に齊く智慧は日月に同くとも法華經を誹謗するの師をば惡師邪師と知つて是に親近すべからざる者なり、或る經に云く「若し誹謗の者には共住すべからず若し親近し共住せば即ち阿鼻獄に趣かん」と禁め給う是なり、いかに我が身は正直にして世間出世の賢人の名をとらんと存ずれども惡人に親近すれば自然に十度に二度三度其の教に随ひて行くほどに終に惡人になるなり、釈に云く「若し人本惡無きも惡人に親近すれば後必ず惡人と成りあくみよつてんかあまね惡名天下に遍からん」云云、所詮其の邪惡の師とは今の世の法華誹謗の法師なり、涅槃經に云く「菩薩惡象等に於ては心に恐怖すること無かれ惡智識に於ては怖畏の心を生ぜよ、惡象の爲に殺されては三趣に至らず、惡友の爲に殺さるれば必ず三趣に至らん」、法華經に云く「惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲と等云云、先先申し候ごとく善無畏・金剛智達磨・慧可善導・法然東寺の弘法園城寺の智証山門の慈覺閑東の良觀等の諸師は今の正直捨方便の金言を読み候には正直捨實教但説方便教と読み、或は於諸經中最在其上の經文をば於諸經中最在其下と或は法華最第一の經文をば法華最第二・第三等と読む、故に此等の法師原を邪惡の師と申し候なり。

さて正善の師と申すは釈尊の金言の如く、諸經は方便法華は眞實と正直に読むを申す可く候なり、華嚴の七十七の入法界品之を見る可し云云、法華經に云く「善知識は是れ大因縁なり所謂化導して仏を見たてまつり阿耨菩提を發する」とを得せしむと等云云、仏説の如きは正直に四味三教・小乘・權大乘の方便の諸經・念仏・眞言・禪・律等の諸宗並びに所依の經を捨て但唯以一大事因縁の妙法蓮華經を説く師を正師善師とは申す可きなり、然るに日蓮末法の初の五百年に生を日域に受け如来の記文の如く三類の強敵を蒙り種種の災難に相値つて身命を惜まずして南無妙法蓮華經と唱え候は正師か邪師か能御思惟之有る可く候。

上に挙ぐる所の諸宗の人人は我こそ法華經の意を得て法華經を修行する者よと名乗り候へども予が如く弘長

には伊豆の国に流され、文永には佐渡嶋に流され、或は竜口の頸の座等、此の外種種の難数を知らず、経文の如くならば予は正師なり善師なり、諸宗の学者は悉く邪師なり悪師なりと覺し食し候へ、此の外善惡二師を分別する

経論の文等、是れ廣く候へども兼て御存知の上は申すに及ばず候。

只今の御文に自今以後は日比の邪師を捨て偏に正師と憑むとの仰せは不審に覺候、我等が本師釈迦如来法華経を説かんが爲に出世ましますしには他方の仏菩薩等來臨影響して釈尊の行化を助け給う、されば釈迦多宝十方の諸仏等の御使として來つて化を日域に示し給うにもやあるらん、經に云く、「我於余國遣化人、爲其集聽法衆亦遣化隨順不逆」此の經文に比丘と申すは貴辺の事なり、其の故は闍法信受隨順不逆眼前なり争か之を疑い奉るべきや、設い又在在諸仏土常與師俱生の人なりとも三周の聲聞の如く下種の後に退大取小して五道六道に沈輪し給いしが成仏の期來至して順次に得脱せしむべきゆへにや、念仏・真言等の邪法、邪師を捨てて日蓮が弟子となり給うらん有り難き事なり。

何れの辺に付いても予が如く諸宗の謗法を責め彼等をして捨邪歸正せしめ給いて順次に三仏座を並べたもう常寂光土に詣りて釈迦多寶の御宝前に於て我等無始より已來師弟の契約有りけるか無かりけるか又釈尊の御使として來つて化し給へるかさぞと仰せを蒙つてこそ我が心にも知られ候はんずれ、何様にもはげませ給へばげませ給へ

何となくとも貴辺に去る二月の比より大事の法門を教奉りぬ、結句は卯月八日夜半寅の時に妙法の本円戒を以て受職灌頂せしめ奉る者なり、此の受職を得るの人争か現在なりとも妙覺の仏を成ぜざらん、若し今生妙覺ならば後生豈等覺等の因分ならんや、実に無始曠劫の契約常與師俱生の理ならば日蓮今度成仏せんに貴辺豈相離れて惡趣に墮在したもう可きや、如来の記文仏意の辺に於ては世・出世に就いて更に妄語無し、然るに

法華經には「我が滅度の後に於て心に斯の經を受持すべし、是の人、仏道に於て決定して疑有ること無けん」或は「速為疾得、無上仏道」等云、此の記文虚くして我等が成仏今度虚言ならば、諸仏の御舌もきれ、多宝の塔も破れ落ち二仏、並座は無間地獄の熱鉄の牀となり方寂寂の三土は地餓畜の三道と変じ候べし、争かざる事候べきやあらたのもしやたのもしや是くの如く思いつけ候は我等は流人なれども身心共にうれしく候なり。

大事の法門をば昼夜に沙汰し成仏の理をば時時刻刻にあぢはつ、是くの如く過ぎ行き候は年月を送れども久からず過ぐる時刻も程あらず、例せば釈迦・多宝の二仏塔中に並座して法華の妙理をつなづき合ひ給ひし時、五十小劫仏の神力の故に諸の大衆をして半日の如しと謂わしむと云いしが如くなり、劫初より以来父母・主君等

の御勸氣を蒙り遠国の島に流罪せらるるの人、我等が如く悦び身に余りたる者よもあらじ、されば我等が居住して一乗を修行せん、何れは何れの如く候へ常寂光の都為るべし、我等が弟子・檀那とならん人は一步を行かずして天竺の靈山を見本有の寂光土晝夜に往復し給ふ事うれしとも申す計り無し申す計り無し。

余りにうれしく候は契約一つ申し候はん、貴辺の御勸氣疾疾許させ給いて都御上り候はば、日蓮も鎌倉殿はゆるさじとの給ひ候とも諸天等に申して鎌倉に帰り京都會信申す可く候、又日蓮先立つてゆり候いて鎌倉へ歸り候はば貴辺をも天に申して古京へ歸し奉る可く候、恐恐謹言。

四月十三日

日蓮 花押

最蓮房御返事

問うて云く華嚴宗・法相宗・三論宗・小乗の三宗・真言宗・天台宗の祈をなさんにいづれかあるべきや、答て云く

仏説なればいづれも一往は祈となるべし、但法華經をもつていのらむ祈は必ず祈となるべし、問うて云く其の所以は如何、答えて云く二乗は大地微塵劫を経て先四味の經を行ずとも成仏すべからず、法華經は須臾の間

此れを聞いて仏になれり、若爾らば舍利弗迦葉等の千二百萬二千總じて一切の二乗界の仏は必ず法華經の行者の祈をか
なふべし、又行者の苦にもかわるべし、故に信解品に云く「世尊は大恩まします希有の事を以て憐愍教化

して我等を利益し給う無量億劫にも誰れか能く報ずる者あらん、手足をもて供給し頭頂をもつて礼敬し一切をもつて
供養すとも皆報ずること能わず、若しは以て頂戴し両肩に荷負して恒沙劫に於て心を尽して恭敬し、又美膳無量の宝衣
及び諸の臥具種種の湯藥を以てし牛頭栴檀及び諸の珍宝以て塔廟を起て宝衣を地に布き斯くの如

き等の事もつて供養すること恒沙劫に於てすとも亦報ずること能わじ」等云云、此の經文は四大声聞が譬喩品を聴聞し
て仏になるべき由を心得て、仏と法華經の恩の報しがたき事を説けり、されば二乗の御為には此の經を行ずる者をば父母
よりも愛子よりも両眼よりも身命よりも大事にこそおぼしめすらめ、舍利弗・目連等の諸大声聞

は一代聖教いづれも讚歎せん行者をすておぼす事は有るべからずとは思へども爾前の諸經はすこしうらみおぼす事も
有らん於仏法中已如敗種」などしたたかにいましめられ給ひし故なり、今の華光如来・名相如来・

普明如来などならせ給ひたる事はおもはざる外の幸なり、例せば崑崙山のくづれて宝の山に入りたる心地してこそおは
しぬらめ、されば領解の文に云く「無上宝珠不求自得等」云云。

されば一切の二乗界法華經の行者をまほり給はん事は疑あるべからず、あやしの畜生なども恩をば報ずる事に候ぞかし、かりと申す鳥あり必ず母の死なんとする時孝をなす、狐は塚を跡にせず畜生猶此くの如し況や人類をや、されば王寿と云ひし者道を行きしにうつかれたりしに、路の辺に梅の樹あり其の実多し寿とりて食してつやみぬ、我れ此の梅の実を食して氣力をます其の恩を報ぜずんばあるべからずと申して衣をぬぎて梅に懸けてさりぬ、王尹と云いし者は道を行くに水に渴しぬ、河をすぐるに水を飲んで錢を河に入れて是を水の直とす、竜は必ず袈裟を懸けたる僧を守る、仏より袈裟を給て竜宮城の愛子に懸けさせて金翅鳥の難をまぬがる故なり、金翅鳥は必ず父母孝養の者を守る、竜は須弥山を動かして金翅鳥の愛子を食す、金翅鳥は仏の教によつて父母の孝養をなす者僧のとるさんばを須弥の頂にきて竜の難をまぬかる故なり、天は必ず戒を持ち善を修する者を守る、人間界に戒を持たず善を修する者なければ人間界の人死して多く修羅道に生ず、修羅多勢なればををりをなして必ず天ををかす、人間界に戒を持ちて善を修する者多ければ人死して必ず天に生ず、天多ければ修羅をそれをなして天ををかさず、故に戒を持ち善を修する者をば天必ず之を守る、何に況や二乗は六凡より戒徳も勝れ智慧賢き人なり、いかでか我が成仏を遂げたらん法華經を行ぜん人をば捨つべきや。

又一切の菩薩並に凡夫は仏にならんがために、四十余年の経經を無量劫が間行ぜしかども仏に成る事なかりき、而るを法華經を行じて仏と成つて今十方世界におはします仏の三十二相八十種好をそなへせ給いて九界の衆生にあをがれて月を星の回れるがごとく須弥山を八山の回るが如く、日輪を四州の衆生の仰ぐが如く輪王を万民の仰ぐが如く、仰がれさせ給うは法華經の恩徳にあらずや、されば仏は法華經に誡めて云く「須らく復た舍利を安ずることをもちいざれ」涅槃經に云く「諸仏の師とする所謂法なり是の故に如来恭敬供養す」等云云、法華經には我舍利を法華經に並ぶべからず、涅槃經には諸仏は法華經を恭敬供養すべしと説せ給へり、仏此

の法華經をさとりて仏に成りしかも人に説き聞かせ給はずば仏種をたたせ給ふ失あり、此の故に釈迦如来は此の娑婆世界に出でて説かんとせさせ給いしを、元品の無明と申す第六天の魔王が一切衆生の身に入つて、仏をあだみて説かせまいらせじとせしなり、所謂波瑠璃王の五百人の釈子を殺し、鷲峯摩羅が仏を追、提婆が大石を放し、旃遮婆羅門女が鉢を腹にふせて仏の御子と云いし、婆羅門城には仏を入れ奉る者は五百両の金をひきき、されば道にはつばらをたて井には糞を入れ門にはさかむきをひけり食には毒を入れし、皆是れ仏をにくむ故に、華色比丘尼を殺し、目連は竹杖外道に殺され、迦留陀夷は馬糞に埋れし皆仏をあだみし故なり、而れども仏さまさまの難をまぬかれて御年七十二歳、仏法を説き始められて四十二年と申せしに中天竺王舎城の丑寅耆闍崛山と申す山にして、法華經を説き始められて八年まで説かせ給いて、東天竺俱尸那城跋提河の辺にして御年八十と申せし、二月十五日の夜半に御涅槃に入らせ給いき、而りといへども御悟りをば法華經と説きをかせ給へば此の經の文字は即釈迦如来の御魂なり、一一の文字は仏の御魂なれば此の經を行ぜん人をば釈迦如来、我が御眼の如くまほり給うべし、人の身に影のそるがごとくそはせ給うらん、いかでか祈とならせ給はざるべき。

一切の菩薩は又始め華嚴經より四十余年の間、仏にならんと願ひ給いしかどもかなはずして、法華經の方便品の略開三顯一の時、仏を求むる諸の菩薩大数八万有り、又諸の万億国の転輪聖王の至れる合掌して敬心を以て具足の道を聞かんと欲す」と願ひしが、広開三顯一を聞いて「菩薩是の法を聞いて疑網皆已に断ちぬ」と説かせ給いぬ、其の後自界他方の菩薩雲の如く集り星の如く列り給いき、宝塔品の時十方の諸仏各各無辺の菩薩を具足して集り給いき、文殊は海より無量の菩薩を具足し、又八十万億那由他の諸菩薩又過八恒河沙の菩薩、地涌千界の菩薩、分別功德品の六百八十万億那由他恒河沙の菩薩、又千倍の菩薩、復一世界の微塵数の菩薩、復三千大千世界の微塵数の菩薩、復二千中国土の微塵数の菩薩、復小千国土の微塵数の菩薩、復四四天下の微塵数の菩薩、三四天下二

を立て多くの仏弟子をさそひとり、爪に毒を塗り仏の御足にぬらむと企て蓮華比丘尼を打殺し、大石を放て仏の御指をあやまちぬ、具に三逆を犯し結句は五天竺の悪人を集め仏並びに御弟子檀那等にあだをなす程に、頻婆娑羅王は仏の第一の御檀那なり、一日に五百輛の車を送り日に仏並びに御弟子を供養し奉りき、提婆そねむ心深くして阿闍世太子を語いて父を終に一尺の釘七つをもつはりつけになし奉りき、終に王舎城の北門の大地破れて阿鼻大城に墜ちにき、三千大千世界の一人も是を見ざる事なかりき、されば大地微塵劫は過ぐとも無間大城をば出づべからずとこそ思ひ候に法華經にして天王如来とならせ給ひけるにこそ不思議に尊けれ、提婆達多・仏になり給はば語られし所の無量の悪人、一業所感なれば皆無間地獄の苦ははなれぬらん、是れ偏に法華經の恩徳なり、されば提婆達多並びに所従の無量の眷属は法華經の行者の室宅にこそ住せ給うらめとたのもし。

諸の大地微塵の如くなる諸菩薩は等覺の位までせめて元品の無明計りもちて侍るが釈迦如来に値ひ奉る元品の巨石をわらんと思ふに、教主釈尊四十余年が間は「因分可説果分不可説」と申して妙覺の功徳を説き顯し給はず、されば妙覺の位に登る人一人もなかりき本意なかりし事なり、而るに靈山八年が間に唯一仏乗名為果分」と説き顯し給ひしかば諸の菩薩皆妙覺の位に上りて釈迦如来と悟り等しく須弥山の頂に登つて四方を見る

が如く長夜に日輪の出でたらんが如くあかなくならせ給いたりしかば仏の仰せ無くとも法華經を弘めじ又行者に替らじとはおぼしめすべからず、されば「我不愛身命但惜無上道 不惜身命当広説此經」等とこそ誓ひ給ひしが。

其の上慈父の釈迦仏悲母の多宝仏慈悲の父母等同じく助証の十方の諸仏一座に列らせ給いて、月と月とを集めたるが如く日と日とを並べたるが如くましましし時、「諸の大衆に告ぐ我が滅度の後誰か能く此の經を護持し誦誦せんものなる、今 仏前に於て自ら誓言を説け」と三度まで諫させ給ひしに、八方 四百万億那由他の国土

に充滿せさせ給いし諸大菩薩身を曲低頭合掌し俱に同時に声をあげて「世尊の勅の如く当に具さに奉行したてまつるべし」と三度まで声を惜まず・よばわりしかば、いかでか法華經の行者にはがわらせ給はざるべき、はんよきと云いしものけいかに頭を取せきさつと云いしもの徐の君が塚に刀をかけし、約束を違へしがためなり、此れ等は震旦辺土のえびすの如くなるものどもだにも友の約束に命をも亡ぼし身に代々思ふ刀をも塚に懸くるぞかし、まして諸大菩薩は本より大悲代受苦の誓ひ深し仏の御諫なしともいかでか法華經の行者を捨て給うべき、其の上・我が成仏の終たる上仏慇懃に諫め給いしかば仏前の御誓丁寧なり行者を助け給う事疑うべからず。

仏は人天の主・一切衆生の父母なり而も開導の師なり、父母なれども賤き父母は主君の義をかねず、主君なれども父母ならざればおそろしき辺もあり、父母・主君なれども師匠なる事はなし諸仏は又世尊にてましますば主君にてはましますませども娑婆世界に出でさせ給はざれば師匠にあらず又「其中衆生悉是吾子」とも名乗らせ給はす釈迦仏独主師親の三義をかね給へり、しかれども四十余年の間は提婆達多を罵給ひ諸の声聞をそしり菩薩の果分の法門を惜み給しかば、仏なれどもよりよりは天魔破旬ばしの我等をなやますかの疑ひ・人にはいはざれども心の中には思いしなり、此の心は四十余年より法華經の始まで失せず、而るを靈山八年の間に宝塔虛空に現じ二日月の如く並び諸仏大地に列り大山をあつめたるがごとく、地涌千界の菩薩虛空に星の如く列り給いて諸仏の果分の功德を吐き給いしかば宝蔵をかたぶけて貧人にあたつるがごとく崑崙山のくづれたるににたりき、諸人此の玉をのみ拾うが如く此の八箇年が間珍しく貴き事心髓にもとをとりしかば諸菩薩・身命も惜まず言をはぐくまず誓をなせし程に、屬累品にして釈迦如来宝塔を出でさせ給いてとびらを押し立て給いしかば諸仏は国国へ返り給ひき、諸の菩薩等も諸仏に隨ひ奉りて返らせ給ひぬ。

やうやう心ばそくなりし程に「卻後三月当般涅槃」と唱えさせ給いし事こそ心ばそく耳をどろかしかりしかば諸菩薩・二乘人天等ごとく法華經を聴聞して仏の恩徳心肝にそみて、身命をも法華經の御ために投て仏に見せまいらせんと思いに仏の仰の如く若し涅槃せさせ給はばいかにあさましからんと胸さはぎしてありし程

に仏の御年満八十と申せし二月十五日の寅卯の時、東天竺・舍衛國・俱尸那城・跋提河の辺にして仏御入滅なるべき由の御音上は有頂横には三千大千界までびびきたりしこそ目もくれ心もきえはてぬれ、五天竺・十六の大

國五百の中國十千の小國無量の藥散國等の衆生一人も衣食を調ず上下をきらはず、牛馬・狼狗・鷲・等の五十二類の二類の数大地微塵をもつくしぬべし況や五十二類をや、此の類皆華香衣食をそなへて最後の

供養とあてがひき、一切衆生の宝の橋おれなんとす一切衆生の眼ぬけなんとす一切衆生の父母・主君・師匠死なんとすなど申すこえひびきしかば身の毛のいよ立のみならず涙を流す、なんだをながすのみならず頭をたたき胸ををさへ音も惜まず叫びしかば血の涙血のあせ俱尸那城に大雨よりもしげくふり大河よりも多く流れたりき、是れ偏に法華經にして仏になりしかば仏の恩の報ずる事かたかりしなり。

かかるなげきの庭にても法華經の敵をば舌をきるべきよし座につらなるまじきよしののしり侍りき、迦葉童子菩薩は法華經の敵の國には霜雪となるべしと誓ひ給いき、爾の時、仏は臥よりきてよろこばせ給いて善哉善哉と讃め給いき、諸菩薩は仏の御心を推して法華經の敵をつたと申さば、しばらくもいき給いなんと思いて「一の誓はなせしなり、されば諸菩薩・諸天人等は法華經の敵の出来せよかし仏前の御誓はたして釈迦尊並びに多宝仏諸仏如来にもげに仏前にして誓いしが如く、法華經の御ためには名をも身命をも惜まざりけりと思はれまいらせんとこそおぼすため。

いかに申す事はそきやらん、大地はささははづるるとも虚空をつなぐ者はありとも潮のみちひぬ事はあり

とも日は西より出づるとも法華經の行者の祈りのかなはぬ事はあるべからず、法華經の行者を諸の菩薩・人天八部等二聖
・二天・十羅刹等・千に一も来つてまほり給はぬ事侍らば、上は釈迦諸仏をあなづり奉り下は九界をたばらかす失あり、
行者は必ず不実なりとも智慧はをろかなりとも身は不浄なりとも戒徳は備すとも・南無妙法蓮華經と申さば必ず守護
し給つべし、袋きたなしとて金を捨る事なかれ伊蘭をにくまば栴檀あるべからず、

谷の池を不浄なりと嫌はば蓮を取らざるべし、行者を嫌い給はば誓を破り給いなん、正像既に過ぎぬれば持戒は市の中の
虎の如し智者は麟角よりも希ならん、月を待つまでは灯を憑べし宝珠のなき処には金銀も宝なり、白鳥の恩をば黒鳥に報
ずべし聖僧の恩をば凡僧に報ずべし、とくとく利生をさづけ給へと強盛に申すならば、いかでか祈りのかなはざるべき。

問うて云く上にかかせ給ふ道理・文証を拝見するにまことに日月の天におはしますならば大地に草木のおふるなら
ば、昼夜の国土にあるならば大地だにも反覆せずば大海のしほだにもみちひるならば、法華經を信ぜん人現世のいのり
後生の善処は疑いなるべし、然りと雖も此の二十余年が間の天台・真言等の名匠・多く大事のいのり

をなすにはかばかしくいみじきのりありともみえず、尚外典の者どもよりもつたなきやうにうちをば今見ゆるなり、恐
らくは經文のそれごととなるか行者のをこなひのをろかなるか、時機のかなはざるかと、うたがはれて後生もいかとをば
つ。

それはさてをきぬ御房は山僧の御弟子とつけ給はる父の罪は子にかかり師の罪は弟子にかかるとつけ給はる、叡山の僧
徒の園城山門の堂塔佛像經卷数千万をやきはらはせ給つが、ことにおそろしく世間の人人もさわぎうとみあへるはいかに
前にも少少つけ給はり候ぬれども今度くわしくききひらき候はん、但し不審なることはかかる悪僧どもなれば三宝の御意
にもかかはらず天地にもつけられ給はずして、祈りも叶はざるやらん

とをば候はいかに、答て云くせんぜんも少少申しぬれども今度又あら申すべし、日本国にをいては此の事大なり、

これをしらする故に多くの人口に罪業をつくる、先づ山門はじまりし事は此の国に仏法渡つて二百余年、桓武天皇の御宇

に伝教大師立て始め給いしなり、当時の京都は昔聖徳太子王氣ありと相し給いしかども・

天台宗の渡らん時を待ち給いし間都をたて給はず、又上宮太子の記に云く「我が滅後二百余年に仏法・日本に弘まる

可し云云、伝教大師延暦年中に叡山を立て給ふ桓武天皇は平の京都をたて給いき、太子の記文たがはざる

故なり、されば山門と王家とは松と栢とのごとし、蘭と芝とにいたり、松かるれば必ず栢かれらんしほめば又しばしばむ、

王法の采は山の悦び王位の衰は山の歎きと見えしに既に世閑東に移りし事なにとか思食しけん。

秘法四十一人の行者・承久三年辛巳四月十九日京夷乱れし時閑東調伏の為め隠岐の法皇の宣旨に依つて始めて行

はれ御修法十五檀の秘法、一字金輪法、四字天王法、不動明王法、如意輪法、毘沙門法、大威徳法

観嚴僧正伴僧八口七条院の御沙汰、転輪聖王法、十壇大威徳法、尊僧都行遍僧都実覚法眼已上十人、大目本坊に於て之を修す、

常住院僧正三井伴僧六口資貫の御沙汰御本尊一日之を造らせらる調伏の行儀は如法愛染王法、紫宸殿に於て二七日之を修せらる、

観嚴僧正七日不動法、勤修寺の僧正伴僧八口皆僧綱、大威徳法、金剛童子法人已上十五壇の法了れり、五月十五日伊賀太郎判官光季京にして討たれ、

同十九日鎌倉に聞え、同二十一日大勢軍兵上ると聞えしかば残る所の法六月八日之れを行ひ始めらる、尊星王法、尊朝太

元法僧都五壇法、大政僧正永信法印全尊、守護經法、我朝二度之行をう、五月二十一日武蔵の守殿が海道より上洛し甲斐源氏

は山道を上る式部殿は北陸道を上り給う、六月五日大津をかたむる手甲斐源氏に破られ畢んぬ、同六月十三日十四日宇治橋の合戦、同十四日に京方破られ畢んぬ、同十五日に武蔵守殿六条へ入り給ふ諸人入り畢んぬ、七月十一日に本院は隠岐の国流され給ひ中院は阿波の国流され給ひ第三院は佐渡の国流され給ふ、殿上人七人誅殺せられ畢んぬ、かの大悪法年を経て漸漸に関東に落ち下りて諸堂の別当、供僧となり連連と之を行う、本より教法の邪正勝劣をば知食さず、只三宝をばあがむべき事とばかりおぼしめす故に自然として是を用ひきたれり、関東の国国のみならず叡山・東寺・園城寺の座主、別当、皆関東の御計と成りぬる故に彼の法の檀那と成り給ひぬるなり。

問て云く真言の教を強に邪教と云う心如何、答えて云く弘法大師云く第一大日経第二華嚴経第三法華経と能此の次第を案ずべし、仏は何なる経にか此の三部の経の勝劣を説き判じ給へや、若し第一大日経第二華嚴経第三法華経と説き給へる経あるならば尤も然るべし、其の義なくんば甚だ以て依用し難し、法華経に云く「葉王今汝に告ぐ我所説の諸経而かも此の経の中に於て法華最も第一なり」云云、仏正く諸教を挙げて其の中に於いて法華第一と説き給ふ、仏の説法と弘法大師の筆とは水火の相違なり尋ね究むべき事なり、此筆を数百年が間凡僧高僧是を學し貴賤上下是を信じて大日経は一切経の中に第一とあがめける事仏意に叶はず、心あらん人は能く能く思い定むべきなり、若し仏意に相叶はぬ筆ならば信ずとも豈成仏すべきや、又是を以て国土を祈らんに当に不祥を起さざるべきや、又云く「震旦の大師等諍て醍醐を盗む」云云、文の意は天台大師等真言教の醍醐を盗んで法華経の醍醐と名け給へる事は、此の筆最第一の勝事なり、法華経を醍醐と名け給へる事は、天台大師涅槃経の文を勘へて一切経の中には法華経を醍醐と名くと判じ給へり、真言教の天竺より唐土へ渡る事は天台出世の以後二百余年なり、されば二百余年の後に渡るべき真言の醍醐を盗みて法華経の醍醐と名け給ひけ

るか此の事不審なり不審なり、真言未だ渡らざる以前の二百余年の人人を盗人とかき給へる事証拠何れぞや、弘法大師の筆をや信ずべき、涅槃經に法華經を醍醐と説けるをや信ずべき、若し天台大師盗人ならば涅槃經の文をば云何がこころうべき、さては涅槃經の文真実にして弘法の筆邪義ならば邪義の教を信ぜん人人は云何、只弘法大師の筆と仏の説法と勘へ合せて正義を信じ侍るべしと申す計りなり。

疑て云く大日經は大日如来の説法なり若し爾らば釈尊の説法を以て大日如来の教法を打ちたる事都て道理に相叶はず如何、答えて云く大日如来は何なる人を父母として何なる国に出で大日經を説き給けるやらん、もし父母なくして出世し給うならば釈尊入滅以後、慈尊出世以前、五十六億七千万歳が中間に仏出でて説法すべしと云う事何なる經文ぞや、若し証拠なくんば誰人が信ずべきや、かかる僻事をのみ構申す間邪教とは申すなり、

其の迷謬尽しがたし纔か二二を出すなり、加之並びに禅宗、念仏等を是を用る、此れ等の法は皆未顕真実の権教不成仏の法無間地獄の業なり、彼の行人又謗法の者なり争でか御祈、叶ふべきや、然るに国主と成り給ふ事は過去に正法を持ち仏に仕ふるに依つて大小の王皆梵王、帝釈、日月、四天等の御計ひとして郡郷を領し給へ、所謂經に云く「我今五眼をもて明に三世を見るに一切の國王皆過去世に五百の仏に侍するに由つて帝王主と為る」と

とを得たりと等云云、然るに法華經を背きて真言、禪、念仏等の邪師に付いて諸の善根を修せらるるとも、敢て仏意に叶はず神慮にも違する者なり能く能く案あるべきなり、人間に生を得る事都て希なり、適生を受けて法の邪正を極めて未来の成仏を期せざらん事返本意に非ざる者なり、又慈覺大師、御入唐以後、本師、伝教大師に背か

せ給いて叡山に真言を弘めんが為に御祈請ありしに、日を射るに日輪動転すと云う夢想を御覽じて、四百余年の間諸人は是を吉夢と思へり、日本国は殊に忌むべき夢なり、殷の紂王、日輪を的にして射るに依つて身亡びたり、此の御夢想は権化の事なりとも能く能く思惟あるべきか、仍つて九牛の一毛註する所件の如し。

三〇一 祈 経送状

文永十年正月 五十二歳御作 与最蓮房日淨

13356p

御礼の旨委細承はり候畢んぬ、兼ては又末法に入つて法華經を持ち候者は三類の強敵を蒙り候はん事は面拜の時大概申し候畢んぬ、仏の金言にて候上は不審を致すべからず候か、然らば則日蓮も此の法華經を信じ奉り候て後は或は頭に疵を蒙り或は打たれ或は追はれ或は頸の座に臨み或は流罪せられ候し程に結句は此の嶋まで遠流せられ候ぬ。

何なる重罪の者も現在計りこそ罪科せられ候へ日蓮は三世の大難に値い候ぬと存し候、其の故は現在の大難は今の如し、過去の難は当世の諸人等が申す如くば、如来在世の善星俱伽利等の大悪人が重罪の余習を失せずして如来の滅後に生れて是くの如く仏法に敵をなすと申し候是なり、次に未来の難を申し候はば当世の諸人の部類等謗し候はん様は此の日蓮房は存在の時は種種の大難にあひ死門に趣むくの時は自身を自ら食して死る上は

定めて大阿鼻地獄に墜在して無辺の苦を受くるらんと申し候はんずるなり、古より已来世間出世の罪科の人、貴賤上下持戒毀戒凡聖に付けて多く候へども但其は現在計りにてこそ候に日蓮は現在に申すに及ばず過去・未来に至るまで三世の大難を蒙り候はん事は只偏に法華經の故にて候なり、日蓮が三世の大難を以て法華經の三世の御利益を覺し食され候へ過去久遠劫より已来未来永劫まで妙法蓮華經の三世の御利益尽くすべからず候なり、

日蓮が法華經の方人を少分仕り候だにも加様の大難に遭い候、まして釈尊の世世番番の法華經の御方人を思い遣りまいらせ候に道理申す計りなくこそ候へされば勸持品の説相は暫時も廃せず殊更殊更貴く覚え候。

一 御山籠の御志 しの事、凡そ末法折伏の行に背くと雖も病者にて御座候上天下の災国土の難強盛に候はん時我が身につみ知り候はざらんより外はいかに申し候とも国主信ぜられまじく候は日蓮尚籠居の志候、

まして御分の御事はさこそ候はんずらめ、仮使山谷に籠居候とも御病も平癒して便宜も吉候はば身命を捨て弘通せしめ給ふべし。

一 仰せを蒙りて候末法の行者、息災延命の祈の事、別紙に一卷註し進らせ候、毎日一返闕如無く読誦せらるべく候、日蓮も信じ始め候し日より毎日此れ等の勸文を誦し候て仏天に祈誓し候によりて、種種の大難に遇うと雖も法華經の功力、釈尊の金言深重なる故に今まで相違無くて候なり、其れに付いても法華經の行者は信心に退転無く身に詐親無く、一切法華經に其の身を任せて金言の如く修行せば慥に後生は申すに及ばず今生も息災延命にして勝妙の大果報を得、広宣流布大願をも成就す可きなり。

一 御状に十七出家の後には妻子を帶せず肉を食せず等云云、權教を信ぜし大謗法の時の事は何なる持戒の行人と申し候とも、法華經に背く謗法罪の故に正法の破戒の大俗よりも百万倍劣り候なり、彼の謗法の比丘は持戒なりと雖も無間に墜す、正法の大俗は破戒なりと雖も成仏疑い無き故なり、但今の御身は念仏等の權教を捨てて正法に歸し給う故に誠に持戒の中の清淨の聖人なり、尤も比丘と成つては權宗の人すら尚然る可し況や正法の行人をや、仮使權宗の時の妻子なりとも・かかる大難は遇はん時は振捨てて正法を弘通すべきの処に地体よりの聖人尤も吉し尤も吉し、あいかまえそうかまえききうの寄来とも遠離して一身に障礙無く国中の謗法をせめて釈尊の化儀を資む奉る可き者なり、猶猶向後は此の一巻の書を誦して仏天に祈誓し御弘通有る可く候但此の書は弘通の志有らん人に取つての事なり、此の經の行者なればとて器用に能はざる者には左右無く之を授与すべからず候か、六賢六賢、恐恐謹言。

文永十年癸酉正月二十八日

日蓮 花押

最蓮房御返事

問うて云く法華經の第一方便品に云く「諸法実相乃至本末究竟等」云云、此の經文の意如何、答えて云く下地獄より上仏界までの十界の依正の当体悉く一法ものこさず妙法蓮華經のすがたなりと云ふ經文なり依報あるならば必ず正報住すべし、釈に云く「依報・正報常に妙經を宣ぶ」等云云、又云く「実相は必ず諸法・諸法は必ず十如・十如は必ず十界・十界は必ず身土」、又云く「阿鼻の依正は全く極聖の自心に処し、毘盧の身土は凡下の一念を逾えず」云云、此等の釈義分明なり誰か疑網を生ぜんや、されば法界のすがた妙法蓮華經の五字にかはる事なし、釈迦・多宝の二仏と云うも妙法等の五字より用の利益を施し給ふ時事相に二仏と顕れて宝塔の中にしてつなづき合ひ給ふ、かくの如き等の法門日蓮を除きては申し出す人一人もあるべからず、天台・妙樂・伝教等は心には知り給へども言に出し給ふまではなし胸の中にしてくらし給へ、其れも道理なり、付嘱なきが故に時のいまだいたらざる故に仏の久遠の弟子にあらざる故に、地涌の菩薩の中の上首唱導・上行・無辺行等の菩薩より外は、末法の始の五百年に出現して法体の妙法蓮華經の五字を弘め給うのみならず、宝塔の中の二仏並座の儀式を作り顯すべき人なし、是れ即本門・寿命品の事の一念三千の法門なるが故なり、されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華經こそ本仏にては御座候へ經に云く「如来秘密神通之力」是なり、如来秘密は体の三身にして本仏なり、神通之力は用の三身にして迹仏ぞかし、凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり、然れば釈迦仏は我れ等衆生のためには主師親の三徳を備給うと思ひしに、さにては候はず返つて仏に三徳をかぶらせ奉るは凡夫なり、其の故は如来と云うは天台の釈に「如来とは十方三世の諸仏・二仏・三仏・

本仏迹仏の通号なり」と判じ給へ、此の釈に本仏と云うは凡夫なり迹仏と云ふは仏なり、然れども迷悟の不同にして生仏異なるに依つて俱体俱用の三身と云ふ事をば衆生しらざるなり、さてこそ諸法と十界を挙げて実相とは説かれて候へ実相と云うは妙法蓮華經の異名なり諸法は妙法蓮華經と云う事なり、地獄は地獄のすがたを見せたるが実の相なり、餓鬼と変ぜば地獄の実のすがたには非ず、仏は仏のすがた凡夫は凡夫のすがた、万法の当体のすがたが妙法蓮華經の当体なりと云ふ事を諸法実相とは申すなり、天台云く「実相の深理本有の妙法蓮華經」と云云、此の釈の意は実相の名言は迹門に主づけ本有の妙法蓮華經と云うは本門の上の法門なり、此の釈能く能く心中に案じさせ給へ候へ。

日蓮末法に生れて上行菩薩の弘め給うべき所の妙法を先立て粗ひろめ、つくりあらはし給うべき本門寿命品の古仏たる釈迦仏迹門宝塔品の時涌出し給う多宝仏涌出品の時出現し給ふ地涌の菩薩等を先作り顕はし奉る事、予が分齊にはいみじき事なり、日蓮をこそにくむとも内証にはいかが及ばん、さればかかる日蓮を此の嶋

まで遠流しける罪無量劫にもきゑぬべしとも覺す、譬喩品に云く「若し其の罪を説かば劫を窮むるも尽きず」とは是なり、又日蓮を供養し又日蓮が弟子檀那となり給う事、其の功德をば仏の智慧にてもはかり尽し給うべからず、經に云く「仏の智慧を以て籌量するも多少其の辺を得ず」と云へ、地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人な

り、地涌の菩薩の数にもや入りなまし、若し日蓮地涌の菩薩の数に入らば豈に日蓮が弟子檀那地涌の流類に非ずや、經に云く「能く竊かに一人の爲めに法華經の乃至一句を説かば当に知るべし是の人は則ち如来の使如来の所遣として如来の事を行ずるなり」と、豈に別人の事を説き給うならんや、されば余りに人の我をほむる時は

如何様にもなりたき意の出来し候なり、是ほむる処の言よりをこり候ぞかし、末法に生れて法華經を弘めん行者は、三類の敵人有つて流罪死罪に及ばん、然れどもたえて弘めん者をば衣を以て釈迦仏をほひ給うべきぞ、諸天

は供養をいたすべきぞがたにかけせなかにをふべきぞ・大善根の者にてあるぞ・一切衆生のためには大導師にてあるべしと。
釈迦仏・多宝仏・十方の諸仏・菩薩・天神七代・地神五代の神・鬼子母神・十羅刹女・四大天王・梵天・
帝釈・閻魔法王・水神・風神・山神・海神・大日如来・普賢・文殊・日月等の諸尊たちにほめられ奉る間、無量の大難をも
堪忍して候なり、ほめられぬれば我が身の損ずるをもかゝみず、そしられぬる時は又我が身のやぶるをもしらず、ふる
まふ事は凡夫のことはざなり。

いかにも今度信心をいたして法華經の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをし給うべし、日蓮と同意ならば地涌の
菩薩たらんか、地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事あに疑はんや、經に云く「我久遠より來かた是等の衆を
教化すことは是なり、末法にして妙法蓮華經の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌

の菩薩の出現に非ずんば唱へたき題目なり、日蓮一人はじめは南無妙法蓮華經と唱へしが、二人三人百人と次第に唱へ
つたふるなり、未來も又しかるべし、是あに地涌の義に非ずや、剩へ宣布流布の時日本一同に南無妙法蓮華經と唱へん事
は大地を的とするなるべし、ともかくも法華經に名をたて身をまかせ給うべし、釈迦仏
多宝仏・十方の諸仏・菩薩・虚空にして二仏うなづき合ひ定めさせ給ひしは別の事には非ず、唯ひとへに末法の令法久住
の故なり、既に多宝仏は半座を分けて釈迦如来に奉り給ひし時、妙法蓮華經の幡をさし顯し、釈迦・多宝の二仏大將とし
てさだめ給ひし事あにいつはりなるべきや、併ら我等衆生を仏になさんとの御談合なり。

日蓮は其の座には住し候はねども經文を見候にすこしもくもりなし、又其の座にもやありけん凡夫なれば過去をしら
ず、現在は見今法華經の行者なり又未來は決定として当詣道場なるべし、過去をも是を以て推する

に虚空会にもやありつらん、三世各別あるべからず、此くの如く思ひつづけて候は流人なれども喜悅はかりなしうれしき
にもなみだつらきにもなみだなり涙は善惡に通ずるものなり彼の千人の阿羅漢の事を思ひい

でて涙をながし、ながしながら文殊師利菩薩は妙法蓮華經と唱させ給へ、千人の阿羅漢の中の阿難尊者はなきながら
如是我聞と答え給う、余の九百九十人はなくなみだを硯の水として、又如是我聞の上に妙法蓮華經とかきつけしなり、
今日蓮もかくの如し、かかる身となるも妙法蓮華經の五字七字を弘むる故なり、釈迦仏多宝仏
未来、日本国の一切衆生のためにとどめをき給ふ所の妙法蓮華經なりと、かくの如く我も聞きし故ぞかし、現在の大難
を思いつづくるにもなみだ、未来の成仏を思つて喜ぶにもなみだせきあす、鳥と虫とはなけどもなみだをちず、日蓮は、
なかねどもなみだひまなし、此のなみだ世間の事には非ず但偏に法華經の故なり、若しか
らば甘露のなみだとも云つべし、涅槃經には父母兄弟妻子眷属にはかれて流すところの涙は四大海の水よりもをし
といへども、仏法のためには一滴をもこぼさずと見えたり、法華經の行者となる事は過去の宿習なり、同じ草木なれども
仏とつくらるるは宿縁なるべし、仏なりとも權仏となるは又宿業なるべし。

此文には日蓮が大事の法門どもかきて候ぞ、よくよく見ほどかせ給へ得させ給うべし、一閻浮提第一の御本尊を信じ
させ給へあひかまへあひかまへ信心つよく候て三仏の守護をかうむらせ給うべし、行学の二道をはげみ候べし、行学たへ
なば仏法はあるべからず、我もいたし人をも教化候へ行学は信心よりをこるべく候、力あらば一文一句なりともかたらせ
給うべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、恐恐謹言。

五月十七日

日蓮 花押

追申候、日蓮が相承の法門等前にかき進らせ候き、ことに此の文には大事の事どもしるしてまいらせ候ぞ不思議なる
契約なるか、六万恒沙の上首上行等の四菩薩の変化か、さだめてゆへあらん、総じて日蓮が身に当てる法門わたしまい
らせ候ぞ、日蓮もしや六万恒沙の地涌の菩薩の眷属にもやあるらん、南無妙法蓮華經と唱へて日本国の男女をみちびか
んとおもはなり、經に云く一名上行乃至唱導之師とは説かれ候はぬ

か、まことに宿縁しゆくえんのをふところ予が弟子でしとなり給たまつ、此の文あひかま今秘たまし給へ日蓮にちれんが己証こじょうの法門ほうもん等かきつけて候ぞ、

とどめ畢おわんぬ。

さいれんほうこへんじ
最蓮房御返事

三〇三 十八円満抄 日蓮之を記す

1362p

問うて云く十八円満えんまんの法門ほうもんの出処いっかん如何、答えて云く源蓮の一字より起れるなり、問うて云く此の事所じよてくに之を見たりや、答えて云く伝でん教大師きやうだいしの修しゆ禅ぜん寺相伝じそうでんの日記にっきに之在り此法門ほうもんは当世天台宗とうせてんだいしゅうの奥義おくぎなり秘すべし秘すべし。

問うて云く十八円満えんまんの名目みょうもく如何、答えて云く一に理性円満りしやうえんまん・二に修行円満しゆぎやうえんまん・三に化用円満えんまん・四に果海円満えんまん・五に相即そうそく円満えんまん・六に諸教円満しよきやうえんまん・七に一念円満いちねんえんまん・八に事理円満じりえんまん・九に功德円満くどくえんまん・十に諸位円満しよえんまん・十一に種子円満しゆしえんまん・十二に権実円満こんじつえんまん・十三に諸相円満しよえんまん・十四に俗諦円満ぞくたいえんまん・十五に内外円満ないげえんまん・十六に観心円満かんじんえんまん・十七に寂照円満じやくしやうえんまん・十八に不思議円満ふしぎえんまん上已。

問うて云く意如何、答えて云く此の事でんきやうだいし伝教大師でんきやうだいしの釈いっかんに云く次に蓮の五重ごじゅうげん玄とは蓮をば華因成果けわいこんぐちの義ぎに名く、蓮の名は

十八円満えんまんの故に蓮と名く、一に理性円満りしやうえんまん謂く万法まんぽう悉く真如法性しんじよほうしやうの実理じつりに帰す実性じつしやうの理りに万法円満まんぽうえんまんす故に理性りしやうを指して

蓮と為す、二に修行円満しゆぎやうえんまん謂く有相無相ゆうそうむそうの二行じきやうを修して万行円満まんぎやうえんまんす故に修行しゆぎやうを蓮と為す、三に化用円満えんまん謂く心性しんしよの本

理しりに諸法しよぽうの因分いんぶん有り此の因分よに由つて化他けたの用ぐを具す故に蓮と名く、四に果海円満えんまんとは諸法しよぽうの自性じしやうを尋ねて悉く本性ほんしやうを

捨て無作むさの三身さんじんを成す法として無作むさの三身さんじんに非ること無し故に蓮と名く、五に相即円満そうそくえんまん謂く煩惱ぼんのうの自性じしやう全く菩提ぼだいにして

一体不二いつたいふにの故に蓮と為す、六に諸教円満しよきやうえんまんとは諸仏しよぶつの内証ないしやうの本蓮ほんれんに諸教しよきやうを具足して更に闕減けつげんなきが故に、七に一念円満いちねんえんまん

謂く根塵こんちん相對ちりそうたいして一念いちねんの心起るに三千世間さんぜんせけんを具するが故に、八に事理円満じりえんまんとは

一法の当体而二不二にして闕減無く具足するが故に、九に功德円満謂く妙法蓮華經に万行の功德を具して三力の勝能
有るが故に、十に諸位円満とは但だ一心を点するに六即円満なるが故に、十一に種子円満とは一切衆生の心性に本より
成仏の種子を具す権教は種子円満無きが故に皆成仏道の旨を説かず故に蓮の義無し、十二に権実円満謂く法華実証の
時は実に即して而かも権權に即して而かも実権実相即して闕減無き故に円満の法にして既に

三身を具するが故に諸仏常に法を演説す、十三に諸相円満謂く一一の相の中に皆八相を具して一切の諸法常に八相を
唱う、十四に俗諦円満謂く十界・百界乃至三千の本性常住不滅なり本位を動せず当体即理の故に、十五に内外円満
謂く非情の外器に内の六情を具す有情数の中に亦非情を具す、余教は内外円満を説かざるが故に草木成仏

すること能わず草木非成仏の故に亦蓮と名けず十六に觀心円満とは六塵六作常に心相を觀ず更に余義に非るが故に、

十七に寂照円満とは文に云く法性寂然なるを止と名く寂にして而かも常に照すを觀と名くと、十八に不思議円満謂く
細しく諸法の自性を尋ねるに非有非無にして諸の情量を絶して亦三千三觀並びに寂照等の相無く大分の深義本来

不思議なるが故に名けて蓮と為るなり、此の十八円満の義を以て委く經意を案ずるに今經の勝能並に觀心の本義良とに
蓮の義に由る、二乘悪人草木等の成仏並びに久遠塵点等は蓮の徳を離れては余義有ること無し、座主の伝に云く玄師の

正決を尋ねるに十九円満を以て蓮と名く所謂当体円満を加う、当体円満とは当体の

蓮華なり謂く諸法自性清淨にして染濁を離るるを本より蓮と名く、一經の説に依るに一切衆生の心の間に八葉の蓮華

有り男子は上に向い女人は下に向う、成仏の期に至れば設い女人なりと雖も心の間の蓮華速かに還りて上に向う、然るに
今の蓮仏意在るの時は本性清淨当体の蓮と成る若し機情に就いては此の蓮華譬喩の蓮と成る。

次に蓮の体とは体に於て多種有り、一には徳体の蓮謂く本性の三諦を蓮の体と為す、二には本性の蓮体三千の諸法本よ
り已来当体不動なるを蓮の体と為す、三には果海真善の体一切諸法は本是れ三身にして寂光土に住す設い一法なりと

雖も三身を離れざる故に三身の果を以て蓮の体と為す、四には大分真如の体謂く不變隨縁の二種の真如を並びに証分の真如と名く本迹寂照等の相を分たず諸法の自性不可思議なるを蓮の体と為す。

次に蓮の宗とは果海の上の因果なり、和尚の云く六即の次位は妙法蓮華經の五字の中には正しく蓮の字に在り蓮門の五重玄の中には正しく蓮の字より起る、所以何ん理即は本性と名く本性の真如理性円満の故に理即を蓮と名け果海本性の解行証の位に住するを果海の次位と名く、智者大師自解仏乘の内証を以て明に經旨を見給うに

蓮の義に於て六即の次位を建立し給えり故に文に云く此の六即の義は一家より起れりと、然るに始覺の理に依て在纏真如を指して理即と為し妙覺の証理を出纏真如と名く、正く出纏の爲めに諸の万行を修するが故に法性の理の上の因果なり故に亦蓮の宗と名く蓮に六の勝能有り一には自性清淨にして泥濁に染まず理即、二には華台実の

三種具足して減すること無し名字即諸法即是三諦と解するが故に、三には初め種子より実を成ずるに至るまで華台実の三種相續して断ぜず

觀行即念念相續して、四には華葉の中に在つて未熟の実眞の実に似たり相似即、五には花開き蓮現ず分眞即、六には花落ちて蓮成ず觀行即念念相續して、修し脱するなき故に、究竟即、此の義を以ての故に六即の深義は源蓮の字より出でたり。

次に蓮の用とは六即円満の徳に由つて常に化用を施すが故に。

次に蓮の教とは本有の三身果海の蓮性に住して常に淨法を説き八相成道し四句成利す、和尚云く証道の八相は無作三身の故に四句の成道は蓮教の処に在り只無作三身を指して本覺の蓮と為す、此の本蓮に住して常に八相を唱常に四句の成道を作す故なり已上、修禪寺相伝の日記之をみるに妙法蓮華經の五字に於て各各五重玄なり蓮の字の五重玄義此く、日蓮案じて云く此の相伝の義の如くんば万法の根源、一心三觀・一念三千諦・六即・境智の円融・本迹の所詮源蓮の一字より起る者なり云云。

問うて云く總説の五重玄とは如何、答えて云く總説の五重玄とは妙法蓮華經の五字即五重玄なり、妙は名・

法は体蓮は宗華は用經は教なり、又總説の五重玄に二種有り一には仏意の五重玄二には機情の五重玄なり。

仏意の五重玄とは諸仏の内証に五眼の体を具する即ち妙法蓮華經の五字なり、仏眼は妙法眼は法慧眼は蓮天眼は華肉眼は經なり、妙は不思議に名く故に真空冥寂は仏眼なり、法は分別に名く法眼は仮なり分別の形なり、慧眼は空なり果の体は蓮なり、華は用なる故に天眼と名く神通化用なり、經は破迷の義に在り迷を以て所対

と為す故に肉眼と名く、仏智の内証に五眼を具する即ち五字なり五字又五重玄なり故に仏智の五重玄と名く、亦五眼即五智なり、法界体性智は仏眼大円鏡智は法眼平等性智は慧眼妙觀察智は天眼成所作智は肉眼なり、問う一家には五智を立つるや、答う既に九識を立つ故に五智を立つべし、前の五識は成所作智第六識は妙觀察智第七識は平等性智第八識は大円鏡智第九識は法界体性智なり。

次に機情の五重玄とは機の為に説く所の妙法蓮華經は即ち是れ機情の五重玄なり首題の五字に付いて五重の一心三觀有り、伝に云く、

妙 不思議の一心三觀 天真独朗の故に不思議なり。

法 円融の一心三觀 理性円融なり総じて九箇を成す。

蓮 得意の一心三觀 果位なり。

華 複疎の一心三觀 本覺の修行なり。

經 易解の一心三觀 教談なり。

正文の第二に此の五重を挙ぐ文に随つて解すべし、不思議の一心三觀とは智者已証の法体理非造作の本有の分なり三諦の名相無き中に於て強いて名相を以つて説くを不思議と名く、円融とは理性法界の処に本より已来三諦の理有り互に円融して九箇と成る、得意とは不思議と円融との三觀は凡心の及ぶ所に非ず但だ聖智の自受用

の徳を以て量知すべき故に得意と名く、複疎とは無作の三諦は一切法に遍して本性常住なり理性の円融に同じからず故に複疎と名く、易解とは三諦円融等の義知り難き故に且らく次第に附して其の義を分別す故に易解と名く、此れを附文の五重と名く、次に本意に依て亦五重の三観有り、一に三観一心の機、二に一心三観の機、三に住果還の一心三観上の機有りて知識の一切の法は皆是れ仏法なりと説くを聞いて真理を開す入真已後観を極めんがために一心三観を修す、四に為果行因の一心三観謂く果位究竟の妙果を聞いて此の果を得んが為に種種の三観を修す、五に付法の一心三観五時八教等の種種の教門を聞いて此の教義を以て心に入れて観を修す故に付法と名く、山家の云く言なり亦立行相を授く三千三観の妙行を修し解行の精微に由つて深く自証門に入る我汝が証相を領するに法性寂然なるを止と名け寂にして常に照すを観と名くと。

問うて云く天真独朗の止観の時一念三千・一心三観の義を立つるや、答えて云く両師の伝不同なり、座主の云く天真独朗とは一念三千の觀是なり、山家師の云く一念三千而も指南と為す一念三千とは一心より三千を生ずるにも非ず一心に三千を具するにも非ず並立にも非ず次第にも非ず故に理非造作と名く、和尚の云く天真独朗に於ても亦多種有乃至迹中に明す所の不变真如も亦天真なり、但し大師本意の天真独朗とは三千三観の相を亡し一心一念の義を絶す此の時は解無く行無し教行証の三箇の次第を経るの時行門に於て一念三千の觀を建立す、故に十章の第七の処に於て始めて觀法を明す是れ因果階級の意なり、大師内証の伝の中に第三の止観には伝轉の義無しと云云、故に知んぬ証分の止観には別法を伝えざること、今止観の始終に録する所の諸事は皆是れ教行の所撰にして実証の分に非ず、開元符州の玄師相伝に云く言を以て之を伝うる時は行証共に教と成り心を以て之を觀する時は教証は行の体と成る証を以て之を伝うる時は教行亦不可思議なりと、後学此の語に意を留めて更に忘失すること勿れ宛かも此の宗の本意立教の元旨なり和尚の貞元の本義源此れより出でたるなり。

問うて云く天真独朗の法滅後に於て何れの時か流布せしむべきや、答えて云く像法に於て弘通すべきなり、問うて云く末法に於て流布の法の名目如何、答えて云く日蓮の己心相承の秘法此の答に顯すべきなり所謂南無妙法蓮華經是なり、問うて云く証文如何、答えて云く神力品に云く「爾の時・仏・上行等の菩薩に告げたまわく要を以て之を言わば乃至宣示顯説す」と云云、天台大師云く「爾時・仏告・上行の下は第三結要付属なり」と又云く「經中の要説要は四事に在り総じて一經を結するに唯四ならくのみ其の枢柄を撮つて之を授与す」と問うて云く今の文は上行菩薩等に授与するの文なり汝何んが故ぞ己心相承の秘法と云うや、答えて云く上行菩薩の弘通し給うべき秘法を日蓮先き立つて之を弘む身に當るの意に非ずや上行菩薩の代官の二分なり、所詮末法に入つて天真独朗の法門無益なり助行には用ゆべきなり 正行には唯南無妙法蓮華經なり、伝教大師云く「天台大師は釈迦に信順して法華宗を助けて震旦に敷揚し叡山の一家は天台に相承して法華宗を助けて日本に弘通す」今日蓮は塔中相承の南無妙法蓮華經の七字を末法の時・日本国に弘通す是れ豈時国相應の仏法に非ずや、末法に入つて天真独朗の法を弘めて正行と為さん者は必ず無間・大城に墜ちんこと疑無し、貴辺年来の權宗を捨てて日蓮が弟子と成り給う眞実・時国相應の智人なり総じて予が弟子等は我が如く正理を修行し給え智者学匠の身と為りても地獄に墜ちて何の詮か有るべき所詮時時念念に南無妙法蓮華經と唱へべし。

上に挙ぐる所の法門は御存知為りと雖も書き進らせ候なり、十八円満等の法門能く能く案じ給うべし並びに当体蓮華の相承等日蓮が己証の法門等前に書き進らせしが如く委くは修禪寺相伝日記の如し天台宗の奥義之に過ぐべからざるか、一心三觀・一念三千の極理は妙法蓮華經の一言を出でず敢て忘失すること勿れ敢て忘失すること勿れ、伝教大師云く「和尚慈悲有つて一心三觀を一言に伝つ」玄旨伝に云く「一言の妙旨なり一教の玄義なり」と云云、寿量品に云く「毎に自らは是の念を作す何を以てか衆生をして無上道に入り速に仏身を成就することを得せしめん」と云

云、每自作是念の念とは一念三千生仏本有の一念なり、秘す可し秘す可し、恐恐謹言。

弘安三年十一月二日

日蓮 花押

最蓮房に之を送る

三〇四 六郎恒長御消息 文永元年九月 四十三歳御作 与南部六郎恒長 於安房 1368p

所詮念仏を無間地獄と云う義に二つ有り、一には念仏者を無間地獄とは日本国一切念仏衆の元祖法然上人の

選択集に浄土三部を除いてより以外一代聖教所謂法華經・大日經・大般若經等一切大小の經を書き上げて捨閉

閣抛等云云、之に付いて上人龜鏡と拳られし処の浄土三部經の其の中に、雙觀經・阿彌陀仏の因位・法蔵比丘の四十八

願に云く唯五逆と誹謗正法とを除くと云云、法然上人も乃至十念の中には入れ給ふといえども、法華經の門を閉じよと

書かれ候は阿彌陀仏の本願に漏れたる人に非ずや、其の弟子其の檀那等も亦以て此くの如し、法華經の文には若し人信

ぜずして乃至其の人命終して阿鼻獄に入らんと云云、阿彌陀仏の本願と法華經の文と眞実

ならば法然上人は無間地獄に墮ちたる人に非ずや、一切の經の性相に定めて云く師墮つれば弟子墮つれば檀那

墮つと云云、譬えば謀叛の者の郎從等の如し、御不審有らば選択を披見あるべし一。

二には念仏を無間地獄とは法華經の序分・無量義經に云く「方便の力を以て四十年には未だ眞実を顯さず」云云、次下

の文に云く「無量無辺を過ぐるとも乃至終に無上菩提を成ずることを得じ」云云、仏初成道の時より白鷺池の辺に至るま

で年紀をあげ四十余年と指して其の中の一經を挙ぐる中に大部の經四部、其の四部の中に次に方等十二部經を説くと

云云、是れ念仏者の御信用候三部經なり、此れを挙げて眞実に非ずと云云、次に法華經

に云く「世尊せそんの法は久しくして後要のちかならずま当に眞実しんじつを説くべし」とは念仏等ねんぶつの不眞実しんじつに対し南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうを眞実しんじつと申す文なり、次に云く「仏は自ら大乘だいしやうに住したまひ乃至若し小乗しやうじやうを以て化すること乃至一人に於てせば我即ち慳貪けんどんに墮だす此の事は爲て不可なり」云云、此の文の意は法華經を仏むね胸に秘しをさめて觀經くわんきやう念仏等ねんぶつの四十余年よんじゆうねん

の經計りを人人に授けて法華經を説かずして黙止するならば我は慳貪けんどんの者なり三惡道に墮だすべしと云う文なり、仏すら尚唯念仏を行じて一生をすこし法華經に移らざる時は地獄じじくに墮だすべしと云云、況や末代の凡夫一向に南無阿彌陀仏と申して一生をすこし法華經に移つて南無妙法蓮華經と唱えざる者三惡道を免るべきや、第二の卷に云く今此三界等と云云、此の文は日本国六十六箇国嶋二つの大地は教主釈尊しやくそんの本領なり娑婆しやば以て此くの如く全く阿彌陀の領に非ず、其中衆生悉是吾子と云云、日本国の四十九億九万四千八百二十八人の男女各父母有りといへども其の詮たずを尋ねれば教主釈尊しやくそんの御子なり、三千余社の大小の神祇も釈尊しやくそんの御子息なり全く阿彌陀仏の子に非ざるなり。〃 文永元年甲子九月

日

日蓮 花押

南部六郎恒長殿

三〇五

波木井三郎殿御返事

文永十年八月 五十二歳御作

与南部六郎三郎

1369p

鎌倉かまくらに筑後房弁阿闍梨大進阿闍梨と申す小僧等之有り之を召して御尊みそんび有る可し御談義有る可し大事の法門等粗こぼ申す、彼等かれらは日本に未だ流布せざる大法だいほう少少之を有す随つて御學問注るし申す可きなり。

鳥跡飛てがみび来れり不審の晴ること疾風の重雲を巻いて明月に向うが如し、但し此の法門当世の人上下を論ぜず信心を取

り難し其の故は仏法を修行するは現世安穩・後生善処等と云云、而るに日蓮法師法華經の行者と称すと雖も留難多し
當に知るべし仏意に叶わざるか等云云、但し此の邪難先業の由御勘氣を蒙るの後始めて驚く可きに非ず、其の故は
法華經の文を見聞するに末法に入つて教の如く法華經を修行する者は留難多かる可きの由・經文
赫赫たり眼有らん者は之を見るか、所謂法華經の第四に云く「如来の現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」又五の
卷に云く「一切世間怨多くして信じ難し」等云云又云く「諸の無智の人の惡口罵詈等し刀杖瓦礫を加うる有らんと等云
云、又云く「惡世の中の比丘等云云、又云く「或は阿蘭若に納衣にして空閑に在る有らん乃至白衣
の与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん」等云云、又云く「常に大衆の中に在つて我等を毀らんと
欲する故に國王・大臣波羅門居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説かんと等云云、又云く「惡鬼其の身に入つて
我を罵詈毀辱せん」等云云、又云く「数数擯出せらるる」等云云、大涅槃經に云く「闍提
羅漢の像を作し空閑の処に住し方等大乘經典を誹謗すること有るを諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢なり
是れ大菩薩なりと謂わん」等云云、又云く「正法滅して後・像法の中に於て當に比丘有るべし持律に似像して少しく經を
讀誦し飲食を貪嗜し其の身を長養し乃至袈裟を服すと雖も猶獵師の細めに視て徐に行くが如く猫の鼠を
伺ふが如し」等云云、又般泥經に云く「阿羅漢に似たる一闍提有り、乃至」等云云、予此の明鏡を捧げ持つて日本国に引
き向けて之を浮べたるに一分も陰れ無し惑有阿蘭若・納衣在空閑とは何人ぞや為世所恭敬如六通羅漢とは又何人ぞや、
諸凡夫見已皆謂眞阿羅漢・是大菩薩とは此れ又誰ぞや、持律少讀誦經とは又如何、是の經文
の如く仏・仏眼を以て末法の始を照見したまい當世に當つて此等の人人無くんば世尊の謬乱なり、此の本・迹二門と雙林
の常住と誰人か之を信用せん今日蓮仏語の眞實を顕さんが為日本に配当して此の經を讀誦するに或有阿蘭若住於
空処等と云うは、建長寺・寿福寺・極樂寺・建仁寺・東福寺等の日本国の禪・律・念・仏等の寺寺なり、是等の

魔寺は比叡山等の法華天台等の仏寺を破せん為に出来するなり、納衣持律等とは当世の五・七・九の袈裟を着たる持斎等なり、為世所恭敬是大菩薩とは道隆・良觀・聖一等なり、世と云うは当世の国主等なり、有諸無智人諸凡夫人等とは日本国中の上下万人なり、日蓮凡夫たる故に仏教を信ぜず但し此の事に於ては水火の如く手に当てて之を知れり、但し法華經の行者有らば惡口・罵詈・刀杖・擯出等せらる可し云云、此の經文を以て世間に配当するに一人も之れ無し誰を以てか法華經の行者と為さん敵人は有りとも雖も法華經の持者は無し、譬えば東有つて西無く天有つて地無きが如し仏語妄説と成るを如何、予自讃に似たりと雖も之を勸え出して仏語を扶持す所謂日蓮法師是なり、其の上仏不輕品に自身の過去の現証を引いて云く爾の時に一りの菩薩有り常不輕と名く等云云、又云く惡口罵詈等せらる、又云く或は杖・木瓦石を以て之を打擲す等云云、釈尊我が因位の所行を引き載せて末法の始を勸励したもう不輕菩薩既に法華經の為に杖・木を蒙りて忽に妙覺の極位に登らせたまひぬ、日蓮此の經の故に現身に刀杖を被むり二度遠流に當る當来の妙果之を疑う可しや、如来の滅後に四依の本土正像に出世して此の經を弘通したもうの時にすら猶留難多し、所謂付法藏第二十の提婆菩薩第二十五の師子尊者等或は命を断たれ頸を刎らる、第八の仏駄密多第十三の竜樹菩薩等は赤き旛を捧げ持ちて七年十二年王の門前に立てり、竺の道生は蘇山に流され法祖は害を加えられ法道三藏は面に火印を捺され、慧遠法師は呵責せられ天台大師は南北の十師に對当し、傳教大師は六宗の邪見を破す、此等は皆王の賢愚に當るに依つて用取有るのみ敢て仏意に叶わざるに非ず正像猶以てかくの如し何に況や末法に及ぶにおいてをや、既に法華經の為に御勸氣を蒙れば幸の中の幸なり瓦礫を以て金銀に易ゆるとは是なり、但し歎くらくは仁王經に云く「聖人去る時七難必ず起る」等云云、七難とは所謂大旱魃・犬兵乱等是なり、最勝王經に云く「惡人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に星宿及び風雨皆時を以て行われず」等云云、愛惡人とは誰人ぞや上に挙ぐる所の諸人なり治罰善人とは誰人ぞや上に挙ぐる所の数数見擯出

の者なり、星宿とは此の二十余年の天変地天等是なり、經文の如くならば日蓮を流罪するは国土滅亡の先兆なり、其の上御勘氣已前に其の由之を勸え出す所謂立正安國論是なり誰か之を疑わん之を以て歎と為す、但し仏滅後今に二千二百二十二年なり、正法一千年には竜樹天親等仏の御使と為て法を弘む然りと雖も但小權の二教を弘通して実大乘をば未だ之を弘通せず像法に入つて五百年に天台大師漢土に出現して南北の邪義を破失して正義を立てたもう、所謂教門の五時觀門の一念三千是なり、國を挙げて小釈迦と号す、然りと雖も円定円慧に於ては之を弘宣して円戒は未だ之を弘めず、仏滅後二千八百年に入りて日本の伝教大師世に出現して欽明より已来二百余年の間六宗の邪義之を破失す、其の上天台の未だ弘めたまわざる円頓戒之を弘宣したもう所謂叡山円頓の大戒是なり、但し仏滅後二千余年三朝の間数万の寺々之有り、然りと雖も本門の教主の寺塔地涌千界の菩薩の別に授与したもう所の妙法蓮華經の五字未だ之を弘通せず弘むべしと云う經文は有つて国土には無し時機の未だ至らざる故が、仏記して云く「我が滅度の後、後の五百歳の中に広宣流布し閻浮提に於いて断絶せしむること無けん」と等云云、天台記して云く「後の五百歳遠く妙道に沾わん」と等云云、伝教大師記して云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乘の機今正しく是れ其の時なり」と等云云、此れ等の經釈は末法の始を指し示すなり、外道記して云く「我が滅後・一百年に當つて仏世に出でたもう」と云云、儒家に記して云く「一千年の後、佛法漢土に渡る」と等云云、是くの如き凡人の記文すら尚以て符契の如し況や伝教天台をや何に況や釈迦多宝の金口の明記をや、当に知るべし残る所の本門の教主妙法の五字一閻浮提到に流布せんこと疑無き者か、但し日蓮法師に度度之を聞きける人人猶此の大難に値つての後之を捨つるか、貴辺は之を聞きたもうこと一兩度・一時・一時か然りと雖も未だ捨てたまわす御信心の由之を聞く偏えに今生の事に非じ、妙樂大師の云く「故に知んぬ末代一時聞くことを得聞き已つて信を生ずること宿種なるべし」と等云云、又云く「運像末に居し此の眞文を囑る

妙因を植えたるに非ざるよりは実に遇い難しと為す等云云、法華經に云く「過去に十萬億の仏を供養せん人人間に生れて此の法華を信ぜん」又涅槃經に云く「應連一恒供養の人此の惡世に生れて此の經を信ぜん」等云云取意、阿闍世王は父を殺害し母を禁固せし惡人なり、然りと雖も涅槃經の座に來つて法華經を聽聞せしかば現世の惡瘡を治するのみに非ず四十年の壽命を延引したまい結局は無根初住の仏記を得たり、提婆達多是閻浮第一の一闍提の人二代聖教に捨て置かれしかども此の經に値ひ奉りて天王如來の記を授与せらる彼を以て之を推するに末代の惡人等の成仏不成仏は罪の輕重に依らず但此經の信不信に任す可きのみ、而るに貴辺は武士の家の仁晝夜殺生の惡人なり、家を捨てずして此所に至つて何なる術を以てか三惡道を脱る可きか、能く能く思案有る可きか、法華經の心は當位即妙不改本位と申して罪業を捨てずして仏道を成ずるなり、天台の云く「他經は但善に記して惡に記せず今經は皆記す」等云云、妙樂の云く「唯円教の意は逆即是順なり自余の三教は逆順定まるが故に」等云云、爾前分分の得道有無の事之を記す可しと雖も名目を知る人に之を申すなり、然りと雖も大体之を教る弟子之れ有り此の輩等を召して粗之を聞くべし、其の時之を記し申す可し、恐恐謹言。

文永十年 太歲癸酉 八月二日

日蓮 花押

甲斐国南部六郎三郎殿御返事

眠れる師子に手を付けざれば瞋らず流にさをを立てざれば浪立たず謗法を呵嘖せざれば留難なし、若善比丘見壞法者置不呵嘖の置の字ををそれずんば今は吉し後を御らんぜよ無間地獄疑無し、故に南岳大師の四安樂行に云く「若し菩薩有りて悪人を將護して治罰すること能わず、其れをして惡を長ぜしめ善人を悩亂し正法を敗壞せば此の人は實に菩薩に非ず、外には詐侮を現じ常に是の言を作さん、我は忍辱を行ずと、其の人命終して諸の惡人と俱に地獄に墮ちなん」と云云、十輪經に云く「若し誹謗の者ならば共住すべからず亦親近せざれ、若し親近し共住せば即ち阿鼻地獄に趣かん」と云云、梅檀の林に入りぬればたをらざるに其身に薰ず誹謗の者に親近すれば所修の善根悉く滅して俱に地獄に墮落せん、故に弘決の四に云く「若し人本惡無けれども惡人に親近すれば後に必ず惡人となりて惡名天下に遍し」凡そ謗法に内外あり國家の一是なり、外とは日本六十六ヶ國の謗法是なり、内とは王城九重の謗是なり、此の内外を禁制せずんば宗廟社稷の神に捨てられて必ず國家亡ぶべし、如何と云うに宗廟とは國王の神を崇む社とは地の神なり稷とは五穀の總名五穀の神なり、此の兩の神法味に飢えて國を捨て給う故に國土既に日日衰滅せり、故に弘決に云く「地広くして尽く敬す可からず封じて社と為す稷とは謂く五穀の總名にして即五穀の神なり」故に天子の居する所には宗廟を左にし社稷を右にし四時・五行を布き列ぬ故に國の「」ぶるを以て社稷を失うと為す、故に山家大師は「國に謗法の声有るによつて万民數を減じ家に讚教の勤めあれば七難必ず退散せん」と、故に分分の内外有るべし。

五月十六日

日蓮在御判

南部六郎殿

三〇七 地引御書 弘安四年十一月 六十歳御作 与南部六郎

1375p

坊は十間四面にまたひさしきしてつくりあげ二十四日に大師講並びに延年心のごとくつかまつりて二十四日の戌亥の時御所にすゑして三十余人をもつて一日経かきまいらせ並びに申酉の刻に御供養すこしも事ゆゑなし、坊は地ひき山づくりし候いに山に二十四日一日もかた時も雨ふる事なし、十一月ついたちの日せうばう

つくり馬やつくる八日は大坊のはしらだて九日十日ふき候いゝんぬ、しかるに七日は大雨八日九日十日はくもりてしかもあたたかなる事春の終りのごとし、十一日より十四日までは大雨ふり大雪下りて今に里にきへ

ず、山は一丈二丈雪こほりてかたき事かねのごとし、二十二日四日は又そらはれてさむからず人のまいる事洛中かまぐらのまちの申酉の時のごとし、さだめて子細あるべきか。

次郎殿等の御きつだちをやのをほせと申し我が心にいれてをはします事なればわれと地をひきはしらたてとつひやうえむまの入道三郎兵衛尉等已下の人人一人もそらくのぎなし、坊はかまぐらにては一千貫にても大事とこそ申し候へただし一日経は供養しきして候、其の故は御所念の叶わせ給いて候ならば供養しはて候はん、なにと申して候とも御きねんかなはずば言のみ有りて実なく華さいてこのみなからんか、いまも御らんぜよ此の事叶はずば今度

法華經にては仏になるまじきかと存じ候はん、叶いて候はば二人よりあひまいらせて供養しはてまいらせ候はん、神ならばすはねぎからと申す、此の事叶はずば法華經信じてなにかせん、事事又又申すべく候恐恐。

十一月廿五日

日蓮花押

南部六郎殿

畏^{かしこ}み申し候^{もつ}、みちのほどぐち事候はでいけがみまでつきて候、みちの間山と申しかわと申しそこばく大事^{だいじ}にて候いけるをきうだちにす護^{まも}せられまいらせ候いて難^{なん}もなくこれまでつきて候事をそれ入り候ながら悦^{よろこ}び存^{ぞん}し候、さてはやがてかへりまい候はんずる道にて候へとも所らうのみにて候は不^ふちやうなる事も候はんずらん。

さりながらも日本^{にほん}国にそこばくもてあつかうて候みを九年まで御きえ候いぬる御心^{おんこころ}ざし申すばかりなく候はいづくにて死に候ともはかをばみのぶさわにせさせ候べく候。

又くりかけの御馬はあまりをもしろくをば候程にいつまでもうしなふまじく候、ひたちのゆひかせ候はんと思^{おも}い候がもし人にもぞとられ候はん、又そのほかいたはしくをばはゆよりかへ^{そつら}候はんほどがづさ^上の

もばら殿のもとにあづけをきたてまつるべく候にしらぬとねりをつけて候てはをばつかなくをば候、まかりかへ^{そつら}候はんまで此のとねりをつけをき候はんとぞんじ候、そのやうを御ぞんちのために申し候、恐^{おそ}恐^{おそ}謹^{きん}言^{げん}。

九月十九日 にぢれん 日蓮

進上 しんじやう 波木井殿 はきはつ 御報

所らうのあひだはんぎやうをくはず候事恐れ入り候。

柿三本酢一桶くぐたち・土筆給い候い畢んぬ、唐土に天台山と云う山に竜門と申して百丈の滝あり、此の滝の麓に春の初より登らんとして多くの魚集れり、千万に一も登ることを得れば竜となる、魚・竜と成らんと願うこと民の昇殿を望むが如く貧なるものの財を求むるが如し、仏に成ることも亦此くの如し彼の滝は百丈早き事合張

の天より箭を射徹すより早し、此の滝魚登らんとすれば人集りて羅網をかけ釣をたれ弓を以て射る左右の辺に間なし、空には鷺鷥鳥夜は虎・狼・狐・狸・何にとなく集りて食い噬む、仏になるをも是を以て知りぬべし、有情輪廻生死六道と申して我等が天竺に於て師子と生れ漢土・日本に於て虎・狼・野干と生れ天には・鷺地に

は鹿蛇と生れしこと数をしらず、或は鷹の前の雉・の前の鼠と生れ、生ながら頭をつき・じしむらをかまれしこと数をしらず、一劫が間の身の骨は須弥山より高く大地よりも厚かるべし、惜き身なれども云うに甲斐なく奪われてこそ候いけれ、然れば今度・法華經の為に身を捨て命をも奪われ奉れば無量無数劫の間の思ひ出なるべしと思ひ切り給うべし、
六賢六賢、又又申すべし、恐恐謹言。
建治二年丙子 日蓮花押

大井莊司入道殿

柑子一籠・種種の物送り給候、法華經第七卷藥王品に云く衆星の中に月天子最も為第一なり此の法華經も亦復かくのごと、千万億種の諸の經法の中に於て最も為照明なり云云、文の意は虚空の星は或は半里或は一里或は八里是くの如し、或は十六里なり、天の満月輪は八百里にてをはします、華嚴經六十卷・或は八十卷・般若經六百卷・方等經六十卷・涅槃經四十卷・三十六卷・大日經・金剛頂經・蘇悉地經・觀經・阿彌陀經等の無量無辺の諸經は星の如し、法華經は月の如しと説かれて候經文なり、此れは竜樹菩薩無著菩薩・天台大師善無畏三蔵等の論師・人師の言にもあらず、教主釈尊の金言なり譬は天子の一言の如し、又法華經の藥王品に云く能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦為第一等云云、文の意は法華經を持つ人は男ならば何なる田夫にても候へ三界の主たる大梵天王・釈提桓因・四大大王・轉輪聖王乃至漢土日本の国主等にも勝れたり、何に況や日本国の大臣・公卿源平の侍・百姓等に勝れたる事申すに及ばず、女人ならば女・戸迦・吉祥天女・漢の李夫人・楊貴妃等の無量無辺の一切の女人に勝れたりと説かれて候、案ずるに經文の如く申さんとすればをびただしき様なり人もちゐん事もかたし、此れを信ぜじと思はば如来の金言を疑ふ失は經文明かに阿鼻地獄の業と見へぬ、進退わづらひ有り何がせん、此の法門を教主釈尊は四十余年が間はの内にかくさせ給う、さりとはとて御年七十二と申せしに南閻浮提の中天竺王舎城の丑寅耆闍崛山にして説かせ給いき、今日本国には仏御入滅一千四百余年と申せしに來りぬ、夫より今七百余年なり、先き一千四百余年が間は日本国の人国王・大臣乃至万民一人も此の事を知らず。

今此の法華經わたらせ給へども、或は念仏を申し、或は眞言にいとまを入れ、禪宗持齋など申し、或は法華經を読む人は有りしかども、南無妙法蓮華經と唱うる人は日本国に一人も無し、日蓮始めて建長五年の夏の始より二十余年が間、唯一人当時の人の念仏を申すやうに唱うれば、人ごとに是れを笑ひ、結句はのりうち切り流し、頸をはねんとせらるること一日・二日・一月・二年ならざれば、こらふべしともをばえ候はねども、此の經の文を見候はば、檀王と申せし王は千歳が間、阿私仙人に責めつかはれ、身を牀となし給ふ、不輕菩薩と申せし僧は多年が間、惡口罵詈せられ、刀杖瓦礫を蒙り、藥王菩薩と申せし菩薩は千二百年が間、身をやき七万二千歳ひぢを焼き給ふ、此れを見はんべに何なる責め有りとも、いかでかさてせき留むべきと思ふ心に、今まで退轉候はず。

然るに在家の御身として、皆人にくみ候に、而もまだ見参に入り候はぬに、何と思し食して御信用あるやらん、是れ偏に過去の宿植なるべし、来生に必ず仏に成らせ給ふべき期の来りてもよをすころなるべし、其の上經文には鬼神の身に入る者は、此の經を信ぜず、釈迦仏の御魂の入りかはれる人は、此の經を信ずと見候はば、水に

月の影の入りぬれば、水の清むがごとく、御心の水に教主釈尊の月の影の入り給ふかと、たのもしく覺候、法華經の第四法師品に云く、「人有つて仏道を求めて一劫の中に於て合掌して我が前に在つて無数の偈を以て讚めん、是の

讚仏に由るが故に無量の功德を得ん、持經者を歎美せんは、其の福復た彼れに過ぎんと等云云、文の意は一劫が間、教主釈尊を供養し奉るよりも、末代の浅智なる法華經の行者の上下万人にあだまれて餓死すべき比丘等を供養せん、功德は勝る

べしとの經文なり。

一劫と申すは八万里など候はん、青めの石をやすり、を以て無量劫が間するともつきまじきを、梵天三銖の衣と申してきはめてほそくつくしきあまの羽衣を以て三年に一度下てなづるになでつくしたるを一劫と申す、此の間無量の財を以て供養しまいらせんよりも、濁世の法華經の行者を供養したらん、功德はまさるべきと申す文なり。

此の事信じがたき事なれども法華経はこれにをびたたく、ことごとしき事どもあまた侍べり、又信ぜじと思は
たほつ しょうみょう きようしやくそん しょうじき きんげん たま しょうぶつ こくちようぜつ ほんてん たまい
多宝仏は証明を加教主釈尊は正直の金言とならせ給ふ、諸仏は広長舌を梵天につけ給いぬ、父のゆづりに母の状を
そゑて賢王の宣旨を下し給うが如し、三つは一同なり誰か是れを疑はん、されば是れを疑いし
むくろんし せんじ くだ たま こく ぜん げんしん だいじゃ ひとびと がっし しんたん そ だいぢ
無垢論師は舌五つに破れ高法師は舌ただれ三階禅師は現身に大蛇となる徳一は舌八つにさけにき、其れのみならず此の
法華経並に行者を用ひずして身をそんじ家をうしない国をほろぼす人人月支震旦に其の数をしらず、第一には日天朝
に東に出で給うに大光明を放ち天眼を開きて南閻浮提を見給うに法華経の行者あれば心に歡喜し
行者をにくむ国あれば天眼をいからして其の国をにらみ給い始終用いずして国の人にくめば其の故と無くいくさをこり
他国より其の国を破るべしと見えて候。

昔し徳勝童子と申せしをさなき者は土の餅を釈迦仏に供養し奉りて阿育大王と生れて閻浮提の主と成りて結句は仏に
なる、今の施主の菓子等を以つて法華経を供養します、何かに十羅刹女等も悦び給らん、悉く尽しがたく候、南無
妙法蓮華経・南無妙法蓮華経。

二月十七日

にちれんかおう
日蓮花押

こへんじ
松野殿御返事

驚目一結白米一駄白小袖一送り給畢ぬ、抑も此の山と申すは南は野山漫漫として百余里に及べり、北は身延山高く
 峙ちて白根が嶽につぎ西には七面と申す山峨峨として白雪絶えず、人の住家一宇もなし、適ま問いくる物とては梢を伝
 ふ猴なれば少も留まる事なく還るさ急ぐ恨みなる哉、東は富士河漲りて流沙の浪に異ならず、かかる所なれば訪う
 人も希なるに加様に度度音信せさせ給ふ事不思議の中の不思議なり。

実相寺の学徒日源は日蓮に帰伏して所領を捨て弟子檀那に放され御座て我身だにも置き処なき由承り候に日蓮を
 訪い衆僧を哀みさせ給う事誠の道心なり聖人なり、已に彼の人は無雙の学生ぞかし然るに名聞名利を捨てて某が弟子
 と成りて我が身には我不愛身命の修行を致し仏の御恩を報ぜんと面々までも教化申し此くの如く供養

等まで捧げしめ給う事不思議なり、末世には狗犬の僧尼は恒沙の如しと仏は説かせ給いて候なり、文の意は末世の僧
 比丘尼は名聞名利に著し上には袈裟衣を著たれば形は僧比丘尼に似たれども内心には邪見の剣を提げて我

が出入する檀那の所余の僧尼をよせじと無量の讒言を致す、余の僧尼を寄せずして檀那を惜まん事譬えば犬が前に人の
 家に至て物を得て食ふが、後に犬の来るを見ていがみ合ふが如くなるべしと云う心なり、是くの如きの僧尼は皆皆惡道
 に墮すべきなり、此学徒日源は学生なれば此の文をや見させ給いけん、殊の外に僧衆を訪ひ顧み給う事誠に有り難く覚え
 候。

御文に云く此の経を持ち申して後退転なく十如是我偈を読み奉り題目を唱へ申し候なり、但し聖人の唱えさせ給う
 題目の功德と我れ等が唱へ申す題目の功德と何程の多少候べきやと云云、更に勝劣あるべからず候、其の

故は愚者の持ちたる金も智者の持ちたる金も愚者の然せる火も智者の然せる火も其の差別なきなり、但し此の經の心に背いて唱は其の差別有るべきなり、此の經の修行に重重のしなあり其大概を申せば記の五に云く

「愚の数を明かすことをば今の文には説不説と云ふのみ」、有る人此れを分つて云く「先きに惡因を列ね次ぎに惡果を列ね惡の因に十四あり・一に慢・二に懈怠・三に計我・四に淺識・五に著欲・六に不解・七に不信・八に鬻聲・

九に疑惑・十に誹謗・十一に輕善・十二に憎善・十三に嫉善・十四に恨善なり」此の十四誹謗は在家出家に亘るべし恐るべし恐る可し、過去の不輕菩薩は一切衆生に仏性あり法華經を持たば必ず成仏すべし、彼れを輕んじては仏を輕んずるになるべしとて禮拜の行をば立てさせ給ひしなり、法華經を持たざる者をさ吝し持ちやせんずらん

仏性ありとてかくの如く禮拜し給う何に況や持てる在家出家の者をや、此の經の四の卷には「若しは在家にてもあれ出家にてもあれ、法華經を持ち説く者を一言にても毀る事あらば其の罪多き事、釈迦仏を一劫の間直ちに

毀り奉る罪には勝れたり」と見たり、或は「若実若不実」とも説かれたり、之れを以つて之れを思ふに忘れても法華經を持つ者をば互に毀るべからざるか、其故は法華經を持つ者は必ず皆仏なり仏を毀りては罪を得るなり。

加様に心得て唱うる題目の功德は釈尊の御功德と等しかるべし、釈に云く阿鼻の依正は全く極聖の自身に処し毘盧の身土は凡下の一念を逾えず云云、十四誹謗の心は文に任せて推量あるべし、加様に法門を御尋ね候事誠に後世を願はせ給う人能く是の法を聴く者は斯の人亦復難しとて此經は正き仏の御使世に出でずんば仏の御本意の如く説く事難き

上、此の經のいはれを問い尋ねて不審を明らめ能く信ずる者難かるべしと見えて候、何に賤

者なりとも少し我れより勝れて智慧ある人には此の經のいはれを問い尋ね給うべし、然るに惡世の衆生は我慢偏執名聞名利に著して彼れが弟子と成るべきか彼れに物を習はば人にや賤く思はれんずらんと、不斷惡念に住して惡道に墮すべしと見えて候、法師品には「人有りて八十億劫の間無量の宝を尽して仏を供養し奉らん功德

よりも法華經を説かん僧を供養して後に須臾の間も此の經の法門を聴聞する事あらば我れ大なる利益功德を得べしと悦ぶべし」と見えたり、無智の者は此の經を説く者に使れて功德をつべし、何なる鬼畜なりとも法華經の一偈・一句をも説かん者をば「当に起ちて遠く迎えて当に仏を敬うが如くすべし」の道理なれば仏の如く互に敬うべし、例せば宝塔品の時の釈迦・多宝の如くなるべし。

此の三位房は下劣の者なれども少分も法華經の法門を申す者なれば仏の如く敬いて法門を御尋ねあるべし、依法不依人此れを思ふべし、されば昔独りの人有りて雪山と申す山に住み給き其の名を雪山童子と云う、蕨をおり菓を拾いて命をつぎ鹿の皮を著物としら舩をかくし閑に道を行じ給いき、此の雪山童子おもはれるは傭

世間を観ずるに生死無常の理なれば生ずる者は必ず死す、されば憂世の中のおだはかなき事譬は電光の如く朝露の日に向ひて消るに似たり、風の前の灯の消やすく芭蕉の葉の破やすきに異ならず、人皆此の無常を遁れず終に一度は黄泉の旅に趣くべし、然れば冥途の旅を思うに閻閻としてくらければ日月・星宿の光もなく、せ

めて灯燭とてともす火だにもなし、かかる闇き道に又ともなふ人もなし、娑婆にある時は親類兄弟・妻子・眷属集りて父は慈みの志・高く母は悲しみの情深く、夫婦は海老同穴の契りとして大海にあるえびは同じ畜生ながら夫妻ちぎり細かに、一生一処にともなひて離れ去る事なきが如く、鴛鴦の衾の下に枕を並べて遊び戯る中なれども彼

の冥途の旅には伴なふ事なし、冥冥として独り行く誰か来りて是非を訪はんや、或は老少不定の境なれば老いたるは先立若きは留まる是れは順次の道理なり歎きの中にもせめて思ひなくさむ方も有りぬべし、老いたるは留まり若きは先立つされば恨の至つて恨めしきは幼くして親に先立つ子、嘆きの至つて歎かしきは老いて子を先立

つる親なり、是くの如く生死無常老少不定の境あだにはかなき世の中に但昼夜に今生の貯をのみ思ひ朝夕に現在の業をのみなして、仏をも敬はず法をも信ぜず無行無智にして徒らに明し暮して閻魔の庁庭に引き迎へ

られん時は何を以つてか資糧として三界の長途を行き、何を以て船筏として生死の曠海を渡りて実報・寂光の仏土に至らんやと思ひ、迷は夢覺れば寤し、夢の憂世を捨てて寤の覺りを求めんにはと思惟し、彼の山に籠りて觀念の牀の上に妄想顛倒の塵を払ひ、偏に仏法を求め給ふ所に。

帝釈遙に天より見下し給いて思し食さるる様は、魚の子は多けれども魚となるは少なく菴羅樹の花は多くさけども菓になるは少なし、人も又此くの如し菩提心を発す人は多けれども退せずして実の道に入る者は少し、都て凡夫の菩提心は多く悪縁にたばらかされ事にふれて移りやすき物なり、鎧を著たる兵者は多けれども戦に恐れをなさざるは少なきが如し、此の人の意を行て試みばやと思ひて帝釈鬼神の形を現じ童子の側に立ち給ふ、其の時仏世にましまさざれば雪山童子普く大乘經を求むるに聞くことあたはず、時に諸行無常是生滅法と云ふ音ほのかに聞ゆ、童子驚き四方を見給ふに人もなし但鬼神近付て立ちたり、其の形けはしくをそろしくて頭のみは炎の如く口の齒は劍の如く目を瞋らして雪山童子をまほり奉る、此れを見るにも恐れず偏に仏法を聞かん事を喜び怪しむ事なし、譬えば母を離れたるこつしほのかに母の音を聞きつるが如し、此事誰か誦しつるぞいまだ残の語あらんとて普ねく尋ね求るに更に人もなければ、若しも此の語は鬼神の説きつるかと思ふともよもさもあらじと思ひ彼の身は罪報の鬼神の形なり此の偈は仏の説き給へる語なり、かかる賤き鬼神の口より出づべからずとは思ふとも、亦殊に人もなければ若し此の語汝が説きつるかと思ふは、鬼神答て云う我れに物な云いそ食せずして日数を経ぬれば飢え疲れて正念を覺えず、既にあだこと云いするならん我うつける意にて云ふは知る事

もあらじと答ふ、童子の云く我れは此の半偈を聞きつる事半なる月を見るが如く半なる玉を得るに似たり、慥に汝が語なり願くは残れる偈を説き給へとのたまふ、鬼神の云く汝は本より悟あれば聞かずとも恨は有るべからず吾は今飢に責められたれば物を云うべき力なし都て我に向いて物な云いそと云ふ、童子猶物を食ては説かんやと

問う、鬼神答て食ては説きてんと云う、童子悦びてさて何物をか食とするぞと問へば、鬼神の云く汝更に問うべからず此れを聞きては必ず恐を成さん、亦汝が求むべき物にもあらずと云は童子猶責めて問い給はく其の物をとだにも云はば心みにも求めんとの給えは鬼神の云く我れ但人の和らかなる肉を食し人のあたたかなる血を飲む、空を飛び普ねく求めども人をば各守り給う仏神ましませば心に任せて殺しがたし、仏神の捨て給う衆生を殺して食するなりと云う、其時雪山童子の思い給はく我れ法の為に身を捨て此の偈を聞き畢らんと思いて、汝が食物ここに有り外に求むべきにあらず、我が身いまだ死せず其の肉あたたかなり我が身いまだ寒ず其の血あたたかならん、願くは残の偈を説き給へ此の身を汝に与えんと云う、時に鬼神大に瞋て云く誰か汝が語を實とは憑むべき、聞いて後には誰をか証人として糾さんと云う、雪山童子の云く此の身は終に死すべし徒に死せん命を法の為に投げばきたなくけがらはしき身を捨てて後生は必ず覺りを開き仏となり清妙なる身を受くべし、土器を捨てて宝器に替るが如くなるべし、梵天帝釈四大天王十方の諸仏菩薩を皆証人とせん我れ更に偽るべからずとの給えり、そのとききじん其の時鬼神少し和で若し汝が云う処実ならば偈を説かんと云う其の時雪山童子大に悦んで身に著たる鹿の皮を脱いで法座に敷頭を地に付け、掌を合せ跪き、但願くは我が為に残の偈を説き給へと云うて至心に深く敬い給ふ、さて法座に登り鬼神偈を説いて云く生滅滅已・寂滅為樂と此の時雪山童子是を聞き悦び貴み給う事限なく後生までも忘れじと度々誦して深く其の心にそめ、悦ばしき処はこれ仏の説き給へるにも異ならず歎かわ敷き処は我れ一人のみ聞きて人の為に伝へざらん事をと深く思いて石の上壁の面路の辺の諸木ごとに此の偈を書き付け願くは後に来らん人必ず此の文を見其の義理をさとり実の道に入れと云い畢つて、即高き木に登りて鬼神の前に落ち給へり、いまだ地に至らざるに鬼神俄に帝釈の形と成りて雪山童子の其身を受取りて平かなる所にすえ奉りて恭敬礼拝して云く我れ暫く如来の聖教を惜みて試に菩薩の心を悩し奉るなり、願くは此の罪を許して後世

には必ず救ひ給へと云ふ、一切の天人又来りて善哉善哉実には是れ菩薩なりと讃め給ふ、半偈の為に身を投げて十二劫生死の罪を滅し給へ此の事涅槃經に見えたり、然れば雪山童子の古を思は半偈の為に猶命を捨て給ふ、何に況や此の經の一品・一卷を聴聞せん恩徳をや何を以てか此れを報ぜん、尤も後生を願はんには彼の雪山童子の如くこそあらまほしくは候へ、誠に我が身貧にして布施すべき宝なくば我が身を捨てて佛法を得べき便あらば身を捨てて佛法を学すべし。

とても此の身は徒に山野の土と成るべし惜みても何かせん惜むとも惜みとぐべからず・人久しいえども百年には過ず其の間の事は但一睡の夢ぞかし、受けがたき人身を得て適ま出家せる者も佛法を学し謗法の者を責めずして徒らに遊戲雜談のみして明し暮さん者は法師の皮を著たる畜生なり、法師の名を借りて世を渡り身を養う

といふとも法師となる義は一もなし法師と云う名字をぬすめる盗人なり、恥づべし恐るべし、迹門には「我身命を愛せず但だ無上道を惜しむ」ととき本門には「自ら身命を惜まず」ととき涅槃經には「身は軽く法は重し

身を死して法を弘む」と見えたり、本迹兩門涅槃經共に身命を捨てて法を弘むべしと見えたり、此等の禁を背く重罪は目には見えざれども積りて地獄に墮つる事譬ば寒熱の姿形もなく眼には見えざれども、冬は寒来りて草木人畜をせめ夏は熱来りて人畜を熱悩せしむるが如くなるべし。

然るに在家の御身は但余念なく南無妙法蓮華經と御唱えありて僧をも供養し給うが肝心にて候なり、それも經文の如くならば随力演説も有るべきか、世の中ものつからん時も今生の苦さかなしし、況や来世の苦をやと思し食しても南無妙法蓮華經と唱へ悦ばしからん時も今生の喜びは夢の中の夢・靈山浄土の喜びこそ実の喜びなれ

と思し食し合せて又南無妙法蓮華經と唱へ退転なく修行して最後臨終の時を待つて御覽ぜよ、妙覺の山に走り登つて四方をきつと見るならばあら面白や法界寂光土にして瑠璃を以つて地とし金の繩を以つて八の道を界

へり、天より四種の花ふり虚空に音楽聞えて、諸仏菩薩は常樂我淨の風にそよめき娛樂快樂し給うぞや、我れ等も其の數に列なりて遊戲し樂むべき事はや近づけり、信心弱くしてはかかる目出たき所に行くべからず行くべからず、不審の事をば尚尚承はるべく候、六賢六賢。

建治二年丙子十二月九日

日蓮 花押

松野殿御返事

三三二 松野殿御消息

1387p

昔乃往過去の古伽提嵐国と申す国あり彼の国に大王あり無諍念王と申しき、彼の王に千の王子あり又彼の王の第一の大臣を宝海梵志と申す、彼の梵志に子あり法蔵と申す、彼の無諍念王の千の太子は穢土を捨てて淨土を取り給ふ、其の故は此の娑婆世界は何なる所と申せば十方の国土に父母を殺し正法を誹謗し聖人を殺せる者彼の国より此の娑婆世界へ迫り入れられて候、例せば此の日本国の入道有る者の獄に入れらるるが如し、我が力に叶はざれば哀愍せずして捨て給ふ、宝海梵志一人請け取りて娑婆世界の人の師と成り給ふ、宝海梵志の願に云く我未來世の穢惡土の中に當に作仏することを得べし、即ち十方淨土より擯出せる衆生を集めて我れ當に之れを度すべしと誓ひ給ひき、無諍念王と申すは阿弥陀仏なり、其の千の太子は今の觀音勢至普賢文殊等なり、其の宝海梵志と申すは今の釈迦如来なり、此の娑婆世界の一切衆生は十方の諸仏に抜き捨てられしを釈迦一人計りして扶けさせ給うを唯我一人と申すなり。

松野殿

日蓮 花押

三二七 松野殿御返事

13088d

驚目一貫文・油一升衣一筆十管給い候、今に始めぬ御志申し尽しがたく候は法華經・釈迦仏に任せ奉り候。

先立より申し候、但在家の御身は余念もなく日夜朝夕・南無妙法蓮華經と唱え候て最後臨終の時を見させ給へ妙覺の山に走り登り四方を御覽ぜよ、法界は寂光土にして瑠璃を以て地とし・金繩を以て八の道をさかひ、天よ

り四種の花ふり虚空に音楽聞え、諸仏・菩薩は皆常樂我淨の風にそよめき給へは我れ等も必ず其の數に列ならん、法華經はかかるいみじき御經にてをはしまいらせ候、委細はいそぎ候間申さず候、恐恐謹言。

明治三年丁丑九月九日

日蓮花押

松野殿御返事

追て申し候目連樹十両計り給はり候べく候

三二四 松野殿御返事

13088d

種種の物送り給い候畢ぬ山中のすまゐ思遣せ給うて雪の中ふみ分けて御訪い候事御志・定めて法華經十羅刹も知し食し候らんさては涅槃經に云く「人命の停らざることは山水にも過ぎたり今日存すと雖も明日保ち難し」摩耶經に云く「譬えば旃陀羅の羊を駈て屠家に至るが如く人命も亦是くの如く歩歩死地に近く法華經に云く「三界は安きこと無し猶火宅の如し衆苦充滿して甚だ怖畏すべし」等云云、此れ等の經文は我等が慈父・大覺世尊・末代

の凡夫をいさめ給い、いとけなき子どもをさし驚かし給へる経文なり、然りと雖も須臾も驚く心なく刹那も道心を発さず、野辺に捨てられなば一夜の中にはだかになるべき身をかざらんがために、いとまを入れ衣を重ねんとはげむ、命終りなば三日の内に水と成りて流れ塵と成りて地にまじり煙と成りて天にのぼりあともみえずなる

べき身を養はんとて多くの財をたくはぶ、此のことは事は事ふり候ぬ但し当世の体こそ哀れに候へ日本国数年の間打ち続きけかちゆきて衣食たへ畜るひをば食いつくし結句人をくらう者出来して或は死人或は小児或は病人等の肉を裂取て魚鹿等に加へ売りしかば人は是を買いく、此の国存の外に大悪鬼となれり、又去年の春より

今年の二月中旬まで疫病国に充滿す、十家に五家、百家に五十家皆やみ死し、或は身はやまねども心は大苦に値へりやむ者よりも怖し、たまたま生残たれども或は影の如くそいし子もなく眼の如く面をならべし夫婦もなく天地の如く憑し父母もをはず生きても何にかせん心あらん人人争か世を厭はざらん、三界無安とは仏説き給て候へども法に過ぎて見え候。

然るに予は凡夫にて候へどもかかるべき事を仏兼て説きをかせ給いて候を国王に申しきかせ進らせ候ぬ、其れにつけて御用は無くして弥怨をなせしかば力及ばず此の国既に謗法と成りぬ、法華經の敵に成り候へは三世十方の仏神の敵と成れり、御心にも推せさせ給い候、白蓮何なる大科有りと法華經の行者なるべし、南無阿彌陀仏と申さば何なる大科有りと念仏者にて無しとは申しがたし、南無妙法蓮華經と我が口にも唱へ候故に罵られ打ちはられ流され命に及びしかども、勧め申せば法華經の行者ならずや、法華經には行者を怨む者は阿鼻地獄の人と定む、四の巻には仏を一中劫罵るよりも末代の法華經の行者を悪む罪深しと説かれたり、七の巻には行者を輕しめし人人千劫阿鼻地獄に入ると説き給へり、五の巻には我が末世末法に入つて法華經の行者有るべし、其の時其の国に持戒、破戒等の無量無辺の僧等集りて国主に讒言して流し失ふべしと説かれたり、然るにかかる經

文かたがた符合し候畢んぬ未来に仏に成り候はん事疑いなく覚え候、委細は見参の時申すべし。

建治四年 戊寅 二月十三日

日蓮 花押

松野殿御返事

三二五 松野殿御返事

1390p

日月は地におち須弥山はくづるとも、彼の女人仏に成らせ給はん事疑いなし、あらたのもしや・たのもしや。

干飯一斗・古酒一筒・ちまき・あうぎ・たかなな方方の物送り給いて候草にさける花・木の皮を香として仏に奉る人
靈鷲山 参らざるはなし、況や民のほねをくだける白米・人の血をしぼれるが如くなるふるさを仏・法華経にまいらせ
給へる女人の成仏得道疑うべしや。

五月一日

日蓮 花押

妙法尼御返事

三二六 松野殿後家尼御前御返事

1390p

法華経第五の卷安樂行品に云く文殊師利此法華経は無量の国の中に於て乃至名字をも聞くことを得べからず云云、此
の文の心は我等衆生の三界六道に輪回せし事は、或は天に生れ、或は人に生れ、或は地獄に生れ、或は餓鬼に生れ、畜生に
生れ無量の国に生をつけて無辺の苦しみを付けて、たのしみにあひしかども一度も法華経の国には生ぜず、

たまたま生れたりといへども南無妙法蓮華經と唱ふ、となふる事はゆめにもなし人の申すをも聞かず、仏のたとを説かせ給うに一眼の龜の浮木の穴に値いがたきにたと給うなり、心は大海の中に八万由旬の底に龜と申す大魚あり、手足もなくひれもなし腹のあつき事はくろがねのやけるがごとし、せなかのこのさむき事は雪山にいたり、此の魚の昼夜朝暮のねがひ時時剋剋の口ずさみには腹をひやしこつをあたためんと思ふ、赤梅檀と申す木をば聖木と名づく人の中の聖人なり、余の一切の木をば凡木と申す愚人の如し、此の梅檀の木は此の魚の腹をひやす木なり、あはれ此の木にのほりて腹をば穴に入れてひやしこつをば天の日にあてあためばやと申すなり、自然のことはりとして千年に一度出る龜なり、しかれども此の木に値事かたし、大海は広し龜はちい

さし浮木はまれなり、たとひよのつききにはあへども梅檀にはあはず、あへども龜の腹をえりはめたる様にがい分に相応したる浮木の穴にあひがたし我が身をち入りなばこつをもあためがたし誰か又とりあぐべき、又穴せばくして腹を穴に入れえずんば波にあらひをとされて大海にしづみなむ、たとひ不思議として梅檀の浮木

の穴にたまたま行きあへども我一眼のひがめる故に浮木西にながるれば東と見る故にいそいでのとらんと思いておよげば彌弥とをさかる、東に流るを西と見る南北も又此くの如し云云、浮木にはとをさかれども近づく事はなし、是の如く無量無辺劫にも一眼の龜の浮木の穴にあひがたき事を仏説き給へり、此の喩をとって法華經にあ

ひがたきに譬ふ、設ひあへともなへがたき題目の妙法の穴にあひがたき事を心うべきなり、大海をば生死の苦海なり龜をば我等衆生にたとへたり、手足のなきをば善根の我等が身にそなはらざるにたとへ腹のあつきをば我等が瞋恚の八熱地獄にたとへ骨のこのさむきをば貧欲の八寒地獄にたとへ今年大海の底にあるをば我等が三惡道

に墮ちて浮びがたきにたとへ千年に一度浮ぶをば三惡道より無量劫に一度人間に生れて釈迦仏の出世にあひがたきにたとへ、余の松木ひの木の浮木にはあひやすく梅檀にはあひがたし、一切經には値いやすく法華經

にはあひがたきに譬へたり、たとひ梅檀には値うとも相応したる穴にあひがたきに喩うるなり、設ひ法華經には値うとも
肝心たる南無妙法蓮華經の五字をとなふがたきにあひたてまつる事のかたきにたとつ、東を西と見・

北を南と見る事をば我れ等衆生かしこがほに智慧有る由をして勝を劣と思ひ劣を勝と思ふ、得益なき法をば得益あると
見る機にかなはざる法をば機にかなう法と云つ、真言は勝れ法華經は劣り真言は機にかなひ法華經は機に叶はずと見る
是なり。

されば思いよらせ給へ公月氏国に出でさせ給いて一代聖教を説かせ給いしに四十三年と申せしに始めて法華經を説か
せ給ふ、八箇年が程一切の御弟子皆如意宝珠のごとくなる法華經を持ち候き、然れども日本国と天竺とは二十万里の
山海をへたて候しかば法華經の名字をだに聞くことなかりき、釈尊御入滅ならせ給いて一千二百余年と申せしに漢土へ
渡し給ふ、いまだ日本国へ渡らず、仏滅後一千五百余年と申すに日本国の第三十代・

欽明天皇と申せし御門の御時百済国より始めて仏法渡る、又上宮太子と申せし人唐土より始めて仏法渡させ給いて其れ
より以来今に七百余年の間一切經並に法華經はひろまらせ給いて上一人より下万人に至るまで心あらむ人は法華經を
一部或は一巻或は一品持ちて或は父母の孝養とす、されば我等も法華經を持つと思つ、しかれ

ども未だ口に南無妙法蓮華經とは唱へず信じたるに似て信ぜざるが如し、譬えば一眼の龜のあひがたき梅檀の聖木にはあ
いたれどもいまだ龜の腹を穴に入れざるが如し、入れざればよしなし須臾に大海にしづみなん、我が朝七百余年の間此の
法華經弘まらせ給いて或は読む人或は説く人或は供養せる人或は持つ人稻麻竹葦よりも多

し、然れどもいまだ阿弥陀の名号を唱うるが如く南無妙法蓮華經とすすむる人もなく唱うる人もなし、一切の經一切の
仏の名号を唱うるは凡木にあつがごとし、未だ梅檀ならざれば腹をひやさず日天ならざれば甲をもあたたためず、但目を
こやし心を悦ばしめて実なし華さいて菓なく言のみ有りてしわざなし。

但日蓮一人ばかり日本国に始めて是を唱まいる事、去ぬる建長五年の夏のころより今に二十余年の間、昼夜朝暮に南無妙法蓮華經と是を唱うる事は一人なり、念仏申す人は千万なり、予は無縁の者なり、念仏の方人は有縁なり、高貴なり、然れども師子の声には一切の獸、声を失ふ虎の影には犬恐る、日天東に出でぬれば万星の光は跡形もなし、法華經のなき所にこそ弥陀念仏はいみじかりしかども南無妙法蓮華經の声、出来しては師子と犬と日輪と星との光くらべのごとし、譬えば鷹と雉とのひとしからざるのごとし、故に四衆とりどりにそねみ上下同くにくむ、讒人に充満して奸人士に多し、故に劣を取りて勝をにくむ、譬えば犬は勝れたり、師子をば劣れり、星をば勝れ、日輪をば劣るとそしるが如し、然る間邪見の悪名世上に流布し、ややもすれば讒訴し、或は罵詈せられ、或は刀杖の難をかふる、或は度度流罪にあたる、五の巻の經文にすこしもたがはず、さればなむだ左右の眼につかび悦び一身にあまれり。

ここに衣は身をかくしがたく、食は命をささぐがたし、例せば蘇武が胡国にありしに雪を食として命をたもつ、伯夷は首陽山にすみし蕨ををりて身をたすく、父母にあらざれば誰か問うべき、三宝の御助にあらずんばいかでか一日片時も持つべき、未だ見参にも入らず候人のかやうに度度御をとづれのはんぐるはいかなる事にや、あやしこそ候へ、法華經の第四の巻には釈迦仏・凡夫の身にいりかはらせ給いて法華經の行者をば供養すべきよしを

説かれて候、釈迦仏の御身に入らせ給い候か、又過去の善根のよをしか、童女と申す女人は法華經にて仏に成りて候は末代に此の經を持ちまいらせん、女人をまほらせ給うべきよし誓わせ給いし、其の御ゆかりにて候か、貴し貴し。

弘安二年己卯三月二十六日

日蓮 花押

松野殿後家尼御前御返事

麦一箱いゑのいも一籠つり一籠旁の物六月三日に給候しを今まで御返事申し候はざりし事恐れ入つて候、此の身延の
 沢と申す処は甲斐の国の飯井野御牧波木井の三箇郷の内波木井の郷の戌亥の隅にあたりて候、北には身延の嶽天をいた
 だき南には鷹取が嶽雲につぎ東には天子の嶽日とたけをなじ西には又峨峨として大山

つぎてしらねの嶽にわたれり、のなく音天に響き蟬のさゑづり地にみてり、天竺の靈山此の処に来れり唐土の天台
 山親りここに見る、我が身は釈迦仏にあらず天台大師にてはなけれども、まかるまかる昼夜に法華經をよみ朝暮に
 摩訶止觀を談ずれば靈山淨土にも相似たり天台山にも異ならず。

但有待の依身なれば著されば風身にしみ食されば命持ちがたし、灯に油をつがず火に薪を加ざるが如し命いかでかつ
 ぐべきやらん、命続がたくづべき力絶えては、或は一日乃至五日既に法華經読誦の音も絶えぬべし止觀のまどの前に
 は草しげりなん、かくの如く候にいかにして思い寄らせ給いぬらん、兎は經行の者を供養せしかば天帝哀みをなして月の中
 にをかせ給いぬ今天を仰ぎ見るに月の中に兎あり。

されば女人の御身としてかかる濁世末代に法華經を供養しましませば、梵王も天眼を以て御覽じ帝釈は掌を合わ
 せてをがませ給ひ地神は御足をいただきて喜び釈迦仏は靈山より御手をのべて御頂をなでさせ給うらん、南無妙法蓮華經
 南無妙法蓮華經、恐恐謹言。

弘安二年己卯六月二十日

日蓮 花押

松野殿女房御返事

白米一斗芋一駄、梨子一籠、名荷はじかみ枝大豆、ゑびね、旁の物給ひ候ぬ、濁れる水には月住まず枯たる木には鳥なし、心なき女人の身には仏住み給はず、法華經を持つ女人は澄める水の如し、釈迦仏の月宿らせ給う、譬は女人の懷み始めたるには吾身には覺えねども、月漸く重なり日も屡過ぐれば初にはさかと疑ひ後には一定と思

ふ、心ある女人はをのこをんなをも知るなり法華經の法門も亦かくの如し、南無妙法蓮華經と心に信じぬれば心を宿として釈迦仏懷まれ給う、始はしらねども漸く月重なれば心の仏夢に見え悦ばしき心漸く出来し候べ

し、法門多しといふも止め候、法華經は初は信ずる様なれども後遂る事かたし、譬は水の風につぎ花の色の露に移るが如し、何として今までは持たせ給うぞ是、偏に前生の功力の上、釈迦仏の護り給うか、たのもしたのもしし、委くは甲斐殿申すべし。

九月一日

日蓮 花押

松野殿女房御返事

三二九 松野尼御前御返事

1396 p

日本国の人にはにくまれ候ぬ、みちふみわくる人も候はぬにをもちよらせ給いての御心ざし、石の中の火のごとし火の中の蓮のごとし、ありがたしありがたし、恐恐。

正月二十一日

日蓮在御判%

松の尼御前御返事

三三〇 浄蔵浄眼御消息

1396 p

きごめの儀一、瓜籠一、根芋品品の物給い候畢んぬ、楽徳と名付けける長者に身を入れて我が身も妻も子も夜も昼も責め遣はれける者が、余りに責められ堪えがたさに隠れて他国に行きて其の国の大王に官仕へける程にきりものに成りて関白と成りぬ、後に其の国を力として我が本の主の国を打ち取りぬ、其の時本の主此の関白を見て大に怖れ前に悪く当りぬるを悔ひかへして官仕へ様様の財を引きける、前に負けぬる物の事は思ひもよらず今は只命のいきん事をはげむ、法華経も又斯の如く法華経は東方の薬師・仏の主・南方・西方・北方・上下の一切の仏の主なり、釈迦仏等の仏の法華経の文字を敬ひ給ふことは民の王を恐れ星の月を敬ふが如し、然るに我等衆生は第六天の魔王の相伝の者地獄・餓鬼・畜生等に押し籠められて気もつかず朝夕獄卒を付けて責むる程に、兎角して法華経に懸り付きぬれば釈迦仏等の十方の仏の御子とせさせ給は、梵王・帝釈だにも恐れて寄り付かず何に

況や第六天の魔王をや、魔王は前には主なりしかども今は敬ひ畏れてあしうせば法華經十方の諸仏の御見参にあしうや入らんずらんと恐れ畏て供養をなすなり、何にしても六道の一切衆生をば法華經へつけじとはげむなり、然るに何なる事にや・をはすらん皆人の憎み候日蓮を不便とおぼしてかく遙遙と山中へ種種の物送りたび候事一度二度ならず、ただことにあらず偏へに釈迦仏の入り替らせ給へるか、又をくれさせ給ひける御君達の御仏にならせ給いて父母を導かんために御心に入り替らせ給へるか。

妙莊嚴王と申せし王は悪王なりしかども御太子淨蔵・淨眼の導かせ給いしかば父母二人共に法華經を御信用有りて仏にならせ給いしぞかし、是もさにてや候らんあやしく覚え候、甲斐公が語りしは常の人よりもみめ形も勝れて候し上・心も直くて智慧賢く、何事に付けてもゆゆしかりし人の疾はかなく成りし事の哀れさよと思ひ候

しが、又情思は此の子なき故に母も道心者となり父も後世者に成りて候は只とも覚え候はぬに、又皆人の惡み候法華經に付かせ給へば偏へに是なき人の一人の御身に添うて勧め進らせられ候にやと申せしがさもやと覚え

候、前前は只荒増の事かと思ひて候は是程御志の深く候ひける事は始めて知りて候、又若しやの事候はばくらき闇に月の出づるが如く妙法蓮華經の五字・月と露れさせ給うべし、其の月の中には釈迦仏・十方の諸仏乃至前に立たせ給ひし御子息の露れさせ給ふべしと思し召せ、委くは又又申すべし、恐恐謹言。

七月七日

日蓮 花押

三三二

刑部左衛門尉女房御返事

1397p

今月飛來の雁書に云く此の十月三日母にて候もの十三年に相当れり錢二十貫文等云云、夫外典三千余卷には忠孝の二

字を骨とし内典五千余卷には孝養を眼とせり、不孝の者をば日月も光ををしみ地神も瞋をなすと見て候、或経に云く六道の一切衆生 仏前に参り集りたりしに仏彼れ等が身の上の事を一一に問い給いし中に仏地神に汝大地より重きものありやと問い給いしかば地神敬んで申さく大地より重き物候と申す、仏の曰くいかに地神偏頗をば申すぞ此の三千大千世界の建立は皆大地の上にそなわれり、所謂須弥山の高さは十六万八千由旬横は三百三十六万里なり大海は縦横八万四千由旬なり、其の外は一切衆生 草木等は皆大地の上にそなわれり、此れを持てるが大地より重き物有らんやと問い給いしかば、地神答て云く仏は知食しながら人に知らせんとて問い給うか、我地神となること二十九劫なり其の間 大地を頂戴して候に頸も腰も痛むことなし、虚空を東西南北馳走するにも重きこと候はず、但不孝の者のすみ候所 が身にあまりて重く候なり、頸もいたく腰もおれぬべく膝もたゆく足もひかれず眼もくれ魂もぬげく候、あわれ此の人の住所の大地をばなげすてばやと思つ心たびたび出来し候は不孝の者の住所は常に大地より候なり、されば教主釈尊の御いと提婆達多と申せし人は閻浮提第一の上臈王種姓なり、然れども不孝の人なれば我等彼の下の大地を持つことなくして大地破れて無間地獄に入り給いき、我れ等が力及ばざる故にて候と、かくの如く地神こまごまと仏に申し上げ候しかば仏はげにもげにもと合点せさせ給いき、又仏歎いて云く我が滅後の衆生の不孝ならん事 提婆にも過ぎ瞿伽利にも超えたるべし等云云取意、涅槃經に末代惡世に不孝の者は大地微塵よりも多く孝養の者は爪上の土よりもすくなからんと云云。

今日蓮案じて云く此の經文は殊にさもやとをば候、父母の御恩は今初めて事あらたに申すべきには候はねども母の御恩の事殊に心肝に染みて責くをば候、飛鳥の子をやしなひ地を走る獸の子にせめられ候事 目もあてられず魂もきえぬべくをば候、其につきても母の御恩忘れがたし、胎内に九月の間の苦み腹は鼓をはれるが如く頸は針をさげたるが如し、氣は出づるより外に入る事なく色は枯れたる草の如し、臥ば腹もさけぬべし坐すれ

ば五体やすからず、かくの如くして産も既に近づきて腰はやぶれてきれぬぐ眼はぬけて天に昇るかとをばゆ、かかる敵をつみ落しなば大地にもふみつけ腹をもさきて捨つべきぞかし、さはなくして我が苦を忍びて急ぎいただきあげて血をねぶり不浄をすすぎて胸にかきつけ懷きかかて三箇年が間慇懃に養ふ、母の乳をのむ事・二百

八十斛三升五合なり、此乳のあたひは一合なりとも三千大千世界にかぬべし、されば乳一升のあたひを・今候は米に当れば一万一千八百五十斛五升稻には二万一千七百束に余り布には三千三百七十段なり、何に況や一百八十斛三升五合のあたひをや、他人の物は銭の一文米一合なりとも盗みぬればろうのすもりとなり候ぞか

し、而るを親は十人の子をば養へとも子は一人の母を養ふことなし、あたたかなる夫をば懷きて臥せどもこゝへたる母の足をあたたむる女房はなし、給孤独園の金鳥は子の為に火に入り・戸迦夫人は夫の為に父を殺す、仏

の云く父母は常に子を念へとも子は父母を念はず等云、影現王の云く父は子を念ふといえども子は父を念はず等是れなり、設ひ又今生には父母に孝養をいたす様なれども後生のゆくまで問う人はなし母の生てをせしには心には思はねども一月に一度一年に一度は問いかども死し給いてより後は初七日より二七日乃至 第三年ま

では人目の事なれば形の如く問い訪ひ候へとも、十三年四千余日が間の程はかきたえ問う人はなし、生てをせし時は一日片時のわかれをば千万日とこそ思はれしかども十三年四千余日の程はつやつやをとづれなし如何にきかまほしくましますらん夫外典の孝経には唯今生の孝のみををし今後生のゆくをしらず身の病をいやして心の歎きをやめざるが如し内典五千余卷には人天・二乗の道に入れていまだ仏道引導する事なし。

夫目連尊者の父をば吉占師子母をば青提女と申せしなり、母死して後餓鬼道に堕ちたり、しかれども凡夫の間は知る事なし、証果の二乗となりて天眼を開きて見しかば母餓鬼道に堕ちたりき、あらあさましやといふ計りもなし、餓鬼道に行きて飯をまいらせしかば纔に口に入るかと見えしが飯変じて炎となり口はかなへの如く飯

は炭をおこせるが如し、身は灯炬の如くもえあがりしかば神通を現じて水を出だして消す処に水変じて炎となり、弥火炎のごともゑあがる、目連自力には叶はざる間、仏の御前に走り参り申してありしかば、十方の聖僧を供養し其の生飯を取りて纒に母の餓鬼道の苦をば救い給へ計りなり、釈迦仏は御誕生の後七日と申せしに母の摩耶夫人にをくれまいらせましましき、凡夫にてわたらせ給へば母の生処を知しめすことなし、三十の御年に仏にならせ給いて父浄飯王を現身に教化して証果の羅漢となし給ふ、母の御ためには、利天に昇り給いて摩耶經を説き給いて父母を阿羅漢となしまいらせ給いぬ、此れ等をば爾前の經經の人人は孝養の二乗孝養の仏とこそ思ひ候へども、立ち還つて見候へば不孝の声聞不孝の仏なり、目連尊者程の聖人が母を成仏の道に入れ給はず、釈迦仏程の大聖の父母を二乗の道に入れ奉りて永不成仏の歎きを深くなさせまいらせ給いしをば、孝養とや申す、べき不孝とや云うべき、而るに浄名居士目連を毀て云く六師外道が弟子なり等云云、仏自身を責めて云く我則ち慳貪に墮ちなん此の事は為めて不可なり等云云、然らば目連は知らざれば科浅くもやあるらん、仏は法華經を知ろしめしながら生てをはする父に惜み死してまします母に再び値い奉りて説かせ給はざりしかば大慳貪の人をばこれより外に尋ねべからず。

ついでに事の心を案ずるに仏は二百五十戒をも破り十重禁戒をも犯し給う者なり、仏法華經を説かせ給はずば十方の一切衆生を不孝に墮し給ふ大科まぬかれがたし、故に天台大師此の事を宣べて云く「過則ち仏に属す」云云、有人云く是れ十方三世の御本誓に違背し衆生を欺誑すること有るなり等云云、夫四十余年の大小蹟密の一切經並に真言華嚴三論法相俱舍成実律淨土・禅宗等の仏菩薩・二乗・梵釈日月及び元祖等は法華經に随ふ事なくば何なる孝養をなすとも我則ち墮慳貪の科脱るべからず、故に仏本願に趣いて法華經を説き給いき、而るに法華經の御座には父母ましまさざりしかば親の生れてまします方便土と申す国贈り給て候なり、其の御言

に云く「而かも彼の土に於いて仏の智慧を求めて是の経を聞くことを得ん」等云、此の経文は智者ならん人人は心をとどむべし、教主釈尊の父母の御ために説かせ給いて候経文なり、此の法門は唯天台大師と申せし人計りこそ知りてをはし候ひけれ、其の外の諸宗の人人知らざる事なり、日蓮が心中に第一と思ふ法門なり。

父母に御孝養の意あらん人人は法華経を贈り給へし、教主釈尊の父母の御孝養には法華経を贈り給いて候、日蓮が母存生しておはせしに仰せ候し事をあまりにそむきまいらせて候しかば、今をくれまいらせて候が、あながちにくやしく覚今候は一代聖教を、今母の孝養を仕らんと存じ候間、母の御訪い申させ給う人人をば

我が身の様に思ひまいらせ候は、あまりにつれしく思ひまいらせ候間あらあかきつけて申し候なり、定めて過去聖靈も忽に六道の垢穢を離れて靈山浄土へ御参り候らん、此の法門を知識に値わせ給いて度度きかせ給うべし、日本国に知る人すくなき法門にて候ぞ、くはしくは又又申すべく候、恐恐謹言。

十月二十一日

日蓮 花押

おわりぎよぶさえものしょう によほつて へんじ
尾張刑部左衛門尉殿女房御返事

三三三 春麦御書

1401p

女房御参詣こそゆめとも うつつとも ありがたく候しか、心ざしいちのはせ申す、当時の御いもふゆのたかつなのごとしあになつのゆきにことならむ。春麦一俵 芋一籠・第二丸給い畢んぬ。

五月廿八日

先法華經につけて御不審をたてて其趣を御尋ね候事ありがたき大善根にて候、須弥山を他方の世界へつてになぐる人よりも二千大千世界をまりの如くにけあぐる人よりも無量の余の經典を受け持ちて人に説ききかせ聴聞の道俗に六神通をえせしめんよりも、末法のけふこのごろ法華經の一句一偈のいはれをも尋ね問う人はありが

たし、此の趣を釈し給いて人の御不審をはらすすべき僧もありがたかるべしと、法華經の四の卷宝塔品と申す処に六難九易と申して大事の法門候、今此の御不審は六の難き事の内なり、爰に知んぬ若し御持ちあらば即身成仏の人なるべし、此の法華經には我等が身をば法身如来我等が心をば報身如来我等がふるまひをば応身如来と

説かれて候は、此の經の一句一偈を持ち信ずる人は皆此の功德をそなへ候、南無妙法蓮華經と申すは是れ一句一偈にて候、然れども同じ一句の中にも肝心にて候、南無妙法蓮華經と唱うる計りにて仏になるべしやと、此の御不審所詮に候一部の肝要八軸の骨髓にて候。

人の身の五尺六尺のたましひも一尺の面にあらはれ一尺のかほのたましひも一寸の眼の内におさまり候、又日本と申す二の文字に六十六箇国の人畜・田畠・上下・貴賤・七珍万宝・一もかくる事候はず収めて候、其のごとく南無妙法蓮華經の題目の内には一部八卷二十八品六万九千三百八十四の文字一字もれずがけずおさめて

候、されば經には題目たり仏には眼たりと樂天ものべられて候、記の八に略して經題を挙ぐるに玄に一部を収むと妙樂も釈しおはしまし候、心は略して經の名計りを挙ぐるに一部を収むと申す文なり、一切の事につけて所詮肝要と申す事あり、法華經一部の肝心は南無妙法蓮華經の題目にて候、朝夕御唱え候はば正しく法華經一部を真読

にあそばすにて候、二返唱ふたへうつるは二部ふたへ乃至いた百返は百部、千返は千部、加様に不退ふたへに御唱ごへうえ候はば不退ふたへに法華經ほけきやうを読む人にて候べく候、天台てんだいの六十巻と申す文には此のやうを釈しゃくせられて候、かかる持ちやすく行じやすき法にて候を末代まつだい惡世あくせ一切衆生いっさいしゆじやうのために説ときをかせ給いて候、經文きやうもんに云く「於末法中まつぽうちゆう於後末世おごまつせまつ法欲滅時ほふよくめつじ受持じゆじ讀誦どくじゆ惡世あくせ末法時まつぽうじ能持のうじ是經者ぜきやうしや後五百歲中ごいつせんにちちゆう宣流布せんるふと、此れ等の文の心は當時とうじ末法の代には法華經ほけきやうを持ち信たもずべきよしを説かれて候、かかる明文めいぶんを學がくしあやまりて日本にほん漢土かんど天竺てんじくの謗法ほうぽうの學匠がくしやう達みな皆みな念仏ねんぶつ者しんこん眞言しんこん・禪律ぜんりつの小乘・權教ごんきやうには隨したが行いじて法華經ほけきやうを捨てはて候ぬ、仏法ぶつぽうにまどへるをばしろしめされず、形かたちまことしげなれば云う事も疑うたがひあらじと計はかり御信用ごしんぎやう候間、をもはざるに法華經ほけきやうの敵てき・釈迦しゃか・佛ぶつの怨あだとならせ給いて今生こんじやうには祈しやうる所願しやうがんも虚むなしく命いのちもみじかく後生ごしやうには無間むげん・大城だいじやうをすみかとすべしと正ただしく經文きやうもんに見えて候。

さて此の經の題目だいもくは習ならい読む事なくして大なる善根ぜんこんにて候、惡人あくにんも女人にょにんも畜生ちくじやうも地獄じごくの衆生しゆじやうも十界じゆがいともに即身成仏そくしんじやうぶつと説かれて候は、水の底なる石に火のあるが如く百千万年せんまんくらき所にも燈とうを入れぬればあかくなる、世間せけんのあだなるものすら尚なほ加様かやうに不思議ふしぎあり、何いかに況あや仏法ぶつぽうの妙なる御法の御力おんちからをや、我等衆生われらしゆじやう惡業あくごう・煩惱ぼんのう・生死しやうじ・果縛かばくの身みが、正ただ了り縁えんの三仏性さんぶつじやうの因いんによりて即そく法報ほふほう・心しんの三身さんじんと顯あらわれん事うたがい疑うたがひなかるべし、妙法みようぽう經力きやうりき即身成仏そくしんじやうぶつと・傳教でんきやう大師だいしも釈しゃくせられて候、心しんは法華經ほけきやうの力にてはくちなはの童女じやうにょも即身成仏そくしんじやうぶつしたりと申す事なり、御疑おんぎ候うたがいべからず委くわくは見參みさんに入いり候て申すべく候と申させ給たまへ。

弘安元年こうあんげん戊寅ぼつ七月三日

妙法尼御前御返事

日蓮にっれん 花押かおつ

御消息に云く、めうほつれんくゑきやうをよるひるとなまいらせ、すでにちかくなりて「声かうしやう」となへ乃至いきて候し時よりもなをいろもしろく、がたちもそむせずと云云。

法華經に云く「如是相乃至本末究竟等」云云、大論に云く「臨終の時、色黒き者は地獄に墮つ」等云云、守護經に云く「地獄に墮つるに十五の相、餓鬼に八種の相、畜生に五種の相、同等云云、天台大師の摩訶止觀に云く「身の黒色は地獄の陰に譬う」等云云、夫以みれば日蓮幼少の時より仏法を学び候しが、念願すらく人の寿命は無常なり、出る氣は入る氣を待つ事なし風の前の露尚譬えにあらず、かしこきもはかなきも老いたるも若きも定め無き習いなり、

されば先臨終の事を習つて後に他事を習つべしと思ひて、一代聖教の論師・人師の書釈あらあらかんがあつめて此を明鏡として、一切の諸人の死する時と並に臨終の後に引き向えてみ候はすこしもくもりなし、此の人は地獄に墮ち給う乃至人天とはみ候を、世間の人人或師匠父母等の臨終の相をかくして西方浄土往生と

のみ申し候、悲いかな師匠は惡道に墮ちて多くの苦みじのびがたければ、弟子はとどまりて師の臨終をさんだんし地獄の苦を増長せしむる、譬はづみふかき者を口をふさいできうもんしはれ物の口をあけずしてやまするがごとし。

しかるに今の御消息に云く「いきて候し時よりもなをいろもしろく、がたちもそむせずと云云、天台の云く「白は天に譬ふ、大論に云く「赤白端正なる者は天上を得る」云云、天台大師御臨終の記に云く「色白し、玄奘三藏御臨終を記して云く「色白し、一代聖教を定むる名目に云く「黒業は六道にとどまり白業は四聖となる」此等の文証と現証をもんてか

んが今候に、此の人は天に生ぜるか、はた又法華經の名号を臨終に二反となつと云云、法華經

の第七の巻に云く「我滅度の後に於て心に此の経を受持すべし、是の人、仏道に於て決定して疑有ること無けん」云云、
一代の聖教、いづれもいづれもをろかなる事は候はず、皆我等が親父大聖教主釈尊の金言なり、皆真実なり、
其の中に在いて又小乗・大乘・顕教・密教・權大乘・実大乘あいかれて候、仏説と申すは三天・三仙・
外道・道士の経經にたいし候は此等は妄語、仏説は実語にて候、此の実語の中に妄語あり、実語あり、綺語もあり、惡口もあり、
り、其の中に法華經は実語の中の実語なり、真実の中の真実なり、真言宗と華嚴宗と三論と法相と俱舍・成実と律宗と
念仏宗と禪宗等は実語の中の妄語より立て出だせる宗宗なり、法華宗は此れ等の宗宗にはにるべ
くもなき実語なり、法華經の実語なるのみならず、一代妄語の経經すら法華經の大海に入りぬれば法華經の御力にせめ
られて実語となり候、いわずや法華經の題目をや、白粉の力は漆を變じて雪のごとく白くなす、須弥山に近づく衆色は皆
金色なり、法華經の名号を持つ人は一生乃至過去遠遠劫の黒業の漆變じて白業の大善となる、いわずや無始の善根皆
變じて金色となり候なり。

しかれば故聖靈、最後臨終に南無妙法蓮華經ととなさせ給ひしかば、一生乃至無始の惡業變じて仏の種となり
給う、煩惱即菩提・生死即涅槃、即身成仏と申す法門なり、かかる人のえんの夫婦にならせ給ひ又女人成仏も疑なかる
べし、若し此の事虚事ならば釈迦・多宝・十方分身の諸仏は妄語の人、大妄語の人、惡人なり、一切衆生
をたばらかして地獄におとす人なるべし、提婆達多是寂光淨土の主となり、教主釈尊は阿鼻大城のほのをにむせび給うべ
し、日月は地に落ち大地はくつがへり河は逆に流れ須弥山はくだけをつべし、日蓮が妄語にはあらず、十方三世の諸仏の
妄語なりいかでか其の義候べきとこそをば候へ、委くは見參の時申すべく候。

七月十四日

日蓮花押

妙法尼御前申させ給へ

御文に云くたふかたびら一つあによめて候女房のつたと云云、又おはりの次郎兵衛殿六月二十二日に死なせ給うと云云。

付法藏經と申す經は仏我が滅後に我が法を弘むべきやうを説かせ給いて候、其の中に我が滅後・正法一千年が間次第に使をつかはすべし、第一は迦葉尊者二十年第二は阿難尊者二十年第三は商那和修二十年乃至第二十三は師子尊者なりと云云、其の第三の商那和修と申す人の御事を仏の説かせ給いて候やうは、商那和修と申すは衣

の名なり、此の人生れし時衣をきて生れて候いき不思議なりし事なり、六道の中に地獄道より人道に至るまでは何なる人も始はあかはだかにて候に天道こそ衣をきて生れ候へたとひ何なる賢人・聖人も人に生るるならひは皆あかはだかなり、一生補処の菩薩すら尚はだかにて生れ給へ何かに況や其の外をや、然るに此の人は商那衣と

申すいみじき衣にまとはれて生れさせ給いが、此の衣は血もつかずけがる事もなし、譬えば池に蓮のをひをしの羽の水にぬれざるが如し、此の人次第に生長ありしかば又此の衣次第に広く長くなる、冬はあつく夏はうすく春は青く秋は白くなり候し程に長者にてをせしかば何事もともしからず、後には仏の記しをき給いし事た

がふ事なし、故に阿難尊者の御弟子とならせ給いて御出家ありしかば此の衣変じて五条七条九条等の御袈裟となり候き、かかる不思議の候し故を仏の説かせ給いしやうは乃往過去阿僧祇劫の当初此の人は商人にて有り

しが、五百人の商人と共に大海に船を浮べてあきなひをせし程に海辺に重病の者あり、しかれども辟支仏と申して貴人なり、先業にてや有りけん、病にかかりて身やつれ心をばれ不浄にまとはれてをせしを、此の商人あは

れみ奉りてねんごろに看病して生しまいらせ、不浄をすすぎすてて 布の商那衣をきせまいらせてありしかば、此聖人悦びて願して云く汝我を助けて身の恥を隠せり此の衣を今生後生の衣とせんとてやがて涅槃に入り給いき、此の功德によりて過去・無量劫の間・人中天上に生れ生るる度ごとに、此の衣身に隨いて離る事なし、乃至今生に釈迦如来の滅後第三の付嘱をうけて商那和修と申す聖人となり、摩突羅國の優留茶山と申す山に大伽藍を立てて無量の衆生を教化して仏法を弘通し給いし事二十年なり、所詮商那和修比丘の一切のたのしみ不思議は皆彼の衣より出生せりとこそ説かれて候へ

而るに日蓮は南閻浮提日本國と申す國の者なり、此の國は仏の世に出でさせ給いし國よりは東に當りて二十万余里の外遙なる海中の小島なり、而るに仏御入滅ありては既に二千二百二十七年なり、月氏漢土の人の此の國の人人を見候は此の國の人の伊豆の大島奥州の東のえぞなどを見るやうにこそ候らめ、而るに日蓮は日本國安房の國と申す國に生れて候しが、民の家より出でて頭をそり袈裟をきたり、此の度いかにもして仏種をもつへ

生死を離るる身とならんと申して候し程に、皆人の願わせ給う事なれば阿彌陀仏をたのみ奉り幼少より名号を唱え候し程に、いささかの事ありて、此の事を疑いし故に一の願をおこす、日本國に渡れる處の仏經並に菩薩の論と人師の釈を習い見候はばや、又俱舍宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗・華嚴宗・真言宗・法華天台宗と申す宗ども

もあまた有りとさく上に、禪宗・淨土宗と申す宗も候なり、此等の宗宗枝葉をばこまかに習はずとも所詮肝要を知る身とならばやと思ひし故に、随分にはしりまはり十二十六の年より三十二に至るまで二十余年の間、鎌倉・京・叡山・園城寺・高野・天王寺等の國國寺寺あらあらず習ひ回り候し程に一の不思議あり、我れ等がはかなき

心に推するに仏法は唯一味なるべし、いづれもいづれも心に入れて習ひ願はば生死を離るべしとこそ思ひて候に、仏法の中に入りて悪しく習ひ候ぬれば謗法と申す大なる穴に墮ち入つて、十惡・五逆と申して日日夜夜に

殺生偷盜邪婬妄語等をおかす人よりも五逆罪と申して父母等を殺す悪人よりも、比丘・比丘尼となりて身には二百五十戒をかたく持ち心には八万法蔵をつかへて候やうなる、智者聖人の一生が間に一悪をもつくらず人には仏のやうにをもはれ、我が身も又さながらに悪道にはよも堕ちじと思つ程に、十悪・五逆の罪人よりもよく

地獄に堕ちて阿鼻大城を栖として永く地獄をいでぬ事の候けるぞ、譬えば人ありて世にあらんがために国主につか奉る程に、させるあやまちはなけれども我心のたらぬ上身にあやしきふるまひかさなるを、猶我身にも失あ

りともしらず又傍輩も不思議ともをもはざるに后等の御事によりてあやまつ事はなけれども自然にふるまひあしく王なれどに不思議に見まいらせぬれば、謀反の者よりも其の失重し、此の身とがにかりぬれば父母兄弟・所従なんども又かるからざる失にをこなはるる事あり。

謗法と申す罪をば我れもしらず人も失とも思はず但仏法をならは責しとのみ思いて候程に此の人も又此の人にしたがふ弟子・檀那等も無間地獄に墮つ事あり、所謂勝意比丘・苦岸比丘など申せし僧は二百五十戒をかたく持ち三千の威儀を一もかけずありし人なれども、無間・大城に墮ちて出づる期見ず、又彼の比丘に近づきて弟子となり檀那となる人々存の外に大地微塵の数よりも多く地獄に墮ちて師とともに苦を受けしぞかし、此の人後世のために衆善を修せしより外は又心なかりしかども、かかる不祥にあひて候しぞかし。

かかる事を見候しゆゑにあらあら経論を勸候は、日本国の当世こそ其に似て候へ代末になり候は世間のまつり事のあらきにつけても世の中あやつかるべき上、此の日本国は他国にもにず仏法弘まりて国をさまらるべきかと思いて候は、中仏法弘まりて世もいたく衰へ人も多く悪道に墮つべしと見候、其の故は日本国は

がし 漢土よりも堂塔等の多き中に大体は阿弥陀堂なり、其の上古ことに阿弥陀仏を木像に造り画像に書き人毎に六万八千等の念仏を申す、又他方を抛うちて西方を願う愚者の眼にも貴しと見え候上、一切の智人も皆い

みじき事なりとほめさせ給う。

又人王五十代桓武天皇の御宇に弘法大師と申す聖人、此の国に生れて漢土より真言宗と申すめずらしき法を習い伝ふ。城嵯峨淳和等の王の御師となりて東寺・高野と申す寺を建立し、又慈覚大師・智証大師と申す聖人同じく此宗を習ひ伝えて叡山・園城寺に弘通せしかば日本国の山寺一同に此の法を伝ふ。今に真言を行ひ鈴をふりて公家・武家の御祈をし候、所謂二階堂・大御堂・若宮等の別当等は是なり、是れは古も御たのみある上、当世の国主等家には柱天には日月河には橋海には船の如く御たのみあり。

禅宗と申すは又当世の持斎等を建長寺等にあげさせ給うて父母よりも重んじ神よりも御たのみあり、されば一切の諸人頭をかたづけ手をあさふ、かかる世にいかなればにや候らん、天変と申して彗星長く東西に渡り地天と申して大地をくつがすこと大海の船を大風の時・大波のくつがすに似たり、大風吹いて草木をからし飢饉も年年にゆき疫病月月におこり大旱魃ゆきて河池・田畠、皆かはきぬ、此くの如く三災・七難、数十年起りて民半分は減じ残りは、或は父母、或は兄弟、或は妻子にわかれて歎く声、秋の虫にことならず、家家のちりうつする事冬の草木の雪にせめられたるに似たり、是はいかなる事ぞと経論を引き見候は、仏の言く法華経と申す経を謗し我れを用いざる国あらばかかる事あるべしと、仏の記しをかせ給いて候、御言にすこしもたがひ候はず。

日蓮疑て云く日本には誰か法華経と釈迦仏をば謗すべきと疑ふ、又たまさか謗する者は少少ありとも信ずる者こそ多くあるらめと存じ候、爰に此の日本国に人ごとに阿弥陀堂をつくり念仏を申す、其の根本を尋ねれば道綽・善導和尚・法然上人と申す三人の言より出でて候、是れは浄土宗の根本今の諸人の御師なり、此の三人の念仏を弘めさせ給いし時にたまはく未有一人得者、千中無一、捨開閣・抛等云云、いふころは阿弥陀仏をたのみ奉らん人は一切の経・一切の仏・一切の神をすてて但阿弥陀仏・南無阿弥陀仏と申すべし、其の上ことに法華経と

釈迦仏しやくがぶつを捨てまいらせよとすすめしかばやすきままに案もなくばらばらと付き候ぬ、一人付き始めしかば万人ばんにん皆付き候いぬ、万人ばんにん付きしかば上は国主こくしゆ・中は大いじん・下は万民ばんみん一人も残る事なし、さる程に此の国存の外に釈迦仏しやくがぶつ・法華經ほけきやうの御敵人となりぬ。

其故は「こんしさんがい みなこ今此三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり而も今此処は諸の患難多し唯我れ一人のみ能く救護くこを為す」と説いて、此の日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうのためには釈迦仏しやくがぶつは主なり師なり親なり、天神七代てんじんちだい・地神五代ちじんごだい・人王九十代の神と王とすら猶釈迦仏なおいしやくがぶつの所従なり、何かに況や其の神と王との眷属等をや、今日本国にほんこくの

大地山河大海草木等は皆釈尊みなしやくそんの御財たからぞかし、全く一分も薬師仏やくしあみだぶつ・阿弥陀仏あみだぶつ等の他仏たぶつの物にはあらず、又日本国にほんこくの天神てんじん・地神しよ・九十余代の国主並に万民牛馬ばんみんぎうば・生いきと生しやうある者は皆教主釈尊みなきやうしやくそんの二子なり、又日本国にほんこくの天神てんじん・地神しよ・諸王しよばんみん・万民等ばんみんの天地てんち・水すいか・火ふ・父母ふぼ・主君しゆくん・男女なんよ・妻子さいし・黒白等を弁わえ給たまうは皆教主釈尊みなきやうしやくそん・御教みけうの師なり、全く薬師やくし・阿弥陀あみだ

等の御教にはあらず、されば此の仏は我等がためには大地だいちよりも厚く虚空よりも広く天よりも高き御恩ごおんまします仏ぞかし、かかる仏なれば王臣万民俱に人ごとに父母ふぼよりも重んじ神よりもあがめ奉るべし、かくだにも候はは何なる大科だいか有りとしめこも天も守護してよもすて給はじ地もいかり給たまうべからず。

然るに上しか一人より下万人ばんにんに至るまで阿弥陀堂あみだだうを立て阿弥陀仏あみだぶつを本尊ほんぞんともてなす故に天地てんちの御いかりあるかと見え候、譬たとえば此の国の者が漢土かんど・高麗等の諸国しよこくの王に心よせなりとも、此の国の王に背そむき候なば其の身はたもちがたかるべし、今日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうも是くの如し、西方さいほうの国主阿弥陀仏こくしゆあみだぶつには心よせなれども我国主釈迦仏こくしゆしやくがぶつに背そむき

奉る故に此の国の守護神しゆごしんいかり給たまうかと愚案ぐあんに勘候かんかう、而るを此の国の人人阿弥陀仏ひとひとあみだぶつを或は金ある・或は銀ある・或は銅ある・或は木画もくえ等らに志しを尽つくくし仏事ぶつじをなし、法華經ほけきやうと釈迦仏しやくがぶつをば或は墨画ある・或は木像あるにはくをひかず、或は草堂あるに造りなんとす、例せば他人たにんをば志しを重おもね妻子さいしをばもてなして父母ふぼにおろかなるが如し。

又眞言宗と申す宗は上一人より下万民に至るまで此れを仰ぐ事日月の如し、此れを重んずる事珍宝の如し、此の宗の義に云く大日経には法華経は二重三重の劣なり、釈迦仏は大日如来の眷属なりなどと申す此の事は弘法慈覚智証の仰せられし故に今四百余年に叡山・東寺・園城・日本国の智人・一同の義なり。

又禅宗と申す宗は眞実の正法は教外別伝なり法華経等の経経は教内なり、譬えば月をさす指渡りの後の船彼岸に到りてなにかせん月を見ては指は用事ならず等云云、彼の人人謗法ともをもはず習い伝えたるままに存の外に申すなり、然れども此の言は釈迦仏をあなづり法華経を失ひ奉る因縁となりて此の国の人人皆一同に五逆罪にすぎたる大罪を犯しながら而も罪ともしらず。

此大科次第につもりて人王八十二代隠岐の法皇と申せし王並びに佐渡の院等は我が相伝の家人にも及ばざりし、相州鎌倉の義時と申せし人に代を取られさせ給いしのみならず島島にはなたれて歎かせ給いしが終には彼の島島にして隠れさせ給いぬ神ひは悪霊となりて地獄に墮ち候いぬ、其の召仕はれし大臣已下は或は頭をはねられ、或は水火に入り、其の妻子等は或は思い死に死に、或は民の妻となりて今五十余年、其外の子孫は民のごとし、是れ偏に眞言と念仏等をもてなして法華経・釈迦仏の大怨敵となりし故に天照太神・正八幡等の天神・地祇・十方の三宝にすてられ奉りて、現身には我が所従等にせめられ後生には地獄に墮ち候ぬ。

而るに又代東にうつりて年をふるままに彼の国主を失いし、眞言宗等の人人鎌倉に下り相州の足下にぐくり入りてやうやうにたばかりの故に本は上臆なればとてすかされて鎌倉の諸堂の別当となせり、又念仏者をば善知識とたのみて大仏・長樂寺・極樂寺等とあがめ、禅宗をば寿福寺・建長寺等とあがめをく、隠岐の法皇の果報の尽き

給いし失より百千万億倍すぎたる大科鎌倉に出来せり、かかる大科ある故に天照太神・正八幡等の天神・地祇・釈迦・多宝・十方の諸仏・一同に大にとがめさせ給う故に、隣国に聖人有りて万国の兵のあつめたる大王に仰せ付け

て、日本国の王臣万民を一同に罰せんとたくませ給うを、日蓮かねて経論を以て勘候いし程に、此れを有りのままに申さば国主もいかり、万民も用ひざる上、念仏者・禅宗・律僧・真言師等定めて忿りをなしてあだを存じ王臣等に讒奏して我が身に大難おこりて、弟子乃至檀那までも少しも日蓮に心よせなる人あらば科になし、我が身もあやうく命にも及ばんずらん、いかが案もなく申し出すべきとやすらひし程に、外典の賢人の中にも世の

ほろぶべき事を知りながら申さぬは諛臣とて、つらへる者不知恩の人なり、されば賢なりし竜逢比干なども申せし賢人は、頸をきられ胸をさかれしかども国の大事なる事をばはからず申し候いき、仏法の中には仏いま

しめて云く法華経のかたきを見て世をばかり恐れて申さずば、釈迦仏の御敵いかなる智人善人なりとも必ず無間地獄に墮つべし、譬は父母を人の殺さんとせんを子の身として父母にしらせず、王をあやまち奉らんとする人のあらむを、臣下の身として知りながら代をおそれて申さざらんがごとしなんと禁られて候。

されば仏の御使たりし提婆菩薩は外道に殺され、師子尊者は檀弥羅王に頭をはねられ、竺の道生は蘇山へ流され、法道は面になやきをあてられき、此等は皆仏法を重んじ王法を恐れざりし故ぞかし、されば賢王の時は仏法をつよく立つれば王両方を聞あきらめて勝れ給う智者を師とせしかば国も安穩なり、所謂陳隋の大王・桓武・

嵯峨等は天台智者大師を南北の学者に召し合せ、最澄和尚を南都の十四人に対論せさせて論じかち給いしかば寺をたてて正法を弘通しき、大族王・優陀延王・武宗・欽宗・欽明・用明・或は鬼神・外道を崇重し、或は道士を帰依し、或は神を崇めし故に、釈迦仏の大怨敵となりて身を亡ぼし世も安穩ならず、其の時は聖人たりし僧侶大難にあへり、今、日本国すでに大謗法の国となりて他国にやぶらるべしと見えたり。

此れを知りながら申さずば縦ひ現在に安穩なりとも後生には無間・大城に墮つべし、後生を恐れて申すならば流罪・死罪は一定なりと思ひ定めて去ぬる文心の比故最明寺入道殿に申し上げぬ、されども用い給う事なかりしか

して居たりしかども、人もみず食もあたずして四箇年なり、彼の蘇武が胡国にとめられて十九年が間糞をき雪を食としてありしが如し。

今又此山に五箇年あり、北は身延山と申して天にはしだて南はたかとりと申して鷄足山の如し、西はなないたがれと申して鉄門に似たり、東は天子がたけと申して富士の御山にたいしたり、四の山は屏風の如し、北に大河あり早河と名づく早き事、箭をいるが如し、南に河あり波木井河と名づく大石を木の葉の如く流す、東には富士

河北より南流れたりせんほをつくが如し内に滝あり身延の滝と申す白布を天より引くが如し此の内に狭小の地あり日蓮が庵室なり深山なれば昼も日を見奉らず夜も月を詠むる事なし峯にははかつのかまびすしく谷には波の下る音鼓を打つがごとし地にはしかざれども大石多く山には瓦礫より外には物もなし国主はにくみ給ふ

万民はとぶらはず冬は雪道を塞ぎ夏は草をひしげり鹿の遠音うらめしく蝉の鳴く声かまびすし訪う人なければ命もつぎがたしはだ金をかくす衣も候はざりつるにかかる衣ををくらせ給えるこそいかにも申すばかりなく候へ

見し人聞きし人だにもあはれとも申さず、年比なれし弟子つかへし下人だにも皆にげ失とぶらはざるに聞きもせず見もせぬ人の御志哀なり、偏に是れ別れし我が父母の生れかはらせ給いけるか、十羅刹の人の見に入りかはりて思いよらせ給うか、唐の代宗皇帝の代に蓬子將軍と申せし人の御子李如暉將軍と申せし人勅定を蒙りて

北の胡地を責めし程に、我が勢数十万騎は打ち取られ胡国に生け取られて四十年漸くへし程に、妻をかたらひ子をまつけたり、胡地の習い生取をば皮の衣を服せ毛帯をかけさせて候が、只正月一日計り唐の衣冠をゆるす、一年ごとに漢土を恋いて肝をきり涙をながす、而る程に唐の軍おこりて唐の兵胡地をせめし時ひまをえて胡地の妻子をふりすててにげしかば、唐の兵は胡地のえびすとて捕へ頸をきらんとせし程に、とかうして徳宗皇帝

にまいらせてありしかば、いかに申せども聞も、ほどかせ給はずして南の国・呉越と申す方流されぬ、李如暹歎いて云く進ては涼原の本郷を見ることを得ず退ては胡地の妻子に逢ふことを得ず云云、此の心は胡地の妻子をもすて又唐の古き栖をも見ず、あらぬ国に流されたりと歎くなり、我が身には大忠ありしかども、かかる歎きあり。

日蓮も又此くの如し日本国を助けばやと思つ心に依りて申し出す程に、我が生れし国をもせかれ又流されし国をも離れぬ、すでに此の深山にこもりて候が彼の李如暹に似て候なり、但し本郷にも流されし処にも妻子なけ

れば歎く事はよもあらじ、唯父母のはかとなれし人人のいかなるらんとをばつかなしとも申す計りなし、但うれしき事は武士の習ひ君の御為に宇治勢多を渡し前を、かけなんとしてありし人は、たとひ身は死すれども名を後代に挙げ候ぞかし、日蓮は法華經のゆへに度度所をおはれ戦をし身におひ弟子等を殺され両度まで遠流せられ既に頸に及べり、是れ偏に法華經の御為なり、法華經の中に仏説かせ給はく我が滅度の後、後の五百歳・

二千二百余年すぎて此の経閻浮提に流布せん時、天魔の人の身に入りかはりて此の経を弘めさせじとて、たまたま信ずる者をば、或はのり打ち所をつつし、或はころしなんどすべし、其の時先さきをしてあらん者は三世十方の仏を供養する功德を得べし、我れ又因位の難行、苦行の功德を譲るべしと説かせ給う取意。

されば過去の不輕菩薩は法華經を弘通し給いに、比丘・比丘尼等の智慧かしこく二百五十戒を持てる大僧ども集まりて優婆塞、優婆夷をかたらひて不輕菩薩をのり打ちせしかども、退轉の心なく弘めさせ給いしかば終には仏となり給う、昔の不輕菩薩は今の釈迦仏なり、それをそねみ打ちなんどせし大僧どもは千劫阿鼻地獄に墮ち

ぬ、彼の人人は觀經・阿弥陀經等の数千の經、一切の仏名、阿弥陀念仏を申し法華經を昼夜に読みしかども、実の法華經の行者をあだみしかば法華經・念仏・戒等も助け給はず千劫阿鼻地獄に墮ちぬ、彼の比丘等は始には不輕菩薩をあだみしかども後には心をひるがへして、身を不輕菩薩に仕つる事やつこの主に随うがごとく有りしかども

無間地獄をまぬかれず、今又日蓮にあだをせさせ給う日本国の人人も此くの如し、此は彼には似るべくもなし彼は罵り打ちしかども国主の流罪はなし杖木瓦石はありしかども疵をかほり頸までには及ばず、是は悪口杖木は二十余年が間ひまなし疵をかほり流罪・頸に及ぶ、弟子等は或は所領を召され或はろうつに入れ或は遠流し或は其の内を出だし或は田畠を奪ひなんどする事・夜打・強盗・海賊・山賊・謀叛等の者よりもはげしく行はる、此れ又偏に眞言・念仏者・禅宗等の大僧等の訴なり、されば彼の人人の御失は大地よりも厚ければ此の大地は大風に大海に船を浮べるが如く動転す、天は八万四千の星暉をなし昼夜に天変ひまなし、其の上日月大に變多し仏滅後既に二千二百二十七年になり候に大族王が五天の寺をやき十六の大国の僧の頸を切り武宗皇帝の漢土の寺を失ひ仏像をくだき、日本国の守屋が釈迦仏の金銅の像を炭火を以てやき僧尼を打ちせめては還俗せさせし時も是れ程の彗星大地震はいまだなし、彼には百万倍過ぎて候大惡にてこそ候いぬれ、彼は王一人の惡心大臣以下は心より起る事なし、又権仏と権經との敵なり僧も法華經の行者にはあらず、是は一向に法華經の敵・王一人のみならず一國の智人並びに万民等の心より起れる大惡心なり、譬えば女人物をねためば胸の内に大火もゆる故に、身變じて赤く身の毛さかさまにたち五体ふるひ面に炎あがりかほは朱をさしたるが如し眼まろになりてねこの眼のねづみを見るが如し、手わななきてかしわの葉を風の吹くに似たりかたはらの人は是を見れば大鬼神に異ならず。

日本国の国主諸僧比丘比丘尼等も又是くの如し、たのむところの弥陀念仏をば日蓮が無間地獄の業と云つを聞き眞言は亡国の法と云つを聞き持斎は天魔の所為と云つを聞いて念珠をくりながら齒をくひちが鈴をふるにくびをどりたり戒を持ちながら惡心をいだく極樂寺の生仏の良觀聖人折紙をささげて上・訴・建長寺の道隆聖人は輿に乗りて奉行人にひざまづく諸の五百戒の尼御前等ははくをつかひてでんそつをなす、是れ偏に法華經を讀みてよまず聞いてきかず善導・法然が千中無一と弘法・慈覺達磨等の皆是戲論教外別伝のあまきふる酒にえはせ給い

てさかぐるひにておはするなり、法華第一の經文を見ながら大日經は法華經に勝れたり、禪宗は最上の法なり、律宗こそ貴けれ念仏こそ我等が分にはかなひたれと申すは酒に酔える人にあらずや星を見て月にすぐれたり石を見て金にまされり東を見て西と云い天を地と申す物ぐるひを本として月と金は星と石とには勝れたり東は東天は天なんど有りのままに申す者をばあだませ給はば勢の多きに付くべきか只物ぐるひの多く集まれるなり、されば此等を本とせし云うにかひなき男女の皆地獄に墮ちん事こそあはれに候、涅槃經には仏説き給はく末法に入つて法華經を謗じて地獄に墮つる者は大地微塵よりも多く信じて仏になる者は爪の上の土よりも少しと説かれたり此れを以つて計らせ給うべし日本国の諸人は爪の上の土日蓮一人は十方の微塵にて候べきか、然るに何なる宿習にてをはずれば御衣をば送らせ給うぞ爪の上の土の数に入らんとおぼすか又涅槃經に云く「大地の上に針を立てて大風の吹かん時大梵天より糸を下さんに糸のはしすぐに下りて針の穴に入る事はありとも、末代に法華經の行者にはあひがたし法華經に云く「大海の底に龜あり三千年に一度海上にあがる梅檀の浮木の穴にゆきあひてやすむべし而るに此の龜一目なるが而も僻目にて西の物を東と見東の物を西と見るなり」末代惡世に生れて法華經並びに南無妙法蓮華經の穴に身を入る男女にたと給へ何なる過去の縁にてをはずれば此の人をとふらんと思食す御心はつかせ給いけるやらん、法華經を見まいらせ候は釈迦仏の其の人の御身に入らせ給いてかかる心はつくべしと説かれて候譬はなにとと思はぬ人の酒をのみてえいぬればあらぬ心出来り人に物をとらせばや、なんと思つ心出来る、此れは一生慳貪にして餓鬼に墮つべきを其の人の酒の縁に菩薩の入りかはらせ給うなり、濁水に珠を入れぬれば水すみ月に向いまいらせぬれば人の心あこがる、画にかける鬼には心なければともおそろし、とわりを画にかけば我が夫をばとらねども、そねまし、錦のしとねに蛇をおれるは服せんとも思はず、身のあつきにあたたかなる風いとはし、人の心も此くの如し、法華經の方御心をよせさせ給うは女人の御身なれども竜女

が御身おんみに入らせ給たまうか。

さては又尾張おわりの次郎兵衛尉殿ひょうえのじやうの御事見参おんことに入りて候いし人なり、日蓮にちれんは此こゝの法門ほうもんを申し候もつは他人たにんにはにず多くの人に
見て候もとへともいとをしと申もつす人は千人に一人もありがたし、彼かれの人はよも心よせには思はれたらじなれども、自体人じたいじんがらに
くげなるふりなく、よろづの人になさけあらんと思ひし人なれば、心の中はうけずこそ。

をばしつらめども、見参けんさんの時はいつはりをろかにて有りし人なり、又女房にようぼうの信じたるよしありしかば実とは思ひ候はざりし
かども、又いたう法華經ほけきやうに背く事そむはよもをせじなればたのもしきへんも候、されども法華經ほけきやうを失ふ念仏ねんぶつ並びに念仏者ねんぶつを
信じ我が身も多分たぶんは念仏者ねんぶつにてをせしかば後生ごじやうはいかがとをばつかなし、譬たとえば国主こくしゅは

みやづかへのねんごなるには恩おんのあるもあり又なきもあり、少しもをろかなる事候ことはとがなる事疑うたがひなし、法華經ほけきやうも
又此こゝの如ごとし、いかに信ずるやうなれども法華經ほけきやうの御かたきにも知れ知らざれ、まじはりぬれば無間地獄むげんじごくは疑うたがひなし。

是はさてをき候ぬ、彼の女房にようぼうの御歎なげいかかとをしはかるにあはれなり、たとへばふじのはなのさかんなるが松にかかり
て思ふ事もなきに松のにはかにたふれ、つたのかきにかかれるががきの破やぶれたるが如ごとくにをばすらん、内へ入れば主なし。
やぶれたる家の柱はしらなきが如ごとし、客人来れども外に出いでてあひしらつべき人もなし、夜

のくらきにはねやすさまじくはかをみればしるしはあれども声もきこえず、又思ひやる死出ししゅの山三途さんずの河をば誰とか
越え給たまうらん只独ただひとり歎なげき給たまうらん、とどめをきし御前ごぜんたちいかに我をばひとりやるらん、さはちぎらざりとや歎なげかせ
給たまうらん、かたがた秋の夜のふけゆくままだに冬の嵐あらしのをとづる声につけても弥いよいよ御歎なげき重おもり候らん、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう。
南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう。

弘安元年 戊寅 九月六日

日蓮 花押

明衣ゆかたびら一つ給たまび生なまんぬ、女人にょにんの御身おんみ男おとこにもをくれ親類しんるいをもはなれ二人あるむすめはかばかりたよず便りなき上。
 法門ほうもんの故ゆえに人にもあだまれさせ給たまふ女人にょにん、さながら不輕菩薩ふきやうぼさつの如ごとし、仏の御姨母おば摩訶波闍波提比丘尼まかはやはだいびくは女人にょにんぞかし、
 而しかに阿羅漢あらかんとならせ給たまいて声聞しやうもんの御名みなを得させ給たまひ永不成仏やうふじやうぶつの道に入らせ給たまいしかば、女人にょにんの姿をかへぎさきの位を
 捨てて仏の御すすめを敬うやひ、四十余年よんじゅうふねんが程ほど五百戒ごはくを持ちて昼は道路にたたずみ夜は
 樹下じゆに坐まして後生ごしやうをながひしに、成仏じやうぶつの道を許ゆるされずして永不成仏やうふじやうぶつのつきなを流させ給たまい、くちをしかりし事ぞかし、
 女人にょにんなれば過去遠遠劫かこおんのとくの間有あるに付けても無なきに付けてもあだなを立てし、はづかしく口惜くちあしかりしぞかし、其その身をいと
 ひて形をやつし尼と成りて狭せうはがかるなげきは離れぬとこそ思おもひしに、相違さういして二乗にじやうと
 なり永不成仏やうふじやうぶつと聞ききしはいかばかりあさましくをわせしに、法華經ほけきやうにして三世さんぜの諸仏しよぶつの御勸氣ごかんきを許ゆるされ、一切衆生いっさいしゆじやう
 喜見仏きけんぶつと成らせ給たまいしはいくら程かうれしく悦よろこばしくをはしけん、さるにては法華經ほけきやうの御為もつと申まうすには何なる事有いりと
 も背そむかせ給たまうまじきぞかし、其に仏の言のたまわく大音声おほおんごうを以もつて普あまねく四衆ししゆに告つげたまわく誰たれか能よく此この
 娑婆国土しやばこくどに於おて広く妙法華經みよふほけきやうを説うかん等云とう、我も我もと思おもうに諸仏しよぶつの恩を報あまじげんと思おもはん尼御前女人達あまじげんにょにん、何事なにじをも
 忍しのびて我が滅後めつごに此の娑婆世界しやばせかいにして法華經ほけきやうを弘ひろむべしと三箇度までいさめさせ給たまいしに、御用ごようひなくして他方たほうの国土こくどに
 於おて広く此の經を宣のべんと申まうさせ給たまいしは能よく能よく不得心ふじやうしんの尼ぞかし、幾いくばくか仏悪ぶつあくしとをばしけん、されば仏はそばむき
 て八十万億那由他の諸菩薩しよぼさつをこそつくづくと御覽ごらんせしか。

されば女人は由なき道には名を折り命を捨つれども成仏の道はよはかりけるやとをば候に、今末代悪世の女人と生れさせ給いてかかるものをばえぬ島のえびすにのられ打たれ責られねび法華經を弘めさせ給う彼の比丘尼には雲泥勝れてありと仏は靈山にて御覽あるらん、彼の比丘尼の御名を一切衆生喜見仏と申すは別の事にあ

らず、今の妙法尼御前の名にて候べし、王となる人は過去にても現在にても十善を持つ人の名なり名はかはれども師子の座は一也、此の名もかはるべからず、彼の仏の御言をさがが今尼だにも一切衆生喜見仏となづけらる、是は仏の言をたがす此の娑婆世界まで名を失ひ命をすつる尼なり、彼は養母として捨て給はず是は他人

として捨てさせ給はば偏頗の仏なり、争でかざる事は候べき、況や其中衆生悉是吾子の經文の如くならば今の尼は女子なり彼の尼は養母なり、養母を捨てずして女子を捨つる仏の御意やあるべき、此の道理を深く御存知あるべし、しげければ、とどめ候い畢んぬ。

日蓮花押

妙法尼御前

三二七 内房女房御返事

1420p

内房よりの御消息に云く八月九日父にてさふらひし人の首箇日に相当りてさふらふ、御布施料に十貫まいらせ候乃至あなかしこあなかしこ、御願文の状に云く「読誦し奉る妙法蓮華經一部読誦し奉る方便壽量品三十巻読誦し奉る自我偈三百巻唱え奉る妙法蓮華經の題名五万返云云同状に云く「伏して惟れば先考の幽靈生存の時弟子遙に千里の山河を凌ぎ親子妙法の題名を受け然る後三十日を經ずして永く一生の終りを告ぐ」等云云、

又云く「嗚呼閻浮の露庭に白骨仮りに塵土と成るとも靈山の界上に亡魂定んで覺蕊を開かん」又云く「弘安三年女弟子
大中原氏敬白す」等云云。

夫れ以れば一乗妙法蓮華經は月氏国にては一由旬の城に積み日本国にては唯八卷なり、然るに現世後生を祈る人

は八卷或は一巻或は方便寿量或は自我偈等を誦誦し讚歎して所願を遂げ給ふ先例之多し此は且らく之を置く、唱へ
奉る妙法蓮華經の題名五万返と云云、此の一段を宣べんと思ひて先例を尋ぬるに其の例少なし、或は一返二返唱へ
利生を蒙る人粗これ有るが、いまだ五万返の類を聞かず、但し一切の諸法に亘りて名字あり其の

名字皆其の体徳を顯はせし事なり、例せば石虎將軍と申すは石の虎を射徹したりしかば石虎將軍と申す、的立の大臣と

申すは鉄的を射とをしたりしかば的立の大臣と名く、是皆名に徳を顯はせば今妙法蓮華經と申し候は一部八卷二十八
品の功徳を五字の内に収め候、譬へ如意宝珠の玉に万の宝を収めたるが如し、一塵に三千を尽す法門是なり、南無と

申す字は敬う心なり随う心なり、故に阿難尊者は一切經の如是の二字の上に南無等云云、
南岳大師云く南無妙法蓮華經云云、天台大師云く稽首南無妙法蓮華經云云、阿難尊者は斛飯王の太子・教主釈尊の
御弟子なり、釈尊御入滅の後六十日を過ぎて迦葉等の一千人・文殊等の八万人・大閼講堂にして集会し給ひて仏の別を

悲しみ給ふ上、我等は多年の間、随逐するすら六十日の間の御別を悲しむ、百年千年乃至末法の一切衆生

は何をか仏の御形見とせん、六師外道と申すは八百年以前に二天・三仙等の説き置きたる四韋陀・十八大經を以てこそ
師の名残とは伝へ候へいざさらば我等五十年が間一切の聲聞・大菩薩の聞き持ちたる經經を書き置き

て未来の衆生の眼目とせんと僉議して、阿難尊者を高座に登せて仏を仰ぐ如く、下座にして文殊師利菩薩・南無
妙法蓮華經と唱へたりしかば、阿難尊者此れを承け取りて如是我聞と答ふ、九百九十九人の大阿羅漢等は筆を染めて書

き留め給ひぬ、一部八卷・二十八品の功徳は此の五字に収めて候はこそ文殊師利菩薩かくは唱へさせ給う

らめ、阿難尊者又さぞかしとは答え給つらめ、又万二千の声聞八万の大菩薩二界八番の雜衆も有りし事なれば合点せらるらめ、天台智者大師と申す聖人、妙法蓮華經の五字を玄義十卷・一千丁に書き給いて候、其の心は華嚴經は八十卷・六十卷四十卷、阿含經數百卷・大集方等數十卷・大品般若四十卷・六百卷・涅槃經四十卷・三十六卷、乃至月氏・竜宮・天上・十方世界の大地微塵の一切經は妙法蓮華經の經の一字の所従なり、妙樂大師重ねて十卷造るを釈籤と名けたり、天台以後に渡りたる漢土の一切經新訳の諸經は皆法華經の眷屬なり云云、日本の伝教大師重ねて新訳の經經の中の大日經等の真言の經を皆法華經の眷屬と定められ候い畢んぬ、但し弘法慈覺智証等は此の義に水火なり此の義後に粗書ききたり、譬は五畿・七道・六十六箇国・二つの島、其の中の郡と莊と村と田と畠と人と牛馬と金銀等は皆日本国の三字の内に備りて一つも闕くる事なし、又王と申すは三字の字を横に書いて一の字を豎さまに立てたり、横の三の字は天地人なり、豎の一字は王なり、須弥山と申す山の大地をつきとをして傾かざるが如し、天地人を貫きて少しも傾かざるを王とは名けたり、王に二つあり一には小王なり人王

天王是なり一には大王なり大梵天王是なり、日本国は大王の如し国国の受領等は小王なり、華嚴經・阿含經・方等經・般若經・大日經・涅槃經等の已今当の一切經は小王なり、譬は日本国中の国王受領等の如し、法華經は大王なり天子の如し、然れば華嚴宗・真言宗等の諸宗の人人は国主の内の所従等なり、国国の民の身として天子の徳を奪ひ取るは下剋上背上下破上下乱等これなり、設いかに世間を治めんと思ふ志ありとも国も乱れ人も亡びぬべし、譬は木の根を動さんに枝葉靜なるべからず大海の波あらからんに船おだやかなるべきや、華嚴宗・真言宗・念仏宗律僧・禅僧等我が身持戒正直に智慧いみじく尊しといへども、其の身既に下剋上の家に生れて法華經の大怨敵となりぬ、阿鼻大城を脱るべきや、例せば九十五種の外道の内には正直有智の人多しといへども、一三三仙の邪法を承けしかば終には惡道を脱るる事なし。

然るに今の世の南無阿弥陀仏と申す人人、南無妙法蓮華經と申す人を、或は笑ひ、或はあざむく、此れは世間の譬に
稗の稻をいとひ家主の田苗を憎む是なり、是国将なき時の盗人なり日の出でざる時の
なり、夜打強盜の科めなきが
如く地中の自在なるが如し、南無妙法蓮華經と申す国将と日輪とにあはば大火の水に消へ、猴が犬に値つるべし、当時
南無阿弥陀仏の人人南無妙法蓮華經の御声の聞えぬれば、或は色を失ひ、或は眼を瞶らし、或は魂
を滅し、或は五体をふるふ、伝教大師云く日出れば星隠れ巧を見て拙きを知る、竜樹菩薩云く謬辞失い易く邪義扶け
難し、徳慧菩薩云く面に死喪の色有り言に哀怨の声を含む、法蔵云く昔の義虎今は伏鹿なり等云云、此等の意を以て知
ぬべし、妙法蓮華經の徳あら申し開くべし、毒藥變じて藥となる妙法蓮華經の五字は惡變じて善と
なる、玉泉と申す泉は石を玉となす此の五字は凡夫を仏となす、されば過去の慈父尊靈は存生に南無妙法蓮華經と唱へ
しかば即身成仏の人なり、石變じて玉と成るが如し孝養の至極と申し候なり、故に法華經に云く「此の我が二りの子已に
仏事を作しぬ」又云く「此の二りの子は是我が善知識なり」等云云。

乃往過去の世に一の大王あり名を輪陀と申す、此の王は白馬の鳴くを聞きて色もいくしく力も強く供御を進らせざ
れども食にあき給ふ他国の敵も胄を脱き、掌を合す、又此の白馬鳴く事は白鳥を見て鳴きけり、然るに大王の政や
悪しかりけん又過去の惡業や感じけん、白鳥皆失せて一羽もなかりしかば白馬鳴く事なし、白馬鳴か
ざりければ大王の色も變じ力も衰、身もかじけ謀も薄くなりし故に国既に乱れぬ、他国よりも兵者せめ来らんに何とか
せんに歎きし程に、大王の勅宣に云く国には外道多し皆我が歸依し奉る仏法も亦かくの如し、然るに外道と仏法と中惡
し何にしても白馬を鳴かせん方を信じて一方を我が国に失ふべしと云云、爾の時に一切の外道集りて
白鳥を現じて白馬を鳴かせんとせしかども白鳥現ずる事なし、昔は雲を出だし霧をふらし風を吹かせ波をたて身の上に火
を出だし水を現じ人を馬となし馬を人となし一切自在なりしかども、如何がしけん白鳥を現ずる事なし

かりき、爾の時に馬鳴菩薩と申す仏子あり十方の諸仏に祈願せしかば白鳥則出て来りて白馬則鳴けり、大王此を聞食し色も少し出で来り力も付きはだもあざやかなり、又白鳥又白鳥と千の白鳥出現して千の白馬一時に鵝の時をつくる様に鳴きしかば、大王此の声を聞食し色は日輪の如し膚は月の如し力は那羅延の如し謀は梵王の如し、爾の時に綸言汗の如く出でて返らざれば一切の外道等其の寺を仏寺となしぬ。

今日日本国亦かくの如し、此の国は始めは神代なり漸く代の末になる程に人の意曲り貪瞋癡・強盛なれば神の智浅く威も力も少し、氏子共をも守護しがたかりしかば漸く仏法と申す大法を取り渡して人の意も直に神も威勢強かりし程に、仏法に付き謬り多く出来せし故に国あやうかりしかば、伝教大師漢土に渡りて日本と漢土と月氏

との聖教を勸合せて、おろかなるをば捨て賢きをば取り偏頗もなく勸給いて、法華經の三部を鎮護國家の三部と定め置き候しを、弘法大師慈覺大師智証大師と申せし聖人等、或は漢土に事を寄せ或は月氏に事を寄せて法華經を或は第三第二・或は戲論・或は無明の辺域等と押し下し給いて、法華經を真言の三部と成さしめて候

いし程に、代漸く下剋上し此の邪義既に一國に弘まる、人多く惡道に落ちて神の威も漸く滅し氏子をも守護しがたき故に八十一乃至八十五の五主は、或は西海に沈み或は四海に捨てられ今生には大鬼となり後生は無間地獄に落ち給いぬ、然りといたへども此の事知れる人なければ改る事なし、今日蓮此の事をあらあら知る故に國の恩を報ぜんとするに日蓮を怨み給ふ。

此等はさて置きぬ氏女の慈父は輪陀王の如し氏女は馬鳴菩薩の如し、白鳥は法華經の如し白馬は日蓮が如し・南無妙法蓮華經は白馬の鳴くが如し、大王の聞食して色も盛んに力も強きは、過去の慈父が氏女の南無妙法蓮華經の御音を聞食して仏に成せ給ふが如し。

弘安三年八月十四日

日蓮花押

白米一斗・荷の子はじかみ一つと送り給ひ候い畢んぬ。

仏には春の花秋の紅葉、夏の清水、冬の雪を進らせて候人人皆仏に成らせ給ふ、況や上一人は寿命を持たせ給ひ下万民は珠よりも重くし候稲米を法華經にまいらせ給う人争か仏に成らざるべき、其の上世間に人の大事とする事は主君と父母との仰せなり、父母の仰せを背けば不孝の罪に墮ちて天に捨てられ、国主の仰せを用いざれば違勅の者と成りて命をめさる、されば我等は過去遠遠劫より菩提をねがひしに、或は国をすて或は妻子をすて或は

身をすてなんどして、後生菩提をねがひし程にすでに仏になり近づきし時は、一乗妙法蓮華經と申す御經に値いまいらせ候いし時は、第六天の魔王と申す三界の主をはします、すでに此のもの仏にならんとするに二の矢あり、一には此のもの三界を出ずるならば我が所従の義をはなれなん、二には此のもの仏になるならば此のもの

が父母兄弟等も又娑婆世界を引き越しなん、いかげんとて身を種種に分けて或は父母につき或は国主につき、或は貴き僧となり、或は悪を勧め或はおどし或はすかし、或は高僧或は大僧或は智者或は持斎等に成りて或は華嚴或は阿含或は念仏或は真言等を以て法華經にすすめかて仏になさじとたばかり候なり、法華經第五

の巻には末法に入りては大鬼神第一には国王大臣万民の身に入りて法華經の行者を或は罵り或は打ち切りてそれに叶はずんば無量無辺の僧と現じて一切経を引いてすかすべし、それに叶はずんば二百五十戒三千の威儀を備へたる大僧と成りて国主をすかし国母をたばらかして、或はながし或はころしなんどすべしと説かれて候。

又七の卷の不軽品、又四の卷の法師品、或は又二の卷の譬喻品、或は涅槃經四十卷、或は守護經等に委細に見て候が、
とうじ せけん
当時の世間に少しもたがひ候はぬ上、駿河の国賀島の莊は殊に目の前に身にあたらせ給いて覺させ給ひ候らん、他事には
似候はず、父母国主等の法華經を御制止候を用い候はねば還つて父母の孝養となり国主の祈りとなり候ぞ、其の上、
にほんこく
日本国はいみじき国にて候神を敬ひ仏を崇むる国なり、而れども日蓮が法華經を弘通

し候を上一人より下万民に至るまで御あだみ候故に、一切の神を敬ひ一切の仏を御供養候へとも其の功德還つて大惡とな
り、やいとこの還つて惡瘡となるが如く藥の還つて毒となるが如し、一切の仏神等に祈り給ふ御祈りは還つて科と成りて此の
国既に他国の財と成り候、又大なる人人皆平家の亡びしが様に百千万億すぎて御歎きたるべきよし、兼てより人人に申し
聞せ候畢んぬ、又法華經をあだむ人の科にあたる分齊をもつて還つて功德となる

分齊をも知らせ給うべし、例せば父母を殺す人は何なる大善根をなせども天是を受け給う事なし、又法華經のかたきと
なる人をば父母なれども殺しぬれば大罪還つて大善根となり候、設い十方三世の諸仏の怨敵なれども法華經の一句を信
じぬれば諸仏捨て給う事なし、是を以て推せさせ給へ御使いそぎ候は委しくは申さず候、又又申すべく候、恐恐謹言。

八月二十二日

日蓮 花押

こめ 牙一俵やいこめうりなすび等 仏前にささげ申し上候畢んぬ。

孟蘭盆と申し候事は仏の御弟子の中に目連尊者と申して、舍利弗にならびて智慧第一・神通第一と申して須弥山に
 にちがつ 日月のならび大王に左右の臣のごとくにをせし人なり、此の人の父をば吉懺師子と申し母をば青提女と申す、其の母の
 けんどん とが 慳貪の科によつて餓鬼道に墮ちて候しを目連尊者のすくい給うより事をこりて候、其の因縁は母は餓鬼道に墮ちてなげき
 候けれども目連は凡夫なれば知ることなし、幼少にして外道の家に入り四念陀・十八大經
 と申す外道の一切経をならつくせども、いまだ其の母の生所をしらず、其の後十三のとし舍利弗とともに釈迦仏にまいり
 て御弟子となり、見惑をだんじて初果の聖人となり修惑を断じて阿羅漢となりて三明をそなへ六通を給へ、天眼をひ
 らいて三千大千世界を明鏡のかげのごとく御らむありしかば、大地をみとおし三惡道を見る
 事 氷の下に候魚を朝日にむかいて我等がとをしみるがごとし、其の中に餓鬼道と申すところに我が母あり、のむ事なし
 食うことなし、皮はきんてうをむしれるがごとく骨はまるき石をならべたるがごとし、頭はまりのごとく頸はいどのごとし
 腹は大海のごとし、口をはり手を合せて物をこる形はうへたるひるの人のかをかげるが
 ごとし、先生の子をみて、なかとするすがたうへたるかたちたとをとりて及ばず、いかながかなしかりけん。
 法勝寺の修行舜觀がいわうの嶋にながされてはだかにてかみくびつきにつちをいやせをとろへて海へんにやすらいてもく
 づをとりにてこにまき魚を・一みつけて右の手にとり口にかみける時、本つかいしわらわの

たづねゆきて見し時と、目連尊者もくれんそんじやが母を見しといつれかをろかなるべきかはいますこしかなしさわまさりけん。

目連尊者もくれんそんじやはあまりのかなしさに大神通じんつうをげんじ給ひはんをまいらせたりしかば、母よろこびて右の手にははんをにぎり左の手にてははんをかくして口くちにをし入れ給たまいしかば、いかながしたりけんはん變じて火となり・

やがてもあがり、とうしびをあつめて火をつけたるがごとくばともあがり、母の身のごことやけ候しを目連見給もくれんたまいてあまりあわてさわぎ大神通じんつうを現げんじて大なる水をかけ候しかば、其その水たきぎとなりていよいよ母の身のやけ候し事こそあれには候しが、其そのの時目連みずからの神通じんつうかなわざりしかばはしりかへり須臾しゅゆに仏

にまいりてなげき申せしやうは、我が身は外道げどうの家に生れて候しが仏の御弟子おんでしになりて阿羅漢あらかんの身を今、三界さんがいの生をはなれ三明六通さんみむつうの羅漢らかんとはなりて候へども、乳母の大苦をすくはんとし候にかへりて大苦にあわせて候は、心うしとなげき候しかば、仏いけ説いいて云く汝が母はつみふかし汝一人なんじが力及ぶべからず、又何いずれの人なりと

も天神てんじん地神邪魔外道道士四天王げどうとうししてんのう帝釈梵王たいしゃくぼんのうの力も及ぶべからず、七月十五日に十方じゅうつぱうの聖僧せいそうをあつめて百味をんじきをとのの母のくをはすくうべしと云云、目連もくれん仏の仰おほせのごとく行いしかば其その母は餓鬼道がきどう一劫いつくわうの苦を脱だれ給たまいきと、孟蘭盆經もうらんぼんきやうと申す經にとかれて候、其によつて滅後末代めつごまつだいの人人ひとびとは七月十五日に此の法を行ゆひ候なり、此は常のごとし。

目蓮案にちれんじて云く目連尊者もくれんそんじやと申せし人は十界じゅうがいの中に声聞道しょうもんどうの人二百五十戒をかたく持つ事石のごとし、三千さんぜんの威儀いぎを備えてかけざる事は十五夜の月のごとし、智慧ちえは日ににたり神通じんつうは須弥山しゅみせんを十四さうまき大山をうごかせし人ぞかし、かかる聖人せいじんだにも重報の乳母の恩ほつじがたし、あまさへはつぜんとせしかば大苦をまし給たまい

き、いまの僧等の二百五十戒は名計なけいりにて事をかいによせて人をたばらかし一分いちぶんの神通じんつうもなし、大石の天にのぼらんとせんがごとし、智慧ちえは牛にるいし羊にとならず、設たい千万人ばんにんをあつめたりとも父母ふぼの一苦すくうべし

や、せんするところは目連尊者が乳母の苦をすくわざりし事は、小乗の法を信じて二百五十戒と申す持齋にてありしゆへぞかし、されば浄名経と申す経には浄名居士と申す男目連房をせめて云く汝を供養する者は三悪道に墮つ云云、文の心は二百五十戒のたうとき目連尊者をくやうせん人は三悪道に墮つべしと云云、此又ただ目連一人がきくみみにはあらず、一切の声聞乃至末代の持齋等がきくみみなり、此の浄名経と申すは法華経の御ためには数十番の末の郎従にて候、詮するところは目連尊者が自身のいまだ仏にならざるゆゑぞかし、自身仏にならずしては父母をだにもすくいがたしいわつや他人をや。

しかるに目連尊者と申す人は法華経と申す経にて正直捨方便とて、小乗の二百五十戒立ちどころになげすてて南無妙法蓮華経と申せしかば、やがて仏になりて名号をば多摩羅跋耆檀香仏と申す、此の時こそ父母も仏になり給へ故に法華経に云く我が願既に満ち衆の望も亦足る云云、目連が色身は父母の遺体なり目連が色身仏になりしかば父母の身も又仏になりぬ。

例せば日本国八十一代の安徳天皇と申せし王の御宇に平氏の大將安芸の守清盛と申せし人をはしき、度度の合戦に国敵をほろぼして上太政大臣まで官位をきわめ当今はまことなり、一門は雲客月卿につらなり、日本六十六国島二を掌の内にかいにぎりて候いしが、人を順うこと大風の草木をなびかしたるやうにて候しほどに、心を

こり身あがり結句は神仏をあなづりて神人と諸僧を手ににぎらむとせしほどに、山僧と七寺との諸僧のかたきとなりて結句は去る治承四年十二月二十二日に七寺の内の東大寺・興福寺の両寺を焼きはらいてありしかば其の大重罪・入道の身にかかりてがるとし養和元年潤二月四日身はすみのごとく面は火のごとくすみのをこれる

がやうにて結句は災身より出でてあつじに死ににき、其の大重罪をば二男宗盛にゆづりしかば西海に沈むとみへしかども東天に浮び出でて、右大將頼朝の御前に縄をつけてひきす今候き、三男知盛は海に入りて魚の

糞となりぬ、四男重衡は其の身に縄をつけて京かまくらを引かれて結句なら七犬寺にわたされて、十万人の大衆等我が
仏のかたきなりとて一刀づつぎざみぬ、悪の中の大悪は我が身に其の苦をつくるのみならず子と孫と末七代までもかか
り候けるなり、善の中の大善も又かくのごとし、目蓮尊者が法華經を信じまいらせし大善
は我が身仏になるのみならず父母仏になり給う、上七代下七代上無量生下無量生の父母等存外に仏となり給う、乃至
子息・夫妻・所従・檀那・無量の衆生・三惡道をはなるのみならず皆初住・妙覺の仏となりぬ、故に法華經の第三に云く
「願くは此の功徳を以て普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」云云。

されば此等をもつて思うに貴女は治部殿と申す孫を僧にてもち給へり、此僧は無戒なり無智なり二百五十戒一戒も持
つことなし三千の威義一も持たず、智慧は牛馬にるいし威儀は猿猴に候へども、あをぐところは釈迦仏信ずる法は
法華經なり、例せば珠をにぎり竜の舍利を戴くがごとし、藤は松にかかりて千尋をよぢ鶴は

羽を恃みて万里をかける此は自身の力にはあらず、治部房も又かくのごとし、我が身は藤のごとくなれども法華經の松に
かかりて妙覺の山にものぼりなん、一乗の羽をたのみて寂光の空にもかけりぬべし、此の羽をもつて

父母・祖父・祖母乃至七代の末までもとぶらうべき僧なり、あわれいみじき御たからはもたせ給いてをはします女人か
な、彼の竜女は珠をささげて仏となり給ふ、此女人は孫を法華經の行者となしてみちびかれさせ給うべし、事事そうそ
うにて候はくはしくは申さず、又又申すべく候、恐恐。

七月十三日 日蓮花押

治部殿うばいせん御返事

細美帷かたひら 一つ送り給ひ候い畢おわんぬ、善導ぜんどう和尚わじょうと申もつす人は漢土かんどに臨りんしと申もつす国の人なり、幼少ようしょうの時、密州みつしゅうと申もつす国の
 明勝めいしょうと申もつす人を師とせしが、彼の僧ほけきは法華經ほけきょうと 浄名經じやうみぎやうきやうを尊重そんじゆうして我も読誦どくじゆし人をもすすめしかば善導ぜんどうに此これを教
 ゆ、善導ぜんどう此これを習ならいて師しの如ごとく行いぜし程ほどに過去かこの宿習しゆくしゆにや有りけん、案あじて云いく仏法ぶつぽうには無量むりやうの行ぎあり機きに随したがいて皆
 利益りやくあり教なりいみじといへども機きにあたらざれば虚はきがごとし、されば我われ法華經ほけきょうを行なずるは我が機き
 に叶あはずはいかんが有あるべかるらん、教きには依よるべからずと思おもいて一切經藏しつせうざうに入り両眼りやうがんを閉ふぢて經きやうをとる觀無量壽經くわんむりやうしゆきやうを得
 たり、披見ひけんすれば此この經きやうに云いく「未來世みらいせの煩惱ぼんのうの賊ぞくに害がいせらるる者の為ため清淨しやうじやうの業ぎやうを説とく」等云とく、華嚴經けこんきやうは二乘にじやうのため
 法華經ほけきやう 涅槃經ねはんきやう等は五乘ごじやうにわたれども、だいしは聖人しやうじんのためなり、末法まっぽうの我等われらが為ためなる經きやうは
 唯觀經ただかんきやうにかぎれり、釈尊しやくそん最後の遺言ゆいごんには涅槃經ねはんきやうにはすぐべからず、彼の經きやうには七種しちしゆの衆生しゆじやうを列れねたり、第一だいいちは入水則没にすいすく
 一闍提人いつせんだいなり生死しじふじの水みづに入りしより已このかた来きたいまに出いでず譬たとへば大石たいしかいを大海たいかいに投入たいにたるがごとし、身重しんじやうくして浮うぶことを習しは
 ず常に海底こに有あり此これを常没じやうぼつと名なく、第二だいにをば出已復没しゅつじふぼつと申もつす譬たとへば身みに力ちから有ありとも浮うぶこ
 とをならはざれば出いで已おわつて復入またりぬ此これは第一だいいちの一闍提人いつせんだいには有あらねども一闍提人いつせんだいのごとし又常没じやうぼつと名なく、第三だいには
 出已不没しゅつじふぼつと申もつす生死しじふじの河がを出いでてよりこのかた没ぼつすることなし、此これは舍利弗等しやうりふとうの聲聞しやうもんなり、第四だいには出已即住しゅつじきじゆ第五ごに
 觀方第六くわんぽうだいには浅処ひがん 第七しちには到彼岸等たうはんとうなり、第四よに 第五ごに 第六だいに 第七しちには緣覺えんかく 菩薩ぼさつなり、釈迦しやくかに如来世にょらいに出いでさ
 せ給たまいて一代五時いちだいごじの經きやうを説たまひ給たまいて第三だいに 已上ひといへの人人ひとひとを救たい給たまい畢おわんぬ、第一だいには捨すてさせ給たまいぬ、法蔵ほつぞう比丘びく
 阿彌陀仏あみだぶつ 此これをつけとつて四十八願しじふはちがんを發おこして迎むかえとらせ給たまつ、十方三世じふぱうさんぜの仏ぶつと釈迦しやくかに仏ぶつとは第三だいに已上ひといへの一切衆生いっさいしゆじやう

を救い給う、あみだ仏は第一第二を迎えとらせ給う、而るに今末代の凡夫は第一第二に相当れり、而るを淨影大師・
天台大師等の他宗の人師は此の事を弁えずして九品の淨土に聖人も生ると思へり、
りが中のりなり、一向末代の凡夫の中に上三品は遇大始めて大乘に値える凡夫、中の三品は遇小始めて小乗に値る凡夫、下の三品は遇惡一生造惡無間
非法の荒凡夫、臨終の時始めて上の七種の衆生を弁えたる智人に行きあひて岸の上の經經を
うちすてて水に溺るるの機を救はせ給う、觀經の下品下生の大惡業に南無阿彌陀仏を授けたり、されば我れ一切經を見
るに法華經等は末代の機には千中無一なり、第一第二の我等衆生は第三已上の機の爲に説かれて候、法華經等を末代に
修行すれば身は苦しんで益なしと申して善導和尚は立所に法華經を抛げすてて觀經を行ぜしかば三昧発得して
阿彌陀仏に見參して重ねて此の法門を渡し給う四帖の疏是なり、導の云く然るに諸仏の大悲は
苦なる者に於て心偏に常没の衆生を愍念す是を以て勧めて淨土に歸せしむ亦水に溺るる人の如く急に須く偏に救うべし
岸上の者何ぞ用いて濟うことを為さんと云云、又云く「深心と言へるは即ち是れ深信の心なり、亦二種有り、一には決定
して自身は現に是れ罪惡生死の凡夫なり曠劫より已來常に没し常に流轉して出離の縁有ること
無しと深信す」と又云く「二には決定して彼の阿彌陀仏の四十八願は衆生を摂受したもつこと疑無く慮り無く彼の願力
に乗ずれば定めて往生を得ると深信す」と云云、此の釈の心は上にかき顯して候・淨土宗の肝心と申すは此れなり、我等
末代の凡夫は涅槃經の第一第二なり、さる時に釈迦仏の教には出離の縁有ること無し、法蔵比丘の本願にては「定得
往生と知るを三心中の深心とは申すなり」と等云云、此又善導和尚の私儀には非ず、綽禪師と
申せし人の涅槃經を二十四反かつぜしが曇鸞法師の碑の文を見て立所に涅槃經を捨てて觀經に遷りて後此の法門を導に
は教えて候なり、鸞法師と申せし人は齊の代の人なり漢土にては時に独歩の人なり、初には四論と涅槃經とをかうぜしが
菩提流支と申す三蔵に値いて四論と涅槃經を捨てて觀經に遷りて往生をとげし人なり、三代が間

伝え候法門なり、漢土・日本には八宗を習う智人も正法すでに過ぎて像法に入りしかばがしき人人は皆自宗を捨てて浄土の念仏に遷りし事此なり、日本国のいろはは天台山の慧心の往生要集此なり、三論の永観が十因・往生講の式、此等は皆此の法門をうかがい得たる人人なり、法然上人も亦爾なり云云。

日蓮云く此の義を存ずる人人等も但恒河の第一第二は一向浄土の機と云云、此れ此の法門の肝要か、日蓮・涅槃經の三十二と三十六を開き見るに第一は誹謗正法の一闡提常没の大魚と名けたり、第二は又常没其の第二の人を出ださばだいばだつた瞿伽梨・善星等なり、此れは誹謗五逆の人人なり、詮する所第一第二は謗法と五逆なり、法蔵比丘の設い我仏を得んに十方衆生至心に信樂して我が国に生れんと欲し乃至十念して若し生ぜずんば正覺

を取らじ唯五逆と誹謗正法とを除く云云、此の願の如きんば法蔵比丘は恒河の第一第二を捨ててこそ候いぬれ、導和尚の如くならば末代の凡夫阿弥陀仏の本願には千中無一なり、法華經の結經たる普賢經には五逆と誹謗正法は一乗の機と定め給いたり、されば末代の凡夫の爲には法華經は十即十生・百即百生なり、善導和尚が

義に付いて申す詮は私案にはあらず阿弥陀仏は無上念王たりし時娑婆世界は已にすて給いぬ、釈迦如来は宝海梵志として此の忍土を取り給い畢んぬ、十方の浄土には誹謗正法と五逆と一闡提とをば迎うべからずと阿弥陀仏・十方の仏誓い給いき、宝海梵志の願に云く「即ち十方浄土の擯出の衆生を集めて我当に之を度すべし」云云、法華經に云く「唯我一人のみ能く救護を為す」等云云。

唯我一人の經文は堅きやうに候へども釈迦如来の自義にはあらず、阿弥陀仏等の諸仏我と娑婆世界を捨てしかば教主釈尊唯我一人と誓つてすでに娑婆世界に出で給いぬる上はなにをか疑い候べき鸞・緯・導・心・觀・然等の六人の人人は智者なり日蓮は愚者なり非学生なり、但し上の六人は何れの国の人ぞ三界の外の人か六道の外の人か、阿弥陀仏に値い奉りて出家受戒して沙門となりたる僧か、今の人人は將門・純友・清盛・義朝等には種性

も及ばず威徳も足らず、心のがつさは申すばかりなけれども朝敵となりぬれば其の人ならざる人人も將門か純友かと舌にうちからみて申せども彼の子孫等もとがめず、義朝など申すは故右大將家の慈父なり、子を敬いまいらせば父をこそ敬いまいらせ候べきにいかなる人人も義朝為朝など申すぞ、此れ則王法の重く逆臣の罪のむくみなり、上の六人も又かくのごとし、釈迦如来世に出でさせ給いて一代の聖教を説きをかせ給つ、五十年の説法を我と集めて浅深勝劣虚妄眞實を定めて四十余年は未だ眞實を顕さず已今当第一等と説かせ給いしかば多宝・十方の仏眞實なりと加判せさせ給いて定めをかれて候を彼の六人は未顕眞實の觀經に依りて皆是れ眞實の法華經を第一第二の悪人の為にはあらずと申さば今の人人は彼にすかされて数年を経たるゆへに將門・純友等が所従等彼を用いざりし百姓等を或は切り或は打ちなどせしがごとし、彼をおそれて従いし男女は官軍にせめられて彼の人人と一時に水火のせめに値いしなり。

今日本国の一切の諸仏菩薩・一切の經を信するやうなれども心は彼の六人の心なり身は又彼の六人の家人なり、彼の將門等は官軍の向はざりし時は大將の所従知行の地且らく安穩なりしやうなりしかども違勅の責め近づきしかば、所は修羅道となり男子は厨者の魚をほふるがごとし、炎に入り水に入りしなり、今日本国も又かく

のごとし、彼の六人が僻見に依つて今生には守護の善神に放されて三災・七難の国となり後生には一業所感の衆生なれば阿鼻大城の炎に入るべし、法華經の第五の卷に末代の法華經の強敵を仏記し置き給えるは如六通羅漢と云ふ、上の六人は尊貴なること六通を現ずる羅漢の如し。

然るに淨蓮上人の親父は彼等の人人の御檀那なり、仏教実ならば無間・大城疑いなし、又君の心を演ぶるは臣・親の苦をやすむるは子なり、目尊者は悲母の餓鬼の苦を救い淨藏・淨眼は慈父の邪見を翻し給いき、父母の遺体は子の色心なり、淨蓮上人の法華經を持ち給う御功德は慈父の御力なり、提婆達多是阿鼻地獄に墮ちしかども

天王如来の記を送り給ひき彼は仏と提婆と同性一家なる故なり、此れは又慈父なり子息なり、淨蓮上人の所持の法華經いかでか彼の故聖靈の功德とならざるべき、事多しと申せども止め畢んぬ三反人によませてきこしめせ、恐恐謹言。

六月二十七日

日蓮 花押

返す返すするがの人人みな同じ御心と申させ給ひ候へ

三三三 新池殿御消息

弘安二年五月

五十八歳御作

1435p

八木三石送り給ひ候、今一乗妙法蓮華經の御宝前に備牽りて南無妙法蓮華經と只一遍唱えまいらせ候い畢んぬいとをしみの御子を靈山淨土決定無有疑と送りまいらせんがためなり。

抑因果のことはりは華と果との如し、千里の野の枯れたる草に螢火の如くなる火を一つ付けぬれば須臾に一草二草・

十百千万草につきわたりてもゆれば十町二十町の草木一時にやけつきぬ、竜は一の水を手に入れて天に昇りぬれ

ば三千世界に雨をふらし候、小善なれども法華經に供養しまいらせ給ひぬれば功德此くの如し、

仏滅後・一百年と申せしに月氏国に阿育大王と申せし王ましましき・閻浮提・八万四千の国を四分が一御知行ありき、

竜王をしたがへ鬼神を召し仕はせ給う、六万の羅漢を師として八万四千の石塔を立て十萬億の金を仏に供養し奉らんと

誓はせ給ひき、かかる大王にてをせし其の因位の功德をたづねればただ土の餅一・釈迦仏に供養

し奉りし故ぞかし、釈迦仏の伯父に斛飯王と申す王をはします、彼の王に太子あり阿那律となづく此の太子生れ給ひしに

御器一つ持ち出でたり、彼の御器に飯あり食すれば又出でき又出でき終に飯つくる事なし、故にかの

太子たいしのをさな名をば如意にょいとなづけたり、法華經ほけきょうにて仏に成り給ふ普明如来ふみょうにょらい是なり、此の太子たいしの因位いんいを尋ねばうへたる世にひえの飯を辟支仏ひやくしぶつと申す僧に供養せし故ぞかし、辟支仏ひやくしぶつを供養する功德くどくすら此くの如し、況や法華經ほけきょうの行者ぎょうじやを供養せん功德くどくは無量無辺の仏を供養し進まいらする功德くどくにも勝れて候なり。

抑日蓮にほんにんは日本国の者なり、此の国は南閻浮提えんぶだい七千由旬ゆじゆんの内に八万四千の国あり、十六の大国、五百の中国、十千の小国、無量の粟散国あり、其の中に月氏国がつしと申す国は大国なり、彼の国に五天竺てんじくあり、其れより東海の中に小島あり日本国是なり、中天竺てんじくよりは十万余里の東なり、仏教は仏滅度後正法一千年が間は天竺にとどまりて余国にわたらず、正法一千年の末像法に入つて一十五年と申せしに漢土かんどへ渡る、漢土に三百年すぎて百済国に渡る、百済国に

一百年已上一千四百十五年と申せしに、人王三十代、欽明天皇の御代に日本国に始めて釈迦仏の金銅の像と一切経は渡りて候いき、今七百余年に及び候、其の間一切経は五千余卷、或は七千余卷なり、宗は八宗、九宗、十宗なり、

国は六十六箇国、二つの島、神は三千余社、仏は一万余寺なり、男女なんによよりも僧尼そうには半分に及び、仏法の繁昌はんじやうは漢土にも勝れ天竺にもまされり。

但し仏法に入つて諍論あり、浄土宗の人人は阿弥陀仏を本尊とし、真言の人人は大日如来を本尊とす、禅宗の人人は経と仏とをば闇さしあいて達磨を本尊とす、余宗の人人は念仏者、真言等に随したがへられ何れともなければども、つよきに随ひ多分に押されて阿弥陀仏を本尊とせり、現在の主師親しゅししんたる釈迦仏を闇あきて他人たる阿弥陀仏の十万億の他

国へにげ行くべきよしをねがはせ給たまひ候、阿弥陀仏は親ならず主ならず師ならず、されば一經の内、虚言そごの四十八願を立て給たまひたりしを愚なる人人実まことと思ひて物狂はしく金拍子かねばうしをたたきおどりはねて念仏を申し親の国をば

いとひ出いでぬ、来迎らいじうせんと約束やくそくせし阿弥陀仏の約束の人は来らず中有ちゆうゆうのたびの空に迷まよひて謗法の業にひかれて三惡道と申す獄屋ごくやおもむけば、獄卒ごくそく阿防羅刹あぼうらさつ悦よろこびをなしとら分くらめてさひなむ事限りなし、これをあらあ

ら経文に任せてかたり申せば日本国の男女四十九億九万四千八百二十八人ましますが某一人を不思議なる者に思い
て余の四十九億九万四千八百二十七人は皆敵と成りて、主師親の釈尊をもちひぬだに不思議なるに、かへて或はのり
或はつち或は処を追ひ或は讒言して流罪し死罪に行はるれば、貧なる者は富めるをうらひ賤き者は貴きを仰ぎ無勢
は多勢にしたがう事なれば、適法華經を信ずる様なる人人も世間をはばかり人を恐れて多分
は地獄墮つる事不便なり、但し日蓮が愚眼にてやあるらん又宿習にてや候らん法華經最第一已今当說難信難解
ただわれひとりうつくし
唯我一人能為救護と説かれて候文は如来の金言なり敢て私の言にはあらず、当世の人は人師の言を如来の金言と打ち思
ひ或法華經に肩を並べて齊しと思ひ或は勝れたり或は劣るなれども機にかなへりと思へり、し
かるに如来の聖教に随他意随意と申す事あり、譬えば子の心に親の随うをば随他意と申す親の心に子の随うをば
随自意と申す、諸経は随他意なり仏一切衆生の心に随ひ給ふ故に、法華經は随自意なり一切衆生を仏の心に随たり、
諸経は仏説なれども是を信ずれば衆生の心にて永く仏にならず、法華經は仏説なり仏智なり一字一点
も是を深く信ずれば我が身即仏となる、譬えば白紙を墨に染むれば黒くなり黒漆に白き物を入れるれば白くなるが如し
毒藥變じて藥となり衆生變じて仏となる故に妙法と申す、然るに今の人人は高きも賤きも現在の父たる釈迦仏をばかろ
しめて他人の縁なき阿弥陀・大日等を重んじ奉るは是れ不孝の失にあらずや是れ謗法の人にあらざ
や、と申せば日本国の人一同に怨ませ給うなり、其れもことわりなりまがれる木はすなをなる繩をにくみいつはれる者は
ただしき政りごとをば心にあはず思ふなり。

我が朝人王九十一代の間に謀叛の人人は二十六人なり、所謂大山の王子・大石の小丸乃至将門すみとも悪左府等な
り、此等の人人は吉野とつ河の山林にこもり筑紫・鎮西の海中に隠るれば、島島のえびす浦浦のものぶどもつたとす、
然れどもそれは貴き聖人・山山・寺寺・社社の法師・尼女人はいいたう敵と思ふ事なし、日蓮をば

上下の男女尼法師貴き聖人なんと伝はるる人人は殊に敵となり候、其の故はいつれも後生をば願ふも男女よりは僧尼こそ願ふ由はみえ候へ彼等は往生はさてをきぬ今生の世をわたるなかだちとなる故なり、智者聖人又我好我勝たりと申し本師の跡と申し所領と申し名聞利養を重くしてまめやかに道心は輕し、仏法はひがさまに心得て愚癡の人なり、謗法の人なりと言をも惜まず人をも憚らず、当知是人、仏法中怨の金言を恐れて我是世尊使処衆無所畏と云う文に任せていたくせむる間未得謂為得我慢心充滿の人人争かにくみ嫉まざらんや。

されば日蓮程天神七代地神五代・人王九十余代にいまだ此れ程法華經の故に三類の敵人にあだまれたる者なきなり、かかる上下万人一同のにくまれ者にて候に此れまで御渡り候いし事おぼるげの縁にはあらず宿世の父母か昔の兄弟にておはしける故に思い付かせ給うか、又過去に法華經の縁深くして今度仏にならせ給うべきたねの熟せるかの故に在俗の身として世間ひまなき人の公事のひまに思い出ださせ給いけるやらん。

其の上遠江の国より甲州波木井の郷身延山へは道三百余里に及べり、宿宿のいふせさ嶺に昇れば日月をいただき谷今れば穴へ入るかと覺ゆ、河の水は矢を射るが如く早し大石ながれて人馬むかひ難し、船あやうくして紙を水にひたせるが如し、男は山かつ女は山母の如し、道は縄の如くほそく木は草の如くしげし、かかる所へ

尋ね入らせ給いて候事何なる宿習なるらん、釈迦仏は御手を引き帝釈は馬となり梵王は身に随ひ日月は眼となりかはらせ給いて入らせ給いけるにや、ありがたしありがたし、事多しと申せども此の程風おこりて身苦しく候間留め候い畢んぬ。

弘安二年己卯五月二日

日蓮花押

新池殿御返事

うれしきかな末法流布に生れある我等かなしきかな今度此の経を信ぜざる人人、抑人界に生を受くるもの誰か無常を免れん、さあらんに取つては何ぞ後世のつとめをいたさざらんや、倩世間の体を観ずれば人皆口には此の経を信じ手には経巻をにぎるといへども経の心にそむく間惡道を免れ難し、譬えば人に皆五臟あり一臟も損ずれば其の臟より病出て来て余の臟を破り終に命を失うが如し、爰を以て伝教大師は「法華経を讀すと雖も還つて法華の心を死す」等云、文の心は法華経を持ち読み奉り讃むれども法華の心に背きぬれば還つて釈尊・十方の諸仏を殺すに成りぬと申す意なり、終に世間の惡業衆罪は須弥の如くなれども此の経にあひ奉りぬれば諸罪は霜露の如くに法華経の日輪に値い奉りて消ゆべし、然れども此の経の十四謗法の中に一も二もをかしめれば其の罪消えがたし、所以は何ん一大三千界のあらゆる有情を殺したりとも争か一仏を殺す罪に及ばんや、法華の心に背きぬれば十方の仏の命を失ふ罪なり、此のをきてに背くを謗法の者とは申すなり、地獄おそるべし炎を以て家とす、餓鬼悲むべし飢渴にうへ子を食ふ、修羅は鬪諍なり畜生は殘害とて互に殺しあふ、紅蓮地獄と申すはくれなるのはちすとよむ、其の故は余りに寒につめられてごも問せなかわれて肉の出でたるが紅の蓮に似たるなり、況や大紅蓮をや、かかる惡所にゆけば王位將軍も物ならず獄卒の呵責にあへる姿は猿をまはすに異ならず、此の時は争かみ聞名利、我慢偏執有るべきや。

思食すべし法華経をしる僧を不思議の志にて一度も供養しなば惡道に行くべからず、何に況や十度・二十度乃至五年・十年・一期生の間供養せる功德をば仏の智慧にても知りがたし、此の経の行者を一度供養する功德は釈迦仏を直ち

に八十億劫が間無量の宝を尽して供養せる功德に百千万億勝れたりと仏は説かせ給いて候、此の経にあひ奉りぬれば悦び身に余り左右の眼に淚浮びて釈尊の御恩報じ尽しがたし、かやうに此の山まで度度の御供養は法華経並に釈迦尊の御恩を報じ給うに成るべく候、弥はげませ給うべし懈ることなかれ、皆人の此の経を信じ始むる時は信心有る様に見え候が中程は信心もよはく僧をも恭敬せず供養をもなさず自慢して悪見をな

す、これ恐るべし恐るべし、始より終りまで弥信心をいたすべしさなくして後悔やあらんずらん、譬えば鎌倉より京は十二日の道なり、それを十一日余り歩をはこびて今日に成りて歩をさしをきては何として都の月をば詠め候べき、何としても此の経の心をしれる僧に近づき弥法の道理を聴聞して信心の歩を運ぶべし。

噫過ぎし方の程なきを以て知んぬ我等が命今幾程もなき事を春の朝に花をながめし時ともなひ遊びし人は花と共に無常の嵐に散りはてて名のみ残りて其の人はなし花は散りぬといへとも又こん春も発くべしされども消えにし人は亦いかならん世にか来るべき秋の暮に月を詠めし時戯れむつびし人も月と共に有為の雲に入りて後面影ばかり身にそひて物いふことなし月は西山に入るといへとも亦こん秋も詠むべし然れどもかくれし人は今いつくに

か住みぬらんおぼつかなし無常の虎のなく音は耳にちかづくといへとも聞いて驚くことなし屠所の羊の今幾日か無常の道を歩まん雪山の寒苦鳥は寒苦にせめられて夜明なば栖つくらんと鳴くといへとも日出でぬれば朝日のあたたかなるに眠り忘れて又栖をつくらずして一生虚く鳴くことをう一切衆生も亦復是くの如し地獄に堕ちて炎に

むせぶ時は願くは今度人間に生れて諸事を闇ひて三宝を供養し後世菩提をたすからんと願へともたまたま人間に来る時は名聞名利の風はげしく仏道修行の灯は消えやすし、無益の事には財宝をつくすにおしからず、仏法僧にすこしの供養をなすには是をもものつく思ふ事これたゞことにあらず、地獄の使のきをふものなり寸善尺魔と申すは是なり、其の上此の国は謗法の土なれば守護の善神は法味につて社をすて天に上り給は社には悪鬼入り

かはりて多くの人を導く、仏陀化をやめて寂光土歸り給は堂塔寺社は徒に魔縁の栖と成りぬ、国の費民の歎きにいら
かを並べたる計りなり、是れ私の言にあらざる経文にこれあり習ふべし。

諸仏も諸神も謗法の供養をば全く請け取り給はず況や人間としてこれをつくぐきや、春日大明神の御託宣に云く飯に
銅の炭をば食すとも心穢れたる人の物をつけじ、座に銅の焰には坐すとも心汚れたる人の家にはいたらじ、草の廊萱の軒
にはいたるべしと云へり、縦令千日のしめを引くとも不信の所には至らじ、重服深厚の家なりとも有信の所には至るべし云
云、是くの如く善神は此の謗法の国をばなげきて天に上らせ給いて候、心けがれたると申すは法華經を持たざる人の事な
り、此の經の五の巻に見えたり、謗法の供養をば銅焰とこそおほせられたれ、神だにも是くの如し況や我等凡夫としてほ
むらをば食すべしや、人の子として我が親を殺したらんもの我に物をえさせんには是を取るべきや、いかなる智者聖人も
無間地獄を遁るべからず、又それにも近づくべからず
与同罪恐るべし恐るべし。

釈尊は一切の諸仏・一切の諸神人天大会一切衆生の父なり主なり師なり、此の釈尊を殺したらんに争か諸天善神等
うれしく思食すべき、今此の国の一切の諸人は皆釈尊の御敵なり、在家の俗男俗女等よりも邪智心の法師ばらは殊の
外の御敵なり、智慧に於ても正智あり邪智あり智慧ありとも其の邪義には随ふべからず、貴僧・高僧
には依るべからず、賤き者なりとも此の經の謂れを知りたらんものをば生身の如来のごとくに禮拜供養すべし是れ經文な
り、されば伝教大師は無智破戒の男女等も此の經を信ぜん者は小乗二百五十戒の僧の上に座席に居よ末座すべからず
況や大乘此の經の僧をやとあそばされたり、今生身の如来の如くにみえたる極樂寺の良觀房より

も此の經を信じたる男女は座席を高く居ることこそ候へ彼の二百五十戒の良觀房も日蓮に会いぬれば腹をたて眼をい
らす是ただごとにはあらず、智者の身に魔の入りかはればなり、譬えば本性よき人なれども酒に酔い

ぬればあしき心出来し人の為にあしきが如し、仏は法華以前の迦葉・舍利弗・目連等をば是を供養せん者は三惡道に墮つべし、彼が心は大野干の心には劣れりと説き給いて候なり、彼の四大声聞等は二百五十戒を持つことは金剛の如し、三千の威儀具足する事は十五夜の月の如くなりしかども、法華經を持たざる時は是くの如く仰せられたり、何に況やそれに劣れる今時の者共をや。

建長寺・円覺寺の僧共の作法戒文を破る事は大山の頽れたるが如く、威儀の放埒なることは猿に似たり、是を供養して後世を助からんと思ふははかなし、はかなし、守護の善神此の国を捨つ事疑あることなし、昔・釈尊の御前にして諸天善神・菩薩・声聞、異口同音に誓をたてさせ給いて若し法華經の御敵の国あらば、或は六月に霜霰と成りて国を飢饉させせんと申し、或は小虫と成りて五穀をはみ失はんと申し、或は旱魃をなさん、或は大水と成りて田園をながさんと申し、或は大風と成りて人民を吹き殺さんと申し、或は惡鬼と成りてなやまさんと面面に申させ給ふ、今の八幡大菩薩も其の座におはせしなり、争か靈山の起請の破るをおそれ給はざらん、起請を破らせ給はば無間地獄は疑なき者なり、恐れ給うべし、恐れ給うべし、今までは正く仏の御使出世して此の經を弘めず、国主もあながちに御敵にはならせ給はず、但いづれも賣しとのみ思ふ計りなり。

今、某仏の御使として此の經を弘むるに依りて上一人より下万民に至るまで、皆謗法と成り畢んぬ、今までは此の国の者ども法華經の御敵にはなさじと一子のあひにくの如く捨てかねて、おはせども、靈山の起請のおそろしさに社を焼き払いて天に上らせ給いぬ、さはあれども、身命をおしまぬ法華經の行者あれば、其の頭には住むべし、天照太神・八幡大菩薩・天に上らせ給はば、其の余の諸神争か社に留るべき、縦ひ捨てじと思食すとも、靈山のやくそ

くのままだに、某呵責し奉らば一日もやはかおはすべき、譬えば、盗人の候に知れぬ時は、かしこやここに住み候へども能く案内知りたる者の、是こそ盗人と、のしりどめけば、おもはぬ外に、栖を去るが如く、某にささへられて社を

ば捨て給ふ、然るに此の国思いの外に悪鬼神の住家となれり哀なり哀なり。

又一代聖教を弘むる人多くおはせども是れ程の大事の法門をば伝教天台もいまだ仰せられず、其も道理なり末法の始の五百年に上行菩薩の出世あつて弘め給ふべき法門なるが故なり、相構へいかにしても此の度此の経を能く信じて命終の時千仏の迎いに預り靈山浄土に走りまいり自受法樂すべし、信心弱くして成仏ののびん時・

某をうらみさせ給ふな、譬えば病者に良薬を与ふるに毒を好んでくひぬれば其の病愈えがたき時我がとがとは思はず還つて医師を恨むるが如くなるべし、此の経の信心と申すは少しも私なく経文の如くに人の言を用ひず法華一部に背くことな

事無ければ仏に成り候ぞ、仏に成り候事は別の様は候はず、南無妙法蓮華経と他事なく唱へ申して候へば天然と三十二相八十種好を備うるなり、如我等無異と申して釈尊程の仏にやすやすと成り候なり、譬えば鳥の卵は始は水なり其の水の中より誰かなすともなければも鶯よ目よと敵り出来て虚空にかけるが如し、我

等も無明の卵にしてあさましき身なれども南無妙法蓮華経の唱へる母にあたためられまいらせて三十二相の鶯出でて八十種好の鎧毛生そろひて実相真如の虚空にかけるべし、爰を以て経に云く「一切衆生は無明の卵に処して智慧の口ばしなり、仏母の鳥は分段同居の古栖に返りて無明の卵をたたき破りて一切衆生の鳥をすだてて法性真如の大虚にとばしむ」と説けり取意。

有解無信とて法門をば解りて信心なき者は更に成仏すべからず、有信無解とて解はなくとも信心あるものは成仏すべし、皆此の経の意なり私の言にはあらずされば二の巻には「信を以て入ることを得己が智分に非ず」とて智慧第一の舍利弗も但此の経を受け持ち信心強盛にして仏になれり己が智慧にて仏にならずと説き給へり、舍利弗だにも智慧にては仏にならず、況や我等衆生少分の法門を心得たりとも信心なくば仏にならんことおぼつかなし、末代の衆生は法門を少分こころえ僧をあなづり法をいのかせにして惡道におつべしと説き給へり、法を

こころえたるしるしには僧を敬ひ法をあがめ仏を供養すべし、今は仏ましまさず解悟の智識を仏と敬ふべし争か徳分なからんや、後世を願はん者は名利名聞を捨てて何に賤しき者なりとも法華経を説かん僧を生身の如來の如くに敬ふべし、是れ正しく經文なり。

今時の禪宗は大段仁義礼智信の五常に背けり、有智の高徳をおそれ老いたるを敬ひ幼きを愛するは内外典の法なり、然るを彼の僧家の者を見れば昨日・今日まで田夫野人にして黒白を知らざる者も・かちんの直綴をだにも著つればうち慢じて天台・真言の有智高德の人をあなづり礼をもせず其の上に居らんとするなり、是れ傍若無人にして畜生に劣れり、爰を以て伝教大師の御釈に云く川獺祭魚のころろざし・林鳥父祖の食を通ず鳩・鵲・三枝の礼あり行雁連を乱らず・羔羊踞りて乳を飲む・賤き畜生すら礼を知ること・是くの如し、何ぞ人倫に於て其の礼なからんやとあそばされたり取意、彼等が法に迷ふ事道理なり、人倫にしてだにも知らず是れ天魔破句のふるまひにあらずや。

是等の法門を能く能く明らめて二部八卷・廿八品を頭にいただき懈らず行ひ給へ又某を恋しくおはせん時は日日に日を拝ませ給へ・某は日に一度・天の日に影をうつす者にて候、此の僧によませまひらせて聴聞あるべし、此の僧を解悟の智識と憑み給いてつねに法門御たづね候べし、聞かずんば争か迷闇の雲を払はん足なくして争か千里の道を行かんや、返す返す此の書をつねによませて御聴聞あるべし、事事面の次を期し候間・委細には申し述べ候、穴賢・穴賢、

弘安三年二月 日

日蓮 御判

新池殿

わざと使を以てちまきさけほしひさんせうかみしなじな給侯い畢んぬ、又つかひ申され侯は御かくさせ給へと申し上げ
侯へと日蓮心得申べく候、日蓮去る五月十二日流罪の時その津につきて供しに、いまだ名をもききをよびまいらせず侯とこ
ろに船よりあがりくるしみ侯いきところにねんころにあたらせ給い侯し事はいかなる宿習なるらん、過去に法華經の
行者にてわたらせ給へるが今末法にふなもりの弥三郎と生れかわりて日蓮をあ
われみ給うか、たとひ男はさもあるべきに女房の身として食をあた洗足てつづ其の外さも事ねんころなる事、日蓮はし
らず不思議とも申すばかりなし、ことに三十日あまりありて内心に法華經を信じ日蓮を供養し給う事いかなる事のよし
なるや、かかる地頭・万民・日蓮をにくみねだむ事鎌倉よりもすぎたり、みるものは目をひき・

きく人はあだむ、ことに五月のころなれば米もとばしかるらん、日蓮を内内にてはぐくみ給いしことは日蓮が父母の伊豆
の伊東かわなと云うところに生れかわり給うか、法華經第四に云く「及清信士女供養於法師」と云云、法華經を行ぜん者
をば諸天善神等、或はをとことなり、或は女となり形をかきまざまに供養してたすくべしと云う經文なり、弥三郎殿夫
婦の士女と生れて日蓮法師を供養する事疑なし。

さきにまいらせし文につぶさにかきて供し間、今はくはしからず、ことに当地頭の病悩について祈せい申すべきよし仰せ
供し間、案にあつかひて候、然れども一分信仰の心を日蓮に出し給は法華經をせうとこそをもひ候へ
此の時は十羅刹女もいかで力をあわせ給はざるべきと思ひ侯いて法華經・釈迦・多宝・十方の諸仏、並に天照・八幡・
大小の神紙等に申して候、定めて評議ありてぞ・しるしをばあらはし給はん、よも日蓮をば捨てさせ給は

じ、いたきとかゆきとの如くあてがわせ給はんとをもひ候いしに病悩なをり・海中いろくづの中より出現の仏体を
日蓮にたまわる事此れ病悩のゆなり、さだめて十羅刹女のせめなり、此の功德も夫婦二人の功德となるべし、我等衆生
無始よりこのかた生死海の中にありしが法華經の行者となりて無始色心本是理性・

妙窮妙智金剛不滅の仏身とならん事あにかの仏にかわるべきや、過去久遠五百塵点のそのかみ唯我一人の教主釈尊とは
我等衆生の事なり、法華經の一念三千の法門・常住此說法のふるまいなり、かかるたうとき法華經と釈尊にてをせど
も凡夫はしる事なし。

寿命品に云く顛倒の衆生をして近しと雖も和も見えざらしむとはこれなり、迷悟の不同は沙羅の四見の如し、
一念三千の仏と申すは法界の成仏と云う事にて候ぞ。

雪山童子のまにきたりし鬼神は帝釈の變作なり、戸毘王の所へ入りし鳩は毘首羯摩天ぞかし、班足王城へ入りし
普明王は教主釈尊にてまします、肉眼はしらず仏眼は此れをみる、虚空と大海とには魚鳥の飛行するあとあり此等は
經文にみえたり、木像即金色なり金色即木像なり、あめるだが金はつさぎとなり死人となる、釈摩男がたなごころにはい
さごも金となる、此等は思議すべからず、凡夫即仏なり仏即凡夫なり・一念三千我実成仏これなり。

しからば夫婦二人は教主大覺世尊の生れかわり給いて日蓮をたすけ給うか、伊東とかわなのみちのほどはちかく候へど
も心はとをし後のためにふみをまいらせ候ぞ、人にかたらずして心付させ給へずこしも人しるならば御ためあしかりぬべ
し、むねのうちにきてかたり給う事なれあなかしこあなかしこ南無妙法蓮華經。

弘長元年六月二十七日

日蓮花押

船守弥三郎殿許今を遣わす

夫れ味に六種あり・一には淡・二には鹹・三には辛・四には酸・五には甘・六には苦なり、百味の飴膳を調ふといども一の鹹の味なければ大王の膳とならず、山海の珍物も鹹なければ氣味なし、大海に八の不思議あり、一には漸漸に転深し・二には深くして底を得難し・三には同じ一鹹の味なり・四には湖限りを過ぎず・五には種種の宝蔵有り・六には大身の衆生中に在つて居住す・七には死屍を宿めず・八には万流大雨之を収めて不増不減なり、漸漸に転探しとは法華経は凡夫無解より聖人有解に至るまで皆仏道を成ずるに譬するなり、深くして底を得難しとは法華経は唯仏与仏の境界にして等覺已下は極むることなきが故なり、同じ一鹹の味なりとは諸河に鹹なきは諸教に得道なきに譬ふ、諸河の水・大海に入つて鹹となるは諸教の機類・法華経に入つて仏道を成ずるに譬ふ、潮限りを過ぎずとは妙法を持つ入牢る身命を和するとも不退転を得るに譬ふ、種種の宝蔵有りとは諸仏菩薩の万行方善・諸波羅蜜の功德・妙法に納まるに譬ふ、大身の衆生所居の住处とは仏菩薩・大智慧あるが故に大身衆生と名く大身・大心・大莊嚴・大調伏・大説法・大勢・大神通・大慈・大悲・おのづから法華経より生ずるが故なり、死屍を宿めずとは永く謗法一闡提を離るるが故なり、不増不減とは法華の意は一切衆生の仏性同一性なるが故なり、蔓草漬たる桶の中の鹹は大海の鹹に随つて満干ぬ、禁獄を被る法華の持者は桶びよつの中の鹹の如く火宅を出で給へる釈迦如来は大海の鹹の如し、法華の持者を禁むるは釈迦如来を禁むるなり、梵釈・四天も如何頂き給わざらん、十羅刹女の頭破七分の誓ひ此の時に非ずんば何の時か果し給ふべき、頻婆娑羅王を禁獄せし阿・世早く鋭身に大患瘡を感得しき、法華の持者を禁獄する人・何ぞ現身に患瘡を感ぜざらんや。

日蓮花押

せんじつあんものがたり

先日御物語の事について彼の人の方相尋ね候いし処仰せ候いしが如く少しもちがはず候いき、これにつけてもいよいよ

はげまして法華經の功德を得給うべし、師曠が耳離婁が眼のやうに聞見させ給へ、末法には法華經の行者必ず出来すべ

し、但し大難来りなば強盛の信心弥悦びをなすべし、火に薪をくわへんにさかなる事なかるべしや、大海衆流入る、

されども大海は河の水を返す事ありや、法華大海の行者に諸河の水は大難の

如く入れどもが今事とがむる事なし、諸河の水入る事なくば大海あるべからず、大難なくば法華經の行者にはあらじ、

天台の云く衆流海に入り薪火を熾んにすこと云云、法華經の法門を一文一句なりとも人にがたらん

は過去の宿縁ふかしとおぼしめすべし、經に云く亦不開正法如是人難度と云云、此の文の意は正法とは法華經なり、

此の經をきかざる人は度しがたしと云う文なり、法師品には若是善男子善女人乃至則如来使と説かせ給いて僧も俗

も尼も女も一句をも人にがたらん人は如来の使と見えたり、貴迎すでに俗なり善男子の人なるべし、

此の經を一文一句なりとも聴聞して神にそめん人は生死の大海を渡るべき船なるべし、妙樂大師云く「一句も神に染ぬれ

ば成く彼岸を資く、思惟・修習永く舟航に用たり」と云云、生死の大海を渡らんことは妙法蓮華經の船にあらずんばが

なふべからず。

そぞもほけきょう

抑法華經の如渡得船の船と申す事は教主大覺世尊・巧智無辺の番匠として四味八教の材木を取り集め・正直捨權

とけづりなして邪正一如ときり合せ醍醐一実のくぎを丁とうつて生死の大海へをしつかべ・中道一実のほばしらに界如

三千の帆をあげて・諸法実相のおひでをえて以信得入の一切衆生を取りのせて釈迦如来はかちを

取り多宝如来はつなでを取り給へ・上行等の四菩薩は函蓋相応してきりきりと二ぎ給う所の船を如渡得船の船とは
申すなり、是にのるべき者は日蓮が弟子檀那等なり、能く能く信じさせ給へ四条金吾殿に見参候はば能く能く語り給い
候へ委くは又又申すべく候、恐恐謹言。

四月二十八日

日蓮花押

椎地四郎殿え

三三六 弥三郎殿御返事 建治三年 五十六歳御作 1449p

は無智の俗にて候へとも承わり候いしに責く思ひ進らせ候いしは法華の第二の巻に今此三界とかや申す文にて候な
り、此の文の意は今此の日本国は釈迦仏の御領なり、天照太神・八幡大菩薩・神武天皇等の一切の神・国主並に万民まで
も釈迦仏の御所領の内なる上此の仏は我等衆生に三の故御坐す大恩の仏なり、一には国主なり二には師匠なり三には
親父なり、此の三徳を備へ給う事は十方の仏の中に唯釈迦仏計りなり、されば今の日本
国の一切衆生は設い釈迦仏にねんごろに仕ふる事当時の阿弥陀仏の如くすとも又他仏を並べて同じ様にもてなし進らせ
ば大なる失なり、譬えば我が主の而も智者にて御坐さんを他国の王に思ひ替えて日本国にすみながら漢土高麗の王を重
んじて日本国の王におろそかならんをば此の国の大王いみじと申す者ならんや、況や日本国
の諸僧は一人もなく釈迦如来の御弟子として頭をそり衣を著たり、阿弥陀仏の弟子にはあらぬぞかし、然るに釈迦堂
法華堂画像・木像法華経一部も持ち候はぬ僧共が三徳全く備はり給へる釈迦仏をば闇きて一徳もなき阿弥陀仏を国こ
ぞりて郷村・家ごとに人の数よりも多く立てなら阿弥陀仏の名号を一向に申して一日に六万・

八万なんどす、打ち見て候所はあら貴や貴やと見候へども法華經を以て見進らせ候へは中中日日に十惡を造る悪人よりは過重きは善人なり、悪人は何れの仏にもよりまいらせ候はねば思い替る辺もなし、若し又善人とも成らば法華經に付き進らす事も有りなん、日本国の人人は何にも阿弥陀仏より釈迦仏念仏よりも法華經を重くしたしく心よせに思い進らせぬる事難かるべし、されば此の人人は善人に似て悪人なり、悪人の中には一閻浮提第一の大謗法の者大闡提の人なり、釈迦仏此の人をば法華經の二の卷に「其の人命終して阿鼻獄に入らんと定めさせ給へり、されば今の日本国の諸僧等は提婆達多瞿伽梨尊者にも過ぎたる大悪人なり、又在家の人人は此等を貴み供養し給う故に此の国眼前に無間地獄と變じて諸人現身に大飢渴大疫病先代になき大苦を受くる上他国より責めらるべし、此れは偏に梵天帝釈日月等の御はからひなり、かかる事をば日本国には但日蓮一人計り知つて始は云うべきか云うまじきかとらおもひけれどもさりとては何にすべき、一切衆生の父母たる上仏の仰せを背くべきか、我が身こそ何様にもならめと思ひて云い出せしかば二十余年所をおはれ弟子等を殺され我が身も疵を蒙り二度まで流され結局は頸切られんとす、是れ偏に日本国の一切衆生の大苦にあはんを兼て知りて歎き候なり、されば心あらん人人は我等が為にと思食すべし、若し恩を知り心有る人人は二当らん杖には一は替わるべき事ぞかし、さこそ無からめ還つて怨をなしなんとせらるる事は心得ず候、又在家の人人の能くも聞きほどかずして或は所を追ひ或は弟子等を怨まるる心えぬさよ、設い知らずとも誤りて現の親を敵ぞと思ひたが今詈り或は打ち殺したらんは何に科を免るべき、此の人人は我があらぎをば知らずして日蓮があらぎの様に思へり、譬えば物ねたみする女の眼を瞋らかしてとわりをにらむれば己が気色のつとましきをば知らずして還つてとわりの眼おそろしと云うが如し、此等の事は偏に国主の御尋ねなき故なり、又何なれば御尋ねなきぞと申すに此の国の人人余り科多くして一定今生には他国に責められ後生には無間地獄に墮つべき惡業

の定まりたるが故なりと、きよもんれき経文歴きと候いしかば信まじ進まいらせて候、此の事は各各たといわれら設ごとい我等が如くなる云うにかひなき者共を責めおどし、或は所を追わせ給たまい候ともよも終には只は候はじ、此の御房の御心をば設たといてんしい天照太神しん・正八幡もよも随ま合せ給ひ候はじ、まして凡夫をや、されば度度の大事にもおくする心なく弥いよ強盛に御坐すと承り候と加様のすぢに申もうし給たまうべし。

さて其その法師物申さば取り返してさて申もうしる事は僻事かと返して釈迦しゃか仏は親なり・師なり・主なりと申もうす文・法華經には候かと問うて有りと申さばさて阿弥陀仏は御房の親・主・師と申もうす經文は候かと責めて・無しと云わんずるか又有りと云はんずるか若しざる經文有りと申さば御房の父は一人かと責め給へ又無しといはばさては御房は親をば捨てて何に他人をもてなすぞと責め給へ其の上法華經は他經には似させ給はねばこそとて四十

余年等の文を引かるべし、即往安樂の文にかからばさて此れには先ずつまり給たまふ事は承伏かと責めてそれもとて又申すべし、構しへ構しへ所領を惜み妻子を顧りみ又人を憑みてあやぶむ事無かれ但偏に思い切るべし、今年の世間を鏡とせよ若干の人の死ぬるに今まで生きて有りつるは此の事にあはん為なりけり、此れこそ宇治川を渡せし所よ是こそ勢多を渡せし所よ名を揚るか名をくだすかなり、人身は受け難く法華經は信じ難しとは是なり、釈迦多宝・十方の仏・来集して我が身に入りかはり我を助け給へ観念せさせ給うべし、地頭のもとに召さるる事あらば先は此の趣を能く能く申さるべく候、き恐恐謹言。

建治三年丁丑八月四日

にちれんかあう
日蓮花押

やめふさう
弥三郎殿御返事

三三七

新田殿御書

1452p

使ひ御志限り無き者か、経は法華経・蹟密第一の大法なり、仏は釈迦仏・諸仏第一の上仏なり、行者は法華経の行者に相似たり、三事既に相応せり檀那の一願必ず成就せんか、恐恐謹言。

五月二十九日

日蓮在御判

新田殿御返事

並に女房の御方

三三八

実相寺御書

建治四年正月十六日

五十七歳御作

1452p

新春の御札の中に云く駿河の国実相寺の住侶尾張阿闍梨と申す者・玄義四の巻に涅槃経を引いて、小乗を以て大乘を破し大乘を以て小乗を破するは、盲目の因なりと釈せる由申し候なるは実にて候やらん不審に候。
反詰して云く小乗を以て大乘を破し大乘を以て小乗を破する者盲目とならば弘法大師・慈覚大師・智証大師等はされば盲目となり給いたりけるか、善無畏・金剛智・不空等は盲目と成り給うとの給うかとつめよ、玄義の四に云く「問う法華にを開して皆妙に入る涅槃何の意ぞ更に次第の五行を明すや、答う法華は仏世の人の為に権を破して実に入れ復・有ること無く教意整足せり、涅槃は末代の凡夫の見思の病重く一実を定執して方便を誹謗

し甘露を服すと雖も事に即して真なる能わず命を傷つけて早夭するが為の故に戒定慧を扶けて大涅槃を顕す、法華の意を得れば涅槃に於て次第の行を用いざるなり」釈籤の四に云く「次の料簡の中、扶戒定慧と言ふは事戒事定前三教の慧並びに事法を扶くるが為の故なり具には止觀の対治助開の中に説くが如し、今時の行者、或は一向に理を尚ぶときは則ち己れ聖に均しと謂い及び実を執して權を謗す、或は一向に事を尚ぶときは則ち功を高位に推り及び実を謗して權を許す、既に末代に処して聖旨を思はず其れ誰か斯の二の失に墮せざらん、法華の意を得れば則ち初後俱に頓なり、請う心を揣り臆を撫で自ら浮沈を曉れ」と等云云、此の釈に迷惑する者か、此の釈の所詮は、或は一向尚理とは達磨宗に等しきなり、及び執実謗權とは華嚴宗・真言宗なり、或は一向尚事とは淨土宗・律宗なり、及び謗実許權とは法相宗なり。

夫れ法華經の妙の一字に二義有り一は相待妙・を破して妙を顯す二は絶待妙・を開して妙を顯す、爾前の諸經並びに法華已後の諸經は破・顯妙の一分之を説くと雖も開・顯妙は全く之無し、爾るに諸經に依憑する人師、彼れ彼の經に於て破顯の二妙を存し、或は天台の智慧を盜み、或は民の家に天下を行うのみ、設い開・を存すと雖も破の義免れ難きか、何に況や上に挙ぐる所の一向執權、或は一向執実等の者をや、而るに彼の阿闍梨等は自・科を顧みざる者にして嫉妬するの間、自眼を回轉して大山を眩ると觀るか、先ず実を以て權を破し權執を絶して実に入るは釈迦・多宝・十方の諸仏の常儀なり、実を以て權を破する者を盲目と為せば釈尊は盲目の人か乃至天台・伝教は盲目の人師なるか如何、笑う可し返す返す。

四十九院等の事、彼の別当等は無智の者たる間、日蓮に向かつて之を恐る小田一房等怨を為すか、弥彼等が邪法滅す可き先兆なり、根露るれば枝枯れ源・竭れば流れ尽くと云う本文虚しからざるか、弘法・慈覚・智証三大師の法華經誹謗の大科四百余年の間隠せる根露れ枝枯る、今日蓮之を糾明せり拘留外道が石と為つて数百年、陳那菩薩に責められ石

すなわ 即ち水と為る、尼にけんが立てし塔は馬鳴めみょう之を頼くすす、臥ふせる師子ししに手を触れば瞋いかりを為なす等これ是なり。

建治四年正月十六日

日蓮花押にちれんかおう

するが 駿河国実相寺豊前公御房御返事じつそうじ ごぼうごへんじ

三三九

石本日仲聖人御返事いしよにんごへんじ

1454p

どうじ 同時に二仏わたに亘はるか將た又一いっぼう方は妄語もうごなるか、近來念仏者きんらいねんぶつ天下てんかを誑惑おおわくするか、早早御存知有ごぞんじある可べきか。
そもそもしゅんめ 抑駿馬一疋追つかい遣つかわさる事存外ぞんがいの次第しだいか事事見参じじの時ときを期こすす、恐恐きようきよう謹言きんげん。

九月二十日

日蓮在御判にちれん

石本日仲聖人御返事いしよにんごへんじ

今月十五日酉時御文同じき十七日酉時到来す、彼等御勘氣を蒙るの時、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱え奉ると云云、偏に只事に非ず定めて平金吾の身に十羅刹入り易りて法華經の行者を試みたもつか、例せば雪山童子・尸毘王等の如し將た又悪鬼其の身に入る者か、釈迦・多宝・十方の諸仏・梵帝等、五五百歳の法華經の行者を守護す可きの御誓は是なり、大論に云く能く毒を変じて藥と為す、天台云く毒を変じて藥と為す云云、妙の字虚しからずんば定めて須臾に賞罰有らんか。

伯耆房等深く此の旨を存じて問注を遂ぐ可し、平金吾に申す可き様は文永の御勘氣の時聖人の仰せ忘れ給つか、其の殃未だ畢らず重ねて十羅刹の罰を招き取るか、最後に申し付けよ、恐恐。

十月十七日戌時

日蓮 在御判

聖人等御返事

この事のぶるならば此方にはとがなしとみな人申すべし、又大進房が落馬あらわるべし、あらわれば人人ことにおづべし、天の御計らいなり、各にはおづる事なけれ、つよりもてゆかば定めて子細いできぬとおぼふるなり、今度の使にはあわぢ房を遣すべし。

大体此の趣を以て書き上ぐ可きか、但し熱原の百姓等安堵せしめば日秀等別に問注有る可からざるか、大進房・弥藤
 次入道等の狼藉の事に至つては源は行智の勧めに依りて殺害刃傷する所なり、若し又起請文に及ぶ可き云云の事之を
 申さば全く書く可からず、其の故は人に殺害刃傷せられたる上重ねて起請文を書き失を守るは古今未會有の沙汰な
 り、其の上行智の所行書かしむる如くならば身を容るる処なく行つ可きの罪方無きか、穴賢穴賢、此の旨を存じ問
 注の時強強と之を申さば定めて上聞に及ぶ可きか、又行智証人立て申さば彼等の人行智と同意して百姓等が田畠
 数十疇り取る由之を申せ、若し又証文を出さば謀書の由之を申せ、事事証人の起請文を用ゆべからず、但し現証の
 殺害刃傷而已、若し其の義に背く者は日蓮の門家に非ず日蓮の門家に非ず候、恐恐。

弘安二年十月十二日

日蓮 在御判

伯耆殿

日秀

日弁等 下

瓜一籠ささげひげこえだまめねいもかうのつり給ひ候い畢んぬ、付法蔵經と申す經にはいさこのもちぬを仏に供養しま
いらせしわらは百年申すしに一閻浮提の四分が一の王となる所謂阿育大王これなり、法華經の法師品には而於一劫中と
申して一劫が間 釈迦仏を種種に供養せる人の功德と 末代の法華經の行者を須臾も供養せる
功德とたくらべ候に其福復彼に過ぐと申して法華經の行者を供養する功德すぐれたり、これを妙樂大師釈して云く
「供養すること有らん者は福十号に過ぐと云云、されば仏を供養する功德よりもすぐれて候なれば仏にならせ給はん
事疑いなし。

其の上女人の御身として尼とならせ給いて候なり、いよいよ申すに及ばず但しさだめて念佛者にてやをはすらん、たうじ
の念佛者 持斎は国をほろぼし他国の難をまねくものにて候、日本国の人人は一人もなく日蓮がかたきとなり候いぬ、梵王
帝釈 日月 四天のせめをかほりてたうじのゆきつしまのやつになり候はんずるにいか
がせさせ給うべきいかがせさせ給うべき、なによりも入道殿の御所勞なげき入つて候、しばらくいきさせ給いて法華經を
誦ずる世の中御覽あれと候へ、日本国の人人は大体はいけどりにせられ候はんずるなり、日蓮を二度までながし法華經の
五の巻をもてかうべを打ち候いしはこり候はんずらむ。

七月二十六日

日蓮 花押

御返事

進上

高橋入道殿御返事

日蓮

我等が慈父・大覚世尊は人壽百歳の時、中天竺に出現しまして一切衆生のために一代聖教をとき給う、仏在世の一切衆生は過去の宿習有つて仏に縁あつかりしかば、すでに得道成りぬ、我が滅後の衆生をば、いかにせんとなげき給ひしかば、八万聖教を文字となして、一代聖教の中に小乗經をば、迦葉尊者にゆづり、大乘經並びに法華經涅槃等をば、文殊師利菩薩にゆづり給う、但八万聖教の肝心、法華經の眼目たる妙法蓮華經の五字をば、迦葉・阿難にもゆづり給はず、又文殊・普賢・觀音・弥勒・地藏・竜樹等の大菩薩にもさづけ給はず、此等の大菩薩等の、のぞみ申せしかども、仏ゆるし給はず、大地の底より上行菩薩と申せし老人を召し、いたして、多宝・仏・十方の諸仏の御前にして、釈迦如来・七宝の塔中に、して妙法蓮華經の五字を上行菩薩にゆづり給う。

其の故は我が滅後の一切衆生は、皆我が子なり、いづれも平等に不便にをもつなり、しかれども医師の習い病に隨いて藥をさづくる事なれば、我が滅後、五百年が間は、迦葉・阿難等に小乗經の藥をもつて一切衆生にあたへよ、次の五百年が間は、文殊師利菩薩・弥勒菩薩・竜樹菩薩・天親菩薩に華嚴經・大日經・般若經等の藥を一切衆生にさづけよ、我が滅後、一千年すぎて像法の時には、藥王菩薩・觀世音菩薩等、法華經の題目を除いて余の法門の藥を一切衆生にさづけよ、末法に入りなば、迦葉・阿難等、文殊・弥勒菩薩等、藥王・觀音等のゆづられしところの小乗經・大乘經並びに法華經は文字はありとも、衆生の病の藥とはなるべからず、所謂病は重し、藥はあさし、其の時上行菩薩出現して、妙法蓮華經の五字を一閻浮提の一切衆生にさづけ、其の時一切衆生、此の菩薩をかたきとせん、

所謂さるのいぬをみたるがごとく、鬼神の人をあだむがごとく、過去の不輕菩薩の一切衆生にのりあだまれしのみならず、杖木瓦礫にせめられしがごとく、覺徳比丘が殺害に及ばれしがごとくなるべし。

其のときは迦葉・阿難等も、或は靈山にかくれ恒河に没し、弥勒・文殊等も、或は都率の内院に入り、或は香山に入らせたまひ、觀世音菩薩は西方にかへり、普賢菩薩は東方にかへらせ給ふ、諸経は行ずる人はありとも守護の人なければ利生あるべからず、諸仏の番号は唱つるものありとも天神これをかこすべからず、但し小牛の母をはなれ金鳥のたかにあえるがごとくなるべし、其の時十方世界の大鬼神・閻浮提に充滿して四衆の身に入つて、或は父母

をがいし、或は兄弟等を失はん、殊に國中の智者げなる持戒げなる僧尼の心に此の鬼神入つて国主並びに臣下をたばらさん、此の時上行菩薩の御かびをかほりて法華經の題目南無妙法蓮華經の五字計りを一切衆生にさづけば、彼の四衆等並びに大僧等、此の人をあだむ事父母のかたき宿世のかたき朝敵怨敵のごとくあだむべし、其の時

大なる天変あるべし、所謂日月蝕し大なる彗星天にわたり大地震動して水上の輪のごとくなるべし、其の後は自界叛逆難と申して国主・兄弟並びに國中の大人をうちころし、後には他国侵逼難と申して郷国よりせめられて、或はいけどりとなり、或は自殺をし國中の上下・万民皆大苦に値つべし、此れひとへに上行菩薩のかびをかほり

て法華經の題目をひろむる者を、或はのり、或はうちはり、或は流罪し、或は命をたちなんとするゆへに、仏前にちかひをなせし梵天帝釈・日月・四天等の法華經の座にて誓状を立てて法華經の行者をあだまん人をば父母のかたきよりもなをつよくいましむべしとちかつゆへなりとみて候に、今日蓮日本国に生れて一切経並びに法華經の

明鏡をもて、日本国の一切衆生の面に引向たるに寸分もたがはぬ上、仏の記し給ひし天変あり地天あり、定んで此の国亡国となるべしとかねてしりしかば、これを国主に申すならば、国土安穩なるべくもたづねあきらむべし、亡国となるべきならば、よも用い、用いぬ程ならば、日蓮は流罪・死罪となるべしとしりて候いしかども、仏いまし

めて云く此の事を知りながら身命ををしみて一切衆生にかたらずば我が敵たるのみならず一切衆生の怨敵なり、必ず
阿鼻大城に墮つべしと記し給へ。

此に日蓮進退わづらひて此の事を申すならば我が身にかなにもなるべし我が身はさてをきぬ父母・兄弟並びに千万人の中
にも一人も随うものは国主・万民にあだまるべし、彼等あだまるるならば仏法はいまだわきま今人のせめはたかたし、
仏法を行ずるは安穩なるべしとこそをもつに此の法を持つによつて大難出来するはしんぬ此の

法を邪法なりと誹誘して悪道に墮つべし、此れも不便なり又此れを申さずは仏誓に違する上一切衆生の怨敵なり大
阿鼻地獄疑いなし、いかながせんとをもひしかどもをもひ切つて申し出しぬ、申し始めし上は又ひきさす

べきにもあらざればいよいよつより申せしかば、仏の記文のごとく国主もあだみ万民もせめき、あだをなせしかば天もい
りて日月に大變あり大せいせいも出現しぬ大地もふりかえしぬべくなりぬ、どううちもはじまり他国よりもせめるなり、仏
の記文すこしもたがわず日蓮が法華經の行者なる事も疑はず。

但し去年かまくらより此のところにげ入り候いし時道にて候は各各にも申すべく候いしかども申す事もなし、又先度
の御返事も申し候はぬ事はちの子細も候はず、なに事にか各各をば・へたてまいらせ候べき、あだをなす念佛者・禅宗・眞
言師等をも並びに国主等をもたすけんがためにこそ申せ、かれ等のあだをなすはいよ

いよ不便にこそ候へまして一日も我がかたとて心よせなる人人はいかでかをろかなるべき世間のをそろしさに妻子ある人
のとをさがるをば・ことに悦ぶ身なり、日蓮に付てたすけやりたるかたわなき上わづかの所領をも召さるるならば子細も
しらぬ妻子・所従等がいかなげかんずらんと心ぐるし。

而も去年の二月に御勘気をゆりて三月の十三日に佐渡の国を立ち同月の二十六日にかまくらに入る、同四月の入日平
左衛門尉にあひたりし時やうやうの事どもどひし中に蒙古国はいつよすべきと申せしかば、今年よす

べし、それにとて日蓮はなして日本国にたすくべき者一人もなし、たすからんとをもひしたうならば日本国の念仏者と禅と
律僧等が頸を切つてゆいのはまにかくべし、それも今はすぎぬ但し皆人のをもひて候は日蓮をば念仏師と禅と律をそしる
とをもひて候、これは物のかずにてかずならず・真言宗と申す宗がつるわしき日本国の

大なる呪咀の悪法なり、弘法大師と慈覚大師此の事にまどひて此の国を亡さんとするなり、設い二年三年にやぶるべき
国なりとも真言師にいのらする程ならば一年半年に此のくにせめらるべしと申しきかせて候いき。

たすけんがために申すを此程あだまる事なればゆりて候いし時さどの国よりいかなる山中海辺にもまぎれ入るべか
りしかども此の事をいま一度平左衛門に申しきかせて日本国にせめのこされん衆生をたすけんがためにのぼりて候いき、
又申しきかせ候いし後はがまくらに有るべきならねば足にまかせていでしほどに便宜にて候いしかば設い各各はいとはせ
給うとも今一度はみたてまつらんと千度をもひしかども心に心をたたかいて

すぎ候いき、そのゆへはするが国は守殿の御領ことにぶじなんどは後家尼ごぜんの内の人人多し、故最明寺殿極楽寺殿
のかたきといきどをらせ給うなればききつけられれば各各の御なげきなるべしとおもひし心計りなり、いまにいたるまでも
不便にをもひまいらせ候へは御返事までも申さず候いき、この御房たちのゆきすりにもあなかしこあなかしこぶじかしま
のへん立ちよるべからずと申せどもいかが候らんとをばつかなし。

ただし真言の事ぞ御不審にわたらせ給い候らん、いかにと法門は申すとも御心ああらん事かたし但眼前の事をもつて
知しめせ、隠岐の法皇は人王入十二代、神武よりは二千余年・天照太押入りかわらせ給いて人王とならせ給う、いかなる
者かてきすべき上欽明より隠岐の法皇にいたるまで漢土・百濟・新羅・高麗よりわたり来る大法秘法を

叡山・東寺・園城・七寺並びに日本国にあがめをかれて候、此れは皆国を守護し国主をまほらしたためなり、隠岐の法皇世を
かまくらにとられたる事を口をしとをばして叡山・東寺等の高僧等をかたらひて義時が命をめしと

れと行ぜしなり、此の事一年二年ならず数年調伏せしに権の大夫殿はゆめゆめしろしめさざりしかば一法も行じ給はず又行ずとも叶うべしとおぼすありしに天子いくさにまけさせ給いて隠岐の国うかはされさせ給う、日本国の王となる人は天照太神の御魂の入りかわらせ給う王なり、先生の十善戒の力といひいかでか國中の万民の中にはかたぶくべき、設いとがありともつみあるをやをとがなき子のあだむにてこそ候いぬらめ、たとい親に重罪ありとも子の身としてとがに行はん天づけ給うべしや、しかるに隠岐の法皇のはじにあはせ給いしはいかなる大禍ぞ此れひとに法華經の怨敵たる日本国の眞言師をかたはせ給いしゆなり。

一切の眞言師は灌頂と申して釈迦仏等を八葉の蓮華にかきて此れを足にふみて秘事とするなり、かかる不思議の者ども諸山諸寺の別当とおおぎてもてなすゆへにたみの手にわたりて現身にはぢにあひぬ、此の大惡法又かまくらに下つて御一門をすかし日本国をほろぼさんとするなり、此の事最大事なりしかば弟子等にもかたらず。

只いつはりをろかにて念仏と禅等計りをそしりてきかせしなり、今は又用いられぬ事なれば身命もおしまず弟子どもにも申すなり、かう申せばいよいよ御不審あるべし、日蓮いかにいみじく尊くとも慈覺弘法にすぐるべきか、この疑すべはるべからずいかにとかすべき。

但し皆人はにくみ候にすこしも御信用のありし上此れまでも御たづねの候は只今生計りの御事にはよも候はじ定めて過去のゆか、御所勞の大事にならせ給いて候なる事あさましく候、但しつるぎはかたきのため薬は病のため、阿闍世王は父をころし仏の敵となれり、惡瘡身に出で後に仏に帰伏し法華經を持ちしかば惡瘡も平癒し

寿をも四十年のべたりき、而も法華經は閻浮提人病之良薬とこそとかれて候へ閻浮の内の人病の身なり法華經の薬あり、二事すでに相応しぬ一身いかでかたすからざるべき、但し御疑のわたり候はんをば力をよばず、南無妙法蓮華經。

南無妙法蓮華經。

覚乗房はわき房に度度よませてきこしめせきこしめせ。

七月十二日

進上 高橋六郎兵衛入道殿 御返事

日蓮 花押

三四四 異体同心事

1463p

白小袖一つあつたの小袖はわき房のびんぎに驚目一貫並びにつけ給わる、はわき房さど房等の事あつわらの者ども
の御心ざし異体同心なれば万事を成し同体異心なれば諸事叶う事なしと申す事は外典三千余巻に定りて候、殷の紂
王は七十万騎なれども同体異心なればいくさにまけぬ、周の武王は八百人なれども異体同心なればかちぬ、一人の心な
れども二つの心あれば其の心たがいて成ずる事なし、百人千人なれども一つ心なれば必ず事

を成ず、日本国の人人は多人なれども体同異心なれば諸事成ぜん事かたし、日蓮が人類は異体同心なれば人人すくな
く候へども大事を成じて一定法華経ひろまりなんと覚候、悪は多けれども一善にかつ事なし、譬は多くの火あつまれど
も一水にはきゑぬ、此の二門も又かくのごとし。其の上貴辺は多年としつもりて奉公法華経にあつくをはする上今度は
いかにもすぐれて御心ざし見えさせ給うよし人人も申し候、又かれらも申し候、一一に承りて日天にも大神にも申し上
げて候ぞ。

御文はいそぎ御返事申すべく候ひつれどもたしかなるびんぎ候はでいままで申し候はず、べんあさがびんぎあまりそう
そうにてかきあす候いき、さては各各としのころいかんがとをぼしつゝ、もうこの事すでにちかづきて候か、我が国のほろ
びん事はあさましけれども、これだにもそら事になるならば日本国の人人いよいよ

ほけきよう 法華經を謗して万人無間地獄に墮つべし、かれだにもつよるならば国はほろぶとも謗法はつすくなりなん、譬は灸治をし
てやまいをいやし針治にて人をなすがごとし、当時はなげくとも後は悦びなり、日蓮は法華經の御使い日本国の人人は
だいそくおう えんぶだい 大族王の一閻浮提の仏法を失いがごとし、蒙古国は雪山の下王のごとし天の御使として法華經の行者をあだむ人人を
罰せらるるか、又現身に改悔ををこしてあるならば阿闍世王の仏に歸して白癩をやめ四十年の寿をのべ無根の信と申す
位にのぼりて現身に無生忍をえたりしがごとし、
恐恐謹言。

八月六日

日蓮 花押

三四五 六郎次郎殿御返事

建治三年三月

五十六歳御作

1464p

白米三斗油一筒給ひ畢んぬいまにはじめぬ御心ざし申しつくしがたく候日蓮が悦び候のみならず釈迦仏定めて御悦び候
らん、我則歡喜諸仏亦然は是なり、明日三位房をつかはすべく候、その時委細申すべく候、恐恐。

建治三年丁丑三月十九日

日蓮 花押

六郎次郎殿

次郎兵衛殿

減劫と申すは人の心の内に候、貪・瞋・癡の三毒が次第に強盛になりもてゆくほどに次第に人のいのちもつづまりせいも
ちいさくなりもつてまかるなり、漢土・日本国は仏法已前には三皇・五帝・三聖等の外經をもつて民の心をととの今てよをば治
めしほどに次第に人の心はよきことははかなく・わるき事はかしくなりしかば・

外經の智あさきゆへに惡のふかき失をいましめがたし、外經をもつて世をさまらざりしゆへにやうやく・仏經をわたして世間
ををさめしかば世をだやかなりき、此れはひとへに・仏教のかしこきによつて人民の心をはしくあかせるなり、当時の外典
と申すは本の外經の心にはあらず、仏法のわたりし時は外經と・仏經とあらそいしかど

もやうやく・外經まけて王と民と用いざりしかば・外經のもの内經の所従となりて立ちあうことなくありしほどに外經の
人人内經の心をぬきて智慧をまし外經に入れて候ををろかなる王は外典のかしこきかともつ。

又人の心やうやく・善の智慧ははかなく・惡の智慧かしくなりしかば・仏經の中にも・小乘經の智慧世間ををさむるに
代をさまることなし、其の時大乘經をひろめて代ををさめしかば・すこし代をさまりぬ、其の後大乘經の智慧及ばざり
しかば・一乘經の智慧をとりだして代ををさめしかば・すこしはらく代をさまりぬ、今の代は外經も・小乘經も
大乘經も・一乘法華經等もかなわぬよとなれり、ゆえいかなとなれば衆生の貪・瞋・癡の心のかしこきこ

と大覺世尊の大善にかしこきがごとし、譬へば犬は鼻のかしこき事人にすぎたり、又鼻の禽獸をかぐことは大聖の鼻通にも
をとらず、ふくろつがみみのかしこきとびの眼のかしこきすずめの舌のかるき・うづの身のかしこき皆かしこき人にもず
ぐれて候、そのやうに末代濁世の心の貪欲・瞋恚・愚癡のかしこきは・いかなる賢人・聖人

も治めがたき事なり、其の故は貪欲をば仏不淨觀の薬をもて治し瞋恚をば慈悲觀をもて治し愚癡をば十二因縁觀をもてこそ治し給うにいまは此の法門をとひて人ををとして貪欲瞋恚愚癡をますなり、譬は火をば水をもつてけす悪をば善をもつて打つじかるにかへて水より出ぬる火をば水をかくればあぶらになりていよいよ大火となるなり。

今末代悪世に世間の悪より出世の法門につきて大悪出生せり、これをばしらずして今の人人善根をすすればいよいよ代のほろぶる事出来せり、今の代の天台眞言等の諸宗の僧等をやしなうは外は善根とこそ見ゆれども内は十悪五逆にもすぎたる大悪なり、しかれば代のをさまらん事は大覺世尊の智慧のごとくなる智人世に有り

て仙予國王のごとくなる賢王とよりあひて一向に善根をとどめ大悪をもつて八宗の智人とをもつものを或はせめ或はながし或はせをとどめ或は頭をはねてこそ代はずこしをさまるべきにて候へ

法華經の第一の巻の「諸法実相乃至唯仏と仏と乃ち能く究尽し給う」とかて候はこれなり、本末究竟と申すは本とは悪のね善の根末と申すは悪のをわり善の終りぞかし、善悪の根本枝葉をさとり極めたるを仏とは申すなり、天台云く「夫れ一心に十法界を具す」等云云、章安云く「仏尚此れを大事と爲す易解を得べきなり」妙樂云く

「乃至終窮究竟の極説なり」等云云、法華經に云く「皆実相と相違背せず」等云云、天台之を承けて云く「一切世間の治生産業は皆実相と相違背せず」等云云、智者とは世間の法より外に仏法を行ず、世間の治世の法を能く能く心へ候を智者とは申すなり、殷の代の濁りて民のわづらいしを大公望出世して殷の紂が頸を切りて民の

なげきをやめ、二世王が民の口ににがかりし張良出でて代ををさめ民の口をあまくせし、此等は仏法已前なれども教主釈尊の御使として民をたすけしなり、外經の人人はしらざりしかども彼等の人人の智慧は内心には仏法の智慧をさしはさみたりしなり。

今の代には正嘉の大地震文永の大せひせひの時智慧かしき国主あらましかば日蓮をば用いつべかりしなり、それこそなからめ文永九年のどしうち十一年の蒙古のせめの時は周の文王の太公望をむかへがごとく、殷の高丁王の傅悦を七里より請せしがごとくすべかりしぞかし、日月は生盲の者には財にあらず賢人をば愚王のにくむとはこれなり、しげきゆゑにしるさず、法華経の御心と申すはこれてひの事にて候。外のこととをばすべからず、大悪は大善の来るべき瑞相なり、一閻浮提うちみだすならば閻浮提内広令流布はよも疑い候はじ。

此の大進阿闍梨を故六郎入道殿の御はかへつかわし候、むかしこの法門を聞いて候人人には関東の内ならば我とゆきて其のはかに自我偈よみ候はんと存じて候、しかれども当時のありさまは日蓮かしこゆくならば其の日に一國にきこ文かまくらまでもさわぎ候はんか、心ざしある人なりともゆきたらんとこの人人めををそれ

ぬべし、いままでとぶらい候はねば聖靈いかにこひしくをはすらんとをもはあるやうもありなん、そのほどまづ弟子をつかわして御はかに自我偈をよませまいらせしなり、其の由御心候へ。恐。

三四七 高橋殿御返事

1467p

米穀も又又かくの如し、同じ米穀なれども謗法の者をやしなうは仏種をたつ命をついで弥弥強盛の敵人となる、又命をたすけて終に法華経を引き入るべき故か、又法華の行者をやしなうは慈悲の中の大慈悲の米穀なるべし、一切衆生を利益するなればなり、故に仏舍利変じて米と成るとは是なるべし、かかる今時分人をこれまでつかはし給う事うれしさ申すばかりなし、釈迦仏地涌の菩薩御身に入りかはらせ給うか。

其の国の仏法は貴辺にまかせたてまつり候ぞ、仏種は縁に従つて起る是の故に一乗を説くならべし、又治部房下野房等来り候はばいそぎいそぎつかはすべく候、松野殿にも見参候はばくはしくかたらせ給へ。

三四八

三三蔵祈雨事

建治元年六月五十四歳御作 与西山入道

1468p

夫れ木をうえ候には大風吹き候へともつよきすけをかひぬればたうれず、本より生いて候木なれども根の弱きはたうれぬ、甲斐無き者なれどもたすくる者強ければたうれず、すこし健の者も独なれば悪しきみちにはたうれぬ、又三千大千世界のなかには舍利弗迦葉尊者をのぞいては仏よにいで給はずば一人もなく三悪道に墮つべかりしが、仏をたのみまいらせし強縁によりて一切衆生はをほく仏になりしなり、まして阿闍世王あつくつまらなんと申せし悪人どもはいかにもかなうまじくて必ず阿鼻地獄に墮つべかりしかども・教主釈尊と申す大人にゆきあはせ給いてこそ仏にはならせ給いしか、されば仏になるみちは善知識にはすぎず、わが智慧なにかせん、ただあつきつめたきばかりの智慧だにも候ならば善知識たいせちなり、而るに善知識に値う事が第一のかたき事なり、されば仏は善知識に値う事をば一眼のかめの浮木に入り梵天よりいとを下て大地のはりのめに入るにたと給へ、しかまっだいあくせあくちしきだいぢみじん而るに末代悪世には悪知識は大地微塵よりもをほく善知識は爪上の土よりもすくなし、補陀落山の觀世音菩薩は善財童子の善知識別円二教ををし今まだ純円ならず、常啼菩薩は身をつて善知識をもとめしに曇無竭菩薩にあへり、通別円の三教をならひて法華經ををし今、舍利弗は金師が善知識九十日と申せしかば闡提の人となしたりき、ふるなは一夏の説法に大乘の機を小人となす、大聖すら法華經をゆるされず証果のらん機をしらず、末代悪世の学者等をば此をもつてすひしぬべし、天を地といふ東を西といふ火を水をし金は月にすぐれたり、ありづかは須弥山にこたり、なんと申す人人を信じて候はん人人はならはざらん悪人にはるかをしりてをしかりぬべし。

日蓮佛法をこころみるに道理と証文とにはすぎず、又道理証文よりも現証にはすぎず、而るに去る文永五年の比東

には俘囚をこり西には蒙古よりせめつかひつきぬ、日蓮案じて云く仏法を信ぜざればなり定めて調伏をこなはれずらん、
調伏は又真言宗にてぞあらんずらん、月支漢土日本三箇国の間に且く月支はをく、漢土日本の二国は真言宗にや
ぶらるべし、善無畏三蔵漢土に宣りてありし時は唐の玄宗の時なり、大旱魃ありしに祈雨の法
ををほせつけられて候しに大雨ふらせて上一人より下万民にいたるまで大に悦びし程に須臾ありて大風吹き来りて国土
をふきやぶりしかばけをさめてありしなり、又其の世に金剛智三蔵わたる、又雨の御いのりありしかば七日が内に大雨下
り上のごとく悦んでありし程に、前代末聞の大風吹きしかば・真言宗はをそろしき悪法なり
とて月支をわれしがどうかうしてとどまりぬ、又同じ御世に不空三蔵雨をいのりし程三日が内に大雨下る悦さきのこと
し、又大風吹きてさき二度よりもをびただし数十日とどまらず、不可思議の事にてありしなり、此は日本国の智者愚者
一人もしらぬ事なり、しらんとをもはば日蓮が生きてある時くはしくたづねならへ日本国に
は天長元年二月に大旱魃あり、弘法大師も神泉苑にして祈雨あるべきにてありし程に守敏と申せし人すすんで云く「弘法
は下臈なり我は上臈なりまづをほせをかほるべし」と申す、こつに随いて守敏をこなう、七日と申すには大雨下りしかど
も京中計りにて田舎にふらず、弘法にをほせつけられてありしかば七日にふらず二七日に
ふらず三七日にふらざりしかば、天子我といのりて雨をふらせ給いき、而るを東寺の門人等我が師の雨とがつす、くわしく
は日記をひきて習うべし、天下第一のわうわくのあるなり、これより外に弘仁九年の春のえきれい又三古なげたる事に
不可思議の誑惑あり口伝すべし。

天台大師は陳の世に大旱魃あり法華經をよみて須臾に雨下り王臣かうべをかたづけ万民たなごころをあはせたり、し
かも大雨にもあらず風もふかず甘雨にてありしかば、陳王大師の御前にをはしまして内裏かへらんことをわすれ給いき、
此の時三度の礼拝はありしなり。

去る弘仁九年の春・大旱魃ありき・嵯峨の天王真綱と申す臣下をもつて冬嗣のとり申されしかば・法華經・金光明經・仁王經をもつて・伝教大師祈雨ありき、三日と申せし日ほそきくもほそきあめしつと下りしかば天子あまりによろばせ給いて、日本第一のかたことたりし大乘の戒壇はゆるされしなり、伝教大師の御師・護命と申せし聖人は南都第一の僧なり、四十人の御弟子あいくして仁王經をもつて祈雨ありしが五日と申せしに雨下りぬ、

五日はいみじき事なれども三日にはをととりて而も雨あらかりしかばまけにならせ給いぬ、此れをもつて弘法の雨をばすひせさせ給うべし、かく法華經はめでたく真言はをろかに候に日本のほろぶべきにや一向・真言にてあるなり、隠岐の法王の事をもつてをもうに真言をもつて蒙古とえそとをでうぶくせば日本国やまけんずらんとすひせしゆへに此の事のちをすてていゝてみんとをもひしなり、いゝし時はでしらせししかどもいまは

あひぬれば心よかるべきにや、漢土日本の智者・五百余年の間・一人もしらぬ事をかんがへ候なり、善無畏・金剛智・不空等の祈雨に雨は下りて而も大風のそひ候はいかにか心させ給うべき、外道の法なれどもいつにかひなき道士の法にも雨下る事あり、まして仏法は小乗なりとも法のごく行うならばいかでか雨下らざるべき、いわうや大日經は華嚴・般若にこそをよばねども阿含にはすこしまさりて候ぞかし、いかでかいのらんに雨下らざるべき、されば雨は下りて候へとも大風のそいぬるは大なる僻事のかの法の中にまじわれるなるべし、弘法大師の三七日に雨下らずして候を天子の雨を我が雨と申すは又善無畏等よりも大にまさる失のあるなり。

第一の大妄語には弘法大師の自筆に云く、弘仁九年の春疫れいをいのりてありしかば夜中に日いたり云云、かかるそらごとをいつ人なり、此の事は日蓮が門家第一の秘事なり本文をとりつめていつべし、仏法はさてをきぬ上にかきぬる事天下第一の大事なり、つてにをほせあるべからず御心ざしのいたりて候はをどろかしまいらせ候、日蓮をばいがあるべかるらんとをばつかなしとをばしめすべきゆへにがかかる事ども候、むじり

国だにもよくせめ候わば今生にもひろまる事も候いなん、あまりにはげしくあたりし人人はくゆるへんもやあらんずらん。

外道と申すは仏前・八百年よりはじまりて、はじめは二天三仙にてありしがやうやくわかれて九十五種なり、其の中に多くの智者神通のものありしかども一人も生死をはなれず、又帰依せし人人も善につけ悪につけて皆二惡道に墮ち候いしを仏出世させ給いてありしかば、九十五種の外道十六大國の王臣諸民をかたらひて

或はのり、或はうち、或は弟子、或はだんな等無量無辺ころせしかども仏たゆむ心なし、我此の法門を諸人にをどされていゝるやむほどならば一切衆生地獄に墮つべしとよくなげかせ給いしゆゑに退する心なし、この外道と申すは先仏の經經を見てよみそこないて候いしより事をこれり。

今も又かくのごとし、日本の法門多しといへども源は八宗・九宗・十宗よりをこれり、十宗のなかに華嚴等の宗宗はさてをきぬ、真言と天台との勝劣に弘法・慈覺・智証のまどひしによりて日本國の人人・今生には他國にもせ

められ後生にも惡道に墮つるなり、漢土のほろび又惡道に墮つる事も善無畏・金剛智・不空のあやまりよりはじまれり、又天台宗の人人も慈覺・智証より後はかの人人の智慧にせかれて天台宗のごとくならず、さればさのみやはあるべき。

いわうや日蓮はかれにすぐべきとわが弟子等をばせども仏の記文にはたがはず、末法に入つて佛法をばつじ無間地獄に墮つべきものは大地微塵よりも多く、正法を企たらん人は爪上の土よりもすくなしと涅槃經にはとかれ、法華經には設い須弥山をなぐるものはありとも我が末法に法華經を経のごとくにとく者ありがたと

記しをかせ給へり、大集經・金光明經・仁王經・守護經はちなひをん經・最勝王經等に末法に入つて正法を行ぜん人出来せば邪法のもの王臣等につたてあらんほどに彼の王臣等他人がとばにつひて一人の正法のを

或^{ある}は^{ある}の^{ある}り^{ある} 或^{ある}は^{ある}せ^{ある}め^{ある} 或^{ある}は^{ある}な^{ある}が^{ある}し^{ある} 或^{ある}は^{ある}こ^{ある}ろ^{ある}さ^{ある}ば^{ある}梵^{ほん}王^{のう} 帝^{たい}釈^{しゃく} 無^む量^{りやう}の^{しよ}諸^{てん}天^{てん} 天^{てん}神^{じん} 地^ち神^{じん}等^らり^んこ^のの^賢王^{おう}の^{けん}身^みに^{あつ}入^いり^かは^りて^て
そ^その^そ国^{こく}を^をほ^ほろ^ろぼ^ぼす^すべ^べし^しと^と記^しし^し給^{たま}へ^へり^り、今^{いま}の^の世^よは^は似^にて^て候^{こう}者^{しや}か^な。

抑^{そも} 各^{かく}各^{かく}は^はい^いか^かなる^{なる}宿^{しゆく}善^{ぜん}に^にて^て日^{にち}蓮^{れん}を^をば^ば訪^{ほう}は^はせ^せ給^{たま}へ^へる^るぞ、能^{よく}く^{よく}能^{よく}く^{よく}過^か去^こを^を御^{たす}尋^{ずん}ね^ね有^あら^らば^ばな^なに^にと^と無^なく^くと^とも^も此^{この}度^{たび}生^{しょう}死^じは^は離^りれ^れ
さ^させ^さ給^{たま}う^うべ^べし^し、す^すり^りは^はむ^むど^どく^くは^は三^{さん}箇^こ年^{ねん}に^に十^{じゅう}四^し字^じを^を暗^{くら}に^にせ^せざ^ざり^りし^しか^かど^ども^も仏^{ぶつ}に^に成^なり^りめ^め提^{だい}婆^ぱは^は六^{りく}万^{まん}蔵^{ざう}を^を暗^{くら}に^にて^て無^む間^{かん}に^に墮^おち^ちぬ^ぬ
是^これ^れ偏^{へん}に^に末^{まつ}代^{だい}の^の今^{いま}の^の世^よを^を表^{あらわ}す^する^るな^なり^り、敢^{あえて}て^て人^{ひと}の^の上^{うへ}と^と思^{おも}ひ^ひ食^くす^すべ^べか^から^らず^ず事^じ繁^{しげ}け^けれ^れば^ば止^{とど}め^め置^おき^き候^{こう}い^い畢^{おわ}ん^んぬ^ぬ、抑^{そも} 当^{たう}時^じの^の忽^{とつ}忽^{とつ}に^に
御^ご 志^し 申^{まう}す^す計^{けい}り^り候^{こう}は^はね^ねば^ば大^{だい}事^じの^の事^じあ^あら^らを^をど^どろ^ろか^かし^しま^まひ^ひら^らせ^せ候^{こう}、さ^ささ^さげ^げ青^{せい}大^{だい}豆^{とう}給^{たま}い^い候^{こう}い^いぬ^ぬ。

六月二十二日

日蓮 花押

西山殿御返

三四九 蒙古使御書

建治元年五十四歳御作

与西山高橋入道

1472p

鎌倉より事故なく御下りの由承り候いてうれしき申す計りなし、又蒙古の人の頸を刎られ候事承り候日本国の敵にて
候念仏 眞言 禅 律等の法師は切られずして科なき蒙古の使の頸を刎られ候ける事こそ不便に候子細を知らる人は勘へ
あてて候をおこりて云うと思ふべし此の二十余年の間私には昼夜に弟子等に歎き申し公には度度申せ

し事是なり一切の大事の中に国の上びるが第一の大事にて候なり最勝王経に云く「害の中の極めて重きは国位を失うに
過ぎたること無し」等云云、文の心は一切の悪の中に国王と成りて政 悪くして我が国を他国に破らるるが第一の悪にて
候と説れて候又金光明経に云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に乃至他方の怨賊来りて
国人喪乱に遇う」等云云、文の心は国王と成りて悪人を愛し善人を科にあつれば必ず其の国 他国に破らるると云う文な
り、法華経第五に云く「世に恭敬せらるるを爲ること六通の羅漢の如くならん」等云云、文の心は法華経

の敵の相貌を説きて候に二百五十戒を堅く持ち迦葉舍利弗の如くなる人を国主これを尊みて法華經の行者を失なはむとするなりと説れて候ぞ。

夫れ大事の法門と申すは別に候はず、時に当て我が為め国の為め大事なる事を少しも勘念がさるが智者にては候なり、仏のいみじきと申すは過去を勘念来をしり、三世を知しめすに過ぎて候御智慧はなし、設い仏にあらねども竜樹・天親・天台・伝教など申せし聖人賢人等は仏程こそなかりしかども三世の事を粗知しめされて

候しかば名をも未来まで流されて候き、所詮万法は己心に収まりて一塵もかけず九山八海も我が身に備わりて日月・衆星も己心にあり、然りといへども盲目の者の鏡に影を浮べるに見えず嬰兒の水火を怖れざるが如し、

外典の外道内典の小乗・權大乘等は皆己心の法を片端片端説きて候なり、然りといへども法華經の如く説かず、然れば經經に勝劣あり人人にも聖賢分れて候ぞ、法門多くなれば止め候い畢んぬ。

鎌倉より御下りそうそうの御隙に使者申す計りなし、其の上種種の物送り給候事悦び入つて候、日本は皆人の歎き候に日蓮が一類こそ歎きの中に悦び候へ国に候は蒙古の責はよも脱れ候はじなれども、国のために責られ候いし事は天も知しめして候は後生は必ずたすかりなんと悦び候に御辺こそ今生に蒙古国の恩を蒙らせ給い

て候へ此の事起らずば最明寺殿の十三年に当らせ給いては御かりは所領にては申す計りなし、北条六郎殿のやうに筑紫にや御坐なん、是は各各の御心のさからせ給つて候なり、人の料をあてるにはあらず、又一には法華經の御故にたすからせ給いて候いぬるかゆゆしき御僻事なり、是程の御悦びまいりても悦びまいらせ度く候へども人聞つつましく候いてとどめ候い畢んぬ。

乃時

日蓮 花押

西山殿御返事

三五〇

西山殿御返事

建治二年 五十五歳御作

1474p

青鳧五貫文給い候い畢んぬ、夫れ雪至つて白ければそむるにそめられず・漆至つてくるければしろくなる事なし、此れよ
りうつりやすきは人の心なり、善惡にそめられ候、真言・禪・念仏・宗等の邪惡の者にそめられぬれば必ず
地獄にをつ、法華經にそめられ奉れば必ず仏になる、經に云く「諸法実相」云云、又云く「若人不信乃至入阿鼻獄」云云、
いかにも御信心をば雪漆のごとくに御もち有るべく候、恐恐。

建治二年丙子

西山殿御返事

日蓮 花押

三五一

宝輕法重事

弘安二年五月

五十八歳御作

与西山入道

1474p

第 百本又二十本追給い畢んぬ、妙法蓮華經第七に云く「若し復人有つて七宝を以て三千大千世界に満てて仏及び大
菩薩・辟支仏・阿羅漢に供養せん、是の人の所得の功德も此の法華經の乃至一四句偈を受持する其の福の最も多きには
如かじ」云云、文句の十に「七宝を四聖に奉るは一偈を持つに如かず」と云うは法は是れ聖の師なり能生能養能成能栄法に
過ぎたるは莫し故に人は輕く法は重きなり」云云、記の十に云く「父母必ず四の護を以て子を護る
が如し、今発心は法に由るを生と為し始終随逐するを養と為し極果を滿ぜしむるを成と為し能く法界に応ずるを栄と
為す、四つ同じからずと雖も法を以て本と為す」云云、經並に天台・妙樂の心は一切衆生を供養せんと

阿羅漢を供養せんと乃至一切の仏を尽して七宝の財を三千大千世界にもりみてて供養せんよりは法華經を一偈或は受持し或は護持せんはすぐれたりと云云經に云く此の法華經の乃至一四句偈を受持する其の福の最も多きには如かず天台云く人は軽く法は重きなり妙樂云く四つ同じからずと雖も法を以て本と為す云云九界の一切衆生を仏に相對して此れをはかるに一切衆生のふくは一毛のかるく仏の御ふくは大山のをもきがごとし一切の仏の御ふくは梵天三鉢の衣のかるきがごとし法華經の一字の御ふくの重き事は大地のをもきがごとし人輕しと申すは人を人と申す法重しと申すは法華經なり夫れ法華已前の諸經並に諸論は仏の功德をほめて候仏のごとし此の法華經は經の功德をほめたり仏の父母のごとし華嚴經・大日經等の法華經に劣る事は一毛と大山と三鉢と大地とのごとし乃至法華經の最下の行者と華嚴眞言の最上の僧とくらぶれば帝釈と猴と師子と兎との勝劣なり而るをたみが王とののしればかならず命となる諸經の行者が法華經の行者に勝れたりと申せば必ず国もほろび地獄へ入り候なり。

但かたきのなき時はいつわりをろかにて候譬は將門・貞任も貞盛・賴義がなかりし時は国をしり妻子安穩なり云云敵なき時はつゆも空へぼり雨も地に下り逆風の時は雨も空へあがり日出の時はつゆも地にをちぬされば華嚴等の六宗は傳教なかりし時はつゆのごとし眞言も又かくのごとし強敵出現して法華經をもつて。

つよくせむるならば叡山の座主・東寺の小室等も日輪に露のあへるがごとしとをばしめすべし法華經は仏滅後二千二百余年にいまだ經のごとく説ききわめてひろむる人なし天台・伝教もしろしめさざるにはあらず時も来らず機もなかりしかばかききわめずしてをわらせ給へり日蓮が弟子とならむ人人はやすくしりぬべし。

一閻浮提の内に法華經の寿量品の釈迦仏の形像をかきつくれる堂塔いまだ候はず、いかでかあらわれさせ給わざるべきしげければとどめ候。

たけのこは百二十本法華經は二千余年にあらわれ候ぬ、布施はかるけれども、志重き故なり、当時はくわんのつと申し大宮づくりと申しかたがた民のいとまなし、御心ざしふかければ法もあらわれ候にや、きんきうきんげん 恐恐謹言。

五月十一日

にちれん 日蓮 かあう 花押

にしやま 西山殿御返事

三五一 西山殿御返事

弘安四年 六十歳御作

1467p

あまざけ一をけやまのいもところせうせう給了んぬ、梵網經と申す經には一紙・一草と申してかみ一枚くさひとつ大論と申するんにはつちのもちぬを仏にくやうせるもの閻浮提の王となるよしをとかれて候。

これはそれにはにるべくもなしそのつをそこにもすぎわかれたのむかたもなきあまのするが国西山と申すところより甲斐国のはきぬの山の中にをくられたり、人にすてられたるひじりの寒さにせめられていかに心ぐるしかるらんとをもひやらせ給いてをくられたるか、父母にをくれしよりこのかたがかるねんころの

事にあひて候事こそ候はね、せめての御心ざしに給うかとおぼえてなみだもかきあへ候はぬぞ、日蓮はわるき者にて候へども法華經はいがでかおろそかにおわすべき、ふくろはくさけれどもうつめる金はきよし池はきたなければちすしやうじやうなり、日蓮は日本第一のえせものなり、法華經は一切經にすぐれ給へる經な

り、心あらん人金をとらんとおぼさはふくろをすすめる事なかれ、蓮をあひせば池をにくむ事なかれ、わるくて仏になりたれば法華經の力あらはるべし、よつて臨終わるくば法華經の名をりなん、さるにては日蓮はわるくてもわるかるべしわるかるべし、おそひやうきんげん 恐恐謹言。

月 日 御 返 事

三三三

西山殿御返事

1477p

としごろ後生をばしめして御心ざしをはすれば名計り申し候、同行どもにあらあきこしめすべし、やすき事なれば智慧の入る事にあらず智慧の入る事にあらず、恐恐。

一月廿三日

西山殿御返事

日蓮

在御判

三五四

妙心尼御前御返事

建治元年八月

五十四歳御作

1477p

すずの御志送り給ひ候いんぬ、おさなき人の御ために御まほりさづけまいらせ候、この御まほりは法華經のうちのかんじん一切經のげんもくにて候、たとへば天には日月、地には大王・人には心・たからの中には如意宝珠のたまいえにははしらやうなる事にて候。

このまんだらを身にたまちぬれば王を武士のまほるがごとく子ををやのあいするがごとくいをの水をたのむがごとく草木のあめをねがごとく・とりの木をたのむがごとく・一切の仏神等のあつまり・まほり昼夜にかげのごとく・まほらせ給う法にて候、よくよく御信用あるべし、あなかしこあなかしこ、恐恐謹言。

八月二十五日

日蓮

花押

妙心尼御前御返事

ちまき 綜五把・第十本 千日ひとつ給い畢んぬ、いつもの事に候へども、ながあめふりてなつの日ながし、山はふかくみちしげければ、ふみわくる人も候はぬに、ほととぎすにつけての御ひとこありがたし、ありがたし。

さてはあつわらの事こんどをもつてをばしめせ、さきもそら事なり、かつのとは人のいぬしにつけてくはしくも、たづねずして此の御房をながしける事あさましとをばしてゆるさせ給いてのちはさせるとがもなく

てはいかんが、又あだせらるべき、すの人人の法華經の心にはあだめども、うへにそしらば、いかんがとをもひて事にかづけ、人をあだむほどに、がへてさきさきのそら事のあらわれ候ぞ、これはそらみげうそと申す事はみぬさきよりすいて候、さどの国にてもそらみげうそを三度までつくりて候しぞ、これにつけても上と国と

の御ためあはれなり、木のしたなるむしの木をくらひたうし、師子の中のむしの師子を食らいつしなふやうに守殿の御をんにて、すぐる人人が守殿の御威をかりて、一切の人人ををどしなやまし、わづらはし候うへ上の仰せとて法華經を失いて、国もやぶれ主をも失うて返つて、各々が身をほろぼさんあさましさよ、日蓮はいやしけれども

経は梵天・帝釈・日月・四天・天照太神・八幡大菩薩のまぼらせ給う御経なれば、法華經のかたをあだむ人人は、剣をのみ火を手ににぎるなるべし、これにつけても、いよいよ御信用のまさらせ給う事、たうとく候ぞ、たうとく候ぞ。

五月三日

日蓮 花押

窪尼御返事

三五六 窪尼御前御返事 弘安元年六月 五十七歳御作

1479p

すずの御供養送り給たまいあわぬ、大風の草をなびかしかづちの人ををどろかすやうに候、よの中にいかにいままで御しん
よふの候いけるふしぎさよ、ねふかければはかれず、いづみに玉あれば水たえずと申すやうに御信心しんじんのねのふかくいさぎ
よき玉の心のうちにわたらせ給たまうか、たうとしたうとし、おそ恐おそ恐おそ。

六月二十七日

日蓮 花押

くぼの尼御前御返事

三五七 妙心尼御前御返事 弘安元年八月 五十七歳御作

1479p

あわしかき二筆なすび一たま給たまい候あわぬ、入道殿の御所まご勞らうの事、唐土もろこしに黄帝こうてい、扁鵲へんじやくと申せしくすしあり天竺てんじくに持水
耆婆きばと申せしくすしあり、これらはその世のたから末代まつだいのくすしの師なり、仏と申せし人はこれには
にるべくもなきいみじくすしなり、この仏不死の薬をとかせ給たまへり、今の妙法蓮華經の五字ごじ是なり、しかもこの五字をば
閻浮提人病之良薬えんぶだいじんびやうのりやうやくとこそとかれて候へ。

入道殿は閻浮提の内日本国の人なり、しかも身に病をつけられて候病之良薬の經文きやうもん顯然けんねんなり、其の上蓮華經は第一
の薬なり、はるり王と申せし悪王あくわう仏のしたしき女人にょにん五百余人を殺して候いしに、仏阿難を靈山りやうぜんにつかはして青蓮華をとり
よせて身にふれさせ給たまいしかばよみかへりて七日ありて、利天とうりてんに生れにき、蓮華れんげと申す花はかか
るいみじき徳ある花にて候あは仏妙法みよほうにたとたま給たまへり、又人の死ぬる事はやまひにはよらず、當時とうじのゆきつしまのものは
病なけれども、みなみなむいちじ二人に一時にうちころされぬ病あれば死ぬべしといふ事不定なり、又

このやまひは仏の御はからひかそのゆへは 浄名經 涅槃經には病ある人仏になるべきよしとかれて候、病によりて道心
はをこり候なり、又一切の病の中には五逆罪と一闡提と謗法をこそおもき病とは仏はいたませ給今日本
国の人は一人もなく極大重病あり所謂大謗法の重病なり今の禅宗 念仏宗・律宗真言師なりこれらはあまりに病おも
きゆへに我が身にもおぼす人もしらぬ病なりこの病のこつずるゆへに四海のつわものただいま来りなば王臣万民みなしづみ
なんこれをいきてみ候はんまなこそあたあたしく候へ

入道殿は今生にはいたく法華經を御信用ありとは見え候はねども 過去の宿習のゆへもよをしによりてこのなが病
にしづみ日日夜夜に道心ひまなし、今生につくりをかせ給ひし小罪はずでにき候いぬらん、謗法の大悪は又法華經に帰
しめるゆへにききせ給つべしただいまに靈山にまいらせ給いなば日いでて十方をみるが・

ごとくうれしく、とくしにぬるものかなとうちよろこび給い候はんずらん、中有の道にいかなる事もいできたり候はば日蓮
がでしなりとなのらせ給へわずかの日本国なれどもさがみ殿のうちのものと申すをばさうなく

おそる事候、日蓮は日本第一のふたつの法師ただし法華經を信じ候事は一闡浮提第一の聖人なり、其の名は十方の
浄土にきこえぬ、定めて天地もしりぬらん、日蓮が弟子となのらせ給はばいかなる悪鬼なりともよもしらぬよしは申さじ
とおぼすべし、さては度度の御心ざし申すばかりなし、 恐恐謹言。

さるは木をたのむ魚は水をたのむ 女人はおとこをたのむ わかれのをしきゆへにかみをそりそでをすみにそめぬ、いか
でか十方の仏もあはれませ給はざるべき、法華經もすてさせ給つべきとたのませ給え、たのませ給え。

八月十六日

日蓮 花押

妙心尼御前御返事

御供養の物数のままに慥に給い候、当時は五月の比おひにて民のいとまなし其の上宮の造営にて候なり、かかる暇なき時・山中の有り様思ひやらせ給いて送りたびて候事御志殊にふかし。

阿育大王と申せし王はこの天の日のめぐらせ給う一閻浮提を大体しろしめされ候いし王なり、此の王は昔徳勝とて五になる童にて候いしが釈迦仏にすなのもちゐをまいらせたりしゆへにかかる大王と生れさせ給う、此の童はさしも心ざしなしたわふれなるやうにてこそ候いしかども仏のめでたくをはすればわづかの事もものとなり

てかかるめでたき事候、まして法華経は仏にまさらせ給う事星と月とともしびと日とのごとし、又御心ざしもすぐれて候。

されば故入道殿も仏にならせ給うべし、又一人をはするひめ御前もいのちもながくさひわひもありてさる人のむすめなりときこえさせ給うべし、当てもおさなければども母をかけてすこす女人なれば父の後世をもたすくべし。

から国にせいしと申せし女人はわかなを山につみてをひたるはわをやしなひき、天あはれみて越王と申す大王のかりせさせ給いしがみつけてきさきとなりき、これも又かくのごとしをやをやしなふ女人なれば天もまほらせ給うらん仏もあはれみ候らん、一切の善根の中に孝養父母は第一にて候なれば、まして法華経にてをはす、金のつつわものにきよき水を入れたるがごとくすこしももるべからず候、めでたしめでたし、恐恐謹言。

五月四日

日蓮 花押

くほの尼御前御返事

このなかの御くやうのものはどころどころ略して法門を書写し畢んぬ。

三三九

妙心尼御前御返事

弘安二年十一月 五十八歳御作

1482p

御そうぜんれう送り給い^{たま}了^あぬ、すでに故入道殿^{にぎみちのどの}のかくるる日にて、おはしけるか、とかうまぎれ候いけるほどにうちわすれて候いけるなり、よもそれにはわすれ給は^{たま}じ。

蘇武^{そぶ}と申せし男は漢王^{かんわう}の御使^{おんつかい}に胡国^{ここく}と申す国^{こく}に入りて十九年めもおとこをはなれ、おとこもわするる事なし、あまりのこひしさにおとこの衣を秋^{あき}ごとにきぬたのうへにてうちけるがおもひやとをりてゆきにけん、おとこのみみにきこたり、ちんしといひしものはめ、おとこはなれけるに、かがみをわりてひとつづつとりにけり、わするる時はとりとび去りけり、さうしといふしものはおとこをこひてはかにいたりて木となりぬ、相思樹^{そうしじゆ}

と申すはこの木なり、大唐^{たいとう}へわたるにしが、明神^{めいじん}と申す神^{かみ}をはす、おとこのもろこしへゆきしをこひて神となれり、しまのすがたおうなになたり、まつらさよめといふ是^{これ}なり、いにしよりいまにいたるまでをや、このわかれ主従^{しゆじゆう}のわかれ、いづれかつらからざる、されども、おとこをんなのわかれほど、たとげなかりけるはなし、過去^{かこ}遠遠^{えんえん}より女の身となりしが、このおとこ、娑婆^{しは}最後のぜんちしきなりけり。

ちりしはなをちしこのみも、さきむすぶ、いかにこ人の返らざるらむ。

いぞもつぐへし、もつらき月日かな、おもひはいつもはれぬものゆへ。

ほけきよう だいもく
法華經の題目をとなまいらせてまいらせ候。

十一月二日

にちれん
日蓮
かおう
花押

みようしんあまごぜんごへんじ
妙心尼御前御返事

三六〇
あまごぜんごへんじ
窪尼御前御返事
じつあん
弘安二年十二月
五十八歳御作

1483p

十字五十まいくしがき一れんあめをけ一送り給い^{たま}了^あんぬ御心ざしさきざきかきつくしてふでもつひゆびもたたぬ
さんぜんだいせんせかい
三千大千世界に七日ふる雨のかずはがずうくしてん^{じゅうほうせかい}十方世界の大地のちりは知る人もありなん^{ほけきよう}法華經の一字供養の
くどく
功德は知りがたしとこそ仏はとかせ給^{たま}いて候へ此れをもつて御心あるべし^こ、^{きようきようきんげん}恐恐謹言。
十二月二十七日

にちれん
日蓮
かおう
花押

あまごぜんごへんじ
くぼの尼御前御返事

三六一
みようしんあまごぜんごへんじ
妙心尼御前御返事
じつあん
弘安三年五月
五十九歳御作

1483p

すずのものを給^{たま}いて候、たつじはのう時にて人のいとまなき時^{もつ}がやうにくさぐさのものどもをくり給^{たま}いて候事いかにも
申すばかりなく候、これもひとへに故人^{じんご}入道殿の御わかれのじのびがたきに後世^{うごせ}の御ためにてこそ候らんめ、なんころにこそ
をとぶらはせ給^{たま}い候は^いくそばくうれしくおはしますらん、とふ人もなき草むら

に露しげきやうにてさばせかいにとどめをきしをさなきものなどのゆくきかまほし。

あの蘇武が胡国に十九年ふるさとの妻と子とのひしさに雁の足につけしふみ、安部の中麻呂が漢土にて日本へかされざりし時・東にいでし月をみてかのかすがの月よとながめしも身にあたりてこそおはすらめ。

しかるに法華經の題目をつねはとなさせ給へ此の妙の文じ御つかひに变ぜさせ給い或は文殊師利菩薩 或は普賢菩薩 或は上行菩薩 或は不輕菩薩等とならせ給うなり、譬えばちんしがかがみのとりのつねにつげしがこ

とく蘇武がめのきぬたのこえのきこえしがこくさばせかいの事を冥途につげさせ給うらん、又妙の文字は花のこのみとなるがごとく半月の満月となるがごとく变じて仏とならせ給う文字なり。

されば經に云く「能く此の經を持つは則ち仏身を持つなり」と、天台大師の云く「一文文是れ真仏なり」等云、妙の文字は三十二相八十種好円備せさせ給う釈迦如来にておはしますを我等が眼つたなくして文字とはみまいらせ候なり、譬はちすの子の池の中に生いて候がやうに候はちすの候をとしよりて候人は眼くらくし

てみず、よるはかげの候をやみにみざるがごとし、されども此の妙の字は仏にておはし候なり、又此の妙の文字は月なり日なり星なりかがみなり衣なり食なり花なり大地なり大海なり、一切の功德を合せて妙の文字とならせ給う、又は如意宝珠のたまなり、かくのごとくしらせ給うべし、くはしくは又又申すべし。

五月四日

日連 花押

はわき殿申させ給へ

三六二 窪尼御前御返事 弘安三年六月 五十九歳御作

1485p

仏の御弟子の中にありちと申せし人はくぼん王の御子いえにたからをみてはおはしき、のちに仏の御でしとなりては
天眼第一のありちとて三千大千世界を御覧ありし人、法華經の座にては普明如来とならせ給う、そのさきのよの事をた
づねればひえのはんを辟支仏と申す仏の弟子にくやうせしゆなり、いまの比丘尼はあわのわさめ山中にをくりて法華經
にくやうしまいらせ給う、いかでか仏にならせ給はざるべき、恐恐謹言。

六月二十七日

日蓮 花押

くぼの尼御前御返事

三六三 窪尼御前御返事 弘安四年十二月 六十歳御作

1485p

しなじなのものをくり給て候。

善根と申すは大なるによらず又ちいさきにもよらず、国により人により時によりやうやうにかわりて候、譬はくそを
ほしてつきくだきふるいてせんだんの木につくり又女人天女仏につくりまいらせて候へども火をつけてやき候はぢの香な
しくそくさし、そのやうにものをころしめずみをしてそのはつををとりて功德善根をして候へどもがへりて悪となる。

須達長者と申せし人は月氏第一の長者ぎをん精舎をつくりて仏を入れまいらせたりしかども彼の寺焼けてあとなし、
この長者もといををころしてあきな今長者となりしゆへにこの寺つゐにうせにき、今の人人の善根も又かくのごとく大

なるやうなれどもあるひはいくさをして所領しやうりやうを給あ或はゆなく民をわづらはしてだからをまうけて善根ぜんこんをなす、此等
は大なる仏事ぶつじとみゆれども仏にもならざる上其その人人ひとひとあともなくなる事なり。

又人をも・わづらはさず我が心もなをしく我とはげみて善根ぜんこんをして候も仏にならぬ事もあり、いはくよきたねをあしき
田にうえぬればだねだにもなき上かへりて損となる、まことの心なれども供養くやうせらるる人だにもあしければ功德くどくとなら
ず、かへりて悪道あくだうにおつる事候。

此これは日蓮にぢれんを御くやうは候はず法華經ほけきやうの御くやうなれば釈迦しゃか仏ぶつ・多宝たほう仏ぶつ・十方じふぱうの諸仏しよぶつに此の功德くどくはまかせまいらせ候、
抑そも今年の事は申しふりて候上とうじ當時とうじはとしのさむき事生れて已来このかたいまだおぼへ候わず、ゆきなんどのふりつもりて候事おび
ただし、心ざしある人もとぶらひがたし、御をとづれをばろげの御心おんこころざしにあらざるか、恐恐きき謹言きんげん。

十二月二十七日

日蓮にぢれん 花押かおづ

くぼの尼御前御返事あまにぜんごへんじ

三六四 三沢御房御返事ごほうごへんじ 文永十二年 五十四歳御作 与三沢小次郎 1468p

佐渡さどの国の行者ぎやうぎ数多此あまたの所まで下向げかうゆへに今の法門ほつもん説き聞かせ候えば未来みらいまでの仏種ぶつしゆになる事こと是れ皆みな釈尊しゃくそんの法恩ほふおんあり
がたし、越後えちごにて此の歌詠かぎじ候ゆ書き送り候なり。

おのづからよこしまに降雨こしあめはあらじ風こそ夜のをつつらめ。

二十一日

かすがすがずるがの人みな同じ御心と申させ給い候へ

柑子こじ一百ひゃく・ぶぶのりのりををご等ごとうの生なまの物はるばると・わざわざ山中やまなかへへくり給たまいて候う、ならびにうづうづぶぶさの尾おぜんの御ご

こそで一給たまい候ういい了あんぬ。

さてはかたがたのをほせくはしくみほとき候。

抑おさ仏法ぶつぽうををかくする者は大地微塵だいちみじんよりをほけれども

まことに仏になる人は爪の上の土よりもすくなしと・大覺だいかく世尊せそん・

ねはんきよう

涅槃經ねはんきようにたしかに・とかせ給たまいて候ういしを、日蓮にちれんみまいらせ候ていかなればかくわ・かたかるむと・がんそんが候ういしほどに・

げにも・さならむとをもつ事候ふつこう、仏法ぶつぽうをばかくすれども・或あるは我が心のをろかなるにより・或あるはたとひ智慧ちえはがしきやうなれども師によりて我が心のまがるをしらず、仏教ぶつこうをなをしくならひうる事かた

し、たとひ明師めいし並じに実經じつきように値あい奉たてまつりて正法しょうぽうをへたる人なれども生死しじをいで仏にならむとする時には・がならず影の身にそうがごとく・雨に雲のあるがごとく・三障四魔さんしようしまと申もつして七の大事出現だいじしゆげんす、設たとひ・からくして六はすぐれども第七にやぶられ

ぬれば仏になる事かたし、其その六は且しばらくをく第七の大難だいなは天子魔てんじまと申もつす物なり、設たとい末代まうだいの凡夫ぼんぶ・二代聖教いちだいにしきょうの御心ごしんをさとり・摩訶止觀まかしかんと申もつす大事だいじの御文ごぶんの心を心えて仏になるべきになり候ういぬれば第六天だいりくくてんの

魔王まおう・此このの事ことを見て驚おどきて云いく、あらあさましや此このの者もの・此このの国くにに跡あとを止とどめならば・がれが我が身の生死しじをいつるかは・さてを

きぬ・又また人を導みちくべし、又また此このの国土こくどををさへとりて我が土を浄土じやうどとなす、いかながせんとて欲ほ・色さんがい・無色むしきの三界さんがいの一切いっさいの眷属けんぞくををもよをし仰おほせ下くだして云いく、各各おののつつに随したがつて・がの行者ぎやうじやをなやましてみよそ

れにかなわすばがれが弟子だんな並に国土の人の心の内に入りかわりてあるひはいさめ或はをどしてみよそれに叶は
ずば我みづからうちくだりて国主の身心に入りかわりてをどして見むにいかでかとどめざるべきとせんぎし候なり。

日蓮さきよりかかるべしとみほごき候いて末代の凡夫の今生に仏になる事は大事にて候いけり釈迦仏の仏にならせ
給いし事を経にあらたて候に第六天の魔王のいたしける大難いかにも忍ぶべしともみ候はず候、提婆達多、
阿闍世王の悪事はひとに第六天の魔王のたばかりとこそみて候へまして如来現在、猶多怨嫉、況滅度後と申して大覺
世尊の御時の御難だにも凡夫の身日蓮にかやうなる者は片時一日も忍びがたかるべし、

まして五十余年が間の種種の大難をや、まして末代には此等は百千万億倍すぐく候なる大難をばいかでか忍び候べきと
心に存して候いしほどに、聖人は未萌を知ると申して三世の中に未来の事を知るをまことの聖人とは申すなり、而るに
日蓮は聖人にあらざれども日本国の今の代にあたりて此の国亡亡たるべき事をかねて知りて

候いしに此れこそ仏のとかせ給いて候況滅度後の経文にあたりて候へ此れを申しいだすならば仏の指させ給いて候未来
の法華經の行者なり、知りて而かも申さずば世世生生の問をうしことどもり生ん上、教主釈尊の大怨敵其の国の国主
の大讎敵、他人にあらず、後生は又無間・大城の人此れなりとかんがへみて、或は衣食にせめられ、或は父母兄弟、
師匠同行にもいさめられ、或は国主・万民にもをどされしにすこしもひるむ心あるならば一度に

申し出ださじとどしごろひごろ心をいましめ候いしが、抑過去遠劫より定めて法華經にも値い奉り菩提心もをこしけ
ん、なれども設い一難二難には忍びけれども大難次第につぎ来りければ退しけるにや、今度いかなる大難にも退せぬ心
ならば申し出すべしとて申し出して候いしかば、経文にたがわず此の度の大難にはあいて候いしぞかし。

今は一二つなり、いかなる大難にもこらへんと我が身に当てて心みて候は不審なきゆへに此の山林には栖み候なり、各各は又たといずてさせ給うとも一日かたときも我が身命をたすけし人なれば、いかでか他人にはさせ給うべき、本より我、一人いかにもなるべし我いかにしなるとも心に退転なくして仏になるならば。

とのばらをば導きたてまつらむとやくそく申して候いき、各各は日蓮ほとも仏法をば知らせ給わざる上俗なり、所領あり・妻子あり・所従あり・いかにも叶いがたかるべし、只いつわりをろかにてをはせかしと申し候いきこそ候けれ、なに事につけてかずてまいらせ候べきゆめゆめをろかのぎ候べからず。

又法門の事はさどの国ながされ候いし已前の法門はただ仏の爾前の経とをばしめせ、此の国の国主我が代をもたもつべくば真言師等にも召し合せ給はんずらむ、爾の時まことの大事をば申すべし、弟子等にもなひなひ申すならばひろうしてかれらしりなんず、さらばよもあわじとをもひて各各にも申さざりしなり。

而るに去る文永八年九月十二日の夜たつの口にて頸をはねられんとせし時より、のちふびんなり、我につきたりし者どもにまことの事をいわざりけるとをもつてさどの国より弟子どもに内内申す法門あり、此れは仏より後迦葉・阿難・竜樹・天親・天台・妙楽・伝教・義真等の大論師・大師師は知りてしかも御心の中に秘せさせ給いし、口より外には出し給はず、其の故は仏制して云く「我が滅後・末法に入らずば此の大法いつべからずことありしゆへなり、

日蓮は其の御使にはあらざれども其の時剋にあたる上・存外に此の法門をさとりぬれば、聖人の出でさせ給うまでまづ序分にあら申すなり、而るに此の法門出現せば正法・像法に論師・大師の申せし法門は皆日出で

て後の星の光・巧匠の後に拙を知るなるべし、此の時には正像の寺堂の佛像・僧等の靈験は皆きへつて但此の大法のみ一閻浮提に流布すべしとみへ候、各各はかかる法門にちぎり有る人なれば、だのもしとをばすべし。

又つづさの御事は御としよらせ給いて御わたりありしいたわしくをもひまいらせ候いしかども、つづがみへ

まいりてあるついでと候しかば、けさんに入るならば、定めてつみふかるべし、其の故は神は所従なり、法華経は主君なり、所従のついでに主君のけさんは世間にもをそれ候、其の上尼の御身になり給いてはまづ仏をさきとすべし、かたがたの御とがありしかば、けさんせず候、此の又尼ごぜん一人にはかぎらず、其の外の人人もしもべのゆのついでと申す者をあまたをひかへて候、尼ごぜんはをやのごとくの御としなり、御なげきいたわしく候いかども、此の義をしらせまいせんためなり。

又このはをとしかのけさんの後そらうとにてや候いけん御そらうと申せしかば、人をつかわしてきかんと申せしに、此の御房たちの申せしはそれはさる事に候へども、人をつかわしたらばいふせくやをもはれ候はんずらんと申せしかば、世間のならひはさもやあるらむ、げんに御心ざしまめなる上、御所勞ならば御使も有りなんとをもひしかども、御使もなかりしかば、いつわりをろかにてをぼつがなく候いける上、無常は常のならひなれ

ども、そごとしは世間はつにすぎてみみまいらすべしともをぼす、一ひしくこそ候いけるに御をとづれあるつれしとも申す計りなし、尼ごぜんにもこのよしをつぶつぶとかたり申させ給い候へ、法門の事ごまごまとがきつ申すべく候へども、事ひさしくなり候はとどめ候。

ただし、禅宗と念仏宗と律宗等の事は、少前にも申して候、真言宗がことに此の国とたつどとをばほろぼして候ぞ、善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・弘法大師・慈覚大師・智証大師、此の六人が大日の三部経と法華経との優劣に迷惑せしのみならず、三三蔵事をば天竺によせて両界をつくり、だし狂惑しけるを三大師うちぬかれて

日本へならひわたり、国主並に万民につたへ、漢土の玄宗皇帝も代をほろぼし、日本国もやうやくをとる、今八幡大菩薩の百王のちかいもやぶれて、八十二代隱岐の法王代を東にとられ給いしは、ひとへに三大師の大僧等がいのりしゆへに還著於本人して候、関東は此の惡法惡人を対治せしゆへに十八代をつぎて百王にて候べく候いける

を、又かの悪法の者どもを御帰依有るゆへに一国には主なければ・梵釈日月四天の御計いとして他国にをほせつけを
として御らむあり、又法華經の行者をつかわして御いさめあるを・あやめずして彼の法師等に心をあわせて世間出世の政
道をやぶり、法にすぎて法華經の御かたきにならせ給う、すでに時すぎぬれば此の国やぶれなんとす。

やくびやうはずでにいへんにせんふせわまたしるしなり、あさましあさまし。

二月二十三日 日蓮 花押

みさわどの

三六六 十字御書

1491p

十字一百まいがしひと給いんぬ、正月の一日は日のはじめ月の始めとしのはじめ春の始め此れをもてなす人は月の西
より東をさしてみつがごとく日の東より西へわたりてあきらかなるがごとく・ともまさり人にもあいせられ候なり。

抑地獄と仏とはいづれの所に候ぞとたづね候は或は地の下と申す經文もあり或は西方等と申す經も候、しかれど
も委細にたづね候は我等が五尺の身の内に候とみへ候、さもやをば候事は我等が心の内に父をあなづり母ををろかに
する人は地獄其の人の心の内に候、譬は蓮のたねの中に花と葉とのみゆるがごとし、仏と

申す事も我等の心の内にをはします・譬は石の中に火あり珠の中に財のあるがごとし、我等凡夫はまづげのちかきと
虚空のとをきとは見候事なし、我等が心の内に仏をはしましけるを知り候はざりけるぞ、ただし疑ある

事は我等は父母の精血變じて人となりて候は三毒の根本婬欲の源なり、いかでか仏はわたらせ給うべきと疑い候へども又うちかへしうちかへ案じ候は其のゆわれもやとをば候、蓮はきよきもの泥よりいでたり、

せんだんはかつばしき物大地よりをいたり、さくらはもしろき物・木の中よりさきいつ、やうきひは見めよきもの下女のはらよりむまれたり、月は山よりいでて山をてらす、わざわいは口より出でて身をやぶるさいわいは心よりいでて我をかざる。

今正月の始に法華經をくやうしまいらせんとをばしめす御心は木より花のさき池より蓮のつばみ雪山のせんだんのひらけ月の始めて出るなるべし、今日本国の法華經をかたきとしてわざわいを千里の外よりまねき

よせぬ、此れをもつてをもうに今又法華經を信ずる人はさいわいを万里の外よりあつむべし、影は体より生ずるもの法華經をかたきとする人の国は体にかげのそつがごとく・わざわい来るべし、法華經を信ずる人はせんだんにかをばしさのそなえたるがごとし、又又申し候べし。

正月五日

日蓮 在御判

をもんすどの女房御返事

御所^{たまわ}の由承^{たまわ}り候はまことにてや候らん、世間^{せけん}の定なき事は病なき人も留^{とどま}りがたき事に候はまして病あらん人は申^{もつ}すにおよばず、但心あらん人は後世^{うしろよ}をこそ思いさだむべきにて候へ、又後世^{うしろよ}を思い定めん事は私^{ひそか}にはかなひがたく候、一切衆生^{しゆじやう}の本師^{ほんし}にてまします釈尊^{しやくそん}の教こそ本にはなり候べけれ。

しかるに仏の教又まちまちなり人の心の不定なる故か。

しかれども釈尊^{しやくそん}の説教五十年にはすぎず、さき四十余年の間の法門^{ほふもん}に華嚴經^{けげんぎやう}には心仏及衆生^{しんぶつぎやうじやう}、是三無差別^{これさんむさべつ}、阿含經^{あこんぎやう}には苦空無常^{むじやくむじやう}、無我大集經^{むがだいしきぎやう}には染淨融通^{せんじやくゆうずつ}、大品經^{だいほん}には混同無二^{こんどうむに}、雙觀經^{そうかんぎやう}、觀經^{かんぎやう}、阿彌陀經^{あみた}等には往生極樂^{おうじやくごくらく}、此等の説教^{せつぎやう}は皆正法^{みなしやうほふ}、像法^{ざうほふ}、末法^{まほふ}の一切衆生^{いっさいしゆじやう}をすくはんがためにこそとかればべりけんめ、しかれども仏いかながおぼしけん無量義經^{むりやうぎぎやう}に「方便^{ほふべん}の力を以て四十余年には未だ真実^{しんじつ}を顕さず」と説かれて先四十余年の往生極樂等の一切經^{いっさいぎやう}は親の先判のごとく、くひかへされて「無量無辺不可思議^{むりやうむへんふかしぎ}、阿僧祇劫^{あそぎこ}を過ぐるとも終に無上菩提^{むじやうぼだい}を成ずることを得ず」といぬきらせ給いて法華經^{ほけきやう}の方便品^{ほふべん}に重ねて「正直^{ちうじき}に方便^{ほふべん}を捨て但無上の道を説く」と説かせ給へり、

方便^{ほふべん}をすてよとかれてはべるは四十余年の念仏等^{ねんぶつ}をすてよとかれて候、かうたしかにくひかへして実義^{じつぎ}を定むるには「世尊^{せそん}の法は久くして後要^{のちかならずま}当^{たま}に真実^{しんじつ}を説くべし」といひ「久しく斯の要を黙^{もく}して務^{いそ}いで速^{すみ}かに説かず」と等と定められしかば、多宝仏^{たはうぶつ}は大地^{だいち}よりわきいでさせ給いてこの事真実^{しんじつ}なりと証誠^{しやうじやう}をくわへ十方^{じふぱう}の諸仏^{しよぶつ}は八方^{はふぱう}に

あつまりて広長舌相^{くわうちやうぜしやう}を大梵天宮^{ほんてん}につけさせ給ふ、二処三会二界八番^{にせんごんぎやう}の衆生^{しゆじやう}一人もなくこれをみ候いき、此等の文^こをみ候に仏教^{ぶつぎやう}を信ぜぬ悪人外道^{あくにんげどう}はさておき候いぬ、仏教^{ぶつぎやう}の中に入り候ても爾前^{にぜん}・權教^{ごんぎやう}・念仏等^{ねんぶつ}を厚く信じて十遍^{じふへん}・百遍^{ひゃくへん}・千遍^{せんへん}・一万乃至^{いっまんないし}・六万等を一日にはげみて十年・二十年のあひだにも南無妙法蓮華經^{なむみやうほうれんげきやう}と一遍^{いっぺん}だにも

申さぬ人人は先判に付いて後判をもちめ者にては候まじきか、此等は仏説を信じたりげには我身も人も思いたりげに候へども仏説の如くならば不孝の者なり。

故に法華經の第二に云く「今、此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり而も今、此の処は諸の患難多し唯我一人のみ能く救護を為す復教詔すと雖も而も信受せず」等云、此の文の心は釈迦如来は我等衆生には親なり師なり主なり、我等衆生のためには阿弥陀仏薬師、仏等は主にてはましませども親と師とはましまさず、ひとり三徳をかねて恩ふかき仏は釈迦一仏にかぎりたてまつる、親も親にこそよれ釈尊ほどの親師

も師にこそよれ主も主にこそよれ釈尊ほどの師主はありがたくこそはべれ、この親と師と主との仰せをそむかんもの天神・地祇にすてられたてまつらざらんや、不孝第一の者なり故に雖復教詔而不信受等と説かれたり、たとひ爾前の經につかせ給いて百万億劫行ぜさせ給うとも法華經を一遍も南無妙法蓮華經と申させ給はずば不孝の人たる故に三世十方の聖衆にもすてられ天神・地祇にもあだまれ給はんかは一。

たとひ五逆・十惡無量の惡をつくれる人も根だにも利なれば得道なる事これあり、提婆達多・鳶崛摩羅等これなり、たとひ根鈍なれども罪なければ得道なる事これあり須利槃特等是なり、我等衆生は根の鈍なる事すりはんどくにもすぎ物のいらかたちをわきまざる事羊目のごとし、貪瞋癡きわめてあつく十惡は日日にをかし五逆

をばおかさざれども五逆に似たる罪又日日におかす、又十惡・五逆にすぎたる謗法は人毎にこれあり、させる語を以て法華經を謗する人はすくなけれども人ごとに法華經をばもちゐず、又もちゐたるやうなれども念仏等のやうには信心ふかからず、信心ふかきものも法華經のかたきをばせめず、いかなる大善をつくり法華經を干

万部読み書写し一念三千の觀道を得たる人なりとも法華經の敵をだにもせめざれば得道ありがたし、たとひ朝につかふる人の十年二十年の奉公あれども君の敵をしりながら奏もせず私にもあだまらずば奉公皆つせて還つ

てとがに行はれんが如し、当世の人人は謗法の者としろしめすべし是二。

仏入滅の次の日より千年をば正法と申して持戒の人多く得道の人これあり。正法千年の後は像法千年なり破戒の者は多く得道すくなし、像法千年の後は末法万年なり持戒もなし破戒もなし無戒の者のみ国に充滿せん、而も濁世と申してみだれたる世なり、清世と申してすめる世には直繩のまがれる木をけづらするやうに非をすて是を用うるなり、正像より五濁やうやういできたりて末法になり候は五濁さかりにすぎて、大風の大波を起し

て岸を打つのみならず又波と波とをうつなり、見濁と申すは正像やうやうすぎぬれば、わづかの邪法の一つをつたてて無量の正法をやぶり世間の罪にて惡道におつるものよりも佛法を以て惡道に墮つるもの多しとみはんべり。

しかるに当世は正像二千年すぎて末法に入つて二百余年、見濁さかりにして惡よりも善根にて多く惡道に墮つべき時刻なり、惡は愚癡の人も惡とすればしたがはぬ辺もあり火を水を以てけすが如し、善は但善と思ふほどに小善に付いて大惡の起る事をしらず、所以に伝教慈覺等の聖跡ありずたればるれども念仏堂にあらずと

いひてすてをきてそのかたはらにあたらしく念仏堂をつくり彼の寄進の田畠をとりて念仏堂によす、此等は像法決疑經の文の如くならば功德すくなしとみはんべり、これらをもつてするべし善なれども大善をやぶる小善は惡道に墮つるなるべし、今の世は末法のはじめなり、小乘經の機・權大乘經の機・皆つせはて唯實大乘經の

機のみあり、小船には大石をのせず惡人愚者は大石のごとし、小乘經並に權大乘經・念仏等は小船なり、大惡瘡の湯治等は病・大なれば小治およばず、末代濁世の我等には念仏等はたとひ冬田を作るが如し時があはざるなり是三知。

国をしるべし国に隨つて人の心不定なり、たとひ江南の橘の淮北につつされてからたちとなる、心なき

草木すらところによる、まして心あらんもの何ぞ所によらざらん、されば玄奘三蔵の西域と申す文に天竺の国を多く記したるに国の習として不孝なる国もあり孝の心ある国もあり瞋恚のさかなる国もあり愚癡の多き国もあり、一向に小乗を用る国もあり一向大乘を用る国もあり大小兼学する国もありと見侍り、又一向に殺生の国一向に偷盗の国又穀の多き国又粟等の多き国不定あり、抑日本国はいかなる教を習つてか生死

を離るべき国ぞと勘えたるに法華經に云く「如来の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめ断絶せざらしむ」等云云、此の文の心は法華經は南閻浮提の人のための有縁の經なり、弥勒菩薩の云く「東方に小国有り唯だ大機のみ有り」等云云、此の論の文の如きは閻浮提の内にも東の小国に大乘經の機あるか、肇公の記に云く「茲の典

は東北の小国に有縁なり」等云云、法華經は東北の国に縁ありとかかれたり、安然和尚の云く「我が日本国皆大乘を信ず」等云云、慧心の一乗要決に云く「日本一州円機純一」等云云、釈迦如来弥勒菩薩須梨耶蘇摩三蔵羅什三蔵僧肇法師安然和尚慧心の先德等の心ならば日本国は純に法華經の機なり、一句一偈なりとも行ぜば必ず得道なるべし有縁の法なるが故なり、たとへばろかねを磁石のすつが如し方諸の水をまねくにいたり、念仏

等の余善は無縁の国なり磁石のかねをすわす方諸の水をまねかざるが如し、故に安然の釈に云く「如実乘に非ずんば恐らくは自他を欺かん」等云云、此の釈の心は日本国の人に法華經にてなき法をさずくるもの我が身をもあざむき人をもあざむく者と見えたり、されば法は必ず国をかんがみて弘むべし、彼の国によりし法なれば必ず此の国にもよかるべしとは思つべからず是四。

又仏法流布の国においても前後を勘うべし、仏法を弘むる習い必ずさきに弘めける法の様を知るべきなり、例せば病人に藥をあたるにはさきに服したる藥の様を知るべし、藥と藥とがゆき合いてあらそひをなし人をそんずる事あり、仏法と仏法とがゆき合いてあらそひをなし人を損ずる事のあるなり、さきに外道の法弘まれる

国ならば仏法をもつてこれをやぶるべし、仏の印度にいでて外道をやぶり、まとうかぢくほつらんの震旦に来て道士を
せめ上宮太子、和国に生れて守屋をきりしが如し、仏教においても小乗の弘まれる国をば大乘経をもつてやぶるべし、
無著菩薩の世親の小乗をやぶりしが如し、権大乘の弘まれる国をば実大乘をもつてこれを

やぶるべし、天台智者大師の南三北七をやぶりしが如し、而るに日本国は天台眞言の二宗のひろまりて今に四百余歳、
比丘比丘尼、うばそくうばひの四衆、皆法華経の機と定りぬ、善人悪人、有智無智、皆五十展転の功德をそなふ、たと
ひは崑崙山に石なく蓬萊山に毒なきが如し、而るを此の五十余年に法然といふ大謗法の者いでき

たりて一切衆生をすかして珠に似たる石をもつて珠を投させ石をとらせたるなり、止観の五に云く「瓦礫を賣んで明珠
なりと申す」は是なり、一切衆生石をにぎりて珠とおもふ、念仏を申して法華経をすてたる是なり、此の事をば申せば
還つてはらをたち法華経の行者をのりてことに無間の業をますなり、是五。

但とのはこのぎをきこしめて念仏をすて法華経にならせ給いてはべりしが、定めてかゝて念仏者にぞならせ給いてはべ
るらん、法華経をすてて念仏者とならせ給はんは峯の石の谷へころび空の雨の地におつと、おぼせ大阿鼻地獄疑なし、
大通結縁の者の三千塵点劫を久遠下種の者の五百塵点を經し事、大悪知識にあいて法華

経をすてて念仏等の権教につつりし故なり、一家の人人念仏者にてましましげに候いしかばさだめて念仏をぞすすめまい
らせ給い候らん、我が信じたる事なればそれも道理にては候へとも悪魔の法然が一類にたばらかさ

れたる人人なりとおぼして大信心を起し御用いあるべからず、大悪魔は責き僧となり父母兄弟等につきて人の後世をば
障るなり、いかに申すとも法華経をすてよとたばかりげに候はんをば御用いあるべからず、まづ御きやつさくあるべし。

念仏実に往生すべき証文つよくば此の十二年が間念仏者無間地獄と申すをばいかなるところへ申しだして

もつめずして候べきか、よくよくゆはき事なり、法然・善導等ががきをきて候ほどの法門は日蓮らは十七八の時よりしりて候いき、このごろの人の申すもこれにすぎず、結句は法門はかなわずしてよせてたたかひにし候なり、念仏者は数千万かたうど多く候なり、日蓮は唯一人かたうどは一人もこれなし、今までもいきて候はふかしき

なり、今年も十一月十一日安房の国・東条の松原と申す大路にして、申酉の時数百人の念仏等にまちかけられて候いて日蓮は唯一人十人ばかりものの要にあふものはわづかに三四人なり、いるやはふるあめのごとしうつたちはいなづまのごとし、弟子一人は当座にうちとられ二人は大事のてにて候、自身もきられ打たれ結句

にて候いし程に、いかが候いけんうちもらされていままでいきてはべり、いよいよ法華經こそ信心まさり候へ第四の巻に云く「而も此の經は如来の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」第五の巻に云く「一切世間怨多く

して信じ難し」等云云、日本国に法華經よみ学する人これ多し、人の妻をねらひぬすみ等にて打はらるる人は多けれども法華經の故にあやまたるる人は一人もなし、されば日本国の持經者はいまだ此の經文にはあわせ給はず唯日蓮一人こそよみはべれ我不愛身命・但惜無上道是なりされば日蓮は日本第一の法華經の行者なり。

もしさきにたたせ給へば梵天・帝釈・四大天王・閻魔大王等にも申させ給うべし、日本第一の法華經の行者日蓮房の弟子なりとなのらせ給へよもはつしんなき事は候はじ、但一度は念仏一度は法華經となう・二心ましまし人の聞にはばかりなど、だにも候はばよも日蓮が弟子と申すとも御用ゐ候はじ後にうらみさせ給うな、

但し又法華經は今生のいのりともなり候なれば、もしやとしていきさせ給い候はばあはれ・とくとく見参してみづから申しひらかばや、語はふみにつくさず、ふみは心をつくしがたく候はとどめ候いぬ、恐恐謹言。

ぶんえいがんねん
文永元年十二月十二日

にちれん
日蓮
かおう
花押

此の薬王品の大意とは此の薬王品は第七の八巻・二十八品の中には第二十三の品なり、此の第一巻に序品方便品の二品有り序品は二十八品の序なり、方便品より人記品に至るまで八品は正には二乗作仏を明し傍には菩薩・凡夫の作仏を明かす、法師宝塔提婆勸持安樂の五品は上の八品を末代の凡夫の修行す可き様を説くなり、又涌出品は寿量品の序なり、分別功德品より十二品は正には寿量品を末代の凡夫の行ず可き様を傍には方便品等の八品を修行す可き様を説くなり、然れば此の薬王品は方便品等の八品並びに寿量品を修行す可き様を説きし品なり。

此の品に十の譬有り、第一大海の譬、先ず第一の譬を粗申す可し、此の南閻浮提に二千五百の河あり、西俱耶尼に五千の河あり総じて此の四天下に二万五千九百の河あり、或は四十里乃至百里・一里・一町・一尋等の河之有り、然りと雖も此の諸河は総じて深淺の事大海に及ばず、法華已前の華嚴經阿含經・方等經・般若經・深密經・阿弥陀經・涅槃經・大日經・金剛頂經・蘇悉地經・密嚴經等の釈迦如来の所説の一切經・大日如来の所説の一切經・阿弥陀如来の所説の一切經・薬師如来の所説の一切經過去・現在・未来三世の諸仏所説の一切經の中に法華經第一なり、譬えば諸經は大河・中河・小河等の如し法華經は大海の如し等と説くなり、河に勝れたる大海に十の徳有り、

一に大海は漸次に深し河は爾からず、二に大海は死屍を留めず河は爾からず、三に大海は本の名字を失う河は爾からず、四に大海は一味なり河は爾からず、五に大海は宝等有り河は爾からず、六に大海は極めて深し河は爾からず、七に大海は広大無量なり河は爾からず、八に大海は大身の衆生等有り河は爾からず、九に大海は潮の増減有り河は爾からず、十に大海は大雨・大河を受けて盈溢無し河は爾からず。

此の法華經には十の徳有り諸經には十の失有り、此の經は漸次深多にして五十展転なり諸經には猶一も無し

況や二三乃至五十展転をや河は深けれども大海の浅きに及ばず諸経は一字一句十念等を以て十悪・五逆等の悪機を撰すと雖も未だ一字一句の隨喜五十展転には及ばざるなり、此の經の大海に死屍を留めずとは法華經に背く謗法の者は極善の人為りと雖も猶之を捨つ何に況や悪人なる上謗法を為さん者をや、設け諸経を謗すと雖も法華經に背かざれば必ず仏道を成ず、設け一切経を信ずと雖も法華經に背かば必ず阿鼻大城に墮つ乃至第八には大海は自身の衆生あり等と云うは大海には摩竭大魚等大身の衆生之有り、無間地獄と申すは縱広八万由旬なり五逆の者無間地獄に墮ちては一人にて必ず充滿す、此の地獄の衆生は五逆の者自身の衆生なり、諸経の小河・大河の中には摩竭大魚之無し法華經の大海には之有り、五逆の者・仏道を成す是れ實には諸経に之無し諸経に之有りと云うと雖も實には未顕眞實なり、故に一代聖教を諳し天台智者大師の釈に云く他經は但菩薩に記して二乘に記せず乃至但善に記して惡に記せず、今經は皆記す等云云、余は且く之を略す。

第二には山に譬う、十宝山等とは、山の中には須弥山第一なり、十宝山とは一には雪山・二には香山・三には軻梨羅山・四には仙聖山・五には由乾陀山・六には馬耳山・七には尼民陀羅山・八には斫伽羅山・九には宿慧山・十には須弥山なり、先の九山とは諸経・諸山の如し、但し一一に財あり須弥山は衆財を具して其の財に勝れたり、例せば世間の金の閻浮檀金に及ばざるが如し、華嚴經の法界唯心般若の十八空・大日經の五相成身・觀經の往生より法華經の即身成佛勝れたるなり、須弥山は金色なり、一切の牛馬人天衆鳥等此の山に依れば必ず本色を失つて金色なり余山は爾らず一切の諸経は法華經に依れば本の色を失う例せば黒色の物の日月の光に値えば色を失うが如し諸経の往生成仏等の色は法華經に値えば必ず其の義を失う。

第三には月に譬う衆星は或は半里或は一里或は八里或は十六里には過ぎず、月は八百余里なり衆星は光有りと雖も月に及ばず、設け百千万億乃至二四天下三千大千・十方世界の衆星之を集むとも一の月の光に及ばず、何に況や

一の星月の光に及ぶ可きや、華嚴經・阿含經・方等・般若・涅槃經・大日經・觀經等の一切の經之を集むとも法華經の一字に及ばじ、一切衆生の心中の見思・塵沙・無明の三惑並に十惡・五逆等の業は暗夜のごとし華嚴經等の一切經は闇夜の星のごとし法華經は闇夜の月のごとし法華經を信ずれども深く信ぜざる者は半月の闇夜を照すが如し深く信ずる者は満月の闇夜を照すが如し月無くして但星のみ有る夜には強力の者かたましき者などとは行歩すと

いへども老骨の者女人なむとは行歩に叶わず、満月の時は女人老骨なむども、或は遊宴のため或は人に値わんが如き行歩自在なり、諸經には菩薩大根性の凡夫は設い得道なるとも二乘凡夫惡人・女人乃至末代の老骨の懈怠・無戒の人人は往生成仏不定なり、法華經は爾らず、二乘惡人・女人等猶仏に成る何に況や菩薩・大根性の凡夫

をや、又月はよいよりも暁は光まさり春夏よりも秋冬は光あり、法華經は正像二千年よりも末法には殊に利生有る可きなり、問うて云く証文如何答えて云く道理顯然なり、其の上次ぎ下の文に云く「我が滅度の後、後の五百歳の中に広宣流布して闇浮提に於て断絶せしむること無し」等云云、此の經文に「二千年の後南閻浮提到に広宣

流布すべし」とかれて候は第三の月の譬の意なり、此の意を根本伝教大師釈して云く「正像稍過ぎ已て末法太だ近きに有り法華一乘の機今正しく是れ其の時なり」等云云、正法千年も像法千年も法華經の利益諸經に之れ勝る可し然りと雖も月の光の春夏の正像二千年・末法の秋冬に至つて光の勝るが如し。

第四に日の譬は星の中に月の出でたるは星の光には月の光は勝るとも未だ星の光を消さず、日中には星の光消ゆるのみに非ず又月の光も奪いて光を失う、爾前は星の如く法華經の迹門は月の如し寿量品は日の如し、寿量品の時は迹門の月未だ及ばず何に況や爾前の星をや、夜は星の時月の時も衆務を作さず、夜曉て必ず衆務を作す、

爾前・迹門にして猶生死を離れ難し本門・寿量品に至つて必ず生死を離る可し、余の六譬之を略す、此の外に又多くの譬此の品に有り、其の中に渡りに船を得たるが如しと此の譬の意は生死の大海には爾前の經は或は筏或は小船

なり、生死しじの此岸しがんより生死しじの彼岸ひがんには付くと雖も生死しじの大海たいかいを渡り極楽ごくらくの彼岸ひがんにはとつきがたし、例せば世間せけんの小船等が筑紫より坂東に至り鎌倉かまくらよりいの嶋しづめなどへとつけども唐土たうどに至らず唐船とうせんは必ず日本国にほんこくより震旦国しんたんに至るに障り無きなり又云く「貧いきに宝を得たるが如し」等云云、爾前にぜんの国は貧国ひんくになり爾前にぜんの人は餓鬼がきなり法華經ほけきやうは宝の山なり人は富人なり。

問うて云く爾前にぜんは貧国ひんくにといふ經文きやうもん如何いかん答えて云く授記品じゆきに云く「飢えたる国より来つて忽ちに大王だいおうの膳だんに遇へるが如く」等云云、女人にょにんの往生おうじやう成仏じやうぶつの段は經文きやうもんに云く「若し如来じゆらいの滅後めつご・後ごの五百歳ごひやくさいの中に若し女人にょにん有つて是の經典きやうもんを聞いて説しの如く修行しやうぎやうせば此に於て命終めいしゆうして即ち安樂世界あんらくせかい阿彌陀仏あみだぶつの菩薩ぼさつ・大衆だいしゆうに圍遶いにしやうせられて住する処に往いて蓮華れんげの中宝座ちゆうざうの上に生じ」等云云。

問うて曰く此の經此の品に殊に女人にょにんの往生おうじやうを説く何の故か有るや、答えて曰く仏意測り難し此の義決し難きか但し一の料簡りやうけんを加えば女人にょにんは衆罪しゆざいの根本破国の源みなもとなり、故に内典ないてん・外典げてんに多く之を禁しむ其の中に外典げてんを以て之を論ずれば三従さんじゆうあり三従さんじゆうと申すは三したがうと云ふなり、一には幼にしては父母ふぼに従う嫁して夫に従う老いて子に従う此の三障さんしゆう有りて世間せけん自在じざいならず、内典ないてんを以て之を論ずれば五障ごしゆう有り五障ごしゆうとは一には六道輪回ろくどうりんねの間男子かみだにの如く大梵天王だいぼんてんのうと作らず二には帝釈たいしゃくと作らず三には魔王まおうと作らず四には転輪聖王てんりんじやうおうと作らず五には常に六道ろくどうに留まりて三界さんがいを出でて仏に成らず超日月三昧・銀色女經ぎんしきにやうきやうに云く三世さんぜの諸仏しよぶつの眼は大地だいちに墮落だらくすとも法界ほうかいの諸の女人しよにょにんは永く成仏じやうぶつの期無し等云云、但し凡夫ぼんぶすら賢王聖人けんおうしやうじんは妄語まうごせずはんよきといぬし者はけいかに頸をあたいきさつと申せし人は徐君が塚に剣をかけたときこれ約束を違えず妄語まうご無き故なり何に況や声聞しやうもん・菩薩ぼさつ・仏をや、仏は普凡夫ぼんぶにてましましし時小乗經じやうじやうきやうを習なひ給たまひし時五戒ごかいを受け始め給たまひし五戒ごかいの中の第四の妄語まうごの戒を固く持ち給たまひし財を奪われ命をほろばされし時も此の戒をやぶらず大乘經だいじやうきやうを習なひ給たまひし時又十重禁戒じじゆうきんがいを持ち其の十重禁戒じじゆうきんがいの中の

第四の不妄語戒を持ち給いき、此の戒を堅く持ちて無量劫之を破りたまわず終に此の戒力に依て仏身を成じ三十二相の中に広長舌相を得たまえり、此の舌つすくひろくながくして或は面ををい或は髮際にいたり或は梵天にいたる舌の上に五の画あり印文のごとし其の舌の色は赤銅のごとし舌の下に一の珠あり甘露を涌出す此れ不妄語戒の徳の至す所なり、仏此の舌を以て三世の諸仏の御眼は大地に落つとも法界の女人は仏になるべからずと説かれしかば一切の女人は何なる世にも仏には成らせ給つまじきとこそ覺えて候へざるにては女人の御身も受けさせ給いては設ひ后三公の位にそなはりても何かはすべき善根仏事をなしてもよしなとこそ覺え候へ而るを此の法華經の藥王品に女人の往生をゆるされ候ゆる事又不思議に候、彼の經の妄語か此の經の妄語かいかにも一方

は妄語たるべきか、若し又一方妄語ならば一仏に一言あり信じ難し但し無量義經の四十余年には未だ眞實を顕さず涅槃經の如來には虚妄の言無しと雖も若し衆生虚妄の説に因ると知しめすの文を以て之を思えば仏は女人は往生成仏すべからずと説かせ給いけるは妄語と聞えたり、妙法華經の文に世尊の法は久くして後に要す当に眞實

を説くべし妙法華經乃至皆是眞實と申す文を以て之を思ふに女人の往生成仏決定と説かるる法華經の文は実語不妄語戒と見えたり、世間の賢人も但一人ある子が不思議なる時或は失ある時は永く子為るべからざるの理起請を書き或は誓言を立てると雖も命終の時に臨めば之を許す、然りと雖も賢人に非ずと云わず又妄語せる者とも云わず仏も亦是くの如し、爾前四十余年の間は菩薩の得道凡夫の得道善人男子等の得道をば許すやうなれども、

二乘悪人・女人などの得道此れをば許さず、或は又許すににたる事もあり、いまだ定めがたかりしを仏の説教四十二年すでに過ぎて八年の間・摩竭提国王舎城・耆闍崛山と申す山にして法華經を説かせ給うとおぼせし時先づ無量義經と申す經を説かせ給ふ無量義經の文に云く四十余年云云。

御供養の物種種給畢んぬ、抑も上野殿死去の後はをとづれ冥途より候やらんきかまほしくをば候、ただしあるべしと
もをばず、もし夢にあらずんばすがたをみる事よもあらじ、まばろしにあらずんばみみえ給う事いか候はん、さだめて
靈山浄土にてさばの事をばちつやにきき御覽じ候らむ、妻子等は肉眼なればみさせ・

きかせ給う事なしつには一所とをばしめせ、生生世世の間ちぎりし夫は大海のいさこのかずよりもををくこそをはしま
し候いけん、今度のちぎりこそまことのちぎりのをとこよ、そのめはをとこのすすめによりて

法華經の行者とならせ給は仏とをがませ給うべし、いきてをはしき時は生の仏今は死の仏生死ともに仏なり、即身成仏と
申す大事の法門これなり、法華經の第四に云く、若し能く持つこと有れば即ち仏身を持つなり云云。

夫れ浄土と云うも地獄と云うも外には候はずただ我等がむねの間にあり、これをさとるを仏といふこれにまよふを
凡夫と云う、これをさとるは法華經なり、もししからば法華經をたもちたてまつるものは地獄即寂光とさとり候ぞ、たと
ひ無量億歳のあひだ権教を修行すとも、法華經をはなるるならばただいも地獄なるべし、

此の事日蓮が申すにはあらず釈迦仏・多宝仏・十方分身の諸仏の定めをき給いしなり、されば権教を修行する人は火に
やくるもの又火の中へいり、水にしづむものをふちのそこへ入るがごとし、法華經をたもたざる人は火と水との中にいたる
がごとし、法華經誹謗の悪知識たる法然、弘法等をたのみ阿弥陀經・大日經等を信じ給うはなを火より火の中水より水の
そこへ入るがごとし、いかでか苦患をまぬかるべきや、等活・黒繩・無間地獄の火坑・

くれん だいぐれん 氷の底に入りしづみ給はん事 疑なかるべし、法華經の第二に云く「其の人命終して阿鼻獄に入りかくのごとて展転して無数劫に至らん」云云。

故聖靈は此の苦をまめかれ給いずでに法華經の行者たる日蓮が檀那なり、經に云く「設い大火に入るも火も焼くこと能わず、若し大水に漂わされ為も其の名号を称れば即ち浅き処を得ん」又云く「火も焼くこと能わず水も漂すこと能わず」云云、あらたのもしや・たのもしや、詮するところ地獄を外にもとめ獄卒の鉄杖阿防羅刹のかし

やくのごゑ別にこれなし、此の法門ゆゆしき大事なれども、尼にたいしまいらせておしまいらせん、例せば竜女にたいして文殊菩薩は即身成仏の秘法をとき給いしがごとし、これをきかせ給いて後はいよいよ信心をいた

させ給へ法華經の法門をきくにつけてなをなを信心を上げむをまことの道心者とは申すなり、天台云く「從藍而青」云云、此の釈の心はいは葉のときよりもなをそむればいよいよあををし、法華經はいのことし修行のふかきはいよいよあをきがごとし。

地獄と云う二字をばつちをほとよめり、人の死する時つちをほらぬもの候べきか、これを地獄と云う、死人をやく火は無間の火炎なり、妻子眷属の死人の前後にあらそひゆくは獄卒阿防羅刹なり、妻子等のかなしみなくは獄卒のごゑなり、二尺五寸の杖は鉄杖なり馬は馬頭・牛は牛頭なり、穴は無間・大城八万四千のかまは八万

四千の塵勞門家をきりいづるは死出の山・孝子の河のほとりにたたずむは三途の愛河なり、別に求むる事はかなしはかなし、此の法華經をたもちたてまつる人は此れをうつかへし地獄は寂光土・火焰は報身如来の智火・死人は法身如来火坑は大慈悲為室の心身如来、又つえは妙法実相のつえ、三途の愛河は生死即涅槃の大海・死出の山

は煩惱即菩提の重山なり、かく御心得させ給へ即身成仏とも開仏知見ともこれをさとりこれをひらくを申すなり、だいはいだつたあびいくて提婆達多は阿鼻獄を寂光極樂とひらき、竜女が即身成仏もこれより外は候はず、逆即是順の法華經なれば

なりこれ妙の一字の功德なり。

竜樹菩薩の云く「譬えば大薬師の能く毒を変じて薬と為すが如し」云云、妙楽大師云く「宣伽耶を離れて別に常寂を求めん寂光の外別に娑婆有るに非ず」云云、又云く「実相は必ず諸法、諸法は必ず十如・十如は必ず十界・十界は必ず身土なり」云云、法華経に云く「諸法実相乃至本末究竟等」云云、寿量品に云く「我実に成仏してより已来無量無辺なり」等云云、此の経文に我と申すは十界なり十界本有の仏なれば浄土に住するなり、方便品に云く「是の法は法位に住して世間の相常住なり」云云、世間のならひとして三世常恒の相なればなげくべきにあらずをどろくべきにあらず、相の一字は八相なり八相も生死の二字をいはず、かくさるるを法華経の行者の即身成仏と申すなり、故聖霊は此の経の行者なれば即身成仏疑いなし、さのみなげき給うべからず、又なげき給うべきが凡夫のことわりなり、ただし聖人の上にもこれあるなり、釈迦仏御入滅のとき諸大弟子等のさとのなげき凡夫のふるまひを示し給うが。

いかにもいかにも追善供養を心のをよぶほどはげみ給うべし、古徳のことばにも心地を九識にもち修行をば六識にせよとをし給うことわりにもや候らん、此の文には日蓮が秘蔵の法門かきて候ぞ、秘しさせ給ひ秘しさせ給へあなかしこあなかしこ。

七月十一日

日蓮 花押

上野殿後家尼御前御返事

三七〇

上野殿御返事うえのとのごへんじ

文永十一年七月ぶんえい 五十三歳御作

1507p

がもくとつる

驚目十連・がわのり二帖・じやうかう二十束・給候い畢たひそつらんぬかまくらにてかりそめの御事おんこととこそをもひまいらせ候いし

に、をもひわすれさせ給わざりける事申せうすばかりなし、ここう上野殿のだにもをはせしかばつねに申しつけ給わりなんとなげ

きをもひ候いつるに、を御遺愛んかたみに御みをわかくしてとどめをかれけるかすがたのたがわせ給わぬに、御心さひにられけ

る事いづばかりなし、法華經ほけきようにて仏にならせ給いて候たまとつけ給わりて御はか

にまいりて候いしなり、又この御心おんこころみねこころざし申すばかりなし、今年のけかちにはじめたる山中に木のもとにこのはうちきたる

やうなるすみかをもひやらせ給え、このほどよみ候・御經いちぶんの一分をことの廻向えこうしまいらし候、あわれ人はよき子はもつべ

かりけるものかなと、なみだかきあえずこそ候いし、妙莊嚴王みよしうごんは二子ふたりこにみちびかる、かの王は悪人あくにんなり、ここう今のどのは善人ぜんにん

なり、かれにはにるべくもなし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

七月二十六日

日蓮にぢれん 花押かおう

御返事ごへんじ

人にあながちにかたらせ給たまうべからず、若わかき殿が候もつは申すべし。

聖人二管・柑子一籠・十枚・薯蕷一籠・牛房一束・種種の物送り給ひ候。

得勝・無勝の二童子は仏に沙の餅を供養したてまつりて閻浮提三分が一の主となる所謂阿育大王これなり、儒童菩薩は錠光仏に五茎の蓮華を供養したてまつりて仏となる今の教主釈尊これなり、法華經の第四に云く「人有て仏道を求めて一劫の中に於て合掌して我が前に在つて無數の偈を以て讃めん、是の讃仏に由るが故に無量の功德を得ん、持經者を歎美せんは其の福復彼れに過ぎん」等云云、文の心は仏を一中劫が間供養したてまつる

より、末代惡世の中に人のあながちににくむ法華經の行者を供養する功德はすぐれたりとかせ給つ、たれの人のかかるひが事をばおほせらるるぞと疑いおもひ候は教主釈尊の我とおほせられて候なり、疑はんとも信ぜんとも御心にまかせまいらする、仏の御舌は或は面に覆ひ或は三千大千世界に覆ひ或は色究竟天までに付け給つ

過去遠遠劫よりこのかた一言も妄語のましまさざるゆへなり、されば或經に云く「須弥山はくづるとも大地をばうちかすとも仏には妄語なし」とこかれたり、日は西よりいつとも大海の潮はみちひずとも仏の御言はあやまりなしとかや、其の上此の法華經は他經にもすぐれさせ給は多宝仏も証明し諸仏も舌を梵天につけ給う、一字一点も妄語は候まじきや。

其の上殿はをさなくをはしき、故親父は武士なりしかどもあなかちに法華經を尊み給ひしかば・臨終正念なりけるよしつけ給わりき、其の親の跡をつがせ給いて又此の經を御信用あれば故聖靈いかに草のかげにても喜びおぼすらん、あわれいきてをせばいかにうれしかるべき、此の經を持つ人人は他人なれども同じ靈山・まいり

あはせ給^{たま}つなり、いかにはんや故^し聖靈^{せいりやう}も殿も同じく法華經^{ほけきやう}を信じさせ給^{たま}へ同じところ^{ところ}に生れさせ給^{たま}つべし、いかなれば他人^{たにん}は五六十までも親と同じしらがなる人もあり、我がわかき身に親にはやくをくれて教訓^{きやうくん}をもつけ給^{たま}はらざるらんと御心のつちをしはかるこそなみだもとまり候はね。

抑^{そもそもにちれん}日蓮^{にほんにん}は日本国^{にほんこく}をたすけんとふかくおもへとも日本国^{にほんこく}の上下万人^{じやうげばんにん}一同に国のほろぶべきゆへにや用^{もち}いられざる上^{たひたひ}度度あだをなさるれば力をよばず山林^{さんりん}にまじはり候いぬ、大蒙古国^{だいまうこく}よりよせて候と申せば、申せし事を御用^{もち}いあらばいかなんどもあはれなり、皆人^{みな}の当時^{とうじ}のいきつしまのやうにならせ給^{たま}はん事おもひやり候はなみだもとまらず。

念仏宗^{ねんぶつしゆ}と申すは亡国^{ぼうこく}の悪法^{あくほふ}なり、このいくさには大體人人^{たいたいひとひと}の自害^{じがい}をし候はんずるなり、善導^{ぜんどう}と申す愚癡^{ぐぢ}の法師^{ほふし}がひろめはじめて自害^{じがい}をして候ゆへに念仏^{ねんぶつ}をよくよく申せば自害^{じがい}の心出来^{しゆつたい}し候ぞ。

禅宗^{ぜんしゆ}と申し当時の持斎法師^{もちさいほふし}等は天魔^{てんま}の所為^{しゆい}なり、教外別伝^{きやうげべつでん}と申し神も仏もなしなると申すものくるはしき悪法^{あくほふ}なり。

真言宗^{しんこんしゆ}と申す宗は本は下劣^{げれつ}の經にて候いしを誑惑^{おあわく}して法華經^{ほけきやう}にも勝るなんと申して多くの人人^{ひとひと}・大師僧正^{だいしそうじやう}などになりて日本国^{にほんこく}に大體充満^{だいたいじゆうまん}して上一人^{かみいちにん}より頭^{いづへ}をかたぶけたり、これが第一^{だいいち}の邪事^{じゃじ}に候を昔より今にいたるまで知る人なし、但^{でん}伝教大師^{でんきやうだいし}と申せし人こそしりて候いしかどもくはしくもおほせられず、さては日蓮^{にちれん}はこの事

をしれり、後白河^{ごしろく}の法皇^{ほふ}の太政^{たいてい}の入道^{にゅうだう}にせめられ給^{たま}いし、隱岐^{おき}の法王^{ほふ}のかまくらにまけさせ給^{たま}いし事みな真言惡法^{しんげんあくほふ}のゆへなり、漢土^{かんど}にこの法^{ほふ}わたりて玄宗皇帝^{げんそんてい}ほろびさせ給^{たま}つ、この惡法^{あくほふ}かまくらに下つて当時^{とうじ}かまくらにはやる僧正法印^{そんじやうほういん}等は是なり、これらの人人^{ひとひと}のいくさを調伏^{てうふく}せば百日^{ひゃくにち}たたかぶべきは十日^{じふにち}につづまり十日^{じふにち}のいくさは一日^{いちにち}にせめらるべし。

今始めて申すにあらず二十余年が間音もをしましよばはり候いぬるなり、あなかしこあなかしくこの御文は大事の事どもかきて候、よくよく人によませてきこしめせ、人もそしり候ものともおもはぬ法師等なり、恐恐謹言。

ぶんえい
文永十一年太歳甲戌十一月十一日

にちれん
日蓮 花押

こへんじ
南条七郎次郎殿御返事

三七一 春の祝御書

1510p

春のいわいわずでに事ふり候いぬ、さては故なんでつどのはひさしき事には候はざりしかども、よろず事にふれてなつかしき心ありしかば、をろかならずをもひしによわひ盛んなりしにはかなかりし事わかれかなしかりしかば、わざとかまくらよりうちくだかり御はかをば見候いぬ、それよりのちはするがのびんにはとをもひし

にこのたびくだしには人にしのびてこれきたりしかばにしやまの入道殿にもしられ候はざりし上は力をよばずとをりて候いしが心にかかりて候その心をとげんがために此の御房は正月の内につかわして御はかにて自我偈一卷よませんとをもひてまいらせ候、御との御かたみもなしなとなげきて候はどのをとめをかれ

ける事よろこび入つて候、故殿は木のもとくさむらのかげがよつ人もなし、仏法をも聴聞せんず、いかにつれづれなるらん、をもひやり候はなんだもとどまらず、この法華經の行者うちぐして御はかにむかわせ給うには、いかにつれしかるらん、いかにつれしかるらん。

さききの二日にいものかしらしいのやうにほされて候を一駄、ふじのつゝのよりみのぶの山をくり給たまいて候。

仏おんでしの御弟子にあなりちと申せし人は天眼第一てんげんだいいちのあなりちとて十人の御弟子のその一迦葉舍利弗かしょうしゃりほつ 目連阿難もくれんあなんにかたをならべし人なり、この人のゆらひをたづねみれば、師子ししきうおつ王と申せし国王の第二の王子みこにこくぼん王と申せし人の御子釈迦しゃか如來にのいとこにておはしましき、この人の御名みな三つ候、一には無貧、二には如意、三にはむれう

と申す一一にふしぎの事候、昔うえたるよにりだそんじやと申せしたうとき辟支仏ひやくしぶつありき、うえたるよに七日ときもならざりけるが山里にれうしの御器に入れて候いけるひえのはんをこひてならせ給たまう、このゆゑにこれうげんざいし現在げんざいには長者ちやうじやとなりのち九十一劫いくじうが間人にんちやうてんじやう中天上にたのしみをうけて今最後さいごにこくぼん王の太子たいしと

むまれさせ給たまう、金のこきにはんとこしなへにたえせずあらかんとならせ給たまう、御眼に三千大千世界さんぜんだいせんせかいを一時に御らんありていみじくをはせしが法華經第四の巻にして普明如來ふみやうにと成るべきよし仏に仰おほせをかほらせ給たまいき、

妙樂大師みょうりくだいし此の事を釈しゃくして云く、稗飯ひえはん輕かろしと雖も所有しゆじうを尽し、及び田勝あさるるを以ての故に故に勝報を得る」と云云、釈しゃくの心こころかるきひえのはんなれども此これよりほかにはもたざりしをたうとき人のつえておはせしにまいらせてありしゆゑにかか
るめでたき人となれりと云云。

此の身のぶのさわは石なんどはおほく候されども、がかるものなし、その上夏のころなれば民のいとまも候はじ、又御造営しうざうえいと申しさこそ候らんに山里の事ををもひやらせ給たまいてをくりたびて候、所詮しよせんはわがをやのわかれ

をしさに父の御ために釈迦仏 法華經 今まいらせ給うにや孝養の御心が、さる事なくば梵王 帝釈 日月 四天その人の家をすみかとせんとちかはせ給いて候はいふにかひなきものなれども約束と申す事はたがへぬ事にて候に、さりともしこの人人はいかでか仏前の御約束をばたがさせ給い候べき、もし此の事まことになり候はば・

わが大事とおもはん人人のせいし候、又おほきなる難来るべし、その時すでに此の事かなうべきにやとおぼしめしていよいよ強盛なるべし、さるほどならば聖靈 仏になり給うべし、成り給うならば来りてまほり給うべし、其の時一切は心にまかせんずるなり、かすが今人のせいしあらば心にうれしくおぼすべし、 恐恐謹言。

五月二日

日蓮 花押

上野殿御返事

三七四

上野殿御返事

建治元年七月 五十四歳御作

1512P

むぎひとひつがわのり五条 はじかみ六十給了んぬ、いつもの御事に候はをどろかれずめづらしからぬやうにうちをばへて候はばむぶの心なり、せけんそうそうなる上ををみやつくられさせ給は百姓と申し我が内の者と申しけかちと申しものつくりと申しくそばくいとまなく御わたりにて候らむに山のなかのすまゐ

さこそと思ひやらせ給いて鳥のかい子をやしなぶが如く灯に油をそふるがごとくがれたる草に雨のふるが如くうへたる子に乳をあたるが如く法華經の御命をつがせ給う事三世の諸仏を供養し給へるにてあるなり、十方の衆生の眼を開く功德にて候べし、尊しとも申す計りなし、あなかしこあなかしこ 恐恐謹言。

七月十二日

日蓮花押 進上

上野殿御返事

態と御使有難く候、夫れについては屋形造の由目出度くこそ候へ何か参り候いて移徙申し候はばや、一つ棟札の事
承り候書き候いて此の伯耆公に進せ候。

此の経文は須達長者祇園精舎を造りき、然るに何なる因縁にやよりけん須達長者七度まで火災にあひ候時・長者此
の由を仏に問い奉る、仏答えて曰く汝が眷属貪欲深き故に此の火災の難起るなり、長者申さくさていかんして此の火災
の難をふせぎ申すべきや、仏の給はく辰巳の方より瑞相あるべし汝精進して彼の方に向へ彼方

より光ささば鬼神三人来りて云わん、南海に鳥あり鳴忿と名く此の鳥の住処に火災なし、又此の鳥一つの文を唱つべし、
其の文に云く聖主天中天迦陵頻伽声哀愍衆生者我等今敬礼云云、此の文を唱へんには必ず三十万

里が内には火災をこらじと此の三人の鬼神かくの如く告ぐべきなり云云、須達 仏の仰せの如くせしかば少しもちがはず候
いき、其の後火災なきと見えて候、これに依りて滅後・末代にいたるまで此の経文を書きて火災をやめ候、今以てかくの
如くなるべく候、返す返す信じ給うべき経文なり、是は法華經の第三の卷化城喻品に説かれて候、委しくは此の御房に
申し含めて候、恐恐謹言。

八月十八日

日蓮 花押

上野殿御返事

单衣一領送り給い候い畢んぬ。

棄老国には老者をすて日本国には今法華經の行者をすつ、抑此の国開闢より天神七代地神五代人王百代あり、神武より已後九十代欽明より仏法始まりて六十代七百余年に及べり、其の中に父母を殺す者朝敵となる者山賊海賊数を知らざれどもいまだきかず法華經の故に日蓮程人に悪まれたる者はなし、或は王に悪まれたれども民には悪まれず、或は僧は悪めば俗はもれ、男は悪めば女はもれ、或は悪人は悪めば智人はもれたり、此れは王よりは民男女よりは僧尼愚人よりは智人悪む悪人よりは善人悪む、前代未聞の身なり後代にも有るべしとおぼえす、故に生年三十二より今年五十四に至るまで二十余年の間、或は寺を追ひ出され、或は処をおわれ、或は親類を煩はされ、或は夜打ちにあひ、或は合戦にあひ、或は悪口数をしらず、或は打たれ、或は手を負う、或は弟子を殺され、或は頸を切られんとし、或は流罪両度に及べり、二十余年が間、一時片時も心安き事なし、頼朝の七年の合戦もひまやありけん、頼義が十二年の鬪争も争か是にはすぐべき。

法華經の第四に云く「如来の現在にすら猶怨嫉多し」等云云、第五に云く「一切世間怨多くして信じ難し」等云云、天台大師も恐らくはいまだ此の經文をばよみ給はず、一切世間皆信受せし故なり、伝教大師も及び給うべからず況滅度後の經文に符合せざるが故に、日蓮日本国に出現せずば如来の金言も虚くなり多宝の証明もなにかせん十方の諸仏の御語も妄語となりなん、仏滅後二千二百二十余年月氏漢土日本に一切世間多怨難信の人なし、日蓮なくば仏語既に絶えなん、かかる身なれば蘇武が如く雪を食として命を継ぎ、李陵が如く簣をきて世をすこす、山林に交つて果なき時は空くして両三日を過ぐ鹿の皮破ぬれば裸にして三四月に及べり、かかる者

をば何としてか哀とおぼしけん、未だ見参にも入らぬ人の膚を隠す衣を送り給候こそ何とも存じがたく候へ此の帷をきて仏前に詣でて法華經を読み奉り候いなば、御經の文字は六万九千三百八十四字・一の文字は皆金色の仏なり、衣は一つなれども六万九千三百八十四仏に一一にきせまいらせ給へるなり、されば此の衣を給て候わば

夫妻二人ともに此の仏御尋ね坐して我が檀那なりと守らせ給うらん、今生には祈りとなり・財となり御臨終の時は月となり日となり道となり橋となり父となり母となり牛馬となり輿となり車となり蓮華となり山となり二人を靈山淨土へ迎え取りまいらせ給うべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

建治元年乙亥八月 日

日蓮 花押

此の文は藤四郎殿女房と常により合いて御覽あるべく候。

三七七 上野殿母尼御前御返事

1515P

母尼ごぜんにはことに法華經の御信心のふかくましまし候なる事悦び候と申させ給候へ

止觀第五の事正月一日辰の時此れをよみはじめ候、明年は世間忽忽なるべきよし皆人申すあひだ一向後生のために十五日まで止觀を談ぜんとし候が、文あまた候はず候、御計らい候べきか、白米一斗御志申しつくしがたう候、鎌倉は世間かつして候、僧はあまたをはします過去の餓鬼道の苦をばつくのわせ候ひぬるか。

法門の事、日本国に人ごとに信ぜさせんと願して候いしが願や成熟せんとし候らん、当時は蒙古の勸文によりて世間やわらぎて候なり子細ありぬと見候、本より信じたる人人はことに悦ぶげに候か、恐恐。

十二月二十二日

日蓮 花押

上野殿母尼御前御返事

夫れそ以おもれば日本国おんみればにほんこくを亦水穂またの国こくと云いひ亦野馬台またやまと又秋津島あきつしま又扶桑等ふそう云云、六十六ヶ国二つの島已上・六十八ヶ国・東西三千余里さんぜん・南北は不定ふじようなり、此の国に五畿ごき・七道しちどうあり・五畿ごきと申もうすは山城やましろ・大和やまと・河内かふち・和泉わづみ・摂津等せつなり、七道しちどうと申もうすは東海道十五箇国・東山道八箇国・北陸道七箇国・山陰道八ヶ国・山陽道八ヶ国・南海道六ヶ国・西海道十一ヶ国・亦鎮西またと云いひ又太宰府と云云、已上此れは国なり、国主をたづねれば神世十二代は天神七代・地神五代なり、天神七代の第一は国常立尊こくじょうたつみこと乃至ないし第七は伊奘諾尊いざなぎのみこと男おとこなり、伊奘册尊いざなみのみこと妻つまなり、地神五代の第一は天照太神てんしょうたいじん伊勢太神いせたいじん宮日みやひの神是これなりいざなぎいざなみの御女みめなり、乃至第五は彦波瀲武ひこなきさたけ草葺不合尊うがやぶきあはずのみこと此の神は第四のひこほの御子みこなり母は竜の女りゅうのむすめなり、已上地神五代・已上十二代は神世なり、人王は大体百代なるべきか其の第一の王は神武天皇てんのう此れはひこなきさの御子みこなり、乃至第十四は仲哀天皇なかつねのう父ちちは八幡御はちまんのり第十五は神功皇后しんこうこうごう母ははは八幡御はちまんのり第十六は応神おうじん天皇てんのうにして仲哀と神功の御子みこ今の八幡大菩薩はちまんだいぼさつなり、乃至第二十九代は宣化天皇せんけのうなり、此の時までは月支漢土がつしかんとには仏法ぶつぽうありしかども日本国にほんこくにはいまだわたらず。

第三十代は欽明天皇きんめいてんのう此の皇は第二十七代の継体の御敵子みかたのりなり治三十二年、此の皇の治十三年壬申十月十三日辛酉百済国くだらの聖明皇金銅しやかぶつの釈迦仏しやくかぶつを渡し奉たてまつる、今日本国にほんこくの上下万人・一同に阿弥陀仏あみだぶつと申もうす此れなり、其の表の文に云く臣聞く万法ぶつぽうの中には仏法最善ぶつぽうしぜんし世間の道せけんにも仏法最上ぶつぽうさいじやうなり天皇陛下てんのう亦修行またしゆぎやうあるべし、故に敬つて仏像ぶつざう經教法師きやうけふしを捧たさげて使もちに附ついて貢獻くげんす宜よろく信行しんぎやうあるべき者ものなり已上いじやう、然りといへども欽明きんめい敏達びんたつ用明ようめいの三代三十余年は崇め給たまふ事ことなし、其の間そのまの事ことさまざまなりといへども其の時の天変地天てんへんちてんは今の代にこそにて候へども今は亦其またその

代にはにるべくもなき変天なり、第三十三代崇峻天皇の御宇より仏法我が朝に崇められて第三十四代推古天皇の御宇に盛にひろまりき、此の時三論宗と成実宗と申す宗始めて渡りて候いき、此の三論宗は月氏にても漢土にても、日本にても大乘宗の始なり、故に宗の母とも宗の父とも申す、人王三十六代、皇極天皇の御宇に禅宗わたる、人王四十代、天武の御宇に法相宗わたる、人王四十四代元正天皇の御宇に大日経わたる、人王四十五代に聖武天皇の御宇に華嚴宗を弘通せさせ給う、人王四十六代、孝謙天皇の御宇に律宗と法華宗わたる、しかりといへども唯律宗計りを弘めて天台法華宗は弘通なし。

人王第五十代に最澄と申す聖人あり、法華宗を我と見出して俱舎宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗・華嚴宗等の六宗をせめをとし給うのみならず、漢土に大日宗と申す宗有りとしろしめせり、同じき御宇に漢土にわたりて四宗をならいたし給う、所謂法華宗・真言宗・禅宗大乘の律宗なり、しかりといへども法華宗と律宗とをば弘通ありて禅宗をば弘め給はず、真言宗をば宗の字をけづり七大寺等の諸僧に灌頂を許し給う、然れども世間の人人はいかなるという事をしらず、当時の人人の云く此の人は漢土にて法華宗をば委細にならいて真言宗をばくはしくも知らし食し給はざりけるかとすいし申すなり。

同じき御宇に空海と申す人漢土にわたりて真言宗をならう、しかりといへどもいまだ此の御代には帰朝なし、人王第五十一代に平城天皇の御宇に帰朝あり、五十二代嵯峨の天皇の御宇に弘仁十四年癸卯正月十九日に、真言宗の住処東寺を給いて護国教王院とがつす、伝教大師御入滅の一年の後なり。

人王五十四代、仁明天皇の御宇に円仁和尚漢土にわたりて重ねて法華・真言の二宗をならいたす、人王五十五代、文徳天皇の御宇に仁寿と斉衡とに金剛・頂經の疏・蘇悉地經の疏、已上十四巻を造りて大日經の義釈に並べて真言宗の三部とがつし、比叡山の内に総持院を建立し真言宗を弘通する事此の時なり、叡山に真言宗を許されし

かは座主両方を兼ねたり、しかれども法華宗をば月のごとく眞言宗をば日のごとしといひしかば、諸人等は眞言宗はすこし勝れたりとをもけり、しかれども座主は両方を兼ねて兼学し給いけり大衆も又かくのごとし。

同じき御宇に円珍和尚と申す人御入唐漢土にして法華・眞言の両宗をならう、同じき御宇に天安二年に帰朝す、此の人は本朝にしては叡山第一の座主・義真第二の座主・円澄・別当・光定第三の座主・円仁等に法華・眞言

の両宗をならいきわめ給うのみならず又東寺の眞言をも習い給へり、其の後に漢土にわたりて法華・眞言の両宗をみがき給う今の三井寺の法華・眞言の元祖・智証大師此れなり、已上四大師なり。

総じて日本国には眞言宗に又八家あり、東寺に五家・弘法大師を本とす・天台に三家・慈覚大師を本とす。

人王八十一代をば安徳天皇と申す父は高倉院の長子・母は太政入道の女・建礼門院なり、此の王は元暦元年乙巳三月二十四日八島にして海中に崩じ給いき、此の王は源ノ頼朝將軍にせめられて海中のいろくづの食となり給う、人王八十二代は隠岐の法王と申す高倉の第三の王子・文治元年丙午御即位、八十三代には阿波の院・隠岐の法皇の長子・建仁二年に位を継ぎ給う、八十四代には佐渡の院・隠岐の法皇の第二の王子・承久三年辛巳二月二十六日に王位につき給う、同じき七月に佐渡の島にうつされ給う、此の二三・四の三王は父子なり鎌倉の右大将の家人・義時にせめられさせ給へるなり。

此に日蓮大いに疑つて云く仏と申すは三界の国主・大梵王・第六天の魔王・帝釈・日月・四天・轉輪聖王・諸王の師なり主なり親なり、三界の諸王は皆は此の釈迦仏より分ち給いて諸国の総領・別領等の主となし給へり、故に梵釈等は此の仏をある木像・或は画像等にあげめ給う、須臾も相背かは梵王の高台もくづれ帝釈の喜見もやぶれ輪王も

かほり落ち給うべし、神と申すは又国国の国主等の崩去し給えるを生身のごとくあがめ給う、此れ又国王・国人のための父母なり・主君なり・師匠なり・片時もそむかは国安隠なるべからず、此れを崇むれば国は三災を消し七難

を払い人は病なく長寿を持ち後生には人天と三乗と仏となり給うべし。

しかるに我が日本国は一閭浮提の内月氏漢土にもすぐれ八万の国にも超えたる国ぞかし、其の故は月氏の仏法は西域等に載せられて候但だ七十余国なり其の余は皆外道の国なり、漢土の寺は十万八千四十所なり、我が朝の山寺は十七万一千三十七所なり、此の国は月氏漢土に対すれば日本国に伊豆の大島を對せるがごとし、寺をかざうれば漢土が月氏のも雲泥すぎたり、かれは又大乗の国小乗の国大乘も権大乘の国なり、此れは寺ごとに

八宗・十宗をならい家家宅宅に大乘を讀誦す、彼の月氏漢土等は佛法を用ゆる人は千人に一人なり、此の日本国は外道一人もなし、其の上神は又第一天照太神第二八幡大菩薩第三は山王等の三千余社、昼夜に我が国をまほり朝夕に國家を見そなわし給う、其の上天照太神は内侍所と申す明鏡にかけをつかべ内裏にあがめられ給い

八幡大菩薩は宝殿をすてて主上の頂を栖とし給うと申す、仏の加護と申し神の守護と申しいかなれば彼の安徳と隠岐と阿波佐渡等の王は相伝の所従等にせめられて或は殺され或は島に放れ或は鬼となり或は大地獄には墮ち給いとぞ、日本国の叡山七寺東寺・園城等の十七万一千三十七所の山山寺寺にいささかの御仏事を行うに

は皆天長地久玉体安穩とこそいのり給い候へ其の上八幡大菩薩は殊に天王守護の大願あり、人王第四十八代に高野天皇の玉体に入り給いて云く、我が國家開闢より以来臣を以て君と為すこと未だ有らざる事なり、天之日嗣必ず皇緒を立つ等云云、又太神行教に付して云く我に百王守護の誓い有り等云云。

されば神武天皇より以来百王にいたるまでいかなる事有りとも玉体はつつがあるべからず・王位を傾くる者も有るべからず、一生補処の菩薩は中天なし・聖人は横死せずと申す、いかにして彼れ彼の四王は王位ををいとされ国をうばはるるのみならず・命を海にすて身を島島に入れ給いけるやらむ、天照太神は玉体に入りかわり給はざりけるか・八幡大菩薩の百王の誓はいかにとなりぬぞ、其の上安徳天皇の御宇には明雲の座主・御師とな

り太上入道並びに一門怠状を捧げて云く「彼の興福寺を以て藤氏の氏寺と爲し春日の社を以て藤氏の氏神と爲すが如く、延暦寺を以て平氏の氏寺と号し日吉の社を以て平氏の氏神と号す」云云、叡山には明雲座主を始めとして三千人の大衆五檀の大法を行い大臣以下は家家に尊勝陀羅尼不動明王を供養し諸寺諸山には奉幣し大法秘法を尽くさずといつ事なし。

又承久の合戦の御時は天台の座主慈円仁和寺の御室三井等の高僧等を相催して日本国にわたれる所の大法秘法残りなく行われ給う、所謂承久三年辛巳四月十九日に十五檀の法を行わる、天台の座主は一字金輪法等五月二日は仁和寺の御室如法愛染明王法を紫宸殿にて行い給う、又六月八日御室守護經法を行い給う、已上四

十一人の高僧十五檀の大法此の法を行う事は日本に二度なり、権の大夫殿は此の事を知り給う事なければ御調伏も行い給はず、又いかに行い給うとも彼の法彼の人々にはすぐべからず、仏法の御力と申し王法の威力と申し彼は国主なり三界の諸王守護し給う、此れは日本国の民なりわづかに小鬼ぞまほりけん代代の所従重

重の家人なり、譬は王威を用いて民をせめば鷹の雉をとり、のねずみを食ひ蛇のかゝるをのみ師子王の兎を殺すにてこそ有るべけれ、なにしかかるがろしく天神地祇には申すべき、仏菩薩をばをどろかし奉るべき、師子王が兎をとらむには精進すべきか、たかがぎじを食んにはいのり有るべしや、いかにいのらずとも大王の身

として民を失わんには大水の小火をけし大風の小雲を巻くにてこそ有るべけれ、其の上大火に枯木を加うるがごとく大河に大雨を下すがごとく、王法の力に大法を行ひ合せて頼朝と義時との本命と元神とをば梵王と帝釈等に抜き取らせ給う、譬は古酒に酔る者のごとし蛇の蝦の魂を奪つがごとし頼朝と義時との御魂御名御姓を

ばかきつけて諸尊諸神等の御足の下にふませまいせていのりしかばいかにもこらうべしともみざりしにいかとして一年、一月も延びずしてわづか二日一日にはほろび給ひけるやらむ、仏法を流布の国主とならむ人

は能く能く御案ありて後生をも定め御いのりも有るべきか。

而るに日蓮此の事を疑いしゆに幼少の比より随分に顕密二道並びに諸宗の一切の経を或は人にならい或は我れと開見し勘見て候は故の候いけるぞ、我が面を見る事は明鏡によるべし国土の盛衰を計ることは仏鏡にはすぐべからず、仁王經・金光明經 最勝王經 守護經 涅槃經 法華經等の諸大乘經を開き見奉り候に仏法に付

きて国も盛へ人の寿も長く又仏法に付いて国もほろび人の寿も短かかるべしとみて候、譬へ水は能く船をたすけ水は能く船をやぶる、五穀は人をやしない人を損ず、小波小風は大船を損ずる事かたし大波大風には小船

をやぶれやすし、王法の曲るは小波小風のごとし大國と大人をば失いがたし、仏法の失あるは大風大波の小船をやぶるがごとし國のやぶる事疑いなし、仏記に云く我滅するの後末代には惡法惡人の國をほろぼし仏法を失には失すべから

ず譬へ三千大千世界の草木を薪として須弥山をやくにやけず劫火の時須弥山の根より大豆計りの火出でて須弥山やくが如く我が法も又此くの如し惡人外道天魔波旬五通等にはやぶられず、仏の

ごとく六通の羅漢のごとく三衣を皮のごとく身に紆い一鉢を両眼にあてたらむ持戒の僧等と大風の草木をなびかすがごとくなる高僧等我が正法を失うべし、其の時梵釈日月四天いかりをなし其の國に大天變大地天等

を發していさめむにいさめられず其の國の内に七難ををこし父母兄弟王臣万民等互に大怨敵となり梟鳥が母を食いはけい破鏡が父をがいするがごとく自國をやぶらせて結句他國より其の國をせめさすべしとみて候。

今日蓮一代聖教の明鏡をもつて日本國を浮べ見候に此の鏡に浮んで候人人は國敵、仏敵たる事疑いなし、一代聖教の中に法華經は明鏡の中の神鏡なり、銅鏡等は人の形をばつかぶれどもいまだ心をばつかず、法華經は人

の形を浮ぶるのみならず心をも浮べ給へり、心を浮ぶるのみならず先業をも未來をも鑒み給う事くもりなし、法華經の第七の巻を見候へは如來の滅後において仏の所説の經の因縁及び次第を知り義に随つて実の如く説か

ん、日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅す等云云、文の心は此の法華經を一字も一句も説く人は必ず一代聖教の浅深と次第とを能く弁えたらむ人の説くべき事に候、譬は曆の三百六十日をかながつるに一日も相違せば万日俱に反逆すべし、三十一字を連ねたる一句・一字も相違せば三十一字共に歌にて有るべからず、謂る一經を誦誦すとも始め寂滅道場より終り雙林最後にいたるまで次第と浅深とに迷惑せば其の人は我が身に五逆を作らずして無間地獄に入り此れを帰依せん檀那も阿鼻大城に墮つべし何に況や智人・人・出現して一代聖教の浅深勝劣を弁えん時・元祖が迷惑を相伝せる諸僧等或は国師となり或は諸家の師となりなんとせる人人・自のきずが顕るる上人にかるしめられん事をなげきて上に挙ぐる一人の智人を或は国主に訴へ或は万人にそしらせん、其の時守護の天神等の国をやぶらん事は芭蕉の葉を大風のさき小舟を大波のやぶらむがごとしと見今候。

無量義經は始め寂滅道場より終り般若經にいたるまでの一切經を或は名を挙げ或は年紀を限りて未顕真実と定めぬ、涅槃經と申すは仏最後の御物語に初め初成道より五十年の諸教の御物語四十余年をば無量義經のごとく邪見の經と定め法華經をば我が主君と号し給う、中に法華經ましまして已今当の勅宣を下し給いしかば多宝・十方の諸仏加判ありて各各本土にかへり給いしを・月氏の付法蔵の二十四人は但小乗・権大乘を弘通して法華經の実義を宣べ給う事なし、譬は日本国の行基菩薩と鑒真和尚との法華經の義を知り給いて弘通なかりしがごとし、漢土の南北の十師は内にも仏法の勝劣を弁えず外にも浅深に迷惑せり、又三論宗の吉蔵・華嚴宗の澄觀・法相宗の慈恩・此れ等の人人は内にも迷い外にも知らざりしかども・道心堅固の人人なれば名聞をすてて天台の義に付きにき、知らずされば此の人人は懺悔の力に依りて生死やはなれけむ、將た又謗法の罪は重く懺悔の力は弱くして阿闍世王無垢論師等のごとく地獄にや墮ちにけん。

善無畏三藏・金剛智三藏・不空三藏等の三藏は一切の眞言師の申すは大日如来より五代六代の人人即身成仏の根本なり等云云、日蓮勸えて云く法・偷の元祖なり盗人の根本なり、此れ等の人人は月氏よりは大日經・金剛頂經・蘇悉地經等を齎し来る、此の経經は華嚴經・般若經・涅槃經等に及ばざる上・法華經に對すれば七重の下劣なり、経文に見今赫赫たり明明たり、而るを漢土に來りて天台大師の止觀等の三十卷を見て舌をふるい心をまよ

わして此れに及ばずば我が經弘通しがたし、勝れたりといはんとすれば妄語眼前なり、いかんがせんと案ぜし程に一つの深き大妄語を案じ出だし給う、所謂大日經の三十一品を法華經二十八品並に無量義經に腹合せに合せて三密の中の意密をば法華經に同じ其の上に印と眞言とを加えて法華經は略なり大日經は広なり已にも入れず・

今にも入れず当にもはづれぬ、法華經をかたうどとして二説の難を脱れ結局は印と眞言とを用いて法華經を打ち落して眞言宗を立てて候、譬は三女が后と成りて三王を喪せしがごとし、法華經の流通の涅槃經の第九に我れ滅して後の悪比丘等我が正法を滅すべし、譬は女人のごとしと記し給いけるは是なり、されば善無畏三藏は

閻魔王にせめられて鉄の繩七脉つけられてからくして蘇りたれども又死する時は黒皮隱隱として骨甚だ露焉と申して無間地獄の前相・其の死骨に顯れ給いぬ、人死して後色の黒きは地獄に墮つとは一代・聖教に定むる所なり、金剛智・不空等も又此れをもつて知んぬべし、此の人人は改悔は有りて見今候へども強盛の懺悔のなかりけるか、今の

眞言師は又あて知る事なし、玄宗皇帝の御代の喪いし事も不審はれて候。

日本国は又弘法・慈覺・智証此の謗法を習ひ伝えて自身も知るしめさず人は又をもひもよらず、且くは法華宗の人人・相論有りしかども終には天台宗やうやく衰えて叡山五十五代の座主・明雲・人王八十一代の安徳天皇より已來は叡山一向に眞言宗となりぬ、第六十一代の座主・顯真・權僧正は天台座主の名を得て眞言宗に遷るのみならず、然る後・法華・眞言をすてて一向謗法の法然が弟子となりぬ、承久調伏の上衆・慈円・僧正は第六十二代並びに

五九七十一代の四代の座主隠岐の法皇の御師なり、此等の人人は善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・慈覺・智証等の眞言をば器はかわれども一の智水なり、其の上天台宗の座主の名を盗みて法華經の御領を知行して三千の頭となり一國の法の師と仰がれて大日經を本として七重くだれる眞言を用いて八重勝れりとをもるは天を地とをもい民を王とあやまち石を珠とあやまつのみならず珠を石といつ人なり、教主・釈尊・多宝・十方の諸仏の御怨敵たるのみならず一切衆生の眼目を奪い取り三善道の門を閉ぢ三惡道の道を開く、梵釈・日月・四天等の諸天・善神いかでか此の人を罰せさせ給はざらむ、いかでか此の人の仰ぐ檀那をば守護し給うべき、天照太神の内侍所も八幡大菩薩の百王守護の御ちかいかでか叶はせ給うべき。

余此の由を且つ知りしより已来二分の慈悲に催されて粗隨分の弟子にあらあら申せし程に次第に增長して国主まで聞えぬ、国主は理を親とし非を敵とすべき人にてをはすべきかかがしたりけん諸人の讒言ををさめて一人の余をすて給う、彼の天台大師は南北の諸人あだみしかども陳隋二代の帝重んじ給いしかば諸人の怨もつすかりき、此の伝教大師は南都・七佛寺讒言せしかども桓武・平城・嵯峨の三皇用い給いしかば怨敵もおかしがたし、今日蓮は日本国十七万一千三十七所の諸僧等のあだするのみならず国主用い給わされば万民あだをなす事父母の敵にも超え宿世のかたきにもすぐれたり、結句は一度の遠流一度の頭に及ぶ、彼の大莊嚴の末法の四比丘並に六百八十万億那由他の諸人が普事比丘一人をあだみしにも超師・子音王・仏の末の勝意比丘・無量の弟子等が喜根比丘をせめしにも勝れり、覺徳比丘がせめられし不輕菩薩が杖木をかをほりしも限りあれば此れにはよもすぎじとぞをば候。

若し百千にも一つ日蓮・法華經の行者にて候ならば日本国の諸人後生の無間地獄はしばらくをく、現身には国を失い他国に取られん事彼の徽宗・欽宗のごとく優陀延王・訖利多王等に申せしがごとならん、又其の外は或は其の身は白癩

黒癩あは或は諸惡重病しよあくじやうじやう疑たがひいなるべきかもし其の義なくば又日蓮にちれん法華經の行者にあらじ此の身現身には白癩黒癩等の諸惡重病しよあくじやうじやうを受け取り後生には提婆瞿伽利等がごとく無間・大城に墮つべし日月を射奉る修羅は其の矢還つて我が眼に立ち師子王を吼る狗犬は我が腹をやぶる釈子を殺せし波琉璃王は水中の大火に入り仏の御身より血を出だせし提婆達多は現身に阿鼻の炎を感じり金銅の釈尊をやきし守屋は四天王の矢にあたり東大寺興福寺を焼きし清盛入道は現身に其身もつる病をうけにき彼等は皆大事なれども日蓮が事に合すれば小事なり小事すら猶しるしあり大事いかでか現罰なからむ。

悦ばしいかな経文に任せて五五百歳広宣流布をまつ悲いかな鬪諍堅固の時に當つて此の国修羅道となるべし、清盛入道と頼朝とは源平の両家本より狗犬と猿猴とのごとし、少人少福の頼朝をあだせしゆゑに宿敵たる入道の一門ほろびし上科なき主上の西海に沈み給ひし事は不便の事なり、此れは教主釈尊・多宝・十方の諸仏の御使として世間には一分の失なき者を一国の諸人にあだますのみならず両度の流罪に當てて日中に鎌倉の小路をわたす事朝敵のごとし、其の外小菴には釈尊を本尊とし一切経を安置したりし其の室を刎ねこぼちて仏像経巻を諸人にふまするのみならず糞泥にふみ入れ日蓮が懷中に法華經を入れまいらせて候いしをとりいだして頭をさんさんに打ちさいなむ、此の事如何なる宿意もなし当座の科もなし、ただ法華經を弘通する計りの大科なり。

日蓮天に向つて声をあげて申さく法華經の序品を拝見し奉れば梵釈と日月と四天と竜王と阿修羅と二界八番の衆と無量の国土の諸神と集会し給いたりし時已今当に第一の説を聞きし時我とも雪山童子の如く身を供養し藥王菩薩の如く臂をも・やかんとをもちしに、教主釈尊・多宝・十方の諸仏の御前にして今仏前に於て自ら誓言を説けと諫曉し給ひしかば幸に順風を得て世尊の勅の如く當に具さに奉行すべしと二処三会の衆一同に大音声を

放ちて誓い給いしはいかんが有るべき、唯仏前にては是くの如く申して多宝・十方の諸仏は本土にかへり給う、釈尊は御入滅ならせ給いて、ほど久くなりぬれば、末代辺国に法華經の行者有りとて梵釈・日月等、御誓いをうちわすれて守護し給う事なくば日蓮がためには一旦のなげきなり、無始已来、鷹の前のきじ、蛇の前のかる、の前のねずみ、犬の前のさると有りし時もありき、ゆめの代なれば仏菩薩諸天にすかされ、まいらせたりける者にてこそ候はめ。

なによりも、なげかしき事は梵と帝と日月と四天等の南無妙法蓮華經の法華經の行者の大難に値をすてさせ給いて現身に天の果報も尽きて花の大風に散るごとく雨の空より下ることく其の人命終入阿鼻獄と無間・大城に墮ち給はん事こそあはれにはをば候へ、設い彼の人人は三世十方の諸仏をかたうどとして知らぬよしのべ申し

給うとも日蓮は其の人人には強きかたきなり、若し仏の返願をはずば梵釈・日月・四天をば無間・大城には必ずつけたてまつるべし、日蓮が眼をそろしくばいそぎいそぎ仏前の誓いをばはたし給へ日蓮が口、。

又むぎひとひつ鷺目兩貫・わかめがちめ・みな一俵給い畢んぬ、干いやぎこめ、各各一かつぶくろ給い畢んぬ、一一の御志はかきつくすべしと申せども法門巨多に候は留め畢んぬ、他門にきかせ給うなよ大事の事どもかきて候なり。

三二九 上野殿御消息 建治元年 五十四歳御作 与南条時光

1526p

三世の諸仏の世に出でさせ給いても皆皆四恩を報ぜよと説き、三皇・五帝・孔子・老子・顔回等の古の賢人は四徳を修せよとなり、四徳とは一には父母に孝あるべし、二には主に忠あるべし、三には友に合つて礼あるべし、四に

は劣れるに逢つて慈悲あれとなり、一に父母に孝あれとはたとひ親はものに覚えずとも悪さまなる事を云うとも聊かも腹も立てず誤る顔を見せず親の云う事に一分も違ふ親によりき物を与へんと思ひてせめてする事なくば一日に二三度えみて向ふなり、二に主に合つて忠あるべしとはいささかも主にうしろめたなき心ある

べからず、たとひ我が身は失しなはるとも主にはかまふよかれと思ふべし、かくれての信あればあらはれての徳あるなりと云云、三には友にあふて礼あれとは友達の一日に十度二十度来れる人なりとも千里二千里来れる人の如く思ふて礼儀いささかをろかに思ふべからず、四に劣れる者に慈悲あれとは我より劣りたらん人を

ば我が子の如く思ひて一切あはれみ慈悲あるべし、此れを四徳と云ふなり、是くの如く振舞うを賢人とも聖人とも云ふべし、此の四の事あれば余の事にはよからねどもよき者なり、是くの如く四の得を振舞ふ人は外典三千巻をよまねども読みたる人となれり。

一に仏教の四恩とは一には父母の恩を報ぜよ・二には国主の恩を報ぜよ・三には一切衆生の恩を報ぜよ・四には三宝の恩を報ぜよ、一に父母の恩を報ぜよとは父母の赤白二和合して我が身となる、母の胎内に宿る事二百七十日・九月の間・三十七度死るほどの苦みあり、生落す時たかたしと思ひ念ずる息・頂より出づる煙り・梵天に至る、さて生落されて乳をのむ事一百八十余石・三年が間は父母の膝に遊び人となりて仏教を信すれば先づ此の父と母との恩を報ずべし、父の恩の高き事須弥山・猶ひきし母の恩の深き事大海還つて浅し、相構えて父母の恩を報ずべし、二に

国主の恩を報ぜよとは生れて已来衣食のたぐひより初めて皆是れ国主の恩を得てある者なれば現世安穩・後生善処と祈り奉るべし、三に一切衆生の恩を報ぜよとは、されば昔は一切の男は父なり・女は母なり・

然る間・生生世世に皆恩ある衆生なれば皆仏になれと思ふべきなり、四に三宝の恩を報ぜよとは最初成道の華嚴經を尋ねれば経も大乘・仏も報身如来にて坐ます間・二乗等は昼の梟・夜の鷹の如くしてがれを聞くと

へども耳しる目しめる如し、然る間・四恩を報すべきかと思ふに女人をきはれたる間・母の恩報しがたし、次に仏阿含・小乗經を説き給ひし事・十二年・是こそ小乗なれば我等が機にしたがふべきかと思は、男は五戒・女は十戒・法師は二百五十戒・尼は五百戒を持ちて三千の威儀を具すべしと説きたれば末代の我等かなふべしとも・

おぼえねば母の恩報しがたし、況や此の經にもきはれたり、方等・般若・四十年の經に皆女人をきはれたり、但天女成仏經・觀經等にすこし女人の得道の經文有りといへども、但名のみに有つて実なきなり、其の上未顕眞實の經なれば如何が有りけん、四十余年の經に皆女人を嫌われたり、又最後に説き給ひたる涅槃經にも女人を

嫌はれたり、何れか四恩を報する經有りと尋ねれば法華經こそ女人成仏する經なれば、八歳の竜女・成仏し・仏の姨母・曇弥女・耶輸陀羅比丘尼記・記にあづかりぬ、されば我等が母は但女人の体にてこそ候へ、畜生にもあらず蛇身にもあ

らず・八歳の竜女だにも仏になる、如何ぞ此の經の力にて我が母の仏にならざるべき、されば法華經を持つ人は父と母との恩を報するなり、我が心には報ずると思はねども此の經の力にて報するなり。

然る間・釈迦・多宝等の十方無量の仏・上行・地涌等の菩薩も普賢・文殊等の迹化の大士も舍利弗等の諸大声聞も・大梵天王・日月等の明主諸天も・八部王も・十羅刹女等も・日本国中の大小の諸神も・総じて此の法華經を強く信じまいらせ余念なく一筋に信仰する者をば影の身にそふが如く守らせ給ひ候なり、相構て相構て心を翻へざる・一筋に信じ給ふならば、現世安穩・後生善処なるべし、恐恐謹言。

上野殿

日蓮花押

はるのはじめの御つかひ自他申しこめまいらせ候、さては給はるところのすずの物の事、もちゐ七十まいさけひとついもいちだ河のりひとかみぶくろ、だいこんふたつやまのいも七ほん等なり、なんころの御心ざしはしなじなものにあらはれ候いぬ。

法華經の第八の巻に云く「所願虚しからず亦現世に於て其の福報を得ん」又云く「当に現世に於て現の果報を得べし」等云云、天台大師云く「天子の一言虚しからず」又云く「法王虚しからず」等云云、賢王となりぬればたとひ身をほろぼせどもそら事せず、いわうや釈迦如来は普明王とおはせし時ははんぞく王のたてへ入らせ給い

き不妄語戒を持たせ給いしゆなり、かり王とおはせし時は実語少人・大妄語入地獄とこそおほせありしか、いわうや法華經と申すは仏我と要当説眞実とならせ給いし上多宝仏・十方の諸仏あつまらせ給いて日月・衆星の

ならばせ給うがごとくに候いしざせきなり、法華經にそら事あるならばなに事をか人信すべき、かかる御經に一華一香をも供養する人は過去に十萬億の仏を供養する人なり、又釈迦如来の末法に世のみだれたらん時王臣・万民・心を一にして一人の法華經の行者をあだまん時此の行者かんぱちの小水に魚のすみ万人にかこまれたる鹿のごとくならん時、一人ありてとぶらはん人は生身の教主釈尊を一劫が間三業相応して供養しまいらせたら

んよりなを功德するべきよし如来の金言分明なり、日は赫赫たり月は明明たり法華經の文字はかくかくめいめいたりめいめいがかくかくたり、あきらかなる鏡にかををつかべすめる水に月のつかべるがごとし。

しかるに亦於現世得其福報の勅宣・当於現世得現果報の鳳詔・南条の七郎次郎殿にかぎりてむなしかるべしや、日は

西よりいづる世月は地よりなる時なりとも 仏の言むなしからじとこそ定めさせ給いしか、これをもつておもつに慈父過去
の聖霊は教主釈尊の御前にわたらせ給いだんなは又現世に大果報をまねかん事疑あるべからず、かつじんかつじん。

建治二年正月十九日

日蓮 花押

三八一 南条殿御返事

南条殿御返事 建治二年三月 五十五歳御作

1530p

いものかしら 河のり又わさび・一・人人の御志 承り候いぬ 鳥のかいこをやしなひ 牛の子を牛のねぶるが如し 夫れ
衣は身をつつみ 食は命をつぐ、されば法華経を山中にして読みまいらせ候人をねんごろにやしなはせ給ふは、釈迦仏を
やしなひまいらせ 法華経の命をつぐにあらずや、妙莊嚴王は三聖を山中にやしなひて・

沙羅樹王 仏となり、檀王は阿私仙人を供養して釈迦仏とならせ給ふ、されば必ずよみかかねどもよみかく人を供養す
れば仏になる事疑ひなかりけり、経に云く「是の人 仏道に於て決定して疑有ること無けん」南無妙法蓮華経、南無
妙法蓮華経。

建治二年三月十八日

日蓮 花押

謹上 南条殿御返事

橘三郎殿 太郎大夫殿 一紙に云云恐れ入り候、返す返すはき殿読み聞かせまいらせ給へ。

かたびら一つしをいちだあぶら五そう 給ひ候あいんぬ、ころもはかんをふせぎ又ねつをふせく・みをかくし・みをかざる、法華經ほけきょうの第七やくわつばんに云く「如裸者得衣いと等云云、心ははだかなるものころもをへたるがごとし、もんの心はうれしき事をとかれて候。

ふほつぞうの人のなかに商那和衆そうと申す人あり衣をきてむまれさせ給たまう、これは先生せんしやうに仏法ぶつぽうにころもをくやうせし人なり、されば法華經ほけきょうに云く「柔和忍辱衣にんにくと等云云、こんろん山には石なしみのぶのたけにはしをなし、石なきところにはたまよりもいしすぐれたり、しをなきところにはしをこめにもすぐれて候、国王こくおうのたから

は左右さうの大臣だいじんなり左右さうの大臣だいじんをば塩梅あんばいと申す、みそしをなればよわたりがたし左右さうの臣おみなければ国をさまらず、あぶらと申すは涅槃經ねはんきやうに云く風のなかにあぶらなしあぶらのなかにがぜなし風をぢする第一だいいちのくすりなり、かたがたのものをくり給たまいて候、御心おんこころざしのあらわれて候事申すばかりなし、せんするところはこなんでつどの法華經ほけきょうの御しんよつのふかかりし事のあらわるるが、王の心ざしをば臣おみのべをやの心ざしをば子の申しのぶるとはこれなり、あわれことのうれしとをばすらん。

つくしにををはしの太郎と申しける大名ありけり、大将どのの御かんきをがほりてかまくらゆひのはまつちのろうにつこめられて十二年めしはじしめられしときつくしをうちいでしに、げんにむかひて申せしはゆみやとるみとなりてきみの御かんきをがほらんことはなげきならず、又げんにをさなくよりなれしかいまはなれん事いづばかりなし、これはさてをきぬ、なんしにてもによしにても一人なき事なげきなり、ただしくわいにん

のよしがたらせ給^{たま}つをうな^なにてやあらんずらんをの^のにてや候^{うけ}はんずらん、ゆくをみざらん事くちおし、又かれが
人となりてちちといつものもなからんなげき、いがせんとをもへとも力^{ちから}及ばずとていでにき。

かくて月ひすべれことゆなく生れにきをの^のにてありけり、七歳のとしやまでらにのぼせてありければともだち
なりけるち^ちどもをやなしとわらひけり、いにかへてははにちちをたづねけり、ははのぶるかたなくしてなくより外^{ほか}のこ
となし、此のち^ち申^{まう}す天なくしては雨ふらず地なくしてはくさをいす、たとひ母

ありともちちなくばひととなるべからず、いかに父のありどころをばかくし給^{たま}つぞとせめしかば、母せめられて云うわち
こをさなければ申^{まう}さぬなりありやうはかうなり、此のち^ちこなく申^{まう}すやうさてちちのかたみはなきかと申せしかば、
これありとてををはし^しのせんぞの日記^{にっき}ならびにはらの内なる子にゆづれる自筆^{じひつ}の状なり、

いよいよをや^やひしくてなくより外^{ほか}の事なし、さていがせんといふしかば、これより郎従^{らうじゆう}あまたともせしかども、御かん
きをかほりければ、みなちりうせぬ、そのちはいきてや又しにてやをとづる人なしと、かたりければ、ふしころびなき
ていさむるをももちぬざりけり。

ははいわくをのれをやまでらにのぼする事はをやのけうやうのためなり、仏に花をもまいらせよ、経をも一卷よみて
孝養^{かうよう}とすべしと申せしかば、いそぎ寺にのぼりていへかへる心なし、昼夜に法華^{ほけき}経をよみしかば、よみわたりけるのみなら
ず、さらにをばへありけり、さて十二のとし出家^{しゅつが}をせずして、かみをつつみとかくしてつくしをにげいでて、かまくらと
申^{まう}すところへたづねいりぬ。

八幡^{はちまん}の御前にまいりて、ぶしをがみ申^{まう}しけるは、八幡大菩薩^{はちまんたいぼなつ}は日本第十六^{にほん}の王^{おう}、本地は靈山^{りやうざん}淨土^{じやうど}に法華^{ほけき}経をとかせ給^{たま}いし
教主^{きうしゆ}釈尊^{しやくそん}なり、衆生^{しゆじやう}のねがいをみて給^{たま}わんがために神とあらわれさせ給^{たま}つ、今わがねがいみてさせ給^{たま}え

、をやは生きて候か・しにて候かと申していぬの時より法華經をはじめてとらの時までによみければなにとなきをさなきこはつでんにびびきわたり・ころすごかりければまいりてありける人人もがへらん事をわすれにき、皆人いちのやうにあつまりてみければをさなき人にて法師ともをばえずをつなにもなかりけり。

をりしもきやうのにどの御さんけいありけり、人めをしるばせ給いてまいり給いたりけれども御經のたうとき事つねにもずぐれたりければはつるまで御聴聞ありけりさてかへらせ給いておはしけるがあまりなごりをしさに人をつけてきて大將殿へかかる事ありと申させ給いければめして持仏堂にして御經よませまいらせ給いけり。

さて次の日又御聴聞ありければ西のみかど人さわぎけり、いかなる事ぞときしかば今日はめしうどのくびきらるるとのしりけり、あわれわがをやはいままで有るべしとはをもわねどもさすが人のくびをきらると申せば我が身のなげきとをもひてなみだくみたりけり、大將殿あやしとごらんじてわちごはいかなるも

のぞありのままに申せとありしかば上くだんの事・一に申しけり、をさふらひにありける大名・小名・みすの内みなぞでをしぼりけり、大將殿がぢわらをめしてをほせありけるは大はしの太郎といつめしうどまいらせよとありしかば只今くびきらんとてゆいのはまへつかわし候いぬ、いまはきりてや候らんと申せしかばこ

のちご御まへなりけれどもぶしころびなきけり、ををせのありけるはがぢわらわれとはしりていまだ切らずばぐしてまこれとありしかばいそぎいそぎゆいのはまへせゆく、いまだいたらぬによばわりければすでに頸切らんとて刀をぬきたりけるときなりけり。

さてかじわらををはしの太郎をなわつけながらぐしてまいりてををにはひきすへたりければ大將殿こ

のちこにとらせよとありしかば、ちこはしりをりて、なわをときけり、大はしの太郎は、わが子ともしらず、いかなる事ゆゑに、たすかるともしらざりけり、さて大將殿又めして、このちこに、やうやうの御ふせたびて、ををはしの太郎をたぶのみならず、本領をも安堵ありけり。

大將殿をほせありけるは、法華經の御事は昔よりさる事とわきまつたたれども、丸は身にあたりて二つのゆゑあり、一には故親父の御くびを大上入道に切られてあさましとも、いつばかりなかりしに、いかなる神仏にか申すべきとおもひしに、走湯山の妙法尼より法華經をよみつた全部と申せし時、たかをのもんがく房をやのくび

をもて来りて、みせたりし上、かたきを打つのみならず、日本国の武士の大將を給いてあり、これひとへに法華經の御利生なり、二つには、このちこが、ををやをたすけぬる事不思議なり、大橋の太郎といつやは頼朝きくわいなりとをもつたとい勅宣なりとも、かへし申して、くびをきりて、あまりのにくさに、こそ十二年まで、土のうづに

は入れてありつるに、かかる不思議あり、されば法華經と申す事は、ありがたき事なり、頼朝は武士の大將にて、多くのつみを、つもりて、あれども法華經を信じまいらせて候は、さりととも、こそをも、なみだぐみ給いけり。

今の御心ざし、み候は、故な、んで、つどのは、ただ子なれば、いとをしとわを、ぼしめしけるらめども、かく法華經をもて、我がけうやうを、すべしとは、よもを、ぼしたらじ、たとひ、つみありて、いかなるところに、おはすとも、この御けうやうの、心ざしを、ば、えんま、ほつわう、ぼんでん、たひしやく、までも、じろしめしぬらん、釈迦仏、法華經も、いかで、かすて、させ給つべき、かのちこの、ちちの、なわを、ときしと、この御心ざし、が、れに、たが、わす、これは、なみだを、もちて、かきて、候なり。

又、むくりのおこれるよし、これには、いまだ、つけ給わらず、これを、申せば、日蓮房は、むくり、国の、わたるとい、は、よろこぶと申す、これ、ゆわれなき事なり、かかる事あるべしと、申せしかば、あだが、たきと、人ごとに、せめしが、經文、かぎり

あれば来るなり、いかにいつともがなうまじき事なり、失もなくして国をたすけんと申せし者を用いこそあらざらめ、又法華經の第五の巻をもつて日蓮がおもてをうちしなり、梵天帝釈是を御覽ありき、鎌倉の八幡大菩薩も見させ給いき、いかにも今は叶うまじき世にて候は、かかる山中にも入りぬるなり、各各も不便とは思へ

ども助けがたくやあらんずらん、よるひる法華經に申し候なり、御信用の上にも力もをしまず申させ給え、あえてこれよりの心ざしのゆわきにはあらず、各各の御信心のあつくすきに候べし、たいしは日本国のよき人人は一定いけどりにぞなり候はんずらん、あらあさましやあさましや、恐恐謹言。

後三月二十四日

日蓮花押

南条殿御返事

三八三 九郎太郎殿御返事

建治二年九月 五十五歳御作

1535p

いゑの芋一駄送り給ひ候、こんろん山と申す山には玉のみ有りて石なし、石ともしければ玉をもつて石をかう、はづれいひんと申す浦には水草なし、いをもつて薪をかう、鼻に病ある者はせんだん香用にあらず、眼なき者は明なる鏡なにかせん。

此の身延の沢と申す処は甲斐国・波木井の郷の内の深山なり、西には七面のかれと申す・たけあり・東は天子のたけ・南は鷹取のたけ・北は身延のたけ・四山の中に深き谷あり、はこのそのごとし、峯にははづつの音かまびすし、谷にはたいかいの石多し。

然れどもするがのいものやうに候石は一も候はず、いものめづらしき事くらき夜のともしびにもすぎかはけ

る時の水にもすぎて候ひき、いかにめづらしからずとはあそばされて候ぞ、されば其には多く候かあら二ひしあら二ひし、法華經 釈迦仏にゆづりまいらせ候いぬ、定めて仏は御志 をおさめ給うなれば御悦び候らん、靈山淨土へまひらせ給いたらん時 御尋ねあるべし、恐恐謹言。

建治二年丙子九月十五日

日蓮花押

九郎太郎殿御返事

三八四 本尊供養御書

建治二年十二月 五十五歳御作

与南条平七郎

1536p

法華經御本尊御供養の御僧膳料の米一駄 蹲鴟一駄、送り給ひ候い畢んぬ、法華經の文字は六万九千三百八十四字・一の文字は我等が目には黒き文字と見え候へども仏の御眼には一に皆御仏なり、譬えば金粟王と申せし国王は沙を金となし 釈摩男と申せし人は石を珠と成し給ふ、玉泉に入りぬる木は瑠璃と成る、大海に入りぬる水は皆鹹し、須弥山に近づく鳥は金色となるなり、阿伽陀薬は毒を薬となす、法華經の不思議も又是くの如し凡夫を仏に成し給ふ、蕪は鶉となり、山の芋はうなぎとなる、世間の不思議以て是くの如し。

何に況や法華經の御力をや、犀の角を身に帶すれば大海に入るに水、身を去る事五尺、栴檀と申す香を身にぬれば大火に入るに焼くこと無し、法華經を持ちまいらせぬれば八寒地獄の水にもぬれず八熱地獄の大火にも焼けず、法華經の第七に云く「火も焼くこと能わず水も漂すこと能わず」等云云、事多しと申せども年せまり御使急ぎ候へば筆を留候い畢んぬ。

建治二年丙子十二月 日

日蓮花押

南条平七郎殿御返事

五月十四日にいものかしら一駄わざとおりたびて候、当時のいもは人のいとまと申し珠のごとくすりのごとく、さてはおほせつかはされて候事つけ給わり候いぬ。

尹吉甫いんきつぽと申し人はただ一人子あり伯奇はくきと申す、をやも賢なり子もかしこしいかなる人かこの中をば申ししたがふべきとおもひしかども継母けいぼよりよりよりうたへしに用いざりしほどに継母けいぼすねんが間やうやうのたばかりをなせし中に、蜂むしと申すむしを我がふところに入れていそぎいそぎ伯奇はくきにとらせてしかも父にみせわれをけそうすると申しなして、うしなはんとせしなり。

びんばさら王と申し王は賢王けんおうなる上仏の御だんなの中に閻浮第一えんぶだいいちなり、しかもこの王は摩竭提国の王なり、仏は又此の国にして法華経ほけきょうをとかんとおぼしに王と仏と一同なれば一定法華経とかれなんとみ候しに、提婆達多だいばだつたと申し人、いかんがして此の事をやぶらんとおもひしにすべてたよりなかりしかばとかうはかり

しほどに頻婆沙羅王びんばしやらの太子阿闍世王たいしあじゃせをとしごとかくかたらひてやうやく心をとりをやと子とのなかを申ししたが今、阿闍世王あじゃせをすかし父の頻婆沙羅王びんばしやらをころさせ、阿闍世王あじゃせと心を一にし提婆だいばと阿闍世王あじゃせと一味いちみとなりしかば、五天竺てんじくの外道げどう、悪人あくにん、雲かすみのごとくあつまり、国をたび、たからをほどこし、心をやわらげすかししかば、一

国の王すでに仏の大怨敵おんてきとなる、欲界第六天よくかいだいろくてんの魔王まおう、無量の眷属けんぞくを具足ぐそくしてうち下り、摩竭提国の提婆だいば、阿闍世あじゃせ、六大臣だいろくてん等の身に入りかはりしかば、形は人なれども力は第六天だいろくてんの力なり、大風の草木たいふうそうもくをなびかすよりも、大風の大海たいふうたいかいの波をたつるよりも、大地震だいちじんの大地だいちをつごかすよりも、大火だいかの連宅れんたくをやくよりも、さはがしくをぢわななきし事

なり。

さればはるり王と申せし王は阿闍世王にかたらはれ釈迦仏の御身したしき人数百人切りころす、阿闍世王は醉象を放ちて弟子を無量無辺ふみころさせつ、或は道に兵士をすへ或は井に糞を入れ・或は女人をかたらひてそら事いひつけて仏弟子をころす、舍利弗・目連が事にあひかるだいが馬のくそにつつまれし、仏はせめられて一夏

九十日馬のむぎをまいりしこれなり、世間の人のおもはく、悪人には仏の御力もかなはざりけるにやと思ひて信じたりしひとびと人人も音をのみて・もの申さず眼をとちてものをみる事なし、ただ舌をふり手をかきし計りなり、

結句は提婆達多・釈迦如来の養母・蓮華比丘尼を打ちころし、仏の御身より血を出せし上誰の人がかたつどになるべき、

かくやうやうになりての上、いかがしたりけん法華経をとかせ給いぬ、此の法華経に云く「而も此の経

は如来の現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」と云云、文の心は我が現在して候だにも此の経の御かたきかくのこと

し、いかにいわうや末代に法華経を一字一点もとき信ぜん人をやと説かれて候なり、此れをもつておもひ候は仏法華経

をとかせ給いて今にいたるまでは二千二百二十余年になり候どもいまだ法華経を仏のごと

くよみたる人は候はぬか、大難をもちてこそ法華経しりたる人とは申すべきに、天台大師・伝教大師こそ法華経の行者と

は・みへ候しかども在世のごとくの大難なし、ただ南三北七・南都・七大寺の小難なり、いまだ国主

かたきとならず・万民つるぎをにぎらず・一国悪口をはかず、滅後に法華経を信ぜん人は在世の大難よりもすぐべく候な

るに同じほどの難だにも来らず・何に況やすくれたる大難多難をや。

虎うそぶけば大風ふく・竜ぎんずれば雲をこる・野兎のつそぶき驢馬のいはるに・風ふかず雲をこる事なし、愚者が

法華経をよみ賢者が義を談ずる時は国もさわかず事もころさず、聖人出現して仏のごとく法華経を談ぜん時・一国もさ

わぎ在世にすぎたる大難をこるべしとみえて候、今日蓮は賢人にもあらず・まして聖人はおもひも

よらず天下第一の僻人にて候が但経文計りにはあひて候やうなれば大難来り候は父母のいきかへらせ給いて候よりも
にくきものことにあふよりもうれしく候なり、愚者にて而も仏に聖人とおもはれまいらせ候はん事こそうれしき事
にて候へ智者たる上二百五十戒かたくもちて万民には諸天の帝釈をつやまふよりも
やまはれて釈迦仏法華経に不思議なり提婆がごとしとおもはれまいらせなば人目はよきやうなれども後生はおそろ
しおそろし。

さるにては殿は法華経の行者にさせ給へりとうけ給はればもつてのほかに人のしたしきもうときも日蓮房を信じて
はよもまどいなん上の御気色もあしかりなんとかたつとなるやうにて御けつくむ候なれば賢人ま

でも人のたばかりはおそろしき事なれば一定法華経すて給いなん、なかなか色みでありせばよかりなん、大魔のつきた
る者どもは一人をけつくんしをとしつればそれをひつかけにして多くの人をせめをとすなり。

日蓮が弟子にせう房と申しのと房といぬなこえの尼なんど申せし物どもはよくふかく心をくびやうに愚癡にして
而も智者となのりしやつばらなりしかば事のをこりし時たよりをえておほくの人をおとせしなり、殿もせめをとされ
させ給うならばするがにせうせう信ずるやうなる者も又信ぜんとおもふらん人人も皆

法華経をすつべし、さればこの甲斐の国にも少少信ぜんと申す人人候どもおぼろげならでは入れまいらせ候はぬにて候、
なかなかしき人の信ずるやうにてなめりて候は人の信心をもやぶりて候なり。

ただをかせ給へ梵天帝釈等の御計として日本国一時に信ずる事あるべし。爾時我も本より信じたり信じたりと
申す人こそおほくをはずせうらんとおぼえ候。御信用あつくをはするならば人ためにあらず我が故父の御ため人は我がを
やの後世にはかはるべからず子なれば我こそ故をやの後世をばとぶらふべけれ、郷一郷知るならば半郷は父のため半郷
は妻子眷属をやしなふべし、我が命は事出できたらば上にまいらせ候べしとひとへ

におもひきりて何事につけても、言をやわらげて法華經の信をうすくなさんずるやうを、たばかる人出来せば我が信心を、こころむるかとおぼして各各これを御けつくんあるはうれしき事なり、ただし御身のけつくんせさせ給へ上の御信用なき事はこれにもしりて候を上をもつておどさせ給うこそかしく候へ参りてけつくん申さんとおもひ候つるにうわてうたれまいらせて候、閻魔王に我が身といとをしとおぼす御めと子とをひつばられん時は時光に手をやすらせ給い候はんずらんとにくげにうちいひておはすべし。

にいた殿の事まことにてや候らん、をきつの事きこ今候、殿もびんき候はば其の義にて候べし、かまておほきならん人申しだしたるらんはあはれ法華經のよきかたきよ、優曇華が盲龜の浮木かとおぼしめしてしたたかに御返事あるべし。

千丁万丁しる人もわづかの事にたちまちに命をすて所領をめさる人もあり、今度法華經のために命をすつる事ならば、なにはをしかるべき、薬王菩薩は身を千二百歳が間、やきつくして仏になり給い檀王は千歳が間、身をゆかとなして今の釈迦仏といはれさせ給うぞかし、さればひが事をすべきにはあらず、今はすてなばかへりて人わらはれになるべし、かたうどなるやうにて、つくりおとして、我もわらひ人にもわらはせんとするがきくわい

なるに、よくよくけつくんせさせて人のおほきかんとおほきかんとにて、人をけつくんせんよりも我が身をけつくんあるべしとて、かつぱとたたせ給へ一日二日が内にこれきこ候べし、事おほければ申さず又又申すべし、恐恐謹言。

建治三年五月十五日 日蓮花押

上野殿御返事

白麦一俵・小白麦一俵・河のり五でふ送り給ひ了んぬ。

仏の御弟子に阿那律尊者と申せし人はをさなくしての御名をば如意と申す、如意と申すは心のおもひのたからをふらししゆなり、このよしを仏にとひまいらせ給ひしかば昔うえたるよに縁覚と申す聖人をひゑのはんをもつて供養しまいらせしゆへと答えさせ給う。

迦葉尊者と申せし人は仏にいつでも閻浮提第一の僧なり、俗にてをせし時は長者にてからを六十そのくらに金を百四十こくづつ入れさせ給う、それより外のたから申すばかりなし、この人のせんじやうの御事を仏にと

ひまいらせさせ給ひしかばむかしうえたるよにむぎのはんを一ぱひ供養したりしゆへに・利天に千反生れて今釈迦仏に値いまいらせ僧の中の第一とならせ給ひ法華經にて光明如来と名をさづけられさせ給うと天台大師・文句の第一にしるされて候。

かれをもつて此れをあんずるに迦葉尊者の麦のはんはいみじくて光明如来とならせ給う、今のだんなの白麦はいやしくて仏にならず候べきか、在世の月は今も月・在世の花は今も花・むかしの功德は今の功德なり、その上上一人より下万民までににくまれて山中にうえしにゆべき法華經の行者なり、これをふびんとをばして山河

をこえわたりをりくたびて候御心ざしは麦にはあらず金なり・金にはあらず法華經の文字なり、我等が眼にはむぎなり・十らせつには此のむぎをば仏のたねとこそ御らん候らめ、阿那律がひゑのはんはへんじてうさぎとなる、

うさぎ・へんじて死人となる・死人へんじて金となる・指をぬきてうりしかば又いできたりぬ、王のせめのありし時は死人となる、かくのとく・うさぎずして九十一劫なり、釈まなんと申せし人の右をとりしかば金となりき、

金ぞく王はいざを金となし給いき。

今のむぎは法華經のもんじなり、又は女人の御ためにはががみとなり、身のかざりとなるべし、男のためにはよろひとなりがぶとなるべし、守護神となりて弓箭の第一の名をとるべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、恐恐謹言。

このよの中はいみじかりし時は何事かあるべきとみえしかども、當時はことにあぶなげにみえ候ぞ、いかなる事ありともなげかせ給うべからず、ふつとおもひきりてそりやうなんども、たがふ事あらばいよいよ悦びとこそおもひてうちうそぶきてこれわたらせ給へ所地しらぬ人もあまりにすぎ候ぞ、當時つくしへむかひてなげく人人はいかばかりとかおぼす、これは皆日蓮をがみのあなづらせ給いしゆなり。

七月二日

日蓮花押

南条殿御返事

三三七 庵室修復書

建治三年 五十六歳御作

1542p

去文永十一年六月十七日にこの山のなかにぎをうちきりてかりそめにあじちをつくりて候いしがやうやく四年がほどはしらくちかきかべをち候へともなをす事なくてよるひをとばさねども月のひかりにて聖教をよみまいらせわれと御經をまきまいらせ候はねども風をのづからぶきかへしまいらせ候いしが、今年は十二

のはしら四方にかふべをなげ四方のかべは、一そにたつねぬ、うだいたもちがたければ、月はすめ雨はとどまれとはげみ候いつるほどに人ぶなくしてがくしやうどもをせめ、食なくしてゆきをもちて命をたすけて候ところ、さきにうへのどのよりいも二駄これ一だは、たまにもすぎ。

夫れ法華經第二の卷に云く「此の宝乘に乗り直ちに道場に至る」と云云、日蓮は建長五年四月二十八日初めて此の
 大白牛車の一乘法華の相伝を申し顯はせり、而るに諸宗の大師等、雲霞の如くよせ来り候、中にも真言・淨土・禅宗等、
 蜂の如く起りせめたたかふ、日蓮大白牛車の牛の角最第一なりと申してたたかふ、両の角は本迹二門
 の如く二乗作仏・久遠実成是なり、すでに弘法大師は法華最第一の角を最第三となをし・一念三千・久遠実成・即身成仏
 は法華に限り、是をも真言の經にありとなをせり、かかる謗法の族を責めんとするに返つて、彌怨をなし候、譬えば角を
 なをさんとて牛をころしたるが如くなりぬぐ候ひしかども、いかでさは候べき。

抑此の車と申すは本迹二門の輪を妙法蓮華經の牛にかけ、三界の火宅を生死・生死とぐるり、ぐるりとまはり候とこ
 ろの車なり、ただ信心のくさびに志のあぶらをささせ給いて靈山淨土・まいり給うべし、又心王は牛の如し、生死は両の
 輪の如し、伝教大師云く「生死の二法は一心の妙用・有無の二道は本覺の真徳なり」と云云、天台云く「十如是只是れ乃至
 今境は是れ体」と云云、此の文釈能案じ給うべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

十二月十七日

日蓮 花押

三八九

上野殿御返事

建治四年二月二十五日

五十七歳御作

与南条七郎次郎

1544p

蹲鴟いゑのいもくしがき焼米栗・たかならずつ給ひ候あわい了んぬ。

月氏がつしに阿育大王あそかだいおうと申す王もつをはしき、一閻浮提えんぶだい四分の一を・たなごころににぎり・竜王りゅうおうをしたがへて雨を心にまかせ鬼神きじん

をめしつかひ給たまいき、始は悪王あくおうなりしかども後には仏法ぶつぽうに歸し・六万人ばんにんの僧を日日に供養くようし・八万四千の石の塔をたて給たまう、此の大王だいおうの過去をたづぬれば仏の在世さいせに徳勝童子とくしょうどうじ・無勝童子むしょうどうじとて二人のをさなき人あり、土

の餅を仏に供養くようし給たまいて一百年の内に大王と生れたり、仏はいみじしといへども法華經ほけきやうにたいしまいらせ候は螢火へんぐわと日月にちがつとの勝劣しょうりやく・天と地との高下こうげなり、仏を供養くようしてかかる功德くどくあり・いわうや法華經ほけきやうをや、土のもちゐ

を・まいらせてかかる不思議ふしぎありいわうやすずのくだ物をや、かれはけかちならず・いまはつゑたる国なり、此をもつてをもふに釈迦しゃかぶつ・多宝たほうぶつ・十羅刹女じゅうらしやくにょいかでかまほらせ給たまはざるべき。

抑そもそも今の時・法華經ほけきやうを信ずる人あり・或は火のごとく信ずる人もあり・或は水のごとく信ずる人もあり、聴聞ちやうもんする時は・もへたつばかりをもへとも・とをざかりぬればずする心あり、水のごとくと申せうすはいつも・たいせず信ずるなり、此これはいかなる時も・つねは・たいせずとわせ給たまえば水のごとく信ぜさせ給たまへるかたうとし・たうとし。

まことやらむいゑの内に・わづらひの候なるは・よも鬼神きじんのそゐには候はじ、十らせち女の信心しんじんのぶんざいを御心みぞ候らむ、まことの鬼神きじんならば法華經ほけきやうの行者ぎやうをなやましてがうをわらんとをもふ鬼神きじんの候べきか、又釈迦しゃかぶつ・法華經ほけきやうの御そら事の候べきかと・ぶかくをばしめし候へ・恐恐おそおそ謹言きんげん。

二月廿五日

日蓮にちれん 花押かおう

御返事ごへんじ

白米一斗いも一駄こんにやく五枚・わざと送り給ひ候い畢んぬ、なによりも石河の兵衛入道殿のひめ御前の度度御ふみをつかはしたりしが、三月の十四五やげにて候しやらむ御ふみありき、この世の中をみ候に病なき人

も、こねなんなどをすぐべしともみ候はぬ上、もとより病ものにて候がすでにきうになりて候さいこの御ふみなりと、かかれて候いしが、さればづゑにはかなくならせ給いぬるか。

臨終に南無阿弥陀仏と申しあはせて候人は、仏の金言なれば一定の往生とこそ人も我も存じ候へしかれども、いかなる事にてや候いけん、仏のくひかきせ給いて未顕真実・正直捨方便ととかせ給いて候が、あさましく候ぞ、此れを日蓮が申し候は、そら事うわのそらなりと日本国にはいかられ候、此れのみならず仏の小乗経には十方

に仏なし一切衆生に仏性なしとどかれて候へども、大乘経には十方に仏まします一切衆生に仏性ありとどかれて候へば、たれか小乗経を用い候べき皆大乘経をこそ信じ候へ此れのみならずぶしぎのちがひめども候ぞ

かし、法華経は釈迦仏已今当の経経を皆くひかえしうちやぶりて此の経のみ真実なりととかせ給いて候いしかば、おんでし御弟子等用ゆる事なし、爾の時多宝仏証明をくわへ十方の諸仏舌を梵天につけ給いき、さて多宝仏はとびらをたて十方の諸仏は本土にがらせ給いて後はいかなる経経ありて法華経を釈迦仏やぶらせ給うとも他人

わゑになりてやぶりがたし、しかれば法華経已後の経経、普賢経涅槃経等には法華経をばほむる事はあれども、そしる事なし、而るを真言宗の善无畏等・禅宗の祖師等、此れをやぶれり、日本国皆此の事を信じぬ、例せば将門・貞任などにがたらはれし人人のごとし、日本国すでに釈迦多宝・十方の仏の大怨敵となりて数年になり

候はやうやくやぶれゆくほどに又かう申す者を御あだみあり、わざはひにわざはひのならるゆへに此の国土すてに天のせめをかほり候はんずるぞ。

此の人は先世の宿業か、いかなる事ぞ、臨終に南無妙法蓮華經と唱えさせ給いける事は、一眼のかめの浮木の穴に入り、天より下いとの大地のはりの穴に入るがごとし、あらふしぎふしぎ、又念仏は無間地獄に墮つと申す事をば經文に文明なるをばじらずして皆人曰蓮が口より出でたりとおもへり、天はまつげのごとしと申すはこれなり、虚空の遠きとまつげの近きと人みなみる事なきなり、此の尼御前は日蓮が法門だにひが事に候はば、

よも臨終には正念には住し候はじ。

又日蓮が弟子等の中になかなか法門しりたりげに候人人はあしく候げに候、南無妙法蓮華經と申すは法華經の中の肝心・人の中の神のごとし、此れにものをならぶればきさきのならべて二王をおとごとし、乃至きさきの大己下になひなひとつぐがごとし、わざはひのみなもととなり、正法像法には此の法門をひろめず余經を失わじがためなり、今末法に入りぬれば余經も法華經もせんなし、但南無妙法蓮華經なるべし、かう申し出だして候も、わたくしの計にはあらず、釈迦多宝・十方の諸仏地涌千界の御計なり、此の南無妙法蓮華經に余事をまじは、ゆゆしきひが事なり、日出でぬればとほしびせんなし、雨のふるに露なにのせんかあるべき、嬰兒に乳より外のものをやしなうべきか、良薬に又薬を加えぬる事なし。

此の女人はなにとなければども自然に義にあたりてしををせるなり、たうとし、たうとし、恐恐謹言。

弘安元年四月一日

日蓮 花押

上野殿御返事

三九一 南条殿女房御返事 弘安元年五月二十四日 五十七歳御作 与南条七郎次郎女房

1547p

八木二俵送り給ひ候い畢んぬ、度度の御志申し尽し難く候。

夫れ水は寒積れば氷と為る、雪は年累つて水精と為る、悪積れば地獄となる、善積れば仏となる、女人は嫉妬かさなれば毒蛇となる。法華経供養の功德かさなれば、あに竜女があとをつがざらん、山といひ河といひ馬といひ下人といひ、かたがたがなんのところに、度度の御志申すばかりなし。

御所労の人の臨終正念・靈山浄土疑なかるべし・疑なかるべし。

五月二十四日

日蓮 花押

三九二 種物御消息 弘安元年七月七日 五十七歳御作 与南条平七郎

しなしなのものをくり給ひて法華経にまいらせて候。

抑 日本国の人を皆やしなうて候よりも、父母一人やしなうて候は功德まさり候、日本国の人をこころして候は七大地獄に墮ち候、父母をこころせる人は第八の無間地獄と申す地獄に墮ち候、人ありて父母をこころし、釈迦仏の御身よりちをいたして候人は父母をこころすつみにては無間地獄に墮ちず、仏の御身よりちをいたすつみにては無間地獄

に墮ち候なり、又十悪・五逆をつくり十方三世の仏の身よりちをいたせる人の法華経の御かたきとなれるは、十悪・五逆・十方の仏の御身よりちをいたせるつみにては阿鼻地獄へ入る事なし、ただ法華経不信の大罪により

て無間地獄むげんじごくは堕おち候なり、又十惡じゅうあく・五逆ごぎやくを日日につくり・十方じゅうほうの諸仏しよぶつを月月にはつずる人と・十惡じゅうあく・五逆ごぎやくを日日につくらず十方じゅうほうの諸仏しよぶつを月月にはつぜず候人此この一人は善惡ぜんあくはるかにかわりて候へども法華經ほけきょう一字一点もあひそむきぬればかならずおなじやうに無間地獄むげんじごくへ入り候なり。

しかればいまの代あまの海人やまかつ・山人げんけへいけ・日日に魚鹿等をころし源家平家等の兵士等のとしどしに合戦をなす人人ひとびとは父母をころさねば・よも無間地獄むげんじごくには入り候はじ、便宜候はば法華經ほけきょうを信じて・たまたま仏になる人も候らん、今の天台の座主てんだいざす・とうじ・あむろ・ななだいじ・けんぎやう・おんじやうじ・ちやうり・しんこんし・なら・ぜんじやう・ねんぶつ・りつじやう・がんぜん・ほけきやう・東寺・御室・七大寺の検校・園城寺の長吏等の眞言師・並びに禪宗・念仏者・律宗等は眼前がんぜんには法華經ほけきやうを信じよむににたれども其その根本をたづぬれば弘法大師・慈覺大師・智証大師・善導・法然等が弟子なり、源みなもとにこりぬれば流きよからず・天くもれば地くらし、父母謀反をおこせば妻子ほろぶ・山くづるれば草木たふるなら

ひなれば日本にほん六十六ヶ国の比丘びく・比丘尼等の善人等・皆無間地獄に墮おつべきなり、されば今の代に地獄に墮おつるものは悪人あくにんよりも善人ぜんにん・善人ぜんにんよりも僧尼そうに・僧尼そうによりも持戒じかいにて智慧ちえかしき人人の阿鼻地獄あびじごくは墮おち候なり。

此この法門ほうもんは当世とうせ・日本国にほんこくに一人もしりて候人なし、ただ日蓮一人計りにて候は此これを知つて申さずば日蓮にちれん・無間地獄に墮おちてうかぶ期なかるべし、譬たとは謀反のものをしりながら国主こくしゅ申もうさぬとがあり、申せばかたき雨のごとし風のごとしむほんのものとごし海賊かいぞく・山賊さんぞくのものとごし、かたがたじのびがたき事なり、例せば威音王仏いおんおうぶつの末すえの不輕菩薩ふぎやうぼさつのごとし歡喜仏かんぎのすえの覺徳比丘のごとし、天台のごとし・伝教のごとし、又かの人人ひとびとよりも・かたきすぎたり、かの人人は諸人しよじんにくまれたりしかども・いまだ国主こくしゅにはあだまれず、これは諸人しよじんよりは国主こくしゅにあだまる事ふ父母ぼのかたきよりも・すぎたるをみよ。

かかるふしぎの者をふびんとて御くやう候は日蓮にちれんが過去かこの父母ふぼか又先世せんぜの宿習しゆくしゆかおぼろげの事にはあらじ、某それがしの上雨うふりかぜふき人のせいするにこそ心させしはあらわれ候へ此これも又かくのごとし、ただなる時だに

もするがとかいとさかひは山たかく河ふかく石おほくみちせばし、いわうやたうじはあめはしのをたてて三月におよび
かわはまさりて九十日、やまくづれみちふさがり人もがよはずかつてもたえていのちかうにて候いるにこのすずのもの
給いて法華經の御うえをもつき釈迦仏の御いのちをもたすけまいらせ給いぬ御功德ただをしはからせ給うべし、くはしく
は又又申すべし、恐恐。 七月七
日蓮花押

三九三 時光御返事 弘安元年七月八日 五十七歳御作 与南条時光 1549p

むぎのしろきこめ一駄はしかみ送り給ひ畢んぬ。

こくぼんわうの太子あなりちと申す人は家にましましし時は俗性は月氏国の本主てんりん聖王のすえ師子けう王のまこ
浄飯王のおひこくぼん王には太子なり、天下にいやしからざる上家中には一日の間・一万・二千人の人出入す、六千人
はたからをかりき六千人はがへりなす、かかる富人にておはする上天眼第一の人法華經にては普明如来となるべきよし
仏記し給う。

これは過去の行はいかなる大善ぞとたづぬるにむかしれうしあり山のけだものをとりてすぎけるが又ひえをつくり食
とするほどに飢えたる世なればものもなし、ただひえのはん一ありけるをくひければ、りだと申す辟支仏の聖人來たり
て云く我七日の間食なし汝が食者えさせよとこわせ給いしかば、きたなき俗のこきに入れて・

けがしはじめて候と申しければ、ただえさせよ今食せずば死ぬべしと云う、おそれながらまいらせつ、此の聖人まいり給い
しがただひえ一つびをどりのこして、れうしにかへし給いき、ひえへんじてこのことなる、このい

變じて金となる金變じて死人となる死人變じて又金人となる指をぬいて売れば本のごとし、かくのごとく九十一劫長者に生れ今はあなりちと申して仏の御弟子なり、わづかのひえなれども飢えたる国に智者の御いのちをつぐゆゑにめでたきほつをう。

迦葉尊者と申せし人は仏の御弟子の中には第一にたとき人なり、此の人の家をたづねれば摩かだい国の尼くりだ長者の子なり、宅にたたみ千でうあり一でうはあつき七尺下品のたたみは金千両なり、からすき九百九十九一のからすきは金千両、金三百四十石入れたるくら六十、かかる大長者なり、めは又身は金色にして十六里をて

らす、日本国の衣通姫にもすぎ漢土のりふじんにもこえたり、此の夫婦道心を発して仏の御弟子となれり、法華經にては光明如来といはれさせ給う、此の二人の人人の過去をたづねれば麦飯を辟支仏に供養せしゆゑに迦葉尊者と生れ、金のぜに一枚を仏師にあつらふ今毘婆尸仏の像の御はくにひきし貧人は此の人のめとなれり。

今日蓮は聖人にはあらざれども法華經に御名をたてり、国主にくまりて我が身をせく上弟子かよつ人をも或はのり或はうち或は所領をとり或はところをおふ、かかる国主の内にある人人なればたとひ心ざしあるらん人人もとふ事なし、此の事事ふりぬ、なかにも今年は疫病と申し飢渴と申しとひくる人人もすくなし、たとひ

やまひなくとも飢えて死なん事うたがひなかるべきに麦の御とぶらい金にもすぎ珠にもこえたり、彼のりだがひゑは變じて金人となる、此の時光が麦何ぞ變じて法華經の文字とならざらん、此の法華經の文字は釈迦仏となり給ひ時光が故親父の左右の御羽となりて靈山浄土へとび給かけり給へかへりて時光が身をおほひはぐくみ給へ 恐恐謹言。

弘安元年七月八日

日蓮花押

上野殿御返事

三九四

上野殿御返事

弘安元年九月十九日

五十七歳御作

与南条時光

1551p

塩一駄はじかみ送り給ひ候。

金多くして日本国の沙のごとくならば誰かだからとしてはこのそこにおさむべき、餅多くして一閭浮提の大地のごとくならば誰か米の恩をおもくせん。

今年は五月より日日に雨ふりごとと七月より大雨ひまなし、このところは山中なる上南は波木井・河北は早河東は富士河・西は深山なれば長雨・大雨・時時・日日につく間・山さけて谷をつづみ石ながれて道をふせぐ河たけくして船わたらず、富人なくして五穀ともし商人なくして人あつまる事なし、七月などはしほ一升を・

ぜに百しほ五合を麦一斗にか候しが今はぜんたいしほなし、何を以てかがうべき、みそもたえぬ、小児のちをしのぶがごとし。

かかるところにこのしほを一駄給びて候御志・大地よりもあつく虚空よりもひろし、予が言は力及ぶべからずただ法華經と釈迦仏とにゆづりまいらせ候、事多しと申せども紙上にはつくしがたし、恐恐謹言。

弘安元年九月十九日

上野殿御返事

日蓮 花押

三九五

上野殿御返事

弘安元年十月十二日

五十七歳御作

与南条時光

1552p

いゑのいも一駄がつじこせに六百のかわり御ざのむしろ十枚給ひ畢んぬ。

去今年は大えき此の国にをこりて人の死ぬ事大風に木のたつれ大雪に草のおるがごとし一人ものこるべしともみず候いき、しかれども又今年の寒温時にしたがひて五穀は田畠にみち草木はやさんにおひふさがりて堯舜の代のごとく成劫のはじめかとみ今候いしほどに八月九月の大雨大風に日本一同不熟ゆきてのこれる

万民冬をすごしがたし、去ぬる寛喜・正嘉にもこえ来らん三災にもおとらざるか、自界叛逆して盜賊国に充滿し他界き

そいて合戦に心をつひやす、民の心不孝にして父母を見る事他人のごとく僧尼は邪見にして狗犬と猴

のあへるがごとし、慈悲なければ天も此の国をまほらず邪見なれば三宝にもすてられたり、又疫病もしばらくはやみてみ

えしかども鬼神かへり入るかのゆへに北国も東国も西国も南国も一同にやみなげくよしき候、かかるよにいかなる宿善

にか法華經の行者をやしなわせ給う事ありがたく候ありがたく候、事見参の時申すべし、恐恐謹言。

弘安元年後十月十二日

日蓮 花押

上野殿御返事

これにつけてもこうえのどの事こそをもひいでられ候へ。

いも一駄くりやきこめはじかみ給ひ候いぬさてはふかき山にはいもつくる人もなしくりもならずはじかみをひずましてやきこめみ候はず、たとえくりなりたりともさるのこずからず、いへのいもはつくる人なしたとえつくりたりとも人にくみてたび候はず、いかにしてかがかるたかき山はきたり候べき。

それ山をみ候はたかきよりしだいにしめくだれり、うみをみ候はあそきよりしだいにふかし、代をみ候は三十二年・二十年・五年・四三二・次第にとる合たり、人の心もかくのごとし、これはよす合になり候は山にはまがれるきのみとどまりのにはひききくさのみをひたり、よにはかしき人はすくなくはかなきものはをほし、牛馬のちちをしらず兎羊の母をわきまえざるのごとし。

仏御入滅ありては二千二百二十余年なり代す合になりて智人次第にかくれて山のくだれるごとくくさのひききにたり、念仏を申しかいをたもちなんどする人はををけれども法華経をたのむ人すくなし、星は多けれども大海をてらさず草は多けれども大内の柱とはならず、念仏は多けれども仏と成る道にはあらず戒は持て

ども浄土へまひる種とは成らず、但南無妙法蓮華経の七字のみこそ仏になる種には候へ此れを申せば人はそねみて用ひざりを故上野殿信じ給いしによりて仏に成らせ給いぬ、各各は其の末にて此の御志をとげ給うか、竜馬につきぬるだには千里をとび、松にかかれるつたは千尋をよつと申すは是か、各各主の御心なり、つちのもちぬを仏に供養せし人は王となりき、法華経は仏にまさらせ給う法なれば供養せさせ給いて、いかでか今生にも

利生に^{りじやう}あづかり^{ていじやう}後生にも^た仏にならせ^{たま}給はざるべき、その上^きみひんにして^げにんなし、山河^{さんが}わづらひあり、たとひ心ざしありともあらはしがたきに^{たま}いまいろをあらわさせ^{たま}給うに^しりぬ、をばろげならぬ事なり、さだめて^{ほけきやう}法華經の^{じゆうらせつ}十羅刹まほらせ^{たま}給いぬらんと^{きようきやうきんげん}だのもしくこそ候へ事つくしがたし、^{きようきやうきんげん}恐恐謹言。

弘安元年十一月一日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

九郎太郎殿御返事

三九七 上野殿御返事 弘安二年一月三日 五十八歳御作

1554p

餅九十枚やまのいも五十本・わざと御便を以つて正月三日羊の時に^{するが}駿河の国・富士郡上野郷より甲州は波木井の郷身延山のほらへおくりたびて條。

夫れ海辺には木を^{たから}財とし山中には塩を^{たから}財とす、旱魃には水を^{たから}財とし闇中には灯を^{たから}財とし女人は夫を^{たから}財とし夫は女人を命とし、王は民を親としは民は食を天とす、此の両三箇年は日本国の中に^{だいえき}大疫起りて人半分減じて候か、去年の七月より大なるけかちにて里市とをき^{むえん}無縁の者と山中の僧等は命存じしがたし、其の上日蓮は^{にちれん}法華經誹謗の国に生れて^{いおんあうぶつ}威音王仏の^{まほう}末法の^{ふぎやうぽなつ}不輕菩薩の如し、^{かんきぞうやく}将又歡喜増益仏の^{かくこびく}末の^{かくこびく}覚悟比丘の如し、王もにくみ民もあだむ

衣もつすく食もとぼし布衣はにしききの如し草葉をば甘露と思ふ、其の^{こそ}上去年の十一月より雪つもりて山里路たえぬ、年返れども鳥の声ならではをとづる人なし、友にあらずばたれか問うべきと心ばそくて過し候に

元三の内に十字九十枚^{まんげつ}満月の如し、心中もあきらかに^{しやうじ}生死のやみもはれぬべし、あはれなりあはれなり、こつこのをこそいゝあるをとこと人は申せし^そ其の御子なればくれないの、一きよしをつた^{たま}給えるか、あいよ

りもあをく水よりもつめたき氷かなとありがたしありがたし、きんじきんげん 恐恐謹言。

正月 三日

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

三九八 うえのとのごへんじ
上野殿御返事

こうあん
弘安二年四月二十日 五十八歳御作

1555p

そもそもにちれん 抑 日蓮 しゅじゆ 種種の大難の中には竜口の頸の座と東条の難にはすぎず、其の故は諸難の中には命をすつる程の大難はなきなり、或はのりせめ或は処をおわれ無実を云いつけられ或は面をつたれしなどは物のかずならず、されば色心の二法よりをこりてせしられたる者は日本国の中には日蓮一人なり、ただしありとも法華経の故に

はあらじ、さてもさても・わすれざる事はせうばうが法華経の第五の巻を取りて日蓮がつらをうちし事は三毒よりをこる処のちやうちやくなり。

てんじんく 天竺に嫉妬の女人あり男をにくむ故に家内の物をことごとく打ちやぶり、其の上にあまりの腹立にやすがたけしきかわり眼は日月の光のことくかがやくちは災をはくがごとしすがたは青鬼赤鬼のことくにて年来男のよみ奉る法華経の第五の巻をとり両の足にてさむざむにふみける、其の後命つきて地獄にをり両の足

じうく ばかり地獄にいらす獄卒鉄杖をもつてつてどもいらす、是は法華経をふみし逆縁の功德による、いま日蓮をにくむ故にせうばうが第五の巻を取りて予がをもてをうつ是も逆縁となるべきか、彼は天竺此れは日本、かれは女人これはをそこがれは両のあし・これは両の手 彼は嫉妬の故此れは法華経の御故なり、されども法華経第五の巻はをなじきなり、彼の女人のあし地獄に入らざらん此の両の手 無間に入るべきや、ただし彼は男をに

の意なり。

次に勸持品に八十万億那由他の菩薩の異口同音の二十行の偈は日蓮一人よめり、誰か出でて日本国唐土天竺三國にして仏の滅後によみたる人やある、又我よみたりとなるべき人なし又あるべしと覺す、及加刀杖の刀杖の二字の中にもし杖の字にあつ人はあるべし刀の字にあひたる人をきかず、不輕菩薩は杖木瓦石

と見たれば杖の字にあひぬ刀の難はきかず、天台妙樂・伝教等は刀杖不加と見たれば是又かけたり、日蓮は刀杖の二字ともにあひぬ、剩刀の難は前に申すがごとく東条の松原と竜口となり、一度もあう人なきなり日蓮は二度あひぬ、杖の難にはすでにせうばうにつらをつたれしかども第五の巻をもつてうづつ杖も第五の巻

うたるべしと云う經文も五の巻不思議なる未來記の經文なり、さればせうばうに日蓮數十人の中にしてつたれし時の心中には法華經の故とはをもどもいまだ凡夫なればうたてかりける間うえをもうばひちからあるならばふみをしつべきことぞかし、然れどもうえは法華經の五の巻にてまします。

いまをもひいでたる事あり、子を思ふ故にやをやつぎの木の弓をもつて学文せざりし子にをしたり、然る間此の子うたてかりしは父にくかりしはつぎの木の弓、されども終には修学増進して自身得脱をきわめ又人を利益する身となり、立ち還つて見ればつぎの木をもつて我をうちし故なり、此の子そとばに此の木をつく

り父の供養のためにたててむけりと見たり、日蓮も又かくの如くあるべきか、日蓮仏果をえむに争かせうばうが恩をすつべきや、何に況や法華經の御恩の杖をや、かくの如く思ひつづけ候は感涙をさかたし。

又涌出品は日蓮がためにはすこしよしみある品なり、其の故は上行菩薩等の末法に出現して南無妙法蓮華經の五字を弘むべしと見たり、しかるに先日蓮一人出来す六万恒沙の菩薩よりさだめて忠賞をかほるべしと思はたのもしき事なり、とにかくに法華經に身をまかせ信ぜさせ給へ殿一人にかぎるべからず信心をすすめ

給いて過去の父母等をすくわせ給へ。

日蓮生れし時より、いまに一日片時も、こころやすき事はなし、此の法華經の題目を弘めんと思つばかりなり、相かまへ相かまへ自他の生死はしらねども御臨終のきざみ生死の中間に日蓮かならずむかひにまいり候べし、三世の諸仏の成道はねうしのをわりとらのきざみの成道なり、仏法の住処、鬼門の方に三国ともにたつなり此等は相承の法門なるべし委くは又申すべく候、恐恐謹言。

かつ今食をねがひ渴して水をしたうがごとく恋いて人を見たきがごとく病にくすりをたのむがごとく、みめかたちよき人、べにしるいものをつくるがごとく法華經には信心をいたさせ給へさなくしては後悔あるべし、云云。

弘安二年己卯卯月二十日

日蓮 花押

上野殿御返事

三九九 上野殿御返事

弘安二年 五十八歳御作

1559p

驚目一貫・しほ一たわら蹲鴟一俵はじかみ少使者をもつて送り給ひ畢んぬ、あつきには水を財とす、さむきには火を財とす、けかちには米を財とす、いくさには兵杖を財とす、海には船を財とす、山には馬をたからとす、武蔵下総に石を財とす、此の山中にはいえのいも海のしほを財とし候ぞ、竹の子木の子等候へもしほなければそのあぢわひつちのことし、又金と申すもの國王も財とし民も財とす、たとへ米のごとし一切衆生のいのちなり。

ぜに又かくのごとし、漢土に銅山と申す山あり彼の山よりいでて候ぜになれば一文もみな三千里の海をわたりて来るものなり、万人皆たまとおもへり、此れを法華經にまいらせさせ給う、釈まなんと申せし人のたな心には石変じて珠となる金ぞく王は沙を金となせり、法華經は草木を仏となし給ういわうや心あらん人をや、法華經は焼種の二乗を仏となし給ういわうや生種の人をや、法華經は一闡提を仏となし給ういわうや信ずるものをや、事事つくしがたく候、又又申すべし、恐恐謹言。

八月八日 日蓮花押

上野殿御返事

唐土に竜門と申すたきありたかき事十丈、水の下ることがひやうがやをいとすよりもはやし、このたきにををくのふなあつまりてのぼらむと申す、ふなと申すいをのぼりぬればうつとなり候、百に一千に一万に一十年二十年に一ものぼる事なし、或ははきせにかへり、或ははしたかどびふくろつにくらわれ、或は十丁のたきの左右に漁人どもつらなりゐて、或はあみをかけ、或はくみとり、或はいてとるものもあり、いをのりうとなる事かくのごとし。

日本国の武士の中に源平二家と申して門守の犬二疋候、二家ともに王を守りたてまつる事やまかつが八月十五夜のみなより、いつるをあいするがごとし、でんじやうのなんによのあそぶをみては月と星とのひかりをあわせたるを木の上にてさるのあいするがごとし、かかる身にてはあれども、いかんがして我等でんじやう

のまじわりをなさんと、ながいし程に平氏の中に貞盛と申せし者將門を打ちてありしかども昇でんをゆるされず、其の子正盛又かなわず其の子忠盛が時、始めて昇でんをゆるさる、其の後清盛、重盛等でんじやうにあそぶ

のみならず、月をうみ日をいたくみとなりきに、仏になるみちこれにをとるべからず、いををの竜門をのぼり、地下の者のでんじやうへまいるがごとし。

身子と申せし人は仏にならむとて六十劫が間、菩薩の行をみてしかども、こらかなて二乗の道に入りきに、大通結縁の者は三千塵点劫久遠下種の人の五百塵点劫生死にしみし此等は法華經を行ぜし程に第六天の魔王、国主等の身に入りてとかうわづらわせしかば、だいしてすてしゆへそ、ばくの劫に六道にはめぐりしぞかし。

かれは人の上とこそみしかども今は我等がみにかけり、願くは我が弟子等大願をこそせ、去年去年のやくびやうに死にし人人のがずにも入らず、又当時蒙古のせめにまぬかるべしともみず、とにかくに死は一定なり、其の時のなげきはだつじのごとし、をなじくはかりにも法華經のゆゑに命をすてよ、つゆを大海にあつらへぢりを大地につづむとをもへ法華經の第三に云く「願くは此の功德を以て普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」と云云、恐恐謹言。
十一月六日
日蓮 花押

上野賢人殿御返事 此れはあつわらの事のありがたさに申す御返事なり。

四〇一 上野殿御返事

1561p

白米一だをくり給ひ了んぬ。

一切の事は時による事に候か、春は花秋は月と申す事も時なり、仏も世にいでさせ給ひし事は法華經のために候いしかども四十余年はとかせ給はず、其の故を經文にとかれて候には説時未至故等と云云、なつあつわたのこそで冬かたびらをたびて候はうれしき事なれどもふゆのこそでなつのかたびらにはすぎず、うへ候時のこがねがつせる時のこれうはうれしき事なれどもはんと水とにはすぎず、仏に土をまいらせて候人仏となり玉をまいらせて地獄ゆくと申すことこれか。

日蓮は日本国に生れてわわくせずぬすみせずかたがたのとなし、末代の法師にはどがつすき身なれども文をこのむ王に武のすてられいろをこのむ人に正直物のにくまるるがごとく、念仏と禅と真言と律とを信ずる代に値つて法華經

をひろむれば王臣^{おみ ばんみん}万民にくまれて結句^{けつく}は山中に候は天いかんが計らわせ給^{たま}つらむ、五尺のゆきふりて本よりもがよわぬ山道ふさがりとくる人もなし、衣もつすくてかんふせぎがたし、食た^たて命

すでにをはりなんとす、かかるきざみにいのちさまたげの御とぶらひかつはよろこびかつはなけかし、一度^{ひとたび}にをもひ切つてうへなんとあんじ切つて候いづるにわづかのともしびにあぶらを入そへられたるがごとし、あわれあわれたうとく、めでたき御心かな、釈迦^{しやくか}仏^{ぶつ}法華^{ほけ}經^{きやう}定めて御計らい給^{たま}はんか、恐^{おそ}恐^{おそ}謹言^{きんげん}。

弘安二年十二月廿七日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

上野殿御返事^{うえのどのごへんじ}

四〇二 上野殿御返事^{うえのどのごへんじ}

1562p

十字六十枚清酒一筒^{やまのつも}薯蕷^{ほけき}五十本^{ほつぜん}柑子^{こうじ}二十串柿一連^{おわ}送り給^{たま}ひ候^{あわ}い畢^{おわ}んぬ、法華^{ほけ}經^{きやう}の御宝^{ほつぜん}前にかざり進^{まい}らせ候、春の始め三日^{しじゆ}種種^{しじゆ}の物^{もの}法華^{ほけ}經^{きやう}の御宝^{ほつぜん}前に捧^{たの}げ候^{あわ}い畢^{おわ}んぬ。

花は開いて果となり月は出^いでて必ずみち燈は油をさせば光を増し草木^{そうもく}は雨ふればさかつ人は善根^{ぜんこん}をなせば必ずさかう、其^その上元^{じやうげん}三^{さん}の御志^{ごし}元一^{げんいつ}にも超^こへ十字の餅^{もち}満月^{まんげつ}の如^{ごと}し、事事^{じじ}又又申^{まう}すべく候。

弘安三年庚辰正月十一日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

上野殿^{うえのどの}

故上野殿御忌日の僧料米一たはらたしかに給ひ候い畢んぬ、御仏に供しまいらせて自我偈一卷よみまいらせ候べし。
孝養と申すはまづ不孝を知りて孝をしるべし、不孝と申すは西夢と云う者父を打ちしかば天雷身をさく班婦と申せし者、母をのりしかば毒蛇来りてのみき、阿闍世王父をころせしかば白癩病の人となりきに、波瑠璃王は親をころせしかば河上に火出でて現身に無間にをちにき、他人をころしたるにはいまだかくの如く例なし。

不孝をもつて思ふに孝養の功德のおほきなる事もしられたり、外典三千余巻は他事なし。ただ父母の孝養ばかりなり、しかれども現世をやしなひて後生をたすけず、父母の恩のおもき事は大海のごとし現世をやしなひ後生をたすけざれば。
一のごとし、内典五千余巻又他事なし。ただ孝養の功德をとけるなり、しかれども如来四十

余年の説教は孝養にたれども、その説いまだあらはれず孝が中の不孝なるべし、目連尊者の母の餓鬼道の苦をすくひしはわづかに人天の苦をすくひて、いまだ成仏のみちにはいれず、釈迦如来は御年三十の時、父浄飯王に法を説いて第四果をえせしめ給へり、母の摩耶夫人をば御年三十八の時、阿羅漢果をえせしめ給へり、此等は孝養ににたれども還つて仏に不孝のとがあり、わづかに六道をばはなれしめたれども父母をば永不成仏の道に入れ給へり、譬へば太子を凡下の者となし王女を匹夫にあはせたるが如し、されば仏説いて云く「我則ち慳貪に墮せん此の事は為て不可なり」云云、仏は父母に甘露をおしみて麦飯を与へたる人、清酒をおしみて濁酒をのみ

せたる不孝第一の人なり、波瑠璃王のごとく現身に無間・大城におち阿闍世王の如く即身に白癩病をもつぎぬべかりしが、四十二年と申せしに法華經を説き給いて「是の人滅度の想を生じて涅槃に入ると雖も而彼の土に於て仏の智慧を求めて是の經を聞くことを得ん」と、父母の御孝養のため法華經を説き給いしかば、宝淨世界の多宝仏も実の孝養の仏なりとほめ給い・十方の諸仏もあつまりて一切諸仏の中には孝養第一の仏なりと定め奉りき。

これをもつて案ずるに日本国の人は皆不孝の仁ぞかし、涅槃經の文に不孝の者は大地微塵よりも多しと説き給へり、されば天の日月八万四千の星、各いかりをなし眼をいからかして日本国をにらめ給ふ、今の陰陽師の天変・頻りなりと奏し申す是なり、地天、日日起りて大海の上の小船をうかべたるが如し、今の日本国の小児は魄をうしなひ・女人は血をはく是なり。

貴辺は日本国第一の孝養の人なり、梵天帝釈をり下りて左右の羽となり四方の地神は足をいただいて父母とあをぎ給うらん、事多しといふともども候い畢んぬ、恐恐謹言。

弘安三年三月八日

進上 上野殿御返事

日蓮花 押

四〇四 上野殿御返事

弘安三年七月二日 五十九歳御作

1565p

去ぬる六月十五日のけさん悦び入つて候、さてはかうぬし等が事いままでかかをかせ給いて候事ありがたくをば候、ただしなないは法華經をあだませ給うにては候へも、うへはたの事によせて事がづけにく

まるるかのゆゑにあつわらのものに事をよせてがしこころをもせかれ候こそ候いめれ、さればとて上に事をよせてせかれ候はんに御もちる候はずは物をばぬ人にならせ給うべしをかせ給いてあしかりぬべきやうにて候わばしばらくがうぬし等をばこれゝをほせ候べしめこんどはそれに候ともよも御たづねは候

はじ、事のしづまるまでそれにをかせ給いて候わばよろしく候いなんとをば候。

よのなか上につけ下によせてなげきこそをく候へよにある人人をばよになき人人はきじのたかをみがきの毘沙門をたのしむがごとく候へもたかはわしにつかまれ、びしやもんはずらにせめらる、そのやうに当時日本国のたのしき人人は蒙古国の事をききてはびつじの虎の声を聞くがごとし、また筑紫おもむきて。

いとをしきめをはなれ子をみぬは皮をはぎ肉をやぶるがごとくにこそ候らめ、いわうやかの国よりおしよせなば蛇の口のかえるはうちやうしがまないたにをけるこぬふなのごとくこそおもはれ候らめ、今生はさて

をきぬ命きえなば一百三十六の地獄に堕ちて無量劫ふべし、我等は法華經をたのみまいらせて候はあさきふちに魚のすむが天くもりて雨のふらんとするを魚のよろこぶがごとし。

しばらくの苦こそ候ともついはだのしかるべし、国王一人の太子のごとしいかでか位につかざらんとおぼしめし候へ
恐恐謹言。

弘安三年七月二日

日蓮 花押

上野殿御返事

人にしらせずしてひそかにをほせ候べし。

四〇五

上野殿御返事 うえのどのごへんじ

1566p

女子は門をひらく男子は家をつく日本国を知つても子なくは誰にかづがすべき、財を大千にみても子なくは誰にか
ゆづるべき、されば外典三千余巻には子ある人を長者といふ、内典五千余巻には子なき人を貧人といふ、女子一人男子
一人たとへば天には日月のごとく地には東西にかたどれり、鳥の二つのはね車の二つのわなり、さればこの男子をば日若
御前と申させ給へくはしくは又又申すべし。

弘安三年八月二十六日

上野殿御返事 うえのどのごへんじ

日蓮花押 にちれんかおつ

四〇六

南条殿御返事 ごへんじ

1566p

はくまいひとふくろいも一だ給び了んぬ、抑故なんぞつてせうしつらつどの事、いままではゆめかゆめかまぼろしか
まぼろしかとうたがいて、それごととのみをもひて候は、此の御ふみにもあそはされて候、さては、まことかまことかは
じめてうたがいできたりて候。

四〇七

上野殿御書

1567p

大海の一は五味のあぢわい江河の一は一つの葉なり、大海の一は万種の瓦のごとし、南無阿弥陀仏は一河の一、南無妙法蓮華経は大海の一、阿弥陀経は小河の一てい法華経の一乗は大海の一てい故五郎殿の十六年が間の罪は江河の一てい須臾の間の南無妙法蓮華経は大海の一ていのごとし、夫れ以れば華はつぼみさいて菓なる、をやは死にて子になわる、これ次第なり。

四〇八

上野殿御書

1567p

南条七郎五郎殿の御死去の御事、人は生れて死するならいとは智者も愚者も上下一同に知りて候は始めてなげくべしをどろくべしとわをばぬよし我も存じ人にもをし候へとも時にあたりてゆめかまばろしかいまだわきまがたく候、まして母のいかなげかれ候らむ、父母にも兄弟にもをくれはていていとをしきをこにすぎわかれたりしかども子どもあまたをはしませば心なぐさみてこそをはしつらむ、いとをしきてこしかもをのこごみめかたちも人にすぐれ心もがいがいしくみへしかばよその人人もすすしくこそみ候いしにあやなくつぼめる花の風にしばみ満つる月のにわかに失たるがごとくこそをばすらめ、まことともをば候はねばかきつくるそらもをば候はず、又又申すべし、恐恐謹言。

弘安三年九月六日

日蓮 花押

上野殿御返事

追申、此の六月十五日に見奉り候いしにおはれ肝ある者かな男や男やと見候いしに、又見候はざらん事こそかなしく

は候へさは候へども釈迦仏法華經に身を入れて候いしかば臨終 目出たく候いけり、心は父君と 一所に靈山淨土に
参りて手をとリ頭を合せてこそ悦ばれ候らめ、あはれなり あはれなり。

四〇九

上野殿母御前御返事

1568p

南条故七郎五郎殿の四十九日御菩提のために送り給う物の日記の事、驚目両ゆひ白米一駄芋一駄すりだつふこん
にやく柿一籠ゆ五十等云云御菩提の御ために法華經一部自我偈数度題目百千返唱牽り候い畢ぬ。
抑法華經と申す御經は一代聖教には似るべくもなき御經にて而かも唯仏与仏と説かれて仏と仏とのみこそじろし
めされて等覺已下乃至凡夫は叶はぬ事に候へ。

されば竜樹菩薩の大論には仏已下はただ信じて仏になるべしと見えて候、法華經の第四法師品に云く「薬王今汝に告
ぐ我が所説の諸經あり而も此の經の中に於て法華最も第一なり」等云云、第五の卷に云く「文殊師利此の法華經は諸仏
如来の秘密の藏なり諸經の中に於て最も其の上に在り」等云云、第七の卷に云く「此の法華經も亦
またかくのごと
復是くの如し諸經の中に於て最も其の上たり」又云く「最も照明たり最も其の尊たり」等云云、此等の經文私の義にあら
ず仏の誠言にて候へは定めてよもあやまりは候はじ、民が家に生れたる者我は侍に齊しなんと申せ

ば必ずとが来るまして我れ国王に齊しまして勝れたりなんと申せば我が身のとがとなるのみならず父母と申し妻子と云ひ
必ず損ずる事大火の宅を焼き大木の倒るる時 小木等の損ずるが如し。

仏教も又かくの如く華嚴阿含方等般若大日經阿弥陀經等に依る人人の我が信じたるままに勝劣も弁ずして
我が阿弥陀經等は法華經と齊等なり將た又勝れたりなどと申せば其の類の人人は我が經をほめられうれしと思へども
還つてとがとなりて師も弟子も檀那も惡道に墮つること箭を射るが如し、但し法華經の一切經

に勝れりと申して候はくるしからず還つて大功德となり候、経文の如くなるが故なり。

此の法華經の始に無量義經と申す經おはします、譬えば大王の行幸の御時、將軍前陣して狼籍をしつむるが如し、其の無量義經に云く「四十余年には未だ真実を顕さず」等云云、此れは將軍が大王に敵する者を大弓を以て

射はらひ又太刀を以て切りするが如し、華嚴經を読む華嚴宗阿含經の律僧等觀經の念仏者等、大日經の眞言師等の者が法華經にしたがはぬをせめなびかす利劍の勅宣なり、譬えば貞任を義家が責め清盛を頼朝の打ち失せしが如し、無量義經の四十余年の文は不動明王の劍索愛染明王の弓箭なり。

故南条五郎殿の死出の山三途の河を越し給わん時、煩惱の山賊、罪業の海賊を静めて事故なく靈山淨土へ參らせ給うべき御供の兵者は無量義經の四十余年、未顕真実の文ぞかし。

法華經第一の卷、方便品に云く「世尊の法は久くして後要らず当に真実を説きたもつべし」又云く「正直に方便を捨てて但無上道を説く」云云、第五の卷に云く「唯髻中の明珠」又云く「独り王の頂上に此の一珠有り」又云く「彼の強力の王の久しく護れる明珠を今乃ち之を与つるが如し」等云云、文の心は日本国に一切經わたれり七千三

百九十九卷なり彼れ彼れの經經は皆法華經の眷属なり、例せば日本国の男女の数四十九億九万四千八百二十八人候へども皆一人の国王の家人たるが如し、一切經の心は愚癡の女人などの唯一時に心うつべきやうはたとへ

ば大塔をくみ候には先ず材木より外に足代と申して多くの小木を集め一丈二丈計りゆひあげ候なり、かくゆひあげて材木を以て大塔をくみあげ候いれば返つて足代を切り捨て大塔は候なり、足代と申すは一切經なり大塔と申すは法華經なり、仏一切經を説き給ひし事は法華經を説かせ給はんための足代なり、正直捨方便と申して法華經を信ずる人は阿弥陀經等の南無阿弥陀仏大日經等の眞言宗阿含經等の律宗の二百五十戒等を切りすて抛ちてのち法華經をば持ち候なり、大塔をくまんがためには足代大切なれども大塔をくみあげぬれば足代を切り落

すなり、正直捨方便と申す文の心是なり、足代より塔は出来して候へども塔を捨てて足代ををがむ人なし、今の世の道心者等一向に南無阿弥陀仏と唱えて一生をすごし南無妙法蓮華經と一返も唱へぬ人人は大塔をすてて足代ををがむ人人なり、世間にかしくはかなき人と申すは是なり。

故七郎五郎殿は当世の日本国の人人にはにさせ給はず、をさなき心なれども賢き父の跡をおひ御年いまだはたちにも及ばぬ人が、南無妙法蓮華經と唱えさせ給いて仏にならせ給いぬ無二不成仏は是なり、乞い願わくは悲母我が子を恋しく思食し給いなば南無妙法蓮華經と唱えさせ給いて故南条殿故五郎殿と一所に生れんと願は

せ給へ一つ種は一つ種別の種は別の種同じ妙法蓮華經の種を心にはらませ給いなば同じ妙法蓮華經の国全れさせ給うべし、三人面をならせさせ給はん時御悦びいかがうれしくおぼしめすべきや。

抑此の法華經を開いて拝見仕り候は如来則ち為に衣を以て之を覆いたもう又他方現在の諸仏の護念する所と為らんと等云、經文の心は東西南北八方並びに三千大千世界の外四百萬億那由他の国土に十方の諸仏ぞくぞくと充滿せさせ給う、天には星の如く地には稻麻のやうに並居させ給ひ、法華經の行者を守護せさせ給ふ事、譬えば大王の太子を諸の臣下の守護するが如し、但四天王・類のまほり給はん事のかたじけなく候に、一切の四天王・一切の星宿・一切の日月帝釈梵天等の守護せさせ給うに足るべき事なり、其の上一切の二乗・一切の菩薩・兜率・内院の弥勒菩薩・迦羅陀山的地蔵・補陀落山の觀世音・清涼山の文殊師利菩薩等、各各眷屬を具足して法華經の行者を守護せさせ給うに足るべき事に候に又かたじけなくも釈迦多寶・十方の諸仏のてづからみづから来り給いて昼夜十二時に守らせ給はん事のかたじけなさ申す計りなし。

かかるめでたき御經を故五郎殿は御信用ありて仏にならせ給いて今日は四十九日にならせ給は一切の諸仏靈山淨土に集まらせ給いて或は手にすへ或は頂をなで或はいただき或は悦び月の始めて出でたるが如く。

花の始めてさけるが如くいかに愛しまいらせ給うらん、抑いかなれば三世・十方の諸仏はあながちに此の法華經をば守らせ給ふと勸令候は道理にて候けるぞ法華經と申すは三世十方の諸仏の父母なり・めのとなり・主にてましましけるぞや、かえると申す虫は母の音を食とす母の声を聞かざれば生長する事なし、からぐらと申す虫は風を食とす風吹かざれば生長せず、魚は水をたのみ鳥は木をすみかとす仏も亦かくの如く法華經を命とし・食とす・すみかとし給うなり、魚は水にすみ仏は此の經にすみ給う鳥は木にすみ仏は此の經にすみ給う月は水にやどる仏は此の經にやどり給う、此の經なき国には仏まします事なしと御心得あるべく候。

古昔輪陀王と申せし王をはしき南閻浮提の主なり、此の王はなにをか供御とし給いしと尋ねれば白鳥のいなくを聞いて食とし給う、此の王は白鳥のいなければ年も若くなり色も盛んに魂もいさぎよく力もつよく又政事も明らかなり、故に其の国には白馬を多くあつめ飼いしなり、譬えば魏王と申せし王の鶴を多くあつめ徳宗

皇帝のほたるを愛せしが如し、白鳥のいなく事は又白鳥の鳴きし故なり、されば又白鳥を多く集めしなり、或時如何しけん白鳥皆うせて白馬いなかざりしかば、大王供御たえて盛んなる花の露にしほれしが如く満月の雲におほはれたるが如し、此の王既にかくれさせ給はんとせしかば、后・太子・大臣・一国皆母に別れたる子の

如く皆色をつしなひて涙を袖におびたり如何せん如何せん、其の国に外道多し当時の禪宗・念仏者・真言師・律僧等の如し、又仏の弟子も有り当時の法華宗の人人の如し、中惡き事水火なり胡と越とに似たり、大王勅宣を下して云く、一切の外道此の馬をいなかせば仏教を失いて一向に外道を信ぜん事諸天の帝釈を敬うが如く

ならん、仏弟子此の馬をいなかせば一切の外道の頸を切り其の所をつばひ取りて仏弟子につくべしと云云、外道も色をうしなひ仏弟子も歎きあへり、而れどもさてはつべき事ならねば外道は先に七日を行ひき、白鳥も来らず白馬もいなかず、後七日を仏弟子に渡して祈らせしに馬鳴と申す小僧一人あり、諸仏の御本尊とし給う

ほけきよう　もつ　法華經を以て七日祈りしかば白鳥壇上に飛び来る、此の鳥一声鳴きしかば一馬・一声いなく、大王は馬の声を聞いて病
ゆか　の牀よりをき給う、后より始めて諸人馬鳴に向いて礼拝をなす、白鳥・一・二・三乃至十・百・千　出来して国中に充満
はくば　せり、白馬しきりにいななき一馬・二馬　乃至百・千の白馬いななきしかば大王此の音を聞こ
めんみよう　し食し面貌は三十計り心は日の如く明らかに　政　正直なりしかば、天より甘露降り下り、勅風　万民をなびかして無量・
たまい　百歳代を治め給いき。

仏も又かくの如く多宝仏と申す仏は此の經にあひ給はざれば御入滅、此の經をよむ代には出現し給う、釈迦仏・十方
しよぶつ　の諸仏も亦復かくの如し、かかる不思議の徳まします經なれば此の經を持つ人をばいかでか天照太神・八幡大菩薩富士
ぼさつ　千眼大菩薩すてさせ給うべきとたのもしき事なり、又此の經にあだをなす国をばいかに正直
ほく　に祈り候へとも必ず其の国に七難起りて他国に破られて亡国となり候事大海の中の大船の大風に値うが如く、大旱魃の
そうもく　草木を枯らすが如しとをばしめせ、当時　日本国のいかなる　いのり候とも日蓮が一門法華經の行者を
たいもく　あなづらせ給はさまさまの御いのり叶はずして大蒙古国にせめられてすでにほろびんとするが如し、今も御覽ぜよた
たまい　だかくては候まじきぞ是れ法華經をあだませ給う故と御信用あるべし。

抑　故五郎殿かくれ給いて既に四十九日なり、無常はつねの習いなれども此の事うち聞く人すら猶忍びがたし、況や母
そもそも　となり妻となる人をや心の中をしはかられて候、人の子には幼きもあり長きもありみにくきもありかたわなるもある物
をすら思いになるべかりけるにや、をのこたる上よろづにたらひなさけあり、故上野殿には壮なりし時をくれて歎き浅
かいらざりしに此の子を懷妊せずば火にも入り水にも入らんと思ひしに此の子すでに平安なりしかば誰にあつらへ身をも・
なぐべきと思つて　此に心をなぐさめて此の十四五年はすぎぬ、いかにいかにとすべき、二人のをのこにこそになわれめと
たのもしく思ひ候いつるに、今年九月五日　月を雲

にかくされ花を風にふかせてゆめかゆめならざるかあわれひさしきゆめかなとなげきをり候はうつににてすでに四十九日はせすぎぬまことならばいかんがせん、さける花はちらずしてつぼめる花のかれたる、をいたる母はとどまりてわかきばざりぬなさけなかりける無常かな無常かな。

かかるなさけなき国をばいといすてさせ給いて故五郎殿の御信用ありし法華経につかせ給いて常住不壞のりやう山浄土へくまいらせ給うちちはりやうぜんにまします母は娑婆にとどまれり、二人の中間にをはします故五郎殿の心こそをもひやられてあわれにをば候へ事多しと申せどもとどめ候い畢んぬ、恐恐謹言。十月二十四日

日蓮 花押

上野殿母尼御前御返事

四一〇 南条殿御返事

1573p

牙二石並びに 鷄一だ故五郎殿百ヶ日等云云、法華経の第七に云く、川流江河諸水の中に海これ第一なり此の法華経も亦復是くの如し等云云、此の経は法華経をば大海に譬へられて候、大海と申すはぶかき事八万四千由旬広きこと又かくのごとし、此の大海の中にはなににのすみ有りと申し候は阿修羅王凡夫にてをは

せし時不妄語戒を持ちてまなこをぬかれがわをはがれしむらをやぶられ血をすはれ骨かれ子を殺されめをうばわれなんどせしかども無量劫が間一度もそら事なくして其の功に依りて仏となり給いて候が無一不成仏と申して南無妙法蓮華経を只一度申せる人一人として仏にならざるはなしとどかせ給いて候、釈迦一仏の仰せなりとも疑うべきにあらざるに十方の仏の御前にてなにのゆゑにかそら事をばせさせ給うべき、其の上釈迦仏と十方の仏と同時に舌を大梵天に。

驚目一貫文送り給い了んぬ、御心ざしの候は申し候ぞよくぶかき御房とおぼしめす事なかれ。

仏にやすやすとなる事の候ぞをしまいらせ候はん、人のものををしふると申すは車のおもけれども油をぬりてまわりぶねを水につかべてゆきやすきやうにをし候なり、仏になりやすき事は別のやう候はず、旱魃にかわけるものに水をあたへ寒氷にこごたるものに火をあたるがごとし、又二つなき物を人にあたふ命のためるに人のせにあふがごとし。

金色王と申せし王は其の国に十二年の大旱魃あつて万民飢え死ぬる事かずをしらず、河には死人をはしとし陸にはがいこつをつかとせり、其の時、金色大王・大菩提心ををこしておほきに施をほどこし給いき、せすべき物みなつきて蔵の内にただ米五升ばかりのこれり、大王の一日の御くごなりと臣下申せしかば大王五升の米をとり出だして一切の飢えたるものに或は二りう・二りう或は三りう四りうなどあまねくあたさせ給いてのち

天に向わせ給いて朕は一切衆生のけかちの苦にがはりてうえじに候ぞとこえをあげてよばはらせ給いしかば天きこしめして甘呂の雨を須臾に下し給いき、この雨を身にふれがをにかかりし人皆食にあきみちて一国の万民せちなほども命よみがへりて候いけり。

月氏国にす達長者と申せし者は七度貧になり七度長者となりて候いしが最後の貧の時は万民皆にげうせ死にをはりてただめおとこ二人にて候いし時五升の米あり五日のかつてとあて候いし時迦葉・舍利弗・阿難羅・羅刹迦仏の五人次第に入らせ給いて五升の米をこひとらせ給いき、其の日より五天竺第一の長者となりて祇園精舎をばつくりて候ぞ、これをもつてよろづを心させ給へ。

貴^き辺^{へん}は ず^すで^でに^に法^ほ華^け經^{きやう}の^の行^{ぎやう}者^{しや}に^に似^たさ^ませ^せ給^{たま}へ^へる^る事^{こと}さ^さる^るの^の人^{ひと}に^に似^もち^めの^の月^{つき}に^に似^たる^るが^がと^とし、あ^あつ^つは^はら^らの^のも^もの^のど^ども^もの^のか^かく^くを^を
し^しま^ませ^せ給^{たま}へ^へる^る事^{こと}は^は承^{じやう}平^{へい}の^の將^{しやう}門^{もん}・天^{てん}喜^ぎの^の貞^{さだ}當^{だう}の^のや^やう^うに^に此^{この}の^の国^{こく}の^のも^もの^のど^ども^もは^はお^おも^もひ^ひて^て候^{こう}ぞ、こ^これ^れひ^ひと^とに^に法^ほ華^け經^{きやう}に^に命^{めい}を^をす^すつ^つる^るが^が
ゆ^ゆな^なり、ま^まつ^つた^たく^く主^{しゆ}君^{くん}に^にそ^そむ^むく^く人^{ひと}と^とは^は天^{てん}御^ぎ覽^{らん}あ^あら^らじ、其^{その}の^の上^{うへ}わ^わつ^つか^かの^の小^{せう}郷^{かう}に^にを^をほ^ほく^くの^の公^{こう}事^じせ^せめ^めあ^あて^てら^られ^れて^てわ^わが^が身^みは^はの^のる^る
べ^べき^き馬^ばな^なし^し妻^{さい}子^しは^はひ^ひき^きか^かく^くべ^べき^き衣^いな^なし。

か^かかる^る身^みな^なれ^れど^ども^も法^ほ華^け經^{きやう}の^の行^{ぎやう}者^{しや}の^の山^{さん}中^{ちゆう}の^の雪^{ゆき}に^にせ^せめ^めら^られ^れ食^{じき}と^とも^もし^しか^かる^るら^らんと^とお^おも^もひ^ひや^やら^らせ^せ給^{たま}い^いて^てぜ^ぜに^に一^{いち}貫^{くわん}を^をく^くら^らせ^せ
給^{たま}へ^へる^るは^は貧^{ひん}女^{にょ}が^がめ^めお^おと^と二^に人^{にん}し^して^て一^{いつ}の^の衣^いを^をき^きた^たり^りし^しを^を乞^こ食^{じき}に^にあ^あた^たへ^へり^りだ^だが^が合^が子^しの^の中^{ちゆう}な^なり^りし^しひ^ひえ^えを^を辟^{ひやく}支^し仏^{ぶつ}に^にあ^あた^たへ^へた^たり^り
し^しが^がと^とし^し、た^たう^うと^とし^した^たう^うと^とし^しく^くは^は又^{また}又^{また}申^{まう}す^すべ^べく^く候^{こう}、恐^{おそ}恐^{おそ}謹^{きん}言^{げん}。

弘^{こう}安^{あん}三^{さん}年^{ねん}十^{じゅう}二^に月^{げつ}二^に十^{じゅう}七^{しち}日^{にち}

日^{にち}蓮^{れん} 花^か押^{おし}

上^{じやう}野^え殿^{どの}御^ぎ返^{へん}事^じ

四^し二^に 上^{あま}野^ご尼^{ぜん}御^ご前^{ぜん}御^ご返^{へん}事^じ

1573p

聖^{せい}人^{にん}ひ^ひと^とつ^つつ^つひ^ひさ^さげ^げ十^{じゅう}か^か十^{じゅう}字^じ百^{ひやく}あ^あめ^めひ^ひと^とを^をけ^け二^に升^{しやう}か^か柑^{かん}子^しひ^ひと^と串^{くわい}柿^し十^{じゅう}く^くし^しな^なら^らび^びに^にお^おく^くり^り候^{こう}了^{らう}ん^んぬ^ぬ春^{はる}の^のは^はじ^じめ^め御^ご
喜^きび^び花^{はな}の^のこ^こと^とく^くひ^ひら^らけ^け月^{つき}の^のこ^こと^とく^くみ^みた^たせ^せ給^{たま}う^うべ^べき^きよ^よし^しう^うけ^け給^{たま}わ^わり^り了^{らう}ん^んぬ^ぬ。

抑^{おさ}故^こ五^ごら^らう^うど^どの^の御^お事^じこそ^そを^をも^もい^いで^でら^られ^れて^て候^{こう}へ^へち^ちり^りし^し花^{はな}も^もさ^さか^かん^んと^とす^すか^かれ^れし^しく^くさ^さも^もね^ねぐ^ぐみ^みぬ^ぬ、故^こ五^ご郎^{らう}殿^{でん}も^もい^いか^かで^で
か^かが^がへ^へら^らせ^せ給^{たま}は^はる^るべ^べき^き、あ^あわ^われ^れ無^む常^{じやう}の^の花^{はな}と^とく^くさ^さの^のや^やう^うな^なら^らば^ば人^{ひと}丸^{まる}に^には^はあ^あら^らず^ずと^とも^も花^{はな}の^のも^もと^とは^はな^なれ^れじ、い^いは^はつ^つる^るこ^こま^ま
に^にあ^あら^らず^ずと^とも^も草^{くさ}の^のも^もと^とを^をば^ばよ^よも^もさ^さら^らじ。

経^{きやう}文^{ぶん}に^には^は子^しを^をば^ばか^かた^たき^きと^とか^かれ^れて^て候^{こう}、そ^それ^れも^もゆ^ゆわ^われ^れ候^{こう}か^か梟^{ふくろう}と^と申^{まう}す^すと^とり^りは^は母^{はは}を^をく^くら^らう^う破^は鏡^{きやう}と^と申^{まう}す^すけ^けだ^だも^もの^のは^は父^ふを^をが^がい^い
す^す、あ^あん^んろ^ろく^く山^{さん}と^と申^{まう}せ^せし^し人^{ひと}は^は師^し史^し明^{めい}と^と申^{まう}す^す子^しに^にこ^ころ^ろさ^され^れぬ^ぬ、義^ぎ朝^{ちやう}と^と申^{まう}せ^せし^しは^はも^もの^のは^は為^{ため}義^ぎと^と申^{まう}す^すち^ちち^ちを^を

1577p

蹲いへのいも鴟い一俵給おびわ了わんぬ。

又かうぬしのもとに候、御乳塩一疋並びに口付一人候、さては故五郎殿の事は、そのなげきふりずとおもへとも御けさん
ははるかなるやうにこそおぼえ候へなをもなをも法華經をあだむ事はたえつとも見え候はねばこれよりのちもいかなる
事が候はんずらめどもいままでこらへさせ給へる事まことしからず候、仏の説いての給はく火に入りてやけぬ者はありとも
大水に入りてぬれぬものはありとも大山は空へどぶとも大海は天あがるとも末代悪世に入れば須臾の間も法華經は信じ
がたき事にて候ぞ。

きそうこつてい かんども もうち
徽宗皇帝は漢土の主じ蒙古国にがらめとられさせ給いぬ、
たまい
せ給いて島にてはてさせ給いぬ、法華經のゆゑにてだにもあるならば即身そくしんに仏にもならせ給いなん、わづかの事には身をやり命をすつれども、法華經の御ゆゑにあやしのとがにあたらんとおもふ人は候はぬぞ、身にて心みさせ給い候いぬらん、
たうとし・たうとし、
きようきようきんげん
恐恐謹言。

にちれんかおう
日蓮花押

上野殿御返事

四一四 南条殿御返事

1578p

御使おんつかいの申し候もうを承たまわり候こ、是この所なんぎ勞難儀のよし聞え候、いそぎ療治りょうじをいたされ候さんけいあいて御參詣有るべく候。

塩一駄大豆一俵とつきか一袋酒一筒給たまび候、上野の国より御歸宅候いま後は未だ見參に入らず候、牀敷存ゆかしくじ候たまいし処に品物の物ども取り副そえ候おとずれいて御音信に預あり候事申もうし尽がたし難いき御志いにて候。

今申せば事新しきに相似にて候とくじょうどうじども徳勝童子は仏に土の餅もちを奉たまりて阿育大王と生れて南閼浮提えんぶだいを大体知行だいたいちぎようすと承たまわり候、土の餅は物ならねども仏のいみじく渡わたらせ給たまはかくいみじき報くわういを得たり、然しかるに釈迦しやくか仏は我を無量むりようの珍宝ちんぼうを以て億劫の間いっけつ供養くようせんよりは末代まつだいの法華經ほけきようの行者ぎやうじやを一日なりとも供養くようせん功德は百千万億倍せんまん過すぐべしとこそ説たまかせ給たまいて候ほけきように、法華經ほけきようの行者ぎやうじやを心に入れて数年供養くようし給たまう事有がたり難いき御志いかな、金言きんげんの如ごとくんば定めて後生ごじやうは靈山淨土りやうぜんじゆつに生れ給たまうべしいみじき果報かほうなるかな。

其の上此その処じゆは人倫じんりんを離はなれたる山中やまなかなり、東西南北とうしなんぺくを去はなりて里もなし、かかるいと心細こころこまき幽窟ゆうくつなれども教主きやうしゆ釈尊しやくそんの一大事いちだいじの秘法ひほうを靈鷲山りやうじゆざんにして相傳さうでんし、日蓮にちれんが肉団にくだんの胸中きゅうちゆうに秘かくして隠たも持もてり、されば日蓮にちれんが胸の間きゅうのまは諸仏しよぶつ入定にぢやうの処しよなり、舌の上てのうは転法輪てんぽうりんの所ところ・喉のどは誕生たんじゆの処ところ・口中くちゆうは正覺しやうかくの砌みきなるべし、かかる不思議ふしぎなる法華經ほけきようの行者ぎやうじやの住処ぢゆうしよなればいかでか靈山淨土りやうぜんじゆつに劣おとるべき、法妙ほふみやくなるが故ゆゑに人貴ひとたかし・人貴ひとたかきが故ゆゑに所尊しよそんしと申もうすは是これなり、神力品しんりきほん

に云いく「若もしは林はやしの中に於おいても若もしは樹きの下したに於おいても若もしは僧坊そうぼうに於おいても乃至ないし而ねはん般涅槃はんねはんしたもつ」と云いふ、此この砌みきに望むまん輩はいは無始むしの罪障ざいしやう忽たちまちに消滅しょうめつし三業さんごふの惡あく転てんじて三德さんとくを成じやうぜん、彼かの中ちゆう天竺てんしやくの無熱池むねつちに臨のぞみし惱のう者が心中しんちゆうの熱氣ねつきを除のぞ愈よくして其その願がんを充満じゆうまんする事清涼池しやうりやうぢの如ごとしとぞぶきしも彼かれ此これ異いなりといへども、其その意いは争いでか

替るべし。^{かわ}

彼の月氏の靈鷲山は本朝此の身延の嶺なり、参詣遙かに中絶せり急急に來臨を企つべし、是にて待ち入つて候べし、哀^{まう}申しつくしがたき御^ご志^しかな御^ご志^しかな。

弘安四年九月十一日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

南条殿御返事^{ごへんじ}

四一五 上野殿御返事^{うえのとのごへんじ}

1579p

いゝのいも一駄^ごばう一つと大根六本、いもは石のごとしごばうは大牛の角のごとし大根は大仏堂の^{だいぶつどう}大くぎのごとしあぢわひは利天の甘露のごとし、石を金にかつる国もあり土をこめにとつるところもあり、千金の金をもてる者もうえてしぬ、一飯をつとにつめる者にこれをとれり、経に云くうゑたるよにはよねたつとしと云云、一切の事は国により時に^{いっさい}よる事なり、仏法は此の道理をわきまうべきにて候、又又申すべし、恐恐謹言。^{きょうきょうきんげん}

弘安四年九月廿日

日蓮花押^{にちれんかおう}

上野殿御返事^{うえのとのごへんじ}

四一六

上野尼御前御返事

1580P

牙一駄（お）四斗定あらひいも一俵送り給ひて南無妙法蓮華經と唱まいらせ候（お）了んぬ。

妙法蓮華經と申すは蓮に譬えられて候、天上には摩訶曼陀羅華、人間には桜の花、此等はめでたき花なれども此れ等の

花をば法華經の譬には仏取り給う事なし、一切の花の中に取分けて此の花を法華經に譬へさせ給う事は其の故候なり、

或は前花後菓と申して花は前に菓は後なり、或は前菓後花と申して菓は前に花は後なり、或は一花

多菓、或は多花一菓、或は無花有菓と品品に候へども蓮華と申す花は菓と花と同時に、一切經の功德は先に善根を作し

て後に仏とは成ると説くかかる故に不定なり、法華經と申すは手に取れば其の手やがて仏に成り口に唱ふれば其の口即仏

なり、譬えば天月の東の山の端に出ずれば其の時即水に影の浮かぶが如く音とひびきの同時なるが如し、故に經に云く

若し法を聞くこと有らん者は一として成仏せざることを無し云云、文の心は此の經を持つ人は百人は百人ながら千人は千

人ながら一人もかけず仏に成ると申す文なり。

抑御消息を見候は尼御前の慈父、故松野六郎左衛門入道殿の忌日と云云、子息多ければ孝養まぢまぢなり、然れ

ども必ず法華經に非ざれば謗法等云云、釈迦仏の金口の説に云く「世尊の法は久しくして後要らず当に眞実を説きたも

うべし」と、多宝の証明に云く、妙法蓮華經は皆是れ眞実なりと十方の諸仏の誓に云く舌相梵天に至る云云、これより

ひつじさるの方に大海をわたりて国あり漢土と名く、彼の国には、或は仏を信じて神を用いぬ人もあり、或は神を信じて仏

を用いぬ人もあり、或は日本国も始はさこそ候いしか、然るに彼の国に烏竜と申す手書ありき漢土第一の手なり、例せば

日本国の道風行成等の如し、此の人、仏法をいみて經をかかじと申す願

を立てたり、此の人死期来りて重病をつけ臨終にをよんで子に遺言して云く汝は我が子なり、その跡絶ずして又我よりも勝れたる手跡なり、たとひいかなる悪縁ありとも法華經をかくべからずと云云、然して後五根より血の出ずる事泉の涌くが如し舌八つにさけ身くだけで十方にわかれぬ、然れども一類の人人も三惡道を知らざれば地獄に墮つる先相ともいはず。

其の子をば遺童と申す又漢土第一の手跡なり、親の跡を追つて法華經を書かじと云う願を立てたり、其の時大王おはします司馬氏、佛法を信じ殊に法華經をあふぎ給いしが同じくは我が国の中に手跡第一の者に此の經を書かせて持經とせんとして遺童を召す、童申さく父の遺言あり是れ計りは免し給へと云云、大王父の遺言と申す故に他の手跡を召して一經をつつし畢んぬ、然りといふ御心に叶い給はざりしかば又遺童を召して言はく

汝親の遺言と申せば朕まげて經を写させず但八巻の題目計りを勅に随うべしと云云、返す返す辞し申すに王瞋りて云く汝が父と云うも我が臣なり親の不孝を恐れて題目を書かずば違勅の科ありと勅定度度重かりしかば不孝はさる事なれども当座の責をのがれがたかりしかば法華經の外題を書きて王へ上げ宅に歸りて父のはかに向いて血の涙を流して申す様は天子の責重きによつて亡き父の遺言をたがへ既に法華經の外題を書きぬ。

不孝の責免れがたしと歎きて三日の間、墓を離れず食を断ち既に命に及ぶ、三日と申す寅の時に已に絶死し畢つて夢のこと、虚空を見れば天人一人おはします帝釈を絵にかきたるが如し無量の眷属、天地に充滿せり、爰に童問うて云く何なる人ぞ答えて云く汝知らずや我は是れ父の烏童なり、我人間にありし時外典を執し佛法をかたきとし、殊に法華經に敵をなしまいらせし故に無間に墮つ、日に舌をぬかる事、数百度、或は死し或は生き天に仰き地に伏してなげけども叶う事なし、人間舎げんと思へども便りなし、汝我が子として遺言なりと申せしかば其の言炎と成つて身を責め、劍と成つて天より雨り下る、汝が不孝極り無かりしかども我が遺言を違へ

ざりし故に自業自得果つらみがたかりし所に金色の仏一むげんじこく・体無間地獄に出現して仮使遍法界断善諸衆生一もんぼつ・聞法華經決定けつじよう成菩提と云云、此の仏・無間地獄に入り給たまいしかば大水を大火になげたるが如し、少し苦みやみぬる處に我合掌して仏に問たてまつい奉りて何なる仏ぞと申せば、仏答えて我は是れ汝が子息遺なんじ・竟が只今書くところの法華經の題目六十四字の内の妙の一字なりと言ふ、八卷の題目は八八六十四の仏・六十四の満月と成り給たまは、無間むげん・地獄の大閻即大明となりし上・無間地獄は当位即妙・不改本位と申して常寂光の都と成りぬ、我及び罪人とは皆蓮の上の仏と成りて只今都率の内院た・上り参り候が先ず汝に告ぐるなりと云云、遺いりゅう・竟が云く、我が手にて書きけり争いでか君たすかり給たまうべき、而も我が心よりかくに非ず、いかにいかにと申せば、父答えて云く汝はかなしなんじ・汝が手は我が手なり汝が身は我が身なり汝が書きし字は我が書きし字なり、汝心に信ぜざれども手に書く故に既にたすかりぬ、譬たとえば小兒の火を放つに心にあらざれども物を焼くが如し、法華經も亦かくの如し存外に信を成せば必ず仏になる、又其の義を知りて謗ほうする事無かれ、但し在家の事なればいひしこと故大罪なれども懺悔しやすしと云云、此の事を大王に申す、大王の言く我が願だ・既いにしるし有りとして遺いりゅう・竟・弥・朝恩を蒙り国又こそつて此の御經を仰あ・ぎ奉る。然るに故五郎殿と入道殿とは尼御前の父なり子なり、尼御前は彼の入道殿のむすめなり、今こそ入道殿は都率の内院に・参り給たまうらめ、此の由をはわきどのよみきかせまいらせ給たまうべし、事そうそうにてくはしく申もうさず候。

恐恐謹言

十一月十五日

日蓮 花押

上野尼御前御返事

乃米一だ・聖人一つ・二十ひさげかがつかうひとかづぶくろおくり給ひ候い^{あわ}んぬ。

このころのやうせんぜんに申しふり候いぬ、さては去^いめる文永十一年六月十七日この山に入り候いて今年十二月八日にいたるまで此の山出^いずる事一步も候はずただし八年が間やせやまいと申しとしと申しとしに身ゆわく心をばれ候いつるほどに、今年は春より此のやまいをこりて秋すぎ冬にいたるまで日日にをとる。

夜夜にまさり候いつるがこの十余日はすでに食もほとをととどまりて候上ゆきはかさなりかんはせめ候、

身のひゆる事石のごとし胸のつめたき事氷のごとし、しかるにこのさけはたたかにさしわかつてかつかうをはたとく切りて一度^{ひとたび}のみて候は火を胸にだくがごとし、ゆに入るにいたり、あせにあかあらいしづくに足をすく、此の御志^{ごし}はいかんがせんとうれしくをもひ候ところに両眼^{りょうげん}よりひとつのなんだをうかぐ候。

まことやまことや去年^{こぞ}の九月五日こ五郎殿のかくれにしはいかになりけると胸うちさわぎてゆびををりかず候はすでに二ヶ年十六月四百余日にすぎ候が、それには母なれば御をとづれや候らむ、いかにきかせ給^{たま}はぬやらむ、ふりし雪も又ふれりちりし花も又さきて候いき、無常^{むじょう}ばかりまたもがへりきこ候はざりけ

るか、あらうらめしあらうらめし余所^{よそ}にてもよきくわんざかなよきくわんざかな玉のやうなる男かな男かないくせをやのうれしくをばすらむと見候いしに、満月^{まんげつ}に雲のかかれるがはれずして山へ入りさかななる花のあやなくがぜのちらせるがごとしとあさましくこそをば候へ。

日蓮にちれんは所らうのゆへに人人ひとびとの御文おんぶんの御返事ごへんじも申もうさず候こういつるがこの事はあまりになげかしく候こうはふでをとりて候ぞ、
これもよもひさしくもこのよに候はじ、一定五郎殿にいきあいぬとをば候、母よりさきにけさんし候わば母のなげき
申もうした候こうはん、事事じじ又又申もうすべし、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

十二月八日

日蓮にちれん 花押かおう

上野殿母御前御返事
うえのどののはごぜんこへんじ

四一八 大白牛車御消息
だいびやくこしきせうく

1584p

抑おさへ法華經ほけきょうの太白牛車びやくこと申もうすは我も人も法華經ほけきょうの行者ぎやうじやの乗るべき車にて候なり、彼の車をば法華經ほけきょうの譬喩品ひゆほんと申もうすに
懇たまいに説かせ給たまいて供、但し彼の御經は羅什らじゆう・存略ゆえの故に委くわしくは説き給たまはず、天竺てんしゆくの梵品ぼんほんには車の莊そり物、其の外、
聞信もんしん戒定進捨懺かいじやうしんしやきんの七宝しちほうまで委くわしく説き給たまひて候を日蓮にちれんあらあら披見ひけんに及び候、先ず此の車と申もうすは縦じゆう広かう五百由旬ゆじゆんの車
にして金の輪りんを入れ銀ぎんの棟むなぎをあげ金の繩もつを以て八方はつぱうへり繩もつをつけ三十七重さんじちゆうのきだはし
をば銀ぎんを以てみみがきたて八万四千の宝の鈴しゆんを車の四面しめんに懸かけられたり、三百六十ながれのくれなひの錦の旗を玉のさほに
かけながし、四万二千の欄干らんかんには四天王してんのうの番をつけ、又蜜みつの内には六万九千三百人十余人の仏ぼつ菩薩ぼさつ・宝蓮華ほうれんげに坐まし給たまへ

り、帝釈たいしゃくは諸の眷属もろもろけんぞくを引きつれ給たまひて千二百の音楽ぎやうを奏そうし、梵王ぼんのうは天蓋てんがいを指し懸かけ地神かみは山

河だい・大地だいちを平等びやうどうに成たまし給たまふ、故に法性ほつじやうの空くうに自在じざいにとびゆく事をこそ・大白牛車だいびやくことは申もうすなれ、我より後に来り給たまはん
人人ひとびとは此の車にめされて靈山りうせん御出いで有あるべく候、日蓮にちれんも同じ事に乗りて御迎ごむかひいにまかり向むかふべく供、南無妙法蓮華經なむみょうほつれんげきやう。
南無妙法蓮華經なむみょうほつれんげきやう。

日蓮にちれん 花押かおう

四一九 春初御消息

1585D

ははき殿かきて候事よろこびいりて候。

春の初はつの御悦ごえつび木に花のさくがごとく山に草の生出いずるがごとしと我も人も悦よろこび入いつて候、さては御送り物の日記にっきハ

木一俵・白塩一俵・十字三十枚・いも一俵 給あび候い畢おぬ。

深山みやまの中に白雪・三日の間に庭は一丈につもり谷はみねとなり・みねは天にはしかけたり、鳥鹿は庵室あんしつに入り樵牧は山にさしいらず、衣はつすし食はたえたり夜はかんく鳥にことならず、昼は里いでんとおもふ心ひまなし、すでに読経よみのこえもたえ観念かんねんの心もつすし、今生退転こんじょうたいてんして未来みらい三五を経ん事をなげき候いとるに此の御とぶらひに命いのちいきて又もや見参みさんに入り候はんずらんとうれしく候。

過去かこの仏ぼんは凡夫ぼんぶにておはしまし候いし時五濁乱漫ごじよくらんまんの世にかかる飢えたる法華經ほけきようの行者ぎやうじやをやしなひて仏にはならせ給たまつぞとみえて候ほは法華經ほけきようまことならば此の功德くどくによりて過去かこの慈父じふは成仏じふぶつ疑うたがなし。

故五郎殿も今は靈山淨土りやうしやんじやうどにまいりあはせ給たまいて故殿に御かつべをなでられさせ給たまつべしとおもひやり候ほは涙かきあへられず、恐恐きうきう謹言きんげん。

正月二十日 日蓮花押にぢれんかおう

上野殿御返事うえのどのごへんじ

申もうす事恐れ入いつて候、返返ははき殿一一によみきかせまいらせ候へ。

末代悪世に法華經を經のごとく信じまいらせ候者をば法華經の御鏡にはいかながうかばさせ給うと拝見つかまつり候へば、過去に十萬億の仏を供養せる人なりとたしかに釈迦仏の金口の御口より出でさせ給いて候を、一仏なれば末代の凡夫はうたがいやせんずらんとて、此より東方にはるか國をすぎさせ給いておはします宝浄世界の多宝仏わざわざと行幸ならせ給いて釈迦仏にをり向いまいらせて妙法華經 皆是眞実と証明させ給い候いき、
 此の上はなにの不審が残るべきなれども、なをなを末代の凡夫はをばつかなしとをばしめしや有りけん、十方の諸仏を召しあつめさせ給いて広長舌相と申して無量劫よりこのかた永くそらごとなきひろくなく大なる御舌を須弥山のごとく虚空に立てならべ給いし事はをびただしかりし事なり、かう候は末代の凡夫の身として法華經の一字・二字を信じまいらせ候は十方の仏の御舌を持つ物ぞかし、いかなる過去の宿習にてがかかる身とは
 生るらむと悦びまいらせ候・上の經文は過去に十萬億の仏にあいまいらせて供養をなしまいらせて候ける者が法華經計りをば用いまいらせず候いけれども仏くやうの功德莫大なりければ謗法の罪に依りて貧賤の身とは生れて候へども又此の經を信ずる人となれりと見今候、此れをば天台の御釈に云く、「人の地に倒れて還つて地より起つが如し」等云云、地にたうれたる人はがへりて地よりをく、法華經謗法の人は三惡並びに人天の地にはたうれ候へどもかへりて法華經の御手にかかりて仏になるとことわられて候。

しかるにこの上野の七郎次郎は末代の凡夫武士の家に生れて悪人とは申すべけれども心は善人なり、其の故

は日蓮にちれんが法門ほうもんをば上かみ一人より下万民ばんみんまで信じ給たまはざる上たまたま信ずる人あればある或は所領しりやう 或は田畠等でんぱたにわづらひをなし結句けくは命に及ぶ人ひつう人もあり信じがたき上はは故上野は信じまいらせ候いぬ、又此の者敵子となりて人もすすめぬに心中しんちゆうより信じまいらせて上下万人じやうげばんにんにあるはいさめ 或はをどし候いつるについに捨つる心なくて

候はずでに仏になるべしと見候てんまは天魔げどう 外道が病をつけてをどさんと心み候か、命はかぎりある事なりすこしもをどろく事なかれ、又鬼神きじんめらめ此の人をなやますは剣をさかさまにのむか又大火だいかをいだくか、三世十方さんぜじゅうぱうの仏の大怨敵おんてきとなるか、あなかしこあなかしこ、此の人のやまいを忽たちまちになをしてかへりてまほりとなりて鬼道の大苦をぬくべきか、其その義なくして現在げんざいには頭破七分ずはしちぶんの科とがに行われ後生ごせいには大無間地獄むげんじごくに墮おつべきか、永くとどめよとどめよ、日蓮にちれんが言をいやしみて後悔ごうかいあるべし後悔ごうかいあるべし。

弘安五年二月廿八日

下伯耆房

四二 蓮三枚御書

1587p

蓮三枚・生和布一籠かこ 給たまひ了わぬ。

そもそも

抑三月一日より四日にいたるまでの御あそびに心なぐさみてやせやまいもなをり虎とるばかりをば候上此の御わめ給たまひて師子ししにのりぬぐをば候。

さては財たからはところにより人によつてかわりて候、此の身延の山には石は多けれども餅なし、二けは多けれどもうちしく物候はず、木の皮をはいでしき物とすむしろいかでか財たからとならざるべし。

億耳居士と申せし長者は足のつらにけをいて候いし者なり、ありきところい内は申すにをよばず。わたを四寸
しきてぶみし人なり、これはいかなる事ぞと申せば先世にたつとき僧にくまのかわをしかせしゆとみ今候。
いわつや日本国は月氏より十万よりをたて候辺国なる上・ひすの島・因果のことはりも弁えまじき上・末法になり候
いぬ、仏法をば信ずるやうにてそしる国なり、しかるに法華經の御ゆへに名をたたせ給う上 御むしろを法華經にまいらせ
給い候いぬれば。

四二二 芋一駄御書

1588a

いも一駄はしかみ五十ぱをくりたびて候。

このみのぶのやまと申し候はにしはしらねのたけ・つねにゆきをみる、ひんがしにはてんのたけ・つねにひをみる、きたは
みのぶのたけ・みなみはたかとのたけ四山のあひはこのそこのごとし、いぬゑのすみよりかはながれてたつみのすみにむ
かうがかるいみじきところみねにはせひのこへたにはさるのさけび木はあしのごとしくさはあめにいたり、しかれ
どもがかるいもはみ候はず、はじかみはをひず、いしにて少しまもりやわらかなり、くさににてくさよりもあぢあり。

法華經に申しあげ候いぬれば御心ざしはさだめて釈迦仏しろしめしぬらん、恐恐謹言。

八月十四日

日蓮在御判

御返事

日蓮は凡夫なり天眼なければ一紙をもみとをすことなし、宿命なければ三世を知ることなし、而れども此の経文のごとく日蓮は肉眼なれども天眼宿命□□日本国七百余歳の仏眼の流布せしやう、八宗・十宗の邪正漢土月氏の論師・人師の勝劣八万十二の仏經の旨趣をあらあらすいちし□□我が朝の亡国となるべき事先に此れをかんがて死も符契のごとし、此れ皆法華經の御力なり、而るを国主は讒臣等が凶言ををさめてあだをなせしかば、凡夫なれば道理なりとをもつて退する心なかりしかども度度あだをな。

四二四

衆生身心御書

1590d

衆生の身心をとかせ給う其の衆生の心にのぞむとてとかせ給は人の説なれども衆生の心をいず、かるがゆへに随他意の經となづけたり、譬はさけもこのまぬをやのきわめてさけをこのむいとをしき子あり、かつはいとをしみがつは心をとらんがためにかれにさけをすすめんがために父母も酒をこのむよしをするなり、しかるをはかなき子は父母も酒をこのみ給うとをもへう。

提謂經と申す經は人天の事とけり、阿含經と申す經は二乗の事とかせ給う、華嚴經と申す經は菩薩のとなり、方等般若經等は或は阿含經、提謂經にいたり、或は華嚴經にもいたり、此れ等の經經は末代の凡夫これをよみ候は仏の御心に叶うらんとは行者はをもへともくはしくこれをるむずれば己が心をよむなり、己が心は本よりつたなき心なればはかばかりしき事なし、法華經と申すは随意と申して仏の御心をとかせ給う、仏の御心はよき心なるゆへにたといしらざる人も此の經をよみたてまつれば利益はかりなし、麻の中のものもぎつつの中ものくちなはよき人にむづぶものなとなけれども心もふるまひも言もなをしくなるなり、法華經もかく

のごとしなになけれどもこの経を信じぬる人をば仏のよき物とをばすなり、此の法華經にをひて又機により時により国によりひろむる人によりやうやうにかわりて候をば等覺の菩薩までもこのあわひをばしらせ給わずとみ今候、まして末代の凡夫はいかでかちからひをををせ候べき。

しかれども人のつかひに三人あり、一人はきわめてこざかしき、一人ははかなくもなし又こざかしからず、一人はきわめてはかなくたしかなる、此の三人に第一はあやまちなし、第二は第一ほどこぞなければならずこぞかしきゆへに主の御ことばに私の言をそつるゆへに第一のわるきつかいとなる、第三はきわめてはかなく

あるゆへに私の言をまじずきわめて正直なるゆへに主の言ばをたがず、第二よりもよき事にて候あやまつて第一にもすぐれて候なり、第一をば月支の四依にたとう、第二をば漢土の人師にたとう、第三をば末代の凡夫の中に愚癡にして正直なる物にたとう。

仏在世はしばらく此れををく仏の御入滅の次の日より一千年をば正法と申す、この正法一千年を二つにわかす、前の五百年が間は小乗經ひろまらせ給う、ひろめし人人は迦葉・阿難等なり、後の五百年は馬鳴・竜樹・無著・天親等権大乘經を弘通せさせ給う、法華經をばかたはし計りかける論師もあり、又つやつや申しいださぬ人もあり、正法一千年より後の論師の中には少分を仏説にたれども多分をあやまりあり、あやまりなくして而も

たらざるは迦葉馬鳴・阿難・竜樹・無著・天親等なり、像法に入り一千年漢土に仏法わたりしかば始めは儒家と相論せしゆへにとまなきかのゆへに佛教の内の大小・權実の沙汰なし、やうやく仏法流布せし上月支よりがさねがさね仏法わたり来るほどに前の人人はがしこきやつなれども後にわたる經論をもつてみればはかなき事も出来ず、又ははかなくをもひし人人もかしこみゆる事もありき、結句は十流になりて千万の義ありしかば愚者はいつれにつくべしともみず、智者とをばしき人は辺執かぎりなし、而れども最極は一同の義あり。

いわゆるいちだいにいひ
所謂一代第一は華嚴經 第二は涅槃經 第三は法華經此の義は上一人より下万民にいたるまで異義なし、大聖とあつぎし
法雲法師 智藏法師等の十師の義一同なりしゆなり。

しか ぞうほう ちんすい ちぎ もつ こぞう
而るを像法の中の陳隋の代に智 と申す小僧あり後には智者大師とがうす、法門多しといへども詮するところ法華・

涅槃華嚴經の勝劣の一つ計りなり、智法師云く仏法さかさまなり云云、陳主此の事をたださんがために南北の十師の最

頂たる恵 僧上 恵光僧都 恵栄法蔵法師等の百有余人を召し合わせられし時 法華經の中には

諸經の中に於て最も其の上に在り」等云云、又云く「已今当説最為難信難解」等云云、已とは無量義經に云く「摩訶般若

華嚴海空」等云云、当とは涅槃經に云く「般若はら蜜より大涅槃を出だす」等云云、此の經文は華嚴經・涅槃經には

法華經勝ると見ゆる事赫赫たり明明たり御会通あるべしとせめしかば、或は口をとぢ 或は惡口をはき 或は色をへんじ

などとせしかども、陳主立つて三拝し百官 掌 をあわせしかば力及ばずまけにき。

一代の中には第一法華經にてありしほどに像法の後の五百に新訳の經論重ねてわたる大宗皇帝の貞觀三年に玄奘と

申す人あり月支に入りて十七年・五天の仏法を習いきわめて貞觀十九年に漢土へわたりしが深密經 瑜伽論 唯識論・

法相宗をわたす、玄奘云く「月支に宗宗多しといへども此の宗 第一なり」大宗皇帝は又漢土第一の賢王なり玄奘を師と

す、此の宗の所詮に云く「或は三乘方便・一乘真實」或は一乘方便・三乘真實 又云く「五性は各別なり決定性と無性

の有情は永く仏に成らず」等と云云、此の義は天台宗と水火なり而も天台大師と章安大師は御入滅なりぬ其の已下の

人人は人非人なり すでに天台宗破れてみへしなり。

其の後則天皇皇后の御世に華嚴宗立つ前に天台大師にせめられし六十卷の華嚴經をばさしをきて後に日照三蔵のわた

せる新訳の華嚴經八十卷をもつて立てたり、此の宗のせんにいわく華嚴經は根本法輪・法華經は枝末法輪等云云、

そくてんは尼にてをばせしが内外典にござかしき人なり、慢心たかくして天台宗をさげをばしてあり

しなり、法相といふ華嚴宗といふ二重に法華經かくれさせ給う。

其の後玄宗皇帝の御宇に月支より善無畏三藏・金剛智三藏・不空三藏・大日經・金剛頂經・蘇悉地經と申す三經をわ
たす、此の三人は人がらといふ法門といふ前前の漢土の大師には対すべくもなき人人なり、而も前になかりし印と真言と
をわたすゆへに仏法は已前には此の国になかりけりとをばせしなり、此の人人の云く天台宗は華嚴法相三論には勝れた
りしかれども此の真言經には及ばずと云云、其の後妙樂大師は天台大師のせめ給はざる法相宗・華嚴宗・真言宗をせ
め給いて候へども天台大師のごとく公場にてせめ給はざれば、ただ闇夜のにきしきのごとし、法華經になき印と真言と現前な
るゆへに皆人・一同に真言まさりにて有りしなり。

像法の中に日本国に仏法わたり所謂欽明天皇の六年なり、欽明より桓武にいたるまで二百余年が間は三論・成実・法相
俱舍・華嚴律の六宗弘通せり、真言宗は人王四十四代・元正天皇の御宇にわたる、天台宗は人王第四十五代聖武天王
の御宇にわたる、しかれどもひろまる事なし、桓武の御代に最澄法師、後には伝教大師とがうす、
入唐已前に六宗を習いきわむる上十五年が間、天台・真言の二宗を山にこもり給いて御覽ありき、入唐已前に天台宗
をもつて六宗をせめしかば七寺皆せめられて最澄の弟子となりぬ、六宗の義やぶれぬ、後延暦廿三年に御入唐、同じ
き廿四年御帰朝、天台・真言の宗を日本国にひろめたり、但し勝劣の事は内心に此れを存じて人に向つてとかざるか。

同代に空海といふ人あり、後には弘法大師とがうす、延暦廿三年に御入唐、大同三年御帰朝、但真言の二宗を習いわた
す、此の人の義に云く法華經は尚華嚴經に及ばず何に況や真言にをひてをや。

伝教大師の御弟子に円仁といふ人あり、後に慈覚大師とがうす、去ぬる承和五年の御入唐、同十四年に御帰朝、十年が
間、真言・天台の二宗をがくす、日本国にて伝教大師・義真・円澄に天台・真言の二宗を習いきわめたる

上漢土にわたりて十年が間・八箇の大徳にあひて真言を習い宗叡志遠等に値ひ給いて天台宗を習う、日本に帰朝して云く天台宗と真言宗とは同じく醍醐なり俱に深秘なり等云云、宣旨を申してこれにぞつ。

其の後円珍と申す人あり後には智証大師とがうす、入唐已前には義真和尚の御弟子なり、日本国にして義真・円澄・円仁等の人人に天台・真言の二宗習いきわめたり、其の上去める仁嘉三年に御入唐同貞觀元年に御帰朝七年が間・天台・真言の二宗を法全良等の人人に習いきわむ、天台・真言の二宗の勝劣は鏡をかけたり、後代に一定

あらそひありなん定むべしと云つて天台・真言の二宗は譬は人の両の目鳥の二の翼のごとし、此の外異義を存ぜん人人をば祖師・伝教大師にそむく人なり山に住むべからずと宣旨を申しそ今弘通せさせ給いきされば漢土・日本に智者多しといふも此の義をやぶる人はあるべからず、此の義まことならば習う人人は必ず仏にならせ給いぬらん、あがめさせ給う國王等は必ず世安穩になりぬらんとをばゆ。

但し予が愚案は人に申せども、御もちあるべからざる上・身のあだとなるべし、又きかせ給う弟子・檀那も安穩なるべからずとをもひし上其の義又たがわず、但此の事は一定仏意には叶わでもやあるらんとをば候、法華經一部八卷・二十八品には此の經に勝れたる經をせば此の法華經は十方の仏あつまりて大妄語をあつめさせ

給えるなるべし、随つて華嚴・涅槃・般若・大日經・深密等の經經を見るに諸經の中に於て最も其の上在り、明文をやぶりたる文なし、随つて善無畏等玄奘等弘法・慈覺・智証等種種のたくみあれども法華經を大日經に對してやぶりたる經文はいだし給わず、但印・真言計りの有無をゆへとせるなるべし、数百卷のふみをつくり

漢土・日本に往復して無尽のたばかりをなし宣旨を申しそ今人ををどされんよりは經文分明ならばたれか疑をなすべき、つゆつもりて河となる河つもりて大海となる塵つもりて山となる山かさなりて須弥山となれり小事つもりて大事となる、何に況や此の事は最も大事なり、疏をつくられるにも両方の道理・文証をつくさるべ

かりけるか、又宣旨も両方を尋ね極めて分明の証文をかきのせていましめあるべかりけるか。

已今当の經文は仏すらやぶりがたし何に況や論師・人師・国王の威徳をもつてやぶるべしや、已今当の經文をば梵王・帝釈・日月・四天等聴聞して各各の宮殿にかきとどめてをはするなり、まことに已今当の經文を知らぬ人の有る時は先ひとびと人の邪義はひろまりて失なきやうにてはありとも此の經文をつよく立て退轉せざる

こわ物出来しなば大事出来すべし、いやしみて或はのり或は打ち或はながし或は命をたたんだんに梵王・帝釈・日月・四天をこりあひて此の行者のかたうとをせんほどに存外に天のせめ来りて民もほろび国もやぶれんか、法華經の行者はいやしけれども守護する天こわし、例せば修羅が日月をのめば頭七分にわる犬は師子をほゆればはらわたくさる、今予みるに日本国かくのごとし、又此れを供養せん人人は法華經供養の功德あるべし、伝教大師釈して云く「讚めん者は福を安明に積み謗せん者は罪を無間に開かん」等云云。

ひへのはんを辟支仏に供養せし人は宝明如来となり、うちのもちめを仏に供養せしかば閻浮提の王となれり、設いこうをいたせどもまことならぬ事を供養すれば大惡とはなれども善とならず、設い心をろかにすこしきの物なれどもまことの人に供養すればこう大なり、何に況や心ざしありてまことの法を供養せん人人をや。

其の上当世は世みだれて民の力よわし、いとまなき時なれども心ざしのゆくところ山中の法華經へまうそうか・たかななををくらせ給う福田によきたねを下させ給うか、なみだもとどまらず。

白米一俵 けいもひとたわらふのりひとかご御つかいを もつてわざわざをくられて候。

人にも二つの財あり一には衣二には食なり経に云く有情は食に依つて住すこと云云の心は生ある者は衣と食によつて世にすむと申す心なり、魚は水にすむ水を宝とす木は地の上にをいて候 地を財とす、人は食によつて生あり食を財とす、いのちと申す物は一切の財の中に第一の財なり、遍満三千界無有直身命ととかれて

三千大千世界にみて候財もいのちにはかぬ事に候なり、さればいのちはともしびのごとし食はあぶらのごとし、あぶらつくればともしびきぬ食なければいのちたぬ、一切のかみ仏をうやまいたてまつる 始の句には南無と申す文字ををき候なり、南無と申すはいかなる事ぞと申すに南無と申すは天竺のことばにて

候、漢土・日本には帰命と申す帰命と申すは我が命を仏に奉ると申す事なり、我が身には分に随いて妻子・眷属・所領・金銀等をもてる人人もあり又財なき人人もあり、財あるも財なきも命と申す財にすぎて候財は候はず、さればいにしへの聖人賢人と申すは命を仏にまいらせて仏にはなり候なり。

いわゆる雪山童子と申せし人は身を鬼にまかせて八字をならへり、薬王菩薩と申せし人は臂をやいて法華経に奉る、我が朝にも聖徳太子と申せし人は手のかわをはいで法華経をかき奉り、天智天皇と申せし国王は無名指と申すゆびをたいて釈迦仏に奉る、比れ等は賢人・聖人の事なれば我等は叶いがたき事にて候。

ただし仏になり候事は凡夫は志ざしと申す文字を心へ仏になり候なり、志ざしと申すはなに事ぞと委細にかんがへ候は観心の法門なり、観心の法門と申すはなに事ぞとたづね候はただ一つきて候衣を法華経に

まいらせ候が身のかわをわぐにて候ぞ、うへたるよにこれはなしてはけうの命をつぐべき物もなきに。ただひとつ候これうを仏にまいらせ候が身命を仏にまいらせ候にて候ぞ、これは薬王のひぢをやり雪山童子の身を鬼にたびて候にもあいをとらぬ功德にて候は聖人の御ためには事供やう凡夫のために理くやう止観の第七の

観心の檀ばら蜜と申す法門なり、まことのみちは世間の事法にて候、金光明經には「若し深く世法を識らば即ち是れ仏法なり」とかれ涅槃經には「一切世間の外道の經書は皆是れ仏説にして外道の説に非ず」と仰せられて候を妙樂大師は法華經の第六の巻の「一切世間の治生産業は皆実相と相違背せず」との經文に引き合せて

心をあらわされて候には彼れ彼れの二經は深心の經經なれども彼の經經はいまだ心あさくして法華經に及ばざれば世間の法を仏法に依せてしらせて候、法華經はしからずやがて世間の法が仏法の全体と釈せられて候。

爾前の經の心は、心より万法を生ず、譬は心は大地のごとし草木は万法のごとしと申す、法華經はしからず心すなはち大地、大地即草木なり、爾前の經經の心は心のすむは月のごとし心のきよきは花のごとし、法華經はしからず月こそ心よ花こそ心よと申す法門なり。

此れをもつてしろしめせ、白米は白米にはあらずすなはち命なり。

美食ををさめぬ人なれば力をよばず山林にまじわり候いぬ、されども凡夫なればかんも忍びがたく熱をもふせぎがたし、食ともし表。目が万里の一食、忍びがたく、思子孔が十句、九飯堪ゆべきにあらず、読經の音も絶えぬべし觀心の心をろそかなり。

しかるに。たまたまの御とぶらいただ事にはあらず、教主釈尊の御すすめか將又過去宿習の御催か、方方紙上に尽し難し、恐恐謹言。

四二六 食物三徳御書 さんとくごしょ

1598p

かゆへに大^{たい}國^{こく}の王^{わう}は民^{たみ}ををやとし民^{たみ}は食^{しょく}を天^{てん}とすとかかれたり、食^{しょく}には三^{さん}の徳^{とく}あり、一^{いち}には命^{いのち}をつぎ二^ににはいろをまし三^{さん}には力をそつ、人^{ひと}に物をほどこせば我^{われ}が身^みのたすけとなる、譬^{たと}へは人^{ひと}のために火^ひをともしば我^{われ}がまゝあきらかなるがごとし、惡^{あく}をつくるものをやしなは命^{いのち}をますゆへに氣^きながし、色^{いろ}をますゆへに眼^{まなこ}にひかりあり、力^{ちから}をますゆへにあしはやくてきく、かるがゆへに食^{しょく}をあたる人^{ひと}かへりていろもなく氣^きもゆわく力^{ちから}もなきほつをつるなり。

一切^{いっさい}經^{きやう}と申^{まう}すは紙^しの上に文^{もん}字^じをのせたり、譬^{たと}へは虛^こ空^{くう}に星^{せい}月^{げつ}のつらなり大^{だい}地^ちに草^{そう}木^{もく}の生^{せい}ぜるがごとし、この文^{もん}字^じは釈^{しゃく}迦^か如^{にょらい}來^{らい}の氣^{いき}にも候^{こう}なり、氣^{いき}と申^{まう}すは生^{せい}氣^きなり、この生^{せい}氣^きに二^にあり、一^{いち}には九^く界^{かい}。

四二七 一定証伏御書 いちじょうふくご

1598p

一定^{いちじょう}と証^{しやう}伏^{ふく}せられ候^{こう}いしかば其^その後^{ちのち}の智^ち人^{じん}かずをしらず候^{こう}ども今^{いま}に四^し百^{ひゃく}歳^{さい}が間^まさで候^{こう}なり、かるがゆへに今^{いま}に日本^{にほん}國^{こく}の寺^{てら}・一^{いち}万^{まん}余^よ三^{さん}千^{せん}余^よの社^{しゃ}・四^し十^{じゅう}九^{きゅう}億^{いっ}九^{きゅう}万^{まん}四^し千^{せん}八^{はち}百^{ひゃく}二^に十^{じゅう}八^{はち}人^{にん}の一切^{いっさい}衆^{しゆ}生^{じやう}・皆^{みな}彼^かの三^{さん}大^{だい}師^しの御^お弟^{でい}子^しとなりて法^{ほふ}華^け最^{さい}第一^{だいいち}の經^{きやう}・最^{さい}第二^{だいに}・最^{さい}第三^{だいに}とをとされて候^{こう}なり、されども始^{はじ}は失^{とが}なきやうにて候^{こう}ども、つゆつもりて大^{たい}海^{かい}となりちりつもりて大^{たい}山^{さん}となる。

四二八 初穂御書

1599p

石給^{たまひ}いて御はつをたるよし、法華^{ほけきよう}經の御宝前^{ほうぜん}申^{もう}し上げて候かしこまり申すよし、けさんに入らせ給^{たまひ}い候へ 恐^{きよう}恐^{きよう}
謹言^{きんげん}。

十月二十一日

日蓮^{にちれん} 在御判

御所御返事^{ごへんじ}

四二九 五大の許御書

1599p

□□りげなくなに事もかくの事□不沙汰^{さた}あるか。す御尋^{たず}ねあるべし、經は或^{ある}は前後^{ぜんご}し或^{ある}は落經^{らくけい}にても候はず。□もの
くるわしきとはこれなり法門^{ほつもん}もかしこきやうにて候はわるかるべし。

追申

五大のもとへは三伊房^{もう}も申して候。他所^{これ}に於いて之を聞かしめ將又^{はたまた}事に依り子細^{しさいあ}有るべきか、伯耆阿闍梨^{あじゃり}事は但我祖^{わそ}なるやうなるべし、設^{たと}ひ件^{くだん}の人見参^{いさん}為と雖も其の義を存じて候へ。

四三〇 一大事御書

1599p

あなかに申^{もう}させ給^{たまひ}へ日蓮^{にちれん}が身のつえの一大事^{いちだいじ}なり、あなかしこあなかしこ。

五月十三日

日蓮^{にちれん}在御判

四三一 身延相承書 「総付嘱書」

1600p

日蓮一期の弘法、白蓮阿闍梨日興に之を付嘱す、本門弘通の大導師たるべきなり、国主此の法を立てらるれば富士山に
本門寺の戒壇を建立せらるべきなり、時を待つべきのみ、事の戒法と云うは是なり、就中我が門弟等此の状を守るべきな
り。
弘安五年壬午九月 日 日蓮在御判血脈の次第 日蓮日興

四三二 池上相承書 「別付嘱書」

1600p

釈尊・五十年の説法、白蓮阿闍梨日興に相承す、身延山久遠寺の別当たるべきなり、背く在家出家どもの輩は非法
の衆たるべきなり。

弘安五年壬午十月十三日

武州池上

日蓮 在御判

先ず日蓮聖人の本意は法華本門に於ては曾て異義有るべからざるの処、其の整足の弟子等忽に異趣を起して法門改変す況や末学等に於ては面面異轍を生ぜり、故に日興の門葉に於ては此の旨を守つて一同に興行せしむべきの状仍つて之を録す。

一、聖人御在生の時弟子六人を定むる事、弘安五年十月 日 之を定む

一日昭 弁阿闍梨

二日朗 大國阿闍梨

三日興 白蓮阿闍梨

四日向 佐渡阿闍梨

五日頂 伊予阿闍梨

六日持 蓮華阿闍梨

此の六人の内五人と日興一人と和合せざる由緒条条の事。

一、五人・同に云く、日蓮聖人の法門は天台宗なり、仍つて公所に捧ぐる状に云く天台沙門と云云、又云く先師日蓮聖人天台の余流を汲むと云云、又云く桓武聖代の古風を扇いで伝教大師の余流を汲み法華宗を弘めんと欲す云云。

日興が云く、彼の天台・伝教所弘の法華は迹門なり今日蓮聖人の弘宣し給う法華は本門なり、此の旨具に状に載せ

畢んぬ、此の相違に依つて五人と日興と堅く以て義絶し畢んぬ。

一、五人・同に云く、諸の神社は現当を祈らんが為なり仍つて伊勢太神宮と二所と熊野と在在所所に参詣を企て精誠を致し二世の所望を願う。

日興一人云く、謗法の国をば天神地祇並びに其の国を守護するの善神捨離して留らず、故に悪鬼神其の国土に乱入して災難を致す云云、此の相違に依つて義絶し畢んぬ。

一、五人・同に云く、如法経を勤行し之を書写し供養す仍つて在在所所に法華三昧又は一日経を行ず。

日興が云く、此くの如き行儀は是れ末法の修行に非ず、又謗法の代には行ずべからず、之に依つて日興と五人と堅く以て不和なり。

一、五人・同に云く、聖人の法門は天台宗なり仍つて比叡山に於て出家授戒し畢んぬ。

日興が云く、彼の比叡山の戒は是は迹門なり像法所持の戒なり、日蓮聖人の受戒は法華本門の戒なり今末法所持の正戒なり、之に依つて日興と五人と義絶し畢んぬ。

已前の条条大綱此くの如し此の外巨細具に注し難きなり。

一、甲斐の国波木井郷身延山の麓に聖人の御廟あり而るに日興彼の御廟に通ぜざる子細は彼の御廟の地頭南部六道入道法名日用は日興最初発心の弟子なり、此の因縁に依つて聖人・御在所九箇年の間帰依し奉る滅後其の年月義絶する条条の事。

条の事。

釈迦如来を造立供養して本尊と為し奉るべし是一。

次に聖人・御在所九箇年の間停止せらるる神社参詣其の年に之を始む二所三島に参詣を致せり是二。

次に一門の勧進と号して南部の郷内のフクシの塔を供養奉加之有り是三。

次に一門仏事の助成と号して九品念仏の道場一宇之を造立し莊嚴せり、甲斐国其の処なり是四。

已上四箇条の謗法を教訓するに日向之を許すと云云、此の義に依つて去る其の年月・彼の波木井入道の子孫と永く以て師弟の義絶し畢んぬ、よつて御廟に相通ぜざるなり。

一、聖人の御例に順じ日興六人の弟子を定むる事。

一 日目

二 日華

三 日秀

聖人に常随給仕す

四 日禅

五 日仙

六 日乗 聖人に値い奉らず。

已上の五人は詮ずるに聖人給仕の輩なり、一味和合して異義有るべからざるの旨・議定する所なり。

一、聖人御影像の事。

或は五人と云い或は在家と云い絵像・木像に図し奉る事在在所所に其の数を知らず而るに面面相違なり。

爰に日興が云く、御影を図する所詮は後代に知らしめん為なり是に付け非に付け有りの儘に図し奉る可きなり、之に依つて日興門徒の在家・出家の輩聖人を見奉る仁等一同に評議して其の年月図し奉る所なり、全体異らずと雖も大概龐相に之を図す仍つて裏に書き付けを成すなり、但し彼の面面相違一も相似ざる中に去る正和

二年日順図絵の本有り、相似の分なけれども自余の像よりも少し面影有り、而る間後輩に彼此是非を弁ぜしめんが為裏書に不似と付け置く。

一、聖人御書の事 付けたり十一ヶ条

彼の五人・一同の義に云く、聖人御作の御書釈は之無き者なり、縦令少少之有りと雖も或は在家の人の為に仮字を以て仏法の因縁を粗之を示し、若は俗男俗女の一毫の供養を捧ぐる消息の返札に施主分を書いて愚癡の者を引摺したまえり、而るに日興、聖人の御書と号して之を談じ之を読む、是れ先師の恥辱を顕す云々、故に諸方に散在する処の御筆を或は平力エツに成し或は火に焼き畢んぬ。

此くの如く先師の跡を破滅する故に具に之を註して後代の亀鏡と為すなり。

一、立正安国論一卷。

此れに両本有り一本は文応元年の御作是れ最明寺殿宝光寺殿奏上の本なり、一本は弘安年中身延山に於て先本に文言を添えたもう、而して別の旨趣無し只建治の広本と云う。

一、開目抄一卷、今開して上下と為す。佐土国の御作四条金吾頼基に賜う、日興所持の本は第二転なり、未だ正本を以て之を校えず。

一、報恩抄一卷、今開して上下と為す。身延山に於て本師道善房聖霊の為に作り清澄寺に送る日向が許に在りと聞く、日興所持の本は第二転なり、未だ正本を以て之を校えず。

一、撰時抄一卷、今開して上中下と為す。

駿河国西山由井某に賜る、正本日興に上中二卷之れ在り此中に箇目下卷に於いては日昭が許に之在り。

一、下山抄一卷。

甲斐の国・下山郷の兵庫五郎光基の氏寺・平泉寺の住僧因幡房日永追出さるる時の述作なり、直に御自筆を以て遣さる、正本の在所を知らず。

一、観心本尊抄一卷。

一、取要抄一卷。

一、四信五品抄一卷。「法門不審の条条申すに付いての御返事なり仍つて彼の進状を奥に之を書く。」

已上の三卷は因幡国富城荘の本主今は常住下総国五郎入道日常に賜わる、正本は彼の在所に在り。

一、本尊問答抄一卷。

一、唱題目抄一卷。

此の書最初の御書文応年中常途天台宗の義分を以て且く爾前法華の相違を註し給う、仍つて文言義理共に爾なり。

一、御筆抄に法華本門の四字を加う、故に御書に之無しと雖も日興今義に従つて之を置く、先例無きに非ざるか。

一、本尊の事四箇条

一、五人一同に云く、本尊に於ては釈迦如来を崇め奉る可しとて既に立てたり、随つて弟子檀那等の中にも造立供養の御書之れ在りと云云、而る間盛に堂舎を造り或は一鉢を安置し或は普賢文殊を脇士とす、仍つて

聖人御筆の本尊に於ては彼の仏像の後面に懸け奉り又は堂舎の廊に之を捨て置く。

日興が云く、聖人御立の法門に於ては全く絵像・木像の仏・菩薩を以て本尊と為さず、唯御書の意に任せて妙法蓮華經の五字を以て本尊と為す可しと即ち御自筆の本尊是なり。

一、上の如く一同に此の本尊を忽緒し奉るの間、或は曼荼羅なりと云つて死人を覆つて葬る輩も有り、或は又沽却する族も有り、此くの如く輕賤する間、多分は以て失せ畢んぬ。

日興が云く、此の御筆の御本尊は是れ一閻浮提に未だ流布せず正像末に未だ弘通せざる本尊なり、然れば則ち日興門徒の所持の輩に於ては左右無く子孫にも譲り弟子等にも付囑すべからず、同一所に安置し奉り六人・一同に守護し奉る可し、是れ偏に広宣流布の時本化国主御尋有らん期まで深く敬重し奉る可し。

一、日興弟子分の本尊に於ては一皆書き付け奉る事、誠に凡筆を以て直に聖筆を贋す事最も其の恐れ有りと雖も、或は親には強盛の信心を以て之を賜つと雖も子孫等之を捨て、或は師には常隨給仕の功に酬いて之を授与すと雖も弟子等之を捨て、之に依つて、或は以て交易し、或は以て他の為に盗まる、此くの如きの類、其れ数多なり故に所賜の本主の交名を書き付くるは後代の高名の為なり。

一、御筆の本尊を以て形木に彫み不信の輩に授与して輕賤する由諸方に其の聞え有り所謂日向日頂日春等なり。

日興の弟子分に於ては在家・出家の中に、或は身命を捨て、或は疵を被り若は又在所を追放せられ一分信心の有る輩に忝くも書寫し奉り之を授与する者なり。

本尊人数等又追放人等、頸切られ、死を致す人等。

一、本門寺を建つ可き在所の事。

五人一同に云く、彼の天台・伝教は存生に之を用いらるるの間、直に寺塔を立てたもつ、所謂大唐の天台山本朝の比叡山是なり而るに彼の本門寺に於ては先師何の国何の所とも之を定め置かれずと。

爰に日興云く、凡そ勝地を撰んで伽藍を建立するは仏法の通例なり、然れば駿河国富士山は是れ日本第一の名山なり、最も此の砌に於て本門寺を建立すべき由、奏聞し畢んぬ、仍つて広宣流布の時至り国主此の法門を用いらるる時は必ず富士山に立てらるべきなり。

一、王城の事。

右、王城に於ては殊に勝地を撰ぶ可きなり、就中仏法は王法と本源躰一なり居処随つて相離るべからざるか、仍つて南都・七大寺・北京比叡山・先蹤之同じ後代改まらず、然れば駿河の国富士山は広博の地なり一には扶桑国なり二には四神相応の勝地なり、尤も本門寺と王城と一所なるべき由且は往古の佳例なり且は日蓮大聖人の本願の所なり。

一、日興集むる所の証文の事。

御書の中に引用せらるる若は経論書釈の文若は内外典籍伝の文等、或は大綱随義転用し或は粗意を取つて述用し給えり、之に依つて日興散引の諸文典籍等を集めて次第に証拠を勘校す、其の功未だ終らず且らく集むる所なり。

一内外論の要文上二卷開目抄の意に依つて之を撰ぶ。

一本 迹弘経要文上 中 下三巻撰時抄の意に依つて之を撰ぶ。
一 漢土の天台・妙楽邪法を対治して正法を弘通する証文一卷。
一 日本の伝教大師南都の邪宗を破失して法華の正法を弘通する証文一卷。
已上七巻之を集めて未だ再治せず。

一、奏聞状の事。

一 先師聖人文永五年申状一通。 一同八年申状一通。
一日興其の年より申状一通。

一 漢土の仏法先ず以て沙汰の次第之を図す一通。

一 本朝仏法先ず以て沙汰の次第之を図す一通。

一 三時弘経の次第並びに本門寺を建つ可き事。

一 先師の書釈要文一通。

一、追加八箇条。

近年以来日興所立の義を盗み取り己が義と為す輩出来する由緒条の事。

一、寂仙房日澄始めて盗み取つて己が義と為す彼の日澄は民部阿闍梨の弟子なり、仍つて甲斐国下山郷の地頭左衛門四郎光長は聖人の御弟子なり御遷化の後民部阿闍梨を師と為す僧なり、而るに去る永仁年中新堂を

造立し一躰仏を安置するの刻み、日興が許に來臨して所立の義を難ず、聞き已つて自義と為し候処に正安二年民部
阿闍梨彼の新堂並びに一躰仏を開眼供養す、爰に日澄本師民部阿闍梨と永く義絶せしめ日興に帰伏して弟子と為る、此
の仁盗み取つて自義と為すと雖も後改悔歸伏の者なり、

一、去る永仁年中越後国に摩訶一と云う者有り天台宗の学匠なり日興が義を盗み取つて盛んに越後国に弘通するの由
之を聞く。

一、去る正安年中以来浄法房天目と云う者有り聖人に値ひ奉る日興が義を盗み取り鎌倉に於て之を弘通す、又祖師の
添加を蔑如す。

一、弁阿闍梨の弟子少輔房日高去る嘉元年中以来日興が義を盗み取つて下総の国に於て盛んに弘通す。一、伊予
阿闍梨の下総国真間の堂は一躰仏なり、而るに去る年月日興が義を盗み取つて四脇士を副う彼の菩薩の像は宝冠形な
り。

一、民部阿闍梨も同く四脇士を造り副う、彼の菩薩像は比丘形にして納衣を著す、又近年以来諸神に詣ずる事を留む
るの由聞くなり。

一、甲斐国に肥前房日伝と云う者有り寂日房向背の弟子なり日興が義を盗み取つて甲斐国に於て盛んに此の義を弘通す是れ
又四脇士を造り副う彼の菩薩の像は身皆金色剃髮の比丘形なり、又神詣を留むるの由之を聞く。

一、諸方に聖人の御書之を読む由の事。此の書札の抄別状有り之を見るべし。

夫れそ以おもれば諸しよ仏ぶつ懸けん遠えんの難がたきことは譬たとえを曇どん華げに仮かり妙みよ法ほう値ち遇ぐうの縁えんは比ひを浮う木ぎに類るい、塵じん数じゆ三さん五ごの施せ化けに猶な漏あれて正じやう像ざう二千にせんの弘くわう經きやうも稍せう過くわぎ已いんぬ、鬪たう諍じやう堅けん固この今こんは乘じやう戒かい俱ともに緩ゆるうして人にには弊へい惡あくの機きのみ多おほし何なんの依え憑ぽうしきこと有あらんや、設たとい内外ないげ兼けん包ぱうの智ちは三さん祇ぎに積たみ大だい小じやう薰くわん習じゆつの行ぎやうは百ひやく劫けつを満みつとも時ときと機きとを弁わぜず本ほんと迹せきとに迷めい倒たうせば其それも亦また信しんじ難なんからん。

爰こゝに先せん師し聖しやう人にん親しんり大だい聖しやうの付つを受けて末ま法ぽうの主な為なりと雖いえも、早むじく無む常じやうの相さうを表あらわして円えん寂じやくに歸き入にやうするの刻こ五ご字じを紹しやう繼けいするが為ために六りく人にんの遺ゆ弟いていを定さだめたもつ。

日に昭しやうと日に朗らうと日に興きやうと日に向きやうと日に頂ていと日に持ぢと已上六人なり。

五ふ人にん武ぶ家けに捧たもぐる状じやうに云いく未だ公家に奏せず。

天てん台だいの沙しゃ門もん日に昭しやう謹こんんで言い上じやうす。

先せん師し日に蓮れんは忝かたじけなくも法ほ華けの行ぎやう者しやと為なる専せんら仏ぶつ果かの直じき道どうを顕あらわし天てん台だいの余あ流りゆうを酌しやくみ地ち慮りよの研けん精しやうを尽じんすと云い々。

又また云いく、日に昭しやう不ふ肖しやうの身み為なりと雖いえも兵へい火くわ永えい息そくの為ため副ふ将しやう安あん全ぜんの為ため法ほ華けの道どう場じやうを構かま、長ちやう日にちの勤きん行ぎやうを致いたし奉たてまつる、已すでに冥めい冥めいの志し有あり宣せん昭しやう昭しやうの感かん無むからんや詮を取る。

天てん台だい沙しゃ門もん日に朗らう謹こんんで言い上じやうす。

先せん師し日に蓮れんは如に来らいの本ほん意いに任まかせ先せん判はんの権けん經きやうを闇さしいて後ご判はんの実じ教きやうを弘くわん通つうせしむるに、最さい要い未みだ上じやう聞もんに達たつせず愁しゆ鬱いつを懷おもいて空むなしく多た年ねんの星せい霜そうを送そうる玉ぎよくを含こみて寂じやくに入るが如ごとく逝し去そせしめ畢おわぬ、然しかして日に朗らう忝かたじけなくも彼いの乗じやう妙みよ典てんを相さう伝でんして

鎮に国家を祈り奉る註を取る。

天台法華宗の沙門日向日頂謹んで言上す。

桓武聖代の古風を扇ぎ伝教大師の余流を汲み立正安国論に准じて法華一乗を崇められんことを請うの状。右謹んで旧規を検えたるに祖師・伝教大師は延暦年中に始めて叡山に登り法華宗を弘通したもつ云云。

又云く法華の道場に擬して天長地久を祈り今に断絶すること無し註を取る。

日興公家に奏し武家に訴えて云く。

日蓮聖人は忝くも上行菩薩の再誕にして本門弘經の大権なり、所謂大覺世尊未來の時機を鑒みたまい世を三時に分ち法を四依に付して以来、正法千年の内には迦葉・阿難等の聖者先ず小を弘めて大を略す竜樹・天親等の論師は次に小を破りて大を立つ、像法千年の間異域には則ち陳隋兩主の明時に智者は十師の邪義を破る、本朝には亦桓武天皇の聖代に伝教は六宗の僻論を改む、今末法に入つては上行出世の境本門流布の時なり正像已に過ぎぬ

何ぞ爾前・迹門を以て強いて御歸依有る可けんや、就中天台・伝教は像法の時に當つて演説し日蓮聖人は末法の代を迎えて恢弘す、彼は藥王の後身此れは上行の再誕なり經文に載する所・解釈炳焉たる者なり。

凡そ一代教籍の濫觴は法華の中道を解かんが為三国伝持の流布は蓋ぞ真実の本門を先とせざらんや、若し瓦礫を貴んで珠玉を棄て燭影を捧げて日光を睥せば只風俗の迷妄に趁いて世尊の化導を謗するに似るか、華の中に優曇有る木の中に梅檀有り凡慮覃び難し併ながら冥鑑に任す云云、本と迹と既に水火を隔て時と機と亦天地の如し、何ぞ地涌の菩薩を指して苟も天台の末弟と称せんや。

次に祈国の段亦以て不審なり、所以は何ん文永免許の古先師素意の分既に以て顕れ畢んぬ、何ぞ僭聖道門の怨敵に交り坐して鎮に天長地久の御願を祈らんや、況や三災弥起り一分も徴し無し啻に祖師の本懷に違する

のみにあらず還つて己身の面目を失うの謂いか。

又五人一同に云く凡そ倭漢兩朝の章疏を披いて本迹二門の元意を探るに判教は玄文に尽し弘通は残る所無し何ぞ天台一宗の外に胸臆の異義を構えんや、拙いかな尊高の台嶺を編して辺鄙の富山を崇み、明静の止観を闇いて仮字の消息を執する、誠に是れ愚癡を一身に招き耻辱を先師に及ぼす者か、僻案の至りなり甚だ以て然るべからず、若し聖人の製作と号し後代に伝えんと欲せば宜く卑賤の倭言を改め漢字を用ゆべし云云。

日興が云く、夫れ竜樹・天親は即ち四依の居士にして円頓一実の中道を申ぶと雖も而も権を以て面と為し実を隠して裏に用ゆ、天台・伝教は亦五品の行位にして専ら本迹二門の不同を分ち而も迹を弘め衆を救い本を残して末に譲る、内鑒は然りと雖も外は時宜に適うかの故に或は知らざるの相を示し或は知つて而も未だ闡揚せず、然るに今本迹兩經共に天台の弘通と称するの条は經文に違背し解釈は拠を失う、所以は宝塔三箇の鳳詔に驚き勸持二万の勅答を挙げて此土の弘經を申ぶと雖も迹化の菩薩に許さず、過八恒沙の競望を止めて不須汝等護持此經と示し地涌千界の菩薩を召して如来一切所有の法を授く、迹化他方の極位すら尚劫数の塵点に暗し止善男子の金言に豈幽微の実本を許さんや、本門五字の肝要は上行菩薩の付嘱なり誰か胸臆なりと称せんや委細文の如し經を開いて見るべし

次に天台大師經文を消したもうに、「如来之を止むるに凡そ三義有り汝等各各自ら己が住有り若し此の土に住すれば彼の利益を廢せん、又他方は此土に結縁の事浅し宣授せんと欲すと雖も必ず巨益無からん、又若し之を許さば則ち下を召すことを得ず下若し来らずんば迹も破することを得ず遠も顯すことを得ず是を三義と為す、如来之を止めて下方を召して来らずに亦三義有り、是れ我が弟子心に我が法を弘むべし、縁深厚なるを以て能く此土に遍して益し分身の土に遍して益し他方の土に遍して益し、又開近顯遠することを得、是の故に彼を止めて下を召すなり」文、又云く「爾前仏告上行の下是れ第三に結要付嘱」と云々、伝教大師は本門を慕いて「正像稍過ぎ已つ

て末法太だ近きに有り法華一乗の機今正しく是れ其の時なり「文、又云く」代を語れば則ち像の終り末の初め地を原ぬれば則ち唐の東羯の西人を尋ぬれば則ち五濁の生・鬭諍の時・経に云く猶多怨嫉・況滅度後と此の言良に以有るなり「云。

加之大論の中に「法華は是れ秘密なれば諸の菩薩に付す」と宣ぶ、今の下文に下方を召すが如く尚本眷属を待つ驗けし余は未だ堪えず、輔正記に云く「付嘱を明せば此の経をば唯下方涌出の菩薩に付す、何を以ての故に爾る、法是れ久成の法なるに由るが故に久成の人に付す」論釈一に非ず繁を恐れて之を略す。

観音・薬王は既に迹化に居す南岳・天台誰人の後身ぞや、正像過ぎて二千年未だ上行の出現を聞かず末法も亦二百余廻なれば本門流布の時節なり何ぞ一部の総釈を以て猥に三時の弘経を難ぜんや、次に日本と云うは惣名なり亦本朝を扶桑国と云う富士は郡の号即ち大日蓮華山と称す、爰に知んぬ先師自然の名号と妙法蓮華の経題と山州共に相応す弘通此の地に在り、遠く異朝の天台山を訪えば台星の所居なり大師・彼の深洞をトして迹門を建立す、近く我が国の大日山を尋ぬれば日天の能住なり聖人、此の高峰を撰んで本門を弘めんと欲す、閻浮第一の富山なればなり五人争でか辺鄙と下さんや。

次に上行菩薩は本極法身微妙深遠にして寂光に居すと雖も未了の者の為に事を以て理を顕し地より涌出したまいて以来付を本門に承け時を末法に待ち生を我朝に降し訓を仮字に示す、祖師の鑒機失無くんば遺弟の改転定めて恐れ有らんか、此等の所勘に依つて浅智の仰信を致すのみ、抑梵漢の両字と扶桑の一点とは時に依り機に随つて互に優劣無しと雖も情上聖被下の善巧を思うに殆んど天竺震旦の方便に超えたり、何ぞ倭国の風俗を蔑如して必ずしも漢家の水露を崇重せん、但し西天の仏法東漸の時既に梵音を翻じて倭漢に伝つるが如く本朝の聖語も広宣の日は亦仮字を訳して梵震に通ず可し、遠沾の翻譯は諍論に及ばず雅意の改変は独り悲哀を懷く者な

り。

又五人一同に云く、先師所持の釈尊は忝くも弘長配流の昔之を刻み、弘安帰寂の日も隨身せり何ぞ輒く言つに及ばんや云云。

日興が云く、諸仏の莊嚴同じと雖も印契に依つて異を弁ず如來の本迹は測り難し眷屬を以て之を知る所以に小乗三蔵の教主は迦葉・阿難を脇士と爲し伽耶始成の迹仏は普賢・文殊左右に在り、此の外の一跡の形像豈頭陀の応身に非ずや、凡そ円頓の学者は広く大綱を存して綱目を事とせず、情聖人出世の本懷を尋ねれば源と権実已過

の化導を改め上行所伝の乗戒を弘めんが爲なり、図する所の本尊は亦正像二千の間・一閻浮提の内未曾有の大漫荼羅なり、今に當つては迹化の教主既に益無し況や婆和の拙仏をや、次に隨身所持の俗難は只是れ継子

一旦の寵愛月を待つ片時の螢光か、執する者尚強いて帰依を致さんと欲せば須らく四菩薩を加うべし敢て一仏を用ゆること勿れ云云。

又五人一同に云く、富士の立義の体爲らく雷に法門の異類に擬するのみに匪ず剩え神無の別途を構う、既に以て道を失う誰人か之を信ぜんや。

日興が云く、我が朝は是れ神明和光の塵仏陀利生の境なり、然りと雖も今末法に入つて二百余年御歸依の法は爾前迹門なり誹謗の国を棄捨するの条は経論の明文にして先師の勸する所なり、何ぞ善神聖人の誓願に背き新に惡鬼乱入の社壇に詣でんや、但し本門流宣の代、垂迹還住の時尤も上下を撰んで鎮守を定む可し云云。

又五人一同に云く、如法・一日の両経は共に以て法華の真文なり、書寫・誦誦に於ても相違有るべからず云云。日興が云く、如法・一日の両経は法華の真文爲りと雖も正像・轉時の往古・平等・撰受の修行なり、今末法の代を迎えて折伏の相を論ずれば一部・誦誦を専とせず但五字の題目を唱え三類の強敵を受くと雖も諸師の邪義を責む可き者か、

此れ則ち勸持不輕の明文上行弘通の現証なり、何ぞ必ずしも折伏の時・損受の行を修すべけんや、但し四悉の廢立・二門の取捨宜く時機を守るべし敢て偏執すること勿れ云云。

又五人の立義既に二途に分れ戒門に於て持破を論ず云云。

日興が云く、夫れ波羅提木叉の用否・行住・四威儀の所作・平嶮の時機に随ひ持破に凡聖有り、爾前・迹門の戸羅を論ずれば一向に制禁す可し、法華本門の大戒に於ては何ぞ又依用せざらんや。

但し本門の戒躰委細の經釈面を以て決す可し云云。

身延の群徒猥に疑難して云く、富士の重科は専ら当所の離散に有り、縦い地頭非例を致すとも先師の遺跡を忍ぶ可し既に御墓に参詣せず争か向背の過罪を遁れんや云云。

日興が云く、此の段顛倒の至極なり言語に及ばずと雖も末聞の族に仰せて毒鼓の縁を結ばん、夫れ身延興隆の元由は聖人・御座の尊貴に依り地頭発心の根源は日興教化の力用に非ずや、然るを今下種結縁の最初を忘れて劣謂勝見の僻案を起し師弟有無の新義を構え理非顯然の諍論を致す、誠に是れ葉を取つて其の根を乾かし流を酌んで未だ源を知らざる故か、何に況や慈覚・智証は即伝教入室の付弟・叡山住持の祖匠なり、若宮八幡は亦百王鎮護の大神日域朝廷の本主なり、然りと雖も明神は仏前に於て謗国捨離の願を立て先聖は慈覚を指して本師違背の仁と称す、若し御廟を守るを正と為さば円仁所破の段頗る高祖の誤謬なり、非例を致して過無くんば其の国・棄捨の誓い都べて垂迹の不覚か、料り知んぬ悪鬼外道の災を作し宗廟社稷の処を辞す善神聖人の居は即ち正直正法の頂なり、抑身延一沢の余流未だ法水の清濁を分たず強いて御廟の参否を論ぜば汝等將に碎身の舍利を信ぜんとす何ぞ法華の持者と号せんや、迷暗尤も甚し之に准じて知る可し伝え聞く天台大師に三千余の弟子有り章安朗然として独り之を達す、伝教大師は三千侶の衆徒を安く義真以後は其れ無きが如し、今日蓮聖人は万年救護の為に

六人の上首を定む然りと雖も法門既に二途に分れ門徒亦一准ならず、宿習の至り正師に遇うと雖も伝持の人自他并
じ難し、能く是の法を聴く者此の人亦復難しと此の言若し墮ちなば将来悲む可し、經文と解釈と宛かも符契の如し迹化
の悲歎猶此くの如し本門の墜墮寧ろ愁えざらんや、案立若し先師に違わば一身の短慮尤も恐れ有り言つ所亦仏意に叶わ
ば五人の謬義甚だ憂う可し取捨正見に任す思惟して宜しく解すべし云云。

此の外支流異義を構え詔曲稍数多なり、其の中に天目の云く、已前の六人の談は皆以て嘲哂すべきの義なり但し富山
宜しと雖も亦過失有り迹門を破し乍ら方便品を読むこと既に自語相違せり信受すべきに足らず、若し所破の為と云わば
弥陀經をも誦すべけんや云云。

日興が云く、聖人の炳誠の如くんば沙汰の限りに非ずと雖も慢幢を倒さんが為に粗一端を示さん、先ず本迹の相違
は汝慥に自発するや去る □ □ □ 二年の比天目当所に來つて問答を遂ぐるの刻み日興が立義・一証伏し畢んぬ、若し
正見を存せば尤も帰敬を成すべきの処に還つて方便読誦の難を致す誠に是れ無慚無愧の甚しきなり、夫れ狂言綺語の
歌仙を取つて自作に備つる卿相すら尚短才の耻辱と為す、況や終窮究竟の本門を盗み己が徳と称する逆人争か無間の
大苦を免れんや、照覽冥に在り慎まざるばあるべからず。

次に方便品の疑難に至つては汝未だ法門の立破を弁ぜず恣に祖師の添加を蔑如す重科一に非ず罪業上の如し、若し
知らんと欲せば以前の如く富山に詣で尤も習学の為宮仕を致す可きなり、抑彼等が為に教訓するに非ず正見に任せ
て二義を立つ、一には所破の為二には文証を借るなり、初に所破の為とは純一無雜の序分には且く権乗の得果を挙げ
廢迹顯本の寿量には猶伽耶の近情を明す、此れを以て之を思つに方便称読の元意は只是れ牒破の一段なり、若し所破の
為と云わば念仏をも申す可きか等の愚難は誠に四重の興廢に迷い未だ三時の弘經を知らず重疊の狂難嗚呼の至極な
り、夫れ諸宗破失の基は天台・伝教の助言にして全く先聖の正意に非ず何ぞ所破の為に読ま

ざるべけんや、経釈の明鏡既に日月の如し天目の暗者邪雲に覆わるる故なり、次に迹の文証を借りて本の実相を
顕すなり、此等の深義は聖人の高意にして浅智の覃ぶ所に非ず正機には將に之を伝うべし云云。

嘉曆三戊辰年七月草案す

日順

四三五

日興遺誠置文

1617p

夫れ以みれば末法弘通の恵日は極惡謗法の闇を照し久遠寿量の妙風は伽耶始成の権門を吹き払う、於戲仏法に値う
こと希にして喩を曇華の萼に仮り類を浮木の穴に比せん、尚以て足らざる者が、爰に我等宿縁深厚なるに依つて幸に此
の經に遇い奉ることを得、随つて後学の為に条目を筆端に染むる事、偏に広宣流布の金言を仰がんが為なり。

一、富士の立義聊も先師の御弘通に違せざる事。

一、五人の立義一先師の御弘通に違する事。

一、御書何れも偽書に擬し当門流を毀謗せん者之有る可し、若し加様の惡侶出来せば親近す可からざる事。

一、偽書を造つて御書と号し本迹一致の修行を致す者は師子身中の虫と心得可き事。

一、謗法を呵責せずして遊戲雜談の化儀並に外書歌道を好む可からざる事。

一、檀那の社參物詣を禁ず可し、何に況や其の器にして一見と称して謗法を致せる惡鬼乱入の寺社に詣ず可けんや、返
す返すも口惜しき次第なり、是れ全く己義に非ず經文御抄等に任す云云。

一、器用の弟子に於ては師匠の諸事を許し闇き御抄以下の諸聖教を教学す可き事。

- 一、學問未練にして名聞名利の大衆は予が末流に叶う可からざる事。
- 一、予が後代の徒衆等権実を弁えざる間は父母・師匠の恩を振り捨て出離証道の為に本寺に詣で字文す可き事。
- 一、義道の落居無くして天台の字文す可からざる事。
- 一、当門流に於ては御書を心肝に染め極理を師伝して若し間有らば台家を聞く可き事。
- 一、論議講説等を好み自余を交ゆ可からざる事。
- 一、未だ広宣流布せざる間は身命を捨て随力弘通を致す可き事。
- 一、身軽法重の行者に於ては下劣の法師為りと雖も当如敬仏の道理に任せて信敬を致す可き事。
- 一、弘通の法師に於ては下輩為りと雖も老僧の思を為す可き事。
- 一、下劣の者為りと雖も我より智勝れたる者をば仰いで師匠とす可き事。
- 一、時の貴首為りと雖も仏法に相違して己義を構えば之を用う可からざる事。
- 一、衆議為りと雖も仏法に相違有らば貴首之を推く可き事。
- 一、衣の墨黒くすべからざる事。
- 一、直綴を着す可からざる事。
- 一、謗法と同座す可からず与同罪を恐る可き事。
- 一、謗法の供養を請く可からざる事。
- 一、刀杖等に於ては仏法守護の為に之を許す。
但し出仕の時節は帯す可からざるか、若し其れ大衆等に於ては之を許す可きかの事。
- 一、若輩為りと雖も高位の檀那自り末座

に居る可^べからざる事

一、先師^{せんし}の如^{ごと}く予^こが化儀^{けぎ}も聖僧^{せいそう}為^なる可^べし、但^{ただ}し時の實首^{じつしゅ}或^{ある}は習学^{しゅうがく}の仁^にに於^{おい}ては設^たい一旦^{いつたん}の犯有^{はんゆう}りと雖^{いえど}も衆徒^{しゅうと}に差置^{さち}く可^べき事^{こと}。

一、巧^{ぎょう}於難問答^{おうなんもんどう}の行者^{ぎやうじや}に於^{おい}ては先師^{せんし}の如^{ごと}く賞翫^{しょうがん}す可^べき事^{こと}。

右^{みぎ}の条目大略^{じょうもく}此^かくの如^{ごと}し、万年^{まんねん}救護^{きうご}の為^{ため}に二十六箇条^{にじふろくかんじょう}を置^おく後代^{こうだい}の学侶^{がくりょ}敢^{あえて}て疑惑^{ぎわく}を生^なずる事^{こと}勿^{なか}れ、此^この内一箇条^{ないいつかんじょう}に於^{おい}ても犯^{はん}す者は日興^{にっく}が末流^{まつりゅう}に有^ある可^べからず、仍^よつて定^{さだ}むる所^{ところ}の条条件^{くたんじょう}の如^{ごと}し。

元弘^{げんく}三年癸酉正月十三日

日興^{にっく}判

全文字数 〃 一二二万〇八三三文字